# カカの天下

ルシカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

# 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
カカの天下

【Ｎコード】
Ｎ７６３２Ｂ

【作者名】
ルシカ

【あらすじ】
とある兄妹、トメとカカは今日も今日とて少し愉快な日常を送ります。特別な事件は起こりませんが、次第に周りにも結構変な人が集まってきて面白おかしく暮らしていきます。ほとんどが一話完結になっています。ふとしたときに暇つぶしに読んで、少し笑ってくれたら嬉しいです＾＾毎日更新していましたが、諸事情により７００話からは不定期更新とさせていただき、今も連載中でございます。

# カカの天下1「カカと言葉」

「ねえ、トメゾー」

「実の兄を呼び捨てにするな妹。あと僕の名前は留（トメ）であって、そんな時代劇にありそうな名前じゃない」

「そのおばあちゃんみたいな名前よりはいいと思うけど」

「……あえて遠まわしに言ったのに、はっきり言いやがりますかお嬢さん」

とんちきな会話を始めたのは僕、笠原留の妹、香加（カカ）です。

今年で小学三年生になる、言動と性格が結構ユニークな子供です。

まあ、最近の子供は皆そんな感じなのかもしれないけど。

「でさ、トメゾーばばぁ」

「おかしな呼び名を足すでない。わしゃまだ若いんじゃ」

「これ、なんて読むの？」

「せっかくノッたんだから反応しろよ」

「このクソババァ」

「てめぇ」

そんなことを言いつつカカが差し出してきたのは、手に収まる小さなサイズの小説だった。ライトノベル――世間では気軽に読まれているらしいが、僕はあまり読んだことはない。

とはいえこれでも二十歳を越えているので、漢字はそれなりには読める。

「どれどれ」

『嘘』か。

「うそ、って読むんだよ、妹」

「ふーん、なるほろ。『口』にするのが『虚』しいってことですな」

そんな漢字が読めないガキのわりには難しいことを言う。

「ねえねえ、トメキチばばぁ。これはー？」

「微妙に変形してるその名前はどっからくるのですか我が妹よ」

「これはこれはー？」

僕のツッコミをことごとく無視してくれて本を押し付けてくるカカ。

いつものことなので別に怒りはしないが、そんなに鼻の頭に押し付けられては読もうにも読めませんことよ？　ってこれバァじゃなくてお嬢口調だな。おほほ。

「ばばぁー、ばばぁー！　ばっばぁぁ！！」

「連呼しない！　本を少し離しなさい！　字を読むときは適度な距離を保つべし！」

断っておくけど僕の喋り方が微妙に個性的なのは、カカへのツッコミが毎日毎日続いて普通の喋り方に飽きたからである。断じて地ではないのでよろしく。

「どれ……『錯覚』さっかくって読むんだよ」

「なるほろ。意味は、お『金』のことはどんな『昔』のことでも『覚』えてる、ってことでおっけ？」

可愛く小首を傾げるカカは本当に素直だ。いや、ひねくれてるのか？　どっちだろう。

そんな無意味な問いをぼさっと考えていると、カカが本を音読し始めた。

「えっと、『友人に五千万円を貸したと錯覚した』」

……どういうお話をどうしたらそんな文章が出てくるのだろう。

「そんなにお金を貸したら、誰だって覚えてるよねぇ？」

やれやれ、と大人ぶってるカカはまるっきりマセてるガキにしか見えないし、意味も勘違いしまくっているのだが……訂正するのも面倒なので放っておこう。

保護者の義務だって？　そんなのは生ゴミにでも出しといておくれ。僕は元来てきとーな性格なのさ。そんな責任重そうな役割を担うつもりはないのである。可愛いから食わしてやる、それでいいのだ。

可愛くなくなったらどうするか？　それはそのとき考えよう。ところで保護者の義務って生ゴミで合ってるのかなぁ。今度、業者に聞いてみよう。

「のう、トメさんや」

「なんだいカカさんや」

「『死を錯覚した』っていうのは生命保険がからんでるのかな」

「カカ、生命保険の意味わかってるか？」

「死んだら儲かる」

「身も蓋もないなオイ」

「『その錯覚は囮さ！！』っていう文は、お金がにせ札だったってことかな」

複雑なトリックの探偵物でも読んでるのかな。どうでもいいけど錯覚って言葉多いな。一体どういう内容の本なんだか。

というか囮って漢字はわかるのね君。

「『サッカーを錯覚』」

しまいにはダジャレかい、しかもつまらん。

「さっかく……サッカー食う？」

食うな。

「あのな、妹」

観念して本当の意味を教えてあげよう。

「おまえの『錯覚』という言葉の使い方は間違ってる」

「や、それは錯覚だよ」

「そんなわけないだろ。いま言った『錯覚』の使い方だって間違って――ないじゃん」

この小娘、まさか。

「知ってて遊んでた？」

「えっへん」

……こんなふうに、僕は変な妹となんでもない日常を過ごしている。

おまけ。

「あ、もしもし。業者さんですか？」

『はい』

「保護者の義務って生ゴミであってますか？」

『あってます』

生ゴミすげぇ。

## カカの天下2「カカとしりとり」

「馬」

「マントヒヒ」

「暇」

「街」

「ちから」

こんにちは、トメです。

今日は日差しが爽やかな日曜日、ですが僕とカカは不健全に家でごろごろしながら漫画を読み、ついでにしりとりをしています。

「拉致」

ちなみに今のが僕の番。

「ちんすこう」

ぶっちゃけこれ、なんだったか覚えてない。そんな微妙な答えを返してくれたのは我が妹、カカっす。

「うち」

「ち、ち、チーカマ」

「マーチ」

「ち、ち、ち……ちきしょう、舐めやがって」

「なんのセリフだそれは」

「むぅ、『ち』ばっかり卑怯だぞおぬし」

「しりとりとはそういう勝負なのですよ」

僕はやれやれ、と寝転がりながら首を振った。

「所詮は小学生。言葉のボキャブラリーで大学を卒業したこの僕に勝とうなど……はいはい、サービスでオッケーにしてあげるよ。ついでに『ち』じゃないので言ってあげよう。『敵』」

我ながらムカつく言い方をしたおかげで、カカは顔を真っ赤にして悔しがっているだろう。僕の目線は漫画に向いているからそっちは見えないけどね。

さぁ、どうする小学生のお子様。『吉』とでも答えれば僕に反撃できるぞ。もしくは何か僕を驚かせるような難しい言葉を言ってみるがいい。

「北朝鮮原爆実験成功！」

小学生を侮っていた。やるなコイツ。

じゃあ、これでどうだ！

「宇治川の戦い！」

平安時代末期に源義仲。頼朝から派遣された範頼、義経による合戦のことだ。現代の問題に日本史で対抗したがしかし、カカは不敵に笑おうとして失敗したようなわざとらしい笑い声を上げた。変な声。

「インドのリライアンス、ジャムナガール製油所で火災！」

な、なに！　世界三位の規模である同製油所全体の生産量に影響が出る可能性があるこの事件Ｉｎ十月二十五日に速報、を持ち出してくるとは……

「貴様、なぜそんなことを……」

戦慄を覚える僕に向かって、妹は嬉しそうに言った。

「ニュース、ちゃんと見てるから」

えらいなーおまえ。

しかし僕も負けてはいられない！　インドにはインドで対抗だ。

「インドネシア独立戦争！」

インドじゃないって？　インドって文字が入ってるじゃないか。だからインドだ。

日本が第二次世界大戦を終え、連合国へ降伏したあとにオランダ

との間で起こった戦争だ。八十万人も死亡したそうだよ。戦争いくない。ケンカもいくない。南無南無。

「また『う』かぁ……いや、いまトメ、せんそおおぉ！　って勢いよく言ったよね？」

「いや、それはないだろ」

「言ったよ！　盛りのついたメスブタみたいに叫んだよ！」

「どっからそんな言葉覚えてくるのおまえは！」

「トメが寝言で言ってたんだよ」

「へ？　は？　そんな、嘘だろ。嘘だと言ってくれ！！」

そんな自分すら知らない性癖でもあったのか！？　ちょっと待て連載開始直後になんてキャラにさせるんだ！！　作者は鬼か！？

「じゃあ、次は『お』だね？」

ああもう、なんでしりとりにこんな必死なんだ我が妹よ。暇だからですかそうですか。

「はいはい、もうそれでいいよ。で、次はどんな事件を持ち出すの？」

「オタクブーム」

「それ事件なの？」

「ある意味そうでしょ」

そう言われればそうなのか……

「おかげで日本のイメージが危ぶまれてるんだから」

小学生に言われちゃおしまいだな日本。

「だからいいかげん、オタクやめなよトメ兄」

「いや、だからさ！　初回から変な設定つけるのやめてくれる！？」

「なにをわけのわからないことを言ってるの？」

世界の構造がわからない妹は小首を傾げる。くそぅ、僕だけが苦しんでて、なんか嫌な感じ！

仕方ない、もう終わらせよう。

「じゃあ、『ム』だな。言うぞ。ムキムキ事件」

「あ、『ん』だ」

「あっちゃー失敗だなーあはは」

ちなみにこの事件の詳細は各自の想像に任せる。

「やることなくなっちゃったね」

「あ」

そういえば暇だったんだった。

「……もう一回やろうか」

「うん」

そうして一日は過ぎていく……

## カカの天下3「おりじなる物語」

「トメトメー。ちょっと聞いて」

「おう妹。今日も小憎らしい顔してるな」

「ありがと。トメ兄もいつも通りダサいよ」

「放っとけ」

どうも、ダサいらしいトメです。清々しい挨拶をかわした僕たちは、一冊のノートを挟んで向き合いました。

「で、なんだこれ」

「いま学校の宿題でね、物語を書いて来いって言われてるの。それでね、考えてみたのを聞いてみてほしいの」

「おお。案外にまじめだな、おまえは」

算数なんかと違い、こういう宿題は子供ウケするものだ。僕も小学校のころに原稿用紙二枚以上で物語を書いてこいと言われ、十五枚ほど書いて先生を驚かせたことがある。

子供ながらに「この先生ぜったい読まねーな」と思っていたが案の定だった。その証拠が読んだ先生の感想。

『長くてすごいね』

大人の書く感想がこれかい、と当時は憤慨したもんだ。しかも追記がこれだ。

『疲れない？』

グレるぞ。

『私は疲れた』

知らないよ。

「それでね、斬新なのを考えたんだよ」

「ん、物語にそれは重要だな」

「じゃあ読むね。昔々、あるところにおじいさんとおばあさんが住んでいました。ある日、おじいさんは山へ芝刈りに、おばあさんは川へ洗濯へ行きました」

ふむ、案外普通だな。定番なところだと『おじいさんは街へガキをしばきに、おばあさんは宗教のシンポジウムへ心の洗濯へ行きました』くらいがインパクトありそうなんだが。しかもそんなのを子供が読むと威力倍増だ。

「おばあさんが川で洗濯していると、川から大きな桃がどんぶらこーと流れてきました」

む。桃太郎？

「まあ、なんて大きい桃でしょう。おばあさんは自分の身長くらい

はある桃を片手で掴み、家まで持って帰りました」

おお、微妙に斬新だ。すげぇなババァ。

「おばあさんとおじいさんは桃を目の前にして、早速食べましょう、と桃を切りました。すると中から男の子が現れました」

うん、まんま桃太郎だ。斬新さがまったくないな……

「中身が桃の実ではなくて残念がったおじいさんとおばあさんは、仕方なくその男の子を食べました」

斬新だ！！

いや、残酷だ！！！！

「喉に包丁をつきたてると血が勢いよく吹き出して、二人はおいしそうにそれを」

「待った！！　それダメ！　発表するな！　捨てなさいそんな話」

ああ、お母さん。カカはなんかエライ子供になっちゃったようです。え、僕のせいだって？　そんなこと言わないでよママン。

「もう一個あるの」

ほっ……安心した。カカもさすがにこんなものを発表するわけにはいかないと、わかっているようだ。

「むかしむかし、あるところに浦島太郎という若者がおりました」

うんうん、もう普通のでいいよ。

「ある日、浦島太郎は亀を苛めている子供たちを見つけました」

そこで颯爽と登場する正義の味方。いいじゃんいいじゃん。

「なんか興奮した浦島太郎は子供も亀も食べました」

「だからなんで食べるのですか！！」

なにやってんの正義の味方！　よくないじゃん！！　そんなのが本当にいたら僕が飛んでいって倒してやるぞっ。

「そしてトメ兄も食べられるのでした」

「心の呟きに続きつけなくていいからっ。ったく、変なのばっかり書いて……もっとまともなのはないのか？」

「あるに決まってるじゃない。トメ兄は残酷なのが気に入らないんでしょ」

「ああ、そうだよ」

「まぁ女の子は血とか見慣れてるし」

「おまえはまだ見慣れてないはずであろうがチビ助！」

最近の小学校では教育上不適切な話題が大変多いので気をつけましょう（いやマジデ）。

「じゃ、ラスト。むかしむかし、おじいさんは竹の中から綺麗な女の子を引っこ抜きました」

なんかアバウトになってるなぁ。

「かぐや姫と名付けられた少女はどんどん成長し、やがて国一番の美人となりました」

うんうん、それを見初めた男がよってたかって貢いで大金持ちになるんだよなぁたしか。罪な女だね。

「おじいさんは興奮して寝ているかぐや姫にダイブしました。『ふーじこちゃーん！』」

そっちの食べるの意味できたか、罪すぎるぞかぐや姫。あと不〇子ちゃんじゃないし。

「しかし布団はバサッと翻り、気づけばおじいさんは手錠でがんじがらめになっていました。『お宝はいただいていくわよ、ルッ〇ァーン』と色っぽく言いながら、貢品を全てお金に変えてかぐや姫は逃亡しました、おしまい。よくできたでしょ？」

「……ああ、ある意味」

「そう言ってお兄ちゃんは疲れたようにため息をつきましたとさ。とても楽しかったです。私がめでたしめでたし」

そう言って、私は席に座った。

教室中の視線が私に向いている。なんか向こうでトメ兄も頭を抱えつつこちらを睨んでいる。

今日は授業参観。私の発表は大いにウケたようだった。いろんな意味で。

「百点！　花丸！」

「自分で言うな！」

「じゃあトメ兄言え！」

「誰が言うか！」

## カカの天下４「冗談？　それとも」

「もしモグラになったとしたら何する？」

トメです。夕飯も終えてゴロゴロしてるところにカカがきて、妙なことをぼやきました。

この妹はたまに、このような無意味なことを言うためだけに僕の部屋へわざわざ来るのです。多分暇なんでしょう。

「モグラねえ……とりあえずミミズでも食べるんじゃないか？」

まだ二十一時だけど眠ってしまいそうな勢いでゴロゴロしまくってる僕は投げやりに答えた。カカはふむ、などと芝居がかった仕草で顎に手をやり、

「ミミズ……おいしいと思う？」

「さぁ。食べたことないからわかんないなぁ」

「さっきの夕飯、おいしかった？」

「いや、正直いまいち」

「じゃあそれが答えだよ」

「入れたんかい！！！」

カカは珍しくにこーっと笑ってこちらを見ている。ちくしょー、

たまに笑うと可愛いくせに、なんでこういう可愛くないことした後にばっかり笑うんだ……

「ところでさ」

「……今度はなんだよ」

先ほどの夕飯にそれっぽいものが無かったかを必死に思い出しながらも、カカの相手はしっかりとする。たまにこの妹は会話を録音しているので、変な答え方をするといろんな場所にその音声を広めようとするから侮れないのだ。

前のときなんかもう、もう……！　ねっ！？　思い出したくない！

「もし蛇になったとしたら、なにする」

「えーっと、とりあえずカエルを食べ……て……」

「カエルっておいしいと思う？」

同じ展開じゃないか。

「や、絶対まずいだろ、あんなの」

味だけじゃなくて色んな意味で。

「さっき食べたから揚――」

「から揚げか！　あのから揚げなのか！！」

「おいしかった？」

「すごい微妙な味がしたぞ！」

「じゃあ、それが答えだよ」

うあああああ！　マジか？　マジなのか？　そんな意味不明なものを僕は食べてしまったのか……ん？

「ちょっと待て。夕飯作ったの僕じゃん？」

「そだよ」

何を今更、というふうに笑うカカ。なんだ……やっぱただの冗談じゃないか。

「だからこっそり入れといたの」

「入れたんかい！！」

「食べたのトメ兄だけだけど」

「しかも鬼かおまえは」

「いや、妹」

「じゃ妹鬼か」

「なにその新種の鬼ごっこ」

力なくうなだれる僕に、我が妹は優しい言葉をかけてくれた。

「ま、食べちゃったんだし仕方ないよ。別に死ぬわけじゃないみたいだし」

「えーと……やっぱり冗談なんだよね？」

「や、今回はマヂ」

「マヂ？」

ああ、なんかそう言われてみればお腹のあたりがギュルギュルと――

その直後、僕は倒れて病院へ運ばれた。

医者の一言。

「ストレスですね」

病院を出た後のカカの一言。

「冗談だったのに」

やっぱりかよ言うの遅いわ！！

## カカの天下5「ハロウィン警報」

ハロウィンの波浪警報・押し寄せる子供にご注意ください

「トリックｏｒトリート！」

眠っていた僕を起こしたのは、妙に弾んだ声で発せられた妹のその一言でした。

お菓子をくれなきゃいたずらするぞ。

ハロウィンの決まり文句ですね。今日がその日だなんて覚えていませんでしたが、やはりカカのような子供には大事な日なんでしょう。

仕方ないですね。布団に入っている僕にはすぐにお菓子を出すことはできませんが、カカがいたずらを始める前にどこかから調達して……などとぼんやりと考えて目を開くと、目の前にキラーンと光る包丁の刃が、っておい！！

「トリィーッッック、オア、トリィィィィト」

なぜにこのお子様はＢ級映画の殺人鬼よろしく巻き舌利かせた口調＆ニヒルな笑顔で包丁を僕に突きつけているのか。

オイコラいったいどんな悪戯する気ですかいオジョウサン。

タスケテ。

「あ、あのさ。あいにく今お菓子ないんだよね」

「キィィィール、オア、トリィィィィト」

「死！？　お菓子くれなきゃ殺すぞ？　どんだけ切羽詰ってお菓子ほしいんだおまえは！！」

「子供はお菓子がないと死んじゃうんだよ」

「贅沢なことを……世界の恵まれない子供たちに謝れ！」

「ごめんなさい」

素直でよろしい。

やれやれ。寝起きでパニックになったけど、これはいつものカカのタチの悪い冗談なのだ。僕はよろよろと起き上がると、

「ちょっと待ってろ」

台所へ向かう。たしか昨日商店街で『小さいお子様がいる家はぜひこれを。買わないと包丁持って恨まれますよ』とかいう煽り文句に突き動かされてわけもわからず買ったお菓子があった。

ん？　包丁持って？　なにこの予言的中。それとも最近の子供は不満があると包丁を突きつけるのがブームなのか。なんて危ない世の中だ。先が不安だぜ日本。

「あっれー」

おかしい。戸棚の奥に隠しておいたお菓子が見当たらない。

「トリックーオアートリックー」

「悪戯しかしないんかい。や、しかし悪い。ここにお菓子あったんだけど、どっかいっちゃったみたいだ」

「それなら私の胃袋へレッツダイビング」

「おまえが食ったんかい！」

「だからお菓子要求してるんじゃん」

そう言われればもっともな話だ。

「となるとお菓子なんかないぞ？　買ってくるにもまだ朝早いし……お、そうだ。お隣さんならイベント好きだしお菓子用意してるかも」

「おお。あそこに住んでる明彦お兄さんは私の魅力ですでに陥落させてあるから、きっとたくさんくれるね！」

「おまえ難しい言葉知ってるね」

「じゃ、突撃となりのお菓子強奪にいってきますー」

「ちょい待ち」

わーいと走り出そうとする妹の頭をむんずと掴み、引き止めた。

「どうせならそれっぽい格好しよう」

僕は結構この手のイベントが好きだった。懐かしきは子供のころの思い出である。あのときの楽しみを少しでも子供に分け与えたいと思うのが親心言うもんや。いんやぁ我ながらじじくさい。

確か最近、日本中を飛び回っている姉貴がちょうどよく巨大なカボチャを送ってきたんだ。もしかするとハロウィンを見越してのことかもしれない。

「カカ、その包丁貸してみ」

僕は小学校の頃に昔みんなでやったのを思い出しながら、カボチャに穴を開け、中身を取り出し、目と口を開けてやった。穴を開けるときに手を切らないように気をつけさえすれば、案外簡単にできるものだ。

できたそれをカカに被らせると、いつもは表情が乏しい我が妹もさすがにテンションが上がったらしい。楽しそうにはしゃぎながらお隣さんの家に突撃していった。

うーん、いいことした。年が離れてるせいか妹というより自分の子供みたいに感じるんだよなぁ。だからついついこうやって甘やかしてしまうのだが……

よくやるわ、と自分で自分に呆れつつ、失礼がないか一応お隣の様子を見に行くことにした。

インターホンはすでに押したらしく、ちょうどドアが開くところだった。

人のよさそうな明彦お兄さんが顔を出す。

そしてそこにいるかわいいカボチャ仮面を見て驚きの声をあげた。

「ひ、ひいいいぃぃぃ！！」

……驚きの声？　そんな絹の裂くような声で驚くなんて情けないなぁ男として。

そう思って僕はよく状況を見てみた。

「トリィーッッッック、オア、トリィィィィィト」

やたら楽しそうに包丁（凶器ともいう）を突きつけるカボチャ仮面（覆面ともいう）がお菓子を要求している。

あれ……これって強盗というんじゃないだろうか。

なんて呑気に思ってる場合じゃない！！　あいつまた包丁持ってったのか！？

ハロウィンにフィットした事件として通報、報道されるのを防ぐべく、僕は明彦お兄さんに説明するために全力で駆け寄った。

そのあと。状況を理解した明彦お兄さんはあっさり許してくれて、ちょっと危なげに頬を緩ませながらもお菓子をくれましたとさ。めでたしめでたし。

## カカの天下６「誕生日は忘れるな」

トメでーす。

「友達が誕生日なんだけど」

仕事から帰ってきた途端に妹が現れ、そんなことを言いました。

「プレゼントあげようと思うの」

ほほう、日頃変な話題ばっかり出してくるから人としてちゃんと成長しているのか心配だったけど、どうやら少しはまともな部分があるようだ。これも僕の教育の賜物だね。

「へぇ。で、その誕生日はいつなんだ？」

「今日」

「今日かい」

「元々その子の誕生日知らなかったんだけど、なんか今日ずっとあからさまに落ち込んでたから、もしかしてと思って調べたら案の定って感じ」

ほんと、この子は妙に聡い。マセてるとも言うか。

「だからまぁ、一応祝ってあげてポイント稼ごうかと」

この歳からそんなことを考えてるとは……女は末恐ろしい生き物

よ。

「しっかし今日はもう夕方だし、買いに行く時間なんかないぞ？」

「や、祝うことが大事なんだから気持ちだけでいいんだよ」

「建前もなにもあったもんじゃないな。まぁ、そういうことなら探してみるけど」

お菓子あたりが無難かな、と台所をごそごそと漁ってみる。

そして出てきたのは、

「高級かつおぶし」

「……なんでそんなのがあるかな」

「なんか姉が送ってきたんだよ」

「お姉が？　うちにろくに顔出さないでなにやってんだか」

「これでいいかな」

「ダメに決まってるじゃん。女の子の誕生日にかつおぶしプレゼントする人なんていないよ」

「でもこれ結構高いんだぞ」

「いくら？」

「五千円」

「うそ！？」

「ほんと。小学生の誕生日なら五千円もかかってればオッケだろ」

「お金かかってればいいってもんじゃないでしょ」

「金かかってればいいんだろ。女なんてそんなもんじゃないのか？」

「そんなだからトメ兄はいつまで経っても男になれないんだよ」

「……ちょいと君。どういう意味で言ったんだそれは」

「んー、でも向こうのお母さんがそれでおいしいお味噌汁作れば一応喜ばれるかな。まぁ、候補には加えとこう。他にない？」

僕の疑問は無視された。なので渋々探索を開始する。そして次に出てきたのは、

「高級漬物」

「なんでそんな微妙な高級品ばっかりあるのうちには」

「だって姉が」

「あのアバズレめ」

「や、かつおぶしと漬物を送ってくるアバズレってわけわからんし」

「で、その漬物も高いの？」

「七千円」

「たかっ！　なにが入ってたらそんな高いの」

「たらば、数の子、ホタテ……北海道にでも行ってたのかな」

他にもないか探してみたが、めぼしいものはこれくらいだった。

「とりあえずかつおぶしと漬物しかないぞ」

「……こんな微妙なものなのに合計金額一万二千円って、なんか馬鹿らしいね」

「で、どうする？　これもってく？」

「……手ぶらっていうのもなんだし、高いっていっても私のお金じゃないし……持ってって、みようかな」

「おお、チャレンジャー」

苦虫を噛み潰したような顔をしながらも、カカはその二つをもって友達の家に突撃した。

――そして、帰ってきた。

「なんかすごく喜ばれた。その子のお母さんとおばあちゃんに」

そりゃかつおぶしと漬物だしな。

「で、カカが持ってるそれは？」

「なんかお礼にって高級洗剤と高級納豆もらった」

「……その子は、喜んでたか？」

「うん。知っててくれてたんだねってすごく感激された」

「へえ、よかったじゃないか」

「そのとき、一緒にいたお母さんとおばあちゃんが『そういや誕生日だったっけ！？』って驚いて、その洗剤と納豆をプレゼントしようとしたのは笑えたけど」

「は。覚えてなかったのか親！？」

「だから感激したんだね」

家族に誕生日を忘れられ、なんとかもらえたのがかつおぶし、漬物、洗剤、納豆の高級シリーズだなんて……その子、憐れすぎる……

「おまえ、その子と仲良くしてやれよ」

「うん。なんかあまりにも憐れだし」

「そんなこと口にするおまえもある意味憐れよのぅ」

そんな感じで、今日も終わる。

## カカの天下7「めくりめぐり」

こんにちわ、カカです。今日はお日柄も困ってますことで。どんなお日柄か？　想像に任せます。

さて実は今、私はお日柄と同じように困ってます。なので頼りにならないまでも一応大人なトメ兄に相談してみました。

「ねえねえ、ちょっと相談してもいいよね」

「なんか妙な日本語だな。まぁいいぞ」

トメは仕事から帰ってきてふにゃふにゃになってます。正確に言うとソファーに抱きつきながらぐったりしてて今にも寝そうです。なので意識があるうちに聞いておこうと思います。

「実はね、小学校で敵ができたの」

「ん？　なに、女子のグループで抗争でも起きたのか」

「そんなのはいつものことだから大したことなくて」

「あー、やっぱりあるんだ」

「あのね、とある男子がスカートをめくってくるの。しかも一回や二回じゃなくて毎日、女子とすれ違うたびに」

それを聞いた途端、トメ兄はがばっと起き上がった。

「マジか！？　この時代にそんなことするやつがいるなんて……根性あるなぁ」

私には理解できない。なぜスカートをめくるということが根性あることに繋がるんだろう。

不思議そうにしている私に向かってトメ兄は得意そうに言った。

「いいか？　今の時代、どこの場所でも集団での女は強い。小学校となれば身体的にも女のほうが強かったりする。昔は多少なら大丈夫だったが、マセてるガキが多い今の世の中でそんなことをしてみろ。そりゃ学校中の女子から白い目で見られ、さらには総無視、集団いじめされてもおかしくないんだぞ？」

「なのにそんなことするのって、単なる馬鹿じゃないの？」

「いや、だからこそ！　それを実行した者は男子からは勇者と讃えられるのだ！　しかも小三になってまでそんなことをするなんて、すごすぎる」

そうかなぁ。とりあえず先生が止めに入るまで泣きながら「ごめんなさい」と言われ続けても手を止めずにぶっ叩いてたら、他の男子はその子に近寄らなくなったけどなぁ。

そのことを言うとトメ兄は「そりゃそうだ」と笑った。

「とばっちりが怖いんだよ。その子と仲良くしたら自分も同じ目にあうかもしれないしな」

「それで友達なくしたら、やっぱり単なる馬鹿じゃないの？」

「いや、それでも勇者なんだよ。皆、内心で羨ましがってるはずだ」

「スカートめくりできるのがトメ兄はそんなに羨ましいのか」

「違う違う。その行動力を、だよ」

そうなんだぁ。

トメ兄にそこまで言われるなんて少し羨ましい。

なので翌日、小学校で。

私も勇者になってみることにした。

でも男子にスカートはない……仕方ないね。

すれ違いざまにその子の短パンを思いっきりずり下げてやった。

「！」「！」「！」「！」

周囲の人がすんごくびっくりした顔で固まった。その子もパンツ丸出しで石化する。

「あ、あの。カカちゃん、なにしてるの？」

仲のいい女子の一人が聞いてきた。私は勇者になるとか言うのが

恥ずかしかったので適当なことを言ってみた。

「んと、仕返し？」

それを聞いた周りの女子は、なんだかすごく納得した顔をした。

「……で、いままで被害を受けた子は、その子が隙を見せると短パンをずり下げるようになったって？」

「ほとんどの女子が被害にあってたからね。休憩時間であの子が短パンを下ろしてない時間のほうが短かったかも」

「……その子、学校こなくなったろ」

「うん、転校した」

「おまえが総いじめのきっかけつくってどうするよ……」

「私、勇者？」

「や、どっちかというと魔王」

「やった♪」

「いくらおまえの女子仲間が魔物っぽいからってその称号で喜ぶな」

「褒めたたえてよ！」

「よくやった。てい」

痛っ。

「なにするの」

「褒めたたいた」

## カカの天下8「文化の日に売るものは」

今日は文化の日です。なので文化なトメです。すいませんいつもと違いはありません。

――さて。我が妹、カカの通う小学校では毎年その日にバザーをやっています。

各自が適当に家のものを持ち寄って小学生らしいお値段で商売するわけだけど、値段の割りに意外といいものが転がっていたりする。特に苦し紛れに親がもたせた生活用品なんかはねらい目だね。お子様にはその価値がまったくわからないので、家事をする人には非常に助かったりする。

そういうわけで。一応家のことを多少はやっている身として、そして兄として僕も久々に小学校へ赴いてみたわけだ。

子供とその家族による喧騒を掻き分けながら、僕はカカの教室へたどり着いた。

扉をくぐり、中に入る。いつも教室を埋めている机は片付けられ、売る側と買う側を分けるため、そして商品を上に乗せるためだけにいくつかが使われている。椅子を全て片付けた、という理由もあるだろうけど、机を並べ替えるだけでよくここまで広いスペースにできるもんだ。

「お、トメ兄」

「よう」

机の向こう側にカカを発見。ねじりハチマキを頭に巻いて『商売繁盛！』と殴り書きされたTシャツを着て、なぜかバナナを持っている。

「……そんなシャツあったっけ。あとそのバナナって売りもんか」

テコテコと寄ってきたカカは、あっけらかんと答えた。

「や、シャツは作った」

「待て待て、よく見ればそのシャツ僕のだろうが」

「だって自分のシャツに落書きなんかされたくないでしょ？」

「その言葉、そっくりおまえに返す」

「あと、バナナは今から叩くところ」

「待て待て、バナナの叩き売りって言いたいんだろうが意味が違う」

「バナナで客を叩いて買わせるんじゃないの？」

一体どんな脅迫商売だそれは。

「あのな、バナナの叩き売りっていうのは、芸とか口上を巧みに使ってとにかく客を集めて、少しずつ値段を下げたりしながら物を売ることを言うの。昔、そうやってバナナを売った人がいて、それが有名になったのが由来ね」

「ほー」

『ほー』

いつのまにか教室中の生徒が感慨深げに頷いていた。なんだおまえらは。

「聞きましたか？　皆さん」

そしていつのまにか担任の先生であり、最近いい年になり、行き遅れと噂の竹先生が。

「カカさんのお兄さんのお話は大変勉強になりましたねー？　でわでわ皆で頑張ってバナナを叩き合ってみましょー」

『はーい』

子供達は元気よく返事をして、各持ち場に散っていった。

「さてさてー私は人数分のバナナを用意しなければ」

「お待ちになって先生！　あなた僕の話聞いてなかったでしょっ」

本当にバナナで叩き合って戦争でもする気か。なんかそれはそれで楽しそうだけどさ。世の中にはトマトを投げあう世界的に有名な祭りとかあるし。でもそんなバナナ戦争したら間違いなく掃除がめんどくさいぞ。

「あのですね先生、バナナはいりません」

「そんなバナナ！」

「話を聞け！」

……先生に叩き売りについてもう一度説明しなおすのに、三十分もかかった。

そして気がつけば―教室の中は叩き売りというものを自分なりに実践している生徒で溢れていた。

「へいラッシャイ！　活きのいい雑誌だよ！　ピチピチだよ！」

などと、男の気を引きそうな口上を述べている女子やら。

「さぁ！　この呪いの人形、効果は本物だよ！　ちょっと実践してみますね。僕の毛をここに入れて、くいっと腕を曲げるとおお！　腕が勝手に動くぅ。足を動かすと足が、っとっとっとうわああ！」

などと、どこから出したのかわからん毛を入れて芸を見せながらバランスを崩して女子に突っこんでいく男の子やら。あ、抱きつこうとしてビンタされた。でもなんか嬉しそう。

「さぁ、ここで掘り出し物の登場だ！　お父さん必見。年頃の男の子のベッドの下に隠されたワンダーランドをごらんあれ」

などと、兄のでもかっぱらってきたのか教育上不適切なものを売ろうとしているカカやら。

……ん？　カカ？

ＨＡＨＡＨＡ！

兄って僕のことやん？

さあ走り出そう。

一時でいい、カモシカとなれ我が脚よ。

神器たる武器、バナナもて。

我が敵を討ち滅ぼさんために。

## カカの天下9「架空請求の遊び方」

「のうのうトメさんや。飯はまだかいの？」

まだですよ、ってな感じなトメです。って、あれ？

「へぇ、すごいな」

僕が驚いたのは妹、カカの声だ。セリフはいつものやりとりだから特に面白みはないけど、声が妙にハスキーになってる。低い声だと、本当におばあちゃんの声に聞こえるのだ。

「とうとう声にまで芸が伸びだか。成長したな、兄は嬉しいぞ」

「へへー」

得意げに笑う声も程良くかれて……ん？

「もしかしておまえ、風邪ひいてるだけか？」

「みたい」

「おいおい、それ早く言えよ。薬飲んだのか？」

「うん。おかしいのは喉だけだから寝てなくても」

「寝てなさい」

有無を言わさず押さえつけようとしたとき、電話の音が鳴り響い

た。

それを聞いたカカはあっさりと僕の腕を抜け出し、受話器をとってしまった。

「もしもし、おばあちゃんですじゃー」

さっき聞かせたおばあちゃんボイスで言う我が愚妹。おいおい、そんな対応じゃ向こうも困るだろうに……

と、楽しそうにしていたカカの表情がふいに曇った。どうやら戸惑っているようだ。

「……ね、トメ兄」

受話器の口を押さえて向こうに聞こえないようにして、カカは助けを求めてきた。なんだ、問題でも起きたのか？

「なんか、『おう、ばあちゃん？　俺だよ俺！』って」

ある意味問題だ！

「なんてノリのいい人なんだろう」

「や、別におまえの悪ふざけにノッてるわけじゃない。今巷で流行ってるオレオレ詐欺とか架空請求とか、そんなんだよ」

「ほう、これが」

カカの口が意地悪そうに歪んだ。

何をする気なのか、僕は一目で理解した。

「任した」

「任された」

カカは受話器の口を開け、会話に戻る。

「ほうほう、トメ吉かえ？　なんじゃどうしたんじゃ。また痴漢で警察のお世話にでもなったのかえ？」

ええ、言っておきますが僕にそんな経験はありませんよ。

「なに、車で事故に？　おかしいのう。おまえさんは『免許なんか引きこもりには必要ないぜ！』とか言っておったではないか。なに、免許は昨日とって、引きこもりもやめたと？」

ええ、そんなことは言ってませんし免許も持ってます。それにしても相手の嘘もすごいな。引きこもりがそんな都合よく免許とって外に出るわけないだろうに。まだまだ甘いな。

「そうか……またお金がなくなるんじゃのう。私の夫は女と借金を作って逃げ、私自身は通販詐欺に騙され、娘夫婦は家出に自殺。おまえさんも結婚詐欺に三回もあって……ようやく生活の目処もたってきたのに。うう、世の中は厳しいのぉ」

おい、ちょっと待て。なんだその無いとも言い切れないのが恐いリアルな設定は。小学生のアドリブにしては見事すぎるぞ。

「保険屋も年金屋も金を払えと毎日脅してくるこの生活にも、ようやく慣れてきたというのに……」

あ、ここらへん小学生だな。保険屋が脅してこようものなら大問題だし、年金屋なんか無い。そんなこと言ったら向こうにもすぐにバレ――

「おお、同情してくれるのかい？　そうか、おまえさんも年金屋は怖いか」

――てないし。しかも話あわせてるし。もしかして本当にあるのか年金屋。

「ほんで、世間に騙され路頭に迷い自殺寸前のおいぼれに、引きこもりの女たらしで騙されまくりのろくでなし&痴漢変態ＶＳ強盗殺人犯ヒャッホウの息子が一体何の用じゃ？」

……や、なんかツッコみ所がいっぱいすぎます。家にいるんだから路頭に迷ってないじゃん。ＶＳてなにさ。強盗殺人はどこから持ってきた。ヒャッホウって何。

「む、すいませんでした？　わかればよいのじゃ」

偉そうに鼻を鳴らしながら、カカは大仰に受話器を置いた。あっさり引き下がるなよ相手の人。頭弱いな。まぁ実際に身体弱ってるカカの声で言われると、無理が言えなくなるのも仕方ないけどな。

「ふー……う？」

風邪の身に今のやりとりは疲れたらしい。顔が少し赤くなってフ

ラフラしている。

「ご苦労さん。もう寝たほうがいいぞ？」

「ちゃんとできたでしょー」

ああ、今のやりとりか。

「なんか咄嗟に思いついたにしては出来すぎだったな」

「実はねー、昨日小学校で『もし詐欺の電話がかかってきたらどうやって断りますか？』っていう問題をー、皆で考えたのー」

皆で……なるほど。あの口上は小学三年生連中の知っている言葉の結晶というわけか。しかし自分をみじめにしまくって相手に同情させるっていうのは、小学生の発想としてはダーティだなぁ。

「とにかく、もう寝なさい」

「はーい」

布団を用意してカカを寝付かせる。

と、そこで僕の携帯が鳴った。知らない番号だ。

「もしもし」

『あ、もしもし。こちら〇〇という有料サイトの者ですが』

おお、架空請求だ。

『で、ですね。まだお支払いになられていない料金を振り込んでいただきたいのですが』

「どこに？」

『ええと、口座番号はですね、〇〇です。では振込み、よろしくお願いいたします』

「なにを？」

『へ？　い、いえですから当サイトの使用料金を』

「なんで？」

『ですから、〇月〇日にあなた様が使用された』

「だから？」

『……いい加減にしてください。振り込んでいただかないと裁判沙汰ということに』

「なんで？」

『……それでは後日、係りの者がそちらに伺うことになりますのでよろしくお願いいたします』

「どちら？」

『……』

プツ、ツー、ツー。

勝った。

## カカの天下１０「カカの天気」

トメです。

仕事を終えて僕が家に帰ってくると、大量のテルテル坊主が迎えてくれました。

玄関から廊下、部屋の奥まで――能天気な笑顔がずらりと並んでいて、少し恐いです。

セロハンテープででも貼ったんだろうけど、こんなことをする人間はうちには一人しかいませんな。

「おーい、カカー！」

呼びながら部屋に入ると、そこにはでっかい白い布を身体に巻きつけて人間テルテル坊主になりながら、能天気な表情でテレビを見ている我が妹の姿が。

なんじゃこりゃ。

「どうしたの、おまえ」

「あのね、トメ兄」

ボケーっとした声で香加が言った。眠いのかな。

「明日さ、マラソンなんだ」

「……へぇ」

「だから、晴れるといいなって」

「マラソン好きなのか」

「だって走ってるだけだよ？　楽じゃん」

そういえばこの娘は妙に体力があるんだった。ヘタすれば運動不足の僕よりも。

「天気が回復するまでテルテル坊主このままね」

「……まぁ、いいけど」

ちなみに外は雨が降っている。

だがしかし、翌日は見事に晴れてしまった。

仕事を終えて僕が家に帰ってくると、再び大量のテルテル坊主が迎えてくれました。

なぜかそれに描かれた顔は涙を流していました。ずらりと並んでいると葬式場みたいです。

どうやらこの前のでテルテル坊主がブームになったようです。

「おーい、カカー！」

呼びながら部屋に入ると、そこにはでっかい白い布を身体に巻きつけて人間テルテル坊主になりながら、ひたすら涙を流してテレビを見ている我が妹の姿が。

なにがあったのだ。

「どうしたの、おまえ」

「あのね、トメ兄」

悲しそうな声で香加が言った。

「今日さ、友達とケンカしたんだ」

「……へぇ」

「だから、悲しくて」

「自分が悪いと思ってるのか」

「だから泣いてるんだよ？　当たり前じゃん」

だから悲しみに暮れてひたすら頑張って作ってしまったと。

「私が仲直りするまでナキナキ坊主このままね」

「……まぁ、いいけど」

ちなみに明日は土曜日だ。つまり三日はこのまま……

だがしかし、月曜日には見事にはずすことになった。ちゃんと謝れてよかったな。

仕事を終えて僕が家に帰ってくると、もいっちょ大量のテルテル坊主が迎えてくれました。

見事に描かれた怒りの形相がずらりと並んでいて、めっさ恐いです。

まだ続くのでしょうかテルテルブーム。

「おーい、カカー！」

呼びながら部屋に入ると、そこにはでっかい白い布を身体に巻きつけて人間テルテル坊主になりながら、テルテルよりも三倍は恐ろしい表情でテレビを見ている我が妹の姿が。

こえぇ。

「どうしたの、おまえ」

「あのね、トメ兄」

怒りを抑えた声で香加が言った。これが漫画なら額に青スジが十個はあるだろう。

「今日さ、悪戯でお気に入りの消しゴム壊されたんだ」

「……へぇ」

「だから、その子が呪われるといいなって」

「新しいの買わないのか」

「限定品だよ？　売ってないじゃん」

そういえばこの前、デパートの開店セールに行ったときに記念品で消しゴムもらっていたな。妙に気に入ってると思ってたけど……

「呪いでその子が不幸になるまでノロノロ坊主このままね」

「……まぁ、いいけ――や、よくない！　いつになるんだよ、はずすの！？　僕は嫌だぞ！　ずーっとこんな怒りの形相したチビどもと同居するの！」

「１０１匹ワンちゃん飼ってる人いるんだから１０１匹ノロちゃんも大丈夫だよ」

「こんなえぐい顔したティッシュにそんな可愛い名前はいりませんっ」

ちなみにカカは頑として引かなかった。

だがしかし、翌日は見事にはずされていた。

そしてカカは上機嫌に。

……えーっと、なにがあったのでしょうか……ね。

皆もテルテル坊主の呪いには気をつけようね。

## カカの天下11「じめじめいじめ」

「トメ兄、皆がサエちゃんのこと悪く言うの」

「へぇ」

なにやらかしこまった様子で僕の部屋にきたかと思えば、カカはそんなことを相談してきました。

「サエちゃんってあれだろ？　誕生日にかつおぶしと漬物の高級セットもらった愉快な女の子」

「うん。それであまりに哀れだから友達になってあげてる子」

むう。我が妹ながらドライな切り返しだ。

「でね、ほんっとその子、静かでね。あんまり皆にとけこんでないの」

ああ、なるほど。小学生というのは基本的に元気の塊だ。運動ができるだけでモテる年頃と言われるほど活発な子が多い。その中で静かな性格の子は友達ができにくかったりするのだ。もちろんそんなことを気にせず無邪気に付き合えるのが子供の利点だが……逆も言える。

「それでね、私と喋ってたらね、他の男子がサエちゃんに『おまえ喋るな』とか『うざいからあっちいけ』とか言ってきて」

「ははぁ。それ言ったの、元々おまえと仲良かった男子だろ」

「仲がいいとは言わないけど、それなりに遊んではいたかな」

ほんっとドライだなコイツ。

「で、その後おまえ『あんなやつ放っておいて遊ぼうぜ』とか言われたろ」

「……エスパー伊東？」

「伊東をつけるな」

なんにせよ、よくある話ではある。

「もともと他の子にもいじめられてたみたいでね。声が小さくて聞こえないからって皆で無視したり。ほんとに声は小さくて、たまに何言ってるかわかんないけどさ、聞き返せば聞こえるまで何度でも言ってくれるのに」

「……ほぉ」

カカは気づいていないみたいだけど、何度も聞き返してくれるっていうのはその子にとってはすごく嬉しいことだろう。

話を聞いてくれる人がいる。それは当たり前のようでとても大切なことだ。

大人にとっても。子供にとっても。

「なのに。みんな口も聞けないやつと喋っても意味ないとか言って」

子供は純粋で、残酷だ。

無邪気。この言葉は果たしていい意味なのだろうか？

邪気がない。悪気がない。だからこそ、自分が悪いことをしているのか、わからないし気づけない。

いじめなんてずっと昔からあった習慣だ。問題だ問題だと騒がれたところで、一向になくならない。

それは教師の責任だ親の責任だと言われていても、どうしようもないのだ。

相手は子供。無邪気の塊でもある。理解できないものはできない。大人が何を言おうと、理由の無い無邪気な悪意に“なんとなく”従っている子供にはわからないのだ。自分で痛い目にあわない限り、相手の痛みを考えることなどできない。

そんなものを、大人にいったいどうしろと――

「それで、そんなこと言われてるサエちゃんを前にカカはどうしたんだ？」

「うん。“なんとなく”男子たち殴って、おっ払っといた」

「……そっ、か」

「うん。でもこれでよかったのかな」

「や、おまえは正しい。いろいろ大変だろうけど、頑張ってみな」

「うん！」

それを確認しにきただけなのか、カカは元気よく頷いて部屋を出て行った。

なるほど。

無邪気な悪意に勝てるのは、無邪気な善意だけか。

“なんとなく”いじめる子供がいれば、“なんとなく”それを助けることができる子供もいるのだ。大人のようにうだうだ考えないからこそ、臆面もなくそれができる。

なら大人のすることは、無邪気な善意を持つ子供を育てること……

「いったいどうすりゃいいんだ、そんなの」

僕は自問しながらベッドに寝転がる。

だいたい、うちは大層な教育なんぞしていない。ただ適当に、いろいろ考えすぎずに“なんとなく”楽しく過ごしてきただけだ。

……ん。

「なんとなく……か。無邪気な子供には、無邪気な愛情を、ってか？」

ちょっとだけ、自分のセリフに赤面しながら。

もしかしたらいるかもしれない、未来の我が子を想ってみた。

## カカの天下１２「カカＶＳラスカル」

「ヤツは敵だ」

トメです。や、僕が敵なわけじゃないですよ？

「最近、敵おおいなーおまえ」

家に帰ってくるなり開口一番そんなことを言った僕の妹カカは、はぁはぁと肩で息をしながら膝をつきました。

微妙に服が汚れていて、なんかよくわからんけど負けた人間って感じだ。

「ううー……あのラスカルめ」

「えっと、アライグマがどした？」

「犬だよ」

なんつー名前だ。

「近所に最近引越してきた家にいるの……その犬が襲い掛かってきてさ」

「噛まれたのかっ」

「組み伏せられて舐められた」

「なーんだ」

じゃれてきただけじゃないか。心配させやがって。

考えてみれば、噛まれてたらこんな呑気に喋ってはいないか。

「なーんだじゃないよ。舐められたんだよ？　犬畜生に！」

「おまえ妙な言葉知ってるよな。あと舐められたの意味が多分違うから」

「許せない……今度は勝つのっ。ゆきじょくせんなの！」

「雪辱戦な。で、具体的にはどうすんだ？」

「今度は私がマウントポジションをとる」

最近の小学生はいろんな言葉を知っている。いや、知ってて当然の言葉かこれ？　理解に苦しむところだ。

「だからトメ兄には背中をあずけた」

「背中も何も相手は一匹だろうに」

「いざ勝負！」

要は僕を助っ人に呼びに来たのか。

やれやれ、と思いつつ腰を上げようとして——ふと思いつくものがあり、台所でそれを持ってから「早く早く」と急かすカカの後を

追った。

そして近くの河原で、宿命の二人――じゃなくて一人と一匹は対峙した。

ひがーしー、いもうとのーやまー。

にーしー、こいぬのーうみー。

「はっけよい、のこった！」

適当に言ってみた僕の声を合図に、カカと子犬は同時に足を踏み出した。

カカは腰を低くして相手に詰め寄る。が、腰の低さで犬に敵うわけがない。滑るように突進してきた子犬は突き出されたカカの手をあっさりとすり抜け、勢いを殺さずに懐に飛び込んで体当たりをかました。

「ぐほぁっ！」

割とマジっぽい呻きをあげてカカが背中から倒れていく。子犬はそれに覆いかぶさり、なんか勝利者っぽくカカを地面に押し倒した。

「いやー、元気な子犬ですねえ」

「そちらこそ元気な妹さんですねー」

じゃれあってる一人と一匹……めんどいから二匹でいいや。

その二匹の飼い主である僕ともう一人は、ほのぼのと喋っていた。

「私、あそこに住んでるんですよー」

「ああ、あの青い家の。じゃあすぐ近くじゃないですか」

「あらあらー、それはそれは。今後ともよろしくですー」

間延びした声で話すのは、やたらおっとりした感じのお姉さんだった。姉と同じくらいの歳かなぁと思ったりもしたが、女性に歳なんぞ聞けん。こあいから。

「あらあら、あんなに舐めちゃって……よっぽどララちゃんのこと気に入ったんですね、ラスカル」

「カカです」

「カラ？」

空なのはあなたの頭では？　と言いそうになったのを咄嗟に堪える。

「ああ、カカちゃんですか。ラスカルと混ざってしまいましたー」

しかし何を思って純白の子犬に伝説のあらいぐまの名前をつけているのかは計り知れないが、まぁ子犬も飼い主も可愛いから許す。

「く、く、くっそー……えい！」

おお、カカが子犬を引き剥がした。一度組み伏せられると結構難しいんだよね、引き剥がすの。

「ふー！　ふー！」

カカは犬もかくやというくらい興奮しているご様子。やれやれ、仕方ない。ここは持ってきた秘密兵器を投入しよう。

「ほら、カカ。これやるから落ち着け」

僕は懐から一口サイズのチョコを取り出した。いざというときカカを鎮めるために持ってきたのだ。

「ほら、カカ」

「む」

むくれるカカに向かって、ポーンとそれを投げた。

カカはそれをキャッチしようと手を伸ばして――横からすっ飛んできた白い風に奪われた。

ラスカルだ。器用にも包みを開けて中のチョコを食べている。って、は？

「おまえ……やっぱり敵だー！」

機嫌よさげに「アン！」と吼えながらチョコを食べ終えたラスカルは、清々しそうに夕焼けに染まる河原を走る。そしてそれを追い

かける少女カカ。発端がチョコのわりには絵になるなぁ。

「ところで、あの。あなたの犬、チョコ食べちゃったんですけどいいんですか？」

「はい。毎日食べてますから大丈夫ですよ～」

「待ちなさい。それは糖尿病とかなるから全然大丈夫じゃない。それにアレルギーとかあってだね」

なぜか僕が犬の食生活について講義しているころ。

カカは追いかけていた犬に追いつき、飛び掛った。しかし距離が足らなかったらしく、犬のヒップに激突してしまう。

カカはそのまま河原の草原に倒れこんだ。ラスカルはカカの攻撃に驚いたらしく、同じく草原に寝転んでいた。

それはまるで――河原でケンカしたあとに友情が生まれるようなシチュエーション。そう、「いい拳だったぜ」とか言いながら夕日を見上げる、どこが発端かは知らないが知名度の高いシーンだ。

だがカカは別に拳を振るったわけじゃない。だからこう言った。

「いい尻だったぜ……」

セクハラオヤジかおまえは。

## カカの天下１２「カカＶＳラスカル」（後書き）

お話の中での注意を一つ。
ラスカルがチョコを食べていますが、これは糖尿病の危惧以外にも中毒のおそれがあるため、犬にチョコをあげるのはやめましょう。病気の原因になります。
というわけで今すぐラスカルの食生活を改めなさい、サカイさん。

## カカの天下１３「お隣のＯＬ事情」

「つまりですねー、やっぱりですねー、会社というのはつまんないものなんですよー」

こんにちは、トメです。

この間延びした声で喋っているのは、最近近所に引っ越してきたサカイさん。先日うちの妹カカがお世話になったついでにと、おそばを持ってきてくれたのです。

で、せっかくだから上がってもらってお茶でも、という良い感じの展開になり、「お仕事なにされてるんですかー」とか聞いたら「実はＯＬなんですがー」と愚痴がどんどん出てくるという悪い感じの展開となってしまった。

「そうですねぇ。まー僕の仕事場もそんないいもんじゃないですし」

「やっぱり上司が問題ですねー」

同じくテーブルを囲んでいる小学生の妹はフシギそうに首をかしげた。

「ジョージってなに？」

「こら、どっかの外国人っぽくて漢字にすると危ない言葉を吐くなカカ。上司。えらい人のこと」

「んー、私らにとっては先生？」

「そうそう」

会社の居心地は上司次第。これはどこでも共通だろう。もちろん同僚となる人間も重要ではあるが。

「歳くってるだけなのに、やたら偉そうなんですよねー。特別優秀でもないのにー」

おっとりしている風に見えてはっきり言う人である。それだけストレスが溜まっているということなのかもしれない。

「はぁ、やっぱあれですか。雑巾の絞り汁いれたお茶を出したりするんですか？」

冗談交じりにいった僕の言葉にサカイさんは「あははー」と平和そうに笑った。

「そんなことしませんよー。それじゃ相手に気づかれないじゃないですかー」

……ん？　セリフがなんか平和っぽくないぞ。

「悪気がないように見せて、かつダメージを与えるのが大事なんですよー」

おいおい。

「たとえばですねー。やっぱり社内でも虫とかいますよねー。それを見つけたらキープしておいて、お茶にいれるんですー。大抵の人

は飲んでから気づきますからそれでダメージを与えつつ、虫が入ったのは偶然です、と言い張ればおっけーです」

「あ、あーっと。ほら、虫とか触れない女の人とか多いですよね？まさかそんなことを世のＯＬが皆やってるってことは」

サカイさんは残念そうにため息をついた。

「そうなんですよねぇ。だから結構やる人が少なくて。しかも何度もやるとさすがにばれるから三回くらいが限度ですしー」

なにその妙にリアルな数字。

「あとはですねー、やっぱり書類のコピーを頼まれるじゃないですかー」

「まぁ、そうだね」

「頼まれたときはちゃんとした部数をコピーして渡すんですけど、会議前とかに隙を見て数部抜いておくんですー」

「えっと、すると、どうなるのかな」

「会議のときにその上司さんは『部数が足りない』と言われて気まずい立場になりますねー。会社の人って無駄にぴりぴりして偉ぶってる人ばっかりですから、さぞやネチネチ言われるでしょう」

「はぁ、それは、その……ばれたりしないんですか？」

「会議で本人がいない隙に、上司の机の上の比較的気づきにくい場

所に置いておけばー、「どういうことだ！」って怒る上司に「そこにあるじゃないですか」ってさらに恥をかかせつつ責任逃れできますー」

……こえぇよ、ＯＬ。

でもご近所のよしみでちゃんと話を聞いていた僕は気づかなかった。

横に座っているカカが話を聞きながらメモを取っていたことを。

「んとね、学校に嫌な先生がいてね」

「はぁ、それで？」

「でね、サカイのお姉ちゃんが言ってたことを試してみたの」

「へぇ、どんな？」

「んとね、職員室いって、お茶煎れてあげますーって言って」

「ほぉ。で？」

「捕まえたバッタを入れて出してあげたの」

「どんだけ堂々としたケンカの売り方だよ」

「こっそり入れたよ？」

「こっそりしてないから」

ピンポーンと無機質に薄情にインターホンが鳴った。

『すいません、あの、カカちゃんのことでお話が――』

居留守！！

## カカの天下１４「トイレでの葛藤」

「なぁカカ」

「なに、トメ兄」

「僕さ、おまえの相談にのること多いじゃん？」

「まぁ曲がりなりにも兄だし」

「そこは曲げとくな」

「いいじゃん、曲げても兄は兄でしょ」

「僕ら、何言ってるんだ？」

「さあ？」

よくわかんないけど曲がってるトメです。

唐突にカカに話しかけたせいで曲がってしまいましたが、気を取り直して話を元に戻します。

「えーっとだな。実は相談したいことがあってだな」

「ふむ」

「さっきさ、ファミレスでトイレに入ったんだよ。大きいのしようと思ってさ」

「む、そのときの状況を細かく説明でもするの？」

「どんな性癖の変態だよ。そうじゃなくてさ」

「はいはい。なに？　血でも出たの？　じゃあお赤飯だね」

……お子様は遠慮無しに意味を考えず発言するから困りものである。

「そうじゃなくてさ。えっと、トイレットペーパーあるじゃん？」

「うん」

「その横にさ、いつもはファミレスのテーブルの上にある割り箸が、ごそっと置いてあったんだよ」

「……はえ？」

「なんかさ、トイレットペーパーと並んで『俺も使えや』って感じで」

「……ほえ？」

「何に使えばいいんだと思う？」

奇天烈な発言と行動を日課とする我が妹も、これにはさすがに困惑しているらしい。

「えっと、つ、つまむ？」

「なにを？」

「えーと、やっぱほら、アレじゃない？　大きいところだし」

「……つまんでどうするんだ」

「えと……ゴミ箱に捨てるため、とか」

「普通に流せよ」

「私に言われても」

翌日。

「なぁカカ」

「ん？」

「昨日言ってたファミレスにもう一度行ってみたんだよ。どうせだから店員に用途でも聞こうかと思って」

「おお、チャレンジャーだ」

「でさ、とりあえず箸がまだ置かれてるか確認しにトイレに入ったんだよ」

「なかったの？」

「ああ」

「なんだ、つまんな――」

「代わりにスプーンとフォークが『使わねえとタダじゃおかねぇぞ』って感じで置いてあった」

「……わんだほー」

「何に使えばよかったんだと思う？」

「えと……スプーンはすくうもんだし、フォークは刺すもんだし」

「何をすくって刺すんだ……ってやっぱアレか？」

「め、召し上がれ？」

「嫌だよ！」

「店員には聞いたの？」

「怖くて聞けなかった……」

さらに翌日。

カカがそのファミレスの女子トイレに入ってみると。

「面白い店だ」

ミニガスコンロとお鍋が置いてあった。

……煮て食えと？

## カカの天下１５「誕生日の戦い」

「友達の誕生日でさ」

「またかいな」

唐突にそんなことを言い出したのはこの僕、トメの愛すべき（？）愚妹カカです。

（？）とつけたのは、果たしてこんな愚かな妹を愛して意味があるのかと自問してみたからです。

我輩は兄である。答えは、まだない。

「で、今度は何をやるのよ。高級コシヒカリでもやればいいのか？」

「ううん、そうじゃなくてさ」

「なんだよ」

「昨日昨日、あるところに」

「なんで昨日って二回言うんだ？」

「昔々、みたいなアクセントで」

「ああなるほど。で？」

「あるところに四人の女子が集まりました。その女の子たちは誕生

日を迎える友達にケーキを作ってあげようと集結したのでした」

「なんだ、もう終わってたのか」

どうやらそのときの様子を話したいらしい。

む？　ならなんで昨日じゃなくてわざわざ今日に言うんだ？　そういえば昨日のカカの様子、少し変だったような。

「準備も買い忘れなく終えて、そこそこに作業は進んでいきました」

「ふむ」

カカにお菓子作りのスキルはないが、女の子なら小学生でも一人か二人くらい器用に作れる子はいるものだ。まぁ小学生となると作れない人間が一人でもいれば台無しになる可能性も充分に高いのだが。

「スポンジが焼けて、冷ましてからクリーム塗るのよー、とリーダーが言いました。しばらく放置でやることがありません。しかし中々スポンジが冷めず、待ちきれなくなった部下Cがクリームをかけてしまいました」

「なんで一気にAじゃなくてCに飛ぶのかは置いといて……それで、どうなった？」

「クリームはもちろんドロドロに溶けてしまい、スポンジから皿へとぽちゃぽちゃと落ち、皿のなかには液体のクリームがたぷたぷと溜まりました」

うむ、妙な擬音がそこはかとなく惨状を描いている。

「やっちゃったものは仕方ないじゃん？　と開き直った部下Cは、もうどうにでもなれと用意していた缶詰のフルーツをこれでもかと適当に散りばめました」

豪快なヤツだな。

「するとどうでしょう。ケーキになるはずだったものは憐れ、『スポンジのクリームおひたし』とでもいうかのような、見事に変な料理へと変わってしまったのです」

ああ、よく言うよな。料理は適当に作っても食えるもんができるが、お菓子はちょっと失敗しただけで大惨事になるって。

「で、そのケーキもどきをどうしたんだ？」

「でもまぁせっかく作ったしお金もかかってるし、誕生日の友達には死んでも食べてもらおうという流れになり」

「鬼かおまえら」

「連れてきた友達は涙を浮かべながら食べてくれましたとさ」

「可哀想に……」

「でもさすがに半分くらいしか食べれなかったんで、作った皆も仕方なく一切れずつ食べさせられましたとさ。可哀想な私たち……」

「そんなもん半分も食わされたその友達のほうがよっぽど拷問だろ

うに」

「……やっぱ。そうかな」

「む？」

今まで面白げに話していたカカの顔が急に歪む。

ああ、なるほど。

昨日の様子がおかしかったのは、変なもんを食べたからじゃなかったのか。

「料理だの菓子作りだの、初挑戦に失敗は付き物だ。でも自分のためにそこまでしてくれる友達がいたんだから、その子も内心喜んでたんじゃないのか？」

「でも、吐きそうな顔してたよ？」

「う……それでも大丈夫だって。今日はその子と話したか？」

「ううん……なんとなく声かけづらくて……あんなになったの、私のせいだし」

やっぱ部下Ｃっておまえか。

落ち込んでたわけね。いっちょまえに。

「ま、明日ちゃんと話してみろって。あんなことになってごめん、とでも言えばきっと許してくれるさ」

「うん……」

翌日。

カカが上機嫌だったのでうまくいったんだろうな、と思いつつ一応どうだったか聞いてみた。

「笑顔でありがとうって言われたよ！」

「へえ、そりゃよかったな」

「私の誕生日にはもっとすごいお返ししてくれるって！」

「へえ、そりゃ、よか……」

「なんかすんごい笑顔で言ってくれた」

えと……なんかカカは嬉しそうに言ってるけど。

それ……

『お返し』じゃなくて『仕返し』って言わないか？

# カカの天下１６「名探偵カカの事件簿」

「犯人はおまえだ！」

おはようございまふ……トメでふ。

今日は日曜日。のんびりと昼寝をしていた僕は、そんな妹の声で起こされました。迷惑です。

僕は目をしょぼしょぼとこすり、こちらに指を突きつけながら偉そうにふんぞり返っているカカを睨んだ。

「犯人って……なんの」

寝起きの不機嫌ＭＡＸな声で言ったが、カカは微塵も怯まない。

それどころか真顔で首を傾げやがった。

「なんだろう？」

「おまえアホだろ」

「いえいえ、お兄官様ほどでは」

「おにいかんってなによ」

「お代官さまを改造した」

「ああ、なるほどな越後屋」

「ははー」

わけわからん。

「で、なんでいきなり犯人とか言い出したわけ？」

カカは無言でテレビを指差した。

テレビの中では湯煙殺人事件のエンディングっぽいものが流れていた。

「ああ、なるほど。テレビの影響か」

「かっこよかったの」

子供の頃ってズバズバ推理を進めてく探偵とかに憧れるもんだよなぁ。たとえその内容を理解していなくても。

「だから私も犯人捕まえる」

「とは言ってもな。僕は別になんの犯罪も犯してないし」

「じゃあ今すぐ犯して」

「聞きようによっちゃものすごい発言はやめなさい」

「どこがすごいの？」

「いろいろすごいの！　とにかく、何か罪を犯してる人見つけるの

はいいけど、無実なのに捕まえたりしたら大変なことになるんだからな。そこは気をつけるんだぞ」

「はーい」

わかってんのかなぁ……

翌日。

「あら、トメさん」

「お、サカイさん。おはようございます」

新聞を取りに外へ出ると、たまたま近所のお姉さん、サカイさんとばったり出会った。

「今日もカカちゃんは元気ですか？」

「今日も多分無駄に元気ですよ。おーい」

玄関に向かって呼びかけると、間もなくカカが顔を出した。

そして僕とサカイさんを見比べてこんなことを言いましたとさ。

「不純異性交遊で逮捕する！」

「……はい、カカちゃん。ちょっとお兄さんとお話しようか」

この後。僕は兄妹として、ちゃんとした知識と教養を伝えましたとさ。

翌々日。

僕が朝食に卵焼きを作ろうとしていると、カカがこんなことを言い出しましたとさ。

「ねえトメ兄」

「なに？　カカ」

「卵って鳥の子供だよね」

「まぁそうだな」

「今トメ兄は何してる？」

「卵を割ってる」

「この殺人犯！」

「まてやコラ」

この後。僕は育ての親として、食物連鎖の知識と教養を以下略。

翌々々日

僕が風呂場から出ると、なぜかカカが待ち構えていた。

そして僕の股間を指差し、叫びましたとさ。

「猥褻物陳列罪で――」

「ＨＡＨＡＨＡ！　よくそんな罪状を調べたな誉めてやるだが猥褻なのはテメェだ覚悟しろコノヤロウ」

この後。僕は人としての常識以下略。

## カカの天下17「友達」

私の名前はカカ。小学校で三年生をしています。どうぞよろしく。

さて、今は昼休み。給食を食べ終えた生徒が遊びまくるのはどこの学校も一緒だと思います。

「カカちゃん、この間の続き、しよー」

少し間延びした声をかけてきたのはサエちゃんといって、私が誕生日に高級ヘンテコセットをプレゼントしてから一緒に遊ぶようになった女の子――じゃなくて、遊んであげるようになった女の子、が正しいかな？

サエちゃんは、ぼやーっとしてのんびりやで間抜けで静かな子。とにかくトロいので友達があまりいない。

「ん……いいよ」

この間の続きというのはビーズ遊びのことだ。サエちゃんが持ってきたビーズを組み合わせてアクセサリーや動物の形を作って遊ぶ、なんともサエちゃんらしいおとなしい遊び。

でも正直、私はあまりこの遊びが好きじゃない。

なぜなら私は不器用だからだ。もともと身体を動かして遊ぶのが得意で、今までの昼休みも男子に混ざってボールで遊んでいることが多かった。

でも、私はなぜかこの子に付き合っている。

はて、なぜだろう。自分でもわかんない。

「ねえねえ、カカちゃん。たまには私たちとも遊ぼうよ」

サエちゃんの机の向かいに座ろうとしたとき、別の方から声がかかった。私が仲良くしているグループの女の子たちだった。

「いまね、男子も混ぜてバスケするの。カカちゃんもやろ」

「んー、でも私」

「いってきなよー。カカちゃん」

この子の面倒見なきゃ、と言おうとしたとき、ほやほや笑いながらサエちゃんが言った。

「ん、でも初めに遊ぶって言ったのサエちゃんだし」

「カカちゃん、身体動かすの好きでしょ？」

「うん、そうだけど……じゃサエちゃんも一緒にやろ」

サエちゃんはちらりと私の後ろを見て、首を横に振った。

「私、運動苦手だから……混ざったりしたら皆、楽しめないよ」

「そんなこと」

「いいから」

なぜか強引に。

いつも通りの笑顔で。

柔らかく笑いながらサエちゃんは言った。

「ほら、私も、怪我したりしたくないしー」

「……そっか」

私は納得した。

正直、身体を動かして遊ぶほうが楽しそうだったから。

だから私はあっさりと、仲のいいグループの中へと入っていった。

ふと振り返ってサエちゃんの方を見ると、一人でビーズを出して遊んでいた。

別に寂しそうじゃない。

私と遊ぶようになる前は、いつもそんな感じだったし、気にすることないかな。

私はそう思って体育館へと向かった。

そしていっぱい遊んだ。

誰よりも動いて、誰よりも点を入れて。

楽しかった。

もともと身体を動かすのが得意で好きな私だもの。当然のこと。

でも、なんだか変だった。

楽しいのに、何か変。

サエちゃんと遊ぶよりも断然、こっちのほうが楽しいのに……何か変。

よくわからない。

よく、わからないけど。

明日はちゃんと、サエちゃんとビーズ遊びの続きをしようと思った。

翌日。サエちゃんは学校を休んだ。

先生から聞いたところによると、風邪をひいたらしい。

今から思い返してみれば、サエちゃんはクラスの中で一番休みやすい子だったのだ。

トロくて、間抜けで、おとなしくて身体まで弱いなんて。

その日の昼休み。

私は友達の誘いを断った。なんとなく。理由はわからない。

サエちゃんの机の中を見ると、昨日遊んでいたビーズ入れの箱があった。

私はそれを取り出して、机の上に並べてみる。そしてなんとなく、サエちゃんと遊んでいたようにいろいろな組み合わせでいじってみた。

つまらない。

すごく、つまらない。

すごく、寂しい。

こんなことをサエちゃんはやっていたのかな。ずっと、一人でやっていたのかな。私と遊ぶようになるまで、そして昨日も、ずっと……

なんだろう。

なんだか、嫌な気持ち。

明日は土曜日。

また、会えない。

その日、私は家に帰ってからトメ兄に相談してみた。

「友達と一緒にいる理由？　また小難しいこと聞くねおまえ」

「なんかね、最近気になっちゃって」

トメ兄は呆れたような顔でため息をついた。

「おまえな……前々から思ってたけどさ、いろいろ考えすぎじゃないのか？　ガキのくせに」

「む」

「そりゃ友達だろうがなんだろうが、人と一緒にいる理由はたくさんあるさ。でもな、子供のころからそんなこと気にしてたら絶対ろくなことにならないぞ。子供は子供らしく、思ったとおり素直に行動してればいいんだよ。大人になったらそういうことは中々できないし、できなくなってから後悔したり、するしね」

そう言うとトメ兄はなぜか少し哀しそうに笑った。もしかすると自分の子供の頃でも思い出しているのかもしれない。

「……私、サエちゃんに会いたい」

唐突に私は言った。

サエちゃんの名前なんか一度も出してないのにいきなりこんなことを言って、トメ兄はさぞかし変な顔をしているだろうと思う。

でも、予想と違って。

トメ兄は笑っていた。

「じゃ、会いにいきな」

「え……いま？」

「おう。家は知ってるよな。こないだプレゼント持ってったし」

「で、でもいきなり」

「子供は遠慮しない！　恥ずかしがらない！　そんなの邪魔なだけだから！」

そう言って、トメ兄は私を家から追い出した。

これはもう、サエちゃんに会って帰って来るまで入れてくれないだろう。

だから、仕方なく私は、サエちゃんの家に向かう。

仕方なく。そう、仕方なく。

突然の訪問に、サエちゃんはすごくびっくりしていた。

顔にはあまり出ていなかったけど、しばらく一緒にいた中で……

誕生日にいきなり訪問したときと並ぶくらいに驚いていたはず。

赤い顔をしたサエちゃんは「風邪がうつるといけない」と言って玄関先で相手をしようとしたけど、私はなんとなく強引に上がりこみ、なんとなくサエちゃんの部屋まで突撃した。家の人はどうやらお仕事で留守のようだ。

なんとなく……そう、なんとなく。それだけを理由に、私は動いている。

サエちゃんはベッドに戻り、私はその横にあった椅子に腰掛けた。

「具合……どう？」

「うん、だいぶいいよ。明日には治ってると思う」

「そっか」

しばらく、会話が止まる。

……私は何をしにここに来たんだろう。そういえば考えていなかった。

沈黙が気まずくて窓に視線を向けていた私は、サエちゃんのほうをちらりと見た。

サエちゃんは……なぜかいつも以上にほやほやした笑みでこちらを見ていた。

「な、なに？」

「カカちゃん。プリント持ってきたとか、そういうんじゃないんだね」

「あ」

そういえば今日、学校から帰る前に「誰か届けてくれませんかー」と先生が言っていたのを思い出した。そのときはここに来るつもりなんてなかったし、誰も立候補する人がいなかったのだ。

「ごめんね……用もないのに来ちゃって」

私が謝ると、サエちゃんはきょとんとした顔で言った。

「なんで謝るの？」

「え、だって」

「用がないのに来てくれたから、私は嬉しいんだよー」

「え……うれ、しい？」

「うん」

サエちゃんが笑ってる。

なんだか、私は。

いろんなことが、どうでもよくなって。

なんとなく、笑い返していました。

「カカちゃん。ビーズ遊びの続き、やろっか」

「え、ここにもあるの？」

「いっぱいあるんだよー」

サエちゃんはベッドから上半身を起こして、近くの棚から箱を取り出した。

「……うん、やろう」

私は気がついた。

このキモチは嬉しいキモチとよく似てる。

ああ、そうか。

私は、サエちゃんといると、嬉しいんだ。

トロくて、間抜けで、身体が弱くて静かな子と、楽しくない遊びをする。

でも、なんだか嬉しい。

それはきっと、楽しいよりも上のこと。

「ねえ、サエちゃん」

「ん？」

「今度さ、バスケやろうよ」

「え、でも私、身体動かすの苦手」

「だから得意な私が教えるの。で、ビーズ遊びはサエちゃんが教えてくれるの」

「わ」

「ね、一緒にやろう？」

「うん、一緒に、やろう」

サエちゃんはベッドの上で。私はその隣の椅子の上で、時々話しながらビーズをいじる。

夕焼けに部屋が染まっていく。ビーズがきらきら光ってる。それが楽しくて、時間いっぱいまで私たちは笑っていた。

そんな茜色の思い出を、私は忘れない。

一緒にいると、嬉しい。

理由はきっと、それで充分。

そのことを忘れずに、この時間を忘れずに。

ずっとずっと、友達でいられるように。

## カカの天下１８「レンガの使い方」

「ただいまトメ兄」

ただいまられたトメです。新しい言葉を作ってしまいました。使いにくいですね、はい。

「おかえりー。ん？　なんだそれ」

学校から帰ってきた妹は、手に古ぼけた赤色の直方体を持っていた。

「なにそれ」

「レンガ」

「なんでそんなもん持ってるんだ？」

カカはなぜか驚いた顔をした。

「なんでって……レンガだよ？」

「レンガだな」

「三匹の子豚では狼を退治したという伝説のレンガ様だよ！？」

「や、退治したっていうか使われただけだし」

どうやらカカの中ではレンガが神格化しているらしい。でも確か

に今時レンガのブロックだけを見るのは珍しいかもしれない。

「そんなのどっから持ってきたのさ」

「公園に落ちてたよ」

「へぇ」

なんでそんなものが落ちてたんだろう。よく見てみれば結構きれいな状態だ。建設業者が捨てていったとか？　よくわからんけど。

「で、そのレンガをおまえはどうしようってんだ？」

「飾る！」

「まてや」

そんな直方体を飾ればこの間のテルテル坊主の悪夢のごとく部屋が妙な空気になるではないか。

「えー、だめなの？　ほら、兄妹喧嘩のときの武器にもなるし」

「おまえは僕を殺す気でありますか？」

「持って振り回せば運動になるし」

「そして手を滑らせてレンガが飛んでって僕の頭に激突して僕は死ぬのか」

「なんでそんなに死にたいの」

「死にたくないから言ってるの！　とにかく。何か使い道でもない限りは、そんなもの置いておくのは許しません！」

「むぅ」

カカは真剣な表情で考えながら、自分の部屋へと帰っていった。

そして次の日。僕が仕事から帰ってくると。

玄関先にレンガが置いてあった。

どこに置いてんだか……と持ち上げてみて、ふと気づく。

何か文字が彫ってある。

『人生はわりと下り坂』

ナンダコレハ。

「カカー！」

「おかえりなっさー」

「これ、なんだ？」

「私の魂の叫び」

次の日。

僕が仕事から帰ってくるとまたまたレンガが置いてあった。

手にとって見ると、新たな文字が追加されている。

『世の中なるようになりなさい』

「カカー！　これ」

「私の願い事」

次の日。

僕が仕事から帰ってくるとまたまたまたレンガが置いてあった。

手にとって見ると、新たな文字が追加されている。

『納豆ごはんと漬物』

「カカー！」

「食べたい！」

「しぶいな」

……どうやらレンガに何か書いて僕に読ませるのが面白いらしく、それからしばらくレンガ伝言が続いた。だが間も無くして書くところがなくなり、カカが新たなレンガを探しにいこうとしたので――仕方なくホワイトボードを購入した。

まぁ伝言するときに普通に役立つだろうし、いいか。

それは二代目レンガとして我が家の玄関に鎮座している。

そして今日も、カカの魂の思いつきが書かれている。

『エビのしっぽの動き』

……変なの。

## カカの天下１９「疑問いろいろ」

「お米はどうして白いんだろう」

……どうも、トメです。

ただいま食事中。そして例によって例のごとく、うちのカカが妙なことを言い出しました。

「なに、そのバカを哀れむような目は」

「いや、だって、ねえ」

「さも答えにくそうに言わないでよ」

「ほら、おまえだって掲示板に書いてたじゃん」

「む」

痛いところを突かれたのか、カカは黙った。

ちなみに掲示板とは先日購入したホワイトボードのことだ。玄関に置いてあるそれには家族への伝言と、カカの日替わり魂の叫びが書かれている。

そして書かれている本日のカカの叫びは『バカは目つきでころせ』

「そんな目で見ないでよトメ兄」

「や、おまえの言うとおりにしてみたんだけど」

「それじゃ殺せないよ。せつなくなるだけで」

「はいはい。で、なんで急にそんなこと言い出したんだ？」

「なんとなく思ったの」

なんともわかりやすい答えである。

「よくわからんこと考えるよな、子供って」

「じゃあ説明できる？　お米はどうして白いのか」

「……む」

どうして白色に見えるか――それなら科学的に言えばお米が光を反射すると白色に見えるから、ということになるが……なぜ白いのかと聞かれれば誰にもわからないだろう。

カカも小さい頃は無自覚な子供の質問で僕の頭を悩ませてきたものだ。さすがに最近はなかったのだけど、やはりたまにはそういう疑問が浮かぶらしい。

しかしそれは難しいけど悪いことじゃない。むしろ良いことだと思う。大人になっていろんなことに無関心になるよりは、よほど健全なことだろう。

なので、まぁ、そんな余計なことを考えても意味が無いなどとは言えず、ちょっと付き合ってみることにした。

「そうだなぁ……白いほうがおいしそうだから、とか？　ほら、黒とか緑色のお米とかあったら食べたくなくなるじゃん」

「でもそれだと、お米は食べてもらいたがってるみたいだよね。トメ兄、自分がお米だったらわざわざ食べられやすいような色になる？」

自分がお米だったらとは……また意外なことを言う。

でも案外そういう発想はおもしろい。もし自分が～だったら、という話はよくあるが、大抵は生き物が相手だ。食べ物を当てはめるのは幼児向けの番組くらいのものだろう。

「そうだな……じゃああれだ。不本意だけどその色にならなきゃならない理由があったとか」

「そうだね。世の中そんなうまくいかないもんね」

なんでそういうところだけ大人な思考なのかねこのお子様は。

「そのつもりはないのに色気が出てるからってむさぼられていく……嫌な世の中だね」

「ちょと待てお子様。いま色気って言ったか？　その言い方だとなんか悲惨な女性みたいに聞こえるぞ。色だろ、色」

貪るとかいう言葉もよく知ってるな、ガキのくせに。

「色って不思議だねえ」

そう言われてみればそうかもしれない。普段当たり前に目にしている色も、子供のころはクレヨンで遊んだりして新鮮な気持ちを味わっていたはずだ。

普段あるものに慣れてしまい、楽しみを忘れたのはいつのころだろう。

「……じゃさ、海とか空はなんで青いと思う？」

どこかで聞いたような話をカカに振ってみる。

科学とか常識とか、そういう余計な考えがないこの子供はどんな答えを出すのか――少し気になったからだ。

だけど意外にもカカはあっさりと答えた。

「そんなことくらい、考えればすぐわかるよ」

「へぇ、なんで」

「空だって海だって、綺麗でいたいからに決まってるでしょ」

それは大人が言えば陳腐な答えだろう。

恥ずかしげもなく子供が言うからこそ、心地よく聞こえる。

「そっか」

綺麗でいたい。なるほど、確かに納得できる理由だ。

身近にある海と空が綺麗じゃなかったら、僕達だって元気がでないしな。

「でも……いくら綺麗になろうと気を使っても、やっぱ荒れるときは荒れるんだよね。化粧が大変そう」

「なんで君はそう女性を例えに使うのかね」

そのうち海や空がダイエットとか始めたらどうする気だよ。

ちょっと見てみたいけどさ。

## カカの天下２０「嘘、本当？　まぎらわしい」

「トメ兄！！」

突然玄関から響いた妹の声に、戸棚に隠してあったケーキを取り出そうとしていた僕はかなりビビリました。

電光石火で戸棚に戻した僕は、何事もなかったかのように玄関へ向かいます。

するとカカがちょうどホワイトボードに何かを書き終えたところでした。その書かれた文字とは……

『嘘のような本当の話』

なに、このお昼の番組のサイコロの目に書いてあるような文は。

「トメ兄……どうしよう」

すっ呆けた文を書いたわりに、カカの表情は今にも泣き出しそうなものだった。

「どうしたんだ、高校生に喧嘩でも売って負けたのか？」

なんとなくこいつならやりそうだなーとか思うことを言ってみたが、さすがに違っていたようだ。特に外傷は見当たらない。

よく見ると、カカは後ろ手に何か隠しているようだった。

「ん、なに持ってるんだ？」

「トメ兄……驚かないでね」

「なんなんだよ、いったい」

「いや、やっぱり驚いて。じゃないとなんかムカつくから」

「言ってくれるなオイ。というかさっさと見せろ」

カカはおずおずと後ろに隠していたものを前に出した。

それはＢ５サイズくらいの大きな封筒で……受け取ってみるとずっしりとした重さが。

あれれ、なんだか紙束が入ってるよ？

まさか、マサカ、ＭＡＳＡＫＡ。

中を見てみると、お札がぎっしり詰まっていた。

「嘘のようだ……」

「でも本当なんだよ」

「この文章のとおりだ……」

「略して？」

「略してる場合じゃない！　どうすんだよっていうかどうしたんだ

よこれ！？」

「道に落ちてた」

「本当に嘘のような話だ！」

「あ、逆になった」

「いちいちツッコむな！」

もしこれでビンタしたらすんごく痛そうなくらいに分厚い札束を手にして、僕は誰が見ても一目瞭然なほどにテンパっていた。

「ええと、とりあえず交番に……あれだよな、この場合一割もらえたりするんだよな」

「わ、そうなんだ。一割ってどのくらいかな」

「どうだろうな。どうだろうな。とりあえずこの重さからして五百万くらいあってもおかしくないんじゃないかな！」

「五百万！　なんでそんなのわかるの！？」

「一千万円の重さが一キロだから（豆知識）それくらいじゃないかと！！」

「じゃ私たちはどれくらいもらえるの！？」

「五十万だ！！」

「いかしたおじさんが五十人!?」

「そうよハンサム諭吉が五十人よ!?」

「わっほぅ!」

「いやっほぅ!」

なんだかテンション上がりすぎて壊れていく二人に、近づく影が。

「あの、こんにちわー」

「あらお隣の!?」

「サカイさん!!」

上がりきったテンションのまま話しかける二人の勢いに押されながらも、サカイさんはいつものように柔らかく微笑んだ。うん、いい笑顔だっ!

「実はお聞きしたいことが……あら、そのお金」

「あ、これですか!?」

「いま拾ったんで交番に届けに」

「私のですー」

……のんびりした声で何をオッシャリマシタカコノ人。

「よかったですー。実家からお小遣いが届いたんですけど落としちゃって、困ってたんですー」

「そ、そうです、か……は、ははは、はいどうぞ……」

行き場のなくなった勢いは、僕をいい感じにもっと壊してくれました。

「……え、あれ、五十人のおじさんは？」

「カカ……おじさん達は全滅しちゃったんだ」

まさかご近所さんに一割よこせとは言えないし……

「ええ！？　そうなの？」

「ああ……いきなり一個中隊ののんびりやさんに襲われ、武器のないおじさん達はあっけなく……」

「壮絶なオヤジ狩りだね……」

「ああ……警察には頑張ってほしいよ」

降って湧いた幸運が消えていく……この虚しさはあと三十分ほど僕とカカを壊し、サカイさんを困惑させ続けたのでした……

## カカの天下２１「かじる音がステキ」

「トメ兄……」

夕飯の買い物に行こうと準備をしていると、妹のカカがなにやら鬼気迫る表情で声をかけてきました。

「なんだよ、おもしろい顔して」

「思いつめた顔なの！」

「へぇへぇ、それでなんでございましょうかお嬢様」

「きゅうり買ってきて」

「は？」

「夕飯のお買い物行くんだよね。じゃあきゅうり買ってきて。なるべく大きいやつ」

「おまえきゅうり嫌いじゃなかったっけ」

「うん。やつは敵だ」

「じゃあなぜにその敵をわざわざ我が本拠地に招き入れるのだ」

聞くと、カカは居心地悪そうにそわそわして、

「おいしそうに、見えたから」

「へ？　おいしそうにって……その敵が？」

「や、あのね、昨日さ、テレビで……その」

ああ、なるほど。

僕は納得した。昨日テレビでカカが食い入るように見ていたのは「となりのト○ロ」だ。僕も付き合いで見ていたのだが、畑できゅうりをおいしそうに食べるシーンは心に残っていた。たしかにあれだけいい音をたてて齧っているシーンを見れば、もしかしておいしいのかも？　なんて思っても不思議じゃないだろう。

「いいけどさ……買ってきたからには食べろよ？」

「うん……うん……！」

先ほどのおもしろい顔とは違って今度は本当に沈痛な表情だ。嫌いな食べ物に挑戦するとなるとやはり意気込みが違うのだろう。

一時間後。

カカは僕が買ってきたきゅうりを手に持ち、睨んでいた。

でかい。

まさしくあの映画並みの大きさだ。

農家から直で仕入れた活きのいいのが一本だけ売れ残っていたので買ってきたのだ。大きさのわりに値段はそんなにしなかった。ビバ農家。

「うう……」

大きさ、色。そして昨日の映像を脳裏で反芻しているのだろう。それは端から見れば確かにおいしそうに見える。カカにもそう見えているだろう。

しかし果たして、ずっと嫌いだったきゅうりを克服することができるのか――

あ、齧った。

とてもとてもいい音をしてきゅうりが齧られました！

そして瑞々しい音をたてながら咀嚼されます。おお、噛んでます噛んでます。

カカ選手、ひたすら真剣な表情で噛み続けてます！

あの大きなきゅうりを！

これはもう、克服したと言っても過言ではないのではありませんか！？

おっと！

なにやらカカ選手の額からだばだばと汗が流れてきましたよ！？

これはもう、身体が拒否反応を起こしているとしか――

「……うぇ……やっぱまずい」

涙目で訴えるカカ。

やはり敵は強かったか……

「……無念」

がっくりと打ちひしがれるカカに僕は優しく語りかけた。

「まぁ、嫌いなものはそう簡単に克服できないさ」

「……うん、そうだね、高すぎる壁だった」

「でもね、約束だからね」

「ん？」

「残さず食べなさい」

「！？」

その瞬間。

カカは親に捨てられたような顔をしたけど、僕は見えないフリをした。

「食べなきゃ晩御飯抜き」

カカは親に『生命保険ありがとー』と言われながら千尋の谷に突き落とされたような顔をしたけど、僕は無視した。

その後。

「きゅうううう！　きゅ！　きゅ！！」

頭がオカシクなりながらも二十分くらいかけて、カカはきゅうりを完食した。

ただし、でかいきゅうりまるごと、しかも嫌いなものを食べた苦しさも相まって、結局夕飯はほとんど食べれなかったのでした。

「……きゅーちゃんもうダメ」

ああ、悲劇。

## カカの天下２２「感謝の仕方」

今日は勤労感謝の日。

世の中では祝日だが、僕の勤めている会社は普通に出勤日だった。休日出勤じゃない、普通の、休日手当てのもらえない出勤日だ。くそったれ。

そんなやさぐれた僕は、せめてもの抵抗に早めに仕事を終えて家に帰ってきた。

「ただいまー」

「おかえりー」

傍若無人で有名な妹、カカの声が返ってくる。どうでもいいけど、勤労感謝の日にいつも勤労してる人が働いて、勤労していないお子様が休みなのは……どうにも納得がいかない。

そんな妹は僕が居間に入ると「おっす」と近寄ってきた。

「トメ兄、今日って働いてる人に感謝する日なんだよね」

「お、知ってたのか」

「だからね、わたしもいろいろと用意してみたんだよ」

おお、なんと気の利く妹か！

やさぐれた僕の心を癒してくれる……

「はい」

ぽん、と渡されたのは小さな封筒。中にはじゃらじゃらと小銭っぽいのがいくつか。

「なに、これ？」

「謝礼金」

「あんだって？」

「あれ、感謝してる人にあげるお金のことだよね、謝礼金って」

「いや、たしかにそうだけどさ……こういう場面に渡すものじゃないぞ」

どちらかというと自分より立場が上の人間からもらうような感じだよな、謝礼金って。

「大丈夫、安心して」

「何が」

「こんなこともあろうかと他にもお礼を用意してあるから」

こんなこともあろうかとって……ちゃんと疑問には思ってたんだな謝礼金。

「えっと、まずはこの鉄パイプを」

「あいや待たれい！　なぜに君は喧嘩上等な鉄パイプをお兄様に向かって振りかぶっているのでありましょうか？」

「あれ？　これが正しいお礼参りだよね」

「それお礼じゃないから！」

「え。だって恩をアザで返すっていう有名なことわざもあるし」

「違うっ！　それ間違って覚えてるから！！」

普通に考えればわかるだろう！　感謝してる相手をボコってアザだらけにするなんてどこの地獄の礼儀だよ！？

「もう……トメ兄は感謝されてるくせに態度でかい」

「感謝されてる気が全然しないからだっての」

「自分にその気がないからって……相手の気持ちも考えてあげないと、ひどい目にあうよ？」

「……なんかそれ、別の話になってないか？」

「ま、なんかのドラマのセリフ適当に言ってみただけだし」

このお子様は。

「まあまあ、トメ兄」

「なにさ」

「いつもありがと」

「……へ？」

ぺこりと頭を下げて、何事もなかったかのようにスタスタと去っていくカカ。

「……なんだ、あいつ。いきなり」

やたらと素直にお礼言われたけど……まさか、今までのは単なる照れ隠し、とか？

だとすればかなり捻くれた照れ隠しのような気もするが……僕の妹だし、仕方ないか。

なんだかんだ思いながらも、感謝されると結構いい気分な僕だった。

まあ、あれだ。

明日からも、また頑張りますかね。

## カカの天下２３「ＴＨＥ　男前」

こんちわ、トメと申します。いつも我がふざけた妹カカともども、お世話になっております。

さて、今日はちょっと遠出して釣りなんぞにきてみました。

場所は釣り桟橋といって、浜から沖にかけて数十メートル延びている釣り人専用の橋です。まぁ橋と言っても隣の国まで繋がってるというミラクルはなく、途中で途切れているのですが。船を出さなくても沖のほうで釣りができるという優れものです。

「おし、トメ兄、えさつけて」

「……はいはい」

張り切っているのは我が妹カカです。なんかテンション上がってます。それもそのはず、彼女は釣りをするのが初めてなのです。どうでもいいけど挨拶も状況説明も終わったのになんでいつまでも僕は敬語なのでしょうか？　うん、めんどくさ。普通の口調に戻そう。

「まったく……つけられないならオキアミにすればいいのに」

オキアミというのは海釣りによく使われる小さなエビのこと。

ちなみに今僕が針につけている餌はイソメという……なんと説明すべきか、そうそうムカデの凶暴バージョンといえばわかりやすいかな。牙があって噛み付こうとする細長い虫だ。

「だってこっちのほうが格好いいじゃん」

「格好よければ釣れるってもんじゃないけどな」

「えー、だって格好いいは正義だよ？　このジャケットも釣り人っぽくて格好いいし」

そう言ってカカは、買ったばかりのやたらごつくてポケットの多いジャケットを自慢げに見せつけた。

「じゃあカカ。もしもおまえが魚だったらこのイソメとオキアミ、どっち食べたい？」

「もしもの話は興味がないよ」

「冷めたガキだなー相変わらず」

まぁどっちが食べたいなんて聞かれたら答えは一つしかないだろう。まさかこんなものを食べたいなんていう物好きは人間にはいないはず、多分。あ、うちの姉なら思うかな？

「ほい、用意できたぞー」

道糸につけた市販の仕掛けに餌をつけて、準備万端。

カカは自分用の小さな釣竿をちょろちょろと動かして、僕が先ほど教えたように仕掛けを海へと落としていく。

さて、あとは自分の仕掛けだな。

イソメが餌なら狙いはキスだな。コチとかハゼならよく釣れるだろうけど食べにくいんだよなーあれ……などと考えていると、

「……と、トメ兄！　なんか引いてる！」

「お、もうアタリきたのか」

「なんか、しびしびくる！」

若干興奮気味にカカが騒ぐ。

それはそうだろう。魚がかかったときに竿から伝わってくる痺れは未知の感触だ。なんとなしに釣りをしてみた人はこの引きの感触にやみつきになって釣りにハマり出したりするのだから。

「尿瓶！！」

「何を唐突に言うとるか」

「や、しびしび感じて思いついたから！！」

相当興奮してるな。

「落ち着けー、急に引っ張るなよ、糸切れるから。ゆっくり、リールまいてー」

そんなアドバイスをしながら、僕はカカに背を向けて自分の仕掛けの用意をしていたのだけど……

ポチャン、と小さな音が聞こえた。

なにか落としたかな？　なんて考えてふと気づく。

……ここって、結構海面から高い位置にあるよな。

つまり水って遥か下にあるわけだ。

その状態でいまのポチャンって音……結構大きくなかったか？

嫌な予感とともに、おそるおそる振り返ってみる。

――カカの姿がなかった。

「……！」

大慌てで海面に目をこらす。波の中にカカの靴があった。でも上がってこない。なんでだ、泳ぎは得意だろう。

そういえば……あいつあんなごついジャケット着てたから服が水吸って重くなって上がってこられないんじゃ！？

僕は慌てて服を脱ぎ、かなり怖かったけど思い切って飛び込んだ。

軽い浮遊感、後に衝撃と水圧の変化で意識を削られそうになるがなんとか堪えて、ひとまず海面に顔を出す。

周囲を見る……変化なし。

このまま潜って探すしかないのか……しかし海は薄ら濁っていて、海中で目を開けてもまともに探せそうにない。

でも、やるしかない……！

そう決意して潜ろうとしたとき、海面を跳ねる魚が見えた。その魚はやたらと激しく跳ねまくっている。まさか……と思いつつそちらに向かうと、身体に糸が引っかかった。

糸ということは――他人が橋からおろしている釣り糸という可能性もあるけど、僕は潜り、糸を辿ってみた――

さて、極めて信じがたい話になってしまった。

カカは見事、僕の手によって助けられ、いま目を覚ましたところだ。

そしてカカが握っていた竿から伸びる糸の先には……紛れもなく先ほど水面で跳ねまくっていた魚が釣れていた。見たことない魚だけど、なんかごつい顔立ちだ。

「――と、いうわけだ」

「この魚が命の恩人？」

「みたいだな、名前わかんないけど」

「じゃ……私がつけてあげる」

「ふむ」

「オットコマエって名前はどうかな？」

「……なんか似合ってる、かつありそうな名前だな」

「お礼においしく食べてあげるからね」

「あれ……お礼に逃がすとか、なし？」

美味しかった、とだけ記しておく。

## カカの天下２４「風邪っぴき夢物語」

さて、最近は寒くなってきましたね、トメです。

風邪が流行っている今日この頃。うちの妹カカも見事に風邪をひいてしまいましたとさ。

今日は日曜ということもあって、僕はかいがいしく看病なんぞをしてやるのであった。とは言っても居間でテレビ見ながら、隣の布団で眠るカカの額のタオルを取り替えたりするだけなんだけどな。

それにしても……不謹慎かもしれないが、あんな元気に小生意気な妹でも静かに伏せっていると可愛いもんだね。

「……うぅん……地獄に、落ちろ、もっと」

うあ、すげぇ可愛くねぇ寝言。

なにやら夢でも見ているらしく、カカはうなされながらもぶつぶつと呟いている。

「……魔法は……石鹸に……食べて……大爆発。ぷぎゃー」

何の夢見てんだこいつ。

まぁ得てして夢というのは妙なものが多い。しかも熱に浮かされた状態ともなれば更に変な夢の一つや二つは見てもおかしくないだろう。

ちなみに僕は風邪を引いているとき、ヤクザに売られてそこから大脱出して自分を捨てた父親に復讐しようとして返り討ちにあったという夢を見たことがある。

「トメにー死んだ」

なんつう夢を見とるのだこいつは。

「むかし、むかし、あるところに……トメという若造がおったそうな」

なんか昔話調に語りだした。本当に寝てるのかこいつは。あと僕さっき死んだんじゃないのか。

「ある日……山はトメを芝刈りに、川を洗濯がトメにいきました……」

や、そんな「お部屋をお連れします」みたいなノリで喋られてもわけわからんから。というか両方僕かい。

「トメが山川さんちで洗濯をしていると……」

うお、なんか合体した。

「川の上からどんぶらこっこと……手にびっしり五寸釘が打たれた死体が流れてきました」

こえぇよ！！

「トメは叫びます。ジュテーム」

までやコラ、死体にフランス語で愛の告白する僕は一体何者だ。

「死体は答えます。トレビヤン・プレタポルテ」

なんで死体が答えるんだ？

なんでフランス語なんだ？

意味は『とっても既製品』

わけわからんがな。

「そして……二人は末永くポワソンとプロムナード……」

末永く魚と散歩してどうすんだ。

というか、こいつはどこでフランス語なんぞ習ってきたのだ？

というかというか、なんで僕は意味がわかるんだろう。習ったことないのに。はて？

神の意思か――まぁその通り――何か聞こえたか？　気のせいか。

とりあえずカカの夢物語は完結したらしく、寝言は止まって静かな寝息をたてている。

面白かったから細かいことはどうでもいいか、と僕は一人納得して、タオルを取り替えようと手を伸ばす。

「触るな」

ピタ、とその手を止める。

「私に触れたとき……おまえはもう死んでいる」

「やっぱ起きてるだろおまえ」

## カカの天下25「冬のお手紙」

おはようございます、いつも愚妹がお世話になっております、トメ兄です。

今日はちょっとご報告したいことがあります。今朝、起きて外を見るとちらほらと白い粉が降っていました。

そう、雪です。

今年初雪となります。

それが嬉しくて、ちょっとあなたに聞いてもらいたくて手紙を出しました。

「きもい」

なんて、ちょっと感傷的過ぎますかね。

「きもいってば」

まぁ、そんなのもたまにはいいかと思い――

「あーきもっ」

「うるさいぞ！」

人がいい感じに浸りながら手紙を書いていたっていうのに……このお子様はなぜ邪魔するかなぁ。

「それ、お姉への手紙でしょ。絶対サブイボたつよ。間違いない」

「や、せっかく珍しく住所わかるんだし、たまには真面目に書いてみようかと」

「きもいだけだっての」

「なあ、そのきもいって言葉、言われると結構傷つくんだぞ?」

「知らないよ」

「うわ冷た。雪が降ったからか?」

まぁ、そんなこんなで。

カカの言うとおりで僕はいま、日本全国を勝手気ままに渡り歩いている姉に手紙を書いていたところなのだ。

この姉はたまにお土産として妙なものを送ってくる以外は一年に一回交流があるかどうかというとんでもないヤツなのだが、一応は血を分けた姉。手紙くらいは出してやろうという素晴らしき家族の絆を発揮してみたわけだ。

「しかたないなぁ。じゃあ私がちゃんと見本を見せたげるよ」

「へえ。じゃあ何を書きたいのか言ってみろ。そのまま僕が書いてやる」

「おっけー」

カカは自信満々に頷いて、コホン、とわざとらしく咳払いをした。

「やっほーお姉。カカだよ」

さてさてカカ選手、さすがに最初は無難な滑り出しです。冬だけに。

「そっちはお便秘ですか？　私は電気です」

おっと。予想通り、なんか変な感じになってきました。

「今日はね、初雪が降ったんだよ。そろそろお姉も冬眠の時期だよね。クマみたいに」

なぜかケンカ売ってきました。

「こっちはね、もうトメ兄が大変なんだよ。ご近所のおねーさんに欲情するわ、そのくせそこの家の犬にセクハラするわ、お姉が送ってきたものをゴミ処分みたいな感じで友達の誕生日に送りつけるわ、海へ落ちて魚に助けられるわ……あ、さっきの冬眠っていうのもトメ兄の発言だから」

いつの間にか僕がケンカ売られてました。

「ほんと、どうしようもないよね。というか、わけわからないよね。なんなのかねこの人」

ほんとなんなのかねこの娘。

「私はね、ちゃんといい子にしてるよ。もうクラスの男子なんか私が廊下を通るだけで避けて頭を下げてくるくらいなんだから」

それは俗に言う番長というものではないでしょうか。いつの間に学校シメたんだこいつは。

「それで、私が結局は何が言いたいかと言うと……トメ兄はお姉のことをバカにしてるってこと。冬眠なんかしてる場合じゃないよ？」

その発言でおまえも姉をバカにしてると思うんだが。

「あともう一つ」

ふむ。

「お年寄りが喜びそうな微妙な高級品ばっか送ってくんな！！」

それも同感だ。

「でもあえてもっとやれ！」

どっち。

「そっち」

なんで僕の心の声に応えてんの。

「ふう、まぁこんなところかな」

一仕事終えた顔でカカは言った。

「ってわけで、皆元気でやってます、っと。よし完成」

「……あれ？　私の力作は？」

「誰が書くかそんなもん」

「えー」

カカは不満げに声を上げたが、僕は構わずに封筒に手紙をいれた。

……数日後。

姉から返事が帰ってきた。

「どれどれ……なんだ、短いな」

「なんだって？」

「えーっと……トメの根性叩きなおしに近々もどる！！」

「わ、お姉ちゃん帰ってくるんだ」

「なんでだ。僕、自分に不利なことは何も書かなかったのに……！」

「ああ、私も手紙出したから」

「は！？」

「どうせトメ兄のことだから無視するだろうと思って。あれ言いながら私も手紙書いてたんだよ」

しまった……手元に集中しすぎて気づかなかった。

そして、近々姉が帰ってくる。

武者修行するとか言って家を飛び出し、喧嘩とカツアゲで生計を立てながら旅をしているという我が家の伝説の姉が……

……いまさら気づいたけど、この姉って犯罪者？

## カカの天下２６「眠れ姫」

「ぐほぁ！」

こ、こんにちわ……トメです……

いきなり聞き苦しい音声を聞かせて申し訳ない……

しかし許してほしい。なにせ僕はいま寝ていたのだ。なのに突然腹に人間っぽい重量が乗っかったのだから「ぐほぁ」くらい言ってしまうのは仕方ないだろう。

まぁ驚いたとはいえ、どういう事態か予想はつくのだが……

僕は腹への重量をうざったく思いながら上半身を起こし、部屋の電気をつけた。

そこには予想通りの光景。僕のお腹に跨っているのはいつ何時も常に傍若無人と名高い妹、カカである。

「……何をしておるか、妹」

「トメ兄、寝れない」

時計に視線をやると、午前1時。お子様のカカはいつもはとっくにご臨終の時間だ。はて、昼寝とかしていたようには見えなかったんだけど。

「学校で寝すぎた」

「学校でかよ」

「だってうちの担任の先生が何を思ったのか午前中めいっぱい使ってアリクイのお話するんだもん。いい加減眠くなるよ」

「なぜにアリクイ」

「大好きなんだって」

担任というとあのぽやーっとした先生か。なるほど、アリクイとかナマケモノが好きと言われても納得できそうなキャラクターだ。むしろアリ食ってそうだし。

「でさ、寝れないんだけどどうしたらいいのかと思って」

「とりあえず僕にボディーブロウしてみたわけか」

「そゆこと」

「おやすみ」

僕は構わず布団を被って寝ようとする。しかしカカは器用にも跨りながらジャンプし――全体重をかけて僕を押しつぶした。

「ぐはぁ！」

「ほらほら、そんな芝居がかったかけ声いいからさっさと眠れる方法教えてよ」

「本気で痛いんだよ！」

「軟弱者ー。粗忽者ー」

「意味わかってんのか……？」

やれやれ、と僕は起き上がり、とりあえずお腹のカカをどかす。

「そうだな……お腹いっぱいになったら寝れるっていうよな」

「そんなことしたら太るじゃん」

「あとはお酒飲んだり」

「私、未成年」

「ええい、こんなときだけ常識的になりおって」

とはいえ小三の子供に酒はまずいだろう。僕の友達は小五で親に連れられ飲み会デビューしたけど。もちろん潰れたらしいけど。

寝起きでふらふらした頭でなんとか考える。安らかに眠れる方法……

「死ねば？」

「殺すよ？」

「ごめん」

眠いせいか過激なこと言っちゃった。子供相手にいかんいかん。

「おお、温かい牛乳でも飲むか？　結構寝れるぞ」

「牛乳嫌い」

「あーこんにゃろ腹立つ」

一体どうしろってんだ……睡眠薬なんてものはこの家にないし……

お。いいこと思いついた。

「カカ、ちょっとこっちきな」

「ん」

お腹からどかされて少し離れて立っていたカカはてくてくと僕に近づいた。

「後ろむいて」

「私の後ろに立つな！」

「座ってる」

「ならいいや。ん」

素直に従うカカ。僕はカカの両肩を掴み、首筋の真下あたりを軽くもむように押してやった。

「なにしてんの？」

「眠れるツボついてる」

「おお、そんなの知ってるの？」

「まあね。だんだん眠くなってきたろ？」

「おー、そいえば、なんか、眠く……」

声が眠そうになってきたので適当なところで離す。

「おし、これで寝れるだろ」

「うん……寝れそう……ありがと」

本当に眠そうにふらふらしながら、カカは自分の部屋へと戻っていった。

……子供って本当に単純だな。

よく眠れるツボなんて僕は知らない。こういうのは案外「眠い、眠い」と思い込めば眠れるもんなんだ。だから適当に眠くなる理由を作ってやればいいだけのこと。

だってねえ、肩もんだだけで眠くなるはずないじゃん？

さて……僕も寝よ。

……

……

……目が冴えて寝れん！！

## カカの天下27「何が悪い」

「運が、悪い」

「はぁ、さようですかお姫様」

学校から帰ってきた妹カカは、開口一番そんなことを言った。

「聞いてよトメ兄！　なんか世界が私をいじめるんだよ！」

「おお、世界を相手にしてんのか。おまえすげぇな」

「茶化すな！」

茶化す以外にどうしろと。

まぁ、このお子様の言動なぞいちいち気にしていたら身が持たないのだが、放っておくのもうるさくて身が持たない。

あれ、どっちにしても身が持たないじゃん。

……いいや。仕方なくいつも通り、話を聞いてやることにした。

とりあえずランドセル等を片付けさせて、僕とカカはちゃぶ台を間に挟んで対峙する。

「トメさんや、飯はまだかいの？」

「まだだよ。そんな妙にはまってるセリフいいから本題言えよ」

「ん、そうだね。じゃ、聞いて。私の運の悪さを！」

そんなもん話してどうなるのかは知らないが、まぁ話したいのなら話させてやることにする。

「まずね、今朝に登校してるときにね、靴紐が切れたの」

「そりゃ縁起が悪いな」

「でね、友達におはようって言ったら三回連続で無視されたの」

「そりゃ耳が悪いな」

「あとね、廊下ですれ違うとき男子とぶつかったんだけど、謝ろうとしたのに何も言わずに去ってったの。感じ悪いったらありゃしない」

「そりゃそいつが悪いな」

「次はね、算数の時間にあてられて、こんなもんわかんねーよ！って言ったらすごい怒られたの」

「そりゃ口が悪いな」

「それからね、授業中に今度お楽しみ会でやる劇の配役が決まってね、練習してみたんだけど皆もう全然だめで」

「そりゃ演技が悪いな」

「それ一回言った」

「ん？　ああ、縁起と演技な。発音と漢字と意味が違う」

「そっか、なら合格」

合格ってなによ。

「それからそれから、放課後になって帰ろうとしたらまた男子にぶつかったの。そしたらその子、妙にふらふら吹き飛ばされちゃったの。私、そんなに強く押してないのに」

「あー。多分脚が悪いんじゃないか？」

「帰りの途中に犬にいっぱい吼えられたし」

「機嫌でも悪かったんじゃないのかなぁ」

「サエちゃんに遊ぼうって誘っても用事があるからって断られるし」

「都合が悪いこともあるだろ」

「途中で雨降ってくるし！」

「天気悪かったもんなぁ」

一通り言い切ったのか口を休めて、カカはひとつため息をついた。

「ほんと……運が悪い日だったよ」

「運というかいろいろ別のものが悪かったんだろうけど……ある意味、運が悪いか」

結局は単なる愚痴だろうが、とりあえず妹君は言いたいこと言ってすっきりしたっぽい。

僕は立ち上がり、夕食の支度にとりかかろうと台所へ向かう。

その途中、背後からだるそうな声が聞こえた。

「はぁ……宿題やる気起きない」

「そりゃおまえが悪い」

「あ、トメ兄。いまナス食べたくないから全部捨てといたから」

「麻婆茄子にしようとしてたのに!?　タチ悪いぞおまえ!!」

今日も、そんな感じの我が家。

## カカの天下２８「変な歌は好きですか」（前書き）

一部の人にしかわからないネタを書いてしまいました。
完全に個人的趣味で書きました、ごめんなさい笑

## カカの天下２８「変な歌は好きですか」

レンタルＣＤというものがありますね。

まぁ説明するまでもないでしょう。低価格でたくさんのＣＤが聞ける便利なシステムです。うちの妹カカは結構その手の店を利用してＣＤを借りてくるのですが……

今日、たまたまそのレンタル品が居間に放置してあったので、あいつはどんな曲聞くのかなーと興味本位で開いてみた。

適当にＣＤをとりだしてラベルを見てみる。

「なんだこれ」

あまりに変な歌手と曲名に、僕の頭の中はハテナマークで埋まってしまった。

だってさ。

歌手：最強の部活。

曲名：鉈で殴ろう。

これ、おかしいでしょ？

なんか一部だけがわかるネタっぽい気もするけど。

僕は見なかったことにして、他のＣＤを取り出してみた。

歌手：警察に捕まったやつら。

曲名：警察が捕まれ。

……えーと、なんだこのコメントしかねるものは。

や、確かに最近警察の不祥事が目立ってるけどさ。それにしたって警察に恨み持ってるからって警察捕まれって……まっ正直にも程がある。僕はそんなん好きだ。えーと、他にはないのか？

歌手：ニート。

曲名：働いたら負けかなと思っている。

……うむ、いまどきならこんな歌あってもおかしくないような気がする、なんとなく。でも世間のニートさん達、本当の負けは人生を無為にすることだぞ。だから仕事しろとは言わんがなんか頑張ったらどうかなーと思う。

僕か？　僕は妹と遊ぶことを頑張ってる。ああ頑張ってるさ、羨ましいか。

――さて、とりあえずまともな曲がないことはわかった。

あいつは一体どんな育ち方をしたんだろう。親の顔を見てみたいもんだ。って親はいま家にいないから僕が親代わりなわけで。ってことは僕のせい？

僕が何をしたというのか。

ツッコミしかしてないな。

……ダメじゃん。

「ただいまー」

お、カカが帰ってきた。

ここは一つ、もっとちゃんとした曲を聴きなさいと注意してやるべきだろう。

「おーい、カ」

「嘘だ、嘘だ、嘘だ♪」

なんか歌ってる！

「おはぎを食べれば中に針、外に出れば車にひかれ、皆祟られ狂ってく♪」

ひたすら楽しそうにひたすら妙な歌詞を歌っている我が妹よ……おまえも狂ってるように見えるぞ。いつものことだけど。

「気にいらなきゃバットで殴れ、大きな鉈で頭をかち割れ♪　パックリン♪」

パックリンとか言うな。可愛いのが逆にえぐい。

「殴れ殴れ殴れー裏切り者を鉈で殴り倒すのよーせっかく埋めた死

体を、晒さないでほしかったのにー♪　だって賞味期限がきれたナマモノってーー」

「か、カカ！」

「お、トメ兄。君の賞味期限は大丈夫かい？」

「なんのだ！？　じゃなくて、なんだその歌は！」

「どうでもいいけどいまオトメ兄みたいに聞こえたね。オトメ、乙女……トメ兄が乙女。似合わな。賞味期限切れてるっぽいよね」

「やかまし！　そんなことよりなんだ、その教育上不適切な歌は」

「世間で流行ってるやつ」

「うそつけ！」

「えー。賞味期限ヤバイの流行ってるじゃん」

それは普通に社会問題だけどさぁ。

「あのなぁ、もっと普通の歌を聴きなさい」

「普通って何？　そんな枠にはめるから人間小さくなるんだよ」

「何様だおまえは」

「お子様だけど」

しばらくそんな感じでカカと言い合っていたけど。

どうしても聞いてみろとうるさいので試しにその曲、鉈で殴ろう、を聞いてみると……意外といい曲だったので僕もダビングしてしまった。実はこの曲、そういった陰惨な運命から逃れようとする曲で、三番あたりの歌詞で救われるのだ。

変な曲、と頭から決め付けるもんじゃないね。

カカは変だけど。

## カカの天下29「そこにそれがあるから」

なぜ人は山を登るのだろう。

そこに山があるからだと、ある人はいいます。

「うんしょ、うんしょ」

まぁ正直、理由になってないんじゃないか？　なんて思うけど、格好いい答えであることはなんとなくわかります。

「うんしょっと。ふう」

じゃあ……我が妹は果たしてどんな壮大な理由であんなとこまで登っているんだろう。

「やっほー。トメ兄ー」

そう、僕はあんな妹を持った兄、トメです。元気よく手を振るカカは、途中の突起にうまく足をかけて一休みしています。

はて……と首を傾げながらも僕は手を振り返してみる。それを見て満足そうに頷くと、カカは再びそれをよじ登り始めた。

首をさらに傾げる。

なんでこんなことになったんだっけ。

僕は五分前のことを回想してみた。

僕とカカは夕飯の買い物を済ませて一緒に家への帰路についているところだった。

その道中、カカが唐突に足を止めた。

「どうした？」

「呼んでる……」

なんか危ない人みたいなことを言ってカカはそれに向かって近づいた。

何の変哲もない電信柱である。電気業者の人が登りやすいように突起のついたやつだ。

「よし！」

気合を入れたカカは……なぜかその電信柱を登り始めた。

そして今にいたる。

うわ回想短かっ。

しかも回想に今の状況に浮かんだ疑問に対するヒントが何一つないし。

「なー、カカー」

「なーにー」

結構上のほうで動きを止めたカカが聞き返す。

「おまえ、なんでそんなとこ登ってるんだ？　意味不明だぞ」

「だって私だもん」

なんてわかりやすい答えだろう。

「んなことしても危ないだけだろー！」

「危ないことをしないと人は成長できないんだよー！」

このお子様は相変わらず生意気にわかったようなことを言う。まったくもってその通りだとは思うけど……

「でもさ、落ちたらどうするんだよー！」

「落ちてもトメ兄をクッションにするから大丈夫ー！」

「おい、僕が受け止めてくれると信じてる、とか健気なことは言えないのかー？」

「トメ兄がおもしろく受け止めてくれると信じてるー！」

「絶対に落ちるなー！　自信ないからー！」

と、そんなこんなでカカは一番上のほうまで登ってしまった。

確かに危ないとは思うのだけど……こいつは昔から木登りとかが妙に得意なのだ。もっと高い木に登ったりもしていたから見ている側としても慣れていたので、そんなに慌てることはなかった。

「さて」

意味が無いと言っていたわりにやりたいこともあるのだろうか。

カカは遠くを見渡すように額に手を当ててぐるりと首を動かし、

「ちいせえちいせえ」

……ああ、石川五右衛門の真似？

それやりたかっただけか。

「……他に台詞あったっけー？」

「知らん」

このあと、カカは危なげもなくするすると降りてきた——かと思いきや、バランスを崩した！

「ぅおっと！！」

「……おお、トメ兄ないすきゃっちんぐ」

僕の素晴らしい反射神経のおかげで、カカをなんとか受け止めることができた……ほんと、危なかった。

僕は胸に抱いたカカを下ろす……と。

勢いがついたせいで少ししゃがんだカカの視線は、ちょうど僕の股間のぴったりの高さとなった。

カカはぽんぽん、と僕のそこを叩き、

「ちいせえちいせえ」

「おまえさ、恩人に対してもっとなんかないのか」

「だってトメ兄の受け止め方がおもしろくなかったから」

「どうやって受け止めればおもしろいんだよ」

「股間で受け止め――」

「死ぬから」

クイーン・オブ・マイペース・カカ。

## カカの天下３０「地震の対処？」

「ねぇ、トメ兄」

「なぁ、カカ」

「ゆれて、ない？」

「ゆれて、るな」

こんにちわ、なんて挨拶してる場合じゃありません。

揺れてる！！

地面が！！

アースクエイク！！

家でのほほんとお茶を飲んでいた僕ら兄妹はどんどん強くなっていく揺れに思わず立ち上がった！！

「ど、どうするよカカ！？」

「と、とりあえずジャンプしてみよう！！」

相当混乱していたんだろう。僕はカカの言葉に従って、揺れまくる大地の震動から逃げるためにジャンプしてみた。

バランスを崩した。

ゴツン！！！

カカと頭をぶつけた。

「い、痛い……なにやってんだ僕らは」

「とりあえずテーブルの下にもぐればいいんじゃ」

「それだ！！」

僕らは急いでテーブルの下へ滑り込んだ。

ゴッツン！！！

同時にもぐりこんだカカと僕の頭が衝突事故を起こした。

「痛い……うぅ……」

二人して涙目でじっとしていると、やがて揺れは収まっていった。

「とりあえず、外に出ておくか」

余震があるかもしれない。

僕とカカはテーブルの下から抜け出し、前触れもなく襲ってきた地震の恐怖に怯えながら慌てて玄関へと向かった。

ドアに手をかけようとしたとき、

「トメさん、カカさん大丈夫ですかー！？」

ゴッッツンン！！！！

いきなり開いたドアに、僕とカカは仲良く顔面を強打した。

「い、い、痛い、よう」

「さ、サカイさん……」

「ああ、ごめんなさい二人ともー、私心配で」

うう……今日は何度頭をぶつければ――

「あ、また揺れる！！」

ぐらり、と地面が大きく揺れた。

ガン！！

ゴン！！！

グァン！！！！

バランスが崩れた三人は仲良く頭をぶつけあった。

い、痛い……

「恐るべし、地震の被害……痛いよぅ」

「おのれ地震め……これほどピンポイントで人を狙えるなんて、侮れないやつだ！」

「なにせ相手はー、地球ですからー」

「地球……さすがに強いね。相手にとって不足はないわ」

ぐらり。

グゥアン！！

ドゴン！！！

ガッツァン！！！！

「あ、相手には余りあると思うんだけど！」

「うぅぅ……な、なんの……ぶるぶる震えてるだけの地球なんか私が――」

ぐらり以下略。

「ほ、ら、カカが、余計なこと言う、から」

「ご、ごめん、なさ」

ぐら以下略。

「もう、だめ、だ……頭が悪くなる……なんか耳から出そう……」

「頭がー、頭がー、なんか鳴ってるー」

「いた、い……ごめんなさい、地球……私、地球に優しくなるから……エコとかにも気をつけるから……エコひいきになるから……」

度重なる強打に頭が朦朧とした三人は、ふらふらと地面に倒れた。

……ああ、最初からこうして伏せてればよかったのに。

悔やんでる間に、余震は収まったようだった。

みんな、地震が起きたら……とりあえずあんま動かないほうがいいぞ、痛い目みるから。

……でも、痛いってだけで済んで、ほんとよかったぁ。

しかし、次の日。

僕は戦慄した。

「カカの頭が変になった!?」

元からでした。すいません。

## カカの天下３０「地震の対処？」（後書き）

そんなに大きい被害じゃなかったけど、最近地震を体験しまして……この程度のお話で済むところが少しでも多いことを本気で祈りました。

実際に地震があったときは、すぐにガスの元栓をしめたり、ブレーカーを落としたり、玄関の鍵を開けたり、ガラスから離れたりと……事態が大事にならないように対処しましょう。

## カカの天下３１「帰ってきた姉トラマン」

「ただいまっ！！」

やたらと気合の入った声で我が家のドアを開け放ったのは、我が妹カカ……ではなかった。カカはいま隣で座って枝豆中だ。や、食べてるだけだが。

「いやぁ、ひっさしぶりだねっ」

どかどかと勝手に入ってきたのは、忘れもしない顔だった。

日焼けした野性味のある顔は、美人と称してもいい顔立ちを妙に暑苦しくさせている。なんというか、「気合」というオーラを周囲に発散させまくっているような感じ。

――何を隠そうこの女こそ、武者修行に出ると言って家を飛び出して以降、各地方の妙な高級品を送りつけてくるというわけのわからない行動をしていたパワフルな我が姉その人なのだから！

「どちらさまで？」

「おっす！　カカっち。大きくなったねー」

「……むぅ」

あ、せっかくの冷たい言葉を無視されてカカがむくれた。

「でさ、我が弟よ。ひとつ頼みがあるのだが」

「帰ってきて早々なんですかぃ」

「うん。帰ってきた早々、ちょっと顔なじみの友達にケンカ売られてさぁ」

「それ友達じゃないだろ」

「これ、預かっておいてくれる？」

今度は僕の言葉を無視して、ひょいっと目の前に取り出したのは、

「こ、子供？」

「うん。ちょっと作ってきた」

「まてやコラ！？」

そんなあっさり作るんじゃねえ！！

「だからちょっと預かってて。家族の団欒はそのあとねー」

言うだけ言って、姉は去っていった。

まだ言葉も覚えていなさそうな赤ん坊を適当なソファーに残して。

「……あいかわらず嵐のような台風のようなやつだ」

「災害そのものだよね」

カカと二人で頷きあい……さて、どうするかと置いてかれた子供を見る。

見る……

あれ、いない。

どこいった？　と二人できょろきょろと周囲を見渡しているとーー

ガシャン！　とコップの倒れる音。

気がつけば赤ん坊はどうやって上ったのかテーブルの上に。

そして隣には倒したコップ。

そしてそして、中身のコーラを服に浴びたカカが。

「ヤロウ」

ゴゴゴゴゴ！　となんか背後で黒いオーラが出てる！

やばい。さすがあの姉と血が繋がっているだけのことはある……！

「やめろカカ。いくらなんでもそんな小さな子に暴力は」

「口で言ってもわからない子には、身体で」

「口で言ってないだろ！？」

「喋れないのに言葉わかるはずないでしょ！？」

いや、まぁ、たしかにそうかもしれないが！

「だから、私が、身体と感情とこのオーラでわからせる！」

「ちょっと待てなんだその黒いオーラは！？」

そんな特殊能力いらんぞこんな日常のお話に。

僕の制止も虚しく、ゆらりとカカが赤ん坊に近づいたそのとき。

「だぁ？」

赤ん坊は微笑んだ。

「――だぁ？」

カカは微笑み返してしまった。

「だぁ……！」

あ、カカの眉だけが困ったようにハの字になった。

「……あれだな。思わず笑い返しちゃってこの怒りはどこへもっていけばいいんだろうって感じだな」

「……子供ってずるい」

「それはたしかに。僕はいつもおまえで実感してる」

さて。姉が帰ってくるまでに、この子が起こすであろう被害をどれだけ食い止められるか……勝負だ。

僕は気合を入れて、子供の相手に臨んだ。

十分後。すでに勝負はついていた。

子供のお世話って大変だ。姉、早く帰って来い。我が軍はすでに壊滅状態だっ。主に居間があんびりーばぶる！！　あんなことやそんなことに！　カカは大変なことに！　いつもはただ変なだけなのに！

そんな祈りも虚しく、姉が帰ってきたのは二時間後のことだった。

# カカの天下３２「続、帰ってきた姉トラマン」

こんにちわ、トメです。

今回は珍しく前回の続きです。姉が急に帰ってきて、どこかで作った子供を僕らに押し付け、懐かしの友達と喧嘩しに旅立ち、戻ってきたところから始まります。

うん、自分で話してもわけわかんないねこれ。

とにかく姉は衣服に赤い液体を少し浴びながらも、ピンピンして帰ってきました。

「ただいまっ。ったくあいつら喧嘩弱くなってやんの」

「あぁそうですか」

「よかったね」

僕と妹カカはしらけながら適当に答えた。姉のこういう部分に関してはツッコまないほうが無難だと思うから。犯罪に巻き込まれたくないし。

あと、こいつが置いてった子供の世話で僕ら二人は疲労困憊だったので、話す気力が尽きかけていたという理由もあった。

「……なぁ、姉。もうどうでもいいよ。あんたがどこで子供作ろうが喧嘩しようが殺人しようが君の人権の自由だよ」

「だからさ、姉。もうどっかいけ」

「な、なにさっ、そんな冷たいこと言わないでよっ。血の繋がった家族でしょ？」

「どちらさまで？」

「どこかでお会いしましたっけ？」

「これでイッツ他人」

「おぅいえー」

「ひ、ひどいっ！」

グダグダな兄妹の僕らはソファーでぐったりしながら口撃した。

「とにかくさ……ようやくそこのクッションの上で寝てくれたその子供はなんなのさ」

冗談はこれくらいで置いといて……仮にも家族が増えるという重大な話だ。事情は聞いておかなければならないだろう。

「え！？　ああ、これは、いや、その」

核心を突かれたら突かれたで慌ててるらしい。

傍若無人に見えて一応は人として何が大事かは（多分）わかっている姉だ。勢いに任せて子供を預けたときに僕らの話を聞こうとしなかったのも、なんだかんだ言って説明するのが怖かったのだろう。

「んとね、なんというか……ああ、もう！　うじうじとあたしらしくない！」

まぁ確かにらしくないといえばそうだけど、やはり人間、家族の前ではそんなもんだと思うが……

「めんどくさいことは言わない！　ヤればデきる！　それだけのこと！」

「いくらなんでもはしょりすぎだろ！　なんだその別の意味でつかったら妙に生々しい励ましの言葉は！？」

「ヤれば……デきる？　なにをしたらなにが」

「お前は考えなくていいお子様」

「むぅ」

「とにかく。はっきりさせていこう。父親は？」

「……コウノトリ？」

「その子供、どう見ても鳥に見えないんだが」

「鳥人間でさ、いまは人間の姿で」

「いずれは鳥に化けたりできると？」

「そうそう。焼き鳥にしたら美味しいよ」

「おお……すごい。そんな人間が本当にいたんだ」

「いないから。信じるなカカ」

ふう、と姉は観念したようにため息をついた。

「本当の話ね……預かったんだよ」

「は？　誰に？」

「あれはあたしが、クマと喧嘩してみたいって理由で北海道にいたときの話だ」

「まずその時点でツッコみたいが、ひとまず置いとこう」

「クマを探して山奥を歩いていたあたしは、一軒の山小屋を見つけた。こういうところには保存食も置いてあるだろうと思って一泊してしまうことに決めた。そしたらさ、そこには先客がいたんだ」

なんだか話がきな臭くなってきた。この話が子供と、どう繋がるというのか。

「あたしはその先客さんと仲良く酒をかっくらって暴れてた」

なぜ暴れる。

「そしたら足捻った」

アホだ。

「そしてぐっすり眠って……起きたらそこにはもう誰もいなかった。ただ赤ん坊と『そういうわけでよろしく』という置手紙があった…　…なんか酔ってるうちに約束しちったみたい。覚えてないけど。てへ♪」

「てへ♪　じゃねーよ！　わけもわからず預かっちまってこの子供どうすんだ！？」

「もうめんどいから育てるしかないかと」

「そっちのほうがめんどいわ！！」

「んー、まぁ育てるのはお姉だし、別にいいんじゃない？」

「あれ？　いいのかカカ。たった今地獄のように苦労したばかりなのに」

「うん、だって世話するのはお姉でしょ？」

「おりょ？　カカっち。なぜにそんなものすごい笑顔であたしを見つめるべさ？」

「ん、いいから子供つれてさっさと出てけ」

「し、しどい！！　いつからそんな可愛くない子供になったの？確かにあんたは生まれつき可愛くなかったけど！！」

「出てけ（にっこり）」

「あー、もう、騒がしいな」

姉貴はしばらくこの地に滞在するようだ。

でも僕らの困憊状態をさすがに心配してか、友達（舎弟ともいう）の家に泊まってくれるらしい。

とりあえず暴風雨は去った……のかな？

## カカの天下３３「焼き魚人生論」

「焼き魚って、人生と同じだよね」

なんか言ってる。

こんにちは、トメです。たったいま妙なことをほざいたのはいつも通りのとんちき妹、カカです。

「……無視すんなートメ兄」

僕はもぐもぐと夕飯のアジの焼き魚を咀嚼しながら、視線で問いかけました。で、何言いたいの君。

「つまりはだね、焼き魚っておいしいねってことだよ」

「んぐ。さっきと言ってること違うぞ」

「そういうこと気にしちゃだめ」

「……なんか会話成立してないな」

「いつもこんなもんじゃん」

まぁね。

「ともかく、何が言いたいかというと」

「ふむ」

「焼き魚って結構、作るのにいろいろ手間かけるでしょ？」

「手間かけて作った僕に感謝しろってことだな」

「そんなのしないよ。でさ」

軽く流しやがった。僕、頑張ったのに。スーパーで主婦とか倒したのに。

「焼き加減を間違ったら黒コゲになったり生焼けになったり……人生もそうじゃない？　燃え尽きたり、不完全燃焼だったり、大事なことから目を離した隙にダメになったり」

……ん？

「でさ、ちょっと塩を加えようとしても、間違えて砂糖かけたり、塩ふりすぎたり……これは人生に色を加えるのと同じことだよね？　加減を間違うと人生の本質を失うこともあるし」

……んんん？

「お前、何歳だっけ」

なんか言ってることが高尚すぎるぞ。

「だからね、結局私が言いたいことは……人生って結局誰かに食べられちゃうものなんだよね」

「結論で嫌なこと言うな！！　なんか鬱になるだろ！」

「って、同級生のタケダ君が言ってた」

なんつー小学生だ。

「そいつ、もしかしてそんなことばっか言ってるのか？」

「うん、なんか難しい変なことばっかり言ってる」

変なことでカカに敵うやつもそうそういないと思うが……たまにいるんだ、こういうのが。なまじ本を読みまくって世界をわかった気になっていろんな薀蓄を語るやつが。

こうしてなんか偉そうかつ的を射ているようなことを言うこともあるが、ほとんどが本人の自己満足で言ってる戯言だったりするものだ。

「それで？　おまえはそのタケダ君の言葉を借りて、なにが言いたかったんだ」

「ん、なんか偉そうに喋ってみたかっただけ。えっへん」

「さいですか、おかわり食うか？」

「ちょうだいな」

――そのとき。

「焼き魚定食はここかー！！」

唐突にバーン！　とドアを開けてドカドカと遠慮なくうちに入ってきたのは、最近武者修行の旅から帰還したという姉である。

「たしかに焼き魚食べてたけど、もうないよ？」

「がーん！！」

「どっから聞きつけたんだ、うちの晩御飯の献立なんか」

「あのね、焼き魚だよ？　それくらい直感でわからなくてどうするの」

わかったほうがどうかしそうだぞ、そんな能力。

「まったくもう……あたしに焼き魚語らせたら五時間はくだらないよ？」

「違う意味でくだらないからやめてくれ」

「おぬし焼き魚を侮辱したな！？」

「トメ兄、焼き魚さんを悪く言っちゃだめ。くだらないのはお姉なんだから」

焼かれて食べられるスタンバイおっけーなお魚をさん付けとは……丁寧だなカカ。

「カカちゃん……お姉ちゃんのこと嫌いなの！？」

「や、単にこないだのハムカツ講義三時間コースを根にもってるだ

け」

あー、あれか。僕らが寝る直前あたりにハムカツ持参でやってきて、強制で食べさせられながら延々と話聞かされたんだよな。おかげで翌日の眠いこと胸焼けすること。

「お姉」

「……うう？」

「出てけ」

「……はい」

おお、あっさり姉を追い払った。僕のほうからは見えなかったけどよっぽど恐い顔してたんだな。だからって小学生の眼光にあっさり負ける姉もどうかと思うが。

そそくさと食器を片付けながら、僕は呆れてため息をつくのだった。

その後。

なぜか焼き魚をもう一度買ってきて、わざわざうちでご飯を食べていくという、わけのわからない姉だったのでした。

## カカの天下３４「クリスマス受け取れ」

「メリークリスマスだねトメ兄」

「メリークリスマスだな、カカ」

今日はクリスマス、時刻は夕方とタイミング的には微妙だが、わざわざ僕の部屋に来てまでそんなことを言い出した妹に一応合わせてみる。

「ところで、一般的にはサンタさんが子供に物をくれる日だね」

「そうだな、子供でよかったな、カカ」

わざわざ一般的に、とか言うあたりがなんとも子供らしくないが、まぁそれは置いておこう。

「それで、今度は何がほしいってお願いしたんだ？」

他の家ではどうか知らないが、うちの家族はクリスマスの一週間前にはツリーを飾り、そこに願い事を書いた紙を貼っておくとクリスマスの翌日には枕もとにプレゼントが置いてある、というやり方をとっている。靴下は非常にやりにくいので却下だ、と我が両親は言っていた。

ちなみに、このやり方は子供が「サンタさんっていないんだよね」とか夢のないことを言った瞬間、子供に伝授される。一気に夢を壊してしまうすばらしい伝統だ。

「んー、お願いはしたんだけど、さ」

こう聞いてはいるが、僕はとうにカカのほしいものはわかっている。今回は大きなツリーが壊れてしまったため急遽ミニツリーを買ってきたのだけど、そのツリーの前にお供え物をするかのようにほしいものが書かれた札が献上されているのを確認済みだ。

「でもさ……サンタさん、こないほうがいいかも」

しかし、我が妹はなぜかそんなことを言い出した。

「なんでそう思う？」

「だってさ、いくらプレゼントを配るからって、勝手に人の家に入るのは犯罪だよ？」

夢の無いことを……いやしかし、サンタを信じているからまだ夢はあるのだ、多分。

「ああ、それは大丈夫。サンタは法律的に無敵な存在だから。住居不法侵入も黙認されるのさ」

まぁ、嘘ではない。

「でもさ、そのプレゼントが本当にその子のほしいものとは限らないんじゃないかな。こないだニュースで見たよ。どこかのお宅のポストに爆弾が送られてきて、そこを覗いちゃった人がどっかーんって」

「ああ、それも大丈夫だカカ。そんなのが送られてくるのは裏でい

ろいろ恨み買ってる偉い人だけだから」

「じゃあ私危ないじゃん」

「裏で何をしとるんだおまえは」

「とにかくあれだよ、サンタさんは危ないかもしれないんだよ？サンタさんの本当の発信源は『赤い服を着たドロボウが忍び込んだ家の人にバレて、ごまかすためにプレゼントをあげた』って話が始まりだって学校の噂だもん。皆信じてるもん。赤い服着ないもん」

どれだけ夢のない小学校だそこは。

「とにかく、サンタさんには気をつけてね」

言うだけ言って、カカは僕の部屋から出て行った。

さーて……どうするかな、買っておいたクリスマスプレゼント。

翌日。

なんとなく従来通りに枕元にプレゼントを置かなかった僕は、カカの反応を見てから別のやり方で渡そうかと考えてみた。

すると。

「サンタさん……来なかった」

なんか、予想以上に落ち込んでいた。

「おいおい、来ないほうがいいんじゃなかったのか？」

「そうだけどさ、そうだけどさ、やっぱ来てほしいじゃん」

どっちだよ、とツッコみたかったが、子供の論理なんぞにいちいち腹を立てていたらキリがない。

まぁ、なんだかんだ言ってもサンタは来ると思っていたのだろう。小学三年となれば「サンタはいない」「サンタは親」ということに気づいても全然おかしくない時期だ。そして信じている子供が同級生にバカにされたりもする時期……おそらくは『サンタにそんな夢もってないよ』みたいな感じで見栄を張りたかったんじゃないかと思う。

「カカ、サンタから預かり物」

「……え？」

「ほら、昨日おまえいろいろ言ってただろ？　だからサンタも素直にプレゼント渡していいもんか悩んでさ、僕のほうから渡してくれるように頼んでたんだよ」

そう言って僕は買っておいたプレゼントの包みをカカに差し出した。

カカはしばらく呆然として、おずおずとそれを受け取った。

そして一言。

「サンタさんって……盗聴までするの？」

「素直に喜べよ、子供」

そんな可愛くないことを言いつつ、頬が緩んでいるカカだった。

## カカの天下３４「クリスマス受け取れ」（後書き）

はい、ようやくクリスマスです。
……はい、相当前の話ですみません＾＾；
早く今の時間軸に追いつけるように更新がんばりますｗ

## カカの天下35「カレーを食べよっ」

「こんばんわー」

僕と妹、カカが夕食を食べていると、そんなのんびりとした声と共にチャイムが鳴った。

ご近所のサカイさんの声だ。

「はいはい、なんですかー？」

「あ、トメさんー。実はカレー作りすぎちゃっておすそわけをー」

おお、これはよき田舎の伝統だ。最近の都会じゃまったく無くなったみたいだけど。

「救援物資でありますか、たいちょー」

後ろからカカが嬉しそうに言った。にしても子供が漢字ならべると妙に感心してしまうのは、いささか子供のことを侮りすぎなのだろうか？

「あらー、もう夕飯食べちゃいましたかー」

僕らの後ろの様子を見たのだろう。サカイさんが残念そうに言った。だが心配することなかれ。

「いえ、実は僕、給料日前でして」

「あらー」

「お金を下ろすなら明日、と思ってたら予想以上に残ってなくて」

「あらあらー」

「今日は納豆ごはんしかないのです」

悲しいかな、これが本当に今日の夕食のメニューなのである。

「そうです、ひもじいのです」

と、カカものってくる。

あんまりだと思うけど、ないものはないんだから仕方ない。下ろせる機械が近くにないし。

「てわけで、いま途方にくれてたわけでして」

「阿呆な顔してたわけでして」

「うるさいでして」

「そうでして」

なんだこの会話。

「だからこそ、カレーという栄養たっぷりかつカプサイシンで身体もホットになるスバラシアイテムがきてくださって感謝感激アメあられなのです」

「アメあられでも、ヒナあられはあんまりおいしくないのです」

「それは同感なのです」

「私は結構好きなのですー」

あ、サカイさんものってくれた。

しかしほんと、なんだこの会話。

「というわけで……涙流しながらも受け取りたいと思います……」

「あ、そうですー。たしかうちに卵も余ってたと思うんですけど、使います？」

「カレーに卵ですか、いいですね」

「ちょっとまったあああああああ！！」

突然おたけびをあげながら現れたのは、なんか最近ここらへんに住み着いた野良姉だった。不覚にも餌を与えたせいで僕らに懐いている。迷惑だ。

「カレーに卵かけるなんて邪道よ！　カレーにはカツでしょう！！」

ずびし！　と挑戦的にサカイさんに指を突きつけながら姉は言った。

いきなりあらわれた失礼なヤツ相手に、サカイさんはあくまでに

こやかに応えた。

「あらあらー。カレーには卵ですよー。完全栄養食とも呼ばれる卵と、血行をよくしてくれる香辛料。すばらしい組み合わせだと思いませんかー？」

「いや、絶対カツだね。うま辛いルーと分厚い肉から染み出る肉汁が絡んだときのハーモニー……野生を感じる！　これぞ身体を元気にする特効薬だわ！」

「カレーと卵の柔らかさが生み出すまろやかな食感……強弱を付け合いながらもせめぎ合う卵の甘みとカレーの辛み……」

「さくさくの衣とカレーの染み込んだ衣を味わいながら、肉とお米の熱さをかみ締める……」

「カレーと卵こそ、最高ですー」

「カレーとカツこそ、最強だね」

「むむー」

「むむむ」

なにやら熱く語ったあとに睨み合う二人……なんか、息があってるのか、もしかして。

よくよく見ればわざわざ姉はカツを買ってきたらしいスーパーの袋をさげている。今日の夕飯はカレーだなんて一言も言ってないのにまた嗅ぎつけたか。エスパーかこの人。

「ねえ、二人とも」

「なんですー？」

「なんだ妹」

睨み合う目を逸らさずに声だけで反応する二人。

大人の争いなど歯牙にもかけず、カカはあっさりと言った。

「両方入れて食べればいいじゃん」

すると、二人はなんとなく可哀想な感じの顔になった。

「や、でもー」

「これは、勝負で」

「つべこべ言わない。おいしけりゃいいでしょ」

「「あ、あの」」

「うっさい！　お腹減ってるの。あんたら食うよ？　卵みたいに割るよ？　カツみたいに揚げるよ？　でも食べないで捨ててやるよ？　そして腐れ」

「「え、えっと、とにかくごめんなさい」」

お腹減ってた妹さんの勝ち。

そのあと。

なんとなくサカイさんも姉もうちで食べました。

おいしゅうございましたとさ。めでたしめでたし。

## カカの天下３６「いろんなお店」

うっかり店、ＩＮトメ＆カカ。

「チキンカレーとライス、並盛りで」

「私も同じのー」

「はい、かしこまりました」

店員さんは深々とお辞儀して去っていった。それを見送るのは僕とカカ。

ここは商店街に最近できたカレー屋さん。カレーとライス、もしくはナンを別々に頼むところらしい。こういうお店に来るのは初めてだ。無難にライスを頼んだけど、今度はナンを頼んでみよう。

「お待たせしました」

速くも頼んだものがきたようだ。蓋をされた皿が二つずつ、僕らの前に並べられた。

「じゃ、いただきますかー」

「たっまには、そっとで、おっしょくじー♪　カレーカレー！」

普段は家でしょぼいものを食べさせているせいか、こういうときのカカは非常に上機嫌でヘタな歌まで自作してしまう。うん、オンチだ。僕に似たな。

「ところでカレーは枯れたら何になるんだろう」

とりあえずゴミになると思うが。うん、変だ。姉に似たな。

そんなことを思いながら、僕らは蓋を開けた。

「……ん？」

「これ」

僕の前にある皿は二つともカレーだった。カカも同じく。

つまり、僕らのテーブルには四つのカレーが並べられたわけだ。

「店員さんのミスかな」

「多分ね」

人間のやることだ。こういう失敗もあるだろう。

「すいませーん！」

僕らは店員さんを捕まえて、ライスがきてないことを伝えた。

平謝りしながらも、店員さんはすぐに厨房に引き返して、お皿をもってきてくれた。

四つのご飯を。

つまり、僕らのテーブルには四人分のカレー&ライスが並べられた。

僕らはしばらく沈黙してから……もう一度店員さんを呼び止めた。

「はい。追加注文ですか？」

おまえは僕らを太らせて食う気か？

僕らはいろいろ間違ってる旨を伝えて、余計な皿を下げてもらった。

「やん、失敗しちゃった♪」

男性店員のこのセリフでテンションまで下げられた。

……しかしなんだかんだあったけど、結構おいしかった。

そして会計。

「４０００円になります」

「まてやオイ」

どこのぼったくりカレーバーだここは。

「やん、間違えちゃった」

すげームカつく。

「４０００円になります」

「いやだから待たんかい」

それも違うだろ四人分の値段だそれは。

「やん、おにーさんたらツッコミ上手なんだから！」

そういうあなたは人をムカつかせるのがとても上手ですね。

「はぁ……俺、なにしてるんでしょう」

あ、我に返った。無理やりやらされてるだけだったのか。

「バカみたいだ」

ええ、ほんとに。

しかしなんなんだろうねこの店は……

とりあえず、彼の問いには答えておいてあげた。

「注文とか値段とか以前に、人として間違ったことをしてると思うよ」

店員は泣いていた。

あとから聞いた話だと、どうやらそこはドジッ子をウリにしようとしていたらしい。

ぶっちゃけた話、普通の店の店員のドジなんか客が苛立つだけで意味がない。

そのふざけたやり方は、お客の数が急降下してようやく店長が意味の無さに気づくまで続いたらしい。

チャレンジの店、ＩＮ姉。

「いらっしゃいませー」

結構混んでいる中で席をみつけ、あたしはどかっと座った。

しばらくすると、皿を持った店員があたしのテーブルに寄ってくる。

ちなみにあたしはまだ何も頼んでいない。だが、ここではこれでいいのだ。

「ショートケーキが一つ」

「残念、モンブランでした」

がっかり、とあたしは肩を落とす。はずれだ。

この喫茶店は、客の注文を聞かない。

客を見た店長が勝手に作り、勝手に出すのだ。そのかわり、何を出すかを当てるとその代金はいらない、というおもしろい制度である。

おもしろいのはいいけどあまり儲からなさそうではある。客の意見を聞かないのだから当然だろう。一部では流行っているが。

どうやら金持ちの息子が道楽でやってるそうだ。

あたしは結構好きだから、この店によく来る。

一日の運試しついでに。

でも——なぜか何が出てくるか当てたお客は一人もいないと言う。

「店長、なんであたしの考えを読めるのさ」

「勘です」

謎だ、店長。

## カカの天下37「妖怪雪降らし」

ポク、ポク、ポク。

「うーん」

こんにちわ、トメです。

僕はいま、朝の布団の中という聖域にて至福の時を過ごしています。いや、冬の毛布って言葉にできない気持ちよさですよね。

ポク、ポク、ポク。

「うーん」

気持ちよすぎて、この時期になるとなかなか布団から出られませんよね。特に早く起きる必要のない、今日みたいな日曜日なんかは。

ポク、ポク、ポク。

「うーん」

ええ……布団から出たくないんですよ起きたくないんですよ。

でも、でも……

ポク、ポク、ポ――

「いいかげんにせんかーい！」

たまらず僕は身体の上に馬乗りになっていた妹カカを、布団ごと吹っ飛ばした。

コロン、とうまく転がって受身をとり、カカはてくてくと僕に歩み寄ってきた。

「で、朝から人の頭を木魚みたいに叩いてくれたのはどういう了見だ？」

「や、この叩くやつがたまたまあったから」

「なんでそんなもんがたまたまあるんだ」

「お姉が持ってきたんじゃない？」

ありうる。あの生物はなんとなく気になったものを拝借して我が家に置いていくという習性がある。ただ、それが人のものだろうと拝借してしまうことがあるのが困りものだ。

なんでああも常識を無視して自分の感性に正直に生きられるのか、フシギでしょうがない。

「ま、それはいいとして。僕を起こした理由は？」

「にゃい」

「おやすみ」

「うそうそー」

布団を被りなおした僕を再びカカがポクポクと叩いてくる。別に痛くは無いが、地味に邪魔でなんとなくムカつくな、これ。

「はいはい、なんの用だよ」

「あのね、相談にのってほしいの」

「はぁ、なんの」

「昨日のことなんだけど」

「昨日……って、なんで昨日のことを今日の朝に言うんだよ」

「さっき思い出したから」

「……そか」

忘れてたくらいなら大した相談じゃないのか？

「私、ずっと疑問に思ってたんだけど」

「うん」

「雪って、なんで降るの？」

……少し、思考が止まった。

考えてみれば気象関係の話なんて小学校低学年じゃまだやらないか。

雪の降る理由……ねえ。

簡単に言えば上空で冷やされた水蒸気が凍って、それにまた水蒸気がひっついて――って固まってったものが雪。

で、重くなって降る。

降ってるうちに溶けたら雨になって、溶けなかったら雪のまま降る……とかいう感じだったと思うんだけど……

説明めんどうだ。

「あのな、雪を降らせてるやつがいるんだよ」

だから僕は適当にでまかせを言った。

「誰が降らせてるの？」

「姉だ」

「あー、降らしそー」

カカは姉を妖怪かなにかと勘違いしてる節があるので、案の定納得した。

「じゃあ、今度お姉に聞いてみるね。なんで雪を降らしてるのか」

「うん、聞いてみてくれ。なんて答えたかまた教えてくれな」

さーて、なんて答えてくれるかな？

その後。

カカは姉に聞いてみたらしい。そうすると、困惑しつつも一応答えてくれたそうだ。

なぜ雪を降らすのか……その答えは。

「冬だから」

ごもっとも。

## カカの天下３８「ハッピーソバイヤー」

こんばんは、トメです。

ただいま大晦日の０時まであと少し、というところ。

僕と妹のカカはご近所のサカイさん宅へ招かれ、年越しそばパーティをしています。

どんなパーティかというと、サカイさんと交流のある人たちがサカイさん宅の大きな庭に集まって、０時とともに年越しそばを一気にすする、という割とわけのわからない集いです。

でもぶっちゃけた話、サカイさんは変な人ですがお金持ちで、さぞかし豪勢なおいしいそばが食べられるのだろう……と期待して、のこのこと来てしまったわけです。どうせ予定もないし。

そして今、その庭はご近所の方々やなんか外人っぽい人まで全員が、そばの丼を手に持って箸を構えています。

極めてわけのわからない光景です。

「もうすぐ今年も終わりですねー」

そう声をかけてきたのは、この変なパーティの親玉……じゃなくて主催者のサカイさんだ。僕とカカはとりあえず丁寧にお辞儀をしておいた。

「今日はわざわざお呼びいただいて……ありがとうございます」

「いえいえー。こんなおかしなパーティでごめんなさいね」

まったくだ……と言いたいのをぐっと堪える。

「ところで、それなに？」

カカが指差したのは、サカイさんの肩に乗っている生物である。

「なんか飲みすぎたみたいですー」

ぐでんぐでんに脱力した、たしか姉とかいうその生物は、魂の抜け切った目をしながらも丼をしっかりと握っていた。

「ほらー、カツコさん。しっかりしてくださいー」

「うー……ハムカツは神だ……」

カツコとはこのわけのわからない生物の名前だったりする。すごく遅い発表だが、別に作者が考えてなかったとか、むしろ考えるのが面倒だったとかいうわけではない。多分。

「ハムカツかー、いいですねー。今度はハムカツパーティしましょうか。０時と共にハムカツをかじるんです」

なんのおもしろ魔術の儀式ですかそれは。

「いいねー……ハムカツかじろー。かぷ」

「あん、ダメですよそんなとこ噛んじゃー」

ちょっとドキドキ。

「がじ」

「ギャー！！」

ドキドキ消えた。

……こほん。なんだか知らないが、この間のカレーについて議論を交わした際に友情でも生まれたらしく、この二人は仲良くなっていた。変な方向へと前も見ずに走り続ける姉カツコと、歩いたり止まったり首をかしげながら生きているサカイさん、うんピッタリだ。表現がわけわからないとかいう苦情は受け付けない。

「はぅー、いだい……あ、そろそろカウントダウンですよ」

姉にどこかを噛まれて涙目だったサカイさんが、庭の隅に立っている柱にかかっている時計を指差した。古ぼけた時計はゆっくりと秒針を進めていく。

そして――、カチリ、という機械的な音と共に、

「ハッピーニューイヤー！」

「あけおめことよろー！！」

「アウグーリオ、ボナーノ！！」

様々な挨拶と共に、全員が一斉にそばをすすり始めた。

少しすすったところで……僕とカカは唖然とする。

なんだか知らないけど、皆すごい勢いですすってる。一気飲みならぬ一気食いとでも言えばいいのか……一口でやめたのは僕ら二人だけみたいだ。

僕とカカは目を合わせ、頷いたあと、周りに倣ってそばを思いっきりすすりまくった。

丼をもらってから少し時間を置いたにも関わらず結構熱くて、しかしものすごく美味しかった。

そして僕ら二人が食べ終わるころには、庭にいる全員が食べ終わっていた。なんで新年早々こんなセカセカしてそばを食べなきゃいけないんだろう……

「ああ、失敗ですー！」

と、サカイさんがめずらしく大きい声で言いました。

「あの時計、十分早かったんです！」

……はい？

「でもご心配なく、こんなこともあろうかと思って、まだおそばは用意してありますー」

執事っぽい人達がささっと現れ、次々と丼を配っていく。僕もそれを仕方なく受けとった。カカは露骨に嫌そうな顔をしていたが、

一応受け取った。

「ささ、カウントダウンいきますよー、3、2、1」

自分の腕時計を見ながらカウントするサカイさん。そして、

「0！」

またもや庭に響くそばをすする音。

さきほどよりも若干時間をかけて、なんとか全員がそばの二杯目を完食した。

もうお腹一杯……と、思ったら。

「ああ！　申し訳ありません！　この腕時計も五分早かったんでしたー」

……えー

「でも大丈夫。こんなこともあろうかと思って――」

思ってるんだったら時計直せよ。

そんなわけで、僕らの新年はそばで胃を満たしまくることから始まった。

……苦しい始まりだ。美味いけどさ……

「いやーおもしろかったですねー」

ちょいと待ちなさいや、そこのサカイさん。

わざとか！？

## カカの天下３９「正月にお帰りなさい」

「あけましておめでとー」

「お、あけおめー」

ここはいつもの通学路。でも久々に通ると新鮮な気がします。

冬休みも終わって久々に再会した私カカと友達のサエちゃんは仲良くマフラーに首を絞められていました。

ん？　この表現だめ？

「カカちゃん、今年もよろしくー」

「はいはい、よろしくしたげるから鼻水拭きなさい」

言いながらティッシュを差し出す私。ヤレヤレ、新年早々世話がやける……

と、ぐじゅーと鼻をかんだサエちゃんの視線が宙を泳いだ。

「……？　サエちゃん、どこ見てるの」

その視線は右から左へ移動していく……私は視線の先を追ってみたけど、特に何も見当たらない。

困惑している私の様子に気づいたサエちゃんは、にっこりと笑った。

「今年もいっぱい帰ってきてるね」

「帰ってきて……って、なにが？」

「ご先祖様とか」

ご先祖様……？　それって、えーっと……たしか私達の前に死んだ人であって。つまりは……

「やだなサエちゃん。そんなこと言って」

「え、だっていっぱいいるよ？」

「やだなやだなやだなーそんなこと言って言って言って」

「もっと言えばいいの」

「ノーさんきゅっ！」

「と、そんなことがあったの」

ちわっす。トメです。

我が妹カカは今朝あったことを説明し終えて、やれやれとため息をついた。

「サエちゃんにも困ったもんだよね。幽霊がいるなんて子供みたい

なこと言うんだもん。そんなの見えるって言って他の人の気を引こうなんて、結構ずるいよね？」

「大丈夫だよー。怖くないよー」

「怖がってなんかないっ！」

一応断っておくが、今のセリフは僕じゃない。

家に遊びに来ているサエちゃんの言葉だ。

というか本人の目の前でよくも堂々とそんなセリフを言えるもんだなーと思ったが、サエちゃんはそれが単なるカカの強がりだとしっかりわかってるみたいだ。

なんかいい友情って感じだ。妬ける。

「大体さ、幽霊が帰ってくるなんて、お盆じゃあるまいし……」

「お盆も正月もおんなじようなものなんだよー」

「……へ？　どこが？」

カカは首を傾げたが、僕はその話題に合う言葉を思いついた。

「確かに『盆と正月がいっぺんに来たようだ』とかいう言葉はあるけどな」

「そゆことじゃなくてですねー」

そゆことじゃなかったらしい。

「お盆も正月も日本古来の魂祭りとされていて、ご先祖が帰ってくるんだよー」

「……そなの？」

知らなかった。が、知ってるフリをしよう。大人だから。大人気ないとか言わないでね。

「そうそう。だからほら、そこの台所にも帰ってきてるじゃないか」

びしっと指さした先にはなんの変哲もない台所。もちろん僕には何も見えない、が、これはこの場を切り抜けるジョーク……

「あ、おにーさんも見えるんですねー」

……にゃ、にゃにお！？

「髪が長くてー、菊の花の着物着ててー、俯いててー、手に包丁もった女の人がいますねー」

なにそのホラーに出てきそうなわかりやすい設定の幽霊。

「あ、そろそろ帰る時間ですー」

立ち上がったサエちゃんを、カカは必死に引き止めた。

「ね、ねね、ねねねねね、サエちゃん、お、お祓いとかできないの」

「大丈夫だよー。一日中そこで立ってるだけだから」

それも怖いぞ！

しかしカカの必死の訴えも振り捨てて、サエちゃんはあっさりと帰ってしまった。

しばし呆然とする僕ら兄妹。

「だ、大丈夫だって。幽霊なんているはずないじゃん？」

「そ、そうだよ。そうだよね？」

そのとき、突然バタン！　という音と共にドアが開き、僕らはそろってビクッと身体を震わせた。

しかし出てきたのは、ただの我らが姉だった。あーびっくりした。

「なんだよ……脅かすなよ」

「えー、いっつもこんなもんじゃん？」

「じゃあ常にもっと静かにしてよ」

「カカちゃんも常に尖ってないでやわっこくなろうよー。ん？」

姉はふと気づいたように台所を見つめる。

そしておもむろに中空に向かってヤクザキックを放った。

「……おい、なにしてんだ姉よ」

「え、なんか邪魔だったから」

「……なにが？」

「なんか包丁持った、着物姿の髪の長い、暗い女」

……まじで？

まじでー？

## カカの天下４０「兄を起こそう」

おはようございます、カカです。

最近、めっきり寒くなってきましたね。特に朝は。

元気な子供な私にとっては別に大したことはないのですが、だらしない大人のトメ兄は今日も今日とて布団にもぐりこんで起き上がろうとしません。

もうすぐ出勤時間なのに……

というわけで、私はいつもいろいろな方法でトメ兄を起こそうと画策します。

方法その一、びっくりさせる。

「トメ兄、朝だよ」

「んー……あと五分……」

「たしかにあと五分だね」

「……うん……うん？　なにが？」

「ほら、時計」

「……はちじ、にじゅう、ごふん？」

言葉を覚えたての赤ん坊のように呟く、いい大人のトメ兄。

「あと五分で仕事始まるんじゃん？」

「うおおお！？　まじかぁ！！」

そのあとはすごかった。

しぶっていたのが嘘のように跳ね起きたトメ兄は、ものすごい速度で着替えて身だしなみを整えていく。

そして会社におわびの電話を入れようとしたところで、別の時計を差し出した。

「はい、これ」

「……あれ、これ、まだ八時になってない」

「うん、あの時計ずらしたの」

「てめぇ！！」

ずらしすぎてはダメ。

ありそうなリアルな時間にするのがコツ。

その二、いぶりだし。

「トメ兄、朝」

「今日は一段と冷えるなぁ……」

ふむ、ならばお望みどおりに。

「あー、寒い寒い……」

ひゅおおおお。

「寒い……さむ？」

ひゅおおおおおおおおおおおお！

「さ、ささささ、ささささささっさむっ」

びゅおおおおおおおおおおお

声にならない声を上げて私を睨みつけたあと、トメ兄は震えのせいで転びそうになりながらも風呂場へと駆け込んでいった。

今日も私の勝ちである。

そのあとみっちり怒られたけど。

その三、ご臨終。

寝てるトメの顔に、濡れたタオルを被せてみた。

なんかものすごい勢いで起きた。

大成功だーと喜んだのも束の間。

本気で死ぬっ！　とものすんごく怒られたので、これはもう使わないでおこう。

その四、ぎぎぎぎぎ！

ガラス窓を尖ったものでおもいっきり引っかいてみた。

ものすんごい音に一発快眠！

でも自分にも大ダメージ。

ご近所からもクレームでダメージ。

さらにガラス窓に普通にダメージ。

もうやめよう。

次は――と、そんなことを考えてるうちに春になるんだなぁ、としみじみ思う今日この頃でした、まる。

「その頃まで生き延びられるのか、僕は……」

「普通に起きれれば問題なし」

「そらそうだ」

「じゃあやってよ」

「……がんばる」

## カカの天下４１「ハンバーガーのおいしいところ」

「ハンバーガーのさ、一番おいしいとこってどこだと思う？」

「私はですねー、やっぱりピクルスの乗ってる場所だと思いますー」

「お、気が合うじゃん！　あたしさ、おいしいところを後に持ってくタイプだからさ、最初にパンをめくってピクルスの位置を確認するんだよねっ」

「私はですねー、そのおいしい部分がわからないままかじってー、食べながらピクルスを探すのが好きですねー」

「たっはー！　ここは気が合わないかぁ！」

ああ……騒がしいことこの上ない。

こんにちわ、トメです。

冒頭から食い気たっぷりな会話をかましているのは、いきなり我が家に押しかけてきて無理やりお茶とお菓子を強奪してばくばく食べながら女性特有の甲高い声で喋りまくってるうちの姉とご近所さんのサカイさんです。

「で、トメは何派？」

「何派ってなにが」

「パンをめくる派かー、探索派ですー」

んなわけのわからん派閥つくんな。

「てかさ、僕の個人的な意見を言わせてもらえば」

「うんうん」

「ああいう店の主役って、フライドポテトだと思うんだよね」

『……』

「ハンバーガーは前菜でしょ？」

「まあ、変なのは放っておこうか」

「ですねー」

……なんだよぅ、僕はポテト好きなんだよぅ。

「たでまー」

僕がいじけていると、サエちゃんの家に遊びに行っていた妹、カカが帰ってきた。

そしてコタツに入っている僕と姉とサカイさんを見て、愕然とした。

「こ、これは……両手にバカ！？」

「違う、両手に花だ！」

確かに両方バカの部類に入るが。

「それに片方は姉貴だぞ？」

「知ってるよ、そういうの。金蹴上等（きんけりじょうとう）って言うんだよね」

なんだ、その男に最上級の恐怖を与えそうな四字熟語は。聞いてるだけで痛いぞ。

「えーっと……近親相姦か？」

「それそれ」

「ねえねえカカちゃん！　ハンバーガーの話なんだけど」

おお、こっちの話をまったく気にせず別の話を持ち出してくるとはさすが我が姉。言うまでもなく嫌味だが。

「半端ないバカがどうしたの？」

「ハンバーガー！　誰が半端ないバカさ！」

「そこの両手のバカ」

うんうん、半端なく同意。

「ま、いいや。カカちゃんは、ハンバーガーのどこがおいしいと思う？」

「早いとこと安いとこ」

……いや、それは、たしかにおいしいところ、つまりは良い所ではあるが。

「そ、そうじゃなくってさー、ほら、例えばあたしらなんかピクルスがおいしいなーって言ってたんだけど」

「食べきれば一緒じゃん」

『……』

わお、素敵な斬り捨て御免だ。

見事に黙りこんだ二人を差し置いて、僕はとりあえず聞きたいことを聞いてみることにした。

「カカ……」

「なに？」

「ポテトって、おいしいよな？」

「うん。私、好き」

なんとなく、ちょっと救われた。

## カカの天下４２「笛のテストはハイレベル」

「トメ兄、たすけて」

「なんだカカ、藪から棒に」

トメです。会社から帰ってきて早々、騒がしき傍若無人の我が妹カカはそんなことを言ってきました。

「あのね。明日、笛のテストなの」

おー、なつかしや。そんなことしてた時期もあったっけ。

一人ずつ音楽室のステージに立って、さらし者にされながら吹くんだよなー。

あれって絶対笛じゃなくて度胸のテストだと思う。今思えば大事な授業だった。

「それでね。私、全然吹けないの」

「全然って、どれくらい」

「音は出るんだけど……どれがドレかわかんなくて」

「どれがどれってなにがなによ」

「だからドレだよ」

「どれだよ」

「ドレミのドレだよ」

「じゃあ初めからドレミって言えよ」

相変わらず無駄に話を混乱させるなぁ。

「とにかく、指も音符とかも全然わかんないの。私、笛って人を殴るのにしか使ったこと無いし」

「なんちゅう小学生だおまえは」

さすがは武者修行とか言って日本全土を旅する姉を持つだけはある。

ん？　僕もあの姉の弟だって？

大丈夫、僕はやられるほうだから。言ってて情けないけど。

「それで……まずは指と音を覚えるとこからかな。まず笛を持ってみな」

カカは素直に低いド、つまりは全部の穴をふさぐ状態で笛を持った。とりあえず持ち方はちゃんとわかっているようだ。

「それがまずドだ」

「ねえ、なんでドっていうの？」

ふむ、どうやらドレミの語源が何かと聞いているらしい。

でも、ぶっちゃけそんなもんは知らない。

なので、適当に答えることにした。

「あのさ、これはなんていう楽器だ」

「笛でしょ」

「そう、誰が決めたかは知らないけど笛っていうだろ。でも何で笛っていうかは誰も知らない」

「ふむふむ」

「つまりだ、どんなものでもとりあえず名前が必要だからつけられたわけで、理由なんてどうでもいいんだよ。それがその名前で、世間に広がっているのなら」

「でも『なんでだろう』っていう気持ちを失くしたら寂しい大人になると思うよ」

「おまえはなんで変なガキのクセに、たまにそういうもっともなことを言うんだ」

「もっともなこと言ったらダメなの？」

ダメじゃないけどさっ！

ふんだっ！

と、そんなやりとりをしながら指と音を教えることしばらく。

なんとか教え終わるころには僕は疲れ果てていた。というか、なんでこんなに覚えていないんだろうこの妹。

「なあ、音楽の授業中ってなにしてたんだ」

「にらめっこ」

「なぜに」

「タケダ君がガンつけてくるから」

「そういう言葉使うんじゃありません」

「ガンガン行こうぜ」

「行くな。で、次は曲の練習だな。なんの曲やるんだ?」

「指も音も覚えてないのに、曲名なんか覚えてるはずないじゃん」

それもそうだが、なんでこの小娘はこんなに情けないことで偉そうなのだろう。

「教科書に載ってる曲だよ」

「はいはい……じゃあ音楽の教科書だしてみ」

「ほーい」

頷いたカカは自分の部屋へと戻っていった。

そして教科書を持って戻って……きて……

「あれ、教科書は？」

「学校に忘れた……」

「ダメじゃん」

「明日、テストなのに……」

「諦めろ」

「……今から、取りに」

「もう夜だし、危ないだろ」

「うー、こうなったら」

「どうするんだ？」

「自分で曲を作って演奏する！」

「おー……それはいい。がんばれ」

翌日、カカは適当に作った曲を披露した。

もちろんテストは落ちたのだが……

「ためしにそれ吹いてみ」

「ん」

と、吹かせたところ……なぜかバカボ〇のテーマだった。

この歳なら見たことないだろバカボ〇……なのに、なぜ。

「心に浮かんだの」

「おまえの心にはバカボ〇が住んでるのか」

バカだもんな。

## カカの天下４３「甘い話」

「ねえ、トメ兄。お菓子って……なんだと思う？」

休みの日、午後三時のおやつにて。

我が妹カカがバームクーヘンを食べながらそんなことを陶酔と呟きました。なんか夢見がちな表情をしているので、捻くれた性格の僕としてはとりあえず夢から覚まさせてあげようと思います。

「太る材料」

カカは見事にしかめっ面をして現実に戻ってきた。

「……トメ兄は甘いものの素晴らしさがわかってない！」

まあ、そこまで熱狂的に好きじゃないし。

「女の子は甘いものがないと生きていけないんだよ！」

「糖尿病の人とかは甘いものがあると危ないけどな」

「それはそれ。残念です」

さいですね。

「でも間違ってないだろ。お菓子を食べ過ぎると太るんだから。それで夕飯抜けば別かもしれないけど」

「三食のうち一食でも抜くとね、お米の神様が怒ってカンチョーしにくるんだよ」

すげぇなお米の神様。

「なんでカンチョーなんだ？」

「米って漢字、どこかの穴に似てるよね」

「……誰が言ってた？」

「お姉。や、あんなのヤツの言うことはどうでもいいから」

「じゃ言うな」

お下劣な！　意味がわからない人はそのままでいいよ。その綺麗な心を大切にね。わかってしまった人は……大丈夫、汚れるのが大人になるってことさ。

「私が何を言いたいかというと。もっと遠慮せずにおやつ買ってきてよ、数日分どっさりと」

平日はカカが小学校から帰ってきてからおやつの時間となる。だからその前日、夕飯の買い物でお菓子を買っておく。そう、一日分だけ。なぜなら、

「おまえ、あればあるだけ食べちゃうだろ。ヘタすれば買い物から帰ってきたらすぐに」

「うう……だってさ、目の前でケーキさんやプリンさんみたいな美

人さんが『私を愛して』って言ってるんだよ？」

「菓子の分際でずいぶんと情熱的だな」

ぶっちゃけうざいぞ。

「とにかく、買ってきてからもすぐに食べたいの」

「そしたら買い物の後にすぐ作る夕飯、食べれなくなるだろ」

「じゃあ、あれだ。ご飯の前はやめて、えっと、ほら。昔の人は言ってたよ。お菓子があるならご飯の後に食べればいいじゃないって」

それは「パンがないならケーキを食べればいいじゃない」とか言ったどこぞの王妃様の言葉を真似ているのだろうか。なんか昔の人が実際に言ってたのよりわがままにレベルアップしてるけど。すげぇなカカ、王妃よりわがままだ。迷惑だ、もう喋るな。

「お菓子がだめならご飯を食べればいいじゃないか」

足りないならもっとご飯食えという意味だ。

「違うの。ご飯とお菓子は別なの。入るとこ違うの。女の子は胃が四つあるの」

「胃が四つって牛のことだろうに」

「おっぱいあるんだから似たようなもんだよ」

全国の女性に謝りなさい。

「とにかくさ、もっと甘いものが食べたいんだよ」

「じゃ、その分運動するっていうんなら何か考えてもいいぞ」

僕は兄として妹の健康管理を気遣ってみた。

「運動ならいつも男子殴ってるから大丈夫だよ」

なんかすごい答えが返ってきてしまった。

「それはおまえ、あれか。いじめてるってことか？」

「ううん。いじめてる子を追い払ってるの。そしたらつかみ合いのケンカになるの」

さすが子供。性別関係なくケンカするなぁ。

「で、私がいつも勝つ」

さすが子供。女子でも腕っ節つえぇなぁ。

「それでさ、結局どうなの？　甘いものをもっとくれるの？」

……仕方あるまい。

「わかったよ。明日、もっと甘いもの買ってきてやる」

「やた！！」

翌日の夕飯。

「……どういうことさ、トメ兄」

「どういうことって、甘いものを揃えたんだが」

カボチャの煮物に豆の煮物、さらには砂糖多目の厚焼き玉子と、言わずとしれた甘いおかずがズラリと並んでいる。

「そういうことじゃないんだよ！」

カカはどかりとテーブルにつき、

「私はおやつをもっと食べたかったんだよ！！」

いただきます、とお辞儀して、ご飯と一緒におかずをつつき、

「うめー！！」

なんだかんだで満足そうに叫んだ。

ほい、僕の勝ち。

## カカの天下４４「がんばれタケダ」

「天才とは、死ぬことと見つけたりバカでも紙一重！」

「……」

「なに、その目は」

「や、なんか変なのがいるなーと思って」

「変とはなにさ」

「まあ、春だしね」

春です。僕です。トメです。そんなわけで春でトメな僕は嘆息をつきながら、居間でみかんを食べていて突然わけわからんことを叫んだカカを見つめました。

カカは変と言われたのが気に食わないらしく、むむむーとこちらを睨んでいます。

「それで、なんなんだ？　その誰でも知ってる名言の合成品」

武士道とは死ぬことと見つけたり＋天才とバカは紙一重、だな。

「んとね、今日のタケダ君の言葉のなかで一番ピンときたものを言ってみました」

あー、タケダ君。たしか数回聞いたことあるな。

たしか……なんか妙に難しくわかったようなことを言う小生意気なガキだった気がする。

「で、その言葉の意味は？」

「天才って死んでから認められること多いなーっていう意味らしいよ」

「……いや、まあ、たしかに」

歌劇『カルメン』を作曲したビゼーや画家のゴッホがいい例だろう。天才と呼ばれる彼らは名声を得るがそれは死後のことである、というのはよくある話だ。

それを思うと……タケダ君、ただの小生意気なガキではないということか。

「あとね、今日の作品はねー、『二兎追うもの一兎も得ず、でも十兎追えば一兎は得る』とかー、『こなーゆきーねぇ、髪の毛が白く染められたーならー』とか、『終電に走りこんでぎりぎりセーフ、ただし乗る電車間違えた！』とか」

なんかすげぇなタケダ君。

「というか随分気に入ってるんだな、タケダ君のこと」

「そうかな」

「だっておまえがうちでクラスの男子の話するときに、名前が出た

こと自体初めてだぞ」

いつもはクラスの男子をぶちのめしたとか復讐したとかそんなことばかり聞いてるからな……って、はて。なんかこの娘の教育を見直さなければならない気がするのは気のせいか。

「おまえ、もしかしてタケダ君のこと好きだとか？」

父親みたいな気にし方だが……まぁ家族に好きな人ができたとなればなんとなく一大事だ。別になにもしないが。

しかし僕の心配をよそに、カカはあっさりと首を横に振った。

「ううん。偉そうだからあんま好きじゃない」

……一刀両断。

「ていうか、ちょっとうるさい。うざい」

おお、第二撃。

「言ってること変でおもしろいから、遠めに観察してるだけ」

おおお、これでフィニッシュだ！

後ろに立っているタケダ君らしき子も見事に呆然としてるぞ！

「……あれ？　タケダ君だ」

いつの間にか玄関のドアは開いていて、僕にとっては初対面の男

の子が顔を覗かせていた。ぶっちゃけ僕は気づいていたが、カカが「タケダ君」と名前を出した途端に彼が狼狽したのを見て「お、本人かな」と思い、おもしろそうだから放っておいたのだ。

タケダ君は僕らの視線が集まったことを確認すると……おもむろに笑い出した。

「ふ、ふはは！　こんなとこでも俺の噂話とは、俺の有名さも大したものだな。でっけぇでっけぇ、俺の人徳。ちぃせぇちぃせぇ、庶民の思惑」

でっけぇでっけぇ態度でそんなことをのたまったタケダ君は、なるほど確かに一筋縄ではいかなさそうなキワモノだ。

カカは露骨に嫌そうな顔になると、

「……うえ」

最悪な一言を残して自分の部屋へと去っていった。

高笑いをあげていたタケダ君はやがて声を小さくしていき……最後にはしゃがんで「の」の字を指でなぞりながらいじけ始めた。どうやら意地を張って笑っていたらしい。

うむ、気持ちはわかる。あれはきつい。

「えーと……なんだ、とにかく頑張れ」

ポンと肩を叩くと、タケダ君は涙と鼻水とその他の汁を垂らしながら僕に飛びついてきた。

「お、お兄さぁぁぁぁん！」

「誰がおまえの兄か」

とりあえず殴り飛ばしといた。

「うう……虎穴に入らずんば虎子に噛まれる……」

「頭いいなおまえ。で、なにしにきたの」

「はぃ……プリント、忘れたみたいなので」

「それはご苦労、あとで渡しとく」

「うう……カカ君……」

なんだか名残惜しそうにカカが去っていった方向を見つめ、とぼとぼと去っていく彼はもしかしたらカカのことが好きなのかもしれない。

そんな彼に対して僕が思ったことはただ一つ。

物好きな……あぁ、あれが俗に言うマゾってやつか。うっとおしいな。

僕は新種の生き物を見つけたような気持ちになり、意気揚々とカカにプリントを渡しに行った。

……なんか僕も、姉と妹の影響で失礼になってきたなー。

## カカの天下４５「酔っ払いシスターズ」

「夏目漱石っていい男だよねっ」

「いやいやー、いまどきは野口英世ですよー」

「でもなんといっても福沢諭吉が一番いい男っ！」

「いえす！　おっとこまえー！」

「男前ばんっさい！　諭吉さんっ、もっとたくさん私の胸に飛び込んできて！！」

あー……やかましい。

こんにちわ、トメです。なにやら遠まわしに金よこせと叫んでいるのはうちの姉とご近所のサカイさんです。

すっかり仲の良いこの二人は何の連絡もなくうちに現れ、持参したお酒とおつまみをかっ食らって宴会中です。

なんていうかもう、姉の行動は自然災害の一種と思って昔から諦めてます。

近づくととても危険です。

二次災害にご注意ください。

「ねね、カカちゃん。諭吉いい男だよねっ」

「こんなおっさんのどこがいいの」

で、二次災害に遭ってしまった我が妹カカには同情を禁じえませんわ。

でも酔っ払い二人に囲まれながら、カカはいつもの通りマイペースにピーナッツをつまんでいます。おまえ、図太いなぁ。

「じゃさーじゃさー、カカちゃんはどんな男が格好いいと思うー？」

「ん、お金持ちは格好いいね」

おい小学生、なにリアルな理想を言ってんだ。

「じゃあ諭吉やっぱ最高じゃん！」

「諭吉にかんぱーい！」

「や、その人お金持ちじゃなくてお金の人だし」

冷静にツッコむカカ。

よくそのロゥテンションで酔っ払いについていけるもんだ、と感心する。

「でもでもー、学校で好きな男子とかいないんですかー？」

酔っ払いにお決まりの恋愛話だ。身内としては微妙に気になったりする。

でもカカは恥じらいを微塵も見せず、きっぱりと言った。

「いないよ。だってあそこには子供しかいないもん」

当たり前だろうが！！

「それに、私は私より強い男じゃないと認めないから」

どこの格闘家だおまえは。

「おお……カカちゃん、あんたあたしの教えをちゃんと守ってるね！」

やはり原因はアンタか、姉。

「骨ある男かどうかは急所蹴ればわかるのさっ」

「あらあらー。どうやってわかるんですー？」

「崩れ落ちるのがダメ男。そのまま平然としているのがいい男っ」

ああ……知らないから言えるんだろうな、この人ら。

問答無用で最大級のダメージを与えられるからこそ急所と呼ぶのだよ。

たとえ痛覚なくてもあそこ蹴られればうずくまると思うぞ。痛みとか超越してるから。

「だめだよ、うちのクラスで耐えられる人はいなかった」

クラス全員の蹴ったのかおまえは！？

「ああ、そっか……あたしの周りにもいないんだよねー耐えれる人」

アンタは出会った男全てのを蹴ってるのか！！？

ああ、なんか思ってばかりじゃなく実際にツッコみたくなってきた……が、ヘタに口を出せば酔っ払い災害どっかんどっかんオモチャになってヒァウィゴー！　になってしまう。

え、僕の発言がすでに酔っ払いみたいだって？

酔っ払いの相手してたらこういう発言もするようになっちゃうのだよ……君もいつかわかるさ。誰だか知らんが。

「で、あたしらのタイプはこういうことだから、サカイさんのタイプを聞こうか」

急所蹴りに耐えれる人、がタイプだったら一生独身だなこいつら。

サカイさんは「うふふー」といい感じにほろ酔い気分な顔で、ぽそりと言った。

「私を捨てない人」

過去に何があったんだサカイさん……！

――と、そんな感じで理性をなくした大人は盛り上がっていく。

だんだん普通に混ざりたくなってきていたのは内緒である。

## カカの天下４６「年賀状の書き方」

「ふぃ～ババンババンバンバン」

日本古来から伝わるお風呂ソングを歌いながら風呂から上がったトメです。湯上りたまご肌な僕は、居間でうんうん唸っている変な生物を発見しました。

妹科、生意気属のカカとかいう生物です。

「どしたんだ、おまえ」

「んーとね、年賀状で何書くか悩んでるの」

……はて。

それって年末、もしくは年始に考えるもんじゃなかったっけ。

ただいま一月二十日。もうとっくにそんなシーズンは終わったぞ。

「なんでそんなもん今頃書いてるんだ？　誰宛だよ」

「サエちゃん……」

ああ、一番仲いい友達のサエちゃんね。

「そういやそのサエちゃんからは元旦に年賀状きてたな。でもおまえも元旦に向こうに着くように、去年のうちに書くーとか言ってなかったっけ」

「うん……言ってた」

「で、結局書かなかったのか？」

「や……書いたんだけどさ」

そう言いながらカカはファイルからどさどさと年賀状を出した。

「これ……なに、全部サエちゃん宛か！？」

「どんなの出せばいいかわかんなくて……」

だからってな……二十枚以上あるぞ？

どんなのがあるかパラパラと拝見してみる。

「なになに……『あけましておめでとう、今年もよろしくねー』って。これでいいんじゃなかったのか？」

「それじゃ普通すぎてつまんないじゃん」

「そりゃそうかもしれないけど」

「もっとインパクトとか愛とか芸術がほしいんだよ」

「こんな狭い紙にそんなの求めなくても……えーとこれは『明けたぜっ。新年だぜっ。めでたいぜっ』……って、なんで『ぜ』なんだ」

「それは勢いで書いちゃったの。若気の至りってやつ？」

「いい言葉知ってるね。えっとこれは……『猪のごとく猪突猛進の心構えで友情を貫きたい所存である』なんだこれ」

「それはタケダ君がこんなのどうだーって言ってきたやつを一応書いてみた」

「ほほう、あのタケダ君か」

あの、なんか難しい言葉をよく言うのが特徴で、カカに密かに恋してて、

「そうそう、あのキモイやつ」

めっちゃ嫌われてる可哀想な男の子だ。

「はぁ……がんばれタケダ。僕はめげずに恋するやつの味方だ。何もしないけど」

あっさりカカとくっつかれてもムカつくし。

「これは？　『一月十日。晴れ。サエちゃん、今日は楽しかったね』ってこれもう日記じゃん」

「だってさぁー。なんかここまで来たら他に書くことがさー」

まぁ、すでに新年に直接会ってあけましておめでとうとか挨拶しちゃった後だからなぁ……書くことに困るのも仕方ないといえば仕方ないのだけど……

「サエちゃんって、あのぽやーっとした子だよな」

「うん。ひたすらぽやーっとしてぷやーっと喋ってぽややんと生きてる子」

なんか柔らかそうに生きてるな。

「スプーンで簡単に裂けるほど柔らかいよ」

こえぇよ。

「ともかく。そんな柔らかい子なら、細かいこと気にせずにおまえの気持ちを喜んでくれるだろうから」

「ふむ」

「これ全部送れよ」

翌々日。

「カカちゃん。あれ、ありがとー」

「あ、届いた？　年賀状」

「うん、届いたよー。年賀状と日記ー」

「ああ……うん、日記ね、はは」

「私ねー、交換日記って初めてだけどー」

「……は？」

「頑張って書くねー」

「……あ、う、うん」

「昨日のうちに返事は送っておいたからー」

……なんかぷやややんと誤解したサエちゃんはやる気満々だったので……カカとサエちゃんはなんとなく、はがきでの交換日記というものを始めることになってしまいましたとさ。

ちなみに、届いたサエちゃんの返事の日記はがきには。

「納豆とカレーを混ぜたのー。なぜなら黒猫が走ってたのー。ドボン。それから眠いです」

という、なんとも小学生らしい脈絡のない日記が書かれていましたとさ。ドボンって何があったの。納豆とカレーの中に落ちたのか？　とにかく眠くなるような平和な音には聞こえないんだけど。

はがきのど真ん中にその文だけ、というその妙な紙を最初に読んだ僕は、宛名を見ずに捨てるべきか否か結構迷った。

そして、それを受け取ったカカの感想。

「変なの」

おまえが言うなと声を大にして叫びたい。

## カカの天下４７「続、がんばれタケダ」

こんにちは、カカです。

今日は掃除当番なので、放課後の教室をせっせとホウキで掃いています。

「カカちゃーん、これ」

サエちゃんが私が掃き逃した大きい紙クズを拾って持ってきます。

「ありがと、サエちゃん」

それをちりとりで受け取った私は礼儀正しく言いました。

「カカ君！　こんなところにゴミが落ちているよ！　一寸の虫にも五分の」

「うっさい黙れ向こういけ」

私は一切遠慮なしで言いました。

相手がタケダ君だったから、という理由は少ししかありません。

ああ、訂正します。それだけでも近寄ってほしくない理由にはなるのですが。

ゴミと言いながらハエの死骸をつきつける男の子になんか優しくできるはずありません。

「うう、なぜだ！　サエ君にはそんなに素直なのに、俺に対してはなんで冷たいのっ？　人生皆兄弟、思いやりこそが世界を救う赤い羽根募金なのにさっ！」

「だってサエちゃん可愛いもん」

「俺だって可愛いじゃないかっ！」

「あんたうざいだけじゃん。そのハエみたいに」

カカの口撃。

痛恨の一撃。タケダ君はしんでしまった。

「うう……なぜ……こうも、うまくいかないのだろうか……」

「んー、そうだねー」

掃除の後。カカがゴミを捨てにいっている間に、タケダ（下の名前はまだない）はカカの親友であるサエちゃんに相談していた。

「俺は頑張ってカカ君と仲良くなろうとしているんだけど……」

「んー、それが暑苦しいんじゃないかなー」

「ふむ……ではどうすればいいかな」

「二度と話しかけなければいいと思うー」

「なるほど、それなら波風立たな……立たなさすぎるだろう！　俺はカカ君と仲良くなりたいのだ！　愛のエレクトロニクスを奏でたいのだ！」

愛の電子工学ってどうやって奏でるのかなぁ、と何気に英語のわかるサエちゃんは思ったが、面倒だったので黙っておいた。

「さぁ、どうすればいい！？　ナイスな意見を聞かせてくれたまえ！」

なんでこんなのの話に付き合ってるのかなーとほややんと思ったが、心優しいサエちゃんは適当に答えてあげた。

「タケダ君っていつもそういう……なんだろー、大人ぶった、こまっしゃくれたクソガキみたいな感じだからー、なんか違う感じで話しかけてみたらどうかなー」

「……なんかすごいこと言われた気がするけど、例えばどんな風に？」

「やんちゃ坊主とかー、いつもと逆に腰低くしてみるとかー、つっぱねてみるとか？」

またまたカカです。

ゴミ捨て場から帰ってくると、タケダ君が待ち構えていた。

また何か言ってくるのかなぁ……うんざりするけど、教室の入り口に立たれては近づくしかない。なのでしぶしぶ歩いていくと……

「おい、カカ坊！！」

「何様だおまえ」

とりあえず殴っといた。

するとタケダ君はうずくまり、めそめそと泣き始めた。

「う、ううう……お許しくださいカカ様ぁ」

「きも」

ぐっさり、と大きな音がタケダ君の胸に響いた。

タケダ君はなにやら脳に深刻なダメージを負ったようにふらついていたが、やがてゆらりと立ち上がり、今の泣き様が嘘のように斜に構えた態度でこちらを見た。

「君さ……いい加減にしろよ。何様のつもりだよ。もううんざりだよ……ああわかったよ、君にはもう話しかけない、目も合わさない、これでいいんだろ！？」

怒鳴るだけ怒鳴って、ぷい、とタケダ君は向こうへ歩いていってしまった。

それを見送りながら、私は……

「よっしゃ！」

ガッツなポーズをしてみた。

「ちょ、ちょっとそんなぁ！！」

心底嬉しそうな声が聞こえたらしく、目も合わさないと言ってくれた直後なのにこっちに走りよってくるタケダ君。

あー本当に邪魔だなー

私は容赦なくそう思った。

――だって仕方ない。

世の中、そいつがそいつだから嫌い、という生理的な相性というものがあるのだ。

それでもタケダ君の挑戦は続く。

幾度となく虐げられ、それが快感になるまで続いていく……って展開は、まずいかな？

## カカの天下４８「ナニして遊ぶのその二つ」

「どっち買おう……」

こんにちわ、トメです。

隣で腕を組んでうんうん唸っているのはおなじみ妹のカカ。

ただいま夕飯の買い物中です。いつもは僕一人でくるのですが、たまには……とカカを連れ出し、「好きなもの一つなら買ってもいいぞ」と言ったのが五分前。

それからずーっと唸ってます。同じ場所をうろうろしているのでいい加減お客さんの邪魔になってます。

「邪魔ねぇこの子」

ほら、通りすがりの買い物おばさんもこう言って……待て、横幅ありまくりのあんたのほうが明らかに邪魔だぞ。声でけぇし。

「おばはん邪魔」

あ、言っちゃった。

「腹が」

あ、詳しく言っちゃった。

「腹肉が」

詳しすぎる。

「ごめん脂肪だった」

謝っちゃったよ。

「うぎゃわあああああああん！！」

ああ、泣きながら逃げてっちゃった。意外ともろいのねおばちゃん。それにしても可愛くない泣き声だ。

「でさ、何を買うのにそんな悩んでるんだ？」

実はうろうろしているのを五分も見てたわりに、カカが何に迷っているのか僕にはわからなかった。これがお菓子売り場なら、いつも食べてるおやつから想像つくんだけど……

カカはうんうん唸りながら立ち止まり、眉根をひそめた顔をくるりと僕に向けて、その五分も迷っている『買ってほしいもの』を言いました。

「バナナとトマト」

「……はぁ」

「どっちにしようかな……」

なんなんでしょう、このお子様は。

口をあんぐり開けてる僕の表情には気づかず、再びうろうろ歩き始めるカカ。いい加減それやめろって。

「なぁ、なんでそんなもんほしいんだ」

「食べたいから」

そりゃそうか。

「なんでそんな微妙なもん二つで迷ってんだ？」

「微妙かな？」

「だってバナナとトマトって接点ないだろう」

「えー、あるよ」

「どんな」

「バナナはおやつに入らないよね？」

「ああ」

遠足にお決まりの文句だ。

「トマトもおやつに入らないでしょ」

「まぁ、そうだけど」

「じゃあ同じだよ」

「……それもそうか」

なんか新理論によって納得させられてしまった僕は、もうしばらくカカのうろうろ劇場を眺めていた。

……や、でもいい加減にしないと。

「なあ、理由はもうこの際気にしないことにしておくから早く決めろよ」

「んー……バナナ舐めまわしとトマトの中心ほじくるの、どっちが楽しいかな……」

なんちゅー楽しみ方しようとしてんだこのお子様。

「あー……もうあれだ。そこまで迷うなら中をとって別のもんにしろよ」

「中をとるって？」

「迷ってる二つの真ん中っぽいの選ぶってことだよ」

「……じゃあきゅうりかな」

「なんでやねん」

「舐めまわせるし、ほじくりがいもある」

……あー、なんか変な話に聞こえるなこの会話。よい子は深く考

えちゃいけないぞっ。

「じゃ、それ買ってもういくぞ」

「うん……あ」

「なんだよ」

「なすびもいいよね」

「なんでそう話的にまずいもんばっか出すかねこの子は」

「……？　なすびまずいの？」

「いや、食べればおいしいし、ネタとしてもある意味おいしいが、いろんな意味でまずい」

「難しいね」

「ほんとにね」

そんな何でもない会話をしながら、僕たちはレジを済ませた。

その後、カカがきゅうりをどうしたのかというと……

「なあ、カカ。きゅうりどした」

「遊んだ」

……だ、そうです。

そういやこいつきゅうり嫌いだった。本当に遊んだだけで食べてないんだろうなぁ。

## カカの天下４９「腐ったいじめ？」

「……なんだよ、またお前か」

「またあんたか」

キツイ目つきでにらみ合う二人のうち片方は私、カカです。

そして相手は……なんだっけ。名前忘れた。

ええと、とにかくその角刈りの男の子は私の通う小学校のイジメ常習犯です。また今日も今日とていつも通りえーとえーと……やっぱ思い出せないけど丸刈りの男の子をいじめていたので、私が間に入ったというわけです。

「なんでいつもいつも邪魔するんだよ」

「なんでいつもいつもいじめてるの」

「だってこいつが構ってほしそうにしてるから、さぁ」

にやり、とガキながらも悪く見せようと頑張ってる引きつった笑みは、丸刈り男子を怖がらせるには充分だったようだ。

丸刈り男子は涙目になって縮こまっている。

「これはさ、遊びだぜ？　じゃれてるだけなんだよ。女にはわかんないだろうけど」

「毎日泣きそうになるまで意地悪することの、どこが遊びよ」

「うっせーな！　なんでそいつ庇ってんだよ。そいつのこと好きなのか？」

子供のお決まりの文句。

脈があろうが無かろうが、この言葉には大抵の子供は顔を赤くして必死に否定するだろう。

だが私は違った。

「――冗談。女に庇ってもらうような情けない男なんか誰が好きになるもんですか」

庇ってるお前が言うセリフか、とその場にいたいじめっ子といじめられっ子、そしてそれを遠目に見るギャラリーの誰もが思ったらしいけど、なんとなく言い出す人はいなかった。

「お……おまえ、それひどくないかっ？」

「いじめてるアンタにひどいとか言われたくないわよ！」

「そいつは確かに叩けば泣くしパシリには逆らわないし女の子には影で『きもーい』とか『「もきー」言われてるけどな、別に腐ったミカンなんかじゃないんだぞ！」

ｂｙ、金〇先生。

「なによっ、誰もそんなこと言ってないじゃない！　大体、もきー

ってなによ！！」

「きもーのレベルアップバージョンだ！！」

「一つ勉強になったじゃないのどうしてくれんの！」

「感謝しろ！」

「ありがとう！！」

……ん？　何か会話が変な方向に。

修正修正。

「大体ね、腐ったミカンなんて話、どっからもってきたのよ！　臭いなぁ」

「腐った牛乳のほうが臭いぞ！　こないだ台所の隅にあってびっくりした！」

「あ、私の家でもこないだそんなのあった」

「でも牛乳って液体なのに腐るんだな」

「うん、フシギだよねー」

「なー」

あれ……なんか和やかになってない？

「でもさ、腐った牛乳は――」

「やっぱりでも腐ってるんだし――」

なぜか腐った牛乳談義になってしまい、白熱し始めたところで…

…いじめられていた上に散々こき下ろされた丸刈り男子がおずおず

と声をかけてきた。

「あ、あの……」

「なによ、腐った牛乳……あ」

つい思ってたことを言っちゃった。

すると丸刈りの男の子は、

「……僕、もう学校こないね」

（＾＾；）ノシ←な感じで悟ったように言った。

「え、ちょ、ちょっと！！」

そのときの私と角刈り男子の顔は、

Σ（ ゜□ ゜ノ）ノ←こんな感じだ。

――かくして、一人の不登校生が誕生した。

果たしてカカは、その子を更正させることができるのかっ。

「ただいまー」

「おかえり、トメ兄」

「今日は学校でなんか特別なことあったか？」

「いや、特に」

更正……させようともしませんね。

それもそのはず。

次の日、その子はちゃんと学校に来たのだから。

どうやら何を言われても腐らない根性の持ち主だったらしい。

……お後がよろしいようで。

## カカの天下５０「はむはむかみかみ」

「チョコが食べたい」

「あっそ」

夕食後、ふと思いついたように我が妹カカは言いました。そして僕、トメはめんどくさげに相槌をうちましたとさ。

「食べたいの」

「あーそう」

繰り返し言ったカカに、またしてもだるそーに相槌をうつ。

「た、べ、た、い、な」

「あ、ら、そ、う」

なんかゆっくり言ってきたからゆっくり言い返した。

「たーべたいな、たべたいなー♪」

「あーそうですか、そうですかー♪」

なんか歌ってきたから歌い返してみた。

「食べてーんだってばよ」

「そうかいってばよ」

なんかてやんでぃだからてやんでぃ返してみた。

なんだこのやりとり。

「で、なんだ突然」

「だから食べたくなったんだってば、チョコが」

「夕食おわったばっかだろ」

「デザートという文化がありますね」

「あーそうですね、そういうお金持ちの文化がありますが、それがなにか？」

「気分だけでもお金持ちになろうよ」

「そのお金持ち気分のせいで貧乏になったら本末転倒だ」

「それでも使ってしまうのが人の常だよ」

「む……まぁ、そう、だが」

小学生に言う言葉じゃない。またタケダ君の入れ知恵か。

嫌い嫌いと言ってるわりには言葉は聞いてるんだな……まぁ珍しい言葉がおもしろいからだろうけど。

「で、今からチョコを買いにいけと？」

「うん。ごー！」

「お小遣いあるだろ？　自分でいけよ」

「子供に夜道歩かせる気？」

「こんなときだけ子供ぶるんか」

「私子供だもん。税金払ってないもん。胸ないもん。生えてないもん」

「生えてないとか言うな」

「じゃボーボー」

「そうじゃなくてね」

……いい性格してるよ、あの姉みたいに。

「てかさ……太るぞ？　こんな時間に食べると」

「子供がそんなこと気にするもんじゃないよ」

普通なら大人が子供に言うようなことを、なんでこのお子様はいつも自分で言うんだろう？

「あのね、普通の板チョコでいいの。私これから勉強するからさ、その前に頭はっきりさせておきたくて」

む……甘いものを食べて脳の疲労をとってから勉強する、というのは僕もやっていたことだ。勉強という言葉を聞かされては教育上協力すべきではあるまいか。いや、しかし。

「食べないとできないのか？」

「できないわけじゃないけどやる気でない→頭に入らない→テスト点悪くなる→いらいらする→トメ兄かじる→ヒャッフー！」

なんてわがままな連想ゲームだ。

「なんでかじるの」

「チョコかじりたいから代わりに」

「おまえはケモノか。あとヒャッフーってなに」

「変になるの」

おまえはいつだって変だよ。誰かなんとかしてくれ。チョコやるから。

「じゃあ、チョコだけに甘がみならいい？　はむはむと」

想像してみた。

甘がみって……耳とか？

危険にもほどがある！！！

「……あー、わかったよ買ってくるよ」

「なんで顔赤いの？」

「赤くない！！」

「タコみたいだよ」

「ならタコでも食べてろっ」

「タコみたいなトメ兄を食べるの？」

「だから僕を食べるな！」

「じゃ舐める」

「兄妹でそんなことしちゃいけません！！」

……はっ。いかんいかん。なんか前後不覚に。

まぁ、なんにせよ結局折れました。

なんだかんだで妹が可愛い、いいお兄ちゃんな僕でしたとさ。

で、買って帰ってくると。

「寝てやがる」

可愛さ余って憎さ百倍でしたとさ。

「……結局勉強しないんかい」

確かに九時寝るのは子供っぽいけどさ。

とりあえず僕は無駄な行動が虚しくて、なんとなく買ってきたチョコをかじりましたとさ。

……甘がみで。

## カカの天下51「赤ずきんトメ……や、狼か」

「ねえ、トメ兄」

「……なんだ、カカ」

「どうしてトメ兄はそんなに布団かぶって寝てるの」

「寒いから」

「どうしてトメ兄はこんな時間まで寝てるの」

「具合悪いから」

「どうしてトメ兄はトメ兄なの」

「……ダメなの？」

なんとなく童話の赤ずきんっぽい会話をしてから、僕はちょっと苦しくなって二、三度セキをしました。

トメです。なんだか今日は身体の調子が悪かったので、会社を休んだのです。

「むぅ。赤ずきんの狼みたいに襲い掛かってきてほしかったな。ひどいこと言えばそうくるかと思ったのに」

「そんな元気ないもん……」

「まさか普通に落ち込むとは」

「落ち込んでなんかないやい」

……そして、学校から帰ってきたカカに絡まれているというわけだ。落ち込んでないよ？　ほんとだよ？　しくしく。

「撃退用の木刀もちゃんと用意したのに」

「病人に無茶さすな……それ、血みたいのついてるの気のせいか」

「姉から受け継いだやつだから」

「受け継ぐな……そんな物騒なもん」

「これね、『蒼い蠍特攻隊長、死剣上等！』って殴り書きしてあるんだよ、すてき」

「あー、すてきね。ところで死闘とかじゃないのな。しけん、ってなに？」

「高校試験に向けて勉強を頑張ってる時期に使ってたらしいよ」

マジメなのか不良なのかわからんやつだ。それにしてもだるい。

「とにかく……僕はまだしばらく動けないから、ご飯は適当に済ませてくれ」

「えー……いま家になんもないよ？」

「んじゃサカイさんとこにたかりにいけ」

あー、だるい。だるくてぶっちゃけたことしか言えない。

「わかった」

そうして部屋を出て行ったカカを僕は止めなかった。

ようやく静かになった……と布団を被って。

「ほら、こんな状態なの」

「あらー、それは大変ですねー」

「うん、だからなんか恵んで」

「では、ビタミンをとってもらうためにレモンをあげましょー」

「ほら、こんな状態」

「あっはっは、なさけねーな我が弟！」

「だからなんかちょうだい」

「んじゃ食べかけのビニ弁やるよ」

「ほらこんな以下略」

「わ、お兄さん大変。死んじゃうの？」

「うん」

「大変……じゃ、これあげる」

「……なんでこんなの持ってきてるの？」

ふと、目を覚ますと。

ベッドの枕元に、レモン丸々一個と食べかけの弁当と、焚かれたお線香が置いてあった。

えと……なんのイヤガラセですかこれは……

お、なんか置手紙っぽいのがある。

なになに……

『このたびは誠にご愁傷様でした』

死んでねぇよ。

## カカの天下52「お肉を食べよう」

「お腹すいた」

「……はぁ。そうですか」

さて、もう寝ようとベッドにダイブしようかと思ったとき。

わざわざ僕の部屋までやってきた妹、カカはそんなことを言いました。

「なんか食べたい」

「……こんな時間にですか、お姫様」

ちなみに僕が寝ようとしていることからもわかると思うが、もう時刻は深夜といってもいいくらいである。

そんな時間に何をおっしゃるかね、このお子様は。

「あのね。肉が食べたい」

「お姫様……っぽくないワイルドなものをご所望ですな」

「なんか妙に油っぽいもんが食べたくなっちゃって」

「なんでだ。夕食が味気なかったか？」

「その通り！　納豆ご飯スペシャルはおいしいんだけどさ、子供に

はもっとお肉が必要なの」

「男の子みたいなことおっしゃりますね、姫」

ちなみにどの変がスペシャルな納豆ご飯だったかというと、卵とひじきとネギとそばを納豆に掛け合わせてご飯にのっけたヘルシー&お手軽&安いというスーバラスィ一品だ。

「苦しゅうない！　面をあげい！　そしてなんか作れ！」

「眠いんでそんなことしたら苦しいです。あと、もう何か作れるような材料ないですし」

「じゃあ買ってくるのじゃ」

「もっと苦しいでーす」

「ええい、役立たずめ。おまえはクビじゃ」

「クビかぁ。んじゃ何も作らなくていいね。おやすみ」

そう言って布団に潜ろうとした僕の肩をぐわし、と掴むカカ。

「トメ兄ー……おなかすいた」

「いきなりそう弱気に出られてもな……」

「だってさー、ワ〇ピース読んでたら無性にお肉食べたくなって」

ああ……たしかにあの漫画にはよく肉出てくるな。

「そう言われてもな、ないもんはないし」

「無いなら作ればいいでしょー」

「肉を？」

「……どこかに野良犬とかいないかな」

「食べるんか、それを」

どんな野蛮人だ。

「お姉は食べたことあるって」

あれは野蛮人だ。

「とにかく、だ。こんな時間に食べるのも身体によくないし。さっさと寝てしまえ」

「むーむー」

何か唸りながらも、一応は観念してくれたらしくカカは部屋を出て行った。

さて、寝るか……と布団に潜ろうとしたとき、再び勢いよく部屋のドアがバーン！　と開いた。

「ねえ、お肉食べないと！」

「……だからー」

「ちゃんと理由があるの」

「……なんだよ」

「今日は二月九日だよ！」

「……だから？」

「にく（２９）の日だよ！」

「……」

「食べないと」

「おやすみ」

適当に追い出して、僕は寝た。

……数分後、三度部屋のドアがババーン！　と開いた。

「トメ兄、お肉見つけたよ！」

「……どこに」

「トメ兄のお腹」

「そうそう、最近ちょっと気になって――出てけやおまえ」

「可愛い妹の言うこと無視するの？」

「可愛いからってやすやすと食われてたまるか」

「お姉はチャンスあったら食べちゃえとか言ってたけど」

……なんちゅうことを言うんだあの野蛮人。

「あんなのの言うこと、別に本気にしてないだろ」

「うん、遊んでるだけ」

「じゃほんとにもう寝ろ」

「うん、まぁ満足した。疲れた。眠い。おやすみ」

妹の相手も疲れるわぁ。

## カカの天下５３「家族会議、そのいち」

「第一回、家族会議！　どんどんぱふぱふー」

「ぱふぱふー」

「……はぁ」

イェイイェイイェーイ！　と腕を振り回しながらはしゃいでる姉、そしてなげやりに拍手している妹カカを見ながら、哀れな僕はなんでこんなことになったのか思い出してみました。

「ねぇねぇ」

「なんだ姉。いきなり」

「家族会議しよ」

「なんで」

「暇だから」

回想終了。思い出す意味あったのかこれ。

「さてさてでわでわ、本日のお題を発表したいと思いまっす！」

「おー！」

「いやーカカちゃんノリいいねっ！　いつもあたしがなんかするとき冷たい目で見るから、あたしって嫌われてるのかと思ってたよ！　嬉しいわん♪」

「ん、暇だからバカに付き合うのもたまにはいいかと思って」

「あたしと付き合いたいって！？　いや、うれし、お姉さん抱きしめちゃおうかしら！」

「……やっぱバカはうざいかな」

ぎゅ、ぶんぶん、ぐるんぐるんぎゅー！　って感じでカカを抱きしめる姉。どんな感じかは擬音でなんとなく察してください。

「おっし、じゃあお題はっぴょーするよん。やっぱ生活で必須なことを家族みんなで話しあえばいいと思うのよ」

まぁ、それは同意する。みんなと言っても父さん母さんいないけど。

「ということで、まずはケンカの必勝法を話し合おうか」

「待てやこら、それのどこが生活必須な議題だ」

僕の至極まっとうな意見に、なぜか姉妹二人は首をかしげた。

「……え、なんで？　するでしょケンカ、毎日」

「んー、でもほら、私なんか二日に一度くらいしかしないし」

「え、そうなのカカちゃん。うわーおとなしいね。あたしなんかいまだに一日三回はしてるのに！」

「なぁ……おまえらなんでそんなに敵多いんだよ」

「何言ってるの弟。あんた男でしょ。敵じゃなくても友達と殴りあいとかするでしょ、いつも」

「いつもそんなことしててたまるかっ！」

「えー！　ちゃんと一日三回はしないとダメだよ、不健康なっ！」

「それは一日三度の食事の話じゃないのか？」

「ほら、トメ兄って友達いないから」

「いても殴り合いなんか普通しないっての」

「軟弱な弟め……それでもいっぱしの男か」

「毎日殴りあいするのがいっぱしの男なら僕は遠慮しとくよ……」

「そんなだからまだ童貞なんだよ」

「ちょ、ちょっとそこのお子様……いまなんて言った？」

二日に一回ケンカしてるとか言ってるし……この妹の教育環境が

心配になってきた……

「ってお姉が言えって言ってたね、こないだ」

「ちなみにその言葉の意味はねー、むふふ」

「おまえが一番教育に悪い！」

「な、なにさいきなり……」

「とにかく変な言葉を教えるのはやめろ。それに教育の環境汚染になるから、いい加減に出て行け」

「な、なにさなにさ！　人を不法投棄物みたいに！」

「あんたを不法投棄した親を恨むわ」

「えっと……ゴミ？」

「指ささないでカカちゃん！！！」

「はいこれ」

「ゴミ箱持ってこないでカカちゃん！！」

「カカ、そっち持って。うりゃうりゃ」

「入れようとすんなコラァ！！」

「なんで僕に対してだけ強気なんだ！？」

……と、第一回家族会議はこんな感じの不毛な会話だけで終わりましたとさ。

## カカの天下５４「カカ的バレンタイン」

こんにちは、トメです。

今日はバレンタインです。おそらくは日本の各地でいろんなイベントが起きているでしょうが、僕の周りでは特にすんばらしいイベントなど起こる気配はありません。あーやれやれ。

それでも一応、妹と姉という身近な女性がいるのは恵まれているのでしょう。毎年二人にだけは確実にもらってるし……

「トメ兄、ちょっと来て」

我が妹、カカからの誘い。来ました来ました。

別に楽しみにしていたわけじゃない。毎年のことだし。

……本当に本当だぞ？

誰にしているのかわからない言い訳を胸中で呟きつつ、カカについていく。

するとたどりついたのは台所。

そして並んでいるのは――

「……カカ。これって」

「材料チョコと調理器具一式」

「……どうしろと？」

「作って」

「……なんで」

「トメ兄のほうがこういうの得意だから」

なんという妹でしょう。自分で食うものは自分で作れとおっしゃりますか。

普通、こういうのは女の子が自分で作るもんじゃないんですか？

僕は至極まっとうな疑問を浮かべつつ……言われるがままに作ってしまった。

そこの君、おもいっきりツッコんでくれて結構だ。

しかし可愛い妹に「作って」とお願いされたのだし、料理関係は嫌いじゃないんだから仕方ないじゃないか。

ちなみに「お願い」じゃなくて「命令」じゃないだろうか？　とかいう疑問は受け付けない。あと、ちらりと弱みを盾にされたりなんかしてないぞ。

……ぜ、絶対違うんだからな。

「結構良い感じにできたな」

気合を入れて作ってしまった小さなチョコケーキを前にして、僕は満足げに一息ついた。

しかし横で眺めていたカカはそれ以上に満足そうに頷いて、こんなことを言った。

「ありがと、トメ兄。これならサエちゃんも喜ぶよ」

……はい？

いま、なんとおっしゃりやがりました？

「いや、女の子にチョコくれる子もいるんだね。さっき学校でもらってびっくりしちゃった」

「……えっと」

「お返ししようかと思ったんだけど、やっぱ手作りには手作りで返したいじゃない？　トメ兄が料理得意で助かったよ」

「……あの」

「じゃ、これ、もらってくねー」

「……ぼ、僕へのチョコは？」

カカはきょとんとして、いけしゃあしゃあとこんなことを言いくさった。

「トメ兄、知らないの？　今日はチョコを食べる日じゃなくて、チ

ョコをあげる日なんだよ」

「……えっと……つまり？」

「いま、材料チョコあげたでしょ。だから今年も無事カウント済み。よかったね」

そう言って、すたこらさっさとサエちゃんの家に向かって去っていくカカ。

「うおい……なにその屁理屈」

それを呆然と見送っていると、

「やっほぃ！　弟よ。待ちかねたろう！　我がチョコを受け取るがいい！」

馬鹿でかい声を響かせて姉がやってきた……いつもなら鬱陶しいことこの上ないが、妹に心をズタズタに傷つけられた今となっては、その迷惑な存在すら歓迎してしまえる心境だった。

その喜びを表情に出さないように気をつけながら、僕は姉からチョコが入っているらしき箱を受け取った。

そして早速開けてみる。

「あのさ……これ、十六個入りのチョコの箱だよな」

「そだよん」

「一個しかないんだけど、残りは？」

「食べた」

「ぅおい！」

「なによ、あげたんだからそれでいいじゃん。んじゃさらば」

ああ、なんというか。

姉妹そろってなんちゅー奴らなんだろう……

バレンタインに特別なイベントなんてありはしないと思っていた。

でも違った。イベントは確かにあった。

まさか嬉しくないイベントがこんなにあるなんて思わなかったけど……がっくし。

「あの、こんにちわー」

と、思ったら。なんとご近所のサカイさんが訪れたではありませんかっ。

ああ、神は我を見放さなかった！！

「こんにちわ、サカイさんっ」

「実はこのチョコレートなんですけどー」

「はいっ」

「さっきカツコさんにいただいたお礼なので、渡しておいてもらえますか？」

「……はい？」

ああ。

神は僕を見放した。

「あと、それとは別にこのチョコを――」

……あああ、やはり神はっ。

「カカちゃんに」

神は僕に恨みでもあるのかっ！！

あからさまに肩を落とした僕があまりにもみすぼらしかったのか。サカイさんはおろおろし始めて……ちょっと悪いなと思った僕はフォローしようと口を開き、

「あ、あの。もしかしてチョコ、ほしかったですかー？」

とどめを刺された。ぐは。

そんなこと聞かれて、男としてなんて答えればいいのだ……

「トメさんは糖尿病だからチョコを見るのもイヤだって、昨日カカ

ちゃんが言ってたから、てっきりー」

元凶は結局またしてもあの妹かあああ！！！

胸中で叫びながら、僕はとりあえずサカイさんがカカに用意したチョコを妹の目の前で食べてやることを誓った。

## カカの天下55「家族会議、そのに」

トメです。

「じゃ、次は食糧事情について話し合いましょう」

でもコレを言ったのは僕ではありませんのであしからず。

姉は何を理由に偉そうにしているのかはわからないが、いつもどおりにふんぞり返っている。

「えっへん」

うざい。

そんな姉を妹のカカとぼんやりと見ながら、僕はため息をついた。

姉曰く家族会議、第二回目の始まりである。一回目はなんの結果も残さない雑談となってしまったため、もう一度開かれたのだ。

「とりあえず……そうだね。最近、野良犬少なくなったよね」

「はい、待った。なんでそこで野良犬が出てくる。食料の話だろう」

「ええ、そうよ？」

何を当然のことを、と姉が首をかしげる。

ここで思い出した。先日の会話でカカが「姉が野良犬を食べる」

みたいなことを言っていた気がする。

「……おい、まさか野良犬は食べものとか思ってないだろうな」

「思ってるわよ」

「なんでやねん」

思わずストレートにツッコミしてしまった。

「なにさ、当たり前じゃない。野良犬なんて放っておいたら害にしかならないんだから」

そこは同意する。

「だから食べちゃったほうがいいでしょう」

そこは断固として否定する!!

「前も聞こうと思ってたんだけど、野良犬っておいしいの?」

「犬、おいしいよ」

「うそつけや!!」

「うそじゃないよ。ビールに合う珍味だよ」

「そりゃ珍味かもしれないけどさ」

なんせ野良犬を食べる人間なんて珍しいったらありゃしない。あ、

これだと珍味じゃなくて珍人か。

「弟君はうるさいなぁ。じゃさ、カカちゃん。昨日あげた干し肉おいしかった？」

「ん、そこそこ」

「そういうことだよ」

「食わせたんかい！？」

うちの妹になんてことを！！

「あれ野良犬だったんだー」

「あの、妹さんや、得体の知れないもの食べさせられたんだから、もっとこう、リアクションないんすか」

「え、だっておいしかったし、野良犬」

「あ、ごめん。あれ野良犬じゃないの。見つかんなくてさ」

「なんだ……冗談か」

「だからサカイちゃんとこの飼い犬を」

「まてやコラ！！」

そのとき、唐突にうちのドアが開いた。噂をすればサカイさんだ。

「あの、すいません……うちの犬、見ませんでしたかー」

「え！？　まじで、いや、うあああ」

なんということだ……

まさか「そこの姉と妹の腹の中です」なんて白状するわけにもいかないし……それにあの種の犬って結構高かったんじゃなかったっけ……ああ弁償するにはどうすれば。

こんなとき、童話のなかのように腹をかっさばいたら犬がそのまま出てくればいいのに。ああそうだ、そうしよう。とりあえず姉の腹をかっさばこう。

「トメ兄。なんで包丁持ってハァハァしてんの」

「……」

「あ、あのさ弟、ごめん、ちょっとした冗談。サカイちゃんにも協力してもらって驚かそうと思ってさ」

聞こえない。

なんか腹をかっさばく理由が増えた気がするけど気にしない。

なんかね……疲れたの。

だから――

「トメ兄……」

目の前にカカが立ち塞がる。

「ふぁいと！！」

かと思いきや「どーぞご自由に」と道を開けてくれた。妹よ、ナイス開始合図。

さて……やったるか。

珍しく狼狽する姉に向かってひとっとび。

で、今回も結局会議じゃなくなりましたとさ。

姉かい？

死ななかったよ。

しぶといねぇ。

## カカの天下５６「続々、がんばれタケダ」

「くくく……今日こそは彼女を振り向かせてみせる。今日は何の日だ？　２月２４日。そう、頭文字であいうえお作文などしてみれば２（福）２（福）４（しろ）という、『福がいっぱいだから行動しろ』という日になるわけだ！」

そう一人で息巻いている俺の名はタケダ。そう、見た目は子供、頭脳は大人（になりたいと思っている）な小学三年生だ！

「相変わらずわけわかんないこと言ってるねー、タケダ君」

のほほーんとそう言ってきたのはクラスメイトのサエ君だ。俺の意中の人であるカカ君ともっとも仲がいい女子である。先日も相談に乗ってくれたりと、とても俺によくしてくれる……はっ！？

「なんだかんだで俺にいつも付き合ってくれているのは……まさかサエ君、俺のことを！？」

「うん、すんごく変でへんだと思ってるー」

「かみ合ってない上に三回もショック！　もしかしたら俺のことを好きだったりなんかしちゃったりなんかするかと思ったり思わなかったりしたりしなかったり！！」

「そんな人いるわけないと思う」

「のほほんとキッツ！！！」

身をのけぞらせている俺をおもしろそうに見てくるサエ君は、この間までいじめられていたなんて想像できないくらいに逞しくなった。多分カカ君の影響だ。

「でも暇だし、話には付き合ったげるよー」

「ならば例によって相談なんだが……カカ君に振り向いてもらうためにはどうすればいいと思う？」

「女の子にはー、やっぱりプレゼントだよー」

ここにトメさんがいたとしたら「この年で貢がせるようなその意見……女ってこえぇ」と言うところだろうが、幸いにも彼はいない。

「なにか彼女の好きそうなものを送ればいいのだねっ」

「そーそー」

「カカ君はなにが好きなんだろう？」

「カカちゃんね、こないだ野良犬がおいしかったーって言ってたよー」

……え、えーっと。

「な、なかなかワイルドなところもあるのだねカカ君。き、気にいったぞ。でもそれはちょっと……」

「あとねー、カカちゃんちには微妙な高級品がいっぱいあるみたいー」

「ふむ……」

「カカ君！」

「……？　気のせいか」

「おもっきし僕の顔をチラ見しといてそんなつれないことを言わないでほしい！」

「……なに。うざい」

ぐぐぐ、さすが百発百中の痛恨の一撃が大得意なカカ君……抉るように泣けるようにきつい。しかし今日こそやると決めたのだ！

「カカ君、これは俺の親愛の情を示すプレゼントだ！　高級――」

「間に合ってます」

「高級なんとかはうちにいっぱいあるから、と言って見てもくれなかったぞ！」

「そういえば昨日、お姉さんが包丁を振り回したときにバッグに穴が空いたって言ってた」

「……すごい、家庭なのだな……まぁいい。とにかく、バッグだな

！？」

「あ、私選んであげるよー」

「カカ君！　聞くところによるとバッグを失くしたようだね！」

「その話を思い出させるな！」

「ぐはぁ！」

「さ、サエ君……」

「女の子にはやっぱ花でしょ」

「カカ君！　この花を君に」

「キモイ」

燃えた……燃え尽きた……

「今日こそは……やれると思ったのに」

「あいうえお作文で2（不幸）2（不幸）4（死んだ）って感じだねー」

「ううううう……ほんと、逞しくなったなぁ、サエ君……もういいよ、今日は帰るよ……」

「そのプレゼント、どうするの？」

「……そうだな。では、今日一日付き合ってくれた君へ、感謝をこめて贈ろう！」

「わ、ほんと？　ありがとー！」

その後。

「ねえねえ、カカちゃん」

「何？　サエちゃん」

「はい、これ」

「おお、高級わさびセット？　この高級シリーズは初めてだなー」

「あとね、バッグがダメになったって言ってたから、はい。私が選んだの」

間違ってはいない。

「わ、可愛い！」

「あとこれ、私の友情の証」

「綺麗な花……！　こ、こんなにもらっていいのかな？　なんかどっかで見たような気がするものばっかだけど」

「気のせいだよー」

どうせタケダのプレゼントなんか記憶の片隅にも残っていないでしょーという予想が当たり、サエは嬉しそうに微笑んだ。

「ありがとう……ほんと、ありがとう！！」

「ううん、いつもお世話になってるお礼だよー」

「ありがとう……サエちゃん、大好き！」

ここにトメがいたとしたら「サエちゃん……恐ろしい子……！」と劇画風に恐れおののくところだろうけど、幸いにも彼はその場にはいなかった。

## カカの天下57「不機嫌の理由は？」

こんにちは、トメです。

突然ですが、困っています。

なにやら小生意気なことでご近所で有名な僕の妹カカが、小学校から帰ってきてからずっと不機嫌なのです。

今もこたつに入ってごろごろしながらムスーっとした顔でテレビを見ています。いや、無愛想なのは元からだけどさ。

「あのさ、カカ」

「なにー？」

「何かあったのか？」

「べつにー」

でた、最強の万能の言葉、「別に」だ。

何も話す気ありませんと、この上なくシンプルに伝えることができる攻撃呪文だ。ＭＰという精神力は使わないが、くらうと精神的ダメージは負う。ゲームの話がわからない人がいたらごめんな？

「え、えーと、カカ？　晩御飯なにがいい」

「なんでもー」

むぅ……重症だ……

「カカ、お菓子食べるか？」

「いらないー」

「カカの好きなエクレアだぞ？」

「いらなーい」

「みかんは？」

「いらないよ」

「バナナは？」

「いらない」

「僕は？」

「いらないってば」

「……」

ショックだ。

端から見れば自爆以外のなにものでもないけどショックだ。

「……ん？　あ、やっぱいる」

「我が妹よ！　おまえはやっぱり可愛いな！！」

「バナナ食べたい気分だった」

「可愛くねぇ！！」

ツッコミつつもカカがちゃんと反応してくれて嬉しかったりする僕だった。

「バナナ栄養たっぷりだもんね。食べて元気だそ」

そう言いながらもしゃもしゃとバナナを頬張るカカは、本当に元気が無いようだった。

「なぁカカ。マジな話、なんかあったんなら相談しろよ」

「んー……」

「僕はおまえの家族なんだからな」

「くさい」

「わかってるわ！　わかってるけど、たまにはこんなことを言ってみようと思った僕の出来心をちゃんと見てくれ！」

「見たよ、恥ずかしい」

「恥ずかしいとか言うな！」

「……や、だって。私の悩みのほうが恥ずかしいから」

そう言って恥ずかしそうに俯くカカ。

「恥ずかしいってなぁ。生まれたときからずっと一緒に暮らしてきて、今更恥ずかしいもなにもないだろうに。言え言え」

「実はね……」

「おうおう」

「今日、トイレの大きい方がうまく出なかったの」

「んあ？」

「こういう日って……憂鬱だよね」

「そ、そうか？」

「うん……なんかその憂鬱から始まって、いろんな昔のこと思い出しちゃって……」

そう言って遠い目をする小学三年生。

大便から始まるいろいろな歴史があるのか、この妹は。

僕も試しに遠い目をして、そんな歴史があったかどうかを思い出してみた。

……ああ。

……あああ。

いろいろあるよね……うん……便意って突然だしね……子供のころは特に。

「はぁ……」

「トメ兄も憂鬱？」

「うん、いろいろあったよな」

「そっか。じゃ一緒に便所行って語ろうか」

「語れねーよ」

## カカの天下５８「カカＶＳ姉娘」

「カカー」

「ん」

部屋でマジメに宿題をしていた、しがない小学生な私……カカは、トメ兄に呼ばれて居間へと移動しました。

するとそこには、不可思議な物体がいました。

ナンダコレ。

「トメ兄……なんか変な生物が見えるんだけど」

「だぁー」

「そう言うなって……なんか姉の友達のとこが都合悪くなったらしくてな、しばらくここに置いとけってさ」

そこに居座っていたのはいつぞやの姉の隠し子。いや、隠してはいないかもしれないけど……

本当にあの姉が産んだ子なのか、どっかで拾ってきた子なのか、友人に預かった子なのか、怪しい封印が解けて開放された悪魔の子なのか、さっぱりわからないのである。つまり理由が隠れているのだ。

「でさ。僕はちょっと用事あって出かけるから、しばらく留守番よ

ろしくな」

「留守番？　これと？　二人っきりで！？」

「うん。そうそ」

「むう……そういやこの子、なんて名前だっけ」

「あ、聞いてないな」

「じゃ、とりあえずタマと名付けよう」

「拾ってきたネコみたいなノリだな。でもまぁ、似たようなもんだからそれでいいか」

んじゃなーと軽く手を振って、トメ兄は出て行った。

さて……戦闘開始である。

ソファーに座ってふんぞり返っているこの物体をどう扱うべきか。放ったらかしにするという手もあるけど、ヘタなことをしたら姉に何をされるかわかったもんじゃないし……

「にゃー、にゃー、カカー」

「お、喋れるんだ。でも呼び捨て、って子供にそんなこと言っても仕方ないか」

姉娘はこちらをビシッと指差してこう言った。

「まるい」

ビキリ、とこめかみ辺りで音がした。

「ねぇねぇ、タマちゃん。それってどこが？　なにが？　どういう意味かなぁ。もっと詳しく教えてくれないかぁ」

「かいぞくせんー」

「聞いてないし！」

「つぶれたー」

「つぶれた？　海賊船が？」

ビシッとこちらを指さして、

「つぶしたー」

「私がか！」

「いい子いい子」

「いいの！？　あ、いいのか、海賊退治だから」

ビシッとこちらを指さし、

「ぬりかべー」

「誰がだ！！？」

お、落ち着け私……なんかいつものペースと違う。

私はこんなツッコミばっかのキャラじゃない。違う違う……オーケー、頭が冷えたぜベイビー。おれっちの心は外は冷たく内は熱くだ。ちょいと熱が外へ漏れちまったが、そんなことじゃ姉には一生勝てないぜ……

しゃがみこんで深呼吸した私は顔を上げた。

するとタマは持参してきたらしい絵本を読んでいた。

「お、何読んでるのかなー？」

「しらゆきひめはー、おおかみになめられてしまいましたー」

舐められた？

しかも白雪姫に狼でないし！

しかもしかも読んでる絵本のタイトル金太郎だし！！

「めでたし、めでたしー」

「めでたくないわ！！」

もう、何よこの子……頭を抱えていると、タマがちょこちょこと歩いてきた。

「カカおねーちゃん」

……おねー、ちゃん？

あ、ちょっと、いいかも――

そう思った途端にビシっと指さされ、

「まるい」

……プッツン。

（ちょっとお見苦しいので自主規制）

数時間後。

帰ってきたトメ兄に、疲れきった声で私は言った。

「トメ兄……私、育児向いてない」

「は？　や、小学三年生のうちからそんなん気にせんでも……」

まがりなりにも相手は子供……キレても手荒な真似はしてないよ？　すごくしたいけど。

姉娘タマは、もうしばらくうちにいる……はぁ。

## カカの天下59「カカVS姉娘2」

こんにちは、カカです。

今日は日曜日。普通なら昼までごろごろしていたいところですが――え、小学生っぽくない？　ほっといて――期間限定で我が家に居座っている不可思議物体のダイブ&ジャンプ攻撃をお腹に受けて、起きてしまいました。

なんて横暴でしょう。日頃の疲れが癒えるかどうかは日曜日にどれだけごろごろできるかにかかっているのに……え、マジで小学生っぽくない？　マジでほっといて。

そして、私の天敵であるその物体、姉娘タマはというと……

「とめとめー」

「おー、トメだぞー」

トメ兄と遊んでます。彼はじゃれついてくる姉娘を雑誌を読みながら適当にあしらっているのですが……

「じじー」

「そだなー、じじーみたいな名前だなー」

「くさいー」

「じじくさいかー、よく言われるー」

なんと、私が言ったら間違いなく怒るようなことも、姉娘が言うと「どうせ子供の言うこと」と軽くあしらっているのです。

そうか……わかった。子供だもんね。気にしなければすむことだよね。

昨日の私は自分らしくなかった……そうだよね、ツッコミなんて私のキャラじゃないもの。

「おしりー」

「おしりがどうしたー」

「ばななー」

「おしりにバナナはきつくないかー」

「きゅうりー」

「それなら入るかもなー」

なんか異次元な会話してよくわかんない。けどなんとなく教育上にも作品的にもよくないこと言ってる気がする。

「さて……そろそろ出かけるかな。カカ、留守番よろしく」

きた。

昨日の雪辱戦だ。

「ふぁいと！」

「……なに言ってるんだ、おまえ」

「いいからさっさとどっか行って」

「なんだよ……冷たくすんなよぅ」

みっともなくいじける兄を追い出して、私は改めてタマと対峙した。

相手は子供、相手は子供。平常心平常心。あわてないあわてない。一休み一休み。

「さ、タマちゃん、なにで遊ぼうか？」

「カカおにーちゃん」

「誰がおにーちゃんだ！？　あと私で遊ぶってあんた何様！？」

……ぁ。

がっくし。

ダメだ……ダメだよカカ。こいつはなんか手強くてさすがお姉の子供（仮）って感じだけど負けるな……そうよ、子供子供。キニシナイキニシナイ。

「あ、あのねタマちゃん。私はおねーちゃんなの、おねーちゃん。

おねーちゃんって言ってみて？」

「ばばー」

「人の話をき……い、いや、あのね」

思わず眉がぴくぴく動いてしまうのはしょうがないことだと私は思う。

「ま、まったくもー、しつけがなってないんだから……」

「しつけー？」

「そう、しつけ」

姉娘はビシッと私を指差した。

「しつけーっちゅーの！」

「し、し、しつこいとか言った？」

しかもダジャレ？　なんて高度な……

「ちゅーの、ちゅーの」

ん、ああ。「しつけ」って私が言ったのを繰り返して、「ちゅーの」って適当につけただけか……そだよね、まさかこんなお子様がそんなことを……

「カカおじーちゃん、しつこい」

ああああああもう！！　何にツッコめばいいんだあああああ！！

「ただいま。カカ、タマ、いい子にしてたかー？」

「真っ白に燃え尽きたぜ……」

「か、カカ？　なんだどうした。お前、留守番する度にやつれてないか！？」

「これが敗者の風格だよトメ兄……」

ソファーでぐだーっとなりながら、近づいてくるタマをあしらうトメ兄を見る。

「かにみそー」

「おお、かにみそはうまいな。でも買ってないぞ。日本酒に合うんだよねーあれ」

「ほんしゅ？　しゅ、しゅーまい」

「ん、しりとりか？　じゃあ、い、い……」

「いちばん！」

「いちばんかぁ、でも僕は八番のほうが好きだな。八番ラーメン好

きだから」

……なんだろう、あのかみ合ってないくせに進んで行く会話……

「トメ兄」

「なんだ、カカ」

「トメ兄って大人なんだね……ちょっと見直したよ」

「は？」

「子供と会話もできないなんて……私、いつも偉そうなことを言ってるわりに、まだ子供だったんだよね……」

「そりゃそうだろ、小学生」

「はぁ……」

何か悟ってため息ついてもまだ姉娘はうちにいます。

## カカの天下６０「カカＶＳ姉娘ラスト」

「えー……おはようございます……カカです」

なんとなくアナウンサーっぽく言ってみました。しがない一般人の小学生、カカです。

二日前にうちにやってきた姉の娘（仮）によって私はノイラーゼ気味です。ノリラーゼだっけ？　ロリローゼ？　まぁいいや、よく意味わかんないし。なんか微妙にアブなそうな単語できた気もするけど気にしない。

さて、今日は普通に学校があるので姉娘タマと戦わなくて済む……んだけど。

「カカー、起きろー」

「頭悪い！」

「……は？」

「違った。頭悪いのはトメ兄だ。頭痛いの」

「頭痛いわりには、いい感じに切れ味ある毒吐くじゃないか」

「そうそう、毒にやられてるの」

「話が噛み合ってないぞ」

「いつものことじゃん」

多分ね。

「とにかく、具合悪いから休む」

「小憎らしいほど元気に見えるが」

「具合悪いの！」

「……そっか。まぁ、たまにはいいかサボるのも」

聞き分けのいい兄でよかった。

はい、本当は頭悪くないし痛くもないです。でも……このままやられたまま逃げるのはなんか癪なのです。

私は居間で朝食をとって……早々にその敵に対峙した。

「あれだろ、今日でタマちゃん帰るから遊んでやりたいんだろ」

あ、そんな勘違いしてサボりをおっけーしたんだ。やっぱ頭悪いなトメ兄。

……ん？

今日、帰る？

休んでよかった……じゃあこれが最終決戦じゃん！

私はさっさとトメ兄を仕事へ追い出して、タマを探した。

見かけないと思ったら……ソファーに埋まって眠っていた。

「タマー？」

呼びかけると薄らと目を開けた。さぁ、勝負！

「ぬ……」

「ぬ？」

「ぬげー」

脱げ？

「……ねこー」

ネコ？　ネコに何を脱げと言ってるんだろう。

「……かわー」

皮を！？　どんな夢見てるのこの子！？

っと、早とちり早とちり。多分寝ぼけて適当な単語言ってるだけだ、うん。

「やめて……カカねー」

「ちょっと、もしかして私がネコの皮を脱がしてる夢見てる？」

やめてよ、そんなトラウマになりそうな悪夢。

「ねぇ、ちょっとタマ。起きてよ。お話しようよ」

「さばにこみー」

「さばなんか煮込んでないでさー」

「カカにこみー」

「私も煮込むなー。ほら、起きて」

「とめやきー」

「なんでトメは焼くのか知らないけどさー、ねぇねぇ」

このあとしばらく頑張ってもタマは起きなくて。やがてお姉がやってきた。

勝負してないのに負けた感じにがっくりしながら、お姉にタマを返すことになりましたとさ。ちぇ。

「なに、カカちゃん。最後にこの子と話せなかったのがそんなに寂しいの？」

「ちがうっ！！」

ああ違うとも。違うったら違う。

「目、潤んでない？」

「姉の目は節穴で通風孔だから当てにならないんだよ」

「どこに向かって説明してんの？」

「カメラ……じゃなくて。まぁ、いいじゃない。でさ、この子の名前、なんていうの？」

「名前？」

「うん、聞いてなかったから」

「そういや付けてなかったな……」

「は？」

「ん、拾ってきた猫みたいなノリで、タマちゃんでいいんじゃない？」

うわ、私と全くおんなじ発想。

「その子、ほんとお姉のなんなの？」

「それは秘密」

謎だ……

あと、なんか血のつながりを再確認してしまった一日でした。

なんにせよ、これで一人の悪魔が出て行ってせいせいしましたとさ、勝てなかったのは残念だけどめでたしめでたし。

……や、別に寂しくないよ？　ほんとに。

## カカの天下６１「カカＶＳ姉娘　アフター」

こんにちトメです。

最近、なんか妹のカカの元気がありません。

こないだ姉の娘が帰って、どうやら寂しくなったようです。口には意地でも出さないでしょうけど。

その証拠に、

「カカ、この卵焼きうまいな」

「かいぞくせん……」

「カカ、串カツもう一本食えよ」

「ぬりかべー」

「……カカ。ご飯おかわりいるか？」

「しつけー」

……ほら、なんかあの姉娘と似たようなことを言って、終いにはしつこいとか言われるんだよ。会話が成立しないのよ。

さーて、どうやって元気にしたもんか……

「なぁ、カカ。タマちゃんだけど」

ピクリ、とカカの耳が動く。

ようやく聞いてくれる姿勢になってくれた。

「そんなにあの子のこと気に入ったんなら、姉に言って連れてくるけど」

「いらない」

「や、でも話したいんじゃないのか？」

「話したくない」

……強情な。

「勝ちたいだけ」

……難しいことを。

「何をどうしたらおまえが勝ったことになるんだ？」

「私が勝ったと思ったら」

「……そもそも何の勝負してるんだ」

「トメ兄」

カカはなにやらキツイ視線で僕を睨んだ。

「何に、とかそういうことじゃないんだよ。私は負けたの。だから勝つの。大事なのはそこだけ」

「それはつまり、単にムカついてるだけじゃないのか」

「そうとも言う」

どこかの幼稚園児みたいな返しだ。

「まったく、相手は子供じゃないか」

「私も子供だよ」

「おまえのほうが年上だろ」

「子供は子供でしょ」

「ああもう……普段ちっとも子供っぽくないのにこういうときだけ」

「うるさいな、何歳だろうが大人な部分も子供の部分もあるのが人ってもんでしょ」

「ええい、いきなり子供っぽくないセリフを」

どうしたらいつもの調子に戻るかなぁ？

要は、あの姉娘に勝てばいいんだよな。

翌日、僕は姉に頼みこんで、姉娘タマにある言葉を覚えさせてからカカに会わせた。

姉と共にいきなり家に訪問した姉娘の姿を見て、何も知らされていなかったカカは固まった。

さぁ行け姉娘タマ！

「しょうぶー」

勝負開始、そしてタマちゃんがあの言葉を――

「このチビスケ！」

「まけたー」

「勝った！！」

あれ、終わり！？

不自然でもなんでもタマちゃんに「まけた」と言わせればいいと思って覚えさせたんだけど……いまの会話、自然な流れだったよな？

「カカ、もしかしてその言葉考えるためだけにしばらくボーッとしてたのか？」

「うん！　どっちがチビか、これなら絶対勝てるでしょ？」

そりゃ、そうだけど……平和だなぁ、なんか色々と。

子供の真剣に考えることはわからないな、と頭をかきながら、なんだかんだで再会を喜んでタマの相手をしているカカを眺める。

「チービ、チービ」

「まけたー」

んー、特に小細工しなくてもよかったかもな。仲良きことは素晴らしきかな。

「ふふふ……今日はいさぎいいじゃない？」

「って、とめが言えって言った」

「トメ兄？」

……あら？

やべ。

## カカの天下６２「二股禁止！！」

「トメ兄、二股ってダメだよね」

「は？」

いきなり部屋にきたかと思えば、カカは突然そんなことを言いました。

「二股……うん、最低だよね。なんでこんなことになったんだろ」

「二股かけてるのか。誰が？」

まさかカカが？　そんな素振りはまったく……それどころか小学校じゃケンカ最凶の名をとどろかせ、男子から恐れられているというカカが、まさか！？

「んとね、フランソワーズがね」

誰だそれ。

「八兵衛とビシュソワースの二人と付き合ってるの」

なにその古めの日本人とおとぎ話な外国人の素敵なコラボレーション。

「ドラマか何かの話か」

「ううん、すぐ近所の公園でもめてたのを聞いたの」

「近所で……？」

こんな都会でもない街でそんなドラマが繰り広げられていたなんて……ちょっと見たいぞ。

「もめてたってどういう風に。『俺とそいつ、どっちを取るんだ！？』みたいな感じか？」

「うん、多分」

「多分って、盗み聞きしたんじゃないのか？」

「うん、したよ。じゃあ、そのときの回想シーン、いってみよ」

「シーンって、なんだ？」

「そういう質問はしたらだめなんだよ」

「そういうこと言うのもダメなんじゃないのか？」

はいはい、気にしないで回想いってみよう。

「わん！　わんわわわんわんわんっ」

「ギャワワン！　ワワンッワッワッワッワン！！」

「グルグルグルルルルッルルルルル！！」

「ガオーン！　ズガオーン！！」

「ビビデバビデブー！！」

「シュワルツネッガァァァァァァァ！！」

「おお、これはまた中々の修羅場！！　って犬やんっ」

「人の名前なわけないじゃない」

「言われてみるともっともだがなんかムカつくな」

「でもまぁ、そんなわけで。ひどい話だよね？」

「犬の言葉なんかさっぱりわからんが、とりあえず鳴き声にひどいのが混じっていたのはわかる」

「だよねっ。やっぱ恋人は一人じゃないと」

「そういうカカは恋人にしたいやつとかいるのか？」

「いるよ」

「誰だ！？」

「田中さん」

なんかショックだカカも大人になってきたんだなぁなんて成長を噛み締めたり寂しかったり――とかいろんな感情がわきあがったが、

「それで、その田中さんというのはどこの誰なんだ？」

「さぁ？」

「さぁ、って好きな人なんだろ」

「うん。好きな人」

「じゃあさぁってことはないだろう」

「――がいないから作った」

がく。

「人を勝手に作るな！　神様かおまえは」

「えっへん」

「偉くねーよ偉そうにも見えねーよ。田中さんっていうのはどっから出てきた？」

「よくある苗字じゃん。あと私お米好きだし」

……お父さん、お母さん。

あなた達の娘は、やっぱりなんか変です。

「ま、それは冗談で本当はいたりするけど」

「……ん？　なんか言ったか」

「なんにも」

## カカの天下63「しんどく格好よく」

「はぁ……」

「はぁ……」

いきなりすいません、トメです。

僕は会社から、妹のカカは学校から帰ってきて、二人で居間に座り……共に最初についた一息は、深い深いため息でした。

「……カカ、なんかあったのか？」

「トメ兄こそ」

僕らは不機嫌そうに、しかし睨み合うでもなく、ボーッと中空に視線をやりながら言葉をかわす。

「僕は……あれだよ。仕事で結構大きい失敗してさ、怒られまくったところ」

「私は……ちょっと、サエちゃんとケンカしたとこ」

僕とカカはしばらく沈黙して、再びため息をついた。

「大体さ、あんな怒ることないじゃん。人間、たまには失敗だってするさ。ちょっと見落としがあっただけでさ」

「そりゃさ、約束破ったのはこっちだよ。でもこっちにも用事って

もんがあるんだからさ、そんな何でもかんでもうまくできないっての」

「確かに僕にも不注意なところはあったさ。でも上司だからってあんな勝手なこと言う権利あるわけ？」

「確かに私が遅刻したのが悪いよ。でもちゃんと遅れるって連絡入れたしさ、それ以上に何ができたわけ？」

「おまえはそんなこともできないのか、ってさ。そんな怒るほどあんたは失敗なしの人生歩んできたのかっての！」

「遅刻は遅刻、ってさ。じゃあんたは待ち合わせに遅れたことないの！？」

「僕だって頑張ってるんだよ」

「私だって間に合おうと頑張ったんだよ」

ひとしきり愚痴りあって……ふと僕らは目を合わせた。

「ねぇ、トメ兄。なんで私達、こんなこと言ってるんだろ」

「んー……多分さ、自分の失敗が許せなくてさ、格好悪いからじゃないか？」

そう、わかっている。

自分が悪いんだってことも。相手に難癖つけて自分を慰めようとしてるのも。

でも――

「でも、さ」

「うん？」

「こんなこと言ってる私達って、格好いい？」

「……それは」

「私は、トメ兄、格好悪いと思う」

「僕も、カカのこと格好悪いと思う」

「……じゃあ、どうすれば格好いい？」

「……そう、だな」

話は極めて簡単だ。

自分の失敗が許せないなら、認めることができないなら、それを格好悪いというならば――逆にすればいいだけの話。

「自分を許せばいい。失敗を認めればいい……のかな」

「それって……格好いい、かな？」

「格好悪いよ」

素直に過ちを認めて、謝る。

他人から見れば誰が悪いのか一目瞭然な状況は、よくあること。

どれだけでも馬鹿にできるような失敗や謝罪も、よくあること。

他人のことなら好きなだけ言えても、自分のこととなると認めるのが怖くなるのが過ち、失敗というものだ。

でも、これだけは言える。

「格好悪いけど……失敗を認めないよりは、格好いいんじゃないかな」

「……うん、そうかも」

「認めて、素直に謝るしかない、よな」

「うん……トメ兄みたいに格好悪いままじゃ、やだし」

「カカも結構、格好悪かったぞ」

「それは、やだね」

「うん、やだな」

失敗を認めて、改善して、進んでいく。

誰でも思いつきそうな、陳腐な言葉。

それでも、実行するのは――

「しんどいな」

「しんどいね」

僕とカカはため息をつきながら、思う。

とにかく頑張ろう、と。そんな簡単でしんどいことを。

じゃないと僕らは、いつまで経っても前に進めないのだから。

## カカの天下64「女って……」

「こんばんはー」

「あらー、トメ君にカカちゃんこんばんはー」

夕飯時、僕と妹のカカは近所のサカイさんに「カレー作りすぎたんですよー」とお誘いを受け、サカイさんのでっかい家にやってきました。

「どうぞどうぞー」

相変わらずの間延びした声で案内され、僕らは庭に用意されたテーブルを囲んだ。どうせなら外で食べようというサカイさんの申し出だ。

本音を言えばかなりの大きさをほこるサカイさんの家で食べてみたかったのだが、お呼ばれした身としては贅沢は言えない。こんな広い庭で食べることができるだけでも充分に贅沢だしね。

「ささ、配りますよー」

あらかじめ僕らが来る時間を予想して準備していたのだろう。ほとんど待つこともなく僕らの前にはカレー入りの皿が並べられた。

ただ、並べられたのはカレーライスではなく、カレーだったという点が重要だ。その隣の皿には香ばしい匂いをかぐわせるナンの皿。

「ご飯で食べるよりこっちのほうが好きなんですよー」

「へぇ、この間は姉とカレーライスについてあんなに論議してたのに。ちょっと意外です」

「カレーライスはカレーライス、カレーはカレーですよー」

わかるようなわからないような答えをくれるサカイさん。

「最近はカツコさんとばかり遊んでましたからねー。たまにはお二方ともお話したかったんですよー。というわけで召し上がれー」

「いただきまーす」

僕とカカは二人して手を合わせ、早速ナンをカレーにつけて頬張った。

ちょっと辛めのカレーと甘みのあるナンがちょうどよくマッチして、すごくおいしい。

「うまうまっ」

「うまうまだな」

僕とカカは二人して夢中になって食べた。

サカイさんは僕らの食べっぷりを楽しそうに眺めながら、自分のナンにも手を伸ばす。

しばし食べながら雑談を続け……やがてこんな話題が上った。

「そういえばさ、サカイさんて最近愚痴らないよね」

「ああ、そういえばそうだな。ここに引っ越してきたばかりのときは結構僕らの家に愚痴りにきてたのに」

というか僕に。

サカイさんの家の規模、そして年末にパーティをしたりするところからみて、かなりのお金持ちなのは間違いないが、そんなサカイさんの職業はなんとただのＯＬだったのだ。

しかし最近はめっきり会社の話を聞かない。なぜだろう、と軽く質問したのだが、その答えはかなり意外なものだった。

「えっとですねー、上司が気に食わなくてやめちゃいましてー、今は主婦ですー」

……はい？

「え、え？　辞めたの？　というかサカイさん、結婚してたの？」

「はいー」

「そのわりには旦那さん、見たことないね」

「それはですねー、亭主元気で留守がいい、ということでしてー」

「あ、それ知ってる。金ヅルはおとなしく金だけ寄越してればいいってことでしょ。金がないツルはただのツルだし」

あとでカカにはもうちょっと優しい言葉の勉強をさせてあげよう。

「そういうことですー。ツルッパゲになるまでお金よこしてなんぼです」

はっきり頷くサカイさん、姉の影響か、言うことがかなり容赦ないなぁ。あれ、元からこうだっけ。

「ちなみにですねー、娘もいるんですよー」

「へぇ、お子さんも？」

「でも見たことないよね」

「それはですねー、獅子は我が子を千尋の谷に突き落とす、ということでしてー」

どうなったんだ娘さん！？

「そんなわけで、私は一人でここに住んでいるのですー。これだけ広いとやっぱり寂しいので、またよろしくお願いしますねー」

「はぁ、それはもちろんこちらこそですけど……旦那さんやお子さんをここに呼ぶ、という選択肢は？」

「ありませんよー」

「……なぜです？」

「そういう誓約ですからー」

「誓約？　なんの！？」

「トメ兄、女にはいろいろあるんだよ」

「なぜおまえは訳知り顔で頷いてんだ」

「女だから」

そうか……女だったらわかるのか、なんかいろいろなことが。

女ってすごいなぁ。

「その誓約のおかげでこうして大きなお屋敷で無職で過ごせるわけですしー」

「帰ってこない亭主バンザイだね」

ほんとすごいなぁ。

「カレーおかわり食べますー？」

「うん、さっきの三倍の量でいいよ」

「じゃー私は五倍です！」

女ってすごいなぁ。

なりたくないなぁ。

怖いし。

「トメ兄、おかわりは？」

「や、なんかその女がどうとかいう話題でお腹いっぱいで」

「聞いたサカイさん？　トメ兄ってば女を食べ過ぎてお腹いっぱいなんだって」

「待てコラ。なんでそうなる」

「ナンだからそうなるんですよー」

「は？」

「あの……ナン」

あ、カレーにつけるナン？

「ナン、なんで、ナンでー」

えーと。

「おもしろくなかったですかぁー……」

「サカイさん落ち込ませた罰として処刑」

「ナンでさ！？」

「ナンで処刑ですかー、レベルの高いこと言いますね」

「やってみる」

「許可♪」

「やるな！！」

ほんとにほんとにこわいなぁ。

## カカの天下65「ついていい嘘、悪い嘘」

「あー、困った」

こんにちわ、トメです。

突然ですが困っています。

皆さんもご存知の通り、僕の妹のカカは端から見ればおもしろく、当事者にしては微妙に迷惑なことを多々するのですが……今回はちょっと、タチが悪いです。

「なにが困ったのさ」

「……あんたに言ってもなぁ」

久々にうちに居座ってお茶を飲んでる姉をジト目で見て、僕はもう何度ついたかわからないため息をつきました。

「ただいまー」

姉に相談しようか迷っているうちに、友達の家に行っていたカカが帰ってきた。

「おかえり、今日は早いな」

「おじゃま、しますー」

おっかなびっくりカカの後ろに隠れて入ってきたのは、カカの親

友、サエちゃんだ。

「お、サエちゃん。いらっしゃい」

「私の部屋で遊んでくるねー」

そう言ってたったかと居間に座っている僕らの横を駆けていく二人。

と、カカが思い出したかのように振り返って言った。

「トメ兄。昨日私のお風呂のぞいたみたいに、のぞかないでよ?」

ぴきり、と空気が凍った。

ものすごく冷たくて白い目が僕に集中、冷凍ビームを放射し、心臓の中まで凍えさせ……

「うそだよ」

カカの一言で空気が常温へと戻った。

「……カカ。嘘はやめろとあれほど」

「いいじゃん、すぐに嘘だって言ってるんだから」

「あのな」

「別に誤解されるわけじゃなし。さ、いこ。サエちゃん」

「……うん」

サエちゃんはさっきの僕のようにため息をついたあと、カカの後を追って部屋へと入っていった。

視線を戻すと、そこにはあんぐりと口を開けた姉。

「……なに、いまの」

「これが僕のため息の原因。なんでかわかんないけどさ、最近カカがやたらと嘘をつくのよ」

事の発端は二日前と最近だが、なにやら嘘をついて人をからかう楽しさを覚えたらしく、やたらと多用してくるのだ。

カカは基本的に人をからかうのが好きだし、生意気な面も多い。だが今までのそれは苦笑しながら許せるレベルの微笑ましいものだ。

今回のは違う。ところかまわず嘘をつくのはやり過ぎだ。

「嘘、か。そんなのつく子じゃなかったのに……」

よほどショックだったらしく、姉はいまだに呆然としている。常日頃、破天荒で能天気な姉にしては珍しいことだ。

「最初はなんでもない嘘だったんだ。冗談だよーで済ませられるくらいの。でも、さすがにエスカレートしてきて今みたいな嘘つくようになると……」

「……うん」

姉はすくっと立ち上がった。

「どうした？」

「……」

姉は思いつめた表情のまま、無言でカカの部屋へと歩いていった。

おお、なにやら姉っぽいことをしてくれるのだろうか……と僕はのぞくのも無粋と思い、居間でじっと待っていた。

だが一分もしないうちに。

姉は沈痛な面持ちでカカの部屋を出てきた。

どうやら、うまくいかなかったらしい。

そして夕方。サエちゃんも帰る時間だ。

僕もカカと一緒に、玄関まで見送りに出た。

「……あれ、そのサエちゃんは？」

「トイレ。でもなんか遅いね。大きいほうかも」

「下品」

「嘘だよー」

その嘘で親友の印象が悪くなるって、わかってないんだろうな。

「おまたせー」

「遅かったね」

「うん。ちょっとあってねー」

サエちゃんが来たから言わなかったが、やっぱり後できつく言っておかなきゃならないだろうな……少し憂鬱になる。でもとりあえず、ここはしっかり笑顔でサエちゃんを見送らないと。

「またねー、サエちゃん」

「これからも仲良くしてやってくれぃ」

「うん、おじゃましましたー」

にっこり笑ってお辞儀を一つ。そして道路へと歩みだしたとき――

「え」

その小さな身体が、跳ねた。

何も聞こえなかった。いや実際は車の急ブレーキの音とかドサッと地面になにかが落ちる音とかしてたんだろうけどそれが聞こえたらその否定したい事実を認めてしまいそうだったから何も耳に入らなかった入らなかったんだよだから嘘だよなおい。

「さ、え、ちゃん？」

僕と同じく固まっていたカカが、弾かれたように駆け寄った。

車に撥ねられた、サエちゃんに。

「サエちゃん……サエちゃん！」

カカはサエちゃんの身体を抱き起こした。でも力がまるで入っていないのか、サエちゃんの身体はぐったりとして、ぴくりとも動かない。

「サエちゃん、さ、えちゃ、さ、う、あぁぁ……」

目を閉じたまま動かないサエちゃん。

泣き叫ぶカカ。

これは、現実か？

救急車、よば、ないと。

震える手で、ポケットの携帯をのろのろと取り出す。

早く、しないと、いけないのに。

この光景を否定したくて。

信じたくなくて。

どうしても、手が、思うように動かない。

そして……

それは、正解だった。

サエちゃんの手が動いた。

自分に抱きついて泣いているカカを慰めるように、その頭をゆっくりと撫でた。

カカはハッとしてサエちゃんの顔を見る。

閉じていた瞼は開いていた。

泣きはらしたカカの顔を見て、優しげに微笑んだ。

「嘘、だよ」

「……え？」

「そう、嘘」

後ろから聞こえてきた声に振り返る。

サエちゃんを撥ねた——いや、撥ねるフリをした張本人の姉が、そこにいた。

「おい……姉、なんで」

「なんでこんなことしたのっ！！」

タチが悪すぎる悪戯に激昂したのは僕だけじゃなかった。

「なんで！　なんで、こんなことを……サエちゃ、サエちゃん、ほんとに、死んじゃったのかと――」

掴みかかるカカを、姉は冷たく見下ろして――不意に、逆にカカの胸ぐらを掴んだ。

「おや？　すぐ嘘って言えばいいんじゃなかったっけ？」

泣きながら怒りを顕にしていたカカの表情が怯んだ。

「いいか、よく聞きな。嘘をついて、すぐそれが嘘だよーって言えば確かに誤解はされないさ。でもね――それで相手が嫌な思いをするかどうかは別問題だろ？」

「……」

身をもって実感した直後のカカは返す言葉がない。

「わかったら、もう嘘はやめな。笑えるくらいのならいい。でも、笑えない嘘は何なのか、きちんと把握した上で使うんだ。いいね」

「……はい」

気落ちするカカを慰めるため、サエちゃんはもう一度家の中に戻った。ちょっと帰るのが遅くなるけど、たまにはいいだろう。これも教育の一環。学校にいるのと似たようなもんだ。

さて……

「言い聞かせるのはよくやった。でもやりすぎだろ」

「あたしもそうは思ったんだけどさ。これ、あのサエちゃんって子の案なんだよ」

「……うそ」

「嘘つくなって言った直後に嘘ついてどうするよ。さっき部屋いったときあの子にさ、帰るときにトイレ寄ってって言ったんだよ。んで、外から窓越しに相談したんだけど」

「なんちゅう相談の仕方するんだ」

「そしたらさ、あの子もカカのこと心配してたみたい。学校でも兆候あったみたいだし。それでさ」

「こんな小芝居やろうってことになったわけか。にしても一歩間違えば本当に事故だぞ」

「そこはまぁ、結果オーライで」

「あのなぁ」

「いいじゃん。あたしだってたまにはさ、姉らしく、いい格好した

かったんだよ」

「……そ、か」

色々問題はあるような気はするけど、確かに結果オーライ、か。

「そういや、姉。あんた車の免許もってたっけ」

「さーて帰るか」

「おい、それサカイさんちの車じゃ」

「ばいびー」

その翌日から。

カカはまったく嘘をつかなくなった。

## カカの天下６６「本当のおやじ狩り」

トメです。

「カカ、今日の夕食はすごいぞ」

相も変わらずサエちゃんの家に寄ってから帰ってきた妹カカに、僕は声をかけました。

「すごいって何。また怒髪天を突くみたいな卵焼きでもできたの？」

先週の夕食のイヤミだな。しかし今時の若者のくせに難しい言葉を知っているのは素直に感心……ちなみにどんな卵焼きだったかはご想像にお任せする。

「違う違う。珍しいものが手に入ったんだ」

「なに？」

「今日の夕食はなんと……オジサンだ！！」

ぴしり、とカカの動きが止まった。

間違えてパソコンの電源ボタンを押してしまったときのような停止っぷりだ。しかし十秒後、カカはちゃんと再起動した。

「……おじさん？」

「そうだ、珍しいだろ？」

「や、たしかに、そうだけど」

「僕も食べたことないんだー」

「私も……というか、食べていいものなの？」

「まぁ食べれるだろ」

「食べれないことも、ないだろうけど……そっか、食べるんだぁ」

「姉がどっかから持って来たんだよ」

「狩ったんだ……本当のおやじ狩りだ……その収穫だっ」

恐れおののくようにカカが言って後ずさる。

勘違いするのは予想してたからいいんだけど……これを機にカカが周囲にいるおじさんを食べようと襲いかかりでもしようものなら大騒動なので、そろそろ本当のことを言うことにする。

「カカ、オジサンっていっても魚だぞ？」

「……え？」

「オジサンって名前の魚がいるんだよ。水族館とかで見たことないか？」

自分の勘違いを理解したようで、カカはほっと胸を撫で下ろした。

「よかった……てっきりトシフミおじさんでも食べるのかと思った」

「なんでトシフミおじさん？」

「食べごろかと思って」

脳裏に今年で35歳になる推定体重90キロのトシフミおじさんが浮かんだ。や、肉付きはいいから確かに食べごろかもしれないけど果てしなくまずそうだ。美味しそうなおじさんなんてモンがいても怖いが。

「とにかく魚のオジサンだ」

「魚にも家族構成とかあったんだ」

「や、だから」

「じょーだんじょーだん。さっさと焼いてよ」

「焼くけどさ。偉そうに言いおって」

「私が焼いていいんならやるけど」

「……はいはい、やるよ」

このパターンで女の子にやらせると妙な失敗するのが定番だ。どんな面白い失敗をするのか、それはそれで見所かもしれないが……食べる当事者としては遠慮したい。

「あとね、もう一匹魚もらったんだ」

「なんて魚？」

「ばばあ」

カカは性懲りもなくうっかり電源ボタンを切ってしまったときのように停止した。すぐ再起動。

「それ、本当の名前？」

「おう。鳥取県でとれるらしい」

「なんでそんなものを持って来れるの、あの姉」

「さぁ？　とりあえず今日はこの魚二つでいこう。あ、そういやおじさんは刺身のほうがいいって言ってたな。ばばあは塩焼きでって」

「なんかすごく残酷なこと言ってる」

「うるさいな、魚なんだからいいだろう」

「じゃあカカっていう魚あったら、トメ兄どうやって食べる？」

「性格的にもしつこそうだから、タタキかな。包丁でダンダカダン！　と」

「じゃあトメ兄って魚あったら、私はぐつぐつ煮てじわじわと……」

「はいはい、くだらないことはこれくらいにして作るぞ」

数十分後。

「じじばば定食だ」

「……なんか、食べる気失くすなぁ」

「じゃ、食べよう。いただきますー」

「……いただきます」

その味だけど……ごめん、オチがなくて。

普通においしかった。

## カカの天下67「カカ天劇場」

こんにちわ、トメです。

今日も仕事が終わって帰ってきたら、どうやら妹のカカがサエちゃんと部屋で遊んでいるようです。

一声かけたあと、僕は気が利くお兄さんを演出するためにお茶を用意して持っていくことにしました。

「おーい、入るぞー」

片手にトレイを乗せたままノックし、扉を開ける。

するとそこには……なにやら異空間が広がっていた。

「こんにちわー」

「へい、らっしゃい。何にぎりやしょう」

「ラーメンを」

「お、ねーちゃんいい目してるね。今朝入ったばかりのピチピチだよっ」

「獲れたて？」

「おうよ。近所の湖でおいちゃんが釣ってきたのさ。長いだろう」

「そりゃラーメンだし」

ツッコミどころ多すぎるなぁ。

面倒だからいいや。

「カカ、なにやってんだ？」

「あ、おじゃましてます」

サエちゃんは丁寧にお辞儀してくれたが、

「へいらっしゃい！」

カカは寿司をにぎるマネなのか、お客にゴマをすりたいのか、単に寒いだけなのか……両手をこすりながら威勢よく言った。

「何にぎりやしょう」

「……じゃ、ソバとか？」

「お客さん馬鹿だねー。ソバなんかにぎれるわけないじゃん」

「ラーメンはいいのか」

「いいんだよ。サエちゃんだから」

ひいきだ……

「で、お茶もってきたんだけどさ」

「ありがとうございますー」

「ん、ご苦労。そこ置いといて」

指差された場所にトレイを置いて、僕は改めて聞いてみた。

「それでさ、なにしてたの」

「お店屋さん劇場」

なんだ劇場って。どこにあるんだ。いや、ここか。

「つまりはごっこ遊びか」

「そうそ。トメ兄もやる？」

ふむ……僕がごっこ遊び卒業したのっていつだっけ？　思い出せないほど昔なのは確かだ。長らくそんなことやってないけど、たまには妹に付き合ってやるのもいいか。

「やるかな」

「トメ兄、いい大人なのに恥ずかしくないの？」

「やかましいわ」

「いいじゃないですかー。大人だって子供に戻りたいときもありますよね？」

なんで最近のガキはこうも悟ったようなことばっか言うんだろう。

「じゃ、トメ兄とサエちゃんお客さんね」

「ほいほい」

とりあえず僕とサエちゃんは一旦部屋の外へ出て、改めて客として部屋に入ることになった。

「ではいきましょー」

「へい、らっしゃい」

「こんにちわ、ここの席でいいか？」

「だめ。お客さんヨゴレだから」

汚れてるって言いたいんだろう多分。

「あ、おねえさんは綺麗だね。ここの席どうぞ」

早速サエちゃんをひいきするカカ。いいけどさ、実際綺麗だしこの子。

「おねえさん、年いくつ？　番号聞いてもいい？」

「いやん」

「口説いてんじゃないよそこの店員。さて、じゃあトロでもにぎってもらおうかな」

「お兄さん、うち、うどん屋だよ？」

「いつのまに店変わったんだよ」

「二人が店を出たときに。ちゃんと書いてあるでしょ」

「どこに」

「私の顔に」

見えねーよ。

「あ、私いくら丼食べたい」

「サエちゃん、ここは今うどん屋らし――」

「あいよ、いくら丼一トンはいりまーす」

そう言って後ろを向き、なにやら作業をするカカ。

「あるんかいくら丼。しかも一トンもかよ」

「サエちゃんの注文だもの。火星人だって仕入れてみせるよ」

すごいＶＩＰだなサエちゃん。しかし食うんか火星人。見てぇ。

「ちなみにどこで仕入れるんだ？」

「裏の畑」

近いな火星人。

「あ、すいません、二トンでー」

「一トンじゃ足りないのかよ！　……じゃ、僕は普通のうどん一つ」

「ごめんねお兄さん。うち、うどん置いてないんだよ」

「うどん屋じゃないのかよ！」

「変更したの。私の顔に書いてある」

「本当に書いてやろうか……大体さっきから何をして」

唐突にカカが作業していた手を止めた。そして細かく切った赤色の紙を僕にふりかけて、っておい。

「さぁいくら丼です。どうぞ」

「僕が食われるんかっ！？」

「いただきます……ふふー」

「え、や、ちょっと、サエちゃん何そのエロティックな手の動きは」

「醤油かけますねー」

「はぁ、もう好きにしてく――ってそれ本物の醤油！？　待て、好きにするな！　あああ」

こんな感じで、僕らは妙なお店劇場を楽しんだ。

ちなみに本当に醤油をかけられたかどうかは……言うもんかちくしょー。

ううう。

これは泣いてるんじゃない。目に醤油が入って痛いだけさ……マジ痛ぇ。あ言っちゃった。

## カカの天下68「メタルカカソリッド」

「はい、もしもし」

こんばんは、トメです。

仕事から家に帰ってきてボーッとテレビを見ていたところに、一本の電話がかかってきました。

『こちらカカ。応答せよトメ兄。おーばー』

「……や、してるけど」

何を喋ってるかなこの妹は。

「何か用か？」

確か今日も今日とてサエちゃんちに遊びにいっていたはずだが。

『……』

「おい」

反応がない……ああ、わかった。

「えっと、おーばー？」

『うむ、拙者はいまサエちゃんちに侵入することに成功した』

なんかスパイと時代劇混ざったな。

『大佐、指示を。おーばー』

遊びたいのはわかったが、何を指示しろと言うのだろう。

「あーっと、じゃあね、その家にいる大人全員に『いつもお世話になってます』と言ってくるのだ。おーばー」

『大佐、その任務は難しいです。おーばー』

「なんでだよ。おーばー」

『面が割れてしまいます。おーばー』

割れたらダメなんかい。

「じゃあダンボールでもかぶって変装すればいいんじゃないか？」

某スパイゲームを思いだしながら言ってみると、「なるほど」とカカは頷き、電話が切れた。あれ、マジでやるの？

数分後、再び電話がかかってきた。

「もしもし」

『こちらカカ。任務に失敗したっ！！』

「失敗ってどうした。おーばー」

『おーばーなんて言ってる場合じゃないの。バカじゃないの？　死ねばいいのに』

ぅおい。その言い方はオーバーだぞ。

『ダンボールが近くになかったので、ちょうどいいところにあった洗濯籠をかぶってみたのですが』

「んなもんかぶるなよ。で、怒られでもしたか？」

『すごい臭いです！　鼻がとびます！』

そうかぁ、とぶのかぁ。それは初めて聞く表現だ。さぞかしスバラシイにおいだったんだろうなぁ。

『そんなわけで行動不能になりました』

弱いなカカスパイ。

『きゅーえんぶっしをお願いします』

「カカ、やたら詳しいなそういう単語」

『こないだ男子に借りたゲームしてたら覚えた』

「……なるほど」

『そういうわけで武器が足りないのです。近くに洗面所があります

が、使えそうなのはヒゲソリくらいです。剃るしかないのでしょうか』

「髭なんかないだろに。そもそもサエちゃんはどうしたんだ？　放っておいて電話なんかしててていいのか？」

『おろかもの！　捕らわれのサエちゃんを助けることこそが私たちの任務ではないかっ』

「初耳ですが」

「たわし！！」

「……たわけ、か？」

「あ、そうだ。すぐそばにたわしあったから。このたわけ！」

「はいはい、それはともかくさ、任務が決まってるなら僕に任務言えとか言うなよ」

『そこはほら、気分で』

相変わらず勝手なやつめ。

『それで、助けるにはどうすればいいのでありますか』

なんだか僕はもう面倒になって、適当なことを言ってみた。

「とりあえず、敵を倒せばいいんじゃないか？」

数分後、三度電話が鳴った。

「はい、もしもし」

『どうもこんばんは、サエの母です』

「あ、いつもお世話になってます」

どうせまたカカだと思っていた僕は、予想外の人物に少しビビッた。

電話の用件は、カカが夕飯をうちで食べていってもいいか、というもので、特に夕飯の用意をしていなかった僕にとっては大助かりな申し出。非常に恐縮しながらも「お願いします」ということで話はついた。

『それで、ええとですね、ちょっとお聞きしたいんですけど』

「なんでしょう?」

『カカちゃんが、洗濯籠をかぶりながら、ヒゲソリを片手に、うちの主人相手にオセロをしているのには、どんな意味があるのでしょうか?』

「あー、えーっと、あの」

『しばらくうちの主人がサエと話をしていたのですが、その間にあんな格好になっていまして、主人に「勝負!」と言ってきまして』

なるほど。サエちゃんがお父さんと話している間が暇だったからうちに電話かけてきたのかあいつ。

そしてこの場合、サエちゃんを捕らえている敵というのはお父さんになるわけだ。

『主人を倒す、とはりきっているのですが……私たち、何かカカちゃんの気に障ることでもしたのでしょうか？』

「ああ、それは発作です。たまにあるんです」

『ほ、発作？』

「はい。意味不明なことをする発作です。子供にはよくあることです。気にしたら負けです」

面倒なので、そういうことにしておいた。

『病院に連絡は……』

「しないでいいです」

『でもそんな病気、聞いたことありませんよ！？』

僕もないね。

「とにかくいいですから。つける薬はありませんから」

とりあえず悪い場所が頭だということだけはわかってるんだけど

なぁ。

## カカの天下69「カカの幸せ」

「幸せってなんだろう」

「お子様がなんだ、いきなり」

こんにちは、トメです。

相も変わらず唐突なことを言いだす妹カカに、僕は呆れきってため息をつきました。

「おまえなぁ、もう少し子供っぽい話題ないわけ？」

「子供でも人間なんだから、こういうことをちゃんと考えるべきだよ」

「……おい」

マジで子供っぽくない、と思ったら。

「って、先生が言ってた」

そうか先生か。よかった安心した。その歳で何をそんな黄昏れることがあったのかと心配したじゃないか。

ん？　待て。そんなことを言い出す先生のほうが黄昏れてるのか？　直接僕には関係ないからどうでもいいけど。

「でさ、幸せってなんだと思う？」

「うーん……そうだなぁ」

「やっぱトメ兄のことだから、いい女集めてハーレムでうっはうっはのばいんばいん？」

「とりあえずカカの発言がまともになってくれれば幸せかなぁ」

今どきばいんばいんってなんじゃい。

「じゃ、姉を１２人くらい集めて」

「まてやっ！！　言いたいネタはわかるがあんな姉が１２人もいたら世界が滅びるぞ」

「大げさだなぁ。せいぜいご近所くらいしか滅びないよ」

「充分に脅威だ！！」

「仕方ないなぁ。じゃあ普通に妹を１２……」

「そのネタから離れろ！　つうか一人でも頭が痛いってのにそんなのが１２倍になったら」

「痛いのもだんだん慣れて気持ちよくなる？」

「なるかっ。廃人になるだけだ！」

ほんっとこの妹の口にすることは危ない言葉が満載だ、原因はなんだろう。いたって普通に教育してるつもりなんだけど。

とは言いつつ原因はわかってる。１２人集まって変形合体すればご近所を滅ぼせる人害兵器、姉だ。

「でさ、結局トメ兄の幸せってなんなのさ」

「そういうお前の幸せは何なんだよ」

「結婚すること」

おお……意外とまともだ。

「サエちゃんと」

まともじゃねぇ！！

「おい、本気で言ってないよな？」

「本気だよ。好きな人と一緒になって何が悪いの」

「……サエちゃんには言ったか？」

「そんな恥ずかしいこと、簡単に言えるわけないでしょ」

そか、よかった。

いや、しかし、そうかぁ。そんな世界かぁ。

まぁ、まだ小さいし、いいのか、なぁ、そんな、考えも。

うん、なんか恐いから、この話はスルーにしておこう。

「で、トメ兄の幸せは？」

「んー……結婚、かなぁ」

「お！　なに、相手いるの？」

「や、そうじゃなくて」

僕は自分自身に苦笑しながら言った。甘いなぁ僕も。

「カカと姉が結婚したらさ」

「私と姉が！？　こわ！」

「ちゃうわ。カカと姉が、ちゃんとした人と結婚したら、たぶん兄冥利、弟冥利につきるくらい幸せかなぁ、なんて」

「ふむふむ、手のかかる姉が出て行けば楽になって幸せだってことだね」

「そうともいう」

否定はしない。しかしそれはお前にも言えることだぞカカ。

「……トメ兄、ありがとう」

「ん？　あ、ああ」

や、兄としては妹の幸せを願うのも当然ということで……

「私とサエちゃんのことを認めてくれて嬉しいよ」

「は？」

「サエちゃんは必ず私が幸せにしますっ！」

ぺこり、と頭を下げて、カカは去っていった。

僕は固まってしまって何もツッコめず、その後ろ姿を見送ることしかできなかった。

えと、マジでそっちの世界いくのか、カカ？

## カカの天下７０「がんばれタケダ、たち」

「ただい……ま？」

トメです。お仕事で疲れて家に帰ってきたとですたい。

あんれまーそいだら知らん顔がおるやないけ。

あ、すいません。なんか驚きのあまり、どこかの方言になってしまいました。

だって驚いても仕方ないと思う。

知らない男子が三人も居間に居座っていたら。

お、一人知ってる顔がいた。

「タケダ君じゃないか」

「お邪魔してます、おにいさ」

「貴様にお兄さんなどと呼ばれる筋合いはない！！」

「ぐぼぁ！！」

おっと、いけないいけない。我が家の女性陣のごとくヤクザキックをしてしまうところだった。

「うう……ごめんなさい」

なぜかタケダ君は顔を抑えているけど気のせいだろう。無意識に蹴ってしまったなんてそんな野蛮なことはないぞ、うん。

「で、そこの二人は？」

「僕の弟子です」

「ど、どうもお邪魔してます……」

「は、初めまして。僕は、あの」

「あ、ずるい。あのですね僕の名前は」

なんだか競い合うように自己紹介された。

でも覚えるのも面倒なので部下Ａと部下Ｂって覚えておこう。

「で、タケダ君とＡとＢは何でここにいるんだ？」

「え、あの、お兄さ」

「だからそう呼ぶなと」

「ぐっほぁ！！　す、すみません……」

なぜか顔を抑えている部下Ａは放っておいて、タケダ君に説明を求めると……

「私が呼んだの」

奥の部屋から部屋着に着替えたらしい我が妹、カカがやってきた。

「なんかね、会議するんだって」

「会議って……なんの」

「はいっ、それはですね！」

意気込み勇んで説明を始める部下B。その話によると、どうやら『小学校の中にあるイジメを防止するにはどうすればいいか』を討論するため、カカの家にお邪魔することになったそうだ。

なぜカカの家かというと……

「学校で一番強いからです」

だ、そうだ。すげーなカカ。

「ふぅん……まぁいいや。話し合うならちゃっちゃとやりな」

「トメ兄、なんか不機嫌じゃない？」

「気のせいだ」

そこの読者、シスコンとか呼ぶなよ？

「じゃ、話し合おうか」

「はい。じゃあまず、今あるイジメをどうするか、ですが！」

「とりあえず全員ぶん殴ってやめさせる」

「……」

あれ、終わり？

「じゃ、じゃあ、苛められていた子が、もう苛められないようにするには」

「身体、鍛えさせればいいじゃん」

しゅーりょー。

「はい、帰った帰った」

「ま、待ってくださいおに――ぐぃはぁ！！」

ん、今度の悲鳴は僕のせいじゃないぞ。

「よ、なんだか客がいっぱいいるね」

「その客を足蹴にしながら挨拶すんな、姉」

前触れもなく家に侵入してきた傍若無人は、男子三人を見渡して……不機嫌そうに目を細めた。

どうやら気づいたらしい。

まぁ誰にでもわかるだろうが。

この三人は三人とも、カカ狙いでこの家にきた。議論は単なる口実だ。

「ちょっと聞こえたんだけど、あんたらイジメっ子をどうにかしたいんだって？」

「は、はい」

「じゃあ話は簡単だ。あんたらが強くなってやめさせればいい」

「え、えっと……」

「カカがいつもやってるトレーニングをあんたらもするの。まさか、女子にできることをできない、なんて情けないこと言うつもりはないだろうね？」

『ま、まさか！！』

三人はハモって即答した。そりゃ好きな女の子の前で情けない姿は見せられないもんな。

「じゃあまず、腕立て１０回」

ほっと胸を撫で下ろす三人。思いのほか簡単で安心したらしい。

「私もやる？」

「カカはいいよ、毎日やってるでしょ」

「うん」

マジか。

「じゃ、はじめ」

言われた通り腕立て伏せを１０回こなし、三人は姉のほうを見た。

「終わりました、が聞こえない。腕立て１０回」

「え、ま、また？」

「腕立て１０回！」

姉の大声にビクリと震え、再び腕立てを始める男子三人。

『終わりました』

「終わりました、の声が小さい。腕立て１０回」

『――終りました！！』

「終りましたの声が可愛くない。腕立て１０回」

『――終わりました♪』

「きもい。腕立て１０回」

数分後、三人は疲れのせいか気落ちのせいか、肩を落としまくって帰っていった。

「ふん、カカは一生嫁にやんないからね」

過保護だよなぁ、お互い。

しかし、もしも嫁じゃなくてサエちゃんの婿だったら……いや、このことは考えるのやめよ。

## カカの天下71「トメって意外と……」

「はぁ！！」

「違う違う。まだまだだなぁカカは」

……ども、トメです。

「てや！！」

「だめだめ。気合が足りない」

なんか、橋の上で傘を振り回している姉妹がいます。非常に認めたくないことではありますが、僕と血を分けている人間と言わざるを得ないことを、ここにお悔やみもうしあげます、かしこ。うん、変な文だ。ちょっと変なやつらを見てたから、変な文を書いてみたかったんだ。

「何してる、妹と姉よ」

「あ、トメ兄」

「よ、弟。いまね、修行中」

「なんの」

「ほら、あそこ見える？」

姉が指差す向こうには一本の街路樹。そしてその枝には――

「鳥の巣、か」

「そうそう。この橋通るとね、鳥が警戒して攻撃してくるんだよ。おもしろいでしょ？」

「おもしろくねぇよ！」

目を輝かせる妹カカを叱り飛ばす、が、全く聞いちゃいない。

「その鳥を叩き落そうと、いま頑張ってるとこ」

「うんうん、鳥だって必死なんだからさ、カカちゃんももっと必死に振り回さないと当たらないよ！」

この姉妹はいったいどこへ向かっているのだろう？

警察か。はは――

や、笑えない。鳥が人に危害を加えているのかもしれないけど、こんなところを本当に警察に見つかったりしたら！

「おい、そこの君たち」

うわ、都合よく巡回中の警官登場！

ツカツカと近づいてくる警官にカカは怯む、が、姉は――

「よう、シュー君」

「げ、お姉様！！」

「知り合い！？」

しかもお姉様とか言ったぞ。

「姉。おまえ、僕のほかに弟いたのか」

「違う違う。これは弟分」

あんたどこの組の親分だよ。

「シュー君、なんか用？」

「い、いや……さすがにこんなところで傘を振り回して鳥と格闘するのは、ちょっと公共の場では……」

おどおどしながら言いにくそうに進言する警官シュー君。しかしニヤリと笑う姉に「ひっ」と情けない悲鳴をあげる。

「ひったくり、八件」

「うぐっ」

「強盗犯、五件」

「ぐっはぁ！」

「誘拐犯、三件」

「……がくっ」

「見逃せ」

「了解」

なんだこの会話は!!?

「な、なぁ姉。おまえ、なに言ってるんだ?」

「あたしの輝かしい経歴」

「えっ、お姉ってそんなに犯罪やってたの!?」

カカが「あらまぁ」って感じで両手を口にやって驚く。僕も真似してみる。

「やっぱり」

「やっぱりってなんだ!? 違う! あたしが犯人捕まえた事件の数だ!!」

あんた本当に何者だよ!?

「……あ、シュー君とやらが何も見なかったことにして去っていく」

「あたしとあいつ、幼なじみでさ。昔からいろいろ頼ってくるんだよ。警察になってからも」

「へー。ま、とにかくだ。いい加減こんなことやめろ。警官は誤魔

化せても、近所で変な噂がたったら僕に迷惑かかるんだからな」

「えー。せっかく始めた戦いだよ。ちゃんと決着つけないと女がすたるよ、ってお姉が言ってた」

「廃らせとけ、そんなん」

「トメ……あんたにも勝負の決まりごとを教えただろう？」

「遥か昔にそんなこと聞いたような気もしないでもない。とりあえず勝負始まったら一発かませ、だっけ？」

「そう！　あたしらはまだあの鳥に一発も――」

と、いきなり我ら三人に滑空してくる影。

噂をすればなんとやら、鳥が襲い掛かってきたのだ。

カカが傘を振り回す。はずれ。

姉が腕を振り回す。掠った。

僕が拳を振り回す。鳥の顔面に直撃。

鳥はふらふらと橋の下へと落ちていった。

「さて、これでいいだろ？　帰るぞ」

「えと」

「トメ兄……あれ？　なに、今なにしたの？」

「鳥殴ったんだよ」

「えと……弟、あんたケンカとかしない人じゃなかったっけ」

「そうだよ」

「なのに、なんでこんなことができるわけ？」

「誰の兄弟やってると思ってるんだ」

「……納得」

## カカの天下72「強風注意報！」

こんばんは、トメです。

「おー……」

「おおお」

妹のカカと二人して阿呆みたいに唸っているのは他でもありません。

外があまりに大嵐のため、うちのガラス戸にひびが入ってきたのです。いやー、こわ。

「ねぇ、これ割れるのかな」

「割れたら家の中、水浸しだよなぁ……」

「そしたら水遊びできるね」

「そうだなぁ、楽しそうだなぁ……」

「水たまり蹴ったり、濡れたカーテン振り回したり」

「ワイルドだなぁ……」

「じゃ、割ろうか」

「そうだなぁ……じゃ、なくって！」

あまりのひび割れっぷりに放心状態になっていた僕は、なんとか意識を回復させた。

「楽しくないからっ。片付けのときとか考えたら！」

「えー、でも大自然の息吹が感じられる野生的な味のある部屋になるんじゃない？」

日本の一般家庭にそんな部屋いらねーよ。アマゾンの一般家庭ならともかくさ。

「野生は大事だよ？　本当は一日バケツいっぱい食べなきゃなんないらしいし」

「野生を食べる？　野生動物？　野生動物をバケツいっぱいってどこにの姉だよ……ああ、野菜か」

「それそれ」

バケツいっぱいに詰められた動物達の破片を想像してしまったじゃないか。

そしてそれを貪る姉。うげろ。でもなんか似合う。

「ともかくだ。危ないからテープで塞ぐぞ」

「わかった」

やらないよりはマシなはずだ。

カカは持ってきたテープを適当な長さに切って、それを僕の口に当ててきた。

「ん、貼りにくいな」

「もがらっちゃ！！」

「……何語？」

ぴったりと貼りやがったテープを痛いのをこらえながらはがして、僕はカカを睨んだ。

「な、なにしやがる」

「え、だって危ないから塞げって」

「僕の口は危ないってか！！」

「うん、やらしー寝言ばっかり言う危ない口」

「僕はそんな寝言なんか言った覚えないぞ」

「寝言だもん、そりゃそうでしょ」

「僕に覚えがなければ、それは言ったことがないのと同じだ」

「何その勝手な理屈」

「誰かさんを見習ってみた」

「誰、その自分勝手」

おめーだ。

「とにかく、さっさと塞ぐぞ」

「えー、だってなんか部屋暑いし、雨入ってきたらちょうどよくなるって」

「暑いんなら脱げよ」

「ま、妹に向かって脱げなんて。やーらし」

「……殴っていいか？」

「妹に暴行だなんて。やーらし」

「……こんの」

ビキビキ！！！

本気でぶん殴ってやろうかと思ったとき、大きな音をたててガラスのひびが一気に広がった。

「……遊んでる場合じゃないね」

「そだな。テープ貼るぞ」

「うん」

さすがに今のは怖かったのか、悪ふざけもやめてカカも修繕を手伝ってくれる。

数分後、大体のひびを塞ぐことができたが……

「テープの隙間から漏れてるね、水」

「そうだな……これ、どうするか」

「とりあえずちゃんとした修理は明日するとして、今は漏れてくる水を下に雑巾敷いて」

「でも雑巾じゃ間に合わなくない？」

「そうだなぁ……ここで番して、ずーっと漏れてくる水を拭いてくれる人がいれば……」

「やっほ！！　我が弟&妹よ、外は嵐だけど、それ以上の嵐をその心に宿してるかい、べいびー！？」

「お、姉。ちょうどいいときに」

「こないだ私のチョコケーキ食べたよね。その罰として今日一日、そこのガラスのひびから漏れてくる水拭き続けて」

「……え、そんな、今日、一日？」

「そうそう、こないだ僕がへそくりしてた松坂牛食べたよな。罰として以下略」

「……え、ずっと？」

「「じゃ、よろしく」」

僕とカカは安心して、自分達の部屋へと戻っていった。

「な、なんてこったい……あたしの心のほうが嵐で荒んじゃうなんて！！　寒い、心の中にすさまじい嵐が吹き荒れて寒いわっ！！」

なんか聞こえた気がするけど、無視。

めでたしめでたし。

## カカの天下73「エイプリル？」

「今日は嘘つきの日だ」

「……んあ？」

「嘘つかないと舌抜かれるんだよ」

「はぁ」

「てわけでお膳立てはしといた。朝食はできてるよ。さらば」

……おはようございます、トメです。

なにやら起きると目の前に姉がいて、言うだけ言って去っていきました。なんだあれは。

「いいや。起きよ」

のそのそと居間に向かいながら、そういや今日って四月一日だっけ……ということをぼんやり思い出した。

「トメ兄、おはよ」

「おう、おはよ」

朝から晩まで同じテンションの妹カカと挨拶。

「あ、カカ。朝食もうできてるらしいぞ」

「わ、ほんと？」

カカはよほどお腹が減っていたのか居間へ小走り。この妹は朝からがっつり食べる派だから毎朝準備が面倒なんだよね。姉もたまにはいいことをする。

「……トメ兄」

「どした、なんか何とも言えない顔して」

「これ、テーブルの上にあった」

差し出されたのは一枚の紙。

『朝食はいただいた！　ｂｙ姉』

前言撤回、姉はいつも通りろくなことをしない。

「朝食あるって言ったのに……うそつき」

ああ、そういうことか。

「あ、そうだ。確か台所の戸棚に買っておいたパンがあったはず」

「じゃ、それで」

カカはまたまた小走りで台所に向かっていった。

……そして再び一枚の紙を持ってきた。

『おやつはいただいた！　ｂｙカツコ』

カツコって誰だ？

……？

……えと。

……えっと。

……？

あ、姉の名前だ！　本気で忘れてた。

「うそつきぃ」

「僕は悪くないぞ」

そのとき、ピンポーン！　というベルと共に「カカちゃーん」とサエちゃんの声が聞こえてきた。

「お」

カカはその声を聞いた瞬間、耳を小動物のように耳をぴくりと動かすと猛ダッシュで玄関に向かっていった。おー、朝食よりもやっぱサエちゃんのほうが優先順位高いんだなー。

僕もサエちゃんの顔でも見ようかと、のろのろ玄関へ向かう。

するとそこには立ち尽くすカカ。

そして一枚の紙。

『サエちゃんはいただいた！！！　ｂｙ姉様』

そしてもう一枚の紙。

『追伸　うへへ』

なんだ、このムカつく紙は。

「か、カカ」

俯いてるカカの顔を覗き込むと、

「……人の女に手を出すたぁ、ふてぇ野郎だ」

なんかすごい顔になってた。

「祭りだよ……血祭りだよ」

「ちょ、怖いから怖いから！！　こらこら俯いたままどこからともなく木刀出すな！！　これは冗談だって、嘘だって！　だって今日はエイプリルフールなんだから！」

「トメ兄、何言ってんの」

「え、何って」

「今日は四月二日だよ」

「え」

そういえば、そうだったっけ？

……あ、昨日エイプリルフールっぽいことなかったから勘違いしてた！

「あんの姉、普通に嘘つきやがったな、日とか関係なく……」

「血祭りだ……」

「血祭るか……あの姉」

合唱。

「「こーろせー、こーろせ、たーっぷり、こーろせ♪」」

そして合掌。

## カカの天下７４「ひねった気持ちと素直な行動」

「ねえ君さ、いくらなんでも調子乗りすぎじゃない？」

「ん？」

ども、カカっす。

今は昼休みの時間。

のんびりとサエちゃんと給食でいちゃいちゃしていた私に向かっていきなりぼーげんを吐いてきたのは見知らぬ女子でした。

ところで暴言じゃなくてボーゲンってあったよね。なんだっけ。

「誰、あんた」

「人に名前を聞くときは自分から名乗るもんよ」

「じゃ興味ないから名前言わなくていいよ」

そんなことよりもボーゲンがなんだったかのほうが興味ある。

うーん……と唸っていると、

「君のそういうところがムカつくのよっ」

「ん？　まだいたの」

「……！　へ、へぇ。噂どおりの勝手な子ね！」

「それで、結局はどちらさまー？」

ぽややんと様子を見ていたサエちゃんがその女子に聞くと、

「わたしはサユカ。なんかカカって子がずいぶんいい気になってるみたいだから、言いがかりをつけに来たの」

「正直だねー。言いがかりつけにきたって自分で言わないよ、普通」

「普通じゃないなら変なやつか。この変なやつめ」

「やっかましいっ！　君に言われたくないわっ」

おーなんか顔赤くしてる。単純っぽい子だなぁ。

それはいいけどボーゲンボーゲン……なんだっけ。

あ、確かスキーのやつだ。

「とにかくね、そんなちっこいくせに偉そうにされちゃたまんないのよねっ」

「サユカちゃん、背高いもんねー。うらやましー」

「ふふん、そうでしょう？　でもさ、高ければいいってもんじゃなくて……はっ」

スキーの……ええと、道具？　違う。

「とにかくっ。そこのカカ！　あんまでかい顔しないでよねっ」

「えー、カカちゃん顔小さいよ？」

「むぅ、確かに。これは私がうらやまし――じゃなくて！！」

あ、思いだした！！

「とにかくカカ。聞いてるの？　私はあなたの」

「滑り方だ」

「滑り方が気にいらなくて」

「スキー行きたくなってきた」

「一度こってりと指導してあげようと思って」

「あ、ほんと？　じゃ今度お願い」

「仕方ないわね、わかったわよ。わたしの指導は厳しいわよ……って、あれ？」

サユカちゃんは、なんか変な顔して首を傾げていた。

……あれ？

わたしは最近生意気と評判のカカに、文句を言うために隣の教室へわざわざ出向いたはずなんだけど……

「サユカちゃん、これ食べるー？」

「あ、サエちゃん。それは私が最後にとっておいたコンソメたっぷりポテチ！！」

「ダメだよ。お友達記念にサユカちゃんにあげるのー」

「えー。せっかくの記念だしこの黒コゲポテチあげようよ。姉も『新人の歓迎には根性焼きが一番』って言ってたし。根性ありそうな焼き加減のこれのほうがいいよ」

なんで、そのカカの部屋でのんびりお菓子食べてるんだろう？

「じゃ、どっちも食べてもらうってことで」

「うー……まぁいいか。歓迎会だし」

「ちょっと待ったっ！　カカすけ？　なんか流されてここまで来たけど……あと何度も言ってる気がするけど、もともとわたしは君に文句を」

「お、カカすけっていいね」

「トメお兄さんもトメすけって呼んで、二人で並ぶと語呂がよさそうだねー」

「ごろ？　ごろごろ」

「うがぁぁぁぁぁぁー！！」

人の話を聞かないこの二人に、わたしはなんかもうやりきれなくなって叫んだ！

そしてそのままカカの部屋を飛び出す。

後ろで二人が何か言っているのが聞こえたけど、そんなのは知らない！

なんだかわからないけど無性にここから離れたくなった。

なんだか、わからないけど――

「お、カカの新しい友達か？」

「へ」

玄関から飛び出そうとしたところで男の人と出くわした。そういえばカカ、お兄さんがいるみたいなことを言ってたような。

「なんだ、もう帰るのか。ゆっくりしてけばいいのに」

「……わけわかんないんだもん、カカ。わけわかんないまま連れてこられて、わけわかんないまま一緒にいて」

なんだかむしゃくしゃしていたわたしは、初対面にも関わらずそんな脈絡もないことを言ってしまった。

でも、そのカカのお兄さんらしき人は――呆れたように、そんなわたしを笑い飛ばした。

「わけもなしに一緒にいるのが友達だろが」

「とも……だち？　でも、カカとか、サエとか、喋ったことあんまり」

「ほんと最近のお子様はどいつもこいつも……細かいこと考えるなよ。カカも多分なんも考えてないよ。『なんとなく』で何でも行動するやつだからな」

「なんと、なく」

そう、なんとなく、わたしは声をかけた。

隣のクラスまで、わざわざ足を運んで。

喋ったこともないのに、わざわざ声を――

「だからおまえもお子様らしく、なんとなくうちでゆっくりしてけよ」

なんとなく――顔が熱くなった。

わたしはぺこりと頭を下げて、身を翻した。

そしてカカの部屋へ。

「カカすけ！！」

そしてなんとなく叫んだ。

「わたしを姉と呼んでいいわよっ」

「……あんた、私の姉がどんな化けものか知ってて言ってる？」

さて、いきなり偉そうなことを言ったうえ、サユカちゃんにとある感情を芽生えさせてしまったトメだったが……

「そうそう、細かいこと考えてたらうちの妹とやってけないよな。うん、我ながら的確なアドバイス。やっぱキングオブ兄だな」

そんなことは露知らず、妹の人間関係に出しゃばることができた自分を自画自賛していた。

## カカの天下７５「新入りと帰ろう」

「きりーつ、礼」

こんにちわ、カカです。

ようやく今日の授業が終わったところです。もうくたくたです。

特に最後の社会。漢字が並ぶとすごく眠くなります。聖徳太子とか。あれはもう催眠術です。じゃあ先生は催眠術師なのでしょうか。

いいなぁ催眠術師。いつでも誰でも寝かせることができるんだよね。便利。イロイロと。でも授業中に使うな。漢字喋るな。聖徳太子喋るな。聞いてるだけにしろ。聞くの得意でしょ聖徳太子。

「カカちゃん、かえろー」

「ん、サエちゃん」

聖徳太子はさておいて、いつも通りにサエちゃんと帰ろうとしているところで――廊下のほうでちらりと見えた、見覚えのある顔。

「じゃ、ついでにそこにいる人も誘いますか」

「んー、そこの人って？」

私はランドセルに必要なものを詰め込み終わると立ち上がり、サエちゃん従えてたったかと廊下へ。

「ほら、サユカちゃん。帰るよ」

「んなっ！？」

怪しげに廊下をうろうろしていた女子生徒は、なんかすんごく身体をのけぞらせて驚いた。

「な、なによっ。別にわたしは君らなんか――」

「はい、いーからいーから」

「ちょ、おいっ、手を引っ張るなカカすけ！　君は昨日から人の話を聞かなさすぎなのよっ」

「いーからいーからー」

「サエすけまで背中を押すな！　別にわたしは君らと一緒に帰る気なんかっ」

むぅ、気性が激しいなぁ。

そうだ、こんなときは催眠術。眠くさせればきっとおとなしくなる。

私はランドセルから社会のノートを取り出した。

「宇治川の戦いは羅針盤の開発によって明治維新は桃源郷、最後にペリーの反乱は織田信長とレッツゴー」

「……なにそれ」

ぅおう、素晴らしきかな居眠り授業のノート。最後は一体どこへレッツゴーしてるんだろう。教えてよ信長。

「ともあれ催眠術って難しい」

「ほんっとわけわかんないわねっ、君」

「ま、いいから行くよ、お姉さん」

昨日（前話）のことを思い出して試しに呼んでみた。

するとサユカちゃんは激しくなっていた表情をピタリと止めて、

「しょうがないなぁ、もう」

緩む頬を押さえながらあっさりと頷いた。

「ちょろいなー」

「カカすけ何か言った？」

「や、なんにも」

「ところでさ、カカすけ。君、ケンカ強いって本当？」

いざ一緒に歩き始めれば、さっき文句を言っていたのが嘘のように普通に話すサユカちゃん。たぶんすごい流されやすいタイプだと

思う。

「うん、そだね。中三くらいの男子なら勝てると思う」

「はぁ!?　いくらなんでもそんな」

「前にカカちゃん、犬さんをいじめてた中三の子を倒してたよー」

「中三ってなんでわかるのよっ」

「その人、ケンカの前に名乗るのが流儀だって言って、最初に自己紹介してきたから」

「律儀なやんちゃすけね……」

「うん、律儀な人だったよ。負けたからってちゃんとお金もくれたしねーカカちゃん」

「おい……それはかつあげと言うんじゃないかしらっ」

「人聞きの悪いこと言わないでよ。大体こんなことくらいは朝飯前の寝ぼけた状態でもできないと、私の姉を名乗ることなんてできないよ?」

「どんなバケモノなのよ、君の姉は」

「忍び込んだドロボウを寝ぼけたまんまベッドの上で袈裟固めかけて、そのまま朝になって目が覚めると隣の男の人が寝てて（死んでて）びっくり！　くらいはしないと」

「嘘よね？　だってそんな人間いるわけないじゃない」

「実話だよ。三日前にやってたし。小学生のくせに自分の常識が正しいなんて思い込んでたら痛い目みるよ」

「君も小学生でしょっ」

こんな風に楽しく会話していた私たちの前に、一人の警官が自転車で走ってきた。

その自転車は道に落ちていた小石をタイヤで弾き飛ばして……近くで居眠りしていたノラ猫に命中させた。

ぎにゃん！？　と無性に可哀想な鳴き声が響く。

あ、しまったという顔で警官は自転車を停めた。

私はつかつかと警官に歩み寄って……とりあえず殴った。

そしてお説教を始める。

「わー、警官まで倒した。カカちゃんすごい」

「……マジで？　うわ、ほんとに警察の人が頭下げてるわ……むぅ。認めるのは悔しいけど、カカすけの言った通りだったのかしら。まだまだ常識わかってなかったみたい」

などと感動されているところ悪いが、

「シュー君、こんなことして……お姉に言いつけるよ？」

「か、カカちゃん、それだけは勘弁してっ」

「じゃあシュークリーム三つね」

私は単に知り合いにタカっていただけだったりする。

猫さんありがとう、君の痛みは無駄にしない。経済的な意味で。

## カカの天下76「サユカの任務、呼び方編」

こんにちは、トメです。

えー、今日は仕事から帰ってくると、いつのまにやら一人増えて仲良し三人組で妹達が遊んでいたわけなんですが……

「えーと……サユカちゃん、だったよね」

「はい、お兄様！！」

「……様はやめて」

「じゃあお兄たん！！」

「それはヤバすぎるからもっとやめて！！」

「は、はい！　ごごごめんなさい！！」

えーっと、なんだろね。

状況を説明すると、僕とこのサユカちゃんは居間のテーブルに座って向かいあってます。

んで、残りのカカとサエちゃんは「あとは若いもんにまかせて」とか言って奥にひっこんでいった。といっても廊下の奥からこっちの様子を伺ってるけど。

「大佐、こちらカカ。おーばー」

「こちらサエ、感動旅行、おーばー」

「違うよサエちゃん。感度良好だよ。感動旅行ってなんかいい響きだけど」

「いつか一緒に行こうねー」

「……それ、ぷろぽーず？」

「え？」

「や、なんでもない、なんでもない」

何をいちゃいちゃしながらスパイごっこしてるんだ、あいつら。

「あ、あの、お兄さん！」

「は、はい。なんでしょうか」

なんか勢いに押されて敬語になってしまう僕。

「おまえって呼んでください！！」

「……は？」

「わたしのことを、おまえって呼んでみてください！！」

おまえ？　なんか会って間もない子にそんな乱暴な言葉遣いはどうかと思うけど……まぁ本人が言うなら。

「なにがしたいんだ、おまえ」

「……あなた」

「……は？」

ぷしゅうううううぅぅぅ、ってな感じで赤くなって膨らんで破裂してしぼんでいくサユカちゃん……なんなんだ、一体。

「大佐、こちらカカ。応答願いますっ、おーばー」

「こちらサエ、どうしたカカちゃん。おーばー」

「なんかもう見てるだけで恥ずかしいですっ、援軍を要請しますっ、おーばー」

「いったいどうしたというのだっ、おーばー」

「なんか夫婦ごっこやってますっ、ブイブイしいったらありゃしません！　おーばー」

「ブイブイいわせてるのかっ、それは危険だ、援軍はもう少し待てっ、おーばー」

んー、よくは聞こえなかったけど、多分ブイブイしいじゃなくて初々しい、かな。

にしてもサエちゃんがこんな固い言葉使うの初めて聞くな～。

「あ、あの、お兄さん」

「ん？　ていうかさ、なんの遊びなんだ、これ」

「へ？　あ、いえ、そのっ」

「すごい顔になってるぞ、おまえ」

もう一度「おまえ」と言った瞬間、サユカちゃんの顔がなんか爆発した。

「えーせーへー！！　えーせーへー！！」

「援軍はまだかー！？」

うるさいなぁ、外野。

ていうか援軍ってなによ？

「援軍、ただいま到着！」

「援軍ておまえか姉！！」

「んー、弟よ、この子があんたの新しい妹？」

「妙なこと言うなっ」

「お姉、もうこの軍は壊滅だよ」

どの軍だよ。

「大丈夫、あたしがなんとかしてあげる」

そう言うと姉は、顔が爆発した名残で呆けているサユカちゃんをひょい、と抱き上げて……

「原爆、投下！！」

僕のほうへと放り投げてきた……って、え？

時間はスローモーション。

サユカちゃんと目が合った。

なぜかサユカちゃんは目をつむった。

こちらに空を飛んで向かってくるサユカちゃん。

そんなときに目をつむるもんだから――僕とサユカちゃんはイヤな感じに頭をごっつんこさせて脳みそ爆発（過剰表現）そしてくたばった。

「あらら、不発だね」

「ある意味ちゃんと爆発したけどね」

「この二人、どうなるんですかね……ふふ」

「うん、楽しみっ」

……気のせいか、意識が落ちる寸前になにか聞こえたような。

## カカの天下77「お祝いしましょう」

「ほれ、召し上がれ」

「……わんだふる」

「どうした、食べないのか」

「あんびりーばぶぅ！」

「ばぶぅってなんだ、赤ん坊じゃあるまいし。バブルだろ」

「弾けるの！？」

「弾けねーよ」

ある意味弾けているこのお子様はご存知、僕の妹のカカです。

なんでこんなにテンションが高いのかというと、ただいま高めのレストランで外食、しかもコース料理でめっちゃ豪華っぽい餌が並んでいるのです。

それを目の前にしてフシギ生物カカは興奮の極みに達しておるわけです、はい。

「ねぇ、トメ兄」

「なんだ妹」

「気持ち悪い」

「腹でも痛いのか？　仕方ないな、このご馳走は僕が全部――」

「だまれ下郎！！」

「げ、げろうって……どっから覚えてくるんだそんな言葉」

「時代劇」

いろいろ見てるなーおまえ。

「そうじゃなくてさ、トメ兄が気持ち悪い」

「なにを失礼な」

「なんでいきなりこんなご馳走を……いつもはお金ないときに醤油ご飯を食べさせたりするくせに」

「や、あれは単に醤油ご飯が好きだからだけど」

「それも気持ち悪いけど、今の気持ち悪さはそれじゃなくて」

「なんだよコノヤロウ」

「……ねぇ、これ、もしかして最後のバルカン？」

「それを言うなら晩餐だ」

死ぬ間際にバルカンぶっ放すのも格好いい生き様だと思うがね。

「バンさんって誰？」

「知るかよそんなの……や、待て。この店の店長がバンさんだった気が」

「最期なんだ、バンさん」

「勝手に殺すんじゃありません」

「ちーん」

「お悔やみっぽく皿を箸で叩くんじゃありません」

次々と並べられる料理がいまだに信じられないのか、混乱しまくっているカカ。

この間ちゃんと話したのに、聞いてなかったなこいつ。

「今日は四年生になったお祝いに、いいもん食わせてやるって言ってただろう」

もう四月も中盤。

サユカちゃんの登場でうやむやになっていたけど、もうカカは四年生へとレベルアップしていたのだ。高学年にクラスチェンジだ。一つくらい新しい魔法を覚えてもおかしくないくらいの成長だ。

「トメ兄、やっぱ気持ち悪い」

「それが新しく覚えた魔法かっ。くぅ……破壊力は充分だ」

「なにバカなこと言ってるの」

「……あ、いや、すいません。取り乱しました」

妹が冷たくてお兄ちゃん悲しい。

「そんなお祝いしてくれるなんて、普段と違って優しすぎだよ。トメ兄が偽者だったとしてもあっさり納得しちゃうよ」

「おまえな……普段の僕をどんなやつだと思ってるんだ」

「ツッコミ」

「いや、その、さ」

正解だけどさ、そう躊躇なく言われるとさ……

「ま、いいや。理由もわかって気分爽快！　トメ兄、遠慮なくいただきます」

「いろいろあって気分落ち気味、でもいただきます……」

僕らは仲良く手を合わせて、ちょっと高めの料理に舌鼓をうった。

ま、なんだかんだ言いつつも仲良くやれてるのはいいことだ、うんうん。

この先カカが成長していけば、こうやって二人で食事できる機会

が少なくなる可能性もあるんだからな。

「おいしいね、ツッコミ」

「おいコラそれあだ名にする気かい」

とりあえずヒネくれて成長してくれないことを祈る。

もう、遅い？

## カカの天下７８「素直じゃない子」

ちわ、面倒くさい授業も終わったところのカカと申します。

さて今日も帰ろうか、そう思ったところで。

「サエちゃん、あれって本当に何なのかな。普通に入ってくればいいのに」

「わかんない。とりあえず聞いてみればいいんじゃないかなー」

と、いうわけで。

昨日や一昨日と同じように授業が終わってから私達の教室前をウロウロしているサユカちゃんに話しかけることにしました。

「なにしてるの。サユカちゃん」

「むっ！？　出たわねカカすけ！」

「そうそう、最近お通じがようやく出るようになったのよ」

「そっかーちゃんと出たんだ。でもサユカちゃんはなんで知ってるんだろ」

「見てたの？　やーらし」

「なんでやねん！！」

サユカちゃんは相変わらず正統派なツッコミをしてくれる。でもちょっとおもしろみが足りないな。トメ兄を見習え。

「で、なにしてるの。一緒に帰りたいの？」

「違うっ。まず説明すると……わたしにとってカカすけは敵なの」

「ふむふむ」

「そして、わたしは敵の様子を探りにきてるってわけ。弱点ないか、とかね」

「そんな危ないこと考えてる人と一緒にいる必要ないね。じゃサエちゃん、二人で帰ろうか」

「……え」

あ、ちょっと本気で寂しそうな顔した。

「探るなんて、あからさまにそんなこと言っちゃダメだよ、サユカちゃん。そういうことは胸の内に隠しておいて、上辺だけでも仲良く見せるものなんだよー？」

うーん、サエちゃん、本当にたくましくなったもんだ。私のおかげで。

あれ、「お前のせいで、だろ」ってトメ兄の声が聞こえた気がするのは気のせいか。

「じゃ、じゃあ！　今のは嘘っ」

じゃあ、とか言ってるけど本当に嘘なんだろうな。わかってるんだけど……

「へぇ、私達と一緒に帰りたいんだ」

「う……そ、そうよ」

「私達ともっと仲良くなりたいんだ」

「ううっ……そ、そそそうよ」

恥ずかしさに悶える顔がたまらんね。

ん？　「おやじくさい」ってトメ兄の声が聞こえたような……これも気のせいだよね。

「私達のこと愛してるんだ」

「そ、そ、そ……そう？　あれ？　そう、じゃ、ないけどそういうことにしたほうが……え、どうしよう！？」

本当、素直じゃないのに素直だなーこの子は。かーわい。

「はいはい、これくらいにして。カカちゃんもサユカちゃんも一緒に帰ろ？」

「うう……サエすけはカカすけのこと愛してるの？」

「うん」

ぼんっ！！　と私の顔が爆発した。

「ちょちょちょちょちょっと！　なななななななななななにを言ってるの」

「じゃ、わたしも愛してるってことにしておこ」

「えっ！？　ちょっと、じゃあ三角関係に……！　え、ちょっとサエちゃんそんなにくっついて、もしかして誘ってる！？」

「カカちゃんナニ言ってるの？」

やばいやばいやばいいつものクールな私はどこいった！？

サエちゃんの突然の言葉に私の混乱は絶頂ピークで宇宙まで飛んでってあらフシギ火星にはやっぱ火星人がいるんだなぁと思ったのも束の間その火星人達の顔が全部トメ兄の顔でしかも揃って「おまえさ、本当にその道でいいのか」とかわけわかんないことを言ってきて――

「ちょっとカカすけ。どうしたの。なんか顔色が信号機のごとく変わりまくってもはや虹色よ？」

「しかも空の虹じゃなくて、こぼれた油とかに浮かぶ変な虹色だねー」

「……え、えっとね」

急に取り乱した私をフシギそうに見つめる二人の視線で、とりあ

えず頭は少し冷えた。

「か、帰ろうか」

「んー……？　うん」

「仕方なく帰ってやるわよ」

うーん、サユカちゃんをからかってやるつもりがとんだ返り討ちに……でもサユカちゃん別に悪くないしなぁ。この行き場のない怒りっぽい感情はどうしてくれようか。

あ、そうだ。

あそこにぶつけよう。

「トメ兄は今日いちいちうるさいんだよ！！」

「は？　僕、帰ってきてからまだ何も言ってないぞ」

「この道でいいんだよっ。なんかハーレムっぽいのもいいじゃない！！」

「いや、何の話？」

「ふー、すっきり。もう余計なこと言わないでよね」

「……一体なんなんだ我が妹よ。こら、妙にすがすがしい顔で去っ

ていくな」

## カカの天下７９「お花見でさわさわさらさら」

こんちわ、トメです。

今日は春うららでなんと花見にきています。

といっても前々から計画していたとか、シートしいて弁当食べるとか……そういう素敵シチュエーションではなく、暇だった姉が「見に行くぞ」と押しかけてきて近所の川際を散歩させられているだけだ。もちろん妹カカもいる。

「おー、花だ」

「なんかもっと感想ないのか、カカ」

「んー、いい感じにピンクいね。桃色だね」

「面白みがないな。その桃色を見てどう思った？　綺麗だとか、心が洗われる、とか」

「桃色ってやらしいよね」

「姉は黙ってろ」

一瞬カカが言ったのかと思った……姉妹だけあって声が似てるから危ない危ない……

「おっ、弟と妹。見てみな」

姉が指差しているのは川。言われたとおり覗いてみると……

「おー、花びらだらけ」

「綺麗に流れてるねー。お姉さん感動」

気がつけば、自分達が歩いている地面も桜の花びらでいっぱいだった。

「……地面も川も、春色に染まってる」

「トメ兄が恥ずかしいこと言ってる」

「カカちゃん、他人のふり他人のふり」

「……ぅおい」

本当に遠ざかっていく姉妹を睨むが、二人は目も合わさずにすたこらさっさと前を行く。

「春ってああいう人増えるから、気をつけないといけないよん」

「ああいう人って？」

「なんか遠くを見つめながらポエムっぽいこと呟いたりする人」

「うわ、それは近づきたくないね。本人は気分いいかもだけど、こっちは暗くなりそうだし。誰もいないところでやってほしいね」

……あの、本気でちょっと悲しいんですけど。

「まぁ、春だしね。あの人の言ったとおり、頭の中も春色に染まってるんだよ」

あの人とか他人行儀で指差されると泣きそうになるんですけど。

「春色って？」

「つまり桜色＝桃色」

「桃色に染まってるんだ。やーらし」

「近づいたらさらわれるよ」

「さわられるの！？」

「ちがう。さらわれてからさわられるんだよ」

「さらわれてからさらわれるからさるわけだね！」

「そうそう、さるものは追わずって言うし。でも敵もさる者だからね」

「えーっと……さるものにさらわれてからさわれるからさるものになってさるんだね」

「そうそうそう、でもそもそもさるものにさわられたらアウトだからまずさわられないようにしないと。あと、さるならこのさわをぬけるんだよ。呑気にさわしてたらだめなんだよ」

「つーまーりー……さるものにさわられるとさらわれてからさわられるからさわなんかしてないでさわをぬけるさるものになってさるんだね」

「あ、あそこにさらいが」

「えっとえっとえっと……さるものにさわられるとさらわれてからさわられるからさわなんかしてないでさらいをすぎてさわをぬけるさるものになってさる！　んだね」

……えーと。誰が人さらいか、というツッコミする暇もなくヒートアップしていくこの姉妹は何を言っているのだろう？

「さらいとかしてる場合でもないよ。身体にさわるし。あ、あのさらいってもしかしてさわら製？」

「つまりつまりつまり……さるものにさわられるとさらわれてからさわられるからさわとかさらいなんかしてるとさわるしさわらのさらいをすぎてさわをぬけるさるものになってさる！！」

はい、たぶん漢字にしないとわけわからないね。

皆はどれがどれの意味なのか、ちゃんとわかったかな？

強引に文章をつなげすぎだって？　仕方ないじゃん。言ってるのは小学生だし。

完璧に僕を忘れているカカ達はもう放っておいて、僕はゆったりと桜を鑑賞することにした。

……恥ずかしい台詞はもう言わないぞ。

さて、漢字にすると、

さる者に触られると攫われてから触られるから茶話とか作礼なんかしてると障るし椹のさらい（熊手っぽい農具のこと）を過ぎて沢を抜ける去る者になって去る、でした。

……わかんないよねぇ。

## カカの天下８０「若気のいたり」

「カカすけ、君っていろいろな意味ですごいよね」

「なに、藪から棒に」

こんちわ、カカです。

今日も今日とて小学校。いじめっこを発見し追跡、撃墜、処刑執行を終えたところで最近友達になったサユカちゃんがこんなことを言ってきました。

「だってさ、いくらなんでも破天荒すぎるでしょ君の行動。いったいどういう育ち方したらそんな風になるわけ？」

「じゃあ聞いてみようよー」

私がなんて答えるか迷っている間にサエちゃんがほやほやと提案した。

「と、いうわけであなた！　お答えくださいっ」

「……なぁ、そのあなたってのはなんなんだ？」

「ぅえ！？　あ、いやそそそそそそその口が滑ってちょっとええいやすいませんごめんなすってぇじゃなくてごめんなさいあれですよそこのあなた、みたいな感じで特に旦那様的な意味のあ、な、た

♪　ではなくてですねっ」

「いや、いいんだけど」

「トメお兄さん、教えてー」

「むぐむぐー！！」

必死に抗議しようとする私の口は、サエちゃんがどこからか召喚した姉に塞がれていて何も言うことができない……！

「カカが小さい頃の話か？」

「そうそ、ついでにあたしが武者修行いってる間のカカちゃんズおもしろエピソードも教えてよ」

「はぁ。まぁ、いいけどさ。何を教えればいいんだ？」

「なんといいますか、カカちゃんがどうしてこんな風に育ったか知りたいんです」

「こんな風って……サエちゃんって本当、言うようになったなぁ。それとも元はこうだったのか？　まぁいいや。じゃ、こんなのどうだろ」

それはカカが幼稚園に通い始めた頃だったかな。

とある和風の食事処へ行ったときのこと。

「これは、ここ！！」

そう言いながら、なぜかひたすらつまようじをソース入れに押し込めるカカ。

僕はもちろん慌てて止めた。

「なんでそんなことをするんだ！！」

「これはここなの！」

「なんで！？」

「ここにようじがあるから！！」

「そこに用事があるから……いつ思い返しても驚きだ。まさかあんな小さいときからオヤジギャグを使っているとは」

「でも、なんだかカカちゃんっぽいねー」

「そのわけがわからない主張をさも当然のように通そうとするとこがまさに、よね。つまようじがソースにどんな用事があるっていうのよっ」

「……むぐむぐ！」

「さ、次、次」

なんとかおとなしくさせたんだけど、カカはなぜかテーブルの下へ潜り込んだ。

小さい子って狭いとこ潜りたがるよなー、と思って放っておいたんだけど……

ゴン！！！

テーブルが一瞬浮いた。下にいるカカが身を起こしてしまい、頭をぶつけたらしい。

ゴン！！　ゴン！！　ゴン！！！

さらに浮きまくった。

どうやらテーブルが揺れるのが楽しいらしい。

僕はカカをなんとか引きずり出した。

「あたまいたい」

ならやるなよ。

「でも楽しいの」

「なんで」

「あたまいたいから」

僕の頭が痛くなった。とても精神的に。

「いつ思い返してもわけわかんないよなぁ。まぁ、カカって基本的にそんなんばっかだけど」

「理由もなしに思ったこと行動するところは変わってないねー」

「カカすけって、昔から変わらないのね」

「……むぐ」

「ま、そんなこと言ってるけど弟君だっていろいろと……」

「変な行動はあんたが一番だろ姉。昔じゃなくても現在進行形で」

「む、失敬な。じゃあ弟の変な過去を言ってやる」

「ほ、本当ですかっ!?」

なんでサユカちゃんが真っ先に反応するのかわからんが……

「へぇ、姉よりも変な行動を、僕がしたことがあるって？」

「うん」

「おもしろい、言ってみろ」

「野菜の皮むきあるでしょ。あれをお尻に」

「やめろおおおおおお！！！！」

「包丁を乳首に」

「やめんかあああああああ！！！」

「水道の蛇口を鼻にね」

「その台所シリーズは封印しろと何度も言っただろうが！！　いい加減にしないとこっちも寝ぼけた行動シリーズで対抗するぞっ。歯磨きを目に」

「あああああ悪かった弟よっ」

僕の渾身の抵抗によって、なんとかこの秘密の暴露は回避された。

「ふう、やっと開放された……もういいから二人とも全部言っちゃいなよ。すっきりするよ？」

『どっぷりしてしまうわ！！！』

ハモる僕と姉。

『えー』

不満そうにハモる三人。

「カカはな、小学一年のときにバケツの中にお尻を」

「まてやトメ兄、私がとっくにどっぷりしてるのに、さらに何を！」

「もうどっぷりしてるならいいじゃないかっ！！」

こんな感じでぎゃーぎゃー騒がしい一日でしたとさ。

## カカの天下８１「猫知識集」

「……む？」

「ん、どした、カカ」

毎度どうも、トメです。

買い物帰りに妹のカカと歩いている最中、カカは立ち止まって一点を見つめ始めました。

その視線の先には――猫。

「……にゃ？」

そのノラ猫はふてぶてしい表情で「あんにゃコラァ？」とカカを睨む。

しかしカカも負けずにその猫を睨み返す。

「……にゃあ」

「なにやってんだ、おまえ」

「対決」

僕が呆れながら聞くと、カカは毅然と言い返してた。

「これは宿題の対決なの」

「宿命な」

宿題の対決ってなんだ。正解したほうが勝利か。おお、まともな学生っぽい対決だ。

「というか宿命ってなんだ。その猫知ってるのか」

「こないだ私のお魚くわえて逃げてったの」

どこの魚介類一家だ。

「はだしで追いかけたら愉快なんだよ！！」

えーっと、どうやってツッコめばいいんだそのボケ。

とかなんとか思っているうちにも、カカはじりじりと猫との距離を縮めていく。

「サンペイ……勝負！」

「なんだそのサンペイって」

「この猫の名前。私がつけた」

なんか憎めない名前だなぁ。

「三度もペッて私に唾を吐いたからつけた名前」

それだけ聞くと憎らしい名前だなぁ。しかし猫って唾吐くのか。

「この……猫のくせに私のイカを……」

「ちょっと待て。おまえさっき魚とられたって言わなかったか」

「イカだって魚でしょ」

……いや、まあ、そう、言えなくも、ないか？

「でもさ、そのイカって生だったか？」

「お刺身だった」

「じゃあその猫、腰抜かしたかもな」

「なんで？」

「猫ってな、イカ食べると腰抜かすんだよ」

加熱処理したものは大丈夫なんだけどね。

イカにはビタミンＢ１を破壊する要素が入ってるから、ビタミン要求量が多い猫は正常な歩行ができなくなるんだよね。

それを聞いたカカがしばしぽかんとして……

「腰をぬかすなんて……サンペイめ。私のイカを盗んだのがそんなに恐ろしいかっ」

そう言いながら近づいたとき――カカは鼻先にサンペイの爪をく

らった。

「カカ！？」

慌てて駆け寄ると、

「……サンペイめ……サンペイめぇ……！」

「はいはい、血を流しまくりながら涙目で強がるな」

「ううう」

よほど痛かったのか、ぐずぐず泣き崩れるカカの顔を拭きながら僕は猫を睨んだ。

おのれ……我が妹を傷つけるとは不届き千万！！

僕がカカに代わっておしおきしてやる！

「はっ」

気合一閃。僕が放った「千切ったたまねぎスラッシュ」は見事サンペイの口に放りこまれた。猫にとってたまねぎは血液中の赤血球を破壊する要素があり、貧血、血尿などの症状を引き起こす可能性がある。

ふっ、買い物帰りの僕と出会ったことを後悔するがいい！

「せやっ」

さらに僕は生の豚肉を放つ。それは放物線を描いて再び見事猫の口に入った。あまりの命中力にスナイパーもびっくりだ。

猫にとって生の豚肉はトキソプラズマ症という、成猫には衰弱時以外はあまり意味がないが子猫時にはほとんど死亡するという症状を引き起こす可能性がある。

「よし……安心しろ、カカ。これでこの猫の命運は終わった」

「……どゆこと？」

僕はこの食べ物で起こされるであろう、猫の症状を語った。

カカに殴られた。

「そこまですることないでしょう！？」

「で、でもこの猫はカカを血まみれにしたんだぞ！？」

「たしかにこのサンペイは、私をスクラップにした……でもね、でもね」

スプラッタな。スクラップはやばすぎだろ。

でも、そうか。そうだよな。

いくらひどいことをされたって、尊い命だもんな。

「サンペイはね。この私に逆らったんだよ」

人の勝手で、そんな殺してしまうかもしれないようなこと、するべきじゃないよな。

「だからね、私がこの手で復讐すべきでしょう」

僕は、そんな心優しい感情を忘れ――

「だからね、それは私がするべきことなんだよ！！」

そうそう、カカ自身が――って、はい？

「さぁ、サンペイ……この牛乳を受けるがいい！！」

ざっぱぁぁぁん！！　と牛乳をぶっかけられたサンペイはたまらず逃げ出した。いやまぁ、いままで逃げずにいたこと自体おかしい気もするけど。ていうか牛乳もったいねぇ。

ちなみにカカが牛乳をぶっかけたのは多分、猫は乳糖を分解しきれずに下痢になる、ということを知っていたからだろう。飲ませずにぶっかけてしまうと単なるイヤガラセにしかならないが。

ん？　なぜこんなに僕らが猫について詳しいかって？

昔、姉が猫を拾ってくるたびにいろいろ失敗してて覚えたからさ。

その猫たち？

逃げ出したよ、全員。

さすが姉。猫にもわかるその怖さ。

みなさんも気をつけましょう。

姉に？　猫に？

両方に。

## カカの天下８２「かわゆいところ」

「そういえばさ、ぬいぐるみってあるじゃん」

いつもの下校道。

例によって例のごとく、私カカと愉快な仲間のサエちゃんとサユカちゃんは一緒に帰ってました。

まぁ、帰る際にこれまたいつものごとくサユカちゃんがしぶったけど、結局はおとなしく一緒になってる。まったく素直じゃないんだから。

「あれさ、名前つけてる人とかたまにいるけど……どういう風につけてるんだろうね」

「そういえばカカちゃんちってぬいぐるみないよね」

「はっ。どうせカカすけのことだから、あってもサンドバッグにしてすぐ捨てちゃってるんじゃないの？」

「よくわかったね」

「……え！？　ま、まじで！！」

「余命が短いから名前つけるのもねー……って、サユカちゃん、なんでそんな生ごみを見るような目でこっちを見るの」

「だ、だってぬいぐるみよっ！？　女の子の夢と希望よ！？　それ

をあんたさ、ささささサン」

「ハイ、どかーん！」

「って感じでぶん殴るなんてどうかしてるわっ」

おお……多分サユカちゃんはサンドバッグって言おうとしたんだろうけど、そこをあえてサエちゃんが「さん、ハイ」と別の言葉に、しかしそれをうまく言いたいことに繋げるとは……この二人、できる。

ん、できる？

できてる？

「ダメだよサユカちゃん！　サエちゃんとできてるのは私なんだからっ」

「……何をわけわかんないこと言ってるの」

……はっ。いかんいかん。

「そういうサユカちゃんはどうなの。まさかぬいぐるみに名前つけてたりするんじゃないの？」

私はからかうつもりで言った。でもサユカちゃんはなぜかきょとんとして……

「……え、ぬいぐるみに名前をつけるのって普通じゃないの？」

お？

お……

おーまいごっど。

「聞きましたかサエちゃん」

「聞きましたよカカちゃん」

「え？　え！？　な、なによ二人のそのゴミ捨て場に漂うような生暖かい視線は！」

「サユカちゃんて、ああ見えて意外と……かわゆいんだねぇ」

「いつも強気に見せて本当は乙女チックなんだねー」

「ちょ、ちょちょちょっちょっと！　なんでそうなるの！？」

「だってぬいぐるみに名前つけるなんてサエちゃんやる？」

「サユカちゃんには悪いけど……あんまり」

サユカちゃんは背後にでっかい「ガーン！！」という文字を背負っていた。うはは、おもしろ。

「ねね、どうやって名前つけるのかなっ」

「へ！？　いや、その、なにさっ。どうせ私は子供ですよ！」

「そんなこと言ってないじゃーん。可愛いって言ってるじゃんサユカン♪」

「勝手に変なあだ名作るなカカすけ！」

「カカちゃんの言うとおり、可愛いよ、サユカン♪」

「サエすけまで……！」

「ねね、もしかしてもしかして、好きな男の子の名前つけたりとかしてんの？　むふふふ」

なんかここにトメ兄がいたら「おまえオヤジ化してるぞ」とか言いそう。自分でもわかる。でも楽しいからよし。

「い、いくらなんでもそれは、もうやらないわよ」

「やってたことあるんだ！　うわ、はーずかし」

「うるっさいわ黙れやカカすけ！！！」

「私、誤解してた……サユカちゃんっておもしろいだけじゃなくて可愛かったんだねっ」

「そっちもうるっさいわ涼しい顔して恥ずいこと言うなやっ！！ていうかおもしろいってなにさっ！？」

「サユカンの今の顔が」

「相当おもしろいねっ、あはは」

そんな感じでにぎやかな下校。なんか日に日にうるさくなってく気がする……でも面白いし、いいよね。

それにしてもサエちゃん、本当に言うようになったなぁ。

「今のお気に入りのぬいぐるみの名前はなんていうのー？」

「……クマのぬいぐるみがヒットラー。うさぎのぬいぐるみが……桃缶」

「うわ、カカちゃんみたいなセンスだね」

あーっはっは。本当に言うようになったなーサエちゃん。

そこが好き。

## カカの天下８３「回転寿司の食べ方」

「ごちになりますっ！」

「おーう」

こんばんは。トメです。

給料日ということで、僕は気前よくカカと愉快な仲間達を回転寿司屋に連れてきていました。

と言ってもサユカちゃんは遅れてくるそうで、今は僕とカカとサエちゃんの三人しかいません。

別に隣に座ってるわけじゃないけど両手に花だなぁ。両方ともトゲと毒がありまくる花だけど。

さて、サユカちゃんはもうすぐ来るから先に食べていいとのこと。どれを取ろうかなーと流れてくる寿司ネタに視線をこらす、と。

「すいませーん。たまごください」

「すいませーん、いくらください」

……む。

「すいませーん。納豆巻きください」

「すいませーん、うなぎください」

むむむ！

「待たんかおのれら。ここは回転寿司屋だぞ。なぜに直接に注文ばっかりするのだ」

「だって時間たったお寿司なんか食べたくないし」

「やっぱり握りたてがいいかなぁと思いまして」

「おまえらなぁ……子供なんだからさ、こう、流れてくるお寿司を眺めながらどれにしよっかな～って迷って楽しめよ」

「おいしくないの食べてなにが楽しいの」

うあ、正論にも程がある。なんかムカつく。

「まぁ、結局は食べたいもの食べるわけですし、それならおいしいのを食べたいじゃないですか」

「……いーよいーよ、僕は楽しく選びながら食べるから。ちぇ」

なんとなく居心地悪くなっていじけながら、僕は流れてくる寿司しか食べないと決意する。

そんな僕にも構わず、二人は注文していく。

「すいませーん。馬の串刺しください」

馬刺しな。串って入れるだけでものすごい意味に聞こえるな。

「すいませーん、河童捕まえて握ってください」

ああ店員さん困ってる。普通にかっぱ巻きくれればいいんですよー。

「すいませーん、トロシックスください」

あああ店員さん混乱してる。普通にトロくれれば……ってなんであの店員さんポケットからロトシックスの紙取り出そうとしてんだ。ていうかなんで持ってるんだ仕事中に。肌身離さず持って当たるように祈ってるのか。うーん……どりーぃむ。

「ごめん、遅れちゃったーってなにあんたらっ」

お、サユカちゃんの登場だ。

「せっかくの回転寿司なのになんで普通に注文しまくってるのよっ」

「だよなぁ!?　おかしいよなこいつら。いやぁ、僕と同じ意見の人がいて嬉しいよ!」

素で喜んだ僕の言葉に、なぜかサユカちゃんは爆発した。

「そそそそっそそうですよねっ!!!　回転寿司はやっぱり回転しているから押すし引くしじゃなくてオスのしのお寿司ですよねっ!?」

……前から思ってたけど、この子はなんでいきなりぶっ壊れるんだろう?

「トメ兄、いきなりサユカンを破壊しないでよ」

「あれ、これ僕のせいなのか。てっきり自然現象かと」

「うわ、にぶっ」

「にぶいですねぇお兄さん」

「……なんか知らないが悪かったな」

……あれ、呼び捨て？　サユカさん呼び捨てっすか？　ま、まぁいいけどさ。

「そんなっ、トメは悪くないよっ」

「とりあえず座って。さ、遠慮しないで食べな食べな」

「――ど、どどどうしようご馳走になるのはいいんだけどどのお寿司食べればいんだろうそうだどうせならここで少しでも好印象になるものを食べるべきよでもお寿司で女の子らしいのってどれよどれを食べればいいのトロは論外高いから嫌な女と思われる玉子はなんか安っぽい女と思われたら嫌だしいくらは粒粒してるし（？）女の子っぽいお寿司はなによどうするわたしどうするわたしどうするわたし」

……？　なんか小声でぶつぶつ言ってるけど聞き取れないなぁ。

と、サユカちゃんが動いた。

手を伸ばした先には……チョコレートケーキ！！

「うわ、邪道だ」

思わずぼそっと呟いた一言で。

爆発以降、周囲に熱気を振りまいていたサユカちゃんは……なぜかプシューとしぼんだ。

……あれ、やっぱこれ、僕のせいか。

その後、僕はカカとサエちゃんにたっぷりと怒られた、なんかデリカシーがどうとか乙女心がどうとか。

まぁ、結局何を言いたいかよくわからなかったけど。

……そこ、鈍いとか言うな。

## カカの天下８４「名物を考えよう」

『この市の名物をつくって売り出そう！　街を活気付けるものならジャンル問わず募集！』

こんちわ、トメです。

帰ってきて早々にカカから突きつけられたチラシにはそんなことがでかでかと記載されていました。

「これ、応募しよう」

「はぁ、なんでまたそんなことを」

確かに僕らの住んでいるこの市には取り立てて名物というものは無いのだけど……そんな普通の街を僕はわりかし気に入っているのでわざわざ無理して名物なんか作らなくてもなぁ、と思う。

「これが採用したときの賞品」

「なになに……高級ネコマタセット」

なるほど、いつの間にかコレクションになってしまった高級シリーズブック（ゲットしたものは写真を撮ってアルバムに入れている）に新たな一ページを加えるつもりか。

……ん？

「ネコマタってなんだ？」

「ね、気になるでしょ」

「や、たしかに気にはなるけど……それを見るためだけに応募するのか」

まぁ、応募したら必ずしも採用されるってわけじゃなし。僕がハガキ書くわけじゃないし、別にいいか。

「で、どんな名物を作る気だ？」

「やっぱ定番は食べ物だよね」

「ふむ。ここには特に名産ないしなぁ。あ、そういや昨日テレビで見たけど、富山県にはブラックラーメンなんていうのがあるらしいぞ。なんか醤油で真っ黒で塩っからいらしい」

「それ、おいしいの？」

「ネタでしかないってばっちゃが言ってた」

「ばっちゃって誰？」

「さぁ？」

「うちにおばあちゃんなんかいたの？」

「見たことないなぁ」

……ん？　なんかすごいこと言ったか僕？　キノセイか。

「まぁいいや。とりあえずブラックだね。ブラック、ブラック……ブラックチャーハンとかどう？」

「どっから思いついたのかわからんが……ちなみになんで黒いんだ？」

「チョコとかあんことかで」

それは確かにネタとしての名物にはなるかもしれない……でもそういう炭水化物と甘いものという意外系組み合わせ品は名古屋あたりで名物店がすでにあったような。

「とりあえずこれはメモメモ。さ、次いこう」

「と、言われてもなぁ」

「街を活気付ける、っていうことは、つまりはこの街の魅力をアップさせるんだよね……」

「あ、地域限定の番組作るのはどうかな。面白すぎたら移住者増えるかもよ」

「番組かぁ……アカレンジャー、ブルーレンジャー、グリーンレンジャー、三人合わせて光の三原色レンジャー！！　とか？」

「なぜに戦隊ものかは置いといて、なんか三人合わせたのが長いな。理科レンジャーとかどうだ？」

「リカレンジャー……」

カカはすこしだけ黙考すると、おもむろにポーズを決めながら叫んだ。

「古手梨花！」

「リカちゃん人形！」

「リッカー！」

「アメリカ！」

「理科の授業！」

「五人揃って、リカレンジャー！！」

うーあー、なんだそのカオスな戦隊。

五人とか言いつつ人間は一人しかいないし。しかもわかる人にしかわからない名前だし。

ひぐらしなオヤシロ様と、少女チックな着せ替え人形と、バイオでハザードな化け物がアメリカン国家と揃って理科の授業をするのか？　どんな番組になるんだ……

あれ、なんか興味わいてきた。本当にできるんなら面白いかもしれない。

「メモメモ……他は？」

「んー、とにかくこの街ならではの変なものでもいいんだよな」

「うん、珍しければいいんじゃないかな」

「一つ思いついた」

「なに？」

「うちの姉」

「あー、なるほど。それいこう」

そんなこんなで、応募するはがきはできあがった。

果たして僕らはネコマタセットを手に入れることができるのか。

わかるのは来月だそうです。

## カカの天下85「幸せな病気」

誕生日、それは特別な日。

お母さんとどこかへお出かけして、最後にデパートの屋上のレストランでケーキを食べる。それが毎年のお決まりのコースだった。

私はお気に入りのチーズケーキを頬張りながら、お母さんの「おめでとう」という言葉を聞く。家に帰ればやっとお父さんが帰ってきて、一緒に夕飯を食べる。

それが、お決まり。

お父さんは仕事で忙しいからお出かけには来ない。でも、夜遅くなるけど帰ってきてくれる。

お母さんもあまり家にいないけど、この日だけは一緒にいてくれる。だから寂しくなんかなかった。

だから、私は笑顔でいられた。

だから、誕生日のその日にお母さんがこなかったとき、笑顔は消えた。

その日もお母さんがくるのを楽しみにうきうきと待っていて。

でもやってきたのは親戚のおばさん。

おいで、というその声に、何度も遊んでもらったことのある人だったから私は逆らわなかった。

車に乗せられて、もしかしたらお母さんもこの先にいるのかなぁ、おばさんも一緒に祝ってくれるのかなぁなんて、そんな幸せなことを夢見ていた。

連れて行かれたのは、おばさんの家。

お母さんは？　という私に、おばさんは答えた。

「今日から私があなたのお母さんよ」

何を言われたのかわからなかった。

でも、おばさんの長い長い説明を聞くうちに一つのことだけはわかった。

今日は、お母さんとチーズケーキは食べられないのだと。

あとから聞いた話だと、私が知らなかっただけで実は両親の仲が悪く……いつの間にか離婚したらしい。本来なら二人の娘である私はどちらかの家に引き取られるはずだったのだけど、厳しいお父さんの家の当主（意味はよくわからない）という人がそれを許さなかった。

「夫婦仲も維持できないような人間に孫を任せられるかっ！！」と

激怒したらしく、親戚のおばさんの家が私の引き取り先に選ばれたそうだ。

おばさんも、その夫のおじさんもいい人達だった。留守がちだった両親と違って家にいることが多かったし、可愛がってくれた。

いや、可愛がろうとしてくれた。

でも私はそれを拒んだ。

あまり会えないお父さんやお母さん。それでも私は笑顔でいた。誕生日だけは絶対会えるから。私が愛されていると確認できるから。

でも、その絶対が終わった。

もう、二度とこないらしい。

だから笑顔は消えた。

何もかもが灰色。視界に映るすべてが無意味。私に関わる全てが面倒。

多分、私は拗ねていたんだと思う。

お父さんとお母さんに二度と会えない、なんていう実感はわかなかった。だってあの二人は普段からほとんど家にいなかったから。

でも、誕生日を祝ってくれなかったという寂しさや苛立ちは実感できた。

話しかけてくるおじさんもおばさんも無視。

転校した学校でもほとんど喋らず、友達もできない。

苛めてくるクラスメイトも気にならない。

助けてくれたクラスメイトも目に入らない。

全部どうでもいい。

母の日にアクセサリーを作ってプレゼントしようと思って始めたビーズ遊びだけを、意味もなく無気力に、ただ続けていた。

そんな私に。

もう一度誕生日がやってきた。

一緒になったばかりのおじさんやおばさんは知らないだろうし。

友達もいないから誰にも教えていない。クラス名簿でも見ない限りは誰にもわからないだろう。

どうせ今日も誰にも祝われずに終わるんだ。

突然お父さんとお母さんが訪ねてきてくれるなんてありっこない。

「去年はごめんね?」なんて謝ってきて、手にはあのレストランのチーズケーキがあって、私の機嫌をとりながら、ずっと謝りながら、これからは一緒に暮らそうなんて言ってくれるんだ。

……ねえ、言ってよ。

なんで言ってくれないの？

お父さん、お母さん……

やだよ。

寂しいよ。

一人は嫌だよ。

私、いい子で待ってたよ？

誕生日に誉めてもらえると思って我慢して、ずっと待ってたんだよ？

だからさ、言ってよ、謝ってよ。

一緒にいてよ……

私、もう一人は嫌だよ……！

誕生日、おめでとうって、言ってよ……ただそれだけで、私は――

何か、聞こえた。

枕に埋めていた顔をあげる。今のは家のチャイムだ。

あれ、私は……鈍い頭を回転させて記憶をたどる。そうだ、私は

たしか……学校から帰ってきて、不貞腐れてすぐに寝ちゃったんだ。

下から音がする。誰かきたみたいだ。

……誰か、きた？

まさか。

淡い期待と、そんなわけがないという現実的な思いを胸に抱きながら、私はおそるおそる下へと降りていった。

ゆっくりと、玄関のほうを見る。

そこには、どこかで見たようなクラスの子。

……そうだよね。

そんなわけないよね。

そんな都合のいいこと――

「あ、サエちゃん。誕生日おめでとー」

……え。

拗ねていた。

もう誰も、私の誕生日なんか祝ってくれないんだって。

だから、その言葉を聞いたら、涙が出た。

表には出さなかった。

私の心は凍ってたから。

だから、その氷の中で涙を流した。

その涙は少しずつ、私の心を溶かしていく。

今日が誕生日ということに初めて気づいたおじさんとおばさんが慌てふためいて、それをあの子がおもしろそうに見て笑ってる。

気の強そうな子。

快活そうな子。

きっとクラスでも人気者だろう。

そんな子が、どうして私なんかを気にかけてくれたかはわからない。

言葉にできないこの思いをなんて呼ぶのかは、わからないけど。

なんとなく思うことが一つ。

この子とは、仲良くなれそうな気がした。

「……なんとなしにカカすけとどうやって仲良くなったのか聞いてみたけど……おもっ！　話が重すぎっ！！」

話を聞き終えたサユカちゃんは予想外に長い話に面食らったみたいだ。

「てかさ、わたし聞いてよかったの？　サエすけ。その、そんな話」

「あはは。言いたくなかったら言わないよ～」

本当の両親のことを誰かに話したのはこれが初めてだった。まだカカちゃんにも言っていない。両親に会えないとかそういうのは私的には過ぎたことで、別に言うのに抵抗はないのだけど……カカちゃんのくだりは、少し恥ずかしい。

「はぁー、そんなことがあったんならそりゃ仲いいはずだわ、君ら」

「でもこれは単なるきっかけだし、それが理由でカカちゃんと仲良くなったわけじゃないよー。なんとなく、いい友達になれそうだなーと思ったから仲良くなったの」

「ふぅん、でもほら、そういうのがあるのとないのとじゃ、やっぱ違いあるじゃない？」

むくれたようなサユカちゃんの言い方に、私は少し笑った。

「サユカちゃん、心配しなくてもサユカちゃんも友達だよ？」

「な、なにも心配なんかしてないわよっ！！」

そんな風に意地を張りつつ、おじさんとおばさんがいない今日に、寂しくないようにわざわざ泊まりにきてくれたところなんか可愛くてしょうがない。

「いい子いい子、寂しがることないでちゅよー？」

「ええい頭を撫でるなっ！　君、さっき聞いてた話とほんと違うわねっ。根暗だったなんて嘘でしょっ」

「あはは。ただ単にカカちゃんがうつっただけだよー」

「あいつは病気かっ」

だとしたら多分、とても幸せな病気だろう。

うん、私は幸せ。

お父さんがいなくても。お母さんがいなくても。

誕生日に「おめでとう」と言ってくれる人がいるんだって、ちゃんと気づくことができたから。

「はいはい、もう遅いし寝まちょうねー。一緒のお布団で寝まちゅかー？」

「だーっ、もうやめいその喋り方！」

「あはははは！」

ほんと、幸せ。

## カカの天下８６「サユカの任務、会話編」

「考えてみたんだけど」

「なにを？　サユカン」

ちわ、カカです。

今日はサエちゃんが用事があるということで、いつもの三人ではなくサユカちゃんと二人でＩＮ我が家です。

「わたしってさ、トメさんとまともに話したことないのよね」

どうでもいいけど呼び方は「トメさん」に落ち着いたみたいだ。

今までいろんな呼び方してたけど。

「やっぱり自然に会話できるようにならないと始まらないわよねっ」

「そうだね。トメ兄の前だとサユカン壊れるし」

「だからさ、カカすけ。なんかトメさんとうまく会話できる話題ってないかな」

「……話題？」

「君、いつもトメさんと暮らしてるんだからさ、話しやすい話題とかすぐ出てくるでしょ？」

そんなこと言われても……いつも一緒にいるんだからどんなこと

を話そうか、なんてわざわざ考えたこともないしなぁ。いつも自然に思いつくまま話してるだけだし。

「じゃあさ、トメさんの好きなものってなに？　それをヒントに話題探すわっ」

「トメ兄の一番好きなものはわかってるけど」

「お、さっすが！　なになに？」

「私」

「却下」

うわ、即決。

「そんなタワゴトはいいから、はい、次」

「サユカンも結構容赦ないね……サエちゃんも最近そんなだし。あーあ、なんで私の周りはこんなんばっかかな」

「あんたが一番容赦ない性格してるくせに何言ってんの。はい、他にトメさんの好きなものは？」

「枝豆かな」

「え、枝豆？　そんなのが好きなの？」

「たまーにビールと一緒に幸せそう食べてるよ」

「そっか……ふむふむ。他には？　よく話題にすることとか」

「んー、会社にいる同僚のおじいちゃんの話はよく聞くかな」

主に愚痴だけど。

「ふむふむ……他には？」

「んー……私ってこう見えて思いつきで喋る人だからよくわかんないんだよねー」

「こう見えるも何も見たまんま、カカすけはわけわかんない星の適当類、破天荒目、私が天科の生き物じゃないのっ」

なにその分類。私って地球の哺乳類のサル目のヒト科の人間というイキモノじゃないんでございましょうか？　というか私が天科ってなに。

「とにかく……ありがと。これらのヒントを元に、とりあえず突撃してみるっ」

「おー、がんばってー」

ひらひら手を振って見送って……なんとなく気になってついていってみる。

居間を覗いてみると、サユカンが必死にトメ兄に話しかけていた。

「枝豆っていいですよねっ、皮をむく瞬間がたまりませんよね！」

「そうか？　僕は単にビールとの相性いいから好きなだけなんだけど」

む、ビールの味がわからない私らお子様には不利な話題だ。サユカン、話題転換だっ。

「そ、そういえばトメさんはフサフサのおじいさんとツルツルのおじいさん、どっちが好きですか？」

「え、いや、どっちも別に……」

「じゃあ可愛いおじいちゃんと格好いいおじいちゃんは！？」

「は？　いや」

「ビューティフルなおじいちゃんとデンジャラスなおじいちゃんと不敗無双のおじいちゃんは！？」

すごい、おじいちゃんパラダイスだ。

「おじいちゃん系は基本的に苦手だなぁ……あのじじぃ思い出して」

あ、トメ兄の顔が歪んでサユカン困ってる。質問も質問だしなぁ……ああ、そっか。見た目平静を装ってるけど実は中身は壊れてきてるな、サユカン。

用意した話題がことごとく役に立たないとわかり、窮地に立たされるサユカン。

と、そこでサユカンは切り札を出した！

「と、ところでカカすけなんですけど……」

「なに、あいつまた何かやらかした？」

「いえ、何かといえばいつもやらかしてますけど……」

おい。

「だろうなぁ。今日は何した？」

「えっとですね、先生の口にちりとりを――」

「まったくあいつは――」

私の武勇伝を聞いて、呆れながらもペラペラと喋りだすトメ兄。

やっぱ私が大好きなんだなぁ、この兄は。いつまでも妹離れできないんだから。やれやれだ。

や、別に嬉しくないよ私は。

うざいだけだし。ほんとほんと。

こほん……サユカン、会話できて目的は達せられたのに釈然としない顔してる。

まぁ、仕方ないよね。話題は私だし。

恋愛って難しい。

……ある意味、私の恋愛のほうが難しいけどね。

はぁ……サエちゃん。

## カカの天下87「ドロドロジュースを作ろう」

「どろり濃厚ジュースが飲みたい」

「……は？」

こんにちは、トメです。

まぁ説明するまでもなくいつものことですが、カカが唐突にそんなことを言いました。

「ほら、昔飲んだことあったでしょ？」

「……ああ、なんか姉が「最近の流行はこれだ！　きーえるひこーきーぐもー♪」とか言って持ってきたやつな」

「それが飲みたい」

「買ってこいよ」

「売ってないの、だから作って」

「勝手なやつだ」

「ねぇそれシャレ？　『買って』と『勝手』」

「うるさい」

言ってからしまったと思ったさ、くそぅ。

「カカって本当にさ」

「あ、またシャレ？」

「どこが」

「カカって、か『かって』」

なんて答えよう。

A　揚げ足とるな。

B　よく気づいたな。

C　バルサミコ酢。

なんだこのCの選択肢。

すごく気になる。

よし、じゃあCで――

「まぁそれはいいとして」

時間ぎれかよっ！！

見たかったのに……バルサミコ酢。

「どろり濃厚ジュースつくって」

「どうやって作るんだよ」

「ジュースをどろりと濃厚にするんだよ」

「……いや、それはわかるが」

「どんな手を使ってもいいから作って、楽しみにしてるよ」

「……わかりましたよ。お嬢さま……」

一作品め。

「ほい、どうぞ」

取り出したるは濃厚というわりには色が薄めのオレンジジュース。

「これ、ほんとにどろり濃厚？」

「試しにコップ揺らしてみ」

言われたとおりコップを揺らしてみると、オレンジの水面はひどく鈍重に波をつくる。確かにどろりとはしていそうな感じ。

「……なに入れたの？」

「サラダ油」

「却下」

「どんな手を使ってもいいって」

「罰としてトメ兄が飲みなさい」

「ちょ、ま、まてなにす――がぼっ」

二作品め。

「ほい、どうぞ」

取り出したるはピンク色のジュース。中には小さく果肉が混じっていて、わりと正統派？　なジュースに見えなくもない。

「これはどんなオチがあるの？」

「オチとか言うな。さっきのと違って今度のはわりとマジメに作った」

こんなジュースを作ろうとしている時点でマジメという言葉からは程遠いような気もするが気にしてはいけない。

「まぁ飲んでみろって」

言われたとおり口をつけてみるカカ。

「あ、結構おいしい」

「だろ」

「あんまりどろどろしてないけど」

「そうか？　うーん……やっぱそれってコップじゃなくて、もう少し大きい器でフォークやスプーンで果肉と一緒に飲むのがいいんだろうなぁ」

「これ、なんなの」

「ん？　ああ。牛乳の中に苺と砂糖を入れてな、苺をフォークで潰すんだよ。苺は柔らかくなって牛乳吸い込んでおいしいし、牛乳も苺の果汁を吸い込んでおいしくなるという素晴らしい技だ」

子供のころに僕が好んでいた食べ方だ。

「でもあんまどろどろしてない……」

「希望に添えなかったか？」

「そうだ！　砂糖じゃなくて佐藤君を潰して入れれば！」

「誰だよその可哀想な佐藤君！！！」

「隣のクラスの男子。最近さ、「おまえ生意気だぞ、潰してやる！」ってケンカ売られたから」

「や、だからって潰して食べるのは」

「きっとドロドロだよ？」

たしかにドロドロにはなるけどさ！　いろんな意味で！！

なんだかんだ言いながらも美味しかったらしく、カカは結構ご機嫌だった。

## カカの天下８８「サユカの任務、手繋ぎ編」

「なんとか会話は達成できた。次のステップよっ」

「あれ、達成できたって言うのかなぁ。他の女の話題で」

「言うなカカしゅけっ」

「しゅけ？」

「……噛んだ」

どもども、カカしゅけと申します。

なにやらヒートアップしているのは我が友達、サユカンです。この間、愛するトメ兄とまとも（？）な会話を果たしたということで、次のターンへ移りたいそうです。ずっとサユカンのターンです。ところでターンってなに？

「具体的にはなにすんの」

「心が触れ合ったあとは身体が触れ合うのよっ」

「やーらし」

「ちがうっ」

ナニが違うんだろうか。

「そういう意味じゃなくて」

「どういう意味？」

「……えと」

「おませさん」

「どっちがだっ」

多分どっちもだ。

「手よっ。手をにぎるのよ。古今東西、身体が触れ合う最初の一歩は手を繋ぐのだと決まっているのよ」

「サユカンてさ、結構少女趣味だよね」

「やかましいわっ。とにかく協力しなさい」

「協力ってなにするの。そこまで言うからには夜も寝ないで昼寝して考えてきたんでしょうね」

「ふふん、甘いわね。夜も寝たし昼も寝たし、なんと授業中も寝たわよ」

寝てばっかりだがや。

「とにかく、私は適当にやるからカカすけも適当にフォローなさい」

「うわー難しい」

そんなわけで。

トメ兄とご対面したサユカンは、いつものごとくガチガチに固まりながらもなんとか会話してる。こないだので自然な会話は克服したって言ってたけど……あんま変わってないんじゃないかな。

さて、それにしてもどうしよう。

……要は、手を握らせればいいんだよね。

「トメ兄、まだサユカンと正しい挨拶してないんじゃない？」

「は？　挨拶ってなんだ今更」

「トメ兄甘いよ、サユカンは前のサユカちゃんじゃないんだよ。サユカンなんだよ？　呼び名が変わったらパワーアップして人格が変わってもおかしくないでしょ。なら改めて挨拶するのがスジってもんでしょ」

「おまえ、相変わらずわけわかんないなぁ」

私もそう思う。

「そんなわけで、ほら。握手握手」

ようやく私の意図がわかったのか、ボーっとしていたサユカンはようやく再起動してあたふたと手を差し出した。

面倒くさがりのトメ兄なら細かいことを気にせず、とりあえずは私の言うとおりにしてくれるはず。

ほら、すんなりとサユカンの手を握った。

これにて一件落着。

「これからもよろしく～」

ぶんぶんと勢いよく上下に降られる二人の手。いやーラブラブ。

ラブラブ？

なんかサユカンの視線が「どこがどうラブラブなんじゃボケこらわしが望んどるのはこんな繋ぎ方じゃないんじゃガタガタいわすぞコラァ」って言ってる……

なんてわがままな。

「トメ兄、その繋ぎ方じゃサユカン不満みたい」

「そうなのか？　どうしろと」

「手の繋ぎ方を逆にしてみればいいんだよ」

トメ兄は少し考えて、一旦サユカンの手を離してもう一度握りなおす。

なんというか、こう、男同士がタッグを組んで「よろしくなっ」

って感じにがっしりと。

わかりやすく説明すると、恋人同士の手の繋ぎ方を上側に持ってきた感じだ。わお、ラブラブ、というかパワフルッ。

サユカンが視線でなんか言ってる……でもまぁいいじゃん、繋げたっちゃ繋げたんだしさ。なんだかんだでさっきから頬赤らめて幸せそうじゃん？

……あれ、なんか腹たってきたような。

「あ、ごめん」

「あつううううううう！！！！」

なんとなくトメ兄に向かってお茶をこぼしておいた。

なんとなく、そう、なんとなく。

深い意味はないからね。

## カカの天下89「タケダVSサユカ」

ごぶさたしてるな皆！　そう、俺さ。カカ君をひたひたと追い続けるタケダさっ！

……む？　どこからともなく「ひたひたってストーカーちっくだなー」とか「自分で名乗るのに苗字なのはどうなんだろー」とか聞こえたような気がする。気のせいかな。トメさんの声に似てたような……まぁいいや。

とにかくだ、由々しき事態が進行している！

俺の好きなカカ君に悪い虫がついているのだっ！

俺はカカ君のクラスをそっと覗き見る……そう、四年生になる際に俺とカカ君は離れ離れになってしまったのだっ。これぞまさに運命の悪戯……なんて悪戯小僧なんだ運命というやつは。小僧のくせに。

ん？　「相変わらず無駄に難しく考えるなー」と聞こえた気が……気のせい気のせい。

とにかくとにかくだ！

あれだ、そう、今まさにカカ君とサエ君に話しかけているあいつ、サユカとかいう女だっ。

なんなんだあいつはっ。やたらと偉そうに二人と会話して……あれが世に言うアゲカツとかいう類なんだろう。なんだかおいしそう

でもあるが。

……はて、「難しい言葉知ってる割にカタカナ系弱いなー」と誰か言ったような……やはりトメさんかっ。壁に耳あり障子に目あり、割れ目にトメさんだ。

……っと、危ない危ない。どうも焦りすぎて話がそれまくってしまう。

急いてはことをし損じる。慌てない慌てない、一休み一休み、年寄りに冷や水。

よし、最後のだけ意味わからないが落ち着いた。

さあ、行こう。

不良退治だっ！！

「たのもー！　カカ君！」

「たのまれない誰あんたまぁいいやどっかいけ消えろ」

あ、相変わらず隙のない弾幕だ……！

だがしかし、それに怯んでいる場合じゃないのだ！

カカ君を助けなければ！

「そこの君！　サユカ君と言ったね」

「なによ君。しょぼい顔だね」

「しょ……！　ま、まったく本当に口の悪い不良だなっ！　俺はな、カカ君のためを思って注意しようとして来たんだ」

「注意？　って、なによ」

「いいかい？　君のようながさつで」

がん！

「口が悪くて目つきが悪くて」

がん！　がーん！

「女らしさも可愛げも欠片もないやつがカカ君に近づくなっ！！」

がーーーーーん！！

でかでかとそんな言葉をバックにしてショッキングさを表している彼女は、俺の言葉に打ちのめされたらしい。ふ、ざまーみろ。

「さあカカ君。こんな不良は相手にしないで――」

「なんてこと言うのこの名無し！！」

「そうだよ名無し！」

「な、なんだよカカ君もサエ君も……というか名無しとはなんだ！聞きようによっては名前に聞こえるが字で見るとすごくせつない

ぞっ　俺の名前は」

「わけのわからないことをほざくな下郎！　あんたね、今の言葉撤回しなさい」

「そうだよ名無し。今のはいいすぎー！」

「な、何をだよ」

「サユカちゃんより私のほうががさつだよ！」

「カカちゃんのほうが口も目つきも悪いよ！」

「え、そこなの！？」

カカ君が自分で言うのは百歩ゆずっていいとしてサエ君ひどくないかっ！？

「それにね……あんたの目は節穴？　そうだね節穴なんだね。この節穴名無し」

なんですかその声に出して読めば一応ありそうな名前！！　ふしあなって苗字になしって名前！？

「あれを見ろっ」

カカ君の指差す先には……蹲っているサユカ、君？

「……ぐずっ」

「普段強気なのに意外と打たれ弱くてすぐ泣いちゃう！　こんなかわゆい子を捕まえてあんたは何を言ってるの！？」

……う、うう……なんとなく言い返せない……！

「これぞ萌えー」

あれ！？　なんかサエ君がフシギな発言しませんでしたかっ！？

「というわけで、節穴名無しが言ったことなんて全部間違いなんだよ、サユカン」

「そうそう、サユカちゃんは可愛いよ？　だから泣き止んで……あ、これが邪魔なんだね」

ん？　これって……サエ君の目線の先は……俺？

「カカちゃん」

「うん、これね」

「排除」

「了解」

……なんですかその簡潔すぎる会話こわすぎ――

ドス、メキャ！　ボコ！！　ボキッ！！！！

チーン。

タケダは死んでしまった。

「おお、タケダよ。死んでしまうとはやっぱり情けない」

「やっぱりとか言わないでくださいトメさん！」

天から降ってきたトメの言葉で突っ込むために自力で復活。

しかし目を開いたときには教室には誰もいませんでしたとさ。

るーるーるー。

がんばれタケダ。

## カカの天下９０「トメ兄死なないで（笑）」

「トメ兄ってたばこ吸わないんだね」

「ん」

こんちわ、トメです。

風呂上りにビールと枝豆というなんともオヤジくさい幸せに浸っていた僕は、同じくお風呂あがりのカカにそんなことを言われました。

「なんだよいきなり」

「や、なんかさ、お酒とたばこってセットなイメージがあるから」

まぁ子供にとっては似たようなもんか。酒、たばこは二十歳からとかいう文句もよくあるし、どっちも子供には無理だというのは変わらないし。

「んぐんぐ。でさ」

「ってーおまえさんは何を飲んどるんだがやっ!?」

「泡麦茶」

「どこのオヤジの返し方だ!?　っていうかさらに僕のビールをあおろうとするなっ」

「えー。おいしいのに」

おいおいおい……小学四年生からビールはまずいだろーっていうかおいしいってホントかよー大抵はじめてビール飲む人ってまずいって言いつつ飲んでるうちにおいしくなっていうくっていうのが定番なのに……！

「小学生にはまだ早い！」

「えー、お姉のやつは小一から飲んでたって」

「あれは人間じゃないからいいんだ！　カカ、おまえは人間だろう」

「そのつもり」

「じゃ、あんなのを見習っちゃダメだ。人間じゃなくなるぞ」

「じゃ姉ってなんなの」

「化け物とか悪魔とか人外とか夜叉とか般若とかオークとかゴブリンとかサイボーグとか未確認阿呆物体とかそういう類だ。カカも後ろ指さされたくはないだろ？　人としてちゃんと見られたいだろ？」

「……ん、それは、まぁ、そだね」

「わかってくれてお兄さん嬉しいよ。ちなみに姉はいま言ったうちのどれだと思う？」

「オークかな」

ふむ、いいチョイスだ。オークという言葉が指すものは歴史をたどればいくつかあるのだが、もっとも多く知られているのは『人の姿をしていて創造ができず破壊しかできない存在』だろう。ゲームとか物語で出てくるやつだ。

ちなみにオークとゴブリンは語源を辿れば単なる別名で、ゲームでは分けられることが多いが実は同じ存在のことを言う（豆知識）

「うーん……あれだな、生産的なイメージまったくなくて攻撃的なイメージしかないとことかぴったりだな」

「……トメ兄も言うことに容赦ないよね」

「おまえらの兄弟だからな。んで、最初の話題はなんだっけ」

「トメ兄はたばこ吸わないんだなってこと」

「ああ、あんな身体に悪いもん吸えるか」

お金かかるし。

「よかった……あれ、吸いすぎると死んじゃうんだよね」

「まぁな。簡単には死なないけど」

「私、トメ兄が死んだら、困るよ……」

おっ、なんか、嬉しいこと言ってくれるじゃないか。

「トメ兄が、もしいなくなったら……」

おおお。瞳を潤ませて可愛いことを言ってくれるじゃないか！

「稼ぎがなくなる」

可愛くねぇじゃねぇか！！　そりゃそうだけど！

「あ、あのさカカ。他になんかもっと、ないのか？」

「あ、ツッコミがなくなる」

「ぅおーい……」

「あ、そうそう。いくらツッコミだからってさ、誰彼構わずにテレパシーでツッコむのやめてよ」

「おまえは何の話をしているんだ」

「ん、ちょっと作者――じゃなかった、んと、なんか上の人の話」

「上ってなんだ上って」

「読し――コホン。んでさ、たばこ吸わないでよ。私あの煙キライなの」

「煙キライって……誰か身近に吸ってる人いるのか？」

「サエちゃん」

「うそっ！？」

ま、まさかまさかそんな!?

あのおとなしい子がそんな不良行為を……まさかそんなはずは。いやいやしかし今の世の中何が起こってもおかしくないぞ「あの人があんなことするだなんて信じられない」なんていうことはよくある話じゃないかでもあの子に限ってそんなうそでもカカは結構前から嘘つくのやめたしそう簡単に嘘をつくはずないしむむむ……

「なぁ、カカ。その話は本当か?」

「嘘だよ」

「嘘なのかよっ!?」

「サエちゃんを疑うなんて……トメ兄の人でなし」

「疑わせるような嘘をつくのはどうなんだコラ」

「や、私とサエちゃんどっち疑うのかなーと」

「子供のくせに高尚な実験するな! まったく……もう嘘つかないと思ってたから油断した」

「大丈夫。トメ兄にしかつかないし」

「……それもどうなんだ」

信用されてるのかどうでもいいと思われてるのか……

「どうでもよくなんかないよ」

「うあ心を読むな！」

「だってトメ兄がいないと」

「いないと？」

「稼ぎがなくなる」

……そこ戻るのかよ。

## カカの天下９１「彼女の生きがい」

「こんばんはー、トメさん」

「おやサカイさん。久しぶりじゃないですか」

ちっす、家でのんびりしていたトメです。

カカも遊びに行って何もすることがなくテレビを見ていると、しばらく見なかったサカイさんが訪ねてきました。

「どうしたんですか？」

「いえそのー……最近ずっと家に閉じこもっていたもので、たまには外に出て人と話さないとと思いましてー」

「へぇ……まぁ上がってくださいな」

サカイさんを居間に通して、適当にお茶とお菓子を出して座る。

「それで、閉じこもって何してたんですか？」

「ええ、その、主にネトゲを」

「ネトゲ？　って、ネットゲームですか？」

「はいー。他にもアニメとかを気になった橋から端まで全部拝聴したりー。ネット通販でなんでも届くなんて今の世の中は便利ですねー。ハマってしまってからは外にも出ずにそればかりになってしま

いまして」

……それなんてニート？

「このままでは人としてダメになってしまうと思い、なんとか重い腰をあげてここまでやってきたのですー」

「重い腰、ですか」

「はい……パソコンの前から離れられなくなってしまって……それはもう日本の将来を腰に背負ったくらい重かったですー」

「……重そー」

というか腰なのに背負うとはこれいかに。

「というわけでートメさん。こんなダメ人間の私はどうすればまともな人間になれますか？」

なんかディープな相談がきたな……ええと、そういえばこの前サカイさん仕事辞めたんだよな。ずっとそのままだろうから……

「とりあえず、なんでもいいから働いてみてはいかがでしょう」

「面倒ですー」

「あんた本当にダメだなぁ！」

近所の優しいお姉さんというキャラというかポジションというか……そういうものが昔はあったのに、いまは見る影もないなぁ……

「でも前はそんな無気力なゴミ人間じゃなかったですよね？」

「ううー、容赦ないですトメさん。でもそうばっさり言ってくれたほうがダメなこの身には効きます……そう、自分でもそう思ってるしー、ぶっちゃけ世間体とかもうどうでもいいから気になりません」

「気にならないんなら効いてないやん」

「そう、前はやる気があったんですー。でも生きがいがなくなってしまったというか」

「へぇ、生きがい」

「なくなってはいないんですけど……なんていうか、その生きがいを確認できないとやっぱりやる気も起きないというか……」

そういやサカイさんの身の上話、前に聞いたっけなー。能天気にダークなこと言うから事実なのか疑問だったけど……

たしか旦那さんと別れて、事情があって子供にも会えないんだっけ？

「ただいまー」

何を言おうか迷っていると、騒がしい足音とともにカカが帰ってきた。

「トメお兄さんこんにちわ、お邪魔しますー」

「と、トメさんこここここ」

「こけっこっこー？」

「こけこっこんにちわ、って何言わせるのサエすけ！？」

ぎゃーぎゃー騒ぎながらいつものトリオはカカの部屋へと進軍していった。

「む、そういやカカのやつサカイさんに挨拶してな……い、って、サカイさん何してんの」

はて、今の今まで僕の前に座っていたサカイさんはいつの間にか台所のほうへと引っ込んでいて、そこから顔をちょこんと出してこちらを伺っていた。

こちらを？　いや。

なんだかカカたちが去っていったほうをじっと見ているような……

「サカイさん？　どしました」

「……へ！？　はー、いえー、そのー」

「なんでそんなとこに隠れてるんです？」

「いえ、その、気配がしたので咄嗟に」

忍者かあんたは。というか引きこもってたくせに身のこなし素早いな。

「せっかく来たんですしカカにも挨拶させますよ」

「結構です！！」

即答だった。

不自然なまでに。

自分でもそう思ったのだろう。サカイさんは取り繕うようにブンブンと手を振り回しながら、

「や、あの、ですねー。ほらー、私仕事探さないといけないですしー」

「へ？　さっきやる気でないって……」

「いえ、出ました。うん、やっぱり生きがいの確認は大切ですよね」

「は？」

「でわ、私は仕事探してきますのでさよならです。今日は相談に乗ってくれてありがとうござ――」

「トメ兄、お菓子あるー？」

どたばたと騒がしい足音が聞こえた瞬間、サカイさんは逃げるようにかき消えた。まじで忍者みたいだ。

「あれ、どったのトメ兄、ハトと豆鉄砲食べてるみたいな顔して」

「……いや、なんだったんだろう」

首を傾げるカカサエサユカのトリオを尻目に、僕は「それを言うなら豆鉄砲をくらったハトだろう」というツッコミも忘れてきょとんとしていた。

## カカの天下９２「前科一犯（ほんとは何犯？）」

それは警察からの電話から始まりました。

内容は、カカを預かっているから交番へ引取りに来てほしいとのことです。

可愛い妹が警察に……その電話を受けた僕、トメの反応はこうでした。

「ついにやらかしましたかっ！？」

電話向こうの無言っぷりが印象的でした。

「あ、トメさん！　わざわざご苦労さまです！」

まるで上司に会ったときのようにビシッと敬礼をとったのは姉の舎弟の警官、シュー君だ。考えてみれば警官に身内がいるって実はとんでもないステータスではなかろうか。

「ええ、そちらこそ。それで、カカは」

「やっほぃ」

交番の奥に座っている妹は能天気に手を挙げた。

でも僕は、その能天気さにいつものように応えることができなか

った。

「カカ……おまえも、とうとう」

「……んや？　トメ兄？」

「そうか、そうだよな。おまえもあの姉の妹なんだよな。そうだよ、わかってたさ。いつかこうやって人様に問答無用に傲慢無礼な天上天下唯我独尊を百鬼夜行のごとくやってしまう夜叉とか般若とかウーパールーパー（正式名称アホロートル）の類なんだって」

「……なんかよくわかんないけどムカツク」

「ああ、カカ！　可愛さあまるか微妙だけど憎さは千倍の愛しき妹よ！　君が遠くへ行っても……たとえくさい飯をくさい所でくさい仲間とくさい話をしながら食べることになっても、おまえはずっと僕のくさい妹だからなっ」

「まだくさくないっ」

「それで、シューさん。こいつ、なにやったんですか？　殺しですか？　誘拐ですか？　強盗ですか？」

「……コノヤロウ」

「なぜにそのような凶悪犯罪ばかり並べるのかかなり疑問ですが……」

「シューさん。これはあの姉の妹ですよ」

「……！」

「ちょっとそこの警官！　なに「それもそっか♪」みたいにポンッと手を打って納得してるの！　そもそもさ、私のしたことなんて大したことないんだから、トメ兄もそんな恥ずかしいこと言ってないでちゃんと聞いて！」

「やー、こんなところに捕まってるおまえのほうがよっぽど恥ずかし――」

「しゃらっぷ！」

む、なんか入り口に立ったまま大騒ぎしているうちに後ろからざわざわと聞こえてきた。このままではご近所にあらぬ噂が……僕はひとまずシュー君と交番の奥へと引っ込んだ。

「で、なにやったんですかこいつ」

「ええと、わかりやすく言えば」

「全然大したことないよ」

「オヤジ狩りですかね」

「ほらね」

「大したことあるわっ！！」

「んむふひゅうひほひゃひょよふふはほひへ！」

僕の必殺技。ほっぺた周辺とにかくモミクチャ攻撃が炸裂。

これは両手で頬を挟んでとにかくメチャクチャにするという簡単かつ地味に効果絶大な必殺技である。ぜひお子さんにもすすめてあげてください。

これをやられるとひじょーに煩わしくて高確率で「二度とやられたくない」とおとなしくなります、もしくは「やめんかボケ！」とキレます。

「ひゃひふるほー」

なにするのーと言ってるかな。

「はふはふ……違うんだよトメ兄。別にお金目当てで襲ったとかそういうんじゃないんだよ」

「そのわりには財布抜いてましたけど」

「それは単なるケンカの礼儀であって目的じゃないの。てかシュー余計なこと言うな黙れ」

「……はい」

よえーなー警官。

や、考えてみれば小四の子供に狩られるオヤジも弱いが……まぁカカだしなぁ。

「そのオヤジがさ、綺麗な花を踏んづけたから」

「綺麗って……結構、みすぼらしかったけど」

「黙れと言った」

「申し訳ないですっ！！」

ほんっとよえーなー警官。

しっかし……花を踏んづけただけでケンカ売るか普通。いくら規格外な脳みそ持ってるカカでもなぁ……カカがそこまで暴走するといえば……あ。

「なぁ、カカ。もしかしてその話、サエちゃんどっかに絡んでないか？」

「よくわかったね。あの花をね、サエちゃんが綺麗って言ったの。だから綺麗。それを汚すやつは私が血で汚してやる」

「こあい！　こあいからその発言！　はぁ……おまえは上官がカラスを白と言ったらそれは白、とか言う軍人かよ……」

「ふふふ……サエちゃんは目に映るもの全てを白と言ったら、私は迷わず白ペンキをサエちゃんにぶっかけるよ。それが私の愛」

「や。サエちゃんにかけるんかい」

「目に映るもの全てにかけられるわけないでしょ。だからサエちゃんにかければ解決」

「現実的だな。それでいいのか愛は……」

「あ、あのー」

あ、ついいつものように雑談に興じてしまったが……ここは交番でカカは捕まったのだ。なにか、処罰とかあるのだろうか？

「相手は子供ですし、処罰などはありませんが……今後気をつけていただけると嬉しいです。多分無理と思いますけど」

よくわかってらっしゃる。

とりあえず大事はないようだ。僕は安心してカカを連れて帰ろうとした。

その折、カカはシューさんに言った。

「シュー。あの花さ、もう誰にも踏まれないように花壇にでもして守っておいてよ」

「……了解しました、お姫様」

……あれ、なんで警官のほうが処罰っぽいことさせられてんだ。

## カカの天下９３「テレビを見よう」

「トメ兄、ニコラシカってなに」

トメでーす。

居間に座って二人でテレビを見ていると、カカがそんなことを聞いてきました。

ＣＭに出てきたから聞いてきたんだろうけど、見てわからなかったのかな。

「お酒の一種だよ」

「なんだ、私はてっきり『ニコニコしてるらしい蚊』の略かと」

してるらしいってなんだよ。血を吸ってニコニコしてる蚊も気色悪いが。

「トメ兄、育毛剤の宣伝してるよ」

「なんで僕に言うの」

「将来ハゲそうだから」

「なぜにそないな風に思うんや」

「私とか姉の面倒見てるから。ストレスでハゲそうじゃん」

「おまえ、自分のことよくわかってるなぁ」

「まぁね」

「……僕に気遣って自分を直そうとかは思わないの？」

「個性って大事だよね」

「……そだね」

ええ、わかってますよ……ハゲる、のかなぁ。今の世の中二十代でも油断ならないらしいし……ちょっと真剣に考えとこうかな。

「トメ兄、このお笑い芸人つまらないね」

「そだな」

「多分私たちのほうがおもしろいよ」

「私たちって誰だ。おまえらカカサエサユカのトリオか？」

「欠かさずおかゆ？　なにそれ」

「トリオ名、勝手につけただけだけど」

「欠かさずおかゆ食べるトリオ？」

「平和そうなトリオだな」

「おかゆのＣＭにしか使われなさそう」

さて、つまらないのでチャンネルを変えよう。ポチっとな。

出てきた画面は野球中継。

「ねえトメ兄。野球ってなんで延長するんだろうね。他の番組に迷惑なのに」

「んー、やっぱ人気あるからさ。延びたんなら少しでも多く見せたいんじゃないか？」

「ならさ、時間切れで一旦試合やめて、別の日にもっかい再戦したほうが見る人多くなるんじゃない？」

……たしかに。

「そうすればもっかいお金とれるし。延長で他の番組迷惑しないし」

「んじゃその提案言ってこいよ」

「誰に言えばいいの？」

「えっと……ナガシマ監督？」

「そんなに偉いのナガシマさん」

「さぁ……でもなんとかできそうじゃないか？　なんとなく」

「わかった。あとで手紙送ってみる」

「好きにしろ……」

僕もカカもスポーツは見ないので、ポチっと再びチャンネルを変える。

なんか恋愛系のドラマをやっていた。

内容は……なんか兄と妹の禁断の愛だとか。

「トメ兄ってさ、妹に欲情とかするの？」

「そんな言葉どっから覚えてくるんだおまえは！？」

「姉」

「聞くまでもないよな……はぁ」

どうせ言葉の意味は「好き」の別の言い方、くらいにしか思ってないだろうが……

「で、するの？」

「するわけなかろう。んな心配するならたまに風呂場から部屋まで素っ裸で戻るのやめろ」

「えっちー」

「そう思うんならやめろ。別に僕はどうも思いはしないが、はしたない。前から言ってるだろうが……あと、そもそも小学生なんか女として見るわけないだろ」

「かわいそーサユカン」

「……聞こえなかったんだが。誰が可哀想って言った？」

「誰でしょう。はてさて」

はてさて？

「お、キスシーン」

「トメ兄、誰かとキスしたことある？」

「おまえとか」

「……ぅはひぃ！？」

なんかものすごい声で驚いたな。

「なんだよ。幼稚園のころはおまえ僕にべったりでさ、しつこくねだりまくってきたじゃないか。寝てる間とか勝手にするし」

まぁそれはほんの一時期の話で、なんかヤバイっぽいからと途中で僕がやめるように言い聞かせたんだけど。

「……う、嘘だっ！？」

「そう思うなら思い出してみろよ」

あ、思い出したのかな。

なんか顔が爆発した。

カカはそのまま立ち上がり、ダッシュで自分の部屋へ戻っていった。

「……かわいーなーあいつ」

シスコンとか言うな、そこのやつ。

さて……テレビテレビ。おお、ちょうどお子様には見せられないシーンが。

カカは帰ってこないけど……ま、どうせ明日の朝には元通りだろ。

いつも通りいつも通り。

## カカの天下９４「サユカンち」

「サユカンちって結構大きいんだね」

「そうかな？　カカすけの家と似たようなもんでしょ」

「や、こっちのほうが大きいって」

「いやいやー」

「私の家よりは小さいねー」

「……わたしらが謙遜してるのに君一人だけ自慢かいサエすけ」

「私の立ち位置ってそんな感じじゃないかなーと最近思うのー」

「どんなよ」

「なんかこう、遠くから面白がって見つめて、おいしいとこだけ持ってく狐みたいな？」

「……ああ、サエちゃん、すっかり汚れてしまって」

でも好きだけど。

毎度こんにちは、カカです。

今日は三人でサユカンの家にお邪魔しています。

「や、しかしわざわざ家にご招待なんてよほど私たちを友達と認めてくれたんだねサユカン」

「はっ！？　べ、別にそういうわけじゃないわよ。ただ、勉強教えてもらうのにこっちからお邪魔するのも悪いから……」

「サユカちゃんて変に律儀だねー」

「変ってなにがよっ。何よ、文句あるなら言ってみなさいよ」

私とサエちゃんは互いに目を合わせ、ふっと笑った。

「基本的にケンカごしで強気な喋り方なのにねー」

「かわゆいとこあったりねー」

「礼儀正しかったりねー」

「好きな人の前で壊れたりねー」

「優しかったりねー」

「えーと……とりあえずあんたら、わたしを馬鹿にしてるよね？」

「してないしてない」

「愛してる愛してる」

「えーいうるさいわっ！　さっさと中入れ！！」

サエちゃんと二人で騒ぎながら逃げるように玄関へ。実は家に入っていなかったのだった……ところでサエちゃん、その愛してるって冗談だよね？　だよね？　だよね……うう、聞けない。勇気ない私。

「それで正解だぞ」

……あれ？　またかトメ兄。テレパシーでツッコむのはなんか人知越えててムカツクからやめろとあれほど――

「あ、猫だ」

「猫！？」

サエちゃんの呟きに反応して、私はテレパシートメ兄から意識を現実に戻した。

猫が玄関先で寝ころがっている……目が合った。

「おー、猫だー。サユカン、どこから盗んできたの？」

「なんで真っ先にそういう結論に達するかなぁっ！」

「サユカちゃん、この猫、いつ食べるの？」

「食べるかっ！？　君らわたしのことどう見てんのよ！？」

「「おもちゃ」」

「声そろえてショックなこと言うなぁ！！」

サユカンに追い立てられてきゃいきゃい騒いでいても、猫は我感ぜずで寝転がっている。こっちを興味深そうに見てはいるけど……

「はぁ、はぁ……このペースで話してるとキリないわ。さっさと部屋行って勉強はじめましょ。そこの階段あがってすぐ左だから先行ってて」

「「はーい」」

追いかけられるうちに家にお邪魔していた私とサエちゃんは二人で階段を登る。

と――

「さ、ミカンちゃん。ちょっとあっちいってまちょうねー」

ピタリ、と。

なんかいろいろ静止した。

私とサエちゃんがぐるりんと首を振り返って、猫を抱きかかえているサユカンを見る。

サユカンは「しまった……」と冷や汗を垂らして固まっていた。

「ミカン、ちゃん？」

「赤ちゃん、言葉？」

サユガス爆発。

「うっさいうっさいうっさい！！　いいから部屋いけー！！！」

「だって。いきまちゅか、サエちゃん」

「いきまちょうか、カカちゃん」

「＃＆％”@！」

言語化できない奇声を上げながら追いかけてくるサユカンから、爆笑しながら私たちは逃げ回る。

あー、おっかし。

勉強できないねー。

「しろよ」

うっさい黙れテレパシートメ兄。

「……あれ、いまどこからかトメさんの声が」

あ、サユカンの怒りが静まった。たまには役に立つねテレパシートメ兄。

なんかいろいろツッコむところあるような気がするけど、とりあえず思うことは一つ。

愛の力って偉大だなぁ。

## カカの天下95「トンデモないいわけ」

「弟よ、金を貸せ！」

「なんだ、藪から棒に」

どーもどーも、トメです。

なんかいきなり姉が突入してきてこんなことを言ってきました。

「こんだけ貸してっ」

姉の要求してきた額は払えない額じゃなかったが……

「なんで必要なんだ？　そういやこのところ見てなかったけど何してたんだ」

サカイさんも引きこもってたらしいし、姉との二人のコンビもしばらく見てないなぁ。

「ん、ちょっと強いやつがいてさ」

「……は？」

「倒すために修行の旅をちょこっと」

「……はぁ」

「そいでさ、ちょっと人を殴りすぎ――」

「待ちーや！」

その先は言わせてはいけない気が……や、もう全部言ったも変わらないような気もするが。

「金貸すのはいい。姉はなんだかんだで返すもんは返すからな。ただ、その邪悪な理由で貸すのはなんか嫌だ。だから別の理由を考えろ」

「……あんたも面倒な性格だね」

「ほっとけ。んで、なんか正当な理由考えてみろ」

「嘘ついてるってわかってるのに意味あるの？」

「気分の問題。ささ」

「んー……実はカカちゃんが人質にとられててさ、身代金に……」

「あいつならさっき自分で抜け出して帰ってきたぞ。今はサユカちゃんちだ」

「え、そうなの。んー……じゃあ、弟が人質に」

「僕ここにいるし」

「あたしが人質に」

「犯人がボコられて終了だし」

「実は事故ちゃって」

「そんな馬鹿に払う金はないし」

「病気になったから治療費に」

「姉が病気なるはずないし」

「詐欺に引っかかって」

「騙したヤツが姉にボコられて終了だし」

「赤い羽根募金に」

「うそつけ」

……さすがに姉もジト目で睨んできた。

「あのさ、弟さんよ。嘘つけって言ったのそっちでしょうが」

「おう。だから無理がなく僕がツッコめなくてなおかつ真実味がある理由を作れと言ってるんだ」

「無理じゃ！！　ツッコむためだけに生まれてきたあんたがツッコめない理由なんて考えられるわけないわ！」

「ツッコむためだけとは失礼な」

「なによ、あんたの生まれて初めて喋った言葉がなにか教えてあげ

ようか？　『なんでやねん』よ」

なんでやねん。

「はぁ……仕方ないな、じゃあ百歩譲って面白い理由考えてみ」

「面白い理由……」

ここまで聞けば皆様もおわかりでしょう。

はい、僕は遊んでるだけです。

「じゃあ、こういうのはどうよ？」

姉は大きく息を吸って、

「あたしが宇宙人に襲われてそれをぶちのめして、なんで襲ってきたか話を聞いてみたら地球に潜入しようとしてたんだけどお金なくてカツアゲしようとしたらしいの。んで軽くお金を貸してあげたの。しばらくしたらもう一人のあたしを発見。どうやら宇宙人は貸したお金についていた指紋から宇宙人技術であたしのコピーを作ったらしいの。悪さしようとするあたしの分身を捕まえるため、あたしは殴りかかった！　しかし戦闘力も同じなのか中々強い！　スカウターも爆発だ！　仕方なくそこらへんに転がってる石とか看板とか人とかシューとかを武器にしてなんとか倒したんだけど、気がついたら辺りは大惨事。その弁償にお金がいるってわけ」

どうよ、とばかりに僕を見上げてくる姉。

「うん、合格」

なんでも暴力で解決というところが実に姉っぽい。

「んじゃ貸すけど、ちゃんと返せよ」

「ありがとー。わかってるって。宇宙人の名において」

「……あれ、おまえ宇宙人なのか」

「果たして勝ったのはオリジナルか分身か、どっちだったのかね……ふふふ」

「……おい、実はそれ昔本当にあったことでおまえは地球人じゃないとか言わないよな」

「鋭い！」

「はっ！？　おい、冗談だろ」

「んじゃあとで来るから用意しといてね。ばいびー」

……地球人じゃない……すごく姉っぽい。

ま、いっか。姉は姉だし。

## カカの天下９６「対岸じゃない火事」

「トメ兄、こんな話を知ってる？」

「なんだ、いきなり」

はろぅ、トメでっす。

仕事から帰ってきた早々、カカはこんな言葉で出迎えてくれました。

「隣の芝は青い」

「ああ、知ってるけど。それがどうした？」

「青すぎて幸せの青い鳥は見つからない」

「いや待て。それは知らんっていうかなんだそのやるせない言葉は」

「サカイさんが歌ってたの」

あの人……なんて鬱な台詞を！　それともなんかのネタなのか（正解）。

「つまり、お隣さんがどんだけみすぼらしくても立派に見えちゃうってことだよね」

「まぁ、そう言えなくもないが」

「じゃ、お隣さんの家が黒コゲになっちゃってても立派に見えるのかな」

「は？　黒コゲって」

「知らなかったのトメ兄。お隣さんの家、火事で燃えちゃったんだよ」

「……はっ！？」

ちょっと待て。お隣さんが燃えたんなら……この家もただじゃすまないぞっ。

僕は半信半疑で玄関へ向かう。中途半端に履いた靴で外へ飛び出す。

そして隣を見ると……びっくり。

本当に、黒コゲだった……

「嘘だろ……い、いつの間に」

「昨日の夜中」

「そんなっ！？　僕は全然気がつかなかったぞ！」

朝は会社に遅れそうで急いでたから気づかなかったのかもしれないけど……

「トメ兄って一度寝ると六時間経つまでひっぱたいてもアソコ蹴っ

ても起きないんだよ」

「アソコってどこだよっていうかなんだその危険な設定は！？」

「設定ってなに」

おっと、ここは大人の事情だ。

「なんてことだ……じゃあ僕らが呑気に寝ている間にお隣は燃えていたのか……」

「寝てたのトメ兄だけだよ」

「……え？」

「私は起きたもん。焦げ臭かったから」

……考えてみればそうだ。いくらなんでもお隣が火事になってれば煙とか消防車の音で起きるだろう。

……ん、待てよ。

「起きて、それからどうした？」

「外へ出たよ」

「僕を置いて？」

「トメ兄起きないもん」

「起こそうよ！　そこはなんとかして起こそうよ！！　じゃないと本当にもう起きなくなっちゃうじゃん！！！」

「いくらなんでも危険が迫れば起きるかなーと実験を」

「そんな一回こっきり一か八かの実験やめてっ！！！」

見た感じうちの家は煙で汚れただけみたいだけど……もし燃え移っていたら……考えただけえ震えがくる。

「ね、今度からは起きるときは意地でも起きるクセを身につけないと」

「あ、ああ……いや、本当だな。こんなことがあったんなら」

「そうそういつもお姉に助けてもらえないんだから」

……姉？　今までの話に姉のことなんか出てきたか？

「格好よかったよ。あれは私がトメ兄を捨てたのを心残りに家を見上げてたときのこと。どこからかバイクの音が聞こえてきて」

あいつバイクの免許なんか持ってな……いや、いまは話を聞こう。

「私を見つけるなり駆け寄ってきて、「カカちゃん無事？　よかった……家とかトメは燃えてもまた作り直せばいいけどカカちゃんは一人だけだから」って涙ながらに」

「いやいやいや僕も一人だけだから作り直せないから！！」

「や、トメ兄も逃げたもんだと思って冗談言ったらしいよ。で、私が事情を説明したら」

そっか……なんだかんだで美しい姉弟愛で僕は助けられ……

「お姉が、「そんな馬鹿は燃えて当然」って」

てない!?　てかひどっ!!!

「というのは冗談で」

「……だよね。そうだよね。いくらなんでもそんな人でなし発言しないよね」

「トメ兄はお姉にいつもしてるのにね」

「……自重します」

「それで家につっこんでって、見事トメ兄を救出して出てきたわけ。うちが燃えてたわけじゃなかったからそんなに難しくなかったみたいだけど」

「はぁ……でも僕、今朝は起きたらいつも通りベッドだったぞ？」

「うん、だからトメ兄起きなかったんだって。騒動終わったあともアソコ蹴りまくったのに起きないから仕方無しにベッドに投げ込んでもらった」

「蹴りまくった……」

「使い物にならなくなってたらゴメンってお姉は言ってた。どゆことかな」

「あ……あはは」

「？　トメ兄。なんで自分の下半身をまさぐってるの」

「え、いやっ！？　確認を！！」

動揺して思わずソコに視線を持っていったがここではまずい。あとで確認しよう。

それにしても……ここまで危険なクセを僕が持っていたとは……

命に関わるから本当に気をつけよう。

「姉にも感謝しないといけないな」

「わかった。今度はもっと蹴ってもらうね」

「いや待てそこが感謝ポイントじゃないんだ」

とにかく途中でも起きれるように訓練しなければ。

……訓練。

どうしろと。

「今度から起きれるように私も手伝ってあげるよ」

「へぇ、どうやって」

「寝てるトメ兄のアソコを蹴りまくって無理やり起こ――」

「やめてくれ！！！」

## カカの天下97「身に染みる汗」

「あー、疲れたー！」

「……はっ……はっ」

どうも……トメです。

いきなりごめんなさい。今日はちょっと、疲れてて……

「ふぃー」

「……ふっ……ふっ」

ベッドにダイブして、そのまま眠ってしまいそう……

「はぁー……布団きもちいー」

「……はっ……はっ」

あぁ……至福……太陽の匂いのする布団って最高の睡眠薬だと思いませんか？　なんせ売ってないんですよ。買おうと思ってもそう簡単には買えない。いくらするんだろうなー太陽。

「……至福……だけど、なんもツッコまれないのがお兄さん寂しいな」

「……はっ、ふう」

僕の視線に耐え切れずに観念したのか、部屋に入ってきて勝手にベッドにダイブした僕をまるっきり無視していたカカは日課の腕立て伏せを中断した。

「なに、トメ兄。私忙しいんだけど」

「ん、たしかに忙しそうだけど……カカってそんなに熱心に鍛えてたっけ」

「いつもしてるよ」

「いつもより汗の量多くない？」

「いつもどこ見てるのさヘンタイ」

や、そういうつもりはないが……滝みたいな汗だぞ。

「まぁいいや。それより聞いてくれよカカ。僕疲れてんだよ」

「私はこれからもっと疲れるの」

「なんでわざわざ疲れることするのさ」

「いざというとき疲れないようにするため。トメ兄の愚痴聞くときとかに」

「ああ、愚痴聞くのは疲れるな。それには腕立て伏せするといいのか」

「そうだよ。知らないの？　人の愚痴聞くのには胸の筋肉使うんだ

よ」

「そうなのか」

「そうそう。ほら、愚痴聞いてると胸がムカムカするでしょ？　だからそうならないように鍛えるの」

……あぁ、そうか。なるほど。確かにね、うん。

要はムカムカすること聞かせるなってことかぁ。

「うぅ……兄の心を癒してくれないのかぁ」

「仕方ないなぁ……じゃあ聞くだけ聞いてあげるよ。でも私返事しないからね。次は腹筋するから」

「う……そんなに鍛えるのが大事か？」

「大事」

……あれ、なんでだろ。

なんだかいつもと違う。カカが、真剣だ。

「……わかった、ごめん。邪魔しないよ」

「……もう、仕方ないお兄ちゃんだなぁ」

「あれ、おまえ、今なんかすごい珍しい単語を口にしなかったか！？」

そんな風に呼ばれたのは何年ぶりだろうかっ！？

「なぁ、なぁ、もう一回言ってくれ！」

「はいはいわかった。サユカンにもらったこの子あげるから、この子に向かって愚痴ってウザ兄！」

「うざにーって何さ！？」

僕の抗議は無視され、あっさりと部屋を追い出されてしまった。

そして手元に残ったのはカエルのぬいぐるみ……これに愚痴ろって？

「げろげーろ！」

わお、思いのほかスッキリ！

「げろげーろ……」

涙が出そうなほどスッキリさ……とほほ。

「なにあんた。いつの間にカエルになったの」

「うん、それは昨日の仏滅の日に……ってなんだ、姉か……またあんたは勝手に」

「いーじゃん、我が家なんだし。それで、どしたのそのカエル君」

「僕の心の友……愚痴を聞いてくれる唯一のゲロゲーロさ……」

「そっか。それはそれはゲロゲーロ」

あ、昨日と言えば思い出した。

「そうだそうだ、お礼言わなきゃならなかったんだった。姉、昨日はありがとな」

「昨日？　ああ、火事の」

「僕をわざわざ部屋から外まで運んでくれたんだってな」

「んー？」

「や、僕にも厄介なクセがあったもんだ。今度からはちゃんと起きれるように訓練するよ。ごめんな、ほんとダメなヤツで……ほんっとありがとう」

ああ、なんか疲れてて元気ないから余計落ち込む……あれ。

なんで首傾げてるんだ姉。

「そんなに感謝することないよ？　あたしは大したことしてないし」

「は？　だって僕の部屋は二階だぞ。そこから外まで運ぶなんていくら怪力無双の姉でも大仕事だっただろ。寝てる人間って普通より重いし」

「いやいやいや……あたしが運んだのは玄関から外までだけよ？」

「……へ？」

「二階から玄関まではカカちゃんが下ろしてきたんだよ。あんたの言うとおり寝てる人間ってのは重いからね。そこまでが限界だったんでしょ」

「……」

「顔真っ赤にして頑張って玄関から外へ運ぼうとしても、うまくいかなかったみたいで」

……あれ、あいつ、昨日なんて言ったっけ。

「そこにあたしの登場。と言ってもそんだけの距離をちょこっと手伝っただけ」

あいつ、僕のことなんか置いてさっさと逃げ出したって言わなかったっけ。

「あ、考えてみれば騒ぎおさまった後にあんたを部屋まで運んだのはあたしか。それは感謝されることかもねー。あ、でもカカちゃん悔しがってたよ。あんたを助けられなかったこと」

……あいつは今、何してた？

必死で、筋トレ、して、た。

「感謝するならカカちゃんにしなさいな。泣きながら土下座でもしてみ」

「……ん、なんか、ほんとにそうしたくなってきた」

情けない。

そしてどうしようもなく温かい。

というか熱い、目の辺りが……

「愚痴なんて言ってる場合じゃないな……僕も、頑張らないと」

「そうそう、いい妹に応えられるいい兄にならないとね」

「そう、だな。はは、姉にそんなこと言われるなんて変な気分だ」

「そう？　じゃ、あたしらしい応援の言葉をおくってあげよう」

「へぇ、どんなだ？」

「げろげーろ！」

「……わー、元気まんまーん」

……ほんと、がんばろ。

## カカの天下９８「牛丼と滋賀県」

「いらっしゃいませー」

いらっしゃいましたートメです。

今日は夕飯をつくるのが面倒だったので妹のカカと二人で牛丼屋へやってきました。

「ご注文よろしいですかー」

「並、つゆをだくだく、たまご」

「並、つゆをはくだく、たまご」

「かしこまりましたー」

……あれ、カカなんか違うこと言わなかったか？　まぁ、いいか。

「ねえね、なんで牛丼ってこんなに流行ってるのかな。隣のカツ丼屋さんが寂しそうだったよ。お客少ないし、従業員少ないし、髪の毛少ないし」

「そりゃ牛丼のほうが安いしな。作るほうも簡単だし」

「カツより牛？」

「そうそ」

「だよね、まさしく日本人」

「……どのへんが？」

「頑張って人生カツよりギューっと周りにしめつけられながら暮らすほうが簡単だもんね」

「また子供に似合わない小難しいことを」

ちょっとうまいと思ったが。

「あれ、姉だ」

カカの視線の先をたどると……ほんとだ。ちょうど姉が店に入ってきたところだった。

「おー！　なんか見知った顔を発見！　可愛い顔と貧乏な顔だ」

「誰が貧乏な顔だ」

「じゃあトメ兄に可愛い顔を譲るよ。私貧乏でいい。えっと……ぼんびー！」

それ言えば貧乏な顔ですか。

「大体な、貧乏な顔ってどんな顔だよ」

「やっすい牛丼屋しか利用できない貧乏な人の顔」

返す言葉もございません。

姉はでっかい口をあけて笑いながら僕の隣に座った。

「ご注文よろしいですか？」

「特盛り、それとキミ」

店員さんを指差してたわけたことをおっしゃる我が姉。

「ご注文は」と聞かれて「君」と答えるなんて……古臭いネタを。店員さんもあきれ返って、

「かしこまりました」

ない！？　え、かしこまったの？　出てくるの？　牛丼の上にあの店員さんが！？　特盛りで！！？　とすれば特盛りってどこの部分が盛り上がりなのさ！？

「なに発情してるのトメ兄」

「そういう言葉の使い方はやめなさいっ」

「なに考えてるさ弟。あたしはキミって言ったんだよ。黄、身」

……ああ……なるほど。紛らわしいことを……

「そういやお姉。こんなところに来るってことはお姉も貧乏な顔なの？」

「いやー、そんな貧乏でもないけど節約したほうがいい顔だね」

そんな微妙な顔ってどんなだ。

さて、とりあえず注文の品がくるまで雑談でもしますかね。

「ね、トメ兄って牛丼とカツ丼どっちが好き？」

「ん？　牛丼かな。普通に好み」

「お姉は？」

「カツ丼だね。肉だし、豚だし。豚っていいよね。鼻が」

たしかにあの鼻は世界が生んだ芸術品だと思う。ビバ豚鼻。

「多分姉につけたらピッタリだと思うんだ、豚鼻」

「おうおうおう、それはどういう意味ですかぃ弟さんよぅ」

「お姉が丸いって言いたいんじゃない？」

「んだとぅ！　人が気にしてたことを！！」

「や、昔より多少丸くなった今のほうがいいと思うぞ。昔のは痩せすぎ、というかムキムキすぎ」

百戦錬磨の怪物だったからな。何の百戦錬磨かという詳細はノーコメントだ。捕まる。

「そ、そっかな……」

外見がよくなったという意見は普通に嬉しいらしい。姉は照れたように頬を染め、

「そうそう。ゴリラが豚になったみたいな」

怒りで頬に赤色を上塗りした。

「あたしが豚だとぅ!?」

「お待たせしましたー」

「ほれ姉。牛丼きたぞ」

「あんたはあたしを牛と言いたいのか!?」

「は？　いや、牛丼だよ飯だよメシ。めしが」

「しが……滋賀!?　今度は県!?　どんだけでっかいんだあたしは!!!」

……や、その発想力がある意味でっかいが……

「腹立たしい!!　かえる!!」

「げこげーこ」

「か、え、る!!!」

おー……カカのとどめで見事に怒り狂って帰っていった……なん

か久々にここまでわけわからん姉を見たなぁ。

「ねぇトメ兄。姉ってすごいね」

「ああ、なんせ滋賀県だからな……どした？」

「姉の分の牛丼、空だよ」

「は！？　いつの間に食ったんだあいつ！？」

「さすが滋賀県……」

「滋賀県って摩訶不思議」

「……ま、食べるか」

「そだね」

「……姉のやつ。金払ってないな」

「……そだね」

あ、滋賀県民さん勝手に県を使ってごめんなさい。

## カカの天下９９「特別編、の準備」

「ねぇ、どうしよう。次で一区切りだよトメ兄」

「意味はわからんが、なんとなく僕らが言ってはいけないこと喋ってないか。わが妹よ」

トメです。

のっけからすいません。カカが意味不明なことを言うのはいつものことなのでご容赦ください。あれ、皆さんは意味をわかってらっしゃる？　はてさて……

「でさ、やっぱなんか特別なことすればいいんじゃないかと」

「なんで特別なことするっていう流れになるのか疑問だけど、なんとなくツッコんじゃいけない気がするからやめとこう」

「それでいいのだ」

「……それ聞いてなんかバカ○ン思い出した」

「バカのボンボンの略？　タケダ君のことか」

「あー、まぁ、それでいいよ」

なんとなくボンボンっぽいしなぁあの子。

「さ、あんなダニは放っておいて」

「ダニは駆除しないといけないぞ」

「タケダニはいつも駆除してるからおっけ。さ、次回に何やるか決めようよ」

「だから次回ってなに……ってツッコむのもタブーな気が……むむむ」

「トメ兄にとってツッコミは息をするのと同じだからね。辛いかもしれないけどがんばれ」

「……僕ってそんなにツッコんでるかな」

「やっぱ一区切りだし、大きいことしたいよね」

無視ですかぁ。

「大きいことってなんだよ」

「そだね……やっぱいつも普通な話ばっかだし、パーっと違う話はどうかな。宇宙人が襲ってきたり」

「その宇宙人が姉だったり」

ありそー。

「殺人事件が起きて名探偵カカが解決したり」

「黒幕はサエちゃんだったり」

ありそー。

「魔物が現れて戦いになったり」

「戦うのは……シュー君かな。一応警官だし」

たよりねー。

「異世界に引きずり込まれたり」

「サカイさんがゲームに引き込まれたり」

ある意味もう引き込まれてるけどね。

「アニメ化したり」

「三百回目くらいにそうなるように目指すか」

あったらすげー。

「誰か死んだり」

「死ぬとしたら……」

なんとなく僕しにそー。

「無人島に漂流したり」

「そして誰もいなくなったり」

「それ最終回じゃん」

それはないだろー。

「……なんか僕ら、さっきから大人の事情で言ってはいけないことばっか言ってないか。最終回とか」

「ほら、次は百回記念だから」

「だから？」

「つまりは特別だから」

「それで？」

「ちょっとくらいぶっちゃけてもオッケーってことよ」

「……なるほど。じゃ僕も細かいことは気にしないで行こう。それで、結局次回はどんな話でいく？」

「んとね、作者に聞いてみたところ」

ほんとにぶっちゃけてるなー。

「いろいろ考えてはみたものの、たかが百回で大掛かりな特別編書くのもどうかと、だって」

「たかが百回とは大きく出たな」

「だから次回は小さい特別編、みたいな感じにするらしいよ」

「それさ、実は考えるの面倒だったとか、書く時間なかったとかそういうことじゃないよな？」

「や、実際は特別に書きたいことが思いつきすぎて、どれにするか決まらなかったんだとか」

「ほんとかね……まぁ、さっき僕らが提案したこともいずれ書くことになるでしょ。気まぐれで書いてるしねこのお話」

「さて、読者の皆様。今回と次回は私達が大人の事情を知ってる状態なので、いつもと雰囲気が違いますけど、それはそれで楽しんでくださいね」

「そうそう、つまり僕らはいつものトメとカカじゃないわけだよ」

「じゃあ誰なのかな」

「……留と香加？」

「いいね、それいこう」

「というわけで次回をお楽しみに。お相手は留と」

「香加でお送りしましたー」

「それではまた次回」

「……ラジオっぽいから私ら独特の挨拶ほしいね」

「今回だけだし、別にいいんじゃないか？」

「んー、なんか考えておこうかな……」

# カカの天下１００「百回記念特別編」

「こんにちわ、香加です！」

「留です！」

「二人揃ってカカ天です！」

二人揃ってのはずなのに香加の名前しか入ってないコンビ名はいかがなものかと思いつつ、始まりました記念すべき百回目。

「今回はちょこっとだけ特別編です」

「どんな風に特別かというと、要はぶっちゃけトークで行こうというわけ」

「百回目ともなればそれなりに登場人物も増えてきたしね。だからここら辺で各登場人物を改めて紹介してみようと思います。ぶっちゃけた視点で！」

香加はもっとパーッと派手なことをしたがってたけど『基本を忘れてはいけない』ということでこのような流れとなりました。

「でさ、ぶっちゃけた視点ってなに、留兄」

「ん、例えば……まず作品のタイトルにもなっている物語の中心人物、カカを紹介します！」

「ん、基本だね」

「えー、彼女を一言で表すと、変です！」

「妹パンチ！」

「ぐはぁ！！　……な、なにする」

「誰が変だって？」

「だから、カカだよ。なんで怒ってるんだ。おまえは香加だろ？」

「……それ、同じじゃ」

「違う！　何が違うと聞かれれば黙らざるを得ないが違うのです！　なぜなら百回記念でわりとなんでもあり状態で細かいことは気にしてはいけないからっ！」

「……むぅ」

大人の事情ですんなり香加は黙ってくれた。よしよし。

「はいはい、紹介続けますよ。えー、タイトルにある通り、物語は基本的にはカカを中心に回っていきます。さっきも言いましたが変なので、変な思考と行動で周りを振り回します」

「でも、そこがとても可愛いです」

「毎日腕立て伏せをかかさないので腕っぷしも強く、我も強いので傍若無人という言葉がぴったりな子です」

「そんなカカに踏まれたいという人が続出で困っております」

「……さっきから何を口出してんの」

「紹介してあげてんじゃん。私じゃないんでしょ？　じゃあこれは自画自賛じゃないよ」

「……それも、そうか。えー、あと、親友のサエちゃんのことが大好きです」

「最終回では結婚します」

「法律上、無理だろ」

「じゃあ最終回で法律を変えます」

「……マジデ？」

「じゃあ次はカカの兄、トメの紹介です！」

「……ま、いいや。えーと、彼はですね――」

「ツッコミです。以上！」

「短っ！　一応トメって主人公だろ！？」

「主人公はカカでしょ」

「いや、トメ視点の話のほうが多くないか？」

「でもタイトルはカカの名前入ってるし」

むぅ……たしかにタイトルに名前入ってるのは大きいなぁ……

「留兄が納得したところで、次の紹介」

「まじっ？　まじで僕――じゃなかったトメの紹介これで終わり！？」

「次はお姉だね。本名はカツコ。でもその名前で呼ぶ人はあんまりいません」

「終わりなのね……とほほ。まぁ慣れてるからいいや」

「トメは姉（あね）と呼びます。カカはトメと同じ呼び方だったり、おねぇと呼んだり、気分で変えてるね」

「まぁ、間違っても『お姉ちゃん』とかいうイメージじゃないからなぁ」

「シュー君なんかお姉様って呼んでるしね。えーと、紹介文には」

ぺらり、と香加はどこから入手したのかわからないレポート用紙を取り出す。

「基本的に正体不明、なんでもあり、って書いてある」

「それ、紹介なのか？」

「そうとしか言い様がないんじゃない？」

言われてみればそうだけど……

「じゃあインタビューしてみましょう。おーいお姉」

そう、今回は登場キャラ全員にインタビューしてしまおうという企画もあるのだっ！

「あれ、お姉が控え室にいないよ？　代わりにこんな紙が」

「えーと、なになに？　『おらこんなつえぇヤツ初めてみた。いっちょヤってみっか！』って……つまり」

「えー、姉はどっかのつえぇヤツとヤってくるそうなので不在です。姉ファンの方、申し訳ありません」

「速めにヤったら帰ってくるかも……ちなみにこのヤを漢字にするとどんな字なのかはご想像にお任せします」

「じゃ、次。姉娘、別名タマ」

「えーと、紹介文には……姉がどこからか拾ってきた子供。山小屋で友達になった人に託されたと姉は言っていたがなんとなく嘘くさい。あと、カカの天敵って書いてあるけど」

「や、そんなことないよ。カカはタマのこと、結構好きよ？」

「だよね。なんだかんだで仲良くなってたし。じゃタマちゃんにインタビューしてみましょう」

「うぃあー！」

現れたタマちゃんは元気に叫えた。そのタマちゃんへ、にこやかな表情で歩みよった香加は、

「やっほー、タマちゃん。元気？」

「べんきー」

指差されながらそう言われて爆発した。

「だ、誰が便器だって……？」

「カカはげー。笑える子はいねぇがぁー」

「それはナマハゲのことだ誰がハゲだ！？」

「つかったあとのべんきー」

「レベルアップさせて言い直すな！！」

ピン、ポン、パーン。

見苦しいことになってますのでしばらくお待ちください。

「はぁ……はぁ……」

「ゲストはタマちゃんでしたー。ありがとうございましたー」

「疲れた……だるぃ、もうやる気ない」

疲れ果てた香加はソファーに寝そべってぐったりしている。やっぱりタマちゃんはカカの天敵なのかなぁ……や、この子は香加だけど。

「留兄、もう勝手にやって……」

「じゃあ、次はサエちゃんの紹介です」

「どんとこい！！」

おお、香加が一瞬でよみがえった。

「えーと、紹介文には……カカの親友。塞ぎこんでた自分を救ってくれたカカを大切に思っている。一緒に行動するうちに、純真な心は徐々にカカっぽくなっていく」

「ね、なんかカカが病原菌みたいに言うのやめない？」

「終いには黒幕になる、って書いてある……なんの黒幕だ？」

「んー、でもなんとなーく、わかるような気も……」

「じゃあサエちゃんに登場してもらいましょー」

どんどんぱふぱふー！　と叫びながらサエちゃんを迎えいれる香加。

「お二人とも、こんにちわー」

「サエちゃん、好き……」

「マテヤコラ」

いきなり頬を赤らめてサエちゃんに抱きつく香加に兄パンチ。

「なんでいきなり告白しとるんじゃおどれは」

「だってさ。こんな何でもありの特別編じゃないかぎり、カカのねじ曲がった欲望が叶うなんて簡単にはないじゃん」

ねじ曲がった……さすが分身。よくわかってるな。しかし欲望とはまたストレートな表現だ。

「最終回で結ばれるんじゃなかったっけ」

「我慢できなくなった」

「……あそ」

「香加ちゃん、私も好き……」

「ああ、サエちゃん……！」

「はいはいはいはい！　なんかチョメチョメな展開にならないうちに次行こう次！」

大人の事情パワーで控え室に引っ張られていくサエちゃん。

「ああ、サエちゃん……！」

「次の紹介はサユカちゃん！」

「ああ……愛しのサエちゃんの代わりにこんなのが」

「こんなの言うなっ！！」

紹介する前に怒鳴りながら登場したサユカちゃん。

「わかった……サユカちゃんで我慢する」

「なんで抱きつくっ！？」

「……おまえはそういう方向にしか行かんのか」

「どうせ変ですから」

あ、開き直った。

「まぁいいや……えー、サユカちゃんは――」

「え、ちょ、ちょっと助けてトメさむちゅ！！」

なんか音がしたけど置いておこう。

「いい気になってるカカに因縁をつけようと話しかけたのがきっかけで友達になる……でも実は同じクラスに友達ができず寂しかった

ので、隣のクラスなら友達ができるかも、と話しかけたのがきっかけ」

「うあああああ！！　ちょっとちょっと待っちゅむむが！！」

「素直じゃないのでいろいろと強がってはいるが弱点、というかツッコミ所は多し。今ではすっかりカカとサエのおもちゃ。えーと、あと、トメが好き」

「あああああああああああ！！！！」

ん。おおっ、香加の呪縛から逃れた！

いや、香加のあの顔から見るに……

「香加。満足いったか？」

「いった♪」

ちなみに僕は紹介文を読んでいたので、香加がサユカちゃんにナニをしていたのかは知りません。皆さんのご想像にお任せします。

「と、トメさん……あの、それで、どうなんですか？」

「ん？　なにが」

「あの、私、トメさんが好きなんですけど……その、返事」

「そんなこと言われても僕は留だし」

トメじゃないし。

「あの、じゃあじゃあ、もし留さんだったらわたしに告白されたら、どう返事しますか？」

「内緒」

「なんでですかっ！？」

「そのほうがおもしろいから」

「と、留さんまでわたしをおもちゃにする気ですかっ」

「うん。がんばってトメを落としてね♪」

「う、うわあああああああああん！」

想い人のそっくりさん（？）に言われたのがなんかやるせなかったのか、サユカちゃんは叫びながらどこかへ去っていった。

「留兄、おぬしも悪よのう」

「おぬしほどではないわ。さて、次は……サカイさんだね」

「隣のぽわーっとしたお金持ちおねーさん、という設定だったけど……いつのまにか無職のネトゲ三昧のダメ人間に」

「でも最近生きがい取り戻したって言ってたけどね。僕は意味がよくわからなかったけど」

「実は過去にいろいろあったらしいけど、あんまり明らかになってないね。そこも聞いてみようか。じゃ、どうぞー」

「……あれ、また置手紙が。『相手が手強いのでカツコさんのサポートをしてきます』って」

「なんだよサポートって」

「わかんないけど……なんかさ、この二人だけどっかで派手な特別編やってる気がしない？」

「……かも、な」

「きっと髪の毛を金色にしてカメハメハしてるんだよ」

「さ、いないとなれば次行こう次」

そういう話題はアブナイからね。

「えーっと。じゃあタケダ君いってみよっか」

「タケダ。通称、節穴名無し。またの名をタケダニ」

「……不憫な」

「カカにとってはダニも同然。じゃあ嫌だけど呼んでみよう。節穴！　名無しー！　タケダニー！　ダニなので見えませんね。インタビュー不能。さ、次」

「あれ、さっきまでいたのにっ！？　どこいった、というかどこに

やった香加！？　なんかソファーにこびりついた赤い液体とかあるんだけど！！」

「雨漏りでしょ」

「赤い雨漏りってなんだよどこの怪談だようわほんとに天井から血が滴ってるよそこにいるのかタケダニ！」

「さすがダニ、いつでもどこでも現れる。そんな天井に殺虫剤攻撃」

「あ……トドメさしたかな。なんかびくんって音が」

「いいからいいから。次はシュー君です。警官でありお姉の舎弟。基本的に強気な人には絶対服従のダメ警官」

「……そんなのが警官か。やってけてるのかなぁ」

「凶悪そうな事件は全部お姉に助けてもらってる、って書いてあるよ」

「とことんダメだなぁ。んじゃ呼んでみよう。どうぞシュー君」

「あ、はい。どうも」

おどおどしながら入ってくるシュー君。実に頼りない。

「じゃあ、姉との出会いエピソードでも語ってもらおうか」

「え、あ、はい」

なぜ、という疑問すら感じず素直に頷くとは……筋金いりの弱気だなぁ。

「僕とお姉さまは同じ小学校だったんですよ。そこで僕はいじめられていたのですが」

「ほう、それを助けたのが姉ってことか」

「カカとサエちゃんの出会いみたいだね」

「いや、いじめていたのはお姉様でして」

「は！？」

「それで、その、なんだかいじめられているうちに僕も楽しくなってきまして」

「……いじめられるのが？」

「はい」

わぁーお、としか言いようがない。

「ああ、そう、ですか……ありがとう、ございました」

シュー君退出。

「……私、シューいじめるの控えよう。なんかちょっと怖かった。何が怖いのかよくわかんないけど怖かった」

「うん、本能には従ったほうがいいぞ……えっと、このくらいで主要人物おしまいかな」

「そうだね……あれ、お姉とサカイさんだ」

閉めるか、と思ったところで、先ほどすっぽかした姉とサカイさんが登場した。

「や、遅れて悪いねっ！」

「どもどもー」

「まったく、どこ行ってたんだあんたら」

「いやー、ドロボウと遭遇してさ、これが意外と強くて」

「そのドロボウどうした？」

「沈めましたー」

ほやほやーと言うサカイさん。どこに沈んだか……は、聞かないことにしよう。

「お姉ってたまにそうやって何かの犯人捕まえたりするっていうけど、そんなによく遭うもんなの、事件とか」

「テレビの探偵さんに比べたら些細な遭遇率だよ」

そりゃ行く先々で必ず死人が出る人達には敵わないだろうさ。

事件は犯人が起こしてるんじゃない、探偵が起こしてるんだ！
とは誰の言葉だったか。

「ま、せっかく来てくれたんだからインタビューするね。サカイさんの過去について」

シュバッ！

「……あれ、消えたっ？」

「聞かれたくないことだったのかな……」

「むぅ。僕としては一番気になってることだったのに……」

「じゃ、代わりにあたしがおもしろい話したげるよ。高校生のとき、動物園から逃げてきた虎にメンチきって勝ったときの話でいい？」

「睨むだけで勝ったのか。それはそれで興味あるが、今回の紹介っていうコンセプトには合わないな」

「なによー。服従させた虎に乗って散歩したらテレビにも映ったんだぞー」

「あ……そういやはるか昔ニュースでそんなの見かけたような……」

「香加、話に乗るな。キリなくなるから。姉ももう喋るな」

「むぅー！」

「さて、長々と紹介してきましたが……これで１００回に渡ってき

たカカ天を振り返ることができたかな？」

「なんというか、全員登場させていつも通り好き勝手やっただけな感じがするけど」

「出てるのが僕らだしねぇ。仕方ないんじゃないかな。どんな場面でも僕らってマイペースだし」

「それが売りだしね」

「自分で言ってたら世話ないな。さて、じゃあこの辺にしておこうか。次回からはいつも通りのカカ天をお送りいたします」

「ばいばーい、またねー」

控え室（？）にて

「ね、留兄。こんな感じにぶっちゃけトークもたまにすると面白いんじゃないかな」

「んー、じゃ、たまにするか？　ラジオカカ天、みたいな感じで」

「読んでる人の反応見てから決めればいいんじゃない？」

「そだね。まだまだ続くからなんでも書いてけばいいんじゃないかとは思うけど……」

「どうせ作者の気まぐれと思いつきで書かれてるしね」

「僕らが考えても仕方ないか」

「じゃあ、とりあえずラジオ的な挨拶考えようか」

「んー、どんなんだろ。おはようをおカカーっていうとか？」

「こんばんわーをこカカーとか、こんばんカーカとか、そんなノリ？」

「それ浮かんだらまたやるかもね。というわけで大募集してみるか」

「……意見くれる人いるかな」

「さぁ？」

## カカの天下１０１「宝探しの家捜し」

ただいま、トメです。

何がただいまかというと、会社から帰宅したところだからです。

そして日課になっている玄関のホワイトボードに目をやります。

そう、カカがレンガを拾ったのをきっかけに購入された、すでにラクガキ帳と化しているあのホワイトボードです。

なにげに毎日更新されているからちょっとした楽しみなんだよね。

昨日は「走れとうがらし、あと一歩」で一昨日は「忍法ミソにこみ、覚悟しろうどん」でその前は「ゴリラとドッジボール」だったか。さてさて、今日は……いつものと違って結構長いな。

『宝探しゲーム！　この暗号を解いて宝を見つけよう！　早く見つけないと宝は萌えてしまうよ！』

宝探しか……この『萌え』という部分は果たして狙いなのだろうか。宝は何に萌えるんだろう。というか宝ってなにさ。まぁどうせ大したものじゃないだろうけど……

『ちなみに宝はトメのキャッシュカードです。萌へ～』

大したことありすぎる上にちっとも萌えやしねぇしっ！！！！

なぜ？　ホワイ？　いつどこで盗まれたんだ……カードをいつも入れてる財布の中を急いで確認してみるけど……ない。そういえば

昨日銀行から下ろしたよな……そのときたしか、そう、ポケットに入れた。しまった入れっぱなしにしててそれをカカが見つけたのかっ。

なんてマヌケな！！

……自分のマヌケさを悔やんでも仕方ない。クールになれトメ。所詮は小学生の作った暗号だ。簡単に解いてやる。なになに……

『ままおまままままましまいまままれまままのなままかままま』

ふむ、これだけ『ま』の文字が多いということは『ま』を抜くんだろう。タヌキと似たような暗号だ。

『ま』を抜く。

『ま』を抜け。

マヌケ。

「クールになれねえええええ！！！！！」

たった今自分で悔やんだことを改めてカカに言われた気がして、メチャクチャ腹が立って思わず絶叫してしまった。暗号が簡単すぎるのも逆にムカつく。

はぁ……落ち着こう。ほんと落ち着こう。暗号が解けてよかったじゃないか。僕の宝、というか財産はおしいれの中だ。

僕はキャッシュカードが萌え要素になってしまう前に（どんな風

になるのか見てみたい気もするが）急いでおしいれをあけようと玄関を突っ切り――気づく。

「おしいれって、どこのだ」

とりあえず客間のおしいれを開ける。ない。

かつて姉の部屋で今は倉庫になっている部屋のおしいれを開ける。ない。

開かずの間の部屋は開かないのでわからない。でも開かないからおしいれがあるのかもわからないから別にいいだろう。そういやなんでこんな部屋があるのだろう。あれ、考えようとすると頭が痛い……気にしないでおこう。

さて、と。まさか勝手に開けてないだろうなぁ、と思いつつ自分の部屋のおしいれを開ける。そりゃいい歳した男性ですから。押入れの一部にはお子様には見せられないものも多少隠してある。カカのやつ、キャッシュカード隠そうとして偶然見つけたりしてないだろうな……と、探してみてもカードは見当たらない。

と、なるとだ。残りはカカの部屋しかない。正直、勝手に妹の部屋のおしいれを開けるのはいろいろとヤバイ気がするが今回は緊急事態だ。

いそいそとカカの部屋に入る。

そういやカカいないな。ホワイトボードに書き込んだということは一度は小学校から帰ってきてるはずだけど。

などと考えながら、おしいれを開けた。

果たして、そこには……

「萌える宝、参上！」

「萌えねーよ」

布団の代わりに詰まっていたカカをとりあえず蹴飛ばす。

「いたっ！　なにトメ兄。家庭内暴落？」

「ああ、おまえの株が大暴落だ」

「カブの漬物っておいしいよね」

「かぶっとかじるとうまいんだなこれが」

静寂。

はい、話戻そう。

「カカ。おまえな、遊ぶのはいいけど、やっていいことと悪いことがあるぞ」

「ポケットに大事なカード入れたまま洗濯カゴいれるのはいいこと？」

……痛いところを。

「……そうだよ。ちょっと汚れてたから洗おうと思ったんだ」

「そうなんだ。そりゃ綺麗スッキリするだろうね。懐が」

……いや、カード失くせば全部終わりってわけじゃないけど……入れっぱなしにしてたのは確かに僕が悪かったしなぁ。

「……はいはい、悪かったよ。さ、ちゃんと宝見つけてやったんだからカードよこしな」

「ないよ」

「……はっ!?」

「私が宝だもん。トメ兄の宝だよね?」

「僕の全財産より価値があるとでも?」

「ないの?」

「……カカと八万円、どっちが高い? むむむ……」

そこ、貧乏とか言わないでね。

これは僕の口座の話であって、我が家全体の口座は別にあるんだから。

「トメ兄と八万円だったら、迷わず八万選ぶなぁ」

「僕は八万円以下か」

「少なくとも日曜日は」

「なぜに」

「稼ぎがないから」

「……言いたいことはいろいろあるけど、いいから返せよ」

「カード？　だからおしいれの中にあるって言ってるでしょ」

「……？　そのおしいれの奥にあるのか？」

「トメ兄の部屋のおしいれの、紺色の水着の人が表紙の本の真ん中あたりにはさんで――」

兄キック！！！

カカを吹っ飛ばして僕はマッハで自分の部屋へと走った。

# カカの天下１０２「猫様のおなーりー」

「トメ兄、猫だよ」

「ああ、猫だな」

トメです。

ただいま夕飯の買い物から帰ってきたところです。カカと相変わらずのノリで雑談しながら玄関に差し掛かったとき、僕らはそれを発見しました。

ちょこんとそれなりに成長した猫。

捨て猫にお決まりのダンボールにはこう書かれていました。

『おまえが飼え』

なんつう強気な捨て方だ。

「ねえ、どうするトメ兄」

「んー、飼うとなるといろいろ面倒だしな」

「じゃ、お隣の家に置いておこうか」

「おっけー」

あれ、なんか猫がぎにゃーぎにゃー！　って騒いでる。

「ねぇ、なんか猫が『ここは妹が飼いたい飼いたいと駄々をこねるシーンじゃないのか』って言ってる」

「へぇ、そうなのか。カカ、やってみ」

「やだよ。子供じゃあるまいし」

あ、猫がしぼんだ。ていうかさっきから僕らの言ってる言葉がわかってるような反応だな。

「ちなみに名前は総理大臣だって。趣味は『君、クビね』って言うことらしいよ」

「総理大臣というよりはどっかの会社の部長みたいな趣味だな」

あ、猫が怒った。

「これだから猫の違いがわからない人間は……って言ってる」

猫の違いなんか模様でしかわからねぇよ。

「ふむふむ、飼い主がまったく命令を聞かなくて、気がつけばこんなところにいたんだって」

「や、どっちかというとその猫が飼い主の言うことを聞かなかったんだろ」

「これだから猫語のわからない人間は……だってさ。やれやれ、人が猫の言葉なんてわかるわけないじゃんね」

「カカはわかってるじゃん」

カカは数秒停止したあと、目を見開いた。

「ほんとだ！　私すごい！」

「あー、すごいねすごいね」

「なに、その反応。私のリアクション違ってた？」

僕の冷めた反応に不満らしいカカは少し考えたあと、

「じゃ、こういうのは？　ひ、秘密がバレたか！？」

秘密だったんだ、猫と話せるの。

そりゃそうか。おおっぴらに「私は猫と話せる」なんて触れ回ってるヤツがいたらお近づきにはなりたくないし。

「秘密を知られたからにはいかしたヤツだ！」

「生かしてはおけない、だろ。いかしたヤツって誰だよ」

「私に決まってるじゃない」

「えーっと、そうですか」

「……トメ兄。反応つまらない」

どうしろというのだ。

「じゃあねじゃあねー」

「はいはい、そのくらいにしてその猫どうするか考えよう。なんか不貞腐れた顔してるぞ」

「ほんとだ。君クビねって言ってるよトメ兄」

「……ああそうかい。飼い主としてクビですかそうですか。さぁどこに捨てようか。川か？　海か？　肥溜めか？」

身の危険を感じたのか、総理大臣は暴れ出した。

「うるさいよ大臣」

キュッと一発。大臣は黙った。弱いな大臣。日本大丈夫か。

「で、コレどこに捨てる？」

「んー……」

玄関から外へ出て、周囲を見渡す。

ぴたりと。たまに利用している食堂に目がとまった。

「そういやあこのご主人、最近寂しそうにしてたなぁ」

「セイジ食堂のおいちゃん？　ぴったりじゃん」

セイジに総理大臣。なにこの奇跡的な組み合わせ。

「あそこに捨ててこようか」

「あ、ちょっと待って」

カカは家に一旦入り、しばらくしてまた戻ってきた。

ペンを取ってきたらしい。『おまえが飼え』と書かれた下に何かを書き加えているようだ。

「完成」

「なになに……」

『おまえが飼え。さもなくば食え』

「明日の日替わり定食はなんだろうね」

「肉料理だったら食べないでおこうな」

僕ら兄妹は仲良く頷き、黙らされてぐったりしている大臣を連行した。

翌日のセイジ食堂の日替わり定食は……『特製ハンバーグ』

まさか、ひき肉に……？

おそるおそる店内をのぞくと、そこにはそのハンバーグをおいしそうに頬張っている姉の姿。

「大臣食べちゃったのかな、姉」

「……さぁな」

「大臣おいしいのかな。刻んだのかな。焼いたのかな。やっぱ最近の政治って煮え切らないからやっぱ煮たのかな？」

「なぁ、カカ。真相は置いといてそのすんごい表現やめないか？」

大臣の生死やいかに。

あと、味やいかに。

## カカの天下１０３「赤ずきんの狼ってよく生きてたよね」

「いただきます」

「「いただきまーす」」

いただきトメです。

今日は妹のカカとその親友のサエちゃんでお茶会です。

といっても居間で紅茶とケーキを食べるだけ。たまたまサエちゃんの家にそれらのお茶会セットが届いたらしく、せっかくだからとうちまで持ってきてくれたのだ。

「はむ……おいし」

「サユカちゃん残念だったな。家の用事だっけ？」

「はい、親戚の引越しの手伝いだとか。トメお兄さんを食べるためなら死んでもくるって意気込んでたんですけどねー」

「え……？　食べられるんですか僕」

「あ、間違いです。トメお兄さんと食べるためなら、ですね」

「はむはむ……あながち間違いでもむぐむぐ……んぐん。ないけどね」

「なんか言ったかカカ」

「むーぐー」

幸せそうにケーキを頬張りながら首を横にふるカカ。声が小さいのと食べながら喋ってるのでなに言ってるのかわからん。

「ま、残念だな」

「そこはポジティブに考えるのよ！　おかげであたしが余った分を食べれるじゃん」

はて、「あたし」なんて粋な一人称のお方はこの中にいましたかしら？

「姉……どこから生えてきた」

「そこの玄関」

「わかった。生えないようにするには何をまけばいいんだろ。除草剤かな」

「とりあえず湿気がたまらないようにしてみてはどうでしょう」

「あたしは草とかキノコの類かっ！？」

「食虫植物とか」

「冬虫夏草かもしれませんね」

ああ、あの虫にとりついて育つキノコか。

……というかサエちゃん、発言がますますカカじみてきたなぁ。
将来が心配……あれ、そういえばカカは？

視線をやると、カカは瞳を潤ませながら姉を見つめていた。

いや、正確には姉の腹を。

「総理大臣っ！！」

あー、そういや猫食べられた（かも）だっけ。

カカは半分泣きながら姉の腹にすがりついた。姉は当然わけもわからず目を白黒させている。

「大臣……そこにいるの？　痛かった？　苦しかった？」

「ねぇ、弟。なに、これ？」

「カカちゃん。頭のネジがとんだの？」

サエちゃんてばほんと……いや、今はそれどころじゃない。

「大臣、いま助けてあげるからね。この腹を包丁でかっさばいて……」

「うえあいあ！？」

ほんとにそれどころじゃない！！！

「やめろカカ！！」

「はなしてー！　総理大臣を助けるの！！」

「総理大臣がお姉さんに誘拐でもされたの？」

「お姉のお腹の中に誘拐されたの！！」

「じゃあもう溶けてるよカカちゃん」

生々しい……恐ろしく生々しい会話だ！！

それなんてホラー映画？

「溶けてないもん！　そのお腹を割れば猫が出てくるんだもん！」

「割ってからまた縫えば元通りだもん！　赤ずきんちゃんはそうやって助けられたんだから！」

「あれは童話の狼だから元通りになったんだ！」

「狼でさえ元通りになったのに姉がそれで死ぬとでも言うわけ！？」

「そう言われると自信はないけどもっ！！」

カカは必死で僕が抑えつけているので、妹に包丁を突きつけられた姉は状況を把握しようと必死で首を捻っている。

……や、多分この状況でカカの怒る理由を把握できる人などいないだろう。

「つまり、カカちゃんはお姉さんが総理大臣を食べたって言いたいんだね」

……あれ、サエちゃんは意外とすんなり把握してる。

「あのさ、私だっていくらなんでも人間は食べないよ？　まずいもん」

「さも食べたことあるような言い方するな。総理大臣っていう猫のことだよ」

「ああ、セイジ食堂に住み着いたあの猫ね。それがどうかしたの？」

ぴたり、とカカの動きが止まる。

「猫……食べてないの？」

「あたしは犬は食べるけど猫は食べないよ」

や、その発言もどうかと。

「証拠がほしけりゃ夕飯にでも食堂行ってみなよ。多分いるから」

夕飯時。セイジ食堂に言ってみると……

「総理大臣！！」

かつて我が家の玄関に捨てられていた猫が偉そうに鎮座していた。

「よかった……食べられてなかったんだね」

感極まって抱きつくカカ。ああ、いいシーンだ。

いいシーン……はっ。

ゆらり、と立ち昇る淀んだ空気。

「ほぉ……なんで、食べられるかもしれなかったと思うんだい、嬢ちゃん」

人はその見えざる感情の波を、怒りのオーラと呼ぶ。

「まさかこいつを捨てたのが嬢ちゃんだった、なんてこたぁ、ねぇよなぁ？」

そのオーラを纏って般若と化したセイジ食堂の主人、ゲンゾウ！！

カカは冷や汗をたらーりとしながら、

「や、昨日ね、姉が総理大臣はおいしそうって言ってたから、もしかしたらもう食べられてるんじゃないかな、と心配してて」

ありそうな言い訳を口にした。

「ほう……うちの大臣を」

般若の視線がついてきていた姉を捕らえた。

姉、逃げる。

それを追って、般若、いっきまーす！

二人を見送りながら、僕とカカ、そして付き合いでついてきていたサエちゃんは食堂の席についた。

さ、夕飯だ。

# カカの天下１０４「カカ達のお祭り、前編」

「ね、トメ兄。今度お祭りあるんだって」

「ああ、知ってるぞ」

あるんだってトメです。別に芸名じゃないよ？

ただいまカカと二人して夕飯を食べています。メニューは……しょぼいんで聞かないでください。

「みんなで行くか？　サエちゃんとかサユカちゃん誘って。うわ、両手に花だな僕」

「私もいれて三人だから背中にも花だね」

「背中……カカに花のトゲで刺されるような気がするのはなぜだろう」

「刺すに決まってるじゃん」

「決まってるんすか」

「こんな納豆ご飯と野菜ジュースなんていう夕飯出されたらそりゃ刺すよ」

それだけで刺すのかー、キレるお子様時代ですかー、というかせっかくこの夕飯状況を見ないようにしてたのにコイツはー。

「お祭り行くのはいいけど、使うお金あるの？　ウィンドウカーニバルなんて寂しいことするくらいなら行きたくないよ？」

ウィンドウショッピングの祭りバージョンか……それは確かに拷問だ。でも言葉を聞くだけならなんとなく楽しそうだから不思議だ。

「ま、明日給料日だから大丈夫だよ」

「じゃ明日の夕飯はマンカンゼンセキだねっ！」

「んなもん食ったら一瞬で給料消えるわ。大体、意味わかってるのか」

「満（一万人の）漢（おとこ達が）全（全裸で）席（席に座って食べる料理）でしょ？」

「由緒正しい中華の宮廷料理をよくそこまで変態料理にできるなおい」

「姉がそう言ってたけど」

「姉の言うことは九割がキワモノなんだから信じちゃいけません」

「じゃあ正しい意味ってなにさ」

「中国が清朝のときの満州族の料理と漢族の料理のうち、山東料理の中から選りすぐりのメニュー並べた宴会様式だよ。現代で中華料理屋で出されるやつはその頃の想像を膨らませて作ったのが多いらしいけどな」

「……なんでそんなに詳しいの」

「へ？　いや、その……ほら……僕も、食べたいって思ったこと、あるし」

兄妹で考えることは一緒だよなぁ。

「で、結局お祭りは大丈夫なわけね」

「おう、少しくらいなら奢ってやれるぞ」

「じゃ、お祭り全てのタコ焼き屋さんをまわろう」

「全部買うのか？」

「うん。伝説のタコのないたこ焼き屋を探すの」

「見つけてどうするんだ？」

「おうおうアンちゃん！　このたこ焼きどうなっとるんや！？　っていちゃもんつけるの。お祭りの風物詩だって姉が言ってた」

「だから姉の言うことは聞いちゃいけませんとあれほど言ってるだろ。あいつの声はマンドラゴラの叫び声とでも思ってだな」

「聞いたら死ぬじゃん」

「だから聞くなってことだよ」

「だって聞いてるとおもしろいもん。それで行動して失敗しても姉

のせいにできるし」

……ほんと、いい性格してるよなぁコイツも。

「とにかくな。お祭りの風物詩といったら射的とか」

「射的でお兄さんを当てて、あなたは私のもの……逃がさないわ！って押し倒すんだよね」

「やるのか？」

「冗談だよ。私が男に興味あるわけないじゃん」

や、その返しもどうかと。

「あとは綿アメとか」

「綿アメを固めて鼻につめるとおもしろいんだって。トメにやってあげるね」

「焼きソバとか」

「頭にかぶって髪の毛に」

「フランクフルトとか」

「耳にさして」

「ひよこ釣りとか金魚釣りとか」

「釣ったのを口にくわえて」

「お面とか」

「股間につけて」

「喧騒をＢＧＭに」

「どじょうすくいを踊り狂えばりっぱなお祭り怪人だねっ！」

「人はそれをりっぱな変態と呼ぶ」

そんなこんなでくだらないことをいいながら話は進み、カカはサエちゃんとサユカちゃんを誘っておく。僕は姉とサカイさんを誘っておくこととなった。念のため、大人は多いほうがいいということだ。

「大丈夫。お祭り怪人が出るって言えばみんなきっと来るよ」

「そりゃ来るだろうさ。本当に出るなら」

「出るよ。ていうか出すよ」

「やめれ」

# カカの天下１０５「カカ達のお祭り、中編」

「祭りだ！」

というわけです。トメです。

今日は僕らが住む街のお祭りです。特に大きい街ではないにしても、さすがにこの日はそこかしこに出店がひしめき、賑やかな喧騒に満ちています。

今の僕は妹のカカと一緒に、友達のサエちゃんとサユカちゃんを待っているところです。

「姉とサカイさん、残念だったね……」

「用事があるってんだから仕方ないだろ」

「あれ？　似たような会話を最近したような覚えが」

「気のせいだ」

あの二人を誘ったときのことを思い出す。なんか妙にニヤニヤしながら断ってくれた。すごく怪しかった。もしかしたら用事ってこのお祭りに関することなんじゃ……

「サエちゃんもサユカちゃんも浴衣で来るんだって。脱がすのが楽しみ」

「なぜ脱がす」

「浴衣ってそれが楽しいんじゃないの？　トメ兄も我慢できなくなったら私の脱がしてもいいよ」

「僕を犯罪者にする気か！？」

「えー。よいではないかよいではないか！　おやめくだされおだいかーん！　ってやりたいのに……」

「……あー、それなら後でやってやるよ」

正直言おう。

それはぶっちゃけやってみたい。

「あ、二人ともー！　こっちこっち！」

お、サエちゃんとサユカちゃんがきた。

「こんばんは、カカちゃん、トメお兄さん」

「こんばっ、カカすけ。と、トメさん！」

「こんばんは、二人とも浴衣可愛いねー」

「サエちゃん、サユカちゃん。脱がしていい？」

いきなりそれかい。

「うん、あとで部屋でねー」

「し、仕方ないわね……優しくしてよ？」

よいではないかお代官の話は事前にしているらしい……けど、ここだけ聞くとめっちゃアブナイ会話に聞こえるな……

「じゃ、行こうかー」

「うん、お祭り怪人楽しみだね」

「いつ現れるんですか？」

「カカすけ、用意したんでしょ？」

……あれ、なんでそんなのが現れること前提なのですか？

「やだなー、用意してないよ」

カカはけらけら笑いながら、

「まだ」

おっそろしいことを口にした。

「射的だ。一番手、カカいきます！」

「おー、頑張れー」

屋台のおっさんから銃を受け取り、いそいそと弾を詰め込む。

「サエちゃん、どれがほしい？」

「あのクマのぬいぐるみがいいなー。寝る前にキスして抱いて布団に入るの」

「わかった。とってサエちゃんにあげるね。ところでどれがほしくない？」

「あのゲルンガーって感じの人形が気持ち悪いなー」

あー、あれか。何かのキャラクターかは知らないが、程よく皮膚が溶けてるあたりがこの上もなくゲルンガーだ。

「わかった。とってサユカちゃんにあげるね」

「イヤガラセかっ！？」

「いくよ……必殺、ライフルブーメラン！」

「って銃を投げるなあああああ！！」

「痛っ！？」

「屋台のおじさんに……！」

「む、狙いが外れた……じゃあこの景品はトメ兄に」

「いらねぇよこんなおっさん！」

「ちゃんと寝るときにキスして抱いて布団に入るんだよ？」

「……ぽ。やだトメお兄さんたら、それナイス」

「じゃ、じゃあこのおじさんの代わりにわたしを、そのっ」

「おー！！　サユカンがんばれー！」

なんて感じに、一つの店を見るだけでこの大騒ぎ。

色んな出店を冷やかしながら、楽しく僕ら四人はお祭りを堪能していた。

いた、んだけど。

「む？　はぐれた」

「トメお兄さんとサユカちゃんいないねー」

「……あれ、あいつらどこいった」

「二人きり、ですね」

こんな感じにはぐれてしまった。

「……ちゃんす？」

その内、二人の人間がこのセリフを呟いたことを、僕は知らなかった。

## カカの天下１０６「カカ達のお祭り、カカ編」

こんばんは、カカです。

いきなりですけどピンチです。今日はお祭り、トメ兄とサエちゃんとサユカちゃんと四人で仲良く出店をまわっていたのですが……

「はぐれちゃったみたい、だね」

「うん……そ、ソダネサエチャン」

「カカちゃん？　なんかロボットみたいだよ」

仕方ないじゃん！

今日はお祭り！　そして横には可愛すぎる浴衣姿のサエちゃん！

イベント中に好きな人と二人きり。

これはもうどこからどう見ても告白すべきシチュエーションでしょう！

いや、もういっそ暗がりに連れ込んであーれーよいではないかおだいかーんってやって押し倒してそれから……

ん？　なんて言ったのかな。言葉の意味がよくわからない。

私は首をかしげて――仕方ないじゃん！　と思ったあたりから何やらぼそぼそと耳元で囁いてきたその人に目を向けた。

「……あんた誰」

「えっと……通りすがりのお祭り怪人ですー」

私にいろいろと吹き込んできたそのお面をかぶった怪しい人は、そんなことを言った。

「カカちゃん、この人誰？」

「お祭り怪人だって」

「嘘だよっ！！」

いつもおとなしいサエちゃんが珍しく叫んだ。

「お祭り怪人っていうのは、頭にやきそばをかぶって鼻に綿アメつめて耳にフランクフルトさして口にひよこと金魚と亀をくわえてお面を股間にかぶってリンボーダンスしながら商売繁盛！　って叫ぶ人のことなんだよ！」

……そこまで言ったっけ私。

というかそんな必死で……もしかして憧れてたりするのかな、お祭り怪人に。

「え、えっとー」

困惑しているらしい自称お祭り怪人さん。仕方ないなぁ、助けてあげるか。

「ま、この人がお祭り怪人っていうんだからそうなんでしょ」

「そ、そうですそうです」

「じゃ、とりあえずやきそばかぶろうか」

「え！？」

「お祭り怪人に変身するんでしょ？ならＧＯＧＯ」

優しい私の助け舟に、自称怪人さんはなぜか焦った声をあげた。

「い、いやそのー。ちょっとそれはー」

「じゃあお面はあるわけだし、それを股間に――」

と、お面を触ろうとしたら物凄い勢いで手を叩かれた。

怪人さんはよほどあせっていたんだろう。それは手加減なしで、乾いた音がお祭りの喧騒の中でいやに強く響いて……痛さより熱さが手に滲む。

だけど。

それよりも鮮烈な音が響いた。

怪人さんは、ずれたお面を直そうともしないで呆然としているようだった。

私も呆然としていた。

それを見た周囲の人も呆然としていた。

ただ一人、サエちゃんだけがきつい視線で彼女を睨んでいた。

彼女の頬に平手を見舞った、サエちゃんだけが。

「カカちゃんに乱暴しないで」

「……あ、ご、ごめんなさ――」

「いこ、カカちゃん」

「へ、あ、うん……」

手を引っ張られながらも、私はまだ呆然としていた。

サエちゃんが、怒ってる。

「あ、あの、サエちゃん」

「なにー？」

さっきまでの厳しい表情はどこへやら。

いつもどおりのぽやーっとした表情で私と一緒に一パックのやきそばをつついている。

「もう、怒ってないの？」

「んー、一応」

い、一応？

「さっきはびっくりした。サエちゃんのあんな顔、見たことなかったから」

「私もあんなことしたの初めて。実は手の平、まだ痛い……ううん、熱いかな。どっちかというと」

えへへーと照れ笑いするサエちゃん。

「どうして、そんなに、怒ったの？」

私の疑問がよほど意外だったのか、サエちゃんはきょとんとしたあと、

「カカちゃんは、私が乱暴されたら怒らないの？」

そんな、口にするまでもないことを口にした。

そう、だよね。

言うまでもないよね、そんなこと。

私はサエちゃんの手を握った。

まだ熱さが残るという手を。

その熱さを確かめるように。

「それにしても、なんだったんだろ、あの怪人」

「どこかで聞いたことがあるような声だったんだけどなぁ……」

「今度会ったらどうする？」

「とりあえず焼きソバを頭にかけてあげよっか」

「サエちゃん、まだ怒ってる……？」

「お面してたから人違いに気をつけないとね」

「……ほんとにね」

## カカの天下１０７「カカ達のお祭り、トメ編」

「んー、とりあえず適当にまわってようか。そのうち会うだろ」

「そ、そそそそうですねっ」

困ったもんだ、トメです。

みんなでお祭り楽しんでたのに……気づいたらカカとサエちゃんの二人とはぐれてしまった。

仕方ないからサユカちゃんと二人で歩いてるんだけど……なぜだろう。この子はめっちゃ緊張してるみたいだ。

うーん……結構何度も会ってるし、すっかり打ち解けてると思ったんだけどなぁ。僕、話しづらく思われてるのかなぁ。

「これはもうどこからどう見ても告白すべきシチュエーションでしょう。いや、いっそ暗がりに連れ込んであーれーよいではないかおだいかーんってやって押し倒してそれからセック――」

なんか、すごいセリフを言ってる人がいる。

思わず振り向いたけど……人の波が大きすぎて誰が言ったのかよくわからなかった。むぅ、天下の往来でそんなセリフを言う変態を見てみたかったんだけど。

もしかしてカカの言っていた変態、お祭り怪人か。おそるべし怪人。

「こ、告白……おだいかん……」

あら、この子も聞いちゃったのか。

「あ、あのっ」

「ん？　なにサユカちゃん」

「クレープ屋さんおごってあげます！」

「へ、や、そんなものすごいもんおごってもらっても」

「じゃなくてっ、クレープおごってあげますっ」

いま聞こえてきた変態の言葉のせいか、僕に緊張しているのか……

どっちかはわからないけど、少なくとも嫌われてはいないみたいだ。ちょっとホッとした。

「ありがと。嬉しいけど、いい大人の男がおごってもらうわけにはいかないよ。ここは僕がおごってあげる」

「で、でも……」

「いいからいいから。遠慮しない」

「じゃあ遠慮なくチョコバナナクレープと普通のチョコバナナと普通のバナナとバナナポテトとバナナたこ焼きとバナナ屋台ちょうだいなっ！」

遠慮しなさすぎ……って、これ、サユカちゃんの声じゃないな。

サユカちゃんと首を傾げながら振り向くと……そこにはバナナのお面をかぶった人が立っていた。バナナのお面ってどんなんだと疑問に思う人もいるだろう。でも説明しようがない。がんばって想像してくれ。

「……あんた誰」

「我こそはバナナ仮面！」

「それお面」

「むぅ、さすがはツッコミ。細かいところも聞き逃さないね」

「なんで僕がツッコミだって知ってる」

自分で言うのもなんだが。

「ん、いや、ほら。一流のボケはツッコミを見抜くっていうじゃん？」

「一流のバカだろあんた」

「違うっ。我こそは占い師！」

「バナナ仮面じゃなかったっけ」

「バナナだけど占いもするのだっ」

なんだろう……このテンポ。どこかで嫌というほど味わいまくったような覚えが……

「ほ、ほんとに占い師？　なんか、全然そんな風に見えないんだけど」

若干怯えを隠しながら恐る恐るサユカちゃんが尋ねると、バナナ仮面は少し考えて、

「占い師ってさ、なんか怪しい感じじゃん？」

「え、ええ」

「まぁ信じてない人から見れば」

「あたし、怪しいじゃん？」

「それはもう」

「とてつもなく」

二人して即答すると、バナナ仮面は大きく頷いた。

「そう、だから誰よりも怪しいあたしは占い師でしかありえないのだよっ！！」

「全国の由緒正しい占い師さんに謝れ」

「どうもすみません」

素直でよろしい。

「んで、結局あんたは何がしたいの」

「もちろん占いだよっ！　というわけでラブラブっぽい二人の相性をみてあげよう！」

ラブラブ？　僕とサユカちゃんが？

……たしかにサユカちゃんは小四にしては背が高いけど……いくらなんでもそう見るのは無理があるのでは。

それに、せっかく仲良くなりかけてるのにいらぬ誤解のせいで印象を悪くするのはよくない。サユカちゃんの名誉のためにも、ここはハッキリと言うべきだろう。

「や、僕らはがもっ」

言おうとした途端口をふさがれた。なんでや。

「……もが？」

「その先は言うな。言ったら一人のか弱い少女が傷つく気がする」

「……もぐが」

なぜこの変なバナナがそんなことを言うのかわからない。妙なカンでも働いたのだろうか。一応占い師だし……

「とにかくっ！　二人の相性はバッチシカンカン！　この上もなくうまくいく星の元に生まれてるから今後とも仲良っくするように！　余計なことを言うなよ君！　では幸せに」

言いたいことを言って、バナナ仮面はあっという間に走り去っていった。

「なんだったんだろ、あれ」

「……」

「ん。どしたのサユカちゃん」

サユカちゃんはなぜか……その、溶けていた。

「あ、あのトメさん！」

「な、なんでしょうか」

「てててっててててをつないでもいいですかっ」

「てて？　あ、手か。まぁ、そだな。これ以上はぐれるのも困るし」

一人ではぐれてあんな変なのに絡まれたりしたら……保護者としてついてきたのに親御さんに申し訳がたたない。

「そ、そうじゃなくて」

「へ？」

「な、仲良く、し、しようかな、なんて」

仲良く？

……ああ、占い結果でか。手を繋ぐのはたしかに仲良しっぽい。

そんなの気にするなんてやっぱ女の子だなー。

でもまぁ、仲良くなれるに越したことはない。これでサユカちゃんとの微妙な雰囲気が少しでも解消できるなら……

というわけで、僕はサユカちゃんの手を握った。

「……！！　あ、あああああのお化け屋敷、おいしそうですねっ！　わたし前から一度食べてみたかったんですよ！」

「はいっ！？　さ、サユカちゃん落ち着いて」

「へっ、いや、わたしは落ち着いてますよっ。ちゃんと九九も逆立ちしながら言えますしっ」

……あれ？

なんか妙な雰囲気が悪化しちゃったぞ。

なんでだ。

## カカの天下１０８「カカ達のお祭り、後編」

「……お、カカ」

「……お、トメ兄」

「トメお兄さん」

「……」

トメです。

お祭りにみんなで来たはいいもののはぐれてしまった僕らでしたが、再び見かけたバナナ仮面を追っているうちに見事合流を果たしたのでした。

「ふう、合流できてよかったよ。僕、今日は携帯置いてきたからさ」

「まったく、その歳で迷子なんて情けないったらありゃしない。勘弁してよね」

「迷子はおまえらだろが。おまえらのほうが子供だし」

「トメ兄達だよ。私たちは迷ってないもん」

「じゃあなにしてたんだよ」

「いちゃついてた」

ぅおい。

「トメ兄もでしょ」

「いや、僕は……」

僕ら兄妹は改めて互いの連れを見る。

「やけにべったりしてるなー、おまえら」

「カカちゃんが腕組んで離してくれなくて……」

困りながらも若干嬉しそうに言うサエちゃん。

「トメ兄とサユカちゃんこそ手繋いでるじゃん」

「いや、なんというか、変な仮面のやつのおかげで、仲良くなれた、と、思うんだけど」

そのサユカちゃんに視線をやるが……俯いたまま顔をあげない。

なんかさっきから会話をするたびにものすごく体力を使っていたらしく、力尽きてしまったみたいだ。顔が赤いのも疲れによるものだろう、多分。

「へぇ、ほぉ……」

「サユカちゃん、よかったね」

カカはサユカちゃんの顔を覗き込んでニヤニヤしてる。

サエちゃんは全てお見通しと言わんばかりにニコニコしている。

なんだこいつら。

「さて、せっかく合流できたことだし……もっかい屋台めぐるか」

「おーっ」

「輪投げだとさ。やるか？」

「私、やりたいです」

そう言って進み出たのはサエちゃんだ。

お金を払って、屋台のおっさんから輪をもらう。

「何ねらうの？」

「えい」

答えずに投げられた輪は綺麗な放物線を描き……僕の頭に乗った。

「トメお兄さんは私のものね」

「ちょっと待ったぁ！！」

あれ、サユカちゃんが生き返った。

「サエすけ！　あんた今なんて言った！？」

「トメお兄さんは私のものだって言ったの。この輪に入ったものは何であろうと投げた人のものになるんだよー」

そりゃすげぇな。

「だからトメお兄さんの首は私がもらった」

武将か君は。

「じゃあわたしだって！」

サユカちゃんはサエちゃんから輪を奪い、僕の頭に向かって二つの輪を投げ……見事に僕の頭に乗る。っておい。

「二つ乗った！　サエすけより多い！　だからトメさんはわたしのもの！」

「ほいほいほい。さらに三つ乗った私の勝ち」

「あー！　じゃあわたしも……もう輪がないっ。おじさん、輪っかもっとちょうだい！！」

「……いいかげんにしろやおまえら」

頭を、というか顔を輪っかだらけにした僕はどうしたもんか、とカカに相談しようとしたけど……

「サエちゃんが……サエちゃんがたかがトメ兄なんかを……許さない、呪ってやる……必要なのはイモリと……ねずみと……カマキリと……」

な、なんかいじけてる……のはいいんだけど地面に書いてあるのが「の」の字じゃなくて黒魔術の怪しい方程式っぽいのがなぜなのか気になるなぁお兄さんは！

とにかくこの騒ぎを止めてカカの機嫌を直さなければ！

「はいはいはい！　サエちゃん、もういいだろ？　サユカちゃんは元気になったんだから」

「はーい。悪ふざけがすぎたかな。ごめんねーサユカちゃん」

「……そうあっさり笑顔を見せられると怒ってた自分が馬鹿らしくなる……ほんと、いい性格してるねサエすけ」

なんで怒ったり元気になったりしたのかいまいちわかんないけど、まぁいいや。

とにかく、カカの機嫌を！

「カカ、なにか食べるだろ？　奢ってやるぞ？」

「……コウモリの牙と……悪魔のしっぽと……」

……食べるの？　それ……

妙な呪いの儀式をたこ焼きとりんごアメで阻止して、僕らが次に行き着いたのは……

「風船割りだって。えーと……ダーツを投げて、風船を割ってポイントにする、だって」

「じゃ、カカちゃんは射的、私は輪投げでボケたから、次はサユカちゃんの番ね。はい、ボケてボケて」

「え、え、えーと……」

「サユカちゃん。そのダーツ僕に向けないで？　ほんとにヤバイから」

「……」

「ねぇ、なんで残念そうなの？　しかもなんで三人とも同じ顔すんの？　余計なこと言うなよって顔しないでよ、なんか悲しくなるじゃん！」

と、そのとき。

腹にまで響く重低音が空から聞こえてきた。

「お、花火だ。サエちゃん、サユカン、いこっ」

「うん。この先の坂の上に見晴らしのいいとこがあるよー」

「えっ、ちょっと待ちなさいよっ！　この風船割り、どうすんのよ

っ」

「サユカちゃん、花火もそんなすぐには終わらないから。のんびり行こう」

「あ、そ、そうですか……じゃあ、いきます」

急にしおらしくなったサユカちゃんの風船割りを見届けてから、僕はカカ達の後を追った。

ちなみに、風船割りの結果は全弾命中、ダーツが刺さりまくった。

風船の下にある、景品に。

もちろん景品はもらえなかった。弁償請求されなくてよかった……

そして、丘の上にある公園から花火を眺める。

僕ら四人は夜空を彩る花々を無言で見上げていた。

少し前まで肌寒かったのに、すっかり暖かくなった風。

重々しく、そしてどこか懐かしい花火の音。

お祭りの風物詩を堪能していた僕らの中で……カカがぽつりと呟いた。

「いいね、こういうの」

「ん」

僕はただ、頷いた。

今日は楽しかった。こんな大騒ぎのお祭りは姉が旅立ってからしたことがなかった。

こんな時間を、また過ごせたらいいと思う。

「ねぇ、トメ兄」

「なんだ、カカ」

「いまさ、花火の中でバナナのお面が見えた」

「……気のせいだ」

人がいい感じで浸ってたのに、不吉な影を落とすな。

僕はカカの言ったことを忘れるため、一心不乱に花火へ視線を注いだ。

## カカの天下１０９「カカ達のお祭り、番外編」

「んー、仲良くなったようで結構結構♪」

どもっす！　あたしはバナナ仮面！　名前はまだない、わけじゃないけど明かせない。

なぜなら、なんとなくっ。

あたしの素晴らしき占いによって恋愛成就間違いなしの二人を、はぐれてた二人と無事に合流させた。うまくいって安堵したあたしは、人波からはずれてしゃがみ込んでいる相棒に声をかける。

「おつかれっ！　どうだった？　相棒」

「ぶたれたー……親にもぶたれたことないのにー……親としてぶったこともないのにー……でもたくましく育ってくれて嬉しいようなー……でもぶたれたー……」

相棒のお祭り怪人はあたしの声が聞こえていないらしく、ぶつぶつと地面に向かって独り言を言ってる。

「ほら、ぶたれたぶたれたってブーたれてないで」

お？　あたしうまいこと言った？

「うううーん」

……しかし相棒のツッコミはなし。この人ツッコミ属性じゃない

から仕方ないかぁ。

あ。

あたしの鍛え上げられた野生のカンがそれらを捉えた。

「お祭り怪人、やばい。警官だ。ずらかるよっ」

「ううう……うー？　なんで警官がー？　私たち、すごく怪しいけどそれだけで何もしてませんよー？」

今時はそれだけでも捕まるんだけど。

「いや、あんたは何もしてないだろうけど、あたしはしたのよ」

「何したんですかー？」

「盗み。あと、警官一人ボコった」

あ。絶句した。そりゃフォローしようもないもんねっ！

「というわけで行くよっ。シュー君に捜査妨害してもらってるけど効果はいまいちみたいだから」

「え、え、そのー、それは私も共犯にー」

なるに決まってるじゃん、あんたのためにやったんだから！

言葉にするのが面倒くさくて、そのまま相棒の腕を掴んで走り出す！

警官達は人の波に阻まれながらもあたし達を見つけたらしく、声を荒げて追ってくる。

こんな怪しいお面をしてれば、見失っても周囲の人に聞き込みすれば一発で居場所がばれるもんね。

じゃあお面をはずせばいい、という提案は却下。あたしらはこのお祭りの間、バナナ仮面とお祭り怪人になると決めたのだ。誓ったのだ。お月様のあんちくしょうに。別にお月様がそんなに偉いとは思えないけど。なにせ太陽の光あびて光ってるだけだし。もっと爆発する勢いで自分で光れよ月も。

それに、万が一お面をはずした状態で『彼ら』に会ったとき、服装で正体がばれるかもしれない。それではせっかくの演出を台無しにしてしまう。

だからあたしはお面をはずさない。

その代わり、お面を増やす。

バッグから取り出したバナナとお祭り怪人のお面を、相棒と二人で片っ端から通行人にかぶせていく。問答無用に。

「え！？」

「ぶっ！」

「ちょ」

ありったけのお面をかぶせまくったころには、警官は誰を捕まえればいいのかわからなくなっているという寸法だ。無関係な通行人がお面をはずしても、それを持っているだけで容疑者となりうるのだから。

あたしたちは混乱している人達に紛れ込み、うまく警官をやりすごした。

そして、盗んだブツの元へたどり着く。

「これはー？」

「花火の砲台だよ」

どうやって盗んだかは、話すと長くなるから省く。

「そしてここには、特製の花火弾があるのだよ！　じゃっじゃーん！！」

これぞあたしの顔の広さの勝利！

「知り合いの花火師に作ってもらったのさ」

「何か特別な花火なのー？」

「この花火は文字の形で咲くの！　その文章とは――」

その内容を言った途端、我が相棒は赤面した。や、お面してるけ

どわかる。

「なななななー！　そそそそそんなのもし見られたらーっ！？」

「見せるために撃つんじゃん。ほら、もう花火の時間だよ」

腹に響く重低音。あたし達のいるすぐ隣から次々と撃ち出される花火。

そう、この花火に紛れて特製花火を撃つこと。これが今回の作戦の仕上げなのだっ！

「相棒、あんた、このお祭りで何したいって言った？」

「……それはー」

「いろいろ厄介な事情があるにせよ、こんな回りくどいやり方でも接点を持ちたいって言ったの、あんたでしょ？」

「……うん」

「それはつまり、この花火に込められてる文章を伝えたいってことじゃん。まんまでしょ？　あんたの気持ち」

「そう、だけどー」

「じゃ、レッツゴー」

「やっぱりだめー！！」

「は？」

あらフシギ。突き飛ばされたあたしの身体が砲台の中へ。

あ、あの。火、点いちゃってるんですけど？

「私のこと、いろいろ考えてくれてありがとう。でも、これじゃ、ダメだよ。私が、ちゃんと自分で伝えなきゃ」

「ね、ねえ」

「まだダメだけど、いろいろ解決しなきゃならないこと多いけど、でも、でもいつか！」

「ご高説ごりっぱパチパチパチ！　ついでにそこのパチパチいってる火もとめて！」

「あー、大丈夫ですよー」

「い、いくらあたしでもこれは」

「なんというかー、ビジュアル的にというかー、キャラ的にというかー、その他もろもろの事情で大丈夫ですよー」

「んな無茶な！？」

「ほらー、漫画でケガしたキャラが次のコマだと回復してたりするのと同じ理屈でー」

「ちょ、ま、まじっすかあああああああ！！」

夜空に咲く、大輪の花。

その花のうちの一輪が、何かを叫んだ。

それを聞いた者は、いない。

## カカの天下１１０「寒い話集」

暑い。トメです。

夏が近づいてきたせいか、気温が妙に高いような気がしてなりません。これも温暖化の影響でしょうか？

「トメ兄……暑い」

「僕もだ……」

そして僕ら二人は日曜の昼、しかも快晴というシチュエーションで、不健康にも居間の畳の上でぐったりとへばってます。

「アイスほしー」

「太るぞー」

「そんなの気にしないー」

「太ったらなおさら暑くなるぞー」

「んじゃトメ兄が代わりに太ってー」

「意味わからねー」

ひたすらだらけきった会話が進む。

「水ほしー」

「飲めばー？」

「台所まで歩くのだるい……トメ兄もってきてー」

「僕もだるい」

「このナマケモノー」

「知ってるか？　ナマケモノって何から何まで木にぶらさがってするんだってー」

「だからなにー？」

「やぁ、僕ナマケモノ！　あ、木がないよ！　ぶら下がれないよ！　動くこともできないよ！　アハハ」

「くたばれー」

だって動くのだるいもん。

「ねー、トメ兄。なんか涼しい話してー」

「すげー難しいご注文をありがとー。ふざけんなー」

「なんでもいいのー。ほらー。怪談とかさー」

あー、そういうのなら……

「むかしむかし、あるところにおじーさんとおばーさんがいました」

「それ怪談なのー？」

「まぁ聞けー。おばーさんが洗濯していると川から桃が流れてきました」

「ももたろー？」

「おばーさんは桃を拾おうとして、足を滑らせて川に落ちて、死んでしまいました。ちゃんちゃん」

「いろんな意味で寒いけどー、というか少し悲しいけどー、つまんなーい」

「んじゃ次はカカが言えー」

「わかったよー。んじゃねー、むかしむかし、一人暮らしをしているサユカちゃんがいましたー」

「なんでサユカちゃんなのかはまぁどうでもいいやー。それでー？」

「だらしないサユカちゃんは久々に部屋の掃除をしていましたー。そして見覚えのある炊飯器を見つけましたー。それはつい先日失くしたものでしたー」

「なんで炊飯器なんか失くせるんだー？」

「人間はねー、いろんなものを失くしながら生きてくんだよー」

なんだその妙に深い発言はー。

「そしてサユカちゃんがその炊飯器をあけるとー、そこはゴキブリの巣になってましたー」

「……」

「……」

うん。

ふつーに怖い。

というか想像したら背筋がゾクッと……ちょっと涼しくなったけど不健康極まりない。

「てらてら油に光る虫が一斉に」

「続けなくていい！」

「じゃあ次はトメ兄の番ねー」

むー、今のは気持ち悪かったけど効いたな……じゃあ……

「僕の働いてる工場でさー、先週だったかな。同僚がローラーの機械に指はさまれて、そのまま腕の血管が全部引っ張られて、腕一本ダメになった」

「うあ」

あああ想像しただけで寒気が。

「次私かー。んとね、もしも姉のヌード写真集が発売したら」

「それは寒すぎるなー。じゃあこんなのはどうだ。タケダ君がカカに告白してきたら」

「タケダって誰だっけー」

返答からして寒いとはやるなー。

「しかも卒業式の晴れ舞台に乱入してきて叫ぶんだ。『俺はカカが大好きだ。いつまでも一緒にいよう！』って」

「それは北極並に寒いねー」

「シロクマもびっくりだー」

「それでさートメ兄」

「なんだーカカ」

「涼しくなった？」

「……心は冷えた気がしないでもないが、身体は暑いしだるいなー」

あんま意味なかったか……

「水飲みたい……トメ兄もってきてよー」

「いやだっての」

「もってこないと、もっと暑くするよー」

「どうやってー」

「トメ兄。大好き」

「……あい？」

「好き、大好き、愛してる！　お兄様！　私の身体を好きにして！！」

「わかりました今すぐ持ってきますだから妙なこと言わないでください！！！」

僕は大慌てで立ちあがり、台所へ走った……なんちゅー高度な技を使ってくるんだこのお子様は！

「ね、トメ兄。暑くなったー？　寒くなったー？　どっちー」

「黙れ」

とりあえずコップに入った水をカカの頭にぶっかけてやった。これで涼しくなるだろう。

間違いなくケンカが始まるが、知ったことか。

暑いのが悪い。

## カカの天下１１１「今日の課題は」

「ただいまー」

トメです。

今日も今日とて妹のカカはサエちゃんやサユカちゃんと遊んでいるのでしょう。家の奥が騒がしくて僕の声は聞こえてないみたいです。

そして玄関ホワイトボードに目をやると。

『今日のトメ兄。次の三つから選びなさい』

……なんじゃこりゃ。

『A、面白い言葉を叫んでほしい』

この字は間違いなくカカだけど……

『B、お菓子を買ってきてほしい』

これ、サエちゃんっぽいな。何気に物欲的なとこが。

『C、甘い言葉を言ってほしい』

これ……サユカちゃんか？　レベルたけー。

とりあえず、僕は無難にBのお菓子を買ってくることにした。

無難すぎてサエちゃん以外は不満そうだった。そのわりにしっかりお菓子は食べたけど。

「ただいまー」

翌日。あのトリオは今日も今日とて仲良く遊んでいるみたいだ。

そしてホワイトボードには。

『今日のトメ兄。次の三つから選びなさい』

今日はなんだ？

『A、その正体はロリコン。誰彼構わず抱きついてくる』

……失敬な。というか、抱きつけって言ってるのかこれ。

『B、その正体は魔法使い。手からお菓子を出せる』

遠まわしにお菓子買って来いってか。サエちゃんぽいな。

『C、その正体はデリルンリーラへめちょっけ。「るてっまこてきでがきでおにりしおはメト」と叫ぶ』

ひたすらにわけわからん。カカだな。

これ、何の呪文だ？　って、これ、逆に読むと……なるほど。

僕はつかつかと歩を進め、騒がしいカカの部屋の扉を開け放った。

「るてっまこてきでがきでおにりしおはカカ！」

どうでもいいけど咄嗟にこれ言える僕ってすごーい。

「失礼なこと言うなこの不届き者！」

「どっちがだ！」

どうでもいいけどお菓子がなくてサエちゃんが残念がっていた。

「ただいまー」

さらに翌日。今日も今日とて以下略。

ホワイトボードを見る。

『今日のトメ兄』

いつまで続くのかなこれ。

『抱きつき占い。誰に抱きついたかであなたの将来が決まります』

なんつーけしからん占いだ。

『A、カカに抱きつく、将来はシスコン』

答えつきかよ。

『B、サエちゃんに抱きつく、将来はどM』

え、Mって……確かに最近はSっぽいけど、サエちゃんってもうそんなキャラなのか？

『そして喜んでお菓子を買ってくる』

そしてとことんお菓子ほしいんだなぁサエちゃん。

『C、サユカちゃんに抱きつく、将来は老後も安心』

なんでこれだけいい結果なんだろ。これ選んでほしいのか？

まぁ、なんにせよどれか選ばないとな……

え、無視するって選択？　そんなのないよ。

だってそれじゃつまんないじゃん。

僕は歩を進め、カカの部屋の扉を開け放った。

すると三人は会話をやめ、期待に満ちた視線で僕を見つめる。

僕は無言でちょいちょい、と三人を手招きした。

僕の元へ集まった三人を、僕はまとめて抱きしめた。もうめんどいから全部選んでしまおうというわけだ。

「と、め……に……ぐぐぐ」

こんな馬鹿なことを考えた張本人にはちょっとキツめに絞めてやったが。

「あうあうあうあうあう」

恥ずかしがってるのか嫌がってるのか真っ赤になって困っているサユカちゃん。うむ、可哀想だが仕方ない。なにせ老後も安心なのだから。

「わはー」

そして一人楽しそうなサエちゃん。

「トメお兄さん。お菓子は？」

そして一人がめついサエちゃん。

「抱きついた料金としていただきます」

さらになんか将来は悪女になりそうなセリフを言うサエちゃん。

「はいはい……こんなこともあろうかと買ってきておいたよ」

「みんな、お礼にもっと抱きついてあげよー」

ぎゅーっとされた。

幸せな時間だった。

## カカの天下１１２「趣味は何でしょ」

「トメ兄の趣味ってなに？」

「なんだ、いきなり」

こんちわ、トメです。

夕食時のこと。妹のカカがそんなことを聞いてきました。

「トメ兄って私たちといること多いじゃん。自分の趣味とかないのかなーと」

「そうだなぁ……ぶっちゃけ、それが趣味と言えなくもないか」

「小学生が趣味なの？」

「そういう言い方やめなさい。誤解されるから」

「小さい子が趣味なの？」

「それもだめ」

「妹が趣味なの？」

「そうじゃなくて！」

「ほんとに？」

そう言えないこともこともないかもしれないが！！

僕は自作のミートボールをもごもご頬張りながら反論する。

「おまえらのコント見るのが趣味かもなーってこと！」

「なに言ってるの。それを言うなら、私たち『と』コント『する』のが、でしょ。なにせツッコミなんだから」

「あ、じゃあ趣味はツッコミってことになるのか」

「妹に突っ込むのが趣味なの？」

「だからなぜにそういう危なげな言い方をするのだねキミは」

「何が危ないのかな」

「おまえの教育と、その他もろもろに危ない」

「そっか……妹にモロに突っ込む危ない趣味なんだね」

「なぁ、なんで着々と僕が逮捕されそうな文章が出来上がってるわけ？」

わざとやってないのが不思議なくらいにデンジャラス。

「トメ兄が逮捕になったら困るよ！」

「稼ぎがなくなるからか」

「私の評判落ちるじゃん」

「なんでおまえはそう自分のことばかり言うかね」

「じゃトメ兄は自分より私のこと優先したりする？」

「当たり前じゃないか」

「おー、ほんとに？　じゃあトメ兄のミートボール一つちょうだい」

「む……まぁ、いいけど」

言ってしまった手前仕方ない……くそー、結構おいしくできたのになぁ。

「ん、ありがと。むぐむぐ……さすが妹が趣味なだけあるね」

「うぐっ、そ、そういや料理も趣味って言えるかも！」

「この程度で？」

「なんでミートボールあげたのにここまでボロクソに言われなきゃならないんだ……」

「たった一つじゃね。もう一つくれたら評価アップするかもよ」

「それは嫌だ。結構おいしくできたし」

「大したことないよ。だから一つちょうだい」

「なんだかんだ言ってカカだって気に入ったんだろ、このミートボール！」

「そんなことないよ」

「とか言いつつ箸を伸ばしてくるな！」

「む、箸を箸で叩くなんてお行儀悪いよ」

「どっちがだよ。僕は育ち盛りだからもっと食べないといけないのだ！」

「トメ兄もう大人でしょ！　これ以上どこが育つのさ！？」

「心が育つんだよ！」

喚きあいながらミートボールを奪い合う僕ら。

箸と箸を剣をあわせるかのように受け、弾く。

「く、おぬし、なかなかやるな」

「うぬの剣も侮りがたし、よかろう、我が必殺技をくらえ！」

僕はびしっ！　と箸をカカに突きつけた。

「カカは今月に入って体重が一キロ増えた！」

「え、ほ、ほんとに！？」

「本当だ！」

でまかせだ！

「む、むぅ……」

「というわけでこれは諦めろ」

さすがはたくましすぎても一応女の子。体重の話題を出したら一撃勝利。

ま、この後お風呂場で体重を量ったカカに「嘘つき」と文句を言われたりするのだろうけど、それはそれでまた口論を楽しむとしよう。

……あれ、やっぱ僕の趣味って、妹？

## カカの天下１１３「ダメな人のなおしかた」

「ぐでー」

……どうも、カカです。

「だはー」

今日はトメ兄の帰りが遅いなーと思ってたら、どうやら会社の飲み会だったらしいです。

「くはー」

そして飲みすぎたようでへべれけ状態です。うなりながら玄関でくたばってます。こんな崩れたトメ兄を見るのも珍しい。

「トメお兄さん、大丈夫なの？」

ひょこ、と私の肩口から覗き込んできたのは親友のサエちゃん。

うちに遊びに来ていたのですが「トメお兄さんの顔を見てから帰る」と言ってちょっと遅い時間だけど待っていたのです。

「と、トメ、さん……」

そして同じ理由で待っていたサユカちゃん。

目を見開いて私の不甲斐ない兄を見つめている。

ふむ、このだらしない姿を見れば百年の恋も冷めるかな。口なんか半開きでだらしないったらありゃしない。

「トメさん……可愛いっ」

……恋する乙女にとってはそんなことどうでもいいらしい。

「いーとーまきまきー」

意味不明なトメ兄の言葉に、

「まきまきー♪」

楽しそうに答えるサユカちゃん。

や、なんというか、ほんとなんでもいいらしい。

「それで、どうするのカカちゃん。中に運ぶんなら手伝うけど」

「んー、トメ兄重いからなぁ。ここで起こしたほうがいいんじゃ」

「わたしが運ぶっ！！」

いきりたって叫んだサユカちゃんは素早くトメ兄の身体に手を滑り込ませ、なんかいろいろ無駄になでたりさわったりした後、勢いをつけてトメ兄を背負った！

「てりゃー！」

「てりやきー」

あ、支えきれずにつぶされた。

やっぱ重かったのかな……それともトメ兄の発言で力抜けたのかな。

「ぐしゃー」

「あ、そ、そのっ、トメさん、あのあのあの」

そしてトメ兄につぶされてるサユカちゃんは沸騰していく。

「ねぇカカちゃん。もうこのままでよくないかな」

「そだね。サユカン幸せそうだし」

「ちょっと待ってよ！　ほ、ほんとに苦しいんだから！」

「へー。じゃ、どかすけど……ほんとにいいの？」

「も、もちろん！」

「ほんとに？　サユカン」

「ほんとに？　サユカちゃん」

「……あと三分だけこのままで」

「「正直でよろしい」」

で、三分後。

「……はぁ、はぁ、激しかった……」

夢うつつのサユカちゃんは放っておいて、トメ兄をどうするか作戦会議。

「壊れた人ってどうやって治すの？」

「んー、やっぱお医者さんに聞いてみるのがいいんじゃないかな」

「電話かけてみよっか」

私のモットーは『思いついたら即行動、被害がでたら人のせい』だ。

というわけで早速病院へ電話してみることにする。

『――はい、タケダ医院です』

「あ、すいません。カカと申します。えっと」

トメ兄の症状は……

「顔を真っ赤にしながらよくわからない言葉を吐きつつ女子小学生を押し倒したりする成人男性の人って、どうやったら治りますか？」

『……』

あれ、なんか向こうの人が黙った。

長い沈黙のあと、電話の向こうの人（女性）は無機質な声で答えてくれた。

『昔から馬鹿は死ななければ治らないと言われています。ですから――今すぐコロセそんな社会のゴミクズ』

ガチャン！　と荒々しい音が響く……きられた。

「カカちゃん、病院の人なんて言ってた？」

「こ、殺せって……すごく怖い声で」

「だろうねー、あの言い方じゃ」

うんうん、とサエちゃんは頷く……なんかまずい言い方しちゃったのかなぁ。

「じゃ、お医者さんの言うとおりにする？　包丁もってこようか」

「え！？　待って待って！　それはさすがに」

「冗談だよー」

あははーと笑うサエちゃんに背筋がゾクリとした……しびれるなぁサエちゃん、そこも好き。

「んー、でもそれじゃどうすればいいんだろう」

「三人で居間まで運んで、布団かけてあげればいいと思うよ」

サエちゃんはあっさりと無難な解決案を提示した。

「……あれ？　最初からそうすればよかったのに、なんでこんな長引いたんだろ」

「そのほうがおもしろいからだよー」

カラカラと笑うサエちゃんには、もう私ですら敵わないのかもしれない。

当然か。惚れた相手には敵わない、ってこないだテレビで言ってたし。

トメ兄の寝顔をつついていたサユカちゃんにも呼びかけ、私たちはだらしない兄を引きずっていった。

## カカの天下１１４「ほんと、がんばれタケダ」

「おはよう、カカ君！」

「でさ、やっぱりきゅうりが怪しいと思うの」

「私はトマトかなー。赤いし。サユカちゃんは？」

「わたしはメルトダウンかなぁ」

ああ……なにやら楽しげに話しながらキッパリ無視していく我が愛しい人……！

おっす、おらタケダ。いっちょやってみっか！

「カカ君！　あの、だね」

「どけ」

「……はい」

いっちょやられちまった！

あああどうしよう！

数日前、カカ君に近づき始めたサユカとかいう女に正義の鉄槌をくらわせ、身の程をわきまえてもらおうとしたのだが……それがカカ君の逆鱗に触れてしまったというわけだ……

ところで逆鱗の鱗ってうろこだよな。なぜ逆のうろこに触る、というのが怒るという意味に繋がるのだろう……意味はわかるんだが。

「最近はそんなのパソコンいじればすぐ出てくるんだから自分で調べろ」

おや、またしてもテレパシートメさんか……ああ、そうだ！

トメさん！　その力で俺にカカ君との仲直りの道を示してくれたまえ！

「そんな偉そうなやつには教えてやらん」

どうか情けなくもか弱い憐れなあなたの下僕にお慈悲を！

「えらい卑屈になったな……そもそも僕のテレパシーはトメの発しているツッコミ電波であって、トメ自身の意思じゃない。つまり僕はトメであってトメじゃない。ツッコミという名の電波なのだよ」

えっと……それはつまり？

「僕はツッコミしかできない。だから相談など乗れん。自力でがんばれ」

そ、そんなぁ！

無情にもツッコミ電波のトメさんの声は遠ざかっていった……くそう、自力でなんとかするしかないのか！

し、しかし……

「あ、あのサエ君？　ちょっと相談に」

「どちら様でしたっけ」

「あの、俺、タケダだけど」

「どちら様でしたっけ」

「お、怒ってるよな。うん。反省してるからさ」

「どちら様でしたっけ」

「でも、ちょっとでいいから話を」

「どちら様でしたっけ」

「あ、あの」

「どちら様でしたっけ」

「……いえ、もういいです」

唯一、協力してくれる可能性のあるサエ君はこんな風に壊れたラジオみたいだし……

結局、今日も俺は一度もカカ君たちと会話することなく帰り道についた……

そしてお気に入りのセイジ食堂で「あやしい定食」を食べつつ、最近居ついた猫に話しかけていた……なんて憐れなんだ俺。

ちなみにこの定食は日替わり定食のようなもので、店主の趣味と気まぐれによってメニューが決まる。大抵は今日のように妙な形をした肉料理だ。

なんの肉かはわからない。あやしい。

「なぁ、総理大臣、聞いてくれよ」

総理大臣が人生相談に乗ってくれるなんて随分とフランクな日本になったものだなぁ。いや、猫の名前なんだけどさ。

「俺さ、好きな子の悪い友達を倒そうとしただけなんだよ。その子のことを思ってしたんだよ……なのにさ……」

猫にわかるわけないよな……と思いつつ、馬鹿にしたような猫の視線にムカついた。

「なんだよその顔……俺が悪いってのか!?　悪いのはあの友達のほうで――」

「はっ。何をわけのわからんことを言うとる」

「へ、ゲンゾウさん?」

いつの間にか俺の隣にいたのはこの食堂の主人、ゲンゾウさんだった。

「誰が悪いか、どう悪いかなんてアホらしい。他のヤツから見れば人間のやることなんざ大抵が悪いことに当てはまる。いや、当てはめることができる。言い方なんぞいくらでもあるからな」

「それ、は……そう、かも」

「誰かの何かが悪いのは当然だ。ならそんな無駄なことは考えるな。何が悪いかじゃなく、何が自分にとって正しいのかを考えろ。前提を間違えるな」

そう言って、ゲンゾウさんは「頑張れ」と、それだけを言って去っていった。

その必要以上に格好いい背中を見つめつつ……俺は自分がどうするべきか、ようやく光明が見えた気がしていた。

そして、思う。

頑張ろう、と。

あとゲンゾウさん、お店放ってどこいったのかな、と。

代金どうしよう。

ちなみに逆鱗に触れる、という言葉の由来は……『竜に一枚だけあるとされる逆さの鱗に触れるとおとなしい竜が怒り狂い、必ず殺された』という伝説から、激しい怒りを買うこという意味で用いら

れるようになったそうな。

「そう言うならカカの逆鱗は二つだな。サエちゃんとサユカちゃんだ」

テレパシートメさんの言葉もためになるなぁ。覚えておこう。

# カカの天下１１５「まじで、がんばれタケダ」

俺はやる！

どうも、タケダです。今は朝の登校時間。いつもカカ君たちが通る道で待ち伏せ中だ。

そして今、カカ君たちの足音が聞こえてきた……！

昨日のゲンゾウさんの言葉を思い出す……

何が悪いかが問題なんじゃない。何が正しいかが問題なんだ……！

さぁ、いくぜ！

いま俺にとって正しいのはカカ君に謝ること！

そしてそのためなら悪いことでもなんでもしてやるのだ！！

「ゲンゾウさんの言葉ってそういう意味でいいのか？」

テレパシートメさんの声も振り切って飛び出した俺は、持っていたナイフを突きつけた。

まずは話を聞いてもらう。そのためならこんな悪いことだって！

「俺の話を聞け！　さもないとこいつを……」

尻すぼみに小さくなっていく声。

それは臆したからじゃない。

「あ……あの、坊や？」

人違いだったからだ！！！

犬の散歩中のおばさんではないかあああああ！！！

「な、なにをそんなに悩んでるんだい？　おばさんに言ってみなさい」

しかもすんごい慈愛に満ちたいい人ではないかあああああ！！！

「……なんか、その……世の中の不条理が悲しいんです」

「世の中そういうもんよ。でも、歯を食い縛ってがんばりな」

「……はい」

この街はいい人ばっかりだ、ちくしょー……

さぁ、リベンジだ！

今度はしっかり標的を確認。突撃だ！

「待った！　俺の話を聞け！　さもないとこいつをぶっ刺す――」

言い終わる前に、俺の手元からナイフが消えていた。

カチャ、と地面に響く無機質な音。

離れたところへ落ちたナイフ。

目の前には、脚を振りきった状態のカカ君……

「なにを、どうするって？」

「な、なななななんなのだ今のハイキックは！　君、なにか拳法でもやってるのか！？」

「んー、姉に習ったから、姉拳法？」

「しかもナイフだぞ！　怖くないのか！？」

「だって姉拳法だし」

わけがわからない……いや、そんなのいつものことじゃないか！

「とにかく話を聞いてくれ！」

「ナイフ突き出すやつの話なんか」

「じゃあこうしてやる！」

俺は再びナイフを拾う。しかしカカ君に突き出したりはしない。

さっきの動きを見る限りではきっと無駄だ。

だから僕はナイフを、自分に向けた。

「話を聞いてくれ！　さもないと死んでやるからな！」

「うわ、ださ」

「なさけないねー」

サユカ君とサエ君の声が痛い……しかしこの際どうでもいい！
何が悪くても！　格好が悪くても！　俺は正しいことをする！

「……そこまで言うなら聞いてあげる。なに」

「先日は君の友人を侮辱して、本当にすまなかった！」

そう言って、土下座した。

そう、俺は謝るのだ。それしか、できない！

「ごめんなさいすいません申し訳ない謝る謝罪する謹んで頭を下げるすまないごめんねごめんなごめんくさいごめごめごめごめ――！」

「やかましい！」

「ごめんなさい！」

頭をひたすら下げているのでカカ君の顔はわからない。

静かな時間が過ぎた。

やがて、カカ君は言った。

「……わかった。そこまで謝るなら許してあげる」

「本当にすまなかった。カカ君にとっては大切な友人だったのだろう？」

「そうだよ……とりあえず顔上げて。男が簡単に頭さげるもんじゃないよ」

言われたとおり、顔を上げて……呆れている顔のカカ君、そして呆然としているサユカ君を見た。

「君にも謝る。この間はすまなかった！」

「え、ええ」

「君はカカ君の大切な友人だ。だからどうか、俺とも友人になってほしい！」

「え、や、やだ」

……冷たい風が、吹いた。

「さ、行こうかサエちゃん、サユカちゃん」

「う、うん。でも、いいの？」

「サユカンが再起不能にしたんでしょ？　私しーらない」

そして過ぎ去っていくカカ君とサユカ君……

「俺って、いったい……」

「まーまー。ちゃんと根性みせて謝ったし、私も許したげる。また暇つぶしに協力してあげるよー」

「さ、サエ君！」

でも、ちょっと救われた。

また頑張ろう。

## カカの天下１１６「お菓子の恨みは裁判沙汰」

「トメ兄、私のおせんべえ食べたでしょ！！」

「あー、うん、ごめん」

妹のカカに怒られちゃったトメです。

どうやら昨日の夜につまんでしまったおせんべいはカカのだったらしい……って、買ってきたのは僕なんだけどなぁ。

「や、小腹がすいたんでつい」

「小腹ってお腹のどこさ！」

「へ？　えっと、胃のあたりかな」

「ここに私のせんべいがあるのかー！」

「ごほっ！」

み、見事な正拳突き……！　胃の辺りに、直撃、した……

「必殺、エクスカリバー」

技名はそっちの聖剣できたか……やるな。

「わ、悪かったよ。せんべいならまた買ってきてやるからさ」

「あれはただのせんべいじゃないんだよ！」

「そういやちょっとシケってたな」

「シケたこと言ってるんじゃないよ！　あのおせんべいはね……袋の中に一枚だけ別の味のせんべいが混じってたなんとも珍しいアイテムだったんだよ！」

「それ、不良品って言わないか」

「でもそういうの見つけるとなんか嬉しいじゃん」

わからなくはないが……

「とにかく、ごめんな」

「カカ裁判によるとね」

なんだその不穏な語りだしは。

「四分の一死刑」

なにその現実的っぽい数字。

「だから身体の四分の一を切り離すね」

なにその怖すぎる刑！！　てか四分の一ってどこさ！？

「裁判官、異議あり！」

「却下。そんなこと言うヤツはこうしてやる」

カカは僕のズボンのベルトを外し、僕の身体を回転させるように一気に引っこ抜いた！

「あーれー！　おたわむれをーってそれじゃカカお代官だろ」

「裁判官もお代官もそんなに違いないよ。アルミ缶とスチール缶だって似たようなものでしょ？」

官と缶ね。うまいこと言うな。

「とにかく新しいの買ってきて」

「はいはい」

仕方ない、我が家のお姫様の機嫌を損ねると何をしでかすかわかんないからなぁ。

そして、スーパーにて。

こういうときに限ってせんべいが売り切れだったりする。

「どうするかなぁ……」

「あら、トメお兄さん」

呼ばれて振り返ると、そこにはカカの愛する親友サエちゃんが。

「買い物か？　えらいなー」

「ふふ、定番のセリフをありがとうございます」

一筋縄ではいかないセリフをありがとうございます。

「なにを悩んでるんですかー？」

「いやな、実は」

……お、いいこと思いついた。

「カカの機嫌とるためにお菓子を買おうと思うんだけどさ、サエちゃんはどんなお菓子が好き？」

「私ですか。そうですね……ポッキーとかチョコ系が好きです。ほら、今日も買いましたし」

サエちゃんの買い物カゴには確かにポッキーが。

この勝負もらった。

「ただいまー」

「おかえりー、せんべい」

「僕の名前はせんべいじゃないぞ」

「私にはせんべいしか見えないの」

「悪いがせんべい売り切れだった」

「え！？　じゃ今私が見てたせんべいはトメ兄の顔か！」

「せんべいみたいな顔って言いたいのか失礼な」

「じゃトメ兄の顔をかじれば解決か」

「しない。そんな一部の人が大喜びそうなこと言うな」

「一部の人って？」

「深くツッコむな。とにかく、せんべいはなかったけど、もっと素晴らしいもん買ってきたぞ、これだ！」

そう言って僕はポッキーを取り出す。

「えー、私いまチョコとか食べる気分じゃ――」

「買い物中にサエちゃんに会ってな、これ買ってた」

「気分じゃ！　チョコとか食べる気分なのじゃ！」

「サエちゃんも今頃食べてるんじゃないかな」

おー、ものすごい勢いで箱あけた。

おー、なんか顔赤らめて食べてる。

おー、なんかねっとりしゃぶってる。

おー……なんか危ない子になってる。

ま、機嫌直ってよかった。

## カカの天下１１７「姉は爆発だ」

「よう、おひさっ！」

「お、姉だ。久しぶりだな」

トメでっす。

夕食の買い物から帰るところで姉と遭遇しました。ほんとに結構久々だ。お祭りに誘って断られて以来か。

「ん？　もしかして包帯まいてないか？」

服の袖からちらりとのぞく白い布に気づいた僕に、姉はなぜか目をそらして笑った。

「あ、んと、ね、これは、その、名誉の負傷というか、名誉の火傷というか、名誉の爆発というか」

「爆発？」

「や、芸術は爆発じゃん！　だから名誉も爆発するんだよ！」

よくわからんが姉の言うことをいちいち考えていては心が病んでしまう。

「にしても姉もケガとかするんだなー。初めて知った」

「するでしょ普通は」

「普通じゃないから言ってるんだよ」

「なにさ、あたしが人間じゃないみたいな言い方！」

「……え、人間なの！？」

「なにさっ、今初めて気づいたみたいなそのリアクションは！」

いや、だってキャラ的になんか……こほん。

「だってさ、姉ってなんか普通の人間っぽくないじゃん」

「じゃあ逆に聞くけど、普通の人間ってどんなのよ」

うーん……と考えること数秒。

「えっと……まず、目があるだろ」

「おい」

「それに、耳もある」

「こら」

「あと、口もあるだろ」

「まてや」

「鼻……は、ない人もいるか」

「クリ○ンのことかー！　ってそうじゃなくて！」

なんだようるさいなぁ。著作権にはちゃんと気を使ってるぞ？

「あたしにそれらが全部ないとでも言うつもりかっ」

僕は数秒、姉の顔をまじまじと見て……

「……え、ある！？」

「なにさっ、今初めて気づいたみたいなそのリアクションはテイク2！」

「でもどうせ飾りだろ。目とかにごってるし」

「失礼なこと言うな！　にごってるのは頭の中だ！」

よくわかってんじゃん。

「大体これが飾りだとしたら、こんな精巧な飾りどこで売っとるのさ！？」

「タケダ医院でこないだ販売してたぞ」

目の飾りとかな。額につけて遊んだりするおもちゃだ。待合室の幼児対策に院長が趣味で置いたらしい。

「で、結局は元気でやってるのか？」

今の反応を見る限りでは、元気さは一切損なわれていなさそうだが。

「なに、もしかして今のって、あたしが元気か心配して確かめるためっ！？」

「あんたさ、そんなに自分が愛されてると思ってるのか」

「当たり前じゃん」

すげぇなこいつ。

「家族に愛を信じられなくなったら終わりだよ」

「カカだったら間違いなくこう言うな。キショイ」

「そんな！？　もう家族なんて信じられない！」

「撤回はえーな」

「神よ！　憐れな誰かから愛を奪ってあたしにください！」

「憐れなあたしに愛をって言えよ厚かましい！　あとこんな道の中心で愛だのなんだの叫ぶなっ」

「えー、なんだよぅ。世の中にはさ、世界の中心で愛を叫びたいのにスクリーンの中でしか叫べない人もいるんだぞ？」

「そんな身も蓋もない言い方やめろよ」

世間が認める名作に何たる言い草だ。

世間様ごめんなさい。責めるならこの姉をつるし上げてください。

「とにかくさ、これ以上情報社会の荒波に叩かれる前に帰れよ」

「むぅ、情報社会と聞いたら帰るしかないか……」

姉は漢字の羅列に弱い。

しかしなんだかんだで元気に帰っていった。

そして僕の夕飯の買い物袋の中から、お菓子が一つだけなくなっていた。

おそるべし姉。

## カカの天下１１８「常識定食」

「トメ兄、質問」

「うぇあ！？」

どうも、カカです。

ふと覚えた疑問を確かめるべく、お風呂場で頭をわっしゃわっしゃ洗っているトメ兄に直撃インタビューです。

「ばか、戸を閉めろ！」

「いいじゃん別に。ここからだと前は見えないし」

トメ兄は戸にいる私に背を向ける形で頭を洗っています。お尻は見えますぷりんぷりん。

「だからってな、おまえ人の裸を」

「なにさ、トメ兄だって私の裸さんざん見てきたでしょうが」

「一緒にお風呂はいろうって、誰かさんが毎回せがんでたからな。あれ、いつが最後だっけ。たしか――」

「わーわーわー！！」

それが恥ずかしいことだと知った今ではその発言は激しく禁則事項だ！！

「ふ、勝った。これに懲りたらむやみに誤解を招きそうなこと言うなよ」

「うう……乙女の秘密を盾に脅される私……」

「ほんと難しい言葉しってるねおまえ」

「こないだドラマでやってた」

「あそ。なんか教育に悪そうなドラマだな」

「最近そんなんばっかだよ」

おっと、本題を忘れるとこだった。

「でさ、トメ兄」

「そろそろ戸を閉めてほしいとこだが……なんだよ」

「今日さ、セイジ食堂でカツ定食、食べたじゃん」

ちなみにセイジ食堂ではとんかつ定食とは言わない。なぜなら店の主人のゲンゾウ曰く、「豚肉じゃねぇから『とん』はいらねぇだろ」だそうだ。じゃあ何のお肉だと聞いても教えてくれない。おいしいからいいけど。

「僕はハンバーグ定食だったけど、それで？」

「なんでご飯も味噌汁もサラダもついてくるのに、カツとかハンバ

ーグだけ名前が載るの。他の可哀想じゃん」

「あー……それはカツとかハンバーグとか、メインだけを載せたほうがわかりやすいからだろ」

「でも他のは？　今日のお味噌汁、カツよりもおいしかったんだよ？　なんか不公平じゃん」

「メインが味噌汁に負けるのはどうかと思うが、ご飯も味噌汁も定食の中に含まれてるからいいんだよ」

「定食でみんなわかるの？」

「ああ、メインの付属品は全部、定食って言葉の中に含まれてるの。これ、常識」

「そうなのかぁ……」

次の日。学校にて。

友達と会ったとき、いつもなら「おはよう」のあとに「元気？」とか「宿題やってきた？」とかいろいろな会話が続くわけだけど、

「カカちゃん、おはよう」

「おはよう定食」

「……？？」

これですべて解決してしまうわけだ。

なんて便利。

今日の私は一味違う。定食だけに。

「さ、自分の考え書いてねー」

今は理科の授業。水を温めるとどういう変化があるのか、を中心にいろいろと実験する時間だ。

ある程度実験が終わったあと、先生は今日の日付と出席番号を照らし合わせて当てる人を決める。

「じゃーカカちゃん。試しに発表してみて」

「温水定食！」

「……なんだか、ずいぶんと味気なさそうな定食ですね」

算数の時間。

「…じゃーカカちゃん。この問題やってみて」

「計算定食！」

「……食べたら頭がよくなりそうな定食ですねー」

体育の時間。

「……じゃー次カカちゃん跳んで」

「跳び箱定食！」

「食べれません」

歴史の授業。

「……じゃーカカちゃん、そのページ読んで」

「織田信長定食！」

「どんな定食なんでしょうね。カカちゃん、ちなみに次のページは――」

と、先生の言葉を遮ってサエちゃんが手をあげた。

「先生、カカちゃんばっか当てて楽しんでません？」

「ばれたか」

お昼休み、なぜかみんなが給食をわけてくれた。

よほどお腹がすいてると思われたらしい。

トメ兄、薄々感じてたけど、あんま通じてないみたいだよこの常識。

## カカの天下１１９「違いのわかる妹」

「トメ兄、ちょと教えてほしいんだけど」

「なんだカカ」

こんちわ、カカです。

ふとした疑問が浮かんだので、お風呂場で頭をもっしゃもっしゃ洗っているトメ兄に質問タイムです。

「トメ兄さ、太った？」

「人のセクシーな背中を見てなんたる言い草だ。ていうか戸を閉めろ」

トメ兄は私に背を向けて頭を洗っている形。うーん、お尻のあたりがセクシーかな？

あれ、そういえばセクシーってなに。セクハラの親戚かな。

「でさ、セクハラトメ兄」

「セクハラしとるのはおまえじゃ、たわけ」

「やっぱちょっと太ったよ」

「……まじで？」

頭をもっしゃもっしゃする手を止め、深刻そうに尋ねてくるトメ兄。薄々自分でも感づいていたのかもしれない。

トメ兄はお風呂からあがり、ビールを飲もうとして……やめた。

私は廊下から覗いてにやりと笑った。

トメ兄は悔しそうな顔をしてた。

朝。ごはんを作っている最中のトメ兄。

卵焼きに砂糖を入れようとして……やめた。

私はわざと物音をたててこっちを振り向かせた。

にやりと笑ってやった。

トメ兄は口をひくひくさせた。

夕方。夕食の買い物に付き合った。

トメ兄は自分のお菓子はいらないというので、その分私のをこれでもかと買い物籠に入れてやった。

にやりと笑ってやった。

トメ兄は目元をぴくぴくさせた。

家に帰ってから。夕飯もあまり食べなかったトメ兄の目の前でチョコバーを食べてやった。

それはもうにやにやしながら食べてやった。

トメ兄は私の肩をもみもみした。痛い。

翌日、私は朝からおかわり三杯もしてやった。

ひたすらニヤニヤしながら食べてやった。

トメ兄は私の頭をぶんぶんさせた。目が回る。

そんなやりとりがしばらく続いて……

「どうトメ兄、やせた？」

「んー……体重は減ったんだけど……どうだろ」

私はトメ兄のお尻を触った。

「うん、やせた」

「なぜわかる」

「お尻のわかる女だから」

「……なんというか、ツッコミ辛いなぁそのボケ」

「本気だよ？　私が何人のお尻を触ってきたと思ってるの」

「クラス全員とか？」

「学校全員だよ」

「変質者かおまえはっ！？」

「トメ兄、冗談にいちいち腹立ててるからお腹出るんだよ？」

「関係ないわっ」

まぁ、実際お尻がやせたのはわかったけどね。

でも、お尻やせるってことはお尻の運動したのかなトメ兄。

なにしたんだろ。

## カカの天下１２０「父の日はうまい棒」

「ちょっと寄り道していい？」

こんにちわ、カカです。

いつも通りにサエちゃんとサユカンのトリオで帰っている途中で、サユカンがそんなことを言い出しました。

「いいけど、どこいくの」

「商店街いきたいのよ」

「何か買うものあるのー？」

「ほら、今日って父の日じゃん。だからなんか買っておこうかと」

父の日……ああ、だから帰りのＨＲで先生が『お父さんに日頃の恨みをはらしましょう』って言ってたのか。

「で、どうやって恨みはらすの？」

「……は？　カカすけ、あんた何言ってんの」

「うちのクラスの先生がね、今日は父親に恨みはらす日だって」

「テンカ先生の家、仲悪いらしいからねー」

「ああ、今年から入った先生だっけ」

「愉快な先生だよー。サユカちゃんも私たちのクラスくればよかったのにね」

うん、前の先生はやたらのんびりした先生だったけど、今回のテンカ先生は程よくテキパキ、程よくだらだらで結構いい感じだ。

「こ、こっちの先生だっていい感じよ！　もう老いぼれてて、わたしら小四なのに足し算教えようとするんだから！」

「それ、いい感じにボケてるんじゃん」

「サユカちゃん、まだそんなこと習ってるから成績悪いんだねー」

「うっさいな！　最初にちゃんとツッコんでるから普通に授業受けてるわよっ」

「せ、先生にツッコんでるんだ」

さすがトメの追っかけ。ツッコミ志望か。

「でもさ、普通に授業受けてて成績悪いなら、サユカンって普通に頭がわる――」

「でさ、あんたらも父の日のプレゼント買いなさいよっ」

む、強引に話を戻した。

「プレゼントと言っても……私のお父さんとは、会えない状態だしなー」

サエちゃんが呟き、サユカンが「げ」とまずいことを言ったみたいに口つぐんだ。

あれ？　お父さんと会えないって……？

「ねえ、サエちゃん。それって」

「か、カカすけは！？　お父さんに何か買ってあげないの？」

む……？　サユカンなに慌ててるんだろ。ま、いいか。

「お父さんねぇ……まぁ、何か買ってあげてもいいけど」

「そういやさ、わたしら何回もカカすけの家に行ってるけど、ご両親に会った事ないわね」

「そういえばそうだねー。トメお兄さんしか見たことないよ」

「……」

「れ？　どしたカカすけ」

「カカちゃん？」

「……？」

首を傾げる。

んん？

んんんんん？

あ。

「そういや私、お父さん見たことない！！！」

「「ぅおい」」

びしっ、と二人にツッコまれた。

「トメ兄いいいいいいいいいいいいいい！！！」

「なんだ妹」

トメ兄が仕事から帰ってきて一番、私は突進した。

「妹とびひざげり！」

「ぐはぁ！　……な、なにする」

「大変だよトメ兄！」

「僕のみぞおちのほうが大変だよ……なんでいきなり攻撃を」

「大変さを表現したかったんだよ！」

トメ兄はなぜか口をひくひくさせた。

「へぇ……そうかそうか。この後おまえにもっと大変なことしてやるから覚悟しろ。それで何が大変なんだ」

「ねえ、私にお父さんっているの!?」

トメ兄はきょとんとして私を見た。

「そりゃいるよ」

「どこに!?」

「どこにって、この家に住んでるじゃん」

「うそっ!?　私見たことないよ!　っていうかどこに住んでるの!?」

「どこって、両親用の部屋あるだろ。開かずの部屋」

「あそこ!?　でも見たこと……や、待って。んー……?　考えてみれば何年か前まで四人でこの家住んでたような……」

「ああ。僕が就職してから、両親とも「仕事頑張るー」って言って留守がちになったからな。でも母さんはともかく、父さんならわりと家にいるよ」

……や、でも開かずの間に住んでるって、どうやって出入りしてるの、ていうか私が見たことないって……

「お父さんって、なにしてる人?」

「忍者」

……は？　ちょいとこのお兄さんマジな顔してナニをぱっぱらぱーなことを。

「あ、ほら。カカさー、このまえ僕にテレパシーでツッコむなとか言ってたじゃん。その声、たぶん父さんだよ」

「あれかあああああああ！！！」

私はあまりの事実に珍しく絶叫した。

「あ、あのさ、父の日だから何か買ってあげようかと思ったんだけど」

「それはいいことだな。置手紙でも書いてテーブルに置いとけばいいよ。いつのまにか消えてるから」

……へー、忍者だったんだ、お父さん……

……あれ、じゃお母さんってなにしてる人なんだろ……いや、ダメージ受けてる今聞くのは怖いから、今度聞いてみよう。

「……なにあげたらいいと思う？」

「父さんはうまい棒好きだから、詰め合わせでも買ってやれば？」

こうして私のプロフィールに『うまい棒忍者の娘』という項目が加わった。

どんだけ～。

## カカの天下１２１「別に雌雄は決さない」

「おっすーってあれ、カカすけは？」

「用事あるからーってすぐ帰っちゃった」

こんにちわ、サユカです。

今日もいつも通りカカすけたちと帰ろうと隣のクラスにきたのですが、サエすけしかいませんでした。

「そんな寂しそうな顔しなくてもー私がいるじゃない♪」

「へっ、いや別に寂しくはないよっ。いつも顔合わせてるじゃん！」

「そうだよねー。昼休みも給食を食べ終わったらすぐにこっちくるもんね。そんなにカカちゃんが好き？」

「……いや、別に、カカだけって、わけじゃ……ってこらこら無言で抱きついてくんなー！」

ああもう、ほんとこの二人には敵わない。

不本意ながらわたしはカカすけとサエすけにからかわれる日々を送っているんだけど……カカすけに似てきたと噂されるサエすけにも結構はっきりとした違いがある。

カカすけは過激で、おもしろい。

サエすけは、なんというか……いやらしい。

「じゃー、今日はサユカちゃんちに行こうか」

「む……まぁ、いいけど」

「ぬいぐるみ増えた？」

「なぜ知ってる！？」

「気まずそうな顔したから」

鋭い……うぅ、またからかわれる。

じゃあカカ達と付き合わなければいいって？　いや、それは、それよ。

「今度はどんなぬいぐるみ？」

「……恐竜さん」

「恐竜、さん？」

「な、なによ」

「さん？」

「……なによぅ」

「さん♪」

「頭を撫でるなぁ！」

そんなこんなで帰り道。

「でさ、カカすけの用って何なんだろ」

「んとねー、お姉さんに携帯買ってもらうんだってー」

「ああ、そういえばカカすけもってなかったっけ」

「サユカちゃんは持ってるの？」

「持ってるよ。サエすけも持ってたのか」

「ダメだよサユカちゃん。ナンパしたときはすぐに相手の番号とか聞かなきゃ」

「誰が誰をナンパしたって？」

「サユカちゃんが私たちを」

「ナンパじゃないっ。ケンカしかけたんだっ」

微塵もケンカにならなかったけれどもさっ。

「まーまー。そんなのどうでもいいから番号教えてよー」

「むぅ……いいけどさ」

ぽちぽちっとな。

「じゃサユカちゃんのアドレス帳の分類は……人妻で」

「ちょと待たんかい！　誰が人妻だって？」

「トメお兄さんの」

「サエすけ、君ねぇ……ぐっじょぶ！」

「でしょ」

でも『人妻』なんて分類されるのわたしだけなんじゃないか？
フォルダの無駄遣いのような……

「じゃあサエすけの分類は……えっと」

「親友？」

「うぐ」

「親友がいいなぁ」

「し……し……」

にこにこ笑いながらわたしの手元を覗き込んでくるサエすけ。

特にアドレスをフォルダに分類していない私は、ちょうど新しい

フォルダを作るところだった。そのフォルダの名前を打つところで止まってるんだけど……

言われるままに『し』を入力したけど……流されるままそんな分類にしていいものか……恥ずかしい。でも……

「私たち、親友じゃないの！？」

「あーうるさいなっ！　わかったよ」

ぽちっとな！

『死友』

……間違えた。

「……こわいよー。サユカちゃん」

「や、なおすなおす」

『私有』

「私、サユカちゃんのもの？」

「間違えただけだって！！」

そんな感じで騒ぎながら、最後にはちゃんと『親友』の分類で落ち着いた。

……別に嬉しいわけじゃないよっ。

## カカの天下１２２「風吹き誕生、激写ガール」

「で、姉。どういう風の吹き回し？」

どうも、カカです。

いきなり携帯を買ってくれると言い出した姉と、ただいま一緒に携帯ショップにいます。

「どういうって、そりゃ風の吹くまま気の向くままにだし」

「……どういう意味？」

「風が吹いて回るのに理由なんてないよ」

……ほんと、わけわかんない。

でもまぁ、姉の頭の中って何が出てくるかわからないびっくり箱みたいなもんだし、行動の理由をいちいち聞くだけ無駄か。たぶんいつもの思いつきの気まぐれでしょ。

「でさ、カカちゃんはどんな携帯ほしい？」

「んー……私、よくわかんない」

トメ兄が使ってるのは見たことあるけど、自分のは持ったことないし。

「じゃ、店員に聞いてみようか。すいませーん」

「はいはーい」

お姉が無駄にでかい声で叫ぶと、営業スマイルビームが眩しい店員さんの登場だ。

「どんな機種をお探しですか？」

「んとね、頭悪いガキでも使えるやつお願いします」

オイコラ。

「そうですね……こちらなんかどうでしょう？　主に頭のイッちゃってる老人が、いざというとき助けを呼ぶためだけに使う機種ですよ」

どんな機種なのさ。

「んー、それじゃつまんないな。なにせおしめ取れたばかりみたいなチビスケだからさ、遊べるやつのほうがいいかも」

コノヤロウ。

「ではこちらはどうでしょう。ハナタレ小僧もハナがタレなくなるほど扱い方が優しい機種ですよ」

だからどんな機種なのさ。鼻炎薬でもついてるのかその電話。

「ハナはタレないんだけど文句ばっかタレるんだなこれが。まったく誰に似たのやらねー」

自分で認めてるみたいで言いたくはないがあえて言おう。

似たとしたら間違いなくアンタだ。

「あぁ、いますよねー文句たらたら目元はタレタレ口元はデレデレなクズ客とか。客商売も楽じゃありません」

姉といい勝負の口汚さだなー店員さん。

「あんたいい口してるね。今度飲むか？」

「いいですねー」

なんか仲良くなってるしっ！？

「でさ、冗談はこのくらいにしておいて」

「えー、もっと冗談言いましょうよ」

なんつう店員だ。

「今度飲みの席でいくらでも言おうよ。それで、小学生にも使える携帯って――」

本当に冗談はきっぱりやめたそうで、この後は驚くほどぽんぽん話しが進んだ。

どうでもいいけど姉と二人だと私ツッコンでばっかりだなぁ。

そして……

「トメ兄、ただいま！」

ちょっと遅くなったけど帰宅！　そしてBダーッシュ！

「激写っ！！」

「うあああああ！！！　戸を閉めろおおおおお！！」

毎度おなじみ、トメ兄の裸です。これで永久保存！

「なんでおまえはここのとこ僕の風呂中に殴りこんでくるんだ！？」

「トメ兄の身体が忘れられなくて」

「変なこと言うなっ……ん、携帯？　それ、僕のじゃないよな」

「うん、姉に買ってもらった」

トメ兄は不思議そうに首を傾げた。

「なんでまた」

「や、理由は教えてくれなかったけど」

「……なぁ、カカ。部屋に戻ってみ」

「なんで？」

「姉がいきなり優しくなるときは、大抵なにか壊したりしたのを誤魔化そうとするときだ」

さすが私より姉と付き合い長いだけはある……って、ええ！？

私はダッシュで自分の部屋へ戻った。そして視線を巡らす。

さして変わったところは……あ。

ああ！！

そんな……

「なんかなくなってたか？」

腰にバスタオルを巻いてトメ兄に、私は肩を落として答える。

「ない……」

「なにが？」

「トメ兄の恥ずかしい写真集……」

「……は？　はぁ？　はあああ？　なんでそんなもんおまえが、というかあの姉それをどうするつもり、というかどんな写真だ！！うわツッコむところが多すぎる！！！」

「ああ……私のにこにこ脅迫材料が」

「にこにこできねぇよ！」

仕方ない、また作るか。

「激写！」

「バスタオルをめくるなあああああ！！」

ともかく、私は携帯をゲットした！

# カカの天下１２３「よーよーねーちゃんお茶と桃でもどうよ」

「カカすけ。そういや君、携帯買ったんだって？」

「うん」

おはようございます、カカです。

今は登校中。いつもの交差点で合流した私たち仲良しトリオは今日も一緒に歩いてます。

「番号とアド教えなさいよ」

「わ、ダイレクトなナンパ♪」

「ナンパちゃうわっ」

「ダメだよサユカちゃん、ナンパで番号聞いたりするならまず喫茶店とかに誘わないと」

「そんな具体的なアドバイスもいらんっ、ていうかまたナンパ話か」

「や、悪いねサユカン。ケーキなんか奢ってもらっちゃえるなんて」

「言ってないっ。いい加減にしないとわたしの番号教えないわよっ」

「いいよ別に」

「……え」

あっさり返すと、サユカンは一瞬だけ寂しそうな顔をした。

「じゃサエちゃん、番号とアドレス教えて～」

「うん、いいよ」

「あ、う……」

ああ、なんかどんどん寂しいオーラが高まってる、

「へー、サエちゃんのアドレスおもしろい」

「これ好きなの。ぬめぬめしてていいよね」

「私的にはべちょべちょって感じだけど」

「……ね、ねぇ。あの……」

おずおずと声をかけてくるサユカン……あああ、やばい。

「……ごめん、その、私にも、おしえ」

「かっわいいなぁサユカンはっ！」

なんか我慢できずに抱きついたっ！

「可愛いよねぇ」

それに便乗してサエちゃんも抱きついたっ！

「ちょ、やめっ、バカにしてるでしょあんたらっ！？」

「バカを可愛がってるんだよー」

「バカって言うなっ！！」

「最初に言ったのはサユカちゃんなのにねぇ」

「バカって言ったほうがバカって言ったほうがバカって言ったほうがバカって言ったほうがバカって言ったほうがバカって言ったほうがバカって言ったほうがバカって言ったほうがバカって言ったほうがバカって言ったほうがバカなんだよ。さぁ、どっちがバカでしょう」

「……え、えーと……ってわかるかぁっ」

そんなふうに三人でじゃれ付いていると……後ろから忍び寄る影がっ。

「こら、なーに小学生が携帯持ち歩いてんだ、生意気な」

ひょいひょいと器用に私たちから携帯電話を取り上げたのは……テンカ先生っ。

「没収」

「か、返してくださいっ、その、学校では使いませんから」

サユカンは慌てているけど、私とサエちゃんはこの担任の先生の性格をよく知っている。携帯を持っている、という理由だけで没収

したりはしないのだこの人は。

その証拠に……先生は無遠慮に私ら三人の携帯の画面を見たあと、深々とため息をついた。

「ったく、つまんないなぁおめーら。誰か好きな男の写真でも待ち受けにしてる英雄はいねーのか？」

「あ、この人は後々それやる予定です」

「ちなみに相手はカカのお兄さんです」

「へっ、わ、わたし！？」

サエちゃんと二人してずびっとサユカンを指差すと、テンカ先生は満足げに頷いた。

「ん、ならよし。合格。ほれ」

ほいほい、っと携帯を投げてよこしてテンカ先生は颯爽と去っていった。

「待ちうけにしたら見せろよー」

そんな捨て台詞を残して。

「なに、あの先生……」

「フランクな感じでいいでしょ。おもしろければなんでもオッケーな人だよ」

「人気あるんだよー」

呆然とするサユカンの顔が結構かわいかった。

「じゃ、トメ兄の盗撮作戦でも練ろうか」

「まず、トメお兄さんがお風呂に入ってる間に」

「ちょ、ちょっと待ってよっ。そんなことするなんて――」

「トメ兄の裸、見たくないの？」

実はもうあるけど、いざというときのためにとっておこう。

「……み、みたいわけないでしょ」

「あ、今の間で想像したね」

「絶対したねー♪」

「ししししてないっ！　何を証拠にそんな」

「お尻おいしそうだった？」

「桃みたいだった……ハッ！？　ち、ちが、そうじゃなくてっ」

そんな感じで騒ぎまくりながらの登校でしたとさ。

## カカの天下１２４「返信カレー」

こんばんは、お風呂上りのカカです。

湯上りたまご肌です。ゆでたまごです。

最近携帯を買ってもらったので、今日はメールをいろいろと送ってみようと思います。

さて……誰に送ろうかな。布団にごろごろしながら携帯スイッチオン。

やっぱ最初は親友のサエちゃんだよね。

えっと、なんて送ろう……そうだ。

『こんばんはーサエちゃん♪　今日の宿題やった？　なんか難しいよねー国語って』

こんな感じでいいかな。

ちなみに私は宿題に目を通しただけでやってないんだけどね。

お、返ってきた。

『こんばんは。第二次世界大戦で織田信長の子孫がどう思っていたか、なんてわかんないよねー。わ、宿題見せてくれてありがとう♪』

……あれ？　なんか話が三歩くらい先にいっちゃったような。

まぁいいや。そんなとこも好き。

次は、サユカちゃんか。

『トメ兄がいま入浴中』

……お、返って来るのはや。

『だからどうしたっ！』

んー……そうだ。これでいこ。

『写メとったら見る？』

わ、ホントめっちゃ返信はやい。

『見る』

文章だとわっかりやすいなーサユカン。これはこれで可愛いけど、からかいがいないなー。

次は姉に送ってみよう。んーと、なんて送ろう。

『焼き鮭を焼くと何になると思う？』

適当でいいや。ぽちっとな。

ん、返信。みんな返すのはやいなー。

どれどれ。

『あたしもヤキが回ったな』

……意味がわからない。まぁ、姉だし。

次は……あ、そうだ。先生のも聞いたんだった。

宿題の文句でも言ってみようか。

『宿題むずかしすぎですよー。大体、織田信長の子孫なんて本当にいたんですか？』

ぽちっとな。

……なかなか返ってこない。忙しいのかな先生って。

お、返ってきた。

『いたさ。オレのじーさんだ』

アンタが子孫かよ。というか女教師なのにオレとか言っていいのだろうか。

『じーさんには散々昔話聞かされてうざい思いしたからな。おまえらも味わえ』

なんちゅう教師だ。

さて、あとは……登録件数まだ少ないんだよね。

残るはトメ兄、か。

なんて書こうかなー。でも同じ家に住んでるのにメールってあんま意味ないよね。

意味のあるメール……ご飯何？　って聞くのは嫌だなぁ。夕飯呼ばれたときの楽しみ減るし。

意味……意味……あー、わかんない。

そのまま送っちゃえ。

『意味がわかんない』

ぽちっとな。

そういやお風呂あがったのかなトメ兄。

お、返ってきた。

『辞書ひけ』

ごもっとも。

んー、あとは……そうだ、カンで適当なアドレス書いて送ってみよう。

で、文章は……

『カレーは好きですか？』

ポチッとな。

……すぐに返って来ないとこをみると、どうやら無事送れたみたい。

あ、返ってきた。

どきどき。

『大好きです！　私はいつも三食カレーですよっ』

ふ、普通の文章だ。

見ず知らずの人から来たメールによく返したなこの人。送った私が言うのもなんだけど。

『じゃあ、焼き鮭を焼くと何になると思います？』

ぽちっとな。

返ってきた。

『焼き鮭焼きカレーですねっ』

焼きカレーって何。

よほどカレー好きなんだなーこの人。面白いから登録しとこ。

えーっと、名前は……『カレー人』でいいや。

## カカの天下１２５「第一回、カカラジ！」

「こんにちは、留です！」

「こんばんは、香加です！」

「「二人揃ってカカ天です！」」

相変わらず二人揃ってのわりには単にタイトルを略しただけのコンビ名だけど、ともかくカカ天ラジオ、スタートです。

「えー、この番組はネット小説『カカの天下』を盛り上げるため、ぶっちゃけトークや作者の本音などを放送する情報番組ですっ！　えー、私たちは本編自体とは関係ないのでお気をつけくださいね」

「適当に名前つけると……カカラジでいいかな？　ネットラジオもネトラジとか言うらしいし」

「おう、そんなもんでいいだろう。ではカカラジ、ごゆっくりお聞きくださーい」

適当に音楽を鳴らしてＣＭに突入。

「これがあれば一日人気者！　額だろうが掌だろうがどこにつけるのも自由！　私たちタケダ医院が提供する『限りなく本物に眼球！』は一玉五百円で販売してまーす！　ぜひお近くの眼球専門店でお求めくださいね♪」

ＣＭがあけて。

「はい、改めましてどうも、香加です」

「留でーす」

「ほんとにラジオになっちゃったね」

「そうは言っても小説なのは変わらないがな」

「余計なこと言わない。さ、このラジオに届いたお便りでも紹介していきましょー」

「そんなのあるの？」

「だって所詮は小説だもん。作者があると言ったらあるんだよ」

「ほんと、とことんぶっちゃけたノリでいくのな……」

「さて、カカラジネーム、アキバ系のそこら辺さん。『サユカたんをお持ち帰りしたい』ってなにこれ」

「いたずらですね。ポイしちゃいましょう」

記念すべき一枚目はポイされた。

「さ、次は……カカラジネーム、三回転半ひねりちゃん。『お祭りの話で出てきたお祭り仮面とバナナ仮面はなんだったのですか』という、思いの他ひねりのない質問ですが、留兄？」

「えー、そうですね。バナナ仮面が単なる変態で、お祭り仮面はそれに巻き込まれた可哀想な人です。たーまやー」

「この人が知りたいのはその正体じゃないの？」

「言わなくてもわかるでしょ、普通は」

「そだね。皆さん、大方の予想通りで正解だと思います。はい、どんどんいきましょう。カカラジネーム、正露丸をかじろうさん。遠慮なくかじってください、私はかじりませんが。えー『カカちゃんのお父さんは忍者ということですが、忍者とは具体的にどういうお仕事なのですか』という質問です。留兄？」

「そうですね、いらないお偉いさんとかをこう、サクッとやっちゃう仕事かな」

「わお、デンジャラス」

「しかしそんな仕事はめったにないみたいよ」

「じゃ主な仕事ってなんだろ」

「んー、恵まれない人へのツッコミかな」

「なるほど。それでタケダ君のとことかよく出没するんだね。でもそれお給料でるの？」

「出るよ、政府から」

「政府って太っ腹だね。さ、では次……カカラジネーム。お姉さまの舎弟さん。『警官というポジションにいるのに出番がないのですが、なぜでしょう……』ってこれあの人じゃん」

「なんで出番がないって、そりゃ滅多に警察の世話になることなんてないしなぁ」

「そもそも自分で舎弟とか書いてる時点でダメでしょ」

「結論、下克上でもすりゃ出番増えるぞ。限りなく無理そうだが頑張れ」

「ではお便りコーナーはこのへんで」

ＣＭへ。

『我が街が誇る定食屋！　安い、うまい、何が入ってるかわからないの三拍子が揃ったセイジ食堂はあなたを待ってるぞ！　腹と気力が減ったときはぜひどうぞ！　粋な店長の人生論つきであやしい定食を提供するぜ！』

「はい、では今日のカカラジはそろそろ終了のお時間となってしまいましたー」

「どうだった？　留兄」

「んー、これさ、ぶっちゃけた話し方してるだけで、本編の謎とかについてはあんまりぶっちゃけてないよね」

「だって謎あんまないもん。なのに早々から明かしちゃったらつまんないじゃん」

「こういう発言はほんと限りなくぶっちゃけトークなんだけどなぁ」

「じゃ最後に……最近でてきた『トメ兄恥ずかしい写真集』の一部でも紹介しますか。まず一枚目。風呂上りの素っ裸のまま転んで大また開きで廊下を滑っている――」

カカラジチョップ！

「さ、妙な写真は飛んだところで、また次回お会いしましょう！」

「ちっ……このラジオはタケダ医院とセイジ食堂の提供でお送りしましたー」

「提供しょぼ」

## カカの天下１２６「カカとしりとり、レベル２」

「雨だなぁ」

「雨だねぇ」

こんにちは、トメです。

季節はすっかり梅雨、天気は激しく雨ざあざあで外出る気が起きません。

「あ、そういやさっき、郵便受けにチラシはいってたよ」

「へー、なんて書いてあった？」

「わざわざ雨が多い時期に活動する物好きなドロボウいるから気をつけてーって交番から」

なぜだろう、特に理由はないけど思ってしまう。

シュー君、お疲れ様。仕事に、というか出番を増やそうとする涙ぐましい努力に……

や、あくまで理由はないよ？　なんとなく思っただけだから。

「にしても暇だね」

「またしりとりでもするか？」

居間のテーブルで二人して漫画を読んでいた僕らは顔も上げずに話している。だるだるである。

「んじゃ、しりとりの『り』からね。人名で」

「人名？　それしかダメなのか」

「普通のじゃつまんないでしょ」

「それもそうか、んじゃ僕からいこう」

リンカーン？　ってンがつくし。んー……

「リンダ」

「誰それ」

「リンダリンダ～♪　っていう歌あるから、そのリンダで」

多分どっかにいると思うし、いいっしょ。

「わかった。『ダ』か……だ、だ……ダンディ佐島」

「誰だよそれ」

「ほら、トメ兄がいつも文句言ってる人」

ああ、たまに僕がカカに愚痴っている同じ職場のムカツクじーさんか。全然ダンディじゃないが……まぁいいか。

「じゃあ『ま』だな。そういうのが許されるなら……魔法使い福沢諭吉」

「あの人魔法使いなの？」

「おう、だって諭吉さんがいっぱいいれば何でも手に入るんだぞ。まさに魔法」

「なるほど」

お、納得した。さすが我が妹。諭吉の偉大さをわかってるね。もっと諭吉ほしい。

「じゃ『ち』ね……ち、ち……散っちゃった花子」

「だから誰だよそれ」

「うちの学校のトイレの花子さん、散っちゃったの」

そうか、散ったのか。

詳しく聞いたら負けなんだろうなぁ。

「じゃ『こ』ね。こ、こ、こ……コケコッコー大島」

「……誰？」

「うちの同僚。朝の挨拶がコケコッコーなんだよ」

「変な人もいるんだねぇ」

おまえが言うな。

「じゃあ『ま』ね。ま、まー……マント柿島」

「今度は誰だ？」

「うちのクラスの子。いつもマントしてるの」

嘘くせー。

「で、また『ま』か？」

「こないだの仕返し」

そういえばずーっと前にやったときは僕がこうやって一つの文字繰り返してたんだよなぁ……

「ま……まー」

どう言えばおもしろいかなー。

あ、おもしろいかは置いといて浮かんだ単語が一つ。

「負けるなタケダ」

「へぇ。何と勝負してるの」

「なんだろ……愛？」

「ふーん……ところでタケダって誰？」

本当に頑張れタケダ。

カカはやらないがな。

まぁ、そんな感じで梅雨を過ごしてます。

## カカの天下１２７「カカと言葉、レベル２」

「雨だねーほんと」

「雨だなーほんと」

こんちは、トメです。

今日も今日とて雨雨ざーざー僕らはごろごろです。

「ねートメ兄」

「んー？」

僕は雑誌を読みながらごろごろ読み読み。カカは宿題をしながらごろごろ書き書きです。

「天上天下唯我独尊ってどういう意味？」

えーっと、たしか世の中で自分が一番偉いとか思ってるやつのことだよな。

「おまえのことだよ」

「私なの？」

「おう」

「わかった。えーっと、わ、た、し、の、こ、と」

多分熟語の意味でも書く宿題なのだろう。先生がこの解答読んだらどう思うかな。

「次、二律背反」

えと、二つの要素が食い違うこと、だよな。

「んー、わかった」

「お、すごいじゃん」

「えと、『二』つの法『律』は『背』中を『反』らすって意味でしょ」

や、意味がさっぱりわかりませんが。背中を反らす法律ってなにさ。それが二つもあんのか？

「よし、次！」

僕の宿題じゃないし、まぁいいや。

「大安吉日……大安売りの日だね。いい日だから吉日ってことで」

ああ、なるほど。そっちの意味のほうがわかりやすいな。

「大根役者……ダイコンが好きな役者？」

「ダイコンみたいな役者のことだよ」

「なるほど。顔が、ダイコンの人、っと」

顔の形がダイコンね。意外といるかも？

「いいだくだく……？」

唯々諾々。人の言いなりになることだな。

「これ、漢字で書けって」

んー、小学生には難しい漢字のような気もするけど、そもそもこれは辞書使って調べる類の宿題みたいだしなぁ。そこを僕に聞くのとカンでやってるんだから……

「胃にダクダクとなんかを入れるって意味で、胃入ダクダクでいいや」

こんなスペシャルな答えが出るわけだ。

怒られても僕は知らんぞ。

「次は……ことわざの問題！」

「へー。言ってみ」

「えっとね、次のことわざが指し示す意味を書きなさい。一問目、『いつまでもあると思うな親と金』だって」

親はいつまでも生きていてくれないし、金は使えば減っていくから自立と倹約を心がけろって意味だな。

「これはそのまんまの意味だね」

「まぁな。で、カカ。正解は？」

「働け、ニート！」

……いや、まぁ、間違ってはいないか。

「次は、『豚に真珠』だって」

価値のわからない者に高価なものやっても意味がないってやつだな。

「豚肉の中には真珠が入ってることがあるの！？」

おーほんとか。そりゃすごい。

これからは豚肉ばっか買うようになっちゃうなぁ。いやでも真珠入ってたら食べにくそうだなぁ豚肉。

「最後の問題！　『文は人なり』だって」

文章を見れば書き手の人となりがわかるってことだろうけど……

いい問題が最後にある問題集だな。

今カカが書いてきた解答文を見れば、カカがどんなやつかは一目瞭然だ。

とにかく意味不明な解答文の数々。

それを読んだ人はみんなこう思うに違いない。

わけわからん、と。

ああ、カカ。

おまえはすばらしくわけわからん。だがそこがいい。

「トメ兄、これの意味は？」

「これが私だ、どんなもんだい！　とでも書いとけ」

そして宿題提出後。

「カカ、ちょっといいか」

「なんですかー、テンカ先生」

「おまえの宿題な」

「はい」

「合格！」

「やた♪」

## カカの天下１２８「カカＶＳ姉娘　まねっこ」

「手をあげろー」

「……ん？」

「ばーん」

胸の辺りを圧迫する重さと、ピロロローという音と共に目が覚めたカカです。

目の前には銃っぽいおもちゃを私に向けているミニサイズの人間が。

「あれ……タマ？」

そう、私の上に乗っかっているこいつは私のライバルにして天敵、姉の娘のタマだ。久々に見るけど……なんでいきなり私に銃を突きつけているのだろうか。

「ばーん」

ピロロローという音が鳴る。撃ってるらしい。

「ばーん」

「……ばーん」

なんとなく指でっぽうで撃ちかえしてみた。

「うきゃー」

撃たれたタマは私のベッドの隅にころん、と倒れた。

「うたれたー」

なかなか可愛いじゃないか。

「おやっさーん」

誰それ。あ、任侠ものかな。

「で、また預かれと？」

「おう、姉が勝手に置いてった」

「で、また私が世話しなきゃなんないと？」

「だって僕は仕事だし。カカは学校休みだろ」

というわけで、またもや私と姉娘タマの戦いが始まったのである。

「……とりあえず朝御飯、食べよ」

トメを見送ってから、いつもより少し遅い朝食。こういうのをしっかり用意してくれるトメ兄はいいお嫁さんになれると思う。よかったねサユカン。

「たべうー！」

「なに、あんたも食べるの？」

仕方ない……タマ用の食器は、と。

万が一割れてもいいようにトメ兄のお椀でいいや。

自分のご飯をよそう。すると横でタマが同じようによそうマネをしながら無駄にキラキラ瞳を光らせてこっちを見ている。

「……やりたいの？」

こくこく、と勢いよく頷くタマ。

この子が何歳なのか、いったいどこまでこういう生活関係のことができるのか、そういうことは全くわからないけど……とりあえずやらせてみることにした。

お、ちゃんとよそった。

よそった。

よそいまくった。

よそいすぎて高くそびえたったご飯が倒れた。

ちゃんとできるかどうか近くで見ていた私の顔にかかった。

ご飯と怒りのせいで熱いぜベイビー。

負けるな私……そうだ、私は年上。この子よりでっかいの。だからこのくらいのことは大目にみてあげるの。ああ私って理性が強いわ！　あはははは誰かほめろ。

ぶん殴りそうになるのを必死でこらえてご飯を片付けた私は、気を取り直してコップに氷を入れて、ジュースをいれる。

そして、またもや隣でマネをしながらキラッキラキラリーンな瞳でこちらを見つめる悪魔の娘。

「……やるの？」

こっくりこっくりと頷きまくるタマ。

「……いいよ。ただし氷だけね」

氷一つ入れるくらいならいいだろう、と氷を入れた容器と氷を掴むトングを渡した。

タマがテーブルにコップを置く。

そして氷を掴んで、コップの上に……ほ、なんとかうまくいきそうだ。

そして氷を落下させた。

氷はみごとコップの真上。

なのに氷は弾かれて床へ――

「コップさかさまじゃん！！！」

そっちは盲点だった！

「はいったー」

「入ってないわ！」

やれやれ、と氷を拾う。

そして顔を上げた。

「ジュースー」

「だからコップさかさまだって！！！」

ああ……テーブルと床がオレンジ味に……

「あ、あのねぇ……タマァ！！！」

私はキレた。

しかしタマはまるで私に感謝するようににっこりと笑って……私の頬に、キスをした。

お……

お……

お……

おこれないいいいいいいいいい！！！！！！

「ただいまー、って、どうしたカカ」

「トメ兄……女ってさ、いくら弄ばれても愛してしまう悲しい生き物だね」

「や、だからさ。なんでタマと留守番するたびに何か悟るんだよおまえ」

「女だもの……」

つかれた……

# カカの天下１２９「名探偵カカの事件簿２」

「事件だ……！」

ども、トメです。

バーン！　と壁を叩きながら居間へ乱入してきた妹のカカは、なにやら景気の悪い顔でそんなことを言いました。

「あ、また便秘か。それはすごい事件だな」

「それはトメ兄でしょ！」

「人聞きの悪いこと言うな」

「だってもう三日出てないでしょ」

「なんで知ってる！？」

カカはムカツク微笑を浮かべてちっちっち、と不器用に指を振る。

「この名探偵カカに知らないことはないのだよ」

「あっそ……んで、どうしたって？」

「サエちゃんとサユカちゃんと遊んでる間に、私のおせんべいがなくなったんだよ！」

おまえほんとせんべい好きだな。

「へぇ、で、犯人は誰なんだ？」

「それをこれから調べるの」

「名探偵に知らないことはないんじゃないのか？」

「トメ兄、世の中は臨機応変にいかなきゃ」

「……ああ言えばこう言う」

「そう言うからこう言うの。出直しなさい」

コノヤロウ。

お、カカの部屋で遊んでたサエちゃんやサユカちゃんも出てきた。

「君らも大変だね」

「楽しいですよー」

「いつものことですしねっ」

いい友達だなぁ。

「で、僕に何の用なわけ？」

「事情聴取にきたの。犯人はトメ兄？」

「いや。僕はいま、しょっぱいのよりチョコとか食べたい気分なん

だ」

「あ、私もですー。気が合いますねートメお兄さん♪」

にこーっと可愛らしい笑顔で賛同してくれるサエちゃん。

「トメ兄、死刑！」

「サエすけ、処刑！」

……なんでこいつらこんな怒ってるんだ。

「冗談冗談、そんなに怒らないでよサユカちゃん。で、カカちゃんはなんで怒ったの？」

それはあなたにふぉーりんらぶだからですよサエちゃん。

「へ？　いやその……ともかくっ」

ごまかしたな。

「私のせんべいを食べた犯人はこの中にいるっ」

「そうか？　気まぐれに忍び込んだ姉が食べてったっていう線もあると思うが」

「や、姉は今日デートだから」

……ほわっつ？

「ちょ、ちょちょちょっと待てっ！？　あの姉がデートだと？　相手は何星人だ？　火星人か？　いや、冥王星人が一番しっくりくる」

「それはどうでもいいからっ！　一人ずつ証言を聞いてくよ」

や、相当気になる話題なんだけどなぁ……

「まずサエちゃん」

「私、ずっとカカちゃんと一緒にいたよねー」

「うんうん、これからもずっと一緒にいようねー♪　次いこう」

ぬるっ。ぬるすぎっ！

「サユカちゃんは？」

「わたしも基本的に一緒にいたじゃない。トイレ何回か行ったけど」

「サユカちゃんってトイレ近いよね。糖尿病？」

「はぁ！？　ちょ、んなわけないでしょ！！」

実際は最近の小学生で糖尿病の人とか増えてきているらしいので、お子さんがいる家庭は気をつけましょう。

「トメ兄は？」

「僕はずっと居間で雑誌読んでたけど」

「しょぼい生活」

「やかましいわっ！　大体さ、せんべいってどこにあったんだよ」

「台所の上の戸棚」

……あれ？

「それ。おまえ昨日の夕方食べてなかったか？」

「いや、私が食べたのは、せんべいじゃなくて、クッキー……ぁ」

あ？　いま小さく「あ」って言ったぞ。

「確かに犯人はこの中にいたみたいだな……しかも超中心に」

「うん、トメ兄を犯人だっ！」

「はいぃ！？　なんで僕！？　しかも『を』ってなんだよ普通は『～が犯人』って言うだろ！」

「うるさいなっ！　事件の犯人を決めるのは証拠でも警察でもなくて探偵なんだよ！」

「はっきり言うにも程があるだろその真理！　ていうか犯人はおまえだろがっ！」

ぎゃーぎゃーと騒ぐ僕らを見て、

「ああいうお兄さんいると楽しそうだよね」

「うん……でもわたしはお兄さんよりも」

「んん？　なにがほしいのサユカちゃん？」

「やっ、お兄さんじゃなくてこ、こ、こいび……いやなんでもないっ」

「どっちにしろトメさんがほしいのねー」

「サエすけそれ言うなあああああ！」

なにやら二人も騒いでいたけど、カカがうるさくて聞こえなかった。

「事件は犯人が捕まるんじゃないっ、探偵の気に食わないヤツが捕まるんだっ！」

「だからそういうことハッキリ言うなあああ！！」

## カカの天下１３０「名探偵サユカの事件簿？」

「ん……あれ、トメさんのお姉さんだよね」

こんばんは、サユカです。

カカすけの家から帰る途中、サエすけとも別れて近所のファミレスの前を通ったとき……見覚えのある姿を見つけました。

「向かいの人……誰だろ」

向かいの席でお姉さんと話しているのは……会ったことのない女の人だな。そういえばカカすけが「今日は姉はデート」って言ってたっけ。

よし、潜入してみよう。

……別にカカすけがやってた探偵ごっこが羨ましかったわけじゃないよ？

「いらっしゃいませー」

えーっと……お姉さんの後ろが空いてる。

念のためお姉さんの連れの人にも見られないように気をつけて……と。

お姉さんの真後ろに背を向けて座った。よし、多分大丈夫。

うーん、わたしって探偵っぽい！

「――でさぁ、あんたも娘に会いたいんならいい加減さぁ」

「そうは申しましてもー、当主様がー」

……なんの話してるんだろ。

当主？　珍しい言葉だなー……って最近どこかでそんな単語を聞いたような。

「だいたいさ、その当主ってのはどんだけ偉いのさ」

「気にくわない政治家をサクッとやっちゃえる程度には偉いですー」

「……そらすごい。うちの親父でも飼ってるのかな」

「とにかく、当主様の命令は絶対で、しかも情報網がものすごく広いんです……娘と隠れて会おうにも……あの子が私に会ったそぶりを誰かに見られた瞬間私はサクッといっちゃいますー」

「んー……ヘビーねぇ」

あれ？

あれあれ？

なーんかひっかかるなー。どこかで似たような話を聞かなかったっけ。

見られるのを覚悟で後を振り向いてみた。

お姉さんの連れの顔が見える。

その瞳を見た瞬間、わたしの脳裏に友人の姿が浮かんだ。

「謎は全て解けた！」

私は思わず叫んでいた。

そして当然、それは二人にも聞こえて――

「……あの、なぜ私は裏路地に連れていかれているのでしょうか！？」

「あー、気にしない気にしない。ちょっと人目につきたくなかっただけ」

「誰かに見られて警察呼ばれても困りますからねー」

ガクガクブルブルガクガクブルブル！！

「別にとって食いやしないよ」

お姉さんはにやーっと笑って、優しく囁いてくる。

「返答しだいでは」

ものすんごくこあいこと口にしたよぅこの人！

「カツコさん、冗談はこのくらいにー」

「たしかに冗談は半分だけど、本気も半分あるんだからね、サユカちゃん」

「……は、はい」

おそるおそる頷くわたしに、お姉さんは今度こそ本当に優しく微笑んだ。

「あたしらの話、聞いてた？」

「……はい」

誤魔化しようはないだろう。ヘタなことを言えばサクッと……うう。

「謎は解けたーって言ってたけど、それはあたしらが話してた内容が全部わかったと理解していいの？」

「は、はい……その人が、サエすけの……」

間違いないと思う。だって目がそっくりだ。毎日見慣れている瞳。鈍い子じゃない限りは気づくと思う。

「そういうこと。この人らの家の事情は知ってる？」

「おおまかには、サエすけに聞いて知ってます」

お姉さんは軽く頷いて、ちらりと女性に視線を合わせる。

「じゃ、あたしの言いたいことわかるよね。これはサエちゃんには秘密」

「これって……お姉さんがその人と会ってたことを、ですか？」

「んとね、この人はサカイさんっていうんだけど……うちの近所に住んでてさ、トメとカカとも知り合いなのよ」

知り合いなのにカカ気づいてないの!?　にぶっ！

……でも、サエすけの家の事情知らないんじゃ『母親かもしれない』なんて思いつかないのも仕方ない、か。

「だから、サエちゃんのお母さんが近くにいるってこと自体を誰にも言わないでほしい」

なるほど……そういう、ことか。

とにかく全般的に見なかったことにしろっていうことだ。

「さもなくばサクッといっちゃうよ」

「わかり、ました」

サクッとやられるわけにはいかなかったので、しぶしぶわたしは頷いた。

「でも」

でも、言わずにはいられなかった。

「サエすけ、寂しがってるんですよ？　お母さんがいなくなって、独りぼっちになって、それで――」

言い募ろうとしたわたしの頭に、優しく手が置かれた。

サエすけのお母さん……サカイさん。

「いまは、あなたたちがいるでしょう？」

「……！」

「勝手なのはわかってるー。でもねー、安心してるの。あなたやカカちゃんがいるから。だから、もう少しだけ時間をちょうだい。頑張って……みるから」

その、優しくて悲しそうな声に。

今度こそ、本当に。

私は頷くことしかできなかった。

## カカの天下１３１「迷える子羊よ、もっと迷え」

「……はぁ」

ども、カカです。

ただいま昼休み。そして場所は屋上。

なぜこんなとこにいるかというと……サユカンに呼び出されたからです。

「でさ、サユカン。人を呼び出しといてため息しかつかないってどういうことさ」

「うぅ……何を言おうか迷ってるのよぅ」

「愛の告白じゃないだろね」

「君にしてどうすんの」

「トメ兄に言う練習とか？」

……あれ、いつもトメ兄の話したら愉快になるのに、今日はそれがないな。

「ほんと、どしたのサユカン。今朝から変だよ？」

「うぅ……」

「登校中に散歩中の犬とすれ違うとき、犬に気づかないで、犬のアゴ蹴っちゃうし」

「……う」

「電信柱にぶつかりそうになって、避けたときに隣を歩いてた男子へエルボーかましたり」

「……うう」

「私が『織田信長ってどう思う？』って聞いたら『食べたい』とか答えるし」

「……ううう」

「なんか変だよ、それも妙に暴力的に」

「……ううう」

自覚はしていたらしい。激しく凹んでる。

サユカンは深々とため息をついたあと……遠いお空へ向けていた視線をようやくこちらに戻した。

「ねぇ、サカイさんって知ってるよね」

「うん、たまに一緒にご飯食べるし」

「どう思う？」

はて、なんかまったく予想外な質問がきましたな。

「どうって……んー、ダメ人間？」

「だ、ダメなの？」

「うん、なんか色々ショックなことあったらしくて堕落しまくってる。ダメ街道まっしぐら」

「そ、そうなんだ」

「でも最近はなんか頑張ってるみたい。なんていうかな……固い雑巾をしぼるかのように元から無い元気をしぼり出そうしてるみたいな」

まぁ、元から無いものしぼってもあんま出ないんだけど、一応頑張ってはいる。

「そっか……いろいろ、あるんだよね」

「サユカン？」

「わたしがどうこう言う問題じゃないんだよね……でもなー……放っておくのも……んんんん」

またお空を見始めましたよこの人。むーっ、人と話すときは相手の目をしっかり見るのが基本なのに！

「うりゃ！」

「うぇあ！？」

ムカついたから抱きついてやった。

ついでに頭を撫でてやる！

「な、なにするカカすけ！」

「何を悩んでるの」

「……う」

直球は痛かったのか、暴れるのをやめて押し黙るサユカン。

まったく、仕方ないなぁ。

「ま、言えないなら別にいいよ」

「言えないというか……言おうかどうしようか迷ってるというか」

「じゃあ言うなー」

「……む、なによ。聞きたくないわけ？」

「迷うような相談なら言わないほうがいい、っていうのがトメ兄のモットーらしいよ」

「……トメさんの？」

「うん。相談しようか迷ってるってことは、それはとても大事なこ

と。相談したほうがいい方向に向かうと思えるならしたほうがいいけど、そう思えないならやめたほうがいい」

えっと、次はなんだっけな。あ、そうだ。

「相談するにもいい時期と悪い時期があるから、ぎりぎりまで迷え。自分の納得できる答えを探せ。できる限り自分で答えを見つけて、それから相談するのもいい。そうすれば後悔しにくい選択ができると僕は思う。相談する時期を見定めるのが難しいけど、だって」

さっすが私、よく覚えてる。

「難しくてよくわかんない部分もあるけど、簡単に言えば、相談するのも迷うくらい大事なことなら、まず自分で考えをまとめてから行動しろってことじゃないかな」

「自分の、考え」

「サユカンの悩みって、すぐ相談しなきゃならないこと？」

「そういうわけじゃ、ないと思う」

「じゃ、まだ焦ることないじゃん」

「でもさ、悩みあると不安なんだよ。早く解決しないとさ、なんか、苦しくて」

おお。なんか笑える。

「カカすけ。なに笑ってるのさ。人が真剣なときに」

「それ、私がトメ兄に言ったのと同じだ」

「え……トメさんは、なんて？」

「悩みがあって苦しい、そのことだけを信頼できる人に伝えておきな。そうやって甘えておけば楽になるもんだ。その証拠に……僕に話して少しは楽になっただろ？　って」

そう、私がここまではっきり覚えてるのは、私自身が悩んでるときにそう言ってくれた兄のおかげで、少し救われたから。

「だからさ、とりあえず私に甘えときな、サユカン」

抱きついたまま、頭を撫でたまま、できるだけ優しい声でそう言ってみた。

サユカンは珍しく素直に頷いた。

もうちょっとだけ頭を撫でてあげよう。

……でもお願い神様。

この場面でサエちゃん乱入とかやめてね。

浮気されたなんて思われたくないし。

# カカの天下１３２「心の言葉、花言葉　前編」

「最近、サユカちゃんの元気ないよねー」

「んー」

こんちは、カカです。

学校が終わってさぁ帰ろうというとき、サエちゃんがそんなことを言いました。

「なにか悩んでるみたい。何を悩んでるのかは聞いてないけど」

昨日ので少しは吹っ切れたみたいだけど、やっぱりまだ元気ない、かぁ。

「そっかー。じゃ、元気づけてあげたいね」

何を悩んでるのか、そこを必要以上に突っ込まないサエちゃんはさすがわかってる。私たちって大人だよね。

「元気づけるか……なにしよ」

「花でもあげればどうだ？」

「花？」

「おう、古今東西、花をもらって喜ばない女はいないという伝説がある」

「そか、わかった。ありがとトメ兄――ってトメ兄がここにいるわけないっ！？」

ということはテレパシートメ兄にしてその正体は私のお父さん！？　どこ、どこにいるの！？

「カカちゃん、一人で何を話してたのー？」

「いない……くそぅ、いつか見つけてやる」

「カカちゃん、頭狂ったー？」

「ソフトな声で過激なこと言うね……サエちゃん」

そこも好きだけど。

「とにかく、花を買ってあげよう！」

そして訪れた花屋さん。

入り口にでっかく掲げられた看板には『鼻は口ほどにモノを言う』と書いてある。字、間違ってない？

とにかく私とサエちゃんは二人でその花屋さんに入った。学校の帰り道なのだけど、いつも一緒に帰るサユカちゃんは「今日はちょっと」と言って教室に残っていた。相当重症らしい。

「でさ、何の花買う？」

「そうだねー、花言葉とか考えて選ぶといいかも」

「鼻言葉？　鼻声のこと？」

「そうそう、それぞれのお花の声みたいなものだよー」

ちょっとズレてるような気がする会話をしながら店内を見渡すと、親切にも各花に『花言葉は～』と書いてある。

なんだ、鼻じゃなくて花の言葉か。そりゃズレるわ。

「あ、私はこのお花好きだなー。えっと、福寿草。花言葉は……『長寿』だって」

「さ、サエちゃん、それ渋すぎ。なんか元気でないよ」

「そうかなー。じゃ、これは？　えっと、ボタン。花言葉は……『王者の風格』だって」

「や、だからなんでそんな渋いのばっか選ぶの……」

さ、とサエちゃんが差し出した花はヒエンソウ。花言葉は『気まぐれ』

気まぐれ……ああ、私への返事か。

「気まぐれに選ぶのもいいけどさ、やっぱ元気が出る花言葉のやつにしようよ」

サエちゃんが差し出した花はコデマリ。花言葉は『努力する』

「うん、がんばろ……あ、これはどうだろ。ツワブキ、花言葉は『愛よ蘇れ』だって。トメ兄への愛が蘇って元気にならないかな」

ふるふる、と首を横に振りながらサエちゃんが差し出した花はラッパスイゼン。花言葉は『片想い』

「そうだよねぇ、片想いだし長続きしないよねぇ……うーん、ほんと元気になってほしいよね」

うんうん、と神妙に頷きながらサエちゃんが差し出した花はヒャクニチソウ。花言葉は『亡き友を想う』

「死んでないから」

むぅ、と唸りながらサエちゃんが差し出した花はケマンソウ。花言葉は『あなたに従います』

「あ、私が決めていいの？　それじゃ……」

私は偶然目に止まった切り花を手に取った。小さな赤い花……可愛いし、なにより花言葉がいい。

「サエちゃん、これ」

私の見つけた花を見てうんうん、と頷きながらサエちゃんが差し出した花はアナナス。花言葉は『満足』

「いいよね、これ。よし、これにしよう！」

サエちゃんはその切り花を買いにレジへ。そして私はサユカンに電話をかけた。

「もしもしサユカン。いまどこ――」

## カカの天下１３３「心の言葉、花言葉　後編」

「はぁ……」

どうも、最近元気がないサユカです。

あまりの元気の無さに今日はカカすけとサエすけの「一緒に帰ろう」という誘いも断ってしまいました。はぁ、ほんとなにやってるんだろ。

屋上でもうすぐ赤くなるかなーというくらいの空をひたすらボケッと見上げていると……電話が一本。

カカすけだ。

わたしが屋上にいると言ったら、わざわざここに来るそうだ。

サエすけも一緒に。

何がしたいのやら。

はぁ……どうしようもないのはわかっていても。

カカすけの言葉のおかげで、わたしが言うべきことじゃないというのはわかっても。

サエすけが寂しい思いをしてると思うと、やっぱりなんだか落ち込む。

「待たせたねサユカン！」

「まぁ、元からここにいたからいいけどさ」

「サユカちゃん、やっほー」

ん……サエすけの顔見るとなんか気まずいなぁ……隠し事してるし。

「今日はサユカンに元気を出してもらおうかと思って、花を買ってきました！」

「え」

「私たちね、一生懸命選んだんだよー」

……花？　わたしの、ために。

なによ、わたし、バカみたいじゃない。

サエすけのお母さんのこと考えて、サエすけ大丈夫なのかなとか心配してたのに……わたしのほうが心配されるなんて……

「はいっ、これが私たちのプレゼントだよ！」

そう言ってカカすけが花をわたしに差し出してくれる……

なんていい笑顔なんだコイツら……くそぅ、不覚にも涙腺が緩ん

で……

「これはハコベっていってね、花言葉はね……なんと！　『ランデブー』だよ！」

「……は？」

あれ。

緩んだ涙腺がなんか締まった。

「や、だからランデブーだよ、ランデブー」

「それでわたしが元気になると？」

「だって花のくせにランデブーとか言ってるんだよ。笑えない？」

「……いや、笑えなくもないかもしれないけどさ」

なによ、感動しそうになったわたしがバカみたいじゃない！

そうよね、コイツらはそういうやつらよね。

人が悩んでるのも気にせずこんなおちゃらけた――

「もう、カカちゃん。ふざけてちゃダメだよ。サユカちゃん怒ってるよ？」

「……う、や、だってさ」

「はいはい、恥ずかしがらないで本命の花だしてー」

「へ？」

珍しく顔を赤くしたカカすけはハコベをしまって、再び花を取り出した。

それは今のカカすけの頬みたいに赤くて小さい、一輪の切り花。

「あー、うー、はい、サユカン」

「これ……は？」

「ガーベラだよ」

「花言葉はね、『一家だんらん』だよー」

一家……だん、らん。

「あのさ、私らって家族みたいなもんじゃん？　だからさ、えーっと」

どもっているカカすけの頭を「任せて」というようにぽんぽんと撫でて、サエすけは一歩近づいた。

「ふふ、サユカちゃん」

「何を悩んでるのかはわからないけど、大丈夫。サユカちゃんには、私たちがいるから」

――いまは、あなたたちがいるでしょう？

その言葉が、不意に浮かんだ。

「そうそう！　私とサエちゃんがいれば天下無敵なんだからね」

「うんうん、何も心配することないよ」

サエすけのお母さんの言葉の意味が、やっと理解できた。

そうだ、わたしにカカすけやサエすけがいるように、サエすけにはわたしとカカすけがいる。

家族みたいなもの、とカカすけは言った。

私たちがいる、とサエすけは言った。

一家だんらん、とガーベラが囁く。

もしサエすけが寂しいなら……その寂しさをわたしたちが埋めてあげればいいだけじゃないか。

だってわたしたちは、友達で、家族。

一家だんらん、天下無敵。

――わたしにできることが、やっとわかった。

サエすけのお母さん、サエすけは任せて。そして頑張って。

いつかサエすけとまた家族になれるその日まで。

サエすけには、わたしとカカすけが一緒にいるから。

「あ、サユカン笑った！　……あれ？　なんか不敵な笑みだよ」

「ほんとだ、誰かに挑戦するみたいな感じだねー」

「ぷっ、あはははは！　君らさ、さっきから恥ずかしいことばっかり言ってる」

「恥ずかしいって言うな！！」

「わ、カカちゃんとサユカちゃん。いつもと逆だー」

わたしの答えは出た。

家族として、友達としてみんなと一緒にいる。

ただ、それだけ。

夕暮れどきの屋上。

風も世界も赤く染まる、そんな中で。

一家だんらんの意味をもつ赤い花だけが、その小さな家族たちを穏やかに見つめていた。

## カカの天下１３３「心の言葉、花言葉　後編」（後書き）

えー、自宅のＰＣのトラブルによりいつもより投稿時間が上下してしまいました。申し訳ありません！

今回で少しシリアス風味のお話はひと段落、しばらくはいつもの感じな展開が続くので、またよろしくお願いします＾＾

## カカの天下１３４「正格（正解と合格）の違い」

「はい、これ読める人～」

こんにちは、カカです。

ただいま国語の授業中です。

テンカ先生が書いた黒板の漢字を見て、わりと授業に積極的なうちのクラスメイト達は次々と手を上げていきます。

「はい、じゃあ出席番号１５番君」

「え……あの、僕には西川っていう名前が」

「ああごめん。オレって人の顔と名前覚えるの苦手でさ。覚えてほしかったらもっと目立て」

先生らしからぬ無茶なことをいうテンカ先生は、そのさばさばした性格がうけて学校の人気者だ。

ちなみに「オレ」とか言ってるけど女の人だ。格好いい女性がそういう呼び方をするとすごく似合うのだと私は初めて知った。

「じゃあ西革君、答えて」

「西革じゃなくて西川です！」

「……なぁ西川。おまえ字を間違ったの、よく気づいたな。言い方

一緒なのに」

「家族には目ざとい耳ざといってよく誉められます」

得意げに胸を張る西川君。ほんとすごい。私には全然わからなかった。

「ん、よし。おまえの名前は覚えた。じゃあ答えてー」

「その漢字は、しゅじゅつ、です。そんなの簡単ですよ！」

黒板にある『手術』という文字は、確かにわざわざ生徒に質問するにしては簡単な漢字だった。

しかしテンカ先生は「はぁ」とため息をついた。

「正解。でも不合格」

「え！　正解じゃないんですか！？」

「いや、正解だが不合格なんだよ西革君」

「西川です！」

「つっこむねぇ、君も」

どうやって聞き分けてるんだろう……

「不合格っていうのはあれだ、面白くないってこと。てめーら子供なんだからもっと変な答え言えよ。あえてオペとか言うとかさ」

この先生はいろいろと自分に正直でほんと面白い。

今年に就任してきたばかりのころは猫をかぶっておとなしくしてたけど、そのどことなく姉に似た本性を段々と現してきたのだ。

「じゃ、どんな答えが合格なんですか」

「そうだな……んじゃカカ。答えてみ」

「……へ？　は、はい」

まさか自分が当てられるとは思ってなかったから少し焦った。

「面白い答えですか」

「ああ、おまえの場合は別に気構えなくていいぞ。素直に考えてみ」

素直に……

手術っていうことは病気なんだよね。

「ずっと入院してるんだね、可哀想」

それで、生きるか死ぬかの瀬戸際なんだよね。

「でっど、おあ、あらいぶ」

それで、大抵一回は成功するんだよね。

「目が、目が見えるわ！」

でも身体に負担かかってきて、

「短い間だったけど、楽しかったわ！」

大抵そばには恋人がいて、

「愛を教えてくれて、ありがとう」

恋人に手を繋いでもらいながら死んじゃって、

「ぽくぽくぽく、ちーん」

恋人も後を追おうとして、

「いますぐ僕もそっちに行くよ！　さぁ、飛び下り自殺だ！　ぴょーい」

でも助かっちゃって、助けてもらった女の人と恋に落ちて、

「いやー、あんな女のことは忘れよう、いちゃいちゃ！」

そしたら死んだ人が幽霊になって出てきて、

「ワタシノコト、ワスレチャッタノ？」

恋人さんはとり憑かれて、

「うわぁぁぁぁ見るな、来るな、近寄るな」

そう叫ぶんだけど、

「ほーら私の内臓を見てごらん」

コートを広げる変態みたいなノリで皮膚を広げる幽霊に、

「見せるなあああああ！　がく」

とり殺されましたとさ。

「ぽくぽくぽく、ちーん」

めでたしめでたし。

「こんな感じでどうですか？」

「大合格！」

なぜかクラスにいる全員から拍手をもらってしまった。

「それで先生、こんなのをテストに書いたら正解にしてもらえるんですか」

「そんなわけないだろ」

「ですよねー」

「でも私は面白いやつのほうが好きだぞ。適度に正解して適度に変なこと言え。いいな」

ほんと面白い先生だ。

「ちなみにカカを見本にすると合格率は上がるぞ。正解率は下がるが」

「「はーい」」

なぜに。

## カカの天下１３５「ねえねえ牛くん、いただきます」

こんにちは、トメです。

今日の仕事は終わり。家に一旦帰ってから夕飯の買い物へと出かけます。

「ただいまー」

「おかえりートメ兄」

「夕飯の買い物いってくるけど、ほしいものあるか？」

「牛を一頭」

「わかった。じゃ、いってきます」

「いってらっしゃい。活きのいいの頼むねー」

牛を一頭か。

カカも知らないうちに、大型肉食動物みたいによく食べるようになったんだなぁってちょっと待てぃ。

慌てて引き返して家のドアを開けた。

「あ、おかえり。速かったね。ノラの牛でもいた？」

「そこらに牛がうろついてたら怖すぎるわ！」

「じゃあ『私を拾ってください』みたいな感じで放置されてたとか」

「そんなデカブツ捨てるような度胸のある飼い主いねぇよ」

「えー、『私を食べて？』って書いて捨てれば結構拾われるんじゃ」

それは確かに拾われるかもしれないが！

「とにかく牛一頭なんて買ってこれるか。なんでそんなのほしいんだ。牛肉ほしいなら明日にしてくれ。特売で１００ｇなんと９８円のが」

「トメ兄、主婦みたい」

うるさいなぁ……スーパー使って生活してれば誰だって覚えるようになるんだよ、そういうことを。

特売のチラシをかかさずチェックしたり……するようになるよね？　ね？　なるって言ってお願い。

「私がほしいのは牛肉じゃないよ。牛乳」

「牛乳？　そんなの毎日買ってきてるじゃないか」

常に一リットルのパックを冷蔵庫に入れていて、なくなったら補充するのがうちの決まりだ。

「それじゃ足りないんだよ。ミルク味のカカ、新発売！　ってくらいに飲みたいの」

「ミルク味って……元々のカカは何味なんだ？」

「危険な味」

……んー、デンジャラス。

「大体、誰が食べるんだ？」

「私を食べたいならトメ兄でもいいよ。舐めてみる？」

「どこを」

「ここ」

「無理！」

さぁ、どこでしょう。

「――要するに、とにかく牛乳飲みまくりたいから手っ取り早く牛を買えと？」

「うん、頑張って元を取るよ」

何年かかるんだよ。

「なんなら牛乳出る乳の部分だけもぎ取ってくるとか」

牛の、乳を？

しぼるんじゃなくて、もぎ取るの？

こう、抉るようにブシャーッと！

「ぉぇ……ちょっと想像した」

「それだと安くなるじゃん。私毎日吸うよ、そのお乳」

出るのは赤い牛乳だけだろうがな。しばらくしたら牙が生えて吸血鬼にでも進化しそうだ。

吸血鬼ＶＳ姉、とかどうだろう。怪物同士でいい映画になりそうだな。

「なんでそんなに牛乳ほしいんだよ」

「大きくなりたいの」

うーん……確かにカカは身長が平均より低めだ。サエちゃんよりちょっと低く、サユカちゃんよりかなり低い。

「牛乳飲めば大きくなるって聞いてさ、胸」

ナンデスト？

カカはどこからともなくトマトを二個取り出して、自分の服の中に入れて胸の辺りに持ってきた。

「こんな感じに。ぼいんぼいん」

「ブッ！」

思わず吹き出した。なんだそのワガママすぎるボディは……もーれつ！

「あのぅ、カカさんや。なぜにそのクソガキと呼べる年齢で胸なんて気にしてやがるんでしょうか」

「胸があればなんでもできるって先生が言ってた。ぼいんぼいん」

ぼいんぼいん言うな。

「……や、なんでもってさ、そりゃある意味なんでもできるかも知れないが……カカはその胸で何がしたいんだ」

「や、特には」

「特にやることないのになんでほしいんだ」

「いざというとき使うためにとっておこうかと」

いざというとき？

胸を使う？　てことは好きな人を口説くときかな。

カカの好きな人はサエちゃんだから、サエちゃんを胸で……

「……」

や、ダメだろこれ以上の想像は。

「カカ。まぁ牛乳を飲むのはいい。身体にいいから。でも飲みすぎるのはいけない」

「そなの？　飲めば飲むほど胸が出るのかと」

「それだと胸じゃなくて腹が出る。そうするとなんにもできなくなるぞ」

「こんな感じ？　ぶよんぶよん」

胸にあったトマトを下へスライド。

「ブッ！！」

また吹き出してしまった。

とにかく、太ると言ったらカカはあっさりと引き下がってくれた。

しかし、胸かぁ。カカも女の子だし、いずれは本気で悩んだりするのかなぁ。

特に根拠はないし、なんとなくだが……

カカは大きくなっても巨乳にはならなさそうだな、と思った。

や、ほんとなんとなく。

別にそれが僕の好みってわけじゃないよ？

## カカの天下１３６「おまえは腐ったトマトだ」

こんばんは、トメです。

「ただいまー」

仕事も終わって疲れて帰ってきた僕は、そう言いながら我が家の扉を開けました。

「ふふふ、カカちゃん。あなたのそのとろけるチーズのような唇をもっと」

「お、お姉、私にもお姉の賞味期限の切れたタラコみたいな唇を――」

「いってきまーす」

とりあえず扉を閉めました。

「さー、みんなでー考えよー」

一人しかいないのはわかってるけど、そんな独り言を呟く僕。

なに、いまの三流昼ドラ。

玄関で妹のカカと姉が……抱き合ってなんかやってた。

……も、もう一回見てみよう。

僕は玄関の扉を開けた。

「……ただいまー」

「カカちゃん、ぼくにはもう君しかいないんだ！　そう、たまごも黄身しかいらないんだ個人的に！」

「お姉、いけないわ。私には、私には兄が！　たまごが安売りのときに大はしゃぎする兄がいるの！」

「そんなの関係ないよ！　ぼくにその焼肉のようにおいしい身体を味あわせておくれ！」

「お姉……私にも、失敗したアルデンテみたいなあなたの身体を――」

「おじゃましましたー」

閉めました。

なに、今の別タイプの昼ドラ。

というかなんでいちいち食べ物が入るんだろう。そしていちいち表現がひどいなカカ。失敗したアルデンテってどんなだ。

……もう一度、開けたらどうなるんだろ。

ちょっとわくわくしながら、僕は玄関のドアをもう一度開けてみた。

「……ただいま」

「いやあああああぁぁぁぁ！！　お、お姉の頭がトマトみたいにブチャッて潰れてる！」

グロッ！　表現がグロ！！

ってぇ、そんなことより。

いまだに叫び続けるカカを無視して、僕は靴を抜いでズカズカと血みどろで倒れている姉に近づく。

「は、犯人はきゅうり――」

「潰れたトマトが喋るな」

げし、とそのトマト頭をさらに潰す僕の黄金の左足。

そう、今日の帰り道に犬のアレを踏んで僕の左足は黄金に……や、そんなことはどうでもいい。

「なんだこの赤いのは！」

玄関を汚しまくっている姉の血、にみせかけた赤い液体。

「と、トマトソース」

「この腐ったトマトめ！」

どこかの熱血先生は「おまえ達は腐ったみかんじゃない」とか言

ってたのをなんとなく思い出しながら、紛れもなく腐ったトマト頭を踏みつける。

「い、いたっ！　ごめん、掃除するからそんな怒んないでよぅ」

傍若無人な姉も自分が本気で悪いと思っているときは聞き訳がいい。滅多に自分が悪いと思わないのが難点だが。

「さすが潔癖症トメ兄、家の汚れのことに関しては鬼になるね。よっ、我が家のヨゴレ鬼」

「変な意味で汚れてるみたいなあだ名つけるな。それで、さっきからやってたこれは何のつもりだったんだ？」

踏みつけていたトマト姉が僕の足から逃れ、むくりと起き上がる。

「いやさ、昼ドラってどのパターンが一番面白いかなーって検証を」

「……最後のはなんだ」

「殺人事件」

……まぁ、たしかに昼にやってる番組系ではよくあるな。

「人生相談系とかもやってみたかったんだけど、その前にトメ兄に怒られちゃったし」

「でさ、弟よ。どれが一番面白かった？」

こいつらは……いったい何をやってるかと思えば。

「賞味期限のきれたタラコ唇かな」

「ふむ、そうか。あたしとしては焼肉のような身体っていうのもいい感じだったと思うんだけど」

「あれ……兄姉、昼ドラと関係ないとこ見てるけど」

「や、そっちのがおもしろかったし」

「演じててあたしもそう思ったし」

正直、人生相談系というのも見てみたかった。

「ま、それはそれとして……これ片付けろよ」

「えー……人生相談編見せてあげるから許してよー！」

「掃除してから見せろ」

文句を言う二人を背中に、僕は自分の部屋に向かう。

ほんと暇なんだなー、こいつら。

面白いからいいけど。

家が汚れるのはよくないけど。

## カカの天下137「ワンモアセッ！」

「キャンプにいこう！」

雨うざったいなーと思ってたところのカカです。

外に出れなくて家でしょんぼりしてたところに姉のこの言葉。なに言ってんだろこの変な人って感じです。

「む、なにさカカちゃん。そのポイ捨てされたタバコを見るような目は」

「ほんと、誰が捨てたんだろうねこの姉」

私と同じようにげんなりしてるトメ兄は雑誌から顔も上げずに答えます。

「僕らの親だろ」

「まったく、ちゃんと産業廃棄物の日に捨てたのかな」

「……あれー？　なんだか今日は一段とカカちゃんが冷たいよー。しかも前にも聞いたようなやりとりだよー？」

「だって外出れないのにキャンプ行こうとか言うから」

「ああ、キャンプって言っても家でできるやつだよ」

はぇ？　家でできる？

「これこれ。ほら、最近流行ってるビリーズ・ブートキャンプってやつ」

それなら私も聞いたことある。たしか効果抜群と噂のエクササイズビデオ、らしい。見たことはないけど。

「へー、それが噂の。買ったのか？」

「サカイちゃんちから盗んできた」

「うおい。いいんかそれ」

「大丈夫、あの人は二十分で飽きたらしいから。いいからやってみよっ！」

「僕、別に太ってないからいいんだけど」

「私も別に」

「いいからいいから。経験だよ」

というわけで。私たち三人はテレビを前にして、筋肉ムキムキの黒人、ビリーさんの動きを真似てみたのだけど……

基本編を始めて十分後、ストレッチの段階で汗だくだったトメ兄はスクワットしていて脚がつり、ダウン。

私は途中いくつかできないのもあったけど、なんとか最後までやりとおした。と言っても腹筋系はほとんどできなかったけどね。

「カカちゃん、その歳でそんだけできればすごいよー」

そして一人、全部カンペキにこなしてさらに次の応用編へすすもうとしているバケモノな姉。

「姉は、元気だね……はぁ、はぁ」

「伊達に日頃暴れてないよ」

「僕さ、ワンモアセッ！　っていうのが耳から離れなくなったんだけど」

脚がつってから動きを止めて、私らの様子をぼーっと見ていたトメ兄は情けないと思う。

「ああ、ワンモアセット、『もう一セット！』ってやつね。あたしはサイクル！　サイクル！　って『回せ！』って言ってるのが耳に残ったよ」

「はぁ……はぁ……とにかく、私もう疲れた」

次の日、身体を筋肉痛で軋ませながらなんとか登校。

「身体……痛い……」

「おい、カカ。大丈夫か？」

心配するよりは呆れたようなテンカ先生の視線が痛い……

「大丈夫……です」

「え、なんだって？」

聞こえなかったらしいテンカ先生が聞き返してきたそのとき、私の中で何かが弾けた。

「もう一回言ってくれ」

「ワンモアセッ！」

「うぉう！！　びっくりした」

……は！？　なんか思わず叫んでしまった！　『もう一回』っていう言葉に反応して……

「す、すいません……授業、続けてください」

「そ、そうか？　じゃ……サエ、次から読んでくれ」

「はい。そこで庄吉は言いました。回せ」

「サイクル！！」

「ひゃう！？」

今度は『回せ』という単語に反応して思わず叫んでしまった……

そんな私に驚いてサエちゃんが可愛い声をあげる。

……ほんと可愛かったなぁ、今の。

「……カカ。おまえなぁ」

「すいません、なんか『もう一回』とか『回せ』って言葉に反応しちゃって……文句はビリーさんに言ってください」

「誰だよ」

「テレビの中で何回も回ってる人です」

「わけわからん」

はぁ、とため息をついたテンカ先生は、少しだけ考えてから口を開きました。

「じゃあサエ。『もう一回』な」

「ワンモアセッ！」

「……先生、遊んでるでしょー」

「あはは、鋭いなぁサエは。いやな、なんかカカの言葉が頭の中を妙に『回って』な」

「サイクル！」

「くくく……」

「先生……ほんとにもう、ちゃんと授業してください！　このままだと授業がうまく『回ら』ないから『もう一回』読みますよ」

「サイクルワンモアセッ！」

「先生！　これおもしろいですー」

「だなー」

そんな感じでしばらく遊ばれた。

ちょっと楽しかった。

## カカの天下１３８「七夕ばたばた」

毎度ありがとうございます、トメです。

「七夕だよ！」

そう言いながら張り切っているのはおなじみ、我が妹のカカです。

「たなばただねー」

「たなぼたですねっ！」

いや、張り切ってるのはカカだけじゃなかった。しかも何か言い間違えてるし。

「たなばたでばたばたですねー」

「たなもぼたぼたですねっ！」

「いや、七夕でテンション高いのはわかったけど……なにするの、君ら」

「トメ兄はバカ？　バカ兄？　ばかにー？　略してバーニィ？」

僕のどこがウサギさんか。

「ば、バーニィなトメさん……ぽ」

想像すんなサユカちゃん！

「七夕だよ？　彦星と織姫様を犠牲にして願い事を叶えてもらえる日だよ」

犠牲とか言うなかわいそうに。

「短冊に願い事を書いて、『言うことを聞けー』って送りまくるんだよ」

それどこのストーカーのイヤガラセだよ。

「まぁまぁ、トメお兄さん。とにかくこれにお願い事を書いてくださいな」

そう言ってどこかで買ったらしい短冊を差し出してくるサエちゃん。どうやら三人でまとめて買ったらしい。

「願い事、ねぇ。サエちゃんはなんて書くの？」

「私はまだ迷ってますけど……そうですねぇ。織姫様のような恋がしたいなぁ、とか思いますよね」

彦星と織姫様のお話は悲恋の展開だけど、そのはかなさと一途な恋物語が日本人には大人気だ。普通の女の子ならそう思うのも当然だろう。

「サエちゃん織姫様？　なら……なら私が彦星になるっ！」

そして、こう思わないのが当然だろう、普通の女の子は。

「えーっと、『彦星、変われ』っと」

しかもほんとに書いてるし。

「まぁ……僕も彦星みたいに織姫様のような好きな人できたらいいなぁ、とか思うけど」

「と、トメさんは織姫様が……じゃあ私が織姫様になる！！」

へ、なぜに？

「えっと……『織姫、降りろ』と」

降りるってなんすか！？

「あはは、みんな大それた願い事ばかりだねー」

そして暴走する二人を呑気に見守っているサエちゃん……いい位置だ。

「トメお兄さんもどうですか？　『神様、そこどけ』とか書いてみたら」

「い、いや。僕にはそんな度胸ないよ……」

姉あたりなら平気で書きそうだが。

「そうだなぁ……これ、どうしても書かなきゃダメか？」

この歳になるとこういうのは正直、恥ずかしい。

「ダメだよ。ちゃんと書かないと」

「そそそうですよ！　一緒に彦星と織姫様をやりましょう！」

「サユカちゃん、一応それ微妙にバッドエンドだから、やらないほうが」

うーん……そうは言ってもなぁ。

「ところでさっきから気になってたんだけど。どうして織姫様は様づけなのに彦星は呼び捨てなんだ？」

「「「男だから」」」

女って……

そして、姉がどこからか持ってきた小さな笹にみんなの願い事が吊るされた。

次の日、姉が責任をもって彦星と織姫様に届けるそうだ。

……いろいろと疑問が浮かぶが、細かいことは気にしないでおこう。

しかし……これを吊るすのは恥ずかしいなぁ。

そう思いながら数々の欲望が吊るされた笹を眺めていると……自

分と同じ願いごとが書かれた短冊を見つけた。

……なんだ、先約がいるじゃん。

誰が書いたかわからないけど、恥ずかしいこと書くなぁ。人のことは言えないが。

ま、ともかく。それならこれは吊るさなくても願いは叶うよな。

「トメ兄！　はやく月見だんご食べようよ」

「おう、今いく。ところで月見だんごって七夕に食べるもんだっけ？」

僕は短冊をポケットにしまって、夜なのに賑やかなやつらの元へ戻った。

月明かりの影に揺れる、一枚の短冊。

『ずっと一緒』という文字が、願いよ届けと言うかのように星の河を眺めていた。

## カカの天下１３９「命令しましょ、そうしましょ」

「ざ、命令ゲーム！」

こんにちは、サエです。お元気ですかー？

私は相も変わらずカカちゃんちで、サユカちゃんも一緒に三人で遊んでます。

「さてさて、みんな書けたかな」

「うん、書けたよー」

「おっけーよっ」

私達が好き勝手に書いた紙を三つの箱に入れて、かき混ぜます。

それぞれの箱には『誰が』『誰に』『何をする』と書いてあり、私たち三人がその箱に入っている紙を引いて文を繋げて命令文を作ろうという遊びです。

よほどのことがない限りその命令には絶対服従。自分が書いた紙以外には何が書かれたのかまったくわからない、なんとも危険なゲームなのです。

「さぁ始めよう。誰がどれ引く？」

「私は『誰が』ひくねー」

「じゃわたしは『何をする』ねっ。一番おもしろそうだし」

「おっけー。んじゃ私は『誰に』か。サエちゃんからどうぞ」

さぁ、最初のお題は……

「えーと、『カカが』だってー」

「む、いきなりかぁ。じゃ私ね……『トメに』だ」

「あれ、トメお兄さんも入ってるんだね。ゲームに参加してないのに」

「そのほうが面白いでしょ」

サユカちゃんが、とカカちゃんが心の中で付け加えたのを私は見抜いた。

「むぅ、トメさんに何をする気だカカすけ……うりゃ！　えと、『一番傷つきそうなことを言う』って、誰よこんなえげつないこと書いた人」

「それは聞かない約束だよー、それじゃカカちゃん、ゴー！」

「ん、楽勝だね」

そう言ってカカちゃんは立ち上がり、居間でごろごろしているトメお兄さんのほうへ向かっていった。私たちもその後を追う。

「トメ兄」

「ん、なんだよ」

「兄妹の縁を切らせていただきます！」

「……ぅえ」

あ、あのツッコミのトメお兄さんが何も言えずに灰になった！！

「任務完了、もどろ」

真っ白になったまま微動だにしないトメお兄さんを置いていっていいものかサユカちゃんと目を合わせるが、いい案が浮かばず仕方なくカカちゃんを追う。

「カカちゃん、トメお兄さん大丈夫かな。なんかつついたら粉々に崩れちゃいそうなくらいショック受けてたよ？」

「影なんかなくなってたし身体も透明化してたわよっ」

「トメ兄は私が大好きだからね。まぁ、あとでちゃんと本当のこと言うから大丈夫だよ」

本当のこと……どんなことを言うのかちょっと気になる。

「じゃ、次いこー」

そして引かれた命令は……

『カカが』『トメ兄に』『コップに入れた水をぶっかける』

「だから誰よこんな攻撃的な命令書いたの！？」

「あの状態のトメお兄さんさんに水をかけたら……」

「灰になってたけど水で固まって崩れにくくなるかもね。やってくる」

カカちゃんはそう言うと居間に向かった。

すぐに戻ってきた。

「トメ兄、世界の終わりみたいな顔してた」

大事な妹に縁を切られたうえに水かけられれば、そんな顔もするだろうなー……

「じゃ、次をば」

『カカが』『トメに』『飛びひざげりをくらわす』

「なんでトメさんにばかりこんなひどいことを！　しかもまたこんな野蛮な！」

ごめん、それ書いたの私です……

「あちょー！！」

「カカすけ行動はやっ！！」

「ただいま。トメ兄、崩れちゃった」

「ええ!?　く、崩れたって……」

「見にいっていいかなー」

「いや、その前に次の命令をしようサエちゃん」

「カカちゃん……とどめをさす気だね」

「え、いや。別に。昨日トメ兄がわたしのようかん食べたからって復讐してるとか、そういうんじゃないよ?」

なるほど、そういうことかぁ。それにしてもカカちゃんって和風だなぁ。

「さて、とどめ……コホン。次の命令を……」

『サエが』『トメに』『必殺技をくらわす』

「……あれ」

「とどめ、私?」

「サエすけ……」

さて、困ったことになった。

「サエちゃん、ゴー!」

「サエすけ、ほどほどに……」

とりあえず居間に来て見ると、そこには死んだカエルみたいなトメお兄さんが。

必殺技、かぁ。私の必殺技ってなんだろう。

「あ」

ふと思いついた。早速試してみよう。

私は溶けかけてるトメお兄さんに近づいて……

「トメお兄さん、私が妹になってあげるから元気だして」

その頬にキスをした。

その瞬間、いろいろなことが起こった。

トメお兄さんは一気に元気になって、カカちゃんはそのトメお兄さんに飛び掛って、サユカちゃんは私に飛び掛ってきた。

これぞ私の必殺技。

大、混、乱♪

サユカちゃんの攻撃を避けながら、横目でカカちゃんを見て疑問に思う。

なんでカカちゃんって私とトメお兄さんが仲良くすると怒るんだ

ろう。しかもトメお兄さんに。

ま、おもしろいからどうでもいいやー。

――そして、今日も今日とてカカの愛は気づかれないのであった。

## カカの天下１４０「かぐわっすぃ」

こんばんは、トメです……はぁ。

昨日サエちゃんに手を出した責任を取れ！　とのことで、今日はセイジ食堂で妹のカカとその仲間たち三人に奢ることになってしまいました。

や、どちらかというと手を出されたのは僕のほうなんだけど……

「ああ、奢ってもらわないと私もうお嫁にいけません……」

とか言って泣き崩れるフリをするサエちゃんに負けた。ほんっと手強くなったなぁサエちゃん。

そんなわけで僕らはいま、セイジ食堂に座ってメニューを見ている。

夕方ということもあってそれなりにお客さんはいるものの、『あやしい定食』という妙なものをおすすめしているこのお店はあまり繁盛しているようには見えない。

「きまったか？」

ぶっきらぼうに聞いてきたのは食堂の店長、ゲンゾウさん。相変わらずしぶい、けど他のお客さんもいるのに料理しなくていいのだろうか。

厨房のほうを見てみると、ばたばたと何人か動いているのがちら

りと見える。食堂の店員はほかにもいるようだけど、店長以外の顔を見たことがないのが不思議だ。

「あ、私はから揚げ定食でお願いしまーす」

「私もサエちゃんと一緒でから揚げ定食。あ、でも私のは揚げ盛りで」

「あいよ」

「……揚げ盛りって、なんだ？」

「から揚げを大盛りでって意味で言ってみた」

しかしカカの言葉にゲンゾウさんは首を横に振る。

「いや、もりもり揚げるという意味にとった」

「じゃ、それで」

も、もりもり揚げる？

「もりっと揚げる、でもいいよ」

「いや、今日はもりもりな気分なんだ」

……か、カカとゲンゾウさんの会話についていけない。

「サユカちゃんはどうする？」

同じくついていけないのか、目を白黒させていたサユカちゃんに声をかけてみる。

ちなみにサエちゃんはわかっているのかいないのか、常にニコニコしていた。

「そ、そうですねっ。じゃあ新メニューの『かぐわしい定食』をっ」

相変わらず僕が話しかけるとなぜか声がうわずるなぁ。いや、それは置いといて。

かぐわしい、定食？

なに、その『あやしい定食』よりあやしい定食。

「ゲンゾウさん、なんですか『かぐわしい定食』って」

「なにがかぐわしいんですかー？」

ゲンゾウさんは渋い顔をゆがめ、『何言ってるんだこのダァホは』って感じのムカつく視線を僕にくれた。　あの、サエちゃんも聞いたのになんで僕だけ。

「そりゃ、定食がかぐわしいんだよ」

「そ、それはそうだろうけど」

「ええい、男が細かいことをグチグチと。この嬢ちゃんを見習え！人間は挑戦することをやめたら死んだも同然。たとえ先が見えな

くても心の琴線に触れたら突撃するのが粋ってもんなのさっ！」

無駄にドスの効いた声で賞賛されたサユカちゃんは、目を点にしてなにか言いたげにしている。

「じゃあな、少し待ってろ」

それに気づかず、言うだけ言ってゲンゾウさんは厨房へと戻っていった。

「……絶対サユカちゃん、テンパって何も考えずにメニュー選んだよね」

「普通なら選ばないよね、あんな変なメニュー」

「あ、あははっ……うん、言ってから後悔した」

でもあんなこと言われた手前、変更なんかできないしなぁ。

「ところでさ、僕は何も注文していないんだけど――」

「へい、お待ち」

「「「「はやっ！！！」」」」

僕ら四人の声が思わずハモった。

そしてとりあえず僕の注文は置いといて、僕ら四人はその『かぐわしい定食』に視線を注いだ。

「か、かぐわしいね」

「この上もなくかぐわしい……うぅ、ちょっと」

「この匂い、僕ダメだわ……」

カカ、サエちゃん、僕はそのあんまりな匂いに顔をゆがめた。

……ん？　でもこの匂い、どこかで嗅いだような……

「あれ、サユカちゃん、どうしたの？」

「サユカン？　なんか顔がゆでだこよ？　たこよ？　なんかたこ焼き食べたくなっちゃったよ」

サユカちゃんの様子がおかしい。顔を赤くして、目がとろんとして……

その目がこっちを向いた。

なぜかな。

なんかほら、あれだ。

肉食獣に捕捉された気分になったんだけど……

「トメさん……」

「は、はい？」

「ちゅーして」

「はっ！？」

「ちゅー！」

飛び掛ってきたサユカちゃん！

迫る唇！

僕はとっさにテーブルの上にあったマヨネーズをその口に突っ込む！

ズボッ！

ちゅー、ちゅー、チュー！

「ふぅ……ゲンゾウさん。この匂い、ワインでしょ」

「肉にぶっかけたんだがな。子供にゃきつかったか？」

「どれだけかけたんですか？」

「一本」

「失せろ」

やることが姉並だったのでそれなりのツッコミをしてしまった。

しかしゲンゾウさんは本当に悪いと思ったらしく、素直に謝ってくれた。

「まったく、ひどいことするなぁ」

「トメ兄のしたことも、けっこう」

「ひどい、ですよ」

「そうか？」

「まよちゅー」

それがサユカちゃんの（その日の）最後の言葉となった。

次の日。酔いつぶれ状態から回復しきってないサユカちゃんは…

…

「うぅ……頭痛い」

「おはよ、マヨ中」

「薬中みたいな言い方やめろカカすけ！」

そのあとも頭痛に苦しみ、イライラしてて、薬中に見えなくもない一日を送ったのでした。

## カカの天下１４１「犯罪者に返り討ち」

「ただいまー」

「おー、おかえりー」

お晩どすえ、トメです。

居間でごろごろ雑誌を読んでいると、カカが帰ってきました。学校からまっすぐ帰ってきたにしては遅めの時刻。たぶん寄り道でもしてきたのでしょう。

と、カカが帰ってきた直後にピンポーンという音が。

「誰か来たみたいだね」

「ん、出るよ。おまえは部屋行ってな」

玄関で靴を脱いだばかりだったカカとすれ違う。

ん？　今なんか変なものが見えたような。

ピンポーン！

「はいはい」

とりあえずそれは置いといて玄関に出る。

「どちら様ですかーって、あらシュー君。お久しぶり」

「どうも！」

ビシッと敬礼を決めたその人は、ご近所の平和を守っているつもりの警官、シュー君だ。

「何か用ですか？」

「ええ、実はですね、お宅に」

「なったんですか？」

「……は？」

「オタクになったんですか？　それなら近所のサカイさんととても仲良くできると」

「違います！　お宅に窃盗の嫌疑がかけられてるんです！」

むぅ、冗談にそんなムキにならなくても。

って、窃盗？

「犯人は姉です」

「……言い切りますね」

「だってそういう生物ですし」

「それはそうですが」

あんたも迷いないじゃん。

「今回は違います。実はお宅のカカちゃんが」

「カカもオタクになったのか」

「そのネタはそれくらいで……」

「呼んだ？」

シュー君と遊んでいると、廊下からカカが顔を出した。まだ部屋に戻っていなかったらしく、今すれ違った格好のままだ。

その、肩に木刀を担いだ格好のまま。

「ときに妹。その木刀はなに？」

「武器」

「……なんのさ」

「ケン――」

「まぁいいや！」

カ、と警官の前で言わせるのもなんだったので遮っておく。

「それで……その木刀の先にぶら下がってるのは？」

カカは気づいていなかったらしく、小首を傾げて後ろ、肩に担いだ木刀の先を見る。

そこにぶら下がっていたのは……

「ぶ、ブラウニー？」

「誰だよ！？　そうじゃなくて、それブラジャーじゃんか！！」

そう、木刀の先にあるのは紛れもなく、それなりにカップがワンダホーなブラジャー！

しかも黒い！　黒いとね、なんかこう……ね！？

「ええ、実はデパートとか、通行人の皆様から、値札のついたブラジャーを堂々と盗んでいったツワモノがいると通報がありまして……」

「あー、デパートで歩いてたら引っかかっちゃったんだね。気づかなかった」

誰か教えてやれよ！

「きっと周りの人も教えづらかったんでしょうね……」

まぁ、知らない子供に「お嬢ちゃん、ブラジャー下がってるよ？」なんて声かける勇気がある人はなかなかいないか……

「ともかく、それは僕がデパートに返しておきますんで」

そう言ってカカから受け取ったブラジャーを、シュー君はポケットへ……

「ねぇシュー。それやばくない？」

「え、なにがかな、カカちゃん」

「警官がポケットにブラジャーいれるの」

……言われてみれば、今どきの犯罪のにおいが。

「じゃ、じゃあどうしろと」

困惑するシュー君に、にやりと笑うカカ。

「つけてけ」

「えぇ！？」

「つけろ」

「いや、それは……」

「つけないと下着ドロボウとして通報するぞ！！」

「はい！！」

よわいなー警官。

「じゃ、女装趣味の変態として通報を」

「そんなぁ！！」

そんな感じでしばらくカカのおもちゃになったあと、シュー君は帰っていった。

ビニール袋に入れるという案を僕が教えてあげたおかげだ。

……あの姉妹におもちゃにされるなんて、難儀な人だなぁ。

ビニール袋をすぐに提案しないで見物してた僕も同罪か。

## カカの天下１４２「サユカＶＳテンカ先生？」

「あれ、テンカ先生」

「おぅ、カカじゃんか」

どうも、仰るとおりのカカです。

今日はみんなでデパートへ買い物に来てます。別にほしいものがあるわけじゃないけどね。

そして男らしい女教師のテンカ先生とばったりです。

「あ、テンカ先生こんにちはー」

「こ、こんにちわっ」

「いつもの三人組か。仲いいな、おまえら」

サユカンは別クラスだから担任じゃないけど、私たちは学校でもしょっちゅう一緒にいるのでセットで覚えられてる。

「しかしな、子供だけでこんなところにいるのは不良だぞ、って脅したらなんかおごってくれるか？」

相変わらずすごい先生だ。

「先生、お金ないんですかー？」

「……うるせぇなサエ。教師の給料なめんな」

「ど、どれくらいなんですかっ？」

「サユカ、聞きたいか？」

般若もびっくりして逆立ちして回転するような笑顔になったテンカ先生にサユカンはたじたじで首を横にブンブンだ。

「そうそう、テンカ先生。今日の私らには一応頼りない保護者いますよ？」

「んぁ？」

「私の兄です。ほらアレ」

ちょうどそのとき、お金を下ろしてきたトメ兄が戻ってきた。

「ただいま、遅くなった……って、そちらの方は？」

「どうも初めまして、私はカカちゃんの担任のテンカと申します。カカちゃんってほんと可愛いですよねホホホ」

「きしょ」

「こわっ」

「誰この人ー？」

本音を呟いた私たちの頭をポンポンポーンと叩く先生。アゥチ。

「うるせぇぞてめぇら！　大人の世界ってのはな、第一印象さえよければこっちのもんなんだよ！！」

「あの、僕の中の第一印象はわりかしスゴイことになってますけどいいんでしょうか……」

いろいろな意味でキケンっぽい変身をとげたテンカ先生にトメ兄も混乱中のご様子。

「いえ、考えてみたらこんなカカのお兄さんが立派な人間なわけないし、別にネコかぶらなくてもいいかなーと」

ぅおいコラ。こんなカカとはなんじゃい。

「それを言われると返す言葉もない」

返せよ！

「それで、先生は買い物ですか？」

「それ以外にここでどうしろと」

「や、社交辞令で聞いただけですよ、面倒だけど」

「おまえ、なかなか話せるなぁ」

「いやぁ、遠慮のない人間が周りに多いもんで」

なんかすごい勢いで打ち解けてる……

と、くれば……

私は横を見た。

サユカンの目が燃えていた。大火事だ！　消防車はまだか！？

「あ、僕はトメっていいます。どうぞよろしく」

「オレはテンカだ……ん、トメ？」

ふと何か思い出したかのように首をぐるりんと回したテンカ先生の視線は……サユカンの目にとまった。

消防車もお手上げなほど燃えてまくっていたサユカンの瞳が少し揺らぐ。

つかつかつか、とサユカンに歩み寄ったテンカ先生は、サッとサユカンから携帯をスッた。その鮮やかな手つきは素晴らしき反面教師。

そしてサユカンが文句を言う前に携帯の待ちうけ画面を勝手に見て、にやりと笑った。

サユカンの待ちうけって、たしかこないだ盗撮したトメ兄のステキショットだったはず……

そういやこないだテンカ先生にサユカンの恋事情をちょっと説明したことがあったっけ。

「トメ！　今度、飲もうぜっ！」

「おう、いいぞ」

「にゃあああああああああああああ！！！？」

あからさまに仲良くしようと見せるテンカ先生にサユカンが断末魔の叫びをあげる。なぜかネコっぽい。

あぁ哀れ。サユカンは先生にも遊ばれる運命なんだなぁ。

それにしてもトメ兄とテンカ先生って、ほんと仲良くなりそうな感じだなぁ。

トメ兄もなんか嬉しそうだし。

……嬉しそうだし。

……笑ってるし。

……なんかムカつくし。

蹴ってやれ。

げしっ！

「いだっ！？　なにすんだカカ！」

「別に」

意味は無いよーだ。

## カカの天下１４３「のりノリ」

おはようございます、寝起きトメです。

今日はなんだか胸が苦しくて目が覚めました。

目を開けてみると胸の上に妹のカカが乗っていました。

そら苦しいはずだこのやろう。

「なんだ、おまえは」

「のりカカ」

「……は？」

「トメ兄に乗っているカカ。略してのりカカ」

「なんだその、のりとおかかの融合品でご飯に合いそうな感じのカカは」

んむ、寝起きでいまいちよくわからんツッコミしてしまった。

「ご飯と一緒に私を食べるの？　つまり私はおかず」

「その言葉はなんか危ないからやめなさい」

何がどう危ないかは言わないが。

「それで、なんでのりカカなんだおまえは」

変な質問になったのは寝起きのせいだ。そうに決まってる。

「なんでって、のりだから」

そう言って僕の胸からぱっと飛び下りるカカ。

「早く、朝御飯食べよ」

「ん、ああ」

カカはなぜか律儀に部屋の前で待っている。仕方なしに身体を起こしながらぼんやりと思った。

「……のりだから？　のりたかったからじゃなくて？」

まぁいいや。細かいこと気にしてたらこの妹と付き合ってられない。

そう、細かいことを気にしてたらダメ、なのだが……なんかおかしい。

「トメ兄、のりご飯おいしい？」

「ん……ああ」

朝飯は『ごはんですよ』でのりごはん。だから僕に乗ってたのか

ぁ、などというのは置いといて。

「……なんでわざわざ僕の隣で食べる」

そう、いつもは向かい側で食べるカカが今日に限って隣で食べているのだ。正直、狭い。

「のりだから」

「のりご飯だと隣で食べるのか」

「のりってくっつくじゃん」

「……ああ、接着剤ののりね」

なるほど、だから僕にくっついてるのか。

あれ、理由になってない？　まぁ、いいか。

やっぱなんかおかしい。

今日は休みなのでごろごろしながら雑誌を読んでいたのだが、

「なぁ、なんで僕を椅子にして本を読んでるんだ」

「のりって、椅子に塗ってあるよね」

「ツヤを出すのりか？　それはそうだが」

「だから」

「理由わけわからん！」

買い物に行くと、

「私も行く」

「ほしいものでもあるのか？」

「や、のりがほしくて」

夕飯の準備をしていると、

「……鍋を覗き込んでものりは入ってないぞ」

「じゃあ入れる」

「入れるなっ！」

そして寝ようとベッドに入ると、

「……なんでいる」

「や、ノリで」

……勢いとかの意味のノリか？

「何を企んでる？」

今日はやたらとカカが引っ付いてきた。こういうときはカカが何かよからぬことを考えていることが多い。だから警戒してたんだけど……ここまで何もなかった。

どうしたというのだろう。それともここで何か仕掛けてくるか。

「や、特に理由はないんだけど」

「ないんだけど？」

「一緒に寝ようかと」

……は？

……あー。

……ははぁ。

これはもしかして……甘えてるのか？

つん、とした表情で目も合わさずに、そのくせしっかりとベッドを占領しているネコみたいな妹に、僕は思わず苦笑した。

「ま、そういうときもあるよな、たまには」

なんとも久々なことではあるが。

「よしよし、お兄さんが寝る前にお話をしてやろう」

「……ねぇトメ兄、なんかバカにしてない？」

「昔々、王子様とお姫様がいました。王子様の名前はカカ、王女様の名前はサエといって」

「トメという王様を殺して国を乗っ取り、幸せに暮らしましたとさ」

「展開はやっ！？」

そんな風にじゃれあいながら、久々に僕らは一緒に寝た。

そういや今日一日、ずっとカカと二人だったけど……こういうのも久々だったな。

ま、たまにはこういうのも悪くない。

# カカの天下１４４「健全にゃー」

こんにちは、トメです。

今日は仕事も買い物も終わり、夕飯の支度を始めるまでのんびり居間でお茶なんぞをすすっています。

「ただいまにゃー」

「おかえりー」

例によってサエちゃんやサユカちゃんと遊んできたカカが帰ってきたようだ。

最近のカカは昔に比べてずいぶんとおとなしくなった。いや、性格自体は明るくなった感じがするが、突拍子もないことをする率が少なくなった気がする。

もちろん今でも変な妹には変わりないけど、サエちゃんが友達になってからだんだんとやることがソフトになってきた気がする。騒がしくはなったが、変な性格もいい方向に変わってきたみたいだ。

僕はそんなことをしみじみ思いながら、帰ってきたカカを出迎えた。

「なぁ、カカ」

「にゃ？」

「なんでネコの耳が頭から生えてるんだ？」

「サエちゃんが似合うって、くれたにゃ」

「……その格好のまま、外を歩いてきたのか」

やっぱ変だこいつ。

「うん、そだにゃ。あ、何度か近所の人に『カカちゃん、それ、なぁに』って聞かれたけど、サエちゃんがくれたからって理由は恥ずかしかったから『トメ兄の趣味』って言ってごまかしといたからにゃ」

「ちょと待てそれじゃあ僕のご近所の評価はどうなった！？」

妹にネコ耳をつけさせる変態兄貴……まずい、まずすぎる！！

「じゃ、私は着替えてくるにゃ」

「ちょと待てこらぁ！！」

怒りのままに思わずカカの制服の袖を引っ張ったそのとき、ピンポーンという音が。

「けほっ」

「……話があるから、ちょっと待ってろ」

ちょっと強く引っ張りすぎたか。反省しつつ玄関に出てみると、そこにはご近所の奥様方が……

「あの、トメさん？　ちょっとお聞きしたいのですけど」

「は、はい？　なんでしょうか」

皆さんの生ゴミを見るような視線が辛い……

「変な噂を聞いたんですけど……お宅のカカちゃんに、その変なこととか、してませんよね？　あ、疑ってるわけじゃないんですけど！」

疑ってないならその腐った目はやめてほしいのですが。

「そりゃもちろん変なことはしてませんよ！　僕はいたって健全な」

と、そのとき。

「トメ兄」

僕が遅いので気になったのか、後ろに現れたカカはこんなことを言った。

「おしおき、まだかにゃ？」

さっき僕が引っ張ったせいで着崩れた制服のままで。

あぁ、神様よ。

なんて間が悪いんだブッコロスゾ。

「健全な……なんですかトメさん」

「健全な『ロリコン』ですか？」

「健全な『おしおき』ですか？」

「健全な『制服』ですか？」

「健全な『妹』ですか？」

「健全な『ネコ耳』ですか？」

「健全な『にゃ』ですか？」

「健全な『ヘンタイ』ですか？」

このおばちゃん達こわいよママン！

なんで壊れたカセットテープみたいな寒気のする声で合唱するの!?

不健全なキーワードの嵐に僕が埋め尽くされていく……

前言撤回。

やっぱカカのトラブルメーカーぶりは変わらない。

見た目は変わってもレベルは一緒。危険値は常にＭＡＸになる可能性大なのだ。

……とりあえず、このご近所の方々の誤解を解かねば。

うぅ、この人間のクズ以下を見るような視線に、耐えられそうにないんだけど。

「がんばるにゃ、トメ兄」

「そだにゃ……このあとのおまえの説教を楽しみにがんばるにゃ」

「にゃんですとー」

ご近所の奥様は恐ろしい。

え、この誤解を解くのにかかった時間は何時間か？

ＨＡＨＡＨＡ！

２０日かかりましたがなにか？

**カカの天下１４５「番長イェイ！」**

もぐもぐカカです。ただいま給食中です。

「なんでサユカンもここにいるの？」

「いちゃ悪いのかっ」

「や、だって別クラスだし」

「……テンカ先生が、いいって言うからさ」

もじもじしてるサユカンは可愛くていいんだけど……いいのかな？

ちなみに私たちはそこらへんの机をくっつけて三人で食べている。誰の机、とかは気にせず食べたい人と食べるのがうちのクラスのルールだ。

「そんなに私たちを愛してるんだねー」

「というよりは向こうに友達があんまりいないんじゃないの？」

「うっさいわカカすけ！　その通りだ！」

「わ、認めたー」

サユカンは箸をくわえたまま、はぁ、とため息をついた。

「こっちのクラスにいる人のほうがまだ話せる人多いくらいよ。正直、向こうのクラスあんまり好きじゃないし」

「私みたいな可愛い子がいないから？」

「うん」

「……サユカン、そこは否定してくれないとなんか寂しいよぅ」

「よちよち、カカちゃん。私の胸に飛び込んでおいで」

「……ぁ」

「なんで鼻血出してるの？」

サエちゃ、ちょと、想像させないで！

「とにかくさ、君らのクラスほど仲良くないんだよ、うちのクラス」

「仲、いいかな？　んー、たしかにここしばらくはイジメとか見ないなぁ」

「番長さんがいるからねー」

「番長？　誰？」

そんなのいたっけ。

そう思って聞いてみると、サユカンは立ち上がり、ビシッと私を

指差した。

「Ｙｏｕ！」

「Ｍｅ！？」

「Ｙｅｓ！！」

「Ｏｈ！」

「なんで英語なのー？」

や、ノリでつい。ちょと楽しい。

「私って、番長だったの？」

「知らなかったのー？　この小学校じゃね、いじめられそうになったら『カカちゃんに言いつけるぞ』って言えば助かるっていう噂が広がってるんだよー」

なにその怪談のおまじないみたいなの！？

「君さ、イジメにあってる子を助けたりしてたんでしょ？　サエすけも助けたって言うし。それの影響じゃないの」

「んー、そりゃ前の学年ではそんなこともしてたけど、最近はとんとそういうことが……」

ふと、教室の入り口で男子二人が喋ってるのが見えた。

私は食事の手を止め、すっと立ち上がり、その二人の下へ向かう。

私が近づいても気がつかない二人。

その二人の膝裏を蹴った。

唐突な膝かっくんで見事にすっ転ぶ二人。

「な、なにすん――」

文句を言おうとした男子生徒の一人を近くの壁を蹴った音で黙らせる。

「入り口で喋るな。他の人に迷惑でしょ」

「……はい」

まったくもう、最近の若いもんは……

ぶつぶつ言いながら元の席に戻ると、なぜか生暖かい笑顔で迎えられた。

「そういうことしてるから番長とか呼ばれてんのよ、カカすけ」

「カカちゃんがクラスをシめてるから、イジメもなくなって仲良くできるんだよねー」

「んむ……や、気に入らないことは我慢するなっていう姉拳法の教えで」

でも女の子で番長って、格好悪いなぁ、なんか。

「こういうの、やめたほうがいいかな」

「カカちゃん、格好いいよ」

サエちゃんが格好いいって言ってくれた……

「じゃ、ＯＫ！」

「Ｙｅｓ！」

「ＧｏＧｏ！！」

「Ｏｈ！」

「Ｈｏｈ！」

なんとなくさっきの英語のノリで大騒ぎしてたら、テンカ先生がやってきた。

「シャラップ！！！」

「アイ、サー！」

ほんとノリいいなぁこの人も。

## カカの天下１４５「番長イェイ！」（後書き）

Ｏｈ！　とか無駄に言ってみるのも楽しいですよねっ

## カカの天下１４６「ケロケロ合唱」

「ただいまー」

仕事から帰ってきましたトメです。

さて、皆様。

皆様は家に帰ってきて、まずは何をしますか？

普通は靴を脱ぎますね、ええ常識です。

そして家に上がるでしょう、ええ言うまでもないことです。

しかし皆様。

玄関が足の踏み場もないくらいカエルのぬいぐるみで埋め尽くされていたら、皆様はどうしますでしょうか？

僕ですか？

そうですね。

とりあえずそこらのカエル君を適当にけっとばします。

「シュート！」

「いたぁん！！」

げ、なんか思いのほか重い感触が。

なんとそのカエルのぬいぐるみの中に妹のカカがいた。そうとも知らずに蹴ってしまった……

なんとも清々しい気分になってしまったじゃないか！

「うぅ……痛いなぁトメ兄。なにするの」

「なにって、まずおまえが何してるんだよ」

僕が気づかなかったのも無理はない。

カカはカエルのぬいぐるみの中心で、カエルの着ぐるみを着ていたのだから。

「なにって、カエルしてんの。通称カエラー？」

「マヨラーの親戚か」

「そうそう」

なんにでもカエルかけて食べるんか。

「このぬいぐるみ共は？」

「えと、生んだの」

「おまえがか」

「カエルって卵いっぱい産むし」

「……へぇぇ、そうか、カカって卵産むんだぁ、そのお腹にも詰まってるのかぁ」

「お腹が出てるだと!?」

「そんなことは一言も言ってないが」

少し出てると言えなくもないが、まぁ子供だし。

「それで、冗談はこのくらいにして……このカエルグッズは一体なんなんだ?」

「商店街でデンジャーケロリンのキャンペーンしてて」

「どんなキャンペーンだ。つうかデンジャーケロリンてなに」

「商店街のマスコットキャラだよ」

「なぜにデンジャー」

「えとね、よくわかんないけど『はたして君はこのキケンな商店街からカエルことができるか!?』っていうスローガンあったよ」

そんな商店街いきたくねーよ。

「でね、レシート持ってったら千円分で一回くじ引きを引けて、『当たり』を引いたらデンジャーケロリンのぬいぐるみが一個もらえるの。特別賞なら着ぐるみもらえる」

なるほど、僕は全然知らなかったけど、このマスコットを広めようってつもりのキャンペーンなわけだ。

「ん？　じゃ、このぬいぐるみ全部当ててきたのか。てことは……どんだけ買い物したんだよ」

見たところぬいぐるみは十匹以上いるぞ。てことは、一万円以上!?

「や、買い物なんかしてないよ」

「へ？　じゃあこれ、盗んできたのか」

「そんなタチの悪いことしないよ」

「そうだよな、姉じゃあるまいし」

「くじ引きの箱ひっくり返して、『当たり』入ってないじゃんって文句言って全部まきあげてきたんだよ」

「もっとタチ悪いわ！」

「はずれしかないくじ引かせるほうがタチ悪いと思うけど」

それは、そうだけど、なぁ……

「それでね、このぬいぐるみ喋るの。だから皆でトメ兄をお出迎えしようかと」

へぇ、玄関で出迎えってことは「おかえりー」とか言うのかな。

カカは手持ちのぬいぐるみを手に取り、後ろのスイッチを押した。

『か、え、れ』

その妙に渋い声は、ものすごく冷たく僕の胸に突き刺さった。

しかしカカは僕の悲しいトホホ顔に気づかず、次々とぬいぐるみのスイッチを押していく。

『か、え、れ』

『か、え、れ』

カエレカエレとカエルの合唱。

『か、え、れ！　か、え、れ！』

開いてもないコンサートを失敗した気分だ……

「……カカちゃんは、お兄さんが嫌いなのかな？」

「給料日のトメ兄は好きだよ」

「今日、給料日なのにこの仕打ちは……帰れ帰れって」

帰ってきてからそんなこと言われると帰る場所がなくなった気がして素でヘコむんですけど。

「これは『キケンな商店街から無事に帰れますように』って入れた声らしいよ」

「なぜにカエレ」

「カエルと似てるからじゃない？」

「で、なんでその声でお出迎え？」

「おかえりもかえれも似たようなもんでしょ。ダジャレは二文字合ってれば成立するって言うし」

他意がないようで安心した。僕の家はここだよね、うるうる。

「トメ兄、変な顔」

「ゆけ、デンジャーケロリン！」

僕の蹴り飛ばしたケロリンは妹の顔に見事命中した。

さて、片付けるか。ケロケロ。

## カカの天下１４６「ケロケロ合唱」（後書き）

ぬいぐるみのカエルってふさふさでいいですよね。
本物のカエルもぬめぬめしてないで毛を生やせばいいのに（無茶

## カカの天下１４７「ハンカチ合戦」

「今日はどこかよってくー？」

「わたしは特に用事はないけど」

「あ、私は商店街よりたい」

よってけよってけカカです。

今日も今日とてサエちゃんとサユカンと学校帰りの私です。仲良きことはかしましきかな。あれ、なんか違ったっけ。

「カカすけ、何か買いたいもんでもあるの？」

「うん、ハンカチ買いたいの。昨日、ダメにしちゃったから」

「カカちゃんのことだから、間違って食べちゃったんでしょー」

「あはは、カカすけらしいバカだねっ」

「食べたのはトメ兄だよ」

……お二人さん、しばし絶句。ハトが豆鉄砲くらってクルッポー。

「トメお兄さん、いつからツッコミからボケに転職したの？」

「トメさんがやると……そんなことでも可愛く思えるのはなんでだ

ろう……」

そらあんたからすりゃトメ兄関係ならなんでもいいからでしょう。

「いやね、昨日の夕飯どきにさ、台所にぐつぐつ煮だっている鍋があったのね」

トメ兄の主食がハンカチとか思われてもこま……らないけど、まぁ一応説明しておこう。

「それで私、急にあったかいおしぼりが恋しくなって」

「ほんと急だな」

「カカちゃんらしいねー」

「それで、その鍋にハンカチいれればおしぼりになるかと思ったんだけど……それ、お湯じゃなくて料理だったのね。それでハンカチの甘辛煮のできあがり」

それで取り出すのも面倒だったんで放っておいたら、夕飯のときに見事トメ兄が食べてしまったというわけだ。もちろん吐き出したけど。

ちなみに真っ先に私が疑われたけど、姉のせいにしておいたのでOKだぜぃ。

「トメさん……わたしのハンカチも食べてくれるかなぁ」

「サユカちゃんって、トメお兄さんのこととなるとポジティブにも程があるねー」

「ポジティブっていうか、エキサイティングっていうか、恋はもーもーというか。モーモー。牛肉コロッケ食べたいな」

「それを言うなら盲目だ」

「む、この声はテレパシートメ兄!?」

弾かれたように辺り見回す、が、やはりその姿は見つけられない。

「くそぅ……いつか、いつか必ず!」

「トメさん……ふへ」

「ねーねー、カカちゃんもサユカちゃんも変な世界いってないで戻ってきてよー。私さびしー」

と、そんなこんなで商店街の雑貨屋さんについた。

「さて、どんなハンカチがいいかな……そだ。サエちゃんサユカン。私に似合いそうなの選んでみて」

「りょかいっ」

「まかせてー」

そして数分後、二人が持ってきたハンカチは、

「なんで二人とも赤色？」

二人は顔を見合わせて、シュッシュ、とボクシングの真似をしながら同時に言った。

「「血の色」」

「おまえらそこになおれ」

説教中。

終了。

「じゃ、今度はサエちゃんに似合うハンカチ選んでみようか」

そして数分後、私とサユカンが持ってきたハンカチは、

「なんで二人とも黒色なのー？」

私とサユカンは顔を見合わせて、胸をさすりながら同時に言った。

「「サエちゃんの心の色」」

「おまえらそこになおれー♪」

とことん説教中。

やっと終了。

「じゃ、今度はサユカンに似合うハンカチを選んでみようか」

そして数分後、私とサエちゃんが持ってきたハンカチは、

「……なんで二人とも、も、桃色？」

私とサエちゃんは顔を見合わせて、同時に笑った。

「「にへへへへ♪」」

「君ら、そこになおりやがれ」

それはもう説教中。

なにはともあれ終了。

「で、結局何色のハンカチ買ったのさカカすけ」

「無難に白色」

「それがあと何日で赤く染まるか、楽しみだねー」

「や、これ武器じゃないんだけど……」

「それを拳にまいて殴るんじゃないの？」

「……あんたら、私をなんだと思ってるの」

二人は顔を見合わせて、同時に言った。

「「とにかく血の色」」

「とにかくそこになおれ」

もういいだろうってくらい説教中。

いいかげんに本当に終了。

ともあれ、お買い物は楽しいなぁ。

## カカの天下１４７「ハンカチ合戦」（後書き）

ティッシュとハンカチは大人になってからでも、いや、大人だからこそ持ち歩きましょう。意外と役に立ちますよねー。

## カカの天下１４８「ご予定は計画的にトメ」

「おーっすカカすけサエすけ。帰ろう、って何書いてるの」

「おう、サユカン」

「夏休みの予定表だよー」

性懲りも無くカカです。

学校が終わって放課後。私たちは明日までの宿題である夏休みの予定表を仕上げているところでした。円の中に『何時から何時までは何をする』と書き込むよくあるプリントです。

テンカ先生は、

「どうせ誰も守れねーんだから、他の先生ごまかせるような内容なら何でもいいぞ」

なんて言ってたので、その通りにさせてもらっているところだ。

でも先生のその言葉に反発して予定を守ろうとする生徒もいる。もしそれを狙ったんだとしたら、テンカ先生なかなかやるなぁ。

「へー、どんなの書いたのっ、見せろ見せろ」

「む、サユカンのクラスも書いたでしょ。そっちのも見せてよ」

「いいよ別に」

そう言いながら私の書いている予定表を見ようと後ろに回りこんでくるサユカン。あ、顔が近……いやいや、私別に変な趣味じゃナイアルヨ？

「えっと、なになに……？」

サユカンに乗じてサエちゃんも覗き込んでくる。

その内容とは……

朝　６～９時　トメ兄。

９～１２時　サユカン。

昼　１２～１８時　サエちゃん。

夜　１８～１８．１時　お姉。

１８．１～２２時　トメ兄。

こんな感じだ。

「……なんか、これ」

「浮気表みたいだねー」

「あ、そうそう、そんな感じっ。この時間は誰とデート、みたいな風に見えるよね」

「一日に四人も……カカちゃんたら、よくばりさん♪」

「ちがうっ！　面倒だから、『誰と遊ぶか』を簡単に書いただけだよ」

「お姉さんだけすごく短いねー」

「ああ、お姉はいつくるかわかんないから、こんなもんでいいかと。長く遊ぶと疲れるし」

最近、夕食どきになるとおかずを一品だけ盗みにくることが多いんだよね。そのままうちで食べてけばいいのに、スリルがどうとか言って盗んだらすぐ逃げてく。

楽しそうで困る。私もやりたい。

「じゃ、サエすけのはどんな感じ？」

「こんな感じー」

朝　１０～１２時　二度寝の嵐。

昼　１２～１８時　遊びの嵐。

夜　１８～２２時　ご飯の嵐。

「サエすけ、やる気ないでしょ」

「うん♪」

「このダメ人間っぷり、どこかで見たような」

ああ、サカイさんにそっくりなのか。

「だいたいご飯の嵐ってなによ」

「んとねー、思いつきー」

「嵐って言葉だけ聞くと激しそうなのに、その他はとことんポヤヤンとしてるな、君」

「嵐って言っても二度寝と遊びとご飯だしねー。さて、次はサユカンの番だぞよ」

「わたしのは君らのと違って普通よ。ほら」

それは結構細かく書かれていて、何分でご飯を食べて、自由時間は何時間で、さらに勉強時間や散歩時間など……どこもツッコミ所がない、つまらない予定だった。

「サユカちゃん、普通」

「普通だよ、サユカンのくせに」

「普通でわるいかっ」

「「悪いに決まってる」」

「即答!?」

「じゃあ私がおもしろくしてしんぜよう」

私はシュバッと鉛筆を取り出し、サユカンの予定表に書き書き。

トメと、勉強。

トメと、散歩。

トメと、自由時間。

「ちょ、そ、そんな……」

サユカンまっかっか警報発令中。

「べ、勉強に、散歩……や、やだっ、自由時間って自由にナニをするの!?　ぅ、うあああ!」

「おー、いい感じな壊れっぷり」

「サユカちゃん、かわい」

「これでいこう!　カカすけ、今日はトメさんいる!?」

「おー、アタックする気満々だ」

「私の予定もトメお兄さんとか書こうかなー」

そして、次の日の職員室。

テンカ先生サイド。

「あいつら……夏休みの予定ってトメのことばっかじゃねぇか。おもしれぇ、合格！」

でもこれ、他の先生には見せれないよなぁ、サユカのクラスの担任も首傾げてたし。オレが整理担当でよかった。

……ん、ああ。そういえば。

トメと飲むんだっけ。

「くく、またサユカで遊べるな、こりゃ」

そうして、テンカ先生の予定にも『トメ』の文字が加わるのだった。

## カカの天下１４８「ご予定は計画的にトメ」（後書き）

トメ、モテモテ…うらやましや。

## カカの天下１４９「覆面少女けけけ現る」

どうも、トメです。

穏やかな午後。居間で休日をすごしていた僕は、ラジオか何かで鳴らされた音楽が耳に入り、雑誌をめくる手を止めました。

だだっだっだだん！

これ、ターミネーターの音楽？

誰が抹殺（ターミネート）されるんだ？

この流れでいくと、どうせ僕なのだろうが……

「トメさん！　こっちを見ろっ！」

言われたとおりに振り向くと、そこには……覆面少女が妹のカカの首筋におたまを突きつけているという光景が。

「トメ兄、たすけてっ」

なんだ、抹殺（ターミネート）されるのはカカか。

……おたまで？　プロってすげぇな。そんなんでも抹殺できるのか。

おたまで活躍する抹殺屋か……見てみたいなそんな映画。

「い、いいかトメさん！　そ、その……あんまり見ないで恥ずかしい！」

「見ろっつったのはそっちだろが」

弱そうな犯人だなぁ。や、覆面してても正体なんか丸わかりなんだが。

「か、カカすけの命が惜しかったら」

「惜しくない」

「……へ」

「惜しくないからお好きにどうぞ」

「ちょっとトメ兄！？　それどういうこと、私がどうなってもいいの！？」

おたまなんぞでカカがどうにかできるのなら世の中はもっと平和である。ん、間違いない。いいこと言うなぁ僕。

「ちょっと、どうするのよカカすけっ！　段取りと違うじゃないっ」

「仕方ない……じゃあプランBで」

一体なんの遊びなんだか。

お、覆面少女――誰なのかモロわかりだが一応そう言っておく―

―がカカを離して僕のほうにきた。

そしておたまを僕に突きつけて叫んだ。

「わたしの言うことをきけ！　さもなくばこのおたまで！」

「料理でもしてくれるのか？」

「おたまでお料理！　トメさんは何が好きですか！？」

「じっくり煮込んだシチューとか」

「わかりました！　じゃあ今度このおたまでじっくり……じっくり」

お、話を逸らされてることに気づいた。それにしてもすんなり剃れる子だ。おっと漢字を間違った。逸れるだ。剃るってどこを剃るんだどこを。

「じっくり煮込んで殺されたくなかったら言うことを聞きなさい！」

だだっだだん！（ＢＧＭ）

「普通に怖いな、それは」

なんかおたまも凶器に見えてきた。

「だいたいな、人を脅すなら包丁じゃないか、普通」

呆れた僕の声に、覆面少女の後方で自由になっているカカが口を尖らせる。

「それだとトメ兄、本気で怒るじゃん」

「よくわかってるな。えらいえらい」

隣にいたら頭を撫でてやるところだ。

「それで、要求はなんだ？」

「け、けけけけけけけ」

「……カカ。お兄さん本気でこあいですピンチです」

「私もちょっと背筋につららが走った」

それは冷たそうっていうか痛そうだ。

「け、携帯の番号とアドレスを教えてください！」

……あれ。

そういえば教えてなかったっけ。

「つまりこれ、ナンパか」

ナンパと聞いた瞬間、覆面少女の顔が爆発した。

「私が教えてもよかったんだけど、なんかこういうのは直接聞かな

いと意味ないとか言ってさ」

「直接か、これ」

「普通じゃないけど直接だよ」

うまいこと言うなぁ。

さて、それじゃなぜか固まってる覆面少女の覆面をとって、と。

「あ、う」

「サユカちゃん。そんなの普通に聞けばすぐ教えてあげるのに」

「か、カカすけが……トメ兄はドケチだから普通に聞いたらイロエロ要求されるって」

「……へー、カカが。カカがね。わかった。あとで言っとく。イロイロじゃなくてイロエロってなんだろねあははは」

「あはは、わかってるくせに」

「カカ、今日のおしおきはロープな」

「さらばっ！」

カカは脱兎のごとく逃げ出した。ま、どうせ寂しくなったら帰ってくる。兎のごとくだし。

「じゃ、サユカちゃん。これ僕の携帯アド……」

と、そのとき。サユカちゃんが目にも止まらぬ速さで僕の携帯を奪った。

そしてディスプレイを見ながら、なんかくらーい声で言う。

「と、トメさん……テンカ先生の番号、入ってるんですけど」

「ん、ああ。こないだ初めて会ったとき、気が合うなーって交換した」

「にゃあああああああああ！！！」

なぜかネコ化したサユカちゃんは急に走り出して玄関の向こうへと去っていった。

……えと、あの、僕の携帯……返して。

## カカの天下１４９「覆面少女けけけ現る」（後書き）

けけけけ。

素でこんな笑い方する人、いるんですかねぇ。

## カカの天下１５０「第二回、カカラジ！」

「さて皆さん、こんカカー。風にもボケる、雨にもボケる、そういう人に私はなりたい。香加です！」

「皆さん、こんカカ。風にもツッコむ、雨にもツッコむ、そういう生活なんとかしてくれ。同じく留です」

有名な格言をアレンジした紹介から始まりました、カカラジ第二回目です！

「この番組はネット小説『カカの天下』を盛り上げるため、ぶっちゃけトークや作者の本音などを放送する情報番組ですっ！　私たちは本編自体とは関係ないのでお気をつけくださーい」

「何が違うって？　ふっ、そんなことを言うやつは甘いな。違いのわかる男になれるまでこれを読むなっ！」

「留兄は違いわかるの？」

「当然だ。名前が違う」

「それだけ？」

「大体は」

「……それもそっか。それではこんな微妙な感じでいきますのでよかったらお付き合いくださーい。一旦ＣＭ！」

「おもしろい子が盛りだくさん！　ここに入学すればあなたのお子さんも一躍有名な変わり者！　もしくは笑いもの！　人生楽しくすごせそうな学校アンケートでダントツ一位を獲得した我が貴桜小学校にぜひどうぞ！」

ＣＭが明けて。

「……ね、小学校のＣＭってアリなの？」

「アリだろ。ほんとのラジオじゃないし」

「ぶっちゃけたー」

「はい、どんどん参りましょう。ラジオに届いた、という設定のおたよりを紹介していきます！」

「ぶっちゃけすぎー」

「ほんとに届いたのもあったりするんだけどな。さ、まず一枚目。カカラジネーム『真実を見抜く目』さんからいただきました。えー、『読んでて思ったんですけど、やっぱりなんだかんだ言ってカカちゃんはトメ兄さんが大好きなんですね。甘えまくりだった１４３話の「のりノリ」はもちろん、トメ兄さんがモテそうになったらたまに嫉妬したりする場面がありましたし』だってさ」

「あれだね。『真実を見抜く目』なんてネームのわりには全然見抜

いてないね」

「そうなのか？」

「カカはね、給料日のトメ兄には甘えるの。何か買ってもらうために」

「うあ、きたなっ！」

「ふっ、汚いと呼ばれてもものが買ってもらえるなら女はそれでいいのだよ」

「……でも、１４３話って給料日じゃないよな」

「……や、給料日だったよ？」

「給料日って１４６話だったし。あとその嫉妬したと思われる部分って結構最近――」

「給料日ったら給料日だよ！！」

「や、しかし」

「うるさいなっ！　給料日が月に何回もあったくらいでガタガタ言わないっ！」

「何回もあったらそれはそれでものすごい嬉しいんだけどな」

とりあえず香加さんが照れまくってますので次にいってあげましょう。

「オイコラなれーしょん！　余計なこと言うな」

こ、こっちにまでツッコみますか。

「ほんとなんでもありだな……まぁ、とにかく次、っと。カカラジネーム『青春をください』さんからいただきました」

「なんとも切ないネームだね」

「えー『このカカの天下って、何回まで続くんですか？』だって」

「作者が死ぬまでです」

「ほう、つまりこれが書かれなくなった＝作者は死んだ、ということか」

「違う違う、書くのやめる＝私が殺す、っていうこと」

やれるもんならやってみろ。

「お、強気だね作者。そういえばカカラジじゃなれーしょんは作者なんだな」

「普段は各話の主人公視点だからね。たまにはこんなもんもいいんじゃないかと」

「あんま喋らないけどな」

所詮は作者ですから。登場人物じゃないですから。

「はいはい、作者がいじけてると読者減るよ。さ、次いこ留兄」

「おう、カカラジネーム『将来の夢はプリンになること』さんからいただきました」

「なれるもんならなってみろ♪」

「冷たいなー香加。えー『最近タケダ君を見ませんけど、生きてますか？』だって」

「死にました」

「はい、死んだそうです」

いやいや生きてます！　次回あたり出てきますから！

「最後のおたよりです。カカラジネーム、花火で打ち上げられても死なない無敵キャラさんからいただきました。えー『あたしも出せ！』だって。どうする香加」

「いやだ！」

「だそうです。残念でした。はい、ではおたよりコーナーはこの辺で」

ＣＭへ。

「血湧き肉踊るサスペンス劇場！　どこにでもある一般家庭に起こった恐るべき悲劇！　朝起きてみると、なんと誰もが逆立ちをしていた！　そして次々となわ跳びを始めてしまう病気の謎とは!?　犯人はきゅうり？　とまと？　まさかたまねぎなのか!?　こわい、こわすぎる!!　いつか放送するかもしれないからどうぞお楽しみに！」

ＣＭがあけて。

「……ね、いつかって」

「しょせんはＣＭだ。ツッコむな」

いつかほんとに書くかもしれないしね。

「はい、では今日のカカラジはそろそろ終了の時間となってしまいましたー」

「今日はどうだった？　留兄」

「作者がうざかった」

すいませんでした。

「あと、香加が可愛かった」

「……カカでしょ？」

「いや、香加が」

「だから給料日はアレで私は別に何も……！　じゃなくて、ああもう、私はいつでも可愛いよ！」

「はいはい、もうからかわないから、そうむくれるな。さて、番組ではリスナー、というか読者の方からご要望や意見をお待ちしてます。こなくてもラジオ（もどき）は続きますが、内容がなんでもありっぽいので面白ければ採用しちゃうかもしれません」

「では最後に。サユカンの待ちうけになっているステキショットを公開、というか説明します。えっとですね、お風呂あがりに鏡の前でポーズをとってたのを隠し撮りしたんだけど、そのポーズっていうのが――」

カカラジチョップ！

「さ、もう時間もないことだし、また次回お会いしましょー！」

「ちぇ……またね皆。今度こそはトメ兄の恥ずかしショットを公開するからねー！　このラジオは貴桜小学校とサスペンス劇場の提供でお送りしました」

「すごい提供だな……」

## カカの天下１５０「第二回、カカラジ！」（後書き）

カカラジはいつにもまして好き勝手やらせてもらってますが…いかがでしょうか？
とりあえず私は楽しいです（笑）

## カカの天下151「0から、がんばれタケダ」

「俺は鳥になりたい……」

「なんでー？」

「ほら、あの鳥を見ろっ。おもいっきり羽をのばしている」

「羽をのばしたいの？　タケダ君つかれてるんだねー」

「そういう意味じゃない！」

そう、俺はタケダ。

恋に情熱を燃やす小学四年生さっ。

最近カカ君と仲直りして、いい方向にいくかと思っていたのだが……やはり人生はうまくいかない。

「俺はな、このもどかしい状況が嫌なんだ！　カカ君に話しかけようとしても、この前の自分の情けない姿が頭の中をよぎり、モンモンとしてムンムンとしてうあああああとなってしまうのだ！」

「つまりは恥ずかしいんだねー」

「ああ、この自分を縛る想いが苦しい！　だからあの空飛ぶ鳥のように、自由になりたい……などと思ってしまうのさ」

「あの鳥、いまフンを落としたよ。たしかに自由だね」

「……いや、ある程度は常識的な自由を」

「わがままだねー」

「なぁサエ君。付き合ってくれるのは嬉しいが、なんというかこう、言葉を柔らかくできないものかね」

カカ君のことで毎度相談に乗ってくれているサエ君は、相変わらずホヤホヤ笑いながら、

「言葉のことでタケダ君に言われたくないなぁ。なんでそんなにうざい喋り方なのー？」

「う、うざ……あ、いやな？　父親が小難しい本を朗読するのを子守唄にして育ったからだと思うんだが」

「恨みがあって枕元に立つ幽霊みたいなことするねー。まぁ、面白いからいいんだけどねー」

サエ君。最近はほんとに手強い。さすがこの貴桜小学校の無敵番長カカ君の片腕にして裏番長と噂されるだけはある。

「それで、私を呼んだのはー？」

「うむ。この間、俺はカカ君に一応許しをもらったわけだが……それ以降、どうにも話しかけることができないのだ。どうすれば、いいと思う？」

サエ君はそれを聞くと、小首を傾げて考え始めた。

ぽく、ぽく、ぽく、ちーん。

なにか閃いたようだ！

「うーん、とりあえず自己紹介から始めたらどうかな」

「自己紹介……いまさらか」

「多分、カカちゃんタケダ君の名前覚えてないよー。小学四年生になってから一回も名前で呼ばれてないでしょ？」

そ、そういえば！！

考えてみればカカ君と話すようになってから俺は名前を呼ばれたことがあるか？　いや、始めの一週間くらいは呼ばれていた気がするがそれだけだ！　一回も呼ばれてない！！　なんか変なあだ名で呼ばれたことはあるけど！！！

と、いうわけでサエ君に言われるままに俺は久々にカカ君に話しかけた。

「カカ君、俺はタケダだ！」

「あっそ」

……あれ、すごい淡白。

この前に謝って許してくれたのではなかったのか！？

助けを求めるようにサエ君を見ると、

「まぁ、カカちゃんはもともとタケダ君嫌いだしね」

彼女はにっこりと聖母のように笑って悪魔のような言葉を言った。

「お、俺は……俺はあああああ！」

「なにしてるのサエちゃん。かえろー」

「あ、うん」

ああ……味方のサエ君が行ってしまう……本当に味方なのだろうか彼女は。

俺は……俺は……

「ばいばい、タケダ」

「……え」

ひらひらと手を振って、去っていく我が女神。

名前、呼んでくれた……

「俺は……幸せだ！」

「ちっちゃいなー、タケダ君」

まだ教室を出てなかったサエ君が何か言ったが聞こえない！

とにかく一歩前進した！

これからも頑張るぞ！

## カカの天下１５１「０から、がんばれタケダ」（後書き）

ほんっと頑張れよータケダ！

## カカの天下152「トメ式勉強法」

こんばんは、トメです。

夜も更けて、そろそろ寝ようかーと思ったとき。カカの部屋の明かりがついていることに気がつきました。いつもならもう寝てる時間なのに……

「おーい、まだ起きてるのか」

「ん、トメ兄」

な、なんと！

カカが勉強している！！

「似合わなっ」

「保護者としてその意見はどうなのトメ兄」

失格だな。あっはっは。

「や、だってカカとノートと鉛筆っていう組み合わせがおかしい」

「それがおかしかったら私、学生やってけないんだけど。なんだったら似合うのさ」

「んー、血のついた木刀？」

「なんでどいつもこいつも私と血を結びつけるかな。喧嘩上等」

レディー、ファイト！

ってなりそうだったけど近所迷惑になるなぁ、と二人で目で会話して止めておいた。

「明後日からテストだから、一応ね」

「そっか、夏休み前のテストかぁ。おまえ考えも行動も変だけど、そういうことはきっちりやるよな。身体も鍛えてるし。いい子いい子」

「まかせて」

「変ていうの否定しないのか」

「否定できるわけないでしょ」

この歳でここまで開きなおるやつも珍しい。

「でもねー、なかなかうまくいかなくて」

「そりゃな、カカってどうみても頭いいキャラには見えないし」

「トメ兄はいいよね、ツッコミだから」

「……は？」

「ツッコミの人って成績いい人多そうじゃん」

そ、そう、なのか？　統計とってみないとわからんが……

「だって人をボケ扱いするんだよ？　頭よくなくてどうすんの」

そう言われてみれば、たしかに……うまいこと言うね。

「トメ兄はどんな勉強してたの？」

「僕か？　ひたすら読むだけ」

「読む？　それだけ？」

「ああ。もちろん範囲内のワークとか問題集は一度全部やるけど、あとはそれを読みまくるだけ」

「そんなので覚えられるの？」

「成績は上位だったぞ、自慢だけど」

「トメ兄、似合わないよ。頭いいキャラが」

「おまえさっきツッコミは頭よさそうって言ってなかったか」

「それはそれ。でもトメ兄はなんか……良くもなく悪くもなくって成績が一番トメ兄っぽい」

「成績優秀で悪かったな。だいたいな、テストなんてコツをつかめば簡単なんだよ。要は暗記すればいいんだから」

「暗記って、算数も？」

「そ。解き方を暗記するんだよ。いいか」

僕は妹にテスト暗記法を伝授してやった。内容はこうだ。

人間は寝ているうちに記憶の整理をする。夢を見たりするときの状態だ。この睡眠を利用することを前提にして勉強をする。

どういうことかというと……寝ている間に脳が記憶の整理をするおかげで、直前にやった勉強の内容の記憶も強くなる。つまり、勉強している最中に覚えていなくても、寝た後に覚えていればいいのだ。

寝る前に範囲内の全ての内容をうろ覚えの状態にしておく。そのためにいちいち書いたりしていては間に合わない。だから読む。寝る前の一、二時間でいいから範囲内のものをひたすら読むのだ。そしてしっかり寝る。

一部を確実に覚えるより、全体をうろ覚えに。不確実に思えるかもしれないが、やってみると割と覚えているものだ。

暗記ものはこれでいい。算数や計算関係はまた別のやり方もあるけど、その話はまた別の機会にしよう。

「要は、ワークとかやることやったらあとは読みまくれと」

「そうそ、まぁ、向き不向きもあるだろうけど僕はそれでやってた」

「へー。で、オチは？」

「ねぇよ。たまにはマジメな話してもいいだろ」

「ちぇ。ま、いっか。それでやってみよう」

「おう、範囲内のことは小さいことも見逃すなよ。先生って１００点とか取られたくないからイジワルな問題一つくらい入れるもんだし」

「うん、わかった。ところでトメ兄」

「なんだ」

「私のテスト範囲わかる？」

「……それ、僕がわかったらすごくないか」

「うん、ほめてあげるよ？」

「いらんわ！」

結局、その日はワークだけやって寝たらしい。

ああ、それにしても勉強か。たまに懐かしくなるんだよなぁ。

小学生のころは、まだ楽しかったからなぁ。問題も簡単で。

……小学生という存在自体は簡単じゃないけどな。うちの妹とか。

## カカの天下１５２「トメ式勉強法」（後書き）

今回は笑い控えめです～
そして、ぶっちゃけこれ私の勉強法でした。余計なことやるよりこの単純なやり方のほうが点取れたんですよね～。ひたすら読み読み。

## カカの天下１５３「溶ける人達」

「……ただいま」

……ども。灼熱なトメです。

何が灼熱かというと、もちろん外です。あっついのなんのって。

汗がダクダクになりながら家に帰ってきました……が、鍵が開いていてカカがいるはずなのに返事が無い。

仕事で疲れたお兄ちゃんを出迎えないとは何事だ、訴えてやる。

どこにだって？　うーんと……家庭裁判所に「妹が出迎えてくれないんです」って相談したらダメかな。なにせ家庭の裁判所だし。家庭の問題を解決してくれるんだよなぁ。

……あかんわ。熱気で変なことばっか考えてまう。

さて、暑かろうが寒かろうが変なことを考えている我が妹は……

「……んぁ」

寝ていた。

居間でごろんと。布団もかけずに。

おそらく暑さにぐったりしていて、そのまま寝てしまったんだろう。

薄い部屋着のままで寝ているものだからお腹が丸出しだ。みっともない。というか風邪ひくぞ。とりあえず起こそ。

僕はカカの肩を揺らしながら声をかけた。

「おーいカカ。帰ったぞ」

「……何名様で？」

寝ぼけてるな。

「兄が一名様、お帰りだぞ」

「……お帰りはあちらになります」

「どちらだよ」

ほんっとに寝ぼけてるな。いまだに目が線だし。どこかの店で働いてる夢でも見てるのか。

「ほら、起きろよカカ。寝るなら部屋で寝ろ」

「……や、みんな働いてるのに私だけ寝るわけにはいきません……」

どんなとこで働いとるんだおまえは。

「いいから起きろっ」

耳もとで言ってやると、カカはようやく重たげにまぶたを開けた。

そして僕の顔にぼんやりと焦点が合わせると、一言。

「……当店はお客様のような方はお断りさせていただいております」

「待てやコラ。僕のどこが変だ」

「変な妹をお持ちです」

「……は？　いや、それはそうだけど……は？」

もう何がなんだか。

「ふあぁぁ……あれ、いま夕方？」

「そうそ、朝じゃないぞ」

「ここ、私の店じゃないの？」

「夢だろ夢。ちなみに何の夢見てたんだ？」

「んんん……私が作った『沈む日本』っていう喫茶店の夢」

「なんつー店だ。行きたくねー」

「でも満席だったよ？　日本人のお客さんいなかったけど」

まさか……その夢の中では日本はもう沈んだ後なのだろうか。予知夢だったりしたら限りなく嫌だな。

「とにかく起きろ。寝るならせめて腹に何かかけろ。腹を冷やすと風邪ひくぞ」

「あー、でもおへそ出してると男の人って萌えるんだよね」

「萌え……？　なにそれ」

「サカイさんが言ってた。なんとも言えない感情のことだって」

……や、なんとも言えないんじゃワケわかんないんですけど。

「とにかく、寝るなら自分の部屋に」

「いいよ。トメ兄のが激しくて寝られないもん」

「なんだその誤解招き率１００％に限りなく近い発言は。僕のナニが激しいって？」

「ツッコミ」

「そんなに激しくした覚えはないけど」

「男はいつもそう言う」

「おまえホントは何歳だよ」

返しがいちいちマセてるというか……意味わかってないだろうな。

わかってたら今時の教育問題がどうたらこうたら……あぁ、めんど。
別にどうでもいいや。

「とにかく夕飯の買い物……は行くのめんどいなぁ。外暑いし」

「夕飯は冷凍庫に入ってるアイスでいいじゃん」

「あー、それいいなー……いやっ、堕落した子を作らないためにも保護者はもっと厳しくっ、真剣に教育を考えねばならないのだっ！　というわけであえてカレー！」

「えー、暑いのに」

「暑いときにあえて熱くて辛いものを食べるというのもオツなもんだぞ」

「どうせレトルトカレー余ってるから楽したいだけでしょ」

「……ちっ、バレたか」

「妹をなめるなー」

「そうだな。なめるならアイスにするよ……カカもなめるか」

「ん、なめる……」

そして僕とカカは二人して、居間でだらだらアイスを食べた。

「トメ兄の、なめていい？」

「カカのもよこせよー。ほれ」

……あれ？　またなんかキケンな発言が……まぁいいや。

外は赤く、でも涼しくなってきた。

今年も、暑くなるのかな。

## カカの天下１５３「溶ける人達」（後書き）

暑いと身体が溶けますよね～（意味不明
バテてぐったりしがちですが……頑張っていきまっしょ！

## カカの天下１５４「ものども喜べっ！　夏休みだ」

「さて、明日からてめぇらは夏休みだ」

ふふふカカです。

ただいまテンカ先生が言ったとおり、今日はもう終業式も終わって残すはこのＨＲだけ。

これが終われば夏休み開始なのだ！　めでたいっ！　酒もってこーい！

「ダメ」

……わかってるよノリだよ冗談だよ、だから睨まないでよテレパシートメ兄もとい父親。どこにいるかわかんないけど。

「夏休みは魔物だ。暑い暑いとだらけているとすぐに過ぎ去り、宿題という悪魔が顔を見せる」

テンカ先生は女性にしては鋭すぎる眼光でクラスを見渡す。その迫力に私たちは息を飲んだ。

「だから……いいかてめぇらっ！　油断するなっ！　気を緩めた瞬間に夏休みは消えていると思え！」

「「さー、いえっさー！」」

テンカ先生の勢いに押され、いまクラスが一つになっていた。さ

ー！

「暑さなんざ吹き飛ばせっ、気合をいれろっ、てめぇらはガキだ！おらおらどうしたガキなら無駄にやかましい声で返事しやがれっ！！」

「「さー、いえっさー！！」」

「西革三等兵！」

「西川です、さー！」

「貴様の仕事はなんだ！？」

「えっと……べ、勉強です、さー！」

「ちっがぁぁう！　貴様は世の中をなめている。勉強なんていうつまらないことで人生経験がつめると思うのか？　罰として腕立て１００回！」

「できません、さー！」

「威勢よく情けないことを言うなっ、じゃあ倒れるまでやれっ」

「さー、いえっさー！」

なんだろこのノリ。

楽しすぎる。

「カカ二等兵！」

「さー、いえっさー！」

「ではわかりやすく貴様に聞こう。ガキの仕事とはなんだ！？」

「遊ぶことであります、さー！」

「そのとおり！　貴様はこれから番長少尉に昇格だ！」

「なんか嫌です、さー！」

「いいかてめぇら！　子供っていうのは遊ぶもんだっ、遊びつくすもんだ！　その中で人間性を育み、歪んだ社会での楽しみ方を覚えていく。それができないやつは……堕落する！　引きこもる！　ニートになる！　聞こえているのかガキども！」

「「さー、いえっさー！」」

「だらけるな、遊べっ。引きこもるな、遊べっ。それができた者こそ、明るく楽しく朗らかに老後も安心になってゆくのだ！」

「「さー、いえっさー！」」

「腹黒一等兵！」

「サエです、さー！」

「貴様の夏休みの一番の楽しみはなんだ！？」

「友達で遊ぶことであります！」

……あれ、いま『で』って言った？

「腹黒の名にふさわしい解答だ！　貴様はこれから裏番長中尉に昇格だ！」

「嫌ですー、さー」

「さて！」

あ、無視した。

「てめぇらはこれから何をする！！」

「「遊ぶ！　遊ぶ！　遊ぶ！」」

「てめぇらの楽しみはなんだ！？」

「「海！　山！　花火！」」

「てめぇらが期待するものはなんだ！？」

「「恋！　告白！　その向こう！」」

「てめぇらの捨てるものはなんだ！？」

「「だらけ！　勉強！　宿題！」」

「てめぇらは学生じゃねぇ。ガキだ！　余計なことは考えず、ガキ

の本分をまっとうしやがれっ！！」

「Ｙｅｓ！　Ｙｅｓ！　Ｙｅｓ！」

「いざゆかん戦場へ！　解散！！」

「ありがとうございましたぁ！」

うん、あれだ。

この教室、カンペキに洗脳されてるね。

楽しすぎ。

放課後。

「……ね、カカすけ。なんかさっき戦争の声聞こえなかった？」

「気のせいだよ」

「さ、カカちゃん、サユカちゃん。夏休みだよー」

「うん、いっぱい遊ぶわよ、カカすけサエすけ」

「「さー、いえっさー！」」

「……なにそれ」

夏休みのはじまりはじまり。

## カカの天下１５４「ものども喜べっ！　夏休みだ」（後書き）

というわけでカカ達の夏休みスタートです！　さー！
小学校の夏休み……なつかしぃなぁ。さー！

# カカの天下155「ブルァボウ！　ぷしゅー」

「ただいまー！」

暑さに向かってケンカを売る気で声を張り上げたトメです。

今日からカカたちは夏休みということで、学校で相当に気合を入れられたらしく朝からやたら元気だった。だから僕も負けじと元気を出して仕事を頑張ってきたわけだ。

ふっ、汗が滴るいい男だぜ。

妹に元気で負けてるわけにはいかないもんなっ。

半ばヤケ気味に意気揚々としながら玄関に靴を放り、居間を覗いた。

そこには相変わらずの三人組が夏だというのに元気よく、

「……んぁ？　とめ、にぃ」

元気、よく……

「トメお兄さん、おかえりなさいまふぁ～……」

元気……

「……すー……すー」

元気なっ！！！

「なんでおまえらそろって死んでんの」

今日は朝から三人そろって超がつくほど元気だったはずなのに、僕が会社に行ってる間に三人ともしなびたニンジンみたいになっていた。

「……や、あのね、今日ね、プールいったのね」

「いったんですよ～」

「……んむ……すー」

サユカちゃん気持ちよさそーに寝てるなー。

「そしたらね、えっと……レディーファイトッ！　ってなって」

「競争始めたんですよ～」

カカとサエちゃんがごろごろしたまま目は線のままで解説を始める。

「で、バシャバシャー」

「泳ぎまして」

「バッシャバッシャバシャツ～！」

「泳ぎまくりまして～」

「ババババババ」

「泳ぎまして×ひゃく～」

「ばひゅー……どるるるる」

「ガス欠になりまして」

「ひゅー、すとん」

「墜落しまして」

「ぷしゅー」

「というわけです」

……最後のぷしゅーが何なのかいまいちわからなかったが、大体わかった。

要は初っ端から元気出しすぎて疲れたんだな。

「ま、確かに泳いだあとって眠くなるもんな」

「そうそう、サユカちゃんなんか帰ってきてすぐ死んじゃったんですよー」

死んだ言うな。

「うん……でも楽しかったよ。女の子の水着姿とかブルァボゥだっ

たし」

「カカ、オヤジくさいぞ」

にしてもブルァボゥって巻き舌効いてていい発音だな。

「だって男子の水着姿を見たっておもしろくないでしょ」

それはそうだが……ガキなんだから泳ぎだけ楽しめよ。

「とにかく、僕は夕飯の買い物してくるけど……」

「アイス、イチゴのね」

「ポッキーお願いします」

当然のごとく注文してくるなお子様どもめ。

「……一緒にいく、とか可愛いこと言うやついないの？」

と、そのとき。

今まで寝ていたサユカちゃんの目がくわっと開いた。

「ふぁい！！」

なにやらアクロバットな感じに身体を捻りながら立ち上がったサユカちゃんは、綺麗に一回転してからズバッと手を上げた。

「わたし、いきまふ！！」

寝起きのせいか口が回ってない。しかしなんでそんな勢いよく……

「おお！　イベントだよサエちゃん！！」

「作戦会議だね、カカちゃん！！」

続いてシュバッとバシュッと立ち上がるカカとサエちゃん。なんだおまえら元気じゃねぇか。

「一緒にお買い物だよサユカン」

「よく言ったねサユカちゃん。起きてたの？」

「夢の中で聞こえた」

「「愛だ……！」」

なんだコイツラ。

「トメ兄、ちょっと待ってて！」

「……三分間待ってやる」

どこかで聞いたセリフで答えると、三人はドタバタとカカの部屋へと移動した。

……なんなんだかな、いったい。

## カカの天下１５５「ブルァボウ！　ぷしゅー」（後書き）

はい、続きます。
にしてもこの話のタイトルすごいなぁ（自分でつけたくせに

## カカの天下１５６「サユカの任務、買い物編」

こんにちは、サユカですっ！

前回の続きなのですが、いま……いま、なんと、わたしの愛しい人、トメさんとデート中なのです！

ただ単に買い物に来てるだけだけど！

場所は近所のスーパーだけど！

二人でお出かけです。デートなのです！

「サユカちゃん、大丈夫？　プールの疲れ残ってるだろ？」

「いいえ、大丈夫です！」

「そう？　でもなんか鼻息荒いよ？」

「そ、そんなことないですよ！　ほほほら、わたし牛肉好きですもん！　だから牛みたいに鼻息荒くなるんですよ！」

うあああ何言ってるのわたし!?　鼻息荒いとか女の子としてそれってどうよどうなのよ!!

「い、今のは忘れてください！　一次の気の迷い大戦ですからっ！」

「第二次があるのか？」

「あるかもしれませんが阻止したい次第です！」

「そ、そうか……がんばれ」

「は、はい……」

ああ、まずいわ。緊張で頭がおかしくなりそう……トメさんはどう思ってるのかな？

ちらりと横目でトメさんの顔を見る。

……なんか難しい顔してる。わたし、やっぱり変な子だと思われてるのかな。

「……サユカちゃん」

「は、はい！」

「この１００円のたまごと２００円のたまご、どう違うんだろうね」

「……は」

「買うときいっつも迷うんだよなぁ……たまごのくせに１００円も差があるなんて生意気だよな」

「そ、そうですね」

たまご見て難しい顔してたのかぁ……よかった。なんか言ってる

ことがお母さんみたいだけど。そこも好き。

……さて、そろそろカカすけたちと立てた作戦を実行するべきか。

わたしは二人に渡された紙をポケットから取り出して、トメさんに見えないように開いた。

まずは……カカすけの作戦からだっ！

紙にはこう書かれていた。

『水着コーナーに行って選んでもらっちゃえ。試着して悩殺だっ！』

なるほど！

そうと決まれば早速、トメさんをうまく誘導して水着を売ってるところへ！

水着を売ってるところへ……

スーパーに水着なんか売ってないよ！！！

「あれ、どしたのサユカちゃん。なんかガッカリした顔して」

「え、あ、あはは。ちょっと急にカカすけのこと思い出しまして」

「あー、わかる」

なんかすごい納得されてしまった。まぁいいや。

この作戦は却下。次の作戦に移る！

わたしはトメさんに見えないように、サエすけからもらった紙を開いた。

紙にはこう書かれていた。

『手を握れ。腕を組め。そして抱きついて……いやん♪』

なるほど！

そうと決まれば早速、トメさんの手をロックオンしてファイヤー！

ファイヤー……

できるかあああああ！！！

そんな簡単にそれができれば苦労しないわよっ、ていうか『いやん♪』ってなによ！

いやん！！

「あれ、どしたのサユカちゃん。なんか赤くなったり青くなったり信号機みたいな顔して」

「え、あ、あはは。ちょっとサエすけのこと思い出しまして」

「あー……いろいろあるんだろうな、やっぱ」

なんかものすんごく納得されてしまった。どうでもいいけど黄色の顔にはなってなかったみたいね。あ、黄色って普通のときか、まぁいいや。

それにしても……うぅ、全然うまくいかない……やっぱダメだなぁわたし。

「カカたちはいろいろ注文してたけど、サユカちゃんは何がいい？買ってあげるよ」

「え、いいんですかっ」

「うん、安いものなら」

「じゃ、ようかんを」

あ、つい正直に言っちゃった！

こんな子供っぽくない可愛くないものを……トメさん、呆れてるだろうなぁ、はぁ……

「お、いいねようかん。僕も好きなんだよ、和風なのが」

「ほ、ほんとですかっ！？」

やったぁ！　さすが年寄りくさいトメさん！！

「わたしも和風なの好きなんです、趣味あいますねっ」

「んじゃ今度一緒に緑茶すすりに行こうか」

「は、はいっ！」

ぃやったぁ♪　一緒にお茶の約束しちゃった！

緑茶すすりに、っていうのが少し気になるけど、お茶はお茶だよね、うん♪

今日はついてきてよかった！　協力ありがとうカカすけサエすけ！

……あれ、あの二人なにか役にたったっけ。

## カカの天下１５６「サユカの任務、買い物編」（後書き）

二人して緑茶をずずっと……トメとサユカはいいジジババコンビになりそうです。

でもなにげにカカもせんべいとか好きで和風よりなんですよね。

## カカの天下157「あれか！？」

「よう、元気で夏をすごしているかね諸君！？」

「……あー」

「……まー」

暑さにうだっているトメです。

相も変わらず熱気を発散しまくっている太陽のせいでぐったりしている僕とカカ。そこに闖入したのは、砂漠だろうが北極だろうが同じ格好でいそうなほど元気な姉その人だ。

「なんだね、その弱い返事はっ。まだ朝だぞ一日の始まりだぞラジオ体操だぞ！」

暑苦しいなコイツ。

「ラジオ体操はやったけど……ちょっと元気を充電してるんだよ。うだー」

「そうそ、活動する体力を蓄えてるんだよ。姉みたいに一定ターンで自動回復する能力ないんだから」

「そんなＲＰＧのボスみたいに言わないでよっ！　まぁいい。そんなことだろうと思って……元気になれるものを持ってきたのだ！」

「どうせ変な高級セットだろ」

「変だと？　バカを言うな！　あたしは一度も変なものなんか持ってきてないっしょ！？」

じゃあ変なのはおまえの頭だ。

「なんと高級スイカセットだ！！」

おお！？　姉の持ってくるものにしてはまともだ！

「スイカ？　やった」

あ、カカが充電完了したらしく復活。やれやれ、じゃ僕もそろそろ復活しますか。

「……ん？　セットってなんだ。スイカ以外に何があるんだ」

「ふっふっふ、いま見せてあげるよ。まずはこれ、スイカ！」

ペカー！　と後光が差して見える瑞々しいスイカさまに僕らはひれ伏した。へへー。

「そして……目隠し用のはちまき！」

あ、なるほど。スイカセットってスイカ割りセットか。

「最後に、なんか赤い液体がついた木刀！」

「まてや。その赤い液体ってなんだ？」

「やだなぁ弟、スイカの液体に決まってるじゃん」

「スイカの液体ってそんなドロ赤かったっけ」

「……あー、うん、時効だから心配しないで」

「何の事件が時効なんだ！？」

「うっさいトメ兄！！」

喚いていた僕を、カカがいらだった声で一喝した。

「トメ兄……その木刀が誰を消したところで私たちには関係ないでしょ、ヤったのはどうせ姉なんだから。そんなことよりスイカを前にしてるんだよ。わかってるの！？」

あ、あの……そんな『他人の命より自分の食欲のほうが大事』って胸張って言われても。

「そそ、カカちゃんはわかってるね」

「いざとなったらシュー君がいるんだし、なんとでもなるよ。それより食べよ」

末恐ろしい奴らだ……というかもう今すでに恐ろしい。

「んー、でもスイカ割りか。私たちだけでやるの寂しいね」

「む、そだね。じゃ他のやつら呼んでからやろっか」

「サエちゃんもサユカンも今日は都合悪いみたいだから、今度にしよう」

「わかった。じゃこれ冷蔵庫いれとくねー」

と、いうわけでスイカはお預けになったんだけど……久々に目にするヘンテコセットを見て、僕は思い出したことがあった。

「なぁカカ。そういや二ヶ月ほど前に応募した『商店街の名物を考えよう』ってやつ、結局はずれたんだよな」

「何をいまさら言ってるの。ブラックチャーハンとかリカレンジャーとかいうふざけたのが通るはずないでしょ。当たり前じゃん」

それはそうだがコイツに言われると妙にムカつく。

「じゃあ高級ネコマタセットっていうのもわからずじまいか……どんなのか気になってたのに」

「何言ってるの。こないだ見せたでしょネコマタセット」

「……は？」

「ご近所で噂になったトメ兄の『妹ににゃにゃにゃん事件』を思い出して」

「あれかあああ！？」

意外な見落とし発覚！！

ネコ耳つけたカカのせいで、僕のにゃにゃにゃん♪　な噂が広まりまくった悪夢が蘇る。

「あれはネコマタセットの一部らしいけどね。サエちゃんちに行けば全部あるよ」

高級ネコマタセットって……コスプレセットかよ！　そんなん出して商店街はいったいどんな商売を中心に栄えていくつもりなんだ!?

「ちょっと待て、じゃサエちゃんが商店街の名物のに当選したのか」

「うん、さすが私の親友、可愛いの思いつくよね。デンジャーケロリンなんて」

「あれかあああああ!?」

意外な見落とし発覚パート2!!!

カエレカエレとカエルの合唱げろげろされた悪夢が蘇る。

「まったく、トメ兄はカンが鈍いなぁ」

……や、そう、なのかな?

「お待たせー、スイカしまってきたよ。で、話が聞こえたんだけど……なに、今度のスイカ割りはネコとカエルのコスプレしてやるの?」

「おー、カンは鈍いけどおもしろいこと言うのがお姉だね」

「ちょ、ちょいとお二方。まじでやるの？　それ」

なんかまた厄介な噂が増えそうな予感。

しかも僕限定の。

でも楽しそうだから困ったもんだ。

## カカの天下１５７「あれか！？」（後書き）

はい、というわけで……さりげなーく（？）出てた伏線の回収です。まぁ基本一話完結のこのカカ天という物語にそういうのはあってないようなもんですが（笑）

タイトルの通り読者様が「あれか！？」というのを狙ってみました。

ちなみにネコマタセットはまだ何回か登場する予定です。

## カカの天下158「トメの一人遊び」

トメです。

今日も今日とて暑い中で仕事を終え、家に帰ってまいりました。暑いといっても僕の仕事場はクーラー効いてるんだけどね。帰りの道のりが暑いのよ。

見たところカカは家にいない様子。

「ただいまー」

誰もいなくても挨拶はしておく。これが正しい習慣というものである。虚しいけど。

自分の部屋で着替え、いつものように居間でごろんと転がる。

明日はスイカ割り大会だなー、場所が場所だけにどんなことが起こるか楽しみだ……などと考えながらゴロゴロ転がっていると――

「あれ、なんだこれ」

ふと目に留まったダンボール。

居間の隅に置いてあったそれは『愛媛みかん』とでっかく書かれている、どこにでもありそうなダンボールだ。

はて、朝はあんなの無かったよな。

誰かが買ってきたのか愛媛みかん。しかしなぜに今の時期にみかん？

と、そのとき。

『愛媛みかん』のダンボールがずり、と動いた。

……見間違いじゃないよな。

「……幽霊さんですか？」

なんとなく丁寧に呼びかけてみるが返事はない。

その代わりと言ってはなんだが『愛媛みかん』のダンボールが再び動いた。

ずり、ずり……と茶色の身体（？）を引きずっている。

「あの……『愛媛みかん』さん。お出かけですか？」

とことん丁寧に呼びかけてみるが返事は無い。

なんだろうこれは。怪奇現象だろうか。

僕の脳裏にテレビ番組でよくあるテロップ（字幕のこと）が浮かんだ。

『愛媛みかんは生きていた！？』

……なんか違うな。

『愛媛ばんざい！　ＧＯＧＯ愛媛！！』

……とことん違うな。

「……ん？」

なんとなく違和感を見つけた僕はゴロゴロモードから立ち上がり、ダンボールを持ち上げてみた。

思いのほか軽々と持ち上がる『愛媛みかん』のダンボール。

そして足元を見てみると……

「なんだ、総理大臣か」

別にダンボールの中に総理大臣の生首が入っていたわけじゃないよ？

……こわっ！　自分で言っててなんだけどこわっ！！　なんだそのイヤガラセにも程がある郵便物！？　もし漫画だったら逆に僕の首がジャンプするくらいショッキングだぞ！！！

すー、はー。失礼、取り乱しました。

なにはともあれ、そこにはセイジ食堂で飼われているネコ、総理大臣（カカ命名）が座っていた。

「さてはカカにでもやられたな」

多分僕を驚かせようと仕込んでおいたのだろう。この総理大臣というネコ、結構頭がいいのである。「待て」と言われれば待つし、「やれ」と言われれば指差した人物に襲い掛かるのだ。まさにネコの中の総理大臣！　や、えらいって意味で。

「しかしこんなダンボールどこにあったんだ」

ニャ、と台所を指差す総理大臣。

そこに視線をやると、他にもダンボールが転がっていた。ハサミやのりが転がっているところを見ると、カカたちが工作でもしていたのだろう。

……なんで台所でしてたのか気になるが。

「しかしおまえすごいなー、本当に話わかるみたいだ。末は博士か大臣か！？」

頭がいい子供によく使う言葉を言ってみる。

すると――「あたしゃすでに大臣ですよ」と言わんばかりに「ニャ」とネコパンチでツッコミを入れてくるではないか！？

「おまえすごいにゃー！」

にゃ、と答えてくれる大臣。

「しかし暇だにゃー」

にゃ、と頷いてくれる大臣。

「……カカ、まだかにゃー」

寂しい僕と一緒にいてくれる大臣。

「あー、でもおまえ近くいると暑いわ。あっちいけ」

なんかガッカリした大臣。

カカまだかなーと思いつつ。

僕はしばらく大臣で遊んだ。

## カカの天下１５８「トメの一人遊び」（後書き）

たまにはトメ一人もいいものだなぁ、と思って書きました。
え、女の子いないとダメですか？　次回は出ますので我慢してください（笑

## カカの天下１５９「スイカ割り大会！　割り編」

「さぁ始まりました第一回スイカ割り選手権！　解説はあたし、相変わらず姉としか呼ばれてないけど一応本名はカツコです！」

「なんだかわからないまま解説の助手になってしまったトメでーす」

ども、今言ったとおりのトメです。

姉がもってきたスイカを割ろう！　とサエちゃんサユカちゃんに声をかけたはいいのですが……なんか大事になってきました。

どう大事かって？

それはね……

「店壊すんじゃねぇぞ」

まず、会場がなぜか近所のセイジ食堂で、お客さんがそこそこいるということ。つまりはこのスイカ割り選手権の観客だね。

そして……さらにおかしな点がある。

「赤コーナー！　人呼んでまっかな暴れネコ！　というか周りを血で赤くする暴れん坊！　カカ選手！」

「それ、どっちかっていうとお姉だにゃ」

「にゃ」という語尾からもわかるように（？）カカがネコの着ぐるみを着ているのだ。

前のようにネコミミだけじゃなく、全身もこもこタイプの着ぐるみだ。コスプレというより仮装って感じがする。あと、別に赤いネコの着ぐるみというわけじゃない。白ネコの着ぐるみだ。

コスプレと仮装。あんま違いないだろうっていうツッコミはなしね。

「黒コーナー！　人呼んで黒い心の狡猾ガエル！　とにかく心がまっくろけ！　サエ選手！」

「ふふ、どーもですけろ♪」

サエちゃんはカエルの着ぐるみを着ている。この間カカが着てたやつだ。サエちゃんが考案したらしい商店街のマスコット、デンジャーケロリン……

「けろ♪」

デンジャーというわりには間の抜けた顔をしているカエル、その着ぐるみの口から顔を出しているサエちゃんは、楽しそうに踊りながら微笑んでいる。

すいません、正直めっちゃ可愛いです、ハイ。

周囲の見物人も「萌えー！」とか叫んでます。意味はよくわかりません。

「桃コーナー！　人呼んで頭は桃色片想い！　いやぁー、青春ってほんっとーにいいもんですね、サユカ選手！」

「なにワケわかんないことしみじみ言ってるんですかっ！！」

サユカちゃんはカカと同じタイプのネコの着ぐるみ、ただし三毛猫バージョンだ。

「こら桃コーナー！　語尾は！？」

「……すいません、にゃ」

ひたすら恥ずかしそうに俯きながら「にゃ」と言う、もこもこネコ姿のサユカちゃん。

その恥らう姿といったらもう……野次馬どもまで「かぁいいにゃ～」と言ってしまうくらいだっ！

「さぁ皆様、ここに集いし戦士たちが繰り広げるスイカ割りバトル、いよいよ開催です！」

どこから調達したのかわからないマイクを振り上げて宣言する姉。ほんと楽しそうだこの人。

「さ、各自スイカを割るために武器を構えてもらいます」

そしてファンシーな三人はその凶器を取り出す。

カカは木刀（ちょっと赤い）。

サエちゃんはメリケンサック（人を殴るときに指にはめる鉄のやつ。バリバリ凶器）。

サユカちゃんはおたま（超普通のおたま）。

えーっと……ツッコミどころはどこかな？

全部だね♪　じゃ一気にいこう。

「ちょと待てカカその木刀いまだに赤いドロい液ついてるぞせめて洗えよ！　サエちゃんなんでメリケンでサックなのそんなのどこから持ってきたの!?　ああでも指に光るその鋼鉄の輝きが妙に似合ってる！　サユカちゃんそのおたまでスイカ割れるの？　割れるとかじゃないんだよ割るんだよって？　ああそうですかスイマセン！」

「助手のトメ君、ツッコミタイム終わった？」

「ん、すっきりした。続けていいよ」

なぜか周囲に巻き起こる「いいツッコミだったぞー」という拍手。照れる。

「よし！　では始めるとしよう！　三人にはあたしの合図で同時に駆け出してもらい、テーブルの上にあるスイカを割ってもらいます！　先に割ったほうが勝ち！　さぁ三人とも、下がって」

姉の指示により、三人はスイカの置かれたテーブルから少し距離をとって並んで立たされる。

「さ、早く割ったほうが勝ちですよー、三人とも構えて！」

姉の指示で思い思いに武器を構える三人。

「ちなみに一番先に割った人には、一番大きいスイカがもらえるのはもちろん、副賞もあります」

なにそれ。僕は聞いてないぞ。

「副賞は……我が弟、トメです。好きにしていいよ♪」

その瞬間、三人の顔が悪魔っぽくなった。

「よーい、どん！」

姉の合図で、三人は――

一斉に武器を投げた。

スパァーン！！　と気持ちよすぎる音と共に破裂するスイカ。

なんで三人ともそんなマジなの？

なんで三人ともそんな気合いれて投げてんの？

なんで三人ともハァハァ息荒いの！？

僕に何させる気！？　なんかメチャクチャ怖すぎるんですけど！！！

「うーん……すごい！　投げた武器が三つとも同時にスイカに当たったよ」

今のが見えたのか……すごすぎるぞ姉。

「じゃ、トメは三人のものということで」

「「「はーい♪」」」

「待たんかい！！」

なんで三人とも目がギラギラしてるの！？

「さ、今度は食べよーの巻だね」

なんでさらに次回にまで続くの！？

## カカの天下１５９「スイカ割り大会！　割り編」（後書き）

というわけで次回はトメを、じゃなかったスイカを食べる話です。
……別にトメでもいいんですけどねっ（↑鬼

## カカの天下１６０「スイカ割り大会！　食い編」

「さぁ始まりました第一回スイカ食い大会！　解説は続いてあたし、最近出番が減ってきたような気がしないでもない姉ことカツコです！」

「今回も解説の助手をさせられるらしいトメです……」

どうも、姉が言うとおり前回の続きで今度はスイカ食い大会だそうです。

姉の威勢のいい声に呼応して歓声をあげる野次馬の皆さん。どうもこの街は暇なやつが多いらしい。

「そういや……さっきのは選手権で、今回は大会なのな」

「うん、ほんとはさっきのスイカ割りで決まった選手とあたしが最後に一騎打ち、って形にしたかったんだけどね。三人とも勝ち残っちゃったし」

なるほど……すると姉はスイカを食べる機会を失ったわけか。可哀想に。

でも多分姉のことだから勝負事となれば本気モードになり、三秒でスイカを半分は食べてしまうだろう。それを考えると、このバケモノに食べさせないでよかった。他の人の分が無くなる。

「さて、では選手入場！　赤コーナー！　っていうネタは使っちゃったからいいや」

「ネタとか言うな」

ともかく前回と変わらないコスプレ姿で登場するカカサエサユカの三人。

や、だからあんたらそんな可愛い格好くせに……なんで目がギンギラギンにさり気ないんスか。

「ちなみに選手の皆さんが気になる副賞、トメ君ですが……なんか三人のものって言ったら泣きそうになったので、この大会で優勝した人に改めてプレゼントふぉぅゆぅ♪　ということで」

「……誰かにプレゼントされるのは変わらんのか」

「当たり前じゃん。あんたが賞品だから三人とも殺るきなんだし」

「ちょっと待て、なんか物騒な響きしたぞ」

「む、鋭い……まぁまぁ、どうせこんな賞品なくてもあんたはあの三人に振り回されて生きてくんだから、そんな気にすることないっしょ」

……なぜだろう。反論できん。

「さて！　副賞が納得したところで勝負の説明をします！　先ほど割ったこのスイカを使って、観客の皆さんに最も大きな拍手させた人が勝ち！」

「拍手……？　意味がよくわからんが」

「要はスイカをネタに芸をしろってこったろ」

「……ゲンゾウさん、あなたまでネタとか言うのやめてもらえませんか？　なんか僕らが全員コメディアンみたいに思えてくるんで」

「似たようなもんだろ」

「言わないでっ！！」

しかし野次馬のほうを見ると「いいぞいいぞー」「やれやれー」とノリ気な様子。ご近所の方から知らない人までいっぱいいるけど、どうも奇天烈な格好のカカ達を気に入ったらしい。アブナイ人いないだろうな。

「さぁ、一番手は誰がいきますか？」

「私がいきますー」

ほぇーっとした声の割に目がメラメラ燃えているサエちゃんが名乗り出た。

「勝ってトメお兄さんで遊ぶのー♪」

……やば、なんか一瞬遊ばれてもいいように思えた。おそるべし見た目が可愛い女の子。

「サエ選手、はたしてどんな芸をしてくれるのかっ！？　おっと、まずはスイカの前に立ち……割れたスイカの破片を手に取った。赤い部分が結構残っててておいしそうだが、それを……」

ズバ！　っと音がした。

サエちゃんが持つスイカは、なんと一瞬で赤い部分が消えていた。

「な、ななんと志村け○食いだ！　通称ドリフカット！」

またの名を超早食い！

まさかこんな力技かつ正攻法でくるとは……サエちゃん、口のあたりがモノスゴイことになってるけど格好いいよ！

野次馬も感動したらしく、興奮しながら手を叩きまくっている。

これはもう決まったんじゃないかな。

サエちゃんは満足そうに口をもごもごさせながら退場し、次の出番のサユカちゃんとすれ違う。

そのとき、サユカちゃんにサエちゃんがぼそっと何かを言った。

「えっ！？　そ、そんなこと言われても」

「トメお兄さんがかかってるんだよ」

「……！　何だってやってやるわっ」

だから君たち、なんでそんなに僕で遊びたいのさ。

「続きましてサユカ選手！　サエ選手を越えることができるのか。

まずはスイカの前に立ち……おや、なんだかすごく小さなスイカの破片を取りましたよ。ほとんど赤い部分がない……」

サユカちゃんはそのみすぼらしいスイカをじっと見て……

「……ぐずっ、わたし、これだけしかもらえないのかにゃ……」

泣いたぁ!?

「ぐっじょおおおおおおおおぶっ!!」

野次馬たちがなんか吼えたぁ!!?

「おっとサユカ選手、女の最大の武器、涙を使いました！　色気とか演技とかそのへんが不足してますが、精一杯の可愛らしい涙に野次馬たちはノックアウトです！」

たしかに可愛かったけどさぁ……

「ちなみにサエ選手はサユカ選手に何と助言したのでしょうか!?サエ選手、どうぞ」

「えっとねー、女はとりあえず泣いとけば勝てるって言いましたー♪」

こっちは可愛いけど可愛くないなぁ！　女ってやつぁ！

「……カカも相当なもんだと思ってたけど、その友人も負けずに成長してるようね……おねーさんうれしいよっ！」

成長の仕方が間違ってる気がするのは気のせいか。

「さー、いよいよ真打登場！　カカ選手、この二人に拍手の勢いで勝つことができるのか！？　おっとカカ選手、無言でスイカの前で立ちました。そして……」

その手に持っていた木刀を振り下ろした。鈍い音が響き渡る。

さらに砕かれたスイカのしぶきが、カカの着ている着ぐるみにかかった。

白ネコの身体が赤く染まる。そう、まるで返り血を浴びたかのように……

先ほどの「赤コーナー！」のくだりを証明するかのような血まみれの（ように見える）ネコもどきは、いつのまにか静まりかえっていた観客を見渡した。

「拍手しろ」

パチパチパチパチ！！

ってぇ、脅しかよっ！

「おっとぉカカ選手、他の二人が受けに回ったのと違い、攻めにでた！」

や、たしかに攻めっちゃ攻めだが……

「音がちいさい！」

パチパチパチパチ！！！

これ、いいのかなぁ。

「勝者、カカ！！　トメはカカのものです！」

「もともとそうなんだけどね」

「カカおまえ何様だ！？」

「ご主人様とお呼び、この副賞め」

僕の運命やいかに！？

というか僕が何をしたぁ！？

「ふふふ」

血まみれで笑うな、怖いから。

## カカの天下１６０「スイカ割り大会！　食い編」（後書き）

このスイカはフィクションです。
実際のスイカは血のようには見えません。

## カカの天下１６１「スイカ割り大会！　賞品編」

どうも、お休みのトメです。

会社は休みだけどある意味休みじゃありません。それというのも……

「トメ兄、これとこれ、どれがいいと思う？」

「んー……左かな。赤いし」

「赤から離れろ！」

「カカ、んじゃあんな勝ち方するなよ」

「だってそのほうが勝てるし」

というわけです。

ってこれだけじゃわかんないか。説明すると……先日のスイカ割り食い大会で優勝し、僕への命令権を獲得した妹のカカはこんなことを言ったのだ。

「トメ兄、海に行きたい」

「ふむ、連れてけってか」

「私だけじゃなくてサエちゃんとサユカちゃんも」

「それくらいならいいけど」

「それで新しい水着がほしくてさ」

「命令は一つだぞ」

「で、どうせだからトメ兄に選んでもらおうかと」

「一つだって言ってるだろ」

「命令します！　私たち三人を海に連れて行くためにまず新しい水着を選んで買って私に土下座しなさい！」

「なげーよ。でもいいぞ、最後以外は」

「えー、土下座してくれないの？」

「土下座して何を謝れと」

「生まれてきてごめんなさいとか」

「……だからさ、僕なんか悪いことしたか？」

こんな感じで、なぜ僕がこんな目にあっているのかという疑問を残しつつ、デパートの水着売り場にホイホイついてきたわけなのだが。

「これと、これと」

「カカ、おまえ何着買わせる気だよ」

「もちろん一着でいいよ。でもいろいろ試着しないと……うん、これくらいかな」

カカは腕いっぱいに水着を抱えると、試着室に向かってトットコ走っていった。ため息をつきながら僕もそれを追う。

試着室に飛び込む寸前、カカはこちらを振り返る。

「ちゃんとここにいてよ。トメ兄に選んでもらうんだから」

「んなこと言ってもなぁ……僕は水着の良し悪しなんかわからないぞ」

「あれ、おかしいな。トメ兄の部屋に隠してある本は、たしかに水着だらけだったのに」

「さっさと着替えろ！」

試着室のカーテンを乱暴に閉めてカカを追い出す。くそぅ……やっぱたまに僕の部屋入ってるなあいつ。僕の埋蔵金の隠し場所を変えねばならないか。

「ほい、こんなのどう？」

カーテンが開き、分不相応にもビキニタイプの水着を着たカカが

現れる。

それを見て、僕は率直な感想をもらした。

「腹が出てるな」

「コロスよ？」

「冗談だって！　んー、なんかそれはカカには似合わないなぁ。なんか大人っぽすぎるというか」

「サユカちゃんとかだったら似合う？」

「あー、そうかも」

「ふむふむ……じゃ次いこう」

再び閉められるカーテン。

そしてしばらくしてオープン。

「これは？」

「胸が小さいな」

「水着の感想じゃないじゃん！」

「いやぁ、だってあまりに可哀想で」

「可哀想とか言うなっ」

三度閉められるカーテン。んな怒られても……水着の違いなんかわかんないしなぁ。

「……これは？」

「赤いな」

「トメ兄！　マジメに感想言ってよ！」

「妹の水着姿をマジメに語るのもどうかと思うが」

「むぅ……じゃとにかく私っぽい水着選んでよ！」

「んー、でも今着てるのはカカっぽいぞ」

「ほんと？」

「血の色だし」

「そこだけでしょが」

そんな感じで難航しながらも、なんとか買う水着は決まった。

買ったのは結局赤いビキニタイプの水着だったけど、小さなリボン飾りが所々についてて可愛らしい作りだった。子供っぽくてカカに似合うだろうと思う。

なにはともあれ来週の休みは海だ！

「……水着あったかな」

「裸でいいじゃん。注目の的だよ？」

それじゃ警察の的になるわ、たわけ。

## カカの天下１６１「スイカ割り大会！　賞品編」（後書き）

というわけで来週は海の話です。
夏はイベント盛りだくさんで大変ですねぇ。
楽しいけどね。
基本的になにげない単発の話のほうが好きだったりする私です。

## カカの天下１６２「土用のうなぎは進化する」

「ただいまー、買い物いくぞカカ」

「ん」

トコトコと寄ってくるカカを待ち、出発トメです。

夏休みで暇を持て余しているカカは、最近よく買い物に一緒についてくる。

「知ってるか、カカ。今日は土用の丑だぞ」

「ん、なんだっけそれ」

「とあるモノを食べて夏バテにそなえようって日だ。さて問題です、何を食べるでしょうか？」

「土曜日生まれの牛？」

難しい注文するなぁ。

「違う違う、うなぎだよ」

土用の丑にうなぎを食べる。その由来は江戸時代あたりのこと、売れなくて困ってるうなぎ屋さんが『本日、土用の丑の日』と看板を出したら売れまくった、というところから来ているらしい。つまり元は商売根性から始まった説なわけだ。実際に栄養豊富だろうから別にいいんだろうけど。

そんなウンチクを語っているうちにスーパーに到着。

やはり目に付くのはうなぎ。うなぎオニギリやうな丼など、これでもかーというくらいに並べられている。

「うなぎのぼりって言葉があるね」

いきなりなんだコイツは。

「あるけど、それが？」

「こいのぼりって言葉もあるね」

「……あるけど」

「こいは滝をのぼったら龍になるんだったよね。じゃ、うなぎは何になるの？」

また奇抜な質問を。カカの頭は一体どうなってるんだろうか。おもしろいなぁ。

「うなぎ、か……うなぎ……にょろにょろ……うーん」

「あ、わかった」

「へ？」

カカを見ると、我が妹はスーパーの一角に目を留めていた。

そこにある商品は、うなぎの蒲焼。

「かばやき……うなぎはカバになるんだね！」

「壮絶な進化を遂げたな、おい」

「つまり……おたまじゃくし→どじょう→うなぎ→カバって感じに育つわけだ、うなぎは」

「それはいくらなんでも壮絶すぎるぞ」

たしかに見た目は似てるけどさ、カバ以外は。

と、そこでいきなり肩を叩かれた。

振り返ってみると、なんとそこにはカカの担任、テンカ先生が買い物カゴを持って立っていた。

「お、テンカせんせ」

「よっ、トメカカ」

「テンカ先生もカバ食べるんですか？」

カカの脈絡のない質問に、テンカ先生は小首を傾げる。

「何を言いたいのかよくわからんが、カバはともかくバカは大好物だぞ」

うまいこと言うなこの人も。

「ほら、うなぎの蒲焼」

「あぁなるほど。それでカバか。相変わらずだなカカ」

「いや、それほどでも」

「ほめられてないぞ」

「ほめてるんだが？」

さいですか。

「ところでよ、トメ。いつ飲みにいく？」

「あー、そうだね。今週末の休みはカカたちを海に連れてかなきゃなんないし……来週かな」

「わかった。また連絡する。じゃオレはオレで買い物するから、またな」

「おー」

ひらひら手をふってテンカ先生を見送る。

くいくい、と引かれるシャツのすそ。

「ね、トメ兄。テンカ先生と仲いいね」

「ん、まぁな。話やすいし」

「……対策を練らねば。サユカンのためにも」

「……？　カカ、どした」

「なんでもない。いいから早くカバ焼き買お」

「そんなものは売ってないがな」

「んじゃバカ焼きでいいよ」

「バカ、か。じゃカカを焼けばいいのか」

「それじゃカカ焼きだよ。じゃなくて誰がバカだ！？」

「テストで算数が３０点だったどっかの誰かさん」

「……さて、カバ焼きはどこかなっと」

「逃げたな、バカ」

「バカって言うな！」

「じゃバカカ」

「つなげるな！！」

そんなこんなでうなぎの蒲焼を買って帰り、おいしくいただきましたとさ。

この夏も頑張ってのりきりましょー！

## カカの天下１６２「土用のうなぎは進化する」（後書き）

本当は昨日とかに載せたかったんだけど……スイカ割り大会が続いてたので遅れて載せました土用の丑。
ちゃんと昨日は流行にのって（？）うなぎ食べました。
皆さんも夏バテしないように頑張りましょー＾＾

## カカの天下１６３「暑い熱い勉強会」

「はぁ、やだなぁ」

「つべこべ言わない！　やると言ったらやるのっ」

「まぁまぁカカちゃん、みんなでやるのも楽しいと思うよー？」

めんどうだなぁ、とため息の絶えないカカです。

今日はサエちゃんとサユカン、いつものメンバーが揃っているのですが……いつもと一つだけ違う点が。

楽しくないのです。

というか、楽しくないものが目の前にあるのです。

それは……我らが天敵、夏休みの宿題！

「今日は勉強会なのっ、カカすけもやるのっ」

「もう……サユカン、私がトメ兄と水着買いに行ったからって、そんな冷たくすることないでしょ」

「それは関係ないのっ」

「そのわりにはサユカちゃん、スイカ割り大会終わってから機嫌悪いよねー」

「関係ないったらないのっ！　あんな恥ずかしい思いしてまで勝てなかったからやりきれないとか、そういうんじゃないもん！」

この子は本当に正直だぁ。将来大丈夫かな。私的には可愛いからいいけど。

「まぁまぁサユカン、例のことはバッチシだから機嫌直して」

「む……ほんとはわたし自身が」

「そこをあえて私がいくからドッキリ狙えるんじゃん」

「なんのこと？　カカちゃんサユカちゃん」

「んー、サエちゃんにも内緒だね」

「サエすけにもいずれわかることよっ」

サエちゃんに隠し事はあまりしたくないけど、どうせすぐにわかる話だし、よしとしよう。

「さっ、それはそれとして宿題するよカカすけサエすけ」

「サユカちゃんてほんと、そういうとこマジメだよねー」

「ほんとほんと、マジメマジメ。やれやれ」

「マジメで悪いか！？」

「「悪いに決まってる」」

「誰が決めたの！？」

「「テンカ先生」」

「先生よりわたしの方がえらいっ！！」

お、おお……なんかヒートアップしすぎたせいか、すごいこと言ったサユカン。

サユカンも自分で「何言ってんだろわたし」みたいな顔してる……これも可愛い。

「とにかく始めるわよっ。各自でドリルやって、わからないところは得意な人に教えてもらおう。カカすけは何が得意？」

「ケンカ」

「そんなドリルないわっ！　というかあってたまるかっ！　サエすけは何が得意？」

「笑顔かなー」

「笑顔のドリルってなに！？　小学生は笑顔も習わなきゃならないのかっ！？」

どうなる２１世紀。

「はぁ……もういいや。適当にやって、適当にできそうな人に聞こう。次の日曜日にはトメさんに海連れてってもらうし、まだまだ遊

ぶ予定がいっぱいなんだから。さっさと宿題終わらせるわよっ」

というわけで、数十分が経過。

「ねぇサユカン」

「なにカカすけ。なにかわかんないことあった？」

「うん。ドリルって男のロマンって言うじゃん。だから男子だけにやらせてればいいと思わない？」

「それドリル違いだから」

数分経過。

「ねぇ、サユカちゃん」

「なにサエすけ。どこかわかんない？」

「トメお兄さんのどこが好きなの？」

「そこはわかんなくていい」

数分経過。

「ねぇサユカン」

「……なによカカすけ。何がわからないの」

「なんで宿題なんかしなきゃなんないの？」

「わたしに聞くなっ、先生に聞け」

「テンカ先生はしなくていいとか言うし」

「……ほんとに先生かあの人」

数分経過。

「ねぇ、サユカちゃん」

「……なによサエすけ」

「私たちって、なんで生きてるんだろう？」

「知るかあああっ！　なに、そんな問題がドリルに書いてあるの！？　そんな重い問題が書いてあるわけ……」

怒鳴りながらサエちゃんからドリルを奪うサユカン。

「あるし！　なにこの『あなたは何のために生きていますか？』っていう問題!?　いったい何のドリルよっ」

叫びながらドリルの背表紙を見るとそこには……『人生ドリル』と書いてあった。

「……サエすけ、なにこれ」

「さっき本屋さんで買ったの」

「君、やる気ないでしょ」

「こんな暑いのにやる気なんかあるわけないでしょー」

にっこりと、いつもの笑みでキッパリ言うサエちゃん。黒いこと言うのに可愛いから困ったもんだ。

「ほんっとにもう、みんな暑さにやられすぎよ、カカすけもやる気ないしっ」

「というかさ、サユカンなんでそんなテンション高いの」

「暑いからよっ！」

あんたもやられとるがな。

結局、宿題はほとんど進まなかった。

## カカの天下１６３「暑い熱い勉強会」（後書き）

ま、勉強会というか宿題会ですが細かいことは気にせず＾＾響き重視っ。

夏休みの宿題って面倒でしたけど、今となってはいい思い出……でもないかな？　大したことしてないし。

自由研究とか、もっとおもしろいことすればよかった……

# カカの天下１６４「カカサエサユカ、無敵説」

「あれ、あいつらってうちのクラスの」

「あ、ほんとだー。なにやってるんだろ」

「なんか……ケンカしてるみたいねっ」

どうも、カカです。

夏休みまっさかりの私たちカカサエサユカの三人は、愛すべきアイスキャンデーを食べながら散歩中でした。

ん？　『あいす』って別にシャレのつもりはないよ。

「どうするー？　カカちゃん」

「行っておけば？　番長」

「番長言うな」

そして散歩中に出くわしたのが、我が貴咲小学校のグラウンドでのトラブルでしたとさ。

「ここは俺たちの場所だぞ！」

「るっせぇなぁガキども。ケチなこと言ってんじゃねぇよ！」

片方は私と同じクラスの……えっと、確かタケダとかいう男子と

運動好きグループ。

そしてもう片方は……多分この近くの中学生。制服見たことある。ダサ。

「どしたの、タケダ」

「おぉカカ君！　ついに名前を覚えてくれたんだね！？」

相変わらず暑苦しいなぁこの人。

「タケダ君、それどころじゃないんじゃないのー？」

「おぉぉサエ君！　君まで来てくれるとは心強い。聞いてくれ！」

「わたしもいるんだけど……」

話を聞いてみると、どうやらうちの小学校のグラウンドを中学生グループが勝手に使っていたそうだ。

そしてサッカーをしようと遊びにきたタケダたちがそれを見つけ、「ここは俺たちの場所だ！」と文句を言い、口ゲンカになったというわけだ。ガキだね。

「んー、でもあんたら後から来たんでしょ。別に早いもん勝ちってことで使わせてあげればいいんじゃない？　細かいこと言わず」

私があっさりそう言うと、タケダたちは弱気な顔になった。

別に授業で使うというわけじゃないし、先に使っていたのなら譲

ってあげるのが思いやりの心というものだ、うんうん。

「ば、番長がそう言うなら……そうするか？」

「えー、じゃ俺たちどこで遊ぶんだよ！」

もめ始める男子連中。

「ていうか普通に番長とか言うな」

「まぁまぁ、番長もそう言ってるしー」

「だからさっ、サエちゃん！」

「譲り合いの精神は大事だーってエライ人は言ってるよ？　そう言う人に限ってできてないけど」

「裏番長もこう言ってるぜ？」

「裏番長とか言うな～」

「別にここでしかサッカーできないわけじゃないでしょ。手間かかるけど他の場所さがしなさいよ」

「番長の子分も……」

「誰が子分か！？」

そんな感じでわいわい騒ぎながらも中学生に譲る方向に落ち着いてきたとき……私たちの会議に待ちくたびれたのか、中学生のリー

ダーっぽい人が声をかけてきた。

「おいチビスケども。さっさとどっか行けよ。いいかげんにしねぇと痛い目見るぞ？」

……チビ、スケ？

カチンときた。でも私は大人。せっかく穏便に片付きそうなのにわざわざ荒事にする必要はない。落ち着け私。

「はいはい、先に来た方に譲るよ。こういうのは基本は早いもの勝ちだし」

なるべく下手にでて私が言うと……リーダー野郎は笑った。

「はっ、違うな。早いもん勝ちじゃねぇ、強いもん勝ちだ。てめぇらみたいな腰抜けのガキどもはさっさとおうちに帰ってママのおっぱいでも吸ってろ」

「はっはっは！　いいこと言うぜタクマ！　たしかにガキにはおっぱいがお似合いだ！」

「お似合いっつってもそのガキどもには無いけどな！　三人とも見事にぺったんこだぜ！」

「当たり前だろ小学生なんだし！」

下品な笑いが聞こえる。

ああ、聞こえた。

プチンって音も聞こえた。こめかみのあたりで。

前言撤回、私は子供。

私は言った。

「思いやりの心、ポイ」

サエちゃんは言った。

「譲り合いの精神、ポイ」

サユカンは言った。

「手間、ポイ」

私はタクマとか呼ばれていたリーダー野郎に宣言した。

「じゃあサッカーで勝負！　勝った方がここを使う！　負けたほうは二度と使わない！　いいね！」

中学生たちは馬鹿笑いしながら、あっさりと勝負を引き受けた。

相手は私たち小学四年生。楽に勝てると思っているんだろう。

「か、カカ君！　そんなことを言って……君、中学生に勝てるほどサッカーうまかったか！？」

「それほどうまくないよ。でも必殺技あるし」

「ど、どんな？」

私はサエちゃんとサユカンにこれからの作戦を一言で伝えた。

「デッドボールだよ」

「それ、野球……」

野球だったら反則。

サッカーだったら……ただの事故なんだよね。

きん！　キン！　金！　金！！！！！

数分後。

グラウンドには股間を押さえてうずくまる男たちの涙が光っていた。

「こ、こんなの反そ……」

「シュート！」

「ぎゃわん！！？」

ゴールキーパー（最後の一人）の股間にデッドボールを決めた私は、笑顔でサエちゃんとサユカンに振り返った。

「ナイスアシスト！」

「「イェイ！」」

パシン！　とハイタッチを決める私たちは無敵だった。

「な、なんなんだ、あの三人……恐ろしいほど、息合ってたぞ……いたぃよぅ」

「あのちっこい女……男の股間に恨みでもあるのか……まるで親の仇のように」

「パス回しが絶妙すぎる……三人で一匹の獣のようだったぞ！　さすがカカ君たち！」

「俺たち、何もできなかったな」

「番長トリオ、おそるべし」

……あら、また変な伝説作っちゃった？

## カカの天下１６４「カカサエサユカ、無敵説」（後書き）

いますよねー、妙なことだけうまい人って。
カカもその類です。サッカーは自体は並、でも回し蹴りとデッドボールだけはうまいのです。
これも姉拳法の賜物か。
それとも単に性格のせいか（多分こっち

## カカの天下１６５「テーマはもちろん？　そのいち」

「作品発表会！」

「……はぁ」

どうも、トメです。

帰ってきた途端、妹のカカにパンパカパーンなポーズをとられ、僕はポカンとしてます。ポカパカパーンです。

「トメ兄、なんでそんなマヌケな顔してるの」

「……いや、帰ってきた途端パンパカパーンされたらそりゃ呆気にとられるさ」

「パンパカパーン！」

「や、だからワケわからんて」

「だから発表会なんだって」

「だから何を」

「夏休みの宿題の工作だよ！　そんなこともわからないの？」

「今の流れでわかるやつはいないぞ」

と、夏休みの工作と聞いて思い浮かぶことがあった。先日の移動

する『愛媛みかん』さんのことだ。

「もしかしてあれか。こないだ台所に散らかってたダンボールのやつか」

「そうそう。紙粘土とダンボールを合わせて貯金箱をつくったの」

ほう、ダンボールと紙粘土か。それはおもしろそうだ。

台所を使ったのも紙粘土なら納得がいく。水場が近くにあるとやりやすいんだよな、あれ。

「さーさ、トメ兄。どうぞこちらへ」

というわけで、僕は居間へと案内され、テーブルの前に座らされた。

目の前には新聞紙をかぶった物体X。

「ではでは、オープンしまーす。こちらがカカ氏の作品です！」

カカ氏って自分で言うなよ。カカシに聞こえるぞ。

なにはともあれ謎の物体Xの正体が暴かれた。

「これは……ほわっつ？」

謎の物体の正体は……見る限り謎のままだった。

「貯金箱だよ。テーマがあるんだけど、なんだと思う？」

何って……ナニコレ。

解説すると、紙粘土で作られた球体から、はさみで切られただろう細長いダンボールがぴょん、ぴょん、とはみ出ている感じ。紙粘土の球体には所々ボツボツした部分がある。

「身近にあるものだよ」

「わかった、カカだ！」

「どこがさ」

「謎な部分が」

「違うよ、トメ兄だよ！！」

ちょっと待てや！

「それこそどこがだ！？」

「紙粘土の部分が茶碗に盛られたご飯で、ダンボールの部分が「なんでやねん」っていうツッコミの手だよ！」

「カカにとっての僕はご飯とツッコミでしかないのか！？」

「当たり前でしょ！　他に何があるの！？」

……否定できねぇ。

「というわけで、これは夏休みの宿題だからね。壊さないでよ」

「わかったわかった……じゃ、おまえがカカシになって壊されないように見張ってろ。ってあれ、総理大臣だ」

『愛媛みかん』の噂をすればなんとやら。近所のセイジ食堂で飼われているネコが、いつのまにか居間の隅に座っていた。

「どこから入り込んできたんだろ」

「私がこないだ大臣専用の出入り口作ったから、そこからじゃないかな」

「作ったって、どこに」

「トメ兄の部屋」

「どこだよ!?」

早急に探さねば……ヘタに出入り口なんか作られたら、総理大臣だけじゃなくて他のネコとかヘビとか姉とか入り込んでくるかもしれない。

「あ」

「ん？　どした」

見るとカカは放心したようにある一点を見つめていた。

その視線をたどると、そこには……総理大臣のネコパンチにやら

れたカカの貯金箱の無残な姿が。

あーあ、カカシあったのに意味なかったか。

「と、トメ兄が死んだあああああああ！」

待ちんしゃい、そこの小娘。

「あぁ……トメ兄が……割れた」

「僕が割れたとか言うなっ、なんか怖いから！」

「はぁ……トメ兄また作り直しかぁ」

「だから、さも僕のことみたいに言うのやめてくれる？」

僕の抗議を微塵も聞いていないカカは、突然ポン、と何か思いついたかのように手を打った。

「そうだ、どうせ同じトメ兄なんだし」

壊れた貯金箱の口部分を拾ったカカは、そのプラスチックの口を……座っている僕の口に押し込んだ。

「よし、トメ貯金箱リターンズ完成！　これを提出すれば」

「プッ！」

「わ、きたなっ！」

ま、せいぜい頑張って作り直せばいいさ。

僕以外の材料使ってな。

## カカの天下１６５「テーマはもちろん？　そのいち」（後書き）

一応続きものです。書くのはもう少し後ですが。
と言っても大した伏線はありませんけどね（笑）まだ作品を発表してない子たちがいるってだけで。
ちなみに、今回の話でやりたかったことは……
プッ！
これだけです（ぇ

## カカの天下１６６「本物の鬼は誰だ」

「カカちゃんが鬼だー！」

「にげろーっ！」

ども、サエちゃんとサユカンに逃げられてる鬼のカカです。

あ、本物の鬼じゃないよ？　鬼ごっこの鬼ね。

今日も今日とて暑いけど、元気な子供な私たちは近所の空き地で鬼ごっこして遊んでいます。

「赤鬼だー」

「赤って言うなー！　タッチ！」

サエちゃんが鬼だ。

「逃げろー、サエちゃんが鬼だー」

「黒鬼だっ！」

「黒いって言うなー……えっほ、えっほ」

基本的に運動神経のないサエちゃんだけど、私と遊ぶようになってからはだんだんと走るのが速くなってきた。

「うわぁ！？　サエすけ！　ボール投げるなっ、危ないでしょ！」

「はい、タッチ」

そして足りない部分は頭脳でカバー。サエちゃんがどこからか取り出したボールの襲撃でサユカンが怯んだ隙に、見事タッチ。

「サユカンが鬼だー！」

「色鬼だー！」

「ちょっと待て！　なんかわたしのだけ違くないか!?　なにその新種っぽい妖怪！」

「そんなに喚きたてて……サユカン、私になんかようかい？」

「カカちゃん、おやじだねー」

う、うるさいなっ、トメ兄の真似しただけだよ！

そんな感じで楽しく遊んでいたんだけと……ふと、空き地の入り口からこっちを覗き込んでいる顔に気がついた。

「あれ、お姉。どしたの」

「やっ、カカちゃん！　ちょっといいかな」

一旦鬼ごっこは中断。サエちゃんとサユカちゃんも一緒に、姉のもとへ集まった。

「ちょっと怪しい人を探してるんだけどさ、見てないかな」

「目の前にいる」

「ん、ああ。あたし……の瞳に映ってるカカちゃんのことか。ダメだよー自分のことそんな風に言っちゃ」

「ダメだよー、自分がどういう風に見られてるのかちゃんと自覚しないと」

あっはっは、と和やかに笑う私と姉。

「ほんと仲のいい姉妹だねー」

「サエすけにはそう見えるのっ？」

「やだなーサユカちゃん。私たちだって似たような会話してるじゃないのー」

「……そういえばそっか」

外野の会話は置いといて、私は話を戻そうと思う。早く色鬼ごっこの続きしたい。

「で、なんでその怪しい人を探してるの？　というか誰それ」

「シュー君が護送中にうっかり逃がした殺人犯」

「あの警官は何をやってるの！？」

「仕事してるんだよ、犯人を追っかけるっていう。自分で作った仕

事だけどねーあっはっは」

笑い事じゃないしっ！

「それで、あたしが例によって手伝ってるってわけ。あんたたち見なかった？　この暑いのに革ジャン着て、帽子かぶってグラサンしててマスクしてて息が荒い男」

「わっかりやすい姿してるねー。でもそんなの見てないよ」

「わたしも気づかなかったです」

「私見たよー」

ほらね、そんな怪しい人近くにきたらわかるだろうし、ここら辺には来てないんだと思うーって見たのサエちゃ！？

「そこの土管の中に隠れてる」

しかも近っ！

「へぇー……土管の中に隠れるなんてどんなスーパーなマリオさんなんでしょうねー……くっくっく」

私たちの会話を聞いていたのか、土管の中にいた男はあっさりと姿を現した。

「帽子だけはマリオっぽいね」

「やかましい！　このガキどもが……せっかくこっそり隠れたのに

バラしやがって！」

男は興奮しているのか、ハァハァと教育に悪そうな荒い息で私たちを睨む。

そしてそれと対峙するのは、不敵な笑みを浮かべている無駄に頼もしい我が姉。

「俺ぁなぁ、五人も殺してるんだ！　今さら一人や二人、増えたところで構やしねぇんだぜ？」

「たったそれだけでいばるな！　あたしなんか――」

「張り合うなバカ姉！！」

スパーン！　とトメ兄直伝のツッコミを放つ。あんた一体何人…いや、聞くのはやめとこう。こあい。

「と、とにかくてめぇら、おとなしきゅごべ！？」

急に奇声をあげてうずくまる男。

ま、急でもないんだけどね。

「おー、カカちゃん腕あげたね。師匠として鼻が高いわ」

「あげたのは脚だけど」

解説しよう！　私と姉が漫才をやってる隙に、サエちゃんが地面に転がってたボールをさりげなくこちらに蹴ってよこした。そして

それをシュート！　男の弱点にデッドボール！　というわけだ。

この技もうカンペキ。見た目は子供の頭脳は大人な名探偵のキックも目じゃないね。

そして犯人は後から駆けつけたシュー君（役立たず）によって無事逮捕され、姉の監視のもと、きちんとしかるべきところへ送られましたとさ。

そして私たちの色鬼は……

「タッチ！」

「あぁん♪」

「変な声出すな！」

「だって色鬼ごっこだし」

こんな感じで楽しく続きましたとさ。

## カカの天下１６６「本物の鬼は誰だ」（後書き）

果たして姉の職業ってなんなんでしょうねぇ。
父と同じくらい謎かもしれません、って作者の私が言っててどうするんですかね＾＾；
暑いときこそ走りまわるのが子供です。
そして暑かろうが寒かろうが走らないのが大人です。
悲しいですねぇ（ぇ

# カカの天下１６７「吸血鬼サカイさん？」

こんにちは、トメです。

最近ムカつくほどに晴ればかり続いている空は、やっと日が落ちかけてきたところだ。倒れる人が続出しそうな殺人的陽光が薄らいで、僕の会社帰りは少しだけ快適だった。

暑いことには変わりないが、程よい風が身体を涼めてくれるのだ。うん、夏って感じ。

そんな夕方に近い時刻。ふと地面を見るとセミの死骸が転がっている。

命短し、か。これも風流だねぇ。

その横に人が転がっている。

風流だねぇ。

……風流？

ちょっと待て。地面に人が転がってる光景が風流だなんてどこの戦場の話だ！？

「ちょっ！　大丈夫ですか！？」

僕は慌てて倒れている人に駆け寄った。

身体に負担がかからないように気をつけながら、そっとその身体を起こすと……

「って、サカイさん！？」

「……ぅ、あれ、トメさん？」

薄らと目を開けたその人は、紛れもなく近所の引きこもり（改善中）のサカイさんだった。

「どうしたんですか！？」

「ぁ……あの、ですね」

「とにかく家に！」

僕は今にも意識を失いそうなサカイさんを背負い、自分の家に駆け込んだ。

カカはまだ帰ってきていないようだった。

サカイさんを居間に運ぶ。急に倒れたようだったから心配だったけど、水を飲ませてあげたらすぐに元気になったようだ。

大したことないみたいでよかった……

「ふぅ……ありがとうございます……おかげで助かりましたー」

「いえいえ。でもどうして急に倒れたりなんかしたんですか？」

「はいー……多分、日光に当たったからじゃないかとー」

は？　日光に当たったから倒れるなんて、そんな吸血鬼じゃあるまいし。それもこんな夕方に近い時間の日光に……

「普段はまったく浴びませんからー」

「い、いくらインドアなサカイさんでも……最近は頑張って働いているんでしょ？」

「はいー。パートをなんとか続けてますー。でもそこは室内ですしー、クーラーが効いてますしー」

「……会社まで移動するときは日光浴びるでしょ」

「移動はクーラーをガンガンにかけた車ですしー、外へ出るときは日傘さしてますしー」

「そこまで徹底するとほんと吸血鬼みたいだねサカイさん」

「わたし、日光と暑さに弱くて……トメさんの血を吸えば強くなります？」

「なりません！！」

ちょっとイケナイ妄想が浮かんだけど却下！

にしてもインドアにも程がある。クイーンオブインドアだ。略し

てイーンインだ。変なの。

「今日は会社に車と日傘を忘れてしまってー」

「日傘はともかく車忘れるってなに!?」

「歩いて帰ろうとしたらポックリといっちゃったんですー」

「いやポックリ逝っちゃったらダメだから!?」

……久々に話したけど、そういやこんな人だったなぁ……サカイさん。

「歩いて帰れるって、会社って近いの?」

「車で三分ですー」

「近っ!? それで車? しかもその距離で倒れるの!? やっぱサカイさん、あまりに引きこもりすぎて吸血鬼になったんじゃ」

「あらー、引きこもってると吸血鬼になるんですかー?」

「へ、いや、そんな素の顔で返されても」

「じゃあ今の世の中は引きこもりでいっぱいですから……ホラーな社会になりますねー」

そらー厄介な社会問題だ。なんとかできるのか政治家たちよ。ガンバレ。まずは吸血鬼を倒せるように身体を鍛えるのだ。ムキムキ政治だ。

「それはいいとして」

「いいんですかー？　吸血鬼社会。みんな血をちゅーちゅーですよ」

「流そうとしてるんです」

この人わかってて言ってるのか素なのか、ほんとどっちかわからん。

「あ、わかった。カカちゃんに吸ってもらいたいんでしょ。本当に男の人って妹萌えな人が多いんですねー」

「なんでそうなる！？」

あと萌えってなに！？

あ、こないだカカが言ってたっけ。たしか何とも言えない感情だっけ。

カカに血を吸われる？　噛まれて？

どこを噛まれて？

……や、ほんと何とも言えない。

言うわけにはいかない。

僕がいま何をどう思ったかは誰も聞くな。

「トメさん、顔赤――」

「じゃかあしい！　ともかくサカイさん。そんな近いんなら会社まで送りますよ。うちの傘使ってください。日傘じゃないですけど、この時間なら普通の傘で充分日よけになるでしょ」

「ありがとうございますー」

というわけで、サカイさんと僕は外に出た。晴れてるのに傘をもって。うーん、変な気分。

「トメさん、吸血鬼って日光に当たると灰になるんですよねー」

「そういう伝説もありますね」

「きゃー！！　いやー！！」

「ど、どうしました」

「ハイになってみましたー」

「はよ歩け」

僕の周りってダジャレ好き多いなぁ。

僕？　大好きですが何か。

## カカの天下１６７「吸血鬼サカイさん？」（後書き）

人間、たまには日光浴びないとダメですよね＾＾；
久々に登場のサカイさん、見えないとこで頑張ってます。

さて、次回は海の話です。リアルの私も明日海いきます、バーベキューです。
泳ぎません。食べるのみです（ぇ
あ、もちろんトメたちは泳ぎますよ（笑

# カカの天下１６８「海から見ればそんなもん！　前編」

「おー、水着だ！」

「まっさきにそれか……カカ、おやじくさいぞ」

「じゃあなんて言えばいいのさ」

「普通は最初に『海だ！』って言うもんだ」

「海だ水着だ！！」

「水着ははずせないのな」

どうも、テンション高いおやじなカカの兄、トメです。

今日は先週の約束どおり、カカたちを連れて海に泳ぎにやってきました。

「カカちゃん、水着姿好きですからねー」

「プールでも女の子ばっか見てるし」

……大丈夫かコイツ。女の子的にも世間的にも。

「はいはいっ！　アブノーマルなのはうちの家系上、仕方ないことなの。だからそんな話題は放っておいて、さっさと着替えておいでー！」

パンパン！　と手を叩いて仕切る声に従って、三人の女子はそそくさとでっかい車の後ろへと潜り込んだ。

下に水着を着てくるように言ってあったので脱ぐだけなのだろうが、一応見えないところへ行くのは気分というものだ。

「……どこの家系がアブノーマルだって？」

「うちら」

「アブノーマルなのは僕以外だ！」

「そう言う人に限って自分が一番アブノーマルなんだよね」

やれやれ、と癪に障る笑みを浮かべているのは……呼ばれてないのについてきた、というかそもそもどこから話を聞きつけてきたのか不思議でならない我が姉その人である。

「……うちに来た時点ですでに水着姿だったあんたに言われたかないわ」

天下の往来をそんなパッツンパッツンの水着姿で……捕まるぞ。まぁシュー君は捕まえるどころか狂喜乱舞しそうだけど。

「お、なに。欲情した？」

無駄にセクシーポーズをとる姉。

鍛えられているため無駄な脂肪はなく、そして出るところは出ている姉は確かにスタイルはいい。だがしかし……

「例えばだ、姉」

「ん？」

「アリが恐竜に欲情すると思うか？」

「……しないだろうね」

「そういうことだ」

「あんたの中であたしはどんだけ異種族なんだ！？」

「や、だからアリと恐竜くらいだよ」

「あたしは人間だぞ！」

「一応見た目はな。でもなんかほら、もし花火の代わりに空へ打ち出されても死ななそうなイメージあるんだよ姉は。冗談だけど」

「……確かに死ななかったけどさ」

「あるのか！　打ち上げられたことが！？」

「うるさいなっ、でもちょっと身体痛めたんだぞ！」

「……恐竜だ」

「恐竜って言うな！　せめてドラゴンと言え！」

「ドラゴンならいいのか」

「格好いいじゃん、火吹くし。あと酒とライターあれば火吹けるしね、あたし」

長い付き合いだけど、この人の思考回路はほんとわからん……

「吹こうか？」

「飲酒運転なるからやめれ……そういやこの車って」

「サカイちゃんのよ？」

「……サカイさん本人は？」

「こんな暑いとこ来たら死ぬよあの子」

「免許は？」

「サカイちゃんは持ってるよ」

「あんたは！？」

「お、ほらほら」

姉と無駄話しているうちにチビどもの着替えが終わったようだ。

……この件はあとでちゃんと追求しておこう。

「よし、泳ぐぞぃ」

一番に飛び出してきたのはカカ。新調した赤いリボンつき水着が小柄な身体によく似合っている。やっぱ見た目は可愛いお子様だな。中身は怪物だけど。

続いてサエちゃん。最近の傾向として黒い水着かと思ったが予想外。ワンピースタイプの紺色の水着……って、スクール水着!?

「サエちゃん……水着それしかなかったの？」

「いえー、他にもありますよー」

「じゃ、なんで」

「狙ってみました」

何を!?

「さてさて、お次はサユカンの登場！」

カカが妙にニヤニヤしてるのはなんでだろう、という疑問はすぐに氷解した。

「ど、どもっ！」

なぜか改めて挨拶してきたサユカちゃんが着ている水着は……この間カカの水着を買いに行ったときに僕が「サユカちゃんに似合いそう」と言った水着そのものだった。

「あー……っと」

カカのやつ……やってくれたな。

「あれだ。うん、似合ってる」

思ったことはいろいろあったけど、とりあえずそれを真っ先に言うべきだと思った。

サユカちゃんは嬉しそうにはにかんだ。おー、真っ赤になって可愛いのー。

僕と喋るときはいまだにガチガチなとき多いけど、やっぱ嫌われてはいないんだよな。

「赤くなって可愛いねサユカン！　そんなにトメ兄に気に入られたいのー？」

「べ、べべべべ別に全然まったくそういうわけじゃないわよ！　こんな水着見られてるのが恥ずかしいだけでっ」

「さ、サユカちゃん、カカの冗談にそこまでムキにならなくても」

「見ないでください来ないでください恥ずかしい！　大体これはカカがむり、やり……」

サユカちゃんが「しまった」という感じにこっちを見る。

周りの人（なぜか通行人も含む）は「あちゃー」と頭を抱えた。

嫌われて……ないんだよね？　僕……

なんかまた自信なくなってきた。

「と、ともかく海だよ海！」

「そ、そうですよー。楽しみましょー！」

「ほらほら二人ともショボンとしてないでっ！　敵はすぐそこだぞ！！」

……そうだな。なにはともあれ、海だ。

カカの親友だし、話す機会も多いんだから……サユカちゃんとも仲良くしたいんだけどなぁ。

すごい勢いで拒否されてちょっと凹んだけど。

ちょっと、頑張ってみるかな。

## カカの天下１６８「海から見ればそんなもん！　前編」（後書き）

さ、海編です！

楽しい海水浴になるかと思いきや……やや微妙な滑り出しとなりました。めずらしくサユカちゃんに歩み寄ろうとするトメ！　果たしてサユカちゃんはどうするのでしょうか……次回に続きます。

## カカの天下１６９「海から見ればそんなもん！　サユカ編」

「はぁ……やっちゃった」

「ほらサユカン、気を落とさないで……」

「そうだよ、サユカちゃんが勢いで失敗するのなんていつものことじゃないのー」

「そうよね……いつもよね……」

「サエちゃん！」

「ごめん、しまったー」

はぁ……とため息ばっかのサユカです。

今日はみんなと海へお出かけ。トメさんが似合うと言っていた（というかカカすけに言わせたんだけど）水着を着て、うきうき気分だったのに……

またまた緊張のあまりに混乱しちゃって……心にもないこと言っちゃった……

きっと……嫌われちゃったよね……

「あ、あのさサユカちゃん」

もうトメさんの顔を見れないよっ！

「サユカちゃんってたしか泳げなかったよね」

もうトメさんの声も聞こえないよっ！

「もしよかったら僕が教えて――」

「カカすけ……泳ぎ教えて」

「……へっ!?　あ、いや、でもその……ええ?」

なによぅ……なんでそんな福笑いみたいな複雑な顔してるのよぅ……

「なに、わたしの後ろに背後霊でもいるの?」

「えっと、それに近いものが……」

「そんなのいるわけないでしょ……いこ……」

はぁ、落ち込みすぎだよわたし……

「あーっと……サエちゃん、そっちお願い」

「いえっさー」

二人が何か言ってる……けどどうでもいいや。

トメさんは……ダメダメ！　今はトメさん禁止！　あんなこと言っちゃったわたしにトメさんを視界にいれる権利なんてないんだわ

っ！

「わたしって……最低」

はぁ……海は広いなぁ……

あ、カモメが飛んでる。

自由でいいなぁ……

あ、それを捕まえようとトメさんのお姉さんが跳んでる。

バカはいいなぁ……

「サユカン、大丈夫？」

「あんまし……ううぅ」

カカすけに連れられて海の中に入りつつ、わたしは情けない声で答えた。

「あんなひどいこと言っちゃって、トメさんも怒ってるよね」

「や、怒ってたらあんなことは言わないと思うけど……」

「あんなことってなに？　トメさん何か言ってたの？」

「聞こえてなかったの？」

「トメさんの声を聞くなんて……そんな、そんな勇気ないわよおおおおお！」

「どんだけ偉い人なのさトメ兄は」

「わたしの神様……ほら、さっさと教えて」

「でっかいなートメ兄。じゃまず、こないだのプールのときみたいにバタ足で」

手始めのバタ足練習で、カカすけの手に引かれながらちょっとずつ進んでいく。

う、口に水はいった。しょっぱい……な、涙の味じゃないんだからねっ！

「だいたいさー、トメ兄を誰のお兄ちゃんだと思ってるの、私のだよ？」

「ぶくぶくぶくぶく」

それがどうしたのよー、と口を水につけながら言ってみる。

「私みたいなじゃじゃ馬といつも一緒にいるトメ兄が、たかがあんな言葉でサユカンみたいな可愛い子を嫌いになるわけないでしょ？」

「ぶくぶくぶくぶく」

全然可愛くないもん、可愛かったらトメさんだって……とぶくぶく言ってみる。

「サユカンは気にしすぎなんだよ。だからさっきもトメ兄はサユカンに気を使って、泳ぎを教えようかーって言ってくれたのに」

「ぶくぶ!?」

まじで!?　とぶくぶく言ってみる。

と、トメさんが教えてくれるって……海で、二人っきりで、つきっきりで!?

「だからさ、トメ兄はサユカンのこと怒ってなんかいないよ。なのにサユカンたら気にしすぎて、せっかく二人だけになれるチャンスを逃しちゃって……」

「ぶくぶくぶくぶく!」

じゃ、じゃあ今からでも!　と勢いこんでぶくぶく言ってみる。

……あれ。

カカすけ、なんでそんなにんまり笑ってるの?

「サユカン……元気でたね?」

「ぶ、ぶくぶく」

お、おかげさまで出たけど……

「じゃ、私と心ゆくまで遊ぼうね」

「ぶくぶく!?　ぶくぶく……」

え、いや!?　わたしはトメさんと二人で……

「だめ、なんかチャンスとか自分で言っててムカついてきた」

なんで!?

「ほーら泳いでこっちまでおいで」

「ぶくぶくぶくぶく!?」

いきなり手を離すなぁ!!

ぶくぶくぶく……

それからしばらく、わたしはカカすけのおもちゃになっていた……

トメさんに教わるチャンスは逃したけど、わたしはホッとしていた。カカすけの言葉を聞く限り、どうやら嫌われてはいないみたいだったから。

「見ないで」とか「来ないで」とか、ひどいこと言っちゃったの

は変わりないから会わせる顔がないのは変わりないんだけど……

でもカカすけ、なんでムカついてたんだろ。

## カカの天下１６９「海から見ればそんなもん！　サユカ編」（後書き）

ちょっとだけ元気を出したサユカちゃん。でもまだ復活とは言いがたいですね。

そのころトメはどうしていたのか……次回はトメ編です＾＾

にしてもカカって自分で自分をじゃじゃ馬ってわかってるんですねぇ。

## カカの天下１７０「海から見ればそんなもん！　トメ編」

「サユカちゃんってたしか泳げなかったよね。もしよかったら僕が教えて――」

「カカすけ……泳ぎ教えて」

はぅあ！？

……どうも、ただいまサユカちゃんに露骨に拒絶されてしまったトメです。

現在、カカたちを連れて海へきているのですが……来て早々トラブルです。

なんかよくわかんないけど、サユカちゃんに嫌われてしまったようなのです……

「……へっ！？　あ、いや、でもその……ええ？」

そんななんとも言えない表情で僕を見るなカカ……

「なに、わたしの後ろに背後霊でもいるの？」

「えっと、それに近いものが……」

「そんなのいるわけないでしょ……いこ……」

ああ、僕の声など一切聞かぬと言わんばかりにスタスタ去ってい

くサユカちゃん……声をかけるときに差し出したこの手はどこへ持って行けばいいのか!?

今の僕の顔はおそらくカカが言ったとおり、背後霊のようになっているだろう……

「まぁまぁ、元気出してくださいトメお兄さん」

「サエ、ちゃん」

「サユカちゃんが意味不明なことを言うのなんて、いつものことじゃないですかー」

「そうだけどさ」

「あっさり頷きましたねー、いいですけど」

それでもあんな拒否っぽいことは言わなかったんだよな……うぅ。

「今のはサユカちゃんが恥ずかしがってただけですよー。ほら、今のサユカちゃんを見てください。後悔してるみたいでしょー?」

サエちゃんに言われて、遠ざかっていくサユカちゃんをちらりと見てみる。

するとそのときたまたま独り言を呟いたのか、サユカちゃんがボソッと漏らした声が聞こえてきた。

「（わたしって）……最低」

最低！？

僕が！？

最も底辺！？

……がっくし。

……あ、姉が回転しながら飛び魚みたいに跳ねながら泳いでる。

いいなぁ、姉は悩みとかなさそうで。

「トメお兄さん、元気だしてください。とりあえずこれでも食べて」

そう言ってサエちゃんが差し出してくれたのはイチゴ味のカキ氷。

所変わってここは海の家の食堂だ。落ち込む僕を元気づけようと、サエちゃんが連れてきてくれたのだ。

「んー、このメロン味はおいしいですよー」

「ん……そうだね、いただくよ」

お金払うの僕だけど。

「疲れてるときとか、ショックなことがあったときとか、ボロボロなときには甘いものに限ります」

「僕、そんなにボロボロ？」

「すぐにでも雑巾として使えそうなくらいボロボロですねー。あ、すいませーん、カキ氷の宇治金時を一つ」

「そうか……ああでも正直ショックだよ、子供に嫌われるっていうのは」

「んー、おいし。だからー、あれはサユカちゃんの照れ隠しですってー」

「……でも、いくら照れてるからって『来ないでください！』とか『最低』とか、言うか？」

「もしカカちゃんなら照れてるってだけで『今すぐその場で死ね』くらいは言いますよー。あ、すいませーんマンゴーシャーベット追加」

そりゃカカならそれくらい言うだろうけどさ……しかしよく食べるなサエちゃん。

「とにかく、サユカちゃんがトメお兄さんのこと嫌いじゃないのは親友の私が保証しますからー、懲りずにサユカちゃんにぶつかってくださいなー」

「でもそれでまた嫌がられたら」

「嫌よ嫌よも好きのうち、と言うじゃないですかー。すいませーん、フルーツパフェ」

「その理屈でいくと世の中に嫌なことは一切ない、ってことになるんだけど……いや、泣き言はこのくらいにしよう！」

恥ずかしくないのか僕は。小学生の女の子にこんなグチグチと。

「よし、もう一回サユカちゃんと話してみよう！」

「おー、よかった。元気でましたねー」

年長者として保護者として、いつまでも情けない姿は見せていられないし、なにより――あんまり長い間落ち込んでいるとここの会計がすごいことになりそうだ！

「じゃ、遊びましょうかー、パパ」

「……ぁぃ？　今なんとおっしゃいました？」

「パパですよー。今の状況からしてそう呼ぶのがいいかなーと」

今の状況？　なんだそれ。

今の状況って言ったら……僕（いい大人の男）が兄妹にしては似てない、しかもちょっと歳の離れた女の子（スク水姿）と甘いものをつついてる（甘いもので釣っているようにも見える）っていう、なんというか、海で小学生の女の子をナンパしてそのままお持ち帰りしようとする誘拐犯と間違えられてもおかしくない状況のことか。

「じゃ、いこー。パパ♪」

「ちょ、ちょっと待て！　その呼び方はその呼び方でなんかマズイ！　ほら、なんか周囲の視線が――！」

そんなこんなでドタバタしたけど、おかげで少し元気が出た。

ドタバタしてて元気出るなんて、トラブル製造機のカカで慣れてるせいかな。

や、しかしサエちゃんいっぱい食べたなーほんと……財布が……

ええい、泣くな僕！

泣くならサユカちゃんの問題で泣けっ！

## カカの天下１７０「海から見ればそんなもん！　トメ編」（後書き）

さて、トメもちょっと元気だしました。財布の中身と引き換えに。
次回、海編の後編です。なんだかんだ言ってちょっとしか元気でてないご両人。はてさてどうなることやら……
しかし色んな意味でおいしいなーサエちゃん。

# カカの天下171「海から見ればそんなもん！　後編」

どうも、カカです。ただいま海でサユカンと遊んでいたところだったのですが……

「お、浜辺にトメ兄たち見っけ」

「……うぁう」

たった今までいつも通りだったのに、トメ兄の姿を見ただけであたふたしてるサユカン。

ダメだこりゃ。

「サユカン、ちょっと待ってて」

私は先行して浜辺に向かって泳ぎ出した。

するとトメ兄と一緒にいたサエちゃんも何か察したのか、こちらに向かって一人で歩いてきた。

ちょうど海と浜の境目あたりで私とサエちゃんは合流する。

「サエちゃん、トメ兄はどう？」

「んー、ちょっとは元気でたと思うんだけどー」

「こっちもそんな感じ。どうする？」

二人の仲が微妙なままだとつまんない。

や、いい意味で微妙ならおもしろいんだけど……今みたいに居心地の悪いすれ違いをされていては、楽しい海水浴も台無しになってしまう。

「どうやったら仲直りするかな」

「ケンカしてるわけじゃないから謝るのも変だよねー」

「とにかく話してもらわないとね」

「何か共通の話題とかー、趣味とかー、そういうのがあればいいんだけど」

共通……共通……トメ兄とサユカちゃん……

あ、そうだ。

いいこと思いついた。

「第一回、息がどこまで続くか大会！」

どんどんぱふぱふー、と私とサエちゃんで適当に盛り上げる。

「ルールは簡単！　みんなで一斉に海に潜って、一番長く息が続いた人の勝ちです」

「みんなって……そういや四人しかいないな。姉はどした？」

「お姉さんならさっき、海の家の店員さんに焼きそばの焼き方を教えてましたよー」

「……なにをしとるんだあの人は」

「まぁまぁ、お姉ははずそうよ。あの人ならバミューダ海域に石のせて沈めても多分平気で帰ってくるよ。圧勝しちゃうよ」

ちなみにバミューダ海域っていうのは、たしか死の海とか言われて恐れられている場所だ。よく知らないけど。

「つくづくバケモノ、というかイロモノだな姉って」

「さぁさ、準備はいい？　あ、トメ兄それはずして」

「……む」

トメ兄の頭にあった水中メガネを奪い、いざスタンバイ。

さっきからサユカンは一言も喋っていない。トメ兄もそれを気にしてるようだけど……まどろっこしいなぁ、もう！

「じゃ、用意……スタート！」

合図と同時に、パチャン！　と一斉に水面に顔をつける。

私とサエちゃん以外は。

サエちゃんと目を合わせて、二人してにんまり笑う。

私たちはズルしている。でもばれない。

なぜなら……サユカンはもちろん、水中メガネをはずしたトメ兄も、水中で目を開けていられないからだ！

サエちゃんは私に手の平を見せる。じゃんけんのパー、じゃない。カウントだ。

五、四、三、二、一……

私とサエちゃんは水面に顔をつける、と同時にトメ兄とサユカンが「「ぷはぁ！」」と顔を上げたらしい声が聞こえた。ビンゴ。

「はぁ……はぁ……あ」

「あ、さ、サユカちゃんと同着かぁ」

あんまり深く潜ってないから水上の会話が聞こえる。盗み聞きしてるみたいでちょっとドキドキ。

「いやぁ、僕さ、水中メガネなしで潜るの苦手で……」

「あ、そ、そそ、そうなんですか、わ、わたしもなんだか怖くて……」

「は、はは」

「ふ、ふふ」

あー、ガチガチだなぁこの二人。

やっぱ失敗だったかなぁ……

……

……あれ？　なんか静かになった。

「海、広いね」

「広い、ですね」

「こうしてると、二人しかいないみたいだね」

「そう、ですね」

「……僕たち、ちっぽけだね」

「……そう、ですね」

ふぅー、と。

長い吐息が聞こえた。

それはまるで、リラックスして深呼吸したかのような……

「……しかし長いな、こいつら。カカはわかるけどサエちゃんまで」

「カカすけといつも一緒にいるから、サエすけの肺までカカ化して

きたんじゃないですか？」

「カカ化、そりゃ大変だ」

「カが三つもあって言いにくいですしねっ」

「ははは！　確かに。カカ化かー」

「カが四つになりましたよっ」

「もっと言いにくくなったじゃないか！」

楽しそうな笑い声が聞こえる。

なんかよくわかんないけど作戦成功だ！

だだっ広いところで二人きりになれば会話せざるをえないだろう、と思いついたこの作戦。

うまくいってよかった。

ただ……一つ、誤算が……

「ん、おい、なんかカカとサエちゃん……」

「もしかして……溺れてるっ！？」

この仲いい会話を聞いてると……ひっじょーに水面から顔を出しにくいということだ。邪魔するのが申し訳なくて。多分サエちゃんも同じだろう。

というわけで……ぶくぶくぶく……

急いで助けられた私とサエちゃんだが、少し頭痛が残っていたのでしばらく浜で休憩させられた。

……でも回復したあとはいつも通り、みんなで遊んだ。

トメ兄とサユカンはいつも通りの笑えるすれ違い。

サエちゃんはいつも通りその二人で遊んでる。

姉はいつも通りぶっとんでる。

ああ、楽しい。でも疲れた。

やっぱ気を使うのは性に合わない。

明日からは私もいつも通り、周りに気を使わせるとしよう。

「ところでサユカン、カカ化ってなにさ」

「あー、その……カッカッカ！」

「笑って誤魔化すな！」

「「カッカッカッカ！」」

「トメ兄も混ざるな！」

「「「「カッカッカッカ！」」」」

「合唱するなー！」

笑い声と潮の歌を聴きながら。

もう一回くらい、ここにみんなで来たいなと思った。

まだまだ、夏は長いのだから――

## カカの天下１７１「海から見ればそんなもん！　後編」（後書き）

海から見ればそんな問題ちっぽけなもんだ。
よくある話ですね。広大な世界を見て、自分や自分の問題がちっぽけに見えるっていうのは。そんなよくある話が結構好きなので、今回はカカたちに味わってもらいました。

悩むのも大事ですが、ふとしたときに肩の力を抜くことも大事ですよね。
自分がちっぽけだと思って落ち込むこともあれば、自分の問題のちっぽけさに気が楽になることもある。ほんと、海ってにくらしいほど影響力あるもんです＾＾；
にくらしいほど、と言いつつ大好きですけどね、海。

## カカの天下172「疲れた人での遊び方」

「おはよー。カカちゃん」

「おはよー……勝手に上がってきていいよー……」

「サエすけ……おはよ」

どうも、超ぐったりカカです。

「おじゃましまーす……あれ、死んでる」

「生きてるわよっ」

そう言いながらもサユカンは私の隣に寝転がったままピクリとも動かない。どうもトメ兄と仲直りしたあとにはしゃぎすぎたせいで、全身筋肉痛のようなのだ。

「サユカちゃん、この辺から魂が飛び出てるよ」

「んなわけあるか」

「でもお腹の辺りから白いのが」

「それは下着っ！」

「だらしないよー」

「……ごめんなさい」

「カカちゃんもこの辺から赤い魂がー」

「サエちゃん、それ洗濯カゴから飛び出てる赤いハンカチだよ。私の魂はなぜそんなところから飛び出すの？」

「洗濯されたのかとー」

「……洗濯しなきゃなんないの？　私の魂」

「したほうがいいよー」

「……覚えとく」

なんかもう限りなくグダグダです。

そう、私とサユカちゃんは昨日の海ではしゃぎすぎたので疲れが抜けきってないのです。身体おもひ。

「サエちゃんは元気だねぇ」

「あまり泳がなかったからねー。あ、カカちゃん。昨日は海に連れてってくれてありがとー」

「ん」

連れて行ったのはトメ兄とお姉だけど、私の一家に対しての礼儀ということだろう。サエちゃんはわざわざ深々とお辞儀してくれた。

礼儀正しいなぁもう。そういうとこ大好き。

「カカすけ。なにその……にへらっとした顔」

「ほっといて」

「サユカちゃんもごちそうさまー」

「へ？　なんでわたしにはごちそうさま？」

「おかげさまでおいしかったよ」

「だから何が！？」

サエちゃん、さてはサユカちゃんをダシにしてなんか食べたな。色んな意味でおいしいところをもっていく……そういうところもどうしようもなく好き。

「あ、そうそう。さっきテンカ先生に会ったんだけどー、明日トメさんと飲むんだって」

「なにぃーたたたた！」

驚きのあまり立ち上がろうとして失敗したサユカンは、筋肉痛に悶え苦しんでる。

「そうそう、なんとかしなきゃね、サユカちゃん……」

「な、なんで手をわきわきさせながら近づいてくんのサエすけ」

「わき？　ふふー、わきわき」

「へ、ちょっと、ほんとに脇をーってあはははっはははいたたたた！！」

いきなり脇をくすぐり始めたサエちゃん。笑いと痛みの嵐でサユカちゃんの顔はすごいことになってる。楽しそう。

「ははははっ、ははっはあたたったた！」

「サユカちゃんが壊れたー」

「壊してるのはきみぃひはははははったたた！」

「あはは、たーのすぃー♪」

ドタバタと逃げ回るサユカンと、それをわきわき追うサエちゃん。

「んー、明日かぁ。どうする？」

「もちろん後をつけるよー」

「ん、やっぱそうだね」

「はぁ……はぁ、ははははぁ……はぁ、はぁ……ちょと、にゃんでカカしゅけわたしのにげみちふしゃいでるの？」

「それはね、わきわきするため」

「ふふー、サユカちゃーん、わきわき」

「ちょと、おねがい、本気でやめ、やめ、やめてえええええええええ！！」

明日のことは明日考えよう。

とりあえず今は目先の面白いものに飛びつくのだ。

やー、たーのすぃー♪

## カカの天下１７２「疲れた人での遊び方」（後書き）

次回はトメたちの飲み会話。また前後編となりそうです。
うーん……最近は続き物が連続してるので、こういう単発話が恋しいです。カカラジの後はしばらく単発を続けようかと思います！

## カカの天下173「ミッション・イン・飲み会　前編」

「よう、トメ」

「こんばんは、テンカせんせ」

「堅苦しいなぁ。こっちがトメって呼んでるんだからそっちも呼び捨てでいいよ」

「んじゃ略してテンで」

「急にフランクになったな、まぁいいが」

フランクな感じのトメです。

今日はカカの担任であるテンカ先生と飲みにきました。テンカ先生、いやテンは歳も近いし話しやすいからノリでこんな約束をしたわけですが……別に他意はないよ？

格好いい女性とは思うけど、いかんせん格好よすぎて男友達と同じに思えるのだ。

「で、今日はここで飲むのか」

「おぅ、オレのいきつけだ。トメは酒強いか？」

「それなりには」

そんな会話をしながら入ったのは『病院』という居酒屋。なんと

も入りにくい名前である。というか居酒屋に聞こえない。これで結構流行ってるらしいのが驚きだ。

「いらっしゃいませ……おお！」

「テンちゃんが男連れてきた！？」

「なに！？」

「彼女じゃなくて！？」

入った途端に叫ぶ店主っぽい人と店員っぽい人とお客っぽい人。皆どんだけ常連なんだよ。というかテンは一応女なのに彼女ってどういう意味だ。

「あーうるせうるせ。いいから席通せ」

気さくに笑う店員に案内され、少し奥の席に通される。

「あ、そうそう。後からくる子らはちゃんとあっちの席に」

「あ、はいはいわかってますよー」

にしし、と笑いながら店員と話すテン。

「何の会話だ？」

「あ、こっちの話だから気にしなくていいぞ。とりあえず生ビールでいいか？」

「おう」

「ね、いいの？　こんなとこ入って」

「今頃この中でトメ兄とテンカ先生はらぶらぶげっちゅうだよ」

「ゆくぞものども！」

「二人ともー、ちょっと落ち着こうねー」

どうも、カカです。

ただいまトメ兄の後をつけていて病院にたどり着きました。

妙にお酒くさい病院です。そんなに消毒液をどばどば使ってるのでしょうか？

「だってさ、サエすけっ。とりあえず入ってみるしかないんじゃないのっ？」

「でも病院って書いてあるよー？　中で何してるのかなー」

「病院……お医者さんごっことか？」

あの歳で？

「いこっ！　続けサエちゃんサユカン！」

二人の手をひいて入ると、そこには病院のような雰囲気は欠片もなかった。

騒がしい店内、おいしそうな匂いとお酒の匂い。そして……

「「「いらっしゃい！」」」

店員はもちろんなぜかお客っぽい人まで合唱するこの妙な雰囲気。なんでみんなそんなニヤニヤしてんの。

「ご予約のお客さまですね、どうぞこちらへ」

予約？

わけがわからなかったけど、てっきり追い出されると思っていたから奥にいけるなら文句はない。私たちは困惑しながらも店員さんについていく。

そして通された席に座って……私たち三人は同時に気づいた。席を分けるすだれの向こうは……なんと、トメ兄とテンカ先生の席だった。

トメ兄はこちらに背を向けている形。そしてテンカ先生はすだれの向こうからこちらを見て――見てるしっ！？

「なにこれ、どゆこと？」

「サユカン、これはテンカ先生が仕組んだことみたい」

「……つまり、どゆこと？」

「挑戦されてるんだよ、サユカン！」

「そゆことかっ！　よーし、受けて立つ！」

「二人とも落ち着いてー」

「これが落ち着いていられるかっ！」

「そうだよ、サユカンのために！」

「落ち着いて静かにしないとトメお兄さんたちの会話聞こえないでしょー」

そう言いながらすだれに耳を押し当ててるサエちゃん。なんだかんだで一番聞きたいんじゃないの？

と、言いつつ私たち三人は仲良くすだれに耳を押し当てる。

そのとき。

「失礼しまーす。はい、オレンジジュースでいいですよね？」

「……あの」

「あ、サービスですからお気になさらず。どうぞ盗聴を続けてください」

「「「は、はい……」」」

ここどんな店なんだ？　あ、病院なんだっけ。

そっかそっか。

……どんな病院だよ。

ま、いいや。それよりもトメ兄とテンカ先生の会話を盗み聞きしないと！

サユカンのために！

あくまでサユカンのために！

## カカの天下１７３「ミッション・イン・飲み会　前編」（後書き）

トメとテンカ先生は何を喋るのか、次回へ続きます。
にしてもいいですよね、この暑いときに生ビール。
あ、書き忘れてました。
この病院はフィクションですのであしからず！

## カカの天下174「ミッション・イン・飲み会　後編」

……こんばんは、しー……静かに、カカです。

ただいまトメ兄とテンカ先生がお酒を飲んでいるのを盗み聞きしているところです。

「なんか食べますかー？」

「あ、お気遣いなく……」

盗み聞きしてるわりにはお店の店員さん公認です。なぜか。

「じゃーフライドポテトを一つ」

「はーい」

「ちょと、サエちゃん。私お金もってないよ？」

「大丈夫、この世の中にはツケというものがあるんだよー」

「へー、サエちゃん物知りー」

よくわかんないけど大丈夫なのかな。まぁいいや、それよりもトメ兄たちの会話を聞かねば。

それにしてもサユカン、一言も喋らずにすだれに耳を当ててるなぁ。

「サユカン、いまトメ兄たち何の話してる？」

「カカすけの話」

「にゃにをー」

聞かねば。

「あー、やっぱ学校でも相変わらずそんな感じかー」

「おぅ、変なことばっかしててな。オレの評価は上がりまくってるけど成績は順調に下がってるぞ」

あー！　私のプライベートを！

「テンカ先生……ブッコロス」

小さく呟いた声はもちろんトメ兄たちには聞こえていない。

「なんでカカはあんな風に育ったんだろう」

「そういう風に育てたんじゃないのか？」

「んなわけあるか。元々おたまじゃくし育ててるつもりが、いつのまにかウナギになってた気分だよ」

あ、こないだ私が言ったネタを！

「ウナギかー、そりゃ掴みづらくて厄介だな。でもそういうところが可愛かったりするんだろ」

「……まぁな」

「このシスコンめ」

「やかましい」

お、いいこと言うじゃん。

「テンカ先生……大好き」

「カカちゃん……殺すんじゃなかったの？　あ、好きだから殺すんだね。うーん、愛だねー。もぐもぐ」

や、ブッコロスって言ったのは勢いというか……それにしてもサエちゃん楽しそうだなー。

あ、いつのまにかきてたポテト食べてるし。私も食べよ。

「ところでサユカのことだが」

「キター！！！」

きゅぴーん！　とサユカンの目が光った！

「ん、サユカちゃんがどうした」

「トメ、あいつと仲良くやれてるか？」

「んー、微妙かな。なんか僕、あまり好かれてないみたいで」

恥ずかしそうに言うトメ兄。

「ほんとはこんなストーカーするくらい好きなのにねー」

「う、うるさいなっ！」

「携帯の待ちうけ画面だってトメ兄なのにね」

「うるさいってのっ！　もう、テンカ先生ってば余計なことを……ちょっとそこのお兄さん！」

店員のお兄さんは今まさにトメ兄の席に料理をもっていこうとしていたのだが、サユカンにむんずと腕を掴まれて動きを止めた。

そしてサユカンは店員さんの両手にある料理のうちの片方に、テーブルに置いてあったわさびを塗り込んだ。

「これをあの女に」

あのね、サユカン。お店の人がそんなのオッケーするわけが。

「オッケー！」

したよ！？　どんだけノリいいのここの人ら！？

「はい、キノコ炒めお待ちー」

「ふっふっふ……苦しむがいいっ」

「サユカン、ひどいことするね」

「そう言いつつ、カカちゃんも楽しそうだねー。もぐもぐ」

「や、ポテト食べてるサエちゃんには負ける」

そう言ってる間に、テンカ先生はわさび入りキノコ炒めを口にした！

どうだ！

「お、これわさびがきいてて美味いな」

うそぉ！？

「わさびなんか入れておいしくなるなんて……ありえない！」

「だよね！？　辛いんだよ？　緑色だよ？　輪っかのサビなんだよ？」

「カカちゃん、その当て字は強引だよー、もぐもぐ」

うぅ……大人って変なもん好きだなぁ。

「トメも食ってみ」

「どれどれ……お、ほんとだ」

「……一緒に箸をつついた」

「……む」

「きゃー、二人とも怖いー♪　もぐもぐ」

別に私は怖くないでしょ。別にムカムカとかしてるわけじゃ……や、してるけど！　サユカンのために！　身を乗り出してるけど！

「じゃあさトメ、もしサユカが――」

あ、乗り出しすぎた。

がたん、とすだれが落ちる。

後ろから何かが落ちた音がして、ビールを口にしていた僕は思わず振り返った。

するとそこには……見慣れた顔が三つ。

「……カカサエサユカ三人衆、なにしてる」

なんでこんなとこにいるんだ。そしてなんで三人ともハニワみたいな顔してんだ。

「い、いらっしゃいませ！　ご注文は？」

店員にでも化けたつもりかこの妹は。

「……じゃあカカ焼きを一つ」

「この時期のカカは質が悪いのでおすすめしませんよー？」

「サエちゃんひどっ！」

「サエすけはカカすけが焼かれないように言ったんだよっ」

「……悪いのは質じゃない。タチだ」

なんだこりゃ。なんで僕らの後ろの席に三人がいるんだ。なんでポテト食ってるんだ。それもまた僕が払うのか。

「……ちっ」

「テン、なんで舌打ちしてる」

「せっかくサユカの言いたいことを代わりに言ってやろうと思ったのに」

「そんなことされなくても、わたしは言えるわよ！」

「じゃあ言ってみろ」

なんだ、サユカちゃんが僕に言いたいことがあるのか？

僕はサユカちゃんを見る。

闘志に満ちた視線が僕を貫く。なんだかこのまま突進してきそうな勢いだ。

「トメさん！」

「はい！？」

「わたしも生を一杯！」

「飲むんかい！」

「お酒の力を借りれば言えるかと……」

「小学生が借りるな！！」

まったく、こいつらは……

「テン、おまえの差し金か」

「いや、ついてくるのはわかってたから店員に案内するように言っておいただけだ」

「なんでそんなことを」

「そのほうがおもしろいから」

「……姉みたいなこと言うな、テン」

「あとまぁ、サユカが言いたいことあったみたいだからな。今日はもう言えないだろうが」

む……何を言おうとしたのかすごく気になるが、仮にも教師であるテンが言えないと言ったのなら、言えないんだろう。今度聞いて

みることにしよう。

「すいませーん、ポテト追加」

とりあえず、今日のところはこいつらも合わせて食事会といこうか。

## カカの天下１７４「ミッション・イン・飲み会　後編」（後書き）

というわけで、飲み会編の後編でした。
色々と詰め込んでたらちょっと長めになってしまいました。本当は中編をいれて余裕をもって書けばもっと面白くなったかもしれませんが……次回はカカラジの回なので＾＾；話載せ順ミスです……
でもトメとテンカ先生の飲み話がまだまだ書き足りないので今後もまた書いていくつもりです！

# カカの天下１７５「第三回、カカラジ！」

「皆さん、こんカカー！　夏の日差しに晴れやかな気分になりながらもブラボゥな汗のかき方にべとべと憂鬱になりながらもちょっとやせるかなアハ別に太ってないけどねとか思ってる香加です」

「こんカカー。暑すぎてダルダルな留です」

「情けないね留兄。それでも男？」

「一応」

「ほんとに？　どれどれ」

「どこ触って確かめようとしてる！？」

いきなり下品な始まりで失礼しました。第三回のカカラジです！

「この番組は留兄の男を確かめる番組です！」

「違う！　どんな番組だ！？」

「留兄のそこをピーする番組」

「放送できんわ！　えーっと、ネット小説『カカの天下』を盛り上げるため、ぶっちゃけトークや作者の本音などを放送する情報番組ですっ！　私たち、留と香加は本編自体とは関係ないのでお気をつけください！」

いきなりとばしてるなー。

「でも留兄」

「もう喋るな。はいＣＭ！」

「とあるデパートの中にある水着用品店は異様な品揃えで大人気、特にロリコンの方々に大好評です！　妹さんに、娘さんに、甘いもので釣ってきた女の子に……無駄に可愛い水着を着せちゃいましょう！　下心を察せられると困るって？　ふっふっふ、そういうお客様のためにあえて店名は書いていないので、安心してご来店くださーい！　お問い合わせは←へどうぞ！」

ＣＭがあけて。

「……留兄、やらし」

「違う！　僕は知らなかったんだ！！」

「……そだよね、留兄はそんな人じゃないよね。トメ兄はそんな人ってことで」

「トメも違う！」

「にしてもＣＭのくせに店名出さないってどゆことさ」

「お問い合わせは←ってなってるだろ」

「書いてないけど」

「だってラジオだし。画面にでるわけじゃなし」

「……それはもっともだけど、じゃこのＣＭって意味あるの？」

「このラジオ自体意味ないんだし、いいじゃないか。さてさておたよりのコーナーいきます、このコーナーはカカラジに届いたお便りや架空のお便りを紹介するコーナーです」

ぶっちゃけすぎー。

「じゃ私読むね。えーと、カカラジネーム『トメ兄嫁にきてくれ』さんからいただきました」

「嫁……え、嫁？　婿じゃなくて嫁！？」

「ということは男同士かぁ、今後のカカ天はそういう方向に」

「なってたまるか！　いいから内容読め！」

「えーっと『トメさんの年齢と勤め先を知りたいです』だって。押しかける気だね」

「怖いこと言うな！　まぁ、来れるもんなら来てみろって感じだけど……歳は２４で、印刷会社に勤めてるよ」

「すごいたまーに会社のグチの話でるよね。嫌いなじーさんがいる

とか」

「まぁな。でもカカ天はホームコメディなわけで。仕事のことはあまり持ち出したくないわけで……ここで公表したから何かで出されるかもしれんが」

「でも留兄さ、あ、トメ兄か。２４にしてはガキじゃない？」

「本物のガキなおまえが言うな。はい次々」

「えーと、カカラジネーム『赤いカカ、略して赤カカ』さんからいただきましたー」

「カが三つ……これも言いにくい」

「えー、『最近カカちゃんの言動がまともになってきてませんか？』だって」

「どこがだ。今でも充分変だぞ」

「それが足りないって言ってるのかな。わかりました。カカちゃんに言っときますね。もっと全開で暴れろって♪」

「……わかった、僕もトメに言っとく。覚悟しろって」

わかった、作者も頑張る。もっとトメが困るように。

「ちょと待て作者。久々に発言したと思ったらそれか」

でもこの作品、トメが困る＝おもしろくなるっていう公式ででき

てるし。

「誰だそんな公式作ったの！」

「作者に決まってるでしょ」

……いや、カカだと思う。

「私が！？　じゃなくてカカが？」

カカがトメを困らせすぎなんだよ。そしたらいつの間にか……

「わかった。もっと困らすように気をつけろってカカに言っとく」

「あれ、それって何もわかってないんじゃ……」

はい、時間です。ＣＭへ。

「おまえが仕切るな！」

「脚本枚数五枚、作成時間三時間のくせに妙に超大作になってしまった怪獣映画『地球防衛軍ＶＳ姉』いよいよ登場！　この異様な製作の手間の小ささは……まさか実話だからなのか！？

どうみても本物にしか見えないミサイルとそれを食べる姉！

東京湾に突如現れたガジラ、そしてそれをも食べる姉！

姉の食欲は地球をも食べつくしてしまうのか！？

そして姉と呼ばれているのは果たしてなぜ、ていうか誰の姉なのか！？　姉と呼ぶからにはその弟だか妹だかも怪獣なのか？

多くの謎とリアルすぎる戦いを描く夏の最注目映画！！　間も無く全国公開！」

ＣＭがあけて。

「なにこの映画。観たい」

そういう話も今度書くかもね。映画観にいく話。

「しかし脚本枚数五枚って……まさか全部アドリブで作ったのか」

「まぁ、姉が出てるんなら台本どおりいくわけないしね」

「それもそうだな。さて、そろそろ終わりの時間だなー」

「今回はなんか、やたらまったりしてたね」

「もう三回目だしなー。もともとほのぼの系のホームコメディなんだぞ、カカ天って」

「そのわりにはたまに勢い良すぎる話があって、それが好評だったりするんだけど」

まぁ、毎日書いてるから作者のノリにも左右されるしねぇ。

「弱音吐くな。書け作者」

はい、すいません……カカ怖い。

「さて、番組ではリスナー、というか読者の方からご要望や意見をお待ちしてます。こなくてもラジオ（もどき）は続きますが、内容がなんでもありっぽいので面白ければ使わせていただいちゃうかもしれません」

「今回もなにげに使わせていただいたのが二つほど」

アイデアくれて嬉しかったです。いやホント。

「では最後に。トメ兄の水着を選んだときの話をば。トメ兄ったらね、最初はビキニはこうとしてね、それが小さすぎて食い込んで、抜けなくなってね、それで店員さんに話しかけたらキャー！　ヘンタイって」

カカラジチョップ！！

「さ、それではまた次回お会いしましょー、お相手は留と」

「いつかそのチョップをよけてやる……な香加でした！」

「この番組はあやしい水着屋と、地球防衛軍もどきの提供でお送りしました」

「相変わらずすごい提供……」

## カカの天下１７５「第三回、カカラジ！」（後書き）

えー、今回はおたよりコーナーの『トメ兄嫁にきてくれ』さんと、ＣＭのほうで『サイコメタル』さんのアイデアを使わせていただきました。ご協力、本当にありがとうございました＾＾

次回のカカラジは２００回です。それではまた＾＾

## カカの天下176「ホントに迷惑な墓参り」

「おじいちゃん、おばあちゃん、ご先祖様……今年もきたよ」

「久しぶりだね、じーじ、ばーば」

どうも、トメです。

今日はカカと姉と三人でお墓参りにきました。

花を飾り、掃除をして、お供え物を……これでよし、と。

「ご先祖様がた、僕らは元気でやってます」

「じーじ、ばーば、元気に死んでた？」

「あぁ、きっと元気に死んでたさ」

ニャー、と黒猫が横切った。

あれ、僕が適当なこと言ったせいかな……まさかね。

「最近はね、いつも一緒にいる友達がいるの。サエちゃんとサユカンっていってね、サエちゃんは黒レンジャーで、サユカンは桃レンジャーなの」

「……その説明でわかるのか」

「じーじもばーばも戦隊モノ好きだったし」

「あー、そういやそうだったな。『じじばば戦隊、老いぼレンジャー！』とか言ってたっけ。懐かしい」

あれ、なんか頭上にカラスが寄ってきた。なんでだ。

「姉はね、最近どんどん怪獣みたいになってきてるの」

「そろそろ巨大化してもおかしくないんじゃないかと」

……あれれ？　頭上のカラスが増えてきたぞ。

さっきまで聞こえていたひぐらしの鳴き声もやんでるし……

「トメ兄、なんか周りおかしくない？」

「んむー……あんまりにもあんまりなことばっか報告するから、じーじとばーばが心配して出てきたとか……」

「じゃこれ、幽霊登場の演出！？」

あー、これで煙でも出てきたらカンペキ……って出てるしっ！

どこから煙なんか……と周囲を見渡したそのとき！

近くにあった墓石が倒れた！

不気味なほど静かな墓地に、鈍い音が響き渡る。

「なんだこれ……墓石が倒れるなんて自然現象じゃ有り得ないだろ

！」

「トメ兄……お兄ちゃんでしょ、守ってね」

気がつけばひしっと僕にしがみついてるカカ。心なしか声が震えてる。

そういやこいつ、こういうの弱かったんだよな……

「し、心配するなカカ。世の中、超常現象なんてそうそうありはしないんだ……そうだ、ほら、これが幽霊の仕業だと思うから怖いんだ」

とりあえず、震えている妹の恐怖を取り除かねば。

「ほら、こんな変な状況、姉の仕業とか思えば」

「ばれたか！！」

「ほんとにおまえの仕業かよ！！！」

倒れた墓石の近くから登場したのは……花瓶の水を替えに行ったまま一時間くらい姿をくらましていた姉だった。

「いやー、いい雰囲気だったからつい」

「なにがどういいんだ？」

「人を驚かすのに」

こいつ最低だ。

「黒猫とかカラスとか煙とか、どうやって用意した」

「なんか呼んでみたらいっぱいきたよ？」

こいつはどこまで人間離れしてくんだ。

「煙は？」

「線香がごっそり捨ててあったから燃やしてみた」

こいつはどこまでハタ迷惑なんだ。

「大体さ、どこまで水替えに行ってんだ」

「ちょっと滝まで」

こいつはホントどこまで行くんだ。

「ほら、カカ。ほんとに姉の仕業だったんだ。心配ないぞ」

「……や、別に怖がったりとかしてませんですから。ほんとですのよ？」

「はいはい、口調変わるほど怖かったんだな。よしよし」

いまだにしがみついてくるカカの頭を撫でていると……ふと、声が聞こえた気がした。

――おまえらは相変わらずやのぅ。

空耳？

それともまさか……

墓石を見上げる。

まさか、ね。どことなくおばあちゃんの声に似てるような気がしたけど……

どっちでもいいか。

これからも見守っててくれよ、おじいちゃん、おばあちゃん、ご先祖様。

「ま、あたしの声なんだが」

「おまえもう帰れ！」

――ほんと、相変わらずやのぅ。

その墓参りの帰り道。

「あ、忘れ物」

「なんだよ姉。まさか墓地にか？　いちいち戻るの面倒だから嫌だぞ」

「……倒した墓石を、戻すのを」

「戻って！！！　いますぐ回れ右して戻って！！！」

半狂乱のカカを落ち着けながら、騒がしく回れ右した僕らなのでした。

……祟られないよな。

祟るなら姉にしてくださいよ？

## カカの天下１７６「ホントに迷惑な墓参り」（後書き）

お墓参りは厳かに、ルールを守ってしましょうね＾＾

## カカの天下177「サエちゃんは見える人」

「ただいまー」

「おかえりー」

「おかえりなさい、トメお兄さん」

どうも、お盆にも関わらず出勤させられてるトメです。うちの会社のお盆休みは明日からたった三日……少ないぞぅ。もと休ませろぅ。

「あれ、サユカちゃんは？」

「お墓参りあるからこれないんだってさ」

「今頃、きっとお墓の前で報告してますよー。好きな人が、できました……って」

おお、青春ドラマっぽい。

にしてもサユカちゃん、好きな人がいるのかー。クラスの子とかかな。

「そんなことホントに言ってるかと思ったらニヤニヤしちゃうよね」

「……あ、ほんとに言ってたみたいだよー」

サエちゃんさま、なぜに誰もいない方向を向いているのでせうか？

「サエちゃん、なんでわかるの？」

「こちらの方がそう言ってるのー」

「どちらの方!?」

この人です、とサエちゃんが向ける視線の先には冷蔵庫しかないんですけど!?

「どちらの方って……あちら」

そう言って上を指差すサエちゃん。

……天国のお方？

「あちらってどちらよ!!!」

あちらどちらこちらってうるさいな。

「ほら、お盆だからいっぱいいるんだよー」

「なにがいるの!?　あ、言わないで!　いるわけないんだから!」

「あれ、サユカちゃんの話聞いてニヤニヤしないのー？」

「できるかっ!」

そういえばサエちゃんって見える人だっけ。

そしてカカはそういうのが大の苦手な人なんだなこれが。

ちょっと迷ったあと、くーんくーん……と怯えている犬のように僕にすがり付いてくるカカ。

「暑い」

げしっ、と蹴り飛ばした。だってマジに暑いもん。

「私は寒いんだよ！」

「それは羨ましい」

「じゃあ代わってよ！」

「どうやって？」

「トメ兄が怖がって私がツッコミやるの！」

「カカこわーい」

「私に怖がるな！」

もう何がなんだか。

「カカちゃん、可愛いですねー」

「サエちゃん……あのテーブルの下に潜りはじめたヤツのどの辺が可愛いのか、君とは今度じっくり話したいと思ってるよ」

「じゃあ一晩明けますね♪」

明けるんだ……

「トメお兄さんはそういうの、怖くないんですか？」

「ん？　幽霊とかか」

「はい」

「んー……幽霊っていっても別に悪さしないんだろ？」

「そうですねー。自分を殺した相手とかにはイロイロするみたいですけど」

そういうの聞くと怖いが……

ゴン！　ぐら、パリーン！

「……いたい」

「ああやってテーブルの下に頭ぶつけてコップ落として割るような妹のほうがよっぽど怖いわ。いつかコップじゃ済まない気がしてな」

はぁ、片付けないと。

「なるほどー。あ、カカちゃん。右肩に青白い手が」

ゴン！！！

「……いたぁい」

「カカちゃん、かわいい♪」

……あと、そうやってニヤニヤしてる今のサエちゃんも結構怖いぞ。

「でしょ♪」

「や、でしょって……」

心読まれた？

どんどん侮れなくなってくるサエちゃん……

## カカの天下177「サエちゃんは見える人」（後書き）

サエちゃんはそういうの見える人です。
結構前の話ですけど、姉と同じもの見てたときもありましたね。
まさか……サエちゃんは姉化してる！？
……ないない。
まさかまさか。
こわいこわい。

## カカの天下178「サユカちゃんの反撃」

「ただいまー」

「おかえりートメ兄」

「おかえりなさいっ、トメさん！」

買い物からおかえりました、トメです。

出迎えてくれる（見た目だけは）可愛い僕の妹たち。

「あれ、今日はサエちゃんがいないのか」

「うん、お墓参りだって」

「今日は親戚に会わなきゃなんないのー、ってすんごく嫌そうな顔してましたよっ！」

へぇー、サエちゃんが嫌な顔、ねぇ。

「なんか想像つかないなぁ。サエちゃんっていつもニコニコしてるイメージあるから」

「そうだね、私も滅多に見ないよあの顔は」

「なんていうかですねっ、いつものニコニコ顔の、口の片方がすごい釣りあがってた感じです」

「んー、いまいちわかんないなぁ」

「ほら、怪談とかであるじゃん。あの……口先女！」

妖怪なのか、口先女。たしかに恐ろしいもんではあるが。

「口裂け女か」

「それそれ。サエちゃんの口の半分だけがその女みたいに裂けた感じだった」

人間、表情を作ろうとすると片側だけが引きつったりして不自然になるというし、サエちゃんもいつもの笑顔を浮かべようとして浮かべきれなかったんだなぁ、きっと。

「そんなに嫌なのか、親戚と話すの」

「サエすけの家はいろいろありますから」

「そうなのか？」

「そうなの？」

サユカちゃんは「まずっ」と口を押さえる。聞いたらダメなことだったのかな。

「そそ、そうなのよっ、そりゃーもう幽霊がいっぱい出まくってその退治にすごく忙しいみたいでっ」

……まじで？

あのサエちゃんちだからなぁ……なんか冗談には思えん。

「久々に家に帰るとさ、こう、一枚たりなーいって言いながら皿洗いしてる幽霊とか、あと、見えにくい汚れを掃除してるろくろ首とか、えっと、暑いからって砂の代わりに水まいてる砂かけババァとかいるらしいわよっ！」

なにそのお手伝い妖怪集団。

ちょっとほしいじゃないか。

「そっか……じゃサエちゃん、忙しいよね」

「あれ？　カカすけ。君なんでテーブルにもぐりこんでるの」

「こいつ、そういうのダメなんだよ」

それを聞いた瞬間、サユカちゃんの口がにんまりと裂けた。おお、もうちょい裂ければ口先女、じゃなかった口裂け女デビューだぞ。

「カカすけちゃーん、どうしたのかなっ？」

「ん、いや？　別に……」

「あ、テーブルの上にろくろ首が乗ってるっ」

ゴン！

テーブルの下に潜っていたカカが思いっきり頭をぶつけた。

「……落ちた？　ろくろ首」

おお、驚いたんじゃなくて攻撃だったのか。

「ええ、落ちたわよっ」

落ちたんだ……

「その代わりにお皿を数えてる女の人が……一枚たりなーいって」

「昨日トメ兄用のお皿割ったのばれた！？」

あんだとこらぁ。

「あははっ、そんなのいるわけないでしょ。いやー、いつもいじめられてるからいい気分だわー」

「うぅ、なんだよぅ……そっちこそ、えっと、いまごろ砂かけババァがサユカちゃんちのベッドに砂まいてるんだからねっ」

地味に嫌だなそれ。

「そんなわけないでしょっ、だって砂かけババァなら、あんたの服の中にいるじゃない。ほら、胸元に」

どんだけ小さいのさ、そのババァ。

「……」

「サユカちゃん、やりすぎ。カカ、真っ白になっちゃったじゃないか」

「あ、あはは……すいません。日頃の恨みが」

「まったく……カカ、おーい！　カカ」

「……は！　いや、寝てないよ？」

聞いてないよ。

「服の中に砂かけババァなんかいないよ」

「そ、そうだよね！」

「おまえの髪の中にいるんだよ。ほら、右耳のあたり」

カカは完全に石化した。

「……あの、トメさん？」

「ほら、日頃の恨みなら僕も負けてないし」

「そ、そうですかっ」

今日はそんな感じでカカで遊んだ。

## カカの天下１７８「サユカちゃんの反撃」（後書き）

お盆によりカカの戦闘力が低下してます。
誰かカカに少しずつ元気をわけてくれ！（他人まかせ

## カカの天下179「カカだんご」

「……なぁ、カカ。悪かったって」

どうも、謝ってる最中のトメです。

今日はお盆休みでうちにいるのですが……カカが困ったことになってます。

お盆ということで、幽霊ネタでからかいすぎてしまい……

「なぁ、機嫌直してそこから出てきてくれよ」

「出ない。幽霊に会う」

カカは布団をかぶりまくってダンゴ虫になってしまったのです。

「ごめんな、ちょっと遊びすぎたよ。ほら、おまえだってやりすぎることはしょっちゅうあるだろ？」

「ある。でも幽霊に会うから出ない」

「あー、ほら。幽霊って物理法則関係ないじゃん？　壁とかすり抜けるし。だから布団かぶろうが、普通にしてようが、くるときはくるわけで」

「じゃあ死ぬ」

「死ぬなよ！！」

取り付く島もない。

「それにな、この真夏の昼間に布団かぶりまくってたら暑いだろ？」

「幽霊のせいで寒い」

「そのわりには喉かれてるし、ちらりと見える腕にはものすごい汗が見えるんだが」

「全部幽霊のせい」

幽霊って多機能だね。

さて、どうしたもんかな……

うーん、カカの普段が普段だから、唯一気が弱くなるお盆にはどうしてもからかいすぎてこうなっちゃうんだよなぁ。去年はどうやって謝ったんだっけ。

そうだ、食べ物で釣ったんだった。

「ほら、サカイさんからもらった桃があるぞ。そこから出てきて食べよう」

「丸い果物はお供え物に使われる。だからそんなの食べたら幽霊がお腹にきちゃう。だから食べない」

ええい、余計な知恵を身につけおって。

「ほら、桃だって切れば丸くないだろ？　それなら大丈夫だって」

「……ほんとに幽霊、胃の中に入ってこない？」

「そんな胃カメラみたいな幽霊いないって」

「……じゃあ、食べる」

よかった。これでカカも布団ダンゴから出て……

出てきて……

「あの、カカさん」

「んしょ、んしょ、なに」

「なぜにそのようにもっそもっそ布団ごと移動されてるのでしょうか」

「布団はずすと、とり憑かれるから」

布団かぶってると幽霊防止になるのか。

布団も多機能になったもんだ。

「カカ、いいから布団をとりなさい」

「や」

ぐいぐい引っ張ってもカカは布団を離そうとしない。

どうしたものか……カカが一発で言うこと聞くには、食べ物と、食べ物と、食べ物……他になにか武器はないか!?

あ、そういえばあった。まだ使ってない手が。

「カカ、もしも幽霊にとり憑かれたら」

その言葉だけでびくりと震えるカカ。

しかし……

「霊感強いサエちゃんに看病とかしてもらえるんじゃないか?」

「くるなら来い幽霊!」

あれま、一発にも程があるぞ。

ほんと好きなんだなぁサエちゃんのこと。ここんとこ忘れてたけど。

さて、とりあえず舞い上がった布団を片付け……る前に。

「カカ、ほい」

「ん」

身体中、汗でぐしょぐしょなカカにタオルを投げてよこす。

「あー、とりあえず水飲め。倒れるぞ」

「……ん、あんがと」

まったくいつまで経っても世話の焼ける妹だ。

「トメ兄、お風呂入りたい」

「あーあー、そんだけ汗かけばそりゃそうだろうな。用意しとくから水飲んでから入れ」

「トメ兄、布団もぐしょぐしょ」

「あーあーあー、洗っとくからそこ置いとけ」

「私もぐしょぐしょ。洗ってくれる？」

「あーあーあーあー、布団と一緒にクリーニングに出してやろうか？」

ったく、どんだけ世話焼かす気だコイツは……

僕ってほんといいお兄ちゃんだなぁ。

誰かほめてくれ。

## カカの天下１７９「カカだんご」（後書き）

カカの怖いものがなくなりましたね！
……多分少し経ったらすぐ戻るでしょうが（＾―＾；）
怖いものって克服しにくいですよねぇ…

# カカの天下１８０「作書感想文」

「読書感想文が書けない」

「へぇ」

どうも、パクパクトメです。

ただいま夕飯を妹のカカとつついてるところです。パクパク。

「というか本が読めないの」

「なぜに」

「遊ぶのに忙しくて」

なんて正直な理由だ。

「だからさ、いっそ手っ取り早く自分で本つくって、その感想書こうかなって」

「ほぅ、それはそれでいい勉強になるかもな」

子供に本を読ませようとする主旨からは外れるだろうが、教養になることは間違いない。

「じゃ、作るよー。昔々、あるところにおじいさんとおばあさんがいました」

「カカってさ、おじいさんとおばあさん好きだよな」

なんか物語の話するときは必ずおじいさんとおばあさんが出てくる気がする。

「おじいさんは言いました。『ばあさんや……』えっと……」

なんて言おうか迷ったんだろう。カカは続きを作るきっかけを探そうと部屋の中を見渡す。

お、見つけたみたいだ。

目に留めたのは……ゴミ箱？

「おじいさんは言いました。『ばあさんや、このゴミめ！』と」

いきなりケンカですか。

「おばあさんは言い返しました。えっと」

カカは手元の夕飯に目を留めた。

「ん、おばあさんは『じいさんや、このハンバーグめ！』と言い返しました」

食べるんですか、おばあさん。

「そんな感じでおじいさんとおばあさんはケンカをはじめます」

なんだかね、毎回おじいさんとおばあさん使うけど……好きなの

かわからん扱いばっかりするな、カカ。

将来が心配だ。僕がおじいさんになったら何されることやら。

僕の心配をよそに、カカの視線は台所へ移動する。

「そんなある日、おばあさんが包丁を持ってスキップしていると」

こえーよばーさん。

「総理大臣に話しかけられました」

……なぜに？　あ、いつのまにかネコの総理大臣が足元に。そういや僕の部屋に作ったとかいうコイツ専用の出入り口まだ見つけてなかった。

「総理大臣は言いました、『にゃー』」

や、それ物語としてどうよ。

「おばあさんは言い返しました。『にゃにゃー』」

なんか頭が可哀想な人の会話みたいだぞ。

「というわけで、二人は協力しておじいさんを倒そうという結論にいたりました」

展開はやっ！

「おばあさんと総理大臣は……えっと、うん。聖なるティッシュと、

天使のイスに、悪魔のテーブルを集めて魔王じーさんに挑みました」

いつのまに魔王になったんだじーさん。

そしてなんだその生活感あふれる三種の神器。

「襲い掛かってくるおじいさん。おばあさんは天使のイスで殴りつけました」

それ武器なの!?

「さらに総理大臣も悪魔のテーブルで殴りつけます」

それも武器なの!?

「おじいさんは見事倒されました」

……そりゃイスとテーブルで殴られれば……

ところで聖なるティッシュは何に使われたんだ？　ああ、じいさんの顔にのせるのか。

「そして二人はタイホされて、誰もいなくなりましたとさ。めでたしめでたし」

「相変わらずめでたくないな、おい」

「ん、そうかな。それじゃ……」

カカは手元に目を留める。

「おばあさんは総理大臣に食べられ」

「その物語の総理大臣は一体ナニモノなんだよ！？」

こうして、カカの『とにかく目に付いたもの合体物語』は終わった。

……いったいどんな読書感想文ができるか楽しみだ。

## カカの天下１８０「作書感想文」（後書き）

これならテンカ先生の合格間違いなし！
他の先生がどう思うかは…不明ですね。

## カカの天下１８１「サユカの任務、肘編」

「わたしは悟ったわっ！」

こんにちは、サユカです！

今日はサエすけの部屋でカカも一緒に、三人でひたすら漫画を読む一日を過ごしていたのです。サエすけ漫画いっぱい持ってるから。

そしてわたしは発見した！

「どったのサユカン」

「この漫画っていうものは、一番すばらしい恋愛の教科書だと思うの！」

「でもサユカちゃん、その漫画って格闘ものー」

それは置いといて！

「つまり、この漫画みたいにトメさんに」

「勝負を挑めば、殴りあった末に河原で分かり合えるってわけか」

「わぁ、男くさーい」

「ちっがう！」

まったく、何を言ってるんだこの二人は。

「つまり！　トメさんに、食パンくわえながら登校中に衝突すればすべてがうまくいくのよっ！」

「まったく、何を言ってるんだこの人は」

ぅあ、たった今のわたしの心の中のセリフで反撃された！？

……ぇ？　あれれ、なんか男の人の声だったような。

「どこだテレパシートメ兄！　久しぶり！」

わ、びっくりした！

「カカ？　なんでキョロキョロしてるの、左右だけじゃなく上下まで」

「また逃がしたか……んーん、なんでもない。そいで、なんでそんなバカ丸出しなこと思ったの」

「サユカちゃんって時々頭おかしくなるよねー」

「そして君らはいっつも容赦ないわよね……」

友達の気安さで言ってるのはわかってるんだけど、ときどきマジで凹むんですけど……

「だってさ。この漫画、その出会い方したらそのままバラ色ハッピーエンドなんだもん」

「それ、格闘漫画じゃなかったの？　サエちゃん」

「うん、そのヒロイン役の子と衝突したときに肘が入ってねー、ストリートファイトが始まるの。それで学校でも会うたびに戦いを重ねていくうちに結ばれるお話」

「結局戦うんじゃん」

「戦わないわよ！　ただ、始めが肝心って言うじゃない？　だからこの漫画と同じ始まりをすればトメさんとも……というわけで今すぐ登校中にトメさんに」

「肘をくらわすんだね」

「そう！」

あれ？　そうだっけ？

「おもしろいね」

「でも登校中ってー、夏休み中に難しいこと言うねー」

「や、細かいこと気にしないでやっちゃおう」

さぁ、というわけで作戦実行！

口に食パンをくわえて、会社帰りのトメさんを待ち伏せ！

「さぁ、がんばってサユカン」

「がんばれーサユカちゃん」

何かが違うような気がしてならないんだけど……あぁトメさんがきたっ！

「や、やるしかないわよねっ」

「ほんとサユカンっておもしろいなー。変に流されやすくて」

「トメさんが絡むと特にねー。おもしろいからいいけどー」

カカすけとサエすけが何か言ってるけど緊張のせいで聞こえない……

ここから、新たな一歩が始まるんだ！

え、ええぃ！　突撃だ！

トメさんに向かってダッシュ！

ああでも怖いから目を瞑って……

あの漫画を思い出すのよ！

腰を落として大地を踏みしめ、下方から抉りこむように右肘！

相手が浮いたところで放った肘からそのまま裏拳！

勢いを殺さず左の掌底でとどめよ！

「思い出しすぎ」

どこからか声が聞こえてきたけどきっと気のせいだ！

「ぐほぁ！？」

あれ、トメさんと違う声。

目をあけてみると……そこには地面に倒れ苦しむ怪しげな覆面男。

間違えたっ！？　でも誰これ。

「ひったくり犯の逮捕にご協力感謝します！」

ふぇ？

いつの間にか警官姿の……たしかシューさんだっけ、その人に手を握られてブンブン振り回されてる。ナニコレ。

「サユカン、ナイス肘！」

「サユカちゃん、かっこいー」

「サユカちゃん」

気がつけば目の前にトメさんが！

「ないすふぁいと！」

ビシッ、と親指をたてるトメさん。

えっと……なんかワケわかんないけど結果オーライ？

後になって自分がどれだけバカなこと言ってたか気づいた……格闘漫画なんかに流されるのはよくないねっ。

おとなしく少女マンガ読んでよ。

「結局また読むんかい」

あれ？　またどこからか声が……

気のせいか。

## カカの天下１８１「サユカの任務、肘編」（後書き）

サユカちゃんナイスふぁいと！

ちなみに格闘漫画は特に元ネタはありませんのであしからず。

にしてもカカ天のキャラって皆妙に強いなぁ……

## カカの天下１８２「背景は大事です」

「ただいまー」

今日も仕事でしたが、だるいながらも終わらせて帰宅してきましたよトメです。

「おかえり」

「おかえりなさーい」

「おかえりなさいっ」

おー、今日はカカサエサユカ、三人ともいるな。

お盆シーズンもひと段落したしね。しかし最近帰ってきたら必ずカカ以外にも誰かいて「お帰りなさい」と言ってもらえるなぁ。

妹が増えた気分だ。お得な気分だ。

「トメ兄、お風呂にする？」

「トメお兄さん、ご飯にしますー？」

「トメさんっ、それとも、わた、わた、わわわ……って言えるかあああああ！！」

そしてどんどんカカ化してきてる三人。

本当に妹が増えた気分になる……ちなみにカカ化というのは変人化と同じ意味だ。

「はいはい、んじゃ生を一杯もらおうかね」

確か冷蔵庫に一本あったはず。

「はい、生でがっぷりと召し上がれ」

「ど、どうぞ……」

「なぜにサユカちゃんを差し出すのだ我が妹よ」

「食べるんでしょ。塩とかいる？」

「いらん！！」

「え……わたしはいらないんですか？」

「なんでそんな真剣に悲しそうなんですかサユカちゃん」

最近はサユカちゃんもノリがいいなぁ。

こないだの海のときはどうしようかと思ったけど……

海？

「あ、そうだ。そういえばサユカちゃんって、まだ泳げないんだよね」

「は、はいっ」

「じゃ今度の休み、皆でプール行こうか。サユカちゃんの特訓に」

「え……」

「僕が教えてあげるよ」

カカに泳ぎを教えたのは僕だし、教えるのには結構自信がある。

猛獣使いと呼んでくれ。

猛獣？　カカのことだよ。似たようなもんでしょ。

「……ん、どした？」

「えっと、トメさんが、教えてくれるんですか？」

「うん」

「……！」

あれ、カカとサエちゃんがなぜか目を見開いた。

「隊長！　前方にバラが現れました！　サユカンの周囲一帯がバラの背景です！」

「おおー、乙女ちっくフィールド全開だー！　サユカちゃん乙女モードだー！」

「バラの赤色が目に痛いでありますー！」

ば、バラ？　そんなもんがどこに……って、ぅお！！

「いきます……だから、その、お願いします！」

サユカちゃんがうるんだ瞳でこっちを見ている！

仲間にしますか？　じゃなくて！

「じゃ、じゃあ今度の日曜日、大丈夫？」

「あ……そ、その日は、用事、が……」

よほど申し訳なく思ってくれたのか、しおしおと崩れていくサユカちゃん。

「た、隊長！　背景のバラが次々と枯れていきます！」

「お、おおー、乙女ちっくフィールドが破られていく……サユカちゃん絶望モードだ！」

「枯れたバラの茶色が目にも心にも痛いでありますー」

ホントに何言ってるんだこいつらは。

「まぁまぁ、機会はまたあるから、そんな落ち込まないで」

「は、はい……ありがとうございます、トメさん！」

両手を祈るように組んで僕を見上げるサユカちゃん。

「なんかポーズが少女マンガっぽいよね」

「最近よく読んでるらしいよー。さっきの背景もそんな感じだったしー」

それを見てこそこそ喋るカカとサエちゃん。だから背景とかってなんなのさ。

まぁいいや。

とにかく今度の日曜にサユカちゃんに泳ぎを教えることはできない、っと。

じゃ何しようかなー次の日曜。

## カカの天下１８２「背景は大事です」（後書き）

少女マンガといえば花背景ですね（そうか？

ぶっちゃけ、それを書きたかっただけです（おぃ

## カカの天下１８３「お金も大事だよー」

「ただいまー」

相も変わらず仕事帰りのトメです。

そしていつも通り出迎えてくれる三人。

「おかえり、先に私にする？」

「それとも私ですかー？」

「それとも、わた、わた……」

またこのパターンかい。微妙に違うけど。

えーっと、ど、れ、に、し、よ、う、か、な、あ、ね、の、い、う、と、お、り……に、は、し、た、く、な、い、っと。

「じゃあサエちゃんで」

「とっても高いですよー」

「いくら？」

「八万で一発、どうですかー？」

サエちゃん、おそろしい子！

なんかリアルにそれっぽく聞こえるんですけど意味わかってませんよねっ！？

「やるねサエちゃん。じゃあ私は十万でどう？」

なんのオークションだこれは。

「わ、わたしなら二万でお安いですよっ」

安くねぇよ。

「おまえらな……そんな軽々と万万言うなよ。一万稼ぐのにどれだけ働かなきゃなんないのか、わかってるのか？」

はい、と手を上げるカカ。

「ゲーセンでガキを三人ほどボコって」

「それは犯罪だこのガキめ」

はい、と手を上げるサエちゃん。

「花を摘んで、駅前あたりで泣いて立ってれば」

「それは反則だ、この腹黒め」

はい、と手を上げるサユカちゃん。

「二日くらい、働けばっ」

「それは普通だ、この常識人め」

「あれ……常識人じゃダメですかっ」

「「「ダメに決まってる」」」

「トリプル！？」

はっ！？　しまった、ついつい……

「ごめん、サユカちゃんくらいは普通でいてくれ」

「トメさん……わかりましたっ！　例え家が火事になっても友達が火事になっても地球が火事になっても宇宙が火事になっても普通でいますねっ！！」

や、その状況で普通なのは逆に異常だから。

「なんでそんな火事ばっか言うの？」

「うちのお母さんがですねっ、毎日家事を手伝えってうるさいんです！」

あー『かじ』ね。

この子もこういうこと言うようになったか。誰のせいだ。僕らのせいだな。なんまいだぶ。

「とにかくな、お金は大事なんだからそう軽々と何万とか言うもんじゃない」

「はーいっ」

うん、いい返事だサユカちゃん。

「いいじゃないですかー数万程度」

うん、いやな返事だサエちゃん。

「稼ぎが少ないトメ兄らしいね」

うん、いやみな返事だカカ。表に出ろ。

「あ、トメ兄。ほんとに稼ぎが少なくなったら言ってね？　狩ってくるから」

うん、危険な返事だカカ。やっぱ表に出るな。

「はぁ……子供はこれだからなぁ。一度労働の大切さってものを経験させればいいんだろうけど」

「あ、じゃあ駅前にいきましょうかー？」

「ゲーセンいこか？」

「そうじゃなくて！」

そんな不健全な労働を覚えられたら将来が不安でしょうがない。

うーん……会社見学でもさせてみるか？

どこの？

……やっぱうちの会社か。

んー、考えて、みるかな。

## カカの天下１８３「お金も大事だよー」（後書き）

さぁさぁ皆さん、カカは１０万、サエちゃんは８万、サユカちゃんはたったの２万ですよ！　お買い得です買った買ったぁ！！

……冗談です。

そんな安いわけありませんよね♪（そもそもお金に換えるな

**カカの天下１８４「敵は多い、がんばれタケダ」**

久しぶりだな、タケダだ！

え、忘れたって？　失敬だな君は！

失敬だな！

ほんと失敬だな！

……もう忘れないでね？

カカ君の恋人――ぐほぁ！！

い、いま……四方八方から石が飛んできたのはなんなんだ……うぅ、嘘ついてスイマセン、カカ君と恋人になりたいと思ってる男、タケダです……

今は夏休み！　小学生にとって様々な思い出を作る絶好のチャンス期間なのだ！

しかし……しかし！　俺はカカ君たちとそんなに親しくない！

だから幾度となくあったであろうイベントにも全く参加させてもらえないのだ！

笑いたければ笑え！

「あはは！」

「ばっかみてー！」

「ホントに笑うなあああああ！！」

男心は複雑なのだ！

「む？　なんだ貴様ら、はるか以前に登場した俺の部下ＡとＢではないか」

かなーり前のことだが、カカ君に近づこうと家に押しかけたときに一緒についてきた男子たちだ。そのときはカカ君のお姉さんに腕立ていじめをくらって逃げ出したのだが……

「あ、あのさ……いいかげん俺らの名前を」

「トメさんがそう呼んでたんだ。カカ君の家族の言葉に俺が逆らうわけにはいかん。言いなりだ」

「堂々と情けないこと言うね……」

「で、前のサッカーのときに久々にいくつかセリフもらっただけのチョイ役が俺になんの用だ」

「……いろいろとツッコミをいれたいところではありますが、まぁいいです」

「タケダさ、カカちゃんたちと仲良くなりたいんだよな」

「まぁ、そうだが」

恥ずかしそうにもじもじする部下ＡとＢ。キモい。

「だったらさ、またぶつかってみないか？」

「ぶつかる？　登校中にぶつかって肘でもくらわすのか」

「そんなアホなことしませんよタケダ君。単純に話しかけるんです」

「あっちは三人、こっちも三人。グループ付き合いにはちょうどいいだろ？」

ふむぅ……なるほど。今までだと俺対カカサエサユカ、一対三だったからなぁ。

ああ、ちなみに言葉使いが荒いほうが部下Ａで丁寧なほうがＢだ。どうでもいいが。

「しかし、カカ君は俺のものだぞ？」

「おぅ、カカはタケダに譲る。俺はサユカちゃんをいただく」

「ぼ、僕はサエちゃんを……」

おぉ、本当に三対三になった！　というかカカ君から乗り換えたのかコイツら……ライバルが減るのはいいんだが……

「これってあれですよね、合コンって言うんですよね」

「む？　何の略だそれは」

「ゴーゴー根性、とかじゃないか？」

ＧｏＧｏ根性！　略してＧｏ根か。なるほど。いい言葉だ。

「さぁ、三人でぶつかってみようじゃないか！　ゴーゴー根性！」

「が、がんばろう！　ごーごー」

「そうだな……やってみるか！　最近名前を呼んでもらえるほど親しくなったんだし、世界は俺を中心に動いていると言っても過言ではない！」

「それ、あんま親しくなった感じしないなぁ」

「なんだと！　カカ君が人の名前を呼ぶなんてスゴイことじゃないか！」

「確かになぁ」

「ボクなんか呼ばれたことないし」

「俺なんか視界に入ったことも……」

……ん？

「何度も名前言ったのに……『あんた』で片付けられるんだよなぁ」

「あー、それ俺も俺も」

「だよなぁ、名前覚えてもらえるだけで羨ましいよ」

「ほんとだよ……あーうらやまし」

「コノヤロウ……」

……あれ？　なんか増えてません？

なんか、部下がＡからＺを越えてません？

わかりやすく言おう。

俺はいつのまにか、うちの小学校の男子に囲まれていた。

「な、なんだ君らは！？」

「カカちゃんファンクラブだ！！」

「……ぇえ！？」

いつのまにそんなものが……俺もいれろ！

「そしてタケダ！　おまえはカカちゃんに近づく最要注意人物だ！」

……ぇ？　要注意？　近づくって……名前を覚えられただけで！？

カカ君はそんなにビッグだったのか！

さすがだ！

惚れ直した！！

「だから俺たちはおまえ、いやおまえたちに釘を刺しにきた……余計なことをするな！　さもなくばこの釘で刺す！」

ホントに刺すのかよ！？

「し、しかしなぜ俺たちの作戦が漏れたんだ」

「それはなタケダ、おまえは常に見張られているからだ！」

うそぉ！？

もしかして、さっきどこからか飛んできた石もこいつらか……

「まさか貴様ら、そうやってカカ君も監視したり」

「そんなことはしない！　犯罪だろうが！」

「え……俺を監視するのはいいのか」

「それは合法だ！」

どこの法だ！？

「いいか、おまえはいつも見張られている。そのことを忘れるな、

ではさらばだ」

そう言って去っていくファンクラブのリーダーっぽい人とその取り巻き。

それを呆然と見送りながら、俺は呟いた。

「カカ君……君はほんと遠い人なんだなぁ」

「が、がんばりましょうタケダ君！」

「そ、そうだ！　なんか偉そうに人数集めてたけど所詮は小学生の集まりだ！」

俺らもなー。

いや、それでも頑張るぞ！

学校が始まってからな！

今ヘタに動くと釘で刺されそうだし……

## カカの天下１８４「敵は多い、がんばれタケダ」（後書き）

恐ろしいことに気がつきました。
この話には……女の子が出てない！！！
つまらないですね（ぉぃ

今度から気をつけます。

## カカの天下１８５「想ひでの遊び」

おはようございます、カカです。

今日は日曜日にも関わらず、なぜかトメ兄は会社に行ってます。働きすぎだよ日本人、テレビでそう言ってたのをなんとなく思い出します。

「今日ってサユカちゃんも用事あっていないんだよねー」

「うん……私ら二人だけだね」

サエちゃんと二人だけ？

二人きり？

チャンス！！

……なんのチャンスなんだろ。なんとなく言ってみたけど。

「とりあえずいつもの通りカカちゃんち来たけどー、なにしようねー」

「どしよっか……あ。久々にアレやらない？」

私は机の引き出しにしまっていたそれらを取り出した。

元々はサエちゃんのものだけど、たくさんあるそうなのでうちにも分けてもらっていたのだ。

そう、アレとは……私とサエちゃんのスイートメモリー、ビーズ遊びだ！

「いいねー。最近サユカちゃんと遊ぶようになってからやってなかったよねー」

「サユカンこういうの苦手そうだからね」

「でもサユカちゃんって意外と可愛い女の子だから、こういうの好きそー」

「ん……そだね、今度誘ってみよっか」

本当はサエちゃんとだけの遊びにしたいなーとか思ってたんだけど……今じゃサユカンも立派な私の親友だ。仲間はずれにすることもないよね。

「じゃ、いいもの作ってサユカンに見せびらかそうか」

「いいねー、じゃ、ビーズをわけよー」

小箱に入ったビーズを机の上にばらまき、適当に私とサエちゃんの使う分を分ける。

「……なんで私のとこに赤いビーズばっか分けるの」

「じゃーカカちゃんはなんで私のところに黒っぽい色のばっかりー」

「イメージカラーって大事だよね」

「うんうん、カカちゃんが血色でー」

「サエちゃんが混沌（カオス）色」

ぴたり、と一瞬だけ空気が止まる。

「サエちゃん、血って色じゃないよ？」

「カカちゃんこそ混沌色ってなにー？　いつの間に黒色からなんでもありっぽい色にレベルアップしてるのー？」

「サエちゃんを表すには黒色じゃ足りない気がしててさ、最近」

「私もねー、カカちゃんを表すには赤色じゃ足りない気がしてたのー」

「おそろいだね」

「ねー♪」

仲良く微笑みあう私達。うーん親友だ。

さて、ビーズをヒモで適当につなげていこう。これと、これと、これと……

「カカちゃん、なにつくるのー？」

「りんごでも作ろうかなーと。で、ランドセルにつけるキーホルダ

ーにするの」

「いいねー。私はネックレスだよー。作ってサユカちゃんにあげるのー」

「あ、そっか。見せびらかすだけってのもなんだし、あげちゃったほうが……」

あげる、ネックレス、サユカン……

「きゅぴーん！　いいこと思いついた」

「カカちゃん、そのきゅぴーんってなに？」

「いいこと思いついた音」

口で言ってみた。

「きゅっぴぃぃぃん！　のほうがいいと思うよー」

きゅぴーんな感じのポーズ付きで訂正してくれるサエちゃん。かっこいー。

「ね、サエちゃん。サユカンにネックレスあげるんだよね！　じゃネックレスの真ん中部分は私が作っていい？」

「いいよー。何つくるの？」

「胸に下げるので血の色って言ったら一つしかないっしょ！」

「しんぞー？」

「心臓のネックレスって嫌すぎだよ！！　違うよハートだよ！」

「あははー、似たようなものでしょー」

「全然違うよっ。それでね……」

そして翌日。

「これ、なに……？」

「私達からのプレゼントだよー」

「サユカンのために作ったの。たまにやるんだ、こういうビーズ遊び。今度はサユカンもやろうね」

「え、ああ、うん……そだね」

「さぁ、サユカちゃんそれつけてみてー」

「え、で、でもっ」

「さぁさぁ、私達の友情の証を受け取ってよ」

「ゆ、友情……いや、でもっ」

なぜかネックレスをつけるのを頑なに拒むサユカン。

「うんうん、友情の証にそれつけてそこらへんを散歩してきてよーサユカちゃん」

「で、できるかあああああっ！！」

なんでそんなに嫌がるかなぁ。

赤いビーズで作ったでっかいハートのネックレス。可愛いと思うけど。

ハートの真ん中に入ってるトメの写真なんか特にいい味出してるのに……

結局、サユカンはそれをつけることはなかった。

しっかり持ち帰ったけどね。

きっと今頃は部屋に飾って拝んでいるに違いない。

## カカの天下１８５「想ひでの遊び」（後書き）

カカとサエちゃん、二人だとまったりしますねぇ。
数ある組み合わせ（？）の中で一番ほのぼのする気がします。
ゆったり会話しますからねー。働きすぎな日本人には必要です、ゆったりゆったり。

## カカの天下１８６「意外とまともに自由研究」

「トメ兄、ここどこ？」

「僕の職場だ！」

「うそん」

ほんとん。

トメです！　今日はカカ達の自由研究のために、そして労働というものを教えるためにとカカサエサユカの三人を工場見学に連れてきたのです！

すでに舞台は印刷工場の中。本当は作業服じゃないと入れないんだけど、小奇麗な格好なら特別に、ということでチビスケ三人も入れてもらったのだ。

「でもトメさん、今日って平日ですけどお仕事しなくていいんですかー？」

「も、もしかしてトメさんって、そんな自由できるくらい偉いんですかっ？」

「もしくは……会社を裏でいろいろ操って、自由にできるとか？」

「そんなサエちゃんみたいなことできないよ」

「……トメさんまでそゆこと言うんですねー」

あ、サエちゃんのニコニコ顔の眉がちょっと八の字になった。

悲しそう、でも可愛いなぁチクショウ。

「この日のために日曜日働いたんだよ。一日多く働く代わりに一日だけ自由にさせてもらったの。上司に言って」

おおぉー！　と三人は感動する。ふっふっふ、もっと崇め奉れ。

「トメ兄……そんなにヒマなの？」

んだとこらぁ。

「おまえな、ここまでしてくれたお兄ちゃんになんか言うことないのか」

「や、感謝はしてる。ただ、私たちをかまう他にやることないのかなーと」

……うるさいよ無いんだよ悪いかコンチキショウ。

「さっ！　雑談はここら辺にして案内するぞ！　ついてこい！」

僕は強引に切り上げて案内を開始した。

工場の隅まで移動して、足を止める。

小学生の自由研究だし、適当に流れを教えるだけでいいよな。

ノートとシャーペンを構える三人に向かって、僕は若干偉そうに胸をはって説明した。

「このシャッターの向こうは外に繋がっててな。トラックで運ばれてきた紙を工場内に運んでくるんだ。印刷する前の紙をな」

「ほぇー、紙って……あれのこと？」

平日だからもちろん工場は機能している。カカが指差したのは、シャッターをくぐった作業員が台車で紙を運んでいるところだった。

「なんだか丸いですねー」

「円柱でしたっけっ、ああいう形って」

「ロール状の紙なんだよ。ここは薬品のラベルとかを印刷する工場だから、そのほうがやりやすいんだ。印刷機もそれ用だし」

「トメ兄、意外と普通のとこで働いてるんだね」

「どんなだと思ってんだ」

「てっきりネタになりそうなとこかと」

「ネタとか言うな」

説明しながら印刷機械のほうへと移動する。

「これが印刷機。ロール状の紙を機械で回転させて、流しながら印刷してくんだ」

僕らの目の前では大きい、というよりは長い機械が、小気味よい音を鳴らしながら動いている。

「なんかいろいろ回転してますねっ」

「ああ。インキをいれるところも印刷する場所も、いろんなローラーがあって回転してるからな。ヘタに指を挟まれると、そのまま血管が引っ張られて腕が一本ダメになる」

これは紛れもない事実だ。

「う、腕が!?　トメ兄ってそんな危険な仕事してたの?」

「や、僕に限らず仕事してる人には何かしら危険があったりするもんだよ」

「へぇ……」

実際に高速回転する機械を見せたおかげか、カカは神妙な顔をしていた。他の二人も同様だ……よしよし、労働する人の大変さがこれで少しはわかったかな?　怖がらせただけ、ってのがちょっと反則っぽいけど。

「トメ兄の腕がなくなったら……私が右腕になって働くね」

「右腕って、おまえはマフィアか」

「じゃあ私は左腕になりますー」

「わ、わたしは脚でっ！」

「おまえらどんな合体ロボになる気だ」

無敵そー。

さぁ気を取り直して、次は印刷したものを検品する機械の紹介だ。

「ここで印刷した製品に不良品がないかを検査するんだ」

「へぇ、不良品ってそんなに出るもんなの？」

「結構あるぞ、人のやることだからな。インキが乾ききらずに他の場所に散っちゃったりすることもある。白いところに赤色の点がついたりするともうダメだね。血に見えるから即アウト」

「だって、カカちゃん」

「いいかげんにしなさいよカカすけ」

「なぜ私に言う」

血の話だからだろ。

最後の機械は、検品した製品を切り分ける機械だ。

「ここで正しい製品の大きさに切り分けるんだ。そしてそれをダンボールに詰めて納品する」

興味深そうに機械を見つめる三人。その機械を動かしている同僚が恥ずかしそうに俯く。別におまえを見てるわけじゃないぞ。

「この工場でする仕事の過程はこんなもんだな。この工程の一連の流れと、あとは……工場を見てまわった感想なんかをまとめればいい自由研究になるんじゃないか」

うんうん、と頷く三人。なんだかんだ言いながらも楽しんでもらえたようでよかった。

「ねぇトメ兄。私、もっと研究したいものがあるんだけど」

「なんだ？」

「トメ兄がいつもグチってるうざいジジィを」

「敵地でそんなことを喋るな！」

聞こえたら面倒なことになるだろうが！　ただでさえさっきからヤツが嫌味っぽく機械の影からこっちを覗いてるのに……仕事しろよ。

「えー、でもジジィ研究のほうがおもしろそう」

「あのさ、カカ。例えばだ。枯れた朝顔の観察日記つけて楽しいか

？」

「楽しくない」

「そういうことだ」

「えー、でも枯れた人間って結構おもしろ」

「だまれ。サエちゃん、サユカちゃん。他に気になるところある？」

適当にカカをあしらって、僕は工場案内を続ける。

三人ともノートにいろいろ書き込んでいたようだし、いい自由研究ができそうでよかったよかった。

「休みを犠牲にしたかいがあったってもんだ」

「どうせ休みでも私達といるんでしょ」

「やかまし」

## カカの天下１８６「意外とまともに自由研究」（後書き）

工場内、機械の描写はできる限り省略しているのでわかりにくいとは思いますが＾＾；

カカ天の中心はあくまでコメディ、カカ達の様子なので、周囲の様子は適当に想像してください（メンドウダッタワケジャナイデスヨ？

ちなみにインクじゃなくてインキと呼んでいるのは間違いではありませんよー。

あと、腕が一本の話はマジです。回転するものには気をつけましょう。

## カカの天下１８７「ドリルずるずる」

どうも、トメです。

「おーい、夕飯だぞ」

今日も夕飯の用意はばっちし。

僕の言いつけ通りに夏休みの宿題の計算ドリルをマジメにしているであろうカカの部屋の扉を開けます。

するとそこには……机に突っ伏している妹の姿が。

「カカ、なにしてんの」

「うー」

「ドリルはどうした？」

「工事現場に置いてきた」

それドリル違いだから。

「カカ、もしかして全然進んでないのか？」

「このドリルが悪いんだよ。不良品だよ。だってさ、ドリルのくせに進まないんだよ？　工事のドリルはガンガン進むのに」

うまいこと言うな。

「とりあえず頑張ったのは認めよう」

「ありがたき幸せ……」

「ひとまず休憩しろ。夕飯食べるぞ」

「申しつかまつった……」

「なにその妙な日本語」

「計算に疲れたから日本語重視モードになったの」

それどっちかというと時代劇モードだぞ。

そんなやりとりをしながらカカの部屋を出て居間へと移動。カカはちょこんとテーブルにつき、僕は用意した夕飯を台所から運ぶ。

「今日の夕飯なに？」

「そーめん」

「またぁ？」

「しょうがないだろ、サカイさんがお裾分けでくれたのがいっぱいあるんだから」

「秋田県！」

「なんだ突然」

「あきたってこと」

「……あぁ、さいですか」

「そーめんって秋田県の名産だったのかぁ」

「勝手に他県の名産決めるな」

秋田県さまに失礼だろうが。

秋田県さまって誰だよ。自分で言っておいてなんだが。

「はぁ……仕方ない。じゃあ今日も秋田県を食べようか」

でけぇ食事だな。

「「いただきます」」

二人して合掌。

すぐにズルズルという音が居間を支配する。ある意味この音も夏の風物詩だよなぁ。

「むぐんぐ……で、カカ。宿題はどれくらい終わった？」

「むぐんぐ……あとね、計算ドリルと絵日記だけ」

「へぇ、結構終わってるじゃないか」

「この二つが強敵なんだよ！　だってドリルだよ？　ドリルにぶつかって勝てるわけないじゃん」

そりゃ機械のドリルにぶつかれば誰だって負けるだろうが。

「お姉じゃあるまいし」

勝てるんか姉。

「だからさ、トメ兄がやってよ」

「なぜに僕が小学生の計算なんぞをやらねばならんのか」

「ふくしゅーが大事って先生も言ってたよー」

「復習にもほどあるだろ……僕もう大人だぞ」

「そんなの関係ないの。私は最近そーめんばっか食べさせられてトメ兄を恨んでるの」

ん、なんか話が飛んだな。どう繋がってるんだ？

「どういう意味だ？」

「だから、ふくしゅーが大事なんだってば」

「……もしかして、恨みをはらす復讐のことか？」

「そう、復讐が大事。私はそーめんでトメ兄を恨んでる。ずるずる」

「わかりにくいわ」

しかも恨んでるとか言いつつしっかり食べてるし。

最近のカカは難しいなぁ。

「とにかく、宿題はちゃんと自分でやれ」

「はーい、ずるずる」

ずるずる。

## カカの天下１８７「ドリルずるずる」（後書き）

宿題モードでカカはだるだるゆるゆる状態です。
でもなんだかんだ言いつつきちんと宿題するカカは偉いですね。

まぁ、トメ兄のしつけの賜物でしょうけど（笑）
姉とか絶対に夏休み中にやらないタイプでしょうしね。

## カカの天下１８８「絵日記はこんなもん」

○月×日　天気　晴れ

夏休みが始まりました。

トメ兄が「僕にもよこせ」と言ってきました。

無理だし。

○月×日　天気　曇り

プールに行ってきました。

サユカンが泳げないらしいのでいじめました。

とても楽しかったです。

○月×日　天気　晴れのような曇りのような

スイカを割りました。

私の手が血の色に染まりました。

ふふ、おいし。

○月×日　天気　晴れだけどみんなの心は曇り

海にいきました。

なんかいろいろありました。

息がつまりそう、と思ってたら水の中でほんとに息がつまりました。ぱたり。

○月×日　天気　私の心はどしゃぶり

なんか皆が私をいじめます。

幽霊なんかいないのです。

いないのです。

いないのです！

ちきしょー。

○月×日　天気　普通に外が雨

今日はトメ兄の仕事している工場を見学しました。

見学の目玉だったじいさんはいませんでした。

ぽく、ぽく、ぽく、ちーん。

〇月×日　天気　雷

今日は空がゴロゴロなってます。

トメ兄のお腹もゴロゴロなってました。

〇月×日　天気　雪

今日は夏なのに雪がふりました。

しかも私の家の上限定です。

きっと姉が風邪をひいたからだと思います。あまりのありえなさに世界がびっくりしたのでしょう。

〇月×日　天気　晴れときどき豚

今日の夕飯は豚肉です。

食材が空から降ってきて嬉しいなーとトメ兄が喜んでました。
姉は降ってくる豚を次々と生で食べてました。

○月×日　天気　晴れときどきアレ
アレでした。

○月×日　晴れときどきミサイル
姉が外国から飛んできたミサイルを食べてました。
姉はみんなのヒーローです。

「こんなとこかなっ」
「なぁカカ」
「なに？」
「嘘書くなや」
「えー、トメ兄のお腹ゴロゴロはほんとじゃん」

「やかましい！」

「でもお姉が風邪ひいたのはびっくりしたね」

「あれ、単なる二日酔いだぞ」

「そなの？」

「姉が風邪なんかひくわけないだろ。あいつ自身が地球のウィルスみたいなもんなんだから」

「うー、書き直す？」

「ほんとに姉が風邪なんかひいたら確かに雪ぐらい降りそうだし、別にいいんじゃないか？」

「そか」

「や、違う！　よくない！　嘘はよくない！」

「宿題を出さないのは？」

「もっとよくない！」

「じゃこれ出す」

「……ちっ、好きにしろ。僕は知らん」

〇月×日　天気　私の気持ちも晴れやか

トメ兄がこんな変な日記を提出してもいいと

「まてやコラ」

「いやん」

## カカの天下１８８「絵日記はこんなもん」（後書き）

絵日記で一番大切なもの、それは天気です！
天気さえ合っていれば、多少話を作ってもばれません！
無理か。

## カカの天下１８９「過ぎる夏」

「山だ！」

「てっぺんだー」

「空気がおいしいっ！」

深呼吸していい気分なトメです。

夏休みも終盤ということで、今日は最後の思い出作りに近くの山へ妹たちを連れてきました。

「やっほー！！」

――やっほー！！

思い切り叫んだカカの声は、やまびことなって返ってきます。

「山だよヤッホー！」

「いい景色だよーヤッホー！」

「君らさ、いくらなんでも元気すぎ」

「サユカンも言いたいくせに」

「言いたいくせにー♪」

「そ、そんなことは……で、でもそこまで言うならしょうがないわねヤッホー！！」

あ、やっぱ言いたかったのね。

「セミがうるさいヤッホー！」

確かに山だけあって周りはミンミンの嵐だ。ミンミン。

「合わせてー、セミッホー！」

なぜ合わせる。

「略してっ、ミッホー！！」

なぜ略す。

「よーし、みんな、せーのっ」

「「「ミッホー！！！」」」

――ミッホー！　ミッホー！！　ミッホー！！

やまびこも合わせて幾重にも重なる「ミッホー」という声。

「おまえらどこのミホさんのファンだ」

ライブの声援にしか聞こえなかったわけで。

さんざん「ヤッホー」とか「ミッホー」で遊んだあとは、シートを広げてランチタイムだ。

「ほれ、食え」

僕お手製のお弁当を広げてみせると、三人はらんらんと目を輝かせた。ケモノの目だ。

「すごいお弁当！」

そうだろうそうだろう。

「ほんとに、すごいですねーお弁当」

うんうん。

「写真とりたくなるくらいすごいですねっ、お弁当！」

弁当ばっかほめてないで誰か僕をほめろよ。

ランチタイムのあとは、みんなで虫取りをして遊んだ。うむ、夏の遊びの定番だ。最近の子はやらないらしいけど。

「トメさんっ、セミを捕まえました！」

さすがサユカちゃん、無難だ。

「トメおにーさん、クワガタ捕まえましたー、これ売れるんですよねー」

さすがサエちゃん。おいしいところを持っていく。

「トメ兄、ほら。さんようちゅう捕まえた」

「それはただの幼虫だ」

三葉虫ってのは大昔に絶滅した節足動物のことだぞ。

「じゃあ、ようちゅうさん？」

「なぜ虫にさん付けする筋合いがあるのか多いに疑問だが、まぁ間違ってはいないな」

さすがカカ。一味違う。

その後も僕とカカたちは目いっぱい遊んだ。

子供というのは本当に次から次へと遊びを思い付くもので、まったく退屈する間もなく夕方になってしまった。

遊び疲れた僕らは、ひぐらしの合唱に耳を傾けながら帰路についた。

――下り道を歩く途中、ふと立ち止まる。

楽しかった時間を振り返るように、山を見上げてみる。

めっきり涼しくなってきた風に、山の木々が気持ちよさそうに揺れていた。

……夏もそろそろ終わり、だな。

少し寂しさを胸に残しながら、僕は先行く妹たちの元へと急いだ。

## カカの天下１８９「過ぎる夏」（後書き）

世界中のミホさん、勝手にアイドルにして申し訳ありませんでした。深くお詫び申し上げます。

## カカの天下１９０「乾杯は終わらない」

「かんぱーい」

「かんぱい、っと」

カチン、と互いのジョッキグラスをぶつけて自分のビールに口をつける。

んぐんぐんぐ……ぷはぁー！　ども、トメです。オヤジくさいとか言わないでくださいね。

今日は先日の飲みなおしということで、再びテンと飲みにきました。

「今日はカカとか追っかけてきてないだろうな」

「大丈夫だ、今日は教えてねぇよ。サユカも言いたいことは自分で言うらしいしな」

「だからさ、サユカちゃんは何を言いたいんだ？」

「教えない」

「なんでさ」

「そのほうがおもしろいからだよ、命短し恋せよ乙女。かんぱーい」

「もうしただろ」

「酔っ払いっていうのは何回もするもんだ。ほれ」

カチン、とジョッキをぶつける。

「誤魔化したな」

「いやいや、もうすぐ夏休みが終わるんだぜ？　乾杯くらい何回もさせろよ」

「嬉しそうだな」

「まぁな」

テンはビールをぐいっとあおって飲み干し、通りがかった店員さんに声をかけた。

「そこのおねーちゃん！　生一つ！」

「あ、はーい。生ビールをお一つですね。ご注文は以上でよろしいですか？」

「あとね、おねーちゃんを一つ」

オヤジかおまえは。

「あー、すいません。私は非売品なんですよー。なにせ世界に一つしかないレアものなので」

そりゃそうだ。手馴れてるなぁねーちゃん。

にこやかに去っていく店員にひらひら手を振って、テンはこっちに向き直る。

「もともとオレは学校が好きで教師になったんだ。そりゃ授業が始まるとなったら嬉しいもんさ」

「へぇ、やっぱ子供好きなんだな」

クールっぽい顔に似合わず可愛いこと言うな。

「ああ、特にカカみたいな変なのは大好物だ」

「好物とか言うな」

食べるなよ？

「なんだよ、トメだってカカとかサエとかサユカとしょっちゅう遊んでるじゃねぇか。大好物なんだろ？　小学生の女の子」

「変質者みたいな言い方やめい！」

食べたりしないからな絶対に！

おいしそうとはちょっと思うけど！　って何言ってるんだ僕は！？

ちょっと酔ったかな……口に出さなくてよかった。

「おいしそうねぇ、やっぱ好物なんじゃん」

「口に出してたのか僕！？」

けけけ、と意地の悪そうな笑い声をあげるテン……くそぅ、やっぱ酔ったかな。

「ビールだけじゃすぐ酔うわ。つまみ頼もう」

「おぅ、オレはなんでもいいからトメの好きなの頼めよ」

「んー……じゃイカの黒造りを」

「トメはサエちゃん狙いか」

「なんでだ！？」

「黒色の選んだから」

「なぜサエちゃんのイメージカラーを知ってる」

「前にスイカ割り大会してただろ。そのとき観客に混じってたんだよオレ。グッジョブ！！　って最初に叫んだのオレだぞ」

あー、大騒ぎしてたせいで結構な人数の野次馬が集まってきてたからなぁ。全然気づかなかった……

「だから、別に僕はロリコンじゃないんだからそういうのは――」

「でもシスコンだろ？」

「……や、その、違」

「わないだろ？」

……や、たしかに最近カカのこと以外で趣味とかないなぁと思ってたところだけどさぁ、でもシスコンっていう響きがその、ねぇ？

「シスコンにかんぱーい」

「……かんぱい」

カチン、とジョッキをぶつける。

「大好きな妹にかんぱーい」

カチン、ときた。コノヤロウ。

「テン、いい加減にしろよ。おまえだって子供を大好物って言ってるんだからロリコンみたいなもんなんだからな」

「おぅ、オレはロリコンだぞ」

あれ、認めやがったこいつ。

なんて男らしいんだ。女のくせに。

「かんぱーい」

「……かんぱい」

にやにやしているテンを睨みながら、僕は本日何回目かの乾杯をした……

ええい！　負けっぱなしは癪だからせめて酒だけでも勝ってやる！　まずは追いつかないとんぐんぐんぐ！

「すいませーん、生おかわり」

「オレもー」

はやっ！！

三時間後。

酒でも口でも全敗な僕がいた。

こなくそー。

## カカの天下１９０「乾杯は終わらない」（後書き）

前回の飲み編が書き足りなくてもう一回書いちゃいました。かんぱーい。

でもまだ書き足りないですね＾＾；

まぁこの二人は今後もたまに飲むことになるでしょうし、いいですけどねっ。まだ泥酔編とか書いてないですし……ふふふ。

## カカの天下１９１「泳げないのもステータス」

「ほい、おいっちにー、おいっちにー」

おいっちにーカカです。

今日は学校のプールに来ています。サユカンを泳げるようにしようと、サエちゃんと協力して猛特訓中なのです。

「うぅ……この間、トメさんが教えてくれるって言ってたのになぁ」

私に手を引かれてバタ足しながらぼやくサユカン。

「仕方ないでしょ。泳ぎに行く暇なかったんだから」

「ほらほらー、足下がってるよー」

少し不満顔のサユカンだけど、サエちゃんに言われてしぶしぶ脚を動かす。

おっとっと、サユカンが急に進んできたから手を引いてる私はちょっとよろめいた。

まったくもう、急におっとっと（お菓子）食べたくなっちゃったじゃんか。

「ねえカカちゃん。サユカちゃんのバタ足はもう大丈夫じゃないかなー」

「うん、手の動きの練習ももう大丈夫だと思う」

一旦サユカンを引く手を離して、サエちゃんと向き直る。サユカンは「おっとっと」と言いながらも体勢を立て直した。サユカンも食べたいのかおっとっと。

「じゃ、なんでサユカン泳げないんだろ」

「うーん、潜ることも少しはできるんだしー、泳げてもおかしくないよねー」

「……そ、そう？　じゃ、いっかい泳いでみる！！」

「あ、サユカン」

止める間もなくプールの端まで移動するサユカン。

水中で壁を蹴る。すいっ、とまっすぐ進んだサユカンはクロールの形に腕を振って水をかく。

うん、綺麗な動きだ。バタ足も勢いがある。

でもなぜかそのまま沈んでいった。

「サユカン、だいじょぶ？」

「はぁ……はぁ……なんとか」

レスキューカカによって助け出されたサユカンは息も絶え絶えに

返事をした。

「サユカちゃんさー、もしかして息継ぎがうまくできないんじゃないかなー」

ああ、なるほど。そこがあったか。

「じゃさ、泳ぐ前に深呼吸を十回くらいしてみたらどうかな。こないだテレビで見たんだけど、すごい潜れる人がやってた。しばらく息止めてても大丈夫になるんだって」

海女と書いてアマとかいう人の話だったかな？

「じゃ、やってみる！」

「私たちは潜って水中でサユカちゃんの様子を見てみようかー」

「そだね」

サユカンは深呼吸を繰り返した後、再びプールの端へと移動した。

水中で壁を蹴って、スタート！

泳ぎ始めた！

ブバッ！！

吸いためた空気が口から全部出た！！！

サユカンはそのまま沈んだ……

「サユカちゃん、だいじょぶー？」

「げほっ、げほっ、げほっ……な、なんとか」

レスキューサエちゃん（多分有料）に助けられたサユカンは死にそうなくらいセキをしながら答えた。

「んーとー、たぶん、潜るだけなら大丈夫でも、水中で身体を動かすと息を止めてられないんじゃないかなー。ほら、一度のことをいっぺんにって慣れてないと難しいでしょー？」

おー、さすがサエちゃん。私の惚れた女だけあって頭がいい。

「じゃ、どう、すれば……」

「思いっきり口を固く閉じればいいんじゃないかな」

助言を受けたサユカンは三度、プールの端へと移動した。溺れまくってるくせにたくましい。

私とサエちゃんは潜ってサユカンの様子を見る。

サユカンが水中で壁を蹴って泳ぎ出した！

ぎゅ、と固く結ばれる口。

ブバッ！！！

鼻から空気が吹き出した。

「ふぃあぃー。はぁぃー、ふぃぅー、はぁぃぁー……」

カカサエレスキューコンビによって救い出されたサユカンは不思議な呼吸をしていた。

なんかヤバめ。

「鼻とは盲点だったねー」

「ガムテープで閉じちゃおうか。水の中でも少しはもつでしょ」

「それ、意味あるのかなー」

「慣れるのが大事だし、息継ぎとかできるようになるまで、ってことでどうかな」

と、いうわけで。わざわざ更衣室まで戻ってとってきたガムテープを使ってサユカンの鼻を閉じる。ついでに口も閉じる。なぜ更衣室にそんなものがあったのかは知らない。

「さぁ、サユカン、ゴー！」

「頑張ってーサユカちゃん」

んむ！！　と喋れないながらも気合を入れるサユカン。三回も溺

れたのに根性あるなぁ。

勢いこんでプールに入るサユカン。

そのまま沈んだサユカン。

あれ？

もう溺れた？

「そういえばー、口と鼻で息ができないと、人って死ぬんじゃなかったっけー」

……あ。

レスキューコンビ出動！！！

殺人犯コンビになる前に急げ！！

――結局、その日のうちにサユカンが泳げることはなかった。

## カカの天下１９１「泳げないのもステータス」（後書き）

息が出来ないと人は死にます。忘れないように。
……忘れる人いないって（＾＾；

題名の意味ですが、泳げない＝教えてもらえる＝交流が増えるきっかけになる、というものです。
そのステータスを生かしてトメと接近！
できませんでしたね。残念！

## カカの天下１９２「宿題を終わらせよ」

「よし、これで自由研究のレポートは終わり！」

「おつかれさまー」

「結構いいものができたわねっ」

おつかれカカです。

たったいま、夏休みの宿題である自由研究の共同作業が終わったところです。

どうやって書いていくか三人で相談しながら……そしてわからないところはトメ兄に聞いたりしながら進めたこの作業。

去年は面倒だった宿題も、この三人でやると結構おもしろかったです。

「これで夏休みの宿題、ほとんど終わりだねー」

「でもさ、サエちゃん。夏休み入る前にテンカ先生、別に宿題はしなくてもいいみたいなこと言ってなかったっけ」

「言ってたねー。でもいざ夏休みが終わって皆が宿題やってなかったら、テンカ先生は教頭先生とかに怒られると思うしー。『前言撤回！　オレが怒られるからやっぱやれ』とか言いそうじゃないー？」

「夏休み終わってから撤回するのは遅すぎでしょっ」

でも言いそー。

「サエちゃん、テンカ先生のことよくわかってるね」

「私も損得勘定は得意だからー」

さすがだ。

「ま、どっちにしろ宿題は全部やるべきだと思うけどねっ。カカすけ、あんたこないだ苦しんでた計算ドリルちゃんと終わったのっ？君のことだから、ドリルは工事現場で使うもんだーとか言って結局やってないんじゃないのー？」

意地悪げに笑いながら言ってくるサユカン。びみょーに当たってるのが悔しい。

だが！　しかし！

「ちゃんとやったよ！　ほら！！」

私は堂々と自分の計算ドリルを開き、二人に見せてやった！！

ぱらぱらとページをめくり、全部やってあることを見せ付ける。

「どうよ。もう夏休みも終わりだし、私は本気を出したのだ！」

「カカ……あんたさ」

「答え合わせはしてないのー？」

……あれ？

「いるの？」

「うん」

「解答の紙ついてたでしょーが」

おーまいごっど。

「で、結局今から必死に答えあわせすることになりましたとさっ」

誰に説明してるんだろサユカン。って、それどころじゃない。

ドリルの答え合わせは厄介なものだった。間違っているのを直すだけじゃなく、「なぜ間違えたか」を簡単に説明書きしなければならないのだ。

「なんでそんな面倒なことを！」

「ただ書いて直すだけじゃ勉強にならないしねー」

「答えを渡されてズルしようとする人防止にもなるみたいよ。答え見ながらやって正解ばっかだと答え丸写しと思われるよね。だからわざと間違えて書こうとするらしいけど、『どう間違えたか』って考えるのは結構難しいしっ」

「それで結局は、自分で普通にやって普通に間違えたほうが早い、っていうことに気づくらしいよー」

あーそうですかそうですか。

どうでもいいけど面倒だよ……うぅ。

「ちょっとカカすけ！　なによこの計算の答え！」

「あー、簡単なのはちゃんと答えるだけじゃつまんないから」

「にしたって『７０３＋５７１＝なおみがこない』ってなんなのよっ！」

「おもしろいかなーと」

「なおみって誰よ！」

「こないんだから知るわけないでしょ」

「変な風にいばるなっ！」

念のために説明しとくと、７０３（なおみ）が５７１（こない）っていう語呂合わせね。

「カカちゃん、これなにー？　５２１＋２５６＝フィーバーって」

「答えが７７７だからフィーバー」

「あー、なるほどー。カカちゃん頭いいー」

「よかないわよっ！　その間違い、どうやって説明するのよっ」

「間違えた理由でしょ？　『そのほうがおもろいから』でいいじゃん」

「そんなんでいいのっ！？」

サユカンは納得いかないようで、眉間にしわを寄せている。

そんなサユカンに、サエちゃんはいつものニコニコ顔で微笑みかけた。

「サユカちゃん、私たちの担任はテンカ先生だよー？」

「……じゃ、いいか」

納得するのはやっ。

ま、そんなこんなで……私の宿題が終わるまでもう少しかかりましたとさ。

## カカの天下１９２「宿題を終わらせよ」（後書き）

夏休みが終わる直前にやってない宿題に気づく。
よくあることです（ぇ

## カカの天下１９３「花火すぱぱん」

「こんばんわっ、トメさん！」

「こんばんはートメお兄さん」

「ただいまトメ兄」

「おかえりー」

毎度おなじみ三人娘を出迎えるのはもちろんこの僕、トメです。

ここは僕の家の庭。別になにか植えてるわけでも飾ってあるわけでもなく、庭というより空き地と言ったほうが近いかもしれない。

それでも四人で花火ができるくらいの広さはある。

そう、今日は夏休み最後の日。

最後の最後に花火をしよう！　ということで、夜にも関わらずサエちゃんやサユカちゃんもうちに集まったのだった。もちろん親御さんの許可はとってある。

「いっぱい買ってきたよー」

カカはスーパーの袋を掲げて楽しそうに言った。サエちゃんとサユカちゃんを迎えに行くついでに花火を買ってきてもらったのだ。

子供だけで夜道を歩かせるのが危険だって？

襲われても返り討ち。

警官は知り合いがいる。

無問題！！

「じゃ早速やろー」

「おし。バケツに水も入れたし、始めるか！」

いつだったか姉が置いてった高級たばこセットについていたライターを取り出す。どこら辺が高級かというと、とにかく金ピカなのだ。付いていたたばこも金ピカだった。

それだけだ。ほんとに高級なのか胡散臭いことこの上ない。

でもこの際、使えれば細かいことはどうでもいい。

綺麗な火の花を咲かせてくれよ！

「じゃ、どの花火からやる？」

はい！　と手を上げるカカ。

「ねずみが爆発するねずみ花火！」

こえぇよ。んなスプラッタな花いらんわ。

はーい、と手を上げるサエちゃん。

「こうもりが出てくるこうもり花火でー」

手品ですかそれ。

はいっ、と手を上げるサユカちゃん。

「ＵＦＯを呼び寄せるＵＦＯ花火でっ」

花火っていろんなことができるんだなぁ。

はい、と一応僕も手を上げてみる。

「僕はロケット花火がいいな。最初に景気よく打ち上げて――」

「ロケットを落とすんだね」

「そうそう、しっかり狙い定めて撃墜！　ってどんだけ飛ぶんだよ花火って」

「ちょっとそこの宇宙まで」

ちょっとじゃないし。

んー、皆の主張がばらばらだ。

「じゃ、間をとって誰も選ばなかったこの発破を」

「「「６４！！」」」

なんかいきなり三人の声がハモった。

「なんだいきなり」

「や、『はっぱ』って聞くと条件反射で九九の数字が出てきて」

さすが小学生。染み付いてるね。

「とにかくやるぞー！」

僕はセットした発破に火をつけて急いで逃げた。

数秒後――激しい破裂音が連続する！

「すぱぱぱぱぱん！！！」

なぜかカカは口で言ったが、とにかくそんな感じの音が耳に響いた。

いいねー、花火って感じ！

「じゃ次はこのミニ打ち上げ花火だ！」

「ぽしゅん」

「ひゅるるるるー」

「っぱぁぁぁぁぁんっ！！」

だからなんでいちいち口で音を言うんだこいつら。

まぁ、楽しそうだからいいか。

その後も僕らはありったけの花火に火をつけまくって遊んだ。

――夜の庭に咲いては散っていく光の花々。

夏の最後を彩るには申し分ない時間だった。

「ちりちりちり……」

「ちり……ちり……」

これ線香花火の音ね。言ってるのはカカとサエちゃん。

「ぽしゅん」

あ、サユカちゃんの声と共に火が落ちた。

「ご臨終です」

「なんまいだーなんまいだー」

「これが本当のお線香花火ねっ！」

ほんと仲いいなーこいつら。

明日から学校。でもこいつらにとっては場所が変わるだけで、結局いつも一緒にいるってことは変わらないんだよな。

……うらやましいな。

そんなことを思いつつ、僕は次の花火に火をつけるのだった。

「……ちりちり」

「あ、トメ兄……ぷふ」

「トメお兄さーん♪」

「トメさん可愛い……」

「なんだよニヤニヤするなよおまえらだって口で言ってただろ！ちょっとやってみたくなったんだよ悪いか！！」

「「「べーつにー♪」」」

こいつらムカツク。

## カカの天下１９３「花火すぽぽん」（後書き）

さて、夏休みも終わり、明日から新学期が始まります。すぽぽん！！

え？　土曜日？

ゆとり教育だから学校は休み？

そんなの知りません＾＾

# カカの天下１９４「二学期のはじまりっ」

「よ、おまえら。久々だな」

「テンカ先生。おはよーございまーす！」

「おはよー！」

「よう先生、元気してたかー？」

適当に挨拶していく生徒たち。タメ口をきく失礼なやつもいるけど、これも先生がクラスに馴染んでいる証拠です。

「おいこらカカ。なんだその口の利き方は」

怒られちった。失礼なカカです。

今日は夏休みが終わって初登校の日です。

「さて、始業式まで時間があるから先に宿題集めるぞー」

テンカ先生がそう言った瞬間、クラスがざわめいた。

「あの、先生。宿題なんか捨てておけって夏休み入る前に言いませんでした？」

手を上げて言う男子。名前は西革だか西川だかどっちか忘れた。

「あー、あれな。皆で叫びまくってたのが職員室まで聞こえたらし

くてさ、あのあと教頭に怒られちまったんだよね。宿題はなにより も大事だのとガミガミ……うるせぇったらないね。てわけで前言撤回。また怒られるのめんどいから宿題はやれ」

「夏休み終わる前に撤回してくださいよ！！」

うあ、サエちゃんの言ったとおりになった……

しかしテンカ先生の言葉に動揺する生徒は思いの他少なかった。もしかしたら皆このことを予想していたのかもしれない。まぁ先生の性格を考えてみれば簡単にわかることだしなぁ。

「じゃとりあえずドリル集めるぞー。自由研究とかは後で各自で工作室に持ってってもらうから」

というわけで宿題の収集開始。

「な……カカ！　おまえ宿題やったのか？」

「ええ、そですけど」

「どうしたカカ！！　頭がおかしいのか！？　いや、元がおかしいから……頭が正常になっちまったのか！？」

あんたの言ってることがおかしいよ。

「先生、安心してくださーい」

私が何か言う前に、サエちゃんがほやほやと笑いながら声をかけた。

「宿題の中身はちゃんと変ですよー」

「ならよし」

この先生もほんとアレだなぁ。

「さて、宿題はこんなもんか。宿題やってこなかったやつは立て」

言われたとおり、起立する数人の生徒。

テンカ先生は厳しい表情で、ダン！！　と教卓の上に拳を叩きつけた。

「なんでやってこなかった!?」

「「「あんたのせいで」」」

「それもそうか。座れ」

軽いなー先生。

「でも宿題は明日までな」

そしてきついなー先生。

「さて……この夏休み、おまえらは何をしてた?」

「赤くなってました」

「黒くなりましたー」

真っ先に発言したのは私とサエちゃん。テンカ先生はおもしろそうに目を細める。

「ほぅ……見たところそれほど日焼けしたようには見えないが」

私たちは夏休み入る前からそれなりに焼けてたしね。

「聞こう。何で赤くなった。何が黒くなった」

「血で赤く」

「お腹が黒くー」

「素晴らしい夏を過ごしたようだな」

なぜか拍手が起こる。

「先生は何をしてたんですかー？」

「オレか？　そうだな……」

少し考え込んだテンカ先生は、やがてにやりと笑ってこう言った。

「彼氏と飲んだりーー」

「誰が彼氏かっ！？」

バターン！！　と教室の戸をぶっ壊す勢いで登場したのは、サユカン！？

隣のクラスにいたはずなのに、聞こえたの今の！？

愛の力って偉大だぁ……

「ま、こうやってカカとかサエとかサユカとじゃれついてたくらいだな。夏休みの思い出は」

そう言って笑うテンカ先生は、心底楽しそうに見えた。

「先生も寂しい人ですね」

「やかましい黙れさぁ始業式いくぞ」

お、トメ兄にちょっと似てる言い方。

「サユカもクラスに戻れ！」

「トメさんとは……」

「ああ、彼氏じゃねぇよ」

「そ、そうですよねっ。じゃ、教室に」

「まだ」

「ぁんだってぇ！？」

テンカ先生もサユカンで遊ぶの好きだなぁ。

今学期もこんな感じで過ごしていくんだろうな。

超楽しみ。

## カカの天下１９４「二学期のはじまりっ」（後書き）

夏休みが終わりました！
夏ならではのイベント話が最近多かったですけど、次回からは『なんでもない日常度』が強くなると思います。
しかし学校が終わったとか始まったとかいうわりに学校の話が少ないこの作品（笑）あ、そうでもないかな？　夏休みが長かったからそう感じるだけですかねぇ……

## カカの天下１９５「元気の出る食べ物は？」

「ただいまー」

どうも、トメです。

仕事から帰ってきたのですが……ハテ。

カカは先に帰ってきてるはずなのに返事がありません。ただのしかばねにでもなってるんでしょうか。

「おーい、ただいまー？」

言いながら居間を覗くと、そこには……

「疲れたよ……パトラッシュ」

なんかしかばねになりたそうにグッタリしてる妹の姿が。隣には不法侵入常習犯の猫が丸まっている。

「とりあえずカカ、おまえが話しかけてるのは総理大臣だぞ」

昔あった「パトラッシュ、もう疲れたよ」のセリフが超有名な某アニメのお犬様じゃないぞ。

「じゃー……疲れたよ……パトラッシュ総理大臣」

ハーフですかその猫。

「で、なにがそんなに疲れたんだ？　大人数とケンカでもしたのか？」

「そんな三分で終わることで疲れるわけないでしょー」

三分ですか。カップラーメンですか。

そういやしばらく食べてないなぁカップラーメン。

「久々に授業聞いてたらさー、なんか疲れて疲れて……パトラッシュになっちゃうよ」

「おまえがなるのか」

「私、これからパトラッシュカカねー」

「略してパカか」

「……それはやめて」

「んじゃカカラッシュ」

「……そんな必殺技っぽい呼び方もちょっと」

わがままな。

そういえば夏の初めもこんなダルダルだったなこいつ。涼しくなってきたところで夏バテでもきたのかな。

「じゃ、今日は栄養のあるもの食べて元気だすか！」

「なに食べるの？」

「栄養があると言えば……」

「すっぽんのぢ」

ぢ……ぢ！？

「や、血だろうが。ぢを食べるってなんなのさ」

お尻が病気なすっぽん探して食べるんか。めんど！

「じゃ、イモリのグロ焼き」

「黒焼きだろ！　グロ焼きってなんぞや！」

グロイ焼き方……想像したくない……

「最近さ、濁点をつけるのがマイブームなの」

変なブームだ。多分今日だけのブームだな。

しかし、濁点をつけても変な意味にならない、なおかつ栄養のあるものと言ったら……あ、そうだ。

「マムシ酒はどうだ！　精力ばっちりつくぞ」

「小学生に何飲ます気さ」

……それもそっか。

「まぁマムシ酒はもちろん、今並べたのはちょっと子供には刺激が強すぎるから却下だな」

「刺激が強いって？」

「元気になりすぎるってこと」

「空が飛べるくらい？」

「あー、そうだなー。飛べるかもなー」

僕は超適当に答えた。でもカカはマジメに捉えたらしく、ガバッと身を起こして目を輝かせた。

「飲む！　すっぽんっぽんの血とかどこに売ってるの！？」

「変質者の血か？　それなら夜に散歩すれば適当に見つかるんじゃ」

「違ったすっぽんの血！」

……いま考えてみると、すっぽんって高いんだよな、たしか。

「よし元気になったな。じゃこの話はなかったことに」

「元気ない！　すごく元気でない！　だからすっぽんの血！」

そんな威勢よく言われても。

……あ。

「ちょっと心当たりあるかも」

「ほんと!?」

「ああ。今度聞いてみるから今日のところは普通のお肉で我慢しな。ちょっといい肉買ってきてやるから」

「むぅ……うん。約束だよ？　やぶったらトメ兄の血を吸うからね」

「吸血鬼かおまえは」

……そう、心当たりとは他でもない。

この間「この人、吸血鬼か？」と思ってしまった人のことだ。

冗談で思いついたんだけど、もともとお金持ちな家だしすっぽんみたいな高級品があってもおかしくないだろう。そう思って聞いてみると……

「ありますよー」

「……マジであるんすか」

「じゃー今度おすそ分けしますねー、すっぽん」

本当に吸血鬼じゃないですよね、サカイさん？

## カカの天下１９５「元気の出る食べ物は？」（後書き）

近々、すっぽんぽん編をやります。
違った、すっぽん編だ。
なんだスッポンポン編って。

失礼しました＾＾；

## カカの天下１９６「食欲は気まぐれに」

「最近涼しくなったね」

「そだなー」

居間で座りながらダラダラ中のトメです。

同じくダラダラごろごろしてる妹のカカがそんな話題を振ってきました。

「夜なんか結構寒いよね」

「昨日は確かに寒かったな。あ、毛布いるか？」

「うんうん、ほしい」

うーん、今年は急に暑くなったり寒くなったりするなぁ。にっき異常気象だ！

……や、原因は僕ら人間なんだけどね。

「先週まではすんごく暑かったのにね」

「今じゃ寒いなんて言葉が出るんだもんな」

「ほんとほんと、暑いなんて言葉もう使わないよ」

「夏はもう終わったなぁ」

「アイス食べたい」

……この妹は。

「話の流れまったく無視でありますかお嬢さん」

もう暑くないだの言ってたのに、いきなりアイスですかい。

「食欲は突然に」

「何のタイトルだそれは」

「そんな映画とかありそうじゃない？」

「おいしそうな映画だな」

観ているうちに腹が減ってくるに違いない。

「とにかく急にアイス食べたくなった」

「どんなアイスがいい？　あずきか」

「あずきはね、昨日あずさちゃんって子とケンカしたから食べたくない」

類似品だな。

逆に食べてやればすっきりするかもしれないのに。

「苺とか」

「あれ赤いもん」

ぴったりじゃん。ダメか。

「バニラとか？」

「三日前にバニーガールがテレビで踊ってたんだよね。それ観てたからお腹いっぱい」

おやじかおまえは。しかも「バニ」しか合ってないし。

「メロンは」

「最近のアンパンマンはメロンパンナちゃんあんまり出ないんだよね」

それ、食べない理由になるんか？

「んー、オレンジは」

「さっきカフェオレ飲んだし」

だから「オレ」の二文字しか合ってないうえに理由になってないから。

「カカ……おまえ食べる気ないだろ」

「あるよ？」

「じゃあ何のアイスが食べたいんだ」

「んー……と」

ちらりとカカに視線をやると、さらにごろごろしながら考えているようだった。ごろごろ。

「やっぱりそんなに食べたくないかも」

「それみろ」

「そーめん食べたい」

「オイコラ」

こいつなんでもアリだな。

「こないだ食べ飽きたって言ってただろ」

「や、毎日食べてたら慣れちゃってさ」

各方面からおすそ分けでもらったそーめんはすでに完食済みだ、長い戦いだったが。

「しょうが焼き定食が食べたい」

「カカおまえいい加減にしろ」

「食欲は唐突に」

「それはもういいから」

ちょっと変わってるし。さっきの続編か？

「本とかにありそうじゃない？」

「あー、太りそうな本だな」

そんな感じでだらだらーっと夕食を何にするか会議をしていたら……

スーパーの閉店時間になっていた。

というわけで。

「トメ兄……この野菜炒め、お肉入ってないよ」

「我慢なさい……」

余り物での粗末な食事となりましたとさ……

## カカの天下１９６「食欲は気まぐれに」（後書き）

食欲は突然に
食欲は唐突に
食欲は気まぐれに

これ、「食欲」を「恋」に変えたらどこにでもありそうですねっ！
それだけです！　意味はありません！！　すいません！

## カカの天下１９７「親戚の種類」

「カカちゃん、新聞紙かしてー」

えーと新聞新聞。おっと、どうも。カカです。

ただいま学校の大掃除の時間。夏休み中にたまった汚れを落とそうと、サエちゃんも窓磨きをしています。私はその手伝いです。

「カカちゃーん。窓ふくから新聞」

「はいはい。んー、四コマのってる記事のと、児童虐待の記事のと、どっちがいい？」

「料理の絵がのってるの、ない？」

「サエちゃんお腹すいてるんだね」

サエちゃんって気がつけば何か食べてるなぁ。でも細いし可愛いなぁ。ずるい。

「はい、料理の絵はないけど、中国産食品の安全問題の記事がのってるのだよ」

「わぁ、これはおもいっきり強く窓をふけそうだよー」

喜んでもらえてよかった。

「……食品をバカにするなー！！」

おー、すごい勢いで窓を拭いてく。

サエちゃん、こう見えて食べ物のことに関しては厳しいからなぁ。こないだサエちゃんちのチョコを勝手に食べたときなんか……お、思い出したくない！

「カカちゃん？」

「私はおいしくないよ食べないでサエちゃん！」

「なに言ってるのー？」

「……あ、ごめんごめん。ちょっと嫌なことを思い出して」

思い出したくないのに思い出しちゃった。恐ろしい記憶を……ちょっと気持ちよかった気もしないでもないけど。

「で、なに？」

「こっちの窓終わったから、次あっちー」

もう！？

「サエちゃんすごい。掃除のプロだね」

「まーねー」

「略してソウプロだね。ソープロ！　ワープロの親戚だね」

「カカちゃん、それ、なんかソープのプロみたいだからやめてー」

「ソープ？　ってなに？」

小首を傾げる私に、サエちゃんは少し考えてからいつもの笑顔で答えた。

「ソースの親戚だよー」

「へー、おいしいの？」

「トメお兄さんに聞けばわかるよー」

「わかった。帰ったら聞いてみる」

なんだろ。ソースの親戚って。

「ものにはいろんな親戚があるんだねー」

「そだねー」

「じゃ掃除の親戚ってなんだろ」

「なんだろねー」

「そうじ……とりあえずそういちさんはいそうだよね」

「いるかもねー」

……はて。なんかサエちゃんの反応が淡白になってないかな。

あ、そっか。

「サエちゃんの親戚は」

ビク、と少しだけサエちゃんの肩が震える。

「私とサユカンかな？」

でもその震えは――私がそう言った途端すぐにおさまった。

振り返ったサエちゃんは、笑顔だった。

「あははー、それ変だよー。私とカカちゃんとサユカちゃんは、親戚じゃなくて親友だもん」

「ごめん、そだった」

私とサエちゃんは笑いあった。

サエちゃんちの家の事情は詳しくは知らない。

でも夏休みのお盆のとき、親戚に会うと言っていたサエちゃんの顔を見る限り……サエちゃんにとって親戚という存在がいいものだとは、とても思えなかった。

だからそのときの話題には触れないように、親戚という言葉は使わないようにしてたのに……失敗失敗。

さ、気を取り直して掃除を終わらそう！

おまけ。家に帰ってからのやりとり。

「トメ兄、ちょと質問」

「なんじゃらほい」

「ソープっておいしいの？」

あれ、なんかトメ兄が石化した。

「……や、おいしい、といえばおいしいと言えなくもないがそれは店によるっていうかなんでカカはそんなことを……」

「トメ兄、おーい？」

なんか一人でぶつぶつ呟き始めた。

一体なんなんだろ、ソースの親戚って。

## カカの天下１９７「親戚の種類」（後書き）

子供にとって、世界は不思議でいっぱいです。
大人になるまで知らないほうがいいこともいっぱいです。

## カカの天下198「カミカミ」

「なんかさっ、甘いもの食べたくない？」

「太るよサユカン」

「わたしは別に気にしてないもーん」

む、私ちょっと気にしてるのに。

どうも、カカです。今日は学校の帰り道。用事があるらしいサエちゃんは先に帰ってしまったので、私とサユカンの二人だけの帰宅となりました。

「んじゃ商店街よってこっかっ」

「そだねー。何食べたい？」

「なんかあずきが食べたい気分っ」

「あー、そういえばあずさちゃんと仲直りしてないな」

「あずさちゃん？　そんなのいたっけ」

「うん。私にいちゃもんつけてきたの。なんか気に入らないって」

「どっかで聞いた話ね」

「そだね」

「どこでだったかな……うーんっ」

自分のしたことって案外忘れるもんだよねぇ。

さて、とにもかくにもやってきました甘味処。入り口の上の看板には店名がでっかく書かれている。その店名とは……

『とけろ』

……なにが？　と最初は思った。

だから店員さんに聞いてみたんだけど、そしたら「程よく溶けかけのアイスを使った甘味をウリにしているので、それが由来なんですよ」と教えてくれた。

にしても『とけろ』はないと思う。

そんなことを思い出しながら、私とサユカンは案内された席についた。

「なに頼もうかな……」

「わたしはあずき抹茶パフェ！　これがもうね、あみゃいのっ」

そっかー、おいしそうだな……ん？

ちらりとサユカンを見る。

なんかあさっての方を見てる。

「あみゃいの？」

「……あ、甘いの」

「あみゃいの？」

「……いやっ、そのっ、だから」

「あ、みゃ、い、の？」

「う、ううう」

私はサユカンの向かいの席から隣の席に移動した。

「あみゃいの？」

「ちょと、カカすけ、顔ちか」

「もっかい、あみゃいって言ってみ」

「そ、そそそんなこと言ってない！」

くぁーわいいっ！

「店員さんに、『このあみゃいのください』って言ってみ」

「そ、そそ、そんなこと言えるわけ」

「言ったらおごってあげる」

「……う」

サユカンは迷ったのか、所持金を確認しようと財布を取り出そうとして……固まった。

「財布……が、ない」

「忘れてきた？」

「かもっ！」

にやり。

「さぁ……もう言うしかないね」

「きょ、今日のところは甘いものはあきらめ」

「きれるの？」

「……うぅ」

無理だね。女の子はそういう生き物だ。

「す、すいませーん！」

手を上げて声を張り上げ、ケンカを売るような勢いで店員を呼ぶサユカン。

「こ、ここ、このあみゃいのください！」

「は、はい……あずき抹茶パフェですね」

「あ、私はこれ」

「はい……白玉クリームあんみつですね。かしこまりました、少々お待ちくださいませ」

よほど体力を使ったのか、ゼーハーと息を荒げながらサユカンは私を睨んだ。

「こ、これでいいんでしょっ！？」

「うん、じゃあハイ財布」

「君が盗んだんかいっ」

あー、もうホントにサユカンはおもしろいし可愛いなぁ。

甘いのとサユカンを味わえて、私は大満足でした！

## カカの天下１９８「カミカミ」（後書き）

人がかむとこみると、苛めたくなりますよね。
……なりますよね？（汗

# カカの天下１９９「ニャイドル」

「あれ、カカすけは？」

「どっかいっちゃったー」

こんにちはー、サエですー。

ただいま学校の昼休みです。給食を食べ終わった親友のカカちゃんは今言った通り、どこかへ行ってしまいました……さびしいー。

「んー、カカちゃんいつ帰ってくるかわかんないし、先に見てようかー」

「なにをよ」

覗きこんでくるサユカちゃんは、隣のクラスなのに相変わらず私達のクラスに入り浸っている。よっぽど私達が好きなんだねー。

「なに、その孫を見守るおばあちゃんみたいな目は！」

「ほっほっほ、サユカちゃん飯はまだかえー」

「おじいちゃん、さっき食べたでしょっ、ってぇ、それじゃサエすけはおじいちゃんじゃないのっ！」

のりツッコミだー。トメお兄さんに近づこうと必死なんだねサユカちゃん。

かぁいい。

「それでっ、なにを見るって？」

「これー」

昨日発売されたネコの写真集なのだー。

「うぁっ」

わ、サユカちゃんの目が輝いた。

サユカちゃん、背高いしツンツンしてるけど、可愛いもの好きなんだよねー。

「こ、このポーズ、可愛すぎ！」

そしてサユカちゃんは興奮しすぎー。

「うわぁ、うわぁ、このミシュって子、可愛い……脚がきれい、脚がー！」

このセリフだけ聞くと危ない人だなーサユカちゃん。

「日本中のアイドルネコが紹介されてるんだよ、この写真集。通称ニャイドル写真集」

「へぇー、へぇー、そうにゃのかー！」

……にゃ？

「サユカちゃん？」

「にゃによっ、今忙しいんだからにぇ！」

にゃ？　にぇ？

私はとりあえずサユカちゃんが持ってる写真集を取り上げた。

「にゃにするのっ」

「にゃにしてるんでしょーかー？」

と、ここでようやくサユカちゃんは自分の言葉使いに気がついた。

「え、や、これは」

「あれあれー？　どうしたのかにゃー？」

「な、なんでもにゃ……じゃなくてなんでもないわよっ！」

「にゃーにゃー」

「なぜに頭を撫でるサエすけっ！？」

だって可愛いんだもん。

「別に遠慮せずに、にゃーって言いなさいなー」

「またこのパターンか！　言わないわよっ、ネコかわたしはっ」

「うん、ネコ化だねー」

「ネコか？」

「だから、ネコ化だよ」

「はぁっ？」

うーん、文章にすれば伝わるのに、声にすると伝わらない言葉の意味……日本語って難しー。

その点、西川と西革を聞き分けられるニシカワ君はすごいと思う。どっちが本名だったか忘れたけどねー。

「……とにかくそれ、もう一回貸しなさいよっ」

「貸して下さいにゃって言ってくれたら――」

「貸して下さいにゃ！」

あれー？　すぐ言っちゃった。

恥ずかしがるのがおもしろいのに……つまんない。そんなに見たいのかなー、これ。

「わかったよー。じゃ一緒に見よー。それで二人でネコになって、恥ずかしい思いしちゃおー」

「恥ずかしいとか言うなっ」

怒鳴りつつも私の隣にくるサユカちゃん。

からかうのはこの辺にして、普通にネコの写真集を――

「……あれ？」

「……これー」

適当にページを開いた私達が固まっているところに、戻ってきたカカちゃんが後ろから声をかけてきた。

「ただいま。二人で何見てるの？」

私とサユカちゃんの肩の間から写真集を覗き込んで……カカちゃんは首を傾げた。

「なんでそんなとこに総理大臣載ってるの？」

あのネコ、ニャイドルだったのー？

謎だー。

## カカの天下１９９「ニャイドル」（後書き）

いじられサユカちゃん話その二です。二回目だけあって吹っ切れてますねサユカちゃん。

にしてもニャイドルパトラッシュ総理大臣はどれだけ名前が長くなれば気が済むのでしょうかね。

次回はカカラジです！

# カカの天下２００「第四回、カカラジ！」

「こんカカ！　最近急に寒くなってきたなーと思ったらたまに暑くなったりして、暑いのか寒いのかはっきりしろよ地球！　と大いなる星に叫んですっきりしてみたい今日このごろな香加です！」

「こんカカ。まぁいつも通りな留です」

「二人そろってカカ天です！　って、なんでいつも通りなの。留兄は世界に対して文句とかないわけ？」

「や、ないことはないが」

「じゃ言ってみ」

「いいのか？」

いいよー。

「作者がそう言うなら言わせてもらうが……」

「うんうん」

「僕以外にもツッコミ役増やせよ！！」

カカ天世界に対しての文句きましたねー。

「でも最近サユカンが勉強中だよ？」

そうそう。

「むぅ……そうかぁ。でもサユカちゃんってどっちかというと、いじられ役じゃないか？」

「留、じゃなくてトメ兄だってしょっちゅういじられてるじゃん。おんなじおんなじ」

「それもそうか……じゃ、気を取り直して。これはネット小説『カカの天下』を盛り上げるため、ぶっちゃけトークや作者の本音などを放送する情報ラジオ（風味）番組ですっ！　私たち留と香加は本編自体とは関係ないのでお気をつけください！」

というわけで、四回目のカカラジスタートです。

「ではでは一旦ＣＭ！」

「今までの常識を覆す居酒屋が登場！　その名も『病院』だ！　名前からして個性的なその店では、臓器移植漬け、手術盛り、脳みそポテトなど珍しいメニューが盛りだくさん！　そしてただいまイベント割引を実施しています。知り合いの飲み会を盗み聞きしたい、知り合いの飲み会中に突然現れてお経でも唱えて脅かしてみたいなど、どんなイベントでも結構です！　院長先生っぽい顔の店長が、粋な計らいをしてくれます。サプライズやスリルを居酒屋で味わいたい方は、ぜひ一度ご来店ください。『病院』と関係ないサービスじゃん、というツッコミはＮＧで！」

ＣＭがあけて。

「……割引かぁ。なんかビール安かったの、そのせいだったんだな」

「抜け目ないね、テンカ先生。でもあのとき食べたポテトって……いいや、食べたの私じゃないし。とりあえず次のコーナーいこ」

「次って言ってもこれしかないけどな」

「うっさい。ではおたよりコーナーのはじまりはじまり」

「なんか今回は感想欄とかメールとかで、結構いくつかいただきまして」

「前に実際に紹介したのが効いたねっ」

「効いたとか打算的なこと言わない！　さ、読んでくぞ。えー、カカラジネーム……って書いてないからそのままでいいのかな。『キツツキ』さんから。『トメ兄の”台所シリーズ”と姉カツコの”寝ぼけシリーズ”を他にも幾つか教えて下さい』だとさ」

「あー、８０話あたりで言ってたやつね。私知らないんだけど」

「香加が小さいときのことだしなぁ。ちょっとした若気の至りなんだけど、まぁ僕は留であってトメじゃないし……でも恥ずかしいな。よし、ちょっと省略して言っちゃおう」

「どゆこと？」

「まずは台所シリーズ。皮むきですね毛を――とか、包丁で剣士っぽく素振りしてたら包丁がすっぽ抜けて――とか」

「なんか省略部分が怖くてすごい気になるんだけど」

「寝ぼけシリーズは、目薬をさそうとしたら口に――とか」

たまにあるよねっ。ないか。

「半分寝てるせいで朝御飯食べる度に忘れて、三回くらい食べちゃったあとさらに――とか」

おばあちゃん？

「間違えて僕の制服着てそのまま登校――とか」

「で、トメ兄はお姉の制服着て登校を――」

「するかっ！　ちゃんと予備の着てったよ」

「姉はそのまま一日過ごしたの？」

「うん。なんか誰よりも男らしくて好評だったらしいぞ」

簡単に想像できるなぁ……

「あと、『姉は喧嘩で最高何人まで一度に倒したことがあるの？』と『姉カツコの旅の最終目的って何？』という質問をいただきましたが……これは姉に聞いてみないとわかりませんね」

じゃ今度ゲストで呼びますか。

「……まじで？　姉呼ぶの？　うぇ」

「いいじゃん留兄。おもしろくなりそうだし。ま、とにかくこの質問のほうは保留ということで、次いきます。カカラジネーム、『人生は七転び八起き、打倒我が家の姉貴に燃えてる弟』さんからいただきました」

「おし、がんばれ弟。僕はめっちゃ応援するぞ」

「えっと、『最近思ったんですけど、キャラクターの容姿って具体的にどんなんですか？』という質問です。ほい、さくしゃー」

はいはい。

えー、この作品はですね、ご存知の通りキャラの容姿の描写をほとんどしていません。もちろん私の中にはイメージがありますけど……あえて書きすぎないほうが読者の皆さんの想像が膨らんでおもしろいかなぁと思ったからです。

「でもこれだけ長くやってるんだし……少しくらい公表してもいいんじゃないか？」

ですね。じゃ香加。うちの看板三人娘の髪型でも公表しちゃって。

「りょかい。カカはショートです。サエちゃんはロングヘアーでさらさらで、これがまた似合ってて可愛くて――」

「長くなりそうだからカット。はい次」

「むぅ。えっと、サユカンは……あ。そだ」

ん、何か思いついた？

「読者の皆さんに質問です。サユカンはどんな髪型っぽいですか？」

……はぁ？

「や、全部ばらしちゃうのもつまんないじゃん？　だからサユカンっぽい髪型はどんなのか、募集してみようかと」

おー、なるほど。じゃ……これを読んでいるあなた！　感想欄でもメッセージでもいいので、あなたが思うサユカンっぽい髪型を書いて送ってみてください！　もしお暇でしたら！

「ご意見まってまーす。ではＣＭへ！」

『ついに最終回を迎える人気ドラマ、『名探偵カカの事件簿』は急展開！

「私犯人やりたい」

そう言い出して聞かない主演のカカ！

「私が一番犯人っぽいよー」

ごもっともなことを言うカカの親友役、サエ！

「わたしだってたまには目立ちたいっ」

魂の叫びをあげる、毎回『たまたま証拠見つけた人』とか『第一発見者』とかチョイ役のサユカ！

「あの、僕もたまには……」

おずおずと手を上げる、毎回被害者役のトメ！
なぜか犯人役をやりたがって争い始める主演達！
その中で起きる殺人事件！
そして自分が犯人だと主張しまくる登場人物達！
果たしてこの話は収拾がつくのか？　犯人役を勝ち取るのは一体誰なのか？　いっそのこと全員で殺しあって残ったやつが犯人でいいじゃないかという意見はダメなのか！？
無駄に密室とかトリックとか使って回りくどく犯人役を勝ち取ろうとする主演達の愛憎劇。どこに愛があるかは疑問だが、脚本がまとまり次第公開！』

「しかし……前から思ってたけどさ、こういう読者を交えた形式の話ってアリなのかな？　大丈夫なのか？」

「んー、読者様的におもしろければ別にいいんじゃない？　たまにしかやらないし」

まぁ、ストップがかからない限りは続けましょう！

「りょかい。さて、番組では引き続き、質問や意見、感想などを募集しています。感想欄でもメッセージでもいいので、『カカラジ用』とかわかりやすく書いて送ってくださったら嬉しいです」

今回は感想欄にいただいたメッセージを主に載せさせていただきました。本当にありがとうございます！

「ところで留兄。読んでないのが一つあるんじゃん？」

「……や、そんなことは」

「えーっとカカラジネーム『トメ毛』さん」

「あ、こら」

「遅い！　『近い将来、トメさんには良い意味でハゲて欲しいです（笑）』だって。ぷぷ、やーいハゲハゲー」

カカラジチョップ！

「いたぁん！」

「いい意味でハゲるならハゲでもいいじゃないか！」

「……そのいい意味って具体的にどんな」

「また次回！！　お相手は留と！」

「にげたー」

「留と！？」

「……香加でした」

「ではまた次回！！」

「うぅ、横暴兄貴め」

「この番組はのんだくれ病院と、名探偵カカの事件簿製作委員会の

提供でお送りしました」

「製作委員会なんてあったの」

「作者の頭の中に」

「……あそ」

## カカの天下２００「第四回、カカラジ！」（後書き）

今回はおたよりコーナーにて『キツツキ』さん、『コロコロ』さん。後半に『トメ毛さん』のメッセージを使わせていただきました。実際にこういうメッセージをもらえてすごく嬉しいです！　本当にありがとうございました！

でもほんと……大丈夫なのでしょうか、この話＾＾；

## カカの天下２０１「最高の枕と優しい手」

「眠いー」

そう言って目をしょぼしょぼこすっているのは、親友のサエちゃんです。

目をこするしぐさも可愛いなぁちくしょー、などと不届きなことを思いながらそれを眺めているのは、お馴染みカカです。

「寝てないの？」

「怖い夢みてー」

「へー、サエちゃんにも怖いものあったんだ」

「どういういみー？」

や、だって最近のサエちゃん。なんとなく私より無敵っぽいよ？

そう言ってからかおうかと思ったけど……なんか本当に眠そうだったからやめておいた。

「机に突っ伏して寝なよ。私もたまにやるけど、結構眠れるよ？」

「うー」

「私はトイレいってくるから」

そう言って立ち上がり、教室を出ようと歩きだす。

しかし――くいっと引っ張られる服の裾。振り返るとサエちゃんが。

「……どしたの」

「一緒にいくー」

「……寝ないの？」

「眠いけど寝たくないー」

よくわからない。

体育の時間。

「おいサエ。おまえそこのチームじゃないぞ」

サエちゃんはチーム分けで別のチームになったにも関わらず、私のそばを離れようとしなかった。もしかして私、愛されてる？

「カカちゃんと一緒のチームがいいんです」

「……理由が可愛いな。許可する」

「「ええっ！？」」

勝手な判断に生徒は大ブーイング。しかし。

「うるせぇ！　この組ではオレがルールだ！　逆らいたきゃ腕っ節でものを言いなっ！！」

もちろん誰も言えるわけなかった。

「あ、あの先生。俺もそっちのチームがいいなぁ」

「おまえは可愛くないからダメだ」

素晴らしい差別だ。

帰り道にて。

「サユカちゃん残念だったねー」

「宿題忘れた居残りだってね。いつも私に宿題やれって言ってるくせに、サユカンも人のこと言えないよね」

サエちゃんと一緒に帰るのはいつものことだけど……今日は本当にずっと私のそばを離れなかったなぁ。

もしかして結ばれたのかな？　どきどき。

「ただいまー」

「こんにちはー」

そして、今日は一旦家に帰ることもなく我が家までついてきたサエちゃん。

ランドセルを私の部屋に置いて、サエちゃんと向き直る。

サエちゃんは大きな欠伸をしていた。今日何度目だろう。

「サエちゃん。その怖い夢ってなんだったの？」

「んー……」

今朝から何度か聞いたけど、聞くたびにサエちゃんは口ごもった。

でもさすがに気になってしまう。

「とにかくサエちゃんが眠れないのは、また怖い夢みちゃうから？」

「あ……うん」

やっぱり。授業を聞き流しながらずーっと考えた推理が当たってた。

「それはね、きっと枕がよくないんだよ！」

「えー」

「だからちょっとこっちに」

私はサエちゃんを連れ出して、最高の枕がある場所に連れていっ

た。

「はい、この枕使って」

「で、でもー」

「いいからいいから」

私はサエちゃんに枕をすすめて、自分も寝転がってもう片方の枕に頭をのせた。

「うわー、なんて寝心地いい枕」

「でしょー」

私とサエちゃんは枕の心地よさを感じながら、目を閉じる。

……そのまましばらくして、サエちゃんが口を開いた。

「カカちゃんとね、会う前のときの夢を見たのー」

「それが、怖い夢？」

「……うん。カカちゃんと会ってからのことが、もし夢だったらって思うとー」

――怖かった。だから夢じゃないと確認するように、ずっと一緒にいたかった。

少なくとも今日は……とサエちゃんは恥ずかしそうに笑った。

「……そっか」

サエちゃんと仲良くなって、私の世界は広がった。

それはサエちゃんも同じだったのかな。

私だって、サエちゃんと仲良くなってからが、もし夢だったらと思うと……

「サエちゃん」

「んー？」

「手、つなごっか」

「……ん」

ぎゅっと手を繋いで。

私とサエちゃんは、目を合わせて微笑みあった。

「これなら、ゆっくり眠れそー」

「私も」

私達は目を閉じる。

幸せの感触を確かめながら——夢の中でも離れないようにと、願いながら。

……さて皆さん、おはようございます。トメです。

今日は会社が半日だけだったので、家に帰って昼寝をしていたのですが……

「なんだこいつら」

なぜにカカとサエちゃんが僕の膝の上を枕にして眠っているのでしょうか？

「寝返りうたなくてよかった……」

なんかやたら幸せそうだし、ここで膝を動かして彼女らの頭を床にゴン！　と落とすのも気が引ける。

「しかし……動けないんだけど」

「こんにちは、おじゃましまーすっ」

あれ、サユカちゃんの声が玄関から。

「ちょっとカカすけ！　君さ、わたしのやった宿題と自分の宿題すり替えたでしょっ、おかげでわたしちゃんとやったのに怒られて――」

怒鳴りながら居間に入ってきたサユカちゃんは、僕と僕の膝の上を見て固まった。

「あー、サユカちゃん。これはね」

「わ、わたしはどこを枕にすればいいですかっ！？」

「とりあえず落ち着け」

どうするかな、この二人。

「……いっしょ」

幸せそうに……どっちの寝言なんだか、まったく。

## カカの天下２０１「最高の枕と優しい手」（後書き）

はい、カカラジで壊れた分、ちょっとサエちゃんほんわか話を書いてみました。黒くないサエちゃんが見たい、というちょっとしたリクエストもあったので＾＾；

いかがだったでしょうか。

ホームコメディの『ホーム』の部分でした（なんのこっちゃ

## カカの天下２０２「カカと言葉、レベル３」

「私達って何族なんだろう……」

あいかわらずいきなりワケのワカランことを言う妹だ。

トメです。夕飯時です。居間で食べながらテレビ見てます。

「ほら、テレビにうつってるじゃん。ラーメン族って」

「……あぁ」

「じゃ、私達って何族？」

「何族ってそりゃ……何族かな」

日本人か、いや『何族』って聞いてるからこれじゃないし……

「や、そもそも何族とかに分類されないんじゃないかな、僕らは」

「えー、分類してよ」

んなこと言われてもなぁ。

「そもそもどんな部族が世の中にあるのか知らないし」

「えっと、例えば……裸族とか」

「たまーに近所で捕まるな」

ヘンタイ族とも呼ぶが。

「あと……海賊？」

「そんなに悪じゃないぞ僕らは」

「姉は？」

「どっちかと言うと山賊に近くないか？　イメージが」

我ながらいい例えだ。

「じゃ、貴族」

「そんなにお金もってないしなぁ」

「お金持ちといえばサカイさん」

「あれはオタク族とか引きこもり族って呼ぶんだ」

密かに吸血鬼族の疑いもかかっている。

「じゃあじゃあ、金属！」

もう族じゃないし。

「金属ほどかたくないだろ、僕ら」

「トメ兄は頭固いとおもうよ」

「やかましい。おまえが柔らかすぎるんだ」

発想が柔軟すぎるから変なこと思いつくんだ。良いことなのやら悪いことなのやら。

「けいぞくは力なり」

「それ単なるスローガン」

『ぞく』ってつけばなんでもいいんか。

「ゾクゾク！！」

「何を震えてるんだカカ」

「寒いときの効果音」

さいですか。

「あとは、あとは、んーっと……あ、家族は！？」

「おー、それでいいじゃん」

やっと会話の主旨が戻った。

「やー、自分でもなかなかうまいこと言ったなぁと」

「いつもは発想が暴走しまくって終わるのに、綺麗にまとまったな」

「そっか。私達は暴走族だ！」

……あぁ、ほんとその通りですよ。

「はいはい、カカは暴走ばっか。暴走族ってことで決定！　満足したか？」

「うん、満族」

「字が違う」

「なんでわかったの？」

「勘だ」

僕らって不毛な会話ばっかしてるよな……暇つぶしにはなるけどさ。

「趣味が妹との会話なんだし、仕方ないよ」

「だから心の呟きに返答すんなっての。誰に似たんだ」

「忍者のお父さんじゃない？」

「……なるほど」

ここ数年、カカに姿見せてないんだけどなぁ。親はなくとも子は育ち、似るものなのか。

「おりゃー、暴走」

「すんな！」

や、姉のほうが似てるなこいつは。

## カカの天下２０２「カカと言葉、レベル３」（後書き）

レベル三、と書いた割にレベルが下がっている気がするのはなぜでしょう。

……あ、難しい言葉使ってないからか＾＾；

まぁ、細かいことはキニシナイ方向で（笑

## カカの天下２０３「すっぽんぽん」

「おーいカカ」

「なに、トメ兄」

こんばんは、ご紹介に預かりましたトメです。

ただいま夕食どき。カカはテーブルについて僕がご飯をもってくるのを待っています。

「へい、すっぽんお待ち」

「へ、えっ、これが!?」

そう、先日カカが食べたがっていた、というか飲みたがっていたすっぽんの血だ。

さっき、近所のサカイさんからお裾分けしてもらったので、早速グラスにそそいで置いてみたわけだ。

「ご飯食べる前に、ちょっと口つけてみないか」

「おぉ……これが、すっぽんぽんの血」

「ぽんが多い」

飲んだら脱ぎ出しそうな血だな。うあぁ、なんて犯罪チックなアイテムだ!

「これを飲んだら空が飛べるんだよね！」

「え、あ、いや」

そういえばそんなこと言ってたな……

「空を飛べるほど元気になる、って言ったけど、本当に空を飛べるわけじゃないぞ？」

「空を飛べるほど元気になるんだよね？」

「あ、ああ」

「じゃあ飛べるんじゃん」

ああもう！　ニュアンスでわかれよお子様！

「とにかく飲んでみるね」

あ、くいっと飲んじゃった。

あ、顔をしかめた。血だもんなぁ。飲みにくいだろうに。

あ、グラスを置いた。

「どうだった？」

「……若い娘の血は格別じゃのう」

なんの漫画の吸血鬼のマネだそれは。

「すっぽんの血だっての」

「若いすっぽんぽん娘の味は格別じゃのう」

それは確かにおいしそ……いやいや！！

「……お？」

「ん、どしたカカ」

冗談を口にしていたカカの動きが止まった。

と思ったら、なんだかそわそわし始める。

「お、おいどうした」

「イェイ！！」

「なんだいきなり」

「なんかイェイな気分なの！　身体が熱い！」

あー、すっぽん効果か。身体が温まってきたのかな。

「イェイ！」

しかしやかましい

「ワンダフル！　ビューティホー！　エキサイトウーマン！」

素晴らしいがどうした美しいがどうした興奮した女がどうした。

「ああ、興奮した女っておまえのことか」

「今の私なら空を飛べる！　さぁ学校の屋上へレッツ」

「ゴーすんな！　飛ぶならここでやれ。ほら、グラス片付けてやるからテーブルの上で」

行儀が悪いけどカカを落ち着かせるためだ。仕方ない。

「えー、低い」

「空を飛べるなら低くても飛べるだろ」

「でも滑空時間とか速度とか」

「そんな細かい知識はいらん！　さっさとやれ」

「ぶー」

文句を言いながらもテーブルの上に立つカカ。

そして無意味に手をばっさばっさと振って……ジャンプ。

もちろん飛べるはずもなく。

ぽとり、とカカは墜落した。

顔面から。

もちろんぽとりなんて可愛い音じゃなかったけど、あんまりリアルな音を表現するのも痛々しいので勘弁してほしい。

さて、畳とキスしたまま動かないカカは……

あ、がばっと起きた。

「いまちょっと浮いたよ！？」

「……はいはい」

幸せなやつだなぁ。

元気出たのはなによりだけど。

「じゃ、これからちょっと外を走り回ってくるね。走ってるうちにまた浮くかもしれないし」

「変な噂たつからやめろ！」

前言撤回。

元気すぎるのも面倒だ……

――このあと、カカを落ち着かせるのに一時間もかかってしまっ

た。

逆る勢いを食に向けさせました。そしたらカカはすごい食べました。炊飯器の中身もすっぽんぽんとなりました。

……違った。すっからかん、か。

## カカの天下２０３「すっぽんぽん」（後書き）

恐るべし、すっぽんぽんの血。
はい、先日言ってたすっぽんぽん編です。
でも誰もすっぽんぽんになってなくてすいません。

# カカの天下２０４「逆」

「ただいまー」

トメです。

今日も今日とて、いつも通り味気ない仕事を終えて帰ってきました。でも家に帰れば面白い妹のおかげで刺激的な時間が過ごせます。刺激的すぎるのも困りものだけど。

さぁ、今日はどんな予想外な刺激があるんだろう。面倒なのは勘弁してくれよ。

「カカー？」

僕は期待を込めて、人の気配がする居間を覗きこみました。

「わぁ、とっても予想外」

どう予想外かと言いますと。

まず、カカがいます。

壁際で逆立ちしながら。

「と……トメ、兄」

あら、悪ふざけかと思ったら若干苦しそう。

「なにしてんだ、上から読んでも下から読んでもカカ」

「さ、逆立ち、してるからって、変な風に呼ばないで」

逆さまだから、つい……うまいこと言ったと思うんだけどな、自分でも。

「それで？　なんで逆立ちしてんの」

「さ、逆立ちの練習、してたら」

「してたら？」

「干してある洗濯ものに、脚がからまった」

なるほど。うちは天気が悪いとき、居間の角っこに小さな物干し竿を置いて洗濯ものを干すからなぁ。

見てみると、干していた僕のジーンズがうまい具合にカカの脚にからまっていた。両手が塞がってるし、これは自分じゃ取れないな。

「は、はやく、とって」

「まぁ、いいけど。ちなみにどれくらいの間その体勢でいるんだ？」

「ど、どうでも、いいから早く」

「や、大丈夫そうならもう少しこのままにしといて、日頃の行いを反省させようかなーと」

「お、鬼……」

いやね、冒頭で妹がくれる刺激が楽しみとか言いましたけれども。

何事もほどほどが一番でござんしょ？

なんでもやりすぎないように、日頃から躾は必要なのですよ。

「時間なんて、わかんない……時計見れないもん」

そりゃそうか。

「とにかく……もう限界」

あー、腕がぷるぷる震えてるね。片足を上に引っ張られながら、なんとかバランス保とうと頑張ってるね。

「なぁ、それ手を床から離したらどうなるんだ？」

「さっき、試したら、なんかぐるんぐるんなって死ぬかと思った」

ぐるんぐるんか……

「やらないでよっ」

「ばれたか」

見てみたかったのになぁ。

「そろそろ、どこかに沈んでしまいそうな勢いです……」

げ、なんか本当に顔色悪い。

「沈むな！　浮上しろ！　いまほどいてやるから！」

さっさとほどいて……この、くそ！　結構固いな。

「天に昇りそうな気分です……」

「浮上しすぎ！！」

とにかくヤバめだ！　兄がふざけてたせいで病院行きだなんて、昔の姉が僕にやったみたいなこと、するわけにはいかん！

「よし、ほどけた！」

「ふにゃー」

「ぐほっ！」

解放されたカカの脚が、そのままカカト落としとなって僕の腹部に命中した。

「はぁ、ふぅ、ふぃー……早くほどいてよホントに！　危なかったんだからね！！」

「だ、だからってカカト落としはないだろ……」

よく効いたぞ、カカト落とし……カカだけに。

「おやじギャグ」

「何も言ってないだろ！？」

「カカのカカト落としはよく効くなぁって顔に書いてある」

「……まじか」

なんにせよ助かってよかった。

まったく、本当にとても刺激的な毎日だ。

カカト落としさえなけりゃ、ちょうどいい刺激だったんだけどなぁ。腹痛い……

## カカの天下２０４「逆」（後書き）

逆立ちって疲れるんですよねぇ。
上から読んでも下から読んでもカカ。えー、さっき気づきました
（笑）

## カカの天下２０５「マパーマとはなんでしょう」

「ね、そういえばタマゴしばらく見てないね」

「ん？　なんだよ。今朝に卵焼き食べたじゃんか」

もう忘れたのか。ボケたのか？

あ、どうも。ボケた妹を持つトメです。

「違うの！　だからさ、タマゴだよ。どうしてるのかなーって」

「だからさ、何の卵のことを言ってるんだよ。生んだのか？」

「人間が生むはずないでしょ何言ってるの」

妹が冷たいよぅ。

「だからさ、ほら。私が名付けた姉娘のタマゴ！　略してタマ！」

「略だったのかタマって！？　初めて聞いたぞそれ！」

「言ってないけどなんとなく察してよ」

「さっき言われた言葉そっくり返す。おまえ何言ってるの」

無茶ばっか抜かしおって……

「でもたしかに、ここ最近見てないなぁ」

「元気してるのかな、私のライバル」

そういえば……よくわかんないけどカカはタマのこと敵視してるんだよな。敵視と言いつつ気に入ってるっぽいけど。

「姉の友達に預かってもらってるって言ってたよな。姉に聞いてみるか」

と、いうわけで。

姉に電話して聞くと、その友達の住所を教えてもらえた。

そんなにうちから離れていなかったし、今ならその友達も仕事が非番で家にいるとのことなので、早速行ってみることに。

「えっと……あった、この家だ。赤い屋根だし間違いないだろ」

姉に聞いた住所が指す家は、なかなか立派な一戸建てだった。

「我が家より立派だね」

「そだな……じゃ、とりあえずピンポン鳴らすか。姉の弟だって言えば突然の訪問も大丈夫だって言ってたし」

「姉の友達……どんな人が出てくるんだろ。ワクワク」

「確かに楽しみだな。あの姉にどんな友達が――って、あれ？」

ふと声が聞こえた気がして、そちらを振り向くと――中庭があった。

「カカ、あれ」

「んー？」

二人してその声のする中庭を覗き込む。

するとそこには――姉娘タマを抱いて話しかけている男の姿が。

「いいでちゅかータマ。僕のことはパパ。お姉さまのことはママ、って呼ぶんでちゅよ？　ほら、言ってみなちゃい」

「マパー」

「こらこら合体しちゃだめでちょー」

「パーマ」

「誰もパーマなんかかけてないでちょー。パーマってお金かかるんでちゅからねー。ほら――」

と、ここで僕らにようやく気づく男。

考えてみれば姉に友達なんて、そんなにいるはずないよねぇ。そして急に行っても問題ないはずだわ。なんせ顔見知りなんだから。

はい、もう言うまでもないと思いますが。そこにいたのは姉の舎

弟で警官、シュー君その人でした。

「あ、あの、トメさん、カカさん……いつから聞いてました？」

「別に何も聞いてないでちゅよ？　マパ君」

「うん、何も聞いてないでちゅ。パーマ君」

「お願いしますなんでもします奴隷にでも犬にでもなりますからどうかお姉さまにはこのことはご内密に」

おー、警官が土下座してる。ほんとよわいなこいつ。

「カカー」

「相変わらず呼び捨てか、いい度胸だなーこの」

いつの間にか下ろされてたタマとじゃれつくカカは、文句を言いつつも楽しそうだ。

「しかしさ、この子だいぶ喋れるようになってきてるのに……赤ちゃん言葉はないんじゃないか？　マパさんや」

「マパは勘弁してください……ほら、ちっちゃい子とか可愛い動物にはどうしてもそういう言い方になったりしますでしょ？」

そういう人もいるよなぁ。

「でも、仰るとおりタマさんは」

お子様にまでさん付けか。

「結構喋るんですけど、僕のことをまだパパと呼んでくれなくて……」

「おまえ、パパちあう」

あ、びしっと言っちゃった。

「マパでじゅぶん！」

充分、か。パパとマパの違いはよくわからんが、将来有望だなこの子。

「う、ううぅ！　なぜタマさんは僕をパパと呼んでくれないのか……」

悲しみにくれるシュー君。どれだけの時間か知らないけど、今までタマを育ててきたんだろうなぁ。なのにパパと呼んでもらえない……それは悲しいよな。

「僕のことをパパと、お姉さまのことをママと呼ばせれば……いろいろとこっちのものなのに」

……そゆことか。意外とセコくいろいろ考えてるんだなシュー君。

「ま、居場所もわかったことだし。今度からはちょくちょく遊びに来るか、カカ」

「仕方ないなぁ！」

うれしそー、我が妹。

「しかたぁいなぁ！」

おまえは何が仕方ないんだ、タマ。

「マパは！」

あー、それは確かに仕方ない。

というか、どうしようもない。

## カカの天下２０５「マパーマとはなんでしょう」（後書き）

タマちゃんどうしてるの！？　みたいな声があったので久々にタマちゃん登場です。マパーマとはなんなのか……読めばわかりますね、はい、つなげただけです。

タマちゃんはシュー君の家で預かってもらってます。ちなみにシュー君の仕事中は家族がタマちゃんの面倒をみています。

シュー君、父親になれるのかなぁ。

多分むりだろうなぁ。

## カカの天下２０６「トメのいいとこ、前編」

「ねぇ、トメ兄のことどう思う？」

「な、なによ急にっ」

「どうかしたのー？」

急に聞いてしまったカカです。

今は学校の帰り道。いつも通りサエちゃんサユカンと三人で歩いていたとき、ふと思ったのです。

「や、私らってしょっちゅうトメ兄と遊んでるけど……あの男のいったいどこがいいのかな、と」

「カカちゃん、お兄さんにあの男はないでしょー」

「そうよっ、お世話になってる人に失礼よ」

わ、結構本気で怒ってる。

やっぱ好かれてるよね、トメ兄。

「でもさ……トメ兄ってそんなに特徴ないじゃん？」

サエちゃんとサユカンは二人して目を合わせて頷き、私のほうに向き直った。

「「ツッコミでしょ」」

「それ特徴？」

特徴って言えば特徴だけど……そんな二人で声ハモらせてまで言うほどのことかな。

「サエちゃんはトメ兄のこと、どんな人だと思ってる？」

「んー、なんか本当のお兄さんみたいな感じー」

む、トメ兄は私の――っとと、なに言おうとしてるんだ私は。

「サユカンは？」

「ら、らぶ？」

「はいはいよくわかりました」

この上もなくわかりやすい答えをありがとう。

むむむ……でも結局トメ兄のどこがいいのか、よくわかんないな。

眉間にシワを寄せている私を見かねたのか、サエちゃんが口を開いた。

「そうだねー、私がなんでトメお兄さんを本当のお兄さんみたいだなーと思うかというとね、カカちゃんだけじゃなくて、私たちにも妹みたいに優しく接してくれるからだと思うよー」

優しい……？　トメ兄が？

「僕が楽しみにしてたおはぎを勝手に食べたな！　なんて激怒するトメ兄が、優しい？」

「トメさん……そんなことで怒るなんて可愛いっ」

はいはい、トメ兄ならなんでもいいんだよねサユカンは。

「あははー」

あれ、サエちゃんいつものニコニコ顔なのになんか笑ってないっぽいよ？

「それはねー」

あれ、なんかサエちゃん顔が近いよ？　声が低いよ？

「私でも怒る」

「申し訳ございません」

……こあい。

サエちゃん食べ物に関してはうるさいんだった……

あれ、そういえば。

「サエちゃんって食べ物にこだわるけど、ずっと前にやったスイカ

割り大会とかはいいの？」

食べものを粗末にしてる感じがするけど。

「あれはああいう遊びでしょー。だからいいの。人のを盗るのはダメー」

今後気をつけよう。

「んー、話は戻るけど、結局トメ兄のいいとこってなに？」

「優しいとこかなー」

「全部っ」

「サユカン黙って。参考にならないから」

なんかサユカン寂しそうな目になったけど、本当のことだから仕方ない。

「カカちゃんはどう思ってるのー？　トメお兄さんのこと」

「私？　うーん……」

どうなんだろ。

「改めて聞かれるとよくわかんないんだよねぇ……だから二人に聞いてるんだけど」

「じゃ、あれしてみればー？　えっと、ストッキング」

……あい？

「ストッキングを、どうするの？」

「かぶるんじゃ――」

「間違えた、ストーキングだったー、ってサユカちゃん今なんて言った？」

思いっきり目をそらすサユカン。

「「かぶる？」」

「い、いやぁ、そのっ、こないだテレビでそんなの、やってて……」

恥ずかしそう……かわいい。

「で、話は戻るけど。ストーキングのこと？」

「そうそう、トメお兄さんの後をつけて、いいところを見つけるのー」

ふむ……それは面白そうだ。

「よし、家に帰ったら早速やってみよう！」

意気込んだ瞬間。がしっ、と肩を掴まれた。

振り返ればサユカンが。

「報告よろしく」

「報告したらストッキングかぶってくれる？」

「その話は忘れてっ！」

「じゃあもっと可愛くお願いして」

「よ、よろしく♪」

「ひねりがないなぁ」

「ひ、ひねりってっ……んと、んと……よろしくにゃん♪」

「任務了解！！」

鼻血出るかと思った。

## カカの天下２０６「トメのいいとこ、前編」（後書き）

先日リクエストのあった「トメの魅力を全開で」と言う要望に応えるため、この話を書いてみました。まだ前半です。次が勝負です。果たしてトメは格好いいところを見せることができるのか！？

続きます。

# カカの天下２０７「トメのいいとこ、後編」

前回の続きからのカカです。

私はトメ兄をどう思ってるんだろう、と突然思い立った私。理由は特にありません。

とにもかくにも……トメ兄を観察してみて、それを調べてみようと思います。

「じーっ」

お仕事から家に帰ってきたトメ兄は、居間でぐったり中。

帰ってきたらいつも１０分くらい転がって停止してるんだよね。充電してるって言ってたけど意味はよくわかんない。

とりあえずそれを壁際から顔を出して遠目から見守ってる私。普通に居間にいてもいいんだけど、それじゃ気分がのらないもんね。

お、寝返りうった。あれやっぱ寝てるのか。

いつも１０分くらいしたら動き出すから、てっきり起きてるのかと思ってたんだけど……目覚まし無しに１０分だけ寝れるのかな。結構便利な能力だね。

お、頭がちょうどテーブルの下に。

起きた。

「だっ！？」

あ、頭にぶつけてる……ぷくく。

「ったぁ……か、カカ見てないだろうな」

きょろきょろ辺りを見回したので頭を即ひっこめた。

「ほっ……よかった見られてない」

見られてますごめんねトメ兄おもしろかったあっはっは。

再び覗いてみると、涙目で頭をさすってるトメ兄が見えた。意外と可愛い。

「さて……」

お、買い物行くのかな。

「カカー！　買い物行くからなー」

はーい、こっそりついてきまーす。

「……返事ないな。寝てるのか」

平日のこんな時間に寝たりしませんよ。トメ兄みたいに器用に起きれませんので。

さて、いつものスーパーへとやってきました。

後ろからこっそりつけていますが、全然ばれてません。私って尾行の才能あるのかも。

ただいまターゲットメ兄（誤植じゃないよ）は、卵売り場にいます。

売り場の上にある看板には『当店で千円分お買い上げの方には、一パック３８円でご提供します』という文字が。

卵を安く買えるってだけで……幸せそうな顔しちゃってまー。タマゴに頬擦りしちゃってるよ。

お、次は野菜コーナー。

タマネギをいくつか持って比べたりしてる……なんか一緒に買い物来たときとは違ったおもしろさがあるなぁ、トメ兄の動きとか。片目つむってタマネギの何を覗き込んでるんだか。

お、いいタマネギ見つかったのかな、これまたうれしそー。

前に「トメ兄の趣味って私？」みたいなこと言った覚えあるけど……趣味、買い物かもしれない。なんかすごい満足そうだもん。

うーん、それにしても。

トメ兄のいいところを探そうと思ってストーキングしてるけど、あんま見つからないなぁ。

最初に見たのは頭ぶつけて痛がってるとこ……ちょっとおもしろかったけど。

で、次は卵の安売りで幸せそうなとこ……ちょっと可愛かったけど。

あとは、たまねぎ選んでるとこ……ちょっと動きが楽しかったけど。

別に全然いいところなんて……お？

甘味コーナーに入った。

あれ、昨日私が勝手に食べたおはぎ買ってる。

……二つ。

あれれ？　昨日のトメ兄、なんて言ってたっけ。

『新発売のおはぎ……楽しみにしてたのに勝手に食べたな！？』

『おいしかったよ』

『やかましい！　今度買って来ても絶っっ対！　カカには食べさせないからな！』

『すっごく、すっごーくおいしかった』

『おまえもう黙れ！』

あんなこと言ってたのに……私の分も買ってくれたんだ。

そういえばトメ兄って……いつもなんだかんだ言いながらも、私が喜ぶことしてくれるんだよね……

見つけた。トメ兄のいいところ。

『私に甘い』だね。

や、いい兄を持ったもんだ。

やー、ほんとほんと。

……嬉しいじゃないか、このぉ。

「――トメ兄、なに買ってるの？」

「うわぁあ！？　カカ！？」

目的を達成した私は尾行をやめて、トメ兄の前に姿を現した。

「あ、私が昨日食べたおはぎ！　二つある」

「む」

「私の分も買ってくれたんだ。うれしー」

ふざけてトメ兄に抱きつこうかと思った瞬間、トメ兄は言った。

「や、昨日おまえに食われたから二人分食べようと思っただけだぞ」

……ナンデスト。

まぁ、そんなことを言いつつ――家に帰った後、結局私に一つくれたんだけどね。

え？　私がトメ兄をどう思ってるか結論は、って？

んー。

内緒。

## カカの天下２０７「トメのいいとこ、後編」（後書き）

いいやつですね、ターゲットメ兄。
でもぶっちゃけた話『昨日の怒りは忘れる体質』でもないとあの姉妹と毎日はやっていけないんだろうなぁと思う今日このごろ。

トメの魅力、伝わりましたかね？
……どうなんでしょうかね＾＾；

## カカの天下２０８「ＦＣ相手に、がんばれタケダ」

「まいったな……」

タケダだぜ！

まいってるぜ！

何にまいってるかと言うと……最近カカ君に近づこうとするたびに四方八方から視線を感じて常に四面楚歌な気分なのだ。

おそらくは先日、俺に宣戦布告したカカちゃんファンクラブなる者どもの視線なのだろうが……いくら俺が頭がいいとはいえ、所詮は小学生。一人で多数の男子を敵に回して無事に済むはずがない。カカ君じゃあるまいし。

しかし……せっかく名前を覚えてもらえたというのに声がかけられないのはもどかしい！　カカ君のことだ、もうそろそろ会話しないと俺の顔も名前も忘れてしまうだろう。

「あぁ、それだけはダメだ！」

「あれ、タケダ君だー」

む、その声は！？

「サエ君ではないか！」

「なに一人でもだえてるのー？　最近流行りの精神いじょー者？」

「流行ってなどいない！」

流行ってたまるか！　がんばれ社会！　がんばれ日本！

「とにかく助かった！　ちょっと話を聞いてくれ」

「わー、拉致監禁される」

「監禁などしない！」

「じゃー軟禁？」

「キンキン言うな！　とにかく屋上へ」

「はいはい、そう熱くならないでー」

カカ君に近づけなかったせいでサエ君と話すのも久々になるが…

…相変わらずマイペースな子だ……

さて、場所は屋上にチェンジ！

「もしかして告白されるのー？　絶対やだー」

「告白などしないがそんな言い方は傷つく」

この際そんなことはどうでもいい！

「実は今、俺は狙われてるのだ！」

「帰っていいかなー？」

「そんな微塵も興味なさそうに言わないでくれ！　おかげでカカ君に近づけなくて困っているのだ」

「カカちゃんに？」

おお、カカ君の名前を聞いて目の色が変わった！

「そうだ。カカちゃんファンクラブというものがあってな、そいつらに睨まれているおかげで俺は……」

俺が詳しく説明しようとしたとき、サエ君は唐突に指をパチンと鳴らした。

「――サエさま、なにか」

うぁどこからともなく黒い男が現れた！？

「カカちゃんに付きまとってる人たちがいるみたいだからー、それを調べて適当にお灸を据えといてー」

「御意」

うぁ消えた！？

「さ、サエ君。今のは……」

「私のファンクラブの会長さんだよー。多分明日にはそのファンクラブを解散に追い込んでくれると思うよー」

「さ、サエ君……なんというか、いくらなんでも」

「……はぁ、言いたいことはわかるよ」

あれ、もしかしてなんかすごい落ち込んでる!?

「皆が黒い黒いって言うからさー、いっそのこと本当に腹黒っぽいことしまくってやろーかと思ってさー、はぁ」

い、いじけてる……こんなサエ君初めて見た!

「調子にのってこんな風に悪役のボスみたいな感じで振舞ったらさー、ファンクラブの人たちもノッちゃってさー、でもさー、私も別に好きで黒いキャラとかやってるわけじゃ」

「わ、わかった! 話聞くから、な? 今夜は飲もう!」

「オレンジジュースねー、はぁ……」

「ああ、何杯でも奢ってやるともさ!」

肩を落としまくるサエ君を励ましながら、僕は『この学校、ファンクラブいくつあるんだろう』などと疑問に思っていた。

次の日から。

本当に四方八方からの視線がなくなっていた。

「なにをしたのだ、サエ君……いや、サエ君ファンクラブか」

おそるべし貴咲小学校。

## カカの天下２０８「ＦＣ相手に、がんばれタケダ」（後書き）

はいカカちゃんファンクラブ壊滅～でもサエちゃんファンクラブは残ってます。
そのせいもあってサエちゃんいじけてますが（笑）

## カカの天下２０９「サユカの任務、茶飲み友達編」

み、みみみなさんこんにちは！　サユカですっ！

な、なぜいきなりどもっているかというと……

「すいません、三色おはぎセット一つ」

「わ、わたしは栗ようかんセットでっ！」

「かしこまりました、少々おまちくださいませ」

そ、そうなのです！

ななんと！　トメさんと二人きりでお茶しにきてるのです！

「セットでついてくるここの緑茶がおいしくてさー」

「そ、そうなんですかそれは楽しみですねっ！」

夏休みの初めあたりに「一緒に緑茶をすすりにいこう」という約束を覚えてくれていたトメさん……やっぱりステキな人！

「でもごめんね、こっちからお茶に誘ったくせに今まで忘れてて」

忘れてたんですか！？

それをわざわざ思い出してくれるなんて……なんて素晴らしい人なの！

「ポジティブすぎ」

どこからか声が聞こえてきたけどきっと空耳だわ！

とにかくこの状況にわたしは緊張しっぱなし！

なぜ！？　色々あってトメさんと仲良くなれたと思うのに、なぜいつまで経っても成長しないのわたしの心臓はっ。そんなに暴れなくてもいいでしょうに！

「カカもどっちかというと和風びいきなんだけどさ、緑茶だけがどうしても好きになれないらしいんだよ。だから茶飲み友達ってのがほしかったんだ」

「光栄であります！」

「和菓子にはやっぱ緑茶だよな」

「その通りであります！」

「や、サユカちゃん。そんな敬礼してまで答えなくても」

ううぅ……だって頭ぐるぐるなんだもん。

「お待たせしました」

そうやって頭をぐるぐるさせているうちに、注文したセットが登場。

「さて、じゃいただこうか」

「は、はいっ」

いただきます、と合唱して、落ち着いた色合いの湯のみを手に取った。

そして二人してお茶をすする。

「ふぅ……お茶がおいしいなぁ」

隊長！　緊張のせいで味がわかりません！

「こういう和風な店でお茶を飲むと……ほんと落ち着くね」

隊長！　テンパって落ち着けません！

「さて……お菓子も食べようか」

「隊長！　食べてもきっと味が――」

「隊長とは誰ぞや？」

「あぁしまった口に出しちゃった！？」

恥ずかしい恥ずかしい……

「なんだ、心の中に隊長さんとやらがいるのか？」

「え、ええそうです、その、こう白ヒゲを生やして赤い服きて、え

ーっとでっかい荷物持ってるみたいな隊長が」

「サンタさん？」

「そ、そうですサンタ隊長です！」

何言ってんだわたしは！？

「そうかぁ、それじゃクリスマスには活躍してもらわないとね」

……あれ。

トメさん、すごい普通の笑顔だ。

「あの、自分で言うのもなんですけど……よくこんな変なこと話してるのに普通に返せますね」

「んー、いや」

トメさんは恥ずかしそうに笑った。

「変な話はカカで慣れてるから」

なるほど。これほど納得できる理由もないわね……

「それとサユカちゃんの暴走にも慣れてきたし」

「なにか言いました？」

「いや、なにも」

視線をそらしながらお茶をするトメさんが何を言ったのか、わたしには聞こえなかった。

でも、うん。なんだか心が軽くなった気分だ。

変な話だけど、緊張してもトメさんは受け入れてくれるってわかったら、緊張が解けたみたい。

これできっと栗ようかんを食べても味が――

「お、トメとサユカじゃん」

「あれ、テン」

味がしなくなったじゃないのっ！！！

「て、テンカ先生……」

こんなときこそ、昨日の電話で聞いたあの言葉を思いだすんだ！

「というわけで……サカイさん！　何か秘策はないですか！？」

「そうねー。サユカちゃんくらいだと一番の武器は視線かなー。想いを込めて見つめて、目で落とすの」

「なるほど……目ですか」

「さ、約束よー。相談聞いた代わりに……最近のあの子のことを話して！」

「あー、はいはいっ」

回想終わり！

というわけでっ、武器は想いをこめた視線！！

「おぉ、なんだサユカ、デートか？　わたしも混ぜ――」

帰れ帰れかえれかえれカエレカエレカエレカエレカエレカエレカエレ！！！

「――っとと、な、なんか、用事思い出したから、帰るわ」

よし、目で勝った！！

あれ、目で落とすだったっけ？　まぁいいやっ。

「なんだったんだ、テンのやつ。慌てて」

「用事があったんですよっ。それよりもほら、おはぎが冷めないうちに食べましょう」

「……や、おはぎは冷めても別に」

あぁ、栗ようかんが甘い。

でもこの時間はもっと甘い！

……にへへ。

## カカの天下２０９「サユカの任務、茶飲み友達編」（後書き）

にへへ……
甘っ（笑

## カカの天下２１０「和風、洋風、〇〇風」

「トメお兄さんって料理うまいですよね」

「ん、そか？」

「そうですよっ、たまにご馳走してくれる夕食とかほんとおいしいですっ」

「そりゃご馳走するときは見栄はってるもん」

やかましいそこの妹。正直なこと言うな。

どうもトメです。今日もそろそろ夕食時。うちにたむろしてる妹どもと別れて、そろそろ買い物に行こうかなと思っていたところです。

「サエちゃんとサユカちゃんも食べてく？　それなら材料多めに買ってくるけど」

「わ、いいんですかー」

「サエすけ、それ目当てでこの話題振ったでしょ」

「むー、別にそういうわけじゃ」

「サエちゃん腹黒だね」

きゃいきゃい騒ぐカカサエサユカは、腹ペコ状態の僕と違ってほ

んと元気いっぱいだ。

「ところでさ、サエちゃんとサユカちゃんってどういったものが好みなんだ？」

「サユカンの好みはトメ――ぐほぁ！？」

「な、なんでもないですよっ」

すげぇ……あの姉拳法の使い手カカに、不意討ちとはいえ鳩尾に肘を決めるとは……

「そ、そういえばサユカちゃん和菓子好きだし、もしかして和風な料理好き？」

「あ、はい！　お料理も和風なのが好きです！」

「ふむふむ、サエちゃんは？」

「私はですねー、お菓子もお料理も洋風なのが好きですね」

なるほど。

「わ、私も洋風好き！」

さすが我が妹、復活が早いな。

「だからサエちゃん、お揃いだね！」

「まて。カカは和風好きだろ」

何年おまえの飯を作ってきたと思ってるんだ。

「む！　違うの洋風なのお揃いなの！」

「お揃いになるために嘘なんかつくな！　それじゃ今のカカこそが腹黒だぞ」

おぉなんかサエちゃんものすんごく嬉しそうだ！　カカと腹黒でお揃いだからか？

「嘘じゃないもん！　そもそも私は基本的になんでも好きだもん！和風でも洋風でもなんでもこいなんだもん！」

「ほほぅ、なんでも、と言ったな？　じゃあネズミとかゴキブリを使った中国料理も大好きなんだな！」

中国料理って本当になんでも食べるからな。

「身近なゲテモノを出しましたねー」

「さぁカカすけ、答えはっ？」

「ちゃ、ちゃんと調理してるなら大丈夫だもん！」

「へぇ？　じゃ今度調達してきたらちゃんと食べるんだな？」

「いいよ、食べてやるよ！　ゲテモノがなんぼのもんよ！」

ちぃ、手強いな……ならこれならどうだ！

「じゃあ姉の丸焼きとかでも食べるんだな！？」

「すいません無理です」

降伏はやっ！

「身近すぎるゲテモノはアウトかー」

「カカすけ、残念っ」

ゲ、ゲテモノって……ちょっとサエちゃん。仮にもうちの身内にそんな言い方――

「あたしのこと呼んだかい！？」

「出たなゲテモノ！！」

「ひどっ！！」

あ、僕が言っちゃった。

ま、いいや姉だし。

「ところで……何の話してたんだっけ？」

一番エキサイトして喋ってたくせに小首を傾げるカカ。

でも……あれ？　僕も途中から勢いに任せて喋ってたから話の趣旨忘れちゃった。

「みんなでおいしくトメお兄さんのご飯を食べようって話ですよー」

「あ、そうだっけ。じゃ結局……なに作ればいいんだ」

「ちなみにあたしが好きな食べ物は――」

「聞いてないし興味もない。よし、じゃあ中をとって皆大好きカレーライスでどうだ！」

「「「さんせーい」」」と三人。「ブーブー」と豚が一人。

さて、献立も決まったし買い物に行くかな。

五人分ともなると結構な量になるし、さっさと作らないとな。

――そして今夜は、とても騒がしい食卓となりましたとさ。

## カカの天下２１０「和風、洋風、〇〇風」（後書き）

果たして〇〇にはいったい何の文字が入るのでしょうか……謎です。そうでもないか（笑）

## カカの天下２１１「続、返信カレー」

「お、カカすけっ。なにしてんの」

「メール」

携帯をカチカチ、とカカです。

ただいま学校の休憩時間。たった１５分しかないのによくうちのクラスくるなぁサユカン。

「おっ、誰？　誰とメールしてんの？」

「メル友だよ」

「へぇ、そんなのいるんだ。なんていう人？」

「カレーの人」

「なにその曖昧な表現。隠すな隠すな、もしかして男だったりするわけー？」

「や、本当にそう登録してるんだって。ほら」

私はサユカンにアドレス帳のページを表示した携帯を突きつけてやった。

「えっと……『カレー人』ってあるんだけど」

あれ、『の』が抜けてたっけ。

『星』をいれて『カレー星人』っていうのもいいなぁ。

「なんでこんな名前で登録してるのよ」

「だってメールでカレーのことばっか話すんだもん」

「だからってそんな……本当の名前は？」

「知らない。印度華麗とかそんな感じじゃない？」

いんどかれい。うん、この人にピッタリすぎる名前だ。

「知らないって、どうやって知り合ったのさっ」

「それは一通の間違いメールから始まった……」

「そんなドラマあったような気がするわね」

本当は間違いというよりはいたずらメールだけどね。

「カレーのことばっかって、どんなメールよ」

「例えば……私が『やっぱりケンカのトドメは正拳突きだよね』って送ったら」

「どういう話の流れでそんなメール送るのかも気になるけど、それで？」

「カレーの人は『私もそう思います。相手が吹っ飛んでケンカが終わると気持ちいいんですよね……ところでげんこつカレーというカレー屋さんがありまして、そこのカレーがげんこつくらうみたいに辛いんですよ――』って感じで続いてくの」

正拳突きの握り拳も確かにげんこつだけど……そこからカレーにもっていくのは我がメル友ながらなかなかやると言わざるをえない。

「へぇ、偶然ね。げんこつカレー、わたしたまにそこいくのよ。全国チェーンで結構広まってるっぽいわよ」

「じゃあサユカンも心の友だね。って、そういえば昨日はサユカンもうちでカレー食べたんだっけ。いまさらだ」

「心の友？　なにそれ」

えーっと、携帯操作をぴっぽっぱ。

「これ読んでみて。昨日の夕飯に私がカレー食べたときに送ったメール」

「どれ」

とりあえず報告しとこうと思ってメールしたんだよねー。

『今日の夕飯ね、カレーだったんだよ』

そしたらものすごい速さで返信がきたんだよねー。

『心の友よ！！！！！！』

「どうよ、メル友の私がカレー食べたってだけでこの喜びよう。『！』マークが六つだよ？」

「……その人の心の友は昨日の晩で何人いたのかしらね」

「とりあえずインドあたりにたくさんいたんじゃないかな」

友達が多くて羨ましい限りだ。

「多分この人は『心』と書いて『カレー』と読んでるね」

「その心は？」

「無かったら抜け殻もおんなじ」

「……重いわね、カレーって」

「カレーの人にとってはね」

胃袋的には誰にでもそこそこ重いけど。

でもカレーなくなったらこの人は本当に死にそう。

「で、心（カレー）の友カカすけはこの人に会ったりしないの？」

「や、会ったら絶対お腹がパンクするまでカレーを食べさせられそうな気がするから遠慮する」

「でも向こうから会いたいって言ってきたら？」

ありうる、けど……

「大丈夫。元々適当に送ったメールから始まったメル友だよ？　どうせすごい遠くに住んでる人に決まってるよ。たまたま近所に住んでるなんて、そんな偶然――」

と、そのとき。

「か、れ、い、か、れ、い、かーれっい」

……ぅ？　背後から、なにか……

「ねぇ、カカすけ。なんか後ろからすごいカレーっぽい歌が聞こえない？」

「い、いや、べつに」

「今日も今日とてか、れ、いー。きょーうは何カレーにしよっかなー」

あるわけ……ないよね？

「ねぇ、カカすけ。なんかこの上もなく近所から歌が」

「わ、私には聞こえないよ？」

「牛さんいれる？　豚さんいれる？　鶏さんいれる？　それとも魚？　野菜？　果物？　それともたまにはにんげん――こほん」

ちょっと待て今何を言おうと――いやいや空耳だ。気のせいだ！

「……あ、カレーメールきてる」

カレーメールとか言うな！

「……なんて返事かな、カレーの友」

本当にカレーの友とか言ってるし！！

「確定ねっ、カカすけ」

なんでこんな身近に現れるのっ？

そしてなぜそんなにわかりやすい独り言が多いのっ！？

「……幸い同じクラスだけどあの子と交流はまったくない……このままバレないようにやり過ごそう」

「できるかねー？」

「できる、といいな」

できなければカレーの友決定だ。

カレーは好きだけどさ、毎日は勘弁してほしい！

こんな近所なら絶対付き合わされる！

あ、返信きた。

『ところで心の友よ。あなたはどこに住んでる人？』

……えっと。

「なんて返信するの？」

適当に誤魔化すしかないね。

「私の住んでいるとこは……シベリアです！」

「日本語でそんなこと言っちゃダメでしょがっ」

サユカンの即ツッコミが炸裂。やっぱダメかぁ。

そもそもシベリアにカレーあるかも知らないしなぁ。

……適当に誤魔化すしかないね。

「私は応募県に住んでいます」

「県をつくるなっ」

ダメかぁ。

どうしよっかなぁ……いいや適当で。

## カカの天下２１１「続、返信カレー」（後書き）

かなーり前に出番があったカレーの人の話です。あれからカカはちょくちょくメールしてたみたいです。

え？　本当の名前ですか？

カレーの人です。

他に説明はいりません。

## カカの天下２１２「惜しい！」

「ただい――」

「ただいま！！」

……あれ、僕が買い物から帰ってきたのに、出迎えてくれたカカが「ただいま」なんて言ってきたよ？

というわけで困惑中のトメです。

「あのさカカ。なんで」

「トメ兄、惜しい！！　もう少しでただいまって言えたのに！」

……は？

「なんじゃそれ」

「いま私たちの間で流行ってるんですよー」

「なにか失敗すると、大きい声で『惜しい！』って指摘するんです」

後ろからひょっこりと顔を出して説明してくれるサエちゃんとサユカちゃん。

ていうかそれ……楽しいのか？

さて、僕が居間に落ち着いてからも、三人は何かにつけてその『惜しいごっこ』を続けた。

「私トイレいってくるねー」

「惜しい！　サエすけそこお風呂！」

「もうちょっとで一緒に入ってにゃんにゃんしちゃうとこだったよ？」

にゃんにゃんってなんすかカカさん。

「せんべい食べよっと」

「カカちゃん惜しいー、そこ口じゃなくて鼻」

「ふが」

女の子が「ふが」とか言わない！

「わっとっ、転びかけた」

「サユカちゃんのスカートがふわりとー、もう少しで中がー」

「トメ兄、惜しい！」

なんで僕に言う。

まぁ、そんな感じで本人たちは楽しそうにしている。僕にはいま

いち楽しさがわからないが。

「夕食つくろ……」

「サユカンあぶなーい」

ってなんでおまえらサユカちゃんを僕に向かって突き飛ばす！？

立ち上がりかけ、という微妙な体勢だった僕はバランスを崩しながらも、なんとかサユカちゃんを受け止めた。

「サユカン惜しい！」

「もう少しでキスできたのにー」

「お、おまえらなぁ……」

そんな危ないことすんなよな、もう……サユカちゃんだって恥ずかしさで顔を真っ赤にしてるじゃないか。

サユカちゃんを落ち着かせ、改めて僕は夕食をつくりに台所へ向かう。

「トメ兄、今日の夕飯なに？」

「キスの天ぷら」

「「「惜しい！！！」」」

だから何がだ。

サユカちゃんまで一緒になって。

まったく……こいつらは何がしたいんだかさっぱりわからん。

呆れながら調理の準備をしていると……三人が台所へ入ってきた。

「どした？　整列なんかして」

「トメゾー」

「トメ吉」

「と、トメえもん！！」

あぁ、なるほど。

こいつらが何をしたいのか、今ならわかる。はいはい、やればいいんでしょ。

「……惜しい！！　僕はトメだ！」

僕にもやってほしかったのね。

三人とも満足そうな笑顔みせちゃってまー。

さて、三人を追い払ったところで調理の準備を。

あれ、買ってきたキス。多く見積もっても三人分くらいしかない……

もう一人前あればサエちゃんとサユカちゃんにもご馳走できたのになぁ。

「惜しい！」

……結構クセになるなこれ。

## カカの天下２１２「惜しい！」（後書き）

この遊びの発案者はカナブンさんという人です。
カナブンさんが誰かって？
それは秘密です＾＾

# カカの天下２１３「公園で遊ぼう、階段編」

「しりとりかいだんしよう」

「しりとりの怪談のことー？」

「そんなの難しすぎるわよっ」

たしかにそんな怪談しろと言われても難題だなぁ。

「カカちゃーん」

「なんだい？」

シャレじゃないよ？　カカです。

今日は学校が終わった後、親友サエちゃんサユカンのいつもの二人と、近所の公園に遊びにきました。

「いくら公園の設備がしょぼいからって、こんな明るいうちから怪談するのはどうかと思うよー」

「や、そうじゃないのサエちゃん。かいだんってこれのことだよ」

そう、そこそこ大きい公園だから、ちょっと広くて大きい階段なんてものがある。私ら三人はちょうどその階段の下に立っていた。

「いくらつまらないシャレを思いついたからって、こんな明るいうちから怪談するのはどうかと思うわっ」

「や、そうじゃないのサユカン。もともとこの階段を指して言ったの」

あと私が普段からつまらないシャレ言ってるみたいに言うな。

「ほら、じゃんけんしながら階段上ってく遊びあるじゃん。グーで勝ったら『グリコ』で三段。チョキで勝ったら『チョコレイト』六段。パーで勝ったら『パイナップル』で六段上るやつ」

「なんで『グリコ』だけ食べ物じゃないんだろうねー」

「わたしもそれは昔から疑問だったわっ。グリルとかどうかしら」

どうでもええやん。

「で、それとしりとりを合体させようかと」

「どういうこと？」

私が思いついた遊びはこうだ。

まず、しりとりの最初の文字を決める。

次にじゃんけんをする。勝者が一人になるまでやる。勝った人は五文字以内でしりとりの続きを言う。五文字以内なら何文字でもいい。そしてその文字数分、階段を上る。

じゃんけんで勝ってから十秒以内に答えられなかったら階段は上れず、もう一回じゃんけん。時間は私の腕時計のストップウォッチ

で測る。

先に一番上についた人が勝ち。

これが『しりとり階段』だ。別に普通に階段上り遊びしてもよかったんだけど、こっちのほうが難しいんじゃないかなーと思ったのだ。

「他にやることもないし、やってみよっかっ」

「私もいいよー」

「おっけ。じゃ、最初のしりとりの文字何にする？」

「普通にじゃんけんで勝ったときの頭文字でいいんじゃない？」

なるほど。グーで勝ったら『ぐ』か。

「よーし。いくよ。最初はグー！　またまたグー！　怒りは募って頭はボーン！」

「なにそのかけ声……」

昔ながらのかけ声、私ばーじょん。

「正義は勝つ？」

「なんで疑問系なのー？」

世の中そんなうまくはいかないから。

「じゃーんけーんぽい！」

結果は！

あ、サユカンが勝った。チョキで。

「計測開始」

「え、あ、えっとっ」

先に上についたほうが勝ちなんだから、なるべく五文字の答えを言って五段上ったほうが有利に決まってる。でも咄嗟に『ちょ』から始まる五文字の言葉を言え、なんていうのは結構難しい。

「ちょ、ちょ……チョベリバ！」

……古。

「ちょっと君ら、なにその、可哀想な人を見る目は」

「時代に置き去りされたんだね」

「あわれー」

「うるさいよっ！」

なにはともあれサユカンは五段あっぷ。さぁ次いこ。

「じゃーんけん、ぽい！」

あ、私勝った。

「計測開始っ」

えっと、『バ』だよね。

「ババァの……」

「ババァの、なにー？」

まずい。先走って言っちゃった。ババァの……ババァの……どうしよう、あと一文字でしか言えない！

「三、二……」

ああもぅ！

「ババァの血！！　……なに、二人ともその目は」

「やっぱカカすけだなぁって」

「ぶしゃー」

「やかましいよ！」

ぶしゃーって何の音さ！　怖いなぁ！　言ったの私だけど！

「じゃーんけん、ぽい」

お、サエちゃん。勝った。

しりとりは『ち』

「計測開――」

「チキンカツ」

さすがサエちゃん。やっぱ食べ物できたか。しかもはやっ！

「食べたいなーと思って」

「サエすけ、こないだしりとりしたときも食べ物の名前だけでわたしに勝ったのよね……」

そんな感じで階段を上っていったけど。

勝者は、しりとりでことごとく五文字の答えを出していったサエちゃんだった。

しかも全部食べ物の名前で。

「サエちゃん、すごい」

「だってお腹すいてるもん」

お腹すいてるとサエちゃんは無敵になるのかもしれない。

そんな意味不明なとこも大好き。

「カカ、意味不明っておまえが人のことを言うか」

黙れテレパシートメ兄。

さて、次は何して遊ぼっかなぁ。

## カカの天下２１３「公園で遊ぼう、階段編」（後書き）

小さい頃に使っていたジャンケンのかけ声を思い出して書きました。最初はグー、またまたグー～と続いていくやつです。いくつかパターンあった気がするのですが……誰も知らなかったらどうしよう（＾―＾；）

ちなみに本作で使ったのは私が覚えているパターンのをいじったやつです。

## カカの天下２１４「カカＶＳ姉娘、教育」

「では、ごゆっくりしていってくださいな」

「はい、ご丁寧にありがとうございます」

「いえいえ。息子の友人が家にくるなんて久々ですから……私も嬉しいのですよ。では」

友達少なさそうだもんな、シュー君。

突然すいません、トメです。

ただいまシュー君のお母様と喋っていたところです。とても丁寧な対応と物腰に驚きです。親が出来すぎると子供は甘えてしまってろくな大人にならないのかもしれません。言いすぎ？

さて、最近姉娘タマの居所がはっきりしたので早速遊びに来たのですが、シュー君は仕事中だったため、シュー君のお母様に対応してもらったというわけですが。

別部屋に置いてきたカカは、おとなしくタマちゃんと遊んでるかな？

僕がシュー君のお母様と世間話しているうちに部屋を破壊なんてしてないだろうな。

「――というわけ。わかった？　タマ」

「ぁい、わぁったカカ！」

よし、何も壊れてないな。カカがタマちゃんに偉そうにしているだけだ。

「あとね、鼻に指をつっこんでやれば相手は怯むからやりやすいよ。最終奥義は相手のズボンをおろせば」

部屋は破壊してないけど常識とか何か大事なもんを破壊してる！？

「カカ、なに教えてる！？」

「ほぇ？　どしたのトメ兄」

「何を教えていたんだと聞いている」

カカは僕がなんで怒っているのかわからないようだ。可愛く小首を傾げている。

「幼稚園行ってるって言うから、必要なことを教えてあげてたの」

「必要なこととはなんでござるか」

「ケンカの必勝法」

「それ必要なのでござるか！？」

しかしどんだけストリートファイト流行ってる幼稚園なんだよ。

「なに言ってるのトメ兄。子供だらけの場所でケンカが起きないわ

けないでしょ。それにござるってなに」

「そりゃそうかもしれないがな、そんな具体的なこと教えなくても……ござるは気にするな」

カカだってたまに変な言葉遣いなるだろうが。

「でもさ、小さいころからこうやってあたしは強くなった、って姉が言ってたよ」

どんだけ自分の弟子を増やしたら気が済むんだヤツは。

「さぁタマ。私が教えたことをもう一度言ってみなさい！」

「あぃ！」

勢いよく手を上げて答えるタマちゃん。

「ケンカの最初はどうするの？」

「てを食べる！」

……あぃ？

「みみを食べる！」

それどこのプロレスラー？

「めを食べる！」

食べすぎ！

「はなをじゅっこむ！」

じゅっこむってなに。なんかわからんけどエライ痛そうなんですが。

「ずぼんさげる！」

……ああ、今言ってたやつか。

「これでカンペキだね！」

「なぁカカ。ケンカって相手を食べたら勝ちなんだっけ」

「それでも勝ちじゃん」

や、確かにそうだけどさ！！

「食べるっていうのは、私がかじるって言ったのを聞き間違えたんだよ」

ああなるほど……ってそれでも結構きついぞ！　目がどうとか言ってなかったか！？

「カカ、おまえな、あまり物騒なのは」

「もう一回言ってみよー！」

聞いちゃいねえ。

「ケンカの最初はどうするの？」

「ぇえっと……」

タマちゃんは小さい子供だ。教えてもらった言葉でもそんな長いこと覚えていられないだろうな。

「ケンカの相手を？」

「たべる！！」

うぉメチャ簡潔になった！？

「違うよタマ。相手を食べるんじゃなくて、かじるの」

「ぇえっとぉ……ぁい、めをかじる！」

だからこえぇよ！！

「それでよし！！」

よくねぇよ！！！

「姉もこうやって育っていったんだね」

「ケンカ相手を食べて育ったんか」

姉ならなんか納得できるが……第二、第三の姉を作ってはいけない！

「いいか、タマちゃん。カカが言ったことは忘れろ。僕がもっといいケンカのやり方を教えてやる」

「む、相手を食べる以上にいいケンカのやり方あるの？」

「当たり前だ！　仲直りできないケンカはダメだろうが」

無邪気な子供は程度を知らない、周りの大人がしっかりしないと！

「いいか、タマちゃん。ケンカになったら、まずは謝るんだ」

「はやまるのー？」

「早まって食べちゃうんだね」

「……カカ、どっか行ってなさい」

……この子の将来が心配だよ、やれやれ。

## カカの天下２１４「カカＶＳ姉娘、教育」（後書き）

こうして姉は増え続けていく……
もうホラーですね。

## カカの天下215「クリック」

「おー、これがパソコンか」

「カカすけ、パソコン初めて見たの？」

「んなわけないでしょ。これがサエちゃんちのパソコンかぁってこと」

「私は初めて見たー」

「サエすけがかいっ。これ君のでしょがっ」

そういうわけです、カカです。

どういうわけかって？　会話で察してほしいなぁ。あ、うそうそ冗談。

今日はサエちゃんちがパソコンを購入したということで、サユカンと二人で見物しにきたのです。あ、私は本当に初めて見るわけじゃないよ？　友達の家で何度か触ったし、一応学校にも置いてあるし。授業では使ったことないけど。

「とりあえず電源いれてみよっ、買ったばかりでも絵を書いたりゲームしたりはできると思うし」

「電源はー……どこ？」

「ここでしょっ。サエすけ本当に持ち主？」

「触るのは初めてで……」

おろ、いつものニコニコ顔に少し余裕がないような……珍しい。

「あ、ついたー」

でもパソコンは無事にスイッチオンされました！

「サユカちゃん、やるー？」

「これはサエすけのでしょ。やっぱ最初にいじるのはサエすけじゃないと」

「……カカちゃーん」

その瞳に負けそうではあるけど……

「私もサユカンに賛成。はい、座った座った」

浮かない顔のサエちゃんの肩を捕まえて、パソコンの前に座らせる。

サエちゃんはパソコンのデスクトップ画面を恐る恐る覗き込んだ。

「え、えっと……絵を描いたりするのはどうするのー？」

「まずね、このマウスを動かすの」

「え、ここにねずみが入ってるのー！？」

「怖いこと言うな！　……ちょとカカすけ。どした」

……ご、ごめ……ぷはははは！

「ま、いいや。マウスっていうのはこれの名前。これを使って画面の矢印を動かすの」

「こ、こう？」

「違うっ、画面に直接マウス押し当てるんじゃなくてっ」

……お、お腹が痛い……うくく……可愛い……

「カカすけも腹抱えてうずくまってんじゃないわよっ。まったくもう、マウスはね――」

「サエちゃん、そのマウスの先端、光ってるでしょ」

うずくまってるなって言われたし、サユカンの言葉を遮ってどっこらしょ。

「う、うん」

「それを画面に向けて、ビーム発射！　パソコン動けぴっぴるんって言えば思い通りに動くよ」

「わ、わかったー。ビーム発射！　パソコン動けぴるっぴん！」

「ぶはははははははは！！」

「遊ぶなカカすけっ」

「動かないよー。あ、ぴっぴるんだったよね。ぴるっぴんって言っちゃったよー」

「君も信じるなっ！」

あーおかしー。腹いたいー。

ホント余裕ないんだなーサエちゃん。普段なら絶対こんなこと言わないのに。

「まったく……マウスっていうのは――そうそう、そうやって動かすの。それでそこをクリックする。クリックっていうのはね――」

「う、うん……うん」

ふー、やっと笑いが落ち着いてきた。

「ほら、そこをクリック」

「うん」

お、なんとかできるようになったかな。サユカンって面倒見いいなぁ。

「で、そこを右クリック」

「うん」

もう笑いどころはないかな？

「……右クリックだってば」

「やってるよ」

「ちがうちがう、右クリック」

「こうでしょー？」

「だから！　右クリックだってば！！」

「だからー、ちゃんと右腕でクリックしてるじゃん！」

ブッ！！！

「じゃあ左クリックって言ったら左腕でクリックするんかい！」

「あ、う、えとー」

さ、サエちゃ、か、かわいふはははははは……

「……カカすけ。君、今日笑ってばっかりね」

「わ、笑い死ぬ……というか、萌え死ぬ……」

「か、カカちゃん、なんでそんな悪魔みたいな目で私を見るのー？」

「ふふふ……次はどんなことして笑わせてくれるのかなー」

「そ、そんなぁ」

サエちゃんがこんな弱気になるの珍しいしね。

徹底的にいじめてやる！　むふふー♪

その日、私は初めてサエちゃん『で』遊んだ。

## カカの天下２１５「クリック」（後書き）

伝説の右クリック炸裂！

言いたいことはそれだけです！（ぅおい

# カカの天下216「カカノテイオー」

「はあ！？」

「ね、お願いトメ兄」

どうも、いつも通り妹のカカに無理難題を言われたところのトメです。

「おまえなー、いったい何歳だよ」

「子供っぽいっていうのはわかるけどさ、ほら、なんか公園に置いてあるやつ見たら不意にやりたくなっちゃって……」

そういうことあるよなー。わかるけどさ。

「で、お馬さんごっこか？」

「うん」

この妹のすごいところは自分のやりたいことをストレートに口にできるところだ。恥ずかしいとかそういう感情は二の次なんだよな……良いことか悪いことかはわからないけど、後悔しなさそうな生き方だ。

「トメ兄、馬になって」

「……や、まぁ、いいけどさぁ」

「じゃ夕食は馬刺しだね」

「食べるんかい！」

「違うよ、刺すんだよ。おしりから」

いつだったか、カカが寿司屋で「馬の串刺し」とか注文してたのを思い出した。

「じょーだんじょーだん。ほら馬になって」

何年ぶりかな、こんなことするの……しぶしぶ言われたとおりに四つん這いになる。む、居間の畳が食い込んで少し膝が痛いな。

「じゃ、乗るよー」

「重っ！」

「まだ乗ってない！」

「うごっ！」

蹴られた……

「ほんとに乗るよ？」

「はいはい、どうぞ」

背中に重さがかかる。む、意外と軽い。こいつも大きくなったなぁと思ってたけど……女の子だし、小四ならこんなもんか。

「はいよー、ヘルパー！」

どっかに困った人でもいるんか。

「それを言うならシルバーだろ」

「はいよー、しるバァ！」

汁バァ？

「キモいわ！　シルバーだっての」

「なんでシルバーなの？」

「昔の西部劇の映画で、主人公の愛馬がシルバーって名前でな、そのときにハイヨー、シルバー！　って言ったのが有名になったらしいぞ」

豆知識炸裂。

「ほれ、とにかく動くぞ。パカラッパカラ～！」

「トメ兄……意外とノリノリ？」

「カカが小さいころよくやってたからな。ほれほれ！」

「おっ、うぁ、あっはは！」

カカが振り落とされない程度に動く動く！　正直言おう、結構楽

しかったりする。

「やっほー！　我が弟に妹よ！　息災かー！？」

唐突にドアを壊しそうな勢いで入ってきた姉は、僕らのお馬さんごっこの現場を見て固まった。

「な、なにしてんのあんたら」

まずい。

「や、これはその……」

「た……たのしそー！！」

やっぱこうきたか。

「あたしもやる！」

目をギンギラギンに輝かせた姉はそう言って、入ってきたのと同じ勢いで外へと出て行った。

「あたしもやるって……誰とするんだろ」

「んー、タマちゃんにでもしてあげるんじゃないか？」

「そんな普通のこと、姉がするかな」

しないだろうな……まぁいいや。パカラッパカラ。

「きゃっふー♪」

しばらく遊んでいると……外から騒がしい足音が近づいてきた。

「……姉だね」

「多分な」

二人そろって玄関のほうを向くと……予想通り姉が飛び出してきた。

「ハイヨー！　アタシガテイオー！」

姉は馬に乗っていた。

競馬っぽい名前をつけてるけど、その馬は誰がどう見てもシュー君だ。まさに「あたしが帝王」って感じの光景である。シュー君かわいそー。

「や！　これ楽しいね！　ほら、鳴け！」

「ひひーん！！」

「アタシガテイオーも楽しいってさっ！！」

それが楽しかったらシュー君、あんた本物だよ。

「とりあえずもっかい町内一周してくるね」

「もっかい……？　ちょと待て。おまえまさか！」

「ぶち抜くよ！　アタシガテイオー！」

「ひひーん！！」

シュー君、泣いてたな……自分で自分を逮捕したい気分だろうに。
罪状はなんだろう。

「トメ兄！　私たちも姉に負けてられないよ！」

「負けでいいよ」

「でも賭け金とられるよ？」

「競馬じゃないっての」

「でも、賭け金」

むっ、いまだに僕の上に乗ってるカカに顔の向きを無理やり変えられた。視線の先には……なにもない。

なにもない！？

「ここにあった僕の財布は！？」

「ハイヨー」

「アホか、普通に走るわ！！」

あの姉、人の金をまた勝手に……ダッシュ！！

これだけを記しておく。

アタシガテイオーはものすごく早かった。

シュー君すげぇ。

姉はすげぇバカ。

## カカの天下216「カカノテイオー」（後書き）

姉は相変わらず犯罪ぎりぎりのことをしてくれます。
え？　ぎりぎりじゃなくて犯罪？
警官が許してるからいいんです。世の中そんなもんです。

あと、いつもより更新が遅かったのでわざわざ心配していただたくメッセージがありまして……なんかすごい嬉しいです（笑）仕事の都合で遅れただけなので大丈夫ですよ＾＾わざわざありがとうでした！

## カカの天下２１７「とある親の想い方」

「――という感じで、素晴らしい右クリックしてましたよ？」

「あぁ、な、なんて可愛いー……も、萌え死ぬー」

「カカすけと同じこと言ってますね」

「はぁ、ふぅ……ふふふ。パソコン送ってよかったー」

どうも、サユカですっ。

今わたしがいるのは近所の小さな喫茶店、『ユーラシア大陸』です。小さいくせに名前はでっかいです。

とにかく、そんな目立たない喫茶店でわたしとサカイさんは紅茶を飲みながら話しています。内容はもちろん、サエすけのことです。

「あのパソコン、サカイさんからの送りものだったんですね。内緒みたいですけど」

「お給料入ったし、これくらいはしたくてー」

サエすけにそっくりのニコニコ顔が今にもとろけそうになってる。

そんなに右クリックの話が可愛かったのかな。口には出さなかったけど、わたしもそのときのサエすけ可愛くて可愛くて頭撫でたりしたくてしょうがなかったのよね。

「親バカですねっ」

「……ふふ、違うわよーサユカちゃん。わたしはねー、馬鹿な親」

「何か違うんですか？」

「意味が違うの、全然ねー。また、サエのこと教えてね」

「……はいっ、できるだけは」

なんだか疲れたように笑うなぁ、サカイさん。仕事とか忙しいのかな、やっぱり……

いろいろ事情あるんだろうけど、娘のために頑張ってるんだよね。前はいろいろ考えちゃったけど、やっぱりこの人はサエすけの母親だ。娘の心配をしながら、それでも頑張ってるんだ、きっと。

だからわたしはたまにこうして連絡をとって、サエすけの近況を伝えたりしている。

サエすけのためにも、この人に頑張ってほしいから。

「ところでサユカちゃん、申し訳ないんだけど……」

「はい、なんですかっ」

サエすけの親友として、わたしもできる限り協力しないとっ。

「ここのお会計、お願いできるー？　わたし、お金なくてー」

「あれっ、財布忘れたんですか？」

「いやー、あのー、パソコン買ったらお金なくなっちゃってー」

「そ、そうですか、それは仕方な――」

「あとゲームとかＤＶＤとか漫画とか買ってたらいつの間にかスッカラカンにー」

急に協力する気が失せてきた。

「あの……サカイさん、娘のために頑張ってるんですよね？」

「そりゃーもー。でもね、頑張るにはいろいろと必要なのー」

それはわからないでもないですけど……

「仕事だるいけど頑張ったしー、ほしいもの買わないと割に合わないしー」

前から薄々感じてたけど、もしかしてこの人、ダメ人間なんじゃ……

「だからサユカちゃん払ってー。払わないと二人とも食い逃げ犯で捕まるよ♪」

このダメ人間タチが悪いっ！！

サエすけの黒い部分が大人になった感じだっ！

「うぅ……わかりましたよぅ」

こんな大人になっちゃダメだ。もしなるならそう、トメさんみたいな大人に！

「サユカちゃん、顔が溶けてるよー」

はっ、いかんいかん。

「とにかく、わたしが払いますよ、払えばいいんでしょ、もう！」

サエすけ、君が不憫だよ、まったくもう。

わたしはしぶしぶレジを済ませ、外へ出る。

サカイさんは自分の策がうまくいったからかニコニコしている。なんかムカつく。

こういうのサエすけにやられるとすぐ許せるけど、大人相手だとなんか……大人のくせにってどうしても思ってしまう。

「今日はごちでしたー、サユカちゃん」

「……別に、いいですけどっ」

「うんうん、ごめんねー」

「まったくもう……ここで話が聞きたいって言ったのサカイさんなのにっ。お金持ってないって最初からハメるつもりで――」

「お詫びと言ってはなんだけど、はい、これー」

っと。

わたしがイラつきに任せて喋ってたのを遮って、サカイさんは小包を差し出してきた。

「これ、なんですか」

「みんなで食べてー」

開けてみると、中には美味しそうなエクレアが四つ……

「あの子、そこのエクレアが大好きなのー。でもちょっと高くてー、ここ来る前に買ったんだけど、思ったより使っちゃった」

あははー、と呑気に笑うサカイさん。

「あの子にこれ食べさせたいと思ったら、それしか考えられなくてー」

……先に言ってくれればいいのに。

わたしは思った。

この人はサエすけみたいにズル賢い部分もあるし、ダメ人間みたいな部分もある。

でも、やっぱり。

ちょっと抜けてるだけで、不器用なだけで。

ちゃんとサエすけの母親なんだ。

この人の笑い方があまりにも優しいから、イラついていたわたしにもそれが理解できた。

「……はい、いただきます。お仕事がんばってください、サカイさん」

「うん、頑張るよー。ほしいゲームもでるしー」

……この人、やっぱダメなのかな。

それともそういう風に見せてるだけなのかな。

謎だっ。

## カカの天下２１７「とある親の想い方」（後書き）

最近サカイさんが絡むとシリアス風味に……なると見せかけてふざけたり。つかみどころのない人です。さすがサエちゃんの母親。

でも、なんだかんだで頑張ってるみたいです。

ゲームとか漫画に支えられながら……ダメ人間じゃないですよっ、頑張るときに頑張ってるならっ！

## カカの天下２１８「大合格！」

「先生、これ、どういうことですか！」

「あん？　なんだよカカ」

どうも、激怒中のカカです。

いまは四時間目が終わって給食時間に突入したところ。本来なら私もクラスメイトと一緒に準備するところですが……ちょっと納得いかないことがあって、テンカ先生に抗議です！

「このテストです」

「おー、さっき返したやつな」

「この点数！」

「おー、全部のテスト０点だってさ。はっはー、バーカバーカ」

ムカッ！

「なんで私が０点なのさ！」

「そりゃ全部間違えたからだろ」

「でも全部おもしろいでしょ！」

「それは認めるが、そんなんで点数やれるか」

むむむ……でも合格とか言うんなら点数くれたっていいじゃないか。

「あのなぁ、カカ」

テンカ先生は嫌味な感じにため息をついて、偉そうに喋りだした。

「おい、誰が偉そうだって？」

「先生」

「当然だ」

なんだこの人。胸中にまでツッコんできて、トメ兄じゃあるまいし。

「あのなぁカカ。おまえ自分がどんな答え方したかわかってるのか？　算数のテストで計算式を『男×女＝子供』って書いたりさ。『×』とか生々しいんだよ」

だってそのその通りでしょ。

「国語のテストの『この文章の何が間違っているか答えなさい』って問題の答えを『書いたやつ』って答えたり」

だって間違った文を書いたやつが悪いんじゃん。私間違ってないよ？

「最後の小話の感想文なんか『先生にはもっと面白い話を選んで欲

しいと思った』って、オレにケンカ売ってんのか」

だってそれ読んでそう思ったんだもん。感想ってそういうことでしょ？

「こんなんで点数やってたらオレが教頭に怒られるだろ」

「……だって、全部合格だったら百点もらえるかと思ったんだもん」

「なんでそう思うかな」

「テンカ先生ならノリでくれるかと」

「てめぇ」

「こんなテスト、トメ兄に見せられないよぅ」

「大丈夫、絶対ウケるから」

「テストって笑いとるもんだっけ？」

「ははは－ひどい点数だバーカヴァーカ」

「笑うな！！」

「笑えるもんよ」

こいつ本当にセンコーか！

「へぇへぇ、じゃこうしてやろう」

テンカ先生は私からテストを奪い、ちゃちゃっと何か書き込んだ。

『国語テスト』や『算数テスト』などが書いてあるところに……

『国語』の部分に斜線引いて、そこに書かれた言葉は『お笑い』の文字。

つまり全部『お笑いテスト』

「これでよし！」

「よくない！」

「笑えるじゃねぇか」

「笑えませんな」

「そうそう、笑えない……ん？」

あれ、なんか野太い声が後ろから……

テンカ先生と一緒に振り向くと、そこには――

「げ、デストロイヤー教頭！」

「誰が破壊神ですか、テンカ先生」

「そこまで言ってませんけど、破壊神のほうが似合ってますよ。顔

的に」

「……テンカ先生、こっちにきなさい」

「ちっ」

「テンカ先生、舌打ちとは影でやるものですよ？」

「影でやったら悪意が伝わらないじゃないですか」

「上等です。こいや」

あぁ、顔の厳しさは日本一と名高い教頭にテンカ先生が連れてかれていく……にしてもテンカ先生って態度でかいなぁ。

ま、それはどうでもいいとして、どうしようこのテスト。怒りをぶつけるはずの先生は行っちゃったし……

「カカちゃん、テンカ先生は？　給食どうしよー」

「あ、サエちゃん。そだね、先生の分は」

キラーン。いいこと思いついた。キラーンっていうのは思いついた音ね。

「私があとでよそっておくよ」

「ん、わかったー」

とりあえず腹いせに給食のおかず全部混ぜてご飯の上にかけてや

れ。

これで腹の虫はおさまった！

……何も解決してないけど。

トメ兄、怒るかなぁ。

## カカの天下２１８「大合格！」（後書き）

０点……小学生のころ、一度とったことがあります。
テストの裏があることにきづかず、白紙で提出したのですが……
悔しいと同時に嬉しくもありました。
滅多にとれるもんでもなかったですし、いい話のタネになりましたからね（笑）

カカみたいに全部面白い答えを書く、みたいな偉業も今思えばやってみてもよかったなぁ、なんて感じる今日この頃。

## カカの天下２１９「大合格？」

「はいこれ」

「ふむ、どれどれ」

もーどうにでもなれと開き直ってるカカです。

現在、今日もらったひどいテストをトメ兄に見せているところです。今のところトメ兄の表情には特に変化はありません。

あ、ちょっと驚きの表情になった。

「すごいなカカ。全部満点か」

「まぁね」

おお……せ、成功したのかな？

「どれ、テストの中身は……」

げ、まずい。

「……カカ」

「な、なに？」

「この国語テストの『話中の節句ａの意味を答えなさい』の答え、『たのしろい』って書いてあるんだが、なにこれ」

「楽しいとおもしろいを合体させてみた」

「なるほど」

あれ、納得した。

ばれてない？

「じゃさ、この『話中の節句ｅの意味を答えなさい』の答え、『ちゃけば』ってのは？」

「ぶっちゃけた話、をぶっちゃけばなし、にして、さらに略してみた」

「なるほど」

あれれ、納得した？

ホントにばれてないのかな？

「んじゃこの『背に腹は変えられないという言葉の意味を答えなさい』の答え、なんで『お腹がすいてる』なんだ？」

「背中とお腹がくっつきそうなんでしょ？」

「なるほど！　はっはっは、その発想はなかったなぁ」

あれれれ？　笑った、納得してる！？

も、もしかしてホントのホントに大丈夫なのかな。やった！

トメ兄がボンクラでよかった！

「じゃあこの算数テストの」

「うんうん！　や、この『からだの面積＝体重』っていうのは結構うまいこと言ったと思うんだよね！　『からだの』っていうのは私が書き込んだんだけど――」

「あれ？　これよく見たら算数のテストじゃなくてお笑いテストって書いてあるなぁ」

……ぇ。

「あれあれ？　これよく見たら１００点って数字が歪だなぁ」

……ぎく。

「あれあれあれ？　なんか正解だっていう○も歪だなぁ。なんかペケをむりやり○にしたみたいな感じだなぁ」

……ぎくぎく。

「あれあれあれ？　こんな細工をしといて我が妹君は何を嬉しそうに語ろうとしているのかなぁ？」

……ぎくぎくぎく。

「カカ」

「はいっ」

「このテスト内容を、反省……してないみたいだな」

してやられた！

「罰として腕立て百回」

「ここどこの軍隊！？」

「それとテストの見直しな。夕飯食べた後にでも教えてやるから。厳しくな」

「うぅ、せめて優しくして」

「ちゃんと反省してるようなら優しくしてもいいと思ったんだけどな」

「うまく騙せたかと思ったのに」

「こんな答案を見て騙されるやつがいるわけなかろうが」

「だよねー」

「わかってんじゃん」

「でもそのラクガキみたいな『１００点』見ても顔色一つ変えなかったからさ、もしかしたらいけるかと思って」

「そこらへんはテンからメールあって知ってたし」

「ぬぁに！？」

あのセンコーのせいか！

「んとな、『オレがラクガキしたのもあるけどひどい答案だから、なんかこらしめてやってくれ』とかなんとか。たしかにお笑いテストだったら１００点かもしれんがな」

「そ、そうそう。このラクガキは全部テンカ先生が」

「テンは自分がラクガキした内容もちゃんとメールに書いてたよ。カカがなんか書き足すかもしれないからって」

してやられたパート２！

「さ、夕飯のあとは覚悟しろよ」

「ひーん」

その夜のトメ兄は本当に激しかった。

「誤解を招くようなこと言うな」

怒られた。

## カカの天下２１９「大合格？」（後書き）

一応前回の続きです。
テストといえば家族に見せるというイベントがセットでついてきますからね。
テスト自体よりもこっちのほうが重要なイベントだった人も多いはず。
親が喜ぶか怒るか。
カカの場合は兄ですが、やはり保護者として多少は成績を気にしてるらしいです。
教えてくれるあたりがいいお兄ちゃんですけどね。

## カカの天下２２０「無防備でもツヨイ子ら」

「ただいまー」

「ぐー」

すばらしいお出迎えありがとう、トメです。

仕事から帰ってくれれば居間に転がる三つの物体。川の字になって気持ちよさそうに眠っていらっしゃいますカカサエサユカ。

「……ただいまー」

「ぐー」

……さみしい。

こほん！　さて、眠っているものは仕方ない。

起こさないように部屋に戻るかー。

「ふぅ」

「……めそ」

っと……寝言か。にしても『めそ』ってなんだ。さすが我が妹。相変わらず普通の寝言は言わないな。

「そう、例えば『お腹いっぱい、もう食べられないよ』とかベタな

のは」

「おかわり」

うぉ、ビックリした。

そっかぁまだ食べれるんかぁ――じゃなくて。いまの声サエちゃんか。

さっきから僕が声出すと反応してるような……

よし、ためしに。

「ばんごー」

「……いち」

「いちー」

「いちっ」

全員一番かよ。謙虚さが無いやつらだな。

「好きなものは？」

「サエちゃ」

「ごはんー」

「トメさんっ」

おお、サエちゃんが寝ててよかったなカカ。正直すぎるぞ。

しかしサユカちゃん、寝言とはいえ僕のことを好きって言ってくれるなんて……いやぁ、子供に好かれるのって嬉しいな。

「鈍感め」

「あれ、父さん」

「出たなテレパシートメ兄……むにゃ」

カカのやつ、まだ父さんのことテレパシーとか言ってるのか。しかしこいつの寝言はいつも本当に寝てるのか怪しいのばっかだなぁ。

「出張から帰ってきたのか？」

「おう。すぐ発つがな」

「そか。この時期は忙しいね。いってらっしゃい」

「おう」

ここでカカがむにゃむにゃと一言。

「いらっしゃい」

『いってらっしゃい』を変に略すな。誰が来店したんだよ。

「俺だ」

「人の心読んでまで合いの手いれなくていいよ父さん」

「ちぇ」

さて、と。

父さんもシュバッと消えたところで、もうちょっとこいつらで遊ぶか。次は個別にいこう。

まずはカカ。

「最近、お兄ちゃんに隠してることとかないかな？」

「トメ兄白髪がふえた」

「マジで！？」

あ、あとで確認してみよう……くそぅ、悪さしてないか聞こうとしたのに思わぬ反撃が……

「かわいそ……」

可哀想とか言うな！　鏡見るの怖いだろ！？

気を取り直して、次はサエちゃんだ。

「トメお兄さんのことどう思ってる？」

「ごはんー」

食べるの!?

「つくるひとー」

あ、ああそういうことか。びびった。なんか答えに納得いかないけど、食べられるよりはいいや。

さて、次はサユカちゃん。

「トメさんのことどう思ってる?」

「メチャクチャにしたい」

しないでくださいお願いします。

サユカちゃん……僕のこと好きなの嫌いなの? どっち? そのよだれはどういう意味? こわい……

詳しく聞いてみたいのは山々だけど、もし誰か起きてそんな場面見られたら何を言われるかわかんないし、やめとこう。

夕飯の買い物でも行ってくるかな。

くそー、しかし気になるな。

白髪。

家に帰ってくると、ちょうどカカが起きたところだった。

「……んにゃ、あれ」

「おはよう、カカ」

「メソポタミア文明最後のトメ兄はどこ？」

「ああ、さっきの『めそ』ってそのことかぁ、って、うぉい！」

なんちゅー夢見とるんだ。

どんな僕かちょっと気になるじゃないか。

## カカの天下２２０「無防備でもツヨイ子ら」（後書き）

笑える話よりものんびーりした話書こうと思ってお昼寝話にしたのですが……あんまのんびりできてませんね（笑）

むむむ……近々もっとのんびり話を書きます！

別に私がリアルでのんびりできてないからじゃないですよ！

ほんとですよ！

## カカの天下221「ピーチクパーチク雛鳥みたいに」

「ただいまー」

「おかえりー、いってきまーす」

「あれ」

うぅ、僕が帰ってきた早々に家を出て行こうとする妹の姿に寂しさを覚えてしまったトメです。

「出かけるのか」

「うん、今日はサエちゃんちで――」

「皆で食べようと思って甘栗買ってきたのに」

「――遊ぼうかと思ったけど予定変更」

Uターンしてテッテッテとこちらに近寄ってくるカカ。

はいはいちゃんとあげるからそんな物ほしそうな目をしないの…

…可愛いじゃないかコイツ。

やっぱ子供は食べ物で釣るに限る。

「じゃさっそく用意しよう」

「あ、サエちゃんたちにメールする」

カカが携帯をピポパポやっている間に僕は居間へと移動。

甘栗、皮をむいた栗用の皿、むいた皮用の皿という三種の神器をそろえて準備万端！

「すぐ来るってー」

「ん、じゃ皆来てから食べようか」

「トメ兄、すぐ来るんだよ」

「……はいはい、わかったわかったたくさんあるから先に食べてればいいんだよな。だからそんなモノスゴイ目で見るな」

アニメだったらでっかい星がキラキラぽんぽん目からでてる勢いだ。

「トメ兄、皮むいて」

「はいはい」

自分でむけよと言いたいところを、あえてむいてやる僕は本当にいいお兄ちゃんだと思う。思うよな？　誰か思うべし。

「むけたぞ」

「おー、生まれた」

「ヤな表現すんな」

「生まれたての赤ん坊はやわらかくておいしそう」

「どこの鬼だおまえは」

「最近の鬼ごっこはね、こおり鬼がブーム――」

「ん」

なぜか得意げに語ろうとするカカの鼻先にむいた甘栗をもっていくと、カカは無言で口を開けた。

ぽい、とその口に甘栗を放りこんでやると、カカは幸せそうにそれを噛み締めた。

「んふー♪」

赤ん坊は格別の味だとか言い出すかと思ったけど、思いのほか普通の反応だ。そんなにおいしかったのかな。むきむき。

「ほれ」

「あーん」

ぽい。

「むぐむぐ……んふー♪」

「こんにちは、おじゃましまーす。あ、いいなー」

サエちゃん登場、したと思ったらテッテケテと僕に寄ってきた。

「あーんー」

おまえもかい。

「ほれ」

ぽいっとな。ぱくっとな。

「んー♪」

何か食べてるときのサエちゃんって本当幸せそうだよなぁ……その表情がなんとも可愛くてコノヤロウって思ってしまう。

「こんにちはっ、あー！　い、いいなっ」

サユカちゃん登場、はいはいこっちきな。

以下省略。ぽいぱく。

（こ、これって指間接キッスだよねっ！？）

（サユカン、何が嬉しいかよくわからない言葉作ったね）

（指を舐めるのと同じだし、けっこう刺激的なんじゃないかなー）

（さ、サエちゃん大人）

何をぼそぼそ喋ってるんだろ。むきむき。

さて、僕も食べるかな。

ん？

「「「あーん」」」

……食べれん。

でも、まぁ、これはこれで。

ぽい。

ぱくっ。

次はどの子に食べさせようかなー。ちょっと楽しい。

……ひょっとして僕って幸せ者なんじゃないだろうか。

栗を食べれないのは残念だけど。

ほんと残念だけど！

ぽい。

ぱくっ。

「んー♪」

ま、いいや。

## カカの天下221「ピーチクパーチク雛鳥みたいに」（後書き）

なんとなくのんびりした話になった……と思います、多分（笑）
栗食べてるだけですしね。
なんとなく書いてて和みました。

トメがうらやましいです。
……ほんとに。
なんかトメだけずるいな。近々こらしめてやろうかな（おい

## カカの天下222「あまにがティータイム」

「ただいまー」

「お土産は？」

「カカ、普通お出迎えのときはなんて言うんだ？」

『おみやげ』じゃなくて『おかえり』でしょうに。

「おかみやえりげ」

「……なぜ合体させる」

「おかみやさん」

「なぜさん付けする」

「そんな人いそうだから」

えりげってどんな漢字になるんだろうなぁ、なんて思いつつどうもトメです。

ただいま買い物から帰ってきたとこで、出掛けにお土産を頼まれていたのでした。カカの頭は今そのお土産でいっぱいです。

「で、なに買ってきたの――」

「おかみやさーん」

「おかえりなさいっ！」

おっとサエちゃんとサユカちゃんも登場。

「サユカちゃんだけだよ、普通におかえりって言ってくれるのは」

「えっ、おもしろくなくてすいませんっ！」

「や、謝んなくていいから」

おもしろいこと言わなきゃならない義務なんか無いんだよ？　一応。

「それで結局は何買ってきたの」

「栗のパンナコッタとクレームブリュレ。二つずつな」

「オゥ、パンナコッタァ！」

ヘタクソな英語みたいな発音で叫ぶカカ。なんか発音が気にいったのかな。

「ブリュー！」

中途半端なとこで止めるサエちゃん。何の擬音だ？

「えっとっ、えっと……」

「や、だから無理して変なこと言おうとしなくていいから」

いくら変な子トリオでも一人くらいまともなのいないとね。

「パンナちゃんってどんなお菓子？」

「ブリュちゃんはー？」

「擬人化したら食べにくくなるぞ。えっと、パンナコッタは生クリームたっぷりプリン、クレームブリュレは表面がぱりぱりの焼きプリンってとこかな」

「おいしいの？」

「僕は好きだぞ」

和風びいきの僕だけど、別に洋菓子が嫌いなわけじゃない。

「僕はクレームブリュレ食べるけど、他のは早いもの勝ちな」

「わたしもクレームブリュレッ！」

即答だサユカちゃん。そんなに食べたかったのかな。

「おそろいですねっ」

「ん、そうだね。じゃおそろいついでに緑茶も一緒に飲む？」

「はいっ」

洋菓子に緑茶はないだろう、と思ったそこのあなた。

甘いものは緑茶になんでも合うんです！　これ、僕理論。

「んー、じゃあ私もたまには緑茶飲んでみようかなー」

「……じゃ、私も！」

「カカ、おまえ緑茶嫌いだろ」

「うー、でも私だけ仲間はずれヤダ」

そこまで言うなら煎れてやるが……

さて、休日のおやつスタンバイオーケー。

「いただきます」

「「「いただきます」」」

なんとなく給食と同じように合掌して、まずはお茶をいただく。

ずずず、と四つのすすり音が居間に響く。

「にが」

「……じゃあ別の飲めよ」

「ヤダ。大体さ、緑茶が苦いのは当たり前でしょ」

「じゃそれをわざわざ言うな」

「うるさいな。暑いときに暑いって言っちゃうのと同じだよ。言っちゃうの！　あむっ……あまっ」

生クリームたっぷりだからな。そりゃ甘いだろう。

「にがっ」

うるさいのは放っておいて、と。

ぱりっとクレームブリュレの表面をやぶり、中からとろりとしたプリンが顔を出す。こんにちはプリンさん。さぁ僕の口の中へどうぞ。

「あまっ」

「サユカちゃん、緑茶と洋菓子だけど合うかな？　僕は好きなんだけど」

「は、はいっ。死にそうなほどおいしいです！」

「サユカちゃんごしゅーしょーさまー」

「にがっ」

「まだ死んでないわよっ、死にそうなだけで」

「どうやったらトドメさせるー？」

「あまっ」

「そんなにわたしを殺したいのかサエすけ」

「サユカちゃんがいなくなればそのクレームは私のものに」

「にがっ」

「こっち食べたかったのかサエちゃん」

「私は全部食べたかったです」

「「おい」」

「あまっっ」

僕とサユカちゃんが文字通りサエちゃんにクレームをつけたところで、僕ら三人の声がハモる。

「「「うるさい」」」

「に――がめんなさい」

がめんなさいってなんだよ、まったく仕方ないヤツ。

「牛乳でいいか？」

「うぅ……うん」

嫌いなものってそう簡単に治らないもんだよな。やれやれ。

その後は特に問題なく、僕らはゆったりとしたおやつを楽しんだ。

「にが……くもないし甘くもない。牛乳味ってなんて言えばいい？」

「黙って飲め」

## カカの天下222「あまにがティータイム」（後書き）

岡宮愛理毛さん。
作中のを漢字でやったらこんなんでました。毛がヤな感じですね。
これを読んでいる人で本当にいらっしゃったら勝手にお名前使ってごめんなさいっ。

# カカの天下２２３「誕生日計画の裏側、そのいち」

こんにちはっ、サユカです！

今日は学校も終わり、いつもなら三人で集まって遊んでいる時間です。でも今日は私とサエすけの二人だけで商店街をうろついています。

カカすけに内緒で。

なぜ内緒かというと、来月に誕生日を迎えるカカすけへのプレゼントを買いに来たからなのですっ。

「何がいいかなー」

「うーんっ、カカすけのプレゼントだし、とりあえず赤くないとダメよね」

わたしの極当たり前の意見に、サエすけはため息をついた。

「あのねー、サユカちゃん。せっかく私たちからカカちゃんにあげる誕生日のプレゼントなんだよ？」

「うっ、ごめん」

そうだよね、マジメに選ばなきゃ……

「ここは私たちの黒色と桃色を合わせるべきでしょー」

そっちかいっ。

「ねぇ、その前にわたしって桃色確定なの？」

「それ以外に考えられないしー」

「考えてよっ、ピンク色とかさ」

「それ同じ色でしょ」

「桃色より響きは可愛いと思うのっ」

「じゃサユカちゃんは頭がピンク色ってことでー」

「ちょっと待って『頭が』はいらないわよっ」

「えー、もともとは頭が桃色って言ってたんだよー」

「……むぅ、そういえば前にそんなこと言ってたような――」

おっと、こんなこと言ってる場合じゃなかった。

「サエすけ、遊んでないでマジメにプレゼント選びましょ」

「そだね。サユカちゃんなんかで遊んでる暇なかった」

「……なんか、って」

ちょっと、そんな言い方ないんじゃ――なんでニコニコしながらわたしの頭を撫でまくるのサエすけ。

「サユカちゃんのこういう可愛い顔を写真に撮りまくってあげるっていうのもいいねー」

「な、なによそれっ」

「サユカちゃん写真集作ってカカちゃんにあげるの。いいアイデアだと思うけど」

「イヤよそんなのっ！　サエすけこそ写真集作ってあげなさいよ」

「狂喜乱舞するほど喜ぶぞ」

「ほらっ、どこからともなく聞こえる声もこう言ってるし！」

「サユカちゃん何言ってるのー？」

あれ？　確かに声が聞こえたと思ったんだけどな……気のせいか。

「とりあえず私たちの写真集は候補にいれておくとしてー、あとはケーキがいるね」

「それは当日近くに考えればいいでしょ。とりあえず今日は変なプレゼントを選ぶのよっ」

「そだねー。あ、ここのファンシーショップ覗いてみよー」

「おっ、ショーウィンドウのドクロなママがいい感じねっ」

変な商品が多そうっ。

すごくカカすけっぽい！

数十分後。店を出たわたしたちは帰り道を歩いていた。

「結構いいものが買えたねっ」

ちなみに『いいもの＝すごく変なもの』という公式だ。

「うん。でもー、私的には誕生日はすごくいい思い出だし、もっと豪華なのがほしかったなー」

「仕方ないじゃないっ。わたしたち小学生なんだから、やれることには限度があるわよ」

「そうだけどー、なんとかならないかなー」

「ないものはないの！　じゃ、渡し方だけでも派手にすればいいじゃない。おめでとー！　って普通に渡すのはつまらないし」

「そだねー、じゃサユカちゃんが告白風味に渡すのはどうかなー」

「こ、告白って、トメさん以外に？」

そんなふしだらなっ。

「ダメかー。貸してー」

サエすけに今買ったプレゼントの包みを渡す。

「おめでとー！　うーん普通。ハッピーバースディ！　普通だなー」

サエすけは歩きながらプレゼントを渡す練習を始めた。

「めでてー！　うーん微妙。おめでたっ！　うーん意味が違う」

「あ、サエすけ――」

「たんじょーび、おめでたうございませう！　うーん昔風にしてみたけど――」

「ありがとう！！」

「……へ」

あちゃーっ。

サエすけは練習に夢中で前を見ていなかった。

だからちょうどよく（悪く？）通りすがった人にプレゼントを差し出してしまったのだっ。その通りすがった人はたしか――カカすけがシュー君とか呼んでた人！

「君はカカちゃんの友達だよねっ！　あまり接点のない僕の誕生日を祝ってくれるなんて……感激だよっ！！」

「……はー」

何を呆けてるのよサエすけ！　説明しないと！

「うぅ……お姉さまも覚えてくれていなかった今日の誕生日を……はっ！　もしかしてこれは、実はカカちゃんとお姉さまからのプレゼントで、照れくさいから友達経由で渡してとかそういうことで――」

な、なんか妄想が炸裂してるよぅ。こわっ！

このままだとまずい。ちゃんと説明しないと――

「あ、えっと、そのですねっ」

「実はその通りなんですよー」

さ、サエすけ!?

「本人たちはすごい恥ずかしいみたいで、多分聞いても正直に言わないと思いますけどー」

「や、やっぱりそうなのかっ！　あぁ、僕はなんて幸せ者なんだ！」

え、え、え!?　サエすけなんでそんな嘘を……この人本気で信じちゃってるよ!

「それでですね、実は十月二十日がカカちゃんの誕生日なんですけどー、お姉さんたちと同じことしてみませんか?」

「お、同じことと言うと?」

「シューさんがカカちゃんにプレゼントを買って、私たちが渡すんですー。そしてさりげなく私がシューさんの名前を出せばー」

「ぼ、僕の好感度も上がるというわけですねっ！　わかりました！」

「あ、プレゼントは私たちが選びますから、連絡先教えてもらえますかー？　今度一緒に選びましょー」

「わかったよ！　いやぁ、女の子と買い物だなんてちょっと恥ずかしいなぁ」

いや……女の子っていっても小学生だし……っていうかサエすけ、それって……

「じゃ、僕はパトロールがあるから行くよ！　またね！」

「ばいばーい」

ブンブンと手を振るシューさんがいなくなり、サエすけはこちらを向いてにっこりと笑った。

「大人の財力げっと♪」

「やっぱそういうことかっ！　黒っ！！　君やっぱめっちゃ黒っ！！」

「ちょうどいいとこにカモがいてよかったー」

「カモとか言うなっ」

「これで文句なしにいいものが買えるねー」

「……それで、プレゼント渡すときにシューさんの名前は」

「出すわけないじゃーん」

……やっぱしか。

「あの小さなドクロばばぁ人形で大人の財力が買えるなら安いものだよねー」

「あぁ、サエすけはこんなこと言ってるのにシューさんは喜んでプレゼント買ってくれるんだろうなぁ……」

ほんと、たしかに『幸せ者』かもしれない。

可哀想かもと思ったけど……

幸せならいっか！

……いいのかな。

## カカの天下２２３「誕生日計画の裏側、そのいち」（後書き）

はい、今回は飛鳥さんのリクエストで誕生日の話を書いてみました。飛鳥さんおめでとう＾＾そしてシュー君と誕生日同じでごめんなさい（シュー君に対してはひどいけど
他のキャラは誕生日決まってるので、誕生日当日の話を書いたりとかはできませんでしたーのでこれくらいで勘弁してください＾＾；
そして思わぬところでサエちゃんの黒さ炸裂です。
最近白かったけど（意味不明）やっぱ黒いとこは黒いです。
さて……十月二十日に向けてすこしずつ準備が進んでいきます。
すこしずつ、ですけどね。

# カカの天下２２４「最終回！？」

学校も終わって我が家に帰ってきたところで、私は不審者を目撃しました。

こんばんは、カカです。

「あれ」

そう、我が家の窓から大きな風呂敷を抱えた人間がのたのたと這い出してくるのを！

「どろぼー！」

「なにっ、どろぼーはどこだ！」

「あんただ！　って、お姉？」

ご丁寧に覆面までしていたけど、声でなんとか姉だとわかった。

「なにしてんの」

「やー、ちょっと旅に出るからさ、荷物を取りに」

……え？

「旅にって……また武者修行とかいうの？」

「や、実はタマのお母さんが見つかってさ」

タマの!?　そういえば姉娘って、どこかで押し付けられた子だったんだっけ……

「ちょっと居場所が遠いんだけど、これがすんごい資産家らしくてさ。できるだけ迷惑料ふんだくってやろうかと思って」

「そ、そうなんだ」

「あわよくばそこの娘になっちゃおうかと企んでる。ま、しばらくは戻ってこないわ」

「そう、なんだ」

「そうそう。厳密に言うと、この作品にはもう出番はないってことね。あたし最終回」

「なに訳わかんないこと言ってるの?」

「こっちの話よ。んじゃ。ばいびー!」

「ま、まって」

「なに?」

「あの、さ……できれば、帰って、きてね」

「あっはっは。いつもうざいだの消えろだの言ってるくせに」

「そ、それは――」

「お望みどおり消えるのよ。よかったじゃん」

姉が、冷たい目をしてる。

こんな目、見たこと、ない……

「ばいびー」

「……う、うん、ばいばい」

私は、そんな答えを返すことしかできなかった。

まるで忍者みたいに姉はシュバッと消えてしまう。

お姉が……いなくなっちゃうんだ。

や、元気だせ自分。

確かにうるさいのがいなくなって清々したじゃないか。寂しくないといえば嘘になるけど……タマも本当のお母さんのところのほうがいいだろうし！

「カカちゃん」

「あれ、サエちゃん？」

聞きなれた声に振り向くと、そこにはいつもの笑顔のサエちゃんが立っていた。

「早いね、約束の時間までまだ――」

「お別れを、言いにきたのー」

「……へ」

うそ。

なに、これ？

「実はねー、お母さんから連絡があったの。やり直そうって。親戚の人たちは全部言いくるめたからってー」

「え、なに、何の話？」

「それでねー、二人で新しい土地でやり直そうってなって」

「え、やだ。そんな」

「……私ね、お母さんが大好き。今まで強がって、カカちゃんをお母さんの代わりにして我慢してきたけど……もうそんなこと、しなくていいんだー」

え、なに。

我慢って、なに。

代わりって、なに。

「だからね、お別れ」

「ちょ、ちょっと待ってよ！」

「ばいばい」

姉を送ったときのように、ばいばいなんて言えなかった。

でもサエちゃんは私のほうを振り向きもせず、高そうな車に乗って、あっという間に見えなくなってしまった。

追おうとした。でも身体が動かなかった。

ショックなことが多すぎて、何から考えればいいのかわからない。

自分がいま、何を思っているのかワカラナイ。

「おう、カカ」

「トメ兄！？　ねえ聞いて！　姉が、サエちゃんが――」

「僕さ、サユカちゃんと結婚することにしたから」

「えええええ！？」

あまりに予想外なことが続いて私はもうパニックだった。そんな冗談としか思えない言葉を笑い飛ばせないほどに。

「ごめんね、カカすけ」

トメ兄の隣で幸せそうに笑うサユカン。幸せそう、可愛い、なの

に、なぜかサユカンが私を馬鹿にして笑っているふうに見えてしまう。これは錯覚？　錯覚だよね。嘘だよね！？

「法律とかあったんだけど、父がなんとかしてくれてさ」

「すごいんだよ、トメさんのお父さん。裏操作で法律だって変えちゃうんだから。さすが現代の忍者って感じだよねっ」

あ、はは。

ははははは。

「じゃ、僕らは二人で暮らすから」

「またね、カカすけ。わたしとトメさんのキューピッド役、感謝してるわ。だからたまには遊んであげるっ」

あはははははははははははは！！

は、はは、は……

なに、これ。

こんなのって、ないよ……

皆、一緒だったのに。

昨日まで皆で、笑ってたのに。

今日だけで皆、いなくなるなんて。

そんなのおかしいよ。

嘘だよね。

夢だよね。

「誰か、夢って言って……ねぇ、夢だよって、ねぇ……ねぇ！！
お願いっ、誰か……おね、がぃ……！」

私は泣いた。

何に泣けばいいのかわからないまま。

ただひたすらに目を瞑って泣き続けた。

コワレタ世界を見ないように。

私自身もコワレテしまえと願うかのように。

そして――

私の世界は。

壊れた。

――ご愛読、ありがとうございました。

なんちゃって。

「カカ、朝だぞ」

「ってぇ、本当に夢オチかよ！！！　私のこのやりきれない想いはどこにやればいいんだあああああああ！！！！」

「カカ、起き抜けに誰に向かって叫んでるんだ？」

「本気で泣きそうになったじゃないかあああああ！！」

「か、カカ？　なんで顔ぐしゃぐしゃで僕に抱きつくんだ」

「悪夢どっかいけぇ！！　あうううううううううううううう！！」

壊れた夢の世界を恨みながら、私は泣いた。

信じられないほど冷たい世界と、この温かい世界の温度差を感じて。

この温かさに、感謝しながら。

あと、こんな世界を見せた誰かをおもいっきり恨みながら。

# カカの天下２２４「最終回！？」（後書き）

はい恨まれてます作者です（爆）
皆さん、いかがでしたでしょうか？
すいませんドッキリでした最終回じゃないですよまだまだ続きますよ？　や、ほら、やっぱ日常にも刺激が必要じゃないですか、だからね？　そんな責めないでイタイ痛い石投げないで。
でもですね、今回は想定できる中で本当に嫌な最終回のケースを夢に出しましたけど。そういう夢を見ると、今の日々の本当に大切なものが見えてくると思うんです。なにげない日々。満足していることも不満もある。でもその不満ですら大切なものかもしれない。それは失ってみなければわからない。
考えてみるだけじゃわからない。体験しなければわからない。でもそれを疑似体験し、勉強できる場所が『夢』だと思います。カカはめぐまれている子だと思います。でもカカだけじゃありません。他の人も、必ずどこかに恵まれていることがあると思います。それを当たり前と言って見逃してほしくない。失くしてから気づいても遅いのだから……そんな思いをこめて、カカにはこんな夢を見せました。
別に読者の皆さんを驚かせたかっただけではありません。ええ、ちょっとその気もありましたけど本来の目的はこっちです！
……本当ですよ？
あ、ちなみにこれは『みたに』さんからのリクエスト『夢落ち話希望』から書きました。リクエストいただいてから結構経ってますが、お応えが遅れてすいません＾＾；
さて、気を取り直して次回はカカラジです！
ちょっとダークな話の次は盛り上がっていきましょう！

……いじわるしたからって見捨てないでくださいね＾＾；

# カカの天下２２５「第五回、カカラジ！」

「皆様こんカカ！！　夏が終わったかと思ったら急に寒くなったり秋刀魚の旬が早かったりしてそんなに急ぐなよ地球、まだまだ若いんだから、なんて語りかけてみたい想いを胸に秘めながら生活している、なんて言ったらテヘちょっと格好いいですよね香加です！」

「胸に秘めてないじゃんめっちゃ叫んでるじゃん……皆さんこんカカ。ちょっと憂鬱な留です……はぁ」

「どうした弟。ため息なんかついて」

「あんたのせいだ」

「あ、やっぱり？　へ、ザマーミロ」

「コノヤロウ」

「やっほぅ皆！　あたしこそはカカの天下で唯一のファンタジー！姉こと括弧です！　あ、これでカツコって読むのね。カギカッコの括弧ね」

はい、今回は姉という厄介なゲストをお迎えしての第五回目のカカラジです！

ちなみに姉の名前は「」の枠に収まらず、大きな人間になってほしいという母親の想いが込められた名前です。すげー名前です。

「や、枠からはみ出しすぎでしょ」

ですよねー。

「なんだよぅ、香加ちゃんだって人のこと言えないじゃんかぁ」

「私はまだ人間だもん」

「あたし人間じゃないの！？」

「当たり前だろうが！」

はいはい、いい加減ＣＭいくよー。

「あ、その前にこれは一応。こほん、これはネット小説『カカの天下』を盛り上げるため、ぶっちゃけトークや作者の本音などを放送する情報ラジオ（風味）番組ですっ！　僕ら留と香加と括弧は本編自体とは関係ないのでお気をつけください！」

「あ、ちょっと待ってあたしにもこれだけは言わせて！　こほん。三人そろってカカ天です！」

「訂正します。カカ天＋ａです」

「というわけで、ａさんは記号らしくおとなしくしててね」

「え、ちょ――」

はいはいＣＭいきまーす。

ただいま話題沸騰中でアッチッチな喫茶店を紹介します！　その名も『ユーラシア大陸』というでっかい名前のお店！　そしてそれに反して小さい店内！　その天邪鬼ぶりは店の名前だけじゃありません！　その天邪鬼メニューをいくつか紹介いたします。

まず、とってもヘルシーで量が少ないアメリカパスタ！　店長がアメリカ嫌いなんだそうです。嫌いなら載せるなって感じです！

次に店の看板メニュー、フィリピンコーヒー！　店長がフィリピン好きで、コーヒーも好きだからというだけでつけられた名前です！　コーヒーはおいしいですがフィリピン自体は関係ありません！

そしてお待ちかねの人気メニュー、大きな器にたっぷり盛られて超ボリュームがある日本パフェ！　日本が大きな国になってほしいという店長の願いが込められております。でもパフェなので和風なものはのってません。

こんな楽しいメニューばかりの喫茶店『ユーラシア大陸』に、ぜひ皆さんお越しください！　ユーラシア大陸の地名が一つも入っていないメニューたちがあなたのご来店をおちしております。

ＣＭがあけて。

「なんか、天邪鬼というよりは店長が好き放題やってるだけって店だな」

「でもそういうところってこだわって作ってくれそうだし、おいしいかもよ。留兄今度いこー」

「そだな」

「お、あたしも連れてってね。さて、それではお次はおたより紹介コーナー！！　このコーナーは――」

「おりゃぁ！」

げしっ、と留から括弧に回し蹴り攻撃が炸裂！

「姉はゲストだろうが！　仕切るな！　でしゃばるな！　喋るな！」

「な、なんだよ弟！　喋るなって言うならあたしは何してればいいのさ！」

「そこにいるだけでいい。姉が喋るとまわりの環境が汚染される」

「なによ、あたしが放射能でも吐いてるみたいな言い方してさ」

「ゴジ○だね」

「ああ、似たようなもんだ。同じ怪物だし」

「ねぇ、ゲストってさ、もっと丁重に扱われるもんじゃないの！？」

「うるさいゴ○ラ」

「うるさい未確認飛行物体ａ」

「弟、その伏字だとゴリラかもとか思われるからやめてくれる？あと香加ちゃん、あたしいつどこを飛んだの？」

「いっつも頭が飛んでる」

「あ、なるへそ」

あんたらさ、コーナー進めなさいな。

「ま、まずい。作者を怒らすな。前回の最終回の夢が正夢になるぞ」

「それはヤダ！！」

「む、あれはあたしもやだな……なんか皆嫌な人になってたし。ちょっとおとなしくしてよ」

「よし、じゃ今度こそ行きます。このおたよりコーナーは感想欄やメール、電話などで読者様からいただいた質問などに答えるコーナーです」

「留兄、電話ってなにさ」

「ん、作者に直接友達からかかってきたやつ。まぁ今回は感想欄とかにも結構あるし、そっち優先するみたいだけど」

「へー。ま、いいや。とりあえずお姉もきたことだし、こないだの質問に答えとこうか」

「ん、なになに？」

「前回な、姉への質問があったんだよ。それもあって今回呼びたくも無いのにゲストできてもらったんだけどさ」

「弟さんや、お姉ちゃんはね、お姉ちゃんはね……お姉ちゃんなん

だよ!?」

「はいはいうるさい。じゃその質問読みます。えー『キツツキ』さんからで『姉カツコは、喧嘩で最高何人まで一度に倒したことがあるの？　姉カツコの旅の最終目的って何？』の二つだね。じゃ最初の質問、喧嘩で最高何人倒したことがあるか、聞こうか」

「いっぱい」

「タマちゃんみたいな答え方しないの。指の数越えたら数えられまちぇんか？」

香加のバカにしたような言葉にも、慣れている括弧は「いやーあっはっは」と笑いとばしています。これが彼女らのコミュニケーションの取り方なんですね。多分。

「一番多かったのは……旅に出る前でまだここに住んでたときに、とある高校の番長を殴り飛ばしちゃったときの喧嘩だと思うんだけど」

「ちなみになんで殴り飛ばしたの？」

「ぶつかってきてあたしが食べてた焼きそばパン落としたから」

「……それで倒される番長も哀れだな」

「でね、一緒にいたグループと喧嘩になったんだけど……最初は８人いたのね。まぁこれくらいならいけるだろうと思ったんだけど」

８人をこれくらいって……

「そしたら誰かが電話したのか、次から次へとおかわりきちゃってさ。もう大騒ぎ」

「おかわりって、わんこそばじゃないんだから」

「だからよくわかんない。お腹いっぱいになったから四十以上は余裕でいったと思うけど」

「やっぱゴジ○だ」

「そだな。深くツッコむのはやめとこう。じゃ次、姉の旅の目的は？」

「何かを見つけること！　人生ってのはいつも旅さぁ！」

「で、ノリだけで飛び出してって、タマちゃん見つけてきたわけね」

「人生何が起こるかわからないさぁ」

ほんとその通り。

「この姉の行動にたいした理由なんて無いんだよなぁいっつも……というわけで『キツツキ』さん、わかりましたか？　姉はゴジ○です」

「さ、次は私読むね。えっとカカラジネーム『カツコはこのゆっきー様が頂くぜ』さんからいただきました『ところで、カツコは俺と結婚を前提にしたお付き合いをしてくれないのでしょうか？』だって。ゴジ○好きなんだねこの人」

「あのさ、キミ達。あたしってゴジ○決定なの？」

「というわけで『ゆっきー』さん。まずは地球防衛軍に入りましょう。そしてゴジ○を見つけてください。全てはそこからです」

「あのさ、弟君も結構たまに無茶言うよね？」

「無茶するお姉よりマシだよ」

「やかましいぞそこの姉妹。あー、でもやっぱ姉。一応ちゃんと答えてあげて」

「あいあい、ゆっきー君。あたしが好きなのはよくわかった。じゃあまずは身体を鍛えろ！　で、あたしに勝ったら付き合ってもいいぞ！　そうだね……ボクシングでチャンピオンくらいになればいい勝負になるんじゃないかな。だからまずチャンピオン目指せ！」

「相手はゴジ○だし、妥当かな」

もしもし留さん、それ、妥当なんでしょうか……

「じゃ次読みますね」

あ、香加ちゃん次いっちゃうのね。えっと、『ゆっきー』さん頑張って！

「お、留兄の質問が連続してる。うん、お姉はいい加減うざいしちょうどいいかも。えっと、カカラジネーム『密かにトメのツッコミファン★（＊＜ｍ＞＊）』さんから。『トメの好きな女性のタイプ

が知りたいですっ！！　あとドキッとする仕草とか許せない行動とか…誰かさんの参考にもなると思いますのでっ♪（笑）』だそうです」

「誰かさん、ね」

「……」

留さん？　なに黙ってるの？

「続いてカカラジネーム……は書いてないのでそのままで。『謝謝』さんから。『トメさんの初恋はいつですか？理想のタイプなども教えて下さい。姉と妹が結婚したらなんて言わずに、トメにも幸せになって欲しいな～』だそうです。留兄モッテモテ！！」

「……恐縮です」

「んでもさ、これ。その誰かさんをゲストに呼んだときに聞いたほうがいんじゃない？」

「む」

「おー、そだね。次はあの子をゲストに呼ぼうか。お姉もたまには良いこと言う」

「や、あの、そのさ」

「ふっふっふ、弟君がなぜ慌ててるか当ててみせようか。ここにいる留君はカカ天本編には関係ない……カカ天を読んでいる別人物に過ぎない。つまり、作中のトメが知らない誰かさんの想いも、留は

全部知っているのだ！！」

「あは、きーまずー♪」

「うぅ……」

図星さされたのか赤くなる留。

「やー、次回が楽しみだねー！」

「次回は姉いないけどねー」

「や、出るよ。どうにかして」

「ダメ。さ、次のおたよりを――」

「え、ちょっと！　その誰かさんはもうゲスト決定なの！？」

あ、あとトメの初恋の話ね。今度書きますわ。

「ちょっと待て作者あああああ！！」

「ナイス作者。さ、次ね。カカラジネーム『トメ兄嫁にきてくれの弟』さんから。トメ兄男にもモッテモテ」

「……や、僕そっちの気ないんで」

「ツッコミも疲れてきてるねー弟」

「誰のせいだ」

「あたしらだ！　たはー」

「読むよ。『カカ天のメイン出演者のフルネームが知りたいです。トメさんやカカちゃんの名字やタケダの名前など、出てきた覚えがないので』

「僕らの苗字は一番最初に出てるよな。笠原留って」

「そうそう、なにげに最初だけは漢字で自己紹介してるんだよね。で、他の人だけど……」

　フルネームを最初から出していないのは、覚えやすさ優先という他にちょっと理由がありまして……まあ名前を出していないキャラ全員に理由があるわけじゃないんですけど。作中でやがて明らかにしますので、もう少々お待ちください。

「だそうです」

「とかなんとか言って、考えるの面倒なだけなんじゃ」

　考えるの面倒なら小説なんか書きません。

「……ごもっとも。ではこれくらいにしておきましょうか。ＣＭ！」

「あー、長いコーナーだったわね！」

「誰のせいだ！」

『えー、皆さん。私はデストロイヤー教頭です。今回私が立候補したのは、この日本の教育に憂いを感じたからです！　暴走していく若者、手を拱いているしかできない大人たち……このままではいけません！　道徳を壊す若者を許すな！　倫理に欠ける大人を許すな！　道徳を壊さず、常識を壊さず、腐った社会を壊すのだ！　私、デストロイヤー教頭はその名にふさわしく、甘ったれな親の考えを破壊しながら教育に当たっていきます！　当たって砕け！　これが私のモットーです！！　デストロイヤー教頭、デストロイヤー教頭をよろしくお願いいたします！　以上です。ご清聴、ありがとうございました』

「……なんだこれ。選挙？」

「破壊破壊って言ってるけど結構いいこと言うね。でもどこに立候補したんだろ」

「教頭なんでしょ？　じゃ校長に立候補したんじゃないの？」

「なぁ姉。僕は学校のことあんま知らないけど……校長ってそうやってなるのか？」

「たぶん」

うそつけや。

「ほらほら、ＣＭにばっか構ってないで。エンディングの前にもう一つコーナーがあるんだから」

おっと、そうでした。

ではここで、サユカちゃん髪型投票コーナーの結果発表をしたいと思います！

「「「おーぱちぱちぱち」」」

「一応確認しておきます。このコーナーは、いまだ公開されていないサユカンの髪型を、読者の皆さんに選んで投票してもらおうというものです！」

時間もおしてますし、ちゃちゃっと発表させていただきます。

第一位！

「え、もうかよ」

「盛り上がりないなぁ」

うるさい外野。第一位、セミロング！

「おー、ぱちぱちぱ――」

第一位、ポニーテール！

「おい」

第一位、ツインテール！

「待てやオイ」

「全部一位なの？」

はい、これはマジです。感想欄やメールでいただいた投票、友人の意見などを合わせるとちょうど同じ投票数なんです！

「ほぇー、そんなこともあるんだねぇ。おねーさんビックリだ」

では、正解を発表します。

「は？　正解て」

「これクイズだったの？」

や、一応作者自身のイメージがありますのでね。でもあえて読者様の意見を聞いて、キャラ作りの参考にさせてもらおうと思って応募したわけです。でも結果によっては私が「そっちのほうが合うなー」と思えば採用したかもしれません。

しかし正解（？）はちゃんとこのトップの中にありました。ちょっとホッとしています。

私自身のサユカちゃんのイメージは……ポニーテールです！

理由は特にありませんが、このキャラを書くときに自然に浮かんできたのです。それが文章にしていないのにも関わらず、読者の皆さんに伝わっていたのがちょっと嬉しいです。

「まぁ、ありきたりっていうか人気ある髪型の定番だしね」

香加ちゃんそれ言わないで。

「というわけで、これからもポニーサユカンをよろしく」

「妙なあだ名つけるなよ。なんかの製品名みたいだろ」

「会社名にもありそうだねぇ」

さて、そろそろ――

「お！　こんなとこにおもしろいものが！」

終わりに――おい括弧。

「えっと座布団の下に隠れていた『カカカカ』さんからのおたよりです！　『カカ、サエ、サユカで一番モテるのは誰ですか？ちなみに俺はサユカンファンです♪』だってさ！」

「そんなの私に決まってるじゃん」

「あたしだよ！」

「お姉はカウントされてないでしょ！」

「あー、意外とサユカちゃんじゃないか？　この『カカカカ』さんもファンだって言ってるし」

正解は姉です。

「ほらみろ！」

「「嘘！？」」

や、本当です。ことの真偽は近々本編で書くつもりなのでそのときに。

ちなみに小学校ではカカが一番人気。可愛いしやること派手だし、やっぱ目立ちますからね。

でもカカと仲良くなってから地味だったサエちゃんが表に出てきまして、見た目の可愛さもあって人気急上昇中。

サユカちゃんは意外と人気は少ないです。確かに可愛いんですけど、仲がいい人にしかそういうところを中々見せないので……そんな部分に気づいた男子はちらほらいるみたいですけどね。

「なるほど。姉が人気あるとかいうタワゴトは捨てといて、カカ達のことは納得だ」

さてさて！　今度こそ本当に――

「ねぇねぇあのさ」

「カカラジチョップ！！」

「あいたぁ！？　な、なに。あたしなんで叩かれたの！？」

「おまえがグダグダ無駄に喋るから、そのせいで放送予定時間を大幅にオーバーしてるんだよ！　もう黙っとけ！」

「……あぃ、すいません」

「よし！　では今回のカカラジはこの辺で。お相手は留と！」

「今日はチョップが私にこなくてよかったー、な香加と！」

「もごもご」

「こういうときは喋っていいんだよ！　融通きかないな！」

「扱いはひどかったけどいつものことだし、散々ひっかきまわせて楽しかったー、な括弧でした！」

「それではまた次回、お会いしましょー！」

「この番組は『ユーラシア大陸以外を盛り上げる会』と、『校長選挙委員会』の提供でお送りしました」

「あ、やっぱ校長の選挙だったんだ……」

## カカの天下２２５「第五回、カカラジ！」（後書き）

第五回カカラジ！　いかがだったでしょうか？
五回中最大の長さです。姉が脱線しすぎです＾＾；まぁ予想できたことではあったんですけど……

ひとつお詫びをば。いつもより更新時間が遅くなって申し訳ありませんでした。前回が前回だけに「もしかしてあれ本当に最終回だったんじゃ」とか思われた方もいらしたみたいで……そんな風に不安を煽るつもりはなかったのですが、ちょっと仕事の都合で更新がぎりぎりになってしまいました！
　でもなんとか書き上げることができてよかったです。長くなったのも読者の皆さんのお声のおかげですので嬉しい苦労をさせてもらいました。これからもどうかカカ天、カカラジともどもよろしくお願いいたします＾＾
　それでは次回のカカラジ、２５０回まで本編をお楽しみください。
ではでは＾＾）ノシ

## カカの天下２２６「音楽の授業、のりのり」

「さて、今から音楽の時間なわけだが」

皆さんこんにちは、ふぁ……給食の後の授業でちょっと眠いカカです。

テンカ先生の言ったとおりこれから音楽の授業なわけですが、先生の目はとろんとしていて、とてもやる気があるようには見えません。私と同じです。

「えっとな、眠いから自習」

ほんとにやる気ないこの人！

「ほら、寝る子は育つって言うじゃん？　教頭ごまかすためにそれっぽい音楽かけとくからさ、昼寝でもしとけ」

え、お昼寝？　それはちょっと嬉しいな。

「先生、ほんとに寝てもいいんですか？」

おそるおそる聞くニシカワ君に、テンカ先生は手をひらひらさせながら答える。

「おぅ、なんせオレが寝るからな」

なるほど、何かあっても全部先生のせいになるわけだ。

「先生、寝不足なんですかー？」

「あのな、腹がいっぱいになったら人間眠くなるの。そういうもんなの」

や、そりゃそうだけどさ。大人なのにそれでいいの？

「じゃ、オレは寝るから。おまえらもＢＧＭ聞きながら寝ろよーおやすみ」

そう言ってラジカセのスイッチをいれた後、テンカ先生は机に突っ伏した。

ふむ、先生としてこれはどうかと思うけど……音楽を聴きながらお昼寝というのは悪くない。

私と同意見の子も多いのか、もう机にぐったりとしている子が何人かいる。よし、寝ちゃえ。

お、ＢＧＭが聞こえてきた。

『き～み～が～よ～お～は～♪』

国歌斉唱。

寝にくい。

や、たしかに音楽の時間で使われるマジメっぽい曲だけどさぁ。

「先生、これはさすがに――」

「ぐー」

抗議しようとしたらもう寝てるし。

「……オレも……らじお……だせー」

なんかよくわかんない寝言呟いてるし。

「どうする？」

「なんかこんなの聞きながらじゃ寝れないよなぁ」

「遊ぶか？」

「でもどうやって」

ざわざわ騒ぎ始めるクラスメイト。でも『君が代』の音量が大きいから多分外には聞こえない。仕方ないなぁ。

「こほん……諸君！　遊びのことなら私にまかせろ！」

「「「おぉ、番長！！」」」

「番長って言うな！　さて、今は音楽の時間だよね。だから音楽で遊ぼう」

「どうやってー？」

そう、たとえば……

『さ～ざ～れ～、い～し～の～♪』

「石野君、さざれ！」

「は？」

「いいからさざりなさい！　国の命令だ！」

「や、さざるってなにさ！？」

「いいからさざれよ石野！」

「番長に殺されるぞ」

や、私いくらなんでもそこまでしませんが。

「え、えっと……じゃあさざれのポーズ、いきます！」

ぱちぱちぱち。

「はいっ」

「……なにそれ」

「さ、サザエのポーズ」

「失格！　おもしろくない！　お、今度は蛍の光か」

『ほ～た～るの、ひ～か～り、まど～の、ゆ～う～き～♪』

「結城君、窓！」

「おっけー！　いぇーい、まどー！！」

ノリいいなこいつ。やってることは窓から身を乗り出して「絶景かなー」とか言って周囲を見渡してるだけだけど。

「さ、次は――」

そんな感じで歌になぞって遊んでるうちに時間が経ち……

「つば～さ～が～ほし～い～♪」

「アヤちゃんが翼君がほしいって！」

「きゃー、アヤちゃんだいたーん！」

「この大空に～つばさをひろげ～♪」

「アヤちゃんが翼君を開きたいんだって！」

ひ、開くってどこを？

「きゃー、アヤちゃんすぷらったー！」

あ、翼君の開きってことか。アジの開きみたいな感じで。

……食べるのかな、アヤちゃん。

まぁそれはともかく、いつのまにかクラスで一番歌がうまいアヤちゃんのオンステージになっている。みんなも踊ったりはやし立てたり伴奏したりと大騒ぎだ！

そんな楽しい時間も、そろそろ終わり――

「なにを騒いどる！？」

あ、終わっちゃった。デストロイヤー教頭登場。翼君の開きでお開きかぁ。

デストロイヤーは音楽室内を見渡して……とりあえず寝てるテンカ先生の首根っこを掴んだ。持ち上げられてもテンカ先生まだ起きないし。

「いま立っている生徒、ちょっときなさい」

う……ノリノリだったうちのクラスメイトはほとんどが立って踊っていた。当然私もだ。指揮なんかしちゃってたし……はぁ、ぬかった。

「あれ。サエちゃん座ってたの？」

「うん、こんなこともあろうかと座りながら鉛筆でたいこ伴奏してたー」

……さすがサエちゃん、ぬかりないな。

このあと、私たちは教頭にこの非常識を破壊された。や、怒られただけだけど。

ノリノリくらい、いいじゃんねぇ？　音楽の時間なんだし。

## カカの天下２２６「音楽の授業、のりのり」（後書き）

『君が代』、『蛍の光』、『翼をください』の歌を使わせていただきました。誰でも知ってる歌ですよねっ。

新しい名前がいくつか出てきましたが、今後も登場するかは不明です。なにせ歌から生まれたようなもの――げふんげふん。や、けしてそのようなことは……あるかもねっ。細かいことはキニシナイッ（笑

## カカの天下227「公園で遊ぼう、ブランコ編」

「今日はなにする？」

「ブランコしたいー」

「あははっ、サエすけったら子供ねぇ」

「サユカちゃん座ってー。思いっきり押してあげるから」

「……そっちしたいのね」

ブランコのようにぶらぶらと公園に遊びにきているカカです。

サエっちゃんとサユッカンといつものように放課後に遊びにきたのです。ん、なんで名前が跳ねてるかって？　なんとなくノリで。

「ほらほら座って」

「はいはい……本当はこんな子供っぽいブランコにのりたくないんだけどねっ」

とか言いつつ嬉しそうなサユカン。

「ほら、座ったわよっ」

「じゃー私が背中を押すから、カカちゃん正面から押してね」

「へ、私も押すの？」

「キャッチボールもしたいのー」

なるほど、ブランコに乗ったサユカンでキャッチボールしようってことか――って。

「サエちゃん、それ正面から受け止める私って結構危なくない？」

「カカちゃんなら大丈夫だよー」

「ちょっと、ボール扱いされてるわたしのほうがっ」

「サユカちゃんだからだいじょぶー」

「ねぇ、それって『カカすけは運動神経いいから大丈夫』とかいう意味と違って『わたしはどうなっても気にしないから大丈夫』って意味に聞こえるんだけど！？」

「ちがうよー。サユカちゃんならきっと面白い顔してくれるから大丈夫って意味だよー」

「そっちのほうが意味わかんないしっ」

「とにかくいくよー」

「わっ、ちょと」

サエちゃんは問答無用でサユカンの背中を押し始めた。徐々にブランコのスピードが上がっていく。にしてもサエちゃん、今日は妙に強引だなぁ。

「そーれー、サーブ！」

へ、バレーボール？

困惑する私に容赦なく迫るサユカン！　その勢いとサユカンの鬼気迫る顔にちょっとビビリながらも、なんとかブランコの端を持って受け止め――返す！

「れ、レシーブ！」

ブン、とそれなりに勢いがついて返っていくサユカン。

でもサエちゃんのほうは背中側だから、比較的簡単にサユカンボールを受け止め、返してきた。

「トスー」

トスのわりには結構な勢いが……えっと、トスときたら……

「アタック！」

「アタックすんなあああああ！！」

びゅおん！　といい感じに風を唸らせながらすっ飛んでいくサユカンボールを、サエちゃんは見事受け止めた！　運動神経よくなったなーサエちゃん。

「回転レシーブー！」

「回転さすなあああああ！！」

ぐるんぐるん回りながら向かってくるサユカンボールはさすがに危険と判断した私は……避けた。

「避けるなあああああ！！」

「……こら、危ないことすんなや若人ども」

そんな感じでサユカンで遊んでいると、偶然通りかかったらしいトメ兄が現れた。

「お、トメ兄。夕飯の買い物？」

「そうだけど……とりあえずサユカちゃん助けるぞ」

暴走気味のブランコをわりと簡単に受け止めたトメ兄は、ふらつくサユカンを立たせて、支えてあげた。

「ほら、そこのベンチで休みな……ったくおまえらな。遊ぶなら相手を見てやれ！　サユカちゃん本気で辛そうな顔してたろ！」

……や、いまトメ兄に抱きつけてめっちゃ幸せそうな顔してますけど。

「サユカちゃんはここで休んでな。カカ、僕がおまえに本当のブランコの遊び方を教えてやる。ちょっと座れ」

「ん？　あいあい」

遊びと聞けば素直に従う。これ、子供の真理ね。

「座ったよ？」

「よし、そしたらな」

お？　なんかトメ兄がブランコに座った私をぐるぐる回し始めましたよ？

そしたらもちろんブランコを支えている二本の鎖もぐるぐるねじれていって……

「レディー、ゴー！！」

「お、お、おー？」

トメ兄が私の肩に置いた手を離した。するとねじれた鎖は当然元に戻ろうとして回転していって――

「おー！！」

ぐるんぐるんぐるんっとぉ！！

やがてその回転は止まったけど、私の目に映る世界はいまだにぐるんぐるん回ったまま……ええい、わずらわしい！

「こら世界、フラフラしてないでしゃきっとせんか！」

「や、フラフラしてるのカカだから」

「カカちゃん世界のせいにしてるー」

「トメ兄！　もいっかい！」

「あれ、気に入ったの？」

わりと楽しかった！

「ちっ」

なんか舌打ちしてるけど気にしない！

「トメ兄、もっかいー」

「はいはい」

そんな感じで、私たちはブランコで遊んだ。

おかげでトメ兄は夕飯の買い物にいけず、夕飯は店屋物となってしまいましたとさ。

ラッキー♪

「ところでサエちゃん。なんか今日強引だったね」

「え、そうかなー」

「うん、なんかあったの？」

「……ふふふー」

なんだろう、この笑いは。

何か企んでるのかなー。サエちゃんのことだし。

## カカの天下２２７「公園で遊ぼう、ブランコ編」（後書き）

ブランコでぐるぐる、昔よくやりました。
でもねじれてく鎖、あれに服挟まったりすると結構危険そうですよね、気をつけましょう＾＾；

## カカの天下２２８「空飛ぶ約束」

トメです。

家に帰ってきてごろごろタイムを満喫し、そろそろ夕飯の買い物にいこうかなーというところで……居間にあるガラス戸から暮れかけるオレンジの空を見上げながら、我が妹カカは呟きました。

「……空、飛びたいなぁ」

「自殺志願者みたいなこと言うな」

カラスでも見て思ったのかね。カーカー。

「もう、生きてる希望が……」

「今日の夕飯、さんまのから揚げにしようかと思ってたのに」

「それだけが生きる希望……」

やっすい希望だなー。

「ま、それは冗談として」

「冗談でも自殺をほのめかすようなことは言わないの」

「……ごみん」

素直でよろしい。カカのいいところは、僕が本気で怒ってるかど

うか察することができることだ。

たまーに僕がなぜ怒っているかわからないこともあるみたいだけど、それはまぁ子供だから仕方ない。

「でさ、空飛びたいの」

「こないだもそんなこと言ってたよな」

「うん、すっぽんぽんでも空を飛べなかったし」

何も知らない人が聞いたらすごいセリフだな。

すっぽんぽんで空を飛ぶ――レベルが高いヘンタイだ。一人で魔王が倒せるくらいレベルが高い。

「どうやったら人は空を飛べるの？」

「飛行機に乗ればいい」

「自力で飛びたいの」

無茶言うなぁ子供って。

「じゃ、なにか？　羽でも生やしたいってか？」

「うん」

遺伝子操作だのなんだの技術は進んでるだろうけど、そんなことできる世の中がくるのかねぇ……

「ほら、羽を食べてれば羽が生えてくるとかないの？」

「ないだろ、それは」

「えー。でもこないだテレビで言ってたよ。心臓を食べれば心臓生えてくるし、肝臓食べれば肝臓が生えて――」

「こねーよ！　こえーよ！　生えてくるって表現がものすっごくこえーよ！！」

「えー、でもこないだテレビで」

「カカ。多分それ勘違いしてる」

多分カカが言ってるのは漢方医学の話だろう。自分の身体の悪い部位を食べることで回復をはかろうという考え方だ。心臓が悪ければ他の動物の心臓を食べる、肝臓が悪ければレバーを食べるというもの。実際に効果があるかどうかは知らないけど……少なくとも生えてはこないだろう。

生えてきたら移植とか便利だろうけど。

「じゃ、羽。生えてこないの？」

「そりゃな。アニメとかゲームだとそういう鳥人間たまに見るだろうけど、実際は……」

「じゃあ鳥に乗りたい！」

「飛行機で我慢するって選択肢は？」

「私は風を感じたいの！」

ガキがいっちょまえになんか言ってる。

「だからね……いつか、乗れるようなでっかい鳥がいる国に旅行にいってやるの！　お金貯めて！」

……ほぅ？

「ずっと先になるかもだけど――」

「よく言った！　うんうん、鳥に乗る、なんて難しいだろうが夢を持つのはいいことだ。なんだか僕も風を感じたくなってきたよ！」

「トメ兄？　なんか急に……」

「ん？　いやいや特に他意などはございませんことよ？」

「よくわかんないけど、確かにタイにはでっかい鳥はいないだろね」

「いないねぇ。どこにいるのかねぇ」

急に僕が協力的になった理由。

それは、カカがこのままやる気になってお金を貯めてってくれる分にはまったく異論がないから。

そしてもう一つ。

「そのときは僕も連れてってくれな」

「うん、もちろん！」

カカの稼ぎで海外旅行、ゲットだぜ！

ずいぶんと先の話だけど……頑張ってお金稼いでくれな、妹君♪

おまえのワガママで行くんだ。

僕は一銭も出さないからなっ。

# カカの天下２２８「空飛ぶ約束」（後書き）

空を飛びたいという子供の純真っぽい想いは果たして叶うのか！？

さてさて、それとは別に空へと『落ちる』人もいなくならない世の中ですよね。

私は、自殺は嫌いです。

きっと自殺を考える人のことは本人にしかわからないだろうし、生きる気満々の私がヘタなことを口にしても説得力はないでしょう。

でも、頑張ってほしい。

少しでも笑ってほしい。

傲慢かもしれないけど、自分の文章で笑えるなら笑ってほしい。

ちょっとワガママすぎますかね。でも、誰かを救えるような小説……いつか書けたらいいなと思います。

本編内容のわりに重いあとがきで申し訳ありません！

## カカの天下229「相談はほどほどに、がんばれタケダ」

やぁ、俺タケダ！

最近、サエ君に頼まれていろいろ動いているエージェントさ！

どういう風に動いているかは企業秘密さ！

秘密さ隠密さ！

そういうわけでいっつも隠れてるから、またカカ君としばらく話せていないのさっ。

めげるぜ！

「どうしたのタケダ君。ため息なんかついちゃってー」

「……いやな、カカ君ともっと――」

「心配しなくても、仕事のできが悪いからって実験台になんかしないよー？」

実験台ってなんの！？

出来が悪すぎたら実験台にされるんですか！？

「も、もっとがんばります……」

「んー、いいよ別に。もう結構たまったしー、あとは適当で」

「そ、そうっすか？」

なぜに敬語なのだろう自分。ううむ……先日の飲み会でサエ君の弱いところを見て、これからは対等に仲良くできるかと思ったのだが……

なんかスッキリしちゃったらしく、最近は黒さ全開だ。機嫌を損ねると何されるかワカラン。

「では明日からはコソコソ作業は終わりだ！」

「はいはいー、がんばってねー」

ファンクラブとかいう連中もいなくなったし、ようやく堂々とカカ君に声をかけることができるのだ！

そうやって意気揚々と登校してきた次の日。

「カカ君、おはよう！」

「……はょ」

……あら？

なんだ、この淡白すぎる挨拶は！？

目もあわせずに去っていった我が女神！　ああ、世界はなぜにこ

うも罪つくりな女性をボーン（英語で『生まれる』の意味）してしまったのか!?　障害を乗り越える度にマッチ（英語で『多くの』の意味）困難が俺をアタック（英語で攻撃――書くまでもないか）する!　あぁ、世界よ、なぜそんなに僕にボーンでマッチでアタックなのか!?

「タケダ君、またマッチ（多くの）困難なのー?」

「おおサエ君!　そうなのだよ!　マッチでボーンボーンでアタックなのだ!　……なぜ俺の心の声が聞こえている」

「タケダ君さ、興奮したらいつも思ってることベラベラ喋ってるよー。難しく言おうとして失敗した感じに」

「……いつも?」

「マッチいつも」

「おぅ、マッチボーン!!」

「なにそれー」

「驚きのあまり合わせてしまった」

カカ君がうつったかな?

「タケダ君もこりないよねー。自分が頭いいとか言ってるわりには」

「ふっ、サエ君よ。本当に頭のいい人間というのはな、目的に対して努力を止めない者のことを言うのだ!」

って何かの本に書いてあった！

「なんだ、受け売りかー」

「また口から漏れてる！？」

こ、これは危険だ……俺の秘めたるカカ君への想いが漏れないように気をつけねば！

「だだ漏れだよー」

「マジか！？　というか俺の心の声って、全部喋ってしまってるのか？」

俺にテレパシーはないのか？

「プライバシーでしょ」

テレパシーなんかあるわけないな！　あっはっは。

笑ってる場合じゃない！　プライバシーがないだと！　どうしてくれる！

「自分のせいでしょー」

そうでした。

「ふふ、タケダ君やっぱおもしろい。無駄な努力とは思うけど、マッチ頑張ってねー」

「……うん、マッチ頑張るよ」

しかし、なぜに今日のカカ君はあんなに機嫌が悪かったのだろうか？

もっとサエ君と相談して対策を練らねば……

おまけ。

「おぅカカ。おかえりー」

「……っ」

「おい、どした。ゴミ箱けっ飛ばすなよ。中身カラだから別にいいけど」

「だってさ！」

「不機嫌の理由はなんでございましょうかお嬢さま」

「最近、サエちゃんとタケダとかいうのがコソコソ仲いいんだもん！」

「……あー、それは多分、あぁ、言わないほうがいいか」

「なにあのタケダってやつ！　これからも無視してやる！」

「……やってることは大体わかるが、裏目に出てるなーあいつ」

## カカの天下２２９「相談はほどほどに、がんばれタケダ」（後書き）

そらそんだけサエちゃんと喋ってればねぇ……
サエちゃんはカカの想い知らないから、こうなるのは当然なわけで……
タケダはもういろいろがんばれとしか言いようがないわけで……

# カカの天下２３０「探しものと見つけたモノ、前編」

暑いですね、サエですー。

秋も真っ最中で少しずつ寒くなってきたところ、なのに今日は日差しが強く、久々に暖かい日和となっておりますー。

「サエちゃん、その帽子いいね」

「うん、たまにはかぶろうと思ってー」

「でもちょっと大きくない？　頭からずり落ちそうよっ」

公園の近くにある湖に遊びにきた私とカカちゃんとサユカちゃん。何をするでもなく木々の隙間を縫いながら歩いていると、私の帽子の話になりました。

ちょっとブカブカの、つばがおおきい白い帽子。たまにずり落ちそうになるけど、私の宝物の一つです。

「お気にいりなんだよー。まだ使うとは思わなかったけど」

「そだよね。もう十月なのに今日は暑いよね。太陽もそんなに仕事してないで、のんびりサンマでも焼いて食べてればいいのに」

カカちゃんサンマ食べたいのかなー。私も食べたいな。

「もしかして太陽がサンマを焼いてるから暑いのかもよっ」

「なるへそ。サユカン冴えてるね」

「焼けたサンマ、降らしてくれないかなー」

「サエちゃん、それ食べるの難しくない？」

意味のない、でもなんとなく楽しい会話をしながらの散歩。

お気に入りの帽子をかぶって、のほほんと歩いて……うん、いい気分だー。

「でさ、そろそろ何かして遊ばない？」

でもカカちゃんはただ歩いているだけじゃ退屈だったみたいだ。

何か遊ぶものはないかなーときょろきょろ辺りを見回している。

と、その視線が私の帽子に止まった。

「んふ、サエちゃん。その帽子、フリスビーみたいだよね」

「えー」

「うん、確かに飛びそうではあるわねっ」

「やだよー、そんなのー」

「まあまあ、そう言わずに！　一回だけ、ね？」

「……しょうがないなぁ。落とさないでよー」

白い帽子だから汚れたら目立っちゃう……けど、カカちゃんなら大丈夫だよね。運動神経いいし、落としたりしないよね。

「ありがとっ。ほらサユカン、そっち立って」

「はいはいっ」

「いくよー、それっ」

ふわり、と帽子が舞った。

帽子はゆっくりと回転しながら、見事なコントロールでサユカちゃんの元へ――

たどり着く前に、風が吹いた。

唐突な風は無情にも帽子をさらう。

湖の方へ。

木々に隠れて、帽子はすぐに見えなくなった。

「……ぁ」

カカちゃんが口を開いたまま、血の気の引いた顔で声無き声を発した。

私は目を見開いて、そのまま動けなかった。

サユカちゃんだけがすぐに行動した。帽子が消えた、湖の方角へ

と走る。

私とカカちゃんもすぐに急いだ。

サユカちゃんが湖を覗き込んでいる。私は周囲を見渡した。でも白い帽子の姿はまったく見えない。

「……湖に、落ちた？」

「わかんないわ。でもこっちの方に飛んできたのは確かだし、ここにないってことは」

「落ちて、沈んじゃった、かなー」

努めて明るく、私は言った。

「あはは、もう、仕方ないなーカカちゃん。落とさないでって言ったのにー」

「ごめ……ごめんっ、サエちゃん。ほんとごめん！」

泣きそうな顔で謝ってくるカカちゃん。

うん、いいよ。カカちゃんだもの。

これくらい、別に――

「探すから！　なにか長い棒使って、湖かき出せばなんとか！」

「や、いいよー、そこまでしなくても」

「だってサエちゃん、怒ってるもん！」

……え？

私が？　まさかー。

「怒ってなんか、ないよー」

「うそ。だって、帽子がなくなったときすごく怖い顔したもん」

「そんな、怒ってなんか」

「ごめんね、絶対見つけるから」

「ねぇカカちゃん聞いて、私は怒ってなんか――」

「待ってて。あ、この棒なんかよさげ」

「だから――怒ってないって言ってるでしょ！」

自分でも、驚いた。

こんな大声が、自分の口から出るなんて。

「……怒ってるじゃん」

「帽子のことは怒ってないよー、でも、カカちゃんが」

しつこいから、ちょっとイラッとして――

「怒ってるよ！」

「……怒ってない！」

「あ、あのさ。二人とも」

サユカちゃんが割って入る、でも私たちの耳には届かない。

「怒鳴ってるじゃん！」

「カカちゃんがしつこいからでしょ！」

「だって探せば見つかるかもしれないじゃん！」

「もう湖に沈んじゃったんだよ！　見つからないよ！　だから別にいいって言ってるのに！」

「別にいいならなんでそんな怒ってるのさ！」

「……もういい！　探したいなら勝手にすれば！」

きびすを返す。後ろで何か聞こえたけど無視した。

早歩きで歩く。

歩く。

目が熱い、胸が熱い。

熱くて、痛い。

カカちゃんのわからずや。

私は怒ってなんかいないのに。

怒ってなんか――

「あら、サエおかえ――どうしたの？」

「……なんでもない」

出迎えてくれたおばさんに適当に答えて、自分の部屋へ。

投げやりにベッドに倒れこんで、私は泣いた。

赤ん坊のように、なりふり構わず泣き喚いた。

怒ってなんか、ない。

ただ、お母さんにもらった帽子をなくして。

カカちゃんとケンカして。

すごく、悲しいだけ。

## カカの天下２３０「探しものと見つけたモノ、前編」（後書き）

今回はシリアス風味のお話です。

コメディを期待して読んでくださっている読者様には申し訳ありませんが、これもカカ達の日常の一部ということで、よろしければお付き合いくださいませ。

次回に続きます。

## カカの天下231「探しものと見つけたモノ、中編」

「……もういい！　探したいなら勝手にすれば！」

そう言って、サエちゃんは行ってしまった。

私は……その背中を見送ったあと、見つけた棒で再び湖をかき回し始める。

「あ、あのさ」

湖は濁っていて、帽子の姿なんかこれっぽちも見えやしない。

「ね、カカすけ」

濁ってドロドロ。

なんにも見えない、聞こえない。

まるで私の心みたい。

「カカすけっ、サエすけ追いかけなくていいの？」

ああもう、サユカンうるさいな。

「勝手にしろって言ったもん。勝手に帽子探すの」

「でもさ、そんなので見つかるかわかんないじゃない。それよりサエすけを――」

「こっちが先」

「でも、なんか天気悪くなってきたし」

サユカンの言葉に答えるかのように、青かった空はだんだんと雲で覆いつくされて、暗い色になっていく。

湖といい空といい、そんなに私の心を映したいのか。

「カカすけ――」

「サユカンうるさい！」

「……！」

「……ごめん。でもさ、雨が降ったら、ここにもし帽子が沈んでても流されちゃうかもしれないでしょ？」

「でも、雨が降ってるときに湖は危ないわよっ」

「でも探すの」

「……どうしても？」

「どうしても」

「じゃあ、力づくでっ！」

私を湖から離そうと掴みかかってくるサユカン。

姉から無駄に手ほどきを受けている私は――つい、その手をとって投げ飛ばしてしまった。

地面が柔らかい土手で助かった。サユカンは怪我をしなくて済んだし、痛みもたいしたことないだろう。

でもサユカンの顔は……泣き顔だった。

思ったより痛かったのか、それとも――私に投げ飛ばされたのが、拒絶されたのがショックだったのか。

「……！」

サユカンは私の手を振りほどいて、きびすを返した。

こちらを振り向くこともなく、去っていく。

ああ、サエちゃんと同じだ。

ぼんやりと、麻痺した頭で考えながら。

私は、湖をかき回す作業を開始した。

ぽつり、と頬になにか当たる。

雨、だ。

何分そうしていたんだろう。

何十分かな。何時間かな。

時間の感覚がまったくない。それでも私は、ひたすら湖をかき回していた。

身体を叩く雨がひどい。服がびしゃびしゃ。湖は茶色と黒色が混ざったイヤな色。

いろんなことがキモチワルイ。

はやく、見つけないと。

見つけて、サエちゃんに謝らないと。

サユカンにも謝らないと。

……私、なにやってるんだろう。

「なにやってるんだ、そこの妹」

「……トメ兄」

久々に聞いたような気がする声に、思わず振り返る。

トメ兄が傘をさして立っていた。その隣にはサユカン……そっか、サユカンが呼んできたのか。

「事情はサユカちゃんから聞いたけどさ……これ以上は無茶だ。帰

るぞ」

「や」

「探すなら晴れた日にすればいい。今探すのは危なすぎる」

「や！　今見つけるの！」

「そんなぐちゃぐちゃな湖で見つかるわけないだろ！」

「見つけるんだもん！」

「この――！」

トメ兄が私の肩を掴んだ。

力づく？　トメ兄相手なら力で勝てない。でも探すのをやめるわけには――

「……あれ」

はがいじめ？

違う。

私の身体はトメ兄の腕の中におさまっていた。

トメ兄は私についた泥で汚れるのも構わず、ぎゅっと抱きしめてきた。

「バカ……身体冷え切ってるだろうが」

「……はなして」

「このまま連れて帰る」

「や！！」

乾いた音が響いた。

身体が冷えていたせいか、痛みは感じなかった。

でも、頬がじんじんと熱くなってくる。

私は頬を叩いたトメ兄を睨む。

すごく近くに見慣れた顔。

見慣れた顔に……あまり見たことがない、真剣な目。

「……ぼう、し。見つけないと、サエちゃんと、仲直りできないの」

その目を見たら……勝手に口が動いていた。

「早く見つけないと……どっか、いっちゃう」

そう、どこかへ行ってしまう。

私の、ともだちが。

だれよりもたいせつな、ともだちが。

「なぁ、カカ」

「どうしよぅ、トメ兄。サエちゃんが、サエちゃ、が……どっか、いっちゃ……ぅ、うう」

「カカ、聞きな」

「ぼう、し……見つからないよぉ……」

私のぐちゃぐちゃな顔を……雨と泥と、認めたくないけど涙でぐちゃぐちゃな顔を、トメ兄はまっすぐ見つめてきた。

「あのな、カカ。失くしたものは戻らないこともある。壊れたものは直せないものもある。でもな、人の想いだけは、探し続けてれば絶対に見つかるんだぞ？」

人の、おもい……？

「帽子なんか見つからなくたって、おまえなら見つけられる。サエちゃんの『仲直りしたい』っていう想いを、絶対に見つけられるから」

「……ほん、と？」

「ああ」

「……な、仲直り、できる、かな」

「大丈夫。親友っていうのはそういうもんだ」

「しん、ゆ……ぅ」

緊張が緩んだせいか、唐突に意識が落ちる。膝の力が抜けた、けど。

「カカすけ！？」

「大丈夫。多分疲れて気絶したんだろ。ずっと雨に濡れて動いてれば当然だ……やれやれ」

トメ兄が受け止めてくれたのかな。落ちかけた身体がふわりと持ち上がった気がする。

「本当に大丈夫なんですかっ？」

「うん、こういう無茶は姉もよくしててね。こいつもアレの妹だし、これくらいなら身体を拭いて温めてやればすぐに回復するだろ」

かすかに聞こえていた声が遠ざかっていく。

完全に意識が落ちる寸前に、想った。

ねぇ、サエちゃん。

私、まだ、サエちゃんの親友かな？

答えはまだ聞けない。

でも探そう。

トメ兄がああいう顔したときは、絶対に嘘つかないもん。

だから、きっと大丈夫。

私が探しているものは、きっと見つかる。

## カカの天下２３１「探しものと見つけたモノ、中編」（後書き）

後編へ、続きます。

## カカの天下２３２「探しものと見つけたモノ、後編」

『失くしたものは戻らないこともある。壊れたものは直せないものもある。でもな、人の想いだけは、探し続けてれば絶対に見つかるんだぞ？』

そんなトメさんの素晴らしい言葉を、私は精一杯伝えている。

……カカすけとサエすけがケンカするなんて、初めて見た。よっぽどあの帽子が大切なものだったんだろう。

でも、あの二人が仲直りしないなんて、そんなのはダメだ。

絶対、ダメだっ。

「――というわけっ」

『……人の想いだけは、探し続けてれば』

「それで、どう？　サエすけ。君はカカすけと仲直りする気、あるの？」

『……』

「カカすけは探してたよ、君との仲直りのきっかけ。気絶するほどね。君は？　探す気あるのかなっ」

茶化したふうに言ったけど、わたしはずっとドキドキしていた。

二人は大切な友達だ。だからでしゃばってみたけど……電話の向こうにいるサエすけの反応を、びくびくしながら待っている。

――泥だらけのカカすけを布団に寝かせるのにトメさんを色々と手伝って。

トメさんに自分の家まで送ってもらって、その夜。

わたしはサエすけに電話した。

わたしのせいで二人の関係が悪化しちゃったらどうしよう。そんなことも考えてしまう。でも――わたしも、友達として、カカすけやサエすけの『一緒にいたい』っていう想いを探し続けないと！

……そうしてあげてって言ったのは、トメさんだけど。

ほんと、適わないなぁ。どれだけ惚れ直させれば気が済むんだか――

『……しょー』

「え！？」

まずぃ、考えるのに必死で聞きそびれた！

『仲直り、したくないわけないでしょー。お母さんにもらった帽子が失くなって悲しかっただけで……怒ってるわけじゃ、ないもん』

ほっとした。

カカすけも言い出したらなかなか聞かないヤツだけど、サエすけも相当なものだと思ってたから……ここで『仲直りなんかしたくない』って言われたらどうしようかと思った。

サエすけにも『仲直りしたい』っていう想いがあるんなら……大丈夫よねっ。

「じゃ、頑張ってねっ。わたしはもう何もしないから」

『……えー』

「えーって言わないのっ。もともと二人の問題でしょ」

『でも、手伝ってくれてもー。お礼はするよ？』

「どうせ怪しいお礼でしょ」

よかった、いつものノリだ。

あれから結構時間が経ってるし、落ち着いたみたい。

……あんな叫ぶサエすけ初めて見たから戸惑ってたけど、あれがお母さんの帽子だったんなら納得できる。サエすけにとってお母さんは特別だし、やっぱり動揺も大きかったんだろうなぁ。

「じゃ、明日学校で。せいぜい頑張ってねっ」

『うー、クレープ奢るからさー』

「ダメ、自分で頑張りなさいっ。おやすみっ」

さぁ、明日はどうなるかっ。

……おはようございます。

「……」

「……」

あれ？

昨日のトメさんのいいお話を聞いて、二人とも仲直りしようってなったんじゃなかったっけ。

「……」

「……」

なんか二人ともだんまりなんですけどっ。

「カカちゃん、おはよう！」

「……よ」

「サエちゃん、おはよう！」

「……ん」

通学路で会うクラスメイトへの挨拶にも、ほとんど反応しない二人。

だ、大丈夫かなぁ。

その後。朝のＨＲが始まるまで二人は口を聞かなかった。

そのくせ気にしてはいるようで、ちらちらとお互い見たりしている。でも視線が合いそうになると目をそらす。それを繰り返していた。

なんとかしたいのは山々だったけど、ＨＲなので二人の元を離れざるを得ない。わたしだけ違う教室なのがもどかしい……

隣の教室のことばかり気にして身が入らなかった授業が終わる。休み時間が始まってすぐに隣へ、っと、テンカ先生発見！

二人の様子を聞いてみると、授業中もずっとそんな感じだったらしい。

「ったく、あいつら……二人揃って片想いでもしてんのかよ」

あ、確かにそんな感じかも。

お互い気になってるんだけど、口に出せない。みたいな？

「あの二人、オレは口出したほうがいいのか？」

「あ、いえ。トメさんが――」

「ああ、トメが言うこと言ったんなら大丈夫か」

それだけで安心したらしく、テンカ先生は口笛を吹きながら職員室へと戻っていった。

……あらまぁトメさんのこと、ずいぶんと信頼なさってるようで……って、今はそっち気にしてる場合じゃなかった！

教室を覗く。

休み時間だというのに、座りっぱなしで、いまだにちらちらお互いを盗み見ている二人。

番長と裏番長の微妙な雰囲気に、クラスメイトは怯えきっているみたいだ。廊下も他のクラスもうるさいのに、このクラスだけお通夜のように静まっている。

……早く仲直りしてよぉ。皆の心臓に悪い。

そんなこんなで、下校時間になっちゃった。

カカすけはそそくさと帰っていたらしく、教室にはすでにいなかった。

その代わり、ずっとカカすけのほうを気にしていたせいで疲れたのか、机の上でぐったりしているサエすけが見えたので突撃開始！

「サエすけぇ！！」

「うあぁー、な、なんだサユカちゃんかー」

「なんだじゃないわよっ。仲直りするんでしょ！」

「い、いざとなったらタイミングがー」

あぁもう、他の人には二人とも容赦ないのに、なんでお互いのことになると弱気かなぁ！

「あのね、トメさんの話忘れたの？　仲直りしたいって想ってるんなら、カカすけとの友情ちゃんと探しなさいよっ！」

「さ、サユカちゃんくさ――」

「くさいセリフだってのはわかってるわよっ、でもね、君らが仲直りしてくれないとこっちも困るのっ」

「サユカちゃん、他に友達いないもんねー」

「大きなお世話よっ」

よし、調子戻ってきたわね。

「とにかく追いかけなさいっ、いますぐっ」

「は、はいー」

カカすけはすぐ見つかった。

昨日の大雨も止んだから、改めて湖に来ていたのだ。

でもカカすけは、昨日みたいに必死に湖をかき回してはいなかった。

やる気がないというよりは、他のことを考えていて手がつかない、といった様子だ。ため息なんかついてるし……多分サエすけと同じ心境なんだろうなぁ。

わたしはサエすけの背中を押す。

サエすけはおそるおそる、カカすけに近づいた。

「……よぅ」

サエすけらしくない声のかけ方だ。緊張してるのかな。

「……よぅ」

肩をびくりと震わせたものの、サエすけと同じ挨拶を返すカカすけ。

……わたしはお邪魔だろうし、このまま木の影でじっとしていよう。

盗み聞きする気はないけど、じっとしていて聞こえてくるものは

仕方ないわよねっ。

「ぼ、帽子、見つかった、かなー？」

「見つかったら、こんなことしてないよ」

「そう、だよねー」

「……うん」

ぎこちないなぁ。がんばれ二人とも！

「あのさー、こんなことしてても楽しくないでしょー？」

「……別に、そんなこと、ないよ」

「うそつき」

「うそじゃないもん」

「うそだよー。だって湖かき回してるだけだよ？」

「それが面白いんだよ！」

「何にも出ないのに面白いわけないでしょー！　うそつき！」

「うそじゃないもん！！」

あ、ああ、また昨日みたいに！

昨日みたいに……ううん。

――大丈夫。

トメさんが言ってたもの。お互いが仲直りしたいって想い続ければ大丈夫だって。

頑張って、二人とも。

頑張ってっ！

「うそつき！」

「うそじゃないって何回言ったら――何回、言ったら」

「……カカちゃん？」

「……昨日、何回言われても聞かなかったの……私、だよね」

そう、これは昨日と同じ。

昨日の、やり直し。

「……でもね、ホントにうそじゃないんだよ？」

まだ言うか――

「私は……サエちゃんといれば、いつだって楽しいし、嬉しいん、だから」

――お？

「カカ、ちゃん……わ、私だって、帽子がなくても、カカちゃんが、いれば。それでいいって、言いたかったのに、さー」

「ぅ、その……ごめん。そんな風に思ってくれてたなんて、思わなくて」

「ううん！　私だって、その……怒ってなかったんだけど、悲しくて、その、当たっちゃって」

「やっぱりあの帽子、大切なものだったんだね」

「うん……自分ではそうでもないと思ってたんだけど……でも、カカちゃんのほうが大切だもん。だから昨日みたいな無茶、しないでね。倒れたって聞いたよー？」

「……見つけないと、サエちゃんがいなくなっちゃいそうで」

「私だってカカちゃんがいなくなるの、イヤなんだからね」

「や、私だって」

「私だってー」

「私のほうが」

「私のほうがだよー」

また言い争ってる。

でも今度のは、笑いながら。

冗談交じりに遊んでる。

「「……ごめん」」

どちらともなく言い出したその言葉で、今回のことは一件落着のようだった。

はぁ……まったく。

友達も楽じゃないねっ！

汗かいたぁ……

「サユカンも、ごめんね」

「サユカちゃん、ありがとー」

「うぉいえあ!?　いつの間に背後に」

「いつだっているよ。だって私たち、いつも一緒だもんね？」

「うんうん、見えなくても背後にいたりするんだよー」

「サエちゃ、それこあい」

「背後霊か君はっ」

「そのとーりー。ぴと」

「くっつくなっ」

「私もピト」

「暑苦しいわ二人ともっ。ったく、もう……ぷっ、あはは、変なとこ触るな！」

暑苦しいけどどこかくすぐったくて、わたしは笑いをこらえることができなかった。

いつもの、ううん。いつもよりずっと楽しそうなカカすけとサエすけ。

今まで曇っていた分、天気も気分も晴れ晴れしてる。

二人とも、ちゃんと『仲直り』を見つけたねっ。

よかった。

本当に、よかった！

おまけ。

その夜のこと。

『でねーっ、なんか昔わたしがあげた帽子が泥だらけで流れてきて

さー！　あの子、わたしのこともう嫌いになったのかなー！　うあああああん！！』

「さ、サカイさん落ち着いてっ。それはですね違うんです――」

『わたしも泥とお酒に沈んでやるううううう！』

「待ったっ、ちゃんと説明しますから早まらないで！　あと泥はともかくお酒はどっから出てき――サカイさん？　サカイさん！？」

余計なものを見つけてしまったどこかの母親が電話ごしに半狂乱になったりもしたけど、これはまた別のお話。

## カカの天下２３２「探しものと見つけたモノ、後編」（後書き）

これにて今回のケンカは解決です（どこかの母親を除いて＾＾；

カカとサエちゃん。仲のいい二人を描くうえで、どうしても書きたかったのが今回の話です。

ふとしたことでケンカになる、これは日常でよくあることだと思います。子供ならばなおさらのこと。

でもケンカして仲直りしてこそ生まれる絆もあると思います。カカ達を書いていると、笑い、ほのぼの以外でもそういった部分も書きたくてしょうがなくなくなりまして……

明日からはいつも通りコメディですのでご安心を！

くさい言葉とか書いちゃってごめんなさい！　でもくさい言葉とかお話、大好きなんです！（笑

それでは、これからもカカ達の日常ドラマにお付き合いいただけたら嬉しいです＾＾

## カカの天下233「飲んだくれジェラシー」

「で、何を言ったんだって？」

「……うるさい」

「まま、そう言わずに。後学のために教えてくださいよ、センセ」

「先生はおまえだろ、テン」

これだから絡み酒は厄介だ。

どうも、絡まれてるトメです。

今日はテンの誘いで飲みにやってきました。場所はもちろん行きつけになってしまった居酒屋『病院』です。

「おーい、ねーちゃん。輸血たのむー」

テンが厨房に向かって声を張り上げる。『輸血』というのはこの店のオリジナルカクテルの名前だ。たしかに赤いカクテルだけど……すごい名前をつけるもんである。「輸血おかわり」とか言うと異様さが一層目立ちそうだ。

「んぐんぐ……ぷはぁ！　ねーちゃん、輸血おかわり」

言ってるし。

「大盛りで」

なおさら異様だし。

「それで……話は戻るが」

「戻さなくていいぞ、吸血鬼」

吸血鬼候補、二人目だな。ちゃぷちゃぷ赤いもんばっか飲みやがって。ちゃぷちゃぷ。

……ちょっとおいしそうじゃんか。

「オレはな、教師として聞かないわけにはいかないんだ。トメ、おまえカカ達になんて言ったんだ？」

「だから、別に――」

「あんだけ仲良かったやつらが大ゲンカしたんだぜ？　しかも女同士で」

「女っていっても子供だろ」

「女のケンカは子供のころからレベル高いんだよ」

……悪うございましたね男のケンカは低レベルで。

「それがたった一日しか続かなかったんだぞ？」

「続いてほしかったみたいな言い方だな」

「それを仲直りさせてこそ教師じゃねぇか」

それはもっともだと思うけど……

「オレの出番を盗りやがって」

教師なら生徒が仲直りしたことを素直に喜べよ。

「というわけで、カカ達に何を言ったかさっさと教えろ」

「……別に、母さんが昔言ってたことをそのまま言っただけだ」

「ほほぅ。なんて言ったんだ？」

テンのことだ。どうせ僕が言わなかったらカカ達に聞くだろう。

まぁ、僕が考えた言葉でもないし、言っちゃっても恥ずかしくないか。

「……まずケンカの原因は、カカがサエちゃんの大切な帽子を失くしたことなんだよ。で、カカがその帽子を見つけないとサエちゃんと仲直りできないって無茶するから――」

「おお、我が妹君よ！　無茶するのはやめたまえ！　無茶はいつものことだけど！」

「なんだそれ」

「そのときのトメの様子を演じてみた。気にせず続けろ」

なんかキャラ違うような……

「あ、ああ。それで、失くしたものは戻らないこともある――」

「はい、失くしたものは戻らないこともある！」

「なぜ繰り返す」

「いいからいいから」

妙にテンション高いな。酔ってるのか？

「……壊れたものは直せないものもある」

「はい、壊れたものは直せないものもある！　聞きましたか皆さん！」

「皆さんて誰だ！」

「いいから続けろって」

「……えっと」

「はい、えっと！！」

「そこは繰り返すな！」

コントかこれは。

「ったく……えーっと。でも、人の想いだけは探し続けてれば絶対

に見つかるんだぞって」

「でも、人の想いだけは！　想いだけは見つかると！！　いい言葉いただきました！！」

「て、テン？」

「聞いたか？　聞いたなてめーら！？」

「「「うんうん」」」

「どちらさま！？」

なんか店員も客も僕らのテーブルの近くに集まってる！？

「よし、これをメモって帰るのだ！　わかったなてめーら！！」

「「「はーい先生」」」

「生徒！？　この人らみんな生徒なの！？」

「お～もいはか～なら～ず見～つか～るぞ～♪」

「歌うな！」

「皆さんご一緒に！」

「「「お～もいはか～なら～ず見～つか～るぞ～♪」」」

「ご一緒するな合唱するな無駄にハモるな！！」

ぜぇ……はぁ……こんなに勢いよくツッコみまくるの久々で息切れてきた。僕も歳かな。

「ちくしょーいいこと言うなぁトメ先生！」

「だから先生はテンだろ……って、あれ」

「トメ先生のコノヤロー……がく」

コノヤローってそれ悪口か？　とかツッコむ暇もなく。

テンは電池が切れたようにぐったりして、やがて動かなくなった。

「……すー、すー」

寝てる！？

「あー、潰れましたねテンカ先生」

「あ、院長店長」

院長店長というのは、早い話がこの店『病院』の店長だ。『病院』だから院長とも呼んでほしいらしく、院長店長というよくわからない呼び方で慕われているおっさんだ。

「前に一緒に飲んだときはザルだったのに……」

「ウコンの力ってすごいですよね」

「なにっ！？」

「それがなかったらテンカ先生、そんな強くないですよ」

そんな酔っ払い防止アイテム飲んでドーピングしてたのか……じゃ、素だと僕のほうが強いのかな。

「そんな準備を忘れるなんて、よほど悔しいことでもあったんですかねぇ」

カカ達の仲直りに関与できなかったのがそんなに悔しかったのか。

とにかく……ふっ、勝った。この間の飲みでは会話も酒も負けっぱなしだったし、いい気分だ！

「ではトメさん。こうなったらこの人絶対起きないので、背負って送っていってあげてください」

「……え？　家まで持ってくの？　これ」

「特別お持ち帰りメニューでございます。料金はいりません。あ、でもお勘定はよろしくお願いします」

……なんか、やっぱ負けたような気がしてきた。

「どうやら傷心のご様子。輸血、いりますか？」

「いらん！」

## カカの天下２３３「飲んだくれジェラシー」（後書き）

くさい言葉を言った人はからかわれるのが宿命です。
トメ兄ざまぁみろ（マテ
それは冗談ですが、テンカ先生の意外な弱み発覚。お酒の弱い人にはやっぱりウコンですね。

「輸血おかわり」
病院で非常時に言ったら不謹慎すぎてぶっとばされますね。
非常時じゃないのでぶっとばさないでください病院関係者の皆様。

## カカの天下２３４「愛ゆえに起こる殺人」

「はいサエちゃん、あーん」

「あーん、ぱく」

「……甘い」

……こんにちは、サユカです、給食中だからといって別に甘いものを食べているわけじゃありません。

「じゃー次カカちゃんね。あーん」

「あーん♪」

「……甘すぎる」

ちっとも甘くないはずのほうれん草のおひたしを口に入れながら、わたしはげんなりして呟いた。

甘ったるいのは……わたしの友達の雰囲気だ。

「あれ、どったのサユカン」

「そんなに甘いの？　そのほうれんそー」

「……あー、うん。甘いわね。なんか」

君ら見てると。

「でさ。君ら……いくらなんでもくっつきすぎじゃない？」

ここまでの会話からもわかるとおり……カカすけとサエすけはべったり密着しながら給食を食べさせあっているのだ！

朝の登校中からずっとだし！

付き合ってんのか君ら！

「えー、だってさ。私たちは新たな絆に目覚めたんだよ？」

「一度はすれ違ったけどー、お互いの大切さが改めてわかったのー」

「もう私たち二人は一生、一緒なのさ！！」

「カカちゃん！」

「サエちゃん！！」

ざざざ、ざっぱーん！

ひしっと抱き合う二人の背後に荒波日本海が見える。

「……付き合ってられんわ」

「そんなことを言いつつ、隣のクラスにも関わらず私たちの教室で給食を食べているサユカンであった」

「サユカちゃんもくっつきたいのー？」

「トイレ！！」

なんか旗色が悪くなってきたんで一時撤退。

うーん……あの二人、仲直りしたのはいいんだけど。

あそこまでラブラブされたら目の毒というかなんというか……なんか本当に禁断の恋におちて付き合ってるみたいだ。

やれやれ……わたしはため息をつきながらトイレを済ませ、教室へ戻った。

「ぷいー」

「めそめそ……」

あれ？

今の今までベタベタしてた二人が離れてる！？

しかもなんかサエすけはそっぽ向いてるし、カカすけはめそめそ泣いてるし！

「めそめそー！」

口でめそめそ言ってるから嘘くさい泣き方だけどっ。

「な、何があったのっ？」

「サユカーン……サエちゃんに捨てられたー」

破局はやっ！

「うん、ポイしたのー」

ポイとか言うなっ。

「え、なんで？　さっきまであんなに……」

「サユカン……代わりに私をもらって」

「代わりにって……君、さっきサエすけと二人で一生一緒って言ってたじゃないのっ」

「一回死んだことにして！」

「できるかっ」

「じゃー戸籍をいじって社会的に抹殺されたことにして！」

「……カカすけ、難しい言葉知ってるわね」

「こないだ殺人番組でやってた」

テレビって知識の宝庫ね。あと、その物騒な番組は多分殺人事件のサスペンス番組かなんかのことだと思うけど、言い方気をつけようねカカすけ。

「ねーねー、サユカン。新しい人生をあゆもーよ。親御さんは泣い

てるよ？」

わたしゃ殺人事件の犯人かっ。

「……あー！　はいはいわかったわかった」

自分の隣の席をぽんぽん叩くカカすけに従って、隣に座る。

するとさっきサエすけにしていたように、カカすけはべったりくっついてきた。

……まぁ、いいんだけどさ。

「サユカちゃんうれしそー」

「うるさい外野っ！」

「サユカン、私あーんするからカモン」

「マジで？　食べさせるの？　うぅ……や、やればいいんでしょやれば。はい、あーん」

「ぱく」

「サユカちゃんなんだかんだ言ってー」

「だから外野やかましいっ」

「じゃ、次は私の番だね。はい、あーん」

「あーん……ふがっ」

鼻にじゃがいもがホールインワン。

「……カカすけ、離れろっ」

「えぇー！？」

サエすけを見るとその目が「そら見たことかー」と語っていた。
わたしがいない間にこれやったわけね。

「サユカン！　私の愛を受け取ってよ！」

「鼻じゃ受け取れんわ」

「愛って痛いし熱いんだよねー」

深いこと言うなー。

実際は熱々のでっかいじゃがいもを鼻にいれたときのこと言ってるんだけど。

「うぅ……サエちゃんにだけじゃなくてサユカンにも殺されたー！」

「人聞き悪いこと言うなっ！」

「捨てただけだよー」

「殺されて捨てられたー！」

「ハイレベルにしてんじゃないわよっ」

と、給食中に大騒ぎしてたのがまずかったのか、教卓で食べてたテンカ先生が寄ってきた。

「あーっと、おまえらさ、死ぬなら理科の時間にしろよ。実験するから」

「なんの!?」

「あ、家庭科の時間でもいいな。調理実習で」

「食べるのっ!?」

「それが嫌なら死ぬとか殺すとか、そういう言葉は止めろ」

「「「……はーい」」」

「んむ、素直でよろしい。とはいっても子供ってやつは禁止すると反発してやりたがるからな。たまに言うくらいならいいぞ」

「せんせー、それ私たちの目の前で言っていいんですかー?」

「オレは正直が好きだ」

……そういう問題かな。

とにかく、先生の指示によってその場はお開きになったんだけど。

カカすけは家に帰ってから、こんな会話があったそうな。

トメさんと夕飯を食べている最中に、ふと思いついたように言ったんだってさ。

「トメ兄は私を殺したりしないよね」

「ぶっ！！」

「食べたりもしないよね」

「学校で何があった！？」

カカすけ、本当にもうちょっと言い方気をつけようねっ。

## カカの天下２３４「愛ゆえに起こる殺人」（後書き）

カカの夢が期間限定で叶いましたねっ。
ほんと限定だけど。
これで本当に二人は元通りです（笑）

## カカの天下２３５「道徳の授業、野望への道」

「おし、道徳の時間だ。つまり道だ。というわけで、てめーらには将来への道、つまりは夢でも語ってもらおう」

いきなりだなぁテンカ先生。

唐突な課題にクラスメイトと一緒にブーイング中のカカです。

「ここで私から一つだけ言わせてもらおう」

うぉ、どこからともなくデストロイヤー教頭登場。

何を破壊してくのかな。

「少年少女よ、できる限り大志を抱け。大人になれば、どうせそのような夢など破壊されるのだから！」

「ま、現実知る前に大きい夢見とけってことだな」

あの……子供の夢をデストロイしてどうするんスか先生方。

なんかムカつくなぁ。

「では、私はこれで失礼する」

うーん、デストロイヤーとか言われてるけど父兄の方々には「大変な人格者だ」って評判なんだけどなぁ。「大変な人格の人」って意味なのかなぁ。

「じゃ、とりあえず誰でもいいから発表してみ」

「はいっ」

お。私みたいにムカついたのか、ニシカワ君が真っ先に手を上げた。

「僕の夢は、家の西に川をつくって本物の西川になることです！」

地味にでっけー。

「でもよ、西に革でも埋めれば手っ取り早く西革になれるぞ」

「それはニセモノです」

「残念だ」

なんでさ。

「じゃ次……アヤ」

さすがクラス一歌がうまいだけはある……けどこれまたでっかいなぁ。来月デスカ。

「来月あたりにデビューすることです」

「じゃ次……えっと、出席番号３８番」

まだ全員の名前覚えてないのかこの先生。

「カレーは世界を救う」

「それだけ？」

「はい」

「……そ、そうか」

おぉ、珍しくテンカ先生が反応に困ってる。

……発言したのが誰なのか、説明するまでもないよね？

「じゃー今度は、サエ」

「先生、私は手を上げてませんよー？」

「や、でもおまえの夢って気になるから」

「私の夢はですねー、お嫁さんです」

「私がもらー――！」

「どした、カカ」

「あ、や……なんでも」

つい取り乱しちゃった。

「まぁいいや。それでサエ。なんだその普通の答えは」

普通なのが悪いみたいな言い方だなぁ。

「あははー、じゃー世界征服で」

すんごい方向転換だ。

「私の王国作るのー」

「サエの王国ってぇとあれか、民が全員サエと同じようにニコニコして」

「全員サエちゃんと同じように黒いことするんですね」

「オセロみたいな国だな。表は白くて裏は黒……こえぇ」

苦笑いするテンカ先生にニッコリと微笑むサエちゃん。裏で何を考えてるかわからない……そこにしびれる憧れる。

「じゃ次はカカに期待しようか」

「期待とか言わないでください」

しぶしぶ私は立ち上がる。

「私の夢は、私の野望を全部叶えることです」

「……だから、その野望がなんなのか聞いてんだよ」

「野望は野望です。私が生きていく中で思いついたこと全部を叶え

ることが私の夢です」

「ちなみに今思いつく野望は？」

「巨大化したい」

「……カカの野望が一番でっけぇな」

その後もテンカ先生は他のクラスメイトの夢を聞いていった。

そして最後に。

どうせ叶わないからな、と念を押して授業を終えた。

「――って言ってたんだよ、どうせ夢なんか叶わないって！　先生のセリフじゃないよね！」

「たしかにそんなこと言う先生、他にいないだろうな」

「だから皆ムカついてさ、意地でも夢を叶えてやろうって燃えてるの」

「あぁ、それが狙いじゃないのか？」

「……あ」

やるな先生。

まぁ何はともあれ、とりあえずは巨大化だ！

……どうやって？

「トメ兄、大きくなるにはどうすればいい？」

「牛乳でも飲めばいいんじゃないの」

「そっか」

野望叶えるのって結構地味だな。

## カカの天下２３５「道徳の授業、野望への道」（後書き）

夢、大事ですよね。

いくら難しい夢であっても、一度想ったことがあるなら心のどこかに留めておきたいものです。そうして何かしら諦めずにやっていれば、いつか形にできるかもしれませんしね。人生そこそこ長いですし。

さすがにサエちゃん王国創設は無理がありそうですけど、サエちゃん町くらいならなんとかできるかもしれませんし（やっぱ無茶？

このカカ天も何か形になればいいなぁ、なんて思いつつ毎日書いてます（笑）

## カカの天下２３６「家族を洗おう」

「トメ兄、今日は掃除をしよう！」

「どした、急に」

ごちそうさま、トメです。

休日の朝食を終えたところで、カカが突然そんなことを言い出しました。

「学校でさ、テンカ先生が『家は家族みたいなもんだから、たまには掃除しろよ』って言ってたから」

「へぇ、それでか。素直だな」

「や、テンカ先生が『オレはしないけど』って言ってたから。それで私がすれば私の勝ちじゃん」

「なんの勝負してんだか」

「人としてのレベルの勝負」

「カカってたまに変に難しめなこと言うよな」

たしかに掃除してない人よりしてる人のほうがレベルは上な気はする。

「だからやろう！」

「はいはい……ま、最近してなかったからちょうどいいか」

「じゃ、最初は風呂掃除な」

やる気満々のカカを使わない手はない。

とりあえずスポンジと洗剤を持たせてみる。

「りょかい！　ごしごし……ねぇトメ兄。ここってお風呂場だよね」

「そうとしか見えないな」

「お風呂場ってなにするとこ？」

「なんだカカ。ボケたのか」

「ううん、だからツッコまなくていいよ」

「そのボケじゃなくて」

ボケ老人ならぬボケガキになったんじゃないかと心配になったんだが。

「で、なにするとこ？」

「普通に答えていいのか？」

「なんで皆おもしろい答えばっか言おうとするの？」

「おまえが言うな。で、普通に答えると身体洗うとこだな」

「だよねー」

うんうん、納得した風に頷いたカカは、ごしごし擦っていた浴槽をびしっと指差して言った。

「ずっとお風呂場にいるんだから、自分で身体洗いなさい！」

「無茶言うなよ」

なぜか浴槽に対して怒っているカカとお風呂掃除を終わらせ、続いてトイレ掃除にやってきた。

するとカカは目を細め、まるで誰かの肩を叩くかのようにポンポンと便器の端に触れた。

「いつも汚いものを食べてくれて、ありがとう」

「その表現ヤメロ」

「あ、飲み食いか」

「だからヤメレ」

たしかにその表現だとすごく哀れに思えてくるが、愛おしそうに

便器撫でるな。なんか頭オカシイ人みたいだから。

なぜか妙に熱心にトイレ掃除を終えて。

「次は本棚の整理だな」

「まかしときー。ねぇねぇトメ兄。こんなに本が詰まってるんだから、この本棚はさぞかし頭がいいんだろうね」

「なぁ、なんでおまえさっきから家具をなにかと人扱いしてんだ？」

整理するために本棚から本を抜き取りながら、カカは純真な目で言った。

「家って家族なんでしょ。じゃ家具も家族じゃん」

うーん……

いいことを言ってる気もするが……

「あのな、それは家族みたいに家や家具を大切に扱おうってことで」

「うん、だから人権をそんちょーして大切にしてんじゃん」

「人じゃないし」

「人じゃなくても家族なんだよ！！」

あー、うー、なまじいいこと言ってる分タチが悪いなぁ。

「さて、本を全部出し終わったし……む、本を全部出した。ということはこの本棚の頭の中身はスッカラカン。つまり……」

カカは哀しそうに呟いた。

「本棚、バカになっちゃったね」

や、今のカカのほうがバカっぽいぞ。

なんだかんだで本棚の整理を終えたころ。

「やっほー！　元気にしてたか我が愛すべき家族よ！」

相変わらず前触れもなく登場した姉。そして――

「入ってくんな！！」

とび蹴りでソレを即追い出したカカ。

「ナイスだ！！」

おっと、思わず本音が。

「あ、あぶないな！　なにすんのカカちゃん」

追い出したと言ってもしっかり防御はしている姉は、玄関の外か

ら不満げに声をあげた。

「私の家族に妙なもん食べさせないで！！」

家族……？　あ、家か。

妙なもん……？　あ、姉か。

要は家が（いろんな意味で）汚れるから入ってくるなと。

「あ、あのー。あたしも一応あんたらの家族なんだけど」

「家のほうが大事だよ」

「ええっ！？」

「それは同感」

「えええええっ！？」

おっと、思わず本音が。

……なんにせよ、この変な考え方は直しておかないと厄介そうだな。

「ちなみにカカ。僕らは家に食べさせていいのか？」

いまのカカの理屈だと、家にいる＝食べられている、ということになるんだが。

「私たちはおいしいからいいの。姉はまずい」

「それも同感。ちなみに消化されたりはしないのか？」

「家に胃袋なんかあるわけないじゃん」

この妹の頭の中は便利にできてるなぁ。

## カカの天下２３６「家族を洗おう」（後書き）

掃除は大事ですよね！
たまにはしましょう！
え？　私はしているか？

……掃除しようって、言うだけなら簡単ですよねぇ（おい

## カカの天下２３７「誕生日計画の裏側、そのに」

「なによサエすけ、こんなところに連れてきて」

「ちょっとカカちゃん抜きでお話したくてー」

お話されるサユカですっ。

学校のお昼休み、カカすけが先生と喋っている間にわたしたち二人は教室を抜け出し、誰もいない中庭へとやってきました。

「話ってなによ、こんな人気のないところに呼び出して」

「実は……私、サユカちゃんのことがー！」

「そういうボケいいから」

「おうおう、前からおまえのことが気に食わなくてなー！」

「別バージョンもいいからっ」

「一応やっておこうと思ってー」

この子もつくづくカカすけっぽくなってきたなぁ。

「でね、カカちゃんのお誕生日なんだけどー」

「ああ、その話ねっ。シューさんとのプレゼントの打ち合わせは来週だったわよね」

「うんうん。それでね、会場をどこにしたらいいと思うー？」

「どこって、カカすけの家じゃないの？」

「うん、そうしようかと思ってたんだけど……でもそれだとあらかじめ準備しておくってできないでしょー。私たちも学校あるしー」

前フリなしで突然「おめでとう！」って驚かせたい、その気持ちはわかるけど……どれだけ大がかりな準備する気なのサエすけ。

「だから、どこか大きい場所借りれないかなー」

「あのねぇ、知り合いでそんな場所貸してくれる気前のいい人なんて――」

そんな人――いない、こともない。

「心あたり、あるんだねー？」

「う……」

鋭い。

「じゃ、そこお願いねー」

「いやっ、でもっ」

「お願いー」

……お願いされてしまったっ。

そういうわけで、絶対無理とわかってるけど来てしまった。

サカイさんの家へ。

「――と、いうわけなんですけど」

「カカちゃんの誕生日の会場、いいですねー。わたしは全然おっけーですよー」

ほにゃほにゃ笑いながら承諾してくれたサカイさんは、重大な問題に気がついていないらしい。

「あの……でもそうなると、サエすけもこの家にきちゃうってことになるんですけどっ」

「え」

口をぽっかり開けて絶句するサカイさん。やっぱし気づいてなかったか。

「サエが……この家に？」

「はいっ」

ぽっかり口のまま器用に聞き返してくるサカイさんに頷く。

するとサカイさんは次第にわなわなと震えはじめ……

「いやっほおぉい！！」

なんか爆発した！！

「サエが！　サエがわたしの家にー！　いやったー！　どうしましょうどうしましょうどうやってお出迎えしましょう！？　お茶とお菓子と満漢全席と懐石料理と世界の料理フルコースのどれがいいですかねー！？　ああ家も飾らないとっ、とっておきのモアイ像どこにしまったかしらー。あとクラッカーを千個くらい用意しましょうかそれともどこかのパレードを引っ張ってきましょーかー！！」

「ちょ、あのっ！」

「クラッカー千個じゃ足りませんかっ？　爆発が足りませんかー！？　ではいっそ核――」

「そうじゃなくてっ」

そうじゃない……けどこの人いま何を言おうとした！？　ま、まぁいいやっ。

「あのですね……別にサエすけの誕生日ってわけじゃないんですからっ！！」

「だってだってー！　娘がくるんですよー？」

「顔合わせたらダメなんでしょうがっ。どうせそれだけやるならカカすけの誕生祝いでやってくださいっ」

「ヤですねーサユカちゃん。よその子のためにそこまでするわけないじゃないですかー」

ごもっともだけどなんかムカつくなその理屈っ。

「なにはともあれ了解しました！　ふふふー、何着て会おっかなー」

まるで恋人とデートが決まったかのようにうきうきするサカイさん……って！

「会う気ですかっ！？」

「直接顔は合わせませんよー。でも……ふふふ。いい考えがあるんです♪」

……そういえばこの人はサエすけの母親だった。裏で何を考えているかわからない笑顔を見て思い出す。

「うまくやりますから心配しなくても大丈夫ですよー」

この人はバカっぽいけど本物のバカじゃない。あれだけ会えない会えないと悩んでいたのに、憂いもなくここまで喜ぶってことは……ちゃんとした考えがあるんだろう。

「わかりました、ではここをお借りします！　今度サエすけと下見に来ますけど……本当に大丈夫なんですか？」

「大丈夫ですよー。サエはこの家には来たことなかったはずですし、多分」

「……多分？」

「わたし、細かいこと覚えるの苦手でー」

……本当にバカじゃないわよね、この人。

「たーのしみたーのしみルンルンルン♪」

「あの、うるさいです」

「ルンルンルーン！！　あ、下見にくる日付と時間は事前に教えてねー。対処するからー」

「あ、はいっ」

さて、どうなるかなっ。

不安だわっ。

## カカの天下２３７「誕生日計画の裏側、そのに」（後書き）

さて、いよいよ来週ですね、カカの誕生日。
果たして無事に準備をすすめることができるのでしょうか。
そしてサカイさん（の頭）は本当に大丈夫なのでしょうかっ！？
そのさんは近日公開よてーです。

## カカの天下238「カカっぽい店」

「ご注文はお決まりでしょうか？」

「はい、えっと――サバの味噌煮込み定食で」

お決まりになって注文なさいましたトメです。

「カカは何にする？」

「んー」

今日はカカと一緒に珍しく和風なファミレスにきています。

それというのも、今日の食事を済ませるつもりだった近所のセイジ食堂が休みだったからです。

ちなみに入り口に貼ってあった紙には『本日、不機嫌により休業いたします』と書いてありました。うーん、ふりーだむ。

「ほら、カカ。さっさと決めな」

「じゃ、豚のしょうか焼き定食」

しょうか焼き……消火焼き？

「火を消してんのか焼いてんのか、どっちだ」

「じゃあ火をいっぺん消してからまた焼くってことで」

なんだその新しい調理法。

「かしこまりましたー」

「かしこまるの！？」

「料理長、オーダー入ります」

「おぅ、言ってみろバイト」

「サバの味噌煮込み定食と、豚のしょうか焼き定食お願いします」

「……消火焼き？」

「火をつけて、一旦消して、もう一回つけるやり方で焼いてくださいとのことです」

ボッ（火をつける音）、カチ（消す音）、ボッ（またつける音）。

「……これでいいのか」

「きっとお客様も喜びます」

「私は気がついた」

「どんなことに気づいたんだカカ。くだらないことか？　どうでもいいことか？」

「どうでもいいこと」

正直でよろしい。

「この、言葉の点々あるじゃん」

「点々？　ああ、濁点のことか」

『〝』のことだ。

「これをつけたり消したりすることでおもしろいメニューが生まれるんだよ！」

「たとえば？」

「店員さーん」

お、さっき無茶な注文をかしこまった店員だ。

カカはメニューの『豚しゃぶサラダ』を指差しながら言った。

「豚ジャブサラダお願いします」

「ジャブですか」

「強烈なやつをお願いします」

「かしこまりました」

だからなんでかしこまるんだこの店員。

「料理長。追加オーダー、豚ジャブサラダ入ります」

「……ジャブだぁ？」

「はい、豚のジャブ入りました」

「誰が豚とボクシングしてんだ？」

「お客様です」

「……」

「ではお願いします」

「……客も客だが、あのバイトもバイトだな」

「ロースカツに『〝』つけるとローズカツ！」

「バラのカツか。食べてみたい気もするな」

「このブランド豚の一品っていうの、ちょっと変えたらプラント豚

になる！」

「おー、レベル落ちるな」

「このぶたせんべいはふたせんべい！」

「……ふた？　鍋の蓋みたいなせんべいか」

「あじの塩焼きはあしの塩焼き！」

「足の……うぁ。おいしくなさそー。しかも何の足かわからんし」

「お楽しみのところ、失礼します」

おお、さっきのイカした店員だ。

「こちら、豚のしょうか焼き定食でございます」

「……消火、したんですか？」

「はい、お望みどおりに」

この店、変だ。

「では、こちらはサバの味噌煮込み定食でございます」

「あ、はいはい僕」

「おもしろくなくてすいません」

「やかましい」

店というか店員が変だ。

「では、こゆっくりどうぞ」

「こゆっくり？」

「ごゆっくりの『〝』を抜いて、小さくゆっくりということです。では……」

爽やかに去っていく変な店員。

「トメ兄、この店いいね！」

「……ああ、カカ向きだな」

店は変でも定食は美味かった。

## カカの天下238「カカっぽい店」（後書き）

おいしさ、雰囲気。
どこで食べるかお店を選ぶ基準はいろいろありますが……私はおもしろい店員がいるところを選びたいです。

## カカの天下２３９「誕生日計画の裏側、そのさん」

「ここがカカちゃんの誕生日会場？」

「そうよっ」

「へー……」

「ど、どーしたのよサエすけ」

「ん、べつにー」

本当に大丈夫よねっ、って感じで心配なサユカですっ。

今日はカカすけの誕生日会場の下見にきたのですが……その会場というのが何を隠そうサカイさんち。

サエすけにとっては母親の家なのです！

この家はサカイさんの本家の別荘で、サエすけが生まれてからは来たことがなかったはず、とのことですが……サエすけ小首傾げてるけど本当に大丈夫なんでしょうねっ。

なにはともあれ、ドアについているインターホンを鳴らす。

「はい、サケイですが」

聞こえてきたのは……おじいさんの声？　それにしてもサケイって……サエすけにバレないための配慮なのはわかるけど、もうちょ

っとマシな名前があったんじゃないかしら。

「あの、サユカですっ」

「うむ、待っておった。今出迎えにゆくからしばし待たれよ」

「は、はいっ」

だ、誰なのかしらこの人っ。

サカイさん、サエすけにばれないように対処するって言ってたけど……

「待たせたのう」

やがて現れた声の主は、想像どおりのひげもじゃのおじいさんだった。白い髪の毛もモジャモジャで、なんだか物語に出てくる魔法使いみたいな風体だ。

「ようこそ、サユカちゃん。そしてお友達の……サエちゃんかな？」

「あ、はいー。今回は無理を聞いてもらってありがとうございますー」

「おお、おお……なんと礼儀正しい子じゃ。それに可愛らしい」

「いえ、そんなー」

「それに見たところ頭もよさそうじゃ。サユカちゃんという仲のいい友達がいるということはきっと優しいのじゃろう。うむうむ、サ

エちゃんは世界一すばらしい――」

「あ、あの、サケイさんっ！」

「む、おお、すまなかったね。つい」

な、なにがついなの？

それにこの感じ……まさかっ！？

「ごめん、サエすけ。ちょっとサケイさんと話あるからここで待ってて」

「んー？　いいよー」

わたしはダッシュでサケイ老人に近寄って――その首根っこを掴んで爆走。庭に生えている木の影に隠れた。

「あの……サカイさん。その格好はっ？」

「あはー、ばれたー？」

おじいさんの格好、おじいさんの声。でもその喋り方は紛れもなくサエすけの母親、サカイさんのものだった。

「んしょ、っと。ふふ。正体をバラしさえしなければ近づいてもいい、って許可もらったのー」

つけひげを外すとあらフシギ。元のサカイさんの声に戻った。

「そのひげ……」

「このひげね、ボイスチェンジャーなのー。どこかのちびっこ名探偵が使ってるのと同じのだよー」

なんてわかりやすい説明だっ。

「これでわたしはサケイおじいさんに成りすますからー」

「……わかりました。そのまますすめていけばいいんですね」

嬉しそうだわサカイさん。

「ふふふー。久々にサエと喋っちゃったー♪」

「サカイさん、よだれ、よだれがひげにしみこんでるっ」

嬉しすぎるみたいだわーサカイさん。

まぁ、なにはともあれこれで大丈夫かなっ。

「あのー、サケイさん」

「あらあら――じゃなかった。うむ、なんだねサエちゃん」

あぶっ！　サエすけいつのまに背後に？　大丈夫と思った矢先にこれかぁ……ひげチェンジャー外してるときに声かけられなくてよかったわっ。

「このお屋敷、見覚えがあるんですけどー。もしかしてお母さんの

ー」

ぜんっぜんよくないし大丈夫じゃないっ！！

「ごめんサエすけちょおおおおっとサケイさんとお話がっ！！」

「う、うんー」

「ぐほぉあ！？」

わたしはサケイさんの首におもいっきしラリアットをかましてそのまま引きずって――再び適当な木の影に隠れた。

「サエすけ覚えてるじゃないのー！！」

「あれー？」

「あれーじゃない！！」

「てへ♪」

「てへでもない！！」

「ごめんなさい」

「謝られても仕方ないっ！！」

「どうすればいいのー？」

「どうしょうもないっ！！」

ええもうホントどうしょうもないわよ！　ああもうどうしようどうしよう……

「んー」

と、慌てふためいているわたしの肩をぽんぽんと叩いて、サケイ老人は言った。

「大丈夫、見てなさいなー」

ぽかんとするわたしを尻目に、サケイ老人はサエすけに向かって歩いていく。わたしも慌てて後を追う。

母のことが絡んでいるせいか、サエすけの目は緊張している。そんな自分の娘に、サケイ老人は優しく語りかけた。

「あのなぁ、サエちゃん。この家はもともとサカイさんという女性の持ち物じゃった」

「サカイってお母さんの旧姓です！」

「ふむ、そうか。しかしなぁ、その女性は何かあったのか、ある日を境に突然元気をなくしてな、サカイだけに」

「ダジャレはいいです」

「おぉ、すまん。そして元気をなくしたサカイさんは詐欺にあってしまい、その支払いのために急遽この別荘を売り払う必要があったのじゃ。詐欺で作られた借金はなくなったようじゃが、今どこで何

をしておるか、わしにはわからん……」

「そう、ですか……そんなことがー」

よくもまぁペラペラと……

落ち込んだサエすけの肩をぽんぽんと叩くサカイさ――いや、サケイ老人。

一人にしておいてやろう、そんな風にこちらへ近づいてきたサケイ老人はこっそりわたしに耳打ちしてきた。

「ちょろいもんでしょー」

「この大嘘つき!!」

「こういうの得意なのー。えっへん」

「娘を騙しといていばるなっ」

「でもきちんと誤魔化さないと、本家にばれたら二度とお話できないしー」

「うっ……」

それを言われると……そうせざるを得ないこの人が可哀想に――

「泣いてるサエ、可愛い……」

「サカイさん、はなぢ」

可哀想に、なぜかどうしても思えないのよね。ひげを赤くしてるこの人見てると。

……とにかく、このまま下見がうまくいきそうで今度こそよかったわ。

「あの、サケイさん！　母のことを思い出したいので、たまにここに来てもいいですかー？」

「それは困るっ！！」

……本当にうまくいくのかしら。

やっぱ不安だわっ！

おまけ。

「あ、思い出した。サエがここに来たときのことー」

「遅いんですよ思い出すのが！」

「妊娠がわかるまでただの体調不良だと思ってたから、ここに静養にきたのよー」

「……ぇ、妊娠が、わかるまで？」

「つまりー、サエがわたしのお腹の中にいるときにここにきたわけ

ねー」

「ぇ、ええ！？　それでここを覚えてるって……」

「フシギなこともあるもんだねー」

## カカの天下２３９「誕生日計画の裏側、そのさん」（後書き）

ついにサエちゃんと接触したサカイさん！　いろいろ大変そうだけど（はなぢとか）乗り切れるのでしょうか。

まぁサエちゃんの母親＝元祖腹黒ですからうまくやるとは思いますが＾＾；

## カカの天下２４０「買い物一つで運命決まる」

「今日の夕飯はなーにっかな♪」

「何にしようかね」

もうお腹がすいているのか、食べ物がたくさんある商店街を歩くカカは楽しそうです。

そんな元気な妹とは反対に「お腹へった……だるい」と元気のない僕、トメです。

夕飯の買い物にきた僕ら二人、カカはうきうき、僕はダラダラと商店街を散策します。

そんなとき、ふとお魚屋さんの張り紙が目に留まりました。

「お、そろそろブリが旬だな」

「ぶりぶり？」

「続けて言うな」

なんか下品だから。

「今日はブリでいいか？」

「いつでもブリッとするスタンバイはできてるよ」

「だからその表現やめれ」

なんでかトイレが浮かぶじゃないか。

「すいませーん」

たくさんブリが並んでるけど、僕は魚の選別なんかできない。だからいいのを選んでもらおうと、手近なお魚屋さんのおっちゃんに声をかけた。

「あいよっ、なんだいにーちゃん」

「えっと――」

「ブリッと一発ください！」

僕の声を遮ってエライことを言ってくれるカカ。ええかげんにせぇへんとしばくで？

「えっ！？　こ、ここでかい？　いやぁ、大胆なお嬢ちゃんだなぁ……」

「ノらなくていいですから」

なんで恥ずかしそうにお尻押さえてんだおっちゃん。

「はっはっは！　いやな、似たようなことを言った子供がほかにも二人くらいいたもんで、ついなっ」

豪快に笑うおっちゃん。

まさかとは思うけどその二人、最近カカが感染したんじゃないかと疑われてる「サ」がつく二人じゃなかろうな……まさか、ねぇ。

「改めまして、おっちゃん。いいブリくださいな」

「おっちゃん、いいのブリブリしてくださいな」

「カカ、おまえもう黙れ」

「いいじゃねぇかよ！　冗談の一つくらいよ。人が悪いなー、にーちゃん」

「悪いのはこの妹の性格です」

「違うよ、トメ兄の育て方が悪いんだよ」

「んだとぅ」

そんなこと言われたらちょっと本気で凹むだろうが！

「まぁまぁお二方。このブリに免じて仲直りしねぇか？」

む、綺麗な切り身。おいしそうだ。

「照り焼きにでもして食いなよ！」

「照り焼き……ちょっと時間かかるんだよなぁ」

「てりてり！」

「蒲焼でもいけるぜぃ！」

「ほー、ブリの蒲焼はしたことないな」

「かばかば！　ん、ばやばやのほうがいいかな？」

「じゃ、それをもらおうかな」

「毎度！」

「まいまい！」

いちいちブリブリみたいに繰り返すカカ。子供かおまえは。

……あ、そうか。絶賛子供中だった。

「お」

切り身を包んでいた魚屋のおっちゃんが、何を思ったのか店頭に並ぶパックを一つ手に取った。お魚屋さんで一旦作ったブリの照り焼きだ。

そしてそれをカカにも見せるようにして、言った。

「もし照り焼きが食べたかったらよ！　これをチンするだけってのもありだぜ！」

「ちんち――」

「やめんか二人とも！！」

悪ノリする二人に思わずツッコンでしまった。

「おもしろかったからこれおまけなっ！」

楽しそうに笑いながら、切り身と一緒にブリの照り焼きを袋にいれてくれるおっちゃん。カカもたまには役に立つ。

「じゃーね、ブリブリおじさん！！」

「ぶっ！？　あの、お嬢ちゃん？　さすがにそのあだ名は――」

無駄にでっかい声で叫びながら手をふるカカに、さすがのおっちゃんも大慌てだ。

すまないおっちゃん。あんたはこれからずっとブリブリおじさんだ。

「――あらカカちゃん。今日はうちで買っていってくれないの？」

そう、先日レモンを買ったときに名付けられた、この果物屋のおねーさんのように……

「あ、どうもモンモンおねーさん」

「ね、ねぇカカちゃん。いい加減そのあだ名はやめてくれないかしら？」

「や」

商店街に妙なあだ名が増えていく……

ま、いいや。僕のせいじゃないし。

## カカの天下２４０「買い物一つで運命決まる」（後書き）

今回はちょーっと下品な話でしたが＾＾；
昨日、ブリを食べたんで書いてみました（笑）
これ読んでブリ食べる気を失くす人出たら……お魚屋さんごめんなさい！！
ごめんなさいブリブリおじさん！！

## カカの天下２４１「誕生日計画の裏側、そのよん」

「カカちゃん、心理テストしよー」

「しなさいっ」

「なに、急に」

しますさせますサユカですっ。

ただいまお昼休みに突入したところ。わたしとサエすけはそれっぽいノートを持って、カカすけの心理に迫ります。

「いいからいいからやってみよー。最近流行ってるやつなんだよー」

「ん、いいけど」

「じゃーまず第一問。次のうち、好きなのはどれ？　一・大きいお肉。二・ケーキ。三・せんべい」

なかなかバラバラな食べものが並んでいる。

「せんべい」

「えっ！？」

「……えー」

わたしとサエすけは二人して微妙な表情になる。

それも当然のこと。これは心理テストなんかじゃない。迫るカカすけ誕生日計画をどういう風にするか、詳細を決めるための質問だったのだ！

「なんで不満そうなの」

「で、でもー。ケーキも好きだよね？」

「嫌いじゃないけど、せんべいのほうが好き」

「うーん……」

「なんで二人して頭抱えるの」

ごちそうでも誕生日ケーキでもなくて……誕生日せんべいかぁ…でもどうせならカカすけの好きなもの用意したいしなぁ……

「いいや。次いこー。第二問。次のうち、乗るならどれ？　一・ベンツ。二・フェラーリ。三・おみこし」

「おみこし」

即答！？

「つ、次。第三問。どの物語が好き？　一・お姫様の物語。二・お嬢様の物語」

「その二つってどう違うの？」

お姫様扱いするかお嬢様扱いするかの違いだけど……そう言うわけにもいかない。

「んー、お姫様がドレス着てて、お嬢様が着物を着てる感じかなー」

お嬢様＝着物っていうのはちょっと無理がある気もするけど、他にいい言葉が浮かばなかったんだから仕方ないわ。

「あれ、今度は二択？」

「……もう一つあるよー。三・ハロウィンの物語」

「断然ハロウィン」

わたしとサエすけは二人して「あちゃー」と頭を抱える。

「……サユカちゃん。お姉さんすごいね」

「伊達に血は繋がってないわね」

カカすけに聞こえないようにコソコソと囁きあう。

実は昨日この心理テストもどきを考えているとき、どこからともなくカカすけのお姉さんが現れて「この質問にこの選択肢を入れとくといいよ！」と助言してくれたのだ。

それがまさか、全部カカすけの好みにはまるなんて……わたしとサエすけで考えていたプランが水の泡なんだけど……

「もう終わり？」

「あ、ごめん。もう一つあるー」

あれっ、まだあるの？

わたし聞いてないわよっ。

「第四問、わたしとサユカちゃん、なんとなく選ぶならどっち？」

なにそれっ！？

「流行ってる心理テストのわりには限定された質問だね」

「仲のいい友達の名前を二つ、って書いてあるの」

……かわしかたうまいなー。

「それで、どっちー？」

「じゃ、あえてサユカンで」

「あえてってどういう意味っ！？」

「気にしない気にしない」

ううん、気になる……あっ、サエすけが何を企んでるか気になってるだけだからねっ！？

別にカカすけがわたしよりサエすけのほうが大事なんじゃないかとか、そういうことは心配してないんだから！

「心理テストおわりー」

「結構短いね。で、結果は？」

「えっとね、カカちゃんは……もしも心に思っていることがあっても、それをあえて言わないほうが吉」

「ほぉ」

「余計なことを言うと幸せを逃してしまうでしょう、だって」

「へー。つまり私は喋るなと」

「いやっ、そういうことじゃなくてっ」

「だって思ったこと言えないんでしょ」

ああもう、つくづく極端な子っ。

「心の奥にある、自分にとって大事なことは言わないほうがいいって意味だよー」

「あー、なる」

……そしてサエすけは言い方うまいわねー。さすがお腹まっくろ。

「サユカちゃん、何か思ったー？」

「べつにっ！」

なにはともあれっ！

カカすけの誕生日方針は決まったわねっ。

せんべい、おみこし、ハロウィン、わたしよっ！

……なにこれっ。

「さー、忙しくなるねー」

「……そなの？」

それすらわからないんだけどっ！

## カカの天下２４１「誕生日計画の裏側、そのよん」（後書き）

さて、誕生日まであと二日です。
はたしてどのようになるのかっ！
カカの奇天烈な要望に、はたして二人は応えることができるのかっ！

そして、買い物シーンでシュー君の出番があったりとかはしないのか！？　日がないから多分しないね（鬼

というのは冗談で……サケイさんの助力によってカカの誕生日計画が方向転換したのですよ。ただプレゼントを買って祝うだけのつもりが、大きな会場が手に入ったことによって……まぁいろいろと（笑

あと二日。お楽しみにっ！
まだ書いてないので私も楽しみですっ（笑

# カカの天下２４２「誕生日計画、発動前夜」

「……はぁ」

こんちわ、ゆーうつなカカです。

それというのもね、聞いてくださいよ。

明日は私の誕生日なのにね、誰も覚えてくれてないみたいなのですよ。

しくしく……

「明日どっかいこう」とか誘おうと思ったのに、サエちゃんもサユカンも休み時間はすぐどっか行くし、帰りはさっさと帰っちゃうしで結局誘えず……

めそめそ……

こーなったらせめてカレーの人にだけでも祝ってもらおうと『明日誕生日なんだー』とかメール送ろうかとも思ったんだけど……考えてみれば学校の連絡網とかにも生徒の誕生日が載ってたりするから、それを機会に私の正体がバレる危険がある……

うーうー。

あ、これは不満な音ね。うーうー。

「はぁ……これでトメ兄が覚えてなかったらグレるぞ」

……あ、でもそういえば前にサエちゃんにしてもらった心理テストで「心の奥に思っていることは口に出さないほうがいい」って言われたんだっけ。

これって心理テストじゃなくて占いの結果みたいだなぁ。

ま、いいや。ともかく、タダでさえ親友二人が覚えてくれてなくてガッカリ中なのに、これ以上イヤなことになってほしくない。

でも誰も祝ってくれないのはいやだ！

まるで私いらない子みたいだし！

……言わなきゃ、いいんだよね。

「ただいまー」

よし、帰ってきた。

トメ兄は帰ってくると、まず玄関に設置されているホワイトボードに目を通す。

「……なんだこれ」

さぁ、私からのメッセージを受け取るがいい！

ちなみに私が書いたのは……まず、タマゴの絵。その横に殻が割

れて生まれた赤ん坊の絵。

「ん、と……桃から生まれたももたろー、か？」

桃じゃない！　上のタマゴの殻は上の部分がとんがってないでしょ！

「ん、これもしかしてタマゴか」

気づくの遅い。

「バカだなあいつ。人間ってタマゴから生まれないのに」

……そなの？　じゃ、どうやって生まれるのさ。

今度聞いてみよう。

「で、その横には……」

その横にはでっかく『日』と書いた！

『生まれた日』という私のメッセージを受け取れ、トメ兄！

「――ああ、タマゴの特売日か！」

「ちっがぁう！！」

「お、カカいたのか。ただいま」

思わず飛び出してしまった。

「それ！」

「それって、このホワイトボードか？」

「それ、明日なの！」

「そっか。タマゴの特売日は明日なんだな」

「特売日から離れろこの主夫！！」

「誰が主夫か！！」

ああもう、たんじょうび、って言葉を伝えるのにはどうすれば……

「カカ、さんじょう！！」

「さっきから参上してるだろ」

「セイジ食堂の様子はどうだった？」

「はんじょうしてたぞ」

「私の上にあるのは！？」

「てんじょう」

「そんな感じの日だよ！」

「どんな感じだよ」

ここまで『たんじょう』に近いヒントを出してもまだわからないかっ。

「ねえ、明日――」

「明日がどうかしたのか？」

やっぱ覚えてないみたい……でも直接言うわけには……

「あ、明日、明日は、その」

「だから明日がどうしたんだよ」

明日は私が生まれた日なんだよ！

「明日はオンギャー！！　わかった！？」

「なにをわかれと！？」

「うぅ……オンギャー！！」

私はヤケになって赤ん坊のように叫んでから自室に引きこもった。

うぅ……グレてやる……

こうなったら意地だ。

明日誰か祝ってくれるまで、絶対誰にも誕生日だって言わないんだからね。

それで誰も祝ってくれなかったらグレてやるもんね！
お酒もたばこも飲んでやるんだから！！

「あー、もしもしサエちゃん？　こっちは明日まで大丈夫そうだよ」
「さすがはトメお兄さん。ずっと一緒にいるお兄さんが一番バラしてしまう可能性がありますからね、心配してたんですよー」
「サエちゃん、うまく吹き込んだみたいだな。カカのやつ、あの様子だと意地でも自分から誕生日だなんて言わないぞ」
「ふふふー、いえいえそれほどでも。ではトメお兄さんはそのままとぼけ続けてください。私もサユカちゃんも準備、頑張りますのでー」
「まだサカ――じゃなくてサケイさんのとこにいるのか？」
「今夜は徹夜になりそうなのでー」
「……わかった。カカを寝かせたら僕もそっち行って手伝うよ。子供が徹夜なんかしちゃダメだからな」
「ありがとうございますー。お言葉に甘えてお待ちしてます、ではまたー」
「ふぅ……カカは幸せものだな。しっかし、あのサケイってじーさ

ん誰なんだろ。サカイさんどこ行ったのかな」

「ほれシュー！　ぼやっとしてないで手と肩を動かせ」

「はい、お姉様！　ふふふ……あのプレゼント、カカちゃん喜んでくれるかな」

「なんか言った？」

「いいえ、なにも！」

「何か隠してる？」

「い、いいえ……」

「あたしに隠し事すると、握りつぶすよ？」

「どこを！？　いえその、カカちゃんに飛びっきりの誕生日プレゼントを買わせていただいた次第で……」

「へぇ、やるじゃん！　皆いろいろやってるのねぇ。あたしもコレ、頑張らないとね！」

「弱いな僕……でもほめられたからいいや、っとぁあぁぁ」

「本番は明日だっ、まだまだ練習するよー！」

「ぺたぺたぺったんぺったんこ。はぁ……これって地味な仕事だわー。じゃなくて地味じゃー、か。おじいさんの真似忘れないようにしないと……娘の頼みだし……娘の……娘のっ！　よっし、やる気出てきた！　ぺたぺたぺったんぺったんこ～♪　娘の胸も～ペッタンコ～♪」

「……サエ君、これでいいのか」

「おー、タケダ君うまーい」

「へぇ、タケダやるじゃんっ」

「ふっ……母上の手伝いでこういうことは結構しているからな」

「男らしくないことはうまいんだねー」

「うぐっ、サエ君！　カカ君を祝うために力を貸してと、君に頼まれたから俺はわざわざ――」

「サエすけっ、無駄口叩いてないでさっさとこれ仕上げるわよっ」

「うんー、グー」

「言ったそばから寝るなっ！」

「う、うんごめん……」

「まったくもう……スー」

「グー」

「こらサエ君サユカ君、二人とも寝るんじゃない！！」

「やかましいっ」

「タケダ君のくせにー」

「なっ、君らっ」

「ほい、助っ人登場。続きやっとくからおまえら寝ろ」

「トメさん！」

「じゃお願いしまグー」

「寝るのはやっ」

不貞腐れて眠るカカも含め、思うことはただ一つ。

――明日がいい日になりますように。

## カカの天下２４２「誕生日計画、発動前夜」（後書き）

いよいよ明日ですね。
さてさて、どうなることやら……

ちなみにたばこを飲んだら死にますので、くれぐれもやらないように。

## カカの天下２４３「魔法の誕生日」

「おはよう、カカ」

「……テンカせんふぇ？」

おはようございまふ、カカでふ……

なぜにテンカ先生が私の部屋に？

「実はな、今日は家庭訪問、というか家庭教師にきた」

「……ふぇ？　なんで」

「てめーがいっつもテストに変なこと書いてて実際の学力がわからないからだよ！　いいから顔洗ってこい！」

「あ、あと五分」

「おぅ、あと五分で顔洗って飯食ってこい！」

「あぅ……」

早くしろー、とパシパシ叩いてくるテンカ先生に急き立てられ、寝起きで重い頭を抱えながら身体を起こす。

せっかくの土曜日なのに、せっかくの誕生日なのに……ため息をつきながら部屋を出るとき、ふと振り返ってテンカ先生に聞いてみた。

「テンカ先生。今日って何の日か知ってる？」

「ああ、カカの――」

お！

「厄日だ」

「……えー」

「いいから早くいけ」

「しくしく……トメ兄は？」

「仕事だ」

『ご町内のみなさま、本日は――』

「朝っぱらからうるさいなぁ。なんだろアレ」

「ほれ、余計なこと気にしないで手を動かす」

選挙活動でもあるのかな、と窓の外を気にしつつ、言われたとおり手を動かす。

はぁ、めんどい。なんで誕生日にテストなんかしなきゃなんないんだろ。

「……はい、終わったよ。国語のテスト」

「まだ時間はある。見直したりしてな」

「むー……これいつまで続くの？」

「全教科やるから、夕方までかな」

「えええええ」

「文句言うならまともにテスト書けばいいんだよ」

「まともじゃないほうが先生喜ぶじゃん」

「それはそれだ」

――そんなこんなで、テストが終わるころには外はもう真っ暗になっていた。最近は暗くなるの早いなぁ。

「なんだ、変なことばっかしてるわりにはいい点とるじゃん」

「一応授業は聞いてますから」

「ん、えらいえらい。ところでカカ」

「なんですかー？」

ひたすらだるそうに返事をする私。誕生日に一日中テスト、という拷問で私の心は荒みきっている。

……グレてやるか。酒飲むか。たばこ飲むか。

「トリック・オア・トリートって知ってるか？」

「ハロウィンのときに子供が言う言葉ですよね」

懐かしいな……私も去年言ってたっけ。かぼちゃ被ってお隣さんに包丁片手に押し入って……あれ。これもしかして犯罪？

ま、いいや。時効時効。お隣さんの家はもう燃えてなくなっちゃったから謝りようないし。

「それがどうかしたんですか？」

「カカ。トリック・オア・トリート？」

「へ？」

「お菓子をくれなきゃイタズラするぞ、って意味じゃなくて。『イタズラ』と『お菓子』のどっちが好きかっていう問いだったら、どっちがいい？」

「どっちも」

「そう答えると思った。ほれ」

「ほぇ？」

ばさっと音がしたと思ったら――視界が真っ暗に。なんか布を被

された？

「ここで授業だ。イタズラとは何か。人を騙すこと、からかうこと。この辺が正しい意味だな」

被された布はもぞもぞと私の身体に纏わりついてくる……これはテンカ先生の手？

「ぷはっ」

ようやく顔を出せた、と思ったらぼすっ、と頭に軽い衝撃。これ……帽子？

「そしてイタズラをするにあたって大事なこと。それは標的をできる限り驚かすことだ！」

パパパパパン！　と連続した騒がしい音と舞うリボン……これ、クラッカー！？

「ハッピーバースディ、魔女殿」

「は、ハッピーバースディ！」

私の両脇にいつのまにかひざまづいていたのは……放ったクラッカーを両手一杯に持ったかぼちゃ人間！？

「さてさて魔女殿！　今宵は少しばかり早いハロウィンと洒落込もうではありませんか！」

「そ、その声、お姉？」

かぼちゃの仮面の中からくぐもって聞こえるノリノリな声は間違いない。じゃあもう一人の頼りなさそうなカボチャは、シュー君？

「お姉など知らぬ！　我が名はカボチャ！　でっかくて煮物にするとおいしくて目にいい、魔女のしもべ！」

「な、なんだかわかんないけど楽しそうだねお姉……それにさっきから魔女ってなんのこと――」

「ほれ」

テンカ先生が向けてくれた鏡に映ってるのは――魔女っぽい衣装に身をつつんだ私！？　真っ黒なローブに大きな帽子、それに手作りっぽいビーズや飾りがきらきら光ってて、まるで本当の魔女みたい！

「嫌なことの後に嬉しいことあるといいもんだろ。誕生日おめでとう、カカ」

私の呆然とした顔を見て『イタズラ』成功ととったのか、テンカ先生は改心の笑みを浮かべている……

「て、テンカ先生……知っててくれ――うぉあ！？」

ちょっと熱くなった胸のうちを語ろうかと思ったそのとき、私の身体がカボチャに持ち上げられた！

「ごちゃごちゃうるさい！　暗くなるまで待ってるうちに練習しすぎて疲れてんだあたしは！」

「ちょ、なにすんの！？」

「いってらっしゃーい。オレもあとで『お菓子』のほう食べにいくからなー」

「え、なに、うあ！」

カボチャは私の身体を担いだまま窓の外へ飛び出した。ちょっと、何この乱暴な扱い！　あんたしもべじゃなかったの！？

勢いよく走る姉カボチャに揺さぶられて文句も言えないまま、たどり着いたのは玄関前。そしてそこに鎮座している――おみこし！？

「な、なにこれ」

「神社にあるのかっぱらってきた」

「捕まるよ！？」

「こっちには警官がいるんだ。全然問題なし」

「あ、あはは」

この頼りなく笑う相棒カボチャを警官扱いしていいのかなぁ……

「しかもなんかごちゃごちゃに飾りつけしてあるし」

「おみこしハロウィンバージョンよ！　さー乗った乗った！」

「え、乗るって――放り投げるな！！」

「魔女は飛ぶもんだろ」

「飛ばされるもんじゃないでしょ！！」

文句を言いつつ着地したのは、おみこしの天井の上。そこには座席とクッションが設けられてたからうまく着地できたけど……ここまで改造しちゃっていいのこれ！？

「さー、いくよ！」

「お姉様、黒猫忘れてます」

「あ、そだそだ。魔女には黒猫だよねー。ほい」

ぽん、と私の膝の上に置かれたのは、黒いネコミミつけたタマ！？

「おめえとにゃー、カカ」

おめでと？　にゃ？　かわいいなコンチクショウ！

「今度こそ行くよ！　せーの！」

「うおぁっと！？」

カボチャ二人の手によって、私が乗るおみこしが担ぎ上げられる！　前に姉カボチャ、後ろにシューカボチャ。

「ハッピ～ハロウィン♪」

「ハッピ～バ～スディ♪」

歌いながら軽快に出発して、ゆらゆら揺れながら歩くカボチャみこし……って！

「ちょとカボチャ！　こんな格好でこんなおみこしでこんなバカで外を出歩いたら――」

「おー、きたきた！」

「カカちゃーん、おめでとー！」

「おめでとうだ、いつかの客よ」

「誰だか知らんがおめでとー！」

……はい？　ナンデスカこれ。

なんでご近所の皆様が外に出てるの？

しかもなんで私を祝ってくれてるの！？

「ね、ねえカボチャ！　これどゆこと！？」

「あー、朝のうちに『こんなんやるから祝ってやってねー』って挨拶回りしといたんスよ魔女様」

朝聞こえた『ご町内の皆様――』ってそれか！？

「ほらほら、主賓が呆然としてたらつまんないよ。手でも振ってあげな、魔女様」

「あ、あはは、どもー」

「カカちゃんおめでと～ららら～♪」

あ、アヤちゃんだ。なんか歌ってくれてる。

「ククちゃんだっけか。おめでとー」

ありがとー知らないおじさん。でも名前違うよそれだと８１だよ。

「いつも読んでるぞー！！」

……この声援はよくわからない。

手をぶんぶん振りまくっていい気分になってきたところで、大きな屋敷の前へとたどり着いた。見慣れたそこはサカイさんち！

門をくぐってしばらくすると玄関が見えてきて――あれ、玄関は見慣れない感じになってる。なんか赤と黒でおどろおどろしい装飾が……

「終点です、終点です、お忘れ物の無きよう、お気をつけくださいませ」

「忘れ物って、私何も持ってないし」

まったくもう、と地面に降ろされたおみこしから下りる。

「カカ！　みゃー！」

「あ、タマちゃん忘れた！」

「だから言ったのに。相棒忘れちゃだめよん」

得意げに笑う姉カボチャ、なんかムカつく。けどおみこし楽しかったから許したげる。途中でやってくれた『加速装置！！』とか『急旋回！』とか『宙返り！！』とかおもしろかったし。

「パーティ会場へようこそー♪　ひゅーどろどろどろ」

「サエちゃん！！」

出迎えてくれたのは白装束に三角布、幽霊みたいな衣装に身を包んだサエちゃんだった。長い黒髪もマッチしてるんだけど……ニコニコ笑顔が眩しすぎてちっとも怖くない。というかこれはこれで可愛い！！

「誕生日おめでと～、どろどろ～」

「あ、ありがとうサエちゃん！」

「……おめでとっ！」

「あ、サユカン、ありが――」

不意に現れたサユカンの姿をみて、思わず言葉に詰まる。

「な、なによっ」

黒いマントにタキシード、口に牙を生やしたドラキュラスタイル！

「似合う……」

「やかましい！　うがーっ！！」

「わー、血を吸われるー！」

「すあれる～」

タマちゃんも交えてきゃいきゃい遊んでいると、サカイさんちの玄関が開いた。

そこから現れたのは、おじいさん？　の、格好をした……

「なにしてんの、サカ――」

「ごほん！！　ようこそ魔女君！！」

あれ？　声はおじいさんだ。でもあれどう見ても……

「君を歓迎しよう！　着いてきたまえ」

「サユカン、あの人」

「いいからいいからっ、いこっ」

なんで慌ててるんだろサユカン。ま、いいか。

「さて、パーティ会場へ行く前に歓待室へ行こう。まずはそこでゆっくりするといい」

「かんたいしつ？」

「カカ魔女ちゃんのために用意した部屋だよー」

「なぜかわたしは入らせてもらえなかったのよねー」

サユカンが不満そうにぼやく。

でもその部屋を見ると……なるほど、これはサユカンを入れるわけにはいかないな。

「な、な、なにこれ！？　部屋中に……」

そう、部屋中に貼られまくっているのは、なんといろんなアングルから撮られたサユカンの写真だったのだ！！

「こんな写真、いつのまにっ！？」

「タケダ君に盗撮させたのー」

「す、ストーカーの部屋みたい」

「それをイメージしたんだよー」

「なぜに犯罪者の部屋をイメージするのかっ！？」

激昂する吸血鬼サユカンに、幽霊サエちゃんはのほほんと答える。

「えー、だって私たち『ずっといっしょ』っていつも言ってるでしょー。ストーカーと同じだよ」

「同じにすんな！」

さすが幽霊、サユカンの怒りが通り抜けて伝わってない。

「とにかくっ、こんな部屋じゃくつろげないでしょ！　さっさと食堂行くわよ！」

「え、もう行くのかの、せっかく頑張って貼ったのじゃが……」

「行くのっ！！」

「むぅ……」

「魔女様、こちらが部屋に貼られている写真の集大成でございます」

差し出される分厚いアルバム。サユカちゃん写真集って書いてある。

「苦しゅうない、よくやった」

「ほめていただき、ありがたき幸せー」

「……そこ、なにしてるのっ？」

「や、別に」

「なんでもー」

あとで見よう。

そして連れていかれたのは、色紙で作られたリボンや人の顔のようにくりぬかれたカボチャなどで妖しく飾られた食堂。

そこに待っていたのは――

「トメ兄、おっとこまえ！！」

「うっさい」

恥ずかしそうに俯くミイラ男トメ兄。

「こんな手抜き衣装より、それを見ろよ」

「それって――うわぁ」

トメ兄が指差したテーブルの上には……ケーキっぽいものが宝物のように光っていた。

や、ほんとにスポットライト当てられてる！？

近づいてそれをまじまじと見てみる。

「これ。私たちの色？」

そのケーキっぽいものは、私とサエちゃんとサユカンのイメージ

カラーに染まっていた。

説明すると、上からみた円を三等分して、それぞれが苺ソースの赤、チョコソースの黒、桃ソースのピンク色に染められている感じ。

「すごいでしょっ、これね、トメさんとシュ――」

「トメお兄さんが、用意してくれたんだよー」

「……や、僕が出したお金は半分も」

「いい仕事するよねー、トメお兄さん」

「トメ兄……ありがとう!!」

「え、や、まぁ……き、気にするな」

「あくまでシューさんの名前出さないのね」

「サユカンなんか言った?」

「へっ、いやっ、べつに」

「でもこれ。ケーキじゃなくて……せんべいじゃん! 無理やりろうそく刺してるけど」

「だってカカちゃんがせんべいのほうがいいって言うからー」

「バースディせんべいよ! 作ってくれるところ探すの大変だったらしいわよっ」

「そ、そっか……ありがとう。でもこのせんべい、トメ兄がいないね」

「む、そういえばそうだな。でもほら、僕はイメージカラーとかないし」

「いえいえ、トメお兄さんもいますよー。ほら、これ」

「……ろうそく？」

「刺さってる感じがツッコミっぽいじゃないですかー」

「……おいおい」

「失礼する！　その、か、カカ君！　おめでとう」

「誰だっけ」

「がーん！！　俺だよタケダだよ」

「あー、そういえばそんな名前だっけ。あれ、タケダ君だけ普通の格好だね」

「格好わるいねー」

「君らの衣装を手伝わされてばかりで時間がなくなっ――！！」

「さて！」

パン！　と手を叩いたトメ兄に、歓談していたみんなが注目する。

みんな？

そう、みんなだ。

気がつかないうちに、私の大切な人達が皆、この食堂に集まってる。

「今宵は少し早いハロウィンでございます。そして我らが魔女の誕生日！　さてさて、早速ですがバースディケー……じゃなくてバースディせんべいのろうそくに火をつけたいと思います」

「よーし、トメ兄を燃やしちゃえ！」

「ちょっと待て僕のイメージがろうそくと決まったわけじゃ――ってこら姉カボチャ本物の僕に火をつけるな！」

ミイラ男だけに燃やせるとこいっぱいあるからね。

「……はい、つきました！　さぁ魔女殿！　魔法で火を吹き消すのです！」

「トメ兄さ、言ってて恥ずかしくない？」

「うっさい！　サエちゃんが書いた台本にそう書いてあるんだよ！」

……サエちゃんの？

そっか。

考えてみればすぐわかること。

驚きと嬉しさで、わかるまで時間がかかったけど。

この飾りつけも、みんなの衣装も。

このハロウィン自体が、全部手作り。

これが、きっと――

「ふーっ！」

「カカ、誕生日おめでとう！！」

「「「おめでとー！！」」」

「さてさて！　つきましては、このパーティの主役、魔女様から一言いただきたいと思います」

「魔女って私、だよね？」

「そうです！　いっつもいっつも魔女のように周りをめちゃくちゃにして」

「魔女みたいにおもしろくてー」

「魔女みたいに可愛い、君よっ！」

「……ふっふっふ、それじゃ魔女らしいこと言ってやる！　しもべ

たちよ、命令だ！！」

魔女らしくバサッとローブを翻し、気取って帽子を投げ捨てて。

私は目一杯の笑顔で叫んだ。

「全員、私に抱きつけ！！！」

一瞬の静寂、それはすぐに騒がしくなる。

寄ってたかってもみくちゃにされる中で、私は思う。

嬉しすぎて熱いくらいの胸を押さえて。

「さぁ、トメ兄を捨ててせんべい食べるよ！！」

「だから本当に僕を捨てようとするなって！！」

今宵はハロウィン。

イタズラとお菓子と、魔法の夜。

そう、これこそがきっと――本当の魔法。

笑顔の、魔法。

みんな……ありがとうっ。

これからもっと魔女っぽくなるから、よろしくね！

## カカの天下２４３「魔法の誕生日」（後書き）

カカ、とても長い誕生日おめでとう！
そう、いつものよりかなり長かった！
前のカカラジ並に長かったですね（笑
やー、伏線作りすぎましたかね。でもおかげで作者的には満足いく出来になったと思います。

読者様はいかがでしたでしょうか？
例によって読んでるほうがちょと恥ずかしいような場所もありますが……作者はそんなん大好きなんでご勘弁！

カカ、本当におめでとう。これからもおもしろ魔女でよろしく＾＾

ではでは、また明日！

## カカの天下２４４「魔法から覚め…るまであと五分だけ…」

「ふぁ……」

昨日大騒ぎしすぎたかな……ねむ……だる……カカです。

ぼんやりしたまま身体を起こし、周囲を見渡しました。

でっかい部屋、敷かれまくった布団、そしてそこに雑魚寝する皆……そか、昨日あのまんま全員ここに泊まったんだっけ。

ぽふ、と再び柔らかい枕とお布団に倒れこむ。

昨日は楽しかったぁ……

どうせ今日は日曜日だし、昨日の余韻に浸っていてもいいよね。

昨日……どんなことがあったんだっけ。

「そうそう……むにゃ……何等分かに切ったせんべいを、食べた後――」

「チョコせんべいって意外といけるね」

「いけぅー！」

姉とタマちゃんはまるで本当の母娘のように、仲良くサエちゃん

味のせんべいを食べていた。私も食べてるサエちゃん味……おいし。サエちゃんだもん。

「こ、こらタマちゃん。チョコの部分ばっか食べないの！」

「シューはケチだね」

「けちー！」

「お、お姉様も言ってやってください――ってお姉様もしてるしっ！？」

「ん、このチョコだけ舐めた後のふやけたせんべいがまたイケるのよ」

「お行儀が悪い……ですけど、まぁお姉様がそういうなら……」

「ふやけてるー」

「……なんで僕のほうを見ながら言うんだい、タマちゃん」

シュー君のことをふやけたヤツだと言ってるんじゃないかな。

「んー、桃ソースかかったせんべいは、いまいちだなぁ」

「うぅ……トメさんにまずいって言われたっ」

「なんでサユカちゃんが落ち込むのん」

だってそれサユカン味だし。

「あむ……カカちゃんの先っちょ、おいしい」

や、たしかにサエちゃん、私味のせんべいの先っちょ食べてるけど……なんでかその言い方ドキドキするなぁ。なんでかわからないけど。

「あ、あの、サエ君、僕にもカカ君を食べさせて」

「言い方がなんかヤだからヤ」

そうだそうだ、出直して来いタケダとかいうヤツ。

「そうそう、魔女カカちゃん」

「ん、なに幽霊サエちゃん」

「今日はカカちゃんが魔女で、皆の主なんだよー。だからしもべに命令とかしてみたらー？」

「ほほぅ」

あれ、なんか皆固まった。

なんで皆サエちゃんのことを「余計なこと言いやがって」みたいに睨むんだろう。

「そだね、せっかく皆おもしろい衣装着てるんだし。それにを活かさないとおもしろくないよね」

「や、僕は着てるだけで充分おもしろいと思うんだけど」
「俺はおもしろい衣装着てないぞ！」
「タケダ君は一般人役でしょー。一人だけ普通の格好してるんだからー」
「なにをっ！　ほら、あそこのテンカ先生だって普通の格好してるじゃないか！」
タケダ君が指さす先には、せんべいの他に用意された料理をマイペースにむしゃむしゃ食べているテンカ先生の姿が。
話を振られたことに気づき、こちらを向いたテンカ先生の格好は、確かに一見普通の格好に見える、が――
「むぐむぐ、っくん。オレだってしてるぞ仮装。ほれ、頭にネジついてるじゃん」
持ってるフォークで自分の即頭部にちょこんとついているネジを指す。
「これでオレもフランケンなシュタインだぞ」
「ネジひっつけただけでしょが！　フランケンさん怒りますよ！」
「怒られてから謝る、それが学校クオリティ」
「それ、どっちかというと生徒がすることだぞ。テン」

しーらね、と我関せずに再び食べ続けるテンカ先生……よほどお腹減ってたのかな。

「なにはともあれ！　魔女の命令を発表します！」

放っておいたらいつまでも雑談しそうなので、流れを切って大声をあげた！

「吸血鬼サユカンが！」

「わ、わたしっ！？」

「ミイラ男トメ兄に！」

「僕か……なんか王様ゲームみたいなノリだな」

「襲いかかって血を吸う！　吸う場所は吸血鬼におまかせ！」

「ぇ、ぇ、えええええええ！？」

「ちょっと待て！！　吸血鬼が血を吸うのはわかるが、なんで相手がミイラ男なんだ！？」

「その包帯がなんのためにあると思ってるの？」

「どんだけ出血する予定なんだ僕は！？」

「ぷしゅー」

よからぬ展開に慌てるトメ兄と違い、顔を真っ赤にして機能停止

するサユカン。吸うところを想像でもしたのかしらん。

「ふふふー、さすがカカちゃん。この配役の意味を一目で見抜くとはー」

「計算済みなのかこれっ!?」

「カボチャーズ、二人を無理やりにでも血をチュッチュさせるのだ!」

「イエス、ボス!!」

魔女の命令は絶対! シューカボチャはサユカンを、姉カボチャはトメ兄を抑えにかかる。

しかし――

「おりゃ」

「なっ、あのお姉様の羽交い絞めから抜け出した!?」

驚愕するシューカボチャ、悔しそうに顔を歪める姉カボチャに……不敵な表情を浮かべるミイラ男トメ兄。

「ふっふっふ……そう簡単にはいかないぞ。僕はな、三歳のころから姉に絞め技されながら色々されてきたんだ!」

……大変だったんだね、トメ兄の人生。

「違う! あたしはあんたが0歳のころから絞めていた! あんた

が覚えてないだけで！」

「コノヤロウ！」

おー、姉弟決戦だ！

「いいぞー」

「やれやれー」

「やんや、やんや」

すっかりパーティの余興になってるね。私が望んでたのと違うけど、おもしろいからいいや。

「いくぞ、アネアネビーム！」

目から光線を出す姉！

「なんの、トメトメカッター！！」

包帯をカッターのように飛ばすトメ兄！

そして包帯がなくなり素っ裸になるトメ兄！

「く、究極奥義ＨＥＮＴＡＩか！？」

「いただきまーすっ♪」

「うわぁ、トメお兄さんの裸をみたサユカちゃんが本当の吸血鬼に

ー！！」

「カカ、いくら日曜でも寝すぎだ。そろそろ起きろ」

……んあれ、いつの間にか寝てた。

今の、どこから夢だったんだっけ？

「トメ兄、トメトメカッターできる？」

「なんだそれ？」

……やっぱあそこは夢か。ちぇ。

ま、いいか。

今日から私は、１０歳だ！！

## カカの天下２４４「魔法から覚め…るまであと五分だけ…」（後書き）

前回の続きを希望される読者様がいましたので、ほんの一部を書いてみました＾＾

いい終わり方だったから余韻とかイメージ壊れるかなぁと思ったけど、こういう形ならいいんじゃないかなーと＾＾

トメトメカッター！

……ちょと気に入ってます（笑

## カカの天下２４５「テーマはもちろん？　そのに」

「ただいまー、っと？」

「トメ兄、待ってたよ。いこ」

どうも。仕事から帰ってきた早々、妹に腕を引っ張られてるトメです。

「どこいくんだ？」

「いいからＧＯ！」

「おおお？」

部屋で一息つく間もなく連れてこられたのは……市民会館？

その入り口にはサエちゃんとサユカちゃんが待っていた。

「おーいっ、サエちゃんサユカちゃーん」

「あ、カカちゃん。トメお兄さんこんにちはー」

「カカすけ三十分ぶり。トメさんこんにちはですっ」

「あ、ああ。こんにちは……」

なぜこんなとこに連れてられたのかワケがわからないまま挨拶する。

「あ、あの、トメさん！　今日はわたしの全てを見てください！」

……はい？

「サユカン、脱ぐの？」

「サユカちゃん、いやーん」

「えっ！？　ちょっ、なんでそうなるの！？」

「や、そういう風に聞こえたから」

すいません。僕も一瞬そう思いました……

「違うわよっ、わたしの全てをかけた作品を見てくださいってことっ！」

や、さっきのじゃそこまでわからんて――作品？

「なにか作ったの？」

「あれー、説明してないのカカちゃん」

「うん、問答無用で連れてきた。あれ見ればわかるっしょ」

カカが指差したのは市民会館の入り口、そこの立て看板にはこう書かれていた。

『夏休み児童、生徒作品展示会場』

「夏休みの作品って……ずいぶん前の話だぞ」

もう十月後半だってのに。展示するの遅くないか？

「なんかね、これ仕切ってたのデストロイヤー教頭らしいんだけど」

「あー、カカがたまに話してる教頭な」

「その教頭が『全員提出するまでは展示会はやらん！』って言い張って引き伸ばしてたから、こんな遅れたらしいですよっ」

「デストロイヤーとか言うわりには創造に積極的だな」

「私が破壊するのは腐った世の中だーっていつも言ってますからー」

なるほど。時間がないからと妥協することが多い世の中を破壊したわけだな。あくまで子供全員に創造する機会を与えた、と。

「にしてもこの時期にやるってことは、よっぽど作品を提出するのが遅れた生徒がいたんだろうなぁ。迷惑なやつだ」

「どうもすいませんでした」

「カカかよ！！」

「だってさー、私が一回作ったトメ兄、壊されちゃったし」

は、僕？

……あぁ、そういえば夏休みのとき。僕を見立てて作ったとかいうのを総理大臣が壊したんだっけ。

「あれから結局作らなかったのか？」

「や、ほら。一回やったのをもう一回、ってむしょーに面倒に思わない？」

それはわかるけど……

「ま、いいや。とにかく入って見てみよう」

そんなわけで市民会館に入る。

貯金箱や妙なオブジェ、ポスターなどが所狭しと展示されていた。僕らの住む区域で提出された全ての作品が集められているらしい。

上に貼られている案内板を頼りに、カカ達の学校の展示場所を探す。

「お、めっけ」

「わたし達の、ちょうど三つ並んでるわねっ」

「どれどれ……」

カカ達の視線をたどると、たしかにそこには似たような物体が三つ並んでいた。

ダンボールと紙粘土で作られた貯金箱、らしい。

下の作品名の欄にはそれぞれ、『友情』『愛』『希望』との文字が。

「この妙な物体のどこが題名の通りなのかはさっぱりわからないけど、なんか意外と普通だね」

もっと変な題名だと思ったのに。

「あれ、これ私達が書いた題名じゃない！」

「三つとも変わってるっ」

「さてはテンカ先生……勝手に変えたねー」

あれ、そなのか？

「じゃ元々はなんて題名だったんだ？」

「私の作品はですねー、『トメさんの友情』です」

「は？　僕の？」

「はい。貯金箱だけに」

「なんで貯金箱が僕の友情に繋がるんだ？」

「大人の社会は、お金の切れ目が縁の切れ目なのでー」

「イヤなこと言うなっ！」

あながち間違っちゃいないから嫌だ……お金ないからって飲み会に行かなかったりしてると、付き合いが悪いって言われて友達が離れていったりするんだよな……

や、別にそれが理由で妹しか遊び相手がいないとか、そんなことはないんだからなっ！

「それで、わ、わたしの作品が……『トメさんの愛』です」

あい？　ていうかまた僕？

「このそびえ立ってるのが愛を表してます！！」

え、えーっと……『立ってる』とかいう言われてこれを見るとびみょーにアレに見えるんだけど……他意はないよな？　サユカちゃんだもんな？　まさかアッチの意味で『立ってる』とか言ってないよな。まさかな……

「サユカちゃんのえっちー」

「なんでよっ、よくわかんないけどサエすけが『愛があれば立つんだよー』とか言ってたからこんな風にしたんでしょ！」

……なるほど、サエちゃんが元凶か。マセてるな。しかし同じ子供でもサエちゃんがそういうこと言っても違和感ないのはなぜだろ

う。

「私のは」

「はいはい、どうせ『トメの希望』だろ」

「ぶっぶー。『トメ兄の絶望』だよ」

「対義語かよ！！」

「実はこの貯金箱、底に穴が空いてるの」

「……そりゃたしかに、ずいぶん貯めたと思ったら穴が空いていて中身がカラだったら……絶望だな」

「トメ兄の人生みたいだね」

「もしもし妹君よ、それどういう意味？」

「貯めたお金を私に奪われる人生。こないだ私が割っちゃった窓ガラス代、早めにお願いね」

「……そういえば請求書きてたっけ」

「暴れんぼうな妹もつと苦労するね」

「……ああ、ただいま絶望中」

そんな感じでわいわいと作品を鑑賞している中で、僕はタケダ君の作品を見つけた。

作品名『もどかしい』

とってももどかしそうな貯金箱だった。わかりやすく言うとお金が入りにくそうだった。入れる人は確かにもどかしいだろう。

……いろいろあるんだろうな、タケダ君。

## カカの天下２４５「テーマはもちろん？　そのに」（後書き）

最近、誕生日のお話で突っ走ってきたので、ここらへんで普通っぽい話でクールダウンを（笑）

ちなみにこの話、別に『そのいち』書いた後に『そのに』書くの忘れてたとか、そういうわけじゃありませんので。

断じてありませんので。

……信じてください！

## カカの天下２４６「よい酔い仲間」

「「おつかれ、かんぱーい！」」

ぐびぐび、トメです。

先日の誕生会を手伝ってくれたお礼もかねて、今夜はテンを飲みに誘いました。僕のおごりで。

「んぐ、ふぅ……別にいいんだぜ？　おごりじゃなくても」

「や、でもせっかく協力してくれたんだしな」

「あれはあれでオレも助かったんだぞ。テストをまともに書かないカカの成績、さっぱりわからなかったからな。通信簿どうしようかと思ってたとこだったんだ」

先日のカカの誕生日。

ハロウィンをやるなら暗くなってからだろう、でもそれまでカカの足止めをどうするか……と悩んでいたところでサエちゃんが思いついたのが、テンによる足止めだった。

曰く、「カカちゃんの成績の話を出せばきっと協力してくれますよー」ということだったのだが……それが見事にテンの悩みのタネを解消する機会になったわけだ。さすがだ。

「それでも協力してくれたことには変わりないだろ」

「律儀だねぇ。ま、そいじゃ遠慮なく。おーい、ねーちゃん。大腸ウインナー追加」

相変わらずこの居酒屋『病院』のメニューは食欲をそそらない品名ばかりだ。しかし美味しいから文句が出ない。もしかして名前とのギャップでなおさら美味しく感じるのかな。

「あ、そういやさ。昨日、夏休みの作品展示会行ったんだけど」

「ほぉ……そんな面倒なとこにトメが自分でいくはずないな。カカに引きずられて行ったってとこか」

「察しの通りだよ。それでさ、テン。カカ達の作品の題名、勝手に変えたんだって？」

テンは「当然」と頷く。

「あいつらバカ正直に『トメ兄の～』とか『トメお兄さんの～』とか書くんだぜ？」

「そりゃ確かに恥ずかしいが……」

「まったく、身内がタイホされてもいいのかね」

「ちょっと待った。なぜにそれで僕がタイホされるのだ？」

名前を出しただけでタイホって、そんな悪名高くなった覚えは無いぞ。姉じゃあるまいし。

「あのなぁ、トメ。考えてもみろよ。そりゃーあの三人が姉妹だっ

たら一人の兄貴のことを思って作品を作るのもアリだろうさ。でもな、可愛い女子小学生が三人、一人のいい年した男のことを思って作品を作ったとなれば……」

「……この上もなく不穏な言い方だな」

「でもそう思うやつもいるかもしれねぇだろ。トメが女子小学生を三人も手込めにしてるとか噂たったら即タイホだぞ」

「そんな極端な噂たつわけない、と言い切れないんだよな、今の世の中」

「そうそう、特にサエ。血も繋がってないのに『お兄さん』なんて呼ばせてる時点でアウトだ。なんだその羨ましい話は。ふざけんな」

「や、別に呼ばせてるわけじゃ……ってなんで怒ってるんだおまえ」

「妹は一人じゃ足りないのかシスコン。どっかのゲームみたいにそんなの十二人つくる気か？　それこそふざけんな。そんなにいらねーだろ。二、三人よこせ」

……こいつ、酔ってきてるな。段々危ない話になってきたから矛先を変えよう。

「そういやさ、こんなに夏休みの作品発表が遅れたの、カカのせいなんだよな」

「あー、おぅ」

「迷惑かけてすまなかったな。あいつ面倒くさがりだから」

「いや。別にあいつは工作サボってたわけじゃねぇし。カカの努力はオレも認めてるぞ」

ん？　サボってなかった？　努力？

「どういうことだ」

「なんだ、知らねーのか。カカが提出するのが遅れたのは、納得いくまで何度も作り直してたからだよ。できる限りいいモノを作りたい、ってのはカカの目的を考えればわかるから、オレも教頭も見守ってたんだよ」

カカの、目的？

「ま、それも適当なところで切り上げてサエサユカの二人と合わせたところを見ると、何か他にいいモノ見つけたんだろうが――」

「まてまて、何の話をしてるんだ？」

「何のって――」

その言葉を聞いて、僕はようやく思い出した。

そう、か。そういえばそうだ。そろそろ……そんな時期だった。

「そういやさ、カカのやつ最近僕の手伝いしたがるんだよ。小遣いつきで」

「ああ、そりゃ間違いねぇな。目的はソレだ。ちゃんと見守ってや

れよ、おーにーさーん！」

「はいはい……そうだな。カカもだけど、僕の隣にいるヤツもこないだみたいに潰れないか見守らないとな」

「むっ、オレは酔ってないぞ！」

「酔ってるヤツは皆そう言うんだ」

「じゃあ酔ってないヤツはなんて言うんだ」

……そう言い返されるとなぁ。

「でもテンが酔ってるのは確実だろ。段々キャラ壊れてきたぞ」

こないだわかったけど、こいつは酔うと果てしなくテンションが上がっていく。

「今日もウコン飲んでないのか？」

「おぅ」

「なぜに」

「この間のが気持ちよかったからだ」

「気持ちよ――なんか仮にも女にそう言われると恥ずかしいんだが」

「あれ、オレが女だって覚えてたのか？」

「今思い出したよ」

「はっはっは、そーか。ま、この間みたいに酔い潰れても家まで返してくれるヤツができたからな。これで遠慮なく、気持ちよく酔っ払えるってもんだ」

「はいはい……この飲みは前のお礼だからな。とりあえず飲みたいだけ飲めよ。付き合うから」

「よし！　トメも飲め！」

「はいはい……」

この夜、僕とテンは主にカカ達のことを肴にしながらたらふく飲んだ。

宣言どおり（？）テンは潰れて、前回のようにテンの自宅まで送っていくことになったけど……楽しかったからよしとする。

いい先生を持ったな、カカ。

いい飲み仲間ができたな、僕。

## カカの天下２４６「よい酔い仲間」（後書き）

トメとテンの飲み話でしたー。

二人のラブラブ希望、との声がいくつかありますが……この二人はどっちかというと男同士の仲みたいな感じになってますね。まぁしかし男と女、仲いいことはいいですし、今後何があるかはわかりませんが……

ところで今回は作中でぼかしている部分がありますね。

そう、そろそろあの時期なのです。鋭い人ならもうすぐ何があるか気づくかもしれませんが……気づいてない人のために胸の内に秘めておいてください＾＾

気づかない人はそのままでいいですよ。トメとテンが何の話をしているのか、近々わかりますから＾＾

# カカの天下２４７「憐れな子豚にえさをおくれ」

「うへへ……」

「カカ、そんな頬赤らめて何読んでんだ」

「サユカン写真集」

「見るのはかまわんが、その顔やめれ。まるで」

「イケナイ本を読んでるみたい？」

……どうも。最近のガキはほんとマセてるなぁとしみじみ思う今日この頃なトメです。

「イケナイっぽい写真もあるよ。見る？　ほれほれ」

「見せるなっ」

「見たいくせに」

「見たくても見ないのが大人ってもんだ」

「……見たいんだ」

しまった、墓穴ほった。

「それはさておき、これから夕飯作るんだけど、手伝うか？」

「あ、うん、やるやる」

よし、話をそらせた。最近のカカはお駄賃あげると言えばなんでもやりたがるから使いやすい。

台所に二人で並ぶ。適当に材料を出して、と。

「まずはにんじんの」

僕が言い切る前に、カカはにんじんを鼻にあてた。

「ピノキオ」

「にんじんの皮をむいてくれ」

「ツッコミは？」

「はよやれ」

ちぇ、とむくれながらも皮むきを手に取るカカ。

料理自体は初めて手伝うわけじゃない。カカは若干危なっかしい手つきながらも皮をむいていく。

「にんじんが脱皮したらどうなるんだろう」

「たしかに皮を脱いでるから脱皮だけどさ、にんじんはにんじんだろうに」

「でも蝶もセミも脱皮したら飛べるようになるんだよ？　にんじん

も飛べばいいのに」

「野菜が飛んだって意味ないだろ」

「そんなことないよ。自分で飛んで畑から出てきてくれたら楽じゃん」

おぉ、それは便利だ！

「しかも脱皮済みなんだよ？　皮むく手間も省けるじゃん」

「でもにんじんからすれば食べられたくないだろうし、飛んで逃げるんじゃ」

「野菜は誰かに食べられるためにあるんだよ？　よろこんで自分から袋に入るはずだよ」

お子様の脳みそってほんと都合よくできてるのな。

「よし、にんじん脱皮したよ。飛ぶかな」

「飛ばねーよ。次はにんじんのヘタを切り落としてくれ」

「このヘタレが！！　そんなことだから切り落とされるんだよ！」

なんでにんじんに説教してんだ。

「そんなことってどんなことだよ」

「飛べないこと。空も飛べないんじゃヘタレとしか言いようがない

でしょ」

「……そか」

じゃこの世はヘタレだらけだなーとか思ったけど黙っておいた。

ま、こいつが思いつきで妙なことを言い出すのはいつものことだ。

「このヘタとりにくいなぁ。あ、『へこたれない』と『ヘタとれない』って似てるよね」

ああ、ほんといつものことだ。

「む、『ロールキャベツ』を『ロープキャベツ』したらどんな料理になるのかな」

「キャベツもないのになんでそんな疑問が浮かぶの」

「食べたいなーって思って」

さいですか。

さて。カカがにんじんを用意する間に、こっちはじゃがいもと玉ねぎの用意は終わってる。

まずはそれらを鍋で炒めて、っと。

「ねぇトメ兄、いつも思うんだけどさ。玉ねぎってすぐにしおしおになるよね」

「ああ、炒めたら水分飛んで小さくなるな」

「すぐしおれるなんて根性ないよね、玉ねぎのくせに。男でしょ、ほんとに玉ついてんの？」

あー玉ねぎだけに、ね。

「野菜に性別なんてないだろ」

「あるじゃん、それ」

カカの指差す先にはじゃがいもが入っていた袋。

袋に書いてある名前は『メイクイーン』

「じゃがいも王女がいるんだから、玉ねぎ男もいるでしょ」

「んじゃそれでいいよ」

適当に頷いたのだけど、カカはそれに満足したのかにっこり笑い、改めて玉ねぎに向き直った。

「この玉無しが！！」

そこは改めて言わなくていいって。

「そういう下品なこと言うなよ」

「こないだ男子が私に言ってきたんだよ」

「……ついてんの？」

思わず目線が下にいく。

「ついてるわけないでしょが！　なのになんか、『おまえ実は男だろ？　玉ついてるんだろ？』って言ってきて」

「……気持ちはわからんでもない」

男らしいからな、こいつ。可愛いけど。

と、そんなこんなで雑談しながらも作業は進み――以下省略。無事に肉じゃがを作ることができましたとさ。

「ご苦労さん」

「ご苦労した！　だからこれ入れて」

カカが部屋から持ってきたのは今時珍しい豚の貯金箱だ。先日の誕生日に友達にもらったものらしい。

「ほい、ちゃりん、と」

僕が適当な小銭を入れてやると、カカは豚の貯金箱を愛おしそうに頬ずりする。

「ふっふっふーん、いい子ね。どんどん食べて、どんどん太ってね……重くなったら殺してあげるから」

たしかに貯金箱ってのは重くなったら割るもんだが、そのつぶら

な瞳のぶーちゃんを殺すって言うのはやたら残酷に聞こえるぞ。

「おまえが死んだとき、ようやく私の願いは叶うのよ……くくく」

「どこの悪役だおまえは」

はてさて、一体何を買うつもりやら。

## カカの天下２４７「憐れな子豚にえさをおくれ」（後書き）

野菜が脱皮して畑の土からぽんぽんと出てきて、自分から袋詰めされる光景を想像してみてください。
すごい便利ですね。
でも不気味ですね。
農家の人の仕事もなくなりますね。
ダメですね。

## カカの天下２４８「子供はお金がかかります」

「すいませーん」

ぴんぽーん、と鳴らしても反応ないなぁ。ども、トメです。

先日のカカの誕生日のお礼を言おうと思って、カカと二人でシュー君の家を訪ねてきたのですが……

「いないのかな」

「前みたいに庭にいるんじゃない？」

「はは、また前みたいにタマちゃんに、パパと呼んでくれー！　なんて言ってたりしてな」

まっさかー、と二人で笑いながら庭を覗いてみると……

「タマ様、どうかパパと呼んでください」

「やー」

まだやってたよこの人。

「お願いしますっ、タマ殿、タマ閣下、タマ王妃！　ははーっ」

「やーら」

しかも土下座してるよこの人。

「ね、トメ兄。あれなに？」

「しっ、見ちゃいけません！」

あんなダメな大人を見せるのは教育上よくない！

「はっ！？　……みぃたぁなあああああ！」

「や、土下座したまんま凄まれても」

「トメさん！　力を貸してくださいいいいい！」

「あげくの果てに泣きつかれても……」

「とおおぉぉめえぇぇさあああぁぁぁんんんん」

「うざ……」

カカに激しく同意。

「わかったわかった……で？　まだやってたのかシュー君」

「はい……あれから来る日も来る日も僕をパパと呼んでくださいってお願いしてるんですが……」

お子様相手に毎日お願いって……相変わらず腰低いな。

「でも昨日、ようやくパパイヤって呼んでくれたところなんです！」

「それ、パパに近づいてるのか？」

「何言ってるんですかっ、先日のマパは『パ』が一文字しか入ってなかったのに今回は『パ』が二文字とも入ってるんですよ！？　びばパパイヤ！！」

「でも、パパがイヤなんでしょ？」

カカの一言でシュー君が固まった。

『以下、シュー君の頭の中』

ぽく、ぽく、ぽく、ちーん。

パパイヤ＝パパ、イヤ＝パパがイヤ＝てめぇなんざパパじゃねえ。

『方程式完成、シュー君の頭の中終了』

「遠ざかってるのかあああああ！！」

「そら毎日しつこく言ってればね」

「あと『頭の中終了』って言い方だと僕が人として終わってるみたいじゃないかあああ！！」

誰に向かってツッコんでるのか知らないが、それはあながち間違っちゃいないかと。

「トメさん！　タマ様をたぶらかすにはどうすればいいんでしょうか！？」

だんだんとなりふり構わなくなってきたなこの男。

「カカちゃんのようなピー（自主規制の音）な子を育ててるトメさんならわかるでしょう！」

「ちょと待ってシュー君。そのピーってなに？」

「……たしかにカカはピー（もっかい自主規制）だし、それを育ててきた自負はあるけど」

「トメ兄。だからそのピーってなに？」

「どうか僕にご指導を！」

「しょうがないなぁ」

「だからピーって何！？」

「うるさいなぁ、カカ。わかったわかった教えてやる。ピーっていうのはな」

「うんうん」

「自主規制だ」

「うん、うん？」

「帰ったら辞書でもひけ」

「……うん」

よし、この上もなく簡潔な説明にカカは黙った。不満そうだけど。

「いいかシュー君。古今東西、子供はモノで釣るのが一番だ」

「なるほど！」

と、いうわけで。速攻で商店街に走ったシュー君が買ってきたのは……なんと五千円もする高級お菓子詰め合わせセット！！

「まともな高級セットだ！！」

おお、変な高級セットしか見たことがないカカの目が輝いた！

「タマ様、これを差し上げますからどうか僕をパパと呼んでください」

「みっちゅ」

「……そ、そうですね。タマ様はみっつ、三才ですねー♪　それでですね、これ」

「みっちゅ」

「だ、だからタマ様がおいくつかはわかりましたから――」

「シュー君、認めようよ。タマちゃんはそれを三つよこせと言ってるんだよ」

「そんな！！」

タマちゃんの右手の三本指を見て絶望的な表情になるシュー君。
なんせ五千円が三つだもんなぁ。

「ターマちゃん。んふふ。じゃんけん、ぽい」

む？

おもむろにカカが始めたじゃんけんに、タマちゃんが左手で出した手は、パー。

パーとはつまり五本の指が立っているということ。

……あーあ。

「シュー君、やっちゅだってさ」

「やっちゅー」

そう、つまり右手の三本と左手の五本を足して……計八本。四万円のお買い上げになります♪

「た、タマ様！　みっつでいいんですよね！？」

「やっちゅー」

「みっちゅでしょ！」

「やっちゅー」

「みっちゅって言って！」

「やっちゅ」

「……みっちゅうううううううううう！！」

シュー君、涙目でそんなん叫ぶとキモイぞ。気持ちはわからんでもないが。

「カカ……おまえな」

「私もほしいもん。だから増やした」

「ほんっと容赦ないなおまえ」

「……ううう、次の給料が入ったら必ず！」

「ってマジで買ってあげるの！？」

シュー君のお金をかけた野望は、果たして叶うのか！

そして警官がこんなのでこの街は果たして大丈夫なのか！？

まー、犯罪起こっても姉がなんとかするから大丈夫か。

あれ、姉の職業って警官じゃないよな？　なんだっけ。

## カカの天下２４８「子供はお金がかかります」（後書き）

シュー君、憐れ。
君の財布は大丈夫か！？

タマちゃん、カカと一緒にあんまいないのにカカ化してますね…

…

## カカの天下２４９「進化するトイレ」

「トメ兄、あのさ。聞きたいことが」

「ちょっと待ってくれ。トイレ行ってからな」

トイレトイレ……ども、ちょっとそわそわなトメです。

「トイレと私、どっちが大事なの？」

「今はトイレだ」

「……いいなぁ、トイレ。いっつも皆の人気者で」

「トイレ羨ましがってどーする」

「だってさ、時には行列までできるんだよ？　セイジ食堂でも行列なんて見たことないのに」

あそこはほとんど地元の常連の人しか使わないからなぁ。おいしいんだけど。

「名前変えてトイレ食堂にしたらお客さんくるんじゃない？」

どんなメニューが並んでいるのか想像したくもない……おそらく居酒屋『病院』と似たようなノリで……うぇ、したくないと言いつつ想像してしまった。お食事中の皆様がいたらマズイから言わないけど。

「便秘定食とか、売れるかも」

「せっかく考えないようにしてたのに！」

でも比較的ソフトな定食を言うあたり、カカも空気を読んでいる。

「便秘にいいものばっかりの定食。よさげじゃん？」

「でもそれ頼むと『私は便秘です！』って公言することになるぞ」

「本当に悩んでる人はなりふり構わないもんだよ」

おまえ悩んだことあるんか、ってそんなことより。

「ところでさ、そろそろ入っていいか？」

実はもうトイレの扉の前でドアノブを握っているとこだったりする。トイレへと立った僕をカカがトットコとついてきたのだ。

「トイレと私、どっちが――」

「トイレ」

無駄に引きとめようとするカカの言葉を振り切り、僕はトイレへ入った。

「ふん、だ。いいもんいいもん。そんなにトイレがいいなら便器にキスでもしてればいいんだ！」

なんか拗ねてるけど放っておく。

ふぅ。

……ちょっと沈黙。

「で、おいしい？　その定食」

「どの定食だよ！？」

「えっと、し――」

「言わんでいい！」

「じゃあおいしいかどうかだけ」

「何も食べんし飲まんわ！」

ここは食堂じゃないっての。

こんなフローラルな香りで落ち着いた色調で静かで考え事に適した場所……って、あれ、なんか食堂、というか喫茶店の説明みたいになってる！　トイレと喫茶店って近いのか！？

「新感覚、トイレ喫茶？」

「メイド喫茶みたいなノリで変なもんつくるなっ！　あと人の心を読むな！」

「トイレって独り言多くなるよね」

「……あ、言っちゃってた？　ごめん」

そら僕が悪いな。恥ずかしながら素直に謝る。

……そういやトイレに箸とかフォーク置いてる店もあったけど。あの店、しばらく行ってないなぁ。

さて、と。

用を足してトイレを出る。

目の前にはお辞儀をしたカカが。

「ありがとうございました」

「だから食堂じゃないと言うとるでしょうが」

「小サイズをお一つで二百ハ十円になります」

「高いのか安いのかよくわからない値段だな」

何が小サイズなのかは気になるけど聞くのやめとこ。

カカの相手を適当にしつつ、居間へと戻る。

「で、聞きたいことってなんなんだ？」

「あのさ。思ったんだけど……トイレにも、男のトイレと女のトイレあるじゃん？」

「あるな」

「じゃ、うちみたいに男女共同のトイレって、オカマなの？」

「……あぃ？」

「便器なのにお釜とはこれいかに……あ、これで釜飯を！」

「だから妙なメニュー作るなっつうに！！」

――後日。

テレビにて『トイレカフェ』の特集を見た僕は唖然とした。

「……あるんだ、トイレの」

ちなみにカカは怒った。

「アイディア盗られた！！」

「や、どう考えても店作った人のほうが早く思いついただろ」

にしても驚いた。

いるんだ、カカみたいな発想する人。そしてそれを実現しちゃう人。

……ちょっと行ってみたいじゃないか。

メニューに釜飯あったら怖いな。

## カカの天下２４９「進化するトイレ」（後書き）

これをほとんど書いたあとに調べたんですけど、トイレカフェって本当にあるみたいですね。
さすがにカカが発案したようなメニューはないでしょうが（笑）

さてさて、明日はおなじみのカカラジです。
新しい企画なんか発案しちゃったりする予定です。まぁ、わりとありきたりな企画ですが……お楽しみにっ。

## カカの天下２５０「第六回、カカラジ！」

「みなさん、こんカカ！　最近寒くなってきましたねーこんなときは布団にくるまりながら幸せにひたりつつ焼き芋食べたり秋刀魚食べたり、え？　寝ながら食べるのかって？　当たり前ですよー、寝酒とか寝タバコみたいに寝芋とか寝魚とかもいいもんですよってな感じの香加です！」

「その布団を掃除する係の留です……なぁ香加。その寝ながらシリーズそろそろやめないか？」

「えー。今度は寝モミジしようと思ったのに。秋だけに」

「モミジ？」

「うん。寝てる留兄の背中をおもいっきし張り手で叩くの。真っ赤なモミジが浮かび上がるよ」

「そっちのモミジか、っていうか僕にやるのかよ！」

「自分じゃできないし」

「今やってやろうか！　背中を出せ！」

「きゃー、留兄が私の服をー！」

「じゃ、わたしは留さんの服をっ！！」

「お！　よし沙由歌ちゃん。協力して留兄を脱がそう！」

「わかったわっ」

さて！　いきなり破廉恥な始まりですがカカラジ、第六回目の放送です！

「上着確保！」

「次は下ねっ」

「やめれえええええ！」

……もしもーし。始まりですよ。

「ほらほら二人とも！　始まってるんだから進めないと！」

「ちぇー」

「残念です……でも上だけでも留さんの裸が見られて……ぽっ」

「興奮した？」

「ホッペが落ちそうよっ」

「それおいしいときの表現だから」

沙由歌ちゃん的には「おいしい」で合ってるんでしょ。ささ、留。進行して。

「初っ端からめちゃくちゃだよ……うぅ、こほん。さ、今更ですけ

ど今日は沙由歌ちゃんをゲストに迎えての放送です！」

「沙由歌ですっ、今日はよろしくお願いします！」

じー。

「よ、よろしく」

じぃーっ。

「よろしくですっ」

じいいいいいいいぃっ。

「う、うん……」

見てる見てる。留の目をすんごい見てる。留は頑張って視線を逸らしてる。

「前回でも言ったけど、本編と違って留は沙由歌ちゃんの気持ちわかってるからね。そして同じくそれを承知の沙由歌ちゃんもふっ切れてる、と」

「あ、あの沙由歌ちゃん……その、そんな顔近づけられるとやりづらいんだけど」

「わたしは最高にやりやすいですっ」

「や、でもこのままだと」

「ウェルカムですっ」

「どこへ！？」

さて、こんな感じで今日のカカラジは進みます。

「留兄は忙しいから私が言お。えーっと、これはネット小説『カカの天下』を盛り上げるため、ぶっちゃけトークや作者の本音などを放送する情報ラジオっぽい番組です！　私たち香加、留兄、沙由歌ちゃんは本編自体とは関係ないのでお気をつけください」

なんか後ろから悲鳴が聞こえるなぁ。

「あ、ちなみに私、いつもサユカンって呼んでるけどそれだと本編キャラと区別つかなくなるから、今日は沙由歌ちゃんって呼ぶことにするね」

ではでは、忙しい留は放っておいてＣＭへ。

今回ご紹介するのは最近話題の和風ファミレス『東治』です！　普通の店内！　普通の和風メニュー！

でもご安心を。ここの店にもおもしろいところはもちろんあります。実は店員が――おっと失礼。お電話がプルルっと鳴ってしまいました。

もしもし。あ、『東治』の店長さんですか。

『いいかっ、俺の店はどっかの食堂と違ってイロモノは扱ってねぇんだ！　おまえんとこのＣＭはいつも変な店ばっかり取り上げてるがな、俺の店も他のと同じ扱いしたら……おまえんとこのＣＭ会社、

ぶっ潰してやるからな！』
がちゃり、と切れてしまいましたねぇ。
こほん。
えー、話は戻りますがこの店の変なところはなんと言ってもバイトです！　とにかくノリがいい！　例えば『スマイルを百個』と言えば百秒間、目の前でニヤニヤし続けてくれるという、とてもフランクなお店です！
え？　店長に釘を刺されたのにいいのかって？
あっはっは。
やれるもんならヤッテミロてめぇに釘をブッ刺したろかこの――
プツッ。

放送事故のため、一時放送を中断させていただきます。

「……なに、今の」

ＣＭでしょ。気合の入ったＣＭ。

「入りすぎなんだけど……ま、いいや」

「はぁ、はぁ……」

「あれ、留兄。ラブラブし終わったの？」

「そんなのしてない！　や、なんか沙由歌ちゃんが急に……」

見てみると、沙由歌ちゃんはちょっと離れたところで頭を抱え込みながらしゃがみ込んでいる。

ちょっと近づいて耳をすませてみよう……

「――にやってるのわたしは、いくらなんでもあんな、あんな、あんな、いやーっ！　顔近かった息かかった留さん格好よかったよぅなんまいだぶなんまいだぶ……」

どうやら今さら自分がやったことを恥ずかしがってるみたいですね。

「沙由歌ちゃん、いっつも勢いつくけどつきすぎて後で後悔するタイプだからねー」

「なぁ、どうでもいいけどなんで念仏が混じってるんだ？」

どうでもいいなら聞くな。ほら留、復活したんなら進めなさい。

「な、なんだよぅ。なんか冷たくないか？」

モテてる留が羨ましくてムカついてるだけ。

「作者、正直だね」

「……さ、さあ！　それではおたよりコーナーを」

「ちょっと待ったぁ！」

バーン！　と放送室の扉を開けて飛び込んできたのは……姉括弧！？

でも……なんか、ぼろぼろ？

「はぁ……はぁ……やった、やったわ！　あたしは」

「ぽちっとな」

カカが壁のボタンを押すと、どこからともなく馬鹿でかいカボチャが飛んできた！　ハロウィン仕様のイカしたカボチャ頭は大砲の弾となって姉を吹っ飛ばす。

「もう一回出演することがでえええええきいいい

「さ、気を取り直しておたよりコーナーを。沙由歌ちゃん、やるよー」

「あ、はーいっ」

どうやら一通り恥ずかしがり終わったようで、沙由歌ちゃんも気を取り直したみたいです。

「まずは前回保留にした質問から。読むよ留兄」

「……はいはい、読めば？」

お、観念してるね留。

「えー、カカラジネーム『密かにトメのツッコミファン★（＊＜m＞＊）』さんから。『トメの好きな女性のタイプが知りたいですっ！！　あとドキッとする仕草とか許せない行動とか…誰かさんの参考にもなると思いますのでっ♪（笑）』続いて『謝謝！』さんから。『トメさんの初恋はいつですか？　理想のタイプなども教えて下さい。姉と妹が結婚したらなんて言わずに、トメにも幸せになって欲しいな～』ということで……どうよ、誰かさん」

「ええ、もうとても参考になりますっ！　ありがとうお二方！　愛してます！　一番愛してるのは留さんだけどっ！」

「ほらほら、こっちは聞く気満々だよ。私もだけど。ほれほれ言うてみ言うてみ」

香加はニヤニヤ、沙由歌ちゃんは今のセリフが恥ずかしかったの

か真っ赤になって俯いて……でもチラチラと留をうかがってる。

「答えればいいんだろ、答えれば……えーっと。まずはタイプ、というか女性のドキッとするしぐさとかだけど……」

「うんうん」

「はいはいっ」

ほおほお。

「……うざ。ええっと。やっぱり、こう……ツッコミがいのあるボケをしてくれる人がいいかな」

「……」

「なんかさ、うまいことツッコミが決まるとこう、ゾクゾクするんだよね……なんで皆黙るの」

一同、沈黙。

「……ねぇ沙由歌ちゃん。コレ、なんていうヘンタイなんだろう」

「ツッコミフェチ？　ボケフェチ？　どっちっ？」

どっちもヤだね。

「なんでそこまでボロクソに言われなきゃなんないの！？」

「だってねぇ……ゾクゾクとかいうのが」

聞いてるこっちがゾクゾクだよ。

「うるさいなぁ！　どうせ僕はツッコミですよ！　もうツッコミに染まっちゃったんですよ！」

「……ちょっと待ってっ。留さんの好きなタイプがそうだっていうことは……」

「留兄を目指してツッコミの練習してる沙由歌ちゃんの行動って……意味なし？」

むしろマイナス？

「そんなぁ！？　じゃあ留さんがわたしに振り向いてくれることはないの！？」

「今からボケの練習すればいいんじゃ」

「そうかー、ってわたしが練習してもしょうがないのよっ。本編のサユカが気づいてくれないとっ！　あっちでくっつかない限りは絶対こっちでも留さんとイチャイチャなんかさせてくれないんだからこの作者！！」

よくおわかりで。本編が基本だからね。

「あぁっ、早く気づくのよサユカ！　あなたはボケるのよ！」

「そりゃいつかはボケるだろうさ。歳とれば」

「そっちじゃなくてっ！」

隅っこで照れ照れしててようやく喋ったかと思えばそれか、留。

「うぅ……このことをサユカに伝えることができれば……」

「無理無理、世界が違うんだから」

「その役目！　この作品で唯一なんでもアリな役のこのあたしが引き受け――」

ぽち、ごすんっ！！　ひゅうううううぅぅぅ……

「引き受けられなかったね」

再び窓の外へ落ちていく姉でしたとさ。

「あ、ちなみに許せない行動は、度がすぎたボケかな」

「とことんボケツッコミ重視なんだね留兄」

「そういう作品の世界に生きてるからね」

言われてみればごもっとも。

「さて、お姉は追っ払ったし、沙由歌ちゃんはいじけてるし、静かになったところで次いこう。カカラジネーム、『もうトメ以外愛せない…』さんからいただきました」

「じゃあ今度、僕の友達のトメ・ギルバーソンを紹介しますよ」

誰かわからん名前だして誤魔化すな。

「うぅ……嬉しいけど恥ずかしいんだよなぁこういうの」

羨ましい悩みだなコノヤロウ。

「なんか今日の作者やさぐれてない？」

そんな日もあるさ。

「え、えっと、読むぞ？　『ふと思ったんですが、テンカ先生って隠れ主人公ですか？タイトルにもなにげに名前入ってますし…』だそうで。どうなんだ作者」

テンカ先生の名前はおっしゃるとおり、カカの天下のタイトルを意識してつけました。でもテンカ先生が隠れ主人公とか、そういう重大な意味はありません。ただ先生の名前を考えていたときに『天下』の文字に目がとまり、『テンカ先生』って語呂がいいなぁと思ってそのまま採用しただけです。

でも意識してつけたので、こう読者様にツッコまれると嬉しいものがありますね。

「へー、あの女がねー」

「沙由歌ちゃん、言い方ちょっと黒いよ」

「あ、ごめんっ。ほら、ライバルだから」

『トメとテンカ先生がくっついてほしい』という意見も結構多くて、こっちの沙由歌ちゃんはそれ知ってるからね。ライバル意識が高くなるのも当然ですな。

「や、悪いけどさ。僕はあくまでそういうのは妹と姉が幸せになってからで」

「それじゃつまらん！」

「つまらないですっ」

つまんないよ、書くほうとしても。

「うぅ……うるさいなぁ！　次！」

「あ、逃げた」

「カカラジネーム『ついに姉を踏みにじり、次はSな妹と対決する青年』さんからいただきました！　応援するぞ同士よ！！　僕はなかなか踏みにじれないけど！　えっと、『カカサエサユカのトリオって三人が出会う前に友達いたんですか？　本編には出てないんですけど…』だってさ」

「私はいっぱいいたよー。親友とかそういうのはいなかったから、サエちゃんと仲良くなってからは皆で遊ぶってことしなくなっただけで」

「わたしはあんまりいなかったわ。少しはいたけど……なんというか、初対面だとどうもツンツンしちゃうのよね」

「仲良くなってデレデレモードになれば可愛いのにね。これぞツンデレ！」

最近はあんまツンツンしてませんがね。

「ずっとデレデレかぁ」

「ね、香加助。なんかバカっぽく聞こえるからその言い方やめて」

「じゃ沙由歌ちゃんも『助』まで漢字にするのやめてよ」

……なんか、ゲストが姉じゃなくても充分話の脱線率高いなぁ。

「同感……で、サエちゃんは？」

サエちゃんは過去話見てもらえばわかるように、お母さんと離れてからは全く友達がいませんでした。その前ならいたんだけど、あまりにサエちゃんが無気力になっちゃったんで遠ざかっていった……って感じですね。

「……ちょっと、切ないわよね」

でも今はいい友達いるからめでたしですよ。

「そだね。私達がついてる！　さて、では次のおたより……えっと、カカラジネーム『にけよき』さん、あと『ブリは照り焼き』さんと『通りすがりのカレー嫌い』さん他数名から、ハロウィンのお話で、『魔女はやっぱサエちゃんでしょ！』というご意見が」

私も魔女はサエちゃんでカカは魔王にでもしようかと思ったんで

すけど。

「私ってどんだけー」

でもやっぱりハロウィンの主役で、カカが似合う役！　といえば魔女かなーと思いまして。幽霊になって人を驚かせて遊ぶ、とかいうのもサエちゃんのイメージには合うしと思い、今回の配役をさせていただきました。

「なるほどー。さ、時間もないし巻いていきます。カカラジネーム『イヤン』さんから。えー『もうすぐ何か起こるというのはカカラジのことですか？』という質問」

「最近の香加すけの変な行動のことねっ」

カカはいっつも変ですけどね。とりあえずお答えします。それはカカラジのことではありません。

「僕らは皆知ってるけど……言わないでおこうか」

「どうせすぐわかりますしねっ」

「そうそう、ではおたよりコーナーはこのあたりで！」

「急いでるなー」

「留兄がぐずぐずしてるから時間なくなっちゃったの！　もっとズバッとぶちゅっとでもすれば展開早いのに」

「早すぎるわ！」

「わ、わたしはウェルカムッ！」

はいはいＣＭへ。

何気ない日常を送っていたカカ達。しかしそのとき、事件は起きた。

家に帰ると、なんと姉の死体が！

しかも普通とは違う……まるでうどんを鼻から食べようとして窒息しそうになったところで突然誰かに首を絞められそれを振りほどこうとしてテーブルにつまづいて金魚鉢に頭を突っ込んで溺れ死んだような死体が！

「変したい……」

「変なことならいつもしてるだろ。まだしたいのか？」

「違うよトメ兄！　変な死体ってこと！」

「誰が変だ！！」

「うぁ生き返った！？」

サスペンスなのかホラーなのかコメディなのかわからない珍大作映画、『変したい』いよいよ後悔、じゃなくて公開！（作者の胸のうちを晒してどーするっ！

この題名をどういう風に捉えるかは、あなた次第です……

ＣＭがあけて。

「わたしならこの映画、『恋したい』って読むわっ」

「沙由歌ちゃん、人はそれを読み間違いって言うんだよ」

「わかってます♪　留さんにツッコまれたかっただけですっ」

「そ、そう……」

「どうぞこれからもズッコンバッコンとツッコんでくださいねっ♪」

「さ、沙由歌ちゃん、じゃなくて本編のサユカちゃんがボケキャラになればね」

「……そうでした。サユカ、気づくのよっ！」

「はいはい、留の恋愛劇場もひと段落したところで、お知らせっ！　この度、ななんと……『第一回カカ天キャラ人気投票！』をすることが決定しましたー！！」

「「おおー！」」

ルールは簡単。読者様には投票したいキャラを二人、選んでいただきます。一人だと迷いそうですし、二人だと読者様の好みの傾向も見れていいかなと思いまして。

投票方法は――感想欄に書いてもよし、メッセージのところから送ってくださってもよしです。

二人のキャラの名前を書くだけ、というメッセージでも全然ＯＫです。ただ、その場合は『メッセージを送る』の方からお願いします。

原則として読者お一人様、二キャラに一票ずつの投票だけとします。

次回のカカラジで中間発表、その次のカカラジで本発表とします！

一位のキャラには……何かおいしい思いをさせるつもりです。

作者としても誰がどれくらい人気なのかすごく気になるので……もしよかったらぜひ投票してみてください！

「投票、くるのかな」

「きてほしいわねっ」

「これで全然こなかったら寒いよなー」

「くるわよっ、ていうか、これ読んだやつ全員投票しなさいあんたたちっ！」

「無茶言うなよ姉……姉っ！？」

「カボチャ大砲セット！」

「え、ちょと待ってよせっかく苦労して登ってきたのに！」

「あ、吹き飛ばす前にこれ聞いとこう。カカラジネーム『シュー君ＦＩＧＨＴ』さんから。『とりあえずシュー君が報われる日は来るのですか？　それとシュー君の想いが姉に届く日はいつですか？』だってさ。どう思うお姉」

「シュー？　うーんあたしに何を言いたいのかは知らんけど……漢なら拳で語るべきだよね」

「はい、わかりましたか『シュー君ＦＩＧＨＴ』さん。シュー君はまだまだ当分報われないようですよ。ではカカラジチョップ、発射！！」

「え、ちょ、それチョップじゃな――」

どっかーん！！

「さ、お後がよろしいようで。今回のお相手は香加と」

「チョップは二回連続で姉か……ちょっと面白くないな、なんて思ってる留と！」

「もうちょっと留さんにくっつきたかった……あ。放送終わってからすればいいんじゃないっ、って思いついた沙由歌でしたっ」

「ではまた次回、お会いしましょー！」

「すぐ逃げよ……あ、投票まってまーす」

「お、これわたしが読むのねっ。えっと、この番組は『レストラン東治』と、『いろんなカカ天もどき製作委員会』でお送りしましたっ」

「今回はまともな提供だね」

「……そ、そうか？」

## カカの天下２５０「第六回、カカラジ！」（後書き）

はい、またまた長くなってしまったカカラジでした。
最近どうにも長くなってしまうことが多いですね。
あまり長すぎると手ごろに読める感じがしなくなるかも……気をつけます＾＾；
それでは明日からはまたいつものカカ天です！

そして皆様の投票、待ってます！
……人気投票なんて成立するほど投票くるのか、ちょっとドキドキですが、よろしくお願いします＾＾；

## カカの天下２５１「貸し借りは忘れずに」

どうも、授業中なカカです。

『もうすぐチャイムが鳴るなー』なんて思いつつテンカ先生の声を聞き流しています。

「いいかー、ここの部分はテストに出すから気をつけ！」

……え。

気をつけ？　気をつけろじゃなくて？

「礼！」

あ、やっぱ気をつけでいいんだ。

おお、慌てて皆が礼をするのと同時にチャイムが鳴った。すごいぴったりだ――と思っている間に、テンカ先生はダッシュで教室を出て行ってしまった。

他のクラスメイトと一緒に唖然としていると、サエちゃんがひょこひょこ私の席に寄ってきました。

「テンカ先生、なにをあんなに急いでるんだろうねー」

「なんだろね」

サエちゃんは顎に手をやり、にやりと笑った。

「私が思うにー、女だね」

「それを言うなら男でしょ」

「……え？　あ、そっか。テンカ先生って女の人だったっけー」

あははー、と笑っているサエちゃんは冗談で言ったのか本気で言ったのかはわからない。

「とりあえず追っかけてみるね」

「いってらっしゃーい」

「サエちゃんはいかないの？」

「私はトイレで忙しいのー」

そっか。それなら仕方ない。さぞかしいろいろあるんだろう。

私は教室を出て、テンカ先生のダッシュした方向へ走った。テンカ先生はドアを開けっぱなしにして走っていったから方向はわかる。

でもどこにいったかはわからない……誰かに聞き込みしようかなー、と思ったそのとき。

「んしょ、んしょ」

「お、ろっくおん」

めっけた。なんかすごいたくさんのプリントを抱えてる。

「テンカ先生、何してるんですか」

「おぅカカ。見ての通りプリント運んでるんだよ」

「いっぱいありますね……手伝いますよ」

「おぅ、さんきゅ。ほい」

どっしりとっ！！

「ちょと先生！　なんでほとんど私のほうに持たせるの！？」

「あ？　だってオレ、女だもんよ」

「私だって女だ！」

「そなのか？　知らなかった」

サエちゃんと似たようなこと言いやがったこのセンコー！

「とりあえずそれを一年から三年のクラスまで配って、職員室にもう半分あるからそれを四年から六年のクラスに配るんだ」

「……なんでこんなの一人で運んでるの」

「デストロイヤー教頭に借りがあってな。今日一日逆らえないんだよ」

「借り、ねぇ」

「おぅ、人生は義理と人情だからな。オレは借りだけは絶対に返すことにしてるんだ」

「ちなみにどんな借り？」

「んとな、昨日職員室に電話があったんだよ。一年生の保護者でな、『ちょっとあぁた！？　うちの子、箸の使い方がなってないんですけどぉ！　お宅の学校ではどんな教育をしてるんザマスか！？』って」

「ざ、ザマスなんて言う人いるの！？　見たい！　聞きたい！　捕まえたい！」

「悪い、ザマスはそれっぽいかなと思ってオレが付け加えただけだ」

ちぇ。

「で、そのトボケたおばはん、どったの？」

最近増えてるらしいね、そういう風になんでも学校のせいにする親。

「ああ、そのあんまりな質問にオレも呆れたんでな、『あのですね、子供にご飯の食べ方を教えるなんてサルでも親が教えますよ？　そんなこともできないなんてあなたはサル以下の親ですか。……あぁもう、そんなキーキーとサルみたいに喚かないでください。サル以下って言われたからサル目指してるんですか？』とか答えたんだけど」

「すごく先生らしい」

「だろ？　でも向こうのおばはんメチャクチャ怒っててさ」

そらそうだ。

「訴えてやるだのなんだの言い出して、さすがにこりゃマズイだろうと慌てたわけよ」

「テンカ先生でもそんな風に思ったりするんだ」

「だって訴えられたりしたらオレの給料がマズイだろ」

そうだよね、うん。それでこそテンカ先生。

「んで困ってたらデストロイヤー教頭が代わってくれてさ」

「助け舟出してくれたんだね」

「そうそう。『テンカ先生。それじゃ甘いです』ってな」

……はい？

「教頭すごいぞ。こんなん言ってた。『申し訳ありません、奥様。サルという例えが正しくありませんでしたね。サルはもともと頭のいい動物ですし、それを例えに出しても私どもが何を言いたいのかわかりにくいでしょう……』と、ここでオレも首を傾げたわけだ。てっきり謝ると思ってたからな」

さすが常識デストロイヤー。

「続きはこうだ。『よろしいですかな？　自分の子供に食事の仕方を教えるなど犬畜生や豚の親にでもできます。つまりあなたは自分が豚以下だと公言されておるわけですな、はっはっは。訴えたければやってごらんなさい。ただしそれはあなたが豚以下だと日本中に示すことと同じです。日本に向かってブーブー叫ぶのと同じです。それでもいいならやってごらんなさいな』と」

……この学校の先生ってたくましい。

「そう言い終わるころには向こうさん沈黙。最後に『ああ、申し訳ありません。あなた様がどちらの生徒さんの保護者様か確認するのを忘れていました。失礼ですが――』って言って向こうが電話を切って、終了！　ってわけだ。電話の相手が誰だかわからない、ってことにして話をチャラにしたわけだな」

難しいことはよくわからないけど、とりあえず教頭がすごいってことはわかった。

「――よし、っと。これで最後だな」

なにげに喋りながらも教室を回ってプリントを配っていた私たちは、ようやく紙束の重量から解放された。

「さて。あとは高学年！　がんばるかぁ」

「私も手伝います」

「お！　いいね。義理と人情だな！」

「だから貸し一つですね」

「……おい」

「重かったなぁ、プリント」

「む」

「借りは絶対返すんですよね？」

「う……」

ふっふっふ。

なにしてもらおっかな～。

## カカの天下２５１「貸し借りは忘れずに」（後書き）

最近こういう変な親増えてるみたいですね。『親』になろうとしない親。嘆かわしいことです。と言いつつ笑い話に使ってしまいましたが（笑）実際身近でそんな親がいたら笑えませんね。

教頭に『豚以下の親』呼ばわりされないように頑張りましょう皆様＾＾；

あと、昨日カカラジを載せたにも関わらず、感想欄にもメッセージでもすでに多数の投票があり、感激しております！　受付はまだまだやってますので、いつでもお気軽に投票くださいね＾＾

## カカの天下252「体育の授業、用意！」

「用意、ドン！！」

ちわ、合図と共に走り出していくクラスメイト達をぼやーっと見ているカカです。

私が走る番まで体育座りで待っているのですが……暇です。テンカ先生は全部生徒に任せてベンチで昼寝してるし。

「用意、ドン！」

「ね、サエちゃん」

「なにー？」

暇だからちょうどよく隣に座っていたサエちゃんに声かけた。

「走るときの合図さ。いっつも用意ドンで飽きないのかな」

「飽きるとかいうものじゃないと思うけどー」

「だってさ、夕飯がいっつもカツ丼とか牛丼だと飽きるでしょ」

「それは飽きるね」

「じゃあ用意丼も飽きるでしょ」

「それもそうだねー」

うん、ツッコむトメ兄と違ってサエちゃんはすぐに乗っかってきてくれるから好きだ。

「というわけで、新しいのを考えたらどうかと」

「例えば？」

「んとねー」

似たような言葉を考え中……考え中……ぴこーん（思いついた音）

「用意、パン！」

「パンの用意？　朝ごはんかなー」

私はあんパン派だ。

「用意、メン！」

「お昼はラーメンかー」

味噌味がいい。

「用意、ベン！」

「食べたあとはお便所？」

発射用意はオッケーかい？

「用意、あん！」

「あん♪」

ああん♪

「用意、じゃん！」

「じゃじゃーん！」

「じゃじゃじゃじゃーん！！」

「あの……カカちゃんの番だよ？」

「じゃん？」

意味も無くエキサイトしていた私はアヤちゃんの声で我に返った。

「それじゃいってくるじゃん」

「いってらっしゃいじゃーん」

サエちゃんに手を振って、いざスタートラインへ！

クラスメイトと並んで位置につく。

「用意――」

「だけ！」

私の言葉で変な沈黙。

「……だけ？」

「用意だけは終わったよ。続きをどうぞ」

「は、はぁ……」

思いついたからつい言っちゃった。

あ、もいっこ思いついた。

「用意、ド――」

「どんとこい！！」

喉を裂く気合と共に猛ダッシュ！

走る走る走る！

やった、いっちばん！！

……あれ？

「なんで他の人、走ってないの？」

「あの……今のどこで走ればよかったの？」

「あの……今のどこでストップウォッチ切ればよかったの？」

困惑してるクラスメイト達に、私は呆れて言った。

「あのね、『どんと来い！』って言ったんだから、『どん』で来ればいいに決まってるでしょ」

「あ、そうなの？」

「そう言われてみれば……そうなのかぁ」

首を傾げつつも納得するクラスメイト達。

「……なんかつまんないなぁ」

「んなこと言われてわかるかっ！！」

「あ、これこれ。何かツッコミないといけないような気がしたんだよ。ありがと久々登場のテレパシートメ兄！　……あれ。ここグラウンドの真ん中なんだけど姿なし……本当にテレパシー？」

「土の中」

「なるほど。さすが忍者だね」

「ではサラバ」

「またねお父さん」

親子の交流は順調だ。

「あ、あの、カカちゃん。もう一回走ってもらっていい？」

「仕方ないなぁ」

まったくもう……ほい、位置についた。

「よーい、ドーー」

「ドドドドドドド！」

「いつ始めんだよ」

スパーン！！　と頭を叩いたのはテンカ先生。

「お。先生、起きたの？」

「あぁ。そろそろカカの番だし変なことするだろうと思って起きた」

「器用ですね」

「まぁな……お」

テンカ先生はふと何かを思いついたようにポンと手を打った。

「こんなのはどうだ。用意、ヘン！」

や、びしっと指差されて言われても。

「えと、変なことすればいいんですか」

「おまえはいつも変だから用意必要ないか」

失礼な。

「まぁいいや。時間ないからさっさと走れ」

ということなので、この後はドドドドドッと普通に走らされましたとさ。

## カカの天下２５２「体育の授業、用意！」（後書き）

授業シリーズ体育編です。
用意、便！　が気に入ってます。

投票と一緒にリクエストとかも溜まってきてますが……まとめるまでもう少々お待ちください＾＾；なるべく応えていきますので！

## カカの天下253「おねだりおねだり」

ども、ぼけっとテレビ観てるトメです。

今見ているのは『初恋は実らない』という、なんともネガティブなタイトルの恋愛ドラマです。

でもタイトルのわりには、主人公とヒロインは一話でくっつく↓二話で別れる↓三話でもっかいくっつく↓四話でもっかい別れる……と、こんな感じで実って実らなくてを繰り返している。せわしないけど、これはこれでおもしろい。

ヒロインにベタぼれされてる主人公がちょっとムカつくけど。まったく……こんな綺麗な人に想われてんならちゃんと気づいてやれよ。

それにしても初恋、かぁ。たしかに実らなかったな。というかそもそも……

「トメ兄！」

と、苦い想い出を振り返ろうとしたところをカカの声に遮られた。

「テレビ見てるの？　手伝うよ！」

「どうやって」

「効果音つけたげる」

カカはテレビの画面に見入った。ちょうどよりを戻す場面だ。

『私、やっぱりあなたのこと好きなの！』

「ずぎゃーん！！」

『ぼ、僕もさ！』

「きらりーん♪」

『ちょっと待った！　彼はあたしのよ！！』

「びびでばびでぶー！！」

「やかましい」

スパーン、と頭を叩いて黙らせる。

「効果音はわかるが、最後のはなんだ」

「唐突に登場したから唐突に思いついた音を言ってみたの」

「あそ。とにかくそんな手伝いはいらん」

「じゃあ他に何かお手伝いさせて！」

なんでそんなに……あぁ、そっか。

お駄賃目当てか。もう日がないもんな。

「んー、させてやりたいけど、今は特に手伝ってほしいことはないな」

ゆったり休憩中だし。ドラマは終わったけど。

「そこをなんとか……トメ兄どこいくの」

「トイレだよ」

立ち上がって居間を出る……なぜかカカもついてくる。

「トメ兄、トイレ手伝うよ！」

「何をどう手伝うのかは興味あるが、怖いからいらん」

ひっついてくるカカを引き離し、ドアを開けてトイレイン！

「ねー、とめにー」

ドア越しから何か聞こえるけど無視。

ふぅ……。

む、なんかこの状態、最近もあったような。

「じゃあせめて応援する！　フレー、フレー、ト・イ・レ！　ガンバレガンバレこ・う・も――」

「いらんと言うに！！」

恥ずかしいことを大声で言うな！　これだから子供は……

用をすませて外に出ると、そこには手を差し出しているカカが。

「応援料ちょうだい」

「僕が恥ずかし料ほしいくらいだ」

その手を跳ね除けて居間へと戻る。そして頬を膨らませながらもついてくるカカ。

「おねがいとめにー！　おねがいおねがいおねがいとめにぃー！！」

「そんな舌ったらずな口調で言ってもダメなもんはダメ！」

ちょっと可愛いけど。

「よし……じゃあ」

あぐらをかいた僕の内腿の上に座り、寄り添ってくるカカ。なんだなんだ。

僕にぴったりくっついたまま、カカは自分の胸元のシャツを引っ張りながら流し目らしきものを送ってきた。

「おにぃさん♪　ここにチップ、はさんでくれないかしらぁん」

「きしょ」

「キショいって言うな！」

や、だってねぇ。こんなガキに迫られても。

「だいたい挟めるような胸などなかろうに」

「脇に挟むから大丈夫。かもんべいべ」

「色気も何もねーな」

体温計じゃあるまいし。

「ね、とめにぃ。お願い！」

「つーん」

「ツンしたんならデレしてよー」

それ僕のキャラ違うし。

「ねね、お願い」

「何もせずにお金をやれと？」

「うー……これからしばらくお駄賃なしでお手伝いするから！」

「つーん」

「つ、次の算数のテストで８０点以上とる！」

「つーん」

「うぅ、えと、えと……これからトメ兄のことお兄ちゃんって呼んであげるからっ！」

「つー、ん？」

それってなんかプラスなのか？

「ああもう！　じゃ次のテスト、全部８０点以上とるからっ！」

ふむ、こんなとこか。

「いくらほしいんだ？」

「……あと７００円」

「今言ったこと、守れるな？」

「うん！」

「守れなかったら身体で払ってもらうぞ」

「いやん」

「いやなのか。じゃあ――」

「うそですっ！　いやじゃないです喜んでこの身を捧げます！」

「よろしい。ほれ」

財布を取り出して小銭を渡してやると、カカは飛び上がって喜んだ。

「やったぁ！　お兄ちゃんがやっとデレッた！」

「デレ言うな」

「じゃ早速買ってくるね！　ありがとお兄ちゃん！」

ま、目的が目的だしすぐにあげてもよかったんだけどね。使える機会は使わないと。

……にしてもお兄ちゃんか。

意外といいな。

## カカの天下２５３「おねだりおねだり」（後書き）

トメはすごいですねぇ。
私だったらこんなおねだりされたら一発ＫＯですよ。

あ、ちなみにカカにちょっと邪魔されてしまいましたが……近々トメの初恋話やりまーす＾＾

## カカの天下２５４「かなしいカボチャ」

「ただいまー」

おかえりー、の声が聞こえなくて寂しいお兄ちゃんなトメです。

うあ、お兄ちゃんとか自分で言うと気持ちわる。

さて、靴はあるのに返事がないとはどういう了見だあの妹……ん？

いつものように玄関にあるホワイトボードを見てみると、そこには……

『本日の夕食はカボチャ定食！！　居間にあります』

そんな普通ぽいことが書かれていた。

普通っぽい……

カカ、病気か？

心配しつつ、とりあえず玄関へあがる。

そして居間を覗くと――

「さぁ召し上がれ！！」

テーブルの上に乗っているカカの姿を見て僕石化。

「召し上がれ？」

「……あ？」

もう一回言われて我に返る。

「何を召し上がれと？」

「カボチャ定食な私を」

そう。

カカはカボチャ定食になっていた。

「その格好はなんだ？」

「可愛いっしょ」

可愛いかと聞かれればとてつもなく可愛いと言わざるをえないが。

「そ、その格好はなんだと聞いてる」

べ、べつに頬の緩みを我慢してるわけじゃないんだからな！

「なにって、だからカボチャだよ。下から言うと、まずはカボチャの靴下！」

ニーソックスのオレンジが眩しいゼ。

「カボチャパンツ！」

丸出しだぞ。

「カボチャのTシャツ！」

黒い三日月な目がキュートだね。

「カボチャの手袋！」

小カボチャに手を突っ込んだだけだろが。

「カボチャの仮面！」

あ、去年僕が作ったやつだ。

腐ってる。

におう。

「明日はこれでサエちゃんを脅かすの！」

まぁ確かにそのスカートはき忘れた格好――じゃなくてカボチャだらけな格好ならインパクトあるだろうさ。

「なるほどね……とりあえず仮面は作り直してやるよ」

「わ、ありがと。臭かったんだよ、これ」

だろうな。よくかぶるよこんなの。

「カカ、ずいぶんと浮かれてるな。そんなに明日が楽しみか？」

「当然！　ちゃんと皆に声をかけて計画立てたんだよ！　ハロウィンなところはちょっと被っちゃうけど、せっかくだし私のときよりもっと盛大に――」

そのとき、突然電話が鳴り響いた。

浮かれてるカカは元気よく「私が出るー！」と電話へとすっ飛んでいった。

「はい、もしもし！　笠原ですが――あ、サエちゃん？」

お、明日の主賓か。これはこれは……

「明日？　えっと、何の話だったかなぁ」

おー、ごまかしてるごまかしてる。

「……え。明日から、旅行？」

……なに？

「そう、なんだ……おじさんとおばさんからのプレゼントで……何時から行くの？　そう、そっか……じゃあしょうがないよね。うん、ほんとは覚えてた……けどわかった。見送りにいくね！　いやいや、やっぱりそういうのは当日に祝わないとさ。うん、うん……わかった。じゃ、また明日ね」

がちゃり、と電話を切ったカカは……目に見えて落ち込んでいた。

「カカ……サエちゃんは」

「明日から旅行なんだってさ！」

わざと明るい感じに言ってみせるけど、悲しみが隠しきれていない。

「あーあ、せっかくいろいろと用意したのに……全部、ダメかぁ」

「えっと、あれだ。ほら、旅行から帰ってきてからってわけには」

「こういうのは当日じゃないとだめだよ。さ！　そうと決まればサユカンとか姉とかに電話しないと！　明日は皆で見送りだ！」

威勢よく言って電話に向かうカカ。

でもその背中は震えていた。

「おっきなプレゼントの箱に私が入ってさ、飛び出すの。私がプレゼントだよ、食べてー、みたいな感じで。おもしろいと、思わない？」

「……ああ、サエちゃん。喜んだだろうな」

「はぁ……せっかくのサエちゃんの誕生日。ちゃんと祝ってあげたかったのに」

「祝ってやればいいだろ。こういうのは気持ちが大事だし」

「うん……そうだよね。サエちゃんも『お祝いの言葉がもらえるだ

けですごく嬉しい』って言ってたし。でも……でもさ」

そうだよな。

わかってるよな、そんなこと。

でも、盛大に祝ってあげたかったんだよな。

「カカ。暗い顔は今日だけにしとけよ。そんな顔で見送られたら、サエちゃんだって誕生日の旅行を楽しめないからな」

「うん……あ、サユカン？　実は明日、サエちゃんが――」

カカの電話する声を聞きながら、思う。

両親からのプレゼントで旅行っていうのはいいと思う。

でもさ、タイミング悪いぞ神様よぅ。

こんな展開、誰も望んでないだろ。

……責任とって、なんとかしろよ！

## カカの天下２５４「かなしいカボチャ」（後書き）

さて、気づいていた方はいましたでしょうか。
そう、カカの天下の最初のほうを見ればわかるとおり……ハロウィンと文化の日の間にサエちゃんの誕生日があったのです！
ちなみにその間にある「めくりめぐり」の話は後日談を混ぜた単独話なので、細かい日にちについてはツッコまないようにお願いします＾＾；

しかしその誕生日もカカのときのようにはいかないようです。旅行行きが変更になったりはしません。このままカカは落ち込んだまま、サエちゃんを盛大には祝えないのでしょうか。
――明日へ続きます。

# カカの天下255「おめでとう、という言葉」

カカです。

今日は十一月一日。

ここは駅の改札口前。

私とトメ兄とサユカン、そしてここまで車で送ってくれたテンカ先生は、サエちゃんの誕生日旅行の見送りに来ていました。

姉とシュー君も呼ぼうとしたのですが、二人そろって朝まで仕事とのことで、この時間にはどうしても間に合わなかったらしいです。

「カカちゃん……」

「サエちゃん。誕生日おめでとう！　これ、皆からのプレゼントね」

私が入るはずだった箱に詰めたプレゼントを渡すと、サエちゃんは本当に嬉しそうに微笑んだ。

「ありがとー！　ここじゃなんだから、電車の中であけるね」

「うん……でも、残念だよサエちゃん。本当はもっと――」

「いいんだよカカちゃん。私、本当に嬉しいんだよ」

「サエすけおめでとうっ！　わたしのとっておきのプレゼントでびっくりするがいいわっ」

「ありがとーサユカちゃん。わざわざ見送りもありがとうね」

「い、いいわよ別に。わたしは君が驚く顔が見たかっただけなんだからっ」

「うわぁーお！　びっくりんりんー」

「見てもないのに驚くんじゃないわよっ」

サユカンも本当は残念なはずだ。いろいろと計画を立ててサエちゃんを驚かそうとしてたのに、それがダメになって……でも明るく振舞ってる。

私は……うまく笑えてるかな。

「サエちゃん。誕生日おめでと」

「トメお兄さん、ありがとうございます。トメさんは何をくれたんですか？」

「今回はカカがまともなプレゼントだからな。僕が変な高級シリーズいれといた」

「わ、楽しみですー」

「サエ、おめでとさん」

「テンカ先生もありがとうございます。学校のほうはいいんですか？」

「ん、あぁよくないぞ。時間的にはこいつらも遅刻だ。でも心配いらねぇぞ。出席とる担任の先生と一緒に登校するんだしな」

つまりは皆で遅刻すれば怖くないということだ。

「あの、わたしの担任、テンカ先生じゃないんですけど」

「そこは知らん」

「そんなぁっ」

……トメ兄もテンカ先生もサユカンも笑ってる。

でも、私は。

「カカちゃん。そんな顔しないで」

「ん……」

「カカちゃん。誕生日ってね、おめでとうって言ってもらえるだけで、すっごく嬉しいんだよ」

それはすごくわかる。私だってこの間、皆に祝ってもらえてすごく嬉しかった。

「私はその言葉がどれだけ嬉しいものか知ってるの。すごく大事な言葉だって。その言葉をカカちゃん達にもらえて、私は充分すぎるほど幸せなんだよ」

「そう、なの？」

「うん！」

サエちゃんは笑ってる。

本当に嬉しそうに。

本当に、満足そうに。

「サエ、そろそろ……」

「あ、うん。お養母さん」

おばさんに促されたサエちゃんは、改めて私たちの顔を見渡して、微笑んだ。

「カカちゃん、サユカちゃん、トメお兄さん、テンカ先生。本当に今日はありがとー。大切な人たちに祝ってもらえて、私は本当に幸せです。じゃ……またねー」

「いってらっしゃい、サエちゃん」

「いってこい、気をつけてな」

「お土産話、期待してるわよっ！」

「サエちゃん……またね」

サエちゃんはペコリとお辞儀して、きびすを返す。

「いってらっしゃーい！」

声は届いたのか、わからないまま。

サエちゃんはおじさんとおばさんと一緒に、改札口の向こうへと消えていった。

「……いって、らっしゃい」

私はなんとなく、そこから動く気が起きなかった。

「カカ」

そんな私を見るに見かねたのか、トメ兄が肩を引っ張る。

抵抗する気力も理由もない。私は促されるまま、テンカ先生の車を停めた駐車場へと歩き出す。

「さっさと学校戻らないと教頭がうるせーな」

「迷惑かけたな、テン」

「いいさ別に。オレはあいつの担任だしな」

「お、先生っぽいこと言うじゃんか」

「そんなこと言って、実はサボりたかっただけじゃないんですかっ」

「んだとコラ？　なんでわかったんだ」

「サユカちゃん、なんか目赤くない？」

「え、あ、ちょっと昨日、撮影会で夜更かしをしてまして……」

トメたちの言葉を聞き流しながら、私はため息をついた。

サエちゃんは満足げだった。でも私は満足できない。

もっともっと、祝ってあげたかったのに――

「ほれほれ、皆さっさと車に乗れよ。いやー、今日の一時間目が全校集会でよかった。授業を遅刻すると後々の調整が面倒だからな」

「自分がよければ他はなんでもいいんか、この不良教師」

「冗談だよ。この時間ならギリギリ――」

……え。

……あ。

あー！！！

「テンテン！！！」

それを閃いた私は、思わず大声で叫んでいた。

「……それはもしかしてオレのことか？」

「うぁ、可愛すぎて似合わな」
「以下同文っ」
「やかましいぞてめぇら」
ほんとやかましい。
「テンテン先生！」
「それに先生をつけんな」
「今なんて言った？」
「……は？　なんて、って」
「全校集会って言った？」
「おう。こないだ一緒に資料配っただろ？　全学年の全クラスに」
「じゃあそのときの借り、いま返してもらっていいかな」
「あ？　な、なにする気だよ？」
テンカ先生が珍しく目を白黒させている。けどそんなことに構ってる暇はない。
私は携帯を取り出す。
「……あ。サエちゃん？　プレゼント開けた？　まだだね。じゃ、

もうちょっと待ってて。んと……四十分くらいしたらもう一回かけるから、そのときにお願い！」

「おい、カカ……」

「トメ兄、姉とシュー君ってもうすぐお仕事終わるよね」

「あ、ああ。あと二十分サエちゃんの出発が遅ければーって姉が嘆いてたし」

「じゃあ呼んで、いますぐ」

「カカすけ……何する気？」

「何するって、決まってるじゃん」

サエちゃん言ったよね。「おめでとう」って言ってもらえるだけで幸せだって。

でも私はどうやら、サエちゃんにもっと幸せになってもらいたいみたい。

「――誕生日のお祝いをするんだよ」

三十分後。

急いで小学校に戻ってきた私たちは、教頭先生に叱られつつも体育館へ移動。全校集会に参加した。

ただいま私は他のクラスメイトと一緒に並んで体育座り中。

テンカ先生は――なんと司会進行役をしていた。マイクを持って堂々と進行するその姿はハマっているけど、さっき「遅刻してもいい」とか言ってたのを考えると実はやる気がないんだと思う。

「――先生、ありがとうございました。続きまして、教頭先生による最近の不審者についての注意事項です。教頭先生のお言葉を――」

つつがなく進行していたテンカ先生の言葉が止まる。

ちらりと私のほうを見た。

私が頷くと、テンカ先生は「やれやれ」と首を振った。イヤそうに見えるけど……さっき私のやりたいことを説明したときはノリノリだったから内心では楽しがっていると思う。

こういうハチャメチャが大好きな先生だからね。

「――お言葉を頂く前に、少しお時間をいただきたい。皆さんにどうしても伝えたいことがある生徒がいますので、その子の言葉を聞いてあげてください」

予想外の言葉に教師側の席がどよめく。

「テンカ先生、一体何を仰っておるのですかな？」

ざわつく教師たちを片手で制し、教頭が一歩進み出た。

「全校生徒に話をしたい生徒がいます」

「……急なことを言いますな。それならば、あらかじめ私どもに話を通しておくのが筋ではないですかな？」

「申し訳ありません。話を通そうとしたところにゲンコツとマイクをもらいましたので、暇がありませんでした」

遅刻してきたからね。

「……む」

「教頭の出番の前にこの話をしたのは、教頭ならわかってくれると思ったからです」

「ほう、では聞こう。その話の内容とは一体何かね？」

「それは私が言うことではありません」

「そうだな、失言だった。では質問を変えよう。教師たる君が、集会という場を壊してまでその生徒に話させようとする理由はなんだね？」

学校の先生はこういう集会を大事にしている。普段は笑顔を振りまく先生も集会のときだけはマジメな顔をして、ふざける生徒がいれば本気で怒鳴りつけることもある。

そんな場所で勝手を言えば、咎められるのは当然のことだった。

教師側の厳しい視線を浴びながら――でもテンカ先生はまるで怯

まなかった。

「借りを返すため、と……生徒のことを第一に考えるのが担任の務めと思うからです」

「……その生徒とは？」

私は無言で立ち上がった。

体育館中の視線が集まる。

「カカ君か。君はなんのために生徒へ話をしようとする？」

「友達のためです」

教頭の目をまっすぐ見て言った。

ありったけの想いと願いをこめて。

「――ならよし」

「教頭！？」

あっさりと頷いた教頭に私は拍子抜け。教師側は困惑してざわめき始めた。

「教頭！　そのような勝手を――」

「やかましい！　校長が紅葉狩り旅行でいない今、私がここの責任者だ。私に従え」

なにやってんの校長。

「しかし集会は、形式というものを生徒に学ばせる場であってですね」

「形式や常識を破るのはいつだって理屈ではなく感情だ。その感情が善意なるものなら……私は止めることはしたくない。形式は大事だ。だがそれを壊すほどの善意は、それにもまして大事なものだと私は思う」

……おお、教師が黙った。

さすがデストロイヤー教頭。壊すことについて語らせたら最強だ。

「さ、カカ君」

「はい！」

さぁ、正念場だ！

私は集会のステージに向かって歩きだす。

視線が集まる。さすがに少し緊張……

「がんばれカカすけ！」

……お。

視線を動かすと、サユカンが頷いてくれるのが見えた。

うん、緊張が和らいだ。もう大丈夫。ありがと。

――そう、大丈夫。私が伝えたいことは、そんな難しいことじゃないんだから。

ステージに立つ。テンカ先生からマイクを渡される。

「皆さん、おはようございます！　私、笠原カカといいます」

気合を入れるために元気よく挨拶し、生徒たちを見渡す。

全校生徒だけあってすごい数だ。その生徒のほとんどが――愉快そうに私を見つめていた。それはそうだ。じっとしてるのが大嫌いな小学生はえてして集会なんてつまらないと思っている。そこに予想外のハプニングが起きたのだから、おもしろがらないはずがない。

ちらりと体育館の裏口のほうに目をやると、ちょうど侵入したトメ兄とお姉がこちらを覗いているところだった。ちゃんと入れてあげるから、私が話し終わるまで待ってね。

さぁて、と。

「私が皆さんにお願いしたいことは簡単です！　実は――」

――どうも、プレゼントが詰まった大きな箱を抱えながら、電車にゆらゆら揺られているサエです。

準備で疲れていたのか、お養父さんとお養母さんは椅子に座りながら眠っています。

私はカカちゃんの電話を待ちながら、外の景色を眺めていました。

……カカちゃん、悲しそうだったな。

なんだかいろいろ準備してくれていたみたいだし……でも、せっかく仲良くなってきたお養父さんとお養母さんの気持ちを無駄にしたくないし。

でもね、カカちゃん。私、幸せなんだよ。おめでとうって言ってもらえるだけで――

「……あ、電話だ。着信……ん？　テレビ電話の、着信？」

ボタンを押して、画面をテレビ電話表示に切り替える。

『やほ、サエちゃん』

画面の向こうにカカちゃんが映った。

……なんか、さっきと違ってめちゃくちゃ楽しそー？

「カカちゃん、どうしたのー？」

『んっふっふ……サエちゃん言ったよね。おめでとうって言ってもらえるだけで幸せだって』

「うん、本当にそれだけで」

『じゃあその言葉、とことん聞かせてあげようじゃん！』

「――え」

画面の光景が変わって、私は息を飲んだ。

学校の体育館に、生徒のみんな……？

『せーのっ！』

『『『サエちゃん、お誕生日おめでとー！！！！！』』』

その大音量に携帯が震えた。

でもそれ以上に私の心が震えた。

『さんっ、はいっ！！』

『『『ハッピーバースディトゥーユー♪　ハッピーバースディトゥーユー♪　ハッピーバースディ、ディアサエちゃーん♪』』』

ピアノの伴奏に合わせて、全校生徒全員が歌ってくれてる。

カカちゃんもサエちゃんも。先生方も一緒に。

先生の中に混じってトメお兄さんやお姉さん、シューさんまで一緒に。

皆で……私の、誕生日を……！

『どう、サエちゃん！　私のびっくりドッキリプレゼント！！』

「……う、うん……びっくりドッキリしたー！」

あ、バースディソングをバックに画面へ皆が集まってきた！

『こらこら。カカすけだけのじゃないでしょ！　わたしら皆のプレゼントよっ！』

「うん、うん……サユカちゃんもありがとー！」

『サエ、おめでとう！　見送りいけなくてごめんよ！　でもあたしらも直接祝えないって昨日聞いてショックでさ、ヤケになってさ、準備してた魔女の衣装着てさ、ホウキの形に光る自転車で夜の街を爆走しちゃったよ！　あっはっは！　ハロウィンだったし別にいいよね』

「よ、よく通報されませんでしたねー」

『サエちゃん、おめでとう……ちなみに通報は五回きたよ……』

「あ、やっぱりされたんですかー……ご、ご苦労さまですー」

『サエ君！　いつもありがとう！　そしておめでとう！』

「タケダ君……」

『サエちゃーん私の歌聞いた？　もっと歌うわよ！　はっぴばーすでぃ♪』

「アヤちゃん……」

『サエ君、おめでとう』

「デストロイヤー先生……」

『教頭をいれなさい』

『あ、サエ。どうよこの合唱！　ほとんどオレのおかげだから感謝しろよ！』

「テンカ先生……」

『サエちゃん。言うの二回目だけど、おめでとう』

「トメお兄さん……」

『『サエちゃん、おめでとー！！！』』

「知らない人達……」

私は胸がいっぱいで、段々と返せる言葉がなくなってきた……

『サエちゃん！　どう？　感動した？』

「うん……うん！」

『じゃ、もいっちょ感動してもらおっか！　プレゼント開けてみて』

にじんできた涙で薄く曇る視界の中、箱を開けて私の目に飛び込んできたのは――

「これ……お母さんの、帽子？」

この間なくして、カカちゃんとケンカになっちゃったときの、白い帽子……！

『うん、同じもの見つけてさ……買っちゃった』

買っちゃったって……この帽子、造りが細かくて、安くないはずなのに……

「カカちゃん……ぅ……うぅ……ガガぢゃーん！！」

ダメです。

泣きます。

止められません。

『ダメ押しだっ！　サエすけ！』

まだ何かあるのー！？

まだ泣かせる気なのー！？

『封筒入ってるでしょ。それがわたしのプレゼントよ。開けてみっ』

「えぐっ、うぅ……」

もう泣き顔をまったく我慢しないまま箱を覗くと、封筒はすぐに見つかった。

その中身は――え。

「おがあざんの、じゃじん？」

『サケイさんの家で見つけたの。とっておきなさいっ』

サユカちゃんは私の事情を知らないカカちゃんのことを考えてか、声を潜めて教えてくれた……

お母さんの、写真。

もう何年も見てないその顔。

とても優しそうな、とても懐かしいその瞳を見ていると、また涙が浮かんできた……！

『サエすけ、どうよ！？』

「ううぅ……」

『言葉にならないほど嬉しいかっ！』

その通りでございますうぅぅ！

「……わ、わた……私から皆に、一言……」

溢れてくる涙を必死に堪えて。

涙よりも溢れてくる感謝の想いを込めて。

「皆……私に抱きつけー！！」

『『『ごめん、無理！！！』』』

「ぷっ……あは……あははは」

『あはははは！！　はは……は……あれ、サエちゃん。その隣の人、誰？』

隣？

ふと横を見ると……知らないおばさんが涙を浮かべて私を見つめていた。

あれ、気がつけば私、乗客の皆さんに囲まれてる！？

お養父さんとお養母さんもいつのまにか起きてる！？

「いい、話だ……」

「へ？」

「なんていい話なんだあああ！！」

「学校をあげてのばーすでぃそんぐ……おじいちゃん心に染み入ったわぃ！　染みすぎてハゲた頭の染みも増えそうじゃわぃ！」

「サエちゃんおめでとう……おばさん癒されちゃったよ」

「おめでとーお姉ちゃん！」

「おめでとうございます。あ、ちなみに僕は乗務員ね」

「サエ、いい友達もったわねえぇぇ！」

「泣ける、泣けるぞおおおぉ！」

『ど、どしたのそっち』

「な、なんか私が電車の中ってこと忘れて騒いでたらー……聞こえちゃった、みたい」

『へぇ……よし！　そこの人たち！　一緒に歌おう！』

「「「おぉ！！」」」

「「「がってんだぃ！！」」」

『せーのっ！！』

携帯電話の向こうと乗客の人たちの大合唱が、電車の中に響き渡る。

あまりのメチャクチャな展開に私の涙は引っ込んで、代わりにこぼれそうなほどの笑いがこみ上げてくる。

こんなに嬉しい誕生日は初めて。

去年、カカちゃんに祝ってもらえて、いろんなことが始まって。

それが最高の誕生日だと思っていた。

でも違った。

嬉しいことは。

楽しいことは。

幸せなことは――友達といると、際限なく生まれるものなんだ！

『サエちゃん、こんな騒がしい妹だけど、これからもよろしくね。今日は本当におめでとう！』

「はい！」

おめでとう、と言ってくれたすべての人に、ありがとう。

私は今、幸せです。

本当に、ありがとう！

## カカの天下２５５「おめでとう、という言葉」（後書き）

えー、読者の皆様に謝らなければなりません。
またもや長すぎですねっ！！
やー、最近長いのは控えると書いたばかりでこんな……なんといいますか、書き始めたら止まらなくなってしまっていつのまにやらこんな時間でこんな長さに（笑）
でも前の誕生日のときもそうですが、作者的には満足いく出来になったのでよかったです＾＾；

でも読者様的にはどうなのでしょうか……思うところあれば感想くれたら嬉しいです＾＾

これからしばらくは長いの書かないぞー！！
四コマ漫画的に手軽な笑いが基本ですからね！

……でも書きたいと思っちゃったら長くても書いちゃうんだろうなぁ＾＾；
そのときはすいませんがまたお付き合いください（笑）

**カカの天下256「愛は人をモーモーにします」**

「サエちゃんがいなくてさみしー！！」

会社から帰ってきて早々、妹にこんなことを言われたトメです。

「まだ旅行いってから一日しか経ってないだろが」

あれだけ格好つけてお祝いをやり遂げても、やっぱお子様はお子様か。

「こんなに私を放ったらかしにして……浮気してやるんだから！」

「単身赴任の夫を持つ奥さんか、おまえは」

「や、どっちかというと私が夫じゃないかな」

カカとサエちゃんなら……そんなイメージだな。

「そんなに寂しいなら電話でもすればいいだろ」

「その手があったか！！」

「気づかなかったんかい」

「恋はモーモーって言うでしょ」

「盲目ね」

「うるさいな。牛肉食べたいんだよ。モーモー」

あいあい、わかりましたよ。そりゃモーおいしい牛肉あとで買ってきますよ。

「ん、モーモー違うって前にも注意されたような……いいや私の心はモーモーだし。って、あれ！　サエちゃんから写メールきてるじゃん！　写真は……モーモーだ！」

「モーモーうるさいぞー、って本当にモーモーの写真だ」

わかりやすく言うと牛の写真だ。おじさんかおばさんにでも撮ってもらったのか、サエちゃんとのツーショット写真だな、モーモー。

「二人で仲良く写真だなんて……私が浮気する前にサエちゃんに浮気された！」

「や、浮気も何も。相手は牛だよ？」

「このでっかいおっぱいが決め手なの！？」

「や、確かにでっかいけどさ。牛だよ？」

「それとも美味しそうだから！？」

「や、だからさ。牛だよ？」

「だから言ってるの。牛肉食べたい」

……そうですか。

「他の写真も、ほら見て！」

「おー、山猫とのツーショットだな」

「このドロボウ猫！」

「うまいこと言うね」

「うぅ、いろんな浮気相手との写真が……」

「全部動物じゃん」

「人間だって動物だよ！」

む、そりゃそうだけどさ。

「これ見て」

「お、サルがコスプレしてる。これは……警官の服か」

「このドロボウ警官！」

どっちだよ。

「ううう……これは？」

「お、動物園シリーズ終わったな。これは……雷門と一緒に映ってるな。へぇ、行ってきたんだ」

「この横のおっさん達は？」

「雷神と風神の像だな」

「この人たちと浮気してたんだね！」

おいおい。

「これが本当の電撃結婚！？」

たしかに雷門だけどさ。

「この雷オヤジめ！」

たしかに雷神さんはそれっぽいけどさ。

「この風オヤジめ！」

単なる風邪ひいたオヤジみたいだぞ、それ。

「ううーん……サエちゃーん」

うーむ、カカはサエちゃん中毒だな。しばらく会わないと頭がおかしくなるようだ。麻薬みたいなもんか。

麻薬な少女、サエ。

……なんか怖いキャッチフレーズができてしまった。妙に似合うし。

とにかく、それは置いといて……麻薬が切れた人を鎮めるにはどうすればいいんだろう。

麻薬じゃわかりにくいか。たばこに置き換えてみよう。たばこを吸いたくても吸えない人は……

口に何かを入れる。

「……牛肉買ってくるわ」

「モーモー！！」

カカはきっとお腹がすいてるから変になったんだ。狂ったようにモーモーうるさいし。これが本当の狂牛病か。食べる前に病気にさせるとは……やるな狂牛病。

ともあれ、きっとお腹がいっぱいになればいつもの変なカカに戻るさ。

……あれ？　なんかおかしいな。

ま、いっか。

## カカの天下２５６「愛は人をモーモーにします」（後書き）

なんか妙にモーモー率が高い話になりましたね。
珍しくサエちゃんに会えなくなり、カカは随分と不安定に変ですね。まぁ寂しいだけでしょうけど（笑）
サエちゃんは明日帰ってくるから、もうちょい我慢ねカカ！

## カカの天下257「サエちゃんがいっぱい」

どもー、トメです。

今日の夕方にサエちゃんたちが旅行から帰ってくるとのことなので、僕とカカとサユカちゃんは駅の改札口前まで迎えにきていました。

言い出したのはサエチンが切れておかしくなってきたカカです。

サエチンとは何かって？　たばこのニコチンみたいなもんですよ。

「サエちゃん……サエちゃーん！」

「ねぇカカすけ。君、なんか病気っぽいよ？」

同感だ。

「ま、サエちゃんを吸えば治るだろ」

「す、吸うって、どこをですかトメさんっ」

「え？　あ、そだそだ。たばこじゃないんだった。吸わないよな……」

吸うとしたらどこだろうか。

「あ、サエちゃん！」

カカが嬉しそうに駆け出すのを見てホッとした。

よかった。これで妙なテンションのカカとオサラバできる。よかったよかっ――

「サエちゃん！　しばらく見ないうちに歳をとっちゃって……」

「……あぃ？　あんじゃってぇ？」

よくねぇよ！！

「カカ！　その人はサエちゃんじゃない！」

どっからどう見てもばーさんだろうが！

「え、でも帽子」

「白い帽子かぶってるだけのばーさんだろうが！」

「失礼な若造じゃな！」

「え、あ、すみませんおばあ様！」

「わしゃじーさんじゃ！！」

「……うそん」

だってスカートはいてるのに……あ、怒って行っちゃった。

「か、カカすけ。大丈夫？」

「あー、サエちゃんが見える。なんか忙しそうに働いてる……」

「それ駅員！　サエちゃんの二倍は身長あるのにどうして間違える！」

「二倍……はありますね、たしかに。何食べたらあんなにおっきくなるんでしょうっ」

「サエちゃん！」

「そりゃサエちゃん食べたらそれくらいおっきくなっても不思議はないけどさ」

「何が起こるかわからない毒キノコみたいなもんですよねっ」

「それ、なんか姉みたいな扱いだなぁ……って、あれ。カカは？」

そういえば「サエちゃん！」って叫んだよな。っていうことは……

「会いたかったよー！」

また違う人に声かけてるし！

「サエちゃん！　しばらく見ないうちに真っ黒になって……」

「カカ、それ黒人さんだから」

いきなり抱きつかれた黒い外人さんは困惑して――

「オゥ！　カワイイデスネー」

してないし喜んでるし。

「オゥ！　ソレホドデモー」

「ニホントワ、ナンテスンバラスィークニナノデショー！」

「イエース！　アイアムジャパーン！」

おまえが日本じゃないデショー。

「イェーイ！　イッツロリッコガール！」

「イェーイ！　アイアムイェーイ！！」

なんか仲良くなってるし。

「メールアドレス交換した」

なんか交友関係広めてるし！

「カカすけ……君すごいわね、わたし英語なんて全然わかんないのにっ」

や、いま使われた英語ってイェーイくらいなんだけど。

「イェーイ♪」

人違いしたくせに楽しそうだなカカ。

「あ、サエちゃん！」

今度はなんだ――と思ったら本物だよ！

「サエすけっ」

「わ、お出迎えだー」

お土産っぽい荷物を抱えたサエちゃんは嬉しそうに微笑んだ。その顔を見る限り、旅行は楽しかったみたいだな。

「サエちゃーん！　サエちゃあああん」

「あれ、カカちゃん熱ある？」

「……え？」

僕とサユカちゃんは顔を見合わせ、慌ててカカに駆け寄った。

おでこに手をあてる。確かに熱い。

「もう、トメお兄さん！　ずっと一緒にいて気づかなかったんですかー？」

「……面目ない」

顔が赤いのはサエちゃんが帰ってくるんで嬉しいからとばかり……

「風邪ひいてるかどうかなんて見ればわかるじゃないですかー。ち

ょっとおかしいなーとか思わないとダメでしょー！」

「だ、だってこいつ、いつもおかしいもん」

「言い訳しないのー！　早くカカちゃんを休ませてー！」

「は、はい！」

「うぅー、サエぢゃーん」

「カカすけ。とりあえずベンチいこっ」

サエちゃんに会って気が抜けたせいか、カカはフラフラと倒れそうになっていた。

――結局その日はサエちゃんのお土産話も聞けないまま、カカを病院へと連れていって終わった。ただの風邪だそうだ。

サエちゃんサエちゃんと病気みたいに言ってると思ったら、まさか本当に病気だったとは……

すまん、カカ。気づいてやれなくて。

だっておまえ、いっつも変なんだもん。

## カカの天下257「サエちゃんがいっぱい」（後書き）

今日のカカは二割り増しくらいに変だったのに……トメなら気づけると思ったのに！

まぁ、えてして恋の病と風邪の病は似たようなもんですし（そうか？）気づきにくいのも仕方ないのかもしれません。

それにしてもアイアムイェーイ！

……や、言ってみたかっただけです（笑）

## カカの天下258「お見舞いに行こう！」

「ねーサエすけっ、ホントにいくのー？」

「当たり前だよー。せっかく日曜日なんだし」

どうもこんにちは、サエです。

今日は風邪をひいたカカちゃんのお見舞い品を探すため、サユカちゃんと商店街へと来ています。

「旅行のお話もしたいしー」

「そういえば写メに映ってた牛さ、すごいおっぱいだったわねっ…　…じゃなくて。風邪うつるからこなくていいってカカすけも言ってたし、別に行かなくてもいいんじゃない？　カカすけのことだから明日には治ってるって」

「わかんないでしょー。風邪で死ぬ人もいるんだからね。お見舞い行かないままカカちゃんが死んじゃったらどうするのー？」

「そんな大げさな……」

「じゃーもし風邪ひいたのがトメお兄さんだったら？」

「そりゃ行くわよ」

「風邪うつるかもしれないのに？」

「どうぞいくらでもカモンよ」

「ちょっと気になったんだけどー……もしトメお兄さんが死んだら、サユカちゃんどうする？」

「トメさんを殺したヤツを殺して私も死ぬわっ」

「トメお兄さんが病気で死んだ場合は？」

「その病原体をこの世から消してから死ぬわっ」

サユカちゃんの愛って世間に優しいなー。

「じゃー私やカカちゃんが死んだ場合は？」

「えっ、いや……別に？」

「何もしないのー？」

「しないわね」

「……そうなんだー」

超がっくり……

「な、なによっ、そこまで落ち込まなくても」

「……そうなんだー」

「ちょ、ちょっとは悲しむかなっ」

「……そうなんだー」

「お線香あげるときに泣いたりしてっ」

「……そうなんだー」

「わ、わかったわよっ、ちゃんと号泣して名前叫んであげるわよっ」

「……そうなんだー」

「ああもうっ！　そうね君らが死んだら悲しみのあまり、昨日のカカすけみたいにおかしくなるかもねっ！」

「……そうなんだー」

「そうそうっ、赤色を見たらカカすけ思い出して闘牛みたいに突っ込んでいったりっ！　黒色を見たらサエすけ思い出してブラックホールに吸い寄せられるみたいに突っ込んでいったりするかも――」

「あ、このゼリーおいしそー」

「聞けやっ！！」

「そんなに悲しんでくれるのー？」

「聞くなっ！！」

「どっち？」

「えっと、いやっ、だからっ！」

「答えてよー、ねーねー」

超ニヤニヤ♪

「楽しいのっ！？　わたしをおちょくるのがそんなに楽しいの！？」

超うん♪

「絶対何もしてやらないんだからっ！」

「いつものジュースはこれだよねー」

「だから聞けやあっ！！　あのねぇ――あ、カカすけ風邪ひいてるんだからこっちのビタミン豊富なジュースのほうがいいでしょ」

「あ、そだねー」

「あとね、うちは風邪ひいたときには決まってプリンを食べるのよ。だからゼリーよりプリン買いましょ。あと栄養ドリンクもさ」

「サユカちゃん、なんだかんだ言いつつお見舞いする気満々だねー」

「べ、べつに、知ってること言っただけよっ」

「トメお兄さんが風邪をひいたときとは全然違うお見舞いになるねー。あ、これサユカちゃんと仲良くなる前の話ね」

「むっ、そのときはどんなお見舞いだったの？」

「えっと、たしかー……枕元にレモンと食べかけのお弁当とお線香と、『ご愁傷様』っていうメモを」

「サエすけ……それ変」

「だよねー」

「そういうの変なのはカカすけにやるべきよっ。トメさんにそんなのダメ！」

「じゃレモンとお線香買う？　ご愁傷様はどうしよー」

「本当にやらなくていいけどさっ！」

サユカちゃんで遊びつつ適当なお見舞い品を買い込んで……いざカカちゃんの家にやってきた。

ピンポンを鳴らしてしばらくすると、パジャマ姿のカカちゃんが顔を出す。

「おぉ、お見舞いだー。いいって言ったのに、ありがとっ」

「カカちゃん！　起きてて大丈夫なの？」

「うん、そこそこ調子は戻ってきたから。トメ兄は買い物中だし」

「トメさんいないのかぁ。じゃ帰ろっかなっ」

「と言いつつさっきまですごい熱心にカカちゃんのお見舞いをねー」

「違うっ！　わたしは別に――」

「あれ、サユカン。そのバッグからはみ出てるのって」

「あー！　サユカちゃん秘蔵のデンジャーケロリン人形だ！」

「あ、えっと……あはは、なんかもぐりこんでたみたいねっ、いけない子なんだからっ。仕方ないからカカすけに貸してあげるわっ」

「風邪でお布団にいることが多いカカちゃんが寂しいと思って持ってきたんだねー。なんだかんだ言って最初から来る気だったんじゃーん」

「違うわっ！　これはケロたんが勝手に！」

「まま、とにかく中に入って。サエちゃんの旅行の話も聞きたいし」

「うんうん、何が聞きたいー？」

「写メに映ってた牛、おっぱいおっきいよね」

「なんで二人ともそこ見るかなー」

「ちょっとっ、聞きなさいってばケロたんは別にっ」

そんな感じでわいわいと、お見舞いタイムがスタートです。

……あれ。

このお話、なんか続くみたいだよー？

## カカの天下２５８「お見舞いに行こう！」（後書き）

はい、なにげに続きます。

そして今日はサユカンＤＡＹです。

カカとサエちゃんだけ誕生日だったので、出番控えめだったサユカちゃんをいつもよりいじります。

それだけです。

## カカの天下259「お見舞いだった、よね？」

「雷門なのに雷落ちなかったんだよー」

「えー、じゃあその門にせものかな」

「そんなのしょっちゅう落ちてたら雷門が地獄への門になっちゃうでしょっ。あ、そっか。帰りたかったのねサエすけ。故郷に」

「んふふー。どゆ意味かなサユカちゃん」

「悪いことする真っ黒な人はそこに住むんでしょっ？」

「じゃーサユカちゃんとケロたんは天国でお花に囲まれて住むんだねー」

「あ、サユカンいまちょっと『それいいな』って思ったでしょ」

なんか賑やかだなー。

「ただいまー」

「トメさん、お邪魔してまーす」

「お邪魔してますっ」

「おかえりトメ兄」

おかえりましたトメです。

今日は日曜日、そしてカカは風邪で寝込んでいるということで色々と買い物に行っていたのですが、その間にサエちゃんとサユカちゃんが遊びにきたみたいです。

それにしてもサユカちゃんの頭の上に乗ってるいつかの忌まわしきカエル人形が妙に気になる……誰も気にしてないからツッコまなくていいのかな？

「トメお兄さんも改めまして、この前はプレゼントありがとうございます」

「ん、ああ。いいよそんな。たいしたものあげてないし」

「いえいえー。使い心地よかったですよ、高級耳かきセット」

喜んでもらえてよかった。四千円も出して買ったかいがあったというもんだ。

「サユカちゃんもありがとね、写真」

「む、何の写真あげたのサユカン」

「……秘密」

「でも百枚以上あってびっくりしたよー」

「……だって何回撮っても『あの服でも撮って』だの『この表情で撮って』だのうるさくてうるさくて結局何時間かかったことか……まったくもうあの人は……」

「サユカちゃん？　何をぶつぶつ言ってるのー？」

「えっ？　いやっ！　なんでもないっすよ！！」

「ねー、何の話なのー？」

ふむ、いい感じに盛り上がってはいるんだけど……

「さて、サエちゃんサユカちゃん。楽しんでるとこ悪いけど、適当なところで切り上げて帰ったほうがいいよ。カカも調子は良くなってるけど治ったわけじゃないし」

「でもカカちゃんのことだからジッとしてるわけありませんよー？」

「わたしらがヘタにいなくなると、目を離した隙に家を抜け出してなんかやらかしますよっ」

「……お二人さんや。私をなんだとお思いで？」

素晴らしき友情だなぁ。

「その点は大丈夫。これから一緒に撮りためたビデオ観るつもりだから」

「何を観るんですかー？」

「最近話題の恋愛ドラマ、『初恋は実らない』だよ」

「あ、それ知ってるわっ」

「私も知ってますー。女優さんが綺麗なんですよねー」

不健全なタイトルなわりに人気なんだよなー、これ。

「とにかく、これ観るから大丈夫だ。観るよなカカ」

「ん、これは観とかないとね」

「だからサエちゃん、サユカちゃん、今日のところは――」

「……トメさんの初恋って、どうだったんですか？」

……ぅえ？

なんでサユカちゃん、目がキュピィンって光ってんの？

「わ、気になるなーそれ」

「そういえばそういう話って聞いたことないな。トメ兄、どなの？」

「は？　や、たしかに実りはしなかったが……」

「その話を詳しく聞いたら帰りますっ！」

「ええぇ？　そんな面白いもんじゃ……」

「その話を聞かなきゃ帰りませんっ！」

「そうだそうだー。トメお兄さん、私たちにカカちゃんの風邪をう

つしたくなかったら、おとなしく白状してください」

どんな脅迫だよっ！？

「トメ兄、白状しないと私、風邪治さないよ？」

だからどんな脅迫だよっ！？

「トメさん。わたし、すごく聞きたいですっ」

だからどんな脅迫――って脅迫じゃないよ素直だよっ！！

「そんなに聞きたいのか？」

あー、わかったわかった。

わかったから三人そろってそんな首が取れそうなくらい頷くな。

はぁ……お見舞いタイムがなぜこんなことに。

「話が終わったらさっさと帰るんだぞ」

「「はーい」」

三人仲良い返事だことで。

「あれ、返事したはいいけど私どこに帰ればいいんだろ」

「カカすけ、そんなのどうでもいいからトメさんに注目だよっ！」

「一緒に雷門から地獄へ帰ろうかー。多分カカちゃんもこっちの人だしー」

「え！？　一緒に……サエちゃ、そ、その話もっと詳しく――」

僕が帰っていいか？　部屋に。

……まぁ、そういうわけにもいかないようで。

僕の初恋の話をしなくてはいけないようだ。

「言っとくけど、そんな面白いもんでもないからな」

話すのは次回な、というわけで続く……続かなくてもいいけど。

## カカの天下259「お見舞いだった、よね？」（後書き）

はい、というわけでまたまた続きます。
先日からちょこっと匂わせてたトメの初恋のお話です。カカラジでその話が出たときから書かなきゃ書かなきゃと思っていたのですが……こんなところに持ってきてみました（笑）
次回はそのお話ですよん。
トメはおもしろくないとは言いましたが、はてさて……

## カカの天下２６０「トメの初恋」

どうも、トメです。

何の因果か誰かの陰謀か、カカ達に僕の初恋話をすることになってしまいました……

「トメ兄。はやく」

「風のようにはやくー」

「光のようにはやくっ」

「はいはいわかったわかった。えーっと、あれは小学校に上がる前だったかな」

「トメ兄、初恋はやいね」

ああ、本当に随分と前の話だ。その頃のことはあまり覚えてないが……初恋だったせいか、その部分だけはわりと覚えてる。

「初恋っていうのは、そのとき隣の家に住んでた女の子でね、物心ついたときからの幼なじみで、僕はその子と毎日のように遊んでたんだ。例えば……」

「今日はドリブルして遊びましょ！」

「いいよー。でもボールはどこ？」

「あんたをドリブルするのよ！」

「ぼくっ！？」

「うりゃうりゃー！」

「うあああああああ！」

「懐かしいなぁ」

若かりし頃の思い出に浸りながら目を細める。

「ね、ねぇカカすけ。これって仲いいのかしらっ」

「んー、いいんじゃないかな。これくらいなら」

「カカちゃんもやりそうなことだしねー」

「なるほどっ」

「続き話していいか？」

「「「あ、どぞどぞ」」」

そんなある日。

いつものように近所の公園で僕らは遊んでいた。

「今日はパスして遊びましょ！」

「ぼ、ボールは？」

「もちろんあんたよ！」

「え、ちょ、ちょと待って……あああパスってどこの誰にすんの！？」

「画面の前の皆様に！　へい、パース！」

「また変なテレビ見たでしょおおおお！！」

そのとき、その子がふと動きを止めたんだ。

何かと思って彼女の視線の先を見ると、公園の隅で男の子三人が寄ってたかって一人の女子をいじめているのが見えた。

「あいつら、また……」

「知ってる子？」

「いじめてるほうはね。ちょっと行ってくるわ」

彼女はそう言ってその男子たちへと向かっていった。

「気の強い子でねぇ」

「トメ兄の話を聞いてると、気が強いっていうより」

「単純に強いんだと思いますー」

「それもそうだな。で、なんでサユカちゃんは『の』の字を床に書いてるの？」

「なんだかんだでやっぱ仲いいと判断したんだねー」

「自分で聞いといて落ち込んだかサユカン」

「……よくわからんけど、話進めるぞ」

「ドリブル攻撃！」

「いだだだだだだだだだだだ！！」

あれ痛いんだよなー、なんて思いながら僕はその子が男子をやっつけるのを見ていた。

「く、くそぅ……とんでもない攻撃しやがって！」

「いたいよぅ……うぅ、もうおまえなんかと遊んでやらないからな！」

「へんっ、望むところよ！」

「おまえみたいならんぼーな女、どうせ俺ら以外に友達いないんだろ！」

「残念でした！　オレにはこれっくらいのことなら笑いながら付き合ってくれる、最高の友達がいるのだっ！」

その子のその言葉を聞いたとき、どきっとした。

僕さえいれば他はいらない。そう言ってるように感じたのかもな。

ドリブル攻撃は笑えないが。

「うぅ……覚えてろー！」

定番すぎる捨て台詞を残して、去っていくいじめっ子たち。

「覚えてたら今度はパス攻撃してやるわーっ！　ふぅ。大丈夫かーってあれ？　女の子いない」

「に、逃げちゃったみたい」

「そっか。ま、いいや。へへ」

そのとき笑ったその子の顔が、すごく格好よく、可愛く見えて。

気がついたら好きになっていた。

「ま、子供のころの初恋なんてこんなもんだよな。ただ仲良くしてるだけで意識するようになったり……なんでサユカちゃんドリルみたいに『の』の字を書き続けてるの？」

「や、だって。ねぇ？」

「大丈夫だよサユカちゃん。トメお兄さんは初恋は実らなかったって言ってたんだよ？　ちゃんとその子をボロクズのように捨ててくれたよー」

「人聞き悪いことを――」

「そんなことよりっ！」

うぉびっくりした。

「トメさん……その子、もしかしてわたしたちも知ってる人ですか！？」

「へ？　あ、あぁ。よくわかったな」

「やっぱりっ！」

「わ、そうなんだー」

「自分のことをオレって言う女の子……って聞いて考えてはいたんだけど」

「おぅ、それでその初恋が終わったときの話だけど――」

そろそろ告白とかしちゃおうか、とか思っていたとき。

珍しく神妙な顔したその子が、こう言ったんだ。

「引っ越すことになっちゃった」

「……え？」

せっかく好きになったのに……

そのときはそう思ったよ。

次の瞬間、砕け散ったがな。

「隣に」

「……はい？　隣って、僕んちだけど」

「うん、だから隣に」

「……どゆこと？」

「んとね、昨日初めて知ったんだけど――オレ、トメの姉らしい」

「え？　ぇ？　えええええええええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

「「姉かい！！！」」」

「うあぁ！？　な、なんだよ、わかったんじゃなかったのか？」

「や、私はてっきりテンカ先生かと」

「私もー」

「ていうか、お姉さんだと知らなかったのはどういうことですか？」

「うちの両親が五年ほど夫婦喧嘩して別居してたんだとさ。離婚寸前までいったから子供に余計なことは言わないようにしてたらしい」

「別居って……隣じゃん！」

「たまたま隣に母さんの親戚が住んでてな、お世話になってたそうだ。ま、そういうわけで僕の初恋は終わりだよ」

「あ、あのトメさん。その、お姉さんに、もう好きとかそういう想いはもってないんですかっ」

「もつわけないだろ実の姉に」

僕は極めて健全ですので。

あと、すっかりバケモノになってしまったアレに恋愛感情なんか持ちようがない。

「はいはい、話は終わり。風邪がうつらないうちに帰った帰った」

「「はーい」」

カカと一緒に二人を見送りに玄関へ。

「おじゃましましたー」

「今日はお話、ありがとうございますっ！」

丁寧にお辞儀する二人。

そしてぼそっとカカが言う。

「にしてもあの姉にトメ兄が初恋……ぷ」

「「ぷ」」

「おまえら帰れ！！」

あぁ話すんじゃなかった！！

僕だって今から思えば「ぷ」だよ！

……や、自分のことだから笑えねぇ。

## カカの天下２６０「トメの初恋」（後書き）

はい、ようやく書き終えたトメの初恋、こんなオチです（笑）
初恋は実らない……皆さんはどうでしょうか？　私も実りませんでしたが、当時小さいころのことでもそのときのことは結構覚えてるんですよねー。

そうそう、話は変わりますが。
今回、携帯小説としてモバゲーのサイトにもカカの天下を投稿していくことにしました。まぁ先日この作品の文章を勝手に使われていたりもしましたが＾＾；そのサイトで掲載すること自体はいいことだと思いますので。管理は友達に任せたので『ルシカ代理人』という人がちょっとずつ話を載せていく予定です。特に文章を変えたりはしませんが、もしお暇でしたらそちらも覗いてみてください＾＾

にしても姉って……ぷ。

## カカの天下２６１「お見舞いだってさ、がんばれタケダ」

「我輩はタケダである！」

「名前はまだない」

「あるわっ」

「知らなかったー」

たしかに公開はしてないがあるのだよ！　というわけでタケダだ！

今日は一大事！　なんとカカ君が風邪で学校を休んだというではないか！

「カカ君の容態はどうなのだ、サエ君！」

「んとねー、電話で聞いたトメお兄さんの話だとー」

『カカ、今日学校いけるか？』

『んー……いくー……』

『まだちょっとだるそうだな……よしカカ。これ、なんて読む？』

『んー……定が焼き生食』

『焼いてんのか生なのかどっちだよ。ダメだこりゃ。休め』

「こんな感じらしいよー」

むむぅ、さすがトメさん。独創的な容態の確かめ方だ。しかしどこに『生が焼き定食』の文字が書かれていたのかが少し気になる。

「あいやわかった、そこまでひどいのならこのタケダ、お見舞いにつかまつろう！」

「でもさタケダ君。風邪ひいてるときって身体が弱ってるし、面倒な人と会うのは疲れるから嫌がられると思うよー？」

「相も変わらずきっついなー！　カカ君やサエ君の誕生日とかいろいろあって仲良くなってきたかと思ったのだが」

「誕生日ねー、歌を歌ってくれたりおめでとうって言ってくれたのは嬉しかったけど……プレゼントがねー」

「なんだ、何か問題があったか？　うちの親がやってる病院の診察券だぞ。面倒な手続きや手数料が浮いて、なかなかにいいプレゼントだと思うが」

「女の子の誕生日に診察券をプレゼントなんて有り得ないよー。タケダ君が診察してもらったほうがいいよ。頭の中身を」

「脳に問題が！？」

そこまでおかしいか!?　だって病院に気軽にいけるようになるのだぞ！　病院は百薬の長というじゃないか！　絶対に喜んでもらえると思ったのだが……

「い、いやいやその話は置いておこう。今はカカ君へのお見舞いの話だ」

「そうだったね。行って嫌われるか、行かないで忘れられるか、どっちがいいのー？」

「その二択しかないのか!?」

「だってカカちゃん、最近タケダ君のこと目に見えて嫌ってるっぽいもん。なぜかはわからないけど」

「むむむ……いや、男たるもの行動が大事だ！　やらないで後悔するよりーー」

「やって自爆するほうがいいよねー」

「そ、そう、そう……」

ば、爆発するのか……いや、恋は爆発だという言葉もあるしな！　怖いが頑張ろう！

「そうだ、お見舞い品として何かおいしいものを持っていけばきっと大丈夫だ！」

「あー、カカちゃんモノに釣られやすいからね」

「エイで鯛を釣るのだ！」
「エイエイおー！」

そのエイを購入し、いざカカ君の家へ！

来たの、だが。

「あー、カカはいま姉に連れられて病院いってるよ」
「そ、そうでありますか……」
「タイミング悪いねー」

がっくし。せっかく勇気をふりしぼって突撃したのに……いたのは俺の未来の兄貴だけか。

「とりあえずもらえるもんはもらっとくぞ。あ、ちゃんとタケダ君からって言っとくから」
「お、お願いします！」

というわけで――残念だが本日は解散、か。

「サエ君はこれからどうする？」
「タケダ君で遊ぼうかなー。暇だし」

「……俺、で？」

その後。

俺はサエ君にもてあそばれ――もとい、遊ばれた。

簡単に言えば、他愛もない話をしながら色々とからかわれ続けただけなのだが……どうしても俺はこの子に口で勝てん。

「でもカカちゃんがいなくて、かえってよかったかもねータケダ君。会わなかったら好感度下がることもないし」

「上がるかもしれないだろう！」

「それはないんじゃ――」

「おやキンジロウ。帰ったのか」

「父上！」

散歩しながら喋っているうちに、いつのまにか我が家の近くまで来ていたようだ。

「そちらはお友達か？　こんにちは」

「こんにちはー……キンジロウって名前なのかータケダ君」

そんなびみょーな目で見るなサエ君！　いい名前じゃないか！

「あ、そうそう。おまえがいつも話してるカカちゃん。さっき診察

にきてたぞ」

「なにぃ！？　ここにきたのか！　なぜ……あ」

「タケダ君、まさかとは思うけどカカちゃんの誕生日にも……」

「……だ、だって喜んでくれるかと」

「好きな女の子の誕生日プレゼントに診察券……やっぱり君が診察受けたほうがいいよー。心の」

「心が病んでるとまで言いたいのか！？」

「うん。それじゃ好感度も上がらないよキンちゃん」

「その呼び方はやめろ！」

「ほんとほんと。変だぞ、息子」

「プレゼントに診察券すすめたのは父上でしょ！」

「まさか本当にやるとは思わなかった」

「うぉい！！」

うぅ……しかし！　いかに前回の診察券がダメだったとしても、今回のお見舞い品で好感度アップのはずだ！

――そのころ、トメとカカは。

「タケダ君？」

「ああ、サエちゃんと一緒にきてな、なぜかお見舞いでエイひれをくれたぞ」

その品を選んだ原因が『エビで鯛を釣る』を読み間違えたなどとは、もちろん彼らは知る由もない。

そしてカカはお見舞い品どころではなかった。

「さ、サエちゃんと、二人で？」

「あ、ああ」

「……あんにゃろぉ！　不幸になれタケダ！！！」

翌日。

カカの風邪は治った。

代わりになぜかタケダ君が風邪をひいた。

結局カカと会ってないからうつるはずはないのに……

ミステリーである。

ただ一つ、わかることは……タケダ君が報われないということだけであった。

## カカの天下２６１「お見舞いだってさ、がんばれタケダ」（後書き）

タケダ君の名前初公開！

けっして二ノ宮さんの名前からいただいたわけではありません（笑）とあるネタのためにこの名前となりました。そのネタ、つまり名前の秘密を明かすのは……まだまだ先となるでしょう。

ま、とりあえずガンバレタケダ。

## カカの天下２６２「カカ天動物園」

「おもしろいっしょ！　『病院』なんて居酒屋。今度いってみようよ！」

「わー、いいですねー。血のようなカクテルとかあるんでしょうかー」

「赤くなくてもアルコールはあたしにとっちゃ血みたいなもんだけどね！　あ、なくなったね。ほい血のおかわり」

「ありがとうカツコさん」

なんかいる……なんかいる！

どうも、異種接近遭遇したっぽいトメです。

「あれ……お姉とサカイさんとお酒だよね、トメ兄」

「ああ。認めたくないけどな」

何が認めたくないかって？　別に姉とサカイさんが飲むのは珍しいことじゃない。あの二人は仲がいいのは知ってる。じゃあ、何が問題なのか。

「おー！　我が弟よ。あんたも飲むか！」

「あ、トメさんカカちゃんこんにちはー」

「なぜにアナタらは公園で酒宴なんぞやっておられるのでありますか」

そう、問題は場所だった。

カカ達もよく使っているうちの近くの公園、その滑り台のてっぺんで器用にもお酒とおつまみを広げているではないか。

「なぜと聞かれたか！」

「聞かれたよーカツコさん」

「それは……そこに酒があるから！」

「ねーよ、滑り台の上なんぞに」

「それがあったのよ」

「嘘！？」

「おう、ほら」

「それは今置いたんだろが」

「うっさいな。過去ばかり見てるなよ」

ダメだこの酔っ払い。

「はぁ……まぁいいや。こんなのは放っておいて帰るぞカカ――カカ？」

ふと気がつけば隣にいたカカが消えて……あ。いたいた。なんか三匹の犬と戯れてる。

「トメ兄！　ほらこの犬たち、ずっと前に話した犬だよ」

「犬？　ずっと前ってどの話だ？」

「６２話」

「何よりもわかりやすいがその表現はやめい！　えっと……ああ、前に二股かけてるとか言ってた犬の話か」

相当の前の話だが、たしか妙な名前で変な鳴き声の犬どもが三角関係でもめてたとかいうことだったな。

「で、結局どうなったんだその三匹」

「あ、それあたしが知ってるよ」

姉？

「八兵衛とビシュソワーズが仲直りして、フランソワーズが平等に付き合うってことで解決したらしい」

「なぜにそこまで犬に詳しい」

「犬といえば……うちのラスカル、どうしたんでしょう」

「そーいえば見ないね、私の天敵犬。はっ、まさかやっぱり姉が食

べたんじゃ！？」

「いえいえ、ただ単にうちから逃げただけですよー。散歩と食事とトイレの世話をサボってたらー」

「全部じゃん」

「どうにも面倒でー」

ほんっとダメ人間化してるなこの人。仕事いってるらしいだけマシだけど。

「ラスカル逃げてたのか……むぅ」

敵と言いつつラスカルのこと嫌いじゃないんだよなカカ。

「カカ、ラスカルはきっと戻ってくるさ」

「公園にたまにいるよ？　呼ぼうか」

「そうそう、すぐに姉が呼んで――呼ぶの！？」

ピー！　と姉が口笛吹くとあらフシギ、どこからともなくラスカルとその仲間達が現れた！

「おい姉、いつから動物使いになったんだ！」

「こないだの墓参りのときにもやったっしょ。あたし動物呼べるのよ。なぜか」

なぜだよ！？

「カツコさん……なぜ言ってくれなかったんですか！？　わたし、ラスカルのことちょっと反省してちょっと心配してたんですよー！」

ちょっとじゃダメだ。めいっぱい反省しなさいアンタは。

「へ、いや、なんでって……てっきり野に離したのかと。ラスカルだけに」

「なるほどー！」

納得していいんスかサカイさん。

「わん！　わん！」

「ねー、このラスカルにくっついてる小さい子らはー？」

「ああ、ラスカルの子供だよ。あたしは右からエベレスト、アンデス、ハイジって名付けたけどね」

「なんだその山脈兄弟犬、ってハイジだけ違う？」

「アルプス山脈よ」

なるほど。

「にしても……えらい犬が集まったな」

「にゃーん」

「あ、総理大臣だ」

カカがとてとてと現れたネコを捕まえる。

さて、今集まっている獣たちの名前を並べてみよう。

ラスカル、エベレスト、アンデス、ハイジ、八兵衛、フランソワーズ、ビシュソワーズ、総理大臣、姉。

どこの国だここは。

「あん！　あん！」

「わおーん」

やかましいし。

「ワン！」

「ツー！」

あ、いまのカカね。

「ぎゃわわん！」

「ビビデバビデブー！」

「しゅわるつねっがあああ！」

「前にも思ったがその鳴き声はどいつの鳴き声なんだ!?」

テレビに出せるレベルの鳴き声だぞ!

「あ、しゅわるつねっがー!　はあたし」

「姉かよ!?」

てことはこないだの犬の恋愛合戦のときにもいたのか?

「ああ、そっか。犬と仲間だもんな頭の中身が」

「びびでばびでぶー!」

「ああ、ごめんごめん。姉より犬のほうが利口――いまの、どの犬の鳴き声だ?」

「そんなこと、どうでもいいっしょ」

「や、しかしこの鳴き声ならテレビに出せるぞ本当に。姉は無理だけど」

「なんでさ。あたしの鳴き声だってイカしたもんでしょ?」

「あぁ、イカれてるよ」

「でしょ!　……あれ?」

イカ違いがわからず首を傾げてる姉は本当にイカんなぁ。

「ラスカル……またわたしのところに戻ってきてくれるー？」

おっと、気がつけばこちらで涙の感動シーンが！！

「あぁ、ラスカル！」

ラスカルは逃げ出した！

「……らすかるぅ」

涙の、シーンが……

「よほど嫌だったんだね」

「飲んでやるー！」

「カカ！　みんな思って黙ってたことをわざわざ言うな！」

「トメさんも飲めー！」

「あたしも飲むぞー♪」

「ぎゃわわん！」

「ビビデバビデブー！」

大混乱なこの状況。

……もうどうにもならんのでここら辺で語るのはやめておこう。

にしても、どいつだビビデバビデブーは。

## カカの天下２６２「カカ天動物園」（後書き）

はい、けっこー前の話を持ち出してきましたが（笑）
登場人物（登場犬？）多いからちょい長めになっちゃいましたね。

はたしてラスカルは戻ってくるのか（名前的に戻ってこなさそうだけど
そしてビビデバビデブーはテレビに出れるのか。
動物側の話は超ゆるゆるーっと進んでいくので超気軽にお待ちください（笑

## カカの天下２６３「むきマロ」

「甘栗おいしいね、トメ兄」

「そだな。あむあむ」

あむあむあむトメです。

今日はカカと二人でテーブルを囲み、ひたすら甘栗を食べてます。

ぱき、と歯で殻をかみ割って。

殻をむきむきして。

ひょい、と口へ放り込んでパク。

これが正しい栗の食べ方ですね。

むきむき。

むきむき。

「マッスル！」

「なんだいきなり」

「ムキムキしてたら叫びたくなって」

「なぁカカ。いつも思うんだが、その突然何かを叫ぶのって病気じ

ゃないのか？」

心の。

「ムキムキ病？」

とてつもない病気が生まれてしまった。

いったいどんな病気なのか、聞いただけでは想像がつかない。

「ああ！　私はムキムキ病にかかってしまった！」

ああ、妹がノッてしまった。

「栗をむきむきして食べ過ぎたんだ！　もう私は身も心も栗……」

それは美味そうだ。

でも食べにくそうだからでかい栗は放っておこう。目の前の小さい栗でいいや。

ぱき。

「あん、かじられたん」

むきむき。

「あぁぁん、服がむかれたん」

ひょい、パク。

「裸の私を召し上がれん！」

「黙って食えや！！」

「だって私は栗だもん」

おそるべしムキムキ病。

ぱき。

「ぐぁ、頭蓋骨が割れた」

むきむき。

「ぐああ、皮膚がはがれた！」

ひょい、パク。もぐもぐ。

「私の身も心もぐちゃぐちゃにいいい！！」

「だから黙って食えや！！」

ホントにおそるべしムキムキ病。

「ムキにならないの、トメ兄」

「じゃあおまえはムキムキになるな」

「ムッキー！　って感じに怒ってくれるなら」

どこまでムキムキにとりつかれてんだこいつは。

「どうやったらムキムキの呪いが解けるんだ……」

「私にムキムキさせなきゃいいんじゃない？」

「なるほど！」

僕はカカの目の前にある皿を奪い、カカの分の栗もむき始めた。

僕はカカの代わりに栗の殻をむく。

むきむきと。

ひたすらに。

そしてそれをカカは食べる。

もぐもぐと。

ひたすらに。

むきむき。

もぐもぐ。

むきむき。

もぐもぐ。

……あれ？

僕、体よく皮むき係やらされてないか？

「カカ」

「むきゅ？」

リスのように頬に栗を詰め込んだカカは可愛く小首を傾げる。

「自分の分は自分でむけ」

「むきゅう……」

残念そうにうなだれるカカ。ふっ、僕としたことが、まんまとしてやられたもんだぜ。

むきむき。

もぐもぐ。

「おいしいね、トメ兄」

「うまいな、カカ」

そんなやりとりがあっただけの、まろやかなマロンタイム。

……まろマロって別にシャレじゃないよ？　もぐもぐ。

あー、おいし。

## カカの天下２６３「むきマロ」（後書き）

ほのぼのと栗を食べる……それだけのお話です＾＾
でもこういうなんでもないお話がカカ天の根本という感じがしてすごく好きなのですが……読者の皆様はいかがでしょうか？
進んでいる途中の物語もありますが……こうやってのんびりおいしいものを食べながら、カカ達と一緒に少しずつゆっくりと日々の物語を過ごしていきたいと思います。

なので「あれはどうなった？」とか「あそこはどうなる？」とかあっても、のんびり気長にお待ちください＾＾
その話の続きを待ってる、と知らせてくれれば、いずれは絶対書きますので（笑）
ではでは。
むきむき。

## カカの天下２６４「病院の天下」

「えっと……あったあった。ここね、『病院』って」

ちっす、あたしカツコ。わかりやすく言うとトメとカカの姉だ。

今日は今度サカイちゃんと飲みに来る予定の居酒屋『病院』の下見にきたのだ。

飲み仲間に聞いて知ったこの居酒屋、本当は今日のうちにサカイちゃんと来る予定だったんだけど……仕事の都合でダメになったそうだ。ちょっと寂しいけど、「仕事で」というのがダメ人間から脱却しつつある感じがするので友人としては良しと思っておこう。

「いらっしゃーい！　ご案内しますので、こちらへどうぞ」

ふむ、『病院』と言いつつ、中も店員さんも結構普通だね。

案内されて席に座り、おしぼりもらって手を拭きながらメニューを開く。

おお、メニューは病院な感じだ。

「とりあえず生ひとつ」

「かしこまりました」

「まさか尿瓶でくるとかないよね？」

「あー、そういう案もあったんですけど、残念ながら却下されたんですよー」

そうか、あたしも残念だ。いっぺんあれでビール飲んでみたかったんだよね。どんな味するか。

メニューを眺めてるうちにビールがきた。普通のジョッキだけど泡がクリーミーだ。ちゃんとうまい入れ方してるね。

それをぐいっとあおり、おつまみを適当に注文する。

白子の脳みそ盛りってどんなのだろー、と期待しつつビールを飲みながら待っていると……

「あのなぁおっさん、あんた親ならちゃんと子供のこと見とけよ！」

「赤の他人のおまえさんにそんなこと言われる筋合いはない！」

なんだか後ろからもめてる声が聞こえてきた。振り返ってみると、どうやら女性客の一人が家族連れの客に注意してるらしい。

「筋合いならあるわ！　あんたのガキがちょろちょろしてたおかげで店員が動きづらくて、あげくのはてにオレのとこにくるはずだった白子の脳みそ盛りを落としちまったんだよ！」

む、それは許せんな。

にしても威勢のいいねーちゃんだ。注文する品も一緒だったし、気が合うかな。

「そ、それは私のせいじゃない！　子供のせいだ！」

「子供を居酒屋につれてきた親のあんたのせいだろが！　連れてくるなら連れてくるでちゃんと監督せんかこのたわけ！」

おー、すげーまともなこと言ってる。

「院長店長！　この子供がうろちょろしないようにお子様ランチでも作ってあげな」

「あいよー」

「それ食べておとなしくしてるんだぞ、そこの子供。あ、値段はもちろんおっさん持ちな」

「そ、そんな勝手に――」

「この店ではオレが法律だ」

おー、すげー勝手なこと言ってる。

でも子供に食べるもんを与えておとなしくさせるっていうのはいい采配だ。それをあっさり店長が了承して、さらに他の客が拍手なんぞを送っているとこを見ると……本当にこの店の主みたいな立場なんだな、あのねーちゃん。

ふむ。

「ちょっと待った！」

気に食わんね、むふふ。

「そっちのおっさんの話はそれでよし、解決、もう喋るな。でもね……そこのあんた！」

「オレになんか用か」

「あたしが来たからにはあたしが法律だ！」

「は？　てめぇ何様だ」

「あんたこそ何様だ！」

「二人とも何様だよ……」

「「お客様だ！！」」

ボソッともらした店員を黙らせ、もう一度向き合う。

「見たところ初めてこの店にきたみてぇじゃねぇか。そのわりに随分と勝手な口叩くんだな？」

「はん、こちとら生まれたときから『あたしがいるとこあたし最強』って決まってんだ」

「この店はオレの天下だ！」

「あたしの天下にするのさ！」

「オレは名前もテンカなんだからな！」

「あたしはカツコだからあんたに勝つわ！」

「上等だ！　勝てるもんなら勝ってみやがれ」

「じゃあまずは武勇伝勝負よ！」

「オレはこないだ警視庁で――」

「あたしなんか国会議事堂で――」

三十分後。

「――とか言ってるんだぜ？　どうだ、おもしろくて可愛いだろ」

「はん、こっちだって可愛さじゃ負けてないよ。あたしの妹なんかこないだむきゅむきゅだったんだよ？」

いつのまにか打ち解けて二人で白子をつついていた。

これだから居酒屋はやめれない。

ちなみに今のは可愛い子勝負だ。

「変な妹だなー」

「あんたの生徒もね」

「「はぁ……まったくカカ（ちゃん）ときたら」」

ん？

なんか名前が重ならなかった？

「あれ……あんた、もしかして！」

「あ、思い出した！」

「カカちゃんの誕生日のときのなんちゃってフランケンシュタイン！」

「そ、そうそう！　そういうてめぇはおみこしカボチャ仮面！」

「いやー、気づかなかったわ」

「……ちょっと待て。てめぇはカボチャの仮面をすっぽりかぶってたから、オレが気づかないのも無理ないが……オレは頭にネジ刺してただけだぞ。なんですぐに気づかないんだ」

「だってあたしネジしか見てなかったもん。ネジに話しかけてたもん。あのネジ男前だよね？　尖ってて」

「そりゃネジだからな」

あー、そっかそっか。どっかで見たことあると思ったんだよな、うんうん。

「さて……明日も仕事だし、今日のところは帰るかな」

「えー、帰っちゃうのかテンちゃん」

「携帯の番号とアド教えたろ。また飲もうぜ」

「おー！　じゃ今度あたしの友達入れて三人で飲もうぜぃ」

「おう！　じゃーあのときのお礼に今日のところは奢ってやるよ」

あのとき？　ハテ？

「んじゃな、姐さん」

「ん、おお。さんきゅ！」

あらら、また一人妹増えちゃった。

あたしの兄弟分も随分増えたなぁ。

「んぐんぐ……んー、よき出会いに乾杯♪」

「あの……私になにか？」

「相手しなさい、院長店長」

「……はいはい。やれやれ、テンカ先生よりすごいのがいるとは」

「何か言った？」

「おかわりいかがです？」

「もらう」

奢りで浮いた分、もっと飲んじゃお。

## カカの天下２６４「病院の天下」（後書き）

ひじょーにたくさんの要望がありました姉とテンカ先生のお話、いかがだったでしょうか。

やー、二人の喧嘩ハチャメチャですね（笑）

まだ二人は出会ったばかりで大した話はしてませんが、なんかこの二人が揃ったらなにやってもいいような気が……やばいやばい、病院の天下はともかくカカの天下は乗っ取られないようにせねば＾＾；

# カカの天下２６５「カカ天クエスト　ＥＰ０」

「こんなの買ってみたー」

「ＫＹクエスト……ロールプレイングゲーム？」

「へー、パソコンのゲームなのねっ」

「うん、みんなでやろうかなーと思って」

カカです。今みんなでサエちゃんちに集まっています。

先日に伝説の右クリックを披露して以来、サエちゃんがパソコンを触ってないとのことなので……教えるついでにパソコンで遊ぼうということになったのです。

「私がやるとまた伝説作っちゃうからー。カカちゃんお願い」

「えー、私伝説見たーい」

「わたしもっ」

「やってやってやってー」

「しないもんしないもんしないもん！」

頬を膨らませてぶんぶんと首を横に振るサエちゃん。

伝説は見たいけど……これが可愛いから許す。

「しかたないなー。まずはゲームをインストール、っと」

ディスクを入れ、画面に出る指示に従って操作していく。

「……トオルさんできたー？」

「誰よそれっ」

「え、だから、カカちゃんが今インストオルってー」

「トオルさん」

「インスが苗字」

「「ぷふー」」

「もう喋らないもん！」

ああごめんサエちゃんでもなんであなたはそんなに可愛いのもう鼻血出すよホントに。

「さ、なんにせよトオルさんできたよ」

「頑張ったわねトオルさんっ」

「……二人とも、きらーい」

だってサエちゃんをからかえる機会なんてパソコンしてるときだけだし♪

「えーっと、まずはキャラ作成だね。主人公の勇者と仲間の設定……おお、魔王の設定までできるんだ」

「勇者はカカすけでいいっしょ」

「私は魔王でいいよーだ、ふーんだ」

「サエちゃーん、そんなこと言わずに一緒に冒険しよ？　ね？」

「……むー、仕方ないなー」

「んーっと、職業も結構あるみたいね。サエすけは……うん、悪の魔法使いって感じよね、っと、あら」

『ひとりめのなかま　サエ　しょくぎょう　悪の魔法使い』

「ほんとにあったわ悪の魔法使い……あ、名前を入れたら性格も出るのね」

『せいかく　はらぐろ』

「うわビンゴだわっ」

「空気読めるねこのゲーム！」

「ああっ、それでＫ（空気）Ｙ（読む）クエストってわけねっ」

「いいもんいいもんいいもーんだ」

「……や、むしろ読めてないよ」

「ご、ごめんねっ、ほら、腹黒ってサエすけのキャラでしょっ、だからつい」

さて、サユカンがサエちゃんを慰めてる間に私の設定もしとこ。

えーっと……名前を入れて、職業が勇者！

『しゅじんこう　カカ　しょくぎょう　ボケ勇者』

「ボケってなに！？」

『せいかく　へん』

「変ってなに！？」

「こ、このゲーム恐ろしいわね……名前を入力しただけでここまで読み取るなんてっ」

「じゃー次はサユカちゃんだよねー！」

「うぁサエちゃん元気になった！」

「サユカちゃんの職業はね、踊り子！」

「あれ、意外と普通なチョイスだね」

『ふたりめのなかま　サユカ　しょくぎょう　手の平のおどりこ』

「手の平のってなにっ！？」

「私の手の平で踊るんだよー」

「どんな職業でどんな仕事よそれっ！？」

『せいかく　さびしんぼう』

「「あー」」

「ちょっとなんで納得してるのよ君ら！？」

「じゃー次、トメいってみよー」

「聞きなさ――トメさん！？」

『さんにんめのなかま　トメ　しょくぎょう　ツッコミ』

「あのさ、これロープレだったよね？」

「ツッコミってどうやって戦うんだろー」

「さすがはトメさん、ゲームでも一味違うわねっ」

『せいかく　つっこみ』

「なんかもうツッコミしかないんだねトメ兄」

「カタカナとひらがなで何か違うのかなー」

「さすがはトメさん、一途なのねっ！」

「じゃー他のも適当に振り分けてみよっか」

結果。

『カカ　しょくぎょう　ボケ勇者　せいかく　へん』

『サエ　しょくぎょう　悪の魔法使い　せいかく　はらぐろ』

『サユカ　しょくぎょう　手の平のおどりこ　せいかく　さびしんぼう』

『トメ　しょくぎょう　ツッコミ　せいかく　つっこみ』

『テンカ　しょくぎょう　王様　せいかく　オレオレしゅぎ』

『姉　しょくぎょう　魔王　せいかく　バケモノ』

「大まかな設定はこんなとこだね」

「……なんていうか、空気読むというより、わたしらが読まれてるわね」

「えっと説明書によると……『現実のプレイヤーの性格も読みながらキャラを作り、さらに設定されたキャラたちの雰囲気を読みながら物語を作っていく新感覚ＲＰＧです』って書いてあるよー」

いろいろ読めるんだね、ゲームも進歩したもんだ。

「あとは登場人物の配役をいくつか……これは性格とか職業でない

みたいね」

「これもちゃちゃっと決めちゃおう」

と、そんなこんなで今日は設定だけで日がくれてしまった。

冒険はまた今度になりそうだ。

でもこのゲーム……名前入れただけでよく正確な性格出せるなぁ。

シャレだよ、笑ってね。

鼻で笑わないでね。

## カカの天下２６５「カカ天クエスト　Ｅｐ０」（後書き）

カカ天のＲＰＧっぽいの書いてみたいなー。
なんてふと思ったことから始まりましたこのお話。
Ｅｐ１からはカカ達が入り込んでゲームをしてるという形で、ＲＰＧという別世界でのカカ天を書いてこうと思います。
もちろんこればっか書くわけにもいかないので（笑）今後ちょっとずつ書いていく予定です。Ｅｐいくつまで続くかはカカ天がいくつまで続くかと同じくらいの謎です＾＾；

# カカの天下２６６「めるメルめるメル」

「ぽちぽちぽちっとな」

ぽちぽちでんなぁ、カカです。

今日はもう夕飯も済ませたので後は寝るだけです。いつ夢の世界へカモンされてもいいようにベッドで寝転がりながら、私は携帯をいじっていました。

――ぴろりん♪

「お、カレーの人からメールだ。なになに……」

『激辛カレー専門店の甘杉さんが潰れちゃったの！　なんでかなぁ』

「えーっと」

『激辛なんだか甘すぎなんだか、わからないからじゃない？』

甘杉さんならおとなしく甘いものを作ろうよ。私甘いもの好きだし。

その代わり私はあんまり辛いのは好きじゃない。カレーも甘口が好み。でもカレーの人は各辛さに合ったおいしさというものを追求してるらしく、甘口から超激辛までなんでも食べるらしい。

――ぴろりんぽん♪

「ん、サエちゃんからメールだ！　なになに……」

『人生楽ありゃ雲あるさ』

うんうん、人生曇ってるひと多いよね。

「じゃあ私は」

『三度目の商事鬼（しょうじき）』

あ、これしりとりね。

わざと字を間違えるのがポイントね。それにしても商事の鬼って本当にいそうだなぁ。三度も何するのかわかんないけど。

――ぽっぺんぱらりん♪

「お、次はサユカンからメールだ」

『いま、ちょーSNだわっ』

「はて……SNとはなんぞや」

KYでK（空気）Y（読め）とか、AYでA（頭が）Y（弱い）とかいう略語が最近流行ってるよね。

それで最近サユカンとのメール遊びで、片方が略語を作る→片方がどういう意味か答える、という問題の出し合いをたまにしてるのだ。

んー、ＳＮ、ＳＮ……Ｓ（先は）Ｎ（長くない）？　違うよね。
ＳＭならわかるんだけど。

『私がいなくてＳ（寂しくて）Ｎ（泣きそう）？』

ぽちっと送信……

――こっぺぱん♪

おお、一瞬で返ってきた。

『そんなわけないでしょっ！　最近冷えてきたからＳ（寒くて）Ｎ（泣きそう）って意味よっ』

「どっちにしろ泣きそうなんだ」

『ＹＮ』って送っとこ。

意味はＹ（よちよちいい子）Ｎ（泣かないの）って感じで。

「よちよち返信、と」

――さゆかんかん♪

「返信はやいなーサユカン」

『Ｙｅｓ？　Ｎｏ？』

「なにが？」

よくわからない。

――さえちゃんまん♪

「あ、サエちゃんから返ってきた。しりとりの返事は……」

『木にしたら撒け』

何を木にしてどこに撒くんだろ、って気にしたら負けだね。

えっと、『け』だよね、んー……

『県高第一』

なんか受験生とかにありそうな言葉ができちゃった。受験ってなんとなく健康に悪そうなのになぁ。

――ぷぅーん？

「む、この音は……やっぱり迷惑メールだ」

登録してないアドレスからくると変な音が出るようにしてあるのだ。おなら、すごいおなら、すかしっぺの三つからランダムで選ばれる。

私の携帯は各相手によって三つの音を設定してランダムに鳴らすことができるのだ。

――カーチャンカーチャンハラヘッター！！

「おぉ、今度は珍しくお姉からのメールだ」

ちなみにお姉はわけがわからないのでわけがわからない音を入れてある。

『カカちゃん聞いてー、シューの手伝いしてたら警備会社の人にスカウトされちったよ！　なんでかな。やっぱ女のわりに背がでかいからかな』

「お姉ってたしか１７０センチ以上あるもんね。でも原因は多分」

『態度がでかいからだと思うよ』

警備にはうってつけじゃないかな。姉が立ってるだけで『近寄ったらいろいろヤバイ』ってオーラが出てるもん。

――チョ～なんでやねんってカンジ～♪

「あれ、トメ兄？　隣の部屋にいるのにわざわざなんだろ」

『独り言と着信音、うるさいぞ』

「……むぅ、反撃」

『いちいちメールうるさいぞ』

送信、と。

あ、隣の部屋から着信音が聞こえた。どれどれ、トメ兄が設定してる私の着信音は……

――カー、カー、カー。

カラスの鳴き声？

や、たしかにカカだけどさ。

「ま、いっか。さて、続き続き」

こんな感じで……音とか、おならとか、なんでやねんが響く夜でしたとさ。

## カカの天下２６６「めるメルめるメル」（後書き）

はい、ただちょっと変なメールをするだけの夜でした。
やっぱ直接喋ってない分テンションは上がりませんね。でもまぁこれはこれでカカ天ぽいかと（笑）

**カカの天下２６７「サラの扱いには充分注意しましょう」**

「カカ、これ朝飯に使うからラップしておいてくれ」

「皿をラップでサランラップ？」

「そんなギャグ言ったつもりはさらさらないが」

初っ端からくだらないこと言ってますがトメです。

夕飯も終わり、残り物を妹にラップさせて僕は洗い物を……と？

――アーネーアーネーアーネー♪

「電話だ」

「トメ兄の着信ってわかりやすいけど変だね」

「変な着信音は変なヤツだけだよ。相手によって細かく違うのだよ」

「気が合うね、私も屁みたいなメールはおならの音にしてるの」

「それなら本物のおならが誤魔化せるな」

「……本当の理由がバレた」

さて、電話電話……部屋に置きっぱなしだったな、たしか。

あったあった。

「もしもし、金も時間も食い物も貸せるもんもやれるもんもないぞ、さぁなんだ」

『じゃー顔貸して。取りにいくから』

「取りにって、僕の顔を？」

『その首、もらいうける！』

「どこの武将だあんたは」

このツッコミって前にもしたな。新しいの考えなきゃなー……ん？　なんか台所から音がしたような。

『首って案外引っこ抜くの大変でさー』

「悪い、なんかあったみたいだから引っ込んでろ」

『む？　引っこ抜けないなら引っ込め？　こりゃ失敬』

よくわからない姉を無視して台所へ。

「大変だよトメ兄！」

「どした！」

「ゆーかい事件だよ！」

「はぁ！？　どこの誰がゆーかいされたんだ！」

慌てて台所に入ると、そこには――床に落ちた明日の朝飯と、それを乗せていたものの残骸。

「……皿割れた？」

「さらわれた」

オゥノゥ！

「おあとがよろしいようで」

「待たんかいゆーかい魔」

ゆーかい魔＝皿割り魔である。

「おまえさ、最近、皿何枚くらい割った？」

「いちまーい、にまーい、さんまーい……」

お菊の皿みたいに数えるカカ。あ、これ有名な怪談ね。とあるお屋敷にいたお菊さんという人が高級な十枚組の皿を一枚割ってしまい、罰として井戸に落とされる。そして死んだはずのお菊さんが毎夜毎夜、井戸から現れて皿を「いちまーい、にまーい」って数えて最後に「きゅうまーい、一枚たりなああい！」って狂っちゃうやつだ。

「九枚たりなあああい！」

「割りすぎだおまえは！」

そんなわけで。

翌日、僕とカカは割った分の皿を買いにデパートまで来ていた。

「トメ兄！　これがいいよ！」

「それサランラップだから」

一回使ったボケはいいよ。

「これは？」

「それサラリーマン」

「誰だか知らんがそれって言うな！」

ごめんなさい知らない人。

「じゃあこれ！」

「それは沙羅（さら）さん！」

「た、確かにそうですけど、なんで知ってるんですか！？」

名札がついてるからです店員さん。

こんな感じで騒ぎながらも、青い模様が涼しげないい皿を見つけ

ることができた。

会計を済ませて袋詰めしてもらう。

詰めてもらってる間、カカと二人して他の食器を見ていたんだけど……

「トメ兄」

くい、と手を繋がれる。ん、引っ張ってるのか。

「あれ」

カカの視線を追うと、そこはたったいま皿を買ったレジカウンター。

店員沙羅さんは包装紙でも探しているのか、後ろを向いて棚の中を覗き込んでゴソゴソしている。

そして後ろを向いているから気づかないんだろう。机と棚の間が狭かったのも悪かった。

身体を『く』の字に曲げて棚を漁っている沙羅さんの見事なヒップが、包装前の皿に当たって少しずつ少しずつ……カウンターから落ちそうになっている。

「皿割れる！！」

思わず叫んだカカ！

そして超注目される僕！

……あれ。なんで僕？

状況整理タイム！

僕――いい大人。妹――小さな女の子。

繋がれた手。

「さらわれる！！」という言葉。

……どっからどうみても僕ってゆーかい魔じゃん♪　あははヤベェよ。

あ、皿が落ちた。

パリン、という音。割れたなあれは。

「さらわれたぁ……あぁうぅ」

そこでそれ言うか！？　そこで泣くか！？

ぽん、と叩かれる肩。

徐々に迫ってくるデパートのお客様包囲網。

あぁ……

僕の明日はどっちだ！？

「こっち」

警備員室ですかそうですか。

## カカの天下２６７「サラの扱いには充分注意しましょう」（後書き）

皆さんも皿が割れたときは注意しましょう、捕まりますよ（ぇ
しかし最近オヤジギャグ的なものがちょっとずつ増えてきたような……？　気のせい？　気のせい！

# カカの天下268「デンジャーカッパッパー」

「はぁ……」

昨日デパートで犯罪者扱いされた胸の痛みがまだ少し残っているトメです……

身分証明だのなんだのしてようやく開放され、皿も同じ柄のものを新たに包んでもらい、無事受け取ることができました。

誤解が解けたあと、デパートの警備員さん達はその旨をその場のおばちゃん達に「この人はヘンタイじゃありませんでした！」と力説してくれたし、館内放送で『本日食器コーナーで捕まったヘンタイ様は、実はヘンタイではないことが判明しましたのでここに連絡いたします』とか流してくれたし……これで世間体もバッチリなはずだ。

でも一日にこう何度もヘンタイと呼ばれれば凹むのも仕方ないってもんだ。はぁ。

「トメ兄、トメ兄」

「なんだよぅ」

おまえの相手する気分じゃないんだよぅ。

「頭にお皿をのせて……カッパ」

「昨日の今日でその皿を危険にさらすな！！」

相手する気ないのにせざるをえない！！

「かっぱっぱ～♪」

「なぁ……頼むからその皿で遊ぶのやめてくれないか？」

「皿が割れたらカッパじゃなくなるよ」

「昨日の今日で割ってたまるか！！」

その皿を手に入れるまでにどれだけの苦労をしたと……ううぅ！

「私はカッパですシリーズ、そのいち」

「話聞けよ」

「水かき」

パーに開いて差し出される手。指と指の間にはセロハンテープ。

「わぁ可愛い水かき♪　とでも言うと思ったかこのカッパ娘」

「シリーズそのに、くちばし」

唇をすぼめて突き出しただけだろが、ったく。

その唇をつかんで引っ張ってやる。ぐいっとな。

「んむむむむむ！」

適当に痛がらせたあとパッと離す。カカはよろめいて――あ、皿が頭の上にあったんだった！

しかしカカは尻もちをつきながらも、見事なバランス感覚で皿だけは落とさなかった。

「ううぅ……唇が伸びてチュパチュパ星人になったらどうしてくれるの！？」

「キスがしやすそうだな」

ずっとそれだとマヌケだが。

「そうなったら毎日腐るほどキスしてやるからね！」

「はん、やれるもんならやってみ――」

というか別に全然オッケーというかむしろ超カモン。人として腐りそうだけど。

……あれ、いつの間にかカカがいない。

と思ったら部屋に行ってたのか、やがてドタバタと戻ってきた。

「カッパは仲間を呼んだ！」

「何のゲームのナレーションだ」

「カッパの友達、デンジャーケロリンズがあらわれた！」

「うあああああ」

大波のように放たれるデンジャーケロリン人形の嵐！

みどり！　視界が緑に染まる！

「しかもなんかぬいぐるみっぽい温かさがない！？　なんか少しひんやり冷たくてぬめってる！？」

「デンジャーケロリンはリアルを追求しています」

「カエルの人形がそんなもん追求したって捨てられるだけじゃ！」

「捨てられたケロリンはカッパに進化し、捨てた主に復讐するのです」

「そんな本当にデンジャーなストーリー作らなくていいからこれどけろ！」

どうやってもってきたのか、大量のケロリン人形は僕の身体を見事に埋め尽くして、マジで動けない。や、動くとひんやりするナニカに触れるから怖くて動けないだけだが。

「こんなのどっから持ってきたんだ」

「サユカンの今日の忘れ物」

「……サユカちゃんはどうやって持ってきたんだ」

「台車。ほら、一輪車の」

ああ、農業で使われてるやつね……ってそんなもんまで使って持ってきて何したかったのサユカちゃん。

「とりあえずこれどけろ。皿もはずせ」

「かっぱっぱ～♪」

「ダメだ……頭の中までカッパになってる」

や、本当のカッパが頭悪いかどうかは知らんけど。

仕方ない。

「カカ、おまえカッパなんだよな」

「かっぱっぱ～♪」

「じゃーもちろんキュウリが大好きなんだよな」

「かぱ――」

「今日の夕飯はキュウリづくしだな」

「何言ってるのトメ兄カッパなんかいるわけないじゃん」

「このカッパの仲間見てるとキュウリ食べたくなってくるな」

「何してるのトメ兄そんなカエルに埋まってしょうがないなぁ助け

てあげる」

即、皿を取って人形の山を崩してくれるカカ。

やっぱカカに言うこと聞かせるのには食べ物の好き嫌いが一番だな。

テーブルに置かれた皿の無事を確認し、ホッと一息つく。

「さら、われなくてよかった」

「私がゆーかい魔だとでも思ってたの？」

「……それはもういいよ」

ゆーかいだの皿だの……そういうのはもうさらさらゴメンだ。

しつこい？

## カカの天下268「デンジャーカッパッパー」（後書き）

カカ天は目をさらのようにして読んでください。

や、すいません。ほんとサラしつこいですね（笑）

でも子供のころに一度はやりません？　皿を頭にのっけて『カッパ』

大人になったらそんなことしないですけどね！

……ほ、ホントですよ？　話作った拍子にノリでのっけたりなんかしてませんからねっ！

# カカの天下269「サユカの任務、お茶飲みリトライ編」

「小倉ようかんと栗ようかん、どっち好き？」

「えと、えっと、えっとぉ……ううぅ」

「や、そんな悩まなくても」

悩んでるんじゃないんです悶えてるんですっ！

どうもいきなりすいません、サユカですっ！　今日はなんとトメさんに誘われて二回目のお茶会にきています！

二回目ともなれば少しは慣れたはず。トメさんと二人で緊張せずに楽しくおしゃべりできる……と思っていたんだけど……

「お、おお、おおおおオクラようかんです！」

「オオクラさんて誰？」

「ち、ちがっ！　オクラようかんです！」

オクラのようかんってなによっ！？

「じゃなくてっ、おけらようかん！　じゃなくてっ！」

「いいから落ち着きなサユカちゃん」

ううぅ……なんでわたしはいつまでたってもトメさんに慣れない

んだろう。二人きりになった途端にわたしの心はオーバーヒート。頭の中でオオクラさんがオクラを食べておけら（コオロギみたいな虫、ジージー鳴きながらよく跳ねる）に変身してしまった……

「ほら、お茶飲んで気持ちを落ち着けて」

「はい……」

味がしないっ！

これじゃ前と同じじゃないのっ。頭の中のオオクラさんも『これはヤバイ』と跳ねまくってるわっ。

……ううん、がんばれ、がんばるのよサユカ！

そう、前と同じってことは、最後はきっとうまくいくのよっ！

「おお、トメとサユカか」

「なんでこういうときに限って絶対登場するんですかテンカ先生っ!?」

ここまで同じにしなくていいのにっ！　なぜっ!?　誰かの陰謀としか思えないわっ。オオクラさんも跳ねて抗議してるわよっ！

「ここでよく会うな、テン」

「ん、オレもこの店好きだしな。どれどれ」

テンカ先生はトメさんが何を食べているのか見ようと、トメさん

に近づいて皿を覗き込んで――

あ。

ああ、あああっ！

「ほう、小倉ようかんか」

「テン、顔近い」

そうよ近すぎよっ！　ねぇオオクラさん!?　あぁもうオオクラさんはどうでもいいわっ。

「なんだトメ。オレの綺麗な顔が目の前にあって恥ずかしいか」

「息がくさい」

「さっきギョウザ食ったからな。はああぁぁ」

「うえぇっ、ニンニクくさっ！」

耳に息なんか吹きかけちゃった……！（注、実際は鼻に向かってくさい息をかけただけ）

あれ、漫画でカップルがやってた……！（注、普通のカップルはニンニクブレスを発射しません）

「これで二人はクサい仲だな」

「あのな……」

クサい仲!?　漫画であったっ、『ほとんどカップル同然のあやしい仲』って意味だったわ、たしかっ！（注、ニンニクくさい仲とは意味が違います。あれ、注意するまでもない？）

どこからかボソボソ聞こえてくる注意がどうとかいう声は置いといてっ。

もう我慢ならないわっ！

「ニンニクテン先生！」

「勝手にニンニク天ぷらの先生にすんな」

「い、いくらなんでもふざけすぎですっ」

「そか？　ニンニクブレス発射しただけだが」

「だから天ぷらとか言われるんですっ」

「言われてねぇよ」

「この天ぷら先生っ！」

「だから何の先生だよそれ」

「まーまー！　二人とも落ち着け」

「オレは落ち着いてるぞ。サユカは熱くなりすぎだな。そりゃ天ぷらも揚がるわ」

「揚げてないですっ！」

「まーまー！」

はぁ、はぁ……うう、確かに熱くなりすぎかも……

「ふぅ……なぁ、二人って仲悪いのか？」

え？

んと……

「仲？　悪くはないんじゃねぇかな。オレはサユカ好きだぞ」

「え！？　あ、その……」

恐る恐るテンカ先生の顔を見ると……なんだか楽しげに笑っていた。こ、これじゃわたし一人で熱くなってバカみたいじゃないっ！

……仕方ないか、バカだよねわたし。バカだからオオクラでオクラでオケラで天ぷらなんだよね……はぁ。

「えっと、こほん。わ、わたしもテンカ先生、好き、ですよー？」

「天ぷらなのにか？」

「あ、その……すいません、なんかひどいこと言っちゃって」

「はは、いいよ別に。オレも天ぷら好きだから気にしてねぇよ」

先生……なんて清々しい人なんだろうっ！　もし天ぷら嫌いだったらどうなってたのか気になるけどっ。

わたしはちょっと感動した。

一方的に悪者扱いして……いや、天ぷらは悪いものじゃないけど……とにかく、反省しないとっ。

「んじゃ、ちなみに」

あ、あれ。なんですかその邪悪な笑いっ！？

「トメのことは、好きか？」

「え？　なに？　ほわっと！？」

そりゃとてつもなく大好きだけど！

だけど……それを、言う、なんて……

「あれー、オレは好きなんだろ？　トメは？」

意地悪げなテンカ先生っ！　さっきの感動を返して！

「さ、サユカちゃん、いいよそんな無理しなくて」

「いやそのっ、別に嫌いとか、そんなんじゃなくてですねっ」

トメさんがわたしを見つめてくる……

「あの」

ああトメさん格好いい……

「その」

瞳がキラリンと光ってるし肌は綺麗で光沢ツヤツヤだし歯はキュッピーンって光ってるし（注、激しく美化されてま――）やかましいテレパシー。それからそれから……

「ああ、ううう」

ああっ！　身悶えるほど大好きなのに言えないっ、嫌いって誤解されそうで早く撤回しなきゃいけないのがわかってるのに言えないっ！

「……あぁ、ううぅ」

「ああ！　トメ。忘れてたけどこいつ、男が苦手なんだよ」

「……ぇ」

「そうなのか？」

自分の情けなさに涙がにじんできたところで、テンカ先生が助け舟を出してくれた。

「だから男に面と向かって好きなんて言えないんだよな。悪かったな、サユカ」

おかげでわたしは自分の気持ちを言わなくて済んだ。

済んだ？

違う。

いつかは言わなきゃいけないのに。

先生はせっかくその機会をくれたのに。

逃げただけ……だよね、これ。

「さて、オレは買うもん買ったし帰るわ。じゃな」

テンカ先生は帰り際、わたしにだけ聞こえるようにボソッと耳打ちしてくれた。

「ホント悪かったな。あせるな、ゆっくりやれ。若いんだから」

先生……あなたは悪魔のような天使だわ。

ありがとう。

先生が去ってから——わたしは気合を入れてトメさんを見据えた。

「トメさん！」

「お、おお」

「わたし、す、好きです！」

言った！

言っちゃった！

ついに言ってしまったわっ。

……もうダメ。

「――小倉ようかんが！」

「あ、ほんとか。じゃこれちょっと食べる？」

「はひっ、ありがとうございまふっ……ううぅっ！」

涙が出るほどおいしいよぅ……

ん！

わたし、強くなるわっ！

いつか自力で告白できるようにっ！

いつか、ね。

今のところはこの甘い間接キスだけで幸せだからいいやっ。

ほんとにこれでいいんだからっ！

いいんだからねっ！

## カカの天下２６９「サユカの任務、お茶飲みリトライ編」（後書き）

惜しい！
もうちょっとで告白できたのにっ！

告白ってやっぱ心の準備とかいりますよねー。まぁ勢いに任せて言ってしまう場合もよくあることだと思いますが（ちなみに私はそのタイプ）

サユカちゃんはまだちょっと、勇気が足りないみたいです。

**カカの天下２７０「この顔にピンときたら逃げましょう×３」**

「……最悪だ」

僕は呆然と立ち尽くしていました……あ、どうもトメです。

ちょっと聞いてくださいよそこの人！

た、大変なのですよ。

テンにメールで呼び出されて来てみれば、そこにはなんと！

「三十番テンカ！　サユカのマネやりますっ」

「おー、やれやれ！」

「やんやーやんやー」

「髪の毛を後ろ手でポニテにして、目を少しうりゅっと潤ませて、相手をちらちら上目使いにみながら……べ、別に君のためにやったわけじゃないんだからねっ！」

「ぶはははは！　にてねー！」

「かわいいよー先生さーん」

そこにはなんと――と、とてつもなく恐ろしいトリオが完成していた！！

「あ、弟だ」

「おぅトメ！　ちゃんと来たな」

「トメさん、ばんわー」

なんだこのカカサエサユカ三人組の大人バージョンは！？

「あ、あんたらいつの間に仲良くなってたの！？」

「「んー、なんか気が合って」」

それはなんというか物凄く納得できる理由ではあるが。

「あたしらも初めて三人で飲んだんだけど、そしたら際限なく盛り上がっちゃってさ」

「で、トメも呼んじまおうってノリになったわけだ」

「それでノリにまかせて、さっきの恥ずかしいモノマネしてたわけか、テン」

「おぅ。酒を飲むときは恥なんか捨ててなんでもやるぞオレは」

「よく言った！　おねーさんも同感だよ。酒は楽しけりゃなんでもいいのだ！」

「トメさんもなんかモノマネやってー」

そういやさっき三十番とか言ってたな……どんだけやってんだ。

これじゃ他のお客さんにも迷惑が――

「おいおい。次はまだかー！」

「早くやれやれー！　次はそのあんちゃんか！？」

なんでうちの近所の人ってこんなノリいいんだろう。

「トメさーん」

「あのね、来たばっかりであんたらのチョモランマみたいなテンションについていけるわけないっしょ」

一応説明しとくとチョモランマってのは別名エベレスト、世界で一番高い山ね。

「仕方ないな！　あたしが見本を見せちゃる！　三十一番！　姉！」

名前言えよ。誰の姉だよ。

「待ってました姉貴！」

「やっちゃえ姉さん！」

「お姉さま頑張ってくださいまし！」

どんだけ弟妹いるんだよ。

「馬のマネやります。ぶるるるる！」

顔をぶんぶん振り回して異音を発しながら僕に迫る姉。こえぇよ。

「ばふんばふんばふん！！」

「馬そんな鳴き声違う」

「馬フン？」

や、テン。たしかに馬のアレはそれだけどさ。

「ばっふーん♪」

「なにそれサカイさん」

「うっふーんの『ば』版ですー」

その言葉にぐりんと首をまわして反応する姉馬とテン。

「ほう、『ば』版！」

「ばばん！」

「ババン！」

「ババンババンバンバン！」

「ハービバノンノン！」

「ＢＡＮ！　ＢＡＮ！　ＢＡＮ！　ＢＡＮ！」

三人だけじゃなくて周囲のお客も店員も盛り上がりまくって……
あーもー何がなにやら。

バンバン盛り上がる居酒屋の大騒ぎを眺めながら、僕はため息をついた。

カカサエサユカの大人版とは言ったけど。

曲がりなりにも『大人』ってだけでこっちのほうがタチ悪い。

あいつらが大人になったらこんなんなるのかなぁ……

しっかり教育せねば。

「三十二番！　トメが姉のモノマネします！」

「ちょっと待たんかワレ！！」

「んだよ、やれよトメ！」

「シラフでそんなんできるかっ！！」

「あ、お酒が足りないんですねー。はい」

持たされるグラス。

「なーんで持ってるの♪」

「なーんで持ってんだ♪」

「なーんで持ってるんですかー♪」

「「「そ・れ・は」」」

『飲みたーいーから持ってるの♪』

全員で合唱すんな！！

「トメが飲むってさ！」

『ハイハイハイ！！』

「五秒で飲むってさ！」

『ヘイヘイヘイ！！』

「ほーら一気♪　一気♪　一気♪　一気♪」

さらに無茶な注文つけるなあああ！！

――数時間後。

一気飲みの嵐にあった僕は完全にくたばっていた。

こいつらキケン。

見かけたら肝臓にご注意を……ごふっ。

死んだ。

だから姉のモノマネがどうだったとかは聞かないように。

## カカの天下２７０「この顔にピンときたら逃げましょう×３」（後書き）

ここにカカ天トリオ大人ｖｅｒが生まれてしまいました。

この三人、組み合わせるとモノスゴイ勢いで話がすっ飛んでいく感じです。怖いです。でも面白そうではありますので今後もたまに出していきます！

ま、今回は酔っ払いですしね！　シラフならそんなに妙なことには……ならないわけないか。この人らだと。

## カカの天下271「その手を握って」

「……つかれた」

休みの日の朝、僕ことトメは居間でテーブルに突っ伏してグッタリとしていました。

たった今まで何かしていたから疲れた、というわけじゃない。昨日の疲れが抜けていないのだ。

昨日は姉たちに付き合わされてひどいめにあった、というのもあるが……実はテンに呼び出される前にもちょっと疲れていたのだ。

カカの、世話で。

夕飯の準備はいつものこと。でもカカが最近テレビの影響で始めたトランプ占いがうざかった。

夕飯の準備をしているときも、夕飯の最中も、夕飯のあとも……ずっとその占い相手として付き合わされていたのだ。

別にこんなのお安い御用だ。伊達に十年も兄をやってるわけじゃない。

でも……

「ちょっと、疲れたな……」

さすがに疲労がたまるとイライラしやすくなるし、面倒なことが

煩わしくもなる。

朝食の用意をしないと……

でも、なんか、だるい……

目を開けたままボーッとテレビを見つめていると、後ろで物音が聞こえた。

振り向いてみると、そこにはカカが立っていた。

目をつむったまま。

「おはよ。起きたのか」

「ぐー」

「寝てるのか」

「ぐ？」

「どっちだよ」

壁に寄りかかって立ちながら、カカは器用に寝ていた。

……さては夜遅くまでトランプ占いしてて寝不足だな、こいつ。

「んむー」

目をしょぼしょぼ擦りながら周囲を見回す。今度こそ起きたかと

思うがそれは甘い。こうなったカカは一時間は寝ぼけたままなはずだ。

「さむい」

「ああ、最近寒いな」

「手がさむい」

「ああ、そこに炊飯器があるから手突っ込んでろ」

わざわざ起こすのも面倒だし、投げやりに僕は言った。

でもカカは炊飯器じゃなく、僕の近くに寄ってきた。

座布団をずらして、ぽすん、と僕の隣に座る。

「なんだよ。僕は炊飯器じゃないぞ」

僕の中には白い米なんかないぞ。赤いもんばっかだぞ。

「手、さみー」

「ん、あ？　手？」

なんか握られた。

「あくしゅー」

「ん、ああ、はいはい。握手握手」

冷たい手してるな、こいつ。

「ぶんぶん」

無意味にぶんぶん上下に振られる僕の手。何がしたいんだ。

「お？」

なんか握手から握り方を変えてテーブルに肘をつかされた。

「のこったのこったー」

「腕相撲したいのか？　僕は今そんな気分じゃ――」

「ごー」

ズダン！！

「いてぇよ！！」

寝てるくせにフルパワーで勝つなよ！

「かちー」

あー手が痛い。まったくこいつは、いつもいつも……

「んー……」

好き勝手やり放題で、今もこんな満足そうにニヤけながら寝やが

って。

「くー……」

こんな、満足そうに。

こんな、無防備に。

こんな――幸せそうに、笑いやがって。

「……はは」

あ？

僕、なんで笑ってんだ。

疲れてたんじゃなかったっけ。

イライラしてたんじゃなかったっけ？

それがなんで笑いながら、握られてないほうの手でカカの頭なんか撫でてるんだ？

「ったく、しょうがないやつ」

――そう、しょうがない。

相手は妹なんだから。

小憎らしいところは、ほんっとーにたくさんあるけど。

結局はやっぱり、可愛いと思ってしまう。

こいつが笑ってれば、僕も笑ってしまう。

多少疲れても、こいつと笑うためなら別に構わないと思えてしまう。

「損な役割だよな……」

やれやれ、と苦笑しながら。

僕は敵わない妹の手を、握り返したのだった。

ぎゅっ、と。

ズダン！！

「……再戦の合図のつもりはなかったんだが」

再びくらった腕相撲の衝撃による痛みをこらえながら、僕はひくひく笑う。

「さ、さて！　朝飯つくるかな」

「はよつくれー」

「……やっぱこいつムカつく」

和やかな時間は一瞬だけ。

でもそれですっかり元気になってしまってる僕がいた。

なんかズルいよな、カカって。

## カカの天下271「その手を握って」（後書き）

可愛い子はズルいです。
ええズルいですとも。

でも何も悪いことなんてありません。
ええありませんとも。

その手を握って笑えるのなら、きっとそれだけでいいのです。

## カカの天下272「パンをおかずにご飯を食べる」

「「「いただきまーす」」」

「ほい、召し上がれ」

召し上がりますカカです。

今日はサエちゃんとサユカンも一緒にうちで夕飯を食べることになりました。

テーブルの上には白身魚のフライ。エビフライ、カキフライ、トランプが並んでいます。

「おいしいわねっ、魚フライ」

サユカンもぐもぐ。

「おいしいですー、エビフライ」

サエちゃんもふもふ。

「おいしいぞ、このカキフライ」

トメ兄あむあむ。

「おもしろいよー、このトランプ」

私パタパタ。

あ、パタパタってトランプを切ったり置いたりする音ね。

「……カカ。おまえ一人だけ感想が違うぞ」

「ん、なに。トランプおいしいよーって言えばいいの？」

「言われても困る。トランプのフライなんて作ったことないからな」

「初挑戦すれば？　意外と神がかった味になるかもよ」

「ああ、たしかに紙の味がするだろうさトランプだしなアッハッハ……ヤギしか食わねーよそんな料理。とにかく今は夕飯なんだからそんなもんしまえ」

「そんなもんとはなにさ。これでも学校じゃこのトランプ占い、結構当たるんだよ？」

「そうなのか、サエちゃんサユカちゃん」

二人は「うんうん」と深く頷いた。

「カカちゃんはトランプを人に当てるのうまいよねー」

「よくあんなシュバッと投げられるわね、今日当たった子なんか刺さってたわよっ」

「もしもし、占いどこいった？」

「占いもちゃんとやってるよ。武器にすること多いだけで」

けっこー攻撃力あるんだなこれが。

「トメ兄にも前に占ってあげたじゃない。当たったでしょ？　『厄介なことが起こるでしょう』っていう予言」

「あ、聞きましたよー。お姉さんたちにお酒飲まされて大変だったとかー」

「や、それ以前に当たってるよ」

「ほらね！」

「しつこく占ってくるカカ自体が厄介だったからな」

「ほらね！」

「いばるな！！」

む、当たってるのにその言い草はなんだよぅ。

「今日だってね、占いしてたらちゃんと感じたんだよ」

「なに、不思議なパワーとか魔法の力とか感じちゃったわけっ？」

「サユカンってメルヘンだね」

「サユカちゃん、かわいー♪」

「やかましいわっ」

「で、結局カカは何を感じたんだ？」

「怪しい視線」

「それ占い違う」

感じたことには違いないじゃん。

「多分それ、カカちゃんファンクラブの人たちだねー」

「パンクラブ？　皆でその人の顔のパン作るとか？」

「そうそう。『みんな、新しい顔よー！』とか言いながら皆でそのパンを食べるクラブだよー」

「言い出した君が嘘言ってどうするの、サエすけっ」

「カカパンとか普通にありそうだよねー」

「サエパンとかもありそう！」

「どっちも中身は想像したくないな……まぁその話は置いといて。カカにファンクラブなんかあるのか」

む？　パンじゃなかったか。

「はい、私のもありますよー。カカちゃんのは一度潰したんですけど、この間の私の誕生日騒動がきっかけでまた復活したみたいですー」

「あー、パンって潰してもしばらくしたらまた膨らんでくるしね」

「カカ、パンから離れろ」

だってやっぱりパンっぽいもん。

「サユカンのはないの？」

「ないねー」

「……そ、そうっ、ま、まぁっ、わたしはそんなのなくても別に」

「サユカンだけ仲間はずれかぁ」

「サユカちゃんだけ人気ないのかー」

「可哀想、カキフライ食べる？」

「哀れだね、エビもあるよー？」

「トランプで涙ふく？」

「あ、あんたらねぇっ！！」

「おいおいおまえら……」

間に割って入ろうとするトメ兄はまだまだ甘い。

「でも大丈夫。私がサユカンのファンになるから！」

「私もー。ファンクラブ会長なんかやっちゃうよー」

「えっ！？　い、いや別にそんな」

「サユパンも毎日食べるよ！　なんかすごく甘そうだけど！」

「食べてるうちにサユカちゃんみたいなポニーテールが生えてくるかもしれないしー」

「生えてたまるかっ！　そのパンどこの促進剤よ！？」

「なんだかんだで仲いいな、おまえら……僕はでしゃばりですか。ハイハイ」

トメ兄がなんかいじけてる。

「ああ、そういえば姉にもファンクラブあったな」

「アネパン？」

「食べたらきっと爆発するわねっ！」

「間違いないねー」

全員同意。

「で、ファンクラブあったんですかー、お姉さん」

「ああ、ものすごい人数だったぞ。でもそのファンクラブ会員たち、

姉が修行の旅に出たときにそれを追って全国に散らばっちゃったからな。もう戻ってきてるの知らないと思うし、この街にはもうシュー君くらいしか残ってないんじゃないかな」

「全国てっ！？」

「お姉さん、すごいんですねー……妙に何でもすごいのはわかってましたけど」

「恐るべし、アネパン」

「伊達に爆発するわけじゃないのねっ」

パンの話をしながらご飯を食べる。

今日はそんな夕飯でしたとさ。

## カカの天下272「パンをおかずにご飯を食べる」（後書き）

カカパンとサエパンの中身、なんだと思いますか？
なんかなんでも当てはまるような気もします（笑）

サユパンですか？　中はあんこかクリームでしょう。
あまあま
アネパンですか？　中は爆弾でしょう。
どっかん
トメパンですか？　中はツッコミでしょう。
なんでやねん

## カカの天下273「カカVS姉娘、筋トレ」

「カカー」

「なっ、あっ、にー？」

おいっちに、さんしっ、どうも、カカ、です！

ただ、いま、トレーニング、中で、腕立て、伏せ、してます！

いち、にっ！

「部屋入っていいかー」

「さん、じゅ！　ふぅ……いいよ」

私は腕立て伏せをやめて立ち上がり、タオルで汗を拭きながらトメ兄を出迎えた。

「お邪魔します。あ、ホントに邪魔しちゃったか」

「いいよ、ちょうど三セット終わったとこだし」

「いつも思ってたんだが、そのトレーニングって何セットやってるんだ？」

「何セットとかは別にないよ。んとね、いつも腕立て腹筋背筋その他もろもろやってるんだけど」

「カカって女子だよな」

「そうだけど。男子に見える？」

「……や、見えない。小さい頃の姉に見える」

「やめてよ、あんな男とか女とか越えてる人みたいだなんて」

たしかに姉に言われたとおりにトレーニングしてるけどさ。

「で、どんだけやってるんだ？」

「全部できなくなるまで」

ん、なんでポカンと口開けてるの。

「ぜ、全部？」

「うん、腕ガクガクお腹ブルブル背中ギチギチになったら終わり」

「……そりゃ強くもなるわ」

おかげで運動全般で男子に負けたことがない。

「んで、なにか用？　私まだこれやるんだけど」

「ああ、実は――」

「あんたとはよく二人きりになるね、タマ」

「カカー」

「カカお姉ちゃんって呼びなさい」

「カカおっちゃん」

「誰がおっちゃんだ」

と、いうわけで。

例によって例のごとく、お姉が連れてきたタマを押し付けられたのだった。

なんでもシュー君の家が今誰もいないらしい。たまにうちに預けられるのはそういうときらしいんだけど……じゃあお姉の家はダメなのかな、というかお姉はどこで寝泊りしているのだろう。いまだに知らないんだけど。

「おっちゃーん」

「おっちゃん言うな。お姉ちゃんって呼ぶの！」

「おねぇー」

「私をお姉と一緒にするな！」

まったくどいつもこいつも……

さて、トメ兄はタマを私に押し付けてさっさと部屋に戻っちゃっ

たし、どうするかな。シュー君が仕事終わったら引き取りにきてくれるらしいんだけど。

とりあえずトレーニングやっちゃうかな。

「いち、に……あれ、タマもやるの？」

「やうー」

腕立て伏せの姿勢をとった私のマネをしようとするタマ。お腹が床についてるから寝転がっただけって感じだけど。

「よし、私についてこれたらあんたはレベルアップしてタマゴになるのだ！」

「めだまやきー」

「そうそう、目玉焼きになるの。いくよー。いっちにっ、さんしっ、ごーろく」

十回目くらいで横を見てみると、そこには頑張っているタマの姿が。

「いーちーにーさーんーしー」

ごん、ごん、ごん、ごん！

なんか頑張って額を床にぶつけてる！？

「やめなさい、タマ！」

「うー。痛い」

「ならやめようよ！」

理由のないわけのわからない行動ばっかり……これだから子供は厄介なんだよ！

え？　私はどうなんだって？

私もまだ子供だもん。だからいいの。

「まったくもー……腕立てはだめだね。じゃあ腹筋をやろう」

ごん、ごん、ごん、ごん！

「だからなんであんたは頭を打ちつけたがるの？　頭を割りたいの？　そりゃタマゴになれとは言ったけどさ！」

「いたいー」

「ならやめようよって言ってるじゃん！　あのね、頭を割っても目玉焼きはできないんだよ！？」

「スクランブルエッグならできそうだけどな。ケチャップいりの」

「……トメ兄。それしばらく作らないでね」

当分食べたくない、スクランブルエッグ。

「で、トメ兄。覗き？」

「人聞き悪いこと言うな。おまえがドア閉め忘れてたんだろうが」

「閉じろゴマって言ったよ」

「それで閉じるわけなかろう」

「トメ兄に言ったんだけど」

「僕はいつからゴマになった？」

お？　気づかなかったけどトメ兄の後ろに誰かいる。

「シュー君だ」

「あはは……こ、こんばんは」

「意外と早く迎えにきてな、それ知らせにきたんだよ」

「ありがとうゴマちゃん」

「昔そんなアザラシいたな、ってなぜに僕が」

「シュー！」

「ああ、はいはいタマ様、帰りましょうねー」

相も変わらず呼び捨てにされてるのを聞いて、私とトメ兄の憐れみ光線（目から発射）がシュー君を貫く。

「シュー君。まだ、なんだな」

まだ、というのは前回シュー君が自分を「パパ」と呼ばせるために決行した『お菓子で言うこと聞いてもらおう作戦』のことだ。実にセコい。

「……ふふ、まだ五つ、です……」

ちなみにその高級お菓子セットは一つ五千円だ。

「二万五千円か……」

「私の分は？」

「あ、えっと……一つお持ちしました。どうぞ」

ひゃっほい。

「苦しゅうない」

シュー君は苦しゅーだろうけど。

「カカ、おまえは遠慮ってもんを知ったほうがいい」

「私よりもタマに教えたほうがいいかと。さっきの見たでしょ？そのうち自爆しちゃうよ」

「ふむ、でも爆発ってところは姉の娘らしいな」

そして爆発してもピンピンしてそう。

「ああ、痛い！　タマ様、そんなに頭突きしないでください！」

「……や、シュー君のほうが金銭面とか精神的に爆発するかもしれないな」

「大丈夫じゃないかな。爆発するほど火薬はいってなさそうだもん」

果たしてタマがシュー君を「パパ」なんて呼ぶ日がくるのだろうか。

こないでほしい。

そしたらもっとお菓子もらえるかもしれないし。

## カカの天下２７３「カカＶＳ姉娘、筋トレ」（後書き）

頑張れシュー君、味方はいないぞ（おぃ

相も変わらずひどい扱いなシュー君ですが……彼も好きでやってることなので問題ないでしょう（本当か？

本来ならトメという常識人（多分）がそのお金の無駄遣いを「おいおい」と止めるはずです、が、それをしないのは……さて、なぜでしょう？（笑）

答えはカカラジででも書きます＾＾

## カカの天下274「スーパーランニング」

「ほうほう、ここが」

ざっ、と仁王立ちして新装開店したスーパーを見据える私の名はカカ！

「なんだかんだと引きずられてきたものの……何買うのよ、カカすけ」

「や、特に買いたいものはないんだけど」

トメ兄は「なんでわざわざそんな遠いところに行かなきゃならんの。新装開店でも単なるスーパーだろ」とか言って、一緒にきてくれないんだもん。

そんなこと言いつつニンジン安いとかあれば来るんだろうけどね。あいにくそんな広告はなかったみたい。残念。

というわけで、サユカンを引き連れてきたわけです。サエちゃんは用事あるって言うし。

「とにかく、どんなもんか覗いてみようよ」

「まぁ、どうせ暇だからいいけどさ……」

「そんな渋々な顔して、実は誘われて嬉しいくせに」

「面倒なだけよっ、こんなの！」

「じゃー今度から誘わないよ」

「どうぞご勝手に！」

「りょーかい。ふむふむ……お菓子コーナーは面白いの、ないなぁ」

「確かにいいものないわね」

「お肉コーナー見ても面白くないし」

「普通よね」

「お刺身コーナーは。あ、イカおいしそう」

「でも結構高いわね……で、あの、本当にもう誘ってくれないの？」

フィィィッシュ！！

「やだなー！　そんなわけないじゃんうりうりうり！」

「うあああぁぁそんなに頬をこすりつけるな摩擦で燃えたらどうするううう！！」

「私はもう萌えてるよーうりうりうり！」

「意味わからんわーっ！！」

そんな感じできゃいきゃい騒いでいると……ふと目に留まった商品が。

サユカンにうりうりするのをやめて、その商品を手に取る。

サユカンも寄ってきてそれを見る。

『とっても美味しい白湯スープ。３０グラム入り』

「白湯……サユ、スープ」

「なんでこっちを見るのよっ」

じり。

じり、じり。

「サーユカン♪　スープ飲ませてー」

「どっから何を飲もうとしてるのよっ！！」

「３０グラムでいいからさー！」

「どこから３０グラム取るのよー！？」

どどどどどどどどどど！

サユカンスープを求めて追っかけまわしていると……サユカンが足を止めた。

そして手に取った商品は、『たっぷりカカオ入りチョコレート！』

「たっぷり、カカオ」

じり。

「たっぷり、カカを！」

じりじり。

「たっぷりよこしなさーいっ！！」

「何をか知らないけどたっぷりはヤだー！！」

どどどどどどどどどどど！

今度は追っかけまわされていると……ふと目に留まった看板を見て、私たちは足を止めた。

「サユカン、これ」

「ええ……」

『食べまくり天下コーナー！』

「食べまくる、テンカ先生？」

「コーナーってことは……いっぱいいるわけ？　食べまくるテンカ先生が」

わらわらと商品を食い荒らすテンカ先生×１００が私とサユカンの脳裏に思い浮かぶ。

「ま、まさか、ねえ？」

「まっさかーっ」

「何してんだてめぇら、こんなところで」

びくっ。

おそるおそる、振り返ると、そこには……

「た、食べられるうううううううう！！」

「の、飲まれるうううううううう！！」

どどどどどどどどどど！！

「……え。なんで？」

ぽつんと置いてかれたテンカ先生の呟いた声は聞こえなかった。

恐るべし、スーパーマーケット！

「おかえりカカ、いらっしゃいサユカちゃん。新しいスーパーどうだった？」

「食べられる！」

「飲まれます！」

「……そりゃ確かに新しいスーパーだ。新種発見だな」

みんなも商品化されないように気をつけよう。

## カカの天下２７４「スーパーランニング」（後書き）

今日の子供はよく走りますね。
寒いですからね、そんなときは走るに限ります。

それはともかく、商品に自分の名前が入ってること、たまにありますよね。それがあだ名になったりすることも。今日はそんな一角を書いてみました。
白湯缶、なんていうのがあればカンペキなんですけどねぇ。

# カカの天下275「第七回、カカラジ！」

「みなさま、こんカカ！　最近寒いなーと思ってたらもう雪！？ゆき！　スノウ！　いくらなんでも早いでしょーにホワイトクリスマスの感動もなくなっちゃうよ空気読みなさいよ空！　って空気に向かって空気読めっていうのも変な話だよねーなんて思ってる香加です！」

「確かに寒くなるの早すぎだよな、うん。留です」

さてさてお待ちかね、カカラジ第七回の放送が始まりました。

「最近はカカラジが長くなりがちだし、ゲストに来てもらうのは後にしようってことになりました」

「えー！　えー！　今回のゲストなら最初から最後までならずレギュラーになってくれてもいいのに！」

「あたしもレギュ――」

「引っ込め」

げし、ひゅー……と前回に続いて落ちていく括弧。

「えーっと、これはネット小説『カカの天下』を盛り上げるため、ぶっちゃけトークや作者の本音などを放送する情報ラジオみたいな番組です！　私たち香加、留兄、何階から落ちても死なないどっかのバケモノは本編自体とは関係ないのでお気をつけください」

「よし、んじゃＣＭにいこー」

今回はテンポ早いなぁ。ほいＣＭ。

「どうも、新人アナウンサーの沙羅と申します。えーとですね、実は今回、新しく開店したというスーパーにきていま――」

「３０グラムでいいからさー！」

どどどどどどどどどどど！

「……なに、いまの。あっ、いえ、えっとですね！　今回は新しく――」

「たっぷりよこしなさーい！！」

どどどどどどどどどどど！！

「――新しく開店したスーパーは３０グラムをたっぷりよこしなさい、じゃなくて、あの、その」

「カット！！　沙羅ちゃん、なにその意味不明な脅迫文！　全然ダメじゃない。もうテープないんだよ？」

「ご、ごめんなひゃい！　あ、噛んじゃった……でも、３０グラムが――」

「た、食べられるうううううう！！」

「の、飲まれるうううううう！！」

どどどどどどどどどどどど！！

「えっと……こほん！　３０グラムがたっぷり飲み食いできるスーパーです、ぜひどうぞ♪」

――あの、これ没のテープじゃないっすか？

――あぁそうだよ！　なにしてんだ放送止めろ！　ったく、誰だテープ間違えたやつ！

――わ、私、です……

――なんでアナウンサーの沙羅さんがこっちの仕事までやってんの！？　君クビ！！

――えぅ！？

「なんだ今のは」

またもや放送事故？

「私映ってた！」

「あ、ああ……アナウンサーの後ろをものすごい勢いで駆け抜けてったの、やっぱおまえか。それにしてもアナウンサーの人、前に皿

売ってなかったっけ」

皿を割りすぎてクビになり、転職したそうです。

「ああ、この間割ったのが初めてじゃなかったのね……ま、それは置いといて。改めましてこんカカ、留です」

「香加です。そして！」

「こんにちはー、ゲストに呼ばれました、小枝ですー」

きゃー！　きゃー！！　とはしゃぐ香加。やかましい。

「小枝ちゃんようこそー！　みんな読めるよね？　サエちゃんだよ！　サエちゃん！」

「そう。だから前回までのゲストと違って、波乱な展開にはならないはずだ！」

「香加ちゃーん」

「なに、小枝ちゃん♪」

「香加ちゃんってさー、私のこと好きなんだよねー」

ピシリ、と凍りつく収録現場。

「え、と、その」

「好きなんだよねー」

「いやその！」

「キスしたい？」

「えええぇえぇ！？」

「したいんでしょー？」

「あのそのえっとのなにぬねの！？」

「あー、そういやそうだよな。沙由歌ちゃんだってトメのこと知ってるんだから小枝ちゃんも当然……」

前回と違って今回は香加がターゲットですね。

「かーもーんー♪」

「そ、そこまで言うなら遠慮なく！」

「待った！　放送禁止にする気か！？」

「そこまではしないよ！」

「どこまでするんだよ！！」

「あーれー♪」

誰をゲストに呼んでも、結局暴走するのね……

「ストップ！　もうお便りコーナーなんだから、ちゃんと進めなさいよ！　なんならあたしが――」

「それはもっともだが！　あんたがいると更にややこしくなるから引っ込んでろ！！」

どかん！　ひゅー……

「なんか冷めちゃったねー、冗談はこのくらいにして進めようかー」

「え、冗談だったの？」

「別に冗談じゃなくてもいいんだけどー？」

「えーっと、その、あ、あとでね？」

後でナニをするのか妙に気になりますが。

「おたより紹介するぞー？　いいかー？　いいな。よし。えーまずはカカラジネーム『白石』さんから。『なんでトメとカカばっかり出るんですか？』という質問」

「だってカカの天下だもん」

「テンカの天下じゃないしね」

「総理大臣の天下でもないよねー」

「なんか政治とかの話になりそうだな、そのタイトルだと」

というわけで『白石』さん。答えは『主人公だから』です。

「次は私読むね。カカラジネーム」

と言いつつ投稿というわけではなかったのですが、質問ということでこちらでお答えいたします。

「えー『魔王姉に勝てない弟』さんから。『姉には頭が上がらないんですけど、どうしたらいいんですか？　トメ様に質問です』だってさ。どうなん留兄」

「頭を上げるな」

「……それでいいの？」

「それが無難。適当に下げて適当に付き合うが吉」

「つまらない答えですねー」

「それでうまくやっていけるなら、それに越したことないだろ。出る杭は打たれる――頭を上げたって姉にどつかれてまた凹むだけよ」

「小枝ちゃんならどする？」

「あの手この手で無理やり頭を下げさせるー」

どの手？　いや、怖いから聞かないでおこう。

「でもさ、なんだかんだで留兄はお姉に頭上がらないわけでもないよね」

「あれは上の存在というより異空間の生物だしな。厄介なだけだし、頭を上げず、下げず、使いもせずに、ほっとくのが一番なんだよ」

ホント無難ですね。まぁ無難に普通な人じゃないと他人にぽんぽんツッコミ入れらんないか。

「さ、どんどん行こう。次は僕が読むぞ。カカラジネーム『ネギまみれ』さんから。『わりと皆シュー君にひどいことしてますけど、良心は痛まないのでしょうか？』という質問だけど、香加、小枝ちゃん。どうよ」

「だってさ」

「だってねー」

「だって、なぁ」

おろ、三人そろって苦笑い？

「「「シュー君、苛められるとすごい嬉しそうなんだもん」」」

……ああ、確かに泣き叫び嘆きつつも（あえて書かなかったけど）いい顔してますもんねぇ。

というわけで読者の皆様、これからシュー君がひどい目にあったときは「なんだかんだで喜んでるクセに♪」なんて思いながら読んでください。

「次読むよー。カカラジネーム『風邪には注意しましょう』さんか

ら」

「作者はもう風邪ひいちゃってるらしいよ」

「バカだねぇ」

うるさい。

「『トメさんとカカちゃんのお母さんってどんな人ですか？　教えて下さい！』だそうですが」

まだ秘密です。

「だそうです。でも……一応ヒントっぽいものは今までの話の中にあるんだよね、留兄」

「ああ、多分誰もわからないだろうけどな」

もし『もしかしてトメカカのお母さんって……』って感じでヒントに気づいた人は、こっそりメッセージででも教えてください。当たってたら、あとがきとかでさり気に「正解♪」とか書きます。

「わかるかな」

「わかんないだろうなぁ」

「さ、次は私が読みますねー。えーと、カカラジネーム『レズビアン』さん」

「なんか危なげなネームだな」

「えとー、『カカちゃんとサエちゃんの物理的な絡みが見たいです！』だってー」

静寂が訪れる。

にこ、と笑う小枝ちゃん。

たらり、と冷や汗をたらす香加。

「いただきまーす♪」

「いただかれるのも悪くないけどでもいやそのあの！！」

ピン、ポン、パーン。

文字に出来ない激しいことが行われているので、少々お待ちください……

パン、ポン、ピーン、。

「はぁ……はぁ……う、奪われた」

「ごちそうさまー」

「や、何もなかったから！　なかったからな！　僕が止めたから！

誤解すんなよ読者の人！！」

「気を取り直して次読みますねー」

「く、クセになりそう……へへ」

「香加、戻って来い！　香加！！」

「んふふふ、みーてーたーよー？」

「おまえは戻ってくんな！」

げし！　ひゅー……

「次は、えっとー……『他。たくさんの方に前々から「テンカ先生と姉の絡みが見たい」という希望がカカラジにも送られてきていましたが、そちらの方々には前回、実際に話を書いたことによって返信とさせていただきます！』って、あれ、これで終わりなのー？　他にもあるのに」

「な、なんとか復活……ん、んっとね、次回のカカラジは人気投票結果発表スペシャルで、そのときにいろいろ考えてるんだってさ」

「らしいな。今回紹介されなかったお便り、要望も次回に持ち越しされたのがいくつかあるから、投稿した人は心配しなくていいよ」

その詳細はＣＭの後で！

一度クリアしたゲームはつまらない……そう思ったことはありませんか？

そんな考えを覆す、新感覚ＲＰＧが登場！

その名も、Ｋ（空気を）Ｙ（読む）クエスト！　細かい登場人物設定によってプログラムが器用にも空気を読み、設定に応じた雰囲気の物語を作成する！　その内容は登場人物によって千差万別！　ツマラナイ設定ならツマラナイ物語に、笑える設定なら笑える物語、オタクな設定ならマニアックな物語、アダルトな設定ならうっふんあっはんな物語になるという優れもの！

一度クリアするだけでは絶対に飽きない超ハイスペックゲーム、大好評発売中！

なお、このゲームは製作者がわかっていません。ゲーム会社に匿名で送られてきたからです。そんなゲーム発売するなというツッコミはなしで。

このクエストを真にクリアしたとき、その謎が明かされるのかもしれません……

え？　興味ない？そこをなんとか。

もしわかったら我が社にご一報ください。

ＣＭが明けて。

「お待ちかね！　ついに人気投票の中間発表に移ります！」

どんどんぱふぱふー！

「中間だからね、票数とか六位以下は省いて、今のところのトップ五人だけ発表するよー」

「ふふふー、私がゲストに呼ばれたってことはー、トップは私だったり？」

「いやいや、これってカカの天下なんだよ？　絶対私だよ！　なんせタイトルなんだから！　どうなの留兄？」

「僕も今から読むとこだし、どうなってるのかわからん。だからさっさと読むぞ。まずは五位！」

「いえい！」

「いえーい」

「五位は……姉！！」

「あい？　呼んだ？」

ちょうどヒョコッと顔を出す括弧。

「これが……五位？」

「これがかー」

「え？　ちょと、なんで皆さん口元をひくひくさせながら静かにあたしを落とそうとするの？　あのね、いくらあたしでもこう何回も落とされたらちょっときつ――あああああぁぁぁ」

「さ、次行くか」

爽やかな顔して進める留さん。

「四位の発表！　なんと二人います！」

「おー！」

「おー？」

「四位……同票で、カカとサユカちゃん！！」

「がーん！！」

がーん、がーん、がーん……とエコーをかけてショックを受ける香加。

「か、カカの天下なのに……」

「まぁまぁ、香加ちゃん。四位だってすごいよ？　沙由歌ちゃんと一緒なんだし」

「それは嬉しいけど……でも！　でも！　ベスト三に入れないのはヒロインとしてさ！　タイトルとしてさ！」

「はいはい、愚痴ばっか言わせるのもなんなので次行くぞ」

「三位ですかー。トメお兄さんと予想してみます」

「三位！　サエちゃん！」

「……あはは」

「ぐ、ぐるぢ……な、なぜに笑いながら僕の首を絞めるの小枝ちゃん！？」

「ゲストを立てないからですー」

「仕方ないだろ！　事実なんだから――げほ、げほ」

「……むー、仕方ない、ですねー」

なんか落ち込んでしまった香加と小枝ちゃん……苦しそうにむせながらも、留は気を取り直して進めます。

「……い、いくぞ？　第二位」

「誰よー」

「誰ですかー」

元気ねー。

「二位、テンカ先生！！」

「て、テンカ先生……！？　カカのテンカなのにテンカ先生に負け

た！！」

「これじゃーテンカのカカになっちゃうよー！？」

「や、それ日本語おかしいから」

強いんですよねぇ、テンカ先生人気。でも……

「とうとう一位の発表です！」

「……誰？　他に一位になるような人いたっけ」

「もういないでしょー」

「一位は……あれ」

テンカ先生以上にぶっちぎりの人気を誇るキャラがいました。

その名も！

「……トメ？」

そうです。ニ位に大きく差をつけ、ただいま一位を爆走中なのは……まぎれもなくトメだったのです！！

「あ、あれ。おっかしいなぁ、あはは。僕、そんな目立ったキャラでもないし可愛くもないし、こんなはずは……あ、あれ？　なんで皆ゆらゆら左右に揺れながら僕に近づいてくんの？　ね、なんか喋ろうよ。怖いよゾンビみたいだよ！　なんかいつの間にか姉もいるし！　どうでもいいけど復活早くなってるな姉！？」

「……落とすか」

「落としましょーかー」

「落とそうかぁ」

「な、ちょっと、僕は姉じゃないんだから、こんな高さから落ちたらいくらなんでも……あ、そうだ！　こんなときには確か――あった！　おたよりの中にあった姉の撃退法！　これを使えば……えっと『まず姉に何か適当に理由言って右の手首を掴ませます』だな。ちょうど今掴まれた――」

ゴキャ！！

「なんか折れた！？　これ以上のことできないよ！？」

「カカラジチョーップ」

「チョップチョップー」

「わああぁ！！　やめろやめろこんな状態の手首でチョップなんかやらせるなあああぁ！！」

えー……

なにやら大変なことになってますので、ここからは私が説明いたします。

「痛い！　ちょっと！　なんで窓際まで僕を運ぶの！？　そして常

にチョップさせまくってるのは誰！？」

おかげさまで投票数も百を超えまして、皆様がどのキャラにどんな想いをもってくださっているか伝わってきて、楽しませてもらっています。

「たった百！？　ちょっと！　こないだあたしが言ったこと忘れたの？　これを読んでいる全、員！　投票しなさい！　渋ってんじゃないわよ、ちょちょいってメール打つだけでそのキャラへの愛の証になるのよ！？」

「いだだだだ僕にも愛の手を！！

「あんたは投票で愛もらってるでしょうが弟！！」

えー、外野が過激なことを言いましたが、投票してくれたら嬉しいのは確かです。

「そんなこと言って、これ以上投票延びなかったら泣いちゃうくせに」

そんなことはありません！

「ほんとに？」

……ちょっとあるかもしれませんが。

「泣いてる！！　僕も泣いてるのわかってるか妹！！」

そうそう、ここから票が動かないのもつまらないので、乗り換え

制度なんか作ってみようかと思います。

すでに二キャラに投票した人でも、一キャラだけ、票を変更してもいいです。そのときは『誰をキャンセルで誰に入れる』と書いてくだされればオッケーです。

人の心も人気も移ろいゆくもの。話が進むにつれて『やっぱりこの人のほうがいい！』ということもあると思うので。

「うんうん。私にたくさん乗り換えてねー」

「小枝ちゃん、三位なのに満足いかないの？」

「私はこっそりトップとりたかったんだよー」

「トップの時点でこっそりしてないから」

「そうか！　こっそり僕の手で壁にチョップしまくっているのは小枝ちゃんだな！？　すんごく痛いぞ！」

それからそれから。次回の三百回目はいつものカカラジと違って人気投票スペシャルをやります！

内容としては、各位発表ごとにそのキャラへインタビューをしたいと思います。

加えて、読者様でキャラへの質問や伝えたいコメントがありましたら伝えておきますので、何かありましたら遠慮なく感想欄でもメールででもお教えください。コメント等が多い場合は省略させていただくかもしれませんが、その場合はご了承願います。

「まとめると――投票を一人だけ変えられる！　キャラに伝えたい言葉があったらどうぞ！　投票まだまだ待ってます！　の三本だね」

そういうわけです。香加、ありがとう。

ではでは、そういうわけで……次回の投票結果をまたお楽しみに！

私は皆様の投票を楽しみにしつつ、不安に思いつつ……このあたりでお暇させていただきます。

「あ、終わりだってさ。留兄」

「終わりだと。弟」

「終わりですってー、留お兄さん」

「お。終わりって何が？　ま、まさか僕の命が――」

ポイ。

ひゅうううううううううううううううぅぅぅぅぅ。

南無。

「この番組はー、『スーパー、天下の台所』とー」

「テンカ先生の台所？　なんか汚そう」

「だねー。あと、『匿名の人のおかげで急に売れたゲーム会社』の

提供でお送りしましたー」

「会社の名前言わないんだ……」

「それじゃ皆様。またねー、ばいばい♪」

「カカばい♪」

## カカの天下２７５「第七回、カカラジ！」（後書き）

たくさんの投票をいただき、作者としてすごく喜んでおります。そりゃもっといただければもっと喜びますが（笑

こんな風にカカラジやキャラ投票という企画が成立するのも、皆さんがこの作品を読んで、盛り上げてくださっているおかげです。作者として、心から感謝しています＾＾

ＰＳ：感想欄でもいくつかいただきましたが、皆様にも。本当に風邪には気をつけましょうね。

# カカの天下２７６「カカ天クエスト　ＥＰ１」（前書き）

注意：このお話はカカ達がゲームのキャラになりきりながらＲＰＧを進める話です。話の内容はゲームの中ですが、『もしもカカ達が異世界にいたら』みたいな感覚でお楽しみください。

ステータス

カカ　ボケ勇者　レベル１　へん

サエ　悪の魔法使い　レベル１　はらぐろ

サユカ　手の平の踊り子　レベル１　さびしんぼう

トメ　ツッコミ　レベル１　つっこみ

# カカの天下２７６「カカ天クエスト　ＥＰ１」

場所：テンカ城。

王様に集められた勇者一向は、魔王討伐に向けて王様のありがたい言葉を聞くことになりました。

「よくきたな、芸人一座」

「誰が芸人だ！？」

「あ？　違うのか。ボケ、ツッコミ、踊り子、手品師といい感じにそろってるじゃねぇか」

「……じゃ王様、この芸人一座で魔王相手に何をしろと？」

「笑いでも取ってくればいいんじゃねぇか？　そうすりゃ世界も平和に」

「そんなＲＰＧがあるか！」

のっけからメチャクチャです。

「ま、冗談はともかくとして……てめぇらは魔王を倒すために選ばれた勇者だ。ま、金と装備は適当にやるから適当に頑張ってこい」

「おそれながら、王様」

トメが　出しゃばった！

「出しゃばるって言うな！　なんだその戦闘中にありそうな意味がない行動のナレーション！」

「トメ、どこに向かって叫んでんだ？」

「……いえ、なんでも、ありません」

トメは　はずかしめを　受けた！

「あー、うるさいなもぅ……」

トメは　はずかしい。

「やかましいっての！　ともかく！　王様、なぜ僕らのような芸人一座が魔王討伐になんか選ばれたのでしょうか？」

「トメさん……芸人って開きなおったわね」

「ふむ、理由は簡単だ」

王様はさも迷惑そうにため息をつき、カカを睨みました。

「魔王ってよ、カカのねーちゃんなんだよ。妹なら責任とってなんとかしろ。オレは迷惑してんだ」

この上もない理由に、芸人一座は黙るしかありませんでした。

「装備と金は武器庫番の兵士に預けてあるから、とっとと行け」

芸人だか勇者だかわからない一行がしぶしぶ立ち去ろうとした、そのときです。

「王様先生、ちょっといいですかー？」

「どっから先生が出てきたのか気になるが、まぁいい。なんだ手品師」

「私は悪い魔法使いですよー」

「全然悪そうに見えんが」

天使のような可愛らしい笑みを浮かべた魔法使い、サエが今日初めて口を開きました。

「要は魔物や魔王をなんとかしてこいという依頼ですよねーこれ」

「依頼っていうか命令だぞ」

「日給」

「は？」

なんだかメルヘンとは正反対の言葉が魔法使いの口からでましたね。

「日給ください。きちんと契約しましょー。５０Ｇなんて子供のお小遣いはなしですよ。あ、そうそう。もちろん武器も棍棒とかいうしょぼいものじゃなくて、きちんとしたものですよねー」

「おいおい待てよ。なんでオレがそこまでしなきゃなんねーんだ。俺はそいつの姉に迷惑してんだぞ。それにな、オレは民から巻き上げた金で毎日酒を飲まなきゃなんねぇんだ。てめぇらにくれてやるほど余裕は――」

「その民の間で『子供ばかりの芸人一座を、王様はろくに援助もなしに魔物にけしかけて大怪我をさせた』という噂が広まったら、そう簡単にお金を巻き上げられなくなるかもしれませんねー」

「……む」

「きっと民の皆さんも『あの王様ならやりかねん』って納得してくださると思いますがー」

「てめぇらが怪我しないように頑張れば済む話じゃねぇか」

「芸人一座にそんな根性あるわけないじゃないですかー」

サエは　正論を　となえた！

つうこんのいちげき！

「あ、ああ！　実はてめぇらはオレが選んだ最高の勇者で――」

「さっきまでの会話はこの魔法道具『録音陛下』でカンペキに録音しています。その中で王様は私たちのことを芸人一座、としか呼びませんでしたよねー。これを民に聞かせれば、どうなるでしょー」

王様は　逃げられない！

「……ちっ、わかったよ。渡す金額と武器のレベルを上げりゃいいんだろ」

「はい、あと雇用契約書ですー」

「前言撤回、確かにおまえは悪の魔法使いだ」

かくして悪の魔法使い一行は、それなりにいい装備とお金を手に入れて冒険へと臨むこととなりました。

と、その前に……

はなす。

「だりぃー」

はなす。

「仕事早く終わんないかな」

はなす。

「今日飲みにいこうぜ。おまえもくるか？」

はなす。

「にゃー？」

「何してんだ、カカ」

「え、いや。冒険前にお城で情報収集を……と思ったんだけど、ろくなこと言う人がいないね」

「あのな、普通に考えろ。見ず知らずの人にいきなり話しかけて、人生のヒントなんかもらえるわけないだろ？　ゲームのやりすぎだよ」

「あの、これゲームなんだけど……じゃ、喋るネコとかは」

「ネコが喋るわけなかろう。さ、行くぞ。まずは魔物倒して経験稼がないとな」

「魔物はいるのに……」

わりと身も蓋もない始まりとなったこの物語。

果たして、どんな冒険になってしまうのでしょうか……

## カカの天下２７６「カカ天クエスト　ＥＰ１」（後書き）

はい、無難な始まりでしたね（そうか？
のっけからカカ天ぽくなってはいますが、せっかくのＲＰＧ世界、まだまだ話を広げていかないとつまらないですよね。
そんなに頻繁には更新しませんが、このゲームもちょこちょこ進めていきたいと思います＾＾

## カカの天下277「正しい風邪の倒し方」

「最近、風邪ひいてる人多いよね」

「うん、わたしのクラスでも休んでる人結構いるわ」

「うちのクラスもだねー」

ぽつぽつと目立つ空席を見ながら「お大事に」と心の中で念仏と一緒にとなえているカカです。あれ、念仏はダメか。成仏しちゃうし。

「サユカンは風邪ひいたりしないの？」

「わたしは結構、そういうのに強いほうね」

「ちぇ、サユカンの看病楽しそうなのに」

「何をする気よっ」

それはもう色々と可愛がってあげますよ。例えば……

『けほっ、けほっ……カカすけたち、お見舞いまだかなぁ。あ。電話っ、もしもし？　あ、カカすけ。え……来れないの？　あ、そう……べ、別に気にしなくていいわよっ。こっちは風邪ひいてるのよ？　ちょうど君らの相手するのだるいなーとか思ってたところよっ。うん、うん……気にしないで遊んできなさいよっ！　じゃあねっ……はぁ……そっか。こないのか……もっかい寝よ……寂しくなんかないわよ……ね、ケロたん。君が一緒に寝てくれれば、わたしは全

然さびしく……さびしく……なんかっ……ぐすん……寂しくなんかないもん……うぅ』

「――みたいな感じでぬいぐるみ抱いてさみしがるサユカンをね、窓の外からサエちゃんと二人して見守るの！」

「うあー、すんごくニヤニヤできそー」

「……わたしの部屋、二階なんだけど」

「ハシゴとか使ってがんばる」

「隣の家にお邪魔してでもがんばるー」

「そこまでしてがんばるなっ！！」

そんなこと言って、もしお見舞い行かなかったら本当に泣いちゃうくせに。

「そういやサエちゃんは最近風邪ひかなくなったよね。去年は何度もひいて休んでたんじゃなかったっけ」

「私の場合はねー、身体が弱かったのは心の問題があったから」

「心の問題？　あ、そういえば私と仲良くなる前って苛められてたりしてたっけ」

今じゃそんなの全然なくなったけど。というか撲滅したけど。私が。

「うん、他にも色々あったんだけどねー。でも今は心が無敵だから風邪なんかひかないよ」

「へー。でも私、いつも自分が無敵だと思ってるわりには風邪ひくよ？」

「カカすけは自分が無敵だと思って無茶しすぎるのよっ」

むぅ、たしかにそうかもしれない。でも小さいころから「若いうちは無茶してなんぼ。なぜなら無茶しても大体は許されるから」って姉に叩き込まれて育ったから、いまいち加減がわからない。

「とりあえず……私は風邪には負けるわけだ。これじゃ無敵って言えないね。風邪を倒さないと！」

「どうやって倒すのよそんなの」

「んー、風邪ってどこにいるのかな」

「今年の風邪はのどにくるって言うねー。セキしてる人多いし」

「よし！　じゃあ風邪ひいてる人の、のどを片っ端から潰せば！」

「たしかにそうすれば風邪ひいてる人はいなくなるねー。この世から」

「それだと最後には誰もいなくなっちゃうわよっ」

それは盲点だった。

「んー……風邪ひいたときって、どうする？」

「薬を飲んで寝るわね」

「つまり、風邪より薬のほうが強いんだよね。薬が風邪をやっつけるんだし」

「そういうことだねー」

「じゃあ薬に勝てば風邪に勝ったことになる！　あ、先生。ちょうどいいとこに」

「んだよ」

授業の準備にきたテンカ先生を捕まえた。

「薬に打ち勝つためには、どうすればいいですか！？」

「……麻薬でもやってんのか、カカ」

本気か冗談か警察に電話しようとするテンカ先生を必死に止めて、私たちは事情を説明した。

「風邪に勝つには？　そんなの簡単だ。たとえばオレは風邪なんかほとんどひかない。なぜかわかるか？」

「バカだからですか？」

「……いい度胸してるじゃねぇか」

「いふぁい！　いふぁいい！」

口をびろーんと伸ばされて痛い！　だってバカは風邪をひかないって言うし！

「あのな、風邪なんて全部のどを通ってくるんだ。なら、のどを鍛えればいいんだよ」

「のどを……腹筋みたいに、のど筋とかあるんですか？」

「のど立て伏せとかー？　腕立て伏せみたいに」

「そんなテレビでびっくり人間がやりそうなことすんな」

あと鍛えるとすれば……スクワットとか。

「のどワット？」

「電気でもつきそうだなそれ」

「わかった、のどジャンプ！」

「首が飛んでいきそうだからやめとけ。あのな、もっと簡単な鍛え方があんだよ」

「カカ、おかえりー……なにやってんだ」

がらがらがら。

「うがい。のど鍛えてるの」

「おー、そりゃえらい」

「トメ兄もやりなさい」

「そだな」

がらがらがらがらがらがら。

## カカの天下277「正しい風邪の倒し方」（後書き）

はい、ちょー普通のオチです。
のど筋とかのど立て伏せとかしませんよ（見てみたいけど

でもなんだかんだ言ってこれが一番だと思うのですよ。外へでるとき、帰ってきたとき、起きたとき、寝るとき。
がらがらがらがらーっと。

## カカの天下278「占いの結果は温かく」

居間でテレビも飽きたので、そろそろ寝るかーって感じのトメです。

観ていたテレビは、人気ドラマの続編。『初恋はやっぱり実らない？　フラれ結ばれエンドレス』だ。なげー初恋である。でもおもろい。カカにも見せよう。

そんなことを思いながら部屋に戻ろうとしたとき、カカの部屋に明かりがついているのが見えた。

「まだ起きてるのか、カカのヤツ」

もう結構遅い時間なのにな、ちょっと注意してやろう。

僕はカカの部屋をノックした。

「おーいカカ、いつまで起きてんだ」

叱る意味もあるし、このまま入ってしまえ。

「おい、カカ？」

入ってみると、そこではカカが……

「とめにぃ……」

泣いてた！？

「天変地異の前触れか！？」

「きいてよとめにー！」

僕の大げさな言葉に反応することもなく、カカは僕に泣きついてきた。

「占いで悪い結果出た」

「は？　ああ、カカのいんちきトランプ占いのことか」

まだやってたのか。

「インチキじゃないもん！」

「当たった試しがあるのか？」

僕も何回か無理やり占われたけど、特に当たったことはないんだが。

「当たるんだよ！　例えばね、占いができるようになってから、まずはアヤちゃんに占ったの」

ああ、たしかアイドル志望の歌うまい子だっけ。

「そしたら忘れ物注意って出てね……次の日アヤちゃん、ガスの元栓を閉め忘れたんだよ！」

意外と地味だなアイドル志望。

「水難って出た西川君は川に落ちるし」

ああ、川だけに。

「東の川に落ちるなんて西川の名折れだ！　とか文句言うし」

それは知らん。

「このままじゃ西革に落ちぶれてしまう！　とか嘆くし」

違いがわからん。

「メル友のカレーの人をメールしながら占ったら」

器用なことするね。

「寒さに気をつけましょうって出て、そしたらカレーの人、『占いおつカレー』とか寒い返事よこすし」

それはこじつけ。

「占い当たりまくりだよ！」

「サエちゃんやサユカちゃんは占ったのか？」

「二人は私の友達だよ？　怖くて占えないよ」

他のは友達じゃないんか。

「で、カカの占いはなんて出たんだ」

「明日、病気になるって……喉、ちゃんと鍛えてるのに」

はぁ……ここまで信じてくれるやつがいればトランプ占いの本を作った人も本望だろう。や、そもそも占いっていうのは……よし。

「ちょっと待ってろ」

カカの返事も待たずに踵を返し、僕は台所へ向かった。

えっと……あったあった。

僕はちゃちゃっと作業を終わらすと、カカの部屋に戻った。

カカはベッドに座ってしょぼんと肩を落としていた。わかりやすい落ち込み方だ。

「ほい、トメの占いコーナーです」

「……え？」

「この温かいココアを飲めば、風邪をひかないでしょう」

僕がお盆にのせて持ってきたココアを見せると、カカはきょとんとした表情になった。

「何言ってるのトメ兄。そんなの占いじゃ――」

「占いだよ。カカが占ったろ？」

僕が何を言ってるかわからないのだろう。訝しげなカカにココアのカップを持たせながら、僕は説明してやる。

「占いっていうのはな、その人に注意を促すものなんだよ。不安をあおるだけなら単なるイヤなやつだろ？　西川君だって、水難とか言われたからなおさら川が気になって近づいちゃったのかもしれないし」

本に書いてあることをマネしただけの占いに、そこまで信憑性があるかどうかは知らない。ただ――信じる信じないは置いておいて、占いがどういうものかはわかってるつもりだ。

「出た占いの結果を見て、その人が喜ぶにはどうすればいいか、危険を回避するにはどうすればいいか……それを考えてアドバイスしたり、気をつけるきっかけをくれるのが占いっていうものなんだよ。カカの占いにはさっきなんて出た？　病気になるかもしれない、だろ。なら、そうならないようにこのココアを飲んで、温かくして寝ればいい」

カカはおずおずとココアに口をつける。

「……温かい、おいし」

「そりゃよかった。ほら、それ飲んで布団に入りな」

「うん……そっか。占いって、その人のためにするものなんだね」

「そうそう」

「じゃあトメ兄の占い結果、黙っておこうと思ったけど、言ったほうがいいんだね」

「お、おう」

「家族がやっかいごとを持ってくるでしょう」

「……それを持ってくるのが小さいほうの家族か大きいほうの家族か、それは置いといて……占い師さんや、それについてのアドバイスは？」

「覚悟してください」

わかりやすいアドバイスをありがとう。

これはしっかり温かくして寝て、明日に備えるしかないね。

僕はそう思いながら、自分の分のココアに口をつけるのだった。

あーおいし、あったかー。

## カカの天下278「占いの結果は温かく」（後書き）

占いについてはそれぞれの人で持論があるかもしれませんが、私もトメもこう思ってます。

信じる信じないは置いといて、とりあえず行動の指針にはしとく。

占いについては特に深く勉強したことはありません。だから否定する気も肯定する気もありません。

ただ、もし当たってたときのために気をつけておく、でも当たらなかったときのためにそこまで気にしない。

まぁ平たく言うと。

ちょこっと気にするだけ。

ですかね（笑）

ココアでも飲みながら＾＾

## カカの天下279「さあ、おどろけ！」

「……お姉、これないってさ」

「仕事が忙しいんだねー」

あのバケモノがどんな仕事してるのかいまだに知らないんですけどね。あ、どうもカカです。学校はもう終わったので、サエちゃんとうちで遊んでます。サユカンは家族で出かけるそうで今日は来てません。

「むぅ……じゃ、どうやって厄介ごとを持ってくればいいかな。昨日の占いがハズれちゃう」

「カカちゃん、悪い占いの結果なら起こらないほうがいいんじゃないのー？　トメお兄さんも言ってたんでしょー？」

「うん。占いの結果が悪かったら、それに注意することが大切なんだって」

「だったらわざわざお姉さんを呼んで厄介にしなくてもー」

「サエちゃん……日本にはね、こんなことわざがあるんだよ」

サエちゃんの肩に手を置いて、まっすぐ見つめながら私は言った。

「それはそれ、これはこれ」

「それ、ことわざだっけー？」

「言葉の技は全部ことわざだよ」

「そうなのかな」

とにかく！

占いというものが、色々気をつけるためにあるのはわかった。

でも占った本人としては、結果が外れるのはなんかムカつくのである。

「うー、でもどうしよう。姉がこれないんじゃ……テレパシートメ兄はどこにいるかわかんないし、お母さんは論外だし」

「仕方ないなー、助けてあげるよ。あのさカカちゃん。占いの結果ってさ、家族が厄介ごとを持ってくる、だったよねー？」

「うん、だから姉に」

「カカちゃんが厄介なこと起こせばいいじゃないの」

私が？

あ、私も家族か！

「なるほど！　じゃあ私が厄介ごとを――」

はて。

「厄介ごとってどうやって起こすの？」

「いつも通り起こせばー」

「いつも？　はて？」

「……いつも自覚なしに起こしてたんだねー」

サエちゃんが何を言ってるのかよくわからない。だって私は厄介なことを起こしたことはないはずだ。楽しいことなら起こしまくるけど。

「とにかくー、自分がトメお兄さんだったら『これは厄介だなー』って思うことをすればいいんだよ」

「トメ兄だったら……」

仕事から帰ってきて、どうなってたら厄介だと思う？

んー……

「思いついた。もし私がトメ兄で、家に帰ってきてさ」

「うん」

「おほほ」

「近所のオバサンが上がりこんでたら厄介だよね！」

「なるほどー」

「おほほほほ！　確かにビックリでございますわね！」

近所で見つけたおほほオバサンは楽しそうに笑ってくれる。私が言うのもなんだけど、心広いなーこの人。

「でもさー、これだけだとまだインパクトが足りない気がするー」

「そう？」

じゃあ……

「近所のおじいさんをプラスしてみました」

「ふぉふぉふぉふぉ」

「おほほほほ！」

なんかすごいことになってきた。

「かあさん、飯はまだかのぅ」

「惜しい！　私はカカさん」

「はい、お茶が入ったよー」

「ごちそうさまじゃのぅ」

「おじいさん、今から飲むんでしょ」

「おほほほ！　あたくしウーロン茶大好きですのよ！」

「口調のわりには庶民的なんですねー、おばさん」

みんなでわいわいとお茶を飲んでいると、トメ兄が帰ってきた。

「な……なんだ、この光景は」

「あ、トメ兄おかえりー」

「おかえりなさい、トメお兄さん」

「おほほほ！　おかえりなさいですわ、トメさんとやら」

「ふぉふぉふぉ、トメさんや。飯はまだかいのぅ」

「え、いや。そんなおじいさんにぴったりハマッてる台詞言われても」

ふっふっふ。困ってる困ってる。

「トメ兄、どう！？」

「……なにがさ」

「厄介でしょ！」

「あのなカカ――」

「ご厄介になっておりますわ」

「へ、あ、これはご丁寧に」

「厄介者で……すまんのぅ……うぅ」

「ああ！　おじいさん大丈夫ですよ！　家族になんて言われようと、あなたの居場所はきっとありますから！」

うん。

トメ兄あたふた。

大成功！！

「お茶がおいしいですなーカカさんや」

「そうですな、サエさんや」

一仕事終えたあとの一杯は最高だ。

でもなんだかんだで楽しいし。

あんまり厄介なことでもないよね、これ。

……ま、いっか。

## カカの天下２７９「さあ、おどろけ！」（後書き）

それはそれ、これはこれ。

すばらしい言葉だと思います！

## カカの天下２８０「感謝の仕方、２ｎｄ」

「忘れてた……」

放課後になり、帰る準備を始める生徒たちの中で、私カカは一人で愕然としていました。

「どしたのーカカちゃん」

「サエちゃん……いまのテンカ先生の言葉聞いた？」

「今のって、帰りのホームルームの『そういや先週は勤労感謝の日だったな。感謝し忘れてた生徒はこの後でもいいから何か感謝しとけイェーイ』ってやつ？」

そんなノリよく喋ってなかったような気はするけど。

「そう。私、感謝するの忘れてた……サエちゃんは、おじさんとかおばさんに何かした？」

「感謝の言葉をあげたよー」

やばい。私は言葉すらあげてない。

「何かしないと！」

「カカちゃん、意外に律儀だねー」

「だって恩は売れるときに売っておかないと！」

「カカすけ……君、サエすけみたいなこと言うわね」

お、サユカンだ。

「サユカンは自分の親になんかした？」

「プレゼントしたわよ」

私だけ何もしてない！

「どうしよう！　ねぇ、何すればいいと思う！？」

「うーん、そうだねー……」

「とりあえずわたしらと同じことしてみれば？」

「でもそれだけだとつまらないねー」

「あ、じゃあいろいろアイデア言ってみてくれないかな。メモするから！」

と、いうわけで。

三人で頭をつき合わせて教室で案を出し合った後、すぐに帰宅。

仕事から帰ってきたトメ兄を居間に座らせて、作戦開始だ！

「で、何が始まるのん」

「えっとさ、ほら。先週って勤労感謝の日だったじゃん」

「ああ、どっかの誰かさんが何も言ってくれなかった勤労感謝の日な」

……根に持ってるな、これは。

「とにかく感謝はしてるし、今からもっとするんだから、細かいことは気にしないの！」

「はいはい……そんで、どう感謝するって？」

「よくぞ聞いてくれました！　私たちが考え出した感謝の数々、覚悟して受けるのだ！　まずは……礼！」

感謝の日、つまりはいつものお礼をする日なんだよね。

だから、まずは礼だ！

「気をつけ！」

ピシッ。

「礼」

ペコリ。

「さよーなら」

「どこへ行くんだ」

あ、つい。学校の終礼のくせで。

「次。いつも働いてくれてることへの感謝の言葉いきます」

「ほいほい」

「ぐっじょぶ！！」

「……や、確かに『いい仕事っ』ていうのは勤労感謝っぽいけどさ」

「サエちゃんはこれで済ませたらしいよ」

「軽いなーサエちゃんち」

「次。プレゼントいきます！」

「お、次はまとももそう……って、どこにいくんだ」

「プレゼント作ってくる。決してのぞかないでください！」

「おまえはどこぞの鶴か」

感謝する日、つまりは恩返しの日。恩返しといえば鶴、というのはおとぎ話大好きなサユカンのアイデアだ。

「すぐにどこぞの鶴みたいに身体の一部をむしってプレゼント作ってくるからね」

「むしるって何!?　どこを!　そんなのいらないぞ!」

「まぁまぁ遠慮せずに」

むしるって言っても髪の毛だし。

ぷち、いたっ。さて、これをどうするか。

結ぶ?

あみあみ……

あやとり!

うーん違う……よし。

「おまたせ。はい」

「はい、って……髪の毛一本そのまま渡されても」

「思いつかなんだ」

「カカさ、そろそろ後先考えて行動するようにしないか?」

「そうなったら人間つまらなくなるってお姉が」

「だからって姉みたいにおもしろ街道まっしぐらもどうかと思うぞ」

それもそうか……

「あとは、えっと」

手を叩く。ぱん、ぱん。

で、ぺこり。

「おがむな」

なんまいだー、ってダメか。

「あとはあとは」

「あー、カカ。感謝してくれるのはわかったから、もうそこらへんでやめとけ――そろそろ変なのが出てきそうだし」

「後半なんて言ったの？」

ボソボソ言ったから聞こえなかった。

「や、もう充分だって言ったんだよ」

「ほんと？　嬉しかった？」

「嬉しい嬉しい」

「じゃあ明日ケーキ買ってきてくれる？」

「はいはい、しょうがないな――って、なんで僕がプレゼントするハメになるの」

バレたか。

「カカ、おまえちゃんと僕に感謝してるのか？」

「してるよ。超感謝、略してカンチョウ」

「その略しかたやめい！」

「カンチョウ……」

じり。

じり、じり。

「艦長！　発射であります！」

「その指をどこに発射する気だあああああ！？」

どどどどどどどど！！　最近走ること多いなぁ。それはさておき。

ちゃんと感謝してるんだよ、トメ兄。

ちょっと照れくさいだけで。

そう、照れくさいから――ぷすっとな！

……この後のトメ兄のことを書くのはやめておこう。

トメ兄の名誉のために。

これが、一番の勤労感謝のプレゼント♪

# カカの天下２８０「感謝の仕方、２ｎｄ」（後書き）

二年目の勤労感謝はこのようにぷすっとなりました。
よかったね、トメ。この小説だけ読んでると君は妹に構うばっかりで本当に働いてるのかコイツとかたまに思うこともあるけど、いつもご苦労様。
そして働いている世間の皆様（自分も含め）遅れましたがいつもお疲れ様です。

## カカの天下２８１「こーちょーぱにっく」

「サエすけ聞いたっ？　校長が帰ってきたって！」

「らしいねー」

一言で返事してしまいましたが、実は私サエも興味津々だったりしますー。

放課後に入った途端、クラスにいる生徒の大半は教室の外へ飛び出していきました。それというのもいまサユカちゃんが言った通り、この貴桜小学校の校長先生が帰ってきたからです。

「校長……あるときはモミジ狩り、あるときはりんご狩り、そしてあるときはワニ狩りと、いっつもなんか狩りに出かけていてほとんどの生徒がその姿を知らない、幻の校長！」

単なるサボり魔のような気もするけど。

「それが今、帰ってきているとっ」

興奮しているサユカちゃんの気持ちはわかる。多分この小学校の生徒全員がわかると思う。

ことあるごとにチラリズムしつつ姿を見せない謎につつまれた校長……その実態をあばく！　こんな面白いイベントに生徒が飛びつかないはずがない。

はずがない、と思ったんだけどー……

「カカちゃんは探しに行かないの？　こうちょー」

「今忙しいの」

真っ先に飛びつくかと思っていたカカちゃんは、どうやら興味がない様子。

「何してるのー？」

「手紙書いてるの。勤労感謝のやつ。トメ兄にはぷすっと感謝したし、お父さんにはテーブルにうまい棒の束と手紙置いといたら一晩で消えてたからオッケ。あとはお母さんだけ」

「そういえば、カカちゃんのお母さんって――」

「ほらっ、カカすけが行かないならサエすけ行くわよっ。誰よりも先に校長を見つけてやるんだからっ」

「わわ、そんな強く引っ張らないでー」

「いってらー」

手元に視線を落としたままひらひら手を振るカカちゃんを教室に置いて、私はサユカちゃんと共に校長探索へ行くことになった。

「さてっ、まずはどこを探す？」

「うーん、校長先生の特徴とかってわからないのかな」

「特徴ね……うーん、狩りばっか行ってるから狩人よねっ」

「狩人。弓もってウッホウッホ言ってるのかなー」

「そんな人がいたらわたしらより先に警察が見つけそうだけど」

そもそもそんな校長やだー。

「んー、ちょっと待ってねー」

校長探しに躍起になる生徒で騒がしい廊下を歩きながら、私はきょろきょろと見回し……目当ての顔を見つけた。

「ねーねー、そこの人」

「サエ様！　じゃなくてサエさん！」

「今わかってる校長の情報おしえてー」

「はいっ、えっと、とりあえず小柄な女性だそうです。あと、髪は黒いそうで、弓は持ってないそうです！」

弓て。みんな考えることは同じだね。

「ありがとー」

「いえいえお役に立てて光栄です！　では」

ぎこちない笑顔で去っていく男子さんに手を振っていると、サユカちゃんがおずおずと声をかけてきた。

「さ、サエすけ？　今の誰？　六年生だよね、あの人」

「私のファンクラブの人だよ。顔見たことあったからー」

「な、なるほど」

一回ファンクラブ集会とかいうのに行ったことあるんだよねー。
それはさておき。

「とりあえず小さい女の人で、髪は黒くて、残念ながら弓は持ってないんだって」

「こだわるわね、弓」

だって残念だもん。

「ふーむ、小さくて、黒い……じゃ、ここととか？」

蓋をパカリ。

「サユカちゃん、たしかに中は黒くて小さかったら入るかもしれないけど……そんなゴミ箱の中に人がいるわけー」

「人がいたわっ！？」

「どんだけー」

流行の言葉を言いつつゴミ箱を覗いてみると、たしかにそこには人がいた。

「ニシカワ君？」

川だっけ。革だっけ。忘れたー。

「な、なんでこんなところに入ってるのよっ」

「かくれんぼー？」

「ぷはぁ！　違うよ！　普通のかくれんぼなら、こんな手も足も口も縛られたりしないだろ！？」

「普通じゃないかくれんぼ。趣味なの？」

「違う！！」

とりあえずニシカワ君を引っこ抜いて、事情を聞いてみると……

「屋上で、校長っぽい人をみかけたんだ……そしたら気がついたらこんなところに」

事情みじかいなー。

「なんでそんなことになるのよっ、校長って一体ナニモノ！？」

「姿見られたら困ることでもあるのかなー」

「や、単にかくれんぼを楽しんでるだけだと思うよ」

あれ、カカちゃんだ。

「手紙書き終わったの？」

「うん。でさ、お探しの校長だけど、もういないみたいだよ」

「「「えぇーっ」」」

すごく残念そうにするサユカちゃんとそれを聞いた周りの生徒たち。

「次はヒョウ狩りに行くんだってさ。本当かどうかは知らないけど」

「まじかよー、ぜってー見つけてやろうと思ったのに」

「ヒョウかよー。かっけーな、ちきしょー」

「ウヒョー！」

「誰だ、くだらないこと言ったヤツ」

ぞろぞろと解散していく校長詮索隊。私も残念だ。今から屋上に行けばまだ間に合うかもーとか思ったのに。

……屋上？

あれ、カカちゃんの歩いてきた方向って、教室じゃなくて屋上のほう……

「ね、カカちゃん」

校長を血眼になって探している人に聞かれると面倒そうなので、一応こそっと聞いてみた。

「もしかして……校長先生のこと知ってるの？」

カカちゃんは一瞬驚いた顔をしたけど、すぐにニヤリと笑ってこう言った。

「な、い、しょ♪」

「えー！」

この後、いくらしつこく聞いてもカカちゃんは答えてくれなかった。

校長って……どんな人なんだろー。

ていうか、仕事しなくていいのかな校長。

## カカの天下２８２「公園で遊ぼう、宝探し編」

「昨日の校長探し、見つからなかったけどあれはあれでおもしろかったわねっ。宝探しみたいでっ」

「じゃー宝探しをしよっかサユカちゃん」

最近外で遊びにくくなってきましたね。だからこそ反抗心溢れる子供の私、カカはいつもの二人を引き連れて公園へとやってきました。

「サユカちゃんの宝物、この公園内に隠したから探してみてー」

「隠したって、いつの間に？　そもそもわたしの宝って何よ」

「私とカカちゃんで作ってプレゼントした、ビーズつきシール」

あ、最近の私ら二人のビーズ遊びの作品か。どこにでも何回でも貼れるシール飾り、サユカンにプレゼントしたんだよね。

「ふん、残念だったわねサエすけ。あんなチャチなもの、宝物でもなんでもないわよ。それを失くしたくらいで、このわたしが必死になって探すと思ってるの？」

ガバッ！　ガバッ！　ガバッ！

「どこよっ！」

「めちゃ必死に探してるやん」

とりあえず手近に落ちている岩をめくりまくり、勢いに任せて近くで遊んでいた女の子のスカートまでめくるサユカン。宝くじ失くした人でもそこまで必死になるかどうか。

女の子に頬を染めて謝り、公園内を探しながら爆走し始めるサユカン。それを確認すると、サエちゃんは私に向き直った。

「カカちゃん、やっと二人きりになれたね……」

ぇ、なにそのドキッとするセリフ。

「カカちゃん」

「な、なに」

唇がなんか眩しいんですけど、ってどこ見てんだ私。

「今度こそ教えて。校長のこと」

む、まだ諦めてなかったのか。

「だから、そのことは教えられないの」

「私に隠し事するのー？」

「ぅ……そ、そういう言い方されると困る」

「私よりあの女がいいのね！？」

「そ、そんなことないよ！　私はいつもサエちゃんを一番に！」

「じゃあ話して！」

なんか昼メロっぽくなってきた。

「教えてくれないと……トメお兄さんにバラすよ？」

「な、なにを」

「カカちゃんが知り合いに片っ端から『トメ兄のここが可愛い』とか『トメ兄のここがラヴい』とか言いふらしまくってるって！！」

「それは勘弁して！！」

そんな事実はまったくないけどあの兄は絶対に喜んじゃうから！！　私が必死で否定しても生暖かい目で見てきそうだから！　ラヴいって何！？

「うぅ……仕方ないなぁ。ちょっとだけだよ？」

「うんうん！」

あー、すんごい嬉しそうだー、かわいいーなーくそー。

「んとね」

「サエすけっ！　どこにもないじゃ――」

「サユカちゃん邪魔！　ヒントはトイレー！」

「ぇ、あ、は、はいっ」

私の話が遮られたのが気に食わなかったのか、さっさとサユカンを追っ払うサエちゃん。

ちょっと怖かった。サユカンちょっと悲しそうだった。

「さ、続きー」

「イェッサー！！」

「なんで敬礼してるのー？」

怖い人にはまず敬礼。

「んとね、私も校長のことそんなに知ってるわけじゃないよ。ただ、なんというか、この前たまたま見つけちゃったというか」

「ふむふむ」

「そしたらなんか『謎の校長って格好いいじゃない？　だから内緒にしといて』って言われて」

「……なんだかカカちゃん族っぽい考えする人だねー」

族て。

「カカちゃん、あのさ、勤労感謝のお母さんへの」

「サエすけ！　トイレには――」

「ヒントは鏡！　ゴー！」

「い、いぇっさーっ！」

サユカン、今日なんか可哀想だなぁ。

「カカちゃん。勤労感謝のお母さんへの手紙、あの後どうした？」

「へ！？」

ぎく。

「手紙さー、書き終わったみたいだけど、あの後持ってなかったよね。もしかして」

「食べたの！」

「……へ？」

「食べたんだよ！　ほら、知らなかったかもしれないけどさ、私にはヤギの血が流れてるんだ！　だから我慢できなくて」

「へー。じゃメーって鳴いてみて」

「メェェェェ」

「ん、可愛いから許そー」

あれ、許された。なんか意外だ。しかも私っぽいこと言うし。

「あんなに慌てるってことはー、やっぱそうなんだよねー」

「サエちゃん、なんか言った？」

「んーんー。なんにも。じゃーこの話は終わりにして、本当に宝探し遊びしよっかー」

「さ、サエすけさん？」

トイレから戻ってきたサユカンは怯えている。

「鏡、調べても、その、すいません、見つからなかったんスけど……」

とことん怯えている。

「んー、なんで人って自分の髪の毛についてるものって気づかないのかなー」

メガネしてる人が自分の額にかけてそのまま忘れるみたいな感じだよね。

サエちゃんがペリ、とサユカンの頭についてたシールを取ってやると、サユカンは愕然とした。

「灯台あたまくらしだねー」

「それだと灯台が頭で暮らしてるみたいだね」

「わ、わたしは……今まで一体なにをしてたの」

「女の子のスカートをめくった後、トイレをじっくり、べったり、舐めるように丹念に調べてたんだよ。無駄に」

「こと細かに言わないでぇっ！」

「いいんだよーサユカちゃんはそれで。うんうん、ラヴいラヴい」

だから、ラヴいって何。

## カカの天下２８２「公園で遊ぼう、宝探し編」（後書き）

校長のことについて、色々とメッセージがきたりしていますが…
…あえてノーコメントとさせていただきます。

真実はどうなのか、それは今後の展開をお楽しみに！！

にしてもサユカちゃんラヴいわ。

## カカの天下２８３「対決！　西の食堂ｖｓ東のファミレス」

「……遅い！」

「遅いね」

「遅いな」

まだかなー、もう！　あ、こんばんトメです。

時刻は夕食時。たまには家族で外で食事を、とカカと姉と三人でセイジ食堂にきたのですが……料理がこないのです！

しかも料理が遅れているのは僕らのテーブルだけではないらしい。周囲を見渡すとびみょーにイラついている常連の方々が見える。

「料理がこない原因って……やっぱアレだよね」

「アレだろうな」

僕とカカは店の入り口に目をやった。

そこではライバル店のファミレス『東治』の看板を持った若者と、セイジ食堂の店長ゲンゾウさんが、バチバチと視線の火花を散らして睨み合っていた。

「皆さん、こんな食堂よりも東治へどうぞ！　ここで食べたからって日本の政治がよくなるわけでもないですよ！」

「やかぁしい！！」

こんな風に無理やり宣伝しようとする東治の回し者のせいで、ゲンゾウさんが厨房に行けないのだ。

「今ならドリンクサービス券をお渡ししますよ！」

「そんな宣伝よそでやれってのが聞こえねぇのか！？　ったくトウジの野郎、姑息な手ぇ使ってきやがって」

「おっと、勘違いしないでください。これは俺が勝手にやってることだ。口にはあまりしないがあんたに勝ちたがってるトウジ親分のためにな！　サービス券もって外回りしてくるって言って出てきたのさ！」

はぁ、なるほど。親分ときたもんだ。随分と恩義があるんだろうな。

でも、そろそろ潮時だな。

なぜなら。

「腹、減った……！」

「もう、待てない……！」

腹減ったら極端に機嫌悪くなる類の人間が、ここに二人もいるんだからな。

ドドン！！　と効果音の突きそうな勢いで立ち上がった二人は、

のっしのっしとゲンゾウさん達の元へと歩いていった。

その異様な気配に気づいたのか、口論していた二人が姉とカカの方へ顔を向ける。

「ゲンゾウさん。ここはあたしらに任せて、あんたは厨房で仕事しな」

「はぁ!?　あのな、ここは俺の店――」

「ならさっさと作れや」

「さもなくばあんたを食う」

「……ぅ、わ、わかった。任せたぞカツコちゃん」

おぉ、あの強面のゲンゾウさんがビビッてる。今どんな顔してんだろあの姉妹。

「にゃ？」

「おー総理大臣。引っ込んでたほうがいいぞ。食われるから」

「にゃ、にゃあ……」

足元に現れた猫の総理大臣はタッタカターっと引っ込んでいった。

頭のいい総理大臣だ。日本も安泰だな。

「さて、そこの男」

「な、なんだアンタらは……そそそんな般若みたいな顔してたって、こここ怖くないんだからな！」

般若。そらこえー。

ずーっと前はたしかゲンゾウさんが般若だったのに、それが逃げるってことは超般若だな。

超こえー。

「あのね、あんた考えてもみなよ。ここから東治までどんだけ距離があると思ってんの。ドリンクサービスするからそこまで行けって？　ご冗談を。時は金なり労力も金なり。こっからそこまで行くにはね、それっぽっちじゃ割に合わないんだよ！」

姉の意見もたしかにごもっともだが、果たしてツッコむべきはそこなのだろうか。

「い、いや、でもドリンクが」

「たかがそれだけでそんな遠いとこまでいちいち行く人ばっかなら、コンビニなんか全部潰れてるんだよ！」

カカの意見もごもっとも。ちょっと高いけど便利だから使うよね、コンビニ。

「半額にしなさい」

「……え？」

ドスの効いた姉の声。まさしく般若だ。や、般若がどんなもんか詳しくは知らんが。

「今から全品、半額にしなさい。今日だけでもね。さもないと、もうその店に誰も来ないようにするよ！」

「ば、バカか！？　そんなことできるわけ――」

「町内会長！」

「あいよ、姐さん」

いたの会長さん！？　ていうか姐て！　アンタどう見ても年上っ、ていうかおじいちゃんでしょうが！！

「今から町内連絡網で『誰も東治には入るな』って回しな！」

「あいよ」

「え、ちょ、ちょっと待て！！　そんなのアリか！？」

「ただし！　半額にするなら入ってあげるよ！　ねぇみんな！？」

「「「いぇーい！！！」」」

相変わらず人気あるなー、姉。

「そんなことできるわけ……そ、そうだ。できるわけないだろ！どうせ嘘っぱちだ、町内会長だかなんだか知らないが、そんな力あるわけ、ひぃ」

ぐい、とその男の胸ぐらを掴みあげたのは、カカ！？

「狭いご町内、なめんな」

「「「カカちゃんさいこー！！」」」

おまえも人気あるなーカカ。

『そ、そんなわけで、その……半額にしないと、もうお客さんがこなくなるって……』

「こんのぉ……馬鹿タレが！！　誰がそんなことをしろと言った！？」

『せ、セイジ食堂に負けたくなくて……』

「兄貴の店は実力でぶっ潰すから余計なことするな、このたわけが！！　いいからさっさと帰って来い！！」

怒鳴った勢いのまま叩きつけるように電話を切った東治の店長トウジは、深々とため息をつき、頭を抱えた。

「ったく本当に余計なことをしてくれた……おぃバイト。なにしてんだ」

「え？　だって半額にするんですよね。でしたら僕もお客様になったほうがオイシイと思いまして、着替えを」

「馬鹿ヤロウ！　何ふざけたこと言ってんだ！」

「ふざけてません。無駄に忙しそうな日は早退する。安く食べられるときにとことん食べる。これがフリーターの鉄則です！」

「いばるな！」

「フリーターの懐をなめるな！」

「だからいばるなっつうに！　とにかく却下だ。人手がいる。半額にしたら……客は、来るだろうからな。赤字だろうが……」

「あ。やはり半額にはするんですね」

「あぁ、ご町内は敵に回しちゃいけねぇ」

「むぅ、仕方ありませんね。お客になれないのなら……打開策をお教えしましょう」

「そんなもんがあるなら早く言え！　なんだ」

「量も半分にすればいいじゃないですか」

「……それ、アリか？」

「今回の半額にする理由自体『それ、アリか？』なことなんですから、大丈夫でしょう。詭弁には詭弁で対抗です。文句を言われたら僕がうまく言いくるめますよ」

「……結局、どうなったんだろうな。東治」

セイジ食堂にいたお客さんは注文した料理を食べた後、みんな揃って東治に向かった。半額セールを始めたという情報が入ったからである。みんな胃袋でっかいねー。

でも僕とカカと姉は行かず、食後のコーヒーをまったりと飲んでいた。

「東治？　知らないよ。興味なし」

「おい。あんだけやっといてそれか」

「私もどーでもいー。お腹いっぱいになったし」

「そうそ、あたしらの食事を邪魔した男を一泡吹かせられたし、あたしももうどうでもいーよ」

本当に勝手だな、こいつら……

その後、話に聞いたところによると東治は経営の危機をうまく回避したらしい。

どうやって回避したかは詳しく聞いていないけど、なにやら口のうまいバイトが活躍したようだった。

「あの人だね」

「あの人だな」

名前は知らないバイト君……君は只者じゃないと思っていたよ。

## カカの天下２８３「対決！　西の食堂ｖｓ東のファミレス」（後書き）

手負いのケモノと空腹のケモノは大変危険ですので、充分注意いたしましょう。

食われますよ。

総理大臣みたく生存本能に従って逃げましょう。

## カカの天下２８４「花占いを相手の前で」

『好きなんだ！』

『まぁ！』

『やっぱり別れよう』

『そんな！』

あ、これテレビの音ね。こんばんは、トメです。

夕飯も食べ終わり、カカと二人でテレビドラマを観てます。内容はビデオまで撮っていつも欠かさず観ている『初恋はやっぱり実らない？　フラれ結ばれエンドレス』です。

そして今は主人公がヒロイン役の人に向かって花占いをしながら今後を決める場面。花びらを千切るごとに、告白してくっつく↓別れる↓告白してくっつく……を繰り返しています。

『どうしようもなく好きなんだ！』『私もよ！』『でもうまくいかないんだ』『くじけるわ！』『でも一緒にいると幸せなんだ！』『それが一番大事よ！』『でも一緒にいると苦しいんだ』『どっちよ！？』『苦しさを君と一緒に！』『望むところよ！』『苦しくて潰れそうなんだ』『諦めはやっ！！』

いつまで続くんだろこれ。

「花びら多いねー、あの花」

「どんだけひっぱるんだろな」

「でもこれはこれでおもしろいよね」

くっついたり離れたりがあまりに忙しくて飽きないのは確かだ。

「まったく……はっきりしない男だなぁ。あの主人公には色々と足りないものが多すぎるね！」

「へぇ、言うじゃないか。例えば何が足りない？」

「身長」

そりゃどうしようもねぇ。確かに女優さんと同じくらいだけど。

「あの主人公の男、何歳だっけ」

「１８歳だな。で、ヒロインが２５歳の設定」

「年齢も足りなかったか。ダメダメだね」

「そうか？　カカは年下ダメなのか」

「だって七歳下なんだよ？　私だったらありえないね」

そら三歳はありえんだろう。

「デートするたびに泣かれそうだし」

だって三歳だもの。

「煮たら美味しいかもだけど」

それは山菜。

「あ、ＣＭ入った。ねぇねぇトメ兄」

「なんだ」

「初恋は実らないごっこしようよ」

それだけ聞くとすげー虚しいごっこ遊びだな。

「トメ兄と私が、交互に好きなところと嫌いなところを言い合うの。そうすれば兄妹の仲がより一層深まるよ！」

……マジデ？

ソレめっちゃ恥ずいんですけど。

「じゃあトメ兄から」

ぇ、ほんとにやんの？

「ほら、ドラマみたいに」

ま、マジなんスか……うぅむぅ……

「ぼ、僕はカカのおもしろいとこが好きだ」

「ぅげろ」

「まてやコラ」

自分から言っといてその反応はなんじゃい！

「ごめん、つい。じゃ私ね。えっと、トメ兄の面倒見のいいとこが好き」

次は逆のこと言えばいいんだな。

「カカの度が過ぎる思いつきは嫌いだな」

「トメ兄の口うるさすぎるとこが嫌い」

……む、なんだと？

「じゃあ僕はうるさく言っても言うこと聞かないカカが嫌いだ」

「なにおぅ、私はトメ兄の冗談の通じないとこが嫌い！」

「カカのそうやって開き直るところが嫌いだ！」

「人をわがままみたいに言わないでよ！」

「わがままだろうが！　最近の僕の作った食事！　味噌汁作れば『味濃い』って言うし、ちょっと同じメニュー続いたら『しつこい』って言うし、ちゃんこ鍋作ったら『どすこい』って言うし！　これのどこがわがままじゃないと――はっ」

下唇を噛んで上目使いに睨んでくるカカの表情で気づいた。僕、何言ってるんだ？

「……ごめん、言い過ぎた」

「どすこい」

「それ怒ってんのか？」

「……どすこい！」

「あぁ怒ってる！　ごめん！　悪かった」

「……ん。私も、ごめん。トメ兄のご飯、好きだよ？」

「え、あ、そ、そっか。僕も、その……」

カカにご飯食べさせるのが好き……ってなんか変か？

「えっと、なにはともあれ、兄妹の絆は深まったね！」

「そうと言えなくも、ないかな。ドラマの二人がしてる言い合いも、少しは役に立つってことか」

『次回、結局こじれてしまった二人はどうなるのか――こんな言い合いしてたら悪いところばっかり目立っちゃいますね。やるだけ無駄無駄。むしろマイナス。テレビの前の皆は真似しちゃイケナイゾ♪』

「「おい、そこの次回予告」」

僕らの感動を返せ。

## カカの天下２８４「花占いを相手の前で」（後書き）

人の悪いところはすぐ目につくのに、良いところはなかなか見つけにくい。よくある話ですね。

カカが言い出したごっこを続けるのはよほど仲のいい友達じゃないと案外難しそうです。

それに比べてテレビの中の人がやってるのは案外簡単そうですが（笑）や、本気でやるのは難しいか……うーん。

## カカの天下285「イメージちぇんじ！」

「サユカちゃん、こないね」

「珍しいねー」

ごちそうさま、カカです。

何がごちそうさまなのかと言うと、給食を食べ終わったということです。

しかしいつもなら給食の時間ですでに来ているはずのサユカンの姿がありません。午前中の休憩時間にも来なかったし。はて。

「たまにはこっちからサユカンのクラスいく？」

「いいねー。もう私に飽きたの！？　って言ってやろー」

む、それ私が言おうと思ってたのに。

何はともあれサユカンのクラスへ移動だテッテコテ。これ移動の音ね。

「たのもー！　お」

「あらー」

サユカンはすぐに見つかった。机に突っ伏して寝てる。

「ふむ、ちょいとそこの人」

「え、あ、はい」

私は近くにいた女子に声をかけた。

「サユカンどしたの？　寝てるけど具合でも悪いのかな」

「サユカン……あ、岸村さんですか」

そういやサユカンって岸村って苗字だったっけ。

「なにやらひどく寝不足のようでして……授業中も辛そうにされていましたし。給食を食べ終わるとすぐに眠ってしまわれましたよ」

そういうことか。登校時は一緒で喋ってたんだけど、寝不足だなんて気がつかなかった。

それにしても丁寧なしゃべり方をする子だ。メガネかけてるし髪は三つあみだし、敬語がぴったりハマッてる。

「誰も起こさないんだね」

「あ、その……言いづらいんですけど、岸村さん。あまりクラスに仲のよろしい方がいらっしゃらないので……わたくしとしては仲良くしていただきたいと思っているのですが、話しかけても冷たく辛口で返されるだけで……お恥ずかしい」

冷たく、ねぇ。照れてるだけだと思うんだけど。

「カカちゃん、ここは私達の出番だねー」

「うん、サユカンのイメージを変えてやろうじゃないの！」

これも友達の務めだ。うんうん。

「あんたも見ててね、委員長っぽい人」

「よ、よくわかりましたね、わたくしが委員長だと」

やっぱそうなんだ。まぁそれは置いとこう。

「さて、どうやってサユカンのイメチェンしよっか」

「委員長さんは、冷たい反応をする、って言ってたねー」

「あ、あの、わたくし委員長って名前じゃ」

「んじゃ略して委長。イチョウさんね」

「え、あの、なぜわたくしの胃腸が弱いって知って――」

知らんて。

「イチョウさんにとっては、冷たい、か……んじゃ」

サユカンの机の中にあったノートを拝借。そしてページを破ってちょこっと書き書きして、寝てるサユカンに貼り付ける。

サユカンの頭にでっかく輝く、『ほっかほか』の文字！

「これで冷たくないよね」

「そだねー。あと、辛口だって」

そいじゃ書き書き。

頭にもいっちょ貼り付ける。

ほっかほかサユカンに加わる、『甘口』の文字！

「冷たくて辛口……つまりはお高くとまってるように見られてるのかなー」

そいじゃこれだ。

ぺたり。

「「うーん」」

サエちゃんと二人で、寝ているサユカンの頭に貼られている紙を眺める。

『ほっかほか』『甘口』『安いよ！』

「サユカレーの宣伝？」

「『おいしいよ』っていう紙も書けばー？」

ピシャァン！！

「カレーはここかぁ！？」

教室の引き戸に悲鳴をあげさせる勢いでカレーの人が現れた。

ギロリン、とカレーの人は宣伝仕様のサユカンを見る。

「はんっ」

ピシャリ！！

「は、鼻で笑って帰っていった……」

「なにあれー」

「見なかったことにしよう。さ、次は何を――」

「何を、してるの」

……あら？

お目覚めですか、サユカン。

「何を、してるのっ！？」

「見なかったことにしよう」

「するなっ！！　なによこの頭についてる紙はっ」

「まーまーサユカちゃん。きっとおいしいよ？」

「意味がわからん慰めしないでよっ！」

「あ、あの、岸村さん！　わたくしもカレーは甘口が好みで」

「だから意味わからないってのっ」

「大丈夫サユカン。冷めても売れ残っても買ってあげる」

「２００円でいいかなー？」

「何からツッコめばいいのわたしはーっ」

ぎゃーぎゃー騒ぐサユカンをなだめながら、私はイチョウさんにウインクした。

「ね、嬉しそうでしょ」

「そ、そうなのですか？　はたして本当に喜ばれていらっしゃるのでしょうか」

喜んでるよ。

だっていつも最後には絶対、微笑んでくれるもん。

冷たく見えたり怒って見えたりするけど、根は素直で友達想いな女の子なんだから。

「うがーっ！！」

今は怪獣だけど。

というかサユカン。そんなに文句言うなら取ればいいのに、紙。

## カカの天下２８５「イメージちぇんじ！」（後書き）

この後サユカちゃんは、カカとサエちゃんとイチョウさんの頭にも紙を貼りつけまくったのでした。

めでたし、めでたし。

どんな文字が貼られたかはご想像にお任せします。

## カカの天下２８６「サユカの任務、相棒編」

「もしもし……またですかっ」

『すいませーん。でもなんか、クセになっちゃってー』

はぁ……とため息なんかついちゃったサユカです。

電話の向こうからは聞きなれた間延びした声。そう、サエすけの母親、サカイさんだ。

『ほら、この間は勤労感謝の日だったのに、わたしだけ祝ってもらえなかったじゃないですかー。トメさんとかは祝ってもらえてたのに……だから寂しくてー』

むー、それは仕方ないことよね。サカイさんが近くにいるってサエすけ知らないんだから。

『ショックでわたし、三日ほど仕事休んじゃいましたよー』

「働いてないじゃないですかっ。そりゃ感謝もされませんよ」

私は呆れながらベッドにちょこんと座りなおした。

胸に抱くのはうさぎのぬいぐるみ、うさたんだ。そのもふもふの頭に自分の顔を埋め、長い耳を指でいじくりながら電話する。きもちいー。手触りがなんとも。

「それで、今度は何が聞きたいんですか。昨日も夜中まで散々サエ

すけのこと喋らされて、寝不足なんですけどっ」

『それは大変ですねー』

「他人ごとのように言わないでください！」

『いえいえサユカちゃん。たとえ寝不足が私のせいでも、私は眠くないんですから他人ごとには違いないんですよー？』

「切りますっ」

『ああごめんなさいー！　そうですね、眠いのならー、最近発売した『うさぎコーヒー』がおすすめですよー』

「……うさぎ」

手元にあるうさたんに視線を落とす。

『そのコーヒーはですねー、うさぎの皮をはいで』

「聞きたくありません！」

バイバイうさたん。今の話忘れるまで隠れててね。

ようこそケロたん。今度の相棒は君よ。

『そうですかー、おいしくて眠気覚めるんですが……あ、そうそう。お聞きしたいことなんですけど。皆さんクリスマスはどうやって過ごすんですかー？』

「クリスマス……ですか。そういえばもうすぐですね。サカイさんの小さいころはクリスマス、どうしてました？」

『私ですか？　そうですねー、あまり特別なことはせずにケーキを食べるくらいだったような……あー、一度だけ妙なクリスマスをしたことがありました』

「へぇ、どんなですかっ」

『そのときに仲良かった友達の家の伝統儀式らしいのですが、６６匹のカエルのお尻にストローを刺して次から次へプッと』

「ストーップッ！！　それクリスマス関係ないです！」

ばいばいケロたん。ようこそワンたん。食べるほうじゃないわよ。犬さんよ。

『そのとき出たのは犬のようなパウンドケーキでして、それはきっとパウンドとハウンド（狩猟犬）をかけたダジャレなんだと今ようやく気づきましたー』

「……サカイさん、わたしの部屋覗いてません？」

『そのときは頭からガブッと』

「聞いてくださいっ！」

ばいばいワンたん！　次はガーたん（怪獣のぬいぐるみ）、君に決めた！

『あ、カツコちゃんだ』

怪獣が来た！？

どうなってるの……ぬいぐるみを胸に持ってくると示し合わせたかのようにその話題が。このままだとぬいぐるみを抱いて寝れないじゃない！

『そういえばカツコちゃんは勤労感謝に何かしたの？　お母さんにとか。あれ、そういえばカツコちゃんのお母さんって……へー、性格は全然似てないんだー』

「あの、もしもし？」

『あ、ごめんごめんー。カツコちゃん来たから、そっちに話し相手になってもらうねー。夜遅くにありがとー』

「……サエすけの話してませんけど」

『それは昨日たくさん聞いたからいいのー。今日は単にヒマで』

「今度から着信拒否していいですか？」

『そう言わないでくださいよー。サエとは話せないから寂しいんですよー。若いエキスがほしいんですよー』

……寂しいって言葉、反則だと思うわっ。

『話してるうちにサユカちゃんも自分の子供みたいに思えてきて……親の愛を受け取ると思って勘弁してください♪』

また恥ずかしいことを……あら、部屋の外に気配が。

「サユカー、いつまで起きてるのよ、早く寝なさい」

お母さんだ。

「はーいっ！　サカイさん、こっちの親の愛もうるさいもんで切りますよ？」

『まぁ！　それは愛対決しろと――』

「言ってませんおやすみなさい」

ぽちっとな。

まったくもう、お話するのは別にいいんだけど……一緒に寝るぬいぐるみの常連さんが使えなくなったじゃないのっ。

どうしよっかなー。この際小さいぬいぐるみでも……あ。

そこでわたしの目にとまったのは、いつぞやカカすけ達がプレゼントしてくれたハートのネックレス。机の上に飾ってあるその赤いハートの中心には、愛しのトメさんのお写真が。

……一緒に、寝ちゃう？　あえて考えないようにしてたけど。

もそもそとベッドから起き上がり、ネックレスを手にとる。

トメさんの写真……そ、そうよね。せっかくあるんだし。誰も見

てないし。

そう、だ。

どうせなら。

く、くち、くちづけを！

写真に、なんて馬鹿みたいだけど！　でも誰も見てないし！　見てないわよね！？

本当に見てないわよねっ！？　見たら殺す！　誰だろうと！

ちなみにトメさんに見られたら私が死ぬ！

……さて、と。

ごくり。

そーっと、そーっと……写真を口元へ近づける。

もうちょい、もうちょっと。

あと、数ミリ……

「やっぱダメ！！」

また失敗してしまった……くそー、この写真のトメさんが格好よすぎるからいけないのよっ！　もっと変な顔の写真なら、ってそんな写真飾るのはどうも、いやでもトメさんだから全然オッケーだし、

いやいやせっかく格好いい写真があるんだから――

そんな感じでネックレスを手にベッドでゴロゴロしながらもやもやしてるうちに、またもや夜更かししてしまった。

恋する乙女が寝れないって、本当なのねっ。

……いつの間にか寝てたけど。

## カカの天下２８６「サユカの任務、相棒編」（後書き）

いやー。
書いててちょっと恥ずかしかった＾＾；

なんにせよいつぞや『サユカちゃんの私生活を覗きたい』とリクエストくれた方、ようやくお応えさせていただきました！
リクの文が違う？　キニシナイキニシナイ。

## カカの天下２８７「姉の役割」

ちっす、カツコだよ。またの名を姉だよ。あだ名は姐だよ。文句あっか。

うし、ないね。さてさて、今日は仕事が早く終わったので我が家に遊びにきてみたよ。ちょっとした用事もあるし。

「やっほー！　者ども出あえー！」

「……くせ者が言うセリフじゃないぞ、それ」

居間を覗くと、けだるそうに挨拶する弟君が。

「おっす、姉」

「なにしてんのさ弟」

「仕事から帰ってきたとこだからな。カカは遊びに出てるし、ごろごろしてた」

「不健康だねぇ、運動しなよ。たとえばサンバ踊ったり」

「運動不足だからって、いきなり部屋でサンバを踊り出すやつがどこにいるんだ」

「あたしはやってるよ。情熱的に。でっかい葉っぱを頭につけて」

昔から街を歩いててでっかい葉っぱが目に入るとテンション上が

るんだよね。だからついつい千切って持ち帰ってしまうのだ。たまに「コラー！」っておっさんが追いかけてくるけど。しかしあのおっさんも「コラー」に飽きないのかね。もう１０年以上「コラー」って言ってるよ。たまには「コーラ」とか言ってみればいいのに。

コーラ飲みたくなってきた。

「……踊るのは百歩譲っていいとして、窓のない部屋でやれよ。もし近所の人に見られたら」

「シャル・ウィ・ダンス？　って言ってやるさ」

「いきなりサンバ踊ろうって誘われても困るだろうに」

「そうかな。こないだ見られたときにそう言ってみたら友達できたよ。一緒に踊った！」

「……この街の人ってつくづくノリいいな」

「もちろん二人とも葉っぱつきで。しかもその人すごいよ。花屋さんらしくてさ、わざわざ店からひまわり持ってきて踊ったんだから」

「つけたんか、それ」

「うん、股の間に」

「なぜに」

ノリで！

「二人して」

「だからなぜに」

とことんノリで！

「楽しかった！」

「そらそうでしょうさ。そんなにはっちゃければ」

そういえばひまわりって最近は花屋にいけば一年中手に入るらしいね。風情がなくなったもんだよね。

「あ、そうそう。これ、お土産ね」

「なんだ、またビールか」

「おぅ、たまには姉弟で飲もうよ」

「……前みたいなノリにならないならな」

あー、こないだのあたしらトリオ結成でテンション爆発したときのことね。あれはやりすぎたと思ってる。でも反省はしていない。

「あとね、『そこ』のチェックにもきたのだよ」

う、と呻いて耳を押さえるトメ。

「や、別にさ、自分でやってるし。この歳だし」

「いいからいいから。なんのためにあたしが母さんにテクを習ったと思ってるの」

「……仕事が忙しくなっていった母さんに代わって僕らの耳を守るため、だろ。何度も聞いたよ」

そう、あたしが今日ここに来た目的……それは、おふくろさんの究極奥義、耳掃除をするため！

「たしかに母さんの耳掃除はヤバいくらい気持ちいいけどさ。お花畑見えるし」

「あたしのだって三途の川くらい見えるでしょが」

「耳かきに毒とか塗ってるわけじゃないよな。殺すなよ」

「でも気持ちいいっしょ？」

「……む」

「この上なくスッキリするっしょ？」

「……や、まぁ」

ふ、母さん直伝の耳掃除の誘惑に勝てる者などいない！

「おし、やったるよ。えーっと耳掃除道具は、っと……あったあった。ほれ、転がって。ここらへん。んで頭あげて」

寝転がったトメの頭を明るい場所に持ってきて、後頭部を持ち上

げてあたしの膝を入れる。これで膝枕完成！

「さーて、やったるぞぃ」

「あー、はずかしー……」

「いいじゃないのさ、誰もいないんだし。姉弟二人だけのときくらい甘えときな」

「たしかにカカには見せれない格好だな」

この弟は妹の前――いや、人前だとやたらとあたしに厳しいけど、多分こうやって甘えたりする面を絶対に見せたくないからだろう。恥ずかしいんだろね。

やれやれ、難儀で愛しい弟だよ。

「あー、うー」

気持ちよさそうな声だしてまー。

「あー……母さん、何してるかなー」

「マジメな人だからね。仕事ばっかでしょ」

「父さんはいいよな、母さんがどこにいてもすぐ会えるんだから」

なにせ忍者。いつでもどこでもいけるからね。

「きっと耳掃除してもらいに、会いに行ってるんだろねー、あー」

「違いない。さて、そろそろ本気出すよ」

「う……さ、三途の、川、が……」

トメの耳掃除を終えた後、しばらくしてカカちゃんが遊びから帰ってきた。

「おかえりー」

「ん、お姉。なにしにきたの」

「カカちゃんの耳を狙いにきた！」

「食べるの！？　私のミミガーを！」

「ふっふっふ……うまそうな耳だ！」

「近寄るな！　出てけ！」

「で、耳掃除はいいの？」

「……トメ兄は？」

「買い物いったばっか」

「あ、んじゃおねがーい」

渋ってた顔をあっさりと引っ込め。「やってやってー」と寄ってくる妹。

「トメいても別にいいじゃないのさ」

「やだよ、恥ずかしい」

この弟妹はホントにもー。

素直じゃなくて可愛いんだから！

## カカの天下２８７「姉の役割」（後書き）

珍しい姉視点のお話です。
いつもハチャメチャで煙たがられることも多い姉ですが、トメともカカとも結局は仲はいいです。

しかしトメもカカも『姉と仲良し』というのが恥ずかしいらしく、そういうところはなかなか見せません＾＾；ほんと難儀なことで。

あと、注意を一つ。
耳掃除に嫉妬しないように！

## カカの天下288「もしも、それをとったら…」

「おじゃましまーす」

「おじゃましますっ」

「どぞどぞー」

招きネコじゃなくて招きカカです。招き招き。

というわけで、いつもの通りサエちゃんとサユカンを我が家に招いたわけですが、今日は一味違います。二人とも、夕飯をうちで一緒に食べる約束なのです。

「あー、寒かったー」

「お、サエちゃん初めて見る毛皮のコートだ」

「そうそー、新しく買ってもらったの」

「いいなー。ね、サユカン、可愛いよね」

「普通じゃないのっ？　高そうに見えるけど、そんなに高くないらしいしっ」

「と言いつつ、さっきから私のコートをなにかとさわさわ撫で回してるサユカちゃんでありましたとさー」

「ばれてたっ!?　じゃなくてっ、わたしは別にコートのもふもふ

がぬいぐるみに似てるなーとか思ってないわよっ」

たしかにサユカンちのぬいぐるみの手触りに似てるかも。もふもふ。

「じゃ、コートじゃなくてサエちゃんを触りたかっただけか」

「そうそう！」

「いやーん」

「そうじゃなくて！」

どっち。

おっと、玄関先にずっといるのもなんだし、上がってもらわねば。

「はいはい、コートはそっちの隅にあるハンガーにでもかけて」

「あれ？　カカちゃん、ここにかかってるのって毛皮のフード？　なんか初めて見るー」

「ああそれ。トメ兄のヅラ」

ピタ。

サエちゃんとサユカンが一時停止した。

動かない。

……まだ動かない。

えと、リモコンは……あ、あったあった。再生ボタンをピ、とな。

「ヅ！？」

「ラー！？」

うぁビックリした！　やかましいなぁもう。音量調節ボタンは…

…あれ、リモコンどこいった？

「ほほほほほんとなのカカすけ！！」

「ほほほ」

「ふざけた笑い方してないで答えてよー！」

おぉ、サエちゃんまで必死だ。

「うん、実はトメ兄の頭って……あ、ごめん、はい冗談です嘘です、だからそんな世界の終わりみたいな顔しないで二人とも」

あまりに二人がアレな顔するもんだからこれ以上冗談を言えなかった……そんなにショックなことなのかな。

興奮する二人を抑えつつ、ようやく居間へと上がってもらえた。

ふーやれやれ。

「ふむ……じゃさ。もしも皆がヅラだったら」

「そんなとてつもなく悲惨なもしも話やめてよっ」

「まま、聞きなって。もしも皆がヅラだったら、それをとったらその頭に何があると思う？」

「脳みそー？」

「それヅラと一緒にいろいろとりすぎよっ！」

サエちゃんて時々怖いこと言うよね……シビれるわぁ。

「とにかくさ、ヅラをとったときのイメージって人によって違いそうじゃないかなーと思って」

「うーん、たしかにっ。カカすけならヅラの中にまたヅラとかありそう」

「サユカンはヅラの中にぬいぐるみ入ってそうだね」

「そのヅラどんだけでっかいのー」

やー、サユカンのポニーテールあたりにもっさりと何かいそうなんだけどな。

「サエちゃんのヅラとったらブラックホールとかありそうだよね」

「そんな、妖怪じゃないんだからさー。せめてお金とかにしてよー」

「それもなんかリアルでイヤよっ」

どっちもありそー。

「お姉とかは爆弾入ってるね、絶対。で、ヅラをはずすとタイマーが動くの」

「時限式っ！？」

「二秒後に爆発だねー」

「「はやっ」」

でもお姉のいつもの節操が無い爆発ぶりを見る限りだと、ありそうな気もする。

「じゃ……トメ兄のヅラとると、何があるかな」

うーん……と三人して首を傾げる。

「トメさんかぁ……なんだろ。『なんでやねん』ってでっかく書いてあるとか？」

「なんでやねん」

「あんま浮かばないねー」

うんうん、しっくりくるものが思いつかない。

「ただいまー」

「あ、帰ってきた」

私たち三人は目線を合わせ、そろって頷く。

「な、なんだよ三人とも。なんで僕を囲んでんの？　なんでフォーメーションっぽいもの組んでんの？　なんで目線が僕の頭をロックオン――」

「調査開始！！」

「うあああああああ！！」

結果。

トメ兄のヅラをはずすと、説教が出てきます。

夕食へ続く。

## カカの天下２８８「もしも、それをとったら…」（後書き）

今回のヅラの話です。
や、コメディ書いてるからには一度はヅラを書かないと。
それだけで書いた話です（ぉぃ

## カカの天下289「メインは○○カツ」

「おかわり！」

「……よく食べるなコイツ」

「トメ兄、なに苦い顔してるの？　大丈夫だよ、きっと生えるから」

「哀れんだ視線で僕の頭を見るな！」

ヅラじゃないぞ、違うんだからな！？

ああ、取り乱してすいません、トメです。

まったくコイツは……さっきの説教、まったく堪えてないな。

「すいませんトメお兄さん、私もおかわりいいですかー？」

「わ、わたしもっ」

「はいはい」

一緒に食卓を囲んでいるサエちゃんとサユカちゃんのお椀にもご飯をよそってあげる。

「トメお兄さんの作るご飯はおいしくて、ついついご飯が進みますー」

「このカボチャの煮物なんて絶品です！」

「そ、そうか？　たしかにそれは自分でもよくできたかと……」

実はその煮物が特別うまくいったから二人を夕食に招待した、というのは内緒だ。だってなんかおばちゃんくさいじゃん？

「おかわり！」

「食べるの早いねーカカちゃん」

「太るわよっ」

新たにご飯をよそったお椀を受け取ったカカは、猛然とご飯をかきこむ。

「もぐもぐもぐ……わらひうんろーひれるろん、むぐむぐむぐ」

「ヒレルロンってなにー？　怪獣の名前かな」

「カカすけが変身するの！？」

や、こいつは元から怪獣みたいなもんだし。

「むぎゃおー！！」

「口にご飯ふくんだまま無理に怪獣せんでいい！」

「白い火を吹きましたねー」

「火じゃなくてご飯よっ、きたなっ！」

まったくもう……掃除掃除っと。

「んぐんぐ、ごっくんちょ。えっとね。私運動してるもん、だから大丈夫、って言ってたんだよ」

「カカちゃん、いつもトレーニングしてるって言ってたもんねー。じゃあ特に何もしてない私とサユカちゃんは仲良く豚さんになるんだね」

「女の子に向かって豚って言うなっ！」

「メスぶたー」

「言い直すなっ！」

「ぶひー」

「わたしを指さして鳴くなっ！」

「おいしーなーこのサユカツ」

「それはトンカツよっ！　わたしを勝手に揚げるなっ！　ていうかわたしは豚じゃないって何度も――」

完全にサエちゃんのオモチャになってるな、サユカちゃん。楽しそー。

「女の子に豚がダメ……じゃあ男のトメ兄が豚なの？」

なにおぅ、僕の体型は標準だぞ。多分。

「と、トメさん……」

「ん？　なにサユカちゃん」

「わ、わたし……トメさんが豚になっても」

え、豚決定なの？

「豚になっても心配いりません！　だって……だって！」

瞳をうるませて、サユカちゃんは声高らかに言った。

「わたし、豚肉好きですもん！！」

「食べるんかい」

「はぅ！？　こ、こんなはずではっ」

思わず速攻ツッコんだけど……なんであんなに落ち込んでるんだサユカちゃん。

「おかわり！」

「ホントよく食べるなカカ。まぁカカたちくらいの年齢なら、横よりも縦に伸びるんだろうけどな。カカなんかまだ背低いし」

「背は私も似たようなものですけどー。あ、そういえばトメさんもお姉さんも背が高いですよね」

「ああ、親の影響かな。だからカカも――」

「お母さんは小柄だそうですし、お父さんに似たんですねー。カカちゃんもそうだといいんですけど」

「え？」

や、うちは両親二人とも結構背があるんだけど。というか……

「サエちゃん、僕らの母さんの話なんかどこで」

「あー！！　私のコロッケがぁ！！」

僕の声はカカの悲痛な叫び声によってかき消された。

「床に落ちたわね。そんなに勢いよく食べるからよ、カカすけ」

「あぁ……私のコロッケが、人類の宝が！！」

やっすいなー人類。

「よしよし、カカちゃん。私のコロッケをあげるよー」

「さ、サエちゃん……ありがとう！　サエちゃんはコロッケの神様だよ！」

庶民的な神様の誕生だ。いたら地味に嬉しいな。

「その代わりにサユカツを一切れちょーだい」

「いいよ。はい、サユカツ」

「おいしいねーサユカツ」

「君らさ……いい加減にしなさいっ」

んー、聞きそびれたな。サエちゃん、うちの母さんのこと知ってるのかな？

母さんの話はあんまり広まってほしくないんだけど……でもサエちゃんなら大丈夫か、うん。

さてさて、食事食事、っと。

「ん。たしかにこのサユカツはおいし――」「君らねっ、いい加減にわたしを食べてるみたいな言い方やめなさいよっ！」

ぴたり、と一瞬の静寂。

僕の「サユカツ」発言とサユカちゃんの「やめなさい」発言が見事に重なってしまった。

「そ、そうだよな。サユカちゃんを食べるみたいなこと言っちゃダメだよな」

「どうぞわたしを食べてくださいっ！」

「「「どっち」」」

思わず僕らの声が重なる。

や、カツは食べるけどさ。

## カカの天下２８９「メインは〇〇カツ」（後書き）

今日のトメ家の夕食のメニューは次のようになっております。ご飯、味噌汁、とんかつ（三切れずつ）、コロッケ（一つずつ）、カボチャの煮物（適当ずつ）、サラダ（コロッケととんかつをのせた皿に盛ってある）

一番おいしいのはカボチャの煮物です。

## カカの天下２９０「コタツ記念日」

最近、シャレにならない寒さになってきましたね。そんなわけでついにアレを出すことを決意したトメです！

早く出せ出せと妹に言われ続けてきたけど……これ、出すの面倒なんだよね。しかし、なにはともあれ！

「コタツの設置、完、了！」

「イェーイ！」

「おめでとーですー！」

「トメさんお疲れさまっ！」

なぜかコタツを設置するというだけで呼ばれてきたサエちゃんとサユカちゃんも大喜びだ！

「愛してるよ、コタツ！」

「私もだよー、コタツー！」

「両想いねっ、コタツッ！」

誰がどれに告白してるんだか、さっぱりわからん。

「で、でもわたしは、その、コタツよりも、と、トメさんのほうが……！」

「でもトメ兄って生ぬるいよ」

人肌ってのはぬるいもんなんだよ。悪かったな熱い男じゃなくて。

「とにかくコタツ！　入っていい？」

「おぅ、スイッチ入れたからそろそろ温まってくるだろ」

「じゃ私一番風呂！」

「あ、ずるいー」

「わたしもっ」

滑り込むようにコタツへ突っ込んでいくカカ。そしてそれに続くサエちゃんとサユカちゃん。

「風呂じゃないだろ」

「似たようなもんだよ……はぁー、極楽じゃー」

「骨身にしみるー」

「ビバノンノンッ」

ババくさいなコイツら。

……ん？　なんかドタドタと外から騒がしい足音が。

2002

「コタツはここか！」

扉を吹き飛ばしかねない勢いでやってきたのは予想通り、姉だった。ほんとに吹き飛ばすなよ、寒いんだから。

「なんであんたはいっつも話してもないことを都合よく察知できるんだ」

「あたしにはコタツセンサーがあるんだよ」

「へー、そう。どのへんにあるんだ？」

「大脳と小脳の間」

「ぐ、具体的だな」

もしかしてホントにあんのか？

「とにかくあたしも入る！」

「はいはい、勝手にしろ」

「わーい」

「お姉、なんで私にくっついてくるの」

「コタツのぬくもりもいいけど、人肌のぬくもりもほしいのさ」

「それ二股だよ！　コタツさんに謝れ！」

あー騒々しい、っていつものことだけど。さて僕も……ん？

「おじゃましまーすっと。おー、コタツだコタツ」

「……なにしにきた、テン。まさかおまえにもコタツセンサーが？」

「んあ？　なんだそれ。トメ、おまえバカっぽいぞ」

「んだと！　これはな、姉が」

「なんだそれ弟。バカじゃないの？」

こ、この……！

「オレはな、カカが今日はコタツ記念日だって言うから来たんだよ」

「……コタツ設置するってだけで来るのか、おまえは」

「だってうちコタツねぇもん。おらおら、オレにも入らせろ」

おい、普通の四角テーブルのコタツに五人も入るなよ。僕の場所が……

「おほほ、コタツ会場はここかしら！」

近所のオホホおばさん！？　っていうか会場ってなに！？

「あらあらトメさん。本日はお呼びいただき、ありがとうですわ」

……カカのやつ、コタツのことどんだけ触れ回ってるんだ。

「こ、コタツはここかいのぅ……」

いつぞやの近所のおじいさんまで！

「あのですね、おじいさん。ちょっと心苦しいんですけど、もうコタツは満員で――」

「うちのコタツは娘夫婦と孫のもんじゃ……誰もいないときにしかコタツに入れん……わしゃあ寒ぅて寒ぅて」

違う意味で心が苦しい！

「どうぞ入ってください！　えぇほんと好きなだけ！」

「トメさん、わたくしもいいかしら？」

「おばさんも自宅でコタツに入れない理由が？」

「おほほ！　出すの面倒でして」

ぅおい。

「コタツって人気者だね」

「じゃカカちゃん。もし子供ができたらコタツって名前にしよー」

「……なんで赤くなるのカカすけ」

「テンちゃん、今度ここでコタツ入りながら熱燗とかどうよ」

「お、いいねー。お供するぜ姐さん」

「おほほ、やっぱりコタツは和みますわね。ところでウーロン茶はないかしら？」

「おぉ、心が温まるわぃ……」

……や、あんたら。よくそんなぎゅうぎゅう詰めで和めるな。コタツの魔力か？

「僕も、入りたいんだけど、なぁ」

『……』

あれ？　なんか僕の漏らした一言で皆が静止した。かと思えば――

バンバン！　と隣を叩くサユカちゃん。

それとなく隣を空けるカカとサエちゃん。

横に転がって隣の隙間を塞ぎ、入れないようにするテン。

なぜか「ここに来い」と言わんばかりに股の間を広げる姉とオホホおばさん。

死んだように眠るじーさん。って大丈夫かおい！？

「……ぁ、買い物あったんだっけ」

2006

とりあえず逃げた。

帰ってきてもそのままだったら、果たしてどうするべきか。

2007

## カカの天下２９０「コタツ記念日」（後書き）

寒くなってもなかなかコタツ出さない家庭、ありますよね。うちはそうでした。まだ我慢できるし、コタツ布団を出すのが面倒だから、ということでズルズルと……

出したら最強ですけどね！

ええもうホントに。

コタツの魔力ですよ。コタツは魔法使いですよ。ＲＰＧにでれば魔王も一発で骨抜きですよ。

あぁ……コタツほしい（実家暮らしなときはともかく一人暮らし中の今はない笑

2008

## カカの天下２９１「丸くなってるだけじゃない」

「はぁー、ぬくい……」

「ぬくぬくだなぁ……」

ぬくーっとしてるトメです。

ただいま出したばかりのコタツでカカとぬくぬく中です……まったりまったり。

昨日はまったりできなかったからなぁ、ウーロン茶パーティＩＮコタツのせいで。ちなみにそのとき僕は無難にカカの隣に座りましたとさ。

狭かった。しかしそれ以上に肩身が狭かった。なんでか皆「このチキンが」って感じで睨んでくるから……や、だってそんな冒険する理由ないし、ねぇ？

ともかくそれは昨日のこと。いまはカカと二人でコタツをのびのびと使ってます……

「トメ兄、みかんほしくない？」

「おー、コタツに必須なアイテムだな」

「買ってきてよ」

「ヤダよ」

コタツから出たくないもん。

「コタツに入りながらみかんをむきむきするのは日本の伝統行事だよ？　国民の義務だよ？」

「誰が決めた、そんな義務」

「総理大臣だよ」

……あぁ、なんかいま僕の足に触った毛玉の塊のことか。いつの間にコタツに忍び込んだんだこのネコ。

「ほら、早くみかんくれないとトメ兄の頭をむきむきするよ？」

「すばらしく赤い身が出てきそうだけどやめてくれ」

「じゃあそのヅラを」

「そのネタひっぱるのもやめて？」

そんな事実はないけどなんか悲しいから。

「それじゃ総理大臣をむきむきするよ？」

可愛そうな大臣、みかんむきむきなんて義務を作ったばっかりにご臨終か。

コタツ布団を持ち上げて中を覗き込んでみると、そこには殺気でも感じたのか縮こまっている総理大臣が。ネコはコタツで丸くなる

もんなのに、そんな隅で震えて……総理大臣がこれだと先行き不安だな日本。あれ、前に逆なこと思ったような気が。まいっか。

「はやくー、むきむき」

「それだけ聞いてるとマッチョなムキムキに聞こえるな」

「早くしないとムキムキになってトメ兄をやっつけるよ！」

いまやってるトレーニング続けてたらいつか本当にそうなりそうだな。

「もしくは総理大臣がムキムキになるよ！」

なんとなく総理大臣がムキムキだとイヤだな。や、理由はないが……なんかヤダ。日本が暑苦しくなりそうで。地球温暖化が進んじゃうよ。

「最後にはみかんがムキムキに！」

どんなみかんだ。確かにみかんがムキムキになるような世の中になったら地球の最後っぽい気もするが。

「みーかーんー！」

「そんなに言うならカカが買ってこいよ、どうせ暇なんだし」

「む」

いたっ、コタツの中でカカに脚蹴られた。

2011

「なにするっ」

反撃！　なんか「にゃう」とか聞こえたけど気にしない！

「いったいなぁ、うぉりゃ！」

んにゃう！？

「だっ！？　捻りをくわえるとはなかなかやるな。てい！」

ぎにゃん！？

「ったぃん！　足の指先でつねるなんて……見直したよトメ兄！」

「まだまだ……僕のコタツ技はこれからだ！」

「私だって最終奥義のコタツ投げは隠してるんだからね」

隠してないし。ていうかそれだけはやめれ。

臨戦態勢で睨みあう僕ら。しかしそのとき、予想外なことが起こった。

「……あれ？」

「う？」

僕とカカはぽかんとして、コタツの上に立ったソレを見つめた。

総理大臣だ。

「どしたの、そうり――」

きしゃあああああああ！！！！！

「ひっ」

「うぁ」

モノスゴイ威嚇音。

毛を逆立てまくるネコの姿に、僕とカカは完全にすくみ上がってた。

かろうじて僕とカカがしぼり出した言葉は一つだけ。

「「……そ、ソーリー」」

ダジャレはいらん、とばかりに睨んでくる大臣。

「「も、もうしわけありません総理」」

わかればいい、と言わんばかりにコタツに潜っていく総理大臣。

「……と、トメ兄、私みかん買ってくるね」

「ぼ、僕も行く」

この後、総理大臣にみかんを献上したのは言うまでもない。

前言撤回、やっぱ日本も安泰だ。

ていうかみかん食べるネコもいるのね。

2014

## カカの天下２９１「丸くなってるだけじゃない」（後書き）

コタツといえばはずせないネコ。というわけで総理大臣の逆襲話です。

あ、言うまでもないとは思いますが一応。ここに書かれている総理大臣という単語はあくまでネコのことを指して言っているのであしからず。日本がどうとかいうのもネコの名前をネタにした言葉遊びであって、政治に口出す気なんかないですよ？（笑

あと、知り合いにいるのですよ、みかん食べる猫を飼ってる人。冬になると一緒にみかんを食べるとか……和むわぁ。

2015

# カカの天下２９２「弱点の避け方」

うーさぶさぶ、カカです。

今日も今日とて通学途中にサエちゃんとサユカンと合流、三人仲良く歩いてます。

「あー、一日中コタツにいたい……」

「それだとコタツ虫になっちゃうわよっ」

「コタツ虫か……何食べるんだろ」

「人の足でしょー」

「「こわっ」」

そう考えると総理大臣なんか丸呑みじゃん。

……ん？

不意にサエちゃんが私の腕を撫でた――や、払った？

「どしたのサエちゃん。私の腕になんかついてた？」

「うん、ついてたー」

「何が？」

2016

「ゆーれー」

「ぶっ！！」

ななななにを仰りますやらこのお方！？

「そういやサエすけってそういうの見えるんだったわね」

「幽霊も寒いから人肌恋しくてひっついてくるんだねー」

「まままままっさかぁ！？」

「そんなにママが恋しいのー？」

「違う！」

ホントはちょこっと恋しいけど！

「大体寒いからひっついてくるなんて、そんなのハエみたいじゃん！」

ハエは自分の身体が冷たいから温かい人肌にくっつきたがるんだよ！

「わ、幽霊のことをハエなんて……祟られるわよっ」

ガシャン！！

「ぅひあうあ！？」

び、びっくりした……私が歩いていたすぐ隣に皿が落ちてきた！？　う、上から……？

「あー、幽霊さん怒っちゃったかなー」

「エエエエ！？」

「いや、なんか上のマンションで夫婦喧嘩っぽいことしてるから、それのとばっちりじゃないかしら」

「あれはとり憑かれてるんだよー」

「そ、そうなのサエすけっ？　たしかに聞いたことのない言葉が聞こえてくるけど。ピーとかピーとか」

ピーだけじゃん。

「あれ、なんでかピーしか言えないわ」

放送禁止用語なのかな。ってそれどころじゃない！

「と、とにかくどうすればいいのサエちゃん！　幽霊さんが怒ったら！？」

「うーん、私なんかは幽霊さんがとり憑こうと向かってきたら避けるけどー」

「どうやって！」

「反復横とび」

2018

……マヂ？

それから私は、ことあるごとに幽霊を避けた。

授業中に誰かが筆箱を落とした音に反応して反復横とび！

「おいカカ。何してんだてめぇ」

「幽霊を避けてます」

誰かがバランス崩してぶつかってきたら反復横とび！

「おいカカ」

「幽霊を避けてます！」

「いや、おまえ今ぶつかって倒れたタケダ踏んでるぞ」

反復踏み踏み！

給食できゅうりが出たら反復横とび！

「食前の踊りか、カカ」

「給食にきゅうりなんていう毒をしこんだ幽霊を避けてます」

「地味な幽霊だな。ほれ」

「うぐっ！？」

横とび中にも関わらず、テンカ先生の放ったキュウリ突き（箸につまんだきゅうりを相手の口へ突き出す恐ろしすぎる技）は見事にクリーンヒット。

「ぐ、ぐぞぅ、幽霊め……」

「その言い方だとオレが幽霊みたいじゃねぇか」

「じゃーきゅうり先生め！」

「誰がだ。ほれほれ」

「うぐ、うぐぐぐ！」

反復、きゅう、り……がくっ。

数々の幽霊を避け続け、ついに帰りのホームルームだ！

「さて、これで連絡事項は以上だ……あ、幽霊」

反復横とび！

「先生、そんなこと言ってカカちゃんで遊んだらダメですよー。幽霊さんはもうひっついてるんですからー」

振り払う勢いで加速反復横とび！

「……そろそろやめるか」

「幽霊じゃなくて周りの人が避けるようになっちゃいますからねー。カカちゃん、そんなことしても――」

「幽霊は避けれた！？」

「え、えーと」

「避けれた！？　振り払えた！？」

「いや、だからなカカ」

「避けれたの！？　振り払えたの！？　どっち！！」

あー、いや、その……と仲良く困るサエちゃんと先生。

「うん、全部避けたよー」

「そ、そうそう、振り払ったし」

「それが聞きたかった」

細かいことはどうでもいい。

2021

それさえ聞ければ安心なのだ。

「サエちゃん、また幽霊きたら教えてね」

「あ、うん。全部追い払ってあげるよー。心配いらないよー」

「サエ、この話題で遊びすぎるとヤバそうだな」

「はい……カカちゃん、本気の本気で苦手なんですねー」

細かいことはどうでもいい。

心配いらないって、それさえ聞ければ、それで！

2022

## カカの天下２９２「弱点の避け方」（後書き）

カカ、超必死です。
変といわれようと気にしません。周りの目も気にしません。
超必死だから。

2023

# カカの天下２９３「カカ天クエスト　ＥＰ２」（前書き）

注意：このお話はカカ達がゲームのキャラになりきりながらＲＰＧを進める話です。話の内容はゲームの中ですが、『もしもカカ達が異世界にいたら』みたいな感覚でお楽しみください。

ステータス

カカ　ボケ勇者　レベル１　へん
サエ　悪の魔法使い　レベル１　はらぐろ
サユカ　手の平の踊り子　レベル１　さびしんぼう
トメ　ツッコミ　レベル１　つっこみ

# カカの天下２９３「カカ天クエスト　ＥＰ２」

魔王退治（姉の不始末の後片付け）を王様に命じられた勇者だか芸人だかわからない一行は、街の周辺でレベルを上げることになりました。

「結構いい装備もらったからねー、皆ちゃんと装備したー？」

「うん、したよ。私はこんぼう＋２を」

「わたしは踊り子だからひのきの棒＋３しか装備できなかったわっ」

「私は魔法使いだから、松の木の杖をー」

強いんだか弱いんだか微妙な装備ばかりです。

「僕はいちおー武闘家みたいなもんらしいから、素手のほうが強いみたいだ。防具だけ装備したよ。旅人の服ツッコミ仕様」

所々にぶら下がっているミニハリセンのキーホルダーがオシャレな服です。防御力は意外と高いです。

「よーし、とりあえずレベル上げるよ！」

「街の人に話しかけても愚痴ばっかだしねー」

「世の中そんなもんよっ」

姉のような魔王がいる世界じゃ、そりゃ愚痴も言いたくなるでし

ょう。

「とりあえず街の周辺にいる魔物、出てこーい！」

スライムがあらわれた！

「おお、素直に現れた。しかもＲＰＧの最初の敵の定番だ！」

「まずこれに負けることはないだろうけど、僕らはまだ全員レベル1だ。気合いれていこう！」

「はーい」

「はいっ」

スライムのこうげき！

サエは5のダメージ。

サエはしんでしまった。

「え？　うそ」

「えええええ！？」

「あははー、魔法使いってＨＰ、ないん、だよねー……がく」

「5もないの！？　ああもう、とにかくさっさと倒して生き返らせるよ！」

カカのこうげき！

ミス。

カカの手がすべった。自分の頭に武器をぶつけて１５のダメージ。

カカはしんでしまった。

「いい武器ぶんどったのが仇になった！？　てかそんなんありか！？」

だって勇者の前にボケだもの。

「つ、次はわたしが相手よっ」

サユカは不思議な踊りを踊った。

スライムのＭＰがさがった。元からないけど。

「え、ちょ、こ、今度こそ！」

サユカは不思議な踊りをもう一度踊った。

トメのＭＰが回復した。

「あの、僕ＭＰもともと０なんスけど」

「あーもう！　こうなったら殴りかかってやる！」

サユカのこうげき！　ミス。

スライムのこうげき。

サユカは5のダメージ。サユカはしんでしまった。

「なんで皆そんなHPないの!?」

スライムのこうげき!

「げ」

痛恨の一撃!　即死亡。

「せ、せめてダメージくらい書けよ……がく」

「おお、カカよ。死んでしまうとは情けない!」

スライム一匹に全滅という事実……嘆く王様の言葉に、一行は返す言葉がありません。

「ホント情けねぇな」

本当に返す言葉がありません。

「いきなり死ぬなんてバカじゃん?」

返す言葉が――

「このザコ、クズ、ゴミ」

「それは言い過ぎだよ！」

さすがにありましたね、返す言葉。

「そう言われても仕方ねーだろ。おら、さっさとレベル上げてこいよ」

貧弱芸人勇者一行は、半ば追い出される形で城を後にしました。

「うー、次こそは！」

意気込んで街の外へ出ると、再びスライムがあらわれた！

「よし、サエちゃん魔法だよ！」

「できないよー」

「なんでよっ」

「私ね、攻撃魔法とか回復魔法とかより、補助魔法とかが得意なタイプの魔法使いみたいでさー。レベル1なのに補助魔法なんて大層なもん使えるわけが」

スライムの攻撃、サエは5のダメージ。

サエはしんでしまった。

「またかあああ！」

「サユカンの踊りもそうだけど、もしかして私らって基本的にレベルアップしないと役に立たない職ばっかなんじゃ……」

「じゃあ早くレベル――」

スライムの攻撃、サユカは5のダメージ。

サユカはしんでしまった。

「上げ、ない、と……がく」

「サユカン！？　くそぅ、レベルさえ上がればおまえなんか！」

スライムのレベルが上がった！

「おまえが上がるのかよ！！」

スライムは火を吹いた。

「どんだけレベル上がってんだよー！？」

ツッコミしながらトメはしんでしまった。ボケる間もなくカカもしんでしまった。

「おお！　カカよ。もう死んでしまうとは情けない」

「『もう』とか言うな！！」

「せめてボケてから死ねよな。トメはツッコミちゃんとしたのに」

「なんで知ってるの！？」

勇者だけでなく芸人としても失格だ、という王様の冷たい視線に一行はたじたじです。

そして再び城を追い出される勇者カカ達。

果たして、彼女らは最初の難関、レベル上げをすることができるのか！？

次回、『打倒、鬼（のように強い）スライム！　サエの秘策』をお楽しみに。

## カカの天下２９３「カカ天クエスト　ＥＰ２」（後書き）

本ゲームにはスライムというどこのゲームでも見る有名な魔物が登場していますが、某ゲームとは一応関係ないのであしからず。
大抵のＲＰＧにはスライム状の魔物がいますので、そんな類ということで＾＾；
ちなみに姿形は読者様のご想像にお任せいたします。身近なＲＰＧのスライムと照らし合わせて考える感じでよろしいかと。
……まぁ、大抵のスライムはこんなに強くないのですが（というか主人公はこんなに弱くない、か笑

# カカの天下２９４「出世皿」

「クリスマスはお鍋しようよ！」

カカが急にそんなことを言い出したのは、休日の昼食が終わった直後でした。おそらく今見ていたテレビの影響でしょう。

映ってた芸能人の人、ずいぶんとおいしそうに食べてたもんな。たしか豆乳鍋だったか。

あ、言い忘れてたけど僕トメです。鍋業者の回し者じゃないですよ？

「なにもクリスマスに鍋しなくても……」

「コタツで皆でお鍋して、それからケーキ食べるの」

ふむ、言われてみればそれもいいかもしれない。この間のコタツ騒動は少々騒がしかったものの、楽しかったのは事実だし。

「問題はコタツの大きさだな。基本は四人しか入れないし……どっかからもう一つ借りてくるかな」

アテはないわけじゃないし。

「それじゃ決定だね。皆に連絡を！」

「するのはまだ待ちな。コタツを調達できるかまだわかんないし」

「じゃあとりあえず鍋だけでも用意しようよ。大きいやつ」

む、なかなかいい提案だ。うちにはせいぜい四人分を入れるのが精一杯な鍋が一つあるだけだし、それも結構古いものだ。鍋パーティーをやるかどうかは置いといて、ここらで新しいのを買っておくのもいいだろう。

「思い立ったが吉日だし、もう買いにいっちゃうか」

「うんうん。立ったらキチキチだよ」

「なんかそれだと、立ったら思いのほかズボンがキツくて「太った？」って初めて気づくみたいな感じだな」

「例えがびみょー」

「うっさい」

おまえもいずれ体験することになるんだよ！

なにはともあれ、やってきました近所のホームセンターの鍋売り場。ここ確かでっかいのあったはず。

さてさて、どんな鍋があるかな……って、あれ。カカが近くにいた店員に向かって走り出したぞ？

「サラさんだ！」

「あ！　こ、この間はどうも失礼を！」

……ああ！　この間、皿を買うときにお世話になった店員さんだ。でも確か、それってここからちょっと離れたデパートでの話、だよな。

「こんにちは。職場、変えられたんですか？」

「あ、はい……ちょっとたくさんなかなか色々ありまして」

どんだけ何があったんだ。

「でも今はお鍋を一生懸命売っております！」

「じゃあサラさんじゃなくてナベさんだね」

なるほど、冴えてるなカカ。

「じゃあナベさん、大人数用の鍋ってどれがいいですかね？」

「あ、あの！　私、別に職によって名前が変わるわけでは……」

「おっとすいません。つい」

そうだよな、そんな出世魚みたいにポンポン名前が変わっちゃ困るよな。皿から鍋って出世した感じだから、つい。

「それに私、鍋だけじゃなくてお釜も扱ってますから」

「じゃあオカマさんだ！」

「えぅ！？」

皿からお釜か。ずいぶんと出世したなぁ。

「わ、私は女ですぅ！！　うぅ……！」

そんな泣きそうになるなら自分からネタ提供しなきゃいいのに。

「うぅ……オカマにされるなんて、私の人生どん底です……」

「お釜の底ですか？　あ、冗談ですよ冗談！」

「ほらほら、お仕事だよお仕事！　笑顔笑顔！」

こういう冗談に免疫がないのか、素直に落ち込んでいるサラさんを慌ててなだめすかし、営業スマイルができるまでには回復させた……ふぅ、焦った。

「私、女ですよね？」

や、営業スマイルでそんなん聞かれても。

「ですよね！？」

「えっ、は、はい！　髪は短いけど可愛いらしい女の子です！」

あれ、なんか勢いで余計なこと言ったか僕。

「か、可愛い……ですか？」

「や、社交辞令ですよ」

「男なんてもう信じない！」

「あああ冗談ですって！」

うー、冗談ばっかりな連中と過ごしてきたからか、ここまで本気な反応されると正直やりにくい……

「じゃあ、可愛いって本当ですか？」

「う、うん」

社交辞令というのが正直ちょっとあったけど、アナウンサーでもやれば『美人』という文字が頭につくくらいには可愛いと思う。

「じゃあ今度、デートしてください！」

「……はい？」

あれ、なにこの展開。

いきなりそんなこと言われても困る……ああでも断ったらまた必要以上に落ち込むだろうし……あーもう！　助けてくれよカカ！

……カカ？

「カカ、なにしてんの」

「や、なんか恥ずかしい展開だから」

「恥ずかしい展開だと鍋かぶるのかおまえは」

「穴があったら入りたい」

ああ、なるほど。でもな、おまえよりも僕のほうがよっぽど穴に入りたいと思うぞ？　その鍋の穴じゃ小さすぎるからかぶらないけどな。

もっとでかいお釜でもあればかぶるのに。お釜のどん底は深そうだから。

「えーと……じゃ、じゃあその話はあとでするとして、とりあえずお鍋を選んでくれますか？」

「はい！」

鍋選びに熱中させて誤魔化してしまおうかな作戦！

……結論。

無理でした。

昨今の女性は強引だぁ……デート、デートかぁ……

「トメ兄、なに頭抱えてるの？」

「デートするのか？　ホントに？」

「や、私に聞かれても」

ですよねー。

どうしよう。

## カカの天下２９４「出世皿」（後書き）

さて、いろんな意味で出世したサラさん。
どうするトメ兄。
どうするトメファン。
さーどうなる笑

## カカの天下２９５「クリスマスの予定は？」

おはようございます、カカです。今日も今日とて飽きずにサエちゃんと登校中です。お、向こうからやってくるのはサユカンだ。

「カカすけ、おはようっ」

「おはよーサユカちゃん」

「おはよ。ねえねえサユカン、実は昨日ね――」

サラさんって人がトメ兄にデートの誘いを、と言いかけて止めた。

だってさ、デートだよデート。そんな話聞いたらサユカン発狂しちゃうよ！

デート当日に聞こうものなら大爆発だよ！

……いいね、それ。

うん、詳細を調べてから当日に教えてあげよう。大爆発希望。

「昨日がなによっ」

「ああ、えっと、そうそう！　あのさ、昨日トメ兄と話してたんだけど……クリスマスって二人とも空いてる？」

「私はカカちゃんたちと遊ぶために空けてあるよー」

「トメさんと過ごせるならもちろん空けるわよ」

む、サユカンの返事が気に入らない。

「なにさーサユカン。トメ兄だけいればいいみたいな言い方じゃん？」

「ええ、そうねっ。できればトメさんと二人がいいな。君らは邪魔よ、邪魔」

「ガーン！」「ガガーン！」

む、ズレた。

「サエちゃん、もう一回ね」

「うん。せーのー」

「ガーン！」「ガガーン！」

またズレた！

「サエちゃんさ、ガガーンって言ってるよね」

「そっちのほうがショックっぽくないかなー？」

「んー、それもそっか。じゃそれで」

「よし、いくよー、せーの！」

「あ、あのさっ！　わたしを放っておかないでよっ」

むぅ、言いかけたのを止められた！

「サユカン、邪魔」

「今忙しいんだよー」

「ガガガガーン！」

あれ、立場が逆転してる。

「朝からガンガンガンガンうるせぇな、二日酔いじゃあるまいし」

「あ、テンカ先生」

「おはようございまーす」

「おはようございますっ」

私たちの挨拶に、手をひらひらさせながら適当に応える先生。

「カカ、てめぇも挨拶しろ」

前言撤回、妙なとこだけ細かい。

「おはようございます。テンカ先生はやっぱりクリスマスの予定はないんですか？」

「……悪いか」

う？　な、なんか予想以上に怖い顔が。

「悪いか……悪いのか！？　あぁんっ？　クリスマスに予定がないのがそんなに悪いのか！　何が聖なる夜だよ何が恋人たちのクリスマスだよ！　あぁ悪かったなどうせオレは『病院』で盛なる夜だよ酔っ払った変人たちのクリスマスだよ！！」

ちゅどーん！　と背景が爆発してそうな勢いで叫ぶテンカ先生。

「な、なんだか痛いところを突いちゃったみたいねっ」

「病院の変人ってあたりが重症っぽいねー」

なんか嫌な思い出でもあるのかなクリスマス。

「あ、あの、テンカ先生？　実は私たち、クリスマスにみんなでお鍋しようって言ってたんですけど……先生も来ませんか？」

恐る恐る聞いてみると、天高らかに吼えていた先生はピタリと動きを止めた。

「鍋？」

「は、はい」

「……変人どもと過ごすには違いないが、寂しい飲んだくれどもに付き合うよりはマシか。よし、のった！」

「はーい、じゃあ詳しく決まったら教えますね」

これで参加者は五人、っと。

「他には誰がくるんだ？」

「まだわかりません。でも鍋会場が私の家の居間なんで、そんなに人数を集めるわけにはいかないんですけど」

トメ兄がもう一個コタツ確保したとして、八人くらいかな？

あと三人……誰にしよっかな。

「ね、せっかくクリスマスなんだしー、お鍋以外も何かしようよー」

「何か……って、前の誕生日みたいに仮装でもする？」

「いいね。参加者全員仮装決定！　クリスマス関係の格好ね」

「自分で言っといてなんだけど、この前トメさんにサンタやるって言っちゃってたし、ちょうどいいわっ」

「私くつしたやるー」

それ、仮装？

「オレもすんのか？」

「こないだみたいな手抜きだめですよー」

釘を頭に刺してフランケンやってたっけ、先生。

「んー、仮装なんてする歳じゃねぇんだがな」

「トメ兄はやりますよ？」

「あいつは子守係だから仕方ない。幼稚園の先生みたいなもんだ」

「じゃあ小学校の先生もやらないと仕方ないですね」

「……しまった」

んふふ、あげ足とった！

さー楽しみになってきましたクリスマス。

他にはなにしよっかなー♪

## カカの天下２９５「クリスマスの予定は？」（後書き）

クリスマス計画が始まってきました…限定八人のパーティーになりますが、はてさてどんなメンバーになるのでしょうか。

まだ書いてないので作者もわかりません（笑）

## カカの天下２９６「やり遂げた男」

「こんちはー」

「タマとったらぁ！」

「とるなよ。今は一応ここの子なんだから」

「そだよね、タマちゃん女の子だし。取るタマもないよね」

「下品なこと言うな」

初っ端からうちの妹が変なこと言いましてすいません、トメです。

今日はタマちゃんに会いに、シュー君の家に遊びにきてみました。

「すいませーん！　いないのかな」

「ということは」

インターホンを押しても反応なし。しかし先日の経験を活かして庭を覗いてみると、やはりビンゴでした。

そこではシュー君が……あれ、なんか仕事をやりとげた男の顔して縁側に座ってる。すすけてる。陰が差してる！？

「……あぁ、トメさんカカちゃん……ふふふ」

「ど、どしたのシュー君、ついにクビか！？」

「それとも今度は逮捕される側になったとか！？」

「シュー君にそんな根性ないだろ！」

「甘いねトメ兄。根性ないヤツのほうがキレて犯罪に走りやすいんだよ？」

「カカちゃん、よく知ってますね」

パチパチパチ、と拍手するシュー君に照れるカカ。

「シュー君もここまでズダボロ言われてよく平気だね」

思わずパチパチパチ。

「お姉さまで慣れてますからね。でも拍手はやめてください」

ちぇ。

「それでシュー君、なんでそんなスッキリした顔してるの」

「終わったんですよ！」

「シュー君の人生が？」

「それはスッキリしたな」

「スッキリしすぎですから！！」

「そんなに出たのか？　おめでとう」
「別に快便だったわけでもなくて！」
スッキリという言葉を聞いてトイレを思い浮かべるのは僕だけじゃないはずだ。
「んじゃ結局どうしたのさ。あと、タマちゃんはどこいったんだ？」
「そうそう！　私のライバルは？」
シュー君はなぜか含み笑いをすると立ち上がり、僕らをチョイチョイと手招きした。
僕とカカは庭に靴を置いて縁側に上がり、先を行くシュー君についていく……するとやがて居間へと通された。
そしてそこには……お菓子を貪り食う子供が！
「た、タマちゃん？」
「よー！」
お菓子に囲まれて元気よく手を上げるその子は、間違いなく姉娘のタマちゃんだった。
「いいなーお菓子。私も食べるー！」
突っ込んでいくカカを尻目に、僕はシュー君を見た。

やりとげた男の顔……ま、まさか！

僕の視線にニヤリと応えたシュー君は、タマちゃんの名前を呼んだ。

「タマ様！」

あ、でもやっぱ様なんだ。

「あい、パパー」

……お。

おお。

おおおおお！！

「シュー君……あんた、やったな！」

つまり、ここにあるお菓子で最後ということか！

「ふふふ……長かった、長かったよぅ……ぐずっ」

「何も泣かなくても……」

「じゃあアンタは何万円使ったら泣くんだ！？」

「ご、ごめんなさい！！」

血走った目で詰め寄られて思わず謝ってしまった。こんな強気な

シュー君初めて見た……よほど辛かったんだな、高級お菓子セット買うの。

しかしそのかいあって、やっとタマちゃんはシュー君のことをパパと呼んでくれたのだ！

「これでタマ様がいつも通り、お姉さまのことをママと呼んでくれれば完璧です！」

「そ、そうだな……で、姉は？」

「やっほー！　なにさシュー。わざわざ呼び出してなんか用かー！？」

噂をすればなんとやら、早速姉の声が玄関のほうから聞こえてきた。行動早いなシュー君。

間も無くドタバタと騒がしい足音が聞こえてきて、お待ちかねの姉登場だ。

「お姉さま！　今日はちょっと聞いてもらいたいことがあってお呼びしました！」

「なによ。珍しいヤクザでも捕獲したわけ？」

珍しいヤクザってナニモンだ。

「いいえ、とにかく聞いてください！　タマちゃん！」

「あい、パパー」

「聞きましたか!?　タマ様が……タマ様が僕のことをパパと!」

「おー、おねーたまー」

……え?

自分の耳を疑ったが……間違いない。

いまタマちゃんは、姉のことを『おねえたま』と言ったぞ!?

「……シュー君が姉のことをいっつもお姉さまって呼んでるから、それに慣れちゃったとか?」

「あっはっは!　なんだタマ、あんたあたしの妹になりたいわけ?」

「おーよ!」

「んじゃあんたのパパは、あたしにとってもパパなわけだ!」

「……あれ?　どこがどうなって、あれれ?」

予定外の展開に混乱しまくるシュー君。

「じゃパパ。あたしのど渇いたからジュースお願い」

「パパー、お菓子もっとー」

「え、は、はい!」

呼び方変わっただけでその実なんにも変わってねえええ！！

「哀れな……」

「ほんとだねー、むぐむぐ」

「さっきから喋らないと思ったら菓子食ってたのか、カカ」

「これおいしいもん」

そりゃそうだ。どんだけ高いと思ってるんだ。

「僕にもよこせ」

うん、おいしい。

むぐむぐ……まぁシュー君。所詮部外者の僕に言えることは一つだけだ。

ガンバレ。

「パパー、僕もジュースー！」

「パパ、私もー！」

「はーい！！」

子だくさんだねシュー君。むぐむぐ。

## カカの天下２９６「やり遂げた男」（後書き）

というわけで、やり遂げた男の苦難は続きます。
ってあれ、それってやり遂げてないってことじゃ……
ま、まぁ！　第一関門は突破ということで！
お金を使っただけで意味はなかったけど！

……あーっと。
ガンバレ、シュー君。

## カカの天下２９７「恋する乙女は本を読む」

「そういや最近さ、昼休みにこっちの教室こないよね。サユカン」

「そうそー。寂しいなー」

「うっ……別にいいでしょっ」

学校の帰り道、カカすけとサエすけのジトーっとした目にたじたじなサユカですっ。

「もともとクラス違うんだし、いつも一緒にいなきゃならないってわけじゃないしっ」

「でも今まではいつも一緒がよかったんでしょ？　毎日来てたし」

「サユカちゃんは私たちが大好きなんだよねー」

「そんなんじゃないわよっ！　ただ暇だからそっちに行ってただけで」

「毎日暇だったんだ」

「かわいそー」

「余計なお世話よっ」

頭を撫でるなっ！

「んー、でもつまり、ここ最近は暇じゃないんだねー。お昼休み」

「……ええ、そうね。君ら以外にも喋る人できたし」

「お、もしかしてイチョウさんか」

「あー、こないだのイメージアップ作戦のときの人だねー」

カレー好きってイメージしかアップしてないけどね。

「どんな感じなのー？」

「どんな感じ……そうね。一言で言うと、やりづらいわ」

今日の昼休みのことを思い出してげんなりしながら、ため息まじりにわたしは言った。

せっかく話すようになったんだから……と、最近の給食はイチョウさんと食べるようにしてるんだけど。

「お、お魚、おいしいですね！」

「そうね、わたしはお肉より好きだからよく食べるわ」

「そ、そうですか」

こんな感じで、どうにもぎこちない。なんだかわたしに怯えているような……わたし、何かしたかな？

「こ、このお漬物、おいしいですね！」

「そうね、わたしも家でお漬物はよく食べるわ。深漬けが好きね」

「そ、そうですか」

……会話が進まない。

そんなこんなでお互い給食が食べ終わり、イチョウさんはいつものように本を取り出して読み始めた。

「イチョウさんって本好きよねー」

「あ、はい！　わたくし本という本が大好きでして……おうちのお部屋も半分くらい本で埋まってたりしてまして」

「本に漬かってるわね」

「わたくしを食べるのですか！？」

「……は？」

「わたくしは漬物じゃないですよ！」

「いや、知ってるし」

この子の中でわたしはどんな怪獣なんだ。誰か「わたしが怪獣だ」とでも吹き込んだのか？

「よくわかんないけど、食べないから安心してっ」

「そ、そうですよね、深漬けが好きなのですよね。わたくしなんてまだまだ浅くて」

漬物から離れなさいって。

「で、でも深く漬かったら食べられるのでしょうか……それはいったいどのようにナニをどうやって……ぽ」

「なぜ赤くなる」

「よく食べるのですよね」

「食べんてっ」

あー、わたしが話をそらすしかないか。

「ところでさ。この本返すわね」

「あ、読んでいただけましたか！」

「いや、言いにくいんだけど、ちょっと苦手っぽいから途中までしか」

「そうですか……」

残念そうに俯くイチョウさん。ちょっと心が痛い。

イチョウさんが本好きということで、仲良くなるきっかけになれ

ばと思い、借りてみたその恋愛小説。最近の昼休みは読書にふけるイチョウさんの隣でそれを読んでいたんだけど……とても切ない内容だった。

切ない恋物語は、イヤだ。

「イチョウさんはこういうの好きなのよね」

「はい！　こんな恋がしたいなーとか、こんな風になりたいなーとか。読んでるだけで前向きになれるのです！」

「そ、そういうもんなんだ……」

わたしが読んだのはとてもじゃないけど「こんな風になりたい」と思えるような前向きな内容じゃなかったけど。

「で、君は今何を読んでるわけ？」

「はい、最近ドラマ化された『初恋は実らない』の原作を」

「思いっきり後ろ向きなタイトルじゃないのっ」

「あぅ」

そのドラマ、カカすけとかトメさんは欠かさず見てるほど好きらしいけど……

「わたし、それ嫌い。だってそのタイトルの通りだと、わたしは……」

わたしの、初恋は。

……だから嫌いなのよ、切ない物語って。読んでいるうちに、わたしの恋もそんな切ないものになってしまいそうで、怖くて。

「恋をなさってるのですね、岸村さん」

少し恥ずかしかったけど、頷いてみせる。

「そんなときこそ、この本を読んでみるべきだと思うのです」

そう言って差し出してきたのは、今の今までイチョウさんが読んでいた『初恋は実らない』の原作本。

「後ろ向きになれってことっ？」

「違いますよ」

イチョウさんは微笑んだ。

なぜだろう。

いつもいつも弱々しく曖昧な表情を浮かべているイチョウさんが、そのときだけは――

「初恋は実らない？　そんな迷信に負けるもんか！　って、そんな気になりますから」

とても、頼もしく見えた。

「――前向きなのは本の内容じゃなくて、本人ってことよね」

「ん？　なんて言ったのサユカン」

「いや、なにもっ」

思い出し笑いしながら、わたしは答える。

「サユカちゃん、イチョウさんがやりづらいなら、いつでもこっちに来ていいんだよー」

「ありがとサエすけ、でも大丈夫。今はまだやりづらいけど……嫌いじゃ、ないからっ」

背中のランドセルに借りた本の重みを感じながら、思う。

待ってろ初恋、わたしは負けないっ！

恋する乙女は強いのよっ！

「カカすけ！　今日はトメさんは？」

「珍しく残業で遅くなるって言ってたから、今日は会えないと思うよ」

「うぐっ！」

負けないから。

負けないもんねっ！！

くそぅ。

## カカの天下２９７「恋する乙女は本を読む」（後書き）

がんばれサユカちゃん。応援してる人は結構いるぞ。

それはさておき。
イチョウさんは本キャラです。本が絡むと登場します。
アヤちゃんは歌キャラです。歌いたくなったら出てきます。
カレーの人はカレーキャラです。枯れキャラじゃないよ。
そんな感じに脇が固まってまいりました。

あ、そうそう。そろそろ人気投票の結果発表ですね！
ぎりぎりまで票を貯めている方はそろそろ投票お願いしますね。
私がカカラジを書き始めるまで、が期限ですので、なるべくお早めに（笑

# カカの天下２９８「名探偵サエの事件簿」

「サユカちゃん手伝ってー！」

「な、なによ急にっ」

こんにちは、サエです。

ただいま昼休みの学校です。とあるツテから素晴らしい情報をゲットした私は、協力を求むべくサユカちゃんに声をかけました。

「ほらほら、読書なんて似合わないことしてないでー」

「う、うるさいわねっ」

あれ？　本のタイトル……『初恋は実らない』って。

「サユカちゃん……」

「そんな可哀想な人を見るような目で見るなっ！　わたしはね、これを読んで初恋に負けないようにしてるの！　スポーツの教則本みたいなもんなのっ」

「その教則本だとー、初恋が実らないことを教えてもらってるようにしか聞こえないんだけどー」

「じゃあ、あれよ。ぬいぐるみ写真集見ながら『うちの子のほうが可愛い！』って言うようなものよっ」

「サユカちゃん、そんなことしてるの？　ぬいぐるみバカにも程があるよー。なんかくらーい」

「やかましいわっ！」

「飼ってる犬や動物ならまだしも、ぬいぐるみって。さみしー」

「う、うるさいってのっ！　とにかくわたしは恋について勉強してるの。恋もしてないサエすけは口出さないでよ」

「濃いことなら結構自信あるんだけどー」

たしかに恋のことはあんまり知らないなー、まだ恋してないもん。誰かいい人いないかなー。

「あ、それは置いといて。すごい話があるんだよー」

「なによっ。カカすけが暴れたとかカカすけが落ちたとかカカすけがヘゲラッチョになったとかっ？」

「そんなのいつものことだよー。ヘゲラッチョは特に。とにかく来てよ」

「はいはい、わかったわよっ……そういうわけでイチョウさん、ちょっと行ってくるわねっ」

「はい……」

あら隣にいたのねイチョウさん。気配がないからわからなかった……それにしてもずいぶんと本の世界に没頭してるみたいだー。サ

ユカちゃんの言葉にもうわの空で答えてるし。

「イチョウさん、そんなんじゃこの先やっていけないよ？　喋ってなんぼの世の中なんだからー」

「はい……」

「喋らなかったら居るのか居ないのかもわかんないんだよー？　この世界」

「はい……」

だめだこりゃ。

「だめです……ヘゲラッチョって国語辞典に載ってません」

「それ調べてたんかいっ！」

「イチョウさん、侮れないねー」

前言撤回。この世界から消えることはまずなさそうだ。

「とにかく、行ってくるわねっ」

「あ、あの。ヘゲラッチョとはどのような――」

「とは言ったものの、どこいくの？」

「あ、うん。職員室にー」

「あ、あの。ヘゲラッチョとは」

口では説明しにくくてめんどいので、私とサユカちゃんはさっさと教室から逃げ出した。

そしてダンダカダーン！　と職員室前。あ、これ移動の音ね。カカちゃん直伝の。

「足が痛いわ……」

この音は足に響くね、膝に悪そう。自重しよう。

「そういえばカカすけは？」

「カカちゃんはトイレで戦闘中だよ。こほん、失礼しまーす。えーとー、あ、いたいた。教頭先生」

他の先生方は都合のいいことに誰もいなかった。皆どこいったんだろ、まぁいいやー。

「ふむ、なにかね諸君」

相変わらずご立派なしゃべり方だ。

「実は小耳に挟んだんですけどー、校長先生が帰ってきてるって本当ですか？」

「……どこでそんなものを挟んだのか不思議だが、その通りだ。いつもの狩りとは違って向こうに滞在せずに即帰ってきたようでな」

「なんですぐ帰ってきたんですかー？」

「うむ、それがな。アフリカまでは行ったのだが、狩ろうとしたら現地の人に怒られたらしい」

「なんて普通の理由だろー……」

「それを聞いた職員が全員、同じことを言ったよ。ちなみに校長はヒョウを狩れなかった腹いせに、現地の人の頭を刈ってきたそうだ」

「うひょー」

「それも全員言ったぞ」

「連帯感あふれる学校でなによりですねー」

「まったくだ」

うんうんと頷き、教頭先生に別れを告げて職員室をあとにする。

「あのさ……わたし、一緒に来た意味あったの？」

「あるよー。ほら、こないだニシカワ君が校長の正体を暴きそうになったとき、捕まってたでしょー？」

「ああ、そんなこともあったわね。それで？」

「私あんなの嫌だもん。だからそうなりそうになったら、『これで勘弁してください』って」

「わたしを差し出すんかい！　なに、わたし身代わりっ！？　あと『これ』ってなによっ！」

「大丈夫だよー、サユカちゃんおいしそうだから。ネタ的にも」

「ネタってなに！？」

わめくサユカちゃんは置いといて……

「とにかく情報は確かだった。ということは、トメお兄さんの家にいけば校長に会えるかもだねー！」

「へ？　なんでトメさんの家が出てくるのよ」

「ふっふっふー、カカちゃんっぽい破天荒な行動、たまにしか帰ってこないという共通点、それに校長先生がカカちゃんの顔見知りという点からして導かれる結論はただ一つ！　カカちゃんのお母さんは校長先生なんだよ！」

「ええっ！？　ほ、ほんとなのそれ！」

「きっと間違いないよ。だからカカちゃんの家にいればきっとそのうち会えるよー」

「よしっ、じゃあこれからの放課後はカカすけの家に集合ねっ」

「うん、決まり！」

「……って。これ、いつも通りってことじゃない？」

「……そだね」

でも待っててよ、校長お母さん！

私が絶対、正体を暴いてみせるからねー！

## カカの天下２９８「名探偵サエの事件簿」（後書き）

果たして腹黒探偵サエは真相を暴くことができるのか！
腹黒探偵……本当はサブタイトルにしたかったけど、別にそんなに腹黒いことしてないからお蔵入りに……がっくし（なぜ

## カカの天下２９９「お鍋の達人（になりたい）トメ」

「夕飯まだー？」

「おう、もうすぐできるから待ってろ」

急かす妹の声に答えつつ、おたまを動かしているトメです。ぐーるぐーる、まーぜまぜ。

ただいま夕飯の準備中。メニューはというと、クリスマスに使う鍋の出し汁を決めるための試作品です。さすがに候補全てを一度に鍋するわけにはいかないので、それぞれのお出しで適当にお肉と野菜をいれて煮込みました。

キムチ、醤油、味噌、豆乳と、欲張って四種類も作ってしまったので、台所のコンロ二つでは少々時間がかかってます。でも味噌と醤油の煮込みはもうできたから、キムチと豆乳をあと少し煮込めば完成です。まぜまぜ。

「トメ兄ってさ、おたまを動かしてる姿似合うね」

「そうか？」

「うん、なんかおばあちゃんが料理してるみたい。ハマッてる」

「……嬉しくないな」

「のうトメばあさんや、飯はまだかいな」

「久々に聞いたな、それ」

どうせおばあさんみたいな名前ですよーだ。

「でも似合うのは確かだよ、おたま」

「自分じゃよくわからんが」

「じゃあ誰にでもわかるように、あだ名をつけてあげるよ」

カカは僕をビシッと指差し、言いはなった。

「おマタの達人、トメ！」

「誰が股の達人か！？」

「あ、間違えた。失敗失敗」

たまたまにしてはハマリすぎな間違いである。でも本当にたまたまなのだろうか。おたまだけに。

そこ、しらけるな。

「じゃあ僕もカカにあだ名つけてやるよ」

えーと、カカが使えそうな調理器具は……

ああ、あった。

「まな板娘、カカ」

「ものすんごく不愉快だからやめてくれる！？」

「や、まな板がそこにあったからつい」

「まな板はさっき戸棚にしまったでしょ？　……トメ兄の視線の先には私の胸しかないんだけど」

「なんて調理しやすそうな板だろう」

「包丁ってどこやったっけ？」

「ちょっと待った！　冗談だ嘘だタチが悪かったな謝るよ！　だから僕を調理するのはやめてくれ！」

「……まったくもう」

やれやれ、と手に持った包丁をおろすカカ。

「ふぅ……いくら胸元にまな板があるからって」

「包丁仕事人、カカ参上！」

「参上せんでいい！」

と、そんなやりとりを続けているうちに煮込みは完成。「早く早く」とうるさい妹の声を聞き流しながら皿に盛る。

そして保温状態の空の炊飯器の中にラッピングした食器ごと突っ込んでおいた味噌と醤油の煮物も取り出す。うん、温かいままだ。

ラップをはずして一緒にテーブルに並べ、別のミニ炊飯器で炊いておいたご飯をよそえばカンペキだ。

「おー……今日の夕飯は豪勢だ」

なにせ煮物が四種類もあるからな。

「これを食べ比べて、クリスマスの鍋を決めよう」

「りょーかい！　あ、クリスマスといえばさ、コタツどうなったの？」

「一つは確保した。これで参加できる人数は八人だな」

「私とサエちゃんとサユカン、トメ兄は決定だよね。あとテンカ先生も混ざりたいって」

「こっちはあと二人決まってる。だから、あと一人だな」

「へー、その二人って誰？」

「それはな――」

ピンポーン、と僕の言葉を遮るようにチャイムが鳴った。

「誰だろ、こんな夕食どきに」

「私いくー」

「僕も行くよ」

一人だけ食卓に残っても寂しいだけだし、と二人して玄関へ行くと。

「突撃、友達の晩御飯だよー！」

「今日のメニューはなんですかっ！」

「サエちゃんサユカン？」

「なんだ、飯でもたかりにきたのか」

妙なノリで登場する二人。はて、さっき帰ったはずなのに。何しにきたんだろ。

「むむむー、夕飯どきならいると思ったのですが、いませんねーカカちゃんのお母さん」

「「……は？」」

首を傾げる僕とカカ。

「まーいいです、いずれ会ってみせますからねー！」

「え、えっと。お邪魔しましたっ」

慌ただしく帰っていく二人。なんだったんだ、一体。

「お母さんなんて話、どっから出てきたんだろ……まぁいいや。食

べようよトメ兄」

「ん、おう」

居間へと戻っていくカカ。僕は戻らずに玄関に立ったまま、カカに聞こえないようにボソッと呟いた。

「父さん、いる？」

「ここに」

即座に天井から返事が返ってきた。

「最近母さんが帰ってきた、なんてことある？」

「む？　いや。先日帰ってきたときに半年間は帰ってこれないと言っていたから、まだのはずだぞ。そろそろ帰ってこれるだろうが」

「だよ、な」

はて。

じゃあサエちゃんは誰のことを言っているんだろう。

「うーん……や、考えてもわかんないもんはわかんないか。あ、父さん。お鍋の試作あるけど食べてく？」

「遠慮しておく」

「……まだカカに顔を見せるの恥ずかしいのか」

「むぅ、面目ない。隠れてばかりの仕事だと、なかなか赤面症が治らなくてな」

忍者っていうのは便利なんだか不便なんだかよくわからない。

さて、食べるかな。

どれが一番うまいかな？

## カカの天下２９９「お鍋の達人（になりたい）トメ」（後書き）

お鍋のお出し、果たしてどれになるのでしょうか。もちろん私の好みで選びます（ぇ

お母さんの謎については、あえてまだノーコメントにさせていただきます♪

あ、でも明らかになる日は近い、とだけ言っておきます！

それから、ついに明日が人気投票の結果発表です！

投票を出し惜しみしている人はいますぐ投票を！　もれなく作者が大喜びします（それだけかい笑

キャラへのメッセージもまだまだ受け付けております。もしかしたら明日載せる話のタネになるかもしれませんよ！

心よりお待ちしております＾＾

# カカの天下３００「第八回、カカラジ！」

皆様こんカカ！　作者のルシカです。

今回は人気投票の結果発表スペシャルということで、僭越ながら私が司会をさせていただきます。

５０日間に渡って投票を募集してきたキャラの人気発表ですが、どのような順位になっているのか。

結果は下の順位から発表していきます。その際には発表された順位のキャラへインタビューしていきたいと思います。いつものカカラジとは趣向が違いますが、ご了承ください。

なお、このラジオに出演、発言するキャラは分身であり、本編とは直接的に関係ないのでよろしくお願いします。

それからもう一つ。今回はたくさんのメッセージをいただいたため、各キャラのインタビューの際に紹介していきますが、カカラジネームを記載された方以外のお名前の発表のほうは控えさせていただきますので、ご了承ください。

加えて読者の皆様にわかりやすいようにメッセージを省略させていただいたりもします。ちょっと書くとキリがないもので……申し訳ありません！

さて――いよいよ発表していきます。まずは１０位の発表！

なんとかベスト１０入りを果たした人気があるんだかないんだか、

キャラ数的にはないほうかなーって感じの１０位は……この人！

投票数、５票！

第１０位は、サカイさんです！

言わずと知れたサエちゃんの母親！　にも関わらずいつまで経っても再会できずにちょこちょこ周囲に現れるヘタレです！　おめでとうございます！

「全然おめでたくない紹介なんですけどー」

いえいえ、ベスト１０入りおめでとうですよ酒井さん。

「投票してくれた人、ありがとー」

さて、ここで読者の方からのメッセージを紹介したいと思います。

「はいはいー？　年齢以外ならお答えしますよー？」

カカラジネーム『括弧さん、留さんを私に下さい』さんから。

「いいよー」

あんた括弧さんじゃないでしょが。

「じゃあわたしに言わないでよー」

それもそうだけどあなたに聞きたいの！　えー『始めの方を読み返して気がついたのですが、サカイさんは見た目姉カツコさんと似

たような年齢なんですよね？　で、かつサカイさんはサエちゃんの実母だから、まぁ若く見積っても３０歳前後と……これはサカイさんが見た目若いのか、カツコさんが３０超えてるのか、どちらなんでしょう？』という質問！

「言ったそばから年齢の話を持ってくるとはいい度胸ですねー……ネーム的にカツコちゃんにすればよさそうな質問をわざわざ……」

お、お答えします！　カツコは２６歳、サカイさんが２９歳です。

「ばーらーしーたーなー？」

つまりサカイさんが若いのです！　可愛い子の親は可愛い（幼い）と相場が決まってますので！

「どうせ三十路手前ですよーっ！　ふーんだっ」

だからフォローしてるじゃないですか！　えっと次いきますカカラジネーム『かむパン』さんから。

「ふーんだ、ふーんだー」

『好きな食べ物は？』とのことなんで用意してみました！

「あ、ほんとだー。あむあむ……んー、からいっ！　私が好きなのはお菓子のハバネロですー。ＰＣ前で食べるのが最高ですよー」

機嫌なおるのはやっ。さすが酒井さん、つかみ所がない……あ、他『サエちゃんと幸せになってほしい』等のメッセージも多くいただきました。

「あむあむ……んー、からっ」

今もそれなりに幸せそうですが、ツッコまないでおきましょう。

さ、次です！

そこでハバネロ食べてる人をちょこっとの差で上回ったのは……

投票数、８票！

第９位は、総理大臣！！

「にゃー」

あ、あの。おめでとうございます！

「にゃー」

決め手はみかんだそうですよ！　『みかん食べるなんて可愛い』とかメッセージが……

「にゃー」

えー、８位にいきます！

可哀想だからとか頑張ってほしいからとか、妙に応援する票が多かったのが気になる第８位の人は……この人！

投票数９票！

弟8位は、シュー君です！

「ごめんなさい！」

なぜ謝る。

「うう……こんなに応援してくれる人がいるのに、期待に応えられなくて申し訳なくて」

大丈夫、君に成功を求めてる人のほうが少ないから。充分期待に応えてると思うよ？

「あんまりだぁ！」

はいはい何にせよおめでとう！

さて修君、質問きてるよ。『あんなに気弱なシュー巡査（？）が警官でいられるのは、なんだかんだであの怪物（カツコ嬢）を扱うのがうまく、どんな凶悪犯も楽々逮捕できるからなんですか？』だってさ。そなの？

「僕がお姉さまを扱うなんてとんでもない！　ただ、その……事件は事件を呼ぶというか、厄介ごとは厄介な人に吸い寄せられるというか」

ああ、なるほど。

なぜか知らんけどトラブルが姉に寄ってくる＝犯罪も寄ってくる＝姉が活躍＝犯人倒され、後始末に呼び出されたシューが逮捕。みたいな形になってるわけね。

「はい……おかげさまで警官仲間にも一目置かれてるんですよ！」

にも？

「……には、です」

素直でよろしい。でもいくら報われなくてもめげないで。君には『シュー君がんばれ！』とか『ガンバレとしか言いようがない』とか『あまりに哀れ』とか応援メッセージがいくつもきてるんだから！

「あの、応援っぽいの最初の一つだけじゃないですか？」

そんな細かいことばかり気にしてるから人生うまくいかないんだよ！

「べ、別に人生がうまくいってないなんて誰も言ってないでしょう！」

じゃうまくいってるの？

「……いって、ないけど」

えと、ごめん。私が悪かった。がんばれ！

「……うん」

さ、さあ！　気を取り直して次にいきましょう！

哀れなシュー君にかろうじて勝ったのは、この人！　後半での登

場で一気に株を上げたっぽい。

投票数１２票。

第７位は、デストロイヤー教頭！

「ふむ、私か」

おめでとうございます！　しかしその……言いにくいのですが。

「ありがとう。なんだね？」

なぜか、教頭だけメッセージが届いてなくて……

「……なぜかね」

もう『そのまんまでいいよ』ってことじゃないっスか？

「そうか、わかった。今後も少しずつ何か壊していこう」

ものすげー不吉なお言葉、ありがとうございます！

さあさ、お次は第６位！

ここまでくるとさすがに登場するキャラは限られてきますが、果たして！？

投票数１５票。

第６位、姉ことカツコ！！

ん、おめでと。

「なんか適当に言ってない？」

あんたはそういう扱いされるキャラだから。さ、メッセージの紹介いくよ。カカラジネーム『最近姉と妹の毒舌が激しいんで適当に毒を返したら二人同時に泣いちゃったから適当にスルーした青年』さんから。

「なげーなおい。てか女の子泣かしたの？　いっけないんだー」

あんたしょっちゅう逆してるでしょうが。

「男が泣くほうが悪い。女は泣いてなんぼ」

言ってることメチャクチャだし。まぁいつものことなんで私もスルーします。えーメッセージですが『国会議事堂で何したの？』だそうで。

「んー、ああ。会議中に『異議あり！』って、とある議員の声マネしてから逃げたのよ」

……あんた、それバレたらエラいことになるぞ。

「忍者の娘よあたしは。そこらへんはバッチリよ。あ、よい子の皆はマネしちゃダメだぞ♪」

したくてもできねーよそんな大それたこと……あ、あと姉には『いつも扱いがかわいそうだから一票いれてあげる』とか『このバケ

モノ！』とかいうメッセージが。

「ちょっと待ちや！　やっぱあたしの扱いひどすぎない！？」

あんたがいちいち破天荒なことするからだろう！　少しは自重しろ！

「あたしに死ねっていうのか！？」

どうしたって死なないだろうがあんたは！

……あ、ああ。すいません取り乱しました。ええ、今のは冗談です本当に。ちゃんと『なんだかんだでいいお姉ちゃんじゃん』なんていうメッセージも届いております。

「最初から言えよな！」

キャラで遊ぶのは作者の特権ですからね。あー楽しかった。

さて、ベスト5発表に移る前にこの辺で一区切りして、１１位以下のキャラを一気に紹介してみたいと思います。簡単にいきますよー。

投票数４票。二名います。

サラさん！　登場して間もないにも関わらずなにやら熱烈なファンがいる様子！

タケダ！　『恵まれないタケダ君に愛の手を！』等の応援メッセージが届いております。

続きまして、投票数3票の方。

東治のバイト店員！　『サラさんに負けるな！』『もっと目立ってほしい』とのメッセージが届いております。

タマちゃん！　『可愛い！』その一言に限るみたいですね！

ニシカワ君！　頑張って西に川をつくれるエライ人になってくれ！　革を埋めるハメにならなくてもいいように！

お次は投票数2票のお人！

アヤちゃん！　歌キャラとして今後もう少し出番が増えればいいね！

院長店長！　これからもちょくちょく『病院』にはお邪魔します！

最後に投票数1票の人！

イチョウさん！　本キャラ&サユカちゃんのお友達として、これからもちょくちょく登場よろしく！

カレーの人！　カレー好きにはたまりません。ぜひカレーで世界を救っていただきたい！

そして……デンジャーケロリン！　なんか一部に熱心なファンがいます！　カカ天のマスコット候補でもある、かもしれませんのでこれからも登場するでしょう。

ふう……大体こんなとこですかね。

さぁ、ではいよいよベスト５の発表です！　どの五人が入っているかはもうご承知の通りだと思いますが……果たして中間発表のときから順位は変動したのでしょうか！

ではいきますよー。

投票数、２９票！

第５位……カカ！！

本編の主人公、というかヒロインが五位にランクイン！　さぁ…ちょと怖いけどインタビューしてみましょう。

香加……あのその。えっと、おめでと？

「疑問系で言うな！！」

はい、す、すいません！　えっと、この度におかれましてはご機嫌うるわしゅう？

「別にビクビクしなくてもいいよ。別に怒ってないし」

あれ？　でも前回のカカラジじゃ……

「あのとき留兄を落としてスッキリしたからもういいの。本編見てればわかるでしょ？　なんだかんだで私はトメ兄やサエちゃんサユカンと遊べてればそれでいいのさ」

お、おお。意外と大人な感じだ！

「でしょ？　というわけで皆様、次の人気投票ではちょっと大人なカカをよろしく」

やっぱ悔しかったんじゃん。

「……ちびっとね。でもいいもん。メッセージが嬉しいのばっかだったから」

そうですね、『これからもトメと仲のいい兄妹でいてください』とか、『これからもはっちゃけてー』とか『やっぱ一番好き』とか『ブラコンなとこが可愛い』とか。

「ん、ありがと！」

……ほんとにあっさりしてるね。つまらん。

「何言ってるのさ。考えてもみてよ。この作品ってカカの天下じゃん。私が題名じゃん？」

そだね。

「つまり、読者の皆は毎回私を見にきてるようなもんでしょ？」

ま、まぁ確かにね。ほとんどの話に君いるし。

「なら、誰にも投票してくれなかった読者の人は、みーんな私に投票してるようなもんじゃん。つまり見えてないだけで私の勝ち」

そ、そうなの、か？

「そうなのさ」

そ、そっか……本人がそう思って納得してるなら、まあいいか。

思いのほかあっさりな反応でガッカリですが、次にいきます！

主人公のカカを一つ上回ったのはどのキャラか！？　さあさあ発表します。

投票数、３６票！

第４位は……サユカちゃんです！！

「わーいっ、カカすけに勝ったわ！」

おめでとう沙由歌ちゃん！　メッセージも届いてますよ、『トメと結婚できるように頑張って♪』とか『諦めずにがんばって、超応援してる』とか『君の想いはきっと届くぞファイヤー！』とか！

「ありがとうっ、特にわたしとトメさんの仲を応援してくれた人たちっ！　トメさんを狙うライバルなんかには負けないわよっ！　例えば『密かにトメのツッコミファン』の人とかにはっ！」

あの、実はメッセージが届いてまして。

「なによっ」

その、サユカちゃんとトメの仲を応援してくれた人と、その『密

かにトメのツッコミファン』の人は同じ人なんだそうですよ？　カカラジネームが違うだけで、同一人物だったとか……

……沙由歌さん？

もしもーし。

「……で、わたしは誰を殴ればいいのっ！？」

誰も殴るな！！　や、あのね――

「なによっ、応援してくれる人がいてわたし喜んでたのに！　それが実はライバルからの塩ですって！　いらないわよそんな塩！　わたしの家にはお母さんが間違えて通販で買っちゃった塩が三キロも残ってるんだからねっ！！」

やー、あのーそれはー。

「いったいどういうことなのよっ、作者っ！」

それはね、きっと沙由歌ちゃんがまだ子供だからしょせん相手にならないという余裕から――

「カカラジチョーップ！！！」

な、なぜおまえがその技を……ぐふっ。

「ふうっ、すっきりした。あ、なんか取り乱してごめんなさいっ、応援してくれたのは事実だもんねっ。人を疑っちゃいけないよねっ。というわけでやっぱり応援ありがとっ、負けないわよ！」

……と、いうわけで、わたしが殴られて一件落着……

ん、回復！　さぁ次いきましょう！

残るは三人、はてさて、順位は動いたのか否か！

いきます。

投票数、３９票！

うーん、サユカちゃんもう少しで届きそうだったんですね。一歩及ばず。

そんな第３位は……なんとテンカ先生です！！

中間発表でトメに次いでニ位だったテンカ先生がまさかのダウン！　でもおめでとう、天下先生。

「おう、さんきゅ。しかし……まさかオレがこんな上にいるとはな。まったくもっていい気分だ」

作者としても意外でしたわ。メッセージもちらほらきてますよ。『格好いいです！』とか『トメとくっついてほしい！』とか『なんだかんだで先生してんじゃん』とか。あといろいろありましたけど、要約すると『ハチャメチャ八割、先生二割』くらいで頑張ってほしいみたいですね。

「いや、九：一くらいだな」

さいですか。あと質問もきてます。カカラジネーム『かむパン』さんから。『好きな食べ物はなんですか？』だそうで。

「可愛い女の子に決まってるだろが」

……食べるの？

「食べるぞ」

そ、そうですか。それはなんとも羨まし――ごほん！　あとそれから、『警視庁で何したの？　あと、トメに送られた後ナニカされなかったか？』というお便りもきてましたが？

「あー、トメに送ってもらった日か。起きたら服に血がついててびっくりしたよ」

血……って、まさかそんなアダルトな展開が！？　ていうか天下先生って処――

「返り血だよ」

……誰の。

「寝ぼけてトメをひっかいたらしい」

……トメ、おつかれー。

「あと警視庁で何したかって話な。大したことないさ、『犯人はオレだ！！』って叫んでから警察とおっかけっこしただけだ」

何の犯人さ。

「何の犯人でもねーよ。だから捕まったらすぐに釈放。警察って逃げる『犯人』を見逃せねぇからな。スリル満点で楽しかった……若気の至りだな」

若くなかったらすぐ釈放されるか怪しいもんだね。あとは『テンカ先生って一人暮らしなんですか？　もしそうだったら料理とか家事はどれくらい出来るんですか？』って質問。

「おー、一人暮らしだぞ。家事はそれなりにはするが料理はできん！　外食ばっかだな」

不健康だねー。トメんちにたかりにいけばいいのに。

「その手があったか」

……余計なこと言ったかな。まぁいいや本編のテンカ先生には言ってないし。

さて、次いきますか。

皆様、残り二人でございます。誰が残っているのかは言うまでもないと思いますので、余計なことを言わずにさっさと発表いたしましょう。

投票数、４０票！

第２位は……サエちゃんでしたー！！

前回テンカ先生につけられていた差を縮め、ついには追い抜かしたサエちゃん！　やはり前のカカラジのおねだりが効いたのか？　とにかくおめでとう小枝ちゃん！

「一位じゃない……」

え、や、でも二位だよ！

「一位じゃない……」

テンカ先生を負かしたんだよ！　中間発表じゃ１０票くらい差があったのに――

「一位になったら手加減なくイロイロできると思ってたのにー！」

な、ナニするつもりだったんスか。

「それはもちろん！　読者さんが喜んでトメお兄さんあたりが頭抱えるようなことを盛りだくさんでー」

それはそれで見たかったかも……

「でしょ？　じゃ作者も私に一票いれてー！」

入れましたよ。

「……あれ。まじー？」

マジ。私サエちゃん派ですんで。でもこの結果なのですよ。

「なら仕方ないかー」

はいはい、メッセージもいっぱいきてますよ。『ブラック親子でがんばって』とか『腹黒最高！』とか、『もっと黒く』とか。

「みんなマゾなのー？」

危険な発言はスルーしてっと。もちろん『たまに見せる白い部分が可愛い』とか『パソコンのときは最強』とか、いいメッセージもきてますよ！

「いいのかなーそれ」

質問もきてます。カカラジネーム『サイコメタル』さんから、『誰で遊んだら一番楽しいですか？』ですってさ。

「んー、やっぱりカカちゃんかな。リアクションはサユカちゃんのほうが大きいし、からかいやすいから、よくいじるのはサユカちゃんなんだけどねー。でもカカちゃんは予想外な行動多いから、いじる楽しさはカカちゃんのほうが上かなー」

『で』って部分は否定しないのね。

「どうせ黒いもん。ふーんだ、ふーんだ！」

あ、スネ方がお母さんそっくり。

「でも私はあんなダメ人間にはならないもーん」

さ、さあ！　なんかドロドロした親子関係が公になる前に次いき

ましょう！　あ、ちなみに再度確認しておきますけど、この発言は『カカ天を全部読んだ、キャラの分身』である小枝ちゃんの発言であって、本編のサエちゃんの心境ではないので間違えないように！

「いやー、でもそんなにかわら――」

はい次！

いよいよ一位でございます。ぶっちゃけ皆様が気になるのは票数くらいでしょう。もう決まってるようなもんですし。

では、発表します。

投票数、５６票！　多すぎです！

第一回、カカ天人気投票第１位は……トメです！！！

留、おめでとう！

「お、おう。なんか、本当にいいのかな僕で」

やー！　前回窓から落ちたくせに票は落ちなかったねー！　残念残念。

「……作者的にはよくないわけね」

そーゆーわけじゃないよ。たださ、ほら。モテすぎなやつって基本的にムカつかない？

「ぶっちゃけすぎ」

だからクリスマスイブあたり、見てろよ？　ふっふっふ……

「そのセリフ、世界を握ってる作者が言うと怖すぎるんだが」

んむ、握り寿司にして食ってやる勢いで書いてやる。

「……食べられないように気をつけとくよ」

メッセージも『モテモテすぎて羨ましい』『このロリコンブラコン』『フザケンナ』『こっちにもわけろ』などの温かいメッセージが。

「あの、なんていうか……そんな風に言われるとツッコミようがないんスけど、自分のことだし」

一位のくせにハッキリしない人だね。あと質問もきてるよー。『いっつもカカ達にお料理作ッてるけど何歳くらいから作ってるの？　得意料理とかこれお薦め！！　とかあったら教えて下さい！！』だってさ。

「あー、五歳くらいのときに泥ダンゴ作ったのが初めかな」

あのさ、それ食べれないっしょ。料理っていうのは食べれるものを――

「姉は食べてたぞ」

――食べれるものを作るのが料理なら、それも料理か。てか姉死ななかったの？

「それで死んでたら苦労はしない」

間違いない。

あと、得意料理は？

「煮物全般かな。母さんに仕込まれたし」

ふむふむ、あと……『彼女欲しいなーと思ッたらいつでもいッてね♪笑』なんて文もあるんですがコノヤロウ。

「コノヤロウとか言うなよ。あ、えっと、今は彼女とかそういうの考えてないんで、大丈夫です。ありがとう！」

断ったなコノヤロウ。

「頷いてもコノヤロウっていうだろ、あんた」

当たり前だコノヤロウ。

コホン。えー、ちょっと長く悪ふざけしてましたが（笑）他にも『ツッコミ最高！』とか『おにいちゃんになってほしい』とか『たまに格好いいとこが好きです』とか『振り回されてばっかいないで頑張れよー』などなど、好意的なメッセージが多くて羨ましい限りですコノヤロウ。

「いい加減コノヤロウやめろよ」

とりあえず一位になったトメにはご褒美として……エラい目に合

わせてやります。クリスマスイヴあたりに！　これが私のプレゼント！

「いらねー！！」

――さて、人気投票の結果はこのようになりました。投票してくださった皆様、本当にありがとうございます！

こんな企画ができるのも、カカの天下という作品が読んでくださるたくさんの方々に支えられている証拠です。本当に感謝してもしきれません。

いつも感想をくれる方々、だんだん返信がフランクになってきてるのは打ち解けた証拠だと思って勘弁してください！

それにメッセージ欄から応援してくださる方々、メールという形ですのでなかなか返事を返したりできないのですが、ちゃんと全部読ませていただき、励みにしております！　ほんと感謝感激雨霰でございます！

あとさりげに誤字を報告してくださる方々、非常に助かっております！　気をつけてはいるのですが……一切なくなるように努力いたします！　情けない作者ですが、もしよければこれからも見守ってやってください！

ではでは、今回のカカラジはこの辺で！

と、言いたいところですが。

実は実は、カカラジのＥＤテーマ曲を作ってくれた読者さんがいまして！

そのテーマ曲を聴きながらお別れ、という形にしたいと思います！　読みながらだろ、とかいう心ないことを思ったあなた！　ダメですよ遊び心を忘れちゃ！

細かいことは気にしないの♪

それでは、作詞作曲？　東雲さん。歌うのはアヤｗｉｔｈカカサエサユカ！　バックダンサーはカレーの人！　バックダンサーの踊りは（）内に書きますので想像しながらお聴きください♪

曲名は――『カカカレー』

@@@

そろそろおせちに飽きました
（バック：しょんぼりするカレーの人）
３日目にして飽きました
昨日の夜は夢の中
おせちのお化けに襲われた
（バック：うなされるカレーの人）

お兄ちゃん　今日はカレーを作ってよ
（バック：と思ったら目を輝かせて復活！）

カレーカレーカカカレー

カレーカレーカカカレー
（バック：テーブルとカレーが登場。ひたすら食べるカレーの人）

唐辛子入れれば激カレー
食べたら空も飛べるかな
（バック：うまーい！　と叫びながらカレーの人、飛翔）

カレーカレーカカカレー
カレーカレーカカカレー
（バック：空から戻ったカレーの人。またひたすら食べる）

りんご入れたら甘カレー
今日は良い夢みれるかな
（バック：寝転がるカレーの人。でも食べてる）

今日もカレーが食べたいな
１０日目だけど食べたいな
昨日の夜は夢枕
カレーの女神が立ってたよ
（バック：もう何もせずに食べることに夢中）

お兄ちゃん　今日もカレーを作ってよ

カレーカレーカカカレー
カレーカレーカカカレー

唐辛子入れれば激カレー
食べたら空も飛べるかな
（バック：食べてばっかいないでなにかしろよ）

カレーカレーカカカレー
カレーカレーカカカレー

りんご入れたら甘カレー
今日は良い夢みれるかな

辛いぞ甘いぞ旨いぞ食べるぞカカカレー
（バック：ごちそうさまでした）

@@@

それでは、また明日。本編でお会いしましょう。

この番組は、たくさんの読者さんたちの提供でお送りしました。

カカばい♪

## カカの天下３０１「カカの転機」

こんばんは、トメです。

夕飯の買い物も済み、さぁ調理にとりかかろう、と思ったら……調味料のほとんどが切れていることに気がつきました。不覚です。

でも今から買いなおしに行くと夕飯が遅くなってしまう……というわけで。

「ほい、メモに書いておいた分のおつかいよろしくな」

「みゅー、トメ兄。ちょっと買ってくるもの多くない？」

「ああ、ついでに戸棚を調べたら、思ったよりいろいろ切れそうだったからな」

「みゅー」

「カカが買い物に行ってる間にできるだけ作っておくからさ、帰ってきたらすぐ夕飯にできるように」

「みゅーみゅーみゅー」

「何の鳴き声だ？」

「ヘゲラッチョ」

ああ、なるほど。そんな鳴き声なんだヘゲラッチョ。

説明しよう。ヘゲラッチョとは――カカがどこかで聞いて以来ハマってしまった言葉であり、何をどうしたのか『ヘゲラッチョ＝不満虫』ということになっているのだ！　語源、そうなる理由、不満虫という生物……何から何までさっぱりわからない！　しかし早い話が不満だと言いたいわけである。

いつだったか、いきなり「ヘゲラッチョ！　ヘゲラッチョ！」と言い出した妹の姿を見たときには「コイツの頭もクるところまでキたか」と思ったものだ。

「仕方ないな。じゃ、お釣りでお菓子を一個買っていいぞ」

「みゅーみゅー！」

「二個」

「いってきます！」

よくわからん生物『不満虫』は耳障りな鳴き声を止め、ようやくお使いへと出かけてくれた。やれやれ……人の足元見やがって。

まぁいいけどね、買ってくるのは許したけど今日食べるのは許さないし。おやつは一日一回という法則だけは、泣かれようが鳴かれようが不満虫が現れようが巨大化しようが曲げないのである。や、巨大化したらさすがに考えるが。夕飯だけじゃカロリー足りないだろうし。

しかしずいぶんと逞しくなったものだ。小さいころのカカはそりゃもう気が弱かったのに……ちょっと、思い出してしまった。

小さいころの、カカを。

あのころは、そう。今みたいに家族はバラバラじゃなくて一緒に暮らしていたな。

「とめにーちゃーん！」

「あぁはいはい、今度はなんだ？」

そしていつものごとく僕にしがみついてくる妹。この頃のカカは本当に可愛かった。すぐ笑い、すぐ泣く。「私最強」って顔に書いてある現在とは大違いだ。

「おとーさんがー」

「はいはい、父さんがどうした？」

「あやしー」

「それは仕方ないんだよ。お仕事なんだから」

普通なら「お父さんが遊んでくれない」とかダダこねる子に使う言葉なんだろうな、これ。

「仕方ないとか言うな！　か、カカ。お父さんはな、仕事はちょっとあやしいかもしれないが家ではとっても」

「怪しいよ、父。あたし授業参観のとき毎回恥ずかしいもん」

「ああ、それは僕も」

「なんでだあああああ！　家では忍者っぽいことしてないのに！」

「染み付いてるんじゃない？　服黒いし。鍛えてるからマッチョだし。あたし女でよかったわ、そんなんにならなくて」

「似たようなトレーニングしてるくせに締まった身体しおってからに……いや、貴様らのことなどどうでもいい！」

「うわ、ひど」

「父ってロリコンだっけ？」

「だぁらっしゃい！！　親は子供が可愛いものなのだ」

「あたしらは？」

「長女はバケモノ、長男は冷めたガキ。どう可愛がれというのだ」

ハッキリしすぎだこのおっさん。

「か、カカ？　お父さんだよー？」

「やー」

そして普通なら生まれたばかりの子供に言いそうなセリフを言って嫌がられる父さん……痛い痛いカカそんなに抱きつかないで、お

腹を絞めないで、なんか出ちゃうから。

「ほらほらパパ君、そんな無理に迫ってもカカ君が怯えちゃうだけでしょ？」

おっと、ここで母さんの登場だ。このときはまだうちにいること多かったんだよな。

「で、でも」

「でもじゃないの。あとで慰めてあげるから、ちょっとあっち行ってなさいな」

「……はーい」

いい歳したおっさんが完全に子ども扱いである。

「カカ君、おいで」

母さんが言うと、僕にしがみついていたカカはテテテと母さんに駆け寄り、また抱きついた。

「むぅ、カカちゃんは本当にトメと母にしか懐かないね。父ほどじゃないけど、あたしも怖がられてる感じだし」

生存本能がバケモノを警戒してんだろね。

「んー、カカ君も少しでいいからカッ君を見習ってくれればいいんだけどね」

「おねーちゃんをー？」

「うんうん。そうすればもっとトメ君にも好かれると思うよ、ね？　トメ君」

「う、え、っと」

「カッ君みたいな子、好きだよね？」

そういう言い方されると初恋の苦い思い出が蘇ってすんごくイヤなんだけど……ここは頷くしかないよな。カカのためにも。

「そう、だね。もう少し強気な子が好きかな」

「トメにーちゃん、そうなんだ」

「ほら、トメ君もこう言ってるし」

「うん、わかった！　私、おねーちゃんに弟子いりする！」

「それを聞いたときの姉の喜びようったらなかったなー。初めてカカとまともに交流持てたようなもんだし。そして弟子入りしたらいつの間にか必要以上に強気になって、僕と姉の呼び方から『ちゃん』が消え、父さんはカカを苦手にしたまんま赤面症になって消えがちに……ああ、若かりし頃の過ち」

あのとき僕が頷かなければ、可愛い妹のままだったのかな……

「ただいまー！」

物思いに耽っている時間は思いのほか長かったのか。もうカカが帰ってきた。

「ぐえ」

そして腹にもらった体当たり。

「ねえねえ聞いてトメ兄！　私ね、いまゴッスンゴッスン踊りしながら歩いてたのね！　そしたら卵が入ってる袋を落としちゃったんだけど、割れなかったんだよ！　これはもう私の人生が『割れることはない』みたいな意味だよね！　安泰だね！」

「そんな神社の裏でわら人形に五寸釘を打ち込んでそうな踊りを踊ってるおまえの人生が安泰かはかなり疑問だが……」

「えー！」

不満げに言いながら僕の腹を揺さぶるカカ。

その腹への衝撃を感じながら、変わってないこともあるんだよなぁ、などとしみじみ想――ああやっぱちょっとうざいわ。あのころより威力上がってるし。

やっぱりおとなしい頃のカカのほうがよかったかもな。

……え？　ロリコン？

断じて違う！！！

## カカの天下３０１「カカの転機」（後書き）

はい、『トメにべったりだった幼いカカがどんなだったか書いてほしい』とリクエストをもらったので、ちょこっと回想書いてみました。

カカの転機ですね。でもびみょーに父さんのほうが目立ってるような＾＾；

もうちょっとチビカカ書きたかったなー。まぁまたいずれ書きます♪

## カカの天下３０２「鳴るか転ぶか、募る楽しみ」

「「カンパーイ！」」

コツン、と合わせたのはジョッキグラスではなくお猪口。そう、今は冬。熱燗がおいしい季節なのだ！　くい、っとあおると……んー、腹にしみる！

どうも、ちょっとおっさんくさいトメです。

「トメって日本酒もいけるんだな」

「おう。姉が結構好きでなぁ」

「そういやこの間の飲み会のときも飲んでたぜ。ビール飲んだ後はこれだーって」

今日の飲み相手はテンだけだ。先日と違って姉とかの付属品はない。

「姐さんって強いよな。何種類の酒を飲んでも潰れねぇし。オレはウコン飲んでもせいぜい二種類が限度だわ」

「僕も似たようなもんだよ。というわけで今日は熱燗オンリーで」

お酒を飲まない人に一応説明しよう。人は『ビール飲んで次に日本酒』や『ワイン飲んで次に焼酎』というように、別の種類のお酒を一度に飲むと一気に酔いやすくなるのだ。これをチャンポンという。初めてお酒を飲んだりするときにハメをはずす人も多いけど、

なるべく一種類のお酒だけを飲むようにしたほうが安全だぞ。

「お待たせしましたー」

「お、きたきた。胃袋おでん盛り合わせ」

ずいぶんとデンジャラスな品名だが、店員が持ってきたのは至って普通のおでんだ。べつに出し汁が胃液っぽかったり胃袋が山盛りになっているわけでもない。

「どのあたりが胃袋なのか、ひじょーに気になる」

「この『病院』で品名気にしたらキリねーぞ。うまいからなんでもいいじゃねぇか。はふはふ……くぁーっ、おでんと日本酒。いいねぇ！　冬の定番！」

僕よりおっさんくさいな、テンのやつ。

「冬の定番といえば……テンも参加するんだよな。クリスマスの鍋パーティ」

「おう。恋人いないから変人と過ごすわ」

その変人のなかに僕が入ってないことを切に願う。

「鍋の他に何かするんだっけか？　オレ詳しい話あんま聞いてねぇんだけど」

「えーっと、まずプレゼント交換会」

「あん？　そんなのあるのか。早く言えよな」

「だって今日カカがいきなり言い出したことだもんよ。明日学校でなんか言ってくるんじゃないかな」

プレゼント交換会――各自でクリスマスプレゼントを持ち寄り、くじ引きで誰が誰のプレゼントをもらうか決める、というものだ。わりとクリスマス会の定番である。

「んー……なぁ。教師ってさ、生徒とか保護者にプレゼントとかやってもいいもんなのかね？」

「意外なとこで真面目だな、おまえ」

「バレなきゃいっか」

「そして適度に不真面目だな」

「そんなに褒めるな。何も出ねぇぞ」

「褒めてねー」

「あ、でもとっくりは出るぞ。ほれ」

「お、どもども」

お猪口を差し出し、テンに酒を注いでもらう……おっとっと。

「注ぎ返すぞ、お猪口だせ」

「おぅサンキュ。っとと。熱いな、手にかかったじゃねぇか」

「舐めろ」

「おっしゃ」

「どこを舐めようとしてる!?」

どこかはご想像に任せます。いやん。

「プレゼントねぇ。やっぱネタになるようなのがいいよな。トメにリボンつけて『はい、どうぞ』ってのはダメか」

「誰も喜ばんわ、そんなもんもらっても」

「そうは思わねぇが。まぁいいか。で、他には?」

「んー、特にないかな。メインは鍋でわいわいすることだし。あとは仮装くらいじゃないかな」

「あぁ、それがあったか……トメの配役はなんだ?」

そう、カカたちはご丁寧にも誰が何の仮装をするか決めていたのだ。仮装するテーマはサンタやトナカイなどの『クリスマスっぽいもの』

当然、僕にもその仮装する配役が回ってきたのだが……

「……ベル」

「は？」

「ベルだよ、ジングルベル」

テンはポカンとしたあと――多いに爆笑してくれた。

「ぎゃはははははははは！　ベル！　ベルの仮装！　おし任せろ。オレが存分に鳴らしてやる！」

「鳴らすな！　多分痛いから」

「そうだよな！　ベルだもんな！　叩かれたら痛いよな！　叩かれるのが仕事だもんな！　辛い仕事だなぁ給料いくらだ！？」

「うるせーよ多分薄給だよ」

あーもう、テンション上がったなテン……さすが日本酒、まわるのが早い。

「ははは……腹痛い……今叩かれたらやばいな、あぁ叩くなよ。オレはベルじゃねぇぞ、トメと違って」

「やかましい。そういうテンは何の仮装するんだよ」

笑い転げていたテンがピタリと動きを止めた。

今の爆笑が嘘のように暗い顔へと反転、ため息をつきながらテンは言った。

「雪だるま……の、下のほう」

「下のほう？　って、それって単なる」

「そう、でっかい雪玉」

「……とすると、なにか？　テンは当日、白いまん丸の球体になって登場するわけか？」

「……おう」

すました顔したテンが、でっかい大福みたいな格好……

「ぷふー」

「なんだそのバカにしたような笑いは！　ああそうさ所詮オレは雪だるまの下さ！　『雪』が頭だとしたら単なる『だるま』さ！　目に筆いれたきゃ入れろや！」

「めでたいのか？」

「めでたいのはカカの頭だ！」

そら同感。

「ったく……まぁ鍋食わせてもらうからにはやるけどよ」

「転がしてやるよ」

「はん、そっちこそ鳴らしてやるから覚悟しろよ」

「酒なくなったな」

「ねーちゃん！　もう一杯！」

やれやれ、ベルに雪だるま（下）か。楽しみだなぁクリスマス。いやぁホントに。

この後も僕らの話題はもっぱらクリスマスのことだった。もちろん色気のある話なんかなくてカカサエサユカの話ばっかりだったけど……なかなか楽しい飲みだったと言っておく。

ウコン飲んでなかったテンはまた潰れたけどね。

## カカの天下３０２「鳴るか転ぶか、募る楽しみ」（後書き）

トメテン飲み話、なんか久々に書いた気がするなぁ。

あ、念のため。作中の「だるまの目に筆を入れる」っていうの、皆さんわかりますよね？　雪だるまじゃなくて、赤いだるまのほう。目が書かれていないだるまに願掛けして、祈願が成就されたら筆で目を書くっていう……テンポ悪くしたくなくて説明省いたので、ここでいちおう補完（笑

## カカの天下３０３「お風呂はゆっくり入るもの」

さーてお風呂だカカです♪

今日の夕飯の肉巻きポテトおいしかったなぁーなんて思いながら、まずはシャワーをあびあび。

そして次は頭を洗う――あ、ふと思いついた。

たまにはトメ兄のシャンプーとか使ってみようかな、どんな感じになるのか。

勝手にだけどちょっと拝借。適当な量を手の平に出して……うわ真っ黒い。炭とか混じってるシャンプーなのかな。そんなのがこの間デパートに売ってたけど。

炭かぁ。洗顔フォームやボディーソープも炭入りのあったけど、果たして綺麗になるのだろうか。かえって汚れるだけのような気が……これは試さねばなるまい。

適当に伸ばして頭につけ、そのままゴシゴシわっしゃわっしゃ。

わっしゃわっしゃ……むー、なかなか泡立たないなぁ。こういうもんなのかなぁ。

……ダメだ。泡出ない。

ザーッと頭を軽く流して、シャンプーの容器を手に取って説明書きを見てみる。

なになに。メンズヘアシャンプー……おりょ、炭がどうとか全然書いてない。なんだか普通のシャンプーのようだけど、なんでこんなに黒いんだろ……あれ、この説明書きシール、なんか今にもはがれそう――そう思ったとき。

ペリ、とシールはあっさりはがれた。

はがれた部分にはこう書かれてあった。

『牛肉にかけよう！　おいしいバーベキューソース』

「誰が牛肉だ!!」

私はおいしくなってしまった髪を逆立て、お風呂場を飛び出した！

適当に身体をふいて猛ダッシュ！　居間でゴロ寝してるトメ兄を怒鳴りつける。

「トメ兄！　これどういうこと!?」

「服を着ろ！」

むぅ、トメ兄最近そういうのうるさいなぁ。こないだまでは素っ裸で歩いてたんだから別にいいじゃんねぇ。

「バスタオル巻いてあるからいいでしょ。それよりこれ」

「なんだ？」

トメ兄のシャンプーに化けていたソースを突きつける。トメ兄はそれを手に取り、私を――いや、私のベトついた髪の毛を見た。

そしてトメ兄は私の頭をむんずと掴み、鼻を近づけてくんくんと匂いをかいだ。

「なんで味付けされてんだカカ。お兄ちゃんは夕飯終わって腹いっぱいだから食えないぞ」

「誰も食えなんて言ってない！　これはどういうこと!?」

「どういうことって言われても……」

「なんでソースがトメ兄のシャンプーに変装してるの？　それともなに、トメ兄は毎日ソースで頭洗ってんの？　毎日味付けして誰に食べてもらってるのさ!?　バーベキュー会場はどこ!?　おかわりは自由なの!?」

いろいろ問い詰める私の剣幕に、トメ兄はただ困惑するばかり。

「……あ」

と思っていたら、何かを思い出したかのようにポンと手を打った。

「そういやさっき姉が来てたんだった。多分僕が目を離した隙にイタズラしたんだろう。僕をひっかけるつもりだったんだろうけど……なぜかカカがひっかかってしまったと」

「うぅー、たまにはトメ兄のシャンプー使ってみようと思って」

「えらい偶然もあるもんだな。ま、代わりにソースかぶってくれてありがとさん」

「私は牛肉じゃないってのに」

「そうだな、牛にしてはボリューム不足だ」

トメ兄の視線が私の顔から下方――胸へと落ちる。

「……なんでかな。よくわかんないけど妙にムカつく」

「理由はなくてもムカつく、か。こういう悩みって本能で気にしちゃうもんなのかねぇ」

「胸ってどうやったら大きくなるの？」

「そだなー」

トメ兄は少し考えてから立ち上がり、スタスタと移動し始める。

私は後をついていった。

そして――ぴと、と胸に当たる固い感触。

「とりあえず、これくっつけとけば大きく見えるぞ」

まな板だ。

これってあれだよね。

殴っていいんだよね。

「はいやぁっ！！」

「ぐっ、はぁっ！？」

回し蹴り&かかと落とし！　って、あれ。殴らずに蹴っちゃった。

まぁいっか。

「そ、その格好で蹴りはやめ、ろ……てて」

そういえばバスタオル一枚だった。

「湯冷めしちゃう！」

「あ、頭、ちゃんと、洗えよぅ」

痛みに悶えながらも小言は忘れないトメ兄でしたとさ。

さて――冷え始めた身体にシャワーを当て、もう一度髪を洗う。

もちろん今度はいつも使ってる自分のシャンプーだ。

さっさと終わらせて湯船に入るんだ！

私は気合を入れてシャンプーを頭に付けてわっしゃわっしゃとかき回す。

かき回す――あはは！

あはは！

なんだろうねこの匂い！

なんかいつも歯みがきのときに嗅ぐ匂いがするよ！

あははは－ちきしょーお姉のやろおおおおおお！！！

その後、トメ兄が台所の隅に隠されていたシャンプーを見つけ、それを使って三回ほど頭を洗ってなんとか落ち着いた。

ゆっくりと湯船に身体を沈める。肌に染み込んでくる温かさにホッと一息。

「ふぃー……ぱぱんぱぱんぱんぱん♪」

トメ兄がよくお風呂で口ずさんでいるメロディを真似しながら、しばしの間ポケーっとする。

ポケーっとしながら姉への復讐方法を考える。

どうしてくれよう。ソースかけても食えない人だしなぁ。どうするか、どうするか……

「ぱぱんぱぱんぱんぱん♪」

あー、どうするかはやっぱり置いといて、とりあえずはポケーっとしよっと。

お風呂ってそういう時間だしね。

「はーぴぱぴぱ♪」

ポケー。

ポケー……お姉、なんかイヤなことでもあったのかなぁ。

## カカの天下３０３「お風呂はゆっくり入るもの」（後書き）

随分と騒がしいお風呂となってしまいましたね。

でも何かと何かを間違えて使ってしまうというのはよくある話ですよね。寝ぼけて洗顔フォームと歯磨き粉逆に使ったーとか。

……作中のような間違いをする人はさすがにいないと思いますけど＾＾；

「って感じでさー。なんだか知らないけどお姉が！」

「うあーっ、ソースと歯磨き粉で頭を洗ったの！？」

「近寄るなー」

「サエちゃ！　それ本気で凹むから！」

「くちゃーい」

「ザーエーぢゃーん！」

半泣きのカカすけをからかって面白がるサエすけを眺めながら、わたしサユカはぼんやりと昨日の電話を思い出していた。

あれはそう、夜中と言ってもいい時間だったわ。意外な人から電話がかかってきて――延々と愚痴られたのよ。

その意外な人とは何を隠そう、カカすけの姉！

『そりゃクリスマス鍋はあたしも行きたかったけどさー、サカイちゃん放っておくわけにはいかないじゃん？』

「前みたいにサケイさんに化けてくればいいじゃないですか。今回も仮装あるしっ」

『そーうまくもいかないのよ。普通に考えてみな、あんな変装がそうそう何度も通じるわけないっしょ？』

「お姉さんって普通に考えることできたんですねっ」

『あたしを何だと思ってんのさ』

「言わないほうがお互いのためだと思いますっ」

『それもそだね。ともかく！　あのときは会場がサカイちゃんちだったでしょ。だから変装がバレないように照明を薄暗くしたり、マスクずれてないかチェックするために各所に鏡設置したり……いろいろ小細工できたけど』

そんなことしてたんだ。サエすけと喋りたいあまりに勢いでやったのかと思ってたけど、意外に考えてたのね。

『今回はそうはいかないっしょ。会場はうちの居間。なぜかあたしが最近交換させられた電灯も絶好調。しかも八人しかいないとなると喋る回数も観察する機会も増える。つまり、すぐにバレちゃうわけ。だからサカイちゃんは欠席！　それに付き合うからあたしも欠席、ってわけ』

「……それで、なんでそれをわたしにわざわざ言うんですか」

『や、単に愚痴ろーかと』

「なんであなたたちはわたしにばっかり愚痴るんですかっ！？」

『だってー、うちらの事情知ってるのってサユカちゃんだけじゃん』

むぅ……それは、そうだけどぉ。

『なんにせよそんなわけで、あたしらは寂しいクリスマスを過ごすのさ。あーさびし！　サカイちゃんかわいそ！　かわいそすぎてムカつくからさ、鍋パーティなんて思いついた弟妹の家に行ってイタズラしてきちゃったよ。悪気あるもんじゃないから手加減したけど』

「なにやったんですか」

『んっふっふ、明日カカちゃんあたりに聞きなさいな。多分すごい迷惑そうな顔して話してくれるから。可愛いんだろなー、見たいなー』

この後もずーっと愚痴だったので適当なとこで回想を止め、改めてカカすけの顔を見る。

うん、いつだったか給食できゅうりが出たときくらい見事に迷惑そうに顔をしかめている。

本気でイヤだったのねソースと歯磨き粉のシャンプー。いやまぁイイとか言う人がいたらビックリよね。食べられたい願望あるんだか磨かれたい願望あるんだか、どっちなのかは知らないけど。

「それでさ、サユカンはプレゼント何するの？」

「へっ！？」

おっと、回想に沈んでるうちに話題が別のものになってるわっ。

「そ、それを言っちゃったらプレゼント交換会つまらないでしょっ」

「サユカンはやっぱし、あれだよね。自分にリボンつけて」

「あなたに私をプレゼント♪　きゃー」

「きゃー、ですまないわよ！　そんな寒いことしたらっ」

「冬にしても寒すぎるね」

「寒すぎて痛いよサユカちゃん」

「さもわたしの頭がイタいみたいな言い方やめてくれるっ！？」

「でもさ、トメ兄相手にならそれくらいしてもいいでしょ」

「そ、そりゃトメさんなら……でもくじ引きで誰に当たるかわからないんでしょっ」

八人もいるんだし、普通に考えてトメさんに当たる確率のほうが低いじゃないっ！

「でもさ、サユカンの気持ちを知られることなくトメ兄に好きにしてもらえるチャンスだよ？」

トメさんの、好きに？

なにされるの？

……にへ。

「告白もできない腰抜けのサユカちゃんにはぴったりだと思うけどー」

「誰の腰が抜けてるってっ！？」

「少なくとも今の表情は抜けてたよー」

くっ、ちょっと妄想してるとこを見られてしまった！

何を妄想してたかは内緒よっ！

「私はプレゼントどうしようかなー」

「サエすけのプレゼント当たっても喜べないものが出そうな予感がするわ、なぜかしら」

「ほほう、じゃ私は？」

「カカすけのプレゼントは……『なんじゃこりゃ』っていうものが出そうっ」

「なんじゃそりゃ」

「あーこりゃこりゃー」

そんな風に他愛のない話を楽しみながら。

こんな楽しみがなかった去年の自分のクリスマスを思い出して。

ああ、それと比べてみると……なるほど。この輪に入れないとしたら愚痴も言いたくなるかな、なんて、納得してしまう自分がいた。

絶対口には出さないけどねっ。

何かサカイさんとお姉さんにもプレゼント用意しとこうかな。

## カカの天下３０４「グチりたいときもある」（後書き）

びみょーに前回の続きです。
しかしあんなイタズラした姉に対して「姉、なにかあったのか」なんて反応する読者様がいないのはまさに日頃の行いですねぇ＾＾；

## カカの天下３０５「戦だ、がんばれタケダ」

このごろずいぶんと寒くなったが、皆のもの元気にしておるか？　む、俺が誰だって？　ひかえおろう！　ここにいる俺をどなたと心得る。先の副委員長　タケダであるぞ！

好きな時代劇の真似事をしてしまったが、皆のものはわかってくれたであろうか？　さてさて、なぜに俺がこのような時代劇口調なのかというと……戦だからだ！

戦、それは男のロマン。

戦、それは男の生き様。

戦、それは都合よくなんでも格好よく表現できる言葉！

そう、たとえ俺が今からやることが情けなくても――詳しく言うと「カカ君、クリスマスまーぜて♪」なんて拝み倒すようなことであっても、これは紛れもなく戦なのだ！　勝たなければならない戦なのだ！

というわけで目標を確認。いつもの三人組で戯れている様子。

さぁ戦だ！　突撃だ！

最近は名前も覚えてくれたようだし、適当に挨拶してナチュラルな会話で切り込むのだ！

「やぁ！　カカ君聞いてくれよ。実は俺、クリスマスに予定がまったく入ってなくてな！」

「あそ。かわいそうに」

え……あの、それだけ？

い、いやいや！　まだ勝負は始まったばかりだ！

「そ、そうなのだよ！　いやぁ冬も真骨頂だな。日本だけでなく、人の心まで寒くしてしまうのだから！」

「かわいそうに」

あの、ちょっと、本気で寒く……

「な、鍋とか、そういう家庭的で温かいもの！　しばらく食べてないんだよ！」

「かわいそうに」

「かわいそうねっ」

「哀れー」

四面楚歌！？

だ、だから俺は――！！

「同情してほしいわけじゃないのだよ！！」

あ。

言ってしまった！？

しかも天高く吼えてしまった！

か、カカ君の反応は？

天に向かって叫んだままになっている顔を、おそるおそる下げてカカ君の顔を見る。

カカ君はもう同情してはいなかった。

「はん、ざまーみろ」

「蔑んでほしいわけじゃなくてさ！」

ええぃ！　もう直球だ！

「カカ君、俺は鍋が食いたいのだ！」

「うらやましいでしょー」

「自慢してほしいわけじゃなくてさ！」

「あ、そういえばそこの戸棚に鍋あったよ。かじれば？」

「鍋自体を食べたいわけでもなくてさ！」

「もー、なんなのさタケダ。見たらわかるでしょ、今は調理実習中なんだよ？　料理されたいの？」

「そうよそうよっ、違うクラスの人は引っ込んでなさいっ」

「サユカちゃんも違うクラスだけどねー」

そう、今日はカカ君たちのクラスは家庭科の授業で調理実習をしている。

とは言っても今は休憩時間なので、別のクラスの生徒もちょこちょこ覗きにきたりしているのだ。あわよくばちょっと料理をつまもうなどと企みながら……俺は違うが。

「いいか！　俺はな！」

「これカカすけが切った野菜？　ぐちゃぐちゃじゃないのっ」

「トメお兄さんとは大違いだねー」

「いっつもご飯作ってるトメ兄なんかと比べないでよ」

「き、聞いてない……」

うぅ、そんなに楽しそうにトメさんの話を！　いいなぁトメさん。男の嫉妬はみっともないが……む、トメさん？

「そういや母上が、昨日トメさんと綺麗な女性が二人でデートしているのを見たーとか言ってたな」

ぅお？　ポツリと呟いただけなのにカカ君たちの動きがピタリと止まった。

「タケダ、それホント！？」

詰め寄ってくるカカ君の顔のアップに「やっぱかわえぇ」なんて思いつつ、慌てて頷く。

「あ、ああ！　なんでも二十代くらいの、すごく綺麗な女の人と、腕を組みながらショッピングしていたとか――」

「二十代……まさか、サラさん？　うー、見逃したなぁ！　いつのまにデートなんか」

「さ、サユカちゃーん？」

はっ、としてカカ君はサユカ君を見る。サエ君も話しかけているが……サユカ君は俯いたまま反応がない。

いや、反応はある？　なんだかぷるぷる震えているような。

５秒後……サユカ君はどうやら力をためているようだ。

１０秒後……まだためているようだ。

１５秒後……もうちょいのようだ。

２０秒後……プチン。

「ふっざけんじゃないわよおおおおおっ！！　なによサラって

!?　どこの皿よっ！　いますぐ出しなさい割ってやる！！」

なんか爆発したようだぁ！？

「サユカちゃん、人間のどこかを割ったら大抵犯罪だと思うよー？」

と言いつつサエ君が持っているのは包丁ではあるまいか！？

「そうだよサユカン。割っちゃダメ」

切るのならいい、とでも言いたげにカカ君まで包丁を！

「ふ、ふふふ……トメさんの腕を……腕を！」

サユカ君まで包丁持って、しかもそんなことを呟いていたら――腕を切り落とそうとしてるようにしか見えないのだが！？

「とにかく、今日は帰ったら即トメ兄に聞いてみよう！」

「「おー！」」

騎士が誓いを立てるときのように剣――いや包丁をかかげ、頷きあうカカ君たち……あ、チャイムが。

「トメさんが、トメさんがお皿と！」

「腕を組むとかー、なんか私もちょっとムカつくかもー」

むぅ、チャイムも鳴ったし自分の教室に戻らなければ！　し、しかし目的が！

「カカ君！　君らがやるクリスマスパーティ、実は俺も出席したいのだが――」

「勝手にすれば！？」

あ、あれ。なんかあっさり了承されたぞ？

「い、いいのか？」

「いいよそんなの！　今忙しいの、あっちいって！」

「まず、サラさんって誰なのー？」

「そうよそれから聞かせなさいよっ」

「実はね――」

なんだか盛りあがってしまったようで、俺は完全に蚊帳の外だった。

なんだか納得しかねるが……参加許可は出たので戦は勝ちだ！よしとしておこう。

……なぜだろうか、男としてはトメさんに惨敗な気もする。

## カカの天下３０５「戦だ、がんばれタケダ」（後書き）

次回、急展開！　お楽しみに♪

## カカの天下３０６「いろんな真相」

「ただいまー！！」

「おじゃましまーす」

「おじゃましますっ」

いきなりお邪魔してごめんなさいサユカですっ！

学校が終わった途端に爆走してきたわたしとカカすけサエすけは、挨拶もそこそこにカカすけの家に上がりこみました！

「おかえりーといらっしゃーい」

居間から聞こえるトメさんの声。いつもならまだ会社で働いている時間なトメさんだけど、有休を消化するために今日はお休みらしい。即、話を聞きたかったからちょうどよかったわっ！

「トメ兄！　ちょっと聞きたいことが――って、あれ」

勢い込んで入った居間にいたのはトメさんだけじゃなかった。

「おほほ、お邪魔していますわ」

たしか、コタツ記念日のときにいたオホホおばさん！

「何してるんですかー？」

「ん、ああ。オホホおばさんが見逃したドラマをたまたま僕がビデオに撮ってたからさ、二人して観てたんだよ」

本人を目の前にして「オホホおばさん」なんて呼んじゃっていいのかしら。

「おほほ、わたくし録画するチャンネル間違えていたのですよ」

……いいみたいね。気にしてないようだし。

「何のドラマ観てたの？　って、ああこれか」

まだ観ていた途中らしく、今でもテレビの中では覚えのある顔が恋愛ドラマを繰り広げていた。

「そう、『初恋は実らない　クリスマススペシャル！　～サンタの初恋の場合～』だよ」

び、微妙に気になるタイトルね。あとで観せてもらおうっ。

「そんなことより！　トメ兄、昨日デートしてたって本当？」

カカの質問にトメさんは目を丸くしたあと、「ありゃー」と照れたように頭をかいた。

「まいったな、内緒のデートだったのに」

「ほ、本当にデートしたの!?」

「う、腕も組んでたっていうのはー」

「うん、あはは。恥ずかしかったんだけど、どうしてもって言うからさー」

そ、そんな……

そんな、そんな、そんなそんな、そんなそんなそんなそんなそんなそんなそんな――

「そんんなんそそなーそそんなんなんそーなんそーなん」

「さ、サユカン落ちついて！」

「サユカちゃんが壊れたー！　心がそーなんしてる！」

「おほほ、うまいこと言いますわね」

わたしの頭はソーナン節で支配された。あははっ、ソーラン節の親戚だよ、楽しいよ、あはは……

「もう！　トメ兄も言葉と行動には気をつけてよ！　腕組んだってなにさ！？」

「な、なんでそんな怒ってるんだよカカ。たしかにおまえに知らせなかったのは悪く思ってるけどさ」

「ほんと大悪人ですよー！　サユカちゃんをこんなにして……そんなにサラさんが可愛かったんですかー？」

「……は？　なんでサラさんの名前が出てくるんだ？」

う？

ソーナン節が鳴り止んだ。

「なんでって、トメ兄。サラさんとデートしたんじゃないの？」

「ああ、その件か。や、急にデートなんてできないからさ、とりあえずクリスマスの鍋パーティーに招待するって形で納得してもらったけど」

……え？

「じゃ、じゃあトメ兄は誰とデートしてたの？」

「母さんだよ」

「「えええええええええ！？」」

驚きの声をあげるわたしとサエすけ。カカすけは「なーんだ」と胸を撫で下ろしてるけど……こっちは「なーんだ」じゃすまないわっ！

「ついにトメさんのお母さんが登場なんですねっ」

「そ、それでトメお兄さんのお母さんはー？　校長はどこにいるんですかー？」

問い詰めるわたしたちの言葉にまたもや眉をひそめるトメさん。

「校長、ってなんのことだ？」

「とぼけてもムダですよー！　トメお兄さんの、そしてカカちゃんのお母さんは――貴桜小学校の校長先生でしょー！　違いますか？」

自信満々に言い放ったサエすけ。

しかし――

「おほほ、違いますわよ」

愉快そうな笑い声。なんであなたが否定するのよっ！

「校長はわたくしですもの」

って、へ？

はい？

「「はいいいいいいいいいいいいいいいいいい！？」」

こ、この人が校長？

「うん、実はそうなんだよ」

隠してごめんね、と笑うカカすけ。

「たまたまノリで呼び込んだ近所のおばさんが校長先生だなんて、夢にも思わなかったけどね」

「おほほ。あのときカカちゃんの前で教員免許を落としたりしなければ、バレることもなかったのですが」

「や、でもそのおかげで勤労感謝の手紙をお母さんにすぐ届けてもらえたんだよ」

「おほほ、ユイナさん――あなたのお母さんとは仲良くさせていただいますからね。もともと一緒になる空港でお茶する予定でしたし、お安い御用でしてよ」

な、なんだかいろんな話が出てきて混乱してきたわっ。

えーとっ、えーとっ、つまり、ああそうだ！

「じゃあ、お母さんはっ？」

「そーそー、じゃあトメお兄さんやカカちゃんのお母さんって誰なんですかー！？」

「んー……ま、いっか。二人になら教えても。その人だよ」

え？　まさか後ろに来てるとかっ！？

誰もいない。

周囲を見渡しても新しい人影など見当たらない。

トメさんの指先が示すのは……

校長先生、ではなく。

……テレビ？

「その女優さん、うちらの母親」

皆様ご一緒に。さんっ、はいっ！

「「えええええええええええええええええええええええ！！！」」

謎はすべて解けた。

カカすけやトメさんがお母さんのことを公に言えないその理由。

二人が欠かさず『初恋は実らない』というドラマを見続け、ビデオにまで撮っていたその理由。

それは彼らのお母さんが――実年齢４２歳にして２０代の美貌を持ち、歳に見合う演技力で『初恋は実らない』を筆頭に数々のドラマで役をこなしきる驚異の女優、笠桐結乃（芸名）だったからなのだ！！

そういえばタケダが言ってたっけ。『２０代くらいの女性と』って。それにトメさんが『お母さんとデートしてた』って答えたんだから、それで気づくべきだった。

――なんてね。

わかるわけ、ないわよおおおおおおおおおおおおおおおぉっ！！！

## カカの天下３０６「いろんな真相」（後書き）

こんな真相、いかがですか笑

# カカの天下３０７「クリスマスイヴ・パニック！　前編」

「そろそろ商店街の中は見終わったよね」

「うんー、私は買いたいもの決めたよー」

「わたしは迷ってるわっ」

こんにちは、カカです。

今日はクリスマスイヴです。そのせいで街はアツアツうはうはカップルで溢れて活気に満ちていますが、私たちにとってはあまり関係がありません。

そう、重要なのは明日。クリスマス当日。

今日の夜にサンタさんがくれるプレゼントも大事だけど、今の私にとってはサエちゃんやサユカンたちと一緒にするプレゼント交換のほうが楽しみなのです！

でも何をプレゼントにするかはまだ決まってません。それはサエちゃんやサユカンも同じだったようなので、今日は三人でプレゼントの物色をするために商店街を歩きまくったのでした。あーでもない、こーでもない、と議論しながら歩くのはとても楽しかった。

そしてあらかた見終わったところで一時解散する。いままで三人でしていたのは『プレゼントの物色』だけだ。まだ誰も何も買っていない。

だって『誰のプレゼントが何なのか』というのは交換会までの秘密なのだから。

「いい？　ちゃんと私とか他の人に見られないように買うんだよ。もし何か買おうとしてる人を見つけたら、すぐに目を背けること」

「わかってるよー。私たちだって明日のお楽しみにしたいもん。ねーサユカちゃん」

「そうよ、わざわざ楽しみ減らすようなことしないわっ」

「よろしい。ではかいさーん！」

私の号令のもとに三人は散らばっていく。

さて、プレゼント候補は三つあるけど、その中でサエちゃんともサユカンとも方向が重ならないのは……あそこか。

頭のなかで店の目星をつけた私は、道を歩くカップルたちの隙間を縫うように移動していく。

……ほんと、カップル多いなぁ。

べたべたくっついてまー。これなら寒くないだろね。おーおー恥ずかしげもなくいちゃいちゃ声あげてる人もいるよ。

「いいじゃん、寒いんだし」

「で、でもぉ、恥ずかしいですし」

「みんな腕組んでるしさ、僕らが組んだって誰も見ないよ」

おーおー、組んじゃってくださいよ。どうせ誰も見たくないよ、知らない人らのイチャイチャなんて――知らない人？

今の声、なんか聞き覚えがあるような。

立ち止まってきょろきょろと周囲をうかがってみる。はて、今の声はどこから――って！？

「……ん」

き、キスしてる。

建物の影に隠れて、キスしてる！

しかも、そのキスしてる二人は――

「な、これで腕を組むくらい恥ずかしくないだろ」

「あの、でも、その……」

声を聞いて確信する。

強引にキスしたその男は……トメ兄。相手は、サラさん……！

「まぁ、そう言う僕も今現在、かなり恥ずかしいんだけどな。でもその、ほら。僕ら、恋人同士だし」

「……はい。では、お言葉に甘えて」

仲良く腕を組んで歩き出す二人。

ああ、なるほど！

恋人かぁ。

だからそんなにくっついてるんだ……

恥ずかしいけどくっついて……

べたべたくっついて……

くっつきすぎでしょ！！　恋人かおまえら！？

なぜか知らないけどムカつく！！　タックルしてやる！　と息巻いた私は、二人が曲がった角へと猛ダッシュ！　したん、だけど。

あれ、いない？

いない！！

集合場所で座り込んで、改めて考えてみる。

はて、私はもしかしてモノスゴイ現場を見てしまったのではなかろうか。いきなりキスなんて見たせいで頭の中が固まっちゃったけど。

トメ兄が、キス。相手はサラさん……恋人、どうし。

ありえないことじゃない。トメ兄は大人だし。でも、前にトメ兄は「急にデートなんてできない」とか言ってたよね。あれ嘘だったのかな？　実はもう何度も会ってデートしてたとか？　でもそうだとしたらサユカンが――

「……カカすけっ」

「あ、サユカン！　実は」

あれ、胸ぐら掴まれたぁあぁあ!?

「聞いてよっ!!　トメさんが！　トメさんがぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあ!!」

「そんなに揺らふなあぁあぁあぁあ!!」

どうやらサユカンも見てしまったらしい！　トメ兄とサラさんのラブラブ現場を！　でもそれは置いといてこのブラブラだれか止めて！　頭がブンブン快楽飛行！　このままだとここが殺人現場になっちゃう！　もちろん被害者は私だ！　笑えない！　でもだんだん気持ちよくなって笑えてくるよあははは――

やがて合流したサエちゃんに救われなかったら危ないところだった。

「トメさんトメさんトメさん……うぅうぅ」

「ま、まあまあちょっと落ち着いて」

「おかしいよぅ、おかしいわよぅ、こんなのぉ」

「そうだよー、奪い返せばいいだけなんだしー」

「うばうもん、うばうもん、ころすもん」

「「それはやりすぎ」」

なんとかブラブラから開放された私は、サエちゃんと二人して錯乱するサユカンをなだめ、情報を整理することになった。

「私もトメお兄さんが女の人といるとこ見たよー」

「どんな感じだった?」

「なんかくっついて腰振ってたー」

「踊ってたの?」

「たぶんー」

よくわかんないけど仲良くしてたことには間違いなさそうだ。

「でもおかしいね」

こんな都合よく三人ともトメ兄を見かけるなんて。しかも見かけた時間と場所を聞くと、三人とも似たような時間に見かけたことがわかった。でも……場所がおかしい。三人ともかなり離れたところにいたのに……そして三人ともすぐにトメ兄たちを見失ってる。

「トメ兄が、増えた？」

「一匹見つけたら三十匹いるって言うしねー」

「熱湯とか洗剤が効くんだよね」

あれ、これトメ兄の話だっけ？　違う、いつのまにか黒い虫『G』の話になってる。

「増えるトメ兄の話に戻そう」

「増えるわかめみたいだねー」

「たくさんのトメさん……そんな、囲まれたりしたら、そんな、そんな……にゃへへ」

「さ、サユカンどんな想像してんだろ」

「んー、わかんないけど、多分そういう妄想に逃げて現実を見ないようにしてるんじゃないかなー」

サユカンもトメ兄とサラさんがちゅっちゅしてるのを見たらしい。サユカンはサラさんの顔を知らないけど、その女性の服装などを聞く限りは私が見たサラさんに間違いない。

「……増えたかどうかはおいといて、トメ兄がサラさんとラブラブしてるのは確実と思っていいのかな。あの声もあの顔もたしかにトメ兄だったし」

「だと思うよー。ほら、あんなにラブラブしてる」

サエちゃんの指差す先には仲良く腕を組んでるトメ兄とサラさん。

ああほんとだ、間違いないみたい。さっきと同じ服装だし……って、え？

「トメ兄……だ」

「トメお兄さんー……」

「トメさんっ」

その、仲睦まじい二人を見て。

ブチリ、と。

三つほど何かがキレる音がした。

## カカの天下３０７「クリスマスイヴ・パニック！　前編」（後書き）

ちょっと早いですが一足先にクリスマスイヴのお話です。
あまりパニックになりませんように笑
後半へ続く

## カカの天下３０８「クリスマスイヴ・パニック！　後編」

ひょこ、ひょこ、ひょこ。

壁から飛び出て縦に並んだ顔は三つ。ども、サエちゃんサユカンの二人と一緒にこっそりと尾行しているカカです！　誰を尾行しているか？　それはもちろん腕なんか組んで歩いてるトメ兄とサラさん！！

「どうしてくれようか」

「どうしてやろーねー」

「コロス」

「「だからそれはやりすぎ」」

サエちゃんと二人でサユカンにツッコむが、放っている怒りのオーラは三人ともおそろいだ。私がなんで怒ってるかは聞かないで。

「確認するけど、さっきカカすけが見たのは確かにトメさんだった？」

「うん、顔は距離があったから微妙かもだけど……私がトメ兄の声を聞き間違えるはずがない」

伊達に物心ついたときから一緒にいるわけじゃないのだ。

「つまりー、やっぱりあの二人はアレなんだねー」

「アレって？」

「言わせないでーカカちゃん」

さ、サエちゃんも静かに怒ってる。なんか意外だ。

「とにかく邪魔あるのみよっ！　どうしよ、突撃するっ！？」

サユカンが怒ってるのは予想通り。私はどうかって？　聞かないでっての。

「突撃するのは最後にして、トメ兄に気づかれないようにイロイロと邪魔しよう！」

「わかったわっ」

「じゃあ早速いくよー。すいませんそこの警官さん！」

サエちゃんは通りすがりの警官を引きとめ、道端に落ちているそれを指差して言った。

「それ、あの二人がしていきましたー」

それは紛れもなく犬のフンだった。

「男の人がふんばってー、女の人は応援してましたー」

「なんだと！？　こんなところで用をたしたのか！　タイホだ！」

うお信じた！

あーあー、怒り狂った警官はトメ兄とサラさんへ向かって突撃しちゃった。

「ざまーみろ」

サエちゃん、本気でムカついてるのね……

あ、警官がトメ兄たちに謝ってる。誤解が解けたのかな。

おお、こっちにズカズカ戻ってきた！

「どういうことだ！　あの二人はそんな覚えはないと言ってるぞ！」

「私が指差したのは違う二人ですよー。もう行っちゃいました。残念ですー」

「なんだとぉ！？」

うまい……さすがお腹真っ黒なだけはある。

「さ、次は何するー？」

警官を適当に追い払ったサエちゃんが言うと、今度はサユカンがキラリと目を光らせた。

「わたしが、やるわ」

おお、できるのか比較的常識人のサユカン！

「ちょっとそこの文房具屋に寄るわねっ」

「うん、わかった。早くしてねー！」

――サユカンの作戦はこうだ。

文房具屋さんで買ったのは紙と筆ペン。その紙に筆ペンで文字を書いて、先回りしてトメ兄とサラさんが歩くだろう道に置く。以上！

それだけか、と思ったそこの諸君。考えてもみてくれ。

カップルで二人で歩いていて、その通る道には何枚もの紙が捨ててある。そこに書いてある文字が『破局』『別れてくれないか』『もう君に飽きた』『壊れていく愛』などと達筆に描かれたものだったとしたら、どうだろう。

精神的にダメージを負いはしないだろうか？

歩く道に『社内恋愛』『不倫発覚』『左遷』とかいう妙にリアルな文字が延々と並んでいる光景だよ？

きっと負うだろう。

「くすん、くすん……もう言葉が思いつかないっ、いいやもぅ嫌な言葉ならなんでも……くすん、『すね毛』『わき毛』『鼻毛』と……くすん」

恐ろしい道ができてゆく。

勉強になった。恋する女ほど敵に回して恐ろしいものはない。

呪いの道を歩いた末にトメ兄たちが辿り着いたのは、なんと私の家だった。トメ兄め、うちに女を連れ込む気だったのか！

ゆるさん。トメ兄にはまだ早い！

「カカすけ、がんばっ」

「いよいよ真打登場だねー」

「まかせて！」

すでに私らは家の中でスタンバイオーケー！

さぁ……トメ兄たちが帰ってきた！

「……ただいまー」

「……お、おじゃまします」

呪いの道を通ったせいか顔色の悪い二人。ていうかそろそろ腕はなせ！

「おかえり！！」

「お、おう。どした、なんか不機嫌じゃ――」

「トメ兄それなにー！？」
私はズカズカ歩み寄り、しゃがみ込んで、いきなりトメ兄の靴下を脱がした！
「うあぁ！？」
バランスを崩したトメ兄はそのまま後ろへ転んで頭をごっつんこ。へん、ざまみろ。
「と、トメさん大丈夫ですか！？」
「いてて……なんなんだよカカ」
「そっちこそ！　これはなに！」
私はたった今脱がした靴下を突きつけた。そこには赤いナニカの跡がついている！
「なにって……ケチャップか。赤いし」
「口紅でしょ！」
ケチャップだけどね。トメ兄が倒れている隙につけたのだ。
「こんなとこに口紅つけるなんて、どんなプレイしてたの！？」
「プレイて。や、あのな。それどう見てもケチャップだぞ」
「じゃあ食べて確かめてみてよ！」

「むごあああああぁぁ！？」

脱ぎたてほやほやの靴下をトメ兄の口へと無理やり突っ込む！
トメ兄はもがもが言いながらも租借した。ていうか、させた。

「なにさキスなんかして、抱き合ったりして！　腰振って踊ったりして！！　ほらほらおいしい！？　おいしいって言え！　おかわりって言えー！！」

「もがぐがが」

壊れたラジオみたいに呻くトメ兄。ほらほらもっともがけ――う？

靴下を味わう呻き声の他に、別の声が混じって聞こえていることに私は気づいた。

これは――笑い声？

その声はだんだんと大きくなって……やがて玄関にその姿を現した。

「ふはははは！　なかなか面白いことになってるな！」

「ふふふふふ……靴下おいしい？」

こ、この二人は！

トメ兄とサラさんとまったく同じ格好に同じ顔、同じ声！

「トメさんが増えたっ！？」

「ほんとだー、サラさんも」

その驚きの状況に、隠れていたサエちゃんもサユカンも思わず飛び出していた。

「ぷはぁ！」

あ、トメ兄の口に入れてた靴下とれた。

「そういうことか……なんか変だと思ったら、何してくれるんだよ父さん母さん！」

……え？

ぽかんと口を開けた私とサエちゃんサユカンサラさんを面白そうに見渡し、サラさんのニセモノはペロンと顔を――いや、ドラマとかアニメでよくある変装マスクを取った。

「はーい、わたしの正体はママなのでした！　ふふ、カカ君とそのお友達諸君。騙しちゃってごめんね♪」

お母さん……！

「笠桐結乃……さん！」

「ほ、ほんものだー！」

「え、え、ええ！？　ほ、本物の結乃さん！？」

私と違って芸能人を前にして驚くサエちゃんサユカンサラさん。
でも見慣れてる私にとってはそれはどうでもいい！

「お母さん！　それにお父さんも……どういうことなの、説明して！」

「説明か、それは簡単だ。本日カカとお友達が最初に見かけ、ラブラブちゅっちゅした後に見失ったトメとサラさんは――全て俺と母さんの変装だ」

「そんな！　だってあの声はたしかにトメ兄だったし、サラさんだって――」

「忍者をなめるな」

「女優をなめるな♪」

……言い返せねー。

「なんちゅーことしてんだあんたら！」

「いやー。若返ったぞ」

「やん♪　パパ君たら」

「そんなことは聞いてねー！」

人権とかを侵害されまくったトメ兄はキレ気味だ。

「んー、でも、私たちがイヤガラセしてたのは本物のトメ兄とサラ

さんなんだよね」

「あれはおまえらの仕業か！？」

やべ、口が滑った。

「うむ。俺らが演じてカカたちをたきつけた後、その近くの場所でたまたま出会ったトメとサラさん。しかし突然折れるヒール！　サラさんは靴を貸してくれるというトメの腕にしがみつきながらここまで来ただけのこと。ちゅっちゅどころかイヤガラセにあいながら、な」

「トメ君とサラ君をうまいタイミングでうまい場所に引き会わせたのはパパ君だけどね。忍者ってそういうの得意みたい」

「隠密活動専門の職だからな。ちなみにヒールを折ったのも俺の手裏剣だ。ああ、弁償はするから案ずるな」

こ、この忍者は……せっかくトメ兄とサラさんとのデートはお預けになってたのに、無理やりさせるなんて！

「ふふ、今日と明日は完全にお休みとれたから帰ってこようと思ってたんだけどね、トメ君が調子に乗ってるってパパ君が言うから……ちょっとお灸をすえようと思って」

「……父さん、あんたが元凶か」

「ふん、モテるやつは地獄に落ちろ。それが息子だろうとも」

「あんたなぁ！　素顔も見せずに偉そうに！」

シュバ！

「あ、消えた！　……あのクソ親父、まだカカに顔見せれないのか」

む？　私に顔向けできないの？　なにやったんだろお父さん。

「まあまあ、トメ君。これくらいのことは慣れてるでしょ？」

「……頷くしかない僕の人生っていったい」

「ママだってたまには娘と遊びたかったのよー」

だからって基本的には普通な思考の持ち主のお母さんがこんなことするなんて……意外。

でも、まぁいいやそんなこと。

「お母さん！　私を騙したんだよね！」

「楽しかったよ♪」

「感想なんて聞いてない！　罰として今日は私とずっと一緒にいなさい！」

「ふふ、はいはい！　あ、お友達君は初めましてだね。カカの母親ですー」

「は、はいっ！」

「よ、よろしくー」

おお、お母さんの芸能人スマイルのオーラに二人ともたじたじだ。

「あと、サラ君？　ごめんなさいね、こんなことして。気を悪くされなかったかな？」

「あ、い、いえ！　私ファンですし、なんだか光栄でサインが極まってほしいです！」

なんだか言いたいことがこんがらがるほど舞い上がってるなサラさん。

「光栄極まってサインがほしい、と言いたいのだな。くく、サラさんが母さんのファンだというのは調査済み、サインでもやれば許してくれると思っていたが、まさに計画通り！」

天井から再登場して高笑いするお父さんに、お母さんはにこーっと微笑んだ。

「パパ君、ひっこんでて」

「……はい」

お母さんはお姉と違ってバケモノでも乱暴でもないし、お父さんのように忍者というわけでもない。

でもなぜかうちでは最強だった。

「さ、みんな。せっかくだからお茶しましょう！　パパ君から話は

聞いててね、みんなとお話したくて仕方なかったの！」

おいでおいでーと気さくに手を振る天下の女優結乃、本名ユイナさんの笑顔に、眩しそうに目をほそめるサエちゃんサユカンサラさん。

緊張しなくてもいいのに、中身はちょっとお茶目なだけの普通の人だし。

でも、最高のお母さんだけどね！

私は今日あったゴタゴタなど忘れて、大好きなお母さんの胸に向かって突進した。

明日のクリスマスだけが特別だと思ってたけど。

クリスマスイヴだって捨てたもんじゃないね！

## カカの天下３０８「クリスマスイヴ・パニック！　後編」（後書き）

少しありましたが、パニック終了です笑
いかがだったでしょうか？　母さんの正体や校長の正体よりも読みやすい展開だったとおもいます＾＾
あとはクリスマスのお話を書くことで、私からのクリスマスプレゼントはおしまいです♪
どうぞごゆるりとお楽しみください。多分、次も長いです笑

## カカの天下３０９「クリスマス鍋」

メリークリスマス！　トメです。

今日は楽しいクリスマス。待ちに待った鍋パーティの日なのです。というわけで、ただいまパーティの準備中。

「トメ君、お野菜の用意終わったよー」

「ありがと母さん、じゃ冷蔵庫いれといて。でも悪いね、せっかくの休みなのに手伝わせて」

母さんは「何言ってるのよもぅ♪」とテレビでは見せない、ふにゃっとした笑顔になった。

「わたしはダラダラしにきたんじゃないの。ママをしにきたのだよ？　昨日はカカ君をかまってあげたから、今日はトメ君をかまう日なの。だから遠慮しないの」

「昨日はある意味さんざんかまっていただけましたが」

少し気恥ずかしくて、皮肉を込めて言ってみる。

「僕の格好で抱き合ったりキスしたり……しかも腰振ってたってなにさ。踊ってただけみたいだけどさ、聞いたら勘違いしそうなことすんなよな。教育にも悪いし」

「あ、それはママじゃないよ。カッ君が『あたしにもなんかやらせろ』って言うから一回だけ演じてもらったの」

あの姉はどこまでバカなんだ。

「まあまあ、昨日のことはごめん！　その代わり、今日はいっぱい良い意味でかまってあげるから♪」

「……そですか」

「ふふ、よしよし」

母さんはニコニコしながら僕の頭を撫でる。どうにも恥ずかしいのだけど拒むことができないのは僕がマザコンというわけではなく、『母さんには敵わない』という法則が笠原家の人間に染み付いているからである。

「トメ兄！　コタツ並べたよー！」

「おう、ご苦労さん」

「他には何しますかー？」

「なんでもしますよっ！」

「んー、じゃ飾りつけでもするか？」

はーい！　と元気よく返事をするカカサエサユカの指には、小さなカエルの細工が施されたリングが光っている。三人ともお揃いだ。

昨夜のうちに僕と母さんが『サンタさんからのプレゼント』として送ったリングである。ちなみに正式名称はデンジャーケロリング。

先日母さんと二人で商店街を回った末、ふざけた名前のわりには可愛らしい細工だったのでこれを選んだわけだが……

カカの部屋に飾りつけ道具を取りに行った三人を見送り、母さんに声をかける。

「そういや母さん、結局どうやってサエちゃんとサユカちゃんをうちに泊める話に持ってったんだ？」

昨夜はサエちゃんもサユカちゃんもうちに泊まった。それは僕らが買ったお揃いリングをそれぞれの枕元の靴下へ仕込むためだったんだけど……せっかくのクリスマスイヴ。家族だって娘と一緒に過ごしたいだろうに。

「んー？　ママはちょっと電話しただけよ。『お子さんはわたしの娘とクリスマスイヴを過ごしたいみたいです。悔しかったら「お友達よりも家族と居たい！」って言われるような素敵な関係を築いてくださいね♪』って」

「脅迫なんだか応援なんだかわからない電話だな」

「善意溢れる電話でしょ、ふふ。とにかく準備進めよ？」

「……はいはい」

そんなこんなであらかたパーティーの準備は終わった。準備と言っても鍋の用意と部屋の飾りつけだけで、それほど時間はかからなかった。

だから夕方までは余裕があり、みんなでダラダラと過ごした。「ママをしにきた」と言う母さんも結局一緒にダラダラしてたけど、娘たちと遊ぶ姿は紛れもなく「母親をしている」と言えたので、無粋にツッコむのはやめておいた。

そして――ついにパーティーの開始時刻が近づいてきた。

「おう、きたぞー」

「お、テン。いらっしゃい」

「ぶはは！　ベルだベル！」

「……うっさい」

すでに着替えた僕の仮装姿を見て吹き出すテン。

仮装と言ってもベルの形をした帽子……いや、仮面とか覆面の類だな、これは。ともかく僕の顔だけが『ベル』になっている状態なわけで。

とっても滑稽なわけで。

「ジングルベールジングルベールすっずっ鳴ぁらすー！」

カラァァァン！

「鳴らすなあああ！」

どういう原理なのか、ちゃんと叩けば鈴の音が出るこの覆面。税込み２９８０円です。

「おー、鳴る鳴る」

カランカランカラン。

「っていいかげん頭叩くのやめろテン！　さっさとおまえも仮装しろ！」

「う……や、やっぱするのか。用意はしてきたが」

「ほら、居間を見てみろ。雪だるまの上の部分がお待ちかねだぞ」

僕に促されて居間を覗くテン。するとそこには……

「あはははははは」

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロ、と激しく転がりまくっている白い球体と。

「ふふふふふふふー」

ペタンペタンペタンペタン、と微妙に転がりにくそうながらも白い球体のマネをする、絨毯を丸めたような物体があった。

「なんじゃこら」

「あ、テンカ先生だ！」

転がってた球体が器用にもひょこっと起き上がる。そして球体についているバケツ帽子の部分から、カカの顔が現れた。

もう説明する必要もないと思うが、これはカカの仮装。雪だるまの上、つまりは顔の部分だ。

バケツ帽子をかぶった雪だるまの顔。その中にカカの身体がすっぽりと収まっている。手足の出し入れが自由らしく、球体の中に引っ込めれば何とも転がりやすい形になるのだ。上下セットで商店街で売っていたらしく、下の部分はすでにテンに渡し済みだそうだ。

「テンカ先生、こんにちはー」

そしてカカと違って不器用に転がっていた物体は、なにを隠そうサエちゃんの仮装、靴下だ。

ぶっちゃけどう見ても絨毯か毛布を身体に巻きつけているだけのようにしか見えない。これはサエちゃんの手作りらしく、やはり手足の出し入れが可能なんだそうだ。器用な。

「んしょ。んしょー……起きれない」

しかしすんごく動きづらそうだった。自力で起き上がれない亀状態だ。なんか可愛いなオイ。

「笑える光景のはずだが……オレもこいつらの仲間入りするんだ、と思ったら笑えねぇ」

「心配すんな。僕が笑ってやる、だからはよ着替えろ。カカの部屋を着替えに使っていいぞ、そっちだ」

「お、おう……あ」

「あらあら、先生君ですね」

「チキン！？」

テンが驚いたとおり、僕のベル仮面と同じような形のチキン仮面が現れる。

そう、クリスマスといえばチキンです。そんなおいしそうな仮装をしているのはうちの母親です。

「カカ君とトメ君とカッ君がお世話になってるようで！」

「は、はぁ。いえ」

「あ、お着替えするんですよね。邪魔してごめんなさい、ごゆっくり～♪」

鼻歌まじりに去っていく我らが母さんの姿を、テンは呆然と見つめていた。

「なぁ、トメ。いまのチキンさ」

「チキンの説明はあとでしてやるから、さっさと着替えてこい」

やれやれ、うちの母親を見た人っていちいち色んなことに驚くから説明が大変なんだよな。有名人だし仕方ないけど。はぁ、ただのチキンの説明なら楽なのに。

「そういえばサユカちゃんって、着替えまだ終わってないのか？」

「ふふふー、まだお着替え中ですよー」

「ふひひ、恥ずかしいんだよ、きっと！」

「きっとテンカ先生とどっちが先にお披露目するか、もめますねー」

やたらと楽しそうな雪だるまと靴下。うーん、サユカちゃんってサンタの格好だよな。なんでそんな恥ずかしいんだ？

疑問に思いながらもカカとサエちゃんを転がして遊んでいると、やがて廊下のほうから押し合い圧し合いする声が聞こえてきた。

「テンカ先生が先に出てくださいよっ」

「冗談じゃねぇ！　てめぇこそ先に着替えてたんだから先に出るべきだろうが！」

「先に生きるって書いて『先生』でしょっ！　だったら先に生き様も死に様見せてくださいっ」

「死んでたまるか！　おまえこそ恥じ様見せてやれ！」

「そんなことしたら、わたしこそ恥じ死にますよっ！！」

おー、ほんとだ。なんかもめてる。

「ちっ、仕方ねぇな、わかったよ。先に出て笑いをとって会場を温

めといてやるよ」

なんかの前座する芸人かおまえは。

とにかく話はまとまったようで、間も無くして廊下の向こうからソイツが現れた。

テンだ。雪だるまの下部分。カカの仮装とセットなだけあって似ている、が――でかい。

馬鹿でかい白い球体。そのやや上部分にめりこんでいるテンの顔。

「笑いたきゃ笑え」

「ぶはははははははははははははは！！」

「め、めりこんでる！　丸い雪玉にしかめっ面がめりこんでる！！くははは！」

「あはははは！　転がったらそれだけで雪崩になりそー！」

「よーし転がすか！」

「いえーいトメ兄いけー！」

「や、やめろこら！　うおおあおあ」

この雪だるまの下部分も手足の出し入れが可能のようだが、なにせでかいので腕も足も半分くらいしか出せない。もちろんそんな状態で自由に身動きできるわけもなく……

「うあああああ！」

ゴロゴロゴローっと転がしやすいのなんのって！

「「「あはははは！」」」

「覚えてろよてめぇら！！」

「「「了解！！」」」

「忘れろてめぇら！」

どっちやねん。

「先生、合体するよー！」

「おお、カカがテンの上にのっかった」

上から読むとカカとテンカだな。はて、なんだか妙に聞き覚えのあるフレーズのような気がする。

「雪だるま完成ですねー」

こんな感じでしばらくテンで遊んだ。

そしていよいよサユカちゃんの登場だ。廊下の向こうで出ようかどうしようかモジモジと迷ってるのがわかる。

「サユカーン、まだ？」

「その格好じゃ寒いでしょー。ふふー」

「う、うるさいわねっ」

「サユカ……さっさと出ろ、そして屈辱を味わえ」

「で、出るわよっ！　出ればいいんでしょ！」

半ばやけくそに叫びながら、サユカちゃんがついに登場！　仮装はサンタ……って。あれ？

「う、うぅぅ」

顔を真っ赤にしながら登場したサユカちゃん。その格好は、赤い布地に白いモフモフで縁取りされた、サンタの衣装と一目でわかる服装なのだが……なんか、布が、少なくないか？

「サユカンかわいい！！」

「ふっふっふー、どうですかーみなさん！　私がプロデュースした、肩出しへそ出しミニスカサンタはー！！」

「えうぅぅっ」

そうなのだ。サユカちゃんはたしかにサンタの格好をしているのだが……赤い布地があるのはサンタ帽子と胸部分とミニスカとミニブーツ（屋内用）だけ。可愛いといえばすごく可愛いが、なんだか赤い水着を改造したような代物で……

「どうよ、トメ兄」

「どうですか、トメお兄さん」

えーっと。

「サユカちゃん、寒くないか？」

「……トメ。てめぇ空気読みやがれ」

「トメ兄こそ寒いよ？」

「女心がわからないクズですかー？」

う、ううぅ。だってさぁ。こんな格好に正直に感想言うのも、なんかさぁ！

あ、でもなんかサユカちゃんが泣きそうな顔してる！　うぅ……そうだよな。一番恥ずかしいのサユカちゃんだよな……

「う、うん。可愛いよサユカちゃん！　すごく似合ってる」

「ほ、本当ですかっ」

「お、おう」

「本当に本当ですかっ！？　ど、どんな風に似合ってますか」

「肩がエロい」

「へそがエロい」

「ふとももがまぶしー」

「おまえら黙れ！！」

僕じゃないぞ！　テンとカカとサエちゃんの感想だからな、これは！

「たのもー！！」

おお、誰かきた！　ナイスなタイミングだ。これ幸いと僕はその気恥ずかしい場から抜け出した。

誤魔化し笑いをしながら玄関に向かうと、そこにはコート姿の男の子。

「おや、タケダ君」

「トメさん！　メリークリスマス！　今宵はお呼びしていただいてまことに――」

「ああ、そういやカカが言ってたな。『勢いで呼んだ。今は反省している』って」

「反省してるのか！？」

いやまぁ僕は別にいいんだけどね。

「ま、ピンチを救ってくれたしな。感謝の意を込めて、それなりに

歓迎はしてやろう」

「あ、ありがとうございますお兄さん！」

「出てけ」

「あああ嘘ですトメさん！！」

まったく。うちのカカはそうそうやらんぞ。

ぶちぶち言いながらもタケダ君を居間に連れてくと、なんと彼はいきなり鼻血を出してしまった。おそるべし悩殺サンタスーツ。お子様には刺激が強かったか。

「あ、あの。こんばんはー」

やがてサラさんも顔を出す。サラさんは他のメンバーの仮装を見て。

「……っ！　あ……っく……」

「サラさんサラさん、そんなものすごい頑張って笑いをこらえなくても」

「で、でも……ぅ……し、失礼、ですし……」

や、そんなしゃがみ込んでバンバン床叩きつつ必死で笑わないようにされたら逆に失礼だと思うんだけど。窒息死とかやめてよ？

ともあれ、これでメンバーが全員そろったわけだ。

しかし鍋を始める前に問題が浮上した。

「なに、仮装！？　聞いてないぞ」

鼻ティッシュを詰めたまま文句を言うタケダ君。カカが言い忘れていたらしい。

「あの、役が足りないから他の役とかぶっても良いと言われたんですけど……結局何をどうすればいいのかわからなくて」

申し訳なさそうに言うサラさん。とりあえず笑いの嵐は去ったらしい。でも分断された雪だるま姉妹を極力見ないようにしている。

それはともかく、仮装しないと始まらないのが今回のルール。どうするべきか。

「仕方ないよ、ここにあるもので仮装してもらおう」

「そうは言うがなカカ。ここには仮装できそうなもんなんか――」

僕が言い終わる前に、カカは市販の飾りつけセットについていたパーティ用の帽子をタケダ君にかぶせた。

そしてテーブルの上に用意してあったフォークを二本、いきなり帽子にぶっ刺した。

「これ忘れてた。トナカイね」

「「「おお、なるほど！」」」

僕も含め、思わず感心する一同。

「あ、あの……なにやら頭皮が熱いのだが」

貫通しすぎたか。

「サラさんはこれね」

言いながらカカがサラさんの頭に置いたのは、落ちないようにひもが付けられた――皿。

「クリスマスといえば、料理。料理といえば、皿。サラさんといえば、皿。てわけで皿の仮装ね」

「あ、頭に皿を乗せただけで仮装というのでしょうか……」

カッパの仮装と言えなくもないが。

「ないものはないんだし、これで我慢しなさい」

「は、はい！　わかりました、立派に皿として生きていきます！」

割れそうな生き方だな。

「それじゃあ問題も解決したようだし、鍋をはじめるか？」

「待ってくださいトメお兄さん。その前にプレゼント交換会ですよー」

「そっか、まずはそれよねっ」

「おぅ、持ってきてやったぞ感謝しろ」

む、忘れてた。そうだな、宴が進んでめちゃくちゃになる前にやっとくか。

「ふふ、じゃあみんな、このくじ引いてね♪」

おお母さん。いつのまにそんなの作ってたんだ。

ひもで出来たくじを皆が引き、一斉にそのひも先に書かれた数字を見る。同じ数字をひいた人同士がプレゼント交換をするという形だ。

僕と同じ数字だったのは――

「おー、サユカちゃんか……って、あれ」

返事がない、ただのゆでダコのようだ。

「どしたのサユカちゃん」

「神様ありがとう！」

うぁビックリした。

「よかったねサユカン」

「よかったねーサユカちゃん」

「ありがとーっ、ありがとーっ」

選挙でもしてる人みたいに周りに手を振って応えるサユカちゃん。
よくわかんないけど……喜んでくれてるのかな。

「あ、あの。サユカちゃん？　とりあえずこれ僕からのプレゼント」

「はいっ、一生大切にします！　墓まで持っていきますっ！」

「や、それはもったいないぞ。使ったほうがいい」

なにせ来年上映される映画『初恋は実らない　宴』のイベントチケットだ。二枚しかないが、かなりのプレミアもののはず。

「さて、サユカちゃんは何をくれるのかな？」

「わたしです！！」

はぃ？

「わ、わた、わたしがプレゼントですっ！　どうぞ好きにしてくださいっ！！」

ぇ？　は？　や？　その？　あの？　えと？

「うあ本当にやったよ」

「サユカちゃん、だいたーん」

「……相手がトメじゃなかったらどうするつもりだったんだ、サユカのやつ」

カカとサエちゃんとテンの声が耳を素通りする。

僕の頭は混乱中だ。はたして、どうツッコめばいいのか。

や、そもそもツッコんでいいのだろうか。

一つ言えることは、ブラボゥなサンタの格好をしているサユカちゃんに「わたしを好きにして」などと言われる光景は犯罪以外のナニモノでもないということだ。

さ、サユカちゃんをもらう……好きに……うーと、えーと。あ！

「じゃ、じゃあ！　そのイベント一緒に行こうか！？　好きにしていいんだよね！　いやぁ、それ実は僕も行きたかったんだよ！」

「は、はいっ！　一生お供します！」

さ、サユカちゃん……いくら自分をプレゼントしたからってそこまでしなくても……まぁともかく一緒に行くってことで話はまとまったからいいや。

さて、他の人はどうなったかな？

カカは――おお、タケダ君と当たったようだ。

「まさかカカ君と交換できるとは思わなかったぞ！」

「私もあんたが相手とは思わなかったよ……はぁ」

「そんなあからさまにため息をつかないでくれ！　心配めさるなカカ君。やせても枯れてもこのタケダ――」

「枯れ果てればいいのに」

「冷たすぎ！　いや、でもこのプレゼントを見てくれれば喜んでくれるはず。このタケダ、こんなこともあろうかと君の喜びそうなのを奮発して用意したのだ！」

「んー……なにこれ」

「高級薬セットだ！　どうだ、嬉しいだろう」

「タケダのプレゼントってさ、役には立つけどつまんないよね。こないだは診察券だったし」

「むむぅ、そういうカカ君はどんなプレゼントなのだ!?」

「イチゴのブローチ」

「……ほわっつ？」

「ほとんどが女の子の参加者だし、トメ兄に当たっても似合いそうだからこれでいいと思ったんだけど。ま、せっかくあげるんだし、ちゃんとつけてよね」

「こ、この可愛らしいのを、つけるのか、俺が」

「つまらなくないでしょ？」

「おもしろくもないがな」

「そんな。見てるほうにとっちゃ愉快だよ。やーいやーい少女趣味」

「泣くぞ！！」

「泣いて枯れ果てるの？」

「男に枯れるとか言うな！　男はな、男はな……枯れるといろいろ終わりなんだよ！」

「なんの話さ」

なんだかんだで嬉しそうじゃんか、タケダ。

さて、他は……お。サエちゃんはテンと当たったみたいだ。

「ほい、『病院』のサービス券」

「なになにー？　えーと『心臓か肺を一つサービスします』って書いてあるー。最近の病院は太っ腹ですねー」

腹が太いからって心臓や肺がたくさんあるわけでもないだろうに。

「いやいや、居酒屋の『病院』だぞ。つまり、それにちなんだメニューをサービスしてくれるってこった。あ、ビールの無料券もあるぞ」

「半分は子どもが参加する交換会になんてもの持ってくるんですかー」

「大丈夫だ、多分おまえなら飲める。なんとなくだが」

「捕まったら先生のせいにしますからねー」

「お、おいホントに使うのか？」

案外素直に受け取ったサエちゃんに、逆に慌てるテン。サエちゃんはそんなテンには構わず、なぜか僕のところへ歩いてきた。

「トメお兄さん、これ換金してくださーい」

なるほど。さすがサエちゃん。ちゃっかりしてる。

適当な現金とサービス券を交換したあと、ふとサエちゃんのプレゼントがなんなのか見てないことに気づいてテンに聞いてみたが――なぜか教えてくれなかった。はて？

不可解ではあるが、教えてくれないものは仕方ない。さて、必然的に残りはうちの母さんとサラさんなわけだが。

「ふふ、お皿とチキンの組み合わせなんてピッタリね」

確かに二人の仮装はいい組み合わせだ。食べないけど。

「はい、これがわたしのプレゼントだよ」

「ま、マフラー！　しかも手編みですか！？」

「これなら誰にでも使えると思って♪　あ、サインとかしちゃったほうがいいかな？」

「ぜ、ぜひ！！　ありがとうございますぅ！　宝物にします！！」

おー、母さんのファンっていう話は本当みたいだな。なみだ目で喜んでるよ。

「じゃあサラ君は何をくれるのかな？」

「私です！」

どっかで聞いたセリフが聞こえる。

「私をあげます！　どうかお好きに使ってください！」

おーおー顔真っ赤にして。本当にファンなんだなぁ。しかしこないだデート誘われた手前、僕がフラれたみたいな形なんだが。まさか母さんに奪われるとは思わなかった。

「んー、ちょっと困ったな。じゃあ、そうだね。今度帰ってくるときに、お茶に付き合ってもらおうかな♪」

「はぃ、はい！！　喜んでお供します！」

僕より確実なデートの約束しおったな。

や、別にさびしいとか思ってないからね。ホントよ？　僕だってデートの約束したしね！　サユカちゃんと！

……なんだかしゃべればしゃべるほど情けないこと言いそうだからこのへんにしとこう。ふーんだ、どうせ恋愛だのデートだのは慣れてませんよーだ。

「「「いただきます」」」

プレゼント交換もひと段落し、ようやくお鍋パーティの開催だ。乾杯の音頭や挨拶などない。いただきます、の一言だけで充分なのだ。だってみんなお腹すいてたもん。

用意したコタツは二つ。

一つはカカサエサユカにタケダ君を加えたお子様席に豆乳鍋。

もう一つは僕、サラさん、テン、母さんの大人席でキムチ鍋だ。

「白菜いれるぞ」

「おう、定番だな。オレ好きなんだよなー、鍋の白菜」

「キムチ鍋ですし、ピッタリですよね」

「いけいけトメ君」

わいわいと白菜を入れる僕らのテーブルを見て、カカたちが騒ぐ。

「白菜か……よし、こっちは対抗して黒いものいれるよ！」

「黒いもの……ねっ」

「黒、か」

「なんで私を見るのかなー？」

入れるなよ、おい。

「じゃあオレも青ネギ入れるぜ！」

「このネギね、ママがんばって値切ったのよ」

「母さん、まだダジャレがマイブームなの？」

「結乃さん素敵です！」

そんな素敵な青ネギを睨むカカチームは……

「こっちも対抗して赤いものをー」

「赤ねっ、お肉かしら」

「ふむ、人の血は赤いよな」

「……なんで私を見るのさ」

「ま、まさか！　カカ君の血は赤くないのか？」

「人の血が流れてないのー？」

「ありうるわっ」

「ありえんわっ」

だから入れるなよ？　闇鍋にも程があるぞ。

「ではお次はママさんが、くず野菜をいれましょー」

これでこっちの野菜は大体オッケーだな。そろそろ肉も入れよう。

さて一方カカチームは。

「くず、か」

「クズねー」

「ごみクズかー」

「なぜ俺を見る！？」

さすがに哀れだ。

「ほれほれ、くだらないことばっか言ってないで具を入れろ」

見るに見かねた僕はカカチームの鍋に適当に野菜を入れてやる。

「むー、でもサユカンだけ何も言われてないの不公平だよ！　ピンクは？　ピンクの反対はなに！？」

「んー、別に反対じゃなくても、同じ色で対抗っていうことでもー」

「トメ兄！　なんかそっちにエロい具を入れて！」

「ちょっとまてっ！　それとわたしが繋がるのがものすんごく納得いかないんだけどっ！！　まるでわたしがエロいみたいじゃない！」

「うん」

「これ以上なく素直に頷いてんじゃないわよっ！！」

「タケダも鼻血ブーな格好しといて何をいまさら」

「あ、う、ううぅ」

急にミニスカを押さえて縮こまるサユカちゃん。忘れてたのね、肩出しへそ出しミニスカサンタの格好。

しかし改めて各自の格好を見るとわりとユニークである。僕や母さん、タケダ君やサラさんは頭や顔の形がスペシャルになっているだけなのだが……

カカとテンの格好がかなり面白い。雪だるまコンビの白い球体は柔らかいらしく、器用にも座り込んでこたつに入ることができている。しかしでっかい雪玉がコタツに入って鍋をつついている姿はとてつもなくシュールである。溶けないのかねぇ。

あとサエちゃんは靴下だし。これ以上ないほどの靴下っぷりだし。

「んー、おいし。さすがトメ君♪」

「煮物の類は母さんに仕込まれたからね」

「うんうん、成長してくれてママは嬉しいよ。でもお肉もう少しいれよっか」

「そだな。テン、肉皿とってくれ」

「おう、ほれ。肉でできたサラさんだ」

「わたしを食べるんですか！？」

や、だからなんで人鍋ムードなのさあんたら。

「お、お手柔らかに」

あとなんで赤くなってんのさサラさん。

「煮込めば柔らかくなるぜぃ」

「やめんか！　ちなみに野菜皿取ってくれって言ったらどうすんだ、テン」

「ふっふっふ、サラさんの野菜はどのあたりかなー」

「あ、そんなところ、や、あ、ああっ」

どこまさぐってんだそこのオヤジ。

「ふふ、テン君、ストップ。悪ふざけもいい加減にしないとダメだよ？　ここには子供もいるんだから」

「う、は、はい……おいトメ、なんでオレもこの人の子供みたいになってんだ？」

母さんの母パワーは偉大だなぁ。もむもむ……ん？

「なんだ。この、やわっこい口ざわりのは」

口を動かしながら首を傾げていると、なぜか隣のコタツのカカが答えた。

「私が隙を見て投げ入れたマシュマロじゃない？」

「この悪ガキ！！」

「もふもふ……もー、カカちゃんは静かに食べられないんだからー」

「これがトメさんの味……これがトメさんの味……えへへ」

「このように静かに呟きながら食べてるサユカ君もどうかと思うが……むぐむぐ、確かにうまいな」

僕はどたばたとカカを追いかけて、それの光景を見て笑いながら鍋をつつくみんな。

……うん。

とても上出来なクリスマスじゃないかな？

鍋を食べ終わったらケーキを食べて、くだらない話に花咲かそう。

このメンバーなら、きっと話が尽きることはない。

うん、いい聖夜だ。

何が聖なる夜なのか、とか。クリスマスの意味、とか。

そんな難しいことは知らないけれど。

僕らは楽しく笑ってる。きっと、それでいいんだよね。

今日がいい日でありますように。

明日も楽しくありますように。

サンタさん——いるなら僕は、そんな時間を望みます。

メリー・クリスマス。

## カカの天下３０９「クリスマス鍋」（後書き）

はい、長いです。過去最高です（笑
でも作者的には満足いくクリスマスプレゼントを読者の皆様に送れたと思うのですが……いかがでしたでしょうか？
今日がいい日でありますように。
遅れましたが――メリークリスマス！！

## カカの天下３１０「クリスマス鍋、にありつけなかった人ら」

おほほ、皆様お元気かしら？　わたくし、貴桜小学校の校長をやっておりますオホホおばさんと申します。

あら、本名ですか？　おほほ、まぁいいではありませんか。わたくし、この呼び方気に入っておりますの。

さてさて、この場をお借りしたのは他でもないのですが……おほほ、ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんがわたくし、狩りが趣味ですの。それでですね、昨日のクリスマスに狩った獲物を皆様にご紹介したくて参上したんですの。

クリスマスに何を狩ったかと申しますと、ずばり恋人たちですの！

世にいるモテない人たちの叫びを代弁するため、幸せな夜を過ごす輩に向かって遠距離からライフル狙撃をどっきゅーん♪

おほほ、冗談ですわ。本気になさったかしら？

本当はですね、恋人を狩ってたんじゃないのです。変人を狩ってましたの。

もちろんライフルなんか撃ちませんわ。ただ観察してきただけですの。おほほ、わたくしの趣味は狩りですけど、本当は狩るまでの過程――つまり狩り始めるまでの獲物の観察のほうが好きですのよ。

というわけで、クリスマスに見つけて観察した変人さんたちの様子を、少しだけご紹介しますね。

あ、わたくしがコタツをお貸ししたカカちゃんの家の様子は別にいいですわよね。一番変ですけど……おほほ、ユイナさんも随分と素晴らしい休暇を過ごせたようですし、また元気にお仕事に励むことができるでしょう。よきかなよきかな。

さて、ではまずはこの方たちから。

「シングルベールシングルベール独りで鈴鳴らす～♪」

「きょーはーむなしいクリスマス～♪」

居酒屋でおおらかに歌っている女性お二方と、なにやら下僕のように縮こまっていた男性の方の、三人グループですわ。

「あ、あのお姉さま。それにサカイさん、もう少し音量を下げられては……？」

「なにさっ！　シューのくせにあたしに意見するわけ！？」

「どうせー、こんな日にこんな居酒屋に来てる人なんてー、みーんな独りでベル鳴らすような人たちだからー、いーじゃなーいでーすかー」

「そうさ！　ならみんなでベル鳴らしたほうが寂しくなくていいじゃん！」

「というわけでー、みなさんご一緒にー。さん、はいー」

『シングルベールシングルベール皆で鈴鳴らす～♪　だーけど独り

さクリスマス～♪』

おほほ、酔ってヤケになっているのはお二方だけではなかったようで、みんなで涙を流しながら大合唱ですわ。

「ふんっ、まったくさ。クリスマス？　なにそれ、食べれるの？って感じ」

「ふふふー、食べてるんじゃないですか、皆さん今頃はー、自分の恋人をー」

「むむむっ！　じゃ、あたしは変人を食べてやろうじゃないの！くくく……うりうり」

「やーんー、カツコちゃんたらー自分が一番変人のくせにー」

「か、ぷ」

「あーんー」

お店はいつの間にかシーンとなってましたわ。皆様、好きですわねぇ。

「あ、あのお姉さま！　なんでしたら僕も食べてください！」

「よしきた。院長店長。メス」

「はいよ」

ぱし、とすかさず女性の手に渡るのは……あらあら本物の手術用

のメスかしら。

「え、なに、本当に食べるんすか！？　調理準備！？」

「カツコちゃん、わたしタンが食べたいなー」

「一撃死！？」

おほほ、わたくしも好きですわ、タン。たしか舌の部分ですわよね。この後男性さんの舌がどうなったのか……それは内緒にしておきましょう。大丈夫です。聖なる夜ですし、舌の一本くらい失くしたってサンタさんがくれますわよ。

お次は――そうそう、色気よりも商売っ気で頑張ってるお店がありましたわ。

「聞いたかバイト。セイジ食堂ではクリスマス定食というのをやっているそうだな」

「やってましたねー」

「ふん、クリスマスの定食？　そのような和洋折衷にも程があるネーミングのメニューなど売れないだろうに。高級クリスマスディナーが大成功しているうちの店とは大違いだろうな」

「そうでもないみたいですよ。その定食は８００円でご飯とみそ汁にチキンとケーキ。さらになんとおもちゃがついてくるんですよ。普通にお得じゃないですか」

「やけに詳しいな」

「はい。おいしかったですよ」

「食べてきたのか！？」

「ええ、さっき」

「おまえな、相手は敵の店だぞ！？」

「だっておもちゃが付くんですもん」

「……それ目当てか？」

「男はロマンを求める生き物です。お子様ランチが食べられない歳でも、堂々とおもちゃ付きのランチが食べられる……あぁ、なんて幸せなのでしょうか！　旗のついたご飯におもちゃ！　これぞロマン！　ありがとうサンタさん！」

ねじを巻くと歩き始めるカメのおもちゃを天にかざして涙を流すバイトさんは、本当に感激しているようでしたわ。

「サンタといっても俺の兄貴だぞ」

「ぴったりじゃないですか。おっさんだし」

「じゃあ弟の俺もサンタか？」

「ですね。なんかください」

「拳でいいか」

「きゃー、怖いカメ。僕泣いちゃうカメ」

「泣け」

あら、店長さんの拳がカメのおもちゃを。

「うあああああああああ！！　僕の、僕のカメチョリンゲルナンベリーナ・ブラブラ・アッハンウッフン１５６３世がああああ！！」

「な、名前長いな」

歴史も深いですわね。

でも正直に申しまして、男の方のロマンってわかりませんわ。本気で泣いてますし……

しかし涙のシーンも束の間、この後お店がすぐに忙しくなりましたので、お二方ともすぐにお仕事に戻られましたわ。

印象的だったのは――バイトさんはそれからずっと涙を流していたので、泣きながら「お独りですか？」と接客しては「あんちゃんもかー！　ううぅ」と答えられていましたわ。とてもお客さんと仲良くされていたみたいです。

さてさて、他は……えーと、そうそう。わたくしの小学校のアヤさんという方は教会で聖歌隊と一緒に歌っていましたわ。おほほ、とても感心なことです。

そういえば西革君の家が夫婦ケンカ中とのことなので、どうなっ

たのか覗きにいこうかと思ったのですが……なぜかお宅が見つかりませんでしたわ。なぜでしょう、西革、西革……名前、覚え間違えたのかしら。あとカカちゃんが言ってたイチョウさんっていう方のお宅も見つかりませんでしたわ。これも名前違うのかしら。

まぁまぁ見つからないものは仕方ありませんわーということで、わたくしはさらにクリスマスの狩りを続け――

「校長、そろそろお仕事に戻られたほうが」

そうそう！　こちらの教頭先生はですね、奥さんに無理やりサンタの格好を――

「校長！！　私のイメージを破壊しないでいただきたい！」

あらあらごめんなさいね。デストロイはあなたの専売特許ですものね。おほほ。でも――サンタの格好を、させたのかしら？　させられたのかしら？　おほほほ！

「……こーちょー」

はいはい、おほほ！　いま行きますわ。

――あなたのクリスマスはどうだったかしら？　もしかしたらわたくしに覗かれていたかも……おほほ。

それでは、お喋りなおばさんにお付き合いいただきありがとう、ですわ。

失礼いたします♪

## カカの天下３１０「クリスマス鍋、にありつけなかった人ら」（後書き）

えー、内容はタイトルのとおりです。
視点は多分みなさま予想外であろう方でお送りしましたが、おほほ（笑

ちなみに『ジングルベールジングルベール鈴鳴らす～♪」を『シングルベールシングルベール独りで鈴鳴らす～♪」にしてますが、実は譜面としての長さは一緒で『ひとりですずなら』を１６分音符で歌った、みたいな感じです。
あ、どうでもいい？　そですか（笑

ではでは、これで今度こそクリスマスプレゼントは終了、ということで♪

## カカの天下３１１「前は前、今日は今日」

「あー……づかれだ」

ども、ぐったりしながら帰宅中のトメです。

なぜこんなに疲れているというと、単純に仕事が忙しかったからです。明日は仕事納め。年末年始の休みに入る前に片付けないといけない仕事が山ほどあって、結局四時間も残業してしまいました……まぁクリスマスに有休とったんだからこれくらい仕方ないか。現代のサラリーマン世界ではサービス残業が十時間以上あっても珍しくないし、それに比べれば……でも慣れてないことすると疲れるのは確かだ。

カカには遅れるってメールで連絡したけど……腹空かせてるだろうなー。

たしかクリスマスにやった鍋の材料の余りが冷蔵庫にあったし、それでなんか作るかな。はぁ、面倒だ。でもご飯食べないと元気でないし、カカも成長期だし食べさせないと……母さんはもう仕事行っちゃって居ないし。

クリスマスのときの鍋はおいしかった。あれ、また食べたいな……や、また食べたいのは鍋だけじゃない。おいしかったよりも楽しかった。だから、またクリスマスのときのような楽しい時間を過ごしたい。そうすればきっと元気になるのに。

「……はは、クリスマスから大して日も経ってないのに、こんなこと言ってたら世話ないよな」

――あれで元気になったんなら、こんな仕事くらい屁でもないんじゃないのか？

あぁ、確かにクリスマスは楽しかったし元気になったさ。でも楽しいことは疲れも溜まるし、その後の仕事が、すごくつまらなく思えてしまうんだ。だからこんなにグチっぽくなる。

僕はこんなことを思う自分の情けなさに辟易しながら帰宅した。

「ただいまー」

「ぅあう！　お、おかえりトメ兄！」

僕の声に驚いたような反応が家の奥から聞こえてきた。何をしてたのか知らないが、厄介ごとは勘弁してくれよ。僕は疲れてるんだから……

「待ってろよー、今夕飯作るから」

疲れを見せないように気をつけながら声をかける。しかしドタバタと玄関まで出迎えてくれたカカは、はりきった顔でこんなことを言い放った。

「大丈夫！　ご飯は私が作ったから！」

……ナンデスト。

「ケガはないか？」

「む？」

「どこが燃えた？」

「……私の心がちょっと燃えてる。なにその言い方。私が料理できないと思ってるの？」

「おまえが料理できるのはボケだけだろ」

僕、うまいこと言ったよね。

「ふん、だ。そこまで言うなら居間に来てみなよ」

言われるままに居間へついていくと――そこには確かに夕飯の用意がしてあった。

「おー、これは」

「どう、ちゃんと料理してあるでしょ」

テーブルの上にあったのは、おそらく世界でも指折りの簡単料理だ。

調理方法は極めて単純、お湯を沸かしてそそいで三分待つだけである。

「まぁ、これならたしかに、ちゃんとはしてるな」

とりあえず食べれるし。

「でしょ。おいしいらしいよ、このカップアーメン」

誰に祈り捧げてんだ。

「ちゃんとヤカンにガスをそそいで火にかけたんだよ」

「ちょいとお待ち、そこのチビ料理人！」

それだとガス爆発するだろが！　本当にアーメンする気か！？

「ガスじゃなくて水だろ？　水だよな！？　水って言え！」

「あ、そうそう。水水」

よ、よかった……やっぱり慣れないうちは一人で料理やらせるもんじゃないな。

「でさ、カップにお湯と一緒に鍋の余りもの入れたんだよ。いいアイデアでしょ！」

へぇ。たしかにそれは栄養豊富になるし、いいかもしれない。だが何を入れたかにもよるな。

「なに入れたんだ？」

「タマちゃん」

「なぬ？」

「鍋の余りもの」

たしかに鍋の話から余ってたけどさ！！

「アーメン」

「冥福を祈るな！」

「あとは9分～17分置いとけば完成だよね」

「……長くないか？」

「え、でも9：00～17：00って書いてあったよ」

「それは何かあったときにかける電話の受付時間だ！！」

どれだけ長いこと置いてるんだ！　それにタマちゃんって！？

僕は慌ててカップラーメンの蓋を開けた。

すると、そこには――

「……あれ」

伸びてもいない普通のカップラーメンが、タマゴ入りで出来上がっていた。もちろん姉娘のタマではなく、普通の生卵だ。

「へへー、トメ兄が帰ってきてすぐにお湯入れたんだよ。そして今のおしゃべりで三分ちょうど！」

帰ってきたときドタバタしてたのはそのせいか……しかも待つ時間を感じさせないように変なことを言い出して――

「いい演出でしょ！　どーよ？」

どーよって……なんだよ。

「あれ？　どーよー」

疲れて帰ってきたら、いつも通りカカがバカで。

「どーよ、どーよー。ねー！」

仕方なく相手してたら、結局いつものペースで。

「むー、トメ兄！　どうよどうなのよ！」

「うるさいな。伸びないうちにさっさと食べるぞ」

「あ、ちょっとくらい褒めてくれてもいーじゃん」

そう、こんなやりとりはいつものことなのに――『疲れて帰ってきたらちゃんとご飯ができていた』っていう、ただそれだけのことが妙に嬉しくて、それだけでさっきまでの疲れがいつの間にか消えていて、胸の熱さを隠すのに、少しだけ苦労しちゃったんだ。

「いただきます、アーメン」

「ね、その前にさ、私になんか言うこととかないわけ？」

あるさ。

カカ、気遣ってくれてありがとう。明日も仕事納め、頑張るよ。

……そう素直に言うのは癪だったので。

僕は無言でカカの頭を乱暴に撫でるのだった。

## カカの天下３１２「だって俺、家族だモン」

「んにゃー」

こんにちにゃ、カカですにゃー。

にゃーにゃー言ってるのはにゃ、ネコと一緒にコタツの中で丸くなってるからにゃー。

にゃー……コタツの中ってあったかいにゃー。

にゃー……

「あったかいにゃー」

「オイ」

「にゃ？　にゃに、この野太い声は」

「オイ、聞けやコラ」

はて？　私はコタツの中で丸くなってたはずなのに……いつのまにかコタツに足だけ突っ込んで寝転がっている状態だった。

そして声に誘われるように起き上がってみると、テーブルの上に――

「オイ、俺のマネすんじゃねーよ。こちとら生まれたときからネコやってんだ。勝手にマネされちゃ不愉快なんだヨ！」

なにやら偉そうに前足で私を指差して「なんだＹｏ！」と説教するネコの総理大臣が、テーブルの上に仁王立ちしていた。

「ど、どしたの大臣。なんで喋ってるの。なんで立ってるの」

「なに寝ぼけたこと言ってんだ。総理大臣が喋れなくて立てなかったら日本終わりダゼ？」

や、それはそうだけどネコにそんな「ダゼ☆」とか言われても。

「あぁ、そか。これ夢だね」

なんか頭がふわふわするし、そうに違いない。

「よくわかったな。そうだ、これは夢だゼ。よくあんだろ？　男に抱かれたまま寝たら相手が夢に出るとかヨ」

「抱いてるの私だけど」

「それは仕方ねぇ。だって俺、ネコだモン」

ごもっとも。

「ともかくよ、せっかくネコと喋る機会できたんだから，なんかねーのか。質問とかヨ」

「ネコって何味？」

「知るわけネーダロ！　てめーは人間の味知ってるのかヨ！」

「私の性格は味があるってよく言われるよ？」

「ほほぅ？　じゃあ食ってみようか？　くっくっく……」

「私を食べるの！？」

「だって俺、雑食だモン」

「モン♪」とか可愛く言うわりにキラリと光る鋭利な牙。ここは――いでよ、ネコじゃらし！

「はん！　バカにすんなよテメー。この俺にネコじゃらしなんぞ効くか」

にゃうーん♪　ぱしっ。

「だいたいな、総理大臣にネコじゃらし向けたりしたら捕まるんじゃねぇのカ？　何の罪かは知らねぇが」

にゃにゃうーん♪　ぱしぱしっ。

「そもそも――」

ごろごろにゃーん♪　ぱしっぱしっぱし！

「って、じゃらすな！！」

「だって君、ネコだモン」

「マネすんな！　てめぇ、総理大臣を怒らせたらどうなると思ってんだ！？」

「戦争でも起こすとか？」

「夜中にてめぇの布団に忍び込んでおしっこしてやる」

なんて恐ろしい！！

「人の布団で糞尿たらすなんてこと、総理大臣がしていいと思ってるの！？」

「していいだろ。だって俺、ネコだモン」

ああ言えばこう言う！

「あのなぁ、あまり俺を怒らすなよ。これでも感謝してるんだゼ？　俺が捨てられてたときに拾ってくれたろ」

「う？　拾ったっていうか、拾いかけたというか」

「わかってるさ、ちゃんと拾ってくれる人のところに届けてくれたんだロ？　わざわざダンボールの文字まで書き直してヨ」

……あー、そういえば、そんなことも、あったような。

「たしか……そうそう、そうだ。『おまえが飼え』って書いてあったのに『さもなくば食え』って書き加えたんだった」

「んなこと書きやがったのか！？」

「あれ、知らなかったの」

「文字なんか読めネェよ。だって俺、ネコだもん」

それもごもっとも。

「コノヤロー……拾われたときにおっさんが包丁片手に首傾げてたのはそういうことだったのかー」

迷ってたんだ、セイジ食堂のおっちゃん。

「ふん、まぁ結果オーライだから細かいことは気にしないでおくゼ。だって俺、ネコだモン」

「それ気に入ってるの？」

「まぁな。ああ、この家も結構気に入ってるゼ。だから今後もちょくちょくお邪魔するが、またよろしくナ」

「ん、わかった。じゃあまた喋ろうね」

「喋れるわけねぇダロ。だって俺」

「ネコだモン？」

「そしてこれ、夢だモン」

ずるずるずる。

「ぅーあ？　おはよトメ兄」

「おはようさん」

仕事から帰ってきたのかな。トメ兄に足を掴まれ、仰向けのままコタツの中から引きずり出された私は、重みを感じて自分の胸元を見た。

「総理大臣が寝てる」

「そこ平面だから寝やすいんだろ」

私は失礼な兄めがけて総理大臣を投げつけた。

「ぎにゃ！」

「ぐはぁ！　か、可哀想なことすんなよな！　まったく……おまえいっつもマトモじゃないことばっかりするよな」

「だって私、カカだモン」

私もちょっと気に入った。

「あ、ゴメンね総理大臣。これからもよろしく」

聞いているのかいないのか、投げつけられたにも関わらず何食わ

ぬ顔でコタツに戻る大臣。

やっぱアレはただの夢だったのかなぁ。

まぁそれはそれとして、ホントよろしくね。

夜中に布団の中にこないでよね！！

## カカの天下３１２「だって俺、家族だモン」（後書き）

総理大臣が喋る話です。や、もちろん夢ですが笑
カカが最初に総理大臣に会った時に「ネコの言葉わかる」とかふざけてますが、案外本当に同じようなこと喋ってたのかもしれませんねぇ＾＾；

# カカの天下３１３「サユカの任務、天岩戸編」

……こんにちは、サユカですっ。

「おーい、サユカーン」

「ねーねー、顔見せてよー」

「うるさいわよっ！　帰りなさいよっ！」

わたしは自分の部屋に篭もりながら、扉の向こうの廊下にいるカカすけとサエすけに怒鳴りつけます。

別にケンカしたわけじゃありません。ただ、ただ――

「サユカンの可愛い顔見たいな！」

「クリスマス以降、一回も見てないよー」

「それを思い出させるなあっ！」

……そう、わたしが立て籠もっている理由はただ一つ。

先日のクリスマス鍋パーティをいまだに引きずっているのです――そうよ、なんであんなに恥ずかしい格好であんな大胆なこと言っちゃったのよわたし！　あぁもう思い出すだけで顔が赤くなるわ！

そうよ、きっとイヴにニセモノ夫婦のキスなんか見たせいでおかしくなっちゃったんだわっ！　じゃなかったらあんな……あんな！！

鍋パーティの終わり際に「トメさんとなかなか目が合わないわねー」って言ったら「目のやり場に困ってるんだよ」「さっきの言葉のせいで扱いにも困ってそうだよねー」と返してくれたカカすけサエすけの言葉でようやく目が覚めたのよっ。

わたし、どんだけ全力で好きって叫んでるのよ――って！！

「そりゃもう身体中から叫んでたね」

「あれでわからない人は相当鈍感だと思うよー」

「なんでわたしの心の呟きが聞こえてるのよっ！？」

「心から漏れてるよ。呟き」

「扉ごしにも聞こえるよー」

いやあああああああぁ！！

「なるほど、あれから顔見せないし電話しても出ないからどうしたのかと思ったけど」

「そういうことだったんだー」

「うぅ……そ、そうよ。なんか外出るのも恥ずかしくなっちゃったわよ」

今が冬休みじゃなかったら登校拒否するくらいよっ。

「ふむ、つまり他の人と顔を合わせると――クリスマスのときに大

きく開いていた胸元とか水々しいお腹とかモチモチした太ももとかも見られてる気分になっちゃうんだね？」

「ちょっ、わたしがヘンタイみたいな言い方やめなさいよっ！」

「大丈夫だよーサユカちゃん。たしかに開いてたけど、見えるほど胸はなかったからー」

「そこだけ慰めてんじゃないわよっ！！」

小学生なんだから、なくて当然でしょっ！

「んー、どうしよっかね、サエちゃん」

「そだねー。トメさんがいれば出てくるんだろうけどねー」

「なるへそ。それじゃ――コホン。あーあーあー……よし」

……ん？

「やぁ、僕トメ兄！」

兄とか言ってるしっ。

「あれ？　お母さんに声マネ習ったんだけどな」

クリスマスイヴにわたしらがカカすけの家に泊まったときのことね。カカすけのお母さんに皆で声マネとか演技の仕方とか教えても

らったのよね。難しくて全然できなかったけど。

「ヘタだなぁ、カカ。声マネはこうやるんだよ。僕を見習いな」

……ぇ、トメさん？

「ふふん、僕の声はどうだい？」

「さ、サエちゃんスゴイ！！」

これサエすけ！？　すご、本当にトメさんの声みたい……！

「サユカちゃん」

「な、なによっ」

いくらトメさんの声に似てるからって、そう簡単には――

「僕は君がほしい」

ブッ！！

「さぁ、おいで。君は僕のものになるんだろう？」

「や、やややややめなさいよぉっ！！」

なんか変な気分になるじゃないのっ！

「サ、ユ、カ♪」

「甘い声で言うなっ！　呼び捨てするなぁっ」

「愛してるよサユカ。抱きしめてあげるよサユカ。キスしてあげるよサユカ！　メチャクチャにしてあげるよサユカ！！」

「とっくにいろいろメチャクチャよ！！」

「さぁ、サユカ」

「あん、トメ様ぁ♪」

「カカすけ！？　カカすけでしょ今の！！」

「サユカ……可愛いやつめ」

「トメ様……わたしを好きにして……やん」

「ちょっとおおおおっ！　なにしてるのそこで！　ていうかカカすけ、わたしの声マネは妙にうまくない！？」

「サユカ……今夜、暇かい？　あぁ、でも君はいつも暇だったね。昼休みとか、放課後とか」

「それはあなたに会うためですわ、トメ様ぁ」

「ふっ、そんなこと言っても、トメ、って呼んでくれなきゃキスしてあげないゾ？」

「やん、意地悪な、ト、メ♪」

「よくできました。これはご褒美……」

「いい加減にしなさあああああいっ！！」

ドターン！！　と、耐え切れなくなったわたしはついに自室の扉を開け放った。

その瞬間――

『愛してるよサユカ様ぁ♪』

「混ざってる！？　って、やめれえええええええええええっ！！」

いきなり二人に増えたトメさん（ニセモノ）が抱きついてきて――わたしはメチャクチャにされた。

どうメチャクチャにされたかというと……そうね。

ハートが周囲に乱舞していたとだけ言っておくわっ……！

## カカの天下３１３「サユカの任務、天岩戸編」（後書き）

サユカの任務と言いつつ閉じこもっているのはサユカちゃんという……細かいことはキニシナイ笑

まぁ結局カカたちに強引に連れまわされているうちに一時的な対人恐怖症は治るのでしたとさ。めでたしめでたし。

それにしてもサエちゃんのスキルが増えてますね。さらに危険になったような……

## カカの天下３１４「カカやコンコン」

「ふわぁ……おはよ」

「おはようトメ兄」

おはようございます皆様、休日に感謝しながら惰眠を貪って今起きたとこのトメです。さーて顔洗うか……って、ん？

「なにやってんだ、カカ」

カカは玄関のほうでなにやらゴソゴソしていた。

「雪降らそうと思って」

「はぁ、なんでまた」

「今年はホワイトクリスマスじゃなかったでしょ。だからホワイトお正月になってほしくて」

「正月に雪。なんか幸先悪そうじゃないか？　その時期に雪降るといろいろ不便になること多いだろうし」

「でも真っ白な気持ちで新年をスタートできるよ？」

お、おお！　珍しくマトモなことを！

「それはそうかもしれないな。で、どうやって降らすつもりだ？」

「フレフレ坊主ってあるじゃん」

「ああ、テルテル坊主を逆に吊るして雨降らすやつな」

「それの雪バージョンでユキユキ坊主つくってみました」

玄関のほうを見ると、たしかにそこにはテルテル坊主らしきものがいくつか逆さに吊るされていた。

「普通のとどう違うんだ？」

「凍らせたの」

なるほど……って、溶けてるんですけど。

「なんか水がにじんでインクがぼやけて、雪どころか災厄でも降りそうな顔になってるんだが」

いつぞやのノロノロ坊主を思い出すなぁ。

「あとね、居間に来て見てー」

「まだなんかあるのか……ってナニコレ」

「雪やコンコン、あられやコンコン♪　っていうじゃない？」

「あ、ああ」

「コンコンっていうのがよくわかんないから、適当にコンコンっぽいもの吊るしてみました」

コンコン……あぁ、そういうことか。

居間の壁際に紐で吊るされまくってるのは『ダイコン』やら『レンコン』やらの根野菜だ。何屋だよこの家。

「どう？　朝市で買ってきたの」

なぜそんなに頑張る。

しかも吊るされているのは根野菜シリーズだけではない。リモコンやらコンサートのちらしやら……

「このリコン届けなんかどっから持ってきたんだ？」

「サカイさんち」

なぜ持ってる！

「あとね、『コンパニオン』っていうの吊るしたいんだけど何なのかわかんなくてさ」

「それは吊るすな！！」

サービス料取られすぎる――じゃなくて捕まるから！

「むー、んじゃ他に吊るせるものないかな」

そう言いながら窓の外に身を乗り出し、周囲を見渡すカカ。

「あ、あの二人新婚さんかな。シンコン！　吊るさねば」

「人生の新たな旅立ちに不吉な影を落とすな！」

「あのおっさん『根性』って書いてあるTシャツ着てる！　吊るさねば」

「いい根性してるのはおまえだカカ！」

「あのじいさん頭ツルッツル！　吊るさねば！」

「もう雪関係ないだろが！！」

暴走するカカをなんとか落ち着かせる。まったく寝起き早々騒がしいったらないな……や、僕が寝坊しただけなんだけどさ。

「ゆ～きやコンコン♪　あ、『雪やコンコン』だから、雪と一緒に私の吊るしたコンコンも降ってくるのかな」

想像してみましょう。

ダイコンやレンコンがミサイルのように降り注ぎ、はらはらと離婚届が舞い降りたあとに、コンパニオンと新婚さんとTシャツ着たおっさんとハゲたじいさんが降ってくる様子を。

よーわからんが世界は終わりだと思う。

「そういえばトメ兄ってシスコンだよね」

シスコンも降ってくるのか。宇宙も終わりだな。

……ん？　足が何かに掴まれ――

「吊、る、さ、ね、ば♪」

「うあああああああああああああああ！！」

景色は反転した。

僕の意識は暗転した。

「ぼ……ぼ、くは……シス、コン、じゃ……がくっ」

逆さ吊りって……結構、クる、ね。

## カカの天下３１４「カカやコンコン」（後書き）

どうでもいいけど私の地元は本当にホワイト正月になりそうです^^；さむさむ……

あと、先日あとがきに「仕事忙しくて感想欄の返信が遅れます」と書いたのですが、なにやらそれで感想欄に書くのを遠慮してくださった読者様から「返信しなくてもいいですよー」って感じでいくつかメッセージで感想送っていただきまして……なんというか気遣っていただけて恐縮です。

でもですね、いまは時間がないだけで、感想に返信するのは苦痛でもなんでもないのですよ！？　むしろ感想読むだけで何でも頑張れるのですから！

なのでメッセージくださった方のほかにも遠慮してくださった方がいましたら、どうぞ遠慮なく感想をお書きください笑

私は喜びまくります！

それから。とうとう明日は年末ですね^^

年越しっぽいお話書こうと思ってますので、せっかくですし２３時すぎくらいに更新しようかなーと思います。

そのあたりから読んでもらえたほうが一緒に年越し、みたいな感じになるかなーと笑

ではでは。また明日です！

心配してくださった方、本当にありがとうございました☆

## カカの天下３１５「年越しカカ天そば」

こんにちは、トメです。

もう今年も大晦日ですね。そんなわけでただいま大掃除の真っ最中です。

「カカー、雑巾くれ」

「はい雑菌」

「字が違う！　あーあー汚すなよな！　ほうき！　はやく！」

「はーい」

「待て、どこにいく」

「放棄しに」

「だから字が違うっての」

「むー、面倒だなぁ。だいたいさ、お姉も大掃除するべきじゃないの？　一応この家で飼われてるバケモノなんだからさ」

「姉はちゃんと大掃除してるぞ」

「どこでさ」

「外で年末に現れる不届きな輩を大掃除してんだよ」

「私もそっちがいいー」

「大人になったらな。さ、掃除掃除」

「ぶーぶー」

と、まぁこんな感じでだらだらしつつも、なんとか夕方までには終えることができた。綺麗な仕上がりに満足満足！

一息ついたところでピンポーンと鳴るチャイム。来たかな？

「こんばんはー、よいお年を！」

「こ、こんばんはっ、よいお年をっ」

それ出会いがしらの挨拶としてはどうなのさ。

「サエちゃんサユカン！　いらっしゃーい」

今日二人が我が家へ来たのは、一緒に年越しそばを食べるためだ。ちょっと思うところがあってサユカちゃんを呼びたかったのと、それならサエちゃんも呼ばないわけにはいかないだろう、ということで来てもらった。

「……サユカちゃん」

「は、はいっ」

そう、サユカちゃんに言いたいことがあったのだ。

クリスマス鍋のときに気づいてしまったことを、ちゃんと伝えなければならない。

「今日、来てもらったのは他でもない」

「ぇ、は、はいっ、な、なのでしょうか、じゃなくれ、なんれしょうひゃ！？」

サユカちゃんは顔を真っ赤にして上ずった声で答えた。

「……もしかしてさ、クリスマスのときの格好とか、そのとき言ったことをまだ気にしてる？」

「ぇうっ！？」

図星だな……ふっ、僕はそれなりに鋭い男。

「むふふー、おもしろくなってきたねーカカちゃん」

「うん。サユカンの顔に『げ、気づかれた』ってでっかく書いてあるよ」

「それあんま可愛くないねー」

外野は放っておいて、僕はサユカちゃんをまっすぐ見つめる。

「サユカちゃん、大丈夫、気にすることはないよ。僕は全部わかってるから」

「ぇえぇえぇえぇえ！？」

「サユカちゃん！　今年中に言っておきたかったんだけど……いいかい？　君は僕の妹の友達だけど、他人だ。でもね、僕にとっては大切な人だ」

「……！」

「もう言葉も失ってるよ」

「なんかいろんな方向に揺れてるけどねー」

「あそこだけ地震起こってるね！　震度どんだけかな」

「んー、３０くらい？」

でけぇよ。

じゃなくて、やっぱり外野は放っておいて！

「サユカちゃん……」

「ぁ……！」

「だからね、頼りたいときは頼ってもいいんだよ」

「……ぅ？」

「貧乏って、辛いよね」

「「「は？」」」

いきなり核心をついた僕の言葉に、三人は驚きを隠せないようだった。

「プレゼントを買うお金が、なかったんだろ？　仮装だって……あんな少ない布しか買えないなんて、よっぽどなんだよね」

「……えっ……と」

「今日は僕、豪華な年越しそば作るからね。存分に食べていってくれ。もし食べれなくなったらうちに来るんだよ？　あぁ、もし着るものが足りなくなったら姉のお古とか――」

僕は一通りサユカちゃんに「いざというときは僕を頼れ」と伝えることができた。サユカちゃんも頷いてくれたし……うん、年末最後の仕事が終わってよかった！

「じゃ、僕はそばの用意するからな」

さーて台所台所っと。

「さすがトメ兄……一部分にしか鋭くない男」

「肝心なとこだけ見落として失敗するタイプだねー。というか結構失礼だよねー」

「ふふっ、もぅ♪　トメさんたら鈍いんだからっ」

「あの格好であれだけやってまだ気づかないなんてね……でさ、な

んでサユカンそんなに上機嫌なの？」

「え？　だって、これからはもっと夕飯とか食べにきていいってことでしょっ♪　ふふっ、トメさんのコートのお古ほしい！　とか言ったらくれるかなっ」

「「たくましい……」」

「おーい、そばの天ぷらなんだけど、どれが……って、喋ってたんだ？」

台所から戻ると、なにやらカカとサエちゃんの痛い視線が。

「な、なに？」

「トメさんってマジメですよねー。マジメすぎですよねー。この鈍感」

「や、トメ兄も結局ぼん、きゅっ、ぼーんがいいんだよね」

「なんでそんな話になるのかさっぱりわからんが、別にそういうわけじゃ」

「じゃ、バフン、ブッ、ボーン！　って感じ？」

「なんかすごいオナラみたいな表現やめろよ」

「今年最後のオナラかぁ」

「かぎますー？」

「かがんわ！　ていうか別に誰かオナラしたわけでもなかろうに」

「じゃあ皆でしましょっかっ！」

「「「それもどうかと」」」

そんなやりとりをしつつ、僕はそばの天ぷらのリクエストを聞いてみた。しかし皆そろってエビ天ときた。やっぱ最近の子供はエビ好きだね。一応かき揚げとかも用意してたけど、これは来年使うことにしよう。

「かき揚げも他のものせちゃいなよ」

「む、そか？」

「そうそう、豪華にすると貧乏サユカンが喜ぶよ？」

「そーそー、貧乏だしねー」

「ぅう……言い返すとせっかくのチャンスが」

「おまえらな、そんな言葉でサユカちゃんをいじめるなよ！」

「「トメ（兄）（お兄さん）に言われたくない」」

な、なぜに。

まぁともかく、天ぷらは用意したもの全部のせるということになった。

台所でちょちょいと作業。だしの用意はできてるから早いもんだ。天ぷらのせて、ねぎをたっぷりわかめたっぷり、はい完成！　ついでにとろろものせてやれ！

……なんかすごい豪華なそばになった。

『いただきます』

そして皆で合唱。どうでもいい話をしながらテレビを見つつ、ずるずるとそばをすする。

「おいし！」

「うまー」

「トメさんの味……！」

喜んでもらえてよかった。

「そういえば……僕から呼んどいてなんだけど、いいのかな？　君らの家族さん。クリスマスも年越しもうちでやっちゃって」

「なんかねー、おばさ――お母さんが『年末、私たちと過ごしたい？　カカちゃんたちと過ごしたい？　いいのよ、正直に言って！……わかったわ、私たち来年頑張るからね！』とか言ってたー」

「あ、うちもうちもっ」

母さん……あなたの言葉はご家族の心に深く残ってるみたいです

よ。いいんだか悪いんだか。

「それでね、せっかくこうして来てくれたんだし、今年は三人で年越しを迎えるの！」

「そーそー。次の年になった瞬間にあけましておめでとーって言うんだよね」

「わたし、そんな夜更かししたことないからすごく楽しみなんですっ」

そうかそうか、仲良くていいねぇ。

しかし……カカだってよほどのことがない限りは遅くても２３時にはいつも寝てるし。

２４時まで、持つのかな？

そばも食べ終わり、満腹感にひたりながらダラダラと過ごし……あと１５分くらいで年越しとなったころ。

うちの居間では息も絶え絶えなナマモノが三つほど転がっていた。

「ね……ねみゅい」

「あー、うー」

「ね、寝てないわよっ、寝てないわよ先生！」

なんか三人が限界だ。やっぱ小学生にこの時間はキツイか。

「おーいカカ。もう少しだぞ、起きろ」

「あー、うん、そだね、机と洋服棚を洗わないと」

「そんな大掛かりな掃除は今度でいいから」

「大掃除は年末にやらないと。だから地球も洗っといて」

「あと15分じゃ無理だ。おいカカ、おーい」

……ダメだな。

サエちゃんは、っと。

「あー、うー、ねートメ」

「呼び捨て!?　は、はいっ、なんでしょうかサエちゃん」

「そこに座れー」

「座ってますが」

「じゃー立てー」

「は、はい。立ちましたが」

「なにしてるのーコラー！　座れって言ってるでしょー！」

サエちゃんもうダメだ。

サユカちゃんは……

「サユカちゃん、もうすぐ年越しだよ！」

「ぷー」

「や、あの」

「ぷー」

「それ寝息？」

「ぷー？」

とりあえずダメっぽいことは確かだ。

そんなこんなで起こそうとしてるうちに年越しまであと一分！
つけっぱなしになっているテレビの中でもカウントダウンが始まってしまった！

「おい、三人とも！　あと一分もないぞ！」

「「はーい」」

「って起きたよ！？」

「起きたままじゃこの時間まで持たなそうだったからさ、半分寝て

て温存してたんだよ」

「私もー」

「わたしもっ」

なんて器用なやつらだ。

「ほらほら、あと１０秒よっ」

「わくわくするー」

「あと5秒！」

4！

3！

2！

1！

0――！

「あけまして、おめでとうございます！！」

「あけましておめでとう、今年もよろしグー」

「よろしグー」

「グー」

バタバタバタ、と倒れる三人。ぇ？　あの、もしもーし。

「……やっぱ限界だったか」

しかし際どいながらも一緒に年越しを迎え、川の字になって寝ている三人を見てると……今年もきっといい年になると確信できて、思わず口元が緩んでいた。

「お、雪、か」

窓の外を見上げると、はらはらと舞い落ちる白い粉雪。

ホワイトお正月だっけ？　真っ白な気持ちで新年を、か。

もちろん去年のことを忘れるわけじゃない。新たな気持ちで新年に臨むということだ。

去年と同じように、ではなく、去年よりも、もっと楽しい一年を。

「お、カカ？」

「んにゅ……」

ずるずると身体を引きずりながら、窓の外を見上げる僕の横にカカがやってきた。

「ほら、雪だぞ、雪降ってるぞ！」

「なんかゴミみたい」

「人がせっかく浸ってるのに水さすなよ、気が抜けるなぁ」

でもまぁ、多分。

なんだかんだいって、こんな感じに気が抜けたりする一年になるんだろうな。

「はいはい、明日は初詣いくんだからちゃっちゃと寝るぞ」

「んにゅ……トメにーちゃんも並ぶ」

「はいはい、並んで寝るよ」

おやすみ、そして改めてあけましておめでとう。

今年がいい一年になりますように！！

## カカの天下３１５「年越しカカ天そば」（後書き）

今年はカカたちと、そして読者の皆さんと過ごせたことがとても大きかったです！

小説を書き始めて五年くらいですが、ここまで書くことが楽しかったのは初めてでした。

来年も毎日書き続けることができるのか！？　それはわかりませんが（笑）、肩肘張らず、ほのぼのと頑張っていきたいと思います。

それでは皆様。

まだ年越してない読者さまには『よいお年を』

もう年越した読者さまには『あけましておめでとうございます』

そして全ての読者様に。

２００８年もよろしくお願いします！！

## カカの天下３１６「カカ天式おみくじ」

改めまして、あけましておめでとうございます、トメです！

昨日の年越し騒動も冷めやらぬうちに、今日は朝から初詣とシャレこんでます。もちろんカカサエサユカの保護者として。

姉とかも誘えばよかったんだろうけど、それは無理な話でした。なぜなら姉、サカイさん、テン、シュー君の四人は年末から温泉旅行に行ってしまっているのだから。湯煙殺人事件とか起きないか心配だけど……そういうわけで今日は四人だけでお参りです。

さすがに元旦の午前中、まだまだ神社も混んでますな。雪はもうやんじゃったけど。

「お、巫女さんだよ巫女さん」

「拝もー拝もー」

「それ拝む対象じゃないから！」

「なんまいだーなんまいだーっ」

「それ失礼だから！」

「トメ兄に彼女ができますように」

「それ巫女さんに言ったら勘違いされるだろうが！！」

新年早々こんな感じです。

騒ぎながらも行列に並んでなんとかお参りを終え、やってきました新年の一大イベント！

その名も、おみくじ！！

これをやらないと新年が始まりませんよ！

「私からやる！」

「あっ、カカすけずるい」

「そうだよーカカちゃん。後になるにつれて笑いがとりづらくなるんだからー」

何の話か知らんが、別に誰が最初でもいいじゃんか。

「ほれほれ、カカやりな」

「やた♪」

意気揚々と巫女さんにお金を払い、おみくじを引くカカ。

「しょうきちだ」

「あら、普通ねっ」

「や、普通じゃないよこれ」

「は？　普通じゃないってなんだよ。見せてみ」

『正吉』

誰だよ。

「私も引きましたー、けどこれー」

『忠吉』

だから誰だよ。

「わたしもひきましたっ、けど、きょう……」

『明日がダメでも凶はいいことあるさ』

良いのか悪いのかわかんねーよ。

「それじゃ、僕は……」

『大好き』

どうしろと。

「あの、すいません巫女さん！」

「あ、はい。なんでしょうか？」

「あのですね、このおみくじ――って、サラさん！？」

「あ、本当だ」

「敵っ！」

「サユカちゃん落ち着いてー」

おみくじを渡してくれていた人がサラさんだと、ようやく気づいて僕らは驚く。あまりに巫女さん姿がハマってて今まで気づかなかった。

「なにしてるんですか、こんなとこで」

「えぅ！　そ、その……年末に前の仕事をクビになりまして、転職を」

またかー、しかし年末にクビになるなんて何したんだ一体。

「それはともかく、あけましておめでとうございます。今年もよろしくです」

「あ、ああ。こちらこそあけましておめでとう！」

「おめでとうございますー」

「ねぇねぇサラさん。拝んでいい？　今年はトメ兄に彼女が」

「サラさんにそれを拝むなカカすけっ！！」

「今年はトメお兄さんに――」

「サエすけぇっ！！」

ぎゃーぎゃー騒ぎ始めるお子様どもは放っておいて、僕はサラさんにおみくじのことを聞いてみた。

「あ、それですか。実はですね、この神社の神主のお子さんが大変ユーモア溢れる人でして、おみくじでも笑いがとれないかとそんな書き方を」

「それでいいのか神社の息子」

「そ、そうですね。さっきからお客さんにも結構ツッコミを入れられてますし」

「これツッコミどころか苦情もんだろうに」

「でも皆さん面白いって評判ですよ？」

ほんっと心広いなこの界隈の人ら。

「まぁまぁ、息子さんも神社を継ぐのかまだわからなくて、今はバイトばかりのようですし。どこかのレストランで働いているとか」

まさかヤツか？

「とにかくですね、ちょっと書き方は違ってもおみくじの内容自体はそのままですので。小吉とか中吉とか」

「サユカちゃんの『明日がダメでも凶はいいことあるさ』っていうのは」

「凶だけど頑張って♪　っていう応援です」

さりげに優しいな。

「じゃあ僕のこの『大好き』っていうのは」

「それは大凶です」

「うそぉ！？　だって大好きとか書いてあるんだよ！？　普通に考えてプラスな言葉でしょ！　大吉じゃ――」

「大凶です。それも特に大きい大凶って聞いてます」

「なんでやねん！！」

今年初のなんでやねん！！

「えぅ！？　そ、そんなこと言われても……おみくじにまで『大好き』とか言われる勝ち組は大凶だ、って神主さんから説明あったんですもん」

この世の中はそんな奴らばっかなのか！？

「そか……大凶か……初めてひいたけど」

「が、頑張ってください！」

「ふー、楽しかった！」

「楽しかったー」

「疲れたわっ」

おぅ、騒ぎ終わったかカカども。

「ねね、トメ兄はおみくじなんて出たの？」

そういえば見せてなかったな。

「これだよ」

「ぶっ、『大好き』だって！」

「だ、『大好き』ですってっ！！」

「サユカちゃん、なんでそんなに驚いてるのー？」

「だ、『大好き』！」

「へ、うん。そうなんだよ、でもこれ大凶みたいでさー」

「大好き！」

「へ、いや、だから」

「大好きっ！！」

「そんな繰り返さなくても」

「そ、そうですねっ、あはは……顔見て言えた顔見て言えた、きゃーっ」

「でも意味伝わってないよー？」

「やることに意義があるのよっ」

「にしてもトメ兄も気づかないもんかねぇ」

なにやら三人がボソボソ会議してるけど聞こえない。

「うーん、どうしたのかな、あいつら。サラさんどう思います？」

「え、えっと……なんといいますか、ああこれは大凶になっても仕方ないなぁ、なんて」

なぜにぃ！？

むぅぅぅ、納得はいかんが、引いたおみくじがこれだったのだから仕方ない。

大凶、大凶かぁ……

今年、がんばろ。

## カカの天下３１６「カカ天式おみくじ」（後書き）

改めまして、あけましておめでとうございます！！
やー、リアルのほうはホワイトお正月です笑
真っ白なスタートをきれるよう、皆さんいいお正月を過ごしてくださいね＾＾
ではでは、今年もよろしくお願いします！

## カカの天下３１７「カカ天式晴れ着」

「はぁ……大凶かぁ」

どうも、妙に落ち込んでしまってるトメです。あんまり占いとか迷信とか気にするほうじゃないけど、一年の恒例行事であんなのが出たらさすがにちょっとショックだったりします。

「ほらトメ兄、いつまでも引っ張ってないでなんか食べようよ」

キテレツなおみくじを終え、サラさんと別れた後、僕らはお昼ご飯を食べようと出店をまわっていた。

「そだな……よし、うまいもん食べて元気つけよう！」

「わーい、ごちそうさまですー」

ん？　話が繋がってないような。

「サエちゃん、ごちそうさまですーって？」

「もちろん奢ってくれるんですよねー？」

へ、や、そんなことは一言も……

「これくらいのことでケチケチするような小さい人が、大凶の運命を跳ね返せるとでもー？」

「おぉ、たしかに。小さい今日が大きい凶に勝てるわけないもんね」

ええぃ、もっともなことを！

「まーいいけどさ、それくらい」

「やたー♪」

「何食べよっかサエちゃん！」

うーん、出費が増えるのは大凶のせいか？

「大丈夫です、トメさん！　わたしだって凶だったんですから！」

「でも励まされてたじゃん」

「うっ、で、でもトメさんだって『大好き』って」

「どこぞの小僧が書いたであろう『大好き』という言葉になんのご利益があると？」

「うっ……と、トメさん珍しくスネてる」

「スネてないもん！」

って子供か僕は！　いかんいかん……ちょっと反省しよう。お、いいとこにでかい木が。手をついて、うなだれて――反省のポーズ。

「うーん、トメお兄さん元気ないねー」

「サエちゃんがたかったからじゃない？」

「いやー、ツッコミしてくれれば元気出してくれるかなーとか思ったんだけどなー」

「なにかトメさんの元気が出そうなものは……あっ」

僕が一人で自己嫌悪に陥っていると、クイクイと服が引っ張られた。

「生まれてきてごめんなさい……ん、なんだカカ」

「そんなディープなあなたのお悩みを解決！　あちらをご覧ください」

カカの指差す先に目を向けると、そこには――なんとも煌びやかな獅子舞が。

「おー、そっか。元旦だもんな……獅子舞くらいやってるか」

「トメお兄さん、そんなに落ち込んでるならちょっと噛んでもらいましょうよー」

「そうですっ、大凶なんか獅子舞に食べてもらいましょうよっ」

獅子舞に噛まれるのは縁起がいいという。そうだな、大凶なんか初めて出たんだし、いっちょやってみるか。

「おーい！　こっちこっち」

カカが大きく手を振ると、他の参拝客の相手をしていた獅子舞が

こちらを向いた。カチッ、カチッと歯打ちしながらコミカルな動きでこちらに向かってくる――おぉ、近くで見るとなかなかの迫力だ。

「この人噛んでくださいー」

「かぷっといっちゃってっ」

「あ、待った。その前にそこの小娘の頭を噛んでくれ」

子供の頭を噛んでもらうと賢くなるという。カカの思考が少しでもまともになれば、自動的に僕の災厄も減ると思うのだ。

「お、そう？　んじゃ遠慮なく食べられてくるよ！」

「獅子舞さん、ガジリといっちゃって！」

「よく噛んでくださいねー。カカちゃんの頭は固いですよー」

思いつくことは柔らかすぎるのにな。しかし途端に遠慮ないセリフを……美しい友情だ。

「さぁ、噛め！」

なぜか偉そうに仁王立ちするカカの頭を目掛けて食らいかかる獅子舞！

かぷっ、ひょい、ごくん。

「飲んだ！？」

ごりごりごりごり。

「噛んでるしっ！！」

「おいしー？」

「嫌なこと聞かないでよサエすけ！！」

おいおいおい！　なんかシャレになってないんじゃ――って、あれ？

ぺっ、ぽと。

獅子舞に食って掛かろうとした直後、まるで「まずいものを食った」とでも言うかのようにカカは吐き出された。しかもその姿は――

「えっ！？」

「あれー！？」

かぷっ、ひょい、ごくん。ごりごりぺっ！　かぷっ、ひょい、ごくん。ごりごりぺっ！

一瞬の早業、気がつけばサエちゃんとサユカちゃんも獅子舞に食われ、咀嚼されて吐き出されていた。

そして吐き出された三人は――なぜか晴れ着姿に変身していた！

カカは青地に色とりどりの蝶が舞う可愛らしい着物、サエちゃんは黒地に赤とピンクの桜柄のしっとりとした着物、そしてサユカちゃんの着物は紫地に優美なちりめん桜……

似合ってる。それぞれのいつものイメージとは少しだけ違う、しかし新たな魅力を感じさせてくれる姿だった。

「な、なんか獅子舞のお腹の中で着替えさせられたよ」

「こ、これは一体……」

「ふふ、びっくりした？　トメ君」

「「「その声は！？」」」

獅子舞から聞こえてきたのは他でもない、我が母親の声！？

「こんな仕事もたまにはいいかと思ってやってみたんだけど、ちょうどよくトメ君たちに会えてよかったよ♪」

「か、母さん……それ女優の仕事じゃないんじゃ」

「芸能人の仕事としてはアリだよ？」

それはまぁ、そうかもしれないけど……

「その晴れ着はわたしからのプレゼントだよ♪」

「え、くれるのこれ！？」

「わー、ありがとうございますー！」

「ありがとうございますっ、お、お、お母さん！」

「あらあらー、娘が増えちゃった♪」

喜びのあまり、袖を振り回しながら獅子舞の周りを走り回るカカサエサユカ。それに合わせてぐるぐる回りながら踊る獅子舞……なにこれ。カカ舞とでも言うべきか。

「しっかし器用なマネするなぁ母さん。その獅子舞の中で着付けなんてさ」

「忍者をなめるな！」

「おまえもいたのかよ！！」

……無駄なスキルを持ちまくっている父親を持つと油断ならないぜぃ。

しかしまぁ、こうやって鮮やかな晴れ着に身を包んだ少女たちの喜ぶ様を見るのは、なんともほのぼのして目の保養になるのは確かだ。感謝すべきなのかツッコむべきなのか。

「よいではないかー、よいではないかー」

「きゃー、お代官さまお戯れをーってぇ、ちょっとぉぉぉぉぉっ」

「天下の往来でなにしてんだ！？」

いきなりサユカちゃんの帯をほどいてぐるぐるーっとお代官さまごっこを始めるサエちゃん！　こんなとこでそんなことしたら晴れ着がはだけてエライことに！！

ぐるぐるぐるー、ぴた。

……へ？　帯をぐるぐるはずされて放り出されるかと思われたサユカちゃんの動きが、止まった。そして。

ぐるぐるぐるーっと巻き戻って……

「お、おかえりー」

「た、ただいまっ」

あー、あれだ。あれに似てる。ヨーヨー。

「ふふ、こんなこともあろうかと『ゴムとバネが仕込まれた帯の先を晴れ着にくっつけることにより、どこでもお代官ごっこが出来る――夢の仕様の新感覚晴れ着！』にしておいたの！　カカちゃんたちなら絶対すると思って♪」

「どこで売ってんだそんなもん」

「商店街」

なんでもありすぎだよあそこ。

「むー、私もやりたかったのに」

「はい、じゃあ次はカカちゃんに貸してあげるー」

「さもヨーヨーを貸すみたいに言うんじゃないわよっ！　わたしは、

わたしは……」

あれ？　なんかサユカちゃんに見られてる僕。

「どしたの？」

「あ、あの……わたし、トメさんとこれをしたいです！」

「はぃ？　これって……お代官ごっこ？」

「はいっ」

な、なんでわざわざ……ま、まさかサユカちゃん！

楽しかったのか、今のヨーヨーお代官。

そうか、男の僕ならもっと早く回せると思ったというわけだな。

「仕方ないな、いいよ」

「やったっ！　じゃあお母さん！」

「はい♪」

かぷ、ひょいっと上へ放り投げられる僕の身体。

ぇ？　ちょ、まさか……僕が晴れ着を着て回されるってこと！？

「こんなこともあろうかとトメ君の分もあるよ♪」

「もちろん女性用だ！」

「準備よすぎだあんたらあああああ！！！」

ごくん、ごりごり……ぺっ。

――この先からはトメ君の強いご要望により、音声のみでお送りします。

「と、トメ兄……綺麗」

「化粧までされてるー、ぷ」

「ふふふ、パパ君。カメラの準備は？」

「カンペキだ！　さぁいけサユカちゃん」

「か、可愛すぎますトメさんっ。あぁ鼻血でそうティッシュティッシュ……よしっ。せーの――よいではないのっ、よいではないのーっ」

「よくなあああああああああい！！」

合掌。

## カカの天下３１７「カカ天式晴れ着」（後書き）

さりげに前回の続き&なにげにまだ続きます笑
三日まではお正月のお話、許されますよね♪

さてさて、感想欄に「あけましておめでとう」と書いてくださった皆様、ありがとうございます＾＾
ただ、ちょっとした企画を考えてますので――お返事は明日までお待ちくださいな♪

## カカの天下３１８「カカ天式年賀状」

「じゃ、また明日ねー」

「一時くらいに遊びにいくわっ」

「待ってるよん、じゃねー」

「気をつけてなー」

どうも、さきほど辱めを受けたトメです。何をどう受けたかは聞かないでいただきたい。

初詣も昼食も終わったので、サエちゃんとサユカちゃんは家に帰ることになりました。カカと一緒にぶんぶん手を振りながら見送ります。

「しかしあの格好で帰ったら親御さんはなんて思うかねぇ」

「可愛いと思うんじゃんない？」

や、それはもっともだが。人の家に行って帰ってきたら振袖姿というのは親御さん的には……ま、いいや。深く考えるのはよそう。

「さっきのトメ兄みたいに」

「余計なこと言うな！」

ちなみに僕はちゃんと着替えた。というか脱がされ――や、なん

でもない。

「じゃ帰るか」

「そだね、お母さんとお父さんはまだ仕事あるみたいだし」

そのようだ。さっきからひょいひょい僕らを飲み込んでいた獅子舞の姿が子供らに妙にウケたらしく、「僕も」「私も」と大人気になってしまったのだ。おかげで獅子舞はさっきから飲んだり吐いたりを繰り返すハメになった。まるで無茶して酒を飲む若者のようだ。顔赤いしな。

「あの獅子舞の顔、青くなっていかないのかな」

「そこまで細かい芸したら名物になるだろうな」

僕とカカはそんなくだらないことを話しながら、微かに雪の名残がある道を歩く。

やがて我が家が見えてくると同時に、郵便受けに何かが挟まっているのが見えた。

「年賀状だ！！」

毎年恒例のモンですな。

僕らは家に入り、居間で早速チェックを始めた。

「これと、これ、これがカカ」

「これがトメ兄で、これお母さんで……ね、トメ兄。なんか真っ白な年賀状あるんだけど」

「ああ、それ父さんのだよ。炙り出しなんだ」

「これ表も真っ白だよ。どうやって届いたんだろ」

「自分で走って配ってるんだろ。忍者仲間のだろうから」

二人で協力してどれが誰の年賀状か仕分け終わり、ようやく年賀状の拝見タイムに移ることができた。

「さてさてー？お、これサユカンのだ。なになに『去年はお世話になりました、今年もよろしくお願いーー』ってすごい普通の文だ！　スタンプで押してあるだけだよ、これ。ネズミの絵は手書きで可愛いけど」

「年賀状って普通はそんなもんだろ」

「えー、私サユカンの年賀状、工夫したのに……」

「あれ、僕にきたサユカちゃんの年賀状は全部手書きだぞ？　なんかハートばっかだし……」

「おぉ、サユカン新年早々やってくれるね！」

「インク足りなかったのかな。そこを誤魔化すためにハートでカバーか」

「……トメ兄も新年早々言ってくれるね」

頑張れサユカちゃん。今度会ったときは優しくしてあげよう。

「えっと、これはサエちゃんの、げ――！！」

「どしたカカ。お、僕のもサエちゃんの、ってぇ――！！」

僕はカカと同じく言葉を失った。

そこには……いつ撮られたのかまったくわからない、僕の恥ずかしい写真が載っていたからだ！　反応を見る限り、おそらくカカも……

「こ、今年もヨロシク、って感じ？」

「なんか『ヨロシクしないと……わかってんだろうな？』とか脅迫されてる気分だ……」

「さすがサエちゃん、私のよりインパクトのある年賀状だ……負けた」

「カカはどんなの送ったんだ？　去年はやたらと悩んでたが」

「ふふん、今回は手本があったからすぐ書けたよ。大好きな友達に『いつも一緒だよ』っていう言葉をこめて」

「ほぅ、いいじゃん」

「紙面びっしり『好き』って文字書いて、真ん中に『いつもおまえを見ている』って」

「どこのストーカーだおまえは！！」

「去年お母さんに届いた年賀状の中で一番インパクトあったのをマネしてみたんだけど」

母さん……名前が売れるとこういうの心配だよなぁ。まーそういうのが大得意な職業の旦那がついてるから大丈夫とは思うが。

「サエちゃん、いまごろ受け取ってくれたかなぁ」

「ポイ捨てしなきゃいいけどな」

「サエちゃんなら笑い飛ばしてくれるよ」

「たしかに。お、これはタケダ君か」

「おもしろくない笑えない。ポイ」

「カカはサエちゃんと逆で笑えなかったらポイか……あ、テンのだ。旅行先からわざわざ送ってきたみたいだな。よく元旦についたもんだ。えーと『旅館の刺身、うめぇ』って単なる自慢かよ！」

「これお姉からだ。んと、『やっぱ旅館の名物は事件だね』だって」

「起きたのかよ事件！！」

もし僕がその場にいれば二時間ドラマになんてならないだろう。

『犯人は姉』『凶器は姉』『証拠は姉』これで一瞬で解決だ。

――そんなこんなで僕らはいろんな年賀状を眺め、帰ってきた母さんとお雑煮を作って食べて元旦を過ごした。我が家では時間のかかるおせち料理は作らない。多忙な親のためにね。でもその分、新年に一緒にお雑煮を作るというのは大切な恒例行事だったりする。今年は姉がいないし、父さんも相変わらず顔を見せないが……いい新年の始まりには変わりない。

そう、いい始まりだ。

だから僕は大凶なんか信じない！

まだ根に持ってたの？　とか言うなよ！！

おまけ1――サエちゃんの年賀状チェック。

「ただいまー。と、あけましておめでとうございますー」

「あけましておめでとう、サエ。そこにあなたの年賀状置いてあるわよ」

「ありがとー。あ、カカちゃんのだ。なになに……あははー、こんなに『好き』って書かなくてもわかってるのにー。『いつもおまえを見ている』とか幽霊みたいなことをー」

なんとなく肩ごしに振り返ってみる。

「なんだ、鎧着て血を流してるおじさんしかいないじゃんー。正月だからそういうの多いんだよねー……んー、もしかしてあなた、イ

メチェンしたカカちゃん？」

「サエー？　なに一人で喋ってるのー？」

おまけ2――サユカちゃんの年賀状チェック。

「ただいまっ！　お母さんあけましておめでとう！」

「おめでとう、サユカ。あなたの年賀状そこに置いといたわよ」

「ありがとうっ。えっと、これはサエすけの、ってぇ！？」

そこにはわたしの恥ずかしい写真がっ！！

「さ、サエすけのヤツ……これでヨロシクとか言ったつもりかしら……あ、これはカカすけの、ってぇ！？」

そこにはトメさんのイカしたブロマイドが！！

「わ、わたしの友達にはろくなのがいないわね、『おめでとう』も『よろしく』も一言もないなんて……えっと……ふむ、んー、こうっ、とか……こういう風にすると」

「サユカ？　なに二つの年賀状を重ね合わせたりしてるの？」

「な、なんでもないわっ！！」

おまけ3――カカラジの年賀状チェック。

「新年ということで、特別にちょっとお邪魔します。こんカカ」

「留兄。結構きてるね、年賀メール、というか年賀感想」

「そだな香加。やっぱラジオやってるからには、いくつかに返事をしたいところだが」

「でも全部はきついよね」

「確かに。じゃあ私らが一人二枚だけ書いて、読者の方にランダムで送るってのはどうだ」

「そだね、じゃあ一枚は当たりでマトモなこと書いて、もう一枚ははずれで変なこと書こう」

「む、変なこととか僕のキャラじゃないような……」

「いいじゃん、遊び心も必要だよ」

「それもそうか、じゃあ他に書ける人がいないか探してみよう」

「よーっし、何書こうかなー……」

「今から他の人探して書いてもらうとして……今日の夜中には送れるかな。ということで書いてない人でほしい人がいたら急いで書いてねー。文面に『あけましておめでとう』っぽいこと書いてあればオッケーだよ。それではカカばい！」

## カカの天下３１８「カカ天式年賀状」（後書き）

と、いうわけです笑
今日の真夜中あたりに感想の返信と一緒にランダムで選んだ方へ留たちの年賀状を送ります（というか書きます）
ちょっとした思い付き企画なので、そんな大層なものは期待しないでくださいね＾＾；

# カカの天下３１９「カオスな初夢」

初夢～トメの場合～

こんばんは、トメです。

僕はいまから寝るところですが、どんな初夢を見れるか非常に楽しみです。

ちなみに一緒に新年を迎えたカカサエサユカの三人も、０時に頑張って起きたせいか、その日は夢を見なかったようです。や、実際は見てるんだろうけど初夢って『初めて覚えている夢』だと思うのですよ。だから僕らはまだ夢を見てないわけで。

これから見るわけで。

さーどんな夢を見るかなー。富士、鷹、ナスが出ると縁起がいいんだよね、たしか。

どれでもいいから出てくるといいな……おやすみ。

……

お、ここは夢の中か？　そう自覚した瞬間、目の前に舞い降りる影。

「よぉぉぉぉぉぉっすっっっ！！！」

そこにはやたらと暑苦しい挨拶をかましてくれる、マスクをした筋肉ムキムキのおっさんが。

「我輩の名は鷹野富士！！　人呼んで富士さん！！」

呼びたくねー。

「貴様に一言モノ申ぉぉぉぉぉぉぉぉすっっっ！！！」

「な、なんだよ」

「こんのぉぉぉぉぉっ、ぅおたんこナスがあああああぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

目が覚めた。

鷹、富士さん、ナス。

「こりゃ大凶だ」

泣けるぜ。

初夢～サエちゃんの場合～

「さーねよねよー……おやすみー」

……

ぴしっ。

ごり。ごり。

ばきっ、ズガッ！　グジュゥアァッ！

ジュルルルルルルッ。ズドンヅドン！！

アォォォォォン！　ピーポーピーポーピーポー！！

痛いぃ……恨めしや……この恨み……食えぇ、食えぇぇぇ……

ヒ、ヒヒヒヒッヒヘヘヘヘきゃけけっけけキャけっけげげげ
ギャげげっげげグガげげげっげえげげげえっげえへげえっげえげカ
カげえげげげげ！！

目が覚めた。

「あー、おいしかったー」

カナシバリって肩コリとれるんだよね。

初夢～サユカちゃんの場合～

あれ？　目が覚めたわ。

もう朝かぁ。夢……見たわよね。あんまり覚えてないけど。うーん、覚えてるのは……

『トメさん、私と結婚して！』『いやいや、あたしとよ！』『オレのもんに手ぇ出すなこのガキども！』『トメ♪』『トメ君、あの夜を忘れたの？』『トメは俺の嫁』『トメ家の遺産はあたしのものよぉん』『そりゃないぜぃ、ふーじ◯ちゃぁん』

……ムカムカムカムカ。

妙なのも混じってたけど、なんかムカつく夢だったのは確かだわ。正夢になったら許さないわよ神様！！

初夢～カカの場合～

「みんなどんな夢を見たの？」

私が聞いてみると、みんな様々な反応を示した。

頭を抱えるトメ兄。

なぜか舌なめずりをするサエちゃん。

まだ見ぬ敵を睨み付けるサユカン。

どうしたのさキミタチ。

「ささ、遠慮なく話してみてくれたまえー」

「そ、そう言うカカはどんな夢を見たんだ？」

「私？　私はねぇ……」

……

「っていう夢を見たの」

「……ほぼ正夢じゃんか」

そうそう。あ、『……』から上が夢ね。ただいま初夢の暴露会中なの、だからトメ兄が言ったとおり正夢になったっていうわけなんだけど。

「カカすけのが一番ワケわかんないわね……」

「そうかな？　わかんないよー。トメお兄さんの夢の話は聞いたけど、サユカちゃんは夢の内容ぜんぜん話してないじゃーん」

「く、詳しく話してないことに関しては、サエすけも同じでしょっ」

「だから説明したでしょー。最初にぴしっ、ごりごりって始まって

ー」

「だからワケわかんないってのっ」

「だからこうー、ごり♪」

「ぐえっ」

『ごりっ』というより『ごきっ』て感じでサユカちゃんで遊び始めるサエちゃんを尻目に、私はトメ兄に聞いてみた。

「ねぇトメ兄、私の夢ってどんな意味があるのかな？」

「うーん、これからもいつも通りってことじゃないか？　カカにしてはつまんない夢だったな？」

「つまんない？　そうかな」

私はじゃれ合うサエちゃんとサユカンを見る。

「きゃけけけけけけけー♪」

「やーめーろーっ！　耳元でそんな笑い方するなぁっ！」

うん。

「結構、楽しいよ」

「……さいですか」

いい初夢だった。

## カカの天下３１９「カオスな初夢」（後書き）

やー、最後はともかく、みなさんほんと混沌とした夢ですな＾＾；
まさにカオス笑

あ。そうそう、年賀感想の返事ですが……昨夜のうちに送るつもりが私、気づいたら寝てまして＾＾；今日の昼ごろに送るハメになっちゃいました……でもま、年賀状がくる時間ってそんなもんだよねっ！　ってことにしといてください＾＾；
『表』とか書いてある年賀状は必ず『裏』の年賀状があります。感想欄にないものはメッセージくれた人に送りましたのであしからず♪　まさにその人だけの年賀状ですね笑

それから、これはどうでもいい話ですが。
おみくじひいたら数年ぶりに大吉でした！
いいことあるのかなぁ……一応年齢的に今年は厄年ですが＾＾；
大吉さん頑張って厄に勝ってね。

さてさて、ちょっとあとがき多くなりましたが、今日はこのへんで！

## カカの天下３２０「カルタの言うとおり」

「いざ、ちんちょーに勝負！」

「尋常に、だろ。珍重に勝負ってなんだよ」

「身長で勝負ならカカすけは最下位ねっ」

「いえいえー、チン長、チンの長さかもしれませんよー」

「なによチンってっ」

それなら僕が一番……っていやいや！　初っ端から下品なネタですいません。あ、わからない人はそのままでいいからね。

どうもトメです。今日も今日とて正月休みを満喫するため、カカサエサユカ＋僕のいつもの四人で正月らしい遊びをするところです。

今日の遊びは……かるた！　札を床に並べ、読み手が読んだフレーズの頭文字が書いてある札を取りあい、一番多く札を取ったほうが勝ちという古来からの遊びですね。

「さぁ始めよう！　トメ兄はこういうの得意だから読み手にまわってね」

「む、僕もやりたかったけど……まぁいっか。じゃあカルタは」

「はいっ！　わたし持ってきましたっ」

おー、デンジャーケロリンカルタだ。さすがご町内のマスコット、グッズも手広く出てるんだな。

さてさて、適当に並べまくって、配置について……と。

「そんじゃいくぞ、準備はいいか？」

「「「おう！」」」

や、やけに気合はいってるな。よし！

「犬も歩けば棒にあたる――」

「はいー」

シュパァン！　ってはやっ！！

「ま、まけたわっ」

い、いつものんびりゆったりで運動神経なんか見せないサエちゃんが……犬耳はやしたカエルが棒に激突している札をプロもかくやという速度でゲット！

「あははー、運動は苦手ですけど、考えたり覚えたりするのは得意なんですよー」

「あぁ、なんかわかる気がする……あれ、カカは？」

「カカちゃんなら聞いた途端、外へ走りだして――」

あれ、外から何か聞こえる……

ワン！　ギャワン！　ギャワワン！！　おとなしくしなさい！
とぉ！！　ゴン！！　きゃうん！？　きゃ、きゃいんきゃいん……

トトトトトト。

「ふぅ、ただいま」

「な、なにしてんだカカ」

「犬を棒に当ててきた」

「ぼ、棒のわりにはすごい音したが」

「電信柱だもん」

や、たしかに犬が歩いてて当たりそうな棒といったらそれだけどさ！

「ワンちゃんに可哀想なことしないでよっ」

「大丈夫、やった犬は近所でも札つきの悪だから。カルタだけに」

「おまえ、カルタのルールわかってるのか？」

「わかってるよ。でもこういう遊び方も試してみようかと」

「さすがカカちゃん。新年からチャレンジ精神旺盛だねー」

ふむ……まぁこういうのもアリか。この妹が他にどんな行動をとるのか、ちょっと見てみたくなってきた。

「よし、次いくぞ。念には念を入れる」

「サエちゃんお願い！」

「むーんートーメーちょめちょめー」

「うぁなんか寒気が！？　なに、どんな念を送ったの！？」

「南無阿弥陀仏」

「なんでお経！？」

念を入れられてしまった僕が、ここから先の様子を簡単にお届けいたします。

「鬼に金棒」

カカは愛用の木刀を装備した！

「目の上のたんこぶ」

「せーの！」

「木刀おろせ！　本当にたんこぶ作る気か！？」

「骨折り損のくたびれ儲け」

「せーの！」

「木刀おろせっての！　ホントに骨折らんでいい！」

「無理が通れば道理が引っ込む」

びしっと親指で自分を指すカカ。うん、そんな感じだ。

「貧乏暇なし」

「シュー君！」

うん、そんな感じ。

「年寄りの冷や水」

バシャッとコップに入っていた水をかけられる僕。

「僕のどこが年寄りだ！？」

「名前が」

「反論できねぇ！」

そんなこんなで最後の勝負。といっても札はサエちゃんが全部シュパンと取ってしまうので、すっかりカカの奇行鑑賞会になっていた。

「と、とれないわっ……うぅ」

「まーまー、おとなしくカカちゃん見てようよ。ポップコーン食べる？」

「じゃ、最後のいくぞー。負けるが勝ち！」

……シーン。

「私の勝ち！？」

「「「もういいよそれで」」」

今日も楽しいなぁ。

## カカの天下３２０「カルタの言うとおり」（後書き）

はいー、今日も今日とてほのぼの（？）楽しそうですねー。
本当は一寸先の闇とかの行動もしてほしかったけど……犬も歩けば棒に当たるやりたかったので不採用に。まぁ別に両方やっちゃってもいいかとも思いましたが、一応＾＾

## カカの天下３２１「福呼ばざる笑い」

こんにちは、カカです。

今日も今日とて冬休みを満喫中。毎度のメンバー、サエちゃんサユカちゃんと遊んでいる項目は――福笑い！　床に散りばめたばらばらの顔のパーツを目隠ししながら元の位置に戻そうとして失敗するためのゲームです。

「だんだん飽きてきたわねっ」

「そう？　口の中に目があるサユカン」

「ものが食べにくそうだったよねー」

「なによっ、お腹に目があるサエすけっ」

「私の目の黒いうちはー」

「腹黒だね」

ん、うまいこと言った。

「カカすけなんかお尻に口があったじゃないのっ」

「トイレの大きい方しやすそうでいいじゃん。直通だよ？」

ともかく楽しかったのは間違いない。

「でも飽きてきたのはあるね。どうしよ、たこでもあげる？」

「私は揚げ物は苦手だよー」

「サエすけ、それマジボケ？」

「油が跳ねるのが怖くてさー」

「や、だからさ」

そんな感じにじゃれあいながら、とりあえず外に出てみることに。

何して遊ぼうか、と寒さにも負けず元気に議論していると、サユカンが突然声をあげた。

「イチョウさん発見っ！」

「え、胃腸？　福笑いに臓器はなかったよ？」

「臓器笑いかー。いいかもー」

「胃が肛門にあったら、そこから食べなきゃならないんだね」

「笑えないわよそんなのっ！　じゃなくてわたしのクラスのイチョウさんよ！　おーいっ！」

サユカンがぶんぶん手を振る。サユカンの視線を追うと、確かにそこには買い物帰りっぽいイチョウさんがこちらに向かって歩いていた。向こうも気づいていたらしい。

「あけましておめでとうございます、岸村さん、笠原さん、サエ様」

「なんでサエちゃんだけ様!?」

「サエすけっ、君、イチョウさんに何したのさっ」

「いろいろー」

……なんで赤くなるのさイチョウさん。

「今年もよろしくお願いいたしますね、お三方」

相変わらず丁寧なしゃべり方だなぁ。よし、今年は言葉遣いが変わるくらいによろしくしてあげよう。

「イチョウさんは買い物帰り?」

「あ、はい。お姉様にお使いを頼まれまして、ただいま任務完了し帰還する次第であります!」

や、なんか丁寧というよりクセのあるしゃべり方のような気がしてきた。

「なに買ってたの?」

「ええと、わたくしとお姉様の化粧品なんぞを」

「化粧!?　イチョウさん化粧するのっ!?」

「え、ええ。学校以外で外出するときに、たまに少しですが」

これは驚いた。やっぱりおとなしそうな子ほど裏で何をやっているかわからないもんなんだね。

私？　私は元気に表で堂々と色々やってるからいいんだよ。

「いいなー、おもしろそー」

「た、たしかに興味はあるわねっ」

「よし、イチョウさん。そのお化粧道具、少し貸してくれない？」

「ええ、構いませんよ」

数分後。

そこでは世にも恐ろしいリアル福笑いが展開されていた。

「あはは！　サユカン眉毛変！　つながってる上に三回転してる」

「か、カカすけこそ口紅つけすぎて口裂け女になってるわよっ」

「ねーねー私はー？」

「「目元が腹黒っぽい」」

「まだ私の目は黒いかー」

早い話が皆さんすごい顔になっていた。

「どう、イチョウさん！　私たちの変身は！」

「ぴゃ！？　え、えぇと、本日におかれましてはお日柄もよく大変気持ちのいい天気ですしここは皆さん仲良く平和にお茶なぞを召し上がるわけにはいかないでしょうか！？　えぇ、お茶を飲んで静まりましょう！　静まりたまえ静まりたまえ！　おぉ神よ！！」

なんでそんな怯えてんの。

「ともかく、化粧したからこれで私たちも大人に変身だね！」

「さすがカカちゃん。ヒロインじゃなくて悪役の怪人に変身したんだねー。杖を振ったりポーズ決めたりしないの？」

「サエちゃんが何を言ってるのはわからないけど、せっかくの福笑いだしこのままご近所の皆さんに笑いを招きにいくよ！」

「わ、笑ってくれるかなっ？」

「サユカン、そのぐるぐるアホ眉毛に自信を持って！　きっと指差して笑われるから！」

「殴っていいかしら？」

「さー、レッツゴー！」

手始めに通りすがりのお兄さんに声をかけてみる。

「じゃん！」

「ぎゃあああああああああああああ！！」

次は通りすがりのお姉さん。

「がおー」

「ばけものおおおおおおおおおおおお！！」

次は通りすがりの警官さん。

「ば、ばあーっ」

「お、おまわりさあああああああああああん！！」

次は通りすがりのおじいさん。

「ポックリ」

次は通りすがりの猫。

「にゃんじゃこりゃぁ！？」

あれ、今の猫だった？　まぁいいや。

「なにやってんだ、おまえら」

おっと、ここで通りすがりのトメ兄が。

「さぁ笑え！　福を呼べ！」

「笑えねぇよこえーよ恐怖しか呼ばねーよ」

「笑う加藤には福きたるだよ？」

「加藤さんも逃げ出すよ、その顔みたら」

「トメ兄もやる？　福笑い」

「よしやってやろう」

「もがががががが！？」

「あれー、この顔とれないなぁ！？」

この後、私はトメ兄にたっぷりと顔をめちゃくちゃにされた。

近所のほうがもっとめちゃくちゃになっていたから、その報いだそうな。

にしても手のひらで顔をこすられまくるだけで結構痛いんだなぁ……

今度やってみよう。

## カカの天下３２１「福呼ばざる笑い」（後書き）

今日は少しおとなしめな感じでしたね。もうちょっとはじけさせてもよかったかな。

福笑いってもうぜんぜんやってないですけど、うまくやれば盛り上がると思うのです。友達の顔とかでしたら……ふふふ笑

## カカの天下３２２「初めての英語」

「うー。つまんにゃい」

「でもいつかはやんなきゃいけないことだろ？」

「サエちゃんやサユカンと遊びたいよぅ」

「だめ、それ終わってから」

ども、珍しく厳しい口調のトメです。

カカたちの冬休みもそろそろ終わりが近づいてきたころ。ここで僕はカカに『宿題終わらせなきゃ外出禁止令』を出したのです！

「どうせワーク一冊なんだから、やろうと思えば今日で終わるだろ？」

「そうだけどさー、飽きたよこのワーク。どうせやるなら別の勉強がいい」

「別のってなにさ」

「うーん、英語とか興味あるなぁ」

ふむ、まぁ休憩がてらに少し教えるくらいならいいか。

「そうだな。Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ａ　Ｐｅｎ　くらい覚えてもいいかもしれないな」

「利子要らずのペン？」

その気前よくお金貸してくれそうなお方はどこのペンさんですか。

「これはペンです、っていう英語だよ。んー、もっと簡単なほうがいいかな。じゃー……」

数分後。

「ユーアーペン！！」

Ｙｏｕ　ａｒｅ　Ｐｅｎ！　あなたはペンです……用法は間違ってるが、ペンを擬人化したと思えばこれでよかろう。ユーアーのほうが覚えやすいし。どうせ遊びだし。

「ユーアーペン！」

「そうそう」

「ユーアーペン！」

「うまいうまい」

「ユーアーペン！」

「繰り返しすぎ」

「ユーアーペン！」

そんな何度も「あなたはペンです」って言い聞かせるとは、そのペン、そんなに自分を見失ってるのか。

「ユーアーベン！」

「へ？　や、僕はベンさんじゃないぞ」

利子もなしにほいほい金なんか貸せないぞ。

「まぁいいや、ちょっとトイレに……」

「ユーアー便！！」

「や、たしかに便所いくけどさ」

「ユーアー大便！」

「勝手に決めんな！」

「ユーアー快便！」

「それはちょっと嬉しいが！」

「……あれ？　ユーアー便と似たようなことを前に言ったような覚えが……なんだっけ」

まったくもぅ、楽しそうなのはいいけどちゃんと宿題やれよ？

やれやれ、僕はおとなしくトイレタイムを……ふー……う？

電話だ。

「カカー！　出てくれー」

やがて電話の電子音が止む。よしよし、ちゃんと取ってくれたな。

「ユーアー関西弁！」

ちゃんとしてねぇ！

やばい、早く戻らないと……で、でもまだ発射中だし！

「ユーアー東北弁？」

しらねーよそんなこと聞いてるなよ！　だいたい東北弁ってどんなんだよ！

「ユーアー京都弁どすえ」

関西弁じゃなかったのかよ！　ってあれ、そういや京都って関西かー。ってそんなことはどうでもいい！　相手は誰なんだ……それがばかりが気になる！

「ユーアーテン！！」

がちゃりと電話の切れる音。そっか、テンか。そういや旅行先は京都だったな。よかった……あいつならカカの言動にも慣れてるだろうし。

無事にトイレを終えて出ると、カカがわざわざ待っていた。

「変な電話しやがって」

カカは「それを忘れていた」とでも言うかのようにポンと手を打った。

「ユーアー変！」

「変なのはおまえだ！！」

「む、逆の場合はどうするの？　アーユー変とか？」

「いいとこはついてるが、それは後で教えよう。それでテンはなんだって？」

「お姉が起こした事件のせいで帰り遅くなるって。一応家族のことだから心配しないように、って電話くれたそうな」

「別に心配なんぞしないが、なんで姉が直接言わないんだよ」

「いま牢屋にいるから話せないんだって」

はぁ！？

「ずいぶん帰りが遅いとは思ってたが……また捕まってんのかあの姉は」

「よくやるよねー」

「始業式までに間に合えばいいけどな、テンも」

まったく、あの姉は毎回毎回……僕が監督しないところだとすぐハメはずすんだから。

「あーゆー並外れたバカにはなっちゃダメだぞ」

「アーユーバカ？」

「なんだとぅ」

「トメ兄があーゆーバカって言ったんじゃん」

……ややこしい。

いいや、英語は置いといて宿題やらせよ。

――宿題見るやつが戻ってくればいいけどね。

## カカの天下３２２「初めての英語」（後書き）

どうでもいいですが私、小学校のころにローマ字の勉強を怠ったせいで中学の英語ですごく苦労した覚えがあります。
ローマ字を覚えているかどうか……その差は大きかったなぁ（しみじみ

# カカの天下３２３「意外と大変な裏方日和」

やぁみなのもの、元気にしてるか！？

俺はトメやカカの父親だ！　名前は明かせない。忍者だからな。ん？　カツコ？　何を言っている、俺は人間だぞ？　あのようなファンタジックな子供などおらんわ。

さてさて、今日も今日とて俺は仕事の合間に家へと戻り、天井裏から我が娘を見守っていたりするのだが……

「うー……トメ兄いないと暇だー」

カカはまだ冬休み中だが、トメはすでに仕事始めだ。先程までサエちゃんとサユカちゃんと遊んでいたのだが、用事があるとのことで帰ってしまった。トメが帰ってくるまで暇をもてあましているわけだな。

なに？　俺が遊んでやればいいって？

たわけ！

できるか！！　恥ずかしい！

こんなストーカーまがいのことをしているほうが人として恥ずかしいって？

たわけ！

貴様！　何様だ！？

俺様だ！

などと独りで自問自答しているうちに（暗いとか言うな）カカはするべきことを思いついたようだ。

「トメ兄、どうせ正月ボケのまま仕事して疲れてるだろうし……またご飯作ってあげよう」

なんと！！　カカのご飯！！

あぁ……娘の作ったご飯……うらやましい……トメ殺す。

「こないだはカップめん作ったし、今度はレベルを上げよう！」

カップめんの次だと冷凍食品あたりか。いやそれで充分。可愛い家族が用意してくれるならそれに勝るものは――

「ハムエッグに挑戦だ！」

なに？

ハムエッグ？

ハームエッグ？　フライパーン？　あっぶーら！？

ファイヤアアアアア！！　を使うのではないか！？

いかん、そのような危険な！！　見たところ聞いたところカカが

独りでそれらを扱ったことはないはず！　となると……あ、あぶ、危ないんじゃ……！！

「えーと、まずはフライパンに油をひいて」

あ、ああ、そんなドバドバと……もしそのまま火にかけたら――えぇい！　シュバッと！

ピンポーン。

「あ、お客さんだ」

とてとてとて……とカカが去った今のうちに！

シュタッと台所に降り立ち、フライパンの中の油をさっと捨ててコンロに戻して、また入れたりしないように油を隠して――って油はもうカラではないか。全部入れおったなあの娘。っと、戻ってきた！

「ピンポンダッシュなんて子供なことするなぁ。私なんか三日前に卒業したよ、まったく」

シュバッと急いで天井裏に戻った俺は、再び様子見に戻る。むぅ、さすがカカ。油が減ったことにまったく気づいていない。

「火をつけてー、あ、ハムと玉子を用意しないと」

フライパンを温めている間に用意。まぁいいだろう。しかし……あーあー割った玉子の殻が入っちゃって。食べるのトメだから別にかまわんが。

「私の分とトメ兄の分だから、二つだよね」

……ちぃ。シュバ！

ピンポーン。

「あれ、またか」

とてとてとて。と玄関へ行っている間にシュタッと！　ちまちま殻とって……もっかいシュバ！

まったく、我が娘の喉に玉子の殻が刺さってしまうところだったではないか。それだけは防がねば……命拾いしたなトメ。

「なんなんだろーもう！　えっと、フライパンが温まったからハムを置いて」

手で置こうとするなフライパンに近い油が飛ぶぞ危ない！　えぇい、石つぶて！

「痛っ」

小石を軽く投げはなち、カカの手にぶつけて持っていたハムを離させる。カカが思わず落としたハムは見事フライパンの上に。しかも二枚とも重ならず、石はきちんとカカの視界の外へ……ふぅ。痛い思いをさせてすまん我が娘。しかし火傷よりはマシだ。

「ここの天井って落石あるんだ……今度トメ兄に教えてあげよう」

教えておいて自分で落とす気だな。父にはわかるぞ。

「あとはハムの上に玉子を置いて、お塩を」

ハハハ、なんでこの娘はあるもの全部使おうとすんのカネ。

わざわざ蓋を完全にあけて玉子の上に落とされた塩は、まるで綺麗な雪山のように積もった。あの山が溶けたら終わりだ!!　シュバッ!!

ピンポーン。

「きた!!」

玄関のチャイムが鳴った瞬間に身を翻し、ダッシュするカカ。ピンポンダッシュ犯を捕まえたいのか……なかなかの身のこなし。さすが我が娘。しかしピンポンを押した俺はすでに天井裏へと戻ってきている。この神速には敵うまい……っと、塩を処理せねば。

シュタッと台所に降り立って――

「またいなかったなー」

戻ってくるのはやっ!?　しょ、処理してシュバッ!!

「あれ？　なんかさっきと違うような……まぁいいや」

うぅ……塩辛い……あの山を一口でパックンチョするのは毒に慣れた俺でもキツイぜ……

「次はコショウ……あれ、こんだけしかないのか」

どうせ全部使うからな。調理一回分だけ容器に残して処理済みだ。

俺の口の中にな……うぅ、時間がなかったとはいえ無茶しすぎだ俺……

「あとは、サラダ！　野菜を切って」

サッラーダ？　ほうちょーう？　指っぽろーり！？

いかん！　くらえ、ちょっと手元に残ってたコショウ攻撃！

「あれ？　上から粉が……へ、へくちゅっ」

いまだ、忍法かまいたち！！　シュタタタっとな！

「あ、あれ。すごい、私くしゃみで野菜切っちゃった！！」

もうなんとでも思ってくれ。

「まるで姉みたい！」

やっぱりあんなバケモノは娘じゃねぇ。

――と、そんなことを続けてようやくハムエッグとサラダが出来上がった。

ふぅ、影から父親するのも楽じゃないぜ。じゃあ日向にでろ？

カカが眩しすぎて灰になったらどうする！？

またもや自問自答しているうちにトメが帰ってきた。

「ただいまー」

「おかえり！　ねぇ聞いて聞いて！」

あぁ……これだけ苦労してもトメが喜ぶだけか……野郎を喜ばせて何が楽しいんだ……おのれトメめ……呪ってやる……秘伝の藁人形と五寸釘で！！

「すごいでしょっ、すごいでしょ！！」

「ああ、たしかにすごいな。一人で作ったのか？」

「ううん、お父さんと！！」

……へ？

「多分だけどね」

「へぇぇぇぇぇ、父さんと、ねぇぇぇぇぇ」

なんだよ。

なんだよなんだよ。

手伝ったのがバレてたのかとか、天井裏にいるのにトメの妙な視線を感じたりとか、なんかいろいろ思ったことがあったけど――とにかく顔が熱すぎて、シュバッ！！

に、逃げたわけじゃないんだからな！

ニヤけてなんかないかならな！！

な、泣いてなんかないからな！！

うえええええええええええぇぇぇぇんカカさいこー！！

## カカの天下３２３「意外と大変な裏方日和」（後書き）

世にも珍しいトメ父視点！　や、カカとカツコの父でもあるけど言いやすいので『トメ父』採用です笑

どっかの誰かさんの視点と似たようなとこがありますが、そちらとの血縁関係はありませんのであしからず。

あと「シュバッ」てとことか「かまいたち」とか細かい質問には全部「忍者だから」という返事をしますんで、それもあしからず笑

## カカの天下３２４「言葉の魔力であなたを落とす」

「しかし暇だね」

「でもせっかくみんな宿題終わったんだから、遊びたいわよねっ」

「でもごろごろもしてたいよねー」

例によってコタツでごろごろ中なカカです。最近こんなの多いなぁ……動かないのはよくないし、トレーニング増やすべきかな。

「ごろごろしながらする遊びってなによ」

「コタツの中でプロレスとか？」

あ、でもこないだそれやって総理大臣に怒られたんだよね。ダメダメ。

「ふふふー、こんなこともあろうかと、こんな本を持ってきたんだよー」

「なになに……」

本のタイトルは『いろんな遊び方』

「これなら寝たきりの老人でも一人でハッスルして遊べるよー」

「ベッドの上でハッスルしてるような老人なら誰も近づかないだろうし、そりゃ独りだろうけど……その本おもしろそうだね」

「どんな遊び方があるのっ？」

「待ってねー。えーと……あ。これなんかいいんじゃないかな」

「なになに？」

「殺し文句の言い合い」

殺し、文句？

「なに、言葉で相手を殺したほうが勝ち？」

「難しいわねっ。でも寂しさで死んじゃう動物がいるんだから、言葉で傷ついて死んじゃう人もいるんじゃないかしら」

「よし、サユカン勝負だ！　やーいやーい、サユカンの不器用！」

「な、なんですって！　カカすけの変人！　あと――」

「突っ走り屋！　慌てん坊！　ノロマ！」

「えと――」

「愚図！　下衆！　愚鈍！　孤軍奮闘！　七転八倒！」

「カカちゃん難しい言葉知ってるねー」

「お色気担当！　萌え担当！」

「うぅ……そ、そこまで言わなくてもいいじゃないのぅ」

「今のって傷つく言葉かなー」

む、最後のは褒め言葉だったか。

「ともかく私の勝ち！　と、こんな感じの遊びなのかな」

「全然違うよー」

「ちょっとっ！　じゃあわたし弄られ損じゃないのっ」

「いつものことじゃないのさ」

「い、言い返せない……」

さて、敗者は放っておいて。

「それで、本当はどんな遊びなの？」

「んとねー、殺し文句っていうのはそもそも好きな人を口説き落とすための言葉でー」

「口説き落とす……崖からでも落ちるように誰かを説得するの？」

「また難しいわねっ」

お、ち、ろ♪　とか可愛く言いつつ谷底へ突き落とす、とかアリなんだろうか。

「そうじゃなくてー、簡単に言えば好きな人をメロメロにさせる言葉みたい。告白の言葉とかもこれに入るみたいだよー」

ふむふむ。ドラマとかでよくある、くさいセリフのことか。

「まずはキーワードを選んで、そのキーワードの入った、もしくはキーワードに関係する殺し文句を一つ考えるの。それをみんなで順番にやっていって、一番くさくて寒くてニヤニヤできる言葉を作った人が勝ち、だってさー」

へぇ、おもしろそう。

「サユカちゃんとか、いい練習になるんじゃないかなー。うまく言えばいくら愚鈍で鈍感で魯鈍で愚図なトメお兄さんでもドキっとするかもよー」

「さ、サエちゃ。そっちの殺し文句は意味が違うんでしょ？」

「あ、ついー」

「いくつかトメさんと一緒の文句があったわ。おそろいおそろい♪」

それでいいのかサユカン。

「じゃーまずはカカちゃんから」

へ、私？

「キーワードはねー、最初は簡単にいこうか。『君は君のまま』でいってみよー」

君は君のまま……それで殺し文句、くさいセリフ、好きな人に、えっと、えっと……

「生魚アタック！！」

「……たしかに生魚は焼いても煮てもない、そのままの姿だけどさー」

「それにたしかにくさいわね。生臭いともいうけどっ」

そんな生魚攻撃で気になるあの人もノックアウト！　ってダメか。

「だってさ、よくわかんないんだもん。サエちゃんお手本見せてよ！」

「次は『甘いもの』かー、よし」

サエちゃんは私の顎を指でクイっと上げて、とろけるような声で言った。

「私は甘いものが大好きなの。その唇……甘そうだね、いただくよ？」

流し目炸裂！！

「どうぞお召し上がりを！！」

「カカちゃん？」

「はっ！！　や、なんでもない、なんでもない」

つい頭に血が昇って口に出してしまった……久々に取り乱したぜい。

「じゃー次はサユカちゃんね。キーワードは『愛』だよー」

「これは考えやすそうだね」

しかし私の言葉とは裏腹に「えーとっ、うーっとぉ」と迷い気味のサユカン。しかしやがて搾り出すように言った。

「あ……愛、お願いしますっ！！」

「なんか募金みたいだねー」

赤い羽根の人らが募金箱もってお願いしてる感じだね。

「じゃあ次は――」

「ただいまー」

「トメお兄さんでいこうー」

すかさず頷いた私たちは、三人そろって「おかえりなさい」の言葉と共にこの問題をトメ兄にプレゼントしてあげた。

「はぁ、よくわからんがそういう遊びなんだな」

「キーワードは『図書館』でー」

おお、難度が高そうだ。

「サユカちゃん相手にお願いしますー」

「ちょっ」

トメ兄は少し考えた後、サユカンをこう言わせた。

「えと……よ、ようこそいらっしゃいました！　今日は何をお借りになられますかっ！？」

「君を、無期限で」

サユカン　は　しんでしまった。

「……あれ、ダメだったか。サユカちゃん？　おーい。なんか顔から湯気出てるけど、なぁカカ、サエちゃん……なんでそんなニヤニヤしてんの、なんでそんな変な目で僕を見るの！？　え、ちょっと！　考えてみてって言われたから言っただけじゃん！　ねぇ！　なんでさっきから僕一人で喋ってるの！？　なんか言おうよ、ねぇ！！」

ニヤニヤがとまらない。これ楽しいね……ぷっ、くくくく……き、君を、無期限でアハハハハ！

さむっ！！　トメ兄の大勝利！

## カカの天下３２４「言葉の魔力であなたを落とす」（後書き）

本話のくささが部屋に充満した場合、すぐに換気してください。においのしみつき、寒気のしみつき、ニヤニヤのしみつき等が考えられます。

もしもこのくさい言葉を誰かに言ってみたいと思ったら中毒です。場合によっては病院へ行き、専門のお医者様にご相談ください。

何の専門に聞けばいいかは知りません。

# カカの天下３２５「第九回、カカラジ！」

「皆さんこんカカ！　新年あけましておめでとうと言いつつこないだちょこっとお邪魔したときもう言っちゃったなぁなんて『空気読め！』『漢字テストじゃ出ねぇが感じ取れ！』『ダジャレじゃないぞ』みたいなことを思ってしまったーまだまだ未熟者の香加です！」

「ども、相も変わらず長ったらしい口上を述べる妹に付き合ってる留です」

そんなわけで始まりました、第９回カカラジ！

「先日は年賀状なんか送ってみたけど、ちゃんと届いたかな？『裏』年賀状は感想欄の人にはあまり当たらなかったから内容が気になる人もいるだろうけど……秘密です」

「最初にも言っちゃったけど、やっぱり改めて言っとくべきだよね。みなさん、あけましておめでとうございます。今後もこの作品ともども、よろしくお願いしますね！」

「ほんとなんでもない日常ばっかだけど、よろしくな」

くっくっく、そんなん好きでしょお客さん。

「新年から飛ばすなよ作者。酔ってるのか」

お酒は大人のたしなみですよ。留だって飲むでしょ。

「そりゃ、まぁ」

「私も飲む！」

香加にはまだ早い！

「でもおもしろくなるかもよ」

許可！　別に小説だし飲んでもいいや。

「ホント飛ばしてるなー作者」

うるさいやい。進めなさい進行役。

「はいはい。えー、説明！　これはネット小説『カカの天下』を盛り上げるため、ぶっちゃけトークや作者の本音などを放送する情報ラジオみたいな番組です！　僕や香加、作者やこれから登場するゲストさんは本編自体とは関係ないのでお気をつけください」

「今日はお姉こないのかな」

「なんせ京都で牢屋だからな。こないだろ」

「じゃあ平和だ」

平和、それはどうかなー。今日のゲストは今話題のあの人だし。

「そうなんだよなー。ちょっとやりにくかったりするんだが」

「私は嬉しいよ」

はいはい、私も作者として嬉しいですよ、カカラジ初登場のあの方がゲストなんですから！　というわけで、まずはＣＭいってみよっ。

「今日のニュースをお伝えします。えー、昨夜未明、京都府のとある旅館にて殺人事件が起こりました。事件が発覚した直後に「あたしがやった」と犯行を認め逮捕された容疑者姉は、ここにきて容疑を否認しており、捜査は難航を極めている模様です。なお、誰の姉なんだとツッコミたいのは私も同じです。なんだか知りませんが警察のほうから『容疑者ＡってなんかヤだからＡじゃなくて姉にしろ』という要請が届いており、その理由は聞いたところによると――その容疑者姉が『それが通らない場合は牢屋の鉄格子を全部叩き折る』とかいう脅迫じみたことを口にしているから、とのことです。ワケがわかりません。実際に事件の犯人なのかどうかは知りませんが、逮捕しておくに越したことないと思います。さて、次のニュースです――」

「これＣＭっていうかニュースじゃん。というか何やってんの、お姉」

「アレはいつ何やってもおかしくないからな。ほっとけ。さて、改めましてこんカカ！　それでは早速ゲストを紹介いたしましょう！　去年の暮れあたり、読者の方々に見事衝撃を与えた――僕や香加や括弧のお母さん、結菜さんです！！」

「いぇーい！　お母さんバンザイ！」

「ふふふー、こんにちは、皆さん♪」

いつもテレビにて視聴者を魅了するステキ笑顔を振りまきながら、話題のお母さん、本名結菜、芸名結乃さんが輝きまくりで登場です。

「ようこそ母さん。聞いた？　反響すごかったって」

「誰も気づかなかったみたいだよ」

「ふふふ、トメ君やカカ君がバレないように気を使ってくれてたからね♪　でもサエ君やサユカ君にならすぐ教えても別によかったのに」

「や、でもさ」

「わたしは君らが生まれる前からこのお仕事やってるんだよ？　パパ君もついてるし、あまり気を使われて君らのお友達と仲良くなれなかったりしたら、さびしいな」

「……ん、わかった」

「でもあんまり教えるとお母さん取られると思って」

「ふふ♪　仕方ないなぁ。そんなことないってわかるように、あとでいい子いい子してあげるわね」

「うん！」

……え、えーと！　カカラジにはありえないくらい和んじゃいま

したが進めていきましょう！

「そ、そだな。こほん！　えーと、では早速読者の皆様から投稿されたお便りを紹介していきましょう！　カカラジネーム『でんでんでんぐりがえってパイパイパイ』さんからいただきました！」

「パイパイ？」

「ママが恋しいのかな♪」

「えーと、『２８３話のセイジ食堂と東治の対決で、バイト店員が「今回の半額にする理由自体『それ、アリか？』なことなんですから、大丈夫でしょう。詭弁には詭弁で対抗です。文句を言われたら僕がうまく言いくるめますよ」と言っていますが、いったいどうやって言いくるめたんでしょうか。気になって夜も眠れずパイパイです』だって」

「パイパイって何？」

「そこはスルーしとこうよ。えと、これはあれだね、姉とカカとご町内みんなで「半額にしろー」って東治を脅迫したときのことだね」

「あら、そんなことしてたのカッ君たら」

「でもそこで働いてるバイト君の話術でうまく切り抜けたみたいだよ。ではそのときの様子をどうぞ！」

「おい、そこのあんちゃん！」

「はい、なんでしょうかお客様」

「この料理、たったこんだけしかねぇのか！？」

「はい、値段が半分ですので量も半分となっております」

「なんだそりゃ！？　そんなこたぁ聞いてねぇぞ、今日は半額だってビラが貼ってあるから喜んできてみりゃ……こりゃ詐欺じゃねぇのか！？」

「そんなことはありません。だって『料金は半額にします』とはビラに書いてありますが『量はそのままです』なんて書いてありませんもの」

「あんだと？　そんなの普通なら」

「普通？　ではお聞きしますがお客様。普通に考えて半額、つまり３５０円で出されるお料理といえばこれくらいではないでしょうか」

「ぐっ」

「３５０円でこの量に不満でも？」

「しかし」

「３５０円でこの量を出す全世界の店にケチをつけると？」

「んなっ」

「３５０円でそこまで文句をつける自分の姿が恥ずかしくないとでも？」

「んぐぐぐ！」

「それではお客様、ごゆっくりどうぞ。もし追加注文される場合はお呼びください」

こんな感じでみんな言いくるめられたそうです。

「まー無茶言ってるのは客のほうだから、正論持ち出されたら負けるわな」

「この人と対決、してみたかったな」

「カッ君と言い合いしてもいい勝負になりそうね。ふふ、今度挑戦してみたら？」

それも面白いかも。

「それじゃ次のお便り。えーカカラジネーム『パフェの人』さんから」

「カレーの人のライバルかな」

「んと、『殺し文句のお話、おもしろかったです。ところでカカちゃんのお父さんやお母さんの間には殺し文句とかあったのでしょうか？　ＰＳ・トメ兄のニヤニヤ言葉が衝撃的でした』だってさ……

なんだよその目は」

「ニヤニヤ」

「ニヤニヤ♪」

「な、なんだよぅ」

「何をお借りになりますか？」

「君を、無期限で！」

「言い直さんでいい！！　さっさと答えろよ母さん！」

「そんな照れなくても♪　ふふ、はいはい答えるからむくれないのトメ君。殺し文句かぁ。パパ君からはそういうのあまりなかったけど、わたしのほうからはあったかなぁ」

ほぅ意外。なんて言ったんですかお母さん。

「そうね、たとえば……パパ君がなかなかはっきり好きって言ってくれなかったときのお話なんだけど。『どうも忍者なんかやってると、隠れたり逃げたりするばかりうまくなって……その……すまん』なんて謝ってきてね、『大丈夫、それならわたしの心にずっと隠れてていいですよ、わたしの忍者さん♪』とか答えたり」

うあー！　聞いてるだけで恥ずかしっ！！！！

「な、なんか、なんか……ねぇ！？」

「ねぇ！？」

皆さんもそう思うでしょ！？　ねぇ！？　なんか、なんか、ねぇ！？

「で、でも母さんみたいな綺麗な人にそんなこと言われたら……たしかに殺し文句だ」

「お父さん生きてた？」

「鼻血出して倒れました♪」

ほんとに殺し文句だ。

「お父さん……情けない」

「それに比べて母さん格好いいなぁ」

「伊達にいろんな役演じてないわよ♪」

「そか……そうだよなぁ、場慣れしてそうだもんなぁ告白の場面とか」

「それに比べて忍者なんかまるっきりそういうの下手そうだよね」

「恥ずかしかったのは確かだけどね」

こんなん恥ずかしそうに言われたら威力倍増だべ？

「なぜに作者が方言っぽくなったかは置いといて、次いきましょう

！　えー、カカラジネーム『姉と妹が俺に復讐してやるーとか言って辞書で殴りかかってきたんでカウンターのつもりでプロレス技で【＊Ｚ〜〟＆＄％】な状態にしてしまったけどまぁいいやと思った青年』
さんから」

「なげー」

「楽しそうな家族ね♪」

「そ、そうかな。なんか波乱万丈っぽいけど」

「あら、カッ君と君らだって似たようなものじゃないの」

そかもね。

「質問は『トメカカのお袋さんて、母の日に子供達から何もらってるんスか？』だってさ」

「母の日！　ふふ。毎年当てるのが大変なのよね」

「僕らもそれを狙ってるからな」

「トメ兄とお姉と勝負してるもん」

なんのことだかわからないとお思いのそこのあなた。真相は今年の母の日あたりに書きますので、先は長いですがお楽しみに♪

「あとですね、たくさんの方からきたのが『トメたちのおじいちゃんやおばあちゃんは？』っていう質問と、『トメ父母の出会いが知

りたい！』っていう要望ですね」

おじいちゃんとおばあちゃんについては、まだしばらく書くつもりはありません。なぜかというと、あまり新キャラを出しすぎるとせかせかしてる気分になってカカ天らしくないからです。

このお話はあくまで日常をのんびりまったりする話なので、ちょっと山があったら一休み……みたいな形で書いていきたいのです。

「じゃあ先月わたしがお騒がせしたから一休み、ですね♪」

そういうことです。まぁ近々姉の話でどたばたしそうではありますが。

「父さんと母さんの出会いは？」

これは近々本編で書きたいと思います。トメ父の登場率もあがってきましたしね。

そのほか、たくさんの質問や要望をいただいておりますが、すべて掲載してると文章量が膨大になってしまうので割愛させていただいております。ですがちゃんと全部メモしているのでご安心ください。今後の本編で少しずつ回答していきたいと思います。そして本編では答えにくい質問、またはカカラジに載せたほうが面白そうな質問はこちらで扱わせていただきます。

「いつもみんな色々送ってくれてありがとねー！」

先日のランキングのような投票企画はちょこちょことまた考えているので、そちらもお楽しみに！

「そういえばさ、作者。メールの返信ってあんましてないよね」

うぐっ、その……感想欄の返信は一度で済むのですが、メールを返すとその……続いちゃうんですよね。私基本的にメール不精ですので返すの遅くなっちゃうし、かえって申し訳ないかなと……でもちゃんと全部読んでますよ！　誤字知らせてくれたりとかありがとうです！

「不出来な作者ですいません！」

じゃあ香加やってよ。

「まともな感想に『トッピロキー！』とか返すよ。それでもいいの？」

……却下。

「ふふ、とにかくお便りは随時募集中です♪」

というわけで、ＣＭ！

大人気ドラマ、ついに映画化！　日本中の恋する青少年に数多の希望とお手本をもたらした『初恋は実らない』が大波乱と共に帰って来る！　やっとのことで結ばれ解かれループに終止符を打ち、幸せな生活を送っていた二人に三十路女の魔の手が伸びる！　うはうはヒャッホーイな熟練のテクニックに純愛は勝てるのか？　いま、二人の愛が試される……来月、いよいよ上映！

ＣＭがあけて。

「これ、サユカンと行くんだよね、留兄。じゃなくてトメ兄が」

「トメ……お前の鈍感さは僕が一番よくわかっている。おそらく普通にデートするだけじゃ気づけないだろう。だからサユカちゃんがんばれ」

「トメ君、自分のことちゃんとわかってるんだね♪」

「それわかっててもサユカンのこと気づけないんだから意味ないけどね」

「さ、さて、そろそろお別れの時間となってしまいましたー！　いやー姉いないとスムーズにいくなー」

誤魔化しましたね……まぁいいや、こほん。えー、最近長くなる一方でしたので、カカラジの流れもここらで一休み、ということで。

「でも一休みしたからには、次には何か企画を考えないといけませんね♪」

む……そですね。考えてみます。

「それでは、恒例のカカラジチョップを――母さんにお願いしたいと思います！」

「お母さん、がんばれ！」

「ん？　何をすればいいのかな」

えっとですね、なぜかは知らないですが、この番組の最後は誰かが誰かにチョップするっていう決まりがありまして。

「りょーかい♪」

あら、お母さん？　そっちは壁ですよ。

「カカラジチョーップ」

ぺしっ。

「母さん、壁なんか叩いたって反応があるわけ――」

「痛っ！？」

「あったよ！？」

なんと、お母さんが叩いたスタジオの壁がぺらりとめくれ、そこからトメ父が！！

「パパ君、いつまでも隠れてないで最後くらい出なさいな」

「お、お母さんよく気づけたね」

「夫婦ですから♪」

「はっはっは！　どうだこのバカップルぶり！　羨ましかろう」

「出てけよ鼻血オヤジ」

「黙れ色ボケ鈍感息子――む、香加ではないか！　さらば！」

本編ならともかく、ここでくらい顔見せればいいのに。

「恥ずかしいではないか！」

「ほんっと情けないな……」

「そこが可愛いのよ♪」

「どうだこのバカップルぶり！」

「うるさい消えろただのバカ！！」

「あ、ほんとにシュバッと消えちゃった……私いつになったら顔見られるのかな」

「今も覆面してたしな」

「ふふ、あとで説得しておくわ。ではでは、今回のカカラジはこの辺で♪」

「なんか、さりげに司会役とられてないか僕」

「強引なお姉とは違った奪い方だね。ともかく、この番組は『京の都の今日のニュース』と『初恋は実らない製作委員会』の提供でお

送りしました」

「京と今日……ダジャレが番組名でいいのかな」

「わたしもまさか自分の言ったダジャレを番組名にされるとは思わなかったわ」

「母さんがつけたのか！？」

「プロデューサーさんがわたしのファンだったの♪」

「はー……そんな裏話が」

「それではカカばい♪」

「ぇ、あ！　カカばい！」

「カカばいばい！」

## カカの天下３２５「第九回、カカラジ！」（後書き）

今日は少し短めのカカラジです。いかがだったでしょうか？

勢いがちょっと少ないながらもお母さんパワー炸裂だったと思います。というか最近ニヤニヤ系が多いような気がするのは気のせいでしょうか。気のせいではありませんね、はいすいません。たぶん私がニヤニヤしたいからです笑

明日からはどんな感じにいこうか……まだ全然決めていませんが、よろしければまたお付き合いくださいな＾＾

それでは、カカばい！

# カカの天下３２６「カカ天クエスト　ＥＰ３」（前書き）

注意：このお話はカカ達がゲームのキャラになりきりながらＲＰＧを進める話です。話の内容はゲームの中ですが、『もしもカカ達が異世界にいたら』みたいな感覚でお楽しみください。

ステータス

カカ　ボケ勇者　レベル１　へん

サエ　悪の魔法使い　レベル１　はらぐろ

サユカ　手の平の踊り子　レベル１　さびしんぼう

トメ　ツッコミ　レベル１　つっこみ

# カカの天下３２６「カカ天クエスト　ＥＰ３」

前回、レベルを上げようとスライムへ挑み、あっさりと返り討ちにあった勇者一行。相手のレベルが上がって手ごわくなったにも関わらず、もう意地だと言わんばかりにスライムへと挑みます。

スライムは火を吹いた。

全滅した。

スライムは火を吹いた。

全滅した。

スライムは火を――

「待たんかいコラァ！！」

トメのツッコミ！　スライムはおどろき、とまどっている。

「おぉ、トメ兄すごい」

「そんな技いつの間に覚えたんですかー。レベルも上がってないのに」

「そうだよ！　レベルが上がらないのが問題なんだよ！　こんなバカみたいに突進→全滅→突進→全滅を繰り返してどうすんだよ！」

「でもトメさん。スライムって一番弱い魔物ですよ？」

トメはにっくきスライムを睨みつけた。

「だいたいな、そこのスライム！」

「あんだよ」

「うわ、喋った！！」

スライムのレベルが上がったことにより、かしこさもアップしたようだ。

「あ、あのなぁ！　なんでレベルが一つ上がっただけで喋れるようになったり火を吹いたりとかできるんだよ！　強くなりすぎだろ！？」

「あのなぁ人間。生物としてのレベルを上げる、なんてのは簡単じゃねぇんだぞ？　てめぇらだって人としてレベルアップするのは簡単にいかねぇだろが。だがそれでこそレベルアップしたときの成長も大きいってもんだろ」

スライムは正論をはなった！

「で、でもなんでスライムがそんな強いの！」

「なんでってそりゃ、芸人一座に倒されるような魔物ばっかなら街の人も苦労しないからだろ」

スライムの言い分はいちいちもっともだ！

「くそー、ツッコミどころが見つからない」

「がんばって、トメさん！」

「ったく、情けねぇな。おまえら一応勇者なんだろ？　だったら最初からそれなりに強いんじゃねぇのかよ」

「うー、私だって好きで勇者になったわけじゃないよ。本当はボケ勇者じゃなくて単なるボケだよ。日々ボケてツッコまれるだけの日々を過ごしたかったさ！　それをあの姉が！　なんでか魔王になんかなるから！　なによ魔王って。わけわかんないよ変だよありえないよ！　ある日お姉が魔王になりました？　ふざけるのも大概にしろっての！」

カカは混乱している。

「よくわかんねぇが、戦闘再開していいか？」

「うぇ！？　ちょ、ちょっとタンマ！」

勇者一行はおびえている。

しかし、そこでただ一人いつも通りほえほえ笑っていたサエちゃんが口を開いた。

「待ってくださいー」

「んだよ、魔法使い」

「ちょっとお聞きしたいのですが、魔物さんってみんなスライムさ

んのようにお強いのですかー？」

「あん？　まぁそうだな。だが俺様ってばレベル上がったろ？　さっきも言ったがレベルを上げるってのは大変なんだ。勉強して恋して挫折して、人生経験を積み重ねてようやくできるもんなんだ」

スライムはなんか年寄りくさい。

「そんなレベルアップを果たした俺様は、おそらくこの界隈では一番つえーだろうな！」

「ふむふむ、なるほどー」

サエちゃんは少し考えて、

「ではこうしましょう。スライムさん、私たちに雇われる気はありませんか？　三食昼寝つきでお給金も払いましょう。どうです？」

「俺様は松坂牛が好きだ」

「ごちそうしましょう」

「承諾だ！　仲間になりたそうにそっちを見てやる！」

「仲間にしますー」

スライムが仲間になった！！

「……ぇ、いいのか、これ」

「ふふふー、世の中には魔物使いという芸人さんもいらっしゃいますし、大丈夫でしょー」

芸人一座としてのレベルが上がった！

「そんなもん上がらんでいい！！」

「で、でもサエすけ！　松坂牛ってどうするのよっ、わたしたち、そんなにお金が」

「そうだよサエちゃん！　松坂さんなんて苗字の人は少ないだろうから、すぐにいなくなっちゃうよ！」

「牛って言ってんだろ！　別に松坂一族を献上するわけじゃない！！」

「そのほうが安くあがるよ」

「そういう問題じゃないわっ！」

熱くなるカカトメサユカに、サエちゃんはやわらかく微笑みながら――

「お金ならあるよー、ほら」

懐から、札束を取り出した。

「さ、サエちゃん、それ、どこで」

「あははー、何言ってるんですか。この世の中には生命保険という

ものが不可欠じゃないですかー」

「え……まさかつまり、僕らが死ぬたびに」

「そう、そのたびに保険金がおりてたんですよー。冒険に出る前に王様とちゃんと契約しましたので」

「……私たちが全滅すればするほどお金持ちになるってこと？」

「そうそう、お金がなくなったら死ねばいいんだよー」

とんでもないＲＰＧだった。

「も、もしかしてサエすけ、今までわざと死んでた！？」

「ノーコメントですー」

「な、なぁ。いいのかなこれ。なんだかルール違反のような」

いまだ心配顔の仲間に、サエちゃんは眩しいばかりの笑みを見せた。

「ルールを破るのが魔法というものでしょー。私、魔法使いだからいいんです」

笑顔でものすごく身勝手なことを言う。

「よし、肉を食わせるがいい！　食った分働くぞ俺様は！」

「あははー、じゃあご飯に行きましょうか」

「お、おう」

「待ってよサエちゃん。まずはスライムさんに名前を！」

「いいの……？　こんな展開、いいのっ！？」

強い味方を得た一行！　しかし、結局いまだに誰のレベルも上がっていない。こんな調子で魔王までたどり着けるのだろうか！？

次回、『あれやこれやで次の町！　レベルは……？』をお楽しみに！

## カカの天下３２６「カカ天クエスト　ＥＰ３」（後書き）

冬休みだし……ということでつけてみたゲーム。
今日も今日とてレベルは上がらず、しかし一歩前進したような気も。
にしても生命保険とかレベルアップのうんちくとか……リアルなんだかファンタジーなんだかワケワカランゲームだ。
きっとプレイしてるカカたちはこんな風に思っていることでしょう笑

# カカの天下３２７「真夜中の決闘」

「……さむ」

自分の身体の震えで思わず目が覚めてしまったカカです。

もうすぐ冬休みも終わってしまうとのことで、今日はサエちゃんの家でお泊り会を開いてみました。適当にゲームして遊んで、疲れて、サエちゃんの広いベッドで三人仲良く眠っていたのですが……

しょぼしょぼする目をこすりながら、私はむっくり起き上がりました。

ボーっとする頭で周囲を見渡す。

自分にかかっていた毛布がない。道理で寒いわけだ。

隣を見る。サユカンが寝てる。こっちも毛布をかぶってない。

「……しゃむい」

サユカンが呟く。同感だ。

そしてサユカンの向こうにはサエちゃんが寝ているんだけど……

毛布をかぶってる。三人してかぶっていた大きい毛布を独り占めしてる。

「むー、なにしてんのー」

まったくもー……私はのろのろとサエちゃんの方へとはいずり、毛布を引っ張る。

サエちゃんはちょっと抵抗したけど、見事毛布の奪還に成功。サユカンにもかけて、私にもかけて、と。

「あったきゃい……」

うむ、同感。

「よし……これで……ねれふ……むにゃ」

意識がくらーくなっていくぅ……ん？

耳元でなんか聞こえる。

「――沈む、沈むー、海に落ちたー海に落ちたー」

むにゃ……落ちたの……？　そいえば身体が重いような……

「沈むー沈むーどんどん沈んでくー浮き上がれないー。着ているものを捨てなければー」

そ、そだね……まずは、なんか身体にかぶさってる重い布を跳ね除ける！

ゴン。

なんか引っ張ったものが意外に簡単に引っこ抜けて勢いあまって

ベッドから落ちたような音が聞こえたけど、とにかく軽くなったー。

じゃ次は服を……もぞもぞ……あれ、なんも聞こえなくなったなぁ。でも身体は軽くなったしこれで浮き上がれる……助かる……水が冷たいから早く上に……上に……

「って、寒いわ！！」

この後の展開に身体自身が危険を感じたのか、妙な夢を振り切って飛び起きる。

脱ぎかけてたパジャマを着なおし、ぐりんと首をまわす。視界に入るのは――

「ちゃむい」

ふるふる縮こまっているサユカンと、毛布でぐるぐる巻きになってぬくぬくしてるサエちゃん！

「……ゆるさん」

私はサエちゃんの耳元に口を近づける。

「よいではないかーよいではないかー。あーれーお代官様お戯れをー」

「あ、あーれー」

「あれーれー。帯を引っ張られてぐるぐる回るー」

「ぐ、ぐるぐる回るー」

私は毛布の端をつかみ、思いっきり引っ張った。

「ぐ、ぐるぐるー」

夢でも回ってるおかげであっさりとぐるぐるゴロゴロ転がっていくサエちゃん。

ゴン！！

あ、ベッドから落ちた。まぁいいや。天罰天罰。

さ、サユカンにかぶせて。

「あたかー」

うんうん、さ、寝よ……あれ、そういえば私好きな子にこんなことしていいのかな……いいや、眠いし。

さて……ぬくぬく……ぐぅ。

「場所は洞窟、外は吹雪。いつ助けがくるかわからない絶望的な状況で、やってきました運命の選択！」

「……にゅ？」

「洞窟の中で震えるカカちゃんとサユカちゃん。そんな中、見つかった一枚の毛布。これをかぶっていれば一人は助かる、一人は凍死、さぁどうするー？」

「にゅー……さ、サユカン使って」

「か、カカしゅけこそ」

「わ、私はいいから、サユカン生きて、これ使ってー」

「い、いいからカカすけが使いなしゃいよー」

あれ？　押し付けあってた毛布がなくなった。

よかった、これで二人一緒に凍死して、一緒にいられる……

一緒に……

「凍死してたまるかぁ！！」

ガバッと起き上がり、愛しき毛布の行方を追う！

「おのれ下郎！　その毛布を誰のものと心得る！？」

毛布を取り戻そうとサエちゃんに向かって飛び掛り――サユカンにつまづいた。

「んにゃぃっ！？」

「わわわ」

そのままサエちゃんに衝突して、二人してベッドから落ちた。

ゴン！！

いい音ともに意識はブラックアウト……

……や、寒い。

寒い！

再びガバッと起き上がり――

「……あれ、朝だ」

のそのそと起き上がると、ちょうどサユカンやサエちゃんも起きだしたころだった。

「ん……おはよ、カカすけサエすけ……なんかわたしらすごい寝相ね」

「んー、めちゃくちゃー……あと、なんでか頭痛いしー」

「あれ？　わたしはわき腹が痛いわ」

「あれ、そういや私も頭が痛い……なんでかな。それに寒い」

よくよく見れば、私たちは三人とも毛布をかけていなかった。誰が跳ね除けたのか、愛しき毛布は机にかかっている。何ぬくぬくしてんだ机のくせに。

「寒いねー……毛布毛布」

「カカちゃん、かもーん」

「あ、わたしもわたしもっ」

「よーし、三人であったまろー」

私たちは三人仲良く毛布にくるまってくっついた。

「あたかー」

「あたかーいねー」

「あたかいわーっ」

三人してほのぼの毛布に丸まりながら、無意味にごろごろ転がった。

ごろごろ。

ごろごろ。

あ、ベッドから落ちる。

ゴン！！

「……痛いわっ」

「なんでだろう、またかって思うのは」

「わかんないー、けど私も思ったー」

「頭ぶつける夢でも見たんじゃないの？」

「なんだかそんな気がしてきたー、覚えてないけど」

「私も」

どんな夢だったっけ？　忘れちゃった。

……温かいし眠いし、ま、いっか。

## カカの天下３２７「真夜中の決闘」（後書き）

寝ぼけてるときの記憶って曖昧ですよねぇ。

これは、そんなお話。

毛布の取り合い、兄弟いる人には覚えがあるのではないでしょうか。まぁここまではやらないでしょうが＾＾；

……んー、でもやるとこはやるのかな笑

# カカの天下328「雪の妖精選手権」

こんにちは、カカです！

とても楽しくてすごく面白くてなぜか頭が痛かったサエちゃんちのお泊り会も終わり、ただいまサユカンと一緒に帰り道です。

他愛のない話をしながら歩いていると、不意に首筋がひんやり。

空を見上げると、はらはらと舞い落ちてくる白い粉。

雪が降ってきた。

「綺麗ねっ」

「ホコリみたいだね」

「「……」」

「もう、カカすけはロマンがないわねっ」

「だって雪が降ったら車は滑るし電車は止まるんだよ？」

「め、珍しくまともなことを」

別に内心「わーい」なんて思ってないよ？

ホントだよ？

……実はわーいわーい！

「いいじゃない雪！　なんだか雪が降るとさ、一緒に何かが訪れたりしそうな気がしない？」

「訪れるって、風邪とか事故とか不幸とか？」

「違うわよっ。ほら、たとえば……その、雪の妖精さん、とか」

またメルヘンなことを……でも絶好のからかいネタだ。そう思ってサユカンにニンマリと笑いかけようとして――ソレが目に入った。

「きっと……青く光ったり白く光ったりして、ふわふわしてて儚い妖精さんなんだろうなっ。会ってみたいわっ」

「サユカン。あれじゃない？　その妖精さん」

「えっ、ど、どこ！？」

私が指差した先には――この寒いのにランニングしてるおじいさんが。

「……あのじーさまのどこら辺が雪の妖精なわけ？」

「顔が青白いよ？」

「寒いからでしょっ！」

「頭が光ってるよ？」

「つるっぱげだからでしょっ」

「ふわふわしてるよ？」

「あれはふらふらよ！　歳なんでしょっ」

「老い先短いから儚いよ？」

「かわいそうでしょっ」

や、わりかしサユカンもかわいそうなこと言ってるよ？

「わがままだなぁ。ちゃんとサユカンの条件満たしてるのに」

「全部こじつけでしょっ。大体ね、妖精っていうのは羽が生えてるもんなのっ」

「お亡くなりになったらきっと羽が生えて昇ってくよ」

「だからそういう寂しいこと言わないのっ」

そんな感じでサユカンと言葉遊びをしていると、新たな妖精候補が走ってきた。

「あ、じゃあサユカン。あの人たちは？」

「あの走ってくる二人？　どこらへんが雪の妖精っぽいのよ」

「服が白い」

「それだと夏の方が雪の妖精増えるじゃないの」

「夏はカキ氷の妖精ってことにすれば――あれ？」

「あらっ」

よくよく見ればその白いコートのお二人さん。テンカ先生とサカイさんだ！

「こんにちはー。京都から帰ってきたんですね。そんなに走ってどうしたんですか？」

「ちょっと遅いですけど、あけましておめでとうございますっ」

そんな私たちの挨拶に返ってきた答えは、

「ゼーハーゼーハーゼーハーゼーハーゼーハー！！」

「はぁーふぅーはぁーふぅーはぁーふぅー！！」

この人ら日本語忘れたの？

「ゼーハゼー……ハー！？」

「はぁーふ！」

まるで犬みたいな会話を交わしたテンカ先生とサカイさんは、私たちに「悪い、また今度」みたいな視線を送ったあと、再び走りだした。

「な、なんだったのかしら」

「さ、さぁ……暑苦しい雪の妖精だったね。きっと今降ってるこの雪は、あの二人が滝のように流した汗が結晶化して」

「気色悪いこと言わないでよっ。それより――あの二人が帰ってきたってことはお姉さんも帰ってきたんじゃないの？　事件に巻き込まれたみたいなこと言ってたけどっ」

「そういえばそだね……お？」

三度私たちの方へ向かって走ってくる雪の妖精候補。

……や。

あれは雪男の仲間だ、きっと。雪女でないところがポイントだ。

ズドドドドドドドドドドドドドドド！！！

「な、なによあれっ」

相変わらずバカみたいに速いなー。すれ違いざまに声かけよ。

「おーい、そこの雪男」

キキィィィィィィィィィ！！！！　と急ブレーキをかける爆走雪男。

「久しぶり、お姉。無事に帰ってこれたんだね」

「シュコーシュコーシュコーシュコー！！」

どうやら雪男は未知の言語を話すらしい。

「ん？　ああ、何があったかは今度話す？　今は忙しいの？　わかった。いってらっしゃい」

「プシュー！！」

なんだか機関車っぽい音を立てながら、雪男もどきは再び爆走していった。

「な、何があったのかしら、京都で」

「うーん、お姉がテンカ先生とサカイさんを追っかけてるように見えたね」

本当にいったいなんだったんだろう。今度ちゃんと聞いてみる必要があるね。

ま、それはそうと。

「どれが一番雪の妖精っぽかった？」

個人的にはお姉かな。雪男っぽいとは思うけど、『ご近所の雪は姉が降らしている』という伝説をどこかで聞いた覚えがあるからだ。どこで聞いたかは覚えてないけど。

サユカンはうんうん唸って……やがて呟いた。

「雪の妖精なんかいるわけないでしょっ」

サユカンがそれ言っちゃおしまいでしょ。

「じゃあ間をとってサユカンが雪の妖精ね。この前のエロサンタ姿で雪降らしてきてよ」

「それを思い出させるなーっ！！」

ぽかぽかと殴りかかってくるサユカンをあしらいながら、適当に言ったわりに意外とハマってるかも、なんて思っていた。

だってさ、ぶっちゃけ妖精なんて、可愛けりゃいいじゃん？

だったら先の三つの例はなんだったんだっていう意見もあるかもだけど、それはそれね。

……もう一回くらいアレ着てもらおうかな。ふっふっふ。

## カカの天下３２８「雪の妖精選手権」（後書き）

三学期までになんとか帰ってこれた姉天酒の三人は果たしてなにをしてきたのでしょうか。この危険なお酒のお話は近日公開です。

それにしても通りすがりのおじいちゃん、うちの子らが失礼なことを言って申し訳ありませんでした＞＜

# カカの天下329「大人ということ」

「……お、なんだろあのイベント」

こんにちは、カカです。

今日は休日。昼間からゴロゴロしてるトメ兄に頼まれて買い物に行く途中、なんだか人がいっぱい集まっている場所を見つけました。

あ、看板がある。なになに……成人式会場？

ふむ……たしか大人の階段をのぼる集まりだっけ。どんな階段のぼるのか気になるなぁ。ちょっと突撃してみよう。

おー、人がすごいいっぱいいる！　しかもみんな綺麗な格好してるなぁ。こないだお母さんに着せてもらったみたいなやつだ。振袖だったっけ。それにしてもなんで女の人はみんな髪の毛がボンバーなんだろ。噴水みたいな髪の毛もあるなぁ。うーん、おもしろい。ところで階段はどこだろう。

「ねね、そこの人」

「うん？　なんだいお嬢ちゃん」

わからないので聞いてみることにした。

「お兄さんはもう大人の階段のぼったの？」

「へぇ！？　ぁ、いや、ま、まだ」

「なーんだ」

がっくり、ってあれ。なんで聞いてみたお兄さんのほうがガッカリしてるの？

「うぅ……どうせ僕はフラレ虫さ、２０歳になるまでに３５回連続でフラレた男さ」

「ははは！　おいタクヤ、凹むな。きっといいことあるさ！」

「そうよ！　３５回も彼女はできたんだから！　階段はのぼれなかったけど」

「３５回も踏み外すなんてなかなかできないぞ！」

「３５回もいちいち数えるのもなかなかできないわね」

「うあああああん！！」

なんだかよくわからないけど皆さん仲良し団体みたいだね。

「ねーねー、皆さんって大人なの？」

「おう！　成人式を迎えたからには大人だな！」

「へー。じゃあこのお兄さん以外は階段のぼっちゃったのか」

「えっと……お嬢ちゃんがどういう意味で言ってるかわからないが、その言葉はあんまり使わないほうがいいぞ。その言葉にはいろんな

意味があるからな」

む？　そなのか。

「とにかく、お兄さんたちは大人になったんだよね？」

「そうだ！」

「へー、へー！　具体的にはどう大人になったの？」

「えっと、お酒が飲めるとか！」

「じゃあ今までは飲んだことなかったんだ」

「そ、そういうわけじゃ……仕事の付き合いとかで、ちょーっと」

「む？　んじゃ変わってないじゃん。他は何が違うの？」

「えーっと、そうだ！　年金を払ったり、住民税を払ったりとか……」

「お金払うようになっただけなの？」

「「ガーン！！」」

あれ、なにやらショックを受けてる皆さん。

「お、俺たち、本当に大人になったのか？」

「いや、そんなこと言われても……でも、今日を迎えて何が変わっ

たかって言われると……思い浮かばないな」

「むううう……あ！　デストロイヤー教頭だ！」

「え！？」

おぉ？　本当だ。名前を呼んだのが聞こえたのか、こちらに向かってくる。

「やぁ、君たち。何年ぶりだろう」

「お、俺らのこと覚えてくれてましたか！？」

「教え子を忘れるわけがなかろう……おや、君は」

「ど、どもー」

「なぜここに――」

「教頭先生！　俺たち、聞きたいことがあるんです！」

ナイスさえぎり。なぜここに来たかと言われても「ノリで」としか答えようがなかったからね。

「昨日と今日の僕らは本当に違うんでしょうか？　僕らは、本当に大人になったんでしょうか！？」

わりと切羽詰ったその質問に、教頭はわりとあっさり答えた。

「んなわけなかろう」

「があああああん！！！」

若者の希望をデストロイ。

「そ、そんな！」

「じゃあこんな日なんか意味ないじゃないか！」

「そうだ！　成人式だの成人の日だの、意味ないじゃないかぁ！！」

嘆き、悲しみに暮れる若者たち。あわれ。

しかしそんな彼らに――デストロイヤー教頭は厳かに口を開く。

「それは早計だぞ。意味があるか無いかは、人によるのだから」

「……え？」

「成人式。その日は一般的には若者が大人と認められる節目の日である。建前はな」

出るか、建前デストロイ！

「実際は単なる休日。若者に騒ぐ口実を与える日でしかないのが現状だ。今では先達の助言を真剣に聞く若者も少ないからな。だが――その騒ぐだけの日を意味あるものにはできる」

力ある声に惹かれたのか、周囲で騒いでいたグループも静まって教頭の話に耳を傾ける。

「久々に会う同級生と友情を深め直すもよし、これを機に新たな友好関係を築くもよし、成長した友から何かを学ぶもよし、世話になった教師や親御さんに礼を言うもよし……また、酒を飲み騒ぎ楽しむだけでもよし。その日を意味あるものにするかどうかは君ら次第ということだ」

「意味ある、ものに」

「そうだ。大人などという曖昧なものに「なれた」などという節目など、実際はない。だが、この日を意味あるものにし、自身が理想とする大人に近づくことはできる。しかし覚えておくがいい。世間的に大人と認められようが認められまいが、君らは君らでしかないのだ。日々精進し、成長すべきなのである」

教頭先生のお話は難しくて、正直よくわからない。でも、なんか、みんな真剣に聞いてる。

「ふむ、少し厳しいことを言ったな。だが――あえて、世間的に大人と呼ばれるまで成長した君らに、おめでとうと言わせてもらおう。先達としてできるのはそれくらいだからな。今日を――いや、日々を意味あるものにするのかどうか、それは君ら自身で考えるといい。少なくとも――それができるのが大人というものだろう？」

「「……はい！！」」

おー、なんかいい話だったのかな？　皆やたらと元気になっちゃった。

「よし……ところでカカ君」

「は、はい！？」

お、怒られるのかな。

「君は私の言ったことがわかったかね？」

「よーわかりまへん」

「はっはっは、そうかそうか。つい説教くさくなってしまうのは昔からのクセでね。そう、今の若人たちがあの小学校にいたころからの、ね」

「そのころからデストロイヤーだったんですね」

「そう呼ばれていたな。結構気に入っておる」

「似合ってますよ。ところで今のお話、もしかしてこういうことかなーってのはあるんですけど」

「ほう、なんだね？」

「毎日を大切にしなさい、ってことじゃないの？」

「……君は、なかなか頭がいいようだ」

「正解？」

「ああ。君は毎日――聞くまでもないか」

「うん、楽しいよ！」

「それはよかった」

うんうん、私も追い出されなくてよかった！　いまのうちにこっそり抜け出そ。

それにしても……あんな難しいお話じゃないと納得しないなんて、大人って面倒くさいね。毎日を大切に。それだけで済む話なのになぁ。

## カカの天下３２９「大人ということ」（後書き）

成人の日、ということで成人式のお話なんか書いてみました。コメディ要素は少ないですが、教頭がどうしても喋りたがったもんで^^;成人式は昨日だった、とかいうツッコミはなしにしてください。昨日書けばよかったなぁって書いた内容見てから後悔しましたが……

でも、意味あるものにすべきなのは昨日だけじゃないと思います。きっかけさえあればどれだけでも日々は意味づくものだと思うので……どうか、皆さんが毎日楽しく過ごせますように^^

あと、成人を迎えた方がいらっしゃいましたら、私のほうからもおめでとうと言わせていただきます。すばらしい大人になれますよう、願っております！

## カカの天下３３０「それぞれの野望」

「おはよ、とお久。元気にしてたかてめぇら」

「「おはようございまーす！」」

皆と一緒に大きな声で挨拶！　久々に学校なカカです！

そう、冬休みも終わり、今日から三学期の始まりなのです！

「てめぇらがどんな冬休みを過ごしたかはあとで聞いてやる。とりあえずは出席だな」

「先生はどんな冬休みだったんですかー？」

出席簿を片手に取ったテンカ先生にあえて聞いてみるサエちゃん。

でも……

「……聞くな」

ほんと何があったのかねぇ。

出席も取り終わり、クラスの皆でぞろぞろと始業式へ。

まー特筆することのない式でした。教頭が喋んないと面白くないんだよね。

それで再び教室へ。

「さて、宿題の回収だな。だがその前に授業っぽいこととしなきゃなんねぇみたいだ。面倒だが」

相変わらず教師のセリフっぽくないなぁ。

「んーとな、あれだ。新年の抱負！　それぞれなんかあるだろ。それ順番に語ってけ」

新年の抱負……えっと、つまり今年中にやりたいこととか目標だよね。

「適当に順番に行こう。まずは西革」

「西川です……でもうちから西にある市が村に名前を変えたから、僕は西村になりそうなので――」

「西方向にどんだけ村やら川やら国やらあると思ってるんだ。そんなこと言い始めたらキリねーぞ。西アフリカとかいう名前になったらどうすんだ」

それ国じゃん。

「２４（にし）キロ以内が範囲です」

この人も結構よくわかんないこと言うよね。

「それで？　西村になりそうだからどうすんだ」

「その村を滅ぼします」

「やれるもんならやってみろ。はい、次」

うーん、先生ドライだ。

「次はアヤだな」

「CDを五枚作ります」

「やれるもんならやってみろ。次」

はやっ。

「カレーがすべて」

「ソウデスカ。次」

え、今の、抱負？

「えーとですねー、友達がカカちゃんのお兄さんのこと好きなので、その恋を成就させてあげたいですー」

お、サエちゃんだ！　うーん、いいこと言うなぁ。

「それから、私の担任の先生もそのお兄さんとくっつけましてー」

……は？

「どっかのお皿も多分くっつけられると思いますので、それもー。そしてドロドロになったところへ、さらに妹に手を出すように仕向けて禁断の愛を育みましてー」

あ、あの、もしもしサエさん？

「そして盛り上がりが最高潮になったところで、私がお兄さんを奪います」

「「最後はおまえが奪うんかい！？」」

私と先生、クラスメイトのツッコミが見事に重なった。

「はい、まさに豊富な抱負でしょー？」

「サエちゃん、それ言いたかっただけでしょ」

「てへ♪」

なんかサエちゃん、私のお母さんと会ってから声マネだのダジャレだの妙にスキルを受け継いでるような……

「カカ、油断するな。サエは『冗談』だなんて一言も言ってない。本当にそのつもりかもしれんぞ」

「ま、まさかー」

「今年が楽しみですねー♪」

む、むぅ……怖い。

「じゃ次はカカ」

「はい？　あ、えっと。読書感想文を書き終えたいです」

「それ冬休みの宿題だろが」

「今年中に終わるかどうか……」

「今週中にやってこい。で、今年の抱負ほかにねーのか」

「これを超えないと先のことは考えられません！」

「……じゃ、ついでに今年の抱負も宿題な」

むぅ、宿題が増えてしまった。

冬休みの宿題、読書感想文だけ忘れてたんだよねー。何読めばいいかな……

と、こんな感じに皆の抱負を聞いた後、宿題回収やらなにやらありまして……あっという間に下校時刻。せっかくだし合流したサユカンにも今年の抱負も聞いてみた。

「今年はトメ兄とどこまでいくの？」

「なんでトメさんのことって決め付けるのよっ！？」

「違うのー？」

「そ、そう、だけどさっ」

「でしょー？　で、どこまでいくのー？」

「……き、キス」

「「おー！！」」

これは、やっぱあのサンタ衣装を用意するしかないね！　さーどうしてくれようか。

……でも私はまず読書感想文か。くぅ、さっさと終わらせてサユカンで遊ばないと！

私は決意を新たにして、二人に聞いてみた。

「ねぇ！　私、何の本を読んだらいいと思う？」

「「常識の本」」

……そりゃないぜ、マイフレンズ。

んー、ほんとどうしよ。

## カカの天下３３０「それぞれの野望」（後書き）

新学期のはじまりはじまりー。
果たして彼女らの目標は叶えられるのか、そしてカカはどんな目標を抱くのか。はてさて……というか全部叶えられたらすごい話になりそう笑
……それもいっか（ぇ

## カカの天下３３１「サカイさん劇場」

どうしよっかなー……と悩み中のカカです。

読書感想文。本を読んで感想を書く。ただそれだけのこと。

でもいざ本を読もうとなると、いったい何を読んだらいいのやら……

「たまにしか読まないんだよね、本って」

漫画は却下って言うしなぁ。ライトノベルとかだったら昔に買ったのが少しあるけど、うちにある本の感想文は去年とかにもう出しちゃったし……

「せっかくサエちゃんやサユカンの誘い断ってまで帰ってきたんだから、なんとか今日中に終わらせないと……でもなぁ」

トメ兄の部屋にいって物色でもしようか。そう思い始めたとき、玄関のチャイムが鳴った。

「はいはーい」

がちゃっと扉を開けると、そこにはサカイさんが立っていた。

「あけましてー」

がちゃ。

「しめましたー」

扉が閉められた。え、や、何やってんの。

「というのは冗談でー」

再び扉を開けてニコニコ笑うサカイさん。

「新年の挨拶、ちゃんとしてなかったでしょー。ですから改めまして、あけましておめでとうございますー」

「あ、そういえばそうだね。あけましておめでとうです、今年もよろしく！」

こないだの挨拶は「ハァハァ」だの「ぜーぜー」だの「シュコーシュコー」だのだったからね。

「よろしくですー。トメさんはいないのかな？」

「まだ帰ってませんね。待ちますか？　私はちょっと宿題しなきゃなんないんで相手できませんが」

「えー、さーびーしーいー！　相手してよーカカちゃん」

子供かこの人。

「宿題って何やってるのー？」

「読書感想文ですけど、その……何の本を読むか迷ってて。今週中に出せって言われたけど、私そんなに早く本読めないし……」

「よし！　おねーさんに任せなさいっ。カカちゃん、読書感想文で本を読むのが面倒だったらね、本を読んだ人の感想を聞いて、その感想を書けばいいんだよー」

な、なるほど。なんかズルい気もするけど……

「もしくは、そうだね。自分で適当に話を作って、こんなの読みましたーこう思いましたーって全部それっぽい嘘で塗り固めるとかー」

なんかサカイさんってサエちゃんに似てるなぁ。

「でも私、自分で話なんて作れませんよ」

「ふふふー。じゃあおねーさんが作ってしんぜよー。トメさん来るまで暇だしー」

やた、強力な助っ人登場！

私はサカイさんを自分の部屋まで通して、早速話を聞くことにする。

「それで、どんな話を作ってくれるんですか？」

「待ってねー……ふふふ、伊達に引きこもってアニメとかゲーム三昧だったわけじゃないのよー……むむ、きたきたー！　わたしはジョーイ！」

いきなりジョーイに変身した（別に見た目は変わらないけど）サカイさんは、ノリノリで一人芝居を始めた。

「ヘイ！　ちょっと聞いてくれよマイケル！」

「オゥ、どうしたんだい？　ジョーイ！」

ちょっと声色を変えたマイケルサカイさんの問いに、頭を抱えて嘆くジョーイサカイさん。

「実はワイフが今、家に男を連れ込んでるんだよ！」

ワイフって……あ、妻のことか。

「あぁ、大丈夫。それは単なる友達だ」

「なぜそう言い切れるんだい、マイケル！」

「俺もさっき君の家をちらりと見たが、君のワイフがその男と一緒に焼き芋を食べていたからさ！」

「それがどうしたんだい！？」

「好きな男の前でおならを連発する女なんかいないだろう？　ＨＡＨＡＨＡ！」

え……と。

「なんですか、それ」

「えー？　マイケルとジョーイのお話。続きはまだあるよ？」

「い、一応聞く」

世にも微妙なサカイさん劇場。再び開幕。

「へイ！　ちょっと聞いてくれよマイケル！」

「オゥ、今度はどうしたんだいジョーイ？」

「またワイフが男を連れ込んでるんだ、今度は別の男を！」

「さっき君のワイフが大量に焼き芋を買い込んでるところを見たが、今度も心配いらないんじゃないかい？」

「それが、食べながらふんばって我慢してるんだよ！」

「オゥ、それはデンジャーだ！　本気でその男を愛してるのか、本気でブラボゥなおならを溜めてるのかどちらだろう？　ＨＡＨＡＨＡ！」

なぜそこで笑うのかまったく理解できないんですけど。

「まだあるよー」

「き、聞く」

微妙に続きが気になる。

「Ｈｅｙ！　ちょっと聞いてくれよマイケルサカイ！」

「Ｏｈ、どうしたんだいジョーイサカイ！」

ちょっとアレンジ入りましたー。

「実は、俺っちってばワイフの心がわからないんだよ！」

「ならワイフの気持ちを確かめればいいんだＹｏ！」

「どうすればいいんだＹｏ！？」

Ｙｏ！　Ｙｏ！

「簡単さ！　一緒に焼き芋を食べてワイフの反応を見るのさ！」

「なるほど！　早速試してみるぜ！」

「数十分後……」

あ、これナレーションか。

「ＨｅｙＨｅｙ！　聞いてくれよマイケル！」

「ＯｈＯｈ！　どうしたんだいジョーイ！」

ノリノリだねぃＨｅｙＨｅｙ！　ＯｈＯｈ！

「一緒に焼き芋を食べてたら俺っちが屁をこいちゃってフラレちまったよ！」

「そいつぁやられたな！　ＨＡＨＡＨＡ！」

……や、だからなんでそれで笑うのさマイケルサカイさん。

「計画通りだ！　君の奥さんはこのマイケルがいただくＺＥ！」

「Ｏｈ！？　Ｎｏｏｏｏｏｏｏｏｏ！！」

そういうことか！？

「ふふふー、どうですか？　わたしのお話は！」

「サカイさん、焼き芋食べ過ぎちゃダメだよ」

「な、なんでわたしのお昼ご飯知ってるんですかー！？」

そんなことだろうと思った。

「ともかくー、これで感想文が書けるねー！」

「え、今ので、原稿用紙二枚も、感想を書けと？」

「もちのろーん」

う、うーん……

翌日。

「先生、どうですかその感想文」

「延々とおならの感想が書いてあるんだが」

それしか書くことないもんよ。

「……まぁいい。この本のタイトルは？」

「えっと……おなら物語？」

「なんで疑問系なんだよ。で、作者は？」

「サカイさんです」

「なるほどな、うん。却下！！」

「なぜ！？」

「本を読んでねーからだよ！」

Ｏｈ！？

## カカの天下３３１「サカイさん劇場」（後書き）

「ヘイ、ちょっと聞いてもいいかいマイケル！」
「オゥ、どうしたんだいジョーイ？」
「聞けば俺っちのワイフを東京湾に沈めたそうじゃないか！？　なぜだい！　俺っちから奪うほど愛してたんじゃないのかい！？」
「それは違うさジョーイ！　このマイケルが奪いたかったのは……君さ、ジョーイ」
「Ｏｈ！　Ｏｈ！？　Ｎｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏ！！！」

以上、今回の没案でした。

## カカの天下３３２「好きこそものの上手なれ」

「んむむむ」

ども、いまだに悩んでいるカカです。

読書感想文がどうしても終わらず、今日も今日とてサエちゃんサユカンと遊ぶのはキャンセルです。ここはもう腹をくくって普通に書くしかないと、図書室になんぞ来てみたのですが……今度は本が多すぎて迷ってしまいます。

えと、まずはどんなジャンルの本を読むかだけど……

「常識の本、か」

サエちゃんサユカンの二人が冗談で言ったのか本気で言ったのかはわからないけど、貴重な意見ではある。一応探してみることにした。

この棚かな。えっと、どんなタイトルの本があるかな……

『どんなバカでもわかる常識、非常識』

バカって……読む気なくす。他は……

『よい子の常識、腐った子の非常識』

子供を腐った子呼ばわりする時点で、あんたの常識が危ういと思う。

『これは当然、これは論外。そんなこともわかんないなんて、あんたバカ？』

ムカ。

『えぇ～こんなこともぉしらないのぉ～マジでぇ～ちょ～しんじらんなぁい』

ムカムカ。

『人生やり直せ』

余計なお世話だ！

『この型破りが！！』

そんなタイトルの本のあんたに言われたくない！！

……なんかムカつく本ばっかで読む気がしない。というか本当にここは常識の本棚なのだろうか。

いいや、とりあえず他の本を読もう。うーん、ここは有名どころをいっとくべきなのかな。例えば……これ、『罪と罰』とか！

「ヘイ！　ちょっと聞いてくれよマイケル！」

「オゥ、どうしたんだいジョーイ？」

「この本、『つみとばつ』じゃなくて『みつとつば』だＹｏ！」

「オゥ、『蜜と唾』かい？　途端にアダルティになったじゃないＫＡ！」

ちょっと黙れ、マイケルとジョーイ。

いやね？　昨日のサカイさんの話を聞いてから私の頭の中にもマイケルカカとジョーイカカが住みついたらしくて……たまに喋りかけてくるんだよ。

「ヘイ！　ちょっと聞いてくれよマイケル！」

「オゥ、どうしたんだいジョーイ？」

「この子が手に取っている本、かの有名な『ハムレット』かと思えば『オムレット』だよ！」

「オゥ、美味しそうな絵が載ってるね！　しかもそれを聞くとなんとなく『ハムレット』もハムがおいしそうに聞こえて――」

あぁもう、うるさい！

「ヘイ、ご機嫌ななめだね、カカ！　こんなときは俺っちのワイフの話をしてあげよう！　ワイフときたら毎日毎日焼き芋を食べていてネ？　ぶーぶーぶーとお尻で呼吸をしているみたいなんだＹｏ！」

「オゥ、それはつまりお尻と肺が直結して――」

そ、の、は、な、し、は、も、う、い、い、Ｙｏ！！

いつかの福笑いみたいなワイフとやらは置いといて、とにかく本を探さないと！！

「あら、笠原さんではございませんか！」

焦っていた私にかかった妙に丁寧な声は。

「お、イチョウさん。カカでいいのに」

「そ、それはまた次の機会に……ところで、こんなところに何をしにいらしたのですか？」

「私がここにいたら変？」

「ものすごく」

い、意外とハッキリ言う子だな。

「へ、ぁ。ああ！　いえ、別に笠原さんに本が似合わないとか知性が感じれられないとかそもそも文字が読めるのでしょうかとか心配してしまったわけではないのですよ！？」

「ほんとハッキリ言うね。見直した」

「違うのです違うのです！　笠原さんはいつも元気なイメージがありまして、しかるにこういう静かなところにはこないのではないかと思っていまして！」

「たしかにあんまり来ないけどね」

自分でもこういう静かなところは似合わないと思う。なんか突然大声で叫びたくなるんだよね。

「ヘイ！　叫ぶぜマイケル！！」

「がってんだ、ジョーイ！！」

おまえらは叫ぶな！！

「ねね、イチョウさん。なんかお薦めの本とかないかな。読書感想文で迷ってるんだけど」

「まだ出していらっしゃらなかったのですか？」

「うん……イチョウさんはもちろん出したよね？」

「はい！　書いてるうちに止まらなくなっちゃって原稿用紙３００枚も書いてしまいました！」

「そ、それだけで本にできるんじゃ」

「あ、あはは。そうですね。一般的な小説大賞に応募できるくらいの量になってしまいまして……先生も困ってらっしゃいました」

じゃあその感想文の感想を私が書く――てのもダメか。それなら普通の本を読んだほうがマシだ。

「はぁ……いいな、そんなに本好きで。私なんか本が苦手で……」

「そうですか？　でも、これでしたら笠原さんでもすんなり読めるんじゃありません？」

「えー、そんな普通に厚い、ほ、ん……」

ぁ、ああ。

そうか。

これが、あったか。

翌日。

「テンカ先生、これ！」

「おー、書いてきたか、って昨日の今日で早いな。また適当なものじゃないだろうな？」

「そんな！　２時間で本を読んで３０分で書いたんですよ！」

「本好きならそれくらいやるだろうが、カカだしなぁ」

「ちゃんと内容を読んでからものを言ってください！」

「どれどれ……」

テンカ先生が覗き込んだ感想文のタイトルは――

『読書感想文　『初恋は実らない』を読んで』

「……ハハ、なるほどね」

ドラマで内容は知ってたおかげか、文章で改めて読んでもすんなり頭に入ってきて……なんだか新鮮な感じがしておもしろかった。

でもやっぱり――冒頭にはこう書いた。

『ヒロイン格好いい！　最高！』

「これ、役者の話じゃないのか？」

「全然そんなことありません！」

実は否定できないけどね。

テンカ先生は面白げにざっと文面を見渡し、頷いた。

「ま、いいだろ」

「やた！」

「ちなみに見たところ、おまえが読んだのは一巻だけだな」

「へ、あ、はい」

「次も読め」

「そ、それ宿題ですか」

「そうだ」

テンカ先生、もしかしてこれのファンだったりする？

私もこれならすんなり読めるからいいけど。

「……もしかして先生、クリスマスのとき隠れてお母さんにサインとかもらったり――」

「さ、さぁ！！　授業だ授業！」

もらったな、これは。

## カカの天下３３２「好きこそものの上手なれ」（後書き）

「ヘイ、ちょっと聞いてくれよマイケル！　もしかして俺っちらってばレギュラー化じゃないのかい？」
「オゥ、ジョーイ。残念ながらそれはないんだＹｏ！」
「どうしてだＹｏ！」
「作者が飽きたんだＹｏ！」
「Ｎｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏ！？」

## カカの天下３３３「お餅は何味がお好き？」

ドスン！　ドスン！　ドスン！！

どうも。除夜の鐘よりも毎年聞き慣れている音を耳にしながら「今年も始まったんだなぁ」と改めて感じているトメです。

「こんにちはー、トメお兄……さん」

「お、おじゃましま……すっ」

「ああ、サエちゃんサユカちゃん。いらっしゃい」

我が家に遊びに来てくれた二人は、庭で展開されている光景を見て呆然としている。

それも仕方のないことだろう。ここまで見事に一人で餅つきをする人間なんかそうそういないだろうし。

「はっ！　せやっ！　うらぁ！」

ドスン！　ドバン！　ズバン！！

右手で持った杵で餅をつき、その間にぬるま湯でぬらした左手でこね、またつく。こねるのはもちろん、杵でつくのもかなりの力がいるだろう。そもそも杵は両手で使うもんだ。それを片手で、しかも普通の人が両手を使うよりも強くつけるのだから、姉もバケモノの面目躍如といったところだろう。

「毎年毎年よくやるよね、お姉も」

そう、カカの言う通り。これは毎年の行事なのだ。

お、ラストスパート。

「ぅおおおおおおおおおおおお！！！」

フォバババババババババ！！！

「とどめ！」

チュドォォン！！

とても餅つきとは思えない轟音。餅、大丈夫か？

高速餅つきを終えた姉は、一仕事やり終えた男の顔で汗をぬぐった。

「ふぅ、こんなもんか！」

「お疲れさま、お姉。去年よりずいぶんと速度あがったね」

「お、お姉さん、男らしかったですー！　いえ、これぞ漢字の漢と書いてオトコでしょー！！」

「とても人間とは思えませんっ！」

「あっはっは！　そんなに褒めるな！」

これを褒め言葉と受け取るあんたはホントにすげーよ。

「さて、じゃあ食べるよ！　あたしは混ぜ餅やってから戻るからー」

「はいはい、こっちは居間で準備しとくよ。みたらしのタレとかはできてるから、あとは並べるだけだし」

「手伝うよー」

「あ、わ、わたしもっ」

「同じくー」

カカサエサユカを従えて台所へ移動。用意していた餅セットを持ち、居間のテーブルへ並べる。するとサエちゃんとサユカちゃんは、改めてフシギそうな顔をした。

「な、なんかいっぱいあるんですねっ」

「ああ、そうだな。しょうゆ、きなこはもちろん、あんこ、みたらし、酢みそもあるぞ」

「さらには、ほいっと。こんなんもあるよ」

臼を片手に庭から戻ってきた姉がポンと皿の上に置いたのは、丸く千切られた黒い餅と、黄色い餅。

「これ何の動物のフンですかー？」

「いきなり食欲失せるようなこと言わないのサエすけっ！」

「あははーだって――」

軽く流そうとしたサエちゃん。しかし、

「そおおおおおおおおおおおうだあああぁぁっ！！　餅をバカにするとあたしが許さんぞぉぉぉぉぉ！！」

恐竜もビックリなでかい口に牙を生やして角も生やして悪魔っぽい翼を無意味にばっさばっさささせながらギャオーンと轟く姉の咆哮。（イメージです）

「す、すすす、すいませんー！　黄色いし黒いし丸いしてっきりー！！」

いつも余裕ニコニコのサエちゃんもさすがに縮こまっている。生存本能が警鐘を鳴らしているのだろう。なんか知らんが命の危機だ！　と。

「いいか！　これは黒糖餅とかぼちゃ餅だ！　そんなこともわからんのか愚か者！　貴様などこのあたしが食ってくれる！　くらえ、きなこボンバー！」

暴走した姉は皿にのっているきなこをつかむと、サエちゃんへ投げ放った！

「きゃー！　防いでサユカちゃんシールド！」

「ぅおいっ！？」

そしてきなこはサユカちゃんの顔に見事ヒット。

「そのモチモチしたほっぺたごと食ってくれるわー！」

「きゃあああああっ！？　ってぇ、なんでわたしを追いかけるんですか狙いはサエすけでしょおおおお！？」

「味のついてない餅なんかいらないからだあああああ！！」

「じゃあ味つければいいでしょおおおおっ！」

「今はきなこの気分なんだあああああ！！」

逃げるサユカちゃん。追うバカ姉。つかまるのも時間の問題だな。

「ん、おいしいね黒糖餅」

「かぼちゃ餅もいけるよー」

そしてマイペースな妹と薄情なサエちゃん。やれやれ……僕も臼から千切って食べよ。

「きゃあああっ！」とか「なめないでーっ！」とか「かじらないでーっ」とか結構悲痛なＢＧＭを聞きながら、僕らはいろんなお餅の味を堪能した。

え、僕ら全員が薄情だって？　あはは、ナニ言ってるんだよ。君ら、虎のお食事中に石投げることできる？　無理でしょ？　だって自分がお食事になっちゃうもん。くわばらくわばら。

「ふぅ！　きなこ餅おいしかった！」

「お、食べ終わったか。他のもちゃんと姉のために残してあるぞ」

残しておかないと僕らが食べられるからね。

「よろしい！　さー食べるぞ！」

意気揚々と餅に箸を伸ばす姉。

その後方には――顔についたきなこが綺麗になくなった代わりに顔が綺麗じゃなくなったサユカちゃんが、よろよろと立ち上がるところだった。さすがに見ていられなくて駆け寄るカカとサエちゃん。

「か、カカすけ……お、お風呂貸して」

「さ、災難だったねー」

「サエすけっ！　君ねぇ！」

「仕方ないよサユカン。お姉はね、餅が大好物なんだよ。餅を目の前にするとバカＤＸに変身するの。普段バカなのがバカＤＸになるの。どれくらいＤＸかと言うと『もちろん』って言葉を聞いただけで『モチロンって餅でできた怪獣の名前か！？　食ってくれるわ！』とか言って旅に出るくらいのＤＸなバカになるの」

「クチャクチャクチャクチャ！？（誰がＤＸバカだって！？）」

「「ひっ！？」」

餅を口に入れながら現れた姉に怯える三人。仕方ないなぁ、もう。

「ほれ姉。キムチチーズ餅作りに台所いくぞ。オーブントースターないとできないからな」

「クチャ！？」

「はいはい、もちピザもできるよ。用意してあるから」

「クチャ♪」

餅魔人の手なずけ成功。

「ほれ、おまえらはこの間にサユカちゃんを風呂に入れてこい」

「「はーい」」

しかし毎年毎年なんでこう暴走するかね。こんなだから『一年に一度しか姉は餅を食べてはいけない』なんて家訓ができるんだよ。

……あれ、もしかして抑制してるから爆発するんか？

「クチャクチャ！」

「はいはい、用意するよ。だからひと段落したら年末年始の事件を聞かせろよ」

「クチャ！　クチャクチャ？」

「ああ、言わなきゃダメだ。警察の世話にもなったんだろうが」

「クチャ……」

「いいかげん餅飲み込めよ」

## カカの天下３３３「お餅は何味がお好き？」（後書き）

クチャクチャクチャクチャ！（次回から姉天酒の正月旅行のお話だよ！

# カカの天下３３４「新年あけまして湯煙殺人事件！？　前編」

よぅ、あたしカツコ。

トメたちがうるせーもんだから、今回は年末年始にあたしらが行ってた旅行の話をするぜぃ！

事の発端は、あたしが眺めていた雑誌に載っていたこんな記事。

『年末を過ごす恋人や家族がいない、寂しいあなた！　本旅館はそんなあなたをお待ちしております！　お客さまの境遇が寂しければ寂しいほど安くなる――寂しいサービスプラン登場！』

まぁ、簡単に言えばその旅館に電話して『家族が相手にしてくれないんです！』とか『ずっと恋人がいないままで……』とか身の上を話して、その寂しさに応じて安くなるというもんだ。

あたしらは早速電話してみることにした。

「家族にバケモノ扱いされてる」

「娘と生き別れたまま会えず、悲しみのあまりに無気力ダメ人間街道まっしぐらですー……」

「けっ、どうせオレみたい男くさい女に彼氏なんざできねーよ。親？　何年も話してねぇな」

「僕ぁ奴隷です！　でも幸せです！」

結構安くなったぜ。

「「「カンパーイ！！！」」」

と、いうわけで。

京都の山奥の温泉旅館へとやってきたあたしとサカイちゃん、テンちゃんにシューは、早速宴会を始めることにした。

「あ、あの……お姉さま。最初って普通、温泉なんじゃ」

「何言ってんのシュー。旅行といったら、到着して飲んで、ご飯前に飲んで、ご飯の後に飲んで、風呂前に飲んで風呂後に飲んで寝る前に飲んで起き抜けに飲んで――っていうのが基本でしょ」

「あははー、カツコちゃん。それ、普通は温泉に入る回数だよー」

「ま、それに付き合ってるオレらも姐さんの意見をとやかくは言えないがな！　あむ……んまいなこの料理」

んむんむ、たしかに値段のわりにはいい料理を出してくれる。

旅行前に急いで大掃除をした後に、結構な時間をかけての移動……さすがのあたしも疲れたし、着いて早々食事&飲み会ってのはいいプランだったと思う。食事前の飲みが抜けたのが残念だけど、食事中に飲めば一緒だし。

「ところでさ、あたしらみたいな美女三人が湯煙の旅に来てるんだ

から、やっぱり事件が起こると思わない？」

「あははー、友達だけで寂しいサービスプランで来ている時点で『美人』なんて言葉もむなしいですけどねー」

「あ、あの……一応僕もいるんですけど」

「シューはあれだ。かばんについてるキーホルダーみたいなもんだから数に入ってねーんだよ」

「簡単に言うとおまけですねー」

「簡単に言わないでください！　まったくも――みきゃ！？」

料理を口にした途端に奇声を上げたシューは、口を抑えながらドタンバタンとのた打ち回った。

「ちゃ、茶碗蒸しが、かりゃい！！」

「は？　オレが食べたのは普通の味だったが」

「ふふー。犯人は誰でしょうねー」

「サカイちゃん以外にありえないと思うんだけど」

そんな風にさも「してやったり」みたいな顔されるとわかりやすいことこの上ない。

「ピンポーン♪　と、いうわけで、こんな風に事件を起こしてみませんかー？」

「ほぅ。というと？」

「今夜で年越しですが、この旅行は二泊三日。もう少し時間がありますよねー。その間にみんな各自で事件を起こします。そしてその犯人は誰か当てるんですー」

「へー、面白いこと考えるなサカイさん。事件の内容はなんでもいいのか？」

「はい、今のわたしのようにシューさんに唐辛子を仕込んだり、っていう簡単なのもＯＫですよー」

てかサカイちゃん。茶碗蒸しに唐辛子なんかいつ入れたのさ。まさか調理前に？　や、そんな忍者じゃあるまいし……

「そしてもちろん、おおきい事件でもいいですよー。例えばー」

サカイちゃんが指差した先には一組の男女。って、あれ。

今この旅館には寂しいサービスプランのお客さんしかいないはずだ。だからこんなだだっ広い宴会場をお客みんなで共有で使うという、寂しい人らへの大きなお世話的なサービスになってるのだが……

「ぼ、僕は君とは別れたんだ！　寂しい人間になったんだ！！　だからもう、付きまとわないでくれ！！」

「そんなこと言わないで！　寂しいなら私がいるじゃない！？」

なんだか修羅場っぽい。そういうのはここに来る前に済ませてく

ればいいのに……

「何なんだよ！　こんなところまで追いかけてきて！？」

「だって、だって！　私があなたと別れる理由なんてないじゃない！？　そりゃ、私もちょっとやりすぎたわよ？　あなたのお弁当に『Ｌｏｖｅ』ってでっかく書いたり、あなたのスーツに勝手に『Ｌｏｖｅ』って縫い付けたり、『Ｌｏｖｅ』って書いた鉢巻と『Ｌｏｖｅ』って書いたＴシャツ着ながら『Ｌｏｖｅ』メガホン振り回して仕事中にも関わらずあなたから離れなかったり、部屋中に『Ｌｏｖｅ』って言葉を筆で書いていっぱいにしてみたり、あなたの携帯の留守電とメールを『Ｌｏｖｅ』っていう声と文字で埋め尽くしてみたり、会社の社長やお役所に『Ｌｏｖｅ』申請書（自作）を送ってみたり――それってそんなにいけないこと！？」

さすがのあたしもそれはいけないと思います。

「……で、サカイちゃん。あの憐れな男がどうしたって？」

「殺して楽にしてあげるー、とかー」

「オレはどっちかというと女のほうを」

「ぼ、僕はあれくらい愛されたいかなぁ」

頬を染めるキモいシューは放っておいて。

「ま、やるとしたらあたしがやってやるさ。愛を受け止めるのも男の甲斐性！！　それができない軟弱者はあたしが打つ！」

「あれを受け止められる人はさすがにいないのではー」

「あたしはできるぞ。あたしがそいつのことを好きなら、の話だが」

「姐さんみたいにタフな人はそうそういねぇよ……ま、とにかくアレは放っておこうぜ」

そう、そのときのあたしはまったく気にしていなかった。

どうせちらりと目に入っただけのカップルだ。男を殺す？　はっ、ご冗談を。軟弱者だから。そんな理由で人を殺すほど、あたしはバカじゃないつもりだ。

だからそんなカップルのことは綺麗さっぱり忘れ、あたしは友人たちとの賑やかな年越しを迎えた。寂しいサービスプラン、なんて使ってるけど実際はまったく寂しくなんかない。一緒に酒を飲める友というのは、あたしにとって家族に勝るとも劣らぬ存在なのだから。

満足するまで料理と酒と話を堪能した――翌日。

飲みすぎて昨夜の記憶は曖昧ながらも身体は元気だったようで、ずいぶんと早起きしてしまった。

一足先に朝風呂を満喫したあたしは、部屋へ戻ろうと廊下をのんびり歩きながら、窓の外の景色を見ていた。うっすらと雪が降っている……外に出ればさむさむ地獄に違いないが、見ている分には雪で薄化粧した山は実に風情ある眺めだ。

そんな冬景色で目の保養をしながら歩いていると――とある部屋

に人だかりができていることに気づいた。

「どうしよう……」「大変なことになったわ」「事件よ事件」「ちっ、新年早々……」「け、警察」

ふむ、事件？

思い出すのは昨日のサカイちゃんの遊び。事件を起こして、その犯人役を当てる、という……まずい、もしかしてサカイちゃんやりすぎちゃったんじゃ！　そしてこんな騒ぎに……ヤバイよ！　あたしらの遊びを本気にしちゃう人がいたら！

「あ、すいませんすいません！！　それあたしのせいです！！」

あっはっはーと能天気な声で言った瞬間、ざわついていた喧騒がぴたりと止んだ。

「やー、すいません。ちょっと遊びのつもりがやりすぎちゃったみたいで――」

「やっぱり貴様が犯人か！！」

……れ？　なぜにこんなとこに警察のコスプレした人が？

「わ、私の……私のせいだと思って自首しようとしていたけど、実はあなたのせいだったのね！？　遊びっていったい何したのよ、この泥棒猫！？」

……れれ？　昨日の過激な女の子だ。

「仲居さんが証言してくれた。君が昨日、この男――被害者を、殺すと発言していたと！」

確かあの子のお相手にそんなことも言ったような……へ？　ヒガイシャ？

「君をタイホするー！！」

……はい？

死んだ？　あの男が？

で、あたしが犯人だって？

あー、「あたしのせい」って言っちゃったもんな。あははー。

マズイ。

## カカの天下３３４「新年あけまして湯煙殺人事件！？　前編」（後書き）

起きましたね、事件。
定番なものになるか、意外なものとなるか……それは次回からのお楽しみに♪

ただ、一言。
ま、この作品ってわりと色々書きますが……基本はコメディなのであしからず。
細かいこと気にして読むもんではありません（意味ありげ？　さーどうでしょう笑

# カカの天下３３５「新年あけまして湯煙殺人事件！？　中編」

「タ―イ―ホ―だー！！」

ツルッ、どてーん！！

……ども、テンカです。

朝、廊下が騒がしかったので起きて部屋から出てみると、そこには意外な展開が待っていました。

「タイホだ！！」といわんばかりにズビシッと指を突きつけている警察の人と、突きつけられている姐さん。警察の人は偉そうだが、なぜか背を床につけている。

「……警察さんや、あたしをタイホするんじゃないのかい？」

姐さんは呆れている。タイホだーとか言われてるのに落ち着いてんなぁ。もしかして初めてじゃねーのか。

「そう、貴様をタイホするのだ！」

「じゃあ寝てないで起きなよ」

「キメポーズが崩れるだろう！」

この世にはまともな警察はいないのか。

「コケといてポーズも何もないだろに。いいから起きなよ」

「ちっ、仕方ないな」

しぶしぶ起き上がる人。しかし、

「うおっとぉ！？」

足がもつれて壁に激突。だが姐さんから視線ははずさなかった。だから再び背中を強打。

「……酔っ払ってんのか」

「違うわ！　バカにした目で見るな！　こ、これでも俺は警察の中じゃ『コケまくりの鬼』という異名で知れ渡ってるんだぞ！　座右の銘は『俺がコケればみなコケる』だ！」

「警察が真っ先にコケてどうする！？」

「犯人もコケるから便利なんだよ！」

えーと……どういう状況だ、これ。

「昨日宴会場にカップルいましたよねー。あの男の方が部屋で亡くなったみたいですー」

「うぉ、サカイさんいつのまに――ってそれマジか？」

「はい、そこら辺の人に聞き込みしました結果ですー。それで警察さんが来たところに、カツコちゃんがうかつなこと喋っちゃったみたいでー」

うかつなこと……ああ、そういえば昨日も殺人予告に聞こえそうなこと言ってたなぁ。

「だから！　さっきあたしが言った『あたしのせい』っていうのは間違いで」

「間違いで人を殺したのか!?　タイホだ！」

「だから！　あれはあたしたちが昨日やってた遊びで」

「遊びで殺したのか!?　タイホだ！」

「だーかーらー！　つい」

「つい殺したのか!?　タイホだ！」

「話聞けやコケーさつ!!」

「妙にピッタリなあだ名をつけるな!!　タイホだ！」

ガキの喧嘩かよ。

「テンカちゃん、とりあえずいきましょー」

「あ、ああ……」

オレらは助け舟を出すべく、姐さんへと近づく。

「貴様らも仲間か!?　タイホだ！」

いい加減黙れ。

「聞いてくださいー。カツコさんの他に容疑者はいないんですか？」

「ふんっ、バカにするな。容疑者がいるなら軽々しくタイホなどと言うか！」

ま、普通そうだよな……

「まぁしいて言うなら、先ほど『私のせいで死んだのよ！！』と言ってきた被害者の彼女だな」

あぁ、あのイタい子か。

「さらにしいて言うなら、誰よりも早く朝食を部屋へ運ぼうとした仲居もいるが」

……ん？　つまり被害者に最後に会ったということか。

「あとは彼の隣に部屋に泊まっていた指名手配中の猟奇連続殺人犯も怪しいと言われれば怪しい気もするし」

おい。

「それから彼のストーカーっぽい男が近くの部屋に泊まっていたな。まぁ関係ないだろう。『男が男を好き』などという話は狂言に決まっている」

待てやコラ。

「そうそう、どうでもいいが仲居連中の間でずいぶんと彼は人気だったらしいな。朝食を運んだ仲居は抜け駆けしようとしたわけだな、うんうん。ちなみに、この村では好きな者は殺して我がものにするべしという古の言い伝えが」

「容疑者腐るほどいるじゃねぇか！！」

「なにぃ！？　しかし自分がやったと言ってきたのはそこの偉そうな女だけだぞ！！」

「だからそれはたまたま――」

「たまたま殺したのか！？　タイホだ！」

コイツ殴っていいか？

……いやいや、それでオレまで捕まったら元も子もない。さすがに警察の目の前でいつもの無茶をするわけにはいかねぇし……ここは。

「おい、そこの仲居ども！　ちょっと来い」

「カツアゲか！？　タイホだ！」

「勝手に決めんな！！」

「口調がカツアゲ風味だ」

「大きなお世話だ！　てめぇ、いい加減にしねぇとうちの小学校入

れて一から教育しなおすぞ！？」

「女教師の個人授業か！　ぜひお願いします！」

「その言い方はヤメロ！！」

あーほんと殴りてぇ。けど曲がりなりにも警察だしなぁ……くそっ、非常にムカつくが無視して事情聴取しよう。

「おい、仲居ども。あのな……ぉぃ？」

みんなそろって何泣いてんだ。

「ううぅ……こんな事件が起こるなんて……なんで？　どうして！？　どうしてうちの旅館がこんな目に！？」

「年末に寂しい身、なんていう情緒不安定な客ばっか集めたからじゃねぇか」

「そーれーだー！！　うううううぅぅぅ」

泣き崩れる女将。自業自得だな。

「それでよ、被害者が仲居の間で人気だったのはたしかなのか？」

「は、はい、顔いいし」「えぇ、顔いいし」「ううぅ……顔いいのになんで死んだの？」「顔……食べたかった」

「顔だけかよ！」

「しょせん年末にこんな所でお仕事して過ごす寂しい女どもですから！」

あー、そう言われて見ればそういうことになるな。

しかしいい証言はゲットできた。

「おい、コケーさつ。聞いたか？　この女、顔を食べたって言ったぞ！」

「え！？　違います！　わたくしは食べたかった、と」

「いや、『もう一回』食べたかったって言ったぞ！　『食べたかった』発言の前に『……』があるだろ、きっとそこに入るんだ」

「そんな無茶な！？」

へん、無茶でもいいんだ。この頭の悪いコケーさつなら、これで充分犯人扱いするだろ。姐さん以外にも容疑者がいるとハッキリわかれば――

「君、『食べる』というのは隠喩表現ではないのかね？」

「なんでそこだけ頭いいんだてめぇは！？」

あーもー！　ヤダこいつ！

「あ、ちょっと待った。えー、そこの野次馬ども！　見世物じゃないんだ散った散った！」

旅館中の人間がこの場に集まっていることにようやく気づいたのか、言葉どおり野次馬を散らしていくコケーさつ。そして、

「「あ」」

姐さんとサカイさんは、それを見つけた。

## カカの天下３３５「新年あけまして湯煙殺人事件！？　中編」（後書き）

コケーさつ大活躍（笑

実際こんなんいたら迷惑だろうなぁ。

事件はもうちっと続きます。

# カカの天下３３６「新年あけまして湯煙殺人事件！？　後編」

ども、前回に引き続きテンカです。

「どうしたんだ？　二人とも」

何かを見つけたらしい姐さんとサカイさんが見つめる先には、コケーさつしかいない。

「どうしたって……気づかないの？　テンちゃん」

「見ればわかるじゃないですかー」

見れば……って、ええと。二人の視線の先は間違いなくコケーさつだと思うんだが……特に、変わったとこは……

「ほらほらよく見てよ！　あの――」

パキン、と。

言葉を止め、唐突に姐さんが放った手刀は、飛来したソレを見事に叩き落とした。

見事に真っ二つに割れ、地面に転がったソレは――陶器製の灰皿。

「この人殺し！！」

旅館に響く憎悪の叫びは廊下の向こう、今まさにソレを投げ放ったばかりの体勢で涙交じりにこちらを睨み付ける――あのストーカ

ーまがいの女性のもだった。

「人殺し……私の……私の『Ｌｏｖｅ』男を返してー！！」

らぶお？　ださっ……とか思ってる場合じゃない！！　それよりも気にすべきは――しばらく消えていたうちに彼女が集めていたのであろう品々だ！

そう、ストーカー女の攻撃は灰皿だけではとどまらなかった。近くに置いてあった箒を投げ、雑巾を投げバケツを投げ、それらが入っていたロッカーを投げ、宴会場へと運ぶ予定だった椅子を投げカートを投げ、どっから持って来たのか包丁やら鉈やら斧やらチェーンソウ（作動中）やらを手当たりしだいに投げつけてくる！！

いや、あれだ。すげぇ。

何がすげぇって、こんな何でも大砲人間がいること自体もすげぇんだけど――

「ほっ、はっ、ふっ！！」

それらを全て素手で叩き落し、払い、受け流してる姐さんが何よりすげぇ。

「こ、こんのおおおおおお！！」

最後には野次馬を投げつけようとするストーカー女！　しかしさすがに放っておくわけにもいかず、オレも一緒になってみんなで抑えにかかって――何とか落ち着いてもらえた。

「……カツコちゃん」

「うん。サカイちゃん」

暴走女を抑えている間に、姐さんとサカイさんは何やら話し合っていた。

女が抵抗しなくなったのを確認すると、オレも二人の会話に参加しようと近づく――が、

「よし！　タイホだ！」

「うぉあ!?　どこにいたんだてめぇ！」

「最初に灰皿が飛んできた時点でコケた！」

「えばるな！！」

「えーいうるさい！　とにかくそこの女！　貴様をタイホだ！」

「ん、わかったよ」

……え？

何言ってんだよ姐さん！

呆然としているオレに、姐さんは「心配いらないよ」と微笑んだ。

「面倒だけど、ちょっと行って来るわ。テンちゃん、事件のことはサカイちゃんに任しとけば大丈夫だから、この後も適当に旅行を楽

しんでおいでよ」

「そ、そんな！　姐さん無しで楽しめるわけねぇだろ！」

「だいじょーぶだよー。すぐ戻ってくるからー」

自信満々でサカイさんが言う……本当に、大丈夫、なのか？

連行されていく姐さんを、オレは呆然と見送る……姐さん、オレは、オレは……あんたの疑惑を晴らしてみせるぞ！　なぁ、サカイさん！　って、サカイさん？

気がつけばサカイさんは隣におらず、遥か後方に。そして誰かと話してる。

あれはたしか……この旅館の女将？

「よよよ……なんて可哀想なわたしの親友！　わかりますか？　たったいまわたしの親友が無実の罪で連れていかれてしまったのですよー！？」

「は、はぁ」

「はぁじゃありませんよマジメに聞いてください！　いいですかわたしたちは昔からとても仲がよくてそれがどれくらいかというと幼稚園のときにプリン戦争～中略～そんな無二の親友で時には大きな難関や壁があってそれを迂回しないで登ったり破壊したり食い荒らしたり～中略～そしてついに三人は友情合体技を完成させるためにこの旅館へと臨み心からの信頼と友情を～中略～した末に捕らえられてしまったんですよああなんて悲しいんでしょう！！」

「ぇ、あ、は、はい！　なんて悲しい！　なんて可哀想！！」

「んあああぁ！！　わたしたちは彼女の無実を証明したい！　でもここに滞在するお金がない……あぁ路頭に迷うべきでしょうか、ダンボール家族の仲間入りをするべきでしょうか……ふふ、どうせマッチをいくら擦っても現れるのは放火魔と勘違いして来る警察だけというこの世の中、それも仕方の無いことでしょう……」

「ぇ。えー……とっ、その、も、もしよろしかったら、その……ご友人の無罪が晴らせるまで、もうしばらく滞在なされますか？　お、御代は、結構ですので……」

「あぁ！　なんていうことでしょう！　このような親切な方がまだこの世にいらしたなんて！！　世の中捨てたものじゃないわ！　ビバ２１世紀！　どうなる２１世紀！！　ありがとう！　ありがとう！」

「い、いえいえ、その、人して当然のことです……た、たぶん」

「あ！　ついでにあの亡くなった方の彼女さんも滞在させていただけませんか？　友達の無実を、ちゃんと彼女の目の前で晴らしたいんです！」

「……！　はい！　あなたの決意はわかりました！　どうか……どうかご友人のためにがんばってください！」

「ありがとー！　ありがとー！！」

ブォンブォンと思いっきり手を振り回しながら女将と握手して、

ぺこりと一礼。そしてサカイさんはこちらへ戻ってきた。

「あ、あんなに早口なサカイさん、初めて見たぞ」

「あははー、勢いで押し切るときくらいしか使いませんからねーあの喋り方。すごく疲れるんですよー……あー、だるー」

目をキランキランさせて正義を語った姿はどこへやら。そこにいたのはいつもどおりの無気力おねーさんだった。

「それで、サカイさん！　早速姐さんの無実を晴らすために動こうぜ！」

「あーうん、そだねー」

「こういうときってまずは現場検証だよな！　うわー、結構厳重に閉まってるけど入れるのかなーあの部屋」

「あ、テンカちゃん。そこはいかなくても大丈夫ですよー。わたしたちはもっと別の場所を現場検証です」

「ど、どこですか？」

よくある名探偵的な『なんでこんなところを』って場所にいくんだろうか？　あぁ認めてやる。オレはちょっぴりわくわくしてる。こんなん好きなんだよな。

でもサカイさんはそんなオレの期待を裏切り、こんな場所を指定した。

「ずるずるずる……」

「んー♪　やっぱり京都のニシンそばはおいしいねー」

「……サカイさん。なぜにこんなとこを現場検証？」

「せっかく滞在日数が延びたんですよー？　これはもう行けるおいしい店は全部検証しないともったいないじゃないですかー」

……ぇ？　あの、もしもーし。

「ずるずるずるー♪」

ま、まさか、本気じゃない……よ、な？

そうだ、きっとこれはカモフラージュだ！　姐さんも安心しろって言ってたし、サカイさんなりの考えがあってのことなんだ！！

「ずるずるー♪　あ、すいませーん！　さらにきつねのトッピングいいですかー？」

……た、たぶん。

でも、あれ？　なんか忘れてるような。

## カカの天下３３６「新年あけまして湯煙殺人事件！？　後編」（後書き）

はい、後編といいつつまだ続きます笑
次回、いよいよ解決編です！

## カカの天下３３７「新年あけまして湯煙殺人事件！？　解決編」

どうもーサカイですー♪　んまんまー。

何がんまんまーかというとですね、京都といえば有名なお豆腐を食しているからなのですー。その名も豆腐どんぶり！　とろとろあんがかかった豆腐とご飯が美味しいのー！

「はぐはぐ……うめぇ、けどさサカイさん。本当にこんなことしていいのか？」

がつがつとご飯をかきこみながらも、テンカちゃんが心配しているのはカツコちゃんのこと。彼女が捕まってから一日、わたしたちがしたことと言えば食べて歩いて寝たくらいだ。

「いいのいいのー。カツコちゃんだって言ってたでしょー、大丈夫だから楽しめって」

「そう、だけどさ……」

「テンカちゃん。実際の事件やドラマは二時間なんかじゃ終わらないんだよー？　もうちょっと気長に考えなくっちゃ」

一応女将さんとかを丸め込んでおいたけど、そんなに滞在はできないだろうしー。今のうちに楽しんでおかなきゃねー。アレだってすぐに見つかるだろうし。

と、思ってたんだけどー。

次の日。

「あぁーぼたん鍋っておいしいですねー」

「うめぇ！　うめぇぞこの肉！　いやぁ姐さんにも食べさせてやりてぇ」

次の日。

「今日はうどん巡りといきましょうかー」

「オーケーぼす！」

次の日。

「本場の甘味処の八橋は違いますねー」

「がつがつがつがつ!!　おかわり!!」

「おー？　頼んでないものが来ましたね。これがぶぶ漬けですかー」

「甘いものばっかだったからちょうどいい！　はぐはぐはぐ……さて、もいっちょ八橋おかわりー！」

「テンカちゃん、京都でぶぶ漬け出されることの意味知ってる？」

「知らないことにしておく、おかわり早くもってきやがれ!!　あ、ついでにぶぶ漬けももう一つ追加で！」

さらに日はすぎ……

「はぁー……好きなときに食って好きなときに風呂に入り、好きなときに寝て……なんて幸せなんだろう……」

「ですねー。でもそろそろお仕事も始まっちゃいますねー」

「そうだな！　じゃあ帰るかサカイさん！」

……うすうす気づいてはいましたがー。

「テンカちゃん。途中からカツコちゃんのこと忘れてない？」

「……ぇ、あ、ああ！！　そ、そんなことないぜ！」

「堕落した生活って、怖いよねー」

ニート時のわたしもすごかったー。どんどん色んなことがどうでもよくなるんだよねー。

「い、いや、ほら。よくよく考えたら、姐さんって心配するようなキャラじゃないじゃん？」

「それはそうかもねー。ギロチン落としても首で受け止めそうなイメージあるしー」

でもさすがに放ってはおけないよねー。わたしたちの後が怖いから。

「そろそろ助けてあげようかー」

「でもどうすんだよサカイさん。オレたち食ってばっかりで全然事件のこと把握してねーぞ？　かといって今から事件調べる時間はないし」

「謎は全て解けた！」

「はやっ！？」

「テンカちゃん、コケーさつさんと被害者の彼女さん呼んでー」

「ほ、ほんとに解けたのか？　わかった、呼ぶよ」

電話へと駆けて行くテンカちゃん。

そして、暗くなる照明。

わたしに当たるスポットライト！

えー……この事件はですねー、意外と簡単なものですー。確かに被害者さんの周りには怪しい人がたくさん座ってましたーし・か・し。考えてもみてください。

このお話は、コメディです。

果たして何がどうだから誰が犯人だー、などという奇抜な推理が必要でしょうか？　んー特に必要ではないと思われますーなぜなら。

面白ければ、それでいい。意表をつければ、それでいい。

それが原則だからです。つまり犯人は……んふふー、もう少し後

のお楽しみですー。

それでは。酒井にんざぶろーでしたー。

なんちゃって、ふざけてみたところで解決編でも始めますかー。

「なんだいきなりこんなところに呼び出して！　タイホするぞ？」

「あの……私のＬｏｖｅ男事件の真相がわかったって、本当ですか？」

すごいヤな名前の事件ですねー。

ともかくわたし、テンカちゃん、コケーさつさんとストーカー女の四人がそろいました。

「それで、サカイさん。わざわざこの人らを集めたってことは、この中に犯人が――」

「いませんよー」

「「「……は？」」」

お約束の展開を期待していたらしい三人は、呆気にとられた顔になる。

「でも事件の真相は……ここにありますー」

わたしの指差す先には――

「……む？　この俺がどうかしたのか女！」

「ちょっと後ろ向いてください」

「こうか？」

ペリ、と。

わたしはコケーさつさんの背中に貼ってあるソレを取りました。

「それ……封筒か？」

「えぇ、遺書って書いてありますね」

「「「……はいいいぃぃ！？」」」

そう、この事件は自殺なのですー。

タイトルに殺人事件って書いてあるのに！　と思ったそこのあなた。ちゃんと『！？』って疑問系になってるでしょー。

伏線がどうとか無いのか！　と思ったそこのあなた。知りませんよそんなの。

「コケーさつさん、あなた多分、初めて現場に入ったときにコケたでしょー？」

「あ、ああ」

「そのときに背中にくっついたみたいですねー」

三人は完全に呆然状態。

「みなさんの気持ちはわかります。わたしだって……いくら封筒が警官の制服と同じ色をしてたからって、まさかいつまで経っても誰も気づかないなんて思ってませんでしたから」

「そ、そういえば背中に黒い文字っぽいものが見えるなーとは思ってたんだが……てっきりいつものようにコケたときに犬のフンか何かを潰したのかとばかり」

じゃー洗いなさいよ。

「わたしが毎日一度は警察に顔を出していたのも、あなたの背中を確かめるためですー」

「き、貴様！　これに気づいていたのか！？　だったらどうしてすぐ知らせない？」

「すぐわかると思ったのでー」

「わかるか！！」

「いや、わかれよ」

テンカちゃんの意見に賛成。

「しかしサカイさん、なんで事件当日にそのこと言わなかったんだ

？　姐さんが捕まる必要あったのか？　もしかして」

宿代タダで長く居座るためにこんなことを？　とさすがに口には出せないながらも目で伝えてくるテンカちゃん。もちろんそれも少しあるけど――

「い、いしょ……かして、かしなさいよっ！！」

「はい、どうぞ」

ひったくるようにして遺書をわたしから奪ったストーカー女さんは、猛然とその封筒を開き始めた。

「わたしが遺書のことを言うのを遅らせたのは、あの女性の方の心を落ち着けるためです」

「落ち着ける……あぁ、そういや暴走してたよな、あの女」

「あんなカツコちゃんレベルな暴走する子が、好きな人に『おまえがうざいから俺死ぬわ』なんていう手紙をもらってみなさいー。きっとその場にいる皆巻き込んで爆発しますよ」

「単に頭の中身が爆発して暴走するのか、本当に爆発するのか……どっちもありえそうでこえぇな」

「時間は心を癒してくれます。多少なりとも時間を置いたあとに、あの女性が遺書を読むことになるように……わたしとカツコちゃんは時間を稼ごうと話し合ったんです。あとを追おうなんていう浅はかな考えに走らないように」

そう、現実のドラマは二時間程度じゃ終わらない。

落ち着くにはもっと時間が必要なんだから。

「ところでサカイさん。あんた遺書の内容を断言してたけど、読んだのか？」

「いえー。でもそれしかなくないですか？」

適当に言っただけですが、もしかしたら違うかも？　ストーカー女さんの様子を見てみる。

「……『いままで愛をありがとうＬｏｖｅ美、なんだかんだ言ったけど、君の愛は嫌いじゃなかったよ……』ですって！？　じゃ、じゃあなんで自殺なんか！？」

あれを嫌いじゃないってすげー。ていうかＬｏｖｅ美って。もしかしてそういうあだ名で呼び合ったんですかねー。ださいですねー。イタイですねー。

「……『でも僕には君を幸せにする資格がない。なぜなら僕は……今まで黙っていたけど、実は――君の生き別れの兄を、殺してしまったのだから！』ですって！？　そ、そんな……小さいころに別れた、お兄ちゃんを」

おお、意外な展開が！

「で、でも私の愛をみくびらないでほしかった。ちゃんと話してくれれば、私は……あれ、まだ続きが。『さらには君の生き別れの妹と弟も殺してしまったんだ』そ、そんな。でも私はそんな子知らな

いもん！　知らない子のことなんて別に……ま、まだある。『さらにさらに君の生き別れた従兄弟三人と従姉妹五人と叔父さん五人と叔母さん八人とはとこ十五人を殺したんだ！』って、え、えぇと……」

あなたどんだけ彼女の一族に恨みあるんですか。

それにそこまで遠縁となると生き別れって言葉が当てはまらない気がしますがー。

「……『そんな僕に君を愛する資格なんてない！』って」

同感ですー。

「……『だからこんな僕のことは気にしないで、君は生きて、幸せを見つけてくれ！』と、これで、終わり……？」

最後だけいい言葉でしめましたねーって、ん？

ああ、そういうことー。

「やりますねー、亡くなった男のかた」

「は？　なにがだサカイさん。オレはもう何にツッコんでいいかわかんねぇぞ。トメを呼んでご教授願いたいくらいだ」

「いえいえ、よく考えて書かれた遺書だなーと」

「何も考えてないようにしか聞こえなかったが」

「いえいえいえいえー、思い込みの激しい方には効果てきめんですよー。見てください」

ストーカー女さんに注目。

「……私、事件の真相がわかったら、愛するあの人のあとを追って死のうかと思ってた……いや、でも、こんな男のために……いやいや、これ嘘かもだし……でも自殺する理由はあったはずだし……えぇと？　愛せばいいの恨めばいいの？　どっち？」

「……混乱してるな」

「そう、混乱してます。だからその場の勢いでＬｏｖｅ男さんを追うこともなく、恨んでいいのかどうすればいいのかわからないまま、結局あの子は生きていくでしょう。あれが嘘か真か、もしくは単にあの子がうざくて自殺したのかはわかりませんが、あの子に考える時間をあげるには最適な文章ですよー」

亡くなった男の人の真意、彼女がこれからどうしていくのか。

それはわからないし、わかる必要もない。

現実はドラマのように二時間じゃ完結しないから。二時間じゃ全てはわからないから。

だからわたしたちは、必要なことだけわかれば、それでいいのだ。

そう、この場合は……カツコちゃんが無罪ということさえわかれば、それでいい。

「それじゃーコケーさつさん。カツコちゃんを釈放してくださいな……コケーさつさん？」

「いたた……ボケた発言が出るたびにコケていたから忙しかったぞ」

地味にコケてたんですねー。気づかなかったー。

「とにかくわかった。この女をタイホすればいいんだな！」

「あんた話聞いてねぇだろ！」

「とにかくカツコちゃんを釈放してくださいー」

「む、そうなのか？　わ、わかった……しかし、じゃあ俺は誰をタイホすればいいんだ」

「自分でもタイホしてやがれ。罪状は『バカだから』ってことで」

まったくもー。この人本当に警察官なんでしょーか。

ともあれ、これで事件は解決ですね！　てっきり事件当日、コケーさつさんが署に戻ったときに誰かが背中の遺書に気づいて事件解決！　と思ってたんですが……ずいぶんと長い間カツコちゃんを放っておくことになってしまいました。

……ん？

ああ。

いいこと思いつきました♪

「コケーさつさーん」

「な、なにかね」

「これ、カツコちゃんのところへ持っていってくれませんかー？」

「それは構わんが……あの女は今すぐ釈放だぞ。迎えにいってやればいいではないか」

「いいんですいいんです。とにかくこれ渡してください」

ふふふー、事件なんか起こっちゃって確かにおもしろい旅行にはなりましたが……

わたしはまだ、事件を起こしてないんですよねー。

あのゲームせっかく思いついたのに、つまらないですよねー。

『わたしたちらしい』旅に、なってないですよねー。

だから――旅の最後に、どかんと一発事件を起こそうじゃありませんか。

……にしても何か忘れてるようなー。

## カカの天下３３７「新年あけまして湯煙殺人事件！？　解決編」（後書き）

事件解決！　なのになんとまだ続きます！笑

えー本話で古○さんっぽいところがありましたが……みなさん知ってますよ、ね？笑

あと、事件の真相はいろいろとツッコミ所満載でしょうが……ツッコみながら読んでもらうつもりで書いたので問題なしです笑

次回も心おきなくツッコミながら読んでくださいまし＾＾

「ほらー、急いで急いでー」

せかせか準備！　サカイですー。

事件を解決した早々、わたしたちは大急ぎで帰り支度を整えています。といってもあらかじめ用意はしていたので、すぐに発つことはできるのですが――

「テンカちゃん、おっけ？」

「あぁ、もう行けるけど……なんでそんなに急いでんだ？」

「事件が起こるんだよー！　ほらほら、チェックアウトするよ、急いでー」

「お、おぉ」

そう、急がなきゃならない。

わたしたちは即行で手続きを終え、駅へ向かうバスへと乗り込む。

「なぁ、いったいなんだってんだ？　姐さんを待たずに出発だなんて」

「だからー、事件なのだよワトテン君」

「事件はもう終わったろ？」

うー、ワトテン君の呼び方にツッコんでくれないー。

「ちーがーうーのー！　わたしたちの事件ゲームはまだ始まったばかりなんだからー」

「はぁ？」

「さっきね、カツコちゃんに――」

同時刻、警察署。

「世話になったなコノヤロウ」

「いやー礼はいらんぞ！」

「あたしゃイヤミ言ってんだ！　威張るな！！」

相も変わらず戯けたことを抜かすコケーさつに一発怒鳴り散らし、あたしカツコはようやく警察署から開放された！　んー、シャバの空気はうまいわ！

「あ。ちょ、ちょっと待ちたまえ君！　君が牢屋にいる間に食べたカツ丼の請求書を受け取りたまえ！」

あー、そういや捕まってるときに出る食事って後で請求されるんだったな。でも。

「いらねーよそんなもん」

「なっ、いや、これは規則で」

「無実なのに牢屋にぶち込まれてたって訴えてもいいんだぞ」

「ぐっ」

「それが嫌ならこんくらい奢れや」

「し、しかし十日にも満たない間にカツ丼だけで１０万の請求を超えるとは、いったいどんな食べ方をしたのだ！？」

「暇だったから食うことくらいしか楽しみなかったんだよ」

「それにしたって食いすぎだろう！！」

「うるせーな。時間つぶしに筋トレもしてたからすぐ腹減ってたんだよ」

一日１０食は食ったかな。ちなみに一食カツ丼三杯ね。

ドラマでよく出るだけあって警察の用意するカツ丼はうまかったわ。さすがに飽きたけどな……

「むぅ……仕方ない。それは奢ろう。しかしこれは受け取りたまえ」

「ん？　なにさこれ」

「君の友人たちから預かったものだ」

コケーさつから預かった封筒を開き、中をのぞいてみると、そこには――

「帰りの電車の切符と、写真？　これ、は……」

サカイちゃんとテンちゃんが写ってる。それは問題ない、だがしかし――彼女らの前に写っているものが問題だった。

ニシンそばでピース。きつねそばでもピース！　豆腐料理でイェーイ！　ぼたん鍋でヒャッホーイ！　うどんすきでチェケラッチョ！！　八橋食い放題でキラーン♪　などなど、この上なく楽しそうな京都のおいしいもの巡り写真が山ほど！！

「あ、あたしがカツ丼ばっか食ってる間に……！」

ひらり、と写真とは違う紙が落ちた。

地面に落ちたその紙の文面を読んだ瞬間。

あたしは鬼と化した。

「さ、サカイさん！　なんでそんなことを！？」

「事件は現場で起きてるんじゃない、人と人との間で起きてるんだ！！　というわけでー、人間関係に亀裂を入れてみました♪」

「無意味に入れるなよそんなの！！」

「食べ物の恨みで友情がピンチ!?　くー！　これは事件ですよー！　危険ですスリルですー！」

「……その紙には、なんて書いたんだ?」

「大したことは書いてませんよー?　『うらやましいだろ』とかくらいしか」

「じゅーぶんすぎるほど大したことじゃねーか!!　こ、こえぇ……どうなるんだオレたち!?」

「大丈夫ですよー。ほら、もう電車動きますし」

そう、すでにわたしたちは電車へと乗り込んでいる。

この駅から警察署までは距離があるから、カツコちゃんがこの電車に乗ることはまずできない。そこはちゃんと計算済みだ。

間もなく電車が発進する。さらば京都よー！　さらばカツコちゃんよー！　いけいけごーごー速いぞいぇーい！

「それにですねー、本来なら犯人当てゲームだったところを変更しまして、犯人捕まえゲームにしたんですよー」

「どう違うんだ?」

「わたしとテンカちゃんを捕まえればカツコちゃんの勝ち。わたしたちが自分の家まで逃げ切れればカツコちゃんの負けです。そのルールもちゃんと書いておきましたので」

「んなあっさり納得してくれんのか？　食い物の恨みはこえぇぞ」

「大丈夫ですよー、カツコちゃんもシャレの通じる大人ですから。でも勝ったらわたしたちが食べたのと同じ分だけおいしいものを奢ってあげるって書いておきましたから、かなり必死で追ってくると思いますよー」

「……逃げきれるのか？」

「実はぎりぎりです。昨夜のうちに電車の時刻表などを確認してみたのですがー、カツコちゃんがわたしたちの乗っている電車から一本遅れて乗ったとしても、効率よく乗り継げば、わたしたちが降りる駅に五分遅れで到着するでしょー」

「ふむふむ、じゃあその五分間でオレたちがどれだけ自宅に近づけるかが勝負なんだな？」

「ええ、でもそれはあくまで最も効率よく乗り継いだ場合ですー。カツコちゃんはあまり頭を使うのが得意じゃありませんから余裕はある……か、と」

「そう……だ……な？」

二人そろって尻すぼみになっていく声。

あはは。

あはははー。

あはははははははー！

突然何を笑っているのかとお思いでしょー。でもこれが笑わずにいられますかー。

わたしたちはですね、窓の外を見ていたのですよ。快調にとばす電車のおかげで高速で流れていく風景に、名残惜しみながらも別れを告げていたわけですよー。

でもですねー。

なんかですねー。

風景の中に別れを告げられないものがあるんですよー。

わかりやすく言えばー、さっきからずーっと風景の中で変わらないモノがあるんですよー。

もーっとわかりやすく言いましょうかー？

「あ、あはは♪」

「はははははは♪」

わたしとテンカちゃんは引きつった笑いのまま顔を見合わせ、もう一度それを見た。

カツコちゃんが電車と並走してる。

生身で。

「「うそん」」

うそぴょん♪　って誰か応えてほしい。

だって……だってだって！　電車ですよ！？　時速百キロ軽く超えてるんですよ！？　それに付かず離れず並走してるって――どこの改造人間ですかあああああ！？

頭を使うのが得意じゃないとは思っていましたけど、普通に走って電車に追いついてくるなんて使わないにもほどがありますよ！？

「姐さんって人間じゃなかったんだーアハハー」

「て、テンカちゃんしっかり！　確かにショッキングな映像ですけど！　あんなマッハで手と脚動かしてる人間見たらオカシくなるのもわかりますけど！　このままじゃ、このままじゃ――」

窓の外のマッハ・カツコちゃんを見る。忍者の娘とは聞いていたけど、その走り方は忍者というより小学生が陸上選手の真似してがむしゃらに腕を振って走ってるみたいな荒々しいフォームだ。でも、でも――

ズドドド

るしー！

めえええええええええええええええええええええええしいいい

即行で弁当を食べ終わったカツコちゃんは顔色を悪くし、急にスピードダウン、だんだん視界から遠ざかっていく。

「……サカイさん、あの弁当に何いれた？」

「今回の旅行のために買っておいたインド象用の下剤です。これならいくらカツコちゃんでも効くでしょー」

「……いま気づいたけど、オレらって普段からあの人が普通じゃないってちゃんとわかってたんだよな、うん。そうだよな、電車と並走できるくらい、今更驚くことじゃないよな」

テンカちゃんが正気に戻ってよかったー。その通りなんですよー、だって実際、普通の下剤なんてカツコちゃんには効かなかったしー。

「さて、なんとかこれで差はつけましたが……油断できません。こっちは停車したりしますし……でもカツコちゃんだってさすがにあの速さで走るには持久力が持たないでしょう」

「ほんとか？」

「に、人間には体力というものが」

「あるのか、あの人に。本当に？」

「……自信ないです。もうこれは追いつかれるたびに攻撃していくしかないですねー。交代で電車の周囲を見張りましょう」

「なんだかスリルを感じるぜ……たしかに何かの事件に巻き込まれてるような気がしてきたぞ」

「それもあれですね、恐竜さんとか怪物が現代の世界に逃げ出したーみたいな事件ですよ。わたしたちはそのデンジャーゾーンから抜け出さないといけないんです」

「ゴールは自宅か」

「ええ、お互い生きて帰りましょー。いいですかー？　電車の外へ出るときはとにかく隙を見せないでダッシュです。駅から降りたら言うまでもなく自宅まで全力で」

「あぁ、それまでにどれだけ姐さんとの距離を稼げるか……って、あれ。もう追いついてきたぞ！？」

「くー！　なにか、なにか武器はー！？」

「――と。そんなわけであたしたちは京都からここまで延々と追跡ごっこしてきたわけよ」

あたしが大方語り終えると、ギャラリーの皆さんはなぜか開いた口がふさがらなくなっていた。

ふむ、ぽい。

「んぐっ！？」

とりあえずトメの開いてた口に餅を放り込んでみる。喉に詰まったらしく、のた打ち回るトメ。まぁ死にはしないっしょ。

「て、テンカ先生たちが帰ってきたとき、みんな全力疾走だったのはそんなわけがあったのねっ」

「お姉があんなに疲れてるなんて珍しいと思ったけど、京都からここまで走ってきたんだね。納得だ」

「な、納得できるんだーカカちゃん。電車と並走だよ？」

「甘いなサエっち。うちの親父は電車より速いぞ」

本物の忍者にはさすがに敵わねぇんだよな、速さじゃ。力なら勝てる自信あるけど。

「そ、そうですかー。それで、結局お姉さんは犯人を捕まえたんですかー？」

「もっちろん！　捕まえて説明させたからあいつらサイドの話もできたんだよ」

「そ、そうですかー。さ、殺人事件にはなってないですよねー？」

「殺したら奢ってもらえないだろ」

ムカついたのは確かだが、最終的に美味いもんくえるんならあたしはそれでいいのだ。

――いろいろあったが、今回の旅行はなかなか楽しかった。

文句を言うとしたら二つ。カツ丼に飽きたことと、京都ならでは

のおいしいものが食べられなかったことだ。

ま、でもサカイちゃんとテンちゃんがもっとおいしいもの奢ってくれるらしいし。

とりあえず今は大好物の餅を食えてるし！

幸せ幸せ、万事オッケー！

「さー、もっと餅食うぞ！！　トメ、おかわり！　……トメ？」

「息してないよ」

「なに！？　餅食えば生き返るだろ！　さあさあもっと食え」

「やめてえええっ！　それ以上詰め込まないで！　トメさん、トメさあああああん！！！」

めでたしめでたし。

ん、トメはどうなったか？

あたしは餅が食えりゃめでたしなんだよ。悪いか。

# カカの天下３３８「新年あけまして湯煙殺人事件！？　本編」（後書き）

姉さん、事件です（ぇ

はい、今回はどっかで見たことあるような箇所、「おいおい」とか「ねーよ笑」とかツッコむ箇所、「どんだけー」な箇所を盛りだくさんでお送りしました笑

姉、それはカカ天唯一（でもなくなってきたけど）のファンタジー。というわけでずいぶんと好き勝手に遊ばせてもらいました。やー楽しかった。長くなっちゃったけど＾＾；

読者の皆さんはどうでしょうか。楽しんでいただけたでしょうか。私の自己満足だけにならなければいいなーとちょと心配です。

今回かなりはっちゃけたので、明日からはまたのんびりペースな話でいこうと思います＾＾ではではー！

## カカの天下３３９「食べ物で遊んじゃいけません？」

「「いただきます」」

召し上がれ自分、召し上がれカカ。どうも、トメです。

ただいま夕飯どき。天ぷら盛りあわせとご飯とお味噌汁という和風な献立です。

「むぐむぐ、うん。今日もいい仕事してるね」

「お褒めに預かり恐悦至極」

「ご褒美にエビの天ぷらとかぼちゃの天ぷらを交換してあげよう」

「ありがたき幸せ。で、どっちがほしいんだ？」

僕の皿にもカカの皿にもそれぞれの天ぷらは一つずつ。つまりどっちかを二つ食べるということだ。僕はどっちも好きだから別にいいんだけど。

「……自分で言っておいてなんだけど、どっちも好きだから決められないや」

食べ物の好みが合うのはやっぱ兄妹だなー。

「じゃあここは天ぷらさんに聞いてみよう」

またおかしなことを言い出したよこの妹は。

「私はエビの天ぷら役やるから、トメ兄はかぼちゃの天ぷら役ね」

「は？　あ、あぁ、まーいいけど」

僕かぼちゃね。

「このドテかぼちゃ！！」

「おまえそれ言いたかっただけだろ」

「このおたんこなす！」

「あ、ナスの天ぷら食べたかったか？」

「うん、今度お願い」

「わかった」

うん、相変わらずよくわからん話の流れだ。

「ところで天ぷらの『ぷら』ってどういう意味だろ」

「おい、エビの天ぷら役とかいうのはどうした」

「あ、そうだった。コホン……おいおいかぼちゃの天ぷらさんよー、いつまでもプラプラしてないで働けよ！」

『ぷら』をそこに持ってきたか。えーと。

「なんだよ、そっちこそプリプリ怒るなよな」

「エビがプリプリで何が悪い！？」

悪くないね、むしろすばらしいねプリプリ食感なエビさんは。

「プリプリがダメとかいうんならブリブリしてやるんだからね」

「何をブリブリするかは知らんがやめてくれ」

その音なんとなく食欲なくなるだろうが。カレーのときにアレを言うのと同じだぞ。

「ん、飽きた」

「もうかい。自由にぷらぷらしてんのはカカじゃんか」

「我こそはお味噌汁！」

ほんとフリーダムだねこの子は。

「ご飯さん、私、あなたのことが好きなの！」

「太るぞ」

「素で返さないでよ！」

あーはいはい。えーっと、そうだな……

「ごめん、僕は他に好きな人がいるんだ！」

「えぇ！？　そ、そんな……あなたとはベストパートナーだと信じていたのに！」

うん、たしかに白いご飯と味噌汁は名コンビだね、でも……よし、ノッてやろう。

「でも、でも僕は……お茶のほうが好きなんだ！」

ビバお茶漬け！

「おっちゃんが好きなの！？」

そうきたか、なんの！

「そうだ！　悪いか！？」

さぁどう返してくる？

「だからトメ兄って彼女がいないのかー」

「ぅおい！　そっちこそ急に素に戻るなや」

「彼氏ならいるの？」

「いてたまるか！　なにが良くておっちゃんなんか好きにならにゃいかんのだ」

「収入」

確かにおっちゃんの収入は良いからそれは魅力的、じゃなくて！

「あのね、彼氏彼女っていうのはお金なんか関係なくてね」

「トメ兄お茶漬けにするつもりなんだね」

聞けや人の話。

「……おぅ、おまえは猫まんまか」

「やっぱこれだよねー。あ、梅干とってきてあげるね」

「お、気が利くね」

んー、言葉遊びしつつも波乱なく夕飯が進んでいく。楽しいねー、和むねー。

「我こそは梅干！」

「はいはい、お一つくださいな」

「ごめんなさいご飯さん、私、他に好きな人がいるの！」

あれ、まだ続いてたのか。しゃーないな。

「そ、そんな！　一緒にお茶しようよ梅干さん！」

「ごめんなさい……私、トメ兄が好きなの！」

あん？

「トメ兄……キス、して……」

えーと、皆様。

誤解しないでいただきたい。これは兄妹の禁断の愛なんかではなく、単に梅干のセリフなのです。ほら、キスしようと迫ってくるのはカカじゃなくて真っ赤な梅干です――え、梅干？

「ぶちゅー」

「んむむむ！！」

酸っぱいじゃないかぁ！！

や、ただそれだけなんですけどね。

「あは、してやったり♪」

梅干を離してもいまだに口に残るすっぱさに口をすぼめる。その顔がおかしいのか、けらけら笑うカカ。このやろー、どう仕返しすべきかっ。

ちょっとした応酬をしながらも、楽しく美味しくご飯をいただく――今日は、こんな夕飯。

## カカの天下３３９「食べ物で遊んじゃいけません?」（後書き）

はい、今回は初心に戻って（?）なんでもない場面をダラダラーっと書いてみました。
基本はやっぱこれですねー。なにげなーくほのぼのーっと。
あなたのご飯さんはお味噌汁とお茶、どちらを選びますか？　ちなみに私の今日のご飯さんはお茶を選びました。

# カカの天下３４０「トメカちゃん誕生」

こんにちは、トメです。

今日はちょっとおとなしくさせていただきます。なぜなら、悲しい日だから。

集まる人々、黒い服、すすり泣く声……そう、今日はお葬式の日なのです。

僕も皆と同じように黒い服を身にまとい、焼香をあげるために並んでいるのですが……むう、なんだか並んでる皆さんが遠慮なく僕の前に割り込んだりしてくる。なんとか避けてるけど、こんな調子じゃボーっとしてたら突き飛ばされちゃうじゃないか。悲しいのはわかるけど……まるで僕を無視するみたいなことはやめてほしいもんだ。

「……可哀想に、まだ若かったのに」

「２４歳だったらしいわよ、それがあんな死に方……」

聞こえてくる話し声。そっか、僕と同い年かぁって、あれ？

そういえば、これって誰のお葬式だったっけ？

「なんでも、お餅を喉に詰まらせたらしいのよ」

「楽しそうに家族と食事しているところに……らしいわね」

ん？

んんん？

「いつも無茶な妹さんやお姉さんに振り回されていたから、いつかはこうなるんじゃないかと思ってたけど」

「そうね、あたくしもそう思ってたわ。そう思えば長くもった方よね、ハハ」

ハハ、じゃねぇよ！

ま、まさかアレか！？　お餅食いまくり大会のときに僕が餅を喉に詰まらせて、そのまま――そ、そんなはずはない！　だって僕にはあの後の記憶あるし！　昨日だってカカと楽しい夕食を！

「これでようやく姉妹から解放されたんだから、さぞ安らかに眠っているでしょうね」

「ええ、きっと安らかで楽しい夕食の夢でも見ているでしょう」

ご丁寧に説明ありがとうコノヤロウ！

ほ、本当に僕は……死んでしまったのか？

すっ、と僕の肩をすり抜けておばあちゃんが歩いていく。そっか、僕はいま、幽霊なんだ。道理でさっきから無視されるわけだ。幽霊なんて普通は見えるもんじゃないし。

あはは……死んだ？　餅を喉に詰まらせて？

冗談だろ……やり残したこと、いっぱいあるのに！　せめて、せめてカカにだけでも何か伝えないと――そう思った瞬間、僕はカカの姿を見つけることができた。

葬式会場の隅、サエちゃんやサユカちゃん、姉と一緒に固まって……泣いている。

「な、なぁ！　カカ！　僕の声が聞こえるか！？」

もし無視されたら――それも怖かったが、せっかく僕はここにいるんだ！　伝えることができるなら、伝えないと！

僕の、最後の言葉を！

カカは――振り向いてくれた。

僕の姿を見て、目を丸くした。やった、見えてる、言葉を伝えることができる！　あぁ、これぞ兄妹愛！！

「ゾンビだ幽霊だ！　消えろ無くなれ成仏しろ！！」

愛なんて信じねぇ。

「トメお兄さん、人って死んだらいなくならないといけないんですよー？」

つ、冷たいよサエちゃん！　さっきまでの涙はどこにいったの！？　ってもう乾いてるし！

「トメさん！　わたし、わたし後を追います！　にっくき餅を滅ぼしたあとで！」

待て、んなことしたら餅大好きの姉に滅ぼされるぞ！　ほら、そこの姉が怖い顔してるじゃないか……って、怖い顔を向けているのは僕にか。

「ば、バケモノだぁ！！」

バケモノにバケモノって言われたぁ！？

はぁ……僕は、姉よりもバケモノになってしまったのか……もう人としての価値はない。死のう。もう死んでるけど。

「トメ兄……あんな餅で死んだから、死んでも死にきれなかったんだね」

「あんな餅ってなんだよ」

「最近さ、シュー君の姿が見えないことに気がつかなかった？　あの人はね、トメ兄が喉を詰まらせたお餅の材料になってたんだよ」

「うえええええ！？　あれってシュー餅だったのか！　なんか名前の響きだけならシュークリームと餅をあわせた新製品みたいだけど！」

「死ぬほどおいしかったんだね」

「本当に死んでどうすんねん！？」

「しかもそんな姿になってまで……」

「そんな姿!?　ぼ、僕はいったいどんな姿だっていうんだ!?」

「耳と鼻と目と口と股間からなんか出てる」

「うあああ死にたいいいいい!!」

「大量に出てる」

「言い直すな!　死にたくなるだろ!!」

「死んでるし」

「ごもっとも!」

ああああ!　僕は、僕はいったいどうすれば……

「トメさん!」

「さ、サユカちゃん?」

「……わたしに、とり憑いてください!」

とり憑く?　それってつまり……

「だ、ダメだよそんなの!　何が起こるかわからないんだよ?」

「わたしは、トメさんのことが好きでした。だから、トメさんと一緒にいられるのならっ!」

さ、サユカちゃん！　そんなに僕のことを……感動した！　感動したけどちゃんと僕を直視してよ！　目を逸らさないで！　どんだけ醜い姿なんだ僕は！

「……ま、まぁいいや。ありがとう！　じゃ遠慮なく」

ひょいっと憑依。

「あれ？　僕は……これ、この身体、まさかサユカちゃん？」

――そのとき発した言葉は、サユカの身体へ憑依したトメのものだった。そう、彼はサユカの身体を乗っ取ってしまったのだ！！　失われたサユカの意識を取り戻すためのトメの冒険が、いま始まる！！　身体は乙女、頭脳は野郎。その名は名ツッコミ、トメカ！

「――なんていう話を考えてみたんですけど、どうでしょー？」

「ど、どうと言われても……」

「トメ子のほうがいいですかー？」

「それはどうでもよくて」

読んでいたノートをパタリと閉じて、やたらと目を輝かせているサエちゃんに向き直る。

「僕、死んでるじゃん」

「あのときの選択を間違えばこういう結末もありえたかとー」

『あのとき』というのは、このサエちゃんの創作話にも出てきたけど、先日の餅食いまくり大会のときのことだ。あのとき僕は餅を喉に詰まらせ、大ピンチに陥ったが……姉が片手で脚をつかんで豪快にジャイアントスイングをかましてくれたおかげで詰まっていた餅はスポーンと口から抜けて飛んでいった。餅の他にもいろいろ口から出そうだったけど、なんとか助かったのだ。

「それでどうですか？　乙女の身体を手に入れた男がイケナイ道へ走るお話なんですけど」

「そのイケナイ道というのがどんなものかは知らんが、自分がそんな風になるっていうのは気分がよくないなぁ」

「じゃあ全国公開とかダメですか？」

「ダメ！！」

「ちぇー、おもしろいと思ったのになー」

「そりゃ身内が読めばおもしろいかもしれないけどさ……で、サエちゃん。なんで急にそんなお話なんか書き始めたの？」

「ちょっと頼まれましてー。詳細はまだ秘密です♪」

「ふーん」

そういやカカも変な話作るの得意だったよなぁ。あっちはもっと

ハチャメチャだったけど。サエちゃんのはなんというか……シュールだ。

「ところでこれ、僕の他に誰かに見せた？」

「ほぼ全員に」

「……感想は？」

「あ！　そういえばシュー君最近見てない！　って」

「真っ先にそっちかい」

や、たしかにそれは僕も思ったけどさ。

どこいったのかなぁ、シュー君。まさか本当に僕らの腹の中じゃあるまいな。

## カカの天下３４０「トメカちゃん誕生」（後書き）

夢オチと思ったそこのあなた、惜しい！笑

まーこれまでいくつも思わせぶりな話書いてきたので、大抵の人は「トメが死んだ？　まっさかー」と思っていたことでしょう。なので今回は特に捻ることなくバラしました。

創作話はやっぱりカカのほうがはっちゃけてますね。発想自体はサエちゃんも面白いですが、やはりワケノワカラナサはカカが一番でしょう。なぜサエちゃんがいきなり創作なんか始めたのか……それは今後の展開で＾＾

# カカの天下３４１「首のないアナタ」

「雪だ！　雪だるまだ！」

「えっほ、えっほ」

ころころーっとカカです！

一昨日から降っていた雪が積もり、私とサエちゃんとサユカンは放課後のグラウンドで雪だるまを作ることになりました。

「わぷっ」

「サユカン、またコケたの？」

「ううぅーっ、転がしてた雪だるま潰れたぁ」

雪の上を歩くのに慣れていないのか、サユカンは足を滑らせまくっていた。

「カカすけはよく転ばないわねっ」

「歩き方にコツがあるんだよ」

「そーそーコツがあるのー、私だって一回も転んでないでしょー？」

「サエすけはベンチにずっと座ってるから転ばないだけでしょっ」

「うん、だから雪の上を歩かないのがコツー」

歩くなら雪の上を歩いたほうが滑りにくいんだけどね。危ないのは雪が無くて凍ってる場所だ。

「サエちゃんも雪だるま作ろうよ」

「うーん、ちょっと考え事してて……あ、そういえばトメお兄さんが、カカちゃんは創作話が得意だって言ってたっけー」

「創作？　ハテ」

そんなんしたことあったっけ？

「なによサエすけ。最近ボーっとしてると思ったら、そんなこと考えてたわけ？」

「うん、ちょっとお話を考えなきゃなんないんだよー。だからカカちゃん、もしそういうの得意だったら、ためしにお話作ってみてくれないかなー？」

「得意ってわけでもないと思うけど……じゃあやってみよか」

「どんなお話？」

「じゃあ、コレが主人公ってことで」

私は自分の手元、作りかけの雪だるまに視線を落とした。

昔々、とあるところで雪だるまが生まれました。

その雪だるま君、略して雪Dとしましょう。

雪Dは生まれつき、障害を持っていました。

なんと、首がないです。

「深刻な障害ね、生きてるのが不思議だわっ」

「作るの途中でやめたのかな」

彼は首が無くても可愛がってくれる子供たちに恩を返すため……

自分の首をさがし出す旅に出ます。ちゃんとした雪だるまになって、

改めて子供たちと遊びたいと思ったのです。

「脳みそも無いのにけなげなこと考えるのねっ」

雪Dはゴロゴロ転がりながら旅を続けます。

「移動は楽そうだねー」

雪Dは街中を転がりながらも宣伝を欠かしません。

「首、首、首をさがしておりますー！　誰か、いらない首をお持ちではありませんかー？　使い古しでも構いません」

「こわいわっ」

「首をよこせえええええぇぇぇぇぇ」

おどろおどろしい声をあげながら街中を転がる、人々の通行にひたすら邪魔な雪球。首のかわりに石が飛んできたのは言うまでもありません。や、もし首が飛んできたら怖いですけど。

それでも雪Dはゴロゴロ転がります。

「な、なんだあれは!?」

「怪物よ！　首をとられるわ！　みんなおうちに入って!!」

こんな風にへそをとる雷様みたいな妙な怪談話を作ったり、

「ママー、タマタマがー」

「あらあら坊や、坊やのタマタマがどうかしたの?」

「ゴロゴロしてるー」

「坊やのタマタマがゴロゴロ!?　びょ、病院へ!!」

こんな風にたまたま妙な患者を作りながらも、雪Dはひたすらゴロゴロ。

そんな長い旅路の末、ついに理想の首の形をした雪球に会うことができました。

「ヘイ、そこの生首！　オレっちと合体しないかぁい?　キラーン☆」

「妖怪の口説き文句ってそんな感じなのかなー？」

これで旅が終わる！　喜びに胸を熱くした雪Ｄはその部分を若干溶かしつつ、愛しの首へ向かって突進しました。

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロどっかーん！！

雪Ｄと首だるまは衝突し、粉々になりました。

「……あれ、終わり？」

「えーと、恋は当たって砕けろという話でした」

私が話し終わると、サエちゃんもサユカンもポカンと口をあけてこちらを見ていた。

「どったの？」

「カカすけ、変」

「へへん」

「なぜに誇らしげっ？」

どんなことでも変なほうがおもしろいもん。

「サエちゃん、どうだった？」

「うーん……私って考えすぎなのかなー。カカちゃんの思いつきパラダイスのほうが面白そう……でもハチャメチャになりそうだし、うーん」

なんか悩んでる。いったいどうしたんだろう？

「サエちゃん、何を悩んでるのかはわからないけど、いつでも相談にのってね」

「うん、ありがとーカカちゃん！」

「さ、サエすけ！　その、わたしもいるんだからっ」

「んー、サユカちゃんは雪Ｄの首を潰した張本人だしなー」

「責任とって恋は当たって砕けてよ？」

「な、なんでそうなるのよぉっ！！」

サエちゃんの悩みも気になるけど、サユカンとトメ兄のデートももう少しのはずだ。

はてさて、どうなってくことやら。

私はとにかく変なＥＮＤ希望。

## カカの天下３４１「首のないアナタ」（後書き）

えーと、自分でつけといてなんですがサブタイトルこわっ！笑

しかし変なＥＮＤが好きというわりには雪Ｄ物語をきちんと〆ているカカなのでした。

## カカの天下３４２「寒くてもちゃんと起きましょう」

「さむ……」

毛布でぐるぐる巻きのトメです……おはよぅ……

今日は日曜日、そして外は雪。

これはもう目が覚めてもひたすらベッドでごろごろし続けるしかないでしょー。

ゴロゴロ……ぐー。

ゴロゴロ……すかー。

「とーめーにー」

そんなまったりと過ごしていた僕の部屋に、小悪魔の声が響く。

「ねーねー、朝ごはん作ってー」

「……適当に食べてろー」

ねむねむまったりモードの僕は投げやりに返した。だって面倒なのだ。毛布がワンダホーで天国なのだ。出たくない。

「カップラーメンも切れてるし、何もないんだよー」

「じゃーパンでも買ってくればー」

「ジャパンなんか買えないよー」

カカが頬を膨らませているのがわかる、が、どうでもいいや。ねむ……

「よーし、そっちがその気なら」

カカが離れた。よーし、これでゆっくり眠れる……

「えーと……お、あったあった」

ごそごそ、ごそごそ。

「どれどれ……おー、一万円以上ある」

あん？

「よし、これを燃やそう」

「待たんかい！！」

とてつもなく理不尽な使い方を聞いて思わず飛び起きた。

「僕の財布の中身をどうするつもりだ！？」

「寒くて寒くて、これを燃やさないと死にそ――」

「財布の中身と食事とその他もろもろが寒くなって後々本当に死んでしまうでゃろうぎゃ！」

「でゃ？　ぎゃ？　噛んだね今」

「やかましいよ！」

「ごめんＹＯ！」

「ノリよく返すなＹＯ！」

寝起きなんだから少しくらい噛むわ！

「とにかく返せ！」

シュパッとカカの手から財布を取り返し、中身を確認……ほっ、大丈夫だ。

「じゃトメ兄、朝ごはん作ってぎゃ？」

「おやすみ」

「うぎゃ！？」

財布を大事に抱え、再び毛布の中へと戻る。

「ぎゃーぎゃー、トメ兄起きるぎゃー」

妙な生物の鳴き声が聞こえるがキニシナイ……

「財布を抱いて寝るなんて虚しいと思わないの？」

燃やされたほうが虚しいわぃ。

「よーし、それじゃ」

もぞ、もぞもぞ。

なんか布団の下で蠢いている。

「てや」

キン！！！

モノスゴイ衝撃が僕の身体に響き渡った。

「どうよトメ兄、起きる気になった？」

「う、動く気力もなくなったわ……」

どこを攻撃されたかは推して知るべし。

「じゃあじゃあ、これでどうだ」

う？　鼻のあたりに何かこしょこしょと……くしゃみでもさせようってのか？

ブチッ！！

「！！！！！！！？？？？？？」

いっでぇぇぇぇぇっ！！　声無き声で叫びながらのた打ち回る！！

「おお、すごい飛び跳ねてる。トメ兄元気だね」

「……！！」

あまりの痛みにまだ声が出ない……この妹、毛抜きで鼻毛を抜きやがった！　婿入り前の男子になんてことを！

こ、こうなったら意地でも起きてやらないんだからな！　毛布に全身くるまろう！　ゴロゴロっと！

ゴロゴロっと！

ゴロゴロゴロゴローっと！

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ！！

なんかゴロゴロしすぎのような気がする。でも毛布の中に入って丸まってる僕には外の様子はわからず……

やがて回転が止まった。

「すいません！　お兄ちゃんが、お兄ちゃんが！」

「ど、どうしたんだいお嬢ちゃん！？」

「ずっと起きないんです！　私、私どうしたらいいか！」

毛布からそっと顔を出すと――冗談のような光景が待っていた。

そこは病院だったのだ。

僕はここまで転がされてきたらしい。んなバカな。

「鼻毛が出てるからきっと鼻毛病です」

そんな不名誉な病気になってたまるか！！

「もしくは股間の」

「おまえもう黙れ！　起きるから！」

たまらず僕は毛布を剥ぎ取り、飛び起きた。

すると目の前には医者っぽい人が数人。

「おお！　確かに鼻毛が出ている！　しかも少し腫れてるぞ！」

「股間も腫れているな。オペが必要だ」

「え？　うそ？　ちょ、ちょっと待って――」

ぱちり、と目が覚める。

「……え？　今の夢？　うそ、え？」

「あ、トメ兄やっと起きた」

鼻が痛い、股間も痛い、でもここは僕の部屋。

……途中から夢だったのか？　どこからだ？

まさかオペ――手術されて記憶消されたとかじゃないよな。まさか、な。

「……？　カカ、なんだそれ」

「ろうそくとろうと」

「……なんでそんなの持ってる」

「トメ兄を起こすのに使った」

あれ？　もしかして今の、最初から夢？　そういえば今回のカカの攻撃ってやたらと普通だった気が……いつもなら意表ばっかついてくるのに。

「ねね、朝ごはん作ってよ」

「……おう」

何はともあれ、素直に起きるのが一番だと思った。

## カカの天下３４２「寒くてもちゃんと起きましょう」（後書き）

夢オチってよく使われてるのであんまり使いたくないのですが、こういう中途半端な夢オチもどうかと思って書いてみました。
まぁこの話を書いた理由は単に私が最近布団から出れなくて、似たように夢と現実混同しがちだったからなのですが＾＾；布団中で電話して返事したつもりが、実はそれ夢だった、とか笑

## カカの天下３４３「お楽しみ会、作戦会議！」

「よーし、号令」

「きりーつ！」

ガラ、と皆と一緒に立ちますカカです。

「礼！」

「「お願いしますぜ、先生！！」」

「まかせとけ！」

「着席！！」

なんか用心棒の先生みたいな挨拶を交わし、始まりました特別授業。

「さて、今日話し合う内容だが……てめぇらも知ってるだろうが、今学期末にはお楽しみ発表会ってぇもんがある。四年生からてめぇらも参加だ。てわけで何するか決めろ」

おー、あれか。春休みの直前にある行事！　体育館に生徒を集めて四年生から六年生までのクラスが順にいろいろ発表していくやつだ。

「知っての通り、発表内容は常識の範囲内ならなんでもいい。歌でも劇でも手品でも……まぁ大抵は劇に落ち着くみてぇだがな」

体育館の狭いステージでできることは限られている。だからおのずと合唱や合奏、劇の三つに内容が集中してしまう。楽をしたいクラスは合唱、もうちょっとがんばろうというクラスが合奏、すごくがんばろうというクラスが劇、といった感じだ。

「うちのクラスが何をするか、そりゃおまえらに任せる。さて、何がやりたい？」

「はーい！」

意外なことに、即行で手を上げたのはサエちゃんだった。

「私とカカちゃんの書いた台本で劇をやりたいですー」

へ？　なに？　聞いてませんよ？

「ほほぅ、てめぇら台本なんか書けんのか？」

「最近練習してたんで、できると思いますー」

あ、そういえばこないだ創作話がどうとか聞いてきたっけ。なるほど、これやりたかったんだねサエちゃん。よし、永遠の親友としてはここは応援しなければ！

「大丈夫です、テンカ先生！　教頭が思わず破壊したくなるような台本作ってみせますから！」

「常識の範囲内でやれっつったろうが。聞いてなかったのか」

「はい！」

「いばんな！」

「あと練習中と本番中も忘れます」

「妙な予約してんじゃねぇよ」

「便利な機能でしょ。ビデオの予約より簡単ですよ」

「そらそーだろーが」

ふふふ……面白くなってきた！

「でもま、他のやつらの意見も聞かねーとな。誰か、これの他に意見あるやついるか？」

テンカ先生がそう言うと、ちらほらと手が挙がる。むぅ、私とサエちゃんの愛の劇場を邪魔するのはどこのどいつだ。

「んじゃそこのおまえ、何がやりたい？」

「激闘、西村伝説！」

「おまえニシカワじゃなかったっけ」

「いいんだいいんだー、村を滅ぼすなんて無理なんだーどうせー……しくしく」

何かあったんかニシカワ君。

「ふむ……じゃ、アヤ。おまえは？」

「私のオンステージ！！」

「他のやつらは？」

「みんな裏方で」

「却下」

すごいアヤちゃん。姉みたいな傍若無人だ。

「てめぇ一人で目立ってどうすんだよ」

「えー！？　だって偉い人が言ってましたよ？　ステージに上がるときは自分以外をじゃがいもだと思えって！　だからじゃがいも扱いしたのに」

それきっと意味違う。

「だったらじゃがいもが主食の国はどうなんだ？」

「そこではみんなが主役なんです！　あ、なんか良い言葉ですねこれ。みんなが主役！」

「そ、アヤ以外は主役なわけだ」

「アウチッ！？」

「さ、他は？」

「カレー決定戦、上級者向け！」

「却下」

それからもぽつぽつと意見が上がる、が……テンカ先生は面白くなさそうにため息をついた。

「てめぇらな……なんでそう自分勝手なんだよ。もっとこう、全員が『超賛成！』って叫ぶような意見ねぇのか？」

ふむ。

「じゃハーイ」

「ほい、カカ」

「テンカ先生の腹踊り」

「「超賛成！！」」

「超却下！」

光の速さで全員が賛成したにも関わらず却下された。横暴だー！

「他！　他にねぇのか！？　って、なんだよサエ」

「はーい、意見を言い直します」

え、変えちゃうの？　私たちの愛の劇場！

「みんなの意見を全部入れた台本を書きますのでー、それで劇をやりたいですー」

「「……」」

反対など出るはずがなかった。

## カカの天下３４３「お楽しみ会、作戦会議！」（後書き）

お楽しみ会のお話、スタートです＾＾
本番は結構先の話。どうやってカカたちが準備していくか……長々とお楽しみください＾＾

## カカの天下３４４「罪つくりな言葉たち」

「「いただきまーす」」

カカと一緒に声をそろえて合掌。トメです。

今日も今日とて楽しい夕飯の時間となりました。いつも妙なことを言い出してくるカカだけど、今日は一体どんなことを言ってくるのか。

もぐもぐ。

もきゅもきゅ。

……あれ？

「どしたカカ。なんで喋らないんだ？」

「ん？　あ、別に」

あからさまに僕から目をそらして答えるカカ。なにやら考え込んでいたようだが……ハテ？

もぐもぐ。

もきゅもきゅ。

「ね、トメ兄」

「なんだ？」

「一生、私の味噌汁を作れ」

ようやく顔をあげたかと思えば何言ってんだコイツ。

「……たぶん今のところのカカの人生で飲んだ大半の味噌汁は僕が作ってると思うけど、それがどうした？」

「むぅ、効果薄いな」

「は？」

聞き返すとすぐにカカはうつむいて、答えてくれなかった。なんなんだ一体。

もぐもぐ。

もきゅもきゅ。

「ね、トメ兄」

「なんだ？」

「愛してる」

「ブッ！！」

味噌汁吹いた。

「な、何をいきなり？」

「や、気にしないで」

気にするなってアンタさんよぉ、いきなり告白しといてそりゃないんでないかい？

僕の非難混じりの視線ビームを涼しい顔で受け流すカカ……や、あれだな、たまに「お兄ちゃん大好き」とか言いたくなることもあるんだろうな、うん。きっとその類だ、あんま想像つかないけど。

もぐもぐ。

もきゅもきゅ。

「ね、トメ兄」

「なんだ？」

「抱いて」

からあげ吹いた。もったいね。

「ブホッ！！」

「ななな、何を言うとるだチミは？」

「や、気にしないで」

気になるっての！　あれか？　もしかして最初のやつもプロポー

ズの言葉だったりするのか？　もしや禁断の兄妹愛！？　ま、まさか、サエちゃんＬｏｖｅなカカに限ってそんな……

「なぁカカ。おまえにとってサエちゃんはなんだ？」

「神」

「僕は？」

「紙」

よし、いつものカカだ。

ふむ？　となるとなぜにカカはこんなことを言い出してきたのだろうか。

もぐもぐ。

もきゅもきゅ。

「ね、トメ兄」

「な、なんだ？」

「ソース取って」

ほ、普通だ。僕はそばにあったソースを手に取り、そのままカカに手渡ししてやった。

「ありがと、お兄ちゃん大好き」

「げほっ！　げほっ！」

「なぜむせる」

や、なぜってアナタ。そんなフェイント卑怯デスヨ？

「こ、コホン……なんなんだカカ、もしかして僕に甘えたいのか？」

「思い上がるな」

「ホントなんやねんおまえは！！」

わけがわからない。今日のカカはいつにもましてワケがワカラナイ！

――その後、さらに何度かカカから甘い言葉をささやかれたのだが……ささやいた直後にことごとく扱き下ろされ、一向に甘えてくる気配はなかった。一体なんだったのだろう。

――夕飯が終わって自分の部屋へ戻り、私カカは早速サエちゃんに電話した。

「もしもし、こんばんはサエちゃん」

『こんばんはーカカちゃん。どうだった？』

「えっとね、一番トメ兄が動揺した言葉はね――」

そう、これは調査だったのだ。

トメ兄に効くのは一体どんな言葉か、それを調べるための。

『よしよしー、サユカちゃんのデート必勝プログラムはもうすぐ完成だよー』

「おー！　楽しみ楽しみ」

クリスマスにトメ兄とサユカンが約束した映画デートが間近に迫り、動き出した私たち。

お楽しみ会の台本も考えなきゃだけど、まずはこっちが大事だよね。果たしてサユカンはこのデートでトメ兄とラブラブになることができるのか！？

考えただけでニヤニヤしちゃうね。

『でー、他にはどんな言葉を言ったのー？』

「愛してる」

『おー、ストレートだねー』

「愛してる」

『はいはいー』

「愛してる！」

『なんで三回言うのー？』

や、サエちゃんに言ってみたかったもんで。

## カカの天下３４４「罪つくりな言葉たち」（後書き）

突然、家族に「愛してる」とか言われたらどうしますか？
食事中だったらとりあえず吹くと思います。
まぁ新婚さんだったり夫婦だったりするとまた違うのでしょうけど笑

カカたちが言ったとおり、サユカちゃんのデートが迫っています。
はてさて、どうなることやら……

## カカの天下３４５「おひさしぶりです、がんばれタケダ」

諸君、あけましておめでとう！　タケダだ！

なに？　「いまさらあけましておめでとう言うな」だと？　仕方ないだろうが、今年に入ってからほとんど出番がなかったのだから！　しかし真打というものはいつも後から登場するものだ。今こそこの俺の真の力を発揮してくれる！

「なぁカカ君」

「誰？」

「ぐはっ」

見たか俺の力を！　ふがいなさすぎて泣けるぜ！

……しかし人生とは七転八倒のちに七転八起！　七回転んで八回倒れてこそ、さらに七回転んだときに八回起き上がることができるのだ！　転びすぎだという文句は受け付けん！

「か、カカ君！　俺の顔を忘れたのか？　クリスマス会にも出たし、年賀状も送ったこの俺を」

「そんな前のことは忘れたよ」

たしかに最近出番なかったけどさぁ！！

「と、とにかくだ！　どうだカカ君。俺たちのクラスの劇を手伝っ

てみないか？」

「む？」

劇というのは、今学期末にあるお楽しみ発表会でのＭｙクラスの出し物のことだ。

お楽しみ発表会では基本的に各クラス単位で発表するのだが、数人くらいなら他のクラスから助っ人をお願いしてもいいことになっている。もちろん四年生以上は全員何かしらの出し物に参加するため、助っ人してもらう＝その人は発表をかけもちする、ということになる。やることが倍になり忙しくなること確実だからと、よほど元気が余っている者以外はあまりしないそうだ。

「でも私忙しいんだよね」

「そこをなんとか！　カカ君のためにとっておきの役を空けてあるのだ！」

「へー。何の劇のどんな役？」

「劇は『水戸黄門』で、印籠の役だ！」

「やりたいっ！！」

ふっ、やはりな。『印籠を出す役』ではなく『印籠そのものの役』というのがポイントだ。カカ君なら絶対に食いついてくると思った！　フィーッシュ！

「この印籠が目に入らぬかーってやつだよね！　……んー、でもな

ー。やっぱりこっちのを完璧にやりたいしなぁ」

「そこをなんとか！　印籠役は目立つくせに楽だぞ？　なにせ後半で周囲の人の目に入ればいいだけなのだから」

物理的に目に入ってはイケナイぞ！

「そうだね、それくらいなら……いっか」

よっしゃぁ！　カカ君との共同作業げっと！

「カカちゃーん」

「お、サエちゃん。うん、サエちゃんの顔を見たらやっぱ自分たちのを中心にやりたくなった。印籠やめるね」

なぜにいいいいい！？

「サユカちゃん勧誘してきたよー」

サエ君の声が聞こえて振り返ると、言葉の通り勧誘したらしいサユカ君の手を引っ張ってこちらへ歩いてくるところだった。

「あれー？　タケダ君久しぶりー」

「誰だったかしらっ？」

「サエ君！　俺を覚えてくれているのは君だけだ！」

「あははー、自分のおもちゃを忘れるはずないじゃないですかー」

聞かなかったことにしよう。

「タケダ君も私たちの劇、手伝うー？」

「おおっ、いいのか！？」

再びラッキーチャンス！　結局はカカ君といる時間が増えるじゃないか！

「サユカちゃんもいいよねー？」

「わ、わたしはまだ手伝うとは言ってないわよっ」

「そっかー。じゃ仕方ないけどサユカン、しばらく遊べないから一人で遊んでね」

「……ぇ」

「うんうんー。私たちお楽しみ会の打ち合わせで忙しいからー」

「……ぁ」

「私たちは放課後もがんばるから、一人で帰ってね」

「……ゃ」

「じゃーカカちゃん、まずは何を話しあおうかー……あれ、サユカちゃんまだいたのー？」

「や、やるわよっ、やればいいんでしょっ！！」

「いいよ無理しなくても」

「やりたいって言ってるのっ」

「なんでやりたいのー？」

「……ぅ」

「寂しいから？」

「ち、ちがっ」

「寂しいと死んじゃうんだよね、ウサギみたいにー」

「そうじゃなくてっ」

「あそ。じゃあ行こうかサエちゃん」

「そだね」

「あーん、もうっ！　そうよっ！　寂しいのよっ！　どうせわたしはウサギよっ！　ぴょんぴょんっ！　仲間に入れてよぅ！」

ニヤ、といやらしい笑みを浮かべるカカ君とサエ君。三人仲が良いのはいいんだが……置いてかれてるな、俺。しかし「ぴょん」とはなんだ。ウサギのつもりか。

「二人ともきらーいっ」

「よしよし、だぴょん」

「なでなでーだぴょん♪」

うーむ、声をかけづらいが……

「け、結局俺は、手伝っていいのか？」

「んー？　そだねー……じゃあ試験しよっかぴょん。タケダ君が役に立つかどうか調べるんだぴょん！」

「サエちゃん、どうやるぴょん？」

なぜ「ぴょん」がデフォルトになっているかは謎だが、このタケダ。カカ君と少しでも一緒にいられるのならどんな試験でもクリアしてみせるぴょん！

「じゃータケダ君」

「おう！」

「ジャンプしてぴょん」

「……おう？」

言われたとおり、その場でジャンプしてみる。

ぴょーんぴょーん。

ポケットの中にある財布の小銭がちゃりーんちゃりーん。

「合格だぴょーん」

「ちょっと待て!?　どこのカツアゲだこれは!!」

「期待してるぴょん」

「期待されてるのは金銭面としか思えないのだが!?」

い、いやしかし！　古今東西、恋愛には金がかかるもの！

これも愛のためを思えば……仕方ない！　何はともあれカカ君と共同作業できることになったのだから！

サエ君、加減……してくれぴょん？

## カカの天下３４５「おひさしぶりです、がんばれタケダ」（後書き）

はい、久々のタケダでした。って、あれ？　なんかタケダ恵まれてない？　結局カカとの共同作業はゲットしてるわけだし……うーん、今年のタケダがやるかもしれませんね。

え？　金ヅルにされてるのはどうなんだ、って？
その程度の扱いなら充分恵まれてると言えるでしょう。タケダのくせに。

## カカの天下３４６「サユカの任務、デート準備編」

「べ、べつにこんなことしなくてもっ」

「いいからいいからー」

「トメ兄に可愛いって言ってもらいたいでしょ？」

「トメさんに……え、えへへ」

うあ、なんて愛らしい笑顔だろう。あ、こんちは、カカです。

ここは近所のデパートの洋服売り場、試着室前でございます。お降りの際は忘れもの等ございませんようお願いいたします、などと電車で聞こえてくる声っぽく言ってみる。実際に何か着忘れて降りたりしたら大変だからね。

「ほらー、そういうわけでちゃっちゃと着替えるー」

「わ、わかったわよっ」

急かすサエちゃんに押され、しぶしぶ試着室に入っていくサユカン。これがどういう状況かというと――サユカンが明日着ていく服を私たちで選んであげようというのだ。

明日に何があるかって？

よくぞ聞いてくれました。

なんと明日は、トメ兄とサユカンの映画デートの日なのです！

クリスマスに約束してからずーっとサユカンが心待ちにしていたこのイベント！　私とサエちゃんも協力して考えたデート必勝プログラムも、今日の服選びを持って完成なのだ！

「サユカちゃん、まだー？」

「ま、まだよっ」

「早くしないと覗くよ？」

「やめさいよっ、バカッ！」

「む、バカだと」

ちょっとムカついた私は試着室に近づき、入り口にかかっている分厚いカーテンの隙間から中を覗き込んだ。

「うへへ、おねーちゃん今どんなパンツはいてんの？」

「本気でヘンタイか君はっ！！」

ムカムカっときた私はカーテンを閉め、後ろを振り返った。

大きく息を吸って――

「皆さん聞いてください！　いまここに入ってる女の子のパンツの色は黒です！」

「ちょっ！　カカすけぇっ！？」

「さらにこの女の子の好きな人は――」

「ごめっ、わるかったっ、わたしが悪かった謝る謝る！　だからもうやめてぇっ！！」

ふむ、この後さらに『この子のパンツはその人のために――』とか続くんだけど、なんかサユカン泣きそうな顔してるからやめといてあげよう。

「なんてこと言うのよぅ……それにわたしのはピンクよぅ」

わざわざ申告ありがとうございます。

「うぅー……ど、どうよっ」

やがてカーテンが開き、恥ずかしそうに頬を染めたサユカンがニューファッションで現れた。可愛らしいけどちょっと大人っぽい黒と白の花柄ワンピースに、お洒落なフリルつきのカーディガン。落ち着いた色と綺麗なシルエットでいつもと違うあなたを演出だ！

「おー、いいんじゃなーい？　さすが私のコーディネイトー！　コーディネイトは？」

「こーでねーと！」

「カカちゃんナイスあしすとー」

お約束だね。そしてサエちゃんが選んだ服が黒いのもお約束。

「よ、サユカン！　顔赤くしちゃって、初々しいね！」

「誰のせいよっ」

あ、さっきの私のせいか。

「でもこれ、ちょっと寒いかもしれないわねっ。カーディガンは長袖だけど、この時期にワンピースは……」

「何言ってるのーサユカちゃん。寒い格好してトメお兄さんに温めてもらうんだよー。それを理由に最低でも手くらいつなげるよー？」

「そ、そか。なるほど……」

サエちゃん……策士だ。

「じゃさ、サユカン。いっそのこと服で隠すの胸の部分だけでよくない？」

「……はぁっ！？」

「だってワンピースでしょ」

「パズルの1ピースじゃないんだからっ」

「そうすれば寒そうなとこ隅々までトメ兄に温めてもらえるかもなのに」

「ぼんっ」

あ、サユカン真っ赤になって爆発した。

「と、とにかくっ、そんなクリスマスのときの服みたいなのは、もうこりごりなのっ」

「「えー」」

「そろって不満そうな声あげるなっ」

つまんないつまんない！　よーし、そっちがその気なら。

「サユカン、ダメだよ、そんなんじゃトメ兄は落とせないよ!?」

「な、なによ、急にっ」

「いい？　サユカン。あのクリスマスのときのトメ兄の言葉を覚えてる？　すごく似合ってる、そう言ったよね？」

「い、言ったと思う、けど」

「トメ兄が服のこと褒めるなんて滅多にないんだよ？　長年一緒にいる私だってほとんど聞いたことないんだから！」

「そ、そうなの？」

そうだったような気がする、多分。このさい事実はどうでもいい。

「つまりね、サユカン。トメ兄はあのエロサンタの衣装しか可愛いと思えないんだよ！」

「な、なんですってぇ！？」

「もうヘンタイにしか聞こえないねーその言い方」

「だからサユカン！　着るんだよ！　封印していたあの衣装をもう一度！」

「う……で、でも」

「トメ兄に可愛いがられたくないの？」

「ぅ」

「トメ兄の目にはあのエロサンタの衣装しか映ってないんだよ？」

「ぅぅ」

「トメお兄さんどんどんヘンタイ化ちゅー。やん♪」

「あれを着てトメ兄をメロメロにするんだよ！　好きな人のために、それくらいできないでどうするの！」

「……！　そ、そうねっ！　わたしが間違ってたわカカすけ！　トメさんのためなら、わたし――」

よし、これでおもしろくなった。

早速サンタ衣装も含めて作戦の練り直しだね！

たーのーしーみー！

## カカの天下３４６「サユカの任務、デート準備編」（後書き）

とうとうサユカちゃん、デートです。
トメは果たしてどう出るのでしょうか。サユカちゃんはどう暴走するのでしょうか。
次回をお楽しみに＾＾
皆さん、うまくいってほしい……ですよね？

## カカの天下３４７「初恋デートは実るのか？　前編」

こ、こっここ、こんにちは、サユカでしゅ！　あぁ噛んだ……ぐすん。

いきなりすいません、緊張しすぎてるせいでうまく喋れないのでしゅ――ですっ！　あーもう本当にしっかりしろわたし！

そう、今日はと、ととと、トメさんとデートなのよっ。

あぁ、デート……なんて甘美な響き……

……デート……デート……デート……はっ！？　い、いけない、あっちの世界に行ってる場合じゃなかった！

鏡を取り出し、朝から何度もやった身だしなみチェックをもう一度。

髪型……よし。服は……うん、昨日買った花柄ワンピにカーディガンも問題なしっ。

え？　サンタ衣装はどうしたのかって？

ひ、ひみつよっ！　あれはまだ――あ！

トメさんだ！　トメさんが歩いてくる！

落ち着くのよサユカ！　こういうときは大抵「待った？」って聞いてくるものよねっ、そしてわたしが――

「やぁ、サユカちゃん。待――」

「待った！！」

今考え中なのよっ！　ええと、そしたらわたしが「いいえっ、いまきたところです」って答えるのねっ！　実際は三時間以上待ってるけどっ！　ああ、なんて定番なデートの流れなのっ？　よし、もう大丈夫、あとはトメさんに「待った？」って言ってもらえば――

「……」

カモン！

「……」

まだかな。

「……！」

ってわたしが先に言っちゃったじゃないのっ！！

「えと、あの、サユカちゃん？」

「あ、その、ご、ごめんなさいっ！　ちょっと考えごとをっ」

「あー、ごめん。そんなに待った？」

まずいっ！　わたしがトメさんの「待った？」っていう質問を先読みして「待ったわよっ！」って答えたみたいな感じになってる！

すぐにフォローを！　ええと、『いいえ、いまきたとこです』よ！

「いえいっ、いたことときすでま」

何言ってるのわたしっ！？

「イエイ、イタコとキス手間？」

何訳してるのトメさん！？　「いえい」ってイタコとキスして喜んでるのっ！？　ちなみにイタコっていうのは巫女の一種よっ、トメさんって巫女さんフェチなのかしらっ！？

「あ、あのー。サユカちゃん？」

「トメさん！！」

「は、はい」

巫女さんなんかに負けてたまるかっ！

「これ、デートですよねっ」

カカすけとサエすけが考えてくれたデート必勝プログラム！　まず最初は――トメさんにこれがデートだと認識させることっ。

「んー……うん」

にこっ。

「デート、だね」

きゃあああああっ！　ピッピー！　イエローカードー！　トメさんは優しい笑顔禁止！！

「サユカちゃんの服、可愛いし。それだけおめかしして一緒に出かけるのにデートって言わないんじゃ、失礼だよね」

きゃあああああ！！！　ピッピー！　レッドカードー！　わたしの顔が超レッドー！！　トメさんは嬉しい言葉禁止ー！！　もっと言ってーっ！！

「じゃあ、手でもつなぐ？」

きゃあああああああああああああ！！　ピッピッピー！！　デッドカードー！！　わたしの心が超デッドー！！　トメさんはもうトメさんを禁止ー！！　トメさんトメさんトメサントメ産止め三度目酸……

「……サユカちゃん、突然しゃがみこんでどうしたの？」

「タイムッ！！」

頭がバグったわっ。

「あ、ああ」

すーはーすーはーすーはー！！

……よし、落ち着け私。ピーピーピーピーと、わたしの頭はいつから禁止用語の嵐になったのよ。いや、ピーな妄想もたまにはする

けど、今するべきじゃないわっ。

「ご、ごめんなさいトメさん。その、緊張して」

「あ、僕がデートなんて言ったからかな。ごめんね」

「違いますっ！　最初にそう言ったのはわたしだし、その、これがデートだったらわたしも嬉しいですぴょん！」

ぴょん？

あああああ！　なんで！　なんでせっかく勇気を出して言ったのにまともに言えないのっ！？

ううぅ……もうヤダ。わたしってなんでいつもこんなにダメなのっ。これじゃトメさんにも嫌われて――え。

「ほい」

「ぁ」

手が。

「デートだろ？　ならいいよな、このくらい」

手が、つながってる。

トメさんと。

「……落ち着いた？」

わたしの痴態をすべて受け入れてくれる、優しい笑顔。

ほんとに、優しい、その瞳。

頬が熱い、胸が熱い。

触れている手が、熱い。

でもなぜか慌てていた心は落ち着いて、わたしは静かに頷いたんだ。

「じゃ、いこっか。上映時間まであんまりないし」

「……はい」

わたし、本当にトメさんが好きなんだなぁ。

映画が終わるまで持つかな、わたしの心臓……

## カカの天下３４７「初恋デートは実るのか？　前編」（後書き）

ついに始まりました、トメとサユカのデート！
……や、初っ端からトバしてますねーサユカちゃん笑
まだ映画館にも入ってませんが……書いててやたらと楽しいのはどうしてくれよう（爆

「うわ、やっぱり満席だな」

「そそ、そうですねっ」

ですねっ、ですよねっ、サユカですっ！

トメさんの言うとおり、ほとんど空席がない映画館。上映する『初恋は実らない』の作品人気が一目でわかる光景だわ。でも――正直、そんなことはどうでもよかった。

今のわたしは映画の内容よりも、映画を一緒に見る人のことのほうが大事なのだ。あぁ、チケットを切るときに離れたトメさんの手がいまだに名残惜しい……

ともあれ、チケットに指定された席にトメさんと一緒に座る。もちろん席は隣同士っ！　すぐそばにトメさん……あぅ、並んで歩くのとはまた違った緊張がっ！

「見やすいとこ座れたね」

「そ、そうですねっ」

真ん中のやや後ろ、という映画を見るには結構いい位置に座れたのは喜ぶべきところだけど、サエすけの助言を真に受けるとすれば微妙だった。

曰く、「隅っこのほうが暗いし目立たないからイロイロできるよ

ー」だそうだ。

あ、もし真に受けたら、の話だからねっ、べつにわたしは暗がりでナニをドウするつもりも……ない、と思うわ、多分っ。

とにかくっ！　席が真ん中なんだからそんなこと考えても仕方ないわ。作戦を進めなければっ。

ええと、たしか……上映まで時間があるから、その間に会話するのよっ。最初はさりげない話題から……

「と、トメさん」

「ん？　なんだサユカちゃん」

「前からちょっと気になってたんですけど、トメさんの血液型ってなんですか？」

などと聞きつつ、実はカカすけからリサーチ済みだ。

「ああ、僕はA型だよ。それっぽいってよく言われる」

細かいところに気がつく（主にボケに）トメさんにピッタリだと思うわっ、って言いそうになるけど、そんな素直に返さないのよっ。

「わ、わぁっ、わたしもA型なんですよっ、A型同士の男女って相性がいいんですってっ」

「お、そうなんだ！」

よしっ、ここまではＯＫ！　次は――ちらりとメモを見る。

『例えば、二人が大きな問題に直面したとします。でも二人ともＡ型なら、慎重に、事は荒立てないように考えて問題に取り組んで、速やかに解決できるそうです』

これを言えば、ってあれ、隅っこにもうちょっと何か書いてある。

『こう答えて、二人で結婚したらうまくいくわよっカモンベイベッ！　とアピールするのだ』

これ、カカすけの筆跡……応援してくれてるんだ！

あれ、もう一つ。

『サユカちゃんのスケベ～♪』

なぜっ！？

これは間違いなくサエすけね……楽しんでるわねっ。

「サユカちゃん？　どした」

「えぇえ！？　あ、いやっ、そのっ」

メモに見入ってて答えるの忘れてた！　ええと答えなきゃ、ええと、ええと――

「二人ともＡ型ならっ、身長を気にして、はとこを粗挽きにするそ

うですっ！」

「……はい？」

「すると問題が解決するんです！」

「すげーなA型」

すごすぎるわよぉっ！！

はぁ……ため息をついて思わずうつむく。恥ずかしい、恥ずかしすぎてトメさんの方を向けない。そうよ、わたしなんかトメさんの顔はおろかスクリーンを見る資格すらないわ、ずっと下を向いてればいいんだわ……はぁ。

そうやって、ため息を何度もついていたとき。

座席の手すりに置いていたわたしの手に、ふわりと温かい感触が。

え？　これ、まさか、トメさんの手？

もしかしてわたしを慰めようとして握ってくれてるの？　やだ、嬉しい……え？　あん、そ、そんな、耳がくすぐったい、息を吹きかけるなんてトメさんたら大胆っ、でもトメさんなら――

「うへへー、サユカンはここがええのんかー？」

「ってカカすけじゃないの！？」

と、隣の席に座ってたトメさんが化けた！？

「トメ兄ならトイレ行ったよ。声かけてたけど聞いてなかったみたいだね」

「う……そ、そうなの？　ていうか、なんでこんなとこにいるのよっ」

「おもしろそうだから」

「どうせそうだと思ったわよっ！！」

あーもう、うまくいかないわ邪魔は入るは……はぁ。

「どうしたの、ため息なんかついて」

「どうもこうも、全然うまくいかないのよぅ……」

「大丈夫、遠くから見ててもおもしろかったよ」

「面白くなくていいのよっ！」

「なんて贅沢な」

「トメさんは完璧な紳士だったのに、わたしだけおもしろかったなんて、我慢ならないのよ……！」

「完璧、ねぇ。そりゃサユカンの目にはトメ兄なら何でも完璧に美化されてそうだけど」

「やかましい！　ほらっ、トメさんが帰ってくるから消えてよっ」

「つれないねー。大丈夫だよ、もうちょい時間かかるから」

「……え？」

「うまくいってないんだよね、サユカン。じゃあ私たちが一肌脱いであげようじゃないの！」

――そのころのトメ。

ふぅ、トイレ終了。さっさと戻らないとな。

「もし。そこの人？」

「え？」

道行く僕に声をかけたのは怪しげな黒いローブ姿のおばあさん……って、魔法使いか？　このご時世に？　ああ、こういうご時世だからこそ、おばあさんもコスプレを。

「いいご趣味ですね」

「なんじゃーいきなり」

「楽しいならそれもいいと思いますよ。では」

「ちょ、ちょっと待たれい」

なんだよ、僕はさっさと戻らないといけないのに。サユカちゃんが待ってるんだから……や、なんかいつもの混乱モードになってたから僕の声届いてたか怪しいもんだけど。

「占ってしんぜよー」

「僕、そういうの信じないから。じゃな」

「ふむふむー、占いによるとおぬしはロリコンじゃ」

「あんだとぉ！？」

それ占いじゃねーだろ！

「あのな、ばーさん。あんまいい加減なこと言ってると」

「ほ、本当じゃー！　この水晶に写っているのじゃー！」

「それビー玉だろうが！」

「たくさん食べておっきくなったら水晶になるのじゃー！」

「ほう？　ビー玉が何を食べるんだ」

「占った者の心を食べるのじゃー」

「いますぐ壊せ、そんな呪いのアイテム」

勝手に髪の毛が伸びる日本人形みたいで怖いわ。

「とにかく、連れを待たせてるから――」

「いいから聞くのじゃー！　あ、聞いてー、ちょっと待っ！　……えーぃ、じゃあ他のこと占ってみんなにばらしちゃうぞー！」

「勝手にどうぞ」

「おぬしの名前はトメ！　初恋の相手は姉！　というわけでカツコさん宛てに恋文を」

「待て待て待てーい！」

な、何者だこのばーさん。フードからチラリと見えるしわくちゃな顔にも、しわがれた声にも、全然まったく覚えがない。だから知らない人……の、はず。

「本当に、占い師なのか？」

「その通り、今回はおぬしに助言するために参ったのじゃ」

「……へぇ、占いって無料でしてくれるのか？」

「もちろ――あ、ジュース奢って♪」

あれ？　なんか妙に可愛い声出さなかったか？

……まぁ、いっか。ジュースの一本くらい。もう少し上映まで時間あるし。

すぐそばにあった自販機でばーさんの希望した『ホットミルクチ

ョコレート』を買って渡す。ついでに僕とサユカちゃんの分も買ってくかな。

「で、占いって？」

「おぬしと相性がいいのはＡ型じゃー」

すげー普通の占いだ。

「あとのぅ、年下とならうまくいくぞぃ。すごく年下がいいのぅ」

「すごくって、どれくらいだよ」

「さてのー。でも今はそういう対象に見えない子にでも、将来美人になりそうな子がいたら仲良くしておくといいかものー」

「そういう打算的な付き合い方は嫌だ」

「ほっほっほー、しかし向こうはどうかのー？　歳の差なんて気にせずにおぬしのことを好いておる子が、そばにいるかもしれないぞぃ」

歳の差を、気にせずに？

……僕は気にするけど、誰もがそうとは限らない……そういえば、そう、だよな。まったく考えてなかったけど。

「わしが言いたいのは二つだけじゃー。一つは、歳が離れておるからといって恋愛対象からはずすなということー」

「もう、一つは？」

「ジュースもう一本奢ってー♪」

「……おう」

それくらいは価値ある説教だったかもしれない。

向こうは歳の差を気にしない、もしそうだとしたら……まさか。

――再びサユカちゃんサイド。

「だから、なんだって君はそういつもいつも」

「お、そろそろトメ兄戻ってくるかな」

「って、え？　あ、ほんとにっ！？　じゃーさっさと」

「うん、消えるよ。サユカンの緊張も結構ほぐれたみたいだし」

「……え？　まさか君、そのために？」

「や、今思いついたから格好つけて言ったの。本当はからかいにきただけ」

「帰れっ」

「はいはい。これからが本番だよ、がんばってねー♪」

腕をぶんぶん振り回してサッと消えるカカすけ。まったく……悔しいけど感謝だわ。たしかに緊張はだいぶほぐれたから。

「……ただいま」

「おかえりなさいっ……あれっ、どうかしました？」

「へ？　い、いや、なにも」

おかしいな。今度はトメさんが緊張しているような……もしかしてサエすけが何かしたのかな。カカすけがここにいるということは、来てないはずないだろうし――と、そのとき。

『えー、こほんこほん。マイクてちゅっ……うぅ、噛みましたぁ』

なんだか間抜けな放送が館内に響いた。

『す、すいませんもう一回っ。マイクてちゅと！』

『何をしてんだコラ！　館内放送で萌えなんかいらないんだぞ！』

『わ、私そんなつもりじゃ、ただ緊張して』

『アナウンサーやったことあるって言うから任せたのに……君クビっ！！』

『あぅ！？』

……はて、どこかで聞いたような声が。思わずトメさんと顔を見

合わせる――けど、すぐ視線を逸らされた。え、なんで、どして？

『こほん、失礼しました。えー、それではいよいよ、『初恋は実らない　宴』上映イベントを始めたいと思います！』

「あ、そういえばイベントつきなんでしたよねっ」

「そ、そうだったな。忘れてたけど」

なんだかギクシャクしてるような気がするわっ。でもなんかトメさん顔が赤いような……もしかして？　と思ったのも束の間、わたしの思考は湧き上がる周囲の大歓声によってかき消された。

「どうもこんにちは♪　ヒロイン役の笠桐結乃です」

人を惹きつけてやまないスイーツボイスに引き寄せられて見てみれば――スクリーンの前に映画の主役がドレスアップして登場っ！？

「あ、母さん」

「ユイナさん、きれーっ」

館内全てが彼女のファンなのではと思うほどの大歓声。そっか、この上映のチケットがレアだって言われてたのは、このイベントのせいだったのねっ。

「そして今回のイベントの相方！　映画の中でわたしのダーリンをたぶらかす年増女役の――」

「ちょっと！　その紹介やめてくださる結乃さん！？」

「でも今回の映画のキャッチフレーズにもこう書いてありますし」

『初恋は実らない　宴』のキャッチフレーズ……たしか『幸せな生活を送っていた二人に三十路女の魔の手が伸びる！』だっけ。

「あたくしはそのフレーズをずーっと抗議し続けてるのに事務所が聞き入れないだけよっ！」

「そうですねー、年増とか言われててもヒロインのわたしより年下ですし、変えたほうがいいかもしれないですね♪」

「ぐはぁっ」

ユイナさんの言葉が年増女さんの胸にクリティカルヒット！　でもユイナさんの笑顔に邪気はない……あの人としては事実を言ってるだけなのよね、あと何度か実際に話してみてわかったけど、結構ほえほえ天然タイプだし。すべて受け入れてくれそうな包容力があるけど、その分悪意には鈍感なのかもしれない。

「さてさてー、それでは上映イベントを始めますよ♪　最初の企画は――いきなりどっきり告白コーナー♪」

本当にいきなりすぎて会場全体が『？』マークを浮かべる。

「知っての通り、これは恋のお話です。初恋に身を焦がす二人の波乱万丈のラブストーリー！

なので、カップルで観にきてくださった方もたくさんいらっしゃるようですね。そこでおせっかいながら――初恋してるっぽいカップルに、今から告白しあってもらおうと思います♪」

スポットライトがあたる。

わたしと、トメさんに。

「なお本人の了承はもらっているので無理やりではありません。皆さん、温かく見守ってくださいね♪」

了承なんかとってないしっ！！　あぁ注目が！　注目が集まってるううううっ！　あぅぅぅっ。

――でも。

これってきっとカカすけの差し金よね。そしてこれは、紛れも無いチャンス。

わたしは、立った。

トメさんも立ってくれた。

ライトの眩しい光と、館内の大勢の人の視線にさらされながら、二人は向き合う。

カカすけとサエすけ……二人とも、こんなわたしのためにここまでお膳立てしてくれて、ありがとう。

うん。

ここまで、きたら。

告白、しよう。

## カカの天下３４８「初恋デートは実るのか？　中編」（後書き）

告白、するのでしょうか。
トメは、どうするのでしょうか。

……次回をお楽しみに。

## カカの天下３４９「初恋デートは実るのか？　後編」

暗い館内でただ一つ輝くライトの光は、今やわたしとトメさんだけを優しく照らしている。

とても、静か。

胸の音だけがうるさい。

鼓動が速い、心のブレーキが壊れたみたいにどんどん加速していく。

トメさんの顔を見る。

好きな人の顔を。

「――トメさん」

声の震えを必死で押し隠す。

「わたしは」

言うんだ、カカすけが調べてくれたあの言葉を。

トメさんが一番反応したという、心にグッときたらしいこの言葉をっ！

「あなたを、お慕い申し上げております」

少し古めかしい告白。

和風びいきなトメさんらしい、と思う。

好き。

大好き。

届いて。

この気持ち。

わたしはあなたが、誰よりも大好きなんですっ！

ありったけの想いをこめてトメさんの瞳を見つめるっ

……やがて。

トメさんが、頷いた。

「うん」

その「うん」はどういう意味？

気になる、でも声を出せない。

実際には数秒、でもわたしには永遠にも思える時間、わたしはトメさんの言葉の続きを待った。

そして――

「僕も、サユカちゃんのことが好きだよ」

――どうも、トメ兄とサユカンくっつけ隊員のカカです。

今日はトメ兄とサユカンの映画デートを見守りにきました。そして現在ついに！　サユカンがトメ兄に告白しようとしている、のですが……

「なんだかサユカちゃん、固まってますのー」

隣で座っている魔法使いローブを着たサエちゃんが、老人ボイスのままで心配そうに呟く。それにしてもすごい声マネだ。いくらサエちゃんと仲がいい人だったとしても、絶対に聞き分けることはできないだろう。私は愛で大体わかるけど。さっきなんかサエちゃん、私のためにわざわざ飲み物買ってきてくれたんだよっ、粒々入りのおしるこっていうチョイスがまた――

「サユカン、ほんと動かないね」

そう、そんなことよりこっちのほうが大事だ。

お母さんにも手伝ってもらって用意した、この告白の舞台。スポットライトがあたり、二人で立ち上がったはいいものの……サユカンは一向に動かない。

「緊張して動けないとか？」

「でも目はイっちゃってるようなー」

「ぶつぶつ何か言ってる気もするね」

「あ、もしかして頭の中で予行練習でもしてるんじゃないかなー？」

実は私たち、トメ兄とサユカンのすぐ後ろの席に潜んでいたりする。お母さんに頼んで席を用意してもらったのだ。だから耳を澄ませばサユカンの独り言も……あ、聞こえた。

「……ねぇ。『はい、わたしも好きです』って言ったね」

「うん、どうやらサユカちゃんの妄想の中では成功したらしいねー」

や、こんな風に衆人環視にさらされたら現実逃避する気持ちもわからなくはないけどさ……そろそろ戻ってこないと、やばくない？

トメ兄だって心配そうに――

「……サユカちゃん？」

「はっ」

あ、トメ兄の呼びかけで戻ってきた。

「よかった、予行練習もバッチリみたいだし、いよいよ言うんだね！」

「うん、そだねー」

「そっかそっか、サユカンがついにトメ兄と」

「これで二人が付き合うことになったらー……二人でお出かけすること多くなるのかなー」

「そうそう、二人だけで遊んだり」

「二人だけでご飯食べたりー」

「二人だけで……ずっと一緒にいたり」

「よかった、ねー？」

「うん……よかった、よかった……」

「カカちゃん？　なんだか顔がひきつってるよ？」

「う……さ、サエちゃんこそ口の端がひくひくしてるよ」

「え、と。なんかさー、これだけお膳立てしといてなんだけど……このままうまくいくのも面白くなくない？」

「そんな気がしてきた」

そう、面白くないから言ってるんだからね。

別にトメ兄を取られるのが土壇場になって嫌になったとか、そういうわけじゃないんだからね。

「サユカちゃん？」

「は、はいっ、えっと……」

ここはどこ？　わたしは誰？　なんて言ってる場合じゃない！
わたしはどこに行ってたのよっ、なんか幸せな世界だったけど！

……えぇ、わかってるわよ、ちょっとアッチの世界にお邪魔してたわよっ、悪い！？　怖いのよっ、勇気がいるのよっ、妄想の中で練習くらいしないとやってられないわよっ！

「と、と、ト、メ、さん！」

妄想の中みたいに震える声を抑えられない！

お慕い申しております！　お慕い申しております！　そう言うのよっ、落ち着くのよサユカ！

ゆっくり、ゆっくり、確実に言うの！

「お」

そう、間違いは許されないわ。

「お」

一文字一文字確実に――さぁ！

言えっ。

言うのよっ！！

口を開く。

息を吸って。

声高らかに！！

「お」「しっこ」「したい」「と」「申しております！！」

……ぁ？

ウシロカラ、トコロドコロ、ナニカ、キコエタヨウナ？

会場の音が消えた。

わたしの鼓動も死んだように消えた。

いまわたし何言った？　いや、何を言ったように聞こえた？

おしっこしたいと申しております。

何を告白してんのわたし。

「サユカちゃん」

トメさんを見る。

「そっか、だから今日は様子がおかしかったのか」

納得、された？

「道理でそわそわしてると思った。ごめん、気づかなくて」

「い」

こんなところでこんなときに。

「い」

こんなこと言って納得されちゃった。

「い」

あは。

「い」

あはははは！！

「いやあああああああああああああっ！！！！」

あははははははははははははははっ！！！！　誰かわたしを殺してー！！

「あぁ！　どこへ行くサユカちゃん！　トイレはそっちじゃないぞ！！」

「ほっといてえええええええええ！！」

「さ、サエちゃん。今のはいくらなんでも」

「や、やりすぎちゃった、かなぁー」

泣きながら去っていったサユカンを呆然と見送りながら、私たちは嫌な汗をかいていた。会場の皆さんも気まずいのかざわざわと騒がしくなる――しかし。

「そこのデリカシーのないこと言った男の子♪」

「……ぇ、僕？」

ただ一人いつものペースを崩さないお母さんが、マイクを片手にトメ兄へ微笑んでいた。

「そうそう、突っ立ってるそこの君」

「え、と」

「早く追え♪」

「はいっ！！」

笑顔でも、とてつもなく怖かった。

「あと、そこの空気が読めなかったお二人さん♪」

え？　もしかして私とサエちゃん？

「やりすぎ。あとで楽屋に来い♪」

「「はいっ」」

逆らえるはずがなかった。

ピン、ポン、パーン♪

『ご来場の皆様、彼女のトイレが終わるまで上映はいましばらくお待ちください』

『こら新入り！　てめぇクビだって言っただろうが！　何勝手に放送してる!?』

『あぅ！　そ、その、女の子があまりに可哀想だったのでフォローを』

『逆効果だバカモン！　こっちへ来い、今日という今日は割ってやる！』

『あ、あぅー！』

パン、ポン、ピーン♪

そんな放送が聞こえて、もうこれは意地でも戻るわけにはいかないと確信したわっ。そんな、サユカです……はぁ。

もうダメよ、何もかもおしまいだわ……

何かに怒ったり、悲しんだりすればいいとは思うんだけど……そんな気力自体が湧いてこないわ。おしまいだもの。

だってそうでしょう？　もしあなたが好きな人と二人きりになって、いい雰囲気になったときに、好きな人に必死な声で「おしっこしたい」なんて言われたらどうする？　どうしようもないでしょう？

「サユカちゃん！！」

あ、トメさん。

追いつかれちゃった……ってそれも当然か。わたし、ロビーで真っ白になって突っ立ってただけだし。

「あのさ、サユカちゃん」

トメさんは言いにくそうに口をつぐんだ。そうよね、あんなこと言ったわたしにかける言葉なんか……

「さっきサユカちゃんが言ったこと……一応、その、わかったつもりだから」

「トイレはいきましたよ、ええいきましたともっ」

ヤケクソで行ったわよっ！

「えっと、そっちじゃなくて」

え？

「カカとかサエちゃんの声が混じらなかったほう」

ええ？

「ふざけてごめんな？　どういう反応すればいいかわからなくてさ……でも、ちゃんと聞こえてたから」

えええ？

「それで、その、今日はもう戻りにくいだろうけど……来週にもう一回、一緒に映画を観にこないか？　今日のやり直し、と言っては何なんだけど」

これ、わたしの妄想？

いつもの妄想だよね？

え？

違うの？

じゃー……

わたしの気持ち、伝わっちゃった？

## カカの天下３４９「初恋デートは実るのか？　後編」（後書き）

さて――なんかえらいとこでカカラジ突入です（爆

明日のカカラジは二人の微妙な関係について特集をする、かもしれません（ぇ

実は今回のお話、作者的にも意外な展開だったりして（おぃおぃ

# カカの天下３５０「第十回、カカラジ！」

「みなさん、こんカカー！　と言いつつ私は香加ちゃんじゃないんですけどもーこんサエってなんか語呂が悪いしこのラジオが『カカラジ』って題名だし仕方なくこの挨拶でーっていうかなんで私がーって感じの小枝ですー」

「にゃあ（アシスタントの総理大臣だゼ）」

こんカカ、第十回目のカカラジで唯一の今までどおり、作者です。

「まったくもー、なんで私がこんな面倒くさいことをー」

トメのお母さん――ユイナさんを怒らせたからでしょ。

「……そう、なんだよー。ううー、これは罰なんだよー。前の話を読んだ人はわかると思うけどー、あのあと楽屋に行って怒られたんだよー」

「にゃあにゃ（自業自得だＹｏ！　ボケ）」

怒る、ねぇ。

あのお母さんが怒るところなんか想像つきませんけど。

「うん、怒った顔は私も見てないよー」

……あれ？　怒られたんじゃ。

「怒られたよー。笑顔で。具体的にはねー、妙に迫力のある笑顔でずーっと見つめられてたの」

は？　それだけ？　それ怒られたって言うの？

「言うよー。だって私たち、反省したもん」

なぜに。

「拷問だったからー」

「にゃにゃにゃんにゃ（どのへんが）」

「だからー、言ったでしょ。笑顔で見つめられてたの」

だから、それだけでなんで――

「二時間それだけだったんだよ」

……へ？

「にゃ？（は？）」

それだけって、会話は？

「何を話しかけてもユイナさんの笑顔はまったく動かないのー。でも逃げようと席を立ったらがしっと肩をつかまれて、笑顔で睨んでくるのー。そして無言でずーっとずーっと見つめられてるの……私もカカちゃんもいろいろ言い訳したりしてたんだけど、私たちが喋り疲れて謝り疲れて座り疲れて見つめられ疲れてダウンするまで、

二時間ずーっとー……無言なのー」

な、なんか想像したらたしかに拷問な気がしてきた。でもカカなら力づくでなんとかできそうなもんだけど。

「カカちゃんは『そんなことしてお母さんに嫌われたらどうするの』だってさー」

なるほど、そりゃ手も足も出ないね。そういう意味ではカカ天最強ってユイナさんかなぁ。それにしても本当にそれだけ？　何も言われなかったの？

「最後に少しだけお説教された。女の子の告白場面でおしっこさせるとは何事かーって」

「にゃあにゃあ、にゃにゃにゃ（いやいや、してないしてない）」

「そんなわけで罰として私はカカラジの司会進行をやることにー……面倒」

君、こんなん好きそうだけどね。

「目立つのは嫌なんだよー。少ない労力で影からこっそりおいしいところを持ってくのが私のスタンスなんだよー」

なんというか正直デスネあなた。

「にゃあにゃ（引きこもりの娘だからな。表に立つのに向いてねーんダロ）」

「いちいちにゃあにゃあうるさいなー。どうせなら普通に喋りなよ。作者さんが面倒でしょー？」

「にゃあにゃ、にゃにゃにゃん（だって俺、ネコだモン。ネコがにゃあと言って何が悪い）」

「カカちゃんがネコになったらきっと『オッピロゲー！』とか『ビキニばんざい』とかネコにありえないこと言ってくれるのにー」

はいはい、それくらいにしときなさい、収拾つかないでしょ……なんでこの組み合わせなんだかね。どうせなら香加と二人でやればよかったのに。

「香加ちゃんへの罰はねー、『目立たないこと』だから。この司会を降ろされることが何よりの罰なんだよー」

む、たしかにね。香加はカカラジ楽しんでるし、それなら充分な罰になるだろう。

「いいなー香加ちゃん。楽で」

「……にゃ（おまえ、もうちょっと取り繕えよ）」

しかし小枝ちゃんもいきなり司会まかされて緊張とかしないの？そういう可愛いとこ見せればサユカちゃんみたいな人気でるかもよ。

「ほらー、アヤちゃんも言ってたじゃないですかー。いざというとき、他人なんて所詮はじゃがいもですよー。じゃがいも程度を相手にして緊張なんてするはずないじゃないですかー」

さ、小枝ちゃん、なんて黒いの！　いつの間にこんな黒くなったの！！　昔はもっとおとなしくていい子だったのに……

「自分を表に出すようになったらこうなっていったんだよー。単にそういう血を引いてるんじゃないのかなー」

超納得。

「にゃんにゃにゃにゃ（腹黒の血か）」

黒い血かー。

「にゃにゃっ（獣の俺様でもさすがにビックリだ。よもや人の血が流れていないとは）」

「……それ以上言うと、さすがの私も落ち込むよー？」

ああっ、ごめん、大丈夫！　ちゃんと皆わかってる、小枝ちゃんが黒いのはそういうキャラ作って楽しんでるだけであって、本当の心はとても純真なものなんだってちゃんとわかってるから！

「にゃーにゃーにゃ（悪気のない腹黒ほど厄介なものはねーＮＡ！）」

「……けっ」

総理大臣！　おまえ大臣ならもうちょっと言動に気をつけろよ！

小枝ちゃん元気だして！　え、えーと次に、って、説明忘れてた――これはネット小説『カカの天下』を盛り上げるため、ぶっちゃ

けトークや作者の本音などを放送する情報ラジオというような気がする番組です！　小枝ちゃんや総理大臣ラジオＶｅｒ、作者等は本編自体とは関係ないのでお気をつけくださいーっということで一旦ＣＭ！

あけましておめでとうございます、今年の初詣はぜひうちの神社に！　え？　もう遅いって？

何をおっしゃる！　初詣をしてない人、結構いるでしょう？　今年のうちに初めてお参りにくればいつだろうと全部初詣です！　そしてちょっと遅れてお参りにくるあなたのために、ちゃーんとおみくじも残してありますよ！　我が神社のおみくじはユニークですよーお客さん。例えばこれ、私がひいたおみくじ。こんなことが書かれてます。

『これをひいた貴様に彼氏や彼女がいなければ大吉、もしいるなら極凶、ラブラブなら凶死』

いやー、凶死ってどんな死に方ですかねー！　気になるがどうせ俺は大吉だよヒャッホーイちきしょーめぇーい！　これを聞いたおまえもこれ引けーい。大吉ならお仲間だぜ幸せになるぞイェーイ！　それ以外ならサーチ＆デストロイじゃボケー、くそー。このー……

あと他にも――

『モテるやつは死ねばいい』とか！

『大吉になるために試験中の中吉』とか！

『はずれ、もう一回』とか！　こういう面白いおみくじまだまだあるから、ぜひ来てくれな！

ＣＭがあけまして。

「にゃにゃにゃ……？（これ、あの神社だよな。誰が宣伝してんだ）」

あの東治のバイトの人じゃないことはたしかだね。あの人ならもっと個性的なこと言うもん。

「ではでは、次はおたよりコーナーでーす」

……ほっ。サエちゃん、飴あげたら機嫌なおしてくれたみたいだ。よかった。なんか拗ねるフリで物をせびられたような気がしないでもないが、考えたら負けだ。

「今日は他のコーナーもあるからあんまり紹介できませんがー」

「にゃんにゃ（すまんな）」

「えーと、カカラジネーム、『ゲロッピー』さんから。えー『デンジャーケロリンはアニメ化しないんですかー？』だって」

します。

「はい次。カカラジネーム『恋する地球儀』さんから。『カカたち

って告白されたりしないんですか？　そういう場面って書かないんですか？』という質問」

いずれ書きます。

「さらに――」

「……にゃーい（おーい作者。なんかこう、もっとマジメに答えねーカ）」

え、あ。はい。すいません。一言で答えれるものばっかだったのでつい。

「さらにーカカラジネーム『血に溺れた作者代人』さん。『カカとトメと姉の父親って一体いくつですか？　答えなければこの作品の作者をこっちの作者と同じ目に合わせる』だそうなー」

「にゃにゃにゃ（作者、脅迫されてるぞ）」

え、えーと……あちらの作者さんはずいぶん何度も生死の境をさ迷ってるし、それと同じ目にあうのは勘弁なのでサエちゃんよろしく！

「しーらない」

え。

「しらないもーん」

あ、あの……答えてくれないと私、真っ二つにされたりミンチに

されたりするんですけど。

「それもしらないもーん」

……じゃあ、ケーキあげるから。

「しーらなーい」

……二個。

「もらおー」

ははー。

「にゃにゃ……（作者、よえー……）」

はいケーキ！　じゃあちゃんと答えてよ。

「知らないよー」

ケーキじゃ足りないか！

「そうじゃなくてさ、私本当に知らないんだよー。香加ちゃんにも聞いたことないし」

言われてみれば……じゃあどうすれば。

「作者が答えなよ」

その手があったか！？　って最初から言ってくれれば――

「んぐんぐ、あまーい♪」

言ってたらケーキはもらえなかったもんな、あっはっは……相変わらずちゃっかりしてるわ。

「にゃにゃ（で、答えは？）」

４８です。

「……にゃ？（マジカ？）」

マジです。

「あんな４８歳やだー」

たしかに歳のわりには元気すぎだけどね。

しかしトメ父の年齢とユイナさんの年齢、さらに最初に姉を生んだ歳を考えると……けっこーすごいことに。

「お父さんってロリコンだったんですねー」

そのことについて、トメ父さんにコメントをもらっています。では、どうぞ。

『あなたはロリコンなんですか？』

『そうだ、悪いか！』

以上です。

「トメお兄さんと違ってキッパリしてるねー……と、ちょうどよくトメお兄さんの話題が出たところで、次のコーナーいってみましょう」

「にゃにゃんっにゃ！（特別企画！　トメとサユカの微妙な関係！）」

はい、実はこのカカラジ、トメサユのデート話をぶった切ったような形になってしまいました。そこでこのコーナーで半端に話が切られてモヤモヤ中のあなたの心を少しでも落ち着かせてあげようというのです！

「はたしてトメお兄さんもお父さんの血を継いでロリコンなのでしょうかー？　そこのところを実際にトメお兄さん、はダメだから留お兄さんに聞いてみましょー。えっと、電話電話」

小枝ちゃんが電話を取り出しぴっぽっぱ。やがて留の声が聞こえてくる。うん、電話ごしでもこちらに聞こえますね。

『なんだいサエちゃん』

「あ、留お兄さん。ちょっとお聞きしたいことがありまして」

『ん、なんじゃらほい』

「留お兄さん、サユカちゃんに告白されたじゃないですかー？　そ

れのご感想は」

『もうね、サイッコーの気分だね！』

……え。

「にゃー（えー）」

『前々から狙っていたサユカちゃんが僕のものになるなんて！　いやー、これから楽しみじゃわい。うはうは』

「そうなんですかー、がんばってくださ――」

「待たんかい！！！」

あれ！？　ビシッと『なんでやねん』ポーズでいきなり登場したのは、たった今まで電話ごしに話していた留！？

「小枝ちゃん、そういうことに声マネを使うな！　危険すぎるから！」

声マネ……って、いまの電話から聞こえてきたと思ってた声って、小枝ちゃんの声か！？

「ちぇー、読者さんがおもしろい反応してくれると思ったのにー」

「にゃんにゃんにゃ（危なかったな、留）」

ふむ、とりあえず小枝ちゃんの陰謀はいつものことだから置いといて、せっかくここにいるんだから本人に聞いてみましょ。

「な、なんだよ」

サユカちゃんの告白、どうでした？

「……や、その、なんだ……」

ほれほれ、お父さん見習ってズバッと答えなさいな。

「ほれほれー」

「にゃれにゃれー」

私と小枝ちゃんのニヤニヤ声、そして総理大臣の奇妙な声に急かされて、あたふたしていた留はようやく意を決して口を開いた。

「恥ずい！！　以上！！」

あ。逃げた。

「にゃっはーにゃ（まーズバッと言ったからいいじゃねぇか？）」

「ズバッと言ったけど内容は微妙だよね、どうなることやらー」

サユカちゃんのほうは繋がんないの？

「ん、電話してみるねー……お、繋がった。もしもし、今の心境は？」

『恥ずいっ！　以上っ！！』

プツッ、ツー、ツー、ツー。

「……にゃにゃぬにゃ？（今の、小枝の声マネじゃねーよな？）」

「なんというかー、もうお似合いなんじゃないですかーこの二人」

何怒ってるの。

「ＣＭ！！」

ねー小枝ちゃん。何を焦っ――

「えーと、ここで急遽、カルガモの出産現場へと取材しに行っている香加ちゃんと中継が繋がっています。それでは香加ちゃん、ＣＭどうぞ！」

聞いてよぅ。

……無視された。顔赤くして可愛いんだからー。

はい、というわけで中継が繋がってる香加、今回のカカラジ初登場ですね。それではカルガモのＣＭをはりきってどうぞ！

『カルガモはねん』

切れた。

「以上です。さ、次はーー」

なんだ今のは。

「にゃんにゃーにゃ（あえて無意味にちょこっと出ることで、目立ってないってことを強調してるんじゃねーカ？）」

なるほど、余計みじめになるもんな。これ罰だし……頭いいなおまえ。

「にゃーにゃ、にゃにゃ（まーな、伊達に大臣選挙に受かってないぜ）」

……受かったの？

「にゃにゃにゃ（ネコのは、な）」

「そこー、静かにしてよー。進められないでしょー？」

や、つい。『カルガモはねん』の続きも気になるし。

「それはー、カルガモはねん♪　って可愛く言ったっていうことで、いいんじゃないかねん」

そうかねん。

「にゃねん（そういうことにしとくねん）」

「さてさてー、というわけでお送りしてきましたカカラジもそろそ

ろ終了ですのねん」

しかし、ここにきて投票型の新企画が！

「にゃっ！（お、こないだ言ってたやつだな！）」

皆様知っての通り、ただいまカカ天では微妙な恋のバトルが繰り広げられているようないないようなよくわからんけどそれっぽいものはあります。そしてそんな彼女らにとっての重要イベントがもうすぐありますね。そう、バレンタイン！！

「去年と違って大きな話になりそうだねー」

その通り。カカ天もキャラが増えまして、誰に誰がチョコをあげるのか、もしくはそのまま告白しちゃったりする人が現れるのか……波乱万丈になりそうな予感がしますね。そこで読者の皆様には――『誰が誰にチョコを渡してほしい！』という意見を投票お願いします！

「そう言うからには、皆が皆トメお兄さんにあげてハッピー、みたいな『モテすぎだコノヤロウＥＮＤ』にするつもりはないんだねー」

ええ、それじゃ面白くありませんから。

というわけで、バレンタイン当日までに読者さんが送ってくれた『誰が誰にあげてほしい』という意見の中で、一番票が多かった二人だけ話中でいい思いをさせてあげましょう！

「……にゃあ、にゃにゃん（なあ、もしかして男から男にでもアリなんか）」

アリです。票が多かったらトメと教頭でも幸せにしてやります。

「私それに一票いれるー」

さぁ早速票が入りました！　はてさてどうなるでしょうか……投票方法は前回の人気投票と一緒で、感想欄に書くか、もしくはメッセージで送ってください。簡潔に『誰が誰に』と書くだけでも全然オッケーですので投票待ってます！　もちろんメッセージとかつけてくれたら嬉しいし、その内容によってはバレンタインに影響があるかもしれません……

「作者って本当に行き当たりばったりだねー」

まぁ、このカカ天って今までずっとそんな感じで話のストックも何もなしに書いてきてますからねぇ。内容はノリで決めます。

「にゃにゃにゃ（少しくらいストックしねーと、また今回みたいにリアルの都合で毎日更新危うくなるかもしれねーぞ）」

う……き、気をつけます。

なにはともあれ！　バレンタインの話は確実に当日書きますので、それまで皆さんの投票を待ってます。誰と誰がうまくいってほしいのか……読者さんたちの意見が楽しみです！

「それでは最後にー、出番が少なかった香加ちゃんに」

「にゃにゃ！（お、最後はでるのか！）」

「カカラジチョップをくらわせてやりましょー。現場の香加ちゃん？」

『ぐほっ』

「はい、とてもいい声でしたねー」

香加にチョップしたの誰だよ。

「ではではー、カカばい♪」

「にゃにゃにゃー（この番組は、謎の神社と『ぐほっ』の提供でお送りしましたゼ）」

そういやあの神社、名前言ってないね……

## カカの天下３５０「第十回、カカラジ！」（後書き）

と、いうわけで！　バレンタイン企画、要するにカップリング投票ですね＾＾結果は当日の話をもって発表という形にしますので、お楽しみに♪

ではでは、明日からは注目のトメとサユカちゃんが…どうなるんでしょうね＾＾；

ちなみにもしくっついたとしてもバレンタイン投票の結果次第で逆転も……笑

## カカの天下３５１「夢は寝てから見るものです」

「あ、カカちゃんおはよー」

「サエちゃん。おはよ」

おはようございます皆様、カカです。

今日は休み明け。いつもの場所でサエちゃんと合流して一緒に登校開始です。

「ね、あれからサユカンと連絡とれた？」

「ぜんぜーん。何回電話しても繋がらないのー」

「自宅のほうに電話したらお母さんが出てさ、聞いたところによると部屋に入ったきりほとんど出てこないらしいよ」

「ご飯は食べたのかなー？」

「それは大丈夫みたい。ご飯の時間にだけは部屋から出てきたみたいだし。でも全く喋らなくて、食べ終わったらすぐ部屋に戻ったんだって」

「ううー、やっぱりショックだったのかな？　おしっこ」

自分たちでやっといてこんなこと言うのもなんだけど、あれでショックを受けない子なんかいないと思う。

「ユイナさんにも怒られたし、ちゃんと謝らないとねー」

「うん……怒られたし、ね」

そのときのことを思い出して遠い目になる私とサエちゃん……あんな目にあうのはもう二度とごめんだ。

「サユカちゃん、学校来るのかなー」

「来なかったら謝ることもできないもんね、って、あ。サユカン発見」

いつもの合流地点にいてくれて、私とサエちゃんはホッとした。

「サユカン！　おはよ！」

「サユカちゃんおはよー」

「ん、おはよ」

む、やっぱ元気ないな。俯き気味だ。そう思いつつもサユカンを加えていつものメンバー勢ぞろい！　並んで一緒に歩き出す。

「あのさ、サユカン。映画館のこと……ほんとごめんね！」

「私もごめんー。ちょっとやりすぎたよー！」

「ん、いいわよ」

――あれ。

もう、許されたの？

「どうしたのサユカン。いつもなら『ちょっとどころじゃないわよっ！　ふざけんじゃないわよっ！　わたしのおしっこどうしてくれんのよっ！！』とか言ってくるのに」

「そうだよー。もしくは『えーんえーん、おしっこー』って泣き出すとかー」

それ何歳児さ。

「するかもしれないわね」

あれ？　あれ？　またずいぶんとあっさりな反応……まだずっと俯いてるし。

「ねえサユカン。本当に変だよ？」

「うん……実はね」

抑揚のない声でぽつりぽつりと喋るサユカンの話を総合すると――トメ兄に自分の気持ちが伝わった！？　そして来週またデートだって！？

「やったじゃん！　サユカン！」

「大きな前進だねー！」

前のデートを台無しにしてしまった手前、今度こそちゃんと祝福

してあげようと私とサエちゃんは大いに盛り上がった。でも――サユカンは浮かない顔。

「ね、サユカン。なんでそんな元気ないの？　嬉しくないの？」

サユカンはようやく顔をあげる。すると、いつも可愛いその目元に――くまができていた。

「嬉しすぎて、寝れないのよっ」

――昼休み。

サユカンの様子が気になる私とサエちゃんは即行で給食を食べ終わり、隣のクラスへ向かった。

教室を覗き込むと、だるそうに給食を食べるサユカンをイチョウさんが気遣っているところだった。

「サユカさん、それはお箸じゃなくて鉛筆ですよ！」

「んー」

「サユカさん、それはおかずじゃなくて消しゴムでございます！」

「おー」

「サユカさん！　それは牛乳のストローじゃなくてわたくしの指で――あ、吸わないでください吸わないでください、わたくしそんな

美味しくないですよ！　え……おいしい、ですか？　あ、ありがとうございます、なにやら照れますねっ、そのようなことを言われたのは初めてでして胸がときめいてしまうやも……つ、次はどこを召し上がりますか？」

何やってんのあんたら。

「お邪魔ですかー？」

「えぅ！？　こ、これはカカさんサエ様。こんにちはです」

ん、ちゃんと名前で呼ぶようになったね。サエちゃんがなぜか様なのは変わんないけど。

「サユカンの様子、どう？」

「ええ……それが朝お会いしてからずっと眠そうにしてまして、でも絶対に寝ないんです。授業中にも先生に『おい、岸村！　寝てるんじゃないのか！？』って怒鳴られたんですけど、『それができれば苦労しないわよっ！！』って怒鳴り返してましたから」

基本的に優等生のサユカンにしては珍しい。眠くて機嫌悪くなりやすいのかな。

「ともかくサユカさんのお身体が心配です。このお昼休み時間だけでも眠ってくださらないと、倒れてしまうやも……」

サユカンを見る。うつろな目でなぜか牛乳のストローをがじがじとかじっている。重症すぎる。

「……トメさんなんて答えるのかな……もしこう答えたら……あぁでもこう答えるかも……そしたら……きゃー……ぶつぶつ」

「すごい静かに悶々としてるね」

「きっと昨日は激しくモンモンしてたんだろうけどー、一晩中モンモンしてたら疲れきったーって感じだねー」

「このままだとサユカさん、悶死してしまいます！」

よくわかんない言葉知ってるねイチョウさん。

「……仕方ないね」

サユカンの身体が心配だ。私は最後の手段を使うことにした。

「サユカン、はい」

「ぶつぶつ……きゃー……ぶつぶつ」

「ほら、この携帯受け取って……って聞いてないね。いいや。勝手に耳に当てたれ」

『もしもし、サユカちゃん？』

「――はいっ！？　トメさん！？」

『寝なさい』

「はいっ♪」

パタリコ。

「くー……くー……」

その後、放課後になるまでサユカンが起きることはなかった。

## カカの天下３５１「夢は寝てから見るものです」（後書き）

告白して、その返事をもらうまで一週間。
……長い、ですよねぇ＾＾；
一体トメはどういうつもりなのでしょうか？　それはまた明日のお話で。

さっそくバレンタイン投票してくださった皆様、ありがとうございます＾＾なかなか楽しい意見ばかりで……笑
当日までまだまだ募集中ですので、サユカちゃんのお話がひと段落してから投票というのもアリですよ笑　ではではー！！

## カカの天下３５２「迷ったときはコレに限る」

「――というわけなんだよ」

「ほぉほぉ！　んぐんぐ！　ぷはぁ……あのサユカが告白かぁ」

そういうわけなんですよ、トメです。

場所は居酒屋『病院』で、飲み相手は言わずと知れたテン。今日はちょっと話を聞いてもらいに飲みに誘ったわけなんだが……

「てっきりこのまま何年も告白できないままズルズルいくもんかと思ってたが、意外とやるもんだな。カカやサエのおかげってとこか。やーさすがオレの生徒」

「……知ってたのか？　サユカちゃんが、その」

「知ってるも何も、誰だって見ればわかんだろ、んなもん。それで返事はどうすんだ？　はむ」

生爪軟骨という相変わらず怪しげな名前の料理を口に放り込みながら、僕の瞳を覗き込んでくるテン……

「いや……それがな」

「あん？　どうすんだよ」

「どうしよう」

「はああぁ！？」

や、だってさ、だってさ！

普通に考えてさ！

小学生の女の子に告白されてみなさいよ。

困るでしょ！？

「てめぇよ、告白されたんだろ？　男なら結果がどうあれズバッと答えてやれよ」

「い、いや……そりゃサユカちゃんは可愛いし、好きだぞ？　でもそれは恋愛で言う好きかどうかっていうのはまた別の問題で……」

「うざっ！　高校生の恋の悩みじゃねぇんだぞ。多少は恋愛経験あんだろが」

「僕の歳で小学生に告白されるような経験が豊富なヤツなんか、そうそういないと思うが」

「オレはよくされるぞ」

……そりゃわからないでもないけどさ、先生。

「しかも女に」

なぜに。

「それでオレが『おとといきやがれ』通り越して『おととしきやがれ』って言ったらなぜか全員が勘違いして『二年後ならいいんですか！？』って返してくるんだよな」

おととしって二年前なのにな。

「それだけ期待してるってことか。もうちょっと成長すれば大丈夫かな、とか」

「そういう期待をサユカもしてるってことか」

「……う」

「二年後ならどうよ、トメせんせ」

「……や、二年でも小六、せいぜい中一だろうが」

「聞く限りじゃカカやサエも相当てめぇが好きみたいじゃねぇか。モテモテだな。罪な男だねぇ」

「や、そ、そうなのかな」

「この犯罪者が」

「文字通りの意味かコノヤロウ！！」

「告白への返事しだいじゃそう呼ばれても仕方ねぇな。教師からみりゃ前代未聞だよ、てめぇらみたいな歳の差カップルができるのなんてよ」

「……ぐ」

「でもま、それはあくまで教師から見た意見だがな」

「ぐ？」

意図がわからず見つめ返すと、テンはニヤリと笑いながらビールをあおり、一気に空にした。

「んぐんぐ、ふぅ……トメとサユカの共通の友人として意見を言わせてもらえば、だ。てめぇらが幸せなら他はどうでもいいんじゃねぇの？　って感じだな」

「……後ろ指差されて生きてもいいってことか？」

「それも含めて、だよ。それでも幸せになれるならよし、それが理由で不幸になるならやめればよし。トメ、てめぇだってなんだかんだでサユカは好きなんだろ？」

「……そりゃな。恋愛対象かどうかを別とすれば」

「だったら両方にとってベストな答えを出せばいいだけだろが。サユカと違って、てめぇは大人だ。どこをどうしたらこの先どうなるか、見通しつけることくらいできるだろ」

「できると思う、けど……そんなことを気にしてサユカちゃんの気持ちに答えるのは――」

「不誠実だってか？　だからてめぇは高校生かってんだよ。いいかトメ。もう一度言うが、てめぇは大人だ。養ってる家族もいる。だ

から世間体も常識も未来もひっくるめて考えて恋愛しなきゃなんねぇんだよ。難しいだろうが、それが大人だ」

「……くそぅ、言ってることはもっともだけどさ。テンはそれを偉そうに言えるような大人の恋愛してるのか？」

「おぅ、気になるヤツはいるぞ」

「ほほぅ！　誰だ？」

「トメとか」

「ぶほっ！！」

生爪を吹いた僕の顔をニヤニヤと眺めるテン……な、何言いやがったコイツ。

「ほれほれどうする、選択肢が広がっちまったぞ」

「て、テン。冗談だよな？　遊んでるんだろ」

「さぁなー。あ、院長店長。おかわり」

心底楽しそうにすっとぼけるテンの真意はつかめない……

「あいよ。トメさんはおかわりよろしいですか？」

……あー、なんかもやもやする。ここは飲むしかないか！　ヤケになった僕は手元のビールを一気にあおった。

「んぐ、んぐ、んぐ……ぷはぁ！」

ダン！　とジョッキをテーブルに置き、腹が熱くなっていくのを感じながら、院長店長を八つ当たり気味に睨み付けた！

「マスターおかわり！　迷いの数だけ！！」

「いいのかい？」

「おうよ！」

「はは、あいよ」

若いって～いいね～♪　と鼻歌を口ずさみながら戻っていく院長店長を見送り、視線をテンへと戻す。

「何笑ってんだよ」

「いやぁー今日は楽しいぜ」

「はぁ……いいさいいさ、存分にからかうがいいさ」

「おぅ喜んで！　迷いの数だけからかってやろうじゃねぇか」

嬉々とするテンに思わずため息。

「んだよ、そのため息。オレなんかに相談すりゃこうなるのは目に見えてただろうが」

「仕方ねーだろ。おまえが一番話しやすいんだから」

「キャー、ワタシッテ、トメトイチバン、ナカイイノカシラー」

「女みたいな喋り方すんな。キモい」

「ふはははは！　知らなかったのか？　オレって女だったんだぞ」

「初めて知った。騙された。慰謝料よこせ。ここの飲み代分でいいぞ」

「やなこった」

いつも定番の憎まれ口をたたきあっていると、やがて院長店長がおかわりを持ってきた。

「はい、どうぞ」

ドン！！　と置かれたジョッキの山。

「……あれ……こんなに？」

「これくらいは迷ってるでしょう？」

「……や、まぁ」

僕の迷いの数だけきたおかわりの山がツボに入ったのか、テンは腹を抱えて笑っている……いいさいいさ、飲んでやるさ。そして好きなだけからかうがいいさ。

幸い、次にサユカちゃんと映画に行くまではまだ日がある。それ

までできる限り迷って悩んでからかわれながら考えよう。

好きだとか、歳が離れているとか、そういうことは置いといて。

サユカちゃんは大切な友達なのだから。

## カカの天下３５２「迷ったときはコレに限る」（後書き）

大人が迷ったとき、どうするか。
やっぱ酒でしょう！！！

というわけで飲んだくれトメです。トメは一体どういう結論を出すのでしょうか……そしてテンカ先生の真意は？
そして本文には書いてないけど密かに暗躍している姉は何をたくらんでいるのか。
そして本編からすっかり消えてしまったシュー君はいつ現れるのか。

バレンタインまでにはすっきりする予定です。
……そう、予定、です笑

## カカの天下３５３「カカＶＳ姉娘　お姫様ごっこ」

「なーんか最近みんなタイヘンなんだよね」

「じゃーカカはヘンタイー？」

「なんでやねん」

トメ兄の真似してビシッとツッコミ。カカです。

今言ったとおり、サユカンとトメ兄はなんかいろいろ大変みたいだし、姉はなんか企んでるっぽくて相手してくれないし、サエちゃんは今日は用事があるとのことなので……久々にタマに会いにきてみました。

「そういや最近ほんとシュー見ないねー」

「どうでもいー」

「そうですか」

ご家族に聞いてもこれと同じ答えを返すからすごいよね、シューの人望の無さは。ま、たしかに私もそんなことかなりどうでもいいけど。

「じゃータマちゃん。今日は何して遊ぶ？」

「おひめさまー」

「お姫さまして遊ぶのかー。とりあえず何がいるかな」

「おかねー」

「……真理だ」

いくらいるんだろ。

「悪いけどお金はないの。でも私がタマ姫様に仕えてあげるよ。何がしたい？」

「ぜーたく」

なんちゅー子供だ。

「え、えっと、まぁできる範囲でならいいけど……って結局何するんだろ。うーん……ねぇタマ。お姫様って何するもんだと思う？」

「そらとぶの」

どこのお姫様だ？　そんな無茶するのは。

「かいてんしながら」

無茶しすぎ。

「やってやってー」

「……え、まじで？」

「うにゅ、おひめさまやってー」

いつからお姫様といえば回転しながら空を飛ぶようになったんだろう。世も末だ。

なんて思いつつギャーギャー騒ぐ姫の言葉には逆らえず……とりあえずタマの両脇を持って抱えてみる。

「えっちー」

「身の程を知れ、えらそうに」

あ、姫だから身の程知ってる発言か、これ。

それにしても子供って意外と重いね……鍛えてる私にとっては持ち上げられない重さじゃないけど。それで、えーと？　回転させながら飛ばすんだよね。

「えい」

投げた。

ちっちゃなタマちゃんは回転しながら放物線を描き――

ゴン！　と額から床に激突した。

はて。

私はもしかして、とんでもないことをしてしまったのではないだろうか。

ちょこっと冷や汗をたらしながら、落下した状態のまま固まってるタマちゃんにおずおずと声をかける。

「た、タマ？　あたま大丈夫？」

「われる」

冷静だ。

てっきり泣き叫ぶかと思いきや、タマちゃんはむくりと起き上がって私を見上げた。

「すごくわれる」

言い直した。

泣いてはいないけど相当痛いらしい。

「ひ、姫？　怒ってる？」

「んーんー」

首を横に振るタマちゃん。ほっ……よかった。

「じゃー痛いの痛いのとんでけ～しよっか」

「うにゅ」

「痛いの痛いの～とんでけ～♪」

「とんれけ～」

「どこに飛ばす？」

ビシッと私を指さすタマちゃん。

……やっぱ怒ってんじゃないのさ。

「いたい」

ビシッと指さされ直した。

……相当怒ってんじゃないのさ。

「た、タマ姫！　どうすれば許してもらえますか？」

「バク転して」

最近のお姫様はバク転を見ると機嫌が直るらしい。

やってみた。

すごい喜ばれた。

「タマもやるー！」

やらせてみた。

ゴン！！

「ひびわれる」

具体的になった。

――こんな、タマちゃんとの一日。

## カカの天下３５３「カカＶＳ姉娘　お姫様ごっこ」（後書き）

はい、最近トメとサユカちゃん絡みのお話が続いていたので、ここらで普通のお話をーと思ってタマちゃん話をお届けしました。

……え？　トメとサユカちゃんのことが気になるから早く書け？

やーほら、何にしたって二人がどうなるかは週末のお楽しみなんですから、そう慌てずに……

って、あれ。

なんか明日カツコが動くっぽい？

## カカの天下３５４「鬼を招く日」

「おいでませ、節分大会！！　どんどんぱふぱふ～」

口ラッパでうるさい姉が近所にご迷惑をおかけしております。トメです。

「よーし、みんな集まったね！　節分やるよ！　豆まきやるよ！！」

場所は近所の公園。鬼のお面と豆まきセットを手にした姉は、意気揚々と叫んだ。

「……なぁ、姉。なんでいまさら節分なんだ？　二月三日はとっくに過ぎてるぞ」

「だってあんたらその日は忙しいとか言って相手してくれなかったじゃん」

う……たしかに忙しかったけどさ、サユカちゃんとのことで。

でもだからっていきなり節分大会はないと思う。

や、別に豆まきがしたくないわけじゃない。それが問題じゃないんだ。問題は――姉が文字通り、みんな集めてしまったということ。

そう。

いるんですよ、サユカちゃんが。

ベンチにいつもの三人で座って、話しながらチラチラとこっち見てるんですよ。

き、ま、ず、い！！

「ほらほらみんなー！　集まりな！　豆まきするよ！」

デートまでは会わないでいようと思ってたのに……この姉は空気読めないから厄介だ。そりゃ今回のことに関してはまったく知らないんだろうし、仕方ないけどさ――

「じゃー各自、鬼役と豆まき役とペアになって投げあってね。ペアはね、うーんと……カカちゃんとサエちゃん。トメとサユカちゃんでいってみよ！」

空気読まないにもほどがあるぞ！！

……や、待て。

こいつまさか、知っててやってる？

「にやり」

「わざわざ口で言いやがったなこんにゃろ」

「にやにや」

「やかましい！」

誰だコイツに余計なこと教えたのは！！　それにしてもこうやっ

て笑いを口に出されると一層ムカつきが増すな、くそぅ。

「よし！　やろうサエちゃん」

「やろー」

僕が心で嘆いているうちに準備を完了したカカとサエちゃんが早速始める。今回は僕とサユカちゃんのことは放っておく方針のようだ……むぅ、今はちょっかい出してくれたほうがありがたいんだが。

「あ、あのっ……と、トメ、さん」

「う、うん」

「はい、これ、鬼のお面ですっ」

「うん、あ、ありがとう」

受け取るとき、微かに僕の手とサユカちゃんの手が触れた。

「――っ！　ごめんなさいっ！　そのっ」

「や、そんなことで謝らなくても！」

「あ、あの！　豆を投げちゃってもいいんでしょうかっ」

「そ、そりゃね。僕は鬼だし、うん、遠慮なく」

「はいっ！　で、でも、その、痛かったら言ってくださいね」

鬼に対してなんて謙虚な、というかなんだこの恥ずかしい照れ照れオーラは!!　小学生か僕らはっ!!

あ、向こうは小学生か。

同レベルか僕は!?

気恥ずかしさに耐えられず、僕はサユカちゃんから目を逸らした。一足早く始めているカカサエペアを見てみる。

「鬼はそとー！　福はうちー！」

ぱくっ、ぱくっ、ぱくっ。

サエちゃんが投げた豆のことごとくをカカが食べてる。鬼のお面を額にしてはいるが……豆まきじゃなくて餌をやってるようにしか見えない。

「えい、えーい！」

ぱくっ、ぱくっ！　もぐもぐごっくん。

「ハッハッハッハッハ」

餌待ちの犬かおまえは。

「鬼は……うち、くる？」

「ワン！」

なんだこの捨て犬を拾ったみたいな光景は。

「ほらほらそこのラブラブチーム、さっさと始めろ」

「黙れ貴様！！」

やっぱ知ってやがるこのアマ。

「え、えっとサユカちゃん！」

「ひゃいっ！」

「やろうか！」

「……えっ、こ、こんなところで――あ、豆まきですねっ」

なんだと思ったの。

「よし、鬼のお面おっけー！　さーどうぞ！」

半ばヤケクソになって叫ぶ。それに触発されたのかサユカちゃんも気合を入れて「はいっ！」と答えた！

よし、こい！

「鬼は外っ！　トメさんは内っ！！」

どっちも僕やん。

どうすりゃええねん。

「トメさんはうちっ！」

「あの、サユカちゃん？」

「トメさんは……うち」

そ、そんな熱っぽく見つめられても。

「うち、きませんかっ」

「え、や、その……」

気まずい。なんか喋らないと。や、でも何と答えれば。

「――だぁ！！　サエちゃんといいサユカちゃんといい、あんたらなんで鬼をうちに招いてんのさ！　ちゃんとやれ！」

戸惑ってるところにちょうどよく姉の雄たけびが轟く。助かった……ヘタレとか言うなソコ。

「そういう姉だって毎年『鬼は内』って言ってんじゃんか」

「あたしのは違う！　『鬼は内にこいブチノメス！　福は外へ逃げろツカマエル！』だよ！」

なんでもかんでもアクティブすぎるんだよアンタ。

……なんにせよ、その場はごまかすことができた、でも。デートまで日はないし、ちゃんとしないとな、ホント。

## カカの天下３５４「鬼を招く日」（後書き）

空気を読めない（ある意味読んでる）姉のおかげでデート前にこんなことに。
でもまぁデート話が長引いて節分できなかったのでちょうどよかったです笑
さて、明日はいよいよデート話！
……にしよっかなー。明後日にしよっかな↑決めてない人
まぁどうなるかは明日の気分次第で（ぉぃ

あ、そうそう。感想の返信遅れてごめんなさい＾＾；なるべくすぐに返していきますのでもう少しお待ちを！　こんなにたくさん書いてもらえて嬉しい限りです！！　これはバレンタイン、いい加減なものは書けませんね＾＾；
感謝しつつ、それではまた明日＾＾

# カカの天下３５５「大人の恋と子供の恋　前編」

……こんばんは、サユカです。

寝れません。

眠いのに、寝れません。

明日はデート。わたしが告白した結果がどうなるのか……不安に押しつぶされそうだったわたしは、深夜になってもモヤモヤしてまったく眠れなかったのです。そこで――

『相談ですかー？』

「はいっ、その、恋愛相談なんですけど」

節分の日からずっと頬と胸が熱い。風邪でもひいたのかと体温を測ってみたけど問題なし、これは間違いなく心の熱さ。この熱をどうにかして冷やしたかったわたしは電話をかけた。深夜になっても起きていて、話を聞いてくれそうな人に。

『えー、めんどいですー』

「いっつも話を聞いてあげてるんですから、たまにはこっちの話も聞いてくださいよっ」

『サエが絡みますかー？』

「全然っ」

『おかけになった電話番号はただいま興味がありません、ピーッと言うのも面倒なんでこのまま切りますー』

「待たんかいっ！！」

ぶーぶー文句を垂れる、いい大人（のはず）のサカイさん。

『それにしてもなんだって私に恋愛相談なんですかー？』

「だ、だって恋愛の相談できそうな人なんて、サカイさんくらいしかいなくて」

『私ってそんなに恋愛経験豊富に見えますかー？』

「えっ……だってサカイさんってドロドロした恋愛や離婚に疲れ果てたからそんなに腐ったんじゃないんですかっ！？」

『おかけになった電話番号はちょっと怒ってます、ピーッと鳴りましたら遺言を残して――』

「あぁごめんなさいっ！！　ちょっと寝不足で本音がっ」

『遺言はそれで終わりですかー？』

「ほ、ほんとにごめんなさいっ！　お願いですから話を聞いてくださいっ！　ほんと……不安で、寝れなくて」

『んー、仕方ありませんねー。聞きましょー』

かくかくしかじか説明ちゅー。数分経過。

話を聞き終わったサカイさんは『ふふふー』と気持ちの悪い笑い方をした。

『トメさん困ってたでしょー？』

「うっ……はい、多分」

『それはそうでしょーねー』

「あのっ！　や、やっぱりわたしみたいな可愛くない子に告白されたりしたら、その、迷惑、なんでしょうかっ」

半分泣きそうになりながら問いかける。

するとサカイさんは――再び気持ち悪い笑い方をして答えた。

『たとえばサユカちゃんが三歳の子に好きですって告白されたら、困りませんかー？』

「それは、もちろん困ると思います。そんなこと言われても……どうしようも、できませんしっ」

『なんて答えますかー？』

「……答え、られないと、思います」

『なんで答えられないと思いますか？』

「……答え方が、わからないから、です」

『そうですね。だって問題にすらなってないんですもん』

「……えっ？」

『答えっていうものはですね、問題があってこそ成立するんです。「好きです」なんていう言葉は問題じゃありませんよね？　単なる気持ちの吐露にすぎません』

「……はい」

『サユカちゃんはトメさんに「好きです」としか伝えていませんよねー？　好きだからどうしたいか、それをまったく伝えていません。それじゃートメさんが困るのも当然ですよ。サユカちゃんがどうしてほしいのか、それがわからないんですから』

「わたしが……どう、したいか」

まったく考えてなかった。

ただただ、トメさんが好きで、その気持ちを伝えることに夢中で――

『サユカちゃんくらいの歳で、同い歳くらいの子に告白すれば、暗に「お付き合いしませんか」という問いかけになるんでしょうけど、歳が違うとそう簡単にはいきません。それはわかりますよね？』

「……はい。さっき、『三歳の子に』って聞いたとき、お付き合いするかどうかなんて、考えもしませんでした」

『トメさんも大人ですからねー。答えは用意してくるでしょー。でもそれを聞く前に、サユカちゃんがどうしたいのか、ちゃんと教えてあげるべきですよー。歳の違う人を好きになったら、「好き」というだけでは片付かないんですから』

わたしは、どうしたい？

トメさんが好き。だからどうしたいの？

『今のサユカちゃんはトメさんの気持ちはもちろん、自分の気持ちもわかっていません。それなら不安になるのも当然ですよー。でも片方でも気持ちがわかってれば――不安も少しはなくなると思いますよー』

そっか。

わたしは自分の気持ち、わかってなかったんだ。

熱に浮かされて、わかろうとしてなかった。考えてなかった。あるのは好きという気持ちだけ。それしか見てなくて、これからどうなるか――それを全部トメさん任せにしてたんだ。

『眠れないならちょうどいいじゃないですかー。デートまで――トメさんの気持ちを聞くまでの間に考えてみるといいですよ。自分がどうしたいのか』

「……はい」

そうだ、考えよう。きっとトメさんはちゃんと考えてくれてる。

子供の言うことだと馬鹿にしたりしない。そんなことができない優しい人だから、わたしは好きになったんだから。

そんな優しい人にばかり考えさせて、わたしが考えないなんて失礼だわっ！

「……サカイさん。すごいです。大人みたいです」

『ふふふー、知りませんでしたかー？　私ってドロドロした恋愛を経験してきた大人なんですよー』

電話越しなのに、優しく頭をなでられているような気持ちになった。

『がんばって』

「はいっ」

さぁ、考えよう。

わたしの、気持ちを。

時間は、まだあるっ。

## カカの天下３５５「大人の恋と子供の恋　前編」（後書き）

……サカイさんがまともに見える（爆

はい、ここらあたりコメディ要素少なめですが、ここまで読んでいただいている読者様ならご容赦いただけると思います＾＾

サユカちゃんがどういう答えを出すのか。
それにトメがどう答えるのか。
大切に書いてあげたいと思いますので、続きはもう少々お待ちください＾＾

# カカの天下３５６「大人の恋と子供の恋　中編」

待ってました！　サユカですっ。

何を待っていたかは言うまでも無いでしょうっ！　今日はついに――トメさんとの再デートの日なのです！

「やぁサユカちゃん、待った？」

「待ってましたっ！！」

「うぇ！？　ご、ごめん」

「あぁっ、嘘です嘘です！　全然待ってないです」

勢いに任せてまたやっちゃった……でも負けないわっ。

「改めましてこんにちはっ、今日はよろしくお願いしますっ！」

「あ、うん。こちらこそ。サユカちゃん、先週と同じ格好なんだね」

「あ、はいっ。その……せっかくカカすけやサエすけが選んでくれた服ですし……これ、前回のやりなおし、ですし」

前回……不意に告白した場面が蘇り、頬が熱くなる。

「トメさんは先週と違う服ですねっ」

「うん、どうかな？」

「ツッコミ所がなくてトメさんらしいですっ」

「……ま、そーな。僕はツッコむ役であってツッコまれる役じゃないからな」

「ふふっ、わたしがボケればいいですか？」

「毎日カカのボケでお腹いっぱいなんだ、勘弁してくれ」

苦笑いするトメさんは節分のときよりずっと自然だ。かく言うわたしも結構自然、だと思う。

「じゃあ行きましょうっ、トメさん」

「あ、うん。そだね」

心は穏やかで晴れやか、もちろん緊張はするけど不安は少ない…。…これも自分の気持ちがハッキリしたからだと思う。サカイさんに感謝だわっ。

昨夜サカイさんと電話してから、布団にもぐりながら考えてみた。自分の気持ちを。自分がどうしたいのか。

すると――拍子抜けするほどにあっさりと答えが出てきて、それで安心しちゃったのか目覚まし時計に叩き起こされるまでぐっすりと眠ってしまった。我ながら単純ね。

でも。

「上映まで時間あるし、ポップコーンでも買うか」

「ごちそうさまですっ」

「……サユカちゃんも言うようになったね」

自分の単純さに感謝してるわ。おかげで今日はこんなにも楽しいんだからっ。

そう、細かいことは後回し。今はとにかく、このデートを楽しんでやるんだっ！

「へぇ、いろんなポップコーンあるんだな」

「あ、和菓子味のポップコーンですってっ」

「うぁ、変なの」

「これにしましょうっ」

「賛成」

自分達の即決ぶりに笑みをこぼすわたしたち。好きな人と趣味があった瞬間ってなんて楽しいのかしらっ！　和菓子好きと変なもの好きでよかったわっ。ちなみに変なものっていうのは主にカカすけのことねっ。

「すいませーん。これください」

「ぅげ。ありがとうございまーす」

この店員……商品見て「ぅげ」って言ったわね。でもまぁ許してあげるわっ。今日はカカすけもサエすけも遠慮してくれて来ないって言ってたし、わたしたちを邪魔する人なんてどこにもいないんだからっ！

「ではお会計――って、あれ？　トメさんとサユカちゃんじゃないですか」

「サラさん！？」

「ぅげ」

予想外の邪魔者がきた……

「サラさんって本当にいろんなとこで働いてるねぇ」

「あぅ！？　いろんなとこですぐクビになってごめんなさい！」

「や、別に謝らなくても……」

「うぅ……すいませんすいません。ところでお二人はデートですか？」

ぴく。

あなたイイコト言ったアルね。邪魔者訂正。いい人決定っ。

「そそ、そうなんですよぉっ、と、トメさんと、デート！」

デート！　あぁなんていい響きっ！　なんか前にもおんなじようなこと考えてた気もするけど、いいものはいいのよぅっ！

「……私とのデートはまだなのに」

サラさんがボソっと何か言ったみたいだけど聞こえなかったわ。

なんかトメさんの肩がビクリと震えたような気もするけど。

でもそんなの気にしないっ、わたしは今とてもいい気分――

「兄妹みたいで微笑ましいですね」

ぴく。

いい人訂正。敵決定。

「兄妹なんかじゃありませんっ」

「あぅ！？」

突然声を張り上げたことに驚くサラさんとトメさん。でも――ここだけは譲れないわっ。

「そ、それは知ってますけど、ほら、兄妹みたいに仲がいいなー、と」

「でも兄妹じゃないんですから、そういう呼び方はやめてくださいっ！　カカすけに嫉妬されて怒られます！」

「や、あいつはそんな細かいこと気にせんだろ」

絶対します。気にしてないようで、そういうことはかなり気にします、カカすけは。

「じゃ、じゃあトメさんは、サユカちゃんにとって、何？」

「トメさんは、わたしの嫁です！！」

「ヨメかよ！？　せめてムコにしてくれよ！！」

「ヨメのほうが似合いますっ！！」

「それは私もそう思います」

「サラさんまで！？」

「それにしても知りませんでした……最近では小学生でも嫁にできるんですね。私、法律って詳しくなくて」

「や、できんできん」

「え、じゃあ法律違反！？　犯罪者！！」

「指差すな！！」

「これだから男は……」

「勝手に絶望すんな！」

「これだからトメは……」

「悲惨に言い直すな！！　あとさり気に呼び捨てっ！？」

あれ……なんかどんどん落ち込んでく。サラさんってこういうキャラだったんだぁ。

「あ、あのさサラさん、別に犯罪なんて何もないんだよ？」

「うぅ……信じられません」

「どうしたら信じてくれる？」

「私とデートしてくれたら」

まてやコラ。

「……ど、どうしよう。話の展開が急すぎてツッコミ方がわからないっ！」

「私の勝ちですね！　じゃあデート」

「いつのまにか妙な勝負にしないでくださいっ！　トメさんが犯罪者なわけないでしょっ！」

「それじゃあ聞きますけどサユカちゃん。サユカちゃんはトメさんと、どうなりたいの？」

――え。

言うの？　ここで？

こんなところで、わたしの答えを。

……いいわ。

言ってやろうじゃないのっ。

わたしは。

わたしは！！

「わたしはトメさんと、一緒のお墓に入りたいですっ！！」

はっ！？　慌ててクライマックスを言っちゃったっ！！

「ほら！　トメさん殺人罪じゃないですか！！」

「ほらって言われても！！」

「許されたかったら私とデートを――」

あーもう、どうしようかなこの人……そう思ったとき。

「おい新入り！！　何サボってんだ！」

「あぅ！？　こ、これはその」

先輩店員Ａが現れた。

「失業して途方に暮れてたのを拾ってやった恩も忘れやがって……

てめぇはクビだ！」

「あぁぅぅ！？　ま、また……で、でもこれで今からトメさんについていくことも」

がしっ、とサラさんの肩を掴む先輩店員Ａ。

「ざけんな。辞めるにしても今日の分は働くのが筋だろが。もちろん時給は無しだ」

「そ、そんなぁ！？　じゃあ働いた分だけ時給くれるのも筋じゃ！」

「うるせぇ、皿割られたくなかったらこいや！」

「あ、あの、私別にカッパじゃないんで皿なんてないんですけど、その、あああ」

ずるずると引きずられていくサラさんを呆然と見送るわたしとトメさん。

「……席、いこか」

「……はい」

なんとも言えない空気のまま入場することになりましたとさ。

さっきは勢いこんで「一緒のお墓に」なんて言っちゃったけど、これを観終わったらきちんと伝えないと。

席につき、さっそく和菓子味のポップコーンをつまみながらパンフレットに目を落としていたわたしは、ちらりと隣を見た。

同じくパンフレットに目を落としているトメさんの横顔に想いをぶつけてみる。もちろん心に想うだけで、言葉にするのは後だけど。

「……あ」

トメさんが何かに気づいたかのようにこちらを向いた。

え、えっ。もしかして、お、想いが伝わった!?

「サユカちゃん」

「は、はいっ」

「このポップコーン、お金払ってない」

「……あ」

こ、言葉にしないと伝わるはずないわよね、うんっ。

後でがんばろう。

## カカの天下３５６「大人の恋と子供の恋　中編」（後書き）

普段は温厚、というか気弱。貧乏くじを引きやすく、要領も悪い。ただしあまり冗談が通じず、激しく思い込むと突っ走るクセあり。それが皿、じゃなかったサラさんだったりします。

さて、次回でサユカちゃんの告白話は決着を見せる予定です。予想外に長引いてもうバレンタイン直前ですが……ハテサテ。

## カカの天下３５７「大人の恋と子供の恋　後編」

「おもしろかったですねっ」

「ん、そうだね」

映画館を出て「うーんっ」と身体を伸ばします。ずっと座ってて、ずっとスクリーンとトメさんを気にしていて……ちょっと疲れました。

でも、とても幸せな時間でしたっ。

「まさか最後のシーンがどこかのサスペンスみたいに崖っぷちだとは思いませんでしたねっ」

「まさか年増女がそのまま崖に落ちるとも思わなかったな」

「落ちてからダッシュで崖を駆け上ってくるとも思いませんでしたっ」

「年増の執念って怖いな。サユカちゃんはあんな風になっちゃダメだぞ」

「はいっ。トメさんこそ主人公さんみたいに優柔不断で彼女を困らせちゃだめですよっ」

「お、おう」

さて……勝負はこれからよっ。

「これからどうする？」

「わたし、お茶がしたいですっ」

「ん、じゃそこらへんの喫茶店に――」

「いえあのっ。この近くにおいしいお茶葉を売ってる店があるので……その、そこで買って、トメさんの家でお茶会とか、どうですかっ？」

わたしの緊張した声で察してくれたのか、トメさんは頷いてくれた。

「――はい」

「あ、ありがとうございますっ」

トメさんの煎れてくれた緑茶に口をつけ、心を落ち着かせる。そう、落ち着くのよ、慌てたら絶対またおもしろい結果になるわ。今は笑いはいらないのよっ。落ち着いて……うぅ、いつも来てるトメさんちの居間なのに、なんだか別世界にいるみたいだよぅ。

「お、すごいね。これは美味い」

「でしょっ！　やっぱり玉露のお茶は違いますよねっ」

と言いつつ味なんてしないんだけどねっ。緊張でっ。

「それで、あの――」

「先週の、話？」

「は、はいっ」

トメさんは一口だけお茶を飲むと、湯飲みを置いて、テーブル越しから真正面にわたしを見つめてきた。

……ステキ。

じゃなくてっ！！

「あのっ、その、前のときは変な形になっちゃいましたけど、改めて言いますっ！」

「うん」

きょろきょろ、きょろきょろ。

「なんで指差し前後確認してんの」

「えっ、いやそのっ、何か邪魔が入ったりしないかなー、なんてっ」

「さすがに大丈夫だろ。きっとみんな空気を読んでくれてるよ」

「そ、そうでしょうかっ」

「うんうん、だから続きをどうぞ」

ううぅ、なんでそんなに落ち着いてるのよぅトメさん！　これが大人の余裕なのっ!?　いつだったか「トメ兄を見るときのサユカンの目にはフィルターかかってる」とか言われたことあるけど、そんなことないわよねっ。

――よしっ、も、もう一回、言うのよ。

「わたしは、トメさんが好きですっ」

言ったっ！

言っちゃったわよっ！

口にするのは二回目だけどっ、心の中では死ぬほど言ってきた言葉だけど！

やっぱり緊張する……！　と、トメさん、は？

ついつい俯いて瞑ってしまった目を開けて、顔をあげる。

そこには、優しく微笑むトメさんが。

「うん、サユカちゃん。あのね、僕は」

「ちょっと待ってくださいっ！！」

「――っと、な、なに？」

「あの、わたしっ、その……好き……ってしか言ってなくて、わた

しが、トメさんに、どうしてほしいのか、とか、その……言ってなかったので」

「どうしてほしいか……あぁ、あの『一緒の墓に入る』ってやつ？」

「それはクライマックスです！　一番の見せ場です！　一気にそこにいったんじゃ順番が違います！　さっきの映画だって、冒頭からいきなり年増女が崖を爆走してたらおかしいでしょうっ！？」

「た、たしかにそりゃおかしいが。興味はひくけど」

「だからそのっ、今わたしが何をしてほしいかと、いうと、ですねっ」

言葉がだんだん尻すぼみになっていく。

恥ずかしい。

でも、言わないと。

「お付き合いとか、していただけなくても、いいんです。そりゃ、お付き合いしていただけるなら崖を爆走できそうなほど幸せすぎますけど」

うん、それくらいはきっとできる。でも。

「でも……そんなこと言われてもトメさん、困っちゃいますよね」

「い、いやっ、そんな、ことは」

「犯罪者って呼ばれちゃいますよ？」

「うぐっ」

「ふふっ、わたしは気にしませんけどっ」

「……ごめん。僕は、気にしちゃう」

本当に申し訳なさそうなトメさんの顔に、こっちのほうが申し訳なくなってしまう。わがままを言っているのは、わたしなんだから。

「当たり前ですよっ。だって、わたしは子供で、トメさんは大人なんですから」

そう、わたしは子供だからいい。でもきっと、大人だと違うんだ。歳が違う。それはとても大きなこと。サカイさんに教えてもらった。

「わたしが、トメさんのことを好きだって言った理由はですね、その」

笑われるかも、しれないけど。

「ただ、わたしの気持ちを知ってもらって、それでも、仲良くお話したり、遊んだり、たまにお茶したりとか、できたらいいな、なんて」

そう、それだけのこと。

ただ、もっと一緒にいられるようになりたかった。

素直じゃないわたしが、素直な理由で。

好きな人と一緒にいたかった。

ただ、それだけ。

「それだけで、いいの？」

たったいま考えていたことをツッコまれたようで、少し笑ってしまった。

「はいっ、それが、いいんです」

「それってさ、単に――もっと仲良くしましょうってことじゃないのか？」

「はいっ！　だって、わたし、子供ですから」

強がりなんかじゃない。

これがわたしの、素直な気持ち。

わたしは今、とても晴れやかな顔をしていると思う。言いたいことが全部、ちゃんと言えたから。

トメさんはまじまじとわたしの瞳を見つめて――やがて、安心したように微笑んだ。

「そっか……こういう言い方もなんだけど、よかったよ。小学生とお付き合いかー、なんて本気で考えちゃったからね」

「わたしはそれでも全然構いませんよっ」

「……ごめん。やっぱりそれは無理みたい」

「ふふっ、いいんです。これからもっともっと仲良くなって――いつかわたしが大人になったとき、またトメさんに告白しますからっ」

「そんときまでサユカちゃんの気持ちが変わらなかったらな」

「変わりませんよ、絶対。ですから、それまで仲良くしてくださいねっ」

「仲良く――か。うん、サユカちゃんは、子供だ」

「はいっ」

「子供だけど、大人だよ」

「――はいっ、ありがとうございます」

トメさんに褒められたっ！

これもサカイさんのおかげねっ。あの電話がなかったら、わたしは自分の気持ちがわからなかった。きっと「好き」という言葉をぶつけるだけで、トメさんに拒まれて、わけもわからず泣いていたに違いない。

「ところで、その、トメさん？」

「うん？」

「わたしの、告白のお返事は？」

わたしの告白。

あなたのことが、大好きです。だからどうか、これからも仲良くしてください――

「ああ。もちろん、喜んで」

その告白は、トメさんに笑顔で受け入れてもらえた。

とても嬉しい。

とても幸せ。

わたしはついに、やりきったんだっ！！

告白を、やりきった。

今回のわたしのお話は、これでおしまい。

結構長かったけど、無事にハッピーな結末を迎えられてよかったわっ。最後は邪魔も入らなかったしっ！

――と、思ってたんだけど。

「そ、そうだっ！」

「ん、どしたのサユカちゃん」

「わたし、カカすけに返してもらわないといけないものがあったんですよっ、だからちょっと、カカすけの部屋に入ってもいいですかっ！？」

「んー、勝手に入るとあいつ怒るんだけどな。ま、サユカちゃんならいいだろ」

「ありがとうございますっ」

ぺこりとお辞儀して、ぱたぱたとカカすけの部屋に駆け込む。

確か、机の上に置いてあるって――あった。

「べ、別にさ、わたしはもう、これで満足なんだけどさ」

誰にともなく言い訳しながら、それを手に取る。

「な、なんていうか……カカすけやサエすけの言うことにも一理あるっていうかっ」

言い訳を続けながら、もぞもぞと着替え始める。

カカすけ、サエすけ、双方曰く――そんでも好きになってもらうに越したことないっしょ。

と、いうわけで……着てみました、いつかのクリスマスのときのサンタ衣装。

おへそが出てます。

太ももも出てます。

なんか……わたしこそ犯罪者っぽくないかしら？

そう思いつつも廊下に出る。居間の手前まで来てすーはーすーはー深呼吸。大丈夫、トメさんは犯罪っぽいことならカカすけとかお姉さんで慣れてるだろうしっ！　これくらいじゃそんなに衝撃にならないはずよっ！

すー、はー。

よしっ。

「と、トメさ――」

意を決して居間に飛び込んで――時が止まった。

そこに居た人と目が合って、用意した笑顔が引きつる。

そこに居た人。

「え、や、あの……」

それは、トメさんじゃなくて。

「シュー……さん？」

どっから湧いたの？

「犯罪だ！　君！　その格好は犯罪だよ！！」

「やっぱりっ！？　じゃなくてっ、なななななんでこんなところに！？」

「そんなことはどうでもいい！　タイホだっ！！」

「いやあぁっ！　こないで、見ないでっ！　このヘンタイ！」

「どっちがだ！」

逃げようとしたところに手首を掴まれ、手錠をかけられ――てたまるもんですかっ！　わたしは『警官から逃れようとしている自分』という場面に泣きそうになりながらも全力で暴れる！

「おーい、シュー君の分のお茶はいったぞーって何やってんのアンタら」

「見てくださいトメさん、犯罪をタイホしましたよ！」

「誇らしげに自慢してんじゃないわよっ！」

あぁ、トメさんが目を白黒させてる！　変な事態に百戦錬磨のあのトメさんが！　もう終わりだわっ！

「ヘンタイの現行犯でタイホ――」

「ヘンタイはあんたよっ！！　大砲する！」

どっかーん。

あ、吹っ飛んだ。やればできるもんね。

「い、痛て……」

「トメさんっ！　なんでそんなとこにそんなものが！！」

「そんなものってシュー君のことか？　や、なんかようやく帰ってきたけど自分の家に誰もいなくて、仕方なくうちに来たらしいんだけど……」

なんて……なんてタイミングの悪いときに帰ってくるのよっ！

「うぅ……た、タイホ――」

「ひっ」

再び立ち上がろうとするシューさんに恐怖するわたし！　でも、そのときシューさんの肩にポン、と置かれる手が二つ。

「いいとこを邪魔した罪で大砲する！」

どっかーん！

「なんかもうシューさんってだけで罪だから大砲するー」

どっかーん！！

シューさんは吹っ飛んでいなくなった。

残ったのはトメさんとわたしと――シューさんを吹き飛ばした犯人が二人。

「カカすけ……サエすけ……」

「ぁ、や！　別にこっそりつけてたとかじゃないよ！　約束したじゃん！？」

「そ、そうだよー！　おとなしく遊んでたんだよー？」

「……どこで？」

「こ、この家でー」

「だってここ、私んちだし」

「……見てたの？」

「あなたのことが、大好きです。だからどうか、これからも仲良くしてください」

「ああ。もちろん、喜んで」

「いやあああああああああああああああ！！！」

どっかーん。

その日、結局わたしはサンタ衣装をトメさんにツッコまれる暇もなく、まっしぐらに自分の部屋まで爆走した。

でも、そのあとにトメさんから電話があった。

大したことは話してないけど、すごく幸せだった。

これからも仲良くできればいいなぁ。

うん。

今は、それで充分。

## カカの天下３５７「大人の恋と子供の恋　後編」（後書き）

長かったサユカちゃんの告白話もようやくひと段落です。ここまで長くなったのはひとえにサユカちゃんの愛の深さのせいでしょう笑　なにせ前回のデートで告白する予定すら私の頭になかったのですから……サユカちゃん、がんばったね。思う存分動き回ってくれて楽しかったよ笑

さて！　予想外にハマりこんじゃったサユカちゃん話のおかげでいつの間にかバレンタイン間近です！

まだ投票していない方はお早めに＾＾

# カカの天下358「バレンタイン・スタンバイ」

時代は手作りチョコだ！

どうも、カカです。そろそろバレンタインですね。去年は適当だったけど、今年は本命の相手がいるので手作りなんかしちゃおうと思います。

本命の相手？

もちろんサエちゃんですよ。

あ、でもサユカちゃんにもあげないと。私としてはサエちゃんの本命チョコと分けたいとこだけど……サエちゃんのほうが豪華だったりしたらサユカちゃん拗ねるからなぁ。

さてさて、そんなわけで早速準備をば。

作ったこと無いから早めにやっておかないとね、というわけで私が頼ったのはコレ！

ラジオ！

『はーい♪　ラジオの前にいる恋する女子諸君、お待たせしちゃったかな？　誰でも聞いただけで超簡単に作れちゃう、バレンタイン特別チョコ作り番組の始まりだよ！』

きたきた。こないだ行ったバレンタインコーナーのとこで宣伝あったんだよね。

正直言って私は料理全般がダメだ。たまーに友達のお菓子作りに参加したこともあったけど邪魔しかしてないのが自慢だ。

そんな私が作れるチョコなんて、溶かして固めるっていうレベルのものしかない。でもいいのだ、愛さえこもってれば！

『さて！　大好きな男子への甘ーいチョコを作ろうと意気込んでる皆に、まずは一言、言わせてもらうよー？』

男子じゃないけど大好きな相手に作るんだ。意気込んでるよ！

さぁ、なんでもこい！

『そんなに好きなら手間暇かけて自分で作れ』

んだとぅ？

プツッ。

それっきり電波が途絶えたのか、ラジオは『ザー』としか言わなくなった。

『イエス、ザー』

「うるさいよ」

なんてラジオだ、こんな暴挙に出るなんて……私や姉じゃあるまいし。しかも言ってることがもっともなだけにすげームカつく。

だがしかし！

こんなこともあろうかと別の策も用意していたのだ！

えと、本、本……あった。

タイトルは『チョコレート太全』だ。何が太いのかはよくわかんない。

えっと、目次を読み読み。あ、これだ。溶かして固める、超簡単なチョコ作り！

そのページを開くと、その冒頭にはでかでかとこう書かれていた。

『大事なイベントをささっと手早く済まそうとする根性なしで腰抜けで愛の足りない哀れな女のためのチョコの作り方』

とりあえず本を床にたたきつけて踏んでやった。

バレンタインってケンカ売る日だっけ？

「……ちゃんと作るかー」

時代は手作りチョコですよー。

こんにちは、サエですー。もうすぐバレンタインということで、チョコをせっせと作成ちゅーなのですー。

「よし、これは高レベルチョコー。カカちゃんやサユカちゃんにあげる用」

いい袋につめつめ。

「よし、これは低レベルチョコー。ごまをすってホワイトデーに期待する用」

普通の袋につめつめ。

「よし、これはクズチョコー。かわいそうな人へのお情け用」

ラップでいいや。まきまき。

「あと……あ、これは派手派手チョコケーキー。カカちゃんとサユカちゃんに『トメさんにー』って見せびらかして焦らせて遊ぶ用」

豪華な箱につめつめ。

「ふふふー……楽しみ♪」

時代は手作りチョコよっ！

「そうよねっ、イチョウさん！！」

「は、はい！？　な、なんでしょうかサユカさん！」

「あっ、ごめごめ。気にしないで続けて続けてっ」

「は、はい……では次に――」

最近ノリに任せて喋っちゃうこと多いわ……気をつけないと。

ただいまイチョウさんちでチョコ作りの練習中っ！　せっかくトメさんとの仲が近づいたんだもの、このままバレンタインで一気に接近して未来の恋人を確定させるのよっ！

得意そうだからってだけでイチョウさんちに押しかけてまでやってるんだものっ！　気合よっ、気合でがんばるのよっ！

「――と、ここでバットに流し込みまして」

「気合一発っ！」

バキッとバット！！

「さぁ、砕いたバットをどこに流すのっ！？」

「さ、サユカさん、野球のバットなんてどこから」

「気合で出したのよっ！　さぁ、これをどこにっ！？」

「そ、そこのゴミ箱へお願いします」

「なんかお尻に似てるわねこのゴミ箱。そっか、これがケツバットってやつねっ」

「サユカさん……少し落ち着きましょう」

「なーんか、皆さん盛り上がってますなぁ」

「ですねー」

「そだな」

んぐんぐ……ぷはぁっ。時代は手作りの梅酒だねっ！！

よ、姉ことカツコだよん。

「で、あんたらはチョコ作ったりせんの？」

「わたしはどうせ影の女ですからー……んぐんぐ、ぷはぁ！　ひっく」

「んー、オレはどうすっかなぁ。職員連中にやってお返し期待すんのもアリだが、あんま柄じゃねぇし」

「そんにゃこと言ってー、実はこそこそトメさん用に作るつもりじゃないのかにゃー？」

「あらま。テンちゃんったら、やーらし」

「勘弁してくれよ、んな痒いことやってられっか」

「そんにゃこと言ってー。それなりの理由があれば作ってあげても別に構わないにゃーとか思ってくるくせにー」

「……そりゃ、理由があればな。いい飲み仲間だし、あいつ」

おーおー、我が弟はモテるねぇ。

すごくつまらん。

よし。

「じゃーこうしよう！　トメにチョコをあげられるのは一人だけ！　そしてその一人には豪華商品を進呈しよう！」

「ほほぅ？　なんだよ姐さん、その商品って」

「それはね――」

ごにょごにょごにょん。

「……え？　まじで？」

「うわー、すごいカツコちゃん。身も蓋もない商品だー」

「……やるわ、オレ」

「よしっ、カカちゃんたちにも言ってくるわ」

これで弟君がもらえるチョコは一つだけ！

モテ期かなにか知らないけど、人間あまり調子にのらないほうがいいからね。

ま、一個もらえるなら充分でしょ。それで我慢してね、弟くん！

ついでに他の子たちにも仕掛けしとこうかな。ふふふ……そうポンポンとチョコあげられちゃ、あげる相手のいないあたしが気に食わないのよ！

あ？　一応いるか。まぁいいや。たいした相手じゃないし。

全部ひっくるめてゲームにしてやれ！！

## カカの天下３５８「バレンタイン・スタンバイ」（後書き）

今のところの投票数を考えると……トップにトメがいるのは確定かと。そんなわけでこんな展開です！

でも予想以上にいろんな展開の希望票が多かったので……トメのチョコ話以外にも、票数の多かったペアも書いちゃおうと思います。なのでこれから投票する方もトメ以外のペアを選んでも大丈夫ですよ＾＾

あと、繰り返しますが投票期限は１４日の私が書き始めるまでなので、なるべくお早めに＾＾

何時か詳しく？

……えーと、１６時くらいですかねぇ。

# カカの天下359「バレンタインゲーム　前編」

ふあぁ……おはようございまふ、トメです。

今日も今日とて目覚まし時計に起こされよっこいしょ。窓からこぼれる朝日に目を細めつつ身体を伸ばしていると……枕元においてあった紙に気づいた。

なんだこれ。

手に取ってみた紙面の冒頭には、でかでかと『バレンタインゲーム』と書かれてあった。

「あー……そいや今日はバレンタインデーか」

寝起きということもあってぼんやりと呟く。

「なになに……『今日一日、あなたはバレンタインのチョコを受け取ってはいけません』……はぁ」

なんでだろー。まだまだ目が覚めてないのでそんな感想しか出てこない。

「受け取ってはいけない、はぁ。受け取ったらどうなんだろう」

紙を読み進める。

『いいですか？　絶対に受け取ってはなりません』

はぁ。

『相手のチョコに触れた瞬間、おまえを殺す』

はぁ。

……はぁ。

はぁ！？

殺す？　キル！？　ユーがキルでミーがデッド！？

一気に起きた頭でもう一度その紙を読み直す。

「な、なんなんだこりゃ」

『繰り返す。今日はチョコをもらうな。さもなくば殺す』

「んな非現実的な……馬鹿馬鹿しい、会社行こ。どうせカカか姉あたりの――ん？　もう一枚あったか」

『――ちなみに会社にはすでに有休届けを出してある』

「……うぁ、いきなり現実的になった」

『今日はおとなしく逃げまわれ。さもなくば殺す』

殺す殺すとオウムみたいに連呼しやがって……でもあいつが言うと冗談に聞こえないから怖くなってきた。

うん？　ああ、これを書いた犯人はもうわかったよ。ここまで手の込んだことができる人間は一人しかいない。

「おい、どういうつもりだクソオヤジ」

呟いた途端にどこからともなく矢が飛んできた。風切りながら壁に刺さった矢の先には、達筆な文字が書かれた一枚の紙が。

紙、曰く。

『モテるやつは死ねばいい』

「あいつは父親の自覚があるのか？」

さすがはカカと姉の元祖だ。

矢が飛んできたところを見ると、どうやら近くに潜んでいるらしい。しかし相手は忍者、そう簡単には尻尾は出すまい。捕まえて説得するのは今までの経験上無理。ということは……はぁ、ヤツが飽きるまで待つしかないか。

僕は「なんでうちの家族はいつもいつも……」とため息をつきながら着替え、部屋を出た。顔でも洗おう……

「トメ兄！」

「ん、カカ。おは……よ」

カカが立ってる。

プレゼントっぽい包みを持って。

「トメ兄！　今日ってバレンタインだよね！」

「お、おお。そう、らしいな」

「そんなわけで、その……いつもお世話になってるし、はい」

……どうしましょうか大佐。

ええい！　先ほどの指令を忘れたか！　ならん！　受け取ってはならん！

で、でも妹が珍しくしおらしく、照れながらも可愛らしい包みを差し出しているのですよ！？

ならんと言っておる！　指令優先だ！　無視だ無視！

「……トメにぃ」

大佐ぁ！？　なんか悲しそうですよ！？

……かわいい。

大佐？

ぬぁ！？　な、何も言ってないぞ私は！　こ、こほん！！　……仕方あるまい。指令ではああ言っても実の父親、まさか本当に殺しはしないだろう。

で、では大佐！！

受け取るがよい！！

自分は大佐を上司に持てたことを誇りに思います！！

「……トメにぃ？」

「はっ！　あ、ああすまない」

ちょっと心の中の大佐と喋ってたんだ。

「ありがとな、カカ。じゃあ、ありがたく……」

僕の手がカカのチョコに触れようとした、その刹那。

うなる風の音を耳に捉えた僕の身体は、弾けるように後方へ跳んだ。

一瞬前まで僕の胸があった部分を手裏剣が通り過ぎていく――ってあぶっ！！　本気!?　本気と書いてマジ!?　マジメに殺す気か!?

『モテるやつは死ねばいい』

「どっから聞こえてくるんだこの声!?」

「お兄ちゃん……どうしたの？」

「か、カカ」

「私のチョコ、受け取ってくれないの？　お兄ちゃん！」

涙ぐみながら悲しむ妹の姿、兄としては揺らぐところ……だがしかし！

「カカ、おまえ何企んでる？」

「……え？」

「おまえが僕のことを素面で『お兄ちゃん』って呼ぶのは裏で何か企んでるときだ」

「ちっ」

お、普段のカカに戻った。

「いいから受けとってよ！」

言いながら真っ直ぐ踏み込み、チョコらしき包みを突き出してくるカカ！

「受け取ってって、おま」

身体を捻ってそれを避ける、が、間髪いれずにカカの腕が霞み、二度、三度と弧を描きながら僕へと襲いかかってくる。

「とと、っと！　それどう見ても受け取ってほしいモノの扱い方じゃないだろが！　多少細長いからってそれはナイフじゃないんだぞ！」

闇雲に棒を振り回したりする子供と違い、いちいち間合いを詰めながら鋭く腕を振ってくるカカのチョコ（本当にチョコなのか怪しくなってきたが）を避けるのはなかなかにきつい、が――僕だって伊達に変な家族を持っているわけじゃない。目と反射神経にだけは自信があるのだ。

「よっ、とっ」

チョコに触れなきゃいいんだろ。というわけで――チョコを持っているカカの手首あたりを適当に手刀で叩きながら受け流し、攻撃のことごとくを捌ききる！

「えい」

「うあああああ」

避けられ続けて焦るカカの隙をつき、手首を掴んで思いっきり引っ張る。それだけでカカはバランスを崩してすっ転んだ。

「痛ぁいっ！　もう！　なにすんのさトメ兄！」

「それはこっちのセリフだ！　なんだか知らんが、僕は逃げるからな！」

「ぶーぶー！　結構ふつーに頑張って作ったチョコなんだぞ！」

「ならそんなもん振り回すなよ！」

言い捨てて玄関へと走る。着替えておいてよかった……とりあえ

ず逃げて隠れて、母さんあたりに電話してなんとかしてもらおう。

急いで靴を履き、外へ出る。

道へ出て、さぁどこへ逃げる――!?

「トメさん!!」

「……げ、サユカ、ちゃん」

やばい。

うぬぼれるわけじゃないけど仮にも先日、告白された身だ、ここで待ち構えていたってことは、きっと……や、もらいたくないわけじゃない。むしろほしい! でも今もらうのがダメなんだ! このよーわからん騒動が終わった後なら!

「これ……チョコですっ! 受け取ってくださいっ!」

「あのさ、サユカちゃん。それなんだけど、よかったら後で――」

「今すぐもらってくれないと、わたし死にますっ!」

「えええええ」

なんでそんな難しいこと言うのさ!?

そしてこれまたなんで本気っぽく彫刻刀握り締めてるのさ!?

「あ、あのさサユカちゃん! 危ないよ、そんなの喉に近づけちゃ

！」

「今すぐトメさんがチョコを受け取ってくれるなら下ろしますっ」

「えええええあああああ」

「さもないと、わたしは喉を掘ります」

「えぐいっ！！　聞いてるだけでこわい！！」

「さぁっ！」

さぁって言われても！

「ふふふー、甘いよーサユカちゃん」

「今度はなんだ！？」

後ろを振り返ると、そこにはサエちゃんとカカが！

「意外とストレートな方法できたね、サユカン！」

「てっきりサユカちゃんのことだからエロエロパワーで勝負してくると思ったー」

「やかましいわよっ！」

……ああ、あの衣装とか？

「だから勝ち目ないと思ってカカちゃんと手を組んだんだけど……

サユカちゃんがそういう方法でくるなら、やーめた」

「え？　やめたってサエちゃん。それってもしかして私との組むのをやめるって意味――」

がし、とカカの首に腕を回すサエちゃん。そしてどこからともなく取り出した彫刻刀を――

「トメお兄さん、私のチョコを受け取りなさーい。さもなくばカカちゃんの目を彫るよー」

「きゃあああああああ！！」

うあ、久々に聞いたカカの本気の悲鳴！！

ここ、なんの変哲もない道路だよな？

なんで僕はこんな脅迫に挟まれて、

「さー、トメお兄さん。カカちゃんとサユカちゃん、どっちが大事なのー？」

「と、トメ兄」

「トメさん！！」

さらになんで修羅場っぽい事態に突入しているのでしょうか？

まったくもって世界はフシギです。

えーっと……どうしよう。

切り抜ける方法が思いつかないので、次回までに考えます。

続く。

## カカの天下３５９「バレンタインゲーム　前編」（後書き）

というわけで、一足先にバレンタイン突入です。
この先どうなるのか、それは投票の結果次第＾＾
続きはまだ書いてないし考えてもいませんからね笑

……え？　シュー君が今までどうしてたか、の話？
そんなもんあとあと。バレンタインのほうが大事。

# カカの天下３６０「バレンタインゲーム　後編」

……どうも、前回からピンチ真っ最中なトメです。

状況は最悪だ。

右向けばサユカちゃんが首に彫刻刀を当ててチョコをもらってくれなきゃ死ぬと言う。

左向けばサエちゃんがカカを人質にとってチョコをもらってくれなきゃ目をサクッといくと言う。

で、僕はどっちを向いても殺される。

どないせいっちゅうねん。

「トメさんっ」

「トメお兄さーん？」

「トメ兄……」

うぅ、サユカちゃんは思い込み激しいっぽいから勢いでやっちゃいそうだし、サエちゃんはなんていうか黒いし、ああもうどうしよう。

とりあえず……会話して説得できないか探りを入れるしかないか。

まずはサユカちゃんを見る。

「わたし……このチョコ、一生懸命作ったんですっ」

「う」

「これが受け取ってもらえないなんて……失恋したも同じだわ……死のう」

「待てぇい！！」

説得できねぇ！！

こっちは諦めてサエちゃんとカカの方を見る。

「サエちゃん？　まさか本気じゃないよね」

「本気ですよ、ええ、それはもう腹黒ですからー」

「え、えっとサエちゃん？　なんかスネてない？」

「えーえーもうなんとでも言ってください黒いですからー。真っ黒ですからー、黒くなれるだけ黒くなってやろーじゃないですかー」

や、やっぱなんかスネてる。

「大体ですねー、最近損な役回りばっかりなんですよー。私だってたまには良い役やりたいのに黒い黒いってみんなが言うから私もそうせざるをえなくてー、サユカちゃんのときだって……ぶつぶつ」

愚痴り始めたし！

「ほらほらー。早くしないとカカちゃんの視界も黒くなりますよー？」

「トメさんっ！　早く選んでくれないと、わたし、ショックで死んでしまいますっ」

……ぴく。

「トメ兄！　助けて！」

「ほらほらー、カカちゃんとサユカちゃん、どっちをとるんですか？　早くしないと両方死んでしまいますよー？」

……ぴく、ぴく。

「トメさん……そっか、そうですよね、わたしのチョコなんて……うん、死のう」

「トメお兄さん、時間切れですー。残念ながら――」

……ぷつん。

「――なさい」

「はいー？　トメお兄さんなんて言いましたー？」

「トメさん？」

「三人とも、こっちにきなさい」

「トメさんー？　答えになってな」

「来い」

「「「ひっ」」」

「そこに並びなさい」

「え、えと、トメ兄？」

「早く！！」

「は、はいぃ！　そ、そんな怒らないでよぅ」

おとなしく並んだ三人に電光石火でゲンコツをくらわす。

「「「いだぁっ！？」」」

「おまえらね……悪ふざけにもほどがあるだろ！！　彫刻刀を人に向けて、軽々と死ぬだの殺すだの……そんな言葉を使うんじゃありません！！」

キレた。

こいつらに対する戸惑いよりも、兄として教育すべしという義務感のほうが上回って……気づいたら僕は説教をかましていた。

「いいか、死ぬとか殺すとかそういう言葉は（中略）っていう気持ちになるだろ、すると（中略）って心が傷ついて（中略）ということ

になるんだ、わかったか！」

「「「はい……」」」

「よし、じゃあ三人とも中に入りな。罰として今日は家の中で遊ぶこと！！」

「「「ごめんなさいでした……」」」

すごすごと家へと入っていく三人。まったく……こんな本気で怒ったのは久しぶりだ。でもこういう躾はきちんとしておかないとな、うんうん。

さて、じゃあ僕も家に……って、あれ。

そういや僕、ピンチ切り抜けちゃってるじゃん！　うわ、すごいな僕――っとぉ！！

またもやどこからともなく飛んできた矢を跳びずさって避ける、地面に刺さった矢の先にはまた紙が張ってあった。

曰く、『親みたいな説教しやがって。俺の役を盗るな』って……仕方ないだろうがアンタが率先して親らしくないことしてんだから。僕がしっかりするしかないだろう。

なんにせよ、これでピンチは脱した。あとは誰もこないようなところに避難して、母さんに電話を――うわぉ！？

「はぁっ！！　む、避けたか」

「あ、あぶな……姉！　いきなり殴りかかってくるとはどういう了見だ！」

なんでこんなに千客万来なんだよ今日は！

「あたしの拳にチョコをはりつけてある。つまり当たったら負けよ！」

「なんでおまえらそんなに僕を殺したいのさ」

「や、別に弟を殺したいわけじゃないよ？　商品がほしいだけで」

「……どういうことだ」

「あれ？　読んだんでしょ、紙。バレンタインゲームだよ。トメにチョコを渡せるのは一人だけ、渡した人には豪華商品が」

「そんな『狙う側』の設定は初めて聞いたぞ！！」

「あ、そういやそっか。まーそういうわけでさ、その賞品ってあたしの自腹なのよ。だからあたしも勝たないといけないの」

「その賞品のために僕、殺されかけてるんだが」

「だってそうでもしないと盛り上がらないでしょが」

「んな当然みたいな顔して人の命を危険にさらすなよ！！」

「あー、うっさいな。おら！」

「うわぁ！？」

問答が面倒になった姉が踏み込んでくる――速い。振るわれる拳、右膝を脱力させてわざと転んでなんとか避ける。転がって体勢を立て直しながらも逃げる算段をたてないと――カカならともかく、姉のようなバケモノを捌く自信はない！

「くっ……姉！！」

「あん？　なにさ」

「手に貼ってたチョコ、落ちてるぞ」

「え？」

思わず自分の手の甲を覗き込む姉。視線が逸れた今がチャンス！

「シュバッ！！」

「え！？　うそ！」

ふっ……忍者のクソオヤジが得意な神速移動術。伊達に何度も見てきたわけじゃない。

「と、トメ……いつのまにそんな技を！　くそぅ、まだ遠くには行ってないはず！　どぉぉこぉぉぉだぁぁぁぁぁ！！」

どどどど！　と砂煙をあげながら去っていく姉。

馬鹿だなぁ姉は。

僕はあんたらと違って普通の人間なんだ。

んな移動術なんかできるわけなかろう。

「本当は電柱に隠れただけなのに……シュバッって言っただけで勘違いするんだから姉もアレだよなぁ。まぁ本当にシュバッと移動する父親がいるってだけでも充分アレだが」

アレが何かは想像に任せる。

「さて、さっさと移動を」

「トメさーん」

今度はなんだよぉ!?

「サカイさん……」

「トメさん、チョコを受けとってくださいー」

またか……

「さもなくば殺すー」

「それもまたか!!」

直球で来たなオイ!!

「ふふふー、キレたヒキコモリをなめちゃいけませんよー」

「最近のご時世を考えると非常に怖い脅しだが……」

こないだ姉に聞いたんだよね、あの話。これからのことを考えてっていうことで……誰もいない家の玄関のほうを指差しながらつぶやく。

「あ、サエちゃん」

「シュバッ！！」

うぉ、父さん以外にもいた！　シュバッと消える人！！

ヒキコモリで運動不足のはずなのに……これが母親の（逃げる）力かー。

さて、改めて移動を……

「トメさん、殺す！」

「まてや」

しまいにゃ前置きなしかい。僕はいつから賞金首になったんだ。

「あぅ！　ご、ごめんなさい、さっきカツコさんに会って、トメさんに会ったらこう言うようにって……」

「そうかい……サラさんも律儀に従わなくても」

「す、すいません、つい……それでですね、コレ」

う、まさかサラさんまで。

「あの、マフラー編んだんです、よかったら、その」

「え!?　手編みのマフラー!?」

そんな男の夢を!?　い、いいよな、チョコじゃないし……受け取っていいんだよな!!

「ど、どうぞ」

「ああ……ありが、と、う?」

差し出されるマフラーを受け取ろうとして……ふと気づく。

「……ね、サラさん」

「は、はい!?」

「そのマフラーと手の間に隠してるモノは……なに?」

「……えへ」

結局あんたもか!?

「す、すいません!　でも賞品が」

振り返って猛ダッシュ。くそぅ……どいつもこいつも僕の命より賞品優先しやがって!　そんなにみんなほしがるなんて一体どんな

賞品なんだ!?

「おー、トメ。こっちこっち」

「テン!?　ま、まさかおまえも」

「オレがおまえなんぞにチョコやるわけねーだろ。痒くなる」

「そ、それもそっか。そうだよな、似合わないしな」

「ムカ……ま、まぁな。いいからこいよ、こっちなら誰もいねぇ」

「あぁ、助かった」

「ほれ、缶コーヒー」

「お、さんきゅ」

「こんな寒空の下にずっといたら身体も冷えてるだろ。それでも飲んで温まれ」

「お、ホットか。いいね……って、よく寒空の下にいたって知ってるな」

「見てたからな。おもしろかったぞ」

「おまえな。人が殺されそうなときに」

「まーまー、ここ座れよ」

促されたのは公園のベンチ。平日の、しかも朝ともいえる時間のせいか、周囲に人の姿はない。

「ふー……ったく、ひどい目にあった」

「大丈夫だって、おもしろかったから」

「あのなぁ」

缶をプシッと開けながらため息をつく。

「ゲームの生贄にされる僕の身にもなってくれよ。チョコに触れたら殺される？　ふざけんなっての」

「は？　そんなルールだったのか。姐さんからは『トメをチョコ恐怖症にしておく』って聞いてたから、単にチョコが嫌で逃げてるんだと思ってたが」

「……ある意味、恐怖症だよ。もう」

ぐいっ、と缶をあおる。

「バレンタインに女に追い回される、ってのは幸せそうに聞こえるがな」

「じょーだん。普通に追い回されるならともかく、賞品目当てだぞ？」

「別にそれだけじゃねーだろ。姐さんが他のやつにゲームを提案したのは今朝だし、もともとみんなてめぇのためにチョコ用意してた

んだよ。よかったな、モテモテで」

「ほほぅ」

ぐいっともう一度缶をあおって、ジト目でテンを睨む。

「じゃーこの缶コーヒーも、もともと用意してたもんだったのか？」

「まさか、そこの自販機で買ったんだよ」

「この、缶コーヒーを？」

「ああ」

「僕の記憶が確かなら、これってコーヒーじゃなくてホットチョコレートっていう飲み物じゃなかったっけ」

「そうだっけ」

「……おい、テン。さっきコーヒーっつったよな」

「ん、それ嘘だ」

コノヤロウ。

「テン、おまえ……僕なんかにチョコやるわけないって」

「まな。賞品なかったらやらねーよ」

「可愛くないヤツ」

「当然だ。オレを誰だと思ってやがる」

なぜいばる!?

「おい審判！　オレの勝ちだな」

『ああ、確認した』

「どっから聞こえるんだこの声！？」

再びどこからともなく飛んでくる矢！　ほんとどこにいるんだよあの親父!?

矢の先に巻きつけられていたそれを受け取ったテンは、満足そうに頷いた。

「うし、んじゃ他の人に報告よろしく」

『了解した、しかしその前にトメを殺さねば』

「あー、あとで殺してくれ。ちょっと用事あるから」

『……仕方ない、ではその間に爆薬をもう少し増やしておこう』

「そうしとけ」

『では』

なぁ、僕はいったいどこにツッコめばいいんだ？

「トメ。ん、どした？」

「……や、なんでもない。で、殺されるまでの間、僕はどうすればいいんだ？　そもそも、その賞品ってなんなんだ？」

僕をここまで振り回した賞品がなんなのか気になって、テンの手元を覗き込む。

そして驚愕した。

「ん、これだよ。今回の賞品」

こ、これは……

「二万三千円」

なんて身も蓋もない賞品だ！！

「これを思いついたときの姐さんの全財産らしいぞ、これ」

「お、おま、おまえら！！　このために！？」

「だって、普通にほしいだろ」

問答無用の説得力がぁ！！

「さて、じゃあこれ使って昼間から飲みにいくぞ！　付き合え！」

「は？　い、いや、まぁ、いいけど」

「と、その前に……ほれ」

差し出される包み。

は？

なんですか、この、バレンタインっぽい包みは。

「なにって、チョコだよ」

「は？　だ、だっておまえのチョコはあのホットチョコじゃないのか？」

「あれは勝つために買ったんだ。こっちが本命」

「……本命？」

「ぅえあ！？　ち、違う違う！　本命チョコって意味じゃなくて！　こっちが本番というか用意してたやつというか！」

包みをあけると、そこには不恰好なチョコが並んで……

「て、てて、てててて手作りか！？」

「お、おう……あんだよ！　オレがチョコつくるのがそんなにおかしいか！？」

「極道の親分が鼻歌まじりに可愛らしいチョコ作ってたら違和感あるだろ、それと同じ」

「うるせぇよ！　ちょっと納得したじゃねぇか！　お、オレだってな、理由がありゃこれくらい作るんだよ！」

「理由って、二万三千円か」

「おうよ！」

そのわりにはこれ、その二万三千円のために使ってないような…

…とかツッコむのも野暮か。

「……ありがとな、テン」

「痒い、痒いから礼なんか言うな！」

「わ、わかったよ。じゃあ後で食べる」

「今すぐ食え！」

「な、なんだよ。痒いんだろ？」

「こんなことを継続してるほうが痒い！　さっさと食って感想言え！　んで飲みに行くぞ！」

「わ、わかったよ……」

なんだ、照れてんのか？　まぁこういうのとは縁遠い性格だからなテンは。気恥ずかしくて仕方ないんだろう、それでも作ってくれ

たんだから感謝して食べるべきだな。

さて、ではこの粘土の塊にしか見えない凸凹したチョコを……ぱくりと。

……もぐ。

「……なぁ、テン」

「あんだよ」

「シソの味がするんですが」

「んじゃそっち食ってみ」

……もぐ。

「フシギと刺身の味がするんですが」

「おう」

「ナニコレ？」

「う、うっせぇな！　普通のチョコなんか作れるわけねぇだろ！痒いにもほどがある！！」

や、だからってこんな製法が不明なもん作らなくても……

「ま、まずいか？」

「フシギな味……」

「よし！　まずくねぇんならオッケーだ！　食え、さっさと食え！！」

「もが、もががぐが！」

「さっさと飲みに行くぞ！！」

「もがー！！」

そんなこんなで無理やり口にフシギチョコを詰められた僕は、その勢いのまま飲みに連れて行かれることになった。もちろん昼前から飲み屋がやってるわけがない。最初はファミレスをはしごして飲み、夕方になったら『病院』へ、というコースだ。

正直、楽しかったと思う。

テンにチョコをもらえたのは意外だったが、嬉しかったし、照れるテンなんていうおもしろいものも見れた。姉の暴挙もたまには役に立つもんだ。

しかし。

テンにチョコをもらってから飲み会が終わるまでの間、カカたちに一切会わなかったが。

あれから一体どうしていたのだろう？

## カカの天下３６０「バレンタインゲーム　後編」（後書き）

読んでいただいた方はお分かりでしょう。
そう！　見事『テンカ先生→トメ』が投票数一位でしたとさ！
……痒い（笑
照れたテンカ先生が見たい、手作りで――などの熱いメッセージ、本当にありがとうございました笑　ほんといろんな意見いただきましたので次のカカラジででも紹介したいと思います＾＾

さて、またまた予想外に長くなってしまったので……この日カカたちは、また他のキャラはどうしていたのか、トメは結局爆発したのか等はまた明日書きたいと思います。

にしてもトメ。
幸せな悲鳴あげてますよねぇ笑
やっぱ爆発か（ぇ

ではでは皆様。
いいバレンタインをお過ごしください＾＾もう終わるけど笑

## カカの天下３６１「バレンタインゲーム　おまけそのいち」

バレンタインデー。ゲームの敗者たちの場合。

よっ、姉だよ！

たった今みんなを集めてゲーム終了を宣言したとこ！　みんなさすがに悔しそうな顔してるね。あ、みんなと言ってもサカイちゃん以外ね。サエちゃんいるし、先に伝えて帰ってもらったのよ。全然悔しそうにしてなかったけど、というか腰押さえて苦しんでたけど。無茶しすぎたとか言って。

「負けちゃったねー」

「ううっ、やっぱりテンカ先生はライバルだったのねっ！」

「トメ兄のはおまけだったし、別にいいや」

「そんなこと言ってカカちゃん、悔しそうな顔してますよ？」

「してないよ！　いい加減なこと言わないでよ。皿割るよ？」

「あぅ！？　だから私はカッパじゃないので皿は……あれ？」

「どしたのキョロキョロと。皿なくなったの？」

「い、いえ……その、トメさんにあげるつもりだったマフラーがなくて」

「あれ？　そういや私のチョコもない」

「あれれー？　私の作ったみんなへのチョコもないー」

「わたしの義理チョコもっ！　どこへ行ったの！？」

はて。

ちゃんと書いたはずなんだけどな。

「ねーね、なに慌ててんのさ」

「お姉！　みんなのチョコが！」

「それならあたしが全部食べたよ」

『……は？』

「紙に書いておいたじゃん。ゲームに負けたらバレンタインに用意したものは全て没収って」

「そんなこと、どこにも書いてなかったと思うんですがー」

「へ？　おっかしいなぁ。ちゃんと紙の隅っこ、虫めがねで見た？」

「見るわけないでしょがっ！！　詐欺広告かっ！？」

「えー！　じゃ、私のチョコ……サエちゃんやサユカンにあげようと思ってせっかく作ったのに」

「おいしくなかったよ」

「勝手に食べておいてそれか！！」

「ならよかったー」

「サエちゃんも安心しないでよ！」

「あ、あの。私が作ったマフラーは？」

「食べたよ」

「えぇ！？」

「何驚いてんの。人間って雑食なんだよ？」

「限度があるでしょう！？」

「あたしにはない！」

「威張るな！！　あーもー……ごめんね皆。うちのバケモノが迷惑かけて」

「仕方ないわよ……バケモノだもの」

「マフラーを食べる……バケモノ」

そこのサラさん、しみじみ言われるとちょっとキツイよ。

「大丈夫だよー。こう考えればいいのー」

お、サエちゃんだけいい笑顔で笑ってる。

「ホワイトデーが面倒くさくなくてよかったー」

「……サエちゃん。私からのチョコ、いらなかったの？」

「わ、わたしのはっ」

「気持ちだけで充分だよー。気持ちだけなら面倒じゃないし」

おー、いい感じにサカイちゃんっぽくなってるなサエちゃん。

「まーまー諸君！　バレンタインデーだからってウキウキしてたら痛い目あうってことよ！　もっと気合を入れてゲームに勝てばよかったんだ！　だから次、頑張りたまえー」

「こ、このお姉……えらそうに！」

「お姉さん……ちょっと本気でひどくないですかっ？」

「まーまー」

あれ？　なんかサエちゃんだけ味方じゃん？

これからもトメがウハウハでダメ人間になるのを防ぐためにイロイロやる予定だし、いっそ皆から睨まれてたほうがやりやすいかと思ったんだけど……

「きっとホワイトデーにすんごくいいものくれるだろうしー、それ

で許してあげようよー」

……は？

「誰が？」

「お姉さんがー」

「誰に？」

「私たち全員にー」

「な、なんで？」

「私たちのチョコを食べたからー」

……あ。

「さぞかしイイモノくれるんでしょうねー？」

「い、いや！　あれはゲームの賞品として没収したわけで」

「もらったらお返しするのは大人の基本ですよー？」

「う……で、でも」

「もしお姉さんが何もくれないと言うのならー」

ふん、なに？　殺すとでも言うの？　そうね、今回の流行語大賞だもんね『殺す』って言葉。でもね、あたしを誰だと思ってんの。

バケモノ・カツコよ！やれるもんならやってみろってんのよ！

「あげなかったら、どうするのさ」

「みんなで無視しますー」

「……え？」

「何を言われても無視しますー。そこらへんに落ちてる空き缶よりも無視しますー。太平洋の真ん中で浮いているかもしれないアメンボよりも無視しますー」

「え、え、そんないるのか不明なものより！？」

「みんなもそれでいいよねー」

「「「うん」」」

ちょっとちょっと。

あたしを誰だと思ってんの？

寂しいと死んじゃう女・カツコよ！？

「そ、それだけはやめてぇ！！」

「つーん」

「え、もう始まってるの？　ちょ、ちょっと卑怯よそれ！　ねぇカカちゃん！　サユカちゃん！　なんで目もあわせないの！　サラさ

ん？　ねぇ、マフラーマフラー呟いてないで反応してよ、そんなトラウマになるほどショックだったの!?　ねぇみんな！　ごめん！　あたしが悪かった！　謝る！　謝るから無視だけはやめてぇ！」

不覚。

結局あたしは今回の騒動に見合うだけのホワイトデーのお返しを約束させられた。

サエちゃんに負けた……

遠慮がない分、もうサカイちゃん超えてるかも……あの子。

はぁ……

やっぱ全部食べちゃうのはやりすぎたか。

## カカの天下３６１「バレンタインゲーム　おまけそのいち」（後書き）

ごめんなさい。
何がごめんなさいかと言うと……あれです。
バレンタイン投票でもらったので「あ、これやりたい。これも、ああこれがこうして」とか考えてたら……
おまけを思った以上に思いついてしまいました＾＾；

というわけで次回、そしてさらにその次回もバレンタインのおまけになると思います……
１４日すぎてもこんなに続くのもどうかと思ったのですが……書きたいんだから仕方ないです笑　日常編はもうちょっとだけ待ってくださいね＾＾

## カカの天下３６２「バレンタインゲーム　おまけそのに」

バレンタインデー、ニシカワ君の場合。

こんにちは、僕の名前は西村。え、西川じゃないのかって？　だっていま西に川ないもん。村があるもん。だから西村なんだよ。

「えー、チョコー、チョコはいりませんかー？」

僕は今こんな感じでチョコを配っている最中だ。もちろん僕は男だし、バレンタインデーにチョコを配り歩く趣味なんてない。なのになぜこんなものを配っているのか。

「ほらほら注目！　私の愛のこもったチョコがほしい人は他にいませんかー？　ほら、もっと気合入れて配りなさいよ」

それは僕が、自称『学校のアイドル』アヤの付き人だからだったりする。

……幼馴染やってるうちに、いつのまにかこうなってたんだよね。

「なぁアヤ坊。なんで僕も配らなきゃならないんだ？」

「なによニッシー。嫌なの？」

「別に毎年のことだからいいけどさ、なんでかなーと」

「そりゃあなた、アイドルがファンの一人くらいはべらかしてないと格好つかないからでしょ」

「はー……そーですか」

「なによその『はーヤレヤレ』って目は！　相変わらずダルダルで言いたいこと言わないんだから」

「えー、だって余計なこと言うの面倒くさいし」

「ほんとニッシーって西の川だの村だのってこと以外は無気力よね」

そう、僕は西のことになると人が変わると言われている。なぜかは知らない。

「それはなんというかほら……西川になるのが僕の使命だし」

「じゃあ私の付き人も使命と思ってがんばりなさい！」

「はいはい」

アヤ坊に付き合うのはいつものこと。面倒とは思いながらも廊下に出て、チョコを配っていく……３０個入りの箱に入っていたチョコはすぐになくなった。高飛車でわがままだけど結構人気あるんだよなーアヤ。あと単にチョコに飢えてる男が多かったのか。

「よしっ、ご苦労様！」

「はいはい、じゃ僕は戻るから」

「待った！　はい」

ぽん、と手渡される包み。たった今まで配っていた安いチョコの包みとは全然違う。

「頑張ってくれたお礼ね」

「ありがとさん」

「ニッシー。もうちょっと感動とかないわけ？　アイドルからバレンタインチョコもらっといて」

「毎年のことだし」

喜ぶのも面倒だ。

「ま、それもそっか。じゃ今年もよろしくね」

「はいはい」

にこやかに笑って去っていくアヤ坊。ああいう笑顔は可愛いんだけどなぁ……なんて思ったところで周囲の視線が痛いことに気づく。

ああ、ここ廊下だっけ。教室に戻らないと――そう思って振り返って歩き出したとき。

ドン、と。

その人に衝突してしまった。

「おっと、大丈夫かね、君」

「え、あ、はい……教頭、先生」

やばい、デストロイヤーだ。

「その手に持っているのは、まさかお菓子か？」

まずい、学校にお菓子持ってきたなんて知れたら怒られる。

怒られるのはとても面倒だ。

とてもすごく面倒だ。

……よし。

「え、えっと。実はこれ、教頭先生に！」

「私に？　まさか君は性別の壁を破壊しようというのか？」

「そーです」

めんどいからそれでいいや。

「ふむ……まぁ、そういうことなら」

アヤ坊に怒られるだろうけど、それもいつものことだからいいや。

バレンタインデー、タケダの場合。

こそこそとカカ君の教室を覗き込む我が名はタケダ！

せっせと夜なべして用意した手作りのチョコ……これをカカ君に渡すのだ！　ん？　男のくせにバレンタインデーにチョコを作った理由か？　そんなものは決まってるだろう！　カカ君が俺にチョコを作るはずがないからだ！

しかしカカ君はああ見えて義理がたいからな！　チョコをもらえばホワイトデーにお返しをくれるだろう！　きっかけ、そう、きっかけ作りが大事なのだ！　この際体面などは置いておく！

しかし……むむ？　カカ君は一体どこに？

「何をしておる」

「うぉあ!?　あ、ああ、教頭先生」

「それは、なんだ」

その、鋭い眼光に――

「まさか、学校に菓子なんぞを？」

俺の言葉がデストロイされた。

「ん？　なんだ、それは私にくれるものだったのか？」

こくこく、と勝手に頷く俺の首。もう思考も破壊されてるっぽかった。

「ふむ、そういうことならば仕方ない、もらっておこう」

こくこく、と怯えたように頷く俺。実際怯えてるんだが。

「いやぁしかし……最近の若者はエライ趣味をしておるなぁ！　まさか男から男に、しかも中年男性に片思いとは！！　はっはっは！！」

その、無駄にでかい声によって。

「ひそひそ……タケダ君って」

「ニシカワ君も……って話よ」

「不潔……」

「イヤー！　キャー！」

「じゅるり……あ、ヨダレが」

俺の評判も、見事に破壊された……

バレンタインデー、教頭先生の場合。

まったくもってけしからん！　あぁ、私は教頭だ。いま巡回を終え、職員室の自分の机に戻ったところだ。

座りながら嘆く。バレンタイン、まぁいいだろう。テンカ君や他

の女子生徒が数人休んでいるのも愛のためならば致し方ない。だが男のくせに学校にチョコを持ってくるなど……情けないことこの上ない！　せいぜい悪い評判で懲りるがいいわ！

さて。

ふむ……

おお。おー。

「あ、あの、教頭先生」

「なんだね」

「いくら甘党だからって……生徒からチョコを取り上げてパクパク食べるのは教師として」

「教師としての理念など、とうの昔に破壊しておる」

「……そんなにチョコ好きなんですか」

「大好きだ」

「……おいしいですか？」

「死ぬほど」

## カカの天下３６２「バレンタインゲーム　おまけそのに」（後書き）

なんでこんなバレンタイン話を書いたか？

投票数が多かったからですが。

何か問題でも？

# カカの天下３６３「バレンタインゲーム　おまけそのさん」

おはようございますー……ふわぁ、起きぬけでねむねむなサエですー。

今日は不思議と目覚ましが鳴る前に目が覚めましたー。うーん…頭がほにゃほにゃしますー。目覚ましが鳴る前ということは、まだ時間があるということですよねー。

というわけで、もう一度おやすみですー……

「あれ、せっかく起きたのにまた寝ちゃうのか？」

「はいー……私は眠いのですー」

「とと、そんなに抱きつくなよサエちゃん。僕は抱き枕じゃないんだぞ？」

「うるさいですー、おとなしくしてくださいトメお兄さんー」

ぎゅっとすると……体温が伝わってきて安心するー。

安心……？

重たいまぶたを一生懸命上げてみる。

すぐ目の前にトメお兄さんの顔。

あぁー、安心……

できるかー！！

ガバッと身を起こす！

「なっ、な、な、なー！？」

「ん、どしたのサエちゃん」

「ななななんでトメお兄さんがここにー？」

「なんでって……僕がサエちゃんのお兄さんだからさ」

「へ……？」

「サエちゃん、チョコおいしかったよ」

「わ、私はあげてませんがー」

お姉さんに全部食べられた、はず。

「あれ、そうだったかな」

「そそ、そうですそうですー……なんでそんなに顔を近づけるんですかー！？」

「え……チョコ、食べようかと思って」

「そ、そこはチョコじゃないですー！　あ、ちょっと、トメお兄さ――」

ガバッ！！

「……今の夢、なにー？」

ここは見慣れた自分の部屋、ベッドの上、跳ね除けた布団。窓の外は真っ暗……そう確認するまでもなく今のが夢だと私はわかっていた。

そう、夢なのはわかっている。

わからないのは内容だ。

「……なんで私があんなー」

あんな……あんなサユカちゃんが毎日見ていそうな夢をー！

「……いいやー」

夢は夢。たまにはそんな意味不明な夢を見ることもあるでしょー。

「ねよねよー」

恥ずかしさの名残でまだ熱い頬を押さえながら、私はもう一度布団に入った……

「と、トメお兄さん……どうですかー？」

「おいしいよ、サエちゃんのチョコ」

「それはよかったー！　ほら、もっとここも」

よーくーなーいー！！

ガバッ！！

「なんで続きを見るのー！？」

どういうことー！？　もしかしてチョコを渡せなかったの実はすごく悔しかったとかー？　私がー？　ありえなーい！

「もう！　寝るー！」

ふてくされてもう一回布団に！

「サエちゃん、あーん」

「ぱくり♪」

「次は僕に頼むよ」

「はーい。ほら、あーん」

あぁーん！？

ガバッ！！

「なんで別バージョンに発展してるのー！？」

なんで……？　私そこまでトメお兄さん好きじゃないのにー……いや、好きっていえば好きだけど、近所のお兄さんって感じでー、チョコを用意したのもカカちゃんとサユカちゃんの反応見るためだしー。

だから……そこまで……チョコを、渡せなかったのが……悔し、かった、わけ、じゃ……むにゃ。

「サエ」

「トメ」

「サエ！」

「トメ！」

「サーー」

無意味に呼び合うなー！！

ガバッ！！

「寝たらダメなのー！？」

ううう、これ以上トメお兄さんの夢を見たらダメだー……なんだか本当に恋してるみたいになっちゃうでしょー！　そんなのダメでしょー！

夢を見ないようにするにはどうすればー……むにゃ。

「サエりゃん♪」

「トメりん♪」

何語ー！？

ガバッ！！

「なんだかどんどんスゴイ方向にいってるようなー」

……仕方ない。

当日を過ぎてから、ってすごい恥ずかしいけどー、ううー……ま

だチョコの材料余ってたよねー。はぁ……作ろー。

寝るために。そう、寝るためにねー。

別に本当に渡せなくて悔しかったわけじゃないんだからねー！

ううー！　トメお兄さんめー！

許さないからねー！

バレンタイデーの次の日。サエちゃんの場合でした。

さて、こちらはさらにおまけ。

バレンタイデーの夜、飲み後のトメの場合。

「うぃー……酔った、もうだめ、ただ、いま――」

ぐでぐでになったトメが玄関のドアを開け中に入った瞬間、ボカンと爆発。

「……けほ」

口から煙を吹き、膝をついた途端にもう一度ボッカンさらにズドンときたらチリンチリンとなにかが鳴ってヴァンヴォンと電気っぽいものがビューティフルかつワンダホーに炸裂したかと思いきやグ

リングリンとアレが回ってナニがドウしてＤｏなってにゃんにゃんルーでチャンピオンラーメン――（以下略）――した後、一枚の紙が落ちてきた。

『モテた数だけ、死ねばいい。ｂｙ父』

おまけのおまけ。

「それで息子を殺しかけたの？　パパ君」

「え……っと」

「パパ君、今年のチョコは抜き！」

「そ、そんなぁ！！」

とある場所でのとある夫婦の会話でしたとさ。

## カカの天下３６３「バレンタインゲーム　おまけそのさん」（後書き）

はい、なんだか詰め合わせっぽいおまけ話がこれで終わりです＾＾サエちゃんのお話は、サエ→トメが投票数二位だったので書きました笑　健闘賞ということで＾＾

あと、モテすぎなトメに鉄槌をという票（？）も多かったので笑

一応生きてたみたいですよ？

さて、バレンタイン話と同時にラブコメっぽい路線もこれでひと段落とします笑　明後日からは元のカカ天に戻る予定ですので、またお楽しみに＾＾

え、明日？

明日はちょっと……いい加減書いてあげないといけない話があるので、ね＾＾；

# カカの天下３６４「シュー君物語」

皆さんは覚えているだろうか？

かつて温泉旅行に行き、途中から行方不明になった男のことを！

――これはかの湯煙殺人事件のサイドストーリー。しばらくいろんな人に忘れられていた哀れな男の物語である。

――事件当日。

愛しのお姉さま、カツコが朝風呂にいってしまったらしいと聞き、男――シューは健気にロビーで待っていた。

やがて客室のほうが騒がしいことに気づいたが、それでも椅子に座っておとなしく待っていた。

やがて――その女は現れた。

カツコじゃない。ぎんぎんに血走らせた目、近くにあるものを手当たり次第に集めている妙な姿は暴走時の彼女と似ている気もしたが、とにかく別人だった。

そう、その女は手当たり次第にいろいろ集めていた。「投げるものは！？　なにか他に投げるものはないの！！」と叫びまわり、怯える客や仲居をものともせずに。

――やがて、その女はこちらにやってきた。

女はシューの座っている椅子の近くにあった掃除用具のロッカーを開き、中身を取り出し始める。

「これと、これ……うん、いい凶器になるわ！　このロッカーもついでに、って軽っ！　中身取り出したせいね」

ギラリ、とイッちゃった瞳がシューを貫く。

「あんた、重りとしてこの中に入りなさい！！」

「え、えぇ？　えええぇぇぇ！？」

万力のような力にひっつかまり、無理やりロッカーに押し込められたシュー！

「ふはははは！　これで凶器は充分！　いい凶器に私は狂喜！　そして今まさに狂鬼となりて敵を撃つ！　うおおおおおおおおＬ！Ｏ！　Ｖ！　Ｅ！　ぱ！　わ！　あああああああ！！！」

人とは思えない力でロッカーごとバウンドしながら引きずられ、中に入っているシューはシェイクされまくる。金属製の内壁に全身を叩かれまくり――やがてシューは気を失った。

この直後、ロッカーは愛しのカツコにむかってぶん投げられることになるのだが……気絶したシューにはあずかり知れぬことだった。

――そして、シューが目を覚ますと。

そこは暗闇の中だった。うまく身動きがとれない感触からして、どうやらまだロッカーの中のようである。

「いてて……うぅ、どうなったんだよぅ。いま何時だよぅ」

ロッカーが歪んでいるせいか、微かにこぼれる外の光から出口を探ることはできた。非力ながらも何度か蹴りをいれ、強引にこじ開ける。

「えいっ、えいっ！　やった、開いた！」

これで外に出ることができる！

シューは喜び勇んでロッカーから飛び出した。

久しぶりの外！　裸になったかのような開放感！

そして、周囲にいる――本当に裸な女性の皆様。

「……ばぶ？」

あまりのショックに一瞬幼児退行したが、

「「「きゃあああああああああああああ！！」」」

男性にとってはスペシャルな格好をした皆々様方の悲鳴によって我に返った。

「痴漢よ痴漢！」

「覗きよ覗き！」

「ヘンタイよヘンタイ！」

「クズよクズ！」

「カスよダニよノミよミジンコよ！！」

「アメーバよアオミドロよゾウリムシよミドリムシよ！！」

「うわあああああ！　違います違います！！　ヘンタイでも微生物でもありません！！」

罵声とともに飛んでくる桶やシャンプーや岩（露天風呂に置いてあるアレ）の数々から、必死に走って逃げるシュー！　しかし避けきれず、岩の一つがシューに直撃しようとした、そのとき！

「シュー！　こっちだ」

「ボブ！？」

懐かしい顔にヤクザキックで蹴り飛ばされたシューは見事に岩を回避。無様に尻餅をついているのも束の間、すぐに立たされ、走り出す！

「ひ、久しぶりだな、ボブ」

「おう！　共にカツコさまを崇め奉って以来だな！」

そう、突然現れたこの男は、かつてのカツコファンクラブの会員仲間だったのだ！

「でもボブ、君、なんで……」

と、ここでシューが口にしようとした疑問を遮るように、

「きゃー！　またあの男よ！」

「捕まえるのよ、男をやめさせてやるのよ！！」

その憎悪がこもりまくった声の矛先がボブだと気づき、シューは驚愕した。

「君も追われてるのか！？」

「ああ、おまえと同じ理由でな」

「じゃ、じゃあ、君も覗きと間違えられて……」

「失敬な！　俺は堂々と覗いていた！」

「威張るなよ！」

「ぼいんぼいんが三人、たゆんたゆんが一人というところか」

「わぁ、それは大漁――戦果も報告しなくていいから！　大体なんで僕がこんな！」

「は？　おまえあのロッカーがゴミ山に持ってかれるの知ってて忍び込んでたんじゃないのか？」

「なんで風呂場の横にゴミ山があるのさ！」

「現代の景色がウリだそうだぞ、この露天風呂」

「現代にももう少しマシな景色はあるでしょおおお！？」

「うむ、さっきのたゆんたゆんな景色はなかなか」

「え、ど、どんな感じだった……？　って聞いてる場合じゃない！！」

そんな二人のダメ男は、鬼と化した女性陣から必死で逃げ回っていたのだが……鬼気迫る女性の勢いに、だんだんと追い詰められていった。

「どうするボブ！　もう逃げ場が！」

「ヤクザなきーっく、げし」

「うわぁ！？」

いきなり蹴られてバランスを崩した僕はそのまますっ転んだ！

「こいつの名前はシュー！　苗字は――で住所は――で！」

「え、え、え！　なんで個人情報を暴露しまくってんの！？」

聞くまでもないことだった。

ボブは、シューを囮にして自分だけ逃げようとしているのだ！

「そして好きな女の名前はカツコだ！」

「そんなことまで言わなくていいだろ！！」

「ちなみに奴隷志望だ！！」

「うるさい！　悪いか」

「ふっ……じゃあな、友よ」

「くっ、ボブ。これが友にする仕打ちか！？」

悲しそうに、悔しそうに叫ぶシュー。そんな彼を見て、ボブは「ふっ」と笑った。

「何を言う。我らは友である前にカツコお姉さまファンクラブ会員……会則第一条！　たまにお姉さまのマネをせよ！　お姉さまならきっとこうするだろう！！」

「なるほど！！　それなら仕方ない！！」

「ではサラバだ！」

そしてボブはしっかりと逃げた。

そしてシューはしっかりとボコられた。

「――でさ、そのまま警察行きだよぅ……なんで京都にきたのか、とか事情聴取を受けてるうちにお姉さまの名前出したら、なんでか警察署が『ざわっ……ざわざわ』ってなってね、よくわかんないけど『失礼しました！！』って釈放されて……」

「へー」

「電車賃もないからヒッチハイクとかしてここまで戻ってきたんだよ。その間もいろいろあったけどさ、なんとか頑張って……そしたら家に鍵かかっててさ、トメさんちに助けを求めにいったらヘンタイよばわりで大砲されるしさ、どこへ行ってもヘンタイ扱いでさ、もう僕って本当にヘンタイなんじゃないかって本気で心配になって」

「まーまー」

「慰めてくれるのかい？　ああ！　やっぱりいい子だなぁタマ様は！」

「これー」

しばらく失踪していたにも関わらず誰にもツッコまれなかった哀れなシューの話をちゃんと最後まで聞いてくれたタマは、天使のような笑顔で手のひらにちょこんと乗せたソレを差し出した。

「なに！？　チョコ！！　バレンタインの！？　くれるのかい！　あぁ、僕はやっぱり戻ってきてよかったよ、幸せだぁ！！」

「ぱくり」

「あぁぁ！　そうだよね、タマ様のだよね！　目の前で食べるなんてお姉さまっぽいことしちゃって！　僕の心はズタズタだよ！　でも一生ついていきますぅ……」

こうして。

一人の男の物語（愚痴）は終わりを告げた。

## カカの天下３６４「シュー君物語」（後書き）

ようやく明かされたシュー君のお話……さんざん引っ張っておいて大した話じゃないのは彼の人柄によるところでしょう（ぇ

さてさて……イロイロな話やイベントがありましたが、これでようやく一区切り！

残っているイベントはお楽しみ会ですが、それはまだ日があるのでしばらくはいつものカカ天です＾＾

またのんびりまったりお付き合いくださいな～

## カカの天下３６５「しげ遊び」

「トメ兄、大丈夫？」

「うーん……うーん……」

こんにちは、カカです。

急いで学校から帰ってきて、すぐに寝込んでいるトメ兄の部屋へと直行する私って妹の鑑ですよね。でも唸ってるだけで反応なし。お父さんの攻撃でくたばっているからと言っても、ちょっとひどいんじゃないでしょうか。

「ねーねートメ兄」

「うーん……爆発が……チャンピオンのラーメンがぁ」

「もう！　トメ兄！」

無視ばっかして……そっちがその気なら！

ズボッ！！

「はなげっ！？」

ブチッ！！

「みみげっ！？」

プッツン！！

「どこのけ！？　……うぅ」

「あ、起きた起きた」

私の愛の力だね。

「いつつ……か、カカ、おまえ今なにした？」

「トメ兄、その前に言うことは？」

「……おかえり」

「ただいま！」

うん、挨拶は大事だよね。

「で、なんの用だよ妹」

「わ、そういうこと言うの？　暇してるだろうと思って遊びにきてあげたのに」

「せっかくなら自然に起きた後に来てほしかったが……ま、いっか。あんがとあんがと」

ぽんぽんと私の頭を叩くトメ兄。ん、許してあげよう。

「じゃー遊ぶよ！」

「なにして」

「んー……あ。とりあえずそれ代えるね」

トメ兄のおでこにのっているおしぼりを手に取り、洗面所へたったったー。ところでトメ兄って怪我で寝込んでるんだよね。これする意味あるのかな？　ま、いいや。

冷たい水で絞りなおして――なんとなく思い立ったことがあり、他にも三つおしぼりを取り出してトメ兄の部屋へと戻った。

「おー、おかえり……なにしてんだ」

「おしぼりのっけてるの」

「額にのせるのはわかる。だがなぜ両肩とへその上にまでのっける？」

寝ているトメ兄の身体の上にひし形の頂点っぽく置かれた四つのおしぼりを確認して、コホンと私は咳払い。

「えー、これからおしぼりの冒険物語を始めます」

「……おしぼりの？」

「うん。まずね、トメ兄の身体の上はおしぼりの王国なの」

「僕の身体も出世したもんだ」

「それでね、おしぼりの名前は……シゲル君！」

「うわ、そんな親近感わくおしぼり初めて見た」

「この四つのおしぼりはね、シゲル、シゲール、シーゲル、シゲルーっていってね」

「覚えやすいんだか覚えにくいんだか、よくわからんな」

「この王国を治めているのはこの四つのおしぼりなの。東西南北に分かれて住んで、国を守ってるんだけど……うーん、誰がどこにいくべきかな」

「んー……シゲルは南かな」

「なんで？」

「語呂がいいから」

「ミナミシゲルでございます。うん、たしかに」

その他はあんまり語呂がぴったりこなかったので、適当に北がシゲルー、東がシゲール、西がシーゲルということになった。

「そしてここで驚愕の事実が！」

「いきなりだなオイ」

「どんな事実がいいと思う？」

「決めてないんかい。んー……じゃあ、実はシゲルーは女だったと

か」

急展開だ！

「シゲルーを取り合って争いを始める、ヒガシゲールとニシーゲル！」

「なんか短くなったな」

「その間にちゃっかり彼女をかっさらったシゲル！」

「サエちゃんみたいなヤツだな」

たしかに。

「そして結ばれた二人はかけおち、シゲル王国を徐々に移動して……」

トメ兄のへその上から南下。ちょっとモコっとしたとこで止まる。

「……おい、なぜそこで止める」

「なんか茂ってて進めないんだよ」

「た、たしかに茂ってるけどさ」

ん？　「しげ」って言葉使いたかったから適当に言ったんだけど……たしかに茂って？　どういうことだろう。ここら辺って何か茂ってるのかな。

「……そんなにしげしげと眺めるな！」

「あう、そんなにげしげしと蹴らないでよトメ兄」

「ったく……あ。なぁカカ」

「なにさシゲル」

「誰がだ」

おっと。

「なに、シゲル兄」

「おしぼりの兄になった覚えはない。それはともかく、あのゴミ捨ててくれるか？」

トメ兄の指差した先には空のペットボトルが。

「えー、それくらい自分で……」

ふと気づく。

「資源ゴミ、しげんゴミだこれ！」

「よくできました。よしよし――じゃなくてげしげし」

「なんで蹴るの」

「ノリで」

こんな感じで今日はシゲルで遊んだ。

そこそこ楽しかった。ありがとうシゲル。

## カカの天下３６５「しげ遊び」（後書き）

シゲル君。
彼を見て思いついたお話。
ただそれだけです。

うーん、久々に普通な感じです笑

## カカの天下３６６「増えたカカ」

「ただいまー」

疲れたー……体調が回復して間もなく出勤した仕事は予想以上にきつかった。それでもなんとか終わらせて帰ってきた僕を待っていたのは……久々に見るホワイトボードゲームだった。

説明しよう！　ホワイトボードゲームとは、我が家の玄関に設置されているホワイトボードに書かれている『何か』にリアクションをとらなければいけないというゲームである！　カカの気まぐれで起こるそのゲームを無視したが最後、カカは拗ねてしまうのだ！

さてさて、今日は何が書いてあるのかな？

えーと。

『私カカは分裂しました』

いきなり恐ろしいことを言う。養育費かさむじゃん。僕の心労も募るじゃん。

『元のカカに戻るためにはみんなを一箇所に集めなければいけません。家の中に隠れているので見つけましょう。玄関に集めといてくれるとわかりやすいです』

はぁ、つまりは玄関の近くにいるわけね、カカ自身は。

『一人目のヒント。台所』

んー、つまりはその『分裂したカカ』とやらを集めればいいのか。

仕事から帰ってきて疲れてるけど……これもリハビリと思って付き合ってやるかな。

「まずは着替えよっと」

わざわざ声に出して言ったのは、隠れているはずのカカに『僕が無視しようとした』と思われないためだ。拗ねて出てこられてもおもしろくないからね。

自分の部屋に戻り、気楽な格好に着替え――ているうちに、押入れの隙間から見慣れない布端がはみ出ているのに気づく。おそらくはカカの分身の一つか。

……ヒント無視して順番を間違えても拗ねるんだろうなー、カカ。

見なかったことにした。台所台所、と。

ふむ、来てみたけどカカの分身とやらが隠れるスペースはない。でも分裂したからには小さくなってるのかも。そう思い棚の中や冷蔵庫などを中心に調べていくが……何も見つからない。

ふと、コンロの上にのっている鍋に気づく。

あれ、こんなの使ったっけ？

疑問に思い、ためしに鍋の蓋をあけてみると――ビンゴ。中に小さな人形が入っていた。人形の頭に貼ってあるのは一枚の紙キレ。

手にとって読んでみる。

「えーと、なになに……？　『分裂カカ、一人目。一子さん』か。一人目だから一子、なんともまぁ簡単なお名前で」

文章にはまだ続きがあった。

『趣味、お料理』

鍋の中に居たってことは自分がお料理される気満々じゃん。むしろそれこそが趣味なのか？

僕は自虐趣味のある哀れな人形を掴み、玄関へと戻ってきた。適当にホワイトボードの下に置いておく。

「さて、つぎは――あ、書き込み変わってる」

僕が人形を探している間に書き変えたか。やっぱ近くにいるな。えーと……

『二人目のヒント。トイレ』

トイレか……すぐ見つかりそうだな。

その予想は的中だった。

二人目の分身人形は便器の中にいたのである。汚れないようにラップで包んであった。細かい配慮は褒めるべきだが、さすがにこの中に置き去りにするのは人形かわいそうだぞ。

「えーと、ラップの中にまたメモがあるな。『分裂カカ、二人目。二個さん』って、『個』かよ！　モノ扱いかよ！　かわいそうに……」

まだ続きがあった。

『趣味、便所』

「どんな趣味だよ」

設定までかわいそうな二個さんを玄関へ運ぶと、さらなるヒントが書いてあった。

『三人目のヒント。おまえのねぐら』

「兄にむかっておまえとは何だ！」

文句を言いつつも自分の部屋にもどり、さっきの押入れを開ける。やはりすぐに見つかった。

『分裂カカ、三人目。サンコンさん』

「いきなり中華風になったな」

『趣味、日中戦争』

「こえーよこのサンコンさん」

日中関係をより良くするために玄関へと戻った僕を迎えたのは、新たに書き加えられたホワイトボード。

『ごめんなさい』

ああ、さっき怒ったからか。

「まー許してやろう」

で、ヒントは？

『四人目のヒント。そこ』

「どこだよ」

とりあえず周囲を見渡すと――それはすぐに見つかった。

僕が帰ってきたときに脱いだ、靴の中に。

人形を取り出し、メモを見る。

『くさい』

なら入るな。

『とてもくさい』

言い直すな。

『病院いったほうが』

余計なお世話だ。

『分裂カカ、四人目。死子』

だからいちいちこえーよ。

『趣味、どすこい』

……シコ踏むからか？　これは怖くない。

「さて、次は」

あれ。そういえば僕がここにいるからもうホワイトボード書けないんじゃないか？

「えーと」

変な沈黙。

「んー」

やっちゃったーどうしよー、って感じのオーラがどこからか漂ってくる。

「とりあえず今日はこのへんで合体しといて、続きがあるなら今度にしないか？　今日は特大チキンカツの特売あるから、そろそろスーパーいかなきゃだし」

チキンカツ、という言葉に喜びオーラを隠せないらしいどこかにいるはずの我が妹。

「んじゃ五秒目をつむったら合体な。はいつむった。1、2……」

5、と数え終わり、目を開ける。

するとそこには人形を手足にぶら下げたカカが立っていた。ひもで吊るしてるらしい。

「合体！　カカ復活！」

「はいはい、買い物いくぞ」

「あ、待って。私もいく！」

「はいはい、その身体にひっついてる人形とってからな」

「待っててー！」

ドタドタと騒がしく自分の部屋へ用意しに向かう妹の後ろ姿を見ながら。

僕って付き合い良いよなぁ……と、少し自画自賛してみた。

## カカの天下３６６「増えたカカ」（後書き）

今日も今日とてまったり話。
ちょっとしたリクエストもあり、久々にホワイトボードの登場です笑

チキンカツ……買いにいってこよ。

## カカの天下３６７「主役はどなた？」

「さて、お楽しみ会だけど」

「どんな台本にしよーねー」

お昼休みにウキウキ会議、あちこちそちこち、良い友♪

こんにちは、カカです。今の歌は気にしないでください。

「カカすけー、サエすけー。きたわよっ」

「あ、サユカン。おいでおいで」

「よこそー」

隣のクラスからやってきたサユカンは私が促した席に座り、三人で向かい合って会議スタイル完成！

「さて……サユカンが色々と大変で忘れてたけど、来月のお楽しみ会でやる劇の台本考えないといけないんだよね」

「な、なによっ！　わたしは確かに大変だったけど、カカすけもサエすけも似たようなものだったじゃないのっ」

「えー、私はいつもどおり遊んでただけだもーん」

「……そのわりにはずいぶんと大きなケーキ、トメ兄に作ってたよね」

「んぐ、あ、あれはー、そう、実はカカちゃんにあげるのに作ったんだよー。だけど恥ずかしくてー」

なんですと！

「サユカン！　なんだかんだで一番いろいろあったのはサユカンでしょ！　私たちはあくまでオマケ！　やましいことなんか何一つない！」

「な、なによ急にっ。別にそういうことにしといてもいいけどさっ」

「ふー、カカちゃんって単純。そゆとこ好きー」

「サエちゃん何か言った？」

「カカちゃんが好きだなーって」

「どうよサユカン！　このラブラブっぷり！」

「あーはいはいっ、わかったから話戻すわよ！　時間ないんでしょっ」

そーだった。

「それでね、まずはこの劇のタイトルなんだけど」

「私いい提案あるよー」

「はい、サエちゃんどうぞ」

「題してー、『告白はおしっこ』」

「ぶっとばすわよっ！？」

うーん、とてもいい題名なんだけど……

「ほら、一応みんなの意見を全部取り入れた台本にするって約束でしょ。そのタイトルだと難しいんじゃないかな」

「えー、かつてない素晴らしいタイトルだと思うんだけどー」

「かつてもこれからも全くいらないわよ、そんなタイトル！　ふんっ、なんでもありなんでしょ！？　なら『黒い魔法使いサエ』にでもすればいいんじゃないのっ」

「なるほど、魔法ならなんでもありだね」

「もう何度も言ってるけどー。いいかげんその黒いって言うのやめないー？」

「じゃあ『グロい魔法使いサエ』でっ！」

「ケンカ売ってるー？」

「じゃあ『ゲロい魔法使いサエ』はどうよっ！」

「むしろサユカちゃんにそれ吐かせてあげようかー？」

「じゃ、じゃあ『トロい魔法使いサエ』はどうっ？」

「むー、これはこういう喋り方なんだから仕方ないでしょー」

なんだかなぁ、キリがなくなってきた。

「まぁまぁ。それじゃまず主役を決めようよ」

みんなの要望をまとめた紙を見る限りじゃ、ごちゃ混ぜな劇をやることになりそうだし……ここはやっぱり主役でタイトルを決めるべきだと見た。

あれ、紙の端に主役に関すること書いてある。どれどれ？

『カレーが主役。カレー大活躍』

見なかったことにしよう。

「主役かぁ……あ、ねーねーニシカワ君」

「んー、何か用？」

たまたま近くにいたニシカワ君に声をかけ、ちょいちょいと手招きするサエちゃん。

「ニシカワ君もやるよねー、お楽しみ会の劇。どんなのがいいー？」

「もーなんでもいいよ。あ、でもアヤ坊には歌わせてやってね。じゃないと僕が八つ当たりされるから」

「む、やる気ないね。こないだの会議のときは何か言ってたのに」

「あのときは勢いで言っただけだよ。基本的に僕は口だけだから」

「じゃーニシカワ君の役、適当に決めるよー？」

「どうぞ、僕も適当にやらせてもらうから」

「それじゃニシカワ君は『西の勇者』役ってことで」

その瞬間、ニシカワ君の耳はダンボに。目はギンギラギンになった！

「任せろ！　西は僕に任せろ！　西のありとあらゆる世界は僕のものだあああああ！！」

おお、吼えた、燃えた。やっぱ西に関してはテンション違うなぁこの人。

「んー、そう提案したはいいもののー、ニシカワ君が主役じゃパッとしないねー」

「サエすけ、今更なに言ってんのよっ。もう彼、勇者やる気満々じゃないのっ！」

「勇者が主役とは限らないよー」

「む、それもそうねっ」

うーん、難しいなぁ。

「主役かー……なんでもできる人じゃないとねー」

「というか、どんな展開に巻き込まれてもおかしくない人じゃないといけないわねっ」

「つまりは何でもアリか」

そんなお姉みたいな人がこの学校にいるわけ――

「あー、なんでもアリな人ねー」

「いたわね、そういえばっ」

「はぇ？」

なんで二人とも、そんな意味ありげに私を見るの？

ま、まーさーかー？

## カカの天下３６７「主役はどなた？」（後書き）

楽しみ会の準備、急がないとやばいんじゃないでしょうか。
まぁ、カカたちですし、ノリでなんとかしちゃうんでしょうけど笑　また今後の展開もお楽しみに＾＾
しばらくのんびり行くので急展開はないと思いますけどね、多分。
そう、多分……（意味ありげ？

## カカの天下３６８「ヤツがくる」

「くるっ、くるのよっ！」

「ど、どしたのサユカン。そんなに慌てて」

ごちそうさま、カカです。

そう、今ちょうど給食を食べ終わったところ。

「サユカちゃん、お通じでもきたのー？」

「おお！　おめでとう！」

「そうじゃなくてっ！」

「じゃーまだ便秘なの？」

「サユカンかわいそう」

「話聞けやっ！！」

えー、もうちょっと遊びたいなー。

「くるのよこのクラスに！　あの人が！」

む、あの人？　サユカンの言い方に興味がわいたので、遊びは中断して話を聞いてみることにしよう。

「誰がくるってのさ」

「カカすけは聞いたことない？　毎日わたしたちが食べている給食……その給食はクラスのみんなでよそって配ったりしてる。だから毎日の中でおかずがあまったりすることも結構あるわ。休む人だっているんだもの、それは仕方のないこと。でも――」

何が恐ろしいのか、サユカンは身震いしながら話を続けた。

「その給食の『お残し』が臨界点を突破したとき、給食センターからわざわざやってくるという……」

サユカンが意味ありげに間をためる。そしてそれをさらに盛り上げるかのような悲鳴が廊下のほうから聞こえてきた――廊下のほう？

なにか、くる？

「先生も警備員も誰も止められない、放たれたが最後、言いたいことを言い終えるまでけっして口を止めることがない最強のケモノ……」

どすん、どすん、どすん、と。

まるで怪獣のような足音が廊下のほうから聞こえてくる――気がした。

その足音はやがてはっきりと聞こえてきて。

「その名も――」

教室のドアが開く。

そいつが姿を見せた。

「給食の、おばちゃん！」

「『お残し』するごはいねぇがぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

こ、こここ、こわっ！？

あまりに人外な迫力にビビりまくる私たちクラスメイト一同！

「ちょぉぉぉっとアンタたち！　黙ってあたいの話を聞きなさい！！」

その猛禽類のような眼光に、教室に居た全員がすくみ上がり、思わず「はいはいなんなりとお申しつけくださいませ！！」とばかりに頷いた。

「最近さ……このクラス、お、か、ず、残、す、子、が！　多くないかい！？」

それはサユカンにたった今聞いたばかりの内容だった。曰く、成長期にしっかり食べないと大きくなれない、好き嫌いするな、などなど。この上もなくわかりやすい口上を述べるおばちゃんに嫌気がさしたのか、ちょっかいを出す生徒が現れ始めた。

「うるせぇなぁババー。適当に食ってりゃ身体は育つもんだろが」

「おだまり、そこの未来のチビデブ！！」

「チビデ……！　おいこら、人の未来を勝手に決めるな！」

「はん！　あんたみたいな不摂生ばっかしてる子はね、背がのびなくて腹がのびるに決まってるんだ！」

どキッパリと断言されて唖然とする男子。と、そこで勇敢にも前に出る女の子がいた。

「あ、あの……ちょっといいですか」

「なんだい未来のぺったんこ」

「ぺ、ぺた――！」

絶句する女子。哀れ。

「それがイヤならもっと食いな。あんたみたいなヒョロっちぃ子は食べすぎくらいがちょうどいいんだよ！」

「は、はいぃ……ご、ごめんなさい。それであの、その、『お残し』が多かったのはですね、多分、この間の日に欠席がいっぱい出たから……」

あれ、もしかしてそれ私たちのこと？

バレンタイデーの日……みんな休んでたんだよね。

「そんなの関係ないよ！　それなら他のやつらがいつもの倍食えばいいだけじゃないのさ！　無理？　子供が胃袋やデブを気にしてど

うする！　あたいらが汗水たらして作ったおかずを捨てなきゃいけないこの悲しみが、あんたらにわかるかい！？」

「え、この給食って汗水たらしてるの？　調味料がわりに？　うげろ」

おばちゃんの勢いがおもしろくて、ついつい私も口を出してしまった。

当然、おばちゃんの視線は私のほうへ。

「給食がまずくなるでしょ。冗談でもそういうこと言うんじゃないよ」

「う……は、はい」

あまりに真摯でマジメな瞳に、思わず頷いてしまった。

「わかったね、未来のセクシーダイナマイツ」

微塵もマジメじゃないし！

「おばちゃん。誰がボンキュッボンになるって？」

「子供のくせに古い言葉知ってるね。あたいはただ見たまんまを言っただけさ。あんたはしっかり食べる子だ。だからこれからもちゃんと成長するわ」

そ、そうなのかな。確かに運動する分ちゃんと食べるようにしてるけど。

「あんた、名前は？」

「カカだけど」

「カカ？　カカだって！？　ほー！　あんたがあの！」

あれ、おばちゃん私のこと知ってるのかな。

「弟からたまに話は聞いてるよ、面白い子だってね。うんうん、そんだけしっかり食べてるようならそりゃ面白くもなるわ！　いい笑いはいい食事がないと生まれないからね！」

弟？　誰のこと？

「じゃ、あたいは帰るよ！　いいかいあんたら！　ちゃんと飯食うんだよ！」

『はーい！！』

話し合いとも名ばかりな勢いに押される形だったけど、給食のおばちゃんがあまりにも恐ろしく凄むもんだからクラスメイト全員が最敬礼で応じることになった。

「あ、そうそう！　あたいのことは南おばちゃんと呼んでおくれ！　じゃね！」

最後までハイテンションを保ったまま、給食のおばちゃんは去っていった。

給食のおばちゃんって……怖い。

それにしてもあのおばちゃんって誰から私のこと聞いたんだろ。

弟……弟……

あ。

そういえば、給食のおばちゃんの名前って、南おばちゃんなんだよね。

名前に西と東の漢字が入った料理系の人いたね。きっとそれだ！

そろって料理、そろって濃い兄弟姉だ。

きっと料理の味も濃いに違いない。

……や、おいしいんだけどね？

## カカの天下３６８「ヤツがくる」（後書き）

実は隠れて設定していたもう一つの三きょーだいがこれで揃いました。

お料理三人衆！　アダルト三人衆よりもさらに（年齢が）上をいくトリオである！

……や、だからって登場しまくるわけでもありませんが笑

# カカの天下３６９「カカ天クエスト　ＥＰ４」（前書き）

注意：このお話はカカ達がゲームのキャラになりきりながらＲＰＧを進める話です。話の内容はゲームの中ですが、『もしもカカ達が異世界にいたら』みたいな感覚でお楽しみください。

ステータス

カカ　ボケ勇者　レベル１　へん

サエ　悪の魔法使い　レベル１　はらぐろ

サユカ　手の平の踊り子　レベル１　さびしんぼう

トメ　ツッコミ　レベル１　つっこみ

## カカの天下３６９「カカ天クエスト　ＥＰ４」

スライムという、新たな仲間を加えた一行。

「名前なんにしよっか」

「なんか希望あるー？」

「格好いいのを頼むぜ！」

「どうしよう、カカすけ？」

「じゃーケロリンで」

「……デンジャーケロリンからとったのか？　たしかにこのスライムってデンジャーだけど」

「なんだかよくわからねぇが、それは人間どもの世界じゃ格好いい名前なのか？」

「すごくすごく格好いいよー」

「そか。ならそれでいいぞ！」

そんな一行は、やがて近隣の街へとたどり着きました。

「街だ！」

「新しい街っ！　うーん、旅の醍醐味よねっ」

「でも大丈夫なのか？　魔物なんか連れてって」

「きっと大丈夫ですよー。ほら」

試しに、とサエは入り口近くの街人に話しかけてみた。

「こんにちはー。私たちって何に見えますかー？」

「あ、はいこんにちは。えっと……ツッコミ、ボケ、マジシャン、踊り子……魔物使いもいるのかな？　どう見ても旅の芸人一座ですね！」

「ほらー」

スライムが加わったことにより、一行の勇者度が１０下がった！

「なんか変なパラメータ下がってるし……こんなことで僕らは大丈夫なのかね？」

「まーまートメ兄。とにかく私たちが王様の命令を受けてることには変わりないんだし、やるべきことをやろうよ」

「お、たまにはまともなこと言うじゃないカカすけっ！」

「んで小娘。この街でやるべきことってなんなんだ？」

「もちろん窃盗だよ！」

カカはぶっちゃけた。

「王様から命を受けた私たちは法的に無敵！　だから早速全部の家に不法侵入して、片っ端から使えるものを盗んでくるのよ！」

「ＲＰＧの正しい姿だねー」

「う、うう……常識人としては激しく抵抗があるが」

「トメさん……ＲＰＧってそういうものなんですっ！　一緒に地獄の底まで悪の道を歩きましょう！」

「まー魔王とか倒すんなら地獄くらいは行かないとダメだろうしな。こんなちぃせぇこと気にしてたらキリねーぞ、あんちゃん」

「そ、それもそうか」

ケロリンの励まし。トメの良心が5下がった。

「よっし！　じゃあ各自、分担していくよー」

とある一軒屋。

「おじゃましまーす」

「な、なんだチミは!?」

「なんだチミはってか！　そうです、私が、勇者です」

「……勇者様ですか？」

「うん。だからとっとと出すもん出してもらおうか」

「どんな理屈ですか！？」

「うるさい、この王様の命令書が目に入らぬか！」

「そ、それは……発行された人は何をしても王様のせいにできるという、伝説の！」

「わかったらさっさと使えるもん出せー！」

一行の勇者度が５０下がった。

そんな感じで一時間後。

「よし、みんな集合！」

カカの号令によって一行は一旦街の広場へと集まった。

「そんじゃー各自、調達できたブツの確認ね。順番に出してこう。まずは私……」

ごそごそとカカが取り出したアイテムは……

「馬のフンと豚のフンと牛のフンと人のフンを手に入れた」

「どこの牧場いってきたんだおまえは！」

「え、違うよ。行ったのは農家。これが一番使えるからって」

たしかに農家の方にとっては必需品だ。

「このアイテムを入れる、特別な袋ももらってきたんだよ」

一行のアイテム欄に新たな道具袋、『こえだめ』が加わった。

「加わらないでよそんなのっ！」

「む、じゃあサユカンは何もらってきたのさ」

「わ、わたしは……その、萌え要素研究辞典を手に入れたわ」

「……どこでもらってきたの」

「な、なんか通りすがりの人が、素質あるとか言われてっ」

なかなか見る目がある人である。ちなみに道具効果は『読むと魅了が成功しやすくなる』という、踊り子にとっては嬉しいアイテムだったりする。

「サエちゃんとケロリンのコンビは？」

「お金を手に入れたー」

「うん、サエちゃんはどこまでもサエちゃんだ」

所持金は増える一方だ。

「さてさて、トリのトメ兄は？」

「う……うん。い、言っとくがな、タンスの中にあったんだからな！　タンス開けたら自動的にアイテム欄に入るから、仕方なく手に入れちゃったんだからな！」

「ずいぶん必死だね、何手に入れたのさ」

「……エロサンタ服を手に入れた」

サユカンは装備した！

「えっ！？　なんで！？　なんで勝手に装備させられてるの！？」

「そりゃもうサユカンの――踊り子のための装備だからでしょ？」

「エロ度が８０上がったー」

「あがりすぎよっ！！」

「ほほー、なかなかいいじゃねぇか。ほれほれ、くるりと回ってみ、スカートふわっとやってみせやがれ。ひゅーひゅー」

ケロリンはオヤジくさい。

「ううぅ。なんでこんなの手に入れてくるんですかぁトメさんっ！」

「そ、そんなこと言われても」

答え、ゲームが空気を読んだから。

「どんな空気よっ！！」

「ピンクな空気？」

「か、カカすけぇっ！！　君、いいかげんに！」

真っ赤になったサユカがカカに襲い掛かろうとした、そのとき！

「大変だー！！　魔物が攻めてきたぞー！！」

街人の悲鳴が響き渡った。

「なに！？　それは本当か！」

「じゃあ早速、勇者様に退治してもらおう！」

「そうだな！　おらおら勇者！　出てきてさっさと働けや！」

「でかい口たたいてでかい顔してんだからさぞかし強さもでかいんだろうねぇ！？」

「お、お金とられた分働いてもらわないとわりに合わないデス！！」

とことん街人の悲鳴が響き渡った。

「あー……こりゃやるしかないね」

「魔物退治か？　でも僕ら、一回も戦闘で勝ったことないのに……」

「大丈夫ですよー。なんのためにいろいろ盗みまくったんですかー」

「そうだぜ、そろえた道具を駆使すれば必ず乗り越えられるってのがＲＰＧのお約束だ！　ま。いざとなりゃ俺がいるしな」

「そ、そろえた道具って、ろくなのが無いじゃないのよっ！」

ごちゃごちゃ言いながらも街の入り口に移動した一行が見たものは――街の外からこちらへ向かって砂煙をあげながら突進してくるイノシシ型の魔物の一団だった！

「な、なんか強そうだぞ」

「大丈夫だよ、いけ、サユカン！！」

「きゃっ、ちょっと何す――あぁん！！」

カカに背中を強く押されたサユカは、バランスを崩して転んでしまった。

スカートがふわりと舞った。

『ブヒー！！』

魔物は興奮して立ち止まった。

「おー、さすがサユカちゃん。萌える転び方だー」

「魅了成功だね」

魔物はサユカのふとももから目が離せない！

「よし、みんな。攻撃だよ！」

「お、おう……って、なに配ってんだカカ」

「武器だよ。せーの！」

一行はアイテムを使った！

さまざまなフンが魔物たちへと襲い掛かる。

魔物は全滅した。

「はやっ！！　てか強っ！！」

一行のずるがしこさが２０上がった！

「む、レベル上がらないね」

「一撃死するアイテム使っても経験値にならないんだねー」

サユカはエロレベルが２になった！

「お、こっちは魅了成功で経験値入ったみたい」

「よかったねーサユカちゃん。パーティの中で一番エロいよー」

「う、嬉しくないわ……っ！」

妙なパラメータばかり上がっていく一行！　しかし普通のレベルは上がらない。勇者度はすでに一５５！　ちゃんとやっていけるのか！？

次回、『初めてのダンジョン』をお楽しみに！

## カカの天下３６９「カカ天クエスト　ＥＰ４」（後書き）

結構人気があるカカ天クエスト、ようやく更新です。
果たして皆さんの期待にこたえられているでしょうか？　とりあえずぶっちゃけてめちゃくちゃなのは自信があります笑
次回ーとか書いてるわりには先の予想が私自身も全然読めなかったりします＾＾；

# カカの天下370「いい仕事！」

「よ、おもしろい店員」

「よう、おもしろい客」

どんなファミレスでの挨拶だ、これは。たしかにファミリーっぽい気軽さではあるが。

あ、どうもトメです。今日は夕飯を食べにファミレス東治にまで足をのばしてみたのですが、毎度のおもしろ店員にカカは喜んで絡んでいきましたとさ。

「メニューでございます」

「私が着てるこの服は？」

「おそらくおニューでございます」

「牛が出すのは？」

「牛乳でございます」

「あそこの席のお客さん二人は？」

「貧乳と巨乳でございます」

「店員さんが好きなのは？」

「爆乳でございます」

ニューニューにゅーにゅーと、なんで仲良くなってんだこいつら。

「今日もいかしてるね、店員さん」

「恐縮です。ではご注文がお決まりになりましたらお呼びください」

丁寧にお辞儀して去っていく好青年……しかし。

「おい、そこの小僧！」

厨房の方へ戻ろうとしたバイト青年を呼び止める粗雑な声があった。

「なんでしょうかお客様」

「このパスタ見ろよ！　髪の毛が入ってるじゃねぇか！」

「あぁ、本当ですね」

「どうしてくれんだコラ！！　こんなもん食わせやがって、いますぐ取り替えてこい！！」

うわ、厄介なお客だ。髪の毛入りの食事を食べさせられたら確かに気分は悪いだろうけど、そこまで怒鳴りつけることないと思う…店員君はどんな風に返すんだろ。

「……本当にお取替えしていいのですか？」

「あん？」

「この髪の毛、細さと長さから察するに先ほど帰ったバイトの髪に間違いないかと」

「それがどうしたってんだ！？」

「そのバイト、背は１５５と少々低めですが胸はボンバーお尻はマンボゥ、いつも流し目うっふんあっはんフェロモンむーんむんの２０台の人妻さんの髪の毛なのですが……そう、ちょうど帰るところの、あの方です」

店員君が指差した窓からは、ちょうど車に乗ろうとしている女性が見えた。なるほど、前は見えないけど後姿だけ見るなら相当綺麗だ。

「……ごくり」

「あんなべらぼぅにぶらぼぅな女性の髪の毛入りパスタ、マニアなら垂涎の一品を……本当に代えてしまってよろしいんでしょうか？」

「いや、男として断じてそれはできん！　皿まで完璧に舐めつくしてくれる！」

「ありがとうございます。調理した店長も喜ぶことでしょう」

「ぐっじょぶ、そう言っておいてくれ」

「かしこまりました」

ほんとこの街はバカばっかだ。

「すいませーん」

「はいただいま！　……失礼します。ご注文はお決まりですか？」

「チャーハンをつゆだくで」

僕の妹もバカだ。

「かしこまりました」

かしこまるコイツもおかしい！

「そちらのお客様は？」

「あ、僕は、んっと……このハンバーグのセットを」

「つゆだくで」

「あ、こらカカ」

「かしこまりました。ハンバーグセットのご飯をつゆだくですね」

「しかもご飯！？　ハンバーグじゃなくてご飯をつゆだくなの！？」

「まさかつゆだくだくで！？」

「誰もそんなこと言うとらんわ！　ご飯に何のつゆをだくだくさせる気かは知らんが却下！　普通ので頼む！」

「えー」

「店員がえーとか言うな！」

「かしこましました……はぁ」

「面白くなさそうにため息もつくな！」

「では少々お待ちください……はぁ」

「だからさ！」

全て承知の上、とでも言うかのようにニッコリ笑い、厨房へと去っていく店員。まったくもう……何笑ってんだカカ。

「トメ兄、やっぱあの人おもしろいね」

「……まぁ、否定はしないが」

腹が減ってる身としてはちょっとうざいぞ。

――やがて、つゆだくのチャーハンがきた。

「あんかけレタスチャーハンでございます」

なるほど、あんかけがつゆだくということか。

ためしに一口もらってみると、ジョークで出てきた料理のわりにすごく美味しかった。

うーん、いい仕事するなこの店。

いろんな意味で。

## カカの天下３７０「いい仕事！」（後書き）

意外と人気な店員登場！
このレストランとお客様はフィクションです。でももし実在したらごめんなさいｍ（＿＿）ｍ

## カカの天下３７１「想いは歳より真剣さ」

「かんぱーい！」

「んなでっかい声出すなよ……カカが起きるだろ？」

「細かいこと言うね、男のくせに。ほれほれ、かんぱーい」

「はいはい、乾杯」

軽く缶ビールをコツンとあわせ、少しだけ口をつける……どうも、トメです。ただいま時刻は０時をまわったところ、よい子は寝る時間なのですが、悪い子（子って歳じゃないが）の襲撃によって僕の睡眠時間は危うくなってまいりました。

「で、急に飲もうなんてどうしたんだよ。気持ち悪い」

「つれないこと言わないでよぅ。たまには姉弟水入らずも悪くないじゃん？」

唇をとがらせながら柿ピーやポテチなどのおつまみをテーブルに広げていく姉。絶対何か企んでるな。

「それでは、インタビューのコーナー！！」

ほらきた。

「わ、なにその冷たい視線。酒の席に恋バナはつきものじゃん？」

「寝るわ」

立ち上がりかけた僕の腕をがっしり掴む姉の魔手。

「あたしの酒が飲めんのか？」

「飲めんと言ったら？」

「トメが寝ている間に鼻から飲ませる」

「……」

「もしくは股間から飲ます」

「わかったよ！」

うちの姉妹はやると言ったらやる。仕方なく座りなおし、ヤケくそ気味にビールをあおった。

「んで、何が聞きたいんだよ」

「んふふふー、いくつかあるけど、まずはサユカちゃんの話かな」

「……なんのことだ？」

「しらばっくれても無駄、あたしには優秀なスパイがついてるからね。どう告白したか、どういう風に区切りがついたかも一通り知ってるんだよ」

本当か？　適当な嘘を言って詳しく話を聞きだそうとしてんじゃ

ないのか。

「で、告白でおしっこされて気持ちよかった？」

「そのとてつもない言い方はやめろ！！」

くそぅ、本当に詳しく知ってやがる。

「そんで、返事はどうだったの？」

「なんだ、そこは知らないのか」

「んっふっふ、違う違う。トメがどう答えるつもりだったのか、聞いてるんだよ」

……そう、正確に言うと僕は返事はしなかった。

サユカちゃんが見つけた最適な答えに、ただ頷いただけだ。

「それを聞いてどうする」

「酒の肴にする」

「あのなぁ……」

呆れる僕をカラカラと笑い飛ばす姉。

「いいじゃん、どうせ結果は出た後なんだしさ。そのときの自分の気持ちを話すことで、わかることもあるかもよ？」

……まぁ、姉の言うことにも一理ある。家族ということで照れくさいが、こいつがテンと同じくらいに色々と相談しやすい相手には違いないし……いいか。

「答えようとしてたのは……そうだな。『サユカちゃんに好きって言ってもらえて、僕は嬉しい。でも、付き合ったりとかは無理だと思う。歳が違うから、僕は君を女としては見れない』と、そんな、感じかな」

からかい風味だった姉の表情が、少しだけ真剣味を帯びた。

「へぇ、フッちゃうつもりだったんだ」

「そうすべきだと思ったよ。だってサユカちゃんまだ小学生だぞ？　僕なんかのためにそんな若いうちから人生決めさせちゃったら可哀想だ」

そう、思っていた。幼い想いと勢いだけで、人生の中で最もと言っていいほど大事な今の時間を無駄にさせないために――キッパリと言ってしまうべきだと。

「でも結局フッたりはしなかった、だね？」

「ああ。そこまで知ってるなら、わかるだろ？　一緒にいられるだけでいい、だからもっと仲良くしてください、なんて……そんなこと言われて嫌と言えるわけがない」

やれやれ仕方ない、とため息をつく僕。しかし姉は僕の心を見透かすように見つめてきた。

「困った風に言ってるわりには、嬉しそうだけど？」

「そうか？」

「それっぽいこと言って、あんた結局サユカちゃんの好き好きオーラに負けただけじゃん？　サユカちゃんは真剣に考えてきた。真剣に想いを伝えた。それにあんたは真剣に応えざるをえなかった。歳の差とか体面とか恥ずかしさとかを気にしてはぐらかす、ってことができなかったんだ。しかもなんだかんだでサユカちゃんが可愛いから、なおさら」

「……うるさいなぁ。弟いじめて楽しいか」

「楽しい楽しいあっはっはっは！」

笑われまくるが憮然とするしかない。ああそうさ。僕は単に負けたんだ。サユカちゃんに。

あのときのサユカちゃんは、大人だった。

もしかしたらこの先、僕はあの子を好きになるかもしれない――そう思わせるくらいに。

「んじゃさ、テンちゃんはどうなの？」

「テン？」

「バレンタインデーにいろいろあったみたいだけどー？」

「いろいろって……飲みに行っただけだぞ。チョコはもらったが、

あいつは単にゲームがおもしろそうだから参加しただけだろうし」

「……こっちの進展はまだまだか。ちったぁ自意識過剰になりゃいいのにこの弟」

「なんか言ったか？」

「いやいや、別に。あ、ビールなくなった！　おかわり」

「はいはい」

冷蔵庫に次の缶ビールを取りにいきながら、ふと思って聞いてみる。

「なぁ、姉。こんなこと聞くのもなんなんだけどさ」

「んー？　なにさ弟」

冷蔵庫から缶ビールを取り出し、閉める。

「サユカちゃん、こんな僕のどこが好きなんだろうね」

「そりゃあんた、本人に聞きなさいな」

「聞けるか！」

恥ずかしいにもほどがある！

「んなこと言ったってあたしにわかるわけないでしょが」

「……そこまでいろいろ知ってるならもしかしてと思って」

座りなおし、新たなビールを姉に渡す。

「あたしにわかることは一つだけだ」

「なんだ？」

「サユカちゃんのふとももは、おいしそう」

「黙れ貴様」

「じゃあサユカちゃんの今後の衣装について会議しようか」

「だから僕は――」

こうして、くだらないことを話しながら夜は更けていく。

……いや、訂正。あまりくだらなくないか。

サユカちゃんの話をしたおかげで、少し気が楽になったかもしれない。

なにせ。

バレンタインデー騒ぎのあとから、結局ほとんどサユカちゃんと喋っていないのだから。

バレンタインデーはごちゃごちゃしてたからともかく。

改めて会うとなると……恥ずかしいもんだ。困ったことに。

## カカの天下３７１「想いは歳より真剣さ」（後書き）

今日のはコメディ分控えめです。告白、そしてバレンタイン話が終わったあとに書いておかないと、と思っていた話です。

サブタイトルの通り、想いに大事なのは真剣さであって年齢ではないと思います。年齢が関係ないとは言いません。あらゆることにおいて経験があるのとないのとは大きな差ですからね。

でも、想うことにおいて何より大事なのは『真剣さ』だと思います。

――なんて、えらそうなこと書いてるわりにはサユカちゃんのふともも話でオチをつける私って……これでいいんだろうか笑

# カカの天下372「結局はこんな感じ」

「ただいまー」

「おじゃましまーすー」

「お、おじゃみっ！」

ううぅ……噛んだぁ。こんにちは、サユカですっ！

今日はじっくりとお楽しみ会の作戦会議をするため、久々にカカすけの家に集まったのですが……

「おー、おかえりといらっしゃい」

「トメお兄さん、こんにちはー」

軽く手を挙げてカカすけに応え、ぺこりと挨拶するサエすけに合わせてお辞儀するトメさん。そして――わたしと目があった。

「こ、こんにちはっ」

「あ、ああ、こちらこそ」

えー、先日に告白したわたしですがっ。

そのときはまぁ、なんといいますか覚悟も言いたいことも決まってまして、わりと堂々といけたのですよ、うんうん。

でもね。

でもね。

告白する前だろうが、した後だろうがね。

好きな人を前にすると、恥ずかしいんです。

と、いうわけで――どどどどうしようどうしようっ！　な、なんか顔がマグマ！　マグマになってるわっ！　どこから噴火したのよっ！　わたしの頭の天辺に噴火口でも空いてるの!?　落ち着いて、落ち着いて噴火口を閉じるのよ！　じゃなくて、えっと、えっと、とにかく何か喋らないとっ！

「あ、あの、そのっ、その服いいですねっ！　似合ってますっ」

「そ、そう？　ただの部屋着だけど」

「あ、えと、その……それが似合ってるんですっ、トメさんって部屋にいるイメージのほうが強いですしっ」

「そう、かもね」

「ええもうっ、部屋にいるのが一番しっくりくるといいますかっ、台所とか超絶的にぴったりだしっ、洗濯物を干す姿なんかそのために生まれてきたんじゃないかってくらい神がかってますし」

「そんなことのために生まれてくるのは嫌だなぁ」

「とととにかく！　一家に一人ほしいくらいでっ」

……れ？

なんかわたし、トメさんがほしいみたいなこと、言っちゃった？

トメさんと目が合う。

頬が熱くなる。目が――離せない。

「え……と」

「そのっ」

トメさんも困ってる、でもこれ本心だし、いっそのこと最後まで言っちゃう？

「あー……」

「わ、わたし……っ」

だ、だめ、言えないっ、言えないけど……目が、目が離せなくて――

「きょけえええええええええええええええええええ！！」

突然響き渡った奇声！　わたしは驚きまくってトメさんとの嬉し恥ずかしタイムから解放された。

「おまえらに一言」

「ものもーす」

モノ申す？　な、なによカカすけサエすけっ。

わたしとトメさんの間に入った二人は、おそらくはわたしたちに向かって――でも実際は天へと向かって、青スジをたてながら叫んだ。

「「おまえら、付き合ってんのカ！？」」

「え、ええ！？」

「い、いえっ、その……ま、まだっ」

「じゃあとりあえずそのソレやめろ！」

「そ、ソレってなによっ！？」

わたしが聞くと、カカすけはサエすけと二人で見つめあい始めた。

「サエちゃん……うふっ」

「カカちゃん……あはっ」

「サエちゃん……にゃん」

「カカちゃん……うにゅー」

なにしてんのコイツラ。

「なにやってんだ、おまえら」

わたしの心のつぶやきを声にしてくれたトメさん。それを聞いた二人はくわっ！　とこちらを向いた。

「「おまえらのマネだよ！」」

「は、はぁ！？　僕ら別にそんなことしてな――」

「「似たようなもんだ！！」」

え、えええっ！？　そそそんな恥ずかしいことしてたのわたしたちっ！

あれ、でもそれって……もしかして、わたしたちが恋人っぽかった、ってこと？

「「喜ぶな！！」」

「べべべつに喜んでないわよぅっ！」

鋭いわねもぅっ！

「はいはい、とにかくサエちゃんもサユカンも私の部屋いくよ！」

「わ、わかったわよっ」

「トメお兄さんはお茶いれてきてー」

「お、おう」

トメさんを追い払い、私の背中をぐいぐいと押してくるカカすけとサエすけ。

「な、なによっ、なんなのよっ」

「うるさい」

「さっさと歩けー」

「わ、わかったわよっ。まったくもう……なんなのよ、さっきの『きょけー』とかさ」

「恥ずかしの雄叫びだよ」

「恥ずかしいときに叫ぶのー」

う、うう？　そんな見てるほうが恥ずかしいことしてたのかしら。

だってさ。

好きなんだもん。

会うたびに緊張するんだもん。

告白した後なら大丈夫かと思ったけど、もっと緊張したんだもん。

それだけ好きなんだもんっ！　好きなんだもん好きなんだもん好きなんだもんっ！！

ふー……

「心のなかでこれだけ叫べばすっきりねっ」

ちょっとだけ清々しい気分になって、改めて周囲を見渡した。

いつのまにかカカすけの部屋。

そしてポカンと口をあけているカカすけとサエすけ。

「どうしたのよ、二人とも」

「声出てた」

……にゃ？

「全力でー」

……にゃにゃ？

「えっと……ごめん。廊下の向こうにいたけど、僕も聞こえちゃった」

……にゃあ。

「あ、あの、サユカン。大丈夫？」

「にゃあ」

「にゃあってー……サユカちゃん、壊れた？」

「にゃー」

「あ、あのさ、サユカちゃん。僕」

トメさんの顔を改めて見た瞬間。

わたしは噴火した。

「きょけえええええええええええええええええええええ！！（恥ずかしの雄叫び）」

「あ、ちょっとどこいくのサユカちゃん！　サユカちゃん！？」

耐え切れなくなったわたしは思わず逃げ出した。

告白して何かが変わると思ってた。

でも、結局はあんまり変わらなかったわたしでしたとさ……はぁ。

――続く。

「え、続くの？　うそっ！？」

ほんと。

## カカの天下372「結局はこんな感じ」（後書き）

最近、大人だ大人だと評価の高いサユカちゃんですが……
やっぱり小学生。
決めるところを決めたはいいけど、落ち着いてみるとこんな感じだったりします。
でも……変わってないようでちょっとだけ変わってるんですよね。
トメの意識のせいで＾＾

## カカの天下373「いないほうが悪い」

「サユカン、出てっちゃったね」

「トメお兄さん、追いかけていっちゃったねー」

こんにちは、前回の続きをカカがお送りします。

前回のあらすじ！

始めに言ったとおり、以上！

簡単すぎ？　まぁつまり私とサエちゃんは部屋に取り残されちゃったわけですよ。

「サユカちゃん、前とあんまり変わらなかったねー」

「ん、だね」

サユカンの告白がどういう結果になったのか、私もサエちゃんも大まかに本人から聞いていた。もっと仲良く、そんな結果に終わったと。でも好きって告白したことには変わりないんだし、てっきりトメ兄と話すときはもっと落ち着くもんだと思ってたんだけど……

「サユカちゃんっぽいね」

「ん、よかったよかった」

考えてみれば、急に大人なお付き合いされても困る。サユカンは

サユカン。ちょっと安心した。

「さてー、サユカちゃんはいなくなっちゃったし、仕方ないから二人で会議しよっかー」

「そだね。んじゃ皆の意見をまとめた紙だそっか」

「コタツでやろー」

「サエちゃんコタツ好きだねー。私の部屋にも一応ホットカーペットとかあるんだけど」

ランドセルから出した紙束を二人で分けて抱え、私とサエちゃんはよっこらせーっと居間へと移動。

今日の朝、私とサエちゃんはクラスの皆に改めてアンケートをとった。『お楽しみ会の劇に何を望みますか?』っていう質問を書いた紙を印刷して配りまくったのだ。

今までは適当に意見を聞いて回っていただけだった。そのせいでどういう台本にすればいいのかまとまらず、こんがらがってた私たちに「紙にまとめろ」と助言してくれたのはテンカ先生だった。腐っても先生だね。

「よし、じゃ順番に読んでこうか」

「うんー。はいノート、意見はここに書いていこー」

「うんうん」

スイッチいれたコタツに足をもぐりこませ、スタンバイおっけー！

「えっと、じゃあまずは一枚目」

君はどんなことをお楽しみ会に望むのかな？

なになに？

「消費税をなくしてほしい」

……？

……はて？

送るとこ間違ってない？

ま、まぁいいや。二枚目は……

「税金が高すぎる」

……はてな？

や、だからさ。そんなこと小学校のお楽しみ会に望まれても困るんだけど。

「さ、サエちゃん。そっちはどんなこと書いてあった？」

「お楽しみ会に望むことー」

サエちゃんはいつもの笑顔よりちょっと困ったニコニコ風味で言

った。

「飛べ」

無茶言うな。

「これはサユカちゃんを飛ばすとしてー、次」

こほん、と咳払いするサエちゃん。

「僕は車が好きです」

そんな好み聞いてないから。

「これはサユカちゃんを車でひくとしてー、次は」

「待ってサエちゃん！　なんでサユカンをそんなに」

サエちゃんは「あははー、なに言ってるのカカちゃん」となぜ私がわからないのか不思議そうに笑った。

「だってさー、サユカちゃんたら、きっと今ごろトメさんに追いつかれて――」

「サユカちゃん、捕まえた！」

「と、トメさん……！」

「あのさ、気にすることないよ？　一応、その、自分で言うのもなんだけど、さっきサユカちゃんが言ってたの、もう知ってるし」

「そっ、なっ、はっ、そっ……そそそう、ですよねっ。で、でも恥ずかしくてっ」

「うん、実は僕も、恥ずかしい」

「あ、あはは……おそろいですねっ」

「……うん」

真っ赤になりながらも微笑みあう二人。

しかし、そのとき！

「ちょっとそこの君たち」

「通りすがり、見ず知らずの私たちが言うのも忍びないが」

「ここは一言、言わせてもらおう」

口元をひくひくさせた買い物客の皆様が、ずらぁりと二人を囲んだ。

「夕日が照らし、まだまだ賑わう商店街の、道のど真ん中」

「周り気にせず自分達の世界へ入り込み、頬を染め、しまいには恥ずかしいときたもんだ」

皆さんご一緒に。

「「「おまえら、付き合ってんのカ！？」」」

「なぜそれをっ！？」

「サユカちゃん、その返答の仕方違う！」

「すすすいません動揺して！」

「――とかいうことになってるに違いないんだよー！」

「そう言われるとそんな気がしてきた」

や、いいんだよ？　そんなの。別にどうでもいい。

ただまぁ、決めるときにいないほうが悪いってことで。

「歌って踊りたい、これはアヤちゃんだね」

「サユカンはバックダンサーだね」

「フリフリの可愛い服が見たい」

「もちろん着るのはサユカンだね」

「よらば斬る」

「サユカン斬られる役ね。あ、そういえば私の意見書いてなかった。あのね、渋いのがいい」

「しぶいー？」

「うん、これはもう手を打ってあるから大丈夫。あと……あ、カレーを出せ、だって」

「じゃーサユカちゃん食べる役ね」

「……いいなー」

「たまにはいい役ないとねー」

サエちゃんは優しいのか悪魔なのか、よくわかんない。

ともあれ、こんな感じでクラスの皆の意見をまとめていった。

「あれー、そういえばカカちゃんが主役じゃなかったっけー？」

「そだよ」

「サユカちゃん、脇役にしては出すぎじゃないかなー？」

「じゃー敵役ってことで」

これならたくさん出てもいいでしょう。

ぽんぽんと決まっていく役柄。

自分がいったいどんな役をやることになるのか、サユカンはまだ知らない。

## カカの天下373「いないほうが悪い」（後書き）

出てったサユカちゃんとトメは本当は何をしていたのか！？

まぁ、サエちゃんの想像通りだったりします笑　このあと二人は落ち着こうと喫茶店でお茶してから帰ったそうですよ。おまえら付き合ってんのカ！？

さて、お楽しみ会ですが……誕生日のときよりカオスになってますね笑

私……どんなん書くんだろ（いつもいきあたりばったり

## カカの天下３７４「お菓子の逆襲」

「こんにちはー」

「ほいほい……あれ、サカイさん。どしたんですか？」

首をかしげながらも突然の訪問者を出迎える私の名前はカカです、どうも。

「実はですねー、懸賞でお菓子がいっぱい当たっちゃいましてー、お裾分けしようかとー」

「お！　ほんとですか」

これは嬉しい！　古今東西、お菓子が嫌いな子供はあんまりいないのだ。

「はい、どうぞー」

ドサッとサカイさんが玄関の床に置いたのは、ダンボールに詰まったお菓子の数々。

「わ、こんなにたくさん当たるなんて……運いいんですね」

「いえいえー、八時間ほどぶっ通しでネットで送れる懸賞に送り続けてたらこれくらいは当たりますよー」

「……サカイさん、ちゃんと仕事してるの？」

「あははー、それではー」

ごまかすように笑ってササーッと退散していくサカイさん。うーん……サカイさんちはお金持ちっぽいから少しくらい働かなくても大丈夫なんだろうけど、いいのかなアレ。人として。

ま、いっか。それよりもお菓子が大事！

ポテチにチョコに柿ピー……種類はバラバラだけど、私は組み合わせとかは気にしないタイプだ。

今日はトメ兄の帰り遅いから、夕飯までの間にお菓子食べてもいいってお許し出てるし……これはもう食べまくるしかないでしょう！

居間へとダンボールを運んだ私は早速ポテチの封を空け、猛然とお菓子へと挑みかかった。

一時間後。

テレビを見ながら、たまに漫画を読みながらひたすらお菓子を食べ続けた結果。

飽きた。

各袋に多少の違いはあるにしても、基本はポテチとチョコと柿ピーだ。食べ続けてれば飽きてくる。いつもはトメ兄が一回のおやつで食べる分しかお菓子を買ってこないから、飽きるなんてことは今までなかったんだけど……

「なんか見るのも嫌になってきた」

軽くげっぷをしながら、まだまだ残っているお菓子の袋を睨む。

「ポテチは塩辛いし」

いつもはそれがいいんだけど。

「チョコは甘いし」

いつもはそれがいいんだけど。

「柿ピーのくせに柿の味しないし」

いつもはそれがいいんだけど。

「うー……もうだめ、いや。お菓子なんて嫌い。見たくもない。あっちいけこのカス！　や、ポテチは残ったカスがおいしいんけどさ……むー、はぐ」

いやいやながら、それでもポテチにかぶりつく。

出されたもの、封を開けたものは出来る限り残さず食べなさい――そう言われ続けて育ってきたから頑張るしかないのだ。

「むぐむぐむぐ、むぐん」

いつも少ししか食べられないときは足りないって思うのに、たくさん食べれば飽きてきて嫌になる。

「中間はないのかな、もう！　お菓子って嫌なヤツ！！」

文句を言いながら二枚一緒にポテチを口に入れ、もぐんもぐんと咀嚼した、そのとき。

「んぐむっ！？」

ポテチの破片が歯ぐきに刺さった、すんごく痛い！

「むぅー、むぅー……」

なみだ目になりながらモゴモゴしていると。

「むぐ？」

妙な感触がした。口元に手をやると、赤い液体が。

「はなぢ？」

チョコ、食べ過ぎたから？

床に血が落ちないように気をつけながら、急いでティッシュをとって鼻につめる！

「ううう、なにさこれ……お菓子の悪口言ったから怒ってるの？」

ありえないと思いつつ、右の鼻の穴にティッシュつめつつ、私はお菓子を睨んだ。

「このー、お菓子の分際でー！」

ムカついた私は柿ピーの袋を床に叩きつけた。

一個のピーナッツが床に当たって勢いよく跳ね返り、そのまま私の左の鼻の穴に入った。

「フゴッ！？」

びっくりして思わず吸い込んでしまった。

右につめていたティッシュも吸い込んでしまった。

えらいことになった。

「ただいまー……なにしてんだカカ」

「おかえり。お菓子を拝んでるの」

「どうしたんだその鼻。真っ赤だぞ」

「私の罪の証」

「どこの宗教の話だそれは」

私は悔い改めて食い漁る。あぁ、お菓子よ、赦したまえ。

私は気づいた。お菓子を怒らせたせいで、もしもお菓子と仲良く

できなくなったら――どうなる？　もうお菓子が食べれなくなったら、どうなる？

死んでしまうじゃないか！

というわけで、とりあえず今日だけでもお菓子を敬うことにした。

「よくわからないけど、飯食うぞ？　適当に買ってきたやつで悪いが、すぐ食える」

そう言いながらさっさとテーブルにパックに入ったカレーとサラダを並べるトメ兄。

その並べられたカレーとサラダの上に、ぱらぱらーっと。

「なにしてる。そこのトラブルメーカー」

「今日はね、お菓子様の日なの」

「はぁ」

「だからお菓子食べるの」

砕いたポテチがかけられたカレーとサラダを見て、トメ兄の顔がげんなりした。

「なんだ、この不思議な食い物は」

「いいから食べるの」

「うまそうに見えない」

「それでも罰と思って食べるの」

「僕はその罰を受ける必要ないと思うんだけど」

「そんなの知らないの」

「オイ」

「食べるの」

ちょっと駄々っ子モードで言い張ると、トメ兄は観念してくれた。

というわけで。

「「いただきます」」

……あれ。

「なぁ、カカ。意外とうまいなこれ」

やっぱりお菓子様は最高だ。

逆らってはいけない。

## カカの天下３７４「お菓子の逆襲」（後書き）

このお菓子はフィクションです。
実際のお菓子はこんなにヤンチャさんではありませんので、ご安心ください。
でもありえる話ではあります（多分
みなさん、食べ物は大切にしましょうね＾＾
「……ね、ちょっと」
ん？　なに香加。
「言いたいことがあるんだけどさ」
はぁ、よくわかんないけど明日のカカラジじゃダメなの？
「じゃ、それで」
ふむ、なんでしょうねぇ。なんか怒ってたような気もしますが。
まぁ明日になればわかるでしょう。
ではでは＾＾

**カカの天下375「第十一回、カカラジ！」**

「こんカカ！　そろそろが春が訪れ世界はうららかに爽やかになるかと思いきや私の世界は最悪、ベリーバッド、チョベリバと三つそろって極悪な感じなので誰か私の心に春をとどけてほしいです春一番で！　なんて思ってる香加です！」

「や、やぁ、なんだかわかんないけど怒ってる香加に怯えてる留だよ」

ど、どうも。同じく怯えてる作者でありますが……ともあれ第十一回カカラジ、スタートです！

「作者！！」

は、なんでございましょうか！？

「言いたいことがある！」

き、聞きましょう！

「この作品はいつからラブコメになったんだあああああああ！！」

ちゅどーん！！　と背景を爆発させながら吼える香加さん。

え、えーっとですね、サユカちゃんの話を書くにあたってラブコメ率が上がるのもやむなく……

「にしてもラブ率が高くない！？」

「ラブ率っておまえ――」

「ラブ男は黙ってて！」

「誰がラブ男だ！！　どっかの殺人事件のバカップルと一緒にすんな！」

「似たようなもんでしょ！！」

「似たように書くなよ作者！！」

うあこっちに矛先きた！？

「だいたいさー、告白話から最近までサユカン妙に可愛くなっちゃって、見ててニマニマいやーん恥ずかしーとか思っちゃうような話ばっかで――それに比べて私はなにさ！　一つ前の話なんか鼻にピーナッツつめて『フゴッ』とか言ってるんだよ！　あのさ、私一応、女の子なんだよ？」

「なんだってー！」

「なんで留兄が驚くのさ！　ともかく、なんか扱いに差がありすぎない！？」

や、だってそれでこそカカだし。それともなに、カカにもラブストーリー用意すればいいわけ？

「ぷっ」

「笑うなラブ男！」

「その呼び名やめい！」

「じゃーラブマン。ラブ男爵、ラブギドラ！！」

えーとですね、これはネット小説『カカの天下』を盛り上げるため、ぶっちゃけトークや作者の本音などを放送する情報ラジオかもしれない番組です！　登場する香加や留、作者等は本編自体と直接は関係ないのでお気をつけください。

「ちょっと、なに無視して進めてんのさ」

あんまり君らに構っててもキリないかと思って。

「む、まぁいいけど……今度はちゃんと私を目立たせてよ？　主役なんだから」

大体いつも登場してるし充分目立ってると思うけど……検討はしてみます。ラブコメ率はさすがに下がる（はず）ですし、お楽しみ会もありますしね。

ではでは、一旦ＣＭへ。

「バレンタインにチョコをもらった色男さん、そしてホワイトデーに何をあげればいいのかまだ決まってない優柔不断男さん！　よってらっしゃい見てらっしゃい。ただいま紹介するのはこちら、ホワイトデーの専用お菓子、『びやクッキー』です！　男らしく、それ

でいて女性心をくすぐりすぎて大爆笑させる形をしたこのクッキー！　迷ってる人はこれで決めちゃいましょう、いろんな意味で成功すること間違いなしです！　なにせこのクッキーには――」

「って、あれ？」

「真っ暗になった……停電っスか！？」

「おい。放送が途中で止まってんぞ」

「うあ、マジっスか！　どこまで放送しました？」

「迷ってる人はこれに決めちゃいましょう、までだな……多分、外で降ってる雪のせいだろ」

「あー、積もってたっスもんね。でもどうします？　一番大事なこと言ってないんじゃ」

「だよなぁ……『びやクッキー』はその名の通り『びやく』が入ってるって説明、かなり重要だよなぁ」

「でも放送しなおすの、めんどいっスね」

「そだな。ま、いっかぁ。そんな強力なやつってわけでもないし」

「あははー、んじゃこのままいきましょー」

「男から女に渡すんだし、クスリの効果でうまくいったらそれはそれでメデタシだしな」

「そうそーあははー」

「あははー」

ＣＭが明けて。

「なんかすごい適当な人たちだね。あははー」

こちらのスタジオサイドから見れば今の裏の会話が聞こえるけど、実際にラジオ聞いてる人サイドからだと普通のクッキーの宣伝にしか聞こえないだろうに……危険だ。もし知らずに買ってしまったらどうなるか。

「あれ、留兄。どこいってたの？」

「ん？　ああ。トメの様子見てきた。あいつラジオ聞いてからすぐ電話してたから、今のクッキー買うっぽいぞ」

『実際のラジオ？』とか『トメの様子？』とか細かいツッコミは言いっこなしでお願いします。

「え、じゃあ買うの？　『びやクッキー』を！？」

「買っちゃまずいのか」

あー、トメの様子見にいったから停電以降の会話は聞いてないのね……ま、ほっとこ。

「そだね」

「なんだよ」

「別に。ホワイトデーが楽しみだね。さ、次いこ次。まずはおたよりコーナー！」

に、行こうかと思いましたが……今回はバレンタイン投票でいただいた意見等を中心にいろいろと公開していきたいと思います。

「む、いくつか溜まってるけどいいの？」

本編で書けることも多いので、とりあえず調整に置いておくという形で……次回までに書けなかった（答えることができなかった）質問はきちんと次回にお答えします。

「んー、カカラジネームとか紹介したかったんだけどな」

それじゃいずれ『おもしろかったカカラジネーム』コーナーでも作りますね。

さてさて、そんなわけで結構前の話ですがバレンタイン！　皆様たくさんの投票ありがとうございました！

「一位がテンカ先生→トメ兄で、二位がサエちゃん→トメ兄、だったよね。たしか」

そう、そして一票差で三位にサユカちゃん→トメ、その下がカカ→トメだね。

「……留兄、モテモテじゃん」

「恐縮です」

大丈夫。投票のほとんどに『トメはモテすぎ』だの『くたばれ』だの『痛い目みろ』だの『おまえはラブコメの主人公か！』だのと熱い怒りと文句が書かれていましたので。

「……それで僕は爆発したのか」

だって、一番多かった『意見』は『トメに天罰を！』っていうものだったんですもん。ある意味、一位です。

「おまけ話にあったニシカワ君↓デストロイヤー教頭、タケダ↓D教頭っていうのは？」

……いや、恐ろしいことに、本当に結構票がきたのですよ。

「その人たちはカカ天に何を求めてるんだ？」

しかも投票を告知して一番最初にきた投票が『タケダｏｒ西革から教頭へ』でしたからね。これはもう新たな世界を書くしかないかと。

「新世界はカカクエだけにしといてくれ。男同士なんて……いろいろデストロイするにもほどがあるぞ」

「留兄だったら絶対モテるのに」

「やーめーろー！」

いやまぁ作者的にもそこら辺はＮＧですので、その路線で書きはしませんけどね（多分）。

「でもホントいろんな意見あったねー。シュー君に愛の手を！　みたいのとか」

「姉からシュー君へ、とかタマちゃんからシューへ、とかだろ。うん、結構あったな。結局もらえてなかったけど」

シュー君一本で話を一つ作ったじゃないですか。あれで充分すぎですよ。チョコなんかあげません。

「男から女性へ、ってのもかなりあったな。多かったのが僕からサユカちゃん、次はシュー君から姉か。うーん、男キャラが男らしくないのがわかりやすい」

「なんで作者ってそんなに男に冷たい扱いなの？」

そりゃ可愛い子のほうが可愛いからですよ。

「うあ、なんて正直な。うちのオヤジみたいだ」

あんなのと一緒にしないでください。って、そういえばそのオヤジさんとユイナさん夫婦で仲良く～みたいな意見も結構ありましたね。オヤジさんイロイロやりすぎたのであげませんでしたが。

「読者の皆さんって登場数少ない人にもちゃんと意見くれるから嬉しいよね」

気がつけばずいぶんとキャラも増えましたからねぇ……最初はトメとカカだけだったのに。

「しかもよく見ると３６５回超えてるしな。最初の話は別サイトにのせたりしてたから実質毎日書いてたわけじゃないんだろうけど、一応は一年間書きとおしたことになるのかな」

それでお祝いメッセージをくれた方もいまして、本当に感謝感激雨霰でございます。

これからもまだまだ続けていくつもりなので、皆様またお付き合いしてくださったら嬉しいです！

「……なんか今日は和やかだね」

「波乱がないな。いつもみたいな」

ずっとドタバタしてたら疲れるでしょう。一休み一休み。

というわけで、バレンタイン投票についてはこのような結果となりましたとさ！

「このような、ってダラダラ喋ってただけのような気もするけど」

「いいんじゃないか？　カカ天の基本ってこんなもんだし。どうせその分お楽しみ会でかっ飛ばすんだろ」

「それもそだね。なんせ私が主役だし」

うんうん、そういうことで……ＣＭいきましょう！

とある街の掲示板。

『貴桜小学校にお子さんがいる方はご注目！　三月後半の日曜日、四年生から六年生の各クラスによるお楽しみ発表会を開催します。発表会に参加されるお子様のご父兄の方々は自由に入場できますので、ぜひお越しください。

演目

～省略～

四年ニ組、ハチャメチャ劇『トメの天下』

概略　主人公のトメ（配役、笠原香加）を中心に起こる騒動を描いたコメディ劇。はたしてトメは天下をとることができるのか？ちなみに先生の名前はテンカ。だからどうした。

～省略～

どうぞ、奮ってご参加ください』

ＣＭが明けて。

「あのさ……香加。このタイトル」

「おもしろそうでしょ？」

「や、確かにおもしろそうではあるけどさ、なんで僕の名前が」

「そのほうがおもしろいから」

「……見にいかねば。変なことしたら止めなければ」

うーん、お楽しみ会への期待が高まってきますね！　いったいそのとき私はどんな話を書くのでしょうか？　私も楽しみです！

「だからさ、作者がそんな行き当たりばったりでいいのか」

ずっとこうしてきたんだから大丈夫でしょう、多分。

「そんなもんかね。で、今回は投票とかないわけ？」

そんな投票してばかりしてもアレですのでね。しばらくはまったりいきましょー。

「まったりしすぎて今回はもう終わっちゃうんだね」

ええ、ということで最後あたりに改めてご挨拶を。

いつも読んでいただいている皆様、本当にありがとうございます。行き当たりばったりとはいえこうやって毎日書き続けられるのも皆様のおかげです！

感想をくれる方。

応援メッセージをくれる方（返信はできませんがちゃんと全部読んでます！）。

忠告してくださる方。

誤字や間違いがあるとすかさず教えてくれる方（毎回マジで助かってます笑）。

この作品に関わってくれる全ての人に感謝しつつ、明日からも執筆させていただきます！

「さ、いいこと言ったところでいつもの行こうか」

「う。今日はどうするんだ？　僕と香加と作者しかいないが」

「私としては作者にしたいとこだけど……読者の皆さんが誰かさんに天罰を下してほしいって言ってるしね？」

「え、で、でも、それは爆発させられたからもういいんじゃ」

「あれはトメの話」

今は留の話。

「……エー」

「カカラジチョップ！！」

「ぐほっ！！」

「カカラジポテチ！」

「いてっ！」

「カカラジピーナッツ！！」

「ふごっ！！」

「ふースッキリ」

カカラジピーナッツ。略してカカピーか。

「なんか可愛いね」

いずれ何かで使お。ではでは皆様方、最後にカカラジネーム？
東雲さんが作詞してくれたエンディング曲を流してお別れしましょう！

@@@@@

カカの天下ｆｅａｔｕｒｉｎｇカカとテンカ　アヤ

いたずらが大好きな少女　（かっかー、かーかー）

喧嘩なら負けない少女　（かっかー、かーかー）

時には甘えん坊な少女　（かっかー、かーかー）

あぁ、その少女の名前は何？

カカ　僕らの番長

カカ　僕らのアイドル

カカ　僕らの妹

カカは天下人

カカ　僕らの番長

カカ　僕らのアイドル

カカ　僕らの妹

カカは今日も行く

ツッコミを兄に持つ少女　（かっかー、かーかー）

ファンタジーを姉に持つ少女　（かっかー、かーかー）

大女優を母に持つ少女　（かっかー、かーかー）

あぁ、その少女の名前は何？

カカ　僕らの番長

カカ　僕らのアイドル
カカ　僕らの妹
カカは天下人

カカ　僕らの番長
カカ　僕らのアイドル
カカ　僕らの妹
カカは今日も行く
カカの天下だぞー！
@@@@@

はい、ありがとうございましたー！

「ではでは皆様、カカばい♪」

この番組は、事故の多い放送局と、デストロイヤー教頭の差し金でお送りしました。

「まともな提供、ないね……」

## カカの天下３７５「第十一回、カカラジ！」（後書き）

ダラダラなラジオでしたが、私はこんな空気が好きです笑　もちろんドタバタも楽しいですけどね＾＾お楽しみ会まではこんなノリでいきたいと思います。

もちろん私の気が変わることもありますが、そのときはご容赦を。

それではまた明日。カカばい♪

## カカの天下376「事件は会議室で起こってる、いや起こす準備をしている」

「あ、サエちゃん。いらっしゃい」

「こんにちはー」

はいこんにちは。カカです。

いよいよ来週から本格的に始まるお楽しみ会の練習に向け、今日は最後の台本まとめ会議です。サユカンはあえて呼んでいません。そう、あえて。

「さ、どうぞどうぞ」

「トメお兄さんはー？」

「居間でゴロゴロしてる」

私の部屋へ行く前に覗いてみると、私の言葉どおり転がってテレビをぼけーっと見ているダメっぽい大人が見えた。

「トメお兄さん、おじゃましまーす」

「おー、いらっしゃい」

ちらりとこちらに顔を向けて挨拶したかと思うと、すぐにテレビに顔を向けるトメ兄。

「何見てるんですかー？」

「カメの産卵」

「……はぁー。おもしろいんですかー？」

「意外と」

なんか瞳に涙をにじませて熱心に見入ってる。

「あんなの放っておいていこいこ」

「う、うんー」

去り際に居間から小さく「がんばれっ」ってテレビへの声援が聞こえたような気がしたけど、気のせいということにしておいた。

さて、部屋に落ち着き、早速会議開始！

「決まってないのはなんだっけ？」

「全部ー」

前途多難だなぁ。

「とりあえず一つずつ決めてこう。まずは主人公は私だけど……どういう感じで何をすればいいのかな」

「カカちゃんはいつもどおり、なにはともあれぶっ飛ばす、って感じで突き進めばいいかとー」

「私、いつもそんな感じ？」

「大体はー」

そうだったのか。まるで姉じゃん。まぁそういうの得意だからいいけどね。

「主人公の方針はこれでいいとしてー、みんなの意見をどういう風にまとめるかが問題だね。『飛べ』とかー」

「ぶっ飛ばしたら飛ぶんじゃない？」

「それもそっかー」

問題一つ解決。

「他は……あ、そういえば劇のタイトルも決めてないやー」

「あ、それそれ。さっき思いついたんだけどさ。劇名は『トメの天下』にしようと思うの」

「トメさん出るのー？」

「や、私がトメって役やるの。なぜなら敵がサユカンだから」

にやり、と私の考えを一瞬で見抜いたサエちゃん。

「セリフが楽しみだね」

「うんうん。でも問題が一つあるの。そこらへんのセリフはいくら

でもホイホイぽんぽんドカドカずんずん浮かぶんだけどさ、他のところが微妙なんだよね。なに喋らせればいいんだろ」

当たり前だけど、私に台本を書いた経験なんてない。サエちゃんも同じだろう。はたしてセリフなんてどうすればいいのか……小首をかしげる私。でもサエちゃんはまったく問題ないよーとばかりに微笑んだ。

「セリフなんか考えなくていいよー」

「え。じゃ、どうするの」

「劇の流れだけ説明してー、次の場面に移れるように各自で適当にやってもらうんだよー」

「あ、なるほど！　どうせハチャメチャ劇って言ってあるんだし、それでいっか」

「いちいちセリフ考えるの面倒だしー」

「サエちゃん天才！　楽することの天才！　どこかのヒキコモリ星人みたい！」

「嬉しくないよー」

褒めてるんだけどなぁ。

「じゃさ、必要な小道具とかは」

「それも各自でー」

「ちゃんと用意してくれるかな」

「用意できなかったらペナルティつければいいよー。一週間の休み時間、全部ひたすら便所掃除とかー、一週間ずっと便所味の給食を食べるとかー」

「……サエちゃん、ほんとによくそんなに黒いこと思いつくね」

「黒いって言わないでよー」

だって仕方ないと思うよ？　そこまでいったら。

「んー、でもやっぱり物語の主軸がいまいち決まってないからまとめづらいねー」

「よし！　じゃあ主人公に聞いてみよう！」

「どゆことー？」

私は立ち上がり、サエちゃんを手招き。

居間へゴロゴロしているトメ兄の下へいく。

「トメ兄、ちょっといい？」

「んー？」

トメ兄はテレビに熱中しているのか上の空。ま、いっか。

「ちょっと聞きたいんだけどさ。トメ兄の好きな国ってどこ？」

「アトランティス」

ふむふむ、舞台はアトランティスっと。

「いま、なにしたい？」

「夕飯食べたい」

主人公は夕飯を食べるために旅にでかけるっと。

「なに食べたい？」

「竜田揚げ」

竜を食べるための冒険がはじまるっと。

さらさらとノートに書いたあらすじをサエちゃんに見せた。

拍手された。

うん、こんな感じで行こう！！

## カカの天下３７６「事件は会議室で起こってる、いや起こす準備をしている」

今日はいろいろ決まりました！
決まりました？
……何が決まったんでしょかね笑

# カカの天下377「ある日、暇の中」

日曜日だというのにやることも無く途方に暮れているトメです。

「あー……暇」

カカはお楽しみ会の準備があるとか言って出かけてるし、テレビも面白いのやってないし……昨日はいい番組やってたんだけどなぁ。『海亀の産卵日誌』とか『アトランティスの謎』とか。

「どうしよ」

掃除でもするかなー、とお風呂場に向かい、気づいた。

そういえばシャンプーがきれてたんだった。

今朝の新聞に挟まってた広告で特別安いシャンプー載ってたよな、それいこう。醤油もきれかかってたような。

「……買い物にいくかな」

僕、今年でまだ25歳なんだけどなぁ。なんか所帯じみてて虚しい。や、一応は保護者してるわけだし仕方ないんだけどね。

さて。虚しいと思いつつ、やってきましたいつもの商店街。

えーと、広告にあったのはここの薬局か。

「いらっしゃいませー」

「ましたー」

小さく呟きつつ店内探索。シャンプーは……お、あった。

商品名『隣に置いてある製品よりいいシャンプー』

なかなかケンカ腰なシャンプーだ。

でも隣にある置いてあるの石鹸なんだけどな。石鹸よりいいシャンプー、石鹸とシャンプーがどんな対決してるんだろ。見てみたい。

「あら、トメさん！」

「ん？」

振り向いてみると、そこには見慣れた顔が。この人ほんとに転々といろんな仕事してるなー。

「えーと」

この人……

「……えーと」

この人は……

「うーん」

「あ、あの？　もしかして私の名前忘れたとか？」

「いや……皿売っててサラさん、鍋売っててナベさん、お釜売ってて以下省略。じゃあシャンプー売ってる場合は誰になるんだろう？」

「で、ですから！　私は売り物で名前が変わるわけじゃ」

「プーさん！」

「何を『これだ！』って目を輝かせてるんですか！　違います！私はどこぞのハチミツ好きなクマじゃありません！」

「ハチミツ嫌いなの？」

「大好きです」

「よかったね、プーさん」

「だから違うんですって！」

「や、最近このネタ使ってなかったじゃん？　たまにはいいかと」

「なんだか今日のトメさん、カカちゃんみたい……」

だってカカいないしー。ちょっと寂しいしー。

「……うぅ、早く人間になりたい」

「まま、そんな気を落とさず」

「どうせ落ちたら割れる皿ですよ……」

「大丈夫、プーさんそんなにヤワじゃない」

「だからぁ！」

おお、たまにはこうやって人をからかうのも楽しいもんだ。

「ところでプーさんや」

「もう知りません、ふん！」

あ、怒った？

「あのさ、ごめん、言い過ぎた？」

「フン」

ぷいっ、とそっぽをむくサラさん。これはまずいか。

「あ、あのさサラさん、ごめん！」

「フンだ」

「何を踏んだの？」

「……私の心を。トメさんが」

「あああごめんごめんサラさん！　ちょっと言い過ぎた、反省して

る！」

「フーンだ」

「どうしたら許してくれる？」

「デートしてください」

うわまたきたこれ。

「……なんでサラさんってそんなに僕とデートしたがるのさ」

前から不思議に思っていた疑問をぶつけてみると、サラさんは頬を赤らめてモジモジしながら答えてくれた。

「えっと……ほら、トメさんって」

「な、なに？」

「若いじゃないですか、それに、その、男の人だし」

「若い男なら誰でもいいんですかアナタ」

婚期を逃して焦るオバサンじゃあるまいし。

「すす、すいません、私、口べたで……で、でも大丈夫です！　私の口がヘタなだけで、その、トメさんにはいいところ、たくさんありますよ！」

なぜに僕が慰められてるのかね。

「きっと！」

しかも希望形かい。

「……たぶん」

不安になるな！

「いい加減にしないとお風呂の商品売ってるってことでフローラって呼ぶぞ？」

「いいですね、それ」

えっ！？

なんだかんだとあったものの、無事にシャンプーを購入。

わざわざ店の外まで出てきて見送ってくれたフローラに手を振って別れる。バイバーイと手をひらひらさせながら、フローラの背後でゴゴゴゴって感じに『仕事サボりやがって』オーラ出してる人ってたぶん店長なんだろうな、なんて彼女の未来を心配しつつ、そこをあとにした。

そして。

「ふふふー」

ものすごく満足そうにニヤニヤしているサエちゃんに出会った。

「あ、あれサエちゃん。こんにちは」

「こんにちわふふー」

新しい挨拶をかましてくれたサエちゃんの笑顔の意図がわからない……や、サエちゃんは基本的にいつも笑顔だけど、今日は含みのある笑顔だ。

「ど、どうしたのかな、サエちゃん」

「わふふー」

「あ、あの？」

「わっふっふー」

妙に笑いながら「バイバイ」と手をひらひらさせて、サエちゃんはそのまま去っていった。

なんだったんだろ。

――あ！　せっかく話し相手見つけたのに逃してしまった！

くそー、仕方ない。一人でお醤油買いにいくかぁ。

でもホント、なんだったんだろ。

## カカの天下３７７「ある日、暇の中」（後書き）

ある～日♪　森の中♪　クマさんに♪　出あ～った♪

サブタイトルはそういうことです。
はい、それだけです。
すいません。

## カカの天下378「ひな祭りは女性の天下」

「ただいまー」

「ん、おかえり」

どうも、会社から帰ってきた僕の挨拶に応えながらもパタパタと居間で動き回ってるっぽいカカの姿に首をかしげるトメです。

「なにやってんだ？」

「ひな祭りの準備に決まってるでしょ」

あー、そっか。そういえば今日って三月三日か。

雛人形……出してやりたいけど残念ながらもう出せないんだ。なぜかというと原因は一昨年前。カカと姉がひな祭りで暴れたせいで、飾ってあった全ての人形の首を落としてしまったことがあったからだ。

ポロポロと首が落ちまくる様はとてつもなく怖かった。

それ以来うちで雛人形を飾ることは禁止された。なんか呪われそうだから。

「……忌まわしい記憶があるから、今日のことすっかり忘れてたな」

「女の子の日を忘れるなんてトメ兄それでも男なの？」

「そう言うカカは覚えてたのかよ。学校行く前は何も言ってなかったけど」

「私はサエちゃんに聞いて思い出した」

「普通そういうのは女の子自身が覚えてるもんじゃないのか」

「違うよ！　女性を敬うべき男性が覚えてるべきなんだよ」

……ひな祭りって女性を敬う日だっけ？

「というわけで、敬え」

「無理」

「えー」

そんな不満そうに言われても。

「じゃあ今日は女の子の日だし」

「はぁ」

「トメ兄は男だし」

「ああ、それで？」

「消えてよ」

「そんな悲しいこと言うなよ」

泣きたくなるじゃん。

「だって女の子の日に男がいるなんて変だよ」

「じゃーアナタ様は本日全ての男に絶滅せよと仰るつもりか」

「今日だけでいいよ」

「んな器用なことできるか！！」

相も変わらず無茶苦茶を言うカカにツッコんだところで、ピンポーンと来客。

「お、きたきた」

てってけてーと玄関に向かうカカを尻目に、さっきまでカカが動き回ってた居間の様子を見てみる。お皿、コップ、ジュース……ひな祭りの準備とか言ってけど、お茶会みたいなことする気かね。

「おじゃましまーす」

「おじゃましますっ」

「おう、いらっしゃい。なにそれ、お菓子？」

サエちゃんとサユカちゃんはそろって小奇麗な包みを持っていた。春のイメージっぽいピンク色の可愛らしい包装だ。

「はい、今日のお茶会のために持ってきましたー」

「やっぱりお茶会するんだな」

「ひな祭りってことで色んなお菓子売ってたんですよっ。特にこの『桜大福のパイ包み』がすごく楽しみなんですっ」

うきうきと語るサユカちゃん。やはり女の子にとって甘いものは特別なんだろうなぁ。しかし大福のパイ包み？　桜大福って桜餡の大福かな。甘党としては気になる。

「さて、じゃあ始めますかー」

「そだね。女の子の日のお茶会だー、ていうわけでトメ兄消えて」

「なぁ妹よ。そんなにお兄ちゃんが嫌いか？」

消えろって言葉、結構胸にくるんだぞ？　グッサリと。

「だって今日は女の子の日なんだよ？」

「そ、そりゃそうだけどさ」

「トメ兄って男だよね？」

「……ああ」

「この下等生物が！！」

ちきしょーなぐりてー。

「まーまーカカちゃん。やめなよー」

「そ、そうよっ！　男だから不参加なんて、そんなこと――」

「――は当たり前なんだけどー」

ええっ、と勝手にセリフを被せられてのけぞるサユカちゃん。

「トメお兄さんが女になれば問題ないでしょー」

……アンダッテ？

「その手があったか。はいトメ兄。お姉のおさがりの服」

「なぜ即行でそんなモノが出てくる！？」

「こんなこともあろうかと」

「頭いいなオマエ！！」

そこまで未来の予測ができるようになるなんてお兄ちゃん嬉しー――いわけあるかいボケ！！

「なんだって僕がそんな服を！？」

「女の子の日だからー」

「だからってな、良い大人がそんな！」

「子供の遊びに付き合えてこそ良い大人だと思うんだけど」

「くそー、頭がよさそうな言葉で頭が悪い要求しやがって」

……着るの？　これを？　僕が？

「なぁ、サユカちゃんも何か言って……あれ？　なんでサユカちゃん目が虚ろなの？　なんで姉の服もってこっち迫ってくるの？　なんで半笑いなの？　なんで三人とも、え、ちょ、ちょっと待っ」

数分後。

とりあえず言いたいことは一つ。

スカートって下がスースーするわね、いやん、

いやんじゃねえええええええええええ！！

激しく心の中で叫び、おそるおそる僕をこんな姿にした（どんな姿かは細かく描写させるな、頼む）三人の小悪魔の顔を見てみる。

三人とも、口元をヒクヒクさせまくっていた。

どう見ても笑いをこらえようと必死だった。

泣いていいですか？

「ト、トメ兄、あ、あの、あのさ……ブッ」

どこにナニ吹きだしてんですかカカさん。

「……イイ」

サユカちゃん、正気に戻ってよ！

「トメお兄さん、『あん、いやだ、やめてよバカ』って言ってくださーい」

サエちゃん要求レベル高っ！？

「言ってくださいっ」

「言ってよトメ兄」

ちょっと待て！　それを言うことにこそ『やめてよバカ』って言いたいんだけど！　あぁでもそれじゃ結局言うことに！？

「言え」

「言えー」

「言ってくださいっ」

ぐぐぐ、こんなに女性陣が強いのはひな祭りだからか。瞳から発射されるキラッキラの輝きに負けそうになる……ものすっごく楽しんでるなコイツら。わくわくしてるのが音にして聞こえてきそうだ。

「「わくわくわくわ

くわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく」」」

「やかましい！！」

じゃーやって、と期待する三人の目線。

く、くそぅ……子供付き合いのいい大人になるには通らねばならない試練なのかこれは。保護者たる大人はみんなこの試練を通ってきたのか。すげぇな大人って。大尊敬だ。

あー、うー、ええい、やけくそ！

「あ、あん、いやだ、やめてよばか」

「もっと可愛く」

「あん、いやだ、やめてよバカ！」

「もっと甘くー」

「……あん、いやだ、やめてよ、バカ」

「もっと色っぽくっ！」

「あぁん、い、や、だ♪　やめてよバカァン」

完璧だ。

ぶはははははははははははははははバンバンバン！！（テーブルを叩く音）ドタバタドタバタ（腹を押さえて転げまわってのた打

ち回る音）ヒー、ヒー、ヒー！（呼吸困難の音）

死んでいいですか？

身投げするため立ち上がろうとした僕の肩を、ぐわしっと小悪魔の手が掴む。

「まだ終わってないよー、ト、メ、子、ちゃん？」

「トメ美ちゃんのほうがいんじゃない？」

「わ、わたしはトメ香ちゃんのほうがっ」

「サユカンたら自分の名前とおそろいにしたいのね」

「やーらしー」

「なんでよっ！？」

あぁ神様。

タスケテ。

## カカの天下３７８「ひな祭りは女性の天下」（後書き）

今日ってひな祭りだったんですね！　いやぁ私も忘れてました、さっき知り合いに聞いてようやく思い出したところです笑
今日書こうと思っていたのを急遽変更。ひな祭りかー何書こうかなーと思ってたところでもらった差し入れが作中に出てきました桜大福のパイ包み。
桜餡がすごく甘くて甘党な私にはかなりグッド！　コーヒーと一緒にいただきました。そして思わず作中で出しました笑
もしお店にあったら甘党の人はオススメです＾＾いやまぁお店によって味違うでしょうけどね＾＾；

## カカの天下３７９「目指すは高み、進路はぐねぐね」

「えー、お集まりのみなさん。これから会議をはじめまーす」

教壇に立った私の声に、はーい！　と元気よく手をあげるクラスメイト一同。小四にしては子供っぽい気もするけど、お楽しみ会へのやる気に満ちているということで良しとしよう。

あ、私カカね。ただいま昼休み。

一応お楽しみ会の準備用に空けてもらえる授業もあるんだけど、他クラスの助っ人も交えてお話したかったから、クラスの皆にあらかじめ知らせて休み時間に集まってもらったのだ。

「先に紹介しておくけど、今回私たちのクラスの助っ人をしてくれるのはこの二人。まずはサユカン」

「あ、えっとっ、きき岸村サユカです！　別クラスですけど、その、よ、よろしくお願いしますっ！」

こういうのは慣れていないのか、カチコチなサユカン。でも意外な声援がその緊張を崩した。

「知ってるよー！」「うんうん」「寂しがり屋で有名なサユカちゃんだよね！」

「ちょっと待ってっ！！　誰がどうしてどうやってそんな風に有名にっ！？」

「え、だって毎日このクラスきてるし」「別のクラスなのに大好きな友達に会うためにわざわざ……」「前は給食まで一緒にしてたわよね」「テレ屋でも有名だよなー」

予想外の知名度で盛り上がるクラスを呆然と見つめるサユカン。人気者だね！

「わ、わたしって……もしかしてすごく目立ってた？」

うん、めっちゃ。

「それにしたって寂しがり屋とかテレ屋とか……そ、そんな」

「サユカン。テレてるの？」

「テレてないもんっ！！」

ほらテレ屋じゃん。

「じゃあ寂しいのか？」「岸村さん、私でよければ抱っこしようか？」「あ、あたしが先よ！」「お、おれも……」

「するかっ！！　もういい、紹介終わりっ！　うぅ……なんでこんな恥ずかしいことに……」

なんでと聞かれれば、たぶん教壇に立つ私の隣に座ってニコニコしているお方の差し金だと思うけど。

「カカちゃん、なにかー？」

「ぐっじょぶ」

「なんのことやらー」

隣のお方は今日も絶好調だ。

「あともう一人、えっと名前なんだっけ」

「そりゃないよカカ君！　こほん、俺の姓はタケダ！　名は――」

「彼はみんなのお財布です。自由に使ってね」

「……カカくぅん、それは、あまりに、あんまりではないか？」

「余ってるならいいじゃん」

「そ、それもそうか！　そうかそうか……余ってるから……え、なにが？」

さぁ？

「さて！　もう時間もあんまりないことだし、ちゃっちゃと劇の準備を進めていくよ！」

隣に目配せすると、今まで生暖かい目でクラスを見守っていたサエちゃんがようやく立ち上がった。

「えーとー、劇の内容については台本を人数分作ってから配るからー、配役と、やらなきゃいけないことだけ伝えてくよー」

まずはー、とサエちゃんは主役や敵役の名前を黒板に書いていく。
私やサユカンの名前だ。

「役は私たちのほうで勝手に決めちゃったけど、文句は？」

「後が怖いからありませーん」

ニシカワ君の意見に「うんうん」と頷くクラスメイト一同。

劇がどうでもいいのかな、と少し不安に思ったけど、耳を傾けてみるとボソボソと「あの二人に任せれば面白くなるだろ」「ていうか絶対変なのになるわよねー」「でもそれがいい」という好意的な意見が聞こえてくる。どうやらやる気は問題ないみたいだ、というか期待されてる私ってすごいね。ふっ！

意地でも全員が楽しめる劇にしなければ。

「主役はこれくらいだねー」

サエちゃんが書き終えた黒板には、次のように書かれている。

主役名、トメ。配役・笠原カカ。

説明、つっぱしる。

脇役名、西の勇者。配役・ニシカワ。

説明、西。

魔法使い役名、サエ。配役・サエ。

説明、黒い。

竜役名、モンキードラゴン。配役・岸村サユカ。

説明、食われる。

謎の役名、謎車。配役・謎。

説明、渋い。

「ちょっとちょっとカカすけ君サエすけ君？　ツッコみどころ山盛りで迷うけど、とりあえず自分のとこツッコんでおくわ。なによドラゴンって！　食われるってどういうことよっ！！」

「そうそう、そんな感じで吼える練習しといて」

「だいたいモンキーってなによ！」

「可愛いでしょー。モキーって鳴くんだよー」

「モキイイイイイ！！」

キュートなドラゴンが誕生したところで次いこ次。

「主な役はこんな感じだけど、もちろんまだまだ皆にも協力してもらうよー。えっと……君と、君と、君かな。あ、ニシカワ君もだけど」

私はテンカ先生から借りた『運動神経いい人リスト』を見ながら

適当な男子を選出していく。

「ん、これだけかな」

「あ、あの。僕らは何をすれば？」

「飛べ」

「無茶なっ！！」

「大丈夫、あとでちゃんと練習に付き合ってあげるから」

言葉足りなかったかな、なんか皆妙に怯えてるけど……ま、いいや。

「次は……アヤちゃん」

「ふふふ、きたわね！」

「アヤちゃんは劇の主題歌をお願い」

「さすがカカ！　わかってるぅ！」

「あとＢＧＭもお願いね」

「へ？　びーじーえむ？」

「劇の中での音楽。めんどいから全部声でやって」

「まさか、劇の最中ずっと声出してろっての！？」

「うん。作曲もお願いね」

「え、ちょっと！　いくらなんでもそんな」

私はわざとらしく「ハン」と鼻を鳴らした。

「できないの？　いつも偉そうなこと言ってるから、てっきりこれくらいは」

「やったろうじゃないの！」

ちょろい。

「さて、次は……ん？　みんなどしたの」

いつの間にかザワザワしているクラスの皆様、いかがなされた？

「あ、あのさ。カカちゃん」

その中でおそるおそる手を上げる女子さん。

「も、もしかしてすごくレベル高い劇しようとしてる？」

「レベル低くして何が楽しいの」

よくわかんないこと言う人だ。

「あ、そうそう。ちなみにテーマは消費税を失くすことと税金を減らすことについてだから」

『レベルたけえええええええ！！』

なんで皆が合唱してるのかよくわかんないけど、チームワークは問題なさそうだ。

……ん？　あ。

「ごめん、唐突に思い出した。えーとぴっぽっぱ……あ、もしもしトメ兄？　あのね、好きな数字教えて、うん。そか、ありがとー。じゃね、仕事がんばりー、あいあい……と」

「カカちゃんどしたのー？」

「設定し忘れてたよ。主人公のトメ、６歳ね」

『さらにレベル高っ！！』

うんうん、いいクラスのまとまりだ。

さー、これからバシバシ練習するぞ！

まずは男子を飛ばさないとね。

## カカの天下３７９「目指すは高み、進路はぐねぐね」（後書き）

レベルが高い。
なんのレベルでしょうか。

難易度？　難解度？
道外れレベル？　カカの頭のレベル？
変レベル？　混沌レベル？

……全部か。

また……クビに、なっちゃった。

あ、いきなり暗くてすいません、サラと申します。

私って、わたしってぇ……なんでいつもいつもお仕事が続かないんでしょうかぁ！？　ううん、しくしくしく……

こんなときは公園で一人ブランコに揺られながら、リストラにあったサラリーマンごっこをするに限りますね……こうやってみんな俯きながらも頑張ってると思うと、不思議とやる気が出てくるんですよね……ゆらゆら、ゆらゆら。

「はぁ……」

「はぁ……」

あら？　なんだか隣から同じようなため息が聞こえてきたような。

横のブランコを見ると、そこでは見知らぬ女性の方がブランコをぶらぶらしていました。いつの間に……全然気づきませんでした。

しばらくして私の視線に気づいたのでしょうか、その女性は俯いていた顔をこちらに向けました。

「あららー、こんにちはー」

「あ、はい。こんにちは」

どこかで見た人のような気がするけど……気のせいでしょうか？

「あなたもリストラごっこですかー？」

柔らかく微笑むその女性の質問に、私は目を見開いた。

「あなたもっていうことは、まさかあなたも！　い、いるところにはいるんですね！　もしかして流行の遊びなんですかコレ！？」

「これが流行ってたら日本は悲しいですねー」

あぅ！　たしかに。

「で、でもまさか仲間に出会えるなんて思っていませんでした！」

嬉しかった。情けないけどすごく嬉しかった！

「私、私、いっつもいっつも仕事をクビになって……一人でこんなところでたそがれて、夕日に向かってエイエイオーしたり、花びらで『私の明日は晴れるかどうか』を占ったり、もういくつ寝るとお正月、というかどれだけ寝るとお正月かなのかを昼寝する可能性も考慮して分単位で計算したり、そんなことして元気出してたんです……でも、やっぱり空元気で……」

「わかりますわかりますー」

「本当ですか！？　ううう、感激です。まさか私と同じような人が、こんな近くにいたなんて！　お互い仕事がなくても頑張っていきましょうね！」

「わたしは仕事ありますけどねー」

……え？

「し、仕事があるって……私の気持ちわかってくれるって言ったのに！　まさか私を騙したんですか！？」

「いえいえー。わたしも昔はそうだったんですよー。でも今はありますー」

「ずるい！」

「人間ずるくなきゃ生きていけませんよー」

「卑怯者！」

「うーん、心地いい褒め言葉ですー」

「悪魔！！」

「そう呼ばれたこともありましたー」

「そんな歳でまだ仕事があるなんて！」

カチン、という音が聞こえました。

「そんな歳ってなんですかー！　私はまだ２９ですよー！」

「もう三十路も同然じゃないですか！」

「３０００円の品物は２９９９円じゃ買えないんですよー！？」

「値切ればいいじゃないですか！！」

「プライドにかけて値切りませんー！」

「嘘つき！　だって最近の野菜って高いでしょ！　値切らないとやっていけません！」

「それはまー確かにわたしもこの間、傷んでたじゃがいもを３０円値切りましたけどー！」

「それと一緒じゃないですか！」

「わたしをじゃがいも呼ばわりする気ですかー！？」

「その丸っこい顔と、賞味期限が危ういのは一緒でしょう！」

「むー！　働いてなくて商品価値もないあなたに言われたくないですー！」

「うぐっ！　だ、だいたいこんな平日の昼間にブランコにのって、ホントに仕事あるんですか！？」

「サボってるだけですよー！」

「いい歳してサボらないでくださいよ！」

「わたしがいると仕事が進まないと思ってあまり行かないであげて

るんですよー！」

「なんでそんなお荷物っぽいのにクビにならないんですか！？」

「クビになると家族も友達もいないわたしは路頭に迷って飢え死にするし遺書の用意もあるって脅してあるから向こうもできないんですよー！」

「タチ悪いですねアナタ！！」

ぜー、はー、ぜー、はー……

怒鳴りあって疲れたので一旦休憩です。いつの間にか立ち上がって睨み合っていた私たちは、どちらからともなくブランコに座りなおしました。

深呼吸して、少し落ちつきます。それは向こうも同じようでした。

「ほらー、この歳だと女性の再就職難しいでしょー？　そこにつけ込んだわけです」

「と、歳で怒ってたわりに利用するところは利用するんですね」

「言われるとムカつきますけどー、事実は事実で武器は武器。使えるものは使うのですよー」

な、なるほどです。勉強になります。

「女なんて存在自体が武器なんですからー、あなたももっと自分の使い方を覚えて成り上がるように頑張るんですよー？」

「……はい、そうですね！　一緒に下から成り上がりましょう！」

にっこり微笑みかけると、女性はニコニコ顔のまま首をかしげた。

「あらー？　わたしも一緒にですか？」

「はい！」

「人生の底辺にいるあなただけじゃなくてー？」

「人格の底辺にいるあなたも一緒に」

ビキッ、とでっかい青スジマークを頭に浮かべながら、私とその女性は仲良く笑いあった。

「ふふふふふふ」

「ほほほほほー」

そう。

とても、仲良く。

## カカの天下３８０「女の対決　社会のダメ人間編」（後書き）

女性って基本的に怒ると怖いですよね。
そして相性悪い人っていますよね。

と、いうわけで……意外な組み合わせな話です笑

この後、二人はどうしたのか……それは誰にもわからない。
延長戦にもつれこんだのではないかという説が一番有力です。

## カカの天下３８１「監督はフリーダム」

よう、オレだよオレ。わ、バカ待て切るな、オレオレ詐欺じゃねぇよテンカだよ。

こほん、よし。珍しくオレが視点だからってチャンネル変えるんじゃねぇぞ貴様ら？

今な、うちのガキどもがお楽しみ会の準備やってんだ。午後からの二時間使って自由作業。本当は担任のオレがクラスの監督すべきなんだろうが、全くしてねぇ。

なぜか？　面倒だから、それもある。

だが理由は他にもある。見てみたいからだ。あいつらがあいつらだけで、どんなものを創りあげるのか。

とはいえ……まったく無視するわけにもいかねぇしな。劇をするのは知ってるが、どんなことをするのかは全く知らねぇ。しかし一応ちゃんと『何か』をしてるか見回るくらいはしなきゃな。

たしか体育館でなんか練習してるって言ってたよな、とそこへ向かう途中。

「あそこ、やけに騒がしいな……あん？　保健室？」

まさか。一応覗いてみると、案の定うちのクラスの男子どもが数人詰め掛けていた。

「何の騒ぎだ？」

「あ、先生」

この連中は……たしか、カカに渡した運動神経いいやつ名簿の上にいたやつらだ。

「何があった？」

「えっと、その……カカと体育館で練習してて、みんな保健室行きに」

下を向きながら恥ずかしそうに言う男子Ａ。

「なんの練習だ？」

「空を飛ぶ練習です」

「飛んでるのはてめぇらの頭じゃねぇのか」

「いいえ、カカの頭です」

それは間違いない。右斜め下を見つめている男子Ｂの言うとおりだ。

「でも、俺たち頑張ります」

お？

「絶対に飛んでみせますよ！」

意気込みながら左斜め上に向かって吼える男子C。

「なんでそんなにやる気あるんだ」

「だって飛べたら格好いいじゃないですか」

「飛ぶっつっても、どうせカカに吹っ飛ばされるとかそんな役だろが」

「なぜそれを!?」

図星か。

「でも、飛べたら格好いいことには変わりないんです!」

ふむ？　保健室行きになってるわりには妙にやる気に満ちてるな、こいつら。ただ吹っ飛ばされるだけじゃないのか。

「ま、がんばれ」

「がんばります!」

「あと、人と話すときは相手の顔を見たほうがいいぞ」

「無理です!」

そう、こいつらが保健室にくることになった原因。

この男子どもは揃いもそろって、首が変な方向に曲がったまま戻

らなくなっていた。

カカに殴られて首がおかしくなったのかね。ま、男は頑張るもの見つけて怪我するくらいがちょうどいい。ほっとこう。

保健室を後にしたオレは教室へ行ってみた。実は午後の授業が始まってからは一回も行ってねぇ。うちのクラスは昼休みの時点で劇の準備に取り掛かってるから号令する必要もねぇんだ。自由にさせすぎ？　オレは放任主義だからいいんだよ。

やがてたどり着いた教室を覗くと、楽しそうに小道具を作っている男子と女子が見えた。

「わたしの武器はバナナよ！」

「俺の武器はサルだ！」

「私の全てはカレー」

どんなもん作ってるのかわからんが楽しそうで何よりだ。

「あれー、テンカ先生じゃないですかー」

他の子に指示を出していたのだろう、女子数人の塊からサエの顔がひょっこりと現れた。

「よ、はかどってるか？」

「はいー、彼のおかげで」

サエの視線の先には……たしかタケダとかいうやつ。

あいつ、なんで真っ白になってんだ？　しかもチャイム鳴ってるのに自分のクラス戻らなくていいのか？

「先生は見回りですかー？」

ま、どうでもいいや。

「おう。と言ってもあまり干渉する気はないがな。他に別教室とか使ってるやつらはいるのか？」

「はいー。音楽室でアヤちゃんを中心に、女子たちがイロイロとー」

「よし、いってみるわ」

こいつらの邪魔しても悪いしな。そう思ってオレは早々に教室を出た。詳しく作業内容を聞いたりはしない。『何か』をしっかりやっているなら、それでいいのだ。

さて、音楽室は……ここだな。

がらり、と戸を開ける。

「ねぇ皆、この『暗いＢＧＭ』って歌でどう表せばいいと思う？」

「ＢＧＭだからぁ、歌っていうより音よねぇ」

「暗い音を、皆で声に出して歌えばいいんじゃない？　ららら～♪じゃなくて、でろでろ～、とか」

「暗い音ならズーン……とかじゃない？」

「それ反省するときの音よ。暗い音といえばグチャとかネチョとかベチャでしょ」

「なんだかホラーっぽくて、暗いというよりグロくないかしら？」

「昨日の映画見たんでしょ。『ツンデレゾンビ』とかいうやつ。『別にあんたのために生き返ったんじゃないわよ！』って名言よね。あ、ちなみに私はヒューどろどろ……とか良いと思うけど、どう思う？　アヤ」

「じゃーいっそ全部合わせちゃいましょ！　皆で適当に歌ってみるわよ！　せーの」

『でろでろズーンでろでろ♪　ツンデレゾンビがグチャネチョベチャ！　グチャネチョベチャ！　グロ！　ヒューどろどろ』

ピシャリと戸を閉めた。

しかしそれでも異界の歌は音楽室から漏れてきてオレの耳を侵食する。おのれ、もう少し頑張れ防音設備。高い金払ってんだから気味の悪い音の一つや二つ封印しやがれ。

封印……オレがするべきなのか。いや、しかしもう一度この音楽室の扉を開ける勇気はない。開けたが最後、まるで無数の蟲が耳の中に入ってくるようなおぞましい悪寒に襲われるに違いない。

いや、しかし、このようなＢＧＭを全校生徒と保護者の方々に聞かせるわけには……

聞かせたら、きっと……

おもしろくなるな。ならいいや。

オレは耳栓もってこ。

「よし、全体的に見てオレのクラスは順調だ」

それさえ確認できればオレの仕事はもう終わりだ。

順調に変なもの――オレの大好物ができている。

頑張ってくれよ、カカ。

## カカの天下３８１「監督はフリーダム」（後書き）

もう三月もすぎ、思いのほかお楽しみ会も迫ってきました。ちょっとのんびりしすぎたかな＾＾；

次のカカラジまでの間くらいまで、主にお楽しみ会の話中心になるかと思います。

普通のなんでもない話派の人には申し訳ありませんが、ちょっとばたばたしてしまうことをお許しください笑

# カカの天下３８２「こだわりのカレー」

ふー、夕食のコロッケおいしかった。あ、カカです。

今日も今日とてお楽しみ会の準備で大忙しだった学校を終えた私。トメ兄お手製の夕食で満腹になり、機嫌よく自分の部屋のベッドにダイブしました。

はぁーおなかいっぱい、布団ふかふかー。

しばらくボーッとしながらゴロゴロしてると……机の上で光ってる携帯が目に入った。

もうちょっとゴロゴロしたかったけど仕方なく立ち上がり、手にとってみる。メールきてるね。カレーの人からだ。

『ねーねー、ちょっと愚痴聞いてよー。今うちの学校でお楽しみ会の準備してるんだけど』

ふむ、カレーの人ってメール相手の私がカカだって知らないんだよね。つまりこれは、同じクラスの人には言えないような文句を聞くチャンス！

仮にも指導者っぽいことしてるし、そういう不満はちゃんと受け止めていかないとね。えっと続き続き。何が不満なのかな？

『――でね、要望出したんだけど……全然カレーが出てこないんだよ！　他の人の要望はちゃんと入ってるのに』

……あ。そいや忘れてた。カレーどっかに入れるんだっけ。

うーん、でもこの人カレーを武器にするとかいって小道具作ってたし、それでいいんじゃないかな？　でも要望は全部入れるって言っちゃってるしなぁ。仕方ない、どこかに入れるかな。

返信は……えっと、『きっと大丈夫だよ。なにしろカレーっていうすばらしく大切な要素なんだから、その台本書いてる人もとっておきにして隠してるんだよ、多分』

よし、送信っと。あとは明日、どっかに入れるって発表すればオッケーだね。バレないように自然を装って言わないと。

次の日。

ニシカワ君が演じる西の国の勇者、その西の国の名前をカレイ王国にしてみた。

これで満足でしょ、とその日の学校を終え、帰宅してしばらくすると再びカレーの人からメールがきた。

『ごめん、また愚痴聞いてくれないかな』

……あれ。

ちゃんと要望叶えたのにな。

首をかしげつつもニ、三、やりとりしてカレーの人の言いたいこ

とはわかった。

つまりこういうことだ。

『カレイとカレーは違うのよ！　あんな片寄った魚と完璧なカレーを一緒にされちゃ困るわ！』

どっちでもええやん。

そう言えたらどんなに楽だろう。でも悲しいことにこのお人はそんな言葉に聞く耳持たず……だからと言って明日いきなり『カレイ王国じゃなくてカレー王国にします』って言うのも不自然だし。バレるかもだし。

仕方ない。

その次の日。

「これさ、トメが竜を食べにいくって話だよね。実はさ、竜をどう料理するかというと……カレーの具にしちゃうんだよ！」

新たな設定の発表！　劇のクライマックスっていう結構いいシーンに登場することになるし、これなら文句ないでしょう！

一つ問題をクリアした。達成感に満ちたまま家に帰った私。

その私を待ち受けていたのは、一通のメールだった。

曰く。

『具だけでカレーができるわけないでしょ！！』

や……それは、そうだけど、さぁ。

だからと言ってルーを探し求めるシナリオ作るのはやりすぎな気がするし。

うー、うー、どうするべきか。

一人のわがままにいつまで付き合うのはどうかと思う。でも、みんなには出来る限り楽しんでもらいたい。だから要望はなるべく叶えたいんだけど……

ルーかぁ。

ルー……

ううう、るー、るー、るー。

あ。

またまた次の日。

「ねね、アヤちゃん」

「なによカカ」

「あのさ、最後に竜をカレーにするシーンなんだけど……ＢＧＭの音を『ルールルー』にしてくれないかな」

「いいけど、最後のはまだ決まってなかったし。それにしてもルールルー？　カレーのルーとかけてるの？　カカにしてはあんまり面白くないわね」

「ほっといて」

これくらいしか思いつかなかったんだよ！　でもこれでカレーの具もルーもそろったから万事オッケーさ。

やるだけのことはやった！　私頑張った、頑張って考えた！　お疲れ様、私！

意気込んでその日の学業を終わらせ、帰宅。

そしてメールを見る。

『ご飯がないわ』

もう勘弁してくれ。

『それに私は辛口がいいのよ！』

うん。

もー知らん。

「カカ、今日の夕飯カレーでいいか？」

「カレーはもう見たくもない！！」

「は？　カカ用にちゃんと甘口買ってきたんだぞ」

「辛口がいいんだそうだよ」

「……は？」

はぁ。行事の中心になるって、大変なんだね。

## カカの天下３８２「こだわりのカレー」（後書き）

こだわってる人って言い始めたらキリがないんですよねぇ……

カレー食べたくなってきました。

## カカの天下３８３「話の中にお入りなさい」

「練習をしよう！」

「おー！」

元気よく言い放つカカすけ、それに賛同するサエすけ。そしてそれを呆気にとられながら見つめるわたしはサユカです。

「学校終わって『早く早く！』と連れてこられて何かと思えば……一体なんの練習よっ」

「もちろんお楽しみ会の劇の練習だよ、サユカン。私たちは主役なんだよ？　学校にいるとき以外でもちゃんと練習しなきゃいけないの」

「勝手に主役にしたのは君らでしょっ」

そこまで強制される筋合いはないわっ、とそっぽを向いてみる。すると二人は――焦るどころかニヤリと笑った。

「へー、そっか。主人公のトメに食べられたくないんだ」

「そ、それはそうよっ、なんで好きな人に食べられなきゃいけないのよっ」

「じゃートメお兄さんが他の人を食べてもいいのー？」

「別にトメさんが何を食べてもいいじゃないのっ」

「そっかー、トメお兄さんと他の女が一つになってもいいんだー」

ひ？　と？　つ？

「そっか。食べるってことはそういうことだよね」

「劇とはいえどもー、せっかくトメお兄さんと合体できて身も心も一緒になるチャンスなのにー、きっと温かいだろうなートメお兄さんの中。気持ちいいだろうなートメお兄さんと合体。でも仕方ないかー、こうなったらサラさんあたりに頼んで合体させ――」

「冗談じゃないわっ！　トメさんの全てはわたしのモノよ！　皿は皿！　料理をのせるものであって食べるものじゃないのよっ！」

まんまとノセられた気もするけど構わないわっ。こういう言い方されちゃ黙ってられないのよっ。

「よし、サユカンもやる気になったとこで早速練習しよっか」

「それはいいけど……何するのよっ？」

「んーっとね」

わたしが問いかけると、カカすけは周囲をキョロキョロと見渡して――やがて何かを見つけたのか、わたしたちを手招きしながら歩きだした。

わたしとサエすけは首を傾げながらもついていく。途中、カカすけが唇に人差し指をあてて「しーっ」と合図したので、なるべく音

をたてないように進む。

そして先行していたカカすけに倣って草むらに身を潜め、視線の先を追ってみると……

「ネコと、犬？」

「総理大臣だねー。あの犬は初めて見るけどー」

「あの犬はラスカルっていうの。ああ見えて三匹も子持ちの主婦なんだよ」

「わー、苦労してるんだねー」

犬に主婦とかあるのだろうか。ほとんど全員ニートのような気がするんだけど。

「じゃあ練習しよっか。あの子らになりきって会話するの。セリフは各自で考えて」

「わ、おもしろそー」

「だけど難しそうね……それにこっちは三人、あっちは二匹よ？どうすんのよ」

「んじゃ最初は私とサエちゃんで見本をみせよう。私は総理大臣役ね」

「じゃー私はラスカルでー」

じゃ、わたしはツッコミね。

「いくよ、あの子たちの動きに合わせて会話するの。せーの」

じっ、と総理大臣とラスカルを見つめる二人。役に入り込んだのかな。わたしも二匹のほうを観察しよう。

じっと見つめあっている総理大臣とラスカル。やがて、ラスカルが「あん」と小さく吼えた。

そしてラスカル役のサエすけが口を開く。

「わかってるでしょー？　あの子たち、三匹ともあなたの子なのよ。どう責任とってくれるのー？」

いきなり話が重っ！！

切なげに鳴くラスカル。しかし総理大臣はあくまでクールに「にゃ」と短く応えた。

「責任なんて知らねぇよ。だって俺、ネコだモン」

即興でやるにしては妙にキャラが立ってる気がするんだけど気のせいかしら？

「大体よ、おめーの子供は全員、犬じゃねぇか。俺の子だってんなら少しくらいネコっぽくなるはずだろ。耳がネコだったり、下半身だけネコだったり、犬の顔とネコの顔が二つくっついてたり」

それじゃ突然変異の障害者じゃないの。

「そうならないところを見ると、大方じつは俺の子じゃなかったとか、そういうオチじゃねぇのか？」

「そんなことないわよー。うちの子たちはね、みんな魚が好きなの。ネコが好きな魚が特にー、これはあなたの血をひいている証拠よ？」

あ、意外と多いらしいわね、魚が好きな犬。

「どの魚が好きなんダ？」

「鮪よー」

「俺は鰹が好きだ、つまりそいつらは俺の子じゃネェ！」

「じゃー鮪は嫌いなのー？」

「ぐ」

「鰤は？　鰆は？　鯖は？　鰺は？　鰻は？　鮫鰊は？」

「く、くそー。そんな読めない漢字ばっかりだしてきやがって」

このネコは何を言ってるのかしら。

「は、はん、そんなこと言って誤魔化そうとしても無駄だぞ。どうせ他の犬とも付き合ってんダロ？　シューあたりが怪しいな」

「確かにあの男は犬みたいなものだけどー、犬として見ても特に魅力がないからありえないわよー」

犬って……ごめんシューさん。ちょっと納得しちゃった。

「本当に、俺の子なのか？」

「ええ。そして私はあなたを愛してる。そういう設定だもの」

設定てオイ。

「悪かったなラスカル、俺、おまえのこと誤解してたよ」

「気にしないで、あなたは総理大臣だもの。きっといろいろと大変なんでしょー？」

「ああ、実は今日も野党（野良猫党）がさー」

いい雰囲気で見つめあう総理大臣とラスカル。そういえばあの二匹、ホントにずーっとちちくりあってるけど……珍しいわね、ネコと犬であんな仲良いの。

あれ、こっちに気づいたのかな。二匹が同時にくるりとこちらを向いた。

「ところでラスカルよ」

「なんでしょう総理」

「俺たちがうまくいかねぇのはさ、やっぱり種族が違うからだよナ？」

「そうですね。ああ、そういえばこんな伝承を思い出しました。人を食べると人間に化けることができるようになると」

一歩一歩、静かにこちらへと向かってくる二匹。って、え？

「そう、か。じゃあ、あそこの人間を食えば」

がし、と押さえられる両肩。え？　えっ？

「私たちは、幸せに……」

ゆらゆらと近づいてくるネコと犬。目がぎらぎらしてる？　舌なめずりしてるっ！？

あぁなんか総理大臣の顔が般若に見えてきた！　ラスカルの口がパカって開いて竜の口みたいに牙がキラリと光って切れ味よさそうにわたしのお肉を狙ってる！？　冗談よね、うそっ、ちょっとカカすけサエすけ肩離してよ逃げられないじゃないっきゃああほんとすぐ近くまで来てる来てるいやあぁぁ！！

「いただき」

「まーす」

ぺろり、と両頬を舐められて。

わたしは気絶した。

意識が落ちる寸前、「サユカンって役に入り込むタイプなんだね」「本番が楽しみー」とかいう薄情な声が聞こえたような気がした。

## カカの天下３８３「話の中にお入りなさい」（後書き）

あなたはだんだん眠くなーる。
あのネコと犬が喋ってる風に見えーる。
食べられーる。

たぶんサユカちゃんの中ではこんな感じだったんでしょうね＾＾；

# カカの天下３８４「チェンジ！　前編」

「ただいまー」

今日は土曜日だけど休日出勤でした。たまった仕事を片付けた僕は、少々お疲れながらも無事に帰宅したところです。

「おかえりさいー」

「ふぅー、今日は疲れたよ」

「お疲れさまー」

疲れたー、というのを強調するように目のまわりを指でぐりぐりマッサージ。

「どうしたのー？」

「や、ほんと疲れたみたいでさ。目が」

「変なものでも見えるのー？」

うん、なんかありえないものが見えるんだ。

「カカ、しばらく見ないうちにちょっと背が伸びたな」

「そうかなー？」

「髪はすんごく伸びたな」

「もう腰まで届くよー」

「喋りかたも伸びてるな」

「こればっかりは直らなくてー」

皆様、もうお気づきでしょう。

「……なんでサエちゃんがカカの服着てここにいるんだ？」

サエちゃんが遊びに来ているだけなら特におかしなことはない。でもいつもロングスカート派なサエちゃんがカカのジーンズをはいてるのは違和感がある。喋り方も心なしかカカっぽい気がするし。

「それはですねー、演技の練習なのですよ」

サエちゃんの話を要約すると。

お楽しみ会の劇に向けて演技の練習がしたい、だから一日だけカカがサエちゃんを、サエちゃんがカカを演じてみよう、ということらしい。

「一日ってつまり……このままカカのマネしながらうちに泊まるのか？」

「そのとおりですー。カカちゃんは私のうちに泊まります。ちゃんと知らせてありますよー」

「サユカちゃんはその練習しないのか」

「サユカちゃんはセリフが多いのでー、もう台本を渡して覚えてもらってますー」

そっかぁ。

「気になりますかー？」

「や、おまえらの今までのノリなら、こういうときはサユカちゃんがきそうだなーと思って」

あ、あれ。なんか睨まれてる？

「トメお兄さん……物事には限度ってものがあるんですよー？」

「え。あ、はい、すみませんでした」

思わず謝ってしまったが、なんで怒られてるのかはよくわかってなかったりする。

「サユカちゃんばっかりいい思いするのもズルいですからねー」

「なんか言ったか？」

「なにもー。さ、いつもどおりに過ごしてください。私は今から改めてカカちゃんになりますのでー」

「あ、ああ。わかった。まぁサエちゃんちの人らが納得してるなら、いっか」

「どうせ最近のカカちゃんはお楽しみ会にかかりきりで、トメお兄さんは構ってもらえなくて寂しかったんでしょー。そのぶん私が慰めてあげますから。よしよしー」

「たまに思うんだけどさ。サエちゃん、歳ごまかしてないか？」

図星だけどさ。

さて、部屋で着替えながら考える。いつもどおりとは言ってもサエちゃんはサエちゃんだし。せっかくだから何かおもてなしをしてあげたいとこだけど……

思いつかない。ま、とりあえずはカカとして扱ってみるかな。

「おーいサエちゃ――じゃなくてカカ。買い物いくか？」

「いきますー、じゃなくて、いくー」

うーん、なんか変な感じ。

そう思いながらも玄関へ、そして靴を――あれ。

「靴がない」

「隠したー」

振り向くとニコニコ顔のサエちゃん（カカ中）。

「カカちゃんならこういうことするでしょ？」

「……たまにな」

そしてよほどの思いつきが無い限りは大抵こういう簡単なところに隠す、と棚の影を覗くとビンゴ。

手に取った靴の中には一枚の紙。

書かれた文字は『はんばーぐ』

「……今日の夕飯希望か？」

「はいー」

さすが親友。カカっぽい。

「卵と牛乳持ってきてくれるか？　あ、牛乳は二番目に安いのな」

「はーい」

スーパーについた僕たち。「手伝うよー」というサエちゃんの申し出はカカらしくないけど、せっかくなのでお願いすることにした。

「あ、そういや食パンきれてたな、頼む。薄くて枚数多くて一番安いの」

「はいはーい」

ぱたぱたと走り回るサエちゃん。いつもは静々と歩いてるからボーイッシュな格好も相まってすごく新鮮に映る。カカを意識してるんだろうけど……こういう活動的なサエちゃんも可愛いもんだな。

そんなことを思いつつレジカウンターへ――あれ？

……首をかしげながらも会計を済ませる。

「おかしいな」

スーパーの袋に入れる前にかごの中をあさりながら、もう一度首をかしげる。

「どうしまし――じゃなくて、どしたー？」

「僕の見立てより２００円くらい多かったんだよ。計算違いかな」

「バレたかー。さすがはトメにぃー」

あ、カゴに入れた覚えの無いお菓子を発見。

「これ、いつのまに入れたの」

「牛乳とか食パンの影に隠していれたー」

「……全然気づかなかった、なかなかやるな。たしかにカカならお菓子をこっそり入れようとはするだろうけど、そんなにうまくやらないぞ？」

「じゃーこれからやるってことでー」

「教える気か。教える気かその技を！　やめてくれよ！？　２００円って結構バカにならないんだからな！」

「トメにぃーのケチ」

う、自覚はしてたがやっぱりそうなのか。半額の値札がつく時間を狙ってスーパーにくるようになったあたりからそんな気がしてたんだ。

「じゃー、これ。返品？」

う……

「トメにぃー」

そ、そんなに悲しそうな顔を、され、たら……あーもう！

「はいはい、今日は特別におっけーにしますよ」

「やたー！」

カカ相手なら慣れてるから軽くあしらうんだけど、サエちゃんのおねだりにはまだ耐性がなかった。子供って卑怯だ。

「お礼にこのお菓子、あとで少しあげるねー」

『梅こんぶ、抹茶味』

何味だよ。

子供ってわからない。

そんなこんなで夕食どき。

さてハンバーグ作るかー、と準備していると背後に気配。

「む、現れたな」

「……」

今度は何をしかけてくる気だ!?　身構える僕。

しかし――

何か企んでいるかと思われたカカ中のサエちゃんは、なぜかぼんやりとこちらを見つめていた。

「えっと、カカ？」

「……ん」

「さ、サエちゃん？」

「……ん」

「え、えっと、一緒に作るか？」

「……ん」

こく、と静かに頷くサエちゃん。

な、なんなんだ？

その後、僕とサエちゃんは二人でハンバーグを作った。

サエちゃんはハンバーグを作ったことはあるのか、慣れた手つきでハンバーグの形をペタペタと整えていた。

その間、無言。

たまに僕が話しかけても生返事しか返してこない。

さっきまで楽しそうにしてたのに、一体どうしたんだ？

僕、何かしたかな？

今日のことを思い返してみる。

……何かされた記憶しかないな。

本当、どうしたんだろう。このあとの夕食どうなるんだ？　お通夜みたいにならなきゃいいけど……

## カカの天下３８４「チェンジ！　前編」（後書き）

今回のお話。
……書いてみたら予想以上に長くなってしまいましたので続きものに。よくあることですが＾＾；
さてさて、サエちゃんはどうしたのでしょうか……続きは明日～
あ、今日は日曜日じゃんとかいうツッコミはなしでお願いします笑　必ず一話の中で一日経ってるわけではないので＾＾；

# カカの天下３８５「チェンジ！　中編」

こんばんは。前回に引き続きトメです。

演技の練習をするためと言ってチェンジしたカカとサエちゃん。

カカっぽく行動しようとするサエちゃんと楽しく戯れていたのも束の間。夕食を作り始めた途端にサエちゃんは黙り込んでしまいました。

一体どうしたんだろう、何があったんだろう。

疑問に思いながらもなんとかハンバーグとサラダを作り、食卓へと並べるところまでいきました。

さぁ、どうする。

「はい、あーん」

「はい？」

さぁ、どうなってんだこりゃ？

食卓について「「いただきます」」の合掌を終わらせた途端、ススと寄り添ってきたサエちゃんが箸を持ってサラダをつまんで僕のお口に「あーん」とかましてきましたよ？

「あーん！」

「や、あの、サエちゃん？　どうしたのホント」

さっき黙り込んだかと思ったら、なぜに急にそのような笑顔？

「どうしたって、カカちゃんの真似してるだけですよー」

「カカはそんなことしないぞ」

何か裏があるとき以外は。

「したくても恥ずかしくてできないだけですよー。だから代わりに私がしてあげるんです」

なんつー強引な理屈だ。

「はい、あーん」

「や、でもさ、さすがにこれは」

「あーんしないと、このまま目に突っ込みますよー？」

「……そういうとこはカカっぽいのな」

観念して口を開けると、おずおずとサラダが口の中に入ってきた。

強引にさせたわりには遠慮がちだな。

「はい、次はハンバーグですね」

「や、サエちゃん。だからもう自分で」

「トメにぃーって頭のてっぺんにもお口があってハンバーグくらいなら一口で食べてしまうという噂は本当ですか？」

「あー、つまり言うこと聞かないとハンバーグ頭にぶっかけるぞコノヤロウってことか」

「そうともいいますねー」

「……あーん」

サエちゃん、なんか変だ。

無理にテンションを高くしようとしてる気がする。カカの真似をしてると言いつつ喋り方は元に戻ってるし。

「はい、あーん」

「あの、サエちゃん？　コップに入ったお茶をあーんで飲むのって結構しんどいんですけど」

「じゃーハンバーグにかけて一緒に食べればおっけーですねー」

「やめろ！　さっきの梅こんぶ抹茶味レベルになるだろ！」

「じゃーおとなしくあーんしてください」

一つだけ、思い当たることがある。

「なんでコップまで箸で持つの！？　危ない危ない落ちる落ちる！」

「器用でしょー。あ」

「あ！！」

冷たい、じゃなくて。

コホン。思い当たることあるんですよ。

もしそれが正しいなら。多分この夕食が終わったあと――

「トメにぃー。一緒に寝ましょー」

「やっぱきたか」

もう夜。そろそろ寝るかな、と電灯を消して自分のベッドに寝転がっていた僕は、予想していたその声を聞いて身体を起こした。

部屋の入り口を見る。そこにはカカの枕持参で部屋へ入ってきたサエちゃんが。

「カカちゃんならこうしたいと思いつつ、たまにしかできないはずですー」

「……はいはい、おいで」

仮にもカカを世話してきた身だ。恥ずかしながら、子供と寝るのは慣れている。

小さい頃にカカと一緒に寝ていたときのようにスペースをあけてあげると、サエちゃんは恐縮しながら布団に入り込んできた。

そして、何を思ったのかもぞもぞと僕の身体をまさぐり始めた。

「ちょ、なにサエちゃふははは！　くすぐったいぞやめはは」

「お手！」

え、あ、はいはい手をさがしてたのね。

適当に差し出した僕の手を探り当てたサエちゃんは、控えめにその手を握ってきた。

これは、あれだね。もう間違いない。

何かあって甘えてくるときのカカと一緒だ。

「サエちゃん、聞いていい？」

「手をつなぐ以上のことはダメですよー」

「そうじゃなくて！　あのさ。さっきハンバーグ作ってたとき急に黙っちゃったじゃん。あれ、どうしたの？」

「あー」

サエちゃんは照れくさそうに布団に顔をうずめた。

「ちょっと、小さい頃を思い出しちゃったんですー。お父さんとお

母さんと、三人でハンバーグを作ったときのことー」

お父さんと、お母さん。

そう、か。

姉づてに聞いたサカイさんの話が確かなら、サエちゃんはずっと本当の両親と離れ離れの状態なはずだ。

「お父さんのハンバーグが一番大きくて、次がお母さん、一番小さいのが私でー、自分で食べる分なんだから、当たり前なんですけど」

サエちゃんの顔は、布団に隠れて見えない。

今、どういう顔をしてるんだろう。

「できあがったハンバーグを並べて……並んだハンバーグが、家族みたいで」

今、どういう気持ちなんだろう。

わからない、わからないけど……さっきの夕食のときに甘えてきたのは、きっとその気持ちのせいなんだろう。

「家族が、三人とも、一緒だったんです」

そのときは、と小さな呟きが聞こえる。

静寂。何を言おう、何が言える？　僕は何を言えばいい？

……や、余計なことは言わないほうがいいだろう。自分の家族の話が人づてに伝わっていたなんて知ったら気分が悪いだろうし。あくまで何も知らないことにして話を進めよう。そして、できるなら——慰めてあげたい。

「サエちゃんちの家族は、うまくいってないの？」

ぴく、と少し身じろぎするサエちゃん。

「いえいえー、うまくいってますよー」

その声は極めて平静だった。

「でも、ちょっと、甘え方がわからなくてー」

「えっと、僕に今してるみたいに甘えたらいいんじゃないのか？」

サエちゃんは少しだけ寂しそうに笑った。

「だってこれは、トメお兄さん相手にカカちゃんの真似をしてるだけなんですもん。私はカカちゃんを演じて、甘え方をなぞっているだけ。だから簡単、だからわかるんです。でも……」

本当の両親じゃない人たちに、どうやって甘えたらいいかわからない、か。

「あ、トメお兄さん。手を離しましたねー。お手！」

「……はいはい」

布団の中ではぐれた手を見つけ、もう一度握る。

今度は、ぎゅっと。

「あったかい……ですー……」

とろんとした声。そろそろ眠いみたいだ。

「家族って、あったかい……」

幸せそうな声。

なのに、切なく思ってしまうのはなぜだろう。

「トメにぃー、知ってますー？」

ぎゅっと握り返してくる、小さな手。

「家族のぬくもりって、結構すぐに冷えちゃうんですよー……」

口調は相変わらずゆったりと。

ほんの少し寂しさを見せながら。

「だからー……たまに温めてもらわないとー……心が寒くて……泣いちゃうことも……あるん……で……す……」

静かな寝息が聞こえる。

サエちゃんは今、泣いていたのか。それは布団に隠れてわからな

い。

僕は、何も言えなかった。

だから、考えよう。

伝えたいことがある。

それを言葉にするんだ。

どうせ時間はたっぷりある。

考えて、考えて——明日、教えてあげよう。

もう、心が寒くならないように。

## カカの天下３８５「チェンジ！　中編」（後書き）

しっとりな終わりに浸りたい人は後から読んでね。

――さて、書き始める前はここまでで前編のつもりだったというのに、気づいたらどんどん長く……
愛が成せる業ですね（ぇ
明日は後編！
はたしてトメはまたもやいい格好しやがるのか？
それとも今回みたいにいい思いをしやがるのか？

うらやましい状況なトメにムカつきながらお待ちください＾＾

# カカの天下３８６「チェンジ！　後編」

おはようございます、トメです。

「んちゅ……？」

朝の挨拶しつつも実はわたくしまだ半分寝ております、目も閉じてますし毛布の温かさに至福を感じているのですがナンダロウこの唇に当たる柔らかい感触は。

「ちゅむ……む……ん……」

ぐいぐいと押し付けられるそれは割と激しいので、僕もちょいと息苦しくなってなんかアレしてるみたいになってきました。アレはアレですよ、アレ。彼氏と彼女とかがするヤツ。しばらくしてないけど。

「ん……ちゅ……はぁ……む……？」

さすがに目を開ける。

すると眼前には可愛い顔と唇が。

あぁ、やっぱこれって他人の唇の感触だったんだ。

それにしても可愛いなぁこの子。なんていう子だっけ。

そうだ。

タコだ。

……たこ？

「ちゅーちゅータコかいな！！」

スパーン！　と思わず奇怪なタコにツッコミを入れると見事に吹っ飛んでいき、広くなった視界の先にはサエちゃんがナニカを僕に押し付けていたようなポーズで固まっていた。

「おはよう、トメにぃー」

「……おはよう。今のはなんだ」

「麗しの唇を持つタコ人形の『むっちゅータコリン』ですー。デンジャーケロリンのライバルなんですよー」

あぁ、あのシリーズの仲間か。

「おはようのキスの味はどうでした？」

「レモンの味がした」

「わぁー、女の子が夢見るファーストキスの味ですねー」

「清々しい香りが逆に不愉快だぞ」

「そういう仕様ですからー。ほらほらトメにぃー。朝ご飯作ってくださいなー」

はいはい……と立ち上がり、思い出した。

そうだ、僕はサエちゃんに伝えないといけないことがあったんだ。

昨日、寝るまでの間に必死に考えた。サエちゃんの寂しい想いを少しでも和らげてあげることができないか、それには何を伝えればいいか。

そして、浮かんだんだ。最高の言葉が！

「サエちゃん！」

「はいー？」

さぁ、言おう。

大人として、親友の兄として、友人として！

僕が君に伝えたい言葉。

「あのさ」

それは――

「あのさ……」

それ、は。

「……」

「トメにぃー？　どうしたんですか」

「忘れた」

「は？」

ぅおい、僕。

なにしてんの。

マジで忘れてるじゃないかあああああああ！！

「何を忘れたんですかー？」

「や、その、な、何を言おうとしてたのか、忘れた」

「もうボケが始まったんですかー？」

サエちゃんの言葉がグッサリと胸へと突き刺さって抉って切り裂いた。

あぁ……ほんとボケじゃないか、僕。

「変なこと言ってないで早くご飯作ってくださいよー」

「うん……そうだよな……僕なんてそれくらいしかできないよな……」

自己嫌悪に陥りながらノソノソと台所へと移動する。あ、その前に顔洗わないと……はぁ。

ん！　いや、諦めるのはまだ早い。今日は日曜日だ。これからまだ時間はある。

カカがいつ帰ってくるかはわからないけど、それまでになんとしてでも思い出してやる！

そう意気込んで朝食を作り、「「いただきます」」の合掌。

そしてサエちゃんには悪いけど、ちょっと思考に沈んで思い出すのに専念させてもらおう、そう思って無口で食べようとした、そのとき。

「今度はトメにぃーが、あーんで食べさせてください」

そんな余裕がなさそうなことを言いやがりましたこのお嬢様。

「い、いやサエちゃん。さすがにもう勘弁してくれよ、今日はちょっと考えたいことがあってさ。それにやっぱり恥ずかし――」

「私にあんな恥ずかしい思いをさせておいて、自分はしない気ですかー？」

うぐぅっ！？　恥ずかしいと言った僕の言葉を逆手にとっての速攻！！　サエちゃん……手強い。

「わかったよ、やればいいんだろ」

「やたー。じゃートメにぃーあぐらかいて」

「え？　ああ」

理由もわからず言われたとおりにしてみる。

すると、あぐらをかいた僕の足元にサエちゃんが背を向けてちょこんと座り、そのまま僕の方へと寄りかかってきた。

「さ、サエ様？」

こつん、と小さな頭が僕の胸にあたる。

「あーん」

このまま食べさせろというのか！？

とんでもなく恥ずかしいしかなり難しい、し、しかし、やると言ったからにはやらないと……箸で朝食の煮物をつまみ、そのままサエちゃんの口元へ。

「はい、あーん――」

「ただいま！」

ぴしゃーん！　と戸を開いて現れたカカ。

そちらを見るのを身体が拒否して固まっている僕。

……何秒かの静寂。

それを壊したのは僕の腕の中（にいるように見える）サエちゃんだった。

「あーん、あむっ、もぐもぐ……おいしいですー。カカちゃんが羨ましいなー。いつもこうやって甘えながら食べてるんでしょー？トメにぃーが言ってたけど」

言ってねえええええええええええ！！

「トメ兄」

「え、や、カカ？　僕はそんなこと一言も」

「黙らんかいコラしばくぞワレ」

「関西弁！？」

何かが爆発した。

その勢いでカカが発射されてすっ飛んできた。

ミサイルのようなとび蹴りを避けることはできず、今度は僕がすっ飛ぶ番だった。ごろごろごろごろーっと転がって壁に激突して停止。痛いです。ものすんごー痛いです。

「ふふー、計画通りー」

楽しそうに笑うサエちゃん……まさか昨日の夕食からコレを狙っていたのか！

「カカちゃんならこういうドタバタ考えるでしょー？」

「か、カカはこんな狡猾にしないと思うけどな」

ただでさえ騒がしいのにこんな知恵までつけられたら、たまったもんじゃない。

「それで、トメ兄。遺言は？」

「ま、待て！　今の会話が聞こえただろ！？　これはサエちゃんの冗談というか企みであって、僕が進んでこんなことしてたわけじゃ」

「イチャついとったことには変わりないやないかぁ！！」

「だからなぜに関西弁！？」

カカはもう一度発射した。

その後も何度か発射したり砲撃したりがあったけど、痛かったとだけ記しておく。

「カカちゃんのほうはどうだったー？」

「や、大変だったよ」

散々イロイロかましてくれてスッキリしたのか、いつのまにか朝食をパクつきながらの雑談モードとなっていた。もちろん「あーん」

などということはしていない。ただでさえ痛くなった腰が折られてしまう。

「サエちゃんって偉いんだねー。家の部屋を全部、毎日掃除してるんだってね。家事も全部手伝ってるなんて……さすが私のヨ――親友」

嫁って言おうとしたな、今。

「私そんな面倒なことしてないよー？」

「えっ。だってサエちゃんのお父さんもお母さんも『サエはこれを毎日してくれるんだよー』って教えてくれて」

「家での私を知らないと思って、いい様に使われたんだねー」

「えええええ！？」

お、おそるべしサエちゃん家の血。親戚といえども黒さの片鱗を見せるか。

「さすがサエちゃんのお父さんとお母さんだね……そっくり！」

……あ。そうか、カカは知らないんだった！

サエちゃんを見る。

「でしょー」

いつものニコニコ顔はまったく曇っていない。でも内心はどう感

じているのだろう。昨日の寂しそうな声が脳裏に蘇る。

『家族のぬくもりって、結構すぐに冷えちゃうんですよー……』

そのぬくもりを僕に求めたっていうことは、今のサエちゃんの家族じゃ本当のお父さんやお母さんのぬくもりには敵わないってことだ。

それはそうだ。本当の親の真似なんて、誰にもできない。

どれだけ想っても、演じたとしても、本当の親には絶対に敵わないんだ。

「じゃー私は帰りますねー」

えっ！

「えー、もうちょっと一緒に遊ぼうよ」

「そ、そうそう！　カカの言うとおり、ゆっくりしてきなよ。日曜日だしさ」

「連絡はしてあるけど一日空けちゃったしー、うちの人も心配してると思うから」

うちの人、そんな他人行儀な――いいや、それは今は置いておけ。

忘れてた、忘れてたことを忘れてた！　早く、早く思い出せ。僕はサエちゃんに何を言おうとしていた？

「そっか……じゃ玄関先まで送るよ」

「し、仕方ないよな、うん」

考えろ考えろ、行ってしまうぞ考えろ！

「それじゃトメお兄さん、お世話になりましたー」

「どんなお世話をしやがったのか逐一聞いてやるから覚悟してねトメ兄」

ああ、玄関まで来た！　靴をはいた！

外に出た！

もう時間切れか！？

「それじゃー、お邪魔しましたー」

「ばいばーい」

バイバイなんて手を振ってる場合じゃないぞ！

遠ざかってく！　声をかけるなら今だ！

何をモタモタと――

あ。

ああ……

見えなくなった。

結局、思い出せなかった。

思いついたときにメモにでも書いておけばよかった。

そのまま寝れば忘れるに決まってるじゃないか、僕のバカ。

「うぅー……さむさむ。もうそろそろ春だってのに寒いね今日は。まだコタツしまわなくていいからねトメ兄」

はぁ……ホント、何を言おうとしてたのか全く思い出せないよ。

「サエちゃんちってストーブなんだよ。やっぱコタツだよね、コタツ」

思い出せない、けど。

「まーあったかいことには違いないんだけど」

思いついた。

「と、トメ兄？」

走り出していた。

思いついた言葉は格好悪い、よくわからない、変な言葉。

でも、思いついたからには伝えないと――

「サエちゃん！」

「はいー？」

朝から急に走り出したせいで身体が悲鳴をあげている。でも、追いついた！

「トメお兄さん、どうしたんですかー？」

「あ、あのさ。コタツってあったかいよな！？」

サエちゃんは目を丸くした。いきなり何を言い出すのだろう、と驚いているのだろう。

構うもんか。

「ストーブもあったかいし湯たんぽもあったかい！　カイロをはればぬくぬくだし冬の毛布なんか最高だ！」

「は、はぁー」

「もちろんちょっとした違いはある。ストーブよりコタツのほうがよかったり、コタツにはないあったかさが毛布にあったり！」

あったかさに優劣はある。絶対に真似できないものがある。

だけど。

「だけどさ、あったかいことには変わりないんだ」

そう、寒くなったとき、温めてくれることに違いはない。

サエちゃんの両親のぬくもり、温かさは真似できない。でも、サエちゃんの心が寒くなったとき、少しでもそれを温めてあげられたなら。

「だから」

僕だっていい、親友のカカやサユカちゃんだっていい、サエちゃんは甘えたいときに甘えられる人間がいっぱいいる。ぬくもりをくれる人がたくさんいるんだ。

「だか、ら」

そう、伝えたいんだけど。

サエちゃんの家の事情を知らないことになっている僕には、それをうまく伝えることができなかった。

そんな頭の悪い僕には、こんなことしか言えなかったんだ。

「だから――寒くなったら、またおいで」

サエちゃんは少しの間、目を丸くしていて。

でも、やがて頷いてくれた。

笑顔で。

「はい。またお願いしますね、トメにぃー」

綺麗な笑顔だった。

とても。

伝わったかな。

僕の言いたいこと。

でしゃばりなのは自覚してる。でも、カカたちと一緒にいることが多いサエちゃんは、もう僕にとって妹も同然になっていたんだ。放ってなんて、おけなかった。

でも……冷静に考えてみて余所様のお子さんを妹として見て突っ走るのって……どうなんだろう。もしかして僕はシスコンというやつなのではないだろうか。

わりとマジメに悩みつつ家に帰ってきた。すると。

「トメ兄、おかえり」

なぜか凄まじい笑顔を浮かべている妹君が。

「お、おう。ただいま」

「ちょっとここ座って」

すすめられた席は、先ほどの朝食の残りが置いてあるテーブルの前。疑問に思いつつも素直に座ってみる。

「あーん」

……え？

「あーん！」

待ち構えるように口を開けるカカ。ま、まさかサエちゃんの言ってたことは本当だったのか！？　本当にこうしたかったのか！

しょ、しょうがないな、うん。

箸で適当なおかずをつまみ、カカの口元へ。

「ほら、あーん」

「あーん、がぶっ」

「いだだだだだだだだだだっ！！」

「もぐもぐもぐ」

「かむなかむなかむなぁ！！　なんなんだ一体！！」

「ぺっ」

言うまでもなく僕の手をお召し上がりだったカカさんは僕の手をようやく吐き出しました。

「私の枕がトメ兄の部屋にあった」

「あ……」

「わいの嫁と寝たんかコラァ！！」

「だからホントなんで関西弁！？」

「もぐもぐもぐもぐもぐ！！」

「あだだだだだだだだだだだ！！」

こいつはサエちゃんの家の事情を聞いたら、どう思うんだろう。

何を言うんだろう。

多分、僕なんかよりいいこと言えるんだろうな。

僕の手を食いちぎる勢いで怒るくらい、サエちゃんのことを想ってるんだから。

でも――サエちゃんが教えるつもりがないなら、黙っておこう。

そんなことを知らなくても、こいつならサエちゃんを寒くなんてさせないだろうから。

だから、当面の問題は。

僕の手だ。

そろそろちぎれる。

へるぷみー。

## カカの天下３８６「チェンジ！　後編」（後書き）

あれ……？　なんかいつもより書き終わるまでの時間が長いなー
なんて思いつつ書いていたらいつのまにかこんなに長く＾＾；
いや、愛ですね。ぬくもりですよ。そのせいです、きっと笑
さぁ。どうでしょうか皆さん、今回のトメ。
感想待ってます笑

## カカの天下３８７「社会のルールだ、がんばれタケダ」

「た……頼まれたものを、買って、きたぞ」

どすん、と重い買い物袋を床に下ろし、手近な机へと華麗に倒れこむ。そんなステキな俺の名はタケダ！！

……全然華麗でもステキでもないではないか！

「おー、やっときたー」

「遅いわよ！」

「次に買ってくるのはこれね」

ご苦労様の一言もなしに渡されるメモがピーラピラ。

「いい加減にしろ！！」

さすがの温厚な俺でもキレた。

「いいか君たち！　俺が買い出し係というのは百歩譲ってよしとしよう。だが、だが！　なぜ俺が自腹を切っていろいろ買わなきゃならんのだぁ！！」

俺の叫びに目を丸くするカカ君のクラスメイトたち。いやいやなぜそのような不思議そうな顔するのだ！？　俺は至極真っ当なことを言っただけだぞ！

そう、状況は理不尽極まりないのだ。

カカ君のクラスのお楽しみ会を手伝うことになった俺。そこまでは良かったのだが……最初の話し合いのときにカカ君が俺のことを『財布』と紹介してからというもの、俺の扱いは本当に言葉どおりのものとなっていた。すなわち、小道具、大道具に必要なものを買うための財布！

しかもカカ君は大道具小道具の係にはあまり顔を出さないし（ここ重要）！

とにかくフザケルナ！！

「なぁ、誰か答えてみろ。なぜ俺が自腹を切る必要があるのだ！？理由はなんだ！！」

答えられるはずがない！

そう思っていた……のだが。

「なぜって、なぁ？」

「持ってるやつが出す、それが社会のルールだし」

「社長と飲みに行った平社員は金出さなくていいだろ？　そういう決まりなんだよタケダ」

「君ら一体いくつだよ！？」

そういうのはもっとサラリーなマンとか営業するマンとかされる

マンを経験してから言うことだろうっ！

「大体だな、なぜ俺のことを金持ちと決め付けるんだ！」

「だって病院の子供なんだよな？」

「どう考えてもお金もちよね」

「病院の子供だからって金持ちとは限らないだろう！　最近は不景気で、経営不振な病院だって多いんだぞ！　あぁ心配なり日本」

「タケダ、おまえも人のこと言えんぞ。何歳だよ」

俺は心は大人だからな。

「とにかく、憶測でなんでも決め付けるのは――」

「じゃータケダ。おまえ月のお小遣いっていくらもらってるんだよ」

「二万だが」

気がついたら床にキスしていた。

「い、っつぅ……な、なんだこのモノスゴイ後頭部の痛みとキスの味は」

クラクラする頭を押さえながら顔を上げると――

小鬼だ、小鬼がおる。

はて？　カカ君のクラスメイトによく似た小鬼だ。

「タケダ……てめぇ、今なんっつった？」

男子Ａの額から角がにょきっと生えた（イメージです）。

「タケダ君……あなた、さっきなんて言ってた？」

女子Ａの口から牙がのぞく（あくまでイメージです）。

「金持ちとは、限らない？」

男子Ｂが手にした椅子を握りなおす、って俺の頭を殴った凶器ってもしかしてソレデスカ（イメージではありません）！？

「俺の小遣い教えてやろうか……月に千円だよ、千円」

「私なんか五百円よ」

「僕なんか家事を一つ手伝うごとに二十円だ」

「オイ、もしかしてこのクラス全員の小遣いあわせたより、タケダのほうが金持ちなんじゃねぇか？」

「ぜってーそうだ」

「クラス全員より金持ち、世の中じゃそれをなんて呼ぶか知ってっか？」

そそそれよりもなぜに皆様が恐ろしい存在に変貌しているのか

が知りたいのですが（しつこいようですがイメージです）！！

「知らないか？　じゃあ教えてやる。社長って呼ぶんだよ社長！」

「オラ社長！　社訓言ってみろよ！　演説してみろよ！」

「俺たちに奢ってくださいよ社長さん！　オラァ」

「きゃー。ゴチになります社長！」

「わ、や、ちょっとやめてごめんなさいごめんなさい俺が悪かったですううううう！！」

か、カカ君。

君のクラスはもう魔界だ。

彼らは小鬼だ。強すぎる。なぜあのような姿に……

あぁ、そうか。

カカ君と一緒にいるんだもんな。

そりゃ強くもなるかぁ、アハハ……がく。

数十分後、観念した俺はとぼとぼと商店街を歩いていた。

両手には買い物袋。重い、でもあまり高いものは買っていない。

なんだか恐喝にでも遭った気分だったが、彼らの話をよくよく聞いてみれば俺が金を出すのも一理あるような気がしていた。持っている者が出す。それで物事が円滑に進むなら悪くないような気がするのだ。

などと偉そうなことを言いつつ……他の人に比べて自分が楽してたくさんお金をもらっているという事実が後ろめたくなっただけ、というのが本音だったりするのだが。

「あれ、タケダじゃないか」

と、トメさん!?

「おおお俺はもうお金持ってませんよ!?」

「なんだいきなり。トラウマでもあるような反応して」

はっ!?　さ、先ほどの恐怖がまだ残っているせいか、過敏に反応してしまった……落ち着けタケダ。何を慌てることがある。相手は我が最愛の人の兄ではないか。

「コホン、し、失礼した」

「おらタケダ。持ってんだろ?　ジャンプしてみろよ」

「持ってないですごめんさいごめんなさいごめんさい!!」

「あれま、本当にトラウマか。あー冗談冗談、だからそんな震えるな」

ううう……この人やっぱカカ君の兄だぁ。

「それで、なにやってんだタケダ。そんなに荷物抱えて」

「働かない社長がいる会社には未来がない、だから働けって、皆が……」

「……もしもし？　どこの会社にお勤めなんですか、おとーさん」

学校という会社です。意外と忙しいしイロイロあるんです。ホント。

「実はかくかくしかじか……」

「へー、皆のパシリにねぇ。で、タケダは月にいくらもらってるんだ？」

「二万です」

今度は地面にキスをした。

「このブルジョワがっ！　札束とでも喋ってろ！！」

えっと。

もしかして俺の小遣い、すごく多い？

地面の味が答えを物語っている気がした。

……おとなしく買い出し続けよ。

## カカの天下３８７「社会のルールだ、がんばれタケダ」（後書き）

持ってる者が払う。
悲しいけどよくある現実です。
私？
持ってないのでよく払ってもら――ええとても感謝してますしてもしきれませんすいません＞＜（誰に言ってるかはナイショ

# カカの天下３８８「白い日のアイテム　前編」

「問題は衣装か……」

「うん。タケダ君にネット通販とかで探してもらったんだけどー、なぜだかそういうのってすっごく高くて買えなかったんだってー」

「なんで高いんだろね。ほしいのは魔法使いの衣装とか、普段使わないような服なのに。使わないなら安くしてくれてもいいのにね」

ども、首を傾げつつお昼を休んでいるカカです。

今日も今日とてお楽しみ会の相談中。そろそろサユカンくるかな？

「や、やっほ……カカすけサエすけっ」

お、噂をすれば。って、あれ。なんでもじもじしてるのサユカン。トイレ？

「あのさ、朝から聞こう聞こうと思ってたんだけどっ」

トイレを？

「今日のトメさんって、どんな様子だった？」

違った、惜しい。

「どんな様子って……いつもどおりにおいしい朝ごはん作っていつもどおりにダルそうに会社行ったけど」

なんでごはんは喜んで作るのに会社は面倒そうなんだろ、あの兄。

「あ、いいなートメお兄さんの朝ごはん。煮物とお漬物がおいしいんだよねー」

「トメ兄ってそういうの寝る前に用意しとくからね、味が染みてるんだよ」

「わ、わたしも食べたい――って、そんな場合じゃなくてっ」

「そうそう、衣装をどうするかが問題でさ」

「衣装ならわたしにアテがあるからっ！　それよりも！　今日が何の日だかわかってるのっ！？」

今日？

何かあったっけ。

「あー、そういえばそうだったー。今日ってああいう日だったねー」

ああいう？　サエちゃんの視線の先を追うと、そこには。

「はいはーい皆さん！　アイドルアヤへのプレゼント受付はここですよー！」

「はい、受付しますので並んで並んでー。渡したらこの名簿に丸してね。丸ついてない人に後で回収しにいかなきゃならないから。すげーだりぃけど」

他のクラスから違う学年までぞろぞろと集まってくる男子たち、その中心にいるアヤちゃんとその下僕、ニシカワ君。あぁ、そっか。

「今日ってホワイトデーだったんだ」

「バレンタインデーのときにお姉さんにチョコを全部食べられたし、関係ないと思って忘れてたー。危ない危ない、ちゃんとお姉さんから何かもらわないとー」

おお、そうだ！　姉に何か貢がせるんだった。

「教えてくれてありがとサユカン。じゃあ何をたかるか相談しよっか」

「そんなことはどうでもいいのよっ」

はて？　じゃあ何が問題なんだろう。

私たちって結局お姉にしかチョコあげれなかったのに。

唯一トメ兄にあげれたのはテンカ先生で――って、あ。

「トメ兄、テンカ先生に何あげるんだろ」

「それよっ！！」

「あー、そっかー」

なるほど、サユカンにしてみれば今日のトメ兄の行動でテンカ先

生との仲が進展しないかどうかが心配なわけだ。

「そういえば昨日、トメ兄あてに通販でクッキーが届いてたような」

「ど、どんなクッキー!?」

「形がハートだったらアウトだねー」

「形は普通だった。だけど、たしか、『びやクッキー』って名前で」

「びや……？　変な名前ねっ」

「たしか小さく『びやく入り』って書いてあった」

びやく、ってなんだろう。私はわからない。サユカンもきょとんとしているところを見ると知らないらしい。

サエちゃんは――あれ、なんか、すんごい驚いてる？

「び、びやくぅー!?」

「どしたのサエちゃん。びやくって何か知ってるの？」

「う、うんー。びやくっていうのは魔法の薬でね、飲んだ人は飲ませた人のことをメロメロに好きになっちゃうのー」

「魔法っ!?　ば、バカねぇサエ。そんなのあるわけ――あ、でもわたしの持ってる漫画にもチラッと名前だけ出てきたことあるかもっ。たたた確か、こんな漢字よねっ」

サユカンは私のノートを勝手に取り出してサラサラーっと『媚薬』という漢字を書いた。

むずっ！　こんな字書けるなんてサユカンすごいなぁ。

「そうそうー、この間お父さんが持ってた通販カタログを暇つぶしに読んでたら、それがあったんだよー。その薬は本当にあるんだよー」

「じゃ、じゃあトメ兄がそれをテンカ先生にあげたら……」

「どうなるのよっ」

「私の想像だけどー。きっとー……」

『トメ……オレ、なんだか身体が熱い』

『へぇ、なぜだい？』

『オレ、おかしくなっちまったのかな。トメを見てると、なんだか……ぽっ』

『はは、僕なんかテンに会ったときからずっと胸が熱くて熱くて困ってるんだぞ？』

『そ、そうだったのか』

『ほら、僕の胸を触ってごらん』

『すごい熱さだ……じゃあオレの胸も触ってくれ』

『あぁ……愛してるよ、テン』

『オレも愛してるぜ、トメ』

『アイラブユー、テン』

『ミートゥー、トメ』

『我愛称、テン』

『謝謝、トメ』

『イッヒリーベディッヒ、テン』

『ダンケ、トメ』

「きっとこんな具合に世界各国の言葉で愛してるって言い続けることにー！」

「気持ち悪いぃっ！！　そんなトメさんヤダ！！」

「テンカ先生も気色わるっ！！　『ぽっ』ってなに！？」

大変だ。

なんか私の周りの世界が崩壊する勢いで大変だ！

「学校終わったら集合だね。トメ兄がそのクッキーを渡すの、断固阻止するよ！」

「わかったわっ！」

「おーっ！」

「ヤー！」

いま、私たちの世界を守る戦いが始まる。

## カカの天下３８８「白い日のアイテム　前編」（後書き）

あまり前編後編と続けたくなかったのですが……ホワイトデーだから仕方ないですね！
しかし今回のトメとテン……自分で書いててこんなこと言うのもなんですが。

きーもーちーわーるーいー笑

いやまぁそれが良いって人もいるでしょう！　多分＾＾ちなみに最後のサエちゃんの「ヤー」はドイツ語で「はい」という意味です。

ところで今回のアイテムはこちら

『びやクッキー』　未鑑定

このアイテムを鑑定しますか？

↓　はい
　　いいえ

鑑定結果まであと一日お待ちください。

## カカの天下３８９「白い日のアイテム　後編」

「気をつけ、礼」

号令も終わり、今日の学業は終了！

ここからが戦いだ。

「サエちゃん、どうする？」

「トメお兄さんもテンカ先生も仕事終わるまでまだ時間あるからー、今のうちにカカちゃんちに行ってそのクッキーを処分するのはどうかなー」

「それで行こう！」

すでに帰り支度はできている。そうと決まれば即行で帰宅だ！

「カカすけサエすけっ！」

教室の戸を勢いよく開け放ってサユカン登場。

「私んちに急行でかくかくしかじか！」

「角材で鹿たちをなぐるのねっ！」

「その通り！　待ってろ鹿々！」

「鹿のお肉はおいしいよー！」

ノリ任せに喋りながら猛ダッシュ！

トメが帰ってくるまでにクッキーを見つけないといけないから、急がないと！

「あ、おかえり」

「なんでいるのおおおおお!?」

帰ってくるなりズザーッ!!　とコミカルに転んでしまった私たち三人。

「今日は仕事も少なかったから半日有休使わせてもらったんだよ。なんだ、いちゃ悪いのか」

「悪い!!」

「この悪党めー!」

「犯罪にもほどがあるわっ」

「出頭しろ!」

「妹さんは泣いてるぞー!」

「奥さんも悲しんでるわっ!」

「え、あ、はい、すいません！　って思わず謝ったけど待てやオマエラ」

トメ兄はなんで自分が責められてるのかわからないみたいだ。なんてうまくトボけてるんだろう。こんな悪人が私の近くにいたなんて……

「あー、まぁおまえらの変な言動はいつものことだからいいや。ちょっと待ってろ」

そして台所へ引っ込んだトメ兄が持ってきたものとは――

「ほれ、これやるよ。食べてみ」

サラの、じゃなかった。皿の上に少しだけ盛られたクッキー。

……クッキー！？

これって、やっぱあのクッキーだよね？

まさか私たちまでメロメロにする気か！？

「この極悪人！」

「あくまー！」

「浮気者っ！！」

「うああ生まれてきてごめんなさい！　ってだからなんで僕がそこまで言われなきゃいかんの！？」

「そんなクッキーを食べさせようとするからだよ！」

「……げ、もしかしてバレてたか？」

あちゃー、と残念そうな顔になるトメ兄。ふん、とうとう正体を現したな！

「大体トメ兄は――」

さらに文句を言おうと口を開けた瞬間。

「ほい」

「あむ！？」

前触れなく放り投げたクッキーが私の口の中に！？

「ほい、ほい」

「あむー！？」

「あむっ！？」

ぽかんと口をあけていたサエちゃんとサユカンの口の中にもクッキーが！！

あぁ……これで私たちはトメ兄の奴隷になってしまうのか。

これを噛めば噛むほど、トメ兄のことが好きに……

噛めば……噛む、ほど？

あれ？

あれれ？

なんだろう。

宇宙が見えるよ？

宇宙にマグマが浮いてるよ？

あぁ、マグマってすっぱいんだぁアハハ。

わ、マグマの中から火星が生まれたよ。太陽に勝つために猛特訓を始めたよ。頑張れ頑張れー。

「――ってぇ私はどこの世界に旅立ってたの！？」

私が正気に戻ったと同時にサエちゃんもサユカンもこっちの世界に戻ってきたらしい。

「あれ？　火山を食べるクマさんどこにいったのー？」

「太陽の姉ＶＳ水竜ケロリンの試合会場は！？」

二人もいい感じの世界に旅立ってたみたいだ。

「……あー！　そういえばトメお兄さんのクッキーを食べちゃった

んだー」

「だよね、でも特に変化ないよ？」

「わたしもないわっ」

「この二人は元からトメお兄さんにデレデレだから効果ないのもわかるけどー」

誰がデレデレだ！？

「ねぇ、トメお兄さん。これってー」

先ほどから黙ってこちらを見ているトメ兄とサエちゃんが目をあわせたとき。

サエちゃんの頬が染まった。

え、まさか。やっぱり薬の効果が！？

……あれ。

私の頬もなんか、熱い。

頬だけじゃない。あれ、熱い――ていうか、痛い！　なんか舌が痛い！！　身体もあちこち熱くて熱くて――

「ひ、ひひゃはっ、ひひゃはーっ！！（し、舌がっ、舌がーっ！！）」

「ひゃふぅー、ははひひょー！！（あうー、辛いよー！！）」

「ひょへひぃ、ほうはっへふほ！！（トメ兄、どうなってるの！！）」

三人そろってなみだ目をトメ兄に向ける。

トメ兄は笑っていやがった。

「ふはははは！　や、予想以上の効果だな。これはテンに食べさせるのが楽しみだ」

「ひっひゃい、ひゃひひゃへはへはほ！？（一体、なに食べさせたの！？）」

なんとか言いたいことは伝わったらしい。トメ兄は私の喋り方に笑いながらも、通販クッキーのパッケージにある説明書きを見せてくれた。私が見たのは品名のあたりだけだから、ここを読むのは初めてだ。

そして、そこにはこう書いてあった。

『火を吹くほど辛い薬味、略して火薬入り。かやくじゃないよ、ひやくだよ。でもひやクッキーってなんだか語呂悪いから、びやくって読むことにしてびやクッキーね。

あと、口に含んだときにあまりに辛すぎて身体が拒否して意識飛ぶこともあるので注意。意識が戻ったあたりで身体がだんだんと辛さを自覚していくでしょう。

でも大丈夫、死にはしない』

「どうだ。テンにやるならこれくらいのネタがちょうどいいだろ？」

「はひははひーは！！（紛らわしーわ！！）」

「ひゃははへはー！！（騙されたー！！）」

「ひょへはんほひほへはひー！！（トメさんの人でなしー！！）」

「悪い、何言ってるかさっぱり――ぐほぁ！？」

口でわからないなら身体でわからせてやった。

うぅ……『びやく』違いだったから気持ち悪い展開にならなくてよかったけど、舌がひりひりするよぅ。

ちなみに、トメ兄がテンカ先生にそのクッキーを渡した結果は。

「ぅぐ……！！」

「ははは！　どうだテン。おいしいか。ホワイトデーなのに顔も舌もまっかっかとはこれいかに――え、ちょ、その凶器はシャレにならなグホッ、ぐあっ！　いだぃん！？　うあああ関節はやめてやめてギブギブ！！」

ざまーみさらせ。

## カカの天下３８９「白い日のアイテム　後編」（後書き）

鑑定結果を報告します。

『びやクッキー』

効果　使った者に対する周囲の人の好感度を下げるアイテム。とことん下げる。しこたま下げる。
攻撃力は高い。
血行がよくなる。

はい、みなさん。
ホワイトデーは誠意を持って返しましょうね。
くれぐれも気安い相手だからといってトメのようなことをしてはいけませんよ。

# カカの天下３９０「女の対決　意地の張り合い編」

ふぅー、用事終わり。あ、ども。最近はお楽しみ会のことばっかりやってるカカです。

今日も今日とてセイジ食堂で用事を済ませ、さぁ出ようというところで……とあるテーブルに見知った顔を二つ見つけました。

「なんでここにいるんですかー？」

「……いちゃいけませんか？」

「あー、そうかー。暇なんですねー仕事なくて」

「うぐっ」

「食べてるのが一番安い定食なのも、仕事なくてお金ないからですかー？」

「い、いいですもん！　私もあなたと同じの食べてやりますもん！」

「他人の食べてるのを見てほしくなるなんて、卑しい人ですねー」

「あ、あはは……いちいち嫌味言わなきゃ気がすまないなんて心も胸も小さいですね。大きいのは年齢だけですか」

なんだろう。最近温かくなってきたのに、あそこ一帯だけ冬真っ盛りな寒さな気がする。

今日は厚着してないから近づきたくないなぁ。でも仕方ない、せっかくあの人いるんだし、お楽しみ会まで日がないし、声かけちゃえ。

「あの、もしもーし。サカイさんにサラさん」

「「あら、カカちゃん？」」

うぉ、ハモった。

そして二人はまた睨み合い始めた。

「なんでカカちゃんのこと知ってるんですかー？」

「あ、あなたこそ！」

「私はご近所さんでずーっと仲良しなんですよー」

「私はクリスマスを一緒に過ごすほどの仲良しです！」

「むー！　じゃ、えーと、私なんかカカちゃんの恋人候補なんですからー！」

オイ。

私の恋人はサエちゃんだけだぞ。

「じゃあ私はカカちゃんと結婚します！」

「いいえ、私はカカちゃんと一緒の墓に入りますー！」

「その前にカカちゃんを殺して私も死にます！」

「そのときは来世で生まれ変わって私とカカちゃんは結ばれるんですー！」

「私だって来世は――」

「皿かカッパかオカマに生まれ変わるに決まってるじゃないですかー」

「あ、あなただってナマケモノとかドブネズミに生まれ変わるに決まってます！」

お、おぉ……なんだこの身近にあまりないドロドロした女の戦いは。もっと見たいけど、あまり時間ないんだよね。残念。

「ま、まぁまぁ！　ちょっと話聞いて。今日はちょっとサカイさんに用事があって」

「私？　勝ったー！」

「負けた……」

面倒くさい人たちだなぁ。

「それでー、私に用事というのはー？」

「はい、サカイさんの持ってる衣装を貸してほしいんです」

おや、なぜかサカイさんの顔が真っ白に。

「な、なな、なんのことでしょー？」

「サユカンから聞いたんです。いっぱい持ってるんですってね。魔法使いの衣装とか妖精の衣装とか、あと何かのアニメの――」

「いいいいいいえいえいえ持ってません持ってませんー！」

私の口を慌てて閉じて、サラさんのほうを伺うサカイさん。しかし遅かったようだ。

「へぇぇぇぇぇ……サカイさん、コスプレが趣味なんですか」

「いえいえいえい

くらい」

「無職よりは恥ずかしくないつもりですー」

「コスプレおばさんよりマシです」

「おば――！」

あああああもう！！

「いい加減にしてください！　二人とも私のこと好きなんでしょ！　だったら私の言うこと聞け！！」

しびれを切らして怒鳴りつけると、睨み合ってた二人はなぜか揃ってきょとんとした顔になった。

「「……いや、別にそんなに好きなわけじゃ」」

「じゃあさっき私を取りあってたのは何！？」

「「ノリ」」

この二人、本当は仲良いんじゃないだろうか。息合ってるし。

「……まぁいいです。とにかく衣装いっぱいあるんだったら貸してくれませんか？　コスプレおばさん」

「違うんですぅー！　コスプレもしないしおばさんじゃないんですー！」

「じゃあなんで衣装持ってるんですか？」

「なんで二十九歳なんですか？」

またこの人は余計なことを。

「サラさん、いちいち水を差さないでください。そんなの歳だからに決まってるでしょ？」

「もう歳だって言われたぁぁぁぁぁー！」

「カカちゃんはトドメ刺しちゃいましたね」

「……サラさんって意外と意地悪なんですね。トメ兄に報告っと」

「やめてえええええ！　なんでも言うこと聞くからそれだけは！私の家の家訓で『敵には全力で当たれ、泣いても許すな。叫んでも許すな。涙が枯れたらちょっとだけ許せ』っていうのがあるだけでぇ！！」

えぐい家だなぁ皿族。血族の間違いじゃないのかな。血まみれな感じの。

「ううぅ……衣装はぁ、なんというかぁ、あの子が着たら可愛いだろうなぁーって妄想するために買ったといいますかー」

「あの子？」

「い、いえいえいえいえいえ！　お気になさらずー！　観念して衣装はお貸ししますからー！　はぁ……ところでその衣装、何に使う

んですかー？」

「今度うちのクラスで劇やるんですよ。お楽しみ会の出し物なんですけど」

そう言った瞬間、なぜかサカイさんの目の色が変わった。

「用意するー！　いくらでも用意するー！！　いいのがないなら取り寄せてでも用意するー！！」

「な、なんでそんな意気込んでるのかわかんないけど助かります」

「わ、私も用意します！」

へ、サラさん？

「伊達にいろんな職をやってきたわけじゃありません。裁縫は得意なんです！」

「おもしろいですー、じゃーどっちがより良い衣装を用意できるか勝負ですー！」

「望むところです！」

「え、あの、そんなにたくさんはいらないんだけど」

って、聞いてないし。

うーん……

私ら、何回ほど衣装替えすることになるのかな？

## カカの天下３９０「女の対決　意地の張り合い編」（後書き）

サラさん……当初はおとなしい子だったのに！

や、まぁ気の許せる人（気を使わない敵？）に対してはこんな感じってだけで基本的に弱気なのは変わってないですけどね＾＾；

それにしてもこの二人、遠慮なくドロドロなやりとりが書けそうな感じでちょっと楽しかったり。今後もセット登場増えるかも？笑

# カカの天下３９１「白い日の天罰？」

「困った」

こんちは、トメです。突然ですけど困りました。

何が困ったかといいますと、今日は日曜日なのですよ。

みんなが待ち望んでいた、世間の大体の人が休みの日。

こんな日は妹で遊ぶに限るんだけど……悲しいかな、カカはお楽しみ会の準備に夢中で付き合ってくれません。

え、つまりは何が困ってるのかって？

あれですよ。

暇なんです。

さぁ困った。何をしよう。

いつもなら適当にのんびりダラダラするところだけど、近頃ずっとカカと遊んでないからちょっと刺激不足なんだよね。

誰かに電話でもして遊びに誘ってみるかな。

携帯をいじりいじり……こういうときに一番誘いやすいのってやっぱテンか。ポチっとな。

数回のコール音の後、相変わらず無愛想なテンの声が聞こえてきた。

『おう、何だ』

「よ、テン。今、暇か？」

『あぁすんごく暇だ』

よし、暇つぶし相手ゲットかな。

「や、僕もカカが構ってくれないから暇で暇でさー」

『お楽しみ会の準備だろ？　おまえんちのカカがなんでも仕切ってくれてるからこっちは大助かりだよ。だからオレが暇になる』

「うんうん、そんなに暇か」

『おう、暇で暇で仕方なくてな。誰かの誘いを待ってたくらいだ』

「よし、じゃあ遊びに行こ――」

『でもトメとは遊ばねぇ』

プツッ。ツー、ツー、ツー……

あ、れ？

切られましたよ？

あの、あれでしょうか。そんなに暇で暇で仕方なかったのに僕のお誘いを断るということは……もしや、先日のホワイトデーのこと、まだ怒ってらっしゃる？

うーむ。ゲームのためとはいえ、せっかくチョコくれたんだし…姉くらいの誠意を見せるべきだったかな。

ちなみにその姉、実は先日僕と飲んだ後に『ホワイトデーに皆に渡すお返しを用意するために旅に出る』とか言って街を出て以来、ずっと音信不通だったりする。

まぁよくあることなので心配はしていない。姉は遅刻はしても約束は破らないタイプだ。近々「遅れてごめーん」などと言いながら皆へのお返しを持って現れることだろう。

さて、そういうわけで姉も暇つぶし相手にはならない。あとは…うーん、サエちゃんやサユカちゃんもお楽しみ会で忙しいだろうしなぁ。

……サラさんにでも連絡してみるかな。

コール中。ん、つながった。

『もしもし』

「もしもし？　サラさん、今何してる？」

『女の対決中です！！』

暇、じゃなさそうね、コレは。

「そ、そっか。頑張ってね」

『絶対負けません！』

「う、うん。じゃあね」

すごい燃えてた。なんか恐かった。何やってんだろね一体。

ま、いいや。そんなことより重要なのは、もう誘うアテがないということだ。友達少ないんだよね僕。

んー。

たまには父さんと交流してみるとかはどうだろう。あの人、大体は暇だし。

ぴっぽっぱ、っとコール開始。

なかなか出ないな。

まだかな。

あ、やっと出た。

「もしもし、父さん？」

『なんだ息子よ――ちょっと待て――今取り込み中で――』

妙に途切れる声。何やってんだろこの人。

電話の向こうの音に耳を澄ませてみる。

これは、走る音？

そう、たくさんの人が走ってる音がする。

銃声がする。

爆発音がする。

知らない男の人の声がする。えっと、なんて言ってるのかな？

『銃より刀のほうが強いだと！　馬鹿な！？　ぐはぁっ』

くぐもった男の声が聞こえ、さらに爆発音。ってぇ、ホントなにやってんですかお父さん！？

『――これで十二人目っと、すまない。いま仕事中でな。何の用事だった？』

「え、えーと」

まさか「さびしいから相手をして」などと、十二人以上の誰かさんを相手にしてるっぽいお方に言えるわけもなく。

「あ、えっと、うん。お仕事がんばってね」

『そんなことを言うために電話してきたのか？　はっはっは、可愛いところもあるじゃないか。この仕事が終わったら寿司でもおごっ

てやろう』

「うん、ありがとー。ハハハ」

会話しながらも電話の向こうから聞こえてくる『げはっ！！』とか『隊長！　手榴弾はどこですか！？』とか『ヤツが使用中だ！誰だおめおめと盗みを許した愚か者は！？』とか『たった一人に……我らが、全滅？』とか、なんともコメントしがたい内容の声が聞こえてくる。なんか日本語じゃない言語も混じってた気がした。

忍者って大変なんだね。

電話してたせいで命を落とされてはたまらないので、適当に話を切り上げて電話を切る。

さてさてさて。またもや暇に逆戻りなわけだけど。

あとは……母さんか。

あの人は基本的に忙しいからなぁ。日曜日といってもきっと……や、でも。息子としてたまには声を聞かせてあげるのも大事だよな、うん。

でも母親に電話するのって、なんか恥ずかしいな。

よし、部屋の掃除してからかけよう。

……よし、掃除終わり。

さぁかけよう、と思ったけどお昼ご飯の時間だ。向こうも昼食か

な。ご飯食べてからにしよう。カカはサエちゃんサユカちゃんたちと一緒に食べるらしいから、一人で昼食だ。

もぐもぐもぐ。

よし、今度こそ！

と、思ったそのとき。ピンポーンと鳴ったので玄関へ行くと、新聞の業者が。

「今ならいらない新聞紙をつけるよ？」

新聞に新聞つけてどうすんの。

あしらったと思ったら今度は宗教の勧誘が。今なら幸せになれるケロリンがもらえるらしい。いらん。何教だよ。

次は占いの押し売りが。明日は８０％の確率で晴れる！　と断言していた。携帯で天気予報を見ると７０％だった。それを見せると「惜しい！」と呟いて帰っていった。

さらに化粧の販売員がなぜかとてもしつこく勧めてきた。ケンカ売ってんのか。

最後には地獄への勧誘者という方がとても熱心に死後の世界を語ってくださった。ノーコメント。

そして、なんだかんだやってるうちに時刻は夕方。

「なにやってんだ僕は……」

妙に疲れてトボトボと居間に戻る。さて、今度こそ電話しよう。
恥ずかしいなんて言ってられない、こんな寂しい日は母さんと話して癒されるに限る。

そう思って携帯をいじっていると、不意につけっぱなしだったテレビが目に入った。

『笠桐結乃、特別インタビュー。生放送！』

「お仕事ご苦労様です！！」

とりあえずテレビを蹴った。

「孤独だ……」

呟いた瞬間、携帯にメール着信が。

『今日はサエちゃんちで夕飯食べるね』

夕飯も、僕一人？

「僕、何か悪いことしたかな」

さらにメールがきた。

『やっぱこっち泊まるわ』

マジで今日ずっと一人か。

泣ける。

「友達……増やそうかなぁ」

そんなことを呟きながら、母さんのインタビューをぼけーっと眺める僕でしたとさ。

はぁ、寂しい。

幸せになれるケロリン、もらっとけばよかったかな。

## カカの天下３９１「白い日の天罰？」（後書き）

いつも恵まれてるトメ。
誰かしら相手がいてツッコんでるトメ。
そんな彼にもこんな日があったりするのです。

## カカの天下３９２「卒業、おめます」

しーっ、カカです。

「それでは、送辞！」

ただいま体育館で卒業式の真っ最中。私はクラスメイトたちと一緒に並んで立って、ステージに並んでいる六年生の皆さんを見つめています。

ぶっちゃけ、下級生いじめしてるとこ見つけてぶっ飛ばした顔くらいしか見覚えがありません。

しかしほとんど交流がなかったとはいえ小学校をシメてくださっていた先輩方だ。ここは敬意を表して送辞を手伝ってあげよう。私は代表じゃないから見守り係だけど。

送辞……在校生から卒業生へと送る門出の言葉だ。一年生のころからやってるから大体覚えてる。たしか始まりは……『おだやかな、春です！　僕たち、私たちは、皆さんのご卒業を心よりお祝いいたします！』だったかな。一人一人、代表の人が単語っぽく言ってくんだよね。

最初は五年生が言うんだよね。さぁがんばれ上級生。

「おだやかな！」

「僕たち！」

抜けてる！！　『春です』が抜けてる！！　なに自己紹介してるの五年生！？

「皆さんの！」

「ご卒業を！」

「心より！」

「します！」

何をするの！？

あー、思い出した。たしか私が一年生のときにもあったなこんなの。緊張しすぎて焦って飛ばしちゃうんだよね、前の人を。

例えば、『クラブ活動では、わからないところを優しく一生懸命教えてくださいました』っていう感謝の言葉も……

「クラブ活動では！」

「わからないところを！」

「くださいました！」

なんていう、すんごいヤなやつの文章になっちゃったり。

『運動会では、先輩方の頼もしい姿を見て、僕たちも、私たちもと、やる気と、勇気がわいてきました！』っていう心温まる言葉も……

「やる気と！」

「ゆうじがわいてきました！」

ユウジって誰？　って身元不明の人物が浮かんできたりするわけだ。

しかしいちいち面白い間違いかたするなぁ皆。

おかげで卒業生の皆さんも父兄の方々も微妙な顔をしてらっしゃる。今にも笑い出しそうな……だって面白いもんね。

「こほん！　では……と、答辞！　ぶっ」

や、ぶってアナタ。先生が吹いてどうすんの。

「在校生の、皆さん！」

ともかく答辞の始まりだ。がんばれ卒業生。

「僕たち」

「私たちは！」

「今日！」

「します！」

だから何を！？　や、卒業なのはわかってるけどさ。

卒業生の皆さんも緊張しているのか、在校生のみんなと同じような間違え方をしていた。例えば、『在校生の皆さん、私たちと同じように、この学校で勉強やスポーツをがんばってください！』という言葉も……

「在校生の！」

「皆さん！」

「私たちと！」

「がんばってください！」

卒業するんじゃなかったんですかアンタら、という文になったり。

『教職員の皆さん、六年間、いろいろお世話になりました！』という言葉も……

「教職員の皆さん！」

「いろいろ！」

「なりました！」

何を教えられてどうなったのか疑問がつきない展開になったり。

『ここまでこれたのは、お父さん、お母さんのおかげです』という普段言わないような家族への感謝の言葉も……

「ここまでこれたのは！」

「お母さんのおかげです！」

お父さんがとても憐れなことになったりと、珍答辞が盛りだくさんだ。

しかしここまで示し合わせたかのように変な言葉になると、狙ってやってるんじゃないかと疑いたくなる。だってほら、その証拠に皆笑って……

笑って……

笑って。

泣いてる？

そっか。

私は六年生に親しい人はいないけど。

そうじゃない人もたくさんいるし。

卒業する六年生だって、もちろん寂しいんだろう。

笑ってお別れする、なんて。どこかのドラマや漫画みたいな話だけど。

「皆さん……本当に、ありがとうございました！！」

「ありがとー！！」

「こちらこそー！！」

笑いながら、泣きながら、もはや答辞とか送辞とか関係なしに叫び始めた皆を見ていると、それに参加してない自分がちょっと寂しかったりして、自分たちの卒業式にはもっと面白いことしてやる、とか考えたりして……

いろんなことを思いながら、私は卒業生たちを見送った。

いいな、こういうの。

今度からはもうちょっと、他の学年の人とも交流してみるようにしようかな。

でも、今はとりあえず。

皆さん、卒業おめでとう！

## カカの天下３９２「卒業、おめます」（後書き）

デストロイヤー教頭主催、自由な卒業式です。
リハーサルの類はしないため、いつもぶっつけ本番です。たまに妙な展開になることもありますが、送りたいように送り、答えたいように答える生徒たちにはわりと好評だったりします。
現実にあったら……どうなるかはわかりませんが＾＾；

**カカの天下３９３「先生、しっかりしなさい」**

「……あん？」

よう、テンカだ。

午後の５、６限を使ったお楽しみ会の準備も、今日とあと一回を残すだけとなった。カカたちは相変わらずオレが指導する必要もなく動いてくれているから楽でしょうがない。

むしろ楽すぎて暇だ、そんな教職員にあるまじきことを考えながら、職員室の自分の机に肩肘ついてボケーっとしていたのだが。

「なんだ、これ」

見慣れない封筒を見つけた。机に乱雑に置いてある書類の下敷きになっていたのだ。

引っ張り出して中身を確かめてみる。

日本人なら誰でも知っている紙が入っていた。

「……天からの贈り物？」

天からテンに？

はいはい、つまらないですね、すいませんでしたよ、けっ。

それはともかく、この飲み代――じゃなくて金、一体何だろう。

誰かがこれでオレに飲めと言ってるのか？　神様かそいつ。もっとくれよ神様。

まぁ、冗談だが。

「おーい、デス頭。これなんだ？」

「その恐ろしい呼び方はやめてくれたまえ、テンカ君――おい、本気で言ってるのか」

「んだよ教頭。デス頭がそんなにまずかったか？」

「死んでいるのは君の脳だ」

「……言ってくれるなぁ、オイ」

基本的に穏やかな教頭がそこまで言うとは、これもしかしてまずいお金っぽい？

「相当前に説明したはずだが、そのお金はな――」

結果。

かなりまずかった。

「おい、カカはいるか！？」

「ガサ入れ！？」

何をとち狂ったことを言っているのだこの小娘は。

「ガサ入れされたら困るようなもんでもあるのか、アヤ」

「い、いえぇそんな滅相もない！」

この準備時間にほとんど顔を出さなかったオレが急に来たせいか、教室の中にいる全員が戸惑っていた。

というか怯えていた。

……ほんとに何もしてないだろうな、おまえら。

まぁいい。

「カカは？」

「た、体育館で飛んでます」

「サエは」

「根回しを」

どいつもこいつも豪儀だな。

「仕方ないな……おまえらでいいか」

「な、なにか？」

なんとなくこの中ではアヤがリーダーっぽいので、こいつと話をすることにした。

「なぁ、劇の準備してたんだよな」

「はい、それはもう」

「経費……かかってたよな。どうしてた？」

バツが悪くて頭をかきながら聞くと、アヤは近くにいた男子生徒の首根っこを掴んで差し出し、あっさりと言った。

「このタケダで払ってました」

「クレジットカードか何かか？　そいつは」

「はい、便利ですよ」

そりゃそうだろうさ。オレもほしいくらいだ。

その差し出されるカードの顔を伺ってみる。

あまり楽しそうには見えない。

「あー……タケダ、大丈夫か？」

「……外傷は特にはありませんが」

「財布の中身は？」

「このくらいの犠牲、大したことはありません！」

なんて男らしい財布だ。ほしいくらいだ。

「いやー、悪い悪い。実はさ、お楽しみ会をするにあたって、各クラスに多少の援助が学校から出てたんだよ」

『え……？』

ポカンとする一同。しかしツッコまれる前に一気に説明してしまう。

「ほんとはさ、衣装に使う布とかそういうのも家庭科室に余ってるの使っていいし、他の教室の備品も許可さえあれば使ってよかったんだと。でもおまえらは勝手に体育館とか他の教室も使って準備してたから指導の必要もねぇやと思って放ったらかしにしてたんだが――」

たはー、と後頭部をかきながら愛想笑いを浮かべた。

「少しは指導しなきゃなんなかったみたいだな、オレも」

「何を当たり前のことを言ってるのですか？」

ぐっ……タケダも言うじゃねぇか。しかしオレのクラスの財布役になってしまっていたコイツなら、これくらい言う権利はあるだろう。許す。

「と、というわけでタケダ！　今まで使った分、今すぐ出すぞ！　いくらだ」

「い、いやしかし俺とて脅しに屈して金を払っていたわけではなく、社員に奢るのは社長の務めであって」

何の洗脳受けてんだコイツは。

「社員、社長？　会社やるほど金もらってんのかよ」

「えっと、月に二万ほど」

「今すぐ潰してやるその会社」

思わず社長の胸倉を掴んでいた。

「ぐええ！？　つ、潰してるのは、俺の、む、胸……」

「うるせぇクレジット会社タケダ！！　もともとペチャパイなんだから潰れても問題ねぇだろが」

「む、無茶苦茶を……」

「てめぇ……オレの一ヶ月の飲み代くらいもらってんじゃねぇか。ええ！？」

「そ、そんなこと言われても！」

「こんなガキにそんなに持たせるたぁ親は何考えてんだ！　おいタケダ。一つ聞く。その答えの内容によっては、てめぇの財布の中身はなくなると思え！」

「ホントに教師かアンタは！？」

肩書きは一応な！

「その金、いつも何に使ってんだ？」

これは大事なことだ。

人は子供のころから金銭感覚を徐々に身につけていかなければならない。金銭感覚というものは、現代を生きるにおいてとてつもなく重要なものだからだ。それを親が何も考えずに与えるだけ与えていたら、金の使い方を覚えないその子供はいつか絶対に金で失敗する。

それをないがしろにしているところを黙って見逃すわけにはいかない！

「さぁタケダ、言え！　その分不相応な金を何に使ってるんだ！？」

「い、いつか親孝行しようと思って貯金してます！」

え。

目をパチクリ。

意外と考えてるじゃないか、金の使い方。

というか普通にいいヤツだ。

「なら許す」

「ほっ……」

とりあえず今回の経費で使ったという金額を返してやった。

「ありがとうございます！　これで両親の結婚記念日に全力で孝行ができます！」

なんか泣けてきた。

「あー、取り乱して悪かった。ともかく遅れながらオレも協力するからよ、なんか必要なもんあったら遠慮なく言ってくれ」

そう言ってクラス一同を見渡してみる。

なぜか全員、こちらを見ていた。

オレの顔を。

……え？

必要なもん、もしかして、オレ？

## カカの天下３９３「先生、しっかりしなさい」（後書き）

普通は何から何まで子供でやるって無理ですよねぇ。
でもですねぇ。
まがりなりにも指導者っぽい子供が一人でもいれば、意外と形になるもんなんですよねぇ。

……形は歪になること間違いなしですけどね、なにせその指導者て我らがカカだし。

お楽しみ会まで、あと少し！

## カカの天下３９４「謀られた台本」

「明日はもうリハーサルよっ！」

「そだねー」

「早いもんだ」

私、カカはしみじみと言いました。

そう、お楽しみ会本番まで残すところあとわずか。ここカカ部屋に集まった私たち三人は、最近ドキドキしすぎて眠れない夢を見る毎日を過ごしているのです！

え、結局寝れてるじゃんって？　そりゃ寝るよ。子供だもん。

「明日はリハーサルなのよっ！」

「そんな繰り返さなくてもー」

「何が言いたいの、サユカン」

小首をかしげる私とサエちゃん。それがサユカンにはどうも気に入らなかったらしい。

「あ、し、た！　リハーサルなんだけどっ！！」

地団駄を踏むサユカン。だから何が言いたいのさ。

「わたし……一回も練習してないんだけどっ」

サエちゃんと目を合わせる。

ポン、と二人で同時に手を打った。

「忘れてた」

「サユカちゃんにも役あったんだっけー」

「君らねえええええ！！」

あんぎゃーっ！！　と火を吹きながら（イメージ）咆哮するサユカン。

「おーおー、こんな感じの役だったよねー」

「もう練習いらないんじゃないの？」

「いるに決まってるわよっ！　君ら、忙しい忙しいってわたしの練習に付き合ってくれなかったでしょっ！　まだ誰にも見せてないのよ今回の演技！」

「だからー、お父さんお母さんとかに見てもらえばいいって言ったでしょー？」

「は、恥ずかしいじゃないっ」

「イチョウさんは？」

「恥ずか、しいし」

ん？

「私たち相手だと恥ずかしくないの？」

サユカンが真っ赤になった。

「え、っと……そりゃ、恥ずかしいけど、その……いまさら、っていうかっ」

それもそっか。サユカンの醜態なんか腐るほど見てきたもんね。

「カカすけひどっ！！」

あれ、私いま口に出してた？

「ううぅ……どうせ失敗ばかりの毎日よぅ」

「大丈夫だよーサユカちゃん。醜いのがさらに腐ったんだよー？これ以上ひどくなりようがないじゃん」

「どうせわたしは人生の底辺よおおおおおっ！！」

もっと底辺にいそうな人に二人ほど心当たりがあるけど、そんな人らのこと言って慰めにはならないだろうし……よし、話を変えよう。

「じゃあサユカン。今から付き合うよ、劇の練習」

「そだねー。今日やることは終わっちゃったしー」

「……むっ」

俯いていた顔をあげるサユカン。ちょっと嬉しそう。

「そ、そう？　なら、その、お願いしよっかなっ」

「醜い腐った生ゴミの汚名、頑張って返上してねー」

「いくらなんでも汚すぎるわよっ！」

そう言いつつも部屋の真ん中に立ち、登場シーンのポーズをとるサユカン。

「いい？　ちゃんと見ててよっ」

「うんうん」

「遠慮なくどぞー」

「じゃ、じゃあ……こほん」

咳払いしたサユカンは、先日渡した台本どおりのセリフを口にし始めた。

「わたしの名前はモンキードラゴン！　主食はバナナ！」

無害そうな竜だ。

「早口言葉で勝負よっ！」

そして無能そうな竜だ。

「今から我の言うことを復唱するのよっ」

お、見所そのいちだ。

「いくわよっ。すーっ……一つへぎへぎに、へぎほしはじかみ、盆まめ、盆ごめ、盆ごぼう、つみたで、つみ豆、つみさんしょう、書写山の社僧正、粉米のなまがみ、粉米のなまがみ、こん粉米のこなまがみ、雨がっぱか、番がっぱか、のら如来、のら如来、三のら如来に六のら如来、お茶立ちょ、茶立ちょ、ちゃっと立ちょ茶立ちょ、青竹茶煎で、お茶ちゃと立ちゃ。来るは来るは、何が来る。高野の山のおこけら小僧、狸百匹、箸百ぜん、天目百ぱい、棒八百本。武具馬具、武具馬具、三武具馬具、合わせて武具馬具六武具馬具、　菊栗、菊栗、三菊栗、合せて菊栗、六菊栗、　麦ごみ麦ごみ、三麦ごみ、合せて麦ごみ六麦ごみ！」

おおおおおおお！！

「サユカンすごい！！」

「まさか言えるようになるとはー」

サエちゃんと二人で惜しみない拍手を捧げる。

「れ、練習したもんっ」

どうやらまんざらでもない様子。

「さぁ、どうだっ！　わたしに勝てるかっ！？」

台本では主人公――トメが勝つはず。そして。

「ま、負けた……負けたのね、わたしはっ」

ショックを受けたように崩れ落ちるサユカン。うん、演技うまいね。さすが普段から崩れ落ちることが多いだけはある。

「こうなったら、トメ。あなたに食べられるしかないのね」

見所そのに。ニヤリ。

「実はわたし、トメのことが大好きだったのっ。だから本望よっ」

この時点でサユカンの顔は紅潮まっさかり、汗がダラダラ出まくっていた。でも台本は続くから演技も続く。

「す、好きよトメ、大好きっ！　トメの人形がほしいわ、毎日抱いて寝るのっ！　トメの歯磨きがほしいわ、間接キッス！　トメの声がほしいわ、囁いてっ！　トメのご飯が毎日ほしいわ、結婚！　トメの苗字がほしいわ、ビバ結婚！　トメの未来がほしいわ、ひたすら結婚！　トメの、ここ、子供がほしいわ、いやん！！」

大変です。笑い止まりません。

「あぁ愛しのトメさま！　わたしをラブしてハグして全部して！　わたしが何よりほしいのはあなたの瞳！　そう、ずっとわたしだけを見つめていてほしいのよっ、ふっ」

ふっ、と髪をかきあげたサユカンは顔から湯気が出るほど恥ずかしがりつつ、ヤケクソになって演技を続けた。

「トメちゃま、あたち、結婚ちたいっ」

指をくわえて赤ちゃん言葉サユカン。

「トメぴょん。わたしあなたが好きなんだぴょん」

頭の上に手の平で耳を作ってウサギサユカン。

「べ、別にトメなんか好きじゃないんだからっ！　好きじゃなくて、だ、大好き、なんだから」

ツンデレサユカン。あ、これ普通か。

「トメ、ちゅーして♪」

はにかみ甘えサユカン。

「トメェ、手、つないでくんないと、拗ねちゃうぞぉ？」

とにかく甘えサユカン。

「トメ、ん、あっ」

もうどうにでもしてくれサユカン。

などと、サユカンは延々と恥ずかしい演技を続けまくり――

「これで満足かコノヤローッ！！」

台本を思いっきり私たちに叩きつけた。

サユカンは、ゼーハーゼーハーと息を荒くしていた。そんなに興奮しなくてもいいのに。

「ところでサユカン」

「その台本ねー、遊びで作った嘘だからー」

「死んでくれコノヤローッ！！」

ぅおお、さすがに怒りも頂点か！

「あ、あのね、私たちが練習に付き合わなかったのはね」

「わざとなんだよー」

「そうそう！　ちょっと理由があって。本当のセリフは本番前に教えるから」

「……じゃ、わたしが今まで練習してきた台本はなに？」

決まってるじゃん。

「だから遊びだよ。これ見るために主人公の名前トメにしたようなもんなんだから」

サユカンはドラゴンに変身した！

暴れた！

痛かった！

そんな感じに遊びつつ、お楽しみ会はもう間近。

あー、いっぱい笑った。

少しは緊張、ほぐれたかな？

……どきどき。

## カカの天下３９４「謀られた台本」（後書き）

ちょっと略しながら引用させていただいた文章、見覚えのある方もいるでしょう。かの有名な外郎売です。

初めて読む方のためになるべく読みやすく書いたつもりですが…難しいですね＾＾；まぁこれを言うのはもっと難しいのですが笑

さりげに最近練習中だったり……始めてみるとハマるんですよね。興味ある方いらっしゃったら全文朗読してみてください＾＾

……さて、そろそろお楽しみ会が始まります。

どうなることやらっ。

## カカの天下３９５「お楽しみ劇　開場」

お楽しみ会、ねぇ。

どうも、トメです。今日は待ちに待ったお楽しみ会の日。日曜日なので、僕も気兼ねなく貴桜小学校へと参上しました。

体育館で行われるということなので、校門をくぐりそちらを目指していると……見慣れた二人が見慣れないセットでいるのを見つけた。

「ど、どうするんですかー」

「そんなこと言ったって……」

サカイさんと、サラさん？

なぜこんなところに。

「おーい、お二人さん」

声をかけてみると――なぜだか二人はものすごいキラキラした目で僕を見つめてきた。

「あぁー、救世主よー！」

「お助けを！」

体育館入り口を眺めながら立ち往生していたらしい二人は、こち

らに気づくと砂煙をあげて猛ダッシュしながら僕にすがりついてきた。ちょと、うざい。

「聞いてくださいよー」

「トメさん！　トメさん！」

「はいはい聞きます聞きますから離れて――ちょっとサラさん！　どさくさにまぎれてどこ触ってんの！？　サカイさんもそんなとこつままない！」

「摘みどきかと思ってー」

どういう意味だ。

「ともかく事情は？」

「えっとですねー、実は今回のお楽しみ会、わたしたちも参加したんですー」

「え、まじで！？」

「はい……その、衣装係という形で」

な、なんだって！？

この二人、この歳で小学生の仲間に混じってたのか。なんて身の程知らずな。

「トメさんー。なにやら年齢関係でとてもぶち殺したくなるような

こと考えてませんかー？」

「いいいいいいいいえええええええ決してそのようなことは！！」

こんなこと考えた僕のほうは命知らずだった。

「それでですね。このお楽しみ会は参加する小学生の父兄じゃないと入れないって、そこに書いてあって」

ああ、そういえばカカにもらったプリントにもそんなの書いてあったような。

「それで……私たちって実質、他人ですし。どうしようかと……」

でもサカイさんって一応他人ではないような。

視線でそう言ってみると、サカイさんは首を横に振って何かを書くジェスチャーを見せた。ああ、名簿とか書くのか。そりゃヘタしたらサエちゃんにバレるな。

「そうだ！　この場で父兄になってしまえばいいんですよ！」

「その手がありましたー」

「……は？」

二人は何を思いついたのか、揃ってぐりんと僕の瞳をロックオン！

「結婚してください！」

「再婚してください！」

　までやアンタら。

　さて。もちろん結婚なんぞするわけもなく、しかし家族になるという案は採用した。

「この子の姉ですー！　なんでやねんなんでやねーん」

「この兄の妹です！　なんでやねんなんでやねん」

　おまえら……僕と特徴似せるにはそれしかないんかい。

　まぁともかく家族に成りすますという解決策が見つかってよかった。焦ってたらしい二人も、おかげで平静をとりもどしたみたいだし。

「入れてよかったですね、お姉ちゃん……ぷ」

「何か文句ありますかー、妹？」

「お母さんでよかったんじゃないですか？」

「あなたは娘って歳でもないでしょー？　頭の中身以外は」

「あなたこそお姉さんって歳でもないんじゃないですか？　見た目的に」

なんで平静とりもどしたらケンカ始めてんだ、この二人は。

「へぇ、珍しい組み合わせだね。あたしがいない間に何があったのやら」

「うぉ、姉！」

いつのまに隣に！？

「あ、カツコちゃんだー。帰ってきたのー？」

「うん、ついさっきね。さすがに妹の荒れ舞台は見逃すわけにはいかないし」

「晴れ舞台だろ？」

「晴れると思う？」

「……や、荒れるな、多分」

久々に登場したにも関わらず、しっかりと妹のことを把握しているところはさすがだ。

「ホワイトデーの準備はできたのか？」

「おぅ、それはバッチリ！　今はひとまずそれは置いといて……おーい、なにしてんのさ」

姉の視線の先には――なんとタマちゃんとシュー君！？　あの二人まで来たのか。

でも受付で引っかかってるみたいだ。僕は姉と一緒にそちらへ向かった。

「なにしてんのさ、シュー」

「えっと、これ僕はどうすれば」

あぁ、小学校の誰とどういう関係者か書かなきゃならないんだよな。

「そんなの簡単じゃん」

姉は受付名簿をひったくると、先ほど僕が書いた『笠原香加』の保護者の欄にさらさらと書き加えた。

名前『シュー』

関係『トメの嫁』

「よし！」

「よくねえええええ！！」

「お姉さま！！　これはいくらなんでも――」

「あ、まだあった」

名前『タマ』

関係『トメとシューの子供』

「なんちゅう奇跡を書いてんだおまえは！！」

『できちゃった婚。毎晩ラブラブ』

「さらに余計なこと書き込むなや！！」

「はい、これ」

「了承」

「そこな受け付けのおねーさん！　それおかしいと思わへんのですか！！」

「愛は人それぞれですので」

「生暖かい目でみるなぁ！」

「……はんっ」

「冷たい目もやめてぇ！！」

僕の叫びもむなしく、そして静々と泣くシュー君のことも誰も気にせず……

「よし、行くよ笠原家一行！」

なんかとんでもない家族になってしまった我ら一行は、一番良い席へと向かってずんずん進んでいった。

ま、まぁ応援する人間は多いに越したことないし……いっか。

受付で渡されたプログラムを眺める。カカたちの劇は三番目か。

頑張れよ、しっかり応援してやるからな！

## カカの天下３９５「お楽しみ劇　開場」（後書き）

わりと詰め詰めで予定をいれてきて、ついに始まりましたお楽しみ会編。

続き物連続は……と、こないだ言っておきながらまたもや長めの続き物＾＾；前々から準備してきたお楽しみ会なので仕方ないのですが……

これ終わったらしばらく単発話でいきたいなーなんて思いつつ。

明日から、本編開幕です。

## カカの天下３９６「お楽しみ劇　第一部　旅立ち」

待ち遠しい！

あ、突然ごめんなさい、トメです。

ただいま貴桜小学校のお楽しみ会を見物しているのですが……

うちの子の出番はまだかー！！　って感じです。

「かかまだー？」

ほら、タマちゃんもご立腹。

まぁ開会の挨拶は大事だと思うし？　他のクラスの出し物を見るのもいいけれど。

やっぱりメインが待ち遠しくなるんだよなぁ……というわけで他の出し物は適当に流していた。

――そして、いよいよ次がカカたちの出番！

というところで一斉にトイレへと向かう我ら笠原家。いま合唱してるクラスの人ら、ごめんね。やっぱ自分ちの子が可愛いもんで……

さて、準備は万端いつでもこい！

『それでは次は、四年二組による出し物、ハチャメチャ劇、トメの天下、です』

題名を聞いて僕のほうへと振り返る笠原家（仮）一同……僕はあらかじめプリントで知らされてはいたものの、やっぱりかなり恥ずかしい。

『皆さんこんにちはー。ナレーション役のサエですー』

「キャ――むぐむぐっ！！」

思わず絶叫しかけたサカイさんの口を慌てて押さえ込み、帽子とサングラスを神速で装備させる姉。そういや変装も必要なんだった……サエちゃんに見つかってないだろうな。

『えー、この劇は基本的にゆるゆるーっと進んでいきますので、細かいことは気にせずお楽しみくださいー』

「く、あれはサカイさんの衣装ですね。可愛いじゃないですか」

悔しそうに呻くサラさん。そっか、いまサエちゃんが着てるタキシードみたいな衣装はサカイさんが……そりゃ絶叫もするか。髪の長い子がタキシードでビシッと決めてるのってあまり見ないけど、実際に見てみるとかなり可愛いし。

『さてさてー、それでは劇のはじまりはじまりー』

サエちゃんが上座のほうに目配せすると、少しずつ緞帳が上がり始めた。合唱部が歌っている間はずっと下がっていたから、きっとその間に準備は終わっていたのだろう。

公開されたステージの上にはダンボールで作られた木や草がいく

つか設置されていた。背景は絵の具で描かれた森の絵。おそらくこれもダンボールに絵を貼り付け、後ろの壁に立てかけているのだろう。意外と本格的に森に見える。

『昔々、アトランティス大陸のとある森に、おじいさんとおばあさんが住んでいました』

ナレーションにあわせて登場する男子と女子。知らない顔だ。

「じじいいいいいいい！」

「ばばあぁぁぁぁぁぁ！」

『威勢のいい鳴き声――自己紹介ですー』

世のご老人に失礼だぞ君ら。

『ある日、おじいさんは川に洗濯へー、おばあさんはおじいさんが仕事をサボらないか監視にでかけましたー』

おじいさん立場よわっ。というかこの展開、わりとどこかで聞いたことあるような……

『すると川の上から』

おっと、ステージ脇から女の子が数人現れましたよ？

ステージの端に作られたお立ち台に上った女子達は、小さく「せーの」と呟いて……

『どんぶらごっこー、どんぶらごっこー』

声をハモらせて合唱した。効果音係か？

『と、何かが流れてきましたー。どんぶらごっこって何ごっこなんですかねー？』

知らんて。

心の中でツッコみつつも、ステージの脇からごろんごろんと転がってくる歪な物体に視線を向ける。

「まぁ、なんておっきなパイナップルなんでしょう！」

「略してオッパ――」

「略すんじゃないわよ！！」

おばあちゃんチョップがおじいさんの脳天を直撃。それによろめいたおじいさんがパイナップルに激突すると、なんと二つに割れてしまった！

「まぁ、パイナップルの中から女の子が！」

ついにカカの登場だ！　赤ん坊の役らしく白いシーツに包まって目を閉じている。

「なんて可愛い子なんでしょ――」

「なんでやねん」

「うちの子にしてしまお――」

「なんでやねん」

「おっきなパイナップルから生まれたから、それを略してこの子の名前はオッパ――」

「なんでやねん」

『どんな話も早すぎるツッコミで止めてしまうことから、少女はトメと名づけられましたー。ツッコまなかったら巨乳に成長せざるをえない名前になるところでしたねー』

……まさか、僕の名前の由来もそれだったりしないだろうな。

『ちなみに名前の元ネタはそこに座ってる男の人です』

「バラすなよサエちゃん!?」

見世物か僕は!?　あぁ、サエちゃんが僕のほうを指差したから他の方々の視線が……恥ずかしすぎる！

と、赤面してるうちに一旦緞帳が降り、いつの間にか緞帳の内側に立っていたサエちゃんも姿をひっこめた。場面転換か。

『そして、年月は流れー……』

サエちゃんの声と共に再び上がる緞帳。なかなか準備が早い。

森の場面セットは変わっていなかった。

変わっていたのはサエちゃんの衣装だった。カウボーイハットをかぶったウェスタンなガンマンスタイル。どこかで見たような肩出しへそ出しミニスカートだけど、装飾の効果か可愛らしさよりも西部劇に出てきそうな野性味があふれていた……まぁ、子供ながらに。や、子供だからこそ、そういうギャップが似合うのかもしれない。

サエちゃんは腰からハートで装飾された銃を抜くと、客席に向かって撃つ真似をした。

『あなたのハートを狙い撃ちー』

「ぐはぁー！！」

撃たれた！？　血しぶきが上がった！！

サカイさんの鼻血だ。

頬を羞恥と血に染めながら、姉に介抱されるサカイさん。

「ふっふっふ、どうですサカイさん。私の作った衣装！　いつぞや見たサンタの格好をヒントにつくってみたんですよ――」

「ぐっじょぶー！！」

「へ？　あ、はぁ」

「とてもすごくぐっじょぶうううぅぅ！！」

「ど、ども……」

鼻血をぶうぅぅっと出しながら絶賛するサカイさんに拍子抜けしたのか、サラさんもたじたじだ。そんなに嬉しかったのか、娘の肩とへそと太ももも。

そんな観客席側の事情はさておき、劇は進む。

『さてさて、成長したトメの登場ですー』

「はぁー」

肩を落としてだるーっと現れたカカの格好は――赤色が眩しいチャイナブラウスに、しっとりとした黒地のチャイナパンツ姿。髪は軽くまとめられ、小さなお団子になっている。なんでそんな格好なのかは置いといて、とりあえず動きやすそうな衣装だった。

「あれは私の作った服ですねー」

「主役はとられましたか……ま、まぁ可愛いんじゃないですか？」

「あなたの作った服よりは可愛いでしょー」

「なっ！　さっき褒められたから褒めてあげたのに！」

「あれは着てる子が可愛かっただけですー。服は普通でした」

「こ、この！」

この二人は放っておこう。あと可愛いのは同意する。さすがうちの子。

『――トメはもうお腹がぺこぺこでした。なぜならこの森にはもう食料がなかったからです』

お、端にいる効果音係がまたもや声を合わせる。

『キーィィィン……コーォォォォン……カーァァァァン……コーォォォォン……』

すんごくゆっくりと学校のチャイムの音を真似ている……あ、これＢＧＭか、もしかして。

「はぁ……うぅ、お腹、減ったよぅ」

不思議だ。ただ単にチャイムの音を口で、間を置きながらデクレシェンドで歌っているだけなのに、なぜか悲しげなＢＧＭに聞こえてきた。子供の頃を思わせるからだろうか。

「はぁ……ボクは一体何を食べればいいんだろう」」

膝をついて俯き、辛そうに呟くカカ――や、トメか。ややこしいな。まぁ僕は自分のことトメって呼ばないから、これから出すトメって名前は全部カカが演じる役のことね。

『そのときです。トメの呟きを偶然、通りすがりに聞いた人がいました。なぜかネコ耳な少女です』

なぜだよ。

ともかくひょっこりと現れたネコ耳つきの女子は、陽気にトメに声をかけてきた。

「ヘイそこの人！　お腹がすいたのかにゃ？」

「うん、だから君を食べていい？」

「待って待って待っちっち！　あたしを食べてもうまくないにゃ。それよりもお腹が減ってるなら西の国にいきなよ！　ドラゴンが治めてる国があるんだにゃ。そこならきっと食べ物が……はぁ」

「どしたのネコ女さん」

「その妖怪みたいな呼びかたはやめてほしいにゃ……その、実はにゃ、あたしネコ好きでにゃ！　ネコ耳にも憧れててにゃ！　だからこんな役やりたいって劇の希望を送ったんだけどにゃ……」

急にたそがれた顔になるネコ耳少女。

「ネコ耳って……リアルにやると結構キツイのね」

や、そんなことといちいち本番で言わなくても。

「ニャって何よ、バカみたい。ネコじゃあるまいし」

や、だからさ。

「んなこと本番で言うんじゃねぇよ！」

ホントホント。あれ……誰だ？　僕の心の中のツッコミを代弁してくれたのは。

『突然現れたのは、えっとー……ツッコミうさぎです』

「今考えたろ、おまえ」

『だって先生の配役決まったのって最近ですしー。決めてませんでした』

「いくらなんでもぶっちゃけすぎだろ」

呆れた声。しかしサエちゃんが現れたと言っているのに、声しか聞こえず、ステージ上にツッコミうさぎらしき姿はない。

『早く現れてくださいよー』

「う、うるせぇな！」

『なんかボケばっかりでツッコミ役がいないなーと思って急いで採用したツッコミうさぎさん。はやくー』

「だからぶっちゃけすぎだっつの！　う、うあ、押すなおまえら！」

ドン！　と吹っ飛ばされ気味にステージ脇から出てきたのは――頭にウサ耳つけたテン。

「ぷ」

「……トメ、殺す！」

げ、聞こえたか。

『ツッコミうさぎさん、開始早々主人公を殺さないでくださーい』

「あ、そういやこっちの主人公もトメか」

「えっと……続けていい？」

『あ、はいはいどうぞーカカちゃん』

「今はカカじゃねぇだろが！」

もうグダグダだな。

この先一体どうなるんだ？

……逆にちょっと楽しみになってきた。

二部に続くぅ。

## カカの天下３９６「お楽しみ劇　第一部　旅立ち」（後書き）

ついに開演しましたお楽しみ会！
グダグダです。
どれくらいグダグダかっていうとタイトルが「旅立ち」なのに旅立ってないほどのグダグダです。

こんな始まりで続きはどうなるのでしょうか？
次回、緊迫（すればいいなぁ）の第二部をお楽しみに！

## カカの天下３９７「お楽しみ劇　第二部　乱戦」

さて、グダグダになった前回からの続き。再び僕、トメがお送りいたします。

「ボクはドラゴンを許すわけにはいかないんだ！」

ちょっと脱線したけど、気を取り直して劇再開だ。それにしてもカカが「ボク」とか使うと違和感あるなぁ。僕の真似なのかもしれないけど。

「へぇー、なんか因縁でもあんのか？」

観念したのか、ヤンキー座りしながら面倒そうに聞くテン。仮にもウサ耳つけてんだからもう少し可愛らしい座り方すりゃいいのに……それはそれで微妙か。

「ボクね、おじいさんとおばあさんに育ててもらったんだけど……二人とも、ドラゴンに殺されたんだ」

おお、急に重い展開だ。バックで流れてた『キーンコーンカーンコーン』のＢＧＭも心なしかテンポが速くなってきた。緊張感を演出しているのか。

「そう、あれは去年のこと。ボクがドラゴンを食べたいって言ったらおじいさんもおばあさんも頑張ってくれて……失敗して、死んだ」

「それどう考えてもてめぇのせいじゃねぇか」

「許すまじ、ドラゴン！！」

「聞けよ」

復讐を誓う少女、それを盛り上げようとする『キンコンカンコンキンコンカンコン』も最高潮に！！

「残さず食ってくれるわ！」

「食うのかよ！？」

『こうしてトメはツッコミうさぎを従えて、西の国へと行くことになりました』

降りていく緞帳。引っ込むカカたち。再び場面転換か。

あれ、そういやいつの間にかネコ耳少女、いなくなってたな。

『西の国までは少し距離があったのでー、お腹がすいた二人は途中でネコさんを食べましたー』

『ごり、ごり、むしゃっ、ぐちゃぐっちゃっちゃー♪』

「その気色悪い歌やめい！！」

耳が汚染されそうなＢＧＭとテンのツッコミを聞いてるうちに、再び緞帳が上がる。今度の舞台は……街の中かな、これは。先ほどのようなダンボールで作られた木などは一切なく、舞台セットは背景の壁紙だけだった。手抜きか？　それとも出演者がたくさん動くためか。

『さてさてー、西の国に入ったトメとツッコミうさぎー』

三度登場したサエちゃんの今度のお召し物は、シースルーのスカートがセクシーなグリーンのアラビアン衣装。

「はぁはぁはぁはぁ」

そのセクスィーさにやられて呼吸困難なお人が約一名、僕の隣に。

「はぁ……はぁ……つ、作って、よかったー……」

あれが遺品にならないように頑張ってくださいよ？　おかーさん。

『二人は街を歩いているうちに、その街があまり裕福じゃないことに気がつきましたー』

「あのネコ、ここなら食べものがあるって言ってたのにな。何もねーじゃねぇか」

「へ？　あそこらへんに一応あるじゃん。食べ物」

「どれだよ」

「人」

「てめぇは血も涙もねぇのか！？」

「うん。あ、待って。あれ」

何かに気づいたらしいトメは、ステージ脇を指差した。

「勇者様だー！」

「勇者様がいらっしゃったぞー！」

舞台裏から聞こえてくる声。勇者ってトメのことか？

『なんという偶然でしょー。二人は西の勇者に出くわしましたー』

現れたのは殿様だった。

うん、どっからどう見ても殿様の格好にしか見えない。ちょんまげもあるし。え、あれ勇者？

「おらおら！　ショバ代よこせや愚民ども！」

扇子をバサッと振りながら偉そうにふんぞり返る殿様。え？　あれ勇者？

『勇者はただいま地上げ中ですー』

「おい。どの辺が勇者なんだ、あれは」

『彼は先月、バンジージャンプを成功させたらしいですよー』

「すげぇ！」

「まさしく勇者ね！！」

……あぁ、小学生じゃ、そりゃ勇者かな。

「そう、我こそは西の国の支配者、ドラゴン様に仕える勇者なり！　というわけでショバ代よこせ！　わかりやすく言えば税金！」

もう悪い殿様にしか見えん。

「ああっ、この蓄えがなくなったら今月ピンチなのです！」

「知ったことか！　少しは身体のことを考えて飲み会を控えるがいい！」

なんだこの妙に現代っぽい会話は。

「いいな！！」

「なんでオレのほうを見て言う！？」

テンけっこー酒飲むもんなぁ。

『勇者を自称する暴君バカを前にして、我らがトメは怒り狂いましたー』

「コラー！　弱いものいじめしちゃダメでしょー！」

「何を言う！　愚民から物を奪うのは勇者の義務だ！」

ＲＰＧだとそうだな確かに。

「なんでそんなことするのさ！」

「ドラゴン様の命令、もとい国を潤すためだ！　税金を納めないと国が貧しくなって、ろくに食べ物がなくなるんだぞ！」

「ご飯がないならドラゴン食べればいいじゃない！」

「その手があったか――いやいや！」

『惜しい！　もうちょっとで納得しかけたのにー』

ノリで君主を食べるなよ。

「殿！　こちらをご覧ください」

そばに控えていた脇役っぽい男子が勇者になにやら紙を渡す。勇者、だよな？　殿って言わなかったか今。

「こ、こいつ！！」

「ま、まさかこの手配書のヤツか！」

驚愕しながら観客の皆さんにも見えるように掲げられた紙には、カカの写真と共にこんなことが書かれていた。

『猛獣、危険！』

「三年前に森でクマの手を食いちぎっているところを目撃されて以来、危険人物として恐れられていたあの子か！？」

『ちなみにトメは今、六歳ですー』

三歳でクマに勝つとか、どんだけ強靭な生き物だよ。

「まるでお姉さまみたいですね」

「ん、あたしもそう思った」

「ばけものー」

「……指さないでタマ。改めて言われるとちょと傷つく」

なにやってんだか。あ、それより劇は？

「ぬぅ、なればこの僕が退治してくれようぞ！　ものども、であえ、であえー！！」

殿の格好のくせにどっかのお代官のようなセリフを叫んだ勇者君はちょっと気持ちよさそうだ。いっぺん言ってみたいセリフの一つだよね、あれって。

『どこからともなく湧き出てくる西の勇者の下僕たちー』

上も下も真っ黒という手抜きスタイル――じゃなくて、いかにも悪役スタイルで現れた男子たちは、飛び跳ねたり側転したりと動き回りながらトメとツッコミうさぎをとり囲む。

「ツッコミ先生は下がってて！」

「ツッコミうさぎだろうが！」

「じゃあ語尾にウサつけてよ。そしたらうさぎって呼んであげる」

「……わかったウサ」

「下がっててウサ！」

「……おウサ」

カカ特有のよーわからんノリに首をかしげながらもトボトボ引っ込むテン。なんかいろいろ諦め気味なのかもしれないウサ。

「私の夕飯を邪魔するとは不届きなやつらめ！」

カカはバッ、バッと格好つけて腕を振り回し、最後にくるりと回って戦隊モノっぽいキメポーズ！

「全員、吹っ飛ばしてくれる！」

ビシッと決めたカカに観客席からも黄色い声援が！

「よっ、待ってましたー！！」

「カカー！　根性みせたれや！」

「か、カカちゃーん、がんばれー！」

って叫んでるの、僕の身内の皆様じゃないですか！？

僕は何も言わないぞ、絶対に！　これ以上目立つのはごめんだ。

……まぁ少しくらい声援を送ってもよかったかもしれない。体育館内は結構盛り上がってるから声もかき消されただろうし。

何が盛り上がってるかって？

ＢＧＭ隊だよ。

『じゃっ！　じゃじゃじゃじゃっ！　じゃじゃじゃじゃっ！　じゃじゃじゃじゃんっ！　じゃん！　じゃっ！　じゃじゃじゃじゃっ！　じゃじゃじゃじゃっ！　じゃじゃじゃじゃんっ！　じゃん！！』

戦闘の音楽でノリよくテンポよく。すごく大変そうだ。お疲れ様です。

「さあこい！」

ステージの中心を境に、トメと敵の集団がわかりやすく右と左に分かれて対峙する。そして集団から一人の敵役の男の子がトメへ向かっていく――なんだ、こんだけ大勢いるんだから派手な殺陣とか期待したのにな。小学生にそれを期待するのは間違いか。

そう、思ってたんだけど。

「てい！」

「うわぁ！」

カカのしらじらしいパンチ。

くらった男の子の声もわざとらしい。

しかし、くらった男子は吹っ飛んだ。

格好よく。

そう――

バク転で吹っ飛んだのだ！

無事に着地し、ドスンと尻餅をついて倒れる男子。そのまま転がって、いつの間にか敷かれていたマットから離れる。

遅れて観客席から『おおぉー！！』と驚きの声が！　なるほど、こういう魅せ方か！

続いてカカに向かっていくのは二人の男子！

「やぁ！」

「「うあー！」」

カカの回し蹴り。それをくらったフリをする二人の男子は同時にバク転！　綺麗にそろったぁ！

まだまだ続く。

「せぃ！！」

「ぐはぁ！」

次はなんとバク宙！

「たぁ！」

「ぐぉ！！」

バク宙して、さらに空中で身体を捻った！？

驚きだ……小学生の劇でこんなものが見れるなんて。前にカカがお楽しみ会で飛ぶとか言ってたけど、こういうことだったのか。たしかに飛んでいた。格好よく！　よほど練習したに違いない。綺麗に決まる技の数々に観客席からは拍手喝采だ！！

『トメのバケモノじみた強さにより、敵はあっという間にいなくなってしまいましたー。さて、残るは西の勇者とその部下、助さんのみー！』

……助さん？

「こ、この印籠が目に――」

『入らぬかー、と言いたかったみたいなのでこんな役になりましたがー、アトランティスで印籠なんかあるわけないのでー』

あ、サエちゃんが悪そうな顔で笑ってる。

『代わりにー……僕の好きな子の名前が耳に入らぬかーって感じで告白してくださーい』

「……はぁ！？」

おっとぉ！　サエ選手、こんなところでいきなり無茶フリだぁ！

「え、あの、その！？」

『助さんは死を覚悟して、最後に好きな人の名前を叫ぶのでしたー』

「そんなそれっぽい説明付け加えられても！！」

『叫ぶのでしたー』

「いや、あの」

『叫べー』

助さん涙目。

『……はぁ、仕方ありませんねー。じゃあコホン。えー切羽詰った西の勇者は、苦し紛れにＢＧＭ係のアヤちゃんに抱きつ――』

「やめてくださいいいい！　僕の好きなアヤちゃんにそんなことしないで！！」

あ、告白しちった。

じゃんじゃん歌っていたＢＧＭがピタリと止まり、一人の女子がステージへと上がる。あれがアヤちゃんかな？

おっと、ステージの真ん中で対峙しましたお二人さん！

告白の返事やいかに！？

「ごめんなさい」

「うわぁっ！！」

ぺこりと謝られた助さんはバク宙しながら吹っ飛んで、そのままゴロゴロとステージ脇へと引っ込んでいった……憐れ。憐れだけど、これが本気の告白なのか台本どおりなのかが非常に気になる。

『さてさて、なにやらハプニングもありましたがー』

ものごっつ楽しそうやなぁサエちゃん。あのポジションって無敵だしなぁ。

『ついに一人になってしまった西の勇者！　一体どうするのかー！？』

「こうなったら仕方ない。奥の手だ！　出でよ、魔法使い！」

西の勇者が叫んだ。

すると――バサッという衣擦れの音が体育館に響く。

「ふっふっふー」

黒いローブを身にまとい、不敵に笑う少女が一人。

「我こそは――この世界（劇）の支配者！！　無敵の魔法使い、サエなのだー！！」

『た、確かに無敵だあああああああ！！』

いつのまにか衣装替えしてるしー！！

「必殺の呪文！　『ステージの皆は吹っ飛びましたー』」

逆らえずに吹っ飛ぶトメたち！！

『ナレーションつえええええ！！』

恐れおののく観客席の一同！

そして――

え？

おお……

おおおおおおおおおお！！

次回に続く。

# カカの天下３９７「お楽しみ劇　第二部　乱戦」（後書き）

おおおお？（じらし

**カカの天下３９８「お楽しみ劇　第三部　終結」**

「必殺の呪文！　『ステージの皆は吹っ飛びましたー』」

ナレーション魔法使いサエちゃんの問答無用の攻撃により、ステージの上にいた全ての人間が「うわー」とか「飛ばされるー」とか「まいっちんぐー」とか言いながらステージ脇へと引っ込んでいく。

そんな中、その流れに逆行する少女が一人。

チャイナ服姿の主人公、トメ役のカカだ。

「負けるもんかあああああ」

見えない力に吹き飛ばされそうになりながらも（多分そういう設定）踏ん張りながら進み、ようやくステージの端っこにいるサエちゃんに手が届きそうになる。

しかし。

「追撃の呪文ー。『トメは頑張って魔法に抵抗しましたが、健闘むなしく吹っ飛んでしまいましたー』」

「うわあぁっ」

ようやくサエちゃんに届くかというところでくらった追撃。トメはわざとらしい声をあげながら吹っ飛ばされる。

そう、吹っ飛ばされる。

だからその方向に身体を向ける。

大きく深呼吸。

腕を高く上げ、軽くステップを踏み、勢いをつけて頭から地面に飛び込む――！

床に手をつき、ロンダート！（側転しながら次の技にあった方向へと身体を捻ること、この場合は後ろ向き）

勢いを殺さずそのままバク転、さらにバク宙！　って、おおおお！　ニ回転！　ニ回転しました！！　そのまま見事に着地です！

ステージの幅をめいっぱい使った、小学生がやったとは思えない豪快な技に、観客席からは割れんばかりの拍手が起こる！

「おー、やるじゃん妹」

「一番格好よく吹っ飛ばされたな。主人公の面目躍如といったところか」

この姉にして妹あり。運動神経のよさはかなり受け継いでるんだよな、あいつ。

予想以上の観客の反応にびっくりしたのか、カカは役も忘れて恐縮しながらペコペコしている。照れてる照れてる。緊張で失敗とかしなくてよかったな。

その歓声が大体収まってきたところを見て、サエちゃんが改めて

口を開く。劇再開だ。

「さすがは猛獣危険と指名手配されるだけはあるねー。でもそれだけじゃ私には勝てないよー」

無敵のナレーション魔法使いを一体どうやって倒すのか。予想外の展開を期待して様子を見守る。

「じゃあ私だって魔法使っちゃうもんね！」

「ほほー、どんな魔法？」

「召喚魔法だよ！　出でよ――渋車！！」

しぶ……？　渋い車か？

『ざわざわざわざわ』

現れたソレを見てざわめく皆さん。

ええ、そりゃざわめきますよ。

まずね、車っていうのはほらアレ、農家でよく使われる一輪車あるじゃない。あれのことよ。

んでね、それを手に持ってひいてるのがセイジ食堂の店長で、一輪車に乗ってるのが東治の店長なのね。うん、おっさん二人、確かに渋い。

渋いけどさ。

なにしてんのアンタら！？

予想外にも程があるぞ！！

数分前、楽屋裏。

「おい弟。なんで俺はてめぇなんぞと二人でこんなところにいるんだろな」

「知るかよ兄貴。俺ぁただ、カカ嬢ちゃんがこないだうちの店に来たときに今回の差し入れを頼まれただけだぜ」

「俺だってその口よ。特製栄養ドリンクを作ってくれってな」

「俺んとこは元気のでる菓子だとよ。あの歳で差し入れまで手配するたぁなかなかやるもんだが……なんでこんなヤツと一緒に」

「まったく同感だぜ……お、緞帳が下りるな」

「おーおー、あわただしく準備してるなー。頑張れガキどもー！」

「ほれほれ、動け動けー！　……ん、どうしたカカ嬢ちゃん」

「あんたらも動け」

「というわけで友情出演です！」

ざわざわざわ！！

「……なぁ弟よ、俺たちゃ注目されちまってるな」

「そりゃこんなことしてればなぁ。一輪車の乗り心地はどうよ？」

「なかなか楽しいぞ。ちゃーん、とか言ってみるべきか」

「兄貴、意外とおちゃめだな」

お、落ち着いてんなー、あのおっさんら。小学生に混じって異様にもほどがあるのに……すげー度胸だ。

「ふっふっふー。なかなか楽しいおじさんを呼んだみたいですが……それで私をどうするおつもりですかー？」

たしかに。あんなおっさん車がなんの役に立つんだ。

「行け、渋車！！」

「どうすりゃいいんだ、嬢ちゃん」

「んとねー、説得でもしてみて」

車の意味ねー！

「よう、ナレーションのお嬢ちゃん」

「今の私は魔法使いですよー」

「おうおう、じゃあ誰がナレーションやるんだい。人間な、あたらえられた役割を一つずつ地道にこなすことが大事なんだぞ？」

「癪だが兄貴の言うとおりだ。子供のうちからそんな欲張っちゃあいけねぇよ」

……普通に説得してるし。

「そうですねー。わかりましたー」

説得されてるし！？

『というわけでナレーションに戻った私。役目を果たした渋車は帰っていくのでしたー』

……なんだったんだ、アレは。

「あー退場前に一つ。セイジ食堂とファミレス東治をよろしく頼む」

「ちゃーん！」

「おお、言ったな兄貴」

「言ってやったぞ」

呆気にとられる僕ら一同。ここにはマイペースなヤツらしかいないのか。

『えーっと、コホン。魔法使いのせいで西の勇者も敵もあらかた吹っ飛んじゃったことですしー、カカちゃんは心おきなくドラゴンの元へと行けるのでした』

緞帳が下りていく。場面転換だ。

「やー、なかなか面白いもんだねぇ」

「そうですね、お姉さま」

「ちゃーん」

「おー、タマちゃんはあれが気にいったみたいですねー」

「次はどうなるんでしょうか、わくわく！」

笠原家（仮）もいい感じに楽しんでるっぽいし、このままうまくいってもらいたいもんだ――

再び楽屋裏。

「さぁ、ついにサユカちゃんの出番だよー」

「頑張れサユカン！」

「が、頑張れって言われたって……わたしまだ何を喋って何をすればいいのかわかってないんだけどっ」

「サユカちゃん、この写真見てー」

「え……こ、これはっ！？」

「この間、偶然トメお兄さんとサラさんがデートしてるとこを見かけてねー、そのときの場面を写真に撮っておいたのー」

「……っ」

「あとはご自由にー」

緞帳が上がる。

『さてさてー、ついにやってきましたドラゴンの住みか！』

最初に見えたのはナレーションのサエちゃん。今度はＯＬっぽい格好だ。しかしなぜこう何度も衣装替えするんだろう。僕の隣にいるお母さんを萌え死にさせる気なのか。

まぁそれはともかく、舞台はあまり変わってないな。まぁドラゴンの住みかと言っても街を治めるようなドラゴンだから、街の中のまんまでいいのか。

「どこだ、ドラゴン！」

「はぁ……オレ、まだやんなきゃいけねぇのか」

意気揚々と現れるトメ、そしてひたすらダルそうなツッコミうさ

ぎ。

さてさて、今度はどんな展開が？

『そしていよいよー！　満を持して、ドラゴンの登場ですー』

「トメさんの浮気者おおおおおっ！！」

予想外の展開きたあああああっ！？

ドラゴンっぽい着ぐるみを纏ったサユカちゃんは今にも火を吹きそうな勢いで叫んだ！

「トメさんの女ったらしっ！　ラブ男！　ツッコミ！！　トメさんのばかあああああっ！！」

『えーっとー、実はトメとドラゴンは昔付き合っていたみたいですー。そしてトメが女を作って捨ててしまった過去があったけどー、そのまま忘れてこんな所へのこのこ現れてしまったというわけですー』

なんで僕のほう見ながら言うの？　それじゃまるでトメ役の説明じゃなくて僕自身の説明みたいやないですか！？

『ドラゴンがなにやら観客席に向かって叫んでいるような気がするのはキノセイですよー』

いやいやいや余計なこと言わないでよ！　うあサユカちゃんメッチャ僕のほう見てるし！　観客の皆様の視線も感じるし！　なにその『あの子をフッておいてこんなとこ来たんだ……』みたいな痛い

視線は!?　劇!　劇の話でしょ!

「わたしというものがありながらっ!　そんな女とイチャイチャしてっ!!」

そんな女?　や、僕の隣にはサカイさんしか――あれ、いつの間にかサラさんに替わってる?

なんで僕の腕にしがみついてんの?

「さ、サユカちゃん怖い……ぎゅ」

アナタ、ワザトヤッテマセンカ?

「イチャイチャすんなあああああっ!!」

あんぎゃあああああああ!!　と吼えるドラゴン様!!

『えっとー、そんな女というのはツッコミうさぎさんのことですー。ほら、イチャイチャしてー』

「だってさ、イチャイチャしよっか先生」

「んな無理して劇の辻褄あわせなくてもいいと思うぞ。さっきサエがあいつのこと『トメの名前の元ネタ』って紹介したせいで察したのか、全員モノホンのトメの方見てるしよ」

しかもニヤニヤしながらな。あの、僕は別に劇の出演者とかじゃないんですけど!?

「トメさんっ！　なんとか言ってよ！」

何も言えませんよこんな公共の場で！！

『や、ごめんなサユカちゃん。僕、胸がない娘はダメなんだよ』

おい待てこらナレーション！　僕の声マネで何言いやがりますか！？

「あ、このうさぎは結構胸あるね。そこのドラゴンと違って」

「わ、バカやめろどこ触って、ん」

なに追い討ちかけやがってくださりますかそこのチビトメ！！

「トメさん……さいってーっ」

炎を吐かれるより痛いドラゴンサユカの言葉。

『さいってー！　さいってー！　さいさいさいさいさいってー！』

その痛さを倍加させるＢＧＭ隊の合唱。

そして心の中で『最低』と呟きまくっているであろう観客の皆様の視線攻撃。

……僕、なんか悪いことした？

「いいもんいいもんっ……じゃあわたしもこんなことしてやるもんっ！！」

こんなことってなんだよ、僕が浮気したって設定ならサユカちゃんも浮気するってのか？　やれるもんならやってみろよもー。どうにでもなれよー、と投げやりに思っていた直後。

……え？

呆気にとられた。

サユカちゃんが……浮気した。

そう。

もう一人のトメに。

「え、ちょと、サユんちゅ！？」

『あ、あらー？』

さすがのサエちゃんも予想外だったのか、説明も忘れて見入ってしまった。

「――ぷはぁっ！　ちょっ、サユカンいくらなんでもやりすんちゅっ！？」

二回目！？

あ。

あああ。

あああああ。

カカが……サユカちゃんが……汚れていく……

「――ぷはぁっ！　どうだ！　見たかっ！！」

「食べるつもりが、私が食べられた……」

よよよ、と崩れ落ちるカカトメ。勝利の雄叫びをあげるドラゴンサユカ。

その目を見てようやく気づいた。

サユカちゃん、緊張とかで完全に錯乱してる。

勢いでここまでやっちゃったんだろうけど……これ、冷静になったときにどう思うんだろう。

多分しばらくは壊れるな、うん。間違いない。

「我が弟よ、なぜそんなにつまらなさそうな顔してるのだね？」

「は？」

「それは果たしてー、カカちゃんが食べられたのがつまらないのかー、サユカちゃんが浮気したのがつまらないのかー」

「どっちなんですか、ねぇ？　トメさん」

「トメまっかー」

「うんうん、真っ赤ですねぇタマさま」

ニヤニヤしまくりながら聞いてくる笠原家（仮）ども。

や、別にこんなの見たからって何にも思ってないですよ！　ええ！　別にこれくらい、なんだっていうんですか！　たかが……たかが……た、かが……あれ、くらい……ふんっ！　気にしてないんだからな！　だからこのこと考えるのもうやめっ！！

『強引にトメを奪ったドラゴンはー、そのままトメと無事に結ばれー、街の民からがっぽりと税金をふんだくりながら幸せに暮らしましたとさー』

……おぉ、こんだけ滅茶苦茶しといて今更だけど、なんとなくそれっぽいエンディングに聞こえる。

『ちなみにその日の夕飯はもちろんドラゴン料理などではなくー、その場にいたツッコミうさぎをカレーにして食べたんだそうなー。めでたしー、めでたしー』

『るー、るーるるるーるーるー♪　るー、るーるるるー♪』

ＢＧＭ隊の明るい曲調にあわせ、出演者の皆がステージの上に整列する。こんなにたくさんいたんだな……準備係とか大道具係の子たちだろうな。さりげなくＢＧＭ隊にも曲が変わる際に入れ替わりとかあったし。真ん中の女子だけは最初から最後まで歌いっぱなしでいたな。たしか告白されてた子か。かなり息絶え絶えだけど大丈夫かな。

『それではこれでー、四年二組のハチャメチャ劇、トメの天下を終わりたいと思いますー。気をつけー、れー！』

ぺこり、と揃って頭を下げたみんなに、体育館中から盛大な拍手が！

これを見た一般客の皆様はいったいどう思ってるんだろうか……ハチャメチャすぎて理解しにくい気がするんだけど。特に最後のあたり。

そして、何より気になるのは。

これ……どこからどこまで台本どおりだったんだ？

気になる。

## カカの天下３９８「お楽しみ劇　第三部　終結」（後書き）

お楽しみ劇、これにて閉幕＾＾

いかがだったでしょうか。偶然にも４００回記念っぽくなったので、かなり好き勝手にハチャメチャ書かせていただいたつもりですが笑

さぁ、このあとは打ち上げ！　そしてカカラジですね。

ふぅー……いっぱい書いたなぁ笑

## カカの天下３９９「変わったこと、変わらないこと」

カカたちの劇が終わった後も出し物は続いた。

五年生による合奏はとても気合が入っていた。次は最上級生ということもあってか、気迫にあふれていたと思う。

すでに卒業式を迎え、お楽しみ会は自由参加となっていた六年生による『本当の卒業式』という劇は涙ものだった。観客として来ていた六年生の大半が泣いていたみたいだ。

そして四年生――サユカちゃんのクラスの合唱は。

ノーコメントにさせていただく。

そして――

お楽しみ会の閉会式が終わった後、学校前。

「よーし、じゃあ打ち上げいくぞ！　オレのおごりだ！」

「でも手配したのはカカでしょ」

「うるせぇ黙れ西の殿様」

「テンカ先生……語尾にウサつけるの忘れてるわよ。げほ」

「てめぇこそ美声忘れてるぞ、アヤ」

「げほ……うう、歌いすぎて喉がガラガラ……思いだせない……私ってどういう声だっけ……？」

「じゃあ僕が思い出させてやろうアヤ坊。んとね、でろでろズーンでろでろでろ♪　グチャネチョベチャ――」

「それ危険すぎてボツになったＢＧＭでしょ！」

「でもこういう声だったよ」

「たしかにその裏声は似てたけど！」

やり遂げた顔で騒ぎまくるカカのクラスの面々は、本当に楽しそうにはしゃいでいた。

「いやー、しかしカカ。すごかったな！」

「あいつ、昔はちょっと暗かったのにな」

「そうそう。変なヤツでさ、みんなで遊んでてもあんま笑わねーのな」

「それがまさかこんな楽しいヤツになるとはなー」

「あら、カカちゃんは前から楽しい子だったわよ？」

「ええー、そうかー？」

はしゃぎながらも主に出てくるのはカカの話題だ。そう、確かにあいつは変わったと思う。

発想がどこかすっ飛んでるのは相変わらずだが、とても『いい子供』になってきたんだと思う。明るくて、人気があって、みんなを引っ張っていく……誰もが思いつくような、『いい子供』に。

このまま五年生になったらクラス委員とかやったりするのかな。リーダーシップを発揮してカリスマ生徒会長になったり……なんて。

成長して僕の元を離れてくんじゃないかなーなんて。

そんな心配なんかしてたんだけど。

「ずいぶんと人気者のようだが」

「うっさい」

「いいのか？　あいつらについていかなくて」

「いいの」

我が妹君は、僕の元を離れるどころかしっかりと背中にひっついていた。クラスメイトから隠れるように。

「はやく、うちいこ」

「まぁ……事前に用意しといてって言われてたから、ちゃんと打ち上げ用意はしてあるけどさ。本当にいいのか？　せっかくみんなでやった劇の打ち上げなんだし、あっちに行ってくればいいじゃんか」

「ヤだ。あんま大勢でいるの好きじゃないもん」

「あんなに大勢を引っ張って劇を完成させといて、何を今更」

「それは気が向いたからやっただけ。そんなのしょっちゅうやってたら疲れちゃうよ。あと三年はやらなくていいや」

こういうことなのだ。

この娘、劇を終わらせたらもう満足、と言わんばかりにクラスメイトと交わろうとしないのである。

「なんだかんだで劇はおもしろいのができたと思うし、なかなかいいリーダーしてたんじゃないのか？」

「別にー。私はやりたいことをこうやりたいって言いまくっただけだし、細かいこと仕切ってくれたのはサエちゃんだし」

「でもいろいろ二人で考えて、みんなを引っ張ったことには変わりないだろ？」

「……む」

「向いてるんじゃないか、こういうの。またやってみれば？」

「クラスみんなのリーダーを？」

「そ」

「は、冗談」

クラスのみんなに『変わった』とか『楽しいヤツ』と呼ばれた僕の妹は――

「そんなことしてたらサエちゃんとかサユカンとかトメ兄と遊ぶ時間が減るじゃん」

もしかしたらこのままどんどん変わってくんじゃないかと思われた僕の妹は――

「ろくに知らない人のことなんか、いちいち気にしてられないよ」

僕の知らないカカになってしまうんじゃないかと心配した僕の妹は――

「面倒くさい」

ぶっちゃけた話、あんまり変わっていなかった。

冷めた目で、だるそうに言うカカ。

二年前くらいのカカを思い出す。そう、あのときもこんな感じで、楽しそうにすることはあっても、大口あけて笑うようなことはあまりしなかった。

でも。

「好きな人と一緒にいるほうが大事なの」

でも。

「さーさ、見つからないうちに早くいこ！」

でも――

あの頃は、こんな楽しそうに笑うことはなかったんだ。

変わった、間違いなく。

成長してくれた、いい方向へ。

だから結局……嬉しいと感じるべきか、寂しいと感じるべきか。

そんな疑問に戻ってしまう複雑なお兄ちゃん心なのであった。

「トメ兄、いこー」

「……はいはい」

でもまぁ。

今はとりあえず、頑張ったお姫様にご褒美をあげないとな。

「じゃ、帰ろうか」

そう、帰ろう。

この馬と。

……うま？

「ひひーん」

「なぜにおのれは最近よく見るリアルな馬の顔なんぞをかぶっておるのだ」

「……や、なんかサユカンと顔あわせづらくてさ」

「あぁ……なるほど。サユカちゃんが自分のクラスの合唱のときに大仏の顔をかぶってたのも同じ理由か」

あれは異様だった……ステージに並ぶ生徒の中で、一人だけ無表情なでっかい大仏の顔がいるのだ。それでそのまま合唱したのもすごかったが。

「さっきサエちゃんに聞いたところによると、劇が終わってからサユカンずっと大仏やってるらしいよ」

「うあ」

冷静になって劇での自分を振り返ったら、誰にも顔を見せたくなくなったんだろうな、きっと……それでもちゃんと合唱に参加したのは偉いけど。

「じゃあ家に帰ったら馬と大仏がそろうわけか」

「馬の耳に大仏だね」

「入らねーよそんなもん」

「サエちゃんは何をかぶろうか迷ってたみたいだよ」

「なぜかぶる必要がある」

うちに帰ると案の定、仮装パーティになっていた。

サエちゃんがちょっかいを出してサユカちゃんは壊れ、カカが追い打ちをかけて大暴走。そしてなぜか僕がこき下ろされて、姉やシュー君やタマはそれを見て笑って——そんな見慣れた光景。

カカは大口をあけて笑っていた。

すごく、楽しそうに。

今はきっと、それでいい。

## カカの天下３９９「変わったこと、変わらないこと」（後書き）

ハイテンションな打ち上げを期待していた方がいましたらば謝罪もうしあげます。
私も劇の妙なテンションのままドカーンと打ち上げを書こうかなーと思ったのですが……

私の中のトメがふと振り返ったのです。今回のカカを。

何かのリーダーをやるって、結構大きいことなんですよね。
リーダーを経験したことがある人ならばわかるでしょう。人を仕切る、それって結構しんどいことなんですよね。
それをどんな形であれやり遂げたカカを見て、成長を感じずにはいられませんでした。
だから確認したかったのです。カカが、どう変わったのか。
結果は本編の通りです。変わった部分もあり、変わらない部分もあり。
ですが――トメの思ったとおり、何が変わったにせよカカが大口あけて笑ってるなら、それでいいんじゃないかと思います。
これからもカカの物語は続きます。成長もするでしょう。逆もあるかもしれません。それでももしこの子の物語に付き合っていただけたなら……とても、嬉しいです。
ではでは、ちょっとしんみりしましたが今日はこの辺で……って、え？　なに香加。へっ、打ち上げしたい？　騒ぎたい？　や、でもここじゃ――カカラジで！？　そんな無理やりグラス持たせてちょっとまってあぁカンパ――

……明日へ続く。

# カカの天下４００「第十二回、カカラジ！」

「こんカカ！　もう春ですね、外はポカポカになってきて頭もポカポカしてる人も増えてきてなんとも騒がしくなりそうじゃないですか、ええもちろん騒がしくいきますよなんてったってお楽しみ会が終わった直後でしかも４００回目ときたもんだ、こんな騒がずいつ騒ぐのさ、しんみりなんてしてらんないよー香加です！」

「はいはい、しんみりして悪うございましたね留です」

「小枝ですよー」

「……沙由歌よっ」

「括弧よ！」

「修です」

「珠だー」

作者です。

と、いうわけで……

『お疲れ様ー！　カンパーイ！！』

前回のあとがき見た人ならわかるでしょう……うぅ、無理やり引きずられてきた私。

「何言ってるの。古今東西、打ち上げは盛大にって決まってるんだよ」

「香加ちゃんの言うとおりだよー。それを留さんと一緒になってしんみりしちゃってー」

……すいません。

「……ごめんなさい」

「まぁまぁ、飲んだら許してあげるよ。はい、留」

どすん！　と置かれたバカでっかいジョッキ。

「飲め」

「え、や、しかしこの量は」

「世の中には『ザル』って言葉があるね、弟」

「あ、ああ。いくら酒を飲んでも平気な人のことだろ？　まるでザルに酒をそそいでるみたいだからそう呼ばれるっていう……」

「今からアンタはざるを通りこして『枠』よ！　ザルの枠！　ザルのような引っ掛かりすらないほどの勢いで飲むの！」

「んな無茶な！」

「宴会、それは誰かが飲んで魅せなきゃいけない場所！　お楽しみ会では香加たちがいろいろ魅せてくれたから、あんたはここで魅せ

るのよ――ほれ一気！　一気！」

「ごぶぁあああああああ！」

おー、流しこんでる流し込んでる。あっはっは。

あれ？　てっきり面白がって盛り上がってるかと思ってたけど…

…香加たち、静かだね？

「……や、沙由歌ちゃんがさ」

まだ大仏の顔かぶってるの？

「どうしても取りたくないんだってー」

「むー、じゃあ私も馬の顔かぶる！」

「あー、私だけ除け者はやだよー」

あぁ、また仮装パーティーに……

「じゃー私は作者の顔かぶるねー」

私の顔は馬とか大仏と同列ですか！？

「読者に見せられないのが残念だね」

勘弁してください！

「まま、飲んで飲んで。お酒好きでしょ？」

ま、まぁね。んぐんぐ。

「修さんも飲んでー……と思ったらー」

「ちょ、珠さ――ごぶぁ！？」

「枯れたら水をあげないとー」

「僕のキャラが枯れてるといいたいのですかぶぁごくごくごく……！」

おー、ジョーロで花に水をあげすぎる勢いで酒が修君の口に……さすが一部でチビ姉と呼ばれてるだけあるね、珠ちゃん。括弧と行動がそっくりだ。

「私たちはオレンジジュースー、お酒飲みたいなー」

「ダメだよ小枝ちゃん。一応これラジオもどきなんだから、酔ってないでしっかり放送しないと」

「うー、わかったー。いつか本編で飲もーっと」

「うんうん……ところで沙由歌ちゃん。その大仏かぶったままどうやってオレンジジュース飲んでるのか教えてくれない？」

「……んぐんぐっ」

「おー、大仏の鼻にストローさしてるよー。ここが口のあたりなんだねー」

「じゃあ私も自分の口のあたりに穴をあければいいんだね！」

「馬の顔の……あごのあたりだねー。作者の顔かぶってる私と一緒だ」

私の顔どんだけでっかいんスか！？

あー……コホン。区切りがなかなかつかないので流れ無視して説明しますが、これはネット小説『カカの天下』を盛り上げるため、ぶっちゃけトークや作者の本音などを放送する情報ラジオに酷似した番組です。登場する酔っ払いどもは本編自体と直接は関係ないのでお気をつけください。

あと、私の顔は多分普通なのでくれぐれも勘違いしないようお気をつけください。

「あぐ、は、鼻にささったぁ」

「私もー」

「んぐんぐ」

揃って鼻からジュース飲んでる人らは無視して、一旦ＣＭへ。

『あなたは、ドラゴンカレーというものを知っているでしょうか？

そうですか、知りませんか……実は詳しいことはわかっていないのです。私も噂でしか聞いたことがありません。なんでもそのカレ

ー……き、キスの味がするとか。なぜかは知らないですがこの街で、主に小学生の間でささやかれている噂話なのです。キスをしたことがない若者たちは死に物狂いでその製品を探しているのですが、いまだ情報はつかめず……何か情報を知っている方がいましたら、どうかご一報ください』

CMがあけて。

「前から思ってたけどさ、これってCMなの？」

細かいこと気にしてはいけません。

「そか。あ、あとさっきさ、たまにはいいかなー、と思って作者いじってみたけど……こんなんもアリなのかな？」

さー？　どっかから苦情さえこなければいいんじゃないでしょうかね。

「苦情きたら修正よろしくね。さて……それじゃおたよりコーナーにいこっか」

ところで香加。いつの間にか私と小枝ちゃんと沙由歌ちゃん以外いなくなっちゃったけど……みんなどうしたんでしょかね？

「飲んだくれ組はあまりにもひどい姿なので、別部屋に移動してもらいましたー」

「今ごろ地獄の真っ最中だよ」

「……んぐんぐっ」

あと沙由歌さん？　先ほどからジュースばっか飲んでて全然喋ってないんですが。

「お楽しみ会のアレがあったからね。私と喋りたくないんだってさ。せっかく気を使って私も馬かぶってるのに。ひひーん」

「……んぐんぐっ」

「私みたいにひひーんとかいう鳴き声でもいいから喋ってみれば？」

「大仏の鳴き声ってどんなんだろねー」

たしかにこのまま無口でいられるのは居心地が悪いですね。だから少しでも喋ってほしいのはわかります。でも大仏の鳴き声ってなんでしょ。『ダイブッツー』とでも言うんでしょかね。

「……んとっ」

考えてる考えてる。

「……ぶ」

お、言うのかな？

「ぶ……ぶーっ！！」

それブタじゃん。

「ま、いっか。とりあえず意思疎通はできそうだし」

「本格的な沙由歌ちゃんいじりは本編ってことで、進めちゃいましょー」

い、いいのかね？

「ぶーっ！」

あ、いいの？　はいはいわかりました。

「それじゃ改めておたよりコーナー――」

待ってください！

「へ？　なに、作者」

えっと……実は前回、読者様の質問で、本編の中で答えられそうなものはなるべくそっちで答えていきたいと言ったのですが……その……

「あー、お楽しみ会準備に話を割きすぎて、その手の話を書く暇がなかったわけですかー」

その通りでございます！　すいません！！

「作者ぶーっ」

あぁっ!?　意味がわからないけど責められてる感じがひしひし

とっ！！

「じゃあどうするの。次のカカラジまで先延ばし？」

んー……本編で書けるかもしれない質問は先延ばし、今後書く機会がなさそうな質問は今答えましょう。

「わかった。じゃあカカラジネーム『ねっちょ』さんから。『ツンデレゾンビってどんなだよw』だってさ」

んとね。

『あんた病気なんでしょ！　し、仕方ないからこの臓器あげるわ！　え、なによ。腐ってるからなんだってのよ！　腐っても体って言うでしょ！　な、なによなによ……ふん、いいわよ。いらないんだったら……それであんたが死んで私の仲間になってくれるなら……その、寂しく、なくなるんだし……』

こんなだよ。

「すげーゾンビだ」

「流行るねー」

流行ってたまるか。はい、次。小枝ちゃんお願い。

「カカラジネームー、『今日のお楽しみ劇に物申す』さんからいただきましたー」

物申されましょう。

「えっとー、『主役がいない打ち上げをテンカ先生はどうやって盛り上げたんですか？』だってー」

ふむふむ。それではそのときのテンカ先生の様子をＶＴＲでどうぞー。

『先生！　カカちゃんどこ行ったんですか？』

『サエちゃんはー？』

『ドラゴンはっ！？』

『あー、うるせぇうるせぇ。ったくあいつら面倒なこと押し付けやがって……お、そうだ。いいかてめぇら、よく聞けよ。あいつらがステージの上で何やったか覚えてっか？』

『なんでもやりすぎてどれのことだか』

『あーもっともだな。クライマックス、なにして終わった？』

『ムッチューしてました』

『そうだ。ムッチューしたからには責任をとらなきゃならねぇ。観客席に今回の主人公の名前の元ネタ男がいたろ？　トメってやつ。あれカカの兄貴なんだよ』

『じゃ、じゃあカカちゃんは！』

『サユカと二人でトメのところに行ってるんだろな。そしてサユカがこう言うんだ。お兄さん、妹さんをくださいーーってな』

『うおおおおおおおおおお！！』

「うおおおおおおーはこっちのセリフよっ！！」

おお、大仏沙由歌ちゃんがしゃべった！？

「なんでわたしが香加なんかをもらわなきゃなんないのよっ！」

「だって私、食べられちゃったんだもん……ぽ」

「沙由歌ちゃん、責任とらなきゃー」

「き、君らがあんな舞台を仕組むからいけないんでしょうっ！！」

馬と大仏のカップルかぁー。いったいどんな子供が生まれるんだろう。

「きっと馬の耳に大仏が生えた可愛い子が生まれるよ」

「そんな妖怪、死んでも生まないわよっ」

「まぁまぁ、これでもかぶって落ち着いて」

「むごっ」

大仏の顔の上からさらに馬の顔をかぶせる香加さん。これで防音もばっちりだね。

「沙由歌ちゃんをからかうのはあとでって決めたの。次いこ次」

「そだねー。えっとー……カカラジネーム『けろりこけろりこけろりろりん』さんから」

なんの呪文だ。

「んとねー『なにやらあとがきで今回はのんびりしすぎたーと書いてありましたが、もし余裕があったら他にどういうお話を書かれてたんですか？』だってー」

ああ、はい。書こうかなーと思って書く余裕なかった話、たしかにいくつかありました。そのうちの一つでも紹介しましょうかね。

「へー、どんなの？」

便所の話です。

「……は？」

ほら、お楽しみ会の準備を始めるときにサエちゃんが言ってたじゃん。お楽しみ会の準備を進めていって、できなかった人には便所味の給食を食べさせるとか。

「あー、私もそれやりたかったなー」

ちなみにお二人さんに聞きますが、もしやるとしたらどうやってました？　便所味っていうのはいろんな解釈できそうですが。

「私だったらー、そうですねー……」

『はいー、便所味の給食ですー』

『え……？　ふ、普通の給食に見えるけど』

『そうですねー。でも便所味ですー』

『ど、どのへんが！？』

『さー？　食べてみればわかりますー』

「こんな感じで普通の給食をさも特別に見せて、気分悪く食べさせたりしますかねー」

「さすが小枝ちゃんだね」

うん……まったく労力を使わないところが小枝ちゃんらしい。で、香加は？

「私はもっとストレートに……」

『はい、便所味のカレー。食え』

「でっかい声でそう言って、私の持ってきたカレーを食べさせるかな」

みんなが普通の給食を食べる中、一人だけ便所味と宣言されたカレーを食べる……なんて恐ろしい！！

「お食事中にこれ読んでる人には嫌な話題だね」

そこはほら、食事中に何か読んだりするのは行儀悪いことだから自業自得ということで。

「そんなんでいいのかな……あれ、もう終わり？」

はい、残りの質問は頑張って今後の本編で答えます。それではＣＭ！

『ドラゴンカレーの手がかりを掴みました。このファミレスです。店の名前は『東治』です。それではここの店員に聞いてみましょう。すいません、インタビューいいですか？』

『ええ、なんなりと』

『この店にはドラゴンカレーというメニューがあると、そしてそれはキスの味がするという噂ですが、本当ですか？』

『ええ、たしかにそのカレーはあります。でもまぁ、本当にキスの味がするかはわかりませんが』

『と、いうと？』

『このカレーのおかげでキスをしたというカップルがいる……ただ

それだけです。しかしそれをきっかけに、いつのまにか小学生の間で噂が広まってしまったんです。ここのドラゴンカレーを食べると好きな子とキスができる、とね』

『なるほど……キスの味がする、というのは人から人へ渡るうちに歪んでいった情報なのですね』

『そうです。そしてその噂を信じるかどうかはお客様次第、私たちはただ、おいしいカレーを提供するのみです』

『ありがとうございました……以上がドラゴンカレーの真相のようです。好きな人とキスしたい、でもなかなか踏み出せない……そんな人はここにきて、カレーの魔力にすがってみるのもいいのではないでしょうか？　さて、それでは次の噂話レポートに参ります――』

な、なんだこのＣＭは……

「あー、ほら。バイトのお兄さんいるでしょ？　私と結構気が合う人」

う、うん。

「でさ、今回のお楽しみ会で私、皆に差し入れしてたよね。そうしたらいいんじゃないか、って教えてくれたの、あのお兄さんなんだよ」

いつの間にそんなサイドストーリーが……

「で、差し入れついでにおっちゃんたちについてきて、隠れて劇見てたみたい。劇が終わってから話しかけたら、『これは使える』って呟いて」

「なるほどー。私たちの劇をきっかけに都合のいい噂を広めて、さらにドラゴンカレーってメニューを作って売り出したわけですねー」

食べればキスができる……そんなジンクスがあれば随分と売れそうだ。

「むむー、私より黒いですねーその人。ライバルかもー」

二人の対決は見てみたい気もするけど……とりあえず今回はそろそろエンディングのお時間になってしまいました！

「もうかー。あ、そうだ。留兄たちがどうなったか、見てみる？」

「ちょ、ちょっとこわいねー」

ふむ、みんなで行けば怖くない。行ってみよう。

別部屋の扉を開ける。

すると――

「うおー！！　馬だ！　馬がいるよみんな！！」

「馬刺しか！！」

「肉ですねー！！」

「くー……」

うあ、寝てる珠ちゃん以外、超ハイテンション……うああ今は馬の顔になってる沙由歌ちゃんに括弧が飛びついてきた！！

「うぉりゃー！！　肉よこせ肉……うおおお！　馬の顔をとったら下から大仏が！！」

「なにぃ！！　誰かが馬の耳から大仏入れたのか！！」

「弟よ！　馬の耳に大仏はあったんだ！　馬の耳に念仏っていう言葉は間違って伝えられた言葉なんだよ！！」

「そうか！！　勉強になったぞ！」

「ところでお姉さま！　その言葉の意味はどんなんでしょー！？」

「馬の耳に大仏いれる勢いで酒を飲めということじゃないか！？」

「姉ってあったまいー！！　よっしゃー飲むぜ飲むぜ」

「食うわよ食うわよ」

「ぶーーぶうううううううう！？」

馬かブタかわからないまま連れ去られていく沙由歌ちゃん……

「大丈夫だよ。どっちもお肉には変わらないから」

食べられること確定ですか。

「なんだかお酒って楽しそうですねー」

や……あそこまでいくと確実に数時間後に地獄が待ってると思う。

「吐いて吐かれて便所味……か」

香加さん？　いい加減その手の話題から離れません？

「小学生の間じゃこんくらいは当たり前だよ。便所なんか特に大好物だよ」

「便所味の商品が出たら子供に大人気かもしれませんねー」

やめてください、君らの街の商店街だと作りかねないから……

――さて！　気を取り直しまして！

ずいぶんと滅茶苦茶になりましたが、今回の騒動はこれにて一段落です。バレンタイン後もなんだかんだでゆっくりできなかった感じなので、今度こそしばらくのんびりまったりに行きたいと思います。

いろんなメッセージをくださった方々、誤字を指摘してくださる方々、感想を書いていただいた方々。

重ね重ね、御礼を申し上げます。

めでたく４００回を迎え、さらにはネットにこの小説が載ってか

ら一年が経過しました。正確な日付は覚えていませんが……三月始めあたりだった気がします。

それから一年、毎日ずーっとこの小説を載せ続けることができたこと。

たくさんの感想をいただいたこと。

いろんな読者様とのふれあいができたこと。

山ほどある思い出を大事にしながら、今後もこの作品を書いていきたいと思います。よろしければ、またお付き合いください。

それで、ですね。この一年、いろんな話を書いてきましたが……みなさんのお気に入りのお話は何話でしょうか？

一年を振り返る意味もこめて、人気のある話ランキング投票！なんぞをしてみたいと思います。

ルールは簡単。今までの投票企画のように感想欄やメッセージにて『何話が好き』と書いていただければオッケーです。投票の状況にもよりますが、上位になった話の裏話や、書こうと思ったきっかけなんぞを公開してみようかなーなんて思います。

〆きりは、次回のカカラジまでです。投票待ってます……が、投票内容が内容だけにカカラジ寸前に出したほうがいいかもしれませんね。カカラジ直前の話でももちろん投票可能ですし……そこは皆様にお任せします。

さて……

なんだかさっきから一人で喋ってますが、香加たちはどうしたのでしょうか？

……あ。

いつの間にか酒飲み部屋に連れ去られてる。

地獄になってる。

仕方ありませんね。今から私、酔っ払いどもをカカラジチョップで成敗してきます。その瞬間にもんじゃ焼きが出来上がってみなさんに不快な思いをさせるかもなので、チョップを境にラジオは終わらせておきますね。

ではでは皆様。

今後もカカたちをよろしくお願いします。

カカばい♪

あんど……

カカラジチョップ！！

この番組は、東治のバイト定員の提供によってお送りしました。

## カカの天下４００「第十二回、カカラジ！」（後書き）

また予想外に長くなってしまい、載せるのが遅れましたが笑　無事に４００到達です＾＾

人気のある話ランキング、投票待ってますね＾＾

……え、お楽しみ会にいたのにラジオに出てない人がいるって？

あの二人は何だか二人でどっかいったみたいです。まぁ、彼女らのお話はいずれ……

ではでは。

明日からはまた、のんびりまったりお付き合いください＾＾

## カカの天下４０１「春。カカの恋」

「春休み！！」

「あー、そだね。おめおめ」

そんなわけでトメです。

どんなわけか？　ああ、カカの言ったとおりですよ。お楽しみ会が終わった翌日にすぐに修了式があるのです。そしてさっき学校から帰ってきたカカは、晴れて春休みに突入したというわけですよ。

「春休みに入ると春を実感するよね」

「小学生のカカはそうだろうけど、僕には春休みなんかないからな。別に春なんか感じないよ」

「む……それは可哀想な。いつまで冬眠してんのさトメ兄」

「してねーよ」

「なんとかして春を感じさせてあげないと、トメ兄はずっと寝たきりに」

「人をおじいちゃんみたいに言うな」

「名前にピッタリじゃん」

「あぁそうですねコンニャロー」

「んー、春といえばコレ！　って感じのって何かないかな」

なんだかよくわからないけど春を演出したいらしい。と言っても桜とかまだ咲いてないから花見もできないしなぁ。

『春といえば――』

そんなときに聞こえてきたのが、つけっぱなしにしていたテレビのこんなフレーズ。

『恋の季節！！』

「こい、かぁ……トメ兄、してくれば？」

「や、いきなりそんなこと言われても……」

「仕方ないなぁ。じゃあ私がしてくるよ」

「あっそ」

恋、ねぇ……こい、こいか……

そんなの気軽にできないよなぁ。

「お、あの男の人がいいかな。じゃ、いってきまーす」

「気をつけてなー」

そうか、カカが恋ねぇ。

……恋？

鯉じゃなくて？

故意でも乞いでもなくて？

恋？

「ちょっと待ちなさい！　そんな軽い気持ちで恋することなんて、お兄さん許しませんよ！！」

慌ててカカを追いかける。しかしカカはすでに玄関を出て、外を歩いていた二十代前半くらいの男性に話しかけようと――

まずい！　そんな髪の毛を染めたチャラチャラしたどこの誰とも知らない男と、恋を――

「来い！！」

「え、あ、はい……」

テクテクとこちらに男を連れてくるカカ。

「してきたよ、こい」

「あぁ。すげぇなおまえは」

全然予想できなかった。カカの考えることはまだまだわからん。

「え、あの、それで……俺はなんで連れてこられたので？」

さー？

「おにーさん、『こい』してる？」

「え、あ、うん。一応……同じバンド仲間の子が、その、ね」

頬を赤らめて答えるあんちゃん。派手な髪の毛してるわりには純情そうだ。

「へー。じゃその子とどこいくの？」

「え、いや、別に、どこかに行く予定はないけど……」

「それじゃ『来い』してないでしょ！！」

「えええ！？」

んな無茶な。

「そ、そうなんでしょうか……」

「そうだよ！　おにーさん『来い』をなめてるよ」

「そうなのかな……『恋』ってやっぱり、もっと積極的にならないとダメなのかな」

「当たり前だよ。どっか行かなきゃ『来い』にならないよ」

「うん、わかったよ。もっと頑張って『恋』してみる。誘ってみるよ」

なんだこの会話は。

「ありがとう、おかげでちょっと勢いがついたよ」

「いいのいいの。頑張ってね男の子」

なんでちょっといい話になってんだ。

朗らかにバイバイと手を振り合う二人を見て思った。

この和み具合。ちょっと春っぽいかも。

「さて、トメ兄」

「なんだよ」

「来い！！」

「どこにだ」

んーと……と考えながらカカは居間に戻る。僕もそれについていく。

そしてテレビを見た。誰かが歌っていた。

『はるばる～きたぜ、函館～♪』

「はる――函館に来い！」

「いかねーよ」

多分カカの頭ん中は年がら年中春なんだと思った。

## カカの天下４０１「春。カカの恋」（後書き）

……サブタイトルでちょっとビビった人、挙手（笑

恋じゃなくて来い。結局はいつもの感じのカカでしたとさ。
しかし久々にふつーな感じの話書きました。
最近長いのばっかり書いてたので短いような気もしますが、カカ天は基本的にこのくらいの長さなんですよねぇ。

春……私にとっては眠くなる季節です笑
桜はやく咲かないかなぁ……桜の下でお昼寝とか最高ですよねっ。

来い！！（なにが

# カカの天下４０２「サユカの任務、ちゅー編」

「そろそろサユカンの家だね」

「だねー。いるかなー」

ちわ。春休みに入ってもいつもどおりにサエちゃんと一緒に歩いてるカカです。

そう、いつもどおり遊ぶはずだったんです。いつもの……三人で。

なのにもう一人はいません。なぜかというと連絡がつかないからです。お楽しみ会の打ち上げで大仏を演じきって以降、そのもう一人――サユカンは、私たちがメールしても電話しても全然反応してくれないのです。

これはもう突入しかないという結論に達して、私たちはサユカンの家に向かっているのですが……会ってくれるかなぁ。

「あ、サユカン発見」

「買い物帰りみたいだねー」

ラッキー。部屋にでも閉じこもってたらどうしようかと思ってた。

サユカンちはもう目と鼻の先だ。家に入られる前に接触しよう。

「おーい、サユカン！」

「サユカちゃん、久しぶりー」

「いやあああああああああっ」

なんか変質者にでも遭遇したかのような悲鳴をあげられてしまった。

「さ、サユカン？」

「くるな……くるなぁっ」

や、なんかけっこー傷つくんですけど。

「サユカちゃん？　どうしたのー」

「わ、わたしを食べないでっ！」

や、あのとき食べられたの私なんですけど。

「馬は！　大仏は！？　誰かっ、馬か大仏を貸してっ！！」

そんなもん貸せる人おらんて。

「うううううっ」

むぅー……真っ赤になってるサユカンを見る限り、どうやらお楽しみ会でのチューは彼女にかなりのトラウマを残してしまったらしい。自分からしたくせに。

「サユカン！　あのさ……」

「ううう……な、なによっ」

警戒心むき出しのサユカンに、私は優しく……

「投げキッス、んー、ちゅっ」

追い打ちをかけてみた。

「狙撃されるぅっ！！」

効果は抜群だ。

「うううううっ、サエすけぇ」

サエちゃんに泣きつくサユカン。サエちゃんはそんなサユカンを優しく抱きとめて……

「直接チュー」

さらに追い打ちをかけた。

「何もかも吸われるぅっ！！」

効果はとことん抜群だ。

弾かれたような勢いで駆け出し、自分の家に一目散に駆けていくサユカン。

それを呆然と見送った私たちは……

「どうしようサエちゃん。あの子おもしろい」

「困ったねー。もっとやろー」

さらなる追い打ちをかけることにした。

おじゃましまーす、とサユカンのお母さんに挨拶して家にあがりこむ。サユカンの部屋の前までたどり着くと、中からは荒々しいゼーハーゼーハーという声が聞こえた。

「サユカン。なにそんなに興奮してんの？」

「もっとしてほしいんだねー」

「違うわっ！！」

おぉ、扉を隔てても全然聞こえるサユカンの怒声。

「しばらく私に構わないで！　もうチューもキスもこりごりよ！そんな単語聞きたくもないわっ！　大嫌いよっ」

「じゃあちゅー学生とかも嫌いなの？」

「嫌いよっ！　早く卒業してしまえばいいのよっ！」

「おみくじで中吉ひいた人は？」

「忠吉さんになってしまえばいいのよっ！」

「中年は？」

「くたばればいいのよっ！！」

や、それいいすぎ。

「中国は？」

「滅ぶがいいのよっ！！」

大問題だし。

「チューリップは？」

「頑張って綺麗に咲けばいいのよっ」

ここだけ優しいね、可愛いなーくそ。

「どうしよっか、サエちゃん」

何か思いついたっぽいサエちゃんは、扉の向こうのサユカンに向かって声を張り上げた。

「んー、そうだねー……よし」

「サユカちゃーん。そんなにチューって言葉が嫌なのー？」

「ええ、嫌よっ！　もう二度とそんな単語の入った行為はしたくないわっ」

「でもサユカちゃん、いま引きこもりチューだよねー？」

バン！！　といきなり乱暴に開かれるドア。そこには息を切らしたサユカンが……よほど慌ててドアを開けたらしい。

「くっ」

「サユカちゃん、私たちから逃亡チューだねー」

おお、うまい！　サユカンは逃げようとした足を見事にピタリと止めた。なるほど、『～中』と指摘することでサユカンをコントロールするんだね！

よーし、私も。

「サユカン、呼吸チューだね」

「んぐっ……！」

「カカちゃーん、サユカちゃん死んじゃうよー」

「あ、さすがにヤバイか、ごめんごめん。サユカン、息止めてるさいチューなの？」

ぷはぁー、と大きく息を吐くサユカン。苦しそうだ、ごめんね。

「ちょっと調子にのりすぎたね」

「そうだよーカカちゃん。無茶なことは言っちゃダメー」

う、反省。

「ところでサユカちゃん、いま人間チューなのー？」

「人間をやめろとっ！？」

「サエちゃんが一番無茶言ってる！！」

「う、馬！　大仏！　誰か馬か大仏を貸してえええええっ！！」

あらら、元に戻っちゃった。

じゃあ次は……

「そんな感じでサユカンで楽しく遊んだんだよ、今日は」

「へぇ……」

夕方、帰宅した私は今日の出来事をトメ兄に報告していた。

「キスとかチューとか聞くとすんごい真っ赤になって慌てて可愛くてさー、もうトメ兄にも見せたかったよ」

「ふぅん……」

「どしたの、変な顔して。私とサユカンが仲いいから嫉妬でもしてるの？」

「そう、それ」

「え、なに。本当に嫉妬してんの？　おー」

「や、違う。それじゃなくてさ」

「どれさ」

「カカとサユカちゃんがチューしちゃったじゃん」

「うん。おかげで仲も急接近さ。だからトメ兄も嫉妬してるの？」

「じゃなくてさ。そんなに急接近していいのか？　サエちゃんの前で」

「……へ？」

「サエちゃんはおまえの嫁だろ。嫁の前でチューとか浮気みたいなことしてていいのか？」

「盲点だった！！」

言われてみればそうだ。

どうしよう！

考えないと……

離婚になる前に！

## カカの天下４０２「サユカの任務、ちゅー編」（後書き）

正確には「ちゅーから逃げる編」ですねこれは。いつかちゅーをする任務も書きたいもんです。がんばれサユカン。

しかし……サユカちゃんをいじりはじめると、どうも予定より長くなる傾向にありますわ笑

## カカの天下４０３「少し親っぽいサカイさん」

『はいはーい？』

「あ……どうも、サユカですっ」

夜分遅くにすいません、サユカですっ。電話の相手はサカイさん……相談したいことがあってかけたのだっ。

『どうしましたー？』

「あの……実はその、お楽しみ会でのことなんですけどっ」

『あー、サユカちゃんが大仏の顔で歌ったお楽しみ会ですねー』

うっ、嫌なところ思い出すわねっ。

「そ、そうですっ」

『大仏なのにお経じゃなくていいのかなーって不思議に思ってたんですよー』

「そんなことはどうでもよくてっ！　あのその、カカすけたちのお楽しみ劇のことなんですけど」

『あー、あのサエによるサエのための劇のことですねー』

「サエすけは別に主人公じゃないでしょっ」

『あははー、ヤですねーサユカちゃん。うちの家では代々、目立たないとこにいながらも全ての糸をひいて操るポジションを主役と呼んでるんですよー』

……やっぱサエすけの親だわこの人。ええほんと、わかっていたけど間違いなくっ。

『それでその劇がどうしましたー？　打ち上げで何かあったりでもしたんですかー？』

「そういえばサカイさん、打ち上げにいませんでしたね。サエすけがいたから仕方ないですけど、どこにいたんですか？　サラさんもいませんでしたけど……」

『はい、一緒にいましたよー。えっとですねー』

聞くところによると、なんとサカイさんとサラさんは二人でプチ打ち上げをしていたらしい。いつの間にそんなに仲良くなっていたのかわからないけど、あまり想像がつかない組み合わせに興味を持ったわたしは詳しく話を聞いてみた。

そのときの様子はこんな感じらしい。

『サラさんの作ったあの衣装、凝ってましたねー』

『ふふ、そうでしょ。時間かけてるんですよ』

『私には無理ですよー』

『またまたそんな……』

『あんな細かいとこまで時間かけるなんて、よほど暇じゃなければできませんー』

『ひ……ま？　あ、あはは。テキトーにやってダサくなるよりはマシですから』

『でも凝ったのにダサかったら救いようがありませんけどねー』

『……あはは』

『……うふふー』

『お待たせしました、生ビール二つお持ちしましたー』

『じゃ、乾杯しましょーかー』

『そうですね。お疲れ様です、ダサカイさん』

『ダ……サ？　ふ、ふふふー、お疲れ様ですーダサラさん』

『私は若いからそんなに疲れてませんけどね』

『……私は無職の誰かさんと違って――』

「す、ストップ！　もういいですっ」

『えー、これからが面白いんですよ？　ダサユカちゃん』

「わたしまで仲間にいれないでっ！」

あまりの邪悪な会話にわたしまで真っ黒になりそうだわ……っ！

「それよりもっ！　わたしの相談を聞いてくださいよっ」

『あー、そういえばそうでしたねー。どんな相談なんですかー？』

わたしは事情を話した。お楽しみ劇で勢いに任せてカカすけとキスしてしまい、それが恥ずかしすぎてカカすけとまともに顔をあわせることができないことを……

「今日、カカすけとサエすけがきて……そのことをからかわれて、それだけならいつものことなんですけど……」

結局、わたしはまともな会話ができなかったのだ。

ずっと頭に血がのぼりっぱなしで……

「どうすれば、いいんでしょう」

『んー』

サカイさんはしばらく『んー、んー』と唸り続け……やがて口を開いた。

『サユカちゃんは、カカちゃんが好きですかー？』

「それは、は、はい。好き、ですよっ」

わたしの数少ない友達だし……本人には絶対言わないけどっ。

『好きな人とキスしたんですよねー？』

「まぁ……はい」

『じゃー別に問題ないんじゃないですかー？』

「で、でもっ！　相手は女の子ですよ！？　わたし……ファーストキスは好きな男の人って決めてたのに……」

『じゃーカウントしなきゃいいじゃないですかー。相手は女の子だからってことでー』

「でもっ、実際にキスしちゃったのは変わらないんだし……」

『じゃーキスしたことを忘れるとかー』

「忘れられませんよっ！　だから相談してるんじゃないですかっ！　もっとマジメに聞いてください！」

『……マジメに言ってるんですけどねー』

え？　あれ？

サカイさんの声……たしかにマジメだ。

『いいですかー？　普通、起きてしまったことは変えられません。でも自分の中では変えられるんですよー。あれは自分にとってはああいうことだった……そういう風に自分で決めてしまえばいいんですよ』

自分、で……？

『サユカちゃんはどうすればいいのかわからないんですよねー？キスしたっていう出来事が大きすぎて』

「はい……」

『どうにでもすればいいんですよ、自分の中で。大きいことも小さくしてしまえばいいんです』

え……っ、だって、普通に考えて、キスってすごく大きな……

『これから先、いろんな出来事があるでしょー。いいことだけじゃなくて、嫌なことも思い通りにいかないこともたくさんあるでしょー。それをどう思うかは、全部サユカちゃん次第なんですよー？だって、自分がどう思うかは自分にしか決められないんですから』

自分がどう思うかは……自分にしか、決められない。

だから……どうにでも思えばいい？

「自分にとって……都合がいいように、決めて、いいんですか？」

『もちろんですー。その考えを人に押し付けると話がややこしくなりますがー、自分に関してはそれでいいんです。自分にとってはこ

うだった――そう言って堂々としてればいいんですよー。人はみんな、そうやって生きていくんですから』

物事を自分なりに受け止めて、自分なりに解釈して、自分なりに糧にして生きていく。

そういうものなのだと、サカイさんは教えてくれた。

すると不思議なことに――それだけでわたしの心は落ち着いてしまった。

女の子とキス、とか、ファーストキスが、とか。あんな人前で、とか。

いろいろ困惑する想いはあったけど。

結局のところ、カカすけとキスしたこと自体は、別に嫌なことじゃなかったんだから。

なら、それでいいんだ。特別なことはない。ただ親友とじゃれあっただけだった……そう、決めたっ！

「ありがとうございます、サカイさんっ。おかげでわたしがどう思うか、決められました！」

なんだかわたし、何気にサカイさんにお世話になってるわよね……またお礼に愚痴聞いてあげないとねっ。

『ふふ、それはよかったですねー』

「はいっ、今ならサエすけともキスできるような気がしますっ」

『その唇ちぎりますよー？』

こわっ！！

でも、本当にありがとう、サカイさん。あなたは立派な親ですよっ。

……あれ。

わたしの親じゃないはずなんだけどな。

## カカの天下４０３「少し親っぽいサカイさん」（後書き）

カカ天世界の中ではわりかし年長組のサカイさん。
親らしく子供に何か教えたりもします。
でも教える相手はいつも余所のうちの子……
かなしいっ！！

## カカの天下４０４「カカとしりとり、レベル３」

「しりとりがしたい！」

「そうですか」

「しりとりの『り』からね」

どうも。適当な返事も気にせず勝手にしりとりを始めるような妹を持つトメです。

「リンダ」

「誰だよそれ」

「こないだしりとりしたときトメ兄が言い出した名前じゃん。ほら、続き続き」

そうだっけ……えっと、『だ』だな。だ、だ……

あ、着信音。僕の携帯電話だ。

「悪いカカ。ちょっと電話出るから」

「ダメ」

「ダメって言われても」

「じゃー電話しながらしりとり続けてよ」

なぜそこまでこだわる？

「電話相手は……テンか。なら、まぁいいかな」

「あ、せっかくだからそのまま一人しりとりしてみてよ。一言喋ったらしりとりの続き言うの」

「ん、わかった」

なんでもいいや、テンだし。電話マークをポチっとな。えっと、『だ』からだよな。

「もしもし。ダンボ？」

『誰がダンボだ』

「気にするな、冒険野郎」

『誰も冒険なんざしてねぇよ！』

話が進まない……やりづらそうな顔をカカに向ける。

「んと、『ただし～』とか、『さらに～』とかつければいいんじゃないかな」

なるほど、文章をつなげて不自然にならないようにするんだな。

『ま、いいや。オレの用はな、今度の週末飲まねぇかと思ってさ』

次は『う』か。

「ああ、いいぞ。ただし運動不足」

『関係あんのかよ』

「ねーよ。ただしクリスマス」

『クリスマスにはあんのか!?』

「だからねーよ。細かいこと気にするなって言ってるだろ？　オッケーだよ。ただしスキンシップ」

『どっか触らせないとオッケーじゃねぇのか!?』

「さらにプリクラ」

『飲みながら触りながらプリクラを撮る気か!?』

「でもランドセル」

『どういう格好でなにさせる気だ!?』

おもしろい……

しばらく遊んでからネタばらしして、テンとは普通に飲む約束をして電話を切った。

「これ、おもしろいね。私もやってみたい」

隣で電話の内容を聞いていたカカが愉快そうに言った。すると……

「お？　都合のいいことにカカの電話も鳴ってるぞ」

「やた！　えっと、サユカンからだ」

「じゃあしりとりの『り』をとって『リンゴ』からスタートだ」

「ほいほい、ポチッとな。もしもしゴリラ？」

『誰がよっ！？』

おー。声がこっちまで聞こえてくるわ。

「気にしないでよラッキーボーイ」

『わたしは女よっ！！』

あ、ガールか。そういやさっきテンにも『野郎』って言ったけどそこはツッコまれなかったな。『野郎』で合ってたのか。

『まったくもう……相変わらずわけわかんないんだから』

「だってインド生まれ」

『嘘つきなさいよっ！！　インド生まれだと皆カカすけみたいになるっての！？』

「だってレインボー」

『理由になってないわよっ！！』

レインボゥだから……次は『う』かな。

『ともかく……そのっ、昨日はゴメンね。明日からはまたいつもどおりになるから……また一緒に遊ぶわよっ』

「もちろんだよ。実はウソ」

『ウソなのかよっ』

「わ、乱暴な言葉づかいだねサユカン。ダメだよそんなの。でもソレがいい」

『どっちよっ』

「だからダメなんだってば。なぜならインド生まれ」

『インド関係あるのっ！？』

や、予想以上に面白い。

今度みんなにすすめてあげよう。

冗談の通じる相手限定の遊びだけどな、これ。

## カカの天下４０４「カカとしりとり、レベル３」（後書き）

しりとりやってるって知らなかったらホントわけわかんない電話ですね、これ。

ぜひやってみてください（ぇ

## カカの天下４０５「トメ先生のツッコミ講座」

「――以上だ。わかったか？」

「おす！」

元気のいい返事でよろしい。あ、トメです。

いまカカにノリツッコミというものを伝授したところです。なぜこんなことをしているかというと、カカが春休みで暇だったから、ただそれだけです。

「簡単に言えば、ボケたあとに『って、そんなわけないやん』って自分で自分でツッコむんだね」

「そそ」

本当は他の人のボケにノッかってからツッコむのが正しいんだけどな。最初はこれくらいでいいだろう。

「じゃー早速試してみるか」

「うん。そうだね……最近あんまり話してないし、お姉にでも電話かけて試してみよっかな」

カカは自分の携帯を取り出し、ピポパっと操作。

「――あ、もしもし。お姉」

どうやら出たみたいだ。

「聞いて聞いて。あのね、トメ兄ったら最近変な趣味に目覚めたんだよ」

む……何を言う気だこいつ。まぁどんなこと言っても最後に『そんなわけないやん』って言えばいいんだけどさ。

「夜中に私の体操服を着て町内を全力疾走して、すれ違った通行人の人に敬礼しながら『世界が平和になりますように！』って叫ぶの。おまえみたいなのがいるから平和にならないんだよって感じだよねーあはは」

ピ。

「ってそんなわけないやん」

「って待てやそこな妹よ！！　電話切ってからソレ言っても意味ないだろが！」

「む、ノリツッコミにツッコまないでよ。ツッコミにツッコむって変でしょ？」

「そっちこそツッコミでボケるなよ！！」

あーややこしい。

「わかったよ、次はちゃんとやるよ。もいっかいお姉にかけるね」

「そうしろ」

まったくもう……姉はバカだから信用するだろうが。

「あ、もしもし。お姉？」

今度こそちゃんと言えよ。

「私のじゃなくてお姉の学生時代の体操服だったわ」

ピ。

「って、そんなわけないよねー」

「だからなんで切ってから言うんだよ！！」

「キレてるのはトメ兄でしょ！！」

「なんで逆ギレしてんだよ！！」

早く誤解を解かなければおそろしいことに！！

「はいはい、わかったわかった。もう一回かけるよ」

こうなったら……またカカが変なこと言う前に僕が割り込んで言うしかないな。

「あ、もしもし。お姉」

来た！　よし。

「今の話ね、全部嘘だから――」

「って、そんなわけないだろ！！」

ピ。

「って、なんでそこで正直に言うんだよ！　なんで切るんだよ！」

「びっくりして、つい」

「つい、にしてはタイミングよすぎだろうが！　あぁどうしよう…きっと姉のことだから信じきってるよ……」

「大丈夫、いくら姉でもそんな冗談くらいわかってくれるよ。トメ兄が想像してるような市中引き回しの上、磔、獄門！　なんてことにはならないよ、絶対」

「そ、そうかな」

「って、そんなわけないやん」

「そこでノリツッコミ使いますか！？　鬼ですねあなた！！」

「ま、ともかく間違いなく死刑だね」

「……」

「……」

「そんなわけないやんって言えよ！！　ノリツッコミしろよ！！」

「しろと言ったりするなと言ったり……トメ兄はどうしてほしいのさ」

「もう何もしないでください頼みますから！！」

ほんっとにもーこの妹は！！

「わかったよ。何もしないし何も言わない。約束する」

頼むよマジで……姉に電話っと。

……よし、出た。

「もしもし、姉か？」

『死ねばいいのに』

怖いです！！

「や、今カカが言ったのはさ、ぜんぶ冗談なんだよ」

『あんたも肯定してたでしょが』

「それは――」

「そうだね！」

ピ。

「……ちょいとカカさん。なぜに僕の声マネをして、なおかつ勝手に僕の電話を切りやがりましたか？　もう何もしないし言わないって約束したろ？」

「そんなわけないやん」

「そんなわけあれよ！　たまには！！」

あ、メールがきた。

姉からだ。

『君の寿命はあとニ分』

カップラーメンができるより早いですね。

誰か「そんなわけないやん」って言ってください！

あ――

あああ――

みなさん。

さようなら。

って、そんなわけないやん！

……ないよな？

## カカの天下４０５「トメ先生のツッコミ講座」（後書き）

そんなわけないやん（なにが

カカはツッコミを覚えてもボケますね。

そんなわけないやん（あるだろ

トメってこれから死ぬみたいですよ。

そんなわけないやん（ホントに？

姉ってホワイトデーのプレゼント、ちゃんと用意してるんですかね。

そんなわけないやん（そんなわけあれよ！！

## カカの天下４０６「遅い白い日、早い花見」

「さて、集まったな皆の者！」

ぐるりと一同を見渡し、声を張り上げる姉。

「今からホワイトデーのプレゼントをあげよう！　さぁ喜べ！！」

今回は高らかに宣言した通りの話みたいです。あ、僕トメね。

ホワイトデーのためにどこかへ旅していた姉はいったいどんなモノを用意したのだろうか？　すごく気になるが、それよりも真っ先に気になることがある。

ここにはあのバレンタインでゲームに参加したメンバー（テンとサカイさん省く）が集められているのだが……

「わーい、何くれるのかな」

「ぱちぱちぱちー」

素直に喜ぶカカとサエちゃん。この二人は疑問に思ってないようだけど……

「それはいいんだけど、なんでこんな場所でっ？」

「まだ桜も咲いてないのに……」

僕はサユカちゃんとサラさんの意見に賛成である。

ここ、この場所が問題なのだ。

「なぁ姉。なんでこんな公園の端っこでレジャーシート広げて花見みたいな形になってんだ？　まだ花も咲いてないのに」

先走って花見を計画したみたいで格好悪いじゃないか。通行人が変な目で見てるぞ。

「いいじゃん。あたしらの頭ん中が春で、頭の中に桜が咲いてるってことにすれば」

「そういうことにすれば頭が可哀想な集団決定だぞ」

「そうそう！　可哀想に思ったんだよこの桜の木」

パン！　と平手で姉が叩いたのは傍らに生えていたみすぼらしい木。これは……桜、なのかな？　なんだか他の木よりも痩せているというか、生命力があまり感じられない。

「見てよこの木！　なんか寂しそうじゃん？　ここはあたしたちで盛り上げてあげようかと」

「花が咲いてからでいいんじゃないか？」

「咲くかも怪しいじゃん。こんなヘタレっぽい桜。それにどうせ咲いた花もしょぼいに決まってるし、花より団子なあたしらは元よりそんなもん見ないし」

あんた良いこと言いたいのか悪いこと言いたいのかどっちですか。

「ともかく！　先取りで花見をしつつ、あたしのホワイトデープレゼントを受けとるがいいわ！」

「わーいわーい、さっさとよこせお姉」

「お腹減りましたー」

ま、いいけどね。ピクニックとでも思えば。

「それでカツコさん。しばらくどこ行ってのっ？　聞くところによると、この日のためにどっか行ってたのよね」

「よくぞ聞いてくれました！　やー、さすがにあたし自身もバレンタインはやりすぎたと思ってたんだよね。だからこれは、ほんっと気合入れる必要があると思ってさ！」

「気合入れて、どこに行ってたんですか？」

「各地方のパティシエに弟子入りしてお菓子作りの修行してきた」

気合入れすぎ。バカだコイツ。

「予定じゃホワイトデーに間に合わせるつもりだったんだけどさ、とある店で結構見込まれて、気がついたら辞められなくなってたんだよね」

姉が、お菓子作りを、見込まれた？

「お姉、自分のキャラわかってる？」

「破壊だけじゃなくて創造もできたんですねー。びっくりですー」

「わたしの予想だと、その作ったお菓子でみんなの味覚と人格と人生を破壊するんじゃないかしらっ」

「み、みんないくらなんでも言いすぎでは……」

僕も年少トリオと同意見だけど、パティシエに見込まれたというのが本当なら期待はできる。この姉、昔から器用だし。

「見込まれて、それでどうやって辞めたんだ」

「まー他の店で修行させてもらってるときに追い出された理由と一緒なんだけどね」

ん、そういや『各地の』ってことは一箇所に留まって修行してたわけじゃないんだよな。しかも全部一緒の理由で追い出されてんのか？

「酔って絡んできた客を殴ったらクビになった」

「それ普通、居酒屋を辞めるときの理由だろ」

「酒飲みの周りには酒飲みが集まるもんなんだよ」

「つまりはあんたのせいか」

いるだけで酔っ払いが寄ってくるのか……そういや動物操るスキルもあったなこの姉。ますますわけわからん。

「さてさて、いよいよ本題！　みんなの分のオリジナルお菓子作ってきたから、どうぞご賞味あれー」

そう言いながらシートの端に置いていた包みを取り、バレンタインゲームで迷惑をかけたみんなに一つずつ渡していく。

「はい、サユカちゃん」

「あ、ありがとうございますっ」

「よかったね、サユカン。で、お姉。このお菓子の作品名は？　『初めての創造』とか『おまえの人生オワタ』とか『これでも食べて便秘だしてください』とか？」

昔、カカが姉に手紙を書くときにふざけて『お便秘ですか？　私は電気です』と書いていたのを思いだした。『元気』とかけてんのな。

「さっきサユカちゃんが言っていたのを踏まえてー、『人生ブレイカー』でいいんじゃないですかー？」

「人生、ブレーカー……そうですよね、人生って欲張って色々と手を出すと……落ちちゃうんですよね、ブレーカーみたいに……はぁ」

「こらこらサラさん。うまいこと言って落ち込まないの」

わいわいと作品名を出して盛り上がる僕ら。しかしそれらを全て一蹴して、姉はあっさりと正しい作品名を口にした。

「や、サユカちゃんにあげるこのお菓子の作品名は『ファーストキスのジレンマ』ね。解決した？」

「なんで知ってるんですかっ！？」

「はい、サラちゃん。このお菓子の作品名は『意外と口が悪い』ね。おねーさんびっくり」

「ほっといてください！」

「はい、サエちゃん。作品名は『意外と甘えん坊』ね。むふ」

「な、なんで――！！」

や、そんな睨まれても！　僕は何も言ってませんよ！？

「はい、妹。作品名は『嫁の心を取り戻せ』ね。がんば」

「うん、がんばる。ってなんでその話を知ってるの！？」

この姉……本当にどっか行ってたのか？

なんだか僕らに最近あったことをみんな知ってるみたいな……

「はい、トメ」

「は？　僕にもか」

「あたしの思いつきで迷惑かけたには違いないからね」

「そ、そっか。姉がそんなこと言うなんて珍しいな」

さすがに懲りたか。

「はい、どうぞ。作品名は『これでチャラ』ね。だから次のゲームも死ぬ気でやれ」

「懲りてないなアンタ！！」

姉って本当にワケわからん。

わからないけど、とりあえずみんなでワイワイと食べたお菓子はおいしかった。

また頑張ろうっていう元気がわいてきた。

……次のゲームも頑張れってことか？

フザケンナ。

## カカの天下４０６「遅い白い日、早い花見」（後書き）

というわけで、姉のお返しのお話でした。

引っ張ったわりには意外と普通でしたね笑

まーいくら姉がバケモノでも、常に人間らしからぬこと考えてるわけじゃありませんしね。

……パティシエに弟子入りは普通じゃない？　姉にしちゃ普通の部類ですよ笑

でもまーわざわざ修行してきたってことで、誠意があったということにしてあげましょう＾＾

しかし姉、妙に目ざといのはなぜなんでしょうね……

# カカの天下４０７「春一番」

あれ……？

あ、どうもトメです。カカと二人で夕飯の買い物へ行くところだったのですが……妙な子供を見つけました。

電化製品屋の店先に置かれている、つけっぱなしのテレビ。流してるのはニュース番組か。

そのテレビに、話しかけてる子供がいたのだ。

『この事件の被害者は約二百人を超えており――』

「そうですかそうですか、それは大変でしたね……」

『事件解決の目処はいまだ立っていない模様です』

「なんと！　が、頑張ってください！」

『次のニュースです』

「なな、なんと！　まだ悲惨な出来事があったのですか！？　いいですよ、クララでよければいくらでも聞きますから！」

歳は……カカより下だな。小学一年生上がったかどうかか？　ランドセルでも背負ってればわかりやすいんだけど、白色のワンピース以外は何も身に着けてないし、見た目だけじゃわかんないや。

「変な子だね」

カカの小さい頃には負けるよ。

「話しかけてみよう」

お、変な子同士、やっぱ気になるのか。僕も気になったからちょうどいい。

「いってこい」

「うん。ねね、そこの君。なにしてんの？」

まったく躊躇なく話しかけるカカ。こいつって昔は人見知りだったんだけどな……いつのまにこんな遠慮のない性格になったんだか。

「はい？　クララに話しかけてるのですか？」

「うん、君しかいないじゃん」

「いえ。ここにシゲルさんがいらっしゃいます」

クララちゃんの視線の先には今まで見ていたテレビがある。シゲルってこのアナウンサーのことか。どっかで聞いた名前だな。シゲールとかシーゲルとかいう兄弟がいたりするんだろうか。

「こちらのシゲルさん、随分とつらい経験をしてきたみたいなのでクララが話を聞いてあげているのです」

や、ニュースを伝えてるだけだろ。

「いろんな事件に巻き込まれて……その末にこんな箱に閉じ込められてしまったんです、きっと！」

本気で言ってるのか？

まるでテレビをまったく知らないみたいだ……って、あ。

今日は四月一日、エイプリルフールじゃないか！

だからこの子供もふざけてるんだ。きっとそうだ。今朝のカカみたいに。

ちなみに今朝のカカは、『嘘をつく＝逆の意味のことを言う』という公式をたてたらしく、朝っぱらからこんなやり取りをすることになった。

『あなたは背中がいっぱいだよ』

『こえぇよ！　って、あぁ。私はお腹が減ったってことな』

『夕飯を吐きだしたい』

『ヤメテクダサイ！　って、あぁ。朝飯を食べたいってことね』

ややこしかったのですぐにやめたが。

とにかくクララちゃんも、きっとそんな風にふざけて――

「クララはシゲルさんを慰めてあげたいです！　でも声が届きませ

ん」

「当たり前だよ。テレビの中だもん」

「テレビ、とはこの箱のことですね！　どうやったらこんな小さくなれるのですか！？　どうやって箱に入るのですか！！」

あれ、なんかマジっぽいぞ？

「えっとね、この箱に入るためには身体を薄っぺらくしなきゃならないんだよ」

そしてそんな別の時代からタイムスリップしてきたみたいな世間知らずな子に嘘を教える悪い子、カカ。まーこいつは普段はほとんど嘘つかないし、エイプリルフールだからたまにはいいと思うけどさ。子供の遊びレベルだし。

「でしょうね！　薄っぺらになるにはどうすればいいのですか！？」

「うん、箱に入るためにペッタンコにしてくれる工場があるから、そこに行けば――」

「薄くなってテレビに入れるのですね！？」

や、ミンチになって天国に入ると思う。

「わかりました！　クララ、早速シゲルさんを慰めるためにペッタンコになってきます！」

「あ、ちょっと――」

意気込んだクララちゃんは、カカの静止も聞かずに電化製品屋の中に入っていった。

「……しまった。嘘っていう前に行っちゃった」

「店に入ってっただけだしな。入り口で待ってれば戻ってくるだろ」

「平面になって？」

「なってたまるか」

そんな新技術があったらどうなる。

狭いところに手が届くようになるな。

それは便利だ。

……などと考えて暇をつぶしていると、やがてクララちゃんが戻ってきた。

「なんだかクララ、その歳ならまだペッタンコでも大丈夫だよって慰められました。お菓子ももらいました」

自分の胸をさすりながら困惑するクララちゃん。どこをどう順番を間違えて説明したのかすごく気になる。

「うぅ、シゲルさんを慰めたいのに！　クララはどうすればいいのですか！？」

クララちゃんは嘆きながらテレビを見た。

映像が変わっていた。

多分どこかの紛争地帯の映像でも流しているのだろう。派手な爆発音と共に炎が舞う画面――あ。

「し、シゲル……さん」

お菓子を落とし、呆然と画面を見つめるクララちゃん。まずい、本気でテレビのことを知らないのだとしたら……

「シゲルさん……シゲルさあああああん！！」

こう、なるよなぁ。

「あんまりです！　あんなに不幸なことばっかりだった人が、最後は爆発だなんてえええ！！」

泣き崩れるクララちゃんにかける言葉も見つからず、僕とカカはそろって困った顔になっていた。

「――シゲルさん？　声が、声が聞こえます！！　生きてるんですか！」

あ、そういや映像だけだもんな。音声はあるか。

「あぁ！！　し、シゲルさんが……お、女の人になってしまいました！」

む、別のアナウンサーの番になったのかな？　クララちゃんがテレビにへばりついてるもんだから見えない。

「そうですか……シゲルさん。シゲ子さんに生まれ変わったんですね」

「や、きっとシゲルーだよ」

かける言葉も思いつかずに立ち尽くしてたくせに、そこだけは口出すのね、この妹は。

「よかったです。クララ、シゲルさんが幸せなら女になってもいいと思いま――あぁ！　シゲルさんが分裂しました！？」

あ、場面が変わっていろんな人が映ったのね。

「きっとシゲールとシーゲルだよ」

だからさ、なんでおまえはそんなにシゲル物語を推すのかね。

「シゲルさん……これなら寂しくなさそうです。これなら安心です」

涙をぬぐいながら安心して微笑むクララちゃん。

なんて純真なんだろう。

「クララ、ペッタンコやめます！　さっき慰めてくれた人の言うとおり、ボインボインになります！」

そしてなんておもしろいんだろう。

「それでは！！」

「え、あ――」

テレビと僕らにペコリとお辞儀して、クララちゃんは止める間もなく走り去っていった。

「な、なんだったんだ。あの子……」

「変な子だったね」

「カカといい勝負だな」

突風のような子だった。

また、会えるかな？

## カカの天下４０７「春一番」（後書き）

実際の春一番、っていうのはもう終わってる時期ですが。
春先に現れた突風みたいな子っていうことでこのタイトルに笑

さてさて、いつぞやのとき以来、嘘には気をつかってきたはずのカカですが……今回は嘘を嘘と言う前に相手を逃してしまいました。
ちゃんと捕まえて弁明できるのでしょうか。
はてさて。

## カカの天下４０８「わてわて」

「サユカちゃん遅いねー」

「そ、そだね」

ドキドキ……あ、カカです。

何がドキドキなのかというと、いま公園のベンチで待ち合わせ中なのですが……まだサユカンがきておらず、サエちゃんと二人きりなのです。だからどうしたと思うでしょうが、私は今ちょっとした企みを実行しようとしているのです。

先日、嫁のサエちゃんを裏切ってサユカンとちゅーしてしまいました。私からしたわけじゃありませんが、したことには変わりありません。これではサエちゃんの夫失格です。

かくなるうえは……そう。

サエちゃんとも、ちゅーしてしまうのです！　わお、私って大胆！

「大ターン！！」

「でっかいターンがどうしたのー？」

「や、なんでもないなんでもない」

興奮のあまり叫んでしまいました。

とにかく、サユカンがくるまでになんとかサエちゃんとちゅーしなければ。

さぁ、どうする？

「サァドゥスルー！！」

「何が作動するのー？」

「やや、なんでもないなんでもない」

またもや叫んでしまいました。

落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け――ひっ。

「おちをつけろ！？」

「オチはつかないけど、だーれだ？」

ああ、いきなり視界が真っ暗になって驚いたけど、サエちゃんがふざけて後ろから目をふさいできたのか！

「ほらほらー、だーれー？」

後ろから聞こえる楽しそうな声。ここは普通に答えるとおもしろくないからふざけて――あ、そうだ。

このままの状態で言ってしまうのはどうだろう。さっきから私は緊張していて、ろくなことが言えてない。この後も面と向かって言えるとは思えない。目隠しされた状態なら、顔が見えない状態なら、

きっと勢いで！

「さ、さ、サエちゃ！　ちゅーしたい！！」

言った！

言っちゃった！

さぁ、サエちゃんの返事は？

「んー？　この手がサササエチャ・チューさんの死体の手だってー？」

誰さ！！

「せいかいー」

しかも当たってるの！？

「チューさんはね、桜の下に埋まってたんだけど私が掘り起こしー」

「そうじゃなくて！！」

悪ふざけモードに突入する前に、私はサエちゃんの手を振り払って、後ろを振り返った。

びっくりした顔のサエちゃんが、目の前にいた。

「私は、サエちゃんと、ちゅー、したいの！！」

断言した。

間違えなく聞こえるように。

そしたら。

「……ぇ」

サエちゃんの顔がみるみる赤くなって――って、え？　あのいつも余裕でニコニコなサエちゃんが！？

「ぇ、ぇ、ぇぇぇー！？」

顔を真っ赤にして両手を胸の前でわてわて動かしてる！？

ああなんか私も恥ずかしくなってきた！！

「えっとー！　うんとー！　どういうことー！？」

「んとね！　えっとね！　言葉通りなんだけど！！」

私も同じように両手をわてわてとせわしなく動かしながら答える！

「それってー！　ほんとにー！　わたしとー？　ちゅー！？」

「そー！　ほんとー！　サエちゃんとー！　ちゅー！！」

なぜか運動会でエール交換する人みたいにフレーフレー！　バッ！　バッ！　バッ！　と腕を振るサエちゃん！　そしてそれにボン

ボン持ったチアガールっぽくフレーフレー！　サッサッサ！　と応える私！

「なんでー！？　どしてー！？」

いきなり腹筋しはじめるサエちゃん！

「だってほら！　私サユカンとしちゃったから！」

続いて腕立て伏せをする私！

「それでー！　私ともー！？」

「じゃないとー！　なんか三人のバランス悪い気がしてー！」

そしていつの間にかわっしょいわっしょいと見えないお神輿をかつぐように腕を動かしまくっている私たち！

や、なんか恥ずかしすぎて動いてないと落ち着かないんだ！

「きゃ――」

「あ！」

無闇に動きすぎてバランスを崩したサエちゃんが私に激突！

そのまま二人で倒れこんで転がって――止まった。

ちょうどサエちゃんが私を押し倒したみたいな形で。このまえ漫画にあったなーこんなシーン。その後どうなるんだっけ。

あーそうだ。二人はちゅーするんだ。顔は目の前だし、この上もなくちゅーしやすい体勢だよね……って、ちゅー！？

「か、カカ、ちゃん」

サエちゃんの可愛い顔が、すごく近くに。

「サエ……ちゃん」

息がかかる。まばたきできない、その瞳から目が離せない。

「ちゅー、するー？」

「ん……」

私はコクリと頷きかけて――

「なにしてんのよ君らっ」

サユカンの声が耳に入った瞬間に光の速度で立ち上がった。

その勢いで振り払いそうになっちゃったサエちゃんも、同じく何事もなかったかのように立ち上がっていた……や、見られたくないものを見られたときの人ってすごい素早く動けるもんなんだね！

「な、なんでもないよー」

「そ、そうそう。ちょっとふざけてたら転んじゃって」

「そう？　なんかピンク色のオーラとか薔薇の背景が見えた気がしたけどっ」

なにそれ。

「気のせいだよー。それよりサユカちゃん、遅刻だよー」

「あ、ごめんごめんっ。おいしそうな桜のアイス見つけたのよっ！　一緒に食べよっ」

はぁ……アイスは嬉しいけど作戦は失敗かぁ。

でもなぜだろう。

すんごく危ない道に走りかけてたような気がする。なんだかサユカンに感謝すべきなような……あむっ？

「んむんむ……おいし。へ？　サエちゃん？」

顔を真っ赤にしたサエちゃんがスプーンを差し出した形で……え？　食べさせてくれたの？

サエちゃんのスプーンで……え、それって。

「バランスはー……これでー」

「あ、うんうん！　バランスはこれで充分だよね！！」

顔を真っ赤にして笑いあう私たち。

そうそう、これでいいのさ！　別に唇同士じゃなくても！

これで充分……幸せ……にへへ。

「あれ？　なんだかまた薔薇が見えるわっ」

「サユカちゃん、目がおかしくなったんじゃー」

「二人の顔も薔薇みたいに真っ赤なんだけどっ」

「「気のせい気のせい」」

「……二人とも、何をわっしょいわっしょいしてるの？」

## カカの天下４０８「わてわて」（後書き）

……なんか、えらいもん書いてしまった気がする笑

どうも、作者です。えー、これはほら、あれですよ。
子供のうちはいろいろあるんですよ、うんうん。間違ったり変な道にそれたりしながら成長してくんですよ、はい。
だから薔薇とか百合とか気にしないでねっ！

無理か笑

えっと……わっしょいわっしょい！！（ごまかし

## カカの天下４０９「新コンビ成立」

「でね、そのときサエちゃんが――」

「あ、そういやさ。サエちゃんとの仲をなんとかするーって盛り上がってたよな、カカ。なんとかしたのか？」

「あ、えと、うん。なんとかなったよ」

「どうなったんだ？」

「言えない！！」

「あそ……」

何で顔を真っ赤にしてるんだか……もぐもぐ、トメです。

たまには外食もいいだろう、と今日はカカとファミレス東治へ来ています。しかし残念ながら、いつもの面白い店員はいません。まだシフト入ってないのかな。

と、そのとき。

「――なんでなのよ！！」

「お、お客様、他のお客様のご迷惑になりますので」

「あたいがその迷惑してる客だわなっ！！」

なんだかエキサイトしてるっぽいおばちゃんの声が聞こえた。レジの方だ。

「なぁカカ。なんだろうなあれ」

「……言えないよこんなの、や、でもあの直後は二人ともぎくしゃくしてたけどすぐ自然な感じに戻ったし、サエちゃん気にしてないっぽいし、私もあれで満足っていうかもうこれ以上は無理っていうかやりすぎたっていうか……ぶつぶつ」

「聞いてないな」

顔を真っ赤にしながら別の世界にイっちゃってるカカ。しかし気になる怒声はまだまだ聞こえてくる。

「なんでよ！　もっと安くしなさいよ！」

「と、当店ではそのようなサービスはしておりませんので」

「西川さんは安くしてくれたって言ってたわよ！！」

誰だよ西川さんって。

「すいません、その西川さんがどちら様かはわかりませんが、当店ではそのような――」

「西川さんはよくてあたしはダメなの！？」

「いえ、ですから」

困った客だなぁ。たぶん適当な人の名前を出してごねて安くしようって魂胆なんだろうな、あのおばちゃん。

「……なぁ、どうする。店長に言うか？」

「いや、しかしなぁ。今キッチンの手を止められると仕事追いつかなくなるぜ？　マネージャーがあのババァに捕まってるだけでもキツイのに」

聞こえてくる店員同士のぼやき。なるほど、そんな相談をしつつも彼らはかなり忙しそうに動き回っている。一人でも遊ばせておきたくない状況なんだ、それをあのおばちゃんが……

「いつものバイト君がいれば、すぐ切り抜けられるんだろうな。カカもそう思わないか？」

「……うん、私は大丈夫だよ。私は大丈夫、気にしてないもん。そもそもサユカンとはもっとすごいちゅーしちゃったわけだし。うんうんもう気にしない余計なことを考えないのが一番……ぶつぶつ」

「ほんと聞いてないし」

仕方ないなぁ……他の人も動きそうにないし。

手助けしてあげるかな。

「ですから！　当店ではそのようなことは」

「つべこべ言わずに安くしなさいよ！　西川さんは――」

同じことを繰り返し繰り返し……それればっか言ってれば話が通ると思ってるのかね。僕は呆れながらそのおばちゃんに近づき、声をかけた。

「へぇ、あんた。あの西川組の知り合いかい？」

「は！？　な、なんなんだあんた！」

「西川組の縁のもんだよ」

できるだけ悪く見えるようにニヤリと笑ってみせる。

「店でサービス受けれるってこたぁ、あの悪名高い西川組のモンにちげぇねぇだろ。おぅおばちゃん。あんたみかけによらず交友広いんだな」

「は？　あ、ああ！　まぁね！」

自分の言い分に味方してくれるとでも思ったのか、おばちゃんは戸惑いつつも頷いた。うし、かかった。

「おっしゃ、俺が西川の親分に連絡つけてやろう！　そして直接この店長に話してもらうんだ！　うちの親分なら店や家を潰すくれぇワケねぇからな。あんたが知り合いってんなら即行で言葉が通るぜ！」

店や家を潰すくらい――そう聞いたおばちゃんの顔が一気に青ざめる。

「え、あ、ちょっと待っておくれよ。あたしゃその、オヤビンにそ

こまでしてもらわなくてもさ！」

オヤビンて。どこの小悪党ですかあなたは。あ、いま小悪党してるのは僕か。

「遠慮すんなよ！　さてっと、親分の番号は……」

携帯を取り出したところでおばちゃんは大慌てで財布をとりだした。

「こ、これ！　代金ここに置いとくよ！　釣りはいらないよ！　じゃあね！」

レジに叩きつけるように金を置いて逃げ去っていくおばちゃん……ふ、ざまぁみろ。

「あ、ありがとうございます！　おかげで助かりました」

「あー、いいよいいよ。この店にはお世話になってるし」

「あの……西川組の、方で？」

「そんなもんねーよ」

多分ね。

「さて……食事食事っと」

「お待ちください、お客様」

僕を呼び止める張りのある声。振り返ると、そこには今日見なかったいつものバイト店員の姿が。

「あれ、いたんだ」

「ええ、いま入ったところです。困ったお客様がいるとのことで駆けつけましたが……あなたのおかげで大丈夫だったようですね。見事な手際でした」

「や、うちの姉が昔やってたのマネしただけだし」

「それでも大したものですよ。やはり飲食業をしておりますと、困ったお客様が――」

そう会話した矢先に、再びレジから怒声が聞こえてきた。

「おうおう！　てめぇらのミスだぞ！」

「す、すいませんすいません！」

……今度はなんだ。おっさんか？

「俺はな、先週この店にきたときに四百円のアイスしか食ってねぇんだぞ！　それで一万円を出したんだ！　そしたらよ、てめぇら六千円しか返さなかったんだ！　そんな簡単な計算もできねぇのかこのバカが！」

なんだこのバカは。

「あ、あの……レシートは」

「この店に来たのは先週だぞ！　そんなもんねぇよ」

んじゃ気づいた日にすぐ来いよ。

「あ、あの……四百円のアイスはうちのメニューにはないのですが」

「先週はあったんだよ！　適当なこと言うな！」

適当なのはどっちだ。それにその厳つい顔でアイスだけ食って帰るってのもおかしい。や、これは偏見か。

「ともかく！　さっさと金を出しやがれ！」

ちらり、とバイト店員と目を合わせ、軽く頷きあった。

まずは僕から口を開く。わざと大きな声で。

「一万円払ってお釣りが六千円、それで気づかなかった？　ぷ」

ぎろり、とおっさんの目が僕を捕らえた。全然怖くない、姉の凶眼に慣らされてる僕にとっては。

「おうあんちゃん。今なんて言った！？」

「や、だってさ。普通に考えてみ？　アイスだけ食べて一万円も払ってさ、六千円しか返ってこなかったら小学生でもその場で気づくでしょ」

「あぁん！？　そんときゃ急いでたんだよ！」

「一週間経って気づくなんて随分とのんびりしてると思うけど？」

いきり立つ客。それをまぁまぁ……と抑えるバイト店員。

「どちらのお客様も落ち着いてください……お客様？」

おっさんの方を向いてにこやかに笑う店員。

「お客様は気づかなかったんですよね？　そういうこともありますよね」

「おうよ」

僕はあさっての方向を向きながら、馬鹿にするように小さくクスッと笑った。

「いくらいい歳してるからといって、数を数えられないことくらいありますよね」

「お、おう」

「あるんだ……ぷ」

「ひき算を間違えることくらいありますよね」

「お……おう」

「小学生じゃん……ぷふ」

「指で数えられる程度のことができなかったりもしますよね」

「お……お、おう」

「赤ちゃんじゃん……ばぶばぶ」

「て、てめぇ！　ケンカ売ってんのか！？」

お、かかった。

「だってあんた、数すら数えられないんだろ？　で、この店員さんは、そういうこともあるよねーって生暖かい目で優しくフォローしてあげてると。その優しさに心打たれて微笑んでただけだよ。ばぶばぶ」

「んんんんだとぉ！　バカにすんな、数くらい数えられるわ！」

「おや、お客様。あなたは先ほどから『指でも数えられるような計算ができなかったからお釣りが少なくても気づかなかった』と叫んでいらっしゃいますが、それは間違いでしたか？」

「んぐっ……！」

おっさんはようやく気づいたらしい。

僕らに「オマエはバカだ」と言われまくってることに。

そしてその反撃の糸口がまったくないことに。

「ばぶー？　どうちまちたかー」

僕の一言がトドメとなり、おっさんは顔を真っ赤にしながら去っていった。

「ああいう客、いるんだねぇ」

「ええ、たまにはですが。それにしてもやりますね、さすがはあの面白い子のお兄さんなだけはあります」

「あんたもな。いつもながら見事な話術だ」

「お友達になりませんか？」

「いいとも。僕、トメね」

「キリヤです」

パーン！　とハイタッチを決めた僕らは――

その日、友達になった。

## カカの天下４０９「新コンビ成立」（後書き）

トメにお友達ができました（この書き方だとトメが小さい子みたいだ笑

キリヤ君もこれで出世、かなぁ。

あ、ちなみに今回みたいなお客さん。意外とホントに来るみたいですよ＾＾；

## カカの天下４１０「おらおらショッピング」

「今度はあそこのお店いこー」

「ごーごーサエちゃん」

「待ちなさいよっ」

ども、いつもの三人で騒がしく歩いてるカカです。

せっかく春休みなんだから、それを満喫しよう！　ということで、今日は三人でお昼から商店街へと赴いています。といっても何か目的があるわけでもなく、ウィンドウショッピングというやつです。

「小物屋さんだねー」

「お、ここにサングラスがいっぱいあるよ。安いやつ」

「カカすけこういうの似合いそうねっ。かけてみなさいよ」

言われるままに、ちょっと逆三角形気味のサングラスをかけてみる。

「おー、悪そー」

「おらおらって感じねっ」

あ、そう？　よーし。

「おらおら。ねーちゃん可愛いじゃねぇか。こんな野郎ほっといてオレっちと遊ばねーか」

「ねーちゃんって私ー？」

「わたしは野郎っ！？」

漫画とかでよくある場面だよね、不良がカップルに絡むとこ。

「サユカちゃん、これをかけて対抗だよー」

あ、サユカンもサングラスかけた。

「お、おらおらっ。人の女に手ぇ出してんじゃねーよっ」

あれ、サエちゃんもかけた。

「おらおらー、勝手にオレっちを取り合うんじゃねぇー、面倒くせーから全員オレのもんだー」

「おらおら、喜んで！」

「おらおらっ、優しくするのよっ」

なんだこれ。

「あ、あのお客様？　もう少しお静かにお願いします」

あらあら、店員さんに怒られちゃった。

「おらおらー。ごめんなさいー」

「おらおら、すいません」

「おらおらっ、すぐやめますっ」

三人そろってペコリと頭を下げる。

「い、意外に素直……しかも可愛い……っ！　あ、いいのいいの、ちょっと静かにしてくれれば」

わ、いい人だ。

「おらおら、ありがとー」

「おら感激しただ、おねーさんも一緒にやるべさ？」

あれ、いつの間にか意味変わってるような。

「あらー、やりたいのは山々だけど、お姉さんもお仕事あるから。ごめんね」

「仕方ないわねっ、おらおら」

「ふふ、ごめんなさい、じゃあね。おらおらー」

にこやかに手を振ってお別れする。うん、ほんといい人だった。

「じゃー次はなにするのよ、おらおら！」

「サユカちゃん、何おらおら言ってるの？」

「変だよ？」

「たった今まで君らもやってたでしょうが！」

さて、サユカンをからかったところで……次は何するかな。

とりあえず手に取ったサングラスをまじまじと見つめてみる。

「んー、これどこで作られたサングラスだろ」

「えとねー、メイドインチャイナって書いてある」

「メイドイン、ってそこで作られたって英語よねっ、たしか」

サエちゃんは私を見た。

「カカちゃんはメイドイン、何星？」

「あはは、私が地球人じゃないみたいな言い方だね。サエちゃんメイドイン魔界」

「あはー、それどういう意味かなーカカちゃんメイドインおらおら星」

「おらおら！」

「ま、まぁまぁっ、カカすけサエすけ」

「うるさいな、サユカンメイドイン普通」

「そうだよーサユカちゃんメイドインしょせんはチャイナ」

「普通って言うなっ、しょせんとかつけるなっ！　それにわたしは日本製よっ！　おらおら！」

「サユカン……まだおらおらとか言ってるの？」

「変なのー」

「あんたらさぁっ！」

再びサユカンをいじって満足した私たちは、別の場所に移動した。

ミニぬいぐるみ売り場だ。

「あっ、ねぇねぇあれ！」

何かを見つけたらしいサユカンは、一つのぬいぐるみを手に取って嬉しそうに微笑んだ。

「ほら、オラウータンのぬいぐるみよっ。おらおら」

「このオラウータンめ！！」

「誰がよっ！　おらおら！」

なんだか気に入ったらしい。

「ねーサユカちゃん。そのぬいぐるみに名前つけるとしたらー？」

「……オランダかしら」

国？

「そのぬいぐるみは誰のー？」

「オラんだっ！！」

サエちゃんもサユカンもノリで言ったんだと思う。

しかし。

「お買い上げ、ありがとうございます！」

「……へっ？」

いつの間にか傍に来ていた店員さん。バッチリ聞こえたね、サユカンの「買います」宣言が。

「ささ、レジはこちらですよ」

「え、あっ、ちがっ……ちょっと待ってよ、おらおら！」

「あん？　早く買いやがれ！　オラオラ！」

「お……オラわかっただ……じゃなくて、あのっ」

キレるとオラオラのプロになるっぽい店員さんに引っ張られてい

くサユカン。

それをにこやかーに見守る私たち。頑張って逃げてきなよー。

うーん、サユカンの慌てた声を聞きながら、サエちゃんとのんびり過ごす。

平和だ……

「二千円になります」

「おらおら！　もうちょっと安くなんないのっ！？」

あ、買うんだ。

## カカの天下４１０「おらおらショッピング」（後書き）

いつもの三人の、なんでもなーい日常をお送りしました。
なんかいろいろあったけど彼女達の中では解決したらしく、いつもの雰囲気です＾＾

どうでもいいけどオラオラのプロっぽい人がなぜぬいぐるみ屋の店員やってるんでしょうねぇ……
あ、今回出てきた店員さん、商店街の人ＡとＢで終わる予定ですのであしからず笑

## カカの天下４１１「キリヤ君はこんな人」

「ただいまー」

おかえり、って自分で言ってどうするんでしょうね、トメです。

今日は珍しいお客さんを連れての帰宅となりました。

「おかえり。ってあれ、その人……東治の」

わざわざ玄関まで出迎えてくれたカカは、見覚えのあるバイト君がこんなところにいるのに驚いたようだ。

「ああ、言ってなかったっけ。こないだ友達になったんだ。さっきまで――」

「そう！　さっきまで私たちは一緒だったのですよ。何をしていたかというと」

そのバイト君、キリヤの目がきらりと光る。

……なんで光るんだ？

「脂ぎった肉体を激しくぶつけ合い、飛び散る汗！　というか汁！　そのように荒ぶりながらも繊細な指使いと濃厚な舌使いで互いに天国を味わい、その甘美な肌の味を堪能していたのです！」

「な、なんかよくわかんないけどトメ兄のヘンタイ！！」

えっと。

「もしかして……さっきラーメン食べてたときのこと言ってるのか？」

「うん、そうともいいます」

ずるっとコケるカカ。

「最初からそう言ってよ！」

「何事にもオリジナリティは必要ですよ」

肉体はチャーシュー、汁はそのまんま汁だろうし、肌はラーメンのことか。よくもまぁそこまで曲解できるもんだ。

「うん、実にカカと似たような人種だ」

「ふむ？　何か言ったかい、トメ君」

「や、なんでも。いいからあがれよ」

そう。今日は一緒に食事したついでに、彼を我が家へ招待したのだった。

特に理由も目的もない。しいて言うなら男同士で語り合おうと思っただけだ。

「トメ兄……友達、できたんだね」

「なんで目をうるうるさせてんだ妹よ」

まるで僕が友達いない寂しいやつみたいじゃん。

「カカ君……感動してるとこゴメン。私はまだこの人を友達とは思えなくて」

「思えよ！！」

とにかくノリがよく、とてもツッコみがいのある男だった。

居間に座らせ、適当にお茶を用意する。

お盆を持って台所から戻ると、早速カカがキリヤにいろいろと話を聞いているところだった。

「トメ兄はどう？」

「さっきはすごかったですよ」

再びきらりと光るキリヤアイ。

「そう、あれは姫君の歌でした。感情の希薄な、それでもはっきりと伝わってくる熱い感情の波！　そしてそれに応えるトメ君の優しい囁き、そして捧げた心はきっと彼女の心の琴線に触れたのでしょう。彼の指が彼女に触れたとき、伝説が始まった……！」

「よくわかんないけどトメ兄のケダモノ！」

えっと。

「ひょっとしてラーメンの勘定を払ったときのことか？」

「うんうん、そうともいいます」

再びずるっとコケるカカ。

「歌はそのまんま声のことだろ。感情の波……ああ、やっぱあのおばちゃん怒ってたのか。僕が財布からお金出すのに手間取ってたから」

で、始まったのは伝説じゃなくてお金のやり取りな。捧げた心はお金のことか。

「伝説のお勘定！」

「誰が何を伝えてんだそれは」

「んー、よくわかんないけどさ。簡単に言うとトメ兄は……そのおばちゃんの心をゲット？」

「うんうん、そうともいいます」

「言わねぇよ！！」

「この女ったらしめ！」

「そうとしか言いません」

「他にも言えよ！」

「じゃーおばんキラー？」

「女の敵！」

「そうじゃなくてね！」

なんつーコンビだこいつら。

「……ん？　そういやカカ。ノートなんか広げて何やってたんだ？」

テーブルの上に広げられた勉強してたっぽいアイテムを見て疑問に思う。春休みは宿題ないんじゃなかったっけ。

「や、さっき外で遊んでたらイチョウさんに会ってさ。春休みでも塾で勉強してるって言うから、私も何かしなきゃなんないかなーと」

おお、偉い！

「でも勉強することなくてお絵かきしてたとこ」

おお、偉くない！

「では、私が教えてさしあげましょう」

おお、またもやキリヤがきらりと！

「え、でもまだ何を勉強するかも決まってないよ？」

「いえいえ、まずはいつ如何なるときにも通用することを勉強する

のはいかがでしょうか。つまり――名前の書き方です」

「む、名前なんて普通に書けばいいんじゃないの？」

また変なこと言うんじゃないだろうな。

「ただ名前を書くのにもオリジナリティが必要だと思います。すなわち、『疾風の変わり者、朝飯すら必ずひねる女、カカ！』とか書けばいいのではないでしょうか」

「あんた普通に失礼だな」

さすがのカカだって怒るぞ！

「そうだよ、朝ごはん様に失礼だよ。一日の食事の王様なんだよ？」

そっちかいっ。

「では『怒涛の変わり者、朝飯前に必ず兄をひねる女、カカ！』でどうでしょう」

「それだっ」

「それじゃねーよ！」

「じゃートメ兄はどんな名前書くの？」

「ん、『毎日ひねられる男』でいいんじゃないでしょうか」

「名前すら入ってねーよ！」

なんか……こりゃまたエライやつを友達にしてしまったような気がする。

や、楽しいけどさ。

## カカの天下４１１「キリヤ君はこんな人」（後書き）

トメとキリヤ君の初絡み（かな、一応

彼を書くのもなかなか楽しいです笑

しかし……またボケ役が増えた＾＾；

## カカの天下４１２「以心電信柱」

「明日からまた学校かー」

「また一緒のクラスになれるといいねー、カカちゃん」

「わたしも……その……君らと」

「サユカン何か言った？」

「な、なんでもないわよっ」

「大きな声でハッキリ言ってみよー」

「絶対聞こえてたでしょ君らっ」

まーね。あ、どもカカです。

今日は春休み最後の日。そろそろ咲いてきた桜を眺めながら、いつもの三人で散歩しているところです。そろそろ改めてお花見する時期かな？

「あれー？」

「どうしたのよサエすけ」

「あそこに変な子がいるー」

サエちゃんの指差す先には、一人の女の子が立っていた。

「変って、どこがよっ。別に普通の――」

サユカンがツッコもうとしたとき、ボソボソと女の子の声が聞こえてきた。

「クララ知ってます。あなた、電信柱っていうんですよね？」

「へ、変な子っ」

おー、こないだ見たクララちゃんだ。今日はピンクのワンピースか。

「何を電信してるんですか？」

一人で必死に電信柱に話しかけてる。

「クララには電信してくれないんですか？」

悲しそう。

「カカちゃん……どうしよー。あの子おもしろい」

私もそう思う。

「話しかけてみる？　サエすけ」

「あ、いちおー顔知ってるから私が行くわ」

そんなに知ってるわけでもないけどね。

「おーい、こんにちは」

「はい？　クララに話しかけてるですか」

電信柱に向けていた視線をこちらに向ける。

「あ、ペッタンコの人！」

「誰がだ！」

……はっ。そういえばこの間はそんな話をしてたんだっけ。

「ペッタンコねー」

「たしかにっ」

「二人ともどこ見てるのっ！　サエちゃんもサユカンも似たようなもんでしょ！」

まったくもう！

「あの。クララに何かご用ですか？」

おっとと、話しかけておいて放ったらかしだった。

「ごめんごめん。クララちゃん何してたのかなーと思って」

「はい。こちらの電信柱さんに話しかけていました」

それはわかってたんだけどね。

「でもこちらのお方、クララが話しかけてもなかなかお返事をくださらないのです！」

「あのねー、この柱から電信を受け取るにはそう簡単にはいかないのー」

悲しそうなクララちゃんに微笑みかけるサエちゃん。

「サエすけ……遊ぶ気ねっ」

「間違いないね」

私とサユカンは小声で囁きあい、少し後ろに下がった。

見物するためだ。

「電信するにはどうすればいいのですか！？」

「んとー、半導体になればいいんだよー」

よくわかんないけど、多分それ人がなれるもんじゃないよねサエちゃん。

「半分だけの胴体になるのですか！？」

もっとなれないや。

「ナゾですフシギですミステリーです！　クララもいつかなれます

か？」

「うん、頑張ればきっとなれるよー」

なったら怖いし！

「はいっ、クララ頑張ります。ところでおねーさんは電信を受け取ることができるのですか？」

「できるよー」

「ホントですか！？」

うそだよ。

「ではおねーさんは半分しか胴体がないのですか！？　で、でも見た目としては」

「半分は夢と希望でできてるんだよー」

「なるほどです！」

納得した！？

「ではでは！　こちらの電信柱さんはなんというお名前なのですか？」

瞳をキラキラさせて腕をぶんぶん振りながら聞いてくるクララちゃん。サエちゃんは「んとねー」と周囲に視線を滑らせ――ボクシングジムに目を留めた。

「マッスル三世っていうのー」

細長いくせにたくましい名前だ。

「一世と二世はどちらにいかれたのですか？」

「折れたー」

「クララしょっくです！　ご愁傷さまです！」

きゃー！　としょっくなポーズをとるクララちゃん。いちいち動きが可愛いなーこの子。

「あ、電信柱があの人に電信してるよー。クララちゃん、代わりに伝えてあげてー」

そう言ってサエちゃんが指差したのは、ちょうどジムから出てきた小太りの男の人。

「なんと伝えればいいですか？」

「えっとねー、『ちょっとそこのあなた。伝言です。トレーニングは終わったみたいですね。早くやせられるように頑張ってください』って言ってるよー」

はい！　と勢いよく手をあげて頷くクララちゃん。

「クララ覚えました。完璧です、行ってきます！」

タタタタ、と小走りにその男の人へと駆け寄っていく。

「だ、大丈夫かしら。少し失礼なこと言ってないっ？」

「これくらいなら大丈夫だよー。小さい子の言うことだし、そんなひどいことにはならないでしょー。いざとなればカカちゃんもいるしー」

「お、いよいよ話しかけるよ」

ちょうどよく立ってる電信柱に身を潜め、私ら三人は静かにクララちゃんを見守る。

「そこのあなた！」

「……ん？　ボクのことかい」

「マッスル三世から伝言です！！」

「誰だよ！」

誰だろう？

「あなたは……えっと、その……」

あれ。もしかして、すでに言うこと忘れちゃった？

「あなたは終わってます！！」

すんごい省略して言った！！

「やせなさい！」

どこが完璧なのクララちゃん！？

「それではクララはこれで……」

「待てよ！！」

む、ちょっとマズイかな。さすがに男の人も怒ってるっぽい。いつでも飛び出せる体勢にしとこ。

「そこまでバカにされたら黙ってられないよ！　どこにいるんだそのハッスル三世ってのは！？」

微妙に変わってるし。

「え、えっと！　それは……！」

クララちゃん迷ってる。たぶん『正直に言ったら三世まで折られてしまいます！』とか思ってるんだろうな。

「どこなんだよ！　キャッスル三世は！」

その前にナニモノですかそのお方。

「それは……その……あ、あなたの、心の中に！」

「いてたまるか！！」

同感だ。

「あ、こら！」

「クララ失礼しますー！！」

あーあ、逃げていっちゃった。

「……サエちゃん、ちょっとやりすぎじゃない？」

「いくら小さい子は許されるからって――サエすけ？」

サエちゃんはいつの間にかしゃがみ込んで肩を震わせていた。

「終わってます……やせなさい……マッスルハッスル……ぷっ、ぷくく……」

珍しくすんごく笑ってる。

や……確かにおもしろかったけどさ。

「サエすけっ、君ねぇ……ふ、ふざけるのもっ、いい加減に……し、しははははっ！」

サエちゃんに釣られてサユカンも笑い出す。そしてさっきのクラちゃんを思い出してるうちに、いつの間にか私も笑っていた。

「はー、はー……どうしようカカちゃん。あの子ほしー」

「私も。今度お持ち帰りしようね」

「さんせいっ！」

「マッスル三世ー？」

「「ぶっ！！」」

それから私たちはまた笑うのだった。

ごめんねクララちゃん。

君が面白くて可愛すぎるから！

## カカの天下４１２「以心電信柱」（後書き）

クララちゃん二回目登場です。
飛ばしてます。
……飛ばしすぎ？（笑）

さ。とにかく明日から新学期ですよ～

## カカの天下４１３「運命の別れ道」

……おはようございます、カカです。

私は今とても緊張しています。なぜなら！　今日はクラス替えの日だからです！

え？　始業式？　五年生？　門出を祝うかのように桜が綺麗に咲いている？

そんなこと、どうでもいいんです。

私にとって重要なのはクラス！　ただそれだけ！！

玄関前に張り出された紙――新しいクラス表の前にできている人だかりへ、いざ突っ込む！

「またニッシーと一緒のクラスかー」

「同じクラス記録更新だな。幼稚園の頃からよく続くもんだよな、アヤ坊」

人波揺られながら、新クラスに一喜一憂する声を聞き流しながらも進む進む。

「……あっ、同じクラスよサエすけっ！」

「ほんとだー。イチョウさんも一緒だねー」

ようやく辿り着く。そこには先に人ごみを抜けたらしいサエちゃんとサユカンの姿が。

「あ、カカすけっ」

「カカちゃんー」

「さぁ、判定は！！」

意気込みながら、くわっと目を開き、五年生のクラス表を見る！

一組……サエちゃんの名前発見！　ということはサユカンのも……あった！

じゃあここに私の名前があるわけだね！

えっと、笠原……

笠原香加は……

あれ。

あれれ？

な……い……？

サエちゃんもサユカンも、ニシカワ君やアヤちゃんもいてイチョウさんもいて、担任もテンカ先生のクラスに……私だけ、いない？

おそるおそる、他のクラス表を見る。

すると、すぐに見つかった。

『二組』の場所に、『笠原香加』と。

膝の力が抜けた。崩れ落ちる。

「そん……な」

絶望した。

私は五年生と六年生を……

サエちゃんと一緒に過ごせないのだ……

「か、カカすけ……っ」

「カカ、ちゃん……」

先に見ていた二人は知っていたのだろう。なんとも言えない表情で、私に話しかけるのをためらっている。

そんな顔、させちゃいけない。

元気を出さないと。

「あ、あはは！　ごめんね、もう大丈夫！」

勢いよく立ち上がり、サエちゃんを見つめる。

「サエちゃん……今年からは一緒のクラスじゃないみたいだけど、変わらずに仲良くしてくれる？」

「う、うん。もちろんだよー」

「また一緒に給食、食べようね！」

「うん！」

「クラブも一緒で！」

「うん……」

「帰るときは……一緒で……」

「うん……！」

「手をつないでさ……」

「う、うんー」

「また……一緒に笑って……一緒に、泣いて……うくっ……一緒に……いようね……うっ、ひくっ……ううう」

「……なんか、まるで私が死んじゃうみたいだねー」

「は、話だけ聞いてると、そう聞こえるわねっ」

ううう、ダメだぁ。涙がどばどば出てくるよう。

「死んだも同然なのはこっちだよぅ……」

「ま、まぁまぁっ。一緒にいられなくなるって言っても授業中だけじゃないのっ！」

「……サユカン。もしも授業の間、空気がなかったらどうなる？」

「死ぬわね」

「ほらね！！」

私にとっては、それくらい大事ってことだよ！

「いや、ほらねって言われてもっ！」

「ぐずっ……サエちゃん……！　裏から手を回してクラス変えたりできないの！？」

「えっとー……カカちゃんの中では私どれだけ黒い人になってるのかなー。私をなんだと思ってるの？」

「悪の帝王でしょ！」

「まだそこまでいってないよー！」

「い、いつかは、いくのね……っ」

冷や汗をかいてるサユカンは放っておくとして、他に私たちに何ができる？

……何も、できない。

だってこれは、先生が決めたことなんだから。

「――いやー、なんつーか予想以上のリアクションだな」

聞きなれた声、後ろを振り向く。

「テンカ先生……」

「おうカカ。おはよ」

テンカ先生の授業とも、お別れなんだ……！

「せんせー……お、お世話になりました……ぐずっ」

「お、おう？」

「先生がいなくなっても頑張りますから……先生の教えを守って生きていきますから……先生のこと、忘れませんから……！」

「オレが死ぬみたいな言い方やめろ！」

「だって……だって……せんせーも別クラスだし……みんな、みんな、別クラスだし……」

「ん、ああ。あれ冗談だぞ」

「……は？」

エ？

ハイ？

ナンダッテ？

「気づかなかったか？　二組の人数が一人多くて、一組の人数が一人少なかったの」

「……つまり？」

「カカがどういう反応するかなー、と思って書き換えた。ホントはおまえ一組だぞ」

「……なぜ」

「オレとおまえの仲じゃねぇか。だからこれくらい許されるかなーと」

は。

ははは。

「泣くまで殴っていいですか？」

「あー、えっと、スイマセンやりすぎました」

「やりすぎなくらい殴ってもいいですか？」

「マジすまん！！」

ほんとだよ……

ほんとだよ！！

……ぐすん。

「ほんと悪かったって！　ほら、せっかくみんな仲良くなって、良い感じで成長してるのによ、わざわざ別のクラスにするわけねーだろ！？　みんな一緒だ！　仲良くやってこーぜ！」

「……うん……ぐすっ」

「わ、悪かった！　あとでケーキでも奢るから元気だせよ！」

ならよし！

よかった……

ほんとによかったよぉぉぉぉ！！

「みんな一緒だ！」

そんな声を耳にしながら、クラス表を見上げる男子が一人。

「え、じゃあ俺だけ……二組？」

がんばれタケダ。

## カカの天下４１３「運命の別れ道」（後書き）

というわけで！
めでたくみんな一緒になりましたとさ！
色々考えたのですが、やはりこれが一番かと＾＾

みんな一緒！

……タケダ以外（笑）

## カカの天下４１４「誰？」

「ほらほら、早く早く」

「ごーごー」

「ちょっとカカすけサエすけっ、引っ張らないでよ！」

しーらないっ、と言わんばかりにぐいぐいとサユカンを引っ張ってるカカです。

現在ただいまお昼休みでございます。給食を食べ終わった私とサエちゃんは、トイレから出てきたサユカンを捕獲し、とある場所へと向かっております。

「いったいどこ行くのよっ」

「ほら、近々クラブどこに入るか決めないといけないでしょ？」

「その下見だよー。去年の六年生の作品とかあるみたいだしー」

「な、なんでわたしまで一緒に行かないといけないのよっ」

私とサエちゃんの足がピタリと止まる。

「え……サユカン、私たちと一緒のクラブ、イヤなの！？」

「ま、まさかー、私たちの他に浮気相手がー？」

「なな、なんだってー！」

サユカンが呆れたような表情になる。あら、ちょっとわざとらしかったかな？　ま、いいや。勢いでいこー。

「サユカン！　相手は誰なの！？」

「どこまでいったのー？」

「身元のハッキリした人なんだろうね！？」

「子供とかできてないだろうねー」

「実は……上に女の子が二人、下に男の子が一人いるんだよ！！」

「しかも未婚なのー？」

「待て待て待てっ！　何者なのよわたしはっ」

「「浮気者」」

「違うっ！　わたしには君たちしかいないわよっ！！」

ハッ、と気がついたときにはもう遅い。

「そっかそっか。私たちしかいないんじゃ仕方ないね」

「クラブも私たちと同じにするしかないよねー」

「……まぁ、いいけどさっ」

ふてくされたフリをしながらも頷くサユカン。おーおー照れちゃって。どうせ私たちと一緒のクラブにするつもりだったくせに。素直じゃないこと言うからこうなるんだよ。

満足した私とサエちゃんは再び歩き出す。サユカンは頬を赤くしながら慌ててついてきた。

「それで、いったい何のクラブに入るのよっ。わたしは放送クラブとかおもしろそうだなって思ったけど？」

「あ、給食中に流してるやつね」

放送クラブ。主な活動は私が今言ったとおり、校内放送だ。給食中に今日の献立を紹介したり、音楽を流したり……決められた時間内なら他にもいろんなことを放送できる。授業として設けられているクラブ活動時間では、おそらく放送の企画を話し合うことが中心になるだろう。

「んー、みんなでラジオみたいにして流すのもおもしろいかもねー。カカちゃんのラジオ、略して『カカラジ！！』みたいな感じでー」

「そう言われると色々できそうで、いいかもね。去年のクラブの人たちより面白くする自信はある。でも……」

「やっぱり私たちはここだよねー」

いつのまにか目的地――とある教室の前に到着していた。

その教室の名前は、裁縫室。

「うん、やっぱ手芸部でしょ！」

「あ……そういえば、こういうの好きなんだったわね、君らっ」

この前あげた私たちのプレゼントでも思い出したのか、サユカンは納得したように頷いた。

「クラブとなればいろんな材料があるだろうし、もっと楽しくいいもの作れるかと思ってさ。ねーサエちゃん」

「ねー」

二人でニコニコ微笑みあう。二人の思い出の遊び、これを極めてきっと……よーし、頑張るぞ！

「なるほどねーっ。ところでカカすけ。ずいぶん意気込んでるけど、作りたいものでもあるの？」

「うん。きっと私の手で作り上げてみせるよ」

「何つくるのよ」

「妹」

「無理でしょっ」

えー。だってほしいもん。

「サエすけも何か言ってやって――サエすけ？　どうしたのよっ」

む、サエちゃんがあさっての方向を見てる。壁際に提示されている六年生の作品には目もくれず。

「サエちゃん、何を見てるの？」

視線の先に目立ったものはない。

あるとすれば……ゴミ箱？

「なんか、変な気配がするー」

そう呟いたサエちゃんは、ふらふらっとゴミ箱に歩み寄った。

そしてそのゴミ箱の蓋を開けてみる。

すると、そこには――

「……や、やったわねカカすけっ。妹ができたわよっ！」

や、ごめんサユカン。ちょっと混乱してて、気の利いた返しができない。

だってさ。

ゴミ箱の中にさ。

クララちゃんがいたんだもんよ。

「――はっ！　も、もしかしてみなさん、クララを見てるですか？」

そりゃ見るよ。そんなとこから出てくれば。

「なんでそんなところに？」

「きっと誰かに捨てられたんだよー」

「サエすけ……その言い方、妙にリアルだからやめなさいっ」

私たちがいまだ戸惑っている中、クララちゃんはマイペースにゴミ箱の中から「んしょ、んしょ」と出てきた。今日は濃いピンクのワンピース姿で、裸足だ。そういえばこの子、いつも裸足だったような……

「あの、クララちゃん。もう一回聞くけど、なんでこんなとこに？」

「はい。探し物の匂いがここからしたので、とりあえず入ってみました」

探し物……にしても、匂い？

「クララちゃんって、そんなに鼻いいのー？」

「はい。たとえばあなた！」

私？

「クララ、あなたからは辛そうな匂いがします」

「……あ、今日の朝ごはん、昨日のカレーの残りだったから」

次はサユカンを指差す。

「あなたからはトイレの匂いがします」

「失礼すぎるわねアンタ！」

「ここくるまえに行ったばかりだもんねー」

そう言われてみればサユカンってトイレの前で捕まえたんだった。

「じゃ、じゃあサエすけはどうよっ　なんの匂いがする？」

「悪の匂いがします」

「この子やるわねっ」

「……んっとに、どいつもこいつもー」

さ、サエちゃん？　抑えて抑えて。

「危険の匂いがします！」

あ！

気がついたときにはクララちゃんは走り出していて、あっというまに裁縫室から出て行ってしまった。

「な、なんだったのかしらっ」

「んー、この学校では見たことないよね。今年に入学する一年生とかかな？　ね、サエちゃん」

「んー……」

「あの、サエちゃん？　もしかしてまだ怒ってる？」

おそるおそる聞く私の質問に、サエちゃんは神妙な顔で答えた。

「いやー。あの子、誰かに似てるようなー」

「えっ、誰かって……わたしたちの知ってる人っ？」

「だと、思うー。でも、誰だったかなー？」

サエちゃんはそれからも、しきりに首をひねっていた。

もちろん、私たちも。

## カカの天下４１４「誰？」（後書き）

クララちゃんが誰かに似てる？　あんな個性的な子に似てる人なんか即わかるはずだと思うんだけど……それになんで学校に？
カカたちの心情はこんなとこですかね。

もしかして、あなたも？笑

……はてさて？

## カカの天下４１５「変な占い」

ふー……トメです。

「ねね、トメ兄」

夕飯を食べ終わってダラーンとしてるところに、カカが携帯片手にやってきました。

「ん？」

「これやってみて」

カカが見せてきた携帯の画面には、名前や生年月日を入力する画面が。

「占いか何か？」

「うん、ＫＹ占いっていうの。流行ってるらしいよ」

「……ＫＹ？」

「Ｋ（空気を）Ｙ（読む）占いだって。私がたまにサエちゃんちでやってるＫＹクエストっていうゲームと同じシステムらしいよ」

「へー。カカはなんて出たんだ？」

「えっと、これを教えてくれたカレーの人の占い結果はね」

「なぜ自分のを言わない」

「うるさいな。とにかく、カレーの人はメールで『一生カレーだけ食ってろ、って結果だったの！　最高の褒め言葉だよね！』って喜んでた」

「どんな占いだよ。ていうか何を占ってんだよ」

「いーからやってみなさいって」

「……ああ」

まぁ暇つぶしにはなるか。

「あ、ちなみにね。これ、ふざけたり間違ったりして入力すると即画面が変わって文句言ってくるから」

「は？　なにそれ」

「たとえばね」

カカは『星座』の欄に『ししし座』と入力した。

「こんな風に間違えて『し』を多く書いちゃったとするでしょ？　すると」

お、画面が変わった。

真っ白な画面。その真ん中には、こんな文字だけが書かれていた。

『笑いすぎ』

……ししししっ、って笑い声のことか。

「こんな風にツッコミいれてくれるんだよ。おもしろいでしょ？ ししし」

「……はいはい。いいけどさ、その笑い方は怪しいからクセにするなよ？」

「うん。あとね、面白かったのが」

カカは再び星座の欄をいじる。

今度は『便座』

出てきた画面の文字は――

『この便所野郎』

「どう！　いーでしょ！　いーでしょー！」

「なんで便所にそんな興奮してるのかよーわからんが、たしかに愉快だな」

なんだか本当に画面の向こうに人がいるみたいだ。

「やってみるか」

えーっと。まずは名前を入力。そして性別か。男、っと。

『うそつけ』

「嘘じゃねぇよ！！」

再び変わった画面に思わず全力でツッコんだ。

「あ、たまにそういう冗談も出るから」

「えらい高性能だなこいつ……」

「一回使った冗談はもう出ないから、安心して続けて」

はいはい、そうですか。えっと、次は星座か。

僕はおうし座だから、お、う――

『オゥ！！』

「まだ入力途中だよ！！」

どこをどうやったらこんなプログラムが作れるんだ！　ったく。

「えっと、次は好きなものか」

好きなものは、なんだろ。

「妹っていれて」

「えー」

「だって間違いないでしょ？」

「あえて書くほどじゃ……」

「いいから書いて」

「はいはい」

楽しそうにしちゃってまぁ。えー、い、も、う、と、っと。

『さっさと書けよ、素直じゃないな』

「これカカが操作してるんじゃないだろうな！？」

「んーん、してないよ。占いが空気を読んだんでしょ」

おかしい……おかしすぎる。

「とりあえず次の質問は――って、あれ。こんだけか」

意外と短いな。送信、っと。

「何が出てくるかな？」

「お、きたきた」

画面を覗き込む。

『占い結果』

『笠原留、２４歳、Ａ型』

あれ、血液型なんか入力したっけ。

『住所は～』

は！？

『戸籍記録は～』

はぁぁ！？

『未来の妻は～』

「待て待て待て！！　なんだこれは！　いくらなんでもおかしいだろ、っていうか怖っ！」

「空気を読んだんだって」

「イロイロ読みすぎだよ！！　なんでこんな個人情報が――」

『好きなもの、パンチラ』

「断じて違うわ！！　だいたいさっき妹って書いたろ！」

『妹のパンチラ』

「そうじゃなくて！！」

『と、いうのはもちろん冗談で』

ずるっ！！

「なぁ……この携帯叩き折っていいか？」

「ダメだよ、私のなんだから。それに占いが空気読んだだけだって何度も言ってるじゃん」

「何の空気を読んだんだよ！」

「トメ兄のツッコミ空気じゃない？」

「なんだよそれ……あ、本当の結果でた」

『おもしろかった』

「これコイツの感想じゃん」

「よかったね、褒められて」

『これからもがんばってツッコんでくれ』

「応援されちゃった……や、待て。なんでツッコんでるってわかった！？」

音声認識機能でもあるのか！？

ＫＹシステム……

謎だ。

## カカの天下４１５「変な占い」（後書き）

たまには季節感無視の話も入れないと～って思ってこんな話書いてみました。

ＫＹシステムって便利（まて

## カカの天下４１６「お約束！　学校のお楽しみ」

「おーし。てめぇらがやれやれってうるせぇから仕方なく、このクラス最初の席替えをすっぞ」

イェーイ！！　とクラスメイトが上げる歓声に乗っかってるカカです！

このクラスになってからは出席番号順に座っていたのですが、やはり席替えしてバラバラに座ってこそ、学校の味が出てくるもんですよね。

味とか言うと小学生っぽくないって？　うるさい黙れ。

「んじゃ適当にクジ作っといたから、引いてけー」

「異議あり！」

「あん？」

シュタ、と手を上げたのは他ならぬ私です。

「私とサエちゃんとサユカンは三人並んで座りたいです」

「わがまま言うな」

「私と先生の仲じゃないですか」

「……こないだの、まだ根に持ってんのか」

あたりまえだよ。本当に絶望したんだからね。

「だいたいな、席ってもんは男女交互って相場が決まってんだ。どのみち三人並んで座るのは無理な話だよ」

「そんな名前も出てない人たちのことなんか気にしないでいいですよー」

「サエ、あんま危険なこと言うんじゃねぇ」

何が危険なんだろ。ただ単にテンカ先生が名前を覚えてない人って意味だと思うけど。苦しい？　知らないよ。

「あ。じゃあサユカンは男でいいですから」

「待てやカカすけっ！　わたしのどこが男だってのよっ」

「じゃーサユカちゃんの女の子らしいとこ見せてー」

「望むところよっ！　え、えっと、どうすればいいのかしら……サエすけ？」

「恋する乙女とかどうかなー？」

「なるほど、それは乙女っぽいわねっ！　よしっ！　あぁ、トメさん！　わたしはあなたのことが大好きです！　もしも――」

「トメ兄が死んだとしたら？」

「この世にある『トメ』と名のつくものを全て集め、全部燃やしてわたしも燃えますっ！　これぞ真の愛っ！」

「おー、関係ない留蔵さんとかもー？」

「燃やすわっ」

「おとめは？」

「全焼よっ！」

世界、滅びるね。

助かりたかったら乙女を捨てるしかない。

……どうやって捨てるんだろ？

「って、なにバカなこと言わすのよっ！！」

長いノリつっこみだった。

「ほい、次の人――」

「あ、テンカ先生！　なに無視してクジなんか引かせてるんですか！」

「無視してねーよ。ちゃんと横目で見てたぞ、おもしろいから」

ふっ、まぁね。私ら三人が同じクラスになったからにはこれくらいは楽勝――ってそうじゃなくて。

「私たちの席ですよ！」

「あー、はいはい。特別に決めてやったから心配すんな。他のやつがクジ引きな」

やった！

「……先生、僕にも希望が」

「んだよニシカワ。またアヤの隣がいいのか？」

「逆です。もうアヤ坊の隣は嫌なんです」

「な、なんですってー！」

いきり立つアヤちゃん……あれ、よく見てみれば今もニシカワ君の隣だ。

「なぜか知らないですけど、小学校一年生のときから僕とアヤ坊の席が離れたことがないんです。いつも隣か斜めの位置で」

あー、いるよね。なんの偶然か知らないけどずーっと一緒のクラスや席の人って。

「呪われてんじゃねぇのか」

「はい、ですからたまには他の席がいいです」

「ニッシー！　あんた失礼にもほどがあるわよ！　別に私はニッシ

ーと一緒じゃなくてもいいけどさ、その言い方が気に食わないわ！　この学校のアイドル捕まえて一緒にいたくない？　しかも呪いって何よ！」

「なんだよ。そんなに僕のそばにいたいのかアヤ坊」

「キモいこと言わないで！」

「だろー。ならキモい呪いを終わらせよう。はい決まり、ばいばい」

「他にも言い方あるでしょっていうの！　大体あんたは――」

また始まった……この二人、こうなると長いんだよね。

もちろんテンカ先生もそれを知ってるため、「あー面倒くせー」と疲れた顔になった。

「なぁ、イチョウ」

「は、はい！？　わたくしのことでしょうか？」

「他に誰がいんだよ」

「し、しかしわたくしの名前は……」

「カカたちがそう呼んでたからそれでいいだろが。元の名前なんて知らねぇし」

名簿見ろよアンタ。

「あの二人さ、ちょっと止めてみてくんねぇか？」

おお！　誰が横槍を入れてもじゃれあいに変えてしまうニシアヤコンビの打破をニューフェイスに頼むのか！

「え、えっと……わたくしでお役に立てるかどうかはわかりかねますが、出来る限り尽力してみたいと思います」

ごーごー。

おそるおそる二人へ歩み寄るイチョウさん。さ、話かけるんだ！

「あ、あの……お二人とも？」

「キモいって先に言ったのはアヤ坊――ん？」

「あんただって言ったでしょキモいって――なによ！？」

「そのキモいというのは、『キモチいい』という言葉の略なのでしょうか」

「「はぁ！？」」

つまりはこういうことになる。

『僕らさ、ずっと一緒だろ？　それはいくらなんでもキモチいいよ』

『私だって、ずっとあんたと一緒なのはキモチいいわよ！』

『ほんとだよな。いい加減にしてくれよキモチいい』

『こっちのセリフよ！　キモチいい呪いね！』

なんてラブラブな会話なんだろう。

「つまりお二人は、一緒の席になるのが何よりキモチいい、ということでよろしいですね？」

今までの口論を、私が今やったように脳内で変換しているのだろう。ニシカワ君もアヤちゃんも真っ赤になって固まっていた。

「うし、つまりは隣の席同士になっても問題ないわけだな。めでたしめでたし！　さぁクジ引け」

呆然としたままクジを引く二人。

そして結果は――なぜかまた隣同士になるのでした。

そして、私の席はというと……

「先生、どういうことですか」

「てめぇら、うるせぇからな。強制隔離だ」

一番前の右端の席に私。

その列の一番後ろにサエちゃん。

そして私の対角線上にある席、つまりは左端の一番後ろの席にサユカちゃん。

私たち三人は、この教室で最大限に引き離されていた。

「どうなっても、知りませんよ？」

「ほー、どうしてくれるんだ？」

「今に見ててください」

後悔させてやるからね！

こうして私たちのクラスは新たなスタートを切るのでした。

## カカの天下４１６「お約束！　学校のお楽しみ」（後書き）

席替え、うーん……学校生活に潤いを与えるお楽しみですよね！
カカたちの席は離れてしまいましたが、だからこそできることもあるってもんです。それが何なのかはまた今度……

ぴん、ぽん、ぱーん

お知らせです。

今回やってます『好きな話投票』なのですが、一つにはなかなか絞れないという嬉しい意見をいくつかいただきまして……
しかし私としては、そこであえて一番が聞きたいわけです笑

ですが！　簡単にまとめるくらいなら大丈夫ですよ。
たとえばサユカンの告白話に一票！　とか。
カカラジに一票！　とか。
カカ天クエストに一票！　とか。

曖昧になるかもですが、その辺は私のフィーリングでまとめますので笑

さて、〆きりまであと十日をきりましたね。
みなさんの投票、まってまーす＾＾

# カカの天下４１７「テンカ先生の戦い」

よう……テンカだ。

「くすっ」

パキ。

おっと、またチョークを折っちまった。

いや、いま授業中なんだよ。オレは教師っぽく、黒板に数式なんぞを書き込んでるわけな？

なのによ。

「ぶっ」「あはは」

なんで、後ろから笑い声が聞こえてくるんだ？

振り返って生徒の顔を見渡す。見た感じ、笑ってるやつは一人もいない。しかしさっきの声には聞き覚えがあった。

「……カカ」

「なんですか先生」

「おまえ、いま笑ったろ。なんでだ」

「笑ってません」

「本当か？」

じーっと見つめてみる。

「ぶっははっ！」

「笑ってるじゃねぇか！」

「や、テンカ先生の顔がおもしろくて」

「どういう意味だコラ！」

「眉毛にごはん粒ついてます」

……なに？

自分の手で眉に触れてみる。む、たしかにあった。朝飯を勢いよく食べ過ぎたか。

「……教えてくれて感謝する、カカ」

「どういたしまして」

再び黒板へ向かう。

なんだ、あいつらはそれで笑ってたのか？　確かにずーっと眉毛にご飯くっつけてりゃ笑えるけどさ。いやオレは笑えねぇが。

「ふふふっ」「ふは！」

おい、まだ聞こえるぞ笑い声。今度はどこに飯ついてんだ。

前触れもなく振り返ってみる。

一番後ろの席にいるサエだけが笑っていた。

「おいサエ。オレの後頭部がそんなにおもしろいか？」

「髪はねてますよー」

「……目、いいな」

寝癖そのままだったか。それなら笑われても仕方ねぇ。

さて、数式、数式……

「ぶっ」「ぶほっ」「くははっ！！」「なにこれ……！！」

いや、笑いすぎだろ。今度はどこのご飯がはねてんだ。

「ぷふー」「ふははっ！」あ……くっ、くく」「ぃやっほぅ」「にひゃひゃ！！」「デュワッ！」

なんか変なのもあったが、笑いが最高潮のところで振り返る！

なんてわかりやすい。

カカ、サエ、サユカ……三人を結ぶ線上の列の生徒のことごとくが、腹を押さえて笑いをこらえている。

「カカ。おまえら、なんかしたろ」

「はい」

正直でよろしい。なんだか知らないが、即やめさせなければ。

「何した」

「息です」

「じゃそれ禁止」

「ええ！？」

あ、冗談か。

「正直に言えよ」

「息してました。これは間違いありません」

「それ以外だよ」

「生きてました」

「じゃそれ禁止」

「えええ！？」

あ、また冗談か。

「おまえの後ろに座ってるやつらを笑わせるようなこと、なんかしたろ？」

「先生、橋を落として笑ってしまう年頃、という言葉があります」

一瞬、瀬戸大橋あたりを破壊して高笑いしているカカが見えた。

姐さんそっくりだった。

「……あ、箸が転がってもおかしい年頃な」

「はい、だから3とか5の数字を見るだけでも笑ってしまうんですよ」

「そんなことで笑えるような平和な世の中だったら苦労せんわ」

酔っ払った姐さんじゃあるまいし。

「本当はなにしてた？」

「ほら、あるじゃないですか。授業中に生徒同士で会話するのに、ノートの切れ端をまわしてもらったり」

あー、言いたいこと書いて「〜ちゃんまで」って近くの席のやつにバケツリレー頼むんだよな。やったやった。

「私ら三人であれやったら、それを読んだ人がなぜかみんな大爆笑」

「どんだけ面白いこと書いてんだ、てめぇは」

オレにも見せろ、と言いたいがここは我慢だ。ここで見て笑ってしまったら負けだ！

「今後はそういうことはするな！　いいな！」

まがりなりにもオレは教師。授業はきちんとやらなければならない。

じゃないと怒られるし。

「はーい。もうしません」

カカが頷くのを確認して、今度こそ黒板に向かう。あーくそ、長いなこの式……と思ったら書き間違えてんじゃねぇか。道理で答えが合わねぇと――

『あっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは！！』

背後から聞こえる大爆笑。

肩を落としながら振り返ると……クラスにいる全員が笑っていた。

「カカ……てめぇ、いい加減に――」

オレが怒鳴ろうとした瞬間、カカはバッとノートの切れ端を広げて俺に見せた。

「ぶっはははははははははははははははっ！！」

あー、こいつら全員これ見たのか。

オレが後ろ向いてる間に全体公開したわけね。

ダメだこりゃ、笑うしかね――

「何事かぁ！！」

ピシャァン！！　と引き戸と一緒に怒鳴りながら現れたのは――

うげ、教頭！？

「……テンカ先生？」

「は、はい！」

教頭の声が静かに響く。

そう、クラスに充満していた笑い声はすっかり鳴りを潜めていた。

「君はさっきから一体なんの授業をしているのかね？　笑い声しか聞こえていないが」

「え、えっと……笑顔の授業？」

「ほほう、それは新しい。ぜひご教授願いたいものだな。よろしく頼む」

「へ？　ええと」

「何をしている。笑顔の授業なのだろう？　さぁ笑え」

「いや、あの」

「私の顔を見て笑えと言っている！！」

「ぶはははははははははははははははははは！！」

や、やべぇ……

カカたちが書いた教頭の似顔絵を思い出しちまった……

しかもカカ→サエ→サユカの順で書き加えられていった顔を……

そう。髪は七三、額には『あたいはさそり座の校長』の文字、さらに耳からマッチョが生えていて、目はエロ目！　頬には可愛く『6しゃい』の文字、鼻の穴からは校長が飛び出して「やぁ」とこんにちはしている教頭の似顔絵を！！

「……ずいぶんと遠慮なく笑ってくれるものだな」

「だ……だって……すごい似てんだもん……」

「ほほう、そういうことか」

ほほう？　なにを納得してんだ教頭。ていうか、どこを見て……

あれ？

なんでオレの手に教頭の似顔絵が書かれたノートの切れ端が貼ってあるんだ？

さらになんで――『テンカ作』とか書いてあるんだ？

「私の顔で、なんの授業をしていたのですかな？」

「い、いやこれは……」

「私は鼻に校長を飼っていたのですかな？　知りませんでしたな」

「お、オレも知りませんでした」

「耳にはずいぶんと立派な青年が住んでいますな」

「その……」

「いまだ書かれていない口には何が住むのでしょうな？」

「あ、あ、あ……」

「来なさい」

「で、ですから誤解――」

「来ると逝く、どちらがいいかね？」

「……来るのほうでお願いします」

あぁ……何言われるんだろオレ……

ちらりとカカを見る。

あんにゃろーはオレに向かってノートを開いて見せていた。
そのノートには『どうだ!!』の文字が。
オレは教頭に見えないように親指を下へ向けて応えてやった。
『ふざけんな、まだ負けてねぇぞ』の意味だ。
そう。
これからもオレの戦いは続く。
あいつらが分散したことでクラス全員が笑ってしまう、とか思うか？
でもな。
あいつら三人そろったほうが笑えるんだよ。
だから今のまま、なんとか慣れさせなければならない。
はぁ……笑い死ななきゃいいけど。
「何か言いましたか？　テンカ先生」
「教頭先生に殺されなきゃいいなーと」
「難しいですな」
「マジで!?」

とりあえずこの試練を乗り越えねば。

## カカの天下４１７「テンカ先生の戦い」（後書き）

カカたちＶＳテンカ先生。
この戦いは今後もたまーに勃発していくことでしょう……

しかしこれ、ちょこっとダーティな話ですね。軽いブラックジョークですかね。見方によれば教師いじめですが、テンカ先生は強いのでまだ冗談レベルです笑

# カカの天下４１８「回る回る、少女も謎も」

こんにちはー、サエです。

「待てーっ」

「やだよーだ！」

学校も終わり、いつもの三人で校庭の脇に咲いている桜を眺めていたのですがー……

「これは花。これは鼻」

カカちゃんはそんな意味不明なことを言い出し、おもむろにサユカちゃんの鼻に桜の花びらを突っ込みました。するとー……

「な、なんてことすんのよーっ」

「あはは！　ふごって言った！　ふごっ！」

「待ちなさーい！」

「ふごっ！　ふごっ！」

こんな追いかけっこが始まってしまったわけでー。

「待ちなさいったらっ！」

「捕まえてごらんなさーい」

おー、一つの桜の木を軸にしてぐるぐる回り始めたー。

可愛い追いかけっこだなー。私は目を細め、ほのぼのと二人を見守っていた。

桜も綺麗だし、私の友達は可愛いし……これでお茶とお菓子があれば最高なんだけどー……あ、サユカちゃんがカカちゃんに追いついた。

「捕まえたわっ！　って――わあああ」

「おおお!?」

ぐるぐる回ってた勢いが強すぎたのか、サユカちゃんは腕を掴んだカカちゃんと一緒に、そのまま校庭の方へと身を投げ出した。

「おっととっ!?　わああ」

「ちょ、サユカンんんん!?」

二人は手をつないだまま、ぐるぐる回り始めた。ほら、互いに腕を引っ張って遠心力つけたらそんな感じになるでしょー？

「とーまーらーなーいーわーっ！」

「おぅおぅおぅおぅ」

楽しい。

可愛い。

誰かお茶とお菓子！

タケダ君でもいれば買いに行かせるのに……あぁ、終わっちゃった。むー、あれを見ながら食べるお菓子はおいしそうなのになぁ。大人の人がお酒のおつまみにするみたいな感覚でさー。

「はぁ……はぁ……カカすけっ！　あんたねぇっ」

「楽しかったね」

「楽しかないわよっ、こんなの！」

「もう一回やらない？」

「やるわ」

楽しいんじゃん。

はらはらと降ってくる桜の花びらを吹き飛ばすような勢いで、再び回転し始める二人。

あー。かわいー。見てるだけでたのしー。

もしかして私、ちょっとおっさんくさい？

「あ、あの、サエさま」

「はいー？」

呼ばれて振り返ると、そこにはイチョウさんがおそるおそるといった表情で立っていた。そんなに怖がらなくてもいいのにー。

「なんです？」

「申し訳ないのですが、わたくし岸村さんたちが遊んでいる場所をお掃除したいのですけど……」

よくよく見ればイチョウさんは竹箒を持っていた。そういえば彼女はよくボランティアで校内のお掃除をしていると聞いたことがある。若いのにえらいもんだねー。

……やっぱり私、ちょっとおっさんくさい？

「あ、わかったよー。じゃあ私たちが遊んだ場所のお掃除はやっておくからー」

あとでサユカちゃんが。

「あ、お願いしてよろしいですか!?」

「うんうん、イチョウさんだけにやらせるのも気が引けるしー。桜の花びらを集めればいいんだよねー」

「はい、木の根元にでも集めていただければ、後でわたくしがちりとりで回収にまいりますので！　それではお願いします！　わたくしは他の場所をやってまいります」

「はーい、いってらっしゃーい」

ひらひら手を振って見送り、後ろを振り返る。

二人はまだ回っていた。

うーん、しょうがないなー。先に竹箒だけでも用意しとこう。

私は校庭の用具倉庫へと向かった。

みんなで遊んでいた場所からはそんなに離れていないので、すぐにたどり着く。

倉庫の扉はすぐに開いた。さて、箒は――ん？

変な感じがした。

倉庫の奥をじーっと見つめてみる。

「……あのー？」

声をかけると、奥の闇がびくりと動いた。

「く、クララに話しかけているですか！？」

え、クララちゃん？

「はいー、私です、サエですー」

「あ、これはどうも！」

知り合いとわかってホッとしたのか、倉庫の中から現れたのは紛れもなくあのクララちゃんだった。

「ふー、予想以上に真っ暗でクララびびりました！　真っ暗なクララ、略して、まっクララでした！　これあんまりおもしろくないです」

相変わらず飛ばすなーこの子。

「また変なところから出てきたねー。何してたのー？」

「さがしものです！　それでは、クララは時間がないのでこれで失礼します！」

「あーー」

前のときのように走り去ろうとするクララちゃんに、ギリギリ声をかけることができた。

「何をさがしてるのー！？」

クララちゃんは足を止め、振り向かずに答えた。

「おかーさんです」

そして再び走り出し、あっというまに見えなくなってしまった。

戻った私は、まだ回っていた二人の回転をランドセルを投げつけ

ることで止め、今あったことを話してみた。

「へー、さがしてるのってお母さんだったのねっ！　でもなんで学校で」

「闇雲に探してるとか？」

「んー。でもこの間、探し物の匂いがするって言ってたしー、やっぱこの辺にいるんじゃ」

「匂いって……それが本当なら、ゴミ箱の中や倉庫の中にいたことがある人になるよ？　そんなまるで学校でかくれんぼしたみたいなお母さんなんか、いるわけ――」

カカちゃんは口にしながらハッと気づいたみたいだ。

サユカちゃんも気づいた。そして私も。

一人だけいる。

お母さんと呼ばれてもおかしくない年齢で、学校中でかくれんぼをしていた女性が。

「今はどうせいないだろうし、教頭先生に聞いてみようよ！」

「そうね、でも聞くなら明日ねっ。いま教頭先生、テンカ先生にお仕置き中だから」

「……まだやってたのー？」

「ええ。噂だと、耳にマッチョが住めるか、鼻に校長が住めるかどうかを身をもって試されているようよ」

「うあ、ちょっとやりすぎたかな」

「と、ともかく聞くのは今度ねっ」

んー、でも。

私がクララちゃんに似ていると思ったのは、あの人じゃないんだけどなぁ。

## カカの天下４１８「回る回る、少女も謎も」（後書き）

はい、遠い伏線きましたー笑
しかし、本当にあの人がそうなのか？　それはまだわかりません。
サエちゃんの違和感を見る限りは。

それにしてもカカたちがぐるぐる回っている様子を想像すると…
…妙にのほほんとしたキモチになるのはなぜでしょう?笑

誰か、お茶とお菓子！！

## カカの天下４１９「次のツッコミは君だ！」

「ツッコミをしてくれないか」

「はい？」

はい、トメです。

今日は日曜日。非番のキリヤと我が家でダラダラとコーヒーを飲みながらだべっていたのですが、ふと思いついたので言ってみました。

「いやな、最近思うんだよ。僕の周りにはツッコミがいないって」

「トメ君がいるじゃないか」

「だから、僕以外にだよ！　僕ばっかツッコミじゃ、いい加減疲れるんだよ。たまには僕もボケたいよ」

「そっか……トメ君もボケが始まる歳かぁ」

「そういう言い方は不愉快だからやめてくれる！？」

あ、またツッコんじゃった。

「とにかく！　僕の周りでツッコミができそうなのって、キリヤくらいなんだよ」

「ふむ、そこまで言うならいいでしょう。私がツッコんでみます。

ですからどうぞ？」

「え？　どうぞってなにが」

「ボケをお願いします」

えっと……どうしよう。いざ言われると何をどうすればいいのやら……

そうだ、とりあえず唐突なことを言えばいいんじゃないかな。

「タイヤキ食べたくないか？」

「食べたいです」

「じゃあ行こ――ツッコめよ！！」

「え、それボケだったんですか？」

「悪かったなセンスなくて！」

あぁ……またいつの間にか僕がツッコミに……

肩を落とす。しかしタイヤキを食べたいと思ったのは本当なので、キリヤと僕は家を出て商店街へと買いにいくことになった。

その道中。

「もっとツッコみがいのあるボケしてくださいよ。トメ先輩と違って私は初心者なんですから」

「プロになったつもりはないけど……でもそうだな」

ツッコみがいのあるボケ。そうだな、自分がツッコむ側だったらどうだろう。

うーん、何かアブナイこと言ってるやつにはツッコみやすいかな。

よし、ボケるぞ！

周りに何か材料は……お、小学生くらいの女の子が歩いてる。

「あの女の子、可愛いなぁ。ナンパしちゃおっかな！」

「うぁ」

「引くなよ！　ツッコめよ！」

「でも先輩、ボケるにしたってもう少し考えたほうが……」

「そんな目で見るな！」

ううう、仕方ないだろう。なんか知らないけど普段から『このロリコンが！』っていう声がどこからか聞こえてる気がするから、あえて「それ犯罪じゃん」って言われて「だよねー、ないよねー」みたいな流れがほしかったのに！

「……犯罪だ」

「ボソッと言うな！」

ああうう、またツッコんでる……

「じゃ、じゃあほら！　ちょうどいいのが来た！」

「はい？　あの女性ですか」

「そうだ！　あれは僕の姉でな、存在自体がツッコみどころ満載だからやりがいがあるぞ」

「なるほど、頑張ってみます」

キリヤの意気込みを確認した僕は、都合よく向こうから歩いてくる姉に声をかけた。

「あ、弟じゃん。やっほー」

「おっす、姉」

「その子だれ？」

「僕の友達でキリヤっていうんだ。ほらキリヤ」

いけ！　ツッコめ！

「こんにちは、キリヤと申します」

「あれ、あんた東治の店員さんじゃん？」

「ご存知でしたか。あ、そういえば……お姉さまもお客さんとして

見たことがあるような」

「うんうん。たまーに行くからさ。今度行ったときはサービスしてね！」

「はい、喜んで」

「じゃ、うちの弟をよろしく。じゃーまたねー」

「はい、ごきげんよう」

にこやかに手を振って別れる二人……

って！

「ツッコめって言ってるだろ！」

「え、今の方にツッコみ所なんてありましたか？」

「あるだろ！　姉の着ていた服は！？　持ってたものは！？」

「薄汚れた特攻服に木刀ですが。ケンカ帰りですかね」

「ツッコめよ！」

「え、別におかしくないかと」

「世間一般ではおかしいんだよ！」

「知りませんでした。さすが先輩。勉強になります」

「おまえわざとやってるだろ！」

はぁ……僕ほんとツッコミしかしてないじゃん……

「あ！」

向こうから歩いてくるあの人は！　今度こそ。

「よしキリヤ、あの女性だけど」

「ナンパするんですか」

「さっきの僕のセリフは忘れろ！　いいか、あの人はかつて皿を売っていたサラさんという人なんだが」

「そんなわけないやん！」

「や、せっかくツッコんでくれたとこ悪いけど、本当」

あ、ちょっとしょんぼりした。

「ま、まぁまぁ聞いてよ。でな、彼女が鍋を売ったらナベさん、お釜を売ったらオカマさんって呼んでからかってるんだよ。今からそんな風にからかうから、僕にツッコめ。いいな」

「はい、わかりました！」

よし。

僕は買い物帰りらしいサラさんに片手をあげて声をかけ――ようとしたら向こうが気づいてくれた。

「トメさん！　奇遇ですね」

僕は買い物袋を見た。

大根が飛び出していた。

「やぁ、大根足さん」

さぁ行け。

キリヤはサラさんの脚をまじまじ見て頷く。

「なるほど」

「納得すんなよ！！」

「え、いや、ですが見事な」

「バカ！　そこは嘘でも――あ」

とてつもなく不吉なオーラを感じて、おそるおそるサラさんの方を見る。

なんていうか、詳しく描写したら呪われそうな顔をしていた。

「私の脚……大根、ですか？」

「い、いや！　大根みたいに太くないよ！　どちらかというと人参みたいに」

「凸凹してるって、言いたいんですか……？」

ヤバイ。

ネガモードだ。

「男なんて……」

瞳に涙を溜めたサラさんは、きびすを返して――

「男なんて……みんな燃えてしまえええええええええ！！」

怨嗟の声をあげながら走り去ってしまった。

……後が、怖い。

「どうしてくれるんだよキリヤ……」

「え、私は燃えませんよ？　萌えましたけど」

「おまえもう黙れ！！」

はぁ……

やっぱ僕がツッコミでいくしかないのか……

「というかトメ君」

「なんだよ」

「ボケだのツッコミだの……あなたの生活ってコントなんですか？」

「言うな！！」

## カカの天下４１９「次のツッコミは君だ！」（後書き）

あらたなツッコミ講座ですが、トメのボケ力不足により失敗。
ですが最後のツッコミはうまいと思います（笑）

しかしキリヤ君……イイね！

## カカの天下４２０「たまにはトメＶＳ姉娘」

どうも、いきなりですが呆れているトメです。

何に呆れているかというと……

「シューの家がまた誰もいなくなるんだよ。てわけでコレお願いね！」

そんな軽い感じでタマちゃんを預けていった姉にです。

まったく、預かるのはいいんだけどさ、いっつも急なんだよ。だいたいさ、なんでシュー君ちの事情なのに姉がくるんだよ。たまにはシュー君に喋らせてやれよ。なんだか知らないけど放っておいたら存在が消えてしまいそうな気がするじゃないか。なんとなくだけど。

……ともかく。カカはまだ帰ってきてないから、僕がタマちゃんの相手をしなければ。

ソファーにちょこんと座って僕をじっと見ているお子様に、なるべく優しく微笑みかけてみる。

「タマちゃん、何したい？」

「げき！！」

劇？

あ。そういえば姉が言ってたな、最近のタマちゃんのお気に入りの遊び。なんでもこの前のお楽しみ会でカカたちの劇を見てから、何かとそのマネをしたがるんだとか。

「んー、劇ごっこすればいいのか？」

「しょう！」

舌ったらずな声で頷くタマちゃん。うーん、そこまで詳しくは覚えてないんだけどなぁ。タマちゃんに適当に合わせてればいっか。

「よし、じゃあ付き合うよ」

「やたー！」

ソファーから立ち上がったタマちゃんは、僕をびしっと指差して口を開いた。

「おらおらー！　しょ、しょ、ショ……」

えっと……ああ、もしかして「ショバ代よこせ！」とか言ってたシーンかな。

結構覚えてるもんだな僕も。

「しょんなとこ、よこせ」

「どんなとこですか！？」

タマちゃんのほうはあんまり覚えていないらしい。

「うわー！」

おや、今の僕のツッコミを攻撃と取ったらしい。タマちゃんは劇中のカカのように格好よく吹っ飛ぼうと、ソファーによじよじ登ってから床へとダイビングした！

もちろん幼いタマちゃんに空中回転などできるはずもなく。

飛んだ姿勢のまま、腹から床に落ちた。

「ぐほぁ！？」

およそ子供に似つかわしくない声を発したタマちゃんは、そのまま停止した。

チーン。

「――って、何を呑気に見てるんだ僕は！？」

急いでタマちゃんに駆け寄る！　まずいまずい、いつも僕の身近でこういうバカをやる我が家の姉妹はやたら頑丈だから「危ないからやめなさい」って止める習慣がなかったんだ！

「大丈夫か！？」

「いたかった」

……や、この子も頑丈だわ。セリフのわりにはケロッとしてるし。

「うまくとべない！　ちゃんととぶ！」

「危ないからやめなさい！」

よし、今度はちゃんと言えた。

「うわー」

再び空を舞うタマちゃん。って、言えた意味ないし！！　また腹から着地だし！

「……ぅ……ぁ！」

打ち所が悪かったらしい。少々ゾンビっぽいうめき声はとことん子供のものとは思えない。

しばらく倒れたままでピクピクしていたタマちゃんは、やがて再び起き上がるのだった。

「いたくなくなってきた」

それヤバイんじゃないか！？

「もういっちょー！」

「ま、待て待て！　簡単な飛び方を教えてあげるから！」

羽交い絞めにしながらなんとか説得した僕は、タマちゃんに一番簡単な体操を教えてあげた。

その名も、でんぐり返り。

「うわー！」

ごろん、と転がったタマちゃんはキャッキャッとはしゃいでいる。
よかった、これなら安全だし、カカのマネっぽいし。

「うわー！」

ごろんごろん。

よっぽど気に入ったらしいな、でんぐり返り。眩しい笑顔で何度も転がるタマちゃん……うーん、なごむ。

「うわあああああ」

ごろんごろんごろん。

お、ちょっとやりすぎー、壁にぶつかるぞ！　あ、進路を曲げた。
うまいうまい。

「うわあああああああ」

ごろんごろんごろんごろん。

よし、しばらくこうして部屋で遊ばせておけば……あれ？

「うわあああああああぁぁぁぁぁぁぁ」

ごろごろごろごろごろごろごろごろ……

「どこへ行く!?」

部屋から転がり出したタマちゃんを追いかける!

同じように部屋を飛び出て廊下に出た。どこまで行った!?　壁にぶつかる前に保護せねば――僕は慌てて駆け出した。

そして何かにつまづいた。

身体が浮いた。空中で僕の足元を見る。そこには丸まったタマちゃんが。

ああ……意外と近くで止まったのね、アハハハ。

まったく、いつもいつも予想外な行動ばかりしてくれる。

なんて昔のカカにそっくりなんだろう……思い出しちゃうなぁ、物心つく前のちっさいカカ。幼稚園いくようになったらおとなしくなって僕に甘えるようになったけど、その前はそりゃもーやんちゃでやんちゃで――――

そんな風に昔の思い出に浸っていて……ふともう一つ思い出す。

そういえば、ここどこだっけ?

空中?　そっか、僕、タマちゃんにつまづいて浮いてたんだっけ。冗談抜きで吹っ飛び中だ。

なのに、なんでこんなこと考えてたんだろう?

あ、これが走馬灯か。なるほど、アハハハー。

僕は笑顔で。

顔から床へと突っ込んだ。

声も出なかった。

「ただいまー。ってトメ兄。なんでそんなところで寝てるの」

「カカ……」

「なぜ遠い目で私を見る」

「や……よくここまで育ってくれたもんだ」

「は？」

あの後もイロイロあって……再度、僕は廊下にくたばっていた。

タマちゃんの世話をするたびにカカが何か悟ったような顔になる気持ちがよくわかった。や、今日みたいな苦労をかつてカカ相手に何度もしてさ、もう慣れた気になってたんだけど……これ、慣れないわ。

育児って、大変ね。

世の中のお父さんお母さん、ほんっとお疲れさまです。

## カカの天下４２０「たまにはトメＶＳ姉娘」（後書き）

結構いい感じにタマちゃんをあしらっているかと思われたトメですが……あえなく撃沈です。
こんなタマちゃんの世話してるんだからシュー君って結構えらい気がしてきました笑

さて……そろそろ好きな話投票の〆きりですが。
カカラジ手前にちょっとしたお話をいれる、かも？

# カカの天下４２１「逆だぞ、がんばれタケダ」

よう、久々だな。タケダだ！！

……ほんと、久しぶりだなぁ。

んああ！　それというのも、俺だけカカ君たちと違うクラスになったから！　神よ、俺に恨みでもあるのか！？　それともただ単にドSなだけなのか！！　おそらく後者だな！

くそぅ……いや、いくら悔やんでも違うクラスになった事実は変わらない。

なんとかカカ君に近づかねば。そんなことを考えながら廊下を歩いていた矢先、カカ君を見つけてしまった。

こちらへ向かって歩いてくる。これはすれ違いコース……声をかけるならば今じゃ！　おのおのがた、でんちゅーでござる！　この間テレビで言っていたが、要はかけ声なのだろうな、コレ。電柱がどうしたのかは知らないが、まぁいい。ともかく突撃！

「やぁ、カカ君」

「お、タケダ財布じゃん」

「余計な言葉をつけ加えるな！」

「じゃ財布」

「そっちを取るな！！」

な、名前を覚えてくれていただけでも良しとしよう。

「あ、あのなカカ君」

「なに。お金くれるの？」

「財布から離れてくれ！　その、な。話があるのだ」

「む？」

よし、ここは単刀直入に思っていることを伝えよう。

「実はな、前々から思っていたのだ」

「何をさ」

「サエ君やサユカ君のことなのだが……君の友達と言うには役不足ではないかね！？」

言った！　言ってしまった！

カカ君は怒るだろう。しかし俺は正しいことを言った！

カカ君の隣に常にいるべきなのはこの俺、タケダなのだから！

さぁカカ君。反論するがいい。俺が愛をもって説き伏せてくれよう！

「たしかにそうだね」

……あれ？

認めちった？

「それで？」

「え……いや、その、それだけ、なのだが」

「あそ。んじゃね。トイレが私を待ってるの」

「そ、そうか。トイレによろしく」

予想外のあまりに、呆然と変な答えを返してしまった……

なぜだ？　俺はあの二人を、カカ君の友達にふさわしくない、と言ったのだぞ。あの友達想いのカカ君なら絶対に怒るはず……

「まさか、俺の知らない間に――救いようがないほどの邪悪に染まってしまったのでは！？」

「きゃあっ！？」

おっと、俺としたことが独り言を叫んでしまった。通りすがりの女生徒を驚かしてしまったではないか、悪いことをした。

「すまな――サユカ君？」

「う、タケダ君、だっけ」

露骨に引きつった顔をするサユカ君は、おそらく俺が苦手なのだろう。しかし、この際細かいことに構ってはいられない！

「サユカ君、折り入って相談があるのだ！」

「な、なによっ」

「カカ君のことで煮詰まっていることがあって――」

「煮詰まっているならそれでいいじゃないのっ」

「……え？」

「じゃあねっ」

逃げるように去っていくサユカ君……煮詰まってるのにそれでいいなんて……サユカ君、冷たい……彼女まで悪魔の道へと？

「タケダ君、そんなとこ立ってたら邪魔だよー」

「魔王がきた！？」

「……なぐるよー？」

おっと驚きのあまりに本音が！

「さ、サエくーん、きいてくれよー」

「はいはい、今度はなにー？」

俺は先ほどあった出来事をサエ君に話した。

「ははーん……タケダ君、言葉の意味を勘違いしてるでしょー」

「言葉の、意味だと？」

「そうそー。勘違いしやすい言葉なんだけどねー」

サエ君の説明を聞くと、こういうことらしい。

『役不足』の意味――与えられた役が軽すぎること。逆だと思っていた！

『煮詰まる』の意味――充分に議論、相談をして結論が出せる状態になること。逆だと思っていた！！

「カカちゃんは私とサユカちゃんのこと『親友』と思ってるからねー。きっと『友達』っていう言葉じゃ軽いと思ったんだよ。自分で言っててはずかしーけどー」

「そして俺が『煮詰まった』と、つまりは『もう結論が出せる』と言ったから、サユカ君は相談を聞く必要がないと思って去っていったわけか……」

というか、な。

というか、な！

というか、な！！

「なんで君らは普段バカなくせにそういうところだけ頭がいいのかね！？」

失礼を承知で叫んだ。

サエ君は深く、とても深く微笑んで――

「言いたいことはそれだけー？　バカ以下のタケダ君」

俺の心を、容赦なく抉った。

リベンジだ。

「カカ君」

「ん、なに？」

そう、リベンジだ！

俺はサエ君から新たな言葉を教えてもらった。そう、勉強不足のせいで意味を勘違いしていた言葉たちだ。それらを使って――俺は今度こそ、カカ君を惹きつける！

「カカ君、前から思っていたのだが」

「また？　なんなのさ一体」

さぁ行くぞ。

「君は頭でっかちだな」

頭がいい、という意味だそうだ！　いい意味で！

「いつも大口をたたいてばかりだし」

立派な言葉ばかり言っている、という意味だそうだ！　いい意味で！

「きっと心臓には毛が生えているのだろう」

度胸がある、という意味だそうだ！　いい意味で！

よし、これは今まで俺が悪い意味だと思っていた言葉たちだ。

さて、さらに褒めるぞ！

「そのままでは犬死にするだろうな！」

とても意味ある死に方らしい。逆だと思っていた。

「無駄に足掻きながら生きていくがいい！」

懸命に価値ある生き方をしていけ、という意味らしい。逆だと思っていた。だって『無駄』とか言ってるのにな。不思議だ。

さぁ、ラストだ！

「カカ君……君はまるでゴリラのようだ」

ゴリラは美人らしい！

「むしろ、へのへのもへじだぞ！」

へのへのもへじはものすごく美人らしい！

「ウーパールーパーと言っても過言ではない！」

ともかく宇宙レベルで美人らしい！

さあ、どうだ。

カカ君の反応や、いかに！？

「で、どうだったー？」

「……無言で……股間を……蹴られ……ました……な、なぜ……」

「だって全部嘘だもん」

「やっぱりか！？」

道理でおかしいと思った！！

「あ、『役不足』と『煮詰まる』の意味は本当だよー？」

「そうかい……もうどうでもいいよ……うう……今度こそ汚名を挽回しようと、熱くなりすぎた……」

「汚名は返上するものでー、名誉を挽回するものなんだけどー……本当に汚名を挽回しちゃったね」

「うあああああああああん」

「よしよし、もっと楽しい言葉を教えてあげるからー」

「楽しいのは君だけだあああああああ！！」

がんばれ……俺……

負けるな……俺……

泣いてなんか、ないやい！

## カカの天下４２１「逆だぞ、がんばれタケダ」（後書き）

勘違いしやすい言葉、結構ありますよねー。
意外と意味が逆だったり。日本語ってムツカシイ。
そしてタケダ君の恋路もムツカシイ笑

さて、次回は――ついにクララちゃんの謎が明らかに！？

## カカの天下４２２「桜、舞い散る中で　前編」

「クララちゃんの正体や、いかに！」

今日のテーマだそうですー。あ、私はサエですよー。

「今日こそ突き止めて見せるよ！」

「おーっ」

時刻はお昼休み、カカちゃんとサユカちゃんは盛り上がっています。もちろん私も興味深々で会議に参加しますよー。

「校長がお母さん、っていう説が有力だけど……それ知ってそうなデストロイヤー教頭は放課後にならないと戻らないらしいから、先に情報収集の結果を！」

おー、会議っぽい。

「まずはサユカン！」

「わたしが聞き込みしたのは、えっと……知り合いのおば――おねえさんなんだけどっ」

なんでこっちを見るのサユカちゃん。

「その人はこんなことを言ってたわっ」

『もしもしっ』

『あらー。もしもしなーに、サユカちゃん。暇だったからお電話嬉しいわー』

『あのちょっと聞きたいんですけどっ、クララちゃんって子供のこと、何か知りませんか？』

『知ってるわよー』

『ええっ！　だ、誰の子供ですか！？』

『わたしのー』

『えええ！？』

『わたしって実は二児の母だったのよー』

『ま、まさか……！　本当ですかっ！？』

『嘘だよー』

『あ？』

『暇なときって嘘つきたくならないー？』

『……切りますっ』

『まーまー、そんな慌てなくてもー。それにしても外人さんみたい

な名前ねー、その子。最近そういう名前が流行ってるみたいだよね。この間なんかー―』

「と、こんな感じだったわっ」

「サユカンが『あ？』なんてガラの悪い返事するなんて思わなかった……」

「そこに注目しないでよっ」

「そんくらい何もわからなかったね、ってことだよ」

「それにしても暇だから嘘つくなんて、変な人もいたもんだねー」

「……」

「あれ？　サユカちゃん、なんでそんなびみょーな目で私を見るのー？」

「いえ、別になんでもないわっ」

変なサユカちゃん。ま、いっか。

ともかくサユカちゃんのほうは空振りだなー。名前が珍しい、っていうのは私も思ったけど、いまどきって言えばいまどきだしー。

「サエちゃんは？」

「私はねー、商店街でサラさんに会ったよー」

「どうだった？」

「子供いますかー？　って聞いたら泣きながら逃げたー」

『子供のいる年齢に見えるようになってしまったのねえええ！？　人生終わりよおおおお！　お肌の曲がり角おおおおお！』とか叫びながらねー。私も二十歳すぎるくらいから歳を気にしたりするようになるのかなー。

「カカすけはどうだったのよっ」

「私はね、あんま聞ける人いなくて……とりあえず校長の娘説の線を調査してみた」

「調査って何したのー？」

「クララちゃんって、たぶん五歳か六歳くらいだよね。だからトメ兄にこんなこと聞いてみた」

『ね、トメ兄。五十歳くらいで子供って産めるもん？』

『うえ……！？』

『なんでそんなに口を引きつらせて驚くのん』

『や、その、うーん……あ、愛があれば？』

『愛があればできるんだ』

『うん、多分。あと健康に気をつけて、すごくがんばれば』

『何をがんばるの？』

『が、がんばるんだよ！』

『だから何を』

『えっと、その……がんばって……がんばって生きるんだよ！！
そしたらいいことあるさ！』

「よくわかんなかったけど、とりあえず愛をがんばれば産めるって」

へー、そうなんだ。勉強になった。

「んー……大した情報も集まらなかったし、あとは放課後に教頭先生に聞いてみるしかないねー」

私の言葉に頷くカカちゃんとサユカちゃん。

そして昼休みが終わり、授業を終え、教頭先生のところに向かったのだけど……

「ふむ、校長に子供はいないはずだが」

またしても、はずれだった。

「私と校長は家族ぐるみで親しい間柄でな、だからあの人の親戚のことも知っているが……その中でもクララという子はいなかったと思うぞ」

そこで、手詰まりだった。

親しい知り合いには大抵当たってしまったし、あとはアテのない情報収集か、クララちゃん本人に事情を聞くしかない。私たちは一緒に帰らず、手分けして適当に寄り道しながら帰ることにした。もしかしたらクララちゃんに遭遇するかもしれないし。

だから今、私は一人だ。物思いにふけりながら歩いてる。

私たち、なんでここまで一生懸命になってるんだろうねー？

さっき、ふと思い立ってカカちゃんに聞いてみた。すると答えはすごくあっさり返ってきて……

『手伝ってあげたいじゃん、お母さん探し』

ちょっと、ドキッとした。一瞬だけ、クララちゃんと自分が重なって見えたから。

「はぁー」

なんとなく、ため息をつく。

お母さん探し……かぁ。

一つだけ、手がかりがあるんだよねー。

私の『クララちゃんが誰かに似ている気がする』っていう、曖昧な感覚。

それが誰かさえ、わかれば……

でも、誰だろー。

知り合い、だよね。

当たり前だよねー。似ているって思ったんなら、少なくともその人のことを知って――

「んー？」

鼻の上にくすぐったい感触。

「あ、桜の花びらかー」

見上げると、そこには半分ほど花が散ってしまった桜の木。風も強いし、そろそろ時期も終わりかなー。

ボーっと歩いていたせいだろう。いつの間にか私は、いつも遊んでいる公園に入っていた。

不意に先日のお花見を思い出して、笑いがこみ上げてくる。花が

ないお花見。ホワイトデーのお返しにと、お姉さんが企画した無茶な企画。

ちゃんと満開のときにしたかったな、お花見。なんであんなに急いでやったんだろ。

あ、そーそー。

たしかあの辺に……あ、あったあった。あの、元気のない桜の木を――

「え？」

元気のない桜の木を、見た瞬間。

「桜……？」

変な感じがした。そう、クララちゃんを見るたびに感じていた、妙な――幽霊が見えてしまうときと同じ、感じが。

「さくら……」

まさか。

でも。

間違いない。

「さ……くら……くらら……ちゃん？」

信じられないけど――

私がクララちゃんに似てると感じてたのは、この桜だったんだ。

## カカの天下４２２「桜、舞い散る中で　前編」（後書き）

おそらく、大抵の読者様にとって予想外だったでしょう。
これ、ファンタジー入ってない？　そう思った読者様もいらっしゃるでしょう。

でもね。
たまにはいいじゃないですか。

ちょっとフシギな桜のお話。
もう少し、お付き合いくださいませ。

# カカの天下４２３「桜、舞い散る中で　中編」

サエです。

お昼休み、給食を食べ終わったところで、私は昨日の公園で気づいたことをカカちゃんとサユカちゃんに打ち明けました。

「つまりサエすけは……クララちゃんがあの桜だって言いたいのっ！？」

「うんー。桜の精とか、そんな感じだと思うー」

「……そう言われてみれば、頷けるかもしれないわねっ！　すごくフシギな子だし。常識を知らなすぎると思ってたのよねっ」

若干キラキラ瞳を輝かせながら頷くサユカちゃん。さすがはメルヘンチックな漫画が大好きなだけあって簡単に信じてくれた。

問題はー……

「またまたー。そんなのがいたら幽霊とかもいることになっちゃうじゃん」

そんなことを言いながら手近にあるゴミ箱の中に入ろうとしている、この子だ。

「はいはいカカすけ。怖いからってそんなとこ隠れないの、汚いでしょっ」

「うぅ、だってさぁ」

幽霊が苦手な私の親友は、そういうフシギな話の類も一切ダメらしい。

でも負けない。信じてもらうんだ！

「カカちゃん。幽霊とかってね、いるんだよー」

「またまたー……やめてよー……天気も話題も暗いなぁ……ほんとにさぁ……ゴミ箱……」

「コラコラッ！　ゴミ箱に吸い寄せられていかないのっ」

「あの中に入ろうとする校長先生やクララちゃんの気持ちがわかるよぅ。防御力高そうだもん……」

あぁ、なんだかどんどん落ち込んでいく……ええい！

私はカカちゃんの両肩を思いっきり掴んだ。

「カカちゃん！　私を見てー」

至近距離で、出来る限りの真摯な目で真剣な声で説得する。

「幽霊さんだって悪い人ばっかりじゃないの。いい人もいっぱいいるの。普通の人と同じだよー」

「で、でもぉ」

「大丈夫。悪い霊がきても私が守るから。私を信じてー」

「信じたいけどぉ」

こうなったらー！

必殺――身体はしなっと瞳はパチッとうるうる上目遣いに悲しい声全開！！

「信じて……くれないのぉ？」

「シンジマ――」

釣れたかー！？

「セン！」

逃したー！

「うぅ……私のこの技が通じないなんてー。よっぽど嫌いなんだね幽霊」

「サエすけ。君、絶対将来は悪女になるわ」

「色っぽかったー？」

「うん――じゃなくてっ！　女の子相手にあんな顔してんじゃないわよっ！　ドキドキしたじゃない、まったくもうっ」

サユカちゃんには有効かー。今度使おう。

「だいたいね、もっと簡単な説得方法あるじゃないのっ」

え？

「あのさ、カカすけ。クララちゃんを幽霊とか思うから怖いのよ。妖怪と思いなさい」

「一緒だよぅ。怖いよぅ」

「妖怪だったら君の身近にいるじゃないの」

「え？」

「君のお姉さん」

「……それもそっか」

説得はやーっ！！

「ふふっ、どうよサエすけ」

「サユカちゃん……ただの私たちの玩具じゃなかったんだねー」

「なんか褒められてる気がしないけど……それで、クララちゃんが桜の妖怪だとして、どうするのっ？」

「それなんだけどー。桜なクララちゃんのお母さんって、結局なんだと思うー？」

「桜のお母さんって、やっぱ桜じゃないの？」

お、カカちゃんも会話に参加してきた。本当にあっさり納得したみたいだねー。

「だとしたらお手上げよねっ。親の木なんてわかるわけないし」

「でもね、もう一つあると思うのー。桜の木の、親っていうのが」

私には一つの推測があった。

それを、確かめないといけない。

「つまり――植えた人」

それが当たってるとすれば。

お母さんっていうのはきっと、あの人のことだ。

放課後。

私たち三人は職員室へ直行した。教頭先生を捕まえて話を聞いて――その推測が正しかったのだと確信した。

「ああ、つい先ほどこちらへ帰ってきたよ。出かけてしまったがね」

その行き先を聞いた。もう間違いない。

急いで学校を出る。走った。私はあまり運動が得意じゃない。でも走った。カカちゃんとサユカちゃんに元気づけられながら。はやく確かめたかったから。

はやくしないと、いけない気がしたから。

息が切れて、脚が重くなって、それでも走って、走って、走って――

その桜の木に、たどり着いた。

木の前には、小さな人影。

「……ごめんなさいね」

その人――校長先生は、木に優しく触れながら、謝っていた。

「満開の時期に来てあげたかったのですがね、ギリギリまであなたに合う肥料がないか探したくて……でも良いものは見つかりませんでしたわ。あなたにはもうすでに、世界各地の肥料を試してしまったものね」

優しく、そして悲しそうに語り掛けるその後姿を、私たちは黙って見つめていた。

「こんなことなら、あなたの満開な姿を見にくればよかった……最後、ですのに」

やがて、校長先生は静かに振り返った。

「あらあら、おほほ。みなさん、いかがなさったの？」

柔らかく微笑む校長先生に、私は聞かずにはいられなかった。

「校長先生。最後って、どういうことですか」

「……ちょっとだけ、お年寄りの昔話に付き合っていただいてもよろしいですか？」

頷く私たち。

笑みを深くした校長先生は、静かに語り始めた。

「わたくしたちの小学校が、なぜ貴桜小学校と呼ばれているかご存知ですか？」

桜。この言葉にドキッとした。

「言葉どおりですよ。桜を大事にしたい、人々のそういう想いから生まれた学校なんです。儚くも美しい桜は人生のよう。願わくば子供たちが、その短い人生で花を咲かせる人間になれますように……というのは、創立した方のお言葉だそうです」

桜は春にしか花を咲かせない。とても短い間だ。それでも精一杯に咲こうする。

とても、とても綺麗な花を。

「わたくしも貴桜小学校の出身なのです。当時は小さな学校でして、生徒も少なくて……でも貴い桜を想う気持ちは変わらなくてね、み

んなで公園に桜の苗木を植えたのですよ」

それが、この木。

いや、この公園に咲く、桜の木々が、みんな――

「成長の早い木でしてね、わたくしもこの子も、同じように時を歩んできました。落ち込んだときには話を聞いてもらって、寂しいときには一緒にいてもらって……いまどきの子は、おかしいと思いますか？　ただの木に、そこまで想うのは」

校長先生は、その桜の木を見上げた。

愛おしい我が子を見るように。

「不思議なものでね。この木が頑張って生きているのを見ると、わたくしも元気になれるのですよ。近くで、懸命に生きている。ただそれだけ――それだけで、わたくしも頑張れたのです。自然って、結構すごいんですよ」

校長先生はまるで自分のことのように胸を張って、誇らしげに言った。

でも、その顔がすぐに曇る。

「そんなわたくしの木が……最近、元気をなくしましてね。病気になったみたいです」

悲しそうに。

本当に悲しそうに。

「樹木医さんの話では……今年、花を咲かせたらもう、もたないそうです」

涙をこらえているのか。

泣きつくしたあとなのか。

「いろんな方法を試しました……でも、ダメでした」

桜の木に手を置いて。

額を当てて。

「ごめんね……」

校長先生は、謝った。

「何もしてあげられなくて……」

こんなに大人の人が泣いているのを、私は初めて見た。

涙は流してない。

でも泣いてる。

なんて重いんだろう。

私やカカちゃん、サユカちゃんが泣くのとは違う。

悲しみの重さが違うんだ。

「あなたたちも、ごめんなさいね……こんなつまらない話……お年寄りの愚痴だと思って、勘弁してちょうだい……」

違う。

つまらなくなんかない。

私たちは知ってるもの。

そんなあなたを――お母さんを探していた女の子を。

あなたの可愛い子供が、最後に会いたいと、走り回っていた姿を知っているから――

声を、かけたい。

でも、かけれない。

かける言葉が見つからない――

「よし」

それなのに。

私もサユカちゃんも、何も言えなかったのに。

「じゃあ」

一人だけ。

カカちゃんだけが違った。

ああ、そうだ。

この子はいつも、こうやって。

「最後に、みんなでパーッとお花見しよっか！」

私たちの手を、引っ張ってくれるんだ。

「まぁ……」

校長先生は目をいっぱいに見開いて。

やがて、頷いてくれた。

「ありがとう……カカちゃん」

校長先生の、その言葉の他に。

声が聞こえた気がした。

多分、その場にいた全員が聞こえていたと思う。

――うん。

明日の朝、みんなで集まる約束をして。

——いっぱい、いっぱい、遊ぼうね。

私たちは別れた。

——おかあさん。

笑顔で。

そして。

その日の夜。

雨が降った。

稀に見る暴風雨だった。

私たちの街の桜は——

全部、散ってしまった。

## カカの天下４２３「桜、舞い散る中で　中編」（後書き）

……続きます。

# カカの天下４２４「桜、舞い散る中で　後編」

カカです。

昨日、みんなでお花見をする約束をしました。

朝早くから準備して、トメ兄にも手伝ってもらって。

決めた時間より早くうちを出ました。

空を見上げる。

晴天。

昨日の嵐が嘘のよう。

そう……嘘であってほしかった。

公園に到着する。

視界に入る桜の花は全て、散っていた。

それらを見ないようにしながら歩を進める。

どうか。

どうか――

「あら……おほほ、早いんですのね。カカさん」

その桜の前には、すでに校長先生が立っていた。

サエちゃんやサユカンもいる。

みんな、約束の時間よりもずっと早くここに集まってたんだ。

その――散ってしまった、小さな桜の前に。

「もしかしたらこの桜だけ、一輪だけでも花が残っていたり……なんて、そんなことを思ってしまいましたわ」

目を細めて、残念そうに呟く校長先生。

「そんな……都合のいいこと、あるわけないですよね」

桜を見上げる校長先生の背中は、本当に寂しそうで。

誰も声をかけることができない。

「桜……散って、しまいましたね」

校長先生の声だけが、響いていた。

「お花見すら、満足にしてやれないのですね。わたくしは」

雲間から差す柔らかな陽光が、憎い。

抜けるような青空が恨めしい。

どうして。

どうしていまさら。

遅いよ、晴れるのが。

こんなときくらい――嵐なんか吹き飛ばして、ずっと晴れていてくれればよかったのに。

「ごめんなさいね、せっかく集まってくれたのに」

やがて私たちに向けられる、校長先生の謝罪の言葉。

先生は何にも悪くないのに。

悪いのは天気とか、桜の病気とか、そういう、そういう――どうしようもないモノのせいなのに。

「校長先生」

こんなの、ヤダ。

「しましょう、お花見」

そんなモノに負けてあっさり引き下がるほど、私は素直じゃない。

「でも、花が――」

「知ってますか？　花が咲いてなくてもお花見はできるんですよ。私たち、やりましたもん。この桜の花が咲く前に、一度」

お姉はなんて言っていた？

花より団子なあたしらは、そもそも花なんて見ない。

そう、花なんかなくても――

「お花見っていうのは、桜と一緒に騒ぐものなんだと思います！桜は花じゃなくて、木です。木があります。だから、お花見はできるんです！」

そこに桜の木と私たちがいれば、それはお花見なんだ！

そんな私の屁理屈に、校長先生は目を丸くしていた。

変なことを言ってると思う。

でも――

「はは、たしかに。いまどきのお花見騒ぎで桜の花ばっかり見てるやつなんて、なかなかいないからな」

「団体の中でそんな人いたら、寂しそうに映っちゃいますよねっ」

「や、本来は見るもんなんだが……とにかくさ。花のないお花見もいいんじゃないかな、ってこと」

「はい、細かいこと気にしないでいきましょうっ」

苦笑しながらも同意してくれるトメ兄とサユカン。

そうだよね。

いいよね、花がなくったって。

この間は、楽しかったんだ。

桜の花が咲いてなくても。

たくさんの優しい木々に囲まれて、みんなでわいわい仲良くしていれば、それだけで楽しかったんだ。

「校長先生。お花見、しましょう？」

今日もきっと楽しい。

だってクララちゃんと一緒なんだ。

花が散ったら終わり、みたいなこと言ってたけど、すぐに木が枯れるわけじゃない。まだいるんでしょ？　そこに。

なら、一緒に楽しもう。

妖怪とか、ちょっと怖いけど……姉の仲間と思えば、怖くな……それも怖いけど、とにかく！

「本当にありがとう、カカさん。ええ、ええ……お花見、しましょう……」

クララちゃん。一緒に遊ぼう。

お母さんと一緒に、ね。

「よし、じゃあシート広げるか」

「あ、手伝いますよトメさんっ」

校長先生は目を細めている。

今度は嬉しそうに。

喜んでもらえて、よかった。

クララちゃんはどう？

喜んでくれてる？

もしそうなら、嬉しいな。

すごく、すごく嬉しいな。

ところで……

サエちゃん、どこいった？

どうも、サエですー。

ただいま大きな木の陰に隠れてます。カカちゃんたちには見えな

い位置。なぜかといいますと、ここにソレがいたわけで、見つけてしまったわけでしてー……

「どうしましょう」

白いワンピース姿のソレが言いました。

「どうしましょう、どうしましょう」

本当に困った声で言いました。

「実は普通にお花が散っただけで、クララ元気だなんて今さら言えません！」

クララちゃんっぽいソレは頭を抱えてしゃがみ込みました。

「……花は無いけど木は元気っぽい、とは思ってたんだよねー。病気はどうしたのー？」

「えと、あの、実は……最初からお話してもいいですか？」

「どうぞー」

「まずですね、クララが目覚めたきっかけは、あなたたちの大騒ぎだったんです」

「大騒ぎ……って、もしかしてお姉さんのホワイトデーの」

元祖お花がないお花見のことだね。

「はい。そこにいらした力の強いお二人に触発されて、クララが出てきちゃったんです」

「力？　それに、二人って？」

「力というのはですね、幽霊さんが見えたりとか、クララみたいなのに気づきやすい人とかが持ってるモノのことです」

あー。

思い出した。

ずいぶんと前にカカちゃんが言ってたことを。

カカちゃんの家で私が見た幽霊を、お姉さんも見ていたってことを。お姉さん見える人だったんだー。

「それでですね、クララの病気もヤバげな感じでして、最後にもう一目でいいから会いたいと思ってお母さんを探してたのです。お母さんが言ったとおり、花が散ったらクララの命も、もう終わり――」

どこかの病室の子供が言うセリフみたいだ。

「の、はずだったので」

……はず？

「っていうことはー。やっぱり元気なの？」

「その……先日、特攻服を来たあの人が、クララの周りの悪い霊を

全部、蹴っ飛ばしてくれたんです」

お姉さん？

……つよ。

「病気の原因はそれだったので、おかげさまでクララすっかり元気です！」

「そ、それはそれはー……困りましたね」

「はい、困りました」

木の陰から後ろを覗く。

そこではいまだにお涙モードのみんなが……

「今までお疲れ様……わたくしの、子供……」

お母さんは特に重症だ。

「……クララ、死んだほうがいいですか？」

「だめー」

「じゃあ二度と出てこなくていいですか？」

「そんなことしても無駄だよー。木はこれから元気になっちゃうんだからー」

「クララしょっくです！」

凹みまくりながらウンウン唸るクララちゃん。うーん、この子が不思議な存在なんだって、もうわかってるはずなんだけど……どこからどう見ても普通の子供にしか見えない。

「お母さんと遊びたい……でも雰囲気を壊すわけには！」

空気を読んでる。大人かも。

ちらり、と再びあちらの様子を伺ってみる。

校長先生はまだ木に語りかけていた。思い出話かな？

「インド象のフン、ワニのフン、豹のフン、フンの化石……各地から集めたフンを肥料にあげたのに……あなたは治らなかったわね」

なんか聞いてると治る気しないんですがー。

「おいしかったのはワニのフンです」

「ふーん」

いま初めてこの子が人外と思えた気がする。

……ん？　人外？

あ。

あー。

「ねー、クララちゃん。さっき言ってた私やお姉さんの力みたいなのって、校長先生にはある？」

「はい？　お母さんにはないです。すっからかんです、文無しです。ロクデナシです」

文無しから先は違うと思うけど、まーいいや。

「じゃあさ。今から普通に出ていっても、クララちゃんがあの桜だってわからないんじゃない？」

カカちゃんたちは知ってるけど、そのあたりは私から説明すればいいし。

「とりあえず今は桜が残念でしたってことにしておいて、今日は一緒に楽しむ。そして後日、気がついたら桜が元気になっていた――こんな流れでどう？」

「それです！！」

言うが早いか、クララちゃんは飛び出していた。

そして校長先生の胸へ突撃――って急すぎでしょー！

「きゃ！」

可愛い声をあげて驚く校長先生。

「あらあら……おほほっ！　どうしたの、お嬢さん？」

「あ、す、すいません……優しそうな人だったので、つい抱きついてしまいました！」

そんなにお母さんに会いたかったんだね、クララちゃん。

私は苦笑しながら木陰から出て、抱き合う二人へ近づいた。

驚きのあまり口をパクパクしているカカちゃんとサユカちゃん。

困惑に首をかしげるトメお兄さん。

そして困った顔をしながらも嬉しそうな校長先生と、笑顔いっぱいのクララちゃん。

「先生、ご迷惑をおかけしてごめんなさい」

みんなの視線を集めながら。

「その子、私の妹でクララっていいますー。校長先生のこと、気に入ったみたいですのでー……よかったら、遊んであげてください」

そういうことに、しておいた。

暖かい風が吹く。

揺れる花はないけれど、木々が穏やかに歌ってる。

みんなで騒ぐには、これで充分。

さぁ、お花見だ。

今度こそ春を迎えよう。

楽しく。

そしてぽかぽか暖かく。

マヌケでおもしろくて可愛い、桜の精と一緒に。

# カカの天下４２４「桜、舞い散る中で　後編」（後書き）

ほろりとくる話になるかと思いきや……こんなんなりました笑
ちょいラブコメの次はちょいファンタジー、と好き勝手に書かせていただいてますが……読者様的にはいかがなのでしょうか＾＾；
私はすごく楽しいです（ぉぃ

今度こそ、今度こそはいつものほのぼのコメディでいきますので、またお楽しみください……あ、そういえばもうすぐ誕生日が……ま、まぁどんな風にするかはそのとき考えよう！

あと、忘れちゃいけない投票コーナー。明日が〆きりでございます。
そうですねー。１６時くらいを〆きりにます。まだ投票してない方は奮ってご参加ください＾＾
作者が喜びます（またそれだけかい

# カカの天下４２５「第十三回、カカラジ！」

「こんカカ！　春の訪れと共にやってきました桜の妖怪、ＫＵ！ＬＡ！　ＬＡ！　いやー可愛いですねちっこいですね、いいとこ持ってきましたねチキショーってな展開のままカカラジに突入してしまいましたスイマセンスイマセンってなんで私が謝ってんの謝るのは作者でしょ！　ってちょっと怒ってる香加です」

「テンションたけー。あ、最近ちょっと出番が少なめな留です」

あんた普段が出すぎなんだから、たまにはいいでしょうが。ともあれ第十三回カカラジ！　スタートです。

「や、今回はファンタジーだったね。妖怪だよ妖怪」

「そんな風に連呼するなよ。可哀想だろクララちゃん」

「そうです、クララもそう思います」

「ほら、本人もそう言って――本人？」

あら、いつの間にか留と香加の間にクララちゃんがいますよ？

「……なんで、いるの？」

「はっ！？　そうです、ここはどこですか。なんでクララこんなとこにいるんでしょう。せっかくお母さんのしぼんだ胸の中にいたのに！」

しぼんだとか言うな。

「というかさ、なんで名前が漢字じゃないんだ？」

「あ、そうだよ。名前！　本編と同じじゃん。もしかして……ほんとに本人？」

はい。クララちゃんはちょこっとだけ幽霊に近い存在です。だから神出鬼没です。こんなところにも出てきます。

「クララ帰っていいですか？」

「待った！　せっかく来たんだから今回のゲストになってくれよ」

「そうだよクララちゃん。あとでデザートに桜のアイスもらえるよ？」

「クララを凍らせるつもりですか！？」

あ。そういやクララちゃんって桜だった。

「氷漬けにされて保存されて、気がついたら未来の世界に……とても楽しそうです！　ぜひお願いします」

「食べるんだよ？」

「クララしょっくです！　やめておきます」

ほんとテンポいいなーこの子。

「クララ帰っていいですか？」

「だからそう急がずに！」

「やっぱりクララを食べる気ですか！　クララおいしくないですよ。だってクララのお腹の中には世界各地の糞尿とどっかの誰かが埋めた死体が――」

「はい！　この番組はね、ネット小説『カカの天下』を盛り上げるため、ぶっちゃけトークや読者さまのご意見などを放送する情報ラジオのようにしてみたい番組だよ。クララちゃん以外の出演者は本編と関係ないから気をつけてね！」

香加はなんでいきなり喋りだしたんだろう。

「桜の木には死体が埋まってる、とかよくある話の片鱗を感じて怖くなったんじゃないかな」

なるほど、さすがはお兄ちゃん。

「死体、美味しいです」

「た、たしかに養分はある……のか？」

「しーえむ！　しーえむいくのー！！」

この話は禁句みたいですね。では香加のお望みどおり、ＣＭへ。

『最近、ＫＹシステムなんつうもんが流行ってるらしいな？　ったく、誰が考えたか知らねーが、んなもんあるわけねーだろ。ためしにそのシステムの占いでもやってみせようか？　あーっと……出たぞ。水難の相？　はっ、ここはグラウンドのど真ん中だぜ？　水なんかどこにも――お、あそこのねーちゃん眩いじゃねぇか。ミニスカがいいねーって突風！　ラッキー！　水玉模様が見え――』

『見いいいいたあああぁぁぁなあああああぁぁぁぁ！！』

『げっ、こっちに向かっ――なんて速さだ！　ば、バケモ――』

ぐちゃ。

――皆さんもＫＹシステムには気をつけましょう。当たりますから。

ＣＭが明けて。

「ね、いまのＣＭの……」

「待て。ツッコんでいいところなのかな、そこは」

「や、やめたほうがいいよね。ミニスカで水玉模様のパンツなんて……ないない。私は何も見てないよー」

「こないだの特攻服の人でした」

「クララちゃん言うなあああ！！　しいぃぃーっ！」

「いまの人みたいにぐちゃってなるよ！？　あ、あんな、あんなのお姉じゃないよ！」

ギャラにつられたらしいよ。

「……あぁ、そこはすごく姉っぽい」

「留兄、深く考えないでいこう？」

「そだな」

そですね。

「それでは、おたよりのコーナーでーす。クララちゃんもやろうね」

「クララ何すればいいですか？」

「これ読んでみな」

「クララ字は読めないです」

「あ、そっか……まぁ今回は投票結果発表もあるからそんなに紹介できないし、いっか。僕が読むよ。えー、『カカ天の皆さんの血液型を教えてください』だって」

「この質問って結構前からいくつかきてたよね」

はい。本当は作中で紹介しようとしてたのですが……

「サユカンの話のときにいっぺん出たよね。トメ兄とサユカンはＡ型でしょ」

その通り、そして他の方々ですが……せっかくですし、ＫＹ診断のお返事つきで紹介しましょう。

「ほほう！　じゃ私から行こうか。私の血液型はね、ＡＢ型だよ」

お、ＫＹ診断のお返事がきました。えーっと。

『やっぱりな』

「なんかムカつくんだけど」

まーそれだけ突拍子もない行動ばっかりしてればね。

「ＡＢ型って何を考えてるのかわかんないっていうし」

「むー、だからこそ面白いんでしょ！」

「それはそうだが……自分で言うなよ」

「じゃ次は留兄やってよ！」

「僕？　僕はもう結果が出てるんだけど……ま、いいか。Ａ型、っと」

『だから？』

「……なぁ、こいつケンカ売ってないか？」

「いえ、こちらの方の仰ることはごもっともだと思います。同じことを繰り返されたら『だから何？』って思うでしょう」

「く、クララちゃん。結構言うね」

「当然です。クララ、字は読めませんが人の心は読めるつもりです」

……嘘とか冗談はわかんないくせに。

「……ま、いいや。じゃ次……他の人のいこうか」

ほい、あらかじめインタビューしておきましたので、流しまーす。

沙由歌ちゃんの場合。

『なによっ、わたしはA型って言ってるでしょ。まったくもう、面倒くさいわね……はい、これでいいんでしょっ』

『B型っぽいこと多々あり。落ち着け』

『余計なお世話よっ！』

括弧の場合。

『あたしの血液型？　B型だけど？』

『B型すぎる』

『うっさい』

酒井さんの場合。

『わたしー？　Ａ型だけどー』

『やろうと思ったことはとことんやる。やらないと決めたことはとことんやらない。そんなあなたはＡ型です』

『知ってることを説明されただけなんですけどムカつきますねー』

タケダの場合。

『俺はもちろん、完璧主義のＡ型だ！』

『あっそ』

『あ、あの、もう少しなにか――』

カット。はい次、シュー君。

『あ、えっと――』

時間ないからさらにカット。次は留父と結菜さん！

『俺はＡＢ型だ！』

『わたしはＡ型ですよ♪』

『はいはい、バカップルバカップル』

『……なぁ。この診断返してくるやつ、なんか嫌なことでもあったのか？』

さぁ？　さて、次はイチョウさん。

『わたくしはO型ですよー』

『意外だ。しっかりしてそうなイメージが』

『あら、そんな。ありがとうございます』

なんかイチョウさんにだけ優しいなコイツ。次は沙羅さん。

『私はB型です』

『最近あんま出番ないけど頑張れ』

『診断もしないで励まされるとスゴイ落ち込むんですけど！？』

最後に校長先生！

『おほほ、わたくしはB型ですわ！』

『おほほ』

『おほほ』

なんだこのやりとりは。

……以上です。

「や、意外とおもしろかったね。単に血液型を発表してるだけなのに」

「そだな……可哀想なのが何人かいたが」

はいはい、ではおたよりコーナー終了で――

「はやっ！」

「また残りは本編中に、とか言い出す気か？」

だってまいてるんだもん。

「ま、またぶっちゃけた理由を……」

お次はいよいよ、好きな話投票の結果発表に移りたいと思います！

「わー、どんどんぱふぱふー」

「どんな結果になったんだ？」

それがですね……予想以上に、票がバラけました！

「と、いうと？」

投票されたどの話も、大して票の差はないということです。これからベスト3を発表しますが、それほどダントツというわけではありません。

ランキング結果としては熱い接戦とかはなく、微妙かもしれません。しかし！　読者さまがどの話をどういう目で見てくださっているのかがすごく伝わってきました。

この読者さんはこんな話が好きなんだ、あ、この話にも票が――そう思いながら集計してますと、なんだかカカ天という作品自体に投票されているようで、すんごく嬉しかったです。

おかげさまでこれからも書いていこうという意欲がわきまくってまいりました。投票してくださった方々、本当にありがとうございます！

「よかったねー。作者だけ」

「よかったな、作者だけ」

「よくわかりませんが、作者さんだけ得してますか？」

はい、では発表します！（無視）

まずは惜しくもランクインを逃した話を並べます。

「チェンジ！」「探しモノと見つけたモノ」「クリック」「お楽しみ劇話」「桜、舞い散る中で」「幸せな病気」「カカの創作話シリーズ」です！

他の話にもたくさんの投票をいただきましたが、その中でも目立った話たちです。

さぁ、いよいよ第3位！

同じ票数の話が二つあります！

一つは――６５話、「ついていい嘘、悪い嘘」です。

「う……私の恥ずかしい過去が」

カカ天最初のシリアス話ですかね。この話だけじゃなく他のシリアス話にもかなりの票が入っていました。シリアス話シリーズとして票をまとめでもすればダントツ一位だったでしょうね。

「コメディがそれでいいのか？」

えっと……コメディな日常があるからこそシリアスが引き立つとか、そういう意見が多かったですね。たまに分野を無視して書いてるかいがあるというものです。

「ほんと好き勝手やってるよね……それで、この話書こうと思ったきっかけは？　いきなりシリアス書くなんて、理由あるんでしょ」

理由ですか。そうですね……今日は何を書こうかなーと考えてたら、急に私の中の姉が怒り出しまして。

「へぇ、姉がカカのことを怒ってる場面が浮かんだんだ」

や、あたしに家族っぽいことさせろーって私に怒ってきたの。

「なんじゃそら！？」

ほら、姉って長女のくせに格好いいこと何もしてないじゃん。だ

からたまには格好つけさせろーて。

「そんな理由で私は怒られたのか……」

あくまできっかけですけどね。家族っぽいことってなんだろう…家族ってなんだろう……そう考えてたら、どうしてもコメディ枠には納まらなくて、いつの間にかあんな話が浮かんできて……すいません。上手く言えません。

ただ言えるのは、ときどき書くシリアスの話の大半は、私の中のカカたちが誰かに何かを伝えたいと思ったときに浮かんでくるんだと思います。その誰かは私自身かもしれませんし、読者さまかもしれません。カカ天の中の誰かなのかもしれません。

また突拍子もない話を書くこともあるかもしれませんが、カカ天はカカ天なので、またお付き合いしていただけると嬉しいです。

「んー、よくわかんないけど、まとまったのかな」

「この人の頭の中はよくわかんないってことでオッケーですか？」

「クララちゃん。君いいね、わかりやすい！」

はいはい、どうせ私もＡＢ型ですよ。さ、もう一つの3位です！

なんと、がんばれタケダシリーズ！！

「うそ、なんで？」

なんか……タケダが可哀想で好き、という意見がわりかしたくさ

んいっぱい。

「みんな苛めるのがそんなに好きなのですか！　に、人間って怖いです……」

苛めがいがあるんだろうねー。

「それで作者さん。これを書こうと思ったきっかけは？」

誰かを苛めたかったから。

「なんて直球な理由！」

「でもこの上なくわかりやすいな」

さて、次いきますかー。

「もうですか？」

「まぁ、タケダだからじゃない？」

「タケダだしなぁ」

それだけで説明も何も不要と思います。

さぁ、二位の発表です！

これは予想できた人も多いでしょう……サユカちゃんの告白話シリーズです！！

「あー、あれは萌えたね」

「ノーコメント」

「燃えたのですか？　熱い展開だったのですか？」

「そうとも言うかな。ね？　留兄」

「ノーコメント！！」

サユカちゃん好きな方はあれでかなり悶えたらしいです。感想やメッセージを読むのが楽しくて仕方ありませんでした。

「ではでは作者さん。そのお話を書こうと思ったきっかけは？」

えー、実はあとがきにも書きましたが……デートの話を書いている最中も、サユカちゃんが告白するという展開は考えてませんでした。

「え、じゃあなんで告白したの？」

だって……デート話の中編書いたあとの読者さまの応援があまりに熱かったから、サユカちゃんが頑張っちゃったんだもん！

「つまりはノリまかせに書いちゃったのですね」

仕方ないじゃないですか！

サユカちゃん頑張ってたし！

応援すごいし！

トメはムカつくし！

「最後の関係ないだろ！」

うるさい、いい加減ラブコメの主人公みたいな立場をなんとかしろ！

「なんとかしてるだろ、あんたが！」

「あー、最近は留兄の株、落ちてるよね」

「落ち目なのですか」

「ううう、うるさい！」

やっぱ上がったら下げないと。何に関しても。

ともかく――このお話は私の中でもかなり大きいですね。本当の意味でトメとサユカちゃんに話の流れを任せましたから……ちゃんとひと段落するまで書ききれて、本当によかったです。

もちろんサユカちゃんの恋はまだまだ終わっていません。まだまだ書きます。そのときは――また二人に話の展開を任せてみたいと思いますので、温かく見守ってくれたら嬉しいです。

さてさてさて！

いよいよ第一位の発表です！

予想できた方もいらっしゃるようですが……このお話が頂点に立ちました。

２４３話、「魔法の誕生日」です！！

「おー！　私がはめられた話だ！」

「いい意味で、な」

そう。みんなで寄ってたかってうちの看板娘を祝ってくれたこのお話が、堂々の第一位でした！

「聞くまでもない気もするけど、この話を書こうと思ったきっかけは？」

もちろんカカの誕生日が決まってて、それを祝おうと思って書いたのですが……誕生日を盛大に祝うって子供のころしかできないじゃないですか。大人になるとつい適当になりがちで……そんな中で子供を書いてる身としては、できる限り盛大に、カカ天っぽく祝ってあげたいと思いまして、あんな感じになりました。

「そのときに登場してたほとんどの人が出てたよな」

そうなのです。やっぱり皆に祝ってもらったほうが嬉しいじゃないですか。だから読者の皆さんにも祝ってもらえるようなノリでいきたいと思いまして。

「おめでとうってメッセージもいっぱいあって嬉しかったよー！」

「おめでとうございます！」

「や、クララちゃん。別に今日が香加の誕生日なわけじゃないから」

「そうなのですか？　では一位おめでとうございます！」

「あ、ありがとう」

一位に輝いたからにはイロイロと話したいところではありますが……あえて詳しく語るのも無粋な気がします。このお話に投票してくださった方々、そしてこのお話に目を留めてくださった方々には余計な話をする必要もないでしょう。感じたままを想ってください。そして香加を祝っていただけたなら……それほど嬉しいことはありません。

……そして読者様が望むなら、今度のカカラジでこの誕生日の語られてないアフターストーリーなんか書いてみようかなーなんて思ってます。どうでしょうか？

それでは、この辺でおひらきにさせていただきたいと思います。

ＣＭへ！

「みんな、上を見ろ！」

「あれはなんだ？」

「鳥か？」

「飛行機か？」

「いいや、姉だ！」

「違う。あれは」

「あれは――ＫＹ姉だぁ！！」

世界の姉は、ＫＹシステムを応援、サポートします。

「や、だからさ。なんなのこのＣＭ」

「そうだよ。なんで空気の読めないお姉がこんなＣＭしてんの」

や、だからギャラがいいから。

「他に頼める人いるでしょ？」

ヘリから空中に放り出しても生きてるような人って姉しかいないから。

「……言われてみれば、パラシュートもなにもつけてなかったね。お姉」

「そら姉にしかできんな、たしかに」

「うん、とことんアレな存在だねお姉は……って、あれ。そういえ

ばクララちゃんは？」

ん、あそこ。

「何してるの？」

「ああ、さっきの発表であまり話についてこれなかったのがつまんなかったらしくてな、今までのカカの天下を読んでるらしいぞ」

自分の話題が出たからか、ふと顔をあげるクララちゃん。

彼女は読んでいたカカ天と香加の顔を見比べながら、言いました。

「香加さん、あなた変です」

「……クララちゃんには言われたくないなぁ」

さてさて、宴もたけなわ、そろそろチョップでしめますかね。

「今日は誰が誰にやるの？」

特に決めてませんが……

「では僕から一つ、チョップでツッコミを」

「お？　なんかあるんだ」

ではお願いします。

「よし。じゃあ言わせてもらう」

コホンと咳払いを一つして。

留は言いました。

「最近のカカラジ――作者が喋りすぎだカカラジチョーップ！！」

あああごめんなさーい！！

「それでは、カカばい！」

この番組は、不思議なＫＹシステム委員会（謎だらけ）がお送りしました。

## カカの天下４２５「第十三回、カカラジ！」（後書き）

投票していただいたたくさんの方々、本当にありがとうございました＾＾

何度もしつこいようですが、感謝してもしきれません。

これからもカカたちを見守っていただけたら嬉しいです！

明日からはまたのほほんといきまーす＾＾

## カカの天下４２６「最近の流行と酔った勢い」

「――で、校長とカカたちと何してたって？」

「や、僕もよくわかんないんだけどさ」

んぐんぐ……うまうま。あ、よう。テンカだ。

この前オレの知らないところで勝手に花見をしていたという話を聞きつけ、「ふざけんじゃねぇ誘えよバカ罰としておごれ！」とトメを脅し、いま病院で飲んでるとこだ。

「たぶん、オホホおばさんが大切にしてる桜があって、もう花が咲かないかもしれないから最後にお花見を、ってことだと思うんだけど……」

「けど？」

「途中からクララちゃんが出てきて……桜のせいで妖怪が復活したとかなんとか」

「なんのこっちゃ」

「や、だからよくわかんないんだって。カカたちが集まって話してたの聞いただけだし」

よくわかんねー話されてもなー。オレはもっとわからんぞ。

「妖怪……姐さんのことか？」

「たぶんな。他に思い浮かばないし」

「復活ってなんだ。秘められた力が解放されて変身でもすんのか？」

「あれ以上バケモノになられても困るぞ」

「でも似合うよな、多分。羽とか角とか牙とか」

「巨大化とか」

「似合いすぎだな」

姐さんの変身や合体を肴にしながらしばし飲み……やがてトメが話題を変えてきた。

「わけわかんないって言えばさ、知ってるか？　最近流行ってるっていうＫＹシステム」

「ああ、聞いたことはある。占いとかゲームで使われてんだろ」

「そうそう。僕もカカに占い教えてもらってさ、結構おもしろいんだよ……人のを見る分には」

「後半聞こえなかったが、なんて言った？」

「や、なんでもないなんでもない。とにかくやってみな、これなんだけど」

「どれどれ？」

トメの携帯を受け取り、画面を見てみる。ふむ、ただの占い入力画面にしか見えないが。

「ふーん、まぁ話のタネにやってみるかな」

名前を入れて、っと。次は血液型か。A型っと。

あん？　急に画面変わったぞ。

『ホントかよ』

「……あん？」

自分の目つきが悪くなってるのがわかる。

「て、テン？」

ギロリ、とトメを睨みつける。

「ホントだよ、ホントにA型なんだよ」

「ど、どうしたんだよ」

「あぁどうせオレは大雑把さ！　オレと知り合ったヤツは全員『君、絶対O型でしょ』って言うけどよ、悪いかA型で！　こういうA型もいるんだよ！」

「ううううあああああわかったわかったでも僕が言ったわけじゃないんで首根っこ掴んでガクガク揺らすのやめてもらえますかあああ

あ！？」

「ま、O型なら仕方ないよねー。ハッ！　なんて鼻で笑われるA型の気持ちがわかるかぁぁぁ！？」

「わかりませんわかりませんけどごめんなさぁぁぁぁい！！」

ふう！

ある程度スッキリしたところでトメを離してやる。

「ったく、なんなんだコイツは」

「げほっ、げほっ……あ、あぁ、なんか空気を読んで遊んでくるんだよ」

「どんな占いだよ……あーっと、続きは？」

星座か。

乙女座っと。

『乙女ならオレとか言うなよ』

「なんで知ってんだてめぇ！？」

「なんで僕を締め上げるんスか！？」

手近だったからだよ！

「どっかで見てんじゃねぇのか、これ書いてるやつ……っと、もう終わりか」

占い結果はどうなんだ？　なんだか怖ぇけど。

「どれ」

トメと一緒に画面を覗き込む。

『運気が０です』

「だからオレはＡ型だっての！！」

「ぐほぁ！？」

「何度言わせるんだ！　こう見えて落ちてるゴミとか空き缶とかお年寄りとか拾うんだぞ！」

「ち、違う違うそれ数字の０だから！　Ｏじゃないから！」

む、そうか。早とちりしてトメにボディーブローしちまったじゃねぇか。

『運気を上昇させるにはラッキーアクションを起こす必要があります』

あん？　言うとおりの動作しろってことか。

『まず、仲のいい男友達と腕を組みます』

ふむ。ほい。

「うぇあ！？　な、なんだよテン……！」

今日はちょうどカウンターで隣に座ってるからな。トメの腕に自分のを絡めてみたんだが……トメの反応がなかなか面白い。

『次は耳に息をふきかけてみましょう』

「ふーっ」

「ひゃぅあ！？」

うはは、おもしれーおもしれー。次は何すんだ？

『最後に、周りをよーく見渡してみましょう』

周り？　ここは居酒屋だぞ。客と店員しかいねー……

「にやにや」

ん？

「ニヤニヤ」

あん？

「「にやにやニヤニヤ」」

見てる。

みんな、すんごい見てる。

何を？

オレがトメと腕組んで、耳に息吹きかけてたのを？

「――！」

酔いが一気に醒めた。

「ち、違うぞ！　今のは違う！」

「いやー。なんだかここ熱いですね店員さん」

「そうですねお客さん、もう夏がきちゃったんですかねぇ」

「いや。ある意味、春ですよ」

「なるほど、たしかに！　ついに春が来たんですねぇテンちゃん」

「皆さんご一緒に。さん、はいっ！」

『おめでとう！！』

「ちっがぁう！！　今のは酔った勢いというか、占いが――」

「よ、兄ちゃん！　今日は酔った勢いでナニされるかわかんねーぞ！　よかったな！」

「よくねーよ！！　おらトメ、てめーも何か言え！！」

「さ、さっきのシェイクのせいか……今になって酔いがまわって…
…なにが、なんだか……」

「おぉ！　潰れるぞ！」

「落とすなら今だな」

「いけ、テンちゃん！」

「だから違うと言っておろうがあああ！！」

叫んでから元凶である携帯を睨みつけた。

画面には一言だけ。

『ニヤニヤ』

折ってやった。

このシステム、敵だ！！

どうやってるのかは知らんが、とにかく敵だ！！

……あ、折った携帯ってトメのだった。

## カカの天下４２６「最近の流行と酔った勢い」（後書き）

占いといっても反応は人それぞれなはず。というわけでＫＹ占いしつつ、久々にテントメ飲み会です。

大人サイドにはクララちゃんの正体は伝わってません。やはり妖精とか可愛らしいファンタジーは子供だけが見えるもんですよねー。

あと、いつも強気なテンちゃんも酔うと弱いとこが見え隠れ……

## カカの天下４２７「頭が痛い」

「ただいまー」

あれ、返事がないよー？　可愛い妹が帰ってきたのに。

あ、どうも。可愛い妹です。学校も終わり、サエちゃんサユカンと遊び倒して気がついたら夕やけこやけ、夕飯を楽しみにしながら帰宅したのですが……

「おーい、ただいまだってばさー」

靴があるから帰ってるのは確実。なのに返事がないのはどゆことだろう。

私は靴を脱ぎ飛ばし、居間へ行ってみた。

いない。となると自分の部屋かな。

てってってーと移動、ノックするの面倒だったので省略してそのままドアを開けると……ビンゴ。

「トメ兄？」

「んー」

寝てる？

「おーい、ただいま」

「……ん、おか……えり……」

なんだかすんごくしんどそうだ。

「もしかして朝の、まだ続いてるの？」

「んー」

今朝のトメ兄はひどかった。顔は白いしフラフラだし歩くたびに頭痛がするのか顔しかめるし……俗に言う二日酔いだね。

「会社ちゃんと行ったの？」

「……ん……二日酔いなんて理由で……あの両親……金くれないし」

よしよし、えらいえらい。

「頭いて……助けてくれ……」

お？

「助けが必要？」

「んむ……」

「誰か呼ぶ？」

「んむ……」

「八百屋さんでいい？」

「んむ……」

よしきた。

私はトメ兄の部屋を出て電話へ直行した。

そしてピッポッパ……

「あ、もしもし。笠原ですけど」

『お？　カカちゃんかい！　どうしたぃ！』

「トメ兄が二日酔いなんです。助けてください」

『あん？　なんでうちに言うんだ、んなこと』

「んと……トメ兄がね、辛いときはおっちゃんの顔を見たくなる、って言うから」

『あぁん！？　こ、こえぇこと言うな……まぁいいか。今度一緒に飲みに行ってやるかな！』

「その前に助けてよ」

『あぁ、わかった。あとで二日酔いに効きそうな野菜もってってやるよ』

「ありがと」

カチャリと受話器を置いて、トメ兄の元へ戻る。

「助け呼んだよー」

「んむ……」

「まだ助けいる？」

「んむ……」

「果物屋さんでいい？」

「んむ……」

よしきた。

再び電話へてってけてー。

「あ、もしもし。笠原ですけど」

『あらやだカカちゃん？　珍しいじゃないのさ！　どうしたの？』

「トメ兄が二日酔いなんです。助けてください」

『あらあらまぁまぁ！　だっらしないわねぇ』

「トメ兄がね、辛いときはおばちゃんの顔を見たくなる、って言うから電話しました」

『あら！　あら！　あっら一！！　いやねぇこんなおばさん捕まえて何言ってるのかしらヤーねぇ！　でも、でもでも、ちょっと嬉しいから今度デートしてあげようかしら。キャー！　歳がいもなく興奮してきたわ』

「その前に助けてね」

『はいはい、あとで二日酔いに効きそうな果物もってってあげるわ』

「ありがと」

カチャリと受話器を置いて、トメ兄の元へ戻る。

「助け呼んだよー」

「んむ……」

「まだいる？」

「んむ……」

「食堂でいい？」

「んむ……」

ほいきた。

電話電話っと。

「もしもし、笠原ですけど」

『おお、カカちゃんかい。どうした』

『カカちゃんだと！？　おい兄貴、俺にも代われよ』

『うるせぇな。俺への電話だぞ』

あ、向こうに弟さんもいるっぽい。

「あの、実はトメ兄が以下略」

『ほぅ、あのにーちゃんがねぇ。それで俺にどうしろと？』

「トメ兄がね、辛いときはゲンゾウさんの顔が見たくなるっていうから」

『あんだと？　けっ……俺の男前ぶりも、てぇしたもんだな』

『すげぇぜ兄貴。だが羨ましくはならねぇな』

『仕方ねぇ……今度デートしてやるか』

この人もするんだ。

『そしてこう言うんだ。すまねぇ、この思い出を最後に俺のことは忘れてくれ……ってな』

しかもフッちゃうんだ。

『格好いいぞ兄貴。だが相手が男だと格好つかねぇな』

「でもその前に助けてね」

『仕方ねぇ、身体に優しい料理でも持ってってやるか」

『よし、自分の店に戻るついでに俺が持っていこう』

『てめぇ……そんなこと言って、俺に惚れた男を横取りするつもりじゃねぇだろうな』

『へ、そんときゃ俺のほうが男前だったってだけのこと――』

長くなりそう。

「とにかくよろしく」

カチャリと受話器を置いて、トメ兄の元へ。

「トメ兄、まだいる？」

「んむ……」

「酒屋さんでいい？」

「んむ……」

ほいきた。

電話電話……ぴぽぱぽ。

「もしもし、笠原ですけど。トメ兄が以下略なんで助けてください。トメ兄が、辛いときはどうしてもおばあちゃんの顔を見たい、って言うもんで」

『ほっほっほ……わかったえ。今度、一緒にホテルにいこうかの』

「ホテル？おいしいものでも食べるの？」

『ほっほっほ、食べるのぉ。わしが』

よくわかんない

『若いもんは久々じゃ……ごちそうじゃわい』

「とにかくお願いね」

カチャリと受話器を置いて、トメ兄の元へ。

「あれ、トメ兄。起きたの？」

「ああ……なんとかな。まだ頭痛いけど」

「もうすぐ助けがくるよ。二日酔いに効くものいっぱい持ってきてくれるって」

「おー……ありがとー」

「どういたしまして。あとね、多分ね、トメ兄の商店街の評判あがったよ」

「……なんで？　ていうかそもそも誰に助けを」

ピンポーンと鳴るチャイム。

「来た」

「……何が？」

「じゃ、頑張ってねトメ兄」

あーいいことした。なんていい妹なんだろう私は。

満足した私はニコニコしながら自分の部屋へ戻った。

数分後、なんか玄関で大騒ぎになってた。「誰を選ぶの！？」とか「この浮気者！」とか聞こえた気がしたけどよくわかんない。

私は眠かった。だからちょっと寝る。

おやすみなさい。

## カカの天下４２７「頭が痛い」（後書き）

トメがひたすら頭を痛くする。
今回はそんな話です笑

や、トメカカのやりとりがやっぱ基本ですねー。
でもなんでこんな話書いたかというと、ただ単に今日の私が二日酔いだったから……それだけだったり笑

## カカの天下４２８「カカと言葉、レベル４」

「お、いいもん見っけ」

すったかたーと走っていく妹を温かい目で見守ってるのは僕、トメです。

今日はカカと洋服屋へ来てみちゃいました。目的の靴下はもう買い終えたのですが、寄ったついでにいろいろと見て回ってます。

「トメ兄！　これほしい」

「おー、どんなんだ」

カカの手元には一枚のシャツ。なんだ、真っ白でおもしろみのない……意見を述べようとする前に、カカはそれを持って試着室へと走った。

「ちょっと待ってね」

「いいけど、なんだよ。そんなに気に入ったのか？」

「うん」

ふむ、よく見えなかったけど気に入るような模様があったのかな。

「お待たせ」

シャツを着るだけだからさすがに早い。さぁお披露目だ、カーテ

ンが開く。

「どうだ！」

なるほど、シャツには模様があった。

いや、模様とは言わないか。

文字だ。

お腹のあたりにでっかく『男前』と書かれている。

「命殺（タマ）ったらぁ！」

「おまえの男前のイメージはそれなのか」

「ふっ……アバヨ」

「どこへ行く」

「まだあるんだよ」

再び閉じるカーテン。

そして間もなくオープン。

「どう？」

胸にはでっかく『可愛いでしょ』の文字が。

「きゃぴ！」

「んな擬音言っても可愛くないぞ」

「む、じゃあ」

くるんくるーん、と回ろうとでもしたのか。

しかし今日のカカはジーンズだ。スカートがふわっとなるわけでもないし、さらにはバランスを崩してコケてしまった。カカ的な可愛いイメージからは程遠いだろう。

「いたた……うぅ」

でもちょっと可愛かった。

「もっかい」

閉じるカーテン。

またまたオープン。

「どうだね」

書かれてる文字は……おお、こういうシャツの定番、『江戸っ子』だ。てやんでぇ！　とか言うのかな。

「んと……」

お、迷ってる？

「エドって誰の子よ」

そっちできたか。

「てやんでぇ！」

あ、でもちゃんと言った。

「次！」

飽きずに閉じるカーテン。そして――

「あの……スイマセン」

そんな感じでのほほんと遊んでいたのを見られていたのか、僕は知らない人に声をかけられてしまった。

「はい、なんですか？」

「チョっと、お聞きしたいのデスが」

しかも外人に。ちょっとビビッたけど、日本語いけるっぽいから大丈夫か……少しカタコトだけど。

「先ホドから――」

「今度はどうだ！！」

その外人さんの声を遮って登場するカカ。

胸には達筆な『ハゲ丸出し』の文字。うーん、これはどう演じるつもりなんだろう。見てみたかった。

でも見れなかった。なぜなら……

「オゥ！！　ビューティフル！！　スバラシイ！！」

なんか知らないけど外人さんが興奮してしまったからだ。

「ぇ、え、なに、この人」

焦るカカ。しかし外人さんはそれに気づかず感激しまくる。

「ヤハリ日本語は美しいデスね！！　英語にはナイこの形、感激デス！！　きっとさぞかしスペシャルでカンドー的な言葉なのでショウね！？」

「え、えと、その」

「ワタクシ日本語は勉強中なのデスが、マダ読めないのデスよ！なのでモシよかったら……このお言葉のスバラシサを、ワタクシに教えてはイタダケないでしょうカ！？」

こ、困った。

『ハゲ丸出し』という言葉は一体どうすれば美しくなるんだ！？

むう……そこら辺のオッサンを指さして「ああいうスッキリした頭のことです」って説明するのが一番手っ取り早いんだけど、それ

だと外人さんの夢を壊しちゃいそうだし……どうすれば！？

カカを見る。視線が『どうする？』と言っている。

『そんなこと聞かれても困る』と視線で返す。

するとカカは『わかった、任せて』と頷いた。

というか視線で会話できる僕ら、すごくない？

「あのね、この文字はね」

「ハイ！　ナントいう意味なのでショウ！？」

さぁ、どういく？

「英語でいうとナイスガイだよ」

ハイ普通に嘘いきましたー。

「オゥ！　やはり日本トクユーのすばらしい褒め言葉ナノですネ！」

「そうそう。光ってる人のこと」

確かに間違ってない。

「ワタクシも光りたいデース！」

や、あんた光ってるよ。眩しいよ、その純真さが。

「じゃーこれあげるよ」

「本当デスか！？　センキューです！！」

あぁ……あんなに喜んでしまって……

「感謝シマス！　アナタのお名前をお聞かせ願えマスか！？」

「カカだよ。あなたは？」

「ワタクシ、ムモーと申しマス！」

むもう。

……無毛？

「このシャツ、あなたにピッタリです」

カカも僕と同じことを思ったらしい。

「ええ、この上もなく」

とりあえず同意しといた。

「アリガトウ……アリガトウございマース！！　日本人の皆さんトテモ親切デース！！」

本当はかなり不親切で申し訳ないデース。

カカから受け取ったシャツを握りしめた無毛――じゃなくてムモ

ーさんは、やたらと頭を下げながらレジへと向かっていった。

「あれ……着るんだろうね」

「ああ……誇らしく、な」

「誇らしく……『ハゲ丸出し』を……」

「まぁ、無毛さんだしなぁ」

「丸出しだしねぇ」

……だからどうした、とツッコんだら負けだ。

「日本語の教科書に『ハゲ』が載ってないことを祈ろう」

「うん」

そんな、一日一善の逆をやってしまった一日でした。

## カカの天下４２８「カカと言葉、レベル４」（後書き）

やー、普通の話ですねー。まったりー。
普通……だよね？笑

ムモーさんには可哀想なことをしました。でもレギュラーになるわけでもないですし、別にいいか（ひど

## カカの天下４２９「サユカの任務、寝込み編」

ど、どうしよう……っ。

こんにちは、サユカですっ。

どうすればいいですかっ！？

いきなりこんなこと言ってすいません。ですが……ですがっ！

わたしの立っている場所……それはトメさんの部屋。

ベッドには……お昼寝中のトメさん。

どうしろとっ！？

えと、最初から説明しますとっ！　カカすけの家に遊びにきたわけですよっ。そしたらカカすけがいなくて、入ってみたら眠ってらっしゃる無防備なトメさん発見したわけですよ説明終わりっ！

さぁ、どうすればいいですかっ！？

え、とりあえず寝顔を見ろ？

了解っ！

天からの囁きに従い、わたしはおそるおそるトメさんのベッドへと近づく。

起こさないように、そーっと、そーっと。

「ん……」

見えました。

寝顔です。気持ちよさそうです。

くぁわいいです。鼓動が加速してます。

えと……次、どうしようかしら。

なにやらベッドの上に一人分くらいの空間があるのですが……これは、その、ねぇ？　そゆこと？

や、やっぱりここは……添い寝、しかないのでしょうか。

い、いいわよね？　ちょこーっとの間、隣で寝転がるだけだもんねっ。それだけだもんねっ！！

「んむ……？」

お、おおお起きられますかっ！？　起きられるならわたくしも諦めざるをえないのですが起きられないならヤらざるをえないといいますかええっとええっと！！

「……んむ」

起きられません？

起きられませんね？

それはわたしにヤれと仰っているのですねっ！？

なんで敬語になってるかはこの際置いといて、やらねばなりませんねっ！

で、では、ちょこっと失礼しまして……

トメさんの隣にそーっと、コロリと寝てみます。

枕も端っこを少しばかりお借りしまして。

ふー……仰向けになって一息つきます。

ちらりと隣を見ます。

すぐそばに横顔です。

どうするよっ！？

あああああーっ！！　幸せだわ！！

幸せすぎて太陽になりそう（注、とにかく熱いという意味です）。

「ん……」

のそっと動いたトメさんの腕に、わたしの視線がロックオン。

まぁ、ここまできたら……

いいわよねっ。

ちょこっと腕を拝借。

わたしの頭の下に置いて……腕枕、完成！

ふー……仰向けになって一息つきます。

ちらりと隣を見ます。

たくましい腕でわたしを包み込む（過大表現）男前なトメさん。

隕石になりそう（注、どうしようもなく熱くてどっか飛んでいきそうという意味です）。

「んー」

こっち向いた!?

こここっち！　こっちあっちそっちどっちエッチ！　じゃなくてああえっとえっとすごい目の前にトメさんの甘いフェイスがゲッチュー（混乱中です）！

あとほんの少しで……き、き、キスできますねコレ！

ってわたしがエッチだよ！　そ、そんな、ねぇ!?　この前ほら、告白したときも普通に仲良くなりたいだけって言っちゃったしっ！

で、でも、キスしたから付き合わなきゃなんないわけでもないし、

減るもんでもないし……

ちょっと勇気を出せば、夢にまで見たことが叶うんだし……

人は夢がないと生きていけないって偉い人も言ってたし……

夢を叶えられない人がたくさんいる中でせっかくのチャンスがわたしに与えられたわけだし、それを逃すのは世界の可哀想な人に失礼よね（注、かなり混乱中です）。

し……しちゃおっか……な。

少しずつ、少しずつ顔を近づけてみる。

トメさん……

格好いい……

可愛い……

どっちだろ……

どっちでもいいや……

「……ん」

カタ。

「ひぅっ！？」

首がもげる勢いで音がした方へ振り向く！

すると――押入れの中からカカすけが現れた！？　もしかしてずっと覗いてたのっ！？

「あー、ごめん！　ほんっとごめん！　もう少しで……あああもう！！」

なんで君がそんなに悔しそうなのよっ！！

「ほんとだよー、カカちゃんのバカー」

そんなこと言いつつベッドの下から這い出てくるサエすけも充分バカよっ！！

「とても衝撃的な場面でした……クララしょっくです」

出たな妖怪！？

「いい青春を見せてもらいました！　あ、どうも。私キリヤと申します」

どなたっ！？

「トメ父も見てたぞ！！」

お久しぶりですっ！！

あぁ……見られてたのね、全部。

「う」

『う？』

「うあああああああああああああああんっ！！」

久々に泣きながら大脱走っ！！

「さ、サユ――」

ずどどどどどどどどどどどどどどどどどど！！

恥ずかしさに任せるままに爆走しながら……

実は、あんまり気にしてなかったり。

実は、それどころじゃなかったり。

「……えへ」

実は、ニヤけてたり。

だって……ほんの少しだけ、触れたもん。

今日、寝れるかな？

無理ねっ。

……少しでも寝れるように、疲れるまで走っとこ。

――その日、ものすごいスピードでスキップする少女のことが街中で噂になったとかならなかったとか。

## カカの天下４２９「サユカの任務、寝込み編」（後書き）

寝込み、襲っちゃいましたね……サユカちゃん。
やー。
書くの恥ずかしかったー笑

# カカの天下４３０「テンカ先生の戦い、第二ラウンド」

「くすっ」「ふふふ」

……よう、テンカだ。

「ぶっ！」「これは……」「へぇ、アハハ」

今日も今日とて授業中、のはずなんだがな……黒板に文字を書きながらため息をつく。

「あっはっは――」

笑い声が聞こえたところで、前触れも見せずに生徒たちの方へ振り返る。

するとそこには、大口をあけて笑いながら隣にノートの切れ端を渡そうとしているニシカワが。

「……はぁ」

オレはため息を混じりに、固まってるニシカワの手からそれを奪う。

ノートにはこう書かれていた。

『教頭先生の顔には何が住んでるでしょうか！？』

この問題の答えが下に箇条書きされている。

えー、なになに?

『いつものマッチョ』

いつのだよ。

ああ、こないだの教頭の顔の落書きのときの耳に住んでたマッチョか。

思い出すぜ、そのあとオレは教頭に、どこからともなく取り出したマッチョ人形で……く、思い出すべきじゃねぇなこりゃ。忘れよう。

『シゲル』

誰だよ。

『大統領』

すげぇとこにあるんだな大統領邸。日本のトップは教頭の中で休むのか。

『イージス鑑』

住んでてたまるか。

『教頭』

教頭の中には小さい教頭が、その中にはまた教頭ってか? 昔そ

んな箱あったな。

『探検家マイケル３１歳、Ｂ型、趣味はおはじき』

設定こまけーよ、つかどこ探検してんだよ。

『……教頭の顔はワンダーランド？』

ああ、たしかにこりゃワンダーランドだよ。きっと入場料もとれるだろうさハッハッハ。

「てめぇら、いいかげんにしろよ？」

ギロリと問題児三人を睨みつける。

カカはそ知らぬ顔、サエはいつもどおりニコニコ、サユカはおどおどしてる、か。

先日の席替え以降、この三人はちょこちょこ授業を妨害してきた。まぁガキの遊びの範囲だし？　オレ自身がそういう悪ふざけに甘いから（おもしれぇから）適当に注意して流してきたんだが……

そろそろ、怒るべきだな。

あと二回だな。

あと二回は見逃そう。それを過ぎたら怒ろう。うん。

そう決心しつつ黒板に書き書きしていると……

「うあ」「うあ」「うあん」

もうきたか、一回目。背後から聞こえてくるざわめきを聞いて呆れ果てる。

「……うあ」「うぁ」「うーあー！」

なんか今回は変にうあうあしてるな。よし、振り向く！

またニシカワが紙を持って――って、なんで問題児トライアングル（カカサエサユカを結ぶ三角形のこと）の生徒がみんな赤面してんだ。

一体なにが書いてある？　奪った紙に視線を落とす。

『サエちゃん、サユカン。好きだよ』

『私も二人が大好きだよー』

『わたしはそれほどでもないけど、す、好きといえなくも……ないわっ』

……恥ず。

そらこんなん読めば赤くもなるわ。

「てめぇら、なんかアブねぇぞ」

さすがに言わずにはいられなかった。

すると筆頭問題児カカは立ち上がった！

「や、これが普通だよ！　運命に引き裂かれた大切な友達を想ってるんだよ……例えるなら私は彦星！　サエちゃんは織姫！　その間には天の川があるんだよ！」

「カカすけ。わたしはっ？」

「サユカン……んー……隕石？」

「なぜわたしがソレになりそうだったと知ってるのっ！？」

ナニモンだよおまえは。

しかしカカにとっちゃ他のクラスメイトは星屑かぁ。こいつら本当に仲がいいんだな……

「か、カカちゃん」

「俺ら、さんざん笑っておいてなんなんだけどさ」

「先生も困ってるしさ、そろそろ」

お、その星屑がオレに味方し始めた。

「黙れクズども！！」

……『星』が抜けると、ひでぇな。

「おいカカ。ろくに名前のないやつらだからってクズはひどいぞ」

「あ、あの……」「名前はあるけど」「先生が覚えてないだけで――」

「黙れクズども！！」

あ、やべ。

「先生だって言ってるじゃないですか！」

「オレは先生だからいいんだよ！」

そゆことにしとこ。

「とにかく！　なぁカカ、もういい加減やめねぇか？　同じクラスなんだからよ、別に席が近くなくたっていいだろ？」

「ヤです！　私は戦い続けます！」

……ムカ。

「先生こそ、いい加減に観念したらどうなんですか！　授業が進まないのも先生が意地悪するからですよ！」

……ムカムカ。

なんでここまで言われにゃならんのだ？

そもそも誰のおかげでてめぇらが一緒のクラスになれたと思ってんだ？　あぁん？

「か、カカちゃん」

「カカすけ、そろそろ――」

「二人は黙ってて！　私はいま全ての元凶と戦ってるんだから！」

プチ。

あー……もういいや。

キレよ。

「うぁう！？」

むんず、と右手でカカの頭をわしづかみする。

そして顔を近づけ、にこやかーに微笑みかけた。

「カカ……試してみるか？」

「な、なにをですか……ぁぁぁぁぁ痛い痛い痛い頭が雑巾のようにしぼられてるみたたたた痛痛たたっ！！」

右手にイイ感じの力を込めながら。

「人の顔に、マッチョやシゲルや教頭が入るかどうか」

「……！」

声無き声をあげるカカの頭を掴んで引きずりながら。

「まずは鼻の穴からいってみようかぁ？　次は耳な。最後は口な。目は勘弁してやるよ……あ、てめぇらは自習な！」

そう言い捨てて教室を出る。

さぁお仕置き部屋へ直行だ。

こないだ教頭にされた折檻、こいつにやってやるぜ！！

数分後。

イロイロねじ込まれたカカは素直になっていた。

教頭、あんたやっぱすげぇよ。

というかマッチョ人形の恐怖がすげぇよ。

……どこで売ってんだ、こんなもん。

## カカの天下４３０「テンカ先生の戦い、第二ラウンド」（後書き）

勝者、テンカ先生！
マッチョをねじこまれたカカ、完敗です！！

……想像したくないですねぇ。

# カカの天下４３１「カカ天クエスト　ＥＰ５」（前書き）

注意：このお話はカカ達がゲームのキャラになりきりながらＲＰＧを進める話です。話の内容はゲームの中ですが、『もしもカカ達が異世界にいたら』みたいな感覚でお楽しみください。

ステータス

カカ　ボケ勇者　レベル１　へん

サエ　悪の魔法使い　レベル１　はらぐろ

サユカ　手の平の踊り子　レベル１　さびしんぼう　エロレベル２

トメ　ツッコミ　レベル１　つっこみ

ケロリン　スライム　レベル２　おっさんくさい

## カカの天下４３１「カカ天クエスト　ＥＰ５」

街を襲った魔物を退治したことにより、株が上がった悪徳芸人勇者一行。

「勇者様のお力を見込んでお願いがあります！　実は、東にある天然洞窟に魔物が住んでいるのですが、これがたいそうな暴れん坊でして……なんと、美人の生贄を毎月よこすように要求してきたのです！　そして昨日、すでに一人目の生贄が向かったところ……村一番の器量良しが、ううぅ！！　どうか、どうか彼女を助け出していただけないでしょうか！？」

涙混じりの村長の言葉を聞き、カカたちは頷きあいました。

「村長」

カカが代表してみんなの返答を伝えます。

「展開がわかりやすすぎ」

「やかぁしぃわぁ！！　んなことわかっとるが仕方なかろうが！」

「お、いいね。村長がぶちキレる展開はなかなかないよ。そのまま魔物に変身でもすれば？」

「とっとと行け！！」

そんなわけで、初のダンジョンへ挑戦することになった。

「――へぇ、ここがそのダンジョンかー」

「でっかい洞窟だねー」

「こ、ここに入るの……？　こ、こわいわっ」

三人娘はその迫力にたじろいだ。

え？

道中の徒歩とか戦闘？

そんなものはスキップした！

「い、いいのかな、それ」

最近のゲームは便利だ！

「ぶっちゃけすぎ！　だいたいさ、経験とかレベルはどうなったんだよ」

すべてケロリンが倒したため、誰も上がっていない。

「ふっ……俺様ってば強すぎるぜ」

「いいのか……それでいいのか勇者一行」

トメは頭を抱えている。

根暗が5上がった。

「余計なお世話だ！」

トメのおたけびは虚しく響いた。

「もっと響けよ！」

もっと虚しく響いた。

「だからそーじゃなくてさ！！」

「――お、ここに何か書いてあるよ」

「立て札だねー」

「何が書いてあるのよっ」

「はぁ……もうなんでもいいよ。何が書いてあるんだ？」

『天然の洞くつに入る前に。チュートリアル』

「……は？」

「初心者用のマニュアルですねっ」

『ダンジョンに入ると魔物の出現率があがります。宝箱も多いですが、中にはニセモノもあるので注意しましょう』

「親切だねー」

『特に洞窟は天然の要塞です。すべりやすい箇所や意外な落とし穴があるかもしれませんから気をつけましょう』

「あれっ、どうしたんですかトメさん」

『武器、防具は装備しましたか？　レベルは充分ですか？　薬草は――』

「そんなこと教えてくれる天然洞窟があるかあああああ！！だいたい宝箱だのなんだの、人の手が入りまくりだろうが！　どこが天然だ！？　それに気づかないのが天然ボケとでも言う気かこのボケ洞窟がぁ！！」

今まで溜め込んだ疑問や不満を爆発させたトメのツッコミ！！

ごごご……

「えっ？」

「なに、この音」

何かが崩れているかのような地響きが聞こえてきた。

そして。

轟音と共に、洞窟が崩れた。

「は？　なによこれっ」

「トメ兄、何したの」

「何って……ツッコミ？」

「あー、トメお兄さんに『こんな洞窟あるか』ってツッコまれて、洞窟が『それもそっかー』って納得したんじゃないですか？」

「つまり、どういうことなんだ？」

ダンジョンをやっつけた！

「やっつけるもんなの！？」

「形あるもの、いつかは滅ぶもんだぜ……いつかわかる日がくるさ、ガキどもよ」

「偉そうなこと言うな軟体動物！　だいたい、今回の僕らの目的は――」

そのとき！

ダンジョンの残骸から大きな影が飛び出した！！

「なにさらしてくれんじゃワレエエエエ！！」

「うわ！　なんだ、あの強そうな魔物！！」

「虎人間だー」

「しかもマッチョよっ……どうしたのよカカすけ」

「マッチョと聞いて眩暈が」

「しっかりしなさいよっ！　こういうときくらい現実世界のこと忘れなさい！」

ともあれボスが現れた！！

「はぁ……はぁ……」

ボスは死にそうだ。

サエちゃんの質問！

「お疲れですねー。どうしたんですか？」

「ざけんな！！」

ボスは怒りで攻撃力が倍になった。

「て、てめぇら、なんてことしやがんだ！？　ダンジョンの一番奥で待ってたらいきなり洞窟が崩れてきてよ、必死で入り口まで全力疾走……オレが強いボスじゃなかったら死んでたぞ！！」

「そしたらめでたしめでたし」

「それで終わらせるゲームがあってたまるか！？」

「たまにはいーじゃん」

「うがー！！」

ボスは泣きそうだ。

哀愁が漂って攻撃力が3倍になった。

「はっ！　忘れてた、生贄に連れてかれたっていう娘はどうしたの！？」

カカの特技『重要なことを今ごろ思い出す』が炸裂！

「瓦礫が降ってくる中、俺様が命がけで守ったわ！」

よくよく見れば……傷だらけなボスの腕の中には、無傷の女性がぐったりしていた。

「おぉ、身を挺して！」

「すごい！　男だねー」

「敵ながら天晴れなヤツだぜ」

「アンタよくやったわっ！　よっ、男前！」

「やかましいわ！！」

調子のいい一行にボスはキレた。攻撃力が5倍になった。

「てめぇら勝手なことばかりぬかしおって……許さん！　成敗してくれる！」

ＢＧＭが変わった！

「おお、ボス戦の音楽だ！」

「かっこいいねー、カカちゃん！」

「君らさ……言ってて虚しくない？」

「サユカちゃん、そこはツッコんじゃダメなとこだよ」

注、皆様はアップテンポな音楽を聴いてる気分でお願いします。

「ごちゃごちゃうるさい！　いくぞ、おりゃあああ！！」

ボスのこうげき！！

「ふ、甘い！　サユカン、ドレスアーップ！」

「へっ！？　ちょっとカカすけ何を――」

サユカはエロサンタ服を装備させられた！

「へへー！！」

ボスはひれ伏した！！

そして少し上目遣いでスカートのあたりを見ている！

「いやああっ！　エッチ！！」

サユカはミニスカの裾を押さえながら回し蹴りをはなった。

ボスに1のダメージ。

「あれ、そんだけか」

「サユカン、レベル低いしねぇ。しかもあの体勢じゃ威力も出ないでしょ」

「可愛さの攻撃力は抜群なんだけどねー」

ボスをやっつけた！

「……え、もう！？」

「崩壊するダンジョンから脱出して、すでに瀕死だったからな。敵ながら哀れなヤツだったぜ」

「で、でも倒したことには変わりないんだし、これで少しはレベルが上がるんじゃ――」

サユカのエロレベルが3になった！

「それしか上がんないのかよ！！」

「だってそれでしか倒してないし」

とにかく一行は生贄にされていた女の子を取り戻した！

ボスをもレベル1のまま倒してしまったカカたち。このまま進ん

でいってしまうのか？　サユカの（エロ）力だけで魔王を倒すつもりなのか！？　だがしかし……？

次回、『強敵あらわる』をお楽しみに！

## カカの天下４３１「カカ天クエスト　ＥＰ５」（後書き）

ひっさびさのカカ天クエスト、どうでしたかね？
ボスの虎男が不憫です。きっとタケダと同じような星の元に生まれたんでしょう。

ところでスキップしたとこ、気になる人いますかね？

実はそこ……とと、ナイショです笑

## カカの天下４３２「ただいまゲームでケンカ中」（前書き）

これは、前話のカカ天クエストのスキップされた場面をプレイしていたときの、カカたちの様子を描いたものです。

# カカの天下４３２「ただいまゲームでケンカ中」

こんにちは、カカです。

今日はサエちゃんちに皆で集まってゲームを進めています。たまーにやってるＫＹクエストっていうヤツです。

「えっと、ダンジョンって村の東にあるって言ってたよね」

「よし、サエすけ！　東だから右へ行くのよ！」

「み、みぎー」

「君まで右行かなくていいんだって！」

相変わらずパソコンを前にしたサエちゃんは面白いです。

「んー、全然敵倒してないけど、一応ステータス見ておこうか」

「そうね。サエすけ、右クリックね」

「み、みぎー」

「だから右行かなくていいんだってばっ！！」

マウス握るとずーっとテンパってるんだよね、サエちゃんてば。

かぁいい。

「あ、敵さんだ」

「よし、今度こそケロリン以外のレベル上げるわよっ！　いけサエすけ、敵をクリックして攻撃するのよ」

「えと、えと、敵……」

「それはトメさんでしょ！」

『サユカのこうげき！　トメは死んでしまった』

「わたしになんてことさせんのよっ！　ていうか味方に攻撃できるのこれ！？」

「しかもすんごい攻撃力だね」

『注！　味方相手に攻撃すると、精神的に弱い人は裏切られたショックで即死します』

「だってさ。サユカンに裏切られたのがショックだったんだね、トメ兄」

「あぁ……わたしの愛が……人生が……」

「だ、大丈夫だよー。ほら」

『サエは金にものを言わせて取り寄せた薬を使った。トメが蘇った！』

「……ねぇ、サエすけ。君ってそんなに操作とか無能なのにさ、な

んでそゆとこだけ絶妙に器用なの？」

「ゲームがキャラの性格を読んでるんだね」

『トメのこうげき！　サユカは死んでしまった』

「復讐させないでよっ！！」

「あああー、ごめんー」

こんな感じで大騒ぎしながらゲームしていたんだけど……

一休みにマウスを手放したサエちゃんが、何か思いついたみたいだ。

「ね、せっかくだしクララちゃんも呼んでみよっかー。こういうゲームに面白い反応しそうじゃないー？」

む、たしかに。最初に会ったときはテレビに話しかけてたもんなぁ。

「でもどうやって呼ぶの？」

「そういえばサエすけ、あの子のこと妹とか言ってたわよね。もしかして一緒に住んでるの？」

「ううん。えっとー……クララちゃーん」

「はいです！」

「「うぉあ！？」」

ど、どっから現れたの！？

「こんな風にね、呼んだらくるのー」

……つ、使い魔？

「クララに何か御用ですか？　サエおねーちゃん」

「うん、一緒に遊ぼうと思ってー。こういうゲーム知ってる？」

「えっと、テレビとは何か違うですか？」

「違うよ。これは遊びでねー」

おお、サエちゃんがパソコンのことを偉そうに語ってる！　そっか、いくらサエちゃんが機械にへっぽこでも、クララちゃん相手になら教えられる立場だよねー。

それにしても二人とも仲いいな。本当の姉妹みたい……

「じゃあやってみよっかー」

「はいです！　見せてください！」

『魔物Ａのこうげき！』

「わー！」「ひぅ！？」

ごぃん！！

魔物のこうげきモーションに驚いた二人は、思わず避けようとしてしまったらしい。サエちゃんは左、クララちゃんは右に――並んで座ってた二人は見事に頭をゴッチンコ。

「な、なにするのー？」

「く、クララはこうげきを避けたんです！」

「私だって避けたんだよー！　右に行くなって言われたから左にー」

だからどこも行かなくていいんだってば。

「人間は右利きが多いから右に避けるべきなんです！」

おお、すごい。なんか理屈っぽいこと言ってる。あんた人間じゃないけど。

「違いますー！　左ですー！　左クリックですー！」

「じゃあクララは右クララです！」

「じゃー私は上クリック！」

「下クララです！」

「クララちゃんが下だね？　私が上だから私の勝ちー」

「じゃあクララ、白クララになります！」

「なら私は黒サエ――誰が腹黒だってー！？　クララちゃんずるいー！」

「「むー！！」」

あぁ……仲のいい姉妹があっという間にケンカに……

「ね、サユカン」

「うん、カカすけ」

「「ゲームって楽しいね」」

私たちは今日も、いろんなことを楽しくやってます。

## カカの天下４３２「ただいまゲームでケンカ中」（後書き）

カカたちがどんな感じでゲームをしているのか書いてみました。
や。あんまりゲームしてませんけど笑

それにしてもパソコンを前にしたサエちゃんを書くのは楽しいです。今回は妹分も一緒ですが……
その妹分、別にサエちゃんと何か契約したとかじゃありませんよ？　ただ桜なので暇なんです。それにサエちゃんの声はよく聞こえるので呼ばれたら現れたりするのです。
まぁ、暇なんでこれからもちょこちょこ現れることになるでしょう笑

## カカの天下４３３「哀れな男」

「姉の弱点を教えろ？」

「は、はい！」

がばっと土下座するシュー君をどうしたもんかと見下ろすトメです。

「なんでまたそんな。シュー君ってずっと姉の下僕でいられれば満足なんだろ？」

「もちろん！」

即答だよこのお方。

「でも、その……た、たまには」

下克上してみたいってか。その気持ちはわからないでもない。

「それにほら、好きな人の弱点を知ってるだけで嬉しいじゃないですか。もう死んでもいい！　気持ちイイ！　僕の弱点も知って！　みたいな」

その気持ちはわからん。てかキモい。

「お礼はしますから！」

「よし、じゃー今日は卵の特売だから付き合ってくれ。お一人様一

パックだから」

「お安い御用です！」

最近カカが卵食べたいってうるさいんだよねー。

え？　安すぎる？　姉の弱点なんてこんくらいの価値だろ。

「にしても姉の弱点ね……うん、そういやこないだマジ泣きしてたな」

「えええ！？　あのお姉さまに涙なんかあったんですか！？」

「ああ。こんなことがあったらしい――」

その日、姉とサカイさん、テンの三人は飲み歩いている最中だったそうだ。

その道中、姉はふと地面に何か落ちているのを見つけた。

『どうした姐さん』

『や……これ、なんだろ』

『わー、もしかしてお財布ですかー？』

周囲に人がいないのを確認した姉は、早速その財布の中身を覗いてみた。断っておくが、まだ犯罪じゃないからな。持ち主の手がか

りがあるかもしれないし、中を確かめるくらいいいだろ。多分な。

『おお、すげー大金が入ってるよ！』

『おー！　使おうぜ！　分けようぜ！』

『あらあらー、そんないけないことしてー……一人いくらですかー？』

ここまでくると犯罪だが、姉はふと気づいた。

『あれ、なんだこれ』

札束の中に混じっていた一切れの紙を。

そこにはこう書かれていた。

『カツラの頭金』

とても寒い風が、三人の間を通りぬけた。

『あ、あのさ……』

『警察とどけよっか』

『うん』

酒が入っていたこともあって、三人は号泣した。

「こんな風に、切ない話に弱い」

「な、なるほど……」

「他にもな、姉がよく行く本屋があるんだけどさ――結婚指輪したサラリーマンが必ずいるんだよ。夜中まで立ち読みしてるんだよ。きっと奥さんに帰ってくるなって言われてるんだよおおお！　って泣いたこともあった」

ま、カカと共通の弱点がもう一つあるんだけど、こっちはやめとこう。

「お姉さま、意外と人情に熱いですよね！　ますます惚れました！」

「あそ」

「じゃあこの弱点を知った僕はどうすればいいと思いますか！？」

「同情されて泣かれるくらいに情けなくなればいいんじゃないかな」

あ、シュー君が石化した。

「今も結構、情けないとは思うけどね」

「……」

「シュー君のことは昔から見てきたんだろうし、ちっとやそっとじゃ泣かないだろうなぁ」

って、あれ？

「考えてみれば、それで泣かしてしまえばシュー君のこと見直すんじゃないか？」

「ほ、本当ですかっ！？」

お、復活した。

「だってさ、姉にとってはシュー君なんて携帯のストラップ程度の存在だったわけじゃん。付けてても付けなくてもいいみたいな。それが見ただけで泣ける対象になる、ってことはすごいことじゃないか？」

「そうか！　ただのストラップを見て泣く人なんていませんもんね！」

「そうだ！　そのときこそ君は姉に人間と認識されるんだ！」

「よーし！　早く人間になりたーい！！」

ん、いい雄叫びだ。

頑張ってもっと情けなくなって、姉に認められてくれ。

姉の見る目が変わるように。

そう、ストラップを見る目から、哀れなゴミクズを見る目に変わるように！

……あれ、いいのか？　それで。

いいのか。シュー君って苛められるの好きだし。

さて。

「じゃ買い物に付き合え」

「かしこまりました！」

元気よく頷くシュー君。

根っからの奴隷体質なのだろうか。

……哀れな。

「どうしたんですか、トメさん」

「い、いや……目にゴミが」

僕が泣いてどうするよ。

## カカの天下４３３「哀れな男」（後書き）

あまりにシュー君が可哀想と思い、出してみました。
なんか、もっと可哀想になったような。

ま、まぁ本人がいいんだからいいんですよ！
それが一番ですよね！
多分……

## カカの天下４３４「喫茶店でインタビュー」

み、皆さん！　こんにちは！

皿です！　じゃなくてサラです！

今日はその、バイトもお休みして喫茶店なんかに来ています！
デートです！

相手はトメさん……ではなく！

「ん？」

なんと、あのユイナさんです！

「あら、なぁにサラ君。そんなに見つめられるとテレちゃうわ♪」

「あ、すすすすいません！　私なんかが視界に入れるなんて恐れ多いですよね！」

「ふふ、嘘よ嘘。見られてなんぼの商売ですもの。いくらでも見ていいのよ」

あぅー、ステキすぎるー。一般人にバレないようにと帽子とサングラスで変装中だけど、そのアイテムがまたお洒落！　似合う！　美人と一目でわかる！　胸元も開いててセクスィー！　ってなんか私オヤジみたいですか！？

「あらあら。見ていいとは言ったけど、そんなところ見つめられる

とー」

「もももも申し訳ありません！　だって開いてるんですもん！」

「ふふ、最近暑いもの」

えぅー、やっぱ本物の美人さんって変装してても美人とわかるんですねぇ！

「それにしてもごめんなさいね、いきなり連絡しちゃって」

「いえいえいえいえ！　着信を見たときには思わず悲鳴をあげてひっくり返ってしまいましたよ！」

「あら、なんだか死人から電話がかかってきたみたいな反応」

「私にとっては死人も同じです！　あ、すいませ！　雲の上の人って意味で――」

「ふふ、ありがとう」

緊張して慌てまくる私を優しく受け止めてくれるユイナさん……は、恥ずかしいです……

「こちらこそ、あのときの約束を覚えていただいて……」

「本当はもっと早くご一緒したかったんだけど、お仕事が忙しくてなかなか、ね」

なんてステキな人なんでしょう。

クリスマスにした約束を、まだ覚えてくださっていたなんて！

「というわけで、サラ君。せっかくだから気の済むまでおしゃべりしちゃいましょ」

「はい！　あの、私、どうしても聞いてみたかったことが！」

「なぁに？」

「あの、旦那さんとはどうやって知り合ったんですか？」

「あら、パパ君のこと気になる？」

「はい！　えっと、忍者、なんですよね」

「ええ、そうよ」

「忍者って、なんですか？　どういうお仕事……」

「うさんくさいお仕事です♪」

あ、あら？　なんだかユイナさんの後ろのほうに、ボトってなんか落ちました。

「え、えと……どうやって知り合ったんですか？」

「パパ君が元々わたしのストーカーでね、あんまりしつこくて面倒くさいから結婚してあげたの」

あ、あの？　なにやらユイナさんの後ろで号泣してらっしゃる方がいらっしゃるんですが。

「その……旦那さんが理想の男性というわけでは」

「全然違うなぁ。んー、しいて言うなら理想はトメ君かな、可愛いし」

「だ、旦那さんは？」

「便利♪」

あのあの、なんだか血涙を流してる人がユイナさんの背後に！！

「なーんて、うそうそ」

「か、かぁさあああああん！！」

よしよし、と後ろを振り向いてその人――旦那さんの頭をナデナデするユイナさんはとてつもなく楽しそうでした。

「あの……やっぱり仲いいですね！」

「べつに？」

「がぁざぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！」

「ふふ……ほらほら、男の子がそんな泣かないの」

と、とことん楽しそう……

「お二方はどうしてそんなに仲がいい夫婦なんですか？　トメさんとか産んだのを考えると、ずいぶん長いお付き合いですよね、どうやったらそんなに続くんですか！？」

「いやー、離婚もいっぱい考えたけどね」

「オイ待ってください初耳なんでございますが！」

「だって言ってないもの」

「俺のどこに至らぬ点が！？」

「暗いとこ」

「だって忍者だもん！！」

「うさんくさいし」

「それ今日二回目だぞ！？」

「ふふ、サラ君。こうやって適度に怖がらせてあげるのが長続きさせるコツだよ。安心なんかさせちゃダメ。男なんてすぐダラけたり浮気したりするんだから」

「ううう……そう、不安だからいっつも裏で引っ付いてることになるのだ、俺は」

「わたしって愛されてるぅ」

「ええ、ええ、愛してますともさ！」

「ここまでくると正直すこしうざいけど」

「うわあああぁぁぁん」

「よしよし」

はー、やっぱり仲いい！　いいなぁ。

ユイナさんはやっぱり私の憧れの女性です！

あんな風になるには、まず自分が強くならないと！

強く……？

「そういえば、ユイナさんって意外と意地悪なんですね。テレビとかで見ると優しい印象ばっかりなのに」

「ふふー、それはね」

ユイナさんは私に顔を寄せてきました。

そして旦那さんには聞こえない、小さな声で。

「好きな人には、意地悪しちゃうの♪」

こんな可愛いことを言ったのでした。

その後も、ユイナさんと旦那さんの三人でお喋りしました。

お二方とも気さくな方で、緊張もすぐにほぐれ、とても楽しいひと時を過ごせたのでした。

もし、トメさんと結婚したら、あの人が私のお母さんに……

あ。

なんか燃えてきました。

## カカの天下４３４「喫茶店でインタビュー」（後書き）

ユイナさん久々の登場です。お休みとれて戻ってきた……ということでクリスマスにしたサラさんとお茶する約束を果たしましたね。
まぁトメ父いじってたばっかにも見えますが笑

それにしてもこの話載せようかなーと思った直前にちょうど「忍者の父と女優の母はどうやって出会ったんですか？」っていうメッセージきたので驚きました。
……エスパー？笑

とにかくまぁ、こういうことです＾＾
詳しい出会いの模様はいつか書きたいなーと思ってます。

## カカの天下４３５「証拠を見せろ」

「お母さんまだかな！」

「はいはい、もうすぐ来るから落ち着けって」

やれやれ……あ、トメです。

今日はうちの母さんが帰ってくる日なので、カカは朝からずーっとそわそわして落ち着きません。友達とお茶してから夕方あたりに帰ってくる、という連絡は受けているのですが……

「夕飯の準備もしちゃったしなぁ。のんびり待とうよ」

そう言った直後、ピンポーンという音が。

「お母さんかな！」

カカはダッシュで玄関へ向かう。僕はその速さに呆れながらも立ち上がり、後に続いた。

そして玄関を覗く、するとそこには。

「ちわ、宅配便です」

さえない男が立っていた。

ハズレだ。

「あの、すいません。お届け物ですのでハンコを――」

「あんた誰」

「は、はい？」

腰が低いその男に、カカはケンカ腰で言い放った。

「えぇと、宅配便業者の者ですが」

「嘘だ！」

オイオイ。

「本当はお母さんの変装でしょ？」

「えぇえ!？　こ、こんな変装するお母さんなんて普通いないでしょう!？」

それがいるんだな。世の中ってフシギねぇ。

「僕は本当にただの宅配便業者ですよ！　ちゃんと男ですよ。毛深いし」

そういう女もいるべ。

「じゃあ証拠として、あんたの恥ずかしいエピソードを語りなさい」

……どこら辺が証拠になるんだ？

「あれは高校二年のときだった」

語るんかい！！

「僕はバスケ部で、彼女にいいところ見せようとドリブルシュートした。これを綺麗にゴールに入れてこう言うつもりだったんだ。君の心にピッタリンコ！　って」

それは確かに恥ずかしい。

「そしたら」

あれ、続きあるんか。

「ボールはゴールに入らず、跳ね返って彼女の鼻っ柱に直撃」

うあ。

「ピッタリンコのつもりが彼女の鼻をペッタリンコにしてしまったというお話です」

うまいことオチがついたな。

「ん、まーまー面白かった。合格、帰っていいよ」

「はぁ」

……カカ、おまえ遊んでるだけだろ。まぁ僕もちょっと面白かったけど。

うんうん頷くカカを引きずって居間へ戻り、ボーっとテレビ鑑賞を再開する。

そして気づく。

そういえば荷物受け取る前に帰しちゃった。

向こうもそれに気づいたのだろう。数分後、再びピンポンが鳴った。

「お母さんかな！」

多分違う。そう言う暇もなく玄関へ向かうカカ。

僕も後を追うと、案の定だった。

「どうも、宅配便です」

「嘘だ！！」

あ、さっきの人と違う。女の人だ。

「え、その……ほ、本当に宅配便なんですけど……」

「じゃあ証拠に恥ずかしいエピソードを語りなさい」

だからなぜそれが証拠になる？

「あれは今朝、八時くらいのことだった」

そしてなぜ語る！？

「出勤するのに電車に乗ってたら……その……痴漢に……うぅ」

あー。

「えっと、その、ごめん。がんばって」

「きっとまたいいことあるさ！」

「はぃ……うぅ、ハンコかサインください」

「ああ、わかった。ほら、これでよし！　頑張って！　ね？」

「今度そんな目にあったら、ちゃんと大声出すんだよ！」

「はぃ……ありがとう、ありがとう」

ぺこぺこ頭を下げながら去っていく宅配便業者さん。

「……普通に可哀想で思わず優しくしちゃった」

「……うん」

なんとなくしんみりしながら居間に戻ろうとする僕ら。

しかしそのとき――玄関のドアが開く音が。

振り返るとそこには紛れもない母さんが！

僕らは暗い顔を一転、笑顔に変えた。

「お母さ――嘘だ！」

カカのやつ、楽しそうな顔して……わざと言ってるなこいつ。どっからどう見ても母さんなのに。

「本当はお母さんの偽者でしょ！？」

少しくらいカカに付き合ってふざけてやるか。

そして心からおかえりなさいって言おう――

「その通りだ！」

ぇ。

「よくぞ見破った！」

ぅあ……

「さすが我が娘――な、なぜに二人ともそんな『んだよテメェは』みたいな顔をしてるのだ？」

「んだよテメェ」

「ホントに言われた！？」

「失せろ」

クソオヤジに兄妹キックが炸裂した。

――本当のお母さんが来たのは、それから十分ほど経ってからだった。

ストレスを発散した僕らは、とっても清々しい笑顔で出迎えることができたのだった。

## カカの天下４３５「証拠を見せろ」（後書き）

祝、ユイナさん帰還！
というわけでお母様の話が続きます＾＾

それに加えて父が悲惨な目にあう話も続きます（ぇ

嘘だ！！（何が

## カカの天下４３６「お母さんの前だから」

「ケーキおいしいよ、お母さん！」

「ふふ、よかったね。カカ君」

「うん。ありがとう！」

可愛く喜んじゃってまー……あ、ども。コソコソしてますけど、れっきとしたトメです。

今日はＧＷということもあって母さんとカカがデートしてます。喫茶店でケーキなんか食べてます。

僕？

僕はその……

「お待たせいたしました、こちらホットコーヒーでございます」

「あ、ど、ども」

小声で答え、背後の様子を伺う。よし、バレてないみたいだな。

もうわかりましたでしょうか？

そう、僕も暇だったので……二人を尾行しているのです！

いっつも僕がされる側で、いい加減うんざりなんだよね。たまに

はしてやらないと気がすまない！　というわけで、現在カカたちのすぐ後ろの席で背を向けて座っていたりする。ここなら声も聞こえるし、顔さえ見られなきゃバレることはないはず！

「カカ君、最近学校はどう？」

「ん、けっこー楽しいよ。サエちゃんとサユカンもいるし」

きた！

や、保護者としてはやっぱり心配なんですよ。僕の目の届かないところでカカがどう思って何を話してるのかさ。今回の尾行だってカカが変なことを言わないか見張るためでもあるんだ。

「お、ちゃんと仲良くやってるんだね」

「うん。最近のサエちゃんはね」

あいつのことだ。ヒネくれまくったことを言うに違いない。

「ほとんど毎日仲良く遊んでるよ。いっつもニコニコしてて可愛いの。でもね、パソコンの前にいるときが一番可愛いんだよ！　すんごく慌てて変な行動ばっかりするの」

……あれ。

「ふふ、カカ君はサエ君が大好きなんだね」

「うん。あ、でもサユカンも好きだよ。サユカンたらね、トメ兄のこととなるとね、何でも真っ赤になってね、すっごくおもしろいの」

あれ、あれ。

「わたしは別に一人でもいいもんっ！　って突っ張ってるくせに寂しがりやでね、すぐ私たちのとこに寄ってくるのがたまんないね。あれが流行りのツンデレってやつかな」

「んー、ママはおばさんだから流行とかよくわからないけど、とにかくサユカ君のことも大好きなんだね」

「うん」

あれれのれ？

なんか……めちゃくちゃ素直じゃないっスか、カカさん。

僕の前ではいっつもヒネくれてるのに、母さんの前ではそうなのかっ！？

お兄さん悲しい！

うぅ……悲しいからもういいや。素直になってるカカの言葉を盗み聞きするのもアレだし、帰ろ……

べ、別に母さんに負けたのが悔しいわけじゃないんだからな！

「じゃ、トメ君はどう？」

ぴく。

「お帰りですか？」

「コーヒーおかわり」

も、もうちょっと聞こう。

「トメ兄？　んとね」

どきどき。

どきどき。

「うるさいね」

ぐさ。

「毎日毎日、いろいろ細かいとこに文句つけてきてさ」

ぐさ、ぐさっ。

「ちょっとうざい」

ズバッ！！

き、斬られた……

刺さって刺さって斬られたよママン……

素直なカカの言葉がこれ……僕はこんな風に思われてたのか……

トメしょっくです！！　あぁ、なんか誰かさんのマネしてしまうほ

どショックだ……

「へー、じゃあトメ君のこと嫌い？」

「や、好きだよ」

……ぁい？

「トメ兄と喋ってると楽しいし」

「あらあら、うざいんじゃなかったのかな？」

「うん、うざいよ。うざいけど楽しい、かな？」

ど、どっちですか？

「なんだろ。トメ兄と遊んでるのは楽しいのね。で、いろいろ私に文句を言ってくるのは面倒くさいんだけど、それもひっくるめて楽しいっていうか……んー、なんて言っていいか、よくわかんない」

「ふふ。もしかしてそれ、『楽しい』じゃなくて『嬉しい』じゃないのかな？」

「あ、そうかも。なんだかんだ言われるのは、まぁ、私を気にしてくれてるってことで……嬉しい、かな」

「知ってる？　『嬉しい』って言葉。『楽しい』って言葉より上なんだよ」

「私それ知ってる！」

どうしよう。

恥ずい。

「――あ、ちょうどいい言葉が浮かんだ」

「お、なにかな？」

「お父さんみたい！」

「なるほどねー。たしかにピッタリかも」

あー……

カカさんや……

そう言われるのはとても嬉しいですよ？

保護者としてうまくやれてるのかな、って思えるからさ。

でもさ。

本当のお父さんの立場、ないべさ？

「うぉぉぉぉぉぉぉん」

ほらー。なんか隣で泣いてるし。

僕は憐れな父親の肩をポンポン叩いた。

「姿見せないから自業自得だよ。でもまぁ……今夜は飲もう。GWだし、休みくらいあるだろ？」

「うるさいやい！　……どこ行くよ」

「病院っていう居酒屋、行ったことあるか？」

今週は家族の仲良し週間だな。

明日は姉も顔出すって言うし。

ま、こんなのもたまにしないとね。

家族なんだから。

## カカの天下４３６「お母さんの前だから」（後書き）

ちょっとしっとり書いてみました。
家族ですもん。なんだかんだ言ってもたまには本音を出したり労わったりしてあげないと。
あげないと……歪んじゃいますよ。今の世の中、特にね＾＾；

私がこんなこと言うのもおこがましいのですが。
自分が家族と思える人がいるならば、たまには本音をもらしてみてはいかがでしょうか。口にしないとわからないこともありますし。
ではでは、失礼しました＾＾

## カカの天下４３７「あっちの本音、こっちの本音」

「カカちゃん、寝た？」

「ああ、母さんと一緒にぐっすりな」

「ほんと、すごい懐きようだよね」

「母さんの可愛がりっぷりも結構なもんだけど」

「あのケンカの後に生まれた子だしね。思い入れも深いんでしょ。あと単純に、あたしやトメより可愛いし」

「それもそうか」

「嫉妬かい、弟君？」

「うっせ」

どうも、ちょっと不貞腐れてるトメです。

今の会話でもわかるとおり、時刻は深夜。カカは母さんとおねんねで、僕は姉と一緒に居間で缶ビールなんか飲んでます。

「なんか、こうやってあんたとのんびり飲むのも久々な気がするな」

「あたしも最近忙しかったからね。気に食わないヤツら退治したり、新聞載ったり」

この人が気に食わないのを成敗してるのはいつものことだけど…
…新聞？

「今度はなにやらかしたんだ」

「人を犯罪の常習犯みたいに言わないの。ちょっとした釣り情報に載っただけだよ」

は？　釣り？

「あれは先週のことだった……」

最近自分のこと語るやつ多いな。

「ポカポカと温かくなってきたこともあって」

「バカになったのか。安心しろ。あんたは元からだ」

「いいから聞けタコ。温かくなってきたこともあって、今年の初泳ぎをしようとあたしは海中を気持ちよく泳いでいた」

泳ぎ出す時期はえーよ。

「そしたら服に釣り針が引っかかった」

「……で、釣られたってか？」

「や、そしたら負けじゃん？　あたし負けるの大ッ嫌いだからさ。水中で暴れたのね。そしたら他の釣り針も引っかかってって」

想像してみる。

温かい日差しが照らす平和な堤防。穏やかに釣りを楽しむ彼らの顔に激震が走る。

「なんだ、この魚は！」「でかい！　でかいぞ！」「くっ、一体どんだけ餌を食ってやがる」

「こいつぁ俺たちへの挑戦だ！」「おい、みんなで支えあえ！　海に全員引き込まれるぞ！」

闘志を燃え滾らせる釣り人たち。

その敵は――海中でなぜか平泳ぎで頑張る姉（なんとなく飛び込んだのでTシャツに短パン姿）。

「シュールだ……」

「もちろん勝ったよ！」

多分、本当に全員海に引き込んだんだろうなぁ。で、怪魚現るとかなんとかで新聞に載ったと。

「トメもやる？」

「できねーよ人として」

――そんなとりとめのない会話をしばらくダラダラ続けていたのだけど……

「ね、トメ」

不意に姉が真剣な顔になった。

「最近さ、どう？」

「どうって、なにがさ」

「好きな娘とか、できた？」

マジメな顔したかと思えば……そんなことか。

「あのな……前から言ってるだろ？　僕は」

「カカちゃんが成長するまでそういうことは考えない、ってんなら何度も聞いたよ」

「……なんか、文句でもあんのか」

姉は小さく笑った。いつものふざけたヘラヘラ笑いじゃない。

「文句があるわけじゃないさ」

そう。まるで大人みたいに、笑った。

「ただ、ね。別にトメが一人でカカちゃんのことを背負い込むことはないんじゃないかと思って」

「……姉からそんな言葉が出るとはね」

「はは。まーフラフラしてたあたしが悪いのはわかってるよ。結果

としてトメに押し付ける形になっちゃって、今更こんなこと言える立場じゃないのもわかってる」

「……」

「でもね、今更でも、今は今じゃん？　あたしはそこそこ落ち着いて仕事してる。収入もある」

たしかに。やりたいことが多すぎると言ってこの街を飛び出して――姉は戻ってきた。

姉はそれからずっと、この街にいる。どこで暮らしているかは知らないけれど。

「あたしがいるんだよ、トメ。あんただけじゃない。だから――」

カカのせいで無理をしなくてもいい。

自分を頼ってくれてもいいのだと。

姉はそう言った。

「母さんに、なんか言われたか？」

「べっつにー。背中は押されたけどね。もともとはあたしの中で考えてたことだよ」

「これは、僕が好きでやってることだよ」

姉は真っ直ぐ僕の目を見据えた。

「本当に？　無理してない？」

「それは」

「やりたいことが他にもあるんじゃないの？　あんただって若いんだし、あるでしょ……人は普通の暮らしが一番って方針で今の生活してるけど、両親のおかげで実際うちには結構お金あるんだから。もうちょっと楽することも、やりたいこと目指すこともできるんだ――」

「あいつが好きなんだよ」

自分でも驚くほどすんなり出てきた言葉を聞いて、姉は口つぐんだ。

「カカは、さ。妹だ。僕の娘ってわけじゃない。育てていくと誓ったわけでもないよ。それでも――あいつと一緒に暮らしていくのが好きなんだ」

最初は仕方なくだった。

両親は仕事が忙しいし、姉は家を飛び出すし、僕が育てるしかないと思った。

だから仕方なく、頑張ってきた。

でも、いつの間にか気に入っていた。

二人での生活が。

「やりたいこととか、楽することとか、考えたこともある。でも僕は今の生活がいいんだ」

カカは子供だ。働きながら子供と一緒に生活するっていうのは、結構しんどい。

正直、少し無理もしてると思う。

でも、だからこそ――やりがいがあるってもんじゃないか。

「あいつの成長を見るのが僕の楽しみなんだよ」

「じじくさっ！！」

「やかましい」

「それ、本音？」

「弟の本音くらい見分けろよ。姉なら」

「けっ、口ばっか達者になっちゃってまー」

ケラケラ笑う姉は、僕の見間違いじゃないならば――とても嬉しそうに見えた。

そう思ってくれるなら、嬉しい。

家族に誇らしく思ってもらえたのなら、こんなに嬉しいことはない。

「そっかそっか。トメはカカちゃんが好きなんだね」
「何度も言わすな」
「でも好きなんだよね」
「うっさい」
「好きなんだよね？　大好きなんだよね？」
「そうだよ」
「あっちむいてホイ」
「ホイ？」
姉の指差した方を向いて、僕は固まった。
多分顔はピカソになってると思う。
「……聞いてたのか？」
「この無礼モノ！」
「照れてんのか？」
「この痴れモノ！」
スパァン！　とご近所迷惑っぽい音を深夜に響かせて、カカはド

タバタと騒がしい音をたてて去っていった。

「トイレにでも起きたんじゃないかな」

「姉……あんたな」

「まーまー、たまには本音を言わないと。でしょ？　ほい、もう一杯」

「はいはい、付き合うよ」

まぁ、昼はカカの本音を盗み聞きしちゃったし。おあいこ、か。

ぐいっ、と冷えたビールをあおる。

目の前にはニヤニヤした姉。

ムカつく。

けど、うん。

悪く、なかった。

## カカの天下４３７「あっちの本音、こっちの本音」（後書き）

昨日はカカの本音でした。今回はトメの本音です。
いちおートメも大人。若造でも子供の世話してるので、それなりに考えているのですね。
自分の生活を気に入ることは、意外と難しいもんだと思います。
でももし気に入ることができたなら、その日々をどうか大切に。

笠原家が家族週間なせいか、ちょっとしっとり風味の話が多い最近ですが、それだけユイナさんの存在が大きい、ということで納得していただけたら嬉しいです＾＾

## カカの天下４３８「一家団欒＋α」

「今日も今日とていい天気だね」

「いい天気すぎて暑いがな……」

「トメ君はだらしがないなぁ。もっとカッ君を見習ってみれば？」

「ふっ、あたしの頑丈さときたらもう核ミサイル攻撃にも勝つくらいよ！」

「そこは負けとけよ、人として」

こんにちは、最近暑いですね。トメです。

そんな天気が続いているのに家にいるのは勿体無い！　ということで我ら笠原家はプチピクニックへと繰り出しております。と言っても目的地は近所の公園なのですが。

ま、ＧＷでどこも混んでるだろうし。家族でお手軽にのんびりするには最適な場所なのではないでしょうか。

おっと、そうそう。笠原家とは言ったけど……

「え、えと、本日はお招きいただきありがとうございます！」

こんな感じで恐縮してしまっている彼女――サラさんも一緒だったりする。

「あらあら、そんな固くならなくても」

「い、いえっ、その、これって家族公認の仲ということでよろしいんでしょうか！？」

「ふふ、わたしは別にいいかな。でも本人の意思が重要だよ、サラ君」

「ま、まずは外堀から崩すということで」

なにやら不穏な会話が聞こえた気がするが、内容はよくわからなかった。わからなかったけど……「崩す」と言いつつ姉を見るのはやめたほうがいいぞサラさん。アレを崩すにはほんと核ミサイルでも持ってこないとダメだろうし。

や、そんなことよりも気になることがある。

「今日のサラさん、胸が見えるね」

「見るな！」

あ、違うよ？　別にカカの言ったとおりサラさんの胸元が涼しい感じになっているのが重要ってわけじゃないんだよ？　ホントなんだからね！

僕が気になったのは……

「あら、どうしたのトメ君」

「そんなに見つめないでくださいトメさん！」

母さんとサラさんさ。

同年代にしか見えないんだよね。

つくづくうちの母親の若作りは異常だと思う。や、べつに濃い化粧とかしてないから作ってるわけじゃないのか。単純に若いのだ。

改めてそんなことに感心してるうちに、目的地へと辿りついた。

やはり太陽が出てると公園の活気が違う。遊びまわる子供たちや散歩するお年寄り、ベンチに座る家族など――陽気だけじゃなく、みんながポカポカしていた。うん、外へ出てきてよかった。

お花見のときのように適当にシートを広げて場所を陣取り、さぁ何をするか――というところで。

「ふはは！　あたしも混ぜろ！」

姉が現れた。

「あ、あれ？」

「お姉が、もう一人……」

そう。姉はすでに一緒にいる。なのに姉が再び現れた。

や、姉の姿をしたバカが現れたと言ったほうが正しいか。

「なにしてんのさ、父さん」

当然、こんなことをするのはうちのバカ忍者しかいない。

「知れたことを！　俺も家族団らんに参加したい！　でも顔を出すのは恥ずかしい！　だからカツコの姿で現れたのだ！」

「それじゃあたしが恥ずかしいだろーが、このクソオヤジ！」

「む？　貴様に恥などあったのか」

僕も初耳だ。

「あ、あんたねぇ……いいよ、今日こそ決着つけてやる！」

「ふっ、いいだろう。勝ったほうが本物のカツコだ！」

や、あんた勝ったら姉として生きる気ですか。

「公園、親子、ときたらやはりキャッチボールだな。ほれ、受け取れ。音速を超えない限りは壊れない、高級キャッチボールセットだ」

「受けてたつ。でも勢いあまって超えても知らないからね」

そこは超えとくなよ、まがりなりにも人として。

「ふっ！」

「はぁっ！！」

ヒュ――ぱぁん！！　キュン――ずぱぁぁん！！　シュィン――

ドカァァァンン！！

……さて。なにやら弾丸を撃ちあってる二匹の変な生物は放って置いて。

「こっちは何する？」

「お母さん、バトミントンやろー！」

「あら楽しそう。でもママ、こういうの苦手なのよね。運動神経なくて」

「私が教えたげるよ、ほらほら早く」

ほほえましい二人は仲良くシートから離れていった。

さて。

「何しよっか、サラさん」

「あぅ！？」

僕ら二人だけ残ってしまったわけですが。

「わ、私たちも勝負しますか？」

「いいよ。何して勝負？」

「えっと……あ！」

何かないか周囲を見渡したサラさんの視線が花壇で止まる。

「花占いで勝負です！」

「……どうやって」

「占いの結果がどうなるか賭けあう、っていうのはどうでしょう」

なるほど。花占いといえば簡単に言えばイエスかノーを決めるものだ。そのどちらかに賭ける、というなら単純極まりない勝負だが――

「でもそれってさ、花を見たらだいたい結果わかっちゃうよね」

花びらが多い花はあまりない。パッと見て花びらが奇数か偶数かを見極めれば簡単に賭けに勝つことができるだろう。

「あ、じゃあ……賭けをしてから私とトメさんで同時に一本ずつ花を選んで、二つの花びらの数をまとめて占うというのはどうでしょう」

なるほど。無造作に選んだ花が二つとなれば結果はすぐにわかるもんじゃないからな。

「よーし、やってみよう」

しかし花占いとはまた女の子っぽい……穏やかな陽気の中でやるにはピッタリかもしれないが。

「じゃ、なに賭ける？」

「私がトメさんと結婚できるかどうか！」

……オイ。

「私は結婚できる、に賭けます」

「じゃ僕は結婚できないに賭け――」

「私と結婚したくないんですか！？」

どーしろと。

「じゃあ逆です。私は結婚しない、に賭けますので」

「僕と結婚したくないのか……」

「ああうう、そうではなくて！！」

ちょっとおもしろい。

……しかしまぁ。なんか聞き捨てならない単語が出てるし、あんまり誤魔化すわけにもいかないか。

「あのさ、サラさん」

「はいっ？」

「さっきから結婚とか言ってるけど……本気、じゃないよね？」

「……ぇ」

あれ。

なんだろう。

サラさんの顔がポストになった。や、タコか。とにかく真っ赤になっちゃった。

「え、えと、えと、家族団欒のところお邪魔しました！　そそそその失礼します！！」

思いっきりまくし立てて走り去っていくサラさん。

それを呆然と見送る僕。

「な、なんだったんだ？」

「んっふっふ」

ふと気がつけば隣には姉が。

「きっとアレだね。自分が気づかないうちにプロポーズしまくってたのに、今ごろ気づいたんだね」

「……そなのか？」

「サラさんって走り出すと止まらないっぽいからね」

あんたが言うな。

「結婚なんて現実感なかったから気づかなかったと見た。なんせデートとか告白とかすっ飛ばして言ってんだから。はてさて、サラさんの本心やいかに！？」

……女の心なんかわからんよ、僕は。

「そしてあたしは果たしてどっちのカツコでしょう」

それもわからん。

## カカの天下４３８「一家団欒＋α」（後書き）

ちょこっとバラバラめですが団欒です。
騒がしく書こうと思ったんですけど、なんだかユイナさんがいるとカカたちはのほほーんとしちゃって大騒ぎにはならないようです。
……え？　二人の姉対決やら走り去るサラさんは充分騒がしい？
んー。
どうでしょう笑

サラさんの真意については、後日＾＾

## カカの天下４３９「一家で病院行き」

毎度。最近連続でお伝えしてますが、またまたトメです。

「いらっしゃい！　五名様で？」

威勢のいい声に案内され、奥のテーブルに僕らは座った。

「私ここ来るの久々だ」

「あらあら、カカ君ここに来たことあるの？」

「大丈夫だよ母さん。居酒屋に家族連れってそんなに珍しくないんだから。ここは料理美味しいし、特にね」

そう。お察しの通り笠原家は、みんな大好き居酒屋『病院』へと繰り出しております。公園で遊んだあと、せっかくだからみんなで食事しようとここへ来たというわけなのです。

なのですが……

「ふむ。昨日もここへ来たが、確かになかなか美味かった。まだ食べてない気になるメニューあったんだよな」

ざわ……！

「くそー、負けたー。今日はヤケ酒だ！」

ざわざわ……いる……なんかいる……なんか二匹いる……！

「な、父さん。そろそろ」

「なんだ息子。変装は解かんぞ。恥ずかしい」

ざわざわ……あれって姐さんだろ。どうやって増えた？　細胞分裂か……ありそー……どんな生物だよ……まさかここまで……いや、俺はあの人ならこれくらいやると信じてた……ざわざわ……

「あぁ、身内として恥ずかしい」

「ねぇ、お父さん」

……ぽ。

「なにカカちゃんに呼ばれただけで顔赤くしてんのよオヤジ」

「キモいぞ」

「うるさいわ！」

「大丈夫よパパ君。わたしだけはキモ可愛いって思ってあげるから」

「キモいのは消えないんですね！？　あ、そ、それはともかく、な、な、なんでしょうかカカ様」

あんたカカに弱すぎ。

「お父さんって女装好きなの？」

「うぐぉっ！？」

おお、直球！

「い、いや、そのようなことは断じてない！」

「じゃー顔見せて」

「そ、それはだな」

「やっぱりオカマなんだ」

「そうじゃないわよ！？」

じゃー女言葉になるなよ。

「う、うぅ……」

さて、追い詰められた我が家の大黒柱は。

「お、お父さんはな、お父さんはな……お父さんなんだぞ！！」

「とてもそうは見えない」

だって顔が姉だし。

言葉に詰まる父さん。さぁどうする――と注目していたのだけど、横やりが入った。

「失礼します。ご注文はお決まりでしょうか？」

「勇気と度胸をくれ」

「申し訳ございません。当店にはそのようなものは置いていませんので」

「じゃあどこにあるのだ!?」

つっかかるなよ厄介なおっさん。酔ってもないのに酔っ払いみたいだ。

呆れた僕と姉は父さんを止めようとした。だが――

「どこにあるか、ですって?」

店員がキラリと歯を光らせて答えた。

「それはあなたの、心の中に」

キマった。

てかこんなとこで何してんのキリヤ君。

「心の中に……見つからんのだが」

「じゃー無いんでしょう」

「うわあああああああん!」

あっさり言うキリヤ君の言葉にやられた父さんは、シュバッとど

こかへ消えてしまった。

「おぉ、すごい。なんとなくからかってみたものの驚きです。なんだったんですか今のは」

「ただのヘンタイだよ。それよりキリヤはこんなとこで何してるのさ」

「こちらには昔、バイトでお世話になったことがありまして。今日は人が足りないとのことでヘルプに入ったのです。GWって忙しいですからね」

なるほど。しかしどこの店員姿でも似合うな。

「ところで、ご注文は？」

適当に頼んで下がってもらい、家族の雑談に興じる。もちろん父さんのことは誰も気にしてなかった。だっていつものことだし。

「お母さんはお酒飲まないの？」

「ママも飲みたいのは山々なんだけど」

ちらりと僕と姉の顔を見る。

「母さん、勘弁してください」

「あなたが飲むならあたしは逃げます」

「ほらー、よくわからないけど飲んじゃいけないのー」

残念そうに言う母さん。でもこれだけは譲れない。

母さんは人前では飲んではいけないのだ。別に絡み酒になるわけでも泣き上戸になるわけでもない。無害といえば無害だろう。でも母さんの酒グセは毒が強すぎる。

「むー、お母さんがお酒飲んだらどうなるか見たかったのに」

「じゃカカちゃん飲んでみる？」

「わ、ばか」

姉が手渡したジョッキをちょびっとあおるカカ。ま、まぁ、あれくらいならいいか……よくないけどねっ。

「か、カカ……？」

おそるおそる尋ねる。

「にがい」

ほっ。よかった。いつものカカだ。

「なぁ兄貴」

「誰だおまえは！？」

あ、あに、アニキって！？

「あぁん？　私はカカに決まってないんですか？　ヨロシク！」

わけわかんないんですけど！！

「わー、酔っちゃった」

「もう、カッ君。悪いことしたら、メ！」

ちょ、ちょっとお母様？　でこピンなぞしてる暇がありましたらば――

「刺身にはやっぱ醤油だよな！　醤油！」

なんか絡んでくるこの変な子をなんとかしてください！

「サッカーにはボールだよ、ボール！　他は邪道だ！」

なんか当然のことをやかましく断言するカカ。まさか一口で酔うとは……や、子供だから仕方ないか。

「おう！　子供は人間に限るぜ！」

いつにもまして意図不明であります。

「そして私には……私に、は……」

あれ。

かくん、とスイッチが切れたように脱力して、椅子に倒れこむカカ。

「潰れたかな」

「あらあら大変。すいませーん、お水お願いします」

ふぅ、冷や汗かいた。

「姉、なんてことすんだ。成長に影響したらどうする！」

「一口くらい大丈夫だって。それよりさ」

「なんだよ」

「カカちゃん、自分にはなんて言うつもりだったんだろね」

「……サエちゃんとかじゃないのか」

「自分だったらいいな、なんて思ったっしょ」

「べつに」

「ウソつけー」

「こら、トメ君カッ君。じゃれあってないで手伝って」

「「はーい」」

「ふむ、帰りまで寝てたら俺が背負っていこう」

「……いたの、父さん」

「うむ、カカが寝たから戻ってきた」

「このヘタレめ」

そんなこんなで、家族みんなで過ごす一日はゆったりと過ぎていった。

## カカの天下４３９「一家で病院行き」（後書き）

注、お酒は飲める歳になったから――じゃなくて二十歳になってから！！

本作はフィクションです。なんとなく飲ませてみちゃいましたが、お子様はマネしないようにお願いします＾＾

# カカの天下４４０「そのひとことが言いたくて」

おはようございます。トメです。

「もう行くのか」

「……あら、見つかっちゃった」

可愛く舌を出しておどける母さん。

「早起きすぎるよ。寝顔でも撮ってやろうと思ったのにな。残念だ」

「あらあら。こんなおばさんの寝顔なんか撮ってどうするの？」

「写真をオークションにでも出せば高く売れるだろ」

「まぁ恥ずかしい」

「心配すんな。僕が落としてやるから」

「ふふ、それ意味あるの？」

「あるさ。自慢だよ自慢。見せびらかしてハイさよなら、ってね」

「こばかさんねぇ」

「……なに、それ。小バカにしてるの？」

「違う違う、親バカの反対」

子バカ、ね。

「母さんに言われたくないな。こんな朝早くに――カカが起きる前に仕事に行くような人に」

時刻は五時。早すぎる出発。そう、いつものことだった。

「母さんって、帰ってくる度そうじゃんか」

「だって、あなたたちの顔を見たら仕事に行きたくなくなっちゃうんだもの」

「ほらな。そっちこそ大層な親バカだよ」

子供を愛しまくる人を親バカと呼ぶのなら――子供の顔を見ただけで自制が効かなくなると言うこの人は、間違いなく親バカだろう。

「母さんが居なくなったって知ったときのカカの相手をするのは僕らなんだぞ？　ったく」

軽く嫌味っぽく言ってみる。もちろん本心は文句なんかない。カカの面倒を見るのは全然、嫌じゃないんだから。

母さんはそれを見透かすかのように微笑んだ。

「感謝してるよ、トメ君。ママたちが心おきなく仕事を頑張れるのも、君らのおかげ。ちゃんと家族のこと考えてくれる子供たちでよかった」

おい、まさか。

「君がカカ君を好きでよかった」

「……聞いてたのか」

「ふふ、忍者の妻をなめるなー」

得意げに微笑む母さん。

「く」

僕は笑いがこみ上げてくるのを抑えることができなかった。

「く、ははは」

そんな僕の様子に首を傾げる母さん。

それを見て僕はなおさら笑ってしまう。

「なぁ、母さん」

「ど、どうしたのかなトメ君」

「子供を、なめるな」

僕のその言葉を合図に。

後ろに隠れていたやつが、顔を出した。

「カカ、君」

そう、母さんは帰ってくる度、朝早くに黙っていなくなる。

だから待ち伏せなんか簡単だったんだ。

「ずっと、言いたかったことがあったの」

気まずそうな母さんに、柔らかな視線を送るカカ。

「言いたくて言いたくて、でも今まで言えなかったこと」

母さんが息を飲む。

何を緊張してるのか知らないけど、そんな必要はないのに。

僕らはただ、言いたいだけ。

たった一言、これだけを。

「いってらっしゃい」

そう、たったこれだけ。

これだけの言葉に、ありったけの想いをこめて。

「――ぁ」

その想いは届いた？

「これで、またすぐ帰ってきたくなったでしょ」

カカの気持ちは届いた？

「――ぅ」

きっと届いた。

母さんの泣きそうな瞳が、なによりもそれを語ってる。

「うん、今すぐに、ただいまって言いたくて仕方がないよ」

声が震えてる。

きっと言葉どおり、今すぐ「ただいま」って言ってカカを抱きしめたいのだろう。でもそれはできない。

だって、これはそういう儀式じゃないんだから。

「でも、その前に、これだよね」

そう、返事は決まってる。

母さんは応えた。

女神みたいな笑顔で。

いや――

「いってきます！」

紛れもなく、お母さんの笑顔で。

そして僕らはもう一度。

さらに後ろに隠れている姉とも声を合わせて言ったんだ。

いってらっしゃい、と。

## カカの天下４４０「そのひとことが言いたくて」（後書き）

家族編、終了です。
同時にしっとり話期間でもありました。えーコメディなのに趣味にはしって申し訳ありません。まぁいつものことと思って寛大な目で見ていただけると嬉しいです＾＾；

なんにしてもクララちゃん編、家族編とちょいシリアス目な話が続いたので、次からはその分ドタバタしていこうと思いますのでまたよろしくです笑

# カカの天下４４１「こどもな日」

おはようございます、トメです。

うちの会社もカカの学校も、まだＧＷ中なのでお休みです。というわけでお休みの定番、朝寝坊をしていたのですが……

「ふぁ……んー、起きよ」

ダラダラと身体を起こして洗面所へ向かい、のろのろと顔を洗う。

んー、きもちー……そういや今日も普通に起きれたなぁ。こういう休みって大抵、朝っぱらから暇を持て余したカカの襲撃があるもんだけど。

母さんと一緒だったときのカカの様子を思い出す。ふむ、もしかして成長したのかな？　素直でおとなしくなったとか？　そうだな、もう五年生だし。いつまでも変な子供ってわけにはいかないよなぁ。

しみじみとそんなことを思いながら居間を覗く。

「カカ。おはよ」

「おはよートメ兄。ねぇねぇ」

「ん、どした」

「今日って子供の日なんだよね」

「そういえばそうだったな」

「ばぶぅー！！」

「……」

前言撤回。

コイツ変だ。

「もしもしカカさん？」

「ばぶ？　なんでちゅか」

「そのフザケタ言葉使いはなんでしょうか」

「子供になってみまちた」

おまえはもともとお子様だろうが！！

そうツッコもうかと思ったけど。

「まんまー」

「朝飯ね、はいはい」

ちょっとおもしろいからこのままいってみよう。

味噌汁を温め、玉子焼きとサラダを作り、納豆を用意して、と。

こんなもんでいいっしょ。

「ほい、朝飯」

並べ終わってテーブルにつき、二人仲良くいただきます。

「あーん」

は？　食べさせろってか。

「やだよ。恥ずかしい」

「あーん」

「嫌だって」

「あぁん？」

「やりますやります、だから睨むな」

まったく、こんなことやるのいつ以来だ？　気恥ずかしさを覚えながらも適当にサラダを箸でつまんでカカの口元へと運ぶ。

「ほい、あーん」

「あむっ。むぐむぐ……」

「次はなんだ？」

「バカにしゅんな！　自分でたびぇる！」

「じゃあ最初からそうしろよ！」

「やってみたかったから」

一瞬だけ素に戻ると、カカは普通に箸を持って食べ始めた。

そう、ほんと一瞬だけだった。その後もカカの子供化（幼児化？）は続いた。

「おもちゃ！」

「僕はおもちゃじゃない！　痛い痛い髪引っ張るな！」

こんな感じで暴れたり。

「とめにー。もーもーちょーらい」

「は？」

「もーもー！」

牛乳のことだと気づくのに十分以上かかったり。

「まじぇまじぇ」

「待て！！！」

『混ぜるな危険』を混ぜたりと、目が離せないようなことを繰り返す。さらには無茶な注文も。

「きがえー」

ん、ああ。手伝えってか……って、できるか！

「おっぱい！」

出ねぇよ！

「ちっこ！」

どうしろと！？

……はぁ、疲れた。なんなんだカカのヤツ。あれか、母さんの前でおとなしくしてた分、なんか溜まってたのか？　今はそれを発散してんのか。

あれ、目を離した隙にまたいなくなった。どこだ！？

見つけた。外だ！　玄関先でベビーカーを引いてる奥さん捕まえて何か喋ってる！　僕はダッシュでそちらへ向かった。

そしてそこでは――

「だー？」

「だー」

「だぁだぁ？」

「だー？」

なんだか未知の言語で語り合う赤ん坊（偽者）と赤ん坊（本物）がいた。

「すいません！　妹がご迷惑を」

「あ、いえいえ！　うちのまーちゃんと遊んでいただいて」

気さくな奥さんでよかった……ったく。僕は呆れながらカカを睨む。

「1、2、3？」

「だー」

気づいちゃいねー。

「本当にすいません。なんだかうちの妹、今日が子供の日だから子供になるーとかわけのわからないこと言い出しまして」

「あらまぁ。実はうちもなんですよ」

「は？」

ベビーカーの中をよくよく見る。

赤ん坊って歳じゃねぇ！？

「オイかかぁ。そろそろ飽きたぜ」

「あらあら、それじゃ帰りましょうか」

「おぅ」

妙に野太い声で答えた赤ん坊（やっぱ偽者）は母親の手に引かれ、呆然とする僕を置いて去っていった。

「……なんだあれ」

「わたちの仲間でちゅ」

「まさかおまえと同じこと考えるヤツが他にいたとは」

「流行ってるんでちゅよ」

「そんな病気が流行ったら世界は終わる」

カカだけが変な子ってわけじゃないんだなぁ。しかもあの歳でビーカーに乗るほど……何歳かはあえて明記しないでおく。

しかし、まぁ。

「とめにー。おっぱい」

「だから出ないっつうの」

「サラさんのおっぱい」

「それなら出そ――じゃなくて！」

他にも似たようなのがいるからと言って、カカがカカなのは変わらないのだが。

## カカの天下４４１「こどもな日」（後書き）

前話で宣言したとおり、ドタバタさせよーと思って書きました。
その結果。ドタバタっていうか……ただ単に変なカカ全開って感じになりました笑

まぁ、基本に戻ったということで＾＾；

# カカの天下４４２「ひみつのそうだん！」

「ここの白玉パフェおいしいねー」

「でしょ。しかもそれね、白玉増やしてくれたらしいよ。知り合いサービスで」

「わー。カカちゃんさまさまさんまだねー」

「へへー、そんなに『さま』つけて褒めなくてもー……最後なんて言った？」

こんにちは、カカでっす。さんまじゃないよ。

今日はファミレス東治でサエちゃんとお茶してます。お茶なら喫茶店のほうがいい気もしますが、いま言った通り、この店だと店長やキリヤ君がサービスしてくれるのです。や、可愛い子って得だね。

「さてさて、そろそろ本題に入ろっか」

「うんうんー」

ここにはいつも一緒にいるサユカンやトメ兄がいません。

なぜなら――二人の誕生日についての会議をするからです！

「五月十七日だよね、二人とも」

「一緒っていうのがすごいよねー。まさに運命って感じでー」

「これはぜひとも、二人で恥ずかしいことしてもらわないとね」

「まったくまったくー」

うんうんと頷き合う私とサエちゃん。

でも悲しいかな、さすがにトメ兄もサユカンもずっと一緒に過ごしてきただけあって、「あっ！」と驚かせそうな妙案がなかなか浮かばない。

相談してるうちにパフェも食べ終わる。でも決まらない。

ここは――そう、第三者の意見ってやつが必要だ！

「すいませーん」

というわけで仕事中のキリヤ君を召喚。

「なんでしょうかお客様」

「アイデア一つください」

「時価ですがよろしいでしょうか」

「トメ兄にツケといて」

「かしこまりました」

「仲いいねー二人とも」

まーね。

「ところで何のアイデアでしょうか？」

「うん、えとね。もうすぐトメ兄とサユカンの誕生日なの。サユカンっていうのは――」

事情を適当に説明する。

「あぁ、この間トメ君の寝込みを襲っていたあの娘ですね」

「そうそう。でさ、せっかく二人一緒なんだし、二人に恥ずかしいことさせようかと思ってるんだけど」

「生ぬるいですね」

「へ？」

「恥ずかしいこと、なんてぬるいこと言ってないで、いっそのこと結婚でもさせちゃったらいいのではないでしょうか」

け、結婚！？

な、なんて……

なんて面白い！！

「よし！　それいこう。結婚だ！」

「おめでとうございますです！」

「うあぉ！？」

真横からいきなり声が飛んできてビックリした！　え、クララちゃん？

「どうしたのー。こんなところで」

サエちゃんが聞くと、クララちゃんはキリヤ君を指差しながら言った。

「この人にご飯もらってました」

「ええ、この間仲良くなりまして。たまにお腹をすかせて来るんで、店の裏で余り物をあげてるんですよ」

な、なんか犬か猫に餌やってるみたいな感じだね。まぁいちおー人じゃないけどさ。

「キリヤはおいしいものくれるです。いい人です」

「……クララちゃんって簡単に誘拐されそうだよね」

飴あげるから付いておいで、と声をかけられてホイホイ付いていく姿が目に浮かぶ。

「大丈夫だよー。いざとなったら消えればいいんだから」

「クララに消えろと言うのですか！？　クララお邪魔虫ですか！？

いえいえ虫は天敵ですよ木ですから。あ、お邪魔木ですか！？
なんだか視界を遮るようで、とても目障りな感じの言葉になってしまいました」

「あ、や、そーじゃなくて」

「どっちにしろ邪魔ですか！　クララしょっくです！　それではいつか見た変な人みたいにシュバッと――」

「待ちなさいって」

んー、せっかくだから手伝ってもらおっかな。

「ねね、クララちゃん。ちょっと結婚式を手伝ってくれないかな」

「はい！　お二人とも、結婚おめでとうございます」

「や、私じゃなくてさ」

「お似合いだと思います。キリヤとおねーちゃん」

「クララちゃん……」

私はがしりとクララちゃんの肩を掴み、可能な限り全力で微笑んだ。

「ひぃぅっ！？　くくくクララを食べても美味しくないですよぉっ！！」

「キリヤ君の話なんかしてないの。わかった？」

「はいぃっ！　わかりましたからその恐ろしい顔をやめてください！！」

失礼だなぁ。ただ微笑んだだけなのに。

「怖いです……こあいです……悪霊退散です……あ、この呪文はクララも危ないかもです……うぅうぅ」

なんで泣きそうなの。

「あっはっは。しかし『キリヤ君なんか』とはご挨拶ですね」

何がおかしいのか陽気に笑うキリヤ君ご本人。しかし。

「てめぇなんぞ『なんか』で充分だろが」

その背後からドスの効いたお声がかかった。あ、店長だ。

「てめぇ、仕事サボって何やってる」

「いえいえ仕事はしてますよ。『アイデア』というご注文をいただきましたので、応えていたところです」

「んなメニューねぇだろが」

「あるんですよ。『本日のキリヤンめにゅぅ』の中に」

「貴様、いつから勝手にメニュー作れる立場になった？　何様だ！？」

「いま貴様って言ったじゃないですか」

「……ナメてんのかコラ」

「いえいえ、冗談です。いますぐ戻ります、はい」

最後までにこやかな表情を崩さずに、キリヤ君は仕事へと戻っていった。

その際、こっそり「なるべく小声で相談したほうがいいですよ」と忠告をもらった。ハテ、なんでだろ？

「えっとー、結局どうするのー？」

「テーマは『結婚』ってことでいいんだよね」

「誰かと誰かをくっつけるですか？」

お、気を取り直したクララちゃんがようやく事情を理解してくれたみたいだ。

「だったらクララの桜を使うといいです。クララの桜の下で告白すると、異様に仲良くなりすぎてしまう！　と評判なのです」

それ、なんか呪いみたいに聞こえるんだけど。

「じゃーその方向でいこー」

ま、呪われるのは私じゃないからいっか。

そんなわけで、トメ兄とサユカンの誕生日の相談は着々と進んでいくのだった。

できるだけ小声で。

しかし――このとき本当はもっと小声で話すべきだったと、私たちは後悔することになる。

## カカの天下４４２「ひみつのそうだん！」（後書き）

トメとサユカちゃんの誕生日、公開でーす。

どんな誕生日になるのか。

今回はカカやサエちゃんのようにはいきません。なにせこの二人ですし、しっとり系が最近多かったので大いにメチャクチャにしてあげたいと思います＾＾

またトメサユ系かよーと思ったそこのあなた。
もちろんそれもありますけど、おそらく予想外の展開もありますのでお楽しみに笑

# カカの天下４４３「秘密の相談」

「んー、おいしー」

「……はぁ」

こんにちは、サラです。

いきなりため息をついてすいません。実は最近悩んでいるのです。

「もぐもぐもぐ」

その悩みについてじっくり考えようと、ファミレスなんかに一人で来てみたのですが……

「どうしたんですか。食べないんですかー？」

「いえ……私はこんなとこで何をしているんだろう、なんて思いまして」

「お料理を前にジッとしているということはー、犬が『待て』してるみたいですね」

「誰が犬ですか！」

「あははー。このメス犬」

「老犬に言われたくないです！」

はぁ……あ、またため息ついちゃいました。まったくもー、ただでさえ悩みがあるのに！

「ほんと、なんであなたなんかとご飯を食べてるんでしょうか」

「仕方ないじゃないですかー。席が空いてなかったんですから」

そうなんです、私がこの店に来たときは満席だったのです。それで仕方なく帰ろうとしたら、たまたま入り口近くのテーブルに座っていた天敵、サカイさんと目があって……それに目ざとく気づいた店員さんが「お知り合いの方ですか？　でしたら――」と言葉たくみに相席をすすめてきて、いつのまにか一緒にご飯を食べることになっていました。

そんなつもりはさらさらなかったのに、店員さんの話術に負けました……

「サラだけにですか？　さむーい」

「人の心を読まないでください！」

あーもう、最悪。ほんと最悪です！

さっさと食べて帰りましょう……

そう思ったのに。

「それで、何を悩んでるんですかー？」

「……だから心を読まないでくださいって言ってるのに」

私がわかりやすいのでしょうか、それともこの人が妙に鋭いのでしょうか。

「まーまー話してみなさいなー」

「相談に乗ってくれるんですか？」

「ううん。笑ってあげるー」

「帰ります」

「まーまー」

くい、と目の前に並んでいる料理を指差されて思いとどまります。うぅ、せっかくのお料理を食べずに帰るのは失礼ですよね。

「はぁ……もーいいです。どうせあなたに話しても何にもなりませんから、あえて愚痴ります。聞いてください」

「ごーごー」

「実はですね。私、今まで勢いのままトメさんのこと追いかけてたんですけど……これって本当にトメさんが好きってことなのかな、と疑問に思いまして」

自分でも意外なほど言葉がすらすら出てきました。多分誰かに聞いてもらいたかったんでしょう。まさかこんな人に話すことになるとは思いませんでしたけど。

「――私、昔から勢いに任せて行動しちゃうんです。気になってた男の子といい雰囲気になったら勢いで告白しちゃったり」

サカイさんは「あらあら」と口元に手を当て、にっこりと微笑みました。

「なんてバカなんでしょう」

「なんて直球なお言葉なんでしょう」

キレそうです。

「そ、それでですね。さらに付き合った人と勢いで別れることも多いんです。彼が女の子と歩いてるのを見たら、それだけで浮気と思っちゃって……」

「なんて短気なんでしょう」

「い、いぃえぇ、こうやってあなたと話せているあたり、かなり根気強いと思いますよ私は……！」

気にしない。気にしない。話の続き！

「トメさんの周りには女の人がいっぱいいますよね。でもなぜか浮気だー！　って怒ったりする気にはなれないんです。あ、いえ、別に付き合ってるわけじゃないから当たり前かもですけど、でも前の私なら好きな人が誰かと歩いてるだけでムカムカしたり……だから、こう、トメさんのこと、本当は好きじゃないんでしょうか？　なんて思ってしまって」

先日、再び勢いに任せてトメさんに迫りました。でもいきなり結婚しましょうだなんて、いくら無鉄砲な私でも行きすぎです。だから急に恥ずかしくなって逃げ出しました。

そして心の中に立ち止まって、いろいろ考えていたら……いつの間にかこんな疑問が生まれてしまったのです。

「いつもの恋愛と違う気がするんです。うまく説明できないですけど、何かが足りないような……何が足りないんでしょうかね」

「頭じゃないでしょうかー」

「ほんとぶっ飛ばしますよ？」

この人は話をマジメに聞けないのでしょうか……いえ、サカイさん大人ですし。なんだかんだ言って助言の一つくらいくれますよね！

「ごちそうさまでした。ではー」

「待ちんしゃい！！」

思わず私っぽくない言葉が出てしまいましたっ。

「ここまで聞いたんですから何かコメントするのが筋でしょう！？」

「あなたはバカですねー」

「あなたほんとムカつきますね！」

私は怒鳴りました。

普段の気弱な私からは考えられないほどの大声を出して。

だってこの人。ムカつくんですもん。こんなに私がムカつく相手、初めて見ました。

だから相談してみたのに。

「だってバカとしか言いようがないじゃないですかー」

そう拗ねて睨みつけたのが効いたのでしょうか。

「もともとこの世に説明できる恋愛なんてないでしょー？　勢いなんてものがあるなら、余計なこと考えないでそれに任せればいいじゃないですか」

なんだかんだ言いながら。

サカイさんはそんな助言を残して去っていきました。

「あ。それも、そっか」

古今東西、恋愛小説は多々あれど。

人の気持ちなんてものを完璧に表したものなんて、在りはしないのではないでしょうか。

とすると、私は……自分の中にある勢いに素直になればいいだけなのかもしれません。勢いに逆らったり、無理やり立ち止まったりするのが無駄だというのなら――

よし。

納得できました。

あれ。

何か聞こえました。

隣の隣のテーブルからです。

なになに？

トメさんとサユカちゃんが誕生日に結婚？

よし。

勢いに任せて邪魔しましょう。

## カカの天下４４３「秘密の相談」（後書き）

勢い任せに行動してしまっていたサラさんの心情をお届けしました。

サユカちゃんの気持ちは落ち着きましたが、果たしてサラさんの気持ちはどんな形になるのでしょうか。

ただ一つ、これだけは言います。

しばらくシリアス系は、ないです！

つまり……？笑

# カカの天下４４４「公園で遊ぼう、タマ編」

「かーかーあー」

「こらこらタマちゃん。『あ』はつけないの」

「じゃあかかく？」

こんにちは、カカです。念のために言っておくけどお母さんでもないし非売品ですよ。

例によって例のごとく少しの間だけタマちゃんを預かることになったので、今日は公園につれてきてみました。私がかつて遊び倒した玩具で子供らしく遊んでいます。や、今でもたまに遊ぶけどね。

「いくおー」

「おー、いけいけー」

滑り台の上で手を振るタマちゃんに応えながら、私はちょっと心配していた。

お願いだから頭から滑るなんてマネはやめてね？　ここの滑り台、結構高さがあるんだから。や、私はやったことあるけどさ。

「てい！」

ボト。

ってその高さから落ちましたよあの子!?　滑らずに、しかも頭から!!

「ちょっと大丈夫タマちゃん!?」

「痛くない」

「ほんと!?」

うわー。前から思ってたけど、つくづく姉並に頑丈なんだよねこの子。

「ぃ、いたくぅ……ないもん……」

そうでもないか。

「よしよし」

私は優しく頭をなでてあげた。

そしたらパシッと払われて、

「いたいでしょ!!」

涙混じりに怒られたっ!?　あ、ぶつけたとこをなでちゃったんだね。そりゃさすがに痛いか。

「ごめんねタマちゃん」

「かかのもぐら!　さかな!」

よくわかんないけどけなされてるんだと思う。

「かかのどせい！」

土星！？　と、とにかく怒りを鎮めないと！

「ほ、ほら。あそこにシーソーあるでしょ？　あれで遊んであげるから」

「ぶーぶー！　ぶたしゃん！」

むくれるタマちゃんを引きずり、なんとかシーソーの片側にのせる。

「ほら、いくよー？」

タマちゃんはスリル満点のほうが好きだから思いっきりやってあげよう！　そう思って私は勢いよくもう片方に座り、タマちゃんを押し上げてあげた。

ぐん、と心地いい感触。

タマちゃんを見る。

やった、笑顔だ。

笑顔でこっちに向かってくる。

あれ、なんで？　あ。勢いつけすぎてタマちゃん飛んじゃったん

だ。タマちゃん軽いし、てこの原理ってやつかな。空中を泳ぐタマちゃんは本当に楽しそう。キラキラした表情のまま私に衝突せんと迫ってきたので――

避けた。

ゴズシャァ！

背後で野球選手がスライディングを失敗したような音が聞こえた。

おそるおそる振り返る。

「ぎゃあああああああああああ！！」

本気で泣いていた！　この子も泣くことあるんだ……じゃなくて！

「ご、ごめんねタマちゃん。笑顔が猛スピードで迫ってくるのが思いのほか怖くて！」

「セミになったよ！　どうしてくれりゅ！？」

セミ！？　あ、飛んだってことか。にしたってなぜセミ？　ってそんなことはどうでもいいか。

「ごめんごめん、ほんっとーにごめん！！　どうしたら許してくれる？」

「死んで」

「それはあんまりだよ！？」

「じゃーもいっかいやって」

「やりたいんかい！！」

はぁ……危険なのはわかってるけど、姫の望みならば仕方あるまい。

私はしぶしぶシーソーの片方にタマちゃんを設置した。さぁ発射のスタンバイだ。

そう思いつつ、念のために普通にシーソーで遊んでみる。

「ちがう！」

やっぱダメか。姫は飛ぶことをご所望だ。

「おしりがちがう！」

多分感触が違うってことなんだと思うけど、他に言い方はないものか。

「わかったよぅ……いくよ？」

「おー」

私は意を決し、思いっきり勢いをつけて腰を下ろした。

タマちゃんのお尻がシーソーの椅子から離れる。さぁ、ここからが本番だ。

私は真正面に飛んでくるタマちゃんの腰をうまいこと掴み――

そのまま勢いを殺しきれず――

視界が反転、背中を反らして――

なんかプロレス技っぽくタマちゃんを地面に叩きつけてもうた。

「みぎゃあああああああああ！！」

「あああああごめんごめんごめん！！　タマちゃん大丈夫！？」

「へこんだ！！」

「どこが！？」

「ひじ！！」

「なぜ！？」

やっぱり私、この子苦手……嫌いじゃないけど苦手だよぅ。

でもこんな大騒ぎをしたにも関わらず、結局タマちゃんは無傷だった。

子供ってつよーい。

私もこんなんだったのかなぁ？

今度トメ兄に聞いてみよう。

今日？　疲れたからパス。

## カカの天下４４４「公園で遊ぼう、タマ編」（後書き）

タマちゃんの前だとカカも変なことする余裕ないですね。や、ある意味してるかもですが笑

あとそうそう。最近サユカちゃんの出番が少なくて不満を持つ方がいらっしゃるかもですが……誕生日でメイン張るのでご勘弁を＾＾；

## カカの天下４４５「手芸部の危機！」

「えー！　手芸部できないんですか！？」

突然大きな声をあげてしまってごめんなさい。カカです。

「あぁ、今のまんまだと厳しいな」

テンカ先生は申し訳なさそうに、でもはっきりと私たちに言った。

「理由はなんなんですかっ」

「この間のクラブ希望調査で手芸部を選んだのはおまえら三人だけでな。しかも去年は六年生だけで手芸部をやってたから現部員は実質ゼロ。クラブは四人以上でするのが決まりなんだ」

「うー、せっかくやる気満々だったのにー」

「なんとかならないんですか？」

しょんぼりするサエちゃんを見ていられず、私は出来うる限りの媚を売る視線でテンカ先生を見つめた。

「せんせぇ……！」

「変な顔」

「ぶっ飛ばすのは勘弁してあげますから何か方法教えなさい！」

「オレを脅迫とはいい度胸だ。ま、方法なんて一つしかないだろう」

「というと？」

手芸部を廃部にさせないための方法。それは極めて単純だった。

要は四人以上部員がいればいいのだ。

「勧誘かぁ」

「でもみんな、もう入るクラブは決めてるんだよね？　こないだ希望調査は終わったわけだし」

「部員が多すぎたクラブとかないのかしらっ」

「さっき聞いておいたけど、ないってさ。とりあえず誰か適当に引っ張ってくるしか……」

「適当に引っ張るならー、確実に入ってくれそうなのがいるよー」

「誰よっ？」

「タケダ君」

「いらない」

脊髄反射で即却下。

「私たちの大事なクラブをあんなのに汚されたくない」

「あははー、カカちゃんきつーい」

そう言うサエちゃんこそ笑ってるだけで何のフォローもしないじゃん。

「せっかくやるなら女の子同士がいいわよねっ」

「うんうん、サユカンに同感。手芸が似合う男なんてヤだし」

「トメお兄さんなら似合うよー」

「……たしかに。なにせエプロンが誰より似合う男だし」

「鼻歌まじりにちまちま裁縫してるトメさん……イイ」

はいはい、妄想は家に帰ってからしなさいサユカン。

「それで、どうするの。誰を誘う？」

「そうね……でも心変わりしてくれるような女の子なんていないかしら。イチョウさんはアヤさんと仲良くなって合唱部に入るって言ってたしっ」

「んー、ここは発想の転換でー……まだクラブに入ってない子を誘うのはどうかな？」

「え？　まだ入ってない子って、そんな子どこに――」

「お呼びですか!?」

唐突に背後から響いたバカでっかい声に、私とサユカンは思わず飛び上がった。

「く、クララちゃん？　なんで」

「おねーちゃんが呼んだ気がしたので」

やっぱ使い魔？　使い魔なの!?

「それで、クララに何のご用ですか？」

「うん、えっとねー。私たちと一緒のクラブに入ってほしいのー」

なるほど。クララちゃんならどこのクラブにも入れるよね、ってちょっと待った!

「サエすけ何言ってるのっ。クララちゃんってそもそもここの生徒じゃないでしょっ」

そ、そうそう！　サユカンが代わりに言ってくれたけど、まずはそこが問題――

「おや？　君はうちの生徒かな」

ぎくり、と身を強張らせる。振り返るとそこにはタイミング悪くデストロイヤー教頭が!?

「ワンピース一枚に、裸足？　ずいぶんな格好をしているが……一

年生かな？」

「いいえ、私たちと同じ五年生ですー」

サエちゃん！？　そ、それはちょっと無理があるような……

「なに？　いや、しかし」

「この子、ギネスにのりそうな勢いで成長が遅れてるんですー」

「……裸足なのは？」

「水虫なんです」

さ、サエちゃん……すらすらと嘘を言うのもすごいけど全部失礼なのもすごい……

「五年もこの学校にいるわりには、私は初めて見る子だが……」

「よくあるじゃないですかー。一つだけ空いてる席とか、なぜか一つだけ抜けてる出席番号とかー。この子はそんな感じの子です」

どんな感じ！？

「なるほど」

って納得した！？

「私も子供のころは隣にそんな席があったよ。なんだかそこだけ寒いのだよ」

「そーそー、わかるわかる」

わかりません！！　わかりたくありません！

「それでは諸君。しっかりと勉学に励むのだぞ。またな」

い、行っちゃった……

「これで入学はおっけー」

「前から思ってたけど……教頭先生って異様に話がわかる人よねっ」

異様に。うん、なんかピッタリな気がする。

「それで結局、クララは何すればいいですか？」

「んー、とりあえず学校に入って五年生になるからには、勉強がそれなりにできないといけないよね」

と、いうわけで。とりあえず皆でクララちゃんに勉強を教えてみることになった。

「まずは算数からいこう」

学力をはかるため、簡単な問題をノートに書いてみた。

『２５８－６＝』

さあどうだ。

「２５８個も何があるですか？」

「え。えっと……りんごとか？」

「そんなに食べきれないです！」

「ま、まぁまぁ。例えばの話で実際に食べるわけじゃないわよっ」

「そこから６個りんごを引いたらどうなるー？」

「バレません」

……は？

「それだけあれば６個くらいバレないと思います」

「や、そうじゃなくて……」

りんごっていうのが悪かったかな。

「じゃあお金！　２５８円から６円をとったらどうなる？」

「泥棒になります」

「そうねーお金を勝手にとったら泥棒よねーってそういう意味じゃないわよっ！！」

見事なノリツッコミをきめるサユカン。これ……学力以前の問題じゃ……

「――あ、チャイム。昼休み終わっちゃったねー」

「それではクララ帰ります」

「え！？　く、クララちゃん授業は」

「飽きました」

だ、ダメだこの子……

「だから名前だけ貸してあげます」

「へ？」

パタパタと去っていくクララちゃん。私たちはそれを呆然を見送りながら、

「なるほどー。その手がありましたかー」

「あの子……頭いいんだか悪いんだかわからないわね」

「これがほんとの、幽霊部員？」

三人して妙に感心しながら頷きあい、手芸部の廃部阻止を密かに祝いあうのだった。

## カカの天下４４５「手芸部の危機！」（後書き）

まだ始まってもいない手芸部の危機でした。まー半ば反則っぽい方法で逃れましたがこれで部は完成です！

カカたちだけのクラブとなってしまいましたが……さびしいことはありません。なぜならクラブ活動はカカたちだけの話で終わらせるつもりはないからです。

まー具体的にはまだ何も考えてませんが笑

手芸部がどうなるのか、またお楽しみに＾＾

# カカの天下４４６「どっちのプレゼント？」

こんにちは、サユカです。

今日はカカすけサエすけと三人で商店街を散策しています。それというのも――来週にあるトメさんの誕生日に贈るプレゼントを選ぶためなのですっ！

まぁ、その日はわたしの誕生日でもあるわけで。二人としてはわたしにも内緒で話を進めたかったらしいんだけど……今回の企み上、そういうわけにもいかなくなったそうよっ！　何をしてくれるのかは知らないけどねっ。

そんなわけで今、わたしたちは服屋さんにいるんだけど。

「さぁサユカン」

「どんな恥ずかしい格好をして自分をプレゼントするのー？」

「またそれかいっ！？」

こいつらはこれしかないのかしらっ。

というか、わたしにそれしかないと思ってるのかしらっ！

「まーまーサユカン。クリスマスの衣装がウケたんだし、今回もその勢いで攻めたほうがきっと効果的だよ？」

「そーそー。まずは私たちのプランを聞いてみてよ」

む……そ、そうね。まぁ、聞くだけなら。

「よし！　じゃあまずは私ね。トメ兄へのプレゼントが、このエプロンドレスなサユカンだった場合！　メイドさんっぽくなるから――」

ぽわわわーんとメルヘンな音をたてながら、想像シーンへと移ります。

『トメさん……いえ、ご主人様っ』

『さ、サユカちゃん。その格好は……！』

『誕生日おめでとうございます、その、こんなわたしでよければ、もらってくれないでしょうかっ』

『喜んで！』

『あ、ありがとうございますっ！　それで、その、ご命令がありましたらなんなりとお申し付け――』

『じゃあ、脱いで』

『えっ、でもっ』

『命令だよ。脱ぎなさい。ほら、半分でいいから』

『は、半分ってそんな、あ、ああ、旦那様――』

カカプラン終了。

「どうよ！」

「どうもこうもないわよっ！　なによそれっ！？　トメさんの性格変わってるじゃないのっ！！」

「ちょっと凶暴にしてみました」

「せんでいいわっ！！　そんなトメさん嫌――でもないけどさっ」

「ご主人様か旦那様か、悩むとこだよね」

「よーし、次は私ねー」

うぅ、相変わらずこうなるとわたしの文句なんか聞きやしないんだからこいつらっ！

「私のオススメはこれー。トメお兄さんへのプレゼントが、このウエイトレスの制服サユカンだった場合」

……ねぇ、この店なんの店？　やたらと変な服売ってない？　そんな疑問は誰にも届くことなく、再びぽややーんと想像シーンへ。

『いらっしゃいませ、トメさ――お客様』

『おや、可愛らしい店員さんだね（キラーン）』

『ご注文はいかがなさいますか？』

『そうだな……君を、もらおうか（キララーン）』

『ほ、ホットとアイスがございますが、いかがなさいますか？』

『へぇ、どういう意味だい？』

『ホットがデレ、アイスがツンでございます』

『ハハ、なるほど。いま流行りのツンデレというやつだね』

『いかがなさいますか？』

『火傷するくらいの、ホットで（キラキラリーン）』

『ああ、お客、様……』

サエプラン終了。

「どーよ！」

「だからどーもこうもないわよっ！　トメさんの性格違うって言ってるでしょっ！！」

「ちょっと色男にしてキラキラさせてみましたー」

「せんでいいって言ってるでしょっ！！　トメさんは元から色男だしキラキラしてるしっ」

「えー、トメお兄さんって元からこんな感じなの？」

「キモーい」

「そうじゃなくてっ！！」

はぁ……はぁ……怒鳴り疲れたわっ。

「サユカン、そんなに文句言うなら他にプレゼント案を出してみてよ」

「そうだよそうだよー」

む……いいわよっ。間違いなく君ら二人のプランよりはまともになるんだからっ！

えっと、そもそもプレゼントがわたしっていうのが間違ってるのよねっ。普通、プレゼントっていうのは何かをあげるものなんだからっ！

トメさんにあげるものは何がいいか――そんなことを考えながら周りを見渡しても変な服しかなかったんだけど、なぜかさっきカカすけがオススメしたエプロンドレスが目に留まった。

エプロンドレス……メイド……これを……もし……トメさんにあげたら……

ぽややや～ん。

『あ、あの……ご、ご主人様、僕、僕……』

「ぶはっ！！」

「うあぁ、どしたのサユカン！」

「鼻血出てるよー？」

し、刺激が強すぎたわっ……トメさんのメイド姿なんて……で、でも、えっと、さっきのカカすけの想像だと、この後どうなってたっけ……？

ぽややや～ん。

『ぼ、僕、恥ずかしいです、ご主人様ぁ』

『ダメよっ。脱ぎなさい。ほら、半分でいいからっ！』

『あ、あーれぇー！』

「ぶはぁっ！！」

「うぉあお！　ほ、本当にどしたのサユカン！？」

「鼻血がだばだば出てるよ？　はい、ティッシュー」

「あ、ありがと……っ」

わ、わたしってば何考えてたのかしらっ！？　トメさんにあんな格好させてあまつさえ……しかも半分ってなによ半分って！　全部じゃいけないのっ！？　や、全部見たいってわけじゃないわけでもないけどっていうかああもう静まれわたしの心！

「サーユカン！」

「そんなに顔を真っ赤にして、何を想像してたのかなー？」

「私たちにもおせーてー」

「絶対、イヤッ！！」

死んでも教えるもんですかっ！！　ここここ、これじゃわたしへのプレゼントになっちゃうじゃないのっ！　しかも致死量の！

「はいはいっ。もうおしまい！　トメさんへのプレゼントはわたしが自分一人で選ぶからっ！」

「えー」

「君らの予定じゃわたしがプレゼントさえ用意してればいいんでしょっ！　ならそれでいいじゃないっ」

「そうだけどさー」

「つまんなーい」

「いいから他の店いくわよっ！　見るだけ見て選んで、君らがいないときに買いにくるわっ」

「「えー」」

不満げな二人の背中を押してさっさと店を出る。

――ご主人様ぁ。

み、店を出る！

――僕、僕、恥ずかしいです。

出るったら出るんだからっ！！　何にも聞こえないんだからっ！

――何でもお申し付けください、サユカ様。

「……！！」

次の日。

一人で商店街にきたわたしは、その服屋へ入っていった。

そして、エプロンドレスが売っていた場所へと足を運び――

## カカの天下４４６「どっちのプレゼント？」（後書き）

久々にサユカ流妄想爆発話です。
……爆発しすぎ？　いろいろとツッコミがきそうですが、まぁ、いつものことですねっ（ぇ
果たしてサユカちゃんはあのエプロンドレスを買ったのでしょうか。真相は誕生日に明らかにっ！

## カカの天下４４７「パーフェクト（？）お母さん」

ふふ、こんにちは。ユイナです。

今日は母の日ですね。女優のお仕事で忙しくても家庭は円満。なので今年もきっと愛しい子供たちからプレゼントが届いているはず。

「ふんふんふーん♪」

鼻歌まじりに今日届いたプレゼントを開けていきます。たくさんありますが、もちろん全部トメ君たちからのプレゼントというわけではありません。恥ずかしながら、特別な日じゃなくてもファンの方々から贈り物が届くもので……毎年、この日は子供たちのプレゼントを探すことから始まるんです。

子供たちもそれをわかってて、あえて名前は書かずに贈ってきます。たまにダミーが入ってたりして、『さぁ当ててみろ』みたいな遊び。数少ない親子のコミュニケーションの一つです。

「えーと、これはなにかな？」

古めかしい風呂敷に包まれた、妙なプレゼントを開けてみます。

そこには土偶が入っていました。

捨てました。

「うぉっと！？　な、何をする我が妻よ！」

「ナイスキャッチ、我が夫君」

「これを誰のプレゼントだと思っている!?」

「そんなモノくれるのパパ君だけでしょ」

「おお、さすが夫婦だな。意思が通じ合っている！　これはとても由緒ある土偶で――」

「じゃーわたしが今考えてることもわかるかな?」

「……はい、いりませんね。すいません」

なんて言いつつ、後でもらうけどね。せっかくのパパ君のプレゼントだし。

「さてさて、そんなことより子供たちのを探さないと」

「お、これなんかどうだ？　母さんの好きなものばかりだぞ」

パパ君の手元を覗き込むと、それはお菓子の詰め合わせ。たしかに美味しそうなエクレアやモンブランだけど……

「んー、違うと思う。トメ君が消費期限の近いものを送ってくるわけないもの。カッ君やカカ君が送ろうとしても却下するわ、きっと」

「前から思っていたが、あいつは主婦にでもなる気か?」

わたしなんかよりよっぽど似合いそうだけど。とりあえずこれは違う、っと。

「これは……おお、箱の中に箱が入ってる！」

いつの間にかパパ君のほうがプレゼント探しを楽しんでるみたい。ふふ、大変な仕事してるくせに、こういうとこは子供みたいなんだから。可愛い。

「なー母さん母さん。これを見ろ。箱の中に箱が、と思ったら、この箱自体がプレゼントだったのだ」

「あらあら、おもしろい箱」

その箱は手作りでした。紙粘土を丁寧に工作したみたいな――小学校の授業ででも作ったのかな？

「あ、でもこれも違うみたい。手紙が付いてて名前が書いてあるもの」

「む、なんだ。カカあたりが作ったのかと思ったのだが」

わたしもそう思ったけど、カカ君ならもっと変な箱を作りそうだよね。ところでこの手紙の差出人、タケダ君って誰だろう。初めてプレゼントくれる子だなぁ。

――と、そんなこんなでプレゼント探しをしていったんだけど。

「ない？」

「ない、な」

子供たちから、と思われるプレゼントが一つもありませんでした。

だばだばだばだば。

「うあああ母さん！　そんな滝のように涙を流すな！」

「パパ君……わたし、あの子らのママ失格？」

「何を言う！　君に比べれば俺のほうがよっぽど失格だ！」

「それはそうだけどぉ……」

「自分で言っててショック！！」

毎年必ずこの日にはプレゼントをくれていたのに……なんで？

なんで？　あうううう……

あ、電話。

「はい、もしもし。結乃です。はい、はい、その件でしたらマネージャーさんのほうに――はい。いえいえそんな、ふふ、ありがとうございます。では」

にこやかに応えて電話を切る。よし。

だばだばだばだば。

「うあああ母さん！　なんかとてつもなく見事な切り替えだったがそんなあからさまに電話を切った途端に泣かなくても」

「だってぇ……だってぇ……」

コンコン、とノックの音。

「あ、はーい。今開けますねー」

「マジで切り替えはやっ！　あの滝涙はどこに消えた？　一瞬で干上がったのか!?　さすが女優、感情のコントロールはピカ一か……っと、俺は隠れねば」

シュバッという音が聞こえたのを確認して、ドアを開ける。

「ちわ、宅配便です」

「あらあら、こんなところに？」

たしかにここはわたしのファンクラブに届いたプレゼントの集積場だけど、宅配便屋さんが直接くるなんて変ねぇ。

「ブツはこちらです」

なにやら物騒な言い方で差し出されたのは、とっても大きなダンボール。

「ご苦労様です。えっと、サインとかいるのかしら」

「いえいえ、いりませんよ」

……あら？　なんだかこの宅配便屋さんの声、聞き覚えがあるような。

そんな疑問を浮かべた瞬間。

「せーの」

ダンボールの蓋が弾け飛んだ。

「じゃーん！　カカちゃん登場！」

「と、トメ登場……」

「ふははっ！　宅配業者に見せかけた姉登場！」

呆気に、とられた。

ダンボールの中から飛び出したカカ君とトメ君、目深にかぶっていた帽子をとり、素顔を現したカッ君。

「あ、あらあら……どうしたの、みんな」

「む、反応薄いよ？」

「トメが思い切って登場しなかったからだよ！」

「ぼ、僕のせいじゃないだろ！　た、多分」

いつものように騒がしくなっていく子供たち……ああ、そういえば。

母の日は、日曜日だったっけ。

「お母さん、母の日おめでとう！　って言うのも変かな」

「いいんじゃないか。あ、でもごめんな母さん、いきなり押しかけて」

「謝ることないって。だってさ、嬉しいでしょ？　嬉しいよね、母」

「ふふ、はいはい嬉しいわよ。わざわざこんな遠いところまで、みんなありがとうね」

三人していろんな物をくれたけど、わたしにとっては子供と話せたことが何よりも大きなプレゼントだった。

いつもの通り、優しく微笑んで。

余裕のあるお母さんを演じる。

あ、演じるっていうのは違うかな。わたしは本当にお母さんなんだから。

でも――弱い部分はなるべく見せないの。

だから、この嬉しさは後にとっておこう。

そう。後でちょっとだけ泣くの。

笑いながら、ね。

おまけ。

「いい話だ……しかしさっきとは偉く態度が違うようだが」

「パパ君。ＫＹって知ってる？」

「最近流行っているシステムのことか」

「ううん、流行語。空気よめ♪」

「ぎゃあああああ！　め、目に、目に土偶が刺さって何も読めません！」

「ちなみにわたしはあなたの嫁」

「俺の余命はあとどれだけだ！？」

「つまらなくてごめんなさいね。妻だけに」

「おあとがよろしいようで」

ちゃんちゃん。

## カカの天下４４７「パーフェクト（？）お母さん」（後書き）

母の日ということで、家族編のおまけみたいな感じになりました。
でもしっとり系はしばらく書かないって言ったしなぁ……
そう思い、最後に軽い夫婦漫才などいれてみました。
つまらないですか？　妻だけに？　あぁすいません。しかし笑ってもらえなくても、なごんでいただけたらそれで充分でございます^^;

## カカの天下４４８「ＣＭ遊び」

こんにちは、カカです。

夕食も終わり、私とトメ兄は二人してぼんやりとバラエティ番組などを見ていたのですが……

「トメ兄。最近の芸人さんっておもしろい人少ないね」

「まぁ、そうかな」

「これなら私たちのほうがよっぽどおもしろいよ」

「コラコラ、向こうはプロだぞ？」

なにおう。私だって変なこと考えるプロだぞ。

例えば、そう。今ＣＭ入ったけどさ。

『っかーっ！　やっぱビールはこのキレだよな！　キレる生、新登場！』

これを私なりに変換してみると。

キレる生……

『オイ何見てんだよ、あぁん！？　おーし！　見たからには買うんだろうな？　あ、オイてめぇコラ、俺を飲まねぇのかよ！？　俺が安いからってバカにしてんだろオラァ！　いいからいっぺん飲んで

みろってんだ！』

「……ぷ」

「どうしたカカ」

「や、なんでもない」

缶が顔になってキレまくってる様子を想像すると、ちょっとおもしろかった。

さて、他におもしろいＣＭないかな。

『フルーツさわやか、ぶつぶつオレンジ！』

ぶつぶつオレンジ……

『……そりゃさ、普通のオレンジジュースのほうがおいしいのはわかるよ？　でもさ、僕たちだってせっかく自販機とかで売ってるんだしさ、少しくらい流行ってくれてもいいじゃんさ。果肉たっぷりでおいしいと思うんだよ絶対。フルーツ好きなら最高なはずさ。それなのに……それなのに……ぶつぶつ』

「ぶつぶつというか愚痴愚痴オレンジ……」

「カカー？　どこ見て何言ってんだー？」

「や、ちょっと考えごとしてただけ」

うーん、世の中おもしろいもんばっかりだ。

他には？

『世にもすばらしい便座カバー、あなたのお尻を守ります』

べんざカバー……

『ヘイ！　わたくしベンといいマース。あなたのおケツ守りマース！』

ベン　Ｔｈｅ　カバー！

「ぶっ！」

「ど、どうしたカカ？　何か笑うとこあったか？」

「い、いや……」

なぜか筋肉マッスルお兄さんがいろんな人のお尻をガードしてる映像が流れてしまった。

次は何だろ。えっと、本屋さんのＣＭかな？

『ブックス矢田』

ぶっくすやだ……

ぶっ、くす、やだ……？

『ブッ（おならの音）クスクス、やだー（蔑みの声）』

「強引だよ！」

言いながらも笑い転げてしまう私。

「なぁカカ。教えてくれ。どこをどうしたらそんなにＣＭを楽しめるんだ？」

「く……くくく……え、えっとね」

ぜーはーと荒い呼吸を整えて、もう一度テレビに視線を向ける。

『黒いお菓子の専門屋、ブラックブランドが新たなクッキーをお届け！　名づけてブラブラクッキー！』

ブラブラ……クッキーが……

『こらクッキー！　あんたいつまでもブラブラしてないで働きなさい！』

『うるせーなー、仕方ねーだろ。面接行くといっつも当たって砕けちまうんだからよ！　クッキーなめんなよ。飴なめろ』

「もっとがんばれよ！」

言いながら爆笑。

「なぁ！　何がそんなにおもしろいんだよ！！」

はー、はー……あー苦しい。どうしよう、これからあのクッキー

を店頭で見るたびに頭の中で就職しないダメ息子と苦労人のお母さんが浮かびそうだ。

「なぁったらなぁー」

あーもう。トメ兄うるさいな。

「ちょっとCMを自分なりにアレンジしてただけだよ」

「はぁ、アレンジねぇ。今までのCMはおまえの中で一体どうなったんだ？」

「えっとね」

どうなるかな。えーっと、えーっと。まとめると。

「ぶちキレる生ビールと愚痴るオレンジ」

「は？」

「そしてお尻を守るベンが登場！　でもおならブーしてクスクス笑われて」

「はぁ？」

「そんなみんなが就職のために頑張るCM」

「はあぁ？」

む、せっかく説明してあげたのに変な顔するなぁトメ兄。

「就職……できるかなぁ」

「わからん。何がわからないってカカの頭ん中がわからん」

がんばれ、生オレンジベンクッキー。

あれ、繋げたら何かにありそうな名前に。

「ねーねートメ兄。生オレンジベンクッキーって作れる？」

「そんなわけわからんもん作れません」

「えー、なんとなくそんな感じのものでいいんだよ」

「あーもー、長年一緒に住んでてどうしてそんなもん欲しがるに至ったかわからないのが妙に悔しい……で、なんだって？　生のオレンジ使ったクッキー用意すればいいのか」

「ベンを忘れちゃだめだよ」

「ベンってなにさ」

「お尻の――」

「便？」

「そうそう」

「クッキーにするの？」

「そうそう」

「誰が食べるの」

「就職できない皆さん」

「おまえ鬼だろ」

「それ食べて頑張ってもらうんだー」

というか、食べたくなかったら働くのだ！

――なんて、今日も今日とて思いつきに任せて遊ぶのでした。

## カカの天下４４８「ＣＭ遊び」（後書き）

なんでもないときのカカの思考を追ってみました。
あんな遊び、結構できるものありそうですよね、切れてるチーズの様子を思い浮かべたりとか笑

## カカの天下４４９「将軍様、失言でござる」

「んぐんぐ……そういやそろそろ、おまえさんとサユカの誕生日らしいな」

「んぐ、そうだけど」

お酒飲みながらこんばんは、トメです。

今日も今日とて行きつけの居酒屋『病院』で、のんびりテンと飲んでます。

「なんだよ。なんかくれるのか？」

「はっ、誕生日をわざわざ祝うような歳でもないだろ」

「それもそっか。しかし歳をとるにつれてそういうイベントがなくなるのも悲しいもんだよな」

「おい、てめぇ。さもオレが年寄りみたいな言い方すんじゃねぇよ。トメと大して変わんねぇだろ」

たしかに。テンは僕より一つ上なだけだしな。

「で、サユカに何をやるんだ？　そういうの細かいトメのことだから、誕生日プレゼントとか買ったんだろ」

「ああ、一応な」

「よしよし、なるほど。で、どんなおもしろいもんをやるんだ？」

この女はなぜ僕らの生活のことごとくをコメディにしようとするんだろう。

「別におもしろくないよ。普通に喜びそうなものを買った」

「じゃー買いなおせよ」

「無茶言うな」

「トメ。おまえな、いくらツッコミだからってボケなくていいわけじゃないんだぞ？」

や、だからさ。なんでうちらをお笑い芸人扱いしてんのさ。

「こういうもんは誠意が大事だろ」

「へーへー、さすが誠意大将軍は違いますね」

さすが酔っ払いは言うことが違いますね。んなこと言ってたら征夷大将軍のバチが当たるぞ。

「でよ、そんな誠意大将軍に聞くが」

「大将軍はやめろ」

「サユカが何をくれても誠意を持って受け取るんだな？」

「当然だ」

「何を、くれても？」

う……

サユカちゃん一人なら心配はしていない。あの子は暴走さえしなければ至極まともな子なのだから。

そう、暴走さえしなければ。問題はあの子を簡単に暴走させてしまうお子様が二人、いつも一緒にいることだ。

「なんでも、というわけには、いかない、かな」

「んだとぅ。おい将軍様、自分のプレゼントは押し付けといて、あっちからのは受け取らねぇつもりか。なんつう勝手、さすが軍の将だ」

「何の軍だよ」

「軍手？」

それ軍じゃねーよ。

「とにかく、物によるって言ってるんだよ。僕はサユカちゃんに似合いそうなピッタリなものをあげるけど、あっちがそうとは限らないじゃないか」

「なるほど。トメに似合ってればいいんだな」

「……なんだよその目は。この生ビールが似合う女め」

「そんなにほめるなよ、台所が似合う男」

「やかましいわ」

「台所大将軍」

「変な風に言い直すな」

酔うとホント変な言葉が出てくるよな。僕も人のことは言えないけど。

「でよ、軍手野郎」

「将軍はどこいった」

「細かいこと気にすんな。あのよ、もしサユカがメイド服なんかくれたりしたら――誠意台所将軍はどうするのかね」

は？　メイド服？

「そんなもんくれるわけないだろ」

「わかんねぇぞ。似合うし」

「似合わねーよ」

「いいか、トメ。似合うか似合わないかは自分が決めることじゃない。周りの目が決めることだ」

う、もっともなことを。

「そしておまえはメイド姿が似合う」

そしてもっともじゃないことを即座に言いやがって。

「軍手も似合うが」

こだわるね。

「賭けてもいい。なにせ台所の将軍だ、ピッタリじゃないか」

「……気色悪いこと言うなよな」

「ほほう。じゃあサユカがメイド服をくれたら破り捨てると？　誠意はどこいきやがった」

あー、面倒くさいなもう。どうせくれるわけないし、適当な返事でいいや。

「はいはい、もしサユカちゃんがそんなのくれたら着てあげますよ」

「おぉ？　本気か」

「おーおー完璧に着こなしてやりますよ。ご主人様、なんなりとお申し付けをーって感じで言いなりになってやりますよ」

「ネコ耳と尻尾もつけていいか？」

「どうぞ？」

「語尾は『にゃん』でもオッケーか！？」

「好きにしろよ。『にゃん』でも『ぴょん』でも『でちゅ』でも『ばぶぅ』でも『ちゃーん』でも『ごっつぁんです』でも、なんでも持ってこいってんだ」

「男に二言はないな？」

「ないよ」

「二言があったら女だぞ。オカマ言葉でやらせるぞ。『いやーん、うっふーん』とか言わせるぞ」

結局恥ずかしい言葉使いになるわけね。でもまーいいだろう。どうせナイだろうし。

「あぁ、好きにしろ」

「そうかそうか。ところでな」

「んだよテン。改まって」

「昨日、カカたちの作戦会議をちらっと盗み聞きしたんだよ。おまえらの誕生日のやつな」

「……それで？」

「それだけ」

二人とも黙ってジョッキを傾ける。

つまみを口に入れる。

もっかいジョッキを傾ける。

ぷはぁ。

……んっと。

「まさか、ないよな？」

テンはニヤニヤするだけで、答えてくれなかった。

まさか、ねぇ？

……ねぇ。

「なぁ、まさか」

「とりあえずここの勘定はもってやるよ。これがオレの誕生日プレゼントな」

「あの、できれば『僕の質問の答え』っていうプレゼントをもらうわけにはいきませんか？　ねぇ、なぁっ！　答えろよオイ！！」

「けけけ」

テンは笑うばっかりで答えてくれなかった。

僕の明日はどっちだ！？

## カカの天下４４９「将軍様、失言でござる」（後書き）

言っちゃいましたねぇ。
いろいろとねぇ。
将軍様。
言ったからには責任はとってもらいますからね？

……や、あくまでサユカちゃんからのプレゼントがアレだった場合の話ですけどね＾＾

# カカの天下４５０「第十四回、カカラジ！」

「皆さんこんカカ！　暑いときは暑い、寒いときはなぜか寒い、と相変わらず不安定な気候に振り回されつつも逆に私が振り回してやるぜ！　なーんて思いつつ自分的にはのほほんと行動してるつもりだったりする香加です！」

「あい、気候にも香加にも振り回されてる留です」

「この軟弱者めが」

「じゃーもっと硬いやつ連れてこいよ」

「硬い頭の人が私に付き合えるはずないでしょ！」

「それはそうだが、じゃあどうしろと」

「軟強者になればいいんだよ」

「どうなればいいのかさっぱりわかんねぇよ」

はいはい、なんにせよ第十四回カカラジ！　スタートです。

「これはネット小説『カカの天下』を盛り上げるため、ぶっちゃけトークや作者の本音や変なＣＭ、思いつき企画等を放送するラジオ趣味な番組です！　僕や香加、作者は本編自体とはとりあえず関係ないのでお気をつけください」

「それではＣＭに！」

「……進行はやいな」

「今回はゲストもいないしね」

「キリヤとか呼べばよかったのに」

長さの都合上でゲストは却下で。今度ねっ。

「でもこれだけじゃつまんないね」

「そうだな……今度ゲストがいないときは小芝居でもいれるか？」

「お、いいねそれ。んじゃ今度やってみよう」

はい、今後の方針も決まったところでＣＭへ！

『皆様は覚えていますでしょうか。かつてこのラジオで異様に可愛い水着売り場を紹介したことを！　そのお店はいまや大人気。店舗を拡大し、水着だけでなくメイド服などの各種制服まで取り揃えております。もちろん訪れるのは邪なことを考えている男性客だけではありません。可愛い女の子もご来店されます。その証拠に――おお、ちょうど買い物に来た少女がいます！　インタビューしてみましょう……もしもし、すいません』

『は、はいっ！？』

『少しインタビューよろしいですか？』

『え、えっと、は、はい……っ』

『今日は何を買いに着たんですか？』

『え、エプ――いえ、そのっ』

『エプロンドレスですか！　おお、まさしくここはメイドさんファッションの王道、エプロンドレス売り場！』

『ひぅっ！　そ、そのっ、えっと』

『皆様、このような可憐な美少女がメイドさんだったら、どうですか？　ときめきませんか？　ニヤニヤしませんか？　鼻血はでませんか？　いえ、きっと出るでしょう。ビバメイド！　ビバ鼻血！』

『い、いやぁっ！　ヘンタイ！』

『ぐはぁっ！　殴られた私が鼻血ブー！　以上、最近流行のお店を紹介しました。あ、問い合わせはこちらです←』

『どうでもいいけど鼻血ふきなさいよっ』

ＣＭがあけて。

「なんだかどっかで聞いたような声だったよね」

「……そしてどこかで聞いたような話だったな」

「ま、着るのは留兄じゃなくてトメ兄だからね」

「もう着るの決定!?　ていうか僕は彼の分身だからどっちにしろ苦痛は変わらないんですけど!」

まーまー。まだ決定とは限りませんよ。

「ここまで言ったらもう確定も同然だと思うけど」

「待て。だってさ、僕のメイド姿だぞ?　そんな汚いもん見たくないって批判がくるかもしれないじゃないか。や、きっとくる。そんなときのためにこうしてハッキリしない言い方をしてるんだよ、きっと」

そうなの?

「僕に聞くなよ!!　ほんとハッキリしない作者だな!」

「別にどっちでもいいじゃん留兄。どうせもうすぐわかるんだし」

「それはそうだけど……はぁ。わかったよ、とりあえず進めよ。えっと、それではお便りコーナーいきます!」

「はーい!　ではではカカラジネーム『桜下死体』さんからのお便りです」

「クララちゃんファンっぽい名前だね」

「まさしく質問もクララちゃん絡みです。えー、『クララちゃんの

血液型は何型？』という質問ですが」

妖型です。

「なにそれ」

オー型があるんだからヨー型もあっていいでしょう。

「……ね、なんかすごい適当に答えてない？」

「普通に桜型でO型ってことでいいんじゃないか？」

んじゃそれで。

「やっぱ適当だねー」

うるさいな。人間じゃない子に理屈ばっか当てはめてもつまんないでしょ。

「それはもっともかも……んじゃ次いこか」

「僕読むぞ。カカラジネーム『カカラジネーム』さんから」

「なんで繰り返すの」

「だってそう書いてあるんだもんよ。えっと、『クララちゃんの桜ってもしかしてソメイヨシノですか？』という質問だけど」

はい、お察しのとおりモデルはソメイヨシノです。この桜、六十年寿命説というものがありまして、成長が早く老化も早いと言われ

ているのですが……ある意味人間とそっくりな寿命ですよね。だから校長と寄り添って生きるには最適な桜だったと言えるでしょう。

「でもクララちゃん、幼いよね」

「校長と同じ歳くらいのはずなのにな。なんで？」

趣味です。

「待て、いくらなんでも正直すぎだろう」

もちろんそれだけじゃありません。

木が意思を持つには年月と想いを重ねる必要があります。長年大事にされ続けていた桜の木が意思を持ち始めたのはつい最近のこと。だから木として積み重ねた年月は多くても、意思をもつ桜の精として生まれてからの年月は少ない。だからクララちゃんの小さい姿は精としての歳相応なのです。

こんな説はどうですか？

「や、聞かれても」

「あんた作者でしょ。ハッキリしなさいな」

うーん、あまりハッキリしすぎるのも好きじゃないんですよね。

この作品は現代が舞台です。たまーに人並みはずれた人がいますが……あくまで基本は現代の日常なのです。では実際、世の中で起きる事象は全て解明されていますか？　いないでしょう。幽霊や妖

精など、説は多々あれど真実はわかりません。だからこそおもしろい部分もあると思います。

この作品はフィクションであり、ある意味ファンタジーです。でも現代でもあるのです。だから少しくらい不明瞭なことがあってもいいのでは、と考えています。クララちゃんを筆頭にこれからも「ん？　どうなってんの」と思われることもあるでしょう。でもそれをあーだこーだと想像するのも、また楽しみ方の一つとなるのではないでしょうか。

「作者、しゃべりすぎ」

……人がマジメに答えてるのに。

「長いっての。留兄、まとめてよ」

「ん、要は……ファンタジーな箇所は自由に想像してください、ってことだろ」

……ごもっとも。

「じゃ最初からそう言ってよ」

……すいません。

「よし、次行こうか。香加？」

「はーい。あ、そうそう聞いてよ。こないだね、変なメッセージが届いたらしいの」

「や、いくら変でもカカには負ける」

「うっさい。そういう変じゃないの。えっと……あった。これこれ。脅迫状だよ」

「なにっ!?　このようなほのぼの作品にそんな過激なものが!?」

「ほら……これ見てよ」

『このメッセージは呪いのメッセージです。このメッセージを一文字でも読んでしまったら、「カカの天下」連載終了までにトメとテンカをくっつけなければなりません。それを行わなかった場合、あなたの身にとてつもない災厄がいくつも降り懸かります』

「ねっ！　怖いでしょ!?」

「……えっと」

実話です。はい続き。

『具体的な例を挙げると、

『全世界のカマドウマが自分に向かって飛んでくる』

『部屋に一人でいるとき、ほんの少し開いたドアの隙間からドナドナの合唱が絶えず聞こえてくる』

『朝起きると自室の真ん中にエクスカリバーが刺さっていて、数多くの自称アーサー王の末裔が土足で侵入してくる』

『昔着ていた服を久しぶりに着ようとしたら入らなかった』

『ご飯の炊き方を間違えれ』

ｅｔｃ．．．

これが嫌ならば絶対にトメとテンカをくっつけてください』

送られてきた内容はとことん実話です。

「どんだけテンが好きなんだよ……」

「や、留兄と天下先生のカップルが好きなんでしょ」

「カップル言うな！　で、どうするんだよ作者。脅迫に屈するのか？」

屈してたら今ごろトメとテンカ先生はラブラブうっふんあっはんだよ。

「その発言も気になるが……とにかく脅迫は気にしないわけか？」

うん。だってさ、ぶっちゃけ本当に起きたらおもしろくない？

とくにアーサー王。

「……そっか。そういやこの人、僕やカカのこと書いてる人だもんね」

「こんなん好きそうだよね。脅迫にならないよ」

エクスカリバーほしー。

「はいはい、ご覧の通り脅迫状はまったく効果がありません。なんとかしたかったらまたなんかおもしろいの考えて送ってくること！」

「もう送らんでいい！　ったく……別に僕とテンはなんでもないのに」

「んー？　でも誕生日話が終わってしばらくしたら、本編でトメ兄とテンカ先生が一波乱あるらしいよ？」

らしいよ？

「そ、それは作者に任せるけどさ……ああもう、次！」

「はいはい。えーっと……お？　お便りはこれで終わりかな」

「おし、じゃあ次のコーナーだな」

「え、なになに？」

「えーっと、前回、好きな話投票で見事一位を獲得した２４３話、『魔法の誕生日』のアフターストーリーを公開するんだって」

「アフター、ってことは？」

「香加が、じゃなくてカカが誕生日を祝ってもらって、『私に抱きつけ！』って言った後の話かな」

「うあ、恥ずかしいこと言ってたもんだね」

「つまりは誕生日パーティーがどんな様子だったかをチラッと書くわけな。２４４話でも触れてるけど、半分は夢だったしな」

「なんならこれ読む前に２４３話と２４４話をもう一度読むのもいいかもね」

「あまり長くないから必要ない気もするけど、そこらへんは読者さんに任せよう。ではでは、２４３話『魔法の誕生日』のアフターストーリー。スタートです！」

アフターストーリー、そのいち。『主役をもみくちゃにするときのお約束』

「私に抱きつけ！」

私はそう言った。

そしてもみくちゃにされた後、みんなわいわいと料理にありついたわけだけど……

「や、喜んでもらえてよかったよかった！　あたしもなんか嬉しいよ！」

「あ、みんな！　せんべいは一応デザートだからな。先に料理食べろよ！」

「そうそう。でも先にろうそく――トメは捨てとこっか」

「だから僕を捨てるなっての！　やめれ姉！」

「んー、おいしーねーこれ」

「お肉やわらかいわっ」

「……」

賑やかな会場の中で、私だけが呆然と立ち尽くしていた。

そんな私に気づいたのは親友の二人。

「あれー？　カカちゃんどうしたのー」

「食べないのっ、それともまだ感動してるとか？」

気が付けば私はわなわなと身体を震わせていた。

「……さっき、私にみんなが抱きついたときなんだけど」

小首を傾げるサエちゃんとサユカン。ただならぬ様子に気づいたのか、手を止めてこちらに注目するみんな。

会場中の視線を再び集め、私は言い放った。

「私の、お尻を触った人がいる」

ざわっ、と会場が揺れる。

まずみんなの視線を集めたのはタケダだった。

「へ？　いや、俺は――」

弁明聞くのがめんどくさかったのでとりあえずボコった。いいでしょ、タケダだし。

「さて、本当の犯人は？」

「そんだけ殴っておいて犯人扱いしないのね……」

呆れるサユカン、その声を聞いて、私は唐突に思い出した。

「そういえばさっき、柔らかーいって言ってたよねサユカン。私のお尻のことじゃないの？」

「あれはお肉が」

「私の尻肉がそんなによかったか！？」

「違うわよ料理の話よっ！」

「私を食べる気！？」

「だ、だから違うってばっ！」

「私は煮ても焼いても美味いぞ！」

「食べてほしいのっ！？」

「ぱくー」

「ああ、サエすけがカカすけを食べた！！」

「……やん♪」

「なに喜んでのよっ」

――ことの真相。

「なぁ、トメ」

「なんだよテン」

「おまえの妹、いいケツしてるな」

「おいオッサン。犯人としてあれ止めて来い」

「んー、もうちっと見てからな」

犯人はテンカ先生でしたとさ。

おやぢＥＮＤ

アフターストーリーそのに、『命令そのに』

カカです。

さっき魔女権限でトメ兄とサユカンをくっつけようと命令したんだけど（２４４話参照）、うまく逃げられたのでダメでした。でもこのままじゃ終わらせないからね！

「ふっふっふ、次の命令いくよ！」

「おおー、魔女様のお言葉だー」

「みんな、心して聞けよ！！」

ノリノリなサエちゃんと姉。

んー、やっぱここは意外なところで……

「テンカ先生！　シュー君に抱きつけ！」

どうだ！

もぐもぐと料理をむさぼっていたテンカ先生は動きを止める。そしてシュー君は顔を真っ赤に爆発させた。おおお、これはおもしろくなるかも？

「え、えっと、えっと？」

顔を真っ赤にさせて、なぜかお姉とテンカ先生を見比べるシュー君。

「もぐもぐ」

そしてマイペースに口に入れたものを咀嚼しているテンカ先生。

やがてそれを飲み込むと、先生は小首をかしげ、ぐるりと周囲にいる人間を見渡して言った。

「なぁ。誰か『ダキ』もってないか？」

ダキって何!?

「あん？　ダキをつけるんだろが」

先生。それはあまりにも強引な逃げ方です。

と、ここで姉が手をポンと打って提案を一つ。

「ね、ダキじゃなくて唾液なんじゃないの？」

「なる。ぺっ」

うあテンカ先生がシュー君に唾を吐き捨てた!?

「……！」

なんか嬉しそう!?

歪んだ幸せＥＮＤ

――と、こんな感じだったのだよ。

「なぁ、いくらなんでもこのシメ方はないんじゃないか？」

「いい話が台無しだよ。自分で言うのもなんだけど」

番外編なんですからこのくらいでいいんです。それにどうせ感動場面はあそこまでで、後はめちゃくちゃ――そんなのわかりきっていたことでしょう？

「そ、それもそっか。にしてもどっちもテンカ先生の話だね」

最近出番少なかったからね。

「なるほど」

「じゃ、ここらへんでＣＭいこうか」

『皆様は乳酸菌を知っていますね？　ええ、お腹を守ってくれたりする菌です。しかし私達が今回提供するこの菌は、なんと乳酸菌の数万倍の威力でお腹を守ってくれるのです！

その名も――姉酸菌。

これを口にすれば鉄壁の強化！　どんな弱い胃腸でも、人間のものとは思えないほどの消化器官へと進化します！　その威力はなんと石をも消化するほど！　これさえあれば幼稚園児のままごとで泥団子も平気で食べられます！　ぜーんぶ姉さんに任せておけば安心

さ！　え？　副作用？　姉みたいになります。それでもよければぜひ――え、生産中止？　化け物が増えてモンスターハンターから苦情がきた？　そ、そんな――プツッ』

ＣＭがあけて。

「……なにさ、今の」

ほ、放送事故？

「これ実話なの？　それとも映画とかの話？」

な、謎です。

「姉って一体……や、ファンタジーにはツッコまないんだった」

そうしたほうが無難ですね。さて、ここでお知らせです！

「おう！　暗い気分をぶっ飛ばせ！」

はい！　お知らせというのは他でもありません。

第二回、カカ天キャラの人気投票を行いたいと思います！

「おー、二回目！」

「雪辱戦だー！　今度こそ留兄潰して一位になるもんね！」

今回はもっと差をはっきりと分けるため、ポイント制とします！
読者様一人が使えるのは3ポイントまで！　そのポイントをどう使うかは読者様に任せます。

「ほうほう。つまり一人に3ポイント使ってもいいし、三人に1ポイントずつ使ってもいいってことだね？」

「一番好きなキャラに2ポイント、二番目に1ポイントってのもできるね」

説明ありがとう！　さらに！　投票期間はきたる５００話目までとします、が！　４７５話目を境に前半期、後半期と分けたいと思います。

「……どゆこと？」

つまり、読者様は投票のチャンスが二回あるということです。前半期に一度投票した人も、後半期でもう一度、投票できるということ！

「それ、なんか意味あるの？」

この作品の性質上、キャラの登場率の浮き沈みが激しかったりしますよね。その中で長く人気を維持できたキャラこそ本当の人気キャラだと考えます。それに、この方法だとますます差がはっきりしますしね。

「なるほど。そういや前のは教頭人気が急に上がったりしたもんね」

そのとおり。いつ私の気まぐれでどんな話ができるかわかりませ

んからね！

「その行き当たりばったり、いい加減なおらないの？」

今までこうだったんですし、これからもこうでいいんです！

ではでは、一応まとめて繰り返しておきますね。

えー、第二回キャラ人気投票を行います。ひとまずは前半期、４７５話までにお一人様3ポイントまで受付けます。ポイントの振り分けは自由。

投票方法は感想欄に書くか、作者へのメッセージ欄から書くか、のどちらかです。カカに3ポイント、とか投票内容を書くだけでも結構ですのでお気軽にどうぞ。もちろん感想やキャラに対する想いを書いていただけたら嬉しいですが！

「票ポイント、集まるかなぁ」

「うーん、なにせこれ４５０話だしな。ここまでたどり着いた読者さんがどれだけいるか……」

うっ、痛いところを突きますね……で、でも期間は長いしきっと大丈夫……だといいなぁ。

「ともかくやってみないと始まらないよね」

「うんうん、香加の言うとおり」

「迷ったらとりあえず私に入れとけばいいよ」

「うんう――話の流れ考えない唐突なアピールだなオイ」

票の流れがどうなるか……とりあえず４７５話で中間発表します！　それまでに皆様、よかったら投票してみてくださいまし。

「じゃ、カカ天の未来は読者さんに託すとして……そろそろ終わりか」

「カカラジチョップどうする？」

景気付けに、前回のキャラ投票一位の脳天割るのはどうでしょうか。

「いいねー」

「え、ちょ――」

問答無用でカカラジ――

「チョップ！」

パカリ（脳天が割れた音）。

「あらま、なんてあっさりした音」

綺麗にいったね。

「留兄スイカみたい！　スイカ食べたいな」

夏になったら食べる話書いてあげるよ。

「やた。ではでは、カカばい♪」

この番組は、あやしい服屋と、ａｎｅ研究機関の提供でお送りしました。

「なにその機関……」

## カカの天下４５０「第十四回、カカラジ！」（後書き）

アフターストーリー、いかがでしたか？　おまけなのであれくらいでいいかと思ったのですが笑

ともあれ、投票開始です。
欲張ってポイントルールなんか作ってみましたが……果たして盛り上がるほどポイント来てくれるのかなぁ、とドキドキであります＾＾；
気が向いたらでいいので、よかったらお願いしますねっ＾＾

## カカの天下４５１「はにかみ誕生日　前編」

えー、みなさんこんにちは。毎度どうも、トメです。

「え……っと」

恥ずかしながら、今日は僕の誕生日だったりします。そして妹のカカの友達、サユカちゃんの誕生日でもあり……

「と、トメさんっ？」

「い、いや、なんでも、ない」

僕と彼女は、今二人で歩いています。

手を、つないで。

それというのも、今朝の話――

「トメ兄、おはよう！！」

「……んぁ？」

いきなり布団をはがされて起こされた僕は、朝っぱらから元気満々で仁王立ちする妹を寝ぼけ眼で見上げた。

「誕生日、おめでとう！！」

「へ、あぁ、ありがと」

まだ頭がぼんやりするので適当に答えてしまう。

「だから私たちのプレゼント、受け取ってくれるよね！」

「ん、あぁ、うん」

まだまだ頭がぼんやりするのでまた適当に答えてしまう。

「なにがなんでも受け取ってくれるよね！　受け取ってくれなかったら死んでもらうよ！？」

「んー、うん」

とことん頭がぼんやりするので変な言い回しにも気づかずに適当に答えてしまう。

「よし！　じゃあまずはサユカンへの誕生日プレゼント貸して。一旦預かるから。それでね、今日は私たちの指令に従って、サユカンと一日デートしてもらうから！」

「わかったぁ」

これでもかと頭がぼんやりするので、答えてしまった。

そして気がついた時には着替えさせられ、待ち合わせ場所に行かせられ、おめかししたサユカちゃんと一緒に歩くことになったのだった――

「はぁ……」

何の対処もできずに言いなりになってしまった寝起きの悪い自分に、思わずため息がもれる。

そしてカカ――いや、カカたちからのプレゼントらしい『指令書バッグ』なるものを開けてみると、『指令その一、手をつないでこの喫茶店へ行け。席に座ったら次の指令書を開けるべし』などと書いてあって……なんか、こんな番組なかったっけ。

「トメさん……その服、似合ってますっ」

「あ、ありがと」

カカに無理やり着せられたやつだけど、確かに意外といいセンスしてるかも。

「そのネックレス、格好いいです！」

「へ？　あ――あり、がと」

これもカカに無理やりつけられたやつだけど、僕はこんなの持っていなかった。もしかして誰かのプレゼントか？

「その、その――」

「ん？　サユカちゃんの服も可愛いよ」

「そそそそそそんな！　トメさんの手こそあったか――ってそうじゃなくてっ！」

あーもう、手なんかつないでるから余計に恥ずかしいな……でも指令に逆らったら殺されるし。なんでも逆らった瞬間、いきなり戦闘モードの姉が降ってくる手はずになっているらしい。どんな手はずかは知らないけど……

ちらりと隣を見る。

「えええええっと落ち着いて落ち着くのサユカ、これがトメさんの手だと思うから恥ずかしいのよ、そう、イナゴの手とでも思えばなんともないわ……なんともない……イナゴイナゴイニャ――かんじゃった」

バッタの仲間と一緒にされるのは甚だ不愉快だが、まぁ喜んでくれてるみたいだし……前に、もっと仲良くするって約束も、したし、な……

まぁ、付き合ってやるか。

「サユカちゃん」

「イナゴ！？」

「誰がだ！」

「すすすいません！　なんでしょうかっ！？」

「喫茶店、ついたよ」

「は、はいっ」

カチコチのサユカちゃんと手をつないだまま、指令書の地図に書いてあった喫茶店に入る。初めて来たところだけど……淡い木の色を基調としたモダンな造りで上品な内装、ドアや窓のガラスに彫られた木や雲、鳥は美しく、表から差し込む日の光で輝いている。

うん、とても雰囲気のいい店だ。なんだ、一体どんな変なところに連れていかれるのかと思っていたから、拍子抜けしちゃったじゃないか。

「いらっしゃいませ」

ふむ、店員さんも普通だな。可愛らしい制服じゃん。

「ご予約の笠原さまですか？」

ハテ。喫茶店って予約するもんでしたっけ？

「は、はい。僕は笠原ですけど」

「お待ちしてました……え、えっと、ご案内します、こちらへどうぞ」

ハテ。気のせいでしょうか？　なんかあの店員、笑いをこらえているように見えたのですが。

「では少々お待ちくださいませ」

僕らが席についたのを確認し、去っていく店員さん……あやしい。

そう思いつつ、僕はあまり心配はしていなかった。カカやサエちゃんは侮れないけど所詮は子供だ。色恋沙汰にはまだまだ疎い。どうせそこまで変なことは考えてないだろう。

「お待たせいたしました」

ほら、なんかきた。けど誕生日ケーキを二人で食べるとか、そういうのだろう？　わかってるさ。子供の考えることはその程度――

「こちら、キリヤ様からです」

んだとコラァ。

コト、と静かに置かれたそれ凝視する。

サユカちゃんも顔を真っ赤にしながら無言でそれを見つめている。

そうか……意外な伏兵もいたもんだ。そうだよな、おまえくらいの歳ならこんなもんがあったってギリギリ知っててもおかしくないよな。

説明しよう！

今、僕らの前に置かれたのはジュースです。そう、ちょっと大き目のグラスに入ってるだけのジュースです。ただ一点を除いて妙なところはなに一つございません。

そう、ストローが二本ついているという点以外は。

「と、トメ、さんっ」

「ま、待った！　とりあえず指令書を」

『指令その二、飲め』

「なんてわかりやすい指令だこんちくしょう！！」

思わず破り捨てようとしたところで、まだ続きがあることに気づいた。うぅ……姉が降ってくるのは怖いしなぁ……一応読もう……

『もちろん同時に飲み始めること。飲み終わったらその距離を保ったまま――』

「うえええ！？」

「ど、どうしたんですかトメさんっ！！」

あまりのことに固まった僕。そんな僕を心配してか、向かいに座っていたサユカちゃんは席を立ってこちら側に回ってきた。そして僕の手元を覗き込む。

『――その距離を保ったまま、お互いに「好き」と十回ずつ言いなさい』

ボカンッ！！　とサユカちゃんの顔が爆発した。

それも仕方ないことだろう。僕のほうはハラワタが煮えくり返っ

て爆発しそうだ。あのエセ紳士店員……なんつー入れ知恵しやがるんだ！！

「どどどどどうしますかトメさんっ！」

「ど、どうするって、やるしかないだろう！！」

「そそそんな大声出さないでください！　注目を集めるじゃないですかっ！　わたしたちが今からどんな恥ずかしいことをやると思って――」

「サユカちゃんも声でかい！　そんなわかりやすい宣伝しなくていいから！！」

大混乱な僕らは一通りぎゃーぎゃー大騒ぎした後、ゼーハーゼーハー言いながらとりあえず落ち着いた。

「じゃ……じゃあ、いくか？」

「は、はい……どうでもいいですけど、その、あれだけ騒いで店員さんが誰も止めにこないのがすごいですね」

それはそうだろうよ。店員全員、影に隠れてこっち見て笑ってるもんよ。仕事しろてめーら。

「うぅ……よし、ちゃちゃっと済ませてパパッと帰ろう！」

「はいっ！」

いざ、と二人してジュースに挑む！

ストローをくわえる。このままジュースだけを見つめてればそんなに恥ずかしくはないんだけど――つい、ちらりと前を見てしまった。

向こうも同じだったのか、目があった。

近い。

んげー近い。

このストロー、よもや子供用ではあるまいか。

「と、トメさん」

サユカちゃんがストローから少し口を離して僕の名前を呼んだ。

「な、なに？」

「……呼んでみただけです」

ちょっとねぇ勘弁してよ、すんごい恥ずかしいんですけど！！

「と、とにかく飲むよ！」

「はひっ」

視線を下に落とし、ズズズズー！　と恥ずかしさを打ち消す勢いでジュースを吸い上げる！

なかなか美味しい。

サユカちゃんも恥ずかしさブースターが働いていたのか、ものの数秒でジュースは片付けることができた。

さぁ、ここからが本番だ。

ぇ、マジで言うの？　これ。

「トメさん……好きです」

あ。

前見ちゃった。

目が合っちゃった。

すんごい近くで頬染めてる、サユカちゃんと。

「次は、トメさん、です」

ぅぐ……ええい、ままよ！

「ぼ、僕も、好き、だよ」

や、これ指令ね！　指令に従ってるだけね！

「わたしのほうが、好きです」

「や、僕のほうが好き、かも」

「すごく、好きです」

「ぼ、僕は普通に好き、かなぁ」

「好きなんです」

「そ、その、僕も好きだけど」

「大好きなんです」

「だ、だい、好き」

「世界で一番、大好きです」

――くらくらする。

僕は普通だよ。子供と恋したりなんかしない。

そのはずなのに。

この距離と。

好きという言葉が。

僕の心を。

かき、乱す。

「トメ、さん？」

「……ん」

「終わり、ましたよ」

あれ。

いつの間に終わったんだろう。

なんだか脳が麻痺してる。まるで今朝の寝起きと同じ。

「トメ……さん？」

ぼんやりする。

目の前にはサユカちゃん。

距離はそのまま。

熱もそのまま。

そのまま、僕は――

## カカの天下４５１「はにかみ誕生日　前編」（後書き）

この二人の話を書くたびに思います。
今日も……エラいもん書いちゃったなぁ……

どうも、作者です。
トメがそのままどうなったのか、あの人の乱入はどうなるのか、
それは明日のお楽しみということで――

先に早速投票していただいた読者の皆々様にお礼を申し上げます。
票集まるか不安だったのでホッとしました。ええもう嬉しい悲鳴を
あげながら集計させていただきます！
ではでは、また明日です。

……今日のタイトル？
べ、別に深い意味なんてないんだからねっ！！

## カカの天下４５２「はにかみ誕生日　中編」

これ以上ないくらいに近いサユカちゃんの顔。

その距離と、たった今まで交わしていた言葉のせいで、頭はぼんやりしていた。

ぼんやりして、そのまま――

そのまま、僕は――

動かなかったので。

「お下げしますね」

プス。

「ふがっ！！」

ストローが鼻に刺さってしまった。そう、サユカちゃんの顔が近い＝たった今まで飲んでいたジュースのストローも近いということだ！　ちょっと持ち上げただけでたやすく僕らに刺さる――にしてもなんで僕だけ！？

「あ、失礼しましたー」

まったく気持ちのこもってない謝罪に思わず店員さんを睨み――ビビった。

なぜかというと、店員さんが睨み返してきたから、ではなく。

「なにか？」

「い、いえ、別に」

その店員が帽子にサングラスという珍妙な格好をしていたからだ。

なに？　ここ喫茶店だよね？　制服は着てるから店員だよね？　ハテ？

「ところでお客様、こちらのほうも預かっております」

「へ？　これ……指令書か」

受け取った封筒には、慌てて書いたような荒い字で『指令書二・五』とあった。

「あの、これ」

「お客様。顔が赤いようですけど大丈夫ですか？」

「へっ！？　き、気のせいではないでございましょうですか！！」

別になんでもないよ！？　赤くないよ！　慌ててないよ！　さっきの色んな魔力に陥落しそうになってたりとかしてないよ、全然！！

「……犯罪者」

「ちょっと店員さん！？　今ボソッとなに言いましたか！！」

「ごゆっくり」

僕の質問に答えることもなく、あやしい店員さんはそそくさと去っていった……

「なんだったんだ……」

「トメさんっ！　は、犯罪もたまにはいいかと思いますっ」

「そして君は何を言うとるのかね」

まったくもう。僕がそんなことするわけないじゃないか！

そんなことがどんなことかって？　そりゃあんだけ顔が近づいて好きだのなんだの言い合ったんだから――や、なんでもないよっ！　なんでもないっ！！

「と、トメさん？　指令書を」

「あ、うん。そだね。内容は――」

ダン！　とお盆を叩きつけるように置いてしまって我に返りました。あ、あら。私ったらなんてはしたない。で、でも、なんか我慢できなくて！

どうも。サングラスに帽子なんかつけてますけどサラです。

先日、カカちゃんたちの作戦会議を盗み聞きしたおかげでこの店

に先回りできたわけですが……予想以上の犯罪っぷりに唖然です。

だってアレ、どう見ても犯罪ですよね！？

というわけで、制裁です。

私お手製の指令書（さっき急いで書きました）で、二人とも正気に戻ってもらいましょう。

壁に隠れながら二人の席を盗み見ます。

「えっと、なになに？　今度はお互いに『嫌い』と二十回言いなさい、だって」

『好き』と言って近づいたなら『嫌い』と言って離す。これです！

さぁどうぞ、やってみてください！　さっきは十回言いましたからね。二十回も逆の言葉を言えばマイナスになるはずです！

「と、トメさん、嫌いですっ」

「僕も嫌い」

「嘘ですからね！」

「はいはい、わかってるよ。僕も嘘だから」

……あれ。

「じゃあもう一回……トメさん嫌いです」

「僕もサユカちゃん嫌い」

「ほ、ほんとにほんとに嘘ですからね！！」

「は、はいはい、わかってるわかってる」

あれあれ？

「トメさん……き、嫌い好き！！」

「そんな電光石火で訂正しなくてもいいから」

なんか、なんか……

仲良くなってません？

呆然としてしまう私。え、仕事？　いいんですよ、そんなの。ほら、他の店員さんだって先ほどスペシャルジュースを持ってってから仕事放り出して興味津々であの二人を見守ってるんですから。

あぁ、そういえば見守ってました。最初はニヤニヤしながら。

それが今じゃ――

「なんなのですかあの人ら！！」

「さぶっ！　かゆっ！　鳥肌たつっ！」

「あれが世に言うバカップル！？　クソップル！？」

「クソくらえ！」

「おい！　この店のメニューにゃ恥と外聞と法律はねぇのか！　あのにーちゃんに持ってってやれ！」

こんな風に近くのお客さんと一緒に私の心を代弁してます。いえ、その、あそこまでひどいことは思ってませんけど！

「大嫌いです！　大好きです！」

「わ、わかったわかった。僕も好きだよ」

なんてことでしょう。

好きとか嫌いとか言い合いすぎたせいか、あの二人はもはや「好き」と言うことに恥ずかしさを覚えないご様子。

私……余計なこと、しました？

うそん。

え、ええい、次こそは！

なんだか不穏な空気を感じた僕は、サユカちゃんとの会話を早々に切り上げて喫茶店から脱出した。あの喫茶店、もう行けないなぁ……いい雰囲気の店だったのにな、残念だ。

「トメさん、次の指令はなんですかっ」

「あ、うん。えっとね」

さっきよりも心なしかサユカちゃんとの距離が近いような。さっきので仲良くなってしまったんだろうか。いいんだか悪いんだか。

「えっと……『指令書その三、公園の桜の木の下へ向かえ』って、桜はやっぱあの桜なのかな」

「多分、そうだと思いますっ」

ここからそんなに離れてないな。僕とサユカちゃんは頷き合って歩き出した。

あえて手は繋がなかった。

なんかそろそろヤバイ気がしたから。

「せっかくだからケーキでも食べればよかったですねっ」

「そういえばそうだな、誕生日なんだし」

「あ、でもカカすけたちが用意してくれてるかも」

「あいつらがそんなに気が利くかな」

「へ、変な気ばっかり利くんだから、少しくらい普通に気を利かせてもらわないとっ」

「……それもそだね」

それでもわりかし仲良く雑談しながら歩き――やがて公園にたどり着いた。

例の桜の木へと向かう。先月まで鮮やかな桃色に包まれていた公園は、すでに薄い新緑に彩られている。その木も同じ――って、あれ。

「この木、意外と元気だな。もう病気で木として終わりとか言ってなかったっけ」

「そ、そういえばそうですねっ！　げ、元気になっちゃったんですかねっ！」

なぜか慌てるサユカちゃん。ふむ、よくわからないけどよかった。この木が元気になればきっと校長先生が喜ぶはずだ。あんなに悲しそうな顔してたんだから。

「それでっ！　ここで何をすれば？」

「お、ああ。そうだった。えっと指令書」

パラリと開く。『指令書その四、桜の下に置いてあるプレゼントの交換をしなさい。あとは声に任せるように』と書いてあるけど。

「声？　なんだそれ」

「とりあえずプレゼント交換しましょうっ」

僕たちは首を傾げつつ、言われた通りに木の下に置いてある自分が用意したプレゼントを手にとった。これ、今朝カカに奪われたやつけど……サユカちゃんも同じ目にあってたのかな。

「えと、サユカちゃん。はい、お誕生日おめでとう」

「はいっ、ありがとうございます。トメさんも、おめでとうございます」

言い合って、プレゼントを交換する。なんだろうコレ。服、かな？

「サユカちゃん。これなに？」

「はい！　エプロン――」

は？

まさか。

まさかまさか。

どこぞの酔っ払いの言うとおり、本当にエプロンドレス？　メイド姿でご主人様確定なのかぁ！？

「――です」

「ぇ」

「だから、エプロンですっ！　トメさんに、その、似合うかと思って」

そ、そっか……よかった。『ドレス』じゃないのね。それなら、うん。普通に使うし普通に嬉しい。

「じゃあトメさんのプレゼントはなんですか？　随分とおっきいですけど」

「それは開けてからのお楽しみ――」

『指輪の交換は終わりましたね！』

「うあビックリしたぁ！？」

どこからともなく唐突に響いてきた声に、僕とサユカちゃんは思わずきょろきょろと周囲を見渡す。が、誰もいない？

「し、指令書の声って、これのことですかねっ？」

「た、多分」

『それでは誓いの言葉に移ります』

「指輪の交換に、誓いの言葉？　これって、まるで……」

『その通りです！　結婚式です』

はぃぃぃ！？

『クララの桜の下で愛を誓い合ったカップルは異様に仲良くなると評判なのです』

あ、あぁ。この声、クララちゃんだったのね。

『そういうわけで、続きやります』

「や、でも、いきなり結婚なんて」

「トメさん！　し、死にたくなかったら従ってください！」

いきなりサユカちゃんは何を脅迫してるのかと思ったけど、そういえば逆らったら姉に殺られるんだったっけ。し、仕方ない。どうせフリだし、いっか。

『では誓いの言葉いきます』

誓いの言葉、ね。あれか。汝は病めるときも健やかなるときもーってやつか。

『えー、こほん。二人ともー、仕事やめるときもー、親御さんが健やかじゃないときもー、お金がないときもー』

「なんか変に現実的ですねっ」

『共に死んでいくと誓いますか？』

や、それ普通『生きていく』じゃなかろうか。

「誓いますっ！」

誓っちゃったよこの子！

『しんろうは？』

「心労？　はい、かなり募ってます」

『何言ってるかクララわかんないです』

「あ、新郎か。って僕まだ結婚してません！」

『はい、これからです』

「そうでもなくて！」

うう……サユカちゃんの視線が痛い。

でもさ――

「私も誓います！！」

なんですと？

今の、僕の声じゃあーりませんよ？

振り向く。そこには息を切らした、サラさんが！？

「私も……私も誓いますから、トメさん！！」

え……っと。

名前呼ばれても困るんですけど。

ということは、なんですか。

……選べ、と？

ゴッド。

僕に何を求めてらっしゃるん？

## カカの天下４５２「はにかみ誕生日　中編」（後書き）

後半に続きます！
いろいろ思われることはあるでしょう。
でもこれだけは言っておきます。

トメに、良い思いは、させません。

にやり。

# カカの天下４５３「はにかみ誕生日　後編」

場所は公園。

そこで愛を誓いあった二人は異様に仲良くなってしまうという桜の木の下で、僕の目の前には二人の女性が立っていた。

サユカちゃん。今日はいろんな恥ずかしいことを乗り越えて、なんだかんだで仲良くなったカカの友達の女の子。

サラさん。なんでか知らんけどここにいる人。

さぁ、どうする？

……どうするよ。

や、別に桜の魔力なんか信じてるわけではないけどさ、二人とも思い込んだら一直線な性格してるしヘタなこと言うのは命とりだよな。もしかしたら誓いのキッスとか言われるかもしれないし。つまりここは慎重に、当たり障りない返事をしなければならない。

よっしゃ。

この状況で当たり障りない返事って、一体どんなん？

ごめん誰か教えてプリーズ。

「トメさん！」

「はぃ！？」

思考の海にダイブしていたのも束の間、いきなり響いたサラさんの大声で無理やり引き上げられてしまった。

「あの、実はですね」

「はぁ」

「トメさんは知らないと思いますけど――ずっと、ずっとあなたにアタックしてたんですよ、私」

さ、さすがの僕でも知ってますけど。

「でも、いつもの恋愛とちょっと違うなって思ってたんです。その、私ってすごい嫉妬深くて、彼氏じゃなくても好きな人の周りに女の人がいるだけでイライラしちゃうんです。でも、トメさんの周りに女の人がいても、そういう感情がわかなかったんです」

何が言いたいんだろう。

「それで私、本当にトメさんが好きなのかなって、迷ってたんです。でも今日を通して、ようやくわかりました。今まで感じなかった嫉妬を、さっきトメさんとサユカちゃんがラブラブしてたときに感じたんです！」

ラブラブてオイ。そもそもさっき見てたんですか！？

「それで確信しました！」

そ、そうですか。ならばなおさら真剣に考え――

「私は、サユカちゃんのことが好きだったんです！！」

ぱっきん。

あれ、こうえんが、まっしろになったぞ。

「サラさん……わたしも、サラさんのことが好きみたいですっ！！」

ぱきぴきん。

あれれ、まっしろなせかいに、ひびがはいったぞ。

れーせーになって、かんがえてみよう。

あ。

わかったかもしれない。

このきのしたでこくはくしたら、いようになかよくなれるんだよね。

さっきこくはくみたいなことしたの、だれとだれだっけ？

あいをちかいますっていったふたりって、だれとだれだっけ？

あはは。

まほうって、ほんとうにあったんだぁ。

『え、えっと……クララ混乱してます！　でも、一応その、誓いのキックを！』

「「せい！！」」

ドカばきん！！

なぜか放たれた二人のキックは――ひらがなっぽい真っ白な世界と僕の鼻っ柱を、ものの見事に破壊した。

「いきましょう、サユカちゃん！」

「はい、サラさんっ！！」

妖しく輝く薔薇の花っぽい空気を周囲に振りまきながら、何処へともなく爆走していく二人。

鼻血を出しながらぴくぴくと地面に倒れ付している僕。

ゴッドよ。

僕になんか恨みでもあるのですか？

ていうか、なんスかこのオチ。

僕は地面に転がったまま、さっきまで真剣に悩んでいたことを恥ずかしがったり今日の出来事で仲良くなれたと思っていたのにあっさり撤回されたサユカちゃんとの絆に虚しさを感じたり桜の魔力ってあんだよそれ反則じゃね？　なんて拗ねてみたりと色々悶々とし

ていたのだけど――

「んもー、クララちゃんしっかりしてよ！　せっかくいい雰囲気だったのに」

「すいません……クララしょっくです」

「まーまー、あれはどうしようもなかったよー」

「いいじゃないですか、おもしろかったんですから」

「そうそう。オレが笑えりゃ全てよし、だ。気が合うな、あんた」

これまたどこからともなく沸いて出てくるおなじみの面子……もうツッコむ気にもならんわ。

「ほらほらトメ兄。元気出して」

「ねークララちゃん。あの桜の魔力っていつまで続くのー？」

「三分です」

「みじかっ！！　んだよ、せっかくおもしろい展開だったのによ。一日くらい続かせろよ」

「桜の花が咲いている時期だったらもう少し続くのですけど」

「ほらほらトメ君。あれは一時の気の迷いだそうですよ。だからそんなとこに転がってないで元気だしてください。フラレ虫みたいですよ？」

「っんの、キリヤ……！」

そこまで言われちゃ転がってられない。僕はカチンときた怒りをそのまま地面に叩きつける勢いで立ち上がろうと――

「あ、転がったままでそんな乱暴に動かないでください。私の誕生日プレゼントのネックレスが汚れてしまいます」

「う？」

キリヤに言われて胸元を見る。そこには見慣れないネックレスが、今朝カカに無理やりつけられたときと同じように光っていた。

「これやっぱりプレゼントだったのか」

「はい。私が苦労して見つけてきた、呪いのネックレスです」

「この惨状はすべて貴様の仕業かあああああああ！！」

「アハハ、いやだなぁ。全部トメ君の日ごろの行いのせいですよ」

「てめえええええ！」

やりきれない怒りをキリヤにぶつける僕。そしてそれを見て笑うカカ、サエちゃん、テン、クララちゃん……はぁ、今日の僕はまるっきりピエロじゃないか！

「ままま、トメ兄。はいコレ」

「今度はなんだ！？」

「私たちからの本当の誕生日プレゼントですよー」

その単語を耳にして、キリヤを追いかけていた動きをピタリと止める。

プレゼント？

そ、そっか。捨てる神あれば拾う神あり！　傷ついた僕の心はみんなによって癒され――

「はい、エプロンドレスの『ドレス』の部分」

なかった。

「もー、サユカちゃんったら大事なところを買い忘れてるんだからー」

「ほんとだよ。わざわざ買いなおしに行ったんだからね。はい、付属品のフリルつきカチューシャ」

「トメ、おまえ言ったよな？　メイド服をもらったらイロイロやるって」

そんな――といったところで僕の頭がフル回転！　迅速に打開策を考える！

「ま、待て！！　それはあれだぞ！　ほら、よく思い出してみろよテン。僕は『サユカちゃんがメイド服をくれた場合』の話をしてた

んだ！　サユカちゃんがくれたのはエプロンだけで、つまるところメイド服をくれたわけじゃな――」

「うるせぇ。んな細けぇこと覚えてねーんだよ。酔ってたからな」

「そんなご無体な！？」

「せめてもの情けです。トメ君の家で着替えてもらいましょう」

「そだね。れっつごー」

今日の僕はピエロかと思っていました。

でもそれは間違いでした。

メイドでした。

なんでやねん。

「なんでやねん！！」

そんな僕のツッコミも虚しく。

着せられてしまいましたエプロンドレスにフリルカチューシャになぜかニーソックス。

誰か殺してください。

「ぴら」

「スカートめくんなカカ！！」

「や、パンツはどうなってんのかと」

「聞くな！！」

あーもースースーするわ恥ずかしいわ泣きそうだわ死にたいわ！
でもなんか逃げたら約束を破ったとして姉を発進させるとか言ってスイッチを見せつけられたから言いなりになるしかないし！　大体なんだよスイッチって姉は何者だよ！　わからねぇよ！　だからそれもアリだよくそー従うしかねーよ！！

「トメ、オレさ、喉かわいたなー」

「勝手に水でも飲めよ」

「言葉使いがなってねーぞ？　あん？」

ちらちらスイッチを見せ付けるオヤジ女テン……こなくそー後で見とけよ。だから今の僕は見るな。

「も、もうしわけありません、ご主人様」

「ぶはははは！！　ご、ごしゅ、ご主人様だって！！」

「トメお兄さんが……あんなひらひらの服着て……いいなりに……く、くぷぷ」

「可愛いよトメ兄」

「やかぁしぃわぁ！！」

「おやメイド君？　言葉使いがなっとらんよ？」

「もぉし……わけ……ありませぇんんんん！」

「トメ、こわいです」

「も、申し訳アリマセン♪」

「ぴら」

「だからスカートめくらないでくださいまし！！」

ぎりっぎりと歯を食いしばりながらこいつらを睨みつけることしかできない自分が悔しい！

こなくそ……よしわかった。僕も男だ。恥ずかしがってるから笑われるんだ。逆に堂々とやってやろうじゃないか！

「ご主人様、お茶でございます」

「……お？」

音もたてずに人数分を並べ、すすす、と壁際に控える。

「んぐんぐ。トメ兄、おかわり」

「かしこまりました。どうぞ」

「トメお兄さん、なにかお茶菓子ないですかー？」

「ここに」

ぴしっ、ぴしっと仕事をこなす僕！

どうだ。ここまで完璧にこなせば笑えやしないだろう！　おそれいったか！

「執事がいる……め、メイドの格好した執事が……く、くはは……は、腹いた……」

「み、見ましたか、あの得意げな顔……お、オカマのくせに、何いい気になってるんですかね……かわいー」

おそれいりました。僕が。

神様でも天使様でも悪魔様でも誰でもいいです。どうか、この珍妙なプレゼントを無かったことにしてくださいませんか？

「はい、トメ兄。ネコ耳と尻尾」

「替えのニーソックスもありますよー」

無理？

死のう。

せめて、心だけでも。

その頃、サユカちゃんとサラさんは。

「私たち、こんなところで何してるんでしょう」

「ここ、さっきの喫茶店っ？」

「えっと……な、なんだか血迷ったこと言ってた気がしますけど」

「わたしもです。なんだったんでしょうっ」

「うーん、なんだかよくわからない桃色な衝動に突き動かされてたような……とりあえずケーキでも食べましょうか。お誕生日ですし」

「え、いいんですかっ！」

「はい、せっかくだから奢っちゃいますよ」

「じゃ、じゃあですね、抹茶系が食べたいですっ！　えっと、どんなのあるんでしょう」

「ふふふ、その代わりと言ってはなんですが、トメさんのどこが好きなのかたっぷり答えてもらいましょうか」

「えーっ！　い、いいですけど、サラさんも言ってくださいよっ！」

なんだかんだで仲良くなってる二人でしたとさ。

そう、トメを忘れて、仲良く。

## カカの天下４５３「はにかみ誕生日　後編」（後書き）

反対意見もちょこっとありましたが……大多数の賛成意見により、トメ君のメイドが決定いたしました！
ちょっとあまりにアレなんで細かい描写は（してみたかったけど）しませんでしたが……や、この件についてはあまり触れないのは吉ですね＾＾；

とりあえず後編が今日に重なるように調整しましたので今日が正真正銘、トメとサユカちゃんの誕生日です。
二人とも、おめでとう＾＾
プレゼントは、これね。
サユカちゃんには小さな友情。
トメには地獄。
さぁ、喜べ二人とも＾＾

## カカの天下４５４「見落としがちなことだけど」

「――というわけなんです」

「なるほどー。それはそれはー」

こんにちは、サカイですー。

今日は珍しくサラさんのお誘いを受けまして、小洒落た喫茶店にてお茶してますー。え、珍しくない？　いえいえー、いつも偶然に会ってるので、わざわざ連絡取り合うのは珍しいのですよー。

そしてお話の内容は、トメさんとサユカちゃんの誕生日のことについてです。

「我に返ったらサユカちゃんと仲良くはなっていたものの、ちょっと気まずくて……」

「そうですかー」

「私、まるでヘンタイさんじゃないですか」

「そうですねー」

「ちょっとは否定してくださいよ！」

「はいはい、仕方ないですねー。えっと、成人女性が小学生の女の子と愛を誓うなんて人としてありえませんね」

「そこを否定されるとすっごく傷つくんですけど！」

「ざまぁーみさらせー」

「この……っ！　な、なんで私は、あなたなんかに、こんなことを喋ってるんでしょう……！」

「私のことが好きだからでは」

「それだけはありえません」

「小学生の女の子襲うのと、どっちのほうがありえませんかねー」

「うぅ……！」

そこを突かれると弱いのでしょうか。威勢のよかったサラさんはしおしおと枯れていきます。

「私……ヘンタイさんなんでしょうか」

「あははー。やーいやーい」

「笑うな！！」

だって楽しいんですもーん。

「私だって……私だって否定したいですよ！　でも、でも！　説明がついちゃうんです！　トメさんの周りに女性がたくさんいても抱かなかった嫉妬を、サユカちゃんがいるときだけは抱いてしまった！　それはつまり……つまり……」

はて。

この前にその話を聞いたときも思いましたけど、なんだか違和感があるのですが。

はてさて？

「私としてはトメさんが好きだと……思うん、ですけど……」

「いまいち自信がもてないとー？」

「はい……昨日のこともありますし」

「あ、トメさんだ」

がばっ！！

「うっそーん」

「あ……あなたねぇ！！」

「あははー。まぁまぁ、そんな首を砲丸投げするような勢いで振り向くほど気にしてるっていうことは、好きってことなんじゃないんですかー？」

「そ、そうなんでしょうか」

そんな弱気なサラさんの顔を見て、私は思わず勢いよくテーブルを叩いてやりました。

バン！！

「ひっ！！　な、なんですか」

「いえ、なんかびくびくしてたので、ついー」

あははー、ビクッてなった。ビクッてー。

「も、もう！　サカイさん！　いい歳して何やってんですか！」

「変な性癖をもつ大人よりはいいと思いますけど」

「あぅ！」

いくら反撃しようと思っても無駄ですよー。今の状況は、私が相談されている側――つまり、私を呼び出した時点でサラさんに勝ち目はないのです！

「もういいです……遊びたければ遊んでください……私は自分がこれからどうするべきなのかさえ、わかればいいんですから……」

「じゃー警察にいきますかー」

「まだ何もしてません！！　そ、そりゃトメさんを追いかけるべきかサユカちゃんと禁断の道を目指すか迷ってますけど！」

すっかり自分の気持ちを見失っちゃってますねー。

「そうですねー。まぁトメさんとサユカちゃんは一緒にいるとき多

いですし、そのときに一緒に追いかけてればそのうち自分の気持ちも――」

あら？

あらら？

一緒に、いる？

ふと、先ほどのサラさんのセリフが脳裏に浮かびました。

――トメさんの周りに女性がたくさんいても抱かなかった嫉妬を――

この間も同じようなこと、言ってましたよね。

でも、待ってください。

トメさんの周りって、そんなに女性いましたっけ？

いると言えばいますけど、サラさんとテンちゃんってあまり面識ないはずですよね。つまり、サラさんが今まで見てきたトメさんの周りって、小学生の女の子ばっかり？　もしくはカツコちゃんやお母さん？

想像してみましょう。

好きな男の人。その人に群がる小学生の女子たち。そして姉と母親。

嫉妬……しますか？

しませんねぇ、普通に考えたら。

つまるところ、サラさんの悩み――『周りに女の人がいても嫉妬しなかった』っていうのは当然の反応なわけで。

悩みすぎなだけで結局は、普通にトメさんが好きなんだと結論づけられるわけで。

「そうですね……わかりました！　とりあえず両方追いかけてみます」

でも勘違いしてるわけで。

「そうですねー。頑張ってください」

それを教える義理もないわけで。

「えっと、警察、警察っと」

「携帯しまってください！　き、気持ちの整理がつくまでは何もするつもりないんですから！」

からかうとおもしろいわけで。

もうしばらく黙っておくつもりなわけで。

## カカの天下４５４「見落としがちなことだけど」（後書き）

なんだか見落としがちですが、実際にトメの周りで彼女になりそうなのって言ったらテンカ先生とサラさんくらいなんですよね。

まぁ、普通に考えたら、の話ですが笑

サユカちゃん入れても三人……

禁断の道いれたらカカも？

伏兵敵にサエちゃんも入るのかな？

んー……や、モテてるかどうかは置いといて恵まれてはいるのか。

やっぱトメはあんな感じの誕生日でよかったということで＾＾

明日は、そんなトメ君のその後をお届けします笑

## カカの天下４５５「ハイはい」

燃え尽きた。

そう、燃え尽きたぜ。

僕は灰になったんだ。

だからみんな、灰のことなんか忘れておくれ……

「おーい、お嫁にいけなくなったそこのトメ兄」

ああ、この世界が輝いて見えたのはいつまでだっただろう。

「おーい、部屋の隅で体育座りしてるそこのトメ兄」

ふっ……灰になった僕にはどうでもいいことさ。

「おーい、なんか危なげにブツブツ言ってるそこのトメ兄」

灰はいい。なにせ白い。汚れてしまった僕が成り下がるには上出来すぎるぜ。

「病院行く？　そこのトメ兄」

はいはい、どこへでもどうぞ。ハイハイ。灰だけにね。くくく……

「泣いてるの？」

うるさいやい。

僕の男としてのプライドはズタズタさ。放っておいてくれ。

「仕方ないなぁ……よし。こんなときこそ、お姉、発進！」

ポチ、と何かが押される音。

瞬間！

「呼ばれて飛び出てアンポンターン！！」

「うるさい黙れアンポンタン。どっから出てきたのか知らないけど引っ込んでろ」

「カカちゃぁん」

「はいはい、お姉まで泣かないの。今ね、トメ兄は傷ついてるの」

「ふむ？　なぜに」

けっ。言うがいいさ。僕の痴態を心行くまで。

「妊娠したから」

「してねぇよ！！」

「えー」

「させる気だったのかよ！？」

「ねーねー、名前は何にすんのさ弟」

「あんたはたまには人の話聞けよ！！」

「だってトメ兄はメイドになってたんだよ？　だったら」

「だったら妊娠するのかよ！？　男が妊娠するわけないだろ！」

「メイドになった男に常識を語られても」

「やかましいよ好きでなったんじゃねーよ！！」

「メイドって妊娠できないのか、おねーさん初めて知ったわ。それ法律？」

「だからあんたは話聞けと何回言ったら！！」

「お、なかなか調子戻ってきたね」

はぁ、はぁ、はぁ……あーくそ、あまりに予想外なことばっかり言うからつい復活しちゃったじゃないか。もういいや。この際気になってたこと聞いてやれ。

「……おい、姉。僕がこんな辱めを受けたのはあんたのせいだぞ。逆らったらあんたを発進させる、とか脅されてだな――」

「変な脅し」

「誰よりも変なあんたが言うな！！」

「む、なんだよう。あたしだって待機してるの辛かったんだぞ！
ずっと同じ場所でね――」

『まだかな』

『あ、スイッチに指が触れた気がする。そろそろかな』

『わくわく』

『そわそわ』

『むぅ、離れた』

『まだかな』

「こんな感じで待ってたんだぞ！」

ごめん。狭っこい場所で縮こまりながら「まだかな、まだかな」って待機してる姉を想像すると、不覚にもちょっと可愛いく思えた。

でもどこに待機してたのかは聞かないほうがいいのだろう、多分。

「それなのに全然呼ばれなくて放ったらかしで……いい加減のびちゃったよ」

おまえはカップラーメンか。

「ようやく呼ばれたと思ったら見せ場はぜーんぶ終わった後だし！　ねーねーもう一回くらいメイドやってよー。あたしにも見せてよ」

カチン。

「あ、サユカンともう一回あのゲームするってことでもいいよ。お姉も楽しめるだろうし」

ムカ。

「なになに、何したの。ポッキーゲームとか？」

「お互いに端から食べてくやつか。いいね、次はそれいこう」

もう。

もう。

もう――我慢ならん！！

「いい加減にしろぉ！！」

唾を吐き散らすのも構わず、僕は二人に怒鳴りつけた！

「いいか！　決めた！　僕は決めたぞ！　これからは男らしく生きる！　メイド姿なんてもっての他だ！　二度としない！　サユカちゃんと妙なゲームもしない！　僕とサユカちゃんは普通に仲良くしていくってことで、決着ついてるんだからな！」

ふんぞり返り、鼻息を荒くして二人を睨みつける！

姉は僕の雄々しい部分を発見したせいか、まじまじと見つめてきて……

「鼻毛が出てる」

「そんなもん発見すんな！」

「――あ、もしもしサユカン？　今ね、トメ兄が言ってたんだけど、もうサユカンとゲームしたくないんだってさ」

「そこな電話してる小娘よ！　そうは言ってない！！　変なゲームはしないと言ったんだ」

「変なゲームしかしないんだってさ」

「ぎゃ！　く！　だ！！」

ふん、戯れはここまでよ。

何にでも反応して慌てふためき玩具にされる僕はここで死に、明日からはどんなことも適当に受け流して楽しむ飄々とした僕がいることだろう。

だってさ。

いい加減、疲れたんだもん。

いろいろ。

「それにしてもさ、男のくせに『男らしく』って言ってる時点で『自分は男じゃない』って言ってる感じがしない？」

「だってトメ兄、メイドだもん」

「それもそっかー。男じゃないんだ」

「はいはい、黙れ黙れ」

疲れたから。

ほんっとに！

## カカの天下４５５「ハイはい」（後書き）

あれだけのことをしたら、さすがの百戦錬磨（カカや姉の騒動に巻き込まれてきただけで正確には勝ってるわけではない）のトメもさすがにキツかったようです。

次からは男らしいトメが！

出たりはしないでしょう。

疲れたときの空元気みたいなもんです。きっと時間が経てばいつもどおりになることでしょう笑←救う気なし

## カカの天下４５６「タイヤキ事件」

僕は生まれ変わった！！

あ、いきなりすいません。おはようございます！　トメです。

今日から僕は男らしく生きることにしました。なのでニュートメです。

「なにそれ。ニューロンの仲間？」

おっと、カカの登場だ。ここは男らしく兄らしく、にこやかに笑いながら返答すべきだろう！

「あっはっは！　おはようカカ！　小学生なのに神経細胞の別称なんてよく知ってるなぁ、偉いぞ！」

「うえ？　あの、トメ兄？」

「うんうん、すぐに朝食を作るからな！　今日はひじき入りの納豆ご飯と冷奴とな――」

「……んと、私、パンがいい」

もう準備したのになんたるわがまま。しかし、この程度のことでいちいち怒っていては男前になど成れはしまい。男らしい寛大さを発動だ！

「なんでかというとね今日はパンツが飛――」

「そうかそうか！　わかったぞ、準備するからちょっと待ってろよー」

「むぅ」

「おや、どうしたカカ」

妹の不満そうな顔にもすぐに反応。男らしい優しさも発動だ！

「トメ兄」

「なんだい？」

「あじゃぱー」

何語！？

とツッコむのは簡単だが、ここは男らしい笑顔で！

「トメ兄、これはね――」

「あっはっは。カカはいつもおもしろいなぁ」

「むぅー……もういいもん」

はて？　カカは冬眠間近のリスのようにぷくーっと頬を膨らませて行ってしまった。一体どうしたというのだろう。

その後、朝食中にも何度か喋ったのだけど、カカはその度に不機

嫌になっていった。

わけがわからないまま会社へと行き――

そして、仕事を終えて家に帰ってくると。

「カカちゃーん！　なんでこんなことにぃー！　うぅぅー！」

なぜか居間で小芝居が始まっていた。

「あの……サエちゃん？」

うつ伏せに倒れているカカ。それを泣きながら抱きしめているサエちゃん。あれかな、ほら、ドラマとかによくある感じで……カカが死んでしまって、それを悲しんでるっていう設定っぽい気がする。

「あぁ！　トメお兄さん」

サエちゃんはガバッと顔をあげて、僕に向かって泣きついてきた。

「カカちゃんが……」

なぜかカカの足を持って引きずりながら。

「カカちゃんが、死んでしまいましたぁぁぁー！」

ずるずるゴン。

「痛っ。脚が壁に当たったよ」

「あ、ごめんねー。人を引きずるのって難しいね」

「気をつけてよ、もう」

「うんうん、わかったから死んでよー」

「はいはい。かくっ」

「さて、カカちゃんが死んだわけですけど」

どのへんが？

「犯人はトメさんだと思うんですけど、どう思います？」

そして殺人犯らしい僕に直球で相談するあなたは何者なのか。

――とか思ったけど、生まれ変わった僕はそんな野暮なツッコミはしないのさ！

「あはは、そっかそっか。悪いやつだなぁ」

「本当です。生きてる価値ないですねー」

「まったくまったく」

「生ゴミのほうが資源になるからまだマシですよねー」

「いやー、生ゴミに負けちゃったかー」

……サエちゃま。僕、何かシマシタカ？　いやいや！　ここはあえて理由は聞かず、さりげに立場を回復するのが吉だ！　ちょうどいいものあるし。

「それだけ悪いことをした償いと言ってはなんだけど、タイヤキ買ってきたんだ。食べよう？　多めに買ったからサエちゃんの分もあるよ」

「わー、ありがとうございますー」

ぴくり、と死体が動いた。サエちゃんはそれに気づいているのかいないのか、にっこりと微笑んだ。

「カカちゃんは死んでるので、その分は私がもらいますねー」

どたんばたんと死体が跳ねてるけどサエちゃんは気づいていない――フリをしてる。そういやこういうちゃっかりした子だったよな、サエちゃんって。

と、いうわけで。

「もふもふ……ところでですね、カカちゃんのことなんですけど」

「むぐむぐ……ん、聞こうか」

いまだ抗議するかのようにピチピチ跳ねてる活きのいい死体は放って置いて、サエちゃんと一緒におやつタイムなんぞに突入しているわけだが。

「全部話してしまうとカカちゃんが生き返ってしまいますから、タイヤキ全部食べてからでいいですかー？」

どたんばたん！　どたんばたん！

「や、カカの分もお茶も煎れちゃったし……早めに話を聞いて終わらせたいなぁなんて」

「もぐもぐもぐ」

「そんないきなり食べるペースあげなくても」

どたばたどたばたどたばた！

「ほら、そこの死体がうるさいからさ」

「むぐむぐ……こくん。大丈夫ですよー、幽霊だって騒ぐときはこんなもんです」

ぴたり、と死体の動きが止まる。食い気より恐怖が勝ったか。

「それでさ、カカはなんで死んだわけ？　しいんは？」

「しびん？」

そうそう、病人とか怪我人がベッドの上でもう用を足せるように――ってそれは尿瓶！！

と、ツッコみたいんだけど、我慢我慢。そんな軽いことでいちいちツッコむ軟弱男は卒業したんだ！

「死因だよ。し、い、ん。なんで死んだのか」

「ああ、よかったです。トメお兄さんが今ここでいきなり尿瓶を使うのかと思ってドキドキしてしまいましたー」

それメイド服を着るより恥ずかしいんですけど。

「死因はですねー。丸一日、トメお兄さんがツッコミをしなかったことにあります」

なんですと？

「……サエちゃん。人間ってそんなことじゃ死なないんだよ」

「でも空気がないところに丸一日いたら死にますよね」

「そりゃね」

「じゃーツッコミなくても死にますよ」

「いあいあ『じゃー』の意味がわかりません！！」

「いつも在るものが無くなった、というのは同じですよー」

……む。それ、は。

「今日のカカちゃんは元気なかったです。『トメ兄が変になった。つまんにゃい』って言って、ずーっと」

つまらない……そっか。言われてみれば僕も、少しつまらなかったかも。

「今日から男らしく、とか、思ってたんだけど」

「カカちゃんを泣かすようなことが、男らしいことだと思いますか？」

泣いてた？　カカが？　ほんとに？

や、そんなことを聞くことこそ野暮だろう。

「カカ、ごめんな」

「……」

「男らしくなろうって気持ちは変わってないけど、ちょっと極端だったよな。根っこのほうでそう思うことにして、他はいつもどおりにするから、その……顔をあげてくれないか」

「無理。死んでるもん！　居留守中だもん！」

「居留守ってことはいるんじゃん」

「あじゃぱー！」

「朝にも思ったけどそれ何語だよ」

「……トメ兄、元に戻る？」

「ああ、だからおまえも元に戻れ」

「ほんと？」

「ああ」

「ちゃんとツッコミする？」

「はいはい」

「私のタイヤキ余ってる？」

「死守しといたよ」

ここでようやく、カカは顔をあげてくれた。

「……じゃー生き返る」

これにて一件落着か。

「よし！　ほら、お茶とタイヤキ！」

「うん、でも、その前に」

「そだな」

僕とカカは二人してサエちゃんのほうを向いた。

「サエちゃん。私のわがままに付き合わせちゃってごめんね。ありがとう」

「僕からもお礼を言わせてよ。ありがとう」

サエちゃんはニコニコしながらそれを聞いて――手を、差し出した。

「なに？　この手」

「お礼ください」

その手はまっすぐ、僕が死守したカカの分のタイヤキへと伸びていた。

「サエちゃん……タイヤキ、気に入ったの？」

「おいっしーですね、それ！」

満面の笑みで言うサエちゃんに苦笑しながら、カカは「仕方ないなー」とぼやきつつタイヤキをあげるのだった。

サエちゃんはほんと、サエちゃんらしい。

ああ、なるほど。

だから僕も、僕らしく、か。

## カカの天下４５６「タイヤキ事件」（後書き）

今日これを書いた理由。
お昼に食べたタイヤキがおいしかったから。

そ、それだけではないですよ！？　た、たぶん笑

まぁ肩肘張ってばっかりもおもしろくないというお話です。そしてサエちゃんはちゃっかり者というお話でもあります。

――あと、昨日からちょこちょこーっと最初あたりのお話のリニューアルを始めてます。
カカ天の型がある程度決まるまでは結構粗い書き方だったんで、ちょこちょこっと修正したり、ちょこっとネタを追加したり……でもまぁ根本はあまり変わってませんので、超暇な方がいましたら読み返してみてもいいかも？　程度です笑

## カカの天下４５７「休み時間、そのいち」

キーン、コーン、カーン、コーン！

よう、テンカだ。いちおー言っておくが、今の音はオレの登場テーマ音ってわけじゃねぇからな。授業が終わったチャイムの音だ。

さて……

どかんと椅子に座り、教卓を上から抱きしめるように上半身を預けて……だらー……オレは死んでる……死んでるっぽい状態……油断すると寝そうだ。意外と気持ちいいのな机の上って。

「あの、テンカ先生？」

「んだよ」

「授業、終わりましたけど……職員室に戻らなくていいんですか？」

「どうせ次の授業もオレがここでやるんじゃねぇか。面倒だからまとめて準備してきたんだよ。だから戻らなくていーの」

「そ、そうですか」

そそくさと自分の席に戻っていく……えっと……生徒そのいち。

名前忘れた。

まーともかくそういうこった。今日はオレもここで休み時間を取

る。そしてついでにガキどもが休み時間をどういう風に過ごしているか観察しようという魂胆だ。教師たるもの、生徒の様子には注意しねーといけねぇからな。

なんでかって？　いつヤツらがおもしろいことするかわかんねーからだろが。

さて、と。教卓に抱きついたまま教室を見渡す。ガキどもは何してる？

あれは……サエとサユカか。なんか喋ってるな。

「ねーねーサエすけっ、トメさんからもらったぬいぐるみの名前、何がいいと思うっ？」

「どんなのもらったのー？」

「おっきーなオラウータンのぬいぐるみ。こないだわたしが買ったオランダの親らしいわよ。トメさんったら、カカすけにオランダの話を聞いて、わざわざ探してきてくれたんだってっ」

「あー、おらおら言いながら買ったやつね。ぬいぐるみの名前がオランダになったのはたしか……オラんだ！　とか言ってたからだよね」

「そうよ。おらおらっ」

「じゃー逆に、オマエんだ！　っていうのはどうかなー」

「オマエンダ？　なんか言いにくいわね」

「じゃーもう直球で、オラ親だ！　でいいんじゃ」

「オラそんなのいやだっ！」

はー、ぬいぐるみなんか買ってやったのかトメのやつ。買うとき恥ずかしかっただろうなー。今度からかってやろ。ぬいぐるみに名前つける恥ずかしさには負けるだろうが。

……ふむ。サユカのやつ、やっぱトメって名前のぬいぐるみも持ってるんだろーか。今度聞いてみよう。

ん？　なんだか廊下が騒がしいような。

だらんとしたまま首だけを横に向けて、開きっぱなしの教室の扉の向こうを見てみる。

「あははは！」

ドドドドド！

……なんか横切ったな、今。

身体を起こすのは億劫だったが気になってしまったので、しぶしぶ抱きついていた教卓を手放す。のろのろと歩いて廊下を覗くと、なんかいた。

オレだけじゃなく廊下にいる生徒、その全員が唖然としてそれを見つめている。そのうちの一人の生徒がみんなの気持ちを代弁してくれた。

「なあ、さっきからカカが見知らぬ子をおんぶしながら爆笑して爆走してるけど、アレなに？」

わからん。

「あはははははは！！」

ドドドドドドドド！！

「ここ怖いです怖いです！　ブレーキはどこですかこれですか！　えい！　えい！」

「どこを叩いてる！？　そこはアクセルだー！　すぴーどあーっぷ！」

「クララしょっくです！」

「あはははははははははは！！」

ズドドドドドドドド！！

よーわからんけど楽しそー。にしてもあの子。たしか教頭から何か聞いてたような……内容は覚えてないが、たしか放っておけみたいな話だったはず。んじゃ放っておこう。

さて教卓に戻るか、と踵を返そうとしたところで、意外な二人組が廊下の向こうから歩いてくるのが見えた。ああ、そういやさっきの授業が終わるとき、イチョウにプリントを運んでくるように頼んだんだった。しかしそれをアヤが手伝っているとは。

「いいのですか？　手伝っていただいて」

「いいわけないでしょ。アイドルたるもの、プリントなんか私が『ほしい』と手を差し出したら男子がサッと持ってきてくれるくらいがちょうどいいのよ！」

「そ、それは便利ですね！　でしたら、えっと、なぜにわたくしを手伝ってくださるのですか？」

「それやってたら評判悪くなったから」

そらそうだ。

それにしてもあの二人……同じく合唱部に入ったし、意外とうまくやってんのな。実質アヤと仲いいのってニシカワくらいだったからちょっと心配だったんだよな。よかったよかった。

お？　そのニシカワは――他のクラスのヤツと喋ってんな。あぁ。相手は財布、じゃなくてタケダか。

「君も懲りずによく来るねぇ」

「愛ゆえに、仕方のないことだ！　そう言うニシムラ君だって」

「あ、僕の名前はニシカワね」

「……先週はニシムラだったではないか」

「週替わりなんだよ」

オマエの名前は定食か。

「と、ともかく！　君だってこの間、土曜日に授業があったとき――そう、お楽しみ会の練習のときだ！　アヤ君にお弁当を作ってきていただろう！　それこそ愛の証ではないのか？」

「君さ、愛とか言ってて恥ずかしくない？」

「ふっ、そのようなことを気にしていては本物の愛などつかめまい！」

「暑苦し……カカちゃんの嫌いそうなタイプだ」

「何か言ったか？」

「いんや、なんにもー。弁当はね、仕方なくだよ。アヤ坊んちは仕事忙しいから、そういうときのお昼は親からお金もらって『適当に買って済まして』って言われてるんだけど……あいつ、お金あったらすぐＣＤに使うから。食費が残らないんだよ」

「ほほう、それでニシカワ君が弁当を？」

「両親の分も作ってるから、三人分も四人分も変わらないしねー」

「……君、意外となんでもできるよな。俺は勉強しかできん。料理も運動もうまくできないし、そしてなにより」

「恋愛がうまくできないよね」

「そうそ――黙れ小僧！！」

小僧がそれ言うな。まぁ男子は男子なりに仲良くやってるようだな。このクラスって女子ばっか目立ってるからわかりにくいが……お？

キーン、コーン、カーン、コーン！

さて、授業だ。

ゆっくり休んだし、頑張るかね。

――うむ、なかなかに有意義な休み時間だった。

## カカの天下４５７「休み時間、そのいち」（後書き）

特別オチのない、まったりとした（？）休み時間をお届けしましたー。

しばらくはこんな感じでダラダラいこーかと思いマス。

誕生日がいろんな意味で激しかったので……ね笑

## カカの天下４５８「ゆめ夢、忘れることなく」

こんにちは、夢です。

じゃなくてカカです。でも夢でもあります。

そう。現実の私は眠っていて、ここはヘンテコ空想世界……のはずです。どう見てもいつもの居間にしか見えませんが。

「あむあむ」

そしてちょこんとテーブルについてタイヤキを食べているサエちゃん。なんて普通なんでしょう。これは本当に夢なのでしょうか？

「ねぇサエちゃん」

「あげないよー」

この世界のサエちゃんもがめついです。

それにしても困りました。やることがありません。せっかく夢の中なのですから、もっと変なことがしたいもんです。

その想いが通じたのか、サエちゃんはタイヤキをくわえたままこちらを向いて、ポン、と私になにかを手渡してきました。

たまごです。普通のサイズのたまごです。

「それ温めてー」

「えっと……どうやって？」

「レンジで地肌で」

どっち。

疑問が浮かびましたが夢の中なので細かいことは気にしません。
レンジを使うのが面倒だと思った私は手で直接温めることにしました。

大切に、包み込むように。

私はたまごを、ぎゅっと握り締めました。

すると、どうでしょう。

つぶれました。

力を込めすぎたようです。

しかしたまごの中身は卵黄ではなく、小さな小さなヒナでした。
いつかテレビで見た、ひよこの赤ちゃんに似ていますが……実際はなんなのかよくわかりません。

「ねぇサエちゃん。これって」

「いま食べるのに忙しいー」

サエちゃんはいつのまにかタイヤキではなく鯛を食べていました。

「よく食べるね」

「たくさん食べないと大きくなれないからーぱくぱくぱく」

全然聞く耳を持ってくれません。仕方なく他に聞ける人がいないか探してみます。

するとシュー君を見つけました。

いつのまにか部屋の隅にいたのです。なぜか首しかありません。

「ねぇシュー君。これ、何のヒナ？」

「サユカンドラゴンだよ」

すると、どうでしょう。

ヒナの身体はものすごい勢いで膨張していき、あっという間に城のように大きなドラゴンになってしまいました。バカでかいです。天井とかはいつの間にか消えてました。

美しい銀色の体躯、鋼のように鋭利な翼――雄叫びは大地を揺らし、破壊神たる存在を見せ付けています。

立派になったねサユカン。

「これ、どうしようか？」

シュー君に聞こうかと思ったのですが、首だけだったシュー君は

いつの間にかドラゴンに踏み潰されていました。

なぜか笑っていました。怖いのでスルーします。

他に話ができそうな人は……あ、キリヤ君を見つけました。

なぜか爆笑してます。

「ねーキリヤ君。私、何をすればいいと思う？」

「あはははははは！　はな……は、話を……ふ、ふはは、話をすればいいのではないですか、あ、あはははは！」

うざいくらいに笑いすぎててなんだか苦しそうですが、なるほど話ですね、わかりました。

しかしサユカン、でかいです。顔が見えません。私も顔を合わせられるくらいの高い位置にいかないとお話なんかできません。

「私が手伝ってあげるよー」

振り返ってみると、そこにはドラゴンと同じくらい大きなサエちゃんが座っていました。いっぱい食べて大きくなれたみたいです。

「んじゃお願い」

サエちゃんは私をうまいことつまんで肩に乗せてくれました。そしてサユカンドラゴンに声をかけてみます。

「ごめんくださーい」

ドラゴンは長い首をぐりんとこちらに向け、ものすっごい怖い顔で睨みつけてきました。目つき悪いですサユカン。

しかしそんなことは些細なことです。なんとドラゴンの鼻先に仁王立ちしている人間がいたのです。

Tシャツに短パン姿のお姉でした。ラフな格好なくせに明らかにドラゴンより強そうなのはどういうことでしょうか。

「クララもいます！」

いました。

ぱかりと開いたドラゴンの口の中に。

「ごっくん」

何か聞こえた気がしますが無視します。

そんなことよりも大事なことがあるのです。

このドラゴンを従えるお姉に、言わなければならないことが！

「お姉！！」

「なにさ！？」

「ソレ貸して」

「はいよ」

夢はそこで終わりました。

むくり、と。

ぼんやりとしたまま身体を起こして、私は言った。

「ソレって何」

どうしても思い出せない。

「おーカカ。起きてたか……どした？」

「ソレって何？」

「は？」

かなり鮮明に覚えてたのでトメ兄に説明してみる。

「ふーん……ソレ、ねぇ。んー、夢って心の底で思ってることが大事だって言うからな。貸してほしかったってことは、現実でいつもはあるのに、その夢の中ではなかったもの、じゃないかな。よくわかんないけど」

現実でいつもはあって、その夢の中ではなかったもの。

――ああ。

コレか。

「ふぇ！？　な、なにふんらカカ！」

なんとなくソレのほっぺたを引っ張りながら、私は新たに浮かんだ疑問に首をかしげていた。

なんでお姉が持ってんのさ。

それは最後までわからなかった。

## カカの天下４５８「ゆめ夢、忘れることなく」（後書き）

というわけで夢のお話です。
実際に私が見た夢を加工したものだったりしますが、いかがでしたでしょうか笑
カカのソレは見つかりましたが、私のソレは見つかりません。果たしてなんだったのか……いまだに不明だったりします。

あと、昨日のお話でミスして書いてしまった箇所があり、読者様のお声で気づいてから修正するまで一時間ほどそれを曝してしまいましたが……お目汚しされた方々には深く謝罪いたします。
今後はそういったミスがないように精進したいと思います！！

## カカの天下４５９「まだ見ぬ未来」

こんにちは、カカです。

今日ものんびり給食タイムを終えて、サエちゃんとサユカンと雑談をしていたのですが……

「『お残し』するごはいねぇがあああああああああ！！」

どっかで聞いたようなフレーズが向こうの教室から。

「きたわね、ヤツがっ！」

「きたみたいだねー」

「見にいこう」

三人そろって廊下に出てみると、ちょうど粛清し終えたらしいおばちゃんが教室から出てくるところでした。

「おーい、南おばちゃん！」

「あらま！　久しぶりね、未来のセクシーダイナマイツ！」

「その呼び方やめてください」

そういやこういう言い方する人だっけ。

「まーまー、いいじゃないのーセクシーダイナマイツ」

「そうよっ！　ミスセクシーダイナマイツ」

「二人ともやめて」

「じゃーセクシーボンッ！！」

何がボンか。

「ならミスいい身体」

おじさんくさいよサユカン。

「むむー、おばちゃん！」

「あいよ」

「この二人もそんな感じで呼んでみて！」

おばちゃんは愉快そうに頷き、まずはサエちゃんをじろりと眺めた。

「あんたは未来の貧乳だね！　細っこい。しっかり食べなよ」

「ひんにゅーってなに？」

「カカすけったらそんなことも知らないのっ？　貧乏な胸のことよ」

そうなのか。それはサエちゃんにとってもショック……かと思いきや。

「あははー、最近はそういうニーズが多いので構いませんよー」

よくわかんないけど平気みたいだった。

じゃあ、サユカンは？

「未来のツンデレさね」

「なんでわたしだけ身体関係ないんですかっ！？」

「じゃ未来のデレデレ」

「「間違いない」」

「なんで即答してんのよそこの二人っ！？」

だって間違いないかと。

「あっはっは！　ほら最近さ、ツンデレって言葉が流行ってるんでしょ？　あたいにゃよくわかんないけど、ちょっと使ってみたかったのよ！　ごめんねぇ」

バンバン！　とサユカンの肩を叩く南おばちゃん。痛そうだけど、その気さくさが心地いいのかサユカンは笑ってる。うん、この人はいい人だ。

と、そんなおばちゃんの笑い声を聞きつけてきたのか、見慣れた先生二人が廊下の向こうから歩いてくるのが見えた。

「あらまぁ、テンカちゃんに教頭！　元気で食べてる！？」

「当然だ。食については昔から南さんにうるさく言われているからな」

「へぇ、教頭もなんだ。オレもよ、小さいころからおばちゃんには躾けられてな」

おお、そうなんだ。意外な繋がりが……二人とも身内だったりするのかな。

その疑問を口にしようとしたんだけど、サエちゃんに先を越された。

「ねーねー、おばちゃーん」

「ん、なんだい」

「教頭先生とテンカ先生を、私たちを呼んでる言い方にするとー、どんな風になるんですかー」

あ、それは興味ある。私が「未来のセクシーダイナマイツ」だったりするなら……

「そうだねぇ。教頭は……昔は格好よかった」

「やかましい」

「テンカちゃんは……昔は女の子」

「待てやコラ。たしかにそうだが、それだと今は女じゃねぇみてーじゃねぇか！」

や、その通りだと思うんですけど。

「その通りだよ」

うわハッキリ言ったこの人。

「まったく……小さい頃は可愛く『あたち』とか言ってたくせに、いつからこんな男言葉を覚えるようになったのかね？」

「うるせぇな。オレにもいろいろあったんだよ」

「あっはっは！　ま、そりゃそうだろうね。あたいが見れるのは食事くらいなもんだ。心のほうはとんとわからないからねぇ！　だからこそ食事に関してだけは本気で見ていくからね、今後も覚悟しときなよ！」

豪快に笑い飛ばし、豪快に断言して、南おばちゃんはのっしのっしと去っていった。

「元気だよなぁ、あのおばちゃん」

「うむ、昔からまったく変わっておらん」

お、ちょうどいい。さっき思ったこと聞いてみよう。

「あのあの、テンカ先生も教頭先生もやけに親しげでしたけど、親戚か何かだったりするんですか？」

「あ、それわたしも気になったわっ！　おばちゃん昔のこととかよく知ってましたよねっ！」

「南おばちゃんが親戚ということはー、セイジ食堂やファミレス東治の弟さんたちもみんなの血縁ということにー……なんだかすごい話ですね」

サエちゃんの言うとおりだとしたら、たしかにすごい繋がり方だ。

しかし。

「いんや、ただの近所のおばさんだ」「否、単に近所に住んでいただけの関係だ」

――なんて、二人ともあっさりと首を横に振るのだった。

「えっ!?　近所のおばちゃんってだけで二人とも知ってたんですか!?」

「いや、あの人の近所に住んでいる人間は大抵知ってるぞ。てめぇらも見ただろ？　あの性格だ、人んちの食事情にまでズンズン口を出してくんだよ」

「それだけではない。彼女は町内で料理教室を開いていてな、それが栄養バランスまで考えられた完璧なものだと評判でもある。さらには先ほどサエ君の言ったセイジ食堂やファミレス東治にまでテコ入れしているらしいぞ。栄養バランスや料理の出来を確認しにいくそうだ」

「なんだか命かけてますねー」

「あぁ、まさしくその通りだろうな。あの人は誰が見ても文字通り『給食のおばちゃん』なんだ」

「私は彼女と歳も近いから昔から知っていてな。なぜなら有名だったからだ。長女に振り回されまくる二人の弟……源三三兄弟の名前はな。そう、昔からああだよ、彼女は」

ゲンゾウさんきょーだい。ゲンゾウって苗字だったんだ……

「カカちゃんが大きくなったらああなるかもねー」

「うそっ！？」

「あ、ちょっと想像できるかもっ。給食のおばちゃんにはならなくても、今とあんまり変わらなくて騒ぎを起こしてる気がするわっ！」

「まぁ間違いなく有名にはなりそうだな」

「同意だ」

教頭まで！

むー、なにさなにさ。

「有名になるんなら私だけじゃなくてサエちゃんもサユカンもセットだよ、絶対！」

「まぁ、間違いねぇな」

「同感だ」

そら見たことか！

血のつながりなんかなくたって、私たち三人はセットなんだからね！

「ほどほどにしとけよ、未来の問題児ども」

……なんで問題児と断定されるん？

## カカの天下４５９「まだ見ぬ未来」（後書き）

久々におばちゃんの登場です。マジメっぽいサブタイトルのわりには中身はこんなんです笑

ちなみにおばちゃんが「未来の～」と言っているのはあくまで食事情を見ての予想ですので、必ずそうなるとは限らないのであしからず笑

……あ、サユカちゃんの場合は必ずといってもいいかも笑

まぁ、ともかく。

みなさん、食事はしっかりとりましょうね＾＾

# カカの天下４６０「クララいきます！」

こんにちは、サエですー。

「クララです！！」

「あれ？　クララちゃん。誰に挨拶したのー？」

「よくわかんないですけど、なんとなく言ったほうがいいような気がしたのです」

「そっかー」

今日はこんなに行儀のいいクララちゃんと街を歩いています。これはクララちゃんからお願いしてきたことで、曰く「街にはフシギがいっぱいです！　いろいろ教えてほしいのです！」だそうです。

一番フシギなのは自分のくせにねー。

「それで、今日は何を教えればいいのかなー？」

「クララ、ずっと疑問に思ってたことがあるのです。あの人たちです」

クララちゃんの指差す先には、疲れた顔で歩いているサラリーマンの皆様。土曜日だっていうのに大変だねー。お疲れさまですー。

「あの人たちは何者なのですか？　同じような服を着ていらっしゃいますが」

「あれはスーツって言ってねー」

「スーツ！？」

あれ、何に驚いてるのかな。

「スーツってあれですか！？　着たらパワーアップしたり、変身したり、代わりに戦ったりするあのスーツですか！？」

えっと……あれかな。よく知らないけどアニメとか戦隊もののヒーローが着たりする『なんとかスーツ』のこと言ってるのかな。どんなのがあるのかわかんないけど、とにかく着たらパワーアップして敵をやっつけるんだよね。

「じゃあじゃあ、あちらの皆さんは毎日戦っておられるのですね！？」

「そうとも言うかなー」

「日本を守るために！」

「うん、間違えてはいないよ」

「クララ感激しました！　ちょっと応援してきます」

言うが早いか、クララちゃんはダッシュで道行くサラリーマンへ突進していき……

「こんにちは、がんばってください！」

「へ？　あ、ああ。ありがとう」

「どうも！　いつもご苦労様です！」

「わっ、な、なんだよ……まぁ、ありがと」

「お疲れさまです！　今日は誰と戦うんですか？」

「へ、あ、んと、部長かな」

次々と物怖じせずに声をかけていくクララちゃん。

なんておもしろいんだろう。

しばらくそんなことを繰り返して……やがてクララちゃんは晴れやかな顔でこちらに戻ってきた。

「クララ満足です！」

うんうん、私もおもしろいものが見れて満足だよー。

「他に気になることはあるー？」

「はい！　あちらの方々のことを教えてほしいです」

クララちゃんの指差す先には、肩を組みながら歩いているカップルの皆様が。

「ああいう風にくっついている人がいっぱいいますけど、あれはど

んな意味があるのですか？」

「あれはねー、うんとねー、肩を組んだりしてるとねー」

わかりやすく言うと……

「子供ができるの」

「そんな重大な意味があったのですか！？」

うん、間違ってはいないよね。将来、生むだろうし。何組かは。

「人の子供ってそんな簡単にできるものだったのですね……」

「うん、簡単にできすぎちゃうから気をつけなさい、って世間じゃ注意されてるんだよ」

本当のことだよね。

「わかりました。じゃあクララ、祝ってきます！」

元気良く言うと、クララちゃんは先ほどのように道行くカップルに向かって突進していった。

「こんにちは！　おめでとうございます！」

「へ！？　あ、うん、どうも。なにかくれるの？　違うのか」

勝手にがっかりして去っていく人……

「どうも！　元気な子供が生まれるといいですね！」

「えぇ！？　いや、僕ら、まだそこまでじゃ……ねぇ？」

「あんたの子供？　アハハ、きもーい」

「泣いていいですか？」

なんだか微妙な関係にトドメをさしたり……

「こんにちは！　男の子ですか？　女の子ですか？」

「あらぁ、あたしたちの、こ、と？」

「うっふぅん、どっちかって言われたらどっちなのかしらんアタシたちって」

「心は女よん」

「アタシもよん」

「でも身体は……いやん」

「いやぁん」

オカマなカップルをなぜか喜ばせたり……

「日本の未来はあなたたちの子供にかかってます！！」

「そ、そうなのか……！」

「あの……私、前から言おうかと思ってたんだけど」
「待って、僕に言わせて！　その……そろそろ子供、作らない？」
「喜んで！　じゃあ早速！」
「Ｇｏ！」
なんだかカップルを後押ししてしまったり……
クララちゃんはいー感じで暴走して私を楽しませてくれた。いやー、ツッコミがいないときのクララちゃんって本当に楽しいなー。
「クララ大満足です！」
私も大満足ですー。
「他には何かある？」
「はい！　あ、あの……あちらの、方々」
クララちゃんの指差す先には、街路樹をパチパチと刈り込んでいる作業員の皆様が。
「あの人たちは何者なのですか！？」
「何者って……えっと、街にある木を管理する人たち、かなー？」
「管理も何もないです！　あの人たちは皆の腕を叩き折って回って、

最後には斧で胴体をぶった斬るんですよ！？」

あー……木そのものであるクララちゃんにはそう見えるのかー。

「そして臓物を加工していろんなものを造ったり……おそろしやおそろしやです。人間怖いです斧怖いです。なんまいだぶなんまいだぶです」

それ人間には効かないよー。どっちかというとクララちゃんらへんに効くよー。

んー。でも業者さんだって木のためにやってることなんだよねー。あ、でも歩く人の危険がないようにするためでもあるのかー。だとすると、やっぱり人間の勝手な都合でひどいことしてることになるんだ……

「よし、抗議文でも書いてみよーか。木を切ったりするのは止められないと思うけど、資源を大切にして切るのを減らすことはできると思うしー」

「はい！　できることがあるなら喜んでやります！」

「うんうん。木、本人からの抗議文だからきっと説得力あるよー」

その後。

私とクララちゃんは一通の抗議文を書き上げた。送る先は日本の偉い人。カカちゃんのお父さんにでも頼んでみようかと思う。

書き上げた内容はというと……

『クララ、切られる木が可哀想です。みんな痛がってます。苦しんでます。腕を切られ、目むしられ耳を千切られ鼻を焼かれ、四肢をばら撒かれて内臓を削られて加工されて……見るも無残です。ひどすぎます。もしあなたが自分の骨を抜き取られ、それを家にされたらどんな気持ちですか？　もしあなたが――以下略』

「クララちゃん……いろんな言葉知ってるね」

「当然です！　クラライろいろわからないことだらけですけど、本能に関してだけはすごいのです！」

「それってなんだか桜の精っていうより獣っぽいけど……何の本能？」

「生存本能です！！」

なるほどー。それに関してはクララちゃんが先輩だー。

――と、いうわけで。

みなさん、資源は大切にしましょー！　というお話でしたー。

## カカの天下４６０「クララいきます！」（後書き）

いきましたクララちゃん！
我らが腹黒サエちゃんに楽しく遊ばれております。
でも私が最終的に言いたかったのは……

資源を大切にね！　自然だって生きてるんだから！

ということだけです。
う、嘘じゃないですからね！？

## カカの天下４６１「ダイエット・ラン！」

「ねね、手芸クラブで何作る？」

「それってわたしたちで決めていいものなのかなっ」

「そういえばまだ一回も活動してないんだよねー」

「クラブ員の調整とかで時間かかってたらしいわよ。わたしたちみたいにすぐ解決方法を見つけられなかった人たちがいたみたい」

そうなんだー。あ、ども。カカです。

ただいま昼休み。給食も終わり、いつもの三人で雑談していたのですが……

「――カカ」

「もし好きに作っていいんだったら、私は折れかけた木っぽいアクセサリーを作りたいなー。クララちゃんにあげるの」

「――カカ」

「また微妙なもの作るね」

「――カカ！」

「きっと喜んでくれると思うんだー」

「カカカカカカカカカカカ！！」

「なにアヤちゃん。それ新種の笑い方？」

「そういう魔女っぽい怪しい笑い方はサエすけのほうが似合うわよ？」

「かっかっか、サユカちゃんったらー」

「うっさい！　あんたが私に気づかないからでしょ！」

おやおや、自称我が校のアイドル様はなにやらご立腹の様子。はてさて。

「どしたの。私に用事？」

「カカに、というか、サエとかサユカにもだけど……聞きたい、ことが、あって」

妙に歯切れ悪く言うアヤちゃん。さっきまで怒っていたかと思えば急におとなしくなったな。や、恥ずかしがってるのかな？

「あの、さ。あんたたちって……どうやって痩せてるの？」

は？　と私たち三人の声が重なる。

「私さ。最近ちょっと体重がやばいのよ」

「とてもそうは見えないけど」

「普通から見たらそうかもしれないけど！　アイドルたるもの痩せてるもんなの！　世の中のアイドルのプロポーションを見てみなさい。ズルしてるんじゃないかってくらい良いんだから！」

たしかにアイドルってそういうもんかもしれないけど……

「なんで私らに聞くのん」

「だって……その……あんたら、スタイルいいじゃない」

小学生にスタイルも何もないと思うけど。

「とにかくみんな痩せてるってこと！　カカ、あんた何にもしてないのにそんな痩せてるの？　不公平よ！」

特に意識はしてないけど……

「しいて言うなら寝る前に死ぬほどトレーニングを」

「な、なんでそんなことしてるのよ！」

「習慣かな」

小さいころお姉に叩き込まれたんだよね。

「サエは！？　あんた運動できないわりに細いじゃないの！」

「私は食べるときは食べるけどー、基本的には少食だからー」

サエちゃんは結構食べるイメージあったけど……言われてみれば

給食で余ったのを食べてるわけでもないし、うちでご飯を食べるときにもおかわりしたりしない。きっと家での朝食や夕食も少ないんだろう。お菓子を食べても太らないわけだ。

それに比べて私やサユカンはおかわりして食べたいだけ食べて、さらにおやつも食べるタイプだ。

「サユカは!?」

「わたしは運動もしてないし結構食べるけど」

「ならなんで!?」

「恋すると痩せるのよ」

そりゃあんだけ全力で恋してればね。

「えと……あんたたちのを参考にするとなると、私はどうすればいいのかしら?」

ご飯を少なくするのは家でやってもらうとして、今できることと言ったら運動と恋かな。

「あんまり疲れるのは嫌なんだけど」

む、贅沢な。それなら……あれをああして……よし。

「サエちゃん、サユカン」

私が簡単に手順を説明すると、二人は快く頷いて早速作業にかか

ってくれた。

「へ？　サエどこにいくのよ。サユカなにやってるのよ」

教室を出て行くサエちゃんと、ノートとシャーペンを取り出してサラサラと何かを書き始めるサユカン。それを見て困惑するアヤちゃんに、私はにっこりと微笑みかけた。

「しばらくお待ちください」

「……はぁ」

やがてサユカンが書き終わったノートのページを破り、四つ折りにして私に渡してきた。

「できたわよっ」

「ご苦労様。えっと……あ、そこの君」

続いて私はちょうどよく通りかかったクラスメイトに声をかける。

「なに？」

「はやて君ってさ、脚速かったよね」

「まぁ、それなりには」

「じゃさ、この手紙を体育館にいるニシカワ君に急いで届けてくれないかな。すごく大事な用件なの」

「うん、いいよ。どうせ暇だし」

特に疑問を持つこともなく引き受けてくれたはやて君は颯爽と走り去っていった。なかなかいい男だ。

「ねぇ、カカ。今の手紙なによ。ニッシー宛てらしいけど」

「手紙の内容はね……サユカン。なんて書いたの？」

「こほん――ずっと黙っててごめんなさいラブ。私、ずっと前からあなたのことが好きだったのラブ。きゃ、語尾がラブになるくらいあなたにラブだわｂｙアヤ坊」

お、アヤちゃんが漂白されたみたいに真っ白になった。

「そ、そそそ、それを書いた手紙を……ニッシーに？」

ぎぎぎ、と錆び付いたネジを回すみたいに首を動かして聞いてくるアヤちゃんに、私は晴れやかな笑顔で頷いた。

その瞬間。

アヤちゃん光の速さで猛ダッシュ。はてさて、配達人はやて君に彼女は追いつくことができるのか。今の鬼の形相を見る限り、あんなのが追ってきたらまず間違いなくはやて君は逃げるだろう。かくしてダイエット鬼ごっこの完成というわけだ。

「さすがサユカン。ラブレター書かせたら最強だね。いつもあんなこと考えてるの？」

「言わないでっ」

「ただまー」

「あ、サエちゃんおかえり。ちゃんとニシカワ君を隠しておいてくれた？」

「うん。タケダ君と喋ってるところをまとめてロッカーに押し込んでおいた。つっかえ棒もしといたよ」

これでよし。さすがの私でも本当にニシカワ君にあんな手紙を見せるつもりはない。私は手加減を知る女なのだ。

――数分後。

「ぜーはーぜーはー……か、カカ……ニシカワ、いなかったんだけど」

「あ、ご苦労様。じゃあその手紙は私が預かっておくよ」

「そ、そうか……それはともかくあのアヤさんはなんだったんだ……食い殺されるかと思った」

ひどい言われようだねアイドル。

「まぁ気にしなくていいよ。そのアヤちゃんはどしたの？」

「かなり引き離したけど、もうすぐ来ると思う……おぇ、疲れた。休んでいいか？」

「はいはい、どうぞ」

よほど必死に走っていたんだろうね。自分の席に座ったはやて君は机に突っ伏して、そのまま動かなくなってしまった。

そしてしばらくして。もっとヘロヘロなアヤちゃんがようやく戻ってきた。

「か……カカ……て……て、がみ……」

声を出すのも辛いらしいアヤちゃんは死にそうだ。やれやれ、仕方ないなぁ。私はこれ見よがしにさっき受け取った手紙を取り出して――

「あ、総理大臣だ。ちょうどいいとこに」

学校だということを微塵も気にせずにたまたま通りかかったネコの首輪に、その手紙を挟んでやった。

「――！！」

生存本能が危険を感知した総理大臣は猛ダッシュ。声も出せないアヤちゃんも負けずに爆ダッシュ。

「カカすけ……鬼ね、君。手加減とかしないわけ？」

「するわけないじゃん」

知っててもするとは限らない。

キーンコーンカーンコーン……あ、チャイム鳴っちゃった。

「アヤちゃんどうするのー？」

「えと、まぁ、残念でした」

大丈夫。いずれきっと一回り小さくなって（痩せて）帰ってきてくれるさ。

さ、授業授業……

あれ。

なんか忘れてるような。

ま、いっか。

## カカの天下４６１「ダイエット・ラン！」（後書き）

久々にカカの容赦なさを書いてみました。
んむ、カカはやはりこうでないと。

あと書きたかったのが、サエちゃんは細いということ！　ちゃっかりいろいろ食べてますけど、彼女は細くて儚くて髪の長い（？）女の子なんです！

あと、アヤちゃんはアイドル志向で「やせすぎ」を目指していますが、現時点では「やせている」な部類です。普通はそれで充分です。なので皆さんは作中のような無茶なダイエットは控えましょう。

あと……そうそう。感想１０００目を踏んだ記念ということで特別に「はやて」様を特別出演させていただきました（超遅）。キャラ設定とか適当ですが笑　キリ番記念とかそんな感じで……

あと……なんか忘れてるような。
はて？

## カカの天下４６２「友達できた？　がんばれタケダ」

やあ、俺タケダ。

カカ君への愛を貫こうと日々精進している好少年さ！　別に少年が好きなわけじゃないぞ。好青年の小学生版だぞ！

さて、それはさておき。

「なぁ、タケダ。僕たちいつまでここいればいいのかね」

「わからん」

これも精進のうちなのか？　試練なのか修行なのか？　男子と二人で狭いロッカールームで密着しあってるのが？

勘弁してください。

「タケダ……暑い」

「俺だって暑いわ」

「タケダ……なんかしょっぱい」

「どういう意味だ！　ええいニシカワ。おまえのほうが入り口に近いだろう。なんとか開けられないのか！？」

「さっきからやってるけどできないよー。つっかえ棒を落とせればいいんだけど」

このロッカー。別に鍵付きというわけでもないし、つっかえ棒がセットできるような作りになっているわけでもない。元より掃除用のロッカーとは鍵など必要のないものだ。

それなのになぜつっかえ棒などができるのか。

答えは簡単だ。ロッカーが歪んでおり、生まれた隙間にほうきを挟めるようになった。そして簡易的な牢獄が出来上がってしまっただけの話。

なぜロッカーが歪んでいるかというと、なんでもカカ君の回し蹴りをくらったことが原因らしい。さすが我が愛すべき女子。イカスイカスけど迷惑。

「むう、こうなったらもっと歪ませてほうきを落とすしかないのだろうか」

「あ、それいいな。もう授業始まってるから周りに誰もいないだろうし。じゃあどうしよう。適当に暴れればいいのか？」

「まぁ待て。まずは俺が――はぁ！」

気合一閃。放たれた拳は一直線にロッカーの壁を砕く！

ポキ。

俺の骨が砕けた。

「よっわいなーおまえ」

あまりの痛みに言葉も返せない。

「よし、僕がいくぞ――破ぁ！！」

俺のわき腹が大破っ！！

「ぬ……おおおおお……！」

立て続けに起こった人体破壊に悶絶する俺……

「あー、ごめんなタケダ」

「なぜだ。俺が何か悪いことしたか？　一日三善くらいしているというのに！」

「一日に三千しか稼ぎがないの？　それは安いよ」

そうだったのか……これからはもっと善いことをしよう。

「世の中の大人さんたちはもっと頑張って稼いで……ってこんな話してる場合じゃないや。今度こそ――いやぁ！！」

俺のみぞおちがいやぁん!?

「……っ！！」

「あー、ほんとごめんなタケダ」

息もできない俺……しかしそのかいあってか外に出れた。俺がも

らった衝撃がそのままロッカーまで貫いていたらしい。おそるべしニシカワ。

――と、ちょうどそのとき、聞きなれたキンコンカンコン音が。

「むぅ、授業を丸々一つサボってしまったか」

「まぁ仕方ないよね……あれ、こっちに向かって走ってくるのって、タケダのクラスメイトじゃないか？」

おお、本当だ。何やら必死な形相だが、俺に用なのか？

「もう！　どこ行ってたのさタケダ委員長！　プリントを運んでくれるはずだった委員長がいなかったおかげでさっきの授業、じーさんの変な話で終わっちゃったじゃないか！」

ああ、なるほど。我がクラスの担任、通称じーさん先生はプリントを頼りに授業を進めていくのだ。それが無いとじーさんは「仕方ないのぉ。ではこんな話をしようかの」とか言って、かつて竜を倒しただの宇宙人を食べただの金髪美人と海に沈んだことがあるだのと荒唐無稽な武勇伝を語り始めるのだ。

まったく、だから俺がいろいろと抜かりなくやっているというのに。

「ええい、だからいつも言ってるだろう。各授業に使うプリントは朝のうちに全て持ってきて棚の上に置いてあると！」

「え、あれ一日分あったの！？」

「当たり前だ。あのじーさん先生になど任せてはおけんからな。俺がクラス委員長になった日からすでにそう提案してある」

「そ、そうだったんだ……わかった。今度から気をつける」

すごすごと去っていく我がクラスメイト。さて――ん？

「なんだニシカワ。変な顔して」

「感心した。おまえ意外と手回しいいのな」

「ふん、すべては休み時間などにカカ君へ話しかけるチャンスを伺う時間を作るためだけにやっていることよ」

「それだけなのかよっ。ならそもそもクラス委員長なんて引き受けなきゃいいのに……」

「仕方なかろう。うちのクラスメイトのほとんどが勉強をうまくできない連中ばかりだ。俺が雑務をこなして他の者には勉強に集中してもらうのが道理だろう。この程度じゃ俺の成績は落ちんしな」

ニシカワは「ほぇー」と妙な音を出しながらぽかんと俺を見つめた。なんだ、妙なヤツだな。

「タケダって意外とスペック高いのな」

「おお？　それは俺も先日にニシカワに思ったことだぞ。ふっ、俺たち。なかなかいいコンビになりそうじゃないか。俺はカカ君、君はアヤ君に振り回されているところなんかもそっくり――」

「あれ。なんだこのネコ」

む、なんだ人がせっかくいいことを言おうとしていたのに。ニシカワはネコの首輪から紙きれを抜き取って眺めている。それにしてもこのネコ死にそうなほど疲れてるな。

「そ……それ……よ、読んだら……だ……め」

おお？　ネコと同じくらい死にそうなアヤ君が現れたぞ。

「ほうほう、アヤ坊が僕にラブ？」

「そ、それは違うんだか――げほげほ！！」

「ん、わかってるよそんなの。だって字が違うし。とりあえず呼吸を整えなさいな」

ニシカワがそう促すと、アヤ君は意外にもおとなしく従ってスーハースーハーと深呼吸した。

そして。

「す、少しは慌てたりしなさいよニッシーのバカ！！　私がバカみたいじゃない！」

「どっちがどっちかわからないよアヤ坊。あ、でもよく言うか。バカって言うほうがバカと」

「なによ、それならニッシーは今二回もバカって言ったじゃない！」

「そっちは三回目のバカだよ」

「そっちも三回目のバカじゃない！」

「はいそっち四回目ー。僕はこれで終わるよ。だからアヤ坊のほうがアレだね」

「アレって言ったほうがアレなんだからね！」

「二回も言ったアヤのほうがアレだろ――」

「そっちだって今アレって――」

五分後。

もうすぐ次の授業が始まることに気づいたアヤ君が話を中断して踵を返したところで、ようやく話は終わったようだ。

「ふー……あ、ごめんなタケダ。放っておいて」

「仲……いいではないか」

「へ？　あぁ、まぁね。なんだかんだでずっと一緒にいるし」

「おまえなんか仲間じゃないやい！」

「どうしたんだよ急に」

「俺……カカ君と五分以上も話したことない」

「え、そこまで？」

「そこまでとか言うなあああああああ！」

うわぁぁぁぁぁぁぁん！　と泣きながら走った。

走りまくった。

何も見えない、何も聞こえないと言わんばかりに。

すると――

「これ君。授業中に何をしている」

チャイムも聞こえなかったらしい。

「よろしい。君の根性を一度破壊し、叩きなおすとしよう」

その前に涙腺が破壊しました。

## カカの天下４６２「友達できた？　がんばれタケダ」（後書き）

はい、昨日の忘れ物、タケダとニシカワのお話を書いてみました。
男の友情ですね！（どのへんが？

いやーしかし。
男だけですね。
むさくるしいですね。
感想欄にあった「しょっぱい」って響きが気に入って使ってしまったくらいですからね。

たまにはいいでしょ！
……ほんと、たまにはにしよう。

## カカの天下４６３「ござる」

「ただいま」

おかえり、って自分で言ってどうするんですかね。トメです。

「おかえりでござる！」

そうそう、やっぱ可愛い妹の出迎えがないと帰ってきた気がしないでござる……ござる？

「それがしはなにがしなこおりがしをしょもうじゃ」

何言った、今。

「あー、カカ。今日はなんの遊びだ？」

「武士ごっこ。最近流行ってるらしいよ」

そんなもん流行るか――そう言いかけてふと思い出す。たしか、この間見たテレビで……そうそう、メールとかで武士語というものが流行っていると特集をしていた。それのことかな。

「へー。で、さっき何て言ったんだ？」

「それがしはなにがしなこおりがしをしょうもうじゃ」

なんかよくわかんないけど「がしがし」言ってるからお菓子でも用意すればいいんだろう。

「アイスなら冷凍庫にあっただろ。今日のおやつ分なんだから勝手に食べればよかったのに」

「ん、これ言いたかったから食べずに取っておいたの」

律儀というかなんというか。とにかく目的を達成したカカは一目散に台所へと走っていった。食べたくて仕方がなかったんだろうね。

僕ものんびり部屋に戻り、部屋着に着替えて台所へ。今日の夕飯分の材料は残ってたはずだから買い物もしなくていいし、このまま用意を――

「トメどの、拙者は質問があるでござる」

台所に入るとまたもやござる娘が現れた。仕方ない、付き合ってやろう。

「ほほう、何用でござるか」

「台所にザルは何個ある？」

「一個だが」

「それじゃ五ザルじゃないでしょ！！」

この子ほんとワケわかりません。

しかしこれはまだまだ序の口。カカの言葉遊びはその後も続いた。

――例えば夕食どき。

「ほらよ」

「かたじけない」

いただきます、と両手を合わせ、もしゃもしゃと鶏のから揚げをやっつける。

そして食べ終わると。

「かたづけない」

「片付けろよ食器！！」

――例えば居間でのんびりしてるとき。

「片腹痛いわ！」

「何がだよ」

雑誌に落としていた目線をあげると、カカはビシッとテレビを指差していた。いまやってる番組は、ニュースか。

『――片方の腹部だけが削ぎとられた状態で発見され――』

「片腹遺体は？」

「聞かれても知らんて」

――例えばその後、カカが台所でとある物を見つけたとき。

「トメ兄！　台所に武士がいた」

「そんなもんを料理する予定はないぞ？」

硬くて食えそうにないし、などと思いつつ台所へ行ってみると…

…なるほど。カカが『ぶし』を持っていた。

「かつおぶし！」

「それ味噌汁用の武士だぞ」

「そっか。武士道とは汁物と見つけたり、ってこのことだったんだね」

「死ぬことと見つけたり、な。難しい言葉を知ってたのは感心するが」

まぁ味噌汁にしたら武士も死ぬけどさ。

――例えば座ってテレビを見ていて、背中をくすぐったい感触が通り抜けていったとき。

「……なにする」

「ものさしで斬った」

「なぜ」

「斬り捨ててごめん」

「それ『て』が一つ多い」

「ごめん」

「許す」

「じゃあ捨てるね」

「おい、僕を引きずってどこへいく」

「ゴミ箱」

「それは許さん」

「ごめん」

――例えば、二人で暇を持て余してるとき。

「あ、暇つぶし！　暇つ武士！」

唐突に思いついたようでござる。

「その『つ』にはどんな意味があるんだ？」

「む。じゃー暇な武士」

「おまえのことか」

「左様！」

「カカって武士だったのか」

「さよー！！」

「さよーけ」

「サヨってだれ？」

「知らんわ」

そんな感じで遊んだ一日でした、でござる。

## カカの天下４６３「ござる」（後書き）

本日は軽めのお話にしてみたでござる。
昨日、一昨日とそこそこボリュームあったからでござる。ここらで休憩でござる。
しかし某はメールなどにかような言葉は使わぬのだが、世の御仁はどうなのでござろう？

# カカの天下４６４「手芸部の開始」

どうも、カカです！　いきなりですが張り切ってます！

それというのも、ついに、ついに、ついに！　クラブ活動の開始だからです！

祝、手芸部発動！　これは気合いれて頑張るしかないっしょ。

「で、オレがこのクラブの顧問になったからよろしく」

「「「似合わねー」」」

「いやかましいわ！！」

抜群のコンビネーションを誇る私たちに怒鳴りつけているのは、お察しの通りテンカ先生である。

「オレだってもともとは別のクラブの顧問だったんだよ！」

「じゃあなんで手芸部なんて破滅的に似合わない部に？」

「カカがいるから面倒みれるのはオレしかいねぇって押し付けられたんだよ」

私って有名人っ！

「てなわけで、だ。妙なことすんなよおまえら。手芸部って意味わかってんだろうな？」

バカにしないでいただきたい。意味もわからずこの部にこだわるわけないじゃないか。

「よし、サエ。答えてみろ、手芸部とは何をするクラブだ？」

「あらゆる『手』を使って他人に『芸』を強制し、それを眺めて笑う『部』でありますー」

「この上なく明朗に無理やりボケるな。カカ、答えてみろ」

「手芸部。しゅげい部。しゅげー部……すげー部？」

「その考え方がすげーよ」

や、そんな褒めないでくださいよ。

「サユカは？」

「すいません、ボケれませんっ」

「ダメだな。この二人を見習え！　もしくはボケれないならツッコむべし」

「はい、わかりましたっ！」

ちょいとお待ちくださいな。

「なんだか変な方向に話が進んでますが。先生の方こそわかってるんですか？　手芸部の意味」

「あん？　てめぇらが揃ってんだから何だか知らないが漫才でもやるんだろうが」

テキトーすぎです教師様。

「ま、おもしろいことする分には構わねぇがオレが怒られない程度に頼むぜ。んじゃオレは他のクラブのほう行って来るから」

「あれ、他の顧問もしてるんですかー？」

「まぁな。ずっと監視する必要のないクラブは兼用したりしてるんだよ。あー、でも放ったらかしもまずいか。よし……そっちの家庭科準備室の奥にな、前の手芸部の作品が転がってるらしい。それでも眺めて今後の活動内容を決めとけ」

「え、先生が決めるんじゃないんですか？　そういうのって」

「んだよ。漫才会場の段取りでもとればいいのか」

「……自分らでやります」

「おう、頼んだぞ」

飄々と去っていくテンカ先生。相変わらず私たち生徒に負けないくらいフリーダムである。

「えっと、どうしよーカカちゃん」

「とりあえず前の手芸部がどんなことしてたのか見てみましょうよ

っ」

サユカンの意見に賛成。私たちはテンカ先生の置いていった鍵を使って家庭科準備室の奥――倉庫っぽい部屋に足を踏み入れた。

あまり掃除していないのか、少しだけ埃っぽい部屋をぐるっと眺めると、すぐに『手芸部』と張り紙されたダンボールが見つかった。これかな？

「結構でっかいねー」

「カカすけ、任せた」

「任されよ」

よっ！　と軽い掛け声と共に、棚の上からダンボールを引きずり出す。そこそこ重いけど、日々鍛えている私の腕にかかれば大した敵ではない。

ダンボールを抱えた私は一旦家庭科室へと戻り、教卓の上にのせた。そしていよいよダンボール、オープン！

「あ、この間展示してあったやつだ」

「へー、服が多いねー」

「面白いのがいっぱいねっ。なんだかステージ衣装みたい」

サユカンの言葉どおり、そのダンボールには煌びやかな衣装がたくさん入っていた。これは後から聞いた話だけど、手芸部は演劇部

の衣装を作ったりすることが多かったそうだ。作った衣装は記念に持ち帰る人が多いけど、学校に寄贈という形で置いていく人もいるらしい。このダンボールの中身はいわば手芸部の歴史そのもの。今後の課題を決めるにはもってこいの代物だった。

「服、かぁ……私はビーズをいじれればそれでよかったんだけど」

「でもどうせならビーズも使って服も作ればいいんじゃないかなー」

「うーん、それもまた衣装っぽいことになりそうねっ」

ふむぅ。んじゃとりあえずは演劇部のお手伝いから――って、あれ。

「ね、そういえば演劇部って無くなったんじゃなかったっけ」

「「あ！」」

そうなのだ。演劇部も先日の手芸部と同じ状態だったらしく、希望部員数が少なくて無くなってしまったのだった。

「そっかー。じゃあ無理だねー」

「他に目標を探すしかないわねっ」

む？

「なんでさ。作ろうよ、衣装」

「は？　なに言ってるのよカカすけ。演劇部は無いって言ったばっ

かりじゃないのっ」

「無いなら作ればいいじゃないの」

「カカちゃん、まさかー」

「うん。演劇部もやろう、私たちで」

――その後、私はサエちゃんとサユカンに思いつきを語ってみた。二人は驚きつつも楽しそうな笑みをニヤリと浮かべ、あっさりと頷いてくれた。

そして今日のクラブ活動時間は、今後どういう風に計画――じゃなくて活動を進めていくかを練るだけで終わりとなる。

幸い私たちの顧問はテンカ先生だ。漫才会場の段取りができるのならば、演劇舞台を設けることくらい簡単だろう。

もしも「そんなの手芸部のやることじゃない」なんて苦情がきたときには「これは、私たちの『手』で『芸』をする『部』です。だから何やっても手芸部です」とでも言えばいい。

それに、そう。

普通に手芸部をやるだけなんて、そんなの私らしくないじゃない？

## カカの天下４６４「手芸部の開始」（後書き）

はい、また何か変なこと考えてるらしいですねカカたちは。まぁすぐに行動に移るわけではなさそうですので気長に見守ってやりましょう。

それにしても演劇……お楽しみ会で味をしめたか？

## カカの天下４６５「トラウマ」

「ほらほら、どんどん食べてくださいよトメ君」

「……」

「ほらほら、むすっとしてないで。可愛い顔が台無しですよ？」

「二度と僕に向かって可愛いとか言うな！！」

どうも、ちょっと怒り気味のトメです。

今日はキリヤの奢りでラーメンを食べにきています。なぜ奢りかというと、先日のメイド騒動のことをどうしても謝りたいとキリヤが言ってきたからです。ええ、向こうから言ってきたからです。けして僕がこうなるまでひたすら無視し続けていたわけではありません。

「ほらほら、大盛りですよ。から揚げセットですよ。どうかこれで許してくださいよー」

「……わかったよ。もう二度とあんなことするなよ？　ふざけるにも限度がある」

「わかってます」

ほんとかね。なんか信用できないような。

「そうだ！　さらにお詫びということで、今度メイド喫茶に連れて

ってあげますよ」

「おまえ全く反省してないだろ」

この期に及んでまだソレの名前をだすか！？

「反省してないなんて、そんなバナナ！　トメ君はメイドになって使われるのがイヤだったのでしょう？　ならば今度はメイドを使って新しい快感を――」

「い、か、な、い！！」

「じゃあメイドラーメンにいきましょう」

「おまえ話聞いてないだろ？」

「おや、ご不満ですか。ならば作りますか？　メイドラーメン、トメ君ならできるかと。メイド服もありますし」

「そのラーメンがどんな物体かは知らんが！　僕は今後一切メイドと名のつくものは否定する！！」

あんな思いはもうこりごりだ！　思い出しただけで即泣ける過去なんてそうそう無いぞばかやろー！

「ほほう、その言葉、たしかですね」

「いただきます！！」

ニヤニヤするキリヤに構わずラーメンに口をつける僕。

しかし、キリヤの怪しい笑みの意味を理解するのは、もっと後のことだった――

ラーメンとから揚げを食べ終わり満腹になった僕らは、うちでのんびりとお茶を飲もうという流れになった。お腹をさすりながら我が家を目指す。

「そういえばテンカさんには何かペナルティーはないんですか？それとも女性だから許してしまうとか？」

「そんなわけないだろ。今度、飲み代でも奢らせる。僕はテンを女とは思ってないからな」

「女性でないならば……何だとお思いで？」

「ヤンキー」

そんなことを道中に話しながら、やがて家にたどり着く。

玄関の扉を開けると靴が三つ。カカはもう帰っているな。サエちゃんとサユカちゃんも一緒か。

「ただいまー」

そう声をあげたとき。

「「おかえりなさいませ、ご主人様！」」

「あぁん？」

耳障りなセリフが聞こえたせいか、思わずガラ悪く聞き返してしまった。

しかしおそらく僕の顔はもっとガラ悪くなっているだろう。なぜなら居間の方から、ひょい、ひょい、とヘンナモノが現れたのだから。

「おお、素晴らしい！」

「キリヤ……てめぇの差し金か」

僕の横にいるバカモノが感動しているのは、姿を見せたカカとサエちゃんの格好だった。先ほどのセリフで想像のつく人も多いだろう。そう――二人してメイド服を着ていたのだ。

「何してんの、おまえら」

「どうトメ兄。似合う？」

「実は昨日、家庭科準備室でいろんな衣装を見つけましてー、着てみたくなりましてー」

「ちょうどキリヤンがどうしてもメイドが見たいって言ってたから持ち出してきたの。可愛いでしょ」

ああ可愛いさ、似合ってるんだろうさ。真っ白なふりふりつきのエプロンもきっと眩しいんだろうさ。でもな――

「というわけで、なんなりとご命令を」

「何でも従いますよー？」

「おお、それはいい。トメ君には悪いですけど早速――」

「キリヤを埋めとけ」

「かしこまりました」「ましたー」

キリヤが何を言おうとしたかは知らんが言ったもん勝ちだ。僕の命令を素直に聞いたミニメイドの二人は器用に両膝カックンを成功させ、バランスを崩したキリヤを仲良くキャッチ。担ぎ上げて外へとキリヤを持っていく。

「え、あの、どこに埋めるんですかー？」

「庭」

「そいつぁーお手軽ですねーって速っ！　カカちゃん穴掘るの速っ！！　もしや前世はモグラ！？　え、ちょ、マジで埋めるんですか！？　あああぁぁぁ」

ふ、侮ったな。カカはとことん有言実行な女の子なんだぞ。悪い意味で。

「あ、あの……っ」

ん？　あ、そうか。靴は三つあった。当然サユカちゃんもいて――

「お、おかえりなしゃいまひぇ！！　ぅぅ……か、かんだ」

当然、メイド服なんぞ着てるわけである。

はぁぁぁぁ……

僕は深く深くため息をついた。

「サユカちゃん。それ、似合わない」

「え……！」

ショックを受けるサユカちゃん。

「だから脱いでくれ」

「そういうことですかっ！？」

なんか勘違いしてるみたいだけど、僕の意図は別にある。

「いつもの普段着のほうが可愛いよ」

「あ、そういうことですか――」

ずいっと顔を近づける。

「だからその僕を汚し穢し貶めた忌まわしき衣装を一刻も早く目の届かないところへ葬って滅却してくださいお願いします後生です土下座でもなんでもしますから」

「なななるほどそういうことですかっ！！」

なぜか丁寧に語りかけてしまった僕の迫力に押されてか、サユカちゃんは慌てて頷くのだった。

ごめんね、似合わないなんて言って。

ごめんね、何度も「そういうことですか」って勘違いさせて。

多分、君の格好は可愛い。多分、似合ってる。

でもね、ダメなんだ。

僕はその衣装に穢されてしまった。

僕にとってもう、メイド服は恐怖の対象なんだ——怖いんだ。あの衣装を見ると今にもケタケタ笑いながら僕から人として大事なものを奪っていくような気がしてしまうんだ。誇りとか、尊厳とか、預金残高とか。

メイド服嫌い。大嫌い。もう目にするのもイヤだ。

なに？

病気みたいだって？

はっはっは。

こんな僕に、誰がした。

え、続くの？

## カカの天下４６５「トラウマ」（後書き）

はい、実は続きます笑
すっかりメイド嫌いになったトメ君。果たしてそのトラウマは克服できるのでしょうか。

次回、トメがまさかの――

## カカの天下４６６「ちょートラウマ」

こんにちは、サユカです……

ごめんなさい。ちょっと元気がありません。なぜならトメさんにメイド服姿が似合わないと言われたからですっ！

ううう、わたしだって好きでこんな格好してたわけじゃないけど……ちょこっと。ほんのちょこーっとだけ「可愛いなー」とか思って鏡の前でくるくる回ってたりしてたのに……

はぁ……

ため息をつきつつ、カカすけの部屋で着替えを始めます。

ええ始めます。

始め……る前に、もう一回だけ。

くるくる。

くるくるくる。

くるくるくるくる。

「……えへ」

「何してるんですか？」

「うあおいえあいあうおっ！？」

唐突にかけられた声に思わず『あ行』を連発っ！　がばっと振り向くと、そこには――サラさん？

「な、なんでこんなところにっ！？」

「ええと、庭で穴掘り――穴埋めですかね？　そんな感じのことしてるカカちゃんに聞いたら、あがっていいと言われまして……どこにいけばいいのかわからず迷ってたら素晴らしいモノを発見した次第です」

「そ、その素晴らしいモノって、もしかしなくても」

「可愛いかったですサユカちゃん」

「何も言わないでぇっ！！」

うぅぅ、こんな姿を誰かに見られるなんて……

「一生の恥だわっ！」

「わ、私はあなたにそこまで恥をかかせてしまったのですか！　わかりました……お詫びに私がお嫁にもらってあげま――じゃなかった」

今なに言いましたこの人。

「お詫びに私もその恥ずかしい衣装を着ます！」

「恥ずかしいとか言うなっ！　じゃなくて、ええ？」

「きっとサユカちゃん、その格好でトメさんに迫る気だったんでしょう？　そうはいきません。抜け駆けはなしです。今の私はサユカちゃんもトメさんもラブなんです。ペアルックで仲良くしながらトメさんも陥落です！」

え、えぇっと……ホント何言ってるのこの人！？

「余ってる衣装はこれですね。あ、私も着れそう」

あ、ああ、あああ……止める間もなく着替えを始めるサラさん。経験した職種が多いせいかエプロンドレスなんて珍しいものを予想外に素早く着込み――

「さ、行きましょうサユカちゃん！」

「あ、そのっ、トメさんは」

メイド服が苦手、とか言う暇もなく。サラさんはわたしの手を引いて猛進するのだった。

そして居間。

ちょうど土いじりが終わったらしいカカすけとサエすけと同時に入ると。

「なんだよぅ……なんで増えてるんだよぅ……ぐすん」

トメさんが、泣いていた。

部屋の隅っこで、体育座りしながら。

「よるなよぅ、くるなよぅ、そんな悪魔の格好見せるなよぅ。僕の魂なんか美味しくないよぅ」

あまりの光景に……わたしら一同、唖然でございます。

その視線すら苦痛なのか、ますます縮こまるトメさん。

「メイドなんかいらないんだよぅ。家事なんか自分でできるんだよぅ。朝飯作るのなんか朝飯前だよぅ。だから来るなよぅ……ぐすん」

と、と、トメさんが壊れたっ！？

なんかブツブツいじけ続けるトメさんというなんとも珍しい事態に、わたしたちメイド組は集まって作戦会議をすることに。

「ど、どうしたんですかトメさんは。なんだか腐った干物みたいになってますけど」

「サラさんって結構言うねー。今度お茶しない？　楽しい話ができそー」

「ごめんなさいサエちゃん。私、心に決めた人が二人いるんです！」

「二人もいちゃダメじゃん」

「サラさん。説明するとね、トメ兄はいまメイド恐怖症なの」

「なんですかその病気は！？　男の人に限ってそんな病気があるわけ――」

ちらり、とトメさんに目を向けるサラさん。

「そう。例えるなら、まるでゴキブリの衣装だ。メイド服の黒い部分はてらてらと油ぎる虫の大群で、僕の中に侵食して大事なものを食い荒らしていくんだ……白い部分は？　白アリだきっと」

なんか言ってる。

「病気ですねアレは」

サラさんに同意です。

「トメお兄さんのトラウマをなくすためにはどうしたらいいんだろー」

「うーん、悩むね」

「あんなトメさん放っておけません！　なんとかしましょう！　……なんとかして」

ここで「全員メイド服を脱げばいいんじゃない？」って言ったら負けなんだろうなぁ、きっと。

どうしよう、どうしよう……そんな風に悩んでいると。

「ここは私にお任せを！」

「うあキリヤン！？　なんで、確かに埋めたのに！」

「ふふふ、甘いです。私は『東治のゾンビ』と呼ばれた男。埋められるくらいへっちゃらです」

そんな不衛生なあだ名の人がいるファミレス嫌なんですけど。

「キリヤさん、何か良い方法あるのー？」

「ええ！　ここはショック療法しかありません。カカちゃん」

「なにかね」

キリヤさんはカカすけにごにょごにょと耳打ち……やがてカカすけは力強く頷いた。

「任せて。トメ兄に媚を売るのは得意だから」

カカすけは自信満々にトメさんに近づいていく。わたしはなんだか不安になってキリヤさんに尋ねた。

「あの、何をやるんですか？」

「メイドの良さをトメ君にわかってもらうのです！」

結局何をやるのかわかんないわ……カカすけ見てればわかるか。

視線をトメさんの方へ戻す。

「ご主人様ぁ、ねぇ、ご主人様ったらぁん」

するとなんだか吐きたくなるほど甘ったるい声を出すカカすけが。うげろ。

「私はぁ、ご主人様のものなんだよぉ？　なんでも言うこと聞くよぉ。好、き、に、し、て、いいんだよぉ？」

身の毛もよだつスィートボイス。妹好きでメイド好きにはたまらないかもしれないそれは、しかし。

「……そんなのカカじゃない。カカってのはもっと生意気で何考えてるかわかんなくて厄介でちんちくりんのくせに無駄にパワフルで僕の言うことなんか聞かないんだ。好きにしていい？　ならあっち行け。しっし」

「へぇぇぇ……そんな風に思ってたんだ」

口元をひくひくさせながらも殴りかかったりはせず、カカすけは震えながらこっちに戻ってきた。

「もう絶対言うこと聞いてやらねー、あんちくしょーが」

「カカすけカカすけ、言葉使い変わってるっ！」

「やりたいことはわかりましたー。次は私がいきますねー」

おっと、ここで人を騙すならお手の物っぽいサエすけの登場だ！

サエすけはにこやかーな顔でスカートをふりふりしながらトメさんへと近づく！

ジャッジ！

「ご主人様ー。あのー」

「……違う。僕の知ってるサエちゃんは裏にドス黒いもんを隠してる笑顔で――ってそのままだ！　黒い、その笑顔黒い、メイド服より黒い来るな来るな！！」

「なんかー、メイド服関係なしに恐れられてるのはどういうことですかー？」

ニコニコしつつも額に青スジ浮かべながら帰ってくるサエすけ……き、気の毒に。

「いや、すいません。おもしろいですねコレ。ささ、次はサユカちゃんかサラさんが」

えええええっ！？

「いやっ！　いやよっ！　あんな調子で言われたらわたしショック死するもんっ！」

「私だって嫌です！　せっかく新たな愛に向かって走る決意をしたのに初っ端からくじかれるなんて！」

サラさんと仲良く「イヤイヤイヤ」と首を横に振りまくる！　それを見てキリヤさんはため息をつき、

「仕方ありませんね。こうなったら不肖ながら、この私がメイド服を」

不肖（愚かという意味）すぎることをほざいたので全員でぶっ飛ばした。

「まったく……もっとトラウマになるじゃないですか！」

「うーん、でもどうしましょー」

万策つきたわね。トメさんのメイド嫌いはもう治らな――

「やっほ！！　何を楽しそうなことをしてるのかな！　あたしも混ぜて」

――いかと思われたそのとき、突如現れたお姉さん！！　なぜかすでにメイド服着用済みの彼女はどこからともなく、ひらりとトメさんの前に降り立ち、

「ぶはははははははははははははは！！」

大爆笑をもって迎えられた。

……え、爆笑？

「に、似合わな……！　あ、姉、似合わなさすぎるくははははっはあっはははははははははは！　はぁ、はぁ、ひぃ……」

笑ってる……さっきまで縮こまっていじけてたトメさんが……復

活した！？

「はぁ……はぁ……あれ？　なんで僕メイド服なんか怖かったんだっけ」

しかも克服した！？

「ま、いっか。もう怖くないや」

――恐るべきことに。その後、トメさんは本当にメイド嫌いを克服したらしく、メイド服を見ても怯えることはなくなった。それどころかお姉さんの格好を思い出すのか、「ぷ」と笑うくらいにまでなったそうだ。

わたしたちの苦労はなんだったのか。

いや、それよりも何よりも。

「いいんだー、いいんだー。どうせあたしなんか女の子っぽい格好なんて似合わないのさー。歳だからなー。きついよなー。けっ！！　おーい酒持ってこーい！！」

お姉さん……可哀想。

## カカの天下４６６「ちょートラウマ」（後書き）

あのトメがまさかの崩壊！

ここまでぶっ壊れたトメを書くのは初めてですね多分。そのせいかいつもよりちょこっと長くなりましたとさ。愛ですね。

しかし最近言ってた「男らしく」も何もありませんね笑　まぁメイド服なんぞ着た時点で負けだったのですよ彼は（鬼

ともかく姉のおかげでメイド騒動は即解決、ひと段落ですよ。

よくやった姉。今夜は飲もう。

# カカの天下４６７「こんなカレーはいかが？」

こんにちは、カカです。

今日はカレーの人についてのお話をしようと思います。そう、私がひょんなことからメル友になり、実はクラスメイトだったことが発覚し――その事実をなんとなく隠しつつ、メル友としてだけ接している彼女のことです。

彼女の名前はインド。や、別にインドって本名じゃないんだけど、カレーのことばっかり言うし、ちょっと色黒な肌してるからということでインドと呼ばれている。ごめんね国のインド、勝手に名前を使っちゃって。でもこの子は可愛いから許してね。

さて、そのインドちゃん。カレーのことになると大胆な発言するしメールでも熱く語ってくれるんだけど、普段はとても静かで無口な女の子だ。

「なーなーインド、消しゴム貸してくれよ」

例えば男子がこんな風に話しかけると、

「……ん」

それだけ言って『ゴムカレー』と書かれた消しゴムをスッと貸してくれる。『カレー』と『ゴム』は逆じゃないのか、そもそもどこでこんなもんを売ってるのかという謎は置いといて、男子がそれを返しても返事は「ん」とだけ。そういう風に無愛想なせいか、インドなんて愉快なあだ名がついているわりには友達は少なかったりす

る。

性格が変わるのはカレーについてだけ。とある方角にこだわる誰かさんと似たような性格である。最近多いのかね、そういう病気。

まぁともかく。カレーにこだわる彼女は給食のとき、いつも持参したカレーをご飯にかけて食べている。だから四時間目――給食の一つ前の授業になると少しずつイライラし始めるのだ。

例えばその四時間目が、社会の授業だった場合。

「――関ヶ原の戦い。豊臣秀吉さんが死んだ後の政権を巡って起こった戦いだ。でっかい戦いだったらしいけどよ、んなことしてて葬式ちゃんとあげてもらったのかね秀吉さん。心配だよな」

テンカ先生。あんた秀吉と親しげだね。

「で、この戦いで大きく分かれた奴の片方が徳川家康なわけだが……さてもう片方はどいつでしょう。教科書に書いてあるぞ。インド、答えてみろ」

インドは先生公認のあだ名だったりする。それにしても『奴』だの『どいつ』だの偉そうにも程があるテンカ先生は何者なんだろうか……あ、織田信長の子孫（かもしれない）とかこの前に言ってたっけ。織田信長……徳川家康より偉いの？

まぁいっか。ともかく指されたインドちゃんは立ち上がる。心なしかフラフラしながら……お腹がすいたのか、それともカレー分が足りないのか。

「おいインド？　聞いてたのか。関ヶ原の戦いで徳川家康と対抗していたのは誰だ」

「カレー」

後者だったらしい。

「カレーと戦ったのかぁ、そりゃ歴史にも残るわ……でもなインド。その戦い、家康の勝利で終わるから、カレーは負けることになるぞ」

「え？　カレーは負けませんでしたよ」

「当然の顔して歴史を変えんな」

「家康が全部悪いんです。だからカレーの勝ちです」

「おいおい家康さん可哀想だろ？　あの人にもいろいろあったんだから」

あの人ってあんた友達かいな。

――まだある。例えば四時間目の授業中にテンカ先生がちょっと脱線してサッカーの話をしていたとき。

「いやーすごかったよなアイツ！　大した選手だよアイツは！　酒グセ悪そうだけどな」

この人にかかれば誰でもアイツでソイツらしい。

「でさ、昨日もこうやって華麗にシュートを――」

「先生」

もの静かな、しかしはっきりとした怒気をはらんだ声。

「な、なんだよインド」

「今、なんて言いました？」

「だから、華麗にシュートを」

「カレーにはライスです」

「……か、れー？」

「もしくはナン！！　カレーにシュートなんてわけわからないものを混ぜないでください！」

「えっと……すまん」

なんだかよくわかんない迫力に負けて謝ってしまうテンカ先生なのだった。

こんな彼女だが、給食中にはちょっとしたアイドルだ。え？　友達がいないんじゃなかったかって？　そうそう。実は先日、あまりに友達がいないインドちゃんにメールで相談されたことがあったんだけどね。

『同じ趣味の人を見つけてみるとか？』

なんて返してみた次の日。インドちゃんは持参したカレーを、目当ての女子に向かって差し出し、

「た……食べる？」

泣きそうな声で、そう言った。彼女にとっては精一杯のお誘いだったんだろう。でも間が悪かった。これをきっかけに友達になってほしかったであろう女子たちはちょうど給食を食べ終わり、珍しく給食についてきたプリンを食べようとしているところだったのだ。

「えっと、今カレーはちょっと」

「だ、大丈夫……ゼリーだと美味しかったから」

ゼリーにかけたんですかカレー！？　ちょっと引いていた女子たちは「じゃ、一口だけ」ということで逃げた。もちろんプリンにはかけず、そのまま口にしただけだ。

その次の日から。

「あの、インドちゃん。カレー少しもらえる？　ご飯にかけて食べたいの」

そう進言した一人の女子をきっかけに、インドちゃんカレーは人気急上昇。やたらと美味しそうに食べるその姿に惹かれたクラスメイトの皆はこぞってインドちゃんにカレーを求めるようになったのだ。こうして、給食のアイドルの誕生である。

「これインドちゃんが作ったの？　すげーな！」

「……う、うん」

「私、もうちょっともらっていい？」

「ど、どうぞ」

「いやーうめぇな！　俺もカレー党に入ろうかな」

「……え、えと」

しかしアイドルとファンとの壁は厚いもの。人気は出たが友達できず、いまだに我がメル友カレーの人は内気な性格を克服できずにいるのだった。

でも、まぁ。

「美味しかったよ！」

「……えへ」

なんか嬉しそうなのでよしとする。

きっとインドちゃんにとってはこれで充分なんだろう。その証拠に放課後の掃除当番のときとか、ご機嫌に鼻唄なんか歌うようになったのだから。

「ルールルー、ルールルー、カレーのカレーのルールルー」

どこかで聞いたような気がする歌。ノリのいい曲ではないけど本人はとても楽しそうである。

この調子で友達ができるといいね。メル友として応援するよ。

というか、私が友達になりたい。でも仲良くなったら携帯のアドレスでいろいろバレるし……そしたらインドちゃんにとって気軽に話せるメル友はいなくなっちゃうんだよね。

それが必要ないくらいに友達ができれば済む話なんだけど。

「インドちゃん、ばいばい」

「ルー!?」

ま、そんな遠い話でもないでしょ。

今日も今日とてインドちゃんは皆の分のカレーをせっせと作るんだろうな。

私の『カレーの人』さん、がんばれ!

――それにしても。

『ねえねえ聞いて! 今日のカレーはすごくうまくいったの。学校のみんなも喜んでくれて――』

つくづくあのインドちゃんとは思えないメールである。

元気になったらこうなるのかな？

## カカの天下４６７「こんなカレーはいかが？」（後書き）

着々と今まで出番が少なかった人のキャラが固まりつつある昨今、いかがでしょうか。今日はカレーの人のお話です。

カカ天には今までいなかった無口&内気な方でございます（カレーが絡むとき、もしくはメール以外は）。いますよね、メールと本人のギャップがある人って。

カレー配ってるけど人の多さに負けてカレーモードになれない彼女。いつかカカたちと一緒に遊ぶ日はくるのでしょうか……はてさて。るーるーるー。

## カカの天下４６８「ほめて」

「トメ兄、起きて」

「ふぁ……？」

おはようございます、トメです。

今日は日曜日。惰眠をむさぼろうと二度寝した矢先にカカに起こされてしまいました。ベッドに寝転がったまま傍らの時計を見れば、時刻はまだ七時半。二度寝してから十分も経ってません。

「あとちょっとたくさん少しいっぱい寝かせてくれ」

「どんだけ寝かせればいいのか全然わかんないよトメ兄。ほら起きて」

「やだ……もうちょっと寝る」

ちょっと幼児化してるが気にするな。寝るときは誰でも子供に戻るもの。いつもカカの世話とかカカ友の世話とか姉の世話とか部長の世話とか会社の世話とか国の世話して疲れてるんだ……

「ねーね、起きてよ」

「やだ。寝るったら寝る」

「起きてよー」

「寝る」

「朝ごはん作ったんだよ？」

「起きる」

ガバッと身を起こす。あまりの勢いにカカが「おお」とのけぞった。

断っておくが、妹が朝食を作ってくれたワーイワーイ嬉しいなっ、とか喜んで起きたわけじゃない。ほんとだよ？

カカが僕の目の届かないところで料理をする――それすなわち諸刃の剣。運とか日ごろの行いが悪かったりすると、とっても大変なことになるのである。主に後片付けが。

「そか。そんなに嬉しいか」

そんな僕の失礼な心情も知らず、すぐに起きた僕の行動を勘違いして喜んでるカカ。ちょっと可哀想だ。

「それで、何を作ったんだ」

まずは現状を把握することが先決である。

「ん、トーストを焼いただけ」

トースト……焼いた……よし、見えた！

「トーストを焚き火で焼いたな！？」

「そんな面倒なもんで焼くバカがどこにいるの」

おまえの血縁で一人いたが。そうかハズレか。

「じゃあ……ガスコンロで焼いた？　それじゃ普通か。ガスコンロを焼いたか！」

「それ普通じゃないよ。変だよ」

だっておまえいつも変じゃん。

「私はね、普通にオーブントースターで」

「オーブントースターを焼いたのか！？　あれ高かったのに」

「だからなんでそうなるの！！」

「や……だって、カカだし」

「トメ兄が私をどう思ってるのかよくわかったよ」

おお、ようやくわかってくれたか。じゃあ少しは普通になってくれ。無理だろうけど。

そうしてなんだかんだ言いながら洗顔を済ませ、半信半疑ながらも居間へ入る。

すると、もう一度ベッドにもぐって夢の中へバイバイ僕知らないもん後のことヨロシク！　なんてしたくなるような光景が広がって

――なかった。

普通にきつね色に焼かれたトーストが置かれていた。横にはジャムの瓶、そして牛乳入りのコップ。昨日の夕飯に作って冷蔵庫に置いておいたサラダの残りまで、ドレッシングつきで置いてある。

「ね、ちゃんとできたでしょ？　ほめてほめて」

「カカ……どうした！？」

「う？」

「おまえ、おかしいぞ！」

「おかしいって何がさ」

「カカが普通に可愛いなんて……変だ」

「あんた失礼だな」

「兄に向かってあんたとは何だ！」

「トメ兄こそ私に向かって何て言ったのさ！」

「普通で変だって言ったんだよ！　あと可愛い！」

「どっちかわかんないよそれ！！　あとありがと！」

おっと、このままだと不毛な兄妹喧嘩に発展してしまい、トーストが冷めてしまう。どんな天変地異か知らないがカカが普通に朝食

を用意してくれたのだ。ここは適当に切り上げてありがたく食べるべきだろう。

「大体トメ兄は私を――」

「あー、カカ。悪い、悪かった。謝るからさ、冷めないうちに朝飯食べよう？」

できる限り腰を低くしてそう言うと、カカはむすっとしながらも頷いてくれた。なんだか不満そうに見えるけど……謝ったから、いいよ、な？

「いただきます」

「……いただきます」

トーストにジャムを塗り、お互い無言でかじる……気まずい。

む。ちょっとジャムが足りなかったか、もう少しだけ塗ろう。僕はジャムの瓶に手を伸ばして――肘をコップに当てて倒してしまった。

「うあ、牛乳が」

テーブルの上を濡らし床へ落ちるかと思われた牛乳はしかし、即座に現れた布巾によって拭き取られた。

さらにその布巾を持つ手は素早くテーブル上の牛乳を全て拭き取り、さらにコップを戻して新しい牛乳まで注いでくれた。

「ふ、どうよ」

そこには自慢げな妹。僕は呆気にとられたが、ちゃんと言うべきことは言った。

「あ、ありがと」

「ちっ」

あれ。なんでお礼言ったのに舌打ちされるの！？

不満げなカカは僕の腕を掴むと、ブン、と振り回し――

かちゃん、ともう一度牛乳をこぼさせやがった。

「おまえ、何す――」

そして即座にそれを拭き取り、新たな牛乳を注ぐカカ。

「どうよ」

「何がしたいのおまえ」

「ちっ」

カカはもう一度僕の腕を掴んで、ってもうえぇわ。

「やめんかい！　何がしたいんだおまえは！」

「ほめてよ！」

「そんなの牛乳がもったいなくてほめられるか――って、は？」

ほめる？　あ、そういえば最初に「ほめてほめて」とか言ってたような。

……ほめてほしくて、この行動？

なんだこいつ。可愛いぞ。

「あー……カカ。悪かった」

「む？」

「今日一日、何回も失礼なこと言ったよな。謝るよ。それと色々と世話を焼いてくれてありがとう。こんなこと滅多に無いから焦ったけど嬉しかったよ。カカはえらいな」

そう言って頭をなでてやる。

うむ、我ながら見事なお兄ちゃんっぷりだ。これならカカも満足するだろう。

「ちっ」

してねー！

なぜだ？　カカはほめてほしかったんじゃないのか！？　どうすればよかったんだ！！

ショックのあまりに固まりつつも内心穏やかじゃない僕を尻目に、カカは唐突に携帯を取り出してどこかに電話をかけていて――相手が出たらしい。

「あ、もしもしサエちゃん？　おはよ。あのね、賭けはサエちゃんの勝ちだったよ。そうそうトメ兄がどんな風にほめてくれるか賭けてたやつ」

賭け？

「そうそう、サエちゃんの『なんかマジメな顔して語りだす』が正解だった」

賭けね。

「うん、今度サユカンと一緒にケーキ奢るよ。んじゃね」

賭けかぁ……あはは。

恥ず！！

「……もしもし、カカさん？」

「はいはいトメさん？　あ、聞こえたか。うん、そゆこと。私はトメ兄もまだ若いし『グッジョブ！！』とか言ってほしいなーって思ってたんだけど、予想以上に年寄りだったね」

僕のさっきのセリフは一体……

「ちなみにサユカンは『大好きだ！』とか言うのに賭けてたんだよ。

そんなこと言うわけないのにね。それ単にサユカンが言ってほしいセリフだし」

僕のさっきの感動は一体……

「あれ、トメ兄？　おーい」

僕のさっきの気持ちは一体……どこにいけばいいのだろうか。

「えっと……ほめて？」

「ほめるかバカタレ」

とにかく。カカはやっぱりカカだった。

何度確認すれば気が済むのやら。

## カカの天下４６８「ほめて」（後書き）

カカにトメが振り回され、ちょっといい格好したかと思えばハズして恥ずかしい思いをする。

うん、カカ天だ。

基本な話は定期的に書きませんとね＾＾

# カカの天下４６９「姉週」

よう！　あたしカツコ！

今回はあたしのとある一週間を紹介するよ！

まずは月曜日。

この日はシューが珍しく喧嘩を売ってきた日だった。なんでもトメにあたしの弱点を聞いたらしいのだ。

「お姉さま……今日という今日は我慢なりません！」

「へぇ、だったらどうするってんだい？」

「お姉さまに、勝ちます！」

「ほぉ……」

珍しく自信満々なシューの態度。何かあると踏んだあたしは慎重に間合いを取った。

そしてシューは口を開く。

「僕は最近、給料が下がった！！」

……は？

「僕は最近、お財布を落とした！　交番には落ちてた財布が届きま

くってて『良い人たくさんいるなー』なんて思ってるのに僕のだけ戻ってこない！！」

……えっと。

「僕は最近、落ちてる空き缶を拾ったら『それは俺んだよ勝手に持ってくなオラァ！』と警察に連れていかれた！！」

な、何を言っているのだろう我が下僕は。そんな不幸自慢ばっかり……

「あ、顔が歪みましたね。ふふふ、僕は知ってるんだ、あなたの弱点が哀れな話だということを！」

なるほど、そういうことか。

「自慢じゃないけど、この街で僕より哀れな男はそうそういないぞ！」

ほんっとに自慢じゃねー。

「まだまだいくぞ。僕は最近、足の小指をタンスにぶつけた！」

あれ痛いんだよね。

「僕は最近、地味だ！」

ごめんそれ昔から。

「僕は最近、出番が少ない！！」

なんのこっちゃ。

「新入りよりも少ない！！」

よくわからんけど確かに哀れだ。

「お姉さまのメイド服が見れなかった！！」

あー、今この人が怒ってるのってそれが理由なんだよね。なんであたしが怒られなきゃならんのかよーわからんが。

「はぁ、はぁ……くっ、バカな。これだけ不幸だとアピールしたのにまだ泣かないのですか！？　やはりお姉さまは涙を流すような人間とは違う次元にいるのですね！！」

「ひどく失礼なこと言われてる気がするけど、それはさておき。不幸っていうかさ、シューにとっちゃ普通じゃん、そのくらい」

「僕ってどんだけ不幸慣れしてると思われてるんですかね！？」

「てゆーか不幸不幸っていうけどさ、ぶっちゃけいつもあたしがあんたにしてる仕打ちの方がひどくない？」

「自覚あったんですねアナタ！？」

それなりには。

だからって止めないけど。

「うぅ……うわーん！！　お姉さまなんか、お姉さまなんか、お兄様になって格好よくなってしまえええええ！」

その日のシューはこんな感じで、よくわからない捨て台詞を残しながら去って行った。

次は火曜日。

お仕事でした。頑張って働きました、まる。

続きまして水曜日。

愛しき我が家に帰ってみた。カカちゃんが寝静まった後に弟君と缶ビールで乾杯！　そこからダラダラと喋って過ごした。

「なぁ、姉。またシュー君のこといじめたろ」

「や、いつもどおりだけど」

「あのなぁ、シュー君かなり凹んでたぞ。どこかに逝ってしまいそうな勢いで」

「シューなら大丈夫だよ」

「そ、そうなのか」

「うん。いなくなっても大丈夫」

「そういう意味かい！？　もうちょっと気にしてやれよ可哀想に！」

えー、面倒。

「あ、そんなことより話は変わるけどさ」

そんなことて。トメの方こそあんまし気にしてないやんシューのこと。

「タマちゃんのことなんだけど」

「あの子は山に帰ったよ」

「嘘だろ!?」

「嘘だよ。当たり前じゃん。慌ててやんの、バッカでー」

「……そう、それだよ。あんたさ、あの子を山で拾ってきたとか言ってたじゃんか。じゃあ幼稚園に入るときとか大丈夫だったのか？身元ハッキリしてないのに」

「は。山で拾ってきたなんて話、嘘に決まってるじゃん。トメちゃんそんなん信じてたの？　バッカでー」

「ちょ！　おま！　だって！！」

「ってことにしとけって、色々と用意してくれた父が」

「……あぁあぁ、父さんね。あの人なら戸籍用意することくらいできるだろうけど……で、結局は本当なのか、嘘なのか、どっち」

「さぁ？」

「はぁ……そうだよな。姉って会話できる次元にいないもんな」

疑問は放ったらかしで木曜日。

この日もお仕事中心。せっせと働くせっせっせー。

さぁついに金曜日だ。

明日は土曜日で休日！　というわけで夜はサカイちゃんとテンちゃんの三人で居酒屋『病院』へ！！

「それではー、カツコちゃんのー、スベらない話いってみよー！」

いつの間にか居酒屋のアイドルトリオと化していたあたしたちは、周囲の客を巻き込み、酔っ払いのノリで大いに盛り上がる！！

「いぇーい！　スベらない話だってよ、いけ姐さん！」

「いくよ――滑り止めクリーム！！」

どこかの青いタヌキよろしくポケットからクリームを取り出したあたしに「おもしろくねー！！」「つまんねー！」「滑り止めなのにスベるとはこれいかにー！！」と楽しそうな文句が殺到！　ちなみにクリームと言ってもクリームパンだけどね！

「どーもすみません！！　お詫びにスベスベのお肌を見せます！！　テンちゃんの」

「んだとぉ！？　わ、コラやめろ」

「ふふふー、逃がしませんよテンカちゃん。おとなしくそのスベスベのお肌を……見せー……あらあらー、本当にスベスベでやんなっちゃう。あははーすべすべすべー」

「あ、ちょと、どこ触って、あん、あっ、あひゃひゃひゃひゃひゃ！！　く、くすぐった」

「ざらざらになるがいいー！　おらおらー」

色っぽく絡みあうサカイちゃんとテンちゃんに「おもしれー！」「いいぞ、もっとやれー！」「いくら払えばどんだけやるんだ！？」と嬉しそうな野次が殺到！　ちなみにあたしがこんなことしても誰も盛り上がってくれません！　なぜだ！？

「いや、だってカツコちゃんは男とか女とかそういう次元にいないから」

じゃーあたしは何なのさ。

誰も疑問に答えることなく時間が過ぎ、次は土曜日。

再びシューがあたしに反旗を翻してきた。

「ふっふっふ……今度こそ僕は勝ちます！　トメさんにまた弱点を聞いてきたんですから！」

はて、次は何がくるやら。カカちゃんとあたしの共通の弱点が一つあるけど、あれはシューには用意できないものだし……他に何かあったっけ？

「……トメさんも最近まで忘れていたらしいですけど、お姉さまは漢字の羅列に弱い……だから……ぶつぶつ」

「おーい？」

何をぶつぶつ言ってるんだろ。聞こえないけど。

「あ、すいませ――じゃなくて勝負です。いきます！」

さぁ来い。

「お姉さまは陰謀詭計で哀鴻遍野ばかり作って迷惑千万です。たまには顔厚忸怩して鬼面仏心、可惜身命にしたらどうですか！？」

「なに言ってんの？」

「難しすぎて伝わらなかったかぁ！！」

またもやシューは泣きながら去っていった……「やっぱりお姉さまに弱点なんかないんだぁ無敵な人なんだぁ僕とは次元が違うんだぁぁぁ！」なんて叫びながら。

そして、日曜日。

一週間を終えて、あたしは思った。

「あたしって……皆から見て、どこの次元にいるんだろう」

もしかして……

二次元か！？

## カカの天下４６９「姉週」（後書き）

ある意味、正解ですね。最後の答え笑
たまには姉の詰め合わせでいこーと思ってこんなん書きました。
雑多ですね。まとまりないですね。殴り書きって感じですね。まー姉っぽくていいでしょう。

さてさて、話は変わりますが……本日、新たな連載なんぞを始めてみました。ふつーの世界のふつーの女子高生によるふつーのラブコメです。多分。
タイトルは「決め手はあんパン」
作者の同一作品のところからいけると思うので、よかったらどうぞ＾＾
カカ天とは毛色が違いますが、ノリは似たようなもんです笑

# カカの天下４７０「その瞳にうつるもの」

こんにちは、サカイです。

今日は引きこもりを改善するために少しでも外に出ようと思い、ちょっとトメさんの家まで足を延ばしてみたのですが……

忘れもしない匂いを感知し、すぐさま隠れました。

そして庭の方へ周り、窓から居間をのぞいてみると――やはりいました。

私の愛しき娘、サエ。そしてもう一人の小さい子は……多分クララちゃん。サユカちゃん情報で聞いていた通りの感じだから、多分合ってると思います。

二人の他に姿は見当たりません。トメさんとカカちゃんは買い物にでも行っているのでしょうか――いいえ、そんなことよりも。

もっと、大事なことがあります。

それは――

「クララはこの格好でいいのですか？」

「うんうん、可愛いよーお姫様ドレス。私はこの割烹着でクララちゃんにお仕えするね。お姫様にはメイドだろうけど前にやったしねー。和洋せっちゅーっていうやつで、帰ってきたトメさんたちを驚かせてしまおー」

か……

か……っ！

か！　わ！　い！　い！！

なんですかなんですかあの小さくて笑顔の眩しすぎる家政婦さんは！　可愛いです可愛すぎます隣のお姫様なんか目に入りません！　い、いいえ。言い過ぎました。お姫様もそこそこ可愛いです、ええ、サエの良い引き立て役です。ああそれにしても我が娘ながらなんたる美しさ、むしろお姫様は影武者でこちらが本物の姫でしょう！　もしくは仕えるフリした影の主役でしょう！　あぁそう考えるとあの笑顔には裏がありまくりそうな気がしてきました、やはり私の血を継いでるのですねステキですステキすぎます家政婦は見た！　いいえ家政婦は見て！　私を見て！　その格好で私を見てえええええ！！

「――はっ！？」

い、いけません。あまりの可愛さに我を忘れてしまいました。家の窓を覗きながら鼻血を出しまくりだなんて変質者そのものではないですか。これが見つかったら通報されてしまいます。

とりあえず、鼻血を拭いて……

「ひっ」

ぴたり、と私の身体が一時停止。コレ、ワタシノ声ジャナイヨ？

スロー再生で背後を見ると、そこには。

「あ……あ」

驚愕に目を見開いているお姫様――いいえ、クララちゃんが！？

なんで！？　たった今まで居間にいたのに！　瞬間移動？　いいえそれよりも！

「ち……血……！」

この場面を見られたことが大ピンチ！　こ、このままでは――

「さ、殺人事件です！！」

そう、殺人事件の犯人として捕まってしま――ってえええええそこまで重罪じゃないですよぉ！？

「け、けーさつ……！！」

「待ってください！　これにはワケがー！！」

「は、犯人が動き出しました！！」

「犯人じゃありません！　どちらかというと被害者の部類ですよ！ほら、血を流してますしー」

「死体が動き出しました！！」

「まだ死んでません！！」

「とにかくけーさつです！」

「待ってってばー！」

「じゃあ探偵です！　犯人はあなただ！」

「わかってるなら呼ぶ必要ないでしょー！」

「なら機動隊です！」

「なぜ！？」

「パニックです！！」

「そうですね！」

「ナマケモノです！！」

「大きなお世話です！！」

はっ！　痛いところを突かれて思わず怒鳴ってしまいました。落ち着かないと家の中のサエに気づかれてしまいます！

「……ふぅ。えっと、落ち着いてください。クララちゃん、ですよね？」

「はい！」

元気なお返事……あらら？　私が落ち着いたらこの子もすぐに落

ち着いちゃいました。

「あのー、私のお話を聞いてくださいますか？」

「はい、クララ聞きます」

「えー、まずはですね、私はあやしい者ではなくてですね」

「サエおねーちゃんのお母さんですね」

「そうそう」

説明する手間が省けて助かりました。これで私が通報される心配も――あれ？

「えーっと、クララ、ちゃん？」

「はい」

「なんで私がサエのお母さんだって知ってるんですか？」

「見ればわかります」

「えええええ！？」

そ、そんな！　見たらすぐにわかるほど私とサエはそっくりなんでしょうか！？　やべぇ嬉しい！　じゃなくて！！　あぁもう今日は我を忘れすぎです……

「クララ、見れば他にもいろいろとわかります！」

「た、たとえば何が？」

「あなたは怠け者です」

ぐさっ！

「面倒くさがりやでサボり魔です」

ぐさっ！　ぐさっ！

「不健康な生活、不健全な趣味、引きこもり、つまるところダメにんげ――」

「やめてええええ！　それ以上言わないでえええ！」

「でも見ればわかってしまいます」

「じゃあ見ないでえええええ！」

「でもさっき『私を見て！！』って叫んでました」

「聞かれてたあああああああああ！！」

ううー、なんなんですかこの子ぉ、エスパーですか？　人外ですか？　そんなのカツコちゃんだけだと思ってましたよぅ。

「どうしました？　サエおねーちゃんを呼びましょうか」

サエの名前を聞いて目が覚めました。そうです、まず一番最初に

しなければならないことを忘れていました。

「口封じですか？」

「そうそう、誰にも喋らないようにこの場で抹殺――じゃなくて！　なぜあなたは私の考えてることがわかるのですか！？」

「口に出してましたよ」

「サカイしょっくです！」

「それクララのセリフです！！」

そ、そうなのですか。なんとなく浮かんできたセリフなのですが。

「と、とにかくですね、クララちゃん。私のことは黙っていてほしいのです。実は――」

「わかりました。クララだんまりします」

クララちゃんは説明するまでもなく頷いてくれました。あまりにもあっさりすぎて逆に疑ってしまうくらいに。

「あ、あの……本当に黙っててくれますか？」

「はい。おかーさんにも色々あるんですよね」

「は、はい。会いたいのは山々ですけど、まだ当主のくそじじいの機嫌が直らなくて……」

「あなたがサエおねーちゃんを大事に想っているのも、見ればわかります。頑張っていることも」

「……あ」

「それに水を差すようなことはしないのです。クララいい子ですから」

「あ、はい……ありがとう、ございます」

「あなたはきっと、もうすぐ報われます。見ればわかります」

そう言ってクララちゃんはにっこりと笑って。まるでお姫様のように一礼して、家の中へと戻っていきました。

「……子供なのか、大人なのか、よくわからない子でしたねー」

おっと、ボーっとしてる場合じゃありません。

いつの間にか鼻血も止まってるし、サエにバレないうちに一刻も早くこの場所を離れなければいけません。

そして。

また、頑張らないと。

――その後、クララはすぐにサエおねーちゃんの元に戻りました。

「あれ、おかえりー。急に消えちゃったけど、どこに行ってたのー？」

「はい、ちょっと気になる人がいまして」

「気になる人？」

「はい。クララたちのことをずーっと見ながら、おねーちゃんのことを話してました」

サエおねーちゃんのお母さんは、何も言わないでほしいと言いました。

でもクララ、指きりしてないです。

「私のことー？」

「はい。きっとおねーちゃんのお母さんです」

「お、かあ、さん……！？」

指きりしてない約束は、やぶられても仕方ありません。

「どこ？　お母さんはどこにいたの！？」

だから、やぶってしまいます。

「はい。それは――」

少し、だけ。

「わからないです」

「え……だって、私たちを見てたって」

「はい。クララたち――この街の木々のどれかを眺めながら、おねーちゃんのことを話してました。クララはそれをお友達の木さんに聞いただけです」

「そ……そっ、か。そう、だよね。クララちゃんって、木だったよね……それで、その、お母さんは、なんて？」

「詳しいことはわかんないです。誰へともなく独り言を呟いていただけらしいので。ただ――あなたのことを、大切に想っていたと」

これくらいなら、いいでしょう？

「……そっかー」

複雑そうな表情で黙り込むおねーちゃん。でも本当は喜んでます。

クララには、見ればわかります。

あなたには小さな幸せを。

あの人には小さな勇気を。

――先のことまでは見えないけれど。どうか、報われる日がくることを。

## カカの天下４７０「その瞳にうつるもの」（後書き）

特に書くことはありません。
二人が共に歩く日が、いつかやってきますように。

# カカの天下４７１「あいつが言えって言ったってあいつが言えって言った」

「ただいまー」

トメです。今日も今日とて仕事を終え、我が家へと帰ってきました。

カカは帰ってないみたいですが、一応居間を覗きます。

そしたら。

「むぐ？」

いきなり口を塞がれて腕を捻られて転ばされて縛られて吊るし上げられました。

フザケルナ。

「……むぐぐ」

こんな強盗まがいのことをされても僕が慌てることはない。なぜならあまりにも手際が良すぎるからだ。一瞬でこんなことができる人間を、僕は一人しか知らない。

ご丁寧にも僕の身体をロープでぐるぐる巻きにしたところで、ようやくソイツは僕の口を塞いでいた布をはずしてくれた。

「ぷは。何すんじゃいクソ親父」

「おや、人違いじゃないかな？　俺様は通りすがりの強盗忍者だよ」
「そんなツチノコ並に珍しいモンがほいほい通りすがってたまるか」
「むぅ、ノリの悪いやつだな」
「簀巻きにされた状態でどうやってノれと」
「仕方ない、俺が乗るか」
「僕の上に乗るな座るな！　重い、硬い、臭い！」
「失敬な！　ええい、相手がカカならば喜んで座られるくせに。軽い、柔らかい、いい匂い？」
「たわけたことをぬかすな！！」
まったく……久々に出てきたかと思えば一体何を考えているのやら。
「さてトメよ。今日は俺に付き合ってもらうぞ」
「はぁ、何をしろと」
「大したことじゃない。俺の暇つぶしに付き合ってくれるだけでいい」
「……おい、なんで僕の身体は上昇してるんだ？」
上へまいりまーす、とばかりに天井へと向かう簀巻きな僕。そう

いや吊るされてるんだった。何処をどうやって天井に縄を通しているのかが気になるが、あいにく顔は重力によって床の方向に固定されたまま。首を捻ったり身体を捻っても天井を見ることはできない。というかロープが厚すぎてうまく動けん。明らかに巻きすぎである。

「おお、居間が一望できる」

背中が天井に付き、まるで電灯にでもなった気分だ。さて、これから僕はどうなるのやら？

「それで？　暇つぶしってなんなんだ」

「落ち着いてるな、おまえ」

「妙な事態は昔から姉で慣れてるから。それで？」

「慌てるな。じきに来る」

その言葉に応えるかのように玄関から「ただいまー」という声が。カカが帰ってきたのか。聞こえる話し声からしてサエちゃんもサユカちゃんもいる様子。

「なあ、この格好で出迎えろと？」

「いいや。おまえはまだ帰ってきていない」

は？　と疑問符を浮かべる間もなく、僕の身体のどこかがチクリと痛み、僕の声は封印された。

「……！」

「む、何をしたか？　案ずるな、喉の麻酔を打ち込んだだけだ。我が家秘伝のものでな、声は出なくなるが身体に支障はない。たぶんな」

我が家秘伝って僕は初めて聞きましたけど！？　ああ父上あなたの家ですかそうですか。ところで先ほどからあなたはどこにいるのですか？　なんか頭上から声が聞こえる気がするから天井裏にでもいるのですかね。はっ、それはそれは忍者らしいことで。そのまま一生そこにいろ。

「……ものすごいプレッシャーを感じるが、まぁいい。えーと、ぽちぽちっとな」

――と、なにやら振動音が。これは、携帯のバイブ音？

「あれ、私か」

下を見ると、いつの間にかくつろぎモードの三人が。そしてカカが携帯を取り出して、

「トメ兄からだ」

そんな、ありえないことを呟いた。

……おい。まさか。

「そう、俺だ」

頭上にいるバカタレが僕の携帯でかけやがったのか！？

「もしもしトメ兄？　あ、うん。みんな一緒だよ。なんか用？」

しかもカカのやつ、相手が父さんだって気づいてないし！　さらにさっきから聞こえていた父さんの声は、電話してるときに限って僕に聞こえてこないし！　どういう仕組みなんだこれは！？　忍者ってすごいな！！

「サエちゃんのバーカ」

「えー！　カカちゃん、いきなり何言うのー！？」

「トメ兄が言えって言った」

言ってねえ！！

「ふふふ……トメお兄さんったら。穴を開けてほしいみたいですね」

どこに！？

「サユカン、ごにょごにょごにょ」

「……ぽっ」

「トメ兄が言えって言った」

「やんっ」

何か聞こえねえけど多分言ってねえ！！

「サエちゃんサエちゃん」
「なに――あん!?」
「つんつん」
「ひゃっ！　わぁん!?」
「脇腹ぷっしゅ。トメ兄がやれって言った」
「……ふふふー」
言ってない！　言ってないからあやしく笑うのやめて!?　くそーあの野郎、一番敵に回したくない子に何してくれんだ!?
「サユカン、こちょこちょこちょ」
「ひ、は、ははははっはははっ!!」
「トメ兄がやれって言った。ここも触れって」
「あん!!　あ、あははははっ!」
あんのやろおおおおお！　いくらなんでもやりすぎだろう!?
「……いや、俺、あそこまでやれとは言ってないんだが」
え、つまりあれはカカが――あんのクソガキャ!?　僕のせいにして事態をさらにややこしくしやがったな!!

「いくらなんでも悪ふざけが過ぎますねートメお兄さん……ふふふ」

ま、まずい。こうしている間にもどんどん僕の立場が危うく！

――こうなったら。

僕は自由に動かせないながらも、出来る限りの力を持って身体を揺らした。腹筋背筋すべてを使い、水揚げされた魚のように暴れる！

「お、おい止めろ。そんなに暴れたら――ええい」

家族は普通じゃないが、この家は普通なのだ。どんな方法で天井に貼り付けているかは知らないが、大人の男がここまで暴れれば天井の薄板がもたないだろう。というわけで、バカ忍者は家が壊れる前に、僕を吊るしている縄を切り落とすハメになった。

天井から自由落下。身動きできない状態で。

あ、死ぬかも？

そう思ったが、僕は無傷で着地することができた。テーブルの上にボトっと腹から落ちたのだけど、何重にも巻かれたロープがクッションになってくれたのだ。

さて、いきなり上から降ってきた僕に唖然とする三人をどうしたものか。

「と、トメ兄？　なんで」

「て、テーブルの上にトメさんが……つまり食べていいてことっ！

？」

食うな、頼むから。

「あれー、今電話してたはずじゃー」

「そうそう、それは――」

お、衝撃のせいか時間が経ったせいか、声が出るようになってる！　ちょっと変な声だけど助かった。これはうちのクソオヤジのせいだと暴露を……

暴露を……ふむ。

「僕、電話なんかしてないよ。今のは全部カカの一人芝居だよ」

きゅぴーん、とサエちゃんサユカちゃんの凶眼がカカを貫き、本人は大慌て。

「え、や、だって、本当にトメ兄から電話が」

「僕、こんな状態だよ？　電話なんかできないよ」

「それはもっともですねー……カカちゃーん？」

「カーカーすーけー？」

「や、その、ごめ、ちょっとやりすぎちゃ――あ、やん、あ、あは、あはっははははやめやみゃははははそこダメ弱いのあははははは」

ふっ、調子に乗った罰だ。くすぐり地獄を存分に味わうがいい！

「驚いたぞ、トメよ。まさか俺を庇ってくれるとは」

「水臭いこと言うなよ、家族だろ。あんたがカカといまだに顔をあわせづらくて微妙な関係なのは知ってるしな」

「おお……それを悪化させるマネはしたくないということか！？なんたる人格者、父は……父は嬉しいぞおおおお」

なにやら感激して去っていく声。どこから声が聞こえていたかは、あえて考えないようにしよう。

それにしても……甘いな父さん。

――そして。サエちゃんとサユカちゃんが帰ったあと。

「……はぁ……はぁ……」

「やっほー。カカちゃーん？　生きてますかー？」

「とめにぃ……どゆこと……」

「父さんがああ言えって言った」

「じゃ……あの電話は……？」

「父さん」

「あいつ殺す！！」

天高く拳を振り上げ、復讐を誓う妹。応援するぞ。

「……トメよ、どういうことだ」

そして再びどこからともなく聞こえる声。

「言っただろ？　あんたがカカを顔をあわせづらくて微妙なのは知ってるって」

それを悪化させるマネをしたかっただけのこと。

「う……う……うわあああああんトメの親不幸ものおおおお！」

自業自得じゃボケ。

僕をなめるな。

**カカの天下４７１「あいつが言えって言ったってあいつが言えって言った」（後**

こんな長いタイトルも珍しい笑
しかしまぁ、タイトル通りのお話かと＾＾；
人のせいにするのはおもしろいですが、ほどほどにしましょーね
＾＾

## カカの天下472「おもしろいって言ったら負け」

ごろごろごろごろ。

あ、別に猫が喉を鳴らしてるわけじゃないですよ？　居間で寝転がって雑誌を読んでるトメです。まぁ喉を鳴らしたいくらいにまったりはしてるわけですが。

「……トメにー」

「あいあい？」

テーブルを挟んで反対側から声がかかる。僕と同じくゴロゴロしながら漫画を読んでいるカカだ。

「～って言ったら負けゲームしよ」

「なんだそれ」

「んとね、例えば最初に出題者が“『りんご』って言ったら負け”って言ったとするでしょ。そしたら続いて出題者は相手に『りんご』って言わせるような質問をするの。質問の形はどんなのでもいいけど、相手は正直に答えなきゃダメ」

「ふむふむ」

「それを交互にやってくの。負けが多いほうが負け」

へぇ、意外とおもしろそうなゲームだ。

「そんなゲーム、どっから持ってきたんだ？」

「サエちゃんに教えてもらった。で、やるの？　やらないの？」

「まぁ暇だし。付き合うよ」

「よし、じゃあ私からいくね。えと……『とんかつ』って言ったら負けね。質問、今日の夕飯はなんだった？」

む、そうきたか。今日の夕飯はとんかつだった。嘘をついてはいけないのなら、ここはとんかつとしか答えようがないのだろうけど……

あ、そうか。

「ご飯」

まぁ、嘘ではない。

「むむむ、うまいことかわしたね」

「じゃ次は僕な」

うん、大体このゲームの趣旨がわかった。

出題者は、問答無用に答えが一つしかない問題を考える。そして相手は、その裏をつく答えを考える。うまいこと思いついた方が勝てるってわけだ。そう、例えばこんな風に。

「いくぞ。『まる』って言ったら負けな。質問じゃなくて○×ゲーム、×は×である？」

「えええ……ううぅ……えっと……」

「○×ゲームだから○か×しか答えはないぞ」

「あー、うー」

「ちなみに正直に答えないとダメなんだよな」

「……まる」

まずは一勝。

「トメ兄、コツ掴むのはやすぎ」

「伊達におまえより長く生きてないよ。ほれ、次はカカの番」

「むー……じゃあ。『いない』って言ったら負け。質問、二択です。幽霊はいる？　それともいない？」

「いる」

「……いないもん」

「おまえはそう思ってても、僕はそう思ってないんだ。だから嘘じゃない」

「いないもん」

「や、だからさ」

「いないもんいないもんいないもん！」

「僕はそう思ってないわけで」

「トメ兄のバカ！！」

「あーもー、じゃーいないってことでいいよっ」

こういう勝ち方もありなのかよ、くそぅ。

じゃあ反撃だ！

「いくぞ、こっちも『いない』って言ったら負けな。質問、二択です。妖怪はいる？　それともいない？」

似たような質問だが、幽霊嫌いなカカのことだ。これも『いない』と言わざるを――

「ああ、それはいる」

あれぇー？

「えと、カカ。妖怪はいいのか」

「うん、だっているもん」

……基準がわからん。姉のことを言ってるのか？

「次は私ね。『トメ兄』って言ったら負け！　あなたのお名前は？」

「……トメ」

「やった、私の勝ち――じゃない！？」

「おまえアホだろ」

慣れた呼称が仇になったな。『兄』は余計だ。

「反撃いくぞ。『カツコ』って言ったら負けな。姉の名前は？」

「忘れてた」

「そんな答えアリかよ！？」

「だってお姉ってしか呼ばないもん」

こいつマジで忘れてたのか。じゃあルール違反じゃないし……くぅ、姉、可哀想に。

「私の番ね。とっておきの問題いくよ。『大好き』って言ったら負け。トメ兄は私のこと好き？　それとも嫌い？」

「すごく好き」

「しまった、『大』は余計だった！」

「もしもしカカさん。言ってて恥ずかしくありませんか？」

「黙らっしゃい」

雑誌に落としてた視線をちらりとカカに向けると、少し頬が赤かった。ほっほっほ、可愛いのう。

「次は僕の番な。『好き』って言ったら負け」

「……む」

「カカは僕のこと好きか？」

かなり恥ずかしい質問だが、たまには妹に好かれていると確認したいというお兄ちゃん心をわかってほしい。

「嫌い」

「嘘つけ」

「別に嘘じゃないし」

意地を張るカカがおもしろい。僕は雑誌を置いてカカ側にごろごろ転がって——うまいことカカの目の前に到着。手元の漫画に向けている顔を覗き込む。

「またまたー、いつもじゃれついてくるくせに」

「家にトメ兄しかいないから、仕方なくだもん」

漫画から顔も上げず、素っ気無く言う困った妹。仕方ない……そ

こまで言われては攻撃するしかないな。

「そっか、んじゃ嫌われてるやつのためにご飯作りたくないし、もう作るのやめよっかな」

「なっ！？」

「嫌われてるやつと遊ぶのもやめよう、うん」

「あああ」

「で、質問の答えは？」

「ううううう」

カカは悔しそうな顔でこっちを見ている。ふっ、勝ったな。

「もう一度聞くぞ。『好き』って言ったら負け。カカは僕のこと、好きか？」

「……うん」

よし――あらっ、負けた！？

「くそぉ、そのような抜け道があるとは」

「……ね、トメ兄」

「なにさ」

「言ってて恥ずかしくない？」

「……オゥ、イェス」

言われてみれば何やってんだ僕らは。

ゴロゴロ転がりながらさっきの定位置に戻った。

「で、カカ。次は？」

「恥ずかしいの、もうやめようね」

「おまえから言い出したことだろうに……ったく」

――こんな感じで今日を過ごした。

## カカの天下４７２「おもしろいって言ったら負け」（後書き）

サブタイトルから続きます。質問、今回は面白かったですか？
……どうだったでしょうか。私が勝ったか負けたかは読者さんによって違うと思いますが、勝てばいいなーなんて夢見ながら今日はシメさせていただきます笑

# カカの天下４７３「甘いもの詰め合わせセット」

こんにちは、クララです！

突然ですがクララ、甘いものが大好きです！　というわけで、これから甘いものを探す冒険に出ようと思います。よかったらお付き合いくださいです。

あ、ちなみに移動は最近見かけた変な人を参考にしていきたいと思います。

ではでは、シュバッ！

はてさて、ここはどこでしょう……むむ、お母さんの匂い。どうやらここは職員室ってゆーところっぽいです。ここに甘いものが！？

「教頭、今日は何食べてんだ？」

「ようかんだ」

「……うまいか？」

「泣くほど」

ど、どうやらあの人から甘いものをもらうことは不可能のようです。次へ行きます。シュバッ！

えっと、ここは……おいしいものの匂いです！　というか見覚えが……あ、クララわかりました。ファミレス東治です！　クララときどきキリヤに食べ物もらいにくるので知ってるのです。

「ふ、見ろセイジの兄貴よ。この売り上げを！」

「ふん、甘いわトウジの弟よ、単純な売り上げこそ負けているが、こちらは原価率が低いのだ。すなわち、儲け自体は負けておらん！」

「甘い！　兄貴は甘いぞ。単純な売り上げが多いということは、うちの店に来る客が多いということだ！　それに何より勝負するならわかりやすいものと相場が決まっている。何％がどうとか面倒なことで比べられるか！」

「……弟よ、経営者としてそれどうよ」

「ふん、商売として儲けが出ていればそれでいいのだ。計算などせずとも――」

「甘いわぁ！！」

「「み、南の姉貴」」

「まーたあんたらはくだらないことでピーチクパーチク！　鳥かいあんたらは！？　だったら今すぐあたいが料理してやるぞ！　あぁん！？」

「「い、いえ、滅相もない！　立派なおっさんでございます！！

食べても腹を壊します！」」

「だろう？　立派なおっさんがガキみたいなこと言ってんじゃないよ。勝負ならね、てめぇの料理を食べてもらったお客の顔で決めるんだね！　食べてもらったお客がみんな笑顔なら勝ち。両方の店の客全員が笑顔だったなら、それをより長く続けられたほうが勝ち！　それが料理人の勝負の仕方ってもんじゃないのかい！？」

「「お、仰るとおり」」

「ったく、いくつになっても甘いんだから、うちの弟どもは」

……甘いもの違いだったみたいです。おばちゃん、こあいです。

シュバッ！

さてさて、ここは……あれ。

「教頭、まだ食べてるんスか？」

「今度は饅頭だ」

「はぁ……」

「なんだテンカ君。ため息などついて」

「別に」

「仕方ないな。ほら」

「いや一つほしいとかそういう意味じゃなくて」

あ、クララほしかったです！　でも急に出てくと怒られそうだし……次行くです。シュバッ！！

おっと、ここはサエおねーちゃんと何度も来たことのある場所です。たしかカカとトメのおうちだったはずです。

「はぁ。有休を消化するのに休みとってみたけど、カカがいないと暇だな……ごろごろ……それにしても昨日やったゲームはなかなか面白かったなー。結局は僕の勝ちだったし。カカもおもしろい答えを返してくれるけど、まだまだ甘いよな」

「甘い……」

「あれ、父さん。いつの間に」

「トメよ。『甘い』って言ったら負けな」

「なんだ、父さんもやりたいのか。じゃあ次は質問を」

「甘いわ！！」

「なんであんたが言うの」

「それくらいおまえらの雰囲気が甘かったということだ！！　てめーらなんだよイチャイチャしやがって！　付き合ってんのか！？」

「ど、どこかで聞いたセリフを……そんなわけないだろ、カカは妹だぞ」

「その妹と頬を赤らめながら『好き……ぽ』とか言い合ってんじゃねぇよ！　甘すぎて吐きそうだぜバーカバーカ！」

「父さん、なんか幼くなってないか？」

「うるさいうるさい、知らねーよこんちくしょー！　俺だってカカに好きとか言われてみたいのに！」

「あんた怒ってる理由それだけだろ」

「うっせーうっせー犯罪者！　警察に捕まっちまえー！！」

「……ガキだな。放っておこ」

「偽造の準備……現場用意……凶器と証拠の捏造……タイミング……現行犯……」

「おい待てそこの本職、あんたが本気になったら洒落にならん！！」

なんだかまた『甘い』違いみたいです。しかもトメがなんだか大変みたいですね。

まぁ興味はないです。

次、次っと。シュバッ！

……なんでまたここなのでしょうか。

「教頭、今度は何だ？」

「ケーキだ」

「美味いか」

「蘇るほど」

「いつ死んだんだよ」

「テンカ君？　先ほどから何かと突っかかってくるが、文句でもあるのかね」

「いや、食べてばっかりで仕事しねーのかなーと」

「君のようなノロマと一緒にしてもらっては困る。この時間を満喫するため、とうの昔に仕事など片付けたわ、この愚か者めが」

「……そんなに甘いもんばっか食ってるくせに辛口だなオイ」

「む、甘いものが足りないのだろう」

「まだ食うか」

結局、クララは甘いものが食べられませんでした……クララしょっくです！

でもなんだか楽しかったのでおっけーです。

## カカの天下４７３「甘いもの詰め合わせセット」（後書き）

甘いもの食べたいなぁ……

今回の話を書こうと思ったきっかけはそれだけです（ぉぃ

ところで人気投票の一次〆切りまであと二日ですね。忘れている方はお早めにどうぞ笑

# カカの天下４７４「友達ソング」

こんばんは。今日のおいしい夕飯も終わり、お風呂も入ってほくほく状態なカカです。自分の部屋のベッドにゴロゴロと寝転がりながらメールしています。

メール相手はカレーの人、もといインドちゃん。相変わらず『友達ができないの……』と相談を受けている私。クラスメイトの印象自体は悪くないんだけど、インドちゃん会話できないからなー。はっきりと喋るのはカレーのこととメールだけって感じ。

つまりメール以外で友達を作るにはまずカレーの話題から入らないとダメなんだけど……あいにくカレーに詳しい小学生なんてほとんどいないのである。

そんなわけで、給食にカレーを配ることで人との交流は順調に増えている一方、大勢の人を前に気圧されてなおさら喋れないという悪循環に陥っているのだ。あれだけの人に囲まれていればそのうち喋れるようになるだろうと思っていたのが甘かった。

だから仕方なく、それとなくメールで『そのクラスで一番賑やかな人たちに突撃してみれば？』なんてことを言ってみたんだけど。

返信は、『いやぁ、あの三人はちょっと勢いとアクが強すぎてついていけないというか、近寄りがたいというか……』って感じで気が進まないようだった。言うまでもなく私たちのことである。バレるの覚悟で言ってみたんだけどダメだった。そんなに怖いかなぁ、私たち。毎日全力で遊んでるだけなのに。

まぁ、ともかく。私たちと友達になるにはまだ勇気が足りないみたいだ。ここはもっとおとなしめな友達から始めて、だんだんと喋れるようになってくれればいずれ友達になれるだろう。ただ、その最初の友達が問題なんだけど……

むー、ごろごろごろ……おとと、ベッドから落ちる。

「カレーとメール以外でインドちゃんと会話するには……うーん……ダメだ、わかんない。インドちゃんがまともに口を開いたのってカレー抗議と鼻唄くらいしか――」

あ。

その手があった！

翌日、学校にて。

「頼みって何よ、カカ」

「えっと、なんでしょうかカカさん。わたくしにできることでしょうか」

私は休み時間にアヤちゃんとイチョウさんを呼び出した。

や、こう言ったほうがいいか。

合唱部の二人、と。

「直球で聞くけど、二人とも。インドちゃんのことどう思う？」

前振りなしの質問に二人はきょとんとするが、ちゃんと答えてくれた。

「どうって、可愛いとは思うわよ。おいしいカレーくれるから結構好きだし。喋らないけど」

「はい、わたくしも好きですよ、インドさん。でも……お恥ずかしながら、わたくしもあまり言葉を交わしたことはありません」

「ふむふむ。二人とも印象は悪くない、と。それで、なんで喋んないの？」

「だって話しかけても顔真っ赤にしてだんまりなんだもの」

「アヤちゃん、告白でもしたの？」

「するか！！」

「じゃやっぱ脅迫か」

「じゃって何よ！　やっぱって何よ！」

「冗談よん。インドちゃんが恥ずかしがってただけだよね。イチョウさんは？」

「わ、わたくし、交流のない人に自分から進んで話しかける、ということが得意ではないもので……」

「なんで」

「あの……初めて話すときに失礼はないかとか、馴れ馴れしくないかとか、知らない心の傷に触れて怒らせたらどうしましょうとか、そのまま殴られたらどうしましょうとか、警察に捕まったらどうしましょうとか、そんなことばかり考えてしまうのです」

そんなことばっか考えてる方がどうしましょうだよ。心に深い傷持ってるのはあんたじゃないの？

「えっと、つまりは恥ずかしいわけだね」

「は、はい……」

「カカ、そろそろ言いなさいよ。なんでいきなりそんなこと聞くの？」

「うん、実は二人にインドちゃんと友達になってもらいたくて」

再びきょとんとする二人。そして、

「まずあんたがなりなさいよ」「まずカカさんがなってさしあげればいかがでしょう？」

息ぴったりに同じようなことを言った。

「……や、なんかさ。私は元気すぎるみたいで、インドちゃんは少し、その、ひいてるみたいで」

「「あー」」

「二人して頷かないでくれる！？」

ちょっとショックだし！

「ま、いいわよ。友達が増えるに越したことはないし。それにしてもなんでカカがそんなことを？　あ、わかった。番長としてクラスをより良い方向へ！　って感じでしょ」

「……あー、うん。それでいいよ」

番長とかまだあったのか。

「わたくしも構いません、といいますか、大歓迎です！　ですが……どうやってお友達になればいいのでしょうか」

「そうよね、そもそも会話できないんだし」

「それなんだけどね、とっておきの作戦があるの――」

そして私はその作戦を伝えた。話し終わると、二人は半信半疑ながらも頷いてくれたのだった。

そして昼休み。作戦の決行である。

いそいそと配り終わったカレーの容器を片付けるインドちゃんに、合唱部の二人が迫る！

それに気づいたインドちゃんは困惑しながら二人を見る。

「ねね、インドちゃん。ちょっといいかな？」

「わたくしたちとお話しませんか？」

「え……その……」

話しかけただけで真っ赤っか。これは重症だ。その後も何度か二人が話しかけるが、インドちゃんの反応は「う、うん……」とか「んと……」とか「その……うぅ」というものばかり。まともに答えることができてない。

やっぱりここは私の考えた作戦しかないようだ。いけ、二人とも！

アヤちゃんとイチョウさんは目を合わせ、頷き――さん、はい、とリズムを取って、おもむろに歌いだした。

「こんに～ちは♪　わた～しは、歌好きのアヤ～♪　ハイッ」

アヤちゃんがイチョウさんにタッチ。

「こんに～ちは♪　わたく～しは、本好きのイチョ～♪　ハイッ」

そしてイチョウさんがインドちゃんにタッチ！　インドちゃんは突然の事態に慌てて――だけどリズムに遅れないようにと慌てて歌いだす。

「こ、こんに～ちは♪　わた～しは、インド好きのカレ～♪　ハイッ」

「逆、逆！」

「あ、えと、カレ～好きのインド～♪　ハイッ」

よし、成功！　ふ、私の目は確かだった。インドちゃんは合唱部ではないけど歌が好きなんだ！　なぜなら掃除中とか機嫌のいいときはいつも歌ってるし、なにより私が初めて教室でインドちゃんに気づいた時も彼女は歌っていた！　だから歌に合わせてなら喋れると踏んだこの計画、見事にビンゴだ、いぇい！

さぁ戻ってアヤちゃんの番だ！

「Ｙｏ！　Ｙｏ！　いっつもカレーをありがとＹｏ！　ハイ！」

なんでいきなりチェケラッチョになってんのＹｏ！

「Ｙｏ！　Ｙｏ！　わたくしもいっつもありがとＹｏ！　ハイ！」

ＤＪのマネしてノリノリなアヤちゃん、それを恥ずかしそうに、しかし楽しそうにマネするイチョウさん。

そして必死にマネしようとしてブンブンわちゃわちゃと手を振り回してるインドちゃん。

「よ、Ｙｏ！　Ｙｏ！　私もＹｏ！　カレーがみんなを食べて、くれて、う、れ、し、い、Ｙｏ！」

「「ノリはいいけど逆だ、Ｙｏ！！」」

うーん、あそこだけかなり妙な空間になってて周りのクラスメイトがポカーンとしてるけど、この調子なら心配なさそうだ。きっとこのまま友達になってくれるだろう。

「オ・レィ！」

「カフェオ・レィ！」

「か、カレーオ・レィ！」

「「何そ・れぃ！？」」

そんな妙ちくりんなコンサートをしばらく続けた後、昼休みの終わりに……インドちゃんはおずおずと二人に、「あ、あのー？　えとー？　と、ともだーちに、なってー？」なんて、日本語を覚えたての外国人みたいなイントネーションで言うのだった。本人は歌のつもりなんだろうね。二人の返事は言うまでもない。

よかったね、インドちゃん。よかったね、『カレーの人』さん。

そして、その夜きたメール。

サブタイトル。

『カ・レィ！！！！』

テンションたかそー。

## カカの天下４７４「友達ソング」（後書き）

インドちゃんにお友達ができました。ずいぶんとノリノリですが、アヤちゃん以外はわりと必死だったりします笑
これからはこの三人グループで仲良くやってほしいなぁなんて思ってます。

さて、とうとう明日で人気投票の一次〆切りです。時間で言うと受付は１６時くらいまでです。それ以降は後半の投票とさせていただきますのであしからずｖ＾＾
ではでは、投票お待ちしております！

**カカの天下４７５「第十五回、カカラジ！」**

「やぁ、僕の名前は留。こいつは愛犬の香加」

「わん！」

「こいつはとっても頭がいいんだ。２－１は？」

「ワン！」

「１＋１は」

「わ、ワン」

「ご飯を食べるときに左手に持つのは？」

「碗！」

「じゃあ右手は」

「わ……碗……」

「物を持つのに使うのは？」

「腕！」

「じゃあ走るのに使うのは」

「わ……わ……腕……」

「すいません、こいつやっぱバカでした」

「がるるるるる！！」

「痛ぇ！！」

と、いうわけで。第十五回カカラジ、始まりです。

「言われたとおりにやってみたけど……何なの今の」

「ほら、こないだ言ってただろ。ゲストいないときのオープニングが寂しいから小話みたいの入れようって」

「おもしろいの？　これ」

「さぁ？」

「ま、いっか。みなさん、おはこんばんちわカカ！　そこ、古いとか言わない。えー最近思うんです私。変な人、増えすぎじゃない？」

「おまえが言うな」

「的確なツッコミどもども。というわけで第二回人気投票を始めてからはや２５話を越えましてついについに中間発表でございます、いやー楽しみですねぇ今度こそ私は主役として一位になれるのでしょうか。それは君らの手にかかっているのだドーン」

「人様に向かって指差すな」

「ごめんなさい。あ、一応改めまして、私は香加です」

「留でーす」

これはネット小説『カカの天下』を盛り上げるため、ぶっちゃけトークや作者の本音や変なＣＭ、思いつき企画等を放送するラジオになったらいいなーと野望を抱く番組です！　抱くだけならタダだから。えー留や香加、ナレーション作者は本編自体とはとりあえず関係ないのでお気をつけください。

「おお、最初に変なことやったから進行がスムーズだ」

後半の内容が結構濃いからね。さ、テンポよくいきましょう！

「テンポ！！」

「無駄に叫ぶな」

無駄なコントすんな。

「はいはい、ではＣＭへ！」

「こんにちは、桐谷通販のお時間です。今回ご紹介するのは『インドちゃんカレー』という商品でございます。提供者はこの方、インドちゃんです」

「……」

「え、えーと、インドちゃん？　ご挨拶を」

「……ち、ちわ」

「とっても恥ずかしがりやな女の子ですね、萌えますね、大変結構です。えーでは説明しましょう。この『インドちゃんカレー』の良いところは……え、なんですかインドちゃん」

「……ん」

「え、なに？　良いところは食べてから説明してほしいのですか？　わかりました。都合のいいことに出来上がったものがここにありますし、いただいてみましょう！　このカレーの良いところを語るのはそれからでも遅くはないと――」

「あーん」

「このカレーの良いところは可愛い子に『あーん』してもらえるところです！！　いやー、なんて素晴らしいんでしょう！　では早速、世界の美しさに感謝しながらいただきたいと思います！　あーん……もぐ。うん、痛い！！　……痛い？　え、まさかこれは、辛すぎて痛いというオチでは」

「三ケタ」

「はひ！？　それもしや何倍カレーって意味でしょうか！？」

「……えへ。えい」

「むぐ、もが！？　ちょ、ちょっとインドちゃんそんな次々と口に

いれないで辛っ！！　熱いのがやっときた！？　身体が痛くて辛くふぇむぐもが！　ひかひ『あーん』されたものを拒むわけにふぁむぐもごま……！！」

――結論。

「死ぬほろ、美味ひはっられふ……」

「ぶい」

ＣＭがあけて。

「何やってんのさ、二人とも」

「や、なんかやりたかったんだって」

「死にたかったの？　桐谷んも変な人だね」

「香加に言われちゃおしまいだな」

ちなみにインドちゃんはあだ名なので漢字には変換してません。

「さて、まずは定番のおたよりコーナーだね」

「僕から読むぞ。えーカカラジネーム『カカの恋を静かに見守る人』から」

「うんうん、見守っちゃって！」

「えー『４６８話の最後でカカがサユカと、お菓子好きのサエにケーキをおごるという約束していましたが、いったい何ホールおごることになったんですか？』という質問。はい香加さんどうぞ」

「小学生の小遣いをなめるな！！」

「はい、１カットだそうです。次行きましょう」

「あ、今回は番組の都合により、二つのおたよりしか紹介できないんだってさ。それでさ、もう一つはこれを紹介しろって言われたんだけど……」

「……うあ、これって前みたいな脅迫状じゃないか！」

なんか再挑戦みたいな感じで送られてきたのだよ。

「どれどれ……？　えー『この手紙は呪いの手紙です。この手紙を一文字でも読んでしまったなら、カカの天下連載終了までにトメとテンカをラブラブうっふんあっはんな間柄にしなければなりません』ってまたストレートな……こういうの、僕リアクションに困るんだけど」

「そんなのどうでもいいから。はよ続き」

「む……えっと、『もしこれを行わなければ数多くの災厄が、最近テンカ姉さんをほったらかしにして恋愛ゲームの主人公みたいに道行く女性に片っ端からフラグを立てていく天然タラシ男トメの身に余すことなく降り懸かります』って僕そんなことしてないよ！？」

「真犯人は皆そう言うの」

この犯罪者がっ。

「早く続き読みなよ罪人」

「うぅ……なんだよぉ……えっと？『☆今回イチ押しの呪い☆』ってこれ何の宣伝よ」

はよ読め。

「はいはい……『そのいち。今、水面下で話題になっているシュー×トメ同人小説本「姑」がカカサエサユカ三姉妹の手に渡る』って話題になるな、そんなモン！！」

シュートメ。しゅうとめ。姑。

「うまい！」

「感心すんなそんなことに！　はぁ……『そのに、ある日突然ツッコミのスキルを無くしてしまい存在意義を見失う』ってこれ最近無かったか？」

だってトメとテンカ先生まだくっついてないからね。早くも呪いがふりかかったのだよ。

「一時的だったけどな」

だってそれだとあまりにトメつまらなさすぎるんだもん。そしたら作品つまんないもん。私が文句言われるじゃん。

「作者の都合かよ……いいけどさ。えー『そのさん、タケダの恋が成就する』ってこれ僕と関係ないやん」

「なに言ってるの留兄。充分にあるよ」

「どの辺が」

「留兄のせいでそんなことになったら私が留兄を殺すもん」

「タケダ！！　がんばるな！！　頼むから！！」

いくら呪いの力でもそれは難しいんじゃないかなぁ……まぁでも、せっかくこんなのもらっちゃいましたし。前から計画していたトメとテンカ先生のお話をそろそろ書こうと思います。それでくっつくかどうかは二人に任せますけどね。私には舞台を用意することしかできないのですから。

「ふむふむ、どんな話になるのかね。にひひ」

「あー、もうそろそろこの話、終わりにしない？」

そですね、実際にどうなるかは本編のお楽しみということで。

「それではおたよりコーナーはこれでおしまい。いよいよ第二回人気キャラ投票の中間発表に入りたいと思います！！」

「よしよし、これなら僕もいじめられないだろう」

「それではまずは一位から！」

「へ？　こういう場合って一位は最後じゃないの？」

「や、そうなんだけどね。今回は中間発表だし、たまには上からっていうのもいいかなーと思って」

「……なんか、ヤな予感がするんスけど」

「なんのことやらー？」

ことやらー？

「ささ、疑心暗鬼な留兄は放っておいて発表いきましょう！　まずは一位！　誰でしょうか。私だよね、私でしょう。まさか前回一位だった野郎がまたもやそこに居やがるなんてことはないよね？」

ないよねー。

「嫌な前フリ……」

「ではでは、発表いたします。第二回人気キャラ投票、中間発表第一位は……じゃじゃん！！　４３ポイントで……えー」

えー。

「えー、とか言うな！」

「はい、お察しの通り、一位はトメ兄でした。またですか。また一位なんですか。たまには妹に花を持たせようとか思わないんですか？　この野郎」

「なんで一位なのにここまで言われなきゃならんのだ」

「だって留兄だもん」

そしてトメだもん。

「というわけで、そんな人気者の留兄にこれ以上いいところを取られるわけにはいかないので……留兄、退場」

「へ？　は？　マジで！？」

マジで。

「うん、ほらほら早く消えてよ。留兄だけ人気取ってたら他の人が可哀想でしょ」

そうそう、バランス悪くなっちゃうんだからね。

「わ、わかった。わかったから押すな、自分で出て行くよ！　……うぅ、一位なのに、一位なのに……一位ってなんだよぅ」

寂しい背中でとぼとぼスタジオから出て行った留さん。今日はお疲れ様でした。

「よし、邪魔者は消えたところで！　今後は私、香加が進行していきまーす。お次は二位だね」

はい、そしてせっかくなのでアピールタイムというものを設けました。これから発表していく中でランクインした人には何らかのア

ピールをしてもらいます。

「ほうほう。制限時間とかあるの？」

二行です。

「……それ、時間？」

だって文章だもん。

「そりゃそうだけど、一応これはラジオ形式なんだし、そこまでぶっちゃけるのは……まぁ、作者が言ってるならいいのか」

そうそう。読んでる人がわかればいいの、わかれば。あ、携帯で読むと二行じゃないかもしれないけど、その辺は了承お願いします。

「了解でっす。さーお待たせしました、続きいきますよ。第二位の発表です！　３９ポイントで、テンカ先生！」

うーん、前回の中間発表と同じ順位ですね。やはりこの二人は強い！

「むー、また私じゃない。いいもんいいもん！　どうせ次だもん！　さぁ気を取り直して　アピールタイムに行きましょう！　制限は二行間ですよ！」

天下先生召喚！

「さぁ、どうぞ！」

「……んあ？　アピール？　んだよそりゃ。別にいいよ適当で。オレは別に人気とか興味ねーし。ま、投票くれたヤツに感謝はしとく。さんきゅ」

うーん、クールだ。

「天下先生らしいよね」

ある意味これもアピールか。では次行きましょう。

「はい、第三位の発表です！　うっ、また私じゃない……でも仕方ないか。３４ポイントで、サユカンです！！」

デート、告白などなど。活躍の場が多かっただけあってなかなか強いです。しかしまだテンカ先生には及ばない！

「そうだよね、サユカン頑張ってたもんね。ではではアピールタイムいきましょう！　どうぞ！」

沙由歌ちゃん召喚！

「留さん、大好きです！！」

「……それだけ？　えと、アピールするとこ違くない？」

話聞いてませんねこの子。まぁ、らしいと言えばらしいですが。

「どこが好きかといいますと――」

長くなりそうなのでそこはカット。はい、香加ちゃん次お願いし

ます。

「りょかい。じゃー第四位！　３２ポイントで、サエちゃん！　またまた私じゃない……まぁサエちゃんに負けるなら別にいいんだけどさ」

前回二位だったサエちゃん、今回の前半では四位にランクインしました。感想欄よりもメッセージの投票が多かったのは、裏でいろいろやるのが得意な腹黒キャラの影響か！？

「それじゃアピールタイム！　サエちゃんのことだから確実なアピール狙ってきそうだよね」

ですね、小枝ちゃん召喚！　どうぞ！

「脱ぎます！！」

見えないし。

「じゃあ香加ちゃんが脱ぎます！」

だから見えないし。

「……え、小枝ちゃんもう終わり！？」

確実なアピールって言えばそうだけど……場所を間違ったね小枝ちゃん。これが挿絵入りとか漫画とかアニメとかだったら最強のアピールだったのに。

「小枝ちゃんもそういうミスあるんだぁ……可愛い」

はいはい小枝ちゃんならなんでもいいんですね、あなたは。

「え、でも脱ぎかけたときに見えた鎖骨にドキっとしなかった？」

……いいから続き！

「なんだよぅ、たまにはそんなの細かく描写してくれてもいいのに……今後に期待か。さ、お次は第五位！　２９ポイントでカカです！　私です！　またこの位置です……」

なかなか上にはいけないね、メインヒロイン。でも今回の上位五人はみんな僅差だから先が全然わからないね。

「うん……でも留兄にだけは勝ちたいのに、遠い……もっかい殺そ」

何度も殺せるなんて便利な世界ですね、ここ。さぁ、続きいきましょうか。

「え、私のアピールタイムは？」

冒頭でやったでしょ。

「……まさか、ワンとしかセリフがなかった、あれが？」

あそこの君のセリフ全部合わせれば二行くらいでしょ。

「そんなのアリ！？」

いいじゃないの、君はさっきからずっと喋ってるんだから。

「それを言われると……わかったよぅ。じゃあ第六位！　１４ポイントで、クララちゃん！！」

おっと、最近登場した新キャラが見事ランクイン！　天然暴走っぷりと微妙なファンタジーが皆さんの心の琴線に触れたのか！？

「ポイントは一気に落ちたけど、かなり大健闘だよね。私もあの子好きだよ、おもしろいし」

おっと香加選手、自分の順位がもう出てしまったからか、余裕の発言です。

「うっさい。それではクララちゃんのアピールタイム、ゴー！」

クララちゃん召喚！

「呼ばれて飛び出てクララです！　えっと、皆さんクララのことバカだと思ってますね！？　見ればわかります！　でも可愛いとも思ってますね！？　見ればわかります！　ぽっ。クララ嬉し恥ずかしょっくです！！」

「はい、なんだかよくわからない勢いを見事にアピールしていただきました」

クララちゃんっぽいったらありゃしませんね。

「それではサクッと第七位にいきましょう！　１３ポイントで、キリヤ君でーす！」

新キャラが二連続できましたね。まぁ前からいると言えばいましたが、最近目立つようになったその色男っぷりに虜になった読者も多いでしょう、ってこないだ本人が言ってました。

「言いそー。ま、ともかくアピールだね」

桐谷君、召喚！！

「ひゃへれはへん……」

「あ、喋れない？　さっきのカレーで？」

ＣＭ出たいなんてワガママ言うから……まぁさっきのをアピールにしときましょう。かなり喋りましたし。

「そだね。んでは第八位！　お、意外だ。９ポイントで、なんとタマちゃんです！！」

ちょこちょこっとしか出てないわりには問答無用のお子様パワーが印象に残るのでしょうか、最近どんどん喋れるようになってきてる謎の赤ん坊がいいとこにきました！

「それではアピっていただきましょう！」

珠ちゃん、召喚！

「う？　あひる？　あひるしゃん？　がーがーがーがーがーがーガーガーがーがーがーがーが

た」

まだ幼児ですし、こんなとこでしょう。

「お次は第九位、え、嘘。えっと……8ポイントで、うちの父です」

驚愕！　いろんな人を差し置いてこの人がトップ10入りを果たすとは！

「なんでさ。そんなに活躍してないよね？」

うーん、作者としても不思議でしょうがありません。

「アピールタイム……するの？」

まぁ、一応……呼びましょうか。留父、召喚！

「シュバッ」

「あ、呼んだ瞬間消えちゃった」

……あ、香加がいるんでした。それで逃げましたねあの人。

「むぅ、ラジオでも顔見れないのか。なんであんなのにポイント入ってるんだろ」

可哀想だからじゃない？　ささ、お次は？

「あ、はい。えっと、第十位！　7ポイントで、サカイさん！」

この人も意外と稼ぎますよね。3ポイント全部！　って読者さんはあんまりいないんですけど、1ポイントはサカイさん、っていうのが結構ありました。

「もうすっかりアブナイ人になってるんだけどねぇ。まぁ母親は強しってことかな」

それではアピールどうぞ、酒井さん召喚！

「どうか私に清き一票をー。私が当選したあかつきには小枝にいろんな恥ずかしい衣装を着せることを約束しましょー。ええ、言ったことは守ります。なんせ私が見たい……えへー……あ、鼻血が」

「投票します！！」

早速洗脳されんじゃないよ、そこの看板娘。

「だってー、だってー」

いくら酒井さんが頑張っても私が書かなきゃ意味がないでしょ！　大体ね、お楽しみ会で散々いろいろ着たんだからそれで満足しときなさい！　しかしさっきの小枝ちゃんといい、アピール手段をよくわかってますね……さすが親子。

「小枝ちゃんの衣装……まぁ作者も小枝ちゃん好きだし、そのうち何かやると期待しとこ」

そんなのされても書くかどうかは気分ですがねー。

「ま、いつものことだし。それで、続きはどうしよっか」

そうですね、後は同点が多いので、一気に発表しちゃいましょう。

「おっけ、じゃーまずは6ポイントの人いくよ！　お姉！　お母さん！　インドちゃん！」

笠原家のお二人と、最近表に出てきたカレーの人！　さぁアピールどうぞ！

「あたしがトップ10に入ってない！？　なんでさ！　あんなに空飛んだり落ちたり幽霊退治したり殺人事件を解決したり電車と並走したりしたのに！！　え、化け物すぎる？　そんなぁ！？」

「あらあらっ。投票してくださった読者君にはありがとうだね♪　みんなのファンレター、ちゃんと受け取ったよ。ありがとねっ」

「……えと……カレー……食べる？」

無駄にテンション高い括弧、アイドル風味な結菜さん、恥ずかしがり屋なインドちゃんでした！　さぁ次は？

「5ポイントの人いきまーす。アヤちゃん！　シュー君！」

彩ちゃん、修君。どうぞー。

「いぇーい！　みんな、学校のアイドルな私のためにどうもありがとう！！　お礼にとっておきのナンバーを聞かせてあげるね！　前奏スタート！！　……あれ。スタート！　……なにしてるのよニッシー！？　あ、終わっちゃ」

制限行間により、中断します。

「あ、えっとですね、僕は」

修君だからこんくらいでいいや。中断します。

――さて、４ポイント以下も結構いるのですが、全部暴露するのもおもしろくないのでこの辺で。その他のキャラが今どんな位置にいるのかはご想像にお任せします。詳しくは次のカカラジで！

「中間発表はこんくらいかな？　よし、じゃあＣＭいきましょう！」

「どうもぉ、こんにちはぁ！　ウフフフ！　あたくしですね、実は街じゃちょっとした有名人なんですのウフフ！　その名もですねぇ、お見合い仕事人！　またの名をウフフおばさん、なんて呼ばれてますのウフフフ！　あたくしにかかればどんな人にでも！　ステキな相手と見事なセッティングをご提供できるんでござぁんすのよウフフフ！　さぁ相手がいないそこのあぁた！　あたくしに相談してごらんなさい。必ず見つけてあげるから！　腕が信用できない？　ウフフ、じゃあ見てなさい。今依頼されてるこのお見合いをみごっとーっに成功させてご覧あそばせて頂きますわよぅウフフフ！　えぇとぉ……男勝りの女教師、嫁にいけそうにないからお願いします、だってぇ。見てなさいよぉウフフフ！」

ＣＭがあけて。

「オホホおばさんの親戚かな」

たぶん類似品かと。

「まぁいいや。えー、というわけで！　そろそろお別れの時間となってしまいましたー」

はい。あとは人気投票、後半戦ですね！

「一回投票した人もまたできるんでしょ？」

ええ。ルールは前半戦と同じ、一人3ポイントまでオッケーです。感想欄もしくはメッセージ欄からお願いします。面白いコメントがあったら紹介するかも！？　もちろん投票だけでも全然問題ありませんよー。

「面白い投票ならもうあったよね」

はい。皆さんなかなかユニークでマイナーなキャラにも投票してくださるので、集計してるこちらもかなり楽しいです。ピンポイントな投票はポイントが少なくても次のカカラジで発表したいと思います。

「それはいいんだけど……これ、なに？」

あ、それは！

「作者、ルシカに投票？　しかも5ポイントも入ってるじゃん！」

なんかイレギュラーっぽいから隠しておいたんですが……や、ど

もども。

「普通に喜んでるね、君。まーいいけど……じゃあこれで今日のカカラジはおしまいだね」

はい。随分と長くなってしまいましたが、チョップどうしましょうかね。

「……そろそろ終わったかー？」

「あ、留兄。いいとこに」

ちょっとこっちおいで。

「ん、なんだよ……まだ終わってな」

「カカラジーー」

チョップ。

「なんでブッ！？」

はい、それでは後半の投票お待ちしております。

「前半に投票してくれた人もありがとねー！」

この番組は、ワガママ桐谷君とお見合い料理人の提供でお送りしました。

「あれ、お見合いの人のとこ、違うんじゃ」

なんでもえーやん。

## カカの天下４７５「第十五回、カカラジ！」（後書き）

こんな感じになりました笑

投票してくださった方々、本当にありがとうございます！　おかげで盛り上がってまいりました！

もしよかったら後半もお願いしますねっ！

# カカの天下４７６「とあるレジの付属品」

こんばんは、トメです。

ただいまカカと二人で夕飯のお買い物中です。スーパーを歩く中、カカは何をするでもなく僕につきまとっています。

「あ、砂糖買わないと」

「さとうさん！！」

誰だよ。

「スズキが安いな」

「すずきさん！」

はいはい……ん？

「お」

「おっさん！」

こいつうざい。

「おまえ」

「おまえさん！」

さんさんうるさいな。

「……1＋1は？」

「に！」

ちっ、ならば。

「1584＋582は？」

「けいさん！」

うまい――じゃなくて。

「カカ、いいからちょっと黙れ」

「む？」

「アレ見てみ」

僕の指差す先にはレジがあり、そこでは店員さんがお客さん相手にせっせと会計を片付けている。そしてそのレジの横に立っているのは――

「おっさん！！」

「それはもういいから……たしかにそうなんだが」

そう、おっさんだった。正確にはおじいちゃんと言ったほうがいいだろうか。頭は薄くて身体は細く、そして顔も細長いおじいちゃ

んが、ぬぼーっとレジの横に立っていた。着ている服が上も下も野暮ったい白色なので、まるでレジの機械の付属品みたいに見える。

「あのおっさんがどうかしたの？」

「や、なんつーか、なんなんだろうなって」

「どゆこと？」

首をかしげながらもカカはそのおじいちゃんを観察して……すぐに気づいた。そのおじいちゃんが微動だにしないことに。そしてそのすぐそばでレジをしている人は、まったく気にせず働いていることに。

「たまに店員さんの顔に息がかかりそうなくらい近くにいるってのに……お互い気にも留めてない。一体何をしてるんだろう」

「何もしてないんじゃない？」

「息とか生命活動的な意味でか？」

「だってあのおっさん――おじいちゃんかな。どこも見てないよ？」

そう、なんだか遠い目をしている。僕らには見えない世界でも見ているのだろうか。

「じゃあさ、あれってやっぱ幽霊か？」

「なむさん！！」

「お、またうまいことを――あれ？」

気がついたらカカは消えていた。幽霊と聞いて逃げたか。

「うーん、どうしよう。とりあえず幽霊かどうか確かめるか。南無三」

僕は適当なところに買い物かごを置いて、一旦レジの向こう側へ出た。そしてさも通行人を装って、そのレジの近くを通り……

「おっと、すいません」

偶然っぽく肩をぶつけてみた。

「……」

そしてレジ列をぐるりと一周し、再び買い物かごの元へ戻ってきた。

――なんだアレ。ぶつかったから実体はあったけど全く反応ないんですけど！　しかも硬っ！　重っ！　ビクともしねー！　ぶつかった僕のほうが弾き飛ばされたし！！　マジであれレジの付属品なのか！？

……や、落ち着け。実体があるということは、あの人は単なる変な人。警察を呼んだほうがいいのではあるまいか。

でも一応、店員さんに確認を。

「あ、そこのお兄さん。ちょっといい？」

「はーい、なんでしょうかお客様」

「あのおじいちゃんなんですけど……何なんですかね、アレ。みんな見て見ぬフリしてますけど」

「うちの店長です」

「制服ぐらい着ろよ!!」

「いやぁ、なんか着るの面倒だそうで」

「店長なのにそれでいいのか!?」

「いやですねぇ、お客様、店長のやることに意見できるはずないじゃないですか」

……ある意味もっともなことを。

「で、あれは何してるの?」

「店の様子を見守ってます」

あぁ、店の全体を見てたのか。てっきり三途の川でも見てるのかと思った。

「まったく、紛らわしいな。危うく通報するとこだったよ」

「七回ほどされました」

「なんか改善しろよ！！」

「大丈夫です、そろそろ寿命ですから」

「可哀想なこと言うなよ！」

「えー。でも、もう少しくらい夢を見させてあげようって皆が思えるからこそ、まだ店長でいられるんですよ？」

「もっともな口調で身も蓋もないことを……」

「早く死なねーかな」

「待てやコラァ！！」

「そのときは僕が店長さ！　僕の歳でその肩書きさえあれば、またモテモテに！」

「聞いてねーよそれに黒いなアンタ！」

こんな感じでさんざんツッコミしまくっていたのだが、レジの方から「おーい、タクヤくーん」と呼ぶ声がして、その店員さんは行ってしまった。

黒い。しかしエグい黒さ、というか嫌な黒さだ。サエちゃんにはああなってほしくない。こう、黒い中にも白さが目立つような……

「コーヒーにミルク入れた感じ？」

「おお、そんな感じかな。黒くても苦いだけじゃなくて甘さがある

ような――ってカカ。いつの間に」

「今の間に。ところで今トメ兄が話してた人……なんか見覚えがあるような」

「ん、そう言われてみれば僕、あの店長おじいちゃんに見覚えがあるような」

「あ、私も」

「誰だっけ」

「さぁ？」

君はわかる？

## カカの天下４７６「とあるレジの付属品」（後書き）

懐かしい顔、登場です。

皆さん、彼らを覚えているでしょうか？　忘れていても別に支障はございませんが、おじいちゃんと聞いて真っ先にわかった人がいたらさすがです。拍手します。

というわけで、今回は『あの人はいま――』をお送りしました！

## カカの天下477「テンカ先生、変化！」

「よう、おまえら。ちょっといいか」

いいですけど、カカです。

サエちゃんサユカンと過ごすいつもの昼休み。いつもこの時間は職員室でだらけているはずのテンカ先生が珍しく教室にやってきて、私たち三人を手招きしました。

「なんですか、先生」

「お金は持ってませんよー」

「誰がガキにたかるかアホ。ちょっと聞いてみたいことがあってな」

ドカリと座るテンカ先生に集まる私たち。ちなみに先生が座ったのはインドちゃんの席だ。トイレから帰ってきたらしいインドちゃんがおろおろしてるのが見えたが、やがてイチョウさんが「わたくしの席にきませんか？　一緒にお話しましょう」と誘っているのも見えた。「……ん」と頷くインドちゃん。いい展開だ。もしや確信犯？

「実は聞きたいことがあってだな」

そんなミニドラマがあったのを知ってか知らずか、私たちに向かうテンカ先生はちょっと真剣ぎみだ。はて？　何の話だろう。

「もしもオレが教師以外の職業に就くとしたら、何が似合う？」

突然の問いに目を丸くする一同。そんな中、私はとりあえず思ったことを口にした。

「教師も別に似合ってませんけど」

「やかましい」

怒られたん。

「え、えっとっ。どんな職業が似合うか、ですよねっ」

「テンカ先生が似合う職業かー……警官とかどうかな？」

「あ、それいいかもねサエちゃん。じゃ、みんなで想像してみよう」

――もしもテンカ先生が、警官だったら。

「そこの犯人！　止まりやがれ！！　殺人の容疑で逮捕する！！」

「うるせぇ！　こ、こっちは一人殺してるんだ！　も、もう一人くらい殺しても別に――うぎゃあ！！」

走って逃げていた犯人の首根っこを掴んで引きずり倒し、馬乗りになる先生。

「ほい、武器の包丁もらいっと」

「か、返せ……」

「あぁん？　返してほしいのか。そうかそうか、どこに返してほしい。右手か」

ざしゅ。

「左手か」

ざしゅっ。

「それとも丁寧に五本の指に返してやろうか。ほれほれほれほれほれほれ」

「うあああやめてやめて刺さないでぇぇぇぇぇ！！」

「刺してねーよ紙一重でな。でも手元が狂ったら刺さるかもなーほれほれほれほれほれほれ」

「ひぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！」

「怖いか？　怖いか！？　てめぇに刺された被害者はもっと怖かっただろうぜオラオラオラ」

「と、止めろ！！　誰かあの警官を取り押さえろ！！」

――想像、終わり。

「どこぞの警官よりよっぽど似合う、けど」

「どっちが犯罪者かわからないねー」

「さ、サエすけっ。そんなハッキリ言っちゃダメ！！」

「てめぇらん中でオレがどういうヤツなのかよくわかったよ」

まーわかっちゃいたがな、と口元をひくひくさせるテンカ先生。まずい、担任が不機嫌になるのは非常にまずい。ここは格好いい職業を提示してイメージアップを！！

「あ、スチュワードズってどうかな！」

「スチュワードさんズー？　いろんなスチュワードさんがオゥイェイでどうしたのー？」

「いやいやオゥノゥよっ！　スチュワーデスでしょっ！」

「それそれ、スチュワーさんが死ぬやつ」

「デスはそういう意味じゃないっ！　全世界のスチュワーさんに謝りなさいっ」

「ごめんなさい」

「よろしい」

そんなこんなで想像してみた。

――もしもテンカ先生が、スチュワーデスだったら。

舞台はすでに飛んでいる飛行機の中。そして流れるアナウンス。

『ご搭乗の皆様にお知らせします。あー、んとな』

丁寧な口調かと思えば急にくだける雰囲気。そして、

『この飛行機、そろそろ落ちるぞ』

あっさり放った爆弾発言によって騒然となる機内!!!

『ちょ、ちょっとテンカ君!!! いくらなんでも正直すぎ!!!』

『んだよ機長、正直のどこが悪い』

『悪くはないけどね! もっと柔らかく言わないと乗客の不安をあおるだけでしょう!?』

『不安? 不安なのか客ども。この軟弱者が!!』

『いやハッパかけてほしいわけじゃなくて!!!』

『るっせぇな。落ちようが何しようが、オレがいるからなんとかなるに決まってんだろうが。ぎゃーぎゃー騒ぐな、おとなしくしてろ』

――想像、終わり。

「なんだろね、この頼りがいがありまくるスッチー」

「なんて男らしいっ！」

「不安あおって、安心させて……良いことしてるのか悪いことしてるのか、さっぱりわかりませんねー」

「あー。あのよ、なんか他に普通のねーか。普通の」

むぅ、テンカ先生自体が普通じゃないのにそんなこと言われても。

「あ、じゃあもう結婚しちゃって奥さんになるってのはどうかしらっ！」

結婚？　奥さん？　確かに普通だけど……

――もしもテンカ先生が、新妻だったら。

「よ、おかえりアンタ。飯か、風呂か、それともオレか？」

――想像、終わり。

「ぶはははははは！　可愛いこと言ってるはずなのにオレとか言って可愛くないし！！」

「ちょ、ちょっとカカすけ、いくら似合わないからって、笑っちゃかわいそ……ぷふははっ」

思わず爆笑してしまった私たち。さすがにちょっと悪いことしたかなーとテンカ先生を見ると……はて、なにやら遠い目をしてらっしゃるのは一体なぜでしょう？

「ん、そうだよなぁ。似合わねぇよなぁ……はは」

「テンカせんせー？」

「あ、あのっ、もしかして怒りました？」

「あん？　怒りゃしねーよ。てめぇらの言うとおり、そんなもん似合わないのは事実だからな。オレはそんな自分が好きなんだし。さんきゅ」

清々しくニカッと笑い、テンカ先生は「じゃな」と軽く手を振って教室から出ていった。

「……なんだったんだろう」

「さぁ、ってあれ？　サエすけは」

あら、いない。いつの間に？

どこいったんだろう。

## カカの天下４７７「テンカ先生、変化！」（後書き）

というわけで、新たなテンカ先生をお見せしてみました。
ただでさえ人気あるのになーと思いつつ、まぁその人気に免じてテンカ先生率がちょっと上がる予定です。カカラジでも言いましたけどね。

それにしても前回の問題。おじいちゃんは大抵の人が正解でした。
ですがタクヤ君、意外とわからないみたいですね笑　一回しか登場してないけど名前あるからわかるかなーと思ったのですが……ま、わからなくても別に笑

# カカの天下４７８「とある美女の物語」

――あら、久しぶりね、あなたたち。

元気してる？　あたしは元気よん……いろいろあったけどね、んふ。

あら？　もしかしてあたしが誰かわからない？　いやぁねぇ、いくら久しぶりだからって、あたしみたいな美人を忘れるなんて。

もう、しょうのない子。

二回は言わないわ、よくお聞きなさい？　そして覚えなさい。

あたしの名前はラスカル。誇り高き美犬よん。

思い出してくれたかしら？　そう。かつて、さる高貴な方に仕え、優雅な暮らしを送っていたあたし……そしてそのぬるま湯から逃げ出し、孤高の一匹狼（でも犬）として外で生きてきたあたしは、ついに――

「はい、ご飯ですよー」

ぺっとしょっぷとかいうのに捕まってしまったのだわ。ラスカルしょっくだわ！　あ、これ？　動物の間で流行ってるの。

おっと、そんなことはどうでもいいのよ。それよりもあたしの現状よ。まったく失礼しちゃうわ。あたしを誰だと思っているのかしら。ずっと檻の中に閉じ込められっぱなしで、人間の相手をしなけ

ればならないなんて！

ご飯おいしいからいいけど。もぐもぐ。

「おー、犬だ犬だ」

あら、来たわね。ふふ、ご飯というお給料をもらったからには仕方ないわ。一つ、遊んであげようじゃないの！

あたしは食事を中断して、寄ってきた子供の顔を見上げた。

「……お？」

あら、あたしこの子知ってるわ。たしか――そうそう、いつだったかあたしのお尻を褒めてくれた子じゃないの。

「なんだか見たことあるような……」

む、あたしのこと忘れたのかしら。まったくもう、これだから人間は……

「ま、いっか。ほれほれ」

無造作に檻の中に手を突っ込んでくるその子。こういうの多いのよね。外に貼ってある紙が原因かしら。『この犬、お手をします。安い女です。値段も安いです』とか書いてあるけど、読めないから意味がわからないのよね。

まぁいいわ。せっかく手を入れてくれたわけだし、昔の戦友に敬意を込めて、ペロっと。

「私を舐めるな！！」

びくっ！！

「ほれほれ」

な、なに？　また手を入れてきたけど……ぺろぺろ。

「舐めてんじゃねーよ！！」

びくぅっ！！

「ほい、ほらほら。おいで」

え、また？　な、なんなのよぅ、ぺろぺろ。

「舐めてんのかおまえ！？」

そうですけど！？

「ふー。怒鳴ったらすっきりした」

な、なんだったのかしら……妙に清々しい顔で去っていくけど。

「またね、ラスカル」

――あら、覚えててくれたのかしら。ふふ、いいわよ。また今度遊んであげるわね。

ふぅ、それではご飯を。

「じー」

あ、あら。また新しい子が。

「へー、お手するのかー。カカちゃん追っかける前に遊んでこうかなー」

そしてまたもや檻の中に入れられる手。まったく、人気者は辛いわね。

「お手」

はい。女の子の手にポンっとのっけてあげる優しいあたし。どうよ？

「それは手じゃなくて前足だよー。はい、お手」

えええええ!?

「ほら、お手」

ためらいながらもポンともう一度のせてみる。

「だからそれは足だよー。お手だよお手、ほらほらほらほらー」

そんなこと言われてもどうしろとー!?

まるで金を払えと脅している人間みたいな感じで檻の端に追い詰

められ、困り果てたあたしに……その子はやがてニッコリと微笑んだ。

「これがホントの“手が足りない”だねー」

うんうん、と頷いて、その子は去っていった……ホント一体なんだったのかしら。満足げだったからいいのかもしれないけど……謎だわ。

さて、今度こそご飯を。

「よう、元気かラスカル」

……またかしら。いい加減にしてほしいわ、って、あら？　見知ったネコがきたわね。

「久しぶりじゃない。総理大臣じゃないの（注、動物語です）」

「おう、また変なところで会うな。ビックリしたゼ（注、こっちも動物語です）」

「ええ、見事に捕まってしまったわ」

「おまえほどの女がこんなところに、か。まぁ見世物としては申し分ないがな」

「やだ、お世辞いっても何も出ないわよ？　ここからも出れないわよ？　どうしてくれんの」

「八つ当たりされても困るゼ。だって俺、ネコだモン。ヘタすりゃ

俺も捕まるモン」

「ふん！　いいから今度来るときはお土産……そう、おさけでも持ってきなさいよ」

「ふっ、わかったゼ。セイジ食堂の様子を見るに、明日の日替わり定食は鮭ステーキだからな。一つ拝借してこよう。そいつで一匹やろうじゃないか（注、人間的に一杯やろうという意味です）」

「楽しみにしてるわよ」

ニヒルに笑って去っていく総理大臣。やっぱり格好いいわね、そしてセレブね。お鮭なんて高級品をいとも簡単に持ってくるんだから……そんな彼を見送っていると、不意に見知った顔が！

あ。あれは――

「ご主人様！！」

心の底から叫んだ。ええ、あたしは一度逃げ出した身。けれど忠誠心は変わらないわ。そう、ただちょっと相手にしてくれなくて拗ねていただけ。今は違う。時間が経って、思い直したの。あの人がどれだけあたしを大切にしていてくれたか！！

「ご主人様！！　あたしが悪かったわ！！　お願い、気づいて！！」

その声が、届いた。

かつてのあたしのご主人様は――笑顔だった。そう、懐かしい顔に再会して、満面の笑みを浮かべてくれていたのだ！！

「あぁ、ご主人様！　あたし、もう逃げたりしない。おとなしく言うこと聞く。だから、あたしをご主人様のそばにいさせて！！」

感激したあたしは、誇りを捨てて本心をぶちまけた。

そんなあたしを見たご主人様は――

「ぶっさいくな犬ですねーあはは」

あたしのことを微塵も覚えていなかった。

「ご、ご主人様？　ねぇ、あたしよ？　あなたの自慢の美犬よ！？」

「しかもうるさいですねー」

「話を聞いて！！（しょせんは動物語）」

「耳障りだからもういこーっと」

そうして、ご主人様は立ち去った。

あたしに大きな心の傷と、悲しみを残して……

ご主人にとって……あたしって……なんだったのかしら……

あたしの存在意義って……

はぁ……

もぐもぐ……まぁいいけど。ご飯おいしいし（しょせんは動物）。

## カカの天下４７８「とある美女の物語」（後書き）

とあるシリーズ、二作目です！
や、シリーズといっても特に関連性はありませんが笑

たまにはカカ天動物園の連中も出してやろうかと思ったのですが、結果として二匹しか出てませんね。また出したいなぁビビデバビデブー犬とか。まぁそのうち。

たまには妙な話もいいもんですね。
いいもん……じゃないですか？笑

あ、そろそろあんパンの続き更新しまーす。

## カカの天下４７９「まったりな午後」

こんにちは、てくてく歩いてるカカです。下校中です。

さっきまでいつもの三人で帰っていたのですが、みんな一旦家に帰って荷物を置いてから、また集まることになってます。

なって、いたのですが。

「カカちゃーん」

「あれ、サエちゃん？」

さっき別れたはずのサエちゃんが追いかけてきました。はて？

「どしたの」

「んー、ちょっと寂しくなっちゃって。やっぱりこのままカカちゃんち行こうかなーと」

「寂しく、って。何かあったの？」

「んーん、ただ、やっぱり一緒にいるっていいよねー」

いきなりよくわからないことを言うサエちゃん。でも言ってることは間違ってないと思うから「うん、そだね」と頷いておく。

「くぁ……」

「いいあくびだねー。カカちゃん眠いの？」

「うん、あったかいからかな」

空を見上げれば柔らかな日差し、鮮やかな青色と白色が目に飛び込んでくる。今日は程よい快晴、それに心地いい風も吹いていて、絶好のお昼寝日和なのだ。

「じゃ、ちょっと寝ていこっかー」

「へ？　どこで」

「そこー」

サエちゃんの指差す先にはいつもの公園。ああ、ベンチか。

「お昼寝しながらここでサユカちゃん待とうよー。メールしとくから」

「あ、それいいかもね」

長い階段を上ると、すぐ目の前にピカピカの赤いベンチが並んでいる。サエちゃんはその中でも綺麗どころを選ぶと、ランドセルを置いてそのまま座って――ぽしぽしと自分の膝を叩いた。

「かもーん」

「ハイ喜んで！！」

お言葉に甘えてサエちゃんの膝を拝借、柔らかーい感触にほえー

っとなりながらゴロリとベンチに寝っ転がる。

「ふわー……」

「んー、座ったままでも眠れるかな私」

気持ちいー……

そのまましばらく二人でぼけー……

ぼー……

っとしてたんだけど。

「うりうりー」

ほっぺをつんつんされてます。

「ほれほれー」

鼻をむにむにされてます。

「ふふー」

耳の下をこしょこしょされ――ちょ、これ、あはは、くすぐったっ。

「……あの。何してんの、さっきから」

「カカちゃんで遊んでるのー」

むぅ、遊ばれてばかりはシャクですな。ではこちらも反撃をば。

「うりゃ」

「ぁん」

「おー、サエちゃん細いのにお腹はぷにぷに」

ぷにぷにぷにぷにぷにぷにぷに。

「あ、あは、あぅ、ちょっとー、もう、えい！」

「ぅあん！」

横腹を急に掴まれて変な声出しちゃった。

「カカちゃんも鍛えてるわりにはお腹柔らかいねー。えいえい」

「あぅん！？　やったな、この」

二人でひたすら互いのお腹をぷにぷにぷにぷに――

何やってんだ私らは。

「ふー……つかれたね」

「うん、一休み」

いじりあい疲れた私たちは、再びぼけーっとモードに入った。

ぼけー……

「……う？」

ふと視界に入ったサエちゃんの髪先に触れてみる。ほんと長いなー、腰まであるんだよね。だから膝に寝転がっててもちょうどいじりやすい位置に……いじりいじり。

「ちょうちょ結び」

「あ、人の髪で。じゃ私もカカちゃんのいじろー」

「いじって楽しいほど長くないよ？　私の髪」

「これくらいあれば全然いけるよ。きのこ畑にしてやるー」

「む、じゃあ私はちょうちょだらけにしてやる」

いじりいじりいじりいじり……

「何してんの、君らっ」

おやサユカン。遅い登場だね。

「二人して変な頭っ！！」

「サユカンもやる？」

「そのポニーテールをほどいてツインテールにしてあげよー」

「その二つの尻尾をさらにちょうちょ結びにしてしんぜよう」

「しんぜなくていいわよ、そんなのっ……って、あら」

うろたえて身構えて……きょとんとするサユカン。

「無理やりしようとしないの？　いつもだったら」

「私は膝にカカちゃんのせてるしー」

「私はサエちゃんの膝から離れたくないし」

「ふーん。じゃあ残念ねっ！　わたしは君らに近づかないから、髪をいじるのは無理よっ」

どうだ、と胸を張るサユカン。だが甘い。

「そっか、じゃあ仕方ないねー」

「うん、仕方ない」

「……え、それで終わり？」

「だって動けないしー」

「手、届かないし」

サユカンを放ったらかしで二人で髪をいじりいじりいじり。

「わ、わたしはやらないからねっ！」

「はいはい」

「自分から獲物になりに行くなんて、しないんだからっ」

「それは残念だー」

数分後。

「……ねぇ、仲間にいれてよぅ」

結局は寂しそうに寄ってくる、可愛いサユカンなのであった。

――そして、夕方。

「なにやってんだか、こいつらは」

帰ってくるのが遅いと思って公園に来てみたトメは、サエの両膝をまくらにして仲良くお昼寝する三人を発見するのだった。

## カカの天下４７９「まったりな午後」（後書き）

はい、ひたすらまったりとした話でした。
笑うポイントとかまったく意識しないで書いたこのお話。のんびりしていただけたら幸いです＾＾

あ、あと。前にあったタクヤ君がナニモノか、ですが。答えを一応載せておきます。
答え――３２９話を読めばわかります＾＾

あとあと、あんパンも二話目更新いたしましたのでお知らせしときます＾＾

よう、テンカだ。

「乾っ杯っ！！」

「か、乾杯。どうしたんだよテン、なんか荒れてんな」

トメの質問は無視して、ぐいっとビールをあおる……そして一気に空けた。

「ぷはぁ！　おかわり！！」

「おいおい。何かイヤなことでもあったのか」

ああ、あったさ！　そしてやさぐれてるのさ！

飲み場所はいつもの『病院』で、見知った顔が何人か、オレの様子を何事かと見ている。そんな視線は苛立ちの前ではまったく気にならず、オレはおかわりしたビールをもう一度あおった。

「あの、もしもしテンさん？　少しは答えてくれないと一緒に飲んでる感がなくて寂しいのですが」

呆れながらも皮肉げなトメの声。そう、だな。元々相談するために誘ったんだし。

「あのよ」

「どのよ」

「……あの」

「どの」

「あー、あのさー」

「どのさー」

「いちいちうるせぇよ!!　切り出しにくいだろが!!」

「おー、テンっぽくなってきたテンっぽくなってきた」

ったく、小憎らしい顔しやがって。おかげで緊張がほぐれたじゃねぇか。

「なぁ」

「どぁ」

「無理があるぞ。なぁ、オレって教師以外の職業だと何が似合うかな？」

「別に教師も似合ってるわけじゃないぞ」

「……兄妹だな、やっぱ」

この調子だと姐さんも同じこと言うんだろうか。

「で、どうなんだよ」

「んー？　テンが転職ねぇ。つまんない洒落だな」

「オレはんなこと一言も口にしてねぇんだが」

「ハイハイ、そう焦るな。しっかし、他の職業って急に言われても……」

何かヒントはないか、と周囲をキョロキョロと見回すトメ。すると、席が近いおっさん二人の会話が聞こえてきた。

「なぁ弟よ、俺は先日、メイド喫茶とやらに行ってみたのだが」

「ほほう、どうだった兄貴」

「いや、ひどいものでな。あまりに給仕がなっていないからその場で指導してやったわ」

「兄貴はすごいな。俺にはとてもマネできない」

恥ずかしいもんな。

「ふ、そうだろう。そして見事な指導をしきった俺は店員に『給仕の鑑』と称えられたのだ」

「おお、格好いいぞ兄貴」

「そしてメイド服をすすめられたのだ」

なんでだ!?

「着たのか」

「おうよ、あまりに熱心にすすめてくるからよ、仕方なくな。しかし今思えば……よもや恥をかかされた腹いせに俺に着せたのではあるまいか」

多分それ正解じゃね?

と、まぁ。そんな会話を聞いたトメはオレのほうを見ながら目を細めていた。

「テンが……メイド喫茶にいたら……?」

なにやら不届きな妄想をしているらしい。

「うはは」

「どういう意味だ、あぁん?」

「や、だってさ。テンが『お帰りなさいご主人様』とか言ってるの思い浮かばなくて……『おけぇりなすってぇ、三代目!』とか言うのならとんでもなく似合うんだが」

ちっ、反論できねぇ。

しかし、まぁ。その後もトメは茶化すばっかりで。

結局は今の教師が一番合ってんだろうなぁ、なんて思って。

……今日のことを、思い出す。ガキどもと話した後、追いかけてきたサエに言われたことを。

『テンカ先生ー』

『あん？　どうしたサエ』

『先生、辞めちゃうんですか』

『へ？　ああ、そういう風に聞こえちまったか。わりぃな、別にそういうわけじゃ』

『嘘です』

『……なんで、そう思う？』

『私、知ってます。その顔――私の傍からいなくなる前の顔です』

『……』

『好きな人がいなくなるのは、もう嫌です。みんな、一緒がいいです』

『……そう、だな』

『さっきはあんなこと言ってましたけど、それはみんな、テンカ先生が私たちの先生じゃなくなるなんて、夢にも思ってないからですからー……私もそんなの、嫌ですから』

言うだけ言って、悲しそうに去っていったその小さい背中。

いつも幸せそうに笑ってるくせに、人一倍臆病なんだよな……誰かが、いなくなることに関しては。そりゃそうだ。あいつの母親のことを知っているなら誰にでも想像がつくこと。

「オレだって、できることならこのままがいいさ」

「ん、何か言ったかテン」

――ふん、オレらしくもない。別に辞めると決まったわけじゃねぇんだ。ここは溜まった鬱憤を晴らすために大暴れするのが正しいだろう！

「はん！　今日はヤケ酒だ！　勢いでメイドもやってやろうじゃねぇか！！」

「おぉ、ほんとか！　そりゃ笑える」

「おけぇりなすってぇご主人！！　注文は！？」

「なんかいろいろ混じってるけど似合ってるからいいや。じゃあテンカ・オレで！」

「オレ！？」

「ユー！！」

そんなこんなで、バカ騒ぎ。

気のいい飲み仲間のおかげで、胸がかなり楽になった。

問題が解決したわけじゃ、ないけどな。

## カカの天下４８０「嵐の前の嵐」（後書き）

と、いうわけで。実は４７７話から４８０話までは時間的に続いています。

全て一日を通してあったことで……でもテンカ先生の問題は解決していない模様。一応は吹っ切れたみたいですが。

どうなるかは、また後日。

## カカの天下４８１「唐突にお聞きしますが」

こんにちは、トメです。

今日は何も予定のない休日。カカと居間で二人、ぼけーっとしていたのですが、どうにも暇です。

「ね、トメ兄。何かおもしろいことないかな」

「カカがそう言うとろくなことにならないからな。ないことを祈る」

そう、暇で結構。たまにはのんびりしないと僕の身がもたないのだ。

テレビを見る。いまやってるのは午後の恒例サスペンスドラマだ。暇つぶしにはいささか力不足だけど、まぁ他にすることないからこれ見よう。

「よし、これだ」

「ん、なに。いまいいところなんだけど」

同じくテレビを見ていたはずのカカは、僕に向かって指を突きつけ、

「おまえは誰だ！？」

そんなことを言い放った。

意図がわからずきょとんとしたが、すぐにそれがテレビのセリフを真似したものだと気づく。

「トメと申しますが」

「誰だと言っている！」

「だからトメだって」

「出て来い！」

「はい？」

「おまえは死んだはずだ！！」

「……ねぇねぇ、会話しようよぅ」

闇雲にテレビの真似をされても対応に困るんだが。

「よし、わかった。犯人はあの人ね」

「そうかいそうかい……って、どこいくのん？」

気が付けば名探偵カカは玄関で靴を履こうとしていて、何をするのかと僕が追いかけるころには外に出ていた。

そしてカカはたまたまうちの前を通りかかったお兄さんに寄っていく――って、おい。何する気だ、犯人扱いでもする気か！？

「誰だ！？」

ナニソレ。

固まる通行人。そりゃそうだ、いきなりこんなこと言われたら誰だって反応にこま――

「武田遠衣だ！！」

――らない、らしい。

「ご丁寧にどうも！！」

「いえいえ！」

「私はカカです！」

「こちらこそご丁寧に！　じゃ」

「うん、気をつけて」

にこやかに別れる不思議コンビ。僕が知らない間に世の中はこんなにも冗談が通じるようになっていたらしい。

とにかく面倒にならなくてよかった。さっさとカカを回収せねば。

「誰だ！？」

ってまたやってるし。我が妹君はいったい何をしたいのだろうか。

「だれだ！！」

意外な展開、なぜか同じ言葉で返事をするおっさん。どうでもいいけどなぜ怒鳴る。

「誰だ！？」

「だれだ！！」

首をかしげながらも再び聞くが、またもや同じ答えを返すおっさん。

「ああもう！　だから、誰だ！？　って聞いてるのに！」

「だからわしの名前は“ダレ”だと言っておろうが！」

「そいつぁ失礼しました！！」

「以後気をつけよ！！」

だから。なんでそんなに元気なのん君たち。

あと“ダレ”ってどう書くのかな。どう見ても日本人だけどあの人。

「誰だ！？」

はっ、連れ戻すの忘れてた。今度のターゲットは女性の方？

「え、あ、えっと、はい。ダレさんですか？　ご丁寧にどうも」

狼狽しながらぺこりと頭を下げる気弱そうな中年女性の方。ダレと聞いて名前と思うとは、もしやさっきのダレさんの知り合いか？

「え、あー、うんと」

反応が予想外だったらしく、ちょっと焦るカカ。しかしなんとか答えをしぼり出す。

「よろしく！！」

よろしくできねーだろ急に言われても。

「え、あ、はい。よろしくお願いします。わたしの名前は天鹿淳恵と申します」

あ、あぁ……よろしくしちゃうんだ。いい人ネ。

「お元気で！」

「ど、どうも。ダレさんもお元気で」

小学生相手にぺこぺこ頭を下げて去っていく女性……えらくおどおどしてたな。って、あれ。今の人――

「誰だ！？」

疑問を浮かべる間もなく次のターゲットに襲い掛かる誰だ小僧、じゃなくて誰だ小娘。

「誰で」

さー今度はどんな意味だどんな反応だこれは？　正解はご想像にお任せする。

と、なんだかんだでカカを眺めて暇つぶししてーー

「誰だ！？」

「だれーだ」

「だれーの？」

「んだ。だれー」

「だれだれ」

そんな、脳みそだけ季節外れに春っぽい会話を終えたカカ。たぶん“だるい”を砕いて言ってただけだろうけどね。とにかくそんな誰だ小娘は、とうとう最後のターゲットに突撃した。

「誰だ！？」

「え……！」

「誰だ？」

「えぇ……！！」

そう。

その、ターゲットとは。

「ひ、ひどい、ひどいですカカちゃん！！　いくらしばらく出ていなかった、もとい会わなかったからって、私の名前を忘れちゃったんですか！？」

「だって皿も鍋も大根も持ってないし。あ、服着てるからフクちゃん？」

「私の名前は時価でも出世魚でもありません！　変化したりしないんです！　ちゃんと覚えてください、それでも私の義妹ですか！？」

違います。

まーとにかく、久々に顔をあわせたサラさんなのでしたが。

「私はサラです！」

「おまえは死んだはずだ！」

オイ。

「いつの間に！？　あぅ……やっとバイト始めて余裕できたからトメさんに会おうと思って来たのに、こんなのあんまりですぅぅぅ」

うわーん、とコミカルな泣き方しながら去っていくサラさん。あー、僕に気づかなかったのか。すぐ近くの玄関先でボケッと立ってたんだけど。

「ふう」

お、やっと飽きたな。サラさんで楽しく遊んだカカは満足げに僕の方へ――もとい、我が家へと帰ってきた。

そして僕は『カカが戻ってきたら絶対に言おう』とずっと思っていたことを口にした。

「なぁ」

「なにトメ兄」

「おまえは誰だ!?」

「なにバカ言ってるの。はやく夕飯」

「……はい」

殴りたい。力いっぱい殴りたい。

でも我慢。僕、大人だもん。

……大人だもんっ！

## カカの天下４８１「唐突にお聞きしますが」（後書き）

カカの突飛な行動、暇つぶしレベル。
激しくはないが変。意味不明。

そんな感じの話をお送りしました。
テンカ先生の話の続きが気になる人もいらっしゃるでしょうが、
まぁまぁ焦らず。
毎日確実に話は進みますので＾＾

## カカの天下４８２「がんばれお父さん」

どうも、トメたちの父です。ふむ、名前とな？　あいにくと忍びたる者、安易に本名は明かせぬ決まりでな。今後も父、という符号だけで俺を認識されるがよかろう。

そう。俺は父なのだ。

そして今日は父の日。

なのに……

な、に、も、無い！！

我が愛すべき子供たちは、俺のことを話題にすることなどナッスィング！　俺に隠れて影で用意したプレゼント……そんなものを期待したがあいにくと俺は忍者！　隠す暴くが専門よ。どんなに巧妙に隠していようと無駄なことなのだ！

なのだ……から、問答無用に何も無いのは、昨夜あたりの時点で明白なわけで。

あれ、涙が。

うぅぅぅ、身に余るこの能力が恨めしい。先週あたりからわくわくしながら見張ってたのに！　こうなったら最終手段だ。無理やり父の日へと注意を向けてやる！

しかしバレては情けないことこの上ない。バレないようにやらね

ば。そんなわけでまずは昨夜のうちからカツコに催眠学習っぽいことしてみた。ヤツが寝静まった後、枕元でひたすら囁いたのだ。

「父の日にうまい棒、父の日にうまい棒、父の日にうまい棒……」

なぜにうまい棒か？　うまいからだ。あと、ぶっちゃけ何かもらえるなら何であろうとそれで父は満足なのである。

そして翌日、つまり今日。

カツコの催眠は成功したのか！？

「父……」

お？

「……が、うまい？」

失敗した。

って、え、もしや食われる！？

「まずいに決まってんじゃん」

食われることは回避、でもなんかけなされた。うまそうと言われても困るが、まずそうと言われても悲しいオトコゴコロ。

「あ、うまい棒！」

そうそう！

「あとで食べよう」

おまえが食べるんかい！！

くそ……ええい、バケモノなんぞに期待したのが間違いだった。

ここは我が子の中で一番の常識人であり憎き敵でもあるトメに期待するか。そう、敵ではあるが、俺を敬う心が少しでもあるなら許してやろうではないか。シュバッ！

ヤツはちょうど買い物をしているところだった。ふむ、気づかれぬように近づいて様子を見るか。

「あ、今日って父の日か」

スーパーに飾られた『いつも哀れなお父さん敬いましょう！』と書いてある看板を見てそれに気づくトメ。グッジョブ看板、しかしなぜ哀れと断定するのか根拠を述べよ。

「よし、じゃ父さんの好きなものを」

おお！？　トメよ、やっぱり――

「食べよう」

やっぱりおまえが食べるんかい！！

ぐぐ、トメは「あと今日の夕食は～」とヘタクソな歌を口ずさみながら買い物を続けていく……夕食に俺の好きなもの作られても俺

は出席できんのだぞ、カカがいるから！　恥ずかしいから！！

ええい、色ボケ男などどうでもいい！　シュバッ！

やはり本命はカカだ！　いろいろどっか故障してても多分優しき我が娘よ！　居間でテレビを見ているところ悪いが――

「てや」

新聞とにらめっこした後、タイミングを計って天井裏から石つぶて。それは見事にリモコンへ命中し、チャンネルを変える。

「あれ」

何も触ってないのに画面が変わったのに首を傾げながらも、父の日特集番組に見入るカカ。成功か！？

「父の日かー」

そうだ、思い出せ。

そして祝ってくれ！

寂しいから。

「いいなぁ、みんな普通のお父さんで」

墓穴を掘ったぁぁぁぁぁっ！！

「母さぁぁぁぁん！！」

夢も希望もなくした哀れな俺が行き着く先。それは我が妻の下だけだった。

「あらあら、どうしたのパパ君」

夫婦の間に壁はなし！　てわけで恥も外聞もなくその胸に飛び込んだ。

「ううううう、父の日なのに、父の日なのに、俺は誰にも何も言ってもらえないし何ももらえないんだぁぁぁ」

「あらあら、よしよし」

「父の日ってなんだ？　全国のお父さんバンザイ全開レッツゴーな日じゃないのか？　違うのか。だったらなんだ！　乳の日か、乳の日なのか！？」

「ふふ、甘えるのはいいけどムードも無しに変なとこ触りすぎたら怒るよ？」

ぐ、さすが我が妻。お見通しか！　でもまぁソレに顔うずめてるからいいけど。

「ところでパパ君？　父の日に何ももらえてないって言ってたよね」

「そうだぁぁ！　おーいおいおい」

言っとくが泣き声である。誰か呼んでるわけじゃない。だから誰もくるなよ。今いいとこなんだから。

「でもね、パパ君。わたしはプレゼントもらったよ？」

「なんでだぁ！？　やっぱ乳の日だからか！　乳がある人が得するのかぁぁぁ！？」

「まーま、落ち着きなさいな。見て、これ」

名残惜しくもソレから離れ、ユイナが差し出した紙きれを見る。

「これは……チケット？」

「私と二人で遊んでこいってことだよ。カッ君とトメ君がお金を出して、カカ君が選んだんだって。自分で言うのもなんだけど――パパ君にとっては最高のプレゼントじゃない？」

言うまでもない。

俺にとって何よりも大切なのは目の前にいる人なのだから。その人と一緒に遊べるというのなら、これ以上の幸せはないのである。

「お……おおお……」

「どうせ見張ってるだろうから、裏をかいて驚かせるにはこれしかないと思ったんだって。先々週あたりに一緒に送られてきた手紙に書いてあったよ。この幸せものぉ」

「う……うぉぉぉぉ！　俺はモーレツに感動している！！」

その感情に身を任せ、俺はもう一度ユイナの胸へと飛び込んだ！

「触りすぎ」

怒られた。

でもいいもん、嬉しいから！

「父でよかった！」

「乳がよかった？　うふふ、まだそんな下品なこと言いますか」

「え、や、ちが――」

殴られた。

## カカの天下４８２「がんばれお父さん」（後書き）

はい、がんばれお父さんでした。
がんばれタケダと似たような話ですが大きな違いが。
父は報われましたがタケダは報われません。
哀れタケダ。だがそれがいい。

タケダの日とかあればいいんだろうけど、そんな変なもの無いしねぇ。

# カカの天下４８３「臨時活動！」

ごちそうさまでした、カカです。

今日も今日とて給食を食べ終わり、まんぷくふにゃふにゃ気分でお昼休みを迎えたのですが……

「カカすけ！！　聞いて！」

「サユカン？　いいよ、聞いてあげる。その代わり、いくらくれる？」

「はいっ」

「……給食についてた、イクラ」

「ふざけてないで、とにかく聞きなさいっ！」

ふざけるなと言いつつ鮭のたまごなんかを指に乗せてくるサユカンに乾杯！　なんて呑気なことを思ってたんだけど――それを聞いて、私の心に激震が走った。

「みんな、聞いて！！」

バン！！　と教卓を叩き、各々で昼休みを満喫しているクラスメイトの注目を集める。手が痛い。

「大事な話があるの。聞いて……サエちゃん、サユカン」

私の指示通り、教室の前後にある廊下への扉を閉める二人。それを見たアヤちゃんが驚いて、

「カカ……ついに私たちを殺す気!?」

どーゆー目で私を見とるのだチミは。

「そんなことはしないよ。本当に大事な話だから聞いて。さっき職員室で話してたのをサユカンが聞いたらしいんだけど、テンカ先生がね――お見合いをするんだって!」

それを言った瞬間、静寂に包まれるクラスメイト。

呼吸音すらしなくなってから、きっかり五秒後。

爆発した。

「「似合わねえええええええええ!!」」

寸分違わぬ大合唱。さすが日々を共に生きる仲間たち。団結力はピカ一なのである。

「しかもね、相手は偉い人の息子!　お金持ちっぽいよ」

ドラマや漫画でしか聞いたことの無い展開に、ざわざわと騒ぎ始める生徒たち。

「お見合い……じゃあ結婚?　マジで?　ちょーウケる」

「しかも相手はお金持ちって……金なんて酒のためにしか無いとか言ってるテンカ先生が？」

「全部酒に変わるぞ、その人の家」

「というかさ、男同士で結婚できるもんなの？」

「失礼なこと言わないでよニッシー！　テンカ先生にも女らしいとこはあるのよ！」

「どこよ」

「……お、おっぱい」

「お金持ちの息子とねぇ。猫とハイエナの方がまだお似合いなんじゃ」

「結婚……新妻……裸エプロン希望」

「い、いいい、インドちゃん！？」

「いい？」

「ちち違います！　それにしても素晴らしく大胆ですね……わたくし驚きのあまり想像してしまいました、ぽ」

好き勝手な――っていうか好き勝手すぎる意見を並べるのはいいけど。

「待って、大事なのはそこじゃないの！」

「え！？　カカはテンカ先生とお見合いが似合うとでも！？」

「そんなこと思うやつ人類にいるわけないでしょ。それはどうでもいいの。大事なのは、そのまま結婚になったらテンカ先生が先生を辞めるってこと！！」

ピタリ、と。もう一度静まるクラス一同。

今度は五秒経っても爆発しなかった。

「……なんで？」

誰かが言った。きっとそれは全員の疑問だ。だから答える。

「さっきも言ったけどサユカンが聞いたの。たまたま職員室で教頭とテンカ先生が話してるのをね。そのお見合いは無理やりっぽくて、相手の意見になかなか逆らえないんだって。それで向こうが、教師を辞めろって言ってるんだって」

なにそれ、と。

それを聞いた誰もが思った。

「……いい？　聞くよ。この中で、テンカ先生に辞めてほしくない人、手を上げて」

ス、とまずは私が上げる。続いてサエちゃんとサユカン。

全員が手を上げるまで時間はいらなかった。

「よし、みんなでお見合いなんかぶっ潰そう！」

きっぱり言い切った私に「おおっ！」と盛り上がりかける一同。

でもそれを遮って、声を張り上げた子がいた。

「待ってください！」

「なに、イチョウさん」

「え、偉い人とのお見合いの話なんて、そんな大きなことに……わたくしたち子供が首を突っ込むべきではないと思います」

さすがは委員長。クラスが悪い方向へ行くと思ったんだろうね。

「気に入らないからといって、その、子供が大人の話の邪魔をしてはいけないと思います。わたくしたちはただの生徒で、大人の方から見れば、そんなものは、ただのワガママでしかないのです」

うん、そうだね。ごもっとも。

でもね。

「子供のうちにワガママ言わないで、いつ言うの」

「……！」

そんなことは知ってる。でも言わずにはいられない。だから私たちは子供なんだ。

「イチョウさんだってテンカ先生好きでしょ？」

「それは……もちろんですけど！」

よし、決まり。

サエちゃんとサユカンと目を合わせ、頷く。

「この件、私たち手芸部が預かった！！」

いつかテレビで見たドラマっぽく格好よく言ってみた！

「おおっ！　って手芸部かよ！？」

「手芸部で何するのよ！」

「それはこれからのお楽しみ。もちろん皆にも協力してもらうから、よろしくね」

――臨時活動、開始なのだ。

その日、うちに帰ってから。

「お？　何してんだカカ」

「んー、クラブ活動」

「はぁ、よくわかんないけど人様の迷惑にはなるなよ」

「それは保障できないけど……ね、トメ兄」

「なにさ」

「テンカ先生の様子、最近変じゃない？」

「そうだな」

「そうだなって……気にならないの？　この間飲みに行ったんだよね」

「おう。悩んでるのが丸わかりなヤケ酒っぷりだったな」

「じゃあ、話聞いたの？」

「いんや」

「え、なんで！」

「なんでって、言うときゃあいつから言うだろ」

「そうとは限らないでしょ。言いにくいことだったら、こっちから聞かないと」

「おまえら子供の場合はな、そういう後押しも必要だろうさ。でもな、僕らは大人だ。誰に何を言うべきか、ちゃんと自分で決められる。少なくとも僕らはそういう関係だ」

「むぅ……よくわかんない。友達のことはなんでも知りたいと思うもんじゃないの？」

「だから、子供のときはそれでいいんだよ。大人になると色々と複雑になってくるからな……相談があればもちろん付き合うし、ただ飲みたいときはそれ“だけ”に付き合ってやる。で、助けがほしいと言われれば問答無用で助けてやる」

トメ兄の言ってることは難しくて、よくわからなかった。

ただ。

「それが男同士の友情ってもんだ」

みんな心底、テンカ先生を女性扱いしてないんだなーと思った。

## カカの天下４８３「臨時活動！」（後書き）

少しシリアス風味になってきましたが、テンカ先生編が始まってまいりました。

カカたちが動いた＝メチャクチャになるのか。
それとも意外とすんなりいくのか――んなわけないか笑

例によって好き勝手執筆モードになってきましたので、どういう展開になろうと温かい目で見守っていただけたら嬉しいです＾＾

**カカの天下４８４「あなたのお悩み、解決します？」**

……よぅ、テンカだ。

元気がないって？　そりゃそうだ。最近の悩み事に加えて、こんなとこにいちゃな……

「お客様？　何かお探しでしょうか」

「面倒のない人生を」

「そちらは当店では扱っておりませんが」

「無駄に光る貴金属を置いてんだから輝かしい未来とかも置いとけよ」

「それは買うものではなく、自分で掴むものです」

ちっ、いいこと言いやがるぜこの店員。ムカつく。

「それでは。ご用の際は遠慮なくどうぞ」

「あー、ハイハイ」

投げやりに答えて、再び店頭の商品に目をやる。

ネックレスや指輪など、女性用の装飾品がズラリと並んでいるのだが……こういうものをあまり身に付けたことの無いオレにはどれがいいんだかサッパリだ。

「あれ、テンちゃん？」

ぎく、と振り向くとそこには姐さんが。くそ、よりによってこんな場所にいるのを見られるとは……なんだか飲酒を見られた高校生の気分だぜ。

「どうしたの、こんなところで。まるで女みたい」

「姐さんこそ。まるで人間みたいだぞ」

「でしょー」

憎まれ口で返すがケラケラと笑う姐さん。そして、

「じゃー私はなんですかねー」

どこからともなくニュっと生えてきたサカイさん。

「あーっと、その神出鬼没さは、まるで忍者みたいだが」

「む、忍者の娘であるあたしよりも忍者っぽいと！？」

「ふふふー、引きこもりの影の薄さをなめてはいけませんよー。ひっそりすること大得意ですから。会社でも居るんだか居ないんだかわかんないって評判なのです」

忍者って影の薄い人がなるもんだったのか。知らなかった。でもその忍者の血をひく姐さん家には濃い人しかいないよな。

「ねね、カツコちゃん。テンカちゃん何してたんだってー？」

「女になろうと無駄な努力を」

待てや。

「おぃ、一応オレは女だぞ」

「どの辺が」

「……む、胸とか」

それくらいしか女らしいとこねーけどさ！

「別にそれだけでいいのに。なんで無駄なことしてんのさ」

「好きな人でもできましたー？」

「そんなんじゃねぇよ。ただ、見合いするなら女らしい格好しないと向こうに失礼、とか言われたから見にきただけで――おい？」

気が付けばオレの腕は二人に掴まれ、ぐいぐいと引っ張られていた。

「そんな面白そうな話をあたしらにするってことは」

「相談したいということですねー。わかります、わかってますー」

うきうきしながら喫茶店へと連れ込まれるオレ。

いや、まぁ。その通りだからいーけどな。

仕事を辞める可能性があったから教頭に説明はしたし、トメに愚痴りそうにもなったが――いざ一番最初に相談するなら、姐さんだけだと決めていた。

「私はー！？」

「あ、おう、サカイさんもだよ、もちろん！！　……あれ、心読まれた？」

「気のせいですよー」

ま、いっか。相手は忍者みたいなもんだし、などと思いながら席につき、奮発してクリームソーダなんか頼んでみた。

「さてさて。お見合いって誰とするわけ？」

「ま、まさかトメさんとー？」

「妹はやらんぞ！！」

「あのー、トメさんは男性ではー？」

「や、テンちゃんのほうが男っぽいしトメのほうが女っぽいからつい」

相談を聞くっていうわりには微塵も緊張感のないこの二人。話しやすくて助かるぜ。

「それじゃ聞いてもらうかね。実は――」

事の次第を説明する。今回お見合いをすることになった経緯、そしてそれが断れない理由等。さすがにその間は二人とも静かに聞いてくれた。

「ふむふむ、つまり……お母さんの面子を潰したくないからお見合いするわけだね」

「ああ。うちの母親ってのが気弱な人でな、お偉いさんからの話を断るなんてできない人なんだよ。それをオレが突っぱねたら母さんの立場が悪くなる。だからとりあえずお見合いをして、断られればいいと思ってたんだが……」

「向こうはノリ気、とー？」

「……あぁ。母さんの会社のイベントに付き合って行ったら、会う機会があってな。なんだか知らんが気に入られたらしい」

「男色趣味でもあるんでしょうかー」

「サカイちゃん、それは言いすぎ。せめて口汚く罵られるの大好きな変質者ってことにしとこ」

あー、自分がどう思われてっかは承知してるが、改めて言われるとオレって男らしいんだなぁと再確認しちまうぜ。

「えっと、それで。向こうはそのノリに任せて先生辞めろとか言ってるんだったよね」

「横暴ですねー。もう亭主気分ですか」

「金持ちの息子だからな。なんでも思い通りになるとでも思ってんじゃねぇか？」

偏見だけどな。

「なんでも思い通りに。あたしとおんなじか」

「カツコちゃんは思い通りに“自分がする”人でしょー」

「それもそっか」

そう、そんな姐さんに聞いてみたいと思ってたんだ。

「で、もし姐さんが同じ立場ならどうする？」

オレが憧れる、姐さんなら？

「オレは仕事を辞めたくないし、結婚なんてもっての他だ。でも母さんに迷惑はかけたくない……どうする？」

期待をこめたオレの問い。

「あたしだったら」

姐さんは、あっさりと答えた。

「サカイちゃんに相談するね」

ズッこけそうになった。

「……あー、その、オレは姐さんの意見が聞きたいんだが」

「だから、あたしじゃいいアイデア思いつかないからサカイちゃんに相談するんだってば。これも立派な意見だよ」

それも、そっか。オレも姐さんに相談してるわけだし。

「んじゃ、ちょうどよくここにいるサカイさん」

「どうしたらいいと思うよ」

頼りにされたのが嬉しいのか、サカイさんはニコニコと笑いながら、

「こういうときはー、お約束の解決方法がありますよー。テンカちゃんのクリームソーダと引き換えにお教えしましょー」

その作戦を、提示した。

こういう事態なら誰もが思いつきそうな作戦を。正直オレも思いつかなかったわけじゃない。が、しかしやはり躊躇いが。

「ほら、電話。早速かけて」

「んぐ……マジか……」

「クリームソーダおいしー」

うぅ……あ、繋がった。

『――もしもし？　どうしたテン』

「あー、トメか。ちょっと助けてほしいんだが」

『ん、いいぞ。何すればいい？』

何も聞かずに頷いてくれる色男。

助かる……助かる、んだが、よ。

マジかー。

マジでそんなことすんのかー……

## カカの天下４８４「あなたのお悩み、解決します？」（後書き）

サカイさんの作戦。それはおそらく皆様も真っ先に思いつくであろうアレな作戦です。そう、お見合い、それをぶち壊しとくれば……その辺はお約束ですが。

カカたちも動いてしまってるのが問題点。

さーどうしてくれようか笑

## カカの天下４８５「無敵のぎゅっ」

「えっと……アルミホイルと、わりばしと」

こんにちはと、サユカですっ。

今わたしがいるのは近所のスーパーの中です。もちろんお買い物中なのですが……

「んー、カップラーメンのカップは使えるかしら。あ、やきそばのカップの方がおもしろそう。えっと、あとは……む、紙おむつ。使える……かな？」

天高く積まれたおむつを前にうんうん悩んでいると、どさ、という音が背後から。

振り向くとそこには、買い物籠を床に落としたまま呆然としている――

「サルさんっ」

「サラです！！　うきー！」

間違えたわっ。

「そ、そ、それよりもどうしたんですかサユカちゃん！　そんなものの前で悩んで……はっ、まさか子供ができたんですか！？」

「そんなわけないでしょっ」

「だ、だって心無しかお腹が出て」

「出てません！！　なんて失礼なこと言うんですかっ！　体重は毎日計ってますけど標準以下なんですからねっ」

本当に本当なんだからねっ！

「そ、そうですかぁ……私、その買い物籠の中身を見て、てっきりアルミに包んだカップめんをわりばしで子供に食べさせるのかと」

サラさんの頭ではどんな光景が広がってるのかしら。すごく見てみたいけど……

「じゃあ何でこんな紙おむつなんかを見てたんですか？」

「え、んっと」

どう答えたものかしら。

「ま、まさかサユカちゃんがはくの！？」

「サラさんはわたしを何だと思ってるんですかっ。もういいです。ここで会ったのも何かの縁ですし、相談に乗ってもらいますっ」

と、いうわけで。会計を済ませてサラさんと喫茶店に入ってみたわ。サラさんはなんだかそわそわしてたけど、ちゃんと話を聞いてくれた。

「――それで、テンカ先生のお見合いを台無しにするためにお買い物してたんですっ」

「お、おむつとか？」

「はいっ」

別に素材はなんでもいいんだけどねっ。

「たしかに……いい歳しておむつなんかして出席すればお見合いなんか台無しですね。やん」

「テンカ先生が装着するわけでもなくてっ！！」

そんな恐ろしすぎること言わないでっ！！

「ちょっと作ってるものに必要なだけです。それよりも、サラさんはどう思いますかっ。その気も無いのに無理やりお見合いだなんて」

「い、今のご時世では中々ないですね。テンカさんみたいな女性には合わないとも思いますし……あれ、てん、か……？」

ふと、何かを思い出したかのように目を見開くサラさん。

「あの、もしかしてそのお見合いって来週ですか？」

「え、その、日にちは知らないんですけど」

「私、今は料亭で働いてるんですけど。たしか来週の予約帖に、て

んか、って読みそうな漢字の人で予約が入っていました。備考欄にお見合いって書いてあった気がします！」

な、なんて都合のいい展開！！

「サラさん！　後でいいので、そのお見合いの日程を教えてくださいっ！　それで、もしよければ……その日、お店に入れてもらえませんか、わたしたち三人をっ」

すでに動いているカカすけの作戦の中で一番の問題点、『その場にわたしたちが入れるかどうか』が解決するかもっ！　棚からぼた餅的な展開に、わたしは喜び勇んでサラさんに詰め寄った。

サラさんは――首を横に振った。なぜか顔が赤い。

「ち、近、じゃなくて、その、すいません！　私、入ったばかりで、そこまでの権限はないんです……お皿を数枚割っても許してくれる優しい場所ですけど、そろそろ限界っぽいし……」

そ、そっか……そうよね、サラさんだってようやく見つけたお仕事なんだし、そう簡単に手放すわけには……ううん、でもこっちも本気、非常事態なのよっ！

わたしはサラさんの手をぎゅっと握り締めて、顔を近づけ、真摯にまっすぐ見つめて言った！

「お願い、サラさん！　わたしにはあなたが必要なのっ」

無理なのはわかってる。でも言わずには――

「わかりました！」

あれっ！？

「ま、まま、まま任せてくださいっ。わたしが必ずやその作戦を成功させてあげます！　で、ですので、もうちょっと握ってください」

へ？　握るって、手？

「こうですか？」

ぎゅ。

「ぴゃう！」

気のせいか、今サラさんの頭上にケモノっぽい耳が見えたような。あとブンブン振り回す尻尾。

「じゃ、じゃあいいんですか？　協力してくれるんですねっ！」

ぎゅ。

「は、ははははい喜んで！　どうせいつものパターンだともうすぐクビになるんです。最後くらいでっかいお花を咲かせてみせようじゃありませんか！」

「ありがとうございますっ」

ぎゅ。

「きゃわわん！」

また耳が見えた。おもしろい……

「サラさん……わたし、チョコレートパフェが食べたいな」

ぎゅ。

「どどどうぞどうぞ！　私がなぜ働いているか？　それはサユカちゃんやトメさんに奢るためなのですからっ！！」

ど、どうしよう。なんだかサエすけになった気分だわ。一緒にいたからうつったのかしら。でもせっかくだし、もうちょっと……

ぎゅ――

「あ」

言い忘れたけどね、わたしたちの座った席は窓際だったのね。

それでね、窓の外にね、なんかいるのね。

噂を思えばなんとやらなのね。

最近うわさの黒いやつが、わたしとサラさんの手を取り合う姿をニコニコと見てたのね。

そしてその黒いのは、おもむろに携帯を取り出して――

「ちょ、どこにかける気よぉぉぉぉぉぉっ！！」

わたしはＭＡＸスピードで、まるでブラックホールに吸い込まれるがごとく黒いのに向かって行ったのでしたのね。

まぁ、そんなこんなでいろいろあったけどね。

わたしたちは、テンカ先生のお見合いへの招待状をゲットしたのだったっ！！

のねっ！

## カカの天下４８５「無敵のぎゅっ」（後書き）

どんどん色んな人が関わってきますなテンちゃんお見合い……これがもし不本意なお見合いじゃなくてもこうなったかもしれない勢いです笑

と、最近ずっとテンカ先生編で走ってきたので次回あたりで一休みしたいと思います。

休んだらポンポンとまた進む予定です＾＾

のね！

# カカの天下４８６「シューＶＳ姉娘」

こんにちは、シューです！

おまえ誰だって？　そんなこと言っちゃいやん！　え、キモい？　すいません普通に喋りますから見捨てないでください！

……ええと。とにかくシューです。お姉さまの下僕であり、タマ様の家臣です。

なんでもないお休みの今日、僕はいつもどおりタマ様の遊び相手をしていました。今は絵本を読んであげてます。

「おしまい」

「いやまだ続きますよ！？」

滅多にない僕の出番をこんなに早く終わりにされたらたまらない！

いや、タマ様は悪意があって言ったわけじゃない。わかっている、ただタマ様のマイブームが『おしまい』発言なだけだ。

「さ、読みますよタマ様。昔々、あるところでおじいさんとおばあさんが」

「おしまい」

「そう、誰にも看取られることなくお終いに――ってだから早いで

すよ終わるの！！」

僕は今までタマ様のことを長い間見守ってきた。なんかおもしろくないからってカットされてたっぽいけど実はそう！　なのでタマ様との付き合いは長く――その中で生まれたものがある。

「昔々、あるところでおじいさんとおばあさんが」

「ししまい」

「そう、年甲斐もなく獅子舞に精を出してたら」

「おしまい」

「無理がたたってお終いに――ってまたかい！！」

ビシッ、と我ながら見事な裏手チョップ。

そう。ずーっとタマ様に付き合っているうちに、僕はなんとノリツッコミをマスターしてしまったのだ！

「タマ様、僕はもう」

「おしまい」

「ええ、お元気で。さようなら――って死にませんよまだ！！」

どうですか、この見事なツッコミ！

この勢いでいずれ……そう、輝けるツッコミの星、トメさんを超

えてみせます！！

「タマ様、僕はもうただの下僕じゃありません。時折ふと思い出したかのように登場しては悲惨な目にあい、笑われながら去っていく――そんな自分とはおさらばです！！」

「しゅー」

「あ、はいはい。ジュースこぼしたんですね、今すぐ拭きますよー」

はっ。なんだこの卑屈な自分は。全然おさらばしていないじゃないか。

……でも、待てよ？

今日のタマ様は何かと「おしまい」と言ってくる。これを利用して、僕の今の地位を挽回することができるのでは！？

「えっと、タマ様？　僕がタマ様のお願いごとを聞くのは」

「これから」

「そう、これから、まだまだこれから――ってマジで！？　なんでこんなときに限ってこれからなの！？　僕の未来は」

「おしまい」

「だからなんでそう絶妙なタイミングで言ってくれるのでしょうか！」

きゃっきゃっと無邪気に笑うお子様……むむむ、これは根っからのコメディ体質な笠原一家の血をひいてるとしか思えない。実際は知らないけど！

「やっほー！　おっじゃましまっすー」

おお、この声は愛しきお姉様！

「よ、シュータマ！　あ」

かちゃん、と僕がジュースをいれたばかりのコップを再び倒すお姉様。

「ごめん、よろしくシュー」

「はーい」

何の疑問も持たず勝手に動く身体。鼻唄混じりにしゃがみ込み、すいすいーっと零れたジュースを拭いて……ふとタマ様と目が合った。

「おにあい」

「僕のこの立場がですか！？」

「おきまり」

「決まってる立場だからこれ以上変わりようがないと！？」

ああ、なんてことだ。僕はそれほどまでにダメな人間だったのか。

あとなんて子供だ。急所突きが的確すぎて今にも僕ちん死にそうです。心が誰かにへるぷみー。

「何やってんだか……ねね、タマちゃんっ」

「おぅ、おねー！」

「シューはどうだった？」

「おちなし」

「オチがないのかぁ。そりゃまいったね」

無邪気に喜ぶ小さなあくま。あぁ、どうせ僕にオチなんてないさ。楽しく今日あったできごとでも語るがいいさー、ふんだ。

「それで、他には何かあった？」

「しゅーがねっ！」

「うんうん」

なんでも好きに言ってください。

僕は知りませんよ。口を出しません。

「だれかわすれた」

「それだけは聞き捨てなりませんよ！？」

ここまで頑張ってるのにそりゃないっすよ！

「あ、んとね。つい最近お隣さんが飼い始めた犬の名前がたしかシューだった」

「勝手に犬にしないでくださいお姉様！！　た、タマ様？　僕の名前はなんですか」

「おしがい」

「そんな貝は知りません！！　それともナイスガイの親戚ですか！？　それなら勘弁しないでもないですけど！」

「かんちがい」

「あっはっはーそうですよねー僕なんかナイスな部分なんてどこにもナス！　ナスっぽい部分ならあるんですけどーってお姉様までタマちゃんの真似しないでください！！」

ぜーはーぜーはーと上がりすぎたテンションを鎮める僕を、お姉様はまじまじと見つめてきた。

「シュー……しばらく見ないうちに芸風変わったね」

「ちょっとイメチェンしようと頑張ってみたんですけど……どうですか？」

「んー、タマちゃんはどう思う？」

「しゅーはいぬがいいー」

「前のほうがいいってさ」

ええそうですかそうですねそうですよ、どうせ僕は犬みたいなもんでしたよ今もそうですよワンワン言いながら尻尾でもつけて振り回してればいいですかそうですか！！

「シュー、なんで嬉しそうなの？」

「気のせいです！！」

ふんだ。よくよく今日のことを思い出してみれば、ツッコミ覚えても扱いは前と変わってないじゃんね。

「お手」

「わん！！」

「やっぱ嬉しそう」

「ヤケクソなだけです気のせいです！」

ほんとですからね！！

「はぁ……僕のこの扱いはいつまで続くんだろう」

「これから」

「これからが本番！？」

タマ様はどんどん成長されてます。言葉も覚えてます。

それに比例してどんどん僕は弄られます。

なぜでしょう？

謎です。

## カカの天下４８６「シューＶＳ姉娘」（後書き）

一休みにシュー君でしたー。
やっぱシューはシューでしたね。サブタイトル見て「勝負になるわけないじゃん」と思った人も多いはず。

さ、明日からはまたテンカ先生編に戻ります。

## カカの天下４８７「手芸部の帽子」

こんにちは、カカです。

「うし、じゃあ今日はこれで終わりだな」

テンカ先生はこんなこと言ってますけど、終わりなんかじゃありませんよ？　そう、これからが本番なのです。

「イチョウ、ごうれ――」

「ちょっとぉ待ったぁ！」

テレビ仕込みの、えっと、浪花節っていうんだっけ？　つまりそんな感じで私は先生に口を挟んだ。

「あんだよカ――」

「ストップ！」

「いや、だか――」

「しゃらっぷ！！」

「お――」

「黙れ！」

「てめぇが黙れや！！　ちったぁ喋らせろ！！」

む、怒られた。

「何だよカカ。何か言いたいことでもあんのか？」

「うん、今度のお見合いのことなんですけど」

「ああそれか。それなら今週の日曜――って何ナチュラルに聞いてんだてめぇ！！」

あらま、重要な情報げっつ。一応サユカンが持ってきた情報で日にちはわかってたけど、これで裏づけってやつが取れたことになるんだよね！

「おぉ、やっぱり本当だったんだ」

「ちょっと信じられなかったんだよねーわたし。半神半鬼ってやつ？」

「おまえ、いつからそんな物騒なやつになったんだ」

ざわざわと熱く騒ぎ始める皆。しかしテンカ先生はそれとは反対に、冷めた目で生徒を見据えた。

「おい、なんでてめぇらそんなこと知ってんだ」

ぎくり、と動きを止める一同。

しかしそんな中で頼れるあの子が朗らかに、

「いやですねー。テンカ先生がお見合いなんて似合わないことしたら世界的ニュースになるに決まってるじゃないですかー」

「なってたまるか！！」

冗談じゃねぇ、と叫ぶ先生。しかしこっちとしてはお見合いで先生を辞められるほうが冗談じゃねぇのである。

「先生、まずはみんなの声を聞いてください！　はい、誰でもいーから発言どーぞ」

私が促すと、クラスメイトの皆はおずおずと口を開き始めた。

「テンカ先生、俺たち、お見合いはいけないと思います」

「……なんで」

「だって、いくらお酒を買う金がなくなったからって玉の輿を狙うのはどうかと」

「待ったストップしゃらっぷ黙れ。どこをどうしてそういう話になった！？」

「え、だってそうだって聞いたぞ」

「わたしもー」

「え、テンカ先生が酒飲みすぎて間違い犯したから責任とるんじゃねーの？　間違いってなんかよくわかんねーけど」

「あたしは先生の頭がおかしくなったのかと」

「それ元からじゃん」

「だからもっと」

「こえー」

私に負けない自由っぷりで語りまくるクラスメイト……恐るべし、人の噂の暴走列車。あれーちゃんと説明したはずなんだけどなー。

「ま、ともかく！　そういうわけで私たちはテンカ先生に辞めてもらうわけにはいかないのです！」

「……わりぃ、どんなわけか説明してくんねーか」

先生どした。眉間なんか押さえて。頭痛いの？

「つまり、私たちはテンカ先生が好きなんです！　愛してるんです！」

「歪んだ愛だなーてめーら」

呆れながらもまんざらではないでしょテンカ先生。口がにやけそうだよん。

「だから、これをつけてください！」

「あん？」

そして、もっと喜んでくれるであろうソレを、私は取り出した。

怪訝な顔をしてそれを受け取る先生。

「これ……帽子か？　なんかいろい、ろ、書い……て……」

私ら手芸部の作品、そして皆の寄せ書きがされたその帽子を見て、テンカ先生は喜びのあまり絶句した。きっと。たぶん。おそらく。

「……な、なんか『先生辞めないで』とか『先生大好き……くくく』とか『辞めるな辞めるな辞めると死ぬぜ』とかお経みたいに書いてあるのが、妙な怨念とかこもってそうなんだが……つーか、なんだこの一番でかく書いてあるの、『結婚なんかしねーよ』っておまえ直球すぎだろ」

「それは模様です」

「……いや、これ」

「文字に見えるのは気のせいです。模様です」

言い切ったもん勝ち。テンカ先生はぽりぽりと頬をかきながら、

「これを、どうしろと？」

そんなわかりきったことを聞いてきた。

決まってるじゃん。

「それをかぶってお見合いしてください」

そのときのテンカ先生の顔といったら……なんとも言えないようで、すんごくおもしろかった。

それから私たちは口をそろえて「先生を想う生徒の本心」だとか「心からの気持ち」だとか「それは生徒自身の命」だとか「それを捨てるということは私たちを海へ沈めることと同じ」とか綺麗ごとを並べ立て、お見合い当日にその帽子をかぶることを無理やり了承させた。

これで作戦の第一段階は終了だ。

手芸部の本領発揮は、まだまだこれからである。

## カカの天下４８７「手芸部の帽子」（後書き）

さて、前準備も終わりついにテンカ先生編も“本編”に突入します。

わりと好き勝手やりますんで、ついてこれる方は広い心で読んでやってください笑

**カカの天下４８８「お見合いミッションＯＮＥ　宣戦布告！」**

やぁやぁこんにちは。僕はトメ。

テンカという妻を持つ、一家の大黒柱さ！

……今日だけな。

「おせーぞ！」

「いいじゃん、時間ぴったしだろ」

「こういう大事なときはもっと早くきやがれ。来ないかと思って焦っただろが」

「へぇ、来なかったら泣いてたか」

「冗談。怒りに任せて見合い相手を泣かせてるとこだ」

そうやって文句を言うテンはいつもどおりのラフな格好じゃなかった。どこから調達してきたのか着物姿。お見合いとかパーティするぞオラァ、と主張しながら歩いてるようなもんだ。ちなみにオラァは、着物の清楚な雰囲気がテンカの荒々しい本能を隠せなかったのを表現してみた。よかろう？

「さっさと行こうぜ」

「はいはい、慌てなくても普通に歩けば間に合うだろ……その柄の花は牡丹か？」

「おう。花言葉は『王者の風格』だ」

似合いすぎて困る。

「へぇ、いいじゃん。女みたいだ」

「最高の褒め言葉どーも。それよりトメ、てめぇはなんだその格好」

なんだ、って……普通の私服なんだけど。

「てめぇがそんなだと、こんな格好してるオレがバカみてぇじゃねぇか」

「そんなこと言われてもね、僕が見合いするわけじゃなし」

「そりゃ……そうか」

そう、僕の役割は彼氏のフリ。無理やりなお見合いを体裁よく誤魔化してお断りするために呼ばれた演技マンなのだ。

「頑張らなきゃいけないのはテンだろ。所詮、僕は部外者だし」

「そうだけどよぉ……相手の父親、まぁ今回お見合いの話を持ってきた張本人なんだがよ、これがすげー強引で、こっちが『彼氏がいるのでお見合いできません』つったら『じゃあ見合いの場に連れてきてうちの息子と比べてみろ』とか言うようなやつだぜ？　オレだけじゃ太刀打ちできるかどうか」

ふむ、テン一人の問題ならなんとでもなるんだろうけど、今回は

お母さんの立場もかかってるらしいしな。

「無理言って悪いが、トメにも彼氏のフリをしてもらわねーと……」

「それはいいよ。別に無理な話でもないし」

「そ、そうか？」

何を不安に思ってるのかは知らないが、テンの彼氏のフリなんて簡単すぎる。なにせ――

「あ」

テンが急に足を止める。視線の先には目的地の料亭、そしてその門の前に立っていたのはスーツ姿の気弱そうな女性と、袴姿の強面なおっさんだった。偶然か、それとも待ち構えていたのかはわからないが――

「うちの母親とお偉いさんだ。頼むぜ」

小さく耳打ちされたテンの言葉から、すでに戦闘開始の合図が鳴ったと確信した。

「やぁ、こんにちはテンカ君。わざわざすまないね」

「こんにちは、ダレ社長。それにお母様も」

ぺこりと丁寧にお辞儀する、僕の隣の着物の人。ダレだこいつ。

「ふむ、そちらの男が？」

「はい、わたしの恋人です」

あー、そっか。そういやテンってネコ被るんだっけ。最初の頃にほんの少ししかそういう場面を見てないから忘れてた。

「……君、自己紹介はないのかね？」

おっと、ぼけっとしてるうちに睨まれてた。ダレだっけこの人？ああダレだっけ。ややこしいなこの名前。

「どうも、トメといいます。テンの彼氏です、よろしく」

言われた通り、普通に自己紹介して頭を下げる。しかし不満そうなおっさん。なぜに。

「……随分と普通の男だな。いや、むしろ粗雑と言っていい。このような男に将来を任せられるのかね、テンカ君」

「え、は、はい……！」

慌てて頷きながらも横目でこちらを睨んでくるテン。ちゃんとやれよてめー、とその目が語ってる。

やかましい。おまえのほうこそちゃんとやれ。

「君はどう思うのかね？　自分がテンカ君を幸せにできると思っているのか？」

すげーなこのおっさん。初対面なのにいきなりこんなこと聞いて

くるか普通。あ、普通なのが気に食わないんだったなこの人。

「さー、できたらいいんですけどね」

適当な回答が、おっさんの眉をピクリと大きく動かした。

「なんだ、その答えは。テンカ君の相手と言うからには、もっと骨のある男が来ると思っていたのだがな。残念だ」

嘘つけ。嬉しそうだよあんた。

「君、年収は？　家族は？　貯蓄はどれくらいあるのかね。そもそもまともな仕事をしているのか？　まぁ身なりを見る限り、そのどれもがうちの息子には敵わんだろうがな」

「でしょーね。別に大金持ちでもないし」

実は結構あるけど。

「……ふむ」

肩透かしをくらったような顔をしているおっさん。あからさまな挑発に全く反応しなかったことが疑問らしい。こちらとしてはドラマでありそうな挑発に『こんなこと言う人ほんとにいるんだー』なんて感心していたのだが。

「……君は本当にテンカ君を愛しているのか？　わざわざ見合いに乗り込んできたわりには、先ほどから無気力無抵抗に見えるのだが」

そうだそうだ、と無言の圧力がテンのほうからチリチリと。多分

口を出しまくりたいんだろうな、でもこのおっさんを前にしてるから大きく出れないと。

情けない。目を覚ませ。

やるべきことは簡単だ。

「ま、僕はイヤイヤながら付き合ってるからな。そんなに熱意はもてないよ」

「なんだと。嫌ならばなぜ付き合っている？」

「だって、愛ってそういうもんでしょ」

ぽつりともらしたクサイ言葉に絶句するおっさん、テン、そして後ろのおばさんも。テンのお母さんだっけ。

「なんだかんだ言いつつ一緒にいる夫婦はたくさんいるよな。でもさ、そういうのって、好きだ好きだと連呼してる人らより、よっぽど繋がってると思うんだけど？」

「……ほう。つまり？」

「幸せにできるか先のことなんてどうでもいいし、それこそ貯蓄だの地位だの人に負けても関係ない。だから熱意はもてない。だって僕は、ただ当たり前のことをしてるだけなんだから」

当たり前のこと――それは、ただ一つのことに対して抵抗している、それだけのこと。

「僕の繋がりを、奪うな」

厳つい顔を不敵に睨みつける。

おっさんはしばらくそんな僕を見返していたが、やがて。

「……君は、敬語も使えないのか？」

「失礼、恋人の前では自然になるもので」

「それも良き繋がりの証とでも言うつもりか？　はは、よかろう。見合いの同席を許す。おもしろい男だな、テンカ君」

矛先が向けられ、呆けていたテンは慌てて答える。

「え、あ、す、すみません。失礼なことばかり――」

いまだにかしこまるテンを睨む。そろそろ気づけバカモノ。

その視線が効いたのか、テンはぴたりと動きを止めて……一つ深呼吸、そして。

「それと、恥ずかしいことばかり言いましたね、このバカは」

「いいだろ。こういうときくらい、たまに言ったって」

「たまに、ねぇ。こんなクサイのが大好きなくせに。おかげでわたしはいつも鼻栓を持ち歩かないといけないんですよ。あーくさいくさい」

「テン、地が出てる」

「あ、失礼しました。でも鼻栓には予備があるので必要な方は遠慮なくどぞ」

謝りつつも悪びれもなく舌を出すテン。急に気安くなった彼女におっさんは少し驚き、呆然としていたテンの母さんはおろおろと困惑し始めた。

それでいい。

彼氏のフリだの恋人のフリだの、最初聞いたときは面食らったけど、話を聞けば僕らのすることは一つだけでいいのだ。

――いつもの仲の良さを見せ付ければ、それで。

屁理屈を並べるにしても、恋人なんて設定は紙ほどの薄さで充分だ。似合わないことをすれば失敗するだろうし、何より。将来本当にテンの恋人になるであろう男だって、どうせ細かいことを考えずに自然体なやつに決まってるんだから。

「て、テンカ君。その帽子は？」

「生徒が作ってくれたものです。ぜひ見合いにかぶっていけと」

「し、しかしだね、それは」

「わたしは“まだ”教師です。生徒の想いを無下にはできません」

おもむろに取り出した失礼極まりない帽子をかぶり、ずんずんと

進んでいくテンカてぃーちゃー。自分の名前の通り『ここはオレの天下』といったご様子だ。

母上の立場は大丈夫かと不安に思ったが、まぁ、あれは生徒に「先生辞めないで」的な感じで作られたモノっぽいから大丈夫か。どう見ても見合い相手にケンカ売ってるけど、美談にしようと思えばできるだろう。

さて、行こう。

まだ見合い相手は来てないけど、存分にぶっ飛ばしてやろうじゃないか。

姉でトラブル慣れし、妹で屁理屈慣れしたこの僕を、止められるなら止めてみろ。

――その頃。

「ここで、いいんだよね」

「そのはずー、あ、サラさんだー」

「裏口から入れってことねっ」

「それにしても、本当にテンカ先生のお見合い場所ってここでいいのかなー」

「大丈夫よ、入り口のほうに予約した人の名前があったから。相手

の人の名前は読めなかったけど、もう片方にはちゃんと『天鹿』っていう苗字が書いてあったからっ」

「そっかー、じゃあ大丈夫なんだねー……でもテンカ先生の字ってそれでよかー――」

「心配ないない。だからさっさとコレを運ぼう。サエちゃんそっち持って」

「はーい、せーの！」

トメの知らないところで、カカたちが動き始めた。

## カカの天下４８８「お見合いミッションＯＮＥ　宣戦布告！」（後書き）

やりたいようにやってます、書きたいように書いてます……てへ。
続きます。

## カカの天下４８９「お見合いミッションＴＷＯ　スタンバイ！」

ども、引き続きトメがお送りします。

ついにお見合い場所へと潜入した僕とテンですが、相手の方に問題が起きた様子です。

「申し訳ない！　どうも息子が遅れているようで……」

「い、いえいえそんな！　わたしたちが早く来すぎたのですから！」

真摯に謝るおっさん……最初は気に食わないと思ったが、根はいい人っぽいなこの人。そしてそれに恐縮しがらぺこぺこ頭を下げまくるテンの母親。聞いたとおり、確かに気弱でおとなしい人のようだ。

「そう言っていただけるとありがたい。では少し連絡をしてきます。君たちは先に中へ入っておきなさい」

「い、いえ！　わたしも残ります！　ほらテンカさん、その、トメさんも、お先にどうぞ」

「はい」

「わかりました」

ま、ともかく。初っ端からいいのをかましたおかげもあって、僕もテンも自然体のままで戦場へと臨むことができそうだ。

そう、思っていたんだが……

「お待ちしておりました」

その見覚えのある仲居さんが現れた瞬間、この店は一気に不自然な世界となってしまった。

「え……と、サラさん？　なんで？」

「なんでと言われましても、私はここで働いていますので」

「え、っと。お久しぶりですね、サラさん」

いつもと違って丁寧なテンに驚いたのか、一瞬目を丸くするサラさん。しかし店員根性が染み付いているのか、すぐに元の笑顔に戻った。

「ええ、お久しぶりです。お話は聞いていますよ。ささ、どうぞ。お席へとご案内します」

普段はおとなしいが暴走すると厄介なこの人がここに――そんな恐怖を抱いたのだが、それは杞憂だったのか。あくまで丁寧に僕たちを案内するサラさんは、さっきの僕らに負けないくらい自然体だった。

「お、部屋の前に名前が書いてある。予約した人と……見合いする両人の名前か、って」

それを見て驚いた。

「なぁテン、これ」

「おう、そういや漢字見るのは初めてか。オレの名前な、天鹿天下、っていうんだよ」

どえらい名前だ。一目じゃ読めないどころか名前にすら見えない。四字熟語だろどう見ても。

「てんか、テンカ？」

「そうだよわりーか」

「悪くはないけど、なんだってそんな」

「ま、座れ」

案内された部屋は洗練された和室で、いかにも高そうな印象を受けた。庶民感覚としては居心地の悪さを感じながらも、テンと肩を並べて座布団に腰を下ろす。相手とはテーブルを挟んで対峙する形になるだろうから、この座り方でいいはずだ。

「そんな難しい話でもないんだけどな。昔、母さんは結婚する前にオレを生んでな。それから結婚しようって話になったんだが……テンカっていう苗字は天涯孤独な母さんしか持っていなくてな。結婚すれば父さんの苗字になるから消えちまう。二人はそれを嫌がったんだとさ。元々父さんも母さんのこと『テンカ』って呼んでたらしいしな」

聞けば父方の家は厳しい家柄だったらしく、婿入りや夫婦別姓という考え方は皆無だったらしい。

「それで娘の名前をテンカに？　でも」

「……結婚する前に父さんは死んじまった。だから苗字は変わらず、名前ももちろん変わらず、そのままオレは上を読んでも下を読んでもテンカって名前になったわけだ。ま、どうでもいい話だけどな」

そう、か。片親だったのか。テンが母親を大事にするのも頷ける。

その過去を聞いたことを、僕は謝ったりしなかった。一度、学生のときに母子家庭だった友人の話を聞いてしまい、謝ったことがある。するとそいつは怒り出したのだ。『それが普通だったんだから、俺にとっては不幸話でも何でもない。だから謝られても困る』と。

人一倍我が強い――いや、単純に強いテンのことだ。そんな余計なことを言ったらきっと蹴られる。殴られる。殺される。や、最後のだけはやめてくれ。

「そうだったのか、テンテン」

「そのあだ名だけはやめろ」

結局蹴られた――お？

「やぁ、申し訳ないね二人とも」

謝りながらダレのおっさんが現れた。もちろんテンの母親も一緒だ。

「息子は渋滞に引っかかったようで、もうしばらくかかるらしい。

昨夜急に出張が決まってな、その帰りがここまで遅くなるとは思っていなかったのだが……いや、これは言い訳だな。本当に申し訳ない」

むぅ、正直肩透かしだ。せっかく気合入れてきたのに。

「しかしもう昼食をとるにはよい時間だ。お二人さえよろしければ先に食事を始めようと思うが、いかがかな？」

テンと目をあわせ、頷いた。

「よし、では」

「はい、お伺いします」

立ち聞きでもしていたかのごとく、即座に現れるサラさん。

「料理を」

「かしこまりました」

あくまで仲居らしく丁寧にお辞儀し、去っていくサラさん。なんとなく不安を覚えた僕は、「お手洗いにいきます」と言って立ち上がり、後を追った。

サラさんはすぐに見つかった。呼び止めると、

「んふふふー、何か？」

とんでもなくおもしろそうに笑っていた。怪しい。怪しすぎる。

「あの、サラさん。何かする気じゃないよね？」

「いぃえぇ、ぜぇんぜんそんな気はありませんよ……私は」

「え、最後なんて言った？」

「いえいえ、お気になさらずーふふふ」

「……楽しそうですね」

にやにやするサラさんを見て思わず口にした言葉。

言うべきではなかった。

「楽しい？　楽しいですよラブラブなお二方を見れてふふふ」

目が笑ってない。

勘違いしてた。

この人怒ってらっしゃいます！！

「料理に、毒とか、はいってないと、いいですねぇ、ふふふふ」

気分がハイってるのはあなたでしょう、と言いかけて怖いからやめた。

その後は何を聞いても笑うばかり……さっきまで格好つけてたけど、なんとなく僕の天下はもう終わったんじゃないかなぁ、なんて

思いながらトイレをすませる僕なのだった。

どうも、カカでーす。

「トメ兄の部屋、ろーっくおん！」

お見合い会場の隣の部屋で待機している私たち工作員は、もう、なんてーかこれ以上ないほどわくわくしていた。

「アレは運び込んでおいたわよっ。今はどんな状況？」

準備してたサユカンが戻ってきた。

「ご飯食べるみたいだよー」

残念ながら見合い会場そのものは見えないけど、話し声だけは聞こえてくるのだ。

「ご飯かぁ。何かするのサエすけ？　アレの他にもいっぱい持ってきてなかったけ、君」

我がクラブの冥参謀、じゃなかった名参謀は、にこにこーっと微笑んで、

「いろんな事態を考えてきましたのでー。もちろんお食事から仕掛けますよー」

我が恋人、じゃなくて相棒だけあって恐ろしい。私はアイデア係、

サユカンは実行係兼情報係、そしてサエちゃんは作戦係なのだけど、その作戦の詳しい内容はあまり教えてくれないのだ。

用意するものはした、それをどう使うかはお楽しみ。そっちの方がおもしろいから――だそうな。

「みなさーん、ご飯運びますけどどうします？」

おっと、ここで我らの強い味方、現在この料亭でただ一人の仲居さんが現れた。他の邪魔者、じゃなくて余計な従業員は、偶然にもシフト表の書き間違いによって皆休みになってしまったのだ。

「仕掛けますー。私行くから、カカちゃんたちはここで待機しててー」

「わかったわっ。耳をすませてるわね……先生がトメさんとお見合い始めないように」

耳がダンボになるサユカン。『トメ兄が彼氏のフリをする』っていう情報を持ってきたときのサユカンのハリキリ様はすごかったからね。人間、勢いで耳もでっかくなるらしい。

それにしてもサユカンはどこから情報を仕入れてくるんだろう。サラさんも然りだけど、トメ兄が彼氏のフリするなんて話……聞いても「電話でそういうこと教えてくれる人がいるのよっ」としか言わないし。

「あ、そうそうサユカちゃん。その辺にたまたま小さな穴が空いてますから、隣の見合い会場を覗けますよ」

サラさんの指差す壁を見る。本当だ。ドリルで開けたような都合のいい穴が！　偶然ってすごいね。

「サラさん、ここまでして大丈夫なんですかー？」

「いいんですよ、他の予約のお客様も誰かが偶然キャンセルしちゃって、このお店は今すっごく暇なんですから。あ、厨房には人がいますので、見つからないように」

ほんと偶然ってすごいね。

「おぬしも悪よのー」

「ふふふ、さっさとお見合い壊して私がトメさんとお見合いするんです」

仲良く歩いていく二人の後ろに黒いオーラが見える……サラさん、最初はおとなしい人だと思ってたのに。なんだかそんな人ほど次々とたくましくなってく気がするなぁ。私のせい？　まさかね。

「サラさんって暴走すると侮れないのよね……トメさんとお見合いするのはわたしよっ」

「はいはい、覗き続けるよ」

さぁ、これからが本当の作戦開始だ。

## カカの天下４８９「お見合いミッションＴＷＯ　スタンバイ！」（後書き）

さて、ここで一つ問題です。
このお見合い話に関してまるっきり放置されているあからさまな伏線っぽいモノが一つあります。それはなんでしょう？
ま、わからなくても支障ありませんが笑
ささ、まだまだ準備が終わったところ。続きます。

## カカの天下４９０「お見合いミッションＴＨＲＥＥ　ＡＴＴＡＣＫ！」

「いや、誠に申し訳ない」

「いえいえそんな！　頭を上げてください社長さん！」

「しかしこの見合いの席を用意したのは私だ。偉そうなことばかり言っておいてこの様とは……いや、面目ない」

よいよい許す、なんて言えたら気持ちいいだろうなぁ。あ、すいません本音がでましたトメです。

ダレ社長もテンの母さんも席につき、これから食事というところ。肝心の見合い相手が遅れていることで社長さんは先ほどから謝ってばかりだ。ほんと腰低くなったなぁ、さすがに社長だけあって礼節わきまえてる、というか良い意味でプライドが高いんだろうね。

「失礼いたします、お食事をお持ちしました」

む、サラさんの登場だ。意外と手際よく和食のお膳を並べていく。しかしまったくこちらと目を合わせないのはいかがなものか。

「この店とは懇意にしていてな、どの料理も絶品だぞ。ささ、鍋の蓋を開けてみなさい」

でもサラさんが絡んでるしなぁ。毒、はいってないよな？　なんて恐怖しつつも蓋をあけると……

「ぴよぴよぴよ」

僕らの顔もピヨピヨピヨ。

毒よりすげぇもんがはいっていた。

ひよこだ。

「これぞこの店の名物――めいぶ、つ？」

声が尻すぼみになっていくダレさん。や。確かにどっかの都では名物かもしれないが、その名前だけは。

――隣の部屋。

「サエちゃ、どっから持ってきたの、あんなの」

「私のファンクラブの人でね、家で養鶏場やってる人がいたからもらってきたのー」

「そ、そういえばそんな集団あったわねっ」

「おい、誰かおらぬか！！　これは一体なんの真似だ！？」

ただでさえ息子が遅刻して気にしているのに追い打ちをかけられ、激昂するダレさん。ふむ、ちょっとフォローを入れて点数でも稼いでおくかな。

「まぁまぁダレさん。魚の踊り食いとかもあるし、これももしかして」

「ひよこのピヨり食いとでも言うのかね!?　あ、ああいやすまんトメ君。このようなものを出す店を選んだのはこちらの落ち度だ…いつも信用ある店と思い使ってきたが、よもやこのようなことを」

「頭をあげてください、ダレさん。どんな店にだって不手際があることもあります」

ひよこを食事に出すこたぁいくらなんでもないと思うが。

「それに、ほら、入ったばかりの新人が間違えたのかもしれないし」

十中八九それが真実だと思うが。

「お、おお、トメ君。君はなんて心の広い男なのだ！」

本心が聞こえないって当たり前だけど便利だよなー、なんて心の中で思いつつ、上っ面だけは好青年っぽく微笑んでおいた。

「おい、仲居！　さっさとこれを下げろ！　ちゃんとしたものを出せ！」

「は、はい！　かしこまりましたぁ！！」

極道まがいな怒声を浴びせられ、慌てて片付けるサラさん。

ちらりとテンのほうを見ると。

「ピヨり食い……くく」

なんかウケてた。

そんなマイペース女の母親はというと……おお、顔が真っ青だ。社長に謝られてどうしていいのかわからないのかな。そういえばダレ社長ってどこの社長なんだろう。ダレ社長じゃなくてドコ社長だな。うん、意味わからんな。

そんなことを考えて時間を潰していたんだけど、やがてサラさんが新しい鍋を持ってきた。

「ちゃんとしたものだろうな!?」

テーブルに置かれたその鍋の蓋を即座に開けるダレ社長。

そして現れたのは。

「こけこっこー」

僕らの顔もコケコッコー。

……や、さっきは子供で今度は成人、ちゃんとしてると言えなくもないが。

「仲居、これはどういうことだ」

俺様の顔にどれだけ泥を塗りたくれば気が済むんじゃこんガキャア、てな眼光で睨まれたサラさんは萎縮しながらも、おそるおそる

口を開いた。

「そ、その、私は運んできただけですので！！」

すげぇ。全部厨房のせいにした。

しかし何も知らない人からすると、そう言われれば厨房が悪いとしか思えない。まさか仲居が料理を用意してるだなんて夢にも思わないだろうからね。

再び慌てて鍋を下げるサラさん……しかし、この人は一体何をしたいんだろう。こんなことをしたって意味が――

「……ぬぉぉぉぉ」

あ。約一名、怒りで血管が切れそうになってる。まさかこの人を怒り殺すつもりなのか？

「……今度はコケり食い？　く、くくくく……」

それともテンを笑い殺すつもりか、それともその母親をストレスで過労死させる気か？　どちらにせよ、この問答無用のバカらしい展開の雰囲気は覚えがある。

まさか、なぁ？

――隣の部屋。

「……ね、サエちゃん」

「養鶏場からお邪魔します、パート2」

「ねぇサエすけ。見てるほうとしては確かにおもしろいけど、一体こんなことして何になるわけ？」

「サユカちゃんの情報によるとー、先生のお母さんに恥をかかせないようにしなきゃいいんだよねー」

「え、ええ。そうサカ――じゃなくて、知り合いから聞いたわっ」

「じゃー話は簡単だよー。相手に恥をかかせればいいの」

今度はさすがに普通の料理がきた。ダレ社長はすぐさま厨房へと乗り込みそうな勢いだったが、これ以上僕らの前で醜態を曝すを嫌ったらしく、後日訴えることにしたそうな。

まさかこれひよこじゃないよな？　と怖いこと思いつつ食べた料理は、確かにとても美味しかった。恙無く食事を終えた僕たちは、もうすぐ到着するらしい見合い相手を庭でも散歩しながら待とう、という流れになったのだが……

「ご覧なさい、素晴らしいだろう？　ここの庭はとても優美な石像と、穏やかで静かな小川のせせらぎが自慢で――」

先ほどの失態を少しでも取り戻そうと庭の素晴らしさを語ろうとするダレさん。

だがしかし。

「素晴らしい……ねぇ……」

僕らは呆気に取られるしかなかった。感動して、というわけではない。感情は動くどころか石化したからだ。

「優美な、石像……」

あの、おっさんがおむつを頭にかぶってフラダンスを踊る妙なオブジェのことだろうか。

それとも塀の上に並んでるミョンミョン唸る人形か。『バーローバーロー』と叫ぶぬいぐるみか？

木にぶら下がりまくったノロノロ坊主も捨てがたい。ああ久しぶりにみるなアレ。

空飛ぶカレー。なにあれー。

「穏やかで静かな、小川……」

あの、庭のど真ん中を行進している豚と牛の大群のことを言っているのだろうか。整列してるから川っぽいけど。せせらぎはブーブーモーモーのことか。

「……おい、トメ。ここは、どこだ？　いつだ？　何だ？　地球か？」

テンが呟く。思わずネコ被りを忘れるほどに衝撃的だったらしい。しかし返事は返せない。地球だという確証はどこにもないからだ。

ただ、わかるのは。

こんなすっ飛んだ展開に持ってくような奴は限られているということだ。ああ、そうだな。サラさんがいるなら、あいつがいてもおかしくない。

ちらりとテンの母親を見る。混乱の極みで顔は真っ白。倒れそうだ。

続いてダレ社長を見る。異空間を目にして顔は虹色。変色しまくって何色かわからん。

うーん、ダレさんには可哀想なんだけど……せっかくのチャンスだし、決着つけちゃうか。

「ダレさん。なんですか、これは」

「トメ君!?　い、いや、こんなはずは」

「さっき言いましたよね？　あなたの息子さんは、僕よりもあらゆる面において上だと。このような失礼極まりない見合いの席を用意するような人たちが、果たしてそんな上等な人たちなのでしょうか」

「ぐっ……それは、だね」

「これは彼女にとっても、彼女の母親にとっても侮辱です。あなたに少しでも恥を知る心があるのなら、これ以上お見合いなんて口に

しないでください。彼女には僕がいるんですから」

彼氏がいるのを承知で呼んだ手前、ダレ社長は最高の席を整えなければいけなかった。それが無理を通す礼儀というものだ。しかしそれはできないどころか、最悪の形となってしまった。身勝手な大人ならば若造にこんな暴言を言われては怒鳴り散らすところだろうが、この人は謝るということをきちんと知っている。恥というものを知っている。

ここまでテンに、いや、テンの母さんに恥をかかせたとなると、ずっと頭が上がらなくなるだろう。いくらテンの母さんが弱気といっても、無理やり見合いを進められることはなくなるはずだ。

「本当に……返す言葉が、見つからない」

うなだれる社長。悪いね、あんたに恨みはないが――ん？

――料亭の庭にある、観賞用の大きな岩の陰。

「さすがトメさんだねー、攻めるとこをわかってるー」

「よくわかんないけど、あの偉そうな人をこてんぱんにしてやれたのよねっ！　このクラス皆で作った『見てるとなんとなくムカつく失礼なモノ』軍団のおかげでっ」

「カカちゃんの連れてきた豚さんと牛さんもインパクト強かったよねー。どうしたのあれー」

「とにかく衝撃的なものを、ってサエちゃんに言われたからね。姉に牧場から連れてくるように頼んだ。あの人、なんでか動物を操れるから」

「具体的にどうやって連れてきたのか、怖いから聞かないでおくわ……あれっ、誰か来た」

「んー……あ、お見合い相手の人が来たんじゃないかなー」

「むむ、あの人……？」

「カカすけ、しっ！　なんだか話し込んでるけど、声が大きいから聞こえてくる……」

「……うわー」

「サエちゃん、どしたの」

「聞こえちゃった」

「だから何をよっ」

「今きたお見合い相手の人が、『その男は彼氏なんかじゃない！』って、言った」

「「げ」」

**カカの天下４９０「お見合いミッションＴＨＲＥＥ　ＡＴＴＡＣＫ！」（後書き）**

何が可哀想って。
店が可哀想ですね♪

さ、次は向こうの反撃なるか。

「その男はテンカさんの彼氏なんかじゃありません！！」

指を突きつけられてちょっとムッとしたトメです。

勝負がついたかと思われたときに突如として現れ、事情を聞いた見合い相手の優男は――いきなりその真実を看破しました。

「こ、こら！　いきなり失礼なことを！」

「いいんです父さん。本当のことなんですから。でしょう？　笠原トメ君」

フルネーム、ときたか。

「なんで、そう思うんだ？」

否定も肯定もせずに根拠を問う。するとその男は自信満々に答えた。

「本当に君がテンカさんの彼氏なら――いや、君に彼女ができたなら！　君のご両親が騒がないはずがない。そうでしょう？」

げ、こいつうちの両親の知り合いか！！

となると今の話も立派な根拠だ。なぜかって？　昔、僕に彼女ができたときに経験してるからさ。付き合い始めて一日も経たずに忍者の父さんにバレて、即母さんへと伝わり、舞い上がった二人は友

達親戚あらゆる連中に言いふらした。年月が経った今でも同じことをするだろう。

この確信に満ちた目。間違いない、この男はそのときに僕の噂を聞いたことがある人間だ。よくよく見れば見覚えのある顔のような気がするし、もしかすると親戚なのかもしれない！

「テンカさんがこの男を彼氏役にした、そして僕とのお見合いを壊そうとしたのですね？」

「いいえ、違います。この人はわたしの恋人です」

あくまで丁寧にテンは否定した。そうだな、たとえ嘘とバレたとしても明確な証拠はない。反撃の機会を待つならば、まだ嘘は張り続けなければいけない。

「そうですか、あなたがそう言うならば信じましょう。しかし――僕とのお見合いは、続けていただけますか？」

その言葉に慌てたのはダレ社長だ。このままではつい先ほどの謝罪を撤回する形になってしまうからだろう。しかしこのムカつく男は口が達者だった。

「今までのこちらの失礼が全てこの偽者の作戦だとしたら？　その確証をとるまでは、こちらの失態と断定することはできません」

などと父親を言いくるめ、さらに僕に耳打ちしてきた。

「いいですよね、トメ君。このままテンカさんとのお見合いを続けても。どうしても嫌と仰るなら、あなたのご両親と僕の父にしかる

べきことを伝えることとなりますが」

何を言うつもりなのかはわからない。だがこいつが僕らの嘘のアキレス腱を握ってることだけは明確だ。

「お返事は？」

しかしムカつくなこいつ。殴りてぇ。しかしここで暴力を振るえば、テンの母さんの立場がなくなってしまう。

「……わかった、邪魔はしない」

テンに視線で謝罪する。テンは『よくわかんねーけど仕方ねーな』とでも言うかのようにため息をついた。

「賢明です。さぁテンカさん、お話しましょう……ええと、ずいぶんと個性的な帽子ですね」

「ええ、生徒が作ってくれたんです。どうやら先生を辞めてほしくないみたいで」

「あはは、人気があるんですね。さすが僕のほれ込んだ女性です。でも僕は……そんなあなたを、独り占めしたい」

キラーンって効果音が聞こえてキモ！　てかクサ！　や、僕もたまにクサいこと言うけどさ、これは違ったクサさだろう！

「……ど、どうも」

テン……なんか笑いこらえてないか？　顔を赤くして口をひくひ

くさせてるぞ。

「そんなに恥ずかしがらず、向こうへ行きましょう」

うあ勘違いした。ナルシストっぽい男だなぁ……やな感じだ。でも僕は口出しできない。

反撃の糸口があるとすれば、そう。

今もどこかで隠れて見ているであろうチビすけが何かしてくれた時だ。

なんでもいい、こちらに有利になるようなことを、何かしてみせてくれ！

「ど、どうするのよっ！　このままじゃわたしたちの作戦、全部意味なくなるわよっ」

「うー、うー、ちょっと待ってね、今考えるからー」

「お願いよ、サエすけっ！　君のどす黒い脳細胞だけが頼りよっ」

「そんなこと言われると何も思いつきたくなくなるー」

「……むぅ」

「カカすけ？　君はなんでさっきから黙ってるのっ」

「何か思いついたのー？」

「思いついた、というか……まぁ、仕方ないか」

「え？　ちょ、ちょっとカカすけ――？」

……何かしてみせてくれ、とは言った。

言ったけどさ、カカ。

「ちょーっと待ったぁ！！」

本人が出てきていいわけ!?

「な、なんだね君は!?」

突然のお子様登場にさらに混乱するダレ社長。

「……ぅぁ」

思わずうめき声をあげるテン。

「？？？？？？」

ハテナがいっぱいテン母さん。

そんな反応をする皆の中でただ一人、見合い相手の男だけが勝ち誇ったように笑った。

「君はテンカさんの生徒かい？　そうか……おかしかったという料理も、この庭も、すべて君が仕組んだことなんだね！？」

「いいえ。それはこの店の趣味です」

また他人のせいにした！？

い、いや。それはこの際どうでもいい。問題はカカがどういうつもりで姿を現したか、ということで……

「ほう、だとすると君はなぜこんなところにいるんだい？」

「だって、だって……その、お見合いなんかするって、言う、から」

むむむ？　もじもじと恥ずかしそうにするカカ。演技なのは間違いないが、まるで女の子みたいだ。

「え、ええと、そんなにテンカさんが心配だったのかい？」

「違うわ！　私が心配するのはあなたに決まってるでしょう！？」

「……ぇ。あ」

何かに気づいた、いや、思い出したのか？　この男。

「あんなに愛を誓い合ったのに……お見合いするなんてひどいわ！！」

はぁ？

目が点になる僕ら一同。これはアレか。男には隠れて彼女がいた、という設定にしてお見合いを壊そうって魂胆か？

子供にしてはよく考えた。しかし、いかんせん歳に無理があるぞオイ。

「私が高校に入ったら迎えにきてくれて、めくるめく大人の世界へレッツらゴーしようって言ってくれたじゃない！？」

あ、あの、カカさん。過激な発言してるとこ悪いですけど、それはさすがに無理が――

「い、言った、けどさ」

言ったんかい！？

え、なに、どゆこと！？

「それなのにこんなお見合いをするなんて！　ひどいわひどいわ最低だわ！」

絶好調のカカさん。

「あの、その、ええと！　い、いやだなぁ。そんなことを言った覚えはないよ？　何を勘違いして――」

「あのときの言葉を録音したテープあるよ」

「すいませんごめんなさい泣かないでよカカたん！　もちろんそれ

を言ったときは本気だったけど――じゃなくてあの、可愛くなったねアハハ一目でわからなかったよ、じゃなくてあの」

カカに比べて絶不調の男……そういえば昔、カカがやたらと人の言葉を録音して遊んでる時期があったな。たしか三年生の最初あたり……あれ。

その時期に、この男の、顔を、見た、よう、な？

「おい、どういうことだ？」

厳しいダレ社長の視線。そしていまだにハテナが盛りだくさんなテン母さんと、同じく首を傾げるテンの視線。

それらに曝されてうろたえる見合い相手。

そして――カカが決定的な一言を放った。

「私に告白したのは嘘だったの？　明彦お兄さん！！」

……あ。

あああああああ！！　おっもいだした！！

いつぞや隣に住んでてカカにベタ甘だった人！！　で、でも！

「おまえは燃えたはずじゃ！？」

「そんなサスペンスっぽいこと言わないでくれトメ君！　燃えたのは家！！　僕は逃げたの！」

そうか、それならば僕のことを知っていたのも納得がいく。このお隣さんはかつて僕の両親が離婚寸前の危機に陥ったときに姉ともどもお世話になったらしい、母方の親戚なのだ。

でもダレさんは僕がわからなかったな……あーそういえば、元々うちの家系は親戚付き合いを好まない部類だって母さんが言ってた気がする。実際僕も明彦さんの顔を忘れてたし。それでも僕に彼女ができたら言いふらしたっていうんだから、うちの両親の舞い上がり方も大したもんだ。

「明彦……」

おっと、回想に耽ってる場合じゃなかった。

ダレ社長がゆっくりと息子に近づいていく。一体何を言うのだろう。カカの言うことを信じるのか？　それともそんなバカな話があるか！　と否定するのか……普通は後者だよな、どう考えても。

「おまえ……またか」

普通じゃなかった!?　またってなんですかまたって!?

「あ、あの？　ダレさん。一体どういう……」

さすがにハテナもいっぱいになりすぎて溢れてきたのか、ずっと黙っていたテン母さんがついに口を開いた。

ダレ社長は苦しそうに「むぅ」と唸り、

「ここまで恥をかいたのだ。包み隠さずお教えしよう」

真実を語る決心をしたようだ。ぶっちゃけ何の真実を知ればこの場が片付くのかさっぱりわからんのだが。

「うちの息子の明彦だがな……生まれついてのロリコンなのだ。幼稚園のころからすでに幼稚園児が好きだと言い出す始末」

あれ、あの、それって普通なんじゃ。

「小学生に上がると小学生の女の子が良いと言い、少しは対象年齢が上がったと安心したのだが」

だからそれ普通ですってば。

「そこから成人しても対象年齢は小学生のまま」

それは普通じゃねーな。

「……お父さん？　なぜそう思うのですか。証拠は？」

そんな語りを遮る明彦さん。カカの言葉を聞いた後ではすでに悪あがきでしかないのだが、以前からその性癖に気づいていたらしい父の言葉に疑問を持ったようだ。

しかしダレさんはきっぱりと言った。

「そんなもの、おまえの部屋に隠されているお宝を見れば一目瞭然だ」

「見たのぉぉぉ！？」

どうやらこのお父さん。主にベッドの下あたりにある男の禁断領域を覗いたらしい。ああなるほど、それなら一瞬で趣味がわかるね。納得。

「成人しても就職してもそれは治らん。こいつぁヤベェと思った私は様々なイベントに連れまわし、ついに子供以外で明彦が興味を持つ女性と出会ったのだ。それがテンカ君、君なのだよ……」

そういうことだったのか。ロリコンのくせになんでテンがいいのかは理解に苦しむが、無理やりにでもお見合いさせようとした理由はわかった。

「このような事情を押し隠し、事を進めようとしたことを侘びよう」

深く頭を下げるダレ社長、そして頭をひっつかまれ、無理やり下げられる明彦さん。

「そして念のため聞いておこう。テンカ君。うちの息子はいらんかね」

「いりません」

「か、カカたん！」

「消えろヘンタイ」

完膚なきまでに打ちのめされた親子。な、なんか色々ありまくったけど、これにて一件落着なのかな。

「さ、いこう母さん」

「え、ええと、でも」

「いいからいいから」

お見合い相手がこんなでも、相手が社長というのがやはり気になるのか、いまだにわたわたするテン母さん。本当に気弱な人だ……でももう立場は逆転してる。ダレ社長はこの人に何も言えなくなるだろう。

カカを手招きする。もうこの場所には用はない。四人で彼らに背を向ける。

「……な、なんだよなんだよ！　人のことをボロクソ言いやがって！　おまえなんかこっちから願い下げだよーだ！」

戯言が聞こえる。明彦さんがキレたらしい。

「テン、無視だぞ」

「わかってる」

このまま去ってしまえばいい。ダレ社長が必死に止めているし。

「大体な、僕がおまえみたいな女らしくないヤツを好きになるはずないだろ！　僕がおまえを選んだのは一番面倒がなさそうだからさ！　結婚しろってお父さんがうるさいから仕方なく結婚してやろうと思ったのに！」

あー、うるさい。

殴りたい。でも我慢。

「教師を辞めろって言ってたのは父さんだけで、僕は全然構わなかったんだぜ？　男らしく仕事に生きればよかったんだ！」

「男らしく、か。違いねぇ」

呆れて呟くテン。よかった、キレないんだな。

「はっ、なんだよその帽子、格好悪い。さぞかし低脳なバカ生徒が作ったもんなんだろうな！　育ちの悪さが丸見えだ。この庭の変な人形だってどうせそうだろ？　こんなもんばっかり作ってるなんて頭おかしいんじぇねぇのそいつら！」

ぴたり、と。テンが足を止めた。

「おい、どうしたテン」

「……なぁ、明彦とやら」

僕の問いを無視して、振り返り――その男と真っ向から対峙するテン。

「な、なんだよ」

「人には立場ってもんがある。礼儀ってもんがある。大人になればなおさらだ。そんな中で暴力ってもんはよ、一番やってはいけない

ことだ。なぜか？　多くの人間の立場を悪くするからだ」

ゆっくりと、歩いていく。

「オレがここで暴力を振るったとしよう。そうすると誰の立場が悪くなる？　ここにいる全員だ。誰も良い想いはしないし、誰も得をしない。ややこしくなるだけだ」

ゆっくり、ゆっくりと。

「だがな、オレの尊敬してる人の生き様で、こういうのがある」

やがて、その足は。

「ずっとずっと、小さい頃から目標にしてきた人の生き様だ。それはな」

その男の、目の前に。

「許せないものは許せない――オレのガキどもを馬鹿にすんな」

そして殴った。

全力で。

## カカの天下４９１「お見合いミッションＦＯＵＲ　ＬＡＳＴ　ＡＴＴＡＣＫ！」

今回のお話について、参照したら「ああアレか」てなお話。
４話。録音話。
５話。明彦さん登場。
９６話。明彦さんち炎上。

などなど。
いっぱい書いてしまいましたが……まだちょっと続きます。
次回――打ち上げ飲み会。
テンカ先生、語ります。

「そいじゃ、お疲れ」

「乾杯！！」

キン、と凍ったジョッキをあわせ、ぐいっと飲み干す僕らはのんべ！　じゃなくてトメです。いつもの居酒屋『病院』でテンと祝杯をあげています！

「んめー！　厄介ごとの後はビールがうめーな！　トメ！」

「あぁ、確かにうまいよ。誰かさんのおかげでヒヤヒヤした後だしな」

色々と気を使っていたのに最後の最後で見合い相手を殴り飛ばしたことを遠まわしに突いてみるが、テンはまるで反省してないようにケラケラ笑った。

「いいじゃねぇか、結局は問題なかったんだから」

「ダレさんが良識のある人でよかったよ、ほんと」

テンが明彦さんの頬を容赦なく殴り飛ばしたとき、僕は再び事態がややこしくなることを危惧したが……その心配はなかった。ダレさんが言ってくれたのだ。「このバカ息子は殴られて当然のことを言った」と。問題にするつもりはまったくなく、むしろ父親としての面子を汚したことを怒り、家に帰ってからまだまだ殴ると張り切っていた。うちのカカにあんな戯けたことを言っていたのだ。ぜひ

とも頑張っていただきたい。本当は僕も殴りたかったが……まぁ、その分はテンが殴ってくれたということで、よしとしよう。

「それにしても意外だったぞ。あんなにネコを被っておとなしくしてたのに、いきなりキレるんだもんな。随分と立派な先生様じゃないか」

茶化して言ってみると、テンは照れたように笑った。

「はは、うるせーよ。別にガキどものことだけが理由じゃねーさ。もともと気に食わねぇやつだったし、散々色々言われて我慢ならなかっただけだ」

それは多分、嘘だ。あのときはテン母さんの立場がかかっていた。どんな言葉でも受け流すつもりだったに違いない。

それなら最初からあんな帽子なんか被らなければよかった。バカにされる可能性なんか誰でも想像できるだろう。それでもテンは被った。なぜか？

――生徒が作ったものだから。

そして、どうせ馬鹿にされるのはそれを被った自分だけだと高をくくっていたんだろう。それにもし生徒に矛先が向いてもそんなに気にならないだろ、なんて思っていたのかもしれない。

でも、実際。自分の生徒が馬鹿にされたら我慢できなかった。

乱雑で適当な性格で、女らしさや優しさが全く見えないこの女は――やはり教師なのだ。この前の言葉は撤回する。テンには教師が

似合ってる。

「あん？　何か言いたいことでもあんのか、トメ」

「……や、ほら。あいつを殴るときにテンが言ってた、尊敬してた人って誰なのかなーと」

なんとなく今考えてたことを言うのは気恥ずかしくて、適当にはぐらかしてしまった。でも気になっていたのは確かだ。テンが目標とした人は――テンをここまで男らしくした人というのは、一体どんな人なんだろう、と。

「ああ、そういやそんなことも口走っちまったか……ん、そろそろ話してもいいかね。おーいビールおかわり」

酒を入れて語りたいのか、店員が持ってきたビールを即座に飲み干すテン。

「っぷはぁ！　んっとな、あの人と会ったのはすげー小さい頃だった。そんときのオレは元気なくて、暗くてな、いっつも苛められてたんだよ」

「想像つかないな」

どちらかというと番長でもやってるイメージだったんだけど。

「はは、だろうな。でもな、母さんは一人でオレを育ててくれたからずっと忙しかった。寂しくてな、でも必死で働く母さんに『遊んで』なんて言えなくてな、どんどん内気になってったんだよ」

母親が一人で子を育てる。それがどれほど大変なことなのか、僕にはわからない。わかったような口を聞くのも失礼だ。だから僕は、ただ黙って聞いていた。

「ガキってやつは苛めやすいヤツを見つけるのが得意だ。オレなんか格好の餌食だったろうよ。いっつも俯いて、何を言われても全く反論できねぇんだからな。そんなオレを、何度か助けてくれた人がいた」

「へぇ、それがテンの尊敬する人か」

「ああ、恩人でもある。その人は強かった。いろんな意味でな。自分より上級生でも追っ払う腕っ節はもちろん、その生き様も強かった。子供の時点で生き様？　なんて思うかもしれねぇがな、子供だって人間だ。光ってるヤツは光ってる」

子供だからと言って侮ってはいけない。うむ、日ごろカカを相手にしてるから、それはよくわかる。

「ほうほう……じゃあもしかして、それがテンの初恋か？」

にやにやしながら聞いてみると、テンは一瞬きょとんとして……バカ笑いした。

「ぶはははは！　初恋！　いいね、それいただき。ああそうだ確かに初恋だった」

「……なんで笑ってんだ？」

「いや、だってよ。そいつは女の子だったんだぜ？」

あれ、そうなのか。上級生も追っ払うっていうからてっきり……
まぁでもカカみたいなのもいるしな。

「でも恋か……間違ってねぇかもな。オレは憧れたんだ、その男らしい女の子に。だからマネした。自分は自分のやりたいようにやる。許せないものはぶっ飛ばす。強くある……そうなれるように、まずは自分の呼び方をマネした。『オレ』ってな」

「へぇ。その子、自分のことを『オレ』なんて言ってたのか。そりゃますます初恋って言葉が似合……う？」

あれ？

あれれのれ？

自分のことを『オレ』って呼んで、上級生も追っ払う女の子？
小さい頃に？

なん、だか、心あたりが、ある、よう、な。

「……なぁ、テン。もしかしてそれって」

「久々に会ったときは驚いたなぁ。あのまんま成長してんだもんよ。まんますぎて、すぐには気づけなかったが……いや、一回飲みを奢ったくらいじゃ足りなかったかな。今回も相談に乗ってもらって世話になったし。また今度、奢ってやるかな」

懐かしい思い出に目を細めながらビールを傾けるテンは、幸せそうに見えた。

いいや、真実幸せなんだろう。なんだかんだで大好きな子供に囲まれて、厄介ごとを吹き飛ばし、誇れる自分を張り通した。

そして終わりに酒を飲む。これが不幸なはずがない。

「あ、もちろんトメも恩人だぜ。今回はありがとな。もし今度トメが同じ状況になったら彼女のフリしてやるよ」

「は、遠慮しとくよ。どうせなら女性に頼むさ」

「知らなかったのか？　オレって女だったんだぜ」

「初耳だ」

何度も繰り返した、いつものやり取り。

それでも昨日とは違う新たな友情や繋がりを感じながら、僕らは楽しくお酒を傾ける。うん、僕たちらしい。お見合いの席もあれはあれで楽しかったが、やっぱりこうでないといけない。

元の鞘に納まった。めでたしめでたしだ。

「そういやよ、トメ。あの後カカたちってどうなったんだ？」

「さっき携帯で聞いたんだけどな、サラさんと一緒に頑張って夜逃げしたらしいぞ」

「庭のアレは、やっぱうちのガキどもの仕業か？」

「みんなで頑張って作ったんだってさ。この幸せモノめ」

「ご褒美に抜き打ちテストでも用意してやらねーとな」

「うあ、なんてヤツだ」

「オレがなんてヤツかって？」

テンはニッと口を歪めて。

一番テンらしい顔で。

「教師ってヤツさ。ずっとな」

そんなことを誇らしく言うのだった。

## カカの天下４９２「お見合いミッションＫＡＮＰＡＩ」（後書き）

今回の「ああアレか」ってな話。
２６０話、幼少時代。
２６４話、思い出しての恩返し。

というわけでテンカ先生編もひと段落……ではなく。
もうちょこーっとだけあるので明日書きます笑

## カカの天下４９３「お見合いミッションＯＭＡＫＥ」

「ノロノロ坊主取り終わったー！」

「こっち側の人形の撤収終わったわよっ」

「ちょっと待って！　もう少し……よし、こっちも人形の積み込み終わり！」

農業用の一輪車にせっせっせ！　あ、どうも忙しくてすいません、カカです！

お見合い作戦も見事に私たちの勝利で幕を下ろしたわけですが、主役のテンカ先生やトメ兄たちと違って私たちには後片付けがあるのです！

負け犬親子がとぼとぼ帰った直後、私たちは一斉に庭の掃除を始めました。別にこのまま帰ってもいいかと思いましたが、通報されて調べられたりしたら危ないですからね！

「皆さん！　どうですか、終わりそうですかー！？」

おっと、料亭の方から私服姿のサラさんが。どうやらこのまま私たちと一緒に逃げるらしい。

「うん、もう終わり。さっきの裏口から出ればいいんだよね、サラさん！」

「はい。先導しまー―」

「ちょっと待てぇぇぇぇぇ！！」

げ、この声は……料亭の方からだ。聞いたことない声だけどなんかヤバげ！

「まずいです、料理長が来ちゃいます！　ここで私たちの顔を見られたら！」

「もしかして指名手配っ！？」

「そうですサユカちゃん！　懸賞金がついてハンターに狙われちゃいます！！」

「ハンター！！　と、トメさんになら狩られたいかもっ」

「あ、私も追われてみたいです！　ラブハンター！　きゃー」

暴走妄想系の二人が呑気に騒いでるうちに足音はすぐそこまで！

「カカちゃん、どするー？」

ああもう仕方ない！

ズボズボズボズボ！

「うちの店の信用を落とした不届き者はおまえらかあああああ！！」

勢い込んで登場したおっさんが多分料理長なんだろう。その後ろ

には数人の料理人っぽい人がいて――みんなそろって目を丸くしていた。

「な……何者っ！？」

「ふっ、何者と聞かれちゃあ答えないわけにゃあいくめぇ」

びしっと適当にポーズを決める！　しかし他の三人はあわせてポーズしてくれるどころかよろめいた。

それも仕方ないだろう。顔を見られちゃまずいっていうから、いきなり片っ端からでっかいお面をかぶせたんだもん。

お面？　ああ、さっきまで庭に並べてた『見てるとなんとなくムカつく失礼なモノ』軍団を無理やり頭上からぶっ込んでかぶせたの。急ぎで作った人形ばっかだから中身スカスカで、お面代わりにはちょうどよかったんだよね。でも覗き穴あけないと前見えないし、結構大きいのもあるからよろめいちゃうの。でも我慢！

「おれたちゃあ泣く子もムカつく失礼仮面！　人様の家に勝手にあがりこんでお茶目なことするのが取り得さ！」

「な、なんて失礼なヤツらだ！！」

「地味におそろしい！」

ふ、そんなに褒めるなよ。しかしノリのいい人らっぽいな。このまま押し通してやる。

「てめーらの仲間のサラは預かった！　とある場所に転がしてある

が、仲間を割られたくなかったら、おれたちを見逃せ！！」

「……むぅ、なんてことだ」

要求が簡単すぎたかな。ま、いっか。

空飛ぶカレーをかぶったサラさんが何か言いたげにしてたけど、結局何も言わずにせっせと目の辺りに覗き穴をあけていた。他の二人も同じく頑張ってる。

私は偶然にもおむつかぶったおっさん人形をかぶったので、目の部分に穴があいてたのをそのまま使っている。しかしこのおっさん人形、首に穴あけて無理やり顔を突っ込んだので胴体が背中にのしかかって……重い。ビール腹ってやーね。

「さて、おれたちは行くからな。追ってくるなよ。追ってきたら割るからな！」

全員の穴があいたのを確認し、私たちは去ろうとした。

だが、そのとき！

「いいや、待て！！　サラちゃんは見捨てよう！」

本人に聞かせるにはあまりにも残酷な言葉が聞こえた！

「で、でも料理長！」

「いいじゃないか、どうせそろそろクビにするつもりだったんだ。だって皿割りすぎだもんあの子。自分は割れないくせに」

うあ本人いないと思って本音が！！

「やっぱりですかーどうせそうだと思ってましたよー！　くそーしねーばかー！！」

ああぁ、サラさん割れてる！　なんかいろいろ割れてるよ多分！

感情的に！

「ふ、ふん！　こっちはわた――じゃなくてサラに拷問したから知ってるんですからね！　この料亭が、色々と隠れてやってることがテレビにバレたら終わりだってことを！！」

おお！　サラさんさすが大人だ！　自分の感情はとりあえず置いといて新たな逃げる材料を持ってきた！　よーしこれで！

「ちっ、あの娘そんなことまで……早めに殺しておくべきだったか」

よーしこれでトドメだ。サラさんそろそろ泣くぞ。

「いー職場だと思ってたのにぃぃぃ」

もう泣いてるし。

「あんな役立たずは捨てておけ。オイ手下ども！　ぜってぇこいつらを逃がすんじゃねぇぞ！！」

「ヘイ！！」

ざざざざっ、と散開する包丁持った料理人たち。なんだろうこの

悪役っぷりは。かっけぇ。じゃなくてヤバい。どうするか――と、そのとき！

細く高い口笛と、どどどどど……という複数の足音が。

そして。

どこ行ったんだろーってさっきから思ってたそいつらが姿を現した。ズドドドドーっと庭へなだれ込む！　ボスっぽいのと一緒に。

「うあああなんだこりゃ！？」

「うほ、材料がいっぱいですぜ料理長！　今夜は豪勢にいけそうだぁ、うしし！　牛だけに」

「マヌケなこと言ってねぇで下がれ！　踏み潰されるぞこの豚野郎！！」

「あっしは豚肉より牛肉でさぁ！」

「しゃべるなタコ！！」

「さらにタコまで！？　どこに」

「おめーだ！！」

「――おーまたっせぃ！！」

豚と牛に埋め尽くされてダイコンラン――大根じゃないよ大混乱だよ？　コホン。えーそんな庭の中、その中でも一際大きな牛の上

に仁王立ちした器用なボスっぽい人――はどっからどう見ても私の身内なのだが、小さい豚ちゃんを顔に乗せているので誰だかわからないことにしようと思う。

「いっやー！　すぐに助けに来ようと思ってたんだけどさ、この子豚ちゃんが迷子になっててさー！　んで見つけたらペットショップの犬と野良猫と三匹で鮭なんか食べててさー、まいったよーあっはっは」

豪快に笑う豚仮面がくいっと顎を動かすと、数匹の豚と牛が私たちの元に。さすがは動物マスター。

「乗りな。一輪車も適当に運ばせるから」

「あ、はいっ、じゃ、じゃあ……お邪魔しますっ」

「わ、私、豚に乗るの初めてです！」

「多分乗りなれてる人はそういないと思うよー。あれ、カカちゃんどうしたのー」

おそるおそる姉の舎弟動物に乗り込んでいく皆。でも私は動かなかった。

「お姉。私、逃げる前にちょっと」

「どしたのカカちゃん」

「こいつら、友達を泣かしたの」

「え……」

ハッとするサラさん。恥ずかしい、見るな。

「ん、じゃーこの子使いな」

姉が他の牛に飛び移ると、さっきまでその足元にいたごっつい牛が、私の元へとのっしのっし歩いてきた。

「こいつは破壊することに関しちゃ天下一品だよ！　その名も『日本経済』だ！」

「壊しそー！！」

「っていうか今にも壊れそうねっ」

恐れおののくサエちゃんサユカン。しかし私は臆せずそれに乗る。

「総理大臣とのコンビネーションとか見たいとこだけど……今日は諦めよう。いくよ、日本経済！」

私が乗ったと同時に飛び上がる日本経済！

「ホントの日本経済もあれくらい飛び上がってくれればー」

「サエすけ、飛んだら落ちるのよ。伸びないと」

そんな親友二人の声を背に、私は悪党どもの前へと降り立った。

「これは私たちの担任の先生が教えてくれたんだけどね――悪いこ

とを言ったり悪いことをしたら、その分は全部自分に返ってくるんだよ！！」

てなわけで全開でいっちゃいます。

大！　暴！　走！

――後日談。

『――などの違法行為が発覚しました。その発覚の原因となった強盗事件について被告は「あれは牛じゃない、悪魔だ、日本経済だ」などと頭がイカレタ発言を繰り返しており、我々みんなダメだこりゃーと諦めている状態で――』

「……なぁ、カカ。このニュース」

「知らない、おかわり」

「……ほい。まぁ、バレなかったからいいけど……程々にしろよ」

さぁねー。

だって、許せないものは許せないもんね。

## カカの天下４９３「お見合いミッションＯＭＡＫＥ」（後書き）

はい、これでようやくテンカ先生編完結です！
いやー……
長かった笑　まさかここまで続くとは思ってませんでした＾＾；
テンカ先生の伏線は「いつバラそっかなーいつバラそっかなー」ってずーっと温めてきたものです。まぁバラす機会がなかなか無かっただけですが笑
そのせいかアレも書こうコレも書こうと思ってたらこんな感じになりました。
ええ、ええ。何がしたかったかというと。
悪を滅ぼしたかったんです爆
こんなコメディもたまにはアリじゃないですかーってな感じでお許しくださいな笑

明日からはまたいつもの感じに戻ります。でも投票〆切りまで日がないし出番ない人を出すべきか……ふつーの日常でいくかイロモノでいくか悩んでます＾＾；
ま、明日の気分で。

あ、あとあんパンも更新したのでまたよろしくです＾＾

## カカの天下４９４「嵐の後の日常」

「ただいまー……」

ダルダルーっと家に帰りました、トメです。

なぜそんなに身体がダルいかといいますと、おそらくお見合いの場に乗り込むなんて慣れないことをした気疲れか、もしくはテンとの打ち上げで飲みすぎたかですね。ええ、後者です多分。

「おかえりトメ兄。あそぼ」

それに比べ、なにゆえこの小娘はこんなにも元気なのか。昨日はあんだけ大騒ぎしてたくせに。

「疲れてんだよー、夕飯まで寝かせてくれよー」

「そっか、昨日は大変だったもんね。はい、ポーズとって」

「は？」

腕やら脚やらをカカに掴まれた。そして適当に動かし、『俺、参上！！』っぽいポーズをさせられる。

そして轟くカカの声。

「愛のために戦う男、トメ！！」

「やかましい」

恥ずかしいことをぬかすカカを放っておき、居間へと入る……あー、面倒だから着替えずにこのままゆっくりしよう。ごろりと畳の上に寝転がる。クッションクッション……あった、デンジャーケロリンクッション。これを枕にして、っと。

「ケロたんと一緒に寝る男、トメ！！」

「改めて言うな、恥ずかしい」

何がしたいんだか……や、遊びたいんだろうけど。いいや、寝よ。

……む。

すく。

「何度でも立ち上がる男、トメ！！」

「うっさいな。トイレいくだけだよ」

「トイレ男、トメ！！」

「人を妖怪みたいに呼ぶな」

「便所男、トメ！」

「言い直すな！！」

「便トメ！」

「略すな！」

「便！」

「ベンって誰だ！」

構ってやりつつトイレへ移動。

「入ってくるなよ」

「どこにでも入る女、カカ！」

「やめい！」

トイレのドアを閉め、しっかりと鍵をかける。ホントに入って来かねないからな。

さて、用をば。

……

……諦めたかな？

「いつもトイレに現れる男、トメ！！」

「間違ってはいないがハエとか変質者みたいに聞こえるからやめてくれるか！？」

「お尻からいっぱい出す男、トメ！！」

「今は別に出してない！　あと下品なことを大声で叫ぶな！」

「パンツは白い男、トメ！」

「今日は黒だ！」

「今日は黒、トメ！」

「あーもー」

「いつも黒、それはサエ！」

「はいはい、そーデスね」

トイレから出た後も、そのカカの遊びはしばらく続いた。

寝るときには。

「寝るときはお腹に手をのせる男、トメ！」

「……悪いか」

起きたときには。

「寝言が可愛い男、トメ！」

「僕は何言ったんですか。ねぇ、ねぇ！？」

くしゃみしたときには。

「はくしょん！！」

「くしゃみがうるさい男、トメ！」

「ごめんなさい」

料理中には。

「トメ兄ってその可愛いエプロン似合うよね」

「……そか？」

「実は女の子、トメ子！！」

「誰がじゃ」

標的は僕だけじゃない。テレビを見ている最中には。

「日本政府にケンカを売るアナウンサー――」

「名前は出すな」

「大して可愛くないアイドル――」

「名前は出すなよ」

「おもしろくない芸人、いっぱい――」

「言わないでやれ、頼むから」

これだけ続けるとさすがに飽きてきたらしい。お風呂上がりあたりでカカはもう妙な口上を言わなくなった。

ちょっと寂しい。

「ふわぁ……とめにー、もうねるねー」

パジャマ姿のカカが目をしょぼしょぼこすりながら手を振ってきて……なんとなく、

「眠れない女、カカ！」

なんて言ってみた。

「あははーむりむり。めっさねみーもん」

しかしカカは変な言い方をしながらフニャフニャと自分の部屋へと去ってしまった。むぅ、もうちょっと遊んでやればよかったか。

そんなことを思いつつ自分の部屋へ戻り、ベッドでゴロゴロしながら誕生日に誰かさんがくれた本を読んでると……

「……とめにー」

「あれ、どしたカカ。寝たんじゃないのか」

「ほんとに寝れない」

あれま。

「なんかお話してー……」

ぽやーっとした口調で寄ってくるカカ。なんか幼児化してるな。

「そら小さいころはいろいろ話してやったけど……どんな話がいいのさ」

「とめにーのお見合いの話。テンちゃんの彼氏役をやってどう思いましたか？」

ちっ、ふやけた顔して痛いとこ突いてきやがる。

「黙り込む男、トメ！」

「バカなこと言ってないで早く」

「言わせろよー。ちょっと言いたかったんだから」

そんな感じでちょっと夜更かしな今日でしたとさ。

## カカの天下４９４「嵐の後の日常」（後書き）

テンカ先生編で随分とはっちゃけたので、今日はひたすら普通の話をお送りしました。

ふつーすぎる？　カカ天は基本こんなもんです笑　のんびりフニャフニャいきましょー＾＾

でも一休みしたし、５００話に向けていろんな人を出していきますかね！

# カカの天下４９５「共同作戦？　がんばれタケダ」

やぁ諸君。毎回毎回聞かなきゃならないのが悲しくて仕方がないのだが……俺のことを覚えてくれているだろうか！？　タケダです！

現在ふつーのお昼休み時間。俺はいつものようにカカ君のクラスを覗き込みながらチャンスが落ちていないか探っていた。なに？　チャンスは落ちているものではなく作るものだと？　はっはっは。それは色男のセリフだ。俺のように堅実で一途な男は、こうして棚からぼた餅がひょっこり現れるのを待つしかないのだよ。む、チキンだと？　鶏肉がどうしたというのだ。

「ねぇタケダ」

「なんだカカ君」

「ちょっと相談があるんだけど」

「そうか。悪いが後にしてくれ。俺は忙しい、今カカ君と――」

カカ君と、喋ってる？

へ？　俺が？　今？　ｎｏｗ！？

ぼ――

ぼた餅が棚から溢れてきたあああああああ！！

「そか、忙しいのか。んじゃまたね」

「まままままたまたまたままままたたまた」

「股がどうしたの」

「まった！！」

カカ君のほうから話しかけてくるなど金輪際ないかもしれん（弱気）ので慌てて引き止める！

「俺は、今な、暇なんだ！　ものすごく暇なんだ！！」

「でも忙しいって」

「暇をすることに忙しかったわけで結局は暇なんだ！」

我ながらワケのわからないことを言う。しかしカカ君は特に気にせず「そか」と納得してくれた。さすがだ、自分が毎日ワケのわからないことを言っているから他の人の気持ちもわかるのだな。

「んじゃ相談があるんだけど。アレ」

カカ君が指を差したのは教室の隅……む？　ニシカワとアヤ君ではないか。言い争っている、のか？

「ケンカしてるみたいなの。アヤちゃんに借りてたノート返したいんだけど、近寄り辛くてさ。タケダってニシカワ君と友達なんだよね？　なんとかできないかな」

なるほど、俺に二人の和解を頼みたいわけだな！　いや、よくや

ったニシカワ。さすが我が友、おまえのおかげで俺はカカ君と話をする機会を……！

「なにニヤニヤしてんの」

「う、いや、これはだな」

「人のケンカ見て笑うなんて、さいってー！」

「ああ、違うのだ、これは」

「言い訳なんて男らしくない」

「……もうしません、気をつけます」

くそう、カカ君ときたらなんて男らしいんだ。好きだ。

「とにかくなんとかしてよ」

「そうだな……まずはケンカの原因を探らないといかんだろう」

「んー、朝からもうピリピリしてたけど」

つまりケンカの原因はそれ以前、か。

「どれ、さりげなく会話しながら近づいてみよう。二人の口論を聞けばケンカの内容もわかるはずだ」

「了解！！」

……あー、幸せだー。涙でそー。

などと感動している場合ではない。俺とカカ君は適当に雑談しながらニシカワたちに近づいていく……ああ。こんなに近くで顔を見たのはどれくらいぶりだろうか。可愛いったらありゃしない……ってだから感動してる場合じゃないのだった！

せっかくの共同作戦だ。ここでカカ君の信用を落とせばさらなる距離が開いてしまう。ここは任務に集中せねば！

だんだんとニシカワとアヤ君の会話が聞こえてくる。なになに……？

「なによニッシー、シュークリームのことなんかをいつまでもネチネチ言わないでよケチくさいわね！」

「おまえな、あれは西田屋の特製シュークリームだったんだぞ？　西がつく名前のシュークリームだぞ？　それを僕が食べないわけにはいかなかったのに！」

「いーじゃないのそれくらい！　ほらこの前にニッシーが作ってた薄皮まんじゅうあるじゃない。あれはあんたが作ったんだからニシカワ薄皮まんじゅうでしょ。それでも食べて我慢しなさいよ！」

「西の田んぼと西の川じゃ全然違うだろ！？　川じゃお米は作れないし、田んぼじゃ人は溺れない！！」

「西なのは同じじゃないの！　ワガママ言わないでよ！」

「勝手にシュークリーム食べるのはワガママじゃないのか！？」

「ああ言えばこう言うんだから！　だいたいね、いっつもニシニシうるさいのに今日ときたら、西の川といいニシカワ薄皮まんじゅうといいカワカワうるさいのよ！　そんなに川に溺れたいの！？」

「カワカワまんじゅうはアヤ坊が言い出したことじゃないか！」

「関係ないわよそんなもん！」

「そんなもんってどんなもんなのさ！？」

「こんなもんよ！」

「だからどんなもんなのさ！？」

……大体の事情はわかった。いそいそと二人から離れる俺とカカ君。

「ね、聞いた？　アヤちゃんが勝手にお菓子食べたから怒ってるんだね。小学生みたいな理由だよ」

だって俺たち小学生だもの。それにカカ君、俺の予想だと……君も自分のお菓子を取られたら本気で怒り出す類だと思うのだが？怖いから言わないけど。

「あんなくだらないことでここまでケンカするんだ。あはは、おもしろ」

「お、おい。君はさっき人のケンカを笑うなって言ってなかったか」

「私はいーの」

なんだこれは。横暴だ。そんなとこも好きだ。

「細かいことといちいちうるさいなー、この頭でっかち」

「う、あ、えと、すまん！」

「どしたの、顔赤いけど」

顔が近いのだ！！

「あ、ほら、その、俺たちこんな風に喋ったことなかっただろう？だからちょっとその、ドキドキ、してしまって」

って何を真っ正直に言ってるのだ俺はあああ！！　恥ずかしいことこの上ないではないか！

し、しかし。これで俺の気持ちが伝わるならばそれはそれで――

「ふーん、タケダは罵られるとドキドキするのか」

伝わってないぃぃ！！

「カカ君、そうじゃなくてね！」

「このダニ以下のゴミくずめ」

ドキ。

ドキってなんだ!?　別に俺は罵られて喜んだわけじゃなくて、カカ君の顔が近かったから胸が高鳴ったわけであってだね!?

「あ、二人が移動する。ほら悶えてないで行くよノロマ」

「……はい、仰せのままに」

もういいや。カカ君との交流が盛んになるのなら、これくらいのことは耐えてみせよう。

「早くしてよグズ、クズ、クス」

「さ、最後のクスってなんだ?」

「変なことで喜ぶタケダを笑ってやったの。いいから早く」

ううううう、俺の男としての名誉とか尊厳とかがぁぁぁぁ……でも会話が弾んで嬉しいぞぉぉぉぉ、このまま幸せが続けば……!

おっと、感動しながら歩いていたら、いつのまにか目の前にニシカワとアヤ君が!?

「わかったわよ、シュークリーム奢ればいいんでしょ!　それでいいのよね、ニッシー!」

「うん、じゃあ放課後に一緒に買いにいこうなアヤ坊」

「まったくもー……」

あれ?

いつのまにか、仲直りしてる？

「……あの、カカ、君」

同じく呆然としていたカカ君は、やがて俺のほうへとゆっくりと向き、言った。

「この役立たず」

ドキ。

だからドキってなんだぁぁぁぁぁぁ！？

「アヤちゃーん、ノート返すねー」

あぁ、行ってしまった……！

こうして、俺の幸せは儚くも散っていったのだった。

でも、うん。

今日は、良い日だ。

好きな人と、話せた。

……えへへ。

## カカの天下４９５「共同作戦？　がんばれタケダ」（後書き）

普通の話のあとはイロモノ話（ぇ
タケダ君の登場でございます。よかったねタケダ、ちょっとカカと仲良くなれて。罵られてるけど。
……まさか未来はシュー君のような？

## カカの天下４９６「呼ばれたのでついてってみた」

こんにちは、カカです。

突然ですが聞いてください。今ですね、日曜日で学校もお休みなのでお昼からファミレス東治にいるのですが……すごいメンバーでお食事なのです。

その驚きのメンバーは……まず私。

次にクララちゃん。

さらに、秘密だけど実はそのお母さんの校長先生！

そして……なんとデストロイヤー教頭！

なんてフシギな四人組でしょうか。や、元々はクララちゃんと校長先生の親子二人で食事するところだったんだけど。

「本当によかったのですか？　私などがご一緒して」

「そうそう、二人でデートだったんじゃないの？」

道端で偶然出会って誘われた教頭と私は、そろってたずねてみる。すると二人はにこやかに笑った。

「おほほ、全然構いませんよ。食事は多いほうが楽しいですし」

「クララもお母――じゃなくて校長と同じでそう思います。それに、

せっかく会ったのに誘わなかったら体裁が悪いのです」

く、クララちゃん。相変わらず変なとこ大人だね。

「失礼いたします、こちらご注文のビーフシチューでございます」

「あ、私だ」

キリヤン登場だ。手を上げてこっちに料理を持ってきてもらう。

「はいどうぞ、シチューでございます」

「私の可能性は無限大。まるで？」

「宇宙でございます」

「イェイ！」

「アイウォンチューでございます」

「恋人同士でするのは？」

「ブチューでございます」

「二人はそれに」

「夢中でございます」

グッ、と親指を立てあう私たち。キリヤンは満足げに去っていった。

「な、なんだねカカ君。いまのは」

「挨拶みたいなもんです」

「そんな挨拶をしなければならないのですか！？　む、難しいです」

「おほほ、楽しい子たちだこと」

お、また料理がきた。

「失礼いたします。こちらのお子様ランチは」

「クララちゃんだよ」

「かしこまりました。はいどうぞ」

えっと、えっと……と頑張って挨拶しようとしていたクララちゃんは結局、

「イェイ！」

「イェイでございます」

グッ、と親指を立てあう二人。

「クララできましたか？」

「うんうん、できたできた」

微笑ましく笑いながら拍手なんかする私たち。うーん、まったりー。

その後も校長と教頭の料理が届いたけど、二人ともこの挨拶はしてくれなかった。年長者にはレベルが高かったかー。

――と。食事している最中に近くを通ったキリヤンを、突然クララちゃんが捕まえた。

「はい、なんでしょうかクララちゃん」

「クララ、キリヤのこと好きです」

いきなり何を!?

「はっはっは、仕方ありませんね。少々お待ちください、サービスしてあげましょう」

おお。

「こう言うとお菓子くれるです」

「クララ君、その歳でもう魔性の女か!」

末恐ろしい……さすが実年齢も魔性なだけはある。見習おう。

「はい、どうぞクララちゃん。プリンをパクってきました」

パクったってあんた。

「マダム、あなたにも」

「あらあらおほほ、わたくしも貴方が好きになってしまうわ」

「光栄です、もっとサービスしましょう」

ザッと身を翻し、厨房へと戻っていくキリヤン。仕事しなくていいのかな。

「わたくしでもイケるみたいですわね、おほほ」

「キリヤは女ならなんでもいいのです」

「では私では無理か。残念だ」

試すつもりだったの！？　見たかったのに……

や、見たい。

「いきましょうよ教頭」

「む、いやしかし」

「いけますよ教頭。全然いけます」

絶対おもしろいです。私が。

「そうか……では試しに」

名場面ゲッツ。楽しみ楽しみ。

「お待たせしました。店長の目を盗んで作ってきたクリームソーダです」

「これ、店員」

「は、なんでしょうか」

「私は君が好きだ」

ど直球きましたー！！

さぁ、どうする色男キリヤン！

どきどき、わくわく。

キリヤンはゆっくりと目を細め――

「はっはっは。あなたのようなダンディなお方にそう言っていただけるとは、私も捨てたものではありませんね。小豆や白玉はお好きで？」

「喉から手が出るほどに」

「かしこまりました、白玉パフェをサービスいたしましょう」

とことん爽やかに去っていくキリヤン……

「なんか、誰でもいいみたいだね」

「キリヤは節操ないです」

「いや、しかし素晴らしい青年だぞ彼は」

「おほほ、教頭先生。その心は？」

「甘いものをくれるからだ」

あなた子供ですか。

――意外な組み合わせだった四人と店員さんは、これまた意外に意気投合。話は軽快に続いていく。

「そうそう。最近話題になっている、小学生の携帯電話の所持を許可するか否かの話ですが」

「おほほ、わたくしとしては不適切なサイトへのアクセスが規制されるなら所持しても構わないと思うのですが。クララちゃんはどう思います？」

「携帯電話を携帯しなくなるのですか？」

「私はそちらのほうがいいと思うのだが」

「それでは携帯電話じゃなくなってしまいます！　ただの電話です！　タダですか！　無料ですか！　家計は大助かりですがそれはともかく教頭は携帯電話をこの世から消すつもりなのですか！？」

「な、なにもそこまでは」

「ひどいです教頭！　あんなに便利なものを消すなんて！　鬼、悪魔、破壊神！！」

「おほほ、クララちゃん。それ全部褒め言葉ですよ」

「知りませんでしたクララしょっくです！」

「褒めておらん微塵も褒めておらん！」

「キリヤもしょっくです！」

「混ざるな！」

「俺様もしょっくです！」

「誰だ貴様は！？」

「あ、すいません。通りすがりの客です。つい」

賑やかに流れていくお昼の時間。

楽しかった。

とても、楽しかった。

でも。

帰り際。

「……あれ、サエちゃん。こんな店の片隅で何してんの」

「うー、カカちゃーん。さっきから居たんだけどー」

「声かけてくれればよかったのに」

「だってー……クララちゃんとお母さんの水入らずの時間にお邪魔するのもなーと思ってー」

「……や、私と教頭は邪魔してたんだけど」

「そうだけどー……私は誘われたわけじゃないしー……ふーんだ」

そんな感じで寂しがるおねーちゃんがいました。

そして、家に帰ると。

「カカ、ご飯は」

「あ、ごめん。食べてきた」

「いらないなら言えよぅ。僕、おまえがくるまで食べずに待ってたんだぞ？」

「……ごめん。連絡すればよかった」

こんな感じで寂しがるおにーちゃんもいました。

世の中、うまくいかないねぇ。

## カカの天下４９６「呼ばれたのでついてってみた」（後書き）

あまり見ない組み合わせ。
なのに意外にまったりハマって作者もびっくりです笑

でも一方ではさびしがる人たちが。人気者はつらいですね、はっはっは！（キリヤン風

# カカの天下４９７「カカ天クエスト　ＥＰ６」（前書き）

注意：このお話はカカ達がゲームのキャラになりきりながらＲＰＧを進める話です。話の内容はゲームの中ですが、『もしもカカ達が異世界にいたら』みたいな感覚でお楽しみください。

ステータス

カカ　ボケ勇者　レベル１　へん

サエ　悪の魔法使い　レベル１　はらぐろ

サユカ　手の平の踊り子　レベル１　さびしんぼう　エロレベル３

トメ　ツッコミ　レベル１　つっこみ

ケロリン　スライム　レベル７　おっさんくさい

# カカの天下４９７「カカ天クエスト　ＥＰ６」

無事に、というか無傷でボスを倒してしまった一行は、見事にさらわれていた村娘を救うことに成功しました。あとは気絶した彼女を連れて、村へと連れて帰るだけなのですが……

「この運び方はどうかと思うんだけど……」

「そんなこと言って、トメ兄が背負いたいだけじゃないの？　そしてどさくさに紛れていろいろ触る、と」

「ダメですからねトメさんっ！　背負うならわたしをっ！　いろいろ触るなら、もっとわたしをっ」

「サユカちゃんったらー、だいたーん」

「え、えへへっ！　ゲームの中くらい頑張ろうかなって！　どうせ画面の前にはトメさんいないしっ」

微妙に現実を混ぜた話をしながらも皆がずるずると引きずっているのは、助け出した村娘を入れたカンオケでした。そう、死んだときにお世話になるアレです。村娘は別に死んでいないのですが、こちらのほうが運びやすいのです。

「……おい、てめぇら」

「さぁ、トメさんっ、ど、どどど、どうぞ！」

返事がない、ただの情けない男のようだ。

「トメ兄……妹として情けない」

「おい」

「トメお兄さん、据え膳食わぬは男の恥さらしですよー」

「おいってば！！」

「なによケロリンッ！　わたしは今、女として勝負を――」

「こっちは本当に勝負してんだよバカタレェ！！」

実はまものの群れに囲まれていた！

「おっと――ぐはっ！」

ケロリンはカカをかばった。１０のダメージ！

「ぜー、はー、俺様が、こうして、てめーらを庇いながら戦ってやってるってのに！」

「だってー、私たちレベル１だしー」

「戦うと逆に邪魔だと思うの。だから応援だけしてるんだよ？」

「応援もしてねーじゃねーか！！」

文句を言いながらの突進！　まもの全員に５５にダメージ！　まものの群れを倒した！

「はー、はー……これで、なんとか」

「お休みのところ悪いなケロリン。僕の聞き間違いじゃなければ、なんだかあっちから足音が……」

「あ、まものだ」

「なんかすごいまものよっ」

鈴木さんの群れが現れた！

佐藤さんの群れが現れた！

田中さんの群れが現れた！

「い、いくら日本に多い苗字だからって、こんなにたくさん群れるなよ！？」

「ちっ！！」

「ケロリン！！」

よくある苗字ーズの総攻撃！！　皆を庇ったケロリンに合計１４８のダメージ！

ケロリンは死んでしまった。

「あああああ！！」

「ケロリンが、ケロリンが死んじゃったよ！！　どうしようトメ兄！？」

「ど、どうするって――げっ」

田中さんの攻撃！　トメは３８のダメージ！

トメは死んでしまった。

「くそぉぉぉぉ田中めぇぇぇぇぇ」

トメは全世界の田中さんに呪いをかけた。通じたかどうかは誰にもわからない！

「なんて弱いのトメ兄！？」

「こうなるからケロリンが頑張って庇ってくれてたのにー……まずいねー」

「ど、どうするのよっ！　このままじゃ！」

「こうなったらー……二人とも、今まで密かに練習してたあの技をやるしかないよー！」

「あ、サエちゃんが考案して私が完成させたあの技ね！」

「わかったわっ！　今こそ――」

よくある苗字ーズが突進してくる！

カカは死んでしまった

サユカは死んでしまった

サエは死んでしまった

「あ、私のカンオケないー。ちょっとごめんねー。入るよー」

サエが今まで引きずっていたカンオケに入った。

定員オーバーになったので、中にいた村娘が外に飛び出した！

村娘Ａが戦闘に加わった。

村娘Ａが目を覚ました！

「きゃあああああ！！　なんですかなんですかっ！？　きゃあああああああ！！」

村娘Ａは怯えている。

村娘Ａは逃げ出した！！

しかし周りは囲まれている！

「い、いや……こないで……いやぁ」

窮地に立たされたことにより、村娘Ａの隠された能力が目を覚ます！！

「いやあああああああああああ！！」

村娘Ａは超逃げ出した！

村娘Ａはとてつもなく逃げ出した！

村娘Ａはハヤテのごとく逃げ出した！

村娘Ａは世界一逃げ出した！！

――やがて、村娘Ａの体力が尽きたとき。目の前には故郷の村があった。

「はぁ……はぁ……はぁ……か、帰ってきた……帰ってきたよぅ……」

村娘Ａは感激に泣き崩れそうになった。

しかし、そのとき。

「ついたー？」

なぜか背中に並んでいたカンオケが一斉に開く。

カカたちは勇者のスペシャル能力、『死んだフリ』を解除した。

「いやー。危なかったね」

「まものの群れが突進してきたときは死ぬかと思ったわ……」

「あのままやり過ごすつもりだったんだけどー、この娘さんが思いのほか頑張ってくれたおかげだねー。いやー、念のために娘さんに命綱つけておいてよかった」

よく見れば、村娘Aのお腹には縄が結んであった。それは全てのカンオケに繋がっている。

しかしそれはひとまず置いといて、カカたちの復活は事情を知らない者からすればゾンビにしか見えないので村娘Aは再び怯えている！

「あ、ごめん。怖がらないでいいよ。私たちはね、あなたをまものから助け出したの」

「へ？　あ、あの。見た感じ、あなたたちを助けたのはわたしなのでは？」

その通りだった！

「あ、順番が違う。その前にあなたを助けたの。それから助けられたの」

「は、はぁ……」

村娘Aはいまいち状況を理解していない。

「そんな話は後にしましょうっ！　早くトメさんを生き返らせないとっ」

「あ、そうだねー。ケロリンも生き返らせないといけないし。村に

入ろー」

「ほら、あなたも」

「は、はい……」

混乱しながらも頷く村娘Ａ。

「……また生命保険でお金もらえるなー」

「サエすけ、なんか言った？」

「んーん」

強敵、よくある苗字ーズを退けた（？）一行！　物語が進んでいるのはすべてケロリンのおかげだと発覚した今、すべきことは一刻も早く戦力を回復させること。しかしそのとき、あやしい影が忍び寄る……

次回、『本当の強敵、現る？』をお楽しみに！！

## カカの天下４９７「カカ天クエスト　ＥＰ６」（後書き）

５００いく前にこれは一回やっとこうと思ってました、久々のカカ天クエストです。
村娘さん頑張りすぎです。
ケロリンも頑張りすぎです。
カカたちは頑張らなさすぎです。
ハタラケ勇者。

## カカの天下４９８「みんなの詰め合わせ、そのいち」

――今日のトメとサユカ。

どうも、トメです。

今日のお仕事も終わり家に帰ってきてみると、待っていたのはいつもの妹――ではなく、なぜかサユカちゃんでした。

「カカすけとサエすけがデートしに行ったので、仕方なくお留守番ですっ！」

「……はぁ」

久々に変な気を利かせたのか、単に自分がサエちゃんと二人きりになりたかっただけなのか……どっちにせよ、まったくうちの妹は……

「夕飯の支度までゆっくりしようと思ってるけど、どうする？」

「遊びましょうっ」

「何して」

「にらめっこがいいです！」

また懐かしい遊びを持ち出してくるもんだ。でも暇だし、いっか。

「にーらめっこしましょ」

「あっぱっぱーっ」

あっぱっぱー？　なんかバカっぽいな。

まぁいいや、とにかく笑わせないと。どんな顔しよっかなー……ん？

「トメさんと見つめ合ってる……幸せ……にゃはーん♪」

「はい僕の勝ち」

「にゃあああああっ！？」

即行で笑ってたし。というかニヤけてたし。

「もう一回、もう一回ですっ」

「はいはい……にーらめっこしましょ」

「あっぽっぽー」

あっぽぅ。りんご食いたいな。

「……にゃーん♪」

「勝った」

「にゃあああああっ」

またニヤけてるし。何がそんなにおもしろいのやら……って僕の顔か？　まさか。

「もう一度ぉっ」

「い、いいけど」

数秒後。

「わぉうん♪」

今度は犬になった。

「もう一度ですっ！」

この子、楽しそー。

あとさっきも思ったけど。

僕ら、バカっぽいなー。

でも。

「じー」

「きゃわわんっ」

「じー」

「がぉーんっ」

「じいいいい」

「ぱおーんっ」

楽しい、どこまで進化していくのだろう。もうちょっとこの面白い子で遊ぼ。

「しゅわるつねっがあああああっ！！」

「いや待てどんな進化したんだよ！？　しかし久々に聞いたなソレ！」

そんな一日。

――今日のカカとサエ。

どうも、カカです。

「今ごろサユカちゃん、うまくやってるかなー」

「大丈夫でしょ。最近あの二人、普通に仲いい感じだし」

「普通すぎてつまんないかもー」

「お、じゃあまた何か考えよっか」

サエちゃんと楽しくデート中。商店街を楽しくブラブラして、そ

ろそろ家に戻ろうかと思ったとき。

「あ。雨が降ってきた」

「傘を持ってきてよかったねー」

雲行きが怪しかったので、私もサエちゃんも自分の傘を持ち歩いていたんだけど……

「傘ささないとー」

自分の傘を見つめる。取っ手がお洒落な、お気に入りのデンジャーケロリンの傘……

ごめんね、ケロリン。

「ふん！」

ボキ！！

ケロリンの断末魔の叫び声が聞こえた。

なぜかコケコッコーだった。

……なぜ？

「どうしたのーカカちゃん」

「傘が雨で壊れちゃった」

「……槍でも降ってきたのー？　それに今、カカちゃん『ふん』って言わなかった？」

「それはくしゃみだよ」

む、鼻がむずむず。ほんとにくしゃみでそう……

「はくしゅっ……ふん！！」

「あきらかに不自然だよー」

「いいの！　とにかく傘が壊れたからそっち入れて！」

「うん、いいよー」

よし、相合傘げっと！！

濡れないようにぴったりくっついて。

「あーいあい♪」

「あーいあい？」

なぜかお猿さんの歌を口ずさみながら、家まで至福の時間を過ごすのでした。

そう、ぴったりくっついて……

ぴったり……

ぐい。

ぐいぐい。

「カカちゃん、そんなにくっつかなくてもー」

ぐいぐいぐいぐい。

「……もしかして道端の川に落とそうとか思ってるー？」

バレたか。

「や、ほら。水も滴るいい女になるよ？」

ぐいぐいぐいーってあれ、今度は私が押されてる？

「じゃーカカちゃんは血も滴るいい女になるねー。赤だしぴったり」

「車道！？　車道に落とそうと思ってますかサエちゃん！？」

ぐい……ぐい……！

大いなる至福の時間は、なぜか押しくらまんじゅうっぽい時間になってしまった。略して大福ＶＳまんじゅう。

傘を中心として互いにぐいぐい押し合う二人。変なの。

でも、これはこれで楽しい。

そんな一日。

――今日のカツコとサラ。

どうも、サラです！

「新人です、よろしくお願いします！！」

ついに新たなお仕事を見つけ、意気込みながら先輩に挨拶した私です！　でも……でも……

「あれ、サラさんじゃん？」

「な、なぜあなたが、ここに？」

そこには驚くべき人の姿がありました。なんと……トメさんとカカちゃんのお姉さんが！！

「なんでって、あたしもここで働いてるからだけど」

「でも……でも……あの」

お姉さんとの交流はそんなに多くはないけど、少しはありました。この人がどんな人か、大体わかってるつもりです。

でも――いいえ、だからこそ！　この人がこんなところで働いてるなんて想像もつきませんでした！

「なにさ、言いたいことがあったらハッキリ言いなよ」

「だって、ここ……花屋さんですよ？」

「そだね」

「なんであなたがいるんですか！？」

「あんた失礼だな」

だって、だって！　すごく普通の仕事じゃないですか！？

似合いません！

「てっきり私、怪獣とかしてらっしゃるのかと」

「それ仕事違う。まーあたしだって似合わないのはわかってるさ。でもこの仕事だと重宝されるのよ。花の種類とかで」

「え、もしかしてお花の種類、全部覚えてるんですか？」

「んーん。でもわかるの」

「……ど、どういうことですか？」

「や、ほら。あたしって動物とか植物の声わかるから」

「なぜ！？」

「さー？　あ、いらっしゃいませ」

巨大なハテナマークを頭上に浮かべる私に構わず、接客を始めるお姉さん。そしてお客さんがほしいと言ったのは、聞いたことのない花の名前。カタカナが並んでさっぱりです。

そんな難解な花の名前を聞いたお姉さんは、ザッと店内を見渡しました。

……あれ？

あれれ？

見間違いでしょうか。

今、一つの花がピクリと葉をあげたような？

「これですね」

……挙手？　もしかして『それわたしでーす』って挙手したんですか！？　う、嘘ですよね、偶然ですよね？　たまたま風が吹いただけで……ってここ店内ですし！？

「ありがとうございましたー。ん、どしたのハナちゃん」

「サラです！！」

「え、花屋さんやるからてっきり」

ま、まぁいいです。ちゃんと仕事もできる先輩っぽいですし、仲良くしていきましょう！

それにしても……世の中、フシギがいっぱいです。

そんな一日。

## カカの天下４９８「みんなの詰め合わせ、そのいち」（後書き）

ちょっとした一日。みんなは何をしてるんだろー的な話です。

今日はいつもの主要メンバー＋姉とか。明日は他のメンバーいきます。なるべく皆を出してあげたいですが、まーあぶれた人がいたらごめんなさい笑

もうすぐ５００。

ちょっと感慨に耽りながら、特別なような、なんでもないような、そんなみんなの一日を書こうと思います。

# カカの天下４９９「みんなの詰め合わせ、そのに」

――今日のイチョウとインドとアヤ。

どうもごきげんよう、イチョウです。

今日はアヤさんとインドさんの三人で、初めて外で待ち合わせしています。少々早く来すぎてしまったようなのですが……あ。お二方とも、ちょうどよくいらっしゃいましたね。

「やっほー！　待った？」

「……そ、それほど、でも」

「インドちゃんに聞いたわけじゃないんだけど」

「……ぽ」

「言ってみたかったんですよね、インドさん」

こくこく、と頷くインドさん。最近一緒にいることが多くなってきたおかげでしょうか、だんだんと仰りたいことが理解できるようになってきました。友人として、とても嬉しく思います。

「変なこと言いたがるのね。まぁいいわ、どこ行こっか？」

「その前に、その、これ」

「あら、なんでしょうか」

インドちゃんがおずおずと差し出されたのは……お菓子ですね。
生チョコのような形です。

「わたくしたちにですか？」

「作ったの……食べて」

「あれま！　あのカレー漬けのインドちゃんがお菓子とな。めずらしー！」

「でもあれだけ美味しいカレーをお作りになられるのですから、きっと美味しいのでしょうね！」

「「いっただきまーす」」

わたくしとアヤさんは二人そろってその可愛らしいチョコを口に入れました。

チョコの味ではありませんでした。

カレーの味でもありませんでした。

チョコとカレーを合わせようとして失敗した何かの味がしました。

「……おいしくない？」

わたくしもアヤさんも必死に弁解しようとします。しかし舌がぴりぴりして思うように喋ることができず、その様子だけでインドさんは察したようでした。

「おいしくないんだ……」

「ヴぁ、ヴ……けほんけほん！　あーあー、テス、テス……こほん。えっと、で、でも喉がいい感じかも！　歌がうまくなったみたい！」

ああ、見事な切り返しですアヤさん！　味を褒めるのは不可能と悟り、別の方面で褒めるつもりなのですね！

「歌ってみるわよ、いくわよ！」

ほげぇえええええええ！！

「……どヘタ」

「しみじみ言わないでぇ！！　ヘタになったのよ！　あ」

うりゅ、と涙ぐむインドさん！

「あなたのせいじゃないですよ！　だから、ね？　泣かないで」

「でも、でも……アヤが使いものにならなくなった」

「どーゆー意味よ！？」

「歌しか能がないのに……それが……」

「ムキー！！」

「ふ、二人とも落ち着いてくださいまし！」

このままずっと大騒ぎでした……

でも雨が降り始めて、たまたま傘を持っていたのがインドさんだけで。

三人でぎゅうぎゅうと押し合いながら傘に入っていると、なんだかんだで仲良くなれた気がしました。

そんな一日。

――今日のタケダとニシカワとテンカ。

どうも、ニシカワです。

今日の授業はもう終わったはずなのに、なぜか学校にいます。それというのもタケダに捕まってしまったからでして。

「なんで僕が……」

「そう言うなよニシカワ！　相談に乗ってくれる人間は多いほうがいいのだ」

どうやらタケダはテンカ先生に相談があるようで、先生の手が空くのを待っているらしい。それに僕にも付き合えと言ってきたのだ。

「俺たち、友達だろう？」

「そんな妙なモンになった覚えないけど」

「……それだ。なぜ皆、俺にそうやってキツイことばかり言うのだ！？」

あぁ、なるほど。最近クラスで広まってる噂について相談したいのか。

曰く『タケダは罵られると喜ぶ。イライラしてる人は解消にぜひどうぞ』というもので、タケダはことあるごとに「タケダ、邪魔」とか「タケダ、臭い」とか「タケダ君の仕事ぶりって異様だよね。このバケモノ」とか言われてる。流行に乗って僕も冷たくしてみたんだけど。

「だいたいだな、道をふさいでいて邪魔だったのはわかる。しかし臭いとは何だ。どこが臭いのか聞いたら足の裏だと？　足の裏が臭くないヤツなどいるのか。足の裏から森の香りがしたら逆に怖いだろうが。まったく……」

そんな噂を知ってか知らずか、タケダはご立腹だ。うーん、テンカ先生がどういう反応するかは気になるし、どうせ暇だし、家に帰るの面倒だし。もうちょっと付き合うかな。

「おう、待たせたな」

おっと、ぼそぼそ話してるうちにテンカ先生の登場だ。あらかじめ話は通していたらしい。

「テンカ先生！　話を聞いてもらえますか？」

「ああ、めんどーだが仕方ねぇ。さっさと言ってみな。どーせくだらねぇことなんだろ？」

「あああ！　テンカ先生まで俺に冷たい！！」

「タケダ。それ先生の地だから」

「ん、ああ。それもそうか……そ、それでですね。相談というのは他でもなく！」

タケダは自分がいかに虐げられているか熱く語った。

「――と、いうわけで！　俺はいわれのない中傷を浴び続けているのです！　どう思いますか！？」

「確かに足の裏から森の香りがしたらイヤだな」

「そこが論点ではなくて！！」

「は？　だっておもしろい部分はそこしか無かったぞ」

「楽しんでほしいわけでもなくて！！」

タケダは半分泣きそうだ。そんな様子を見て先生がニヤリと笑うのを、僕は見逃さなかった。

「先生……僕、聞いたんですけど」

「あんだよ」

「先生、この間のお見合いのときにこう言ったそうですね？　『生徒をバカにするな。許せない』って」

お見合い時にあった先生の武勇伝は、伝道師カカによってすでにクラスメイト全員の知るところとなっている。別にタケダをどう言おうと僕は構わないんだけど、なんとなく気になったので聞いてみたのだ。

するとテンカ先生はあっけらかんと答えた。

「オレはいーんだよ」

テンカ先生はやっぱりテンカ先生だなぁ、としみじみ思った。

「テンカ先生って……カカ君と似てるよな」

何か思うところがあるのかそう呟くタケダ。それはともかく、彼はその後もからかわれるばかりで悩み事の解決には全く届かなかったという。

そんな一日。

――今日のキリヤとクララとシュー。

どうも、キリヤです。

「そこの男！　速やかに投降しなさい！！」

「はっはっは！　学校はすでに卒業しています！」

「それは登校！！」

「綺麗な人ですよね！」

「それはトウコさん！！　って誰だ！？」

ノリのいい警官ですね。楽しい限りです！

「きゃー！　たすけてー！　いろいろされるです！！　めくるめく世界でいろいろめくられるですー！！」

小脇に掴んだクララちゃんが叫ぶ。

もうおわかりですか？　そう、私は今、クララちゃんを誘拐しているのです！　そして偶然にも犯行現場は交番前！　そこにいた警官三人は大慌てで私を追っているのです！

「逃がさんぞ！　俺の管轄で幼女誘拐などさせん！」

「給料が下がりますからね！」

「いろんな人に頭も下がりますからね！」

「はっはっは！　最近の警察ときたら！　もうちょっとマジメにやったらどうですか！？」

「「幼女誘拐してるおまえが言うなあああああ！！」」

心地よい怒声をあびながらだっしゅ、ダッシュ、ダーッシュ！

「きゃー、めくられるです、スカートめくられるのです！　でもクララ今日スカートじゃないです」

「珍しいですねぇ」

「サエおねーちゃんが買ってくれました。にくやだからって」

「肉屋？　……ああ、にーきゅっぱ、２９８０円ってことですね」

呑気に会話していると、後ろの警官たちが何やら大慌て。

「おい、聞いたか？　身代金は２９８０円らしいぞ！」

「おまえいくら持ってる！？」

「ぐっ……１０００円ちょっとしか」

「俺もだ……」

貧乏ですねここの警官は。まぁどうでもいいです。

「はっはっは！　捕まえてごらんなっさーい」

しなを作ってピョンピョン跳ねながら逃げていると、

「確保！」

あっさり捕まっちゃいました。子供一人抱えてるんですから当然

ですね。

「いたた、そんなに強く掴まないでくださいよ」

「うるさい！　貴様、自分が何をしたかわかっているのか！？」

「ええ、幼女誘拐ごっこです」

「「……ごっこ？」」

ぐるりん、と首を回してクララちゃんを見る警官。

「はい、クララ楽しかったです！　またやりましょう」

「「もうやるな！！」」

おお、なんと息のあった警官たちでしょう。これならこの街も安泰ですね。

「人騒がせな！　しかし君には一応、事情聴取させてもらうからな！」

タチの悪い遊びですからね、それは当然でしょう。

でも面倒なので。

「え、でもこの遊びはシューさんの公認だって聞きましたが」

ぐるりん、と再び首を回した警官の視線が捕らえたのは……ゼーハーいいながらようやく追いついてきた警官。あれがシューさんで

すよね、たしか。

「シュー……またおまえ絡みか」

「なんでおまえの知り合いはこう面倒ばかり起こすんだ!?　来い、たっぷりしぼってやる!」

「はぁ……はぁ……へ？　あ、あの？　なんのことですか、え、ちょ、痛っ、引っ張らないでえええ」

警官二人に引きずられていくシューさん。おお、カカちゃんの言ったとおりだ。「こうすれば危険な遊びもできるよー」なんて言われて半信半疑だったのですが。

「キリヤ、次は殺人事件ごっこがいいです」

「はっはっは、本当に殺すのは無しですよ?」

良い子も悪い子もマネしちゃダメですよ。

そんな一日。

――今日のセイジとトウジとミナミ。

「せまいぜ、兄貴」

「うるせぇ、仕方ねぇだろ傘が一本しかねーんだから!」

「傘ならもう一本姉貴が持ってるだろ！」

「じゃあトウジ、おまえ言ってこいよ」

「やだ。こえぇ」

「俺だってこえぇ」

「なんか言ったかい？　バカ弟ども」

「「いいえ、滅相もない」」

「ふん、やれやれ……ケンカばっかりな二人にはこんくらいがちょうどいいのさ。せいぜい雨の降ってる間くらいは仲良くするんだね」

「兄貴、変なとこ触るな」

「恐ろしいことを言うな」

仲良く相合傘なおっさんたち。

そんな一日。

――今日の校長と教頭。

「校長、前から気になっていたのですが」

「おほほ、なんですか教頭」

「校長は完璧に仕事をこなされますよね」

「朝飯前ですよ」

「校長はいつ仕事しているのですか？」

「朝飯前ですよ」

「ああ、私と同じですか。ちなみに朝は何時に起きられますか？」

「おほほ、三時です」

「私は四時です。負けました」

「勝ちました。というわけでこの西田屋のシュークリーム、一つ多くいただきますね。おほほ」

「悔しいですな」

そんな一日。

――今日のタマ。

部屋の中。でんぐりがえってゴロゴロゴロゴロ……壁に激突。

「ぼーりんぐ」

そんな一日。

――今日のトメ父とユイナ。

「わたし……あなたのことを、愛しています」

我が妻はそう言った。

俺ではない、別の男に向かって……

「くそぅ、あの男め！！」

いくらドラマの収録で相手が男優とはいえ、許せん！

「嫌がらせの手紙を書いてやる……男からのラブレターなどいかがなものか」

せっせと書き溜める。

そんな一日。

――今日の総理大臣とラスカル。

『今日の俺は輝いてるぜ！』

『どこが？』

『鼻が』

猫は湿ってるからね。

『あたしだって輝いてるわよ！』

犬も湿ってるからね。

そんな一日。

## カカの天下４９９「みんなの詰め合わせ、そのに」（後書き）

詰め合わせ。いろんな味を楽しんでいただけたでしょうか？

さてさて、明日はついに５００話です。同時に人気投票の〆切りです。

〆切り時間は例によって１６時とします。

――ちょこっと小耳に挟みますと。

……トップ三人。今のところほとんど差がありません。好きなキャラを一位に導くのはあなたかもしれない！

ふるってご投票ください＾＾

**カカの天下５００「第十六回、カカラジ！」**

「ども、私の名前は香加。この犬の名前は留」

「わん！」

「よーし留、とってこーい」

天高く放り投げられるボール。そしてそれを追いかける留犬。

「わんっ、わんっ、わん……」

「さ、邪魔者はいなくなった。というわけで小話も終わりこんカカ！　ついにやってきました第二回キャラ人気投票の結果発表の日が！　待ちました待ち焦がれました最近暑くてほんとにちょっと焦げそうでしたってな感じの香加です！」

作者です。５００話目にして十六回目のカカラジにして第二回キャラ人気投票発表会、開幕です！！

「今回は残念ながら人気投票発表スペシャルとなりまーす！　って、なんで残念ながら？」

えー、今回のカカラジまでに質問とか脅迫文とか妙な文とかいくつか届いてまして、一挙に紹介しようか！　なんて意気込んでいたのですが……

「まとめる時間がなかったと？」

う、それもあるのですが。ちょっと長くなりすぎそうだったのと、単純に全部書くには時間がなかったのです。お仕事もあるもので…なのでオモシロ投稿してくださった皆様、なるべく次回にお応えしますので、申し訳ありませんが今回は人気投票の発表だけで勘弁してください。

「へー。ま、いんじゃない？　こんだけみんな投票してくれた企画の発表だし、充分５００話の区切りっぽいし」

「区切りと言えば、前の話の詰め合わせもそれっぽかったよな」

「うんうん、あれ結構好評で――いつのまに戻ってきたのトメ犬」

「頑張って走った。僕にも司会をやらせろ！」

「じゃあさっきトイレに流しちゃったボールがあるから、それもとってこーい」

「わんっ、わん――って取ってこれるか！！」

「ちぇ」

「改めましてこんにちは、留犬もとい留です」

これはネット小説『カカの天下』を盛り上げるため、ぶっちゃけトークや作者の本音を語りながら人気投票の結果を発表するラジオ番組です！　留や香加、ランクインした皆様は本編自体とは直接関係ないのでお気をつけください。

「ではでは、早速いってみましょか？」

はいはい。では留、よろしくお願いします。

「えっと、まずは１０位からだな」

「１０位！　留兄！」

「待て。こんなところに居てたまるか」

「えー。こんな順位は人間じゃないって？　留兄ったら偉そー」

「そこまで言ってないだろ！　ただ、その、中間発表であんだけ上にいたのに１０位はヤダなぁって……」

「さてさて、そんな留兄に見下された人間以下の哀れな１０位の発表です！」

「だからそこまでは――」

「えー、１０位！　前期、後期合わせて１５ポイントを獲得しました――姉カツコです！！」

あれま。

「……や、驚いた」

「ホントに人間じゃなかったね」

偶然もあるもんだ。ある意味人間以上だけど。

「ではでは、そんなお姉に登場してもらってインタビューいただきましょう！　どうぞ」

括弧があらわれた！

「酒持ってこーい！」

カツコは飲んだくれている。仲間にしますか？

「いいえ」

「カカ即答!?」

「むしろ超いいえ」

「……で？　いつの間にカカ天クエストになったんだよ」

いやぁ、なんとなくね。ところで姉。なんで飲んだくれてるの。

「や、別に？　別に別に別に？　投票できるのが3ポイントに増えたにも関わらず前回と票数が同じとはどういうこっちゃーとか思ってないよあたしゃ」

……あ、そういえば前回も１５票。

「しかも六位だったな、たしか」

「落ちたねー、お姉」

「うっさいやい！　それというのもあたしの出番が少ないからだぞ

！！」

だから、あんたが出すぎるとジャンルがファンタジーになっちゃうんだってば。

「ちなみに姉へのメッセージはな……あれ、メッセージは？」

「なんかおもしろいの無かったから捨てといた」

「酒持ってこーい！！　ちきしょー！！」

泣きながらぐいぐい飲みまくる姉……ああ、可哀想に……

「んめー、くはは」

でもないか。

「ホントのところのメッセージはね、『ナイス人外！』とか『これからも皆を引っ掻き回して！』っていうのが多かったかな」

「あ、捨ててなかったんだな」

「うん。さ、次いこっか。第９位！　１７ポイントを獲得しました――インドちゃんです！！」

「おお、上がってきたなーカレー人」

出番はかなり後半になったにも関わらず、無口キャラがツボに入った方たちからの熱烈投票によってここまできました！

「それじゃーインドちゃんを呼んでみよっかー！　どうぞ！」

インドちゃん、登場！

「メッセージには『どんどん可愛くなっていく！』や『俺が求めていた恥ずかしがりキャラはこれだ！！　サラさんは期待はずれだった』や『ぼそぼそキャラ萌えー』などのご意見をいただいてます！」

「……」

「あ、あれ？　インドちゃん？　あの、9位になった感想なんか聞きたいんだけど」

「……」

ど、どうやら緊張でカチコチの模様です。

「どうする、なんとかしろカカ」

「よし。こほん……ねぇ、インドちゃん。せっかく皆が投票してくれたんだよ？　頑張って少しくらい喋ってみようよ？　ね？」

優しく語りかけるカカ。

インドちゃんはやがて……こく、と小さく頷いた。

「……か」

「うん？」

「……カレー、みんな、食べてね！！」

あ、逃げ出した。

「緊張を振り切り、なによりも先にカレーのことを言うとは……おのれ、侮れん」

「……あ。ねえねえ留兄」

「どした？」

「今ね、インドちゃんからメールあった」

「あ、そか。ここは舞台の裏側だからインドちゃんはメル友がカカだって知ってるんだったな。で、なんて書いてあった？」

「延々と『ありがとう』の文字が続いてる……」

なんだかとっても呪いっぽいメールだけど、とりあえず読者さんにすんごい感謝しているということなのでしょう！

「……くそー、新しい可愛さだな。負けてられないや」

「香加があんな風になったら地震雷火事オヤジがいっぺんに来るだろうな」

「ふんだ、どうせ気弱なとこなんかありませんよーだ！　さ、次いくよ！　第８位、１８ポイントを獲得しました……え、なんで？　えと――うちの、父」

「や、なんであの人がこんな上なのかサッパリわかんないんだけど」

ほら、日本人って忍者好きなんですよ。多分。

「……ひどい言われようだな。父は悲しいぞ」

「うあ、まだ呼んでないのに来やがった、このクソオヤジ」

「失礼だぞ留！　この俺はな――」

「どれどれ素顔は？」

シュバッ！

「あ、また消えた。あの人ここで喋る気ないのかね」

「香加が隠れてりゃ喋るんだろうけど……ま、そこまでしてやる義理はないしな。って、あれ。なんだこれ。置手紙？」

読んでみましょう。

『前略この度は――』

長い。堅苦しい。読むのも書くのももめんどい。ポイ。

「うあ。一刀両断」

「私も見習わなきゃならないくらいの傍若無人だ」

ま、要は読者さんに感謝してるらしいです。彼へのメッセージは

主に『ユイナさんとイチャイチャしすぎ』『ぶっ殺す』『もしくはトメを殺せ』といったメッセージが大半でした。

「それでなんで票が入ってんだろ……いや待て一つ僕に関わるメッセージ無いかオイ」

「留兄がなんか言われるのはいつものことでしょ。ゴルゴさんに暗殺依頼した人もいるらしいよ？　ゴルゴさんて誰だか知らないけど」

みんなふるって暗殺依頼してるね。さ、次々。

「サラっと流すなー！！」

「第7位！　残念ながらサラさんじゃありません」

「や、別にサラさんがいいなんて一言も」

「第7位、２０ポイントを獲得しました、こちらも新参者――クララちゃんです！」

はい、どうぞ。

「クララ、3錠です！！」

「何の薬だよ」

「違いました。参上です！」

ポン、と小さな音と共に現れたクララちゃん。最近はサエちゃんコーディネイトで可愛くバッチリ決めています。

「メッセージはですね、『もうすべてが可愛い！』『フシギ少女っぷりがたまらない』『うちの妹になってください』等が寄せられています」

「クララちゃん、感想は？」

「はい！　7と言えばラッキーセブンです！　じゃークララも何か良いことあるですか？」

うんうん、きっとあるよ。

「やりました！　じゃーなんかください」

え、そんな急に言われても。

「なんか無い？　留兄」

「えーと、さっき僕がつけてた首輪でよければ」

「ありがとうございます！」

あ、つけちゃった。

「わんわんです！」

「よーし、じゃあさっきトイレに流しちゃったボールをとってこーい！」

「わんわんです！！」

あ、行っちゃった。

「……勢いで言ってみたものの。どこ行ったんだろクララちゃん」

「ま、まぁ。人間じゃないし、大丈夫なんじゃないかな、多分……香加！　つ、次いこうか！」

「う、うん」

皆様。決して現実逃避してるわけじゃないですよ？　ええ。

「えー六位です！　２３．５ポイントを獲得しました――キリヤです！！」

「．５ってなに？」

いやまぁ、そういう投票があったので一応。

「メッセージには『色男！』『キリヤ君の話術最高！』『トメと付き合っちゃえよ』などが……って最後のフザケンナ！！」

最後の意見、イタダキ。

「いただくな！！」

ではでは、留の未来の彼氏の登場です。

「だからやめい！」

「はっはっは！　留君、そんな怒らずに。僕らの友情が眩しすぎてそういう風に見えてしまっただけさ。無論、私はどっちでもオッケーだがね！」

「ねね、キリヤン。そんなことばっか言ってるから質問きてるよ？」

「おや、なんだい香加ちゃん」

「キリヤ君は相手が誰でもいいんですかーって。読者さんから」

あぁ、最近のファミレスで誰彼構わずに口説いてたときの話だね。どうなの桐谷君。

「ふ、いえいえ。誰でもいいなんて」

「違うの？」

「そもそも前提が違うのです。私は――楽しければなんでもいいんです！！」

ハイハイそうですか。ありがとうございましたはっはっは。

次！！

「作者、怒ってるの？」

「呆れてるだけだろ。僕も呆れた。ま、『留君の彼氏も面白そう』とかバカなこと言い出す前に退場させたかったから、いいけどな」

それではいよいよベスト５！　に移る前に、１１位以下の方々を

一気に紹介させていただきます。ちょっと巻いてますので（業界用語）一気に並べますよ！

第１１位、サカイさん！！　『サエちゃんと一緒になれるようにがんばって！』という熱いメッセージがたくさん！

第十二位、タケダ！　『可哀想だから入れてやる』『おまえにはホントに同情する。俺も頑張るおまえも頑張れ』など泣けるメッセージがたくさん！

第十三位、タマちゃん！　『やることなすこと可愛すぎ』『癒されます』『私の腹から生まれてきて』などちょっと怖いメッセージもあるけど可愛いとの声がいっぱい！

第十四位、ユイナさん！　『お母さんパワーにやられました』『こんなお母さんがほしかった』『俺もあなたの胸でウハウハしたい』など留父に殺されそうな甘い希望が結構ありました！

第十五位、シュー君！　『強くなれ』『シュー君だって頑張ってるんだよね？』『君に幸あれ』『シューは頑張っていますよ。がんばっています。とてもいいことです。でもね、人間あきらめが第一なのです。だからそれができないあなたはいつまでもそのままよ。でも私はそんなあなたが好きですよ』などという説教っぽいお言葉がたくさん！　頑張れシュー！

以下、すいませんがメッセージを略させていただきます。

第十六位、サラさん。第十七位、コタツじじい。第十八位、アヤちゃん。第十九位、総理大臣。第二十位、デストロイヤー教頭。

なお、同票のキャラの順位の上下はメッセージの熱さで判断させていただきました。

それ以下に票が入ったキャラ、こちらも同票が多いですが、票が多かった順に並べています――院長店長、ケロリン、イチョウさん、校長、タクヤ君、明彦さん、ラスカル、武田遠衣、ニシカワ、チビカカ、ハヤテ君。

「うわーツッコミたいとこいっぱい」

「でも時間ないのですぐさま五位発表に移ります！」

細かいツッコミ、変なメッセージ紹介は次のカカラジでやりますね。

「ふふふ、ついに私の反撃が始まるんだね！　さぁ五位は誰！？私に負けた五位は誰なのさ！！」

「それではいきます！！　第５位！　６０ポイント獲得で――」

「で？　で？」

「……カカ」

「帰る」

「待て！　待てって！！」

「はーなーしーてー！！　私なんてどうせ主人公じゃないんだー！」

「そんなことないさ！　ほら、メッセージだってさ、『やっぱカカがいないと始まらないでしょ！』とか『大好きです』とか『こんな子が近くにいてほしい』『友達になってほしい子ＮＯ１！』とかいっぱい来てるしさ！」

「……それはありがと」

ほっ。落ち着いたか。

「でも負けたことには変わりないし！」

落ち着いてねぇ！！

「な？　香加さ、前に言ってたじゃないか。カカの天下を読みに来てる人はカカを見に来てるようなもんだ。だから全員私に投票してるようなもんだって」

「そんなもん強がりに決まってるでしょ！！」

「ぶっちゃけた！？」

「いいもんいいもん。カカ天じゃなくてサエ天でもサユ天でもトメ天でもテン天でも――好きな天ぷらを丼にして食べてればいいんだもん。お腹すいたから食べてあげるもん」

「な、カカ。いじけるなよ。いじける必要なんてないと思うぞ？」

「……むぅ」

「いいじゃん５位。６位の倍はポイント差がついてるぞ？　主役と

しては面目躍如だと思うし、きっと上とだってそんなに差はないさ」

「……んむぅ」

「大体さ、この物語の大半におまえが出てるんだぞ？　香加がいてこそ他のキャラも活きるんだ。おまえが中心だってことは変わらないんだよ」

「……ほんと？」

「当たり前だ。なにせ『カカの天下』なんだからな、これは。だから、ほら。司会やろう？　それは香加にしかできないと思う」

「……じゃ、やる」

「ほっ」

よかった。さすがはお兄ちゃん。確実に自分のほうが順位が高いくせによく言った。

「留兄消えろ！！」

「あんたねぇ！？　人がせっかく説得してやったってのに、なんだその言い草は！！」

はいはい、二人とも元気いっぱいになったところで、次いこー。

「まったくもう……はいはい、やればいいんでしょ、やれば！！」

「そうそう、その意気だ。じゃーいくぞ。第４位！　６４ポイント

で――サユカちゃん！」

「む、本当に差はあんまりなかったんだね」

任務話、告白話と、まさしく恋バナ専門の女の子。まだまだ小さいながらも恋に生きる少女、サユカちゃんが前回と同じく四位となりました！！　そんなわけで沙由歌ちゃんの登場でーす。

「こんカカっ！　みんなありがとうっ！」

「えっと、メッセージはね。『暴走娘、可愛いです』『頑張ってトメを落として！』『法律なんかシラネ』とか！」

「うんうんっ、がんばるわよわたしはっ！」

「他には『もっとエロく』『もっといやらしく』『もっと淫らに』とか」

「うんうんっ、がんば――がんばらないわよっ！？　なによそれっ、何の指導なのよっ！？」

「いや、なんかそんなの来てるんだもん」

いつのまにやら半ばエロ担当になってましたからね。小学生のくせに。

「サユカンたら、やーらし」

「うっさいわよ香加すけ！　やらしいのはそんなこと言う皆でしょっ！？」

「うん、それは間違いない」

「とにかくわたしはそんな役いやよっ！　エロい衣装なんて着ないんだから」

「作者、着ないの？」

着せます。

「ちょっとぉっ！？」

「はい、サユカンの今後の方針が決定したところで、次にいきましょうか」

「……留さんは、そういう衣装、見たいですか？」

「え……み、見たいかと聞かれれば、その」

「わ、わかりました。じゃあ、その、がが、頑張ってみます！」

「ハイそこー。ラブってないでちゃっちゃと次いくから。サユカン出てって」

「む、なによ香加すけ。わたしより順位低かったくせに」

「いいから出てけ！！」

「きゃあああっ！！」

吹っ飛ばされてった沙由歌ちゃん。それでも幸せそうだったのは、やはり留とラブったからでしょうか。

「こりゃもうスペシャルな衣装着せるしかないね」

考えときます。

「……」

「口挟まないんだね留兄」

なんだかんだ言って見たいんだよ。

「このむっつりスケベめ」

「うっさいわ！！　はよ次いけよ！」

はいはい。じゃー次は香加に任せた。

「任された。ではいきます。えーとなになに？　第３位！　７４ポイントで――」

「おお、いきなり点数飛んだな」

あれ？　どしたの香加。

「第３位は？」

「……トメ、兄、だ」

ぷ。

「ぷふ」

「なんだその反応は！！　もっとなにか無いのか！？」

「ざまーみろ」

やーいやーい。

「こ、こいつらは……！　や、別に順位に不満なんかないよ？　僕は大人だもん。一位が当然だー、なんて全く思ってませんでしたから」

まぁ。聞きまして？　奥さん。

「聞きました聞きました。この男なに言ってるんざましょかね」

一位が当然だなんて。恐ろしい子。

「そしてざまぁない子」

「人の話を聞きんしゃい！！」

まま。私たちの本心を暴露するのはこのくらいにしておきまして。留にはそりゃーもうたくさんの熱いメッセージが届いてます。『兄貴、最高！』『やっぱりツッコミ』『格好つけるときがたまらない』『トメが一位になるのは気に食わない、けど入れる』とか。

「や、その、ほんとありがとうございます」

「他にも『モテモテ男は地獄に落ちろ』『死んでしまえ』『誰ともくっつくな』とか」

「ありが――ありがとうって言えないし！」

あとね、『テンカとくっつかないと殺す』『サユカちゃんとくっつかないと殺す』『サエちゃんとくっつかないと殺す』『カカとくっつかないと殺すけどくっついたら社会的に死ぬ』みたいな感じの。

「どうしろっちゅーんじゃ！！　何しても死ぬじゃん！」

「誰ともくっつかなきゃいいんじゃ？」

や、でも『いい加減誰かとくっつけ。殺すぞ？』っていう意見も。

「なんでみんな僕をそんなに殺したがるのん！？」

そりゃまぁ。『カカ天』っていう作品を好きでいてくださる読者様からすれば、一番羨ましいポジションだし。

「でも今回は3位。ぷふー」

「……ずいぶんと嬉しそうね、香加ちゃん」

「うん。もう機嫌直った。さ、こんな男は放っておいて次いこかー」

「……うん、いいよ放っておいて。いじられればいじられるほどドツボにはまる気がするし」

懸命ですな。ささ、香加ちゃんどうぞ？

「はいはい！　元気いっぱい夢いっぱい笑いいっぱいで2位の発表です！」

「笑え笑え」

「はっ、ざまぁ」

「鼻では笑うな！！」

「はいはい。2位いくよ？　残るはあと二人。誰が残っているかは皆さんもうおわかりですね。問題はどっちがどっちか……いきます！」

ごくり。

「第2位！　75ポイント――我が心のオアシスにして永遠の相棒、サエちゃんです！！」

「おおお！　出ました腹黒少女！」

これまた前回と同じ順位ですが、出番が少なめにも関わらずこの激戦区で見事順位を死守しました！　というわけで……どうぞ、小枝ちゃん！！

「呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃじゃーん。どーも、小枝でーす」

笑顔がステキでちょっと恐ろしい小枝ちゃんにも、様々なメッセージが届いております。えー『サエ様こそ真のヒロイン！』『腹黒

サイコー』『サエさまステキ！』『やっぱりサエ様が一番可愛く思いました』『サカイさんと幸せになってほしい！』などなど！

「……なんで様づけばっかなの？」

サエちゃん人気は、なんといいますか……サエちゃんにゾッコン！　みたいな人が多くて。いつだったか、『サエちゃんファンクラブ会員番号一番』みたいな人が感想欄に現れたんですよ。そしたら『本当の一番は俺だ！！』みたいなメッセージがいくつも来たという秘話が……

「り、リアルで末恐ろしいな、小枝ちゃん」

「えへへー」

その天使な笑顔に惹かれてか、『サエさまに3ポイント！』っていうのが多くてですね。しかも大半の人が申し合わせたかのように『さま付け』するという摩訶不思議。

「さすが私の相棒だね！　大人気だ」

「みんなありがとー。そんなに人気があるなら、作者さんがきっと素晴らしいお話を書いてくれるから待ってるんだよー？」

『はーい』って合唱が聞こえてきそうな気がする。っていうかプレッシャーかけないでください！　書けるように努力はしますがねっ。

こほん。そんな人気な小枝ちゃんに質問が届いております。えー、『留お兄さんのことをどう思ってますか？』という質問ですが。

「好きですよー」

「えええ！？　ど、どどど」

どうどう、香加落ち着け。

「どのくらい！？」

「シュークリームより好きー」

「えええええ！！　そんなに好きなの！？」

え？　え？　驚くくらいに好きな部類なのソレ。

「でも留さんよりエクレアのほうが好きかな」

「ほっ……ならよかった」

よかったの？　うーん、基準がわからない……どう思う？　無難にやり過ごそうと無言な留君。

「振るなよう。こういうの答え辛いんだよぉ。立場的にさぁ」

「留兄はヘタレだね。でも！　小枝ちゃんと恋人になるのは私だけだからね！」

「ふふ、ありがとー香加ちゃん。私はいつでもオーケーだよー？」

あ、あれ。なんかこの光景、いつだったかカカラジで小枝ちゃん

ゲストに呼んだときにも見たような。

「なんならここで、いますぐ、なるー？　するー？」

「な、ななな何になるんでしょうか！？　何するんでしょ――」

ちゅ。

「！！！！！？？？？？？」

「えへー」

何をしたかはご想像にお任せします。

「帰っていい？」

「帰るな香加！　そしてさりげなく小枝ちゃんをお持ち帰りするな！！」

「や、もういいや。どうでもいいや。満足」

「カカラジではホントにラブラブなんだよねー私たちは」

「ねー」

これ以上はいろいろ危険なので、小枝ちゃんアウト！！

「あ、消えた！？　小枝ちゃんどこ！！」

退場していただきました。ほら、最後の仕事が残ってるよ？

「うー……ま、いっか。後でイチャイチャしよーっと」

え、えっと。カカラジでこうなったからって本編でもこんなんなるとは限りませんからね！？　あくまでここは裏側で別世界なんですからね！！

「作者、そんなに必死になんなくても」

「香加、仕方ないさ。ここのおまえらはちょっと過激すぎるんだ。歳のわりに」

「そっかー。ほのぼの世界だもんね。気をつける」

はい、気をつけて気を取り直してとうとう第１位の発表です！！

「もう皆さん、誰なのかおわかりでしょう！」

「私が発表するね。第二回、カカ天キャラ人気投票第１位！！　７７ポイントと縁起がいい数字で――テンカ先生でーす！！」

元から高かった票数がお見合い話で一気にラストスパート！　トメを抜かして見事、初の第１位を獲得したのでした！　上位三人が同点数で並んだときはどうなるかと思いましたが……ともかく天下先生、召喚！！

「……ったく、だからよ。もうオレはこういうの興味ねーんだって」

「そんなこと言ってるわりに口元にやけてるぞ」

「嬉しいんだね」

「う、嬉しくねーよ別に」

「親友である僕に見抜けないとでも思ったか？」

「……ああそうさ嬉しいさ！　さんきゅーてめぇら！！　ざまぁみろトメども！！　ふはははは！」

見事に開き直ってくださった天下先生には『カカ天の中で誰よりも男らしいです！』『こんな先生いてほしい』『僕に個人授業してください。いや、そんなことしたら死ぬかな、でも本望』とかきてますね。

「そんなのより一番多いのが、なんといっても『トメとくっついてほしい！！』『もう付き合っちゃえよおまえら』『絶対一番お似合いです』『お見合い話で惚れ直しました。やっぱりトメとの二人がいい！』っていう、留兄とのラブラブ希望意見だよね」

「んなこと言われてもなぁ？　留」

「なぁ？」

「ないよなー」

「なー」

頷きあう二人から仲良しオーラがぷんぷんするのですが……やはり愛情より友情が強いっぽいですね。

「じゃあ聞くけどさ、天下先生」

「あんだよ香加」

「先生がいま、一番好きな男の人って誰？」

「留だな」

おお、即答！！

「……でも即答ってことはやっぱり特別な意味はないんだよね」

「もちろんだ。留だってそうだろ？」

「ん、おう」

じゃ、留にも聞いてみますか。

「留が一番好きな人って、誰？」

「……げ」

あれ。なんとなく聞いてみたけど……もしかしてこれって皆が一番気になってることじゃないの！？

「……や、その、それは」

「んだよ留。男らしくねぇな」

「そうだよ。天下先生を見習いなよ。このままじゃ本当に誰かのお

嫁さんになっちゃうよ？」

「で……でも」

優柔不断ですねぇ。

ねぇ、みなさん？

「そうよそうよっ！　と、留さん？　遠慮なくわたしって、言ってもいいんですよっ！？　きゃ、言っちゃったっ！」

「留お兄さんと過ごしたあの一夜のことを想うと……うーん、どうしてもって言うなら私も好きって言ってあげてもいいですよー？　ぽ」

「留、男らしくないです！　男じゃないんならなんですか？　メスですか？　そういえば最初は犬でしたね。このメス犬！！　早く言うです！」

「はっはっは！　私でもオールオッケーですよ留君！　おもしろいので」

「留よ……俺だけはやめてくれよ。父子でなどと吐き気がする」

「ふふふー、留君。お母さんが好きなら甘えてもいいのよ？」

「絶対カレーだ……絶対そうだ……」

「今回やっと初登場！！　ラジオだからってラジーちゃんじゃないですよ、サラです！！　留さん、どうか私を！」

「なんだなんだなんだどっから出てきたおまえらー！！」

いつの間にか囲まれている留君なのでした。

「弟君や、覚悟を決めなされ」

誰が一番好きなんだい？　今日登場した皆が答えを待ってるよ？

「……」

はい？　なんだって？

「……香加だよ、香加！！　どうせ妹が一番好きなんだよ！　悪かったな！」

「カカラジチョーップ！！」

ぼきゃ、と香加のチョップが満面の笑みで炸裂！！

「恥ずかしいでしょーが！！」

言いつつ顔はニッコニコな香加ちゃんでした。

「やれやれ。まだ妹離れできねーんだな」

「留お兄さんが妹離れできたそのときこそ、恋愛が始まるんですねー」

「妹離れ……するのかしら、留さん」

さぁ？　それはあなた方の努力次第。

――さてさて。長々と続けてきましたがここで一区切り。

たくさんの投票、本当にありがとうございました。そして５００話。ここまでお付き合いいただき、感謝の言葉が溢れすぎて書けません。

この物語はカカたちの日常です。なんだかんだとありますが、結局はそれだけ。

その日々を見守ってくださる方々と、今後も楽しく、ほのぼのと、のんびりと歩いていけたら幸せだなーと思います。

明日からは、また普通のお話。

物語はどんどん続くでしょう。願わくばこの楽しい時間も、同じく続いていきますように。

ではでは、カカばい！

――この番組は、愛する皆さんの提供でお送りしました！！

クサいって言うな！！

## カカの天下５００「第十六回、カカラジ！」（後書き）

ちょっと焦らしたりいろいろありましが笑
これにて５００話、完遂です。
ではでは皆様。
また明日、です＾＾

## カカの天下５０１「夏の音」

「あーづーいー」

「言うな、もっと暑くなる」

ども……妹をたしなめつつもグッタリしてるトメです。

ようやく梅雨も終わったかなーと思った矢先、猛暑ががっつり襲い掛かってきました。あまりの暑さに汗がダラダラ身体はグダグダ。カカと二人して居間で寝そべっています。

「扇風機じゃ足りない……クーラーほしいよトメ兄」

「ダメだ……今までだってそれ無しでやってきたんだ。だから今年も……」

そう、うちにはクーラーがない。それというのも僕らの両親の「夏は暑いもの、冬は寒いもの」という教育方針（？）のせいだ。あの人たちはなぜかエアコンを嫌うのである。身体によくないとか言って……コタツや扇風機はいいらしいけど、その基準がよくわからん。

「もう限界だよー。地球は日々暑くなってるんだよ？　そろそろ買ってもいいじゃん」

「それはもっともだけどな……」

金はあるくせに高い買い物をなかなか許さないうちの両親がどう

言うか……なんにせよ今すぐ決められる問題じゃない。

「クーラーほぢー」

カカには悪いが諦めてもらおう。

「なぁ、カカ。クーラーから出る風あるじゃん？」

「うん、いいよねあれ。涼しくて。夏には神風だよ。『神様がくれた風』を略して神風だよー」

「あの風は全部おならだ」

あ、カカが凍りついた。いいなー涼しそうで。

「……あの、神風が？」

「ああ、神様のおならだ」

「……クーラー……いいや」

説得完了。ごめんな神様。

「よしよし、その扇風機で我慢しろ」

「おー、あいらぶ、せんぷーきー」

暑さで溶けかかっているような声を出しながら扇風機に抱きつくカカ。おいこら僕のほうに風こないだろ、それだと。

「せんぷーきー、せんぷーきー……ね、トメ兄。せんぷー機ってさ、千回プープー風をくれる機械だからせんぷー機なのかな」

「違うと思うが……どうでもいいけどプープーってそれもおならみたいだな」

「……せんぷーき、いいや」

ぽい、と抱きついていた扇風機を投げ捨てるカカ。

よし、これで千のプーは僕のものだ。はー……涼し。

「あぢー……」

しまった。そんなことしてたらカカが干物になってしまう。なんとかしないと……

「……トメ兄、涼しくなる質問をします」

「おお、言ってみろ」

「世界三大美女とは誰のことを指すでしょー？」

「えーと確かクレオバトラーと」

「どこのバトル野郎ですか」

クレオパトラだっけ？　いかん、暑さで脳がやられてる。

「世界三大美女、正解はー、私とサエちゃんとサユカンでした」

「それは寒いギャグだ」

「でも暑いね」

「ああ、暑いな」

意味ねー。

「じゃー姉とテンカ先生とサカイさんが本当の世界三大美女」

「もっと寒いな。むしろ三大珍女だ」

「三大珍味みたいだね」

「言い得て妙だ」

「でも暑いね」

「ああ、暑いな」

ダメだこりゃー。

「よし。カカ、外に出よう」

こういうときは家の中よりも外のほうが涼しかったりするもんだ。

「あぢぃぃぃ」

するもんだけど暑いのは変わらない。

「トメ兄……アイスほしい」

「僕もほしくなってきた……しかし」

まだ夏も始まったばかり。いきなりそのような贅沢をして教育的にはいかがなものか？

ここで僕がアイスを買ってやるとする。

↓するとカカが贅沢を覚える。

↓そして後々にカカは家の金を盗み出し、全て使ってアイスを買ってしまう。

↓アイスに塗れて僕らは氷付けになり、冷凍保存され……溶けるころには未来の世界へ。

↓そこには人間はおらず、ケロリンしかいない。

↓ケロリン化。両生類。鳴き声はケロリラリン。

「いかん！！」

なんとしてもアイスを買わせないようにしなければ！！（注、暑さで頭がやられています）

「カカ、アイスが何の略か知ってるか？」

「知らないー。どうでもいいからアイス食べよう、かじろう、なめよう」

「アイ、その英語を訳すと『目』だ。つまりアイスはな、目玉で作った酢の塊なんだよ」

「……つまり？」

「あれは全部ナニカの目玉だ」

「アイス……いいや」

さすがにぎょろっとした目玉をかじったり舐めたりするのを想像するのは気色悪かったのだろう。カカは顔色を悪くして遠慮した。

……って、あれ。顔色が悪いのはもしかして暑すぎるせいか。そういえば反論がないのも暑さで弱っているからか？　なんでもかんでも禁止して倒れたら元も子もないな。ここは何かジュースでも買って――お？

いいものめっけ。

ちりーん。

「涼しくなった気がする」

「やっぱ夏は風鈴だよな」

灼熱だったはずの我が家は、涼しげな音を響かせるだけで全然違う世界になっていた。

「ケロリンの可愛い風鈴があってよかったね」

「おまえケロリン好きだよな」

「忘れたの？　デンジャーケロリンって、元はサエちゃんが考えた街の名物なんだよ」

「そういやそうだっけ。カカがお気に入りにするわけだ」

ちりりん、と綺麗な音を出す、まぬけなカエルを眺めながら。

今年の暑い夏も、涼しく楽しく乗り切れたらいいなー、なんて思うのだった。

「ね、トメ兄。ケロリン風鈴の鈴って、ケロリンの身体の下についてるんだよね」

「ん、ああ。そうだな」

「じゃあもしかして、この音ってケロリンのおな――」

「待て！　そろそろその考えから離れないと、おまえ何もできなくなるぞ！」

……ほんと。暑さにやられないように、気をつけながら乗り切ろう。

# カカの天下５０１「夏の音」（後書き）

「あ　つ　い」
これ、今回のサブタイトルのボツ案です。
だって今日暑かったんだもん！！！　あまりにあんまりなんでボツにしましたが笑

どうでもいいですがうちにはクーラーがあります。でもつけません。我慢できるうちは意地でもつけません。根性でどうにもならないときのみ使用します。
なのでトメ家にもクーラーはつけてやりません（私怨

……え？　記念すべき５０１話目がこんなんでいいのかって？
特別っぽいのは散々やったし、いーんです。これがカカ天です笑
ゆるーく涼しくいきましょう＾＾
……暑いけど笑

# カカの天下５０２「騒がしい大人たち」

ちっす！　テンカだぜ！

いきなりですまねぇな。せーの！

「「「乾杯！！」」」

三つの声とグラスの音が心地よく重なり、オレら飲み会がスタートだ！！

メンバーはこの三人！　オレ、姐さん、サカイさんだ！

「んぐんぐ……っぷはぁー！！　あっついときに飲むビールは最高だねぃ！！」

「うんうんー。ささ、料理は何を頼もうかー」

「サカイさんの好きなのでいいぜ。オレはなんでもいいから」

「あたしも！　メインはビールだぜぃ！」

「じゃあじゃあ……明太子食べたいな。このメンタイ出し巻き玉子、頼んでいいですかー？」

ピクリ、と姐さんの耳が動く！

「ヘンタイだし巻きとな！？」

「おし、頼め！　めっちゃ食ってやるぜー！」

「ち、違いますよー。メンタイコです」

「ヘンタイの子とな！？」

「おしおし頼め！　めちゃくちゃにしてやるぜ！！」

「だから違うんですってー！」

初っ端から飛ばしまくるオレたちにサカイさんはたじたじだ。ま、酔いが回ればすぐにテンションが追いついてくるだろうがな！

「さてさて、適当に頼んだところでー……いきなりですが、本題にいきましょうかー」

あん？　なんだそのキラキラした目は。

「そうそ、今日の飲み会の肴の目玉はもちろん！　テンちゃんの見合い話だよねー」

そうなるだろうとは思ってたがな。

「あんま話すことなんかねぇぞ？　大体のことは姐さん知ってるだろが」

「私もサユカちゃんから色々聞いてますから、一応知ってるんですけどねー」

「あ、サカイさんだろ、カカたちを乱入させたの！　結果的には助

かったからいいけどよ」

「えーえー、感謝してください。そしたらまたちょっかいかけてあげますからー」

いや、少しは自重してください。

「それで、それで？　どうなのよ」

「何がだよ、姐さん」

「うちの弟、どうよ？　イカスでしょ？」

「別にトメと見合いしたわけじゃねーだろ」

「でもでもー、似たようなものだったんじゃないですかー？」

そりゃまぁ、彼氏役やってもらったわけだし、似てなくもねーけどよ。

「あの子、きっとテンちゃんみたいなタイプ好きだよ？　なにせあの子の初恋相手ってのがさ、自分のことを『オレ』なんて呼ぶ男勝りな女の子だったっていうんだよ！？　ほら、テンちゃんにぴったり」

それアンタのことでしょが、どう考えても。

「ちなみにカツコちゃんの初恋は誰だったんですかー？」

お、それはオレも興味あるぞ。

「あっはっは！　これが笑っちゃう話でさー。トメなんだよ」

……は？

「一時期、トメが弟だなんて知らなくてさー、それでもずっと一緒だったからつい好きになっちまってねー。ま、昔の話だがね」

……驚いた。小さい頃は相思相愛だったんだな二人とも。

「ま、あたしの話はいいさね。テンちゃんどうよ、うちの弟をもらうつもりはないかい？」

「テンカちゃんもついに結婚ですかー」

「子供は六人！？　いやー子沢山」

「がんばりすぎですねー。というか好きですねーふふふ」

「勝手に話を進めんな！！」

ったく、この人らは酒が入るとどこまでも行くんだから……オレも人のこた言えねぇが。

「オレは今は教職に精一杯でな、んなこと考える余裕はねーよ。それはトメも同じだろ？」

「あー……弟君、カカちゃんに精一杯だからねー」

「親代わりみたいなものですからねー。育児できるのは羨ましいで

すけど、やっぱり大変なんでしょうねー。カカちゃん可愛いし」

「そうそう、カカちゃんが可愛いのが問題なのよ。おかげでトメは骨抜きさ」

「だろ？　ま、オレがトメとどうにかなるとすりゃ、まずカカが心配ないくらい成長しないと無理だな」

「カカちゃんが成長ねぇ。彼氏でも作らすか？」

「いいですねー。誰かそれっぽい子はいないんですかー、先生」

カカに似合う男ねぇ……

「んー……タケダくらいかなぁ、一番可能性ありそうなのは。少したきつけてやるか」

「お、カカちゃんに彼氏が！　こりゃめでたい！」

「カカちゃんもついに結婚ですかー」

「子供は上に女の子、下に男の子が一人ずつ！？」

「よくある理想図ですねー」

酒にまかせて暴走する二人の戯言を聞き流しながら、オレはふと考えてみた。

トメと……そういう可能性はあるのかどうか。

んー……

正直、あるかもしれねぇな。

でも、ま。オレはそういうの慣れてないしな。あいつも絶対に慣れてねぇし。

この後どうなるか、時間が経てばわかるだろ。カカが成長して、オレもトメも成長して……話はそれからってことで。とりあえず目先のことで精一杯だからな、オレたちは。

ゆっくり行こう。焦るよりそっちのほうが楽しいさ。

「……っと、ボーっとしちまってた。おい、何して遊んでんだ。オレも混ぜろよ」

気を取り直して姐さんとサカイさんに声をかけると、二人はそろってこう答えた。

「「いまね、テンカちゃんごっこしてるの」」

……オレごっこ？

「おらおら、宿題やれ！　あん？　答えあわせ？　おれはしねーよ、てめぇでやれ！！」

姐さん……どこで見てたんだその場面。

「おらおらー、泣け！　わめけ！」

サカイさんや。あなたの中のオレはどうなってんだ？

「ふはは！　ここはおれの天下だ！！　有り金を置いてさっさと帰れ！！」

オレ、いつそんなこと言った？

「文句があるのかね？　貴様はテンカ王の前にいるのだぞ！　ひざまづけ！　命ごいをしろ！　小僧から石を取り戻せ！！」

「サカイちゃん、それ違う人の真似になってるから」

「目がぁー、目がぁー！！」

メガ楽しいこの人たち。

「四十秒で飲み干しな！！」

「そーれ一気！　一気！！」

何がどうなろうと、この人らと一緒にいれば楽しいんだオレたちは。絶対。

でも一気飲み連続は勘弁な。

## カカの天下５０２「騒がしい大人たち」（後書き）

書いてから思いました。

飲み干すのに４０秒って……

長いしっ！

# カカの天下５０３「サエちゃんの眠い朝」

じりりりりりり、とうるさい音で目が覚めました、サエですー……

「んー……にゅ」

もぞもぞと起き上がり、目覚まし時計をぱしぱし叩いて黙らせますー。

ぱしぱし。

ぱしぱし。

「……んゅ？」

止まらないー……

あ、叩いてたのケロリンのぬいぐるみだった。

「ごめんなさい」

きちんとぺこりと頭を下げて、今度はちゃんと目覚まし時計を止める。

「くぁ……」

小さなあくび……眠いー……

「……くー」

眠くて……上半身だけ起こしたまま傾いてって……

ごん。

「いた」

壁に頭をぶつけて、ようやくちゃんと目を覚ました。

あまり朝は得意じゃないんだよねー。ふらふらしながら洗面所で顔を洗って……朝ご飯を用意しないとー。おじさんもおばさんも仕事で昨日からいないんだよね。自分でやらないと。

トースターにパンをセットして、つまみを回して、これでよし。パンが焼けるまで数分……携帯でも見よーっと。

メールだ。ファンクラブの会長からかー。えーと『命じられた調査の結果ですが――』ふむふむ……よし。『じゃあソレ消しといて』っとこれで返信完了。

ふふふー、だんだん学校の影の支配者っぽくなってきたなー私。黒い黒いって言われるのは嫌だけど、こういうの楽しいんだよね。そのうち「この私を称えよ！　姫と呼べー」とか言ったりして。

チン。

あ、パン焼けたー。

……あれ、焼けてない。コンセント入れるの忘れてた。

いいもんいいもん。姫はパンなんか焼かないもん。だからこういう失敗もあるんだもん……焼くけどさー。もう一回もう一回……

一人で赤面しながら今度こそ朝食をちゃんと用意。マーマレードのジャムをつけて、はむはむ食べる。

食べながら見るテレビは毎朝してるニュース番組。顔なじみのアナウンサーが頑張って何か喋ってる。

いっつも思うんだよね。

この人、鼻毛すごいなー。

耳毛もすごいのかなー？

あれ、またメールだー。ファンクラブ会長、暇なのかな。

内容は『ではこの人はどうしますか？』だって。まったくもう、そんなの聞くまでもないのにね？　『許さない』と返信、これでよし。

ごちそうさまでしたーと合掌して、食器を片付けてるうちに登校時間に。カカちゃんたちを待たせちゃ悪いし、急がないと……でもその前にメールチェックだけしとこう。

パソコンの電源をぽちっとな。ふふ、最初は全然わからなかったパソコンだけど、最近はちゃんと使い方を覚えたんだよー？　メル友だっているんだから。いつも『あなたを幸せにしてあげます！！』って送ってくるのー。だから私もそのたびに『じゃあここに現金を

送ってください。それだけで幸せです』ってタケダ君の住所を添えて――

「あれ、つかないー」

なかなかパソコンが起きてくれない。何度も電源ボタン押してるのになー。私に似て寝ぼすけさんなんだから。

「ねーねー、朝だよ」

ぱしぱし叩いてもゆすっても起きてくれない。耳元で囁いても返事なしだ。

仕方ないなー。

「で、どうしたって？」

諦めて登校した私は、今朝のパソコンさんの寝ぼすけさんっぷりをカカちゃんとサユカちゃんに語ってみた。

「うん、仕方ないからパソコンさんの耳元に目覚まし時計をセットしてきたー……どうしたの？」

口元を押さえてしゃがみ込むカカちゃんとサユカちゃん。えっと、笑いをこらえてる？　私の頭はハテナでいっぱいだ。

「さ、サエすけっ、それ、意味ないから！」

「ええー!?　あ、やっぱり耳に差し込んで繋げなきゃいけないのかな」

「目覚まし時計とパソコンは繋げられないからっ！　ていうかそもそも耳ってどこっ!?　耳に差し込むって何を!?　ちょっとえぐいしっ」

「サエちゃん……かわいい……く、くはは……！！」

「じゃ、じゃあ、パソコンさんに名前をつけて呼ぶのとかどうかなー?　そうしたら呼ばれてるーと思って起きてくれるかも」

「なんてつける気よっ?」

「パソコンだからー、パコちゃん?」

「「可愛いし……！！」」

再び爆笑モードな二人。なんでこんなに大騒ぎしてるのか、私にはよくわからない。もしかしてパソコンさんって寝ぼすけさんなのが当たり前なのかなー?　じゃあ無理やり起こすのはよくないね。今度は優しくゆっくり電源ボタンを押してあげよう。

ゆっくり、起きるまで何回も。

――家に帰ってから、やってみた。

「つかない」

なんでー？

「ねーねー、パコちゃん？　画面真っ暗だよ。なんでそんなに暗いの？　嫌なことでもあったー？」

電源ボタンは一回しか押してはいけない、ということを知ったのはもう少し後のことでした。ボタンを押すのが楽しくて、最近何回も押していました。

……私って、もしかして、どじー？

## カカの天下５０３「サエちゃんの眠い朝」（後書き）

サエちゃんの弱いところを書いてみました。
……なごむ笑

えー、それは置いときまして＾＾；なんかいろんな人にご指摘いただきまくってなんとなく凹みそうな感じなのですが笑　５０２話が二つあったと……
これ、バグでした。作者側からすると５０２話部分がふたつある状態。一つだけ消すことができず、仕方ないので両方消すことに。
そしたら……
今まで一度もなかった空白の日ができてしまいました！！

……ま、いいですけど。一日一話には変わらないし。
いいですけどね！
落ち込んでなんかないですからね！

……サエちゃんでも見てなごもーっと笑

## カカの天下５０４「今日の二人は大忙し」

こんばんは、トメです。

今宵は七夕。去年と同じように姉がどこかの山から引っこ抜いてきた笹の木が、庭にぶっ刺さっております。これ犯罪じゃないのかな？　もしそうならシュー君のせいにすればいいだけだけど。

「しっかし、今時ここまで短冊が吊るされまくった笹の木も壮観だよなー」

姉が笹の木を持ってきてすぐ、カカは大量の短冊を飾り付けた。あらかじめいろんな人に願い事を書かせていたらしい。そんなわけですでに笹の木には願いが下がりまくっているんだけど……

「僕の願いごと、まだ決まってないんだよね。他の人のを見て参考にしよ」

さっさと書いて家の中で始まってるお月見だんごパーティに参加しないと……そう、どうやら去年から七夕に月見だんごを食べるのがうちの定番と化したらしい。月見だんごと言いつつ室内で食べるとはこれいかに。

「おっと、ボーっとしてないでさっさとしないと」

でもゆっくり眺めるのもいいな。おもしろいんだよなー人の願いごとって。どれどれ？

『お姫さまになりたいです。サエ』

お姫様……？

どう想像しても女王様しか浮かんでこないのはなぜだろう？　同じだと思ったそこの君、甘いぞ。姫と女王じゃ全然違う。何が違うかっていうと偉そうなイメージが違う。わかりやすく言うと『姫って呼んでくださいね♪』っていうのと『女王様とお呼び！！』って感じの違いだ。わかった？

でも意外とメルヘンなとこあるんだなサエちゃん。そういうのはサユカちゃんの領分かと思ってたけど……今度、姫とでも呼んでみるか。

どれ、次は……

『トメさんとデートがしたいです。サユカ』

ず、ずいぶんとささやかな願いだな。しかし逆にくすぐったいような……今度またお茶にでも誘うかな。

『願い？　自分で叶える。テンカ』

なんて男らしい。

『娘と会いたい。S』

これ、サカイさんか……泣けるな。頑張れサカイさん。頑張れ織姫と彦星。

『織姫と彦星。おまえら何様だ？　あたしがその場から引きずり落

としてやる!!　カツコ』

頑張れって言った矢先にこれか!!　そんなこと不可能のはずなのになぜか本気でやりそうなのが恐ろしい。逃げて!　二人とも逃げてー!!

『二人は逃がしました。クララ』

……え?　これ、今の僕への返事?　姉の宣戦布告への返事?　でも一緒に書いたわけでもないだろうし……え?　ええ?　クララちゃんって何者?　エスパー?

ま、まぁいいや。他は……

『私はサラですから!!　サラ』

……何があった?

『さかなになりたい。シュー』

おまえも何があった?

や、彼のことだ。いろいろあるんだろうけど……強く生きろ。

『幸せになりたい。タケダ』

切実すぎて泣けるぜ。

『勘弁してくれ姉貴。トウジ&セイジ』

ここ掲示板とちゃいますから。

それにしても男性陣はことごとく可哀想なこと言ってるなぁ。

『薄着ばんざい。キリヤ』

かと言ってコイツはどうかと思うが。

『甘いもの万歳。教頭』

似たもの同士かあんたらは。そもそも願い事じゃねーし。

『あたち、はんざい。ちま』

犯罪!?　何したのちまって子……あ、『ばんざい』と『たま』か！　字を覚えたんだな！　うんうん成長し――『あたしバンザイ』とか成長の方向間違ってませんか!?　ますます姉っぽくなってくな……将来が不安だ。ホントに犯罪とか起こさなきゃいいけど。

『輝け日本。総理大臣』

……あれ、こいつネコじゃなかったっけ？　どうやって……それとも本物――や、きっとイタズラだ。絶対そうだ。余計なことは考えるな。僕らは日本が輝くように祈っていればいいんだ。

『輝け教育。校長』

普通に立派だ。

『俺もモテたい。父』

それに比べてコイツときたら。あとで母さんに言ってやろ。

その母さんの短冊は……ないか。今月も忙しいって言ってたしなぁ。

「……それにしても、ないなぁ」

さっきから一番に探してるヤツの短冊が見つからない。知らない子の短冊もいっぱいあるからどれがどれやら……ええい、なんだこの『カレー星人襲来希望。カレーパンマンでも歓迎』っていう短冊は！

「何してるのトメ兄」

「お、カカ」

ちょうどよかった。本人に聞いてしまおう。

「今さ、いろんな人の願い事見てたんだよ。おまえはなんて書いたんだ？」

さぞかし変なこと書いたんだろうなーと期待してたんだけど。

「アイスになりたいって書いた」

意外と普通だった。

……や、普通ではないけどさ。カカにしては普通だなって意味で。

「夏のアイス大好きだから」

ちっ。どうやら前にした目玉の話は忘れたらしい。

「アイスになってどうする。溶けるぞ。食われるぞ。大量生産されてビールとか生魚を冷やされるぞ。ドライアイスは凍傷にお気をつけを。アイスランドはヨーロッパ。アイスホッケーは日本ガンバレ。アイスル心を忘れずに。そんなのになりたいのか」

どんなのだ。自分で言っててわからん。

「暑いときにアイスを食べまくってー、身も心もアイスになりたいの」

「それは、たしかに夢だな」

だってさせないし。

「マイブームはね、抹茶あずきモナカアイスと、苺のみぞれ！」

「あそ」

「可愛い妹のささやかな夢をかなえてあげよう！　とか思わないの？」

「可愛い妹のお腹が壊れたら大変だもの」

「夢のためならそれくらい！」

「可愛い妹のお腹が出てきたら大変だもの」

「……ぐぅ」

ま、今年も暑くなりそうだし。多少のアイスは大目に見てやることにするかね。

そういうわけだ、織姫に彦星よ。こいつの願いは僕がなるべく引き受けるから、他のヤツの願いごとを叶えられるように頑張ってくれ。

『頑張れ二人とも。トメ』と。変な短冊ばっかだし、こんなのもいいだろう。

ああ、でも。

織姫、彦星よ。

叶える願いは選べよ？

## カカの天下５０４「今日の二人は大忙し」（後書き）

煩悩が渦巻く願いごと。それに目を通す織姫と彦星……きっと『んなもん自分で頑張れよ』と思ってしまう願いも多いでしょう。
でもきっと自分ではどうにもならない真剣な願いを書けば！　きっと二人も応援をしてくれるはずです！
応援だけか、って？　手伝ってはくれないのかって？

甘えるな（マテ

応援ってーもんはそれだけで立派な力となるのですよー。

さて今日は七月七日……と、いうわけで。
七時七分に投稿しました！！
「だからどうした」発言禁止！！！

## カカの天下５０５「トメがいっぱい」

「姫、迎えにまいりました」

「ああ、トメ王子」

ぽややーん……あ、いきなり幸せな音をすいません、サユカですっ。

「さぁ、いきましょう」

優しく手を差し伸べてくれるトメさん。ああ、なんてステキなのかしら。豪華な王冠に高貴なマント……似合わないけどトメさんだからなんでもいいわっ！

「どうしたんですか？　サユカ姫。そんなに見つめて」

「え、えっとっ」

思わず言葉に詰まるわたし。だって言えるわけないじゃない。貴方に見とれていたなんてっ！

「ふふ、そのような熱い視線をもらっては仕方ありませんね。ほら」

わたしの頬にトメさんの指が優しく触れる。顔が近づく！　こ、これはもしやっ！？

「あなたのお望みのままに」

望んでないっ！　特に望んでないですけどカモンッ！！　いつでもどこでも大歓迎っ！　さぁキキキキ、キスを！！

「俺の全ては、あなたのものです」

ああ、なんてステキなセリフなのかしらっ！

でも――

「へぶ！？」

わたしは近づいてきたその頬を張り飛ばした。

「さ、サユカ姫、何を！？」

「愚か者！！　トメさんは自分のことを『僕』って呼ぶのよっ！！」

「そんな！　だってこっちのほうが王子っぽいかと思って」

「黙れニセモノ！　せっかくいい気分だったのに台無しにして……消えなさいっ！！」

わたしが命じた瞬間、トメ王子が言葉の通り消え去った。

……なんだか本当にお姫様になったみたいで、ちょっと気持ちよかったわ。

「次っ！！」

「は！　今度こそ真打登場でございます！」

どこからともなく現れる新たなトメさん。

「我こそはトマ王子！！」

「名前が違うっ！！」

蹴っ飛ばした瞬間、そのニセモノも消え去った。

「はー、はー……まったくもう！　ちゃんとしたトメさんはいないのっ！？」

……え？　何をやっているのかって？

見てわからないかしら。

夢を見てるのよ。そう、トメさんの夢を！！　でもね、こりゃいいわねふへへへーって思ってノリノリでお姫様やってたんだけど……ろくなトメさんが現れないのっ！

これでもわたしの夢かしらっ！　情けないっ！

「さぁ、次はっ！？」

「俺様こそ真の魔王、トメである！！」

「魔王はお姉さんにでもやらせときなさいっ！　消えろ！！」

「わ、わしゃぁトメじゃ……ばーさんや、飯ゃまだかいの？」

「おじいさん。さっき食べたでしょ？　あと誰がばーさんかしら。しばくわよ」

「お風呂上りのトメです！！」

「きゃあああ服着て服！！　あ、着なくても、別に、その」

「デンジャートメリン参上」

「誰よアンタッ！？」

『本日の天気は８０％の確率でトメです！』

「何このナレーション、ってトメさんがいっぱい降ってくる！？　あああそして地面に衝突してことごとく潰れて山になっていく……止めて！！　早く止めて！！」

「トメだけにとめて？」

「くだらないこと言ってないで止めなさいよ！！　アンタ誰よっ！」

「わしゃぁトメじゃ……」

「おとなしく飯食ってなさいっ！！」

夢。それは都合のいいものだと、誰かが言っていた。

でも……

これのどこがよっ！？

「好きな人がいっぱいで嬉しいんじゃ？」

「いっぱい居りゃいいってもんじゃないでしょうが！？」

「みんな美味しいよ？」

「食べないわよっ！！　大体アンタ誰！？」

「わしゃぁトメじゃ……」

「だから飯でも食べてろって――ああトメさんたちは食べるなあああっ！！」

がばっ！！

「はぁ……はぁ……な、なんて夢なのかしら」

あんなにたくさんのトメさんが……わたしどんだけ好きなのかしらね。いいえ、でも本物のトメさんには全く及ばないニセモノばかり……これで本当にトメさんを愛していると言えるのっ！？

「この方法、ダメね」

枕の下からアルバムを取り出す。そのアルバムには今までに入手した数々のトメさん写真が溢れている……枕の下に入れて眠れば夢に見られると思ったんだけど、どうやら写真が多すぎたらしい。

「あ、お祖父ちゃんの写真が入ってる。何かの拍子に混ざっちゃったのかしら」

それがあのお年寄りトメさんかぁ。

――そんな朝を迎えた日の午後。

変なトメさんばかり見てしまったので、どうしても本物のトメさんに会いたくなってカカすけの家にお邪魔してしまった。サエすけといつもの三人でお茶をご馳走になる。

「……ねぇ、サエすけ」

「このマンゴープリンおいしー。ん、なに？」

「お姫様になりたい、とか思ったことある？」

「なぜそれをー！？」

なにかしらこのリアクションは。

はぁ……ため息をついて、トメさんを見つめてみる。

「……ん？」

夢の中のトメさんはキスしようとしてくれた。

「な、なに。サユカちゃん」

本物のトメさんは……

「えっと」

ちょっと困惑した表情を浮かべて……

「あ。僕の抹茶プリン、一口ほしい？」

「はいっ！！」

「そかそか、サユカちゃん抹茶系が好きだったもんね」

もっと好きなのはわたしの視線の先なんだけど……この鈍さとズレた優しさがたまらない。

うん。やっぱりこうでないとっ！

「あーんっ」

「さ、サユカちゃん。それはちょっと……」

うん。やっぱりこうでないとっ！

「ぱく」

「ちょっとカカすけ！　勝手にトメさんからの一口奪わないでよっ！！」

うん。やっぱりこうで――これはいらないや。

ともかく。やっぱり本物のトメさんが一番ってことねっ！

## カカの天下５０５「トメがいっぱい」（後書き）

お姫様第二号誕生！

といってもサユカ姫の出番は今回限りでしょうね……だってサエちゃんのほうが姫っぽいし。

それにしても一途なサユカちゃん。ちょっとした間違いでも怒ります。

間違えてトメのセリフに「俺」とか入れたら殴られそうです。気をつけます。

## カカの天下５０６「カカと漫才　レベル１」

「ツッコミがしたい！！」

元気にハキハキ大宣言！！　どうも、カカです。

「いきなりなによ、カカすけ」

「無理でしょー」

呆れているのはおなじみの友達、サエちゃんとサユカン……むー、そんなに変かなぁ、私がツッコミすると。前にも言われた気がするけど。

「大丈夫だよ、やればできるよ！　だって私、アイスピックってやつらしいから」

「氷砕くやつ？　ぴったりだねー」

「それを言うならハイスペックでしょっ！　なんでもできるって意味ね」

おお、ツッコミだー！

「サユカン！　ツッコミ教えて」

「な、なによ。トメさんに教えてもらえばいいじゃない」

「トメ兄はレベル高いもん。だからまずはサユカンレベルで慣らそ

うかと」

「そんなこと言われても教えることなんてできないわよっ……でも、そうね。じゃあわたしと二人でツッコミやってみよっか。サエすけ、ボケてっ」

「飯ゃーまだかいのー？」

「そういうボケじゃなくてっ！！　あと最近見た悪夢を思い出すからやめてくれるっ？」

「はーい」

よし、始まるぞ。頑張ってツッコもー！

わくわく、わくわく。

「じゃあサエすけ始めて。カカすけ、ちゃんとツッコむのよ？」

「おうさ！」

「いくよー。んとー……隣の家の囲いができたんだってね。へー」

「へー」

「ツッコみなさいよっ！！」

え？　なに、どこを！？

「今のはねー。『囲い』と『へー』をかけてるの。囲いって塀のこ

とでしょー？」

「へー」

「まだボケるかっ」

う、そんなつもりは……

「じゃあサユカン見本を見せてよ」

「わたし？　いいわよっ」

「んじゃいくよー。隣の家の囲いができたんだってね。へー」

「つまんないわよっ！！」

「……サユカちゃん、ボケろって言っておいてそれはあんまりなお言葉だよー」

「だってそう思ったんだもん。もっと面白いこと言ってほしかったわ。まぁ練習だからいいけどっ」

ふむふむ、なるほど。つまんないわよ！　これだね。

「じゃあカカすけ。やってみて」

「不安だからサユカンも一緒にやって」

「いいわよ」

「それでは、こほん。隣の家の囲いができたんだってね。へー」

「つまんないわよっ！」

あ、乗り遅れた。えっと。

「そうだわよ！！」

「何よそれ！？」

「や、遅れたからつい。ちなみにこれはソーダだわよ」

「つまんないだわよっ！」

「あげる」

「もらうわ」

アドリブ利かせたつもりだったんだけど、ダメだったかな。

「こく、こく……今度はちゃんと素早くツッコむのよっ？」

「うん！　サエちゃんお願い」

いざ！！

「隣の家の囲いが」

「つまんないわよ！！」

「早いわよっ！！　なによ、隣の囲いがつまんないって。面白い囲いってどんなのよっ」

「えっと。囲いだけに、カッコイイ男の人のゾウが並んでる塀とか？」

「……そんな囲いあったら確かに面白いでしょうけど」

「でしょ？　ぱおーん」

「ゾウってそっちのゾウ！？　銅像とかじゃなくてっ！？」

「ゾウっていうのはね、男の人の下半身についてる――」

「説明せんでいいわよっ！！　って話が逸れてるし。カカすけ、君ツッコミしたいんじゃなかったの？」

「え、男の人の下半身のゾウを何に突っ込めと」

「そんなことは誰も言っとらんわっ！！　あぁもー、なんとかしてよサエすけ……」

サユカンと一緒にさっきから黙ってたサエちゃんの方を見てみると。

「むぐむぐ……」

ポップコーン食べながら観戦してた。

「……サエすけ？」

「ん？　あー、大丈夫だよサユカちゃん。結構おもしろいよー」

「そんなことは誰も聞いとらんわっ！」

え、でも重要なことじゃないかな。

「ねーね、サエちゃん。なんだかツッコミが二人みたいな感じだったけど、他に感想はないのかな？」

「いやいやいや誰がどう見てもわたししかツッコミいないからっ」

サユカンの言葉は無視。サエちゃんはニコニコと「んー」と首をひねり、

「ツッコミが二人というよりー、ボケが二人、というよりー」

やがてポン、と手を打った。

「バカが二人みたいだったー」

「……わたし、頑張ったのに……頑張ってツッコんだのに……誰か評価してよっ」

「つまんないわよ」

「うっさいわカカすけ！！」

おあとがよろしいようで。

「「「どうも、ありがとうございましたー」」」

「うーん。まだまだ練習が必要だね」

「漫才って難しいねー」

「もうちょっとテレビとか見て勉強しましょっ」

「……なぁ、てめぇら。何してんだ？」

「「「手芸部」」」

「どこがだっ！？」

おー、テンカ先生もツッコミだぁ。勉強勉強。

## カカの天下５０６「カカと漫才　レベル１」（後書き）

カカと～シリーズの新作です。まーまだレベル１ですのでね、軽く書きました。レベル上がるにつれて面白くなっていけばいいなーと。

**カカの天下５０７「ファミレス東治の繁盛記」**

いらっしゃいませ！！

おっと、突然申し訳ありません。忙しくてつい営業スマイルをかましてしまいました。私ですか？　ええ、キリヤです。

「キリヤさん、Ａの三番テーブルお願いします！」

「了解しました」

騒がしくてすいません。私のバイト先、ファミレス『東治』はいまや戦場なのです。それというのも――おっと、愚痴っている場合ではありませんでした。Ａの三番、と。

「失礼いたします。お客様、どうかなされましたか？」

「どうしたもこうしたもねーよ！！　見ろよこれ！」

頭の悪そうなおっさんが指差す先には、先ほどお出ししたスープ。その中に……

「虫が入ってんじゃねぇか！？」

ふむ。たしかに小さくて黒いのが浮いていて、虫に見えなくもないですが……

「いいえ。お客様ご安心を。これは虫ではありません」

「あぁん？　だったら何だってんだよ」

「これはスープの隠し味に使う海草の一種です。おそらく手違いでひと欠片だけスープに入ってしまったのでしょう」

「……本当かぁ？　羽みたいなの付いてるんだが」

「その海草というのが珍しいものでして、光合成を活発にするために薄い透明な膜のようなもので葉を覆っているのですよ。ほら、ビニールハウスとかあるじゃないですか。あの要領で光を強めて吸収するんです。その羽のように見えるのは、おそらくそのビニールがはみ出てしまったのでしょう」

「へぇ……で、これは食べられるのか？」

「ええ、もちろん。栄養補給、滋養強壮に最適で、さらにお通じまでよくなります」

「そうなのか。悪かったな、あんちゃん」

「いえ、こちらこそ。無害とはいえ異物を混入させたのは事実ですし。本当に申し訳ありませんでした」

「いやいや、無害ならいいさ。じゃあこれは食っちまおう」

パク。

「……へぇ、結構うまいな」

「なにせダシに使うくらいですからね。では、失礼いたします」

「おう、すまなかったな！」

ふぅ、意外と良い人でしたね。

いやーしかし。

本当に食べるとは思いませんでした。まぁ本当にお通じは（必要以上に）よくなるかもしれませんし、いいでしょ。

「キリヤさん！　すいません……Ｂの一番にいってもらえますか？」

「はいはい、ご随意に」

今度はなんでしょう。

「ちょっとお兄さん！！　この料理、塩辛すぎるわよ！　あたしったら高血圧なのに！　どうしてくれるの！？」

なら塩辛い可能性があるこってりした料理なんか頼むなクソデブババァ！　と言いたいのを必死に堪え、私はあくまで営業スマイルをペッカペカ！

「失礼ですがお客様。その料理、塩分はほとんど含まれておりません」

「はぁぁ？　じゃあこの辛いのはなんなのよ！」

「それはですね、カレーに似た調味料です」

「カレー？　そんな味はしないわよ」

「ええ、味は塩とほとんど変わりません。しかしその実、含まれている成分はカレーと同じ！　その名もカプサイシン！　脂肪を燃やすカプサイシン！　食べたら痩せるカプサイシン！　女性の味方のカプサイシンです！！　なので、塩辛いというのならそのカプサイシンが、カプサイシンが！！　あぁすいません。大事なことなので二回言いました。ともかくそのカプサイシンが多く含まれていたということ……しかし塩辛いことには変わりませんね。今すぐお取替えを」

「これでいいわ」

「え、いや、しかし」

「これでいいのよ！　あたしは痩せたいのよ！　そろそろヤバイのよ！　旦那も目をそむけるのよ！　娘は口聞いてくれないのよ！！　さっき転んだのよ！　だからおかわり！」

まだ食べるのですか！？　い、いるんですよね、これを食べれば痩せやすいと言われ、それを食べ過ぎてカロリー取りすぎる本末転倒な人……ああ、だから転んでるんですね。転倒だけに。

「かしこまりました」

しかしこっちは商売ですし、黙っておこ。

「ふふ……カプサイシン……カプサイシン……ばくばくばく！！」

いやーしかし。

本当にそうだったらいいですよね。

「キリヤさーん！！」

はぁ……今度はなんでしょうか？　いくら私がスペシャルバイトだからって疲れるものは疲れるんですよ？　それというのも料理長が風邪で寝込んだりするから……あの人がいれば料理で文句なんか出ないんですけどねぇ。

「失礼いたしま――あら」

「よ、キリヤン。元気してるー？」

「あんまり元気なさそうだな」

なんだかホッとしてしまいました。

「カカちゃんにトメ君！　いや、お恥ずかしながらちょっと疲れてますね。料理長がいないもので」

「トウジのおっちゃんが？　それで皆バタバタしてるんだね」

「やっぱ料理長って大事なんだなぁ」

「確かにあの人はすごいですけど、もうちょっと他の料理人も見習ってほしいと――ああ、すいません。ドリンクでもサービスしますね」

「あ、いいよ。忙しいだろ？」

「忙しいからこそ、です。少々お待ちを」

飲食業ってこういうやりとりで癒されるんですよねー。いくら忙しくてもドリンクくらい、ちょちょいのちょい、と。

「はい、トメ君。アイスコーヒーです」

「おお、よく飲みたいものがわかったな」

「さっきメニューでそれをジッと見ていたでしょう？　はい、カカちゃん」

「おー」

「コーラでございます」

「怒ったときは？」

「コラー！　でございます」

「呆れたときは」

「コラコラ……でございます」

「可愛くいってみよっか」

「こーら、だーめ♪」

「だっふんだ」

「ダメだコラ」

「コーディネイトは？」

「こーでねーと」

グッ！！　と親指を立てあう私たち。

「……最後、コーしか合ってなかったが」

「はっはっは、野暮ですよトメ君。ノリがよければいいんです」

よし、元気の充電完了！

営業終了時刻までもう少し、頑張りますかね！！

## カカの天下５０７「ファミレス東治の繁盛記」（後書き）

キリヤ節がいっぱい炸裂です。嘘が多い？　はっはっは、またまたそんなー。

苦情はキリヤンに言ってください。適当に全部かわすでしょうけど笑

## カカの天下５０８「あいつが言ったことを言えって言われた」

こんにちは、クララです！

「よーし、じゃー長いセリフ言いゲームしよー」

「どんなゲームよ」

「説明して、サエちゃん」

今日はサエおねーちゃんとカカとサユカで一緒に遊んでます！
みんないろんな遊びを知っていて、クララとっても楽しいです！

「最初に出題者の人が長いセリフを言うの。それで、他の三人はそれを聞いて覚えるの。次に、出題者の人が三人のうちの一人を選んで、その人がセリフを復唱するのー。ちょっとくらいなら間違ってもいいけど、ハッキリ間違ったり覚えてなかったら罰ゲームね」

ふむふむ、とにかく誰かが言った言葉を覚えればいいのですね！

「それじゃーまずは誰が出題するー？」

「私やる！　みんな聞いてて」

「カカですね！　はい、クララ覚えます！」

みんなで深呼吸、気合を入れてカカに注目です！

「――シュー君が神妙な顔して歩いていると、電柱に激突して車に

激突して人ごみに激突して姉に激突して吹っ飛んで、カラスに激突してサユカンちの屋根に激突してバウンドして空を飛んでって月に激突した!!　ざまーみろ」

激突しまくりです!!　え、えっと、えっと……

「まずはクララちゃん言ってみよ!」

いきなりですか!?

「えと、えと……シューが、珍妙な顔して死にました。ざまーみろ!」

「惜しい!」

「それでもいい気がするけどねー」

「え?　え?　ダメですか?　クララもうおしまいですか!?」

クララしょっくです!

「ちょっとそれは可哀想じゃないかしら。クララちゃん、もうちょっと頑張っていいわよっ」

「うんうん、がんばれー」

ううん、皆さんの優しさが身に染みます。クララがんばります!

「えっと……シューが、慎重な、じゃなくて、しん……しんにょうな……しんにょう?　神尿?　神の尿!?」

「も、もしもし、クララちゃんっ？」

「それ違うよー」

「おもしろい発想だ……見習わないと。それはともかく、しん、まで合ってるよ」

「しん……新緑？　神様の尿は緑色なのですか！？」

大変です。クララ大混乱です！

「うーん、サエちゃんサユカン。これはさすがにダメでしょ」

「おもしろかったんだけどねー」

「罰ゲームねっ」

え？　え？　クララ何されるのでしょうか！？

「あら。なんとも都合のいいことに、あそこから歩いてくるのはシューさんじゃないのっ」

「よーし、クララちゃん突撃ー」

「突撃して何すればいいですか？」

「今のセリフを言ってきてもらおっか。それが罰ゲームね」

ほ……よかったです。月まで飛ばされたり、ざまーみろって言わ

れたりするのかと思いました。そんなことならお安い御用です！

クララはてってってーと通りすがりのシューに近づきました。

「おや？　君は……」

「シュー！！」

「は、はい」

「おまえの尿は緑色です！」

「いきなり何を！？」

「病院にいきましょう！」

「えええええ！？」

「ほら早く！　手遅れになる前に！」

「て、手遅れって何がどうなって……ちょっと、押さないで！　な、なんでこんなところに病院が！？」

「すいませーん、急患です！！　この人の尿が緑色なのです！」

「それは大変だ！」「それはたいへんだ！」「それはタイヘンだ！」「それはヘンタイだ！」

「なんでいきなり医師先生がズラリ！？」

「早速解ぼ――手術だ！」

「解剖！？　いま解剖って言った！？　え、ちょ、ちょ――」

ばたん、と病院の扉が閉まりました。

「ふー、クララいいことしました」

「な、なによ。今のコメディみたいな光景はっ」

「きっとクララちゃんのフシギな力が起こした現象だよー」

「おもしろかった……もっかいやってほしいな」

「今度は何色の尿にするー？」

「虹色」

「尿はもういいわよっ！　次いきましょ、次」

そういえばクララ、ゲームの最中でした！　尿が緑色になるなんていう大事件のせいですっかり忘れてました。

「じゃー私いくねー」

「がんばれサエちゃん！」

「――私はトメさんのすね毛が好きです。トメさんのすね毛を愛しています。トメさんのすね毛に愛されたいです。ビバすね毛。ワンダフルすね毛。ブリリアントすね毛！　私はトメさんのすね毛に埋

もれて死にたい」

こ、これが噂の脚ふぇちというやつなのですか！？　勉強になります！

「じゃーサユカちゃん言ってみよー」

「やっぱりわたしっ！？」

「そりゃそうでしょ。頑張れサユカン。間違えたら本人の前で今のを朗読だよ！」

「そ、それだけは避けないとっ！　い、いくわよ……わ、わたしはトメさんの、す、すね毛が好きです。トメさんのすね毛を愛しています！　あぁ恥ずかしい……」

「サユカ、ガンバです！」

「ありがとうクララちゃん……こほん。もう一気にいくわよ！　トメさんのすね毛に愛されたいです。ビバすね毛。ワンダフルすね毛。ブリリアントすね毛！　わたしはトメさんのすね毛に埋もれて死にたい！！　どうよっ！？」

「ところで通りすがりのトメ兄をこちらに用意してみました」

「さ、サユカちゃん……！？」

「そんなこったろうと思ったわよおおおおおおおおおおっ！！」

ああ！！　サユカがどこかへ大爆走していきます！！

「サエおねーちゃん、追わなくてもいいんですか？」

「大丈夫、サユカちゃんはきっとパワーアップして帰ってくるよー」

ぱわーあっぷ……

「すね毛を生やして帰ってくるのですね！？」

「うんうん、それは壮絶なパワーアップだねー」

「クララちゃん……やっぱ侮れないな。メモメモ」

「あのさ……おまえら、何してんの？」

トメは呆れながら首を傾げています。まったくもう、そんなこともわからないのですか。

「クララたちはすね毛をしてるんです！」

「「「どういう意味！？」」」

みんなにツッコまれました！！　クララしょっくです！

## カカの天下５０８「あいつが言ったことを言えって言われた」（後書き）

サブタイトルはいつかの話の類似品です笑

まだまだ遊びようがありますね、これ。

今度また遊ばせてみようかなぁ……

## カカの天下５０９「カレーの王子様」

「カーレーでー、なぜ泣くのー、からすぎるっからよー♪」

かーらーすー、な替え歌です、ごめんなさい……私ですか？　その、インド、って呼ばれてます。でも日本人です。偽証じゃないです、ごめんなさい。

なんだか謝ってばかりですね、ごめんなさい。その、慣れてないもので。

なんで歌っていたかというとですね、友達と待ち合わせしてるからです。その、なんだか楽しくなって歌ってしまいました。

「まだかな……」

そわそわしながら時計と人ごみを眺めます。待ってる二人が遅れているわけではなく、私が勝手に早く来ているだけなんですけど……えへへ、待ち合わせって楽しいですね、嬉しいですね。

「まだかな……」

そうだ、この間にまたメールしようかな。恥ずかしながら私、メル友というものを持っていまして……名前もどこに住んでるのかもわからない女の子なんですけど、いつもの私からは信じられないくらい話すことができる相手で、私はメルちゃんって呼んでます。メルちゃん何してるかなぁ……メールだと本心を出しやすいけど、アヤちゃんとイチョウさんへのメールは、まだここまで気軽に書けな――

「きゃっ」

「いってぇぇ！！」

携帯に目を落としていたせいで近づいてくる人影に気づかず、そのままぶつかってしまいました！

「ご、ごめんなさ――」

「いてぇ！　いてぇぞこのやろう！！」

ひっ！　と、とても怖くて強そうな人……！　学ランが開いてセクシーです、頭がボーンってなってます……！

「おいガキ。てめぇがぶつかってきたせいで足が折れたじゃないかよ！」

ひっ！　と、とても強そうなのにすごく身体が弱い人でした！！

「おい、聞いてんのかてめぇ」

どど、どうしよう。足が折れたんなら１１９番……！

「コラ、どこにかけようとしてやがる！！」

あぁぁ、携帯が取り上げられました！

「そ、その、救急車を……」

「嘘つけぇ！　『１１』まで押してあるぞ？　１１０番にかける気だったんだろが！」

どうしようどうしよう、この人、頭悪いです。救急車の１１９番も最初が『１１』っていうことに気づいてないです……でも怖くてそんなこと言えないです……

「どう落とし前つけてくれるんだ？　あぁん？」

「と、とりあえず……私……カレーしか、持って、なくて……！」

「カネ？　おお、カネ持ってんじゃねぇか」

「ち、ちち、違います、その、カレー」

「だからカネだろが！　出せよ！」

どうしようどうしよう、この人、耳まで悪いです……！

「か、カレー」

「だからそのカネ出せよ！」

うぅ、これでカレー出したら怒りますよねこの人……でも、でも……私、どうしたら――

誰か、助けて！！

「ちょっと待ったぁ！！」

え――本当に、助けがくるなんて。

「俺の前でクラスメイトを脅すとはいい度胸だ！」

「誰だ、てめぇは！」

「聞いていなかったのか？　クラスメイト、だ」

こ、この人は……たしか、いっつも私たちのクラスをあやしげに覗いているタケダ君です！　別のクラスだからクラスメイトじゃない、なんてツッコんだらいけないのでしょうか……

「てめぇには関係ねぇだろが！」

「ふ。学級委員長たる者、学友全てを守るのが使命！」

い、いつもと違って格好いいです！

「俺ぁな、そいつにカネをもらわなきゃなんねぇんだよ。邪魔するなら殴るぞオラ」

「いいのか？　この俺に手を出しても」

「あぁん？　てめぇがどれほど偉いってんだよ」

い、医者の子供さんとは聞いてましたけど。

「ふっ、俺が偉いかどうかが問題ではない。問題は、俺の病気だ！！」

「はぁ？」

「いいか、俺は心臓の病気で、本当ならば今もベッドで寝ていなければならない状態だ！」

「元気じゃねーか」

「気力だけで生きているのだ！　根性なのだ！　だから口先だけは達者なのだ！」

「じ、自分でそこまで言うか」

「まぁ聞け。だから俺の身体は外からの衝撃に非常に弱い。突き飛ばされただけで心臓内の弁が破壊され、緊急手術が必要となるのだ。五分以内に救急車が到着しなければ俺は死ぬ。殴られでもしたら即死かもしれんな――さぁ、どうする？　俺を殺すか？　その歳で殺人犯になるか！？」

すごい……すごい！　医者の子供っぽい……！

「さ、殺人……う、嘘だろが！　そんな弱い人間、俺は見たことねぇぞ！！」

「おまえは病院に行ったことがあるのか？　そこにはどれほどの小さい子供が病気に苦しんでいると思っている？　テレビで外国の子供を見たことは？　疫病に侵された彼らを見たことは！？　貴様が知らないだけで世界は病気でいっぱいなのだ！　悔しかったら赤い羽根募金でもしろ！！　恵まれない子供に愛の手を！　募金おねがいしまーす！」

「く、くそ」

「さぁどうする？　俺を殴るか？　俺を殺すか？　殺人犯で捕まるか！？　吐け、おまえがやったんだろう？　親御さんは泣いてるぞ！　カツ丼食うか！？」

「お、覚えてやがれ！」

わぁ……怖いおにーさんが逃げていく。

「ふぅ、あやしげな声に誘われて駆けつけてみれば、このようなことになるとは」

「あ、あの……」

「大丈夫だったか？　たしかノゾミ君だったな」

「は、はい……」

私の本名、知っててくれたんだ……お、お礼、お礼を言わなきゃ……

「おっと、俺はもう少し用事があるのだ。これにて失礼する」

「あ――」

私のバカ……いくじなし……

お礼、伝えられなかった……

でも……

格好、よかったな。

「いやー、ごめんねインドちゃん！　遅れちゃった」

「バスが遅れてしまいまして……インドちゃん？　どうかされましたか？」

「……王子様……見つけちゃった」

「カレーの王子様？」

「そういうカレーありましたよねー」

明日、会えるかな。

……ぽ。

## カカの天下５０９「カレーの王子様」（後書き）

さて、いきなりですが。ここれ「あれ？　今日の話って流れ的に○○○の話になるはずじゃ……」と思っていた人がいましたら、「さすが！　いつも読んでますね！？　よく気づきました！」と褒めたたえるところです。

どういう意味かわからない人は……まぁ別にそのままでもいいのではないでしょうか笑

そうそう、今回はタケダの技が光りましたね。基本的に強くないタケダがその弱さを活かし、いざというときにカカを助けられるように編み出した話術「タケダ流脅迫術」です。タケダ流、ってとこがミソですね。

インドちゃんに使えばこの通りですが、カカに使っても効果は薄そうです。そもそもカカなら自力でなんとかしそうですしね＾＾；

よう、あたしだ！

誰かって？　あたしっつったらあたしだ。カツコに決まってんでしょが。

「カツコさーん、これはどこに置けばいいんですか？」

「あ、サラちゃん。そこに置いといて。重いっしょ」

そしてただいま仕事中なのだ。職種は女の子なら誰でも一度は憧れるお花屋さん――『似合わないこと言うなよ』とか『女の……子？』とか思ったそこの君、表に出ろ。

「表に出たら何されるんですか！？」

「あんたも思ったんかい！？」

知らずに口に出してたみたいだわ。それにしてもまったく……失礼な後輩だこと。打ち解けてきたから気安くなってるのもあるけどね。

「そういやさ、サラちゃんってなんでこの店で働いてんの？」

「い、いけませんでしたか？」

「うん」

口をひし形にしてショックを受けるサラちゃん。よし、仕返し完了。

「ま、冗談は置いといて。志望動機ってどんなんだったのかなーと」

「つ、つい出来心で」

「それ犯行動機だから」

シュー呼ぶか？

「え、えっと。さっきカツコさんが一人でボソボソ呟いてたことが理由です」

「なんかその言い方だとあたしが危ない人みたいだわね」

物理的に危ない部分があるのは認めなくも無いが。

「いろいろお仕事しましたけど、女の子なら一度は憧れるお花屋さんのお仕事、したことなかったなぁって」

「おお、サラちゃんが言うとしっくりくるセリフだ」

「でしょう？」

「あんた正直だな」

あはは、と調子に乗ったことを照れながら笑うサラちゃん。なかなか可愛いらしい。最初はちょっとおどおどした部分があったけど、慣れると結構気さくな性格みたいだ。言ってみれば普通。うーん、

あたしの周りにはいないタイプだね。

「ところでさ」

「はい？」

えっと、バラを持ってるから。

「バラえもんはさ」

「なんでどっかのタヌキ型ロボットみたいな名前になってるんですか私」

「じゃーバラバラマンちゃんは」

「なんで解体されてるんですか？」

「じゃ豚バラ」

「さも太っていそうな名前はやめてください」

この子のツッコミもなかなかいいね。育てるのも一興かな。

「ま、ともかく。そのバラちょっと水足りないみたい。いつも水あげる時間より早いけど、もうあげちゃおう」

「あ、そっか。今日、暑いですもんね。さすが先輩です」

「いや、ほら。声聞こえるから」

「さっきブツブツ言ってたのもお花と喋ってたんですよね。お花の声が聞こえる……なんてステキなんでしょう！」

「ステキ……ねぇ」

あたしは好きだけど、サラちゃんの思ってるようなもんじゃないと思うなぁ。だって……

並んでいる花たちの声を聞こうと耳を澄ましてみる。

『あーあっぢぃ……』『あんだよこの日差しぁよ』『やってらんねぇー』『だりぃー、思わずしおれるぜ』『俺なんかたわむぜ』『おーい、俺らの命の水はまだかぁ！？』『喉渇いてんだよこっちぁよ！！』

どこの居酒屋だよ。

「あー」

今持ってるのはジョーロだから、

「おい、ジョー！」

「誰ですか！？」

「悪いけどそのまま全部水あげちゃって。みんな催促してるわ」

「あ、はーい」

いい返事だ。そしてテキパキした仕事……

「サラちゃんってさ、なんで今までクビばっかだったの？　全然仕事に問題ないように見えるんだけど」

「そ、そうですか？　でも私はドジというか間が悪いというか……そんな感じでいつもうまくいかなくて問題を起こしてしまうんですけど」

「でもここじゃ問題起こさないよね？」

「そうですね。どうしてでしょう？」

「さぁ……」

あれ、なんか花たちが『気づいてないのね』って言ってる。どういう意味だろ。あたしたちがわからないだけで端から見たらハッキリした理由でもあるのかね？　サラちゃんがうまくいってる理由。ま、いいけど。

「ところで先輩、今日も勉強させていただいてもいいですか。ちょうどお客さんいませんし」

「いいよー。何が知りたい？」

「そうですね……確か誕生花とかあるんですよね。今月の誕生花とか教えてもらえますか？　ついでに花言葉なんかも」

「いいよ。じゃー七月の人たち手を上げてー」

はーい、と本当に手を上げるわけじゃないけど雰囲気と知識をあ

たしに伝えてくれる花たち。

「えっとね……例えばこれ、くるまゆりって言うんだけど」

くるまゆりの花言葉――沈黙、なんだけど。なんだか普通に伝えるだけじゃつまんないよね。せっかくだから現代風にしたほうがいいかな。

「花言葉は“シカト”」

「し、シカト？　無視ですか！　この百合、可愛いのに」

「うんうん、ひどいよねー。あとついでに言うと、この横にある黄色い百合」

黄色い百合の花言葉――飾らぬ愛か。

「花言葉は“すっぱだか”」

「そんな花があるんですか！？」

飾らないからさ。なにせ。

「この白い泡みたいな花。あわもりそうっていうんだけど」

あわもりそうの花言葉――恋の訪れ。

「ねーよ」

「え？　それ花言葉ですか」

「そうそう。“そんなもんねーよ”」

どうせ女らしくないさ。次いくぞ。

「この赤いラッパみたいな花。つきぬきにんどうっていうんだけどね」

つきぬきにんどうの花言葉――献身的な愛。んっと、シューみたいな感じ？　あー。

「花言葉は“踏んでください”」

「……うわぁ」

うん、大体そんな感じ。あとは……

「あ。ここにはないけどナスの花も七月の誕生花だってさ」

「ナスの！　へぇ、野菜の花にもあるんですね。花言葉は？」

ナス――真実。

「いつも一つ」

「……はぁ。それ花言葉ですか」

「うん。花言葉はいつも一つ」

や、本当は一つの花にいっぱいあるんだけどね。名探偵さんがそ

う言ってたから。

「勉強になります」

よしよし。次は何を――あ、お客さんだ。

「こんにちは」

「いらっしゃいませ。何かお探しですか？」

「うん――ああ、あった。この百合を包んでくれ」

「こ……これ、ですか？」

「ん？　ああ。彼女にプレゼントしようかと思ってね。花言葉もいいし」

「えええ！　だって、すっぱだかですよ！？」

「……は？」

「このヘンタイ！！　あなたにあげる花なんかないわ！」

言いながら花言葉“ねーよ”のあわもりそうを掲げるサラちゃん。

いやー。

おもしれー。

お花屋さんって楽しいわぁ。もっとやれー。

## カカの天下５１０「あたしたちの花屋」（後書き）

詰め合わせの話を覚えていますでしょうか？　そのときちらりと出てきた姉とサラさんのコンビ話です。

新鮮でまだ慣れてない感じですが、意外といい花屋にできそうです。いろんな意味で笑

# カカの天下５１１「あそこの花屋」

こんにちは、カカです。

今日も今日とていい天気！　特に目的もなく、一人で商店街を散策なんかしています。

さぁ、何かステキな発見でもないかな！

おお、あそこに見えるはお花屋さん。綺麗なお花に囲まれて、なんだか見たことある人が――

「……？」

「あれ、カカちゃんじゃん。やっほー」

「……？」

「どしたの。変な顔して」

「……？」

「おーい。お姉さんの顔忘れちゃったの？」

お花屋さんに。

お姉？

「ぎゃあああああああああああああああああ！！」

「どういう意味だ！？」

逃げろ！　逃げろぉぉ！！

「殺されるうううううう！！！」

「なんでだー！！　おーい、戻ってこーい！！」

私は泣きながら逃げ出した。

――そして、急いでトメ兄を連れてきてみた。

「あら、カカちゃん。よくわかんないけど落ち着いた？」

「……？」

「そしてどったの弟君。さっきのカカちゃんと同じ顔して」

「……？」

「もしもし？　暑さにやられちゃったのかな……ジョーロの水でよければ飲む？」

「……？」

トメ兄は大きく息を吸って――さん、はい！

「ぎゃあああああああああああああああああああああ！！」

「あんたもか！？」

「こ、殺される、殺されるぞカカ！！」

「だよね！？」

思いっきり頷きあう私たち！

「だからなんでさ！？」

「見てはいけないものを見てしまった！！」

「まったくその通り！」

「あんたらは姉をなんだと思ってるんだ！？」

私とトメ兄はもう一度頷きあい、同時に言った。

「「少なくともお花とは合わないモノ」」

「なんて失礼な！！　あたしとお花のどこが合わないってのさ！」

どうやらお姉は身の程をまったくわかっていないらしい。ここは思い知らせてやる必要があるみたいだ。

私とトメ兄はアイコンタクトを交わし、三度頷いた。

「答えろカカ！　花といえば再生の象徴！　姉は！？」

「破壊の象徴、大怪獣」

「花を女の子に例えるなら、姉は！？」

「ムキムキまっちょのスキンヘッド」

「花を見ると笑みがこぼれる！　姉を見ると！？」

「泣き叫ぶ」

「花は癒される！　姉は！？」

「疲れる」

「花は可愛い！　姉は！？」

「つえぇ」

「花は素晴らしい！　姉は！？」

「ヤベェ」

パン！　と片手を打ち合い、ビシッと同時にお姉を指差す！

「「どうだ、まいったか！？」」

「あっはっはー、素晴らしくムカつくコンビネーションだなあんたらコノヤロ」

だって……ねぇ？　わかるでしょみんな。

「あんたらがなんと言おうと、あたしがここで働いてる事実は変わんないよ」

「くそう……世界の終わりか」

「言いすぎだよあんたら……」

妥当なことしか言ってないと思うけど？

「あら、トメさんにカカちゃんじゃないですか」

――と、騒いでるうちに花屋さんの中からサラさんが？

「サラさん！　姉が、姉が花屋です！！　どうしましょう！？」

「トメさん。気持ちはわかります。私もショックでした。でもいくら残酷でも真実は真実なんです。受け入れましょう」

「「サラさん……！」」

そうだよね！　サラさん良いこと言う！　私とトメ兄は泣きながら頷いた。

「むぅ……あたしが花屋さんだとそんなに変かなぁ」

あ、言いすぎたかな。落ち込んだ？

「ま、いいや。サラちゃん、仕事しよー」

余計な心配だったみたいだ。さすがはお姉。恐竜に踏まれてもビクともしない頑丈さだ。身体も心も。

「はーい。何しましょうか？」

「そこの花材切っといて。フローリストナイフそこに置いてあるから」

「わかりました」

「あたしはさっき出た分のリボン、作り置きしとくね」

おお……なんか普通に仕事してる。

「姉とサラさん、か。よくよく見るとベストコンビだな」

「そう？　凸凹にも程があると思うんだけど」

「いいか、カカ。サラさんはいろんな職を転々としてきた。それは多分、生来のドジと運の悪さ、不器用さによるものだろう。でも――よく見てろカカ」

見る？　サラさんを見てればいいのかな。

ナイフで、えっと、切り花してるのかな？　でも手つきがなんだかあやし――あ。サラさんの手が滑っ――

「ぱし、っとな」

「ふぇ、カツコさん？」

「気をつけなー」

「あ、ありがとうございます」

滑った手を、お姉の手が受け止めた？　で、でもお姉――

「よし、できた！　これを」

あ、サラさんが転ぶ――

「がし、っとな」

「おとと」

「気をつけなー。水撒きした後だから滑るよ」

「はーい」

転びそうになったサラさんを、お姉が腕を掴んで支えた。でも、でもお姉――

「見たか？　あの通りサラさんはドジだ。ナイフが滑ったときは手を切るとこだったし、転んだときはあのまま傍に置いてあるでかい鉢に激突しただろう。見た感じ、あの鉢を倒せばドミノ倒しのように店中の花が倒れる」

「それを、お姉が防いだ？」

「そう。サラさんはドジだ。しかし姉の運動能力はそれを遥かに凌駕している」

「……お姉。さっきから離れた位置で仕事してるのに、いざという時は一瞬でサラさんの隣に移動してるよ？」

「ああ。あんなフォローは姉にしかできん。だから言っただろ？ベストコンビだって。これなら致命的な失敗はまずしないだろうな」

おお……職を転々としていた生活もついに最後になるのかな！？

「それにしても……つくづくお姉ってバケモノだね」

「毎度思うことだがな」

「なのに、なんでトメ兄は普通なの？」

「姉があああなる原因になった訓練を、僕が受けてないだけ」

「なんで受けなかったの」

「そこは僕の意思とは関係ない話だよ。今度母さんにでも聞いてみな」

「ふーん」

そういえば私も普通だよね。お姉に色々教えてはもらってるけど、あんなにバケモノじゃないし。

アレはああいうもんだと思って気にしなかったけど。

お姉はどうして、ああなったんだろう？

今度、聞いてみよう。

## カカの天下５１１「あそこの花屋」（後書き）

前回の続き、ですかね。端から見た二人の花屋さんはどんな感じか……ぎゃー！　って感じです笑

でもコンビ的にはご覧の通り、最適な組み合わせだったりします。サラさんはドジを。姉はその修正にかまけて暴走を抑えることができます。

でも、まぁ。

カカたちにバレた以上、この花屋さんでも何かやるらしいですけどね、姉は。

**カカの天下５１２「この夏は熱い？」**

「んじゃホームルームはこれで終わりだな」

はいはい、さっさと号令してよ――おっと、いきなり汚い言葉でごめんなさい。カカです。

テンカ先生が今言ったとおり、今日の学校はもう終わり。楽しい楽しい放課後タイムが待っているのです。

「っと、忘れてた。もう一つ伝えなきゃなんねぇことがあるんだ」

だというのにこの先生は……何を言い忘れたのか知らないけど早く、早く！

「んっとな、てめぇら知ってるか？　隣街で毎年八月に大きな祭りやってんの」

それなら知ってる。多分みんなも知ってるだろう。私たちの街のお祭りよりもかなり賑やかなものらしい。私は毎年地元のお祭り行くから、そっちはあまり行かないけどね。それがどうしたんだろ。

「今年のオレたちんとこの祭りは、やたら長い梅雨の天気のせいで中止になったよな？　だから隣街の祭りに行こうと思ってるヤツらは多いと思う」

あ、それいいかも。やっぱり年に一度はお祭り見に行きたいしね。みんな誘って行ってみようかな。

「で、だ。その祭りではな、一般人が自由に参加できるイベントがある。ステージに上って、制限時間内なら歌でも何でもやって構わないってヤツだ。てめぇらの中で三組、これに出ろ」

へー。

ふーん。

……は？

「あんだよてめぇら、みんなポカンとして」

「せんせー。意味わかりませんよー」

私たちを代表してサエちゃんがツッコんでくれた。そうそう。唐突すぎて何が何やら。

「意味っつってもなぁ。参加者募集のやつに適当に送ったら枠が三つも取れちまったからよ、てめぇらを出させようと思っただけだぞ？」

「えっと……なんでそんなの送ったんですかっ」

「なんとなく」

「なんで三つも取れるのよっ」

「確実に取りたかったから周りのヤツの名前を借りたんだよ。ほれ、懸賞とかでよくやるだろ？　そしたら三つとも取れた」

「なんとなく送るのに確実に取りたいってどういう意味ですかっ！」
「なんとなくってそーゆーもんだろ。意味なんてねーよ」
うーん……私が言うのもなんだけど、先生って本当に自由だよね。
「それで話を戻すぞ。てめぇらの中で適当に三組、チームを作れ。
そうだな……とりあえずカカサエサユカは出ろ」
命令系なのが気に入らなくて、私は席を立った。
「なんでですか」
「オレが見てーから」
「そんな理由じゃ納得できません」
ただちに私が逆らえない、もしくは面白い理由を言いなさい。
「んじゃ、三人ともが期末テスト悪かった罰ってことにしよう」
「職権乱用だ！」
「職権も金も使うためにあんだよ」
なんつー教師だ。
「せんせー。私はテスト悪くなかったと思うんですけどー」
「あぁ、たしかにサエは全教科、平均点は超えてたな」

「でしょー」

「あぁ……全教科７７点だなんてふざけるにも程がある。てめぇ点数欄を見ながら狙ってやっただろ？　本気でやれば１００点とれたな？　ふざけた罰だ、おまえも出ろ」

「ラッキーセブンなのにアンラッキーとはこれいかにー？」

「７が一つ足りないからだろ。さて、一組は……そうだな。イチョウ。おまえ出ろ」

「わたくしですか！？　で、でも期末テストは」

「全部１００点取られるとなんかムカつくんだよ、教師としては」

「そ、そんなぁ」

「ついでに他のクラスだが、タケダも全部１００点だから命令しといた。１００点仲間同士、イチョウとチームでいいだろ」

「うぅ、先生の命令とあらば致し方ありません。わかりまし――あ、あら？　どうしましたインドちゃん？」

おや、インドちゃんがイチョウさんの胸倉掴んだ！？　なに、ケンカ？

「じー……」

「え、ええと？　インドちゃん？」

「じー……」

「もしかして……一緒に出たいのですか？」

「こくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこく」

「そ、そんなに首を振ると取れますよ！？　わ、わかりました。一緒に出ましょう？　えっと……アヤさん？」

「ハイハイ、私にも出ろって言うんでしょ？　わかったわかった、あんたら二人放っておけないもんね。ニッシー？」

「僕もか……やっぱし」

どうしたんだろインドちゃん。人前に出るのとか苦手そうなのに……なんかあったのかな。

「さて、順調に二組決まったわけだが……もう一組どうすっか」

はーい、と私は手を上げた。

「ん、カカ」

「テンカ先生が出ればいいと思います」

「あん？　なんでだよ」

「私が見たいから」

「……あんな。そんな理由じゃ納得できねぇぞ。ただちにオレが逆らえない理由、もしくは面白い理由を言え」

さっき私が思ったのと同じこと口にしてる。なんか似てるのかな私たち。

「テンカ先生がこの前、お見合い結婚を回避できたのは誰のおかげですか？」

「んぐっ……い、いや、あれはトメのおかげであって」

「そのトメは誰の兄ですか？」

「それは」

「そもそもトメ兄だけだったら危なかったんじゃありませんでしたっけ？」

「……あぁもー、やりゃいいんだろ、やりゃ」

かくして、八月にあるお祭りのイベントステージに参加する三組がここに決まったのだった。

「何しよっかー」

「わ、わたしはするなんて一言もっ」

「まーまーサユカン。手芸部の一環だと思って――あ、それいいかも」

こんな私たち。

「ところでインドちゃんさ、あんだけ勢いよく頷いてたからには提案あるんだよね」

「……うぅ」

「提案じゃなくて眩暈があるみたいですね。頷きすぎて」

「うまいなイチョウさん」

こんな三人。

「しっかし一人で出るわけにもなぁ……またトメにでも頼むか」

こんなテンカ先生。

何をするかは、まだ全く決まっていない。

## カカの天下５１２「この夏は熱い？」（後書き）

サブタイトルの通り、果たして熱くなるのでしょうか。
変になるのでしょうか。
グダグダになるのでしょうか。
すべては私の八月の気分次第！（いつものこと）

夏祭り編、ちょこっとずーつ進めていきます。

## カカの天下513「サユカの任務、浮気編!?」

こんにちは、サユカです!!

「ふー、ふー……なに？」

「あ、いいえ、なんでもっ！」

熱いお茶をふーふーしてるトメさんかぁいい……あ、状況説明もせずにすみませんっ。えっとですね、今トメさんとお茶してます！　いつもの甘味処でデートなのですっ！　七夕に書いた願いごと、早速叶ってよかったぁっ！

「――しっかしお祭りねぇ。テンもよくやるな……うちの妹どもは一体なにすることやら」

「ふふ、テンカ先生はトメさんも誘うつもりみたいですよっ」

「マジかい。僕だけそんなことするのヤダなぁ。キリヤでも誘うかね」

「うわぁ。一体どんなお祭りになるのか、すごく楽しみになってきました！」

「サユカちゃんは何するんだろうね」

「……急に楽しみじゃなくなってきました。わたし、あの二人に遊ばれること確定だと思いますし」

「それが楽しいんだろ？」

「うぅぅぅん……そう、ですけどぉぉ」

そんなことより、トメさんとこうして雑談してるのが何よりも楽しいですっ！

そう言えたらどんなにいいかなぁ。でもわたし、今のまんまで充分幸せです。なので神様、どうか邪魔とかしないでくださいねっ。

「オイこらにーちゃん！！　俺のサユカに何してんだ！？」

神様コノヤロウ。

「んっと、君は？」

「サユカの婚約者だ！！」

……はぁっ？　な、何言ってるの、この突然現れた男の子は！？

「またか」

「またとか言わないでくださいよトメさんっ！　そりゃ最近テンカ先生のがありましたけどっ」

「あ、ああ。ごめん」

「とにかくっ！　わたしはあなたなんか知りませんっ。わたしはトメさんと結婚するんだから！」

「オイ。まだ決まってませんよ？」

ハッキリと断言してその男の子を睨みつける。多分同い年くらい、茶色の短髪で帽子をかぶっていて、色黒な顔立ちは整っているし格好いいと言えなくもない……けど、こんな子見たことない！

「そんな……俺に結婚しようって言ってくれたじゃないか！」

「いつよっ？」

「この前の安全日だよ！」

「ぶっ！！」

「と、トメさん？　どうしたんですか突然お茶を吹き出して……ところで安全日ってなんですか？」

「い、いや。サユカちゃんはまだ知らなくていいこと」

はてな？　安全な日？　逆に危険な日って何かしら。よくわからないわ。

「そこの君？　言い方間違ってないか。大安の日とか」

「ん、そうかも。えっと……とにかくこの間、廊下で教頭がくしゃみした日だよ」

「いつだよ！？」

「あの日ねっ」

「わかるんかい！？」

だって珍しかったんだもんっ。

「でも、あの日にそんなことなかったわよっ。教頭が近くにいたタケダ君になぜか『バカモン』って怒鳴っただけでっ」

「タケダ、完全に八つ当たりされてる……照れてたのか教頭？」

「トメさんっ！　そんなとこまでツッコまなくていいんですっ！　大事なのは、わたしがこんな子を知らないってことですっ」

「や、わかってるよ。普通はさ、こういう同じくらいの歳の男の子と仲良くなるもんだし」

信じてくれてないし！！　わたしが本当に好きなのはトメさんだけなのにっ！　それなのに、この男の子……くびり殺してやろうかしら。

「な、なんだよその殺意に満ちた目は。これはサユカのために言ってるんだからな！　こんなサユカの気持ちもわかってないような男に！」

「なによっ！　トメさんならわたしことを隅から隅までわかってるわよ！」

「さ、サユカちゃん。その言い方はまずいからやめて！」

「ほら、自信なさげじゃん！　他にもあるぞ。例えばこの間の誕生

日！　この男はサユカに何をあげた？」

「ぬ、ぬいぐるみよ」

「そう、ぬいぐるみ！　すでにサユカの家はぬいぐるみだらけ。部屋に収まりきれなくなったぬいぐるみは、お風呂場やトイレにも住み始めてもう大変。それなのにぬいぐるみを追加するなんて、あんた鬼か！！」

なんで君がそんなこと知ってるのよっ！　その、確かにそうだけど！

「サユカちゃん……あのプレゼント、迷惑だったかな？」

「そ、そんなことありません！　わたし、ちゃんと名前もつけて部屋で一緒に寝てますっ！」

……ちょっと、なぜ口を押さえて吹き出すのかしら二人とも？

「可愛……い、いや。とにかく！　サユカにはもっといいプレゼントをすればよかったんだ！　名前をつけるのも苦労してるはずだし！」

「勝手なこと言わないでよっ！　わたし、名前をつけるのに苦労なんか微塵もしてないわっ！」

「じゃあ聞くけど、この人にもらったぬいぐるみの名前は？」

「……トメ」

「さ、サユカちゃん……ちょっと、恥ずかしいな」

「……38号」

「多っ！！　ちょ、僕38人もいんの！？」

「確かに名前に苦労はしてない……」

「い、いや、でもっ！　トイレとお風呂に住んでるトメ8号とトメ22号は、いざという時ちゃんと後ろを向かせてますからっ」

「聞いてないしっ！　ていうかそこにいるのもショックだし！　あとロボットみたいだし！！」

「だ、だって、いつもトメさんと一緒にいたくて……」

「ふん、サユカ。よく聞け。そこまで思ったって結局意味はなくなるんだぞ？」

「ど、どういう意味よっ」

ていうかあんた誰なのよホント。

「いいか？　この前に先生のお見合いがあっただろ。それをこの男が阻止した……漫画や小説でそんな展開になって、二人が結ばれなかったことなどない！！」

がーん！！

そ、そういえば……わたしが持ってる少女漫画も恋愛小説も、そ

んな場面があったら間違いなく二人に愛が芽生えて……そして本当に結婚式をあげて……あぁ、やめて、指輪なんか交換しないで、誓いのキスなんかしないで……ブーケを受けとったそのおっさんは何者……髭がもじゃもじゃ……あああああ……！

「うわあああああああああああああんっ！！　その指落とすー！！　その唇ちぎるー！！　先生なんかウェディングケーキのロウソクとでもキスしてればいいのよぉぉぉぉぉぉぉっ！！　髭をもじゃもじゃ生やしてロウソクの火に引火して燃えればいいのよぉぉぉぉぉっ！！」

ズドドドドドドドドドドドドドドドド！！　と砂煙を上げながら去っていくサユカちゃんを見送りながら、僕――トメはため息をついた。呆れたからだ。

「……なぁ、そこの男の子」

「おーおー、久しぶりに見たなーサユカンダッシュ。やっぱこうじゃないと」

「これが見たかったからそんな格好してきたのか？」

「うん。だって最近のサユカンつまんないもん」

「わざわざご苦労なことで……ま、子供は元気なほうがいいのかもしれないけどな」

本当に呆れて、もう一度ため息をつく。

――まぁ、こいつの正体なんぞ始めから気づいていたのだが。ついノッてしまってサユカちゃんには悪いことしたかな。

「あとで謝っておけよ？　カカ」

「んやー。おもろかったから、黙っておいてまた男装するのもアリかと」

「髪やら肌の色まで変えて……化粧のうまい友達でもできたか？」

「うん、イチョウさんって言ってね――」

呑気に雑談しながら、一つ改めて思ったことがあった。

サユカちゃんって……激しいよね、いろいろ。

## カカの天下５１３「サユカの任務、浮気編！？」（後書き）

ほのぼの狙いなんだかメチャクチャ狙いなんだかよくわからん話になりました。まーよくあることですが笑

サユカンの暴走が最近少ないなーと思って書きました。今日のもまだまだ少ないです。つまらないです。なので、これからも何かしらで暴走させたいと思います。

そうそう、ホラーの短編を書いてみました。「小説家になろう」の企画、夏ホラーの参加作品です。カカ天とは雰囲気が全っ然、違いますが、まぁホラーなので笑

もし興味ある方いましたらご覧ください＾＾

タイトルは「箱の中の黒猫」です。

# カカの天下５１４「ぷち飲み会　いっかいめ」

こんにちは、カカです。

最近ますます暑いですね。こんなときにはやっぱりこれです。

「乾杯！」

「かんぱーい」

んぐんぐ、くはーっ！

「たまりませんな、サエさんや」

「しみますなー、カカさんや」

「まま、飲んで飲んで」

「おっとっとー」

瓶を傾けてサエちゃんのコップに注いであげる。うーん、今まで見てるだけだったけど、なかなか楽しいねーこれ。

状況を説明しますと――時刻は夕方。トメ兄は残業で遅くなるというので、うちの居間でサエちゃんと二人で飲んでるわけです。

オレンジジュースを。

「それではおつまみの登場です！　出でよポテチ！」

「いえーい」

ぱりぽりつまみながら、オレンジジュースをクッと……さっきも言ったけど、たまりまへんなー。

「カカちゃんも飲んで飲んでー」

「あ、どもども。おとと。ところで最近どうですかサエさんや」

「最近ですかー、そうですねー。学校の用務員さんと仲いいですねー」

「ほほう！　それは初めて聞きましたぞ。面白い人なのですか？」

なぜか敬語なのは気にしないでね。きっと酔ってるんだよ。雰囲気に。

「うん、面白いよー。なんだか知らないけど、私と会うたびに土下座するのー」

サエちゃんたら、こあーい。

「そっか。きっとその人、星座が土下座なんだね」

「うまい！　座布団一枚……は近くにないからハイ、ポテチを一枚あげよー」

「かたじけない」

「ハイあーん」

「ぱく」

あむあむ……うーん、サエちゃんに食べさせてもらったポテチは格別に塩味が効いてるね！　……汗ついたわけじゃないよね。

「ところでサユカちゃんはー？」

「ん、サユカンはね……ちょっとトメ兄の誤解を解きたいとか言って、今ごろトメ兄の会社近くで待ち伏せを」

「犯罪ちっくー。でも誤解って何したのかなー？」

「……えっと」

「その顔から見るにー、カカちゃんがちょっかい出したねー？」

「ぐ」

「ふむふむ、トメお兄さんとサユカちゃんが仲良くなってくのが寂しかったとー？」

「私から言えることは一つだけだ」

「なんぞやもしー？」

「注げ！」

「はいはい、飲んで飲んでー」

差し出したコップにこぽこぽ注がれる液体。それを一気飲み！
っぷはー！！

「飲むといろいろ忘れられていいね！」

「うんうん」

「よし、ここらでシュークリーム、いくか？」

「いこーいこー、シューさんクリーム」

「途端にまずそうに見えるからそれは言うな！　ではさらに、新たに用意したコーラをば」

「おお、違うジュースに変えるんだねー。なんて贅沢！」

「私たちって大人だよね！　ささ」

「あ。どーもー」

新しく持ってきたコップに注いであげる。

「おおー、黒くて、しゅわしゅわで」

「まるでサエちゃんのようだ」

「私、しゅわしゅわー？」

「うん。なんとなく。いろいろ溶かす感じがそれっぽい」

「よーし、じゃー改めて乾杯だー！」

「サエちゃん汁で乾杯だ！」

「汁とか言うなー！」

言いつつもカチン、とコップを合わせる。

「たしかに汁だと汚いイメージだよね。じゃあ、サエ液？　略してサ液？」

「サエキって誰ー？」

「さー？」

内容の薄い会話をしながらシュークリームをつまむ。

「んー、夕飯を考えずにお菓子食べてジュース飲んで……ほんと贅沢だ！　そして大人はほんとズルい！　私たち子供はこんなことして大人に見つかったら文句を言われるというのに、大人にはそれがない！　不公平だ！」

「でもトメさんはそんなことしないよねー」

「甘い！　このシュークリームのように甘い。トメ兄だって人様に見せられないことしてるんだよ」

「たとえばー？」

「朝、起きたときに目覚ましを止めようとぱしぱし叩くんだけど、目覚まし時計じゃなくて枕を叩いてたり」

「……おー」

「ちょーウケる！　とか言いながら床をバンバン叩いてうずくまってる風にしか見えなかったよ。しかも気づいた後、枕にごめんなさいとか謝ってるし。ちょーウケる！」

「えっとー……」

「あとね、起きたかと思ったら上半身を起こしたまま寝ちゃって、そのまま倒れて壁とか床にゴンって頭にぶつけたり」

「ええっとー……」

「ほんと、信じられないよねー。ん、どしたのサエちゃん」

「飲ませろー！」

「おう、なんだか知らないけどいくらでも注ぐよ！　飲め飲め！」

「世の中ふざけんなーってことでいっぱいだー！　んぐんぐー」

「いい飲みっぷりだね！　あとね、寝ぐせがすごいときのトメ兄はすごいよ。ボーンって跳ねてて、境目がハゲみたいなの！」

「おー！　ハゲ万歳！」

「よくわかんないけど酔ってるねサエちゃん！　いえーい。もっと

飲め！」

「いえーい。ハゲも飲めー！　ハゲはどこだー！」

「多分老人ホームあたりにいっぱいいるよ！」

「じゃあ今からいっちゃおっかー？」

「場所知らないよ！」

「なんてことだ！　乾杯だ！！」

「おお乾杯だ！　とにかく今日は飲むのだ！」

「ただいまー……なんだおまえら」

「おお、お帰りハゲ兄」

「お帰りなさい、ハゲお兄さん」

「おんしも飲むか？　いや飲め！　私のコーラが飲めんのか！？」

「飲めんのかコラー！！　老人ホームかおまえはー！」

「いろいろとあるがもう一度言わせてくれ。なんだおまえら」

酔っ払い気分って楽しいね。

またやろう。

## カカの天下５１４「ぷち飲み会　いっかいめ」（後書き）

カカとサエちゃんがだらだらとジュースを飲みながら喋るだけの話です。

これが意外と心地いい。

……またやります。ええ。

## カカの天下５１５「クララＶＳ姉娘」

「……どうしよう」

困った。あ、どうもトメです。

何が困ったかというとですね、たった今、姉が突風のように通り過ぎて行きまして……こんなモノを置いていったのです。

「でんしゃー」

や、電車なんか置かれたら我が家は潰されますけど、違います。

「けいさつー」

そんなもん置かれてたまるか。

「う？」

呑気に僕を見上げるこの子……タマを置いていったのです。そして都合の悪いことにカカは不在。

やっぱり僕が面倒見るしかないのだろうか。四時間ほどで戻ってくるとか言ってたし。でもこの子、手ごわいしなぁ。一人じゃきつい。

「誰か助けてくれないかなぁ」

「わかりました！」

「うぁびっくりした！？」

隣から突然声がして思わず仰け反ったけど……あれ？　この子ってたしか。

「そんなに困ってるならクララが助けになりましょう！」

「あぁ、クララちゃんだったね。でもいつの間に……」

「クララは正義の味方なのです！　困っている人の前にいきなり現れるのが趣味なのです！」

「へぇ。人助けが趣味なのか」

「いいえ！　現れるのが趣味です。手伝うかどうかはわかりません！」

「なんだそれ、単なる野次馬か。ま、いいけど……じゃあ僕のほうは手伝ってくれるん？」

「はい！　カカにはお世話になってますからトメも助けてあげるです！　それでクララ、何すればいいですか？」

「ああ、この子の面倒を見ててほしいんだけど」

クララちゃんはそこでようやくタマちゃんに気づいたようだ。足元でフシギそうな顔をしているタマちゃんを見て、クララちゃんはなぜか叫んだ。なぜだ。

「こ、ここここ、この子は!!　あの有名な、赤んぼうというやつなのでは!?」

「あー、うん。まぁ」

赤んぼう、っていう歳ではなくなってきてるけどな。喋るようになってきたし。

「でもどこも赤くないですよ!?」

「えっと……血は赤いぞ?」

「見てみます」

「見んでいい!!　何する気だ!?」

な、なんかカカと違うタイプだけど、この子もかなり危なっかしいよな。

「ほら、ほっぺたとか赤いだろ?　そんな感じでどうよ」

「赤いというよりピンクです……」

「まぁ、そだね」

「じゃー赤んぼうじゃないです。ピンクぼうです」

「得体の知れない棒が生まれたな」

アイスにでもありそうだ。

「なんにせよ、この子の名前はタマちゃんだよ」

「タマ！　ボールですか！」

「や、あのね」

「ピンクボール……略してピンボール……はっ、これが噂に聞くパチンコというやつなのでしょうか！？」

「これってどれだ」

「タマを弾いて転がせばいいのですね」

「それ虐待！」

どうしよう。

タマちゃんだけでも参ってたのに、問題児が二人になってしまった。

「では普通に遊べばいいのですか？」

「あ、うん。そうそう」

「じゃあこれ持っててください」

「ん、なにこれ、国語辞典？」

「はい。おねーちゃんにもらいました。最近はそれで世の中のこと

を勉強しています」

「へぇ……これ読んでるのか」

緻密なんだか大雑把なんだかわからない勉強だ。

「赤んぼうの意味もそれで調べました」

「ほぅ。ちなみに赤んぼうの意味は？」

「下まぶたを指で下げ、裏の赤い所を見せること」

「それ隣！　『赤んぼう』の隣にある『あかんべえ』の説明！」

「なんと！　道理でタマが赤くないはずです！　クララしょっくです！」

この調子で他の言葉も間違えて覚えてたら……怖いな。

「さ、タマ？　クララはクララですよ。言ってみるです」

「うー？　くら？」

蔵：家財や商品などを火災や盗難などから守り、保管しておく建物。

「違います、クララです！」

「くあん？」

句案：文章や歌・句を作るのに、あれこれと考えること。

「だから、クララです！」

「だからー？」

だから：それゆえ。そんなわけで。

「クララです！」

「くーらー？」

クーラー：涼しい。夏の神様。

「クララですってば！」

「くー？」

くー：多分なんかの鳴き声。可愛い。

「ク、ラ、ラ！！」

「く、だ、く！」

砕く：姉。

「むぅー……トメ！！」

「とめー」

トメ：僕のこと。国語辞典って勉強になるなーとさっきからめくっている。後半の単語の説明は適当な解釈だから本気にしないように。でも姉ってなんか砕いてそうじゃね？

「トメ！　聞いてるのですか？」

「ん、ああごめん。ちょっと遊んでた……なに？」

「この子、頭悪いです！　クララの名前をまったく覚えてくれません！」

「あー、まぁ子供だからさ。遊んでるんだよ。ね、タマちゃん」

「おー！　遊んでるお！」

「このお姉ちゃんの名前は？」

「くらたひゃくぞう」

「どちら様ですか！？　クララしょっくですー！！」

「ああ、待ってくれひゃくぞう！」

行ってしまった……まぁ問題児が一人減ったからよしとしよう。

「それにしても、くらたひゃくぞう？　そんなもんどっから――」

僕は先ほど無造作に置いた辞書が開いていたことに気づいた。そしてそれをタマちゃんが読んでいることにも。

「……そういえばタマちゃんって、文字を覚えてるんだっけ。まさか」

あった。

倉田百三：劇作家・評論家。広島県生まれ。戯曲「出家とその弟子」により求道的な文学者として出発、白樺派と交流を深め社会問題に関心を寄せたが晩年は超国家主義に傾いた。戯曲「俊寛」、論文集「愛と認識との出発」など。

「愛と認識との出発……かぁ」

確かに子供の言葉を認識するには愛が必要だなぁ……僕はそんなよくわかんないことを思いながら、振り出しに戻ったけど子守どうすっかなーなどと頭を悩ませていた。

「辞書に書いてないかな？」

たま：弾丸。

「こりゃどうしようもねー」

撃たれたら疲れるまで止まらないのだ、きっと。

## カカの天下５１５「クララＶＳ姉娘」（後書き）

トメ、クララ、タマちゃんという……またもや珍しい組み合わせを書いてみました。

いろいろと会話が妙な感じに広がって書いてておもしろいです。

いろいろ試してみるもんですな。

## カカの天下５１６「彼女が一番怖いものは――怖いもの」

「暇だねー」

「暇よっ！　それに暑いわ」

「悪かったね、クーラーも遊び道具もない家で」

居間でぐったりしているサエちゃんとサユカンに謝りつつ、別に悪いとは思ってないカカです。なぜか？　クーラーがなくても遊び道具がなくても、私にとっては二人さえいてくれればいいのです。それだけで天国なのです。

「じゃー暇つぶしに怖い話でもしよっかー」

ズザッ！！

「おお、カカすけが目にも留まらぬ速さで廊下にっ！！」

……こないだ見た花屋さんでのお姉の動き、無理かと思ってたら意外とできるもんだ。

「じゃ、サユカちゃんからいこっかー」

「涼しくなるしいいかもね。ちょっとカカすけ、こっちきなさいよっ！」

さっき二人さえいれば天国だと思ったけど訂正。今だけ地獄だ。居間だけに。

「天国とか地獄とかー、幽霊話を聞く気満々じゃーん」

「はっ！？　サエちゃんいつの間に隣に！」

「ささ、怖い話聞こうねー。夏の風物詩だよー。おいしいよー」

「やーだー！！　やだやだやだー！」

「ほら、ワガママ言わないの」

「ママー！　ママー！！」

「……ワガはどこいったのかしら？」

「サユカちゃん、ワキガなんかどうでもいいから手伝ってー」

「へっ？　あ、はいはい――誰がワキガよっ！？」

じたばた暴れるけど暴れすぎてサエちゃんを殴ったりしたらダメだし――とか考えてるうちに捕まってしまった。

「うぅ……うぅ……どうしようどうしよう。助けてママ！！」

「完全に気が動転してるわね……」

「カカちゃん、落ち着いて。カカちゃんの誕生日は？　血液型は？」

「助けて誕生日！　なんとかしてよ血液型！！」

「「ダメだこりゃ」」

なによぅ、だって怖いのダメなんだもんよぅ。

「大丈夫だよーカカちゃん。そんなに怖くないから」

「そうそう、全っ然、これっぽっちも怖くないから」

「……二人とも、語尾に小さく『私は』ってつけなかった？」

「「……」」

「なんで目をそらすの？　どこ見てるの？　何見てるの？」

「「幽霊」」

「帰る」

「冗談よ冗談っ！　ごめんカカすけ、わたしが悪かったっ」

「そうそうー、サユカちゃんが全部悪いのー」

「オイ」

「だから機嫌直してー！　殴っても蹴っても何してもいいからー！
サユカちゃんを」

「だからオイ」

「やだ。帰る」

「落ち着いてー！　帰るも何もカカちゃんのおうちはここだよ！！」

「オイ――あ、ツッコむとこなかった」

そんな大騒ぎの末……私はもう一度捕まるハメになりましたとさ。

「よし、じゃサユカいきまーすっ！」

「わー、ぱちぱちー」

「うぅ……あ、あんま怖くないのお願いね？」

心の底から怯えながら言うと、サユカンはにこやかに笑って頷いてくれた……けど、なんていい笑顔だろう。あの嬉しそうな笑顔が逆にこあい。

「わたしがするのは呪いのタクシーっていう話よ」

「呪いなんかいいよぅ……なんで祝いじゃいけないんだよぅ」

「それじゃ怖い話になんないでしょっ！　いい？　えっと――とある市内に一つのタクシーがあったの。そのタクシーには霊が憑いていて、たまに降りるお客さんの耳元でいろいろ囁くの……大抵の人は空耳だと思うらしいけどね」

な、なんだか、これはそんなに怖くないかも……いきなり霊とか言ってるし。

「それでね、ある日の深夜、そのタクシーが一人のお客さんを乗せ

たの……酔っ払いだったわ」

「うんうんー」

む、怖い部分に移るか……？

「そのお客さんは吐いたわ。そして幽霊はその耳元で呟いた――汚いわよアンタ」

どうしよう。本当に怖くない。

「それで終わりじゃなかったわ。またある日の深夜、そのタクシーが一人のお客さんを乗せたの……酔っ払いだったわ」

今度こそ、怖い部分……？

「お客さんが降りる瞬間、幽霊は呟いたわ――アンタお釣りもらうの忘れてるわよ」

「いい人だねー」

こわくねー。

「おかげでそれに気づいたお客さんは、運転手さんにお釣りをもらおうとしたわ。そしたら運転手さんは言った――じゃかあしいコラァ！　降りるんならはよ降りんかい！！」

「こわい人だねー」

……え、怖い部分って、これ？

「そんな勝手なことを繰り返した運転手さんに幽霊は呆れて、『ええかげんにしなさい』とその人を呪い殺してしまいましたとさ。ちゃんちゃんっ」

えっと……

「どうよ、カカすけ。怖くなかったでしょっ？」

「あー、うん。たしかにあんまし怖くなかった」

「よし、掴みはおっけー。ナイスサユカちゃん。カカちゃんもノッてきたところで私がいきまーす」

「さ、サエちゃん！　その、お手柔らかにね？」

「うんうん。ではー、ここに取り出したるは普通のノート。まずはここに地図を書き込みますー」

サユカンと二人でサエちゃんの手元を覗き込む。

「私が今からするのはねー、呪いの人形が住んでいると呼ばれるお屋敷の話だよー」

「へぇ。で、サエすけは何を書いてるのよ」

「そこの地図だよー」

地図かぁ……いちいちそんなの書くなんて具体的だなぁ……そんな場所が近くにあったら私、もうそこに近づけないよ……

「よし、大体書けたー」

「呪いの人形が住んでるのはどの家？」

「これー」

これかー。

「ってここ私んちじゃん！？」

「バレたかー」

「バレるに決まってるよ！！　まったくもう、嘘ばっか言って」

「ごめんごめん。実はこの家からちょっと移動するんだよー」

……え、結局は近くにあるってこと？　おそるおそる地図を覗き込む。

「この家から道に出て、ここを右に行くのー」

う、そこは入ったことない道。

「そしてここを右」

そこも入ったことない……

「そしてさらに右へ行ってしばらく行くと――この家だよ」

この家かー。

「って一回りして結局私の家じゃん！！」

「バレたかー」

「……サエちゃん。私のことバカだと思ってる？」

「可愛いと思ってるー」

「ならよし！！」

「……カカすけ、あんたそれでいいのか」

いいのだっ！　嬉しいから！

「ま、いいけど。ところでサエすけ？　カカすけをからかうのはこのくらいにして、本題いきなさいよ」

「んー？　私、嘘なんか言ってないよ」

「へ？　だって私の家……ここでしょ？　ここに呪いの人形なんかあるわけ」

「あるよー」

「……なんで知ってるのよっ」

「この家に住んでる幽霊さんに聞いたから。ほらー、いつか言ったでしょ？　菊の花の着物姿の、髪の長い、包丁持ってる女の人」

わ、忘れてた……！　そういえばそんなこと言ってたっけ!?

「さ、サエすけって見える人だったわね、そういえばっ！　じゃあ呪いの人形もこの家のどこかに？」

「あ、あるわけないよ！　あるわけない！　大体さ、そんな人形が本当にあったら私がすぐ気づくし！」

「そういえばそうよね。わたしたちも結構出入りしてるけど、そんなの見たことないしっ」

「うーん、隠し場所とかどっかに無いかなー」

「ないない！　絶対ない！　この家に住んでる私が言うんだから間違いない！！」

こうして、なんとか二人には諦めてもらった。

私はこの家に住んでいて、そんなあやしい人形なんか見たことがない。

……でも、一つ。心あたりが。

両親用の部屋だと聞かされ、私は結局入ったことがない、開かずの間。

父の――忍者の、部屋。とてつもなくあやしい。

あやしいけど……それを確かめる勇気は私にはない。

はぁ……今夜一人でおトイレいけるかなぁ……

助けて誕生日。なんとかしてよ血液型。

## カカの天下５１６「彼女が一番怖いものは――怖いもの」（後書き）

あー、あれかーっていう話。

３９話。幽霊。
１０１話、１２０話。開かずの間。

とっといた伏線をようやく使い始めます――とっときすぎ？　ええ、自分でもそう思います。だからわざわざここでわかりやく公開しました笑

## カカの天下５１７「２０００円問題」

「……はぁー」

いきなりため息なんかついてすいません、サカイですー。

「あむあむ……どうしましょー」

困ったことになりましたー……え？　そう言いつつ何を食べてるのかって？　そ、それは、その、ストロベリーのミニパフェですけど、違うんです！　本当に困ってるんです！　ただ、その、これにはワケがあってー……

「食べ終わってしまいました……」

「お下げしますね」

「あ、はいー」

店員さんが食器を片付けてる……今よ、今だわ、今しかないの。言うのよー！

「あ、あの！！」

「はい？」

「あのー……」

「いかがなさいましたか、お客様？」

「えっと、実は――チョコのミニパフェも追加で！」

「かしこまりました。少々お待ちください」

ううう……言えませんでした。

何をしているのか？　もう、鈍いですね、見てわからないのですか？

……お財布を忘れてきたんです。ええ。

それにも気づかず、このファミレス東治の『新作マンゴープリン！』のチラシを見て「あーコレ、サエがこの前食べてたんですよねー（サユカちゃん情報）」と店に入ったのが運の尽き……気がついたときにはすでにアイスを平らげた後でした。

それから何度も店員さんに言おうとして……恥ずかしかったり「この後、私はどうなるのー？」とテンパったりして結局言えないので、とりあえず注文してしまうのでした。すでにアイス、ミニパフェは制覇です……

携帯で助けを呼ぼうとしたんですけど、頼りになりそうな三人はみんな圏外か電源が入ってませんでした。他にお友達なんかいないしー、どうしよー。

「はぁ……」

「お待たせしました」

「どうもー」

もうヤケになってパフェを食べつつ、窓の外を見ていると――

「あー！！」

思わず大声を上げてしまいました！　知り合いが歩いていたのです！　あれは間違いなくサユカちゃん！！

「さ、サユカちゃーん」

助けを求めないと！　でも大騒ぎして目立つわけにはいきません！　静かに気づいてもらうため、さりげなく窓をコンコン……

気づかない！

じゃーもっと大きな音でー！

「あ、眩暈がー」

他のお客さんや店員さんへのカモフラージュで、フラついたフリして窓へとタックル！

ドゴン！！

「いだっ！！」

ず、頭突きしてしまって予想以上の痛さでした……あぅ、額が痛くて涙目です……でもサユカちゃんは気づいてくれました！　声は聞こえませんが手を振ってます！

「さ、サユカちゃん、こっち来て、お店に入ってー！」

そしてお金を貸してくださいー！　と身振り手振りで手話とか駆使して伝えます！

さー届いて私の思いー！

……あら？

サユカちゃんはにこやかに笑って、そのまま去っていきました……

ケロリラリン♪　あら、この音は携帯のメール音……

開いてみると、そこにはサユカちゃんからのメールが。

『おもしろかったですっ』

そんな感想いりませーん！！　あ、でも近くにいるんならメールを……『二千円くらい貸してー』っと。

「失礼いたします、お客様」

「は、はいー？」

まずいです、踊りすぎて気づかれたのでしょうか？

「おもしろい踊りでした」

だから感想なんかいらないんですってばー！

「いいものを見せてもらったサービスです。グレープフルーツジュースをどうぞ」

だからそんなものいらな――やっぱいります。

あーおいしー。

「どこの国のフシギな踊りですか？」

「ええとー……美味しいものを食べたときに踊る、サカイ共和国のサエ教の踊りです」

「ぷ」

「笑いましたねー！？」

「はい」

「認めましたねぇぇー！」

「じゃあいいえ」

「なんなんですかあなたはー！」

「しがないバイトでございます」

変な人です……けど後々食い逃げ犯として捕まる可能性を考えると邪険にもできません。

……はっ！　その手があったかー。

「ねーねー、おにーさん」

「はい、なんでしょうか？」

「おにーさんは、どんな女の人がタイプー？」

必殺、人妻の魅力で色仕掛けー！

「そうですね、こういう人が好き、というよりも……」

「いうよりもー？」

「すぐにお金を借りたがる人だけはダメですね」

ば、ばばば、バレてますかもしかしてー？

「それでは、失礼いたします」

い、言えないー……

あ、そういえばサユカちゃんにメールしたんでした。どれどれ、返信は……

『そんな大金持ってませんっ』

小学生ですもんねー。二千円は大金ですよねー。

「はぁ……はっ！？」

気がつけば目の前に人が！

「何してるんですかサカイさん。フシギな踊り？」

「さ、サラさんじゃないですかー！！」

なんという運の良さでしょー！　正直言うとこんな人に弱味を見せるのは気に食わないですけどー、もう背に腹は変えられません！

「サラさん、お金貸してくださいー！」

さーバカにするならしなさい！

「いきなりバカにしてくれましたね！？」

「えええええ？　なんで？　どうしてー！？」

「サラだからって……私はサラ金なんかじゃありません！」

「おーうまいー、じゃなくて！　わたし、そんなつもりじゃ」

「いつもいつもバカにして……でもこんな言い方でバカにされたの初めてです！」

「誤解ですよー！　私も気づかなくて――」

「失礼します！」

「あああー、待ってくださいサラさーん！！」

い、行ってしまいました……なんて被害妄想なんでしょー。これだからあの人はダメなんですよ。ぷんぷん。日ごろの行いのせい？　誰ですかそんなこと言ったのは。わたし、日ごろの行いはいいですよー？　ゴミの分別きちんとしてるしー。

「はぁー……」

ホント、どうしましょう。ここまで知り合いに立て続けに会っただけでも珍しいのに、さらに他の人に会うなんてことは――

「あれれ？　おかーさんがいます。クララびっくりです！」

「……え？」

『お母さん』という単語にビックリしたものの、サエの声じゃない。でもどこかで聞いた声。振り向くとそこには――いつかのフシギな女の子。

「おやおやクララちゃん。知り合いですか？」

「はいキリヤ。なのでクララが奢ってしまうのです！」

「わかりました。支払いは済ませておきますね」

私は唖然としてました……

「あ、あの？　クララちゃんでしたよね。どうして」

「おかーさん、お金ないんですよね。見ればわかります。あなたた

ちの血統はクララと相性がいいので――」

「そ、そうじゃなくてー。その、おかーさん、って？」

「サエおねーちゃんのおかーさんですよね。おねーちゃんのおかーさんはクララにとってもおかーさんです」

おかーさん……その響き。

嬉しくて泣ける！！

「あ、ちなみに今のお金はどこからー？」

「サエおねーちゃんにお小遣いでもらいました」

娘に奢ってもらうおかーさん……

情けなくて泣ける！！

「ううーー。今度はあなたたちにご馳走してあげますからねー！」

「はい、クララもサエおねーちゃんも楽しみに待ってます」

こうしてピンチを乗り切った私でした。本当に大人なんでしょーか私……と肩を落としつつも、いい話を聞きました。

「ではでは！　今度のお祭りのときに奢ってくれませんか？」

サエたちが何やらやるみたいです。気になるので行ってみたいと思います。

そんな軽い気持ちで行ったお祭りが、あんなことになるなんて…

…私は想像もしていませんでした。

## カカの天下５１７「２０００円問題」（後書き）

珍しく意味ありげな終わり方をしました。
本当に意味があるのか？
……さー（おぃ

まま、ともかく。サイフを忘れないように気をつけましょう。私はよく忘れます（だからコレ書いたと言えなくもない。

# カカの天下５１８「カカと漫才　レベル２」

「てく、てく、てく」

「それ何の音だ？」

「歩く音」

「そか」

「てく、てく、むきゅう」

「ナニ踏んだ？」

こんにちは、トメです。

今日は海の日でお休みです、が……だからと言って海にいくような予定はなく、こうしてカカとアテのない散歩なんかしています。

「すう、はあ、すう、はあ」

「それは何の音だ？」

「トメ兄の呼吸の音」

「あそ……なんで僕？」

まーとくに目的もないもんで。隣を歩くカカもこうして暇つぶしによくわからないことしてます。

「すー、はー、すー、はー」

「何やってんだか」

「ひっひっふー、ひっひっふー」

「子供なんか産まんぞ」

「ハァハァ、ハァハァ」

「ヘンタイくさいからやめれ」

「こけこっこー！」

「ニワトリか！！」

「ふー……ふー……」

「なんか疲れてる？」

「……」

「あれ、僕の呼吸は？」

「ご臨終です」

「死んだのかよ！？」

「ぽく、ぽく、ぽく」

「ご丁寧に木魚まで……」

「でんでろでろでろ」

「おお、幽霊になって復活だ」

「……」

「何うずくまってんだカカ」

……え？　幽霊って聞いて怖くなった？　じゃあやるなよ。暇つぶしたいのはわかるけど。

「突然ですが、私は森の妖精です！！」

ほんと突然だな。

「さぁ愚かな人間よ、この森の妖精様になんなりと質問してみるがいい」

こんな偉そうな森の妖精イヤだな。もっと穏やかでいてほしい……こいつが支配する森はきっと毒キノコや茨やゾンビでいっぱいだな。や、ゾンビはいないか。こいつ苦手だし。

「ほら、質問して質問して」

「えっと……好きな森は？」

「森永」

「それ森じゃねーよ」

「え？　じゃあ森永の牛乳」

「もっと違う」

森永は会社だよ。

「まま、それは置いといて。他に質問はないの？」

「……森の妖精のお仕事は？」

「大もりのご飯を食べる」

「森ちげーよ。仕事しろよ」

「食べるのが仕事なんだよ！」

「それニートって言うんだよ！」

「私は森だよ？　根無し草って言ってよ！」

「意味同じだよ。っていうか森じゃなくて草じゃん！」

「仕方ないな。じゃあ私は花の妖精！」

話変わるの早いな。

「質問して質問して」

「じゃ……花の妖精って何するの」

「花だから、癒しのオーラを出してるんだよ」

「どうやって？」

「くちゅん！」

「うお、はな水飛ばすなよ！」

「これ癒しのはな水」

「いらねーよ！　ほらティッシュ！　ふけ！」

ごしごしごし。

「あ、トメ兄。ティッシュについたはな水が、まるで花みたいに広がって」

「見せんでいい！！　もういいよ鼻の妖精は！」

やれやれ……あ、いいとこにゴミ箱発見。ここに捨てよう。

ポイ。

「ゴミ箱のＨＰが２０００回復した」

「はな水すごいな」

「なにせ癒しだから」

何やってんだろ僕ら。

「じゃーそろそろ私は木の妖精ね」

「はいはい……ん？　さっき森だったのにまた木か」

「うん。ほら『森』って漢字は『木』が合体した漢字でしょ。私は変形合体する前の形態」

こういうダラダラを楽しむときは変にツッコまないのがコツです。

「ちなみにイエローでカレー好き」

ツッコみません。

「質問して質問して」

「じゃ……好きな木は？」

「あ、わかった。スキー！」

「なぞなぞじゃなくてね」

「じゃあ……好、き？」

「可愛く言うな」

なんかときめくだろうが。

「妖精は可愛いもんなんだよ？」

……お。唐突だけど散歩コース上にいい店見っけ。

「よし、じゃあ僕も妖精やるぞ」

「妖精は可愛いもんなんだよ？」

「そこ繰り返すな。どうせ可愛くねーよ。えー、こほん。僕は夕飯の妖精さ！　今日の夕飯は何がいい？」

ついでに買い物していこう。

「じゃー妖精のから揚げが食べたい」

「こえーよ！　鶏のから揚げな？」

「鶏ってようせいだったんだ」

「ああ、養成された鶏だ」

漢字と一緒に教えると、カカは興味深そうにうなずいた。うむ、正しい学生の姿だ。いいこと教えたわい……たとえそれがダジャレっぽいもんであっても。

「へい、らっしゃい！」

「おっちゃん！！　鶏をよこせ！！」

「それは要請な」

「はようせい！」

「早くしろって意味か。強引だ」

「そんなツッコミよせ！！」

「ああ、『よせ』か。ええかげんにしなさい」

「お客さん……あんたら変だよ？」

「「そのツッコミはよせ！」」

何か悲しいから！

ま、お後がよろしいようで。

## カカの天下５１８「カカと漫才　レベル２」（後書き）

そのつもりじゃなかったんですけどね。なんかこの二人をダラダラ喋らせてたら勝手に漫才っぽくなりました。

しかしまぁ、まだレベル２です。

まだまだ。まだまだ。

もっと漫才勉強しないとね。カカたちも。私も。

**カカの天下５１９「諸君、夏休みとはこういうものだ！」**

こんにちは、カカです！！

はい、私元気です！　なぜかというと――そう！　今日さえ終われば、それからもう夏休みなのです！！

そんなわけでただいま体育館。全校生徒が集まって終業式とかやっております。

「それでは教頭先生からお話をいただきます」

「ごちそうさまでした」

「誰だ？　変なことを言ったヤツは！」

私ですテンカ先生。

「ちゃんと話が終わってから言え！」

あ、言っていいのか。了解。

「んじゃ教頭、どぞ」

テンカ先生が促すとデストロイヤー教頭が出てきて……なんか呆れてる。

「テンカ君。こういうときくらい地を隠せと言っただろう」

「あ、おもろいこと聞いたらつい戻っちまいました。気をつけます」

「うむ、気をつけたまえ」

「では夏休みの注意を終わります」

「今のは君への注意だ！　話はこれからだ」

「ちっ。はいはい」

この人らも結構おもしろいよね。

「さて……諸君。改めて言うまでもないが教頭である。明日から――いや、正確には今日の午後から君たちは夏休みとなるわけだが」

うんうん、休むよ！　いっぱい休むよ！

「私から言いたいことがある」

はいはい、どうせ色々気をつけろって注意でしょ？　大丈夫だよ。長い休みに入る前は毎回そんなんばっかり聞き飽きてるんだから。

「休むな」

って、はいぃ！？　夏休み全否定！！

久々に出ました常識デストロイ。

「いいか？　子供とは日々勉強である。本来休みなどというものは一週間に一度もあれば充分すぎるのだ。それをこのような長い期間

与えられ、無為に過ごすべきではない。休みなのは学校であって、君たち自身ではない。いいか？　暑さに負けず、常に何かをするのだ。宿題でもいい、遊びでもいい。読書でもいい。少しでも楽しいことを、自身の力になることをするのだ。これは休みではない――それさえ忘れなければ、君たちはきっと素晴らしい時間を過ごせるだろう」

おお……なんか難しいけど、すごいこと言うなぁ。学校は休み。でも私たちは違う、か……そだね、何もしないのはつまんないし。いっぱい何かをしよう！

「以上である」

よしきた。

「ごちそうさまでした！！」

「見っけ。やっぱカカか。後で話な」

「やられた！！」

「うっし、全員いるな？」

終業式が終わった後にゲンコツをもらった私は頭を押さえつつ、他のクラスメイトと一緒に頷いた。

「さて、これから夏休みなわけだが……てめぇら！　夏休みになったら何をする？」

「「遊びます！！」」

「遊ぶだぁ？　てめぇらふざけんな！！」

その予想外の怒号に、浮かれていた皆は一斉に押し黙った。

なので代表して私がおそるおそるたずねる。

「え？　や、だってあなた去年……」

思いっきり遊べ！　みたいなこと言ってませんでした？　なぜか軍隊っぽく。

「そんな昔のことは覚えてねー！　よくよく考えればよ、オレたちぁ少し仕事あんのにてめぇらだけ丸々休みってのが気にくわねぇ！！　何でもいいからてめぇらもなんか苦労しろ！」

り、理不尽だ！！　やっぱ勝手だこの人！

「例えばニシカワ！」

「い、いぇっさ！！」

「小さくてもいい！　夏休み中にてめぇは西に川を作れ！」

「キラーン（目が光る音。でもなぜか口で言ってる）！　はい喜んで！」

そういやそんなんが夢だとか言ってたなーニシカワ君。

「イチョウ！」

「は、はい」

「イチョウだから……銀杏拾え！」

「な、夏にですか！？　無理です」

スーパー行きなさい。

「インド！！」

「……はい？」

「インドを作れ！」

んな無茶な！！

「……はい」

頷いちゃったよこの子！？

「そこでこっそり覗いてるタケダ！」

「はひっ！？」

なに、不審者！？

「お、俺は先生が忘れたプリントを届けに」

「おまえは竹だ！　だから……なんもしなくていーや」

「は？」

「立ってるだけでいーよ」

「え、えと？」

哀れ。

「次は――サエ！　なんか遮れ」

「じゃーテンカ先生の人生なんぞをー」

「それはごめんなさい！」

まぁ素直。

「あとサユカ！！」

「は、はいっ」

「……んと。思いつかん！」

「なんですかそれっ！？」

サユカン……名前が当てハマるもんなさそうだもんね。

「カカ！！」

「あいさ」

「カカト落としをマスターしろ！」

「してます」

姉拳法でとっくに。

「じゃあ……カカぁ――お母さんに孝行でもしろ！」

「あ、夏に一回帰ってくるみたいなんで。そのときに」

「そんときはオレも呼べ」

そういやファンだったっけ。

「アヤ！！」

「はーい！　ふふ、アイドル志望の私はもちろん――」

「アヤしいヤツを捕まえろ」

「えええ！？　ちょ、私のだけやたらレベル高くないですか！？」

や、他の人のも相当なもんだよ？

「あとは――」

「……先生は？」

ぼそっと誰かが呟いた一言。それを境に生徒達が爆発した。

「そういう先生は何をするんですか！？」

「そうだそうだ！」

「わたしたちだけ何かするのは不公平ですよっ！」

「先生も何かしたらどうですか！　テンカ先生だけに天下を取るとか！」

「天界に行くとか！」

「天下一武道会で優勝するとか！」

「食品添加物になるとか！！」

好き勝手に言う生徒たち。

それをぐるりと見回して、テンカ先生は苦虫を噛み潰したような顔で言った。

「何するかって？　決まってんだろ。仕事だよ」

教室は一気に静まった。

「お、お疲れ様です」

「うるせー」

思わず口に出てしまった私の一言に、テンカ先生は疲れたようにため息をつくのでした。

「……ま、てめぇらは楽しくやれや。ガキのうちにな」

肩を落とすテンカ先生を見て、なんとなく言われたことに挑戦してみよっかなーという気になってしまう私たちでしたとさ。

## カカの天下519「諸君、夏休みとはこういうものだ！」（後書き）

最近の教頭、デストロイしてないよーとの意見があったのでさせてみた。いい機会だったし。

うーん、デストロイなのに毎回良いこと言うなこの人。とても私が書いてるとは思えん笑

なんにせよ、休みというものは自身が作るものであって、他人からもらうものではないと思います。仕事の日だろうと休日だろうと、自分の中で「休み」と「休み以外」を作ってこそ、色々なことができるもんだと思います。

……ま、そーそー言うほどうまくできるもんでもないですけどね^^；

**カカの天下５２０「そっと開いて見てごらん」**

「やっぱり飛騨っしょ！」

「僕は明石かなぁ」

「私は木曽かな。お姉よく言ってるじゃん。キソが大事だって」

あなただったら何が好きですか？　あ、いきなりすいません。トメです。いきなりこんなこと言われても何の話だかわかりませんよね――あ、わかりますか。さすがです。

「おっと、雑談してる間にもうこんな時間か。あたし用事あるから行くわ」

「おう。お裾分けありがとな、姉」

「バラのジャム！　明日の朝食が楽しみだね」

「あっはっは。そう言ってもらえると店からパクってきたかいがあるよ」

オイ。

と思いつつ口には出さない。もらえるもんはもらっておく。そして姉がどうなろうと知ったこっちゃない。どうせビクともしないし。クビになっても別に。

――いつものごとく唐突に訪問してきた姉を適当に送り出し……

さーて夕食でも作るか、と思ったそのとき。

「トメ兄。これお姉の忘れ物かな」

「ん？　なにその紙」

「居間に落ちてた」

カカからその紙を受け取り、広げてみる。

そこには子供が殴り書きしたような意味不明な文字が並んでいた。

「なんか……怖いなこれ」

「え」

「ドラマとかホラーで出てくる怪奇文書みたいな感じ――ああ、大丈夫だって。そんな姉もびっくりな速度で離れるなって」

今まで隣にいたはずなのに、気がつけば廊下の向こうへ避難しているカカ。はえぇ。

「どうせタマちゃんが適当に書いたやつだよ」

「そ、そっか」

納得したように見せてビクビクしながら近づいてくるカカ。あんだけの動きができれば幽霊くらいぶっ飛ばせると思うのだが。

「それで、えっと、なんて書いてあるのかな？　トメ兄、読んでみ

て」

「んっと……」

汚い字だが読めないことはない。

『かコシむなにをマしてコるシののめこのきもちコをうらマみをぞうマきのおくシでいまママすぐれコシんらくマほシしシマい』

「……暗号？」

「右下に人っぽい絵が書いてあるな。あと、これはこの人の名前か……しゅー、って書いてある」

「シュー君ね……ところでトメ兄。私、嫌なことに気づいた」

「ああ、僕もだ」

暗号、と今カカが呟いた瞬間に僕にも見えた。不自然なカタカナ。これを抜くと……？

「たぬきを書いて『タ』を抜け、みたいな感じだね」

「書いてあるのはシュー君だから……見た感じ、マ抜け、コシ抜けかな」

「タマちゃんが書いたにしては手が込んでるな。すると文面は？」

『かむ』

『なにをしてるの』

『のめ』

『このきもちを』

『うらみを』

『ぞうきのおくで』

『いますぐ』

『れんらくほしい』

こ……怖っ！！

「はっ？　カカ？　カカ、どこ行った！？」

「屋根裏……」

「一体どうやってそこにワープしたかは疑問だけど、とりあえず戻ってこい！」

「ヤダ……こあい」

「真っ暗な屋根裏に一人でいるのは怖くないのか」

ぎゅ。

「おあぁ！？　び、びっくりした……いつの間に背後へ」

震えながら僕のシャツの裾を掴んでいるカカ。なんかこいつの動きのほうが幽霊じみて見えて、あまり怖くなくなってきた。

「しかしこれ、本当になんなんだろ。ちょっと脈絡のない文面だな」

「な、何が言いたいんだろ」

素直に読んでみると……書いた人、もしくは読ませたい人が何かを噛む？　もしくはカムって名前か？　そして書いた人の気持ちを、恨みを……臓器の奥で飲めってか？　さらに連絡ほしいって……このへんがよくわからん。

「あ、わかった！」

「何がわかったのかね、名探偵カカ君」

「これは恋文なんだよ！」

「ええ！？　どこをどうしたら」

「あのね、この文章を入れ替えるの。順番に言うよ！」

怖さを吹き飛ばそうとヤケになっているのか、カカは身体をくねくねさせて恋する少女っぽくこれを音読し始めた。

「なにを、してるの？」

ふむ。

「いますぐ、連絡ほしい」

ふむふむ。

「この気持ちを、臓器の奥でかむ」

おお、気持ちを胸の奥でかみしめた、みたいな感じか！

なるほどね……ちょっと苦しいけど、そう言えないこともない！

「恨みを飲め」

「飲めねーよ！！」

ダメだ。最後がダメすぎる。怖すぎる。

「わわ、わかった！　逆に読むんだよトメ兄！」

「そうか！　するとどうなる！？　えっと！」

僕もヤケになってきた。何も考えずに読んでみる。

「連絡ほしい。いますぐ」

こ、こっちから読んでも文章は繋がるな。

「臓器の奥で、この気持ちを、恨みを――飲め」

「誰デスかー？　誰が臓器の奥にいるんデスかー？　ナニ飲んでらっしゃるんデスかぁ？　それきっと美味しくないよぉぉ。一緒にジ

ユース飲もうよぉぉ」

ヤバい、カカが壊れ始めた。で、でも続き……

「なにをしてるの？」

「本当なにしてるんだよぉ」

「噛む」

「噛まないでぇぇぇぇぇ！！」

「落ち着けカカ！　悪い！　今のは音読した僕が悪かった！！」

なんだこれは。後ろから読んだほうが怖いぞ！！

……あ。

あ……れ……

「か、カカ……」

「うぅぅ、なんだよぅ。噛まないでよぅ」

「誰も噛まないって！　ほら、これ」

「やめてよぅ。その紙押し付けないでよぅ。噛まれるよぅ」

「違うんだって！　ほら、この文の最初の文字だけ、後ろから読んでみ！」

「最初だけ、後ろから……？」

暗号でよくある縦読みだ。左端の文字を、逆から読んでみると……

『れ　い　ぞ　う　こ　の　な　か』

ゾッとしました。ええ。

「とめおにいちゃん。わたし、きょうはがいしょくがいいなぁ」

「幼児化しても仕方ないぞ、カカ。冷蔵庫はいずれ開けなきゃならない運命だ」

「いぃぃぃやぁぁぁぁ！」

「し、心配するな！　さっきだって冷蔵庫からぷっちんプリン取って食べてたじゃんか！」

「きっとプリンがぷっちんってキレて襲ってくるんだ！　そして噛まれるんだぁぁぁ！」

えぇい、埒が明かない！

いずれは開けることになるんだ。それに今すぐこいつの不安を解消しなければならない。精神病院にお世話になりそうな顔してるし！

「よし、開ける、開けるぞ！」

「ま、待ってトメ兄！　早まらないで！」

ダッシュで台所へ行き、冷蔵庫の取っ手を掴み――

ガバッと開ける！

「トメ兄さようならー！！」

「縁起でもないこと言うな！！」

そうは言いつつ心臓をバクバクさせながら冷蔵庫の中を見る。

そこには――

「ど、どう……？」

「や、なんもないよ」

本当、拍子抜けした。姉が何か仕込んでたりするかも？　とか思ってたんだけど。

「ほっ、よかったぁ」

「ああ、よかった」

二人して安堵のため息をついた、そのとき！！

「「うわぁおえぁぁいぁぁぁ！！」」

いきなり肩を叩かれて、揃って絶叫した！！

「……な、なにさ。そんなに驚かなくていいじゃん」

姉だった。

「び、びっくりした……」

「てっきりバケモノかと」

「どーゆー意味だ」

僕らが本気でビビっているのが気に食わないらしい姉に、さっき拾った紙のことを聞いてみた。

「ん？　ああこれ。タマのイタズラ書きだよ」

「やっぱりそっか……変な文章が出てきたからびっくりしたよ」

「変な文？　どんな」

僕らは先ほど解読した内容を話した。すると姉の目がどんどん細くなってきて――

「ま、子供って霊とか感じやすいって言うしね」

「……え」

「声聞いたか乗り移られでもしたんでしょ。それで冷蔵庫に何かあるって書いた、と」

「で、でも冷蔵庫には何も」

「何言ってるの。これはタマちゃんが書いたんだよ？」

……あ。

タマちゃんがこれを書いた家は、ここじゃない。

「シュー君の、家の？」

「冷蔵庫、なのか」

そうだったのか……

「じゃ、いーや」

「そだね」

ちゃんちゃん。

## カカの天下５２０「そっと開いて見てごらん」（後書き）

夏です！　と、いうわけで。
こっちでもホラーっぽいもん書いてみました！

完結してないって？　冷蔵庫には結局何が？

……にやり。

シュー君だからいーじゃない。
あ、かなーりご無沙汰ですがあんパン更新したんでまたよろしくです笑

## カカの天下５２１「開けちゃった間」

「開かずの間に入りたい？」

こくこく！　と激しく頷く妹を前に、ちょっと困った顔のトメです。

「どうしたんだよ、いきなり」

「……怖いの」

「は？」

「怖いの！！　開かずの間ってなに！　何があるの！？　なんか不気味で、昨日なんか夜におトイレ行けなかったんだから！」

あー、昨日見た変な文が原因か。そういうのがそこそこ平気な僕ですら怖かったもんなぁ……あれで怖がりモードに突入したんだな。このモードに移るとなんでも怖がるんだよな。

「開かずの間って言ったって、ただの両親の部屋だぞ？　まぁ母さんは帰ってきてもカカと寝るし、ずっと入ってないからほとんど父さんの部屋になってるけど」

む？　父さんの部屋だから大丈夫、というのは理由としては弱いか。怪しいしな、あの人。忍者だし。

「とめにぃぃ」

「……わかったよ。中を見ればいいんだろ？」

「いいの！？」

「ま、別にいいだろ――いいよな？　父さん！！」

一応適当に声を張り上げてみる。

「……反応ないね」

「出かけてるのかな？　そうそういっつも僕らのストーカーしてないか……いいや、無断で入ろう」

「ど、どうやって入るの？」

「いいからいいから」

自分で言っておいてビクついてるカカの背中を押して……問題の部屋の扉の前に。

「うう、そこはかとない威圧感が」

「まぁ、あのクソオヤジの部屋だし。どんな部屋になってることやら」

時代劇にありそうな武器が並んでたりする可能性もある。

「に……人形あるかな」

「は？　人形ってなんの話だよ」

「なんかね、サエちゃんが、この家には呪いの人形があるって」

「……そんな話、初めて聞いたぞ」

「だ、だから！　その開かずの間の中にあるんじゃないかと思って！！」

なるほど。怖がりモードにしたってなんでここが怖いのかと疑問に思ったけど、そういうことね。

「確かめればわかるさ。んじゃカカ、ここ立って」

「へ、ここ？」

適当に扉から離れた地点にカカを誘導する。

「どうするの？」

「はい、扉に向かって。適当に僕の言葉に合わせて」

「う、うん」

よし、準備完了。

ではいきましょう。

「さん、はい！」

僕が言うとカカの身体がぴくっと動き、

「わん」

ワンステップ。

「つー」

ツーステップ。

「きっく」

リズムに弾んでカカキック炸裂。見事に扉を吹っ飛ばした。

「あ。ノリでついやっちゃったけど、いいの？」

「いいのいいの。前からぶっ壊そうと思ってたんだよ」

なんでここが開かずの扉になってたと思う？　父さんが鍵を失くしたからだよ。それでも「俺様は入れるからいいんじゃね？」とか言って放置されてたんだよね。

「よし、入るぞ」

「う、うん」

そしてついに。何年かぶり（鍵があったときは入ったことがあったはず。覚えてないけど）にその部屋へと入った。

――そして、絶句した。

百以上の無機質な目に見つめられ、僕らは石化したように固まった。所狭しと並べられた小さな人の形をしたソレら、壁にべったりとついたソレら、天井から見下ろすソレら、よくよく見れば床も、机も、扉にまでソレが――

「な、なに、これ……」

震えた声でカカが呟く。ああ、僕も震えてる。

いくらなんでも、こんな……

「ここが封印されていた意味が、わかったな」

「うん……」

そう。

この部屋だけでいくつあるのかわからない、ソレは――

全部、母さんのグッズだった。

女優だけどアイドルみたいなもんだからね。所狭しと並べられたのはフィギュアか。そんなもんあったんだなぁ……壁やら天井やらそこらじゅうに敷き詰めて貼ってあるようなポスターは結構見るけど。あ、机や椅子に貼ってあるのは生写真とポストカードか。

いやぁ、入った途端に母さんだらけでびっくりした。

「これなら怖くないだろ」

「別の意味でお父さんが怖くなったけど」

ああ、またもや父娘の溝が……

「そう言うなって。あの人、母さんと一緒になる前は普通にファンだったらしいし」

「ふーん……この押入れの中にもこんなのがあるのかな」

さっきまで怖がっていたのがこんなモンで強気になったのか、カカはずんずん進んで押入れなんぞを開けてみた。

するとそこには予想通りにうちわだのハッピだの様々なグッズと一緒に——まったく関係なさそうな人形が一つ、置いてあった。

「あれ、これだけお母さんじゃない」

押入れの真ん中に安置されていたのは綺麗な日本人形だった。造りの細かい菊の花柄の着物、長い黒髪……表情は見えない。額に貼られた大きなお札のせいで。

「……なぁ、カカ」

「トメ兄、なんだろねこれ。すごくおっぱい大きい人形だよ。揉んで遊ぶのかな」

「それ、さ。もしかして……」

「ほら、トメ兄も触ってみて」

カカに促され、押入れに近づいてみた。

おそるおそる押入れの中に手を伸ばす。

そして、その人形に貼られたお札を、少しだけ持ち上げてみた。

すると見えたのは。

人形の美しく穏やかな表情と。

額に書かれた一文字。

『呪』

バタム！！

「僕の腕がカニばさみっ！？　いってぇぇぇ！！」

いきなり猛スピードで押入れを閉められた！　中の人形に手を伸ばしていた僕の腕は吹っ飛ぶ寸前だった！

「何すんだカカ！！」

「だ、だだだ、だって、いま！！」

見たのか。ならこの怯えようも仕方ないか。

「書いてあったよ！？　『呪』って書いてあったよ！？　『トメ兄を呪う』を略して『呪』だよ！？」

「なんで僕!?」

「私だったらイヤじゃん!!」

「この正直者!!」

「どういたしまして!!」

なんかパニくりながら無意味な言葉の応酬を交わしたあと、やがて落ち着いた僕らの結論は――

「やっぱりあれが、サエちゃんが言ってた呪いの人形?」

「多分な……でもお札が貼ってあったから、多分大丈夫じゃないかと」

「放っておこう」

「賛成」

見なかったことにした。

……でも、気のせいだろうか。

何もかも忘れて鮮やかに部屋を後にする寸前、押入れからガタっと音がしたような。

きっと気のせいだ。うん。

## カカの天下５２１「開けちゃった間」（後書き）

昨日に引き続き、怖い話もどきです。もどきですので怖くはありません。たぶん。

ちなみにユイナさんは昔、歌を歌ってたのでうちわとかはそのときのモノだったりします。

## カカの天下５２２「おまえなんかこうしてやる」

「こんにちは、お邪魔しまーす」

「ようこそ我が家へ！！」

「ど、どうしたのよ。ヤケにテンション高いわねっ」

ええ、うちに遊びに来たサエちゃんとサユカンを迎えた私はちょっとヤケです！　カカです！！

なんでヤケか？　それは気にしないでください！

「ささ、上がって上がって」

「う、うんっ」

「んー」

いつものように居間へと通して麦茶を振る舞い、ちょこんと座って三人で「んぐんぐ」と喉を鳴らして一気飲み。や、最近暑いから喉渇くよね。

「それで、カカちゃんどしたのー？」

「え、なにが」

「んー……なんか」

「なにさ」

「何かを誤魔化したくてムリに空元気を出そうとしてる感じがするー。怖いことか悲しいことでもあったー？」

さ、サエちゃん鋭い……！　実は最近怖いこと続きでどうにも元気がないんだけど、でも！　そんなこと説明したら余計に元気なくなっちゃうし！　昨日見たモノなんか忘れて、清々しく夏を満喫するんだ！

「別になんにもないよ。それよりさ、夏祭りに何をするか決めようよ！」

「あ、そういえばそんなのあったわねっ」

「カカちゃんがそう言うならいいけどー。何かあったら相談してねー」

サエちゃんに相談したら、また夜にトイレへ行けなくなる話が出てきそうだから遠慮しときます。うう、ごめんね。気持ちは嬉しいんだけどね。

「そのイベントってたしか、ステージの上に立って何かするのよね。なんでもいいとか言ってたけどっ」

「そうそう！　それでさ、せっかくだしここは三人で手芸部の成果を発揮すべきじゃないかな！」

結局一学期はいろいろ試してみたけど『これ！！』と言える結果は出せなかったからね。

「手芸部ね……一学期で作ったものといえば何かしらっ。ビーズのアクセサリと、演劇もないのになんとなく例年に倣って作ってみた衣装……は作りかけだったかしら」

作ってみたというか、残ってた衣装を改造してただけなんだけどね。

「あとは簡単に作った人形だねー」

……人形？

呪？

「ナンカ思い出したぁぁぁぁぁ！！」

「ど、どうしたのよカカすけっ」

助けて神様ホトケさま！

「のどぼとけが見えるほど叫んだよー今」

え、ホトケさまは喉にいるの！？　じゃあ助けてホトケさま！！

「ちょ、なんで口に手を突っ込んでるのよカカすけっ」

助けてホトケさまー！　と手を、というか指を口から喉に伸ばしてみた。

吐いた。

「おぇぇぇぇぇ」

「カカちゃーん？　飲みすぎ？」

「はい、ゴミ箱っ！！」

うぅぅぅ……死ぬかと思った。私がホトケになるとこだったよ。

「みゅぅ……そういえば飲みすぎたトメ兄がこうやって吐いてるの見たことあるような」

「吐いたら楽になるらしいからねー」

「あ、ドラマの警察も犯人に向かって言ってたわね、それっ！　どこでも共通なのね」

でもこの気持ち悪さのおかげで一瞬思い出した怖いのはどっか行っちゃった。よかった。

「それで、人形の話に戻るけどー」

う、どっか行ったと思ったらまた……いいやもう。逃げるから怖いんだ。こうなったらあの人形を頭の中で改造してやる！

「あの人形をどうするのよっ」

「えっとねー」

――私の脳裏にポン！　とあの着物姿の人形が登場。お札はなく

て顔が丸見え。とりあえず額の『呪』の字を『肉』にしてやった。顔は……タケダでいいや。うわ、なんて変な人形。

「じゃあ、人形を動かすのねっ！」

「うん、おもしろおかしくー」

――タケダの顔した『肉』人形は激しく腰を振りまくって踊り狂い、スピンターンをキメて『おぅいぇい！』と呟いた。

「さらにセリフをー」

「それもおもしろおかしくするのねっ」

「うん、変なセリフでいこー」

――タケダ人形はおもしろおかしく叫んだ。『シャイニングおならＢｏｏｏｏｏｏｏｏ！！』

「それを続けてー」

――続けて叫んだ。『２ｎｄシャイニングおならＢｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏ！！』

「いろいろと話の波を作りつつー」

――波を作って叫んだ。『まだまだＢｏｏ！！　たまにはＢｏｎ！！　終わりと思えばもいっちょＢｏｏｏｏ！！』と、すでに叫ぶだけじゃなく、おならで空を飛んでいる。

「最後には、どかーんと」

――タケダ人形はお尻をどかーんとさせて、どっか消えた。

「どう？　カカちゃん」

「うん、おもしろい」

怖いの消えたわ。どかーんと。

「よしっ！　じゃあ夏祭りは、人形劇で漫才！　で決まりねっ」

「へー、そうだったんだ」

「へーって……何聞いてたのよ、カカすけ」

「しゃいにんぐおならぶー」

「はぁっ！？」

「光り輝くおならぶー？」

「もしくはボン」

「何言ってるのー？」

「や、気にしないで。それにしても漫才かぁ……」

どんなのがいいかなぁ。

## カカの天下５２２「おまえなんかこうしてやる」（後書き）

ニュースをお伝えします。
本日未明、脳内でどかーんさせた人形の顔に武田を使った件について、香加さんはこう述べています。
「誰でもよかった。たまたま頭に浮かんだから使った。カッとなったわけでもなくなんとなくやった。反省はしていない」
警察は「何も反省する必要はない」と判断し、今後も武田を放置していく旨を明らかにしているそうです。

## カカの天下５２３「みんな楽しみ夏祭り」

こんにちは、アヤよ！

今日も暑いわね。というわけで喫茶店で涼んでるの。お茶の相手はイチョウさんとインドちゃん。いつの間にか夏休みでも集まるくらいに仲良くなってしまったわ。

「そういえばさ、もうすぐ夏祭りなのよね」

ふともらした私の言葉に、二人とも「う……」と言葉に詰まる。うーん、一応頭には入れていたけど良いアイデアは浮かばなかったって顔ね。

「申し訳ありません……わたくしが全部１００点など取ったせいで……」

「イチョウさん、それで謝られるとなんかムカつくよ？」

「す、すいません！　お詫びにわたくし、次は一つも１００点を取りません！　全部９９点に抑えます！」

それもそれでムカつくと思うわよー先生は。

「インドちゃんは何すればいいと思う？　夏祭り」

期待しないで聞いてみたんだけど、インドちゃんは意外にも頷いた。え、アイデアあるの！？

「私ね……みんなに、笑ってほしい」

「ん？　どゆこと。ステージの上でひたすら笑うの？」

それはそれで面白そうだ。変な目で見られるだろうけど。

「あのね……私ね、カカちゃんたちを見ていつも思ってたの。あんな風にみんなを楽しませることができたらいいな、って」

あー、あいつらね。たしかに何かしら周りの子らを笑わせてはいるけど。

「でもカカさんたちのようになるには大変ですよ？　それこそ人間捨てるくらいの気持ちでいきませんと」

「イチョウさんって丁寧なんだか乱暴なんだかわかんない喋り方するよね……ま、いいけど。確かに一理あるわ。あそこまではっちゃけられないわよ私たち」

特にインドちゃんには厳しいだろうし。

でもインドちゃんはふるふると首を横に振った。

「私たちは……私たちなりのやり方で、みんなに笑ってもらえばいいと思うの」

「なるほどです。おとなしいならばおとなしいなりに、静かな笑いを求めればいいというわけですね」

静かな笑い？　陰でクスクスとか鼻でフンって笑うとかそんなの

？　なんてね。

「私ね……この間テレビで見たの。そういう人」

「そういう人って……静かに笑いをとる人ってこと？」

「うん……」

へぇ。私は結構テレビ見るけど、最近でそんな芸人いたかな？

「その人、すごいの。じっとしてるだけで笑われるんだよ」

ん？

「その人は何もしてないのにね、周りの人がすごく楽しそうなの」

んん？

「なんか、やーいやーいとか言いながら笑って」

「それいじめられてるだけだから！！」

さっきの笑いで合ってたのか！？

「あんな風になりたい」

「なっちゃだめ！！」

「……え。笑いをとったらだめ？」

「笑われたらダメよ！！　笑わせないと！」

「違いがよくわかんない」

「あー、もう、だから……ねぇ、イチョウさんも何か言ってよ」

いつの間にかのんびりとフルーツパフェを食べていたイチョウさんは、慌てて口を拭いて……にっこり微笑んだ。

「できると思いますよ」

「へ？　なにが」

「みなさんに笑わっていただけると思います。お二人のやりとりを見ていただければ」

う、何よそれ。まるで私たちまでカカたちみたいな見世物になってたような言い方じゃない！

「んー、でも、まぁ。ニッシーとタケダもやるんだし、あの二人を適当にいじれば……やれるかな？」

「では、決まりですね」

「え？　え？　……えと、結局、どうなったの？」

あらあら、インドちゃんたら。自分が何をしたいって言ったのかわかってなかったのかしら。仕方ないわね。

笑いをとる出し物と言ったら、コレでしょう？

ずるずるずるずる。

――突然すみません。トメです。

「うめーなチキンラーメン」

「テン、馬鹿にして悪かった。そんなもんスーパーで買って家で食えばいいと思ってたけど、店で食べるチキンラーメンがこんなに美味いとは」

「はっはっは、いきなり誘われたかと思えばこのような場所に連れてこられ、どうなるかと思いましたが……いやはや、麺と玉子の味がなんとも」

三人そろってずるずるずる……ああ、ほんとすいません。いまラーメン中なんです。

夏祭りの相談をしようとテンに連絡したら、お昼時だし珍しいところで飯食おう！　と言われ……この、みんな知ってるチキンラーメンを出すラーメン屋さんに連れてこられたのです。果たして普通に市販のチキンラーメンを使っているのか、ここで独自に作っているのか……それは食べただけではわかりません。ただ一味違う気はします。それが味のせいなのか『外で食べる』という雰囲気のせいなのかはいまいち判断つきません。

「それでトメ君？　協力しろと言われたものの、私は詳細を知らないのですが」

ずるずるしながら聞いてくるキリヤ。僕だけテンの道楽に付き合うのも癪だったので巻き込んでみたのである。

「ああ、それな。実は――」

「待てトメ。今はチキンラーメンに集中しろ。じゃないとチキンラーメンに失礼だ」

「へ？　いいじゃん、食べながら会話しても」

「ダメだ。これを食べている間は現実を忘れるんだ」

「なぜにそんな現実逃避を？」

「チキンだからだ」

……沈黙。

「テン」

「うるさい」

「おまえ今ちょっと恥ずかしいだろ」

「うるせぇ！！　黙って食え！！」

「チキン。一般的には鶏肉のことですが、臆病者や逃げる男に向かって『このチキン野郎』と呼ぶこともありますね。今のは現実逃避とかけて」

「いちいち説明すんな！！」

ずるずるずるずる！！

――そして、食べ終わり。

「というわけでさ、夏祭りのステージで何かしなきゃならないんだけど」

「私も参加してよろしいのですか？」

「や、参加しろ。命令だ。なぁテン？」

「オレは別になんでもいーぞ」

「ふむ。では夫婦漫才＋アルファで決定ですね」

「「なんでそーなる！？」」

などとツッコんでみたものの……

ちわ、カカです。次の夏祭りにどんなのをやるか考えてます。

「ただいまー」

「おかえりトメ兄！　どうなった？」

「夏祭りか？　なんか漫才することになった」

え……？

そのとき、ぴろりろりん♪　と私の携帯が鳴った。

開いて見てみると、メールが一件。インドちゃんから？

『ねぇねぇ聞いて！　わたしね、今度ね！　漫才することになっちゃった！！』

……皆、漫才？

『だからネタちょーだい』

や、こっちのセリフだし。

初めまして。今回の夏祭りの実行委員長です。誰だよって？　多分もう出ないから細かいことは気にしないでいただきたい。

「実行委員長。夏祭りイベントの詳細報告が一般参加者からいくつか届きました」

「ふむ、今日は四件か。どれ、ステージでやる内容は？」

『漫才』『漫才』『漫才』『漫才』

「……おい、チラシのどっかに漫才大会とか書いたか？」

「い、いいえ」

なんなんだコイツら。

## カカの天下５２３「みんな楽しみ夏祭り」（後書き）

そんなわけで、夏祭りはカカ天的には漫才大会となってしまいました。

果たしてカカたちはどんな漫才を披露するのか。そして私は面白く書けるのか！？　ちょっと自信はありませんがいつものようにキャラ任せで頑張りたいと思います（それ頑張ってるのか？

# カカの天下５２４「なんかでっかい変な人」

「平伏せー！！」

「ははー！！」

あ、あなたは平伏さなくていいですよー？　サエですー。

今日は夏休みにも関わらず学校にお邪魔していますー。家庭科室から夏祭り用に色々と拝借するついでに中庭に来たのですが……そこに彼がいました。そう、いつかカカちゃんたちに話した、私に会うなりいきなり土下座する用務員さんです。

「頭が高いぞー！」

「ははー！」

トメお兄さんと同じくらいの歳かな？　星座は多分、土下座です。どこの空にあるんだろうって言ったらカカちゃんは「日本人の心の空」って言ってました。渋い。

「ほら、もっと頭を下げろー！！」

「ははー！！」

んー……

「なんで頭上げないの？」

「種を植えてるんで」

花壇のお仕事かー。道理で中庭で会ったときから土下座してると思った。

「今までの会話はー？」

「ノリで」

いい人だ。

「それに可愛い子に土下座するのは楽しいからな！」

でも変な人だ。

「そういや夏休み中だよな？　サー――嬢ちゃんはなんでこんなとこに来たんだ？」

「あなたに会いにきたのー」

「なんたる光栄！　ははー！！」

土下座しつつ器用に花壇に種を植える用務員さん。日光が照りつける中、タオルをハチマキにして働いて……大変だ。

「それ何の種？」

「枝豆だ。来年のおつまみ用に」

「うわー職権乱用だ。黒いー」

「よく知ってるな、黒豆だぞこれ。ビールと合うんだこれが」

「ビール飲むんだねー。道理で立派なお腹してると思った」

その用務員さんは身体が大きい。ものすごくおおきい。今私が言ったようにお腹が出てるんだけど、中年のおじさんとは違う。なんて言うんだろう……身体が全体的に太いんだ。

「ふふふ、いいところに目をつけたな」

「すごすぎて最初に目がいくんだもん」

「巨乳はつらいぜ」

「いや胸でなくてー」

たしかに巨乳だけどさ。

「ああ、腹か？　ふふふ、このお腹にはな、夢と希望が詰まってるんだよ!!」

「へー、どこかの青いタヌキみたい！　ねね、ちょっと夢と希望を取り出してみてよー」

「ふ、そいつぁムリな注文だ。どっかの青いタヌキとは違ってこの夢と希望は俺の一部になっている……詰め込むことはできても取り出すことはできねぇのさ」

「詰め込むことしかできないならー、もっと詰め込めば用務員さん

は幸せになれるの？」

「肥満を超越して早死にするな」

不幸じゃん。

「夢と希望を詰め込みすぎた人間はうまくいかないのだよ。ぶっちゃけ健康診断的にそろそろヤバイ。１３０キロ超えるのはさすがに……メタボリックもびっくりだ」

「メタボリック？　なにそれ。格好いいね」

「なに！？　格好いいだと！！　じゃー俺メタボでいいや」

「うん。なんか変身しそー。ビームだしそー」

「メタボリックキャノンとか出すぜ！」

うんうん……本当にいいのかな？　格好いいの、名前だけなんだけどー。ま、いっか。

「ねーねー、さっきから思ってたんだけど……そのお腹叩いても平気？」

「おう。さぁ、この腹太鼓で演奏してみるがいい！」

わーい。ああいう大きなお腹みると叩いてみたくなるよねー。

「えい――硬い！」

でも意外な感触だった。ぽよぽよかと思ったらカチカチ！

「ふ、昔はレスリングやって鍛えてたからな。この腹には夢と希望だけじゃなく、筋肉も詰まってるのだ。もっと叩いてみ」

「えい！　えい！」

「もっと！　もっと！」

「えいえいえーい！！」

「あぁ、もっとやってぇ！！」

「楽しそうだねー用務員さん」

「おう。こういうの好きだからな。そして罵られるのも大好きだ！」

「変わってるねー」

「おう。小さいころから『どうしようもないヘンタイ（笑）』と評判でな」

「それ、悪い評判じゃー」

「いやいや、（笑）がポイントだ。周りが『バカだこいつ』と笑える程度の趣味なのだよ。というわけで、さぁ！　思う存分罵るがいい！！」

「どうして生まれてきたのー？」

「……そういう重いのはちょっと」

あらら。身体大きいのに打たれ弱いとこあるのねー。

「用務員さんも重いのに」

「ふ……言葉の重みに勝るものはないんだぜ」

なるほど。勉強になるなー。

「ところで用務員さん、お名前はー？」

「む？　沖村雄太と申す」

「あははは－」

「……親がつけてくれた名前を笑われるのはちょっと」

ほんと意外と打たれ弱いなー。（笑）がつく程度の趣味だから仕方ないのか。

「じゃあ雄太さんだね」

「いやいや、ぜひゆーた、と侮蔑をこめて呼び捨てにしていただきたい。俺はあなたをサエ様と呼ぶので」

「なんでそこまで卑屈なの？」

「それがいいのだよ！！」

「ふーん。たしかにどうしようもないヘンタイだね、ゆーた」

「（笑）をつけてくれ！！　そうストレートに言われるのはちょっと！」

おもしろいなーこの人。

「ところでサエ様。俺は今から休憩だが、用務員室で茶でも飲んでくか？」

「あ、ごめん。これを友達に届けないといけないからー」

「そうか、残念だ」

「でもまたくるよー。ゆーたおもしろいもん」

「それは嬉しいな。今度来たときはぜひ踏んでくれ」

「どこを？」

「腰を。重い身体を支えているせいか、最近痛くてな」

またねーまたなーと手を振って別れ、カカちゃんちに向かって歩き出す。

変な人だったなー。自分でヘンタイとか言ってるし。でも身の危険とかは感じなかったな。聞くところによると生徒から人気あるみたいだし。気のいいおっちゃんって感じ。若いけど。

それに、なんだろう……喋ってて妙に安心できたような……

顔が優しくてお父さんみたいだったからかなー？　まー全然似てないんだけどね。

また話しに来ようっと。そして私のファンクラブに兵器として加えれば……我が軍は無敵だー！　物理的な意味で！　カカちゃんのお姉さんは除外的な意味で！　放てメタボリックキャノン！！　サエ様とか言ってくれるからすぐに私の軍門に下――

……あれ？

そういえば私、名前言ったっけ？

## カカの天下５２４「なんかでっかい変な人」（後書き）

新しい変な人登場。

名前、沖村雄太。
職業、貴桜小学校の謎の用務員さん
特徴、でかい。ヘンタイくさいことを言っているが、それが本気なのか周りを楽しませる冗談のつもりなのかは不明。
基本的には優しいオーラを放っていて、女子供にはめっぽう弱い。
ただし男を相手にしたときの戦闘力は鬼。その巨体を突進させ、すべてのモノをなぎ倒す。

# カカの天下５２５「第十七回、カカラジ！」

あーあー、ただいまマイクのテスト中、ただいまマイクのテスト中……んっん……よしっと。

えー、ではこれより、第一回呪ラジを始めたいと思います！　この呪ラジでは、ネット小説『カカの天下』の主人公カカの兄である天然タラシ変態ヘタレ女装趣味男トメを真人間に戻すべく、ありとあらゆる方法を駆使して天然（中略）トメを調きょ――教育していく番組です。

本来この時間は「カカラジ」の放送時間なのですが、なにか　の手違いによって司会のお二方がスタジオにまだ到着しておりません。よって、代わりに根っからのカカラジストである例の呪いの手紙の送り主、その名も――え？　二人が到着した？　ちっ……もう気付かれたか――えーと、わたくしちょっと用事を思い出しまして、今日はここで退散します。では！！

「――まったくもう。誰さ、スタジオの入り口に山のようにケロリン人形置いたの！」

「おかげで入るのに時間かかっちゃったじゃないか、まったく……わ、始まってる」

「おとと、皆さんこんカカ！！　最近カカラジの度に暑い暑いと言ってる気がしますがあえて言います暑いです！！　だって暑いもん！　なんて叫ぶから暑くなるんだという説もあるので試しに逆に言ってみます寒いです冷えます凍ります――嘘つけ！！　こんなとこで凍れるかぁ！！　ぷんぷん」

「はいはい落ち着け。留です」

「熱くなって自己紹介忘れてた。香加です！！」

そんなわけで熱いやら暑いやらわかりませんが、第十七回目のカカラジスタートです。

「今日は最初の変な小芝居やらないんだね。なんか変なのがあった気がするけど」

放送事故ですね。

「あれはゲストのいないときにやろうって話だったからな。今回はゲストいるし」

「ほー。誰さん？」

まぁ人気投票なんかやったからには、ねぇ？　あの人に出てもらわないといけないでしょう。

「お、まさか一位のあの人が！　それについてどう思う？　今回は一位を逃した留兄さんや」

「しつこいな……僕は別になんとも思ってないってば」

これはネット小説『カカの天下』を盛り上げるため、ぶっちゃけトークや作者の本音を交えながらいろいろやるラジオ番組っぽい話です！　留とか香加とかゲストさん、私作者は本編自体とは直接関係ないのでお気をつけください。

「しかしさー、人気投票終わったらいろいろ落ち着いたよねー」

「そだな。本編は夏祭りに向かって動いてるけど、基本はのんびりだし」

企画も楽しいですけど、こういう風にダラダラいくのが基本でないと。いっつも勢いでＧｏ！！　なんてやってたら疲れて毎日なんて書けませんしね。

「ところでさ……今さらこんなん聞くのもなんだけど。なんで毎日書いてるの、あんた」

「そういえばそうだな。一日一話だと日常な感じがしていいとは思うし、今やそれがカカ天って感じだけど……なんで？」

さぁ？

「オイ」

なんかいつの間にか毎日更新になってた……あれ、なんでだろ。気がついたら引っ込みつかなくなってて……しかも終わりが見えない感じに。

「そんなノリでこんな話数まできたんだね。完結する予定とかあるの？」

いやぁ、これとこれは書いておかないと、っていうのはあるんですけど……終わりは全く考えてないっすね。

「何話までいくことやら……ま、僕らは普通に暮らしてくだけだから、いいんだけどね」

まぁ私のやる気が続く限りは書きますよー。現実のほうで予想外のトラブルやら仕事が入らない限りは毎日いきますので、今後もよろしくお願いします。

「人気投票がいっぱいきて元気でたしね」

まったくその通り。あんだけ票がきたのは嬉しかった。

「というわけで、今回はそんな投票中にあったおもしろかったことや小話交えて行こうと思いますー」

ではＣＭです。

『今、何が流行ってるか知ってるかい!?　知らないのか。そりゃダメだ。全然ダメだ!

いいかい?　流行ってるのは――脅迫状だ!

え、それは“やったらダメなこと”じゃないのかって?　ノンノンノン、脅迫状ってものはね、ユーモアのわかる人には送ってもいいことになってるんだよ。だからそこの君も、うちの文房具屋で便箋買って送ってみないかい?

どこに送るか?

そうだなぁ……カカラジとかいうのにでも送ってみれば、“今月

の脅迫状”とかいうコーナーでも作ってくれるんじゃないかい？

それじゃな！　頑張っておもしろい脅迫状書けよな！』

ＡＭがあけて。

「ラジオ違う」

そだ。ＣＭがあけて。

「もはやＣＭじゃない気がするけどね。文房具屋さんの名前言い忘れてるし」

まぁそんなわけで。こういうコーナーもいいかなぁと思います。読者の皆さん、気が向いたら送ってみてください。どっちに送るかは任せますが、「これは面白い！　紹介される自信がある！」という脅迫文は、感想欄よりもメッセージ経由で送っていただいたほうがよろしいかと。感想欄だと載せる前に他の人に読まれちゃいますしね。

「本当に『今月の脅迫状』とかやるの？」

おもしろいのがあったらね。さてさて！　そろそろゲストに登場していただきましょう。第二回人気投票で見事に一位に輝いた――天下先生です。

「ちっす」

「軽いな、テン」

「いいだろ別に。こういうの苦手なんだよ。オレは何かの中心とかは合わねぇんだ。面白いことを近くで見守って少し茶々入れるくらいがちょうどいいんだよ」

「じゃ別にそゆ位置でもいいよ。そういう小ズルイ位置にいるから一位になれたんだろうし」

「……香加、オレのこと恨んでるか？」

「べーつーにー。どうせ私の上には天下先生や留兄以外にもいますからー」

はいはい拗ねないの。ラジオ進めるよ。留？

「はい、進行しますよ。えー、まずは人気投票中にいただいたメッセージをいくつか紹介しましょうか」

ほとんどは投票していただいたキャラへの励まし、応援だったのですが……一部、おもしろいのがあったので紹介します。

「あい、私読みます。えと、『トメ。ふふふ、この天然女ったらし野郎め……うらやましいから一位になってカカに嫌われてしまえ！！』という応援なんだか違うんだかよくわからないメッセージ」

「ま、実際は一位にならなかったが、香加より順位が上ってだけで結局は嫌われてんだろうけどな……あん？　じゃあオレもか」

「う……そうなのか、香加？」

「んや、嫌いにはなってないよ。恨んでるだけ」

喜んでいいのかどうなのか、微妙な回答ですな。

「あとね、『もし、カカに嫌われなくても、ゴ○ゴ１３に依頼してヤってもらうわ！』って書いてあるよ」

「あー、前にちらっとそんなこと言ってたな。暗殺依頼出したとか……」

でも残念ながら、そのお方に留は殺せないんだなぁ。

「なんでだよ。留は姐さんみたいにバケモノでもなんでもねぇだろ」

だって作品違うもん。来れないよ。

「な、なんてぶっちゃけた話を。まぁ僕は助かったけど」

「じゃ次いこか。えと、『投票数が少ないに一票』って、これは何」

あぁ、なんか読者様一人三ポイントしか入れられないのが「少ないぞー」という意見がありまして。

「そりゃ好きなキャラに好きなだけポイント入れることできればいいだろうけど」

「そんなことしたらバランスが――」

そんなことしたら集計大変じゃん。

「てめぇの都合かい！？」

だって人間だもん。限界あるもん。

「ムカつくなこいつ……ムカつくけど姐さんみたいになれなんて無茶言えねぇしな」

はいはい、次お願いします。

「次は――うわ、なんかいっぱいあるよこれ」

「このメッセージは……投票の？」

うぐ……ま、まぁ、一応いただいたからには発表しとかないとと思いまして。

「あんだこれ。『作者に投票します』って……てめぇの投票ポイントか！？」

あい……

「ねぇ、今数えたんだけど――作者、２７ポイントも入ってるよ！？」

「は？　じゃ実質６位なわけ？」

ううう……はい……

「あんた本編出てないじゃん！」

だって……なんか、頑張ってください、みたいな感じで、結構もらって……

「で？　なんで隠してたんだよ」

ええと、その、キャラ人気投票なのに作者なんかが出るのもアレかと思いましたし、あのときは急いで書いてましたし、アレですし、

「アレアレと煮え切らねぇな。はっきり言えよ」

恥ずかったんだよ！！

「おお、ハッキリ言った」

でも嬉しかったんだよ！　感謝してるんだよ！　このー！！

「だ、そうです皆さん。投票してくれた親切すぎる読者さんたち、これで納得してあげてくださいな……あれ、どした香加」

「私より低いからどうでもいいや」

正直なご意見どーも。さて、次――といきたいところですが。人気投票の話だけじゃなく普通のメッセージもたまっていますので、投票の際にもらったメッセージを一挙紹介していきましょう！　香加、一気に読んで。

「はいな。じゃーいきます。『♂さっちー♂』さんから。　カッコいいタケダを出せ」

無理。

「えー『日々楽々』さんから。タケダ、天然&クール路線で行け。それでモテるから」

許さん。

「タケダのはもういいや。えっと『三戸』さんから。トメにとんでもない事をするテンカ先生が見たいです」

超オッケー。

「はい次『棗』さんから。カカをくれ！」

だめ！！

「いっぱいの人から。サエちゃんくれ！！　ダメ！！」

先に言うな！　でもダメ！！

「これもなぜか何人かから。タケダとシューはいらん！」

わざわざ書くな！！

「やん。えー次は『変人と呼ばれている普通の人』さんから。普通の人と思ってるのは自分だけ？　まるで私、というかカカじゃん。まぁいいや。えー、早くケロリンの超必殺技とか究極奥義とか高速ノリツッコミが見たいです」

早く――って決定済み！？　ど、努力します。

「あれ、もう終わり？」

はい。感想欄にある投票は誰でも見れるので、今回はメッセージ経由でいただいたメッセージ中心に紹介させていただきました。

なお、サエちゃん狂信者のメッセージについては、どれもこれも長すぎるので却下しました。無念。

「さすがは私の嫁……」

「じゃ次は普通のおたより紹介かな……おいテン。なにしてる」

「チキンラーメン食べてる」

「なぜ！？」

「飯食ってなかったんだよ。これうめーよな……あ、作者。生卵もらったぞ」

そうそう、うちの冷蔵庫には卵と牛乳が常備して――そんなことはどうでもよろしい。普通の行きますよ。

「また私が読むね。えっと、『友人に西川っていう人がいる人』さんから。お見合い話で一瞬出てきた『トメの彼女』とは誰ですか？』だって。誰ですか留兄」

「あー、それはその」

まだ秘密です。

「えー」

「ずるずるずる」

「ほら天下先生も聞いてみてよ！　興味あるでしょ！」

「今のオレの興味はチキンラーメンのみ」

「このチキン女！」

「美味そうで良いあだ名だ。ずるずる」

こっちの天下先生の真意も読めないですね……とにかく秘密です。次行きましょう。

「じゃ僕が読むな。お、これテンもいるしちょうどいい質問じゃないか」

「ずるずる？」

「んと、『カカ天は心の癒し』さんから。『１２０話でカカが、「父の日は恨みを晴らす日って先生が言ってたよ」みたいな感じで言ったら、サエちゃんが「テンカ先生とこ仲悪いみたいだよー」って答えてると思うんですけど、テンカ先生は片親だって言ってるし…ってすごく気になったんですけど』だってさ。どうなんだ？　テン」

「あー、それな。恥ずかしい話なんだが……オレ、父親嫌いなんだよ」

「なんでさ」

「早くに死んじまったからだよ。それで母さん苦労させてるし、オレだってガキのころ寂しかったし、それで苛められたりしたし――ま、それで死んだ親を嫌いっていうのは単なる八つ当たりだってわかってるさ。でも、ついな」

「サエちゃんが、テンカ先生のとこは仲悪いみたいだーって言ってたのは？」

「オレの片親が死んでる、なんつーのはガキに聞かせる話じゃねーだろ」

つまり。個人的な恨みで父の日は嫌い。でも詳しく話すつもりはないから適当に生徒に語ったわけですね。

「そゆこと。なら最初から喋るなって話だけどな。人間、いろいろと話したくなっちまうんだよ」

そう。そして大人は酒に溺れていく、と。

「それ、てめぇの話じゃねぇのか？」

さ、さぁ！！　次にいきましょう！

「ほい。えっと、これは何人かにいただいた質問だな。お見合い話のときで、『カカが嘘をついてる！！』だとさ」

ああ、最初の頃の事故のときからほとんど嘘つかないって決めたんでしたよね、香加。

「うん。留兄相手にはたまについてたけど。笑って済ませられるようなのを考えながらね。嘘と冗談の区別って難しいけど、一応考えながらやってたよ」

「そのわりにはあの時ハッキリ嘘ついてたよな。庭の惨状を料亭のせいにしたんだっけか」

「うん。お姉がね、『嘘をついて傷つく人がいるって前に言ったよね？　でもその傷つく人が悪い人なら遠慮なくいーよ』って言ったから」

姉……軽いなー。

「ま、嘘をつかずに世の中を渡るこたぁ難しいしな。以前、嘘について姐さんはちゃんと教えてくれたんだろ？　なら、それくらい良いと思うけどね」

「そう、だな。嘘の良し悪しをちゃんとわかってくれてるなら、それで」

「といっても私――カカはまだ子供だからね。間違えたらフォローよろしく」

はい、話はまとまりましたね。

「嘘といえばもう一つ。キリヤンの話の嘘も相当なもんだったよね？」

「あ、ファミレス東治の繁盛記の？」

んじゃ桐谷君に聞いてみましょう。おーい。

「はい。客様を幸せにするのが私の仕事です」

おお、何気に立派なことを。

「手段を問わず」

「そこは問えよ！！」

「えー。お客さん喜んでるんだからいいじゃないですか。それにあのとき、私は一度も『自分が言ったことが嘘』だなんて言ってませんよ？」

確かに嘘ととれる発言はしてるけど、断言はしてないんですよね。

「それが話術というものです。では」

イカサマ師の言い分みたいですが……それもうちのカカ天のネタなんでよしとしましょ。ではここらでＣＭへ。

『夏祭りのお知らせです。

日時：８月２日。

場所：カカの天下。

様々な出店はもちろん、イベントステージではライブやダンス他、一般人参加のフリージャンルな発表会もございますので、皆さん、振るってご参加ください。参加できるものなら。

注：今年のお祭りは警備体制を強化いたしますのでご了承ください。昨年のお祭りでお面を利用し、なんかよくわからんことをした阿呆がいたので、その対策です。お祭りの風物詩であるお面をかぶるなとは言いませんが、かぶるなら相応の注意をお願いします』

ＦＭが――

「同じネタ使わないの」

……ＣＭがあけて。

「それにしてもなんつーお知らせだ。参加できるもんならしてみろってか？」

「参加したいー！　って人が本当にいたらどうすんのさ」

ふむ……そですね。じゃ参加表明していただいた読者さんがいましたら、抽選で選んで何人か出しちゃいますかね。ただし、どんな役で出てもどんなキャラで出ても文句言わないこと！

「おお、読者さん参加企画だ」

まさにたった今思いついた企画だったりします。ビバ思いつき！

さて、そろそろお別れの時間となってしまいましたが……ここで

一つ。お知らせしたいことが。

「ん、なに？」

このカカ天。適当に書いているようで所々で遊び心があったりするのですが、皆さん気づいてくださってるのかなぁと。

「んだよ。例えばどんなんだ？」

例えばクララちゃん。登場時にワンピース着てますね。話が進むにつれて、そのワンピースの色が、桜の咲き具合によって色を変えてたりしてたのですが……気づいて――

「や、気づかないだろ普通。そんなこと」

例えば人気投票が終わってから。５０２話から先は、人気投票一位のテンカ先生視点、二位のサエちゃん視点、三位の――と順位の順に話を展開してたのですが……気づいて――

「だから気づかないっての！！」

「やることいちいち細けぇんだよてめぇは！」

「大体さ、なんで５０１話はやっぱりカカとトメっていう基本な形にしたかったんですよぅ。それにほら、ちょっとわかりにくくしたほうが「あ、これってもしかして！？」みたいな楽しみできるじゃないですか！　そんな感覚が好きなんで――

「だったらもっとわかりやすくしろよ」

うぅ、ごもっとも……ちなみにトメ父視点の話だけなかったりするのですが、インドちゃんがピンチのときにタケダを誘導したのが「たまにはいい格好させてやろう」とでしゃばったトメ父だったのですが……気づいて――

「気づいてほしかったらどっかに書けよ！！」

いやー、トメ父も順位高かったけど出番こんなもんでいーや的な演出したかったんですよー。しかし誰も気づかない。悲しい。

「そしてこんなところで告白するハメになるわけだね」

でもこんなん好きなんで、またやります。

「こりねぇな、おい」

そんなわけでこれからも細かいことしてきますんで、よろしくお願いしますね♪

「……なんか変なまとまり方だけど、まぁいいか。じゃそろそろ終わりだな。お知らせしとくこととかあったっけ、香加」

「あ、脅迫状コーナー。やるんなら募集しないと」

「ああそれか。いつもの通り適当にどっか送ってください。自信のある人はメッセージ欄からどうぞ。各自、おもしろく書くこと！」

オリジナリティ溢れる脅迫状、待ってます。

「あとは夏祭りの参加表明！」

こんな役で参加したい！　っていうのがあれば書いてください。ただし、その通りになるか、そもそも出られるかはわかりません。全ては……時の運と私の気まぐれです。あ、名前を書くのを忘れずに！！

「こんなとこだね。さて、じゃあ恒例のアレだけど……せっかくだし天下先生、やる？」

「あん？　オレがやっていいのか」

「おう。誰にやってもいいぞ」

「じゃ……オレに投票したヤツらにカカラジチョップ！！」

「「なぜ！？」」

「どいつもこいつもオレとトメがくっつけばいいとか書いてんじゃねーよ！！」

そうそう、そんなこと書くから夏祭りでは本当の『夫婦』漫才をすることになるんですから。

「は？　おい、ちょっと待て作者それはどういう意味――」

強制終了気味にカカばい！！

この番組は、どっかの文房具屋と、夏祭り実行委員長の提供でお送りしました。

## カカの天下５２５「第十七回、カカラジ！」（後書き）

そんなわけでカカラジでした。
正直な話、カカラジで喋ってさらにここでも作者が喋るのは微妙でナニ書けばいいのかわからなかったりします汗

ま、いっか。それでは夏祭り編、本編はもうすぐですよー。参加表明は８月２日に載せる話までですのでお早めに！

## カカの天下５２６「間の悪い私」

こ、こんにちは……ノゾミ、もといインドって呼ばれてる私です。

今日はですね、そのですね……夏祭りにやる漫才の打ち合わせということで、みんな集まることになっていたのですが、その……

「む？　どうしたノゾミ君。俺の顔に何かついているか？」

こ、ここ答えないと！　答えないと！　早く早く！　タケダ君の顔には何がついてる！？

「……口」

「口？」

聞き返してきた聞き返してきた！　頷かないと頷かないと！　ほら、早く！

「……う」

「口がついてちゃダメなのか？　なんてな――」

「うん」

「ダメなのか！？」

「あ、ち、ちが……！」

ううう！　変なタイミングで頷いてしまいました……

「喋るなということか……」

「……あ、あの」

「わかってるさ。冗談だろう？」

うん、うん、頷かないと――

「まさか冗談じゃないのか？」

「うん！！」

「俺は喋ってはいけないのかぁぁぁ！！」

「違……！！」

えっと、ですね、そんなわけでして、その……今、喫茶店でタケダ君と二人きりなのです！　ここが集合場所で、さっきまでアヤちゃんとニシカワ君もいたのですが、イチョウさんが来る途中でどこかで迷ったらしくて二人で迎えに行っちゃいまして……私とタケダ君はお留守番なのです……

正直、すごく緊張しています。だってだって……ついに言えるのですから。

胸にずっと秘めていたことを。

……あのとき、私を助けてくれたタケダ君。次の日から学校で、

ずっとお礼を言おうと伺っていたけど……結局、声をかけることすらできなかった。カレーをあげることもできなかった。

だから、夏祭りの話を聞いて、タケダ君も参加すると聞いて、これはチャンスだと思った。

お礼を言う、チャンスだと！

そして今、絶好のシチュエーション！　さぁ言うの、言うのよ。私はノゾミ！　その名を持つ私が望みを叶えられないでどうするのっ。

「た……タケダ、君」

「む？　なんだノゾミ君。ところで俺、喋ってもいいんだよな？」

「も、もちろん！　あ……あの……」

うぅ……目をあわせるだけで緊張するよぅ……

「やっぱり俺の顔に何かついてるか？」

「……あ」

簡単よ。とっても簡単。ただ「ありがとう」って言えば済む話！

「……ありが」

言うの。言うのよインド！　そう、私はインド。面積がそれなりにある国の名を持つ女！　だからこれくらい言えるの！

「ありが……！」

「ありが？」

「ありが……１０匹」

……ぅぅ。

言えにゃい。

でも、でもでも、遠まわしだけど言ったよね？　アリが１０匹で『ありが１０（とお）』だもんね！　タケダ君は頭がいいから、きっとわかってくれるよね！

「俺の顔にアリが１０匹も！？」

前のセリフ（俺の顔に～）忘れてたぁ！

い、言い直さないと！

「アリに集られた男タケダ……ううむ、このフレーズはなかなか珍しいが格好悪いな。ところでアリはどこだ？　鼻の穴に巣でも作ってるのか？」

「あ、あり」

「有りだと！？　人間の鼻の穴に巣を作ることも有るのか！？　お、おそるべしアリ」

怖いぃぃぃ！　想像したら怖いぃぃ！

にゅう……とにかく失敗、伝わらなかったみたい。メル友のメルちゃんなら、こういう言葉遊びをすぐにわかってくれるのに。試しに携帯をピポパっとしてメール送ってみる……『アリが１０匹』っと……

あ、すぐ返信きた。

『蛾が７２匹？』

７２匹の蛾で『なにが？』だね。さすがメルちゃん！　はぁ……こんな風にタケダ君ともやりとりできれば……

いいえ、そんな弱気じゃダメだよ私。助けてもらったんだもの。お礼の気持ちをちゃんと伝えないと！

「た、タケダ君……」

「む、なんだ。俺の顔からアリは取れたか？」

「う、うん。それでね……その……」

言うの。言うの。

「た、た……」

ちゃんと言うの。「助けてくれてありがとう」って！

「た……」

甘えちゃダメ。そうだ、もっと自分を追い込めば良いんだ。今から私は言う。これを逃したらもう言えない！

「たすけ……」

そんなんじゃダメ。大きく息を吸って。さぁ一気に言いましょう。これを逃したらもうチャンスはなし！　もう言えない！　だから言わなきゃならないの！　さぁ言おう！

さぁ！

一気に！

「た」から一気に言うよ！

せーの！！

「タスケって誰だ？」

言えないし！　タケダ君の質問が被って言えないしぃぃぃ！！

ぅにゅー……なんてダメな子なんだろう、私。ノゾミって名前は『望みを抱くだけ無駄』って意味なのかな……そこそこ面積ある国のインドの名前をもらっても私には足りないのかな……アメリカくらいの面積いるのかな……だんだん頭の中がわかんなくなってきた。

はぁ……私が素直になれるのはやっぱり携帯しか――携帯！

そうだ、携帯があったんだ！　急いで急いで！　たしかメルちゃ

んにもらったメールでお礼を言われたのが……あった！！

「タケダ君、これ！！」

「む？」

そのメールを表示して、タケダ君に向かって携帯を突き出す！

見せた……見せちゃった……

タケダ君の反応は……？

……顔まっか？

はてにゃ？

くるりと携帯を回転させて、改めて表示されてるメールを見てみる。

『ありがとう！』

うん、何も間違ってな――あ、続きあった。

『君のおかげで可愛い下着が買えたよ』

急ぎすぎたぁ！！　これ私がメルちゃんに下着の通販サイト教えて上げた時の……！！　買ってない……私は買ってないよぅ……タケダ君のおかげとか何よぅ……今日の下着は可愛くてお気に入りだけど関係ないよぅ……

「の、ノゾミ君？　その」

「ち、ちち、違います、間違えました……タケダ君が、下着とか、その、違くて……」

「あ、ああ。よくわからんけどわかった！　だから落ち着け！」

「ぅぅぅ……」

恥ずかしい……恥ずかしすぎるぅ……

「ふむ。ノゾミ君が何を言いたいのか……とりあえず俺の中で仮説が三つあるんだが、聞いていいか？」

あ、もしかして気づいてくれた！？　私は慌ててこくこく頷く！

「仮説そのいち」

首を縦にこくこく！

「そのメールはタスケからのメール」

首を横にぶんぶん！　『可愛い下着を買った』とか報告してくるタスケ君なんて嫌！！

「仮説そのに」

こくこく！

「タスケの鼻の穴にアリが住み着いた」

タスケはもういい！！

「最後の仮説だ。君は俺に何かを伝えたいけど、まったく伝わっていない？」

こくこくこく！

よかった……伝わってた……

……あれ？

伝わってないんじゃん！！

「何を伝えたいのだ？」

「そ、その……」

言う。

今度こそ――

「インドちゃん、タケダ。お待たせ！！」

「この度は迷ってしまい、お手数おかけいたしました……」

「いいよイチョウさん。だって西に向かって迷ってたんだから」

「……何がいいのよニッシー」

……くすん。

みんな帰ってきた。

言えにゃい。

夏祭りまでに……言えるかにゃ……？

## カカの天下５２６「間の悪い私」（後書き）

というわけでインドちゃん話でした。
なんかこの子の話となるとゆるーい感じになりますねぇ……こんな子たちが漫才なんかできるんでしょうか。まったく考えてないや、あっはっは。

ま、それはともかくとして。夏祭りの参加表明をぞくぞくといただいてます。楽しくてありがたい限りですが……出れなくても恨まないでくださいね＾＾；

## カカの天下527「祭りの前に、ひと踊り」

「カカ、珍しいもん手に入ったぞー」

「なになに？　ご飯？」

ご名答、そろそろ夕飯の時間なのです。用意するのはもちろん僕、トメです。笠原家の食事係とか洗濯係とか掃除係とかカカ係とか姉係とか役職の多い人間です。誰か給料くれ。

「今日の夕食は――これだ！！」

「……おじゃまたくし？」

「違う！」

「あ、おたまじゃくしだ！」

「そもそもそれが違う」

ちょっと似てるけどな。僕がカカに見せた、ボールの中でうようよ泳いでる細長いのは――

「どじょうだよ。踊り食いって知ってるか？」

「なにそれ。踊りながら食べるの？」

「いんや、活きたどじょうをそのまま食べるんだよ。そしたら口の中でどじょうが踊ってるみたいになるだろ？　だから踊り食い」

「……え」

さすがのカカも、コレを口に入れるのはビビるらしい。ちょっと絶句してる。

「試しに一匹つまんでみ」

「……ええ！　このまま食べるの？」

「だからそう言ってるだろ。あ、ちなみに噛まないで飲むもんらしいぞコレ」

「お腹の中で育ったらどうするの！？」

「胃液さんが活躍してくれるから大丈夫だよ」

「万が一生き延びたらどうするの！！」

「胃液さん、ちゃんと仕事してくれるってば。給料は出ないけど」

僕だって給料なしで働いてるんだから。

「そのうちお腹の中からケロリンが出てくるんだよ！？」

「だからおじゃまたくし違うっつーの」

まさに「おじゃまします」とお腹をたくしあげるわけか……ってダジャレにしては怖いな。

まぁそれはともかく、カカは軽くパニックになってるな。いくら小生意気でもお子様か。

「んじゃ僕が軽く食べてみるから」

別に初めてじゃないしな。不安を取り除いてやるためにも軽くひょいっとつまみ、口の中での踊りを楽しんでからつるんと飲んでみた。

「あぁ……」

なんか壮絶な顔してカカが見てるけど……おお、食道とかが愉快な感じ。暴れてる暴れてる。

「どじょうがトメ兄の胃の中に……」

「おう」

「そして抜け道を発見」

「おう？」

「細い隠し通路を辿っていくと、やがて脳へとたどり着き」

「おうい？」

「がぶっ」

「殺す気か！？」

「トメ兄はそんなものを食べたんだよ！？」

「そんなもんじゃねーよこれは！！　心配ないから食べてみな。慣れれば楽しいから」

うぅ……とカカは嫌そうな顔をしつつ箸を持つ。

そしてどじょうを摘もうとして……失敗。失敗。なかなか摘めない。

「どじょうすくい難しい」

「それ踊りのことな」

意味としては変わらないかもしれないが。

「ほっ、よっ、はっ、やた、掴めた」

「よし、それじゃ口に――」

「ちょっと待ったぁ！！」

……あん？

聞きなれた声がして振り向くと、そこにはいつのまにか仁王立ちしている姉が。

「カカちゃん！　どじょうを食べる前にはね、どじょうすくいという踊りをするのが習わしなんだよ！」

どこの宗教の話ですか。

「そっか！」

しかし喜んでどじょうを手放すカカ。こいつ、実は怖くて「食べるの先延ばしにできて助かったー」とか思ってるな。

「よし、ではあたしと一緒に踊ろう。よっ、ほっ、はっ」

「よっ、ほっ、はっ」

そして仲良くどじょうすくいを始めるアホ姉妹。なんだか姉がカカに拳法教えてたときのこと思い出すなー。

「いいねいいねー、脚でもすくうよ。はい脚あげてー。ワンツー、ワンツー」

なんか違うもんになってきた。

「はい、くるっとターン」

どじょうって激しいしな。

「ここでコケる」

ああ、どじょうって滑るしな。

「はい、埋まった感じで静止」

それは土壌。

「ヘイユー、アイマイミーマイ！」

ああ、ド・ジョーさんか。誰か知らんけど外人な……よくわかったな僕。

「よし、ウォーミングアップおしまい！　さぁ食べるよ！」

「う、うん」

なんだコイツ。食べたかっただけか。

「……えと、カカちゃん先どうぞ」

「え！」

そしてこいつもビビってる、っと。そういや食べたことないのか姉は。

「お姉こそどうぞ！？」

「いやいや、ここは姉の言うこと聞けやコラ」

「姉なら見本を見せるべきでしょ！　たまには本気見せてよ！」

「どじょう食べるだけで本気見せてどうすんの！？」

「じゃ、いつなら本気だすの！？」

「そ、それはほら……空から隕石が降ってきたときとか」

止めるんかアンタ。

「よ、よし！　じゃあ一緒にいこう？」

「い、いいよ？」

「せーの、でいくからね！」

「う、うん！」

「せーの！！」

ここにサエちゃんとかいたら間違いなく自分だけ食べないんだろうなー、なんて思いつつ。同時にどじょうを口へ入れる二人を眺める。

「む、むむむんむ！！」

「むんむんむん！！」

口の中で暴れてるみたいです。

「むんむー！　むんむー！」

そしてなぜかワンツーワンツーと踊り始める姉妹。

「んぐん！　飲んだ！」

「んぐ！　あたしも！　な、なんかまだ踊ってるよ！」

「じゃあ踊らないと！」

「そだね！　よっほっはっ！」

「わんつー！　わんつー！」

おー……ほんとに踊り食いしてるよこいつら。

アホだなー。

でも……なんか楽しそうだな。

……んと。

どじょうをすくって、ぱくっとな。

んー……

「わん、つー（とても小さい声）」

……はっ！

「じー」「じー」

「こっち見んな！！」

「にや」「にやにや」

「こっちくんな！！」

「はいご一緒に」「わんつー！」

「踊らすなー！！」

べ、別に楽しくなんかないんだからな！！

……はい！　皆さん一緒にくるりと回って、ワン、ツー、どじょう！

た、楽しくなんかないんだってば！！

## カカの天下５２７「祭りの前に、ひと踊り」（後書き）

夏祭り系の話ばっかもあれなので、まったく関係ない話をはさんでみました。

そう、どじょうの踊り食いです。なぜその話を持ち出したかというと、最近うちの職場で話題になったからです（めっちゃ私事

踊り食いもいいですが……活どじょうの天ぷらとか、揚げるときすごいですよ。ものすごい踊りますから。油飛び散りまくりですから。

どじょう、楽しいですよね。

揚げられたり飲まれたりする身としてはたまったもんじゃないでしょうが＾＾；

# カカの天下５２８「夏の詰め合わせ、うえ」

とある夏休みの風景、そのいち。

私、サエですー。

今日はカカちゃんとサユカちゃんで、学校のプールへ遊びにきています。夏休みは監視の先生がいる時間なら出入り自由なのです。四方八方スクール水着。マニアにはたまらんねー。

「っぷはぁ！！」

「おー、サユカちゃんも泳げるようになってきたねー」

「私たちのおかげだね。感謝するがよいサユカン」

「泳げるようにって……プールサイドから二人してわたしをぶん投げただけじゃないのっ！！」

「すごい跳ねたね。水切りみたいに」

「なんかカカちゃんのお姉さんになった気分だよー」

「こっちはシューさんにでもなった気分よっ！！」

言い合いながらプールサイドからざっぱんとプールに降りて、不貞腐れるサユカちゃんに近づいていく。そういえばシューさん、最近見てないなー。

「仕方ないじゃん。サユカン全然泳げるようにならないもん」

「なんだか面倒になってさじを投げたくなるのもわかってよー」

「さじじゃなくてわたしを投げたでしょうがっ！！」

「槍投げみたいで格好よかったからいいじゃん」

「投げやりに言うなっ！！」

お、うまい。サユカちゃんもツッコミできるようになってきたねー。

「よし、んじゃサユカンのためにもちゃんと特訓しますか」

「そうだねー。じゃあ息を止める練習と、水中で目を開ける練習やろうかー」

「どうやるのよっ」

私はこういうときにもっとも適した訓練法を知っている。それは――

「水中でにらめっこするのー」

これなら特訓にもなるし遊びにもなる。一石二鳥だ。

「いいねそれ。サユカンもそれくらいならできるようになってきたし」

「いいわよ、受けて立つわっ」

私たちは「せーの」と声を合わせて、いっせいに潜った。

そして三人で顔を見合わせる。息を止めることに必死なサユカちゃん。カカちゃんはベタに鼻の先を指で押上げて豚の鼻を作っている。

しかし甘い。

必殺顔。

『ブリリアントストームのっぺらぼう！！』

二人とも水中で大爆笑。大量の空気を吐き出して水上に顔を出した。遅れて私も顔を出す。

「――ぷは。私の勝ちー」

「けほっ……さ、サエちゃんやるね。次は私の必殺技を見せてあげるよ！」

「げほげほっ……え、まだやるのっ！？」

再び「せーの」と潜る私たち。

私の必殺顔『焼き鳥フェニックス』とカカちゃんの『六連風神悪鬼』が衝突する！

勝負は互角。同時に吹き出して水上へと上がる！

「ぷはっ！！　はぁ、はぁ……やるね！」

「そっちこそー！」

「げほっ……ぇ、また？」

サユカちゃんは死にそうだけどもいっちょ「せーの！！」

『トワイライトテンペスト！！』

『硝子の幻想卿！！』

互角！！　サユカちゃんはすごく死にそうだけどまだまだー！

数多の必殺顔が荒れ狂う。

『天よ、地よ、この世にありし全てのものよ』

『天ぷら』

『そして誰もいなくなるか？』

『マシンガンババァ！！』

『でかい鼻！！』

『シュー君の死』

『カカちゃん』

『サエちゃん』

『今日はお弁当？』

『うん。一緒に食べよう』

『もうちょっと遊んでからねー』

『ほーい』

――そんな、水の気持ちのいい晴れた午後でした。

あ、サユカちゃん死んだ。

とある夏休みの風景、そのに。

私、アヤなんだけど……

「ネタが浮かばない！！」

これである。今日も夏祭りの五人で喫茶店に集まって考えてるんだけど……一向に漫才の方針が決まらないの！！

「何かないの、ニッシー！！」

「相撲でさ。ひが～し～、誰か～。に～し～、かわ～、って略すなよ！　みたいなのは？」

「おもしろくない。タケダは？」

「もうすぐ算数終わるぞ」

「普通に宿題してんじゃないわよ！！　……あとで見せなさい。インドちゃんは？」

「……え、えっと……なんでやねん」

「誰もボケてない！！　あ、ツッコミの練習か。あ、うん、いいよいいよ。続けて……イチョウさんは？」

「はい？」

「普通に本読んでるんじゃないわよ！！」

これである。かろうじてニッシーが考えようとしているけど西ネタばっかでつまんないし。

「はぁ……棄権したほうがいいのかしら……イチョウさんは何読んでるの？」

「わたくしが考えてきた漫才のネタ帖です」

「早く言いなさいよそれを！！」

――そんな無駄な時間を過ごしてしまった午後でした。

これで大丈夫……かな？

とある夏休みの風景、そのさん。

僕、トメです。

「休みじゃねーよ！！」

――そんなことを誰へともなく呟いてしまった午後でした。

短いし。

とある夏休みの風景、そのよん。

オレ、テンカだけどよ。

「なぁ教頭さんや」

「なにかね」

「オレが何やってると思う？」

「プールの監視だな」

「あんたは何してる」

「背泳ぎだ」

「……なんでオレだけ仕事してんだ」

「下っ端とはそういうものだ」

――そんな、理不尽な午後でした。

てめぇも働けよ。

とある夏休みの風景、そのご。

ぷるるる、と携帯が鳴って取りました、サカイです。

『もしもし、サカイさん？　今日はいったいどうしたの。会社に来てないし連絡もつかないし……何かあったの？　休みの届けも出てないわよね？』

『夏休みですー』

『ねーよ！！』

――そんな、ダメな午後でした。

あら、もう午後？　寝すぎたわー。

とある夏休みの風景、そのろく。

動物語訳。

「暑いにゃー……ラスカル」

「だるいわぅん……総理」

「焼き豚になってしまうぶぅ……」

「「ごくり」」

「ぶー！？」

――そんな動物たちの美味しそうな午後でした。

いつぞやの豚です。覚えてますか？　ぶぅ。

## カカの天下５２８「夏の詰め合わせ、うえ」（後書き）

前回好評だった詰め合わせです。詰めた基準は適当です笑

さてさて、夏祭りまであと２日。

どうしまっしょかね（ぉぃ

# カカの天下529「一滴の不安」

こんにちは、クララです！！

ただいまクララはすごくうきうきしてるです。なぜかといいますと……明日お祭りがあるからです！！

クララはいつも遠くから見てるだけでした。それだけでもすごく楽しかったのに、今年は普通に参加することができるのです！！こんなに嬉しいことはありません……なのでいろんな人を片っ端から誘っていたりします。

そんな中、偶然にもサエおねーちゃんと会ったので一緒に歩いてます。

「サエおねーちゃんの漫才、楽しみです！」

「ふふふー、これからカカちゃんちで打ち合わせなんだよー」

なんと！　ならばクララは退散せねばなりません！　やっぱりこういうのは当日のお楽しみでないと――

「……あ、そうだ。ちょっと気になることあるから、クララちゃんもついてきてくれる？」

「はい？　いいですけど」

クララ的にはどこでもついてくですよ。木工業者のとこ以外なら。

「おやや？」

――と、サエおねーちゃんと雑談しながら歩いているうちにカカの家にたどり着いたのですが。

「変な感じがします」

「でしょー？　私が打ち合わせしてる間に、見てきてくれないかな」

「わかりました」

なんでしょう。なんだか良くないモノの気配がします。

カカの目があると面倒なので、適当に消えて勝手にお邪魔します。えっと、変な感じは……こっちからですね。

カカの家で初めて入る部屋です。なんだか物が少ない部屋ですね……壁も床もまっさらですし。でも所々テープをはがしたアトがあるような？

「ぴく」

カタン、と。音がしました。

押入れのほうです。

ちょっと失礼して……開けさせてもらいました。

するとそこには！

なんだか薄気味悪い人形がありました……

「か、可愛くないです」

「悪かったねぇ！！」

「ひぇ！？」

しゃ、喋った！？　なんだか喋りましたよこの人形！！

「な、なんなのですかあなたは！」

御札が貼られた着物姿の人形は……返事をしませんでした。

「き、気のせいだったのでしょうか」

おそるおそる人形の顔を覗き込みます。可愛くないと言ったのは雰囲気のことであって、実際の顔の造りは結構、綺麗な……でも、やっぱり怖い感じがします。

あれ？　よく見ればこの御札、なんだかはがれかけて――ぴくり。

「ひっ！？」

や、やっぱり動きました！！　えっと、いま胸が動きました！

……胸？　おお、中々に立派なおっぱいです。

はらり。

……はらり？

足元を見ます。

落ちてたそれを拾います。

御札でした。

……ほわっつ？

「に、人形が……動き出してます！！」

なんか封印が解けたっぽいです！！　額に『呪』とか書いてあります！！　親切です！　わかりやすくて涙がでます！！

「よっせって！　あっげっる！　よっせって！　あっげっる！！」

「なんか言ってます！？　何言ってるかわかんないですけどめっちゃ怖いです！！」

「なにおぅ！？　桜の精ごときがあたいのおっぱいにケチつける気かい！？」

は、ハッキリ喋りました！　この人形、やっぱり額の文字通り、呪いの……？

「桜の精って……なんで知ってるですか！？」

「はん、人じゃないモノになってから長いんでね。そんくらい見ればわかる。あんたにも似たような力くらいあんだろ？」

「そ、そうですけど……そ、それと。さっきのなんですか。よせてあげる！　とか」

「あんたも気合入れるとき『えいえいおー』とかやるっしょ？　あんな感じ」

なんて奇抜なえいえいおーなんでしょうか！　初めて見ました。クララも今度やってみるです。

「くあぁ……しっかし久々に動けたわ。起き抜けにひと仕事すっかな」

「し、仕事ですか？　何するですか？」

「誰か呪うのよ」

「ダメです！！」

「あん？」

ビクリ、と身体が震えました。人形さんに睨まれただけで、動けなく……

「あたいのおっぱいに何が詰まってると思う？　人の怨念や無念、呪いの類だよ。あたいはこれを誰かにバラまくために作られたのさ。それが仕事なんだよ」

「そ、そんな……おっぱいには夢と希望が詰まってるって誰かが言ってました！」

「そいつぁ単なるスケベだ」

「とにかくそんなもの詰めたらダメです！　ばら撒いたらダメです！」

また睨まれます。怖いです。でも引いてはいけません！

「明日は楽しいお祭りなんです……それなのに、こんな」

「祭りがあるのかい！！　こいつぁ良いことを聞いたよ、ありがと」

「しまったぁです！！」

口が滑ってしまいました！　クララしょっくです！！

「それじゃお楽しみは明日にとっとくかね……めちゃくちゃにしてやる。くくく」

「さ、させません！」

「ハッ、妖精風情に何ができる。あんたらの類はお祭り騒ぎが大好きなんだろ？　だったら人の不幸でも大騒ぎすりゃいいじゃないか――バケモノ同士、仲良くしようや」

「嫌です。クララは楽しいのがいいんです！」

「そうかい。残念だ――じゃあね」

「待っ！！」

消えて、しまいました……

どうしましょう！　明日のお祭りが……

「クララちゃーん？　あ、ここにいた」

「サエおねーちゃん！」

「こんな部屋があったんだねー……あれ、どうしたのクララちゃん。何かあった？」

「こ――」

ここで呪いの人形が、そう言おうとして口つぐみました。

「……いいえ、何もありませんでした。変な感じは気のせいでした」

「そっかー。そういえば変なのなくなってるね」

もう、ここには居ませんから。

「よかったー。じゃおやつ食べよー」

「はい」

お祭りは、めちゃくちゃになんかさせません。

みんな、楽しみにしてるんです。

だから、みんなは何も知らないまま楽しんでください。アレは、

クララが一人でやっつけます！！

あの――あ、名前知らないです。

だから適当につけます。

あの、おっぱい星人め！！　クララの街を好きにできると思ったら大間違いです！！

## カカの天下５２９「一滴の不安」（後書き）

呪いの人形も参戦？　が決まり、夏祭りは大変な混雑が予想されます。
混戦が予想されます。
混乱はしないように頑張ります。

さーて。
お祭りが終わるまで何話かかるでしょっかねー笑

**カカの天下５３０「夏祭りだよ、全員集合」**

遠くから花火の音が聞こえます。

トメです。本日いよいよ夏祭りです！！　昨日は前夜祭があったみたいですが、イベントステージが本祭の今日にあるので行きませんでした。しかし話に聞くとその日もかなりの盛り上がりを見せたようで……きっと今日も大盛り上がりでしょう。楽しみです！

「お待たせ！！」

「おお、用意できたか」

カカサエサユカの三人が仲良くうちの玄関から出てきた。そして――その仲のよすぎる格好に驚いた。

「どうよ、トメ兄」

「ど、どうですかトメさんっ」

「どうメダルですかートメお兄さん」

最後のはいまいちわからんけど、いやぁ。

「うん、似合ってる。三人とも色違いのケロリン浴衣って……よく見つけたな」

カカは赤、サエちゃんは黒、サユカちゃんはピンクで、それぞれの生地の色にあったケロリン模様が所々で飛び跳ねていた。

「サエちゃんが持ってきたんだよー」

「買ったのか？」

「いえいえー、なぜか昨日、宅配便で送られてきたんですよー。せっかくだから着てみなさいっておばさ――お養母さんが」

……サカイさんだな、絶対。なんだ、意外とやることやってるんじゃん。

「いいよね、トリオって感じで！　このまま漫才に出るんだよ」

「ああ、おまえらも出るんだよな」

こいつらも漫才なんだよなぁ。変なかぶり方したもんだ。うちのおもしろ一家の血をひいてるだけはある。

「トメさん……今日は、今日だけは勝負ですっ！　どっちが満点を取れるかっ」

「点数……つくのか？」

「え、こういうのってつくんじゃないんですかっ」

や、漫才大会じゃなくてお祭りだしこれ。

「ま、いっか。じゃあどっちが多く笑いをとれるか勝負な」

「は、はい！！　絶対みんなを笑い死にさせてやりますっ」

大量殺人じゃん。

「そして地球でただ二人残ってしまったわたしとトメさんは……！！」

なんかドラマだ。

「生活しきれず死んでゆく……！」

なんか現実的だ。

「そして二人は仲良く天国へっ！」

えっと、まぁ、お手柔らかにね。

……ん？　いつのまにか赤いのと黒いのが離れたところに。

「聞きましたかサエさんや。あのラブラブっぷり」

「おーおー、なにやら二人で盛り上がって……カップルはお祭りの風物詩ですなー」

「もうあんたら二人で漫才やれば？　って感じですなぁ」

「そこをあえてテンカ先生とやらせることによって、サユカちゃんをいじるのが楽しくなるんじゃないですかぁ」

「おお、そういえばトメ兄とテンカ先生は夫婦漫才をやるとか？これは見ものですなぁ」

「サユカちゃん悔しがるよー、くっくっくー」

「泣くかもねー、今のうちに幸せを……けっけっけ」

「ちょ、ちょっとそこの二人ぃぃぃっ！！」

よかったな、サユカちゃん。早速笑いとれてるぞ。邪な笑いだけど。

さてさて……そろそろ夕焼けも引っ込んできたし。そろそろ行きますかね。

祭り会場は隣町だ。なのでバスで移動するんだけど、さすがに混んでいた。臨時でたくさんバスが出てるからすぐ乗れたけど。

そして到着するころにはすっかり真っ暗。しかしそれに負けない無数の提灯の明かりが夜空と人々を照らしていた。

「んー！　祭りって感じだねー」

「よし！　早速食べよう！」

「着いた早々に何を食べるのよっ」

「たこ焼き屋さんとお好み焼き屋さんとわた飴屋さんと焼きそば屋さん！！」

「屋さん――って人を食べてどうするのっ！？」

「あのわた飴屋さん、おいしそー」

「腹壊すわよっ、あんなハゲた人食べたらっ！」

「ああ、あのわたあめをハゲた頭にかぶせて『イカしてるぜそのアフロ！』って言ってあげたい！」

「ほんとにやる気！？　ちょ、待ちなさいよカカすけ！　こらっ、サエすけも一緒に止めて！」

「白いアフロもいいもんだー」

「君も同意見かっ！？　たしかにあのおっさんの頭は可哀想だけどっ」

おー……見事に舞い上がってるな、この三人。まぁ一年ぶりの夏祭りだし、子供はこれくらいはしゃいでくれたほうが楽しいもんだ。うんうん。

「好々爺な視線で満足そうに頷いて……もう歳ですか、おじいちゃん？」

「オレも子供は好きだが、今のトメみてぇな生暖かい視線は無理だなぁ。若いから」

「……おまえらのほうが年上だろうが、キリヤ、テン」

唐突に背後から現れた二人に片手をあげて挨拶する。あらかじめ

携帯で連絡をとって待ち合わせしていたのだ。どうせこのあとイベントステージで一緒になるんだからな。

「いやはや、このような大人数でお祭りに来るなんて何年ぶりでしょうか。私、なんだかうきうきして踊りだしそうです」

「踊ればいいじゃないか。一人でな」

「ではフォークダンスを。ささ、トメ君」

「一人で踊れっつってんだろが！　しかもなんで僕なんだよ。テンを誘えよ、一応女なんだから」

「私はあの方が女とは思えません。トメ君のほうがよほど」

うわ、なんて正直なことを！

「てめぇら……仲いいな、オイ。そんなに仲がいいなら一緒にフォークしてろや」

「ちょ、それフォークはフォークでも食器の――」

「いんや、武器だ」

あっさりグッサリとやられた僕とキリヤはその後しばらく、テンの僕となって出店の食べ物を献上することになるのだった……それにしてもどこで調達してきたんだろ、あのフォーク……お祭りってなんでもあるよなぁ。

そんな姿を三人娘に笑われながらも進んでいくと、カカがいきな

り「あー！」と大声をあげた。

その視線の先にはカカたちと同じような歳の子らが五人。何人かは見たことがあるな。友達かな？

「出たな、敵め！！」

敵？　とカカの言葉に首をかしげたが、すぐ近くにいたテンが「あいつらも漫才に参加するんだよ」と教えてくれた。なるほど、それで敵か。

「カカ君！　俺は君の味方だ！！」

「タケダ……ほんとに？」

「ああ、もちろんだとも！」

「じゃあ漫才勝負、負けてくれるの？」

「うぐっ……！」

タケダに他のメンバー四人の視線が突き刺さる。ここで負けると言ったらすなわち、仲間を裏切るということで……

友情&常識良識をとるか、それとも愛をとるか！？

「ま、負けてやろうじゃないか！！」

愛をとった！！

「情けない男だね」

そして負けた！！

「なっ……は、ははは！　冗談だよ！　俺は正々堂々きみに勝つ！」

「じゃ敵だね」

「ぎゃふん！」

また負けた。結局なにしても勝てないだろうけどな。

お？　こっちはサエちゃんと……あの子は誰だっけ。おとなしそうな子だけど。

「インドちゃーん。カレー持ってきてる？」

「う、うん……ある」

「少しちょーだい。あとで焼きそばにかけたいのー」

「あ、あれ美味しいよね！」

なんか仲いいな、この二人は。

さてさて、もう一方では……テンと二人組の子が喋ってますな。

「ニシアヤ、てめぇらのその格好はなんだ？」

「何って、衣装ですよ。漫才の」

「アヤ坊がですね、うまくできないときのことを考えて格好だけはきちんとしようと」

「喋るなニッシー！！」

衣装、ねぇ。なんか子供用のスーツみたいな服着てるけど、会社員の漫才でもするのかな。

「気にくわねぇ」

「え！？　なんでですか先生！」

「西じゃないから？」

「そんなの気にするのあんただけよ！」

「オレの持ってるスーツに似てんだよ、てめぇらの服」

「そんなこと気にするんですか先生！？」

「やっぱり西じゃん」

「話聞いてたのあんた！？」

おー……意外と強敵かもしれないな。コメディ資質はそこそこあるっぽい。

「さて、私たちも何か話しますか？」

「キリヤ？　私たちって……あ」

なんとなくはぐれたっぽい女の子が一人、僕らのそばでおろおろしていた。細くて背が高くてメガネしてて……なんとなく委員長っぽい顔をしてる。

「ええと、初めまして！　わたくし、みなさんとご学友としてつき合わせていただいておりますものです」

おお、やたらと丁寧な子だ。人見知りするのか顔真っ赤だけど。

「み、皆さんイチョウと呼んでくださるので、お二方もよろしければそのようにお呼びください」

「あ、どうも、これはご丁寧に」

思わずペコリと頭を下げる。

「私のことはお兄様と呼んでくれて結構ですよ！」

「意味不明」

スパンと頭を叩くが、キリヤは構わずに笑う。

「トメ君。君にはわからないかもしれないがね、男たるもの可愛い妹を持ちたいと思うことがあるのだよ！」

「そんなもんかね」

「だからイチョウさん、どうか私を、さぁ！　さぁ！」

「は、はい。キリヤお兄様」

ほんとに言ったよこの子。押しに弱いのかね。

「き……き……キリヤ感激！！」

ネタが古い。

「死んでもいい！」

勝手に死ね。

「トメ兄！　はやくお祭りいこー！！」

おっと、カカの声で我にかえる。そうだな、せっかくお祭りだ。ここにいつまでも立ち止まってるわけにはいかない。

まだイベントまでは時間があるし……それまで色々と回ってみますかね！！

## カカの天下５３０「夏祭りだよ、全員集合」（後書き）

お祭り始まりました！
まだまだ導入部分。お楽しみの読者さんの参加する話は次の話でございます。誰が出るのか、すでにランダムで選んでありますが…明日までの参加表明が多かったら、もしかしたらまだ増やすかも？

悪あがきの表明、待ってます笑

あ、あと。祭り長そうなんで今のうちにとあんパン更新しちゃいました＾＾

## カカの天下５３１「夏祭りだよ、いろいろ集合!?」

ども、引き続きトメです。

夏祭りの本祭。いつものメンバー＋アルファですごい人数になってしまいましたが、楽しくお祭りを見物しています。

しかしさすがは大きなお祭り。いろんな人がいます。例えばそう、たった今、出会い頭にいきなり僕の肩を掴んで見つめてくる人とか。

そのよくわからない人は、いきなりこんなことを言ってきました。

「辛い事もあると思うけど、頑張って。その努力を見ている人はちゃんと、沢山いるから」

どういうこと!?

「ケンさん、なにいきなり変なこと言ってるんですか!?」

「こいつも見てます」

「ぅおい!!　ボクはこんな人知りませんよ!?」

「では」

「ちょっと、ケンさん?　まさか他の人に片っ端からそんなこと言っていくわけじゃないですよね?」

「ヒロ、君の努力は誰も見ていない」

「わざわざ言うな！！」

「あ、あの……？」

な、なんだったんだろうあの二人組は……つまり「いつもおまえを見ている」ってことか？　うーん……まぁ、応援されたからにはいろいろ頑張ろう。それにしてもなかなかいいツッコミだった。

さて、他にも変な人はいるぞ。例えば……

「あれー、なんか踏んだ」

「サエちゃん？　何を――うわ、寝転がってる人踏んじゃったよ！」

こんな祭りのさなかで寝転んでる人がいるのか！？　それはその人が悪いんじゃ……

「ごめんなさいー」

それでも律儀に謝るサエちゃん。しかしその踏まれた人は、

「感激だ！！」

「はー？」

「サエ様に踏まれて感激です！　よければもっと踏んでください！」

「……サエすけ、この人、君のファンクラブの人なんじゃっ」

そういえばそんなのあるって聞いたことあるような。サエちゃんはその人に微笑みながら、

「気持ち悪いからどっか行ってー」

鬼のようなことを言った。

「はっ！　仰せのままに！　あああ、サエ様に踏んでもらっちゃった！　我が名はＭｒ．Ｋとでも呼びながら蔑みのお言葉を投げかけてー―」

微塵も堪えず、むしろ喜びながらそんなことを叫び続けるミスターは放っておいて、僕らは歩を進めていた。ファンクラブって境目をきっちりしないと怖いしね。

「おや、サエ様ではないですか」

またサエちゃん狙いの誰かか！？　と、思いきや。そこにいたのは警官姿のシュー君と……誰、このでっかい人。

「あ、ゆーただー。ほらカカちゃんサユカちゃん。こないだ話した土下座の用務員の人」

「学校の？　そんな人がなんで警官の格好してるのさ」

横がでっかい人は豪快に笑った。

「昔いろいろやってたからな。そのツテもあって今回の祭りの警備を頼まれたのだよ。またお祭り怪人とかいうわけのわからないモノが出ても困るんでな。女性と少女は俺が守る！」

女性限定かい。そしてなぜ黙っているシュー君。せっかく登場したのに。

「サエ様の友達だね？　みなのもの、遠慮なく俺のことをゆーたと呼び捨てにしてくれて構わないぞ！　蔑んでくれても構わない。むしろ蔑んでくれ」

なんつーやつだ。ちょっと言っとくかな。

「なぁ、あんましそういう露骨なことを言うなよゆー」

た、と続けようとしたその瞬間、僕の頭はわし掴みにされていた。

「にーちゃん？　あんたにまで呼び捨てにされる筋合いはねぇんだぞ？　あぁん？」

こ、こここここ怖いです怖いです！　なんかめっちゃドス効いてますこの人！！　このまま頭握り潰されそうなんですけど！　ほんとにいろいろ女性限定なんですねスミマセン！！

「こらゆーた、めっ」

「も――申し訳ありませんっ！！」

ほっ……手を離してくれた、助かった。

「罰として警官がんばることー」

「はっ！！　サエ様の命とあらば！　できなかったらお仕置きして

ください！」

「できなかったらお仕置きもしないー」

「そのほうが辛い！！　わかりました、お仕置きされるように頑張ります。おら、いくぞシュー」

ああ、引きづられていくシュー君……あれか、怖すぎて何も言えないのかシュー君。なんとも哀れな……

「ほれトメ。これやる」

僕が哀れみの目で彼を見送っていると、唐突に何かが差し出される。これは、たこ焼き？

「テンか。随分いっぱいあるなこれ」

「サービスだとさ」

「いただこう……む？　これ、ベビーカステラ混じってないか」

「サービスだとさ」

「……なんで」

「隣がベビーカステラやってるからパクったんだってよ」

「いいのかそれ！！」

「形似てるしバレなさそうだからいんじゃね？」

まぁ客としてはいろいろ食べれるからいいんだけどさ……形似てるし。もぐもぐ。

さて、他のやつらはどうしてるかな……キリヤは？

あらま、あいつもすれ違った人に話しかけられて……

「キリヤ。久しぶり、しぇけなべイべ」

「おう、シアンかべイべ」

「イェイ」

「いぇーい」

それだけ言ってすれ違って去っていった……

「ってどんな関係！？」

「さぁ。私にもわかりかねます」

「今の会話は！？」

「ノリです」

……そうだよな。祭りには変なやつが多い。こいつとかな。

「あー、惜しい！！」

その声に振り向くと、年少の漫才五人組が射的をやっていた。しばらくあんなのやってないな……お、カカたちも混ざる気かな。

「カカたちもやるのね。お兄さん！　銃もう一つちょーだい」

アヤちゃんだっけか。その子が呼びかけると、射的屋のお兄さん二人は……げ、ヤクザ？　とにかくガラの悪そうな二人が睨んできた。

「おいおい、またガキかよ」

「仕方ねぇだろ兄貴。金出してくれりゃいいじゃねぇか」

「そうよな、今日で稼がなきゃ親分にどやされるしよ」

「おう、俺はイトウ！」

「俺っちはユーサク！」

「二人あわせてイトウユーサク！　ちったぁ知られた名前だぜ！」

普通の名前だ。そりゃ皆なんとなくは知ってるよ。

「いいからよこせ」

そしてそんな小芝居も気にせず銃を催促するカカ。

「はい、どうぞ」

そして粋がったわりには普通に商売人な男たち。大人って大変だ

よねぇ。

「む？　どうしたノゾミ君」

「え、っと」

ふと見ると、タケダの横にいたおとなしい子が……すれ違いのお客さんっぽい人と目を合わせてる？

「私の名はカリュウ！！」

「ひっ」

……な、なんだ？　いきなり。

何が始まるんだ……

「……」

終わりかいっ！！

「な、なんだか自己紹介されたんですけど……」

「言うだけ言って去って行ったな」

さっきのベイベーとかいうヤツといい、射的屋の人といい……ああいうの流行ってるのか？

「大丈夫かノゾミ君」

「え、あ、うん……あ、ありが……１０匹」

「君はよくアリを見つけるなぁ」

「イチョウさん……あの二人、どうにかならない？」

「わたくしの力ではまだどうもできません……ニシカワ君の西の力でなんとかならないでしょうか？」

「まだ西が足りない」

この子らのボケっぷりも流行ってるのだろうか。あーツッコみたい。

「カカちゃん！　どこに撃ってるの！？」

なに！？　カカが何かやらかしたのか！

「あ、トメさん！　カカすけが、歩いてるカップルにいきなり銃を……」

「はぁ？　なにしてんだよカカ」

「ほしいものに当てろっていうから」

「……見ず知らずのカップル撃って、何がほしかったんだよ」

「愛を分けてほしかった」

「ノイローゼかおまえは！？　あ、すいません！　うちの妹がご迷

惑を！」

撃たれたっぽい男の人に謝りまくる。

「あ、そんな。いいですよ別に、痛くありませんでしたし」

おお、いい人っぽい。でも彼女さんは怒ってるっぽい。

「ふん、気をつけてよね！　いくわよレイ」

「あ、待って僕の彼女！」

まさか名無し！？　……そんなハズないよな。なんでそんなこと思ったんだろう。即興で書いた小説じゃあるまいし。不思議だ。

「あの、カカちゃん！」

「んむ？」

「君がほし――じゃなくて頑張って！！」

あ、妙なことを言いかけたかと思いきやなぜか応援して去って行った。何がなんだかさっぱりだけど、本当に悪いことしちゃったな。カカに反省させねば！

「カカ！　おまえな――」

「どうした弟よ」

「変わってる！？　姉！　いつの間にそこに！」

「ばーん」

「撃った！　道行く人に向かって！？　変わったと思ったらカカと変わらないし！」

「や、その人スリだから」

「すげぇなあんた！！」

言いつつ撃たれた男はさっきの警備のでっかい人（ゆーたとは怖くて呼べない）に捕まっていた。

「ところでトメ。あんた子供の引率でもしてんの？」

「や、そんなつもりはなかったんだけど……それっぽいかも」

「ちょうどいいわ。あたしさ、この後のイベントステージで漫才やるから皆で見に来なさいな。知り合いがいると気合入るしね」

……え、姉も出るの？　しかも漫才？

## カカの天下５３１「夏祭りだよ、いろいろ集合！？」（後書き）

というわけで読者様に参加していただきました！
選んだのは完全にランダムです。役柄についての不満は聞きません。即興で書いた小説なので笑

この後の話でも読者さんが出たりする……かも？

## カカの天下５３２「夏祭りだよ、集合しすぎ」

続きましてこんにちは、トメです。

さてさて、大人数な僕らはそれなりに楽しくお祭りを回ってきたのですが……腕時計を見るとあらびっくり。

「おいテン、キリヤ。そろそろステージ行かないとまずいぞ。集合時間だ」

いよいよ本日のメインイベントが始まろうとしています！　なぜかうちらの関係者全員が漫才をやる、というフシギな……というか何してんのおまえら的な展開になってしまいましたが、やると決めたからにはやらねば！

「もうそんな時間か。おいガキども！　てめぇらの集合時間はいつだ？」

カカ組、アヤ組の話を聞くと、どうやら僕らの集合時間と大差ないみたいだ。届いたお知らせを読む限り、イベントステージは二時間以上続くようなので、出演者たちは一斉に集合するわけではなく、自分の出演予定時刻の十五分前に各自で待機しなければならない。それで僕らの集合時間が大差ないということは……もしかしたら連続で漫才することになるかもしれない。そうなったらほんと漫才大会みたいに……まぁ僕らは別にいいんだけど。

「それでは皆さん仲良く会場に行きましょう！　こっちですよー」

引率の先生よろしく先導していくキリヤ……って。

「道、詳しいんだなおまえ」

「ええ、このお祭りを主催している神社とうちは懇意の仲なので。このお祭りにはよく出席させられてたんですよ」

あぁ。そういえばこいつバイトばっかしてるけど、うちの街にある神社の神主の息子なんだっけ。忘れてた――しかしいいのか、そんな顔知られてるのに漫才なんかして。

「会場は……ここです！」

おー！！　と僕らの驚きの声が重なる。境内の奥に設置されたステージはアイドルがライブでもやっていそうなほど豪華で、さらにそれに見劣りしない観客の多さときたら……ほ、本当にこんな大勢の前で漫才なんかやっていいんだろうか。

「ねぇトメ兄」

くい、と服の袖を引っ張ったのは妹カカ。おお、なんて堂々とした瞳だろう。まったく物怖じしていない。さすがだ！

「帰ろう」

物怖じどころか完璧に怖気づいて諦めたんかい！！

「あのな――」

「大丈夫ですよ、カカちゃん」

僕が口を開く前に、おそらくこの祭りに一番詳しいだろうキリヤがでしゃばった。僕の見せ場取る気か。

「毎年見ていますが、このイベント自体はさほど期待されているものではありません。なにしろプロではなく一般人がやるのですから、基本的にレベルが低いのです。お客さんもそれをわかってますから、そんなに気にすることないですよ」

「そなの？」

「そうそう。つまらなくても『ま、こんなもんでしょ』程度にしか思いません。それでも一般人があたふたするのはそれなりに面白いから、ここまで人が集まるのです」

「……そっか。でもなんか、それ……逆に嫌だね」

お、負けず嫌いに火がついたか？

「ええ、そうですね。大勢の人たちがあなたを『素人の漫才？　はは、ダッセ』などと鼻で笑いながら見ることでしょう。『やっぱつまんね。ま、こんな程度だろ』とか、『俺のほうがうまくできるぜ』とか、ステージに上がろうともしない口先だけの輩が笑うわけですよ。その鼻を明かしてやろうとか思いません？」

「なんか、思ってきた」

「なめられるのはムカつきますねー」

「わたしをなめていいのはトメさんだけよっ」

「さ、サユカ！　それ意味違くない！？」

「あはは、アヤ坊ったらすけべー」

「この俺をなめていいのもカ――痛っ！！」

「タケダ君！　時と場合を考えてふざけたこと言ってくださいまし。インドちゃんの前でそういうことはダメです」

「……えっと、何が？」

その会話を子供たちはみんな聞いていたらしい。先ほど驚き、ビビっていた皆は――なんと、見事にやる気になっていた。

恐るべきはキリヤの話術か顔芸か。『素人の漫才？　はは、ダッセ』って見てるだけで殴りたくなるくらいムカつく顔だったからなぁ。

「良い役とられたな、トメ」

「おまえもだろ？　センセ」

「うっせ。オレは先生っぽくないからいいんだよ。演説なんぞやってられっか」

授業も似たようなもんだと思うけどね。さて――

「じゃ、行くか！　大して期待されてないんだし、思いっきり楽しんでいこう！」

おー！！　と周りの人に変な顔で見られながらも片手を突き上げて気合を入れる。や、なかなかテンション上がってきたぞー。

わいわいと喋りながら緊張をほぐしつつステージに移動。受付けの人に名前を言って通してもらい、裏へと回る。

「オレらは次の次の次……結構あるな。ガキどもはどうだ？」

「私たちは次の次だよ。アヤちゃんたちは？」

「……次よ」

あれま。意外とギリギリだったのね。時間早まったのかな？　こういうイベントで時間が前後しちゃうのはよくある話だし。

「ま、まぁ！　大して期待されてないって言うし、大丈夫よ！！」

「アヤ坊は聖歌隊とかで人前とか慣れてるもんな！」

「そう、そうよ！　客なんかみんなじゃがいもよ！！」

「い、インドちゃん！　そんなにカレーをがつがつと食べたらお腹壊しますよ！」

「はぐはぐはぐ……」

「緊張のあまり、お腹じゃなくて別のところが壊れているな……よし、ノゾミ君！」

「……はぐ？」

「俺にもカレーをくれ」

「あなたも壊れてるじゃないですか！？」

五人はそれなりに頑張って気合を入れてるらしい。ちょっと心配だけど、キリヤの言うとおり、お客さんが温かければ――お？

『ありがとうございました！　武田遠衣君で、人間紙風船でしたー』

今ステージに出てる人が終わったみたいだ。

「あれ、兄貴だ」

む？　そういえばタケダって言ってたな。タケダの兄貴かあの人……人間紙風船ってなにやったんだろ。まぁいっか。

いよいよ次だな！　期待されてないとはいえ、頑張ってほしい――

『さぁ！！　ここで本日のメインパートに移りたいと思います！』

……？

『かつて、このステージは漫才大会として全国に名を知らしめていました……それはもう数十年も昔の話。現在では廃れ、ただの一般参加のお遊戯イベントになってしまいました』

……オイオイ。

『しかし！　それを知っていた強者がいたのです！』

知らないから！！

『ぜひこの晴れのステージで漫才をしたいという猛者が四組も！！』

偶然だからそれ！！

『そんなわけで、私たち実行委員会は急遽、審査員をご用意しました。まずは、かつて少年少女時代にトリオ漫才で大会の優勝を総なめにした――ゲンゾウ三きょーだい！！』

あの？

『そして数々の漫才師を世に送り出してきた貴桜小学校の校長先生！　そして教頭先生にもお越しいただいてます』

もしもーし？

『そしてなんとなく誘ってみた、たこ焼き屋のおっさん！』

……あ、ベビーカステラをパクって売ってた人だ。

『この六人の特別審査員をお招きし、各漫才に点数をつけていきたいと思います。そして見事優勝に輝いた組には豪華賞品が！』

な、なんか……めっちゃハードル上がってるんスけど！？

『さぁ！　観客の皆さんも大盛り上がりになってきたところで行きましょう！　エントリーナンバー、一番！！　“株式会社アヤ”の皆さんです。どうぞ！！』

お、おいおい……大丈夫か？

こんなステージ、姉だってどうなるか……あれ。

姉どこいった。

## カカの天下５３２「夏祭りだよ、集合しすぎ」（後書き）

そんなわけで、ようやくイベントの準備が整いました！
いやー、夏祭りだけで余裕で一週間超えそうですな笑

どうせですし、一番おもしろかった漫才を皆さんに採点でもしてもらいましょうか……
いや待て。私、自分で自分のハードル上げてないか？　笑い取れるか的な意味とか採点の合計出す作業的な意味とか！！

んー……
ま、採点したければどぞ（てきとー

# カカの天下５３３「夏祭りだよ、株式会社アヤ」

こんにちは、司会です。名前はありません。

僭越ながら今回の漫才大会の進行と説明を担当させていただきます。どうかよろしくお願いします！

『株式会社と名乗る五人の小学生は果たしてどのような漫才を披露してくれるのか！？　エントリーナンバー一番、“株式会社アヤ”張り切ってどうぞー！！』

カカカッ！　カカカッ！　カカカカカカカッ！！　と意味不明な三三七拍子と共に登場したスーツ姿の五人組。小さいスーツ、可愛らしいです。おっと、まずは女子三人が前に出ましたよ？

「えー、みなさんこんにちは！！」

リーダーっぽい女の子が元気に挨拶！　いいですね！

「アヤです！」

「糸です」

「……針です」

「裁縫か！？」

自己紹介でいきなりかましました。アヤと名乗った少女がツッコミを入れています。

「説明いたしますと、綾というのは裁縫において斜めに交わる模様のことを」

「説明しなくていいのイチョウさん！！　まったくもう、自己紹介くらいちゃんとやるよ！」

こほん、と一つ咳払い。

「言葉の」「アヤです」

ちーん。

「どういう意味よ！？」

「説明いたしますと」

「しなくていいわよそんなの！」

おとなしそうな顔してやってくれますインドちゃん。え、何で名前を知ってるか？　私はあらかじめ出演者の名前確認してるので本名知ってるんですよー。

……本名じゃない？　え、だって登録名簿にはたしかにインドと。

今気づきました。どう見てもこの子は日本人でした。

ま、いーや。

「進まないわね……こほん。今度は君から自己紹介やって！　私と

イチョウさんは最後！　ほら、さっきから黙ってる男どももするのよ！」

「……えっと、インドです」

「中国です」

「ソ連です」

「ユーラシア大陸か！？」

男性陣もしっかりボケる。どうやらツッコミはアヤちゃん一人のようです。

「しかもなにソ連って。ニッシー、今はソ連じゃないでしょ？」

「え……じゃ、ソ連2？」

「なんでシリーズ化してんのよ！　ゲームじゃあるまいし」

「ダブルソ連」

「増えてるじゃん！！　今はロシアよ」

「ロシア……ソ連と名前の繋がりないよ？」

「ないわよ」

「新作が店頭にあっても気づかないじゃん！！」「ゲームじゃないっての！！」

なんだか夫婦漫才みたいな感じになってまいりました。

「おもしろそうだよ、ロシアクエスト６」

「なんで６なのよ」

「幻の大地だから」

「ロシアは幻でもなんでもなく普通の大地よ！　なに、その大陸が沈んだみたいなタイトルは」

「反省しろよエニック――」

「おまえだよ！！」

ちょっと危ないネタできましたね。幻の大地というのはドラク○６のサブタイトルです。お客さんはピンときたのでしょうか。あやしいです。

「もういいわ。自己紹介は進めながらやっていきましょう！　こほん……ごほっ、ごほっ！！」

何度も咳払いしてたらむせたようです。

「けほ……えっと、皆さんようこそ、株式会社アヤヘ！　えー、今回はですね。臨時で新入社員を募集しまして、希望者が面接するために集まっていただいたわけです！」

ふむふむ、そういう設定で話を進めるわけですね。ちょっと展開

が強引ですが、そこは小学生だから仕方がないか。

「さて、それでは一人ずつ面接していきましょう」

ステージ隅に寄って一列に並ぶ四人。それとは別に真ん中に用意されていた椅子に座り、足を組むアヤちゃん。

「考える人」

ポーズを決める。ちょっと頬が赤いその姿に観客から「カワイー!!」との声援が飛びます。

「えー、それでは最初の方どうぞー」

「こんこん、がちゃ」

口で言いながらドアを開けるマネをして、一人目が入ってきます。この子はタケダ君ですね。

「失礼します」

「はい、そこにかけて」

「ぴ、ぽ、ぱ」

「どこに電話かけてるの!?」

「警察」

「なんでよ!!　そこ!　そこの椅子に座りなさいってこと」

「それはできない」

「なんで？」

「俺の、尻が……」

「痛いの？」

「くさい」「みんなそうよ！！」

おお、テンポがよくなってきました。

「くさくないお尻の人なんていないでしょ？」

「いや、それは臭いをかいでみないとわからな――」

「かぐな！！　捕まるわよ警察に……だから電話してたの？」

「先を読んで行動する男、タケダ」

「じゃあ、これからあんたが人のお尻の臭いをかいでまわるのは決定済みなわけ？」

「……俺だってな、こんなネタやりたくなかったよ！！」

「あの、ちょ」

「大勢の前で笑いを取らなきゃならないからって頑張ってるのに！なんだよその言い草は！？」

「タケ――」

「帰る！！」

「おぉーい……あ、行っちゃった」

これは……果たして漫才のうちなんでしょうか。面白いですけど。

「仕方ないか。次の人どうぞ」

次の方は……イチョウさんって書いてありましたね確か。

「失礼します」

「はい、どうぞ。そちらにかけてください」

言われたとおり、アヤちゃんの向かいにある椅子へ座るイチョウさん。

「すごい失礼します」「なんでもう一回言うの？」

「ほほほ」

「しかもすごいって。なんか今からすごい失礼なことするみたいな言い方やめてくださいよ」

「ほほほ」

「え、えっと。面接始めますよ？　えーと、あなたはこの会社に何

を求めてきましたか？」

「漫才です」「正直すぎ」

「ダメでしょうか」

「ダメですよ……この会社にきた理由ですよ。志望動機ですよ」

「……鬱で」「それ死亡動機」

「あぁ、死にたいのです。絶望した！　とか言ってみるのです！」

「なんでそんなに死にたいの？　何かあったの？　私でよければ聞くわよ」

「……実は」

「うん」

「わたくし、個性がないのです」

「そんなことないと思うけど」

「いいえ、全然ないのです。周りの人と比べて」

「はぁ、周りの人と」

「ええ、わたくしの周りは異常に個性的な方ばかりなのです」

「……へぇ」

「とてつもなく何かが飛びぬけているのです」

「そ、そう」

「普通なのはわたくしだけ、みんながみんなバカばっかりで」「ケンカ売ってんのか！？」

「いえいえ、そのようなつもりは」

「まったくもう……とにかく死にたいなんて言っちゃダメよ？」

「はい、人に話したらなんだか元気が出てきました」

「それはよかった」

「では」

「うん、気をつけてね……ってあれ？　いつの間に悩み相談所になったのここ！？　もう帰っちゃったし……ま、いっか。次の人！」

……おお！　かなりいい勢いだったので見入って感想を言うのを忘れていました。楽しかった！　観客の皆さんも笑ってます。えー、次はインドちゃんですね！

「失礼します」

「うん、そこにかけて」

「はい……」

「それで、今日は」

「はい。私、悩んでるんです」

「面接どこいったー？」

「あの、実は私、あることを伝えたい人がいまして」

「話聞いてないっすねーあなたも。はいはいもういいよ、ここは株式会社アヤ。仕事は悩み相談よ。それで？」

「は、はい……その、タケダ君に伝えたいことがあって」

「タケダって、さっき出てった？」

「……はい」

「お尻のくさいタケダ？」

「……はい」「素直に頷くな！！」

おっと、帰ったかと思われたタケダ君が裏からツッコミました。

「で、何を伝えたいの？」

「えっと、ですね」

しかしスルー。

「私、言います！　あの、私、タケダ君のこと……」

おお！　と観客と一緒にどよめく。これはまさか、みんなの前で勢いに任せての告白か！

「……」

しかし言葉が続かない。おやおや？　なんだか誰にも聞こえないほど小さな声で何かぶつぶつ呟いているような……ここは私の必殺技、超！　耳をすませば！

「……どうしよう言えない言えないタケダ君にお礼言いたいだけなのになんで言えないのなんで言えないのタケダ君がタケダ君のことタケダ君のせいでタケダ君が悪いのそうタケダ君が悪いタケダ君め……」

耳を、すまさなければよかったかもしれません。

人前という緊張もあるのでしょう。ただお礼を言いたかっただけのはずの彼女はここにきて――こんなことを言い放ちました。

「私は……タケダ君のことが憎い」

シン、と静まる会場。

ひっ、と小さく漏れるタケダの怯えた声を聞いて、インドちゃんはようやく自分が何を口走ったか気づいたようでした。

「……あ……あの……わた、し……違うんですぅぅぅ！！」

泣きながら去っていくインドちゃん。ぶっちゃけ会場の皆さん、何がなんだかわからず呆然としています。それはステージ上のアヤちゃんも一緒だったようで。

「な、なんだったのかしら……タケダのやつ、なんかやったの？　インドちゃん去っていっちゃったし……大丈夫かしら」

「これから一体どうなってしまうのか？　続きはインド2で」「おまえはもういい！！　いいかげんにしろ」

「「「ありがとうございました」」」

は？　あ、ああ！　漫才終わったんですね……今のがオチ！？　え、ええと……とにかく拍手！　拍手！

――遅れて沸いた歓声が収まったところで司会の仕事をさせていただきます。

『いやぁ……なんだかどこからどこまでがネタあわせされた漫才だったのかわからないところでしたが……審査員の方々、採点をどうぞ！』

審査員の頭上に設置された電光掲示板が音楽と共に一斉に数字を表示した！

『８５点、８３点、８８点、９２点、９０点、８０点、合計は――５１８点！　これはいい数字ではないでしょうか……どうですかアヤさん』

おずおずと前に出た五人のうち、リーダーとしてツッコミとして

頑張っていたアヤちゃんにインタビューしてみました。

「え、あの？」

『コメントをどうぞ』

「は、はい……き、緊張して何が何やらわかりません！」

初々しいですねぇ。これでよくあのような漫才ができたものです。立派です。

『それでは審査員の方々にも聞いてみましょう。え、一番高い点を入れた校長先生、どうでしたか？』

マイクを向けると、校長先生はおほほと朗らかに笑って答えてくれました。

『前半に少し緊張が見え隠れしていましたが、後半からは勢いに乗ってテンポがよく、楽しませてもらいました。このような生徒を持つ学校の校長として、誇りに思いますよ』

『素晴らしいコメントありがとうございます……それでは、ゲンゾウ家の長女、ミナミさん。どうでしたか？』

『いやぁ、小学生とは思えないね！　ちょっとグダグダ感があったしオチが弱いけど、よくやったと思うよ。あたいが現役だったときに対決したかったもんだ。ところでそこの、カレーばっか食べてそうなその子』

『ええと、インドちゃんのことでしょうか』

『ああ、その子。伝えたいことはちゃんと伝えなさいな。このステージに出る勇気があるならちょろいもんさね』

おっと……なにやらいいこと言ったご様子。インドちゃんが深々と頭を下げています。さすが校長と並ぶ年長者！

『ああ、そういえば私からも一つ聞きたいことがあったのですが。アヤちゃん？』

『なんでしょうか司会者さん』

『ニシカワ君だけ面接がなかったようですが……』

『あんなやつ始めからクビです』

『なるほど！　さぁ疑問も解けたところで次に参りましょう！　エントリーナンバー。二番！　根暗な人形館の皆さんです、どうぞ！！』

次回に続きますよ！

## カカの天下５３３「夏祭りだよ、株式会社アヤ」（後書き）

今回は漫才特有の素早いツッコミを再現したかったので「」の改行をいじってみました。うまくテンポよく書けてればいいなーと思います。

それにしても調子に乗って書いてたら予想外に長くなりました笑
この調子で明日も書けるのでしょうか……カカたちのネタ、まだ考えてないんですよねぇ……怖い怖い。
相手が小学生ということで審査員さんたちは優しい点数ですが、読者様からの酷評がこないことを祈ってます＾＾；

# カカの天下５３４「夏祭りだよ、根暗な人形館」

こんにちは、司会です。名前はほしいですけどありません。

さぁ今回も漫才大会の進行を担当させていただきます。なお、漫才じゃなくてコントでは？　という声も上がっているみたいですが、専門家に聞くと『今の世の中そういった枠は取り払われてきている』とのことなので、細かいところはツッコミなしでお願いします。

さぁ、お仕事しますよ！

『漫才なのに、根暗？　果たしてそれで笑いは取れるのか！？　再び小学生たちの出番です、エントリーナンバー、二番！　“根暗な人形館”のお三方、お願いします！！』

カカカッ！　カカカッ！　カカカカカカッ！！　相変わらず意味不明な三三七拍子です。おお、先ほどの子供たちの必死で漫才をする姿がウケたらしく、いっそう大きな拍手が巻き起こります！そして登場したのは……おやおや？　着物姿の女の子、二人だけ？

「どうもこんにちは！　カカです」

「サエですー」

その瞬間、怒号のような歓声が起こりました。

『サエ様サエ様サエ様サエ様サエ様サエ様サエ様！！』

な、なんでしょうかこの人気は！？　すごい声です。さらに所々

でどさくさに紛れて「おねーちゃんステキです！！」とか「かわいー！」とか「踏んでー！」とか「我が娘よー！」とか聞こえます！

「うるさい、黙れ！！」

おっと、カカちゃんが一喝しました。小学生とは思えない剣幕に、皆さん本当に黙ります。

「私にも言え」

『カカカカカカカカカカカカ！！』

「様をお付け！！」

『カカ様カカ様カカ様カカ様カカ様カカ様カカ様カカ様！！』

本当になんなんでしょうか、この二人は……見たところ学校の人気者とご町内の人気者といった感じですが。

「カカちゃん、すっきりしたー？」

「うん。じゃあ始めよっか」

「よし、いくよー。いや、いきなりですけどね、実は私、悩みがあるんですよー」

「はい、お腹ナオール」「いやー、腹痛じゃなくて」

「はい、頭ナオール」「頭が悪いわけでもなく」

「はい、ハゲナオール」「誰がハゲよー」

「はい、ナオルさん」「誰よ！」

「ハゲだよ！」「知らないよ！！」

おおお、快調にとばしております。

「じゃーこれはどう？　すごいよ、どんな悩みでも解決できるよきっと！」

「なになにー？」

「はい、ナオルさんのお金」「これなら確かに何でも解決――ってそれ泥棒」

「違うよカツアゲだよ」

「同じだよ。ダメだよ泥棒なんかしたらー」

「はーい……あれ」

「なんですかー？」

「ナオルさんのお金、いまサエちゃん自分のポケットに入れなかった？」

「それはいいから話を聞いてよ」

「う、うん」

おお、サラッと流した……さてはあの子、黒いな。

「私ね、今悩みがあるんだよー」

「どんな悩みなの？」

「あのね……これなのー」

おお？　サエちゃんが移動して……ステージ脇から大きな箱を引きずってきました。ちょうど人が一人、入るくらいの大きさです。箱の下には車輪がついています。

「この人形箱のことなんだけどー」

「ずいぶん大きな人形箱だね」

「うん、それでね――」「痛」

ステージの中心に持ってくる際に何か踏んだのか、箱がガクンと揺れました。その際に中から声が……

「ねぇ、なんか音しなかった？」

「気のせいだよー」

気のせいでしょうか。

いや、声じゃなくて、ステージ上の二人が妙に楽しそうな顔をしているのは……

「ほんとに気のせい？」

「じゃー確かめてみよっかー」

「わかった。えい」

ゴガン！　と豪快に箱を蹴るカカちゃん！　サエちゃんがしっかり押さえてるので箱が吹っ飛んだりすることはないですが――

「え、ちょ、何っ！？」「えい」ゴン！　「痛っ！」「なんか聞こえた気がするかもー。えい」ガン！　「きゃっ！！」「おお、いい音するする」ガン、ゴン！！　「やっ、なにこれっ」「えいえい」ガシゲシゴシガシブシバシ！！　「きゃ、い、いやぁぁぁぁぁぁっ！！」

悲鳴が聞こえる箱をひたすら蹴り続ける二人。そして。

「あ、手が滑ったー」サエちゃんが箱から手を離し「シュート！！」箱下の車輪も手伝って勢いよくステージ脇へと引っ込んでいく箱！

「「スッキリした」」「君らわたしに恨みでもあるのかっ！！」

箱の中からツッコミが……おお、誰かがステージ脇から勢いつけて放ったのか、器用にも滑りながら戻ってきました。

「さて、帰ろうか」「帰るなよっ！！」

箱がツッコんでます。

「戻ってきたでしょ君の悩みがっ！　勢いよくっ」

「悩みなんかこないほうがいいよー」

「マジメにやりなさいよっ！！　まったくもう……トメさんありがと」

トメさん？　ああ、ステージ脇から箱を放ってくれた人ですか。

「やりますかー」

「そうだね、仕方ない。それでサエちゃん、悩みってなに？」

「それがねー、この人形箱を開けるとー」

大きな箱の蓋が開きました。するとそこにはひらひらなお洋服を着た女の子の人形が。

「箱のわりには小さい人形が出てきたね」

「箱の底下に人が入ってー」「そゆこと言わないの」

なるほど。司会の特別席から背伸びして見てみると……箱の底に手だけ出せる穴が空いてますね。ということは……

「この人形がね、動き出しちゃったのー」

「そうなのっ！！」

やはり。えっへん、と胸を張る小さい人形……箱の中の黒猫、じ

ゃなくて箱の中のサユカちゃんが人形劇をするみたいです。

「私さー、人形を作るのが趣味なのー」

「うんうん、いっぱい作ってるよね」

「それでさ、ふと作ってみた人形がね、こんな風に気持ち悪く」「気持ち悪いって言うなっ」

「だって普通に考えてさー、人形がいきなり動き出して喋りだしたら驚くよー」

「だってあなた、もっと友達がほしいってわたしに語りかけてたじゃないっ」

「かと言って本当に人形が友達になってもー」「わがままねっ！」

コミカルに裏手チョップをしまくる人形……可愛いですねぇ。

「サエちゃん……そんなこと言わないで」

「カカちゃん？」

「私がいるよ？　私だけが友達じゃダメなの？」

「カカちゃん……ごめんね、そうだよね。私、カカちゃんがいればそれでいい」

「サエちゃん！」

「カカちゃん！」

「「ひしっ」」「漫才やれよっ！！」

うーん、抱き合う二人は可愛いですけど人形さんのツッコミごもっとも！

「なによっ、わたしだけ除け者にして……さっきだって二人だけ様付けで呼ばれてさ……」

おっと、人形さんがいじけ始めました。

「ああ、ごめんね。あなたも立派な漫才仲間だもんね」

「仲間はずれはダメだよねー」

「き、君たち……」

「ごめんね、観客の皆さん！　今から私がこの人形の中の人の名前を言うので、申し訳ないんですけど様付けで呼んでくれますか！？」

コミカルで可愛いやりとりに好意的だった観客さんたちは喜んでOKを出してくれました。

「ありがとうございます！」

「これでいいよねー？」

「カカすけ、サエすけ……ありがとう」

おお、ステージとお客さんが一体に！

「さぁ皆さん、私に続いて！　様付けで」

『はい！』

「いきますよ！」

「せーのー」

「便所！」『便所様！！』「どういうことっ！？」

観客までボケさせましたね今！

「便所様ってなによっ！」

「や、大事だよ便所。様付けしていいくらいに」

「……もういいわよ便所人形で。それで、便所人形から一つ言いたいことがあるわっ！」

「ヤケっぱちになったねー」

「動き出した人形の定番！」

「ほほう？」

「どんな願い事でも一つだけ叶えてちょうだいっ」

「おおー……おお？」

「願いごとを、叶えてくれるんじゃないのー？」

普通は逆ですよね。人形が叶えてくれそうなもんです。

「なに言ってるのよ。頑張って動き出したのよ？　ご褒美くれたっていいじゃないっ」

「なんか、そう言われればそんな気がしてきたー」

「でしょっ」

「それで願い事ってなに？」

「わたしね、人間になりたいっ！」

「じゃーこの問題に答えられれば人間になれまーす」「簡単だなおいっ！！」

「不満なのー？」

「で、でもまぁ、人間になれるのよねっ」

「うん、私がー」「君ナニモノよっ！？」

「サエちゃんが人間に？」

「うん」

「それは見てみたい」「どんな設定なのよ君らはっ！？」

「まぁまぁそう言わず。人間になりたいんでしょー？」

「そ、そうよっ」

「エロい身体がほしいんでしょー？」

「べ、別に」

「胸はもっと大きく」

「うん……うんじゃなくてっ」

「エロエロな衣装を着てー」

「なんでそんな格好しなきゃならないのよっ」

「トメお兄さーん」「名前を呼ぶなっ！！」

「トメっていうのはね、この子の好きな子で」「説明するなっ！」

いやー、もう完全に見物モードです私。フシギな世界に巻き込まれた感じで説明することありません。

「ごめんね、人形さん」

「……もうしない？　二人とも」

「「うん」」

「反省した？」

「「うん」」

「ほんとに？」

「「うん」」

「じゃあ許すっ」

「「許さん」」

「うん……えぇ！？」

「今うんって言ったね」

「ねー。許されないねー」

「ううう……こいつらムカつくっ」

「というわけで、人間になれました！」「正解だったの今のっ！？どこ、どこに正解があったの！　ていうかそもそも問題はっ！？」

「いいじゃんそんなこと」

「そっか、そうよねっ！　やった！　やった……あれ、わたし、ちょ、この箱、出られない」

「何してるの？」

「だって人間になったんでしょ」

「うん、私たちが」「わたしはっ！？」

「そのままー」

「なんで……というか君ら、変わってないじゃんっ！　なにが変わったのよ！」

「え、こんなに立派な人間になったのに」

「元から人間だったんでしょっ」

「いやいや、違うよ」

「全然違うよねー」

「何が違ってたのよっ」

「舌が二枚あったんだよ」「多分それ変わってない！！　今も絶対二枚あるわよっ！」

「「いいかげんにしろ」」「君らがだよ！！　ほんといいかげんにしろ」

「「「ありがとうございました」」」

三人の妙な雰囲気に呑まれていた私たちですが……気がつけば拍手を送っていました！

『えー、ぜんっぜん根暗じゃなかったのが気になりますが……点数のほう、どうぞ！！』

一斉に表示された点数は！

『９０点、９２点、９４点、９２点、８０点！　これはいい点数です、合計は――５４０点です！　株式会社アヤを大きく上回りました！』

ささ、どうぞーと促すと、照れながらお二人と大きな箱が前に出てきてくれました。

『いやー、どうでしたかカカちゃん』

「たこ焼き屋さんが前と変わらず８０点なのが気になります」

『おっと審査員にダメ出しがきましたよ！　しかしたこ焼き屋さんはノーコメントのご様子なので他……ゲンゾウ兄弟のお二人、いかがでした？』

『いやぁ、相変わらずの嬢ちゃんたちの世界に巻き込まれた感じだったぜ。テンポもよかったしな。なぁ兄貴』

『おう。しかし最後のオチ、多分たくさん無駄に喋るってことを言いたくて二枚舌を使ったんだと思うが、微妙に意味が違うぜ』

『おっとこちらにもダメ出しが入りました。えーサエちゃん？　二枚舌の意味はわかりますか？』

「ほら、サエちゃん。二枚あるんだから」

「移植できますねー」「しないわよ気持ち悪いっ」

『おおっと、またもや箱の中からツッコミが入りましたが……まだ漫才は続いてるんでしょうか？』

「続いてないですよ？」

「続いてないですよー」

「じゃあここから出してよっ」

「「じゃあ続いてます」」「おいっ！！」

『いやはや、放っておくといつまでも続きそうな勢いですねぇ……しかしそろそろ時間です。最後に一つ、いいですか？』

「なんでしょ」

『トリオ名が“根暗な人形館”だったんですが……どの辺が根暗で、どの辺が館なんですか？』

「根暗なのは、この子がいつまでも箱に引きこもってるからです」

「ちょっ、出られないの予定通りだったのっ！？」

「館はこの箱です」「ちっさいわよっ！　いいかげんにしろ」

「「ありがとうございましたー」」

『やっぱりまだ続いてましたね、ええ。そんなわけで、とっても摩

訶不思議なお三方でしたー……次です、お腹いっぱいになった気もしますがエントリーナンバー三番“トメテン夫婦＋K”の登場です、どうぞー！』

まだまだ続きますよ！

## カカの天下５３４「夏祭りだよ、根暗な人形館」（後書き）

危なかったです……や、投稿時間が。もう少しで明日になるとこでした笑

予想外な仕事入ったんで書き終わるのがギリギリでした。なんか長くなったし＾＾；あんま行き当たりばったりもアレですねぇ……まぁ書きたい感じで書けた気がするのでよしとします。よしとしてくださいm(お願い

さてさて、次回は本命（っぽい？）トメテンです。どうなるでしょーか。

そしてお笑い芸人気分で書いてるコレは果たして楽しんでもらえているのでしょーか笑

## カカの天下５３５「夏祭りだよ、トメテン夫婦＋K」

こんにちは、司会です。そろそろ名前をもらえませんか？　ダメですかそうですか。

ささ、愚痴ってないでお仕事お仕事。

『先の二組と違い、今度は大人なグループの登場です！　大人な漫才を見せてくれるのか、それとも!?　エントリーナンバー三番、“トメテン夫婦＋K”の登場です、どうぞ!!』

カカカッ！　カカカッ！　カカカカカカカッ!!　とだんだん作為的に感じてきた音と共に、二人の男女が登場しました！

「どうも、トメです！」

「テンカだ。よろしくな」

「さて、夫婦漫才ということだけど――」

「トメさんの妻はわたしよっ!!」

ステージ脇からあがる声、ピタリと動きを止める皆さん。

「あの、サユカちゃん？　今は漫才でフリをするだけだから、別に気にしないでくれるかな」

「と、トメさんがそう言うなら……」

なにやらハプニングがあったようです。さてはあの男モテモテか。

「さて、それでは夫婦――」

「トメさんと結婚するのは私です！」「今度はサラさんかい！？」

観客席からも一人、妻候補があがりました。やらせなのか本気なのか、後者だったらどうしてくれようと観客の皆さんが殺気だってきました。

「だからこれ設定、演技！　ね？」

「はい、わかりました……すいません、ついノッてしまって」

「まったくもう……皿は乗るもんじゃなくて乗せるもんなんだよ？」

「うまいこと言ったと思ってるだろ」「うっさいテン」

こほん、と一つ咳払い。

「さて、気を取り直して。僕らは今から夫婦です！」

「それはおめでとうございます、クララ祝福します！！」「漫才やらせてよ！！」

「はい？」

「クララちゃん、これ漫才。ね？」

「はい」

「結婚したって設定なだけで、実は結婚してないんだよ」

「結婚詐欺ですか！？」「話を聞け！！」

「逮捕します！」「いいから黙っててよ進まないから！」

「死刑！」「厳しすぎる！！」

はぁ、とトメ君は疲れたようなため息……これ、全部ハプニングなのでしょうか。

「今度こそやるぞ」

「なぁトメ」

「なに」

「おまえ誰と漫才するんだ？」「言うな」

なんと言いますか……人気者ですねぇ。

「とにかく夫婦漫才！　テンと！」

「仕方ねぇな、やってやるよ」

「おまえ偉そうだな」

「あん？　だってオレが亭主だろ」

「いや待てよ」

「なによ」

「おまえ女なんだから妻やれよ。僕が夫だろ普通は」

「いや、それは古い。二次元の世界ではな、自分のことをオレっていう女よりもボクって呼ぶ女のほうが多いんだぜ」

「知らないよそんなの。どっから聞いたんだよ」

「知り合いの引きこもり。パソコンばっかやってるらしいぜ」

っくしゅ！　と観客席からくしゃみの音が。いるんでしょうか、その引きこもりさんが。

「ともかく、僕が夫、おまえは妻な」

「わかったよ、ったく」

「オレっていうのも止めな。テン、おまえ猫かぶるのうまいだろ。私って言え。あと女らしい言葉使いに変えろよ。妻っぽく」

「わ、わかったわよ。私、ちょっと恥ずかしいんだけど、これでいいのかしら？」

ぼそぼそぼそぼそ。

「今『きめぇ』とか言ったやつちょっとこい」「こらこら」

「いや、許さん。こんなこともあろうかと、これを持ってきた」

「なんだそれ、人形？」

「ああ、オレたちの前に出てた箱人間が使ってた」「箱人間って言うなっ！」

ステージ脇から何か聞こえますが……

「や、だってまだ箱に」

「入ってるし」

「ちょっとカカすけサエすけ！　いい加減出しなさいよっ！」

「えー、でも鍵どっか行っちゃったしー」

「先生！　トメ兄！　どうすればいいと思う？」

「おまえらも人の漫才中に勝手に入ってくんなよな……テン、なんとかしてやれよ」

「カカ！」

「あい？」

「蹴り砕け」「あい」「ぎにゃあああああああああああああっ！？」

「さて、さっきから邪魔ばっかり入るが続けるぜ。この人形なんだけどよ」

「それをどうするんだ」

「ふっふっふ、これにはな、さっきオレのことを『きめぇ』と言ったうちの一人の、毛が入ってるんだよ！」

「やべ」「てめぇも言ったのかよ！？」

「いやいや、冗談。妻をそんな風に言うはずないじゃないか」

「ほんとか？」「ほんとほんと」

「ならいいけど。それでな、この人形の腕を捻れば、その毛を持ってた本人が痛がるって寸法さ」

「呪いの藁人形か」

「似たようなもんだってサエが言ってたからな。それ、ねじねじねーじ」

……数秒経過。

「何も起こらないぞ？」

「あ、トメの毛だった」「いだだだだだっ！！」

「間違えちった」

「痛！　痛いから！　さっさと腕を捻るの止めてくれ！」

「首ちぎっちゃえ」「うぉい！？」

「捨てちゃえ」「僕の首！！」

「早く演技しろよ」「どうしろってんだよ！？」

「首取れよ」「できるか！！」

ああ、そうこう言ってるうちに投げられた人形の首が観客席の方へ……

「誰かそれ拾ってくれ！」

トメさんが呼びかけると、すぐに観客席から反応が！

「とった！　首をとったぞ！！」

「そこの武将さん早く返して！」

ぽーんと投げられた首を見事にキャッチして、あっさりと人形にはめ込むテンカさん。

「さて漫才始めるか」「アドリブなげーよ！」

え、今までの全部アドリブ！？　た、たしかに全部その場だからできるネタでしたけど……

「まったく……あんだけ練習したのに初っ端からメチャクチャじゃないか」

「まーまー、今からちゃんとやればいいじゃねぇか」

「よし、やるぞ。テン、自分のことは私で、女言葉でよろしくな」

「いま心の中で『きめぇ』って言ったやつ！」「それはもういいから」

「全員、人形と同じように首が飛ぶからな」「こえーよ！」

「そしてクララがキャッチしてからまた戻ってくる」「怖すぎるわ！！　何が怖いってクララちゃんが一番怖いわ！！　それ思った人、全員の生首がクララちゃんの手元に一旦集まるんだろ？　山ほどの生首が！」

「満腹だな」「食うなよ！」

「ごちそうさまでした！」「もう食ったんかい！！」

えっと……いつになったら始まるんでしょうか？　というか色んな人が喋りすぎ……

「ったく……始めるぞ！　はいはい始まり！」

「おう。こほん、ねぇあなた？」

「お、おう」

「なに照れてんだよ」「うるせーよ！！」

というか二人とも照れてるっぽいです。

「あのね、私ね、結婚したらやってみたかったことがあったの」

「へぇ、なんだい？」

「離婚」「いきなりそれかよ！！」

「やってみたいと思わない？」

「思わないよ！　なに、僕なんかした？」

「したよ」

「なにそれ、なにそれ。覚えがないんだけど」

「したした、とんでもないことした」

「なにしたの？」

「オレと結婚した」「ダメなのかよ！？」

「うそうそ、冗談。私、あなたのことが好きなんです！」

「ほんとか？」

「だってあなた、いいところいっぱいあるんだよ」

「そうかなぁ」

「顔は格好いいし」

「え、いや」

「りりしい瞳」

「いやそんな」

「優しい雰囲気」

「照れるなぁ」

「柔らかいこじわ」

「うんうん――こじわ!?　しわ!?　しわなんかあったっけ僕の顔」

「そんなあなたが好きなんです」

「い、いや僕は」

「なんてステキなんでしょう。福沢諭吉」「金目当てかい!?」

福沢諭吉。一般的に一万円札に写っている、おそらく日本一の人気者のおっちゃんである。

「ええ。コンビニで会計するときのあなたのサイフの中身を見たときから私は……」

「うあ認めたよこの人」

「いえいえ、あなたのステキなところもいっぱいあるんだよ？」

「へぇ。例えば？」

「財力と預金残高と遺産」「全部お金かよ！！」

「同情するなら金をくれ♪」「僕に同情してくれよ！！」

「女運がなかったな……」「おまえが言うな！！」

「同情してあげたんじゃん」

「同情の原因が言うなっての。しかも何だよ遺産って……殺す気か！？」

「うん」

「満々？　殺す気満々なの！？」

「ふふ、万万♪」「叩くな僕の懐を！　僕のサイフを叩くな！」

「そこに万札があると思うと、つい」

「怖いなぁ……大体なんでいきなりそんなこと言うんだよ」

「結婚詐欺です！」「クララちゃん黙ってて！」

「す、すいません！　なんだかずっと見てたら混ざりたくなってしまって！」

気持ちはわかります。しかし邪魔をするのは……と思いつつ、彼らはその邪魔すら漫才の一部にしてしまっている気もします。

「それで？　なんでそんなこと言うんだよ」

「浮気したでしょう！　知ってるんだから！」

「……え」

「わたしのことっ！？」「私のことですね」「私かー」「おまえら黙れっての！！」

「……人気者だな、トメ」

「テン、素に戻ってる」「おっと」

「はぁ……サユカちゃんやサラさんはともかく、サエちゃんまで混じってくるとは……このままだとカカもくるな。その前になんとかしないと」

「おい、続き」

「あ、ああそうだった」

「浮気したでしょう！　知ってるんだから」

「してないよそんなこと」

「この前、一緒に歩いてるの見たんだから」

「違うって」

「そんなあの人が、今この会場にきてくださっていまーす」

「なにそのどっかの番組みたいな展開」

「さぁ、どうぞー」

あらかじめ仕込んでおいたのか、どこかで聞いたような感動の場面っぽい音楽を響かせて登場したのは……＋Kの人？

「わーい」

「男じゃん！！　僕そんなのと浮気したりしないよ！」

「ぱぱー」「隠し子！？　そういう設定！？　てか子供にしてはでかっ！！　僕が何歳のころ生んだんだよ！？」

「マイナス二歳？」「年上なのかよ！！」

「ぱぱー」

「なにさ」

「ぼく、会いたくなかった」「じゃあ出てくんなよ！！」

激しくツッコまれながらもきゃっきゃとキモい演技をしながら飛び跳ねる男性……たしかキリヤさんでしたか。

「わかった？　あなたが浮気してるってことが」

「ちょっと待てよ。今の話聞いてなかったのか!?　マイナス二歳だって!」

「たったマイナス二歳がどうしたのよ!」「は?」

「私の故郷なんかマイナス三十度よ」「知らねーよそんなこと!」

「だからさっさと慰謝料払え!」「おまえ最悪だな!」

「そして死んで遺産もよこせ!」「最悪すぎて涙が出るわ!」

「涙が金になるのか!?」「なんでそんなに病んでるんだ!?」

「ねぇちょっと、早くしてくださいよ」

「な、なんだよ僕の息子（仮）」

「……?」「股間を見るな!!　息子ってそう意味じゃねーよ!」

「でも仮ですよ」

「ああ、僕は認めてないからな」

「仮……カリ?」「下ネタやめろ!!　お子様も見てるかもしれないんだぞ?」

「えー、良い子のみんな?　意味がわからなくてもお母さんとかに聞いてはいけませんよ?」

「先生に聞け」「おいそこの本業教師！！」

「きっと困るぜー。けけけ」「テン、元に戻ってる」「おっと」

「とにかくです」

「なんだよ息子」

「慰謝料出せよ！」「なんで息子が催促するんだよ！」

「早くしないと借金が返せないでしょう！　ねぇ姉さん」「おまえらグルか！？」

「グルメか！？」「ちげーよ！　脇から変なこと言うなカカ！！」

テラカオス。

「とにかく、おまえらグルだな！？」

「グルグルだな！」「何も回らないよ黙れよカカ！！」

「ええと、続き続き……う、うぐっ！　くそ、何ヘタなこと言ってんだキリヤ！」

「本性を現したなテン！」

「こうなったら仕方がねぇぜ！」

「やっぱそっちのほうが似合うぞ」「余計なお世話だ！！」

「まったくもう……大体さ、なんでそんなに借金があるんだよ」

「お金、いっぱい使っちゃったんですよ」

「何に使ったのさ」

「あなたたちの結婚式で」「何から何までダメな結婚だったんだなオイ！」

「このダメ夫」

「うるさいダメ妻」

「結婚、ダメ、絶対」「嫌なこと言うなよ！　いいかげんにしろ」

「「「ありがとうございましたー」」」

――はっ!?　お、終わったんですね！　拍手、拍手!!

『い、いやぁー、なんだか先ほどのカカちゃんたちにも増して引き込まれてしまった感じですねぇ。点数のほうはいかに!?』

気になる点数は!?

『９４点、９２点、８０点、９６点、９２点、１００点――合計は、５５４点！　これはトップです！　一気にトップに躍り出ました！！」

お三方、前へ！

『どうでしたか、トメさん！』

「邪魔多すぎ」『ごもっとも！』

しかしそれにも負けずこの点数！　素晴らしいです。

『さて、では審査員の……たこ焼き屋さん！　一組目、二組目と８０点だったあなたがなぜこの二組には１００点をつけたのですか！？』

『あの二人ね』

『ええ』

『うちのたこ焼き、買ってくれたんです』「それだけかよ！」

トメさんからツッコミをいただきました！　しかし審査員は審査員。なんとも言えません！

『で、では一番低い点数８０点をつけたゲンゾウ三きょーだいの末っ子、トウジさんに伺ってみましょう。どうでしたか？』

『俺は子供のほうが好きだ』「だから漫才の感想言えよ！！」

ここにきてもトメさんのごもっともなツッコミが映えます。しかしこれではあまりにあんまりなので……

『教頭先生！　どうでしたか！？』

『うむ……テンカ君』

「な、なんだよ」

『教師たるものが漫才などをするとは！』

「んだよ、ダメなのかよ！　あんただってそこで審査員やってるじゃ――」

『ぐっじょぶ！』「いいのかよ！？」

『最初はゆっくりと、しかし徐々にペースを早めていった点。そして幾度となく入った横槍をうまくかわして笑いをとり、最後までやりきった点を高く評価したいと思う』

「おお、やっと普通のコメントもらえましたね」

「でも９２点なんだな」

『同僚は甘やかさない主義でな。これでも譲歩したほうだぞ』

『えー、なんだか皆さん私情が入りまくってる審査をしてる気もしますが、とにかくありがとうございました！！　さて、寂しいところですが次はラストの方々です！　エントリーナンバー四番！　“うちの花屋”の登場です！　どうぞー！』

……あれ？

そういえばそれに出演するはずのサラさんって方、観客席にいませんでしたっけ？

## カカの天下５３５「夏祭りだよ、トメテン夫婦＋K」（後書き）

お待ちかねのトメテン漫才です！
どうですかぁ！　どうなんですかぁ！！
書き手にはおもしろいのかわかりませんけど頑張りましたよ私は！　自分的に！笑

ふー。自己満足（おぃ
さて、明日は姉ですねー。
多分、ただごとにはなりませんよ笑

## カカの天下５３６「夏祭りだよ、ハプニング！？」

いやぁ、笑った笑った。

『最後の漫才はこのお二人にキメてもらいましょう！　本業は街の小さな花屋さん。しかしてその実体はお花ではなく笑いを売っている？　そんな伝説を作ることができるのか！　エントリーナンバー四番、“うちの花屋”の登場です！』

イベントステージは大盛況だ。試しにと見に来てみたが、実にいい。

『お、おや？　お一人しかステージに上がられませんね。コンビの漫才と聞いていたのですが……』

何がいいかって？　決まっている。

『なんだかお困りのようなので聞いてみましょう。あの、いったいどうされました？』

ここには笑顔が溢れている。

「ううう……相方のカツコさんがいないんです！　さっきからずっと探しているんですけど」

笑顔、笑顔、笑顔。

『相方が！？　そ、それは困りましたねぇ……ええと、どうしましょう』

幸せそうで実に結構。そろそろいいだろう。

「姉がいない！？　なにやってんだあいつ」

「いっつも変なことするよねあの人。あれ、どうしたのサエちゃん」

「なんか……ヤダ」

いやぁ、なかなかにおもしろかったよ人間ども。

「ヤダって、何が？」

「怖い、感じが――」

褒美だ。

吐き気がするその笑顔、存分に恐怖で染めるがいい。

――ドクン、と。鼓動のように大地が揺れた。

「――え？」

それは誰の声だったか。いや、誰もがそう呟いたのかもしれない。

数秒の意識の空白。それが地面からの衝撃によるものだと誰かが

理解する前に、明る過ぎる赤色が夜の闇を支配した。

「じ、地震!?」「お、おい。なんだあれ」「……燃えて、る?」「倒れた提灯の火が屋台に燃え移ったぞ! 誰か、消防車!!」「うあ、また揺れた!?」「樹が倒れてくるぞ!! 近くにいくな!!」「うあああああ!!」

響き渡り交差する悲鳴、怒号、泣き声、叫び声――ここにあった笑顔の全てが一瞬で消え去り、赤い地獄と化していた。

それを見下ろし、高らかに笑うモノが一人。

「アハハハハ! なんだ、予想外にすごいじゃないかあたいの力! あれだな、ずーっと閉じ込められて恨みっぱなしだったのがよかったんだな。いい感じに恨みの力が溜まって胸も大きくなって――待てよ。胸に力が溜まってる? じゃあ力を使えばしぼむのか、この胸」

まぁいいか。そう呟いた人形は人差し指を地面に向け、くい、と持ち上げてみせた。

たったそれだけで揺れる大地。倍化する惨劇。

「踊れ踊れ人間よ、今宵は祭りぞ? ただの人形風情なれば見つめるのみの一時だが、しかし! 人形の枠を超えた我は、祭りに相応しき音と色を授けよう。あぁ、素晴らしきは神の真似事よ。心地の良いことこの上ない!! む?」

人形が立つ神社の屋根。そこから見える人間たちの踊りをすり抜け、まっすぐ向かってくる者が一人。

「おやおや来たか。踊っていればいいものを」

人の波を抜けた。避難を終えたその場所には誰もいない。そこにいるのはただ一人、火の手が上がり燃え盛る神社の屋根を――息を切らして見上げる桜の精。

「はぁ、はぁ……今すぐ止めるです！」

「止める？　何を止めればいいんだい？」

「この呪いを今すぐ止めなさい！！」

おお、おお。いい剣幕だ。火の色に照らされ一層凄みを帯びている。あれほどの笑顔を壊されたのがよほど腹に据えかねたらしいな、同類。

「そう言うな。一緒に漫才を見た仲じゃないか」

「やっぱりあそこにいたのですね……近くにいるのはわかっていたのに、どこにいるのかわかりませんでした……」

「くく。漫才に人形を使うと聞いてな、親戚としてはどのようなものか見てみたかったのだよ」

「サエおねーちゃんの人形を、あなたなんかと一緒にしないでください！」

「何を言う。テンカとやらが漫才で言ってたじゃないか。あれは呪いの人形の類だと」

「それでもあなたなんかと違います！　サエおねーちゃんの作った人形に呪いがあっても――きっと優しい呪いに決まってるんですから！！」

消えた？　そう認識した刹那、気配を感じて振り返る。

そこには妖精特有の力を使い、一瞬で屋根の上、人形の背後へと移動したクララの姿。

「ほう、便利なものだな」

感心する間にもクララは振りかぶった腕を全力で突き出し、人形に殴りかかる。

しかし。

「くぁっ！？」

クララの足元が突然崩れる。拳が人形に届く前に、その小さな身体は屋根を突き破って神社内へと落ちていった。

中は火事ですでに灼熱。落下の衝撃よりも熱風と煙に身体を蝕まれる。

「こちらも便利なものだろう？　あたいの呪いは全ての不幸を味方とする」

「クララ痛いです……っ！　あれ！？」

「ああ、今の消える移動法？　使えないようにしてみたよ」

それを聞いた瞬間、走り出すクララ。

「さぁ、頑張れ」

申し合わせたかのように倒れてくる柱、落ちてくる瓦礫、行く手を阻む炎！　人形の言う通り、偶発的な不幸ですらも武器としてクララを襲っているのだ。

「はぁ、はぁ、はぁ……！」

身を低くして獣のように、ひたすら走る、走る、走る！

倒れてくる柱をかいくぐり、落ちてくる瓦礫に目もくれず、炎の隙間に身を躍らせ――二階の窓から外へと飛び出した。

「使えます！」

神社の中を出たおかげか、力は戻っていた。地面に身体が叩きつけられる寸前に一旦身体を消し、離れた地点へ着地する。

「まだだぞ？」

地面が揺れる。転倒。その衝撃によって倒れてくる大木。

「痛っ！」

転倒によって足をくじいたのか、動けない。だからもう一度消えようとしたが――できない。力が再び封じられたのだ。

「……いや」

迫る大木。

「……して」

終わる。終わってしまう。

「……返して」

このままでは呪いを止める人が、誰も――

「みんなの笑顔を返して！！」

轟音。

大木が、クララを押し潰した。

「あーらら。頑張ったのにねぇ」

それをケラケラ笑う人形。

「言わなかったっけ？　妖精風情に何ができるってさぁ。あたいは日本に残るバケモノの中でも極め付けにタチの悪い呪いの人形よ」

誇らしく、嫌らしく、気持ち悪く、気持ち良く。

「たかだかあんた程度に勝てる道理がないのさ」

笑って、笑って、笑い続けて――

「だからあんたはおとなしく、そこで死ん」

「あー、暑い暑い。いくら夏でも暑すぎでしょこりゃ」

「で、なさ、い？」

その場違いな普通の声を聞いて、ようやく黙った。

「ていうか、なんでうちの不細工人形があんなとこいるわけ？」

その人間は、普通の人に見えた。そこそこ綺麗で、すごく快活なだけの普通の人間。

でも、なんだか道理とか捻じ曲げそうな感じがした。

おとなしく死にそうにない感じもした。

「ま、いっか。バトンタッチだね桜のお嬢ちゃん。お疲れちゃん」

手元に抱いた、呆然としている妖精を地面に下ろして、

「あとはあたしに任せなさいな」

もう一人のバケモノが参戦した。

## カカの天下536「夏祭りだよ、ハプニング!?」（後書き）

……あれ。これカカ天だよな？
そう思ったそこのあなた、大丈夫です。カカ天です。
カカ天のジャンルは実はコメディではありません。
『コメディっぽいもの』です。
なので好き勝手やらせてもらってます。わはー。

いっぺんこういうの書きたかったんですよねぇ。ベタなピンチにベタな登場。
それがいい！！
姉の漫才を期待した方々、すいません。
代わりと言ってはなんですが、姉の潜在（能力）でもご覧ください。

## カカの天下５３７「夏祭りだよ、ハプニング――殺し」

闇を炎が着色する夏祭り――その中心で人知れず対峙する人外たち。

「あ、あの……！」

「はいはい、休んでなさいな。擦り傷やら火傷やらでボロボロだよあんた」

身体は限界だったのか、ペタンと地面に座りこむ桜の精。

そして腕を組んで仁王立ち、不敵に人形を見据えるのは笠原家の長女、カツコ。

「なんだ、貴様は」

「んー、なんだろ。この街のハプニング処理班？　あんたみたいなのを黙らせるのが仕事」

「は？　できるのか、人間風情が」

「やるんだよ、人形風情」

手足をぶらぶら、準備運動。

「やれるものならやってみな。あたいに触れられれば上出来だ」

んー……と身体を延ばし、柔軟終了。

「こっちのセリフ」

銃弾のようにカツコの身体が放たれた。

一息で最高速に達した彼女はあっという間に神社の壁際へと到達し、屋根へと人間離れした跳躍を見せる。

屋根へと右足をつけた瞬間、足元が崩れる。クララを落とした手口と同じだ。

しかしカツコは右足が沈んだ瞬間、地面と垂直方向へ回し蹴りを放つ。大きく円を描く左脚。崩れた屋根の穴の縁に優しくつま先を引っ掛け、

「ほっ」

その足先の力だけで、落ちかけた身体を強引に戻した。

刹那、下から吹き上げてくる炎を野生のカンで察知。浮かした身体は体勢を整える間もなく、

「よっ」

右手で屋根の瓦を引っかくようにして自身の身体を横へと投げる。器用に火柱を避けきった。

「――なっ」

軽業師のような芸当に驚愕する人形に向かい、滑るように疾駆す

る。速い。

「こ、この……！！」

上がる上がる、火柱が上がる。だが乱雑に放たれるその凶器をカツコはカンだけで縫うように避けていた。

あと数瞬で肉薄する――そのとき。

「うおっと！？」

目の前から極太の火柱が下から吹き出し、屋根もろとも空を貫いた。カツコはさすがに後ろへ跳ぶ、しかし着地するはずだった屋根が消えた。

「はぁ……はぁはぁハハハ！　魔物が最も力を発揮できる時を知っているか！？」

カツコの身体が落下する。神社の床に――いや。

「それはな、現実から隔離された空間にいる時だ！」

床が消えた。その下の床も。地面が見えて――それが割れた。夜の闇より深い闇、奈落への入り口が開いていく。

「律儀に避難してくれたらしく、この周囲には誰もいない。魔物と魔物に喰われるモノの、それ以外はな！　ここら一帯はもはやあたいの箱の中！　閉じられた箱で何をしようと誰も知らない気づかない。だからあたいはなんでもできる！」

魔法とも呼べるその力によって造られた穴は深く、底は見えない。
カツコの身体は吸い込まれるようにその闇へと消えていった。

「くくっ……勝った」

己が力に満足し、先ほど感じた冷や汗をぬぐいながらも人形が笑う。人形が汗をかくのもおかしな話だが、コレはもはや魔物と化しているので問題ない。

「人間風情が侮ったな。適した場においての呪いという力がどれほど強いか、知らなかったと見える！」

勝ち誇った声が奈落へ木霊する。

それは果たしてカツコに聞こえているのか。

確認するまでもなかった。

「――知ってるよー」

なにせ、返答があったのだから。

「え……？　は？　ええ？」

「箱の法則でしょ。世界の裏を知らない一般人さえ複数その場にいなければ……要は人目につかない場所なら力は使い放題ってやつ。それが裏を生きるモノの法則。うん、知ってる知ってる」

誇るでもなく、ただ単に当然のことを口にするような調子で木霊が響く。

「だってそこで鍛えられたもん」

この世で最も深い闇から、奈落の崖際を空に向かって爆走するカツコが姿を現した。

――壁走り。忍者の基本技である。多分。

「ば、かな……えぇい、非常識なことを！！」

非常識な存在が何を言う、とツッコむ間もなく。燃えた神社がさらに崩れ、焼けた残骸がいまだ地面より下にいるカツコへと降り注ぐ。

目が細まる。

脳から各神経へ伝達。

限界解除。

無理やり研ぎ澄ませた感覚をフル活用。マシンガンのように向かって来る大小ランダムな銃弾を避け、蹴り弾き、拳を焼かれながらも殴り砕き受け流し握り潰し、灼熱爆弾爆発を身体の各所に掠らせながらも致命傷だけは受けることなく――

「よう」

黒と赤の空を突き抜け、ついに頂点へとたどり着いた。

「思ったよりキツかったかなー」

「な……なんなんだい、あんたは……」

「何って、人間だよ」

「嘘つけ！！」

「ひっど」

「人間が今みたいなマネできるかぁ！！　だだ、だって、ダダダッて、シュシュッてドカーンって、ピューンって！！」

狼狽しまくるその姿は小さな子供にしか見えない。そして普通のお姉さんにしか見えないカツコは、

「じゃ、根性ある人間」

「根性あったってそんなんできるかぁ！？」

「できるさ。根性あればなんでもできる。ああ、そういやあんたの天敵の娘でもあったか。ま、いいや……てわけでホイ」

あっさりとそんなことを言って、人形の額に人差し指を突きつけた。

そこは『呪』という文字があった場所。

「溶けてくっつく、特性お払いシール。保存時は冷やしておく必要があるのでご注意を――」

カツコが祭りの途中で消えたのは、シューの家にこれを取りに行っていたからだ。悪霊相手には覿面なアイテムなため、先日、それを恐れた近くの浮遊霊がタマを介して冷蔵庫に保管されていたソレをどうにかしようとした場面もあったりしたが。

して、今貼ったそのシールの効果とは。

「だ、大丈夫ですか!?」

「お、桜の嬢ちゃん。もう大丈夫だよ」

「な、なにしたんですか……？」

「ほれ、見てみ」

人形の額。

『呪』という不吉な文字。

その文字が『祝』に変わっていた。

「どうよ、貼れば何でももめでたくなるというスペシャルシールさ。ちょうどいいサイズがあってよかったわ」

「字が変わってます」

「うん」

「でも似てます」

「だねぇ」

「パチもんってやつですか!?」「あーうん、それでいいよ」

最後の最後で極短漫才のようなやりとりをしながら、人知れず行われた戦いが終結した。

『呪』という字は『祝』に変わり、運気は逆転。

不吉な火事は滝のように振り出した雨によって全て消える。

そして雨と共に、ささやかな幸運が降り注ぐ。

例えば崩れた屋台に挟まれ、身動きが取れなくなっていた人も。

「あ、あれ。うまい具合に瓦礫が崩れた！　よし、今助けるよ！」

「ありがとう……真紅さん」

このように運良く助かったり。

「どたばたに乗じてわたあめたくさん食べれた……ウマー」

普通に幸福な人（ちょっと犯罪者）、甘党の鈴宮さんがいたり。

「ああ、ここにいたんだな祐清！」

「よかった、無事だったかフウキン」

はぐれた人たちが無事に出会えたり。

――そして、その中で。

「……あれ」

幸か。

「……え」

不幸か。

「おかあ、さん……？」

「サエ……？」

――二人が、出会ってしまった。

## カカの天下５３７「夏祭りだよ、ハプニング――殺し」（後書き）

あっちゃこっちゃで大変なことが起こってますが、まだ続きます。ついに出会ってしまった二人はどうなるか！？

あとわかる人にはわかると思いますが、今話中に出てくる箱の法則についてはもう一つの短編ホラー小説「箱の中の黒猫」に出てくるのと同じ原理だったりします。

それにしてもすっかりファンタジーですなぁ。

明日はコメディに……ならないな多分（笑

## カカの天下５３８「わがまま」

サカイです。

サカイです。

サカイです。

ああ、なんで三回も言ってしまったんでしょうか。まるでどこかの芸人です。なんでなんでーってそんなの言うまでもないじゃないですかー！！

「お母さん……！」

サエが。

目の前に、サエが……！！

に――

にげないと――

「っ……！！」

「あ、お母さ――」

ごめん。

ごめんね、サエ。

私、まだあなたに顔を合わせられな――

人にぶつかった。

跳ね返って屋台にぶつかった。

さらに電信柱に激突。

ピンボールのようにサエのところへ戻ってきてしまった。なにやってんだ私。

「お母さん……大丈夫ー？」

「う、うん。なんとか……じゃなくて！！」

走り出す！

「待って！」

服の裾を掴まれる！

バランス崩してすっ転び、頭から地面へ激突！

「あ、ああー！　お母さん！」

そろそろ死ぬかも……

ヨロヨロと立ち上がったところで、サエの顔が真正面に。

可愛い……

じゃなくて！！

「なんで……」

「え」

「なんで、逃げるの……？」

「それ、は……」

自然と顔が俯いてしまう。

「私の友達が言ってたの。私のお母さんは、今も私のことを想ってくれてるんだって」

……そう、いつだって想ってた。

「それは、違うの？」

違わない。

「もう、私と一緒にいてくれないの？」

一緒にいたい。

でも……

「ご、ごめんねー」

後ろを向く。

「私ね、あなたと会ったらいけないことになってるのー」

サエに会わせる顔がないから。

「お養父さんの――あなたのおじいさんの命令でね、会ったら怒られるのよー」

今のサエの顔を見たくないから。

「私としてはね、ちゃんとサエのお母さんをしたいんだけどね、ごめんねー」

今の私の顔を見せたくないから。

「ほんとはね、ずっと会いたかったんだけどねー」

今の、

「うん、会いたかったんだけ、ど」

最低な母親な、

「会い、た……」

最低な私の、

「かった……！！」

最低な顔を……

「お母さ――」

「でもね！」

サエの声を遮る私の声は泣きそうで、震えてて、情けなくて仕方がないんだけど……これだけは言わないと。

「でもね、ダメなの」

そう、ダメだった。

「頑張ってみたんだけどね、ダメだったの」

こんなこと言いたくない。ただの言い訳だ。

「あなたと会うための許し、もらえなかったの」

許しを得ずに会おうと思ったことは何度もあった。でもダメだった。あの人の親戚に預かってもらっている以上はサエの立場を悪くできないし、そもそも私にそんなわがままを押し通す力は無かった。

「でも、でもね！　私、安心してたんだよー？　サエにはお友達がたくさんいるでしょ？」

カカちゃんにサユカちゃん。トメさんだっていい人だし、あの妙な女の子も。

「サエがいつも楽しそうに笑ってて、安心してたんだよー」

そして感謝していた。この子と一緒にいてくれる皆に。

「ああ、ちゃんとこの子は幸せなんだって」

遠くから見守って、サユカちゃんから話を聞いて。

少し寂しかったけどホッとした。

この子は、私みたいな母親がいなくても、ちゃんと幸せになれるんだって。

「だから、ね？　私がいなくても、このまま幸せで――」

「……か」

とても、小さな声で。

その子は言った。

「……んですか」

聞き覚えのある声。

ああ、これは、そうだ。

「……けないんですか」

ずっと小さかったこの子が、泣いていたときの声。

泣きながら、私を。

私なんかを。

お母さんと呼んでくれたときの声――

「もっと幸せになったら、いけないんですか！？」

涙が、出た。

「わがままを……言います」

なぜかはわからない。

「一生に一度のわがままでいいですから」

想うことが多すぎて、どれが原因かわからない。

「お母さんにいろいろあるのは知ってます」

私は何も言えず、

「でも」

何も言うことができず、

「私と一緒にいてください」

ただ自分の娘を抱きしめることしかできなかった。

泣いた。二人で一緒に泣き続けた。

そしてわかった。

これが私の――私たちの幸せだったんだ。

娘に触れられるだけで、こんなにも湧いてくる力。

さっき私は心の中でなんと言った？

――そもそも私にそんなわがままを押し通す力は無かった。

何を甘えたことを言っているのか。可愛い娘が一緒にいたいと言ったのだ。こんな小さなわがままを押し通せなくて何が母親だろう。

「……待ってて、サエ」

「うん」

「私、頑張るから」

「うん」

「もっと、頑張るから」

「うん」

「今は無理だけど、いつかちゃんと迎えにくるから」

「うん、待ってる。いってらっしゃい、お母さん」

「うん。いってきます、サエ」

いつか、あの子も言っていた。あなたはきっと、もうすぐ報われます、と。

当たり前だ。この胸に湧き出た力があれば、なんだって出来る。

だから。

最後まで走り続けられるように——もう一度、愛しい娘を抱きしめた。

## カカの天下５３８「わがまま」（後書き）

夏祭りの途中ですが、緊急事態により別のお話っぽく展開いたしましたのでご了承ください。

お姫様の小さなわがままが叶いますように。

## カカの天下５３９「夏祭りだよ、わかってる！？」

こんにちは。サカイです。

断腸の思いでサエと別れ、いまだ混乱している祭りの中を歩いていると……警官姿の大きい人に声をかけられました。

「もし、すいません」

「はいー？」

「今夜は騒ぎを起こしたりしないんですかな？　お祭り怪人さん」

「……どこから聞いたのかしらー？　ゆーたさん」

相変わらず大きいわねー、この人。

「あなたが知らないところで、情報はそれなりに落ちているものなのですよ」

「そう。それでー？」

「なんでしょう」

「私とサエのこと、報告するの？　監視役さん」

彼とは少なからず縁がある。私の夫だった人の親戚である彼の家に、まだ赤ん坊だったサエを預かってもらったことが何度かあったのだ。

「……ミエ様」

しかし親族としての立場は低いのか――彼らの親族とはすでに離れた私のことも彼は『様付け』して呼んでくる。とは言っても、もはやあの家の手先なわけだけど。

私とサエが会った。そのことが報告されれば、あの家は何らかの対処をしてくるだろう。そうなると厄介なんだけどー……

「はて？　私はサエ様の浴衣姿に夢中で、他は何も見てませんでしたので。むふー」

「このヘンタイ」

「そんなに褒めないでくださいよ」

「じゃーもう言わない」

「もっと言って！！」

「どっちー？」

半分呆れながら、半分感謝しながら私は笑った。この人は昔からバカなことばかり言っているけど、紛れも無くいい人なのだ。

「……よかった。くそじじいのとこに乗り込むのはいいけど、ちょっと準備が必要だから。先に動かれると困るんだよねー」

「ほほう、お得意の裏操作ですな」

「そーそー。陰湿さにかけては自信があるしね。なんでもするよー、あの子と一緒になるためなら」

「大変、素晴らしい判断かと」

「ありがとう」

「つきましては、ご一緒になるときはぜひ私も」

「あなたはいらない」

「手厳っしぃー！　もっと言って」

「言ったら黙ってる？」

「それはもう」

「あなたの親は泣いてるよー」

「それは言いすぎ！！」

さて、と。まずは準備だけど、とりあえずその前にゆーた君に娘自慢でもしますかね。どの話がいいかなー。あの子が「浴衣ありがとー」って言ってくれた話はクライマックスに持ってこよう。気づいててくれたんですよあの子！　愛ですよねー愛！　むふー！

「さーさー、私を『様』と呼ぶなら、ちょっと付き合いなさいなー」

「はぁ、それは構いませんが……夏祭りのこの事態を放っておくわ

けには。いくら雨が上がったとはいえ」

「大丈夫ですよーそんなの。ここにはトボけてて騒がしくておもしろくて、何でもかんでも愉快にまとめてしまう人たちがいるんですから、きっとその人たちがなんとかしますよー」

うん、多分。

こんなにぐちゃぐちゃで陰気くさい雰囲気になったら、それを気に食わないあの子たちが何かぶちかますでしょー。

サエですー。

お母さんと感動の再会をしてしまったので顔がくしゃくしゃでしたけど、なんとか回復してイベントステージがあった場所に戻ってきました。もう止みましたけど、さっき雨が降ってて助かりました。誤魔化しやすいです。

「あ、サエすけっ！　よかった、無事だったのね」

「サユカちゃん、会えてよかったー」

「うん。火事が収まってからここがみんなの集合場所っぽくなったみたいだから……あれ、どうしたの。目が赤いわよっ」

「あ、うん。ちょっと火事のときに乾燥したみたい」

サユカちゃん目ざといなー。

「カカすけっ！！　サエすけ見つけたわよっ！」

「サエちゃーん！！」

おっとー！　なんか飛びついてきたと思ったらカカちゃんだ。無事でよかった……心配してくれてたんだねー。

「よかった……よかった……」

「うん、よかった」

抱きしめあう私たち。

ホッとしたカカちゃんの顔。

そして見つける、その感情。

「安心した？　カカちゃん」

「え、うん！」

「なら……別のことが気になってきたみたいだねー」

カカちゃんは、ばつが悪そうに頬をかいた。

周囲から聞こえてくる会話と、その雰囲気。地震に火事、数々の屋台倒壊などのハプニングによって夏祭りに参加した人たちのムードは最悪だった。災難にあったと嘆く人、屋台が壊れたことに泣く人怒る人……知り合いとはぐれたままの人とか大怪我した人は“な

ぜか”いないみたいだけど、明るい人など誰一人として居ない。

「ん」

カカちゃんは言った。

「気に食わない」

うん、こういう子だ。私の親友は。

「行くの？」

「うん」

「手伝おうかー？」

「な、何するか知らないけど、わたしも力になるわよっ！」

「んー、いいよ」

カカちゃんはおもむろに人ゴミの中に手を突っ込んで。

「よっ」

なんとトメお兄さんを引っこ抜いた。

「トメ兄いれば、それでいいや」

「え？　え？　何……おお！　三人とも！　無事だっ――」

「はい、行くよートメ兄」

「は？　な、なに、おい引っ張るなって！」

「カカちゃん！！」

親友と、そのお兄さんが振り向く。

さっきの素晴らしい出会いも手伝って、きっと私は最高の笑顔で言った。

「いってらっしゃい」

「うん、いってきます！」

「どこへ！？」

二人を見送りながら……なんだか自然に笑みがこぼれてきた。

「いってらっしゃいばっかり言ってると、なんだか私がお母さんみたいだなー、ふふ」

「サエすけ何か言った？」

「んーん、なんにも。ささ、見物しましょーや、サユカちゃんやー」

「そう？　じゃ、そうしますか、サエすけさんやっ！」

ニコニコ顔でステージ前へ。

さー、やっちゃえカカちゃん！

ちは、カカです。ちょっと怒ってます。

「おい、カカ！　本気か！？」

私のやりたいことを教えるとトメ兄は文句たらたらです。ええい、大人のくせにだらしがない！

「本気も本気。ちょー本気」

「や、それはいくらなんでも」

「私とトメ兄だよ？　それくらい楽勝っしょ」

「……まぁ、な」

私の言葉で乗り気になったのか、トメ兄は頷いてくれた。よっし、これで怖いものはない。

こっそりステージ裏に忍び込んで深呼吸。言いたいことを心の中で復唱する。

……ええと、あれと、あれと、あれも言いたいなー。でもなー。んー……あれ、トメ兄どこいった？　まぁいいや、先に考えをまとめてっと……

んー……

やめた。

面倒くさい。

思ったこと言おうっと。

「よ、スタンバイおっけーか？」

「トメ兄どこいってたの！」

「こっそりスピーカーとか繋げてきた。ほれマイク」

「……手馴れてるねトメ兄」

「昔、よく姉にこんな手伝いやらされてたからな。照明もいじれるぞ」

「さすが忍者の子供」

「僕は大したことできないけどなー。さて、ではそろそろ？」

「いきますか！」

照明がステージを彩った。

提灯が消え、真っ暗だった祭りに火が灯る。先ほどまで火事に怯えていた人たちは身を竦めるが、ただの明かりだと気づくと安堵のため息をつきながらステージに注目する。

そこには仁王立ちする私！　そして後ろに控えるトメ兄！

視界に入る人たちの視線をあらかた独り占めしたことを確認して――私は始めた。

「あんたらのその顔が気に入らない！！」

スピーカーの音量は最大なのか響き渡る私の声！　ぽかーん、とする一同。構わず続ける。

「今日はお祭りだよ？　楽しい楽しい夏祭りじゃないの？　それをなんで暗い顔で過ごさなきゃいけないの!?」

「仕方ないだろカカ。さっき地震やら火事があってさ、みんな疲れてるんだよ」

そんなことを言いつつ隣に立ってくれるトメ兄。そう、これは口だけだ。

「疲れてる？　ならもっとお祭りを楽しんで、その疲れを吹き飛ばしたらいいじゃん」

「そう簡単にはいかないよ。あれだけのことがあったんだ。みんな気分が落ち込んでるのさ」

「なんで落ち込む必要があるの。ひどい怪我した人はいないし（お助け忍者調べ）屋台が壊れた人にはお金ちゃんと出るらしいし（忍者の裏づけあり）何も問題ないじゃん！」

「だから、そう簡単なもんじゃないんだって。災害があった、それ

だけで人は落ち込むもんなの」

「災害？　なにそれ。さっきのなんて神様のイタズラでしょ？」

ステージ前の人の失笑が聞こえた。「神様？　子供は気楽でいいわねぇ」「俺たちがどんだけ怖い思いをしたか」「きっと雷が落ちてもはしゃぐんでしょうね。ただごとじゃないってのに」「神様が居るならこんなこと起こらないだろ」なんて、そんな根暗なことをヒソヒソと呟く。

でも私の心は折れない。

むしろムカついた。

「そんなこと言ってるから神様が怒ったんじゃないの？」

皆が押し黙る。

「いいこと言った。居る居ないは別として、少なくともいま汚いことを言ったようなやつに神様が微笑んでくれるわけがない。神様がよほどの阿呆で無い限りはな」

トメ兄の援護もあって、ヒソヒソしていた嫌な人たちは恥ずかしそうにそっぽを向いた。

「笑うヤツには福きたる、笑わないヤツには厄しかこない！！」

「おーまたいいこと言った！　カカさんや、その心は？」

「笑え！！」

再び呆気に取られる一同。そして再び構わず続ける！

「私に続いて笑いなさい！　さぁいくよ！　わっはっは！　はいっ」

『わっはっは！！』

いきなりの要請に応えてくれたのはトメ兄と――ステージの真ん前にいるサエちゃんとサユカン！

でもそれだけ。まだまだ足りない。

「わっはっは！」

『わっはっは！』

今度はちょっと大きくなった。どこにいるのかわからないけどアヤちゃんグループとかキリヤさんにサラさん、ゲンゾウ三きょーだいが加わってくれたからだ。でも――

「全然小さいよ！　このままだと神様が欲求不満で、また地震が起こっちゃうよ！」

「欲求不満て……おお！？」

ズン、と一揺れ。騒ぐほどでもない、しかしはっきりとわかる揺れが絶好のタイミングで訪れた。

「ほらほら！　神様も怒ってるんだよ。笑いなさい！　わっはっは！」

『わっはっは！』

ちょっと増えた。でも。

「小さい！！」

ズン、と催促するようにもう一度揺れる！　うわ、なに私、もしかして超能力とかあるんじゃないの？　そんなことを思いつつ続ける！

「わっはっは！！」

『わっはっは！！』

よーし、地震への怯えも混じってるけど大きくなってきた！

――舞台裏。

「カツコ！　カツコ！　今のどうやったんですか！？」

「ん？　この人形に命令してるだけだよ」

「カツコ様、本当に大丈夫なのでしょうか？　こ、このような地震など……」

「いいのいいの、一回揺れるだけなら被害もないし」

「それならばいいのですが……皆様が心配でございます」

「……人形、あんた性格変わったな。すげー効き目だ、あのシール。今度親父に貼ってみるか」

「呪いの人形から祝いの人形にチェンジしたのですね！」

「ま、長くはもたないだろうからまた封印するけどね。さて……頑張れー、あたしのきょーだいども」

「わっはっは！」

『わっはっは！！』

んー、いい調子！　もういっちょ！

「わっはっは！」

『わっはっは！！』

「ぺっぺっぺ！」「きたねーよ！！」

スパンと一発ツッコミきました。んー、これはダメか。

「かなり元気出てきたね」

「無理やりな気がするけど、まぁな」

「それじゃー今度は私に続いて言ってねー。楽しい楽しい夏祭り！
はいっ」

『楽しい楽しい夏祭り！』

んー、ノッてきたね！

「地震のせいで大壊滅！　はいっ」「キツいわ！！」

トメ兄のツッコミを挟みつつも『地震のせいで大壊滅！』とノッてくれるみんな。いいよー！

「だけどみんな、生きている！　はいっ」

『だけどみんな、生きている！』

「生きているから歌うんだ！　はいっ」

『生きているから歌うんだ！！』「なんかの歌詞か！？」

「しぶとく汚く生きている！」「オイ！」

と、ここで中断。

「なんでそんなこと言うんだよカカ」

「何が」

「せっかくみんなポジティブになってるのにさ、しぶといとか汚いとか」

「生きていることが何より大事なんだよ！」「だからなんでいちいちいいこと言うんだよおまえ！」

「いいこと言っちゃいけないの？」

「いや……いいけどさ」

「続けていい？」

「どうぞ」

「こほん……さぁいくよ！　楽しい楽しい夏祭り！　はいっ」

『楽しい楽しい夏祭り！』

「参加者の半分は警官！」「なんだその厳重体勢」

「残り半分はヤクザ！！」「抗争でも起こす気か！」

「なにトメ兄。さっきから文句ばっか」

「言ってることメチャクチャなんだよ……なんだよ警官とヤクザのお祭りって」

「いっぱいいるよ？」

「や、たしかにそうだけどさ。私服警官も屋台ヤクザもいるけどさ。観客はどうした」

「さっき燃えた」「おまえ被害ゼロって言ってたろ！？」

「あ、そうだったそうだった。言い直すね」

「ああ、ちゃんとやれよ？」

「うん……いくよ！」

「おう」

「楽しい楽しい夏祭り！　はいっ」

『楽しい楽しい夏祭り！』

「参加者はみんな燃えた！」「そうじゃなくてね！！」

「なにさ」

「みんな燃やしてどうすんだよ」

「いやいや、心がね」

「あー心が」

「そうそう。心を燃やしてくのよ、今から」

「なるほど。ごめん、わからなかった」

「こっちこそわかりにくくてごめん。もっとわかりやすくいくね」

「うんうん」

「観客の心を燃やして燃やしてーって。燃えて燃えてーって」

「お願いするよ」

「了解。いくよ！」

「どうぞ」

「萌えて萌えて萌えて！！」「字が違う！！」

『萌えて萌えて萌えて！！』「なんで元気にノッてくるんだおまえら！？」

「萌えて萌えて、たまに燃やして！！」「燃えるのはおまけなのかよ！？」

『萌えて萌えて、たまに燃やして！！』「おまえらもちゃんと復唱するのかよ！？」

そろそろいいかな？

「はい、回って回ってー」「おー踊りが入りましたよ」

『回って……回って』「ちょっとやりにくそう」

やりにくいっていうか、ノリにくいんだね。まだ見てるだけの人いるし。

おっし。それなら……

「右にちょちょいっと。はい踊ってー」「あ、ちゃんと皆でやらないとぶつかるよ、人が密集して狭いから」

トメ兄ナイスフォロー！

「もっかいいくよー！　右にちょちょいっと」

『右にちょちょいっと』

「左にちょちょい！」

『左に……ちょちょい』

無理やりノせて、いい感じ！

「ここで一曲お願いします！　ここにいるトメ兄が歌います！」

「僕！？」

「トメ兄で、曲名は、盆踊り！」「それ歌ねーよ！　それに盆じゃねーよ！」

「ボーン！」「意味わからん。けどミュージックスタート！」

誰がやってくれたのか、流れる軽快な音楽。もともとお祭りの最後のために用意されていたのかもしれない。

無理やり笑わせて、無理やり躍らせて。

全部無理やりで強引だけど。

笑ってれば楽しくなるし、踊ってればうきうきする。

それがお祭り、だよね！

「もうっ、カカすけったらメチャクチャにしちゃって……」

「まぁまぁサユカちゃん。そんなに妬かないのー」

「べ、別に妬いてなんかっ」

「いろいろな組み合わせで漫才とかやってたけどー、あのコンビには敵わないよねー」

「……なんか、おもしろいとか色々通り越して問答無用な組み合わせよね、アレ」

「ふふ、まぁ楽しいからいいけどねー。さぁ、サユカちゃんも踊ろー」

「わっ、ちょっとっ」

「楽しいとき、嬉しいとき、お祭りのときは楽しく笑って踊るのだー♪」

人と事情が入り乱れるこの夜に、幾百幾千の想いが一つになる。

それらはもちろん、全く同じ想いではなかったが――誰もが総じて楽しそうだった。

夜が更ける。

闇を照らすは心の炎。祭りの踊りはゆるやかに、激しく、愉快に、もう少しだけ続いたのだった。

## カカの天下５３９「夏祭りだよ、わかってる！？」（後書き）

と、ゆーわけで！
夏祭り編、ようやく完結です。長々とお付き合い、ありがとうございました……

またもや投稿時間が遅くなってしまいましたが……

ゆったりお酒飲んでたらこんな時間になったのは内緒。
酔っていい気分で書いてたら長くなってしまったのも内緒。
まったく内緒にしてませんが笑
んー、ほら、あれですよ。お祭りのときはやっぱり飲まないと笑

ま、私の酔っ払い事情は置いといて！
参加表明していただいたのに出られなかった皆様。申し訳アリマセン。くじ運が悪かったと思って……そしてその分どっかでくじ当たると思ってお許しを＾＾；

そろそろお盆ですね。
飲食業にはキツイ時期です……夏祭り終わってよかった笑
それでは明日からはまたゆるゆるーっといきますので、お付き合いいただけたら幸いです＾＾

## カカの天下５４０「暑いし」

どうも……カカです……

「暑い……」

「私もー……」

「だるいわ……」

そんなわけで。お祭りの翌日に皆で遊ぼうと我が家へ集まったはいいのですが、ワケワカラン暑さと昨日の疲労で私もサエちゃんもサユカンも居間でぐったり寝転がっています。

「カカすけ……なんて様よ。昨日はあんなに元気よかったのに」

「すごかったよねー。あんな大勢をまとめあげちゃって。緊張とかしなかったの？」

「や……なんかね、やたらとムカついてたからか緊張しなかった。あと、なんか頑張れーって誰かに後押しされてたような」

「神のご加護でもあったのかしらっ」

「そんなもんあるわけないでしょ」

「うわー、昨日あんなにいいこと言ったのにー」

うるさいなぁ……昨日は昨日、今日は今日。気合入れてるときと

腑抜けてるときとじゃ言うこともやることも違うのさー。それが人間さー。暑いし。

ま、そうは言っても神のご加護っていう感じはあながち間違ってなかったかもしれない。なんとなくだけどね。

「まーでも昨日は頑張った。それでいいじゃん」

「うんうん、わたしたち頑張ったわよねっ」

「頑張ったから……今日は何もしなくていいんじゃないかなー」

「そだね……」

暑いし。こうやってジッとしてるだけでいっか。

「ダメよっ！　子供なら子供らしく、何かしないと！」

サユカちゃん元気だなぁ……でもなぁ……

「踊りすぎて身体が痛いんだよね」

「あ、私もー。調子に乗ってサユカちゃん振り回しすぎたー」

「そりゃわたしも痛いけどさっ」

うん、足とか痛い……

いたい……

「じゃ、一発芸やります」

「どうぞーカカちゃん」

「遺体」

シーン……

「なにもしてないじゃないのっ」

だって動きたくないもん。

「じゃー私も一発芸やりますー」

「どうぞサエちゃん」

「遺体二つ目」

「だから何かしなさいよっ」

ナイスこんびねーしょん。サエちゃんと親指を立て合っていぇーい。

「じゃーサユカンは？」

「そうそう、そこまで言うならサユカちゃんもやるべきだよー」

「えと……それじゃ、やりまーす」

『わー』

とてもわざとらしい声援。

「んと……大量殺人現場」

「つまり何もしないのねー」

「だって暑いもんっ！　疲れたもんっ！」

おー開き直った。しかし激しく同意。

「でもこのまま寝たきりってのもアレだし……喉渇いたし。スポーツドリンクでも作りますかね」

「賛成ですー、ドリンカーカカさん」

「賛成よっ、ドリンカカカカ」

「あんたらも作るの！　それにサユカン。『カ』が一つ多い」

「じゃ、そこに蚊が留まってたってことで」

この子も相当キてるね。それも仕方ないか。暑すぎて脳みそ茹ってるみたいだもん。うー、立ち上がるのもヨロヨロしちゃうよ。

「ほらほら、立って。手伝って」

「あいー」

「うー、身体が重いわ」

三人でフラフラと台所へ移動。えーっとポカリの粉がここら辺に……あった。

「はい。適当にコップに粉入れて、水入れて混ぜてね」

「あれ、一気にたくさん作るんじゃないのー？」

「うちは一回飲むたびに適当に作ってる。そうすると飲みすぎないようにできるんだって」

「細かい、というかケチくさいわねっ」

「たくさん飲むなら水が一番ってトメ兄が」

「さすがトメさん！　ジュースの飲みすぎはよくないものねっ」

ほんと現金だなーサユカンて。

……現金？

ほしい。

「カカちゃん？」

「へ！？　あ、ごめんボーっとしてた。あはは、えと、もう私がみんなの分、適当にやっちゃうね！」

暑さのせいかな、と苦笑いしながらもささささーっとコップに粉を入れていく。

そして混ぜると……泡だってきた？

「なんか変だねー。サユカちゃん、味見してみてー」

「え、別にいいけど――」

さっき入れたのは……

「洗剤だコレ」「ぶっ！！」

「サユカちゃんだいじょうぶー？」

「あぶっ！　あぶなっ！！　もうちょっとで口に入れるとこだったわよ！」

暑さのせいだ、うん。

というわけで、もっかいやり直し。

白い粉をぱっぱっぱ！

「今度はサエすけが飲みなさいよっ」

「やだー」

「やだって！　そういえばさっきもさりげなくわたしに毒見させたわよねっ！　ほんと黒いんだから――」

「カカちゃん、それ見せてー」

「この話を聞きなさいよ、まっ黒サエすけっ！」

「……カカちゃん」

「んあ？」

「これ漂白剤」

……ちんもく。

「カカすけ？　いくらサエすけだからってね、これ飲んでも白くならないわよっ？」

「顔色くらいしか白くならないよね」

「む、それだけでも白くなるなら飲ませるべきかしらっ」

「少しでも黒さがマシになるかも」

「あっはっはー。二人とも、いいからその毒物捨てなさい」

――そんなこんなで。

ようやく作ったポカリを飲んで。

「ごほっごほっごほっ！！」

三人そろって咳込み、病院行き。

お父さんが隠しておいた麻薬だったみたいです。

そんなわけで、私たち三人は残りの夏休みをベッドの上で過ごしたのでした……

「なんちゃって」

「んぐんぐ……カカちゃんどしたの？」

「ちょっと暇だからミニエピソード考えてみたり」

「へー、聞かせなさいよっ」

ほんとは粉が多すぎて味が濃くて、むせただけでしたとさ。

んぐんぐ……今日も今日とて平和だねー。

暑いけど。

ポカリおいしー。

## カカの天下５４０「暑いし」（後書き）

暑いしーとか疲れたーとか。
べ、別に私がそうだってわけじゃないんですからねっ！！
や、暑いのは同意なんですが笑
そんなわけでイベントの後はお決まりのまったり話です。だらだらーっと行きましょう＾＾ちなみに私は子供のころはポカリ派でしたが今はアクエリアス派です（聞いてない

にしても……今から思えば。
この子ら日常会話がほんとミニ漫才ですね……ボケとツッコミ必ずいるし。

## カカの天下５４１「音頭だってさ、がんばれタケダ」

やぁやぁ、タケダだ！！

夏祭りが終わって丸一日経ち、我ら五人はなじみの喫茶店へ再び集まった！　それというのも夏祭りのイベントステージにて披露した漫才の打ち上げをやろうというのだ！

「タケダ、乾杯の音頭を頼む」

「そんな踊りは知らん」

「乾杯する前になんか言いなさいってことよ！　頭いいくせにバカね！」

「まぁまぁアヤさん。小学生が乾杯する機会など普通はそうそうあるものではないと思いますし」

「……こくこく」

不覚だった。そういえばドラマとかで見たことあるかもしれないな！　ええと、確か……グラスを持って……

「ゆったりした椅子に座って、猫をなでるんだっけ」

「豹柄ローブと葉巻はいるか？」

「おおニシカワ、ありがとう」

バカには見えて普通の人は見えないそれらをニシカワから受け取る。

「ねぇイチョウさん。なにかしらあのミニコント」

「多分、漫才大会のときの失敗を少しでも笑いで取り戻そうとしているのではないかと。この場合はおそらく、グラスしか共通点ないじゃん！　とかツッコむのが正解ではないかと」

「ふーん。おもしろくないしツッコまないけど。インドちゃんやる？」

ノゾミ君は首を横にふるふるふる。くぅ、心優しい彼女ですらこの仕打ち。やはりあのときの失敗は大きかったか……

「いいからタケダ、乾杯の音頭やってよ」

アヤ君はあからさまに厳しいし……こうなったら小粋なジョークでも！

「モテたい音頭でいいか？」

「それでいいわ」

「……え」

「やれ」

「え、でも」

「やるっていったのはあんたでしょ？」

「……その」

「やれ」

まぢ？

この静かな喫茶店の中で？

ぐぐ……ええい！　適当に腕をちゃっちゃっちゃっ！！

「モテたいモテたいモッテモテ！」

「そりゃモテんわ。かんぱーい！！」『乾杯！！』

えええええええええ！！

「えっと、その、俺、誰とも乾杯してな――」

『んぐんぐ！　ぷはぁー！　コーラうめー！』

「みんな飲んでるし……」

いじめか……いじめなのか……いじめ格好悪い……いま格好悪いの俺だけど……

「む？　ノゾミ君？」

「……んと」

「ノゾミ君は乾杯してくれるのか」

「……ん」

「なんと！　君は優しいな！」

「……！！」

コンコンコンコンコンコン……っていや、そこまで小刻みに乾杯しなくても。嬉しいが。

しかし先ほどのアヤ君……攻撃の仕方がカカ君そっくりだったな。カカ君ほど変な性質はもってなくとも似ている部分があるということか。かと言って好きにはならんが。ほんとだぞ？　先ほどのモテたいというのはカカ君限定であってだな。

「さて！　みんなお疲れ様だったわけだけど」

おっと、アヤ君が仕切りだした。

「みんな頑張った漫才大会！　その中で！　タケダがネタを途中で放棄したこと、どう思いますか」

ぐぐぐぅ！　やはりその話題がきたか！

実はあのとき、俺の面接パートにはちゃんとネタがあった。しかしそれが俺的にはあまりに下品で、カカ君の前ではとてもできなかったのだ。

「ニッシーが無理やりオチを作ってくれたからいいものの――」

「ま、待って」

む、インド君？

「わ、わたしも、その……変なこと、言っちゃって」

俺を庇ってくれているのか！　しかし確かにネタ合わせにないことを言っていたな。ちょっと傷ついたぞアレは。

「じゃあインドちゃんにも何かしてもらおっかなーふっふっふ」

「あ、アヤさん。インドさんにはあまり手荒なマネは！」

さりげに「タケダなら手荒にしてもいい」みたいな意味込めてないかイチョウさん。

「大丈夫よー、軽く……」

アヤ君がノゾミ君を楽しそうに睨みつける。

「びくびく……」

ノゾミ君は怯えている。

「びくびく……」

アヤ君はそれをじーっと眺め……

「びくびく……」

やがて言った。

「ごちそうさま」

「いや何もしてないだろう！？」

「ん、なんか、可愛いからもういいやーと思って」

なんと！！　確かに怯える小動物的なインド君は可愛かったとは思うが、それで全てオッケーとは……この娘、よもや天然の魔性の女の器を持つ者か！？　多分死ぬまで本人が自覚しない類の！

「それじゃ次はタケダの番だな。アヤ坊、何させるんだ？」

おお楽しそうな我が友よ。後でブットバス。

「それじゃね、インドちゃんから一言あるから聞きなさい！」

む？　ノゾミ君から？

「あの……」

「ほら、インドさん。ファイトです！　がんばるのです」

「うん……」

「ノゾミ君？」

なんだ、一体何を言ってくるのだ？

「……だ」

だ？」

「だい……」

だい？

だい……

ｄｉｅ！？（和訳すると“死”）

「俺に死ねと！？」

「うん」

そして迷わず頷くアヤ君！　やっぱこういうとこはカカ君そっくりだ！

「え、えと、そうじゃ、なくて」

そしてなぜか再びコンコンコンコンと小刻みに乾杯してくるノゾミ君！　いったい何がどうなって！？

「……ダメだな、こりゃ」

「いったいいつになったら言えるのかしら。“大好き”って」

「言えないならばそれはそれでインドさんが可愛らしいので良いのですが。ほら、なんだかキツツキのようです」

「ふと思ったけど、インドにキツツキっているのかしら」

「いるよ。アジアヒメキツツキとか」

「……なんでそんなこと知ってんのニッシー」

「西のことだから」

なにやら周囲が騒がしかったが、ひたすら乾杯し続けるノゾミ君に困惑していた俺には全く聞こえなかった。

とりあえず思う。

いい加減に飲まないと炭酸抜けるぞ、コーラ。まずいぞコラーって感じになるぞ。

……やっぱ俺にはボケのセンスないな。

## カカの天下５４１「音頭だってさ、がんばれタケダ」（後書き）

夏祭りのその後、みたいな感じなお話です。まぁタケダがアレなだけですが笑

明日は他メンバーの打ち上げです。あと姉と人形のその後を少々……

え？　祭り終わってすぐ書けばよかったんじゃないかって？

のんびり話を挟んだりしないと焦ってる感じがしてヤなのです（よくわからん

## カカの天下５４２「大勢で飲むときは瓶で」

よう、姉ことカツコだ。元気してっか？

ちょっと用事を済ました帰り道。ふと気づくと、いつの間にか桜のお嬢ちゃんが隣を歩いていました。

「ん、どしたの」

「いいんですか、あのお人形」

お、気になって見てたのかな。用事というのはそれ、夏祭りで暴走してくれた人形を父に預けてきたとこだったのだ。もちろん封印をお願いして。

「あのお人形、今じゃすっかり良い人になっちゃったんですよね」

「人じゃないけどね。まぁ幸運を呼び込む力があるよ。あれを連れてただけで……行った店は空いてるし、買おうとしたものはバーゲンセール、スーパー行けば特売の嵐だし」

「所帯じみてます」

「ほっとけ。で……あのままいけば大金が転がりこんで、理想の旦那さまも一瞬で見つかってただろうね」

「そ、そんな人形を封印してよかったんですか！？」

「いいんだよ、だって――」

「人形の力でも借りないと、あなたのような怪獣に旦那さまなんて見つかりませんよ！？」

「……いー度胸してんなー嬢ちゃん」

別に怒んないけどね。ええ、自覚はしてるし。でも怪獣て……もちっと言い方あるでしょうに――そこのバケモノとか思ったやつ表出ろ。もしかしたら何か上から降ってくるかもしれんよ？

「あのお人形、近くにあるだけでも周りの人に幸運をもたらすものだと思うのですが……」

「いいのいいの、あんなの無いほうが。いいことはありすぎないほうがいい。悪いことがあるからいいことの喜びを知って、もっとがんばることができるんだから」

嫌なことがあったり怒られたり、挫折したり。

それがないと人間は成長できない。そういう風にできている。

「まずいものを食べた後にうまいものを食べたらすごく美味しいのと同じ理屈ですね！」

「んー……うん、多分。ちなみにお嬢ちゃん的にはそれって例えばどんなの？」

「コーヒーのあとにチョコを食べると美味しいです！」

ふむふむ、桜の精はコーヒーが苦手、と。

「コーヒーチョコ食べてみる？」

たまたま持ってた。

「なんですかそれは！？　い、いただいてもいいですか！？」

「どぞ」

ぱくり。

「うまずいです！！」

「うまいのまずいの、どっち」

そんなやりとりをしつつ、辿りついたのはおなじみの居酒屋『病院』だ。思えばお嬢ちゃんと一緒になったのは運がよかったね。

「一緒にいこ」

「え、でもクララお酒飲めません！　お酒を飲むのは２００歳を超えてからと誰かが言ってました！」

……樹木年齢？

「そこまで待てん。ほれ入れ」

「あああ、クララは不良木ですー！！」

発育悪い木にしか聞こえんね。ともかく『病院』ののれんをくぐ

る。ちなみにこののれん、『体内行き』と書いてある。あまりくぐりたくないが、これがここのセンスだから仕方がない。

「やっほ！！　お待たせ」

「姉！　遅いぞ」

「あ、クララちゃんだー！　お姉が連れてきたの？」

そこには見慣れたメンバーが揃っていた。根暗な人形館の三人と、トメテン夫婦＋K、そして……

「あ、カツコさん！　あの後大変だったんですからね！！　どこ行ってたんですか！？」

あたしの相方になるはずだったサラさん。実はあれ以来会っていなかったりする。

「や、サラちゃんに幸福はまだ早いかと思って」

「何わけのわからないことを――」

「はいはいサラさん。その話はあとで。ほら姉、グラス。クララちゃんもはい、ジュース」

「あ、ありがとうです」

みなさん、もうおかわり――じゃなくて、もうおわかりでしょうか？

そうです、これは夏祭りの漫才大会の打ち上げなのです！！

「それじゃ、漫才大会だけじゃなく打ち上げにまで遅刻してきた姉を恨んで！」

『乾杯！！』

景気よくグラスが鳴り、各々のテーブルに散っていく。おお、なんか漫才チームそのままみたいなテーブル分け……かと思いきや。

トメ&サユカの席。

弟君にビールを注ぎながら幸せそうに頬を緩めるサユカちゃん……顔に『これやってると奥さんみたいで幸せ』って書いてある。トメも結構楽しそうだし。仲良いねぇ。

カカちゃん&サエっちの席。

「うう……サユカちゃんがかまってくれない」

「まま、飲んで飲んでー」

「注いでくれ！　涙の数だけ！」

なんだかんだ言いつつサエっちに注いでもらえて嬉しそうじゃんカカちゃん。それにしてもこの居酒屋は用意いいなぁ。こういうとこで瓶のコーラはいいよね。

キリヤン。

働いてる。

テンちゃん&サラちゃんの席。

「ああ……トメさんにサユカちゃん……私の大好物が二人も……混ざらないと……でも、でも、もうちょっとこの可愛い光景を見て堪能してから……」

「うんうん、あっちも微笑ましいがカカたちのノリもおもしれーぞ」

うちの弟と子供らの様子を酒の肴にしてすっかり傍観モードだね、この二人は。んー、混ざるならこっちかなぁ。

「クララどこいきましょうか」

「あ、そか。君いたね。じゃ一緒に飲むか！」

「はい！　酒もってこーい！」

「ダメっしょ。お、ノンアルコールカクテルあるじゃん。すいませーん、『桜』一つ！」

「共食いならぬ共飲みです！」

「おお、共に飲もう」

クララちゃんと改めてかんぱーい、なんてやってると、

「あ、そうだ！　姉、あんたが来る前に決まったことがあるんだけどさ」

「なんだい弟」

「漫才大会で見られなかった姉とサラさんの漫才を、今ここで見せてもらえないかなーって」

パチパチパチ！　と拍手するカカちゃんたちと周りの客。予め話がいっていたのか、相変わらずアットホームな店だなぁ。

「じゃ、やる？　サラちゃん」

「……はい。断りきれなかったので」

というわけで、店の真ん中あたりで二人で並ぶ。

えっと……

「サラさん一人で漫才やります」

「なんでやねん」

「なんでやねん（そういう話だったでしょ）」

「なんでやねん（聞いてないですよ）」

「なんでやねん（まぁいいや。やれ）」

「なんでやねん（カツコさんやってくださいよ）」

「なんでやねん（めんどくさい）」

「なんでやねん（そういうの得意でしょ）」

「なんでやねん（そのような事実は一切ございません）」

「なんでやねん（存在そのものがボケじゃないですか）」

「なんでやねん（いくらあたしでも怒るよ？）」

「なんでやねん（間違ったこと言ってませんよ私）」

「いいかげんにしなさい（いいかげんにやりなさい）」

「いいかげんにしなさい（そっちこそ）」

「どないやねん（ぶっちゃけどんなネタやるんだっけ？）」

「どないやねん（ぶっちゃけ酔って忘れました）」

「（あたしたちって）どないやねん」

あれ、クララちゃんが突っ込んできた。物理的に。けしてツッコミにきたわけではなく――

「なんでやねんです！！（意味わかってない）」

混ざりたかっただけのようです。

――少し離れたテーブルでは。

「ね、トメ兄。あれツッコまなくていいの？」

「これ以上『なんでやねん』を増やしてどうすんだ」

「それもそだね。ま、ウケてるからいっか」

うちの弟どもがこんなことを言っていたが……実際、このツッコミ合戦がそこそこウケてるから不思議だった。まぁ相手は酔っ払いだしね。

ともかく。

「いいからやれ！」

「そっちこそやれ！」

「やれ！」

「やれ！」

酒のせいかケンカごしのサラちゃんを相手にしながら、

「やれやれ……」

「トメ兄、それおもしろくない」

「や、そんなつもりは別に」

そんな弟妹と一緒に、騒がしく打ち上げを過ごしたのでした！

## カカの天下５４２「大勢で飲むときは瓶で」（後書き）

人形の処置は軽く書きましたが、あの人形。後々また出てくる予定です。なんであの部屋の押入れなんかに入っていたか……とかその辺を書こうかと。まー先だと思いますが＾＾；

ともかく打ち上げでした。みんなお疲れ様！
そしてお疲れ様、私！　乾杯――は今できないから仕事終わったら飲も笑

**カカの天下５４３「お盆の夜には色々……いらっしゃいます？」**

むにゃ……どうも、トメです……

挨拶したものの、僕は自分の部屋の愛しきベッドでそろそろ就寝するところだったりします。今日は墓参りに行って疲れたので、すでに布団に入ってうつらうつら……

あ、そろそろ睡魔に屈服します。

それではみなさま……

おやすみなさい……

それにしても最近この枕、チクッとするとこあるなぁ……むにゃ……

「アチョー」

……なんか聞こえた？

ま、いっか……ぐぅ……

「ホァター」

やっぱなんか聞こえる。

ゴン。

「アタッ」

どっかぶつけたか？　僕の部屋の向こう……廊下から聞こえる。

なんとなく想像はつくものの、僕は起き上がって電気をつけてドアを開いた。

するとそこには布団のお化けが。

「一緒に寝て」

やっぱりか……この妹、知っての通り幽霊の類がてんで苦手である。そのためご先祖の霊がたくさん帰って来るこのお盆、さらに墓参りした後は妙に怖がりになるのだ。

「墓参りなんて毎年してるだろ？　それで毎年何もないんだから、今年だって何もないさ」

「今年は違う。なんかいる」

「幽霊か」

「幽霊などこの世にいない！　いたら私はもう死んでいる！！」

「そ、そうか」

「でも何かいるの！　だから私は警戒しながら必死にここへ辿りついたの！」

警戒……ああ、さっきのアチョーとか言ってたやつか。言いなが

ら暗闇に向かってファイティングポーズでも取ってたんだろうな、きっと。

「何かってなんだよ。きっとネズミかなんかが屋根裏にでもいるんじゃないか？」

「でも……お盆だし」

「お盆だからゆうれ――」

「その名を口にするな！！」

「でも、お盆――」

「ボーン！！」

「……はい、もう何も言いません」

よくわからない迫力に押され、結局一緒に寝ることに。まぁこの歳になった妹と一緒に寝るなんて最近は年に数回しかない珍しい行事だし、たまにはよかろう。

「電気消すぞー」

カカは僕の隣で持参してきた枕にしがみついている。そして電気を消して寝転がると――今度は僕にしがみついてきた。人肌は温かくて寝心地はいいんだけど、こいつヘタに鍛えてるから握力めっちゃ強くて痛いんだよな……いつつ。

しかしそんな寝苦しさにもやがて慣れ、再び睡魔さんが登場して

ねんねんころすと歌ってくれたとき――あれ？　なんか不穏な歌じゃなかった？　まぁいいや――突然カカが叫んだ。

「ボーン！！」

その叫びと共に振り下ろされた拳は見事に僕のお腹へクリーンヒット。眠りかけていた意識は「あにすんだこらぁ」的な感情と共に目覚めた。

「な、なんだよカカ！」

「何かいる！　音がする！」

音？　あ、ほんとだ。上のほうからガサゴソと。

「く、くくく、くるならこい！」

電気はつけてないけど闇には目が慣れてる。上のほうに……なにかいるな。黒い細かいのが動いてる。

それに対してカカが構えているのは……僕の枕？　そんなもん振りかざして武器のつもりか。

「こ、この枕はね、伝説の枕なんだぞ！」

初耳だが。

「昨日これでゴキブリを潰した！」

「聞いてないぞそんな伝説！？」

「それだけじゃない！」

……聞こう

「先週、なんでか家に蛇が入ってきたから……追っ払うのにこれを噛ませた！　そしたら蛇の牙が刺さって抜けて、枕についちゃったのだ！　つまり……この枕は毒がある（かもしれない）牙を持っている！」

……ぇ、最近ちくちくするなーと思ったら、それ？

ど、毒ないよな？　ないよな！？

「さぁこい！」

「よしきた」

スパァン！！　と人の枕で暴挙を尽くしてくれた妹の頭を引っぱたく。

「なにするか！？」

「おまえこそ人の枕で何をしとるか。ええい、とにかく明かりをつけるぞ」

暗いのに目が慣れているところへの突然の光で目がくらむ。しかしすぐに慣れ、天井あたりを飛んでる黒いのの正体がはっきりした。

すばしっこいけど、こういうの捕まえるの得意なんだよね僕……

んっと。

「ぱしっとな」

「と、トメ兄、手で掴んだの!?」

「これコウモリだな。窓からでも入り込んだんだろう」

牙むき出しだな。噛まれないように気をつけてっと。

「もう大丈夫だぞカカ」

「寄るな!」

「助けてくれたお兄様にそれかい」

ほれほれーと近づけてやろうかとも思ったけど、それで大騒ぎされたらご近所迷惑になるからやめておいた。遅い時間だしね。

「……そのコウモリ、変身したりしない?」

「しないだろ」

「いきなり吸血鬼キリヤンになったり」

「なんであいつが……」

ふと想像してみる。ヤツが黒いマントをはためかせ、高らかに笑っている様を。

「似合うな」

「でしょ」

「サエちゃんも似合いそうだけど。可愛らしくて」

「サエちゃんになら心臓をかじられて脳みそ飲まれてもいいんだけど」

「エグいエグい」

冗談を交わしながら窓から逃がしてやる。これにて一件落着か。

「さて、問題は解決したわけだし部屋に戻」

「ここで寝る」

「……ま、いいけどね」

またボーンとか言い出さなければな。そう願いつつ一緒の布団で眠りについたのだが……

カタ。

「明かりをつけましょボンボンボーン！！」

「ぐほぁ！？　つ、つける、明かりつけるからその妙に威力のある拳を引っ込めろ！」

今度は本当にねずみでしたとさ。

甘えられるのも楽じゃない……

## カカの天下５４３「お盆の夜には色々……いらっしゃいます？」（後書き）

怖がりカカとそれに振り回されるトメ君。
なんだかんだで仲がいいです。また「トメ殺す」みたいな発言がきそうですが、これはこれで大変みたいですよ？　夜中にねずみ探しって……
でも、ま。
人肌恋しい人にとってはやっぱ羨ましいんですけどね笑

# カカの天下５４４「とある元気の充填方法」

「ただいまー」

買い物から帰ってきました、トメです。お盆なせいか、お昼どきのスーパーはスーパーすごかったです。くだらないこと言ってすいません。

「「おかえりー」」

あれ、なんか二人分の声が聞こえたような。

首を傾げながら居間へと入ると――

「ぱりぽりぱりぽり」

せんべい食べてる人がいた。

「ぱりぽりぽりぽり」

二人も。

「母さん、帰ってたのか」

「ぱりぽり。うん、さっきね」

「ぱりぱり」

母さんとカカはなぜか体育座りでテレビに視線を向けている。二

人でぴったりと寄り添って……仲の良いことで。少しはこっち向いてくれたっていいのに。

「そんな熱心に何を見てるんだ？」

「夏祭りのときのトメ君の漫才」

「ＤＶＤ版」

「いますぐ消せ！！」

「やだよん♪」

素早くリモコンを確保して意地悪げに言う母さん。しかし視線はテレビからそらさない……あーもー恥ずかしいな。小学生のときに書いた作文でも読まれてる気分だ。

「パパ君が撮っててくれたんだよね」

「あの野郎……」

「いいじゃないのトメ君。ママさんはお祭りに参加できなかったのだよ？　少しくらいそのときの気分を味あわせてくださいよ」

そう言われると頷くしかない。

「お母さん、仕事忙しかったんだ」

「うんうん、こっちも夏祭りだったの。でもそれはテレビ番組の内容でね、収録が大変でなかなか帰ってこれなかったんだよ」

「楽しかった？」

「お祭りといっても、あまり楽しくなかったかな」

「なんで？」

「カカ君が隣にいなかったから！」

「お母さん！」

「カカ君！」

ひしっ、と抱き合う二人。最近こんな光景どっかで見たな。

「私もね、夏祭りは楽しかったんだけど寂しかった」

「どうして？」

「お母さんと手を繋いでまわれなかったから」

「カカ君！」

「お母さん！」

ひしっ、と抱き合いながら手を握りあう二人。

「このせんべい、おいしい」

「ママも思った」

「お母さんと一緒に食べてるから！」
「カカ君と一緒に食べてるから！」
「お母さん！」
「カカ君！」
ぱりっ！　と見つめあいながら同時にせんべいをかじる二人。なんだこいつら。ＣＭか？
「トメ君もしたいの？」
「いい」
何をどうすりゃいいのかよくわからんし。
「それよりさ、母さん。秋から新しくドラマやるんじゃなかったっけ？」
「そうだよー」
「……休み、とれたのか？」
「とったの」
あっさりと言う我らが母親ユイナさん。
「とったって……大変だったろうに」

「そりゃあ大変だよ。やることは盛り沢山、一日休んだだけで地獄を見るのは間違いないね♪」

「地獄を見る予定のわりには明るく言うね」

ちっちっち、と余裕ありげに指をふる母さん。

「人間ね、そうなんでもかんでも詰め込めるようにできてないの。頑張ったら休む。そして休みの中で元気を充填して、また頑張る。そういう風にできてるの。これができないと元気がどんどんなくなって、結局何もできないし何も楽しめなくなっちゃうんだよ」

「へぇ……でも世の中には休んじゃうと堕落しちゃう人もいるみたいだけど」

ふと近所にいる、頑張ろうとしているけどダメダメな誰かのお母さんのことを思い浮かべてみる。

僕は事情を知ってから、ずっと心の隅で力になってあげたいと思っていた。あの人は姉の友人でもあり、僕の友人でもあるのだから。でも僕には何もしてあげられない。せいぜい愚痴を聞いてあげるくらいしかできないのだ。

「休みすぎて堕落する人かぁ。それはきっと、元気を使うきっかけを見つけられない人だね」

「……なにそれ」

「んー、これママさんの持論なんですけどね。人ってね、元気が出

たらすぐ頑張ったほうがいいんだよ。元気って賞味期限あるから、それが過ぎるとダメになっちゃうの。そしたら新しい元気がくるまで何もする気が起きなくなるの」

「む。じゃあ賞味期限が過ぎるまでに、頑張ることを何か見つけなきゃいけないってことか？」

それも結構難しいような……

「そうだよ。でも難しくなんかないよ」

僕の心を見透かしたように母さんが言う。

「だって頑張る内容はなんでもいいんだもの。今日は散歩して、綺麗な何かを見つけよう。今日は料理をしてみよう。今日は誰かに優しい言葉をかけてみよう。今日はお手伝いしてみよう――なんでもいいから思いついたことを頑張ればいいの」

なんでも、思いついたことを……？

「やるべきこととか、やったほうがいいことがあるなら、それを優先すべきかもしれないけど……そんな難しいことを考えてたら疲れちゃうものだよ。やりたいことをやってみるの。やってみようと思ったことをやってみるの。そうすれば元気は長持ちするし、日々が楽しくなるし、元気をもらえることも増えるはずだよ」

「やるべきことを置いても、やりたいことを？」

「心に余裕と元気があれば、少しくらい遅れたって大抵のことはなんとかなるものだよ。人って意外と強いんだよ？」

そう言って微笑む母さんは誰よりも強く見えた。そして恥ずかしながら……少し、その微笑に見惚れてしまった。

「……お母さん」

「なに？　カカ君」

「難しくてよくわかんない」

「ん、そうだねぇ。親の元気の元は、やっぱり愛する子供ってことかな♪」

「お母さん！」

「娘よ！」

飽きずになんかしてる二人は放っておいて。

母さんの言葉を聞いて、僕は自分の日々を振り返ってみた。

あなたはどうだろう？

元気をくれる誰かがいますか？

何かを頑張っていますか？

……あの人も。

周りからダメ人間扱いされてるあの人も、娘と触れ合ったりした

ら元気が出るんだろうか？　案外元気が出すぎて“思いついた小さなことから頑張る”なんて通り越していきなり本題を解決してしまったりして……それはないか、いくらなんでも。

「お母さん！」

「カカ君！」

まだやってるし。

「トメ君！」

「……え」

「トメ君！」

「僕も？　や、それはなんか恥ずかし――」

「こい♪」

「……はい」

赤面しながらも元気が出た。やっぱりこの人には敵わない。

さて、差し当たってはこの元気で美味しい夕食でも作りますかね！

## カカの天下５４４「とある元気の充填方法」（後書き）

最近、元気ない人が周り多いなぁーと思ってたらユイナさんがこんなことを仰いました。
ちょっとくらい遅れてもいいから一休み。心を元気にさせてから頑張ろう、と。
ちなみに私の元気の基は読者さんの感想です笑
もらってすぐ返信する余裕ないのが心苦しいのですが＾＾；

## カカの天下５４５「ワタシニホンゴワカリマセーン」

どうもー、暇してるカカです。

サエちゃんもサユカちゃんもおうちのお墓参りを手伝わされているみたいで遊べないそうです。こっちのお墓掃除もトメ兄と姉でやってしまうそうなので、私だけ暇なのです。別に墓掃除くらい手伝ってもいいのになぁ。暇なほうがよっぽど……

あれ、そういえばトメ兄がなんかやれって言ってたような。

「宿だ――」

聞かなかったことにしよう。

というわけで散歩なんかしてるんだけど、なんか無いかな……お、向こうから歩いてくるのは見知った二人！

「最近声すら聞いてないシュー君だ」

「あ、あはは……わかりやすい説明的な挨拶をありがとうカカちゃん」

「それにタマちゃん！　こんにちは」

「オゥ、カカー、コンニチーワ」

……？

「ゲンキデースカー？」

「シュー君、この子」

「はい」

「言語障害？」

「難しい言葉知ってますねカカちゃん。えっとね、なんだかタマ様、いま外人みたいなんですよ」

「……外人」

「ドゥシタノー？」

「日本語しか喋ってないよ？」

「えっと、タマ様的には英語みたいです。なんかさっき、通りすがりの外人とぶつかったら、外人がうつったとか言い出しまして……」

「あー、あるある」

「あるんですか！？」

「子供のころはあるんだよ」

知らないのか。私も昔はよくトメ兄相手に「アレ、カッテクダサーイ」とかやってたもんだ。そして「ダメ」と言われたら「ワタシ日本語ワカラナイネー」と返してごねるのだ。まー大抵の場合ダメなもんはダメだったけど。

「じゃあ……カカちゃんが僕にぶつかったら、僕がうつることも？」

「それはごめんなさい」

「謝られた！？」

「それはいくらなんでも恥ずかしいから」

「僕って……僕の扱いって……」

「まーまー、いつものことじゃん」

「それもそうですね」

意外とタフだよねこの人。

「さてと……ねね、タマちゃん。知ってる英語言ってみな」

「オバタリアーン」

沈黙。

「……シュー、これって英語なの？」

「わかりません。なんとなく英語くさい響きですが」

シュー君は大人のくせに英語もわかんないのか。ダメだなぁ。

「よし、タマちゃん！　私が英語を教えてあげよう」

「ワタシ、エイゴダーヨ」

「あんたが英語でどうすんの。えっとね、まず数字！　1が、ワン！　2が、ツー！　3がスリーでね、4が……んー……」

「うーと、えーと」

「あ、ごめんね。一気に言っても覚えられないだろうし、これくらいにしとこうか」

「カカちゃん。もしかして4の英語がわからな――」

「黙れ喋るな」

わかるよ！　ほんとはわかるんだからね！

4でしょ？

えっと……

ヒョーでしょ！　ヒョーだったよね、うん。ワン、ツー、スリー、ヒョー！！　なんとなく嫌な予感がするから口には出さないけどね。

「さぁタマちゃん！　いま習った英語を使って、あそこの店でどら焼きを注文するのだ！」

「ハイヨー！」

……これは英語？　うーん、わかんないからいいや。突進するよ

うに店へと入っていくタマちゃん。そしてそれを追う私たち。

「あの……この支払いは」

「シューだよ。ごちそうさま」

「なんとなくわかってました、はい」

こんな男は放っておいて、さぁ初めてのおつかいだよタマちゃん！

「スイマセーン」

「はい、いらっしゃいませー」

シューと二人でこっそり見守る。まずは一個かな。ワンだよ、ワン！

「クダサーイ！」

「いくつですか？」

「ワンコ！」

「ペットショップはあっちよ」

……あ、一個だからワン個か。

「ムムムー！　デワ、ツーコ！！」

「わたしがほしいの！？」

あなたのお名前ツウコさんですか!?

「スリーッツ!」

「スリッツ？　スリット？　ふふ、わたしの脚線美にみとれましたか？」

どら焼き屋の制服がそんなんでいいのか。

そんな疑問は置いといて。まったく言葉が通じないことに腹を立てたタマちゃんは……

すぐ近くのどら焼きを掴んでダッシュ、って万引き!?

「タマちゃん!」

「タマ様!」

外へ出て逃げ回るタマちゃんをなんとか捕まえる。なんだかんだとドタバタしてるうちに店員のツウコさんが外へ出てきた……これはまずい。万引きで通報されでもしたら!

「あの――」

「大丈夫です!　この人、こう見えても警官なので、罪はちゃんと償わせますから!」

万引きってどのくらいの刑になるんだろう。わかんないけど、これでタマちゃんを連れ帰って誤魔化せれば!　そう思ってたんだけ

ど……

「いいんです！　この子は……この子は、わんわんに餌をあげるために必死だったんです」

……いつからそんなストーリーになったん？

「わたしがやりました！」

な、に、を！？

「だから、だからその子は離してあげてください……」

「わかりました。あなたを逮捕します」

するの！？

「これでいいの、これで……わたしはあの子を守ったの」

なんか浸ってるし。

「ばいばい……その優しさを大切にね」

泣きそうな顔で手を振るツウコさん。そんな切ない場面で、タマちゃんは戦果のどら焼きをもしゃもしゃと頬張りながら言った。

「オバタリアーン！」

「やっぱりあいつがやりました！！」

もう何がなんだかわかりません。

結局万引きだのワンコだのの話はうやむやのまま私たちは逃げました。

いい暇つぶしにはなった。それにしても４ってなんだったっけなぁ。思い出せない。ヒョーじゃなくて……ピョー？

ワン、ツー、スリー、ピョー！！

何が飛ぶのん。

## カカの天下５４５「ワタシニホンゴワカリマセーン」（後書き）

てなわけでタマちゃん話でした。
エセ外国人っておもしろいですよねー。
子供がやるとワケワカリマセンが＾＾；

さて……お盆連休最終日！
飲食業が夏で最も忙しい日々が終わる！！　皆さんの感想を元気に代えていってきます！！
……返信は今日を乗り切ってからでご勘弁を＾＾；
ピョー！

## カカの天下５４６「おやすみキリヤン」

「……おい」

「……はい？」

「……誰だおまえは」

「……キリヤですけど」

「そ、そうか？　なんか４８時間逃げ回った末に吸血鬼に血を吸われた人みたいな顔してるぞ」

「……アハハ、ええもうなんか燃え尽きましたハイ」

ど、どうもトメです。今日は久々にキリヤとラーメンでも食べようと誘ってみたのですが、その、今のやりとりでわかるように「誰！？」てな感じの死にそうな顔をしてます。

「４８時間……ハハ、お盆の４８時間は普段の時間に換算するといったい何時間になるのでしょうか。時給はいかほどに？」

「何を言っとるのだおまえは」

いつもの余裕ある表情はどこに行った？

「いえですね、説明しますとですね……飲食業というものは、お盆がもっとも忙しい時期でして」

「あ、そなのか」

「ええ。お盆休みに里帰りする人も多いですし、お墓参りで親戚が揃うことも多く、単純に連休ということでお食事、宴会の機会が多いわけです。そんな中――いえそもそもこの八月、私はあの夏祭りの午後以外はずっと働いてまして……」

……あ、そういや漫才大会の打ち上げのときすら働いてたなコイツ。

「そうです。気づきました？　その５４２話では一言も喋ってませんよ私ゃ」

「お、おい。何を言ってる」

「ああすいません。つい口が滑りました。疲れてるんです」

「そ、そうですか。お疲れ様です」

「お盆最終日、そう日曜日ですよ。私ゃファミレス東治で働いた後に病院に行きましたよ。診察的な意味ではなく、もちろん居酒屋のほうへ働きに。そうしたら疲れ果てた人たちがダウンしてましたよ。むしろ本物の病院行けって感じでしたよ。そんなわけで……その日にシフトに入れる人が少なかったんですよ」

「は、はぁ」

「わかりやすく言いましょうか？　病院はですね、満席になると店員さんが８人いても忙しいんです」

「な、なるほど」

「お盆最終日、満席でした」

「て、店員さんは？」

「４人でした」

は……半分……！

「死ねますよ。店の中を全力疾走ですよ。後半からおかしな笑いがこみ上げてきますよ。でもノークレームでこなしましたよ」

「おぉ……さすがパーフェクト店員」

「もっと褒めてください」

「スペシャル店員！　バイトの天才！」

「もっと！」

「一人で二人分の働き！　つまりは一粒で二度おいしい！」

「もっともっと！」

「よくやった。ラーメン食え。奢りだ」

「最高のお言葉です！！」

ちょうどきたとんこつラーメンを怒涛のごとくすすりあげるキリ

ヤ。ちょっと泣いてる？　なんていうか……本当に疲れてるんだなこいつ。

「うう……うまい、うまいです……」

「お疲れ様だよ」

「ええ……そしてお盆最終日がやっと終わって、やっと休みだと深夜に騒いだ次の日の朝に電話かかってきて『やっぱ今日出てくれ』と言われた日にゃーあなた、その場で叫びますよ？　いえ叫びましたけど」

「言われたんだ……ちなみになんて叫んだんだ？」

「はい喜んで！！」

「喜ぶの！？」

「そうでも言わないとやってられないんですよ！！」

無理やり自分を奮い立たせて……うぅ、泣ける！

「ビール飲むか？　奢りだ」

「いただきます！！　最高です！！」

僕って友達想いだなぁ。いいや、ついでに僕も飲もうっと。

間もなくビールがやってくる。

「乾杯の前に一言！」

若干壊れ気味にキリヤが言う。

「私の好きな言葉は、『お勘定』です」

うわーお……

「もっと聞かせてくださいその言葉！　早く聞かせてくださいその言葉！！　要約すると金払ってとっとと帰れおまえら――」

「キリヤ、キリヤ落ち着け！」

「次に好きな言葉は『ラストオーダー』です！　早くやってこいその時間！　１２０分飲み放題とか飲んでるほうはいいだろうけどこっちは地獄なんです！！　ちったぁ注文自重してください！　せめて注文するならまとめてしろ！　いちいちいちいち呼ぶんじゃねぇ！　あと手元のグラスに酒があるのに追加注文するんじゃねぇ――」

「キリヤ！　キリヤ壊れてる！　キャラが壊れてる！！」

「お、おっと私としたことが……疲れのせいで思わず昔に戻ってしまいました」

昔どんなんだったんだろ……

「とにかく私はやりました！　やりきりましたよ！！」

「おう、お疲れ！！」

「ありがとう友よ！！　カンッパイ！！」

ラーメン屋で盛り上がりまくる僕ら二人。いいじゃないかいいじゃないか。頑張ったんだよこいつは。こんくらい、いいじゃないか。

「はぁ……おいしい」

「そりゃよかった」

「ええ……よくやった私、よくやった皆。なんだかんだでお客様の前では笑顔でしたよ。あと漫才大会のときはちゃんと一歩引きましたよ。頑張る余裕がありませんでしたから。でもＫＹでＧＪでしたよね？　トメテンファンの皆さん」

「誰に喋ってんだ？」

「空気を読む。いいことです。夫婦の邪魔しちゃいけません。グッジョブな私。サイコーです」

「おーい、もしもーし？　キリヤ君だいじょぶー？」

それからもキリヤは壊れ気味だったけど、最後は清々しい顔をして別れた。瞳に涙を溜めてお礼なんか言われてちょっと気恥ずかしかったが、心から『お疲れ様』と言いたい。

そして、お盆に忙しかった人の分まで。

休んだ僕らは、頑張らないとな！

## カカの天下５４６「おやすみキリヤン」（後書き）

キリヤ君のお疲れ様体験談でしたー！
え？　これが全部実話だって？
作者自身の話だって？
あっはっは、そんな馬鹿な。
そんな馬鹿な（泣

……思うままにわずか１０分で書き上げたのは内緒（笑

## カカの天下５４７「黒合戦」

「なんだ、普通に美味しいじゃん」

「そうよね、なんで流行ってないのかしらっ」

「んー……」

もぐもぐ……あ、いきなり食事中ですいません。

今日はサエちゃんとサユカン、おなじみの三人で海へと遠出してみました。私たちも小学五年生、海くらい自分たちだけで来れるのです。ごめんね仕事中のトメ兄。

そしてサエちゃんのシックな水着（もちろん黒）を堪能しつつ、サユカンの水中いじめ（それが愛）を堪能しつつ……遊びまくって時間が経つころにはお腹も空いて、近くに見つけた海の家に入ってみたのですが、ものの見事に流行ってませんでした。

「そういえばこういう海の家って、今じゃほとんど無くなってるってテレビで言ってたわっ」

「もったいないね。遊び疲れた後に食べる焼きそばほど美味しいものなんて、あんまり無いのに」

店内を見渡しても別に変なところはない。少しボロいのは雰囲気が出てていいと思うし、メニューも普通だし……何かが足りないような気もするけど。

「はい、お水のおかわりですよ」

コップにお水を注いでくれるのはこの海の家の店主っぽいおじさん。私は思い切って聞いてみた。

「ね、おじさん。このお店ってなんでこんなにスカスカなの？」

「ははは、直球なお嬢ちゃんだね。でもその通りだから反論しようがないねぇ……今の不況の世の中じゃ、こういう割高なくせに大して美味しくないお店は受け入れられないんだよ」

「……他に原因もあるけどねー」

サエちゃん何か言った？　小さくてよく聞こえなかった……まぁいいや。

「おじさん、私たちがこのお店をお手伝いするよ！」

「ええっ！？　カカすけ、何言ってるのよっ」

「午前中は海でたっぷり遊んだし、どうせ予定もなかったでしょ？午後からはこのお店を宣伝してまわるの！」

「お、おお……そいつぁ本当かいお嬢ちゃん！　ありがてぇ！！」

と、いうわけで。海の家にお客さんを呼び込むために浜辺へ出てきたわけだけど。

「まったくもう、勝手なんだからっ！」

「いいじゃんいいじゃん、こういうのも楽しそうでしょ」

「そうだけど……なにカカすけ。夏祭りのときで人助けにでも目覚めたの？」

んー、実はそうかも？　でもそんなことより気になることが。

「えっと……サエちゃん？　さっきから黙ってるけど、もしかして怒ってる？」

おそるおそる顔を覗き込んでみると……あら、いつもの可愛すぎる笑顔が。

「んーん、カカちゃんのそういうところは立派だと思うし、手伝うよー」

「そ、そう？　よかった」

「まーあんな店を流行らせたところで意味ないとは思うけどー」

「あんな店って……普通のお店じゃん。焼きそばも普通に美味しかったし」

「そりゃそうだよー」

サエちゃんは何を言いたいんだろう？　詳しく聞こうとしても「なんでもないよー」とか言ってはぐらかされるし……手伝ってくれるみたいだから、気にしないでおこうか。

私たちは早速手分けして宣伝してみることにした。とは言うもののやり方なんてよくわかんないから、適当に声を張り上げてみるしかない。

「あそこの海の家、５００円でいかがですかー！！」

「海の家が売ってるの！？」「５００円で！？」

「あ、違った。海の家の焼きそば、５００円でいかがですかー！！おじさんが作ってるよー！　普通に美味しいよー！！」

そんな感じで叫び続けてみるものの……反応してくれる人は少ない。唯一、一組のカップルが「あ。あの子、夏祭りの」「ほんとだ！　せっかくだし、行ってみる？」とお店に向かってくれたくらいだ。呼び込みって難しいなぁ。

「はぁ……はぁ……海の家で焼いたおじさん、５００円でいかがですかー！！　ってあれ、なんか言いまくってるうちに変に混ざって……疲れたみたいだな私」

少し時間も経ったので、私は諦めて海の家に戻ってみることにした。

まったく戦果が上がらなくて肩を落としながら、浜をとぼとぼ歩く。

やっぱ、私流になんかやんなきゃ無理かなぁ。

そんなことを考えているうちに、やがて海の家が見えた。

そう、繁盛しまくっている海の家が。

「……え、なんで？」

「カカすけっ！　どういうことよこれ！」

そこには私と同じく戻ってきたサユカンがいた。しかし聞かれてもわかるはずがない。

「私もサユカンも知らない、ということは……」

サユカンと二人で走る。

そしてやがて見えた。我らが友人、サエちゃんが。

なんかキョロキョロしてる。

あ、何か見つけたみたいだ。視線の先には……家族？

サエちゃんはたったったーと軽快に走りながらその家族に突っ込んでいって……

なんと、お父さんっぽい人に飛びついた。

「パパー」

「「「なっ！？」」」

家族一同騒然。私たちも騒然。慌ててそっちに駆けつける。

そのかいあってか、すごく近くまで辿りついたとき。

ちょうど私たちから見て正面を向いていたサエちゃんが、そのお父さんの耳元にこんなことを囁いたのが聞こえた。

「弁解してほしかったら、あっちの海の家でお食事してってー」

私とサユカンは足を止めて絶句した。真正面にいたからこそ私たちには聞こえたけど、あれなら周りの人には聞こえていない。なのでいまだにお父さんのご家族、特に奥さんはとてつもない形相で夫を見ている。

「あ、悪徳勧誘か！？」

お父さんも小声で対応。

「そーだよー。でもいいじゃないのー食事くらい。どうせ二千円も使わないでしょー？」

「し、しかし」

「コホン……パパー！！　今夜はお医者さんごっこ――」

「行きます！　お腹空いちゃったしな！　焼きそば三杯くらい食べちゃおっかな！！」

「――なんちゃってー。おじさんったら慌てちゃってー」

「い、いやぁ、そんなキツイ冗談言われたら誰でも慌てるって！」

「ごめんねー、いつも奥さんのノロケ話ばかり聞いてたらちょっと嫉妬しちゃってー」

おじさんの演技は白々しいけどサエちゃんの演技はあくまで自然だ。その“実は知り合いな近所の子供だった”的な言葉とさりげないフォローに、厳しい視線を送っていた奥さんも「まぁ、子供のやることとか」って納得したみたいだし……なんて見事な手際だろう。

バイバーイ、と気さくに手を振ってわかれたサエちゃんは何食わぬ顔でこちらに歩いてきた。

「サエちゃん……すごいね」

惚れた。私にもやってほしい、特に最初に抱きつくとこ。

「すごいけど、大丈夫なのっ!?　あんなことして……あれじゃまるで――」

「大丈夫だよー、何もかも」

サユカンの心配をあっさり一蹴して、サエちゃんはニコニコっと笑った。

……何もかも、ってどゆこと？

――そのころ。海の家では。

「焼きそば6つください！！」

「こっちは3つ！」

「はーい！！」

注文を受け、裏へと引っ込みながらも店主はずっと笑っていた。

「ひひひ……カップ焼きそばを皿にうつして売ればボロ儲けだと思って始めたこの商売……諦めかけてたが、これならイケる！　そうだよな、気づかなかった。ガキなら金はかからねぇんだ。これからも適当に泣き落としで子供を味方につけて働かせていけば……う、うへへ」

店主が倉庫にある大量のカップ焼きそばを無造作にひっつかみ、調理場――ただお湯を入れるだけの場所だが――へと戻ろうとしたとき。

「ちょっと、そこの君」

慌てて後ろにカップめんを隠して振り返ると、そこには――

「け、警官……！？」

「君。ちょっと聞きたいのですが」

「は、はい」

「先ほど外で、この店を宣伝している子供たちがいたのですが……あの子たちを働かせているのですか？」

「え、いえ、手伝ってもらっているだけで」

「……親戚とか？」

「い、いえ、全く無関係の子たちです」

「署に来てもらおうか」

「ええ！？　お、俺は何もしてませんよ！？」

「全く無関係の子供たちを働かせているだけで充分、罪だ。それに脅迫まがいの勧誘をさせているとの情報もある。こちらのほうが問題だが」

「そ、そんな！！　俺は何も知らな――」

「知らないことが罪なこともあるのだ。さぁ！！」

こうして、この“何を焼く音もしない海の家”は潰れてしまうのだった。

カカです。海の家が繁盛してると聞き、もっと頑張らねばと呼び込みを続けていたのですが……

「おじさんが焼いた海の家、５００円でどうですかー！！　ってあれ、なんだろ」

なんだか海の家のほうが騒がしい。

行ってみると、そこにはまたもやサユカンが。タイミングいいな、私らって。

「カカすけ、聞いてっ！　あの店の人、なんか犯罪者だったみたいっ」

「ええ!?」

「警察に捕まってたわよっ」

そんな……じゃあ私たちのしたことは、いったい……

「それでね、カカすけ。サエすけから伝言。今度から誰かを手伝ったりするときは、事前に誰かに相談してね、だってっ！」

サエちゃんにはわかってたのかな、こうなるって……って、あれ?

「サエちゃんは?」

「なんか、やることがあるって」

こんにちは、サエです。

「通報ご苦労様、クララちゃん」

「それくらいお安い御用です！」

「でもてっきりシューさんがくるのかとー」

「怖いから別の人に任せる、だそうです！」

「あのヘタレー」

ともかく私の作戦の要を果たしてくれたクララちゃんにお礼を言います。今回の海水浴は一緒に来てなかったのですが、急遽呼びつけてしまいました。この子には距離とかあまり関係ありませんしね。

「でも今度はクララも海で一緒に遊びたいです」

「泳げるようになったらね。クララちゃんの身長で泳げないと、いろいろ危ないし」

「むう、クララ頑張ります！」

私の計画通り警察に捕まっていくおじさんを遠くから眺めます。

私には焼きそばを食べたとき、すぐにわかりました。あのカップ焼きそばだと。別に放っておいてもいいかと思いましたが、カカちゃんが首を突っ込んでしまったので制裁してしまいました。まー黒いことしてるほうが悪いんですし。まったく、黒いことはするもんじゃないですよねー。

君が言うか？　と思った人は表に出てねー。もしかしたら身体の一部分が黒くなるかもだよー。

「ところで、この風呂敷に包んだ大量のカップ焼きそばはどうする

のですか？」

「うちに置いといてー」

でもこのカップ焼きそば自体は好きなのでもらっておきます。なにせ一口でコレだとわかるくらい好きだからねー。あれだけあるなら２０個くらい減ってもバレないよねー。

「サエおねーちゃん、なんだかツヤツヤしてませんか？」

「わかるー？　いやー夏祭りのときに補充した元気をどこに使おうか迷ってたんだよねー、今日のはちょうどよかったかなー」

みなさん、黒いことはほどほどにねー。

君が言うなって思った人は以下略。

## カカの天下５４７「黒合戦」（後書き）

腹黒合戦はサエちゃんに軍配が上がりました！　ま、当然ですね笑
やってることはいいことなので腹黒じゃないんじゃ……そう思われる方もいるかもですが、それでも腹黒と呼ばれるのがサエちゃんクオリティ笑

## カカの天下５４８「例えるなら」

「――てな感じで遊んできたんだよ」

「へー」

「トメ兄、聞いてる？」

「聞いてる聞いてる」

やれやれ、行けなかった僕に遊び自慢して楽しいのかねこの子は。あ、どうもトメです。夕飯を食べ始めてから食べ終わり、まったりしてる今に至るまで延々と、カカから海に行った話を聞かされまくってます。

「――でね。どうトメ兄。羨ましい？」

「はいはいはいはい」

最初は楽しく聞いてたのですが、こんな風に言われるといい加減うざいです。

「そう邪険にしないでよ。ここからが本題なんだから」

「あーそう、ふーん」

「む」

僕の適当な返事にムカついたらしい。しかしこっちだって一緒に

行けなくてムカついているのだからおあいこだ。

子供のケンカ？

……言うな。

「こっから本当に本当に本題なんだからね！」

「はいはい、言ってみれば？」

「ずばり、みんなの水着の話！！」

……それ、本題？

「まずサユカン！」

「……はぁ」

何を言うつもりなのかねこの子は。水着なんてせいぜい色くらいしか話すことがないだろうに。

「サユカンの水着、例えるならそれは白桃」

……は？

「未成熟ながらも瑞々しいその肌、たわわな丸みは同性ですら憧れるだろう」

ちょ、ちょいとカカさん？

「食べればきっと甘酸っぱい……でもかなしいかな、それを食べることができる唯一の男性はすでに決まっている。羨ましいぞ、トメ兄！」

「僕なの！？」

「まーぶっちゃけ胸もちょっと出てきたしお尻の丸みはウハウハだったし白い水着がよく似合ってたんだよ」

「そ、そうですか……」

わかりやすい説明どうも……なんか微妙にオヤジくさいけど……

そっかー、サユカちゃんねぇ。あの歳にしてはそこそこ身長あるし、身体も成長してるんだなぁ……や、あれですよ？　娘の成長を見守る父親的な感慨に耽っているだけであって別に邪なことは思ってませんよ？

「次はサエちゃんの水着、それは例えるならチョコレイト」

また妙な薀蓄が始まった。

「レートじゃなくてレイトっていうところが重要」

ソウデスカ。ヨクワカランケド。

「白い肌に映える黒い布地、その向こうは甘いのか……それとも苦いのか」

なんかエロい。

「見ているだけでよだれが出る」

「きたねーよ！！」

「まーぶっちゃけ黒い布が少なくて肌が綺麗でドキドキしたんだよ」

またもやわかりやすくオヤジくさい発言どうも。

サエちゃん。ほっそいけど綺麗なんだよねあの子。長い黒髪と白い肌、さらに黒い水着となればそりゃ目を引くだろうな。しかし僕の周りって可愛い子多いな。主に子供だけど。

「それでどう思う、トメ兄」

「何が」

「サエちゃんの水着の向こうは甘いのか、苦いのか」

「……水着の向こうも黒いんじゃないのか？」

「黒い？」

「そうそう、本人の前じゃ言えないけど腹ぐ――」

「乳首が？」

「そうそう乳首が黒――じゃねぇべさ！？　そっだらこと思ってなかとよ！？」

思わずどっかの方言が出たやないか！？

「あはは、大丈夫だよ。サエちゃんの乳首は別に黒くないから。綺麗な――」

「報告せんでよろしい！」

まったくこの妹は……

「さ、いよいよ私の水着だよ！」

「自分のを言うのか」

「私の水着……例えるなら俺の女神」

「誰のだよ！？」

なーんか出てくる語彙が妙に難しくてカカっぽくないと思ったら……

「さっきからの説明、誰が言ってたんだ？」

「およ、わかった？　実は海でたまたま遭遇したらこんな風に褒められまくってさー」

「やっぱな。で、誰？」

「タケダ」

あいつキメェ。

「あ、でも正確には覚えてないから適当に私のアレンジも入ってるよ」

「よだれが出る、とかか？」

「さっすが。でもサエちゃんの水着見たらよだれ出るでしょ？」

出ねーよ、少なくとも僕は。

「それで、タケダと遊んだりしたのか？」

「や、帰るときに会ったからさ」

「帰るときって夕方だろ。あいつ何しに行ったんだよ」

「なんか……海に沈む夕暮れが見たいんだとか」

あいつ何歳だよ。

「それで、どうよトメ兄」

「なにが」

「私たちと海に行きたくなった？」

「……まぁな」

「じゃ、今度は一緒に行こうね」

「お、おお」

珍しい。ここまで自慢しといて普通に誘ってくるとは――

「そして私たちの水着をさっきみたいに漏れなく例えなさい」

前言撤回。

「これ夏休みの宿題ね」

「誰に提出すんだよ」

「もちろんテンカ先生」

「そんなもん提出して喜ぶか！！」

「いいじゃん、誕生日プレゼント代わりってことで」

……え？

誕生日？　まじで？

## カカの天下５４８「例えるなら」（後書き）

さて、どうでしょうか。
海に行ったのに水着の描写がないたぁどういう了見じゃわりゃあ！？　と思っていた読者の皆さんへとこのお話をお届けします。
各自、限られた情報の中で存分に妄想してほのぼのすること。
……ほのぼのは無理？
カカの描写が少ない？
それは知らん。

# カカの天下５４９「野菜生活」

「よーい、ドン！！」

だっしゅ、だっしゅ、だっしゅっしゅー！！

「――よし、一番！！」

「ふぅ、二番よっ」

「さーんーばーんー」

予想通りの順位だね。あ、こんにちは、カカです。今いつもの三人で競走してたところです。

「気持ちよかったー！　ありがとうねサユカン、畑使わせてもらって」

「わたしのお祖父ちゃんのだし、別にかまわないわよ。でもいきなり『畑貸して！』っていうから何をするかと思えば……」

「ふぅ……ふぅ……私、こういうの、苦手だよー」

「ごめんねサエちゃん。でも一度やってみたかったんだよ」

日光の下、緑の匂いが溢れる畑の中を全力疾走！　絶対気持ちいいと思ったらビンゴだった。ほら、なんか畑の均等に延びてる道ってレース場みたいじゃない？　それに気づいたらむしょーに三人で競争したくなったんだよ。

「はー、はー、まー、たまにはー、運動するのもー、いいけどー」

「そうそう、サエすけはこれくらいしないと、もやしっ子になっちゃうわよっ」

「もやしみたいにサエちゃんが畑でいっぱいとれるようになるのかぁ……」

「そして出荷されて皆に食べられるのねっ」

「いやぁー！！」

スーパーでサエちゃんが並んでれば買うけど！　なんか食べるとか言うとグロくて嫌だ！！

「そういえばさ、皆を野菜に例えると何になるんだろうね」

「……カカすけ、相変わらず発想が突飛ね」

「でもー、はー、おもしろいかもー、はー」

「サエちゃん大丈夫？　ちょっと木陰に座ろう」

背の高い農作物の影に三人並んで座る。土がお尻につくのも気にしない。でもこの植物は木になる、って木になったら大変だ。気になるだ。これはなんだろ、見たことあるような……とうもころしか！？

「ふー……落ち着いた」

「よかった。じゃあ本題にいこう。サユカンは野菜に例えるとなんだろう」

私とサエちゃんの視線が一点集中。サユカン今日はショートパンツだから白い太ももがかなり眩しい。

「「大根だね」」

「どこ見て言ったっ！？」

「サエちゃんはなんだろ」

「聞きなさいよっ」

「サユカンどう思う？」

「ほんと人の話を聞かないわね君らは……」

「人に話を聞いてるよー」

「いいけど……慣れたし……サエすけならコーヒー豆でいいんじゃないの？」

あれ……野菜なの？　豆だから野菜か。

「はいはい、黒いって言いたいんでしょー」

「甘いわねっ。わたしが思うに、サエすけの黒さは煮ても焼いても食えないほどのレベルじゃないのよ。まだ可愛らしさがあるってい

うか」

「つまりー？」

「コーヒー豆なら煮ても焼いても食えるわっ」

「うまいこと言ったつもりかー！！」

言いながらサユカンの太ももをこちょこちょーっとくすぐるサエちゃん。むぅ、乗り遅れた。

「ちょ、やめ、やめなっさいっ！」

「むー、腕を押さえられたら敵わないー」

腕力ないからねサエちゃん。

「さて、お次は私なわけですが」

「カカちゃんは簡単だよー」

「ほほう？　なによサエすけ」

「トマト」

「なぜに」

「上から読んでも下から読んでも一緒でしょー」

……あ。トマト。カカ。なるほど。しかも赤いしぴったりだ。

「じゃあトメさんはっ」

「トメ兄はゴボウ」

「その心はー？」

「よくちくわにつっこんであるじゃん」

「それだけなのっ！？」

こういうのは直感と思いつきが大事なんだよ。

「じゃーテンカ先生はなんだろー」

「かぼちゃ！」

「即答するわねカカすけ。理由は」

「天ぷらにすると美味しい」

「……わかるけどさ、それ君の好みでしょ」

かぼちゃ美味しいよ、甘いかぼちゃ。

「じゃー、あの通りすがりの人はー？」

「顔がたまねぎ！！」

「あの通りすがり二人目はー？」

「雑草」

「とるに足らない存在ってことだねー」

「や、名前も知らないって意味で言ったんだけど……そ、そこまで言わなくても」

「ちょっとっ！　わたしを置いていかないでよっ」

こういう競走となると私とサエちゃんがツートップ、サユカンが遅れぎみになるんだよねー。

それにしても野菜食べたくなった。かぼちゃの天ぷらとか……トメ兄にお願いしよっと。

その後、夕飯の買い物に行くトメ兄に。

「今日さ、食べたいものがあるの」

「へぇ、言ってみ」

「テンカ先生の天ぷらとトメ巻き、サユカンの煮物が食べたいな」

「……」

「あ、サユカンと私のサラダでもいいか」

「私のサラダてオイ」

「あとサエちゃん飲みたい」

「おまえいつから姉の仲間入りしたんだ?」

バケモノと言いたいらしい。

そういえばお姉って野菜だと何なんだろう。

んー……

すいかだね。

すいかは野菜なのか果物なのかわからない。

お姉は何が何だかわからない。

ぴったりだ。

## カカの天下５４９「野菜生活」（後書き）

カボチャの天ぷら、ゴボウのちくわ巻き、大根とトマトのサラダ。
食後はコーヒーにデザートはスイカ。
これにご飯と味噌汁つけてカカ天定食！！

へるしー。

**カカの天下５５０「第十八回、カカラジ！」**

「留殿様、大変でござる！！」

「どうしたのだ香加！！」

「トメトノって言いにくい」

「それだけかよ！？」

「い、いえ！　農民が攻めてきました！！」

「農民とは読者のことか！　い、いったいなぜ！？」

「心当たりはないのですか？」

「あれか。最近の小説がおもしろくないからか！？」

「や、多分私の水着の描写シーンがなかったからだよ」

「それじゃあ今すぐやろう。例えるなら細くしなやかな肢体のトマト――」

「今までの例えの中で一番美味しくなさそうじゃん！！」

「トマトをバカにするなよ、サラダの彩りには重要なんだぞ！」

「あ、それとも最近の更新時間がバラバラだからかも！」

「……いいじゃん別に」

「作者も生活あるしねぇ」

「結局何が原因なんだ？」

「あ、農民がきた！！」

『我々は要求する！！　カカの天下をもっと――』

さて、こんカカ！！　冒頭の小芝居で準備運動もしたことだし、第十八回、カカラジ始まります！！

「あ、あれ！？　続きはどうなったの！」

続きは読者の皆さんに任せます。この際カカ天に対する要望でも叫んじゃってください。おもしろかったら採用したり紹介するかもです。

「適当だなー……あ、改めまして留です」

「初めて先に言われた！　なんてショックを隠しつつ夏休みの三割くらいを夏祭りで使われちゃって遊びたりないよぅそりゃ海の家でバイトもするし畑を走り回ったりもするさまだまだ遊び足りないよーって感じの香加です！！」

はいはい、長くて悪ぅございましたね。そんなわけで作者です。この番組はネット小説『カカの天下』を盛り上げるため、ぶっちゃけトークや作者の本音を交えながらいろいろやるラジオ番組系のお話です。留とか香加とか作者とかがここで話す内容は本編自体と直

接関係ないのでお気をつけください。

「む、どんどん進むね。もっと遊びたいと言ってるのに！！」

「いっつも好き勝手に遊んでるからいいじゃん」

ささ、ＣＭにいきます。

『空読財閥。あらゆる分野に進出し、日本だけに限らず世界にまで展開している大企業集団です。それこそ図書館道具屋庭手入れ、さらには萌え業まで幅広くこなしています。ＫＹシステムを作ったのはまさか……という噂もありますが真偽のほどは定かではありません。こんなバケモノ企業に、あなたも参加してみませんか？　バケモノと言っても各地で目撃されている不審で声のでかい女性とは関係ありませんのであしからず――』

Ｃｍがあけて。

「それ長さね。センチメートル」

ＣＭでした。間違えちゃってセンチな気分。

「うるさいよ。それより……何、今の」

「何ってＣＭだろ」

「あんまりおもしろくないよ？」

私のダジャレが？

「それもだけど」

……センチだ。

「でもおもしろくないって言ったってＣＭだし」

「本物のＣＭじゃないんだから、おもしろくないと意味ないよ？」

「また身も蓋もないことを……笑いを取るのが目的じゃないんなら、何かの伏線だったりするんじゃないか？　なぁ作者」

さてさて、どうでしょうね。

「微妙な言い方するね。まぁそのうちわかるだろ」

「あ、そうだ。コーナー行く前にちょっといい？　冒頭のやつだけどさ」

「ん、さっきの小芝居か」

「うん。あれでも言ったけど……もうちょっと私の水着の話しない？」

「んー、香加のは読者さんの想像に任せるってことでいいんじゃないかな。強いて言うなら……鍛えてるから身体が無駄なく引き締まってる、胸はそんなにない、頭の中身以外は健康体……こんなとこ

か？」

「むー、サエちゃんとかサユカンの表現と全然違う！」

「タケダに言えよ。またキモい言いかたしてくれるんじゃないか？」

そうそう、『タケダきめぇ』というメッセージが結構あってあまりに可哀想に思ったので、そのときの様子をちらりと紹介したいと思います。

「そのとき？　ああ、香加――じゃなくてカカたちとタケダが海で会ったときのことか」

はい、ＶＴＲスタート。

『おお、カカ君たち！！　こんなところで会うとは奇遇だな！』

『タケダ君だー』

『えっと……あ、ニシカワ君の友達のタケダ』

『カカすけ……そこから辿らないと思い出せないの？』

『うぅ、いいのだ。俺はカカ君に覚えてもらえているだけで』

『それはそうとタケダ君』

『なんだサエ君』

『私たちを見てなんとも思わないのー？』

『ふむ……水着がよく似合っているな！』

『それだけー？』

『……なんだと』

『すぐに褒めたのはいいよー。でもその一言で済ますのかなー？』

『す、すごく似合っているぞ』

『もっと褒めてー』

『い、いやしかし』

『女をどれだけ褒められるかが男の甲斐性だよー。さぁー自分の持てる感性と語彙を全て使って褒めまくってー。できないと男じゃないよー。カカちゃんが好きになるなんて絶対ないよー』

『ぐっ……そこまで言われては引けんな！　聞くがいい、俺の全身全霊を込めた感想を！』

聞いた結果。

『気持ち悪くておもしろかったよー。これでカカちゃんが好きになるなんて絶対ないね』

『え……ちょ、サエ君！？』

『じゃーねー』

そんな感じでサエちゃんは楽しそうに、他二人は微妙な顔をしてタケダから離れていったそうです。

「ふむ、つまり脅されて仕方なくキモいことを言ったというわけだね、タケダは」

「でもそんな風に思ってたのは変わりないんだろ？　じゃあどっちにしろキモいんじゃないか」

「そだね」

救済企画、失敗。ごめんねタケダ、頑張って本編で汚名を挽回しろ。

「汚名は返上するもんだよ？」

挽回するさ、タケダなら。

「間違いないね。ささ、そんなのは放っておいて、おたよりコーナー行こうよ」

「よし、僕読むぞ。えーとカカラジネーム『甘党に悪い奴はいない。多分……』さんからいただきました」

「ぶっちゃけ本当にそうなら世界はもっと平和だけどね」

「誰よりも平和なおまえが言うな。えっと、『ルシカさんはカカ天の中で、誰が自分に一番似ていると思いますか？　もし、タケダ君だったら可哀相……』だって」

「あんなキモい発言するようなのと一緒だったら確かに可哀想だね」

「それでどうなんだ、作者。あとがき読む限り、お盆はキリヤと似たような生活だったっぽいけど」

まぁ、職種はキリヤと似たようなものです。飲食業……ファミレス東治じゃなく居酒屋病院の方ですが。ちなみに本当に病院という居酒屋で働いているわけではありません。

ついでにぶっちゃけますと、カカ天を更新するのはほとんどランチタイムと夜の部の間、中休みです。で、余裕がなくなると早番で夜の部が終わった後に更新したりするのです。最近更新時間のバラつきが多いのはそんな感じだからだったりします。

「……昨日、休みだったのに更新時間が遅かったのは？」

二週間ぶりの休みで疲れが溜まってたのか、気がついたら寝てたからです。

「をい」

まーまー、話がズレました。私が誰に似てるかですが……テンカ先生、かなぁ。

「うわ、人気投票一位の人を持ってきた！！」

「そこに反応するか我が妹よ。まだ根に持ってんのか」

いやいや、そういう意味ではなく。まず言葉使い、私は普段あんな感じです。接客したり目上の人に対してはちゃんと敬語使いますので、その辺はテンカ先生と違いますが……あと性格。おもしろけりゃ細かいことは気にしない的な感じが同じです。考えすぎない、マイペース、何かあっても「ま、いんじゃね？」「なんとかなるっしょ」と酒を飲んで乗り越える。

「最後のが重要だね」

……どうせ飲む人ですよーだ。大人は飲まなきゃやってられなくなるもんです。

「よくわかる」

さすが留。大人だ。

「それが楽しいお酒ならいいんだよ」

そうそう。それを明日の活力にするのが大人なんだよ。

「どうせお子様だからわかりませんよーだ。はい作者の身の上話はこの辺にして次いくよ。カカラジネーム『ぱんぷきんX』さんから！『もしかしてカカって地球で姉に並ぶ最強人物！？』ってあんなバケモノと一緒にすんなー！！」

おもしろい質問ですが甘いですね。カカなんてまだまだです。まず胸、雲泥の差です。色気についてはどっちもありませんが――

「なんの話をしとるか」

ああ、そういうことじゃなくて？

「夏祭りのお姉の暴れっぷり見たでしょ。あんな漫画か小説みたいなことできるわけないじゃん」

これ小説なんだけど。

「うっさい」

「しかし確かにあんなの見るとなぁ。登場当初は冗談っぽく言ってたのに、いまや本当にバケモノだよなあの人」

カツコのバケモノっぷりのルーツ――なぜカツコだけバケモノでトメとカカは普通なのか。この辺はいずれ過去編と題して書こうと思っています。

「さっさと書けばいいのに」

その前に書こうと思ってるイベントがありますのでね、何編になるかはご想像にお任せします。それはそうとカカが最強か？　という質問についてですが……

答えるなら“そうでもない”ですね。

人としての成長も歳相応、家柄も普通。変な部分はあるし運動神経は並以上だけど、そこまで飛びぬけた才能があるわけではありません。夏祭りのときの指揮っぷりは人形の『祝』の力の後押しもあってあそこまでいきました。

しかし、最強ではなくとも、強運と人を惹きつける魅力を持っていることは確かかと。後々、大勢の誰かにとっての最高の人物になる可能性はあるかもですね。

「要約すると、これ以上ファンタジー化はしないってことだね」

「香加、おまえわかりやすいな」

「でしょ」

……私の説明が無駄に長く思えるような発言禁止！！

「ふ、作者といえど私には敵わない。やっぱ私最強じゃん？」

もーいいよそれで。

「拗ねるな。次いくぞ――ってあれ、なんかいっぱいある」

夏祭りにもらったメッセージまとめたものです。で、まとめて答えます。

えー、改めまして。今回はこの好き勝手に書きまくったお祭りに参加していただきありがとうございました。登場した読者様はお疲れ様、しなかった人もなんか叫んでた人に混じってた、ってことで楽しんでいただけたなら幸いです。

「つまりは無茶やったことへの謝罪だね」

「今日の香加はわかりやすい」

そして私の面目がない。次！！

「はいよっと。お、ここからは新コーナー、“今月の脅迫状”です！！　皆さんから送っていただいた脅迫状の中から一枚、紹介して、ツッコんだり従ったりしていこうと思います」

たくさんの脅迫状、ありがとうございました。

「脅迫状もらって喜ぶのも変な話だけどな。それじゃ早速いくぞ。えっと……『脅迫状ｔｏキリヤ』だと」

そいじゃ桐谷君登場。ほい。

「お呼びでしょうか？」

「よう桐谷。こんなの届いたんだけど」

「ふむふむ？　えーと『夕方までに東治食堂のメニューを全品アタッシュケースに入れて用意しろ。もしこの脅迫状を無視した場合、今日中に店の前で胃の中身を盛大にぶちまけるじょー』と。なんですかこれは」

「今日吐くじょー？」

「それ違……くない！　あってるじょー！」

数々の脅迫状を送ってくださった方々、すみませんだじょー。私、こういうくだらないダジャレ大好きなんですじょー。てへ。

「それで桐谷、どうするんだじょ？」

「いいですよ、用意しましょう」

「えー！　じょーって言ってくれないの！？」

「香加、そこはどうでもいいから」

「じょーん……」

しょぼーんの別バージョンのようです。

「えっと、やり直すぞ。桐谷、用意できるのか！？　だってもう夕方だぞ？　更新時間的な意味で」

本日は１８時にあたりに投稿しました、ハイ。

「できますよ、一瞬で。だって“メニュー”を“全品”入れればいいんでしょう？」

……あ。メニューにある料理を全て、とか書いてないからそうともとれる。メニュー自体を入れればいいんだ。

「トンチの勝利ですね。現代の一休さんと呼んでください。神社の息子ですし丁度いいでしょう」

「略してげんきゅう？」

「減給！！　なんて恐ろしい言葉を！！」

働いている人は絶対に聞きたくない言葉ですね……

「頭は丸めてないし神職っぽいこと何もしてないし、一休さんなら本当に減給されそうだけどな」

「しょせん私の設定なんぞ目立ってないからいいんです。では私はこれで」

ふむ。おつかれー。

しかし、新コーナーを始めてみたものの……正直あまり、ピン！とくる脅迫状がなかった感じだったりします。もっとおもしろいの募集！　あまりぶっ飛び過ぎてると読者さんにおもしろみが伝わらなかったりするので、適度に考えてみてくださいね。

「おもしろい脅迫状って難しいね……」

「だって脅迫状って元々そういうもんじゃないしな」

あと、夏祭りに出さないと泣くぞーみたいな脅迫状がいくつかありましたが、そんなこと言われてもあくまで抽選なんで……すいません、出られなかった人は泣いてください。

「鬼だ……」

「悪魔だ……」

「お姉だ……は言いすぎか。お姉なら謝らないだろうし」

まぁまぁ勘弁してください。メッセージも結構いただけるように

なり、全部対処できるほどの余裕はなくなってきているので……でもちゃんと全部読んでますよ！　正直、感想欄のように気軽に返信できないのが惜しいです。

あと、たまに『私の作品を読んでください』とか『アドバイスをください』とかメッセージをいただくこともありますが、私自身、他人に何か指導できるほどの力量があるとは思えませんし、何より自分自身のことで精一杯なので……いまだに読んだりできていなくて申し訳ありません。

今後、余裕ができればもしかしたらお邪魔するかもしれませんが、そのときはアドバイスなんて偉そうなことはせず、普通に感想を書こうと思います。ただ……しばらくは余裕ができなさそうなので、そこはご勘弁を。

「作者、話長い」

「香加、仕方ないんだよ。歳とるとこんなもんさ」

「留兄って作者の一個上だよね」

「……どうせ僕だってたまにじじくさいさ」

はい、なんか話断ち切られましたが……引き続き脅迫状、メッセージ等お待ちしております。紹介したり採用したりするかはわかりませんが、送ってくれると私が元気になります。そしてきっとカカ天の寿命も延びます。

「それだけ最終話が遠くなるってことか」

「ほんと、いつまで続くやら」

私の元気が続くまでですね。さて、長々と書いてしまいましたが、ＣＭへ！

『空読財閥。ご存知あらゆる分野に進出し、成功を収めているバケモノ企業であります。最近、数々の不正が暴かれていますが、これは末端の子会社による勝手な行為であり、当財閥は全く関与していないことをここに宣言します。そして引き続き、将来有望な社員となるべき皆様をお待ちしております』

笑う部分がないＣＭがあけて。

「だから、それじゃダメでしょ」

「いいんだって。意味があるんだって……多分」

「そうだね、変に細かい伏線とか好きだもんね作者」

今回のは細かくないからいいでしょ！　はいはい閉めますよ。留！

「あいよ。えーと、カカラジでは引き続きおたよりメッセージを募集しております。ふとした疑問なんかありましたら遠慮なくどうぞ。あと、脅迫状も待ってます。オリジナリティ溢れるものを期待します。それから……あ、冒頭の小芝居の続き、暇な人は考えてみてください。ついでにカカ天への要望とか叫んじゃってくださいね」

「今回のカカラジは特別なことがほとんどなかったねー」

たまには普通のラジオっぽいこともいーじゃない。なんとなく聞き流すーみたいなノリで。

「ぶっちゃけ作者、ちょっと疲れて休みたいだけだろ」

余計なことぶっちゃけた留にカカラジチョーップ！！

「ぐぎゃぶ！？」

私だって夏休みがほしいのだ。

「羨ましいでしょ、ふふ」

く、この小学生め……でも可愛いから憎めない……

「やっぱ私ってば最強じゃん。てわけでカカばい！」

この番組は、空読財閥の会長の提供でお送りしました。

## カカの天下５５０「第十八回、カカラジ！」（後書き）

そんなわけでラジオ終了です。なんだか私喋りすぎな気もしますが笑　なんかたまに私自身への質問きたりするからいっかなーと…　…ま、ラジオ話はいつも以上に自由なもんなので適当に流してください笑

夏祭りでぶっ飛んだので、その分カカラジでも一休み的な（一休さんとは読みません）感じでさらっといきましたが……物足りない、もっとカオスな感じがほしいという方は遠慮なく言ってください。次あたりにはカオスにできるくらいの元気があるでしょうしね笑

## カカの天下５５１「藪を突いて狸を出す」

よう、テンカだぜ。

今日はオレたちお馴染みの三人で集まる日だ。とは言っても今日は飲むわけじゃなく、喫茶店でお茶をするんだが……

「サカイさん、おせぇな」

「んだねーガツガツガツ」

「なかなか連絡取れなかったし、ようやく取れたかと思えば今日のこの時間しか空いてないたぁ……なにやってんのかね？」

「さぁねーガツガツガツ」

「姐さんは何も知らねぇのか」

「んーガツガツガツ」

聞いてるのかね、この人は。

「ごくん……よし」

「喋る気になったか？」

「おにーさん、パスタランチのDを追加！！」

やっと口を開いたかと思えばそれかい。しかもこれでA～Dまで

のパスタセットを全部制覇だ。

「なんでそんなに腹減ってんだよ」

「ちょっとエネルギー使うことがあってねー……お、サカイちゃんきた」

「おお、本当だ」

店に入ってきたサカイさんはすぐにオレたちを見つけて寄ってくる……あれ。

「ひさしぶりー二人とも」

「サカイさん、ちょっと痩せた？」

「あらそうー？　ふふ」

いや、痩せたというよりやつれた？

「なぁ、姐さん」

「いただきます」

「久々に会った友人を前に開口一番がそれかい！！」

くっそー絶妙なタイミングでパスタランチを持ってきやがって…

…空気読めよ店員。

「Ｄセットー　Ｄセットー♪　あ、知ってる？　サラちゃんの胸って

Dカップなんだよガツガツガツ」

「んなこと関係ね――ねぇけど、でかっ!?」

着やせするタイプかあの人!!

「ね、びっくりだよねーガツガツ。あ、サカイちゃんチッス」

「ちっすー。ふふ、相変わらずだねー」

姐さんのマイペースっぷりにも全く動じず、店員にコーヒーを注文してオレの隣にゆったり腰を下ろすサカイさん。

「しかしほんと久しぶりだよな。飲みじゃないのが残念でならねぇんだけど」

「そうだねー、飲みたいねー、でももうちょっと待ってね。今は私、サエと一緒になるために大忙しだからー」

……なにぃ?

「一緒になるって、できるのか!?」

「んー、邪魔するクソジジィに許しさえもらえればねー」

「もらえそうなのか?」

愚問だ。簡単にもらえるなら今みたいに離れ離れな関係にはなっていないだろう。

しかしサカイさんは笑った。

許しがもらえそうだからじゃない。もらえないと認めつつも笑ったのだ。

「それがね、会ってすらもらえないのよー。なにせ大きな財閥の会長さんだからねー。忙しいから、の一言で追い払われちゃうの」

そう言って、サカイさんはゆっくりとコーヒーを口にする。

表情は穏やかな笑顔。前のような弱々しい笑みじゃない。どこか強い意思が滲みでているような……何かあったのか。この人を強くさせる、何かが。

「ガツガツ……で、そんな会長さんにサカイちゃんはどうしたんだっけ？」

「うお、姐さん。ちゃんと話聞いてたのか」

「口は食べるのに忙しいけど耳はあいてるからね。すいませーん、とんかつ定食追加」

この人……店の定食全部食べる気じゃ……

「ふふ、それでねー。私は頑張って抗議中なのですよー。サエに会う許可をよこせー、そもそも話に応じろーってね。抗議文送ったりいろいろやったりー」

……すげぇ。あの無気力だったサカイさんがそこまでやるとは！

「それでも仕事が忙しいって取り合ってくれないのー」

「そうか……財閥の会長だっけ？　そんな偉い人だったら本当に忙しいんだろうな。ちなみになんて財閥なんだ？」

――と。

後ろから『財閥』という言葉が聞こえて振り返る。

そこには一台のテレビ。この喫茶店に置いてあるものだ。ちょうどニュースをやっていた。

『空読財閥――』

「はは、まさかな。忙しいって言ったって、そこまで有名な財閥が出てくるわけないよな」

「あははー」

「日本でも有数のバケモノ企業団体だぜ？　企業の範囲が広すぎて把握できてるんだか怪しいくらいなのに、そこの会長なんて――」

「ねー。せっかく仕事を減らしてあげてるんだから、さっさと応じればいいのにー」

ぴたり、と脳が一旦停止。

そして身体は再び振り向く。

そのニュースを見る。

『空読財閥――またもや末端の会社にて不正発覚か』

こんな記事、最近多い、よな？　末端のこと故に致命的にあらず、しかしニュースにはなる程度の不祥事が続いて明かされて……

「忙しい忙しいって言うから望みどおりに減らしてあげてるのにねー」

さっきこの人なんて言った。

抗議文を送ったり、“いろいろ”やったり――

……なんか怖くて、サカイさんの方、振り向けないんスけど。

「あ、でも不祥事が続いたほうが忙しいのかー。あはは、だったらこれ以上忙しくしてほしくなかったら早く私の要求に応じればいいのにねー」

頷けない……怖くて頷けないっス！！

「あ、もうこんな時間だー。ごめんね二人とも、私ちょっと用事あるからー……二人はゆっくりしてって。今度また三人でゆっくり飲もうねー」

そう言って、多すぎるコーヒー代を置いてサカイさんは店を出ていった。

取り残されるオレと暴食姐さん。

「ぷはー！　美味しかった。やっぱシメはとんかつ定食だよね」

シメなんだかメシなんだか……いや、そんなことは置いといて。

「なぁ姐さん。サカイさんさ、なんであんな全開なの」

「あ、サカイちゃん？　うん、こないだサエちゃんと会ったらしいよ。そしたら燃え上がっちゃってさ」

「あのよ……空読財閥とサカイさんって」

「お察しの通りだよ。今朝あたしもちょこっと手伝ったのよ」

「ああ、それでそんなに疲れてエネルギー補給してんのか」

話の内容が興味なさげだったのは、すでに知ってたからか。

「そゆこと。でもあたしがしたのはそれだけ。ほとんどあの人が一人で財閥の不祥事を暴いてってるよ。聞くところによると“きちんと狙うべきところに脅迫状や暴露状でも送れば、それが事実だろうが虚言だろうが何かしらの埃が出る”だそうな。すごいよね、匿名でしか情報操作してないのにしっかりマスコミに暴かせてんだから」

「……黒い黒いとは思ってたが、ナニモンだあの人」

「母は強し、ってことでしょ」

姐さんの言葉が胸に突き刺さる。ああ……そういえばうちの母親も、あんな気弱なくせして一人でオレを育て上げてくれたんだっけ。

母親……か。なったことはねぇから、わからねぇが。

そんなに頑張れるもんなのかね。だったら……

「あれ、何してんのテンちゃん」

「サエにメール」

「なんて？」

「んっとな、『番号変えました、試しにかけてみてくれ』ってな」

すぐに意図を悟ったのか、姐さんが楽しそうに笑う。

「なにそれ、嫌がらせ？」

「まさか」

さっきまでそこにいた人の番号をメールにのせて、

「応援さ」

送信した。

頑張ってる友人にオレができるのはこんくらいだ。あとは自分で頑張れよ、母親さん。

## カカの天下５５１「藪を突いて狸を出す」（後書き）

カカラジの意味不明だったＣＭがここに繋がります。
で、次は何編か……もうおわかりでしょう。

サカイ親子編、多分そんなに長くならない……はず。

# カカの天下５５２「言葉の使い方には気をつけろ」

サユカです。

今日はお母さんに買い物を頼まれて、商店街へと歩いていたのですが……その道中で公園を横断したとき、変な光景を見つけてしまいました。

「ふむふむ、ラスカルさんは犬かきが得意なんですねー」

クララちゃんと、犬。

「総理大臣さんは猫かきですかー」

さらに猫、そして、豚!?　なんか、その、公園の隅っこでクラちゃんを中心にミニ動物ランドが広がってる……

「ブートンさんは？」

ブートン……ブー豚？　この上なく豚だわ。

「やっぱり豚かきですかー」

なんか豚肉専用の調理用具っぽいわね。

「クララも早く桜かきを覚えたいです！」

雪かきの親戚かしら？　溢れる桜の花びらを掃除するのかな。それはそれで不思議な世界観でいいかも……

「サユカですか？」

「おっとっ！？　あ、うん。こんにちはクララちゃんっ！」

なにげに二人だけで絡んだことってほとんど無いのよね、ちょっと緊張。

「あの……クララちゃん、もしかして動物と喋れるの！？」

「はい」

すごいっ！　さすがは桜の妖精さんねっ。メルヘン……

「じゃあじゃあっ、この猫はなんて言ってるの？」

「お尻がかゆいそうです」

「わたしのメルヘンを返せっ！！」

「尻かき……これも泳ぎの一種ですか！？」

そんな泳ぎは見たくない。

「そういえばクララちゃん泳げないんだったわねっ」

「はい、それで皆さんに泳ぎについて教えてもらっていたのですが」

「へー、例えばなんて言ってるの？」

「ここにいるラスカルさんが言うには、散歩中に飼い主の足が滑って蹴っ飛ばされて川に落とされてから泳げるようになったそうです」

か、可哀想……アニメのラスカルと違って飼い主に恵まれなかったのね。

「クララも落とされれば覚えますか？」

「うーん、覚えなきゃ死ぬ、となったら意地でも覚えそうだけど危険ね。やっぱり地道に習っていくしかないんじゃないかしら。サエすけに習ってるんでしょ」

「はい、おねーちゃん教えてくれます」

「どんな風に教えてくれるの？」

「足のつかないプールに放り込まれて、『限界になったら助けてあげるから頑張ってー』って」

「それさっきのラスカルと変わらないじゃないっ！！」

このまま任せておけないわ。今度はわたしも一緒にいこう。いや、わたしもほとんど泳げないんだけどね？　なんかわたしまで一緒にそのプールに放り込まれそうな気がしないでもないけどね？

「お、クララちゃん」

「あ、無敵おねーさん」

無敵？　振り返ってみるとそこにはカカすけのお姉さんが。ああ、

無敵……ね。

「こんなとこで何してんの二人とも」

「動物さんたちと喋ってました」

「お、そりゃすごい」

「無敵おねーさんは喋れないんですか？」

「や、大抵の動物は呼べば来るし、従ってくれるし、意思疎通はなんとなくできるけど……さすがに会話はできないね」

なんだこの人ら。

「そいじゃあたしは仕事あるからこれで」

「さよならです、無敵おねーさん」

「あ、さよならっ！」

慌てて言うと、お姉さんはニカッと笑ってわたしにも手を振ってくれた。相変わらず人好きする笑い方する人だわ。

「ねぇ、クララちゃん。人って動物と話せるのものなの？」

「根性あればいけるのではないでしょうか」

そ、そうなのか……よーしっ！

「にゃー♪」

試しに猫の総理大臣さんに話しかけてみた。

「キシャー！！」

「きゃぁぁっ！？」

な、なんか怒られちゃったわっ。

「ダメですよ、そんなことを言っては」

「な、なに？　わたしなんて言ったの？　なるべく優しく語りかけたつもりなんだけど」

「今のは猫語で『このメスブタめ』です」

猫語って難しいっ！！

「そんな言葉を優しく言ってどうするのですか。ブートンは雄ですし、メスブタなどここに一匹もいないのですよ。意味がわかりません。しっかりしてください」

「は、はい……ごめんなさい」

怒られてる……わたしが悪いのかはものすんごく疑問だけど怒られてる……

「じゃ、その……にゃーにゃにゃんにゃん、にゃー♪」

ちょっと長くしてみた。

「キシャー！！」

「きゃぁっ！？　こ、今度は何！？」

「今のは猫語で『日本経済など知ったことか』です。総理大臣に向かってなんてこと言うのですかっ！？」

「それこそ知ったことかって感じだわっ！！」

「ああ！？」

「今度はなによっ」

「今の最後の『わっ』って言葉、犬語で『おまえを殺す』です！」

「嘘っ！？　そんなのあるわけないわっ！」

「あああ！？」

「次は何！？」

「今の『わっ』って言葉を犬語にしてさっきのと繋げると、『おまえを殺す、五回』です！　大奮発です！　怖いです！」

「わたしは自分の口癖が怖くなったわっ」

「今の『わっ』は犬語で『そして私も殺される、八回』です！」

「一体全体、何の詩よっ！？」

はぁ……はぁ……わたしの日常会話って、犬にとってはずいぶんと危険だったのね。

「サユカ、動物語を習ってみますか？」

「なんか知らないほうが平和そうだからやめておくわ……気にはなるけど」

「日本語に混ざった動物語って多いですからね。例えば般若」

はんにゃ……？

「般若の『にゃ』は猫語で『さみしいから一人にしないで』です」

「可愛いわね般若っ！！」

そんな般若なら、一緒にいても……

いや、やっぱダメね。あの顔で『さみしいから一人にしないで』って言われてもホラーにしか思えないわ。やっぱり危険ね動物語。

## カカの天下５５２「言葉の使い方には気をつけろ」（後書き）

この言語はフィクションです。
勘違いして猫語を喋るような愉快な人が現れても本作者は一切の責任を負いません。

でも猫に『にゃー』とかいいながら話しかける人種の方は、普段どんなことを話しかけているのかぜひ教えてください。
ご心配なく、作品に使ったりはいたしません。
私が笑うだけです。

## カカの天下５５３「恐怖、それは素晴らしき原動力」

どうもこんにちは、トメです。

今日はお休み、カカももちろんお休みの日。となれば遊びにでもいこう――そう思いもしましたが。夏休みには遊び以外に大事なことがもう一つあるのです。

そう、宿題です。

というわけで。僕はカカの部屋で、こやつがちゃんと宿題をしているか見張っていたりします。

「うぅ……トメ兄、邪魔」

「いいだろ別に。ここで本読んでるだけなんだから」

見張りと言ってもじっと見てるのも疲れる。僕はただカカがサボらないかだけをチェックするために居るだけなのである。

「あとでちゃんとやるよぅ」

「あともなにも残り一週間しか夏休みないだろ。去年みたいに残したりしたら承知しないからな」

「うぅ、外は明るいのに……遊びたい」

「いいじゃん、サエちゃんとかも忙しいんだろ？」

「うん、なんか大事件だーとか言って取り合ってくれなかった」

「だったらちょうどいいだろ。そんなドリルくらいさっさと終わらせたまえ。わからない問題は教えてやるから」

うーうー唸りながらもしぶしぶ机に向かうカカ。それでいい。たとえ嫌々だろうと『提出物をきちんとやって出す』ってことだけは覚えさせておかないとな。そうすれば中学、高校と進んでも先生から白い目で見られることはないはずだ。

まぁ、変なことやって変な目で見られたりする分は知らんが。

「トメ兄、この問題やって」

「ん、どれ。わからない問題があったか？」

「この算数のドリルって問題」

「全部じゃん」

やる気ねーなこいつ。

「一生に一度のお願い」

「あのなぁ……」

「やってくれたら言うことなんでも聞く」

ほほう？

「絶対だな？」

「絶対。どんな命令でもオッケ」

「その命令は前払いでもいいか？」

「先に聞くってこと？　いいよ」

「よし、もう一度聞くが絶対だな」

「女に二言はないよ。なんでもするよ」

「よし、じゃあ明日にでもそのドリルを全部やってやろう」

やったー！！　と身体中を飛び跳ねさせて喜びを表現するカカ。

「じゃあ命令を言うぞ」

「さぁこい」

明日には僕がドリルをやってくれる。そう決まってカカはもはや有頂天、油断しまくっている。

だが甘い。

「今日中にドリルを全てやれ」

「この卑怯者め！」

何を言うか。きちんと色々確認しただろうが。それにカカは頷い

た。だからこれは卑怯なんかじゃないのである。

「いいからやれよ、約束だろ？」

「そんなの無し！　別の命令にしてよ」

「女に二言はないっつったろ」

「あれは正しくは男に二言はない、でしょ。私は女だもん」

「一生に一度のお願いまで使ってそれか」

「“あのお願いは”一生に一度だけだもん。他のお願いならまだまだするもん」

……そういう屁理屈には頭回るのな。

「勉強の虫になってはいけないんだよ？　はい殺虫剤」

「や、渡されても……」

どっから出した、このキンチョール。

とりあえず返す。

「あのなぁカカ。こういうのは自分の力でやらないと意味ないんだぞ？」

「……」

「おい」

「……」

「無視するなよ！」

「ムシにはこれ！」

「なぜそんなに殺虫剤を推す！？」

相変わらずワケのわからん妹だ。やれやれ、適当に世間話でもして気を休ませてからやらせるかな。

「あ、そういやさ。まったく関係ないけど……虫といえば僕、最近虫歯かもしれないんだよ」

「じゃー殺虫剤を口に」

「死ぬわ！」

「あはは、またまたー。えい」

プシュー。

……そこから先のことは思い出したくないから詳しく描写はしない。

ただ、簡単に言えば。殺虫剤という毒物を軽く見ていたカカがふ

ざけて僕の顔面にプシューして、僕はエライことになったのだ。どうエライことかっていうとあれだ、大の男が駄々をこねまくる子供のように痛みに暴れ狂ったくらいのことだ。

そして数十分後。

カカは必死に机に向かっていた。

「……目がひりひりする」

「はい！　すいません！！」

僕の様子があまりに凄まじかったのか、カカはものすごく恐縮していた。

「……頭が痛い」

「はい！　ほんとすいません！」

カカの額には『宿題の虫』と書かれた鉢巻。

そして隣に座る僕の手には、皆知ってる手軽な凶器、殺虫剤キンチョール。

「そこの虫、退治されたくなかったら頑張れ」

「はい！　喜んで！！」

ぶっちゃけ僕は怒っていた。さっきのは洒落にならなかったのである。その怒りは長年一緒にいるカカにも当然伝わり、加えて先ほ

どの凶器を目の前にしているので必死も必死、全力投球でドリルと戦っているのだ。

「すごい緊張感……これがほんとのキンチョール！！」

「いいからやれ」

「はい！！」

その日、カカは宿題のドリルを全て片付けた。

## カカの天下５５３「恐怖、それは素晴らしき原動力」（後書き）

人間、怯えてると驚異的な集中力を発揮したりしますよねぇ……怖い先生の前で授業とか。

それでも寝る人は寝ますが（私とか）カカは良い子なので素直に怯えて頑張りました。まー滅多に怒らないトメが怒ったのが大きいですけどね。

あと、なんとなく思い出したどうでもいいエピソードを一つ。

私は高校の授業中よく寝てましたが、こまめに起きてノートだけはきちんと取ってました。さらにテストで文句なしに満点近くとってたので怖い先生も私を起こせず……

「おまえ寝とる場合じゃないだろが！」と叩き起こされる人の隣で「起きてる意味ないじゃん」とばかりにグースカ寝てました。

いま思い出すと私も黒いっすね！

## カカの天下５５４「気になるあの子に猛烈アタック」

よう、テンカだぜ。

今日はまたもや時間がとれた三人でお茶会だ。先日のは姐さんは食ってるだけだわサカイさんはすぐ帰るわで慌しかったからな。今日こそはのんびりするぜ。

「ばくばくばくばく」

「……姐さん、今度は何食ってんだ」

「チョコパ」

チョコパフェな。

「またなんか仕事してきたのか？」

「んーん、ただ食べたいだけ。ばくばくばく」

この人の思考も大概自由だよな。さて、そろそろサカイさんが……

「ばくばく――あ、サカイちゃんだ」

「本当だ。目も向けずによくわかるな。おーいサカイさん、こっちこっち」

店内に入ってきたサカイさんはオレたちを見つけるとずんずん向かってきて――

「どうしよう！　詐欺だよ！！」

こんなことを叫んだ。なにいきなり。詐欺？　サカイさんが今やってることか？

「どしたのサカイちゃん。詐欺って？」

「なんかね、オレオレ詐欺みたいな」

「犯人はテンちゃんだ！！」

待てぃ。

「違うの、オレオレ詐欺みたいな……こう、娘娘詐欺なの！！」

あー……なんか読めたような気がする。

前のお茶会のとき、勝手ながらサエに送ったんだよな、サカイさんの番号。それでサエから電話かかってきて、パニックになってると。やれやれ……あとは自分で頑張れよーって思ってたんだがな。仕方ない。

「大丈夫だぜサカイさん、それは紛れもなくあんたの娘だ」

「そんなこと声を聞けば一発でわかるわよー！！」

……え、じゃ何が問題なんだ。

「サカイさん？　えっと、自分の娘からの電話なら別に問題ないん

じゃねぇのか」

「問題大有りだよー！！　あんな可愛い子から電話かかってきて冷静でいられるはずないでしょー！」

初恋の子から電話もらった小学生かアンタは。

「あのよ、サカイさん。それでその、詐欺はどっから出てきたんだ？」

「あの子も私も詐欺とか得意そうでしょー！！　だからー！！」

だからと言われても意味がさっぱりわかりません。

と、そのとき。

今まで黙っていた姐さんが口を開いた！

「サギという鳥がいます！！」

……

「……」

「……」

……

「なんか言えよ！！」

「え、だって言ってみただけだし。ばくばく」

この人ほんとわからんわ。

「とと、とにかくどうしよう！　動揺してすぐ切っちゃったけど、たまにかかってくるんだよー」

そりゃそうだろうに……これが日本有数の企業団体を相手に暗躍してる人の姿かね。

「出てやれよ、娘だろ？」

「だだ、だってだってー、あんな可愛い子とお話なんてできないよー！」

「あんたの娘はいつの間にアイドルと化したんだ。何度も言うけどよ、サエは単なるあんたの娘で、あんたはその母親だろうが」

「母親だろうと友達だろうと、あんな可愛い子の声を聞いたら鼻血でること間違いなしだよー」

親バカもここまでくればおもしれぇな。

「あぐあぐ……ごっそさん、っと。じゃさ、サカイちゃん。もしサエちゃんが電話サービスとかしようものなら、日本中で鼻血ブーが続出することになるんだね」

地獄絵図だ。

「間違いないよー！！　出血多量で死亡者続出だよー！！」

「もはやサエちゃんは社会問題だね」

「ううー、電話関係の仕事にだけは就かせないようにしないとー」

これを本気で言ってるからすげぇよな。

「はぁ、サカイさん。そろそろ落ち着けよ、初めて恋人できた小学生じゃあるまいし」

さっき思っても口にはしなかったことを言ってみる。

ちょっとキツイかなーと思ったが、

「相手は小学生だもん！　初めての恋人以上の存在だもん！！」

この人のパニックを微塵も揺らがすことはできなかった。どんだけ娘が好きなんだよ。

「わぁったよ、じゃあこうしよう。待ってろ」

ええと、サエのメールアドレス開いて……『こないだはわりぃな。教員としてサエの親御さんと接する機会があったついでに番号を送ってみたんだが、当の母親が恥ずかしがってるみたいでな。別におまえを嫌って電話に出ないわけじゃないから安心しろ、むしろ好きすぎて戸惑ってるみたいだからよ。だから……メールから始めてやれ』っと。

「うし、アドレス送っておいたぞ。これでメールでくるだろ」

「余計なことをー！！　ありがとー！！　このやろー！！」

感謝されてるのかどうかわかんねぇ……お？

「この音。早速メールきたみてぇじゃねぇか」

「う、うんー」

「どれどれ、なんてきたのさサカイちゃん」

三人で携帯を覗き込む。するとそこに恐る恐ると言った感じで『あの……おかあさん、ですか？』との文字が。

「可愛いじゃねぇか。返してやれよ、サカイさん」

「うんー……えっと、『それはどうかな？』と」

「なんでそうややこしいことするんだアンタは！？」

「だだ、だって恥ずかしいしー！」

「あっはっは！　おもしろいぞーもっとやれ」

「じゃ、じゃー……『好きです』って」

「告白してどうすんの！？」

そんなこんなでドタバタしつつ、なんとか二人のメールラインの確保に成功したのだった。あー疲れた。何が疲れたってツッコミ役が疲れた。やっぱこりゃトメの領分だな。

「そういやさ、テンちゃん。誕生日とかどうすんの？」

「あ、覚えてたか。別にいーよ、そういうのどうでもいいタチだし」

「その誕生日までには私もゴタゴタ終わらせたいですしー、何か集まってやりましょー！」

「いや、別にいいって。サカイさんは自分の娘だけ気にしてな」

「娘も友達も大事なんですよー」

友達……ね。歳の離れた人に改めてそう言われるのは気恥ずかしいが、悪くはない。

誕生日かぁ。別にどうでもいいんだけどなぁ、自分のは。

## カカの天下５５４「気になるあの子に猛烈アタック」（後書き）

最近涼しいですよねぇ……そのせいか変な時間に寝ちゃって更新がこのような中途半端な時間に笑

さて、そんなわけで夏とさして関係のない、けれど最近噂のサカイさん編の一旦をお送りしました。サブタイトルは昔こんなフレーズあったなーと思いついたものですが、いつどこで聞いたのか覚えてません。誰か元ネタ知ってますかね？

話がズレましたが……まぁいいや。サカイさんガンバ。これでよしと。

しかし夏休みもあと少し。もういくつか夏っぽい話をやりたいところですねぇ。皆さんも夏、満喫してくださいね！

私は最近、仕事仲間と花火なんかしました＾＾

あとは海に行ければなぁ……

## カカの天下５５５「遊んで泳いで赤面海」

こんにちは、トメです。

本日快晴、カカに日ごろからずっと「連れてけ連れてけ」と言われていたので有休をとり、海水浴と洒落こんでいます。メンバーは僕、カカ、サエちゃんにサユカちゃん。そしてなぜかついてきたキリヤ。

「あっはっは！　サユカちゃんとらえたり！」

バイト地獄から解放された直後とは別人のように清々しい顔を浮かべているキリヤ。すっかりいつもの調子で高らかに笑いながら――ボールを見事にサユカちゃんに命中させた。

「ううっ、ごめんなさいトメさんっ」

「いいよ、後は任せろ」

悔しそうな顔をして向こうの外野へとザブザブ移動するサユカちゃん。え、何をしているか？　今ね、ビーチボールを使ってドッジボールしてるんだよ。最近の海は便利なもので、水上に紐を浮かべて作った即席のコートがあったりするのだ。誰でも自由に使えるその紐コートは、所々で水中の重りに繋がっているのでほとんどブレない。水位が上下すると緩んだり使えなくなるみたいだけど、そんな細かいことは気にしないで適当に僕らは使っている。

チーム分けは、僕とサユカちゃんとサエちゃんチーム。そしてカカとキリヤチームだ。カカはもちろんだが、キリヤが予想以上に運

動神経がよく、すでにサエちゃんとサユカちゃんは当てられてしまった。ピンチだ。

「ふ、トメ兄。勝負あったね」

「それはどうかな？」

「強がり言っちゃって。いくら水の上でも私はそう簡単に当たらないし、このひょろい人だって結構すばしっこいよ？」

「あっはっは。カカちゃん、名前で読んでくれると嬉しいな！」

甘い甘い、すばしっこいなどという能力は全く関係ないのだ。

やれ、サエちゃん。

「カカちゃーん」

「ん、なにサエちゃん」

「チラ」

「ぶっ！！」

隙あり。

「ぐはっ」

芝居がかった口調であっさりボールにやられるカカ。おまえの弱点などお見通しなのだ。ちなみに何をチラ見せしたかはご想像にお

任せする。

「いや、いいもん見せてもらいました」

「さわやかな顔で言うな」

さて……残るはこいつなわけだが。

ボールはキリヤの手に渡っている。僕の後ろには外野に回ったカカがいる。ここをなんとか切り抜けないとアウトなわけだが……

「あ、カカちゃん！　線の上から出ちゃダメだからね！」

キリヤが僕の後ろにいるはずのカカに向かって注意する。僕はキリヤのボールに意識を集中しているからそっちは見ないけど……なんだカカのやつ、線から出ようとしたのか？　まったく卑怯な……おお！？

足が……誰かに捕まった！？

「油断しましたねトメ君！　ルールは“線から出てはいけない”ですよね？　そして線である紐は水上に浮かんでいる……つまり！　水中である限りは線の内側なのです！！」

出ましたお得意の屁理屈。確かにカカは潜りながら僕の足を押さえているので、身体の一部すら線からはみ出てはいない。だから反則ではないのだ。

ぶっちゃけ反則だろうけど。

「そのまま私の的になるがいいです！」

ボールを振りかぶるキリヤ。あいにくと僕の味方には、同じように水中を移動してキリヤの邪魔をできるほどの水泳能力を持った子はいない。絶対絶命か。

そう思えたが、しかし。

僕はこういう屁理屈には慣れている。どっかの誰かさんのおかげで。

放たれるボール。それを僕は潜ってかわす。そして――水中のカカと目があった。

海の中、しばし見詰め合う。

特に表情を浮かべることもなく。

いや……僕は笑顔を浮かべていた。

そして逆にカカは悔しそうな顔を――そう。たった今潜った僕と、さっきから潜っているカカとでは酸素の残存量に大きく差があるのだ。

限界を超えて逃げ出すカカ。しかしその足を掴む僕。

じたばた暴れるカカ。ダメ押しに足の裏をこちょこちょーっとくすぐってやる僕。

カカがごぼっと空気を吐いた。勝負あったな。

「っぷはぁぁぁぁ！！」

「っぷは。はい、線からはみ出たカカの反則。よって僕の勝ち」

不満そうに口を尖らせる二人。しかし文句は言えまい。卑怯なことをしたのはそちらが最初なのだから。

「や、でも最初に卑怯なことしたのはサエちゃんが――」

「サエちゃんが悪いとでも？」

「そんなことは世界がひっくり返ってもあるわけないね！」

カカにとってサエちゃんの全てが正義ということは周知の事実。僕の完全勝利というわけである。

さて、一区切りして海から上がるかー……っと？　重い身体を引きずりながら歩いていると、向こうから見覚えのあるでっかい人が。

「あ、ゆーただ！」

……出た、女の子に優しく男にはアイアンクローのユウタって人だ。前に祭りで警備員やってたけど……

「サエ様！　これはこれは。“偶然”ですな」

「監視してたのー？」

「なぜそれを――じゃなくて、その、ええ、海の監視員のバイトを

しているのですよ、わはは！」

「私の水着どうー？」

「とりあえず土下座させてください」

「くるしゅーない」

「ははー！！」

や、しかしあんなゴツイのが平伏すなんて……サエちゃんの未来が怖いわ。

「水着といえば……トメ兄？　テンカ先生のプレゼントは――」

「別のにする！！」

前にカカが提案してきた『皆の水着品評レポート』なんか絶対にやらないぞ僕は！　あんなの人としてダメだろう。つまりタケダは――や、言わないでおいてやろう。

「あ、あの、トメさんっ！」

「ん、なにサユカちゃん」

「あの……よろしければ、その……っ！」

「私の桃を噛んでください」

「なにおかしなこと言ってるのよカカすけ！　それに桃ってどこよ

！？」

見ない、紳士としてその桃はなるべく見ない。

「あの！　泳ぎを教えてくれませんかっ！！」

「ん？　ああ、いいよそれくらい」

「やったっ！！　ついに念願の……！」

なにやら大げさにガッツポーズをとるサユカちゃん。そんな喜ばれるほど泳ぎ教えるのうまくないと思うんだけどな、僕。

……ん、なんだカカ。耳を寄せろ？　どれ。

ふむ。

ふむふむ。

なるほど、そういう教え方かぁ。これと行ってプランも決まってなかったし、やってみよう。

というわけで、水上。

サユカちゃんの手を引きながら、軽く泳いでもらってるんだけど……

「ぶくぶくぶくぶく」

何やら顔を赤くしていて動きにいまいちキレがない。うーん、こ

れやってても意味なさそうだなぁ。じゃ、カカの言うとおりに……

手を離してみた。

捨てられた子犬のような顔をするサユカちゃん。

僕は言った。

「さようなら」

「ええ……っ！？　ぶくっ！」

沈みかけるサユカちゃん――しかし持ち直した！

「待って！　待ってぇトメさんっ！！」

僕に向かって腕を目一杯伸ばしながら、がむしゃらに手足を動かして追いかけてくるサユカちゃん。しかし僕は後ろに下がる。

「がぼっ、ま、待ってっ！　置いていかないでぇっ！！」

ぐさ、なにやら良心が痛んだ。

「行かないでっ、行かないでぇっ！　その先は死地よ、帰ってこれる保障はないのよっ」

……なんのドラマの話でしょうか？

「アバヨだなんて言わないでっ！！」

言ってないし。

「あれっ？」

何やら別世界に旅立っていたサユカちゃんは、いつの間にか足を止めていた僕にぶつかり、慌てて溺れて……足がつくことに気づいた。

「あ……ここ、浅瀬だわ」

「そうだね、そして泳げるようになっておめでとう、サユカちゃん」

そう、なんか変なこと言ってたけどサユカちゃんは結構泳いだ。ちゃんとセリフの合間に水に顔をつけてたし、息継ぎもしてた。間もなく普通に泳げるようになるだろう。

「と、トメさん……！」

感動したのか、潤んだ瞳で見つめてくるサユカちゃん。

そんな彼女に、僕はどうしても言いたいことがあった。

「サユカちゃん、よだれ」

久々にサユカちゃんの顔が爆発した。

「違うんですっ！　これは興奮したからとかじゃなくて、その、泳いだ直後だから……う、うわあああああんっ！！」

ズバババババババババッ！！　って泳ぐのはやっ！？　赤面し

たサユカちゃんは完璧なクロールで僕から逃げていった……

「悪いこと言ったかな」

「さすがトメ兄。最後の仕上げも完璧だね」

「うーん、喜んでいいのやら……」

そんなこんなで色々あったけど。

夏の定番、海を――僕らは今年もちゃんと満喫できたのだった。

## カカの天下５５５「遊んで泳いで赤面海」（後書き）

もいっかい海の話を書こーと思い、こんな感じになりました。また数話に渡って海スペシャルとかやりたかったんですけど、今回の夏は過ぎるのが早く……間に合わず、こんくらいに留めました。

まぁ来年があるさ！　それまで続いてれば、多分＾＾；

**カカの天下５５６「うえ」**

やぁ諸君、元気かね？

今日はちょっとした実験に付き合っていただこうかと思うのだが、よろしいか？　よろしいな。

それでは説明に入ろう。君達もよく知るあの子たちの前に『上』とだけ書かれた紙を置く。以上！！

なぜそんなことをするのか？　知りたければ最後まで付き合うがいい。さぁいくぞ！

サユカの場合。

自分の部屋からトイレへ移動するとき、ふと視界の片隅に映った紙。

『上』

とりあえず上を見た。

何もなくて首を傾げる。

普通だ。以上！

ニシカワの場合。

いつの間にか自分の部屋に現れたその紙。

『上』

「……む」

その紙の左側に『西』と書く彼。『北』と『上』は違うのだが、どうでもいいらしい。

よくわからん。以上！

アヤの場合。

夕食中にいつの間にかおかずと一緒に並んでいた紙。

『上』

それを見た彼女は、

「うえ！！」

とても綺麗な発音で読み上げた。

ご飯と一緒に食べるなよ？　以上！

キリヤの場合。

バイト先の控え室の掲示板に貼ってあったその紙。

『上』

キリヤはそれを剥がしてちょちょいと書きくわえ、料理長の背後にこっそり近づき、そのコック帽の後ろにそっと貼り付けた。

書いてある文字は『上へまいります』

それを読んだ誰もが天高く突き上げるコック帽を見上げたのは言うまでもない。

小学生みたいなことをするやつだ。以上！

カカの場合。

彼女が嫌々ながらも宿題を進めていると、ひらりと舞い落ちた紙。

『上』

と、読む間もなく払いのけて、床に落ちる紙。そのままスルー。

なんか悲しいので今度はわかりやすく、そっと机の横に置いてみる。

今度こそ『上』が目に入る。

カカはそれにちょちょいと書き加える。

『上様』

とても満足げに頷き、宿題に戻る。

この子もさっぱりわからん。続く。

カツコの場合。

『上』

紙を上に放り投げる。

それだけ。

何を思ってそうしたのか気になるが所詮はバケモノ、俺たちに理解はできんだろう。以上！

トメの場合。

『上』

「上ってなにが」

とりあえずツッコんだ。

そして上を見る。

「上ってなにが！？」

もう一回ツッコんだ。

意外とつまらん。以上！

テンカの場合。

紙を無視。

ことごとく無視。

寂しくて泣けてきた。以上！

サエの場合。

『上』

テーブルの上に置かれていたその紙。

彼女はそれを丁寧に折りたたむ。

そして封筒に入れる。

住所を書く。

ポストに入れた。続く。

インドこと、ノゾミの場合。

『上』

「……！」

なんとなく上に怯える。

目を瞑ってびくびくしたポーズで上に構える。

可愛い。以上！

デストロイヤー教頭の場合。

『上』

「ふむ、７０点！！」

字を採点する。

「我々が求めているのは８５点以上の文字だ！！」

そして破り捨てた。壊したとも言う。

しかし壊れているのは破った理由ではなかろうか。なんか疲れてるのかもしれない。頑張れ教頭。以上！

タケダの場合。

書くまでもない反応だったので省略。

シューの場合。

誰だっけ。

カカとサエの場合。

ポストを覗くと自分宛ての手紙を見つけ、差出人がサエとわかるとカカはうきうきしながら部屋に戻り、その封を開けた。

すると内容は、『上』の一文字だけ。

「……また？」

とりあえず再び『上様』と書きながら、サエに電話した。

「あ、もしもしサエちゃん？　なんか手紙きたけど、上ってどういう意味？」

『あ、それねー。それが届いたときに上を見ると、幽霊が――』

プツン、と切れる電話。

さぁ、と青ざめるカカ。

上を見るな上を見るな上を見るな――そう言い聞かせても恐怖は収まらず、ついに！！

「上様ぁぁぁ

「きっと面白かっただろうなー。あとでトメお兄さんに詳しく様子を聞こーっと」

わざと良いタイミングで電話を切ったりした小悪魔サエに、一瞬だけ可愛らしい角と尻尾が見えた気がする。

そういえば先日、サエはカカに対して『お化け関係ではあまりからかわないようにしよう』などと思っていたらしいが――どうやら『私がその弱点を直してあげよー、ついでに遊ぼ』と意向を変えたらしい。

心温まる友情だ。羨ましい。以上！

「……それで、なんでこんなレポートを書いたのかなパパ君は」

「いや、最近寂しくてな。仕事も暇になったし、童心に帰って夏休みの宿題っぽいものでもやってみようかと」

「自由研究だね。でも、なんで『上』なの？」

「なんとなくだ」

「やっぱりパパ君もカカ君たちと血が繋がってるんだね。変だよ♪」

「そんなに褒めるなよ」

そんな忍者のお茶目でしたとさ。付き合ってくれて感謝だ、皆の集！！

## カカの天下５５６「うえ」（後書き）

このレポートの目的。
それは読者に「なんだこれ」と苦笑してもらうことである。以上
！！！

## カカの天下５５７「激烈極まる闇の戦い」

カカでーす。

今日はトメ兄とスーパーへお買い物に来てます。夕飯その他を買うためです。

「カカ、今日は何が食べたい？」

「美味しいもの」

「……何が食べたくない？」

「美味しくないもの」

難しい顔をするトメ兄。

「はぁ、仕方ない。いつもみたいにやるか」

「ん」

最初からそうすればいいのだ。

通りかかったのはお魚コーナー。今日の主役でも決めるのかな。

「よし、カカ。カンパチとサンマ、どれがいい？」

カンパチとサンマ……

カンパチＶＳサンマ！

カンパチ＝なんとなく昔の人っぽい名前＝どっかの男＝あだ名はハチ。

サンマ＝さんまさん＝芸人さん＝おもろい＝無敵。

「サンマの勝ち」

「おっけ」

その後もいつもの通り、私の脳内決戦で買うものをどんどん決めていく。

「あ、油切れてたな。カカ、オリーブオイルとサラダ油、どっちがいい？」

オリーブオイルＶＳサラダ油！

オリーブオイル↓オリーブ。

『あぁ！　オリーブ！　オリーブ！！　会いたかったよ！』

なんとなくこんなの浮かんだけど誰だろう。まぁいいや、とにかく人の名前だ。

サラダ油↓サラダ。

『サラだ！！　私はサラだ！！』

知り合いだ。

「知り合いの勝ち。サラダ油」

「ん、安いほうがいいよな」

次はお菓子コーナーだ。

「おやつ買っていいぞ。一つだけな。スナックとチョコ、どっちがいい？」

スナックＶＳチョコ！

スナック……

『あらぁ、また来たの？　そんなに私が好きなのかしら？　しょうがないわねぇ……何飲むの？』

チョコ……

そういやサエちゃんの水着のイメージがたしかチョコ……

『あらー、また来たのー？　そんなに私の水着姿が好きなのー？　しょうがないなー……一緒にあそぼ？』

「問答無用でチョコ」

「いいけど、食べ過ぎるなよ。鼻血出るからな」

別の意味で出そうです。

「あと買うものは……あ、そうだ。今うちにある材料なら芋買えばカレーできるな。明日にでも作るか。芋……さつま芋の時期だよな。なぁカカ、さつま芋カレーか、それともじゃが芋で普通のカレーか。どっちがいい？」

さつま芋ＶＳじゃが芋！！

私の脳内で対峙する二人。

『くく……この殺魔芋と勝負するとはいい度胸だな、貴様。名を名乗るがいい』

『ふん、大層な名前ではないか。我は邪牙芋――闇に堕ちた我が牙をその身に受けるがいい』

注意。対峙してるのはあくまで芋です。

『大仰な芋だな。芋とは元より土の中に生きる者。つまりは芋である時点で私たちは共に闇に属しているとは思わないか？』

『それは至極尤もだ。だが我はあえて口にしよう』

『闇を超えし闇に堕ちたとでも言うつもりかね？　くく、単なる根暗とさして変わらなく聞こえるが』

『――上等だ、芋と根は切っても切れぬ関係故』

『いやまぁ切れば切れるがね、所詮は。まぁいい――受けて立とう、“邪なる牙”よ』

『“殺しの魔”よ、盟友にして天敵――商売敵たる貴殿に敬意を表し、我が牙の全力をお見せしよう』

しつこいようですが注意。こいつらは悪魔で芋です。微妙に誤字じゃない気がします。

『……一つ、聞くが』

『なんだ』

『貴様の牙とは、その所々に生えている芽のことか？　だとしたらあまりにも間抜けに思えるが』

『ふん、甘いな。世には――何物をも越えて硬き芽があると知るがいい！！』

『来るか、ならば私も応えよう。世には――闇の黒さえ埋め尽くす紫があると知れ！！』

激突する邪牙芋と殺魔芋。

邪たる闇の牙が、殺意を込めた魔の紫が交差して――

両方砕けた。芋だから。

「さつま芋食べたい」

「おっけー」

勝負が引きわけだったので気分で選ぶ。

あ、なんか色んなものを戦わせてたら思い出したことが一つ。

「ねーね、トメ兄」

「なんだ？」

「唐突に過去の間違いを思い出した」

「多すぎて困っただろう」

「や、私のじゃなくてサユカンの」

「サユカちゃんの？　何か間違ってたのか」

「うん。ほら、七夕やったじゃん？　それで願い事書いたじゃん」

「ああ、結構前の話だな」

「そのときにサユカンがなんてお願いごとしたか知ってる？」

「えっと……自分で言うのも恥ずかしいけど、なんか僕とデートしたいとか」

「実はね、その札の裏に小さく“トメさんとずっと一緒にいられますように”みたいなこと書いてたんだけど」

「そ、そうなのか……照れるな」

「あのね、“ずっと一緒に！！　サユカ&トメ”って書きたかったんだろうけど……サユカＶＳトメになってた」

「ずっと戦うの！？」

今さら気づいても遅いけどね。ま、いいんじゃん？　さっきの芋同士の戦いみたいに格好よかったなら。

……あれ。

なんで芋同士の戦いがあんなに格好いいのさ。

謎だ。

## カカの天下５５７「激烈極まる闇の戦い」（後書き）

謎はおまえだ。

そう読者にツッコんでほしくて書きました！！
ここで一応注意。格好いいこと言ってる二人がいますがあくまで芋です。ええ芋です。ちゃんと芋同士の戦闘シーンを思い浮かべてくださいね。

さてさて、８月も残り２日。
内容はともかく「最後の二話はこんな話をやろう」と決めているものがあったりします、が、この芋たちよりは大仰な話ではないのであしからず。

**カカの天下５５８「夏の詰め合わせ、した」**

とある最後の夏の風景、そのいち。

カカです。

さて、何しよっかな。こないだのトメ兄とのあれやこれやで宿題終わっちゃったんだよね。

よし、一人で遊ぼう。

カキ氷を……がーっと食べる！

がああああーっと。すると……来た来た！

頭の奥が、キィィィィィィン……！

「あぅ、おぅ、あぅぅぅぅ！」

たはー！！

たのしー！！

もっかいやろ……

そんな感じで過ごす最後の夏。たはー！

とある最後の夏の風景、そのに。

タケダだ。

「ほらニッシー！　急いで宿題を終わらせるわよ！」

「はぁ、毎年よくやるよねぇ僕らも。絶対に最後の二日で終わらせようとするんだから」

必死に机にかじりつく二人を見てため息をつく。

「それはいいが、なぜ俺の家でやるんだ？」

「ここならクーラーあるじゃない」

「お茶も出るだろ」

はぁ……こいつらは。

「イチョウ君、君は宿題しなくていいのか？」

「わたくしは一日で終わらせるタイプですので」

「おお、俺と同じだな」

む？　なぜアヤ君とニシカワは嬉しそうな顔をしているのだ？

「なんだ！　二人とも仲間だったのね！」

「いや待てアヤ坊！　ラスト一日で終わらせるなんてヘタすれば僕

たちの上を、いや下を――」

「何言ってるんだおまえらは」

「宿題は初日に終わらせるのですよ」

「そういうもんだろうが……あれ、どうした二人とも」

なんかすごく睨まれているような……

「これだから優等生は！」

「お茶！　タケダ！　お茶！」

「わ、わかったわかった、煎れてくるから待ってろ！」

なぜ怒る。まったくもって意味がわからん。

しかし……ノゾミ君、遅いな。

「早く！」

「はいただいま！！」

「おかえり！」

「……は？」

こんなこき使われる最後の夏……

とある最後の夏の風景、そのさん。

ノゾミです。

今日はタケダ君の家で勉強会……じゃなくて宿題会。今度こそお礼を言うチャンスだ。お礼用のカレーも準備したし。

タケダ君もイチョウさんも宿題終わってるみたいだけど、難しい問題の答えを見せ合ったりしながら勉強するのも結構楽しそうだし……ってうきうきしてたのに。

宿題が見つからない。

とっくに待ち合わせ時間は過ぎてるのに。

ないよう。

ないよう……

ああ、時間が……

結局行けなかった。

翌日、見つかった。

くすん。

寝かせたカレーおいし。

くすん……

こんな泣ける最後の夏。

とある最後の夏の風景、そのよん。

サエです。

私たちを差し置いて宿題を終わらせてしまったカカちゃんを恨みつつ、サユカちゃんと二人で宿題を片付けています。

やっているのは算数のドリル。

二人で一つの机を挟みながら、黙々とやります。

――ぺら。

――ぺら。

同時にめくれるページの音。

再び同時。

――ぺら。

また同じ。

「……ねぇ、サエすけ」

「なにー？」

「なんでページをめくるタイミングが同じなの？」

「なんでだろねー」

「……そのドリル、わたしが今やってるのと同じやつよね」

「そだねー」

「ページも同じよね」

「そだねー」

「……サエすけっ！」

「一緒にやるって楽だよねー」

「君、わたしの写してるだけでしょっ！？」

「うん、逆さまから文字読むの、得意なんだよー」

「あーそうね向かい合ってるわけだからそっちから見ればわたしの文字も数字も逆さまよねスゴイスゴイ――ってこらっ！　堂々と白状してんじゃないわよっ」

「大丈夫だよー。時々は違う答え書いてるからバレないってー」

「そういう問題じゃないでしょっ！　こういうのはきちんとしないとダメなの！　わたしと違うドリルやりなさい、いいわねっ！？」

「ぶー、サユカちゃんのマジメんぼー」

「褒めてくれてありがとっ」

「アメンボー」

「どういう意味よっ！？」

「甘えんぼー」

「余計なお世話よっ！！」

こんな感じでサユカちゃんで遊んだ、最後の夏。

とある最後の夏の風景、そのご。

サラです！

今日はちょっとお洒落してみました。奮発して買った服をいくつか鏡の前でとっかえひっかえして、ようやく決めたこの姿！

ちょっと胸が目立つ気がして恥ずかしいけど……た、たまには露出多いのもいいですよね、夏ですし！

さぁ……いざトメさんの家へ！

最近あんまり遊びにいってなかったからなぁ。楽しみだなぁ。わくわく……

ピンポンを鳴らす。

カカちゃんが出てきた。

「トメ兄ならテンカ先生と飲みに行ってるよ」

がーん！　なんてこと、驚かせようと思って連絡しなかったのが裏目にでた……うぅ、どうせ暇だと思ってたのに。

こうなったら私もその飲み会に無理やり参加するわ！

……お酒落のせいでお金が無い。

「え、えっと。カキ氷、一緒に食べる？」

「うん……ありがとうカカちゃん」

とても美味しかった。

「サラさん、泣いてる？」

「違うの、これはつべたくて、キィィンとして涙が出てるだけなの！」

そんな、冷たい氷で心温まる最後の夏。

とある最後の夏の風景、そのろく。

トメです。今、テンと飲んでます。

「もうすぐ夏休みも終わりだな……面倒くせぇぜ」

「なぁ、テン」

「あん？」

「今、ほしいものとかあるか？」

誕生日プレゼントに何をやるのか結局決めてない僕は、感づかれるのを覚悟で率直に聞いてみた。

「ほしいもの？　ああ」

しかしテンは気づくどころか深く考える様子もなく即答した。

「おもろい宿題だな」

そう、深く考えることもなく急所を突いてきたのだ。

「夏休みが終わってからの楽しみっつったらやっぱそれだろ。特に自由研究！　どんな奇抜なものを提出してくれるのか、楽しみでならねぇぜ！　ん、どしたトメ」

「あれか……やっぱあれしかないのか……」

カカの提案するテンへのプレゼント、あまりにも恥ずかしい宿題。
あれを……やれと!?

僕にタケダの仲間入りをしろと!?

あんまりだ!!

「おかわり!!」

「おお、よくわからねぇが威勢がいいな、気に入った! オレも付き合うぜ!」

そんな飲んだくれな最後の夏。

とある最後の夏の風景、そのなな。

クララです! 今日はキリヤの店にきてます! デザートにフォンダンショコラを奢ってもらってます! 甘すぎておいしすぎです!

「そろそろクララちゃんも夏休み、終わりですね」

「へ? クララは毎日がお休みですよ」

「クララちゃん、それニートって言うんだよ」

「クララしょっくです!!」

そんなお勉強になった最後の夏。

とある最後の夏の風景、そのはち。

こんにちは、ユイナです♪

今日の私はちょっとお暇ができました。なのでパパ君とスタジオ近くの公園を散歩なんかしてます。

「いい天気ですねー」

「うむ……」

のんびりとした時間。

それもいいけど、ちょっとお茶目してみようかな。

「パパ君パパ君」

「なにかね我が女神」

「はい、これ」

私はおもむろに一枚の紙を差し出した。

その紙にはただ一文字、『上』とだけ書いてある。

それを読んだパパ君は、

「シュバッとな！」

果てしない青空へと吸い込まれていった。上へまいりまーす。上すぎでーす。上杉さんは関係ありませーん。

……やがて、黒い米粒になったパパ君が落ちてきた。

「スタッとな！」

「パパ君かっこいー！」

「いやーはっはっはっはっは！」

「はいこれ」

「む？」

今度は『下』です。それを読んだパパ君は、

「土遁！！」

ズボッと地面へ潜りこんだ。下へまいりまーす。ありえないほど下すぎでーす。下杉さんって方はいらっしゃいますかー？　関係ありませんけど。

……やがて、どこまで潜ったかわからないパパ君がニョキッと生えてきた。

「ズボッとな！」

「パパ君かっこいー！」

「いやーはっはっはっは！」

「でも汚い♪」

「ごめんなさい」

こんなラブラブな最後の夏。

とある最後の夏の風景、そのきゅう。

カツコだ！！

今日は気分的に流しそうめん！　水の流れるミニ滑り台をシューに無理やり用意させて、いざスタンバイだ！

「あ、あの……いいんですか、僕なんかが最初に下にいて」

「いいよいいよ、準備ご苦労さん。あたしらが流すから待ってな。ねータマちゃん」

「ねー」

「ううう……ま、まさか褒美がもらえる日が僕なんかにくるなんて…感激です！　いざ！　流れてくるそうめんの全てをすくいとって

みせます！」

「んじゃ流すよー」

「はいっ！！」

つるつるつるー。

「タマちゃんも、ほい」

「おー」

つるつるつるー。

んー、良い感じ。

「……あの、流れてこないのですが？」

「あ、待って。先にあたしらの胃に流し込むから」

「流しそうめんの意味ないですよねそれ！？」

「美味しいねー、タマちゃん」

「うー、おいしー、この線路」

「たしかに細くて長いですが無理ありませんかタマ様！？」

「じゃー、いぼ？」

「どこも共通点がなーい！！」

「や、たしか『いぼの糸』ってそうめんがあったよ」

「そうなんですか！？　タマ様……知ってました？」

「なんじゃそえ」

「知らないのに『いぼ』って答えたのね」

「タマ様スゲー」

そんな楽しい最後の夏。

## カカの天下５５８「夏の詰め合わせ、した」（後書き）

先月の３１日に書いた「うえ」……今月の３１日に書けばいいかなぁとか思ってましたが、最後の話は決めていたので今日お届けします。

ついでにあんパンのほうも新しい話をば＾＾

# カカの天下５５９「夏を彩る闇夜の花」

とある最後の夏休みの風景。

カカです。

八月三十一日。正真正銘、夏休みも終わりです。そんな最後の夜に――私たちは花火をしようと集まりました。

集まったメンバーは私、トメ兄、サエちゃん、サユカン、クララちゃん。そして……

「あはははははははは！」

スパパパパパパーンとロケット花火をシューに向かって投げつけてる、お姉。

「……！」

シューは涙目で逃げ回りつつも少し笑ってる。楽しいのか嬉しいのかわかんないけど……もしかしたら恐怖で頭がおかしくなっているのかもしれない。

「あ、危ないわよね……あれ」

見てるだけで痛そう、と顔を歪めるサユカンが持ってるのは普通の花火、あっちのシューは汚いけどこっちでシューシューいってる花火は綺麗だなぁ。

「んー……」

「あ、またクララの負けです！」

「ふふー、私こういうの得意なんだよねー」

バケツの上で線香花火対決してるサエちゃんとクララちゃん。対決というのはもちろんお姉たちのような激しい戦争ではなく、線香花火の火をどれだけ持たせられるか勝負だ。サエちゃんが誰よりも強い。

「ったく……あれはちょっと迷惑だな」

「お、トメ兄も戦争に参加？」

「カカもやるか。その二刀流で」

私の両手に光る炎の刃――そう格好つけたところで二つともただの花火なんだよね。

「やめとく、トメ兄がんばって」

「よしきた」

トメ兄が手に持ったのは……なんと十六連射ロケット花火！　誰だそんなもん買ったのは。そんな疑問は差し置いて、微塵のためらいもなくそれをお姉に放つトメ兄。

「いいかげんにしろー！！」

トメ兄、あんたもね。一番うるさいよ。実は興奮してる？

連続する破裂音、お姉に迫る十六の脅威。

「波っ！！」

それらを全て神速の手刀をもって叩き落とす。彼女の瞳がギラリとそちらを向いた。

「あたしにケンカ売る気？　トメ」

「いい加減にしないと警察くるからな」

「はん、警察ならそこでのびてるじゃないのさ。恐るるに足らん」

「どこの魔王だあんたは」

「くくく、魔王も結構！　闇夜に咲き誇る花々に誘われ、我はここに舞い降りた！　さぁ勇者たちよ、倒せるものなら倒してみ――」

「てい」

問答無用でロケット花火を投げつけるトメ兄。鬼だ。

「む、なによぅ。人が気持ちよく語ってるのに」

それをパシッとあっさり掴み取るお姉。こっちのほうが鬼だ。

「反撃！」

気を悪くしたお姉がロケット花火をトメ兄へ!?

「忘れたか？　僕、こういうのは得意なんだ」

と、トメ兄が!!　お姉ほどあっさりではないにしろ、目にも留まらぬ速さで飛ぶロケット花火をパシンと受け止めた!?　どっちも鬼か!!

「よろしい、ならば戦争だ」

「静かにやれよ」

そんなやり取りを呆気に取られながら見つめる私達一般人……

「ねぇ、カカすけ。あんたらの兄姉ってどうなってるのよっ!?」

「か、カツコだけじゃなくて、トメも実は人間じゃないのですか!？　クララしょっくです!」

「クララちゃん、お姉さんも一応人間だからー」

「トメ兄は反射神経が異様にいいだけだよ。まぁあのお姉にずっと付き合ってればね」

そういうところだけでも鍛えないとやってられなかったんだろうなぁ……

「じゃカカすけもできるの？　ロケット花火掴み」

「できるわけないでしょ、あんなの」

そりゃ少しは鍛えてるけど、あんな見えないもんどうやって掴めと。

「うう、あれも花火……花なのですよね。だとすればクララもいずれ、あのようにピューッと飛んでいかなければならないのでしょうか」

「あはは、お姉さんに言ってみようか？　きっと飛ばしてくれるよー」

「サエすけ、それ“投げ飛ばす”って言うのよ」

――ん！？

「あ、馬鹿姉！」

「やべ、ミスった！！」

ロケット花火の流れ弾が、こっちに！？

「サエす――」

「サエおね――」

「え――」

それは流星のような速さでサエちゃんの顔面に迫り――

「っだぁ！！」

その弾丸を間一髪で私が掴み取った！

花火の勢いと身体に無理をさせた反動で転びそうになる、っと、っと！　でもなんとか持ちこたえた。

「ふぃー……」

「なによ……できるじゃない、カカすけ」

「サエちゃんは私が守る！！」

その想いのおかげで限界を超えたのだ！　そうとしか思えない……あー怖かった。

「……カカちゃん、ありがとー！！」

そしてそんな私にご褒美が！　ひしっと抱きつかれ嬉し恥ずかしでっす。あらあら震えちゃって……そうだよね、サエちゃんのほうが怖かったよね。

私のサエちゃんをここまで怖がらせたお姉……

許すまじ。

許すマジ。マジで。

「お姉、こい」

「はい」

自分の罪がわかっているのか、おとなしく謝りにくるお姉。

そして――

「あ、あのう、カカちゃん？　これはいくらなんでも」

「罰だよ」

「ね、許して？」

「×だよ」

お姉の体中につけた、ロケット花火とかいろいろ連射花火とか普通のとか……そしてくくりつけられた一つのロウソク。

「そのロウソクの火が一番下までいったとき、世にも美しい花が咲くんだよ」

「あ、あのぉ？　あたし、別に花咲おねーさんになった覚えはないんだけど？　花咲じーさんの弟子になった覚えもないし」

「大丈夫だよ、お姉。花は勝手に咲くから」

「むしろ姉自体が花だしな」

「怖い……笠原家って怖いわっ！　トメさんステキだけど」

「うーん、火気厳禁な家族だねー」

「でっかい花火ですか！　楽しみです！　カツコ、早く散るです！」

そんなクララちゃんの言葉に反応したわけじゃないだろうけど、ロウソクが唐突にぽっきり折れた。

「はぁ……あたしって、毎年こんなことしなきゃなんないのかな」

お姉の諦めきった言葉と共に、その火がちょうどいい場所に落ちて点火する。

なんか断末魔の叫びと共に咲く、一輪の巨大な花。

その眩しいまでの輝き、美しさ――そして散り様を見ながら、私たちはそれぞれに夏の終わりをかみ締めるのだった。

そんな、夏休みの最後。

お姉の最期、ではない。残念ながら。

しぶとい。

## カカの天下５５９「夏を彩る闇夜の花」（後書き）

最後は花火！　と漠然と決めていましたが……まさかこんな話になるとは笑

綺麗にまとめようとか思ってたんですが……ま、去年と同じく姉が咲いたってことでいっかーって感じです笑

明日っから九月ですねぇ。大勢の学生さんたちは色々始まる日です。んと……頑張ってください（としか言えない＾＾；

## カカの天下５６０「人生の答え合わせたいむ」

「よぅ、久々だなてめぇら！！」

とうとう新学期だぜ……だりぃ。おっと本音が出ちまったな。テンカだ。

適当にガキどもと挨拶をすませ、始業式を終えて。

まず最初にやる授業は、これだ！

「知ってるやつもいると思うが、夏休みの宿題の答え合わせのやり方は学年によって違う。理由は知らんがな。今年はこの一時間で各自、ドリルの答え合わせをやってもらうことになっている」

教室内にそわそわする生徒がいるのをオレは見逃さなかった。

「今から答えを配る。各自でドリルの答え合わせをやるように……ただし！　もしその場で答え合わせ以外のことをしているやつを見つけた場合」

こういうやり方にすると必ずいるのだ。白紙のドリルを当日に答えを見ながら解答し、即丸付けをして宿題を終わらそうとするやつが。一時間以内にやるとなると大仕事だが、普通にやるよりはずっと楽……そんなことはさせん。ムカつくから。

「いいか？　まだやってないドリルをこの一時間で終わらそうなんてヤツがいた場合……そいつには自分の好きなやつをこの場で発表してもらう」

教室に緊張が走る。さすがオレだ、本来なら教師が口を出すべきではない領域を利用した見事な脅迫法。マネしてもいいんだぜ？

「さぁ、宿題をやってこなかったやつは正直に前へ出ろ」

案の定ぞろぞろと前に出てくるやつら。四人か、意外と少ねぇな。しかしかなしいかな、全員男子である。

「正直で結構。さぁ順番に好きな人を発表だ」

『えええぇぇぇぇ！？』

「んだよ。宿題やってこなかったんだろ？　罰だ」

その程度で済むんだからありがたく思ってほしいもんだ。

「ほれほれ、てめぇからだ。名前も忘れた男子」

「どんだけこの教室の先生やってるんですか！？　いい加減覚えてくださいよ！！」

「おーおー威勢がいいねぇあんちゃん。その勢いで告白言ってみようか」

途端に押し黙る男子Ａ。ちっちぇなぁ。そりゃ名前覚える気もなくなるってもんだ。

「……です」

「聞こえねぇなぁ」

「だから、その……です」

「さっきの勢いはどこいった？　下っ腹の底のに力を入れろ……」

「で、出そう」

「尻じゃねぇ！　腹に力入れろっつうに」

「は、はい！　言っちゃいます！」

「よし、言え！　当たって砕けろだ！」

「俺はサエちゃんが好きです！！」

おおー！！　言った！　男らしい！

「サエ、どうよ」

「きゃっかー」

あっさり撃沈。残念だったな若造。

「あ……当たって……砕けた……」

「大丈夫だ、男らしかったぞおまえ。きっとこの先、その傷が役に立つさ」

慰めはこんくらいでいっか。

「さ、次いくぞてめーら」

「いやだぁぁぁ！！　こんな風になるのいやぁぁぁぁ！！」

「ええぃ、騒ぐな。それにこんな風とは失礼だぞ、この上なく清々しい顔じゃねぇか」

「あれは失うものがなくなった可哀想な人の顔です！」

「ガキがおおげさなこと言ってんじゃねぇよ！　どーせてめぇらくらいの年齢は恋の駆け引きだのなんだのするより、ぶつかってったほうがうまくいったりするんだよ。ほれ次てめーだ、言え！」

「うぅ、こうなりゃヤケだ！　僕はカカちゃんが好きです！！」

「身の程を知れ」

はい撃沈。

「み、身の程って……」

「虎がだんご虫を好きになると思う？」

だんご虫、おお、だんご虫！　言われてみればだんご虫みたいな坊主頭だこの男子。

「よかったな。てめぇはこれから“だんご虫”だ」

「いいことなんて何一つないですよぅ！」

「そのうちになんかあるさ。だからそうだんご虫みたいに丸まるな……そうだカカ。ちなみに聞くが、おまえが虎ならサエは？」

「ブラックホール」

「あのー、カカちゃん？　せめて動物で言ってほしかったなー」

そりゃブラックホールとだんご虫じゃ勝ち目ねぇわな。

「カカすけ、わ、わたしは？」

「猿」

「ウキー！！」

うむ、いいモノマネだ。サユカも日に日に芸達者になっているようで結構なことだ。

「はい次」

「ぼ、ボクは……サユカちゃんが好きです」

あれま、こりゃ綺麗に仲良しトリオが挙がったもんだな。でもサユカはなぁ。

だよなぁ。

「えっと、ごめんなさいっ！　わたし、好きな人がいるから」

「だ、誰ですか……！　こ、ここ、殺してやる」

オイオイ。あんた流行のアブナイ子か？　やべぇ、矯正しとかねぇとオレの給料が危ねぇ。

「なんですって――あんたが死になさいよっ！！」

「好きな子に死ねって言われたぁぁぁっ！？」

あ、泣き出した。勝手に矯正してくれたみたいだな。でもちょっとコイツ危なそうだからあとで慰めといてやろ。

「ほれ、最後。てめぇだぞ」

「俺は……テンカ先生が好きです！！」

あれま。オレかいな。

「おといきやがれ」

「え、えっと……二日後にくればいいんですね！！　そうしたら返事を……！」

「待て待て、そりゃ明後日だろが。オレは一昨日って言ってんだよ」

「あ、そっか……え、じゃあ、どうやってくれば」

「もうくんなってことだよ」

「うあああああああん！！」

あー、丁寧に説明してトドメ刺しちまったか。ま、いいだろ。ガキの頃の大人に対するそういう想いは早めに諦めたほうが今後のためってもんだ。サユカみたいに実るかもしれない場合は別かもしれねぇがな。

「……屈辱だわ、なんでアイドルである私の名前が挙がらないのかしら」

アヤ、こういうときに彼氏付きの女に告るガキはそうそういねぇぞ。てめぇ本人は認めねぇかもしれんがな。

「さて、盛り上がったところで答え合わせ始めるぞ。そこの撃沈男子四人は答えやらねぇからな、普通にドリルやること」

「先生……恋って、なんなんでしょう」

「そんな答えは知らん」

自分で答えを見つける類の問題だ、それは。

オレも見つけちゃいないがな。

## カカの天下５６０「人生の答え合わせたいむ」（後書き）

答えのない問題、ありますよね？
恋とはなんなのか……まー答え方はそらもー科学的なそっけないものから情熱的な恥ずかしいモノまで腐るほどあると思いますが、明確な正解はないですよねー。

……だからどうした？
いや、特に言いたいことはないんですけどね（ぉぃ

そうそう。なんか九月一日よりも先に――二十五日あたりから学業始めている方々もいるそうで……その方々に一言。

ご苦労様！！

スイマセン、そんくらいしか言えません＾＾；
学生ガンバ！
大人もガンバ！

# カカの天下５６１「めんめんめん」

「ただいま」

ふぅ……トメです。

最近ちょっと仕事が忙しくて疲れ気味です。そんな僕を真っ先に迎えてくれる玄関のホワイトボードに書かれていた文字は……

『わたし、めっちゃかゆいねん』

知らんて。

「おかえりトメ兄！」

「おう。夕飯までちょっとダラダラさせてな」

身体がだるいので居間でゆるりと横になる……ふー。

「ねね、聞いてよトメ兄」

「んー？」

「今日さ、いろんな人の夏休みの様子を聞いてたんだけどさ」

ふむ、あれだな。調子戻すためにカカでもからかうか。そうなると……からかうツッコミどころを探さないと。

「なんと、ハワイに行った人がいたのだ！」

「あ、やっぱ実際にいるんだなそういう子」

うちは国外には行かないからなぁ。理由は母さんが長期の休みを取れないから、そして母さんを差し置いて旅行に行こうなどとは誰も思わないからだ。

「ハワイ……すごいよね。私、ハワイ語なんかできないから行く気になれないや」

ハワイ語……アロハオエーとか？　おえー。

「ハワイ語。略してワイ語」

猥語？　卑猥の猥？　そんな言語が主流なのか。終わったなハワイ。

「それからね、イージス艦に行った人が」

出兵でもしたんか。

「イギリスだった」

だいぶ違うな。

「似てるよね」

まぁ、響きだけなら似てると言えなくも、ない、か？

「あとね、空に行ったって人が」

……死んだのか？

「たくさん」

たくさん死んだのか。

「あ、海だった」

「青くて綺麗なとこしか共通点ありませんが」

「ほとんど同じじゃん」

……それもそうか。

……そうか？

「僕はてっきりたくさん死んで空に上ったのかと」

「なに、そんなに死にたいの？　のこぎり持ってこようか？」

なぜにそんな恐ろしいアイテムをチョイスするのですか。

「やめてくれ」

「いまなら斧もついてくるよ」

「怖いからやめぃ。話を戻すけど、海なら僕らも何度か行ったよな」

「だよね。でも山にも行きたかったなー」

きゅぴーん。ツッコミどころめっけ。

「山に？」

「うん、山に」

「山仁さんの家なら二丁目にあるぞ」

「や、そうじゃなくて。山の中だよ」

「山中さんの家なら三軒隣にあるぞ」

「違う！　お山のこと！」

「尾山さんなら」

「もう！！」

「毛さん？　そんな中国系の人近くにいたっけ」

「知らない！」

「シラヌイさんならこないだ――」

「うがー！！」

「ＵＧＡね。カラオケに機種にあるなー」

あらら、怒って自分の部屋に行っちゃった。

……さて、調子も戻ったことだし夕飯でも作りますかね。

その前に、と。

「おーい、カカ？」

カカの部屋の扉の向こうへ呼びかけるが、

「オー・イカカなんて人知りません」

返ってきたのはこんなお言葉。怒ったかなこりゃ。

「やりすぎたよ、ごめん」

「槍杉さんも多夜さんも五面も知りません。四面もクリアしてないし」

言ってることはよくわからんが、とにかく怒っているらしい。

「ごめん！」

「私はまだ二面！」

あ、あれか。シューティングゲームとかで言う一面とか二面とかの話か。一つ目のステージを一面とか言う……となればこれは、五面までいけば許してもらえるということ！

なぜそうなるか？　ほら、五面までいけば『ごめん』が認められることになるんだよ。え、まだよくわからない？　カカ的思考だと、

とにかくそうなんだよ。

「えっと……二面にいるんだよな？　三面にはまだ行かないのか？」

「二面のボスが強いの」

「ちなみにボスは誰だ？」

「お姉」

ラスボスじゃん。

「三面のボスは？」

「本気出したお姉」

裏ボスじゃん。

「……四面のボスは？」

「変身したお姉」

全部姉かい。というか何に変身するんだ。

「……五面のボスは」

「お姉×１０」

勝てねー。

このままでは永遠に許してもらえない……仕方ない。

食べ物で釣るか。

「あー、その、夕飯なに食べたい？」

「めん！！」

面面言ってたからか麺ときましたか。

「麺類な。それ作るからさ、機嫌直してくれよ」

「めん！」

返事か？　それ。

「たいこ！」

「わかった。明太子パスタな。それと、本当にごめんな？」

「……いま四面。もうすぐ五面」

おお、もうすぐ許してくれるみたいだ。

ちゃんと許してもらうために、姉を１０匹倒せるくらい美味しいもん作らないとな。

## カカの天下５６１「めんめんめん」（後書き）

意味不明なサブタイトルでしたが、話を読んでいただければ納得してもらえたはずです！　めんめん！

え？　五面とごめんの関連性がわからない？　そこはカカ的理論なんで適当に流してください。

しかし夏休み。私の家は旅行とかまったくしない家だったのですが、特にハワイとか行きたいとは思いませんでした。まぁ行ったことないから良さがわからないだけだと思いますが……

今は普通に温泉とかいきたいなぁ（しみじみ

# カカの天下５６２「カカ天クエスト　ＥＰ７」（前書き）

注意：このお話はカカ達がゲームのキャラになりきりながらＲＰＧを進める話です。話の内容はゲームの中ですが、『もしもカカ達が異世界にいたら』みたいな感覚でお楽しみください。

ステータス

カカ　　ボケ勇者　　レベル１　へん

サエ　　悪の魔法使い　　レベル１　はらぐろ

サユカ　　手の平の踊り子　レベル１　さびしんぼう　エロレベル３

トメ　　ツッコミ　　レベル１　つっこみ　　死体、

なんでやねんの裏手チョップのまま死後硬直

ケロリン　スライム　　レベル７　おっさんくさい　死体、

もはや変な塊でしかない

## カカの天下562「カカ天クエスト　EP7」

魔物にさらわれていた村娘Aを（反則な手で）救いだし、村へと無事に連れ帰っ（てもらっ）た勇者一行を待っていたのは、村人たちの手厚い歓迎でした。

「勇者様じゃー！」

「勇者様のおかえりじゃー！！」

「皆の者、戸締りを充分に！！　貧しい者は出てくるな！」

真っ先にそんなことを言われるのは今までの勇者達の功績に他ならない。

「ああ……私、帰ってこれたのね！！」

いろいろあったが村娘Aは生きて帰れたことを感動した。

「おお、よくぞ帰った村娘Aよ！！」

「あの、名前で呼んでくれませんか？」

「いやぁ無事でよかった村娘A」「ほんに、怖かったろ村娘A」「村娘Aちゃん！　怪我ない？」

「聞いてよ！」

RPGではよくあることだ！

「勇者様、このたびは愚図で愚鈍で無能で顔と胸しか取り得のない村娘Ａを助けていただき、誠にありがとうございます」

「そこまで言いますか村長！？」

村長は口が悪い！

「くるしゅうない。感謝のしるしとして有り金ありったけよこすがよい」

勇者は単純に悪い！

「うぅ……なんなのこの仕打ちは」

村娘Ａは待遇が悪い！

「ささ、勇者様、こちらへ！」

「うむうむ」

「いやー、大変だったよねー。敵のボスを倒して、ここまで戻ってくるのー」

「サエすけ……わたしたち、大したことはしてな――」

「大変だったよねー」

サエは恩着せがましい。

「なによ、なによ……もう黙ってられないわ。ちょっと待った！！」

「なんじゃ村娘Ａ。名前もないくせに無礼じゃぞ」

「村長のほうが無礼よ！！」

村娘Ａは正論をはなった。

「村長が村で無礼をして何が悪い！！」

しかし村長には効かなかった。

村娘Ａはめげない！

「大体ね、その人たちを連れて帰ってきたのは私なのよ！？　その人らは死んだフリをして私に引きずられてきただけ！！　私は自力で帰ってきたの！　ほら、見て私の服。汚れてるでしょ！？」

「おまえにぴったりじゃ」

「余計なお世話よ！！　つまり私が必死で帰ってきたってこと！」

「何を言う。勇者様のほうが汚れておるぞ」

「ぴったりね！」

「間違いない。心もきっと――」

「もしもーしー？　調子に乗ってると村を滅ぼしますよー？」

サエは冗談とは思えない脅迫をはなった。

「え、えぇと。とととととにかくじゃ」

村長は怯えている。

「勇者様のほうが汚れているということは、勇者様のほうが頑張ったということじゃろう！」

「カンオケから土埃でも入ったんでしょ」

「勇者様になんたる言い草！　いくら極悪非道の限りを尽くすどっからどうみても勇者に見えない小さな悪鬼とはいえ――」

「そーんちょーさーん」

「ひぐぅ！？」

村長どころか村が怯えている。

「とにかく！　勇者様が正義！　勇者様が全て正しいんじゃ！！」

『そーだ！　そーだ！』

恐怖政治支配が完成した！

政治じゃないというツッコミは受け付けない。

「もういい！　おまえは帰れ！」

「え……」

『かーえーれ！　かーえーれ！！』

「そんな……私、村のためと思って生贄になったのに……それでもなんとか村に帰ってきたのに、その村の人たちに帰れって言われたら、私はどこにいけばいいの……う、うわぁぁぁぁん！！」

村娘Ａは逃げ出した！

誰もまわりを囲まなかった！

「ちょ、ちょっとカカすけ、大変よっ！」

「うん。私たちの出番が少なすぎる」

「そうじゃなくてっ！　そうだけどっ！」

「心配することはないと思うよー。ほら」

村人の様子を見ると……

「まったくもう、何をやっとるかのあの娘は」

「つべこべ言わずにさっさと家に帰ればいいのじゃ」

「病気で床に伏せている母親にはよぅ顔を見せてやらないと」

「まったく、急ぐあまりに言葉がきつぅなってしもうたわい」

村人たちは意外と良い人だった！

「ほらね。みんな不器用なんだよ」

「いや、でも、あれだと誤解されたんじゃっ」

「誤解なんてすぐ解けるよー。どうせこの村に住んでるんだからー」

サエはそう思っていた。

しかし……事態は急変する。

――行くアテもなく、ただ一人の肉親が気になった村娘Ａは家に帰った。

「お母さん……」

布団で横になっている母親に声をかける。

「お母さん……私」

「成仏しな……」

「え」

村娘Ａは絶句した。

そして思った。村の中では、自分はすでに死んだ存在なのだと。

すでに帰る場所などないのだと――

「……！」

たまらず村娘Ａは再び逃げ出した。

「むにゃ……んー……なむなむ……」

その場には、寝言を呟いたりするぐっすり状態の母親だけが残された。

カンカンカン！

村の神社の裏で甲高い音が響き渡る。

村娘Ａが……なんと藁人形に杭を打ちまくっていたのだ！

「許さない……許さない……」

打つ、打つ、打つ。これでもかと藁人形と杭に向かって木槌を打ち続ける。

「こんな村なんか……こんな村なんか……」

村娘Ａは怨嗟を唱えた。

「全員、下痢になってしまえ！」

地味だった！

「その後、便秘になってしまえ！！」

地味に怖かった！！

「下痢、便秘、下痢、便秘、下痢、便秘、下痢、便秘、下痢、便秘！」

村娘Ａは藁人形の下腹部に杭を打ち続ける！

村娘Ａの人としてのレベルが下がった！

『罵詈雑言』を覚えた！

「死んじゃえ……みんな下痢と便秘で死んじゃえ！」

説明しよう！　村で平和に生きてきて、結局ボスに何もされなかった村娘Ａが味わったことのある最も深い苦しみが、この下痢と便秘のエンドレスなのだ！

それはそうとまた村娘Ａの人としてのレベルが下がった！

『怨嗟』を覚えた！

「村だけじゃない……世界中のみんな、死んじゃえ！」

『なんか異様に怖い顔』を覚えた！

「世界中の人間よ、下痢と便秘で死ね！！」

村娘Ａは『かなり怖い人』へとクラスチェンジした！

ガスガスガス！！　杭を打ち続ける。

やがて、もうどうしようもないほどにレベルダウンを繰り返し、『とてつもなくヤヴァイ人』へとクラスチェンジしたころ……彼女の背後で一つの足音が。

「くくく、なんたる逸材がいたものよ」

そう呟いた、その者こそ！

「我は魔王カツコなり！　やった登場できた。わーいわーい。それはともかくそこな村娘Ａよ！」

「……なに？」

「うをを！？　や、その、ね。うん、ちょっとあんたをスカウトに来ただけだからさ、そんなものすんごく病んだ目でこっち見ないでくれる？　こあいから」

魔王は怯えている。

「スカート？　スカートの下は下痢と便秘でふふふふ」

「いあ怖いから！！　いろんな意味で恐ろしいしヤバイからさ、ちょっと落ち着け！　ううん、なんか魔王っぽくないよぅあたし……こっちのほうがよっぽど魔王くさいよぅ……」

「何か用なの？」

「いやね？　そんなに人間が憎いなら一緒に滅ぼさないかなーと思って」

「……あなた、魔王なのよね」

「そだよん」

「魔王の下なら……世界を下痢と便秘にできる呪いが完成できるかもしれないわね」

「……あたしにだけはかけないでね、それ」

「行くわ」

「あ、そう？　よかったよかった」

村娘Ａがカツコの仲間になった！！

とうとう姿を現した魔王、そして生まれてしまった強大な敵！！いまだにレベルが上がってないばかりか出番すらほとんどなかった勇者一行は、一体どうなるのか！？

次回、『そんなに急いで生き返らせなくてもいんじゃね？』をお楽しみに！

## カカの天下５６２「カカ天クエスト　ＥＰ７」（後書き）

はい、かんなり久々のカカ天クエストでしたー！　まだかまだかという嬉しい意見がありましたので書きましたよん。
今回は敵の登場がメインなので、カカたちはあまり暴れることはできませんでしたが、果たしてどうなるのか！
まったく考えてません（いつものこと

でもまーそれっぽい次回のタイトルもつけましたし、彼女たちが大暴れするのではないでしょうか。
多分。

## カカの天下５６３「市民なプールで泳ぎましょ」

こんにちは、カカです。

今日は学校が終わった後で市民プールに来ています。このごろ残暑はあまりないのに今日は珍しく暑かったのが理由の一つと、それからクララちゃんに泳ぎを教えるのが目的です。

「あっぷ、あっぷ！！」

「はぁ、はぁ……か、カカすけ」

なぜかサユカンが「今回はわたしも付き合うからね、絶対っ！」と妙に意気込んできたので連れてきたのですが、本来の指南役であるサエちゃんは用事があるとのことで欠席です。なので私がサエちゃんの代わりです。

「つい、た！」

「ご苦労様ー」

かなりの長い時間をかけてプールの端から端まで往復して帰ってきたサユカン。

ちなみに私はプールの端に腰掛けている。つまりサユカンは私の足元にいるわけで。

「とう」

「あうっ」

ようやく水の底へ足を下ろせると油断したサユカンの頭に足をのせる。

「サエちゃん式水泳指南法、たぁ」

「うぁんっ」

もっかい泳げという気持ちを込めてサユカンの頭を足で押す。疲れ果てているサユカンは成す術もなくプールへと押し返された。

「ちょ、カカすけ、もう無理よっ、限界よぅっ」

このプールは中心に向かってどんどん深くなっていくタイプで、私たち小学生だと端以外は足がつかない。なので押し返されたサユカンは必然的に泳がないといけないのだ。

「本当に限界な人はね、声なんか出せないんだよ。無理とか限界とか文句を言う力があるってことは、まだ手を抜いてるってことなんだよ。だからもっかい」

「この鬼っ！　悪魔っ！」

「これお姉の受け売りだから、鬼も悪魔もお姉だね」

「そんなことはこの街の人全員が知ってるわよっ」

うちのお姉もメジャーになったもんだ。あ、一応説明しとくとお姉の受け売りはこの根性論だけで、ひたすら水の中でもがき続けろ

っていうやり方はサエちゃん式だからね。

「ぶくぶくぶく……」

「ほら、限界を迎えたらクララちゃんみたいになるんだよ。声も出てないでしょ？」

「それどころか沈んでるわよっ！　あぁもう！」

急いで助けにいくサユカン。随分うまく泳げるようになったもんだ、やっぱ何であれ死ぬ気になるのが上達の秘訣だよね。それにしてもこないだ海に行ったときに見せたクロールには劣るなぁ。やっぱトメ兄ドーピングか、あれは。

「ん？　もう助けたのかな」

再び足元に現れる人影。水面から飛び出した頭に再びぺち、と足を乗せる。

「あ、知らない人だった」

まぁいいや。

「てい」

「うわぁぁ！？」

いやぁ、人に教えるのも楽しいもんだねぇ。

でもそろそろ泳ごうかなぁ……お？

「カカすけ！　さすがにもう上がるわよっ！」

「うぅ……水分の吸収しすぎは木によくないのです……地下水作るです……」

あれま、クララちゃんがヤバそうだ。そういうことなら仕方ないね。

私も手を貸してサユカンと一緒にクララちゃんを引き上げる。幸い疲れただけのようなので、五分もベンチで横になると……すぐに元気になったみたいだ。

「よし、もっかい行くか」

「ちょっと休ませてよっ！」

「ばっちこいです！」

「なんでクララちゃんそんな元気なのっ！？」

こんな風にギャーギャー騒いでいると……

「あら、奇遇ですね皆さん」

聞き覚えのある声がして、振り返ってみるとそこには水着姿のサラさ――えぇ！？

「おっぱい星人の再来です！！」

「し、失礼な！」

「無理もないわよ、なんですかそのスイカッ！　脱いだらすごいというか……脱いだらずるいって感じだわっ」

こないだうちに来たときに着てた服を思い出す。そういえば着やせするタイプだったんだよね、サラさん。や、違うか。

「パイパイさんも泳ぎにきたの？」

「やめてくださいよ！　その中国あたりにいそうな名前！」

「じゃあパイさん」

「それ数学の記号です！　私はサラです！」

「や、皿というよりひっくり返したお碗だよ。ねぇワンさん」

「だから私は日本人ですってば。あと胸に向かって喋らないでください！」

だって身近に全くいないほど立派だし。お母さんもそこそこあるけど、こっちのほうがでっかい……

「ねぇクララちゃん。わたしもあんなスタイルよくなれるかしら。そうすればトメさんもっ」

「無理です」

「なんで断言するのっ！？」

「サユカは養分が足りません。お尻の実りは見事ですが、胸を実らすための養分は不足してます。このままでは無理です。クララ見ればわかります。木ですから」

「うぅ……今後の努力次第ってことねっ」

「はい。お尻の実りから見るに、うまくやれば胸の果実も実ると思いますよ」

「食べ物とか気をつけてみるわねっ」

そしてその果実を食べるのはトメ兄……ってなんか私、オヤジくさい？

「えっと、何を話してるのかな？　サユカちゃん」

「え、いいえ別にっ！　それよりサラさんは泳ぎうまいんですか！？」

慌てて誤魔化すサユカン。クララちゃんの秘密は大人には内緒だからね。

「泳ぎは結構すごいですよ、私！　よかったらサユカちゃん、手取り足取り教えー―」

「ほほう、じゃあ勝負しよっか」

「む、まぁそれでもいいですよ」

ちょうど泳ごうと思ってたからちょうどいい。

「ほら、クララちゃんもサユカンも一緒に競走しよ」

「え、でもわたしたち、競走できるほどは……」

「いいからいいから。練習がてら」

「クララやります！　さっきコツがつかめたところです。きっと泳げます！」

そんなわけで。

適当な準備運動の後、横一列でスタンバイする私たち。

「クララちゃん、合図して」

「クララ合図です！　よーい、おっぱい！！」

「なんですかその合図！？」

そんなツッコミを聞きつつ一斉スタート。泳いで泳いで泳いで！

うおおおおおー！

よし、着いた！

そして――

「負けたー！」

「ふふ、大人の水泳力をなめちゃいけませんよ」

くそー。サラさん速い。

「私、すごいでしょ！」

「うん、泳いでるときの胸がすごかった」

「どこ見てるの！？　って、あれ。サユカちゃんたちは」

振り返ってみると、二人は遥か後方にいた。

しかも……まっすぐ泳げていない。サユカンは右に、クララちゃんは左に少しずつズレてって……ゴン。頭をぶつけて跳ね返り、元のコースに戻るもののやっぱりやがて曲がっていって……またゴン。この繰り返し。

「痛そう……でも可愛い……」

なぜかうっとりするサラさん。

「たしかに見ておもしろいけど……それよりももっかい勝負しよ、サラさん」

「いいですよ。ふふ、思いっきり泳ぐのは気持ちいいですね！」

夏休みが終わっても、私たちの夏はもうちょっとだけ続いたのだった。

そして家に帰ってきて。

「トメ兄、仕事お疲れー」

「おう……プール行ったんだよな？　どうだった」

要約すると。

「おっぱいがスゴくて痛いけど気持ちよかった」

「……何してきたんだ？」

てへ。

## カカの天下５６３「市民なプールで泳ぎましょ」（後書き）

最近目立たないサラさんをちょっと目立たせてあげたいなーと思って書きました。目立ったのはおっぱいだけでしたが。

んー、しかし。クララちゃんも海に参加させたかったけど……まぁ時期の都合で来年ですかね。

しかし残暑、たまにしかないですよねぇ。過ごしやすいといえばそうなんですが、夏のように薄着で寝ると夜寒いですよねー。

風邪に気をつけまっしょい。

## カカの天下５６４「社会の授業、都道府県」

やっほー、カカでーす。

ただいま社会の授業中。テンカ先生の下、日本各地の名産品とかそんなんについて勉強してます。

「ニシカワ、東京といえば？」

「敵です！」

「なぜ」

「東だからです！　やっぱり西でしょう、東京じゃなくて西京でしょう！　さいきょう、ほら最強じゃないですか！」

おお、最強の都。ちょっと心惹かれるなぁ。

「んなこたどうでもいいからちゃんと教科書読めよ。もういいや、座れ。えー、次は……アヤ。和歌山県は？」

「敵よ！」

「おまえもかい」

「だって私、歌は好きだけど和歌ってわかんないんだもん。春はあけぼのって何？　あけぼのが相撲っぽいってことしかわからないわ！」

「アヤ坊、仲間だ！　共に戦おう！」

「仕方ないわね！　私はただの歌山県にするために！」

「僕は西京都にするために！」

なんでもいーじゃんって思うけど。

「……するために、どうすんだ？　おまえら」

「とりあえず勉強しよう」

「そうね、学業は全ての基本だわ」

「普通にえらいなおまえら」

頑張る理由がわけわかんないけどね。

や、しかし退屈だ。サユカンは授業中マジメだし、サエちゃんは昨日何かあったのかボーっとしてるし……トメ兄は最近仕事が忙しいのか遊びに付き合ってくれないし。

「それじゃ熊本県がどんな県か、答えられるやついるか？」

ここは授業で遊ぶしかないか。

「はーい」

「カカ？　珍しいな……まぁいい、答えてみ。熊本県は？」

「クマがせっせと本を作る県」

「どんな県だよ。しかし器用だなクマ」

結構可愛くない？　工場の中で並んだクマが一生懸命……

「とにかく違う」

「じゃークマで本を作る県？」

「あのな、本は紙、つまり木からできてんだぞ。なにか？　木みたいに伐採すんのか、クマを」

並んだクマをばっさりばっさり伐採か。わお、平和な光景が一気に地獄絵図に。

「じゃー……くまもと……くま……もと……くま……」

あ！

「県民全員が元クマ！！」

「何を名案思いついたかのようにトチ狂ったこと言ってやがる」

「あれま、違った？　じゃ元ヤン」

「熊本のカケラもなくなったじゃねーか」

「困ったクマった」

「はいはい。ったく、そこちゃんと確認しとけよ。代わりの質問、茨城県は？」

「いばらぎ？」

「そうだ」

「なんか痛そう」

「気持ちはわからんでもないが、それ単に感想だろ。あーあとな、いばらぎじゃなくていばらきだったわ」

「いばらぎのほうが痛そうだよ」

「んなこと誰も聞いてねーよ。とにかく確認しとけよ、じゃあ……石川県は？」

「石と川だけ」

「三途の川っぽいなオイ」

「テンカ先生、だんだんツッコミがトメ兄に似てきた」

「あいつと喋ってるだけで勉強なるからなぁ」

おかげでノッてきた。

「群馬は？」

「馬の群れ」

「県じゃねーよソレ」

「群れた馬！」

「変わってねーし」

きっと馬刺しとか美味しい県なんだろうなぁ。

「じゃー奈良で発達しているのは？」

「おなら」

「どうなってんだよ奈良！？」

「そりゃもーブーブーと」

「奈良県民に謝れ」

「ごめんなさいブー」

「謝ってねーし」

心の中では本当に謝ってるよ？

「高知でよく売られているものは？」

「坂本竜馬」

「誰も買わねーよ」

今の日本には必要かもしれないよ。

「鹿児島県でよく売られているものは？」

「西郷隆盛」

「いらねーってば」

「じゃ最後の隆盛」

「売り切れ寸前か！？」

そりゃ売れるよ。きっと日本は求めてるよ、そういう人をたくさん。

「新潟は？」

「書けない」

「聞いてねぇよ」

だってそうじゃん？　なにあの字。

「兵庫は？」

「せまい日本　そんなに急いで　どこに行く」

「カカさんや　それは標語　違いだぜ」

「おっとっと　こいつは失敗　恥ずかしい」

楽しいな　社会で遊ぶの　楽しいな。

と、ここでキーンコーンカーンコーンとチャイムが鳴った。

「よし！　みんな、わかったか！？」

『な　に　が　！？』

ごもっとも　ああごもっとも　ごもっとも。

おそまつ。

## カカの天下５６４「社会の授業、都道府県」（後書き）

ひっさびさの授業シリーズでーす。

えーと、いろんな県民さん。勝手なことばっか言ってすいません。特に奈良県民さん。変なとこ発達させてすいません。謝ります。変な子供の戯言と思ってお許しを！

## カカの天下５６５「そそっかしい私」

こんにちは、インドことノゾミです。

えっと、夏休みが終わるまでにタケダ君にお礼を言う、って決めてたんですけど……もういつの間にか二学期、結局言えてません…悲しくて私はカレーばかり食べてしまいます。いつもですけど。

でもでも、このままじゃいけないと思っているんです！

こういうのは時間が経てば経つほど言いにくくなるもの！　一刻も早くタケダ君にこの想いを伝えなければ！

でもでも恥ずかしい……そんなわけで、メル友のメルちゃんに相談してみました。

『直接言うのが恥ずかしいなら、手紙でも書いて渡しちゃえば？メールでこんだけいっぱい喋れるなら書けるっしょ。あとは渡せばいいんだから』

『なるほど、ありがとうメルちゃん！！』

『どういたましてー』

そんなわけで、手紙を書くことになったのです。今、自分の部屋で一生懸命書いてます。

「えと……えと……まずは……」

頭から変な文にならないように気をつけて、タケダ様、と。

「つぎは……何か、普通の話題……」

夏は漫才など、いろんなことでお世話になりました、かな。

「つぎ……」

ところでちょっと今更になっちゃったんですが、お礼を申し上げます……かたいかな。

「つぎ……」

あのときは、ひどいことに……違うかな。メチャクチャに……うーん……あ、怖かったところを助けてもらってありがとうございました。うん、いい感じ。

「つ……ぎぃ……？」

あと、なんて書こう。

んーと、んーと。

好きです。

無理！！

「むー！！」

なんだか顔が熱くなって無意味にバシバシ机を叩く。

そんなわけないでしょ！

いやあるけど！

そんなの書けるわけないよぅ！

うー、うー、あ、でもやっぱりこれくらいでいいのかな。うん、このくらいにしとこう。言いたいことは直接言えばいいんだし。

よし、封筒に入れて、完成！

明日、学校でタケダ君を呼び出して……渡しちゃおう。

大丈夫。

渡すだけなら、できる！！

そして、翌日。

昼休みにタケダ君を屋上に連れてきました。

「どうしたノゾミ君。このようなところに呼び出されると、何やら期待してしまうぞ」

はっはっは、と冗談交じりに笑うタケダ君。

でもこっちは笑えない。わ、わわ、私にとってはまさにその“何

やら”みたいなものなんだから！　“何やら”がなんなのかは厳密にはわからないけど！　少なくともカレーの具になるようなものじゃない。

「こ、これ！」

余計な言葉は口にしない。緊張して言えないだけだけど、とにかく渡す。

「ふむ？」

受け取ったのを確認してすぐに後ろを向く。恥ずかしくてタケダ君の顔を見れない。

「もしやラブレターとか？　まさかなぁ」

違います、けど、それと同じくらいに気持ちを込めた手紙です。

私は口ベタだけど、ちゃんと書いたつもり。何度も何度も見直したもの。ほら、ちゃんと書いてある。タケダ様へ。夏は漫才などいろんなことにお世話になりました――ほら、今読み返してもおかしなとこなんて一つもない！

おかしなとこなんて……

おかしな、とこ。

なんで私が、タケダ君に渡したはずの手紙持ってるの？

おかしくない？

おそるおそる、タケダ君の方へ振り向く。

タケダ君は封筒を開けていた。

そして、中身を読んでいた。

「なになに、『タケダ　頭　変』……だ、と？」

下書き用のメモを間違えて入れちゃったぁぁぁぁぁぁぁぁ！！

なんで私っていっつも何かミスするのー！？　はぅぅ、内容とか気をつけることとか思いついたことを断片的に書いたはずだけど、あ、あとなんて書いたっけ。

「『漫才　今更だけど　ひどい　メチャクチャ』とは……や、やはり漫才のときのことは許してくれていなかったのだな……」

あぁーうぅー！　前の打ち上げのときのこと、まだ引きずってる！

「『怖かった』とは……そうか、それほど会場に立つのが怖かったんだな。そしてそこから逃げ出した俺が憎いと」

なんでそんなストーリーが組みあがるのー？　って私が漫才のときに「タケダ君が憎い」って言っちゃったから？　なんでそんなこと言ったの私ぃ！

「む？　『好きです』だと！？」

それも書いちゃったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！

「……『そんなわけないでしょ』とな！？」

それまで書いちゃったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！

「くっ、俺が少しでも『ラブレターか？』などという妄想を抱くことを予想していたのかっ。な、なんたるダメージだ……！」

そうじゃないのにぃ。

でも完璧に勘違いされてるしぃ。

誤魔化しようがないしぃ。

でも、でも何か言わないと！

「あ、あ……あの！　ち、違うんです」

「いや、慰めはいい。内気なノゾミ君のことだ、言えない本当の気持ちを手紙にしようとしたのだろう？」

そうなんだけどそうじゃなくて！

「そ、その、それ、実は嘘なんです！」

「慰めはいい」

「い、いいえ。本当です！　嘘です！」

「どっちだ」

「本当に嘘なんです。えっと……ちゃんと手紙にも書いてあります」

「む？　どこだ」

「えっと、えっと、白いところに白い字で！」

「詐欺の誓約書みたいだな」

「ちゃ、ちゃんと書いたんです！」

「この便箋ピンクだが」

「ままま間違えました！　ピンクなとこでピンクな字でピンクなことを」

「どんなことだ!?」

「ちち、違うの、だからそんなに興味津々にしないで」

「いやいやいや別に興味あるわけではないが！」

いつの間にやら私もタケダ君も困惑して意味不明なことを喋っていたのだけど……やがてタケダ君が深々と頭を下げてきました。

「何はともあれ、悪かった。男タケダ、不快な気持ちにさせた責任は取ろう。なんでも言ってくれ」

え……？　ど、どうしようどうしよう。何を言えばいいんだろう。

付き合ってください？　だからそんなこと言えるなら苦労しないってば！

「そ、その……」

「うむ、なんだ！」

だ、だめ。思いつかない。

「か、必ず出しますから、もうちょっと待ってください」

「夏休みの宿題でもあるまいに……いや、わかった。いくらでも待とう！」

その後、私は逃げるようにタケダ君と別れました。

はぁ……なんで私ってこう鈍くさいんだろう。

カレー食べて元気だそう……

はぁ……

なんで入れ間違えるかな、この手紙……

この、手紙？

「これ……そのまま渡せば済んだ話じゃ？」

私のばかぁぁぁぁぁぁ！！

## カカの天下５６５「そそっかしい私」（後書き）

二学期入ったし、一回書いておかないとと思っていたインドちゃん話です。
で、書いてみたら……なんとも言い難い話になりました笑　なんか間抜けな雰囲気というか……ポケポケしたＢＧＭが似合いそうというか……ま、いっか。

それはそうと昨日の話ですが、一つ謝罪する点が。　読者様にご指摘いただいたのですが、「いばらぎ」じゃなくて「いばらき」だそうです。普通に勘違いしていました……お恥ずかしい。
でもすいません。
「いばらぎ」のほうが痛そうなので、このままでもいいですかね笑　なんか作者の勝手なイメージなんですが。
んー、でも間違った言葉をそのままにしておくのも……何か考えて編集とかしてみますかね。

# カカの天下５６６「サユカの任務、分泌？」

こんにちは、サユカですっ！

学校ではいつもの給食が出て、わたしたち仲良し三人組は机をくっつけて一緒に食べているのですが……

栄養バランスに定評がある給食。しかし足りないものがあったのです。それは……

「トメ分がたりないわ」

それを聞いたカカすけとサエすけが顔をあげました。

「「ぐっちゃむっしゃくっちゃ」」

「口の中のもの飲み込んでから喋りなさいっ！！」

「ごっくんちょ。なにそのトメ分って」

「トメさんと会うと分泌される成分よ。それが切れたら死ぬのっ」

「サユカちゃん、なんかキモチワルイよー？」

「うっさいわっ！」

体内にそれがなくなったら死ぬのよっ！？　笑い事じゃないんだからっ！

「サユカン、あれ見て」
「あれって……窓ガラスしかないけど？」
「とーめー」
「ダジャレじゃないの！」
「サユカちゃーん、これ見てー」
「なによ、それ。ただのトマトじゃない」
「トメィトォ」
「無理があるわよっ！」
まったくもう、馬鹿にして！
「カカちゃ、カカちゃ」
「んー？」
「いかにゃいでぇー！」
いきなり何が始まった？　カカすけもポカンとして……あれ、頷いた。
「行かねばならぬ、行かねばならぬのじゃー！」
「いやー！　私を置いてかにゃいで、そばにいてにゃー」

「とめてくれるな、おっかさん！」

とめて↓トメて。

「わかりにくいわっ！！」

「抜群のチームワークだねサエちゃん」

「んーいぇーい。キモい成分出たかにゃー？」

「キモいって言うなって！　あとなんでサエすけにゃんにゃん言ってるのっ！」

「可愛いっしょー」

「可愛いよサエちゃん！」

「にゃっはっはっはー」

むぅ……この二人は……！

「真剣に聞いてよっ」

「だって……ねぇ。トメブンってなに？」

「カナブンの仲間じゃないかなー」

「親分と子分の仲間かもよ。はは」

「あははー」

「鼻で笑うなっ！　要するに最近トメさんにずっと会ってなくて寂しいのよっ！」

「かといってトメ分を分泌とかはさすがに無いっしょ」

「なによカカすけっ！　君だっていつだったかサエチンがどうとか言ってたくせに！」

「は？　何言ってるのサユカン。そんなん知らないよ」

ぐぐ……この子はまた都合のいいことを……ってカカすけのことだから本当に忘れてる可能性高いけど……！　あのとき頭が病気っぽかったし……！

「とにかくとにかくっ！　トメさんに会えなくて寂しいのっ！　毎日枕を涙で濡らしてるのよっ！」

「なんでさ」

「売るんじゃないかなー。マニアに」

「売れるかぁっ！！」

「サエちゃん、何書いてるの？」

「んー……ほい、出来た」

なによそれ、張り紙？　えぇと。

『サユカちゃんの涙入り枕、大特価三万円で販売！！』

「高っ！！　誰も買わないわよこんなのっ」

「そっかー、じゃちゃんと説明を」

『舐めると少ししょっぱいです』

「舐められてたまるかぁっ！！」

「涙の味だよー」

「サエちゃん、涙じゃなくて汗も染み込んでるんじゃ」

「ちょ、まだ何書き足してるのっ」

『ちょっと臭いです』

「大きなお世話よ失礼ねっ！！」

『そういうのが好きな人向け』

「一体どこにそんなの好きな変態がいるのよっ！？」

「はいクラスのみんな、注目！　特に男子ども！！」

「これ、ほしいー？」

『……』

「なんでどいつもこいつも頬染めて顔を背けつつチラチラこっち見てるのよっ！？」

はぁ……はぁ……な、なんだかツッコミすぎて疲れたわ。

「あの、申し訳ありません、いいですか？」

あら、恐る恐る声をかけてきたのは……イチョウさん？

「なに、まさかほしいの！？」

「これは意外な買い手だねー」

「わたくし……ずっとずっと思ってましたの」

は！？　な、なにを？

「でも恥ずかしくて、言い出せなくて」

なぜなになんで何が！？

「どしたのイチョウさん。まさか……」

「しっ、カカちゃん。今いいとこだよー」

「でも、思い切って言おうと思います。言いたいことをいつまでも胸に秘めてそのままにしておくのって、よろしくないですよね！」

う、うん。それはそうだけど……わたしの枕ほしいの？　じゃつ

まり……えぇ！？

「では、言います」

ゴクリ、とわたしたちの喉がなった。

「給食、早く食べてください」

しばし無言の後。

コクリ、とわたしたちは頷いた。

そだよね。みんな食べ終わらないと片付けられないもんね。ごめんなさい。

うぅ、それにしてもトメさんに会いたいよぉ。仕事忙しいんだよねぇ。ううー。

## カカの天下５６６「サユカの任務、分泌？」（後書き）

はい、よくわからないタイトルと意味不明な任務でしたが（てか分泌することが任務ってなんや）細かいこと気にしてたら人生つまらないでっす。

久々にサユカちゃんをいじった気がします。これはこれで楽しいのですが、やっぱりサユカちゃんいじりは実際にトメを絡ませてこそだなーと思ったり。でも忙しいみたいなので……仕方ありませんな。

## カカの天下５６７「自由すぎ研究」

こんにちは、引き続きサユカよっ！

いまはお昼休み。みんなが提出した夏休みの自由研究が公開されたとのことなので、カカすけとサエすけと一緒に展示場所へ見物にきているわ。

「みんなやっぱり工作とか多いね」

「一番手堅いからねー」

「あら？　なんだかあそこ、騒がしいわねっ」

妙に人だかりができている一角があった。そこに行ってみると……一つのテレビを前にして、生徒がたくさん集まってる。そして爆笑しているわ。

「……ねぇ、カカすけサエすけ？　あれってまさか」

「私たちの展示物っぽいねー」

「あれま。テレビで流してくれるとは粋な計らいを」

わたしたちが提出した自由研究……それは夏祭りの漫才を収録したＤＶＤと台本だ。ちょっと恥ずかしかったけど楽しかった思い出だし、笑いの研究も立派な自由研究よねっ。

「あん？　なんだよてめぇら、こんなに集まって」

あらテンカ先生？　展示室に入ってきた瞬間に固まって……どうしたのかしら。

あ、ちょうどトメテン夫婦の漫才場面だわ。

「てめぇら全員、目を潰せ！！」

無茶いわないでよっ！

「うぁ、くそ、なんであのときの忌まわしき映像がこんなところで！」

「私たちの自由研究ですよー。提出したときに確認しなかったんですかー？」

「んな面倒なことするか！！」

オイ教師。

「だあぁ！　くそ、なんだこりゃ。カカサエサユカアヤイチョウインドニシカワ……てめぇら全員グルか！？」

だって全員で研究したもの。それにしても提出物にまでインドって書いたのねインドちゃん。あとなにげに一人抜かしたわよねテンカ先生。どうでもいいけど。

「俺もグルだ！」

あら、いたの。自己主張ご苦労様だわ。

「タケダ、てめぇあんなもん公開されて恥ずかしくないのか？」

「もちろん恥ずかしいとも！」

「だったらなぜ反対しなかった！？」

「俺にそんな権利があるわけなかろう！」

「それもそだな」

主張弱っ！　そりゃ名前からハズされるわ。

「お、インド！！　てめぇ内気のくせにこんな大胆なマネしていいのか！？」

「……もじもじ」

「ダメだ内気すぎて埒が明かねぇ」

いたのねインドちゃん。

「とにかく消せ！　今すぐ消せ！」

あーあ、電源切られちゃった。

「ふぅ……これでこの映像は誰にも見られな――」

「でも僕お祭りで直に見たけど、おもしろかったよテンカ先生！　だからもう一回見たいな」

くじけない生徒Ａがあらわれた！

「なっ！　貴様、その記憶を消せ！　なんならバット持ってこい！　オレがてめぇの記憶を――」

「あ。あたしも直で見たー」「おもしろかったよね」「笑った笑った」「テンカ先生が夫婦……ウケた」「お見合いって聞いたときもウケたけどな！」「しかも漫才だぜ？」「ちょっと緊張してたの、可愛かったよセーンセ！」

なんかいっぱい目撃証言者があらわれた！

「なんでてめぇらどいつもこいつも見てるんだ！？」

『だってお祭り行ったもの』

「そんなもん行くんじゃねぇ！！」

『いや、そんなこと言われても』

なんて息のあったクラスメイトたちだろう。いや、同じ反応したくなるくらいにテンカ先生が無茶を言ってるだけなんだけど。

「くっそ……おいカカども。今すぐこの自由研究を下げろ、別の研究を持って来い！」

また無茶をっ！　わたしは反論しようとした。

でもそのとき。それを遮ってカカすけが前に出た。

「テンカ先生。この自由研究を変更してほしくなかったら、私たちの言うことを聞いてもらうからね」

「は？　オレは変更してほしいんだが」

「いいの？」

「いいが」

「じゃーこの『お見合いを台無しにする一例』っていう論文をＤＶＤ付きで――」

「待てやコラァ！！　なんでそんなＤＶＤがあるんだ！？」

「サラさんが撮ってたらしいよ。なんかお笑い好きだからって」

「オレの見合いはコントかよ……」

似たようなもんだったじゃないの。

「どする？　せんせ」

「あー、わぁーったよ。何すりゃいいんだよ。できることとできねぇことと金ねぇことがあるぞ」

初めて聞く言い回しだわ。

「んとね、テンカ先生もうすぐ誕生日じゃん？」

「あん？　それがどした」

「祝わせろ！」

「……は？」

「テンカ先生そういうの嫌いらしいじゃん」

「そうだが」

「私たちは大好きなのさ！　だから誕生会させなさい！！」

おお、それは素晴らしい提案ねっ！

「……いや、いいけどさ。別に」

テンカ先生がしぶしぶ頷いた瞬間、カカすけとサエすけは大きくガッツポーズをとった。

「よし！　騒いで騒いで騒ぎまくるよサエちゃん！」

「うん！　それで最後に『全部この先生のせいですー』って言うのー！」

「それ最高！　先生のせい！」

「略してせんせいせいー！」

「せんせいせいせいせい！」

「せいせいせやー！」

おやまー、はしゃいじゃって。わたしも楽しみだからいいけどねっ！

と、そこへ。

「おい、サユカ」

「なんですか？」

真剣な顔をしたテンカ先生がこっそり話しかけてきた。はしゃいでるカカたちに聞こえないように。

なにかしら。こっそりあの二人殺せとか言うのかしら。

「あの二人、最近変わったことなかったか？」

違ったわ……って、はて？

「え、えっと、どうしてですかっ？」

「いや、あの二人。テンションがいつもと微妙に違うような気がする。表情も少し固いような……教師としてのカンだが」

「なんだか信憑性の薄いカンですね」

「野生のカンだ」

「それは信頼できますねっ」

「言うようになったじゃねぇか」

「いひゃい、いひゃい」

頬をひっはらはいひぇ。

「とりあえず気をつけてみな。これでも毎日ガキどもを見てんだ。あれは無理してる。何かをな」

うー、頬がひりひりする。でも、無理？　何のことかしら。

わからないわ、だってあの二人いつも変だものっ！

……でも。

言われて、みれば？

## カカの天下５６７「自由すぎ研究」（後書き）

最近、メッセージでいくつか「これってもしかして?」的な質問がありますが……全員に答えます。
読んでればもうすぐわかります。
そう、その答えは明日から始まる……

かも（おぃ

## カカの天下５６８「あなたの声が聞きたくて」

こんばんは、サエです。

時刻は夜中、私は自室の布団で寝転がりながら電話を待っています。

「まだかなー」

携帯片手に無意味にごろごろ。

「まだかなまだかなー」

ごろんごろん。

「まだかなまだかなまだなかだまなかだまなかなー」

そんな不思議な呪文が聞いたのか、ちょうどよく電話がかかってきましたー！

「もしもしー！」

『もしもしー！！』

「お母さーん！」

『サエー！』

「おかーさーん」

『サーエー』

「おっかさん！」

『サッエ！！』

「お、お、おかあさん！」

『サ、サ、サエサエ！！』

何をしているのかって？　仲のいい親子の挨拶に決まってるじゃないですかー。

「電話、待ってたよー」

『ごめんね、もっと早くかけたかったんだけど、さっき追われててー』

「大丈夫？」

『うん、全然大丈夫よー。お母さんね、存在感の無さには自信があるから隠れるのうまいのよー』

ホッと胸をなでおろす。詳しくは知らないけど、お母さんが私のお祖父ちゃんに抗議するために色々やっているらしいのは聞いていた。それが危険なことだとも……お母さんの声が聞きたかったのもあるけど、ずっと心配だったんだよねー。

『この前は……結局会えなくてごめんねー。せっかく約束したのに』

「んーん、いいよいいよー。だって私たちが一緒になるために必要なこと、なんだよねー？」

『そうなのー……でもね、その日に急いだおかげでね、無事にとある社長の不倫現場を撮影することができたんだよー！　不倫相手が世間にバラすとおもしろいことになりそうな人でね、すぐにマスコミに流すかどうしようか迷ってるんだけどー、会社を揺さぶるのに不倫だけじゃ弱いような気がするんだよねー』

「やっぱりそれをネタに社長さんを脅して、もっといろんな悪事を見つけたあとで全部流せばいいと思うよー」

『おおー！　さっすが私の娘だねー！』

「あったりめーよー」

『こりゃもー私たちが揃ったら最強間違いなしだねー！』

「うんうんー」

早く最強親子の名を知らしめたいとこだねー。

『お父さんは……あ、やっぱりいいや』

「いいのー？」

『うん、いい』

お父さんの話も聞きたかったんだけどなー。

『最近はどうー？　何かあった？』

「えっと……あ、そうそうー。カカちゃんが少し元気ないの」

『珍しいねー』

「ってあれ、カカちゃんの話ってしたっけ」

『あ、えっと……実はご近所さんだったり』

「えー！？」

『実を言うとね！　私、サエの近くでずっとあなたを見守っていたのー！』

「ええー！？　だって今まで一度も会ってないじゃん！」

『そりゃそうよー、今でこそ電話なんかしてるけど、本当は接点持ったらダメだったものー。バレたら終わりだったから……だから必死に隠れて見てたのよー？　存在感をゼロにして電柱になりすましたり街路樹に化けたりしてー』

「器用だねー」

『もちろん普通に影に隠れて追っかけたりもしたよー！』

「ストーカーだねー」

『サエくらい可愛いとストーカーくらい着いちゃうの！』

「わかるわかるー」

このふざけたやりとりがたのしー！

『大丈夫、全員私が消し炭にしといたからー』

「ってホントにいたのー！？」

『うん、五人ほど』

こ、こわぁ……お母さんありがとう！

『あ、ごめん。話を戻すね。カカちゃんの元気がないって？』

「うん、なんかトメお兄さんが忙しくて構ってくれないみたい」

『トメさんが？　へー、お仕事忙しい……の、か、な？』

あれ、どうしてどもったのかな。

『……ちょっと待ってねー』

ぺら、ぺら、と紙をめくる音が聞こえる。

『あ、やっぱり。ごめん、それ私のせいだー』

「どういうことー？」

『私、いくつか会社を潰したんだけどー、その分の仕事がトメさん

の会社にいってるみたいー』

あれま。世間って狭いねー。

『あ、あら、うわ、この仕事量はエグい……ちょっとなんとかしてみるねー』

「できるのー？」

『適当な会社に仕事が流れるようにいじってみるー』

やっぱり私のお母さんはすごい！　私も色々裏でできるように頑張らないとなー。

『んー、これを、こうすれば……たぶん一週間もすれば落ち着くようになると思うわ』

「よかったー」

あと一週間……トメお兄さん、潰れなきゃいいけど。

その後も私はお母さんと他愛もないことを話した。学校のこと。友達のこと。お母さんの仕事のこと。いろんなことを話して――やがて、寝なければいけない時間になった。

「……えっと、そろそろ寝るね、お母さん」

「……うん」

「おやすみー」

『うん、おやすみー』

「うん、おやすみー」

『おやすみー』

「おやすみー」

……終わらない。

「えっと、おやすむね？」

『うん、おやすめー』

「うん、おやすむ……」

休むよー？　休むからねー？

『……』

「お母さんから切ってよ」

『サエから切ってよー』

切れるわけない。

だって本当は、私はずっとお母さんの声を聞いていたいんだから。

お母さんがいなくなってから今までの分、ずっと聞いていたいの

に――それを、どうして自分から切れるだろう。

『もー、仕方ないなー。ここは大人な私が切ってあげますか』

「うんうん、そうしてー」

『……やっぱ一緒に切ろ』

「むー、いくじなしー」

『育児はこれからするんだよー。私、うまいこといった？』

「はいはい、育児してもらうの待ってるからねー」

『おーよ！　じゃ……せーの、で切るね』

「うん……」

『せーの！』

私は、切れなかった。

無機質な電子音だけが耳に残る。

私はお母さんみたいに大人になれない。会いたい。寂しい。寂しくて……ベッドの上をごろごろごろ。

「はぁ……お母さん。会いたいな」

思わず口に出しながら、

「会いたいなったら会いたいなー！！」

どっすんどっすんベッドで跳ねてみた。

何やってんだろ、私。

でもまー、子供だからいっか。

子供は寂しがりやなもんですよ、独りだとこんなこともしちゃうのですよ、どっすんどっすん。

そういえばお母さんも寂しい寂しい言ってたけど……まさかこんなことはしてないよね？　どっすんどっすん！

「お母さん、かむひあ！！」

そのころのサカイさん。

「さぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！　かむひあ！！」

どっすんどころかどっかんどっかん跳ねている、大人なはずのお母さんでしたとさ。

## カカの天下５６８「あなたの声が聞きたくて」（後書き）

ぴー、ぴー。
路線変更警告発令。

次回からしばらく……ジャンルが変わるやも？

**カカの天下５６９「あなたの心を傷つけて」**

こんばんは、トメです……

なんか、元気なくてすいません。いつもならとうに夕飯も終わっているだろう時刻、ようやく仕事から帰宅しながら缶ビールを煽っているところです。

「……っくは」

うまい、はずのビールが苦いとしか思えない。

ぼんやり歩きながら飲み続け……ふと川に差し掛かる。橋の上から水面を見つめてため息をついた。

「はぁ……」

今日の仕事は大失敗だった。

まるで新人のような確認ミス、それによって増えた大量の仕事、嫌になるほど上司からの叱責……あの会社に勤めて結構になるが、いや、だからこそこんな失態をしてしまうと、ものすごく凹んでしまう。

「はぁ……」

何度目になるかわからないため息をつき、一気にビールを飲み干す。

「……仕事しすぎで疲れたってのも、あるんだけどさ」

どうしようもない愚痴を言いつつ、近くにあった自販機横のゴミ箱に缶を投げ捨てる。

……もうすぐ家だ。ここに来るまでに何本空けたことやら。

「ま、たまにはいいだろ」

人間、ずっと穏やかでなんてそうそういられないのだ。凹むときは凹む。幸いカカには携帯で『遅くなるから何か飯食っとけ』と伝えてある。今日はこのまま寝てしまおう。

そんなことを考えながらのろのろと家まで歩く。あー、さすがに何も食べずにこんだけ飲むと酔いが回る……

「ただいま」

我ながら気の抜けた声だ。思わず苦笑する。

「あ、おかえり！」

「おー」

相変わらず元気だなこいつは……

「む、ちょっと待った！」

「……なに」

そのまま自分の部屋に直行しようとしたところでカカに止められた。

「ホワイトボード！　ちゃんと見てよ」

「ああ」

そうだ、これ見るの日課だったよな。最近は大したこと書いてないから見落としてた。まったく面倒くさいな、えーと、どれどれ？

『ハラヘッタ』

でかでかと書かれたその文字、っておい。

「……食べとけって、言わなかったか？」

「ん、今日はインスタントの気分じゃないのだよ！」

いつもだったら、ただ呆れただけだろう。

「トメ兄の料理が食べたいの」

でも、今日の僕は。

「ん、どした？　あまりに可愛いこと言われて感動した？」

――イラつきしか覚えなかった。

「うざ」

「え」

「あのな、見てわからないか？　僕は今疲れてるんだよ。料理なんかやる気力ないの」

「えー！　私お腹空いてるのに」

「知らないよ、僕は寝る」

それだけ言って部屋に戻ろうとする。

でもカカはしつこく食い下がってきた。

「疲れてるんでしょ？　そんなときこそちゃんと食べないとー」

「今はとにかく眠いんだよ。僕のことは放っておいて、自分で作って自分で食べな」

「ふむ、仕方ないね。じゃー私が世にも素晴らしいカップ麺を二つ作ってしんぜよう！」

「二つも食うと太るぞ」

「トメ兄も食べるんだよ」

「勝手に決めるな」

「まま、そう言わず――」

「うるさいって言ってるだろ！！」

イラだちは最高点に。

「疲れてるって言わなかったか？」

「え、だから、私が作るって」

疲れも酔いも、合わさって。

「料理するよりも何よりも、おまえといるほうが疲れるんだよ！」

――そんな、心にもないことを言ってしまった。

「そう毎日毎日おまえに付き合ってられるか」

「とめ、に……」

「いちいちうるさいんだよ。疲れてるときくらい休ませろよ。どっか行ってろよ」

心にもないこと？　いいや違う。そのときの僕にとっては紛れも無く本音だった。

心の隅にあった言葉が表に出てきてしまった。

いつもの冗談じゃない。それを感じとったのか……言いたいことを吐き捨てて自室へ戻ろうとする僕の背後から、震えるようなカカの言葉が返ってきた。

「……わかったよ、じゃあ、どっかに行ってるよ！！」

「ああ、行け行け。清々する」

「……！」

何を言ったか知らないが、カカはそのまま家を飛び出した。

ああ、すっきりした。

部屋に入ってそのままベッドにダイブする。

まったく、カカにも困ったものだ。

どれだけの間、一緒にいたっていうんだ。

僕がイライラしてることくらい見ればわかるだろう。

まったく……

そう。

見れば、わかるだろう？

ああ、わかる。

ずっと一緒にいたんだ。

カカは、夕飯を僕と一緒に食べたかっただけだ。だから待っていた。そして僕が疲れているのに気づいて、元気づけようとしてくれた。

それくらいわかるだろう。

おいトメ。

おまえは何をしている？

「何やってんだ、僕は……」

泣きそうになる。なぜあのようなことを言ってしまったのか。ちょっと冷静になればわかるのに、どうしてあのときは。

……簡単な話だ。疲れてるとか酔ってるとか、そういうのを言い訳にして、何も考えようとしなかったのだ。だから勢いに任せてあんなことを言ってしまった。

ただの八つ当たり。

子供相手に！

妹相手に！

僕は……最低だ。

「や、落ち込んでる場合じゃない、か。携帯……」

のろのろと携帯を取り出す。重いのは身体か心か……

多分、両方だ。

「えと……」

幸い、カカの行動パターンは予想がつく。

「あ、もしもしサユカちゃん？　ああ、うん。実はちょっと困ったことがあってね、恥ずかしながら、その」

大方サエちゃんかサユカちゃんのところへ転がり込むつもりだろう。家出したとか言いながら……そしてこちらから頼むまでもなくあの二人は受け入れてくれるとは思うが、迷惑をかける以上、僕が迎えにいくまでカカをお願いしなければならない。

「……だから、そしたら連絡くれるかな？　本人には内緒で……あ、うん。大丈夫、それは僕が、自分で言うから……はは、ごめんね。じゃ、よろしく」

まいった。励まされてしまった。情けなくてまた泣きたくなる。

でも、仕方ないよな。

僕は人間だ。大人になったからって、何もかもうまくできるわけじゃない。ヤケにもなる。だけど、失敗したなら、ちゃんと自分で責任を取らないと。

今回は、僕だけが悪い。

「はぁ……仕事の失敗よりキツイな、こりゃ」

今日は厄日だ。自業自得なんだけどな、くそ……

なんて謝ろうか。

悩む。

とりあえず――ちょっと泣いてスッキリするか。

誰もいない、今のうちに。

## カカの天下５６９「あなたの心を傷つけて」（後書き）

人間、誰しも心の闇にとらわれるときがあります。いかにカカ天の世界が平和、和やかなものとはいえ、彼、彼女たちが生きる中でそういう“人間らしさ”を完全に無視したくないという私の想いはこれまでの話からもわかっていただけると思います。

続きます。

そう、もう少し長く。

## カカの天下５７０「あなたを想い」

こんばんは、サユカですっ！　そ、そのっ！

「か、カカちゃーん？」

「カカすけ、おーい」

返ってくるのはズゥゥゥゥゥン……という重たすぎる空気のみっ！！　ちょ、えっと、なんだか大ピンチですっ！！

トメさんから連絡があった後。サエすけに連絡を取ってみたら案の定カカすけが家に来たらしく、急いでわたしも駆けつけたのですが……よ、予想以上に事態は深刻みたいですっ！

「トメ兄に……どっか行けって言われたの……」

「そ、そうなんだー」

「どっかって、どこ？　ドッカって国があるの？　それともドッ科？　ドッを研究する科？　ドッて何？　言いにくい」

「か、カカすけ？」

「もしかしてドッ化？　ドッに変化すればいいの？　だからドッって言いにくいんだってば」

「カカちゃん、気をしっかりー！」

「あ、ドッ蚊？　最近蚊に刺されたんだよ……蚊に刺されたとカニに刺されたって似てるよね……カニ食べたいなぁ……ドッカニないかなぁ……」

ダメだわ。何がどうダメなのかさっぱりわからないけど、とにかくダメだわ！

「えと、カカちゃん？　トメお兄さんが何を言ったかわからないけど、きっと嘘だよ」

「あれ嘘じゃないもん。トメ兄本気だったもん」

「そんなわけないじゃないのっ！　トメ兄さんってカカすけのこと大好きなのよっ！？　なんか見てて通報したくなるくらいにっ！」

「大好きならあんなこと言わないもん」

「で、でもほらー、人間って魔が差したりするしー」

「まがさしって何。ものさしの親戚？　知らないよそんな人」

あーもうほんとダメだわ。会話が通じないっ。

サエすけの枕に顔を押し付けて黙り込むカカすけ。わたしはため息をつきながらサエすけに手招きをして、部屋から廊下へ出る。

「……どうすればいいのかしらね、あれ」

「うん……何言っても聞いてくれないんだよー。とりあえずうちに来たときは泣いてたんだけどね」

「え、あのカカすけがっ？」

よほどショックだったのね……カカすけのそんなシーン、数えるほどしか見たことないし……いや、そもそも。トメさんと本気でケンカするところなんて初めて見たものね。

「私の胸でさんざん泣いたあと、今みたいに私の枕に顔を押し付けて……しばらくしたら立ち直ったかと思えばあんな感じー」

あんな感じ……ね。

部屋の中を見る。いまだにサエすけの枕に顔を押し付けているカカすけ。なんかやたらスーハースーハーしてるのは気のせいかしら。まさかあれで元気になるの？

「私たちの言葉が届かないとなるとー、トメお兄さんになんとかしてもらうしかないねー。元はといえば元凶だし」

「そういう言い方やめてよっ！　きっとトメさんも何かあったのよ。じゃなきゃ、こんな……」

「……そうだよねー、ごめん。トメお兄さん、大人だもんね」

そうよ、大人なのよあの人は。わたしはそこが好きなんだからっ！

だから、なんとかしてよ、トメさん。今回はわたしたちじゃ、全然――

「あ、チャイム？」

「きっとトメさんよっ！　サエすけ、カカすけを連れてくわよ」

「う、うんー」

枕に張り付いているカカすけを無理やり引っぺがし、両脇を二人で抱えて連行するように玄関へと引きずっていく。

その間、カカすけ無言。なんか怖い。

そしてわたしもサエすけもなんとなく喋る気になれず、玄関までたどり着く、と。

「……え」

返事が無いただのしかばねだったカカすけが、目を見開いた。

わたしもぽかんと口を開けて驚いた。だって、そこにいたのは――

「あらあら、ずいぶんな顔ね。カカ君」

「おかあ、さん？」

今、仕事でとてつもなく忙しいはずの、ユイナさんだった。

「なん、で……？」

なんでこんなとこにいるのか、と聞きたいんだろう。そのカカすけの意図はしっかりと伝わって、

「なんでって、決まってるじゃないの。自分の子が泣いてるのを放っておけますか」

当然のことのように、あっさりと。すごいことを、この人は言った。

「パパ君が文字通り飛んできてね、教えてくれたの。カカ君の一大事だってね。だから、ここまで抱っこして運んでもらっちゃった」

抱っこして運んでって……県越えてないっ！？　に、忍者ってすごいわ。

「あ、あのね、私、トメ兄と」

「うん、話は聞いたよ」

……あ。

ふわりとカカすけを抱きしめるユイナさん。

「ね、カカ君。トメ君はなんて言ったのかな」

「私といると……疲れるって。だからどっかいけって」

「それ、本当だと思う？」

「思う。だってトメ兄、本気だった」

「カカ君が思うなら、きっとそうだね」

びくり、とカカすけの肩が震える。ちょっと、そんな言い方――
そう口を開こうとしたけど、ユイナさんの「でもね」という言葉で思い留まった。

「人ってね、いろんなことを想って生きてるの。あの人といると楽しい、でも疲れる。そう想うのは不思議じゃないんだよ」

「え……だって、意味、逆」

「うん、だから言ったでしょ。いろんなこと、って。例えばカカ君、走るの好き？」

「うん。速く走ると、風、気持ちいいし」

「じゃあさ、ずっとずーっと走ってたら？」

「……疲れる」

「嫌にならない？」

「……なると、思う」

「じゃあ、それで走るのを嫌いになる？」

「……ならない」

「でしょ？　トメ君もおんなじなんだよ。いろんなことを想ってて、たまたま嫌な想いが表に出てきただけ。カカ君を嫌いにはなってないよ」

「……ほんとに？」

「うん。人ってね、感情の生き物だから。その人の９９％が好きで１％が不満なだけだったとしても、その不満を言ってしまうことがあるの。その人がすごく好きなのに、そのときの勢いだけで『嫌い』を言っちゃうことがある。それがきっかけで疎遠になる人も多いわ」

「……そんな」

「人はどんな想いも持ってるの。でも大事なのは根っこの部分。お互いの根っこさえちゃんと好きなら大丈夫。だけどね、もしケンカをしたら、時間を置いてからちゃんと確認しないといけない。相手と自分の根っこの気持ちは変わっていないのか」

「……怖い」

「うん、怖いね。でもね、大切な人と勘違いしたまま仲直りできないほうが怖くないかな？」

ユイナさんが振り向く。

「確認してみよう？　そうすればいつの間にか仲直りできてるから」

カカすけもそっちを見る。

「……トメ、兄」

「カカ、その……」

ユイナさんが、そっとカカすけの背中を押す。

「……トメ兄は、私のこと、嫌い？」

「……そんなわけあるか、馬鹿」

わたしは胸をなでおろす。

どうやらこの兄妹喧嘩は無事に解決するようね。さすがはカカすけとトメさんのお母さんだわ……クセのある子供を持つと人格者になるのかしら。

「ううううううぅぅ」

「あー、僕が悪かったよ。鼻水拭け」

ともかく。本気で慌ててる可愛いトメさんも見れたし、カカすけもトメさんに抱きついて泣いてるし。

「ごめんな、母さん。こんな子供みたいなことで呼び出して」

「なに言ってるのトメ君。君だってずーっと、私の子供なんだからね」

「……仰る通りで」

これにて一件落着ね！

あれ？

隣にいたはずのサエすけが、いつの間にかいない。どうしたんだろう。

カカすけたちと別れたわたしはサエすけの部屋の前へと戻った。

ノックしてみると、すぐに返事が。

「……カカちゃん、仲直りできたー？」

「ええ、ちゃんとね。なによ、見てなかったのっ！？」

「そっかー……」

「あ、わかった。自分がカカすけを立ち直らせてあげられなかったから、ガッカリしてるんでしょっ！」

「……ん、そんなとこー」

「さすがのわたしたちも大人には敵わないわねっ！　さて、それじゃわたしは帰――」

唐突に扉が開いた。

「サユカちゃん。もう遅いし、泊まっていけばー？」

「へっ？　う、うん」

それはいいんだけど、なぜだろう。

サエすけが、なんだか――泣いていたように見えた。

## カカの天下５７０「あなたを想い」（後書き）

……終わりではありません。

続きます。

# カカの天下571「あなたは泣いて」

こんにちは、サエです。

いま、踏んでます。

「ああ、もっと！　もっと踏んでぇ！！」

私が足蹴にしているのはゆーたです。いきなり驚かせてしまいましたかー？

「ここ？　ここがいいのー？」

「うあぁぁ！　いい、いいです！！」

ただいま学校の昼休み中。用務員室を訪れた私はゆーたを踏んであげることにしました。なんか喜ぶから。

「ほら、もっと無様に叫びなさい」

「うおぉおぉおぉおぉ！」

「ゆーた、うるさい」

「失礼。楽しくてつい。あと本当に気持ちいいもんで」

「花壇の仕事って、しゃがんでばっかだしねー」

「ええ、すぐに腰を痛めるのですよ」

そんなわけで。私はうつ伏せに寝そべったゆーたの腰の上に乗っかってぐいぐい踏んであげてるんだけど。マッサージねー。

なんだと思った？

「おらおらおらー」

「あぁあぁあぁ、そんな強くぅぅ！」

結構楽しい。なんかいい気分だし。

「ほら、もっと叫びなさいー」

「はい！　私は犬でございます！　卑しき犬でございます！」

「犬は言葉なんか喋らないよー？」

「わん！　わん！　きゃいんきゃいん！」

そんな遊びをしばらく続けて。

「ふー。すっきりした」

「いや、私もなんとも清々しい気分になりました。ありがとうございますサエ様」

「こっちこそー」

「ところで」

……あれ。

ゆーた、なんか急に真剣な顔になった？

「何か、ありましたか？」

「いやー、何もないよー。なんとなく来ただけー」

「そう、ですか」

「うんうん。じゃ、お仕事がんばってねー」

そそくさと逃げ出す私。

さすがは大人、なかなか侮れないねー。何かあったかと言われれば……たぶん、あったんだと思う。

自分の気持ちがよくわからない。ただ、なんとなく。カカちゃんたちと一緒にいたくなかった――

「サエちゃん！」

それなのに。

「サエすけっ！　もう、探したわよ」

顔を合わせてしまった。すっきりしたはずの胸がちくりと痛む。

「どこいってたの？」

「んー、ちょっと用があって用務員室に」

「いつの間にかいなくなってたと思ってたけど、そんなこと行ってたのねっ」

「サエちゃん」

カカちゃんが私をじっと見つめてきた。

なぜだろう。

怖い。

「サエちゃん、昨日はありがとう」

「……ん」

怖い。

「なんだか恥ずかしくて、なかなか言い出せなかったんだけど……昨日は迷惑かけてごめんね」

怖い。

「でも嬉しかった。やっぱり持つべきものは友達だよね！　私がトメ兄と仲直りできたのもサエちゃんのおかげだよ！」

怖い。

「本当にありがとう！」

怖い、けど、答えないと。

「……あ」

ほら、ちゃんと答えて。

「……うん、気にしないでいいよー。友達だもん」

「ま、わたしたちはあまり何もできなかったけどねっ！　ユイナさんに手柄を取られた感じっ！」

ふざけて不貞腐れたように言うサユカちゃんの言葉に、

「いやいや、お母さんだけじゃないよ。本当に皆のおかげだよ」

「またまた。わたしたちの言葉には耳も貸さなかったくせに」

「あ、あれも甘えの一種と思ってよぅ。そりゃ、お母さんは――」

その、

言葉に、

「……よね」

「え？　サエちゃん、なに」

「カカちゃんはいいよね。そうやって、すぐにお母さんに会えて」

耐え切れ、なかった。

場が、凍る。

「さ、サエすけ……？」

「仕事が忙しいのに駆けつけてくれた？　ただ兄妹喧嘩しただけなのに？」

止まらない。

「なにそれ。私なんて、最近ようやく声が聞けるようになったっていうのに」

止まらない。

「さ、サエちゃ――」

「知ってた？　カカちゃん。私ね、お父さんともお母さんともずっと会ってないの。私が今いる家の人たちは、本当の親じゃないの」

そんなことを言っても仕方ないのに。

「本当のお父さんもお母さんもいなくて、寂しくて、いつもいつも我慢してるのに――なんでカカちゃんはいつもそうやって私に見せ

つけるの？　なんでいつもそんなに幸せそうに笑うの？」

そんなことを言いたくないのに。

「お父さんもいて、お母さんもいて、それが当然で――私だって、そんな家に生まれたかった！！」

それは紛れもない、私の本心だった。

「カカちゃんを見てるとイライラするの……」

お父さんもお母さんもいない私が、ひどくみじめに思えてきて。

「お父さんもいて、お母さんもいて、お兄さんもお姉さんもいてよかったね？」

私が、ひどく孤独に思えてきて。

「私は……私は……！！」

もう、言葉が出ない。

でもすでに充分すぎるほどの言葉をぶつけてしまった。カカちゃんに言うのは筋違いなこと。でも言わずにはいられなかった。その気持ちは確かに私の中で生まれたものだったから。

そんな気持ちが嫌で蓋をして、ずっとずっと閉じ込めてきたのに……溢れてしまったのだ。

「カカちゃんなんか大嫌い」

なんて嫌な子なんだろう、私。

「カカちゃんなんか――」

もう、何を言ってるのか自分でもわからない。

悲しくて、悔しくて、情けなくて……涙で視界も心も歪んで、何も見えない。

ただ、映るのは……薄らと見える、カカちゃんの悲しい顔。

でも激情にかられた私は、なお汚い言葉をぶつけようとする。

なんて嫌な子。

なんて悪い子。

だから叱ってよ。誰か叱って。お父さんでもお母さんでもいいからさ、カカちゃんのお母さんみたいに駆けつけて、私を叱ってよ。お願いだから、ねぇ、私、ちゃんと謝るからさ……

そんな声は、届かない。

都合よく誰かが駆けつけて抱きしめてくれるなんて、そんなことはありえない。

そう、思っていたのに。

「まったくもう」

ふわりと、後ろから私を抱きしめてくれた人がいた。

それは、お父さんでもお母さんでもなく。

「いつだったか『私たちを家族と思えー』なんて言ってくれたのは、どこのどいつだったかしら？」

……サユカちゃんだった。

「カカすけ」

「……ん」

カカちゃんの声に身体が強張る。あれだけひどいことを言ったのだ。絶対に嫌われて――え？

「うりゃ」

今度は前から、カカちゃんに抱きしめられた。

「え？　え？」

わけが、わからない。私は、私はあんなにひどいことを――

「サエすけさ、昨日いつの間にかいなくなってたでしょ。だからユイナさんのお話聞いてなかったんだね」

「お話……？」

「ええ。人ってね、色んな感情を持ってるの。だからね、いくら仲のいい相手にも、どんなに好きな相手にも、嫌いだって言っちゃうこともあるんだって。でも大事なのは根っこの部分なの」

「根っこ……」

「ほら、カカすけ」

「うん」

涙で滲む目をごしごしと擦り、カカちゃんの瞳を見つめる。

「私ね、今ね、すごく悲しい」

カカちゃんの瞳も潤んでた。

「なんでこんなこと言われなきゃならないんだろうって、腹も立ってる」

その言葉とは裏腹に、声は震えていて。

「こっちこそサエちゃんなんか嫌いだって、叫びたい」

でも、しっかりと私を見据えて、

「でもね、私はサエちゃんが好き。その根っこだけは変わらないの」

はっきりと、そう言った。

「サエちゃんの根っこは、どう？」

でも、泣きそうな声で、

「私を本当に嫌いになっちゃった……？」

震える声で、

「お願い」

震える身体で、

「私を嫌いにならないで」

私を抱きしめてくれた親友の姿に、私の涙腺は耐えられなかった。

恥も外聞もなく、赤ん坊のように全力で泣いた。

泣きながら、カカちゃんとサユカちゃんにすがりつきながら叫んだ。

嫌いになるわけない。

なれるわけない。

こんな優しい親友を、こんなに温かく包んでくれる家族を、どうして嫌いになんかなれるだろう？

そうだ、私には家族がいる。

こんなに温かい家族が。

カカちゃんが羨ましい？　お父さんお母さんがいる他の家庭が羨ましい？　なんて愚かな考えだったんだろう。それにも勝る大事なものを、私はもう手にしていたというのに。

そうだ、あの夏祭りの晩に自分で言ったじゃないか。

私はもう、幸せ。

そしてさらに幸せになるために、お母さんを待つのだと。

――泣きながら抱き合う三人の少女の姿を、遠くから見守る影があった。

「ふむ。なにやらサエ様が寂しそうに見えたので、ここは母親の出番だろう！　と思い連絡したのですが……少々遅かったようですな。いや、電話してからここに来るまでめっさ速かったですが」

「……そうねー。慰め役、とられちゃった」

「いやはや、申し訳ない。このままだと無駄足になるとこですが、会ってゆかれますか？」

「いいえ。でも、呼んでくれてありがとう。おかげで腹は決まったわー」

影の一つは携帯を取り出した。

「――あ、もしもしカツコちゃん？　うん」

その影の眼は真っ直ぐに。

母を、自分を呼びながら泣きじゃくる、愛しき娘に向けられて。

「明日やらかすから」

さらにその奥――

「手伝い、お願い」

未来へと向けられていた。

## カカの天下571「あなたは泣いて」（後書き）

サエ&サカイ編、本編。
まいります。

## カカの天下572「あなたは真実を知り」

こんにちはー、サカイですー。

本日はお日柄もよく――絶好の襲撃日和です。

「やっほ、サカイちゃん」

「カツコちゃん。今日はお願いね」

「任されよ。あ、テンちゃんから伝言。『グッドラック！』だとさ」

「男らしいねー」

「一緒に行けないの、残念がってたよ」

「仕方ないよー。教師さんはそう簡単に休みなんか取れないし。それに今回は……二人のほうがやりやすいと思うし」

「ふーん？　ま、あたしはサカイちゃんに従うだけだし。なんかあったら遠慮なく言って」

「ありがとー。じゃ……行こっか」

視線を動かす。私達が攻めるべき城へと。

――城というのは微塵も大げさじゃない。日本トップの化け物企業、その会長が住まう屋敷なのだ。大仰の門が見えるが、それをくぐったとしてもまだ屋敷が見えるかはわからない。庭を通るだけで

車を使わなければならないほどの敷地なのだ。

その呆れるほど大きな城へ向かい、躊躇なく足を踏み出す。

恐れはない。覚悟は娘の涙を見た瞬間、すでに決まっているのだから。

「ストップ、カツコちゃん」

門にたどり着くにはもう少し歩かなければいけない。しかしこれ以上近づけば門を警備している人達に止められるだろう。

「どうすんの？」

「見ててー」

さぁ。

やろう。

携帯を取り出し、電話をかける。その相手とは。

『もしもし？　どちらさまでしょうか』

「いまあなたの真正面に見える、携帯を持ってる人ですー」

その相手とは――今まさに門を警備している男だ。

『は、あの、誰ですか？　なんで私の番号を知ってるんですか』

「そんなことはどうでもいいですー。あなたのお母さん……今、入院してますよねー」

『……それが、なにか』

「手術したばかりで予断を許さない状況ですね」

『まさか』

「手術が失敗、ということにしてほしくなかったら、今すぐ私を奥へと通しなさい」

『なっ……！』

母を殺されたくなかったら通せ、私はそう言っているのだ。

「ハッタリかどうかの判断は任せますー。ただ、私には一瞬で“それ”を指示する手段があります。何かは言いませんが」

『……』

「あなたをたった一人で育ててくれたお母さんでしょう？　齢三十から子を育てるのはどれだけ大変だったかは想像もつきませんが、あなたが受けた恩はどれほど大きいことか――」

『……少々、お待ちを』

「よろしく。私達――客の名前はサカイミエですよ」

さも調べ上げてあるような節を見せると、相手は予想通りにあっ

さりと従ってくれた。それほど母親が大切なのだろう。

「サカイちゃん、今の話、まじ？」

「嘘ですよー。でも今の電話の相手の方は実直で情に厚い方です。調べ、分析した結果、母のことを言われて従わないはずはないと判断しましたー。警備長である彼さえ傀儡にしてしまえばこっちのもの」

「後で訴えられないかね」

「情に厚いと言ったでしょう？　私の娘に対する想いさえ知ってもらえれば、きっと許してもらえますよ」

「そーうまくいくかね」

「いかせるんです。それにそこまで心配することはありません。あの方の母親さんは、本当は手術なんて受けていないんですから」

「……まさか」

「病院の偉いお医者さんだって、間違った書類があれば間違った相手に間違った連絡とかしちゃいますよねー」

「あのさ、前から思ってたんだけど……どこをどうやって何してんのあんた」

そんな特別なことはしてませんよー。単に今日のために予め色々と仕込んでおいただけのことです。

「ともかく。今日の私は全力モード、容赦はしません。さ、いいみたいですよ」

先ほどの警備長がこちらに視線を送る。職務上、平然としているが顔は蒼白。心は痛むし可哀想とは思うけど、こちらも色々と背負っている。引くわけにはいかない。

歩を進める。間もなく門へとたどり着く。

「サカイミエ様ですね？」

「ええ」

「来客の旨は承っております。こちらへ」

庭を行くためのリムジンへと案内される。それに乗り込み走り出すまでも、運転手の横に同乗した警備長は怪しいそぶりは見せなかった。慎重な性格なのだ、先ほどの言葉がハッタリ、という証拠がつかめない限りはこのまま従ってくれるだろう。

……やがて、ここが日本か疑いたくなるくらいの大きなお屋敷が見えてきた。

リムジンが停まる。ドアが開き、警備長が恭しく礼をする。このような場所で警備をするだけあって礼節は心得ているらしい。それに対して私たちは礼節も何もあったものじゃないけどねー。

「ありがとう」

「……は」

カツコちゃんと並び、屋敷へと向かう。一歩遅れて追ってくる警備長。何か仕掛けてきたら面倒だけど、そのときはカツコちゃんがなんとかするでしょう。それよりも次は屋敷の門番だ。

「失礼いたします、お客様。お名前を伺ってもよろしいですか？」

「サカイミエです」

「申し訳ありません。失礼ですが、そのような来客予定は――」

「あ、おーい。カワシタさーん？」

門番の声を遮るように屋敷の中へと声をかけると、この上ないタイミングでスーツ姿の中年男性が現れる。

「これはこれはサカイお嬢様」

「お久しぶりねー」

「ええ、本当に。実はこの後、会長から食事に誘われているのですが……よろしければ、いかがかな？」

「よろしいのかしらー」

「ええ、会長の娘たるあなたが何を遠慮することがありましょうか」

それを聞いた門番が硬直する。狙い通りだ。会長の娘――そう聞けば門番風情が私を拒むことはできないだろう。この家は私の家とも言えるのだから。

「ささ、どうぞ」

「ありがとう。門番さん？　通ってもよろしいかしら」

「は！　ど、どうぞ」

「警備長さんは下がっていいよー」

「……は」

後でフォローしないとなぁ、と忘れないように心にメモして、カワシタさんと政治経済などについて談笑しながら進む。時折カワシタさんがカツコちゃんに話題を振るけど、内容がよくわからないカツコちゃんは「アタシ日本語シカワカリマセーン」とか返答をしていた。日本語しか喋ってないのに。

さて、このカワシタさんという人。実は空読財閥に属する、とある企業の社長さんだ。何度か脅したことがあって、ついでに踏んであげたりしたら目覚めたらしく、今ではすっかり私の家来になっている。今回は昨日のうちに連絡をとり、時間等を打ち合わせしておいたのだ。

初めから彼の連れとして案内してもらえば早かったところだけど……外門の警備は厳しく、主人に呼ばれた客以外は通れない。いち社長といえども外門の警備にまでは口出しできないため、カワシタさんには中で待機してもらい、私達は外門を強引に突破したのだった。

「会長はこの先のお部屋ですが――」

案内されたのは豪華な扉の前。しかし。

「お待ちを」

次に立ち塞がるはメイドさん。本当にこんなのいるのかーと感心してしまうけど、実はただの家政婦さんで、服装は主人の趣味だと私は知っている。

「会長はただいまティータイムを楽しんでいらっしゃいます。誰も通すなと言われてますので」

「今月に入って三回、あなたはお屋敷のお金をちょろまかしましたね」

「私は何も見ていません」

虚空を見ながら去っていくメイドのコスプレをした人。屋敷内全ての人間は一度調べ上げている。いざというときのための抜かりはない。

「さて、では私はこれで」

「ありがとう。今度五十回くらい踏んであげるー」

「それは楽しみですな。ではご武運を」

いやーいい変態さんだ。助かったー。

「カツコちゃん？　全然喋ってないけど生きてる？」

「や、なんかサカイちゃんのすごさに驚きつつ、私いる意味なくね？　って不貞腐れてるとこ」

「大丈夫。これから出番はあるから――さぁ、いこう」

扉を開ける。応接室だ。

そこには秘書らしき女性と、にっくきクソジジイの姿が――！！

「……ほう？　誰が通せと命じたのかは知らんがよくぞ来たな。この狼藉者めが」

乱暴に置かれたティーカップがカチリと鳴った。

白いが豊かな髪、貫禄のある風体に鋭い眼光。朗々とした低い声。久々に感じる威圧感は化け物企業のトップに立つに相応しいほどに重過ぎる。

「あらあら、せっかく休みを作ってあげたのに随分な言い草ですね、お養父さま」

でも負けない。この程度の重圧なら慣れている。

「ああ、貴様の思惑通りだよ。なにやら不祥事が目立ったことにより忙殺され、疲弊し、儂は静養することを余儀なくされた。だからこうして貴様などと対峙しているわけだが」

「どれだけでも感謝してくれて結構ですよー」

「くく、随分と強気になったものだ」

当たり前だ。私にはサエが、そして隣にはカツコちゃんがいてくれるのだ。何も怖いものはない。

「さー話をハッキリつけましょうお養父さま。サツマさんはどこ？私の夫は」

「もう貴様の夫ではないし、儂とて貴様にお養父さまなどと呼ばれる筋合いはないのだが」

「いいから呼んでください！」

隣で表情一つ変えずに立っている秘書にも構わず、感情をむき出しにして私は叫んだ。

あの人がいなければ話にならない。

私からサエを奪った、あの人がいなければ――

「奴は死んだ」

そう、思っていたのに。

## カカの天下５７２「あなたは真実を知り」（後書き）

コメディ要素、すいません控えめです。

このサエ&サカイ編はお察しのとおり「あなた～」シリーズ全部ひっくるめています。今回はサカイさんの本気モードなので、笑いとかの要素はあまり気にせずに書かせていただきました。そして今回、サエちゃんを取り戻すにあたりカカたちの力を借りることも考えましたが、ここはやはり母親の力だけで（カツコはういますが）頑張ってほしいと思いました。

さて、長々と　書きましたがもう少し続きます。真実を知ったサカイさんがどういった行動をとるのか、また読んでいただけると嬉しいです。

## カカの天下573「あなたは決意し」

サカイです……

いま敵の本拠地の応接室にて、お養父さまと対峙しています。私の隣にはカツコちゃん。お養父さまの隣には秘書のお姉さんがいます……

いきなり茫然自失ですいません、ですが、その……

「死んだ……？　あの人が」

「そうだ。貴様と離婚した直後にな」

「じゃあ……サエはあの人に育てられていたんじゃないんですか！？　私は、私はずっと……！」

「サツマが考えなしに貴様と別れ、無意味にサエと引き離したとでも思ったか？」

そうは思わなかった。思いたくなかった。だってあの別れは唐突すぎたもの、三人で暮らしてて、サツマさんは企業の跡継ぎとして仕事に追われていたけど優しくて、家族三人とも仲良くて、それで、それで……突然、別れてほしいと言われた。

強引に離婚届けに判を押され、サエと二度と会うなと忠告された。理由はいくら聞いても教えてもらえなかった。ただ知ることが許されたのは、サエはきちんと空読の家で育てるということ。そして私がサエに会うと、空読の家でのサエの立場が悪くなるということ――

私は様々な理由を考えてみた。一つ、私の生まれに不明な点が発覚し、汚れた血は空読の家に相応しくないと判断された。一つ、私が浮気でもしたと誤解された。一つ、誰もが私を単純に嫌っていた。一つ、夫のサツマさんがおかしくなった。一つ――

いつのまにかそんな、誰も答えを教えてくれない問いを考えるくらいのことしかできなくなっていた。

ショックだったのだ。愛する人に拒絶されたことが。愛しい娘を遠ざけられ、二度と会うなと言われたことが。

空読財閥の規模はよく知っている。その財閥の会長と次期会長が「会うな」と言ったのだ。どこをどうやっても会えないし、会うことが許されるはずがなかった。

だから絶望した。それでもサエの引き取られ先をなんとか調べ上げ、その近く――すれ違うことがないギリギリの場所に住所を移して、それでよしとした。

サエは寂しがっているかな？　そう思わない日はなかった。

でもサツマがいる。私には急に冷たくなったけど、娘にデレデレだった彼がひどいことをするとは思えない。きっと仕事で忙しくて親戚の家に預けていても、ちょくちょく帰ってサエの面倒を見てくれているんだ。

ずっと、そう思っていたのに。

「サツマが貴様と別れた理由は簡単だ。その別れる前日、奴が病気

で死ぬことが確定した。それだけのこと」

声が、出ない。

「仮にも大企業の跡継ぎだ。それが亡くなれば大事になろう。マスコミ程度はいくらでも規制をかけられるが、身内の間ではそうはいかぬ。奴が死んだことにあらぬ疑いを貴様にかける輩も多かっただろう。それを見越して、奴は貴様と別れた」

「そん……な……」

「ふん、他にも理由はあるがな。奴が貴様と別れたのはそういうことだ。何を言いに来たかは知らんがな、無知で無力な、守られていただけの貴様に、何も言う資格はない」

知らな、かった……

「ではな。早々に帰るがよい。このような愚かなマネは二度としないことだ」

重々しく扉が閉まる。

倒すはずだった敵は、行ってしまった。

「知らな……かった」

そして私は、立ち尽くすだけで。

「この向こうは旦那様のご自室へと続く廊下です。厳重な警備の上、強固な扉の鍵を開けることは不可能です。無駄な抵抗はやめて、お

となしくお帰りください」

ずっとお養父さまの隣で黙っていた秘書が言う。そしていつの間にか会長のＳＰ……黒服のボディーガードが私たちを囲んでいた。

そんなことは気にならない。

じゃあ気になるのは？　サツマさんのこと？

それも気になる。だって愛していた人だ。その人が死んでいたなんてショックすぎる。

でも……それは過去のこと。

それよりも現在のことを想う。

サエは父方に引き取られたのだと、そう思っていた。

でも違った。父親はすでに亡くなっていたのだ。

じゃあ、じゃあ……あの子はずっと……ずっと……

ずっと、本当に独りだったんだ。

それは……

納得がいかない。

目が細まる。

歯にぎりぎり力がこもって、想いが暴れそうになる。

後悔だけだった心に火が灯る。

「旦那様は、今日はもうお会いにならないそうです。お引取りを」

「カツコちゃん」

「あい？」

「あの扉、壊して」

「あいよ」

「……は！？　あ、あの」

「わん、つー、すてっぷ――キック」

爆弾でも炸裂したかのような音が響いた。強固と呼ばれた扉があっさりと砕ける。

慌てる秘書の声を無視して進む。

私は勘違いしていた。

あの子には父親がいると。

守ってくれていると。

そう思うことで逃げていた。

たとえ本当に父親がいたとしても、結局は――あの子の母親は私しかいなかったというのに！

「止まれ！！」

ボディーガードが立ちふさがる。

「カツコちゃん」

「まっわしっ蹴りー」

のほほんとした声と裏腹に動きは鬼だ。鞭のように撓る脚を誰一人として避けることができず、あっさりと吹っ飛ぶ黒服の男たち。

そんなゴミには目もくれず、私は一直線に空読のジジィの胸倉に掴みかかった。

「ぐ、あ……！」

壁にジジイを押し付けて絞め上げる。

「サエを渡しなさい」

「な――」

「さっさと頷け。あの子は私の娘だぞ。だから私がもらうと言っている！」

納得できないのはそこだった。

サツマさんが私を遠ざけた理由はわかった。だけど、私とサエを引き離した理由は聞いていない！

「……あの子を貴様から離したのは、何のためだと思う？」

その答えを、ジジイは聞かずとも語ってくれた。

「儂が何も知らないと思っているのか。貴様の生活のひどさは目に余るものだった。ああ、予想通りだったのだよ。貴様は子供を育てるには弱すぎたのだ」

弱い？

ああそうとも、私は弱い。

でもね。

「当たり前でしょう。親というものはですね、子供がいないと強くなれないのです」

「……！」

「あなたならわかるでしょう？　子を持ったことのある、あなたなら。今は子がいないあなたなら……我が子と引き離された親がどんな想いか！！」

この張り裂けそうな想い。

たった一度会っただけじゃ収まらない。

命に代えても、ずっとずっと一緒にいたいという、この想い。

「色々と、失礼をしました」

それを伝えきることはできた。勢いのあまり掴んでしまった手を下ろし、真っ直ぐにジジイの――お養父さまの目を見つめる。

「しかしあの子はもらいます」

あなたを絞め殺してでも――その想いも伝わったのか。

「……よかろう」

お養父さまは頷いてくれた。

「手配してやる。ただし見せてもらうぞ、その親の強さとやらが、貴様ごときにあるのかをな」

「望むところです」

大丈夫、私は強くなる。

サエが一緒なら、絶対に。

「言うね、サカイちゃん」

振り返ると、そこには黒服さんをしこたまボコったカツコちゃんが。そのあまりに圧倒的な戦況に、なんだかコミカルさを感じてしまって……緊張感が抜けて、少し笑ってしまった。

「ふふ、当たり前です。私よりサエが大好きな人なんかそうそういませんからね」

「おお、愛だ」

「ええ、愛です」

とてもいい気分。ごめんなさいね、迷惑をかけた皆さん。ちゃんと後で色々とフォローしますから。

「おい」

さわやかに去ろうとしたのに、呼び止められてビクッとなる。ま、まさか色々弁償してけー、とかないよね？　私、お金ないよ？

「おまえも、義理とはいえわしの娘だ。何かあったら言いなさい」

予想外の、優しい言葉。

「おお、愛だ」

「……うるさいです」

ちょっと感動しちゃったじゃないの。

「……ありがとう、ございます」

丁寧に頭を下げて、今度こそ立ち去る。

なんだか悔しい。

でもいいや、そんなことより。

これからある意味――今回の本番が待っているのだから！

本番……

「どうしよう、カツコちゃん」

「ん？」

「サエを迎えに行くの、嬉しすぎて怖いよー！！」

だって「私と一緒に暮らしてください」なんて結婚を申し込むようなもんだよー！？

あうー、緊張するー！！

「おお、馬鹿だ」

「うるさいですー！！」

## カカの天下５７３「あなたは決意し」（後書き）

次の話をもってサエ＆サカイさん編終了となります。

や、久々に重めに書かせていただきました。

その分、次の話ははじけてしまうかもしれませんが笑

笑顔で読んでいただけると嬉しいです＾＾

## カカの天下５７４「そしてあなたと歩きだす」

どうも、サカイですー。

愛しの娘を取り戻す手はずは整いました。

後はサエを迎えにいくだけ……なんですけどー。

「どうしよー、どうしよー。ねぇカツコちゃん、どうやって迎えにいけばいいのー？」

「なんでもえーやん」

「よくないよ！　一生に一度のことだよ！」

「そりゃそーかもしれないけどさ。んー……私と一緒に住もう、でいいんじゃないの？」

「そそそ、そんな結婚を前提として同棲を申し込むようなことをー！」

「サエちゃんと結婚したくないの？」

「したい！！」

「じゃーそれでいいじゃん」

「でもさー！！」

とかなんとか揉めているうちに……いつの間にかサエを預かってもらっている親戚の家に着いてしまった。

「ごくり」

「何緊張してんのさ。さっきみたいに、サエをよこせー！　って言えばいいんだよ」

「そ、そっか、そうだよね……おぇぇぇぇ！！」

「なんで緊張で吐いてんの！！　さっきの勢いどうしたの！？」

「だってさー、だってさー、さっきの相手は厳ついクソジジィじゃん、こっちは宇宙一の美少女じゃん、どっちが緊張するかっていったらこっちに決まってるよー！」

「あんた本当に心底親バカだな！！」

あたりまえじゃんー。あんな可愛い子を娘に持ったら誰だってこうなるよー。おぇぇぇ！

「ふぅ……ふぅ……」

「落ち着いた？」

「うん、ありがとー」

カツコちゃんに背中をさすってもらって、少し落ち着いた。

さぁ行こう！

私は深く深呼吸して……その親戚の家の前に立った。

玄関の前で……叫ぶ！

「サエをよこせー！！」

「断る！！」

「断られたぁぁぁあ！　うぇぇぇぇえん！！」

「簡単に泣くな！！」

そんなこと言われたってぇぇ、こんなハッキリ……ハッキリ？

誰に言われたんだろー。

「事情は聞いた！！」

バーン！　とドアが思いっきり開いて、

「ふげらぁあ！？」

私の鼻にクリーンヒット！！　いだぁぁぁい！

「あ、ごめんサカイさん」

「お母さん、へいきー？」

「だから言ったでしょ、カカすけっ！　ちゃんとトメさんに見張ってもらってタイミング計ったほうがいいって！」

「ていうかさ、別に芝居がかった登場せんでも。あとテン笑いすぎ」

「ぶはははははは！！　サカイさんかっこわる！！　あんな意気込んで勝負に行ったのに！　ぶはははは！」

鼻いたぃ……って、サエはともかくカカちゃんにサユカちゃんにトメさんにテンカちゃん……

「なんで皆いるのー？」

「全部終わったって姐さんから聞いたからな、こういうとこくらいは見物しようかと思ったわけよ。そしたらなんかおもしれぇことになってたからよ」

「僕は久々に定時に帰れたかと思ったらカカに引っ張られてきたんだよ……おもしろいっていや、おもしろいけど」

おもしろいことって……カカちゃんが？

「えっとー、カカちゃん？　私はサエを迎えに来たんだけどー」

「私の嫁はやらん！！」

絶句した。

まさかそうくるとは思わなかった。

「そ、そんな……どうか、どうかお嫁さんを娘にください！！」

「断る！！」

「そこをなんとか！　私は娘を愛しているんです！」

「だからといってそう簡単に私の可愛い嫁をやれるかぁ！！」

そ、そんなぁ……クソジジィの後にこんな裏ボスがいるなんて！

サエ！　助けてー！

「いろいろ逆だねー。あははー」

楽しそうねーくそー可愛い。

こうなったら！

「だ、だったらー……私はトメさんをお嫁にもらうもん！」

「なんですってぇぇぇぇぇっ！？」

「サユカちゃん、誰よりも驚きすぎー」

「ほらほらカカちゃん！　トメさんをもらっちゃってもいいのー！？」

「いいよ別に」

「カカすけてんめぇっ！　くらぁっ！？」

「サユカちゃん、おちつきー」

ううん、どうしよう。勢いで言ったはいいものの、こんなにあっさりこんなのもらってもなー。

「サカイちゃん！」

「カツコちゃん？」

「お姉様とお呼び！」

「あぁん、おねぇさまぁー！！」

まー楽しいからいいや。

「あんさ、僕をネタにするんはどうでもいいけどさ、せめて婿にしてくんないかな？」

「お、乗り気じゃねぇかトメ。いっそのことパパって呼んでもらったらどうだ」

「トメパパー」

「サエすけこんにゃろおらぁっ！？」

「サユカン、キャラ変わりすぎ」

そんな大騒ぎ。

いつの間にかカカちゃんとトメさんが言い争ってて。

サユカちゃんもそれに混ざって。

カツコちゃんとテンカちゃんはそれを見て笑ってて。

そして、私の隣には――

「お母さん」

「え？」

「ただいま」

私は息を飲んだ。

その言葉を聞いて……なんだか胸がいっぱいになってしまって。

でも、しっかりと答える。

「おかえりなさい」

娘は母に。

「私も、ただいま」

母は娘に。

「うん。おかえり、お母さん」

私たちは互いの場所に帰ってきた。

手を繋ぐ。

心を繋ぐ。

手が離れても、二度と心は離れないように。

強く、強く。

うん。

私たちは――これから一緒に生きていく。

## カカの天下５７４「そしてあなたと歩きだす」（後書き）

サエちゃんサカイさん編完結です！

いろいろいろありましたし書きましたが、いかがだったでしょうか？

連載中もたくさんの感想ありがとうございます。全部欠かさず読ませていただき、励みになっています。ちょっと余裕がないので返信できていませんが、明日にはお返事したいと思いますので少々お待ちを＾＾

え、最終回っぽい？

えーと、昨日は手違いで最終回設定なんかにしてしまったのでツッコミをたくさんいただきましたが笑　当分やめる気はないのでご安心を笑

ではでは、また明日。カカラジでお会いしましょう！

# カカの天下５７５「第十九回、カカラジ！」

「皆さんこんカカ！　九月！　九月といえば秋！　秋といえばサンマ！　鮭！　あと酒！　とか言いつつ毎日飲んでるそこのあなた、肝臓とお腹は要チェックしておかないと食欲の秋も加わってイヤンなことになっちゃうぞー、私みたいに運動しろ香加です！！」

「はいはい、たまにしか飲まないしカカたちと遊んでるといつの間にか苦労したり運動したりしてるから体型は普通なトメです」

はい、毎日適当に走ったり筋トレしてるから同じく体型は普通なはずの作者です。

「誰も聞いてないことをありがとう」

うっさい。さてさて第十九回カカラジスタートですよー！！　盛り上がっていこー！！

「本編のノリがアレだったから戻さないとね」

「や、最後は香加の、というかカカのせいでずいぶんといつものノリに戻った気がするが」

そんな波紋を呼んだサカイさんサエちゃん編もようやく一区切りつきました！　ということで今回のゲストはもちろんこの方！　酒井さんです！

「こんにちはー」

「おお、酒井さんだ。昨日はサエちゃんと一緒に家に帰ったんだよね」

「そーそー。昨日の小枝は激しかったわー。ベッドの中で何度も何度も抱いて抱かれて……でも可愛かった♪」

「（なんかエロい）」

そこの顔赤くしたむっつり助平。何考えてる？

「いいいいいえええええ何も！？」

「留さんの助平さーん」

「あんたが紛らわしいこと言うからでしょうが！！」

「そりゃもー私の胸の中を出たり入ったり擦ったりー、脚を絡めて――」

「だからやめい！！」

「……留兄が何をあそこまで慌てているのか、よくわかんないんだけど」

お子様香加はそれでいいの。えーとこの番組はネット小説『カカの天下』を盛り上げるため、ぶっちゃけトークや作者の本音を交えながらメッセージを紹介したりするラジオ番組系のお話です。ここにいる留とか香加とか酒井さんとかは本編の分身であり、直接関係はないのでお気をつけください。

「留パパもやるー？　娘とスキンシップ」

「あ、ダメだよ！　小枝ちゃんを抱くのは私なんだから！」

「だからそういう表現はやめいと言うに！」

「昨日の夜食は親子丼だったんだよー♪」

「酒井さんもさぁ！！」

……小枝ちゃんと一緒になれたからか、暴走気味だな酒井さん。

ま、とりあえずＣＭいきます。

『あの噂のＫＹ（空気を読む）システムがＫＹクエストに続いて新登場！　その名も“ＫＹ人生ゲーム”だ！　プレイヤーが生年月日、住所氏名年齢を入れるだけでほぼ完璧な分身が作られ、架空の人生を再現する！　その過程はもちろんＫＹシステムが空気を読んで読んで読みまくり……就職してもプレイヤーのやる気次第で減給されるしリストラされるし、途中で起こるアクシデントは不思議なことに現実のあなたが実際に体験したことのあるものばかりだ！　こえぇ！　さらに結婚時には相手の顔が画面に出て、あなたのリアクション次第でその先が決まります。時には演技も必要？　いいえ我がシステムはそれをも見破ります。しかしそれに見破られなくなったとき……あなたは人として一段階成長していることでしょう。さぁ、あなたも新たなＫＹシステムを使って人生の勝ち組になってみませんか？

しかし結果が敗退だったらあなたの人生も敗退です。そのときは……まぁ頑張れ』

ＣＭがあけて。

「……やれと？」

「まぁ、カカ天メンバーたちにやらせろーって感じだよなぁ」

このＣＭについて詳しいことは、次のＣＭの後に話します。しかしＫＹ人生ゲーム……確かにやらせてみてもおもしろいですね。

「ふふー、私もやってみたいですー」

多分あなた勝つよ。こういうゲーム得意そうだし、小枝ちゃんと一緒になった今じゃ無敵っぽいもん。

「あんな可愛い娘を持った時点で、すでに人生の勝ち組ですよねー」

「はいはい、そんな酒井さんにメッセージが結構いっぱいきています。内容のほとんどは『サカイさんよかったね！』とか『ついにサエちゃんと……おめでとう』などなど温かいものが多く、もちろん今回の話が完結するまでにも『頑張れサカイさん！』『サエちゃんと一緒に幸せになれますように』等のお言葉をたっくさんいただきました」

「本当にありがとうございますー。おかげさまで丸く収まりました」

「そういえばさ、今回もカカサエサユカの活躍を期待！　みたいなのも多かったんだよね」

そうなんですよね。でも今回は姉が手助けしたとはいえ、サカイさん一人に頑張ってもらいました。やっぱここは母一人で底力を見せ付けてほしかったんですよね。

「ふふー、ごっつぁんです」

「なんでお相撲さんの挨拶かわかんないけど」

「底力だからでしょ」

「あ、ああ、そうなの。わかんないけどわかったよ香加。えーと、とりあえずよかったよかった。後は健全な親子関係のまま暮らしていけることを祈るばかりですね」

「昨日ねー、サエと一緒にお風呂入ったら鼻血出て湯船が真っ赤に」

「ハイそんなアホみたいな話するなら顔くらい真っ赤にしろとでも言いたいですがさておき、普通のお便りを紹介したいと思います。えーカカラジネーム『甘党は辛いものが嫌い』さんからいただきました」

「おお、留兄がツッコまずにスルーした」

そこツッコんだらまた助平とかいじられると思ったんでしょ。

「内容は『みんなの好きな食べ物は何でしょうか？　ＰＳ：自分は甘いもの全般です。』とのことです」

「スルースキル高いですねー」

「本編の中でちょくちょく書いてたけど、あんまはっきり書いてないんだっけ。酒井さんと天は答えたことあるけど」

留、ほんと色々無視して進めてるね……まぁいいですが、ハイ。軽くしか書いてませんね。じゃあ順に聞いてみましょう。留は？

「僕は基本的になんでも好きだけど、料理もお菓子も和風なものが好きだね。サユカちゃんもだよ、よく一緒にお茶するし。そのとき僕がよく頼むのはおはぎか大福。サユカちゃんはようかんが多いな」

香加は？

「私も和風派だけど、緑茶はなんかダメ。あときゅうりとか苦手ね。好物は……気分によって変わるけど、今はせんべいかな」

渋いね。ケーキとかも普通に好きみたいだけど。

「うん。私の周りにいる人は大体甘いもの好きだけどね」

なるほど。ところでサエちゃんは何が好きなんだろう。

「エクレアですよー。あと基本的に洋風びいきです」

おお、さすがはお母さん、即答ですな。

ちなみに載せてませんがクララちゃんは桜餅が好きです。「共食いは禁断の味」とか言いつつバクバク食べます。あとタケダの大好物はカレーだそうで、案外インドちゃんとうまくいくかも？　そう言いつつイチョウさんやクラスメイトの好物もカレーなので、イン

ドちゃんの影響がかなり大きいですな。あとキリヤの大好物は奢りのラーメン。トメ父はうまい棒、ユイナさんはお鍋とお刺身が好きです。

「お姉はお餅が死ぬほど好きなんだよね。正月あたりにそんな話あったと思うけど」

ニシアヤコンビの好物はワケあって秘密です。

「あー、私、好物変わりましたー！」

「へぇ。前はハバネロだったよね。何になったの」

「サエー！」

「はい、次のお便りですが、『タケダの死に神』さんからいただきました。タケダ専門の死神なんですかね？」

「するぅ……」

「内容は、『ある程度の登場人物の髪型を教えて欲しい』だそうだけど、作者？」

ふむ、あまり明細に語るとキャラを想像する楽しみが無くなりますが……まぁここまで書いたんですし、いいでしょう。前にもいくつかは公開しましたが、一気にいきます。

カカ、ショートです。ややおかっぱぎみ。サエちゃんはサラッサラーのロングです。サラさんは関係ありません。お人形さんカットですね。サユカちゃんは基本ポニーテールなのですがたまに気分で

ツインにしたり片結びにしたりしてます。

カツコはベリーショート。サカイさんはサエちゃんと髪質は似てますし長いですが、後ろで一つに縛ってます。テンカ先生はセミロングで、基本あまり手入れしないのでボサボサ気味です。でも似合うのはワイルドだから？

タケダとニシカワの髪型は似たようなもんで、スポーツ刈り風味です。タケダは坊ちゃん刈りが似合いそうですが、本人はカカに気に入られるために格好よくなろうと無駄に頑張ってるので気取ってます。

アヤちゃんの髪は短いですが、しょっちゅう縛ったりいじったりして髪型はせわしないです。自称アイドル、可愛い自分にこだわってます。

あと……キリヤ君は茶髪でちょっと長いです。仕事中は縛ってますが、普段はもっとワイルドでセクシーな感じです。さぁ想像しなさいワイルドでセクシーなキリヤンを！

サラさんは、そうですね。あなたが思い浮かべる『胸が大きいセクシーな人』が似合う髪形です。

「どんなだよ」

ま、あえて想像ご自由にーな人を残すのもいいかと。

「……ま、いいけどさ」

「ねね、留兄。お父さんは？」

「いつか自分で確かめろ」

「むぅぅぅぅ。あ、お母さんもセミロングね。毛先を中心にパーマかかってるよ」

こんなとこでしょうか。

「シューさんとかいませんでしたっけ」

誰だっけ。

「おいこら作者」

じょーだんっすよ。シュー君は坊主です。スキンヘッドじゃないですよ、髪の毛のありますし結構伸びるまで切らないんですが、普段は警官帽に隠れてます。イメージとしては。

……こんなとこ？

「僕は」

はいはいイケメンカットでいいよ。

「なんだその投げやりさは！」

留に関してはみんな色々妄想あるだろうし、こっちもあえて自由にしとく。

「……ま、あんまり長くない、とだけ言っとく」

さて、次いきましょう。

「私読むねー。えっと、『ゲイボルクグングニル』さんからいただきましたー。私知ってる、ゲームばっかしてた時期に覚えたのー。これ二つとも伝説の槍だよー」

「お、子供のころしたゲームであったかも」

「留兄も昔ゲームしてたんだね。んで、なんて書いてあるの？」

「読むね。えっとー『犯人は、いつも君だ！！　夏休みがもうないのに宿題が終わらないＤＥＡＴＨ。ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ。月夜ばかりと思うなよ』だってー……なにこれ」

わかりません。夏休みの話書いてたら送られてきたのですが……

「ただ愚痴りたかっただけなんじゃないの？」

やっぱそう思う？　いやね、送ってもらったわいいけど反応に困っちゃいまして。

「名前がとにかく槍だし……突っ込んだら負けってことじゃないのか。突く武器だけに」

「うまいこと言ったつもりかー！」

「つもりか！？」

「つもりだ！」

はい、続きまして。

「えー『扇風機のプロペラ』さんからいただきました。内容はこちら」

『ちょっと面白かったのでメッセージを。

Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ　ＩＵＰＡＣ命名法

飽和炭化水素（アルカン）

Ｃ１００Ｈ２０２　名前：キリアン

カカの天下　５４６　おやすみキリヤン

惜っししいぃ！

以上』

「……さほど惜しくなくないか？」

「いやー、しょうもないことでもなんとなく気づいてしまったら送らずにはいられないその気持ち、わかりますー」

えと、『カカ天、頑張ってください。応援しています』とのことです。ありがとう！　さぁ次行こう！

「私読みますー。『ロッテ』さんからいただきましたー。えー『法人税法の用語に『加算留保項目』（例えば、ある支出について会社

上は費用扱い、法人税法上は資産扱いする項目）というものがありますが、長いので便宜上『（加・留）』と表記されます。括弧、加、留、どこかで見た様な文字ですが偶然……でしょうか？』だそうですー」

「なにがなにやらわからんばい」

「お子様にはわからん漢字が多いか。しっかし……これこそ惜しい！　だな」

はい、相当前にいただいたメッセージなのですが、なんとなく紹介するタイミングを逃し続けて今更となりました。

そしてお答えしましょう。全くの偶然です！　こんなのあって私ゃびっくらこきました。世界は偶然に満ちてますね。

さて、愉快なおたよりの次は……えー、たまに話のリクエストもらうのですが、それについていくつか答えていこうと思います。ここで紹介するのは一例でして、他のリクエストもメモってはいるので……いつか使うかもです。

「えーと、リクエスト！　オリンピックの話を書いてほしい、って……もう過ぎたよ？」

はい、過ぎました。ぶっちゃけそのときは私自身がめっさ忙しかったのであまりオリンピックを気にする余裕が無く……うまいこと書けませんでした。

「書くとしたらこうなってた、とかないのか？」

ちょっと考えてたのは、カツコさんが「あたしも運動にゃ自信あるけど、こうやって普通にすごく頑張ってる人たちに混ざる気はないわぁ。あたしゃ反則してるようなもんだし」とかいうもの。でもオリンピックという素晴らしすぎる舞台の話を反則な姉が語るのもなぁ……と思い、ボツにしました。

「まぁお姉がオリンピックに出たら……とか私らにしては面白いけど失礼な感じだもんね。じゃ他のリクエスト。えっと、姉とトメ父の戦いが見たい、っていうのが結構あるよ」

「なんとも恐ろしいリクエストをしてくるな。どっちが勝つかは見たい気もするけど」

「戦いってー、やっぱり夏祭りの対人形みたいな感じですよねー。そういえば人形の謎とかも残ってますがー」

まま、その辺はまた今度。とりあえず姉とトメ父の戦いは……まぁ機会があれば考えますが、今のところは予定はないです。

逆に。カカの授業参観が見たい！　運動会が見たい！　トメとサユカちゃんがバイクでツーリングしてるのが見たい！　とかありましたが、こちらは検討中であります。

「ふむふむ、んじゃ他のリクエストは……って、なにこれ」

「どした香加……うぁ、なんだこの量のメッセージ」

えー、その辺については前回のカカラジの冒頭の問題と一緒に紹介したいと思います。

前回のカカラジでの小芝居にて、今のカカ天に足りないものを叫んでくださいという問題を出したのですが……メッセージにいっぱい来たのが、これ。

『カカ天に足りないのは、タケダの出番です！』

「……は？」

こんなのに加えて、タケダの話のリクエストもいくつか。

「なんでタケダが人気あるのさ」

出番少なすぎるからかなぁ。人気投票とかじゃ目立たないのに……まぁインドちゃんのこともあるし、ちょっと出番増やす方向で行こうかなと。

「えー。あの子、出番が少ないこと自体もキャラのうちだと思うんですけどー」

ええ。だからあくまでちょっとです。私が書くときになんとなく気にする程度です。だから結局出番率は変わらないかもしれませんね。

「それ、意味ない……」

さぁ！　今月の脅迫状のコーナーにいきましょう！

「スルーしたー」

「今日はスルー多いな」

「留兄、あんたが言うか」

今回紹介する脅迫状はこれです！

『私の要求を呑まなかった場合……

世界中のお菓子を全部食べます♪

そして、タケダとシュー君の財布をカツアゲします♪

カカサエサユカを私の食べたお菓子で釣って小説に出させない様にします♪

ほかの読者からクレームは食べます♪

ついでに読者も食べます♪

もう、ルシカ先生も食べます♪

地球を食べます♪

おいしいかな？

ついでだから、土星とか木星とか金星とかも食べます♪

月と太陽も食べます♪

で、結局みんな生きれない♪小説書けない♪

私は生きる♪

腹の中で生きる♪

はっはっはっはっは♪

でも、小説見れないの困るからやっぱ止めます♪

で、出来ないとかじゃないですからね！！

違うんだからね！！

ちゃんと出来るんだからね！！

思ったら要求することないですわ（＾０＾）／

長くなってごめーん

誠にすいまめーん』

「……は！？　終わり！？」

はい。『みなつ』さんからいただきました。

「あのー、作者さーん？　あなたはどんな基準で紹介する脅迫状を選んでるのですかー？」

私がおもしろいと思ったかどうか。

だってこれ、わけわからないでしょ？

「ええ、さっぱり」

それがいい！

「なんじゃそら。作者、食べられたいだけじゃないの？」

ないない。

あと他にもいくつかもらってたんですけど、もうひと工夫ほしい！　いやまぁ今回紹介したのは工夫も何もなく思いつくまま書きまくっただけのものっぽいですが、それがどことなくカカ天っぽいですし。

「結局は作者の気まぐれで選ばれるのね」

そーです。あとは……例えばトメテン系の脅迫状でおもしろいのがあった場合、後々トメテン話の後のカカラジで使うのもありかなーと思って置いといてあったりもします。すぐに紹介されなかったからといってボツ決定というわけではないので、諦めずに次のカカラジまで待っててください！

ともかく懲りずに脅迫状を送ってくれることを期待してます。元祖脅迫状の方も、最近「え、この人ら兄弟だったの!?」って驚かせてくれた感想欄で見覚えある紅い月な人たちも、タケダ好きのぬこさんも、下り坂な人も、練炭の人も、友人に西川がいる人も。はい、ついでにメッセージ欄専門の方々へも挨拶してみました。感想欄と違って返信はできませんがいつも読んでます。ありがとー！

『ありがとう！』

さて、それではＣＭへ！

『ＣＭ。それは限りなく自由な世界。あなたもこの世界へ挑戦してみませんか？　脅迫状に続いて自由気ままな笑えるＣＭを募集！　応募方法はいつものようにメッセージ欄へお願いします。カカラジ一回ごとに一つ選び、使わせていただきたいと思います。どんなＣＭでも何のＣＭでも構いません、私の心の琴線に触れるものであればなんであろうと紹介します。もしお暇ならば、ぜひに！　変なＣＭ、待ってます』

ＣＭがあけて。

「ＣＭのＣＭってどうなのよ」

いやね、実は今回の最初のＣＭも読者の『鈴宮』さんの案でして。もうこの際ＣＭも募集してみたらどうかと。せっかく二つＣＭあるし、片方は読者さんに！　みたいな。

「どんどん自由になってくねー」

ただ注意！　私なりのアレンジが入る可能性があります。今回のＣＭも基盤はいただきましたが結構いじってあります。それでもよろしければ……どんどん送ってくれたら嬉しいです。長さとか決めないので。

あ、提供も忘れずにつけてくださいね。

「ラジオっぽいラジオっぽい」

さらに募集しますよ！　今月の脅迫状のコーナーはもとより、もう一つ！

企画名――あなたも生徒になって、テンカ先生にプレゼントを贈りませんか？　略してテンプレコーナー。

応募場所は感想欄でもメッセージ欄でも結構です。九月二十日に誕生日を迎えるテンカ先生へ『あげるもの』と『あなたの名前』を書いてください。これは私が独断で選びますので、私がついつい話に使いたくなるようなネタ――じゃなくてプレゼントと設定を待ってます。

「メッセージもつけてくれると、もしかしたら使うかも？」

「また全部対応はできないかもしれないけど、カカ天を応援すると思って出してくれたら嬉しいな」

〆切りは九月二十日の昼十二時とします。一緒にテンカ先生を祝いましょう。楽しい応募を待ってます！

「にしても期間、短くない？」

「ちゃんと小まめに読んだ人だけ参加できる……セコイことやりますねー」

「や、ぶっちゃけカカラジの日とおとめ座が終わっちゃう日がたま

たま近すぎたってだけじゃ」

さて！！　結構長々とお送りしました今回のカカ天、いかがだったでしょうか！

「あー、そういえばテンカちゃんがおとめ座ってどこかで言ってましたねー」

「そういやもうすぐおとめ座期間が終わるね。だからか」

さて、カカラジチョップの時間です！

「作者必死だね」

サカイさんどうぞ！

「私でいいのー？　じゃー……私にチョップ！」

なぜに？

「自重しろ私」

『ごもっとも』

この番組は、ＫＹシステム製作者とＣＭ製作委員会（株）がお送りしました。

## カカの天下５７５「第十九回、カカラジ！」（後書き）

さー果たして忙しくなるでしょうか笑

嬉しい悲鳴をあげることを期待しつつ、皆様の企画参加をお待ちしています＾＾

## カカの天下576「おかーさん自重しろ」

「サエ、用意できた？」

「はーい」

リュックに詰めた荷物を持って玄関へー。あ、どうもサエです。

今回、無事にお母さんと一緒に住むこととなりまして。今日は今までお世話になっていたおじさんおばさんの家に、細かい荷物を取りに来ましたー。大きな荷物はダンボールに詰めたので、後から郵送してくれるそうです。

「お待たせ、お母さん」

「んーんー、いま来たとこー」

「……さっきから玄関にいたでしょー」

「言ってみたかっただけー」

てへーと笑うお母さんは本当に若いと思う。若すぎるとも思う。

「じゃーサエ、挨拶」

「うん」

玄関をくぐり、お母さんと並んでから……くるりと振り返る。

そこには数年間お世話になった家。

そしてお世話になった……家族の二人がそこにいた。

「おじさん、おばさん」

「おう」

「サエ……」

「お世話になりましたー！！」

深々と頭を下げる。

お父さんがいなくて、お母さんもいなくて。そんな私が今まで生活することができたのはこの二人のおかげだ。仲良くなるまで時間がかかったし、互いに遠慮していた部分が大きかったけど……本当に感謝している。

「サエ」

「……叔母さん」

「わたしのこと、またお養母さんって呼んでくれていいのよ？」

ぎゅっと抱きしめてくれるおばさん。

温かい。

……こんなに長く生活してきたのに、抱きしめてもらったのは初

めてかもしれない。実のお父さんお母さんを求めていた私はいつまでたってもこの人たちに甘えることができなかったから。

悔しい。こんなに温かいなら、もっと早くに甘えておけばよかった。

「……お養母さん」

ちょっと恥ずかしいけど、呼んでみた。

おばさんは微笑んでくれた。

ぴきり。

……ぴきり？

「サエ……この数年間、いろんなことがあったわね」

「う、うんー」

「いつも一緒にご飯を食べて」

ぴきぴきり。

「旅行にも行ったわね」

ぴきっぴきっぴき。

あ、あのー？

なな、なんか抱きしめられて温かいんだけど、背中のほうがやたら冷たいんですけどー？　なんだか冷気が荒れ狂ってる感じなんですけどー？

「初めておはようのキスをしたときは恥ずかしかったわ」

そんなことした覚えないんですけどー！？

ぶっちん！！

って後ろでなんかキレたんですけどー！？

「サエー？　私のサエー？　わ、た、し、の、サ、エ？　ほら、そこの他人さんにあまり時間をとらせちゃ悪いでしょー？　さっさと帰りましょー」

底冷えするようなお母さんの声。

さらに、ぎゅっ、と抱きしめられる私。

音もなく下がる周囲の温度！！

「あぁ……サエ」

「あのー、どこの馬の骨ともしれないそこの他人さん、私達はそろそろー」

「わたしのこと、またお母さんって呼んでくれていいのよ？」

あれ、二回目！？

しかもなんだか字が違うようなー！？

「……サエー、こんな耳の聞こえない人に何を言っても意味ないですよ、行きましょー」

「わたしのこと、またお母さんって呼んでくれていいのよ？」

無視しつつ三回目ー！！

さ、さすがにこの状況だと「お母さん」なんて言えない……

「そろそろうちの子を離してもらえませんかー？　そこの人」

「サエ。わたし、あなたのことを本当の娘だと思っぴゃい！？」

「あらあらー？　思っぴゃいって何語なんでしょー」

お、お母さん……いま、おばさんの眉毛を指で摘んで数本むしった！！　痛そう……！　今まで無視していたおばさんもさすがにお母さんを睨みつけた。

「何するんですか。せっかく、う、ち、の、可愛いサエと話していたのに」

「いえいえー、そろそろ、う、ち、の、可愛いサエを返してもらおうかとー」

あ、あのぅー……？

「サエ。もしこの人のところが嫌になったら、いつでもうちに戻っていらっしゃい。待ってるわ」

「ふーんだ、サエにはカカちゃんっていう親友がいるのよー。そう、塞ぎこんでたサエの心を開いた親友がいるの。何もできずにご飯だけ出してた母親もどきなんかより、そっちを頼るに決まってるでしょー」

「塞ぎこんでた原因が……よく言いますね。それに余所様の子供をあてにするなんて、それでも親ですか？」

「どこかの誰かさんが頼りないから仕方ないでしょー」

「どこかの誰かさん？　ああ、あなたのことですか」

寒いよー。なんか寒いよー。この辺りだけ冬だよー。

「……夜道には気をつけなさいよー」

「……あなたこそ、階段を下りるときはご注意を」

怖い、けど。このままじゃダメだ！

「あ、あのー。お母さんがた？」

「お母さんって私のことねー？」

「わたしのことよね？」

「え、えと、その、二人とも、大人げないよー？」

おそるおそる本音を言ってみたんだけどー……

『子供がそういうこと言わないの！』

息をぴったり合わせて反論されました……普通は大人がそういうこと言わないもんだと思うけどー……言っても聞いてもらえないだろうなーこれは。

「どうしよー……」

「放っておけばいいさ」

「……おじさん」

「おやま、俺のことはお父さんと呼んでくれないのかい？」

軽くおどけるおじさんの顔を見て、なんとなくホッとした。

「あれは別れの儀式みたいなもんさ。お互いが同じようなタイプだから正面から衝突してるが、なんだかんだ言いつつお互いがお互いを羨ましいだけなんだよ。正直……俺も羨ましいし、寂しいがね」

「……おじさん」

「元気でな」

ポン、と頭に置いてくれたおじさんの手はとても温かくて。

「はい、お養父さん！！」

私の口からは、とても素直にそんな言葉が出てくるのだった。

「さてさて、サエー？　そろそろ本当に帰りましょーねー。う、ち、へ！」

「ふふふ、サエ？　本当にいつでも戻ってくるのよ？　会長のジジィに何を言われても、いざとなったらあの手この手で守ってあげるからね。主人を盾にしてでも」

いまいいとこだったのに……というか確かに、二人ともそっくり……

「お養父さんも大変ですねー」

「……慣れとる」

「私もお母さんに慣れるように頑張りますー」

「サエ、それはすぐ慣れるから頑張らなくていい。それよりも自分に慣れてくれる人を頑張って探しなさい。おじさ――お養父さんみたいな忍耐強い人を見つけるんだ」

お養父さん。

それ、私があの人たちと同じタイプだって言いたいんですかー？

その後、新たな我が家に帰ってから。

「ほら、めしあがれー」

「いただきまーす」

「サエ、あの女が作ったものより美味しい！？」

こんなことや。

「お風呂入るねー」

「サエ、あの女が沸かすお湯よりも気持ちいい！？」

こんなことや。

「お母さん、おやすみー」

「サエ、一緒に寝よー！」

「喜んでー」

「で、あの女とどっちが寝心地いい！？」

こんなことばっかりで。

「……ねえ、お母さん。私が悪かったよー。だから早く寝よー」

「ううん、そうよね。全部私が悪いのよー！！」

たしかにそうだけどー。

はぁー。

……私、将来こうなるの？

「ぎゅぅぅぅー！」

「お母さん、くるしー」

暑苦しいほど温かい。

んー。

そーなったらそーなったで、別にいっかー……

ぬくぬく。

## カカの天下５７６「おかーさん自重しろ」（後書き）

カカラジで自重しろとか自分で言っといて……してないやん！！

「してますよー」

……これで？

「かなりー。私がどんだけサエのこと好きだと思ってるんですかー！」

や、どんだけと言われても……もう全然数値が計測不可能な感じですけど。

ま、まぁとにかく！

これで晴れてサエちゃんの引越し完了です。おじさんおばさんはたまーにさりげなく登場してましたが、おばさんはサカイさんやサエちゃんと同じタイプです。黒いです。

え？　サカイさんは空読の人と血の繋がりは無いんじゃないかって？

ええ、ありませんよ。

なら、なぜ似たタイプなのか？

類は友を呼ぶんです。サエを引き取ったのはそういうめぐり合わせ。

とりあえず頑張れおじさん。

# カカの天下577「我悩む、故に我みゅー」

こんにちは、トメです。

先日かなり恥ずかしい失態をしてしまった僕ですが、なんとかカカと仲直りすることができ、無事に親子一緒になったサエちゃんとサカイさんを祝うことができました。

しかし……

「むみゅー」

カカが変です。

や、変なのはいつものことなのですが、今日は顔が変なのです。

「むっちぇらむー」

そう、簡単に言うとむっちぇらむーな顔です。

「でゅみゅみゅみゅう」

そう、さらに簡単に言うとでゅみゅみゅみゅうな顔です。

でゅみゅみゅみゅう!!

さぁ、早口に滑舌よく大きな声で言ってみよう。意外と難しいぞ？

「にっちぇらほっちぇらけっちぇらむっちぇら」

「そこの妹、さすがにその言語はないと思うぞ、地球人として」

「うっさいな。人が悩んでるときはこういう音出るんだよ」

初めて知ったぞ人間のそんな機能。

じゃああれか、悩みを抱えた人たちが集まるカウンセリングなんかでは皆して『むみゅー、むっちぇらむー、でゅみゅみゅみゅう、にっちぇらほっちぇらけっちぇらむっちぇら』とか合唱すんのか。

……なんかねっとりとした悪魔とか呼べそうだな。

ま、冗談は置いといて。

「何を悩んでるんだよ。僕のことをまだ怒ってるとか？」

「んな昔のこたーどうでもいい」

なんだよぅ、僕としてはかなりの事件でめっちゃ反省してたんだぞぅ？　今だって……まぁケンカしたのが久々とはいえ、尾を引くことなんて今までなかったけどさぁ。

サエちゃんちの前で和解した、あの時。

我が家に帰ってからカカのとった行動は簡単だった。

ホワイトボードに書かれたまま放置されていた『ハラヘッタ』の文字をびしっと指差したのだ！

そして夜中だというのに冷蔵庫の中にあった適当な材料から『ナスとトマトのパスタ、バジル風味』を作るハメになり、わざわざ出張してくれた母さん含めて三人で夜食会となってしまった。よくわからない光景だ。

ちなみに頑張ってくれた父の分も適当に廊下に置いといた。部屋に引きこもってる子供に「ご飯、ここ置いておくわね」とかいう気分だった。

まぁ、長くなったが何を言いたいかというと。カカがそう言うからには僕の件は本当に関係ないということだ。

「サエちゃんがサカイさんちに……つまり近所に来たってことか」

「あ。そうじゃないけど、それも気になるね」

「ほほう。と、いいますと？」

「サカイさんが母親だよ？」

「ああ」

「ないよね」

「ないな」

即答してもうた。だって言われてみると、なぁ……

「教育するどころかされる側だよね。小学校あたりから」

「おまえもキツイなぁ」

「でも、未来の私のお養母さんになるかもしれないんだよね」

「おまえもイタイなぁ」

まだ諦めてなかったのか……ってそれは先日に嫁がどうとか騒いでたし、今さらか。

「あとさ、サカイさんってサエちゃんのお母さんにしてはめっちゃ若いよね、見た目。サユカンのお母さんとかは普通におばさんなのに」

「うちの母さんだって若いだろ」

「二人が並んだらお母さんズには見えないよね」

確かに……都会いけば普通にナンパとかされそうだ。なにせ二人とも十代だか二十歳だかで子供生んでるんだしな。そう考えるとすごいな僕の周り。なんとも早い――

「サユカンも早いのかね」

「知らんて」

僕に聞くな、頼むから。

それよりもそろそろ悩みの本題を――

「引越しそば」

「……は？　その、今時あんまり見ない廃れた風習がどうした」

「引越ししたら、ずっとそばにいてくれるんだよね」

「そのダジャレはあんまりおもしろくないぞ」

「私はサエちゃんがそばにいればおもしろくなるんだよ」

「通じてねー」

「あ、おばさんにそばさんって呼びかけたらきっと大抵は振り向くよね」

「そして突拍子もねー」

ちなみに引越しそばは『細く長くお世話になります』という年越しそばと似たよな意味がある。

そばさんは今度試してみよう。

――などとくだらないことを延々と喋っていたのだが。

「結局何を悩んでいたんだ？」

「んー」

「むっちぇらみゅみゅみゅんとか言ってたろうが」

「うん、それなんだけどね」

「おう」

「なんで私はそんな不思議な音が出るんだろう?」

「……知らん」

オチも結局くだらなかった。

平和だ。

## カカの天下577「我悩む、故に我みゅー」（後書き）

内容の薄っぺらいダラダラ話。
や、久々に書きました笑

明後日はテンカ先生の誕生会、息がつまらないように軽くしとかないと！

……まぁ、誕生会ですし重くするつもりもないんですがね＾＾；

## カカの天下578「よくあるデートの口実」

こんにちは、トメです。

ただいま商店街の待ち合わせ場所へと向かっております。待ち合わせ相手はカカたちではなくテンとかでもなく、珍しく……

「あ、トメさん！　今回はお誘いいただきありがとうございます！」

「こんにちは、サラさん。ごめんね、いきなり」

「いいえぇ！！　まさかトメさんからデートの誘いをもらえるなんて思ってませんでした！　てっきり忘れ去られているものかと！　出番の少なさ的に」

出番とか意味がよくわからないけど、とにかく喜んでくれてよかった。

「そ、それで今日はどこに行くんですか！？　私、もう楽しみで楽しみで」

「うん。明日がテンの誕生日だからさ、プレゼントに何をあげればいいか相談に乗ってもらおうかと思って」

あ、ピキリと石化した。せきか……名づけるならセキさんかな？

「と、トメさん！」

おお、石から戻った。

「なんでですか！」

「なんでって、テンと歳の近い女の人が他にいなくてさ。姉なんか論外だし」

「そうじゃなくて！　あなたは、あなたは私の気持ちを知ってるでしょう！？　なのに、なのにこんな、他の女性へのプレゼントを選ばせるなんて……！」

あー、そゆことね。

「んとさ、サラさんや」

「……なんですか」

「今までさ、そうやってサラさんに色々とアプローチされてたじゃん？」

「……はい」

「でもさ、最近はサユカちゃんにも熱心だよね」

「そ、それは……！」

「それで前から思ってたんだけど」

ちょっと言いにくいけど。

「サラさんって――友達に飢えてるだけじゃないの？」

ズバリ、言ってしまった。

や、失礼とは思うよ？　でもさ、こんだけ何度も会っててサラさんが僕ら以外といるとこ見たことないし聞いたこともないし。僕だけじゃなくてサユカちゃんも、つまり性別関係なく好意を向けるのはやっぱりそういうことなんじゃないかと。

だってほら、その証拠にサラさん戸惑ってる。

「そうなの？　私ってそうなの？　考えてみれば私って友達いない？　そういえば高校のときもバイトしてたし卒業してからは怒涛の勢いで転職してきたから友達作る暇もなかったしトメさんといるときもサユカちゃんもいるときも楽しいし幸せだけどカカちゃんたちといても同じなような？　じゃあこの恋って錯覚？　いやでもついこの間にいろいろ悩んだばかりでこれは……ううう」

戸惑いすぎてオーバーヒートしそうだな、こりゃ。

「サラさんや。とりあえず悩むのはその辺にしないかね」

「でも……ううう」

「とりあえず僕らは友達なわけだから仲良くしよう。恋愛がどうとかはもっと仲良くなっていくうちに考えればいいんじゃないかな」

「そ、そうですね！　さすがはトメさん、大人です！　その辺のちゃらちゃらした男の人とは一味違いますね！」

や……単に昔、恋愛で痛い目にあったことあるから逃げてるだけ

なんだけどね。サユカちゃんのこと保留にしてるのもあるし。とは言うものの、サラさんに関してのくだりは間違いじゃないと思う。薄幸そうだからなこの人。

「それでさ、本題なんだけど」

「はい、テンカさんへのプレゼントは何がいいか、ですね」

「そうそう。何あげればいいかわかんなくてさ、ヒントないかな」

「ヒント、ですか」

うーん、と考え込むサラさんを見る。ヒント……

「サラさんといえば、まず皿だろ」

「……あの」

適当な雑貨屋に入って物色してみる。皿か……意外といいかもしれない。

「他に何があったっけ。ナベさん、オカマさん、ハナちゃんやら……鍋にお釜に花。どうにもあいつには似合わないな」

「あの！　もっとないんですか！？」

「あ、大根足があった」

「そうじゃなくて！」

他か……

「そういえばサラさんの服」

「はい！」

「フクちゃん」

「だーかーら！」

「はいはいごめん。でさ、その服だとよくわかるけど、サラさんて胸大きいね」

ボッ！　とサラさん真っ赤。初々しいねぇ、まぁそれはともかく。

「ここに『おっぱいプリン』ってあるけど、さすが直球なネタすぎるよな」

あ、サラさんコケた。しかしなんで観光地って必ずこんなもんがあるんだろうね。

「谷のジオラマ、こんなのまであるのか」

「あ、あのう？　トメさん、その賞品に目がいったのはもしや」

「胸の谷間見えたからなんとなく」

「セクハラです！！」

だってあなたそれが目立つ服着てるんだもの。

「そ、そりゃ私の自慢の武器に目をつけてくれたのは嬉しいですけど」

それはよかった。

「もう少し、その、頬を赤くしたりとか、そういうリアクションしてくれてもいいじゃないですか！　もしくは舐めまわすように見つめるとか！　そんなあっけらかんとヒントにされたら女として悲しいです！」

「そんなこと言われてもなぁ。僕も高校生とかじゃないし、大きい胸見たくらいじゃ簡単にはときめかないよ」

下ネタは得意じゃないし、年頃の妹がいるから注意はしてるけどね。

「そうですよね……トメさんはちっちゃい胸がいいんですよね」

「ちょと待てぃ。そうは言っとらんわ」

「じゃあもっと邪な目で見つめてください！」

「せっかくさっき友達宣言したのにそんな目で見れるか！」

「う……そうでしたね」

そうそう。しかし友達だからと気合を入れて、いつもならあまり言わない下世話なネタに持っていってみたんだけど……慣れないことするもんじゃないかな。

「こほん。改めて聞くけど、サラさんだったらプレゼントに何がほしい？」

「私、ですか。そうですね」

ちらりとサラさんの視線が動く。その先には……アクセサリの店？

「わ、私、指輪とかほしいです。それがもし、ペ、ペアで、左手にはめるようなものだったら、すごくいいなぁ……なんて」

「それだ」

「……へ？」

「あいつ飾りっ気ないもんな。うん、それでいこう！」

決めたからには即実行。僕は走り出す。

「え、あの、どこに行くんですか！」

「今日はありがとうサラさん！　早速用意してみるよ！」

「あ、待ってくださーい！　もっとかまってくださいよー！　これから私の誕生日の話とかしようと思ってたのにー！」

明日までに、か……時間がないな。

用意するのはペア、つまり一つじゃないんだ。急がないと！

## カカの天下５７８「よくあるデートの口実」（後書き）

思わずサラさんの今までのあだ名をちょっとだけ振り返る話になりましたが。ラジーちゃんとか出てませんが。

サラさん再び困惑中。なんか程よくお色気不幸キャラになりかけてる気がします。カカ天ではからかわれやすく迷走しやすい、ちょこちょこ出てくるサブな人っていう位置だったと思いますが……

友達認定したとたん仲良くなっちゃいましたね。そして書きやすくなりました（作者の都合

んー……出番、増えるやも？　逆に恋愛関係でひと波あるかもしれませんね。

とりあえず明日はテンちゃんの誕生会ですけどね＾＾

# カカの天下579「テンプレ」

よう、テンカだ。

今日はオレの誕生日だ。26になった――だからどうしたって感じなんだが、うちのガキどもがどうしても祝いたいって言うもんだから仕方なしに了承したぜ。面倒くせぇ。

土曜日だってのにわざわざ学校の体育館なんぞに集まりやがって……本来なら休みのはずなのに、勝手に学校の場所を使っていいのか？　と教頭に聞いてみると、ヤツはこう言った。

「ここは教育の場、つまり人を祝いたいという心を教え育てる場所でもある。生徒が自主的に誰かを祝いたいと言うならば、協力してこそ学校、賛同してこそ教師ではないかね」

ご高説どうも。しかし「そんならあんたもオレを祝うのか」と聞いてみると「君は私の誕生日に何もくれなかっただろう。だから祝わん」とか抜かした教頭は立派なんだかガキなんだかいまいちわからない。自分の尊厳でもデストロイしたのかね。

……まぁ、ともかく。ガキどもは休みだってのに律儀に集まりやがったわけだ。本当は何か出し物とかしたかったらしいが、オレの「んなことされたら背中がかゆくなる。てめぇら誕生日にオレの気分を害するつもりか」という一言によってプレゼントを受け取るだけとなった。

『テンカ先生！　誕生日おめでとう！！』

「あーはいはい、さんきゅ」

定番な合唱に、手をひらひらさせて適当に答える。

それがガキどもは気に食わなかったらしい。

『テンカ先生！　四捨五入したら三十路おめでとう！！』

「ぶっ殺すぞてめぇら！！」

『あ、元から四捨五入しても三十路だった！』

「わざわざ声をそろえて言い直すな！！」

思わず怒声をあげる。しかし日ごろからこんなもんなので、ガキどもはビビることもなく笑っている。ちっ。

「とにかくだ、オレはこんなん苦手なんだよ。だからてめぇらとっとと渡すもん渡したら帰れよ」

そっけなく言う。照れてるわけでもなく、これは本音だ。

「みんな、わかったー！？」

すると、それを聞いたカカは集まったガキどもに呼びかけた。

「ちゃんとプレゼントでテンカ先生を楽しませるんだよー？」

『おー！！』

おー、って……難しくねぇか、それ。

「さー、順番に先生にプレゼントしていきましょー」

「最初のかた、どうぞっ！」

サエもサユカもカカに倣ってガキどもを仕切っている。いつの間にか偉くなったもんだな、こいつらも。

「先生、おめでとうございます！」

「おう。誰だてめぇ」

「いい加減に生徒の名前覚えましょうよ！　私は信次です！　はいこれ」

おお、泡盛じゃねぇか。『与那国』か、うめぇんだよなこれ。しかし生徒に酒をもらう教師ってどうよ？

「さんきゅー泡盛」

「私の名前は泡盛じゃないです！」

「はいはい、あだ名ついただけでもテンカ先生的には快挙だよ。さ、次いこう！」

カカ、わかってるじゃねぇか。

「ケイです、初めまして」

「……担任相手に今さら初めましてってどうよ」

「じゃあ僕の名前覚えてたんですか？」

「初めまして！」

「なんか釈然としない……でも、はい。ハブ酒」

また酒！　しかもハブ入り、って……

「てめぇらそろって沖縄でも行ってきたのか？」

「いえ。ただテンカ先生といえば強いお酒かインパクト強い酒が似合うかなぁと」

「……さんきゅ、ハブ野郎」

「なんか友達からハブられてるみたいなあだ名やめてもらえます！？」

我ながらセンス溢れるあだ名だぜ。

「照々と申します」

「なんでどいつもこいつも初対面みたいなんだろうな」

「あなたのせいでしょ」

「うっせぇ。なにくれるんだよ」

「私のまともな部分を上げます」

「どこだよ！？」

はい次！

「台風１３号をあげる」

「いらん！！」

次！

「お医者さんセットをあげまーす！　これでコスプレして、好きな人とうっふんあっはん！　ふふふ」

「好きな人。誰でもいいのか。そうか。手始めにてめぇの脳みそ手術したろうか。おい誰かノコギリ持ってこい！」

「いやぁぁぁ！」

変なもん持ってくるからだ。次！

「あ、先生。これトメ兄からしいですよ」

「あん？　なんだこりゃ、花か」

赤いサルビアだ。メッセージプレートに『トメより愛をこめて』と書いてある。九月二十日の誕生花……花言葉は『あなたのことばかり思う』だと。くせぇ。

プレートの裏を見る。

姐さんが働いてる花屋の店名が書いてあった。

「どうどう？　どう思ったのテンカ先生！？」

「姐さんも暇だなーと」

「……ちっ」

――そんなこんなで、結局騒いで。

たまに長引くホームルームみたいなノリでだらだら喋り、適当に楽しんだ後、適当に片付けて、適当に解散となった。

「先生、さよならー」

「おー」

そして校門を出て、帰り道へ。

もらったもんを袋詰めして両手に持ってるが……重い。

映画のチケットやら温泉旅行のチケットやら妙な自作のチケットやら、かさ張らない物もかなりもらったんだが……これだけ数が多いとなぁ。しかし誰だＳ字フックを七つも送ってきたやつは。妙に派手な箱に『フックの魔術師　ぬこより愛を込めて……』とか書かれてたが、わけわからん。

いろいろくれて気持ちは嬉しいんだが……と。

数分も歩かずに、そいつを見つけた。

「テン」

「あん？　トメ、どうした」

こいつもなんかくれんのかね？　オレは軽くそう思っていた。

「その……テンに、渡したいものがあるんだ」

「ほう？」

いいぜ、もらえるもんはもらう。しかし物か。腐るほどもらったし……この際、飲みを一回奢ってくれるほうが嬉しいんだがな。

「これ」

トメがポケットに入れていた手をだす。

その手の上には、小さな小箱。

んだよ、結婚指輪でも入れるみたいな箱だな。

パカ、と耳心地いい音をたてて箱が開く。

その中には、ちょこんと指輪が二つ並んでいた。

やっぱ結婚してくれーみたいなボケか。

「テン！」

「お、おお？」

「そ、その……な……」

なかなか迫真の演技だ。頬も心なしか赤いし。

「僕は、まだ平社員で、収入も少ないし、指輪もこんなものしか用意できなかったけど」

ふむふむ。

「でも、でもな、その……気持ちだけは受け取ってほしいんだ」

「おう」

「僕と……その……」

はは、おもれー顔だ。はよボケろ。

「け、け……」

けけけけー、とでも笑う気か？

「結婚してくれ！」

あれま、言っちゃった。

顔を俯かせてぷるぷる震えてまー。

えーと。

どこで笑えばいいんだ、これ。

「トメ？」

トメは答えない。

え、なに。これドッキリじゃねーの？

ドッキリだろ常識で考えて。

わざわざ指輪なんか用意して、手の込んだボケなんだろ、これ。

ボケ？

待てよ、トメってツッコミだよな。

え？

なに、じゃ、これ。

ボケじゃねーの？

マジ？

まじ？

え、ぅえ、んなバカな、いやでも、トメ何も言わねーし、震えてるし、てっきり笑いをこらえてるもんかと思ってたけど、怖くて震えてるのか？

あれ、そういやさっきの花。妙に告白くせぇ花言葉のやつ、あれ姐さんのイタズラじゃねぇのか？　まさかこれの前フリ？　そんなわけねぇよな。おい。

待て、なんか急に恥ずかしくなってきた。

頭が真っ白になってきた。

んなこと今まで微塵も考えたことなかったが、考えなきゃいけねぇのか？　答えなきゃいけねぇのか!?　いや、そんなこと言われてもわかんねーよ!

おいトメ。

これはボケだって言えよ!

笑えよ!

「ぶはははははははははは!!!　もうダメ限界!　笑いをこらえるの限界!!!」

……

あぁん？

「こらトメ兄！　返事を聞くまでバラさない約束だよ！」

振り向く。どこからかぞろぞろ湧いてくるガキども。

「そうですよー、いま先生の表情が百面相になりかけてたのにー」

「ステキでしたトメさんっ、わたしにも同じこと言ってくださいっ！」

「ひはは、はは、ひー、苦し、ごめんサユカちゃん、もう無理だわ、なんだこの僕の演技、テンにプロポーズとか、ウケる！　テンが困ってたのがなおウケる！」

……

あぁん？

「はい、テンカ先生。改めてどうぞ」

「……あぁん？」

「こわっ！　え、えっとね、はいこれ。私とトメ兄の二人で作ったペアリングだよ。こっちはペアネックレスにペアブレスレット、サエちゃんとサユカン作ね。お母さんと一緒に使ってね」

「……へ、おお」

カカの説明を聞いて、狂気が一瞬だけ醒める。

「ほら、この間お見合いあったでしょ。トメ兄がね、あのときのこ

と思い出したの。テンカ先生も先生のお母さんもあまり飾りっ気なかったし、仲よさそうだったし、こういうのがいいんじゃないかって」

「そ、そうか」

うちの母親とペア、か。んな恥ずかしいこと何年もしてねぇが…喜びそうだな、うん。これも親孝行になるか。さすが親友。いいプレゼントくれやがるぜ。

「それでね、どうせペアリングなんていう紛らわしいもん渡すんだからプロポーズっぽいことして遊んでみようってトメ兄が」

「ぶはははははは！　あのときの自分の演技とテンの反応！　思い出すだけでまだ笑えるわ！！」

そう、確かに一瞬だけだった。

狂気が目覚める。

さすが親友。

おもしれぇことしてくれやがるぜ……

「はー、はー……あれ、どったのテンカさん」

ゆらり、ゆらりと近づいていく。

「あ、あのー？　テンカさん？　テンちゃん？　テンテン？　えっと、わかってたよね？　冗談だってわかってたっしょ？　僕がこん

なん言うわけないしさー」

ああ、わかってたよ。

どうせ笑い出すと思ってたよ。

別にトメとくっつきたいなんざ思ってねーし、期待もしてなかったさ。

でもな。

実際に絶妙なタイミングで笑われるとな。

めっさムカつく。

「今日はさんきゅーな、トメ」

「あ、うん。どうってことないよ」

「運動不足なオレのためにサンドバッグになってくれるんだろ？いやぁ素晴らしいプレゼントだ」

「……へ」

「どうってことねーよな？」

その後。

オレは次の日に筋肉痛になるくらいに運動した。

その夜。すぐさま母親に渡したペアのアクセサリーは案の定喜ばれ、そのまま二人でケーキを食い、生徒にもらった酒をかっくらった。

強すぎて母親は二秒で死んだ。オレもわりかし死にそうだ。

でも、まぁ。

悪くない一日だった。

もらいまくったプレゼントをどうするか考えながら――

祝ってくれたてめぇらに、乾杯。

## カカの天下579「テンプレ」（後書き）

サブタイトルの直球さに吹いたら負けです。
さて、短い募集期間でしたがいろんなプレゼントをいただきましたテンカ先生の一日はこんな感じとなりました！
いただいた感想等に全部返信してからこれ載せたかったんですが……多忙につき勘弁です＾―＾；
それから今回書かれなかったプレゼントも先生は実はもらっていて後でこっそり登場したりするかもなのでお見逃しなく！
そんなわけでテンカ先生おめでとう！
乾杯！

**カカの天下５８０「ＶＳタマ！　がんばれタケダ」**

ご機嫌いかがかな？　タケダだ！

今日は日曜日。さすがにカカ君の家に押しかけて覗き込むのは犯罪になってしまうので、仕方なく適当に散歩なんぞをしているところだ。

そして我が街で一番大きい公園を通りかかったとき。

「む、あれは……」

滑り台の上に一人の少女が立っているのを見つけた。幼稚園児くらいか？　なぜか小さな赤ジャージを着ているが、少女の身体のほうが小さいらしく、だぼだぼになっている。あれでは動きやすいのだか動きにくいのだかわからんな。変に可愛いが。

いや、誤解するな。別に可愛いといって目をつけたわけではないぞ。俺はカカ君一筋だからな。ただ、なんとなく見覚えがある子のような気がしたのだ。

「かうんとー！」

お？　周りに誰もいないのに一人で何か叫んでる。

「てん！」

ふむ、テン、ナイン、エイトとでもカウントするのか。

「なな！」

飛んだ！？　あ、ああ。ナインとなな、頭の文字同じだしな。

「むっくす！」

シックスとむっつが合体してるな。どっちも六だが。

「えっと……ごー！」

早いなカウント終わるの！！

ともかく言葉通り滑り台に身を投げたその少女は、するすると快調に速度を上げて滑り、

「はっしゃー」

勢いに任せて飛び上がって――いきたかったらしい。しかし少女の身体はちょこっとだけ浮いただけで、そのまま滑り台下の砂場に叩きつけられた。どごーん。

って待て！　ものすごい音したぞ今！？

俺は慌てて少女に駆け寄った。

「おい、大丈夫か！？」

普通の女の子なら泣き叫ぶだろう、怪我もするだろう。

しかし少女は無傷で無表情、あっさりと立ち上がり、

「痛い」

ぽそっと言った。それだけだった。なんて頑丈な子だ。

「だれだー？」

「む、俺か。俺の名はタケダ！！　君は？」

「かさはらたま」

笠原……そうか、誕生会などでカカ君たちと一緒にいたことがあったな！　だから見覚えがあったのか。

「タマ君はいくつかね？」

「ひゃくさい」

「なんと、見かけによらず年上だったのか！？」

「うん、はくさい」

「はくさいは美味いな！」

「くさい」

「それは困るな！」

「さい」

「動物園にいるな！」

「い」

「胃の調子はいいぞ？」

「くさい」

「なぜその言葉だけ繰り返す！？」

そんな意味不明な会話できゃっきゃと笑うタマ君。ふ、さすがは俺だ。無意味にいろいろな本を読んでおいてよかった。ついさっき『幼児と会話するときは目線を合わせましょう』と何かの本に書いてあったのを思い出したのだ。だから幼児目線になったつもりで何も考えずに喋っている。いや、もしやカカ君も常にこんな感じなのでは？

「かうんとー！」

「おい、どこへ行く？」

滑り台でダメだったのが悔しいのか、今度は公園の中心にある噴水へと走り出すタマ君。

そうか、噴水か。あれならもっと発射できそうだな。

タマ君は濡れるのも構わず水の溜まり場へとダイブ、そのままザブザブと水を豪快にかき分けて、天に向かい勢いよく水を噴射している装置に突進していった。

なぜ止めない自分！！

「おい待てタマ君！　それはさすがに危ない！！」

「ぜろー！！」

「いきなりそれ言ったらカウントの意味がなかろうにー！！」

そんなツッコミが届くこともなく。

タマちゃんの小さな身体は噴水の激流に弾かれ、吹っ飛んだ。すんごく痛そうな音と共に水しぶきがあがる。

「た、タマ君！　生きてるか？」

これはさすがに泣いただろう！

そう思った。しかし。

「びっくりした」

「それだけなのか！？」

頑丈すぎる……なんだこの子は。

「はっしゃー」

「待て待て待て！」

さすがに今度は止めないと！　俺は仕方なくに水溜まり場に入り、

タマちゃんを捕まえた。

暴れるかと思いきや意外とおとなしかったので、身体をそのまま持ち上げて水場から脱出する。

「ふぅ……君はいったいどこに行こうとしたのだね？」

「うちゅー」

……子供ってでっけー。小さいくせにでっけー。

「いいか、夢想をするのは良い。人間はそれを糧として無理難題や不可能を可能としてきたのだからな。だが無理無謀という限度を知らねば怪我や不幸を呼びかねないのだぞ？」

「ちきゅうごしゃべれ」

「他の言語知らないのだが！？」

「なにいってるかわかんない」

「あの、タマ君？」

「なにいってるかわかんない」

「いや、もう普通に喋ってるんだが」

「ちきゅうごしゃべれ」

「あの！？」

むぅ……ここは思い切って妙な言葉でも喋ってみるか。

「でゅみゅみゅみゅう！」

「わかった」

「なにが！？」

思いついた言葉をそのまま言ってみたのだが、まさか意味があるとは！！

「つねり」

「いだだだ！」

「これででみゅみゅみゅー」

な、なんと。でゅみゅみゅみゅうとはつねられたような顔のことだったのか。

「いたたた、は、はなしてくれ、もう勘弁してくれタマ君」

「ちきゅうごしゃべれ」

「俺いま何処の人になってるのですか！？」

ええい、こうなったら思いっきり異星の言葉を喋ってやる！

「あうちゃ」

俺がそれを言った瞬間、タマ君が動いた。

「てむきょ」

右フックをもらった。

「ねいたぁ」

そのまま肘うち。

「てるぁいぁ」

裏拳に繋げて。

「に、にぁるっすっす」

やめてくれ、と言ったつもりなのにタマ君は綺麗な回し蹴りをはなった。

あっさり吹っ飛ぶ俺……なにこの戦闘力。

「いうとおりにしたー」

そして明かされる衝撃の事実。俺が喋った言葉は全て、パンチ↓キック↓必殺技、みたいな格闘ゲームでいうコンボのような意味がこめられていたらしい。

そんなバカな。

声にならない声で呟き、倒れる俺。

「あ、ままー」

そんなボロボロ状態の俺を踏み越え、タマ君が向かった先に立っていたのは……この街で知らぬ者はそこそこいない、『怪獣より怪獣』と名高い笠原カツコ……

なるほど、彼女の子供ならば、このバケモノっぷりにも納得がいく。

しかし顔はあまり似てないな。

「またあそぼー！」

むぅ、正直気が引けるが、そう言われて答えないわけにはいくまい。

「お、おう！　またな！」

「ちきゅうごしゃべれ」

「何言えばいいのだ！？」

今度会うときまでにちきゅうごをマスターせねばならないな。

地球語じゃない。ちきゅうごだ。

……ちきゅうごってなんだ？

## カカの天下５８０「ＶＳタマ！　がんばれタケダ」（後書き）

タケダの出演要請が多かったので久々に。
と、いっても……タマちゃんのほうが目立ってますねぇ。
ま、しょせんはタケダ。こんなもんです。

でゅみゅみゅみゅう、はちきゅうごらしいです。
……ちきゅうごって何。

# カカの天下５８１「ちょっと気になる立場デス」

こんにちは、サユカですっ！

今日は何の変哲もない月曜日。普通に学校に行って、普通に授業を受けて、普通に給食を食べて、普通に昼休みを迎えたわけですが。

最近ちょっと気になっていたので、思い切ってサエすけに聞いてみました。

「え、お母さんのことー？」

「ええ。サカイさんって、こう言ったらなんだけどすっごいグータラな人だからさ。サエすけに構いまくりで仕事とか行ってないんじゃないかな、なんてっ」

あながち的外れな想像じゃないと思うわ。あの人なら「仕事なんかよりサエといる時間のほうが大事なのよー」とか鼻血を噴きながら断言してもおかしくない。

あら、でもサエすけったら首を横振り。

「お母さん、けっこー夜遅くまで仕事してるよー？」

「ええっ！？　で、でもサカイさんの勤めてる会社って強制で残業させられることはないって言ってたのに……」

「そうなのー？　仕事のことはお母さん何も言わないからわかんない」

仕事に目覚めた？

マジメに目覚めた？

むしろ人として目覚めたのかしらっ？　今まで人としてアレだったしっ。

「うーん……まぁ、ちゃんと働いてるならいいけど」

とても信じられないけど。

「サユカちゃんって私のお母さんについて詳しいんだねー」

「へっ！？　あ、うん。たまに電話したりする仲だったからっ」

電話の内容はサエすけについての情報提供だったから、最近は全然連絡ないけどね。だからサエすけにこんなことを聞いてみたんだけど……べ、別に電話がこなくて寂しいわけじゃないからねっ！

「……もしかしてサユカちゃん、前からお母さんと連絡とってたー？」

「え、そ、そうだけど、それがっ？」

「私のこと聞かれてたの？」

「ぎく」

鋭いっ。

「私の情報と引き換えに何か報酬とかもらってた？」

「ぎくぎくっ」

鋭すぎっ！　ほ、報酬っていっても喫茶店でデザートを奢ってもらったり相談に乗ってもらったりしただけで……で、でもそんな裏取引みたいなことしてたって知られたら感じ悪いわよねっ。

「や、やーねっ、そんなことするわけないじゃないっ」

「嘘だねー。私がお母さんだったら間違いなくそうするもん」

ぐっ、この似たもの親子めっ。

「で、でも証拠がないわよねっ」

「ないねー、残念なことに」

「ええ、残念ねっ」

「うん、残念なことに私の手元にサユカちゃんの携帯があるんだよー」

「なんでよっ！？　うわ、本当にそれわたしのだっ！　ポケット入れてたのにいつの間に！！」

サエすけはわたしの携帯を人質にとって小悪魔スマイル！！

「白状したほうが身のためだよー？」

「薄情者！」

「くだらないダジャレを言う人にはお仕置きだよー。携帯の中身を見ちゃおーっと」

ふんっ、見られて困るものなんて――

「おやおやー？　送信済みメールの中に、トメお兄さん宛てのが残ってるぞー？　サブタイトルが『大好き』って気になるね。『らぶ』とか『いやん』も気になるけど、とりあえずポチッとなー」

「いやぁぁぁぁあああっ！！」

見られて困るものだらけだったわぁぁぁぁっ！！

「白状するー？」

「しますっ！　わたしがやりましたっ！！」

「あなたはー、私の情報を無断で売りさばき、不当な利益を得ていたのですねー？」

「うぅっ、そんなこともちょっとあったけど、それは君たちのことを思って――」

「みたいだね」

「……えっ」

頷いたサエすけはあっさりと携帯を返してくれた。何かしら、てっきり色々と脅されるかからかわれると思ってたのに。

「データフォルダの写真、見たー」

「げっ！」

照れたようなサエすけの笑い、これは――やっぱり最近撮ったあの写真を見られたのかしらっ！？

「私とお母さんが写ってたねー。手を繋いで」

「……ええ」

やっぱりかっ。

「その写真のときね、私とお母さんは『ただいま』と『おかえり』の言葉を交換してたの」

……聞こえてたわよ。だから今まで応援してた身としては感極まって、思わずカメラ向けちゃったのよっ！　悪いっ？

「そうなるように、サユカちゃんも応援してくれてたんだよねー」

「ま、まぁ、そうだけどっ」

「ありがとー」

なによ、急にしんみりしないでよ。なんだか恥ずかしいじゃないのっ！

「それでー、私もその写真がほしいんだけどー」

あげるわよ、元々そのつもりだったし――そう言いかけてやめたわ。

「ほしい？」

「私にとっても大事な思い出だしー」

「じゃあその代わりに」

「お母さんみたいに私も脅迫するのー？　きゃー、サユカちゃんてば人でなしー！　えっちー！」

「なんとでも言うがいいわ。ほしいならわたしとトメさんの仲がもっとよくなるように協力しなさいっ」

「……サユカちゃんもたくましくなったよね。さすが『大好き』ってメールも送るだけはあるねー。えっち」

「うっさいわね。君らと一緒にいたらこうなったのよっ！　ていうか、えっちって繰り返すなっ！」

「てっきり私たちと一緒にいたらえっちになったのかとー」

「たくましくなったのよっ！」

と。そこでちょうどよく、一番たくましい友達が帰ってきた。

「ふぃー、ただいま」

「おかえりカカちゃん」

「そういえば悪いことしてテンカ先生に叱られてたんだったわねっ。どうだった？」

「ムカついたから笑わせてやった。でゅみゅみゅみゅうな顔したら一発よ」

ほら、こんなにもたくましい。

これと付き合ってたら図太くもなるってもんだわっ。

あ、でもいくら図太くなっても大胆にはなってないわよっ！？さっきのメールはサブタイトルが恥ずかしいけど、中身は『サブタイ驚きましたっ？　えへっ』みたいな内容で、別に変なこと書いてないんだからねっ！　ほんとだからねっ！

「サユカちゃん」

「なによっ」

「ありがとねー」

「繰り返すなっ！」

ま、仲良く元気にやってるならいいわよっ！

「サユカちゃん」

「今度はなによっ」

「えっちー」

「だからぁっ！！」

なんでその言葉まで繰り返すかなぁっ！？

## カカの天下５８１「ちょっと気になる立場デス」（後書き）

陰ながらサカイさんを支えてきたサユカちゃんのちょっとした一コマ。
ここで作者として、一つ感想を。

どこまで引っ張るんだ、でゅみゅみゅみゅう。

# カカの天下５８２「お子様にはレベルが高いかもしれない」

お久しぶりです、シューです！

え、おまえ誰だとか言わないでくださいよ！　僕って警官ですよ？　街中で見かけたらビクッとされる職業ですよ！？　そう、職業的にインパクトはあるはずなのに……なんでこんなに出番ないんだろう。うう。

――っと！　あまりの出番の無さにいじけて触れてはいけない類の話をしてしまいました！　僕はカタカナのシューですよ！　本編本編！

えー、僕はいまカツコお姉様の荷物持ちをするために交番から抜け出してきたところです。そう、仕事中にお姉様から呼び出しをもらったもので「通報をもらったので出てきます」と同僚に声をかけ、外出したのです。

え、嘘？　違いますよ。嘘なんかついてませんよ。

通信で報告があったのです。だから通報です。間違ってないでしょう？

「やっほ、サカイちゃん。遊びに来たよ」

「あ、カツコちゃんとその他一名、いらっしゃーい」

……はい、別に他一名でいいです。年末年始の旅行以来、お姉様だけでなくサカイさんとテンカさんにもずーっと下僕扱いされてい

ます。だから慣れてます、ええ。

仲良くお喋りする二人の後を静かについていきます。やがて部屋に通され、持たされていたお姉様の荷物を置くとお役御免となりました。

「その荷物はなにー？」

「お菓子とかいろいろ。お茶会に必要なもんだよ」

「あらあら、ふふー。今日はお互い休みですし、サエはカカちゃんちに遊びにいっちゃいましたし、二人してお庭のテーブルでのんびりしましょうかー。テンカちゃんがいないのは残念ですけどー」

二人で……ね。あはは。

「ん、それはいいけど。今日はサエちゃんにべったりしなくていいの？」

「あははー……ちょっとべったりしすぎたみたいで、お母さんもちょっと休んだほうがいいよって言われてしまいました」

「休まなきゃならないほど頑張ってべったりしなくても」

「だってー」

はい、話に全く入れません。

「……では、僕はそろそろ仕事に帰ります」

「あ、まってー。せっかく来てくれたんだし」

思わぬ言葉に大感動！　ま、まさか僕も一緒にお茶会を！？

「うちの下僕と遊んでいけばー？」

そうは問屋が卸さなかった。

そして。

その、サカイさんの下僕だという人を前にして。

「おう、シューじゃないか」

ひぃえええええええ！　という悲鳴を心の中であげていた。

だってだって！　サカイさんの下僕だっていうから下僕同士仲良くできるかと思ったのに、なんでこのでっかい人が出てくるんですかぁ！？

「夏祭りのときは世話になったな」

「こ、こここちらこそ！！」

そうです、夏祭りのときの警備でコンビを組まされた、ゆーたさんなのです！　そのときは役職的に僕のほうが立場は上のはずなのに全く喋らせてもらえず、ズルズルと引き摺られていたのです……

こ、こんな人と仲良くできるかー！！

――数分後。

「いや、下僕という種族は数が少なくてな。こっちの方面で話せる相手がなかなかいなかったのだが……やはり趣味が合うもの同士で話すと楽しいものだな」

「そうですね」

なんだか通じるものがあって案外打ち解けてしまいました。

話も弾んでいき、盛り上がった僕らが持ち出した話題はやはりこれでした。

「下僕たるもの、主人に踏まれてこそ本懐だな」

「ええ、まったくその通り」

自然な流れですね、うん。

「しかし僕はなかなか踏んでもらえないんですよ。前にお姉様にお願いしたら『こうなるけど、いいの？』って傍にあった岩を踏み砕いてましたし……あれくらったら普通に死にます」

「俺などは……腰が痛いからと、踏んで揉んでもらうように頼むがな」

「あ、それいい考えですね！」

「堂々とした理由で踏んでもらえる。我ながら素晴らしい作戦だと思うぞ」

「ちょ、ちょっと試してきます！」

「うむ、ぐっどらっく」

ビシッと親指を立てあう僕らは戦友だった。どこに戦があるのか？　何を言う、人生とは日々戦なのだ。

ちょっと格好つけてみました。さてさて、お姉様はまだ庭にいるかな……あ、いた！

「お姉様！」

「どったのシュー」

「あらあらー、ハァハァと悩ましい声」

「走ってきたから息が切れてるだけです！」

「この距離で？」

「あらあらー、ハァハァと情けない声」

「言い直さなくていいです！　そんなことよりですね、お姉様。じ、実はその、僕、いま腰が痛いんですよ、すっごく痛いんです！」

実は本当に痛かったりします。大人になって働くとどんな職種であれ、姿勢を気をつけないと腰を痛めやすいんですよね。

「だ、だからその、マッサージで踏んでもらえませんか！」

「へー、腰が痛いと」

「はい！」

だ、ダメ？　ダメですか？

な、なんで無言で立ち上がるんですか。

なんでのっしのっしと僕のほうに歩いてくるんですか？

なんで僕の肩を掴んで！？　あ、あ、い、いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！

ボキごきゃグキぐきゃブッツンドゴどごっどごっごどっかんグルグルピーポーピーポーでゅみゅみゅみゅうッドスン！！

ありえない音を響かせながら、僕の身体はいろんな方向へぐりんぐりんとシェイキング。

よほど怒ったのかなお姉様。見たことも無いプロレス技っぽいのを大連発して……

ああ……僕の身体はどうなったのかしら。

お姉様の唸りまくる豪腕から解放されて……

僕の身体は……

身体は……

「身体かるっ！！」

「ふ、あたし流整体術！　もう腰痛くないっしょ？」

「は、はい！」

それどころか全身の凝りという凝りが消えています！　一瞬で痩せたかのように身体が軽いです！

「ありがとうございました！」

「いーよいーよ。たまには下僕孝行しないとね」

僕はルンルン気分でゆーたさんの下へ戻り。

怒られました。

「たわけが！　貴様は踏んでもらいに行ったのではなかったのか！？」

「そ、それが、意図が伝わらなかったみたいで」

「まったく、素人はこれだから困る」

「じゃ、じゃあゆーたさんだったら、どうお願いするんですか！」

「決まっている。下賤な私めの恥ずかしいところを踏んでくださいと土下座するのだ」

なんて男らしい！　いや、漢らしい！　むしろいやらしい！

で、でも僕にはそこまでできない……しょせん僕はチキン野郎なんだ……

「あ、ゆーたー？」

ぅおっと!?　いつの間にかサカイさんが！

「は、ミエ様」

「まだ帰らないでねー。後で踏んであげるから」

「よろしいのですか!?」

「うん。カツコちゃんと色々話してるうちに気づいたんだけど。今サエと一緒にいられるのは……元を辿れば夏祭りであの子と出会った私が逃げ出しそうになったとき、戻れとばかりに弾き飛ばしてくれたあなたのおかげなのよね」

「も、もったいないお言葉！」

「だから思いっきり踏んであげるー」

「ヒールでお願いします！」

あー、ゆーたさんいいなー。

やっぱチキンな僕とはレベルが違うんだなー。

チキン……

お姉様、僕を食べてくれないかなぁ。

……あれ。なんだかゆーたさんと喋ってるうちに思ってることがだんだん露骨になってきたような？

ま、口にしなければいいでしょう。

思ってるだけなら捕まりません。

警官が言うんだから間違いありません。

だから、さぁ！　あなたも！！

## カカの天下５８２「お子様にはレベルが高いかもしれない」（後書き）

秋分の日……
シュー分の日……

ごめんなさい、出来心なんです。

それにしても変態だなこいつら。

## カカの天下５８３「忍法、疲労回復」

こんにちは、トメです。

今日は夕飯にカカを連れてラーメンを食べに出ました。そしてラーメンといえばあいつも……とキリヤを誘い、三人でお食事です。

「や、いつもながらここのラーメンはにんにくすごいな」

「はふ、はふ、あふい」

「私は身体が疲れたら必ずここのラーメンを食べますよ。にんにくで活力回復です。ただ、油断すると次の日までにんにくの匂いが残っているので要注意ですが」

三人そろってズルズルする。んー、辛うま！

「ところでトメ君」

「なんぞやもし」

「私は小学校の頃までにんにくのことを肉だと思っていたのですが」

「あー、僕もそうだった」

「おお、同士よ。カカちゃんはどうでしたか？」

隣を見ると、カカはれんげに乗せた麺をふーふーし、食べようとして汁の中に落としたところだった。間抜けで地味に可愛いが、本

人はムッとしながらキリヤに答えた。

「……私は忍者の肉だと思ってた」

あー、そんなん言ってたな。そういえば。

「それはどのようなもので？　忍者を殺して千切り取った肉ですか」

「グロいグロい、食事中にそんな話すんな。えーと、説明するとな？」

再び麺を汁に落として「ムキィ」と呟くカカを眺めながら、

「最初はカカも僕らと同じように、にんにくを肉だと思ってたんだよ。で、いつだったか、にんにくたっぷりのスタミナサラダだぞーって夕食に出したら――」

『トメ兄、肉はどこ？』

『肉じゃなくてにんにくな』

『にん？　忍者の肉？　どこ』

『あー……忍者だから隠れたんじゃないか？』

『なるほど！』

「と、適当なことを言ったら信じたわけだ」

「ほうほう、さすがトメ君。子供の発想を馬鹿にしない見事な返し

方です」

「や、馬鹿にしてた。甘く見てたとも言うか。それから僕が肉を扱うたびにカカが寄って来て――」

『あれー、肉どこいったかな』

『お肉が隠れたの？』

『ん、見つかんない』

『じゃーそれ忍肉だね。隠れたんだね』

『そうかもなー』

結局、冷凍庫の奥にあったんだけど……

『トメ兄、何してるの』

『肉を水につけて解凍してんの』

『忍法、水とんの術！』

『はいはい、そだね』

『トメ兄、何してるの』

『肉を焼いてんの』

『忍法、火とんの術！』

『はいはい、そだね』

『トメ兄、何してるの』

『焼いた肉を切ってるの』

『忍法、とんとんの術！』

『なんやそれ』

『包丁をトントン』

次の日。公園にて。

『トメ兄、どこへ行くの』

『トイレに』

『忍法ぼっとんの術！』

『や、確かにここのトイレは水洗じゃなくてぼっとん便所だけど』

「――と、このようなエピソードがあるのだよ」

「ずいぶんと冒険しましたね忍肉さん。隠れてからぼっとんするまで」

「ぼっとん言うな」

食事中だと言うのに僕も配慮が足りなかったかな。

「でもま、今じゃカカもにんにくのことはちゃんとわかって……どしたカカ？　ラーメンの中ずっと見つめて」

「このチャーシュー……豚肉だよね」

「そだな」

「豚って……とん、って読めるよね」

「よく知ってますね。偉いですよ」

何が言いたいか大体読めた。

「忍法、豚の術！」

いったい全体どんな脂ぎっしゅな術かはわかりませんが、一応『とん』と言ってます、ええ。

カカはチャーシューをびしっと指差し、再び断言した。

「豚！！」

「はいはい」

さらには厨房の方を向く。このラーメン屋は調理風景が見れるようになっているので、ちょうどそこで店員が大きな肉を焼いているのが目に入り、カカはそれを指差した。

「豚！！」

「はいはいはい」

この子は何をやりたいのか？　そんな疑問はいつものことだ。

カカの視線は客席へ。そして汚らしくラーメンをすすっている、とっても肥えたおばはんを指差した。

「豚！！」

「はいはいはいはい――って！」

確かに見た目が豚だけど！

「すごい豚！！」

「言い直すな！」

すごい豚なのはわかるけど！　ラーメンすする勢いすごいし！　鼻息荒いし！

げ、こっち気づいた。

げげ、来る、なんか来る！

「うあ、０．１トンの術とかするのかな」

「座っているトメ君の膝の上に乗るのですね。どっすんと。色んな意味でウゲェェ」

おまえら呑気だなオイ！　その０．１トンありそうな豚が来るんだぞオイ。どっかの養豚場に連絡を――

「ちょっとあぁたたち？　あたくしに何か言いたいことでもあるのかブー？」

ブッ！！　とラーメンを吹き出す僕ら……い、今の「ブー」は、カカが僕らしか聞こえないくらいの小さな声で、付け足したんだけど……

「何を笑っているのブー？　失礼しちゃうわブーブーブー」

や、やめ……ふはは……カカの声があまりにもおばはんの台詞にうまく重なっておもしろすぎる……

「ちょっと、本気で怒るざますよブー！？」

ま、まずい。深呼吸しろスーハースーハー。

「こほん。お気に障ったならすいません、なんでもないんです。実は」

「おならブー」

「ぶはははは！！」

ダメだ僕。戦闘不能。呼吸不能。こんな失礼に育ってごめんなさい父さん母さん。でもおもしろすぎるんです。

「あ、あぁたたち！　いい加減にしなさい！」

「ブヒー」

ダメ、ほんとダメ。腹痛い。隣を見ればカカも腹を押さえて痙攣している。よくそんなんでブヒーとか言えたな、自殺行為だぞ。

「申し訳ありません、お嬢様」

と、そろそろおばはんの堪忍袋的にも道徳的にも本気で危ういかと思われたとき。キリヤが立ち上がった。

「お、おじょう、さま？」

「はい、お嬢様。実は本日、私たちの父とも呼べる人が亡くなったのです。その方を私達は『おとん』と呼んでずっと慕っていました……しかし、その人はもういない。だから決めたのです、笑おうと。悲しくなったらとにかく笑って、涙を吹き飛ばそうと」

笑いすぎて涙出てますけど。

「その『おとん』の面影が、あなたにあったのです」

「で、でもあたくしは」

「ええ、女性です。しかし私達の『おとん』は中世的な顔立ちでした。あなたのような女性ながらに凛々しい方に『おとん』の影を見てしまい、つい悲しくなってしまって……無理やり笑おうとしたら、このようなことになってしまいました。本当に申し訳ありません」

「そ、そういうことなら、まぁいいわ！」

おー、すげー。おばはん納得して帰っちゃったよ。

「はー、笑い疲れた。キリヤンすごいじゃん」

「忍法、口車」

そうしてキリヤは笑った後、

「――だブー」

しっかり僕らを笑わせてくれたのだった。

――そして。

「忍者の話してたから登場してみたのに……結局気づかれなかった……」

店員の格好で肉を焼きながら、

「ぶぅー」

僕の父さんは頬を膨らませてスネていたのでした。

## カカの天下５８３「忍法、疲労回復」（後書き）

サブタイトルは忍肉が使うことのできる究極の奥義です。

疲れたときはにんにくだね！
豚肉もいいよね！

ぶー。

……あ、ついにでゅみゅみゅみゅうが。

**カカの天下５８４「あなたならどの競技に参加しますか？」**

こんにちは、カカです。

ただいま午後の授業でクラブ活動の時間です。手芸部員である私、サエちゃん、サユカンの三人は、家庭科室のおっきな机を囲みながらせっせとビーズをいじっています。

「よし、できた」

「何ができたのー？」

「作品名、鼻毛」

「なんつう名前よっ。しかもどの辺が鼻毛？」

「ほら、ここにちょろっと毛が生えてるでしょ」

「……じゃあ、その毛が生えてる楕円っぽいビーズの塊は、鼻なの？」

「や、お尻」

「じゃあ尻毛じゃないのっ」

「サエちゃん聞いて。サユカンね、尻毛がいいんだって」

「何もかも略しすぎな説明するんじゃないわよっ」

そんな感じで遊んで――じゃなくて活動してたんだけど。

「さて、諸君」

「どしたのカカすけ」

「そろそろ今学期の我々手芸部の活動内容を決めようではないか」

「活動って、今やってるのじゃダメなのー？」

だってビーズ遊びはいつもしてるし。クラブ活動って感じじゃないんだよね。

「前学期ではテンカ先生のお見合いを邪魔したり、漫才大会に出たりと大活躍だった我々手芸部だが」

「あれクラブ活動だったのっ？」

「当たり前でしょ！　なんだと思ってたの？」

「……なにかしら。説明できないわ」

「じゃあクラブ活動でいいじゃん」

サユカンは首を傾げながらも頷いた。細かいこと気にするねこの子は。

「それで、我々は今学期は何をするべきだと思うかね？」

「はーい」

「うむ、サエ君」

「運動会に何か一発かませばいいと思いまーす」

おお、それがあった。去年は運動会の日がことごとく雨で結局中止になったんだよね。今年こそは頑張ろうと思ってたとこだし、手芸部としてさらに何かするのも悪くない。

「い、一発かますってなによっ」

「んー……」

「何か案はあるかね？　サエ君」

「カカすけ、どうでもいいけどさっきからのその変な口調なに？」

「部長っぽくしてみた」

えっへんって感じ。偉そうになってるかな？

「アナウンスのマイクを奪う、とかどーかなー」

「あ、それ面白そう。それで実際とは違った競技の放送を流したりすれば……どうなる？」

「迷惑にしかならないわよっ」

ちっちっち、と指の運動。

「そこはうまくやるんだよ。ねーサエちゃん」

「そだねー。例えば玉転がしの競技があったとするでしょー」

「うんうん」

「こほん。『えー、次はサユカちゃん転がしです。サユカちゃんを掌の上で転がしたい人は集合してください』とかー」

「転がされてたまるもんですかっ」

「あ、本当に転がすわけじゃないよー？　面白おかしく鬼畜にからかうって意味で」

「丁寧に説明してくれなくてもわかるわよっ！　却下っ！」

「よし。じゃあこんなのどうよ。『次はトメ兄競走です。トメ兄が好きな方は競走してください』とか」

「トメお兄さんの心を奪ったほうが勝ちだねー」

「絶対に一番になってみせるわっ！　賛成！」

どう競走するのかさっぱりだけど、やるなら私も参加、かな。や、一応ね、一応。

「多分その日だけじゃ決着つかないと思うけどねー。じゃあ次は何のサユカちゃん競技にしよっかなー」

「む、それならわたしだって！　『次はサエすけ競走です。サエす

けが好きな方は競走してくださいっ』でどうよっ」

「カカちゃんのマネでオリジナリティがなーい」

「ううっ」

「それに多分お母さんが勝つよ、それ」

「ふ、サエちゃんのためなら死ねる私を忘れてもらっちゃ困る」

「お母さんも多分死んでくれるよー？」

「……サエすけ？　ちょっと言い方選びましょ」

「サカイさんとはいい勝負ができそうだ」

そんな感じでわいわい喋ってると、顧問のくせにたまにしか顔を出さないテンカ先生が入ってきた。

「よう、てめぇら」

「……テンカ先生競走か。意外と大勢参加するかも」

「人気あるもんねー、なぜか」

「サエすけっ！　いくら不思議だからって、いくら不思議だからって、いくら不思議だからって本人の目の前で『なぜか』とか言わないのっ！」

「なんで三回言うの」

「それだけ不思議なのよっ！」

サユカンもほんとたくましくなってまー。

「何の話かよくわからんが、怒っていいんだよな？」

まーまー落ち着いてモチついてーと先生をなだめるついでに、運動会で私たちがするべきことはあるかな？　と聞いてみた。

「応援用に垂れ幕か横断幕でも作れよ」

私たちはびっくりワーオ。

「それがあった！　それでいこう！」

「手芸部っぽいわっ！」

「まったく思いつかなかったー」

「……あん？」

私たちがあまりにも驚いたのが気になったらしい先生に、さっきまでの会議内容を説明してみた。

するとなぜかジト目で見られた。

「なんかてめぇら、手芸部っつうか……手芸しながらなんか企む部になってねぇか？」

そだね。

## カカの天下５８４「あなたならどの競技に参加しますか？」（後書き）

今年はやります運動会！
来月上旬くらいを予定してまっすー。

も少しまったりしてからね。

んー、にしても何するんですかね、手芸しながらなんか企む部の三人は。

# カカの天下５８５「おかーさんマジ自重しろ」

こんばんは、サカイです！

今日も今日とて残業してのお帰りですー。いつもサボってばっかだった私が最近急に残業ばかりするものだから、同僚の方に「病院いく？」なんて言われてしまいましたよー。「いや、いこう。すぐいこう今いこう。人が壊れていく姿なんて見たくない」なんて続けられましたが、正式に社員になる話があると説明したらようやく納得されました。

今まではアルバイトみたいなものでしたからねー。社員になるからにはきちんとお仕事しないといけません。私は今、二人分の生活費を稼がなければいけないのですから。空読のジジイに言えば援助はしてくれるでしょう。実際、私も夫と別れてからしばらくは、空読からの慰謝料という形の援助をいただいて生活してきましたし。

しかし今。私は自分の力で二人で暮らしていかなければならないのです。母親として。

お仕事は一生懸命やります。残業もします。家に帰り、深夜には資格の勉強もしています。

立派でしょー？

すごい頑張ってるでしょー？

それというのも――

「ただいまー！」

「お母さん、おかえりー」

この、この、このこのこのこの可愛いすぎる娘のおかげなのです！

「お母さん、えっと――」

「ご飯にする、お風呂にする、その前にサエにするー！！」

ガバッと！

「ふわわわわわわー！」

「する！　サエに擦るー！」

ほっぺたをすりすりすりすりー！！

五分後。

「ふー、今日の疲れも癒えたわー」

「ほっぺがー……ううー……ねーお母さん。これ毎日やってて飽きない？」

「サエの身体に飽きるわけがないでしょー！」

最高の触感だわーにへへへへー。

え？　さっきまでの母親の威厳が消えた？　うっさいばーか。

「はいはい、とにかくご飯作ったよー。どうぞー」

「ううん、ごめんなさいねー。本当ならお母さんが作ってあげなきゃいけないのにー」

「お母さんは仕事で忙しいでしょー。それくらいはいいよー」

「ううん、いい嫁もらったもんだー」

「はいはいー」

二人には大きすぎる家を歩きます。でも、この家で一人で暮らしてきた私にとってはサエが嫁にきてくれただけで、もう天国！　寂しさなんてこれっぽっちも感じはしないのですー！

「あのね、これはちゃんと作ったの。あとは冷凍食品なのー」

テーブルに並んでいるのは鶏のから揚げ、きんぴらゴボウ……これらは冷凍食品ね。そしてサエが作ったのは……野菜炒め！

「ごめんねお母さん。私、何かを適当に炒めることしかできない……」

「大丈夫よサエ。世の中には誰かを適当に痛めつけることしかできない人もいるんだから！」

今ごろカツコちゃん、くしゃみしてるかな。

「それじゃー食べましょー！　いただきます」

「うん。いただきますー」

母娘二人での食事……

ううー、一緒になってから毎日感動してしまうわー。野菜炒めうめー。

「ねーお母さん」

「ん、なにサエ？　あーんしてほしい？」

「い、いや、そうじゃなくてー」

「じゃ、私にあーんしてー」

「そうじゃなくてー！　あのね、お母さん。大事な話があるの」

真剣な顔のサエ……

この子はどんな顔も可愛いわー。

「大事な話？」

「うん。あのね、私と」

「結婚！？」

「なんでそうなるのー！！」

「いや、ほら、同棲の次はやっぱり……ねー？」

「ねー？　じゃなくてー！」

あら残念。違うのかー。

「お母さん、私たち」

「私たちの間についに子供が！？」

「もー！　話を聞いてよー！」

やーん怒ったサエも可愛いー！

「……話聞いてくれないと、もうちゅーしてあげないからねー」

「申し訳ありませんサエ様！！」

それは！　それだけはー！　ただでさえ一緒になった初日にしすぎたせいで、特別な日じゃないとダメって禁止させられてるのにー！！

「じゃーちゃんと聞く？」

「聞く聞く、なんでも聞くよー！」

「じゃー、これ」

渡されたのは一枚のプリント。えーとなになに……運動会の父兄参加プログラム？

「親子で二人三脚しながら、障害物競走……あの、一緒に、出てくれないかなー、なんて」

サエの言いたいことはわかったわ。

そうね、せっかく一緒に住み始めたんだもんね。

せっかく改めて家族になったんだもんね。

「一緒になってからの、初めての共同作業……がんばるわよー！」

「う、うんー。なんか結婚式のケーキ入刀みたいな言い方だけど」

私にとっては変わらないわよー！　ふふ、頑張るわよー。

「ところでお母さん。私、運動神経スッカラカンなんだけどー……お母さんは？」

「運動神経？　もちろん、ちぎれてるわよ」

「ち、ちぎれ……！？」

「うん。でもまーちぎれたら結べばいいんだからー」

「……朝からジョギングとか始めよっかー」

「うんうん！　また二人でいる時間が増えるわねー」

「もー……前のお母さんってこんなにべったりだったっけ」

「あらあら、ちょっとひっつきすぎかしらー？」

「ううん、すごくひっつきすぎー」

「じゃあやめる？」

「……やだ」

私たちってラブラブよねー、ふふふー。

はー、幸せー。

幸せすぎるー。

さて、と。その幸せを守るために、今夜も勉強しますかー！

## カカの天下５８５「おかーさんマジ自重しろ」（後書き）

大・暴・走！！

これがおかーさんの本領発揮さ！

書きながら「ホント何してんのこの人」としみじみ思っちまいました。

# カカの天下５８６「最大ＨＰは３」

おはようございます、サエですー。

運動会にてお母さんと出る二人三脚障害物競走に向けて、今朝からジョギング開始ですー。

「最初は軽くいきましょー、サエ」

「うんうん、私たち体力ないからねー」

おそろいの黒ジャージを着て、二人して走り始めますー。

たったったーと。

一分後。

「ゼーハーゼーハーゼーハー！！」

「お母さん、いくらなんでも体力ないよー」

「……っ！」

「声も出ないんだねー。でもいくらなんでもここで止めるのはダメだよ。がんばろー！」

膝に手をついて肩で大きく息をしながらも、ビッ！　と親指を立てるお母さん。さすがー！　格好いいー！

「さ、いくよー！」

「……おすっ」

声が裏返った返事と共に、再び走り出す私たちー！

そして一分後。

「ぜーはーぜーはーぜーはー！！」

私がダウンしました。

「……！」

いくらなんでも私たちヤバくない？　とお母さんに視線で訴える。

「……っ！　……っ！」

それはわかるわー！　でもどうしようもないのー！　と声無しで返事してくれるお母さん。

「……！」

あそこの公園のベンチで休もー！

「……！」

超さんせー！

目線だけでそんな会話を交わした私たちは、酔っ払いのようにフ

ラつきながらも公園のベンチへとたどり着き、そこへと倒れこんだ。
ああ、なんだか横を通り過ぎていったジャージ姿の父子に笑われたー……なんであんなに軽快にジョギングできるんだろー……あれ、なんか見たことある顔だったような。

「……ふー。お母さん、大丈夫？」

「大丈夫くにゃい……」

私はなんとかマトモに喋れるまで回復したけど、お母さんはまだ息も絶え絶えだ。歳の差かな、なんて思ったそのとき。

「サエおねーちゃん！　大丈夫ですか！？」

あららー？　突然どこからともなくクララちゃんが現れたー！

「クララちゃん、どうしたのー？」

「サエおねーちゃんの命の危険を感知して飛んで来ました」

……私、そこまで疲れてたの？

「それにしても久しぶりだねー」

「はい。最近はサエおねーちゃん色々ありましたから、お邪魔にならないようにと思いまして」

「クララちゃん……なんだか大人な気遣い、ありがとー」

「いえいえ！　もうすぐ冬も近づいてきましたし、クララも枯れ気

味なのです！」

年寄りくさくなるって言いたいのかなー？

「なのでしばらくしてからお二人の前に姿を現し祝福するつもりでしたが、なにせサエおねーちゃんの命の危機だったのでやむなく」

「そ、そっかー」

気をつけないといけないね、命……

「そこの人はすでに死にかけですが」

「お母さん！？　ああ、こんなに痙攣してー！　やっぱり歳なのー？」

「寿命ですか！？　ずいぶんと若作りしていたのですね！　実は中身はクソババアだったのですか！！」

「なんでクソつけるのー！　ってそれどころじゃないー！　クララちゃん、お水持ってきてー！」

「クソをつけた水ですね！」

「違うー！　なんでそんなにクソつけるのー！」

「所詮クララは木ですから！　肥料大好きです！」

「女の子失格！　その発言禁止！！」

「クララしょっくです！」

てんやわんやで数分後、公園のお水を備え付けのコップに入れて持ってきてもらい、それを飲ませてあげたおかげでお母さんはなんとか生き返った。

でも私たちの表情は暗かった。

「サエ……私たち、本当に人間かしらー」

「二分間走っただけで死にかけるなんてなかなかないよー……」

いくらなんでも体力なさすぎだよねー。どうしたらいいんだろー。

……と。

悩む私とお母さんに、意外にもクララちゃんが提案をしてくれた。

「鍛えたかったらこの人に聞けばいいです」

そして案内された先には……

「あれま。どったの？　珍しい三人だわね」

私が知る限りで最強の人類が立っていた。

「クララちゃん、あのー？」

「この人に聞けば即解決です！」

「た、確かにそうかもしれないけどー」

「なにさなにさ、何の話よ？」

なんとなく無茶なこと言われるのが目に見えてる……そう思いつつも一応聞いてみた。

「あの、お姉さん」

「カツコちゃん」

「なんじゃらほい？」

「全然体力のない私たちが身体を鍛えるには、どうすればいいと思う？」

お姉さんはきょとんとしたあと、何でもないことのようにあっさりと答えた。

「あたしが最初に鍛えられ始めたのは五歳くらいだったんだけどね。そのときゃ無装備でどっか森の奥に放置されたよ。やってみ？」

ほら、無茶がきた。

「なんかヤバげな獣とかいたし、食料調達しなきゃいけないし、子供だろうが体力なかろうが生死かかってりゃ根性が搾り出されて色々一気に鍛えられるよ」

「本当に死んだらどうするのよー！　そもそも五歳でよく生きてたわねカツコちゃん」

「や、もちろんオヤジの監視つきよ？　本当に危なくなったら助けてくれてたさ」

「そ、そうやって助けてくれる人がいないから却下だねー」

「あたしが監視やろっか？」

『遠慮しときます！！』

いくらなんでも無理だよー！　とお母さんと声をハモらせる。

「はぁ……やっぱり地道に少しずつ頑張るしかないねお母さん。運動神経が粉々にならないといいけどー」

「そうね、サエ……でもお母さんもう運動神経死滅してるかもー」

仲良く肩を落とす私とお母さん。

そんな私たちに、後ろから。

「頑張ってください、お二人さん」

クララちゃんがこんなことを言ってくれて。

それがジョギングだけじゃなくて、もっといろんなことを応援されているみたいで……少し元気が出たのでした。

## カカの天下５８６「最大ＨＰは３」（後書き）

せっかく二人一緒になったので、出番も増え気味な親子です。そして久々登場なクララちゃん。この子もなにげに見守っていたのでした。

体力壊滅的な二人ですが……

私の友達には歩いて五分で息切れする女の子もいますし、あながちありえない体力でもないんですよねこれが。皆さんも引きこもりには気をつけましょう。いつの間にか「人としてどうよ？」って言われるくらいに体力落ちてたりしますから。

# カカの天下５８７「まげ」

むにゃむにゃ？　カカです。

えっと、今……いつだろう。ここはどこだろう。私はカカだろう。

「殿！！」

「うい？　ぶっ！」

振り向くとそこにはちょんまげ姿のトメ兄が！

「どうしたのトメ兄！」

「は？　殿こそどうされたので」

「との？　よくわかんないけどちょんまげ似合うねトメ兄」

「は、はぁ。ありがとうございます」

あれ？

気づけばここはおっきな和室。私は偉そうな席に座っていて、目の前には大量のちょんまげがずらりと並んでいた。

「なんかの畑みたい」

「お殿様！　自分の部下にそのような言い方はいかがなものかと！」

あ、ちょんまげが生えてるんじゃなくて、ちょんまげ男たちが私に平伏してるのか。

って、なんでさ。

「おとのさま？　どゆこと？」

「これは夢です」

「超理解した。わかりやすい説明あんがと」

とにかく私は殿様なわけだ、えっへん。

「ささ、お殿様。早速命令をどうぞ」

「おお、トメ兄――や、じいよ。いや、名前的にはばあやよ」

「誰がばあやじゃい」

おトメさんっておばあさん絶対いるし。

「んじゃ、じいでいい？」

「はいはい、なんでもいいよ」

「その命令ってなんでもいいの？」

「もちろんです。この部下どもはお殿様の下僕であり夢の産物。あなた様の思うままに動きます」

よーし、じゃあ……

「皆のもの！　我を称えよ！」

『カカ殿様！』『カカ殿様！』『カカ殿様！』『バカ殿様！』『カカ殿様！』

「誰だ今バカって言ったやつ！」

「お殿様、こやつらはあなたの心を移します。つまりあなたがどこかで自分をバカだと自覚している部分があるからこのように言われたのです」

むむ……や、たしかに思ってるとこもあるけどさ。

『やーいバーカバーカ』

「成敗してくれるわ！！」

「お待ちくださーい！　殿が自分でそう思ったからこやつらが反応しただけのこと！」

むぅ、意外と使いにくいなぁ。

「ささ、気を取り直して次の命令を」

「んんん、じゃあ……皆のもの！　街の人間を全てちょんまげにしてくるのじゃ！」

「もうすでに全員ちょんまげですが」

「バカじゃないの？」

『やーいバーカバーカ』

「コホン、殿？　ここはあなたの夢とはいえ、時代劇の世界なのですよ？　ちょんまげは当たり前です」

『そーなのかー』

「や、いちいちちょんまげ軍団に合唱させなくていいですから」

さすが私の夢。微妙に本人とは違ってもトメ兄がツッコミなのは変わらないんだね。

「――おっと、大変です殿！」

「どったのG」

「Gて！　それも確かにじいですが……ってそれはともかく！　今入った報告によりますと、なんと農民が一揆を！」

「いっき？」

よし！

「はい、コーラ持ってきてー」

『一気！　一気！　一気！　一気！』

「っぷはぁ！！　きくぅ！」

『きくぅ！！』

「なにちょんまげ全員に混じってコーラなんか一気飲みしてるんですか！　一揆ですよ一揆！　農民が攻めて――ああ！」

突然部屋へとなだれ込んでくる農家の方々！

「あ、そっか。農民が一気か。さん、はい」

『一気！　一気！　一気！　一気！』

「なんだこの光景……」

「皆で仲良くコーラ飲んでるんだけど」

「そうじゃなくて！　一揆ですよ！　社会の授業でやったでしょ！」

「覚えてない」

「殿の夢に出てくる僕が知ってるってことは、殿も覚えてるってことなの！」

ややこしいなぁ。

「つまり皆、お腹がすいてるんです！」

ぐんぎゅるぐんぎゅるるるるるるー♪

「なに全員の腹の虫で合唱させてんですか！」

「や、楽しいかと思って」

『お腹すいたー』

「僕の顔をお食べ？　って食べないよ！　何言わすんじゃバカ殿！」

「これ、じい。言葉が過ぎるぞ」

「ああもう面倒だ、丁寧な言葉遣いやめやめ！　いいか殿！　一揆ってのはな、殺し合いだ！」

ちょんまげ軍団と農民が死んだ。

「全員殺してどうすんだよ！！」

「や、だってさ、じいがそんなこと言うから想像しちゃって」

「それにしたってこの地獄絵図はあんまりだろ！　なんか全員コーラ飲みすぎで死んだみたいなシュールな展開になってるぞ！」

「仕方ないなぁ。んじゃ全員生き返って」

『うっしゃー！』

「お手軽だなおまえら！」

「よーし！　ちょんまげ軍団も農民もよーく聞け！　おまえらが私の夢の――いや、私の中の住人だというならば！　変な子と名高い

私に恥ずかしくないおもしろいことをしてみろ！　全員で！」

『うおおおおおおお！』

「ぶはははははは！　あれ」

笑いながら起きたのは初めてだ！

あー、おもしろかった！

……何がおもしろかったんだっけ。

「思い出せぬ！！」

めちゃくちゃ悔しいんですけど！

「おーいカカ、起きたか？」

「じい！」

「……は？」

「なぜちょんまげじゃないのだ！？」

「よーわからんがおまえの寝癖はちょんまげに近いぞ」

なんですと？　鏡を見ると……おーブラボー。パイナップルみたい。

だからあんな夢みたのかなぁ。

「……くるしゅうない」

「おまえの髪の毛は苦しそうだが」

うむ、シャワーでも浴びて楽にしてくれるわ。

## カカの天下５８７「まげ」（後書き）

今回のお話はけっして某なんとかけんさんのなんとか殿様を元に書いたわけではありません！！

嘘です。

**カカの天下５８８「委員長ご乱心？」**

「申し訳ありませんが、皆さんお静かにお願いいたします」

どうも、カカです。

今の丁寧な言葉遣い何！？　って驚いた人、安心してください。今のは私じゃありません。いくら最近の日本が異常気象でやたら寒かったりするからって、私まで異常になったりはしないのです。

え、いつも変なことするじゃないかって？

それ正常じゃん。私的には。

「えー、今から運動会に参加する種目を決めていただきます」

ともあれ現在、授業を一つ潰しての作戦会議だったりするのです。内容は今イチョウさんが言ったとおり……誰がどの種目に出るかで結果は大きく左右します。腕がなるぜ。みょんみょんと鳴るぜ。これは異常だね。

「なお、わたくし達のチームが勝てばテンカ先生が焼肉へ連れていってくれるので頑張りましょう」

『おおおおおお！！』

盛り上がる私たち！

「……ねぇ、今ここにテンカ先生いないけど、それ本当なのっ？」

「いないほうが悪いよねー」

「サエすけ？　サエすけっ！？　それどういう意味！？」

言葉通りの意味だよ。クスクスクス。

「お、恐ろしいクラスだわっ」

「トメ兄も焼肉連れてくよ」

「絶対勝つわよっ！」

恐ろしく扱い安い子だわサユカン。

「さてさて、皆様。知っての通り先生がいませんので――」

「いやはやサエちゃん、お主も悪よのう」

最近見た殿様の夢と似たような感じでサエちゃんに話しかけると、サエちゃんもすぐにニヤーと笑ってノッてきてくれた。

「いえいえー、お殿様ほどではー」

お代官様じゃなくてお殿様ってわかるところが通じ合ってる証拠だよね！

や、さっき夢の話したからなんだけど。

「わたくしが進行させていただきます。それで、あの――」

「ところでこういう会話をする場合、サエちゃんって何て役だっけ」

「えちごや、じゃなかったかなー」

「えっちＧｏ屋？」

「えっち後屋かもしないよー」

「なんでわたしを見るのよっ！」

だって、サユカンならわかるかと。

「まずは徒競走の方から順に――」

「ねーねーサユカちゃん。どっちが本当なのー？　えっちＧｏ？　えっち後？」

「わかった、えっち小屋だ！」

「知らないわよっ！　ていうか君ら、えっちえっちって恥ずかしくないのっ？」

「だってそういうの気になる年頃だもの」

「なら少しは恥らいなさいよっ！」

だってえっちなのは私じゃなくてサユカンだし。

「徒競走、女子。五十メートル、百メートル、あと持久走とリレー

と全部カカさん、と」

「待てぇぇぇぇぇぇぇい！」

聞き捨てなら無い言葉が聞こえて再び時代劇モード！

「イチョウ殿！　何ゆえ！？」

「お話を聞かない人にはお罰を。これは学校のルールであります」

「お罰って！」

「可愛い言い方でしょう？」

「そうじゃなくて！　そんなに出るのはいくらなんでも」

走ってばかりじゃつまらないから他にも色々出ようと思ってるのに！

「大丈夫ですよカカさん。この間、体育で持久走をやったでしょう？」

「へ、うん」

なんか私一人だけやたら早く終わっちゃったから、ついでに余計に走ってたんだけど。

「そのときのカカさんは男子よりも長い距離を走り、なおかつこの学校で男子を合わせても最速のタイムを出しました。これくらい平気だとわたくしは思います」

なんじゃとー。

「カカちゃんすごーい！」

「カカすけ……君ってそこまですごかったのねっ」

仲良しな二人だけでなくクラスの皆に賞賛され、なぜか拍手をもらってしまった私。

「や、どもども。なんか恥ずかしいなぁ」

「カカさんは全種目出場、っと」

「だから待てぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇい！！」

そりゃ色々出たいとは思ってたけど全部って！？

「カカさんなら大丈夫ですわよ」

「そ、そんなぁ」

や、まぁ、やれと言われれば根性でやってみせるけどさぁ。

「そうそう、この小学校に残っている伝説によりますと、カカさんのお姉さんは在学時、六年間全ての運動会で全ての種目に出たそうですよ？」

あんなバケモノと一緒にすんな！

「カカさん？　これに懲りたら人の話はきちんと聞きましょうね」

イチョウさん……もしかしてそれだけを理由に怒ってた？　なんか顔も喋り方もとことん普通なんだけど言ってることが容赦ないよ？

「さて、次に決める種目ですが、どれどれ……『サエちゃん競走。サエちゃんを誰が一番好きなのかを決める競走』だそうで参加者、は……」

読み上げてから次第に言葉がなくなっていくイチョウさん……

すいません……それ入れたの私です……

ちょっとしたジョークになるかと思ってやりました……

でもなんか怒ってるっぽいイチョウさんにやるべきではなかった……

ど、どうするのかなイチョウさん。

「……」

ポイ。

「さて、次は――」

って捨てた!?　そして何ごとも無かったかのような進行！　や、やっぱ怒ってるよこの人!?　相変わらず顔は普通だけど！

「カカさんは男子の種目も全部出場、と」

「おやめくだされい！　なにとぞ！　なにとぞー！」

なんだかイチョウさんはとても不機嫌なようだった……話を聞いてなかったのがそんなに癪に障ったのかな。それとも何かあったのかな。うーん……

とにかく各メンバーの出場種目を簡単に説明すると……

私、全部。

サエちゃん、親子二人三脚障害物競走。

サユカン、五十メートル走と借り物競走。

アヤちゃん&ニシカワ君。ペアで玉転がし。ニシカワ君はうちのクラスの男子では一番スポーツ万能なため、他にも色々出るっぽい。

インドちゃん、パン食い競走。吊るすパンをカレーパンにしたら速くなるのでは？　という実験をするため。

そしてイチョウさんは……親子二人三脚障害物競走。サエちゃんと同じだ。

その後は普通に喋ってたけど、怒ってたわけじゃないのかな？

うーん？

## カカの天下５８８「委員長ご乱心？」（後書き）

いつもなら誰かを振り回す方のカカが振り回されてます。イチョウさんのいつにない強気なペースに戸惑ったようで……

まぁ、マイペースとはいえまだまだ子供。予想外の事態には弱いのです。予想外なことばっかするタマちゃんなんか天敵ですね。だからといって嫌いになるわけでもないんでしょうが。

運動会の種目が決まりました。

さて、どうしてくれようか……

ちなみに姉は小学一年生の時点で今のカカより速いです。どんだけー。

# カカの天下５８９「実行委員？　がんばれタケダ」

やぁやぁ、タケダだ。

実は今回、運動会の実行委員をやることになったのだ。伝統ある行事を滞りなく進めるための重要な仕事、頑張らねばなるまい！

そう気合を入れていたのだが……なにやら雲行きが怪しいのだ。少し話を聞いてくれ。

まず俺のクラスメイト。概ね応援してくれているのだが、一部に厄介なやつがいてな。最近そいつがやたらと突っかかってくるのだよ。

「ようタケダ。運動会の実行委員になったんだって？　よかったじゃねぇか、運動ダメダメなやつでも役に立てて」

「おや、ヤナツ君。君こそよかったではないか、大して目立たないながらもささやかな見せ場ができて」

「んだとぉっ！　このグラタン野郎！」

果たしてそれは悪口なのだろうか？　グラタン好きな俺としては理解しかねる。

この頭の悪い男子はヤナツ。同じクラスなのだが、周囲の者からは『ヤ』が足りない男子として有名だ。

どういうことか？

ほら、ヤナツに『ヤ』の文字を足してみろ。ヤなヤツになるだろう。

「……いい気になってると痛い目みるぜ」

「ふむ、それは何度か俺の靴や机に画鋲を入れたことを言っているのか？」

「なっ！」

小学生のような悪戯だ。

あ、俺たち小学生だった。

「偶然に目撃した人間が教えてくれたよ。そんなことを続けていると、またカカ君にボコボコにされるぞ？」

「ううう……お、覚えてろ！」

はてさて何を覚えていればいいのやら。かつての悪業を理由にカカ君に八回ボコられたことか。

ともかくヤナツがヤナヤツなのはわかってくれたかな？　問題を起こしてくれなければいいのだが……何が一番ヤなヤツかというと、全然面白くないのだ。お目汚しすまない。

「なな、そこの実行委員」

呼ばれて振り返ってみると、見知らぬ上級生の男子さんが。

「おまえさ、撮影も担当するんだよな？」

「ええ、一部だけですが」

「じゃあサエ様を撮れ！！」

……またか。これで八人目だ。

「えー、俺は先生方から任されているため、そのような贔屓はできませぬ」

カカ君はいっぱい撮るが。

「ちぇ……やっぱ自分で撮るしかないかぁ」

「それならそれでお気をつけて。同じサエ君ファンクラブに見つかったらボコられますよ」

「うぐ……」

聞くところによると運動会で『サエ競走』なるイベントがあるやも？　という噂が流れているとか。実行委員としてはそんな馬鹿なと言いたいが、あのカカ君ならなんとかやりかねん。

「タケダ？」

「おう！？」

噂を思えばなんとやら！　そこには愛しのカカ君が！

「か、カカ君ではないか！」

「タケダが実行委員なんだってね」

「おお、全力を注ぐつもりだ！」

「ハ」

……あれ？

なんだか鼻で笑われましたよ俺。

「じゃ」

な、なんだその「タケダが？　じゃ好き放題できるや」みたいな態度は！

いくらカカ君の頼みとはいえ、好き放題させると思っているのか！？

させますね。

「た、タケダ、君」

「おお？　ノゾミ君ではないか」

今日の昼休みは客が多いな。

「自然な会話……自然な会話から……」

なんだ？　声が小さくてよく聞こえんが。

「あ、あの……わたし、ね？　パン食い競走に、出るんだけど」

「心配するな。ちゃんとカレーパンも混ぜておくぞ」

「あ……！　ありがとう！」

そんなに喜ばれるとは思わなかった。そこまでカレーパンの有無を心配していたのか。

「本題……本題……」

またもや小さくて聞こえない。本代？　まさかまたもや本Ｄｉｅ、訳すると『本格的に死ね』とか言われるのではあるまいな。

「あの！　あ、危ないところを助けてくれてありがとう！」

きょとん、としてしまった。

「い、言った、言っちゃった」

「ノゾミ君、カレーパンが無かったらそんなに危なかったのかね」

「……え？」

「もしや他のパンを食べると倒れるとかあるのか？　もしくはあんパンが嫌いだとか」

うちの兄貴の知り合いが聞いたら激怒しそうだが。

「……伝わって……にゃい……くすん」

「あ、おい！　ノゾミ君、どこへ行く！？」

ああ、なんだかわからないが泣きながら去っていく……俺の何が悪かったのだろう。さっぱりわからん。

「タケダさん」

「お？　これはこれはイチョウ君ではないか！」

やっとまともな会話ができそうだ！　いやはや、常に冷静かつ穏やかなイチョウ君はとても頼りになるのでね、運動会の進行について相談したかったのだよ！

「タケダさんのクラスには死んでも負けませんから」

相談、したかったの、だけ、ど？

いつもどおり穏やかな顔、しかしそれだけを言ってツカツカと去っていくイチョウ君の姿は……なんというか、怖い。

……俺の何が悪かったのだろう。さっぱりわからん。

せっかくの運動会、俺が楽しくしてやろうと思っていたのだが。

まさか俺、地味な便利屋みたいになるのではなかろうか？

## カカの天下５８９「実行委員？　がんばれタケダ」（後書き）

タケダの出番を増やしてほしい！　その意見をくんで書いてみたのですが……

タケダ、頻繁に出るとあんまおもろくないですね。まぁコメディ的にもヤナヤツがいたのもありますが笑
しかも登場＝出番少なくなるフラグが立つからやりにくく……
ま、しょせんタケダです。出番もどそ（ぇ
出番を増やしたければ革命を起こすしか……

**カカの天下５９０「季節はずれのあんにゃろぉ」**

ただいまー……と言っても誰もいませんよっと。

カカですよっと。

学校から帰ってきたところですよっと。

靴を脱ぎ捨てて自分の部屋にいきますよっと。

居間の横の廊下をたったーっと。

なんかちらっと居間に妙なもんが見えましたよっと。

キキッ、とブレーキですよっと。

バックしまーすバックしまーす、っと。

居間を覗きましたよっと。

サンタさんがいましたよっと。

「……？」

なんか、おかしいですよっと。

あれ、今日って十月になったばっかりだよね。アレの出番まであと二ヶ月だよね。

……なんで今、居間に？　あ、別にダジャレのつもりはないよ？
マイったねこりゃ。

「プハー」

赤い服に帽子、白髭もしゃもしゃのサンタが何をしているかというと……座ってタバコ吹かしながら、寝転がってテレビ見てる。

なんか腹立ってきた。

「ランドセルあたっく」

「オゥ！？」

無言で投げつけたランドセルは横になっていたサンタの頭を見事に潰した。ざまみろ。

「い、いったいのぅ！！」

サンタは衝撃でフラつく頭を両手で押さえながらこちらを向いた。

そして私を見て、固まった。

「の……」

の？

「ノゥ……」

のぅ？

「Ｎｏ！！」

え。

「ま、まさか外人！　英語！？」

「Ｉ　ａｍ！　Ｔｈｉｓ　ｉｓ！　Ｉ　ａｍ！　Ｔｈｉｓ　ｉｓ！！」

「やっぱり英語だ！　どうしよう！」

な、何を言ってるのか全然わからない……前にちらっとトメ兄に教えてもらったけど、こんな英文初めて聞いたし！

「うぅ、どうしよう、どうしよう」

「ふぅ……なんとか誤魔化せそうじゃの」

「そこのサンタいま日本語言った！？」

「ＫＩＮＯＳＥＩＪＡＹＯ！」

「うわ英語だ！　わかんない！」

「……ローマ字だっての」

英語って本格的に発音されると全然わからないよぅ。なにさロゥマジィダッテノゥって。そんな単語知らないよぅ。

「何言ってるか、わからない、全然わからない」

「……さて、逃げるか――」

「仕方ない、問答無用でボコボコにしよう」

「待てぇい！！　なんでそうなる！？」

「面倒なことはさておき、事態はスッキリ解決するでしょ」

「スッキリするのはおぬしだけじゃろうが！」

あらら？

「日本語喋れるじゃん」

「しまった……傍若無人なノリがあの女にそっくりでついツッコんでしもうた……」

うな垂れるサンタさん……や、サンタの格好した泥棒、なのかな？

「とりあえず警察に電話、か」

「ちょっと待つのじゃ！　わしは怪しいもんじゃない！　サンタじゃぞ！」

「サンタが生きてていいのは十二月だけだよ」

「それは本物のサンタがあまりに可哀想ではないか！？」

ふむ……それもそっか。もし本当のサンタだったら警察に突き出すわけにもいかないし。

「じゃ、もう少し話をしよっか」

「ほっ……おお、サンタに答えられることなら全て答えるぞぃ」

「さっきの英語、なんて意味？」

あれ？　私をうまく説得できたかと思いきや意外な攻撃をくらって固まった、みたいな顔してる。

「いや、その、それは」

「意味あるんでしょ」

「い、一応は」

「じゃ、教えて」

「どうしても、知りたいかのう？」

「うん」

「先程の意味は……その……」

「うんうん」

「私は！　これは！　私は！　これは！」

「馬鹿じゃないの？」

「うっさいわい！　外人のフリして誤魔化そうと必死だったのじゃ！」

言われてみれば確かに騙されかけた！　むむ、やるな。

「不愉快じゃ！　わしは帰る！」

「適当なこと言って逃げ出すな」

「ちっ！　大体じゃな、おぬし。なぜそこまで突っかかってくるのじゃ。サンタが子供のいる家に入って何が悪い？　言うてみぃ！」

「住居不法侵入罪」

「む、難しい言葉知っておるの」

「あと猥褻物陳列罪」

「何が猥褻だというのじゃ！？」

「Ｙｏｕ！」

「Ｍｅ！？」

おお、ノッてくれた。やるねサンタ。

「オゥノゥ、ショック……！」

「打ちひしがれたままノリで帰ろうとするな」

「……くそぅ、おぬし小学生のくせにやるではないか。法律なぞを持ち出すとは」

「ふ。昔ね、トメ兄相手にボケるためだけに法律を勉強したことがあるんだよ」

トメ兄が反応しそうなのしか覚えてないけど。

「見逃してくれないかのぅ？　ほら、確かにわしはここでくつろいでおったが、何も盗ったりしとらんよ？　ほれ」

サンタさんはポケットをびろーんとのばし、何も持ってないよーとアピールする。そういえば白い大きな袋、というサンタの標準装備も持ってない。

「何も持ってないじゃろ？　だから何も盗ってないのじゃ。犯罪者じゃないのじゃ」

「そうだよね、そもそもサンタさんは何か奪う人じゃなくて、何かをくれる人だもんね」

「そうじゃそうじゃ」

「んじゃとっとと出すもん出せ」

「何もないと言うておろうが！」

「身体があんだろ」

「おぬしのほうがよっぽど犯罪者っぽいのぅ！？」

ふ、そんなに褒めるなよ。照れるゼ。

「仕方ないのぅ……ええい、バラしてしまうがの。実はサンタと忍者は協力関係なのじゃ」

……む？　うちの父親知ってるのか。

「だから今日はおぬしの父上に呼ばれてきたのじゃよ」

「で、そのお父さんは？」

「五分前にシュバッと消えおった」

私の気配を感じて逃げたのかな。

でも、サンタと忍者が知り合い？　そういえばずーっと前のクリスマスに、トメ兄がサンタと喋ってたようなこと言ってたような……

「信じてくれるかのぅ？」

じー、っとサンタさんの目を見る。

ん、悪い人じゃないね。

「おっけ。憐れんだ目で見送ってあげるから無様に逃げていいよ」

「……なんだか信用されたのかされてないのか、よくわからない返

事じゃが」

「ううん、信じた。あなたは本当のサンタ、これでいいよね？」

「あ、ああ」

サンタさんが、いるのかどうか。

さすがにこの歳になればわかってる。

でも、いてほしいと思うのは……自由だよね。

「で、ではわしは、これで」

「うん、ばいばい」

適当に手を振って、背を向ける。

そのまま玄関から帰るのかもしれない。

もしかしたらシュバッと消えるのかもしれない。

まさかトナカイが迎えに？

夢が広がる。それでいい。

事実はどうあれ、それだけで……

「なぁ、カカ」

「なに、トメ兄」

「僕のパンツが一枚ないんだけど、知らないか？」

あのサンタ、まさか！？

その正体は、意外にも来週あたりにわかることになるのでした。

## カカの天下５９０「季節はずれのあんにゃろぉ」（後書き）

書いた本人が言うのもなんですが。
不思議な話ですねぇ。
サンタて（笑）
タケダといい微妙な話が続きますわ（タケダ微妙なやつ扱い

## カカの天下５９１「一生懸命な子を騙すのは簡単です」

こんちゃ、カカです。

今日は朝からサエちゃんの顔を見れて、私はご満悦です。家が近くなるっていいよね！

どういう意味か？　えっとですね、実はサエちゃんにジョギングを教えてほしいと頼まれまして。ぶっちゃけジョギングに教えるも何もないと思うんですけど、一緒にいられるならいっかーと思って了承したのです。

というわけで、とりあえず一緒に走り始めたサエちゃんとサカイさんにご指導をば。

「まずは呼吸はミュージカルに」

「あぁあぁあぁあぁー♪　こんな感じー？」

「お母さん。いい声だけど、それ息吐いてるだけだよー」

「違った。リズミカルだ」

「はっはっはっはー、これでいい？　カカちゃん」

「何笑ってんの」

「呼吸してるんだよー！」

この辺は序の口。さて、次のステップへ行こうか。

「あのね、走りながら喋ると疲れるでしょ」

「はぁ、はぁ、うんー……」

「ぜー、ぜー……」

サカイさん、もうそれですか。体力無さすぎだね。

「それでね、呼吸と一緒に声を出せば、辛いけどいいトレーニングになるんだよ」

「なるほどー」

「なるほどだぜー」

サカイさん、男らしくカモフラージュしてぜーぜー隠したね。

「というわけで私に続いて声を出してね」

「わ、わかりましたー、はぁ、はぁ」

「わぜーかぜーりぜーましぜーたぜー」

サカイさん、タヌキで『た』抜きの暗号みたいに『ぜー』を抜く暗号だね。

「いくよ。はい、はっはっは！」

「はっはっはー！」

「ぜはははは！」

サカイさん、わざとやってない？

「はい、ほっほっほ！」

「ほっほっほー！」

「おほほほほー！」

絶対わざとだ。この人、芸風変わったな。

「はい、にゃーにゃーにゃー」

「にゃーにゃーにゃー」

ああ、可愛い……サエちゃんに猫耳つけたいな。

「ぜにゃ、ぜにゃ、ぜにゃ」

ああ、気持ち悪い声だ……猫を踏み潰してるみたいな。

「きゃんきゃんきゃん」

「きゃんーきゃんーきゃんー」

ああ、犬耳もいいなぁ。

「ぎゃわわん！」

ああ、疲れてるのか余裕あるのかどっちなんだこの人。

「あん、あん、ああん！」

ちょっと色っぽくしてみた、ドキドキ。

「あーん、あーん、あーん」

なんかどっかの青いタヌキの主題歌思い出した。

そしてサカイさんの異様に艶っぽい声にびっくり、さすが大人だ、となるかと思いきや。

「あんだこらー！」

こっちのセリフだこらー。

ともあれ、他にも……

「もきゅーむきゅーみきゅー」

とか。

「みぃみぃみぃ」

とか。

「ちゅっちゅっちゅっ」

とか。私の欲望が指示するまま、サエちゃんに色んな言葉を言わせることができた。いやー鼻血出そうですよ、どうしましょ。

「……」

そしてふざける余裕のなくなるほど疲弊したサカイさん、いまや鼻血出しながら無言で走ってます。しかしグッジョブ！　と親指立てられました。いぇーい。

そんなこんなで公園に差し掛かり、ベンチで休憩することになりました。

「はぁー、はぁー……疲れたよー。ね、カカちゃん、お母さん？……なんで二人して鼻血出してるの？」

や、だってね、あなた。

「サカイさん、生きてるー？」

「あぁー……萌え死ぬってこういうことかー……」

「個人的には、ひとちゅ、ふたちゅ、みっちゅーが最高かと」

「それで鼻血出たわー」

走ることに一生懸命で自分がどんな破壊力抜群なことを言っていたのか気づいていないサエちゃんは、慌ててティッシュを取り出して私たちの鼻血を拭いてくれた。

「ティッシュ常備してるの？」

「うん、お母さんが鼻の粘膜が弱くて鼻血出やすいって言うからー」

多分それ嘘。弱いのは自制心だ。

「それにしても二人とも、言うほど走れなくもないじゃん」

「呼吸の仕方をミュージカルにしたら随分と楽になったよー」

ミュージカルでよかったっけ？　まぁいいや。

「あとは二人三脚の練習だね。私、全部出ろと言われはしたものの、これは出ないんだよね」

この競技は父兄も参加するから、そんなに大人数は出れない。だから親子で仲のいい人、もしくはこれをきっかけに仲良くしたいっていう人たちに譲ってあげたのだ。意外と参加希望が多かったし…ま、うちはそんなのしなくても仲いいしね。

「ふふふー、それなら大丈夫だよー。この前に足を結んで走ってみたんだけど、全然問題なかったんだよー。一回も転ばなかったのー！　ね、お母さん」

「……」

サカイさんは無言で頷いた。さっき少し返事してくれたけど、基本的には死にかけらしい。

「でもなんかわかる気がする。サエちゃんとサカイさんって色んな

テンポが似てるもんね。喋り方とか、考え方とか」

腹黒とか。

「どっちかというと姉妹に近いかも？」

「片方はけっこー歳ですけどねー」

言うね、サエちゃん。

「……あれー？」

「どしたの」

「いえ、あの人たち」

サエちゃんの指差す方には一組の父子が立っていた。その向こうにもう一人いるかな？　二人の身体に隠れてこっちからじゃよく見えないけど。

「あのお父さんと息子さん、よくジョギングのときにすれ違うんだよー。お父さんと男の子で仲がいいなーと思って見てたんだけど」

お父さんが羨ましいとか？　や、わざわざ聞くことじゃないか。

「あの男の子、なんか見覚えがあるようなー」

「……あ」

父子が二人して、おもむろに走り出す。そして見えたその横顔は

……

「あの男子、私が何度かやっつけたことあるやつだ。ほら、サエちゃんを苛めてたこともあった」

「んー、覚えてないやー。その頃はそんなのどうでもよかったしー」

そっかぁ。思えばサエちゃんに会う前はあいつと結構遊んでたっけ。そんなに友達とも思ってなかったけど、ドッジボールとかするにはいい相手だったし……ああ、サエちゃんを苛めるのを見てからだ、そいつが苛めっ子だと知ったの。だからそんな場面を見つける度にボコってたんだけど。

「あれ、イチョウさんじゃないー？」

「ほんとだ」

ヤなヤツとその父親っぽい人が去った後に残っていたのは、まさしくイチョウさんだった。

「なんだか険しい顔してるー」

「何かあったのかも。あいつヤなヤツだし。今度懲らしめておくかな」

「やめたほうがいいよー。兄妹喧嘩にそうそう他人は口を出すものじゃないしー」

「……は？」

兄妹？

あの二人が？

「まーカカちゃんたちの喧嘩なら私たちは口出すけどねー。家族だしー」

そんな嬉しすぎる言葉にも、私は反応できなかった。

それほど衝撃的だったのだ。

あの大人しく（最近は強いけど）頭のいい穏やかなイチョウさんと、悪ガキないじめっ子のヤなヤツが、兄妹？　双子！？

似てなっ！

似てなっ！！

似てなさすぎ！

それにしても、何を話してたんだろう？

## カカの天下５９１「一生懸命な子を騙すのは簡単です」（後書き）

とてもあくどいタイトルのこのお話。いかがでしたでしょうか？
あくどかったですか？
それともグッジョブですか？

まぁともかく。
この三人だとサエちゃんで可愛く遊べることが判明しました（おぃ

イチョウさんについてはノーコメントで。

あと最近、感想の返信ペースがとても遅いので申し訳ないです。
明日からはわりとちゃんと返せると思うので、懲りずに送ってくださいまし＾＾；

# カカの天下５９２「地味な子が怒る理由」

こ、こんにちは、インドことノゾミです。

実はですね、今日ですね、えっと、昼休みなんですけど、音楽室で会議をしてもらっています。その……私の、タケダ君への告白について。

ああああ告白と言っても違いますよ？　あなたが好きですとか私実は人間じゃなくてカレー星人なんですとか麻薬組織のカレーですとかそういう衝撃的な告白ではなくて！

その、助けてくれてありがとう、そう伝えたいだけなんですけど。

「どうしてそんなにうまくいかないのかしらね！」

「ご、ごめんなさい……」

「こらこらアヤ坊、そんなに怒ったらダメだよ。タケダのことはうまくいかなくても、インドちゃんのカレーはうまいんだからいいじゃないか」

「ニシカワさん、何がどうよろしいのかさっぱりわからないですよ」

メンバーは最近おなじみになってきた四人です。私、アヤちゃん、ニシカワ君、イチョウさん……いつもはここにタケダ君が加わるのですが。

「それにしても、あれかしら。こんなにうまくいかないってことは、

インドちゃんとタケダって水と油なのかしら」

「間違いなくタケダが油のほうだな」

「安い油ね」

「もしくはイヤミなほど高いやつ」

「人間的に安っぽいから、安いのでいいのよ。でもインドちゃんはきっと富士山あたりで採れる綺麗な水ね！　なんか誰にも気づかれない岩の隙間からちょろちょろっと可愛らしく湧いてるやつ」

「それはインドちゃんが地味でちっこいと言いたいのかアヤ坊」

「よくわかったわねニッシー」

「インドさん、怒ってもよろしいかと思いますが」

そ、そっか。ありがとうイチョウさん。

「わ、私、水よりカレーがいいです！」

「そうではなくて」

え？　え？　だってカレーなら油も合うし……じゃあ、えっと……

「イチョウさんも地味だよ！」

「怒ってもよろしいですか？」

「あぁぅぅごめんなさいぃぃぃ」

思わず口が滑ったんですぅぅぅ……

「この水と油を合わせるには……ニッシー、どうすればいいと思う？」

「洗剤でも混ぜれば？」

「理科室行くわよ！」

「インドさん、止めませんと」

そ、そっか。

「うちは中性洗剤です！」

「すすめてどうするのですか」

え？　え？　だって肌が荒れないから……

「ふぅ……仕方ありませんわね。アヤさん、待ってくださいな。洗剤をどうするおつもりで？」

「タケダに飲ませる」

「死にますわよ」

「いいじゃん」

「よ、よよ、よくないぃ……」

思わず泣きそうな声を出してしまったアヤちゃんはそれに気づいてくれて、バツの悪そうな顔で謝ってくれた。

「ごめん、考えなしだったわ。好きな人が文字通り泡噴いて倒れるところなんか、見たくないわよね」

「う、ううん。いいの。真剣に考えてくれたのは、嬉しいし……」

謝られて私も恥ずかしくなってしまって、尻すぼみになりながら答える……うぅ、なんだかしんみりさせちゃった、かなぁ。

「真剣に、タケダの抹殺を考えたんだけどなー」

「ニッシー！　あんた空気読みなさいよ」

「おっと、今度は僕の抹殺か？」

「洗剤であんたの根性洗ってあげるわ！」

「そうか。じゃあ脱ごう」

「きゃあああ！　ちょっとやめてよ！」

「叫びつつガン見するなよアヤ坊」

「近寄るなー！」

「さぁさぁ、僕の根性はどこにある？　洗え！」

ギャーギャー騒ぎつつも楽しそうなアヤちゃん。そして冗談を続けるニシカワ君。

本当に仲のいい二人。私のせいで暗くなりかけた雰囲気がもう元通り。カカちゃんたちのグループとは違って、少しだけ普通の、少しだけ穏やかな騒ぎ方。

私はこれが心地いい。イチョウさんもそうなんだろうな。

「まったくもう……わたくしが口を挟む必要はなかったかもしれませんわね。何かあったとしてもニシカワさんが止めていらしたでしょうし」

ちょっと拗ねたように、でも笑っているイチョウさん。さっきまでの、少し刺々しかった感じが消えてる。聞いてみるなら今だと思った。

「ねぇ、イチョウさん。わ、私も口、挟んで、いい？」

首を傾げるイチョウさん。ち、ちょっと怖い。私はこういう風に、誰かに踏み込んで話をすることに、慣れていなかったから。

「あ、あの、あのね、最近イチョウさん、元気ないんじゃないかと思って」

実はタケダ君のことは口実で、四人で集まってもらったのは他に理由があった。今言ったとおり、イチョウさんの……友達の元気がなかったから。また皆で集まったら、笑ってくれるんじゃないかと思って。もしよければ話を聞かせてくれるかと思って。

でも、そんなことまで包み隠さず口にできるほど私は器用じゃない。だから、その心配する気持ちだけを伝えてみた。

いつの間にかアヤちゃんもニシカワ君もじゃれ合うのを止めてこちらを見ている。イチョウさんは何かを察したのかもしれない。けど何も言わずに微笑んでくれた。

「ご心配、ありがとうございます。とても痛み入ります……ええ、確かにわたくしは元気がありませんでしたね。でも、そこまで心配してくださるほどの大層な理由ではないんですのよ？」

「で、でも、あの」

「理由わかんなきゃ、心配すんのが当たり前でしょうが」

私の言いたいことをアヤちゃんが代弁してくれた。男前な子で助かる。

その真っ直ぐな物言いに、イチョウさんも目を丸くしたけれど……やがて、再び微笑んでくれた。今度は嬉しそうに。

「ほんと、大した理由じゃないのです。ただの……兄妹喧嘩ですから」

兄妹？

「もしかしてヤナツのことか？」

「あー、私知ってる。隣の有名ないじめっ子だ。って、アレがイチ

ョウさんの！？」

……あ、こないだカレー差し出したら「こんなもんいらねぇよ」って振り払った男子さんかな。振り払われたカレーは宙を飛んでその子の頭に着地したけど。カレー味の髪の毛になってちょっと羨ましかった。やらないけど。

「はい、ちょっと最近家庭で色々ありまして、大喧嘩しまして……次の運動会ではあの子のクラスに絶対、負けないという話になりまして」

イチョウさんの喧嘩してる姿……想像、できないなぁ。

「なぁ、イチョウさん。僕の勘違いだといいんだけど……カカを全競技に出そうとしたり、僕にも色々出させようとしたのは、もしかして絶対に勝つため？」

「もちろんです」

つつ、と私たち三人は冷や汗をかいた。

怖かった。その筋では有名なサエちゃんに匹敵するんじゃないかと思った。

『そんなわけだったんだよー！』

秘密のメル友のそんな“世間話”を聞いて、私カカはなるほどーと頷いた。

そういうことね、ふむふむ。それとなく『そっちの人って皆楽しくやってる？　最近元気ない人とかいない？』ってメールで振ってみたのがビンゴだった、予想通りにイチョウさんの心配してくれたねこの子は。

ま、当然だよね。友達だもん、元気なかったらきっかけなくても気づくよね。

「しっかし、兄妹喧嘩ね」

『はやくいつもの、穏やかでしっかりしてて、ちょっとだけマイペースだけど私たちのまとめ役で、そのくせ予想外のことになるといきなり慌てだす可愛い友達に戻ってほしいよー！』

へー、イチョウさんってそうなのか。あまり接点ないから印象薄いけど……今度はもっと喋ってみようかな。予想外のことになるといきなり慌てだす、という楽しそうな部分が聞き捨てならん。にやり。

『でも今度から、怒ったら怖い、っていう項目が加わったよ！』

む、それは気をつけなければ。

「しっかし……最近、兄妹喧嘩した身としては他人事の気がしないな。協力してあげよっかな」

敵はヤなヤツでしょ？

ならまぁ、遠慮なくやりましょうかね。

## カカの天下５９２「地味な子が怒る理由」（後書き）

とっても地味なイチョウさん。
そこにキレると怖いという項目が加わり……
あれ……
なんかこの作品。キレると怖い人がやたら多いような……

ま、いっか☆

とりあえず地味な子脱出なるか！
今はまだもう少し難しい、かなぁ？　はてさて……

## カカの天下５９３「まげまげ」

むにゃむにゃ……？　カカです。

ふと振り返ればちょんまげ軍団。こ、これは！

『アイーン！』

「一瞬で展開がわかるけど、それはさすがにまずいでしょ」

さすがにいくら私でもツッコミを入れます。でもこれ私のせいじゃないよ？　いつぞやみたいにズラリと並んだちょんまげ軍団のせいなんだからね。

『許してちょんまげ！』

「うるさいよ！　おまえら少しは自重しろ。僕も怒るぞ？」

おお、この声は！

「トメ兄、いや、トメじい！」

『じい！』

『ジイ』

『爺！』

『G！』

『ジジイ！』

『ババァ？』

『ジジババ！』

「ええい、やかましい！！」

我らが精鋭たち、今回は前回にも増してでしゃばっております。

「とにかく殿、状況はおわかりで？」

「うん。また夢なんだね」

「はい、今回もカカ殿様の好きなようにできます」

「トメじい、歌って」

「G！　G！　僕はG！　トメトメGG僕はG――ってなんだこれは！」

「トメじいセンスないね」

「夢の中の僕のセンスはおまえ次第なんだぞ！」

『ツッコミジジイ！』

「やかましいと言うに！！」

いいぞちょんまげ軍団。

「はぁ……お殿様？　あなたには現実のトメという人物像があるでしょう。それを壊すような命令をしても無理がありますよ。本来ボケはあなたなのですから」

『ボケ殿様！』

うっさいぞちょんまげ軍団。

「そんなにボケてるつもりはないんだけどなぁ。思うままに行動してるだけで……お？」

なんか軍団の一角に、外人のちょんまげがいる。

「ねぇねぇ。そこのあんたら、何？」

膝を付いていた二人の金髪のちょんまげはバッと立ち上がった。どこかで見たような――

「ヘイ、聞いたかいマイケル？　俺たちのことを何かと聞かれちまったＹＯ！」

「聞いたよジョーイ。我らが主は僕らのことをすっかり忘れているみたいだＮＥ！」

「詳しくは３３１話あたりに載ってるぜ！　おもい出しておなら出してブッブッブーだぜ！」

「オゥ！　その表現は下品すぎてブッブッブーで×だと思わないか

い？」

「そんなこと言ったらクイズ番組は全部おなら大会さ！」

「ＨＡＨＡＨＡ！　こいつぁやられたぜ！　座布団じゃなくてブーブークッション一枚だ！」

この特徴のありすぎるノリ、思い出した。サカイさんが生み出して以降、私の中にひっそりと住みついたエセ外人どもだ。

「おかげで殿様の頭の中がおならでいっぱいさ！」

「ＨＡＨＡＨＡ！　それじゃまるで俺たちがおならみたいじゃないか！　もっとも？　ブッと一発かましても俺たちは出ていかないがな！」

「おならと一緒に固体が出たら女の子としては困るだろうしな！」

「いいから出てけおまえら！！」

なんだかこの二人が登場しただけで私の出番がかなり食われる気がするのでさっさと追い出す。

「出て行けってさ、ジョーイ？」

「オゥ、マイケル。それはやはり、お尻からかい？」

「消滅しろ！！」

お、本当に消えた。でもやっぱりどこかに残ってるんだろうなぁ

……

「……なぁ、カカ殿。ちょっと臭くないか？」

「やめてよトメじい。本当におならになったなんて考えたくもない」

「さっきからおならおならとうるさいがな、ちょんまげ全員でおならで合唱とか勘弁な」

う、そう言われてみるとやってみたいような……でも……

「臭いの嫌だからやめとく」

「うんうん、それでいい」

というわけで、黙っててねちょんまげ軍団。

『殿様の、おなーらー！』

「私だってやらないよ！？」

言うこと聞くのか聞かないのか、どっちなのさあんたら！

『お姫様の、おなーりー！』

「だから私は――あれ？　姫？　おなーりー？」

私がいるでっかい和室の襖が開く。するとそこからは……十二単を着たサエちゃんが！

「おお、我が姫よ！」

「突発的に登場したわりにはすんなり受け止めるのな、カカ殿」

「私がサエちゃんを拒むわけなかろう」

「それもそうだが。しかし衣装は豪華だし、サエちゃんもさぞ美化されてるだろうと思ったら……そのままだな」

「サエちゃんはそのままで誰よりも可愛いのさ。それに十二単、社会の資料集に載ってたの見て、いっぺん着せてみたかったんだよね」

着飾りまくって輝きまくってるサエちゃんはこちらに静々と歩いてくる。

だがしかし、それを遮る者たちがいた！

「サエ姫様！　聞いてください！」

「どうか、どうか私たちをカカ殿様の悪政からお助けください！」

なんだとぅ？

「カカ殿様は家臣と農民の扱いがひどすぎます！」

「仕事に残業はないものの！」

ん、多分トメ兄の仕事を基準にしてるのかな。

「暇があれば殿様を褒め称えよと！」

「暇があれば殿様にお菓子を貢げと！」

「暇があれば漫才をしろと！」

「暇があればトメ様を斬れと！」

「暇がないのにこれらをしなかった場合は打ち首なのです！　あまりにひどいと思いませんか！」

そりゃひどい。どうなってんだ私の頭の中は。

「お助けを、サエ姫様！」

さーどうする私の嫁。

「そんなこと言われてもー、それ指示したの全部私だしー」

みんな絶句。さすがだ私の嫁。

「と、トメじい様お助けを！」

「なぜに暇つぶしで斬られまくってた僕がおまえら助けなきゃあかんの」

それもそうだ。

「いくら斬ってもトメじい様死なないじゃないですか！」

「仕方ないだろ、カカの中じゃ僕が死ぬのはありえないことになっ

てるんだから」

「うん、だから何度殺してもいいんだよ」

「……なんか納得いかんが」

いいじゃん。私の中じゃ、絶対にいなくならない存在なのさ、トメ兄は。

「ねーねーカカ殿ちゃん」

「おお、新しい呼び方だ。なに？　サエ姫ちゃん」

「サユカちゃん皇帝が攫われたらしいよー。続く」

むくり、と身体を起こす。

「……え、続くの？」

思わず呟く私なのでした。

そして寝癖はもちろんちょんまげ風味でした。

## カカの天下５９３「まげまげ」（後書き）

最近運動会話が続いていたので、ここらでまったく関係ない話を入れてみました。

え？　カカ殿が気に入ったのかって？

ハイ。

## カカの天下５９４「サラさんのおべんと」

こんばんは、トメです。

もうすぐ夕食の時間。カカは遊びが長引いているらしく、まだ帰ってきていません。なんでも運動会用に何か作っているとか。

で、代わりと言ってはなんですが。

「トメさん、次は何をすればいいですか？」

なんと、サラさんが僕の家にいたりします。

「ああ、んとね」

そして僕とサラさんの二人がいるのは台所。そこで何をしているかと問われれば答えは一つ、お料理です。

さて、なぜ僕とサラさんが料理をしているかと言いますと……詳しい説明は面倒なので簡単に。要は頼まれたのです、明日の運動会へ持って行くお弁当を作りたいから教えてほしいと。聞けば料理は普通にできるようですが、レパートリーが少ないそうで。

「これを切ればいいですか？」

「うん、おたんこナスさん」

「私はサラです！」

「だって茄子持ってるし」

「うぅ……はい、切りました。次はこれですね」

「うん、どてカボチャさん」

「サラです！！」

「ああ、今は皿持ってるもんね」

「そうじゃなくて！！　いつもサラです！」

「たまには茶碗にしようよ」

「しません！」

そんな風に言葉遊びを楽しみながらも進んでいくお料理教室。とは言っても僕だって歴戦の主婦に比べればまだまだ料理はうまいとはいえない。できるのはサラさんの知らないメニューを教えることだけだ。

「これはどうしましょう？」

「水にさらしといて。あ、またサラになったな」

「むむむ……いい加減にしないと、トメさんをさらってしまいますよ」

「人さらい。略してヒットラーか」

「それ略してません！」

「ミカエルをミッキーって呼ぶようなノリでさ」

「じゃあトメさんはトミーですね」

「……ごめん。謝る。だからやめて、それ」

「ふふ」

うーん、それにしても。こうやって料理を教えてほしいって頼まれたことも踏まえて、友達認定してから随分と気安くなったなぁサラさん。僕としても喋りやすい。

「ヘイ、トミー！」

「やめなさいってば」

「ふふ、お料理はこんなところですか？」

「えっと、あとは」

僕が教えたのは茄子のベーコン挟みフライとカボチャのバター醤油焼き。あとは水にさらしておいた野菜でサラダを適当に教える。それと詳しくは知らないけど、ごぼうとかは水にさらすと栄養が溶けてしまうらしいので、その辺も教える。ごぼう以外がどうなのかは知らないけど。

「これで完成、と。ちょっと一息つこうか」

「はい。これをメモってから……」

サラさんは熱心にレシピを書いている。それほど難しいものじゃないんだけどね、生真面目な性格なんだろう。

「お茶煎れとくねー」

「さんきゅーですトミー」

「それやめろって言ってるだろミカエル」

「全然私の名前が残ってないんですけど！」

「早くしろミッキー」

ふむ、なんだか新鮮なやりとりだ。カカ相手でもたまーに僕がからかう側に回ることがあるけど、それとはまた違った感じ。友達が少ない僕としては新しいタイプに出会えて嬉しい限りだ。や、前からこんなんだったけど……ここまで二人で喋ることってあんまりなかったからなぁ。

さて――メモは終わったらしいので、台所から戻ってきたサラさんと居間で茶をすすりながらくつろぐことに。

「ふー……極楽じゃ」

これサラさんが言ったのね。

「サラさん、今さら聞くのもなんなんだけどさ。運動会のお弁当って……カカたちのと同じやつ？」

「あ、はい！　そういえば言ってませんでしたね。実は私、双子の弟と妹がいるんですよ。カカちゃんと同じ歳の」

あれま。衝撃の事実。

「え、なに、もしかしてそれってカカと同じクラスだったりするのか？」

勢い込んで聞くと、サラさんは照れたように笑った。

「それが、その……わかりません」

「なぜに？」

「お恥ずかしながら、最近うちのお母さんが死んじゃいまして。うちの父も弟も妹も情緒不安定なんですよぉ。だからうちにいてもお父さんと弟ちゃんはイライラしてるし、妹ちゃんは塞ぎ込んでるし……学校の話なんか聞く余裕ないんですよね。私も仕事で忙しいし」

「な、なんか内容のわりには」

「サラッと言いました、サラだけに」

「……開き直ってきたね」

「ふふ。でもですね、私としてはそこまで重い話のつもりはないんですよ？　母が病気で寝込むことになる今年の初めあたりまでは、皆そこそこ仲良かったですし。死んじゃったのは最近で、皆は元気ないですけど、明日の運動会で元気になれればなーって思ってます」

全然曇りのない笑顔。

「お父さんと弟ちゃん、私と妹ちゃんで二人三脚障害物走で対決するんです。父も私も無理やり参加させられる形なんですけど、なんでも弟ちゃんと妹ちゃんが喧嘩したのが原因だとか。なんで喧嘩したかは知りませんけど、家族で運動会、いいじゃないですか。だから私は美味しいお弁当を作るんです。明日がいい日になりますように、って」

強い。そう思った。

でも、なんでそんなに強い？　そうも思った。

「サラさんは……元気なの？」

「元気ですよ。もちろんお母さんのことは悲しいですけど、悲しみばっかり見てたら生きていけないでしょう」

「……いいこと言うね。感心した」

「いやぁ、本当はこれ、受け売りなんですけどね」

「誰かがそう言ってたのか？」

「言ってたわけじゃなくて、その人たちを見本にして、感じとったというか……」

何が恥ずかしいのか、頬を染めるサラさん。

そっかぁ……サラさんにとって重い話じゃない以上は、僕は特別何も答える必要はないんだろうな。ただ聞くだけでいいんだろう。しっかしサラさんに弟と妹がねぇ……ん？

「そういえばさ、サラさん」

「なんだいトミー」

「……それ気に入ったの？」

「ふふ！　なんですかトメさん」

「お楽しみ会のとき、あったじゃん。三月あたりに。あのときさ、入り口でサカイさんと一緒に『父兄じゃないと入れない』ってもめてたけど……弟や妹がいたんなら、入れたんじゃ？」

トミー発言で余裕を持っていたサラさんの表情が、ぎくりと固まった。

「そそ、それはその……あの……サカイさんを差し置いて、私だけ入るのもなー、なんて」

「おやまぁ」

「ちちち違うんですよ！？　私にとってサカイさんは天敵で！　ただあのときは同情してあげてもいいかなぁなんて！　実はここに来る前にも会ったんですけどそれはもう大喧嘩でして！　娘を手に入れるまでの道のりがあーだこーだと語るあの人に私は言いました、このド変態と――」

「見本、ね」

なるほど、色々とあったあの親子の話には色々と学ぶことが――

「違うんですってば！！」

あったんだろうけど、サラさんは認めなかった。

「それだけじゃないんです！」

でも半ば認めているようなもので。

それを指摘してもよかったけど……慌てるサラさんを見物しながら茶をすすりつつ、明日は楽しい運動会になればいいなぁとだけ思う僕なのでした。

## カカの天下５９４「サラさんのおべんと」（後書き）

トメとサラが……いい感じすぎる！！
なんだこれは！？　と喜ぶ方も怒る方も。存分に感想をお寄せください笑

そして何気に……もう運動会！？

## カカの天下５９５「貴桜運動大戦　開会式」

どうも、トメでーす。

今日はカカたちの運動会！　天気は快晴！

父兄である僕も早起きして、グラウンドがよく見える位置にシートを広げ、場所を陣取ってました。そしたら姉とサカイさんが場所をよこせーとばかりにズケズケと入り込んできました。そしていつの間にか隣にクララちゃんが座っていました。ま、いいんですけどね。サラさんとも会いましたが、家族関係がいろいろあるので、と別の場所だそうです。ちょっと残念。

さて、四人で他愛もないお喋りをしているうちに生徒も集まってきて、ボーっと準備を眺めているうちに開会式が始まりました。

『それでは、教頭先生からお言葉をもらいます』

マイクから聞こえてくるテンのかしこまった声。キモい。

「サエェ！　サエはどこー！？」

さっきからサカイさんが一心不乱に愛娘を探してる。うざい。

それはともかくデストロイヤー教頭のお言葉だ。さてさて、どんな演説になるのやら。適当に作られたミニステージに上がってマイクを握る教頭を、期待を込めながら見つめる。

「諸君、ここは戦場だ！」

すごい始まり方だ。

「以上！」

終わり！？

唖然とする僕たち。しかし教頭はやり遂げた感が満載の顔で去っていく……壊れた。僕たちの『イベント始めの長ったらしい挨拶』という常識が粉々に砕かれた。

『さて、次は校長先生からご挨拶を』

静々とステージにあがる校長先生。小柄な身体に朗らかな笑顔、相変わらずお元気そうで。

「ほほほ。皆さんこんにちは。そう構えないでください。わたくしは校長、こういう場では話が長くなってしまうものですが……教頭先生もこのように抑えてくれたわけですし、手短に終わらそうと思いますわ。おほほ」

ふーん。

まぁ、長い話が苦手な僕や大多数の生徒からすれば、ありがたいことなんだろうな。

「では終わります」

『話はしようよ！？』

おお、僕と共に大多数の生徒の声がそろった。うんうん、いいツッコミが育ってるな。きっとさっきも僕と同じくツッコみたかったに違いない。

さて、それはともかく本当に今のので終わりらしい。次に進んでいく開会式。

『さて、ここで我が校の手芸部からの垂れ幕披露があります。部長の笠原カカ、前へ』

「はい！」

おお？　なんだ、そんなもん作ってたのか。手芸部とは聞いてたが。

前へ出たカカはテンからマイクを受け取り、ゆっくりと生徒たちとその父兄たちを見渡した。

「今回、私たちの活動として運動会を盛り上げるための垂れ幕を作らせていただきました。すでに私の部員が学校の屋上にスタンバイしています。校舎をご覧ください。

なるほど、サエちゃんとサユカちゃんがいないと思ったらそういうことか。

校舎を見上げる。すると屋上あたりに小さな人影がちょこちょこ動いているのが確かに見えた。あそこから幕を垂らすのだろう。

「サー！　エー！」

サカイさんがどうせ見えもしないのに必死で手を振っている。かなりうざい。

「さぁ！　ダラダラとべちょべちょと垂らすがいい！」

なんか別のモノが垂れてるような言い方やめなさい！！　と、思わず口に出しそうになって思いとどまる。ここは公共の場、大声を出すわけにはいかない。

そんなことを思っている間に垂れ落ちる幕。大きな細長い白地に大きく書かれている文字は！

文字、は……

『ふんどし』

僕らは全員、絶句したあと、打ち合わせたかのようにそろって叫んだ。

『なぜ！？』

「垂れ幕ってふんどしに似てるよね」

それ言うためだけにあんなでっかいもん作ったんかい。

「カカ君！」

「き、教頭？」

さすがの教頭も怒ったか！？

「なぜ私のふんどしがあそこに！？」

でけーし！

「冗談だ」

い、意外とお茶目なのね、教頭先生。

「だよね。あぁびっくりした……ってあれ？　あのふんどし私のだった」

「絶対に違うだろ！？」

「やんトメ兄。こんなところまでツッコミしてー」

し、しまった。思わずいつものクセで……周りにも変な目で見られている。む？　なんだ、何か聞き捨てならないことが聞こえた。漫才大会の再来か？　とかざわざわと……あれを見てたやついっぱいいるのか、もしかして！？

「えー、皆さん。今のは冗談です」

『当たり前だ！』

皆さんお怒りです。

「ここで、今回の運動会を突っ走るにあたり、私たちの意気込みをこの上なく語った垂れ幕をもう一度垂らします」

なんだ、ちゃんとしたのがあるんじゃないか。やれやれ……

「それではどうぞ！　私たちの意気込みを見ろ！」

バサッ！　と勢いよく現れる垂れ幕！

そこには達筆な文字で意気込みだ！　と叫ぶかのように、こう書かれていた！

『おまえを殺す』

『意気込みすぎ！！』

すげー。ここまで生徒と父兄と教師の心が揃ったことが、かつてあっただろうか。

「まぁまぁ、もう一個、ちゃんとしたのがあるんですよ」

「カカ、いい加減にしろ。早くやれ！」

「まぁまぁトメ兄、慌てないでよ。さ、私たちが言いたいのはこれだ！」

三度目の正直か、垂れ下がった幕には――こう書かれていた。

『我々こそは』

『……？』

意味がわからず首を傾げる僕ら一同。

「逆から読んでみ」

カカの言葉に従ってみる。

『我々こそはおまえを殺すふんどし』

「怖いだろう！」

『たしかに！！』

「やる気でた？」

『でねーよ！！』

「ふんどし野郎のほうがよかった？」

『関係ねーよ！！』

そんなわけで、初っ端から大勢の人を振り回す自分の妹に感心したり、姉の再来のような気がして心配になったりしつつ……貴桜小学校大運動会は開催されたのだった。

ちなみに。

「いや、誕生日にもらったS字フックが役に立ってよかったぜ」

垂れ幕作りに貢献できたことに、テンは一人満足げだった。

## カカの天下５９５「貴桜運動大戦　開会式」（後書き）

始まりました運動会！

快調に飛ばしてるカカですが、どうなりますかね。
明日からは競技が始まりますよー！

なんだかカカラジ前にイベントやるのが通例になってきたような笑

# カカの天下５９６「貴桜運動大戦　徒競走　借り物競走」

こんにちは、サユカですっ！

貴桜小学校の大運動会、ついに始まったわけですが……

『次は、五十メートル走です』

どぎゅん！

『次は、百メートル走です』

ずぎゅん！

『次は、持久走です』

しゅたたたたたたたたたたー！！

わたしは唖然とするばかりだわ。

「ん、どしたのサユカン」

「カカすけ……あんた、はっやいわねぇ……」

プログラムのほぼ最後にある運動会の花形、全学年対抗リレーの“走る体力”を温存させるために、うちの小学校の運動会は午前中でほとんどの徒競走を消化してしまう。なので序盤、五年生が出場する三つの競走をとりあえず応援してたんだけど……

「当然っしょ。だから全部出ろって言われたんだし」

「……そりゃそうだけど、よくもまぁそんなケロっとしてるわね」

「だって私、ほとんど全部出るんだよ？　まだ半分も終わってないのに疲れてどうすんの」

余裕で一位をとりまくったカカすけは、持久走の直後にも関わらず平気な顔をしていた。軽く息は切らしているけど五分もたてば元通りっぽい。わたしから見ればこの子も充分バケモノだわ。

「次は借り物競走か。私は五年生の最初、サユカンは最後だね」

前半にある数少ないイベント競走ね。あとは走ってばかりもつまらないという理由で入っている棒倒し、そしてお昼前に父兄参加の二人三脚障害物走と続いていくわ。

「……あ、サエちゃーん！　準備はどう？」

「ふー。うん、バッチリ」

サエすけがどこからか戻ってきた。どこから――運営本部？　あそこにはタケダが……

「サエすけ？　準備って、何してきたの」

「いいからいいからー」

『次は、借り物競走です』

「ほらサユカン。呼ばれたよ、行こう」

……あやしい。

「がーんばってねー」

……あやしすぎる。

怪訝に思いながらもわたしにはどうすることもできず、おとなしく指定された位置へと並んだ。

うちの小学校は学年につきクラスが三つある。なので、一組は赤組、二組は青組、三組は黄組で統一される。でもわたしたちは赤組、なんて呼び方はしない。これは午後の始めにある応援合戦にも大きく関係してくるんだけど。

赤組は赤鷲団。

青組は青龍団。

黄組は黄隼団として、今もそのシンボルが描かれた旗を振り回して、声を張り上げて応援しているわ。すごい熱気……これは応援合戦が楽しみねっ！

「位置について！」

ってそんなこと考えてる間にもう出番っ！？　慌ててスタートラインにつく。ちらりと向こうを見てみると、またもや一位のフラグを持ってるカカすけが見えた。さすがだわ、こんな運が左右する競走でも一位をとるなんてっ。

「よーい！」

パン！　と乾いた音と共に猛ダッシュ！

幸先はいいわ、今のところ二位ねっ。あとはゴールまでに三つある借り物がなんなのか……

テーブルに到着。すでにお題の書かれた札を取ったにも関わらず呆然とそれを眺めている隣の人に首をかしげつつ、裏返しに並べられた札の中から直感で選んだ一枚を開く！

これが借り物のお題よっ！

『好きな人』

……ええ。そんなこったろうと思ったわっ！

迷わず一般の応援席へと駆け出す。この種目をやれと推したカカすけとサエすけ。そして先程のサエすけの怪しい行動。どうせタケダをいいように使って借り物内容を変えたに違いないわ。

ふふ、甘かったわね二人とも。いつまでもいじられるわたしじゃないのよ。とっくの昔に告白したわたしにとって、このお題はもはや赤面するくらいの効果しかないっ！　むしろそれをすでに予想し、予めトメさんの位置を確認しておいたわたしにとっては一位への布石でしかないのよっ！

「トメさん、来てくださいっ！」

「僕？　あ、ああ」

何か察したのか、ちらりとカカすけとサエすけの方を見るトメさん。でもあっさりとシートから腰を上げてくれた。その手を繋ぐ。

きゃはんっ！

っと、お、落ち着くのよサユカッ！　たった今これくらいなんともない宣言したばかりじゃないのっ、なのにこんな、手の感触に、に、にへへへへってニヤケるんじゃないのっ！　ここで慌てたらあの二人の思うツボよっ！

その二人へと目を向ける。グラウンドの隅でニヤニヤしながらこちらを眺める二人。それにわたしはニヤリと笑ってみせた。こんなの余裕よっ、という意思を込めて。

でも二人のニヤニヤは止まらなかった。わたしがつまらない反応をすればガッカリすると思ったのに……拍子抜けだわ。

「サユカちゃん、僕はこのまま一緒にいけばいいのか？」

「え、は、はいっ！　ゴールまで付き合ってください！」

できれば人生のゴールまでお願いしますっ！

「つ、次の借り物ですね」

言葉にできないのをもどかしく思いながらも次の札を取る！

すると。

『一番大事な友達』

こんな悪魔めいた、お題が。

「……っ」

「サユカちゃん？」

わたしは無言で走る。

そして、その二人の前に立つ。

その、なんというかひたすらニヤニヤニヤニヤニヤニヤしてる、二人の前に。

「さぁ、どっち！？」

「どっちー？」

自覚できる、わたしの顔はまっかっかだ。くそぅやられた。トメさんのお題はカモフラージュだったのかっ。

「私とその女、どっちがいいの！？」

「さぁここで決めてー、はっきりしてー」

ううう。

うううう。

「え――」

『え？』

「選べるかぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

わたしは二人の手を片手で強引に掴み、もう片方の手で掴んでいるトメさんごと引きずって強引に走り出した！

「やーん、サユカちゃんたらハーレムー？」

「サユカンのえっち！」

「うるさいわぁっ！！」

「……なんなんだ、コレ」

トメさん、わたしも同意です。なんなんでしょうコレ。

ともかくこれで二つのお題は消化っ！　次はっ！？

「わたしは手が塞がってるので、トメさん、お札を選んでもらえますかっ？」

「え、いいの？　じゃあ……これ」

さぁ、次は！？

「ふりだしに戻る」

「すごろくかぁぁぁぁぁぁっ！！」

わたしの渾身のツッコミが炸裂、しかしそれも空しく、「早くスタートに！」とカカすけに急かされてしぶしぶスタートラインへと走る。

「ラインに足でタッチしたら、もっかい借り物ね」

「……まじっ！？」

「さっきタケダ君に確認してきたから間違いないよー」

「そういうルールにしろってタケダを脅した、の間違いでしょっ！」

もうなんでもいいわよもう……次のお題は？

『好きな人との理想の将来を語れ。はい、マイク』

「借り物関係ないしっ！！」

札のそばには「どうぞ」とばかりにマイクが……

「ほら、サユカン。やらないと」

「いつまでもゴールできないよー？」

「サユカちゃん？　お題ってなんだったんだ」

一人だけ札の内容を知らないトメさん。

う、ううぅっ。

くそぉおおおおおおおおおおっ！　ヤケだっ！！

『わたしの夢はっ！！』

大音量でグラウンドに響くわたしの声っ！

『トメさんと結婚して子供を六人くらい生んで幸せな家庭を築いて海辺の家に白い犬と猫を飼って暮らすことですっ！！』

思わず押し黙る皆さん。なぜか流れていたＢＧＭまでもがストップした。

そんな中、一番呆然としているのはもちろんトメさん。

「こ、子供……六人？」

『がんばりましょうっ！』

「ちょっと待て！　そのタイミングでがんばりましょうって言われると、その、子供を作るためにナニをドウがんばるぞーみたいに聞こえて――」

『知りませんっ！』

もういいんです。

もうヤケです。

どうせ本心、いつかはバレる！

「これで満足っ！？」

首謀者二人へ目を向ける。

爆笑していた。

「さ……サユカン……くはは……ほ、本心が知られちゃって、残念だったね？　ああ、ざんねん」

「ざんねらないっ！」

「あはははー！　ああ、むじょー」

「むじょらないっ！！」

あとで見とけっ！

「次のお題はっ？　なに、『先程の夢に友達もプラスしろ』ですってっ！？」

マイクを握る！

『さっきの夢に出てきた白い犬の名前はカカ！　猫は黒色で名前はサエよっ！！』

『ちょっ！？』

『二匹とも五歳で死亡！！』

『そこまで決めるのー！？』

ステレオでわめく二人にプチ復讐完了っ！　さぁ最後のお題はぁっ！！

『ごめんなさい』

「許さんっ！　はいゴールいくわよっ！」

もうキレちゃってたわたしは大したリアクションも取らず、三人を引きずってゴールへと爆走した。

そしてゴール。一位だった。

一息つくと無性に恥ずかしくなって、わたしは思わず泣き出してしまった。さすがにやりすぎたと思ったのか、主犯の二人は慌てて謝ってくれたし、トメさんは「大丈夫、全部わかってるから」と言ってくれた。いいの、もういいの。これは運動会、お祭りみたいなものなんだから……皆が盛り上がってくれれば……ぐすん。

と、思っていたんだけど。

借り物競走。

それは競走。つまり複数人で走るもの。そして並べられた札は誰がどれを取るかわからないもの。

そんな借り物競走でわたしをハメるにはどうするか？　簡単ね、

全ての札を同じ指令にすればいい。

わたしはこんな感じになったわ。そして一位だった。でも泣いたわね？

その他のわたしと一緒にスタートした人たちが、どういう軌跡を辿り、どんなドラマを公開処刑のごとく繰り広げながらゴールまで辿りついたかは……詳しくは話さないわね。

だって可哀想だもの。

でも、盛り上がったと、言えなくもないわねっ！

はぁ……恥ずかし。

## カカの天下５９６「貴桜運動大戦　徒競走　借り物競走」（後書き）

なんだかサユカちゃんいじるの久々でかんなり長引いてしまいました笑
でもまぁ楽しかったからよし！

さて、しかしここで問題が。
なんか書きたいことが思いのほか多くて……カカラジまでに運動会終わらないかも＾＾；
キリのいいところにはするつもりですが……超えたら、まぁそのときはそのときで。

見通し甘かったなぁ。五話あれば書けると思ってたのに……ま、いっか。

# カカの天下５９７「貴桜運動大戦　棒倒し　そして」

こんにちは、カカです！

さぁ盛り上がってまいりました大運動会！　ええ、私たち特性の借り物競走のおかげで、グラウンドに集まった皆さんは色んな意味で盛り上がってます！

しかしちょーっとやりすぎたので、今度こそ皆が素直に盛り上がれるステキなイベントを用意しました。

『さて！　棒倒しも大詰め、三つの獣が同時に激突するバトルロワイヤルの始まりです！』

似合わない格好よさげなことを言っているのは実行委員会の放送担当、タケダ。

グラウンドではその実況の通り、すでに各トーナメント戦を終えた棒倒しチームが三つスタンバイしている。棒倒し競技の最終決戦だ。赤鷲団、青龍団、黄隼団の面々は果たしてどんな戦いを繰り広げるのか。

『それでは用意、どん！』

棒倒しでそれはどうよ？　な掛け声と共に走り出す戦士たち。おー、まずはさっきトーナメントで優勝した我らが赤鷲団を２チームがかりで潰す作戦か。

やばいなぁ。トーナメント戦で赤鷲団が勝ったのって私が速攻で

相手のチームを潰したのが理由だしなぁ。私がいない今の状態じゃ……てわけで新戦力の登場が必要だね。

「な、なんだアレは！」

「なんかキター！！」

「ちょ、おい、棒倒しどころじゃないんじゃないか！？」

突如として現れたソレに皆さん大パニック。

さて、と。

現在クラスメイトが戦っている中、私一人だけどこにいたと思う？

そう、タケダの横。

『あれはなんだ？　キリンか？　動く電信柱か！　まさか怪獣か！？』

それを説明するために、私はここにいる！

タケダを蹴っ飛ばしてマイクを奪い、高らかに宣言する！

『説明しよう！！』

昔のアニメかなんかでこんなのあったよね。

『たった今現れたその怪物は、私たち手芸部が作った……えっと……』

詳しくは考えてなかったな。んー、いいや適当で。

『ボスです！！』

『なんの！？』

皆ツッコミうまくなったね。

『とにかくボスです！　それを倒したチームにはスペシャルボーナスが加算されます。ぶっちゃけこのバトルロワイヤルに勝つより高い点数です！　って実行委員のタケダが言ってます』

地面にのびてるけど。

『このボスは手ごわいよ！　皆が支えているものと同じ、しかし三倍は太い棒の身体！　そして家庭科室に余っていたボロ布をふんだんに使った、触りたくない色をした衣装！』

『……なぁ、カカ君』

『なにタケダ。起きたの？』

『うむ……あの怪獣の頭なのだが』

『双頭だよ！　格好いいっしょ』

『なぜ大仏と馬なのだ？』

『ちょうどいいのがそれしかなかったから』

前にお楽しみ会のときに使ったのを再利用した。

『しかし――』

『うっさい』

タケダをもう一度蹴り倒し、マイクを握る！

『とにかくボスなこの怪獣！　名前は――』

んーっと。

『姉ゴン！　怪獣アネゴンです！』

だってあれ、お姉だし。

ボロ布衣装で見えないけど、その怪獣っぽくアレンジされた棒の下を一人で支えてるの。しかし小学生とはいえ１０人くらいで支えるはずの棒の三倍――むしろ木といってもいい、そんなのを一人で持ち上げて歩けるんだからつくづくバケモノだよね、アネゴンだよね。

『おっと？　早速各チームの特攻メンバーが挑戦しているようですが……』

本来なら大勢いるはずの、棒を支えたり妨害してくるはずの敵がいない。だから一見、組みし易そうに見える怪物だったが……

「う、うわ、なんだこれ」

「傾かない！　登れない！！」

たかだか数人の特攻だけではお姉はビクともしなかった。や、普通は大木持ってるだけで倒れるもんだけどね？

『さぁ！　ボスは思いのほか手ごわい！　こうなったら参加者以外も合わせて全員で倒すしかないぞー！！』

不参加のはずの五年生以外の生徒たちがざわめく！

『学年もクラスも関係ない！　棒を倒したときに頂点にいた生徒のチームがボーナスポイントをもらえるんだ！！』

ちらほらと応援席から身を乗り出す生徒が出てきた。やがて一人が棒怪獣へと走り出すと、それを皮切りにしてどんどん生徒が飛び出していく！

『そうだ！　皆で怪獣姉ゴンをやっつけろー！！』

わらわらと姉ゴンに群がっていく生徒たち。こんなもんでいいっしょ！

「タケダ、あとよろしく」

返事が無い、ただの脇役のようだ。

さてさて猛ダッシュ！　軽快に風を切って私も姉ゴンへと立ち向かう！

――お姉に協力してもらう手前、説明役を買って出た私。その熱いノリで生徒をうまく焚きつけることができたと思う。でももちろん、それは私がリーダーシップとかそういうのに目覚めたわけではなく。

説明役に甘んじつつ、ちゃんと勝利は私がもぎ取る。

このシチュエーションに興奮していたからだ！

「うおー！　私が勝つ！」

多すぎる生徒の猛攻に、さすがのお姉も棒を傾けざるを得なかった。もう少し、もう少しで私が辿り着く！　そしたら適当な生徒を踏み台にして一気に上へと駆け上がる――

「わん！」

踏んだ地を蹴る。

「つー！」

踏んだ生徒の頭を蹴る！

「すてっぷ！」

棒の中央に着地！

そしてそのまま一番上に――

ぽん、と。

小さな影が“上から”舞い降りた。

「クララ勝利です！」

「それ反則でしょぉおおおおおお！」

妖精技を使って瞬間移動なんかしちゃったクララちゃんを頂点にして、棒はゆっくりと倒れていくのだった。

幸い、そんなクララちゃんの不思議技を目撃した人はいなかった。誰も彼も興奮しまくっていたからだ。

しかしクララちゃんは一般人。生徒じゃない。誤魔化そうにも体操服を着ていない。でも生徒限定なんて規則を私は言わなかったし……これちょっと失敗ね。

仕方ないので、ちょっと反則技を使うことにした。

ようやく起きたタケダを引きずってきて、クララちゃんにマイクを向けさせる。

『ええと、クララ君、赤色と青色と黄色、どれが好き?』

『桜の赤です！』

おし、赤組がボーナスゲット。

ボスを相手にしてる間に青龍団が手薄になった棒を攻めて優勝してたんだけど、点数としてはこっちが上だ。これでいまだに私たちの赤鷲団がトップ！

そんなわけで、私はホクホク顔で応援席へと戻ってきた。

サエちゃんとサユカンは……あ、いた。

ん、あれ？

なんでトメ兄やサカイさんまでいるんだろ。

「おーい、どしたの皆して。ここは生徒用の――」

元気よく続けようとして……

言葉を、失った。

サエちゃんが、サカイさんに介抱されていた。

痛そうに、足を押さえながら。

「え」

血の気がひく。

「サエちゃ――怪我したの！？」

慌てて駆け寄ると、サエちゃんは弱々しい笑顔を返してくれた。

「うんー……あはは、そんな顔しないでよー。足を捻っただけだからー」

「だけって、だって……」

足を捻ったら……それじゃ……

サカイさんを見る。目を閉じて、ひしっとサエちゃんを抱きしめている。

トメ兄を見る。沈痛な面持ちでサエちゃんを見つめている。サユカンも同じだ。

「なんで？　サエちゃんはあんな危ないイベント参加しないって言ってたよね！？」

「うん」

「ああいうときは安全な場所でほくそ笑みながら見物するのがサエちゃんだもんね！？」

「あははー、そうなんだけどー、ハッキリ言わないでー」

「じゃ、じゃあ、なんで」

そのとき。

言い争う声が後ろから聞こえた。

「っだよ！　離せよ！」

「離しませんわ。あなたはサエ様に謝るべきです」

「様だぁ？　はは、バカじゃねーの」

「バカ？　生徒たちが動くどさくさに紛れてサエ様を蹴飛ばしたあなたのような卑劣な輩が、他人をバカ呼ばわりするのですか！？」

な……に……？

振り返る。そこにはイチョウさんと、イチョウさんに腕を掴まれた……ヤナツが……！

「なんだよ、そいつが鈍くせぇのが悪いんだろうが」

おまえが……やったのか……

「あなたという人は！」

「うっせぇな、妹のくせに兄貴に文句言うな。大体さ、おまえもムカついたりしないのか？　こいつときたら毎朝毎朝、母親なんかとべたべたしながら走ってたんだぜ？」

おまえが……おまえが……

「俺らと違って、何にも苦労を知らないような顔してよ、へらへら笑いやがって、ムカつくんだよ」

何も知らないくせに……

「どうせ大した怪我じゃねーだろ。そんくらいでぎゃーぎゃー言うなよな」

大した怪我じゃない、だと？

ふざけるな。

ふざけるな！

サエちゃんは次の、父兄参加の二人三脚障害物走をすごく楽しみにしてたんだ。やっと一緒になれた親子で、一緒に走り切ろうって、運動が苦手なのに毎日走って練習して……何年も離れ離れになっていて、ようやく一つのことを一緒にできるって、やっと掴めた親子の幸せをかみ締めていたんだ。

ソレナノニ。

足を捻ったから出れない？　この小さな男のせいで？　こいつは、この男は何をしている。視界が怒りで真っ赤に染まる。こいつは何をほざいている。全身の体毛がチリチリ燃えるように逆立つ。苦労を知らないのは、歯が砕けるくらいにギリギリと、何も知らないのは、息は荒く獣のように、おまえのほうだ、アア許せなさすぎてドウニカナル許さない許さない許さない許さない許サナイユルサナイ――

「コロシテヤ――」

「ダメです」

そのどうしようもない怒りを止めたのは、そっと私の肩に置かれ

たサカイさんの手だった。

「その言葉を本気で口にしてはいけません」

なんで？

なんでいけないの。

こいつは、こいつは――

「ああもう、うっせぇ！　兄貴に逆らうな！」

「きゃ！」

「イチョウさんっ！」

突き飛ばされたイチョウさんをサユカンが受け止める。

「文句があるなら二人三脚で勝つんだな！　でも俺の親父はな、元陸上選手なんだぜ！　おまえらなんかに勝ち目はないだろうけどな！」

もうそんなものはどうでもいい。私はおまえを殴りたい。

「あ、親父！」

「おう、ヤナツ。どこに行ってたんだ」

駆けて行く。誰よりも殴りたい私の獲物が。

「いやぁ、ちょっと障害物走の敵に難癖つけられてさぁ」

「なに？　困った子供もいるもんだな。そんなやつらには俺たちが正々堂々と負かしてやろう！」

「当然だ！」

ああ……

あの二人、許さない。

「ダメですよ、カカちゃん」

「サカイさん、なんで――」

私は納得がいかなかった。

誰よりも怒りに染まっていると思っていたサカイさんが私を止めたから。

でも。

「殺してはダメです。死んだら楽になります。二度と恐怖を味わえません」

サカイさんが怒りに染まっているのは、

「殴ろうとしましたね。あの子のことはサエから話を簡単に聞いています。カカちゃんが今まで何回か殴ったと……それでもこんなことをするというのはつまり、殴った程度じゃ人の痛みがわからない

っていうことです」

途方も無い怒りに染まっているのは、間違いなかったのだ。

「……サエすけ競走、ね」

サユカンがぽつりと口にした、その競技。

それだけで、その場にいた私たちは理解した。

「そうだね。サエちゃん競走だ」

何をするべきかを。

「勝負だよー」

「勝負ねっ」

「うん、勝負」

――誰が一番、サエちゃんの仇を討つか。

黙っているトメ兄に目を向ける。

「止めないでね」

「……ん、まぁこういう報復は褒められたものじゃない。でも正直、今のは僕もムカついた。それに子供のうちに知っておいてもいいだろう――悪いことをすれば、痛い目を見るってことを」

これで決まりだ。

サエちゃんの代わりは私が出る。

そして、私たちの姫に手を出したらどうなるか――思い知らせてやる！！

## カカの天下５９７「貴桜運動大戦　棒倒し　そして」（後書き）

本当の決戦は明日です。

# カカの天下５９８「貴桜運動大戦　サエちゃん競走」（前書き）

注意
このお話は、明日のお話と合わせて読んだほうが熱いかもしれません。
判断は皆様にお任せします。

## カカの天下５９８「貴桜運動大戦　サエちゃん競走」

――グラウンドの隅。

「ふぃー……ちかれた」

「おほほ、お疲れ様ですわカツコさん」

「お、校長。ごめんね、部外者なのに参加しちゃって。妹の頼みを断れなくてさ」

「いいんですのよ、あなたは小学生の頃からいつもそうでしたからね。慣れてます」

「いつもそう、って……どうなんだろ」

「あなたはあなた、ということですわ。あぁ、学年が上がるごとに一つずつあだ名増えていったあなたはとても印象的でした。一年生の頃は『桜の虎』で、二年生は『桜の龍』でしたっけ？」

「やめてくださいよ、その肩書き恥ずかしいんですから……六年生のときのなんか絶対秘密ですからね」

「あらあらどうしましょ、おほほ」

「バラしたら許しませんよ」

「わたくしに逆らうと？」

「……やめときます。勝てませんし」

「おーい、お姉！！」

「お、なんじゃい妹」

「二人三脚、参加して！　私と一緒に」

「やーよ。子供の相手で疲れたもん」

「でも、でもサエちゃんが！」

「あんたの相棒ならうってつけのがいるでしょうに」

「……そだけどさ」

「二人三脚ならあたしよりあの子のほうがいいよ。ほら、いきな」

「はぁい……」

「おほほ、青春ですね」

「何があったか知ってんの？」

「さてさて……おほほ」

――応援席。

「あれー？　クララちゃん」

「ごめんなさい……あんなに浮かれていたせいで、サエおねえちゃんを守れませんでした……」

「あはは、気にすることないんだよ？」

「でも、でも！」

「心配いらないよー。私には、ちゃんと守ってくれる人がいるから」

「でも、え、え？　なんでクララをギュッとするですか」

「……ごめん、お母さんと走れなかったの、やっぱり残念で……もうちょっとこのままで」

「はい。クララ、抱きまくらです」

「……座布団いちまいー」

「ないです」

――グラウンド隅。

「妹ちゃん。走る順番、カカちゃんと交代しよう？」

「で、でもお姉様！　わたくしだってヤナツに勝ちたいのです」

「うん、わかる。でもね、トメさんに話を聞いちゃったの。今は――あの子の方が、理由が重いから」

「お姉様は、わたくしの勝ちたい理由を知らないくせに、そんな……」

「知ってるよん」

「……え」

「いいからいいから。あの子たちに任せておきなさい。きっとそのほうが、不器用な私たちよりうまくいくから」

――スタンバイ。

「……と、こんな感じでどうかなー？」

「異論はないわっ」

「いいけどさ、これだと競走っていうより協力になっちゃうよ」

「いえいえ、競走ですよー。それぞれがそれぞれの役割をどれだけうまくこなすか。私の場合は作戦を立てるだけで、もうお役御免ですけどー」

「でも、この役割どうするの？　いつもサエすけと一緒にいるわたしがやると不自然じゃないかしらっ」

「それなら大丈夫。さっきそこでキリヤン捕まえたから。サエちゃんのこと話したら二つ返事で了承してくれたよ」

「なら完璧ですねー。では……始めますかー」

――どうも、改めましてカカです。

皆さんご機嫌いかがですか？　私は一生の中で一番悪いかもしれません。

その理由を説明するといったい何万文字になるかわかりませんので省略しますが、とにかく人を殺せそうなくらいに怒ってます。でもそんなことは言ってはいけないと言われたので、もう言いません。口にするだけで罪になる言葉だと教えられたので。

さて、そんな私の感情はさておき。

今回の作戦を説明しましょう。

作戦そのいち、生徒の皆に手伝ってもらい噂を広める。

「ねぇねぇ知ってる？　ヤナツ君のお父さんって」

「聞いた聞いた。すっごく脚が速いんでしょ！」

「なんでも元陸上選手だったとか」

「オリンピック寸前までいったらしいよ！」

「じゃあヤナツも、もしかして速いの？」

「実は英才教育受けてて、今まで本気出してなかったんだって」

「あらあら、神崎さんのところのお父さんってすごかったのねぇ」

「もしかして噂の笠原カカちゃんより速いのかしら」

「桁違いに速いって聞いたぞ！」

ん、どうしたの？　いい噂ばっかりじゃないかって？

ムカつくけどそれでいいの。

作戦そのに。捕まえたキリヤンをレポーターに化けさせる。普通の格好だけど、マイクと運動会を撮影する用の機材とキリヤンの怪しい笑顔があればそれでオッケ。

『ちょっとよろしいですか！？』

マイクによって拡張されたキリヤンの声がグラウンドに響き渡る。

『な、なんだ君は』

『いえいえ、名乗るほどの者ではありません。チンケなレポーターですよ』

微妙に時代劇混じってるね。

『いきなり申し訳ありません。今回、“あの”神崎選手が走られるとのことなので駆けつけたのです！』

ざわざわと応援席に波紋が広がる。「レポーターがわざわざ？」「あら、やっぱりすごい人なのね」「うわぁ。サインもらったほうがいいのかなぁ」などという声がそこかしこから聞こえてきた。

『い、いやぁ。確かに陸上はしていたが、そこまで有名だった覚えは』

『いえいえご謙遜を！　あの頃のあなたの走りは素晴らしかった！　あのころレポーター仲間の間では話題沸騰だったのですよ？』

『……あのころ、レポーターをしていた？　あなた、歳いくつですか？　ずいぶんと若いんじゃ』

『こう見えてもあなたより年上です』

『なっ！？　み、見えませんね』

『はっはっは』

さすがキリヤン。嘘にためらいが無い。

『それはそうと！　そんなあなたが走ると聞いて、いてもたってもいられなくて来てしまいました。しかしこれは、あなたの熱烈なファンである私が個人で起こした勝手な行動ゆえ、テレビ局の者はついてきませんでしたが……あなたと、あなたのお子様の走りを記録する栄誉だけをいただけないでしょうか？』

嘘だろうが誇張だろうが、ここまで言われて頷かない大人はいない。

『ふ、ふふ、仕方ないな。そこまで言うなら』

さらになまじ自信があるなら、余計なことまで言ってしまうのだ。

『俺は必ず一番になる！　ダントツでな！　このすばらしい息子と共に！』

『ほほう！　息子さん？　意気込みは？』

『俺の父さんすげーだろ！？　絶対勝つぜ！！』

『楽しみにしてます！　神崎という苗字にある『神』はあなたの脚に宿っているとまで呼ばれた走りを見せてください！』

二人はもはや英雄扱いだ。生徒からも父兄からも尊敬の眼差しを集めまくり、運動会は盛り上がる一方！

でも、ごめんね。

今からそれを、ぶち壊す。

『それでは、父兄参加の二人三脚障害物走、スタートです！』

徐々にスタートしていく参加者たち。

これだけ盛り上がった英雄二人はラストを飾る。もちろん私もタケダを利用し、サラさんに事情を説明して代わってもらい、一緒に

走ることになっている。

『さぁっ！　急遽腹痛を起こしたタケダに代わってわたしが実況を務めますっ！』

『腹が痛いのは、君に殴られたから――ぐほっ！』

『とっても痛いようですっ！　さて？　親子の微笑ましい競走もそろそろ終盤を迎えるわけですが、いよいよっ！　テレビ局にまでファンがいたという伝説の選手の走りが見られるわけですっ！』

サユカンの実況が始まった。

これで準備は整った。演出、台本は全てサカイさんだ。愛娘を傷つけられた怒りを抑えこみ、そのエネルギーを作戦への計算に費やした。その結果がこの舞台。

でもそれは、まだ終わっていない。私という歯車が役目を果たすまでは。

「ね、トメ兄」

「どした、カカ」

「お姉が言うから仕方なくトメ兄を相棒にしたけど……大丈夫なの？」

互いの足を縛りながら聞いてみる。

「トメ兄、特別に運動神経いいわけじゃないでしょ？」

「そりゃな。毎日アホみたいに運動してるおまえと比べれば」

「そもそも走れるの？」

「失敬な。大人の成人男子をなめるなよ？　たまにランニングさえしていれば、小学生の女子なんぞにそうそう遅れはとらん」

「でも私の脚、中学生の男子並らしいけど」

「それでも全然余裕だよ。二人三脚っていうのは、そういう問題じゃないんだから」

私は少し不安。でもトメ兄は言葉どおり、余裕の表情だった。

『さぁ！　ついに、ついに！　神とまで呼ばれた父！　そしてその神童ヤナツ君の華麗なる走りをご覧いただけますっ！　それはきっと鷲よりも猛々しく、龍よりも雄々しく、隼よりも速いのでしょうっ！　ああ、目に浮かびます、赤、青、黄などといった色を超越した虹色の走りがキラキラと――』

サユカンお得意の夢見がちな説明のおかげで皆の期待値は最高潮に。ちなみにこれ、冒頭だけであとカットしたから。長すぎるから。

さて。

行こうか？

「位置について！」

「……本当に大丈夫なんだよね、トメ兄」

「心配性だなぁ」

最後の最後に確認で、私はトメ兄に聞いてみた。やはり不安だったからだ。

「なんでトメ兄がそんなに余裕なのかわかんないんだよ」

「だってさ、カカ」

トメ兄は、当然のことのように、

「おまえはヤナツより速いんだろ？　じゃあ僕らが勝つに決まってる」

そんなことを言って、

「……なるほどね。じゃあ“その通り”にいくけど、いいんだね？」

「は？　てっきり僕は元からそのつもりかと」

私は、笑うしかなかった。

『よーい！』

そう。

『パン！！』

銃声と共に駆け出す。

そうだよね。

全力で相手を叩き潰すなら――片足が縛られていようが全力で走るのが当然だ！！

## カカの天下５９８「貴桜運動大戦　サエちゃん競走」（後書き）

次回、決着。

## カカの天下５９９「貴桜運動大戦　二人三脚障害物走」

スタートはこの上もなく絶妙だった。

走る、走る、走る。

軽快すぎる、一人で走るのと全く変わらない。私とトメ兄の足を縛ってる？　本当に？　紐解けてるんじゃないの？

『おっとぉ！　素晴らしい走りです、笠原カカっ！！』

それはいらない心配のようで、サユカンの実況と共に驚愕の声が周囲から聞こえてきた。

二人三脚で全力疾走を成功させている。これだけでも驚きだろう。

でもそんなことよりも、皆が驚いているのは――

『速い速い！　笠原カカとその保護者であるお兄さん、誰よりもダントツで速いですっ！』

まるで誰かさんたちのことを完全に忘れきったかのようなサユカンの放送。

そう、皆が視線を注いでいるのは私たちだけでなく――すでに私たちの遥か後方にいる、思ったより大した走りを見せなかった親子。視線は語る、期待外れ、ガッカリだと。でもそれを口にすると雰囲気が悪くなるので誰も触れない。

『そろそろ先頭の笠原兄妹が最初の難関に差し掛かります。ここまでは噂どおりの走りっぷりですが、果たしてここはっ!?』

――噂どおり。

「ほ、本当に速いわね、あのカカちゃんって子」「噂には聞いていたけどあそこまでとは」「中学生の男子並の運動神経だって話だよな、たしか」「でも俺レポーターとか来たからてっきりあっちの方が」「しっ！　黙ってな」「い、いいぞ、頑張れー！」「いっけー！！」

ヤナツたちの噂を広める一方で、もう一つ広めてもらったものがある。それは私の噂。『笠原カカというやたらと早い女子がいる』と。そして『それよりも速い』という触れ込みでヤナツを持ち上げた。

だからヤナツ父子に失望した観客は、次の噂――私の噂に乗っかってくる！

『おっと、期待に応えすぎたせいか一般応援席からもカカすけを応援する声がっ！　思わずわたしも応援しちゃいます！　キャー！　トメさん頑張ってぇっ！！』

私の応援しろよ、とツッコむ間もなく。

「さて、網をくぐるわけだけど」

「カカ、僕が先やるわ」

「ほい」

それだけで意思が伝わる。

まずトメ兄が地に落ちている網の端を拾い上げると、そこに一人分の隙間ができる。私はそれをくぐって一歩進み、適当なところで網を掴んで持ち上げる。そこにできた隙間に入ったトメ兄はさらにもう一歩進み、私より少し先で網を持ち上げる。そこに入った私がさらに一歩進み――この繰り返し。簡単に言えば、右手、左手、の順に網を掴んでくぐっていくやり方を、私の右手、トメ兄の左手でやっているだけだ。足を縛ってる状態でやると言うほど簡単じゃないんだけど……簡単だ。

『止まりません、勢いが止まりませんっ！　淀みなく交互に網を進んでいくその姿はまるで虫！　なんか妙な形をしているわりには素早く動く、外国あたりにいそうな虫のようですっ！　例えが悪い？　それはカカすけのせいです！　なんでそんなに見事に一心同体なのよっ！！　わたしと代わりなさいっ！』

サユカンサユカン、ちゃんと実況しようよ。嫉妬するのはわかるけど。

網を抜けた先にあるのは平均台。二人三脚だというのに二つずつしか並べられていないという、なんとも意地悪な障害物。

「どっちがケンケンする？」

「カカやれよ」

「いいよ」

合図もなしに平均台へ跳び乗る。

『う……わぁ……っ』

サユカンの感嘆、そして応援席からの超感嘆。

我ながら、というか我らながらすごいと思う。二つの平均台を三本の足で渡るのは難しい、なら二本で渡ればいいということで――トメ兄は普通に左右の足を平均台にのせて進み、私はトメ兄と縛られた足だけをのせて片足立ちでケンケンするように跳ねながら進んでいったのだ。しかもここでも歩かず走る。狭い平均台の上を小刻みに激しく片足で跳び進むのは難しいはずなんけど……ここでも不思議と問題ない。一人で動くときと全く違和感がないんだよね。

次に縄跳び、ハードルと続いたけど、私とトメ兄はことごとくを掛け声の一つも無しにクリアした。そして最後はマシュマロ取り。小麦粉がたっぷり入った箱の中に隠されたマシュマロを、手を使わずに顔を突っ込んで探すというもの。口でくわえて、それを箱の傍で待機している先生に見せれば合格だ。

しかし今回は特別ルールが存在する。マシュマロが二つあり、生徒と父兄、二人共の口にマシュマロがないと合格できないのだ。つまり二人して一つの箱へと顔を突っ込むことになる。

「ぶほっ！　何するカカ」

「うりうりうりうり」

説明するまでもなく余裕勝ちが決定していた私はちょっとじゃれついてみた。トメ兄の顔に小麦粉をくらわせまくる！

「げほっ、げほっ……自爆した」

でもくらわせるには小麦粉を自分の顔で吹っ飛ばすしかないわけで。私も小麦まみれなわけで。

「ほへ、はっはほひほ」

ほれ、さっさとしろ？　あ、トメ兄もう見つけたんだ。少しくらい遊んでくれてもいいのに……ほい、めっけ。

「合格！」

私たち二人のマシュマロを確認した先生はＯＫサインを出してくれた。あとはもうゴールするだけ。

『この障害物走で一番速かった二人！　顔も一番白いですっ！！　ていうかトメさん、これ終わったらわたしと一緒に今のやつやりましょう！』

サユカンの実況に応援席から笑いがもれる。でも私みたいにじゃれついた人ってあんまりいなかったのかな？　これって多分、親子とかが仲良くするために仕組まれてるんだと思うけど……ま、いっか。

「んぐん。トメ兄、サユカン絶対どさくさに紛れてちゅーする気だよ？」

「んぐ。勘弁しろよ」

マシュマロの飲み込んだ私たちは、そのまま……

『ゴール！　ゴールです！　皆を感動させるほどの素晴らしい走りを見せてくれた二人に、大きな拍手をお願いします！！』

いつぞやの漫才大会のときのような大歓声をもらってしまった。

いやはや照れる、これが作戦とはいえ。

「カカ」

「おうよ」

またもや口にするまでもなくハイタッチを決めた私たち。

「どうしたカカ、自分の手なんか見つめて」

「ねぇ、トメ兄。私たち、練習してないよね？」

「は？」

「なんでこんなにうまくできんの」

「毎日練習してたからだろ」

目を白黒させる。え、だって、こんな練習したこと――

「二人三脚ってのはな、呼吸が大事なんだよ」

「ふむ」

「毎日おまえのボケに合わせてツッコミ入れてるのは誰だ？」

「あ」

そうなのだ。二人三脚だけじゃない。誰かと何かをするには呼吸が大事なのだ。ということは――私たちがこの競技が苦手なはずはなかった。

「最初はお姉に断られたけど、うわぁなるほど。そういうことなら確かにトメ兄のほうがやりやすいわ。最強コンビじゃん私ら」

「……姉と一緒にやったら、誰だろうと足ごと引き摺られながら走ることになるだろうし。絵的にそれがまずかっただけじゃないか？」

「おりょりょ、話を逸らした？　トメ兄もしかして照れてるのかや？」

「うっさい。そんなことより」

トメ兄が顎をくいっとそちらに向ける。

ああ、そうだ。

……後ろを見る。

私と一緒に走っていた後続の人たちが追いついてくる。

ヤナツ父子は、四位だった。最初は二位だったものの、私たちに追いつこうと無理にペースを上げて何度も転んだのが理由らしい。

他の人は楽しそうにしていた。勝ち負けなんか関係ないんだ、家族で触れ合い、協力しながら障害物を越えることをただ楽しんでいた。

でもヤナツたちだけは、表現し難い暗い顔で、黙々と競技をこなしていた。

ゴールまでそのまま。

「……トメ兄。なんでだろ」

「どうした？」

「今ね、爽快な気分だったの。私のサエちゃんを傷つけたやつを打ち負かして、皆に応援されながら走りきって、トメ兄とコンビネーション決めて、一番で……いい気分だったはずなのに、少しだけ、なんだか嫌な気分になってきた。さっきまですんごくムカついてたのに、あの二人を見て、ざまぁみろーとか思えないの」

「そりゃーここまでコテンパンに叩きのめせばな。やりすぎかな、とか思わないほうがダメだろ」

トメ兄は、なぜか嬉しそうな顔だった。

「おまえも相手のことを考えるようになったか――よしよし。でも大丈夫だぞ？　このままだと確かにやりすぎで、僕らのしたことは単なる貶めだ。だからこそトドメを刺すんだろ」

トドメを刺す。サカイさんの作戦にはまだ続きがあったのだ。

そのトドメというのは文字通りの意味ではないかもしれない。ここまで持ち上げられておきながら、走り出した途端に実況は彼らに全く触れず、観客たちも先行く私たちにばかり注目し、そのまま見て見ぬフリをされながら、微妙な空気の中を走り切らなければならない……私は子供だからよくわからないけど、サカイさん曰く罵倒されたり蔑まれるよりもこちらのほうが屈辱的だという。同情、憐れみ、そして失望。プライドの高い人間はこれを何よりも嫌うそうだ。ならばここまで叩きのめした上にトドメなど刺しようがない。

でも、必要なのだ。この作戦の仕上げとして。

「さて、あの父子はどこかなっと」

居づらくなったせいだろう、いつの間にかフラリと消えたあの父子を探そうとしたそのとき、

「待って」

私を止める声があった。

「トドメは私に任せて」

「サラさん？」

「これは多分、私のほうが適任だと思う。それにね、サエちゃんっていう友達を傷つけられて怒ってるのは、私だって同じなんだから」

サラさんって、ヤナツたちの家族なんだよね。

家族……家族、か。

「おっけ。容赦なくやっちゃって」

「ふふ、家族だからなぁ。容赦しちゃうかも」

「んー……じゃ、任せる」

サラさんは笑った。

その家族を、あんなにひどい目にあわせた私たちに。

「ありがとう、カカちゃん。私の家族に喝を入れてくれて」

去っていくサラさんを見つめながら、無言だったトメ兄に聞いてみる。

「これで作戦完了、かな」

「そうだな。見ろ、サエちゃんが来る」

応援席の向こうから、サカイさんに支えられながら私の親友がやってくる。

「カカちゃーん！　すごかったよー！！」

サエちゃんは笑顔だった。本当は自分がお母さんと走りたかったはずなのに、本当は悲しいはずなのに、笑顔だった。

いろいろと気になることはあるけど。

私はその笑顔をまた見れただけで、達成感がいっぱいだった。

あとは、そう。

トドメがうまくいけば、完璧かな？

サラです。

「なんだあいつらは！　人をあざ笑いやがって！」

校舎の隅に隠れてグラウンドを覗きながら、私の父親が言った。

「なんてやつらだ！　俺たちが何をした？　こんな想いをさせられるようなことをしたのか！？」

同じく覗きながら、私の弟が言った。

「……」

あれだけ父と弟を負かしたがっていた妹は無言だった。多分なんだかんだ言って、家族のこんな姿を見て笑う気にはなれないんだろう。

うん、よし。

トドメだ。

「卑怯で卑劣極まりない！　見ろあれを、人を貶めて笑いやがって！　あぁ汚い笑い方だ――」

「そう？　私には、悪戯を成功させた子供が楽しそうに笑ってるようにしか見えないけど。もしくは悪を倒した余韻に浸ってる、正義の味方とか？」

私の家族は困惑した顔を、驚いた顔を、そして憤怒に染まった顔を向けてきた。

その鬼のような顔をした父親が口を開く。

「何を善人面している？」

「何を悪人面してるの？」

即座の言い返しにうろたえる父。

「あなたたちが嫌な気分なのは、後ろめたいことがあるからでしょう」

そして三人は押し黙った。

「私も、あの子たちも……後ろめたいことは何もない。私は関与すらしていないし、あの子たちは傷つけられた友達を守っただけ。元陸上選手を打ち破った意外な勇者として称えられているだけ」

「そ、そのせいで、俺たちは惨めな思いを――」

「当然じゃないの、誰かの大切な人を傷つけたんだから。大切な人

に何かあったとき、どんな想いを抱くか……私たちは知らないわけじゃないでしょう？」

つい最近、母親を失った私たちが知らないはずがない。

「でも……でも、あいつばっかり……！」

「弟ちゃん。人が本当に苦もなく幸せなのかっていうのは、本人しかわからないんだよ？」

「知らないし、そんなこと」

「じゃあもしあの二人がずーっと幸せだったとしたら、あなたの行為は褒められるの？」

俯く弟。

「なんだ、ヤナツのせいか、おまえのせいで――」

「お父さん。あなたは朝のランニングで見かけたあの人たちを鼻で笑っていましたね。朝食のときに、とても汚く語っていましたが」

「そ、それは」

「まさかあの母娘のことだとは思いませんでしたが……ヤナツがした行為も、見て見ぬフリをしたんじゃないですか？」

黙り込む。図星のようだ。

「自分たちが何をしたのか、わかった？　だから嫌な想いをするの

は自業自得。でもね、だからってそんなに楽しくないことばっかり考えてると、どんどんつまらなくなってくよ」

「楽しいことなんて、どうせ見つからないよ」

弟が泣きそうな声で言った。

「お母さんが死んじゃってさ、ずっとイライラしてさ、つい人をいじめちゃってさ……それで友達いなくなるしさ、自業自得だってわかってるよ！　でも……」

「お姉様、それだけは、楽しいことが見つからないという意見だけは、わたくしも同意します。お母様が亡くなってから、わたくしは……」

お父さんは何も言わない。でも多分、この子たちと同意見。この人もずっと機嫌が悪かったから。

「皆さ、お母さんがいなくなってから元気がなくなって……私だけ元気だったでしょ。なんでか、わかる？」

三人が私を見る。

「働かないと生活できなかったのもある。皆を元気づけようっていう気持ちもあった。でもね、一番の理由は、日々に楽しみを見つける達人たちが近くにいたから」

その視線を、受け止める。

「この世にあるものはね、見方を変えるだけですごく楽しくなるの。

私の知り合い――友達にこういう人がいたわ。自分の夫が知らないうちに亡くなっていて、娘と自分だけが取り残された。でも可愛い可愛い娘のために、その人は一日も待たずに元気になった。悲しむような顔一つせず、一心不乱に働くようになった。娘を全力で愛するようになった。それは見る目を、亡くなった夫じゃなく、今生きている娘に向けたから」

強かった。どうしようもなく気が合わず、会えばケンカばっかりだったけど……昨日、娘の自慢話をしていたあの人は、どうしようもなく強かったのだ。

「お父さん。あなたの目は、どこを向いていますか？」

私も強くなりたい。

「あなたたちは？」

私の家族にも、強くなってほしい。

「私はもちろんお母さんがいなくなって悲しいよ。でも、お母さんは死ぬ間際に、私たちに頑張れって言ってくれた。だからお母さんの分まで私は生きるし、お母さんの分まで私は笑う」

いつの間にか私は泣いていた。ずっと言いたかったことが言えて嬉しいから。悲しみと苛立ちのせいで聞く耳を持ってくれなかった家族に、ちゃんと伝えることができたから。

「楽しいことに目を向けよう？　悲しいことに目を向けてもいい。ただ、そればかりにならないで。もし見本がほしいなら……あそこにいる子たちを、見るといいよ。ほんと、呆れるくらいに楽しい人

たちだから」

ありがとう、カカちゃんたち。こういう言い方も変だけど、ありがとう。

私に、きっかけをくれて。

「……お姉ちゃんは、最近よく笑っていますね」

お姉ちゃん、なんて呼ばれるのは何年ぶりかな。

「うん」

「納得、です」

妹ちゃん、合格。

「……でも、なぁ？」

「オヤジぃ……なぁ？」

「どうしました、お二人さん？」

ずっと渋い顔をしていたお父さんと、泣きそうだった弟ちゃんも、

「こんな負け犬状態の俺たちは……いったいどんな顔して戻ればいいんだ？」

「笑えって言われてもなぁ、あんだけ思いっきり負けて笑ってたら馬鹿みたいじゃん？」

そう言って、二人は頬を引きつらせたような、だけど照れたように、笑って、

「仕方ないじゃないですか、馬鹿だったんですから。あっはっはー負けたー！　って感じで思いっきり笑ってやりましょう！」

二人も、合格。

ぎこちないけど、皆笑えた。

ね、カカちゃん。

トドメって、これでいいんだよね？

「さぁ、お弁当の時間ですよ！　この日のために用意した新料理がありますから、楽しみにしててくださいね！」

運動会はまだ半分、午後からも競技はいっぱいだ。

美味しいご飯を食べて、気合を入れて。

皆で笑おう。

どこかで見ているお母さんも、笑ってくれるように！

「……あ」

「今度は何よ、弟ちゃん」

「でも俺、カカとかサエの前で笑ったら殺されるかも」

「それはしーらない！」

「え、ちょっとねーちゃん!?　俺笑えねーよー!!」

そこまでは知らないもんねー！

## カカの天下５９９「貴桜運動大戦　二人三脚障害物走」（後書き）

予想以上に気合を入れすぎてしまった運動会編、まだ一話続けますがひと段落です！！

やー……ここまで長くなるとは思いませんでした。しかも明日はカカラジ？　うきゃー。

まぁいっぱい書いた分の達成感はあるので、手は抜かずにやりますけどね。でも……ちょっと載せるの遅れてもユルシテネ。

サカイさんサエちゃん編を境にしばらくしんみりしたのはよそうかなーと思ってたんですが、話を思いついてしまったものは仕方ないとばかりに書きました。

ヤナツたちの裁定には読者の皆さんも思うところもあるかもしれませんが、それらはまた感想ででも語っていただけると私すごい喜びます＾＾

それでは明日、カカラジでお会いしましょう！

**カカの天下６００「第二十回、カカラジ！」**

「見ろ！　シューがゴミのようだ！」

「いつものことだ」

「お姉を解き放て！　あの人は人間だぞ！」

「そうでもない」

「四十秒でツッコみな！」

「長いし。逆に難しいし」

「好きな人が、ボケました」

「よかったね」

「まっくろくろサエ出ておいでー！」

「おまえが目玉をほじくられるぞ」

「私なんて、面白かったことなんて一度もないわ」

「嘘つけ」

「黙れ小僧！」

「黙れ小娘」

「やーよ、というわけで始まりましたカカラジなんですけど冒頭のこれはなんでしょうね小芝居やるんじゃなかったんですかねぇある意味芝居ではありますけどってぇいえいえ某あれとかこれとかは関係ありませんよきっと多分っというわけで気分切り替え私ワールドへようこそ！　香加です！」

「僕は芝居せずにツッコんでただけだけどな、留です」

「二人合わせてカカ天です！」

「……そういやそんなこと言ってたな、最初のカカラジじゃ」

はい、そんなわけでどんなわけかわからないまま第二十回カカラジスタートです！

「二十回！　すごいね、もうそんなになるんだね」

はい！　キリのいい数字ですねぇ。六百話だし。

「運動会をぶった切る形だから、キリがいいのかどうか微妙だけどな」

うぐ！　い、いいんですよ、問題はひと段落したんですから！本当は私も運動会が終わってから綺麗にカカラジに入るつもりだったんですよ。運動会に五話使うとしてーって書いてったら……直前になって五話じゃ足りないことに気づいて、でも直前すぎてどうしようもなく……

「それで、とにかくヤナツ問題だけでも解決させようと頑張った、

と」

はい……おかげで結構詰め込んだのでいい感じなボリュームとなっております。運動会といえば熱い展開！　それだけを思って敵であるヤナツを登場させたわけですが……

これまた意外と嫌なやつだけのキャラにならない。なんだかんだと話が進んでいくうちにいつの間にやら『マイナス感情、プラス感情』や『人の強さ、弱さ』や『楽しいことを見つけよう、そして生きよう』などなど語ることとなり、当初予定していた熱いだけの展開にはなりませんでした。

「じゃあ作者的には失敗なんだ？」

いえ、失敗というほどでもありません。書きたいものが書けましたし勉強になりました。現代の中で、いざ勝負で敵を倒すことになったとき、その敵は何を思う？　コテンパンにされてそれで終わりだったらカカ天らしくないんじゃないか？　など考えさせられることが沢山ありました。

「ほほう。んじゃ具体的に何を学んだんだ？」

まず、人間は痛い目を見て初めて学ぶことができるということ。まぁこれは書きながら学んだことではなく、実際に生活していく中で実感したことですが……痛い目にあったときって凹むんですよね。心が荒みますよね。でも本当に痛くて心が弱ってるときに、真摯に話しかけてくれる人がいたら……そのときに初めて聞き入れることができる話があると思うんですよ。

弱っているからこそ、プライドや見栄を置いて話を聞くことがで

きる。もちろん場合によります、ヤケになって誰の話を聞かないときもあるでしょう。でも何かを学ぶことができるといえば、やはり痛い目にあったときなんです。

心が弱ってるときに騙されるって話がよくありますよね？　あれの逆で、良い説得に心が動くことだってあると思うんです。

今回のヤナツも父も、荒んでました。サラさんの言ってたとおり話を聞いてくれない状態で……そこでカカたちが見事に痛めつけてくれました。自分たちがどれだけ情けない状態だったかを露呈し、サラさんに説得のチャンスをくれました。ここまで詳しく解説するのもなんですが……カカラジならこういう背景を書くのもいいかな、なんて思いまして。

「長い。香加、まとめな」

「馬鹿を矯正したかったらとりあえず痛めつける」

み、身も蓋もない……

「お見事。大体な、オープニングから話が重いんだよ！」

「せっかく最初の小芝居で軽快にいってたのに！」

はいはいごめんなさい！　もう一つ学んだことを言ったらすぐにＣＭいきますよ！

「よし、じゃあ言ってみろ！」

熱い展開にしたかったら、嫌な敵よりもライバルを相手にすべき

！　以上！

「なるほど。たしかに」

「いい勉強なったね」

はい、ＣＭ！

『第一回ミスカカ天コンテスト開催が決定しました。出場者は、

エントリーナンバー１
プロポーションだけなら高得点か？　ミス化け物
カツコ！！

エントリーナンバー２
最近登場機会の多い、元引きこもり
サカイさん！！

エントリーナンバー３
読者投票第一位、実はツンデレ？
テンカ先生！！

エントリーナンバー４
お色気キャラかと思えばそうでもなく、恋愛キャラ脱出で出番が減った、かに見えたが？
サラ（自称）

エントリーナンバー５

優勝候補、実は三児の母で大女優
ユイナさん!!

エントリーナンバー6
出ちゃっていいのか？　むしろどっからきた？　超ダークホース
村娘A!!

エントリーナンバー7
どうして応募しちゃったんだ!
給食のおばちゃん!!

エントリーナンバー8
子供代表、タケダも鼻血ブー、お色気担当
サユカちゃん!!

以上の八名が『料理』と『コスプレ』の二部門で争います。

実況『祭野司会』夏祭りもこの人が司会をやっていた。

解説『サエ』黒い毒舌ズバズバ炸裂!?

審査委員長『トメ父』エロい。

審査委員『キリヤ』よく喋る。

審査委員『シュー』おまえに審査されたくない。

トロフィーの上で不敵に笑うタマ、

ガサゴソ動く副賞の箱、

何処にもいないカカ、
数々の謎を抱えてミスカカ天、
いずれカカラジで開催！』

ＣＭあけて。

「えーと、今のはカカラジネーム、がないのでそのまま。若木瀬さんからいただきました」

「ＣＭ投稿、結構いっぱいきてるみたいだね！　よかよか」

さすがに脅迫状より考えやすいのか、どしどし送っていただいて私としては大感激です！　本当なら一つだけ読者さんのＣＭを採用するつもりだったのですが、今回は面白いのが沢山あったので後半のＣＭにも使わせていただきます！

「んでさ、作者。このミスコンやるの？」

予定はないですが……やってもいいかなぁとは思いますねぇ。

「さりげに留兄いないよね」

「む、そういえば」

忘れられたのか、わざとなのか気になりますが、こんなやつのこ

とは放っておいて、ふつおたコーナーいきましょう。

「……ひどいよぅ」

「留兄がいじけても可愛くないよ。さて、カカラジネーム『真を突く者』さんからいただきました！　えっと、『著作権とか大丈夫ですか？』だっ……て……」

著作権……

「なぁ、冒頭の――」

「言っちゃダメだよ留兄！！」

だ、だだ、大丈夫です！　作中に出てくる見覚えのある台詞とかそれっぽいなんかのタイトルとかスペルカーげふんげふん！　えーともかく全部偶然似てるだけですので！　ええ偶然ですとも！

「次行こうか次！　留兄読んで！」

「香加がこういうのに気を使うのも珍しいが、そこはツッコんじゃいけないんだろうな。ＫＹだよな。んじゃ次！　カカラジネーム『サランドゥ！』さんからいただきました」

「サランドゥ！」

サランドゥ！

「挨拶にすんな。えー『サンタの正体はまだか！？』だと」

明日わかります。次！

「はい、カカラジネーム『受験生はつらいよ』さんからいただきました。えー『カカサエサユカの通知表公開お願いします！　特にサユカちゃんは今まで得意なことってあったか微妙なので得意科目はなんですか？　それともう一つ、レギュラー陣の背の高さはどんなですか？』とのことだけど？」

はい、まず通知表公開なのですが、これは別の機会に本編で発表しようと思います。いい話のネタになるかと思いますので。

「毎日書いてるからこういうネタは大事だよな」

ぶっちゃけ助かります。

「ほんとぶっちゃけだな。で、サユカちゃんの得意教科は？」

サユカちゃんは真面目なので、わりかし平均的に成績がいいです。特にいいのは――

「保健体育でしょ？」

「小学生にそんなもんはないだろが」

「ちっ」

……えー、中学だったら保健体育と答えてイヤンな感じにするとこでしたが、普通に算数が得意です。ちなみに付け加えますと、小学生のころからこういう区切りもどうかと思いますがサエちゃんとサユカちゃんは理数系、カカは文系ですね。

「私って直感派だからね」

「ふざけなければ国語の点数はいいんだよな、意外と」

そんなわけで、詳しい通知表については今学期末か今年度末にでも。あとは背丈ですが……ちらーっと前に本編でも書きましたが、低い順に言うとカカ、サエ、サユカです。カカは平均より低め、それよりちょっとだけ高いのがサエちゃんですがあまり変わりません。サユカちゃんは女子にしては高いほうですが、ポニーテールという髪型は実際より身長が高く見えるのでパッと見、男子並だったりします。

「僕は？」

君は百七十の後半です。

「ちょっと高いよね。これだからイケメンは」

「や、僕がイケメンなんていう設定はどこにもないんだが」

はいはいモテるやつは皆そう言うんだよ。くたばれ。

「あの作者さん？　常々疑問に思ってたんですけど、僕のこと嫌いなんですか？」

はい、次のおたより。

「あのぉ！？」

「カカラジネーム『ちょっと一言よろしいかしら』さんからいただきました」

「……やっぱ嫌いなのか」

はっはっは。いつも好かれすぎなんだ、たまには落ち込むがいい。

「作者いい気になってるね」

……む？

「メッセージ読みます。えー、『最近感想の返信が遅いです』だって」

あああああごめんなさいごめんなさいごめんなさい！

「おお、浮かれていたのが一気に落ち込んだ」

うう……仕事忙しいと本編書くので精一杯だったりしますので、どうか許してやってください。

「あとね、『あんパンまだー？』って」

ごめんなさいいいい！　それも中途半端ですぅぅぅ！

「そんなわけで、いい気になるなよ作者という」

……もしかして香加、留の仇をとったとか？

「なに！　そうなのか、香加！」

「うん。元気になった？」

「ああ！　最愛の妹よ！　兄は感動している！」

「さて、ここで脅迫状コーナーです。『拝啓秋も深まってきた今日この頃……（中略）さて、ここ最近の「カカの天下」はサカイ親子を軸としたシリアス路線になっています。そのため、私が心待ちにしているトメテンのメの字も出てきません。別に私はシリアスもシリアルも嫌いなわけではありません。ただそれ以上にトメテンの、ラブで、ラブラブで、うっふんあっはんいやーんな話が大好きです！大好きなのです！！

というわけで、留！

カカ天登場キャラの代表として、あなたには今までのシリアスを全て帳消しにするほどのコメディな災いが降りかかり、あなたはその髪の毛をアフロにしてしまうでしょう。

ただし私も鬼ではありません。今回のカカラジが終わるまであなたが『ぶりっ子口調』で司会を務めるならば、この災いは鎮まります。

ではまた手紙を送ります。脅迫者より　愛を込めて

敬具』だって。さぁ留兄、ぶりっ子だ」

「……ああ、妹よ。兄はがっかりしている」

「ほれ、元気になったんなら指示に従いなさいな。ちなみにこれ、『脅迫者鶏助』さんからいただきました。元祖脅迫状を送ってくれた人ね。ありがとう！」

「がっかり……」

「ほら、ぶりっこ」

「がっかり……してるんだもん！」

それぶりっ子なのか？

「そんなこと急に言われても、どうすればいいかわからないんだもん！」

「とりあえず『だもん』を使えばいい感じだもん？」

そうなんだもん？

「知らないもん！」

とにかく最後までこれでいくんだもん！　ＣＭだもん！

『えー、今回お勧めするこの商品！！　なんと！

『姉気分が楽しめるバケモノセット』と『トメとサユカ気分が楽しめるツッコミセット』！！

これをつければあなたもバケモノ！！これをつければあなたもツッコミ！

さあ！今すぐお買い求めを！！

お問い合わせはこちらまで！！　どちらまで！？　知らん！

なお、五個以上お買い上げのお客様全員に、

『シュー気分になれる下僕セット』か、『サエ＆サカイさん気分になれる腹黒セット』、または『タマちゃん気分になれるすごいセット』のどれか一つをお付けしております！！

十個以上お買い上げのお客様には、『トメテン夫婦漫才プラスＫセット』、『カカトメ妹にゃにゃんセット』の両方をお付けしております！

気になるお値段は、なんと！５００．．円！！５００．．円でございます！！

期限はありませんので、ご注意を！！』

ＣＭがあけたもん！

「えー今のＣＭは、カカラジネーム『でんでんむしむしカカつむり』さんからいただいたもん！」

感謝だもん！

「それにしてもこの口調だと僕が喋ってるんだか香加が喋ってるんだかわかりにくいもん」

「んじゃ私やーめた」

私もやめました。

「じゃ僕も……やめたらダメなんだよね、わかってるもん！」

や、それにしてもこのＣＭはインパクトがありました。つい昨日いただいたんですけどね？　バケモノセットというのに強く惹かれました、ええ。高級をつけるかどうか迷ったぐらいです。

「高級バケモノセット。なんか凄まじいね」

しばらく高級セットシリーズ出してないですけど、ここで読者さんに使われるとは思いませんでした。ぐっじょぶ！

「しかし５００円とは安いもん！」

「ほんとだよね、たったこんだけなら私でも買える」

これを安いと言う人はブルジョワでしょう。

「……え？　だって５００円でしょ？」

よく見なさいな。今の世の中、どれだけちっちゃかろうが数字の後に丸があればゼロと認識されるんだよ。

「ま、まさかごま――」

はい、そんなこともあるのでお買い物は注意しましょう。続いてエンディングといきたいところですが……ちょっとここでもう一つ、紹介したいＣＭがあります。

「おお！　いつもより一つ多いもん！」

や、本当は二つだけ紹介しようと思ってたんですけど、今のバケモノセットＣＭを昨日いただいて、どうしても使いたくなったんですよ。なので本来なら後半のＣＭにしようと思っていたこちらもまとめて発表しちゃおうかなーと。

「ＣＭ応募大成功だもん！　発案者の『鈴宮』さんに感謝だもん！」

「留兄。いい加減うざいよ」

「自分でもわかってるもん！」

さてさて、それではカカラジネーム『天上』さんからいただきました。よくメッセージにて感想をいただく方で、今回は面白いのを送っていただきました。ではどうぞ！

『もしも、あそこで違う選択をしていたら？　もしも、あの場面に戻ったら？　その時あなたはどうする？　想像して創造してみませんか、平行世界を……

早い話が読者とルシカさんが描く、カカ天の『もしもシリーズ』です。

・もしもトメさんが弟、カカちゃんが姉だったら？

・もしもトメさんの妹がサユカちゃんなら？

・もしもトメさんのプロポーズドッキリをテンカさんがＯＫしていたら！？

本筋・設定共に、ネガティブなパラレルは×、明るく笑えるならなんでも○！

皆さんの望む世界を、どうか私たちに見せてください……』

ＣＭがあけて！　エンディングです！

「ねぇ、もしもシリーズってドリ――」

「しーっ！　著作権に気をつけようって言ったばっかだもん！」

ともかくこれはいいですね、ちょっとした寸劇なら面白い話ができそうです。というわけで、今やってるカカラジの冒頭の寸劇、これにしちゃいましょう。

「ど、どんどん読者の意見を取り入れてるもん」

ラジオっちゃ本来そういうもんだもん。と、いうわけで。皆さんの読みたい『もしも話』を募集します。内容はＣＭの通り、あなたが見たい設定で話を送ってきてください。次のカカラジの冒頭で寸劇として実践しちゃいます。誰を出演させても結構ですよ！

さらにさらに！　覚えている人は覚えているでしょう！　もうすぐカカとサエちゃんの誕生日なのです！　というわけで……テンカ

先生のときみたいにプレゼントを募集しちゃいます！　今年はいろんな場所で大活躍だったカカとサエ。クラスメイトだけでなく一般人からも届いちゃったりするかもしれませんね。つまり設定は自由！　その代わり、自分がどこの誰かを必ず明記して送るようにしてください！

「……覚えてたか。運動会なんかやってる場合なのかなーって私の分身のことながら思ってたんだけど」

「多分、それに間に合わせるために運動会をあんなに詰め込んでたんだもん」

それと注意事項として……プレゼントが誰宛なのか書くこと！　選択肢は三つ！　カカ宛て！　サエ宛て！　カカとサエの二人宛てです！

「なに、三つに分ける意味あるの？」

いろいろと考えてることがあるのですよぉ。と、いうわけでコーナーのおさらい！

普通の質問受け付けます。ふつおたコーナー。

どんな宣伝でも面白ければＯＫ！　ＣＭコーナー。

ファンキーな脅迫状待ってます、脅迫状コーナー。

もしもな寸劇、見てみませんか？　もしもコーナー。

あの二人にプレゼントを！　カカサエ誕プレコーナー。

以上になります！

「うん、増えすぎ」

「なぁ作者。ただでさえ感想の返信遅れてるとか言ってるのに、こんなに対処できるのか？」

死ぬ気でします。ええ、自慢ですけどカカ天で書くと決めたこと、やると決めたことを妥協したことはありません。多少遅れようがやりきってみせます！　だって楽しいし！

「そだね。楽でつまんないより、必死こいて楽しいほうがいいよね」

「まぁ頑張ってくれ。僕らもせいぜい楽しくやるし」

はい、というわけでぶりっ子口調を勝手にやめた留君にはいずれ罰を受けてもらうということが決定です。いやぁ楽しい！

「し、しまったもん！」

「それじゃ留兄には別に罰があるっていうし、今回のチョップは……作者だね」

ドンと来い！

「気合入れてやれや！　カカラジチョップ！！」

六百回おめでとー！！　って自分で言うのもなんだけどチョップいたーい！！

今回の放送は、『若木瀬さん』と『パラレルをしてしまっても委員会』と『なんかすごいモノがいっぱい売ってそうなテレフォンショップ』の提供でお送りしました。

## カカの天下６００「第二十回、カカラジ！」（後書き）

というわけで６００回です。なんだかここまでくると節目がどこだかわかりませんね笑

感想の返信が遅かったりする作者ですが、全部欠かさず読んで日々の糧とさせていただいておりますので、懲りずに送っていただけたらものごっつ嬉しいです。

ではでは、明日は運動会の残りのお話です。

次の誕生日編まで、また楽しくいきましょう！

## カカの天下６０１「貴桜運動大戦　お昼休み」

こんにちは、トメです。

色々あった運動会。お昼休みの時間となり、ようやくゆっくりとお弁当を食べることができます。

思い思いの場所でシートを広げ、昼食をとる父兄と生徒たち……

「ニッシー！　さぁお弁当をよこしなさい！」

「はいはい。だってさお母さん、お弁当出して」

「あ、おばさま！　こんにちは！」

「あらあらアヤちゃん、こんにちはぁ」

「ニッシー、ちゃんと手伝ったんでしょうね」

「半分は僕がやったよ」

「よろしい！」

「いつも一切手伝わないアヤ坊がなんでそんなに偉そうなのさ」

「その分いつも遊んであげてるからよ」

「ヒドイ！　僕とのことは遊びだったのね！」

「へっへっへ、楽しい思いができたんだからいいじゃねぇか」

「返して！　僕がいままで貢いだお弁当を返して！」

「トイレにいけば多分あるんじゃない？」

「……アヤ坊、いくらなんでも女子にその返しはないかと」

「はいはーい、お二人さん。仲がいいのはいいけどお弁当広げてー」

「あ、すいませんおばさま」

「アヤちゃんのご両親は、まだ？」

「海外です」

こんな風に仲のいい男子と女子が集まったり……

「テンカせんせー」

「お、ふんどし三人組」

「……テンカ先生、その呼び方はどうかと」

「んだよ、自分たちのふんどしを皆に見せつけてたじゃねぇか。格好よかったぞ」

「誤解を招く言い方やめてくださいっ！　女がふんどしするわけないじゃないですかっ」

「サユカン、男もしないと思う」

うんうん。

「オカマはー？」

知らん。

「お、サエ。足はもういいのか？」

「とりあえず歩くことはできますー。ところで……」

「おろ。どした母さん。オレの背中に隠れて」

「あ、あはは……元気のある子たちですね」

「圧倒されたか。ほんと母さんは気が弱いな」

「あ、ちゃんと私たちが贈ったペアリングとかネックレスとかつけてくれてますね！」

「あらあら、じゃああなたたちがテンカのいつも言ってる……」

「む、なんて言ってるんですか？」

「ふんどしトリオと」

「それついさっき生まれたネタでしょっ！？」

「それにしてもー……ふーん、確かにペアアクセサリをつけてるけ

どー……」

「なんだよサエ」

「アレはー？」

「うっせぇ。ほれ、てめぇらはトメたちと一緒に食うんだろが。さっさと飯食って来い！」

「ふふふー、照れちゃって」

「それじゃ親子でごゆっくり！　いこいこ」

「……サエすけ、アレってなに？」

こんな風に教師も親子でお弁当を食べたり……

「……サユカ」

「あ、お父さん、お母さん」

「あなた……借り物競走で……」

「ひぅっ！？　ききき聞いてたのっ！？」

「うぅ……」

「母さん、泣くな……うぅ」

「泣くほど格好悪かった？　ごめんねっ、ごめんねっ！」

「立派になって……」

「どういう感想っ！？」

「おまえは俺たちの誇りだ！」

「一体何をどう誇るのか詳しく述べよっ！！」

『愛をっ！！』

「わたしの親っていったい……」

こんな風に午前の雄姿を語る親子がいたり……

「あらあら教頭先生、どうしました？」

「共に弁当を食す相手がいないのです」

「おほほ、寂しいですね」

「とても」

「わたくしはクララちゃんと食べますが」

「ご一緒しても？」

「どうしますかクララちゃん？」

「ヤです！」

「フラれてしまった！！」

「あらあらクララちゃん、どうして？」

「教頭はデザート全部食べちゃうからです」

「たしかに」

「教頭先生？　デザートを食べないという約束ならご一緒しても――」

「それは拷問です」

こんな風に一人で食べるハメになった人がいたり……

色々な昼食風景があるわけだが、さてさて僕らのほうは。

「トメ兄。お弁当は？」

「あ、僕作ってないぞ」

「なんだと！？」

「心配するな。こういうときのお弁当はやっぱり母親の手作りにすべきだろう」

「……そりゃそうだけど、お母さん仕事でこれないし」

「弁当だけなら作ってくれたらしいぞ」

「ほんと!?」

「ほら、届いた」

なにやらざわついている方向を見ると、相当な人数の注目を集めながらサンタ姿のおっさんが現れた。

「ふぅ……周りの視線が熱いわい」

「ご苦労様です。この天気だと、その衣装が単純に暑いんだと思いますが」

「ほっほっほ、それもあるのぅ。ほれ、ユイナさんのお弁当じゃ」

「わざわざありがとうございます……ん、どしたカカ」

ぽかーんと口あけて。玉子焼きでも放り込めばいいのか？

「と、とめ、トメ兄！」

「なにさ」

「こいつナニブツ!?」

「サンタ」

「や、わけわかんないから!!」

あれ、会うの初めてだっけ？

「この人は――」

「まぁまぁ、わしはサンタ。それでいいじゃないか」

「や、しかし。せっかくお越しいただいたのに」

「よいよい、わしもわしで忙しいのじゃ。それではの」

「ありがとうございました！　ほら、カカもお礼言って」

「え、あ、うん。ありがとー！」

「ほっほっほ、また会おう」

唖然とする周囲の人を全く無視して、のっしのっしと去っていくサンタのおっさん。

「……ねぇ、トメ兄。あの人、なに？」

「うちのばあちゃん」

「はぁ！？」

思えば僕もあの人に会うの二年ぶりくらいなんだよね。滅多に人前に出てこないし。

「え、は、うそ、どう見てもおっさんだよ！？」

「変装だよ」

「なんでサンタ!?」

「正体を隠せるから」

「なんで隠すの!?」

「正体バレるとすぐに命狙われるからって」

「え、待って待って待って……ばあちゃんって、あのばーば？　戦隊モノ好きだった」

「覚えてんじゃん。本当はサンタじゃなくてなんとかレンジャーになりたかったらしいけど」

「死んでるでしょ!?」

「死んだフリしてんだよ。過去にいろいろやったから」

「毎年墓参りに行ってるのは!?」

「じいちゃんの墓参りついでのカモフラージュ。だってあの人が死んだ場面なんて見たことないだろ」

「嘘……じゃあ、なんか、墓参りに行く度に聞こえた気がしたばーばの声って……」

あれ、カカも聞こえてたのか。んじゃやっぱ墓参りの度に近くにいたのかね。声かけてくれればいいのに。

「なんでうちの家系にはまともなのがいないんだろう……」

「や、片親がまともじゃないんだから仕方ないだろう。父さんは忍者、その母親も忍者。ギャグだよな」

マジなのが笑えないところだが。

「今日は父さんも忙しかったらしくてな、母さんの弁当を届けてくれたわけよ。ほれ、食べるぞ」

「う、うん……」

相当ショックだったのか、カカは困惑した表情のまま頷いた。まったく、毎日毎日頭を使わず感性の赴くままに行動してるからそういうことに気づかないんだ。父さんのことも一度忘れてたしな。

……まぁ、軽々と身をくらます忍者がオカシイんだが。

「あ」

「お」

僕たちのシートが敷いてある場所に戻ると――そこにはなんと、ヤナツ君が。

「……どういうことだろ」

「さぁな。サエちゃんとサカイさんと対峙してるけど。お、サラさん」

「トメさん、カカちゃん。トドメちゃんと刺してきたよ！」

「へぇ、その結果があれか」

「うん！」

「ねぇサラさん」

「ん？」

「トドメを刺したのに、ヤナツはなんでまだ生きてるの？」

「……冗談よね？　冗談だよね？　トドメってそういうことじゃなかったんだよね！？」

カカの遊びはともかく、あちらはどうなってるかな――

「えっと……サエ」

「んー？」

「あ、その、な……えっと……」

「んんんー？」

「だから……」

「はよぅ申せ」

「俺が悪かった！　どうか許してくれ！！」

「許さん」

「ぐはぁ！！」

「お母さん、ここは私が答えるところー」

うん、今許さんって言ったのサカイさんね。

「えー」

「えーじゃないの。ごめんねヤナツ君」

「い、いや。許されないのも当然だ！　だけどサエ、ど、どうか許してほしい！」

「うん」

「許してくれるのか！」

「だめー」

「ダメなの！？」

今のはサエちゃんね。おーおー、ペコペコと謝って。

これこそがサカイさんの立てた作戦の最終目的――本人に心から謝らせること。痛めつけるだけじゃなく、自分たちがそれぐらい痛かったんだとわかってもらうこと。

やり口はとてつもなく邪悪だったけど、結果オーライってとこか。

「うまいことやったみたいだな、サラさん」

「どういうトドメさしたの？」

『わかってもらう』という部分がすなわちトドメだったわけだが。

「……えっと、恥ずかしいんですけど」

ほほう？

「言え言え」

「えっと、ううん、はい。んー、うちの家訓にですね、『敵には全力で当たれ、泣いても許すな。叫んでも許すな。涙が枯れたらちょっとだけ許せ』っていうのがあるんですけど」

「それに加えて恥ずかしいって一体ナニやったのさ」

「そんな感じで容赦なく叩きのめしたとか？　恥ずかしい言葉を叫びながら」

「ちちち違います！　そんなことしませんよ！　いやらしい！」

ナニ考えたの。

「ただ、全力で八つ当たってどうするの？　って話をしただけですよ」

家訓活かされてなくない？　いいけどさ。きっとクサイこと言ったんだろうなぁ。それで言うの恥ずかしいんだろうなぁ。でも家族の間なら、それくらいでちょうどいい。ある意味、今回の作戦の中でサラさんが最も適任者だったかもしれないな。

「一体どうしたら許してくれるんだ！？」

お、ヤナツ君が叫んだ。

「じゃーおもしろい話言ってー。笑える話」

「なに！？　う、いや、俺はそういうのは苦手で」

「最近あった恥ずかしい話でもいいからー」

「……調子に乗って、皆に一位宣言しておいて……ボロ負けした」

「あははー、カッコワル」

「死んだほうがいいねー」

「お母さん、それはキツすぎ。せめて笑ってあげよう？」

「あははバーカバーカ」

「うわぁぁぁぁぁん！！　ねーちゃん！　俺笑えねーよ！！」

助けを求められたサラさんは能天気に「がんばれー」とだけ応援した。薄情だ。

「おいヤナツ」

「げ、カカ」

「そもそもね、誠意ってもんが伝わってこないんだよ」

「……どうしろってんだ」

「弁当よこせ」

「おまえが腹減ってるだけだろ！？」

「負け犬が私に口ごたえ？　恥を知れ！」

「さっき腐るほど知ったわ！」

楽しそうじゃん。

どうなることかと思ったが……午後からは楽しく競技をできそうだな。

そう、思ってたんだけど。

見つけてしまった。

「なぁ、サラさん」

「なんですか、トメさん」

「皆笑ってる中、一人だけ暗い顔をしてる人を見つけたんだけど」

「あ、お父さん」

そう、隅っこで居場所がなく立ちつくしている人だ。

「あああ！　さっきなんとかちょっと笑ったのに、また笑えなくなってます！」

「どうするね、サラさん」

「こうなったら、トメさんを紹介します！」

「は？　なんでそうな――」

「お父さーん！　私をこの人にあげてくださーい！」

「ちょっと待てぇぇぇぇぇぇ！！」

――ともあれ、うん。

ちゃんとお弁当食べて、午後を乗り切ろうね皆。

## カカの天下６０１「貴桜運動大戦　お昼休み」（後書き）

皆様に謝らなければいけないことがあります。
えーと。

終わりません！

ううー、なんだよぅ、書きたいこと多すぎるよぅ、一話にまとまらないよぅ、
というわけでもう一話続けてしまいます！
勘弁！

あと昨日カカラジ載せてからメッセージが２０件くらい着てテンション上がってます笑　どんどんどうぞ！

# カカの天下６０２「貴桜運動大戦　応援　パン食い　決戦リレー」

こんにちは、カカです。

運動会も午後の競技に突入です。最初は応援合戦だ！

「いっけーいけいけいけいけ黄隼！！　おっせーおせおせおせおせ黄隼！！」

「必勝闘魂根性青龍！　常勝必勝絶対勝利！」

各団の熱の入った応援が続き、ついに我ら赤鷲団の出番が来た！

私たちのはすごいよ！

「なぁ、カカ。おまえ全部出るんじゃなかったのか？」

「うん。そうなんだけど。さすがに応援のときくらいは休ませてって言ったのね」

「へぇ。それで大丈夫なのか？」

「うん、代わりを置いてきたから」

「代わり……？」

応援団が登場する。

そこには私の代わりがいた。

「なぁ兄貴、なんで俺たちはまたこんなところにいるんだろうな」

「カカの嬢ちゃんに頼まれちゃ仕方ねぇだろが。しかし弟よ、このちあがーるとかいう衣装をどう思う？」

「なかなか似合うぞ兄貴。すぱっつがなければ捕まるな」

トメ兄が呟いた、あっても捕まると。

「ほらあんたたち！　くっちゃべってないでいくよ！！」

「おお、姉貴！　学ランがなぜか似合いすぎだ！　男前すぎるぞ！」

「小学生で学ランなんぞ着とるやつはいないし、なお目立つな」

そして応援が始まる！　ミナミおばちゃんの力強すぎる太鼓と共に、トウジとセイジのおっちゃんの声がグラウンド中に響き渡る！

『赤い鷲でゅみゅみゅみゅう！　赤い鷲でゅみゅみゅみゅう！』

おー……渡した応援台本の通りだ。

「なぁカカ……おまえさ、いくらなんでもアレはないだろう」

「や、まさか本当にやるとは思わなくて」

「それもそうだ」

「なのに、なんか『いいだろう』とか『これは挑戦だな』とか『受

けて立つ』とか妙に男らしく頷かれて」

「……なんであの人たち、断るってことをしないんだろう」

「楽しいからじゃない？」

「それにしたって……」

『でゅみゅみゅみ

パン食い競走！

各チーム二人ずつで走るんだけど、私と一緒に走るのはなんとインドちゃん。

そして彼女の後ろにイチョウさんが並んでいて、二人は走る出番がまわってくるまで仲良く喋っていた。同じチームでも隣に並んでいるわけではなかったので、私は話に入ることはできなかったけど、こんな会話が聞こえてきた。

「先ほどはカレーをありがとうございました」

「い、いえいえこちらこそ。おかずもらっちゃって……」

「それならばお互い様ですね。ニシカワさんのお弁当からもおかずをもらいましたし。アヤさんは……奪う側でしたけど」

なんだ、サラさん一家で一人だけいないと思ったらインドちゃんたちと食べてたのか。もしかして家族といるの気まずかったのかな？

「あの、イチョウさん、もう大丈夫？」

「ええ、ご心配おかけして申し訳ありませんでした。もう全部解決です。本当はわたくしが自ら兄に制裁を下したかったところなのですが……多分それは、楽しくない結果になったと思いますし」

「そっか。よかった、の？」

「ええ、よかったです」

「そっかぁ。ところで、あの、その、聞いていい？」

「なんでしょうか」

「なんでお兄さんに、怒ってたの？」

「……お姉様の悪口を言うからですわ。お姉様がいつも元気なのを見て、お母様のことをなんとも思ってないんだ、とか言って」

「イチョウさんは、お姉ちゃんが大好きなんだね」

「だぃっ！？　え、ええと、その、大好きというほどではありませんよだってあの人わたくしがそれで兄と喧嘩していると知っていたのですよすぐに言ってくだされればよかったですのにそれといいますのも今朝にわたくしたちの兄妹喧嘩を目撃して理由を知ったたばかりでどう声をかけるべきか迷っていたと申してますから仕方ないのかもしれませんけどでもでも知られてると思ったらば一緒にいるのが恥ずかしくなりまして――」

「い、イチョウさん、落ち着いて」

「は！？　し、失礼しました……」

イチョウさん。テンパるとサユカンみたいだね。今の口上にもう少し夢見がちな単語でも入れればサユカンだ。『きゅんきゅん』とか『もっきゅーん』とか。

大好きというほどではありませんよきゅんきゅん。だってあの人もっきゅーん！

完璧だ。今度サユカンに言わせてみよ。

「はい、深呼吸」

「すー、はー」

「落ち着いた？」

「はい……ご心配をおかけしました。あ、もう出番ですよ」

おお、もうか。

「ところでインドさん」

「あ、はい、なに？」

「カレーパン、一個しかないみたいですよ」

「……！」

「インドさん落ち着いて！」

え、なに？　インドちゃんどうしたの！？

「用意！」

って余所見してる場合じゃない！　さすがに騎馬戦までこなした後だと疲れてるけど……まだまだいける！

パァン！！

身体を弾くようにスタートさせる。快調な滑り出し！

私の前を走るやつはいない！

いない。

けど、あれ。

予想外なものを見たと言わんばかりの周囲の歓声と共に。

なんかくるなんかくるなんかくるなんかくる背後からなんかくる！！

ギュン、と。

いつぞやお姉が本気で走ったときのような音を唸らせ、私の脇をすり抜けたのはまさしく――インドちゃん！！

抜かれた？　そう認識した瞬間、負けてなるものかと身体が吼える！　全種目に出るため“一位になれる程度”に加減していた体力を総動員して全力を込めた。そして追いつく、だが抜けない。私が一歩前に出れば、彼女は三歩分加速して抜いてくる。それは鉄壁の意思、死んでも一位になるという意気込みだけで、インドちゃんは私を超えようとしていた。

やがて見えるパン。

私は適当に咥えやすそうな長いパンをめがけてジャンプ！　よし、うまくとれた。

隣を見る。インドちゃんはもちろんカレーパンを咥えた！

そしてそのまま豪快に着地して！

倒れた。

死んでも一位になる、ではなく。死んでもカレーパンを食べると意気込んだ彼女は、目的を達成すると文字通り死んだのだった。

や、口をもごもごさせて咥えたカレーパン食べてるから気絶しただけだろうけど。

えっと……妙なところで全力出したせいで疲労が一気に襲ってきたけど、なんとか私は一位になるのでした。

インドちゃんすげぇ。食べ物の執念すげぇ。

誰かが言っていたインドちゃん実験は、見事に驚愕の結果を残したのでありました。

さてさて。

運動会も最後の決戦を残すのみとなりました。

「ヤナツ、あんたがアンカーか。本当に結構足速いもんね」

「……一番速いわけじゃないけどな。さっき格好悪いとこ見せた分、

少しくらい良いところみせとけって、タケダがな」

へぇ、あいつやるじゃん。

「とは言ってもカカが相手じゃなぁ。また惨敗しそうなんだが」

「何言ってるの。私、今日これで全部の競技出たことになるんだよ？　さっき全力出しちゃったし、もうヘロヘロよ」

「それに負けたら格好悪いってこと」

「ん、それは確かにそうだね」

――そして、結果を言えば。

ヤナツのチームが大きくリードしてアンカーに渡ったにも関わらず、私は勝った。

死ぬ気で大爆走したおかげだ。

とは言ってもヤナツも全力だったらしく、ゴールした瞬間に私たちは揃って地面に倒れこんだ。

ヤナツは言った、やっぱり敵わない、と。

でも笑っていた。

多分、楽しかったんだろう。

でも、私の勝ち。

優勝は赤鷲団、これも私の勝ちみたいなもんだ。

私の勝ちぼっかりで気分がいい。

そう、きっと私が誰よりも楽しんだ。だから私の勝ちなんだ。悔しかったら私より楽しんでみるがいい！

ま、運動会が終わって笑ってる人は、みーんな勝ちのような気もするけどね。

――さぁ祝杯だ。コーラ持ってこーい！！

## カカの天下６０２「貴桜運動大戦　応援　パン食い　決戦リレー」（後書き）

これにて運動会編終了です！
なんとか編ってどうにも長くなっちゃいますね。楽しいからいいんですが……まぁしばらくはのんびりと。
というわけにはいきませんね、誕生日ありますから笑
また楽しくなるように頑張りますよー！

あ、忙しいとか書いてますけど、感想でもメッセージでも何かありましたらほんと遠慮なく送ってくださいね。それをエネルギーにして書いてるので＾＾

本日の見所。

タケダはもちろん、運動神経がいいはずのニシカワ君の空気さ。
もちろんでゅみゅみゅみゅう。

# カカの天下６０３「再利用、不可？」

こんばんは、トメです。

運動会を終え、打ち上げで大騒ぎした翌日である本日、仕事を終えてきました。

ダルいです。

日ごろたまにランニングしているとはいえ、全力で走るのは久々のこと。さらにはカカと呼吸を合わせて――なんていうハイレベルなことをしたせいで身体は筋肉痛で重いのです。だから疲れた。ダルい。当たり前ですね。

そんなわけで僕はダラーっとした顔で帰宅しました。

「ただいまー」

返事がない。でも靴はある。家にいることは確かだけど……

「代休だしゆっくりするとは言ってたが、まさかまだ寝てるなんてことは」

ないだろうな、と呟きかけて。

いつもの習慣でホワイトボードの方を見て。

絶句した。

「おいカカ！」

「んー……」

妹の部屋に突入してみると、案の定そいつはまだベッドの中だった。気持ちよさそうに眠っているが、僕は気持ち悪い気分なので起きてもらう。

「おい。おーい、起きろ」

「……ん……や」

「ヤじゃなくて！」

「やー」

くそぅ、起きない。こうなったらこいつが最近気に入ってるこの言葉で！

「ほらカカ。あそこに、でゅみゅみゅみゅうがいるぞ」

「でゅみゅみゅみゅう？」

あ、起きた。それにしても言いにくいなこれ。

「んー？」

むくりと身体を起こしたデンジャーケロリン柄パジャマのカカは、

少し目をしばたたいて僕へと焦点をあわせた。

「なに言ってるのおにーちゃん。でゅみゅみゅみゅうって九時から始まるんだよ？」

「おまえこそ何を言っとるのだ」

まだ寝ぼけてるな。

「カカ、おまえまさかずっと寝てたのか？」

「んー？　んーん、おひるね」

「それならいいけど……そんなことより！　なんだよ、あのホワイトボードのところにぶら下がってたのは！」

「ブラ、下がる？　トメ兄おっぱい垂れたの？」

「そうそぅ最近気になってきてこれも歳かなーって違う！！　ふんどしだよ！」

そう、運動会で使われたあの垂れ幕ふんどしが、玄関の壁一面にでかでかと貼り付けてあったのだ。

「そっかぁ。トメにー、ふんどしに出迎えられて興奮したんだね。はなぢぶー？」

「なんだそのとてつもない文章は！　疲れてるところにふんどしから『おまえを殺す』宣言されてめっちゃ気分が悪いわ！」

「んー……うっさいなぁトメ兄。まだ眠いのに」

「いいから、なんでアレがあんなとこにあるんだよ！」

「なんでってトメ兄。『おまえを殺す』だの『ふんどし』だのでっかく書かれた垂れ幕なんて、学校っていう教育の場に置いておくわけにはいかんでしょう」

ええい、言われてみればもっともだがソレを公共の場で発表したやつが何を偉そうに。

「とにかく、あんなもんいらないから捨てとくぞ」

「待てぃ、もったいなかろうが」

「なんだその口調は」

「いいからおぬし、あれはリサイクルするのじゃ、活用法をのべよ」

まだちょっと寝ぼけ眼だなこいつ。

「はよぅのべよ」

「リサイクルったってなぁ……」

「仕方ないの、わらわが提案してしんぜよう」

「誰だよおまえ」

「例えばじゃ、んーと、デパートはどうじゃ？」

「デパート……？」

想像する。

ある晴れた日、高々と上げられたバルーンから下げられる垂れ幕にはこう書かれていた。

『大安売り、おまえを殺すふんどし』

「いらねー」

「宣伝文句は、上手い早い臭い」

「何が！？」

「殺し方が」

全然よーわからんがソレだけには殺されたくはないな。

「それではあれじゃ、クリニックはどうじゃ？」

想像する。

病院の壁に下げられた幕にはこう書かれていた。

『おまえを殺すふんどし、治します』

「治せねー」

病気じゃねーし。

「自動車屋はどうじゃ」

想像する。

『最高時速三百キロでおまえを殺すふんどし』

とてつもなく恐い。

「ならばあれじゃ。お笑い番組でどうじゃ」

「お笑い……？」

「笑えるおまえを殺すふんどし」

「どこをとっても微塵も笑えんのですが」

「じゃー笑いながらおまえを殺すふんどし」

「なんだその妖怪は」

「じゃー笑いながらおまえを殺すふんどし妖怪タケダ」

「タケダどっから出てきた!?」

「それに今までのを合わせてー」

今までのを、合わせて……？

『大安売り！　最高時速三百キロで笑いながらおまえを殺すふんどし妖怪タケダ、治します』

なにこのカオス。

「めでたしめでたし……」

なにやら自己完結して眠りやがったこの小娘。

んー……

変なことに使われる前にアレ燃やしとこう。秋だし焚き火の一つくらいいいよな。

僕はそう決めると、速やかに作戦実行に移るのだった。

## カカの天下６０３「再利用、不可？」（後書き）

久々にふっつーの話を書きました。ちょこっと運動会の名残をのこしつつも、どうでもいーまったり話です笑

え、またでゅみゅみゅみゅうなのかって？

だって……なんだか知らないけど皆やたら使うんだもん。だから好きなのかと……

# カカの天下６０４「カカ天クエスト　ＥＰ８」（前書き）

注意：このお話はカカ達がゲームのキャラになりきりながらＲＰＧを進める話です。話の内容はゲームの中ですが、『もしもカカ達が異世界にいたら』みたいな感覚でお楽しみください。

ステータス

カカ　ボケ勇者　レベル１　へん

サエ　悪の魔法使い　レベル１　はらぐろ

サユカ　手の平の踊り子　レベル１　さびしんぼう　エロレベル３

トメ　ツッコミ　レベル１　つっこみ　死体、腐っても色男

ケロリン　スライム　レベル７　おっさんくさい　死体、腐ったらゴミにしか見えない

## カカの天下６０４「カカ天クエスト　ＥＰ８」

自分達が助けた村娘が敵の手に渡った――そんなことを知る由もない勇者一行は、村人達からの礼の宴を楽しみまくっていた。

「勇者カカ様、よろしければこちらのお料理をお召し上がりください」

「ん、そこ置いといて。それはそうとあんた」

「は、なんでしょうか」

「踊れ」

「は！？　い、いや私はしがない村男Ａでして、踊り子では……」

「いいから踊れ。おもしろい踊りを踊れ。命令じゃ」

「う、ううう……勇者様の命令とあらば」

村男Ａはふしぎな踊りを踊った！

「おもしろくない」

村男Ａは心に１５７のダメージを受けた。

村男Ａは逃げ出した。

「さ、サエ様。こちらのお飲み物はいかがですか？」

「ありがとー。ねぇそこのおねーさん」

「な、なんでしょう？」

「脱いでー」

「はぁ！？　い、いや、その」

「勇者の命令が聞けないのー？」

「し、しかし」

「この村の平和は誰のおかげ――」

「……や、やります」

村娘Ｂはスカートに手をかけた。

「えー、本当に脱ぐの？」

村娘Ｂは絶句した。心に２２６のダメージを受けた。

「だ、だって、だって！」

「えっち」

村娘Ｂは逃げ出した。

「ゆ、勇者サユカ様、これを」

「ありがとうおじさんっ！　これ美味しいわねっ」

サユカの笑顔に癒され、おじさんＡのＨＰが５回復した。

「そこのおじさん」

「な、なんでしょうかカカ様」

「ハゲ」

毛根の一撃！　おじさんＡは心に４８６ダメージを受けた。

おじさんＡは心が死んでしまった。

「あ、ああ……村が壊滅していく……」

村長は泣いている。

「カカちゃーん、やりすぎじゃないかなー？」

「いいっしょこのくらい。ちょっと村の人口が減って、ちょっと心の傷が増えただけだよ。それにこういう贅沢はトメ兄がいるとできないからね」

「カカすけ……ワルね」

「ゲームの中でくらい悪いことしないとね。くっくっく」

トメはツッコみたそうにしながらもカンオケでじっとしている。

「むぅ、トメさんがいないとつまんないわよっ！　さっさと生き返らせてあげましょうよ」

「まーまーサユカちゃん。愛しの人とずっと一緒にいるのもいいけど、たまに離れて羽目をはずすのも必要だよー？」

「は、羽目をはずすってなによっ」

「だからさ、トメ兄がいないうちにできること、やればいいんだってば」

「トメさんがいないうちに……というか、トメさんがいるとできないことよね。それって何かしら」

「強盗とか殺人とか？」

カカの狂気が満タンだ。

「そんなの嫌よっ！　ＲＰＧじゃないでしょっ！」

「じゃー浮気とかー？」

「死んでもしないわっ！！」

サユカの愛が満タンだ。

「よし、こうしよー。トメさんだけ差し置いて私たちだけレベルを上げて、生き返らせた後であざ笑うのー」

サエの黒さが言うまでもなく満タンだ。

「よし、そうしよう！　じゃあそこの村人！」

カカは適当な人を指差した！

「な、なんだ、俺か！？」

「戦闘だ！」

戦闘場面に移ります。

タケダがあらわれた！

「え、色々となんでだ！？」

「だってレベル１の私達が勝てそうな魔物いないもん。だから村人で代用」

「鬼か悪魔か君は！？」

「勇者だよ」

「それだけは絶対に嘘だぁぁぁぁ！！」

カカのこうげき！

タケダに３のダメージ。

サエのこうげき！

タケダに1のダメージ。

サユカのこうげき！

タケダにイヤーンなダメージ。

「イヤーンってなによっ！？」

「サユカちゃんいやーん」

「サユカンいやーん」

タケダのこうげき！

「だめ」

タケダのこうげきは却下された。

カカのこうげきがいっぱい。

タケダは死んでしまった。

「やった！　経験値は！？」

カカたちはマイナス１０の経験値を獲得した。

「ええー！　獲得してないしー！」

「どういうことよっ！？」

「――人としてのレベルが下がる経験値、ということよ」

おっとタケダの様子が……？

変わらない。気のせいだったようだ。

「こっちかぁ！？」

カカは後ろを振り向いた！

「あ、あなたはー！」

「あれ、どうしたのよっ！」

村娘Ａがあらわれた。

「ふふ……ふふふふ……」

村娘Ａは『なんか異様に恐い顔』を常に発動している！

「こわ！！　なに、ホラー？　ホラーゲームな展開？　なら逃げるぞ私は」

「待ちなさいよカカすけ！　ほら、なんか戦闘場面になってるわよっ！　あらわれたとか言ってるし！」

「村娘Ａさん……もしかして敵になったのー？」

村娘Ａは不敵に笑った。

「そうよ。村に、いいえ、人間に見捨てられた私は魔物に成り下がることにしたのよ！　マイナス１０の経験値なんか比べ物にならないほど人として成り下がり、いまやレベルはマイナス７０よ！」

「マイナスって……弱くなるんじゃないの！？」

「魔物にとってはそれが正規のレベルなのよ。つまり私は、あなた達がレベル７０になるのと同じ強さを得たということ！」

「……村娘が？」

「悪い！？」

「じゃー聞くけどー、その村娘さんに何ができるのー？」

「見たところ、顔が恐くなった以外に変化が見えないんだけどっ」

村娘Ａは再び不敵に笑った。

「あなたたちは子供だから、まだわからないかもしれないわね……世の中には魔性の女と呼ばれる人がいるの、そういう女は得てして普通の人、でもこういうスキルを覚えることができる」

村娘Ａの最大奥義が炸裂する！

『男を奪う』

トメ入りのカンオケが盗まれた！

「あああああああああああっ！！」

「トメ兄ぃっ！？」

「……うそーん」

「あーっはっはっは！　見たか勇者ども！　どれどれ、戦果の確認を……」

村娘Ａはカンオケをあけた。

「……おー」

村娘Ａはよだれを垂らした。

「ちょっと何する気よそこの女っ！！」

「ふふふ、ここであなた達を片付けてしまおうかと思っていたけど……それはあまりに簡単だし、やめておくわ」

なにせカカ達はレベル１だ！

「それよりもこの人を着せ替えて……改造して……ふふふふふ」

「ちょっと待ちなさいよぉぉぉぉっ！！」

村娘Ａは逃げ出した！

村人相手にはなぜか最強のくせに普通の魔物にはてんで弱すぎる勇者一行――無情にもモノとして連れ去られてしまったトメ！　本当に腐っても色男でムカつくが、果たしてこれからどうなってしまうのか！？

次回、『さっさと生き返らせないとスライムはヤベェ』をお楽しみに！

## カカの天下６０４「カカ天クエスト　ＥＰ８」（後書き）

あーぶな笑
もう少しで０時を過ぎるところでした……むぅ、余裕を持たねばなぁ。
というわけで、今度は比較的はやくカカ天クエストの続編です。なんだか人気あるようなので、短めにしてペース上げて載せてこうかなーなんて思ってます。といってもこれもほとんどノリで書いてるので計画とかないんですが笑

もう誕生日間近ですねぇ。プレゼントを贈るならお早めに、特にカカ個人へのは、ね＾＾

## カカの天下６０５「二人のお望みは？」

こんにちは、トメです。

今日は仕事も終わり、そそくさと家に帰ってきたのですが……カカとサエちゃんはデート中ということで、ちょうどいいとばかりにサユカちゃんと二人で会ってます。

居間で二人きりで、お見合いするかのように向き合っています。

「トメさん……本当にいいの？」

「ああ。もう、僕たちはここまで……来るところまで来てしまったんだ」

「でも、でも……カカすけたちには内緒で」

「仕方ないんだ。もう限界だ！」

「ああ、トメさんっ！」

「サユカちゃんっ！」

ひしっ！　と抱き合う僕ら二人！！

――なんつって。んなことしないよん。

「というわけで、そこの覗いてる二人」

「きなさいっ！」

デートに行ったはずの二人は廊下の向こうからひょっこり現われた。

「ちぇ、バレてたか」

「ドキドキしてたのにー」

「君らがわたしの行動を読んでいたのは、こっちもお見通しだったってわけ！」

うむ、最近僕は隠れてサユカちゃんに会っていた。それを二人が勘付いているのも承知で……しかし、そろそろ潮時なのだ。

「教えてあげるわ、わたしとトメさんが何をしていたかを！」

「子作りしてたんでしょ？」

「なにせ六人だもんねー」

マテや。

「ちょ、なに言ってるのよっ！」

そうそう、言ったれサユカちゃん。

「一度にできるのはせいぜい双子よっ！　六人もすぐできるわけないでしょっ」

「待ちんしゃい。否定する場所違うがな」

仕方ない、僕が説明するか。

「あのな、二人とも。これはテンとか姉とも話してたんだが」

「その二人も一緒に！？」

「わかった、双子×三人で六人にする気だー」

「と、トメさんってばっ！」

「どんだけ色々旺盛なんだ僕は。そこから離れろ」

このガキどもはどこまでわかって言ってるんだか……大体なんで姉が出てくる。あれはそもそも人間じゃないから完全無欠に対象外だぞ。

「僕らが話し合ってたのは、カカとサエちゃんの誕生日のことだよ」

あれ。なんで絶句してるんだ二人とも。

『誕生日？』

なんだ、声をそろえて。

「忘れてたのか？」

「や、サエちゃんのは覚えてたけど」

「私もカカちゃんのは覚えてたけどー」

『そっかぁ、そういえば私もか』

自分より相手かハハどんだけバカップルなんだこの二人。

「それで、だ。去年は色々と驚かせたりしたわけだが……」

「今年はどうしようって、わたしたちで考えてたのよ。そしたらなんとっ！」

『なんと？』

聞いて驚け。

「思いつかないんだ！」

あ、仲良くずっこけた。

「それでな、昨日テンと話したら『もう面倒くせぇから二人まとめて祝っちまおうぜ、二人のやりたいことやらせてよ』って結果になったわけだ」

「わたしとしてはカカすけたちに内緒でやりたかったんだけど……」

去年もカカのやつは自分の誕生日覚えてたしな。また驚かせようとしても期待通りの反応をしてくれるとは限らないし。

「ほうほう」

「なるほどー」

ともあれ、自分たちの誕生日をここまで考えてくれているという事実が嬉しいらしく、二人は満足そうに頷いていた。

「それで二人とも、何がしたい？」

「去年はハロウィンとか合唱だったわね。なんでもいいわよっ！カカすけとサエすけがしたいことをっ」

カカとサエちゃんは目を合わせる。

「私はサエちゃんと世界征服がしたい」

レベルたけぇよ。

「カカちゃん、それはいくらなんでも難しいよー」

うんうん、さすがサエちゃん。わかってる。

「トメお兄さんを征服しよー？」

何もわかってねぇ！！

「お、そっちの方が簡単だね。サユカンは征服済みだし」

「待ちなさいよっ！　わたしを征服できるのはトメさんだけよっ！むしろもう征服済みよっ」

あーもー、なんで今日はこう誤解を招きそうなことばっかり……

始めに悪ノリしたせいか？

「ねーねーサユカちゃん。自分の身体を征服されるって、具体的にはどういうことー？」

「具体的にはねっ！　まず胸を」

「待て待て待て待て！！　余計なことを説明するな考えるな！」

「そう、考えるな！　感じるんだ！」

「あぁーん、かんじるぅー」

「そんな感じよっ！」

「どんな感じだ！！　ていうかおまえらガキのくせにナニをドコまでわかってやってる！？」

「ほぁちゃー！　って感じでわかってる」

「胸をドキドキさせる感じでわかってますっ！」

「年頃ですからー」

……カカやサユカちゃんはただ単にノリで言ってるだけっぽいけど、サエちゃんはなぜかそういうのをきちんと理解してそうで怖い……保護者としてどうするべきか。

ほっとこ。

「はい、お話リセット」

ポンと手を叩くとおとなしくなり、ちょこんと座る三人娘。

「それで結局、何がしたい？　二人とも」

サエちゃんはカカを見る。カカに任せたという感じだ。

カカは「んー」と虚空を見やり……

「お祝いの日にちは、カカとサエちゃんの誕生日の中間辺りにしようと思うんだけど」

「決めた」

「ほほう。なんだ？」

「結婚式」

……え。

カカと、サエちゃんの？

「決定」

問答無用！？

## カカの天下６０５「二人のお望みは？」（後書き）

はい、カカ宛て、サエ宛て、二人宛てと分けたのはこういうことだったりします。

二人の結婚式（仮）は２５日辺りにしようかと。詳細はまた後日。

まずはカカ宛ての〆切り、２０日の正午くらいですかね。お待ちしてまーす＾＾

# カカの天下６０６「肉イ騒ぎな休み時間」

こんにちは、カカです。

今日も今日とて小学校。普通の授業を普通に終えたところなのですが……

「せんせー」

「んだよ、カカ」

私のこの一言で、ちょっとざわつくことになります。

「焼肉は？」

皆は覚えているだろうか？

私たちが運動会をする直前、勝手に『優勝したらテンカ先生が焼肉に連れてってくれる』と言っていたことを！

「あんだそりゃ」

案の定な返答をする先生。しかしそうは問屋が卸さない！

「俺たちが優勝したら先生が焼肉に連れてってくれるっていうから、俺たち頑張ったんですよ！？」

と、はやて君。

「そうだそうだ！」

と、泡盛君。

「にーく！　にーく！」

と、ハブ野郎君。

誰かが勝手に言い出した約束――などという些細なことは、優勝した私たちの脳みそにはカケラも残っていないのである。

「あー……っと、つまりてめぇら。優勝したんだから褒美がほしいと？」

「そうです！　みんな頑張ったんです！」

と、照々君。

「カカちゃんなんかパン食い競走で、倒れたインドちゃんに皆が駆け寄る中でただ一人ゴールに向かって走る――そんな人でなしに成り下がってまで一位になったんですよ！？」

げ、クラスメイトに火種だけつけて後は放置にしようと思ってたのに、こっちにまで飛び火してきちゃった。

「あー、ほら。ちゃんとゴールした後に駆け寄ったじゃん？　それにさ、インドちゃん倒れたっていっても口は元気にカレーパン食べ続けてたし」

「それでもあんまりだよ！」

「か、カレーパン食べ終わったら回復したし」
「クラスメイトよりも勝利を取ったんだ！？」
うぅ……だんだん悪いことしたような気がしてきた。
「そんなに勝利が大事か！？」
「格好いい！」
賞賛してんのか非難してんのかどっちですか。
……ともかく、謝っておこうか。
「インドちゃん、ごめんね？」
「……！」
「あ、あの？　ごめん」
「……！！」
あのぉ、そんなに涙目でぷるぷる震えながらカレー入りタッパーなんか献上されたらほんっとに悪いことした気分になるんだけどぉ、怯えないでよぅ、何もしないよぅ、メルちゃんとして仲がいいだけにショックだよぉ。
「よしよし。これで心置きなく褒められるわね」

「カカちゃんのおかげで優勝できたのは間違いないわけだし！」

「カカ、よくやった！　おまえのおかげだ！！」

現金なクラスメイトたちめ……

「む、ニッシーだって一位取りまくったのよ！　ちょっとは褒めなさいよあんたたち！」

おお？　ここでアヤちゃんの登場だ。

「だって、なんかニシカワ君って目立たないし……」

「カカちゃんのほうが派手だしね」

あらやだ嬉し。

「むむむ……こらニッシー！　あんたが目立たないからこんなこと言われるのよ！」

「僕は赤組の応援席が西にあったことだけで満足だよ」

「そんなだから地味とか言われるのよ！　もっとアイドルな私みたいに派手になりなさいよ！」

「でもそう言うアヤ坊の運動会の成績は地味だよね。三位ばっか」

「う、うっさいわよ！！」

ちなみにニシカワ君並にいい成績を残している足の速いはやて君

は話題にも上らない。アヤちゃんがニシカワ君ばかり気にしているのは……やはり愛か。くぅ、染みるねぇ。

「まぁまぁお二人とも。運動会の勝利は皆様が団結して得たものです。三位であれ四位であれ、それが無ければ得ることはできなかったのです」

「イチョウさん……」

「そう、三位であろうと四位あろうと、獲得できるのが一点であろうと点数には変わりません。塵も積もれば山となる、ゴミも積もれば少しは役立つ、とも言うではありませんか」

「誰がゴミよ！？」

「あぅ！？　わ、わたくしとしたことが、またもや本音を」

「本音ってあんたねぇ！？」

イチョウさん元気になったよね。

「塵？　ゴミ！？　冗談じゃないわよ！　そんなのニッシーだけよ！　私はアイドル！　ニッシーはチリドルでゴミドルよ！」

「はいはい、僕は塵でゴミですよ」

「そこまで言ってないでしょ！？」

「言ってる言ってる」

さて、そんな騒ぎの中で私はマイペースに机の下に隠した携帯でメールをしていた。相手はサエちゃんとサユカン。なんで同じ教室にいるのにメールしているかというと、相変わらず私たちの席は四隅に離されているからだ。休み時間だから移動してもいいんだけど、皆が授業のときからそのまま座ってるから私たちもなんとなく動かないのだ。なので代わりにメールで会話。

お。サエちゃんからだ。

『ひざがかゆい』

む、返信しないと。

『私は鼻がかゆい』

サユカンにも、と。お、返信。

『かけばいいじゃないのよっ！』

ごもっとも。

うーん、何してるんだろね私ら。

お、またサユカンからだ。

『どうせなら君らの結婚式に全員呼んで、焼肉パーティーにしちゃえば？』

ぽちぽちっと返信。

『結婚式は身内だけで済ませたいの』

『……あそ』

なんか呆れてる。

「あぁうっせぇ！　わかったわかった！　ちょっと待ってろ」

おお？　メールしているうちに話合いに決着がついたみたいだ。途中からテンカ先生は蚊帳の外だった気もするけど。

「……もしもし？　ああ、オレだ。あのさ、焼肉頼めねぇか？」

テンカ先生が電話で話し始める。さすがに私もわくわくして携帯から手を離し、先生を見守った。

やがてテンカ先生は電話を切って――私たちに向き直った！

「よし、喜べてめぇら！」

私たちのテンションが上がる！

「や、焼肉ですか！？」

「おう、正真正銘の焼肉だ！　牛肉だ！　うめぇこと間違いなしだし、タダで食わせてやる！」

おおおおおおおお！！

「文句ねぇな、貴様ら！？」

『はい！！』

「ミナミのおばちゃんに電話した。明日の給食は焼肉だ、これでいいだろが」

『はい！　……はぃぃ？』

うわぁ……

微妙……

「文句ねぇって言ったよな？　じゃあそれで満足しろ」

私たちは、運動会には勝ったのにテンカ先生には負けた気分で、すごすごと残りの休み時間に行動を移していくのだった……

## カカの天下６０６「肉イ騒ぎな休み時間」（後書き）

肉イねこの！　どこが？　はい、言ってみたかっただけです。

というわけで、たまにはクラスメイトをたくさん出してあげようと思い、過去に出番があった生徒達を集めてみました。

出番が少ない？　キニシナイ。

後半のクラスメイトの台詞には適当に自分の声を入れてお楽しみください＾＾

……でもそれってちょっと寂しい？　ま、いっか。

# カカの天下６０７「鼻から出るもの」

こんにちは……サラです。

運動会では色々とありましたが、少しだけ笑いあえた私たち家族はぎこちなくも穏やかな日々を送っています。

なのですが。

今、私は穏やかではない顔でファミレス東治の椅子に座っています。

それというのも対面に座っているのが……

「ふふふー、サラさんたら、自分のテリトリーに私を呼んでどうするつもりなのかしらー」

「別に私はここで働いているわけでも飲食業をしているわけでもないんですけど」

「皿がいっぱいあるじゃないですかー」

「……あはは、私は血をいっぱい見たくなってきました」

「皿の上にのせますかー？」

「ええ、どうぞ召し上がれ。ご自分の血を」

「ふふふー」

「あはは」

……そう、このムカつくサカイさんと一緒のテーブルについているからです！　ほんっとこの人とは馬が合わないわ！

「お客様がた、ご注文をお伺いしてもよろしいですか？」

ニコニコギスギスと睨みあっていた私たちに臆することなく話しかけてくれたキリヤ君は、店員の鑑と言わざるを得ないでしょう。

「あの、ご注文は？」

『この女の血を』

「はっはっは、献血センターは向こうですよ？　今ならケロリンジュースのバッタ味がもらえます」

全く動じないキリヤ君に注文を済ますと、私とサカイさんは再び対峙しました、と、いけないいけない……

「やめましょう。今日はこんな言い争いをするために呼んだんじゃありません」

「そうなんですかー？　あなたからメールがきたときは、てっきり最終決戦かと」

それでもいいんですけどね。

「ほら、サユカちゃんに頼まれたじゃないですか……お楽しみ会の

ときみたいに、カカちゃんとサエちゃんの衣装を作ってほしいって」

「そうですねー、なんであなたなんかと一緒なのか不思議で仕方がありません」

「全く同感ですが、あの子たちのためならば仕方ありません。心をブタにして一緒にやろうじゃありませんか」

「メスブタですかー？　ぴったりですねー」

「あなたのレベルに合わせたんですけど」

「最近あなたも太り気味ですしねー、ブタみたいにぷっくり」

「ええ、胸が太ってしまいまして。そろそろ年齢的に垂れてきそうなどこかの誰かさんと違って」

「どこが太ろうがデブはデブですよねー。デブのブタって美味しそー」

「タレた身体より焼肉のタレのほうがまだ美味しそうですよね」

「あはは」

「ふふふー」

話せば話すほどケンカになるのはなぜでしょうか。自分でもわかりません。

その後もケーキが来ては「また太りますねー」と言われ、「そん

なことを気にするほど歳とってませんので」と反撃し、そんなやりとりが食べ終わるまで続いて……

「こほん！　それで話を戻しますが、カカちゃんとサエちゃんの衣装、どうしましょう？　結婚式の衣装となるとレンタルでもしますか？　でも子供用のサイズって無さそうですけど」

「レンタルなんて適当なことは許しませんよー。ちゃんと手作りのものを着せるべきです」

「いえ、でも作る時間が」

「大丈夫ですよー。タキシードでもドレスでもなんでも、うちに作りかけのが沢山ありますからー」

「……なんでそんなものが作りかけで沢山あるんですか」

「私が仕事をしてなかったころー……そう、サエと引き離された直後ですねー。私、寂しくてー、気を紛らわせるためにサエに着てほしい服を片っ端から作りまくったんですよー。でもどれもこれも完成直前で、なんだか自分のやってることが空しくなって、手を止めてしまって……そんなときの残骸が、最近押し入れの中から出てきたんです」

私を睨んでいた険がとれたサカイさんの顔は、とても穏やかだった。遠い昔の――今はもう乗り越えた道を懐かしんでいるのだ。

それを見て思い出す。そう、今回の運動会で家族を説得できたのも、こんな顔をしたこの人の話を聞いたから……認めたくないけどこの人に、人生の先輩として尊敬する部分があったから、私も頑張

ろうという気持ちになったのだ。

「じゃあ、サカイさん。今回の衣装はそれを使って作るんですね」

「はい。あのときに込めていたやり場のなかった愛を、きちんと完成させてあげようと思います」

一瞬だけ、そう、一瞬だけ。

この人が、素晴らしい母親に見えた。

「はい。一緒に頑張りましょう！」

「はー？　私だけでやりますよー。うざったいですねー」

……ホント、一瞬だけだった。

「え、えぇと、私が今回サカイさんを呼んだのは、その、協力するためで」

「なんでですかー？　いつもどおりに対決ってことでいいじゃないですかー」

違うのよ、違うの。今回はサカイさんのおかげで色々と助かった部分もあったし、お礼といったらなんだけど、ちょっと身をひいてサカイさんのお手伝いってポジションに回ってサカイさんを立ててあげようと思っていたの。そうしてステキなお母さんって感じでサエちゃんのポイントを稼ぐのもいいじゃない？　なんて、そんなことを思ってたんだけど――

「サエの衣装も、相方のカカちゃんの衣装も私が作るんです。なーんであなたなんかと協力しなきゃいけないんですかー」

絶対言ってやるもんですくぁ！！

「……やっぱり血を見ますか？　自分の娘見てホイホイ鼻血を出してるサカイさんなら自分の血なんて見慣れたものでしょうけど」

「私の愛は鼻から出るんですよー」

「鼻毛つきの愛ですか。勘弁ですね」

「愛をえり好みしているから彼氏の一つもできないんですよー」

あはははは。

「そうですね、勝負ですねコノアマ」

「うんうんー、馴れ合いなんて私たちらしくないですよー。キモいキモい」

「さよなら、鼻血ババァ」

「さよならー、ブタ皿さん」

顔はにこやか心は修羅。

ガタン、と勢いよく立ち上がった私たちは、そのままレジに――

「なんだ、あなたたちの愛はその程度ですか」

行こうとして、立ち止まった。

「やれやれ、てっきり“カカちゃんやサエちゃんをより喜ばせる”のを最優先すると思っていたのですが……買いかぶりだったようですね」

キリヤ君……？

「あの子たちよりも自分の感情が優先ですか、そうですかそうですか。子供よりも自分のこと、そんな人が子供に暴力振るったりグレさせたりするんでしょうねぇ。愛がないから。ああ、愛とは何処にあるものなのか……少なくともここに愛は無いですね。哀しかありません。あぁ哀しい。あなたたちの鼻に詰まってるのは愛じゃなくて哀ですね」

愛が、ない？

あの子たちへの？

ひどい侮辱だ。

でも言い返せない。

全くもって正論だったから。

だから。

にっくき敵ともう一度目を合わせる。

「……サカイさん、衣装は何があるんですか」

「……言っておきますけどー、難しいのばかりですよー」

「望むところです。引きこもりのサボり魔ダメダメ人間にできて、私にできないはずありません」

「仕事転々辞め辞め人間がよく言いますねー」

悔しい。

家族にあんな説教をしておいて、私は大切なことに目を向けないまま進むところだった。

「うんうん。鼻から出るほど愛があるなら、ちゃんと優先順位を守るべきです。あ、鼻づまりだったんですね。だから今は鼻から愛がダバダバ出てるんですね、なるほど」

でもなんか、鼻から愛って私が言ったわけじゃないけど、

「えー、ティッシュー。愛の鼻づまりの方にティッシュはいかがですかー？」

なんかムカつくこの店員！

「そこのキリヤ君！」

「ハイ鼻が潤っているそこのお客様！」

「さも鼻水だらけみたいな言い方やめてください！」

「ティッシュ三十箱で？」

「多すぎます！！　そんなことはどうでもいいからさっさとコーヒー持ってきなさい！」

「二つねー！」

「はいはい、かしこまりましたー♪」

なんだか面白くないけど――

「まず結婚式といえばタキシードとドレスですがー」

「それだけじゃおもしろくありません！」

この人とは組みたくないけど――

「そんなことはわかってますよー。お色直しがあるに決まってるじゃないですか」

「サカイさん色気ないからてっきり忘れてるかと」

「大人の魅力がわからない人ですねー」

「単なるおばさんです」

「単なる独り身に言われてしまいましたが、あなたとは比べ物にならないほど色気のある衣装を作りますよー」

「おばさん臭い派手なだけのものは、やめてくださいね」

後で見れるはずの、カカちゃんとサエちゃんの笑顔を楽しみに、我慢して我慢して我慢して我慢して、あーだこーだと相談しながらやってやろうじゃないですか！

## カカの天下６０７「鼻から出るもの」（後書き）

いやぁ、サブタイトルに比べて随分とシリアスになってしまいましたね！

え？　シリアスじゃなくてギスギスだって？

それも『ス』しか合ってなくてダジャレとしては微妙だって？

……カカ天だからいいんでない？

というわけでハイ！　結婚式の衣装についてはこの二人にお任せしますので、プレゼントにタキシードやドレスを贈った方は別のものにチェンジしたほうがいいかも？　贈り直しは可ですのでご自由にどうぞ＾＾

ここでヒント。地味で妙なものを贈ると届きやすいかも……

# カカの天下608「ステキなプレゼント」

こんにちは、トメです。

今日はカカに付き合って買い物にきています。それというのもサエちゃんの誕生日プレゼントを買うためで、いつもの商店街ではなく、遠出してデパートなんかに来てみたのですが……

「何もない」

「や、いっぱいあるけど」

「ここに価値あるものは何一つない」

「値札いっぱい貼られてるんだけど」

「それは幻だよ」

だったらここにあるもん全部タダか？　そうだったらどんなにいいことか……とりあえずカカのお眼鏡にかなうものは見つからないみたいだ。

「うー……」

唸りながらさ迷うカカに付き合っていると、大きなデパートではお決まりのアナウンスが聞こえてきた。

『落し物が届いています』

うん、よくあるな。それにしてもこういうアナウンスの女性の声って落ち着いた美声だよね。

『落し物は、ケンタ君、六歳』

落とし物言うな。それ迷子だ。

『食品売り場に落ちていました』

食品売り場でケンタ……フライドチキ――や、気にすまい。

『持ち主は速やかに取りに来るように――』

持ち主とか言うなっての。

『お願いします。かなり常識のない暴れ方をしておいでです』

あんたもけっこー常識ないと思うよ。

『うぎゃあああ！！』

美声台無し。何があった？

『……くそっ、揚げてやろうかしら』

それケンタ違い。てかアンタがキレる前に放送を切れ。

そんなことを胸中でツッコみつつもカカを追いかける……が、やがて立ち止まる。

「どした？」

「こんな意味のないデパートは潰れるべきだ」

いいもの見つからないからってそんな可哀想なこと言うなよ。このデパートだって頑張ってるんだぞ？　掃除とか。

「でも近所の商店街はあらかた見たんだろ？」

「うん……でもあそこはモノがありすぎて、どうしても“これならサエちゃんが喜んでくれる”っていうのより“これをあげたらおもしろい”っていうのばっか浮かんできて……」

血だな。もしくはそういう星の下に生まれた宿命か。

「帰ろ」

「はいよ」

そんなわけでデパートを後にした僕ら。

家に向かいてくてく歩く、その道すがら……

「お」

カカが何かを見つけた。

「こんなん拾った」

それは一見高価そうな、派手なバッグだった。でもよくよく見て

みると所々に泥がついていて、一日か二日ほど道端に放置されていたような印象を受ける。中身は……空か。

「それどうするんだ？」

「んー……持ってく」

「なぜに」

「サエちゃんへのプレゼントのヒントになるかもしれないから」

どこをどうしたらそうなるのかよくわからないが、この娘の思考回路は妙なことから名案を閃いたりするので放っておくことにする。いらなくなったら交番に届けよう。シュー君への嫌がらせに。

で、そんなバッグを持って歩いていると……

「お」

カカが再び地面にしゃがみ込んだ。

「こんなん拾った」

それは一見、犬の糞だった。

犬の糞！？

「拾うなよ！！」

「冗談。拾ってないって」

ほっ、よかった……

「拾うけど」

「なぜに!?」

「こんなとこに放置したらマナー違反でしょ」

「え、なんでそんな普通に偉いこと言うの?」

「……トメ兄、あんたね」

アハハ、だってサ、ね? わかるデショ?

「んしょ」

カカは落ちてた木の枝を使って、さっきのバッグにうまいこと糞を押し込んだ。

「いいのか? そのバッグ。サエちゃんのプレゼントに――」

「サエちゃんにこんな小汚いものあげるわけないでしょ。捨てるよ」

父さん、母さん。あなたたちの娘はいまだにわかりません。

「さて、行こトメ兄」

「マジで持ってくんだな……」

「ゴミ捨て場に捨てる」

で、そんなバッグを持って歩いていると……

「お」

カカが三度地面にしゃがみ込んだ。

「こんなん拾った」

それは一見、カラスの死骸だった。

カラスの死骸て!?

「拾うなよ!?」

「うん、バッグに入れる」

「なんでさ!?」

「こんなところに放置してたら車が通りにくいでしょ」

「なんで普通のことばっか言うのさ！　らしくないぞ！」

「……このカラス食べたいとでも言えばいいの？」

「勘弁してください」

車に激突して死んだばかりらしいカラスは、さほどひどい状態じゃなかった。だからまだ見れるし、また棒を使ってバッグに入れる

こともできる……けど……

「よしよし、おまえは車に立ち向かったんだね。他のカラスは皆チキンだから寄らないのに」

カラスがチキンとはこれいかに。

「……なぁ、こういうのはちゃんとした処理してくれるところに電話すべきなんじゃないのか？」

「む、そなのか」

「ああ。今は大丈夫だけど、こういう死体は放っておくとヤバイ状態になるし」

ノミとか湧いてきて……想像したくもない。

「ちゃんと処理してくれるとこってどこ？」

「んー、とりあえず近くに交番あるし、持って行くか」

嫌がらせに。

「ん、よし。歩こ」

で、そんなバッグを持って歩いていると……

「お」

今度はなんだ……

「トメ兄」

「何を拾った？」

「ひったくりにバッグ盗られた」

「……は？」

もしかして今すれ違ったバイクのやつか？　あ、後姿がまだ見える。手にあのバッグを……一見派手だから狙ったのか。

「処理してくれる人がいてよかったね」

開けてびっくり、よもやバッグに犬の糞とカラスの死骸が入っているとは思うまい。

「きっとあの人、ひったくりやめるな」

「いいことしたね」

「そだな」

ツッコミどころは多いけど、今日は胸中でツッコむのに疲れたので放っておくことにした。

さて、それにしても。

サエちゃんのプレゼントどうするのかね。ひったくり犯にステキなプレゼントしてる場合じゃないんだけど。

## カカの天下６０８「ステキなプレゼント」（後書き）

ステキすぎるプレゼントをもらったひったくり犯がどうなったかは皆さんのご想像にお任せします。
あとこれを読んでるケンタ君がいて、もしも不愉快な思いをされたらすいません。でも私はケンタは好きです。別の意味？　いやいやそんなことは……

しかし最近ギリギリ多いですね＾＾；気をつけます！
あとカカの誕生日プレゼント〆切りは二十日の十六時ですよん。

# カカの天下６０９「赤い誕生日」

カカです。

「カカちゃん誕生日おめでとー」

「カカすけ。おめでとうっ」

「トメ兄は？」

「……今朝無理やり起こされてから数十回言わされて、まだ言えと？」

「だって嬉しいんだもん」

そうです、今日はついに私の誕生日なのです！

ちゃんとしたお祝いは今週末にしてもらうことになっているのですが、サエちゃんとサユカちゃんは今日も集まってくれました。もちろんサエちゃんの誕生日当日も直撃するつもりです！

「はいはいおめでとう。それでな、カカ」

「ん？」

「ちゃんとしたケーキもプレゼントも週末に用意することにして、今日は簡単に、と思ってたんだが……ケーキが届いた」

「お、誰から誰から？」

「というかな、ケーキだけじゃなくていっぱい届いたぞ。知らない人から」

「……なぜに」

「ほら、おまえ今年は色々と目立ってただろ？　だから学校のクラスメイトっぽいのから一般人まで、いろんな人からプレゼントが届いたみたいだ」

む、そういえば夏祭りでも運動会でも色々やりすぎた気が……

「良くも悪くも有名になっちゃったんだねー」

「きっと悪いほうよっ！　ふんどし女子とかいう噂が広まってるに違いないわ。それで、そのふんどしがマニアに高く売れたりするのよっ」

「こらこらサユカちゃん」

「妄想たくましすぎー」

うーん……やりたいようにやってきたけど、改めてそう聞くと恥ずかしいもんだね。

「でもプレゼントくれるなら嬉しいな。なになに、何があるの？」

「まずはこれだ」

おお、綺麗にラッピングされた正方形の箱はまさしくケーキっぽ

い！　しかもおっきい！

「ほらほらカカすけっ、早く箱を開けなさいよっ！」

「包みはちゃんとカカちゃんのイメージカラー、赤色だねー。クラスメイトかなー？」

えへへ、わくわく。リボンをほどいてほどいて、真っ赤な包みを開けると中からは――ほら、真っ赤なケーキが！

……また真っ赤？

なに、これ。

なんか、ぐちゃぐちゃなんだけど。

赤黒いんだけど。

赤黒い液体がびちゃびちゃに滴ってるんだけど！？

「ぐ、グロい……な」

「ま、まるで破裂した内臓ねっ」

『ウォォォォォォォォンン……』

「鳴いた！！　泣いた！？　なななんか唸ってるよこのケーキ！！」

「あー、なんか幽霊の気配すると思ったらケーキの中からかー」

「なんでケーキにそんなもんがいるの！？」

『ウウウウウウウウォォォォン……』

ひぃぃぃ、やだ、私が泣きそう！

「んー、『コノウラミハワスレナイ』って言ってる」

「なに！？　恨みってなに！？」

「お、おい落ち着けカカ！　これさ、メッセージカードついてるぞ」

「なにさ誰さこんなの送ってきたのは！？」

「なになに？　『１５話でケーキを半分喰わされた女子より』って１５話てオイ」

ケーキを、半分？

……あ。

あああああああ。

「私が失敗したべちょべちょなケーキっぽいモノを、吐きそうになってるのも無視して無理やり食べさせまくって泣かせたあの子かぁ！！」

そうだ、そうだそうだ、たしか誕生日にはすごいものくれるって言ってた！

「じゃーこの幽霊ってその子かなー？」

「ま、まさか、そのケーキの毒で死んじゃってこんな姿にっ！？」

ヤメテ。

「そうかもー。幽霊さんが『ウラミハワスレタコロニヤッテクル……』って言ってるー」

ヤメテクダサイ。

「なぁカカ。このケーキ――」

箱に入れ直す。

蹴り飛ばす。

ゴミ箱にホールインワン。

「でもプレゼントくれるなら嬉しいな。なになに、何があるの？」

「うわ、無かったことにしたわねカカすけ」

聞こえましぇん。

「ま、まぁいいか。あんなの食べる気にはならないしな。ええと、次は……これだ」

お、今度もお菓子っぽい包みだ。

普通のお菓子だよね……うんうん。はがしはがし……ほら、普通のクッキーだ！

「差出人は、サイボーグさんって書いてある」

「カカちゃん、サイボーグに知り合いがいるのー？」

「お姉さんのことじゃないの？」

うーん、誰かわかんにゃい。それに多分お姉はサイボーグなんかより強いと思う。

「なんでもいいじゃん、このクッキーが美味しければ。早速いただきまーす」

私が齧るとパキ、と小気味のいい音を立てて割れるクッキー。

うん、苺ジャムが入ってるね、おいし……い……？

なんだろう。手に、生暖かい液体の感触が……

「か、カカ……」

「なんか……そのクッキーの断面からダラダラ流れてるのって……っ」

な、なななななな――

「血だねー」

なんですとおおおおおおおおおおお!?

「あ……やだ……手が……血で、真っ赤にぃ……!!」

「カカすけっ！　気をしっかり持って！　もうっ、サエすけ変なこと言わないでよっ！」

「ごめんカカちゃん、嘘だよー、それは苺ジャムだよー」

「カカ、苺ジャム好きだよな？　な!?」

「えううううううう」

えぐっ……な、泣いてなんかないんだから！

でももう、イヤになってきたよぅ。

「今度のは普通だよ、ほら、トマトがダンボールでいっぱい届いたんだ」

「内臓があるんでしょ？」

「ないから」

「誰かの血が流れるんでしょう？」

「戦場じゃないから」

「……普通のトマト？」

「そうそう。ほら僕が空けるよ、ほらほら」

「……ほんとだ」

それは確かに……美味しそうな赤色をしたトマトだ、うん。

「これ、メッセージな」

「ん……どれどれ」

――笠原カカ様。誕生日おめでとうございます。私はあなたと直接話す機会はありませんが、いつも遠目から元気なあなたを見て勇気づけられている者です。そのお礼に、これを贈ります。こんなものですいません。

「わ、これ私のファンっぽい！　ようやく普通のプレゼントだね！」

自然と顔がほころぶ！　なになに、続きは？　ええと。

――特に、かなり前の話になりますが、お姉さんとの腐ったトマトの寸劇はとても面白かったです。あのときのあなたたちの姿がおかしくて、一年以上をかけてようやくこれだけのトマトを作り上げました。

トマトの、寸劇？

一年以上かけて、たくさん？

届いたダンボールを見る。

トマトがびっしり詰まった大きいダンボールが十一個。歳の数だけある。かなりの量だ。

――腐ってはいませんのでご安心を。

腐った、トマト？

ああ、そういえば、そんなことしてたような……え？

え？　え？

なんで、そんなこと知ってるの？　あのときはお姉とトメ兄しかいなかったし、誰かにそんな話はしたことないし――

――１３６話のことですね。

何!?　１３６話って何!?　どういうこと!?

――イツモ、ミテマス。

「わあああああああああ!!　怖い!!　怖すぎる!!　なに言ってるのかさっぱりわからないし!!」

「落ち着けよカカ!!　どうしたんだ!?」

「これ!　このトマトってどこから送られてきたの!?」

「近くからだけど」

近く……？

――イツモ、チカクデ、オマエヲ、ミテイル。

「うわあああああああああああああああああああああ！！」

「ちょっとカカすけっ！？」

ボウソウ、ボウソウ、アハハ。

「ダメだわっ！　混乱してるわっ！」

「あ、トメさん。このプレゼントなんかいいんじゃないですかー？」

「よ、ようし！　見ろカカ！　おまえの好きな変なモノだぞ！」

ミロ？

ミタ。

「匿名希望からのプレゼントだ」

――即席忍者。

お湯をかけて三分でシュバッ！

「怖いいいいいいいいいいいいいいいい！！」

「え？　おい待てカカ！　これのどの辺が怖いのか説明してくれぇ！」

もうヤダ。

プレゼントヤダ。誕生日ヤダ。

誕生日キライ。

「……行っちゃった」

トメです。

すっかり怯えきってしまったカカは半泣きのまま自室に閉じこもってしまいました。

「作戦成功ですねー」

「成功だけど……心が痛むわね。カカすけ、泣いてたわよ？」

「むぅ、兄としてもかなり心が痛いぞ」

「仕方ないじゃないですかー。そういう作戦なんですからー」

そう、作戦だ。

今回、カカに送られてきたプレゼントはもっとたくさんある。でも僕らはその中でもカカが苦手なものしか見せなかった。いやまぁプレゼントにカカが苦手なもんをこれだけ送ってくるやつらも何してんだコラって感じなんだけど……

本物のメッセージカードをいくつか取り出す。

『ふふ、びっくりした？　前に私の誕生日で無理やり変なケーキを食べさせてくれた仕返しだよー。本当は去年にあげようと思ってたんだけど、カカちゃんたらサエちゃんたちにばっかり付きっ切りになってたから私、拗ねちゃって。でも別のクラスになっちゃって、カカちゃんと喋る機会がなくなって、寂しくなっちゃって……これをきっかけに仲良くなれればいいな、なんて思います。すごいでしょ、ケーキ。カカちゃんこういうの嫌いだよね！　嫌がらせだよ！　ちゃんと私に怒りにきてね！』

ケーキをくれた子からは、こんなメッセージ。

『近所に住んでる農家の娘です！　夏祭りでカカちゃんのファンになっちゃいました！　うちからプレゼントできるのはこのくらいしかなくて申し訳ないんですけど、もしよかったら受け取ってください！』

トマトをくれた子からは、こんなメッセージ。

そう、善意しかないメッセージだ。ん？　血みどろクッキーか？　あれについていたメッセージには『赤いからコレ』としか書いてなかった。だから意図は不明だ。即席忍者？　カップラーメンみたいなもんだ。これこそ詳細はわからん。各自想像せよ。

ともかく、だ。これだけの善意あるプレゼントに細工してカカを怖がらせるように仕向けたのは――他ならぬサエちゃんだった。

「運動会のときと逆ですよー。“落として、上げる”です」

「わかるけどぉ……去年もそんなのやったし……でも、ここまでする必要あるのかしら」

「去年のカカちゃんの喜びよう見たでしょー？　あれがもう一度見たいのー」

「ま、終わりよければ全てよし、って言うしな。最後にあの顔が見られるなら……少しくらい、悪者になってやるさ」

「ううっ！　いいけどっ！　サエすけ！　ちゃんと細工した分は、後でカカすけに誤解ないようにバラしなさいよっ！　他人様のプレゼントをいじるなんて、本当は失礼なんだからっ！」

「わかってるよー。本人の了解もとってあるしー」

ごめんな、カカ。誕生日ってさ、その日も大事だけど……やっぱり祝う気持ちのほうが大事だと思うんだよ。

当日がこうだから、きっと落胆も激しいだろう。

でも、だからこそ次は笑顔に。

もっと笑顔に。

……いちいちやり口が邪悪なのがサエちゃんらしいけど。もう少し我慢な？　カカ。魔法をかけるのって大変なんだよ。

その代わり、ちゃんと心からおめでとうって、言ってやるから。

# カカの天下６０９「赤い誕生日」（後書き）

カカ、誕生日おめでとう！！
えー、とは言っても全然めでたくない内容なのですが。
今のところは。

カカには悪いですが、送られてきたプレゼントを見てサエちゃんがこんな作戦を思いついてしまったのだから仕方ないです。そう、誤解を招きそうなものばっかりくれるから！！　ありがとう！！
いろいろくれた皆さんに最大級の感謝を！
いつもだったら読者さんも騙すところですが、今回はプレゼント自体が読者さんにもらったものですからね、やめました。一緒にカカを騙しましょう。

ところで注意。
この作戦はサエちゃんという卓越した腹黒さがあってこそ成功する可能性が高い作戦です。現実に素人がやるとただ単に嫌われてしまう可能性があるので注意しましょう。

さらに、ちなみに。
作中では話の都合上、細工していると言いつつ――実際にはいただいた要望を割とそのまま採用してたり……
その発想に脱帽です。私も負けてられません。

## カカの天下６１０「ダメなものはダメ」

おはようございます、サユカですっ！

いろいろ赤かった誕生日の翌朝、いつもの待ち合わせ場所でサエすけと一緒に、カカすけを待っているのですが……

「こないねーカカちゃん」

「こないわね……サエすけ、君いまは近所でしょ。来る途中に声かけたりしなかったの？」

「したよー。でも寝癖ついたトメお兄さんが出て」

「そこんとこ詳しくっ！！」

「んーと、ここあたりの髪がこんな風に跳ねてて」

サエすけがなぞった辺りの髪を、ぐいぐい引っ張って跳ねさせてみる。うりゃ、うりゃ、これくらいかな？

「跳ねてたのはそのぐらいだねー」

「……えへ」

トメさんとおそろい……

「続けていいー？」

「どうぞんっ」

「トメお兄さんの話だと、まだ部屋から出てこないってー」

……嘘。

「そ、そこまで昨日のがショックだったのかしらっ！」

「そうかもー」

「ねぇサエすけ？　もうバラしちゃダメかしら」

「ダメなものはダメ！　これはカカちゃんを喜ばせる魔法なのー！」

ううん、そうかもしれないけど辛いわよぅ。

「サユカちゃんてば随分とカカちゃん想いなんだねー」

「ち、違うわよっ！　ほら、これだとカカすけを苛めてるみたいで、わたしが悪者になったみたいでイヤってだけっ！」

「大丈夫だよー友達想いのサユカちゃん。想像してみて？」

「だから違うって――」

「カカちゃんが落ち込んでいますー」

「……ええ」

「そこで私がバラしますー」

「……うん」

「バラバラ殺人事件」

「……」

「ごめんなさい、やりなおしますー」

「よし」

「バラすうちに、カカちゃんの口元が徐々ににやけてきますー」

「……想像はできるわ」

「あまりの嬉しさに我慢できなくなったカカちゃんは発射しますー」

「どこへよっ!?」

「ずごごごごごー」

「何が発射してんのよっ!?」

「ぷにゃん」

「何が起きたのっ!?」

「ロケット噴射な感じで幸せの国へ一直線ですー。これこそ魔法!」

確かにそれは魔法だけど……そんなにうまくいくかしら、ん?

背中からじゃり、と砂を踏む音。カカすけ？

わたしとサエちゃんは同時に振り向いた！

するとそこにいたのは――

「む、どうしたサエ君サユカ君。俺の顔に何かついているか？」

「タケダ君の顔がついてるー」

「ええ……とても残念ね」

「どういう意味だ！？」

はぁー……と同時にため息をつくわたしたち。

「俺の顔がついていたらいかんのか！？」

「そんな顔どうでもいいからどっかいってよー」

「そうよ。新しい顔でも探しにどっかいきなさいよっ」

「きつっ！！」

きつくもなるわっ！　だってわたしたち、こう見えてストレスが――

「あ、カカちゃーん！」

来た！！

カカすけは……うわぁ。

なんだか、見るからに、どんよりしているわ。

「……あ、サエちゃん、サユカン、おはよ」

「う、うん。おはよー」

「元気ないわねカカすけっ！」

タケダなんか目に入ってもいないし！　いつものことだけどっ！

「カカ君、おはよう！」

「誰あんた」

あ、タケダ石化。やばいわ、どうでもいい人のことは忘れるくらいに落ち込んでるじゃないのっ！

「どうしたのよカカすけ、ほら、元気出して？」

「うん……はぁ」

そんなカカすけの、深々とつくため息を見て。

「痛っ！？」

わたしは無意識に、隣に立っているタケダの足を踏んでいた。

「カカちゃん？　元気出してー」

「うん……でも、昨日のショックが抜けなくて」

「ひぎっ！？」

わたしはタケダの足をかかとでぐりぐりした。反対側にいるサエすけはタケダの指を一本だけ握って捻っている。

そう、耐えているのよ。タケダを罪悪感とストレスのはけ口にしながらっ！

「そ、そんなにショックだったー？」

「うん……だってさ、あんなに怖いものがいっぱい送られてくるなんて、私、嫌われてるんじゃないかって」

「ぬぐぉぉぉぉぉ」

「そ、そんなことないわよっ！　きっと相手に悪気はないのよ！」

「そうかな？　だって私の嫌いなのばっかり」

「ぬぐぁぁぁぁぁぁ」

「ほらー、相手がちゃんとカカちゃんのこと知ってるとは限らないでしょー？　それでたまたま悪いの選んじゃったんだよー」

予想外なほどの落ち込みように必死でフォローするわたしたち。

あれらが本当に善意のプレゼントってことさえバレなければいいのよ、証拠さえ隠し切れればいいの。それさえ守れればドッキリは、魔法は成功するわっ！

「ぐぃぃぃぃぁぁあぁぃぃあ」

それにしてもうるさいわねこの男っ！　ちょっと四肢が捻られてるだけでなによっ！

「そうかな……偶然かな」

「そうだよそうだよー」

「そうよそうよっ！」

「そっか……そうだよね」

ほっ……どうやら切り抜けられそうね。毎回見るたびに思うけど、本当に怖いのダメなのね……

「ほら、学校いこー？」

「うん……」

「ほらほら元気出せって言ってるでしょっ！　週末が本番と思えばいいじゃないっ！」

「うん……」

ごめんねカカすけ、ダメなものはダメなの。魔法を成功させるた

めには、もう少し、ね。

あれ？　そういえばタケダの声がしなくなったわ。どこに……？

地面に落ちてるわ。

静かになってよかったわ。

「さ、学校行くわよカカす――」

「でもね、去年があれだけ嬉しい日だったのが、今年はあんなに怖い思いをする日になっちゃったんだと思うとさ……なんか」

あ。

「なんか、泣けてきて……」

ええと、タケダは？

感情のはけ口は――

「なんか……」

我慢。

ダメなものはダメ。

「なんか……ぅう……ひっぐ」

そう、ダメなものはダメ。

そうよ、こんなの――我慢なんかできるかぁっ！！

「カカすけ、ごめんっ！！」「カカちゃんごめぇぇんー！！」

「……えぅ、なに、二人して」

「あぅぅぅぅー実はね実はねかくかくしかじかでー！！」

「かくかくしかじかじゃわかんないよ」

「わかりなさいよ気が利かないわねっ！！　つまりねつまりね――ということよっ！」

「――じゃわかんないよ」

「うるさいわねっ！　それで説明したことにしなさいよっ！」

ごめんなさい。無理でした。魔法は失敗です。

カカすけのあんな顔を見たら、もう我慢できなかったの……！

「……え、じゃ、あれ、わざと？」

「そうよっ！　一回落ち込ませたほうがもっと喜んでくれるって――」

「サユカちゃんが言うからー」

「ちょと待てっ！　言ったのは君でしょうがっ！！」

「だってだってー！　もっと喜んでもらいたかったんだもーん！」

「そう、だったんだ……」

あーもー！！

「そのつもりだったのに、カカちゃんがまた泣くからー！」

「そうよっ！　台無しよっ！」

「二回も泣かれたら我慢できるわけないでしょー！」

「どうしてくれるのよっ！？」

「へ？　は、はぁ、すいません」

カカすけ、君ねぇっ！　謝って済む問題じゃないのよっ！！　謝るのはこっちだからよっ！

「わかったらさっさと許しなさいよっ！　誕生日おめでとうっ！　ごめんっ！」

「そうだそうだー！　めでたいだー！　誕生日だー！　ごめんだー！」

ヤケになっていたわたしたちは激しくカカすけに詰め寄った！

なんだかもう言ってることもメチャクチャで、カカすけに魔法をかけられなかったのが悔しくて、もうわけわかんなくて――

「許さない」

その言葉を聞いて、不覚にも涙が出てきて――

「なんですってぇっ！　ふ、ふざけんじゃないわよっ！！　本当に悪かったわよぅっ！　許してくださいお願いしますよっ！」

「えぅぅ、そうだよ早く許してよー！　カカちゃんに見放されたら死んじゃうよぅー！　ほらこれ！　昨日のプレゼントのちゃんとしたメッセージカードだよー！」

「これは届いてた三角定規十個よ！　購買部と届け先間違えてないっ！？」

「それから雑貨屋さんからスッポンエキスと安全マットが届いてるよー！　ほらほら、チョイスが意味わかんないけどケロリン味でケロリン柄だよー！」

「ほら驚けっ！　『世の中のでゅみゅみゅみゅう』って本よっ！　好きでしょっ！？」

「ほらほらー、なんか知らないけどバイクまでもらっちゃったんだよー！！」

ほらほらほら！　これでも許してくれないのっ！？

「……その、ランドセル……一体、どこへ、繋がっ……四次元？　どうやって、入れてたん……」

なんか落ちてるタケダっぽいのから音が聞こえた気がするけどそ

れどころじゃないので無視っ！！

「どうよー！？」

「どうよっ！？」

「許さない」

「そこをなんとか頼むわよぅっ！」

「どんなことでもするからー！！」

「罰として、私に抱きつけ」

ぎゅ、と。

そんなことを言いながら、抱きついてきたのはカカすけのほうで。

すごく近い、その横顔を見て。

幸せそうな、その顔を見て。

あ、なんだ。魔法、成功してんじゃん、なんて。

そんなことを思ったら、すごく気が抜けてきて。

わたしもサエすけも、泣けてきちゃって。

カカすけも泣いちゃって。

しばらくその場で抱き合いながら、三人で泣いちゃった。

道のど真ん中。周囲に人は少しだけいて、何事かと見られていたけど構わない。遅刻？　それがどうしたっていうの。

「誕生日っ」

「おめでとー！」

「……ありがとう！」

サエすけ、作戦失敗ね。腹黒くてもまだまだ子供。そうそう、うまくはできないわよね。

でも、結局は最後の最後にハッピーエンド。

少しくらい早まったって、構わないわよね？

そう思ってたんだけど……

「構うに決まってるだろ！！」

学校が終わったあと、トメさんに怒られたわ。

「我慢してた僕の想いはどうなるんだあああああ！！　すんごい辛かったんだぞカカにあんな顔させてるの！　それを勝手に解決するなんて！」

「ご、ごめんなさいトメさんっ！」

「あのときのカカちゃんの顔、可愛かったー」

「……二人とも、そのときの話を詳しく」

隠しておいたプレゼントの物色にカカすけが行ってる隙に、トメさんは話を聞いてきた。

でも、ちゃんとカカすけが幸せそうだったと聞くと、「ならよし！」と許してくれたわ。

わたしたちって……ヘタに騙すこともできないくらいカカすけが好きだったのね。悔しいから口には出さないけど。

「このプレゼントを送ってくれた人を全て呼ぶがよい！　私が抱きついてくれるわぁ！！」

「やめとけ。面倒だから」

「じゃーその分、私に抱きついてー」

「ハイ喜んで！」

「僕はさすがに遠慮しとくけど……サユカちゃん？　行かなくていいのか」

「べ、べつにっ！！」

どうせ抱きついてくるもの。

……ふん、口に出さない代わりに、せいぜい抱きつき返してやるわっ！

何度も言うけど、おめでとうっ！

## カカの天下６１０「ダメなものはダメ」（後書き）

話が違う？　皆で一緒にカカを騙すんじゃなかったのかって？　ＨＡＨＡＨＡ！　小説は読者さんを騙してなんぼですよ！　オコラナイデネ。

はい、というわけで。前回あんなことを言いながらも即行でバラしてしまいました。えー、ハイ、お二人がどうしても我慢できないと言うもので。どれだけ説得しても聞かないもので。

今回は笑ったり大騒ぎでいこー！　とか言ってたのにこんな感じとなってしまい……そこは謝ります。これコメディですもんね。こんなんばっかじゃダメですよね。　でも……話はカカたち任せにしてるので、勘弁してください。この分はきっと、結婚式で弾けてくれるはずです、きっと！

……ほんと、オコラナイデネ。

カカ、何度も言うけど誕生日おめでとう！

## カカの天下６１１「この日のあの時間」

こんにちは、カカです。

改めて誕生日を祝ってもらって元気たっぷり！　ですが……遅刻してしまいました！　そのときの話をちょっとします。

「カカ、サエ、サユカ。てめぇら、この時間に登校しやがって……言うことは？」

「おはようございます！！」

「よし、席につけ」

「いいのっ！？」

「んだよ、朝に必要なのは元気な挨拶だろが」

「遅刻はー？」

「うっせぇな。生徒が遅刻したらオレの評価が下がるんだよ。無視だ無視」

この人が先生でよかった。

……よかったのかな？

「おし、授業の続きをすっぞ。この問題は……遅刻してきたカカに答えてもらうかな」

「遅刻は無視じゃなかったんですか？」

「それはそれ、これはこれだ」

大人ってズルい。

「ほれ、答えは？」

「３です」

「今は国語の時間だ」

「三です」

「漢字にすりゃ国語ってわけじゃねぇ」

聞いただけでよくわかったね、先生。さすが私の担任だけはある。

「この例文の欠けてる部分を埋めるんだよ、四つの選択肢からな。問題は五つあって――」

「三！　三！　三！　三！」

「三つなんて一言もいってねぇぞ」

「や、その問題の答えを言ってみた」

「なんで適当に言うんだよ」

「それが私の生き様だから」

さっきまで私らしくなかったからね。リハビリしないと。

「……問題、見てみろ」

黒板を見る。

――私は『　』人間です。『　』が『　』だと、とっても『　』なのです。

「てめぇの答えで読んでみろ」

「私は三人間です。三が三だと、とっても三なのです」

三すげぇ。

「カカ……あのな。わけわからんだけでおもしろくないのは点数低いぞ？」

「がーん！」

ショックだ……私としたことが！

「精進しろよ」

「ご指導ありがとうございました、先生！」

勉強になった！

「あの、よろしいですか？　カカさんと先生は一体何の授業をされているのでしょうか」

む、マジメなイチョウさんが立った。

「お楽しみのところ申し訳ありませんが、今は国語の時間で――」

「国語を勉強してるんだが。なぁカカ」

「うん、そだよ」

「……どの辺がですか？」

「日本語喋ってるだろ」

「……算数も日本語喋りますが」

「あれは数字が入るっしょ」

「今も入っているのでは？」

「漢字にしたじゃねぇか」

「……もうよろしいです」

イチョウさんの負け。ふ、理屈が屁理屈に勝てると思うなよ！

「さて、話を戻そう。この問題を遅刻組にやってもらう、まずは見本となる答えを教えよう――私は『規則正しい』人間です。『起きるの』が『早い時間』だと、とっても『気持ちいいもの』なのです。

これが答えだ」

あれ、答え言っちゃった。

「どうだ、つまんねぇだろ。まず五年生の問題じゃねぇ」

確かに……ん？

「先生、よく見たら先生の持っている教科書、二年生の――」

「さぁ！　というわけで五年生レベルの問題だ！　三人で順番におもしろい言葉を当てはめて、この文章をおもしろくしてみろ」

……さては教科書忘れたな、先生。

「まずはサユカ。最初のところを埋めてみろ」

「ええっ！？」

私は『　』人間です、ってとこか。

「せ、先生っ！　わたしにはハードル高いですよっ」

む、ここだ！

「ハイ！　サユカンの代わりに言います！」

「言ってみろ」

「私はラブラブ人間です。トメさんがキュンキュンだと、とっても

モッキューンなのです、ＢＹサユカン！」

「合格！！」

「勝手なこと言わないでよっ！！」

「間違ってねぇだろ」

「なんで断定！？　もっきゅーんっ！」

「ほら似合ってる」

うんうん、クラスメイト皆で頷く。

ふ、運動会で思いついた言葉を使えてよかった。

「じゃあ次、サエ」

「私は心が白い人間ですー」

「嘘ついたから却下」

うんうん、クラスメイト皆で頷く。

「ぷー……」

頬を膨らまして拗ねるサエちゃん、クラスメイト皆でニヤニヤ。

「よし、最後にカカ」

「私は変な人間です……あれ？」

あれれ？

「どうしたカカ。そんな誰もが知ってること言っても仕方ねぇだろ」

あれれれ？

「先生……」

「んだよ」

「おもしろいことが思いつきません」

「……は？」

どうしよう。

リハビリどころか、スランプ！？

## カカの天下６１１「この日のあの時間」（後書き）

変化球を投げました。
さて、どうなるでしょうか？

……それにしても最近、家に帰ってくるのが本当ギリギリな時間で笑
明日は早めに更新できるように頑張ります！

# カカの天下６１２「この日のその理由」

こんにちは、サエですー。

ちょっと大変なことになってます。前回の続きですー。え、省略しすぎですかー？　説明めんどいんですもん。

とにかくー、カカちゃんが「おもしろいことが思いつかなくなった！」と騒いでいるのですよー。

「どうしよう！　生まれたときからおもしろいって言われてきたこの私が……」

「どんな生まれ方したのよっ」

「……えっと……んっと……」

「こんな質問なら即答していたカカすけが！！」

「考えてるー！？」

いつも一緒にいる私たちにはわかる。これは絶対にいつもと違う！

「うぅ……？　リハビリし始めたときは調子よかったのにな。３とか三とか。その後からなんだか調子が狂ったような……」

そのあとはー……何かあったっけー？

「カカすけ、今までにこういうことってなかったの？」

「なかった。私はいつも変だったはずだ」

いつも自覚はあったのねー。

「でもさー、もしカカちゃんが普通になったとして、何か問題があるのかなー？」

「あるよ！」

「どんなー？」

「……んー、なんか、口にできないけど、それは沢山の人が困る結果になるような気がするんだよ……」

よくわかんないねー。別に私たちの様子をテレビで見ている人がいるわけでもなしー。

「これ、どうしたのかね君たち」

「あ、教頭せんせー。実はカカちゃんが」

私は事情を説明してみた。

「ふむ……こんな話がある。とある家庭で、ろくでなしの夫がいたそうだ。その夫は後々に家を出て行ったのだが、そのとき子供が母親にこう聞いた。『ねぇねぇママ、パパはどこにいったの？』と」

教頭の声マネ、きもい。

「すると母親はこう答えた。『まぁまぁアキオちゃんたら』と」

とても渋い中年の裏声をご想像ください。

「母親は言った。『あの人のことをパパだなんて呼んじゃいけませんよ。父と思っちゃいけません』と。子供は答えた。『じゃあなんて呼べばいいの？』と。母親は言った。『獅子は何よりも大事な誇りを失ったとき、死を迎える。つまり名を半分失ったのだ、それと同じことよ』と」

戦国武将のようなママですね。

「母親は続ける。『父は何よりも大事な妻の信頼を失った、だから“ちち”の半分が削られ、“ち”だ、“恥”と書いて“ち”だ。パパでもあるから頭が“パー”でも構わんぞ。どちらか好きなほうを選ぶがいい』と」

いつのまにか口調が一般家庭の奥様からかけ離れていますがー。

「ちなみにその父親が出て行った理由は、パチンコで大負けして借金を作ったからしい」

パチンコ。パチ。パ、ち……なるほど。この小話、どこから出てきたんだろー。なんだか慣れない人が必死に作った感じがするー。

「つまり何が言いたいかというと、だ。カカ君」

「ん」

「ユーモアを失った君は、今から“カ”だ！！」

「カ！？」

「それが嫌ならば意地でもユーモアを取り戻すがよい。私はそれを期待している。以上だ」

去って行く教頭。

その途中、小さく「やはり私にユーモアの才能はないな」とぼやいているのが聞こえた。そっか、これって教頭が作った話なんだー。多分、ユーモアな話を作ろうとしたんだろーなー。でもこんな小難しい話になってしまったとー。教頭らしいなー。あの人は言葉じゃなくて態度にユーモアがある人だからねー。

「それで、どーするのー？　カちゃん」

「カチャンって！　私をそんな音で呼ばないでよぅ」

「じゃ、カーちゃんかしらっ」

「貴様のような娘を産んだ覚えはないわ！」

カチャン。

「あ、筆箱落としたー」

「さぁぁぁえぇぇぇぇちゃぁぁぁん」

むー、こんなに簡単にカカちゃんをいじれるのは怖い話のとき以来だなー。でも今は怖い話なんかしてないし、種明かしもしたしー

……なんでこうなってるのか、わかんない。

こうなったら最終手段だねー。

「ちょっと電話するねー」

「どこへよっ」

「――あ、もしもし、トメお兄さん？　ちょっとお願いがあるんですけどー」

なるほど、と頷くサユカちゃん。ちょっと恥ずかしそうに俯くカカちゃん。二人の無言の了解を得て、私は仕事中でも電話に出てくれたトメお兄さんに事情を説明した。

『へ？　元気ないままにしとくんじゃないのか』

「それはそうだったんですけどー……家に帰ったら説明しますので、とりあえずお願いしますー」

『わかった』

『――おいトメ！　仕事中に誰と電話してやがるんだ!?』

あ、トメお兄さんの後ろから声が。まずいかなー？

『すいません、いまうちの姉がヤクザの親分との別れ話から勃発した一人ＶＳ組全員の戦争を始めようとしてるので止めてるんです』

『なにぃっ!?　おまえの姉って……アレだよな？』

『アレです』

『思う存分電話してくれ。そして止めてくれ』

『話がわかりますね先輩』

『一度、アレの戦争に巻き込まれたことがあるんだよ……古傷がうずくぜ、あんな想いは二度としたくねぇ……俺はあのときに大事なものを失ったんだ……金とか……』

『……よし、先輩は行ったぞ。続きだ』

「トメお兄さん、嘘がうまいですね」

『キリヤに習った口車だ。それに昔に実際あったことを今言っただけだから、嘘と言っていいやらどうやら』

……今度、詳しくきこーっと。

「それで、その、カカちゃんなんですが」

『わかったわかった。元気にさせればいいんだろ?』

え、そんな簡単にー?

『カカに代わってくれ』

言われた通り、携帯をカカちゃんに渡してみる。でも会話内容が気になるので……カカちゃんの耳元にある携帯に、サユカちゃんと

二人して自分たちの耳を近づける。

「あん？　合体でもすんのかてめぇら」

顔をくっつけあう私たちを見かけたテンカ先生がそんなことを呟いたけど、今は電話内容のほうが気になるのでスルー。

「ねぇトメ兄。私、変だよね！？」

『すごく』

「どこが変だったっけ！？」

『脳』

「他は！？」

『全部』

「でも変なこと思いつかないんだよ！」

『んじゃ聞くが、今朝に歯ブラシで眉毛を磨いていたのはなんでだ？』

「眉毛が汚れてたから」

『やっぱりおまえは変だ、以上！』

えー！　終わりー！？

私は思わずカカちゃんから電話をひったくった。

「トメお兄さん？　いったい今のは――」

「……なんか調子戻った気がする」

「カカすけほんとっ！？」

えー？　なんでー！？

『あー、サエちゃん？　カカが元気ないのは僕のせいでもあったんだよ』

「どういうことですか」

『昨日から僕は、カカがどんな変なことをしようとツッコまなかった。それで調子狂ったんだろ』

なるほど――そう思うと同時に気づいた。

カカちゃんが今朝から元気がなかった原因の半分は、トメお兄さんに相手にされなかったからなのでは？

カカちゃんはリハビリしようとしていた。ならその相手は、やっぱりトメお兄さんじゃなければいけなかったのでは？

漫才大会を経験したからこそわかる。ボケとツッコミはタイミングが命だ。それによって調子が変わるのだ。だからこそ、テンカ先生のツッコミでリハビリしようとして、失敗した。

トメお兄さんと言葉のやりとりを交わすことで、成功した。

お笑いって……深い！

「カカすけっ！　さっきの問題やってみてっ！」

「私は変な人間です！　私が絶好調だと、とっても変なのです！」

「まさにそのとおりねっ！」

この調子ならプレゼントを渡しても喜んでくれそうだし、結婚式でも全開で変なことしてくれそうだねー！

『大体な、変なやつが変なこと考えようとしたらマトモになるに決まってるだろうに。変なやつは無意識に考えること自体が変なんだ。余計な頭使わなけりゃいいんだよ』

なるほどなるほどー！　本当に深いですねー！

……はてー？　それにしてもー。

なんで私はお笑いについて研究してるんだろー。

変なの。

## カカの天下６１２「この日のその理由」（後書き）

というわけで、カカの復活に加え、ちょっと変わったお話の形にしてみました。ここから６１０話の最後に繋がるわけです。

気がついたらトメのツッコミ性能をアピールする結果に。タイミングとか声とかは文章じゃ表現しにくいですからね、それを話を通して表現したということで……

よく読者さんにも言われますが、やっぱりカカ天の基本はこの二人なんですよね。サユカちゃんやテンちゃんがツッコミをできるようになってきても、彼にはまだ敵いません。多分！

さてさて、カカ&サエちゃんのプレゼントですが。
明日までとします。つまり……？

カカも元気取り戻しましたしねー。

# カカの天下６１３「お結び式　開場しまーす」

こんにちは、トメです……本日はご来場、誠にありがとうございます。

え、どういうことかって？　いやですねぇお客様。

カカとサエちゃんの結婚式会場――スカイリード・チャペルへようこそと言っているのですよ！

「……ぽかーん」

「……ぱかーん」

「……きかーん」

効かないどころか効果はばつぐんだ！

「トメ兄……本当に、ここ？」

「ここって、紛れも無く、正真正銘の結婚式会場ですよねっ！？」

「てっきり、うちででもやるのかとー……」

驚くのも無理はない。僕がカカサエサユカを連れてきたのは、三人の言うとおりの場所だったからだ。小鳥が羽でも休めていそうな、柔らかな彫刻が施された門。それをくぐると視界に入るのは鮮やかな緑の絨毯に白銀のタイル道、そして城。

「あらあらー、お待ちしてましたよー！」

ひたすら呆然とする三人娘を前にどうしようかと悩んでいると、城のほうからサカイさんが腕をぶんぶん振りながら歩いてきた。

「ほらほら、こっちですよー」

相変わらずぽかんと口を開けたまま、手招きに誘われて式場内に入っていく三人娘。僕もそれを追いかける。

「ね、ねーお母さん。ここ、どうしたの？」

「借りましたー」

「どうやってよっ！？　す、すんごくお金がかかるんじゃないのっ！？」

「タダですよー」

「サカイさん、何したの」

お、カカ鋭い。

「いえいえー、お祖父さんにお願いしただけですよー？」

何にでも手を出している空読財閥は、結婚式のプロデュースも請け負っている。その会社にサカイさんは“たまたま”面識があったらしい。そう、たまたまだ。とある時期にその会社が一度潰れかけた経験があったり、サカイさんが電話で「今度こそ潰されたくなかったらー」とか言ってたのなんて聞いてない、聞いてないともさ。

「こっちですよー」

サカイさんの案内で城に入る。厳密には城じゃないんだけど、これ以上に適した表現が浮かばない、式場のスカイリード・チャペルというのはそれくらいに立派な建物だった。

「いまドレスルームでサラさんが準備してますのでー、ちょっとここで待ちますかー」

僕らはロビーのソファで一息つくことに。緊張で喉が渇いてきたとかいっちょ前のことを言うカカたちに小銭をやると、三人はキョロキョロしながら自販機へと走っていった。

「はぁー……サエも結婚ですかー」

「フリですけどね」

「本気だったら断固阻止ですよー」

なるほど。サカイさんのことだから反対するかと思ってたけど、快く引き受けてくれたのはこれが子供の遊びだと割り切ってるからか。サエちゃんを相手にしているときは子供にしか見えないけど、根はちゃんと大人なんだなぁ。

「トメさん、うちのサエをよろしくお願いします」

「うあ、恥ず。何ですか改まって」

「ほらー、結局はこれからも一緒に仲良くやってくわけじゃないで

すかー」

それも、そうだな。結婚式なんて冗談みたいなことをできるのも、僕らが家族ぐるみで仲がいい証拠だし……

「そうだな、うん。こちらこそカカともども、これからよろしく、サカイさん」

「はい、どうぞよろしくです」

握手、と。

「ところでトメさん、お近づきのしるしと言ってはなんですがー」

「なんですか？」

「口座番号を教えてください」

「近づきすぎ！！」

とかなんとか言ってるうちに、カカたちがジュースを買って戻ってきた。

「ほら、まずはサエちゃん」

「えー、カカちゃんから言ってよー」

「じゃんけんに負けたでしょ、ほらっ！」

ん、なんだサエちゃん。僕の方に身体を向けて、頭を下げた？

ああ、結婚前の挨拶ってやつか。

「トメさん、ふつつかものですが末永くよろしくお願いしますー」

君は僕と結婚すんのか？

「娘さんは私が必ず幸せにしますー」

娘とちゃうし。

「だから口座番号教えてください」

「君もかい！？」

似たもの親子め！

「ちょっとサエすけっ！　君、まさかお金目当てで結婚するの！？」

「そんなわけないよー。か、ら、だ、め、あ、てぇん♪」

その妙な色気はどっから出てくるんだ女子小学生よ。

「サエちゃん、私も身体目当てだよ！！」

「待てぃ」

悪ノリするカカを止めつつも周囲を見渡すと、徐々に見知った顔が増え始めてきた。

「キリヤ！　神父役を交代するです！」

「おやま、クララちゃん。できるのですか？」

「クララ経験者です！　誓いのキックも完璧です！」

「では任せました。私は司会に専念しましょう」

キリヤは僕に気づくと軽く手を振った。僕もそれに応えるがキリヤはこちらには来ず、すぐに奥へと消えていった。段取りに忙しいんだろう。おや、あれは？

「兄貴、腕がなるな」

「おおよ弟。なんなら勝負するか？」

「待ちな！　今回の料理長はあたしだよ、勝手なマネは許さないからね！」

「おお、姉貴。料理長の格好が似合いすぎだぞ」

「やはり料理長たるもの、身体が太くなければな。細身の料理長が作ったものはどうにも美味そうに見えなくていかん」

「うむ、おばちゃんおばちゃん」

「ふん、この歳になっちゃ太いとか言われても怒る気ゃしないがね、仕事はきっちりやるんだよ！」

「任せろ、ファミレス東治の繊細な味つけと」

「セイジ食堂の派手な見た目と！」

「給食の栄養を兼ね備えた、究極の料理を用意してやるかんね！！」

こちらもこちらで忙しいようだ。しかし店長二人と給食センター仕切ってる人が料理作るって……友達ってだけで呼んだんだろうけど豪華すぎるな。

おや？　気がつけば……カカとサエちゃんが離れたところに二人して座っていた。

そう、だよな。結婚前だもんな。きっと改めて愛を語り合っているんだろう。

「――ん？」

くい、と引っ張られる服の裾。振り返るとそこには、

「サユカ、ちゃん？」

今にも泣きそうな顔をした、サユカちゃんが。

「どうしたの」

「トメさん……あの……」

サユカちゃんは瞳に涙を溜めながら、カカとサエちゃんのほうを見つめていた。

「あの二人が……結婚するなんて……」

「うん」

「一番仲のよかった、あの二人が……」

「うん」

「こんな、大きな場所で……」

「うん」

「こんなに、皆に祝ってもらって……」

「うん」

「わたし……わたし……！」

「うん、感極まったんだな」

「はい……！　幸せそうなあの二人を見てると……わたし……っ！」

「うん」

「本当に……本当にバカらしくてっ！！」

「僕もそう思う」

何やってんだろねー僕らはホント。

呆れつつも、もうちょっとで結婚式が始まります。

## カカの天下６１３「お結び式　開場しまーす」（後書き）

始まります、なんちゃって結婚式。ほんと何やってるんでしょうねこいつらは笑

カカサエプレゼント受け付け〆切りはちょっと延長して、明日一日いっぱいまでとします。遠慮なくどうぞ＾＾

# カカの天下６１４「お結び式　乾杯しまーす」

「入れてください！！」

「僕もカカちゃんやサエちゃんを祝いたいんです！！」

「ええい、ならん！　ここは身内しか通せないのだ！」

「くっ、なんだこの巨大な番人は……」

「せっかく二人の晴れ姿を見にきたのにー！！　あ、サエ様！　門の向こうにサエ様がいるぞ！！」

「皆、突撃だ！　意地でも結婚式に出席するんだ！　同士諸君、撃鉄を起こせ！」

「いつまで寝てるのよ撃鉄！！」

「誰だよ！？」

「ゆーたーがんばってー」

「うおおおお！　そのお声さえあれば俺は際限なくパワーアップする！　見よ、我が身体は百三十キロから百六十キロへと進化した！　愛だけで三十キロ増量した筋力を見るがいい！　ぬぅあああああああ！！」

「全軍、突撃！！」

「――うわぁ！？　無理です敵いません！」

「諦めるの早いし！」

「ふはは！　む？　なんだ貴様、その携帯の待ち受け画面は！　サエ様の運動会のときの写真ではないか！　削除削除ぉ！」

「あぁ！　サエ様ファンクラブ秘蔵の写メがぁ！」

「うわ、削除とかいいながら自分の携帯に送ってるよこの人！！」

「俺はいいのだ！　貴様らはダメだ！！」

「なぜに！？」

「文句があるなら腕で語れぃ！」

……どうも、引き続きトメです。

ただいまカカとサエちゃんの誕生会、なんちゃって結婚式を進行しているのですが……

「あんな催し物は予定になかったはずなんですけどー」

窓の外を見ながら呟くサカイさんに同意する。なんだあの外の大騒ぎは。あそこだけ戦争でも起きてるのか。

「あ、おかえりサエちゃん！」

「新郎を放っておいてどこ行ってたのよっ？」

「ちょっと煽ってきたー」

……この娘のせいだったのか、アレ。

「カカちゃん、サエちゃーん！　お待たせしました、ドレスルームへどうぞ！」

この声はサラさんだな。衣装の準備をしているって話だったけど……って、え？

「どうですトメさん。似合いますか？」

「似合う、けど……」

面食らった。呼びにきたサラさん自身が純白のウェディングドレスを着ていたからだ。ボディラインに沿ったシルエットが美しく、特に胸元の刺繍されたレースが華やかで綺麗で……ってどこ見てんだ僕は。

「ど、どうしたの、それ」

「いやー、ドレスルームにあったんですよう。そうしたらついつい着てしまいまして……トメさん、せっかくですし私たちもこのまま式を――」

「そんな風に遊ぶなんて、随分と余裕があるんですねー」

調子よく喋っていたサラさんの言葉がストップ。冗談なのはわかってもちょっとドキッとしていたところなのでホッとする。

「仕事も喋るのも遅いサカイさんとは違うので」

「結婚だけは早かったんですけどねー。彼氏もいない誰かさんと違って」

「だから失敗したんですか？」

「いいですよねー失敗する心配がない人は」

ごごごごご、となんか重い音がする。何の音かはわからないけどホッとしたのは間違いだったことだけはわかった。どうしよう。

「……ん？」

その心臓に悪そうな音よりも不吉な予感が胸をよぎった。

「おーい！　弟よ！」

「ん、姉か？」

いいや、きっと気のせい――

「どうよこれ！　なんかドレスルームにあったからついつい着ちゃってさー！！」

くる……近づいてくる……何かが……とてつもなく似合わないものを身に纏ったナニカがぁぁぁぁぁぁぁぁ！！

さて、ちょっと見苦しいものを見て目が腐ってしまったが、準備は滞りなく終わったようだ。スタッフらしき人に呼ばれた僕らは披露宴会場へと移動した。

本来なら結婚式を終えた後に披露宴という形なのだろうが、僕らにとってこれは単なる誕生会だ。細かい順序などは気にせずに、楽しそうなところだけをこだわって進めていくことになっている。

今回は僕ら大人組にサユカちゃんを混ぜて――つまりはカカとサエちゃんを除いた皆で段取りを決めた。とはいえ『次にこれをやって、次にこれをやる。これを誰に任せる』という基本しか決めていないので、実際に誰が何をするか詳細はわからない。だから司会のキリヤが適当に仕切っていくことになっている。

『さて、皆様。お集まりですね？』

カカとサエちゃんを抜いた参加者がそろった。僕、姉、シュー君にタマちゃん。テン、クララちゃん、司会のキリヤ。サラさんとサカイさんも主役の着替えを終わらせたらしく、会場に入っている。テーブルの上にはすでに派手な料理がずらりと並んでいるが、料理人三姉弟の姿は見えないのでまだ何か作っているのかもしれない。

ちなみに母さんは父さんに背負ってもらいながら高速ダッシュでこちらに向かっているが、少し遅れるらしい。そんなメールがさっききたのでキリヤには伝えてあるんだけど……ん、またメールだ。なになに？

『背中に母さんの胸が当たってうふふふ』

死んでしまえ。

『それでは！　新郎新婦の入場です！！』

おっと、腐ったメールに気をとられているうちに決定的瞬間が！

人数が少ないわりには大きな拍手に祝福されながら姿を現したのは――意外な光景だった。

タキシードにウェディングドレス、これは予想通り。でもサエちゃんがタキシードでカカがウェディングドレスとは……てっきり逆だと思ってた。だってカカのほうが男っぽいし！

「くっ、カカすけ綺麗じゃないのっ！」

悔しそうなサユカちゃんの言葉に素直に頷いた。確かに可愛いというより綺麗だ。まさか僕がカカにこんな言葉を使う日が来るとは思わなかった……僕も歳をとったか。

それが派手なドレスだったなら、ただ可愛いと思っただろう。しかし実際にカカが着ているのは、どちらかというとシンプルでスレンダーなドレスだった。トップとスカートにだけあしらわれたレースが上品さを、肩紐の小さな花と胸元のコサージュが清楚な可愛らしさをアピールしている。髪には小さな花々が揺れている細工が美しいシルバーのティアラ、そしてウェディングベール。柔らかな純白、そして透明感のある白――ありとあらゆる白に包まれたカカはいま、紛れもなく綺麗だった。

そしてサエちゃん、シックなブラックのタキシード。サエちゃんほどの細身が着ると、不思議と可愛らしさと格好よさが同居したよ

うな印象を受ける。どちらとも言えるのだ。長い髪は後ろで一つで縛った彼女はまさしく男装しているのだが、何よりも男装しているのは顔だと思う。うん、なんかキラーンって感じで色男風にカカを見ている。

「行こうか、まいはにー」

「はい、だーりん」

ほんとにもうなんなんだろねコレ。またサユカちゃんうずくまってるし。泣いてるのか？　や、多分笑いをこらえてるんだろう。

色んな意味をもつ生暖かい視線を浴びながらゆっくり歩くカップル二人は、のろのろと勿体つけて歩いたあとに会場の奥に設けた主役席へと着席した。

『さてさて皆様、お手にグラスをお持ちください』

各々、テーブルに並べられたシャンパングラスを手に取った。

『それでは、乾杯の音頭をテンカ先生にお願いしたいと思います。先生、どうぞ』

呼ばれたテンはニヤニヤしながらマイクを受け取り、

『ありえねー。乾杯！！』

とても正直な感想を口にしながらグラスを掲げ、披露宴のスタートを告げるのだった。

## カカの天下６１４「お結び式　乾杯しまーす」（後書き）

なんだかまたもや予想より一話ほど長くなりそうです。それもこれもこの子たちが「ありえねー」なことするから笑

と、いうわけで。明日の話で皆様のプレゼントをーと思っていたのですが明後日になりそうです。なので明日一日の間ならまだプレゼントＯＫですよ＾＾

……もう、かなーりいっぱいきてるんですけどね笑

## カカの天下６１５「お結び式　雑談しまーす」

乾杯、ということでトメです。

妙に綺麗な花嫁姿のカカを見て、すでに娘を送り出す父親な気分です。や、僕は兄だったはずなんだけどな。うう、涙が……

でねーよ。

「サエおねーちゃん格好いいです！　カカ、似合ってます！」

「キャー！　サエサマー！！」

クララちゃんが興奮するのはわかる。しかしそこな母親、娘に様づけしつつ鼻血たらしながら『サエ命』のハッピ着て自作のうちわ振り回すってどうよ？

「キャーキャーキャー！！　カカサマー！　サエサマー！！」

うっさいなぁ歳甲斐も無く。でもサエちゃんしか見えていないわけではなく、うちわには『カカも命』って書いてあるので許す。

「キャッキャ！　カカタマー！　ブタタマー！　カニタマー！！」

タマちゃんお腹すいてんのかな。

「わたちタマー！！」

なんかのギャグみたいなシメ方だな。

「……ぜー、ぜー、ぜー」

あ、サカイさんバテた。やっぱ歳だな。

「カカちゃんイイじゃん！　お姉さんびっくりしちゃったよ……いいなぁ、あたしと違って女装が似合って」

女装て。アンタと一緒にすんなや。

お、あそこの二人は？

「なぁサラさんよ。確かにあいつら似合ってるけど……あえて普段のイメージと逆にした理由はなんかあんのか？」

「だってタキシードは黒いじゃないですか。だからサエちゃんに」

「なるほどな。今サラさんが皿を持ってるのとおんなじ様な理由ってわけか」

「り、料理食べるときは仕方ないじゃないですか！　テンカさんだってお皿持ってるし！」

「残念だったな。天ぷら食ってるからオレはテンだ」

テンとサラさんの組み合わせって珍しいな。ま、カカを中心にしょっちゅう集まって何かやってるからな、僕の知らないうちに仲良くなったのだろう。

さて、ここまで祝われている当の本人たちはというと……

「サユカンサユカン」

「なによっ」

カカとサエちゃんは仲良く腕を組み、

「にやり」

「ふふんー」

「う、羨ましくないもんっ！」

こんな感じにサユカちゃんで遊んでいた。

「サラさーん！」

「はいはーい？　呼びましたかカカちゃん」

「サユカンが羨ましがってるからさ」

「だから違うわよっ！　わたしはこれっぽっちも羨ましくないし華やかな衣装なんか気にもしないから――」

「サユカンにも衣装を着せたげて」

「お願いするわっ！！」

前後の文章が繋がってませんよ？

「ふふ、了解しました。サユカちゃん、こちらへどうぞー！」

「はいっ！　わーわー、なになに？　何を着れるんですかっ」

数分後。

サユカちゃんは結婚式に無くてはならない役――いや、無くてはならないモノの姿で現れた。

「ぶはははははははははははは！！」

真っ先に大爆笑したのはテンだった、そして笑いは光の速さで会場へと広がっていく。僕も悪いけど……吹き出した。

「なんなのょこれはっ！？」

「ぶ、ぶぶっ、ブーケですあはははは！」

そう、最後に花嫁が投げたりするあの花束だ。その花束が――サユカちゃんの頭に咲いていた。さながら花束に顔と手足がにょきっと生えたような、とっても愉快な生き物となっている。や、可愛いんだけどさ……ウケる。

「くははははっ！　ょぅサユカ！　なな、投げてやろうか！？　あはは！」

「教師のくせに生徒を指差して笑ってんじゃないわよっ！！」

「待てテンちゃん、投げるならあたしの方が適任だよ。あのブーケ

は重すぎる！」

「重いっていうなっ！！」

「サユカちゃん、よかったねー。ブーケを受け取った人は次に結婚できるんだよー。ね？　カカちゃん」

「サユカンの場合は受け取ったというより、ウケ取ったって感じだけどね」

「カカちゃんうまーい！」

「夫婦漫才してんじゃないわよそこっ！」

「はい、タマ様。たかいたかーい、これでいいですか？」

「じょー」

「わたしの頭に水をやるなぁっ」

「元気になーれ」

「ならんわっ！！」

元気じゃん。

いやはや。身体を張って式を盛り上げようなんて、友達がいのある子じゃないですか。うんうん感心感心。それに比べてこっちの大人は……はしゃぎすぎて一人ダウンしているサカイさんに水を飲ませつつ、僕は皆のサユカちゃん遊びを楽しく見守っていた。

『――さて、ここでお二人の馴れ初めについて、少し触れてみたいと思います』

おお？　盛り上がりがひと段落したところでキリヤのマイク音声が響いた。

『その前に一言。サユカちゃん、ぐっじょぶ』

「嬉しかないわよっ！」

『あっはっは！　いやはや、ウケどころを取られてしまいましたが、こちらもなかなか面白いですよ』

二人の馴れ初めね……大体は知ってるけど、改めて聞くのもいいかもしれないな。キリヤも直接二人にインタビューして聞いたらしいし。

『二人が初めて会ったのは――男子便所』

マテや。

『そのときサエちゃんは苛められてました。便器味の水を飲めと無理やり押さえつけられて――』

え、えぐ……！

『そこにカカちゃんが登場！　苛めていた男子の便器味の水どころかステーキまでご馳走し、サエちゃんを助け出したのです』

何食わせた、オイ。

『そのサービス精神、うちのファミレスでも見習いたいと思います』

頼むからやめてくれ。

そもそもそんな話をされちゃ、せっかくの料理がマズくなる――

『貸しな！！』

『おっと！？』

あれ、キリヤがマイクを奪われた！？　奪ったのは――給食の鬼と名高い南のおばちゃん！！

『そんな話をされちゃ料理がマズくなる……今、そう思ったやつがいるね！？』

ギクッと身を震わせる人多数、もちろん僕も。どんだけ鋭いんだこのおばちゃんは！

『そいつらは罰としてこれを食いな！！』

ギクッとなった人の前へとなぜかこの上なく正確に並べられる皿。その上には――なんか、赤黒い、臓器をそのままむしってきたような料理が……！！

『食いな！！』

や、でも。

『食いなっ！！』

でも、これ。

『食えやぁぁぁぁぁぁっ！！』

姉をもビビらす咆哮に、僕は慌ててその料理を口に入れた。不気味なほどにあっさりとスプーンで切れてすくえたその物体は――とてつもない味がした。食べた僕らは揃って口元を押さえて悶絶する。

そして、声を合わせて言った。

『美味すぎる……！！』

『はん、汚物の話や臓器の見た目ごときでマズくなるような料理は作っちゃいないんだよ。ナメてもらっちゃ困るね！』

勝ち誇った顔で去っていくおばちゃん……負けたぜ。

『さてさて、なにやら私の出番が奪われまくりでちょっとジェラシー、キリヤンったらやんやん、なわけですが』

酔ってんのかキリヤ。

『話を戻します。そんな、サエちゃんを苛め、カカちゃんに成敗された思い出の人が――会場にいらっしゃってます！』

また微妙なやつ呼んだなー。公開処刑にでもする気か？

『どうぞー！』

でもちょっとわくわく。

……ん。

あれ。

『おかしいですね、ちょっと待ってください――もしもし、ゆーた君？　何やってるんですか……え？　本当ですか？　そう、ですか……』

電話を切ったキリヤは、とても残念そうに、

『申し訳ありません、思い出の人は、サエちゃんのファンクラブの皆様によって……その、色々ありまして、現在、東京湾だそうです』

どゆこと！？

「あれ……？　そういえば、さっきから弟ちゃんと連絡が取れな――ま、まさかそれってヤナツのことじゃないですよね！？」

『残念です』

「残念ですじゃなくて！！」

『ええ、もうすぐ東京湾に流れ着くころだということで』

「ここでそんな説明するってことはやっぱり！？」

『続きまして――』

「続かないでくださいよぉぉぉぉぉ！」

サユカちゃんの次はサラさんいじりか。うむ、またこれも楽しい……本気じゃないよな？　まさか、な？

『カカちゃんとサエちゃんの絆を決定づけることとなった方たちを、お呼びしています。感動の再会です』

お、誰だ誰？

「あの、私の弟ちゃんは！？」

『大丈夫ですって』

「本当に？」

『ええ。だって私がここで頷いたら、私が人殺しになってしまうではないですか。だから大丈夫です』

「一ミリたりとも安心できる要素が見えないんですけど！？」

『はっはっは！　サラさんの慌てっぷりを見て主役のお二人も満足のご様子。というわけでそろそろこの人は無視して登場していただきましょう、どうぞ！！』

弟を心配しまくる優しいお姉ちゃんを放っておいて、皆の視線は開く扉へと注がれる。

そして、現れたのは懐かしの――

## カカの天下６１５「お結び式　雑談しまーす」（後書き）

皆でわいわい雑多なお話。それでも一言しか台詞がない誰かさん。哀れなり。

さて、明日は感動のご対面と共にプレゼント贈呈です。はてさて誰のプレゼントが選ばれるやら……お楽しみに＾＾

**カカの天下６１６「お結び式　贈呈しまーす」**

引き続きトメがお送りいたします。

『それでは登場していただきましょう！　どうぞ！』

キリヤの声と共に開かれる会場の扉。

――カカとサエちゃんにとって、最も思い出深い方をお呼びしますと、キリヤは言っていた。

誰だ？　ここにいるメンバー以外でそんな人いたっけ？

僕は何も聞いていなかった。

だから、驚愕した。

それを見て。

あまりにも予想外で。

ほら、会場の皆も絶句している。

目を輝かせているのはカカとサエちゃんだけ。

『皆さん、驚きの様ですね』

それも当然。

『ご紹介しましょう！』

登場したのは――

『二人が仲良くするきっかけとなった、高級かつおぶしと高級漬物と高級洗剤と高級納豆のセットです！！』

『人じゃねーのかよ！？』

カカサエ以外の声を揃えたツッコミに、キリヤは微塵も動じずに続ける。

『えー今回ですね。お二人が仲良くなったエピソードを聞いた私は、どうしてもこの方たちをお呼びしなければならないなーと思いまして』

あくまで擬人化して話を進めるのな。

『しかし集めるのは楽でした。この内の高級かつおぶしと高級漬物は、なぜか一般の方からのプレゼントとしていただきまして。差出人はレイさんといいます。なんでも夏祭りですれ違って以来ファンになったのだとか。そんな彼がなぜ二人の思い出の品をチョイスできたのかは謎です。おそらく変質的なしつこい愛の力でしょう。世の中ってふっしぎー』

そんなファンがいるとなると身内としては非常に心配なんですが。まぁ姉とか父とかバケモノ護衛がいるから大丈夫とは思うけど。

『さぁ！　お二人とも。思い出の方々に、どうかメッセージを！』

無茶言うなオマエ。

『まずはかつおぶしに！　カカちゃん』

「味噌汁うめー」

うわ適当。

『お次は漬物に！　サエちゃん』

「ご飯うめー」

『洗剤に！　カカちゃん』

「驚きの白さ」

『納豆に！　サエちゃん』

「ご飯うめー」

『ありがとうございます！　皆さん、大きな拍手を！』

わけもわからず手を叩く一同。とりあえずわかったことは一つ、サエちゃんは白米が食べたいのだ。

『さて、人気者のお二人には他にもたくさんの方々からプレゼントが届いております。まずは綺麗な花束がお二方に』

おお、普通だ。

「わー、ありがとー」

「何の花だろ。あとでお姉に聞いてみよ」

……普通だ。

『差出人は『弟より』となってます』

普通じゃねぇ！！

「誰の弟だ！？」

『わかりません。もしかしたらカカちゃんの？　だとしたら……ユイナさん、若いですね』

「その言い方ヤメロ！！」

確かに若いけどさ！

『しかし、この中で他に弟といったら……』

「ま、まさか私の弟！　ヤナツ！？」

『でも東京湾ですし』

「決定なの！？　ねぇ、それ決定なの！？」

『続きましてー』

サラさんいじるの好きだなぁキリヤ。もしかして好きな人は苛め

たくなる例のアレか。

『差出人はアレスさんで、ビッグでフラッシュなプレゼントが届いております。どうぞ！』

暗くなる照明、それと同時に現れたのは巨大な光る箱！

しかし眩しいわけではなく、静かに、幻想的に光るその箱は――キリヤが雇ったスタッフの手によってゆっくりとカカたちの目の前へと運ばれていく。箱は随分と重量があるらしく、車輪付きのカートに乗せているが、それでもスタッフは重そうにして運んでいた。

やがて二人の目の前に運び終わると、箱から発せられる光を浴びたカカのドレスが煌びやかに輝いた。まるで妖精の姫君のよう。そんなクサい台詞が出てくるほど、そのときのカカは美しくて。

カカが箱を手に取り、開ける。

すると、さらに僕のクサい台詞が炸裂した。

「なまぐさっ！！」

『たっぷりぎっしりホタルイカだそうです。綺麗でしょう？　でも生臭いですねぇあっはっは！』

いきなり漂いまくる海のかほりに僕らは辟易し、感動も忘れてさっさとホタルイカ箱を退場させた。何を思って送ってきたんだ、あんなもん。

『続きまして、愛の貴公子様より、高級黒豆セットが届いておりま

す』

次に二人の前に差し出されたのは、大きな器にこんもりと積み上げられた黒豆。煮豆かな、あれは。

『二万円だそうです』

生々しいなオイ。さっきのイカには負けるが。

『サエちゃんを食べる気分でお召し上がりください、とのことです』

次の瞬間、カカはものすごい勢いで豆を貪り食い始めた。

『あの……カカちゃん？』

「サエちゃんは私が食べる！！」

『えーと、サエちゃん。いいのですか？』

「いいですよー。どーせ夜になれば私がカカちゃんを食べるんですからー」

そうそう、結婚初夜には花婿が花嫁を――ってサエちゃま？　なんであなたってばたまにそんなにアダルティなんですか。

『はっはっは、わかりました。カカちゃんがサエちゃんを食べ尽くし、むしゃぶり尽くしたところで次にいきましょう！　えー、マツタケが七本、ちくわが五本届いてます』

「カカちゃん、私たちって業者さんにファンが多いのかなー」

『差出人は、ぶーたんさんです』

「ここまできたら、その人も食べれそうだよね」

とんかつ屋にありそうだ。

『お、次は普通です。若木瀬さんからお二人へ祝辞が。『Ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎｓ！　ａｎｄ　Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ！』だそうです』

「コング拉致ローション？」

コングを拉致ってナニする行事だそれは。

『コングラッチュレーション。おめでとうという意味です』

「わー、ありがとー」

『さてさて、次はサイボーグ様から。すごいですね、サイボーグに知り合いがいるんですか、強そうですね！』

どっかで聞いたフレーズだな。

「はん、あたしのほうが強ぇ」

姉の言葉に頷く一同。これもどっかで聞いた話だ。

『えー読みます。出来心でクッキーを贈ったら、悲しい話にしてしまい、本当にスイマセン。お詫びにサエちゃんとお揃いの四つ葉の

髪留めを贈ります。カカは飾りとして使って下さい。本当にスイマセン、だそうです』

「お揃いのものくれたから許す！！」

よかったねサイボーグさん、姉に破壊されなくて。

『続きまして雑貨屋の天上さんから、判子が二つ届いております』

「おー！　『酒井香加』って書いてある！」

「こっちは『笠原小枝』だよー」

おお、味なマネをするなぁ雑貨屋。

「ねね、サエちゃん！　これ早速押そうよ！」

「そだねー！」

「ねぇねぇトメ兄！　なんか押すもの持ってきて！」

「なんかって言われても、判子押すような書類なんて……」

「借用書ください」

「サエちゃん……君さぁ、君さぁ、もしかして金に困ってるのか！？」

「あははー、これさえあれば私も笠原家だねー」

「何をする気だ！？」

「おかーさん、あげるー」

「一番渡してはいけない人に渡すなぁぁぁぁぁぁ！！」

はぁ、はぁ、なんとか阻止できた。じ、実印登録はしてないし、大丈夫だよな？　や、でもサカイさんなら何かをどうにかしかねない。注意しなければ。

『さてさて、他にも多数のプレゼントが届いてあります。衣服類も多かったので、まとめて後でご覧ください』

ほんといっぱいきてるんだなぁ。

『なお、私をあげる、俺をあげる等のメッセージも多数いただきましたので、焼却しておきました』

ぐっじょぶ。

『最後に、よくわからないプレゼントを紹介します。ええと、カカちゃん宛てですね。調査員鶏助さんという方から調査書が届いているのですが』

「なにそれ」

『なにやら先日の連続ひったくり事件についてらしいです』

ひったくり？　はて、最近そんなことが身近であったような。

「んじゃ私読んでみるね」

カカはその調査書を音読し始めた。

『その日、いつものようにひったくりをしようと、人通りの少ない道を物色していた僕が見つけたのは、いかにも高価そうなバッグを不用心に持っていた美少女と、その美少女を変態的な眼差しで見ながら隣を歩く男の二人組でした。

僕はその二人の背後に近付き、慣れてしまった動作で美少女の持つバッグを奪い取り逃げました。（なぜか二人は追いかけてきませんでした。きっと美少女のほうは、男の変態的な眼差しに恐怖し動けなかったのでしょう）

安全圏まで逃げ切ったと感じた僕は、その日の収穫を確かめようとバッグを開けると……あ……あぁぁ……そこからは覚えてません……気がついたら、ここにいました……ただ、バッグの中にとても恐ろしい何かを見た……そんな気はします。

――以上が、今回起きた不可思議な事件の被害者からの証言である。

この事件の発端となったバッグについてだが、被害者である男性を発見した警察官（名前は忘れた）によると現場には何も残っておらず、男性の虚言ではないかとの見方もあった。しかし、その男性が自身をひったくり犯だと自供した時点でこの虚言は意味を成さず、意図も不明だ。被害者――いや、被疑者の言葉には信憑性があるとして、何者かが持ち去った可能性も考慮しつつ捜査が続けられている。

また、そのバッグの所持者であった少女が何らかの事件に巻き込まれていた可能性もあり、少女と事件当時その少女と一緒にいた男についても詳しい情報を集めている』

しーん、となる一同。

誰かが言った。

「なにこれ」

誰かが答えた。

「ギャグだろ」

全員が頷いた。

『一般の方々からのプレゼントは以上となります』

というかさ。

色々くれたこいつら……誰だ？

## カカの天下６１６「お結び式　贈呈しまーす」（後書き）

若干カカラジっぽくなった今話です。
プレゼントを贈っていただいた皆様、ありがとうございました＾＾ここで紹介されなかったプレゼントもさりげにまだチャンスはありますので、希望を捨てないで見守ってください笑
でも正直、サエちゃん宛てのプレゼントが一番おもしろい＾＾

# カカの天下６１７「お結び式　挙式しまーす」

カカです。

今日は私とサエちゃんのお誕生日パーティ結婚式風、ということで、皆と楽しくわいわいとやってます。

『それでは次は――おお？』

シュバッ！　という無駄に格好いい音と共に、どこからともなく降ってきたのは……お父さんとお母さん！！

「遅くなってごめんね！」

「俺様ただいま参上！」

「馬がほざくな」

トメ兄の言葉に頷く。お父さんはあくまで私に顔を見せたくないのか、私が運動会で怪獣アネゴンの頭部に使った馬の被りものを装着していた。ダサい。

「きゃー！　カカ君てば可愛い！　結婚して！」

「か、母さん！　俺というものがありながら」

「馬がほざくな♪」

「ぶひぃぃぃぃん！！」

「それ豚だろ」

ダメージを受けてるお父さんを尻目に私はお母さんに抱きしめられてかいぐりかいぐりあああああドレスがドレスがぁぁぁぁぁでも柔らかくてあったかくていい匂いぃぃぃ――おろ？

「あら？」

お母さんの抱きしめ攻撃から引っ張り出された私はくるくる回りながらサエちゃんの胸に？

「おれの女に手を出すなー」

「さ、サエちゃん……！」

「手を出すなら、お金」

「サエちゃぁぁぁぁぁぁん！！」

本当にお金に困ってるの？　なら貸すよ？　五千円くらいなら持ってるから！！

「サエ君もかーわいー」

あ、サエちゃんもお母さんの抱きしめ攻撃に！

「おろー？」

と思ったら私と同じように引っ張り出されてくるくる回りながら、

今度はサカイさんの胸に。

「俺の女に手を出すなー！！」

待てぃ、私の女だ！

「全部あたしのだ！」

「お姉関係ないでしょ！！」

「クララも混ぜるです！　俺の女はどこですか！？」

「知らないよ！！」

「タマちゃんです！」

「なんで自己紹介してるのー？」

そんな女同士の合戦を繰り広げている後ろでは、

「なぁ馬父」

「吸うか！！　そのボロいの、なんだ？」

「それだと馬の乳のように聞こえるな。吸うか？」

「ああ、なんだか東京湾辺りで樽に詰められて浮いてたのを道中で見かけたから助けてきた」

「ヤナツゥゥゥゥゥゥ！！」

「おおサラさん。よかったな……しかし父さん。樽詰めされてたのによくわかったな？」

「顔だけ出てたのだよ」

「うわ、惨いわねっ！」

「……俺……二度と、苛めしない……だって、したら……死ぬもん」

「うん……うん……怖かったね……生きててよかったね……」

「おぉ、そういえばトメよ。ふっふっふ」

「なんだよその意味深な笑いは」

こんなやり取りがされていた。すると、いきなり私の携帯からメール着信音が聞こえてきて、

「んしょっと」

「なぁカカ。てめぇ今どっから携帯出しやがった？」

「ん、ほら。このドレスごわごわしてるから挟むとこいっぱいあるんだよ」

「んなもん挟むなよ、せっかく綺麗なドレスなのによ」

「テンカ先生みたいに胸で挟めればいいんだけど」

「……オレは無理だ」

「残念です」

「うっせぇ！」

怒られちった。さて、メールのほうは？

『このボロクズを拾ったおかげで、より長く背中に当たる母さんのおっぱいを堪能できたぜへへへ』

……

「む？　トメよ。メールはきておらんのか？」

「ん、きてないぞ。カカにはきたみたいだけど」

ピキ、と固まる馬。

ぎ、ぎ、ぎ、とこちらを向く馬。

「間違エチャッタ♪」

私はニッコリ微笑んだ。

「死ね」

馬は消えた。でも多分死んでない。隠れて泣いてるだけだ。残念だ。

『さてさて、ちょうどよく皆揃ったことですし、そろそろ挙式のほうに移りたいと思います』

おーパチパチパチ！　ナイスだよキリヤン、どこぞの最低馬がいなくなったときに「ちょうどよく」って言うあたりがシビれるね。

『えー、新婦のご要望により、まずは指輪交換ならぬプレゼント交換からです！　新郎、プレゼントをどうぞ』

よしよし、まずはサエちゃんのをもらわないとね。私のプレゼントは最後じゃないと。

「ちょっと待ってねー。お母さーん！」

む、サエちゃんはサカイさんと、ごにょごにょ何やら相談中……

やがて私のほうへと振り向いたサエちゃんは申し訳なさそうに頭を下げた。

「ごめんねカカちゃん、私のプレゼント、間に合わなかったみたいなのー。もうちょっとしたら渡せると思うから、待ってくれる？」

「うん、いいよ」

私にとっては今の時点でもう幸せなわけで。それをさらに幸せにしてくれるっていうなら、どれだけでも待つよん。

「ごめんねー。その代わり、絶対に最高のプレゼントだから期待しててー」

おー、最高ですか。私にとって最高っていったら相当なもんよ？
期待期待。

『ふむ、どうやらサエちゃんのプレゼントはまだ先になるようですね。それでは――カカちゃんのプレゼントに移りたいと思います！』

そして、私のプレゼントも最高で、相当なもんよ？

『それでは皆さん、入り口のほうへ移動！！』

は？　と首を傾げる一同。

「カカちゃん、どういうことー？」

「えへへ、今から最高のプレゼントをあげるんだよ！」

『それでは新郎新婦、入場！！』

再び始まった、この言葉。

トメ兄たちはチャペルまで借りて誓いの言葉とかを演出してくれるつもりだったんだけど、そこに私は待ったをかけた。

「カカちゃん、これ……」

「へへ」

――だって、普通の聖堂じゃ狭すぎて入場できないもんね。

「サエちゃん、この間の運動会で出来なかったでしょ？　二人三脚」

私の足とサエちゃんの足、そしてサカイさんの足はぴったりと紐で結ばれていた。

「だからやろう？　今、親子で。短い距離だし、障害物もないけど……これが私のプレゼント」

どうかな？　私としては最高のタイミングでの贈り物だと思うんだけど。

「カカちゃーんー……あぁたって子はぁー……はぁぅー……おばさん感動だよぅー！」

「サカイさんも喜んでくれた？」

「いま感動の鼻血を抑えるので精一杯だからちょーっと話しかけないでー！！　うぅぅぅー！」

よし。愛は鼻から出る、でお馴染みのサカイさんから最高の言葉いただきました！

「でさ……なんで僕たちも繋がれてるんだ？」

「ん？　私は、私とサエちゃんだけの結婚式をしたい、なんて一言も口にしてないよ？」

なんだか皆、勘違いしてたみたいで。楽しかったから放っておいたけど。

「しっかし、こりゃやりすぎじゃねぇか？」

「こ、転びそうです。コロちゃんになってしまいます」

「サラさん、味しめたね。まー隣があたしだから大丈夫さ」

「お、俺、一緒にやっていいのかな？　元はと言えば俺のせいで……」

「ふふ、そこの君？　仲間はずれなんて寂しいこと、させないから安心なさいな♪」

「しくしく……しくしく……」

「あの、ユイナさんっ！　なんか仲間はずれにされてる人のっぽい泣き声が聞こえるんですけどっ！　気のせいですかっ！？　あ、気のせいですか、わかりました」

「おまえらあしながい！！」

「タマ様！　タマ様が短いんですよ――あ痛っ！　痛い痛い！」

皆で足を結んで横一列。

長い長い、横一列。

「さ、始めようか！」

「なぁカカ。本当にこのままやるのか」

「結婚式って、ずっと一緒にいようってことでしょ？　じゃあ皆でしようよ」

変かな？　こう思うのって。

結婚式は、そういうものじゃない？

もっと別の意味があるもの？

でも、いいよね。

どうせニセモノなんだもの。

だったら本物よりも、欲張ったっていいよね！

「さて、適当に作ったあの台座までの数メートルだけど……僕らはちゃんと歩けるのか？　こういう時はどうすればいいよ、先生」

「あん？　オレかよ」

「頭がいいはずの学校の先生に任した」

「そうだな……一番端のやつ！」

「あ、ほらタマ様。はーいって」

「あい？」

端は一番失敗しにくいから、一番危なっかしいタマちゃんをそこ

に配置してある。

「右って言え！」

「ひだりー！」

「ケンカ売ってんのか！？　まぁいい。隣のやつ、今のと逆の方向を言え」

「え、あ、タマ様の隣、僕？　は、はい！　み……右」

「その隣のやつ、逆の言え」

「あたしか。ヒッダーリィ！！」

「いい発音だな姐さん。じゃ、その隣も同じように言ってけ」

テンカ先生お姉から反対側まで順に「右」「左」「右！」と続いていく。

「よし。今自分が言った足が、最初に歩き出す足だ！　間違えんなよ！」

えっと……あ、そうか。なるほど、確かにこれで歩ける。何人何脚かわからないほどたくさん繋がってても、歩く原理さえ知ってれば結構簡単なんだね。

「じゃ、いくぞ。カカ、おまえの号令で動く。いち、に、いち、に、で進むぞ？」

「ほいさ」

「いち、で一歩だ。いいかてめぇら！　一人転んだら全員転ぶからな！　気合いれてやれよ！」

おお！　と意気込む私らの声は吼えるよう！

「いっくよー？　せーの、いち！」

一歩！

成功。でもバランスを崩しかけた。さすがにこれだけ繋がってると、足にかかってくる力を感じ取りにくい。

「に！」

二歩！

成功。今度はうまくいった。誰かが転びかけたようだけど隣の人が支えたようだ。

こうして。私たちは必死に、気合をいれて、一歩ずつ進んでいった。

バカらしい、そう言う人もいた。

なにやってるんだろう僕ら、そう言う人もいた。

いまわたしに話しかけるなっ！　そう言う人もいた。

そんな私たちは――揃って楽しそうに笑っていた。

そして。

「はぁ……はぁ……」

誰の息かわからない。誰もが息を切らしていたからだ。

「歩くのって……ひどく疲れる作業だったのねっ！」

「でも、なんとか辿り着いたぞ……だんだん楽しくなってきた、僕」

「はっはっは！　さぁ出番ですよクララちゃん！　私の代わりに神父役をやるのでしょう？」

「ええキリヤ！　クララやります！　誓いのキックです！」

「あー……クララちゃん？　それは違います。どう違うのか今さら説明するのも面倒なので、別の言い方にしましょう」

「どんなですか？」

「誓いのぶっちゅー！　にしましょう」

神聖な口付けが途端に堕ちたね。

「クララ了解です！」

さぁ頑張れクララちゃん！

「えっと、私たちは！　悩めるときも、健やかなるときも、笑い、笑い、えっと……とにかく笑い、皆一緒にいることを誓いますか！？」

ある人は楽しそうに。ある人は恥ずかしそうに。ある人は呆れながら。

各々で「誓います」と宣言して――ラストだ。

行けクララちゃん！

「誓いのぶちょー！！」

「どこの部長だよ！？」

ズルッと皆で仲良くコケてしまった。多分足を結ばれてなくてもコケたと思う。それが妙に可笑しく思えてしまって、皆でまた仲良く大爆笑するのだった。

「カカちゃん」

そんな中、なにやら抱きしめられる感触が？

「どったの、だーりん」

「ありがとー……」

……あはは、困ったな。ドレスが濡れちゃうよ。

黙ってたと思ってたら、涙を我慢してたんだねサエちゃん。

「本当に……ありがとー……！」

いやはや、嫁冥利につきるね。

「よぅ、お二人さん」

「トメ兄？」

「まいったよ、おまえの思いつきには。僕はてっきり本気で擬似結婚するもんかと」

「まだ法律変えてないしね」

「変える気か！？」

「あたぼーよ」

でも、今は皆で結婚。

皆で幸せに。

皆で、いつまでも一緒にいよう。

この笑い声に誓って。

足だけじゃなく絆を結ぼう。

未来永劫、切れることのない笑いの絆を。

# カカの天下６１７「お結び式　挙式しまーす」（後書き）

お結び式、これにて終了です＾＾

なぜお結び式というタイトルだったのか、これでもうわかっていただけたかと思います。

なんだかんだで誕生日話はいい話にしてやろうという思惑が出てきてしまいましてふふふふ。読者の方々が和みまくってくだされば我は本望でござる。なので和んだ人は挙手してくださいね＾＾

さて、明日はもらったプレゼント整理なんかするみたいですよ…？

# カカの天下６１８「整理しまーす」

こんにちは、トメです。

昨日の結婚式的大騒ぎから一日経ち、まだ疲れが残る中。僕はカカと一緒に、もらったプレゼントの整理をしています。

「しかしほんとに妙な衣服が多いな……何に使うんだこれ」

とても外で着れないようなオモシロ服ばかりなんだけど。

「今度ファッションショーでもする？　サカイさんもいっぱい服くれたし」

「んー、それもいいかもな」

どこで何のためにするのかは皆目さっぱりだけど、また皆で集まって開催すれば面白そうではある。

「お、ほらカカ。タマちゃんからのバースディカード」

「……う」

「しまっとけよ」

苦い顔をするカカ。それも昨日にちょっとしたエピソードがあったからだ。

誓いの部長が終わった後（意味わかるよな？）、いくつかイベン

トがあった。その内の一つに『タマちゃんからのプレゼント贈呈』というものがったんだけど……

『ありがとう、タマちゃん！』

『んー！』

ニコニコしながらカカが受け取ったケロリンのイラストつきバースディカードに書かれていたのは、拙い文字で『おばさんたんじょうびおめでとー！』という言葉。

『誰がおばさんだ！？』

立場的には合ってる……のか？　姉がタマちゃんの母親だとしたら、カカは叔母さんだし。

『ばばぁー！』

『なんであたしを指差す！？』

『もっとばばぁー！』

『なんで僕を指差すの！？』

こんな風に姉と僕を翻弄したりしてた。楽しかったなぁ。

あー、そういえばアレなんとかしないとなぁ。いやね？　そのあとのイベントでウェディングケーキ入刀があったんだけどね。ケーキもこれまた見た目が普通に立派なウェディングケーキで、これがゲンゾウ三姉弟のプレゼントということだったんだけど……

『どうも、キリヤです』

『なんで今さら自己紹介してるですか？』

『ほら、回想場面って誰が喋ってるのかわかりにくいじゃないですか』

『クララ納得です！』

『それでは新郎新婦による共同作業に移りましょう！　ケーキ、入刀！』

『って、なんで二人とも包丁持ってるのよっ！　サユカです』

『や、だって渡されたから。カカです』

『なんか夜須さんって人から高級包丁セットが贈られてきたからいっぱいあるみたいだよー。サエです』

現在とてもわかりやすい回想をお送りしております。

『クララいいこと思いつきました！　さっき指輪交換できなかったので……包丁、交換！』

『してどうするのよっ！』

『じゃあ、交戦！』

『死ぬわっ！』

『クララしょっくです！』

『交戦とな！？　ふ、カツコ』

『魅せるか？　クソオヤジ』

そして包丁を握ったバケモノ二人のショー的な戦いが始まった！

ズガガガガガガガガガガガガガガガガッ！

速すぎて見世物にならんし。

というわけで、今うちには包丁がいっぱいあります。父さんにでもあげるかなぁ、手裏剣の代わりにこれ投げろって。姉と戦ってたとき投げてたっぽいし。

「トメ兄、花もいっぱいあるね」

「そだった。しばらくは飾っておくか」

花といえば姉とテンのプレゼントだな。

『ったく、このプレゼントを考えるのにすんげぇ悩んだんだぜ？　テンカだ』

自己紹介はもういいよ回想メンバー。喋り方で大体わかるから。

『えー！　次はあたしが自己紹介しようと思ってたのに！』

はいはい、回想進めなさい。

『ちぇ……グレてやる。群れてやる。濡れてやる』

後半二つ、ナニ？

『こほん。あーっと、カカ、サエ？　これがオレと姐さんで必死に考えたプレゼントだ！！』

『わー、バラだー！』

『必死にって、先生。別に普通の花束じゃん。嬉しいけどさ』

そう、普通の赤いバラの花束と黒いバラの花束だったんだけど……

『ほれ、赤いバカと黒いバカ』

『……それが言いたかっただけ？』

『くだらねぇだろ！？　ふはははは！』

『それこそがあたしたちの大好物！　あっはっはっは！！』

バラを渡してバカ笑いするバカ二人。バラをあげたほうが棘があるとはこれいかに。

まぁ、そんな阿呆なことを必死に考えていた場面を想像すると頬も綻ぶ気もするがね。あと面白かったのがサラさんがサエちゃんへあげたプレゼント。

サラさんから手渡された機械をしげしげと眺めるサエちゃん。

おそるおそる触りながら、ひっくり返してみたり、穴を覗き込んでみたり、スイッチらしきところを突いてみたり。

そしてスイッチを入れ、実際に機械が作動するのを見て、塾考したサエちゃんが出した結論は――

『掃除機！？』

『ドライヤーです』

即行で否定され、そのやりとりに周りは大爆笑。

『あ、あの……か、髪乾かすの大変だと思って新型の……ぷくく』

『いいもんいいもんー！　これだけ立派なら掃除機にだって使えるもんー！』

間違いなくゴミを吹き飛ばすだけなのだが、カカは『そーだね、よちよち』と新郎の頭を撫でていた。和む。

あとはタケダの親戚っぽい人から打ち上げ花火が届いてたんだよな。結局使う機会はなかったけど取っておこう。あと……なんかメッセージカードと花を添えて一緒にS字フックが届いてたな。よくわかんないけど、メッセージは温かいものだったから赤いフックはカカ、黒いフックはサエちゃんが持つことになった。持って何に使うのは甚だ疑問である。

「あ、トメ兄。そろそろ待ち合わせの時間だよ！」

「そっか。じゃ出かけよう」

整理作業は中断、これからカカサエサユカと携帯ショップへ行く予定だ。

サユカちゃんが選んだ携帯を、四人でお揃いにする。これが僕とサユカちゃんが考えたプレゼントだった。機種は先日こっそりサユカちゃんと二人で出かけたときに決めていた。でもそのことがバレてどこぞの新郎新婦に「でーとだ」「でーとだー」とか色々とツッコまれることになるんだけど――それはまた、別の話。

ともかく、たくさんのプレゼントをもらえてよかったな。カカ、サエちゃん。

それにしても色々くれたおまえら誰だ。

## カカの天下６１８「整理しまーす」（後書き）

後日談的なお話をあっさりと書いてみました。綺麗な終わりもいいものですが、あの後なにがあったのかも書きたかったので＾＾

いろんな衣服類を贈ってくださった皆様、本編の通り、どこかでファッションショーなんかでカカたちが着ることになると思いますので、またお楽しみに＾＾

そう……どこかで。

そう……多分、カカたちが。

あと……その他のものも、多分どこかで笑

――さて、残るはサエちゃんの誕生日を残すのみとなりました！

プレゼントはまだ受け付けてまーす！

でも……サエちゃんのプレゼントは一番レベルが高いので、なかなか紹介されないかも？笑

あんパンの更新は誕生日終わってからかなぁ……遅れまくってすいません＾＾；

## カカの天下６１９「結婚とは何なのだろう」

ただいまーっと、トメです。

仕事から帰ってきた僕は適当に着替え、居間へと戻ってきたのですが……

「……ぱり」

えーと。

「……ぽり」

なんか、テーブルに肩肘つきながら煎餅かじりつつボケーっとテレビを眺めてる小学生がいます。多分うちの妹だと思うんですが、なんか背中が煤けている風にも見えます。

見ているテレビの内容は――

『先輩！　仕事やめるって本当ですか！？』

『……ああ』

『やめてください！』

『んだとてめぇ』

『いえ、やめることをやめてください！』

『わかりにくい言い方はやめろ！』

『二人共もうやめて！！』

わけわからん。

「なぁカカ。何をたそがれてるんだ？」

「私たち……結婚したんだよねぇ」

「……さも僕とアナタが結婚したみたいな言い方はやめてくれませんか？」

「なんで一緒に暮らしてるのがトメ兄なんだろ」

「要望に応えてくれてありがとう、とても不愉快だ」

まったくこのお子様は……や、たしかに皆で結婚って言ってたから、僕とも一応結婚したことになるかもしれないけどさ。

「お、結婚特集だ」

「テレビか？」

見てみると、先ほどの妙なドラマは終わっていた。

『本日はですね、世に残る結婚の名言！　これを紹介していきたいと思います！』

ほう、これまた都合のいい番組で。

『えー、まず一つ目。結婚とは、二人三脚である』

「これはもうやった」

カカの言葉に頷く。この格言を作った人も、よもや本当に二人三脚しているヤツらがいるとは思うまい。

『結婚とは、人生の墓場である』

「死んでくる」

「待てぇい！！」

本当に墓場に入られたらたまらんぞ！

「冗談冗談」

「おまえは本気で墓場行きそうで怖いんだよ……」

『それでは次の名言です――あらゆる真面目なことのなかで、結婚というやつが一番ふざけている。ｂｙボーマルシュ』

「じゃ私にぴったりじゃん」

「そだな」

カカは常にふざけてるしな。

『結婚とは、その主人公が第一章で死んでしまう小説のようなもの

であるｂｙ作者不明』

「死んでくる」

「だから待てや！！」

世の偉人たちはツッコミがいのある言葉ばかり残すなぁ。

『男と女とが結婚したときには、彼らの小説は終わりを告げ、彼らの歴史が始まる。ｂｙロミュビルュス』

「じゃあこれ最終回？」

「いやいやいやいや！！」

最終回とか言っちゃダメですから！！

『よい結婚はあるけれども、楽しい結婚はめったにない。ｂｙラ・ロシュフコー』

おぉ、これは。

「私たち、楽しい結婚ができたよね」

「ああ、確かに楽しかった」

「うん……楽しかった」

「あぁ……」

「皆、笑ってたもんね……」

「うん……」

「ご愛読、ありがとうございました」

「だから最終回にすんなよ！！」

続くよ！？　まだまだ続くよ！！

『すべての悲劇というものは死によって終わり、すべての人生劇は結婚をもって終わる。ｂｙバイロン』

「……ねぇ」

「終わらないってばさ！」

おのれバイロン。誰だか知らんが強そうな名前だな。

『女房は死んだ、俺は自由だ！　ｂｙボードレール』

「死ねトメ兄！」

「なんで僕が女房役なんだよ！！」

この人もなんつーこと言うんだ。家庭にもいろいろあるだろうけどさ！

『恋は人を盲目にするが、結婚は視力を戻してくれる。ｂｙリヒテンベルグ』

「結婚って目にいいんだ」

「違う違う違う」

眼科いって結婚を奨められたらビビるよな。

『その女性がもし男であったならきっと友達に選んだろう、と思われるような女でなければ妻に選んではいけない。ｂｙジュベール』

「おー……これはなんだか私とサエちゃんにぴったりっぽい」

「この人はそんなつもりないだろうけどな」

『結婚は、デザートより前菜が美味しいコース料理である。ｂｙオーマリー』

「お腹すいたね」

「そだな」

さて、夕食にするかな。

## カカの天下６１９「結婚とは何なのだろう」（後書き）

サブタイのわりにライトな内容、いかがだったでしょうか。

短く感じますか？　実はこれが基本の長さです。～編とかやるたびにその後で「こんなにあっさりしてたっけ」と再確認しますね笑

結婚とは――

んー。

したことないからわかりません＾＾；

## カカの天下６２０「もぐもぐタイム」

こんにちは、トメです。もぐもぐ。

何がもぐもぐかというと、現在カカと二人で夕食中だからです。もぐもぐ。

「ねぇトメ兄。この玉子焼き、なに？　出血してるよ」

「ああ。前に姉がさ、居酒屋の『病院』で食べためんたい出し巻き玉子がめっちゃ美味しかったーってうるさかったから、適当に作ってみた」

「この赤いの、めんたいこ？」

「そそ」

「そか。それにしても玉子焼きの形がぐちゃぐちゃだね」

「めんたいこ入れるとうまくいかなくてさぁ」

職人さんはすごいねぇ。もぐもぐ。

「食べにくかったらご飯にかけてみ」

「そうする。お醤油とって」

「ほれ」

「ん」

もぐもぐ……

「んま」

「な。めんたいこに玉子の組み合わせっていけるよな」

「おかわりしちゃお」

「おぅ、たくさん食え」

もぐもぐ。

「あ、お母さんのＣＭだ」

「シャンプーのやつか。四十代でもこの艶やかさ……って、母さんがやっちゃ意味ないよな」

「元から綺麗だもんね、髪も本人も。異常に」

「同じもんを一般人が期待するのは間違ってるだろう。ま、人気は出るだろうけど」

「そういえば、ふと思ったんだけど。お父さんとお母さんってどうやって知り合ったのかな？」

「ああ、結構おもしろい話が聞けるぞ。今度聞いてみ」

「うん」

もぐもぐ。お、ＣＭ終わった。

『さて、ここでクイズです！』

「トメ兄、答えてみ」

「よしきた」

『あなたが生きてる意味って、なーんだ？』

「クイズって軽さの問題じゃねーだろ」

もぐもぐ。

「おかわり」

「食うのはやいな」

もぐもぐ。

「あ、そうだ。サンマ！　今度サンマ買ってきて」

「旬だしおいしいからいいけど、なんでさ」

「こないだね、サユカンに綺麗な食べ方教えてもらったの。やってみたい」

「わかったよ」

もぐもぐ。

『次のクイズです！』

「カカ、やってみ」

「よしきた」

『あなたが死ぬと、どうなるでしょう？』

「地球も死ぬ」

「そいつぁ大変だ……チャンネル変えていいか？　もうヤだこのクイズ」

「許可」

もぐもぐ。ん、カカが立ち上がった。

「ちょっとトイレいくね」

「ん」

てってって……

「よし、隙あり」

ささささっと。

「……ただいま。ん、あれ？」

そ知らぬ顔でもぐもぐ。

「おかずが増えてる！　ハムフライだ！」

にやり。

「うわ何この嬉しさ」

「ふふん、日々サプライズは必要だよな」

「わーい。ソースちょうだい」

「ほれ」

もぐもぐ。

「んまんまサクサク」

「安いわりにうまいんだよな、あそこのスーパーのハムフライ。一つ78円でこれだぞ？」

「なんで77円じゃないんだろう？　私だったらそうするなぁ」

「知らんよ」

「んむ、ご飯すすむ。おかわり」

「はいよ。僕もしよっと」

もぐもぐもぐもぐ……

「で、カカさんや」

「なんだいトメさんや」

「オチは？」

「ないよ」

「そうか」

ごちそうさまでした。

## カカの天下６２０「もぐもぐタイム」（後書き）

箸休めにこんな話を、と言いつつ箸を動かす描写しかないとはこれいかに。

オチがない、というオチです。

あ、明日の昼１２時でサエちゃんのプレゼントを〆切りますのであしからず＾＾

## カカの天下６２１「幸せな悩み」

こんにちは、サエですー。

今日は私の誕生日です。そんなわけでー……

「サエちゃん、おめでとう！」

「サエすけ、おめでとっ！」

お祝いをしてくれるために、二人の親友がうちに駆けつけてくれました。

「しっかしさすがねサエすけ、カカすけに負けじとプレゼントたくさんっ」

「さすが私の嫁！」

「もしもしカカすけ？　その嫁のファンが大勢いるわけなんだけど」

「ファンならばよし！　手を出そうというなら私がすべて倒してやる！　どすこい！」

「なんで相撲なのよ？」

「昨日のおもしろかったんだよ」

「え。どんなのよっ」

「まわしが取れたの。しかもダブルで」

二人はいつも賑やかだなー。

「……まったくもう、サユカンたら今日は何をしに来たの？　サエちゃんを祝いにきたんでしょ。それなのにモロだしがどうだの立派だっただのソレばっかり」

「言ってるのは君でしょがっ！」

「さて、このプレゼントはなんだろなっと。開けていい？」

「うん。三人で開けて楽しもうと思って取って置いたんだもんねー」

「こらっ！　聞きなさいよっ！　もぅ知らないっ……何入ってるのよっ」

拗ねきれないサユカちゃん萌えー。

「お、懐かしや。カボチャの仮面……じゃないや。ランタン？」

ほんとだ。よくハロウィンで見るような、悪戯っぽい顔に掘られたカボチャが箱の中から飛び出した。

「光ってるじゃないのっ！　もう電池入れてあるの？」

んー、これはー。

「電池じゃないねー。何か入ってるねー」

「はえ？　それが光ってるのか」

なになに？　ふむふむ。

「わかったよー、何が中で光ってるのか」

「なになに？」

「タナカとその兄貴の怨念だー」

「誰の何だか全っ然わかんないわよっ！！」

あ、カカちゃんが無言でカボチャに箱をかぶせた。

「次のプレゼントいこうか！」

なんて爽やかな笑顔だろう。今見たことを忘れろと言わんばかりだー。これはもー、いつかカカちゃんが寝てるうちにこのランタンを枕元に置いて驚かせるしかないね。

「メッセージもいっぱいきてるね！　えーと？」

『プレゼントに僕を上げます♪』

「……こんなのばっかかね、全部ファンクラブからみたいよ？」

「サエちゃん」

「なに？　カカちゃん」

「これ燃やしていい？」

「ダメ。焼き芋用に取っておこー」

「焼き芋なら仕方あるまい。命拾いしたな小僧ども」

せっかく送ってきてくれたものは有効に使わないとねー。

「じゃ次いくわよっ！　えっと、差出人は『関西地区在住の魔導師という名の手品師』って書いてあるけど」

関西かー、知り合いなんていたっけー？

「ね、サエちゃん。箱の中からなんかガサゴソ音がするんだけど」

「大丈夫だよー。さっきのカボチャよりは安全なはずだからー」

何も感じないしねー。どれどれー？

箱を開ける。

その中には――

全体は白っぽいのに、お腹だけ真っ黒な子猫が入っていた。

「飼おう！！　サエちゃんはこの子を飼うべきだよ！！」

「ちょとまてーぃ」

「サエすけの生き写しだわっ！」

「私は猫耳でもなければ尻尾も生えてないんですけどーぃ」

「だってお腹が黒いわよっ！」

「それが全てさ！」

そこまで断言されると何も言えないよーぃ。

「ねね、サエすけっ！　その子猫抱いてみてっ！」

こう、かなー？　おそるおそる……わ、柔らかい。しかもすごくおとなしー。

「魔女と黒猫の組み合わせくらい似合う！！」

「嬉しくないよー」

「目元がそっくりねっ」

「私の子供みたいな言い方よしてー」

「ほんと、そっくり！」

「なんで子猫のお腹に向かって言うのー？」

うーん……飼えるかどうかはわかんないけど、お母さんに聞いてみようかなー。しかしこの人どういうつもりで送ってきたんだろー？

「や、こんなのくるとオラわくわくしてきたぞ！」

「わたしもよっ！　ほらほら次のプレゼントいきなさいよっ！」

「もうどうにでもしてー」

正座して膝の上に乗せるとにゃあにゃあ転がり始める腹黒子猫。

うん、おまえやっぱり腹黒だねー。そうやって可愛さをアピールしてうちに住みつくつもりなんだねー。

「……そこの二人ー？　なに『私にぴったり』とでも言うかのようにニヤニヤしてるのー？」

「んふふ、べっつにー」

「さ、次はこれよ！　差出人はケイさんだってっ！　中身は……」

白い腹巻き。

「……そこの二人ー。なんで口元押さえて蹲ってるのー」

「ぷくく……さ、寒い日は安心ねっ！」

「黒い日も安心だね」

あ、二人して爆笑したー！　むー！！

「いいもんいいもん、私の味方はこの子猫ちゃんだけだもん」

「サエちゃーん！　仲間とばっかり仲良くしないでさ、ほら次のプ

レゼント見よう！」

「今度はミンチさんて人からよ」

なにさー。おにくー？

「漂白剤」

「……なーにおーぅ？」

「どんな黒さも驚きの白さに」

二人が再び爆笑したのは言うまでも無い。

「ぷくー！」

「まぁまぁサエちゃん。そんなに頬を膨らませて拗ねないでよ。でも可愛いからハイチーズ！　パシャリとな」

「お、いい感じで写メ撮れたわねカカすけっ！　あはは！　頬がまんまるでかーわいー！」

「ぷくー！！」

可愛いとか言われても機嫌は直らないもんねー！

「まぁまぁまぁまぁサエちゃん！　機嫌直してよ！　すごいプレゼントがあったからさ！」

今までのも充分ネタとしてすごいよー！　悪い意味でー！

「ほんとすごいわよ！　ケマリしたい、って人からなんだけどっ」

したいなら勝手にやってればー？　それともケマリの死体なのー？

「ほらほら、機嫌なおして」

「ぷくー」

「……ねぇねぇ、サエちゃん。せめてこっち向いて」

……仕方ないなー。

くるりと振り返る。

まん丸に膨らませていたほっぺがカカちゃんの指で押されてぷしゅーと潰れた。

「あぁ、柔らかすぎる可愛いすぎる！」

「膨らませたほっぺと言えば指ぷしゅーよねっ！　サエすけ、わたしにもやらせてっ！」

「知らにゃい」

「あ、やりすぎたかもっ！　カカすけ、こういうときこそあのプレゼントよ！」

「うん！　サエちゃん、これを見て！！」

「……なにさー」

「万札」

「誰さこんなの送ってきたのー！？」

それからもうちは大騒ぎで。

どこの誰から送られてきたのかよくわからないプレゼントに一喜一憂して。

なぜだか私と腹黒を結びつけようとするものが多かった気がするけど、楽しかったから許してあげよー。ありがたく思えー。それにしてもパコちゃんの説明書をわざわざ送ってくれた人は何者だろー。名前まで知ってるなんて……私と同じでナニか見える人なのかなー？

――ともかく。今日はカカちゃんとサユカちゃんと楽しく過ごした。

この上がないくらい、楽しかった。

でも。

カカちゃんやサユカちゃんには悪いけど。

その夜。

「ただいまー！」

「おかえり、お母さん」

この時。

「うー、疲れた！　でもサエのために頑張ったわよー」

「うん、ありがとー」

この瞬間。

「去年とか祝ってあげられなくてごめんねー！　その代わり、はい！　あの店のチーズケーキのおっきいやつ買ってきたよー」

「うん、待ってた」

いつか待ち焦がれて夢見た――言ってほしかった言葉と、求めた温もり。

「あれから……何年目、かしらねー。こほん、改めましてー！　誕生日おめでとう、サエ！　これからもよろしくねー」

「ありがとう、お母さん。私のほうこそよろしくー！」

これに勝るものは無いんじゃないかと思う。

ううん……違う。

全部、一番だ。

一番な思い出ばっかりで、大変だ。

嬉しすぎて困る。

なんて、幸せな悩み。

## カカの天下６２１「幸せな悩み」（後書き）

わかる人にはわかりますね、この話がどこにリンクしているのか。
あのときのサエちゃんの願いをいつか叶えてあげようと思いつづけ……ついに！　長かった……

サエちゃん、おめでとう。

そしてサエちゃんにステキなプレゼントを贈ってくださった方々にも感謝を！　紹介しきれなかった方はごめんなさい！　また懲りずに企画とか参加していただけたら嬉しいです＞＜

しかしサエちゃんのプレゼントは過激すぎるものとか「僕をあげます」発言とかいっぱいでした。その辺りはカカラジででも。あと、衣装案がやたらいっぱいあったので、いつかする予定のファッションショーをまたお楽しみに＾＾

# カカの天下６２２「ヘイ！　買い物だもん！」

こんにちは、カカです。

「うわぁーお」

何がうわぁーおかと言いますと。

実はですね、トメ兄に頼まれて買い物にきたわけですよ。なのですが、その買い物リストを書いたメモを落としてしまったのですよ、うん。

「んー、もう目の前には商店街。携帯は忘れた。戻るのは面倒」

こうなったら答えは一つしかない。

勘で買おう。

えーと、まずはお肉屋さん、っと。

「いらっしゃいカカちゃん！」

「んっす」

「一人で買い物なんて偉いねぇ」

さて。勘で、と言いつつ……商店街にくるまでの道中でリストの内容を歌いながら歩いてきたから、大体は覚えてるんだよね。んーと、たしか最初が……

んーん、ん、ん♪　お肉屋きたら、殺人事件♪

「バラバラ殺人ください」

「豚のバラ肉でいいのかな？」

すげぇ、伝わった。さすがは私が――というかトメ兄や姉が小さいころからお世話になっている店だけはある。

「どれだけいるのかな？」

「どれだけ、か」

２００だ。

「２００メートルください」

「あいよ、２００グラムだね」

「そうともいう」

よし、お肉げっと。

「毎度あり！」

「代金は？」

「２１２ドルだよ！」

「なに言ってんのバカじゃないの？」

「……そりゃないぜぇ、カカちゃん」

お肉屋さんと仲良くお喋りして、次の買い物へ。

お魚屋さん、か。たしか……

魚屋きたら、サ――忘れた。サンマかサバだったような。

「へいらっしゃい！　何をお探しで？」

いいや、あわせちゃえ。

「サンバください」

「サンバだね！」

「活きのいいサンバね」

「よーし、ミュージックスタート！」

南国っぽい音楽が流れ出す。

「ヘイ！　ヘイ！　踊るぜヘイ！！」

「私もヘイ！　あなたもヘイ！！」

熱い時間を過ごした。

「これでよし、と」

「毎度あり！」

「――おや、お前さん。何が売れたんだい？」

「サンバだよ」

「そうかい」

お魚屋さん夫婦はいつ見ても仲がいいなぁ。さて、次は果物屋さんだ。

「ちわ」

「はい、いらっしゃい。何をお探しで？」

可愛いおねーさんの店員さんだ。んと、ここのリストはそのまま歌ってたから、そのまま言おう。

「レモンだもん」

「一個でいいもん？」

「そうだもん」

「かしこまりましたもん」

ノリのいい店員さんだ。

「それから……柿だきー」

「種無しでいいきー？」

「そうだきー」

「きー？」

三個セットのでいい？　と聞く店員さんに、

「きー」

頷く私。

「あと、バナナなんだナ」

「一房でいいんだナ？」

「そうなんだナ」

会計を済ませて、ニコニコ顔でおねーさんと別れる。また来よう。

次は八百屋！

「キャベツだきゃー」

「はい、キャベツお一つですね」

……この店員つまんないきゃー。

「これだけでしょうか？」

「あと、きゅうりだきゅー……う」

忘れたことにするきゅー。

よし、大体は買ったきゅー。あとは私のスポーツドリンクとトメ兄の牛乳と……って、なんか妙にお金が残っちゃったきゅー。サバとサンマでも買い逃したかのような残金だきゅー。はて、どうしようかきゅー。

「ただいま」

「おーカカ、ご苦労さん」

「はい、買ってきたもの確認して」

「おー……ん？　なんだか少なくないか」

「残金は７７円だよ」

「……おい。きゅうりとか買わないで、勝手になにか買っただろ」

「ぎくり。バレた。７が揃ってるのにアンラッキーとはこれいかに」

「７が一つ足りないからだろ。さぁ白状しろ、余ったお金を何に使った！？」

「トメ兄へのお土産」

「……」

「はい、栗ようかん。トメ兄好きでしょ？」

「……」

「いつもいつもお疲れ様」

「……許す」

ふ、甘いねお兄ちゃん。

「ところで、魚屋の買い物が無いのはなんでだ？」

「ん。サンマかサバか、わかんなかったからサンバ踊ってきた。どっちだっけ？」

「むしろ僕が聞こう。おまえはバカなのかアホなのかどっちだ」

## カカの天下６２２「ヘイ！　買い物だもん！」（後書き）

今日の昼食は肉も魚も食べました。
だからこの話が生まれました。
全然繋がってないと思った人、それは気のせいです。
我ながらよくわからない思考回路だと思ったのは内緒です。

正確にはチキンカツとサバの焼き魚でした。お腹いっぱいです。

## カカの天下６２３「押し売り注意！」

こんにちは、トメです。

今日は文化の日。貴桜小学校では例年通り、生徒によるフリーマーケットを開催しています。そんなわけで顔を出してみたわけですが……

「……あんまりだぁ」

「しくしくしく……」

「これは泣いてるんじゃない……泣いてなんかいない……やっぱ俺泣いてる」

なんで一部だけお悔やみムードなんだ。

「お、トメじゃねぇか」

振り返るとそこには、なにやら黒い布をひらひらさせながら手を振る、見覚えのある顔が。

「テン？　や、なんかこの人たちが死んだみたいで」

『死んでないもん！！』

や、でもそんなムードですよ？　あなたがた。

「どうしたんだろうな。テン、わかるか？」

「おぅ。死んだのはうちのクラスのフリマを見てきたやつらだな」

『だから殺さないで！！』

無視。

「うちの、ってカカたちのクラスでもあるよな。なんだ、そんなに恐ろしいものを売ってるのか？」

「いいや、普通にいらなくなったものや古いものしかねーぞ」

「じゃあ問題ないじゃないか」

「古くなったパンとか」

「捨てろよ！！」

確かにいらないけど売るなよ！！

「まー落ち着け。やつらが気を落としたのはカカとサエの出展物を見たからだ」

「やっぱうちの妹が絡んでるのか……何売ってたんだよ」

「誕生日でもらったプレゼントをいくつも」

……うわぁ、としか言えない。

「あれ見てオレも売るのやめたよ」

「ちょと待てテン。おまえまでもらったプレゼント売るつもりだったのか」

「だってオレもあいつらもわけわかんねぇプレゼント多かったんだもんよ」

言われてみればたしかにカカも変なものをもらってたな。履けないトイレのスリッパとか。

「あー、そうそう。カカやらサエの場合はな、プレゼントと一緒にラブレターとかついてるのが沢山あったらしいぞ。だからそれの返事なんじゃないかね、これは」

……だとしたらそうとうエグい返事だな。思いついたのはサエちゃんと見た。手軽に返事もできるしフリマは盛り上がるし一石二鳥だし。

「ふむ、ところでテン。気になってたんだが」

「んだよ」

「さっきから手持ち無沙汰っぽくブンブン振り回してるその黒い布、なんだ？」

「トメのパンツ」

「なんでそんなもん持ってんだ！？」

慌ててひったくる、って本当に僕のだし！

「売ってたんだよ、カカが」

「ああそんなこったろうと思ったさ！　そしてなぜに買うのか！？」

「けっけっけ、てめぇの慌てる顔が見たかったからだ。このネタが百円なら安いもんだ」

「無駄遣いするなよな！」

「てめぇはオレの母親か」

ええぃ、くそ。最近僕のパンツが減っている気がしたのはこのせいか。これは早急にカカたちのフリマを直撃して他にヤバイものがないか調べなければ！

「行ってくるがいいトメ捜査員」

「なんじゃそりゃ」

「まだ仕事あるから回れねーが、楽しめよ。んじゃな」

「おう」

ひらひらと黒い布を振って去っていくテン。

って――いつのまに！？

「パンツ返せよ！！」

「追ってくるがいい、ボクサーパンツ派のトメ捜査員！　けけけけ！！」

――さて、妙な笑い声をあげるテンを追っかけまわして遊んでいるうちに迷ってしまった。

「どこだここ……お、見覚えのある顔を発見」

ちょこちょこと廊下を歩き回る小さな影に声をかける。

「や、クララちゃん」

「トメです！！　こんにちはです！」

「はい、こんにちは」

礼儀正しい良い子だ。

「ちょうどよかった、道を聞きたかったんだけど」

「クララ知ってます！　それってデートの誘いですよね！？」

……また何のテレビ見たんだこの子は。

「クララちゃん、デートっていう言葉の意味知ってるの？」

「えっちな意味です！」

「誰が説明したんだそれ！？」

「クララ逃げるです！！」

あぁ……いってしまった。ここで追いかけたら僕が危ない人に見られてしまうし……むむむ、本当に道を聞きたかったんだけどなぁ。

おろ？　もいっちょ見覚えのある顔が見えた。

タケダと、たしかヤナツ。なんだあいつら、中庭でコソコソと。いってみよっと。

どれどれ……何やら二人で真剣に向き合って――

「俺はおまえが好きだ、ヤナツ！」

おぉう。

「タケダ……い、いや、その、俺は……」

あぅち。

「今日はフリーマーケットだ、この俺自身を君に売ろう……おまけに、俺の人生をつけようではないか」

あぅちあぅちあぅちあぅち。

「……ローンは、組めるか？」

「一生分ＯＫさ！」

吐いていいか？

「――よし！　完璧なキメ台詞だ！　カカ君への告白練習、協力感謝するぞヤナツ君！」

「気にすんな。俺もその台詞を使わせてもらうんだからな……サエ相手に」

……なんだ、よかった。本当によかった。

世界はまだ人に優しかった。

「しかしイケるんじゃないか？　今の台詞、男の俺でもゾクっときたぜ」

誰でもそうなる。男だと特にだ。

「うむ。これなら成功間違いなしだな！」

なぜ子供という生き物はこうも自信満々でいられるのだろう。ちょっと羨ましい。とはいえあぁはなりたくはないが。

「よし、今度はヤナツ君の番だ。俺に向かって練習するがいい！」

「よっしゃ！　絶対告白を成功させるぜ！」

成功？

無理だな。だってとってもうざいし。

んー……

だからこそ教えてやらないけどね。

兄としてはこんなやつらと妹たちがうまくいくのもヤだし。くっくっく。

しかしここどこだろう。

そして、なんだかんだでカカたちの教室にたどり着けなかったので不貞腐れて帰ってきた。やがてカカも帰ってくる。

「カカ、おかえり。今日どうだった？」

「二十個くらい売れて、三個くらいビーズ買って、二人ぶっ飛ばした」

サエちゃんの分も跳ね除けたか。ご苦労さんである。

## カカの天下６２３「押し売り注意！」（後書き）

タケダやヤナツなんて誰も買いません、ええ。

……買います？

# カカの天下６２４「秋、焚き火、そしてヤツら」

こんにちは、カカです。

今日はいい天気だけど少し寒い、そんな秋らしい日。

こんなときこそ、やっぱり――焚き火に焼き芋！！

事の発端は、お姉がどこからかさつまいもを調達してきたことから。ちょうどいいことに私の家の庭には落ち葉がたくさん、サエちゃんちには燃やすものがいっぱい。これはやらない手はないだろう、ということで……集まることができたメンバーで焼き芋会です。

集まったのは、

「ねーねー、お母さんねー、サエのおならが嗅ぎたいなー」

「ねーねー、お母さんさー、マジやめて」

燃やすものを持ってきてくれたサカイさんサエちゃん親子と、

「わたしのお尻は大丈夫……わたしのお尻は大丈夫……今日はキュッとしてるからっ！」

トメ兄の前でアレをかまさないか心配しまくってるサユカンと、

「あとで仕事終わったあたりのサラちゃんに持ってってやるかな。あたしってばやーさし」

さつまいもを持ってきたのはあたしだから一番たくさん食べなければ、と意気込んでいるお姉と、

「姉、あんたそんなこと言いつつ連れてこなかったのは自分の取り分が減るからだろ？　だからサラさんに悪いと思って一個だけ持ってく気だな」

えっと……何もないトメ兄、そして主人公の私、以上！！

「なんだよカカ。そのつまらないものを見るかのような目をなぜ僕に向けている？」

「この役立たずめ」

「なんだよ！　そりゃ僕は何もしてないけど、それはおまえだって同じだろ？」

「ふ、甘いね。私はちゃーんと燃やすものを持ってきたよ」

「……む」

すでに皆で協力して落ち葉を集めていたので、あとは燃えるものを添えて火をつけるだけ。

「あたし組み立てるよん」

さすが野生のお姉。落ち葉と枯れ木を使ってちょちょいと焚き火の枠組みを整えてしまった。

「そんじゃ燃やすものちょうだい」

「はいー。おねーさん、この手紙全部燃やしちゃってー」

「中見たの？」

「うん、勉強になったー」

「勉強に？　なに、具体的な子供の作り方でも書いてあったの？」

そんなラブレター嫌すぎる。

「んーん、いくらラブレターに気持ちがこもっていても、誤字脱字が多かったら萎えるんだなーって」

なるほどね。やっぱり気持ちを伝えるなら直接がいいのかなぁ。

「じゃ私も。これ燃やしてよお姉」

「なにそのでっかい布」

「運動会のときのふんどし」

あれ、どうしたトメ兄。ずっこけて。

「な、なんでそれがここにあるんだ！？　確かに燃やしたはずなのに！！」

「バカだなぁトメ兄。忌まわしいものは捨てても燃やしても持ち主のところに戻ってくるって常識を知らないの？」

「そんな恐怖映画の常識知らんわ！！」

なんで一枚しかないと思うかね。私たちがあの言葉にたどり着くまでには色々とサンプルがあったのだよ。

「まずはどれ燃やす？」

「んじゃこれ」

「ぶはは！　カカちゃんなにこれなにこれ！　なに書いてあんの！？」

「ん、『もっこり』だよ」

お姉は爆笑。サカイさんも口元を押さえて笑ってる。トメ兄は嫌そうな顔をしながらも笑ってて……結構ウケたな。案としては『我々こそはもっこり』っていうのがあったんだけど、それでもよかったかなぁ。

「ほら、焼き芋。ホイルに包んだぞ」

「さんきゅー弟君」

「どうだカカ！　これで僕も役にたっただろう」

「でも笑いはとれてないよ？」

「……なんでとる必要がある」

そんなやりとりをしているうちにお姉はさっさと焚き火の中にさ

つまいもを放り込み、着火。パチパチパチ、と心地いい音が聞こえてくる。

「まだかなーまだかなー」

にこにこ待ってるサエちゃんかぁいいなぁ。

「……ちょうちょっ！」

サユカンはなぜかサエちゃんの髪で遊んでいた。私もやろっかな。

「暇だね。サカイちゃん、何かおもしろい話ないの？」

そう、暇なんだよね私ら。

「ふっふっふー」

そんな私たちを救済しようと、ついにサカイさんが立ち上がった！

「焼き芋といえば私たち！　サエ、いくよー」

「うん、お母さん。アレだねー」

なんだなんだ？

「ミエサエの小粋なジョーク！」

こほん、と息を整えた親子は――

「Ｈｅｙ！　ちょっと聞いてくれよマイケル！」

「Ｏｈ！　どうしたんだいジョーイ？」

うわ出たジョーイ＆マイケル！！　そういえば……元はサカイさんの小話から生まれたんだっけ。

「最近うちのワイフが焼き芋を食べないんだＹＯ！」

ノリノリなジョーイサカイさん。

「おっとぅ、それは一大事だ！　一体どうしたというんだい？」

こっちもノリノリなマイケルサエちゃん。

「しかもそれだけじゃないんだ！　相変わらずおならでブーブー呼吸してるし歯には薄らと黄色いものが付いてるんだ。おかしいＹＯ！」

「はっはぁん？　間違いないね、そいつは浮気さ！」

「アゥチ！　なぜそう思うんだい！？」

「きっと隠れて愛人とさつまいもを食ってるのさ！」

「なるほど！　君の頭は冴えてるＮＥ！」

「サエだからＮＥ！」

……え、終わり？

「数日後」

まだあった。

「Ｈｅｙ！　ヘイ！　屁を射ると書いて屁射！　聞いてくれよマイケル！」

「Ｏｈ！　やたらとテンションが高いね、どうしたんだいジョーイ？」

「あの後ワイフを問い詰めたんだよ！　そうしたら知らない知らないとシラを切り通すから、勢い余って別れちゃったＹＯ！」

「ワォ、思い切った決断をしたもんだ！　ところでジョーイ」

「なんだい？」

「考えてみたんだけど、浮気はやっぱり勘違いだったんじゃないかい？」

「ホワッツ！？　どうしてそう思うんだい！？　途端にさつまいもを食べなくなったのはどう説明するんだい！？」

「飽きたんじゃないかい？」

「おならが続いていたのはどう説明するんだい！？」

「お腹を壊してたんじゃないかい？」

「歯が黄色かったのは！？」

「歯を磨いてなかったんじゃないかい！？」

「ＨＡＨＡＨＡ！　こいつぁまいった！」

いつも思う。この人らの笑うタイミングがさっぱわからん。

「でもいいさ！　そんな下品な女とは別れて正解だったよ！」

「それじゃあ君のワイフはこのマイケルがもらった！　計！　画！　通！　り！」

「結局は浮気してたんじゃないかＹＯ！」

ぺこり、と二人して頭を下げる親子。

なんとなく拍手する私たち。

ナンダコレ。

「な、内容はともかく息ぴったりねっ」

「私の子守唄代わりだったからねー、この二人のお話」

「……こんなの寝る前に聞いてたらカカみたいになりそうだな」

なにおう。

「あたしこれ好きだわぁ……ねぇねぇジョーイサカイちゃん」

「Ｈｅｙ！　なんだい！？」

「あたしもたまにそのジョーク聞いてたけどさ、なんでさつまいもとおならの話ばっかなの？」

「ＨＡＨＡＨＡ！　それはね、このお話の対象年齢が小学生以下だからさ！」

なるほど。小学生以下は好きだよね、おならのネタとか。

「お、姉。そろそろ焼けたんじゃないか？」

「ん、いい感じ！」

サカイ親子のおいもジョークのおかげで暇を持て余すことなく焼き芋にありつけた私たち。

ほっこり焼けた芋はとっても美味しくて、そのときの様子も細かく教えてあげたいとこだけど……だめ。

だって、おならの音とか聞いてほしくないもんね。

ほくほく、んまんま。

## カカの天下６２４「秋、焚き火、そしてヤツら」（後書き）

なんか要望多いのでジョーイマイケルまたもや登場です。いつぞや焼き芋といえば――というリクエストいただいたので書いてみました。

ちょっと下品風味が多くなってます、そうゆうの嫌いな方はゴメンナサイ＾＾；

明日はカカラジですねー。何かネタがあったら遠慮なくどぞ＾＾

**カカの天下６２５「第二十一回、カカラジ！」**

――もしも、テンカ先生の誕生日のとき、結婚申し込みドッキリを仕掛けたトメがもう少し笑いを堪えていたら。

注意。５７９話をちらりと読むか、思い出してから続きをご覧ください。

「僕と……その……け、結婚してくれ！！」

トメがそう言ってから数秒の葛藤の後。

「……」

「テン？」

「……ば」

「ば？」

「バーカ！！」

「は？　おおお？　ぐぇっ」

「トメ！！　てめぇオレをバカにしてんだろ！？」

「うげ、ぐ、胸倉、はな、せ」

「オレだってこんなだが女なんだぞコラ！　あぁ女さ悪かったなコ

ラァ！！」

「うぁうぁうぁうぁ揺らすな揺らすな揺らすなぁぁぁぁ！」

「こんなとこでそんなこと言われたって返答なんざできるわけがねぇだろうがぁぁぁ！！」

「悪かった悪かった悪かったからシェイクをやめろ！！」

「言うならもっと雰囲気だの言葉だの考えやがれ！　あぁん？　オレが女らしくねーからそんなことは考えられねぇのかそうかそうかブッ殺す！！　その前に金出せやコラァ！！　保険金は俺のもんだぁ！！」

「まだ何も返答してません！！」

「もっと死ぬほど考えて出直して来やがれ！　ていうか死ね！　おとといい来やがれ！！」

「お、おとといには来れない」

「じゃーあさって来やがれ！」

「き、来てほしいのか？」

「バーカバーカ黙れバーカ！！」

トメを弾き飛ばし、走り去っていくテン。

ほんの冗談のつもりで始めたドッキリが、取り返しのつかない誤

解を生んでしまった。それに気づいたトメは先のことを考える余裕もなく、ただ呆然とするのだった……

というわけで、第二十一回カカラジの始まりです！！

「あのぅ……作者さんや」

なんだねトメ、じゃなくて留君。

「冒頭の、ひっじょーに恥ずかしいのは、なんぞやもし？」

ほら、もしもシリーズ企画をやるって言ってたじゃん。今のは『照れるテンちゃん見たい』さんからいただきました。

「なんでよりにもよってそんなのを選ぶ！？　大体さ、テンが本当にこんな反応するのか！？　なんか可愛いじゃないか！」

あれま、満更でもないのね。んじゃ今度――

「やめんか！！　別に僕らはそんなんじゃない！」

そんなんにできるのが作者――ぐぇ。

「……お、カカ。なんだ、僕の代わりに作者に天罰下してくれたのか？」

「はい、というわけで主人公の主人公の！　主！　人！　公！　の私を差し置いて初っ端から目立ってくれた人気ランキング上位コンビですがねーえーえーランキング上位がそんなに偉いんですかそうですかそんなに偉いならお金も余ってるでしょう口座番号教えても

らえますか？　ってな感じで怒ってる香加です！！」

ず、ずびばぜん……だってトメとテンカの絡みが最近少ないってメッセージがくるからさぁ。

「私も活躍させろ！」

仕方ないなぁ。じゃあこれやってよ。

「わ、やった。やるよ留兄」

「どれどれ……え。僕がインドちゃんの役やるの？」

急だったから呼んでないし収録もしてないの。いいからやるの。

「はいはい……」

こちらは『嘘吐きぬこ』さんからいただきました。

――もしもインドちゃんがブラジルちゃんだったら。

「ねぇねぇブラジルちゃん」

「サッカーうめー」

ちゃんちゃん。

「終わりかよ！？」

カレーうまい子がサッカーうまい子になったじゃん。

「セリフ少ないよ！！」

はいはいはいはい、じゃあこれ！　『三日月』さんからいただきました。

――もしもトメとサユカの感情が反対だったら。

「サユカちゃんハァハァ……サユカちゃんハァハァ……」

ちゃんちゃん。

「待てやコラァ！！」

「私セリフないし！！」

どう見ても犯罪です。本当にありがとうございました。はい、この番組はネット小説『カカの天下』を盛り上げるため、ぶっちゃけトークや作者の本音を交えながら談義したりするラジオ的なお話です。ここにいる留とか香加とかは本編の分身であり、直接関係はないのでお気をつけください。

「おい待て勝手に進めるな――」

はいＣＭ。

『――臨時ニュースをお伝えします。えー……一昨日から行方が分からなくなっていたトメテン推進委員会『ＴＴＩＵ』の会長である

鶏助氏が本日未明、都内のホテルにて遺体で発見されていたことが明らかとなりました。

警察の発表によりますと、検死の結果、体内からトメテン成分が検出されず。また、同氏の遺体発見現場であるホテルの一室からルシカ氏に宛てた大量の脅迫状が発見されたことから、死因は体内のトメテン成分の枯渇からの心身衰弱によるもの、という見方が強いとのことです。

また、同氏死亡の旨をうけ『ＴＴＩＵ』は、

「トメによる数多くの女性との恋愛フラグの乱立が今回の悲劇を生んでしまった。このような悲劇をこれ以降起こさない為にも、いち早くトメとテンカには一線を越えてもらわなくてはならない」

との声明を発表しました――」

ＣＭっぽいニュースがあけて。

「なぁ、これ全部ツッコまなきゃダメか？」

別にいいよ、皆さん大体わかるだろうし。

「ＴＴＩＵってなに？」

（Ｔ）トメと（Ｔ）テンカが（Ｉ）いちゃいちゃ（Ｕ）うっふんあっはんだそうです。

「ツッコまないぞ……あえてツッコまないぞ僕は」

今回の冒頭のもしも話でトメテン成分を吸収して生き返ってくれたら幸いです。

「しかしこの人よく見るよね。こないだ私の誕生日にプレゼントで報告書みたいなのも出してなかったっけ？」

ええ。この『鶏助』さん、言わずとしれた脅迫状の発案者なのですが、企画が生まれるたびに、というか何か思いつくたびにいろいろ送りまくってくれまして。私としては一人の読者を贔屓したくはないのですが、問答無用でおもろいものを送られてしまうと……ねぇ？

「……確かにあの報告書はおもしろかったけどさ」

あい。ここで紹介してもよかったのですが、ひったくり犯のネタが温かいうちに紹介したかったので。カカの誕生日プレゼントに勝手にしちゃいました。

「そういや他にも色々とおもしろいプレゼントあったんだって？」

はい、しかし過激すぎたりお話の進行上辛いものは不採用とさせていただきました。本当に申し訳ない！

「どんなのがあったんだ？」

意外とかぶってたのが、トメ&テンカ先生使い回し券とか、誰でもなんでも言うことを聞く指輪とかの命令系ですね。

「勘弁してくれ」

あとはカカに日本刀の真剣とか、

「もらったら銃刀法違反だし」

腹黒を治す薬とか、腹黒にする薬とか、皆が子供化してしまう黒魔術的な薬とかもジャンルがファンタジー化してしまうので諦めました。あと腹黒セットとして犯罪用具が詰まったものもありましたね。

「誰へのプレゼントか一目瞭然なのがすごいね」

面白かったのがこれ！

――プレゼント案。

『義母さん』：巨大な箱の中には？　産親ＶＳ育親！！

『お母さん』：巨大な箱の中には？　産親ＶＳ育親！

「……並んでる二つの箱からいきなり二人が飛び出して口喧嘩を始める光景が目に浮かんだぞ」

「もうこれ本編でやっちゃっていいんじゃない？」

私もそう思うので考えてみます、ありがとう『三日月』さん。

「この方もたくさん送ってくれてるんだよな。数撃ちゃ当たるとばかりに」

「や、常連みたいなのができて嬉しいね嬉しいね。他の人ももっと頑張ってね」

さて、誕生日の話題もこのくらいにして、ふつおたでも紹介したいと思ったのですが……それよりもちょっと、話題にしておきたいことが。

「なんじゃらほい？」

――最近のでゅみゅみゅみゅう率の異常な高さについて。

「……あぁ」

「……それね」

いまや感想欄をざっと見て、でゅみゅみゅみゅうという言葉を見ない日はないんですけど。

「挨拶にしてる人もいるしな」

「誰さ、でゅみゅみゅみゅうなんて変な言葉言い出したの」

おまえだ。

「私カカじゃないもーん。香加だもーん」

「同じようなもんだろが」

ちなみに実話だけど……作者用のメッセージ欄あるのね、読者さんには見えないけど。それが……

件名：でゅみゅみゅみゅう（ついに件名にまで…）

件名：でゅみゅみゅみゅみゅう！！

件名：でゅみゅみゅみゅうなんちゃって

――なんて並んでて、軽くウィルスにでも感染した気分なのですが。

「パソコン開いてファイル名が全部『でゅみゅみゅみゅう』になってたらホラーだな」

そうそう、トシさんからの誕プレ案にあった『じっくりコトコト煮込んだでゅみゅグラスソース』ってのもおもしろかったです。

「かけたい！！」

「僕はかけたくない」

まーほんと色々なことに使われてるんですよ。

「この言葉のどこが皆の琴線に触れたんだかさっぱりわからないんだが」

「んー、わけのわかんなさがちょうどよかったんじゃない？」

そういう香加の言ってることこそ、わけわかんないんですけど、まぁそれがカカ天の味でもある……のかな？

「カカ天の味といえばさ、最近メッセージで『シュールギャグに路線変更ですか?』とか『最近ほのぼので軽い話が多いですね、疲れてきました?』とかいただいてるけど」

えー、イベント続きで忘れられてるかもしれませんが。カカ天は元を辿ればシュールな話やほのぼの話、なんでもないワンシーンを描くのが基本ですので。確かにちょっと作者のリアルが忙しくなってきたのもあって休憩に入る意味もありますけど。

「元を辿って最近またリニューアル再開したしね」

はい、やはり一年も経ってから文章を見直すと粗とか読みにくい場所とかわかるのでね、毎日少しずつでもいいから見直ししていきたいと思います。

「また余裕なくなっても知らないぞ」

本当に余裕がなくなってきたら、少しの間だけ休止……とかも少し考えてるんですけどね。

「あれま。ここまで毎日続けてきたのに?」

もちろんできる限りは書いていきますよ。ただ、私も働かなきゃ食べていけませんし、これしか書いてないわけでもないので……もし十日間くらい休みたいって言っても怒らないでほしいなぁ、なんて。

「そんなこと言いつつ書き続けるに一票」

「私も。てか続けろ」

うぐ、はい、頑張ります。と、ここで脅迫状コーナー！！

「あ、逃げた」

えーと、カカラジネーム『旅行者』さんからいただきました！
どうぞ！

『きょーはくじょーを送りつけます。

さて…何を要求しましょうか？

……取り敢えず自分の要求を呑まない場合、カカの天下作者であるルシカ先生を精神的に追い詰めます。

具体的に言うと、月火水木金土日の各曜日毎に色んなモノの説明を作者に送りつけます。

月曜日に銃火器の説明（グロい解説付きで）

火曜日に食器の説明（お腹が空くような解説付きで）

水曜日にホラー小説や映画の説明（自分が持ってる文章力を駆使してリアルな解説付きで）

木曜日にアニメの説明（東京のあるところに居そうな感じの説明付きで）

金曜日に刃物の説明（吐きたくなるような解説付きで）

土曜日に食べ物の説明（食べに行きたくなるような説明付きで）

日曜日に殺し方の説明（身の毛もよだつ解説付きで）

とまぁ、こんな感じでやりますよ？

ところで要求の方ですが、トメテン話かトメとカツコの学生時代の話、チビカカの３つの内のいずれかを６７５話までに書いて下さい。

書かなかった場合、マジデヤリマス』

異常です！　じゃなくて以上です！！

「なかなか愉快な脅迫状だねぇ。んで作者、これをチョイスした理由は？」

この月火水木金土日の説明さ、見たい。

「……は？」

というわけで、ちょっと脅迫状の内容を変更させていただきます。前に書きましたよね？　私の修正が入るかもしれませんって。だから修正して……

『ところで要求の方ですが、トメテン話かトメとカツコの学生時代の話、チビカカの３つの話を全て６７５話までに書いて下さい』

ってことにします。そして私はこのうち２つしか書きませんので、どうぞ一週間頑張ってください旅行者さん！！　書いていただくの

はいつでも構いませんよ♪

「あんたが脅迫してどうするよ」

あっはっは！　この私にこんな愉快な挑戦をしたことを不運に思って書いてください。もちろん感想欄に書いていただけると読者さんも読めるのでベターですけど、恥ずかしいならメッセージでもいいですよ？　まぁカカラジで発表させてもらいますが……くっくっく。

「やっぱ脅迫してるし」

いえいえとんでもない。ここまで言ったら書いてくださるしかなくなるだろうなーなんて思ってませんよ？　ここで書かなかったら負けた気分になるぞーとかも思ってませんよ？

「サエちゃんより黒いんじゃないかなこの作者……」

ふ、当たり前です。サエちゃん書いてるのは私だぞ。

というわけでですね、旅行者さんに期待しつつＣＭに行かせていただきましょう！

巷で噂のあの言葉！

『でゅみゅみゅみゅみゅう』が何でか知らないけど音楽に！

その曲名とは『でゅみゅみゅみゅみゅみゅう！！』

そのまんまじゃん！　とかのツッコミは一切受け付けません！！

作詞：さぁ？　俺。

作曲：誰だろう？　おまえ。

出所：もうおまえんちでいいよ。

評価：でゅみゅみゅみゅみゅみゅみゅみゅみゅ（以下略）

有る意味話題作！

普通に見れば問題作！

どうみても違法作！！

むしろサクサク！

そんなぶっちゃけ意味不明な曲はたぶんそのうち発売！！

ぜひ御清聴あれ！

どうなっても知らないがな！！

どこで売るかも知らないがな！！

この言葉の意味も知らないがな！！

誰か教えろ！！

ＣＭがあけて。今のは『三日月』さんからいただきました。

「ほんとこの人ばっかだね」

や、なんか最初のころにいただいた案が紹介されなくて燃えてきたらしく、ほんと沢山送ってくれてるのね。もちろん色んな方からも案は頂いているのですが、まだ一味足りません！　皆さん懲りずに送っていただけると嬉しいです！

「でもさ、もしもシリーズは思いつきやすいらしくて本当にいっぱいもらってるよな」

「一つずつ紹介するつもりが、初っ端から三つも紹介してるしね」

ええ、とても面白いものばかりで……なんだか冒頭にちょこっとやるだけじゃ勿体ないようなのもいっぱいあって、どうしようかと。

「そんなにおもしろいのが余ってるなら、たまに本編でやったらどうだ？」

……はい、それも考えてます。ほんとそれだけで一話できそうなのばっかりなんですよ。

「じゃ、その方向で善処するってことで。コーナーのおさらいでもしよっか」

ほい。

普通の質問受け付けます。ふつおたコーナー。

どんな宣伝でも面白ければＯＫ！　ＣＭコーナー。

ファンキーな脅迫状待ってます、脅迫状コーナー。

もしもな寸劇、見てみませんか？　もしもコーナー。

以上です！

「新しい募集はないのね」

いろいろありすぎるとカカたちも読者さんも疲れるでしょうしね。

「それじゃ、いつものチョップいってみようか」

その前に、一つだけいいかい？

「なにさ作者」

サラさんとイチョウさんの、ささやかな共通点を皆が見つけてるかなーと。

「あ、そういや姉妹だって明かされたの最近だったね。何かあるの？」

えっとですね、何か驚いたときとか、サラさんもイチョウさんも「あぅ！」とか「えぅ！」とか言うんですよ。

「……それだけ？」

うん。

「……ほんの、数箇所だけじゃない？」

ダメ？

「そんなもんわかるかぁぁぁぁっ！！　カカラジチョップ！！」

おあとがよろしいようでー！！

この番組は、『なんかいろいろ鶏助さん』と、『とりあえず飛べ！　社』さんと、皆さんの提供でお送りしました。

## カカの天下６２５「第二十一回、カカラジ！」（後書き）

だんだんとカカラジがラジオっぽくなってきました。ネタを考えるよりも読者さんの投稿をいじる率が増えてきて楽しい限りです＾＾

こちらも色々と自由にさせていただいてますが、不満とかあったら遠慮なく言ってくださいね。できる限り善処させていただきます。

あと、私のリアル事情なんかもたまーにさらっと書いちゃってますが、それによって投稿時間やペースが乱れたりすることもあるので念のため……って意味でも書いてます。ラジオ話はぶっちゃけることにしてるのでいいかなーと……もしうざかったらスルーしてくださいね＾＾；

ではでは、明日からはしばらくのほほんとしますが、またお付き合いくださいな！

## カカの天下６２６「花屋っぽい店」

こんにちは、サラです。

いきなりですが、今日はちょっと私の仕事風景なんかを紹介してみたいと思います。

「おはようございます」

「お、サラちゃんおっは！」

その紹介で欠かせない人物がこの人、カツコさん。

私の友達トメさんのお姉さんであり、花屋さんの先輩でもあります。

「すいませーん」

「へイらっしゃい！！」

「これください」

「あいよ！！」

花屋さんにしては威勢が良すぎるのが玉に傷です。でもこれはこれでお客さんにウケているみたいです。

「今日はバラが安いよ！」

「じゃあそれ一つ」

「並盛りでいいかい？」

「特盛りで」

「あいよ！　特盛り一丁入りまーす！！」

とても花屋さんとは思えません。

「おーい、白バラさーん、お菊さーん」

カツコさんが花束を作っています。本人曰く、お花に返事をしてもらっているそうですが、そんなことを知らない他人から見れば楽しく歌いながら仕事している様にしか見えず、笑みがこぼれてしまいます。

「……にゃろう」

「あれ？　どうしたんですかカツコさん、せっかく作った花束をばらばらにして」

「こいつら嘘の返事をしてやがった。黒バラのくせに自分は白いとか……サエちゃんかっつーの」

たまに花に遊ばれることもあるみたいです。

「さてさて、水でもやろっかね！　サラちゃん、そっちお願いねん」

「はーい」

花の様子を見ながら水やりをしていて……ふと見ると、カツコさんが外へフラフラ出て行きました。

「おまえも元気ないな、ほれほれ」

そう言いながら店先に生えてる雑草にも水をあげている姿は、なんとも微笑ましいものがあります。普段の粗雑で邪悪な印象とは大違いです。

「こ、こんにちは！」

「おぅ、らっしゃい」

「いらっしゃいませー」

お店にお客さんとして必ず毎日来るのがシューさんです。多分仕事中です。

「お姉様、これとこれ、花束にしてください！！」

「ほいほいほい、と。ほれ」

「ありがとうございます！」

代金を受け取るカツコさん。

そして。

「お姉様！　これ受け取ってください！」

たったいま買った花束をカツコさんに捧げるシューさん。

「ありがとさん」

当然のようにそれを受け取り、バラして再び商品として戻すカツコさん。

全くもって意味のない行動に見えるんですけど、店の売り上げは上がるし、シューさんは満足げなので、きっとこれでいいのでしょう。毎日見てるとさすがに哀れですけど。

「んしょ、っと」

「あら、カツコさん。それなんですか？」

「ミニ黒板。これに今日のおすすめを書いて店先に置こうかと思ってさ」

ますます花屋さんっぽくなくなりますね。

「どれどれ……はて？　『黒のフリフリ』ってなんですか？」

黒のフリージア？　え、でもフリージアに黒色なんてなかったような……

「ふふん、わかんない？　今日のおすすめ」

「はい、全然。黒のフリフリ……？」

「サラちゃんの下着」

「えぅ！？　なんで知ってるんですか！！」

「着替え覗いた！」

「嘘っ！？」

「うっそーん！」

で、でも今日の私の下着は確かに……！

「あっはっは、黒ちゃんって可愛い下着好きなのねぇ」

「サラです！！　な、なんで、どうやって！？」

「ん。サラちゃんさ、家に花を飾ってるっしょ」

え、ええ……一応、花屋さんしてますから。

「そいつらから聞いたのよ、風の噂ならぬ花の噂で」

「わ、私の部屋には置いてないのに！」

「花に目なんかないでしょ？　見るんじゃない、感じるんだ」

そんなどこかの映画みたいなことを！！

「とにかく勘弁してください！」

「わかったわかった。書き直すよ、ほれ」

『今日のおすすめ。はいてない』

「わかってない！！　何もわかってないです！」

「よぅよぅボウズ、スカートめくりしたくないかい？」

「通りすがりの子供に変なこと吹き込まないでください！！」

「皆さーん、この娘はいてないですよー！！」

「変な宣伝しないでください！！」

「安いよー！！」

「何がですかぁぁぁぁ！！」

とても頼りになる先輩は、とても厄介な先輩でもあるのでした。

「サラちゃんごめん、そんな怒んないでよ」

「もう知りません」

「あたし何でもするからさー」

「本当ですね」

「おう！」

「じゃあ店先に五分間立って、宣伝してください」

「……それだけでいいの？」

素直に店先に立つカツコさん。

私はその横に、今日のおすすめが書かれたミニ黒板を置いた。

私が書き直した文字は――

『今日のおすすめ。あたし』

石化するカツコさん。それに構わず仕事に戻る私。そしてそれを見た通行人の皆様は……

「ぷっ」

「くすくす……なにあれ」

「恥ずかしくないのかね、自分がおすすめだなんて」

「絶対に売れねぇな」

「え、売れ残りセールじゃないの？」

「なにさあんたら！！　揃いも揃って笑ってんじゃないわよ！！」

「はい、お金」

「見世物じゃないわ！！　でもよこせ！！　……もうちょっと払え」

この商店街は今日も平和です。

## カカの天下６２６「花屋っぽい店」（後書き）

意外と繁盛しているらしい花屋さん。看板娘と看板バケモノは今日もちょっとだけ騒がしい。

それにしても昔の話を読み返したら予想以上に拙く、修正したい場所が山ほど出てきて困りました。気がついたら朝まで修正してていつの間にか出勤時間でした。ま、一日くらい寝なくても死にはしませんよね！

感想欄も楽しいことになってきたし、まだまだ頑張りまっす笑

# カカの天下６２７「黒い画面と黒い人」

こんにちはー、サカイです。うふふー。

今日はですねー、サエに頼まれてパソコンの使い方を教えることになっているのですよー。もー楽しみで楽しみでー！

「お母さん、聞いてよー」

「はいはいー？」

「パコちゃん動かなくなっちゃった」

パコちゃんですってよ奥さん！　うちの子ったら可愛いと思いません！？　あなたなんかより！

「どうしよー……」

「ほらほら、こんなときのために説明書もらったでしょー」

サエの誕生日のとき、誰かは知りませんが『パコちゃんの説明書』というものをプレゼントしてくれました。おそらくはサエの機械オンチを知っている学校の友達か……ぐっじょぶです。だってその内容がとーっても素晴らしいんですから！

「うん……えっと、パコちゃんが停止した場合は……」

サエと一緒に手書きっぽい説明書を覗き込みます。

Q、パコちゃんが停止しました。

A、パコちゃんは拗ねてます。しかし、「きゅぅーん」とおねだりする子犬のような声を出してください。

「ほらほら、サエ。椅子から立って」

椅子をずらして、机の上にあるパコちゃんの真正面にサエを立たせます。

「さ、やってー！」

「えと、きゅぅーん」

「ポーズつきで！」

「え、えっと。子犬のポーズ……」

「はい、犬耳」

「なんでこんなものをー」

「いいからいいから尻尾もつけてー。ほら、さんはい」

「きゅぅーん、きゅぅーん」

……！！

ええと、ビデオビデオ、鼻血鼻血、ティッシュティッシュ。

「お母さんどしたのー」

「ううん、心配いらないわサエ。お母さんさっきレバーいっぱい食べておいたから」

いくら流しても大丈夫ですよーだばだばだば。

「そっかー。でもパソコンは暗い画面のままなんだけどー」

それはね、サエ。お母さんが予め保存しておいた真っ黒な画面を開いているだけなのよ？　ペイントプログラムを最小化すればすぐに直るの。でも教えないの。ふふふー。

……気のせいですかねー。画面よりもあんたのほうが黒いっていう声が聞こえたような。

「ねーねー、どうするの？　お母さん」

「あ、はいはいー。ほら、説明書をよく読んでみなさいな。続きがあるでしょ？」

「ほんとだ」

――それでもダメなら、できる限り可愛くおねだりしてみましょう。

「ねーパコちゃん。お願い、仲良くしよー？」

「サエ、もっと可愛く」

「ねーねーパコちゃん。私とあそぼ？」

「サエ、ポーズ」

「ねーねーパコちゃん。私とあそぼ？　きゃらーん♪」

きゃらーんっていうのはポーズをキメたときの効果音ですよー。
どんな可愛らしいポーズかは語感でなんとなく想像しましょー。

「サエ、自分のこと名前で呼んで」

「ねーねーパコちゃん。サエとあそぼ？　きゃらりん♪」

「さ、サエ、赤ちゃん言葉いってみよう」

「ねーねーパコたん、サエとあそびまちょ？　きゃらりらりん♪」

「も……もうちょっと言葉増やしてみようか」

「ねぇねぇパコたん、サエね、さびちぃの。わたちといっちょにあそびまちょー、きゅぅーん。きゃらりらりんぽん、しゃらららーん♪」

しゃらららーんですよあなた！！

もうダメです！！　パソコンなんぞに可愛らしく必死に話しかけるこの娘の滑稽さと可愛らしさといったらもうもうもう！！　これ以上エスカレートさせたら私死んでしまいます！！　殺人事件です！！　死因は萌え死に！！　凶器は萌え！　犯人は罰としてアイドルデビューの刑です！！

「あ、なおったー」

サエの死角でマウスを操作して黒画面を最小化。ぐっぱい私のしゃらららーん……ビデオに撮ったからもう充分です。これさえあれば元気になれるし、ダビングすればカカちゃんへの取引材料にもなりますし。

「これで普通に使えるねー」

「待ってサエ」

「鼻血ふきなよ」

「うん……よし鼻詰めた。えっとね、操作するときに注意する点があるの」

「なにー？」

「ほら、説明書のここにもあるでしょ」

Q、パコちゃんの機嫌をとりたいのですが。

A、矢印キーを押すとき、その方向へお尻を振りましょう。

「やってみて」

「こ、こうかな」

サエの小さいお尻が右にくい、左にくい。

くい、くい、くい。

ふり、ふり、ふり。

「死んでもいいですか？」

「なに言ってるのお母さん」

い、いやー、そろそろ出血多量の領域に……

「あ、あとね、サエ。キーボードを打つときは効果音をつけるといいのよー」

「わかったー」

何も知らない子ってすごいねー。

「ぴ、ぽ、ぱ」

私の心も打たれてます。

「きゅん、きゅん、きゅーん」

私の心もきゅんきゅんです。

「ぴちゅーん、ぱちゅーん」

私の脳もぴちゅーんです。

はぁ……サエのお母さんでよかった。サエが機械オンチでよかった。

私は今日も幸せです。

……どう？　サツマさん。あなたの分まで幸せになっちゃうからね。羨ましいなら……ビデオの中に少しくらいなら、映ってもいいですよ。ふふ。クリックかちっとな。

「わ、また真っ暗になっちゃったー！！」

とりあえず、おねだりもっかい見よ。

## カカの天下６２７「黒い画面と黒い人」（後書き）

サカイさんがサエちゃんにパソコンを教えている話が見たい！
というリクエストをいくつかいただきまして。
シニア船さんにいただいた誕プレも加えて書いてみました。

なんかこんなのをうきうきしながら書いてる自分を振り返るとちょっとキモいなぁなんて思ったり。
ま、喜んでくれる人がいるなら……

いるよね！？

# カカの天下６２８「ボクの大冒険」

こんにちはです！

ボク、ミートボールです！　初めまして！　生後三十秒です！

えっとですね、いま作られたばかりでですね、ファミレス東治の小鉢の中です！　小鉢ってあれですよ、小さい器のことですよ！

なんだか店の黒板に『定食は全てミニサラダ、ミニうどん、小針、清物付き』って書いてありますけど、小鉢ですよ！　小針が料理についてきたら怖いですからね！　あと字が違いますけどきっと漬物ですよ！　清物ってなんですかね！　誰か書き直さないんですかね！　ボクが書き直したいところですけど手も足もないんで無理なんですよね！　ミートボールなんで！

「――ご注文は以上でよろしいですか？　シューさん」

「はい、お願いします！」

ボクは厨房で、定食に使われるのを待ってるんですけど、ホールの方からはお客様の声とかが聞こえてきます！

「オーダー入ります。ミックスフライ定食、から揚げ定食、パスタランチ、オールワンです」

「はーい」

おっと、そろそろ出番ですかね！　ボクをのせた小鉢がお盆の上

に並べられました！

「おやクララちゃん。ちゃんと注文を聞いてこれましたか？」

「はい！　クララばっちりです！」

おやおや可愛らしい店員さんがいますね！

「えっと、こーら、うーろんちゃ、えっと……」

がんばれ！

「あ、おれんじじゅーす、ホールインワンです！」

さっきと何か違う？

「あっはっは！　どこに何が入ったのでしょうねぇ。少なくとも私のツボには入りましたが。可愛い可愛い」

「クララこれ持ってきます！」

「ええ、頑張ってきてください」

「はいです！」

持っていかれます！　いやぁ、やっぱり料理の一つとして生まれたからには誰かに食べられないといけませんよね、楽しみです！

「あ、手が滑りました」

――かちゃん。

……あ、あああああ！

ボク、落下！！　床に落ちました！！

「クララしょっくですぅ！　キリヤ！」

「はいはい、片付けますよ」

ああ……ボクの人生はこんなところで終わるのか……人じゃないから肉生か……肉屋さんみたいな名前だなぁ……しくしく……

「待ってくださいキリヤ。その肉団子、捨てるですか？」

「ええ、もう汚いですからね」

汚れてしまったボク……もうあの頃には戻れないんですね……

「クララ、捨ててきます」

「おや。ではお願いします」

持ってかれるボク……え？

ちょこん、と。厨房の隅っこで隠れるようにこっそりと新たな小鉢の中にのせられたボクは、困惑した表情で女の子を見上げました。顔ないけど。

「生きろ」

渋くそう言った女の子は、そっと他の小鉢と一緒に並べてくれました。

なんて優しい女の子なんでしょう……嬉しいです……でもボク、床の汚れついてるけどいいんですかね。

あ、お盆にのせられました！　そしてまたあの女の子に持ってかれます！　本当にいいのかなぁ、どきどき。

「お待たせしました！　シュー、受け取るです」

「あ、はいクララ先輩。ありがとうございます」

「これもこれもです」

「はいはい。ほらタマ様、お義姉様、お料理がきましたよ。はいお箸です、はいお水いれますね」

「なにさまだ!?」

「ええ！　僕がそれ言われるんですかぁ!?」

なにやら下僕のごとく甲斐甲斐しく働く男がいますね！　哀れです！

「ん、シュー」

「なんでしょうかお義姉様！　おしぼりですか!?」

「そのミートボールさ、汚れてない？」

ボクのことですか！？

「ほ、本当ですね！　こんなものをタマ様やお義姉様に食べさせるわけにはいきません！」

こんなやつに、こんなものって言われてしまいました……

「こんなものはポイです！」

うわぁ、投げられた！？

飛んでいく……飛んでる！　鳥になった！　ボク、鳥になったよ！　鶏肉じゃなくて豚肉だけど！

「……あら？」

「どうしたんだいアヤ坊」

な、なにやらカップルのテーブルに着地しました。おおお？　女性の方にスプーンですくわれて……

「見てよニッシー。ここに変なものが」

「変なもの……スプーンに映った自分の顔かい？」

「ぶっとばすわよ！？」

「あはは、冗談だよ。アヤ坊はいつだって可愛いよ」

「ば、ばか……」

「さ、ほら……」

「ん……」

そんなお互いの唇を食べる前にボクを食べてくださいよ！　ああ、スプーンから床へ落とされた……

ころころと転がるボクの身体……

もう誰にも食べられないのかな……僕の一生は、ゴミ箱に捨てられて終わるのかな……誰かの身体の中で、たんぱく質として活躍したい。ボクの望みは、ただそれだけだったのに。豚肉だから吸収効率もいいし、他のお肉よりも頑張ってスタミナつけるぞって、そう、意気込んでいたのに……

「あ、もったいな」

「お義姉様！？」

ひょい、ぱく。

あ。

「――という夢を見たんだよ」

カカです。ミートボールじゃありません。

「壮大ないいわけだな、オイ」

「ほんとに見たんだってば！　信じてよテンカ先生！」

「わかったわかった、信じてやるからそのミートボールは捨てろ」

「うぅ……世の中には三秒ルールというものがあってだね」

「そりゃ姐さんなら大丈夫さ、てめぇの夢物語みたいに拾って食ってもな。三年ルールくらいありそうだしよ。しかし教師として言わせてもらう、落ちたものは食うな。腹壊す」

「もったいない……」

「その気持ちは立派だがね」

――お察しの通り、今までのは全て私が見た夢。

給食中に落としたミートボールを拾って食べようとした私をテンカ先生が止め、私はこういう夢を見たからコイツが可哀想で食べずにはいられない、と主張したのでした。却下されたけど。

ところで、どの辺で夢だってきづいた？

夢だと気づくためのおかしな点はこんなところだ。

まず、シュー君のセリフが多い。

クララちゃんが普通に働いている。時給は千円。高すぎる。あとたまに渋い。

やっぱりシュー君のセリフが多い。

落ちて汚れた食べ物をお客様に出すのはあまりにもひどすぎる。

シュー君が喋りすぎ。

ニシカワ君とアヤちゃんが必要以上にラブラブでとても目ざわり。

お義姉様とか先輩とか言っている。しかもシュー君が。

そもそもミートボールに意思などない。

とにかくもうシュー君のくせにセリフが多すぎる。

以上だよ。わかったかな?

## カカの天下６２８「ボクの大冒険」（後書き）

パッと開いてみるといきなり肉団子に自己紹介されるという、あるいみ出オチちっくなこのお話、いかがでしたでしょうか。

まーその実は夢オチなんですが。

頑張ってシュー君に喋らせて違和感を表現してる中、私は本当に彼に出番を与えてないんだなぁと実感しました。

なのでもっと出番を減らそうと思います。

# カカの天下６２９「カカ天クエスト　ＥＰ９」（前書き）

注意：このお話はカカ達がゲームのキャラになりきりながらＲＰＧを進める話です。話の内容はゲームの中ですが、『もしもカカ達が異世界にいたら』みたいな感覚でお楽しみください。

ステータス

カカ　ボケ勇者　レベル１　へん

サエ　悪の魔法使い　レベル１　はらぐろ

サユカ　手の平の踊り子　レベル１　さびしんぼう　エロレベル３

トメ　ツッコミ　レベル１　つっこみ　さらわれ中

ケロリン　スライム　レベル７　おっさんくさい　状態ヤベェ

## カカの天下629「カカ天クエスト　EP9」

トメが敵の手に渡ってしまった、その事実を前にしてさすがにそろそろ慌て始める勇者一行。ようやくというか、やっとというか、腰重すぎるだろ鉛でも入れてんの？　って感じだが、とにかくカカたちは動き出す！

「大変だ……トメ兄がいないと」

「ツッコミがいないねー」

「わ、わたしが頑張るしかっ！」

しかし悩みどころが微妙だった。

「とにかく、いざというときのためにケロリンを生き返らせないとだねー」

「うん、戦う人いないもんね」

「教会にいきましょっ！」

そして他人任せにする気満々な一行だった。

――教会にて。

「生き返らせることができないっ!?　どうしてよ！　それが教会

の仕事でしょ！？」

「た、たしかにそれが商売ですけど」

神父はぶっちゃけた！

「でも……ですね」

神父はおそるおそるカンオケを開けた。

腐臭が神父の鼻を襲う！　５のダメージをうけた。

「う、うちではリサイクル業務は行ってませんので」

ずっと放置されていたスライムは、すでにただの産業廃棄物と化していた。

「もう、サユカン。ちゃんと冷蔵庫に入れとかないからこういうことになるんだよ」

「なんでわたしに言うのよっ。大体ね、『死体を冷蔵庫に入れる』なんてコマンドないでしょ！」

「でも常識的に考えてー、何の死体であれ常温で保存してたらヤバイよねー」

「なんて融通の利かないゲームなのかしら……」

それほどでも、とナレーションは呟いた。

「誰よっ！？」

返事がない、ただのゲーム管理者のようだ。

「空気を読んでくれてるプログラムじゃないかな、多分」

「ねーねー、よくわかんないこと言ってないでケロリンどうしようか考えようよー」

「あの……あちらにリサイクルショップがありますので」

親切な神父の言葉に、勇者一行は微妙な表情になった。

――リサイクルショップ。

「いらっしゃいませ」

「あの、このスライムなんですけど」

「生き返らせることできますかー？」

店員はカンオケを開いた。

腐臭が店員の鼻を襲う！　しかし店員には効かなかった！

「すごいわね、さすが専門家っ！」

「いいえ、単に私には鼻が描かれていないだけです」

グラフィックの問題だった。

「ふむふむ」

「生き返れそー？」

「はい。『洗剤』と『水』があればなんとか」

「なんだか身も蓋もないよねーいろいろ」

説明しよう！

二つともスライムの原材料である。洗剤の種類にもよるが、それに洗濯のりを加えるとスライムが作れるのだ！

「そんなわけで、『洗剤』と『水』を手に入れてきてください」

「は？　そんくらいあなたの家にもあるっしょ」

「そのようなアイテムは取り扱っておりません」

「あのー？　『水』もないんですか？　飲んだりしないんですかー？」

「そのようなコマンドはありません」

どこかで聞いたようなセリフが返ってきた！

「サユカンがあんなこと言うから！」

「だ、だってぇっ！　ズルいわよそんな都合のいいところだけゲームっぽくて都合のいいところだけリアルみたいなっ」

「空気読んでください。それがＲＰＧです」

サユカは黙るしかなかった！

「その二つはどこにあるのかな。店員さん知らない？」

「そうですね。『水』を手に入れるなら、この町から北へしばらく行くと清い水の流れる川がありますので、そこで」

「いや、だから水道……」

「そのようなグラフィックはありません」

「ああもうっ！　わたしが悪かったわよっ！」

「じゃ『洗剤』は？」

「この町にある酒場で使われています。お願いすれば分けてもらえるかもしれませんね」

「集めるしかないか……ＲＰＧってそういうもんだし」

「そうなのかー」

「面倒くさいわねっ」

もっとも基本的なことである戦闘をすっ飛ばしている身分なわりには贅沢な一行であった。

――酒場。

「まずはここだ！　ねぇねぇ『洗剤』わけて」

カカは店主に話しかけた。

「ほほう？　構わないが、こちらもタダでやるわけにはいかないなぁ」

たかが洗剤少しくらい無料で分けろよ、というツッコミをする空気の読めない人間はすでにいなかった。

「今日一日、三人にはここで働いてもらおう」

ミニゲーム的イベント発生！！

「クエスト扱いだから経験値も入るよ」

「これはもうやるしかないっしょ」

「うん。一回も戦わずにレベルをあげよー！」

「だ、大丈夫かしら。わたし働いたことなんかないわよっ」

「心配いらないよ。こういうのに大事なのは経験や社会性じゃない

の。コントローラの操作だけだから」

本日のぶっちゃけ率は非常に高めとなっております。

「それじゃ、お願いするよ！！」

ミニゲームが始まります。

各テーブルに座っているお客さんにオーダーを聞き、暗記して間違えずに料理を運びましょう。

スタート！！

終了！！

成功！！

「描写はっ！？」

このミニゲームは全てグラフィックのみで行われるため、そのようなナレーションはありません。

「今日そんなんばっかだねー」

「まぁまぁいいじゃん。経験値もらえれば」

「ご苦労様。ほら、報酬だ」

「来た来た！」

『洗剤』を手に入れた！

「よしよしー」

経験値を得た！

「やったわねっ！」

時給が上がった！

「レベル上がろうよ！？」

結局レベル１のままの一行は、果たして頼みの綱のケロリンを生き返らせることができるのだろうか！？　そしてトメは今ごろ何をしているのだろうか！　イチャイチャしてるなよコノヤロウ！

次回、『すばらしき水の精登場』をお楽しみに！

## カカの天下６２９「カカ天クエスト　Ｅｐ９」（後書き）

ちょっとペースを早めて短めに。いかがでしたでしょうか。身も蓋もないこと言いまくりですが笑

あぁ、それにしてもあんパンを書く暇がない。
２００話くらいまで一気にリニューアルかけたいのに時間がない。
そもそも休日がない。
誰か……睡眠時間か使えるバイトをください笑

ま、ど根性です。今夜も作り笑顔です＾＾
やっぱ黒いとか言わないでネ。それがお仕事だからネ。

# カカの天下６３０「元気な人」

こんばんは、トメです。

今日は久々にテンと二人で居酒屋『病院』へと飲みにきています。

「ご注文はよろしいですか？」

「心臓を生で」

「オレは腎臓を生で」

「かしこまりました」

断っておくが、決して臓器を注文したわけでも妙な料理を注文したわけでもない。これは単に生ビールの注文だ。メニューの注意書きに書いてあるんだよ、『体内の臓器のうち、どれかと生、と言って注文しないと売りません』って。

「お待たせしました。心臓の方？」

端から聞いたら意味わかんないねこの呼び方。

「はい、僕ね」

「どうぞ。ではこちらが腎臓で」

適当に料理を注文すると、店員は「オーダー入りまーす！　オペ準備！」と厨房に向かって叫んでいた。

「相変わらずおもしれー店だぜ、ここは」

「ほんとにな。んじゃ乾杯！」

「乾杯！！」

カチンとジョッキを合わせ、二人そろってぐいっとあおる！

「ぷはぁ！　よぅトメ、最近どうよ」

「どうよもこうよも、そうよ」

「そうか」

「そうなのさ」

なんとなくもう一度乾杯し、ぐびぐびビールを飲む。

「くはぁ……テン、あれだ。お疲れ」

「おぅ、疲れたな」

何に疲れたとは言わないが、大人には色々あるのである。ビールを飲んで無意味にダラダラと語るときが一番楽なんだよなぁ……

「お、明太だし巻きがきた」

今度リベンジするために参考にしなければ。

「ノンノンノン、トメ。ヘンタイだし巻きだ！」

「大声で言うなよ」

「なんだなんだなんだ！？　なにそのオモシロ料理！！　見せてちょ！」

こっちこそなんだなんだなんだ？　知らない女性がいきなりこっちのテーブルに――

「なーんだ、普通のメンタイだし巻きかぁ。でもヘンタイだし巻きか、いいセンスしてるね！」

「ふふん、そうだろ。いぇーい」

「いぇーい！」

親指を立てて拳を付き合わせる、妙に楽しそうな女性二人。

「じゃあ手羽先明太は、手羽先ヘンタイになるのね！？」

「うあ、あんたもすげぇチョイスをするな。やらしすぎだろ」

「手の先がヘンタイなんだよ？　うっしっし」

「しかも羽だからくすぐるんだろ」

「あはは！　やーん」

「このヘンタイめ」

「なんで二人とも最後に僕を見るのさ！？」

くそぅ、たまに僕宛てでなぜか『この変態め！』とか『このロリコンめ！』とか手紙がくるけど、なぜ僕がそんな扱いを受けねばならんのか。警察のお世話になるような邪な考えは一切浮かべたことがないのに……

すいません、嘘つきました。

昨日、会社のゴミ袋を一つ、失敬しました。だって買うの面倒だったんだもん。

やることちっちゃいとか言うな。

「あんたも飲めよ」

「おうよ！　そこの格好いい店員さーん！！」

「はい、お呼びで」

「ごめん、あんまり格好よくなかった」

オイ。ごめんって言ったことをごめんなさいするべきだと思います。

「格好いいじゃなくて可愛いよ！」

「あ、ありがとうございます！」

……あれま。うまいこと褒めるねぇこの人。

「とも臓を生でくらはいな♪」

ともぞうって誰だ！？

「おお、しぶい臓器じゃねぇか」

どんな臓器だ。身体に居るんか、とも臓。そこだけ老化してそうなんだけど。

「とも臓がんも怖くないぜぃ！」

病気のがんより銃のガンみたいだな。ともぞーガン。

「――お待たせしました！　とも臓！！」

いねーよそんなやつ。ていうかなんでそいつだけ呼び捨てなんだ。なんで向こうに座ってる爺さんが振り返ってるんだ。もしやあんたの名前、とも臓か。だとしたらなんとなくごめん。ともぞーガン撃つなよ？

心の中でそう呟きながらも、輝かしい笑顔でジョッキを受け取る女性を見つめる。なんともまぁ元気溢れる人だ。しかしテンのやつ……

『乾杯！！』

カチン、とジョッキを合わせる。それはいいけど、知り合いなら紹介してくれればいいのに。

「くはぁ！　うめぇな！」

「いい飲みっぷり！」

「あんたもな。で、あんた誰だ？」

「ぶふっ！！」

び、ビール吹いた。

「オレはテンだ。あんたは？」

「あたしはメグ！　ん、どしたのおにーさん」

「い、いや……あんたら初対面？」

そだよ？　と仲良く頷く二人。

「なんて初対面でそんなに意気投合してんだ」

「んふふ、甘いねおにーさん。居酒屋とはそういうモノなのだよ。ねーテンちゃん♪」

「なーメグっち♪　乾杯だぜ！」

「おうよ！」

「トメも飲め！」

「そうそう。甘いトメちゃんはビール飲んで苦味をつけたほうがいいよー」

これが酔っ払いの真髄か……僕も修行が足りないな。

「や、しかし。知らない人間同士でいきなり飲むなんて経験あんまりないぞ、僕は」

「わかってねぇなトメ。ここはな、心寂しい人間が集う場所なんだよ。気に入ったヤツがいたら話しかけて語り明かして飲み明かして朝日を拝みてぇヤツらの集合場所なんだよ！」

「いつからここは精神病院になったんだ」

「いやいや待って。考えてみてみて？」

「なにさメグさん、だっけ」

「そそ。アタシ思うんだけど、心臓とかを生で注文してる時点で精神病院いきじゃね？」

すんごいごもっとも。

「で、でもここの店長だって個性を出そうとマジメに考えてるのかもしれないし！」

「そうなのかよ、店長？」

「ん、なんだ。マジメに心臓がほしいのか」

「いらねーし！！」

「アタシ見てみたい！　そして食べさせてみたいね！」

「なんで僕を見る！？」

そんなこんなで、なんだかよくわからない合流をした僕ら三人はそのまま盛り上がって飲み続け――

潰れた。

「おーい、二人ともー。もう限界？」

「……メグさん、つおいね」

僕もテンもぐでんぐでん。僕はなんとか意識あるけど、テンはすでに半分寝てる。

「おーい、テンちゃん。大丈夫？」

「……丈夫」

なにが。

「テンちゃん！　おーい！　……よし。色々質問してみれば意識はっきりするかな。テンちゃん、質問に答えなさい。お名前は？」

「テンちゃん……」

あのテンが自分のことをちゃん付けするところなんて滅多に見ら

れるもんじゃない。しかし脳を責める酔っ払い電波が強すぎてそれに注目する余裕はない。

「よーしテンちゃん。歳はいくつ？　何歳？」

「みっつぅ……」

テンちゃんさんしゃい？　酔いでそこまで退行したか。

「みっつじゃないでしょ。サバ何匹読んでるの」

「よっつぅ……」

「あら？」

「いつつぅ……」

なんの数を数えてるんでしょうかねこの人。サバか。

「仕方ないなぁ。トメちゃんは大丈夫？」

「おぅ……」

なんとか……

「じゃ聞くけど。トメちゃんなんさい？」

「人災……」

「アタシのこと!?　あははは！　そんだけ言う元気があれば大丈

夫だね。じゃーお代は払ってタクシー呼んでおくから、回復してからゆっくり帰りなよ！」

「さんびゃくさんじゅうぅ……」

「テンちゃん数えるのはや！　あは、またね。さーて明日はライブだ！　元気は充電したし、あとは寝るだけ！」

そのメグさんという女性は、嵐のように去っていった。

でも、姉のようなはた迷惑な嵐ではなく、なんとなく周りを元気にしてくれるような、心地のいい災害だった。

そう、災害だ。とりあえずこの頭痛だけは。

タクシー代まで払っておいてくれたらしいし……いつか恩返ししないとなぁ……

「いちおくぅ……」

「それは嘘だ」

## カカの天下６３０「元気な人」（後書き）

正体不明の元気な人が通り過ぎるお話です。
さてさて、この方は何者なのでしょうか。別に新レギュラーキャラというわけではありませんが、しかし……？

ま、スルーしてください＝ｗ＝

# カカの天下６３１「二号、もしくは」

こんにちにゃ、カカですにゃ。

なんでいきなり猫みたいなバカみたいな語尾をつけているかというとにゃ、今の私たちの話題が猫の話だからだにゃ。

「猫の名前、ねぇ」

「そーそー。決まらなくてさー」

「猫ってあれでしょ？　サエすけが誕生日にもらった腹黒子猫。飼っていいことになったのね」

学校からの帰り道。私たちは歩きながらサエちゃんの相談を受けてたんだにゃ。腹黒子猫というのはお腹の部分だけ毛が黒いという意味で、サエちゃんみたいな意味はないんだにゃ。

「……」

「ど、どしたのサエちゃん」

「とてもにっこりとカカすけを睨んでるわねっ」

「私、何かしたのかにゃ？」

「なによその『にゃ』って。ちゃんと日本語喋りなさいよ」

「オゥ、コレ日本語アルヨ」

「わざわざ胡散臭くしなくていいから」

「……カカちゃん」

「な、なにアルかサエちゃん？」

「なにか失礼なこと考えてなかったかなー？」

「そ、そんなことアルないヨ！？」

「どっち」

サエちゃん日に日に鋭くなってきてるよね……ぽややんと鈍かった昔とは大違いだ。

「まーいいや。話を戻すけど、子猫の名前どうしようかなー」

「サカイさんと相談して決めればいいんじゃないの？」

「そうなんだけど……私もお母さんも、あの猫ちゃんを前にすると遊ぶのに夢中になってそれどころじゃなくなるのー。お腹のもふもふしたところに顔を埋めるのがもーたまらなくて」

「あの腹黒子猫、サエちゃんをもてあそぶとは！」

「カカすけ、逆よ逆」

「む、そっか。サエちゃんが遊んでるほうか」

でもどっちも腹黒だから逆にしても別に。

「……そこまで言われると開き直って思いっきり黒いことしたくなってきた。どうせ明日は日直だしー」

「何も言ってアルないヨ！？」

「だからどっちよっ」

この使い方面白いアルヨ。

「もういいけどさー。子猫の名前ー！」

「サエ二号でいんじゃない？」

「ぴったりねっ」

「……むー」

「一号は不満みたいよ。どうするのカカすけ」

でもこれ以上ぴったりな名前もないしなぁ。

「それじゃ、この帰り道で目についたものを適当に名前にあててみよっか」

「あ、いいんじゃないかしら。どう、一号？」

「一号ってゆーなー」

サエちゃんは頬をリスみたいに膨らませながらも同意してくれた。
子猫なんかよりこの顔のほうが万倍可愛いと思う。

「適当に目についたもの……あれはどうかな」

「なになにっ」

「挽き肉」

「……猫、食べるのー？」

「じゃあ合い挽き」

「何と合わせるのよっ！」

「……」

「なんで私を見るのー？」

合わせたらどれだけ黒くなるんだろう。

っと、サエちゃんに睨まれてる。コホン！　そういえば総理大臣のときも猫を食べるとかどうとか揉めたなぁ。懐かしい。あのときはお姉の腹をかっさばいて大臣を救い出したんだっけ？　あんま覚えてないけど。

「とにかく、もっとマトモな名前を選びなさいよっ！」

「じゃあサユカンやってみなよ」

「わたしっ！？　そ、そうね」

サユカンは周囲をキョロキョロと見渡して……やがてそれに目を留めた。

「フェラーリ」

かっけぇ。

「いいかもー。でもあの車はフェラーリじゃないよ」

「う、うるさいわね。車の種類なんて知らないもん」

でもいい候補なのは間違いないね。私も負けてはいられない。

「お」

「カカちゃん、なにか見つけたー？」

「なんて名前か言ってみなさいよっ」

「ハゲ」

「待てっ！！」

や、だってそこのおっさんが。

「わたしみたいに、もうちょっと名前っぽいものを選びなさいよっ」

「鈴木建設」

「そんな名前の猫やだー」

むむ、目に付いたものを適当にって言ってるんだからもうちょっと受け流してくれても……お？

通りすがりの総理大臣だ。

どうでもいいけど、この文章だけだとすごい意味だよね。

……ふむ。

「これはどうだろう」

「なにー？」

「官房長官」

「カカすけ……だからさぁっ」

「採用ー」

「いいのサエすけ！？」

「気に入った」

「サエちゃん。いぇーい」

「カカちゃん。いぇーい」

ぐっ、と親指を立てあう私とサエちゃん。

かくして、よくわからないノリで官房長官が誕生した。

なんて私たちらしい。

「これで合い挽きにするなら総理大臣と官房長官に決まりだね」

「日本が大変なことになりそうだねー」

「そもそも誰が食べるのよ、そんなもんっ」

「……お姉？」

ぞわっとした。

# カカの天下６３１「二号、もしくは」（後書き）

腹黒官房長官誕生！

注意：当作品は現実の政治に関して批判を抱くものではありません。というかこんな話を使ってどこをどう批判しているのか、全くもって解読不能なはずです。腹黒？　それは私のことです。ともかく所詮はネタでしかないという、広い心を持ってスルーしていただくようお願いします。

ところでカカラジをご覧になった方は知っているでしょうが。脅迫状を私に送ってきた旅行者さんが感想欄で、とても頑張って愉快に私にケンカを売ってます。私も喜んでそのおもろいケンカを買い漁り、返信をしたいと思っています。ちょっと遅れてますが、今夜帰ってきたら頑張って返事を書きまくるつもりです。

覗いてみると楽しいかもしれません笑

## カカの天下６３２「サユカの任務、策略編」

さ、サユカです！

ちょっと聞いてくださいっ！　だだだ大事件が起こったんです！！

今朝ですね、カカすけとサエすけといつものように登校してきて、教室に入ったらですねっ！

黒板に巨大な相合傘が書かれていたんですよ！！

相合傘ってわかりますよね？　三角形の頂点から対辺へ直角に線を引いて、そのまま辺を突きぬけて適当な長さで止めて傘にして、その線を中心として両脇に男女の名前を書き、二人がラブラブだということを世界に知らしめるものよっ！！

ああ、動揺のあまり小学生に似つかわしくない説明をしてしまったわっ！　なによ頂点と対辺って！　まだ習ってないのに！　いいえ、そんなことはどうでもいいのっ！

重要なのは……その相合傘にわたしの名前が書かれているということ。

そして、その相手がトメさんなら問題はなかった。

でも、でも……その相手が！

「なんでタケダなのよっ！？」

全くもって不可解だわっ！

「へー、サユカンってそうだったんだ」

「トメさんはもう飽きたんだねー」

「そんなわけないでしょっ！！　誰よ、こんなの書いたのはっ！！」

すでにほとんど揃っているクラスメイトの皆は「さぁ？」とニヤニヤしながら答えた。

全員犯人ってことでぶっ飛ばしてやろうかしら。

「と、ともかく、これ消すわよっ！」

黒板消しでごしごしごし！！

あれ。

「消えない！？　うわこれチョークじゃなくてペンで書かれてるじゃないのっ！　なんてタチの悪い――」

「おーし、てめぇら席つけー」

朝礼のために教室へ入ってきたテンカ先生は、黒板の相合傘を見てピタリと動きを止めて……

「席ついとけよ」

ピシャン！　と引き戸を閉めてどこかへ行った。

「な、なんなのかしら」

「サユカン、とりあえず座ろうよ」

「それ、消えないよー」

「う、うん……」

釈然としないながらも渋々席に向かうわたし……うぅ、なんか周りのニヤニヤした視線がうざいわ。

ピシャン！　と再び開く教室の引き戸。

「よぅ、待ったか」

あ、テンカ先生――は！？

「そこの生徒。どけ」

「あの俺の名前――」

「知らん。いいからどけ。で、向こうの教室で空いてる席に座れ」

「は、あの――」

「いいから行け」

有無を言わさず教室移動することになった、わたしの隣の席の男

子。

そして、代わりにそこに座ったのは――タケダ。

「な、なんだね一体！　俺はここのクラスではないぞ！」

「さ、朝礼を始めっか」

「テンカ先生！！　どういうことですかっ！」

「あん？　大丈夫だって。タケダのクラスのじーさん先生ボケてっから。一人くらい生徒が入れ替わってもバレやしねーよ」

「そういう問題じゃないわよっ！　なんでこんなのが隣にいるの！？」

「だってラブラブなんだろ？」

「だからどこをどうしてそんな有り得ないことになってるのよっ！　ゴキブリに恋する女なんていないでしょうっ！？」

「さ、サユカ君。その言い方はあんまりでは――」

「黙れゴキブリ！！」

トメさんに比べればあんたなんかゴキブリよ！　熱湯とか中性洗剤でもかぶってればいいんだわ！　そして蒸発しろっ！！

「さて、黒板を消す前に写メとってトメに送らねぇと」

「にゃあああああああああああっ！！」

「じゃ私はサユカンとタケダのラブラブツーショットを」

「机くっつけちゃおっかー」

「うぎゃあああああああああああああっ！！」

「サユカン、その叫び方は女としてどうかと」

「あんたらの所業は人としてどうかしてるわよっ！！」

はぁ、はぁ、はぁ……ちょっと一休み。

「ここでトメお兄さんと電話が繋がっておりますー」

「休ませる気なしねっ！？」

「はいどうぞー」

こうなったらわたし自身が誤解を解かなければ！

「もしもしっ、あ、あのですね」

『似合ってるよ』

がーん……

と、トメさんの口から……そんな言葉が……

「こうなったら……タケダを殺すしかっ」

「な、なんでそうなる！？」

『やれやれー』

「なぜ誰一人として止めない！？」

えーと、彫刻刀は、と。

「……む？」「ん？」「おぉ」「あれれー？」

へ。どしたの皆、驚いたような声だして。

「あら。あなたは」

彫刻刀を探してて気づかないうちに……目の前にインドちゃんが、もじもじしながら立っていた。

「あ、あの……その……」

「どうしたの、インドちゃん。わたしに御用？」

「そ、その……！」

なにかしら。なんだか怯えられているような。インドちゃんの後ろのほうではアヤちゃんやイチョウさんが「言え！」とか「頑張ってくださいまし」とか応援してるけど……

「さ、ささ、サユカたん！」

「……たん？」

「か、噛みまちた、じゃなくて、えっと……」

すごい必死だわ。なんだか初めてトメさんを目の前にしていたわたしみたいね。

「うぅ……」

そうそう、こんな風に言いたいことがあるのに言葉にできなくて、感情だけが溜まっていって、

「……！」

爆発するのよね。

「手が滑りました！！」

パコーン、と。

思いっきしアンダースローで手から滑ったカレー入りタッパーはわたしの額を直撃。そのままゆっくりと倒れていくわたし。

地面に倒れるまでの一瞬のうちに、わたしが思ったことは一つだけ。

――ああ、タッパーの口開かなくてよかった。カレーかぶるのはさすがに勘弁だわ。

「ぐは」

ばたりと倒れるわたしの身体。

そしてそんなわたしから少し離れたところでタッパーが弾けとび、カレーが床に零れる。セーフ。

それからはちょっと騒ぎになった。クラスメイトはインドちゃんの暴挙に唖然としたりカレーを片付けたり。インドちゃんはわたしに必死に謝ったりなぜかタケダにも謝ったり。

そして。

「ごめんねサユカちゃん。まさかこんなことになるとはー」

「……サエすけ。まさか」

「あれ書いたの私だよー。黒いことするって言ったじゃん」

そういやこの子、今日は日直で早く来てたんだったわね……今朝わたしたちと合流できたのは玄関に迎えに来てくれたからだし。

「サエすけ……君ねぇっ！！　やっていいことと悪いことが――」

「てぃ」

痛っ！　無理やり気味にわたしの耳に当てられたのは、携帯電話？

『もしもーし！　サエちゃん！？　……まったくもう、さっきのをもう一回言えって？　仕事中に恥ずかしいんだけど……まぁいいか。

サユカちゃん、昨日の服、似合ってたよ』

え。

「本当ですかぁぁぁぁっ！？」

『う、うん』

「嬉しいですっ！　昨日の服はお気に入りでしてっ！」

「うわ、すんごいニッコニコだねサユカン」

「ふふ、ちょろいねー」

「どうやったのサエちゃん」

「あらかじめトメさんに『昨日の服がおかしくないかサユカちゃんが不安に思ってるので元気づけてください』って電話しておいたの。これでサユカちゃんの機嫌はばっちり。計画通りー」

なにか聞こえた気がするけど、わたしの頭は幸せモード！　トメさんとの会話一色に染まった。

染まりすぎて目障りな黒板に椅子を投げつけようとしたら、さすがに止められたわ。危ない危ない。心が爆発するのも考えものね。

でも……インドちゃんはなんでわたしに爆発したんだろう。

ま、まさか……あれも恋の爆発！？

つまり。

わたしのことが！？　どうしようっ！！

## カカの天下６３２「サユカの任務、策略編」（後書き）

策略編といいつつ、策略にハマるお話です。インドちゃんガンバレ。

あとタケダがカレーをかぶるべきだったと思う人は挙手ノ

しかし最近サエちゃんの黒さが目立ちすぎですな。明日からはちょっとカカよりに戻そうかなっと。

あとどうでもいいけどビールとラーメン最高です（ほんとにどうでもいい

## カカの天下６３３「こういう仕返し」

いったあああああああああ！！

こ、こんにちは、カカです……いきなりすいません。

「大丈夫か、カカ！」

「足見せてー」

「うわ、もう腫れてるじゃないのっ！」

そうなのです。

今日も仲良く四人で遊んでいたのですが、私が調子に乗って公園の滑り台からジャンプして着地失敗、見事に足を捻ってしまったのです。

「こりゃ捻挫だな。カカ、痛むか？」

「うぬぅ」

「肯定なのか否定なのかわからん返事すんな」

「ばりばり痛い」

「ばりばりかー……」

「ばりばり掻いていいっ！？」

「死ぬからやめて！！」

ほんとに痛いんだよぅ。

「仕方ない、僕が背負って帰るか」

「ぬぉぉぉ」

「カカすけったら、なんて可愛くない声」

「顔も可愛くないー」

「少しは心配してよ！」

足が痛くて痛くて、トメ兄の背中に乗るのも一苦労……

お？

「ん、どうしたカカ」

なんか、思い出した。

「お、おい――」

――小さい頃。

「とめにーちゃん、おんぶ」

「うぐ、また来たか」

私はことあるごとにトメ兄におんぶをせがんでいた。

「あのな、カカ。僕さ、今ちょっと捻挫してて」

「おんぶー」

「や、あのな？　足が痛くて」

「おんぶぅ……」

「痛いから、その……」

「とめにーちゃん！　おーんーぶぅぅぅぅー」

「……うう」

「とめにーちゃん、かかのこときらい？」

「……はぁ」

「わ、とめにーちゃん」

「よいしょっ……と……ぐ」

「んあ？　何やってんのさトメ！！」

「姉……や……おん、ぶ」

「わーい！」

「カカちゃん大喜びだけど、あんた顔白いよ」

「うん……いだい」

「ほらカカちゃん。あたしがおんぶしたげるから」

「ぎゃー！！」

「ぎゃーってカカちゃんアンタ……」

「あっはっは、僕じゃなきゃ嫌なんだよなーカカは」

「死にそうな顔して何言ってんだか！　ふーんだ！」

「なーに、カカの泣きそうな顔のほうが痛いよ……いだだだ！！」

「わーい、とめにーちゃん大好き」

――うあ。

「か、カカ？　なにやってんだおまえ！？」

「カカすけがトメさんを背負ってどうするのよ！」

「ぬぅぅぅぅ」

痛い痛い痛い痛い痛い！！

「お、おいカカ」

「うっさい黙れ！！」

あーもー痛いなー！　死ぬほど痛いなー！　これより私が泣く方が痛かったなんて！　どんだけ私のこと好きだったんだトメ兄は！？

「カカちゃん、どーしたのー？」

「なな……なんでもないぃ」

「そっかー」

あっさりと引き下がるサエちゃん。何かわかってくれたのかな。

「おいカカ、バカなことしてないで下ろせ。捻挫がもっとひどくなるぞ」

それをあの頃のトメ兄に言いたい！

「いいから！　家に帰るまでこれで行くの！！」

「んー……？」

特に意味はないけど、自分への罰というかなんというか！　今思い出すと悔しくなったというか！　トメ兄あのときごめんっていう

か！

「んー……あ」

ん？

「痛っ！」

さらに激痛を感じた足元へ目を向けると、そこには私の弱点を突いたと思われる棒が！　その棒を持っているのは――トメ兄！

「何するのトメ兄！？」

「やー。そういや昔、背中からこんなことするヤツがいたなーと」

思い出しやがった！

「な、なんのことかね」

「あの頃は可愛かったのになー」

「はいはい帰るよ！」

「かか、とめにーちゃんのこときらい？」

「あー嫌いだよ、だいっ嫌いだよ！！」

「わーい」

「うっさい！　帰るよ！！」

うぉぉぉぉぉ！　根性！

「私たち、置いてけぼりだねー」

「そうね……って！　止めないとっ！」

「いいからいいからー。カカちゃんの気の済むようにしてあげよー」

後ろの声も気にならないくらい、私は痛みに耐えている！！　でもへっちゃらだもんね！

「わーい。カカ大好――」

「それだけは言うな！！」

その後、なんとかトメ兄を家まで運ぶことができた。

腫れあがった自分の足を見て、あのころのトメ兄の足はどうだったかと思い出そうとしても――浮かぶのは楽しかった思い出ばかり。子供の私が鈍かっただけかもしれないけど、そういう部分を見せないで私を楽しませてくれてたんだよね。

ごめんね。

そしてありがとう、とめにーちゃん。

……言わないけどね。

## カカの天下６３３「こういう仕返し」（後書き）

さりげに要望が多いチビカカ、ちょこっと登場。

もっと出せという方は言ったほうがいいと思うよ！

あと、カカラジの通りに旅行者さんが一週間頑張ってくれたから、感想欄の感想も書いてもいいと思うよ！

# カカの天下６３４「何がない」

トメでーす。

今日は例によってカカたちは学校帰りに遊んでくるそうで。一足先に帰った僕はせっせと夕飯の用意をしています。

「んー……また腕あげたな、僕。これは美味い」

鍋の中の秋刀魚の味噌煮を一口つまんだ僕は自画自賛した。やはり味噌が決め手だな。といっても白味噌と赤味噌を適当に合わせただけのものだけど。

「カカ喜ぶかな……」

僕が不覚にも恥ずかしいことを呟いたそのとき。唐突にバタン！と玄関のドアがぶっ壊されそうな勢いで開いた。

そしてズンズンのっしのっしアンギャーとばかりに騒がしくこちらに向かってきたのは言うまでもなく、

「トメ兄！　聞いてよ！！」

「ただいまがないぞ」

「ただいま聞いてよ！」

ただいまの意味が変わってるような……ま、いっか。

「さっきね、私ね、うらないしてきたの！」

「占い？　そんなことできたっけ、おまえ」

「誰だってできるよあんなの！」

ふむ。

「なんでおまえはそんなに怒ってるんだ」

「そうそうそれだよ私が言いたいのは！　さっきさ――」

「ねぇねぇ八百屋さん、これください」

「売らない！！」

「売れよ！！　ってなんだこの女の子！」

「ね！？」

「何が『ね！？』なのかはさっぱりわからんが、確かに誰でもできるうらないだ」

そして誰もやらないうらないだ。ていうかやろうと思わないだろうに。

「つーかさ、なんでカカが八百屋さんやってるのさ」

「この間さ、買い物に行ったときに対応が悪かったんだよ。だからお手伝いして立て直してあげようかと」

なんつーでしゃばりな小学生だ。

「でも売らないなら手伝ってないじゃん」

「特別企画って売れるんだよ？　だからうらない。売るための売らないだよ」

この娘の思考回路は相変わらずどっか飛んでいる。

「それで、続きは」

「そうそう、あのね――」

「まったくもう、手伝うならちゃんとやってくださいよカカちゃん」

「ごめんよおっちゃん」

「可愛いから許します」

「そんじゃお客さん待とっか」

「ええ、そうですね」

「いらっしゃい！　いらっしゃい！」

「いらっしゃいませー！！」

「……」

「……」

「売れない！！」

「大きなお世話です！！」

「って怒られたんだよ！　ひどいと思わない？」

「たしかにとてもひどい」

おまえがな。

「そもそも占いの意味わかってないだろおまえ。でもそれであっさり引き下がるのは、カカにしては珍しいな」

「うん、今朝の占いで『しつこいのはいけない』って言ってたから」

ああ、意味はわかってるのね。じゃーなんでそんな――と聞いたらきっと『うらないと占いは違うんだよ』とか言い出しそうだなぁ。わけわかんないなぁ。いつもこうだなぁ。なんでだろうなぁ。父親が悪いんだなぁ。いいアイデアだなぁ。そういうことにしとこう。

「どしたのトメ兄」

「カカはカカだなぁ、としみじみ」

「そうだよね！　やっぱ私は私らしくするべきだよね！」

「おまえはいっつもおまえらしいが、どういうこと――おい！？」

気がついたらカカは駆け出していた。

その後。カカに聞いた話によると、こんなやり取りがあったらしい。

「あ、カカちゃん。また来たんですか」

「うん、八百屋さんに言いたいことがあって」

「あ……その、こっちこそごめんね？　さっきは言い過ぎました」

「ほんとだよ」

「オイ」

「せっかく私がこの店に足りないものを教えてあげようというのに！」

「……さっきはうらないが足りない、とか言ってましたが？」

「そうそう、うらないじゃないんだよ。のらないだった」

「は？」

「ノらない。おいちゃんノリがないんだよ」

「八百屋に海苔は置いてませんが」

「ちっがーう。キャベツを注文されればキャー。トマトを買うお客さんにはトメィトゥと言うようなノリが足らないんだよ」

「そ、そんなこと言う店員いませんよ」

「ここではそれが普通だよ。よし、もうこの際だから完璧に矯正しちゃおう」

「去勢！？　それだけはやめて！！」

「何言ってるのかわからないけど、ほら。大きな声でいらっしゃいませって言ってみて」

「い、いらっしゃいませ！！」

「もっと大きく！」

「いらっしゃいませ！！」

「んむ、これじゃ普通だね。よし、ノリよく自己紹介してみよう」

「ど、どんな風にですか」

「僕は元気がない、ってひたすら元気よく言ってみて」

「わけわかりませんよそれ！！」

「いいから、正直に」

「ぼ、僕は元気がない」

「ほら元気がないよ！」

「だからそう言って――」

「いいから元気よく元気ないって言え！」

「僕は元気がない！！」

「もっと大きく！！」

「元気ない！！」

「その調子で別の自己紹介行ってみよ！」

「何も売れない！」

「そうそう！」

「店特徴ない！」

「その通り！」

「客来ない！」

「いいよー！」

「僕甲斐性ない！」

「だから？」

「彼女もできない！！」

「それで？」

「寂しくない！」

「ほんとに？」

「寂しくないもん！！」

「そっか。それはそうと恥ずかしくない？」

「恥ずかしくない！！」

「でも？」

「情けない！！」

「自分が？」

「不甲斐ない！！」

「おお、ほら！　なんかおいちゃんを可哀想なものを見る目なお客さんがいっぱい入ってきたよ」

「泣いてない……」

「おいちゃん？」

「え、ええ。これでうちの店はノリのいい店として繁盛するんですかね？」

「しらない」

「ね！？」

遠慮ないのは認める。カカらしいのは認める。でも僕に言えることは一つだけだった。

「どうよ！？」

「しらない」

とりあえず秋刀魚食え。

## カカの天下６３４「何がない」（後書き）

いつぞや似たような話がありましたね、あれの続編です（たぶん

どことなく丁寧なおいちゃん。出番はおそらくもうないでしょう。

八百屋がんばってね（ぇ

## カカの天下６３５「心の中の三角形」

少し肌寒い教室。

テンカ先生のもと。カカたち生徒は、のほほんと授業に取り組んでいた。

「……はい？」

「ん、どしたインド」

「あ、あの……いま、私を呼びませんでしたか？」

「いんや。インド産の、とは言ったがな」

「そ、そうですか……」

その会話をもって、授業を受けている生徒たちの脳裏に、インド産→インドさん→インドちゃん、という公式が成り立ってしまった。

「話を続けるぞ？　今現在じゃ、インド産の電気自動車がな――」

誰もが想像した。

『インドちゃんの電気自動車……なんだか電気自動車のくせに「そ、その……ぶ、ぶっぶー」とか言いながら遠慮がちに走ってそうだ』

車体の色が黄色なのは言うまでもない。

「あとな、高級インド産猪の毛を使ったヘアブラシがすごく――」

カカ以外が想像した。

『インドちゃんイノシシ……「ぶ、ぶひぃー」とか言いながらちょこまか逃げ回ってそうだなぁ。これ豚？　どっちでもいいや可愛いから』

カカだけは違った。

『高級インドちゃん……』

新たな高級シリーズとして、心の中にそっとしまいこんだ。

「あとな、インド産のヌードルだ」

男子たちは思った。

『インドちゃんのヌード……えへ』

スパパパーン！！　とテンカ先生の教科書に殴られる男子たち。

「な、なにを！？」

「てめぇらが何を考えていたのかなんざ、顔を見りゃわかる。天罰だ」

なら紛らわしいこと言うな、と誰もが思ったが、誰も口にしない。怖いから。

「そうそう、インド産とうがらしもな――」

誰もが思った。

『インドちゃんの唐辛子……辛そー』

想像されたのがカレーなのは言うまでもない。

そんな調子でインドちゃん、つまりノゾミという女の子の名前を中心として進む授業の中で……

サユカだけが、ずっと緊張していた。

なぜか？　その答えは、昼休みにわかることとなる。

ただ、先に思い出してほしいことは。

先日、サエが黒板に書いた相合傘のせいでタケダとサユカのラブラブ疑惑が浮かんでいるということ。

そしてノゾミという女の子はタケダのことが好きだということ。

最後に、サユカがとある勘違いをしているということ。

――昼休み、屋上。

「来て、くれたんですね」

私の果たし状を見て、とノゾミは心の中で呟いた。

「ええ、来たわ」

あなたのラブレターを見て、とサユカは心の中で呟いた。

「あ、あの……最初に聞いておきたいんですけど、わ、私の気持ちって、知ってますか？」

私がタケダ君を好きだっていう気持ちを、とノゾミは心の中で呟いた。

「ええ、その、なんとなく気づいては、いるわ。やっぱりそうなの？」

あなたがわたしのことを好きだっていう気持ちよね、とサユカは心の中で呟いた。

「……はい」

その通りです、とノゾミは勘で頷いた。

「ああ、やっぱり」

そうなのか、とサユカは勘で納得した。

二人とも、勘がはずれているとは夢にも思っていない。

「でもね、インドちゃん。わたし、好きな人がいるの」

トメさんが好きなの、だからあなたの気持ちには応えられない、とサユカは心の中で呟いた。

「そう、ですか……」

私の気持ちを知った上でそう言うってことは、やっぱりサユカちゃんもタケダ君のことが好きなんだ、とノゾミは心の中で納得した。

「じ、じゃあ、私、負けません」

私もタケダ君が好きだから、負けない、とノゾミは心の中で挑戦した。

「そう……わかったわ。受けて立つわっ」

あくまでわたしのことを諦めないのね、ならばわたしもちゃんとその気持ちに真摯に応えるわ、とサユカは勘違いしたまま挑戦を受けた。

「はい……勝負です」

タケダ君は渡さない、とノゾミは勘違いしたまま勝負を開始した。

「わたしはね、好きなのっ！」

トメさんが、とサユカは心の中で呟いた。

「わ、私も、好きです！」

タケダ君が、とノゾミは心の中で呟いた。

そして。

「わたしはね、好きなのっ！」

「わ、私も、好きです！」

サユカとノゾミが向かいあってそう宣言しあう、その場面だけを目撃してしまったタケダは。

「い、いかん……女同士だなどと、そのような不健全な交際……見過ごすわけにはいかん！」

こちらも勘違いしたまま、最愛であるカカの友人を正常に戻そうと躍起になるのだった。

かくして、わけのわからん三角関係の完成である。

わけがわからなさすぎて、完成というのも難しいが。

というか、おまえたち。

心の中じゃなくて普通に呟け。

## カカの天下６３５「心の中の三角形」（後書き）

珍しく神視点みたいな形でお送りしました。とはいえカカ天っぽさを出すために少しだけツッコミ入れてたので、私視点と言ったほうが正しいかもしれませんね＾＾；

ひょんなことから生まれた、妙な誤解。
これは大事件に発展する――こともなく。

多分、地味に、変に、物語の端っこで続いていきます。

# カカの天下６３６「動物的国会」

こんにちは、クララです！

実はクララ、今回ちょっと頼まれごとをされまして。なんと皆さんの会議に呼ばれてしまったのです！

気になるメンバーは！

「すみません、クララさん。わざわざ」

腰の低い子猫さん、官房長官！

「恩に着るゼ」

格好いい猫さん、総理大臣！

「あなたしか、頼れる人がいないのよぅ」

自称美人の犬さん、ラスカル！

「名の無い豚はただの食材だブー」

誰も聞いてもないことを答える名無しの豚さん！　あ、そういえばこないだブートンさんって名づけてあげたんでした。

「モー」

最後に、喋る気すらない牛さん、日本経済！！　これ名前です！

牛肉も立派な経済の一部ですから！

以上のメンバーでお送りします！　あと、これらは全て動物語で話されています！　公園の一角で集まった動物たちとクララがにゃんにゃんモーモー騒いでますが気にしないでください！　通りすがりの人々も空気を読んで見て見ぬフリをして去って行きます！

「それで、相談ってなんなのですか？　クララにできることでしょうか」

「ああ、俺と官房長官で話し合ったんだが……なぁ？」

「ええ、ボクも彼と一緒に色々と考えてみたんですけど、どうにもいい考えが浮かばなくて」

「総理大臣と官房長官で……日本経済についてでも話してたんですか？」

自然と視線が一緒にいる牛さんに集まります。

「やっぱりステーキだと思うんだゼ、俺は」

「ボクはミルクが飲めればそれで」

「モー」

「ほら、日本経済さんが嫌がってますよ」

クララにはわかります。

「話を戻すブー。問題は彼女なんだブー」

「彼女。ラスカルですか？」

「ええ、そうよ」

「彼女がブヒー」

「ちょっと。さもあたしが豚のように丸いみたいな言い方やめてよ！！」

「こらこらラスカル。こいつぁ豚なんだから仕方ねぇんだよ。悪気はねぇんだ」

ラスカルは小さな檻の中で、深々とため息をつきました。

「クララさん……見ての通り、あたしってばペットショップに捕らわれの身でしょう？　本当は元の飼い主のところに戻りたいんだけど……その、檻から抜け出せなくてね」

飼い主……前に聞いたことがあります。サエおねーちゃんのお母さん、サカイのことですね。

「それでさ、あの人があたしを買ってくれれば話は早いんだけど……忘れられてるみたいでね」

「どうしようかと思いあぐねいていたら、猫の集会に新入りがきやがった。こいつが官房長官とかいう、俺にケンカを売るような名前でな。話してみりゃやたらと頭が良くて、しかもラスカルの飼い主が主人だって言うじゃねぇか」

「事情を理解したボクは、総理大臣からラスカルを紹介してもらいました。そしてぜひとも一緒にあの優しい飼い主さんに飼われたいと思い、策を練っているのですが……」

なるほどです！

「つまり！　クララが代わりに人と話して、ラスカルがサカイに飼われるようにすればいいのですね！」

おおー！　と感心する声が響きます！　ふっふっふ、こう見えてもクララ、頭はいいのです！

いろいろ知らないだけで！

「じゃあクララ、早速ペットショップの人と話してきますね！！」

十分後。

「ダメでした……」

「ええ!?　なんでよ！　理由は!?」

「わからないです！　なんだかすごく変な顔をされたんですけど」

落胆する動物たち。クララもしょっくです……あれ？

なんだか車がいっぱいきました!!

なんだかなんだか怖そうな人たちがクララたちを取り囲みました！！

「保健所戦隊ただいま参上！！　ここか！　妙な動物たちがたむろしている場所というのは！」

「あ、あの子です！　なんだか動物にとり憑かれたような喋り方で、私に……！」

しまったです！　動物語のままペットショップの人と話してしまったのです！　つ、つまりさっき、向こうにとっては――

『いらっしゃいませ。あらお嬢ちゃん、どうしたの？』

『ぶーぶーニャーニャーわんモーブー！！』

という会話になっていたのですね！　変な顔されるはずです！！

「そこの女の子。ちょっといいかい？」

「ぶひー」

「こいつもうダメだ！　殺そう」

「ちょっと待つです！！」

動物語解除！　人間って怖いです！！

「いやいや冗談だ。ふざけているのかと思ってね」

い、意地悪です。クララ不満です。

「私は保健所の動物保護を担当している者だ。ちょっと質問したいんだが、いいかな？」

「……」

「喋れないのか。なら面倒だから皆殺しに」

「答えます！！」

こいつら悪魔です！！

「なら聞こう。そうだな……まず、そこの美味しそうな豚はどうしてこんなところに？」

言えません。このままでは太ってしまうブー、という健康的思考で散歩がてらに牧場を抜け出してきたなんて。

「そこの、やたらインパクトのある強そうな牛はどうしてこんなところに？」

言えません。そんなブートンに誘われて柵をぶっ壊して逃げてきたなんて。

「そこに、小さな檻に入った犬は？」

言えません。クララがペットショップの店頭から檻ごと適当に持ってきたなんて。

「そこの猫は……」

言えません。国のトップがこの二匹だなんて。

「はぁ、仕方ないな。では――」

こ、殺されます!?

「クララさん、ボクに良い考えがあります！」

「はい!?　官房長官、その考えとはなんですか！」

「こう言ってください！」

ごにょごにょにゃーにゃー……なるほど、クララ感嘆です！

「白状します!!」

「ほう？」

「ここにいる動物は全部――サカイミエという人の家で飼ってる動物です。ただいま散歩中なのです」

「……確認を、とっても？」

「いいですよ。案内します」

そして、サカイのおっきな家にたどり着きまして。

「ここで待っててください。いまサカイを呼んでくるです」

庭に保健所戦隊を待たせて、建物の影に入ったところでシュバッ！

先にサエおねーちゃんを見つけて頼み込み――

「ねーねー、おかーさん。飼ってー」

「ええー？　いくらサエの頼みでも――」

「飼ってー飼ってー飼ってー」

「よしきた」

めでたく全部、サカイが飼うこととなったのでした。

保健所の人にもちゃんと対応して、法律等はサカイのほうで捻じ曲げてＯＫにするそうです。

「ふぅ……うまくいきましたね！」

清々しい顔をしている官房長官は、まさにサエおねーちゃんの猫でした。お腹が黒いのは毛色だけじゃないみたいです。

「いい家だブー」

「モー」

「俺もしばらくここに住むかな」

「ご主人様……あたしのことちゃんと覚えてるのかしら」

ともかく、みんな一緒に仲良くめでたしめでたしです！

「お母さん、ありがとー！」

「サエの頼みだものー。ところで今夜は豚肉と牛肉、どっちがいい？」

「ブ……」「モ……」

めでたし、ですよね？

## カカの天下６３６「動物的国会」（後書き）

最初はそんなつもりはなかったのに書き終わってみればサカイさんちが賑やかなことに。これがカカ天クオリティ。その場勝負とも言う。

さてさて、相も変わらず感想の返信等が遅れてますが……ぶっちゃけ金土日は修羅場ですので勘弁を笑

明日は気合入れてリニューアル続けますよー！

あんパンも……できれば！！

# カカの天下６３７「カカとしりとり、レベル４」

「しりとりしよう」

「おう、いいぞ」

こんにちは、トメです。

今日も今日とて特になんでもない日。居間でのんびりしてるとき、ふと思いついたように呟いたカカの言葉から、しりとりをすることになりました。

「普通のしりとりか？」

「や、それはおもしろくない」

やっぱりか。

「今日のしりとりはね、動きでするの」

……なんのこっちゃ。

「例えばね、トメ兄がしりとりで、『ゴリラ』って答えようとするでしょ」

「ふむ」

「そしたらトメ兄はゴリラの物真似をするの。うほうほーって」

「ほう」

「で、真似をするだけで、答えが『ゴリラ』ってことは言わないの」

「……ん？」

「それで、私がそれを『ゴリラ』って当てることができたら、私の勝ち」

「おい」

「私がわからなかったらトメ兄は答えを言って、次は私が『ラ』から始まる答えを考えるの。『ラッパ』ならラッパの真似をして、トメ兄がそれを当てることができたら勝ち。これの繰り返し。どう？」

どうもこうも……

もはやしりとりじゃないし。

「でも……暇だし、それでいっか」

「よーし。まずは私がやるから、当ててよ？」

「わかった」

二人して立ち上がって向かい合う。要は、カカが何の真似してるか当てればいいんだよな。

「まずは定番、しりとりの『り』から始まる言葉ね」

「おっしゃ」
「いくよー」
カカはその場にしゃがみ込んだ。
「……え、それだけ？」
「うん」
しゃがみ込んで、丸まってるだけだぞ。
え、これ、なに？
「わからん」
「ギブアップね。正解は『りんご』だよ」
「わかるか！！」
「え、だって丸まってたじゃん」
「この世に丸いものがいくつあると思ってるんだ！」
「いいからいいから。次はトメ兄の番だよ。りんごの『ご』ね」
むぅ……や、逆に考えよう。とてつもなく当てにくいのは向こうも同じ。だらだらと続けるには最適の暇つぶしじゃないのか、これは。

「えーと」

ともかく『ご』だな。『ゴリラ』はさっき例に出したからつまんないし……よし。

僕は背筋を伸ばしたまま腰を曲げて、壁に背をつけ、寄りかかる。足も伸ばしたままなので、僕の身体は『く』の字のまま壁に押し付けられた。

「……それだけ？」

「おう」

「ご……ご……ご？」

ごごごごご。

特に空気が重みを増しているわけでもない。カカの背後のイメージである。なんかこう、漫画的に『？』マークと一緒に『ご』って文字がいっぱい浮いてるみたいな感じ。

「ごー……降参！！」

「答えは『五時』だ」

時計の針な。

「わかるかー！！」

そうだろうそうだろう。さっきの『りんご』もそうだった。レベ

ルたけーよこれ。

「ほれほれ、次はカカだぞ」

「よーし、絶対わかんないかんね」

カカはその場に座り、ついさっきまでしていたように、ズズズとお茶を飲み始めた。

「あれ、しりとりやめたのか？」

「やめてないよ」

ということは、これが答え……でも、いつも通りだし……

「降参」

「ふ、『じじい』だよ」

「いつも通りじゃないか！　いつもじじいなのかおまえは！」

「トメ兄だって似たようなものでしょ！」

く、のんびり緑茶をすすって「はー極楽」とか呟くのがじじくさいというのならば、反論はできん……

「次トメ兄ね！　今度は当ててやる！」

「よし、『い』だな」

僕はその場で立ったまま、じっとしていた。

それだけである。

「……え、しりとりやめたの？」

「やめてないぞ」

「え、でも何もしてないし……むー、い、い、い、い」

いいいいいいいいいいいいいい！

変な鳴き声。あ、別にカカがこれ叫んだわけじゃないよ？　カカの背後のイメージね。

「わかんない！！　答えは！？」

「『息』」

「わかるか！　いつも通りじゃん！」

や、だってねぇ。仕方ないじゃん？

「じゃあ私だね、これはどうだ――」

一分後。

「わかったぞカカ、それ『吸血鬼』だ！」

「ぶっぶー！　答えは『キシャァァ！』だよ！」

「擬音とかズルくね！？」

数分後。

「わかったよトメ兄、それ『待ち合わせ』でしょ！」

「ブー。『間に合った』でした」

「似たようなもんじゃん！」

「さっきのおまえの『貝』と『牡蠣』だって似たようなもんだったろ！？」

一時間後。

「……なにやってんの、弟と妹よ」

対決中に姉が訪問してきた。

そのときの僕らはすでに順にやるのが面倒になっていて、互いに同じ頭文字の動きを見せ合っていた。最初に当てたほうが勝ちだ。

僕はかっちんこっちん動き、カカはタコみたいな口をしながらく

るくる回ってる。

「……もう一度聞くけど、なにやってんの？」

「いま勝負中！」

「ねぇお姉、私たちのこれ、何に見える？」

「ばか」

姉に言われた！！

「違うの！　『す』から始まる言葉！」

「すごいばか」

姉に言われた！！

「違うよ！！」

「そうだ、違うぞ姉！」

「……じゃ、なにさ」

「僕はするめイカだ！」

「私は酢飯だよ！」

「どこが」

「するめイカってかたいから、硬い動きしてたろ」

「酢飯ってすっぱいし寿司にも使われるから、すっぱい顔して握られるっぽい動きしてたでしょ」

「やっぱあんたらすごいばかだ」

姉に言われた！！

でも、仕方がない気もする。とりあえず暇は潰せたのでめでたしめでたし。

## カカの天下６３７「カカとしりとり、レベル４」（後書き）

地味に長く続いているしりとりシリーズ、四話目です。
ええ、もうしりとりかどうかあやしいです。
でもまー単なる暇つぶしですのでね。

――お客さん、もしお暇で相手がいるなら、やってみたらどうっすか？

## カカの天下６３８「おっぱいの話」

やっほ、カツコだよ！！

今日も寒いね寒いね寒いね！　というか今日が寒いね、寒すぎだよ！　風強いし！　というわけで逃げ込むように花屋さんへ出社！

「おっはよー！　さぶさぶ」

「あ、カツコさん。おはようございます」

いつも通り出勤時間のかなーり前にスタンバイしてるサラちゃん。さっすが！

「あぁー……」

「どうしたんですか、そんな頭の悪そうな声出して」

「外寒くてさ……ここは暖房効いてて温かい……」

「頭はいつも温かいじゃないですか」

「……サラちゃんさ、言うようになったよね」

「これくらい言わないとカツコさん、話聞いてくれないじゃないですか」

や、まぁ、あたしってばインパクトない言葉って受け流しちゃうんだよね。シューとの会話なんかがいい例だわ。なーんも覚えてな

い。

「はぁ……しかし温かい。お花に囲まれてるし、この店内だけ春だわ……」

「カツコさんの頭もいつも春じゃないですか」

「ほんっと言うようになったね花ちゃん！！」

「サラです！」

正直あたしは嬉しい。こうやって遠慮なく喋れるということは、それだけ仲良くなれたということだからだ。

「ふふん、カツコさん。そうやって名前でばっかり抵抗してもダメですよ？」

でもやられてばっかじゃ癪なので、ちょと反撃をば。

「これでも一緒に仕事するたびにカツコさんの自由奔放極まりない言動に振り回されてるんです。毎日もまれてるんです」

「胸を？」

「そりゃ私も成長しますよ」

「胸が？」

「違います！！」

「えーと、本日のオススメ『おっぱい』と」

「書くなぁぁぁぁぁ！！」

ふ、反撃成功。あたしを完全に黙らせるにはまだまだじゃの。

「しっかしなぁ」

「なんですか？」

ごっしんごっしんと黒板を吹き消すサラさんを横目に見ながら呟く。

「サラさんはたしかに乳ましいが」

「なんですかそれ」

「たくましいの乳バージョン」

「……」

お、照れた。

「あたしだって同じくらい胸あんのに、なんで注目されないのだろう」

「え、それ胸筋じゃないんですか」

「オイ」

一応やこいぞ。

「あはは、冗談です。でもほら、カツコさんって男の人くらい身長高いじゃないですか。全体的にすらっとしてるし。スタイルよくても目立たないんですよね」

んー、確かに身長は高いけど。百七十センチ余裕で超えてるし。

「よし、試しに聞いてみよう」

「何をですか？」

質問に答えるまえに携帯で発信……おし、出た。

『もしもし？　姉か』

「おう、我が弟よ」

『なんか用か？』

「あたしのおっぱいどう思う？」

ぶっ！！　とサラさんが何かを吹き出した。

『どう思うも何も……』

「何かあるっしょ！　結構あるんだから」

『胸筋たくましいなとしか』

「あとでブッとばす」

通信切断。やはり男はダメだ。

こういうときはやっぱり女の子同士だよね、というわけで発信！

『もしもし？　なにさお姉』

「あ、カカちゃん？　あんさ、あたしの結構出てるおっぱいどう思う？」

『ろっこつ太いよね』

通信切断。やはり身内はダメだ。

「むむむ……なぜ、どいつもこいつもあたしの胸をおっぱい扱いしないのか」

「さぁ。でもなんでいきなりそんなこと気にしてるんですか？　カツコさん、そういう女性らしいこと興味ないかと思ってたのに」

「ん、なんとなく」

正直どうでもいいんだけどね、男にモテたいとは思わないし。

「ただ、女として生まれたからには『乳もみてぇ』って思われてなんぼかなぁと」

「思われすぎても複雑なのですが……こら」

「ん？」

「もまないでください！！」

「いやぁ、まだ手が寒くて。ここなら柔らかいし温かいし……地肌でいこうか」

「ひぇぇぇ！？　どこに手を入れてるんですか！！」

この乳はもみてぇって思うよね。もみもみ。

……引っ叩かれた。いてぇ。

そんなこんなで就業時間。

「サラちゃん、ラーメン食べてこ」

「はーい」

なんだかんだで仲のいいあたしたち。呼ぶとバッグを持ってひょこひょこ寄って来るサラちゃん。んむ、可愛い。そして胸が揺れるのがなんとも言えん。

「今日は寒いから、ネギ味噌チャーシュー麺だ！」

「わ、あのにんにくたっぷりのやつですね」

「おぅ、温まるぞぃ。そしてたくさん食べて胸を増量！」

「普通はお腹のあたりが増量されるんですが」

「大丈夫っしょ。あたしってば日々の運動量が半端ないから脂肪ぜんっぜんつかないし」

「……だから胸も目立たないのでは」

あ、胸って脂肪だっけ。

本当に胸筋だけになったらどうしよ。ないと、思うけど、うーん。

ま、いーや。

ラーメン食べてあったまろ。

## カカの天下６３８「おっぱいの話」（後書き）

サブタイトルで吹いた人、挙手ノ

や、なんかインドちゃんヌードルでロリコンがどうとかいう話が出たのでアダルティな話にしてみました。
でも内容は姉です。
ごめんなさい。

あと、今日の私の昼食がネギ味噌ラーメンだっただけで書きました。
とてもにんにく臭いです。
でも元気です！！

## カカの天下６３９「もうすぐそんな季節ねぇ」

ねえねえ、カカですけど。ちょっと聞いてくださいよ。

人って、いきなり意外なもの見ると驚いたりするじゃないですか。

でも、あまりにも意外すぎるものだと変な顔で固まっちゃうと思うんですよ、今の私みたいに。

そう、話は二分ほど前に遡ります。

私は自宅のトイレに入ろうとして、鍵が閉まってることに気づいた。

「トメ兄？」

「は、入ってまーす」

「入ってるんじゃなくて出してるんでしょ」

トイレとはそういうもんだ。

「それもそうだな、はは」

……あれ？　いつもだったらツッコミくるのに。

「どうしたの、トメ兄。何かあったの？」

「や、実はな」

「うん」

「人がトイレで大きい方をしてるっていうのに、妹が話しかけてくるんだ」

「それは大変だ」

「だろう？」

「そして大便だ」

「そうなんだよ」

「じゃあ開けるね」

「なんで！？」

や、だって大便でしょ？　ちょっかい出さないと。

「このトイレの扉、鍵かかってても開けるコツあるんだよね」

「わ、バカ！　やめろよ」

「大丈夫だって、ちょっと写真に撮ってサユカンに見せるだけ――」

カチャ、とトイレの扉を開けるとそこには。

サンタがいた。

そんなわけで、変な顔して固まってるわけですが。

「ほっほっほ、バレてしまったのう」

「……ばぁば？」

「そうです、私が、変なおばあちゃんです」

どっかで聞いたことあるな、このセリフ。や、それはともかく。

「さっきまでトメ兄の声じゃなかった？」

「声マネなんぞ遊びの一種じゃ」

忍者の親すげぇ。詐欺しほうだいだ。

「……それで、なんでこんなところでトイレの大きい方してるの？」

「もよおしたんじゃ」

そりゃそうか。

「もう終わった後だったからよかったものの、最中だったらどうするんじゃまったく」

「それは勘弁だね。でもさ……なんでここにいるの」

「ぐ」

まさかまたトメ兄のパンツを？

「まぁまぁ、こんなところで立ち話もなんじゃ。部屋にいこうではないか」

たしかにこんなところだね、トイレだし。

というわけで、私たちは居間へと移動して一緒にお茶を飲むことになった……あれ？　トメ兄いつの間にか出かけてたのか。気づかなかった。

「はぁ……茶がうまいのう」

おお、やはり本物のおばあちゃんは違う。なんてハマッてるセリフなんだろう。

「私もズズズ……んま。おやつの栗ようかんどうぞ」

「かたじけない」

「ねね、ばぁばってさ、あんまり人のいるとこに下りてこないんだよね？」

「トメに聞いたのかの？　そうじゃが」

「なんで？」

「……わしはの、人と触れ合うのはあまり得意じゃないのじゃよ」
「触れないの？　やっぱり死んでるんだ！！」
「そんなわけなかろうが。幽霊と違うぞい」
そか、そうだよね。ほら、私の中じゃつい最近まで死んでたから。
「わしはの……人の温もりが苦手なのじゃ。冷たい人間なのじゃ」
「死体だから！？」
「違うと言うとろうが。心の温度の話じゃ」
なるほど。
「でもばぁば、普通に私と喋ってるじゃん」
「これくらいは、の。ただの、わしは根のほうで非情な人間なのじゃよ」
「じゃあ私と一緒じゃん」
「何を言うか。全然違うじゃろうに」
「だって私よく言われるよ、非常識だって」
「……いや、非情と非常識は違うじゃろ」
「ばぁばが非常識なのは違わないでしょ」

押し黙るばぁば。

だって私が正しい。現代で声マネやらシュバッとやら披露する忍者の、どこが非常識じゃないというのか。

「ね、おそろい」

「む……おそろいか」

「そう、おそろい」

おそろい、としみじみ呟くばぁばが、ちょっと可愛かった。

「ほらほら、難しい顔してないで笑って笑って。もっとお話しようよ」

「むぅ……そうだの」

「私全然覚えてないんだけどさ、じぃじってもう死んじゃったんだよね」

「ああ、かなり昔にな」

「どうして死んだの？」

「戦じゃ」

「戦争？」

「いや、合戦で」

「いつの人!?」

それから三十分ほどだけど、ばぁばと喋った。

ばぁばは自分をおもしろくない人間だとか言ってたけど、充分に楽しかった。そもそもトイレから現れるサンタという時点でおもしろすぎるのに何を言ってるんだろね？　覚えないけど昔の私っておばあちゃんっ子だったのかな……久々に喋るはずなのに、すらすら話すことができた。

そして、トメ兄が帰ってくる直前。人と触れ合うのが苦手と言っていたばぁばは、また来ようかの、と照れくさそうに笑ってくれた。

そして。

「あっれー？　僕のパンツがまた減ってる」

深まる謎。ほんと何しに来てるんだろばぁば。

## カカの天下６３９「もうすぐそんな季節ねぇ」（後書き）

おばあちゃん、またもや登場です。そろそろサンタの季節ですからね、ていうか寒いったらありゃしない。さっき雪降ってましたよ雪！！

あーさぶ。電気代節約のために意地で我慢できるうちは暖房つけない派の私としては寒さ的にも頑張り時です。数日すれば身体が慣れるんですよねぇ、なんとなく。

あと風邪やらインフルやら流行ってるみたいですし、皆さん気をつけましょうね。

## カカの天下６４０「サユカの任務、貢がせ編」

ここ、こんにちは、サユカですっ！

ちょっとまずいです、かなりやばいです、すごく危険です！

何がかといいますと……今ですね、トメさんといつもの和菓子屋さんでお茶してるのですが……なんとっ！

財布を忘れましたー！！

「どうしたの、サユカちゃん」

「いいえぇ、なんでもないですっ！」

どうしましょう……楽しいはずのトメさんとの会話もまったく耳に入ってきません。なぜわたしはいつもすんなりトメさんとお喋りできないんでしょうか。会ったばかりの頃に戻ったかのように焦りまくりです。

だって……このままだとっ！

わたしが財布持ってない↓トメさんが払う↓トメさんに金のかかる女だと思われる↓サユカしょっくです！　↓ショック死。

こうなってしまいますっ！

なんとかしないと……考えて、考えるのよサユカ。

この場合、わたしがお金を持っていない以上はトメさんに払ってもらうしかない。ならば考えることは一つ、いかにわたしの印象を悪くしないままお金を出してもらえるか、ということねっ！

そうね……ドラマとか漫画で、よく男の人が喜んで女性に貢いでいる場面があったわよね。あれは、そう、確かお色気とかで誘惑してたわ！　女性にメロメロになった男の人が「僕が出すよ、いいや出させてください」と頼みこむ、これだわっ！

「サユカちゃん？　本当にどうしたの」

「えっと」

すいません、トメさん。

今から誘惑してみます。

引っかかってくださいねっ！

「うっふんっ！！」

「……はい？」

「あっはん！！」

「サユカちゃん、大丈夫？　頭」

引っかからないわっ！！　さすがはトメさん、ガードが固いわね。

わたしに何が足りないの……？　あ、そういえば。

「ちょっとお手洗いにいってきますっ！」

「ああ、それ我慢してたから変だったのか」

「違いますっ！！」

トイレに駆け込み、個室に入る。

思い出した――ドラマでも漫画でも、女性は頬を赤らめていたわっ！　あれが色っぽくする秘訣なのねっ！

というわけで頬を染めるために、その場で足踏みダッシュ！

個室だからどうせ誰も見てないわ。ダッシュダッシュダッシュ！！　だだだだ！！

はぁ……はぁ……いい感じに身体が温まったわ。これなら頬も染まってお色気満点ねっ！

鏡で自分の頬を確認したわたしは、満足げに頷いてトメさんとの席へ戻った。

「おやサユカちゃん、おかえりなさい」

「ゼーハーゼーハーゼーハー」

走りすぎた。作戦失敗。

「なんでそんな息切らせてんの」

「ぜぇ……いいえ、ちょっと……はぁ……」

うぅ、お色気どころじゃないわ。うえ気持ちわる。こ、こうなったら……あ。

ふと向こうの席に座っている二人と目が合う。

イチョウさんと、ヤナツ。

わたしの脳裏に、あの二人にお金を借りるという選択視が閃いたわ！　とにかく今はトメさんの評価が下がりさえしなければそれでいいのよっ！

「トメさん！」

早速トメさんに言わないと！

「ゼーハーゼーハーゼーハー！！」

「落ち着け」

「ハー……はい。あの、友達があそこにいたので、ちょっと行ってきていいですか？」

「うん、いってらっしゃい」

よかったぁ。わたしは息を整えながらも早足でイチョウさんたちのテーブルへ向かった。

「イチョウさん！」

「サユカさん、奇遇ですわね。もしやもしやデートでしょうか？」

「そうよっ！」

「まぁ」

トメさんがどう思ってるかわからないけど、わたし的にはデートだからいいわよね。

「あれ、おまえってタケダが好きなんじゃねぇの？」

「もっぺん海まで流されたいの？」

「なな、なんだよぅ。よくわかんないけど悪かったよぅ」

そんなことはどうでもいいのよっ！

「イチョウさん！」

「は、はい」

「金出せっ！」

「ひ、恐喝ですか！？」

「そんなわけないじゃないっ」

「まてサユカ、今のはそうとしか聞こえなかったぞ」

海の藻屑の声なんか聞こえないわ。

「いまね、その、確かにデートなんだけど」

「わぁ、とても羨ましいです」

「きゃは、やーんそんな、デートって言っても一緒にお茶してるだけだし、でもでも羨ましい？　えへへ、わたしもすんごく幸せで」

「その話長いか？」

「あんたの人生よりは短いわよっ」

って、確かに惚気てる場合じゃなかったわ。

「実はお財布忘れちゃったのっ！　でもあの人に格好悪いところ見せたくなくて……お願い、明日には返すからお金貸して！」

「ぎく」

……ぎく、ってなに、イチョウさん。

「どうしたんだよ妹、姉貴に小遣いもらったばっかだろ？　貸してやれよ」

「ええと、ヤナツさん？」

「なんだよ」

「か、金出せ！」

「なんで！？」

「その……わたくしも、お財布を忘れまして」

仲間がいたわ。なんて嬉しくないのかしら。

「ということですので、ヤナツさん、わたくしの分のお勘定もお願いしていいですか？」

「わざとじゃないのか、まったく……俺が財布を忘れてたらどうなってたか」

ぶちぶち言いながら財布を開くヤナツ。なんだ、こいつ結構いいヤツじゃないのっ。

「……あ、お金忘れた」

こいつ結構だめなヤツじゃないのっ。

「うう、どうすれば――あ、トメさん！」

こっちに来ちゃったわ！

「お、なんだ。知り合いってその二人か。運動会のときの」

「どうもその節は大変ご迷惑をおかけいたしました」

「……よう」

ちゃんと挨拶しなさいよヤナツ！

「ん。ところでサユカちゃん？」

「はいっ」

「僕、財布忘れたんだけど」

ぎゃー！！

「なんて、うっそーん……なんで三人ともコケるのさ」

も、もうトメさんたらお茶目なんだからっ！　そこが好き！

結局、そのときはお金が無いと言うイチョウさんとヤナツのお金を立て替えるついでにと、わたしの分もまとめて払っちゃおうとトメさんは言ってくれたわ。おかげでわたしが財布を忘れたことはバレなくてすんだの。イチョウさんに一つ貸しね。

それにしてもトメさんてば、なんて優しい人なのかしら、なんて太っ腹な人なのかしら。

そこが大好き。

## カカの天下６４０「サユカの任務、貢がせ編」（後書き）

短いペースでサユカン任務発動！　連続任務の希望があったから書いてみましたが……さすがにバランス的にもう一発はいけません笑

ちなみに。一応は和解したイチョウさん&ヤナツコンビですが、イチョウさんのヤナツに対する呼び方は元からこうですのでお気になさらず。

初雪の話を書いてしまおうかと思ってたら降ったのはまだ一部の各地だと気づき、やめたのは内緒。

だってこっち降ってるもん……寒いもん……ううう。

酒を（おぃ

# カカの天下６４１「コタツ記念日２」

毎度こんにちは、トメです。

今年は寒くなるのが早いですね。このままじゃ凍死しちまうぜーということで、こいつの出番です！！

「祝、コタツ記念日！！」

おおはしゃぎなカカの言うとおり、おコタツ様のご登場です！

「はぁー、温かいですー」

「ちょっとサエすけ、そっち詰めなさいよ」

「姐さん、ほれ」

「ありがとテンちゃん……おとと。んぐ……くはぁ！　コタツに熱燗、染みるねぇ！」

「おほほ、みかんはまだかしら？」

「おぉ……生き返るようじゃあ……」

なんで集まってんだあんたら。

「どしたのトメ兄。コタツ入りなよ」

「入る隙間ないだろが」

「そこは詰めるんだよ」

「そもそも、なんなんだこの集まりは？」

僕の至極まっとうな疑問に、カカは胸を張って答えた。

「コタツ記念日だよ！」

「説明なってない」

「コタツだよ！」

「短くしただけ」

「タツよ！」

「勝手に立てよ」

あー、よくよく思い出してみれば去年もコタツ出したときにこのメンバーがいたような。

「カカ、またコタツ出すって喋り回ったのか？」

「んーん、なんか勝手に集まった」

コタツすげぇ。

「まーまーいいじゃないですかトメお兄さん」

「大勢のほうが楽しいですよ、コタツ！」

狭いだけだと思うんだが。

「トメ、つまみ」

「早くしなよ弟君」

こっちはこっちで宴会モードで僕への気遣いなんかまったくありゃしねぇ。

「おほほ、みかんみかん」

校長はなんか子供みたいで可愛いし。

「ふぃー……」

この近所のおじいさんは――近所のおじいさん！？

「あ、あの。おじいさん？　ここは僕らの家ですので、その……お帰りになっては？」

「わしはもう、帰る家がないんじゃ……」

「どうぞ心ゆくまで温まってください！！」

寒いよう。心が寒いよう。どうか心にもコタツをおくれ！

「さて、ここで！」

ん、なんだカカ。唐突に。

「コタツ選手権を行います」

なんぞやそれ。

「コタツのいいところを一番うまく言えた人の勝ち。私から時計周りに言ってくからね」

ふむ。全員元気よく手を上げて賛成みたいだ。その手がことごとく黄色いのはみかんのせいだろう。

「じゃ私、いきます！」

何を言う気だ。

「ぬくい」

……それだけ？

「次！」

「ぬくーい」「ぬくいわっ！」「ぬくいぜ」「よってらっしゃい、ぬくいよぬくいよ！」「ぬくいですわ」「ぬくいのぅ……」

「全員優勝！！」

なんだそら。

とは言いつつ気持ちはわからなくもないがね。そんな意味不明な

やりとりで盛り上がられるほど緩い気分にさせてくれるのがコタツだし。

「で、トメ兄はいつ入るの」

「む」

そうなのだ、僕だけまだコタツに入っていないのだ。

「だからさ、入る余裕がないだろうっての」

「だからさ、それでも入るならどこを選ぶのって聞いてるの」

「買い物いってきます」

「逃げるな！！」

そんなこと言ってもな……よし。

「アイス買ってくる」

「行ってよし！」

コタツにアイス。これはやっとかないとね。コタツっていろんな食べ物が美味しくなるから不思議だよなー。コタツは食べ物じゃないのにねー。コタツすげー。

そして、アイスを買って帰宅して。

なんだかんだでコタツに入ることになり。

ややこしいからもう全部入ればいいだろう、と――

「お、トメきた」

「おっし弟君、飲め！」

「はいはい」

姉、テンコンビの場所にいき、

「トメお兄さん、ようこそー」

「とと、トメさんっ！　はい、あーん！」

「サユカちゃん、みかんはいいんだけど皮は剥いてくれ」

サエちゃん、サユカちゃんコンビの場所にいき、

「おほほ、トメさんがきましたよ。はい、みかん」

「や、移動するたびに何か口に入れるのもどうかと」

「いえいえ、こちらですよ」

「こちらって、じーさん？」

「あーん……」

「じいさんに食わせろと!?」

「わしは、ここ数日何も食べておらんのじゃ……」

「みかんでよければ!!」

ご高齢コンビの場所にいき、

「カカ」

「ぐー」

最後に、いつの間にか気持ち良さそうに寝てるカカの横に落ち着いた。ったく、ちゃんとコタツ布団かけろよ。ほいっと。

そしてしばらく雑談して、カカが起きたころにアイスを食べて、皆が帰った後。

コタツの中を覗いてみると。

「あ、いたんすか。総理大臣、官房長官」

ここで何を話しあっていたんだろう。きっとぬくいことなんだろうなぁ。

ぬくい日本になればいいなぁ。

さて、またコタツ入ろ。

## カカの天下６４１「コタツ記念日２」（後書き）

今年は寒すぎるので去年より早くコタツ登場！

書いといてなんだけどコタツ……いいなぁ。ほしい……けど置く場所がない！

ちっさいの買ってベッドの上にでも置くかなぁ。

**カカの天下６４２「カカＶＳ姉娘　うぃんたぁ」**

んにゃ……おはようございまふ、ふぁ……カカです。

今日は学校がお休みの日です。そして今7起きたとこです。

「さぶ」

布団に包まります……でも眠くないです。寒さで起きちゃいました。でも布団から出たくないです。

「でも……でもあそこには、アレが」

よし！

意を決して布団をふっとばし、ダッシュ！

「んあ？　カカおは――」

廊下で出くわしたトメ兄を無視して居間へと走る！

そして居間に入った瞬間にスライディング！

座布団をふっとばしながらズザザッとコタツにＩＮ！

「ふぃー……ぬくぬく」

私の朝の戦いは終わった。

「おいカカ」

「あ、おはようコタツ。おはようトメ兄」

「おはよう。ところで僕はコタツの次かい？」

だってこんな幸せを与えてくれるコタツ様にまず挨拶しないとバチが当たるよ。コタツの電源が入らなくなるとか。そんなの拷問だし。

「ま、いいや。そんなことより……カカ、コタツの中覗いてみ」

「ん、また総理大臣とかでもいるの？」

そういえばコタツにＩＮしたときに、中のものを何か蹴飛ばしたような。コタツ布団をめくって中を覗いてみる。

赤くて狭い、その世界で。

まんまるい四つの目と視線があった。

「……タマちゃん？」

「おう、あたしもいるぞ！　おはようカカちゃん」

二人がコタツの中で丸まってる。

「タマちゃんはともかく、お姉は年甲斐もなく何してるの」

「む、なんだよう。コタツっていうのはこうやって楽しむもんなん

だって、タマに教えてたところなのに」

のそのそとコタツから脱出しながら言うお姉。確かにコタツの中に潜り込むのはよくやった。でも大人がやるとみっともないね。

「私、タマちゃんとか蹴っちゃったかな」

「や、あたしが反射的にガードしたから大丈夫」

さすが。

「それで、なんで二人がいるの」

「コタツがあるから」

「……それだけの理由で？」

「シューんちのコタツは新しく買うんだとよぅ。だから出すのはもう少し後になんのよぅ。その間、タマにコタツを味あわせてやれないのは可哀想っしょ？」

むう、そういうコタツ的理由なら仕方ないか。

「それでさ、タマちゃん。そこから出ないの？」

「あたかー」

「あー。あったかいねーうんうん」

出ないらしい。

「おーい姉、朝飯作るの手伝え」

「えー。あたし何もできないよ？」

「しないだけで何でもできるくせに戯けたこと抜かすな」

「えー！」

文句を言いながらもトメ兄と一緒に台所へと消えていくお姉。さて、それじゃあタマちゃんと二人きりになったわけだ。

「……でもつまんない」

タマちゃんコタツから出てこないし。

しばらくしたら出てくるかと思ったんだけど……

うーん、待てない。

ちょっと覗いてみよ――

「……ん、なんだこの、美味しそうな匂い」

朝ご飯の？　や、でもすごく近くから匂ってくるような。

「まさかタマちゃん、コタツに焼かれてタマゴ焼きに！？」

なんだか近くからジュー……！　とフライパンでタマゴ焼いてるような音も聞こえてるし！　しかもこの匂いは！

「タマちゃん焦げてる！？」

怖くて覗けな……い？

ふと隣を見る。

ジュー……！　と音を立てて焼ける玉子を乗っけたフライパンを持ってるお姉がそこにいた。

「えへ」

「消えろ、紛らわしい！」

何しにきたんだまったく……焦げた匂いしたけど、あの玉子大丈夫かな？

玉子は心配しつつ、タマちゃんのほうは安心しつつコタツ布団をめくってみた。

するとそこには黒い物体が！

「やっぱり焦げた！？」

「う？」

あ、お尻だった。服の色だった。よかった。

「あれ、どしたのタマちゃん。出るの？」

私が布団をめくった場所からニュッと顔を出すタマちゃん。

「あつい」

「ずっと中にいたら、さすがにそうだろね」

「さむい」

あ、戻った。

そしてしばらくして、今度は私の座る反対側からニュッと顔を出すタマちゃん。

そしてまた引っ込む。

今度は右からニュッ。

またまた引っ込む。

どうやら中は暑く、外は寒いために行ったりきたりして調節しているらしい。

そこかしこからニョキニョキと出たり引っ込んだり……おもしろい。

「よーし」

ちょっと名残惜しいけど、一旦コタツから出る。

そして待ち構え……

うまく私の前にニョキッと生えてきたタマちゃんに、まだひんやり冷たい左手を首筋にピタッと攻撃！

「ひゃふ！」

びっくりしてブルッと震えたタマちゃんは慌てて引っ込む。

やがて、私の反対側にニョキッと生える。慌ててそっちに回りこむけど、

「きゃっ」

辿りつく前に引っ込む！

「よーし、勝負！」

私とタマちゃんの戦いが幕を開けた。

「……もぐら叩きだ」

「……もぐら叩きだね」

「はぁ、はぁ。あ、トメ兄にお姉、ご飯できた？」

「ふにゃあー」

コタツもぐらとの戦いを終えた私は息を切らし、暑い中で運動し

ていたタマちゃんはふやけてしまっていた。

「できたよ、でも聞いてくれ。姉がふざけたせいで焦げたから一品追加したんだよ。そのせいで時間かかったんだ」

「なにさ！　ちゃんと食べれる部分もあったでしょ！」

「焦げた部分を取り除いたら半分もなくなったわ！　ともかく皿を並べるぞ」

「はいはい、皿ちゃんぷりーず！　サラちゃんはこなくていいよー！」

サラさんいないからね、言っとくけど。

「私疲れたから手伝わないね、よろしく」

「カカ。おまえもさ、もう少しおとなしい遊びしろよ。コタツが壊れても知らないぞ」

それは困る！

というわけで、朝ご飯を食べた後はタマちゃんとおとなしく遊ぼうと、ビーズを出してきたのですが。

「ほら、タマちゃんこれ」

「ぱっくんちょ」

「ぎゃー！！」

細かいビースをぱっくんちょしちゃったタマちゃんで大騒ぎになるんだけど、それはまた別の話。

## カカの天下６４２「カカＶＳ姉娘　ういんたぁ」（後書き）

タマちゃんリクエストぽいのがあったので書いてみました。キャッキャとはしゃぐコタツ虫で和んでいただけたら幸いです。

コタツうらやましい（まだ言ってる

# カカの天下６４３「カカ天クエスト　ＥＰ１０」（前書き）

注意：このお話はカカ達がゲームのキャラになりきりながらＲＰＧを進める話です。話の内容はゲームの中ですが、『もしもカカ達が異世界にいたら』みたいな感覚でお楽しみください。

ステータス

カカ　　ボケ勇者　　レベル１　へん

サエ　　悪の魔法使い　　レベル１　はらぐろ

サユカ　　手の平の踊り子　　レベル１　さびしんぼう　エロレベル３

トメ　　ツッコミ　　レベル１　つっこみ　改造中

ケロリン　スライム　　レベル９　おっさんくさい　ごみ

# カカの天下６４３「カカ天クエスト　ＥＰ１０」

環境を破壊する産業廃棄物と化したケロリンを生き返らせるためには『水』が必要！　勇者一行はそのアイテムを求め、ラオナの滝へと目指すことになった！

「だからさ、水なんてどこにでもあるじゃないのっ」

サユカはしつこい！

「余計なお世話よっ」

「でもサユカちゃんが言うことにも一理あるよねー」

「うん、いくらなんでも『水』を求めて旅するってのはないっしょ。アフリカの旅人じゃないんだからさ」

ＫＹプログラムが作動する……

『水』というアイテムは、『きれいな水』という名前に切り替わった！

「変わんないわよっ！」

「なにか固有名詞ないのー？」

ＫＹプログラムが作動する……

『きれいな水』は『ありえないほどきれいな水』という名前に切

り替わった！

「限定品にすりゃいいってもんじゃないわよっ！」

「ねぇサユカン。もういいよ、観念して行こう」

「うう……っ」

問題が解決したところで魔物があらわれた！

「なんていいタイミングなんだろー」

魔物も空気を読んで待ち構えていたようだ！

「とうそう」

カカたちは逃げ出した！

魔物があらわれた！　カカたちは逃げ出した！

魔物があらわれ逃げ出した！

魔物で逃げ出した！

とにかく逃げた！

逃げた！

逃げ！

逃！

！

「略しすぎっ！」

勇者一行が逃げすぎなので、わかりやすく省略いたしました。

「だってレベル1じゃどうしようもないし、っと」

「河よっ！」

逃げまくった一行がたどり着いたのは大きな河。村人の話によると、この河を下った先に滝があり、その滝つぼには妖精が住んでいるとのこと。その妖精に祝福された水はありえないほどに綺麗で、それこそが強力なスライムを生き返らせるに相応しい材料……ではなくアイテムなのだという。

「そんなこと言ってたっけ？」

『水』という設定に不満がおありのようだったので、一行が逃げている間に設定を作りなおしました。これにてＫＹプログラムを一旦終了いたします。

「余計なこと言わなきゃよかったかしら。ただの『水』ならこの河から汲めば終わりだったのに」

そのようなコマンドはありません。

「またそれっ！？」

「いいから行こうよサユカン。妖精さんが待ってるよ」

「わかったわよぅ」

「でもカカちゃん、この先の魔物は強そーだよ？　逃げても周りを囲まれたらすぐ全滅しそー」

「そだね……よし、私に良い考えがある！」

「なになにー？」

「言っちゃったらまたコマンドないとか出るかもしれないから先にやっちゃおう。それ！」

カカは念のために持ってきておいたカンオケ（空）を河へと放り込み、それに飛び乗った！

そして先頭のカカに追尾する設定になっているサエとサユカもカンオケへと乗り込む！

「この河を下れば滝なんでしょ？　じゃあこのまま一気に！」

「さっすがカカすけ！　プログラムに警告される前に荒業ね！」

「おーおー、揺れるー」

ぴん、ぽん、ぱーん♪

「ん？」

ワンポイントアドバイス。

このゲームには船というものが存在します。そしてその船での移動中も魔物が出るので要注意！　しかも陸より強いかも？　ぽん、ぽん、ぴーん♪

「えええ！　魔物出るのっ？」

「これが船扱いだとそうかもねー」

「どうしよ、今すぐ下りたほうが――」

魔物があらわれた！

「もう遅い！？」

高速で下るカンオケは魔物の額に激突！　魔物に１９３のダメージ。魔物を倒した！

「む、むしろ速すぎたみたいね、カンオケがっ」

ぱらぱらっぱっぱっぱーん♪

「あ、まさかレベル上がったー？」

カンオケのレベルが上がった！

「だからなんで私ら上がらないのさ！！」

やがて一行を乗せたカンオケは順調に滝つぼへ落下。

よくあるＲＰＧのように、落ちても怪我一つしなかった一行は、そこで妖精と遭遇する！

「ＨＡＨＡＨＡ！　ジョーイ、変なのが来たＹＯ！」

「君の頭のほうが変だぜ、マイケル？」

水の妖精。

とてもきれいなイメージがあるかもしれないが、現代の地球の水の汚さではこんなものである。

「ここ地球なの！？」

地球で作られたゲームですので。

――さて。ついに妖精と遭遇した一行は、果たして無事に『ありえないほどくさい水』を手に入れることができるのか。そしてラオナの滝という名前に意味があったことを最初から気づいた勇者はいるのか！？　次回、『ＶＳ　キタナイ妖精』をお楽しみに！

おまけ。

――その頃、敵の手に渡ってしまったトメは。

「ふっふっふ……私のダーリンの改造は終わったかしら？」

村娘Ａは完璧に悪役面して笑っていた。

そして、ついに。改造されたトメが現れる！

「おお、出でよ我が花婿！　もちろんドリルはついているだろうなぁ！」

改造といえばドリル。それを言い出したのは魔王だが、村娘Ａはそのセンスが嫌いではなかった。

そして脳改造も終えたはずの今、ようやく生まれ変わったトメと村娘Ａは結ばれるのだ！

「おお、我が花む……こ、よ？」

トメがあらわれた。

トメにはドリルがついていた。

顔にいっぱい。

「こわっ！？」

鉄のいがぐりのように刺々しい顔になってしまったトメを見て、村娘Ａは思わず怒鳴った。

「どういうことよ！　説明しなさい、技術開発部のタマちゃん！」

「んー？」

作業服を着た可愛いちびっこがあらわれた！

「この有様はどういうことよ！」

「かっこいいおー」

「ドリル多すぎ！　普通は手にだけつけるもんじゃないの！？」

「さーびす」

「そんなのいらないわよ！」

がっしょん、という機械っぽい足音。

「げ」

きゅいーん、と回転するドリル、多数。

「や、くるな、ドリルくるな、近寄るな、ちょっとくるなくるなくるな怖いわぁぁぁぁ！」

かくして、恐ろしい魔物が誕生した。

## カカの天下６４３「カカ天クエスト　ＥＰ１０」（後書き）

ククククエもついに１０話に達しました。
ちょっとペースアップしましたが、次はもうちょっと延びるかもです。
ラオナの滝、で直にオ〇ラ＝ヤツらと直感できた読者さんがいたら素直に感心します。
皆あの二人に脳を侵されてるのかなーと（嫌すぎる

# カカの天下６４４「いーしやーきいもー」

こんにちは、カカです。

『いーしやーきいもー、おいもー』

誰もが一度は聞いたことのあるこのフレーズ。最近あんまり見なくなった焼きイモ屋さんのトラックを、慌ててトメ兄が追いかけたのがさっきです。

その戦果を頬ばっているのが今です。

「んまー」

「んまー」

トメ兄と二人でもしゃもしゃ食べてます。

美味しいおイモを食べながら、なんとなく考えてみます。

もしも……石焼きイモが、焼かれるほうじゃなくて焼くほうだったら。

イモがせっせと石を焼く。

イモ自体は生のまま。

却下！

もしゃもしゃ。

もしも……石焼きイモが、石焼きイボだったら。

石で焼かれるイボ……

想像するだけで熱い！！　痛い！

でもそんなの関係ねぇ。

もしゃもしゃ。

もしも……石焼きイモが腹黒だったら。

腹、つまり中が黒い。

焦げてるやん。

もしゃもしゃ。

もしも……石焼きイモが、床焼きイモだったら。

床に落ちただけやん。

汚いやん。

もしゃもしゃ。

もしも……石焼きイモが、意思焼きイモだったら、

『うおおお！　俺の意思が燃えるぜ！！　ヒャッフー！！』

イモのくせに喋るな暑苦しい。でも冬にはそれくらいがちょうどいいか。

もしゃもしゃ。

もしも……石焼きイモが、騎士焼きイモだったら。

『ふ。我こそは潤いの騎士、ビタミン！』

『俺は電解の騎士、カリウムだぜ』

『私は力の騎士、タンパクなるぞ！』

『生命の騎士、エネルギーを忘れてもらっては困る』

『ビタミンの兄弟騎士、ナイアシンと申す』

『五人揃って、騎士焼きイモ！！』

なんかコメントしづらい。

もしゃもしゃ。

『ならば、五人揃ってイモレンジャー！』

とてもコメントしづらい。

もしも……石焼きイモが、今日の夕飯でも出たら。

飽きる。

もしゃもしゃ。

「カカ、いま何考えてる？」

「いろいろ」

「そうか。それはそうとカカ」

「なんぞや」

「買いすぎたから、今日の夕飯もこれな」

「騎士焼きイモのバカ！」

「何言ってる」

「イモレンジャーめ！！」

もしゃもしゃ！

おまけ。

一緒に外を散歩していたニシカワとアヤ。そこへ来るのは先ほど笠原家の前を通ったトラック。

『いーしやーきいもー、おいも』

「にしやきイモ!?　買わねば!」

「なんであんたは毎年そうやって同じ聞き間違いして飛び出そうとすんのよ!」

「だってにしが!　西が焼かれているのだ!　急げアヤ坊!」

「わけわかんないってば、ってコラ!　慌てすぎて財布から小銭落としてるわよ!」

「はやく、はやく買わないとぉぉぉぉ!　にぃぃぃぃしぃぃぃぃぃぃ!!」

「でもニッシーが向かってるその方角は東ね」

「じゃいいや」

「いいの!?」

「だって西じゃないし」

「……もう何度も聞いてるんだけどさ、なんでニッシーとそう西にこだわるわけ?」

「なんとなくーとかニシカワたる宿命とか、いつも適当に答えてた気がするけど……最近その理由がわかった気がするんだよ」

「へぇ、それはおもしろいわね。なんでなの?」

「きっとね、僕は何か、夢中になれるものがほしかったんだ。だからなんでもよかった。そんなときに自分の苗字の『西』って文字がたまたま目に入って、コレだ！　って思ってしまったんだよ」

「……へぇ」

「変かな」

うん、と頷く人は多分たくさんいるだろう。

「う、ううん？　いいんじゃないの、そんなのも……それに……何かに夢中になってる人って……その……ちょっと、格好いいし、なんて」

「ん？　アヤ坊、聞こえなかったんだけど、後半なんて言った？」

「ち、ちち、ちょっとよ！　ちょっと！！」

「なにが？」

「うっさい！　ニッシーなんか東にいっちゃえ！」

「僕を殺す気か！？」

「焼きイモ買ってこいってことよ！」

ハイハイ焼きイモだけじゃなくて色々とごちそうさま、もういりません、という人も多分たくさんいるだろう。

でもそんなの関係ねぇ。

## カカの天下６４４「いーしやーきいもー」（後書き）

皆さんの予想に反して、やつらは微塵も出てきません。
だって出すぎだし。

出てほしかった？　ネタが古い？
でもそんなの関係ねぇ。

# カカの天下６４５「かに」

こんばんは、カカです。

今日の夕飯はカニです。例によって例のごとく、お姉がよくわからないルートで調達してきたのです。

「……」

「……」

そんなわけで、トメ兄と二人で茹でたカニを黙々と食べてます。

カニの足をとり、パキッと折って、中の身をほじほじっと。

「……」

「……」

カニ食べるときって無言になるのよね。

さてさて、そんな暇を持て余したあなたにステキな時間を。私的シンキングたーいむ。

もしも……カニが、オニだったら。

私は今、オニ退治をしている。

見たか赤オニ！

パキッと、ほじほじっと、黙々と……

もしも……カニが、アニだったら。

アニ、つまり兄。

トメ兄を食べる！

サユカンが怒る……ざまぁみろ。

パキッと。ほじほじっと。黙々と……

もしも……カニが、マニだったら。

マニー。

つまりお金！

ほしい。誰か、私にくれないかに！？

……ごめん。

色々と、ほんとごめん。

パキッと。ほじほじっと。黙々と……

もしも……カニが、ナニだったら。

ナニって何？

何だよ。

……何さ。

パキッと。ほじほじっと。黙々と……

もしも……カニが、腹黒だったら。

中が黒。

全部かにみそじゃん！

それはそれでうまー。

パキッと。ほじほじっと。黙々と……

もしも……カニに殻がなかったら！

食べやすい。

パキッと。ほじほじっと。黙々と……

もしも……カニ同士の恋人がいたら。

横歩きしかできないから、常に見つめ合って移動。

それだけを聞くとステキだけど、人間がやると、とても異様。

天下の往来を、見つめあいながらカニ歩きするカップルたち。

繁華街はそんなんばっかり。

とても異様。

パキッと。ほじほじっと。黙々と……

もしも……カニが縦歩きできたら。

特徴がなくなる。

パキッと。ほじほじっと。黙々と……

あ、かにみそ。

もしも……かにみそが、あにみそだったら。

兄みそ。

それを食べれば私もツッコミ？

なんでやねん！

……まだまだ甘いな。

パキッと。ほじほじっと。黙々と……

もしも……カニが、カミだったら。

神様！

いただきます。

パキッと。ほじほじっと。黙々と……

「なぁカカ」

「んー？」

「おまえ、さっきから身をとってばかりで食ってないぞ」

「そういえばそうだ！！」

皆は気づいてた？　私は気づかなかった。不覚。

はむはむ……

カニうまー。

「ご飯にカニの身をのせようか」

「私も！」

幸せな時間です。んまー。

おまけ。

そのころのゲンゾウ兄弟。

「兄者、なぜあんなに沢山のカニをカツコさんに？」

「い、いやな？　『あたしはカニが食いたい！　渡さなければこうだ！』とカニバサミをされてな、仕方なく」

「ほほう、久しく触れてなかった女性の肌の感触にときめきを隠し切れず、カニを贈呈してしまったというわけだな」

「い、いやそういうわけでは」

「それは本当かい？　セイジ」

「あ、姉貴！？」

「あのカニはねぇ、明日の給食にも使おうと思ってたんだよ！　よくもやってくれたねぇ！　その根性叩きなおしてやる！　そんなに好きなら――あたいだってカニバサミしてやるわ！！」

「ま、待て姉貴！　それはカニのハサミではなく、太い枝もばっさり切れるお得な電動スパスパ枝切りバサミではないか！？」

特価一万円ぽっきりです。枝切りだけにぽっきりです。切れてませんね折れてますねスイマセン。一家にお一つどうぞ？　電話番号は自分で考えよう。

「まずい、逃げるぞ兄者！」

「待てぇぇぇぇ！　く、狭い道に入ったねこの馬鹿弟ども！　ハサミが長くて横歩きしかできないじゃないのさ！」

ハサミを持って横歩き。

まさにカニ！！

おあとがよろしいようで。

## カカの天下６４５「かに」（後書き）

ひたすら何か食べ続けるシリーズ！

そして感想もらって気づいたのですが、おまけって形が連続してるので今回もやっちゃいました。
騎士焼きイモみたいな特別変なのは思いつかなかったのですが、これはこれでボケーッと読んでくれたらカニも本望です。

ふと変なの思いついたら、さりげに本文修正していれるかも笑
そんときはまた知らせますねー＾＾

# カカの天下６４６「クララちゃんの本気」

こんにちは、サエですー。

最近寒いですよねー。いっつも外にいるクララちゃんもきっと寒いと思って、今日は暖かい我が家にご招待してみましたー。

「ここだけ春です！！」

「あれー？　今まで暖房がある家に入ったことなかったの？」

「あったのかもしれませんけど気づきませんでした。クララ寒いの平気ですし」

やっぱりねー。寒くなってもワンピース一枚なんていう姿でいるからおかしいと思ったー。ワンピースの色は枯れ木色になっちゃってるんだけど。

「なぜこんなに暖かいのですか？」

「これだよー、このエアコンさんが暖かい風をくれるの」

「エアコンですか！　エアコン……何かの略ですか？　ツアコンとかリモコンとかみたいな！」

「うん、そうだと思う」

「何の略なのでしょうか」

「エアは、エアー。風だと思うけど」

「コンはなんでしょう。コンコン」

「入ってまーす」

「トイレのことですか！？　クララわかりました。つまりこれは風のトイレ！　この温かい風は、人が用を足すと匂う生暖かい風と同じなのですね！」

「絶対に違うと思うよー」

そんな発想できる人いないと思うし。そうだとしたらすごく嫌だし。

「じゃあコンってなんですか！」

「コン……根性？」

「根性！　熱い根性ですね！　だから冬でもこんなに暖かいのですか、納得です！」

納得してくれてよかったー。多分違うけど。

「サエおねーちゃん、エアコンさんが風を吹かなくなりました」

「あ、きっと部屋が完全に暖まっちゃったからだねー」

「クララ、もっと根性の風を浴びたいです！」

「じゃー設定温度を上げてみよっか。リモコンリモコン……ぽち」

十秒後……二十秒後……

「ウンともスンとも言わないです」

「ほんとだねー」

「もしもーし！　入ってますかー。コンコン！」

「クララちゃん、だからトイレじゃなくてねー」

しかも結構遠慮なくゴンゴン叩いてない？　あ。

「なんだか変な音がします！　ごぃんごぃんって」

「もう、クララちゃんが叩きすぎたせいで機嫌が悪くなっちゃったのかも」

「クララしょっくです！　どうしましょう！」

「うーん、パコちゃんと同じように名前をつけてあげたら機嫌直してくれるかなー」

エアコンだから……

「ねぇねぇ、クララちゃん。この子の名前、アッコちゃんとアコンちゃんのどっちがいいと思う？」

「アッコちゃんがいいです！」

「よし決定だー。ねぇねぇアッコちゃん、機嫌なおしてー？」

呼びかけてもアッコちゃんはごぃんごぃんと重い音をたてるばかり。

「直してくれないねー」

「サエおねーちゃん、もしかしてアッコちゃんは風邪を引いたんじゃないですか？　最近流行ってるみたいですし」

「そうかも！」

いつも風を吹いてばっかりだから、風邪を引いてもおかしくないかも！

「じゃ、どうしよー。悪化する前になんとかしないとー」

「サエおねーちゃんは風邪を引いたときはどうしますか？」

「えっと、布団で横になるねー」

「わかりました。アッコちゃんを布団で横にしましょう！」

「で、でもアッコちゃん、あんな高いところにあるのにー」

設置してある場所、私じゃとても手が届かないしー。

「しかもすごく硬く固定されてるんだよー」

「クララに任せるです！」

クララちゃんの目がキラリと光る！

「クララジャンプです！！」

そしてその小さな身体は、二メートル以上の跳躍を見せ！

「クララ手づかみです！」

がっし、と音がはっきり聞こえるほどに強く鷲掴み！

「クララど根性です！！」

メキメキメキ、と壁の一部と共にエアコンを引き剥がした！！

ズダン！！　と荒々しく着地したクララちゃんは、引き剥がしたエアコン――アッコちゃんを担ぎながら、とてもやりきった顔で一息ついた。

「く、クララちゃんって力が強いんだねー」

「大自然の力をなめてはいけません！　さ、布団はどこですか！？」

「こっちー」

使ってない部屋にクララちゃんとアッコちゃんを案内する。そして布団を持ってきて、敷いて、そこにアッコちゃんを寝かせて……壁の一部も引っ付いてるけど、細長いから簡単に布団を被せることができた。それにしてもなんかバチバチいってるのは、やっぱり体

調が悪いからかな？

「それで、次はどうしますか！？」

「私だったら、お水飲むかなー」

水分とらないとねー。

「わかりました、お水汲んできます！」

たったかたー！　と台所に駆け込むクララちゃん。

そして間もなくコップを持ってきて……

「クララ躓きました！」

転んだ拍子にお水がばら撒かれて、私とアッコちゃんとクララちゃんにかかって――

「しびびびびび」

「クラララらびびびびです」

なんか、ビリビリっときて――

……こんばんは、サカイです。

仕事を終えて家に、帰ってきたのですが。

「布団の上に、サエ、エアコン、クララちゃん」

人生でもそうそう見れない川の字ですねー。

「きゅー……」

「あらあら可愛い寝言ねーサエ。目を回してるけど」

そのあと、二人を起こして事情を聞いてみたんだけど。

とりあえずエアコンは風邪を引かないことはわかってくれたんだけど。

ショートしている機械を水で濡らすと感電するから危険だということも理解してくれたんだけど。

機械と人を一緒に考えてはダメということだけは、わかってくれなかったみたいだわー。人みたいな木があるんだから機械も――って、なんのことかしら？

そんな誤解も可愛いから、別にいいんですけどねー。

## カカの天下６４６「クララちゃんの本気」（後書き）

最近普通の話が続いたので、異様な話を書いてみました。
はい、色々とアレですね。

この作品にはコメディ補正というものがかかっています。一見、阿呆な行動に見えますが……実際にやると危険極まりないので真似しないでください。
できない？　ならいいです。

# カカの天下６４７「トメの一人遊び２」

こんにちは、トメです。

忙しい年末を控え、会社から有給休暇を消化しろと言われました。
そんなわけで平日にも関わらず休みをもらってしまったのですが……

「ひま」

カカを学校へ送り出してからというもの、家事を終わらせてしまうとすることがありません。

「暇をもて余した主婦か僕は」

一人でツッコミをいれても、本当にそうなんじゃないかと思えて笑えません。ちくしょー。

「誰か他に暇な人はいないものか」

キリヤにでもメールしてみるか。

『いま暇か？』

ぽちっと送信。おもしろみがない？　男のメールなんてこんなもんだ。

「あれ、もう返信きた。暇なのか」

そのメールを覗いてみると。

『いま無敵中です』

脳裏にスターなアイテムをとって光りながら爆走するキリヤの姿が浮かんだ。帽子をかぶったアレね、異様に高くジャンプしながら亀とかなぎ倒す感じのアレね。

「気になるな……電話してみよ」

数回コールするまでもなくキリヤが出た。

「あ、もしもし。無敵中ってどういうことだ？」

『はい、ただいま満席となっております』

なんだこの噛み合わない会話。

「あーっと？」

『タクヤ君待ってください。Ａ５卓様にはお子様がいらっしゃるでしょう、ならばそのオーダーを通す前に一度、お子様が食べられるのでしたらにんにくをお抜きしましょうか？　と確認を取りなさい。にんにくの強い料理が二つも入っています。お子様に刺激物はよくありません』

『は、はい、わかりました！　でも、キリヤさん、よくオーダーがわかりましたね、ドリンクばっかり作っててホールにもほとんど出てないのに』

『ホールにはつい先ほど一度出たのでお客様のご様子は全て覚えま

した。店員がオーダーを取る声はここにいても聞こえます。さ、速く動きなさい』

『は、はい！！』

『こういうわけですトメ君』

なるほど、店が満席状態かつ自分は無敵状態というわけだ。

「忙しいときに悪いな、でも電話してて大丈夫なのか？」

『ええ、なにせ無敵なので』

『おいキリヤ！！　てめぇこんなときに何して――』

『ドリンクお願いします！　Ａ１卓様にグレープフルーツジュースとオレンジジュースツー、ホットコーヒースリー。Ａ３卓様に生ビールツー、Ａ４卓様に瓶ビール梅酒お湯割りカシオレカシグレオールワン、Ｂ２卓様は常連のお客様なのでホットコーヒーに砂糖なしミルク三つです。Ｂ１卓様にはアイスコーヒーツーをこちらに用意してあるので、間もなく出るお料理と同時にお願いします』

『……おいキリヤ、そんな伝票ねぇぞ』

『先ほどホールを回ったときに五卓様同時に聞いたので、書く暇がありませんでした。先に作ってしまったほうがいいと判断しましたので。配膳してからすぐに書きますよ』

『……全部、暗記したのか』

『それが何か？』

『……なんでもない』

『ならば配膳してください』

『……おう』

『そういうわけですトメ君』

なるほど、どうだ自分は無敵だろうと言いたいわけだ。

確かにすげぇ。

「ああ、邪魔して悪かった」

『はっはっは。飲食業とはどれだけ忙しいときにもお客様からお電話をいただくもの、この程度のことで文句を言っていては自身のスキルアップなどできません』

スキルアップ、かぁ。

「今度またラーメン食おうな」

『喜んで、では』

うーん、普段はおちゃらけていても仕事ぶりだけは神だな。僕も見習ってスキルアップに励むか……確か料理の本あったよな。食材結構あるし、暇だし……

「でもその前に、と」

なんだか寂しいので、もう少し誰かと時間潰したいなー、なんて。

テンは明らかに授業中だろうし……カカたちもしかり。待てよ、いま昼どきだよな、だからキリヤもあんなに忙しかったんだろうし……でも給食中だろうな。

あとはサラさんか。メールしてみよ、ぽちっと送信。

『やほ。いま暇？』

なんだかナンパなメールだなぁ、なんてちょっと自己嫌悪。お、返信きた。

『いま花屋でお悔やみ中です、すいません！』

葬式？

花屋で？

つまり、姉が！？

やったぁ！！

じゃなくて。

「なるほど、葬式用の花の準備で忙しいってことか」

結局はお仕事中なんだなぁ。

じゃあ……ちょっと恥ずかしいけど、母さんはどだろ。同じようなメールをぽちっと送信。

するとこれまたすぐに返信が。

『ただいま演技で女子高生中』

なんと、返信が変身だった！！　しかも――えええええ！？

『いやいやいやいやさすがに無茶だろう！？』

即変身！　じゃなくて返信！　すると向こうからも変身！　じゃなくて返信間違えすぎ！！　僕動揺しすぎ！

『ママもそう思ってね、抗議してるところだよ。なんか監督さんがどうしても着てほしいみたいでね？　絶対に売れるとかまだまだイケるとか言われてるんだけど、これ以上言ったらパパ君の手裏剣が飛んでくるからアブナイね、うふふ♪』

や……そっちもアブナイですけど、うちの母さんが女子高生姿って、そっちこそアブナイビデオみたいになっちゃいますから。頑張れ母さん、死人を出すな？

「しかし皆、仕事忙しいんだなぁ。母さんは来年まで帰ってこれないみたいだし……僕だけ暇で、何か申し訳ないような。お？」

メールだ、カカから？　昼休みか。

『ただいま授業中』

別におまえには聞いてねーよ。

『うっそーん。本気にした？』

したからどうだっていうんだよ。

『トメ兄は暇中？』

余計なお世話だよ正解だよ。

……という感じの返信をしてみた。

すると。

「電話？　えと――もしもし？」

『あ、あのっ！　トメさんですか！？』

「はいはいトメさんですが」

サユカちゃんか。

『あの、寂しくて死んでしまうって本当ですかっ！？』

僕、そんなにか弱いウサギだっけ。

『あのあの、わたし今から学校抜け出して会いにいきますから死なないでっ！』

「いあいあいあ死にません死にません。カカが何言ったか知らないけど大丈夫ですから」

『本当ですか？　あの、学校終わったらすぐに駆けつけますので』

じーん……なんか嬉しい。

「じゃ、夕飯でも食べてく？」

『いいんですかっ！？』

「うん、美味しいの作っておくよ」

『わ、ありがとうございますっ！　でも、その、ご迷惑じゃ……？』

嬉しいこと言ってくれたお礼だよ。

「全然構わないよ。楽しみにしてな」

『はいっ！！』

ちょうどスキルアップを、と思ってたところだし。

いっちょ、やりますか！

『あぁ、もうすぐ授業です。でも、もうちょっとお話しましょうっ』

そんな健気なことを言ってくれるサユカちゃん。しかし、

『……これで今夜のうちの夕飯は豪華に。サエちゃん頭いー』

『ふふふー、私もご相伴に預かるのだー』

聞こえてるぞ、サユカちゃんの後ろにいるだろう二人！

でも人数分作るけどね。

今日のメニューは――牛すじカレー！　すじ肉は柔らかくなるまで時間かかるからな、じっくり作るにはもってこいだし、何よりカレーといえば子供の大好物の代名詞。間違いはあるまい。

さてさて、やつらのほっぺた落とすぞー！

ところで。

僕って……寂しいのか、恵まれてるのか、どっちなんだろう？

## カカの天下６４７「トメの一人遊び２」（後書き）

あの話の続編が帰ってきた！
そして皆、声をそろえて言うだろう。
「てめぇ恵まれすぎだ、ざけんじゃねぇ」と。

どうも、相変わらずトメロリコン疑惑に拍車をかける話を書いてしまったルシカです。でもトメ本人はロリコンのつもりはないんです、単に寂しいだけで……他に知り合いがいないだけで……

あと、またもや感想の返信ができない状態ですが（時間的な理由で絶対に返信しますので、懲りずにいろいろ書いてくださいね＾＾；
トメへの脅迫も可。

# カカの天下６４８「欠けた三角」

「……はぁ」

トメです。突然ため息なんか吐いてすいません。

「まだあったんだな、これ」

自室の机の中を整理していたときに見つけてしまった、そのシルバーペンダント。

角が一つ欠けた銀の正三角形が、薄らと光る。

「捨てられないんだよなぁ、情けないことながら」

それと同時に光る思い出。

そうだな、光っていた時期は確かにあった。でもこの綺麗な三角形が欠けたのと同時に、いろいろなモノも欠けていった。

「なんで欠けたんだっけ。ああ、たしか」

思い出す。

あれは僕が高校生だったころ。

気の合う友達もそれなりにいて、今ほど愉快なやつらが集まらなくとも楽しい日々を送っていて、僕の隣にはアイツがいた、あのころ。

「おい笠原、笠原！」

「なんだよ……僕は眠いんだよ」

毎日毎日寝るまでの間は全力で懐いてくるカカの世話に疲れ果てていた僕は、高校の休み時間といえば机に突っ伏して眠るのが日課となっていた。

「そんなこと言っててていいのか、来てるぜ今日も」

「……どっちが」

思い当たるのは二人いた。

来てくれて嬉しいほうと、来てくれてウギャアなほうだ。

前者だったらいいなぁと希望を抱いているうちに教室のドアが吹っ飛んだ。

「弟よー！！」

どうやら後者だったらしい。うぎゃあ。

「なぁ、姉」

「よう弟！　元気か！」

「あんたの顔みたら元気なくなったよ」

「それはよかった！」

人の話聞けよ。

「なぁ姉。何度も言うが」

「何度でもツッコんでくれていいよん。それが君だ」

「なら言われるまでもなくそうするよ。あんたは大学生だよな？」

「おうよ」

「ここは高校だよな」

「おうよ」

「なんでいるんだ」

「……？」

「なんで不思議そうに首傾げるんだよ！？」

「そんなに怒んないでよ、手土産にカカちゃん持ってきたから」

背負われていたらしく見えなかったカカが、姉の肩口からひょこっと顔を出した。

「とめにーちゃん！　にゃー」

ひらひらと手を振るカカ。

「にゃー」

思わず振り替えしてしまう僕。

「……はっ!?　じゃなくて！　なんでカカまでいるんだ！」

「幼稚園から拉致ってきたから」

「なんで拉致るんだよ!?」

「そんなに喜ぶなよぅ」

「ああもう会話が成立しない！」

「とめにーちゃん、にゃー」

「にゃー!!」

やけになってブンブン腕を降るとカカは楽しそうに振り返してくれる！　なんか楽しくて確かに土産にはなったかもしれんが色々と問題あるだろう！

「まぁまぁ笠原」

「なんだよさっき起こしてくれた友人Ａ」

「おまえこそなんだよその説明的な口調は……いいけどさ。ともか

くお姉さんは心配なんだよ、おまえに彼女ができて」

「「ぐっ」」

そろって言葉に詰まる僕ら姉弟。

「ち、違うもんね！　あたしは別に！」

「見てくれよーお姉さん。こいつさ、彼女にプレゼントもらったんだぜ、ほら」

「わ、ばか」

友人Aが襟元から手を突っ込んでくる。その拍子に服の下に隠してつけていたペンダントが表に出てきてしまった。

「三角形のペンダント、これよこれ！　しかも聞いてくれよ。これさ、にくいことに――」

ん、姉？　ペンダントを持って……

「ふん」

パキ。

「折っちゃった」

「なにしてくれんだ姉えええええええええええええ！！」

彼女からの初めてのプレゼントをあっさり素手で折りやがったコ

ンチクショウは、バツの悪そうな顔で、しかし謝ることもなく、

「うっさい！　そんなのあたしだって買ってやるもん！　バイトしてくるから待ってろバーカ！」

「とめにーちゃん、にゃー！」

わけのわからないことを言って去っていく姉、そして相変わらず手を振り続けているカカ。

そんな二人は目に入らず、僕はただ、欠けたペンダントだけを手に立ち尽くしていた。

「なぁ、トメ」

「……なんだ友人Ａ」

「これは俺のせいだ。だからこれだけは言わせてくれ」

「……なに」

「ざまぁみろ」

とりあえずそいつを殴った。さらば友人Ａ。二度と会うこともないだろう。出番的な意味で。

「それが、彼女と別れるきっかけ」

乾いた笑いがこぼれる。

「――だったら、よかったんだけどな」

それなら話は簡単だった。

いいや、特に複雑なことはない。現実も極めて単純だった。

複雑だったのは、僕の心だけ。

「……しまっとこ」

捨てられない。

捨てることはできない。

欠けた三角形と、欠けた関係。片方を失うと、もう片方も同じ運命を辿るような気がするから。

もっとも、もう片方のほうはすでに無くなっているかもしれないが。

「それにしても、あのころの姉」

バカだったなぁ。

「あのころのカカ」

可愛かったなぁ。

「あのころの僕」

ほんと、バカだったなぁ。

## カカの天下６４８「欠けた三角」（後書き）

これでどうだ！！
誰かさんとの約束、トメと姉の学生時代を書いてみました。ついでにちょっと過去編の冒頭を……

すぐには突入しませんが、これからちょこちょこと過去の話を公開していきたいと思います＾＾

そうそう、もうすぐカカラジですが。

ちょっとした情報をば。ＣＭ枠一つと自由枠なおたよりが少ないので、それを送れば採用される可能性が多いかもしれません。
もし何か思いつくことがあれば遠慮なくどしどし送ってくれると嬉しいです＾＾

# カカの天下６４９「翻訳可能」

おはようございます、トメです。

今日は最近じゃ珍しいくらいのいい天気。寒い寒いと文句を言って布団から出にくかった僕も、比較的すんなり起きることができました。

爽快的な気分で朝食を作り、いつもの時間になっても珍しく起きてこないカカの部屋をノックノック。しかし返答なし。気持ちよすぎて逆に寝てるんでしょうかね？　僕はそう思ってカカの部屋の扉を開けて、

「……」

とてつもなく不快そうにベッドから身を起こしている、カカとご対面しました。

ご機嫌ななめ、どころか急降下？　なぜ。

「あの、カカ？　おはよう」

「……」

「お、おーい。返事してくれないとお兄さん寂しいな」

「……っ」

あれ、口を動かしてる。一応は小声で何か言ってるのか？

「どうしたんだよ」

その声を聞き取ろうと近づき、耳を寄せてみると、

「ぶぁっくしょっいっ！！」

「声でかいし近いし汚いし！？」

耳元で盛大にくしゃみをかまされ飛び退くと、カカはギロリと悪い目つきをこちらにむけ、

「ち――げほげほっ！　ちげほ！　ぢげほげほげほ！！」

今度は盛大に咳を始めた、っておいおい。

「まさか風邪か？」

「ちごほっ」

にしても変な咳だ。最初の『ち』やら『ぢ』ってどこから出てきたんだ。

「ううううう……ちげほっ」

「ダメだなこりゃ。おとなしく寝てな」

幸いにも今日は土曜、学校も会社も休み――お？　ぐいっと引っ張られる僕の服。カカが掴んでる。

「ううううう」

「なんだよ、行ってほしくないのか？」

寂しいのか、可愛いやつめ。

「ち……ち……」

「ち？」

「ぢぐじょーい……」

伊達に長年一緒にいるわけではない。カカの言いたいことは理解した。

先ほどカカは盛大なくしゃみをかました。だから――「はっくしょい、ちくしょい！！」というアレを言いたかったのだ。

たったそれだけのために僕を引き止めたのだ。

たったそれだけのために咳をしまくってまで声に出そうとしていたのだ。

変なやつ。

「はいはい、言いたいことはわかった。なんか胃に優しいもん作ってきてやるから待ってろ」

「どべびぃー……」

トメ兄ね。

「今度はなんだ……あー、何言ってるのかわかるけどわからんから鼻かめ。ほれティッシュ」

ちーん、と定番の音を聞かせてくれたあと、

「それで、なんの用だったんだ」

「……おはよ」

「それだけか？」

「返事、しでながっだ……ぐじゅ」

律儀なやつだ、ここは可愛い。

「はいはい、それじゃ行ってくるぞ」

「ぶぁっくしょい！！」

「くしゃみで返事するのは百歩譲っていいとして、もう少し可愛いくしゃみできないもんかね」

「ちげごほげほ！！　ちぐげほ！」

「ちくしょーとか言わなくていいから！　おとなしくしてろ」

「ううううう、ぎぶ！！」

ギブ？

ああ、義務か。

……義務か？

まぁいいや、僕がいなくなれば変な意地も失くすだろう。そそくさとカカの部屋を後にして、台所へ向かう。

さっき作った朝食はラップして冷蔵庫に置いて、と。適当な野菜が余ってるし、玉子もあるからおじやにしよう。

そんなわけで調理中……ん、居間のほうから着信音が。そういや起きたときに携帯あそこに置いたんだっけ。コンロを弱火にして、音に急かされるようにそちらに向かう。

テーブルの上に放置されていた携帯を手にとってみると、画面には会社の番号が。

休日出勤要請か？

そういえば昨日、機械がトラブってたような。

「しーらないっと」

音が鳴り止んだと同時にマナーモード。そしてテーブルにポイ。

さーておじやおじや、っと。

数分後。

お盆に朝食セットをのせた僕は、再びカカの部屋を訪問した。

「ほれ、おじやできたぞー」

「げほげほげほっ！」

「はいはい、そんな無理してオヤジ狩りとかボケなくていいから」

「げほっ……」

「ほら食え。あーん、とかいるか？」

「げほ」

「いるのかよ。風邪ひくと弱いなーおまえは。ほれ、あーん」

「ぶあっくしょい！！」

「口だけ開けろ！　返事するな！」

ようやくわかってくれたらしい。くぁ、と雛鳥のように開いた口にフーフーと冷ましながら雑炊を放り込んでいく。

「なんとなく思ったけど、僕らって昔からやってることは変わらないよな」

「げほ」

「そうそう、おまえが風邪ひいて、僕が看病して……でもたまには逆はないのかね？」

「げほげほ」

「ああ、そういやあったな変な看病されたことが。看病というかお供え物か。や、あんなのじゃなくてさ、今僕がやってるみたいな、心温まる感じの」

「けほけほ」

「まぁ、確かに僕はあんまり風邪ひかないけどさ。もしものときの話だよ」

「ぶぁっくしょい！！」

「そもそも料理できないから無理？　教えてやるから覚えろよ」

「ぶぁっくしゅ！」

「面倒？　いざサエちゃんが風邪ひいたら教えろとか言うくせに」

「はっくしゅ！」

「あ、やっぱやるの？　サエちゃん絡むと強いなおまえは。じゃあ教えるよ」

「ぢぎじょー！」

「お、やっと言えたな。ちょうどおじやも食べ終わったし、よかったよかった」

お盆の上を片付け、部屋を出ようとする。

「……とめにーちゃん」

昔の呼び方に少し驚きつつも振り返る。

「……あの」

カカが、真剣な目をしていた。

「なんだ？」

「……いつも」

熱か羞恥か、顔を真っ赤にして。

少しの間、躊躇していたけど。

カカは思い切ったかのように口を開いた。

「ぶぁっくしょい！！」

「寝ろ」

「……ぁぃ」

残念そうに俯き、もそもそと布団に入っていくカカ。

それに、

「どういたしまして」

そう声をかけると、カカは動きを止めて、

「ん」

唸るように返事をして、しっかりと布団をかぶるのだった。

## カカの天下６４９「翻訳可能」（後書き）

二日続けてしんみりもなーと思ったのですが、昔のカカと現在のカカで甘えた感じを出してみたらどうだろう？　とも思ったので、こんなん書いてみました。
いかがでしたでしょうか？

さてさて、もうすぐカカラジなのですが……

年末の居酒屋って……いっそがしいですねぇ（超私事

感想返す時間ががが！
ほんと申し訳ない！
でも頑張りますのでもうちょっとお待ちを！

明日中にカカラジ書ききれるかなぁ……ちょと不安かも。
遅れちゃったらごめんね♪
ではでは皆さん風邪にご注意をー。

**カカの天下６５０「第二十二回、カカラジ！」**

――もしも、カカ天本編にルシカさんが登場していたら。

「トメ、どけ！！　そこには私が座る！！」

私の天下。

――　もしも、ルシカさんがカカ天を書くのにやる気を無くして手抜きになっていたら。

「いただきます」

「いただきましょう」

「もぐもぐもぐ」

「ぱくぱくぱく」

「ごちそうさま」

「おそまつさま」

つまらなっ！！

――もしも、トメがカツコのようなバケモノ的な力を持っていたら。

「超、なんでやねん！！」

トメのツッコミがカツコの鳩尾に炸裂する。神速で打ち出されたその衝撃、いかな強靭な肉体を持つカツコといえど耐え切れず、成す術もなく吹き飛んだ。しかし岩をも砕くその威力を急所に受けてなお身体が爆散せずにいられるのは、やはり身に持つ力が似たもの故か――

何の話だよ。

――もしも、サユカとトメの年齢が逆だったら。

「ねぇねぇトメ君、サユカお姉さんとこれからお茶しないっ？」

「はぁ……また？」

「なんでそんな嫌そうな顔するのっ、お姉さん悲しいっ」

「や、ツッコミとツッコミが一緒にっていう組み合わせがいまいち」

「……カカすけみたいなこと言うわね」

「今の僕はカカとも同じ歳ってことだからな。そういう仕様だ」

「でもそれを自分で言う辺りがトメ君ね……でもでも、お姉さんも頑張ってボケるからさっ」

「……ボケる、ねぇ」

「ああっ！　今、違う意味の『ボケる』って言葉を想像したでしょうっ！　えーえーどうせ年増ですよ、悪かったわねっ！」

「誰もそんなことは言ってないって」

「ふんっ、お姉さん傷ついたんだからっ！　トメ君なんか嫌いっ！　でも好きっ！」

「どっち」

「どっちもっ！」

「……はいはい、わかりましたよ。一緒にお茶すればいいんでしょ」

「わ、やった♪　この前ね、いいお店見つけたの。お姉さんがおごってあげるわねっ」

「結局はいつものパターンか……ま、いいけど」

大人故に少し強気のサユカちゃん、そして子供故に少し弱気のトメ。案外こっちのほうがうまくいくかもしれませんね。

見た目、犯罪ですが。

「そんなわけでぴゅみゅみゅ――こんカカ！　前回に引き続きもしも話から始まりました、寒いよ最近寒すぎるよコタツコタツっとーなにさ羨ましい羨ましいってうるさいんだよ作者も皆もさぁーと言いつつへへーいいでしょいいでしょーなんて自慢してる香加です！」

「そんな煽るようなこと言うなよと思いつつ実は僕も自慢げだったりする留です」

……香加、始め何言いかけた？

「や、なんか挨拶はこれを言えっていう妙な電波が流れてきて。なんとか理性を総動員して無視しきったけど」

……コメントしないほうがよさそ。

はい、そんなわけで始まりました第二十二回カカラジ！　冒頭のもしも話ですが、私ルシカに関する話二つが『ケイ』さんから。トメが姉みたいな超人的な力を持っていたらー的な話が『腹黒幽霊』さんから。そして年齢逆話は『ＡＢ天』さんからいただきました。

なお、沢山の方々からいただいた「もしもサエちゃんが白かったら」「もしもサエちゃんがまっ白白すけだったら」などのリクエストですが……

あまりに可愛すぎて書けないことが判明。

どうしても読みたかったら機械を前にしたサエちゃんでも読んで納得しなべイビーたち。

「だそうです、読者様への言葉遣いがなってないよな。そんな失礼なこの番組はネット小説『カカの天下』を盛り上げるため、ぶっちゃけトークや作者の本音を交えながら読者様の投稿文について談義するラジオ的なお話です。ここにいる留とか香加とかは本編の分身であり、直接関係はないのでお気をつけください」

「……可愛すぎるサエちゃん見たかった。もちろんいつでも可愛いけど」

ならいーじゃん、というわけで早速ＣＭへ！

『ここが今人気急上昇中の“天上天下”というファミリーレストランです！　渋い名前ですねぇ！　外見は普通ですが』

「えぇ。私もそう思います」

『お？　このファミレスの店長さんですか？』

「いえ、私はただのバイトです。店の名前を考えたのは店長なんですが、赤面症とかいうやっかいな病気にかかっていますので……あと『ヘタに公共の場に出るとヤツらが来る』とか言って出てこないのです」

『頭も病気なのですね』

「そうです」

『それでは店長さんには良い病院を紹介するとしまして、お店のオススメメニューを伺ってもよろしいですか？』

「はい！　コレが男性女性問わず大人気の“トメコノヤロー”です！」

『誰かへの文句に聞こえるのは気のせいですか？』

「この料理はベーコンとキャベツのトマトソースパスタを、当店自慢の隠し味にて仕上げたものです！」

『私の質問は無視ですか』

「虫なんか入ってませんよ？　いくらトメコノヤローでも」

『中途半端に聞いてるなあんた――コホン！　ええと、ちょうどあちらに、そのトメコノヤローに恨みでもあるかのように有り得ない量を食べている女性がいました！　話を聞いてみましょう！　トメコノヤローは美味しいですか？』

「んぐんぐ……トメ……コノヤロー」

『とっても美味しいようですね、はい。お隣の男性の方はどうでしょうか』

「むぐ……トメコロス」

『こちらは違う料理のようですね、とっても美味しそうです』

「はい、トメコロスはイカとトマトソースのパスタを先ほどのように隠し味にてやっちゃったものとなっております」

『トマトベースが多いですね？』

「はい、なぜかいっぱいあるので。イカもそこそこいっぱいあるので」

『そんな微妙に本編とリンクしたこのお店、一度訪れてみませんか？　そしてあなたなら……どんなトメへの文句を食べますか？』

「あ、言っちゃいましたね」

『文句だろうがぶっちゃけようが、どうせ最後は飲み込むんだからいいじゃないですか』

「うまいこと言いました」

ＣＭがあけて。

「はい、今のは皆さんご存知、感想欄で色々と頑張ってくれた『旅行者』さんからいただきました」

「頑張ってくれたから採用したの？」

いえ、単に料理名が私の心の琴線に触れただけです。

「アイデア勝ちか。でもこの人、脅迫状も他のＣＭも一緒に送ってくれたみたいだけど。なんか昨日か今日にかけて、五連続くらいで」

実話です。なんかいっぱいメッセージきました。でも今回はこれが一番気に入ったので、他は却下です。

「おーおー、またツッコまれそうなこと言ってるよ」

とは言っても相当アレンジしまくっちゃったんですけどねぇ。あ、でも。一つだけ紹介したいものが。

これは、さっき冒頭のもしもシリーズを書いた後に『旅行者』さ

んからもらったメッセージです。

『きょーはくじょー。

あのね、ぼくのね、お父さんがね？

「トメ氏ね」ってよくいうんだ。

だからね。なんで？　ってきいたら、

「男として羨ましいポジションだからだよ、ゆう○もこのポジションを狙うんだよ」

っていったんだ、よくわかんなかったけど、わかったことがあるよ。

トメかわれ。

ゆう○5さい。』

私は思いました。

ネタがかぶった！！

「お、恐ろしいな」

「伊達にいろいろ頑張ってないねこの人」

何かしら頑張るとおもしろいことになる、という良い例ですね。

さて、いい感じに戦慄したところで今回のふつおたコーナーですが……

「私読むよん。えーカカラジネーム『ゆでみゆう』さんからいただきました。えー『いろんな話を書かれていますが、各話を書くきっかけとか由来ってあるんですか？』という質問！」

きっかけは大抵思いつきですね。コタツほしいって思ったらコタツの話になるし、焼き芋食べたいって思ったら焼き芋の話になるし、カニ食べたいって思ったらカニの話になるし。

「思いつきにも程があるだろ、他に何かないのか？」

そうですねぇ……例えば昨日の話。

「あ、私、てかカカが風邪ひいた話ね」

「結構いい話って感じだったよな」

ええ、実はですね。あの話を書くきっかけなのですが、

「誰か風邪でもひいたのか？」

いえ。先日の飲み会で、友人が真剣な話の大事なところでやたらとくしゃみを連発しまして、そのタイミングが絶妙すぎて皆で大爆笑したのです。それがきっかけ。

「いい話ぶち壊しだなオイ！！」

「きっかけにしても意味わかんないし」

意味わかんないって香加には言われたくないね。

「ぐ……でもさ、普通はさ、風邪ひいたときに周りの人たちが温かかったからこんな話書いた、とかじゃないの？」

いえ、それどころか風邪の話を書いた次の日から微妙に風邪気味という、わけのわからない状況に。次の日って、つまり今日ね。

「ツッコミようが無いところがどことなくカカ天っぽい展開だな」

ま、ふつおたは以上です。

「……ええ！？　もう終わり？」

最近ですね、いただく普通の質問の大半が、本編で答えたほうが面白いものばかりなのですよ。

「最近っていうか、この前も似たようなこと言ってなかった？」

かもしれませんね。というわけで、ふつおたは何かあったら答えるということで、ここは自由枠にしようかと。

「自由、ねぇ。なにすんの？」

手始めに、なぜか最近流行ってるニュース特集でもしようかと。

「おお、これまたラジオっぽい。けどニュースって今までＣＭでやってたよな」

CM枠がそれで埋まってしまいますので……やっぱりせっかく色々いただいてるので、色々と紹介したいじゃないですか。

「それでも全然紹介しきれてないんだけどねー」

ううん、申し訳ない。でもでもですね！　送っていただいた投稿は全て目に通し、カカ天を続ける活力とさせていただいているのでご安心を！　送っても無駄なんじゃないかとか悲しいこと思わないで、懲りずに送ってくださいね！

「よし、作者の謝罪も済んだところで、ニュース紹介だっけ？　いってみようか」

「私読むねー。えっと、まずはこれ」

KRNニュースです。

ただ今、容疑者トメ氏が連行されました。

トメ氏は、カカ天の世界の中で『ロリは全て僕の妹』をスローガンに、小学生の女の子に過度なコミュニケーションを強要したとの事です。

被害者Aの事例――

幼い頃からトメ氏との同棲生活を強要され、両親に会える事も稀だそうです。

被害者Bの事例――

トメ氏に好きだと１０回も言わされ、挙句の果てには結婚を行いそうになったとの事です。

被害者Ｃ様の事例――

トメ氏に、「あーん」などを強要され、挙句の果てには一緒のベットで一夜を明かしてしまったとの事です。

この容疑者トメ氏の処遇ですが、いい加減『フラグ乱立罪』を辞めて一本に絞って欲しいと思われます。

ってかな、Ｃ様と一夜を明かしたなら男として責任取れやボケェェェェ！！

……ゴホンッ、な、なんでも御座いません、放送事故です。もしくは私の頭の事故です。

なお、番組には続々とトメ死に対しての様々なところからの殺意……いえ、抗議が届いているとの事です。その一つを紹介しますと、「ざまぁみろ」とのことです。出番はもうないと断定された友人Ａさんの恨みがこもっているようですね、とても喜ばしいことです。

では、以上ＫＲＮニュースでした。

だそうですよ、留さん。

「だそうだよ、留兄」

「僕知らないモーン。トメじゃなくて留だモーン」

こちらのニュースはもちろん『ＫＲＮ』さんからいただきました。
では留として、このトメをどう思いますか？

「彼は無実です！　信じてください！」

ヤだ。

「それでは次のニュースです」

「なんでこの作品は男性陣への扱いがこんなにひどいんだろう？」

さらに無視して二つ目。

――こんばんは、ニュースカカ天の時間です。

では最初のニュースです。えー…『食肉友の会』の会長である鶏助氏が本日、不法家宅侵入の罪で現行犯逮捕されました。

警察の発表によりますと同氏は本日昼過ぎ、市内に住むサカイミエさんの家宅に侵入しようとしたところをパトロール中の警察官が発見、現行犯逮捕とされました。

警察の取り調べで同氏は、

「日本経済の危機だった」

「同じ食肉として助けずにはいられなかった」

「全てはトメの責任だ」

などといった意味不明な供述を繰り返し、また、取調官が注文した親子丼に対し、「共食いをさせる気か」と叫びながら取調室に羽根を撒き散らしたため、公務執行妨害の罪も問われる可能性もあるとのことです。

では次のニュースです――

だそうですよ、留さん。

「だそうだよ、留兄」

「僕、関係なくね？」

正論は爽やかに無視してっと。こちらは毎度同じみ『鶏助』さんからいただきました。

「ニュース見てると鶏助っていうより鶏肉さんなんだけど」

「仲間の牛肉を助けるため……泣ける！」

「泣くっていうより鳴いてるんじゃないか？　コケコッコーとか。鶏だし」

こんな感じで愉快なニュースをいただいております。今後も愉快なものがあれば紹介していきますが、思いついたものはなんでも送ってきてください。私的に愉快度が高いものから紹介していきます。

「おりょ、ニュース特集とか言ってもう終わり？」

まいてるんです。

「久々に聞いた気がするね、その言葉」

「僕としては周りのやつらの頭のネジをまいてほしいところだが」

お次は脅迫状のコーナー！

「……僕、無視ばっかされてる。ちょっと寂しい」

こちらも沢山いただいていますが、今回特に心に残ったのはこれ！

『脅迫状：ルシカ先生、無理をしないで休養をとりなさい！　そしてこれからももっと楽しい話を書き続けなさい！　もしそれが出来ないなら、ずっとカカ天ワールドを広げ続ける事を誓いなさい！』

こちらはＫＥＮＮさんからいただきました。

「脅迫っていうか、普通に応援文じゃないか」

ええ、ほんとに。それがもー私ゃ嬉しゅーてならんのですよ。

「んで、休養はとるのん？」

むぅ。ぶっちゃけた話、そろそろ少しくらい休憩してもいいんじゃないかなーと思ってたり。

「あれま、こんだけ長く続けてきたのに」

「ここまで来たら二年目突入までぶっ通してみればいいと思うけどな」

私もできればそうします。ただ、リアルのほうのお仕事が去年と比べてシャレにならないくらい忙しくなってきましたので……こいつぁヤベェと感じたら休むかもしれません。

「でも休むって言ってもいい区切りなくない？　６５０話は今日で過ぎるし」

ちょっと考えてるのは６６６話で休んで、クリスマス話から開始、みたいな。

「コメントしづらいぞ」

「コメントしづらいね」

だって６７５話で休むとなったらクリスマスになっちゃうでしょう！　だったらここしか区切りないじゃん！

「はい、というわけで。作者は死ぬ気で続けるということに決定だね」

「だな」

……やれるだけはやるけどさー。

「んじゃ読者さんに聞いてみよっか。続けて書いてほしいと思う人はそんな感じの感想書いてー」

「そろそろちょっと休んでもいいんじゃ？　と思う人はそんな感じのをよろしくな」

ちょっと怖いな、どんな返事がくるのか。

「でも正直、僕思うんだけど、作者の性格的に……どっちの返事であれ感想いっぱい来たら頑張ってしまう気がする」

私も実はそんな気もする。なんだかんだでやってきたしね。

「いんじゃない？　とりあえずノリで聞いてみれば。んで後々のことはその返事を見たときのノリで判断するってことで」

じゃ、そんな感じで。ＣＭ！

どなたか私のペットを引き取って頂けませんか？

もう私にはこの子を養っていく自信がありません……。

白い体……。

たくましい四肢……。

面長な顔立ち……。

猫の総理大臣とよく遊んでます。

官房長官とも仲がいいです。

好物は紙。

特に野口英生とか樋口一葉とかの絵が書いてあると喜びます。その中でも一番のお気に入りは福沢諭吉の書いてある紙です！

そう……山羊です！

名前は、『財政破綻』です！！

コイツが好物を食べるせいで家はもう言葉通りに財政破綻寸前です！

それに山羊のくせに僕より力があります！　躾られません！！

どなたか経済力のある方コイツを引き取って下さい！　お願いします！！

今なら妹山羊の『経営困難』もお付け致します！

誰か助けて！！

ＣＭがあけて。今のはカカラジネーム『トシ』さんからいただきました。

「採用決定だな」

「採用決定だね」

よくおわかりで。多分しばらくしたらいつの間にかカカ天牧場に

参入していることでしょう。

「牧場ってもちろんあそこだよね」

そうそう、あそこね。

「私も混ざろっかな」

「いいんじゃないか？　香加なら立派な珍獣仲間になれるさ」

「むきぃー！」

「お、それ鳴き声か。似合ってる似合ってる」

はい、じゃれ合ってる二人は置いといてコーナーのおさらい。

普通の質問受け付けます。ふつおたコーナー。

なんでも思いついたらどうぞ、自由枠コーナー。

どんな宣伝でも面白ければＯＫ！　ＣＭコーナー。

ファンキーな脅迫状待ってます、脅迫状コーナー。

もしもな寸劇、見てみませんか？　もしもコーナー。

そして、作者は休みをもらうべきか否か？　あなたはどう思うコーナー。

たくさんのお便り、待ってます。

「そしてまた返信が遅れるわけだね」

む、遅れたとしても全部ちゃんと見るし返信するからいいんだよ！

「感想欄だけは、ね」

……はい、せめてそこだけはちゃんと返します。

「よろしい。さて、もうエンディングだけどどうする？　いまだに落ちないでゅみゅみゅみゅう率の話でもする？」

「や、なんかすでに結構頑張っちゃったらしいからさ。そろそろ終わったほうがいいかと思うんだ」

私も留に賛成なんだ。

「む、じゃーチョップか」

世界の風邪っぴきたちのウイルスヘカカラジチョップ！！

「あれま、なんともお優しい」

「ポイント稼ぎか、黒いね」

や、違う。単に私自身の風邪にどっかいってほしいだけ。

「黒いんじゃなくて自分勝手だったか」

「では、そんな作者は放っておいてでゅみゅみゅ――だから違うっ

ての！　なんでこの言葉使いそうになるんだろ……カカばい！！」

「理由は感想欄を見てる人ならなんとなくわかるんだろうなぁ……」

この番組は、『ＣＭという試食会』　と『一般人の皆様』と『ニュースとか』の提供でお送りしました。

## カカの天下６５０「第二十二回、カカラジ！」（後書き）

間に合ったー！
とか言いつつヤバイです、もう出ないと遅刻ですよあっはっは笑
最初のＣＭのお料理について。なんであのような料理なのか、わかる人にはわかります、よね？

さて、だーっと書きましたが楽しんでいただけましたでしょうか？
忙しいとか言いつつ感想たっぷり待ってます。全部消化してみせるから遠慮せずに来いやー！！
はい、調子に乗りました。スイマセン。

# カカの天下651「つい」

こんにちは、皆様。初めまして。

私、しがない時の旅人でございます。とはいえ面白いことを見つけると、ついつい旅を中断して覗いてしまうのですが……いやはや、このカカさんたちのドタバタは実に愉快ですね。そんなドタバタを語るのも楽しいかと思うのですが、皆様はすでに色々なネタ、もといお話を知っているご様子。私の口から改めて語る必要もないでしょう。

そんなわけで、今回はちょっとしたテーマに基づいて彼女たちを紹介してみましょうか。

ふむ、私も前述しました『つい』というテーマはどうでしょう？異論はないようですね。それでは……

カカさんの場合。

「カカ」

「なに、トメ兄」

「今日は何もしないのか？」

「……なんで」

「や、カカといえば変なことするもんだと思って、つい」

失礼、トメの場合でした。

こほん、改めてカカさんの場合。

「……」

自室に寝転がったカカさんは、読んでいる漫画をぺらりとめくります。

「……」

ぺらり。

「……」

ぺらり。

って何もしないんですか！？

す、すいません。カカさんなら適当に見てれば何か変なことしてくれるものと思って、つい……他の人にいきましょう！

次はサエさんとサユカさんの場合。

「サエすけ、まだかな……わ。あの服、格好いい」

商店街でサエさんと待ち合わせしている最中、とある服屋さんを前に足を止めたサユカさん。

「トメさんに似合いそう……よーし。すいませーん！　店員さん、あの服見せてもらっていいですかっ」

「八千円です」

「嘘でしょっ！　見るだけで！？」

「店員であるわたくしの言うことに間違いなどありません」

「がーん！」

見るだけでそんなにかかるなんて……！　どうしようっ！

「どうしたのーサユカちゃん」

「サエすけっ！？　いいところに来たわ、あのね、実はかくかくしかじかで」

「なるほどー。まかせて」

「どうするのよ」

「ちょっと粘ってみてー」

「わ、わかったわ。すいませーん！」

「はいはい、なんでしょうか」

「あの服見せてもらっていいですかっ」

「八千円です」

「あ、あの、ちょっと見て触るだけなのでっ」

「では五千円です」

「見るだけっ！」

「三千円です」

「ちらっとっ！」

「二千円です」

「隣の服のお値段はー？」

「千円です――ああ！？」

「わーい、じゃあお会計お願いしますねー。値札が四桁ですけど気のせいですよねー。店員さんの言うことは間違いないですしー」

「す、すいませんすいません！　わたくしの負けです！　ですからどうかお許しを！　どの服も好きなだけ見ていってもらっていいですから！」

「さっすがサエすけっ！　よーし、この際だからいろんな服を見まくって、一番のクリスマスプレゼントを考えてやるわっ！　あ、作

るのもいいかも、手芸部だしっ！」

ついついトメのことばかり考えてしまうサユカさん。

「ああいうノリを見ると言い負かしたくなるんだよねー」

ついつい腹黒さで勝負してしまうサエさん。

「からかいやすそうなお客を見ると、どうしても調子にのってしまうんですよねぇ」

ついついふざけてしまう商店街の店員さん。

以上の三本を続けてお送りしました。

さて、お次は……

サカイさんの場合。

「はぁー、早く帰りたいわー」

机に座り、手を動かしながらも、ため息をつきながら呟いています。

「疲れたー」

キーボードをカタカタカタ。

「帰りたいー」

仕事をカタカタカタ。

「ねーお母さん。もう家に帰ってるんだけど、さらにどこに帰るのー？」

「は、そういえばそうだったー！　仕事してると、つい」

最近は家にまで仕事を持ち込むマジメなサカイさん。でも根っこの部分はあまり変わらないようです。

それでは最後といきましょうか。

「シューー、お醤油とって」

「はい、すみません。どうぞ」

カツコさんより立場が低い男、シューさん。

「だー」

「はい、すみませんタマ様失礼します、いろいろこぼしてますよ！」

タマさんより立場が低い男、シューさん。

「ねぇシューー。なんであんたっていつも謝ってんの？」

「相手の立場が上ですと、つい……」

「ふーん。む、テレビがいいとこだ。シュー、お醤油いれて」

「はい、すいません失礼します。どうぞ……はい、お醤油すいません！」

お醤油より立場が低い男、シューさん。

「めーぼし」

「はい、梅干ですね。すみません失礼しますタマ様……はい、梅干すいません」

梅干より立場が低い男、シューさん。

「あ、この料理冷めたからさ、レンジでチンしといて」

「あ、はい。すみません」

シューさんはぺこぺこ頭を下げながら、電子レンジの扉を開けました。

「失礼しまーす」

とにかく立場と腰が低い男、シューさんでした！！

いかがだったでしょうか？

それでは本日の紹介は以上です、時の旅人がお送りしました。

「パパ君、さっきから何やってるの？」

「おお、我が妻ではないか。いやな？　どんなことであれ、いつも通りだとつまらんではないか。だからついつい趣向を変えてやってしまったよ。わっはっは」

時の旅人など、おるわけないではないか。騙されたか？　ついつい騙されてしまったか？　恨みを込めてトメだけ呼び捨てにしているのに気づかなかったか？　ふはは！　ざまぁみろ！

「パパ君ってほんと、憎まれ役しかしないよねー」

「……忍者のサガか、ついな」

「仕方ないなぁ、わたしだけは好きでいてあげよう♪」

「おまえ！！」

「あなた！！」

ひらり。

「ぐほぁっ！？」

抱き合うかと思いきや、俺の身体は見事に避けられ、地面に叩きつけられた！？

「な、なぜ……」

「ごめんパパ君。つい♪」

さ、さすがは人気女優……自身のガードは鉄壁だ……がく。

## カカの天下６５１「つい」（後書き）

や、昨日からなんだか心温まるメッセージをいっぱいもらって感無量中です笑
お休みの件に関してはもう少し考えてみるつもりです。とりあえず今は頑張れそうなので＾＾
ホントに皆様にはたくさんの元気をいただいて……

とか言いつつ読者様を微妙に騙すかのようなこの内容。ムカついた人いたらすいません笑
恩を仇で返すつもりも悪気もないのです、ただ、詰め合わせ的な気持ちで書いてたらなぜかこの父がでしゃばってきまして……苦笑も苦情もトメ父へどうぞ。

ちなみに。
シュー君のあれ……実際にやった人が（以下略

# カカの天下６５２「お母さんぱわー」

「こほ」

こほにちは、サこほですー。

じゃなくて、こほ。サエです。朝になって今起きたところです。

「んむー、これはやっぱり、こほ」

最近流行りのあれかな。

「サーエー♪」

上機嫌な声と共に現れたお母さん。

「おっはよー。今日の朝ご飯はねー」

手にはお盆とその朝食。

「おはようお母さん。風邪ひいちゃった」

それが落ちた。

けたたましい音と共に割れる朝食グッズ。

「……！」

「あの、お母さん？」

「きゅうううううー！！」

え、壊れた？　と思ったらものすごい速度で私に駆け寄るお母さん。

「きゅうううううー！」

そして目にも留まらぬ速さで私の額と喉を触って熱とか確認した後、

「しゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁー！！」

即行で電話しに行こうとしたお母さんの服の裾をつまむ。

「ぶげら！」

あ、そのせいですっ転んだ。でも止まってよかった。

「きゅーきゅーしゃー！　なんてオーバーだよ、お母さん」

「い、一刻も早く１１０番に」

「私なにしたの」

それ警察だし。まだバレるようなことはしてないはずだよ？

「救急車でも消防車でも警察でも国会でも呼ぶのー！　サエをたすけてー！！」

「きゃー、お母さんをある意味たすけてー」

ちょっと面白くなって笑いながらノッてみる。すると、

「にゃ」

「にゃ」

「おまえらじゃないのよー！！」

そりゃないよお母さん。国会とか言うからわざわざ来てくれたんだよ？　総理大臣と官房長官。

「とにかく落ち着いて。ただの風邪だから」

「根拠は？」

「え」

えーっと……

「こほ」

「きゅうううきゅうううしゃぁぁぁぁぁ！！」

「だから待ってって」

「ぶべらっ！？」

あ、また転んだ。

「そんなにひどくないってばー」

「わ、私の鼻は床と激しくキスしすぎて、ひどい痛みがあるんだけどー……本当に大丈夫？」

「うん」

「むー、それなら呼ぶのはやめるけど……風邪かー、カカちゃんのが移ったかしらー？」

「かも。お見舞いに行ったりしたからねー。そのとき一緒にプリン食べたんだけど、カカちゃんが『サエちゃんの美味しそう、一口ちょうだい』って交換したりしたから、そのせいかも」

「それよ！」

「こほ。やっぱそれかー」

「今からしましょー！」

「なんでさー」

「羨ましいから！」

……お母さん、お母さん、私を愛してくれるのは嬉しいけど、風邪まで一緒にひくことないと思うよ？

「とにかくサエ、今日の学校はお休みねー。お母さんも会社休むから」

「え、いいよーそこまでしなくても」

「大丈夫大丈夫、私は三日分くらい前倒しで仕事してるから。一日くらい休んだってへっちゃらぽんですよー」

さすが私の自慢のマジメお母さん。

「とりあえず、消化のいい朝ご飯を食べた後にお薬ねー。あとは部屋を衛生的に……」

お母さんの目が部屋の入り口に止まった。

そこには私を心配そうに見つめてくれる、猫、犬、豚、牛。

「不衛生な獣は出てけー！！」

お母さんの剣幕に、にゃわんでゅみゅぶもー！　とそれぞれの鳴き声をユニゾンさせながら逃げ去っていくアニマルズ。なんか変な鳴き声混じったの気のせい？

「もしかしてあの子たちがいるせいでサエが体調を……だとしたら今日の夕飯はとってもお肉なパーティーね」

「こほ。そんなこと言わないでよー。せっかく心配して見にきてくれたのに。それにあの子たち、不衛生なんかじゃないよー。ちゃんと一日三回は身体洗ってるし、外から帰ってくるときもちゃんと足を洗ってるし」

「そ、それもそうねー。だからこそ家の中まで出入り自由にしてる

んだし……こないだ日本経済がドアノブを回して開けてるのを見て、思わずビデオに撮りそうになったわよー。投稿したらテレビに出そうなくらい異様に賢くない？　あの子たち」

なにせクララちゃんに翻訳してもらって躾けたからねー。

「どうせ個室がいくつか余ってるし、あげようかしらー」

「あ、それはちょっと」

「あはは、さすがにそれはやりすぎよねー。でも動物小屋は必要だし、この際いろいろと改装しようかしらー。お養父さんのお金で」

改装かー、それいいねー。人のお金ってところが特にいいねー。

「おっと、そんな計画は後で練るとして、まずは学校に電話ね……えーと――あ、もしもしテンカちゃん？　今日うちの子を休ませるね、ばいばい――っと、これでよし」

わー軽い。先生から見てすっごい嫌な親みたいだー。

「待っててね、サエ。いまおじや作るから！　トメさんが」

「お母さんのじゃないのー？」

「私、作り方わかんない」

「お母さんのがいいなー」

「よしきた」

えへへ、こういうときくらい素直に甘えないとねー。

お母さんの看病。久しぶりだもんねー。

「できたわよー」

お母さんの、手作りのご飯。

いただきます。

「適当に作ってみたんだけど」

美味しかった。

温かかった。

風邪が悪化した。

## カカの天下６５２「お母さんぱわー」（後書き）

強すぎるお母さんぱわーは毒になります。服用の際は充分に注意しましょう。

さて、私の風邪を移すためにサエちゃんにひいてもらいました。
最近かわゆいのが続いてたので、今回はコメディちっくに。
カカ天アニマルズに関しては色々コメディ補正がかかってるのでノーコメントで。
それにしても便利だコメディ補正。

# カカの天下６５３「風邪はこうすれば治るらしい」

こんにちは、カカです。ぶすっ！

別に何かブスッと刺したわけじゃないですよ。あなたをブスとか罵ってるわけでもないですよ。

私の顔がぶすっとしてるんです！

「ぶすっ！」

「んだとコラァ！！」

「あーちがちが、テンカ先生のこと言ったんじゃなくて」

「ホントかよ」

「当然！　テンカ先生って美人だもん」

「ならよし」

それ以上に男前だけど。

「んで、何をそんなにぶすっとした顔してたんだ」

「……わかってたんじゃん」

「ったりめぇだろが。大人なめんな」

大人に見えません。

「ま、大方サエもサユカも休みでつまらねぇから不機嫌なんだろ？」

「むぅ」

悔しいがその通りだ。　二人とも風邪でお休み、せっかく全快して学校来たのにつまんない。

「いま風邪、流行ってるしなぁ」

「テンカ先生は大丈夫なんですか？」

「おう、オレは滅多にひかえねぇぞ。年に一回ひくかどうかだな」

「バカだからか」

「てめぇにだけは言われたくねぇっての」

「私はバカじゃない！　変なんだ！」

「開き直りやがった」

最近思うんだよね。こう言うのが正解だって。

「しかしこの会話、前もしなかったか？」

「そんな気がする」

喉を鍛えるとか言ってたよね、たしか。あれから私もうがいする

ようになったんだよね。それでもひいたけど。

「トメとか姐さんは大丈夫なのか」

「うん、私の周りの大人もあんまりひかない。トメ兄はたまに体調悪くするけど、自己管理がどうとか言ってちまちま細かいことやるからすぐ治るし、お姉はウイルスも栄養にしそうだし。あと、お母さんも健康だね」

「あー、結乃……というかユイナさんか。新しいドラマ決まったんだよな」

「うん、それで大忙し。よく知ってるね」

「まぁな、有名だし」

でもテンカ先生って結構お母さん好きだよね、多分。夏休みのとき、帰ってきたら呼べって言ってたし。

呼んでないけど。忘れてたから。

「ともかくだ、今は我慢しろ。学校終わったら見舞いにいけばいいじゃねぇか」

「そだけどさー」

「つまんねぇなら、他に遊び相手見つけな。じゃーな、オレは仕事あっから」

ひらひら手を振りながら去っていくテンカ先生。遊び相手ってい

ってもなぁ……お。

「カカ君！」

いきなり話しかけてきた一人の男子。

「なに、えっと……」

こいつは、たしか、そう、そうだ！

「マケダ！！」

「あぁ、確かに負けだ。俺の負けだ！！　ちくしょー！」

あれ、違ったっけ。

「んで、何か用？　マケダ君」

「そのまま話を進めるのだな……ええい、この際それは些細な問題だ！　あ、あのだな、学校が終わったらサエ君たちのお見舞いに行くのだろう？」

「そのつもりだけど」

「お、俺も一緒に行っていいか！？」

ほう。私はこの人を知らないけどサエちゃんたちの知り合いなのかな。ならいっか。

うん、いい。

とてもいい。

「じゃ一緒にいこっか」

「おおお！？　ほんとか！！」

「うん。じゃ放課後よろしくね、マケダ君」

「ち、ちょっと待て！　その、なんだ、君は現在、遊び相手がいないのだろう？　だったら試しに、今から俺と」

「それはいいや」

――イチョウさんやアヤちゃんを適当に捕まえて遊んだり、サユカンとちょっと電話したりして過ごし、放課後。

私とマケダ君はサエちゃんの家へとたどり着いた。それまでの間、マケダ君がしきりに話しかけてきたけど適当に流し続けていたので、ちょっと疲れた。

「あ、いらっしゃ――え！？」

「どしたのサエちゃん、そんな驚いて」

「え、だって、カカちゃんと、ええ！？」

「はっはっは！　サエ君、実は一緒に来たのだよ！」

「げほげほげほげほ！！」

「なぜ咳き込む！？」

「だ、だって――げほ？」

咳き込んだサエちゃんの口をハンカチで押さえる。

「げほ、カカちゃん、ありがと？」

サエちゃんはなぜそんなことをするのかわからない様子。

それはね？

「サエちゃんの風邪の菌げっと」

「む？」

「これを」

「むもが！？」

マケダの口へと突っ込む！！

「ふがが、まみほふふ！？」

「おとなしくしろ！！　サエちゃんの風邪をマケダに移して治すんだ！！」

「ぷはっ！？　そのために連れてきたのふぁふほ！？」

「カカちゃん、ありがとうー！」

「ぷはっ！　さっきと違って心からお礼を言っているなぁサエくむもが！」

「おとなしくしろタケダ！　じゃなかったマケダ」

「ぷぁ、知っててやってたのかね君は！？」

そんな大騒ぎの後。

そろそろ移ったかなーと私が手を離したところで、

「でも私とタケダ君、ちょっと間接キスみたいになっちゃったねー」

この一言により、

「うぅ……くらくら、す、る？」

くらくらだけでなく、ボコボコにして帰すことになったのは言うまでもない。

おまけ。

家で寝込んでいるサユカちゃんは、学校が昼休みな時間を見計らってカカへと電話をかけました。

『――もしもし、サユカン？』

「あ、もしもしカカすけ……ごほっ」

『どしたの、何か用？』

「そ、その……用は特に、ないなんだけどっ」

『なんだ、つまんない』

「え、ちょ」

『ブツッ！　ツー、ツー』

「なによぅ……ちょっとくらい話相手になってよぅ……身体辛いし、一人じゃ寂しいのよぅ……」

『ツー、っていう口まね』

「ちょっ！？　おまっ！！」

『にやり』

「この……！　元気になったら殴ってやるわっ！」

『はいはい、さっさと元気になってね』

「望むところよっ！」

皆さん、お大事に。

## カカの天下６５３「風邪はこうすれば治るらしい」（後書き）

周りの大人、という欄に父親の話が微塵ものぼらないこの悲しさ……

さて、風邪の話はこれでひと段落といたしましょう。あまり長引くと縁起が悪いので。

私の風邪も無事に完治いたしました。

私、身体が弱っても胃袋だけは強いので。にんにくたっぷりラーメンをがーっと食べて栄養ドリンク飲んで、薬飲んで水飲んで、がーっと寝たらすっかり元気になりました。んむ、我ながらたくましい。

ご心配してくださった皆様、本当にありがとうございます！

皆さんも体調悪いときは無理してでも食べましょうねー。もちろん吐かない程度で。ウイダーインゼリーとかオススメです＾＾

## カカの天下６５４「熱燗を飲みながら」

こんばんは、トメです。ということで――

『乾杯！！』

年末に入ったせいか週末は居酒屋が騒がしく、ゆっくり飲むことができない。そんなわけで平日の夜にも関わらず、テンと二人で飽きずに『病院』で飲んでます。

「んぐっ！　やっぱ一杯目はビールだぜ！」

「しかし寒い今の時期は熱燗もうまい！」

「おう、わかってるじゃねぇかトメ！　二杯くらい飲んだらそっちにいこうぜ」

「この『アンコウの内臓ポン酢』って、あん肝ポン酢のことだよな」

「相変わらず嫌な名前を好む店だな……が、あん肝は素晴らしい。日本酒にいくとき頼もうぜ」

「おお、これって白子の天ぷらだよな！　冬は熱燗に合うメニューが増えて嬉しいねぇ」

「なぁ、『白い臓器』って品名だけでよくわかったなトメ。白子はともかく本当に天ぷらか、これ？」

「揚げ物の欄にあるだろ」

「トメ、この店に馴染んだなぁ」

最初は食べ物の話で盛り上がり……やがて、ビールから日本酒へ移るように、世間話へと移行していく。

「そういやもうすぐクリスマスだよな。てめぇら、また何か考えてんのか？」

「や、それがな。カカたちに言われてるんだよ、何も考えるなって」

「何も考えるな？　なんだそりゃ、変な言い分だな」

そうなんだよなぁ。料理とかは後でお願いするかも、とか言われただけで、他は余計なことをするなって釘刺されてるんだ。

「何を企んでんだか……トメ、心当たりねぇのか？」

「そういえば」

「あんのか」

「クリスマスに関係するかはわからないけどさ、一昨日の夜かな？　トイレいくときにカカの部屋が空いてるのが見えてさ、早く寝ろーと注意するつもりで覗いてみたら」

「覗きで警察に捕まったのか」

「だったら今ここにいる僕はなんなんだ」

「脱獄犯め！　金払え！」

「奢ってもらいたいだけだろおまえは」

「ねぇーん、とめぇーん、はらってぇーん」

「キモいキモいキモい！！　しな垂れかかるな！　さりげなくポケットから財布盗もうとするな！」

「けけけ、酔っ払いって楽しいよな」

ああそうだな、誰でもたまにキャラ壊れるもんな。

「まま、一杯……んで、覗いたらどしたって？」

「っとと、サンキュ。いやな？　なんか、すごい機械っぽい音で『ツー、ツー、ツー』って言う練習してたんだよ」

「あー」

「クリスマスに関係あると思うか？」

「ねぇな」

「ハッキリ言うなぁ」

「んぐ、ぷは……昨日の昼休みに小ネタとして使ってたから、それはない」

そうかぁ……

「あと、最近。僕のパンツがやたらとなくなるんだが」

「知らねぇよ」

「知ってたら怖いよ。でもな、なくなる日には共通点があるんだ」

「どんな」

「パンツが紛失するのは、必ず父さんと会った日なんだよなぁ」

「……おい、いま酒がまずくなる想像しちまっただろが」

「悪い。偶然だとは思うんだが。まさかあのバカが……でもバカだしなぁ」

何をするかわかんないんだよなぁ。

「なぁトメ。おまえって父親のことを喋るときはいつも悪口だよな」

「おまえだってそうだろ」

「ああ、オレも父親嫌いだからな。でもな、このままじゃダメだと思ってんだよ」

……ふむ。

「偉大な父は世界にごまんといる。だから父＝ダメ人間、という公式にはならないはずなんだ」

確かに、そう決め付けるのはよくないけど。

「というわけでトメ。ちょっと父を称える言葉をさがしてみようぜ」

「言葉をさがすって――ああ、携帯で検索してみるのか」

どうせ目的のない飲み会だ、やることが決まったらやるしかない。

どれどれ……

「お、なぁトメ。これなんかどうだ？　ことわざなんだが、『父の恩は山より高く母の徳は海より深し』だってよ」

「母はともかく、父に恩なんてあったかな……」

「ならこれはどうだ。『子供の楽しみに対する敵はいつでも父か教師である』だとさ。永井荷風さんのお言葉だ。教師としては見逃せねぇな、その通りとも思うし」

カカにとって父は敵だろうけど、この言葉の意味を考えると……父親役は僕、ってことになるのかなぁ。でも僕はよく一緒に楽しんでるし、敵でもないよな？

「あー、『一人の父は、百人の校長に勝る』とはサミュエル・ジョンソンさんの言葉だ。かっけぇ名前の人だな」

「誰かわからん」

そして一瞬、あの校長先生が百人そろって『おほほ』と合唱している姿が浮かんだ。こえぇ。

「む、『子どもは大人の父である』って深い言葉だな。ワーグナーって人、なんか聞いたことあるような」

あいにくと学業から離れて久しいもんでな、僕も知らない。学者さんだったかな？

「しかし、なるほど。テンの言う通り、世界には偉大な父がたくさんいるわけだ」

酔っ払いでもたまには建設的な会話ができるもんなんだな。うちの父も少しは見直せるように、いいところでも見つけてみるか……

「でもな、このままじゃダメだと思うんだ」

「は？」

なぜここで先ほどのセリフを繰り返す？

「この『父』という言葉を『乳』に変えてみろ！」

乳……だと？

『乳の恩は山より高く母の徳は海より深し』

とっても胸がおっきいお母さんが浮かんだ。

『子供の楽しみに対する敵はいつでも乳か教師である』

乳つえぇ！

『一人の乳は、百人の校長に勝る』

乳こえぇ！！

『子どもは大人の乳である』

わけわかんねぇ！！

「ところでトメはどんくらいの乳が好きだ？」

「なんでそんなに話が飛ぶ！！　父はどこいった！？」

「あん？　乳なら一応ここにあるぞ、揉むか？」

「揉むわけあるか！！」

「けけけ。ま、一杯つげ」

「……はいはい」

「一回揉め」

「ええかげんにせい」

「じゃーオレが揉む」

「ええかげんにせい！！」

結論。

酔っ払いって、やっぱ酔っ払いだよね。

楽しいのはいいんだけどな……言っとくが、揉んでないからな。

## カカの天下６５４「熱燗を飲みながら」（後書き）

テンカ先生の出番が少ないとの苦情がきたのでここらで一発飲み話をポン。

ツッコミどころ色々あるかもですがノーコメント。

今後をお楽しみに＾＾

# カカの天下６５５「休載、じゃなくて救済企画」

「ねぇねぇカカちゃんたち、ちょっと相談があるんだけど」

「なにさお姉」

ちっす、カカでっす。

学校も終わり、風邪が治ったサエちゃんとサユカンと一緒に我が家でだらだら遊んでいたところ、唐突にお姉がやってきました。

「実はこいつのことなのよ！」

「こいつって誰ですかー？」

「誰もいないじゃないっ！」

「あ、あの……僕……」

「わ、いたの！？」

「誰だっけー」

「こら、失礼なこと言わないの。シェーさんでしょっ」

ああ！　あの有名なポーズ！

「うぅ……シューです」

知ってるけどね。

「で、お姉？　そのとてつもなく目立たなくて影の薄いシューがどしたの？」

「そこ！　そこなのよ！　こいつってさ、おもしろくないじゃん？」

「うん、私とは大違いだ」

「ほんとほんとー、どうしようもないよねー」

「お、おもしろいってそこまで重要な要素だったのっ！？　わ、わたし大丈夫かしら」

めっちゃ大丈夫。

「そんでさ、そろそろ影が薄くなりすぎて消滅しそうだから、カカちゃんたちの手でおもしろくしてやれないかなと思ってさ！」

相変わらずひどい言い草だなぁ。

「シュー、あんなこと言われてるけどいいの？」

「なんてお優しいお姉様！！」

いいんだ。しかもウェルカムなんだ。

「えっとー、シューさんが目立つようにすればいいんですよねー」

「そそ。こいつってばいっつもあたしの小間使いだからさ、全然目

立たなくて……まずそこね！」

「あの……っ」

おそるおそる手をあげるサユカン。

「その小間使いをやめればいいのではっ」

「なんで？」

「え、な、なんでって」

素で聞き返すお姉。

「僕に死ねと仰るのですか！？」

「え、ええっ！？」

なぜか怒り出すシュー。

「わ、わたし悪いこと言ったのっ？　もっともなこと言わなかったっ！？」

混乱するサユカン。可哀想に、まだこの二人のことがわかってないんだね。

この二人はね、わけわからないんだよ。そこをわかってあげないと。

「あ、こういうのはどうでしょー。ただこき使うからみすぼらしく

見えるんですよ、だから偉そうなあだ名をつけてあげればー」

さっすがサエちゃん！　冴えてる！

「どんなのがいいかな。格好いい部下みたいなのがいいよね」

「格好いい部下ね……諜報員とかどうかしらっ！」

お、サユカン。さすが私たちと付き合いが長いだけあって復活早いね。

「いんじゃないかな。お姉、それやってみなよ」

「おっけ！　おい、そこの諜報員！」

「はっ！」

シュー君も結構やる気な返事だ。

「なんなりとお申し付けください！」

「それとって」

「はっ！　どうぞ！」

「おい諜報員！」

「ははっ！」

「お茶煎れて」

「喜んで！！」

「こら諜報員！！」

「はいっ！！」

「呼んでみただけ」

「ありがたき幸せ！！」

「どうよ」

やってることはいつもと変わらないけど、インパクトできたし、なにより、

「ちょっと面白かった」

「何も諜報してないけどねー」

「でもお姉さんにとっては重宝してるわよ？」

「おお、サユカちゃんうまい！！　お姉さん座布団一枚あげちゃおう！」

これで終わり？　それだとつまらないなぁ。

「他に何かない？」

「私、もう一個提案があるのー」

「おお、サエちゃん今日は積極的だね。なになに？」

「風邪のときにベッドで読んでた漫画で思いついて、作ってみたんだけどねー。これ」

そう言ってサエちゃんが取り出したのは一冊のノート。

その表紙には、『カカノート』と書かれていた。

「これに名前を書かれた人はね、カカちゃんと同じ行動をしなきゃならないの」

私たちの視線が一人の男に注がれたのは言うまでもない。

そして、近所のセイジ食堂にて。

まずは私がやってみた。

セイジのおっちゃんは笑っていた。

「はっはっは！　嬢ちゃんは今日も元気だな！！」

続きまして。

カカノートに名前を書かれたシュー君が、いま私がやったのと同じ行動をします。

さぁどうぞ。

「……」

まずは静かに店に入る。

「おぅ、いらっしゃい。好きな席に座んな」

そして。

「わき毛ボーン！！」

「は？」

「みみ毛ボーン！！」

「……おぃ」

「すね毛ボンバー！！」

「……」

「まつ毛ビーム！！」

「もしもし警察か？　緊急事態だ、今すぐ来てくれ」

「ちょ、ちょっとぉぉぉぉ！　なんでカカちゃんならあっさり流したくせに僕だとそんなご無体な！！」

よし。

「おもしろかった」

「おもしろかったねー」

「おもしろかったわっ！」

「あたしゃ大満足だよ、ありがとうカカちゃんたち！　じゃ帰ろうか」

『うん』

「ちょっと皆さぁぁん！　僕をおもしろくするんじゃなかったんですか！？　いつの間に『おもしろかったー』って単なる暇つぶしに変わってたんですか！！　それってあんまりじゃないですかぁぁぁぁ！！」

いつものことじゃん。

## カカの天下６５５「休載、じゃなくて救済企画」（後書き）

すごい！　シュー君がこんなにいっぱい喋ってる！
もうこれは素晴らしい救済になったのではないでしょうか！！
じゃ、しばらく出番なくていいよね。うん。

あと昨日書き忘れたなーと思ってたことが一つ。

素晴らしい言葉を残していただいた先達の皆様、ごめんなさい！！
酔っ払いはそういうネタが大好物なんです……
どうかお許しを。

# カカの天下６５６「クリスマスのその日、あなたは！」

どうも、トメです。

牛丼的な夕飯も終え、一月からスタートする母さん主演のドラマＣＭをぼーっと眺めながらコタツにＩＮして座っている今日このごろです。

「トメ兄」

「はいよー」

「これやってみて」

差し出されたのはカカの携帯。寝転がって何をちまちまやってるかと思えば……なになに？　画面を見ると、『クリスマス版ＫＹ占い』との文字が。

「これってあれか？　いつぞや占いと言いつつ全く占わず、妙に恐怖心を残したまま高らかに笑って去っていったあの嫌味なやつか？」

「プログラムをそこまで擬人化できるのもすごいね」

むしろ単純にそのプログラム自体がすごい。だって僕らで遊んでたし。楽しんでたし。

「まま、私は過去は気にしない女だから」

「僕、男なんだけど」

「そんなことは聞いてない。いいからやれ」

……なんだよぅ。冷たくすんなよぅ。寒い上に冷たいなんて嫌な季節だよぅ冬はよぅ。

「えっと？　生年月日と本名を入力……これだけでいいんだよな？」

『うん』

「携帯に『うん』って返事が出た！？　相変わらず怖いなこのシリーズ！」

「いい加減に慣れなよトメ兄」

慣れてはいけない気がする……

「それで、なんて出たの？　ちなみにタケダとシューを占ってみたらね」

「なんでその二人を真っ先に占う？」

「いけにえ」

だろうと思った。

「そしたらね、タケダは『あーあ』って出て、シューは『いろいろあったけど小さな幸せよかったな』って出た」

びみょー……

「で。そんな厄介そうな占いで、トメ兄はなんて出たの？」

「くそー、カカもやれよなぁ！　えっと。『七年前のクリスマスと似たようなプレゼントをもらうでしょう』って具体的すぎるなオイ」

「七年前？　どんなんだっけ。トメ兄覚えてる？」

「七年前っていったら、僕が高校生のころ……う」

それだけでちょっと嫌な思い出があるんだけど、とりあえずそれは置いておこう。クリスマスでのプレゼントで覚えてるのといったら――

『トメにーちゃん！』

『お、どうしたカカ』

『きょーね、くりすます！』

『ん、そうだな。クリスマスだ』

『けーきたべるひ！』

『おー、そうだな。嬉しい日だ』

『にゃー！』

『にゃー』

『だからね、かかね、けーきつくったの！』

『おお、そりゃすご……い……？』

『はい！　たべて、とめにーちゃん！』

『これ……たしかに白くてケーキっぽく積み上げられてるけど、石鹸じゃないか！？』

『うん！！』

『そんな嬉しそうに返事されても』

『がんばっておりょうりしたよ！』

『そ、それは料理じゃなくて工作』

『たべて！』

『ぐ、ぐぐ……そんな笑顔で』

『たべて、くれないの？』

『そんな泣き顔で！！　く、くそぅ、石鹸を包んでた袋は！？　説明書きはどこだ！　口に入れてはいけないと書いてないなら覚悟を決める！！』

「――で、書いてなかったんだよなぁ」

目に入ったときはすぐに水で洗い流してください、とか、子供の手の届かないところに保管してください、とは書いてあったが。口に入れてはいけない、とは書いてなかった。

書いとけよ。

「そして僕は逃げられず、覚悟を決めて石鹸をバクバクと」

奥さん知ってます？　石鹸って食べても死なないんですのよ？多分モノによりますけどね、冗談抜きで口から泡吹きますけどねオホホホ。

……子供の手の届かないところに保管してなかった僕が悪いんです、ごめんなさい。

「な、なぁカカ？　クリスマスは」

「秘密」

「危なくないかとか、それだけでも教えてくれ！」

「秘密だってば」

「……せめて石鹸ケーキはやめてくれよ？」

「なにそれ」

覚えてないか。なら安心――できん。こいつのことだから忘れてるからこそ「あ、このアイデアいいかも」とか言ってまた作る可能性がある。

「とにかくクリスマスはお楽しみにね」

「不安だ……」

僕は携帯に浮かんでいる『ざまぁ』の文字を見ないようにしながら、深々とため息をつくのだった。

## カカの天下６５６「クリスマスのその日、あなたは！」（後書き）

トメ、シュー、タケダと。数少ないカカ天の男性陣の運命が決まりました。
当日、どのような感じでそんな感じになるのか。

乞うご期待！

にゃー！

あと、純正の固形石鹸とかだったら本当に食べても大丈夫らしいですね。
だからって食べるなよミーたち。

## カカの天下657「今日のカレーは黒い味」

もぐもぐアヤです！　もぐもぐは苗字じゃないわよ！

いま給食中なの。すっかりお馴染みになったメンバー、私とニッシー、インドちゃんとイチョウさんの四人で仲良く食べてるわ。ご飯にはもちろんインドちゃんのカレーね！

「……ねぇ、インドちゃん」

「は、はい？」

「もしかして、何か悩みでもある？」

びくり、と身体を震わせたのを、私は見逃さなかった。

「ど、どうして、そう思うの？」

「カレーの味が落ちてるわ」

ほらまた。ビクッとした！

「何かあったんでしょう」

なんて悲しそうな顔で俯くのかしら。

「ほら、顔をあげて」

きっと、すごく切ないことがあったのね。

「私が話を聞いてあげるから、ね？　話してみて。何があったの？」

「今日のカレー……自信作だったのに」

「普通にごめん！！」

私が原因だったの！？　そりゃ自信満々のカレーが美味しくないなんて言われたら悲しくなるわよね……うぅ、いつもと味が違うと思ったら、予想と逆だったのね……

「味が高尚すぎてアヤ坊の口に合わなかったんだよ、な？」

「失礼ねニッシー！　こう見えても私はたまにフランス料理のお店に連れてってもらってるのよ。この私の舌のどこが高尚じゃないと」

「高尚じゃなくて……ごめんね……」

「あああああ」

そんなつもりじゃなかったの！　うう、天邪鬼な自分の性格が憎い！

「せっかくニシカワさんがフォローしてくださったのに。それくらいきちんと感じ取らなければ、ラブラブカップルになどなれませんよ？」

「なるつもりなんかないわよ、そんなもの！」

「まぁ、ではラブラブバカップルに？　友達としては嬉しいやら目

ざわりやら」

「……イチョウさん、キャラ変わったわよね」

「あぅ!?　や、やはりそうでしょうか。なにやらサエ様を崇拝しているうちにブラックな面が生まれた気がしていたのです」

ブラックイチョウって感じかしら。なんだか語呂が悪いわね……

黒イチョウ。

黒い腸、嫌ね……リアル腹黒にも程があるわ。

じゃあ、黒い蝶。

なんか怖いわっ!!

「ねーねーイチョウさん。なんでサエちゃんを崇拝してんのさ。僕、その話題知らないんだけど」

む、ニッシーいいとこ気づいた。私も知らないわね。

「え、ええと……言えません!!」

「なんでよ?」

「十八禁なのです!!」

『おいおいおいおい』

思わず声を合わせてしまう私とニッシー。

「あ、今のは結構バカップルのようでしたよ、お二人とも」

「あのね」

「わたくし羨ましいですわー。あらインドちゃん、どうしたのですか？　やはり何か悩みでも？」

イチョウさん……逃げてるわね。

「あ、あの……あのね」

う、でもインドちゃんが口を開いたわ。さっきは失礼なことを言った手前、こっちを優先しないと。

「あの……タケダ君のこと」

「なるほどタケダか！」

「タケダのことね！」

「タケダさんのことだったんですね！」

私たちが脳裏に浮かんだ話題は一つだけだったわ。

『誰だっけ』

「……むぅー」

「ごめんねインドちゃん！　ほら、タケダといえばこういう扱いだから！」

「……むぅー」

「ほら、僕なんか特にあいつとは憎まれ口を叩き合う仲じゃん？　だから許してくれよー」

「……むぅー」

「ええと、インドちゃん。タケダさんって男子でしたっけ女子でしたっけ」

「……イチョウさん嫌い」

「あああごめんなさい！　わたくしもたまにはこんなお茶目をしてみたかったのです！」

最近多いよね、イチョウさんのお茶目。お茶目っていうか単なる毒舌のような気もするけど。

「よし、今度からイチョウさんが毒舌になるときは『黒い蝶、降臨！』って感じで盛り上げていこうか」

「にににニッシー！？　あんたどこまで私の心を読んでるのよ！？」

「アヤ坊の考えてることなんて大体わかるよ」

「に、ニッシー」

ちょ、ちょっとドキッとしちゃったじゃないの。

「だって大体は声に出てるから」

「うっそぉぉぉぉぉぉ！？」

ドキッどころかギクッって感じよ！　なに、そんなに声に出してた！？　き、気をつけないと我が身を滅ぼしてしまうわ！

「大丈夫、イチョウさんには聞こえてないから」

「ほっ……って、本当でしょうねニッシー」

「じゃあその証拠に。ねぇ、イチョウさん！」

「はい？　なんでしょうかニシカワ君」

「黒い蝶ってどう思う？」

直球！

きょとんとするイチョウさん。やっぱり聞こえてなかったようね。よかったぁ。

「はぁ、なにやら暴走族のような印象を受けますわね。わたくしのだいっ嫌いな」

聞こえてなくて本当によかったぁぁぁぁ！　イチョウさん怒ると怖いし！

「ねぇねぇアヤ坊」
「なによニッシー、そんな小声で」
「やっぱり『黒い蝶、西から降臨！』ってことでもいい？」
「なんでもいいわよ！！」
そんなことより大事なことがあったわ！
「インドちゃん！」
「は、はい？」
私とニッシーが取り込んでいる間、イチョウさんに慰めてもらっていたインドちゃんはまたもや身体を震わせた。ここまできたら寒いだけなんじゃないかとも思うわ。
「タケダに言いたいことが言えなくて悩んでるんでしょ？」
「う、うん」
「言いたいことを言う勇気がないと」
「……そう」
「この前、サユカに立ち向かっていったじゃない？　あの勇気はもうなくなってしまったの？」
「……！」

「あのときみたいに、私たちが見守っていてあげる。だから、ね？勇気を出して。あのときのように」

「……うん！」

「よし、じゃあ早速タケダのところへいきましょう！」

立ち上がる私たち！

ふう、うまくまとまったわ。色々あったけど終わりよければ全てよし！　これにて一件落着ね！

「た、タケダ君！」

「む？　どうしたのだねノゾミ君」

「え、えーい！」

「ぐわあああ！」

「ちょ、なんでカレーをぶん投げてんの！？」

「確かにあのときと同じだ」

「で、でも、ええと……お似合いですよ！」

黒い蝶さん、それフォローになってませんよ。

「君たち……」

カレーまみれのタケダを見て、インドちゃんは大いに嘆く。

「わ……私が殺したぁ！！」

脱兎のごとく逃げ出すインドちゃん。

終わりよければ全てよし、のはずだったんだけど。

「オチがついたからいーじゃん」

「それもそうね」

「おい、俺は……？」

『お似合いですよ』

このハモり具合、私とニッシーはやはり名コンビだと思う。

「お、お二人とも、そのようなことを仰っては失礼かと」

あんたが言うな。黒い蝶。

## カカの天下６５７「今日のカレーは黒い味」（後書き）

イチョウさんが順調に毒舌キャラ化してます。
黒い蝶といってもサエちゃんとはまた違います。あの子は腹黒いだけで口は悪くありませんから。多分。

とりあえずタケダにカレーをぶっかけてほしいとのリクエストがたくさんあったのでやってみました。
タケダカレー、どうぞ召し上がれ。

私はいらんが。

## カカの天下６５８「四者四様」

こんにちは、カカです。

今ですね、サエちゃんサユカンと三人でクリスマスの練習をしているのですが……どうにもうまくいきません。

「どうすればいいんだろうねー」

「テレビの通りにやってるのに、うまくいかないわっ！」

もう一度振り返ってみると……

「えっと。くるりんくるっと回るステップ、止まりかけておっとっと。恥ずかしそうに照れて笑って、右手で可愛く頭をコツン。気を取り直して深呼吸」

「んとー、『いくわよっ』って叫びながらスキップで進んでー、シュタッとポーズー」

「ウインクしながら、『あなたに私をプレゼント！』でいいのよねっ」

うーん、間違ってはいないはず、なんだけどなぁ。

あ、いきなりごめんね。わけわかんないよね。

私たちがやってるのはね、ＣＭでお母さんがやってる動きなの。サンタ姿のお母さんがこんな可愛いアクションした後に、指でバッ

キューンって画面から撃ってくるんだよ。やられるよね。悩殺だよね。むしろ自分をプレゼントしたくなるよね。

「何かが違うのよねっ！」

「でも違いがわからないねー」

「んー」

そして私たちはその動きを練習中。クリスマスに計画してるコトに使うためだ。

「じゃ、他の人がやってるの見てみよっか」

と、いうわけで。

「エントリーナンバー、一番。トメ兄！」

「なんだなんだなんだ？」

「いいからこれやってくださいー」

「へ？　はぁ！？　これって母さんの――おいおいマジか」

問答無用でスタート。

くるりんくるっと回るステップ――

「えっと、くるーっと」

遅い！　おりゃ！

「うえあうえ！？」

コマのようにぐるりんっと振り回し、いい感じな回転がついたトメ兄。そこで止まりかけておっとっとだ！

「とぁっとっと！」

そこでセリフ！

「い、いくわよ」

次はスキップ！　らんらんらーん、と！

「ら、らんらんらーん」

「もっと可愛く！！」

「らんらんらーん♪」

「キモ」

「おまえなぁぁぁぁ！」

「いいから続き！」

「くそぉ……シュタッ！」

ポーズを決めて、ウインクして、

「あなたに僕をプレゼント」

指でバッキューン。

ズッキュウウウウウウウウウウン！！

……はて。

いま、トメ兄の指からの発射音と同時に、ものすんごい着弾音が聞こえたような。

「ぷしゅー」

「サユカちゃんが悩殺されたー」

「あれま、ほんとだ。幸せそうな顔しちゃって……いいプレゼントもらったみたいだね」

「夢という名のプレゼントだねー」

「お、サエちゃんいいこと言った」

「……なぁ。結局、僕がここまで恥を捨てた理由は？」

「次いこか」

「そだねー」

サユカンひきずってこ。ずるずるずる。

「おい？　おまえら、おーい？」

続きまして。

「エントリーナンバー、二番。お姉」

「ほむほむ？　母さんのマネっこか、よしきた！」

本物のコマのように高速回転してビタッと止まり、「いくわ！」と軽々スキップ開始、加齢に、じゃなくて華麗にシュタッとポーズを決めて、ウインクしながらバッキューン！！

「あんたにあたしをプレゼント！！」

「いらないですー」

「ちょっとサエちゃん！？　あんまりの言葉にさすがのおねーさんもびっくりよ！！」

「あははー、つい」

気持ちはわかる。誰も家に核兵器なんか置いときたくないだろう。バッキューンどころかカッ！　チュドォオォォン！！　って感じだし。

「それにしても完璧すぎて可愛くないね」
「わたしもこれはいらないわ」
「サユカちゃんも言うねー」
「でも、私たちには無い何かがあったと思う」
「物理的な破壊力じゃー？」
確かにあの高速回転に巻き込まれたら吹っ飛ばされそうだけど。
「次いこう」

さらに続きまして。
「エントリーナンバー、三番。キリヤン」
「ふ、お任せを」

くるりんくるっと回るステップ。すらりと伸びた手足が美しい。
しかしストップにしくじり、おっとっと。「私としたことが、お恥ずかしい」と頬を染め、甘い視線で微笑んだ。
「いざ、あなたのもとへ」
囁きながらダンスのように優雅なステップ、そして忠実なる執事

のように跪き、

「私の全てはあなたのもの、どうぞお好きに」

キラーンキラリーンと無駄に輝く瞳と歯でダブルフィニッシュ！

！

「や、改造しすぎ」

「でもとてつもなく格好いいねー。ほら、周りを見て？　女性の方々の心をまとめてズッキュゥゥゥン！　って感じだよー」

「おお、さすが色男。サユカンどう思う？」

「ま、なかなか」

さすがだ。トメ兄以外は眼中にないのね。こっちのがよっぽど格好いいと思うんだけど。

「満足していただけましたか？」

「んむ、くるしゅーない」

「よかった。それでは仕事に戻らせていただきます」

すごいよね。何がすごいって、仕事中にこれをやることが。

「サインください！」

「はっはっは、お客様。そんなものよりデザートはいかがですか？」

あの人、ホントすごいよね。さて、最後に行こうか。

ラスト！

「エントリーナンバー、四番。トウジのおっちゃん」

「おい、カカの嬢ちゃん。ちょっとこいつぁ、いくらなんでも……」

「だって近くにいたから」

「いや、そりゃうちでバイト中のキリヤに会いにきたんなら、俺も当然いるだろよ」

「やってくださいっ！　見たいですっ」

「減るもんじゃないですしー」

「待て、俺の尊厳とか色々と減るものが」

「私たちのは減りませんしー」

「オイ」

「ねね、トウジのおっちゃん。ごにょごにょごにょ」

ちょっとした切り札発動。

「ぐぐぐ、仕方ねぇ、俺も男だ！」

ふ、ちょろいぜ。

「おっちゃん、お願い！」

「おうよ！」

おっちゃんが動く！

あらよっと！　とぐるりと回転。

歌舞伎のポーズで片足おっとっと、たたらを踏んで、

「いくぜぃ」

がに股でのっしのっしと歩いて止まり、ドスンとシコ踏みはっけよい！

「のこった！」

「や、そこセリフ違うから」

「おぉ悪りぃ。ついな」

「でも、すごく男らしい動きだったねー」

「だろう？　惚れたかサエ嬢ちゃん」

「私があと五十年、歳をとってればー」

「サエすけ、それ褒めてないわよね？」

ともかく。

「ありがとう皆！　おかげで私たちに足りないものがわかったよ！」

「おおー、本当なのカカちゃん！」

「なによ、わたしたちがこの動きをするにあたって、足りないものって！？」

「身長」

どうしようもねぇ。

まだまだクリスマスの準備は考える余地がありそうだ。

## カカの天下６５８「四者四様」（後書き）

カカたちは何をしようとしているのでしょうか。
謎です。

この大人たちはいい歳して何をしているのでしょうか。
とても謎です。

# カカの天下６５９「名探偵カカの事件簿３」

おはようございます、カカです。

「うおー」

今日は朝から、うおー、な展開となりました。

なにがどう、うおー、かと申しますとですね。んー……最初から説明しましょうか。

うちには一応、自転車なるものがあります。私もトメ兄も徒歩派なので滅多に使いませんが、中庭に予備が一台、すぐ使えるように玄関にもう一台置いてあります。

どちらも特に高価なわけでもない、普通のママチャリ。

そのうちの一つ、玄関に置いてあるほうの自転車の――

「カゴが盗まれた」

何を言ってるのかわからない？　そのままの意味なんだけど。自転車の前についてるカゴあるじゃん、荷物とか置くとこ。あそこの部分だけがそっくりそのまま千切られてたんだ。

「トメ兄、どう思う？」

「うおー」

いつの間にか隣に立っていたトメ兄も私と同じリアクション。そりゃそうだよねぇ、朝起きて玄関に来てみたら自転車のカゴだけが無くなってたんだ、誰だって「うおー」と言いたくなるはず。

「なんて微妙な盗み方をするやつなんだ……自転車盗難が流行ってるとは聞いてたけど、まさか一部分だけ盗むやつがいるとは」

「鍵を壊そうとした感じもないし、間違いなくカゴだけを狙った犯行だね。どしよっか？」

「そうだなぁ。カゴがなくなって不便になったものの、走れなくなったわけじゃないんだし……放っておくか」

「そだね」

次の日、今度は座席が盗まれていた。

ほら、自転車の椅子の高さって調節できるじゃん？　高くしすぎるとすっぽ抜けるじゃん。そのまますっぽ抜いて持ってかれたのだ。

「この犯人は何をしたいんだろう？　地味ないやがらせか」

「私にはわかる」

「カカ？」

「この人はズバリ、思いつきで行動している！！」

「……ああ、おまえと似たようなやつか」

否定はしない。

「ならばどうする、カカ」

「ふ、私が犯人ならもう一度ここに来る。そして今度はベル辺りを解体するはず。そして上部分だけをはずして持っていくはずだ」

「なんという名推理」

「だから私は先を読む」

私は破ったノートに『これは持って行かないでください』と書いて、ベルに貼っておいた。

次の日。

ベルは無事だった、しかし後部座席というか荷台というか、そんな感じの部分だけが取り外されて盗まれていた。

「くぅ、やるな犯人」

「どうするね、名探偵カカ君」

「ならばこうしよう」

私は破ったノートに『返してください。お願いします』と書いて、すっきりしたカゴあたりに貼っておいた。もちろんベルの『これは持って行かないでください』という紙はそのままだ。

次の日。

今度は何も盗まれなかった。しかし何が返ってきたわけでもない。

「カカ君、どう見るね」

「きっと犯人は『うは、アホだコイツ』と思い、去っていったに違いない」

「ならば犯人はもう、ここには来ないのではないか？」

「いいや、それは早計だよトメソン君」

「僕が損しそうな名前だねカカムズ」

「なんかムズがゆそうな名前だね。それはともかく、勝負はこれからだ」

「というと？」

「犯人は現場に戻ってくる。そう、次の日に来なくとも、また次の日に来るかもしれないのだよ」

私は二枚の紙が貼られた自転車に、さらに『返してよう』と『お願い♪』の紙を追加して貼った。

次の日。私は『返して！！　お願いだから返して！！』と『アレがないと、こまっちんぐ』の紙を追加した。

次の日。私はインパクトを持たせるため、全ての貼り紙に口紅でキスマークをつけてみた。もちろんトメ兄のキスマークだ。

次の日。サユカンは釣れたけど犯人は釣れない。私は『返せ』という紙を十枚追加した。

次の日。私は『本日特売』と『三万円でどっすか?』という紙を追加した。

次の日。私は隠し持っていた書かれた運動会のときのふんどしも貼ってみた。書かれている文字は『特盛り』だ。

次の日。私はでっかい紙にでかでかと『まいったか』と書いて自転車に貼り付けた。

そして次の日。自転車は元通りになっていた。座席、後部の荷台はきちんとはめられ、千切られたカゴは留め金でしっかりと固定してあった。

さらに『まいったか』の紙の隅に、ご丁寧にも『まいりました』の文字が。

「ふ、私の勝利だ」

「見事だ名探偵。ところで、犯人探しはしなくていいのか?」

紙に書かれた『まいりました』という文字の下を見る。

そこには小さく『楽しかった』と書かれていた。

「このユニークさに免じて許してやろうではないか」

「立派だ、さすが名探偵」

「えっへん」

「しかし、この貼り紙だらけの自転車を玄関に放置したせいで広がった近所のユニークな噂はどうするべきだと思う？」

「知らにゃい」

「オイ」

## カカの天下６５９「名探偵カカの事件簿３」（後書き）

突然ですが、私の自転車は一度壊されかけたせいで、カゴが取れた状態なんですよ、本来は。

それを１００円ショップで買った留め金を四箇所使い、ごまかして使ってたんですけど……

昨日、その留め金の二つが盗まれてました。

でもま、いつも後輪留めるのに使ってるロープの鍵を前に回せば使えるやー、と思ってたんですけど……

本日、残る二つも盗まれてました。

そこでスーパーしんきんぐタイム。

カゴは使い物にならない。

かといって１００円ショップでまた買うのももったいない。それでまた盗まれても地味にヤだし。ていうか地味なもん盗むなオイ。

というわけで。二度と（そいつに）盗まれないかつカゴも元通りになる天才的な方法を思いついた。

なんのことはない、そいつに返してもらうのだ。

そういうわけで『返してください。お願いします』という張り紙を自転車に貼って放置してみることにした。

こやつは二日連続で私の自転車に手を出しているのだ。こんなすっとぼけた姿になった自転車をまだ使っているのか様子を見にきてもおかしくない。

そして張り紙を見て思うはずだ。

「うはｗｗｗなんだコイツｗｗｗアホだｗｗｗｗ」

もし犯人に少しでもユニークさがあれば返してくれるはずだ。

本当に返ってきたらウケる。

そんな私の今朝の実話を元に書きました。

# カカの天下６６０「名探偵トメの事件簿」

やぁこんにちは、僕はトメ。探偵さ！

「嘘つけ」

はい、すいません。カカに怒られちゃいました。

しかし！

そんな風に探偵きどりしたくなるほどの証言を得てしまったのだ！

さて諸君。近頃、僕のパンツが次々と紛失していることは知っているだろう？　理解しがたいこの事件の詳細は全く掴めず、捜査は難航していたのだが……

証言そのいち。笠原カカ。

「トメ兄のパンツがなくなる日って、必ず私がばぁばに会う日だよ」

この証言を聞いて――なに？　証言が一つしかないなら『そのいち』とかつけるな？　気分だ。えーコホン、この証言を聞いて僕は不可解に思った。なぜなら、この証言は僕が気づいていた事件の共通点に酷似しており、なおかつ決定的に違うものだったからだ。

そう、僕が気づいていたのは――事件が起こる日は必ず、父さんに会う日、という点なのだ。

しかしカカは、それだけではないという。事件当日に祖母も近く

にいた？　あの忍者親子が……これは偶然とは思えない。

「ねぇトメ兄。どんなに格好いいことを言っても追ってるのはパンツだよ？」

「うっさい」

いい気分なのに邪魔するな。

ともかくこの証言を手にした僕は、一つの仮説を組み立てた。

――僕が父に気を取られている隙に、祖母がうちを漁り、ブツを持っていったのではないか？　つまり、これは計画的犯行だ。

完璧な推理だ。真実はいつも一つ！

「ねぇトメ兄。どんなに格好いいことを言っても追ってるのはパンツだよ？」

「キレイに繰り返すな」

しかしこの推理にも穴はある。

動機、すなわち僕のパンツを持っていく理由がないということだ。

「なぁカカ。犯人はなぜ僕のパンツを持っていったのだろうか。使い道なんかないだろうに」

「とりあえずそれでサユカンは釣れると思うよ」

「釣り餌じゃないんだから」

「んじゃ撒き餌？」

「そこまで広範囲に渡るほど匂うはずはない。洗濯済みだし」

「他に共通点ないの？」

「むぅ」

共通点……共通点かぁ……

「む、こんな時間だ。とにかくお風呂入ってきなよトメ兄」

「むぅむぅ」

顎に手をやり唸りながらも脱衣所へ向かう。

まずは上着を脱――ここから先のシーンは事細かに描写したら「カエレ」「キエロ」「シネ」とか言われそうだから省略しよう。

とにかく湯船につかりながら、僕は考えた。

考えて思い出して考えて思い出して……

風呂から上がる直前、閃いた！

「そうか！」

あった、もう一つの共通点。

勢い込んで風呂から上がり、急いで身体を拭きながら、居間にいるだろうカカに聞こえるように声を張り上げる。

「カカ、わかったぞ！　もう一つの共通点が！」

「ん」

おお、脱衣所のすぐ外にいたか。ならば話は早い。

「盗まれたパンツはな、全て何かの文字の刺繍があったんだ！　つまり犯人は、何かが書かれているパンツを探していたんだ！　て、あれ。僕の風呂上りの着替えのパンツは？」

「パンツもう全部ないよ」

「うっそぉぉぉぉぉぉぉ！！」

無地のも全部ってことは僕の推理いきなりはずれ！？　しかも風呂入ってる間に盗まれたの！？　タイミングが悪すぎる。嫌がらせとしか思えない。

「むぅ、どうしよう。とりあえずはくものがない」

「私のパンツはく？」

「はいてたまるか！！」

言っておくが僕は脱衣所にいて、カカはその扉の外から会話している。断じて丸見せのまま会話してるわけじゃないので誤解しない

ように。

「んーと……あ、ねぇねぇトメ兄。お父さんの下着とか、どこかにある？　なんなら今はそれを代わりに」

「ヤツの私物などこの家にない」

「……あの人、つくづく家族っぽくないね」

何をいまさら。

「くそぅ、どういうことだ。おとなしくしていれば完全犯罪となっただろうに、なぜいきなり、こんなヤケになったかのような犯行を」

「ねぇトメ兄。どんなに格好いいことを言っても追ってるのはパンツだよ？」

「だから繰り返すなっつうに」

ヤケになった……ふむ……

「もしも、僕の推理が正しかったとしたら？　父さんとばーちゃんは何かを探している。目的は、僕が持っているパンツに書かれている文字か、もしくはそれが書かれているパンツそのもの。怪しまれないように数度に分けて僕からそれっぽいパンツを盗んでいたものの、目的のパンツが見つからず、時間がなくなり勝負に出た……？」

なんとなく、この仮説が正しいような気がしてくる。

「どう思う？　カカ」

「パンツって言葉が出るたびに萎える」

「余計なお世話だ！！」

そんなの僕だってわかってるけど、仕方ないじゃないか。実際にパンツが全部なくなって大事件なんだから。

「時間がなくなった……それが正しかったとしたら？　間もなく訪れる、もっともわかりやすい区切りといえば、クリスマス」

「む？　クリスマスプレゼントに一家に一枚、トメ兄のパンツを配って歩くのか。スゴいね、ばぁばサンタ」

「スゴすぎて困る」

ていうかホント困る。さし当たっては今パンツがなくて困ってる。

「……仕方あるまい」

「トメ兄？」

「あの、奥の手ならぬ奥のパンツを使うしかないのか！　封印していたあのパンツを！！」

「パンツって言葉が出るたびに萎える」

「それも繰り返すな！」

そして僕はその日、長年封印していたパンツをはくことになった。

次の日。

大量のパンツがいつの間にか洗濯機に放り込まれていて――封印から解き放ったパンツだけが消えていた。

犯人の狙いはこれだったのか。

いったい犯人の目的とは！？

事件はまだ、終わらない……

「パンツ事件ね」

「言うな！」

# カカの天下６６０「名探偵トメの事件簿」（後書き）

昨日に続きまして事件簿シリーズです。
いろいろと気になるところはあるでしょうけどノーコメントでいこうと思います笑

さて、そんなわけで事件は置いといて――作者の日常を気まぐれにほんの少し紹介する、ちょっと長いあとがきコーナー！

本日、職場での会話。

「いいですよねぇ」
「なにが？」
「私は貝になりたい、いいですよねぇ、うん」
「ああ、映画の？」
「そうそう。私は貝になりたい！」
「私はタフガイになりたい」
「じゃあ私はバイ貝になりたい」
「いやいや俺はとり貝が好きだ！！」

楽しい職場です。

## カカの天下６６１「やぁやぁ皆様、今宵は冷えますね」

とてもとても寒い夜。

外は当然、屋内も冷えきっています。温かいはずのお布団は冷たすぎて、逆に体温を奪うでしょう。

さてさて、そんな中。

彼女たちは、どうやって過ごすのでしょうか？

ちょっとした夜の出来事を覗いていきましょう。

覗きは犯罪です。

だからどうした。

というわけで、まずはカカちゃんの部屋を覗いてみましょう。

「さむっ！！」

ついさっきまで温かい居間でのんびりしていたため、ひんやりとした自分の部屋に入った瞬間にカカちゃんはそう言わずにはいられませんでした、

「むぅ……」

布団を触ったカカちゃんは、その冷たさに思わず唸ります。布団を被らなければ寒い、しかし布団が温まるまでこの冷たさを我慢し

なければいけません。居間へ戻ろうにも、すでに就寝時間。コタツで眠るとお兄さんに怒られてしまうため、それも却下です。

「よし」

そこでカカちゃんは新たな選択肢を思いつきました。

部屋を出て廊下をしばらくトットット、と飛び跳ねながら歩きます。少しでも身体を温めるためです。無駄な努力です。

やがて見慣れた扉の前で立ち止まったカカちゃんは、ノックもせずにその部屋へと突入しました。

「トメ兄！！」

そこには衝撃の光景が！！

「なにさ」

――何もありませんでした。お兄さんはベッドの上で布団をかぶり、今まさに眠るとこだったのです。つまらないです。この男はコメディというものをわかっていませんね。期待はずれです。凍え死ね。

「……なんだか、誰かにひどいことを言われてるような気がする」

「トメ兄、寒い」

「んあ？　そりゃ冬だもん。寒いに決まってる」

「だからトメ兄」

「まさか一緒に寝たいってか？　そりゃ二人で寝れば温かいだろうけどさ、おまえももう小さい子供じゃないんだから――ってなぜツカツカと問答無用で寄って来るのさ」

「てりゃ」

カカちゃんはお兄さんをベッドから転げ落としました。

「んが！　何する！？」

ベッドから落ちたお兄さんは怒ってカンカンです。だからどうした。

「おー、やっぱ温かい。人肌ってすごいね」

お兄さんの体温でぬくぬく状態になった布団に入り、カカちゃんはご満悦です。

「……おい、カカ。そこ僕のベッドなんだけど」

「今日だけベッド交換しよ」

「おまえのベッド小さいだろ？　あぁもう、わかったよ。一緒に寝よう」

「何言ってるのトメ兄。小さい子供じゃないんだから一人で寝なさい」

「てめっ……！」

言ってることはもっともであり、お兄さん自身もカカちゃんの自立は良い傾向だと思っているので言い返せません。ざまぁ。

「……ち、わかったよ。今日はそこで寝ろ」

「おやすみー。私の布団は好きに使っていいよ」

「はいはい」

そう言いつつ、「もう小さい子供じゃないんだから」と先ほど発言した手前、小さくない女性（自称）である妹の布団を使う気になれなかったお兄さんは……結局コタツで眠ることにしました。

そして翌日、カカちゃんに「コタツで寝ちゃダメって言ってたくせに」と怒られることになるのです。ざまぁ。

さて、次はサエちゃんの家を覗いてみましょうか。

何度も言いますが寒い夜。自分の布団を目の前にして、サエちゃんは顎に手をあて考え込んでいます。

「んー……どうしよー」

説明しましょう。サエちゃんはお母さんと一緒に寝たいのです。最近ようやく共に住むようになってからお母さんに甘えまくってきたサエちゃん、その調子で今夜も……そう思ったのですが。

「恥ずかしー」

小学五年生、少しずつ自我が芽生える時期です。もう小さくないのに母親と一緒に寝てしまっていいものなのだろうか、と悩んでいるサエちゃんなのでした。端から見ればサエちゃんは小さくて可愛すぎるお子様にしか見えないので問題ないと思うのですが、本人からするとやはり気になるところなのです。

「よーし」

そこでサエちゃんは思いつきました。

お母さんがまだ仕事部屋にこもっているうちに……お母さんの寝室を冷房でさらに冷やします。そして氷を詰めたナイロン袋をベッドに入れて冷やしまくります。

ただでさえ冷たい部屋が極寒になったところで、サエちゃんは証拠隠滅して撤収しました。

やがて、お母さんの仕事が終わるころ。

「サエー！　今日は冷えるのー、すごい冷えるのー、嫌がらせのように冷えるのー、だから一緒に寝よー」

計画通りに事が進み、サエちゃんはニヤリと笑うのでした。

……いいえ。

ニコニコと、天使のような笑みを見せるのでした。

可愛いなーコンチクショウ。

こほん、さて、最後はサユカちゃんです。

寒いながらもベッドに入ったサユカちゃん。徐々に温かくなっていく布団……しかし。

「まだ寒いわね……もっと温かくならないかしらっ」

この家にはみかんという室内犬がいるのですが、布団が抜け毛でスゴイことになってしまうからという理由で一緒に寝てはいけない決まりになっています。とても温かいのですが……

「よしっ」

そんなわけでサユカちゃんは、別の策に出ました。

「トメさんと一緒に寝よう」

トメ二号～三十号、と名づけられただけのタダのぬいぐるみが、布団の上にズラリと並びました。

「これだけ一緒に寝れば温かいわねっ」

数分後。

「寒い……まだ足りないわっ！」

トメ三十一号～八十号、と名づけられただけのタダのぬいぐるみが、さらに布団の上にズラリと並びました。

「わーい、これでトメさんがいっぱいだわっ」

さすがはぬいぐるみ、これで布団もぬくぬくです。

「トメさん温かい……っ」

サユカちゃんは泣いていました。

「でも虚しすぎて心がとても寒い……っ」

ご愁傷様です。明日にでもトメさんに会って色々な成分を補充してください。

さて、長々とお付き合いいただきましたが、そろそろお開きとさせていただきます。

はて、私が何者か、ですか？

ふっふっふ。前回、このようなナレーションで話が始まった話を覚えてますか？　今回の話の冒頭を読んで、ピンときた人、さすがです。

実はですね、私は――それとは無関係なタダのナレーションです。残念。では。

おまけ。

カツコの場合。

「あー寒い！　寒っ！！　こんなんじゃ布団に入っても寝られやしないわ！」

三秒後。

「ぐー」

## カカの天下６６１「やぁやぁ皆様、今宵は冷えますね」（後書き）

いつもとは違った趣向でいってみました。
寒くて眠れないとき、あなたならどうしますか？

人の温もり……一番の睡眠薬ですよね。
はぁ……

た、ため息に意味なんかないんだからね！！

# カカの天下６６２「カカ天クエスト　ＥＰ１１」（前書き）

注意：このお話はカカ達がゲームのキャラになりきりながらＲＰＧを進める話です。話の内容はゲームの中ですが、『もしもカカ達が異世界にいたら』みたいな感覚でお楽しみください。

ステータス

カカ　ボケ勇者　レベル１　へん

サエ　悪の魔法使い　レベル１　はらぐろ

サユカ　手の平の踊り子　レベル１　さびしんぼう　エロレベル３

トメ　ツッコミ　レベル１　つっこみ　ドリル

ケロリン　スライム　レベル１４　おっさんくさい　すごいごみ

## カカの天下662「カカ天クエスト　EP11」

なんとか無傷でラオナの滝に辿りついた勇者一行。しかし、その前に立ちはだかるは水の妖精！

「こ、この二人がラオナの滝に住むといわれる妖精ねっ」

サユカは怯えている。

「なんだかアメリカ人っぽいね」

「やだなーカカちゃん。この世界にそんな名前の国はないよー」

カカとサエはボスクラスの敵を前にして余裕綽々だ！

「ちょっと二人とも、相手はボスよボス！　どう見ても強そうじゃないし、どう見てもネタで創られたような敵だけど、ボスはボスなのよっ、もっと気を引き締めなさい」

サユカは妖精に向かってビシッと指を突きつけた。

「さぁ、あなたたちの水を渡してもらうわよっ！」

サユカの宣戦布告！

「ヘイ、聞いてくれよジョーイ」

「オゥ、どうしたんだいマイケル？」

しかし妖精には効かない！　むしろ妖精は聞かない！

「実はこの間、エレベーターに乗ったのさ！」

「オゥ。この世界のどこにそんなハイテクなものがあるんだい？」

「それは言わない約束さ！　続けるとね、六人乗っていたエレベータの中で、なんと屁をかましたヤツがいたんだＹＯ！」

「密室でそれは拷問だＮＥ！」

「しかもその音がすごいんだＹＯ！」

「Ｂｏｏｏｏｏｏｏｏｏ！！　って感じかい！？」

「Ｂｙｕｕｕｕｕｕｕ！！　って感じさ！」

「身が出そうだな！　ＨＡＨＡＨＡ！」

「出てたはずさ！　ＨＡＨＡＨＡ！」

ただいま大変お見苦しい話題となっております。精神衛生上よくないと判断された視聴者の皆様はチャンネルを変えてください。

「そしてね、ジョーイ。一緒にそのエレベーターに乗っていたうちの一人が叫んだんだ。俺じゃない、俺じゃないぞ！！　ってね」

「オゥ、それは逆にあやしいね」

「皆そう思ってね、問い詰めたんだ。おまえがやったんだろう、白

状すれば楽になるぞ、カツ丼食うか？　ってね」

「オレっちならカツ丼だけいただくね！」

「それでもソイツは言い張ったのさ、俺じゃない、俺はやってない！！　ってね」

「ホゥ、言い張ったのかい」

「それはもう言い張りまくりさ」

「それならソイツは本当に屁をかましていないんだろうさ！」

「どうしてそう思うんだい？」

「屁というのものはお腹が緩いときに出るものだろう？　張ってちゃ出ないんだＹＯ！」

「こいつぁ一本取られたＺＥ！」

『ＨＡＨＡＨＡ！！』

繰り広げられる水の妖精ワールドに、勇者一行はまったくついていけなかった！

「ね、ねぇどうするのよっ！　変なやり取り始めちゃったわよあの妖精たちっ」

「面白いからいいんじゃん？」

「ポップコーンとかないかなー」

「漫才見にきてるわけじゃないのよっ！　もう、仕方ないわね……わたしがしっかりしないと」

いまだに笑い続けている妖精二人に、サユカはおそるおそる声をかけた。

「あ、あのっ！」

「オゥ、どうしたんだいお嬢さん！」

「そ、そろそろ……」

「そろそろ？　そろそろ出そうかい？　アレが出るのかい！？」

「ＨＡＨＡＨＡ！　あのエレベーターの犯人はこのお嬢ちゃんだったのか！」

「おまえがやったんだろう、白状すれば楽になるぞ、カツ丼食うか？」

サユカは固まっている。

「あ、カツ丼ください」

「ポップコーンは置いてませんかー？」

「あんたらねぇっ！！」

カカとサエは馴染んでいる！

「水の妖精！　君らはボスでしょっ！　水の妖精でしょ！？」

「水っぽい屁は――」

「屁の妖精じゃなくて水の妖精でしょっ！　なら戦うわよっ！」

サユカは先に進みたいようだ。

「仕方ないな、やろうかサエちゃん」

「そうだねーカカちゃん」

ようやく戦闘が始まる！

マイケルとジョーイがあらわれた！！

カカのこうげき！

「おならＢｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏ！！」

「ＨＡＨＡＨＡＨＡ！！」

マイケルは笑い転げている。

サエのこうげき！

「おならＢｙｕｕｕ

「ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ！！」

ジョーイは笑い転げている。

サユカのこうげき！

「えっと……なにこれ」

ミス！！

『ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ！！』

「バカにしてんのっ！？」

『ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ

一行は０の経験値を得た。

相も変わらず反則的な方法で突き進む勇者一行！　反則だから経験値は当たらない、そんな中でついに唯一の戦力であるケロリンが復活するのか！？　次回、『あれ、レベルが……』をお楽しみに！

## カカの天下６６２「カカ天クエスト　ＥＰ１１」（後書き）

一部の方々に大人気、マイケル&ジョージ劇場の時間でした。カカクエ？　そっちのほうがおまけです、ええ。

ところで彼らに聞きたい。なぜそんなに屁が好きなのか？　誓って言うが私が好きなわけじゃない。あんなクサイもんは嫌いだ。なのに頑として屁のネタを続けるのはなぜなのだろうか？

マイケル氏はこう語ります。

「ネタにしやすいからサ！！」

ですよねー。

# カカの天下６６３「年末のお買い物風景」

こんにちは、トメです。

ただいま正午の時間帯、土曜日ということでカカと一緒にデパートまで遠出して買い物に来たのですが……人すげぇ。

「人がゴミのようだ。商品もゴミのようだ」

「店員さんに怒られるから、そゆこと言わないの」

カカをたしなめつつ、飛ぶようにモノが売れていく様を見ているとお金のほうがゴミのようだなーなんて思ったりする。さすがは年末だ。

「はくしゅっ」

おや、カカ。くしゃみとは……風邪？　いや違うか。人が多くて空気悪いからかな。

「はくしゅっ」「くしゅっ」「ぶぇっくしょい！！」「ちくしょー！」

おーおー。人が多いせいかくしゃみが周りの人にまで伝染してく。科学的根拠はないけどこういうのってあるよな。でもくしゃみしてないのにちくしょーって何があったんだろう。

「ち、ち、ちくしょん！！」

それがくしゃみか。なるほど。個性あるね。

「ふわぁ……」「あふ……」「ふあーあ」「くあぁ……ねみゅ……」
「でゅみゅ……」

おや、欠伸も伝染したか。これも根拠ないけど、移っていくように見えることってあるよな。最後のなんか違うけど。

「これおもしろいね」

「こらイタズラ娘。なにする気だ」

「もっちゃらげ！　とか言ったらどんな風に伝染するかな？」

「冷たい目線が伝染するな」

もしくは生暖かい目線か。なんか哀れむような。

「む、そんなことないもん。この街の人は基本的にノリがいいからね」

「ノリがいいにも限度があるだろう。そんな意味不明な言葉を連呼するようなやつ、カカ以外にいないだろうし」

「確かにもっちゃらげだったらそうだけど……これならどうだ！
でゅみゅみゅみゅう！！」

あーあ、叫んじゃった。だからそんなこと言っても冷たい目で見られ――

「でゅみゅみゅみゅう！！」「でゅみゅ！？」「でゅみゅーでゅみゅー」「でゅみゅみゅみゅみゅみゅみゅみゅみゅみゅう！！」「でゅみゅみゅみゅう三歳」

伝染率高っ！！

「でゅみゅみゅうマキシマム！！」「でゅみゅみゅみゅうエキサイティング！」「でゅみゅみゅみゅうバイオレット！」「でゅみゅみゅみゅうコーヒー」

どこの星の生物の飼育場だここは。そしていちいち最後が変なのはなんでだ。

「どうだ！　すごいでしょう」

「うん」

すごい変。

さて、この程度でいちいち大騒ぎしてたらキリないよな。買い物買い物。

『迷子のお知らせをいたします』

お、出ましたお決まりのアナウンス。この前は随分アレな放送だったけど、今回はどうかな？

『心当たりのあるお客様はご連絡ください。では』

子供の特徴言えよオイ。

『あ、申し訳ありません』

お、言いなおすか。そうだよな、迷子といえば一大事、ちゃんと詳しく特徴を言わないと。

『上司に怒られたのできちんと説明します』

それは言わなくていい。

『その子は人間です』

ったりめーだ。

『たぶん』

たぶんってなに!?

『なお、お名前はプライバシーの侵害になるため公表できないと判断しました』

そんなにヤバイお子様なのか。人間だ、ってわざわざ言い直すくらいだし。

「ねぇねぇトメ兄。この迷子ってお姉みたいな人なのかな」

たぶん人間。

名前を出したらヤバイやつ。

「かもな」

世の中広いなぁ。

『続きまして、落し物のお知らせをいたします』

あらら、やっぱりお客さんが多いとそういうのあるよねぇ。

『飲みかけの缶ビール』

捨てろよ！！

『銘柄は空読ビール、その中でも最も高い、超一番搾りマックスです。一缶なんと１０５０円、飲みかけとはいえこれを捨てておくのは惜しいです』

おお、缶のくせに予約しないと買えないという、あのビールか！

『西口付近に設置してある赤いベンチの隅に置いてありました。缶の底面に小さな傷があります。心当たりのある方はすぐにご連絡ください』

それにしても明らかに迷子より詳しい説明なのはなんでだ。

『あと五分でこなければ私が飲みます』

タチ悪いなこいつ。

「ねぇねぇトメ兄。この人ってもしかしてお姉じゃない？」

迷子よりもビールに注目。

ぬるくなろうが人のだろうが、飲みたければ飲む。

「ありうる！」

声違うけどね。つくづく世の中広いなぁ。

さて、買い物買い物っと……

数分後。

『迷子のお知らせをいたします』

あれ、ビールどうしたのかな。

『好き勝手やりすぎてクビになり、私が路頭に迷いました』

知らんて。

さ、買い物買い物……

『誰か拾って』

この落し者だけは誰も拾わないだろうな。

## カカの天下６６３「年末のお買い物風景」（後書き）

ま、こんな風景どこにもないと思いますが笑
先ほどスーパー行ったらすんごい混み様で、年末すげーと思ってこんな話を書くことにしてみました。

アナウンスの人は皆さん覚えているいでしょうか？　そう、ケンタ君の話の人です。その後ひったくりにあう話です。

買い物の帰り道、この人を入れたバッグがひったくり犯に盗まれるとかどうだろう？　とか考えましたが、さすがに無理があると思ってやめました。

# カカの天下６６４「やぁやぁ皆様、今朝も冷えますね」

とてもとても寒い朝。

薄い陽光に照らされながら、どこもかしこも夜の名残を残しています。

そんな静かな時間の中、彼女たちはどうやって目覚めるのでしょうか？

ちょっとした朝の出来事を、覗いていきましょう。

覗きは犯罪？

捕まえられるものなら捕まえてみろ。

さぁいきましょう。最初はもちろんこのお方です。カカちゃんの部屋。

「……む」

ゆっくりと瞼を開いたカカちゃん。

「さむ」

かぶっていた毛布を手繰り寄せ、自分の身体にぐるぐると巻きつけていきます。

「起きないと」

言葉とは裏腹に身体は毛布のぬくもりを手放そうとしません。それらをかき集めて丸まったカカちゃんは、そのまま、

「んしょ」

ぽてん、と団子状態のまま落ちました。さすがはふかふか毛布、落下の衝撃などものともしません。

「んしょ……んしょ……」

ごろん、ごろんと、毛布のおばけは器用に転がっていきます。こんなこともあろうかとドアは半開きにしていたため、スムーズに廊下へ脱出できました。

そのまま階段へゆっくりダイブ。ぽてん、ぽてん、と驚きの柔らかさを発揮しながらカカちゃんを衝撃から守る毛布、ちょっとお値段が張っただけはあります。

「ふぅ……」

無事に階段を下りたところで一休み、そこで、

「うぉ！？」

そんなモノが廊下のど真ん中に落ちてたもんだからお兄さんもビックリです。

「トメ兄、おは」

「おはよう、妖怪かと思ったぞ」

「毎年のことなんだからいい加減に慣れなよ」

「毎年でっかくなってんだろうがその毛布団子」

そう、子供の成長は早いのです。とはいえやってることは同じのようですが。

「も少しでコタツ……」

「はいはい、手伝ってやるよ」

「こらー、蹴って転がすなー」

なんだかんだでコタツまでたどり着いたカカちゃんは無事に毛布を装備解除、ぬくぬく状態を保ったまま朝食を待つのでした。

さてさて、ちょっと和んだところで次にいきましょうか。オチ？日常生活にいちいちそんなモノが用意されてるわけないでしょう。次はサエちゃんですよ。

「んー……」

鳴り響く目覚まし時計。サエちゃんは止めようと布団から手を伸ばします。

「んにゅー……」

ぱしぱしとそれを叩きますが、目覚まし音は一向に止まる様子が

ありません。

「んゆー……」

ぱしぱしぱしぱしぱしぱしぱしぱしぱしぱし――

「フギャー！！」

「わわわ」

間違って官房長官の頭を叩いていたようです。

「ごめんなさい官房長官」

身を起こしたサエちゃんはペコリと丁寧にお辞儀しました。すると官房長官も「仕方ありませんね、やれやれ」とばかりにお辞儀を返してくれました。人と猫が頭を下げあう、変な光景です。

「さてさて、寒――」

「サーエー！！　起きたー！？」

寒い、そう言おうとした瞬間にドカーンと開け放たれた部屋のドア。

「あらあら眠そうな顔しちゃってー。やっぱりお母さんが一緒に寝ないと、寒くてちゃんと眠れないのかしらー？」

「んと」

「まーまーそんなことはいいのよー、朝ご飯できたのよー時間なのよー！　ほら、その前に朝の挨拶！」

「おはよー」

「はい、おはよー。まだまだ朝の挨拶よー！」

その後、いつものようにホッペすりすりしてかいぐりかいぐりちゅっちゅしたサカイさんは満足そうに去っていきました。

「起きよーっと」

そしてサエちゃんはふと気づきました。ただでさえ朝の弱い自分が、寒い時期にも関わらずあっさり布団から出られていることに。

「寒くないなー、あ」

答えが見つかりました。

「お母さん、暑苦しいもんね」

最高の防寒対策と言えるでしょう。

ある意味の理想の朝を迎えている彼女を羨ましく思ったところで、最後にいきましょう。今日も今日とてぬいぐるみに囲まれて眠るサユカちゃんです。

「んー……」

ぐっすりと眠っているサユカちゃん。そこで目覚ましが高らかに

鳴り響きます！

『サユカちゃん』

「はいっ！！」

甘くとろける最愛の人の声！　そう、こっそり録音したこの声を目覚ましにすることでサユカちゃんの目覚めはいつも爽快なのです。

『ねぇねぇサユカちゃん』

「はい、いま起きますよっ！」

『お醤油とって』

「はい喜んで！」

そう、こっそり録音したのでこんなセリフなのです。しかしサユカちゃんはニコニコしながら机の上においてあるお醤油を取り、飾ってあるトメ一号の前に差し出すのでした。

「はい、トメさんっ！　もーしょうがないんだからー」

『ありがと』

「えへへ」

照れ笑いしながら目覚ましを切ったサユカちゃんは。

「わたし……なにしてるんだろ」

誰にもわからない疑問を抱きながら落ち込むのでした。毎朝の恒例行事だそうです。

寒い寒い冬の朝、皆様はいかがお過ごしですか？　この娘たちのような起き方をしている人もいるかもしれませんね。もしいたら、それはとても愉快なことです。

それでは今回はこの辺で。

はて、私が何者か、ですか？

そうですね、前回も疑問に思った方もいらっしゃるでしょうし。

この際はっきりいたしましょう。

はーっはっはっは！　実は実はなんと！　この俺様、通称トメ父の変装だったのさ！

実はあんなこと言いつつ前回のナレーションも俺様だったのだ。先日の話で「やっぱりな」とか「トメ父じゃないと思ってた」とか勘違いしてたやつら、残念だったな！　忍者をなめるな、女優の夫をなめるな！

見破ったぜーとか思いながらいい気になってた自分を恥じるがいい！

このような変装など朝飯前だ！　今日の話も朝飯前のものばかりだったしな！

はーっはっはっは！

嘘です。

おまけ。

カツコの場合。

「朝だー！！」

五分後。

「飯だー！！」

五分後。

「身支度だー！！」

五分後。

「仕事だー！！」

寒くても変わりませんでした。

## カカの天下６６４「やぁやぁ皆様、今朝も冷えますね」（後書き）

ナレーションたのしー。
はい、そんなわけで『今宵～』の続編っぽいもんです。
三者三様の朝をお楽しみいただけたら幸いです。
そして話の所々にツッコミたければどうぞご自由に笑

さてさて、私事ですが。年末の居酒屋は戦場ですね、ええ。さすがに金、土と二日連続で営業時間中フル稼働で動いてたら手も荒れてきました。洗い物でアカギレするんですよねー。
でもこの話を三十分で書きあげた私の指はまだまだイケると思うのですがいかがでしょう。

## カカの天下665「トメよりステキなあの人は」

ここここ、こんにちは、カカです！

突然ですが、私いま慌ててます！　なんでかというとですね、すごい情報をキャッチしたからです。

皆さんもご存知の通り、私の周りの人からトメ兄への信頼度とか好感度とかは、かなーり高いほうなのですが……

それが揺るぐかもしれません。なぜか、それはとてもわかりやすい理由です。そう……トメ兄よりもステキな人が現れてしまったようだからです！

これは調査を開始せねば。その人を見かけた人たちの感想を順に聞いていきましょう……

まずは一人目、いつのまにかトメ兄の友達に落ち着いたわりには密かに恋人も狙っていたりするサラさん！

「は、はい！　さっき仕事中にお花屋さんの前を通りかかったんですけど、あんなステキな人……他にはいないと思います！」

「ほうほう。トメ兄やサユカンと比べると？」

「う、もちろんそのお二人は私の中でもトップクラスのステキ人ですけど、今見たあの人は……トメさんやサユカちゃんに負けないくらいステキな人だと思います」

「ええと、見かけただけで、喋ってないんですよね？」

「はい」

それなのにここまで言わせるとは……よほどステキな人のようだ。

「でもさっきの人――」

「次は……」

聞くとすればこの人か。別に個人的にはこの人の言うことに興味はないけど、近くにいたので一応声をかけてみよう。お姉だ。

「いま通ったそのステキな人、どうだった？」

「惚れたね」

惚れた！！　あのお姉が惚れたそうです！

これはいよいよ本物だ。トメ兄の立場がピンチか！

「でも――」

「どっちいった！？」

「うぇ？　ああ、あっち」

追っかけよう！

「見た？　今の人！」

「すっげー格好よかったよな」

「いやいや、格好いいより綺麗だって！」

「むむむ、あの洗練された歩き方と華麗な容姿、只者ではないでござる」

その人を追跡するにつれて聞こえてくる街の人の声。いったいどんだけステキ度マックスなのだろうか。

おや、あそこに見えるのは……サユカン！！

「あ、カカすけっ！！　いまねっ」

「ステキな人が通ったんでしょ？」

「そうよ、よくわかったわねっ！」

果たして、トメ兄にゾッコンのサユカンはどんな反応か！

「思わず見惚れてしまったわ……」

「おー、言うねぇ。それで、トメ兄とどっちがよかった？」

トメさん、と即答するかと思いきや、

「んー……っと……」

「悩むの！？」

「え、いえ、その、トメさんが世界一ステキなのは当然よ？」

そんなすっとぼけたことを当然とされても困るが。

「でも、あの人も負けないくらいステキだったというか……二人そろって世界一、みたいな……っ」

サユカンにここまで言わせる！？　本当に人間だろうか。なんか魔力とかあるんじゃないだろね。

「あ、でもね――あ、ちょっとカカすけっ」

「うーん……」

気になる、気になりすぎる、見失う前に急いで追跡せねば！！

「あ、セイジのおっちゃん！！」

「おう嬢ちゃん。どうしたぃ、そんなに急いで」

「今ここに、ステキな人こなかった！？」

「うぐ」

なぜ言葉に詰まる、おっちゃん。

「あ、あれは悪い夢だぜ……」

「どうしたのさ」

「俺が……この俺様が、男相手にときめくなんて……いくら美人だからって……」

なんか、おっちゃんの数十年間の人生を覆すほどのショックを受けている模様。そっとしておいてあげよう。

それにしてもどこに行ったのかな、そのステキな人……ん？

セイジ食堂、ということは。

いつの間にかうちの近くだ、ここ。

まさか……

「あ！！」

私の家の前にいた！！

すらりと伸びた細身にスーツを纏い、艶やかな長い髪を後ろで一括りに縛った美青年が、そこに……うわぁ、なんて綺麗な人なんだろう。

こんな神様みたいな人が通れば、すれ違った全ての人が振り返るだろう。

サラさんもお姉もサユカンもセイジのおっちゃんも……魅了されるのは仕方ない。

あぁ、本当に綺麗な人だ。

まるで私のお母さんみたい。

「ってお母さんじゃん！！」

「あらカカ君、おかえりなさい」

「おかえりなさいってこっちのセリフ、え、え？　なに、どゆこと！？」

なんでお母さんがそんな男装してここに！？

「ふふ、似合ってるかな、このスーツ。ドラマで使ったのをもらっちゃった♪」

「ありえないほど似合ってたせいで、皆が男の人だと勘違いしちゃってたよ！　確かに男の人にしては綺麗すぎるけどさ！」

「四十台の化粧テクをなめちゃダメよ。それに女優は呼吸一つで何にでもなりきれちゃうんだから」

そんな馬鹿な、と思いたいけど実際に騙されてる人がいる以上は否定できない……

「正体がバレると面倒だから、目立たないように変装してきたんだけど」

そこは否定する。目立ちすぎ。

「で、でもなんで？　お母さん、ドラマの仕事が忙しくて帰ってこ

れないはずじゃ」

「うーん、それなんだけどね？　収録が異様な急ピッチで進められて、もう終わっちゃったんだよー」

お母さんは「なんでかしらねー」とまったく困ってないように困ってみせた。や、私もお母さんがいてくれるなら文句ないんだけどさ……と、そのとき。

「カカちゃーん」

「あれ、サエちゃん？」

向こうから歩いてくるのはまさしく我が親友。

「ねぇ聞いてよサエちゃん！　なんかさ、お母さんが」

「やっときたねー」

「……は？」

「遅れてごめんね、カカちゃん。はい、私からの誕生日プレゼント」

……は？

「今日から年始の数日まで、ユイナさんのお仕事はないよー。だからずっと家にいられるの。その時間が私のプレゼント」

え？

ええ？

えええええええええええええ！？

「な、ちょ、なん！？」

「なんでって、カカちゃんが一番喜ぶと思ったからー」

「どっ！？」

「どうやってって、私のお母さんにお願いしてー、コネとかアレとか色々してもらってー」

「あはは、だから監督あんな怯えてたんだ。早く終わらせないと一家路頭に迷う！　みたいな顔してたから、おかしいと思ってたんだよね♪」

「だよね♪　って、そんな簡単に」

「あら、どうしたのカカ君。ママとしては子供たちと一緒にいられるなら、何も問題ないんだよ？」

一緒に……一緒に？

あ、そっか。

今気づいた。

クリスマスも、お正月も、お母さんと一緒にいられるんだ！！

家族、みんなで一緒に！！

「さ、サエちゃ……」

「私だけお母さんといるなんて、不公平だしねー。どうかな、カカちゃんからもらったプレゼントに負けないお返しができたと思うんだけど」

「ありがとう！！」

「その顔が見たかったー」

こうして、私の最高のクリスマスと、最高のお正月が約束されたのだった。

ありがとう……本当にありがとうサエちゃん！

おまけ。

「あらパパ君」

「家族みんなでって、お、俺は……？」

「さぁ？」

さらにおまけ。

「ねぇサエちゃん。サカイさん……捕まったりしないの？　脅迫罪とかで」

「さぁー？」

## カカの天下６６５「トメよりステキなあの人は」（後書き）

引っ張りまくったステキな人の正体、実はこのお方でした。皆さんはいつ気づきましたかね？
引っ張りまくったサエちゃんの誕生日プレゼント、実はこんなんでした。予想してた方いますかね？

さてさてさて……ここで重大発表をば。
私、ルシカのカカ天は……

明日の話、６６６話をもって、一時休載します！！

まー皆さんが優しい言葉で休め休め言ってくださってますし、仕事もバカみたいに忙しいですし、年末に一休みくらい、いっかなーと思い決断いたしました。

再開は……
来年になります。

や、本当に長い冬休みで……
皆さん、ありがとう。
それではさようなら。
なんちゃって。
嘘です。
クリスマスやら年末やらの話を放っておくわけないでしょう。
そんなわけで、２３日からクリスマス話を始めますので、それまで皆様、お待ちいただけると私が幸せです＾＾

# カカの天下６６６「スペシャルまでの数日間」

カカです。

今日はお母さんと一緒に寝ました。だからあったかくて、寝坊しそうになっちゃいました。

お母さんも今まで忙しかったせいで疲れてたのか、意外とお寝坊さんで……でも起きないといけなくて、でもでも私もこの温もりを手放したくなくて……

一緒に毛布団子になってベッドから落ちてみました。この前みたいにこのままコタツへ――

「むきゅ」

「あ」

お母さんの顔面から落ちちゃいました。

「んっふっふー……おはよ、カカ君」

「あ、う、うん、おはよう、お母さん。だいじょぶ？」

「てい」

「むぎょ！？」

仕返しされました。

お母さんは意外とたくましい性格です。さすが私たちの親。

次の日。

サエですー。

今日はクララちゃんの力を借りて、我が家のアニマルズに芸を仕込んでいます。おかげで楽しいクリスマスを迎えられそー。動物の言葉がわかる人がいるっていいですねー。

「クララ大活躍です！！」

「うんうん、協力ありがとークララちゃん」

「昼飯前です！！」

「うんうん。これ終わったら用意するからねー、お昼ご飯」

「エビフライがいいです！」

「りょーかいー。ところでクララちゃん、なんで今日のワンピースは所々キラキラしてるの？　ラメでも入れてるのかな」

「あ、それです！　聞いてくださいサエおねーちゃん！　毎年この時期になるとクララの本体にやたらとキラキラした物体を巻きつけられるのです」

えとー、街路樹に付けられるクリスマスの飾りつけのことかな？

「木の皆もビックリしてます」

なるほど、木からしてみればそうかもねー。

「だからクララもキラキラしてるです」

その理屈はよくわからないねー。

「あ、そろそろご飯の時間だね。これくらいで切り上げよっかー」

「はい！　皆さんご飯ですよ！」

わんにゃーぶひーもー！　っと雄叫びをあげるアニマルズ。

「何度見ても感心するよー。動物と話せるってやっぱりすごいよねー」

「……でも、そのせいで衝撃の事実を知ってしまいました」

「なになにー？」

「犬も牛も豚も、猫舌なんです！！」

そーなのかー。そういえば動物って加熱して何か食べる習慣ないしねー。

「クララしょっくです！！」

「なんでー？」

「わかりません！！」

クララちゃんは今日もキラキラ元気です。

次の日。

こんにちは、サユカです。

クリスマスに向けてカカすけもサエすけも色々と頑張っている中、わたしだけが何も決まっていません。

「どうしよう……もう時間がないのにっ！」

慌てるわたし、でもそこに、

「大丈夫だよサユカン」

「うんうん、特別なことは何もしなくていいよー。ほら、こんなのでどう？」

二人の親友が手を差し伸べてくれて、

「こ、これだけでいいのっ？」

「そうそう、充分だよ！」

「盛り上げるのは私たちがやっておくからー」

その言葉に、感動してしまいました！

「う、うん……でもがんばるわねっ！　面白くないかもしれないけど、せめて煌びやかになるようにっ！」

「そうそう、その意気だよ」

「面白くするのはこっちでするしねー」

「サエすけ、何か言った？」

「別にー」

変なサエすけ。まぁいいわ、わたしはうまいボケとかネタとかないけど、精一杯頑張るわよっ！

次の日。

アヤです！！

今日こそはインドちゃん頑張れ！　ということでお馴染みになった四人でタケダのことを追っていたんだけど、

「むむ、一体何をしているのだ、カカ君」

「むむむ、一体何をしてるんだろ、タケダ」

「むむむ？　一体何をしてるんだあんたら」

『カカカカカカカカ！？』

「カが多い」

バレた！？　なんかでっかい家で怪しいことしてたのを見てたタケダを見てたところで、カカに見つかった！？

「ま、いいや。せっかくだからあんたらもやれ。改装工事も手伝え」

『は！？』

次の日。

トメです。今日は家族そろっておでんです！！

「トメ君のおでん、やっぱりおいしい！」

「家族みんないると、やっぱり賑やかだね」

「でもあのクソ親父いないけど、いいの？　あたしは別にどうでもいいんだけどさ」

「そうだね、パパ君も呼んであげよっか」

む？　呼ぶって、近くにいるのか。確かにアレのことだから天井

裏あたりにいそうだけど。

「とりあえずトメ君、パパ君の席を用意して」

はいはい、テーブルの一角にご飯置いて、おでんをよそって皿を置いて、サラダ置いてっと。

「それで？」

「はい♪」

父さんの写真をポンと置いて、

「はい、皆で手を合わせてお辞儀」

『南無阿弥陀仏』

「ってお供え物じゃないんだから。って、ああ！」

「頭下げてた間に、ご飯全部消えてる！？　あ、なぜか僕のおでんも！」

「さすがクソ親父、あたしに勝る早食いだ」

「これでパパ君も一緒にご飯できたね♪」

会話は何一つしてないけどな。

次の日。

某花屋。

「カツコさん！　これ！」

「サラちゃんどした――ほほう？　妹ちゃんたらおもしろいことしてくれるじゃん！」

某学校。

「へぇ、これはなかなか味なマネするじゃねぇか」

某家。

「カカのやつ、そういうことか」

各所に届いた招待状。

『いつの間にかサンタさんにプレゼントをもらえなくなった、可哀想な大人たちよ。

私たちがサンタになって、素晴らしい時間をプレゼントしてやろうではないか！！

そんなわけでこの日のこの時間、この場所に来なさい！　予定？　そんなものは聞いてない。私が言いたいのは一つだけ。

来い！！　ｂｙカカ』

――小さなサンタが騒ぐ聖なる夜、一体どうなることでしょうかね。

## カカの天下６６６「スペシャルまでの数日間」（後書き）

と、いうわけで。
次の話はクリスマスとなります。それまでは昨日のあとがきの通り、お休みさせていただきます。

６００話ほど毎日書き続けてきましたが……いやはや、充実した日々でした。温かい読者様に支えられ、気持ちよく年末を迎えられそうです。
とはいえ、まだまだやること書くことといっぱいですな。感想返しは（多分）ちゃんとやりますし、クリスマスも楽しんで書いていきたいと思いますので、またお付き合いいただけたら幸いです。
それでは皆様……
また来週！

# カカの天下667「三人のサンタ」

こんにちは、トメです。久しぶり？　なんでだろう、そんな気がします。

まぁいいや、とにかく。今日は世間一般ではクリスマスイブと呼ばれる日。家族で過ごしたり恋人同士で過ごしたり、深夜にはサンタさんを待ったりサンタさんになったり。そんな日です。

果たして、本日の僕らは……どっちだろうか。

「おぅトメ、さすがだな。時間前に来るとは」

「テンか。おまえも結構早いじゃないか」

待ち合わせ場所――いや、集合場所にて僕らは顔を合わせた。もちろんテンだけじゃない。

「むむ、見よサラちゃん！　あそこに見えるはラブラブツーショット！　イブだからって調子に乗ってやがる、邪魔しにいくぜ！」

「へい親分！　おらおらー私も混ぜろー！　えっほえっほ……あ、ども、てへ。恥ずかしいけど楽しいですねコレ」

道の向こうからやってきたのは、なんか最近元気だよなーって感じのサラさんと、いつも通りなノリの姉。

「はっはっは！　イブに誘われるとは本命の証……今宵、期待してもいいのですかな、トメ君？」

「僕が誘ったわけじゃない、っていうかどっから出てきた、っていうか近い近い近い！！」

「照れるなよ……くく」

「誰だおまえ」

ニョキッと生えたと思ったらいきなり耳元で囁いてきた悪ノリなキリヤ。

「あらあら、皆さんこんにちは。私の子供君たちが、いつもお世話になってます♪」

道中ちょっと寄り道したかったそうなので置いてきた母さんが合流。

そして、

「わー、さすがですね皆さん。時間通りですー。私なら絶対遅刻するのにー」

そんなことをほやほやっと言いながら現れたのは、集合場所の主サカイさん。

そう、僕らの集合場所とは――サカイさんちの玄関だったのだ。

数日前に僕らの手に届いた招待状。なんでもサンタと縁が無くなった僕ら大人にスバラシイ時間をプレゼントしてくれるそうな。さしずめ、お世話になってる大人への恩返しといったところだろう、

嬉しいことを企画してくれる子供たちじゃないか。

「やーやーサカイちゃん。今日って結局、何すんの？　カカちゃんてばタマちゃん勝手に借りてくし、そのくせ何にも教えてくれないし」

「ふふ、私も知らないんですよー。サエったら教えてくれなくてー」

「うちのクラスの問題児どもまで一緒になってると聞いたが……はてさて、何企んでるんだかな」

「あ、トメさん。クリスマスおめでとうございます、今年もよろしくお願いします」

「サラさん、それボケてんだよね？」

「はっはっは！　ボケ！　つまり歳ですか――ぐほぁ！？」

「なんで母さんが裏拳かましてんの」

「あらやだ。ママってばお茶目しちゃった、あは♪」

「と、歳の話題は敵がどこにいるかわからない……女性恐るべし、キリヤンまだまだ修行が足りない♪」

「男がそんなんやっても可愛いくねーよ」

「カツコンまだまだ修行が足りない♪」

「あんたは元から可愛くねーよ、ていうかなんでノッてくる？」

「サランまだまだ修行が足りない♪」

「だから可愛く――ちょっと可愛いな」

サランラップが脳裏に浮かんだのは内緒。

「さてさて、トメンさん」

「なにサカイさん――トメン言うな」

「きゃー私も修行が足りない♪」

流行らすな。

「まぁまぁ、皆さんとにかくお上がりくださいな。集合したら玄関へ通すようにだけ、言われてますのでー」

雑談モードになっていた僕らは、サカイさんの言葉に従ってゾロゾロと移動を始めた。

『おじゃましまーす！』

僕ら合わせて七人が入っても余裕な玄関、まさしく豪邸だ。いそいそと靴を脱ぎ始める僕ら……ん。

「なんか、内装変わってない？」

「ええ、改装したんですよー。イベント仕様に」

玄関から三方向へ伸びる広い廊下。それを区切る壁が全て暗い色へと塗り替えられていた。元は綺麗な白色だったはずなんだけど。あ、天窓も布で覆われてる？　今は夕方だけど、これで電灯でも消そうものなら昼でも真っ暗に――

あ、消えた。

「わお、真っ暗。キリヤンどきどき」

「キリヤ、酔ってんのか？」

「あ、わかります？　さすがはトメ君！　まだ缶ビールありますけど、お一つ いかがですか？」

「あ、オレもらうわ」

「あたしも！！」

こいつらは……少しは真っ暗になったことに疑問を抱けっての。

「あら、なんだか音が聞こえません？」

サラさんの声にハッとなり、耳をすませる。確かに薄らと音楽が聞こえてくる、どこかで聞いたことがある、これは……

「母さんのＣＭテーマソングじゃん」

そういえばカカたちってあのＣＭの練習してたっけ、と思い出したそのとき、黒一色だった視界にスポットライトが！

三つの廊下の向こう側で、アイドルでも登場するかのように幾つもの明かりが踊っていた。光の中にいるのは――三人のサンタ！　鮮やかな赤い布地に大きな白いボンボンを付けまくった愛らしい衣装を見に纏った三人は、

『メリークリスマス！！』

声を揃えて大宣言！　続いてさらに、くるりんくるっと揃ってステップ、止まりかけておっとっと。恥ずかしそうに照れて笑って、右手で可愛く頭をコツン……感嘆するほどのシンクロ率だ。

気を取り直して深呼吸、

『いくわよっ』

微塵もブレずに言った彼女たちは、軽快なスキップでこちらに向かって来て――僕らの目の前でシュタッとストップ。ポーズを決めてウインクしながら、指鉄砲をバッキューン！

『あなたに私をプレゼント！』

完璧だ。

完璧すぎるぞゲンゾウ三姉兄弟。

「ふ、見てみろよ兄貴。俺たちの雄姿に、全員感動で声も出ねぇようだぜ」

「弟よ……当然だ」

「ふん、あたしがいるからさ」

ミナミのおばちゃん、それ正解。もっと正しく言えばあんたら三人がいるからだが。

「おぉバランス小僧！　この前はあまり喋らなかったけど元気してたかい！？　って聞くまでもないね、健康そうな顔しちゃって！」

「あ、あはは……ども」

この前っていうのは、お結び式のときだな。

実は小学生のときから『給食のおばちゃん』として知り合いなわけで……そのときからバランス小僧と呼ばれていた。おばちゃん曰く、「あんたは栄養バランスに気を使いまくって不健康になるタイプ」だそうだ。子供を見る目がありすぎ、というかすでに予言者のレベルだと思う。

「ところでゲンゾウさんたち、なんでこんな」

似合わないこととしてるのか、と聞こうとして思いとどまる。だって三人の中年さんたち、妙に楽しそうなんだもの。「兄貴！　俺のよ、頭をコツンのとこ、可愛くないか？」とか「イチコロだぜ」とか自慢げに語り合ってるし。

「ささ！　歓迎パレードも終わったことだし、飲み物配るよー。おやっ、もう飲んでるヤツらがいるのかい！？　気が早いねぇ」

「あ、ジュースあります？」

「あるよ！　って野菜美人ちゃんじゃないの、久しぶりねぇ！」

「ふふ、どうも」

母さんまで知り合いか、ほんと顔広いなおばちゃん。あの学校の卒業生、全員覚えてんじゃないのか。

そんなことを思っている間に、どこからともなくゲンゾウ三姉兄弟が取り出した飲み物が皆に行き渡る。

そして――

『メリークリスマス！！』

声を揃えた大宣言セカンドが響き渡った。

再び光るスポットライト。その光の中には三つの影！

くるりんくるっと揃ってステップ、止まりかけておっとっと。恥ずかしそうに照れて笑って、右手で可愛く頭をコツン……そこそこのシンクロ率だ。

気を取り直して深呼吸、

『い、いくわよ……っ』

ズレまくって尻すぼみになりながら、ぎこちないスキップでこちらに向かって来て――僕らの目の前でズルッとストップ。変なポーズを決めてウインクしようとして両目とも瞑りながら、指鉄砲をバッキューン！

『あ、あなたに私をプレゼント！』

頑張ったな、タケダ、シュー君、ゆーたさん。

『明かりもついたところでカンパーイ！！』

誰も見てないがな。

「くはぁ！！　皆で飲むビールはうめぇなぁ！」

テンの楽しそうな声に頷く僕ら――ってあれ！？

「カカ？　サエちゃん、サユカちゃんもいつの間に！！」

「んぐんぐ、皆で飲むコーラはうまいねぇ」

「そだねー」

「と、トメさんっ、かんぱーい、かんぱーい」

これまた可愛いサンタ姿、しかし微塵も違和感無く僕らに混じっていた三人は、とことんマイペースにコーラなんぞ飲んでいる……サユカちゃんだけはなんか頑張って何度も僕のグラスと乾杯してるけど。

「お、おいカカ！」

「ん？　ああトメ兄。かんぱーい」

「かんぱーい」

グラスとグラスがカッチン。

「じゃなくて！　どうなってるんだよ、この母さんのＣＭのダンス、おまえらが練習してたんじゃないのか？」

僕まで巻き込んで、随分と頑張ってたはずだ。それがどうして？

「うん。色々な人に協力してもらって頑張ってたらね」

んぐ、とコーラを一飲みしたカカはあっけらかんと言った。

「コレ私たちがやるよりおっさんたちがやったほうが面白い、という結論に」

なるほど。光の速さで納得した。

「タケダたちは？」

「アレは失敗だった。だから見て見ぬフリ」

哀れだ。フォローはしないが。だってあの二人、ただでさえ暗い廊下の隅っこでイジイジ落ち込みすぎだし……ん、二人？

もう一人は、

「ゆーたがそのセクシーで可愛いサンタ服着て踊ってたら、どこからどう見ても変質者みたいだよー」

「あぁ！　もっと言ってくださいサエ様！！　もっと見てくださいサエ様ぁ！！」

とてつもなく嬉しそうだ。多分あの中で一人だけ楽しんでたんだろうな。

「あの……シューさん、って言いましたっけ？　俺、俺……」

「ええ、わかってます。乾杯しましょう、ふふ、ふふふふ」

えーと、見てたら無性に暗くなりそうなアレは放っておいて。

「カカ、乾杯はいいけど……今日は一体、何をどうするんだ？」

スバラシイ時間をプレゼント、というからには企画してるんだろう？　そう意図を込めた質問に、カカは待ってましたと言わんばかりに大きく頷いた。

「もっちろん！　まずはこのくじ引きを！」

「はいはーい、皆さん一つだけとってくださーい」

サエちゃんが取り出した数本のひもくじ。するとこちらも待ってましたとばかりに雑談に興じていたそれぞれがくじへ群がってきた。どいつもこいつも何が起こるか楽しみなんだな。

「私は鼻水ですー」

……は？　どしたのサカイさん、とち狂った？

「ええと、くじに『鼻水』って書いてあるんですよー」

「はいっ、同じ言葉が書いてあるくじを引いた人同士で一緒になってくださいっ！」

「おーい、『鼻毛』の人いない！？　あたし『鼻毛』だよ！」

「オレだ！　オレこそが『鼻毛』だぜ！」

「おお！　鼻毛の友よ！」

「あの……私、『鼻血』です」

「名前が？」

「名前はサラです！！　もう、トメさんはなんなんですか！？」

僕としてはこの一連の会話がなんだと問いたいが。あれ、僕『鼻血』だ。

そんなこんなでペアが決まった。

僕とサラさんの鼻血ペア。

姉とテンの鼻毛ペア。

母さんとサカイさんの鼻水ペア。

そして……

「おやおや？　私だけ余りましたよ」

「キリヤ、そのくじには何て書いてあるんだ？」

「ええと、『鼻クソ』とありますが」

カカ？　と視線で聞くと、

「ああ、それハズレ」

「ハズレがあんの！？」

「うん。その人にはちょっと雑用してもらう」

楽しみにしてた分ショックで酔いも醒めたか、呆然とするキリヤ

……お？　その後ろからおずおずと出てきたのは、

「あ、あの、カカちゃん？」

「俺たちのくじはないのか！？」

先ほど醜態を曝した可哀想な二人！

「ああ、あんたらは元から鼻クソ」

さらにトドメを刺されてしまった、哀れとしか言いようがない。

「さぁ！　ペアも決まったところで進んでもらうよ！　目指すは三つの廊下の先、右から――カカサンタの部屋、サエサンタの部屋、サユカサンタの部屋へと続いています！」

「今から五分間、皆さんで相談して、それぞれ決めた部屋へと進んでくださいねー。どこへ来ても自由ですよー」

「わたし待ってますトメさんっ！　あ、説明？　んっと……あ、そうだわ、それでですね、サンタの部屋へ入ったら、頑張ってプレゼントをゲットしてくださいっ！」

――さぁ、どうする？

## カカの天下６６７「三人のサンタ」（後書き）

お久しぶりです！！
いやぁ、久々なんで張り切ってしまいました。この休憩期間、もちろん休みなしに仕事でしたが、今日は何書こう明日はどんなのにしようとか考えることなく、余裕を持って過ごすことが出来ました。
読みたい本を読んで、観たいものを観て、勉強したいことをして。リフレッシュできたように思います。
こういう時間も、やっぱり大事だなぁとしみじみ。

さて、そんなわけで約束どおり戻ってまいりました、
書かないのは楽でしたが、物足りなかったのも事実なわけで。仕事から帰ってきて即行で書いてしまいました。
カカたちとのクリスマス、どうか楽しんでいただけたら嬉しいです＾＾

## カカの天下668「サンタワールド展開中」

――カカサンタの部屋。鼻水ペア、サカイ&ユイナ。

ママでーす。

「いいいいいやぁぁぁぁぁー！　私はサエサンタの部屋に行くのー！」

「だーめです。ママとしては、末っ子の晴れ姿を見ないといけないんですから♪」

嫌がるサカイ君をずるずる引き摺って廊下を進んでまーす。ちょっと重いでーす。サカイ君、運動不足かな？

「わ、私だってー、たった一人の娘の晴れ姿を――」

「ああ、娘とクリスマスを過ごすなんて何年ぶりかしら」

「う……私だって結構なー」

「もしかして初めてかも」

「ぁ、あぅー。で、でもでもー、私だって一緒になってから初めての」

「愛する子供と年に数時間しか一緒にいられないこの辛さ……誰か、わかってくれないかな」

「わ――わかります！　私も子供とずっと離れてたからわかりますー！！」

「あ、わかる！？　一瞬一瞬が本当に大事なんですよね！」

「そうですそうですー、私は最近ようやく娘と一緒にいられるようになったんですけど、毎日毎日一分一秒が幸せでー！」

「じゃ今日くらいはいいですよね♪」

「……あぁぁぁぁぁぁー、なんかこの人に勝てる気がしないぃぃぃー」

ふふ、年長者をなめてはいけません。たったいま情に訴えようとしたのも、さっきサンタの部屋を決めるときにズルいクジにしようとしたのもお見通しです。そのときは先手を打って、逆に他のペアが他の部屋にいくように話の流れを変えて、阻止させていただきました。女優の演技力と洞察力を甘くみましたね♪

あ、ちなみにどういうことか詳しく説明しますと。私は女優です、演技が主な仕事です。演技するにはその役柄や役職をよく見なきゃいけないでしょ？　それで培った洞察力を活かし、相手をよく見て、話の流れが思い通りになるように演技しながら喋ったというわけです！

「あ、ここだね。『カカサンタの部屋』って書いてある扉はっけーん」

「ううー、楽しそうですねー、まー私もカカちゃん好きですからいいですけどー」

扉で血文字みたいに殴り書きされているそれを楽しく眺めたあと、私はウキウキしながらその部屋へと突入しました！

「メリーメリークリスマス！！」

出迎えてくれたのはカカ君サンタの声。そして――大きなケロリンがいっぱい。大人の身長より遥かに背が高いケロリンもいる、これは人形？　違う、公園によくある遊具みたいなものかな。太ったケロリン型のジャングルジム、キリン型のケロリン滑り台もあるし、蛇型ケロリンの平均台や豚型の洞窟みたいなケロリンもいるし……あれ、ケロリンって何の生き物だっけ。

「さて課題です！」

ウシ型ケロリンの上で仁王立ちしたカカ君サンタは、可愛いサンタ服を揺らしながら楽しそうに宣伝した。

「鬼ごっこ！　私を捕まえなさい！」

「え？　え？　えー？」

「あは、いきなりなになに？」

「捕まえたらプレゼントをやろう！」

おお、そーゆーことか！

宣言すると同時に走り出すカカ君！　このケロリンたちの間を駆け回るカカ君を追いかければいいんだね。

「ほらサカイ君、追いかけよう！」

「えー、だるいですー」

「プレゼントがほしくないんですか？」

「んー、サエのじゃないから別にー」

「これサエちゃんが用意したもんだよ」

「サカイミエ本気モード！！」

おお？　お母さんパワー発動か！

猛然とダッシュしたサカイ君、慌てて豚型ケロリンの洞窟に潜り込むカカ君！

サカイ君はなんと、その豚の腹を蹴り上げた！？　揺れた洞窟にビックリしたのか、慌てて出てくるカカ君、そこにサカイ君が猛禽類のごとく飛び掛かる！

「うぁお！？」

その形相に恐れをなしたのか、カカ君は腰が抜けたかのように身を落とした。振り下ろされたサカイ君の腕は空振り、近くのケロリンの身体を爪で削り取る。

「こ、殺す気！？」

さらに襲い掛かってくるサカイ君に、さすがのカカ君も逃げるこ

とを諦めたのか迎撃を試みる。けどサカイ君の方が早い！

早い！

早い！

スタミナ切れるの早い！

「ちかれたー、あしいたいー、おれたー、つめいたいー、はがれたー」

パタリコと倒れたサカイ君はゴロゴロしながら泣いて唸り始めた。もちろん足は折れてないし爪もはがれたわけでもない。

「歳だわー……」

む、私より十歳以上若いくせに軟弱な。

「はー、はー、死ぬかと思った。この人、娘のこととなると人の限界超えるわ」

カカ君、母親ってそんなもんだよ。多分ね。

「さてさて、次は私の番だねー」

「お、お母さんはこんな風にはならないよね？」

「さーねー。ではではいきますぞ」

そこから先の展開は詳しく話したくないかな。

だって恥ずかしいんだもの♪

別にサカイ君みたいなアブナイ暴走はしてないよ？

ホントだよ？

むむ、そんなに疑うなら少しだけ見せてあげよう。

「まてまてー」

「捕まらないよー」

「あはは、こいつぅ」

「やーん」

ニコニコ顔で平均台で追いかけっこしたり一緒に滑り台する私たち。ほら恥ずかしい。

でも最後には。

「おいでカカ君♪」

「はーい」

おとなしく自分から私の胸へと飛び込んできてくれました。

そしてもらえたプレゼントは、一枚のカード？

書いてある文字は『そのいち。おいかけっこ』と、それだけ。

「あらー？　裏に何か書いてありますよー」

おや、寝転がっていたサカイ君だからこそ気がつけた盲点だね。

どれどれ、裏には……『と』って、大きく書いてある。

これだけ？

「ねーねーカカちゃん、サエが用意したプレゼントはー？」

「これサエちゃん直筆」

「ならよし」

いいんだ……

あれ？　でもこれ、どういう意味なんだろ。

「お母さん、こっち」

「え？」

――サエサンタの部屋。鼻毛ペア、カツコ&テンカ。

『おー……』

よ、テンカだ。

廊下を進み、『サエサンタの部屋』の部屋に入ったオレたちだが……姐さんと一緒に呆然としてしまった。

「ジャングルだ！　ウホッ！！」

やはり野生の血が騒ぐのか、姐さんが雄叫びをあげる。そう、ここはどう見てもジャングルだった。一室の各所に置かれた植物、というか木、木、木！！　そして部屋の真ん中には、最近サカイさんちに住み着いた動物の皆様。

「めりーくりすますー」

その中心に動物女王のように君臨してるのがサエ。アマゾンの奥地にでもありそうな光景の中で、サンタ服が異様に似合ってねぇ。

「めりくりです！！」

そしてサエサンタの背後からピョコっと顔を出したのは、クララだったな確か。こいつもチビッこいサンタ服姿だが、妙に所々キラキラしてるのはなんでだ？　まぁいいか。

「んでサエ。プレゼントをくれるという話だったが？」

「はい。私の出す問題に正解することができたらプレゼントをあげますー」

ほう、そういう趣向か。生徒が教師に問題たぁおもしれぇ。

「いいですかー？　では問題です、今から総理大臣がモノマネをしますので、何のマネか当ててください」

……ネコが、モノマネだぁ？

「じゃークララちゃん、お願い」

「にゃーにゃー！」

まるで総理大臣に話しかけるかのように言うクララ。まさかな？

「ハイ！　おねーさんわかっちゃった！　ネコのモノマネだ！」

「姐さん、話聞いてないだろ。クララじゃなくて、ネコの総理大臣がやるモノマネを当てるんだよ」

ほら、ちゃんと見ろよ。総理大臣が指示に従って……

「ニャーニャー」

従っ……って……

「ニャーニャー」

「さぁテンカ先生！　総理大臣は何のマネをしているでしょうかー！？」

「……ネコのマネ」

「ぶー」

わかるかあああああああああ！！

「もー、先生こそ私の話聞いてないんじゃないんですかー？」

「そーだそーだ、あたしと一緒じゃん」

「はっきり聞いてるし総理の声も聞こえてるが、それをネコ以外の何と見ればいいんだ！？」

サエはやれやれ、とため息をつきやがった。

「ダメですねー、正解は『犬のマネ』です」

「……どこがだ？」

「ちゃんと『わんわん』って言ってるじゃないですかー」

「どこがだ！？」

「ネコ語で」

「わかんねーっつーの！！」

「もー。苦労したんですよ、芸を仕込むの。犬のポーズまでしてるのに」

どっちも似たような四足動物だろが。

「ちゃんとマジメに考えてください」

ぐぅ……動物に言葉を仕込む？　アホらしい、が、ここはきちんと子供の話を聞いてやるのが教師としての勤め……

「次は日本経済、どぞー」

「モーモーです！」

再び牛に話しかけるクララちゃん。そして、

「モー、モー」

案の定モーモーしか言えない美味そうな食材。

「くそぅ……アレはなんのマネなんだ」

「何ってテンちゃん、牛のマネじゃないの？」

「アホか姐さん。さっきはその考え方で失敗したんだろが。さっきのが犬のマネをするネコなら、今回は……」

待てよ、ここにいる動物を見てみろ。ネコ、犬、豚、牛、山羊だ……前来たとき山羊なんかいたっけ？　まぁいいや。この面子で、さっきはネコが犬を演じていた。一般的に対に考えられている動物同士だ。同じ思考でいくならば、牛肉の対は豚肉！

「わかった！　豚のマネだろ！？」

「答えは『牛のマネ』です」

「ほらー！　あたし合ってたじゃん」

「帰っていいか！？」

こんなもん国家試験より難しいわ！

「まーまーテンカ先生。カンで言えば当たるかもしれないじゃないですかー」

「……じゃあ、次の問題出してみろよ」

今度はラスカルとかいう犬が出てきた。

「ワン！　ワンワン！」

……わからねぇ。

「さぁ先生、答えは？」

「どう思うよ、姐さん」

「総理大臣じゃないかな？」

「あのネコか、さすがに同じような答えはやらないだろう……いや、腹黒いサエのことだ、ありうる」

ここは姐さんに賭けよう！

「答えは、『ネコのマネ』だ！」

「ぶー」

やはり違ったか……

「答えは『総理大臣のマネ』でしたー」

「は？　いや、それ合ってるんじゃ」

「んーん、ラスカルは『日本の国の経済社会情勢は厳しい状況でありますが、日本としては、日本の国にふさわしい、外国で困難に陥っている国々、あるいは災害によって被災を受けて窮乏している被災民の方々に対して、できるだけの支援活動をしていきたいと思っております』って言ったんだよー」

「帰る」

やってられっか。

「待って待って待ってー！」

その後、すったもんだのあげく。

なぜかは知らんが、姐さんの答えをそのまま言えば問題のことごとくが正解だったことに気づき、任せると一発で正解した。

どこをどうしたら『カカのマネ』をする豚を見分けられるんだ。

わけわからん。

ともかく、そんな苦労をして手に入れたプレゼントは、一枚の紙切れのみ。

書かれているのは、『そのに、クイズ』という言葉だけ。

「むむ、その裏にも何か書かれている気がするわ！」

「おお？　ほんとだ。なんでわかった姐さん」

「なんか受信した」

あんたほんとにナニモンだ。

それはともかく、書かれているのは……『が』という大きな文字だけ。なんじゃこりゃ。

「はいはい、本番はこれからですよー」

「あん？　サエ、っとと、押すなよ」

「なにかにゃなにかにゃ、うはは」

オレたちはどこへ連れてかれるんだ？　お、おい――

## カカの天下６６８「サンタワールド展開中」（後書き）

まずは小手調べだ。
と三人の部屋の様子を書くつもりが、二人で手一杯だったぜぃ。
でもクリスマスは明日だぜぃ。だから明日で完結させるぜぃ。
長くなりそうだぜぃ笑

とりあえずメリークリスマス・イブ！！
本番はここからだ！

## カカの天下669「メリー・クリスマス」

――サユカサンタの部屋。鼻血ペア、トメ&サラ。

トメです。

なぜか自動的に僕らのペアはサユカちゃん部屋行きとなりました。それが当然といわんばかりの流れになったのは疑問ですが、特に異論はないのでよしとします。

そして『サユカサンタの部屋』へと入るといきなり「これ着てください」と衣装を渡されたのですが……あの、この服、さ。

「トメさん、サラさんっ！　着ましたか？」

「私はオッケーです。トメさんは？」

「や。その、この服」

「着てくださいねっ！」

「早くしてくださいよ！」

ぐぐぐ、放り込まれた試着室で衣装を片手に悩む僕。着るしか……着るしかないのか！？

く、クリスマスだしな……関係ないけど。

仕方ない、か。

いそいそ。

「……着たぞ」

「はーいっ！　ではこちらへどうぞっ！」

試着室から出ると、そこには――

「改めまして、メリークリスマスです二人ともっ！」

「あ、ああ」

そのサンタらしからぬサユカちゃんの姿に、少し圧倒された。

まるで舞踏会にでも参加するかのような豪華なドレス、先日のお結び式に用意されたものとはまた違う、フリルだらけの可愛らしいデザインだ。でも髪のティアラはあのときのものかな？

「サユカちゃん可愛いですよね！」

そういうサラさんも着替えていた。こちらは……なぜかトナカイの着ぐるみ？　軽そうな角を頭につけて、鼻にもピエロのような赤い玉をのせている。しかしオーバーオールのトナカイ衣装……結構、身体のラインが出るな。サラさんスタイルいいから、こう――いかんいかん。紳士として、そんなとこ見ちゃいかん。

「で、でも……ぷ」

「トメさん……ステキですっ！」

そう、人の衣装を見てる場合じゃないのだ。

僕が渡された衣装。それはどこからどう見ても、お姫様の服だったからだ！

姫と言ってもあれだ、ドレスじゃなくて着物。時代劇とかで出てくるようなお姫様が着る、十二単っぽいやつ。本物じゃないからあっさり着れたけど、これ……男の僕が着るもんじゃないだろう！？

「あはは！　ここまで似合うと女としての自信なくしますよね」

「トメさん髪も伸ばしたらどうでしょうっ」

「あ、サユカちゃんそれいい考え。カツラないかな？」

「あとで探しましょうっ」

きゃいきゃい騒ぐサラさんサユカちゃん。本気じゃないよな、冗談だよな。いくらなんでも嬉しくないぞ。クリスマスってことで無礼講ってことで、サービスで着てやってんだからな。

「じゃーん！」

「おおタマちゃん。君も仮装か」

「きゃー！　可愛いー！！」

サラさんが目をキラキラにして叫んだのも無理ないことだろう。ちっこいタマちゃんは黒い角と黒い翼、黒いタイツに身を包んだプ

チ悪魔の格好をしていたからだ。ちびっこ好きにはたまらない可愛さとなっております。

「それでサユカちゃん？　こんな格好して、一体なにするの？」

「あ、はいっ！　ではどうぞ、クリスマスプレゼントです」

あっさりと差し出される一枚のカード。

「あれ、これだけ？　てっきり何かするのかと思ってたんだけど」

プチ悪魔タマちゃんがきゃいきゃい走り回っている部屋には、何本もクリスマスツリーが立っている。各部屋にイベントが用意されているんだろうなーと予想していたから、この木々もそれに使うもんかと。

「は、はい……カカすけもサエすけも、イベントを考えてました。でも、その、わたしはそういう愉快なことを思いつかなくて」

スルスルスル……

ん？

「そしたらですね、カカすけとサエすけが、ただ皆で着飾ってプレゼントを渡すだけでいいんじゃないかって言ってくれてっ！」

スルスルスル……なんだこの音。タマちゃんが駆け回る音じゃないよな。

「だから、ですね。衣装も頑張って、部屋の内装も頑張って、可愛

くしてみたんですっ！」

スルスルスル……衣装も、頑張って？

「どうですか！？」

「どうですか、って。ねぇサラさん」

「うん、トメさん。頑張りすぎ、かも」

「え？」

サユカちゃんの視線が下へ向く。

自分のドレスを見る。

その、いつの間にかミニスカートになったドレスを。

「え？　え？　えええええっ？　なにこれなにこれっ！？」

スカートの丈がどんどん短く……

「きゃあああああっ！　い、糸がほどけていってる！？　やっ、今度はお腹の部分まで無くなってくわっ！　なんでなんでなんで！？」

足はもちろんお腹もへそ出しで、どんどんセクシーな衣装に……

「あ、タマちゃん！？　タマちゃんでしょわたしの糸引っ張ってるの！！」

ああ、だからずっと走り回ってたのか。

「待って！　止まってタマちゃん！！」

「やー」

「やー、って……いやあああああっ！　見える、見えちゃう！！こうなったら捕まえて――ああ、ツリーに糸が絡まってうまく動けないしほどけないしきゃあああああああっ！」

僕、止めようとしたんだよ？　紳士として。

でもなんか、サラさんが僕の腕を捻り上げてまで動きを封じてくるから……

仕方ないよね、うん。

「見ないでえええええええええっ！！」

ごめんサユカちゃん。

その慌てふためくおもしろダンス、サラさんと二人で堪能させていただきました。

ちなみに下も上も、ギリギリのところで糸がほどけないように細工されていたらしく、大事な部分は見えないで済みましたとさ。

「はぁ……はぁ……は、恥ずかしすぎる……」

「大丈夫だよ、サユカちゃん」

「すごくおもしろかったです！」

「そんな感想いやぁぁぁぁっ！！」

「サラさん正直すぎ！　サユカちゃん。大丈夫、可愛かったよ」

「……本当ですかぁ？」

「ほんとほんと」

ほとんど泣いていたサユカちゃんは、顔を手でぐしぐしと拭いて、

「じゃあ、いいです。幸い、トメさんとサラさんにしか見られて、ないし」

そんな風に落ち着いた。

のも束の間、

「はいはい、次は肩出しショーでございます」

「いえーい。タマちゃん、ごー」

「うはは！　いいぞてめぇら、もっとやれ！」

「サエったらいぢわるー、さすが私の娘♪」

「あらあら、頑張ってサユカ君」

「タマちゃんの役、あたしがやりたいな」

「あ、次はクララがやるんです！！」

「なんで皆いるのよぉぉぉぉぉぉっ！！」

僕が着替えている間にイベントが終わったらしい皆は、実はこっそりとサユカちゃんのおもしろダンスを見学していたらしく……無慈悲にも、第二幕が始まるのだった。

ごめん、サユカちゃん。君の困り果てて暴れる様子はとてつもなく面白かった。

そんな騒動がひと段落して。

ちびサンタ三人（一人半泣き）に案内されるがままに大広間にくると、パーティーの準備がすっかり整っていた。

所々に付けられた飾りは、色折り紙を輪にして繋げたものだろう。懐かしい、小学校の頃とかよく作ったわー。

「うう、私たち……なんでクリスマスイブにこんな飾りばっか作ってるのかしら」

「アヤ坊、その疑問は改装を手伝い始めたときに持つべきだったよ」

「あら、わたくしは好きですよこういうの」

あそこでせっせとまだ飾りつけしてるのは、カカのクラスメイトだな。なんでそれぞれ赤、黒、ピンクのパジャマ姿なんだろう。

いや、よくよく見れば全員、衣装替えしている。大広間へ移動する前に、あの部屋で全員着替えてきたのだ。

「おうトメ」

「テン……巫女服？」

白い羽織と赤い袴が眩しい神聖な服。しかし完璧にコスプレに見える。だってテンだし。片手にジョッキ持ってるし。

「似合うか？」

「ノーコメント」

お、あそこで飾りつけを手伝ってるのはキリヤか。衣装は……デンジャーケロリン柄の赤黒いＴシャツだ。なんだか内臓出てるようにも見える。

「あいつだけ普通っぽいな」

「ああ、なんかね？　聞いたとこによると、この前の誕生日にカカちゃんたちがもらった服を皆に着せまくってるらしいよ！」

なるほど、道理でバラバラだと思った。

「しかし姉……白無垢？」

「ひっひっひ、どうよ」

ウェディングドレスは死ぬほど似合わなかったが、なぜかこっちは似合うな。

お？　向こうで料理作ってるのはもちろんゲンゾウ三姉兄弟、サンタの格好のままだが、もう一人小さな影が。

「おう嬢ちゃん。味見してみろや」

「……ん、もちっとガラムマサラいれて」

「あいよ！」

なんか一緒にカレー作ってる、しかも料理人に意見してる。ガラムマサラって確かスパイスだよな。あのちっさい雪だるま姿の子、カレーのプロか？

「はい、ちゅーもく！！」

お？　カカの声だ。各々で自由にしていた皆の視線が集まる。

「カカ殿さまー！！」

「はっはっは！　頭が高い！！」

「君の背が低いんだから仕方ないでしょっ」

拍手しながら盛り上げる、魔法使い姿のサエちゃん。

どっかのテレビで見たかのような殿様姿で大威張りのカカ。

そして先ほどのセクシーなドレス姿のままのサユカちゃん。開きなおったらしい。

「諸君！　私たちからのプレゼントは受け取ったかな！？」

プレゼント？　ああ、この紙のことか。大変なことになってるサユカちゃんに注目してて、結局見てなかったけど。

「あら、トメ君ももらったのね。そのカード」

「母さん」

すげぇ。母さんの衣装すげぇ。

どんな衣装か？　内緒だ。とにかくすげぇ。

「あらあら、弟君たちもカードなんだね。なんて書いてあるの？」

母さんのカードには『そのいち、おいかけっこ』という言葉と、裏には『と』の文字。

姉のカードには『そのに、クイズ』という言葉と、裏には『が』の文字。

そして僕のカードには『そのさん、お着替え』という言葉と、裏には『り』の文字。

他のメンバーもわらわらと集まってきて、その三枚のカードを見

比べてみる。何が言いたいんだ、わからん。

「ふふふ、お悩みのようだね？　そこでもう一枚、カードがあるのだけど！」

む、これだけじゃないのか。

「ちょっとカカ！　それって！」

「僕たちが用意するイベントの賞品なんじゃないのか？」

抗議の声は二つ。アヤちゃんとニシカワ君、だったかな。

しかしカカはあっさりと、

「だってアヤちゃんたち、イベント思いつかなかったじゃん」

「う！　そ、そうだけど……こうなったら土壇場で、と思ってたのに」

土壇場で思いつきのままにイベントするのか？　カカじゃあるまいし……この子も相当に強い娘だな。

「ん、わかった。じゃハイ」

ぽん、とカードをアヤちゃんに渡すカカ。

「え？　え？」

「会場の手伝い、っていうイベントの賞品」

あらま、イベントする前にもらっちゃった。

「ちょっと！！　これって、子供が大人にプレゼント、っていうコンセプトでしょ！」

「キリヤンとか手伝ってたじゃん」

「私らは子供よ！？」

「あ、でもでも。アヤさんもニシカワさんもラブラブですし、大人の階段を上ってしまったということにしてしまえば」

「あ、うまいね妹ちゃん！」

「かかか勝手なこと言ってんじゃないわよ！！　ばか！」

「あぅ！？」

「えぅ！？」

仲良くすくみ上がるサラさんイチョウさん姉妹。

「おとなのかいだんのーぼるー♪」

そしてマイペースに口ずさむニシカワ君……大物になりそうだコイツ。

「むぅー！　トメだったわね。はい！！」

「あ、ありがと」

あんま話したことないのに呼び捨てにされてしまったが……と、とにかく。アヤちゃんからもらったカードを見てみる。

『そのよん、飾りつけ』と書かれていて、裏には『あ』の文字が。

なるほど、読めてきた。

「はっはーん、言いたいことがわかってきたぜ」

「テンちゃんも？　あたしもだよ」

わいわいと盛り上がる一同。カカたちの方を見ると、満足そうにふんぞり返っていた。

「トメ姫、近う寄れ」

「はい、お殿様――って姫言うなや」

忘れてた、僕いま姫の格好してるんだ。それにカカが殿様って…明らかに嫌がらせだろ、これ。

「はいはい、もっかい注目だよ！！」

カカの隣に立ったところで、もう一度張り上がる声。集まる視線。

「そのカードの裏の文字を組み合わせると、ある言葉になります！」

「でもねー、まだ一文字足りないんだよー」

「その一文字を、今から皆に当ててもらうわっ！」

やっぱりな、という顔で頷く一同。

カード裏の言葉は、『と』『が』『り』『あ』だ。そしてもう一文字。

「さて！　私たち、ちびっこサンタが大人にプレゼントしたい言葉とは……いったい、なんでしょーか！？」

殿様姿でサンタも何もないが、その問題に。

僕を除いた大人たちは、一斉に答えた。

『ありがとう！！』

「不正解」

『……え？』

ポカンとする一同。

「あ、ありがとな？」

「ぶー」

「ありがとよ！」

「ぶー」

「ありがとね！？」

「ぶー」

「ありがとん！」

「ぶー」

「むしろ、ありがと！」

「ぶぶー」

次々と出る答え、しかしことごとくハズレ。

はぁ、やれやれ。

「トメ姫、答えはなんだと思う？」

自慢じゃないが、僕は誰よりもカカという小娘を知っている。

だからこう答えた。

「ありがとぶ」

「正解！」

『えええええええええええええええええええ！？』

アリが飛んでどうする！？　と思った皆さん。いいことを教えて

あげよう。

別に答えはなんでもよかったのさ。

だって、『ありがとう』で正解なんだから。

追いかけっこ、クイズ、お着替え、飾りつけ……子供の頃を思い出すようなイベントたち。

日ごろ世話になっている大人に『子供の頃』と一緒に、『ありがとう』という言葉をプレゼント、ということなんだろう。

たしかに素晴らしいプレゼントだ。

でも、

「土壇場で恥ずかしくなったんだろ？」

「うっさい黙れトメ姫」

サエちゃんとサユカちゃんまでポカンとしていたのがその証拠。

だから僕がボケという助け舟を出してやったというわけだ。

顔を密かに真っ赤にしてる、可愛い殿様サンタの頭を撫でる。

「こっちこそ、ありがとな」

「……メリークリスマス」

おう、メリークリスマス。

大人も子供も入り混じり、今宵は飲めや歌えやの大騒ぎ。

先ほどのイベントについて語り合ったり、まったく関係ない話をしたり、料理に舌鼓を打ったり、カカが殿様ゲームを始めたり、サエちゃんが高級黒魔術師セットとか言ってあやしい壺をヒッヒッヒーとか言いながらかき混ぜたり、サユカちゃんがまたもやイヤンなことになったり。

言い始めればキリがないので、これだけ伝えておこう。

楽しかった、そして子供たちの言葉が嬉しかった。

だから身の程知らずにも願ってしまった。

この日を生きる全ての皆に、聖なる夜を。

いや――

楽しい夜を。

メリー・クリスマス。

## カカの天下６６９「メリー・クリスマス」（後書き）

メリークリスマス！！
いや、頑張ってしまいました笑
この話自体が皆様へのクリスマスプレゼントになればいいなーなんて思ってます。

めでたしめでたし。
あれ？　でも。
何か忘れていませんか……？

## カカの天下670「メリー・クリスマした」

――クリスマスの後日談、そのいち。

「はい、テンカせんせー」

「お、おお。サンキュー、サエ」

皆がわいわいとプレゼント交換する中、こそこそと隅で交換するテンカとサエ。

「それで、またあの指輪してないんですかー？」

「うっせぇな……」

「せっかくこういうときのために誕生日にあげたんですからー。普段でもしてほしいですけどー」

「そりゃ確かに親子そろって、そうだけどよ、でもな――」

「何をこそこそしてるのかな！？」

「うわぁ！？」

突然現れたユイナの声に驚いたテンカは、サエから受け取ったプレゼントを思わず落としてしまった。

「あらら？」

「あーあー」

その、『笠桐結乃の月気球』という題名が書かれた本を。

「あらあらあら？　これって私の写真集だよね。来月発売のはずなのに、どこから手に入れてきたの？　すごーい！」

マイペースに喜ぶ笠桐結乃（芸名）本人さんとは裏腹に、テンカはダラダラと汗を垂らしながら固まっていた。

「ん？　どうしたのかなテンカ君」

ユイナはその様子をおかしく思って聞いただけだった。

しかしテンカはこれ以上ないほど狼狽して、

「ち、違う、違うんだ！」

「はい？」

「お、オレは別にあなたのファンってわけじゃなくてだな！　親子そろって大ファンってわけでもなくてだな！？」

「はぁー」

「違うんだぞ！？　去年のプレゼントでサエに写真集もらって密かに喜んでたとか、それがきっかけでサエに知られて誕生日プレゼントに『結乃ＬＯＶＥ！』とか書かれた親子おそろいリングもらったりもしてねぇし！！」

「なるほど」

「夏休みにこっち来るって言ってて、来たらカカにオレも呼ぶように言っておいたのに呼ばれなくて、それで密かに落ち込んだりとかもしてねーし！」

「なるほどなるほどー」

「去年も今年も近くで話してて舞い上がりそうになるのを必死に抑えてたりとか、ぜってーねぇんだからな！！」

どう見ても舞い上がっているテンカの言葉は、

「握手」

「ぴ！」

「ぷらす、抱擁こーげき♪」

「ぴゃ！？」

あり余るファンサービスによって、妙な鳴き声と共に止まった。

ちなみに言うまでもないと思うが、今までのテンカの言動は逆の意味にとると正しくなる。

「あーあ、バレちゃったー。でも幸せそうだから、いっかー」

一人事情を知っていたサエは愉快そうに笑いながら……ユイナに抱かれ、かつて誰も見たことのない顔をしているテンカの写真を撮

るのだった。
何枚も。

――クリスマスの後日談、そのに。

「こ、ここでクリスマス会が行われていると聞いて！」

「俺も！　俺も参加したいいいいぃ！」

「あたしなんかプレゼント持ってきたのよ！」

先日の結婚式のように、再び群がってきたカカたちのファン。いつぞやの漫才大会で魅了した人々の熱は、いまだに冷めないらしい。

しかし、立ちはだかるは鉄の肉壁。

「うおおおおお！　なんで俺ばっかりいっつもこんな役なんじゃあああい！！」

嵐のように振り回される豪腕に、為す術も無く吹き飛ばされるファンたち！

「でもサエ様のためじゃあああああ！」

ゆーたというでっかいお兄さんは、今日も今日とて輝いているのでしたとさ。めでたしめでたし。

――クリスマスの後日談、そのさん。

「なぁカカ」

「なによトメ姫」

「クジのさ、鼻毛とか鼻水とか鼻血とかあったじゃん。あれって意味あんの？」

「ないよ？」

「……ないのか」

「うん、なんとなくつけただけ」

めでたしめでたし。

――クリスマスの後日談、そのよん。

「おお、母上。首尾はどうだ」

「あのパンツの件じゃろう？　問題ない」

「そうか、クリスマスに間に合ってよかった」

「うむ。一仕事終えたのう」

「たまには親子で一杯やるか」

「付き合おう」

クリスマスの夜。黒いサンタ二人は、さらなる闇へと消えていくのだった。

――クリスマスの後日談、そのご。

「ゆーたさんに、勢いで追い出されてしまった……」

一人でそう愚痴をこぼすのはタケダ。どうやらカカたちファンへの攻撃に巻き込まれて、屋敷の外まで吹っ飛ばされたらしい。

「はくしゅ！！　うう……寒っ……昨日からあやしいとは思っていたが、まさかこれは、風邪をひいたか？　ああ、そういえばどこぞの風邪の菌を移されたことがあったか……あの翌日に大丈夫だったから甘く見ていた。くそう、あらかじめ薬を飲んでおけば、あの鉄壁に再挑戦するのに」

はくしゅ、と小さなくしゃみをもう一度して。

「……帰ろ」

せっかくのクリスマスだからこそ、体調管理はするべきだった。

タケダは胸中で後悔しつつ、寂しく家へと帰っていくのだった。

あーあ。

しかし帰ってみれば温かいご飯とケーキが待っていて、家族と過ごすのも悪くないなーなんて思うのだった。なんだかんだでめでたしめでたし。

ただし翌日、風邪は悪化した。

――クリスマスの後日談、そのろく。

「ゆーたさんに、勢いで追い出されてしまった……」

おまえもか、ということでシューも誰かさんと似たような状態だった。

「うう、食材などなどにお金を出したから、小銭すら残っていない……いいや、帰ろ」

ゆーたという鉄壁に立ち向かうという勇ましい考えなど浮かぶはずもなく、とぼとぼと帰ろうとするシュー君。しかし気づく。

「は!?　そ、そういえばうちの家族は旅行に行ってて留守なんだ。帰る場所が……ない」

愕然とするシュー君。どこかに泊まる?　いいやお金が無い、この寒空の下で野宿するしかないのか!?

しかし、そのとき。

「あ、あれは！！」

シューは地面にへばりついた。

お金だ、なんとお金が落ちている。結構な額だ。

「やった……これだけあれば漫画喫茶になら泊まれる！　神様、いいえサンタさん、ありがとうございます！」

先日、とある二人が焼き芋を買おうとしたときに落とした小銭が一人の男を救った。これを奇跡と呼ばずなんと呼ぼう。

「へへ……サンタさんっているんだ」

小さな幸せをかみ締めながら、シュー君は漫画喫茶へ向かうのだった。

めでたしめでたし。

ただし満室だった。

――と、いうのはさすがに可哀想だからやめておこう。

――クリスマスの後日談、そのなな。

「ふー……飲んだ、飲んだ、飲みすぎた」

深夜、すでにぐっすり眠っているカカを背負って帰ってきたトメ。姉や母はそのままサカイ宅で飲み明かすらしいが、何よりも兄としての自覚が勝るトメは一足先に帰ってきた。

カカを部屋まで連れて行き、ベッドに寝かせる。

「はなげ……」

「だからなんで鼻にこだわるんだっつーの」

相変わらず妙な寝言をもらす妹に苦笑しながら、おやすみ、今日はありがとな、と囁いて部屋を出る。

「うーん……なんか腹減ったな」

料理はもちろんかなりの量が並んでいたが、食べたのは随分と前の話だ。後半はお酒と会話が中心だったので、小腹が空いてしまったのだろう。

「なんか冷蔵庫にあるかな……お、あったあった」

ラップした料理が奥にあった。酔っていたトメは何の疑問も持たずにラップをはぐって口にした。

「おえええええええ！！」

その料理は完全に悪くなっていた。まずさと刺激に酔いが醒める。おそらくほぼ腐りかけ、一体いつラップしたものなのか……今のトメには思い出せない。ただ一つ、思い出したのは、

「クリスマスの占い……当たった」

先日やったＫＹ占い。石鹸ケーキを食べたときと似たようなプレゼントをもらうことになる――見事に的中していた。

これは教訓という名のプレゼントだ。酔ったときは気をつけろ、調子に乗るな、いい思いしすぎだ、モテすぎだ、そのポジション代われや――そういったメッセージが込められているに違いない。

「誰だ、こんなプレゼント考えたの……」

私だ。まいったか。

メリー・クリスマス。

## カカの天下６７０「メリー・クリスマした」（後書き）

見ての通り、クリスマスの後日談。
そして数々のさりげない伏線回収でもあります。果たしてみんな「あ、これ伏線だな」という部分を全て見つけられていたかな!?
伏線が小さすぎ？　ふはは、どうだまいったか。

さてさて、明日からは普通のお話に戻りますかねー。何を書くかは……明日考えます＾＾

# カカの天下６７１「若くて自由で無敵なおかた」

おはようございます、トメです。ふわぁ。

クリスマスも終わり、すっかり年末モード。仕事が忙しい中でも土曜日は休日出勤したくなかったので、頑張りました。なのできちんと休みをゲット、そしてきちんと寝坊しまくりです。

「おはよ」

「おはようトメ君」

「……」

おー、起きたら母さんが居るってのもいいもんだなぁ。ここ最近、毎朝思うけど。

「眠そうだね、ママご飯作ろっか？」

「んや、いいよ。そんなに腹減ってないからみかんでも食う」

「そっか」

「……」

さてさて、みかんの積まれたカゴを持ってコタツへ入ろう。

「で、そこの小娘は返事してくれないのな。寝てんのか？」

母さんの膝に目を向ける。そこにはふやけた顔をした妹の頭が乗っていた。コタツに身体が入ってるから生首にも見える。

「ふふふ、我が妙技に声も出ないのだよ」

「……んぅ」

なるほど、母さん最強の必殺耳掃除か。あれ、ほんと声出なくなるんだよなぁ。姉の技もすごいが、本家には敵わん。

「あとでトメ君もしてあげるね」

「む……」

「あ、恥ずかしい？　恥ずかしいんだ。あは、かーわい」

「うっさい。こんな歳になってまで母親に耳掃除なんか――」

拒否の言葉を口にしかけて、カカの顔に視線を落とす。

とてつもなく幸せそうな顔。母さんの耳掃除、尋常じゃないほど気持ちいいんだよな……僕の意地とあの幸福、どっちを取るか。

「お願いします」

「はいな♪」

幸せになって何が悪い、うん。とりあえずみかん食べよ。

「あむあむ」

「ねーねートメ君」

「なにさ」

「トメ君って誰が好きなの？」

「ぶっ！！」

みかん吹いた。

「な、なんだよ急に」

「ほらぁ。クリスマスで見てたら、良い感じな子がたくさんいたじゃない」

「そうか？」

「うんうん」

「例えば誰だよ」

「サラ君は？」

「サラさんは、まぁ、いい友達だし。最近話しやすくて面白いけど」

「胸とお尻どっちが好き？」

「胸――じゃなくて何をいきなりそんな質問に！？」

「ふふ、どっちもすごいじゃないのサラ君」

いや、まぁ、確かにスタイルいいけどさ！　ってなんで素で答えてるんだ僕は！？

「ふむふむ、テンカ君とかは？」

「テンは完全に男友達扱いだなぁ。巫女服でジョッキが似合うやつの、どこに女を見ろってんだ」

「えー。色々バレて慌てまくるテンカ君、可愛かったのに」

「なにそれ」

「見てなかったのかぁ。よし、今度またやっちゃおう」

何をやるのか気になるけど、聞いても教えてくれないんだろうな。この人、楽しみを見つけると密かに土壇場まで取っておくタイプだし。

「おっきい胸とちいさな胸、どっちが好き？」

「別にどっちも――だからなんでそんな質問になるのさ！？」

「あはは、気になるじゃーん」

そしてなんでまたもや素で答えてるんだ僕は！？

「どっちも？　胸の大きさは興味ないのかな」

「どちらかというと、くびれ――じゃーなーくーてー！」

「きゃー、予想外な答えにビックリ！　ゆいにゃんまだまだ修行が足りない♪」

恐るべし母さん節……特に何かしているわけでもないのに正直に答えてしまう。

「じゃあ話を戻すけど、サユカ君は？」

「サユカちゃんか」

告白されたこともあるけど……

「年齢がなぁ」

「トメ君、死刑ね♪」

「別に母さんのこと言ってないでしょが！？」

「あはは、冗談よん」

母さん見た目すんごい若いけど、やっぱりそういうの気になるのかな……こればっかりは本気かどうかわからない。

「それでそれで？」

「や、さすがに小学生はヤバイでしょ」

「えー、くっついたら一番面白いのに」

「カカみたいなこと言うな」

「歳老いたサユカちゃんと現在のサユカちゃん、どっちがいい？」

だからさ、だからさ、だからさ！　なぜいきなり究極の選択になる！？

「ねーねー、どっちー？」

「みかん無くなったな」

「誤魔化さないで、マジメに考えてよぉ」

じゃ、マジメに考えて……

「養育費と福祉費って、どっちが多くかかる？」

「トメ君、せこい」

「トメ兄せこいよ」

「弟ちゃん。せこ！」

「息子よ、せこいぞ」

「おまえらどっから湧いて出た！？」

うちの家族は今日もダラダラ平和です。

え、質問の答え？

そりゃ……今だろ。

や、ロリコンとかそういうことじゃなくて。歳老いてたらすぐ死んじゃうじゃん。寂しいじゃん。

「つまんない答えにママがっかり」

「悪かったな！！」

## カカの天下６７１「若くて自由で無敵なおかた」（後書き）

クリスマス頑張ったので、今回はゆるゆるーっとした一日を書いてみました。

でも会話内容は……

ツッコみたい人、ご自由に＾＾

# カカの天下672「モンスター」

「もきゅー！」

おはようございます、カカです。今の発言に意味はありません。

ただいま冬休み中、のんびりまったりお寝坊してみたのですが、部屋寒っ！　というわけで毛布に包まったまま右手だけちょこんと出して、カーテンを開けてみます。

「ゆきゅー！」

今のは意味があります。外に薄ら雪が積もっていたからです。もきゅーの雪版でゆきゅーです。

「んー……」

白い、白いね。

白いもん見てたら黒いもん見たくなってきた。

サエちゃんに会いに行こう。

「……寒い」

雪積もってるだけあってホント寒いなぁ。毛布から出たくないなぁ。

よし、このまま会いに行こう。

ええっと、このままだと毛布が濡れるから……お、ちょうどいいところに大きな黒ゴミ袋が。大掃除用にトメ兄が持ってきたやつだ、これを……

「んしょ、んしょ」

出してた右手が冷たくなってきたので、今度は左手を出して一所懸命にゴミ袋を開く。

「んし」

開いた。ここに毛布に包まったまま私の身体を入れて……

「んしょっと」

左手一本でなんとか内側から結んだ。

よし、これで防水対策バッチリのカカ団子が出来上がりだ。きっと外から見ると、中身の詰まった黒いゴミ袋にしか見えないに違いない。でも「外見ばかり気にしてはいけない、大事なのは内面だ」ってトメ兄が言ってたから、気にしないことにする。

さて、これから……ん？

んん？

ああ。

そっか。

右手を解放。

「はぁ！！」

気合一発正拳突き。ゴミ袋に一つ、横穴を空ける！

「ぷはぁ……息できなかった」

空気穴おっけー。適当に毛布に隙間つくって視界もおっけー。さぁいこう。

いざ、外へと飛び出そう！

わっしゃ、わっしゃ、と袋と毛布を擦り合わせながら、全身のばねを使って跳ねながら移動。

空気穴から右手だけ出して、窓を開け放つ。

そして飛び出す！！

ちなみにここ二階ね。

飛んでいる……私はいま、妙な姿で飛んでいる！！

たーのしー！！

ぼす、と軽い衝撃と共に着地。すでに手は引っ込めてある……ふ、やはり私の毛布はさすがだ、危険なんかありゃしねぇ（下に雪があるとはいえ、実際にはとても危険です）

さて行こう。

横穴から雪とか水が染みないように気をつけながら、わっしゃわっしゃと道へ移動開始。

わっしゃ、わっしゃ。おお、意外といけるじゃん。寒くないし。

「うおぉあ!?　な、なにあれ」

「ご、ゴミ袋が歩いてる？　いや、跳ねてる!?」

（皆さん、お騒がせしまーす！）

「み、見なかったことにしよう」

「世の中、不思議がいっぱいだわ……」

あれ、声を出したつもりなんだけど。毛布とゴミ袋に遮られて聞こえてないみたい。

ま、いいや。なんか面白いから遠回りして行こっと。

わっしゃ、わっしゃと移動中。

「く、黒くて丸い妖怪じゃあああああ！」

む？　どうした息子夫婦連れのおばあちゃん。

「不吉じゃああ、この世の終わりじゃあああ」

「お、お母さん落ち着いて！！」

「そうですよ、お養母さん。せっかく私たちが結婚したばかりなのに、そんなに早くこの世が終わっては困ります」

「違うんじゃあああ！　きっと今年と共に最期なんじゃあああ！　おまえらが」

「なんでうちら！？」

「ダメ嫁は死んでしまえ」

「それが本音か！？」

なんか大変だね。ご苦労様です。

華麗にスルーしてわっしゃわっしゃと移動中。

「ひっ！？」

（おやサユカン。奇遇だね、って聞こえてないか）

「な、なになに？　なんなのコレ、黒くて丸い……え、なに？」

わっしゃ。

「ひ」

わっしゃわっしゃ。

「な、なんか来る、なんか来るっ」

わっしゃわっしゃわっしゃわっしゃわっしゃ――

「来るなあああああああっ！！」

うはははははははははははは！

一通りサユカンを追い掛け回して遊び、満足した私は再び移動中。
今度は商店街を横断してます。

「ど、どこの店だよ！　あんなゴミ捨てたの！」

「セイジ食堂じゃないの？　あそこ変なメニュー出すし」

「じゃ、じゃあ、あそこからここまで動いてきたのかよ！？　捨てられたまま？　い、いったい何が入ってるんだ……」

うーん、大騒動だねぇ。黒いゴミ袋が道を歩いているだけなのに。

「あ、カカちゃん。やっほ」

（あ、お姉だ。やっほー）

「どこ行くかは知んないけど、気をつけてねー」

（はーい）

爽やかに挨拶を交わしてわっしゃ、わっしゃと移動中。あれ、なんかおかしい？　気のせいか。

ズボッ！！

……ん？　なんだこの音。

「か、カラスがゴミ袋の妖怪にクチバシ攻撃を！？」

説明ありがとう、通行人のかた。

「で、でもなんか、クチバシ抜けないみたいだぞあのカラス」

ほほう？　ならば――右手解放！

「うわ、ゴミ袋から手が生えた！？」

ここらへんかな。

「うおお！？　身動き取れないカラスを掴んだ！！」

てい。

「自分の身体からカラスのクチバシを抜いて――」

とぉ！

「うおおおおおお！！　抜いたカラスのクチバシを地面にブッ刺した！？　すげぇ！　なんかよくわかんないけどすげぇぇぇぇ！！」

ありがとう、ありがとう、声援と解説をありがとう知らない人。

さーて、面倒なので片腕生やしたままわっしゃ、わっしゃと移動中。なんかすっごい怖がられてる。

やがてたどり着いたサエちゃんち。

ピンポーンと呼び鈴を鳴らしてしばらく。パタパタという足音と共に、おっきな扉が開く。

「はーい、どちらさ――」

よう、とばかりに気軽に手を上げると、ビクッ！　と身をすくませるサエちゃん。

（さすがに私だと気づかないよね。よーし、このままイタズラを）

「……！」

（おや、ビクッとなったまま固まってますよサエちゃん。サエちゃん？）

たたた、と意外と機敏な動きで近づいてきたサエちゃんは、ぐいっと私の身体を持ち上げて――

「えーい！！」

たまたま近くに来ていたゴミ収集車へと私を放り込んだ！！

「おーかーあーさぁぁぁぁぁん！！」

そのまま泣きながら家へと帰っていった……なんだかさすがに怖かったみたいだ、周りの反応聞いてたらカラスの血とか付いてたらしいし。きっと勇気を振り絞って得体のしれないモノを退治したって感じなんだろうな、って。ん？

ちょっと、ちょっとちょっと？

ゴミ収集車動いてますよ？

お、降ります、降りまーす！！

――その後。なんとかして帰還した私は、妖怪カカ団子を封印することを誓ったのだった。

## カカの天下672「モンスター」（後書き）

よーし、今日は張り切ってカカに変なことさせるぞー。

というわけで書きあがった話がコレです。

どう？

# カカの天下６７３「今年最後の詰め合わせ　まえ」

サラです。もう年末です。

ちょっとお休みをもらって家でゆっくりしていたら、すでに仕事納めを終えて自由の身となったお父さんがおずおずと話しかけてきました。

「さ、サラ？」

「あらお父さん。どしたの？」

「年末はどうするつもりだもしよかったら家族みんなで食事とかどうだろうたまには高い店でも予約して贅沢するのも悪くないのでは――」

「バイトです」

恥ずかしいのか緊張しているのか早口でまくし立てるお父さんを一刀両断。カツコさんと仲良くなってから口撃力は上がる一方だ。

「……お父さん、勇気、出したのに」

「はいはい、弟ちゃんと妹ちゃんがいるでしょ」

「そ、そのバイト先に行くからな！」

「はいはい、神社で巫女さんやってるからどうぞ。お守りとおみくじは絶対買ってね」

やれやれ。不器用ながらも頑張ってるのがわかって、ちょっと可愛いじゃないの。

「よーし、お父さん安産祈願の買っちゃうぞー」

「なんでよ！？」

「もうすぐいるんだろ？」

「ちょ、え、ちょ！！」

――サラが今年、手に入れたもの。

家族の絆。

キリヤです。もう年末です。

主にファミレス勤務、ヘルプで居酒屋『病院』をかけ持ちバイトしている私は、この時期になると忙殺されて死にそうになります。クリスマスはディナーコース中心の店に客を盗られるので暇でしたが、年末となるとそうは行きません。

「キリヤ君、おつかれ」

「はっはっは！　院長店長もお疲れっしゅ！」

「キリヤ君が噛むとはね。相当疲れてるんでしょう」

「はっはっは！」

ヤケになって笑っていますが、この時期に昼のファミレス、夜の居酒屋なんてバイトをしていると、それはそれはバカげた仕事量になるのです。しかもバイトリーダーなどやっていると……正直、倒れそうです。

「あと少しです、今年も乗り切りましゅよ私は」

「噛んでる噛んでる。コホン、それなんですがねキリヤ君」

「なんでしょうか」

「三十一日は休みにしようと思うんです」

「なんでしゅと！？」

実はトウジ店長にも「疲れたろ？　たまにゃ休め」という言葉と共に三十一日はお休みをいただいていたのですが……つまりは大晦日、完全フリーということに。

「しかし院長店長、今年は年中無休で営業すると言っていませんでしたか？　私は構いませんよ、バイト先で年を越すのはいつものことなので」

「ああ、そうじゃないんです」

院長店長は遠い目をして言いました。

「もうすぐ今年も終わり……忙しさを実感しながら、ふと気づいたんですよ」

「ほう」

「『病院』が年中無休って、縁起が悪くないですか？」

「……」

その通りです。

「縁起が悪いのヤなので、最後くらいお休みにしましょう」

「そ、そうっしゅか」

となると、大晦日はお休みですかぁ。

どうしょう。フリーターになってから大晦日が空いたことなど無いので、過ごし方がわかりません。

――キリヤが今年、手に入れたもの。

休日。

「仕方ありませんね、トメ君にでも連絡してみましょう」

そして、休日を共に過ごせる友人。

タケダです。もう年末です。

「ゲホゲホゲホゲホ！！」

――タケダが今年、手に入れたもの。

風邪。

イチョウです、もう年末です。

風邪を引いたタケダさんをお見舞いに行きたいとインドさんにお願いされましたので、ご一緒しているところです。ただいまタケダさんちへ向かって移動中です。

「インドさんは年末をどうやって過ごされるのですか？」

「カレー」

「え、ええと、やっぱりカレーですか？」

「年越しカレー」

「そ、そうですか」

「……いっちゃんは？」

「わたくしは父と弟に付き合ってさしあげようと思っています。最近はマシになってきたとはいえ、今までの悪行のせいでロクな知り

合いがいませんので。わたくしが傍にいなかったとしましたら、きっと男二人でおそばをすすりながら意味もわからず泣くことになってしまうでしょう」

——イチョウが今年、手に入れたもの。

毒舌。

「いっちゃん、優しいね」

「えぅ！？　べ、別に他意はありませんのよ？　あまりに二人が哀れでしたので」

「うん、だから優しいね」

「う、まぁ、そういうことにしておきますわ。ほら、タケダさんの家に着きましたよ」

ピンポーン、と呼び鈴を鳴らします。

反応なしです。

「留守でしょうか」

「……仕方ないね。いっちゃん、他で遊ぼ」

「いいのですか？　そんなにあっさり」

「うん。あっさりカレーも好きだもん」

「インドさんがそう仰るならいいですけど」

「……でさ。ねぇ、わ、わわ、私の呼び方も変えてみない？」

「あらあら、それは面白いかもしれませんね。わたくしがいっちゃんですから、ええと……」

――インド、もといノゾミが今年、手に入れたもの。

好きな人。

いや。

好きな人たち。

タケダです。年末です。

「ゲーホゲホゲホゲホグホガホガッホォ！！」

――タケダが今年、手に入れたもの訂正。

呼び鈴も聞こえないくらいの風邪。

ゆーたです。年末です。

「今年もいっぱい踏まれたぜ！！」

――ゆーたが今年、手に入れたもの。

悦び。

セイジです、もう年末です。

「どうした姉貴。たまには三人そろって初詣、なんざらしくねぇ提案だな」

「はんっ、特別な理由なんざないよ。ただ、ね。毎年毎年、あたしらにゃ大晦日に休みがない。年始の挨拶もそこそこに店の仕込みを始めちまう」

そうだな。給食センターに勤めているとはいえ、飲食業界の巨匠たる姉貴に休みなどほとんどない。

「ずっとそうなのは、寂しいことじゃないかと思っちまっただけさ。三人だけの姉兄弟なんだし、さ」

なるほど。そう言われりゃ、そうだな。

今年は何の因果か、三人で仕事をすることが多かった。あの嬢ちゃんたちのせい――いや、あの嬢ちゃんたちのおかげか。

「付き合おう。トウジだって了承するさ」

「はんっ、嫌と言ってもぶん殴って言うこと聞かすがね」

「前みたいに包丁で殴ろうとするのだけは勘弁してくれよ、さすがの俺も白刃取りなんざ何度もできねぇんだからな」

ゲンゾウ三姉兄弟が今年、手に入れたもの。

新たな絆。

クララです、もう年末です。

「今年が……終わります」

すっかり年末ムードな人たちを木の上から眺めながら、クララは物思いに耽ります。

――クララが今年、手に入れたもの。

自分の身体、たくさんの友達、いろんな想い。

「年末……今年……」

そして人としての、様々な知識。

「って、どんな意味でしょうか。クララわかりません」

しかし少し足りない。

おほほ、校長です。年末です。

「もうすぐ春が来ますわね……」

あの桜を見れない春が来る、そう想うと切ない気持ちになってしまいます。

でも……でも。

先日見に行ったとき。あの木に、元気が戻っているような気がしてなりませんでした。

まさか……

まさか、ねぇ？

――校長が今年、手に入れたもの。

失望。

「なぜかしら……クララちゃんに、会いたいわ」

そして希望。

## カカの天下６７３「今年最後の詰め合わせ　まえ」（後書き）

もう今年も終わり……

というわけで。今年のまとめ的なお話にしてみました。丸々一年間カカ天を書き続けて……色々と思うこともありますのでね。

カカラジも、色々と投稿していただいて申し訳ありませんがあまり発表できそうにありません。年末大晦日スペシャルといこうと思いますので！

しっかし年末！　ほんっとアホみたいに忙しいので感想返信追いついてなくてすいません！

３１日は休みとなったので、ちゃんと感想返信して、色々と思い返しながらカカラジを書きたいと思います……

作業追いつかなくて来年になっちゃったらごめんね♪

## カカの天下６７４「今年最後の詰め合わせ　あと」

アヤです。もう年末です。

「ねぇニッシー。大晦日、どうする？」

「今年最後の夕日が沈むのを見る！」

さすがは無意味に西にこだわる男ね！　意味がわからない？　ほら、夕日って西に沈むでしょ。

「じゃ、じゃあ私も一緒に見るわ！」

「いいの？　アヤ坊。つまらないよ」

「いいのよ！」

「すごくつまらないよ？」

「いいのよ！」

「なんで自分はこんなことしてるんだろうって人生の意味まで考えちゃうよ？」

「それをやろうって意気込んでるあんたは何なのよ！？」

「僕は死ぬほど楽しいし嬉しいし興奮する」

「そ、そう」

いまだにニッシーのこういうところ、わかんないのよねぇ……

「アヤ坊、行く？」

「……行くわ」

いつかわかる日が来るかしら？

――アヤが今年、手に入れたもの。

ちょっとだけ素直な心。

――ニシカワが今年、手に入れたもの。

西。

シェーです、じゃなかったシューです。もう年末です。

クリスマスの夜、漫画喫茶で寝ていたら……なぜかゴミ収集車に運ばれました。ゴミと勘違いされたらしいです。なぜだ。

気がついたら遠いゴミ捨て場に放り込まれそうになったので、ぎりぎり脱出。

ゴミに成りすまして転々とゴミ収集車を乗り継いで――なんか途中で腕が一本生えた妙なゴミ袋も見かけたけど――なんとか我が家に帰宅。

「おお、タマ様！　お久しゅうございます！」

「くちゃい」

ですよねー。

――シューが今年、手に入れたもの。

ネタ。

――タマが今年、手に入れたもの。

強さ。

テンカです。もう年末です。

「あれ、母さん、どした」

「テンカさん……これ、どういうことかしら？」

「こ、これは！？」

オレがユイナさんにハグされている写真！？

「な、なぜこれを！？」

「郵便受けに入っていたのです」

サエか！　あんにゃろ、浮気相手の嫌がらせじゃねぇんだからよ！！

「これは一体どういうことなのです！？　ゆ、ゆゆ、結乃様と、こんな」

「まぁ落ち着け！　説明する！」

あのおとなしい母さんがこんな剣幕になるとは……よほど好きなんだな、結乃さん、もといユイナさんのこと。オレもだけど。

「――というわけだ」

お見合いのときのトメのことから生徒のカカのこと、やつらの母親だということを説明しきると、

「結婚しなさい」

「は？」

「結婚しなさい！　そのトメという人と！　今すぐ！　そうすればわたしと結乃様は――」

「あんたそれでも母親か！？」

「子の幸せを考えるのが母親……テンカさんも、結乃様がお養母さんになれば幸せでしょう？」

「そ、それはまぁ」

「そして親類になれるわたしも幸せ。みんな幸せで言うことなし！」

「いやいやいやいや！　なんか色々間違ってるから！！」

「わたし、もう絶対にテンカさんにお見合い話なんか持ってきませんからね！」

「そ、それはありがたいが！」

お、おとなしいはずの母さんが……強ぇ。ファン根性ってすげぇ。

――テンカが今年、手に入れたもの。

自由。

サユカです。もう年末です。

「あらサユカ。いつもの人たちのところへ行かなくていいの？」

「クリスマスは向こうで過ごしちゃったし、正月くらいはっ」

たまには家族孝行しないとねっ。

「いいんだぞ？　無理せずに、家族より男をとっても」

「べ、別にそういうことじゃっ！」

「ああ、サユカも大人になったのね！　年越しそばじゃなくてお赤飯のほうがいいかしら！」

「ちょっと、変なこと言わないでよっ！」

「はっはっは、僕はハンバーグが食べたい」

「あんたは変なこと言いすぎ！　空気読みなさいよっ！！　おそばか赤飯って言ってるのになんでいきなりハンバーグが出てくるのよ！？」

「僕、肉好き」

「そういうことじゃなくてっ！」

「あなた、ステキ」

「どこがっ！？」

「ステーキもいいな」

「あんたは話を聞きなさいっ」

「おやおや、気がつけばサユカに『あんた』呼ばわりされてるよ」

「まぁ、ダメよサユカ。この人を『あなた』とか『あんた』って呼んでいいのはわたしだけ」

「モテる男は辛いなぁ。チャーハン食べたい」

「あなた、さっき食べたでしょ」

「そうだった、はっはっは！」

ああ……どこからツッコめばいいんだろう……教えてトメさん師匠。

「うちの親子はいつの間にこんな風になったのかしら……前は普通だったのに、カカすけたちに目を向けてる隙にいつの間にか、こんな」

「だってサユカ、いつの間にかツッコミになってるんだもの」

「だからボケボケカップルと呼ばれたあの頃を思い出したのさ！」

「わたしのせいかあああああっ！？」

――サユカが今年、手に入れたもの。

ツッコミ力。

「――と、いうわけなんですけど。トメさんならこういうときってどうツッコみますか？」

『いきなり電話をかけてきたかと思えば……ツッコミ指南か？』

「教えてください、ししょーっ！」

『僕ならこう言う――いいからさっさと作れ』

「なるほど！」

そして、好きな人に電話をかけられるほどの小さな勇気。

サエです。もう年末です。

「ねーお母さん。カカちゃんに聞いたんだけど、前は年末にそばパーティしてたんだって？」

「そーそー、本家から離れたとはいえ懇意にしてくれた人は結構いたからねー。その人たちを集めて、一月一日になった瞬間にそばをすすったりしてたわー。懐かしいわー」

「もうしないの？」

「あのときは皆ともまだ仲良かったんだけど……いつの間にか用事があったり私が呼んだりしない限りは、私に近寄らなくなっちゃったんだよねー」

日ごろの行いだねー。

「だからサエは近寄ってー」

「はいはい」

「もっとー」

「はいはい。これで寂しくない？」

「うん、ぜーんぜん」

「じゃあ今年は二人でおそば食べようね」

「うんうん、いっせーのーで、で食べるよー」

「はいはい」

「フライングはなしよー」

「はいはい」

――サエが今年、手に入れたもの。

幸せ。

「すりすりすりすりすり」

「お母さん、そんなに頬を擦りつけたら肌むしれるよ」

ちょっとウザいくらいの幸せ。

トメです。もう年末です。

「今年の終わりを家族で過ごすって、いいもんだな……」

「トメ兄、縁側に座ってお茶をすするおじいちゃんみたいだよ?」

「あはは！　それ似合ってるよ弟君！」

「ふふ、実はママより年上だったりして♪」

それだけは無い、とか言ったら怒られそうだな。事実なのに。

「でもトメ兄の言うこともわかるよ。家族全員でこんなに一緒に居られるの、今までなかったもんね」

「父さんがいないけど？」

「あら、パパ君なら天井裏にいるよ？」

「だね。三時間前から」

「……母さん、姉。どうやってわかるんだそんなもん」

「愛の力♪」

「気配」

どっちもわからん。

「しかし、家族がそろって何よりもいいのは――」

「にゃ？　なにさトメ兄」

「カカが変なことをあまりしないことだな。母さんの前だからか、おとなしくて助かる」

む、カカさんや。なぜにギクッとなった？

「おい、まさか母さんのいないときに、また変なことを」

「してないしてない！　ねぇお姉？」

「んー……？　あー……」

何か思い出している姉。

「あれ別に変じゃないよねぇ」

「だよね！」

「うん、大丈夫大丈夫、普通普通」

そうか、ならいいけど……とてつもなく変な部類に属する姉の判断基準じゃ信用ならんが。

「ほらほら、そんなことより！　もうすぐ今年も終わるんだからさ、平和に行こうよ」

「それもそうだな」

色々あった今年が、終わる。

無事に。

皆で。

笑顔で。

「なぁ、カカ」

「ん」

「今年、何が一番楽しかった？」

聞かれたら誰もが悩むであろう質問に――カカは即答した。

「全部！！」

うん、今年は良い年だった。

思い返せばどれもこれも楽しかった。

そして、そう思えることが嬉しかった。

この想いこそ、僕らが今年手に入れた何よりのものだろう。

さぁ、残り少ない今年を満喫しよう。すぐに来年がやってくる。

それを笑顔で迎えうつために、全ての人々にこの言葉を送る。

よいお年を。

## カカの天下６７４「今年最後の詰め合わせ　あと」（後書き）

今年最後のカカ天本編が終わりとなりました。

そして明日。今年最後のカカラジです。

何時に投稿できるかわかりませんので、念のため先にカカたちと一緒に言っておきます。

よいお年を＾＾

# カカの天下６７５「今年最後のカカラジ！」

「皆さん、今年最後のこんカカ！！　ゆく年くる年すぎる年、皆様いかがお過ごしでしょうかーなんてかしこまりつつも思い出いっぱい夢いっぱいな今年を振り返ってイェーイな感じでハイテンション！　寒さにも負けないぜでもコタツを取り上げるのだけは勘弁な、って感じの香加です！！」

「はい、同じく今年最後のこんカカ！　猛獣使いの留です」

今年最後のこんカカ、作者です！

「留兄が言った猛獣が誰かは置いといて、ねぇ作者」

なんじゃらほい。

「今日は冒頭のもしもシリーズ話、しないの？」

それなんですがね。

「何かあったのか？」

ぶっちゃけ投稿多すぎ。選びきれん。

「オイ」

てわけで今度、もしもシリーズ話をまとめて書きまくろうかなーと。

「それもいいかもな。もしもシリーズは考えやすいのか、一人で三つも四つもほいほい送ってこられてるし」

嬉しいんですけどね、嬉しいんですけどね！　ほんと多すぎるから選ぶの難しいんですよ！　来年のお楽しみにしといてください。

「ま、仕方ないね。作者は神でもバケモノでもなく、しがない人間なんだし」

そゆことでご容赦ください……さて、この番組はネット小説『カカの天下』を盛り上げるため、ぶっちゃけトークや作者の本音を交えながら今年を振り返ったり、よいお年をーと言うためのラジオ的お話です。ここにいる留と香加はカタカナなやつらの分身であり、本編と直接関係はないのでお気をつけください。

「さてさて、それでは今年最後のカカラジはじまりはじまりー」

ＣＭへ！

――時はでみゅ暦＊＊年

ドオオオオオン！

一つの街が、わけのわからないことを叫ぶ大魔王の始めたバイトによって、混沌の渦に飲み込まれようとしていた……

「そんなペンダントくらいあたしだって買ってやるもぉぉぉぉぉん！」

そして大魔王の下に集う、変な魔物達――

「このボロクズを拾ったおかげで、背中に当たる母さんのおっぱいをより長く堪能できたぜへへへ」

「しゅーはいぬがいいー」

「わん！！」

「よっせって！　あっげっる！　よっせって！　あっげっる！！」

「スカートの下は下痢と便秘でふふふふ」

「君が高校に入ったら迎えに行くよ。そしてめくるめく大人の世界へレッツらゴー」

さらに、いつものように暴走する街の実力者――

「私に抱きつけ！！」

「ねーねーパコたん、サエとあそびまちょ？　きゃらりらりん♪」

「わ、わた、わたしがプレゼントですっ！　どうぞ好きにしてくださいっ！！」

「こいつら悪魔です！！」

迫る日常の危機に、一人のメイドが（半強制的に）立ち上がる！？

「そんなご無体な！？」

大人気ネット小説「カカの天下」でお馴染の豪華キャストが贈る、新感覚魔法ギャグコメディー！！

『マジカルメイド☆トメ』

「トーメートーメーカッター！！」

新春、満を持してついに開幕！？

「よるなよぅ。くるなよぅ。メイドなんかいらないんだよぅ。家事なんか自分でできるんだよぅ。朝飯作るのなんか朝飯前だよぅ」

――乞う御期待！！

ＣＭが明けて。

「はい、こちらのＣＭはカカラジネーム『七星河　一休』さんからいただきました……なにこれ留兄」

「僕に聞くな」

「他に誰に聞けと」

「作った本人に聞けよ」

えー、なんか古いネタ掘り出して勢いのまま作られたっぽいです。

どれがどこで使われたセリフか、もちろんわかりますよね皆さん！

「開幕……わけがわからなさすぎて逆に見たいよね」

はい、勢いが気に入ったんで採用しました。にしても姫だったりメイドだったり大変だね君。本編で手術でもさせよっか？

「なんのだ――とかツッコんでヘタに話が広がっても困るから次行きます。ふつおたコーナー」

「ちっ、つまらん兄だ」

つまらんメイドだ。

「爽やかに無視して、こちらは『嘘吐きぬこ』さんからいただきました。紹介します」

「やぁルシカ君。

実年齢を出すならば、私は君より年下だ。まだ社会も知らない、尻の青いペーペーだ。

だが、これは広大なネットの海に存在する仮想現実世界『カカの天下』という、隔別された世界でのある一室で、私と君が会話をしていると考えて貰いたい。

つまりこの尊大な口の聞き方を見逃していただきたいのだ。

もっとも、君に拒否権はない。何故なら君は黙したまま私が一方的に語りかけているだけなのだから。

ならばそれは雑談にならないのではないかと言われたら何も言い返せないが、それについて語ると桜の開花を迎えることになりそうなので、退室してからテキスト　Ｐ．１２４Ｃ項『相対性理論と酢酸カーミン、そして君のクリームブリュレ』を参照してもらうとして、本題に移るとしよう。

日本の基本的な会話の作法から脱っして結論から告げるとするならば、私は経験者である。

そして、ここで大事になるのは何の経験者であるのかという事だが、端的に言えば石鹸の咀嚼及び嚥下だ。

つまり、石鹸食った事あんぞという事なのだ。

あれは酷い。鼻や口から抜けるフローラルな香り。ぬちゃぬちゃと最悪な口当たり。胃袋から逆流する泡……。

アレを越えるとするならば、コーラとメントスを同時に食う以外に無いのではないかというくらい最悪だ。

そんな訳で脅迫をさせていただく。

タケダをそんな目に合わせたくないのなら、次の要求に応えて貰いたい。

その一、クリスマスパーティーでサユカンとトメを二人きりにすること。

その二、朝の一杯はコーヒーに限る。

その三、タケダにコーラを与えた後に、メントスを与える。

コーラメントスが想像つかないのなら実際に試してみるといい。

コーラ入りのペットボトルにメントスを入れてみたまえ。直ぐに分かるさ。

あとこれは忠告だ。試すなら近所の公園でやるんだな。

花屋の店長　ぬこより」

「……え、これ脅迫状じゃないの？」

どこがさ。

「え、や、だって脅迫状って書いて――」

タケダをそんな目にあわせたくなければそんな目にあわせろって言ってる時点で脅迫になってないし。

「へ、あ、あー。そっか。要求に応えても応えなくてもそんな目にあうんだねタケダ。どうでもいいけど」

「ほんとどうでもいいな」

どうでもいいです。でもなんかおもろかったので紹介しました。

「いろんな意味でレベル高いな……え、今度こそ脅迫状の紹介？ペース早いな」

後半に企画やりたいので、ちゃっちゃと紹介いきます。

「ふーん、いいけど。んっと、カカラジネーム『双葉』さんから三連続でいただきました」

『サユカとトメがくっつかないとサユカが不憫すぎて死にます（僕が）。

サユカとトメがくっつくと失恋で死にます（僕が）。

どうにかしてください。

でないと死にます（僕が）』

どないせいっちゅうねん！！

「要は殺してくださいってことじゃ」

「そこの妹、怖いこと言うな。えーと二枚目は」

格好いいトメが見たいとかいうふざけた内容なのでスルー。

「じゃ三枚目」

「オイおまえら」

『クリスマスの夜０時にあなたの心臓（ハート）を盗みにまいります。

親愛なるでモテモテで女泣かせなトメ様へ。怪盗忍者より』

はい、盗めませんでした。

「ということでですね、いよいよ本日のメイン企画にいこうと思います！　ん、どしたの留兄」

「や……なんか……寂しくなって」

ざまぁみろ、というわけで年末特別企画『今年を振り返ろう』に移りたいと思います。

「名前そのまますぎ」

まずは去年の正月からいきましょうか。

「ツッコんだのに誰も聞いてくれない……」

「留兄、キモいだけだから泣いてないで元気出して」

「泣いてなんかないやい」

はいはい、気を取り直してやるよー！！

「気落ちさせたのは誰だよ……はいはい、去年の正月だって？」

初っ端から騒いでたよねぇ。

「そうそう、このときトメ兄は大凶ひいたのにさ、結局今年は大して悪いこと起こらなかったよね」

「……そうか？」

いい思いばっかりして、ねぇ？

「……そうか？」

あと年賀状企画もやったよね。今年は……ちょっとやる余裕ないかなぁ。二日から仕事ですし、私事で申し訳ないですが。

「……そうなのか？」

さて、次にあったイベントといえばサユカンの告白！

「これは盛り上がったね」

「……そうかなぁ」

「留兄、戻ってこーい」

そうだぞ主役。君が情けなかったときの話してるんだぞ。

「む、それに関しては返す言葉もない」

このときの展開はほんと、行き当たりバッタリＭＡＸでした。なにせ書き終わってから「あ、告白しちゃった」ってマジで言いましたからね私！！

「感想欄とかメッセージの応援の声が強すぎて、つい書いちゃったんだっけね」

はい、それでも満足いく結果になったと思います。さすが私。

「調子に乗るな」

「読者さんの声のおかげだろ」

そのとおりです、サーセン。

「それがひと段落したらバレンタインか」

「投票で決めたんだったよな。誰が誰にチョコをあげるか」

そうだったよね、色男。

「や、単に男性キャラが少なかっただけだろ。そのときは特に」

うまく逃げたね。まぁその通りだったんだけど。

「今年はどうなるんだろね……」

そのときの私の気分次第です。

「あんたいっつもそれだね」

あ、そうそう。このバレンタインのおまけ話のほうでサエちゃんがトメにチョコあげたのに、ホワイトデーには返してないですけど？　みたいなお便りもらったんですけど。

「あー、サエちゃんが可愛かった話ね。相手が留兄、というかトメ兄なのがムカつくけど」

なんだかんだで恥ずかしがったサエちゃんは、次の日に笠原家で普通のおやつとして提供した――というわけです。バレンタインのものと気づかせずに食べさせたわけですな。

「サエちゃんらしいといえばらしいけど、作者が忘れてただけじゃないの？」

忘れてたとしても、それはもらった当人のトメです。私のせいじゃありません。

「オイ」

さ、お次はサエちゃんのお宅訪問でそのスジの方々に大きな波紋を呼んだりしましたが、それについて語るとまたもや色んな人にあーだこーだ言われるのでスルー。

「さすがサエちゃん大人気！　でも私のな」

はいはい、次はホワイトデーがありましたね。

「悪ノリしたトメ兄最悪」

で、次は――

「なぁ！！　ちょっとは僕にも喋らせ――」

お楽しみ会！　４００回記念風味に書きましたな。

「これは文字通り楽しかったよ。バク転しまくったし、サエちゃん

真っ黒だし、サユカン爆発したし」

うーん、これはなんだっけな。何かの舞台を見て、「あ、こんなん書きたい」って思って書いたイベントだったはずですが……何を見てそう思ったのかが思い出せません。

「あとがきとかに書いてないかな？」

さすがに全部読み返す暇はないですなぁ。

「さっさと更新しないと来年になりそうだったからな」

お、復活してきたね留。

「細かいことは気にしないことにした。年末だしな、忘年忘年」

そかそか。どうでもいいや。

「オイ――気にしない気にしない」

この頃からサラさんの登場率も上がってきたね。

「サユカンの発奮材料にもなってたね、このとき」

「最初は一発キャラだったのに、なぜか人気が出てレギュラーになったんだよな」

今じゃ立派な恋愛要員ですね、留。

「僕に振るな」

いっそフラれろ。さて、その後は……

「キリヤと仲良くなってきたな」

「むぅ、留兄が冷たい扱いを全く気にしなくなってしまった。つまんない」

「キリヤも読者さんの声からレギュラーになったようなもんだよな」

「むむ！　今度は私を無視か！　負けんぞ！」

それをサイドに書きつつ、進めていたのがクララちゃんのお話。

「すっごいファンタジーだったよね！」

「あれも反則的に読者を騙す勢いだったよな！！」

「そうそう！　桜が正体なんてわかんないよね！」

「誰の子だーって色々憶測が飛び交ってて！！」

はいはい、そんな競い合って発言しなくていいから。普通にやってくよ？　いい加減にしないとこれ以上書かないよ？

「……はい」

「わかったよ」

よろしい。えー、このときはですね。無性にファンタジーが書き

たくなりまして。カカ天でファンタジーといったらどんな感じになるかなぁ……と考えた結果、あんなお話となりました。

「柔らかいファンタジーって感じだったな」

そうそう。私ですね、元々は激しいファンタジーを書いてたのですよ。長編をいくつか書いて投稿したりしてて、その一休みと練習に始めたのがこのカカの天下というわけです。そしたらいつの間にかこの作品が自分の中で大きくなってきて……でもたまに書きたくなるんですよ、ファンタジー。

「それが弾けたのが夏祭り、というわけか」

「あのよせてあげる人形だね」

夏祭りのクララ&姉サイドは、ほんとコメディー脱線させて楽しませていただきました！　が、その話の前にもいろいろあったので、先にそっちの話題にいきましょう。

「ああ、まだ早かったか。えっと、桜の話の次は何あったっけ」

「僕ことトメとサユカちゃんの誕生日だろ」

「ああ……ひどい結末だったアレか」

「サラさんとサユカちゃんがくっついて終わりだったよな」

その前の誕生日がいい話だったし、桜の話でしんみりした直後だったので……阿呆な話にしたかったのです。

「いい迷惑なんだが」

サユカちゃんには悪いが、留とかトメの扱いなんてそんなもんだ。

「そして次はお見合い話だね。トメ兄とカカたち大活躍！！」

「暴れたよな……おまえら」

実はテンカ先生が登場してから間もなく「テンカ先生がお見合いする話を書いてください」というリクエストがきまして。「まだ早いです」と返事して、ずーっとずーっと一年くらいあったためて、ようやく書いたお話だったりします。

「おー、今日は裏話多いね」

せっかくですのでね。今だから言えるぶっちゃけとかもしようかと。

「じゃ、さっきも話題に出たけど次にあった夏祭りは？」

あれねー！！　ぶっちゃけねー！

漫才考えるのすんげー疲れた！！

「……ほんとぶっちゃけだね」

や、ほんとね？　漫才のネタ考えるのにずーっとずーっと悩んでてね？　うーんうーんネタ……ネタ……って唸りながら「私はいつからお笑い芸人になったんだろう」とか真剣に疑問を覚えたからね。カカ天書いてて一番悩んだかもしんない。

「いつもはその日のノリで書いちゃうもんね」

あい。姉とクララの戦闘シーンなんか微塵も悩まずに書いたのに……漫才奥深い。難しい。お笑い芸人の皆様尊敬。

「まぁまぁ、それだけ悩んだ結果がちゃんと読者さんに受け入れられてよかったじゃないか」

ほんとですよ！　ほんと嬉しかったです！　ほんと報われました！　皆さん感謝！！

「はいはい、作者のテンションが上がりすぎて喋りすぎないうちに次にいこうか。カカ？」

「次の大きな話といえば、サカイさんのサエちゃん奪還話！！」

こちらも一年以上に渡って引っ張ってきた話ですね。

「長かったねー。でもそのおかげで生まれたドラマもいっぱいあるよね！」

そのたびにコメディから脱線したりもしましたが、自分的にも良い経験となりました。こんなの書いたことないけど書けるかな、いいや書くしかない、なんてことがちらほら。ちゃんと書けていたかどうかは、読者さんの声を聞くしかありませんが……

「とりあえずハッピーエンドにまとまってよかったよな。色々あったが」

はい、ハッピーエンド好きで知られる私ですが（作品見てればわかると思いますが）それだけじゃ嫌なんですよね。

「次の運動会でもそんな感じだったよな。ヤなヤツを負かすぞー！　って熱血かと思いきや」

「色々と重い話に……」

その話も勝手に展開していったーって感じですね。カカ天世界はもう半ば独立しちゃってるので、『ちょっとだけ幸せになりやすい、でも現実』みたいな感じの世界観に、勝手になってる気がします。

「六百日以上も続けてれば世界観が固まるのも当然か」

かもしれませんね。でも暗い話ばっかりも嫌なので、次のお結び式は気合入れましたよ！

「私念願の、サエちゃんとの結婚だからね！」

「読者さんの投稿企画もあって、色々とありえない展開もあったが」

そうそう、読者参加型話が多くなってきたんですよねぇ。楽しいんですよこれがまた。ただ書いてるだけじゃない！　皆で何かしてる！　って感じで。

「でも疲れるんでしょ」

はい！！

「でもまたやるんだろ」

はい！！

「……お疲れさん」

はい！！　誕生日、お結び式ともに楽しい時間でした。ちなみにカカのプレゼント、皆で二人三脚っていうのも前日あたりに思いつきました。

「ほんっと行き当たりばったりだなアンタ！！」

や、一応先のことは考えてはいるんですが……直前のほうが色々思いつくんですよね。ま、そんなお結び式が終わりまして、普通っぽい話が続きます。

「イベントを敷き詰めすぎたから、って言ってたよね」

そうですそうです、ちょっとリセットな意味も込めてクリスマスまで普通のペースに。

「とか言ってたらクリスマスが近づくに連れて作者の余裕がなくなってきて……」

本当にちょっと一休み、ということになりましたとさ。こっそり大晦日にカカラジの日をあわせる予定にして、クリスマス、年末とイベント気分に浸りながら書かせていただきました。

「それで、どうなの。来年は年中無休で続けられそう？」

んー……私もこれだけを書いているわけじゃありませんしね。

お休みをいただいたからこそできることが、やっぱりありましたし。時間にも頭にも本当に余裕が持てたので、もしかするとまたお休みをもらったり、二日に一話更新に変更するかもしれません。

「二日に一度か。随分ペース落ちるな」

できる限りは毎日続けるつもりです。詳しいことは決めてません。来年のことは来年決めます。

「そだね。今は今年の話だった」

「振り返ってみて、どうだった？」

ふむ……香加、どうだったよ。

「私は前話で言ったじゃん。全部楽しかった！」

留は？

「大凶じゃなかったな、間違いなく。良い年だったさ」

そうか……

「作者は？」

私は、言うまでもなく良い年でした。

この一年間、最初から最後までずーっとカカ天を書いていました。最後にちょこっと休みましたが、その間も読者の皆さんとずっと繋

がっていれたと思います。

私はわりかしマイペースかつ自分勝手な人間ですので、せっかくの読者さんの感想やコメントに気を使えなかったことや、書きたいように好き勝手書いたせいで不快に思われたこともあったかもしれません。

でも今年も終わり！　このカカラジをカカ天式忘年会ということにして、全てを棚上げして忘れて――楽しかった、そして嬉しかった一年だったと、ここに断言します。

これを読んでいただいている全ての皆さんにありがとう。

そして今年もよろ――ん。

「どしたの」

「待て、何かきた。脅迫状？　ああ、いつもの『鶏助』さんからだ」

『これは呪いの手紙です。この手紙を一文字でも目に入れてしまったのならば、貴方は今から来年の大晦日までに以下のことをしなければなりません（読者も含む）。

「残り少ない今年を楽しい気持ちで過ごすこと」

「来年を今年よりもさらに良い年とすること」

「鶏を崇め奉ること」

以上のことを見事成し遂げることができたのならば貴方は、トメ

による笠原家に代々伝わる伝説の裸踊りを拝観することができます。

ルシカ先生も『カカ天』に登場する皆さまも、勿論今これを読んでいる貴方も、『カカ天』を愛する全ての方が来年も良い年を過ごせるように、この、幸せを呼ぶ呪い（まじない）の手紙を送らせて頂きます。

では、これからも良い日々を』

「うわーいいこと言うねー！」

「裸踊りのところ以外はな！！」

さてさて、そんなわけで。今日のところはこの辺でお開きとさせていただきます。

「もう間もなく新年だしね！」

「迎えうたなきゃなんないしな」

はい！　それでは皆様カカばい！

「よいお年を！」

「来年もよろしくお願いします！！」

過ぎ行く今年と、楽しくなること間違いない来年に――カカラジチョップ！！

この番組は、今年の感謝と来年への希望でお送りしました。

## カカの天下６７５「今年最後のカカラジ！」（後書き）

今年は皆様、本当にお世話になりました。
日々皆様の声が何よりの活力となり、充実した一年を過ごすことができました。
来年もどうか、よろしくお願いします。

それでは、よいお年を＾＾

よーし年越しそば持ってこーい！！

## カカの天下６７６「今年もほうふ」

あけましておめでとうございます、トメです。

ただいま年を越したばかり。家族でコタツを囲みながら、テレビと一緒にカウントダウンなんかしちゃいました。

「今年もよろしく！！」

「誰に言ってんだ、カカ」

「この世界の全てに向かって！」

「……あそ」

「それプラスお姉に」

「あれま、世界からハズれてんだな姉」

「人間じゃないし」

「納得」

「じゃーあたしって何さ！？」

いったい何度言わせれば気が済むんだ。おまえは姉だ、それだけだ。他に何がある？

「ふふ、あけましておめでとう皆。あとカッ君」

「母まであたしをおまけ扱いか！！」

「ふふ、ママもカカ君とおそろいなのだ」

「あたしだけおそろいじゃないし！」

「あらあら。床下の人とおそろいになればいいじゃない♪」

聞くまでもなく父さんだろうな、床下にいるのは。

「何をおそろいにしろと」

「お姉も嫁もらえば？」

「それだ！！　じゃーテンちゃんを嫁にもらう」

似合いすぎて困る。

「あ、でも親父とおそろいヤダ」

気持ちはわかる。しかし嫁をもらう＝うちの父さんとおそろいだったら世界中の旦那さんが可哀想だ。謝れ。

「すいませんでした！！」

おお、どこからともなく父さんの声が。意外と律儀だな。

「では！　たったいま新年を迎えた子供君たちに聞きまーす」

夫のフォローもなしに話を進めるかーさんサイコー。

「今年の抱負は？　カカ君から！」

「人を笑わせる」

……むう？

「その心は？」

「去年ってさ、私が笑ってばっかだったんだよね。だから今年は、皆に笑って欲しいなって」

へー、おもしろい。何がおもしろいって、カカは今まで『周りを笑わせる』ために変なことしてたんじゃなくて、『自分が笑う』ためにやってたんだなってとこだ。お楽しみ会だの漫才大会だのあったけど、それも全て自分のためだったんだろう。その結果で周りも笑ってたんだが……それを自分からやろうってのはなかなか良い心がけだ。

しかしなぜだろう。僕の苦労がさらに増すような気がするんだけど。

「いいね！　それじゃ、カッ君は？」

「剣を極める」

なぜ。

「あ、お姉。もらった木刀返す？」

そういえばいつぞやもらってたな木刀。

「んや、三代目があるから大丈夫。二代目を大事にしてやってくれ」

「わかった」

一代目どこいった。

「じゃ、トメ君は？」

「僕、か」

どうしよ、まったく考えてなかった。

「んー……んー……」

「弟君よ、悩むならばあたしとカカちゃんのを合わせてみるのはいかがかな？」

「合わせる……」

今年の抱負――笑わせる剣を極める。

「ハードル高すぎだろ、それ」

「そだね。カカちゃんが再来年あたりに挑戦するレベルだわ」

再来年にもう挑戦すんのか、すげぇなカカ。神童か。

「うーん。去年のトメ君の失敗を思い出して、それをしないようにすればいいんじゃないかな？」

「なるほど。去年の僕の失敗といえば……」

「サユカンをフッた」

「じゃあ今年の抱負はサユカちゃんをフラないってことで」

「待てぃ！！」

それって逆に考えるとつまり！！　サユカちゃんの告白を受け入れるってことで――

「え、なに。嫌なの？」

「じゃあ弟君の今年の抱負は、サユカちゃんをもう一回フるってことで」

「この人でなし！！　人じゃないなんてお姉と同じか！？」

「わーい！！　おそろい仲間が来たー！！　わーい……わーい？」

なぜか怒るカカ。喜んだ自分に疑問を持って首を捻る姉。

「こらこらカカ君、人を笑わせるんでしょ？　そんな怒っちゃダメ」

「あ、そか」

おお！　ナイス母さん！　いいなそれ、そう言えばカカを制御で

きるんだな。

「じゃおもしろく怒る。この人でなしチャッチャッチャ！！」

制御できねぇ。

「なんだよそのチャッチャッチャッて」

「知らないよチョッチョッチョ。人を笑わせるって大変だねちぇっちぇっちぇ」

や、笑えるかどうかは置いといて今のおまえはおもしろいぞ。

「それでトメ君？　今年の抱負はどうしよっか」

「んー……カカの制御ができるようになる、とか」

「それは人生の目標でしょ？」

いつの間に僕の人生は妹中心になってたんスか？

「よし、あたしが決めたげよう！　今年の弟君の抱負は――はっちゃける！！」

「……は？」

「あんたね、落ち着きすぎ。まだ二十五歳でしょ？　まだまだ若いのよ！　四次会まで飲み明かしたり、綺麗なおねーちゃんのいる高い店でヒャッホウとかする歳なのよ！　なのになんでそんな家庭を大事にしてそうなパパみたいに落ち着いてるわけ！？」

そんなこと言われても……飲みすぎたらお金かかるし疲れるし。見ず知らずの女の人と喋るだけでお金使うのも嫌だし、もったいないし。

「うーん、そうだねぇ。カカちゃんをずーっと育ててきたせいか、確かにトメ君は落ち着いちゃってるね」

「だからこそ！　今年はもう少しはっちゃけなさい。せっかく子供が回りにいるんだから、子供の元気をもらうのよ！」

元気すぎる子供を抑制するのが大人の仕事と思うんだが――って、こんなこと考えてるところが落ち着いてるって言われるのか？　もしかして。

「よし、一緒に世界を笑わそうぜトメ兄すっぽんぽーん！」

「それ僕が素っ裸みたいに聞こえるからやめてくれる？」

「ほら、みみっちいこと言ってないでマネしなさい弟君！」

え、マジで？

「いくよトメ兄。ほら大きな声で！　すっぽんぽーん！」

「す、すっぽんぽーん！」

「声が小さい！　すっぽんぽーん！！」

ええい、もうヤケだ！

「すっぽんぽーん！！」

「今年の抱負はすっぽんぽーん！！」

「明日からはすっぽんぽーん！！」

「新学期早々すっぽんぽーん！！」

「出勤中にすっぽんぽーん！！」

「死ぬ間際にはすっぽんぽーん！！」

「別れの言葉はすっぽんぽーん！！」

「あの世にいってもすっぽんぽーん！！」

「閻魔様もすっぽんぽーん！！」

はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……

「じゃ、初詣はすっぽんぽんで行くということで♪」

『それはナイ』

仲良くツッコむ笠原家の子供たち。

我が家は今年も、こんな感じ。

## カカの天下６７６「今年もほうふ」（後書き）

忙しい日々が終わり、気が抜けて風邪をひいてしまったルシカさんです。だるくて寝てたらこんな時間に……いかんいかん、明日から仕事忙しいってのに。

さて、そんなわけで新年早々ぎりぎり投稿となりましたー。でも大晦日は濃厚に書いたので初っ端は軽くいきます。

このサブタイトルの『ほうふ』っていう字には抱負と豊富の漢字が二つ入ります。

抱負は言うまでも無く、今年も豊富でありますようにって感じで。

何が豊富か？

想像にお任せします＾＾

ではでは皆様、あけましておめでとうございます。

今年もカカたち共々、よろしくお願いします！！

# カカの天下677「今年もおみくじ」

こんにちは、トメです。

年も無事に明けた翌日、僕らは家族で初詣へ行くことになりました。残念ながらすっぽんぽんではありません。

「んむぅ……」

僕らと一緒に年を越すために頑張って夜更かししたカカは、ものすごく眠そうだ。思えば昨日のすっぽんぽんハイテンションは眠気がピークで頭がイッてたせいかもしれない。

「……はっ！」

「起きたか、カカ」

「ここはどこ！？」

「神社の前だ」

「私のこの格好は！？」

「晴れ着だよ」

母さんが半分寝てるカカを器用に操りながら着せたのは、去年用意した青地に蝶柄の着物だ。見るのは一年ぶりだがやはり可愛らしい。ちゃんと髪も結い上げてるし。

「くぁ」

着ている本人は大口開けて欠伸しているが、それでも可愛らしい。

「ふふ。去年は獅子舞だったけど、今年は皆でお参りできるから嬉しいわ」

「あれ、でもお母さんは着物じゃないんだ。残念」

「あっはっは！　カカちゃん？　この母が着物でおめかしなんかしたら一瞬で男どもに囲まれちゃうよ」

姉の言うとおりだ。僕らの母さんは有名人、オーラを消さなければ一般の人に正体がバレてしまうのだ。

「それでセーターにジーパンなんてラフな格好してるんだね、それも似合うけど」

「ふふ、ありがと♪　でもカッ君が着ないのはなんで？」

「あたしゃどうせ似合わないもんよ」

確かに。

「そっかぁ。じゃあトメ君が着ないのはなんで？」

「や、僕、男だし」

「えぇー」

「えぇーって言われても」

「ちゃんと用意したのに」

「だからそれ女物だろ!?　嫌だぞ去年みたいに見世物になるのは!」

蘇る悪夢……あのときは化粧までされてたっけ。あんなのはもう御免だ。

「ふふ、いざとなったらパパ君にお願いするから気をつけてね」

「そのパパ君はどこだよ」

「え？　すぐ隣にいるじゃない」

すぐ、隣？　隣っていうか周りには一般の参拝者がたくさんいるけど……まさかこのうちの誰かに化けてるのか!?　わからない、何がわからないってそうまでして顔を隠す理由がわからん。

「変に意地になってるだけだと思うよん」

「……姉、人の心を読むな」

でもそれが正しい気がしてきた――お、人の列が見えてきた。並ぼう並ぼう。

「サエちゃんとサユカンは？」

「連絡しといたよ。もうお参り済ませておみくじ売ってるとこで待

ってるとさ」

「むむ！　私を置いて先にやるとは友達がいのない！」

「おまえが時間になっても起きないから待ち合わせ時間に遅れたんだろ」

そんな雑談をしているうちに、あっという間にお賽銭箱の前にたどり着いた。ご縁があるように五円放り込み、ガラガラとでっかい鈴を鳴らす。そして二礼二拍一礼。

えーと、今年も病気とか事故なく無事に過ごせますように……あと、

「すっぽんぽーん！！」

隣でこんなん叫びながらナニを祈ってるのかさっぱりわからないカカが、色々な意味で無事に今年を過ごせますように。

よし。

「ぽんぽぽーん！！」

「ほら行くぞ」

ひたすらぽんぽん念じているカカの首根っこを掴んで引きずり出す。おお、髪を結い上げてるおかげで掴みやすい。

「ああ、待って、まだぽんぽん終わってない！」

「いいから来い」

周りの人に迷惑だ、色んな意味で。

「ぽんぽこおおお

「お、おめでとうございますっ！　今年こそよろしくお願いしますっ」

サユカちゃん？　『こそ』ってどういう意味かな？　や、ツッコまないほうがよさそうな気がする。

「二人ともおみくじは引いたのか？」

「はいっ！」

「でも内緒ですよー、お二人が引いてから教えますー」

よしよし、それじゃー売り場へ……

「あ、トメさーん、カカちゃーん！　あけましておめでとうございます！」

「お、ミコさんだ」

「サラです！！」

巫女姿のサラさんね。

「今年こそサラです！　よろしく！」

心配しなくても去年もちゃんとサラだったよ。大体は。

「今年もこのバイトやってたんだな」

「はい、短期だからやっておこうかと思いまして。おみくじですか？」

「うんうん！　トメ兄、私から引くね！」

「はいはい」

勢いよくおみくじ箱に手を突っ込み、豪快にほじくり回したカカが掴んだ、そのおみくじ内容とは――

「やった！　大吉！！　じゃない！！」

「じゃないのかよ」

だったらなんだ？

「んとね、『太吉』だ」

あい？

「それ、ゴミがついててそう読めるだけじゃ？」

「や、これでいいみたい。太い一年になりますって書いてあるもん」

そういえばこの神社って……まさか今年もヤツが書いたのか？

「サエちゃんたちに見せてこよーっと！！」

晴れ着のまま器用にたったか走っていくカカを見送りながら、

「ああ……なんだか急に引きたくなくなってきた」

「次はトメさんですね、どんどんどうぞ！」

「わ、サラさん！？」

無理やり引っ張られてそのままおみくじ箱に突入してしまった僕の右手。こうなったら仕方ない、と直感でおみくじを引いた。これに決めた！！

「どうだ！！」

いざ、オープン！

「やった！　大凶！　じゃない！？」

今年も大凶かと思いきや、

「これ……『大区』だ」

え、なに。書き間違い？　や、でもカカのも内容はちゃんとしてたし、開けばちゃんとした文章が――

「えっと『漢字まちがえちった♪』って、ならいれるなよ！！」

叫びながら地面にスカおみくじを叩きつけた僕は、これを書いたヤツを脳内で殴りながらサラさんにお金を渡した。

「もう一回」

「あら、いいんですか」

「当たり前だ。今年最初の大事な行事を『漢字まちがえちった♪』の一言で終わらせてたまるか」

これでどうだ！

「えーと、『おまえはもうダメだ』って吉とか凶とかどこいったの!?　ケンカ売ってんのか！」

「あはははは！　トメさんてば今年もおもしろいですね！」

笑い事じゃないよサラさん。神様にケンカ売られてるとしか思えない……

「あはははは――あら、どうしました？」

笑っていたサラさんのところへ、同業者っぽい巫女姿の人が。

「あの、ここに置いといた宴会用のヘンテコおみくじ箱知りません？」

「あ」

それ、もしかしなくても……

「予備の箱と間違えて使っちゃいました！！」

「あんたのせいかぁ！！」

「あぅ！！　ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！」

僕と巫女さんに平謝りするサラさん。今年初ドジだったな。

「えーとえーと、あ！　本物の予備は便所にありました！！」

なぜだ。まさかおみくじで拭くのか。勘弁してくれ。

あ、ちなみに改めて僕が引いたおみくじはというと――

大凶だった。やっぱ僕にケンカ売ってるだろ神様。

## カカの天下６７７「今年もおみくじ」（後書き）

さりげなく続きます。

ちなみに私は末吉でした。

待ち人：まだ来ない

来いよ！！

あ、失礼しました（悲

## カカの天下６７８「今年も三人娘」

あけましておめでとう！　カカです。

今日はいつの間にか神社に来てました。知らない間に晴れ着も装備していました。ミステリー。

「カカちゃん、何が出たー？」

「太吉」

「何よそれっ」

そんなわけで、私は仲良し三人組でおみくじを見せ合ってます。

「私は中吉だったー」

「わたしは小吉よっ」

「三人の中でサユカンのが一番おっきいのにね」

「どこ見てんのよカカすけっ！」

ご想像にお任せします。

それはそれとして、内容のほうを見てみようか。

「やっぱり気になるのはカカすけの太吉よねっ」

「んー、でも普通に大吉っぽいこと書いてあるねー」

「どれどれ？」

『失物――出る。高いところ』

「高いところ……」

三人して上を見上げる。

半分は青い空、半分は雪でも降らせそうな濁った雲。

なんかあるかな？

失ったものが、見つかるかな？

「あ」

「どうしたの、カカすけっ」

「首が痛い」

「……あそ」

「あー！」

「どしたのサエちゃん」

「失くしたと思ってた百円玉の置き場所をなぜか思い出したー」

おお、本当に見つかるとは思わなかった！

「便所だ」

トイレって言おうよ。

ともあれ、めでたしめでたし……あれ、私のおみくじじゃなかったっけ。まぁいいけど。

「さて、次は？」

視線をおみくじに戻す。

『争い――勝つことやすし』

「やすしって誰。どこにいるの？」

「きっとあなたの心の中にー」

「サエすけ、その返しはいまいち」

「あの、ここにいますが」

「そこにいるんかいっ！？」

おお、たまたまそこにいたのか、やすし君！

「よし、やすし！！」

「は、はい！」

「勝て！！」

「あ、はぁ、励ましありがとうございます」

「気にスンナ」

「がんばれー」

「え、ええと、よくわかんないけど頑張って勝ってねっ」

なんか感動しながら去っていくやすし。うん、いいことした。

「でも本当に普通の大吉な内容だね」

「……君のやってることは普通じゃないけどね」

「む、そういうサユカンのおみくじはどうなのさ」

「わたしのだって普通よっ。ほら」

どれどれ？　サエちゃんと一緒に覗き込みー。

「おお……」

「おおー」

「なによ、そんな驚くようなことなんて書いてないでしょっ！」

「や、これ」

『出産――安し』

「やすしが出産！？」

「え、あ、はぁ。頑張って産みます」

「やすしまだいたのっ！？」

ていうか無理だろ。

「あはは、出産しやすいってことだよー」

「だよね、あはは。で、サユカン産むの？」

「産むわっ！！」

おっと、ちょうどいいところにトメ兄がやってきた。

「はぁ……大凶……ん？　どうした三人娘。なぜにそんなジッと僕を見つめる。まさか大凶っぽいことを早速――」

「と、とと、トメさん！！」

「はいよ！？」

「わたし、今年の抱負は『産む』ですっ！！」

「熟む？」

「サユカちゃん！　出産後に注意、とも書いてあるよー！」

「気をつけましょう、トメさんっ！！」

「あ……うん。よくわかんないけど気をつけような。人生いろいろあるからな」

「転んだりしたら大変ですっ！」

「うん、人生転ばないようにしないとな」

すごーい。サユカンが子供産む計画がちゃくちゃくと進んでる。

生まれたら私も叔母さんかぁ。年取ったなぁ。

「それで、トメ兄のおみくじはなんて書いてあったの？」

「大凶っぽい内容で色々と気をつけろって書いてあるけど……一つだけ、違うのがある」

『待人――来る。たよりあり』

「これ、いい意味じゃない？」

「でも大凶だし……悪い意味じゃ」

誰かが波乱でも持って来るのかにゃ？

「そういえばサエちゃんのおみくじは？」

「秘密だにゃー」

## カカの天下６７８「今年も三人娘」（後書き）

昨日、おみくじの内容をちょろっと書いたので、今日はその話をば。

ちなみに姉とお母さんはひたすら甘酒飲んでます。それだけですので出演させませんでしたが、それでも見たいという方はお書きください。明日書くかもしれません。

でも明日はカカに初変なことでもさせようかと思ってるし、どうしよっかなー……ま、気分で笑

## カカの天下679「今年も全開」

こんにちは、トメです。

意外と長い神社のお話が続いてます。飽きた方はすいません。

おみくじを見せあっていまだに騒いでいるカカたちを放って、甘酒売り場の方へと来てみました。えーっと、さっき母さんと姉がいた場所は……

「新年にかんぱーい！！」

間違いなくあそこだ、甘酒も日本酒もビールも同じに考えてるバカのいるところは。

「おぅ、弟君も飲むか！？　ういっく」

「あはは！　ねぇねぇトメ君。カッ君たら、おっさんみたいでおもしろいんだよー」

母さん気づいてなかったのか？　そいつの中身は三年前くらいから完全にオヤジだぞ。

「よぅ、トメじゃねぇか」

「おー、テン。あけましておめ――でたくない顔してんなオイ！？」

申し合わせたかのようにセーターにジーパン姿と母さんと姉とお揃い姿のテン。しかしその顔はヤバイ。普段から悪い切れ長の目つ

きが尋常じゃない程に鋭くなっており、暗く濁った眼光を放っていて、わかりやすく言うと超怖ぇ。

「っせぇな……風邪ひいたぜ、ちくしょうが」

「し、新年早々、大変だな。でも甘酒は飲んでるのか？」

「ったりめぇだろ。喉をアルコールで消毒してんだよ」

のんべの屁理屈を……でもまぁ、甘酒なんてアルコール度数ほとんどないし、大丈夫か。

「おいこら！　弟君も飲め！　あたしの酒が飲めないってぇのかい！？」

なのになんでこんな酔ってるんだこのバカは。

「ははは、トメ。大人しく飲まねぇと酒のつまみにされちまうぞ」

うぐぅ、姉が人の頭をバリボリとかじる光景が容易に想像できるから不思議だ。

「あ、それ見てみたいな。ねぇねぇトメ君。やってみて」

「姉に食べられてみろと仰りますかお母様」

「きっと楽しいよ」

あなたたちはね。ていうか母さん、もしかして酔ってる？

「はいはい、弟君もコップ持って」

「お、ありがと」

あらら、ここ甘酒はセルフで無料なのね。可哀想に、ここにあるの全部飲みつくされちゃうぞ。

「はい、それでは改めまして！　輝かしい新年に、かんぱーい！！」

『かんぱーい！！』

「トメが好きなのは！？」

『おっぱーい！！』

「待たんかい！！　テン、おまえなんちゅーことを」

「あ、違った違った。トメ君が好きなのは？」

『くびれー！！』

「バラしたな母さあああああああん！！」

『あっはっはっはっは！！』

不本意ながら場を盛り上げまくってしまった僕の性癖。新年早々、大凶です。恥ずい。

「――なに笑ってんだよ、うぜぇ」

ん、何か聞こえたか？　気のせいか。

「やぁやぁ、見知らぬ皆様もお一つどうぞ！」

「え、ああ、悪いねぇ」

「そこのお爺様も、どうぞ♪」

「ほっほっほ、こんな美人なお嬢さんに注いでいただけるなら、いつ死んでもいいのぉ」

「おいコラ坊主、飲めや」

「は、はい！！　だから殺さないで！！」

そして、通りがかった人に片っ端から甘酒をすすめていくタチの悪い集団と化した僕の家族他一名。すすめられた人は笑顔になるからタチはいいのか？　悩むところだ。

「――気にいらねぇ」

また聞こえた。どこだ？

どこから聞こえた？

いた。

高校生くらいの集団か？　五、六人の男子か。なんだか面白くなさそうな顔してるなぁ。

「面白くねぇ……」

あ、やっぱりそうですか。

「なに笑ってんだよコイツら……」「苛々する……」「くそったれが……」

なんだか嫌な雰囲気に。

「あはははは！　鬼さんこーちら！」

「待ちなさいよカカすけぇぇぇ！」

「二人ともはやいー」

そこに通りかかったカカとサユカちゃん。遅れてサエちゃん。

集団の一人が動いた。足を振り上げ、脇目も降らず走るカカの足元へ――

「そこのクソガキなにしてる」

身体が舞った。

カカの、じゃない。舞った身体は二つ。

一つはいつの間にか助走をつけて飛び蹴りをかましたテン。もう一つはそれをくらって吹っ飛んだ高校生のもの。

「っでぇ！！」

「っと」

受け身も取れず地面に転がる高校生、それに比べて土を派手に削りながらも見事に着地を決めるテン。突然起こった事態に呆気に取られた僕が思ったのは――テン、男まさりな口調なだけはあるな――なんていう感想だけだった。

「やっくん！！」「おい、大丈夫かよ」「クソが、何しやがる！？」

息巻く高校生集団。しかしそれに怯むテンではなかった。

「っせぇな。風邪で頭痛ぇんだ。わめくな」

ドスの利いた低い声に怯む男たち。

「何しやがる？　こっちのセリフだ。てめぇら、うちのチビどもに何しようとしやがった」

視線で三人くらい殺せそうな目つき。だがそれにも負けずに一人の男子が声をあげた。

「気にいらねぇんだよ」

「なにが」

表情をピクリとも動かさず聞き返すテン。それにカチンときたのか、男子も声を荒げる。

「全部だよ！！　てめぇら全部気にいらねぇんだよ！　笑ってるや

つ――何の苦労もせずに笑ってるやつら、全員気にいらねぇんだ！！」

なんだ、これ。

「おまえらに俺の苦しみがわかるか！？　去年から受験勉強で毎日苦しんで、親に目の仇のように毎日叱られて……毎日だぞ！？　外へ出ることも三時間しか許してくれなくて、それと寝る時間以外に休まる暇がない俺の気持ちがわかるか！？」

は？

「俺なんか去年から親一人いねぇんだぞ！？　なのによ、どいつもこいつも同情してるフリして何もしてくれねぇし」

はぁ。

「俺のほうがひどいさ！　十六歳になったときから親に無理やりバイトさせられてんだぜ！？　なのに、どれだけ頑張っても『あれができてない、これができてない』とか『ガキだから仕方ない』とか散々言われて……仕方ねぇじゃねぇか、年齢なんてどうにもならねぇんだから！」

……言って、いいか？

「おまえらはさ、どうせ苦労なんかねぇんだよな？　だから、たかが新年ってだけで、そんなに笑ってられるんだ」

言っていいよな。

「バカな大人はいいよな、バカな子供はいいよなぁ！！」

「――せぇ」

ああ、テンが言うか。じゃあ任せた。

「不幸な俺たちと違って、笑ってられ――」

「小せぇ」

「あん？」

「さっきからグダグダと小せぇことばっかり言いやがって。なんだてめぇら？　自分の小ささ自慢してオレを笑わせてぇのか？　だったら大成功だよあっはっは！」

「んだと、このアマ！！」

「てめぇらはよ、視野が狭ぇんだ。狭すぎるんだ。多分車の免許取ろうとしても受からねぇんじゃねぇか？　右折とかできなくて」

ああ、あれっていろんな方向見なきゃいけないもんな。

「色々と言いたいことはあるが、面倒くせぇからまとめてやる――てめぇらうぜぇ。不幸自慢なら余所でやれ、そんなもん聞きたくねぇよ」

「な――」

あれま。思いのほかバッサリ斬っちゃったな。教師ならもうちょ

っと、

「ダメだよテン君。教師ならもうちょっと、道を指し示してやらないと」

って、なんで母さんが出てくるのん？

「……なんだ、てめぇは」

「ん、ママです♪」

その自己紹介はどうかと。

そうツッコミすら入れられない雰囲気の中で、母さんはいつも通りに笑った。

「ねぇ、君たち？」

そしてゆっくりと語りかける。

「苦しみ一を十と取るか、幸せ一を十と取るか」

その柔らかすぎる雰囲気に、たじろぐ高校生たち。

「苦しみ十を一と取るか。幸せ十を一と取るか」

声は綺麗に、言葉は鮮明に、

「本人次第、考え次第。零にも百にもなるでしょう。あなたなら、どうしたい？」

彼らに届いたはずだ。

「私たちが笑うのは、そういうこと」

誰にだっていつだって、幸せも苦しみもある。その中で、どちらに目を向けるか……それが大事なのだと、昔教わったことがある。

どうせなら幸せ一を十と取りたい。だから僕らは笑っている。

「う、うるせぇ……」

言葉は伝わっても、気持ちは伝わらなかったのか。

「うるせぇうるせぇ！！　やっちまえ！！」

時代劇のようなセリフと共に、未熟な子供たちはヤケになって――

「仕方ないですね。スケさんカクさん、懲らしめてあげなさい♪」

それと似たようなセリフで迎えうった。

そして二秒後、死屍累々の高校生たちが……って二秒ってはやっ！！

「ねぇ母さん」

「なんだいトメ君」

「カクさんが姉なのはなんとなくわかる」

「カッ君を短くして、カクね♪」

「スケさんは？」

「スケベの略」

ああ、父さんか。

というわけで、妙に小さくキレまくった高校生集団は、姉が一人の足を持つ→そのままそいつを武器にして三人まとめて殴り飛ばす→残った二人はなぜか泡吹いて倒れる（おそらくスケさんの仕業）という一瞬で片付いてしまったのだった。

「ゆ、ゆ、ユイナさん！！　大丈夫なんですか！？」

おお、そんなに慌ててどうしたテン。さっきまでの迫力が嘘みたいだぞ。

「女優の度胸をなめるな♪」

「い、いや、そうじゃなくて身体は」

大丈夫に決まってんだろ。うちのスケさんカクさんすげぇんだぞ。

「しかしなんだったんだ、新年から……」

「そだね！　確かに景気が悪い！」

おお、カカ。なんか黙ってると思ったら。

「つまり。この人たち、笑えないんだよね？」

「ああ、そだな」

「じゃ、私の今年の抱負を実行するとしようか」

「え――」

「いくぞ、サエちゃんサユカン！　こいつらを笑わせろ！！」

こちょこちょこちょこちょこちょ！！

「あはははははははははははははははははひはははははっふっはははは！！」

新年早々、景気のいい笑い声が神社に響き渡った。

うむ、終わりよければ全てよし。

いい一年になりそうだ。

## カカの天下６７９「今年も全開」（後書き）

なんかちょろっとママンの話を書こうとしたらこんなのできちまうからカカ天はこえぇぜ。

というわけで。

登場した高校生たちは端から見ればとてつもなく情けないですが、意外とこうやって愚痴る人、いるんですよねぇ。

苦しみを十と取ってしまうんですよねぇ。

逆がいいですよね＾＾

# カカの天下680「カカの挑戦　そのいち」

こんばんは、カカです。

今日もそろそろ終わるころ。私は眠る前に机に向かい、自室で一人うんうん唸っていました。

目の前には一冊のノート。

宿題ではありません。当たり前です。

そのノートは……

「どうやったら、今年の抱負を達成できるか」

ということを書き綴ったものです！　新生カカノートとでも呼びましょうか。

今年の抱負――笑わせる。いさ考えてみるとこれは難しい。お笑い芸人さんたちが日々頑張っているのは、実はとんでもなくすごいことなのだと実感せざるをえない。

「どうやったら人を笑わせることができるか……」

おもしろいことをすればいい。ならば、そのおもしろいこととは？　具体的には？

「トメ兄にコスプレしてもらう」

それはおもしろい。しかし笑いはとれるだろうか？

身内にはとれるだろう。しかし周りの人は引くだろう。

うーん、半分合格。一応メモメモ。さぁ次は？

「トメ兄にボケ百連発をかましてもらう」

ダメだ、きっと三連発あたりでお客は全員帰ってしまうに違いない。

失格。次。

「トメ兄を素っ裸にして外へ放り出す」

笑いは笑いでも、後ろ指差されて笑われてしまう。私を含む家族のみんなが。

却下。次。

「トメ兄が飛ぶ」

私が飛ぶほうがおもしろい。

ナシだね。次。

「トメ兄がでゅみゅみゅみゅう」

アリだ。メモメモ。次。

「トメ兄ダンス」

想像してみよう。

『トメ！　トメ！　トマラナイけどトメ！　トメ！』

アリだな。メモメモ。次。

「トーメー人間」

透明人間。

なれない。

次。

「トメィトゥ！！」

トマト。

美味い。

メモメモ。次。

「正義の味方、トメ」

想像してみよう。

『君のピンチに颯爽と惨状！！　敵はどこだ！？』

どこだろう。

いいや、適当に作っちゃえ。えっと……でっかいケロリンでいいや。

『おお！？　出たな怪物ケロリン！　全長三百メートルで税込み九千四百五十円、今なら可愛い帽子も付いてくるお買い得品め！！』

鳴き声はアレしかなかろう。

『でゅみゅみゅみゅう！！』

『おのれ、なんだか可愛くてクセになる鳴き声でみんなの人気者の……って、あれ、じゃあ僕、倒さなくてよくないか？　や、でも一応、その、敵め！！』

『でゅみゅー！！』

『成敗してくれるわ！　いくぞ！！』

トメトメカッターはこないだ使ったから……

『笠原流包丁術、輪切り』

きらりと光るトメの包丁が一閃される。普段ならきゅうりなどをお手軽に切る包丁術だが、笠原流と名がつくだけあって威力は尋常ではない。その証拠に一つの高層ビルがあっさりと輪切りされてしまった。

意味もなく。

『おのれ、効かないか！？　こうなったら――笠原流包丁術秘儀、皮剥き』

再び翻る戦闘用家庭用包丁（どっち用だよ）。包丁で皮剥き……容易に思い浮かぶ家庭のお料理上手の姿といえばこれだろう。ゴボウの皮剥きならばともかく、じゃがいもの皮を包丁で綺麗に剥いている人を素人が見れば感心せざるをえないはずだ。その皮剥きすら笠原流、やはり威力は尋常ではない。東京ドームの外側を剥き削り、少しだけ小さくしてしまった。

見世物としては思いのほか地味な結果だった。そしてやはり意味はない。

『こうなったら――』

すでになんだか「なんで建造物ばっか壊してんだ」とか「派手に目立ちたいだけだろ」とか「がんばれケロリンそいつをやっつけろ頼むから」と誰もが言いたい雰囲気の中、空気の読めないそのヒーローは最後の一撃を放つ。

『笠原流包丁術最終奥義、微塵切り！！』

その名のごとく。キャベツだけではなく、もっと大きなものを粉微塵に切り刻むその奥義は――

カカの夢を、切った。

「……ばぇ？」

妙な音を出して顔を上げる。額がひりひりする、身体が痛い。いつの間にか机に突っ伏して眠っていたらしい。

「時間は……おぉ」

トメ兄が起きるくらいの時間だ。

「……ぼぇ」

再び妙な音を出してから、のそのそと起き上がる。うぅ、さむ。毛布毛布……寒い中で座りながら寝たせいで身体が起きているのか、今日は毛布団子にならなくても動ける。もちろん寒いので肩にはかけるけど。

「とーめーにーはーおーきーてーるー？」

部屋を出る。細々と歌いながら、そーっと廊下を移動。やがてトメ兄の部屋へ。こそこそ入る。

おーおー、あったかそうに気持ちよさそうに寝てるよ。今日から出勤日なのに。

ピ――ポチ。

鳴りかけた目覚ましを即行で止める。

さて、昨日さんざん考えた結果を試そうか。

トメ兄を……

結局どうすんだっけ？

アレだっけ？　コレだっけ？

まぁいいや。

顔に全部書いてやれ。

そして私はペンを置いた。

「トメ兄、遅刻するよ」

「んあ？　あー……ってもうこんな時間！？　なんでだ！？　目覚まし鳴ってなかったのか！？」

「そんなこと言ってる間に」

「うああやばい！！　カカごめん、飯は適当に頼む。僕着替えてそのまま出るわ！！」

鏡も見ずに慌てて走って出て行くトメ兄。

さてさて。

トメ兄の愉快な顔に、みんなは笑ってくれるかな？

## カカの天下６８０「カカの挑戦　そのいち」（後書き）

挑戦の結果がどうなったか……それはまた後日。

さて、話は変わりますが昨日の秘話を一つ。

私は昼の仕事を終えた後、いつもの通りカカ天を書いていました。しかしいかんせん時間がなく、そんなときに限って書いてたらなんか不良でてきてユイナさん頑張っちゃっていつもより長引いて……やばい、もう家を出ないと夜の仕事に間に合わない。もうちょっと、もうちょっとでできるのに！　今日は仕事に出てしまえば帰ってくるの夜中一時過ぎるの確定だから今のうちに更新しないと毎日更新が――と葛藤しつつ書きまくった結果。

遅刻しちゃいました。てへ♪

ま、まぁまぁ。仕事の様子見てヤバくなさそうだったし、遅刻っていっても七分だし……いいよね？　ね！？

## カカの天下６８１「呆れるばかりの一日か？」

ムカムカムカムカトメです！！

僕の名前がこんなに長くないことは皆さんご存知でしょう。ええ、単にムカムカしてるだけのトメです。それというのもカカのイタズラ！！　あんにゃろ、顔にびっしり細かくイタズラ書きなんかしやがって……

耳無し芳一みたいな自分の顔に気づいたのは、会社に出勤してしばらく経ち、トイレでふと鏡を見てからだった。気づくのが遅すぎると思うだろう。しかし遅刻寸前だった僕には、身だしなみを気にする余裕も、周りからの妙な視線を察する余裕もなかったのだ。

「え、ちゃんと耳にも書いたよ？」

「書きすぎだ！　耳無し芳一は言葉のあやだ！」

「え。アヤちゃんが芳一って人と浮気!?　ニシカワ君というものがありながら」

「そんなこと誰も言っとらん」

というわけで家に帰って早々にカカを叱り付けているんだが、この小娘はどうにもマイペースを崩そうとはしない。

「くそう、とんだ恥をかいてしまった……」

「ねね。周りの人、ウケてた？」

「ウケる前に引いてたわ！！」

「えー。いなかったの？　じっくり読んだ後にクスッと笑った人とか」

「……それなら何人かいた」

「よっしゃ」

「よっしゃじゃねえ！」

僕の声は届いていない。自信作がウケたという喜びでカカの頭はいっぱいだ。

「とにかく、もうこんなイタズラはやめろよ」

「わかった。これはもうしない」

「他のもするな！」

「耳がかゆい」

「会話をしろ！！」

ああ……なんかいっつも再確認しているけど、カカは今年もカカだ。

「あ、いたいた。おーい、トメ君、カカ君」

「母さん？　ただいま」

そうだった、今の我が家には母さんがいるのだ。挨拶するのを忘れていた。

「おかえりなさい。それでね？　私、いまから仕事に戻るから」

あまりに唐突な爆弾発言に、ピシリと空気が凍った。

「……え？」

なんとか声を絞りだす。

「だからね、私の冬休みはもうおしまいなの。残念だけど」

そ……っか。

そうだよな、こんなに長い間、仕事を休むこと自体が異例だったんだ。だから唐突に戻ることになっても仕方ない。や、そもそも僕らが聞かなかったんだ。休みがいつまでか、なんて。

聞きたくなかったから。考えたくなかったから。

でも、いざこうなったら、きちんと送り出してあげないと。

大丈夫、慣れている。特別な言葉は必要ないし、今さら感動的な別れ方をする必要も――

「おっかさぁぁぁぁぁぁん！！」

ないはずなんだけどなぁ。

「ほんまけ!?　ほんまに行ってしまうんけ!?　そんなことオラ聞いてないべさ!!」

注・カカです。

「ああ……隠していて、悪かったな」

注・母さんです。

「なして!?　なして今なんけ!　ようやく、ようやく幸せさ掴んできたとこやないか!」

注・田舎っぽい訛りのイントネーションをご想像ください。

「俺だって辛いさ……でも仕方ないじゃないか!!」

注・都会から来たイイ男をご想像ください。

「お腹の子さどうするんだ!?　つつおやがいなかっだらこの子寂しがるがいね!!」

注・つつおや→訛りを直すと父親。

「おまえが、いるじゃないか」

「オラだけじゃ無理だっぺ……オラも一緒についていく!!　東京さ行くだ!　都会のモンがなんだっちゅうんや。どうせ着るもんがハイカラになるだけっしゃろ!?」

「カカ子……！」

カカ子って誰だ。

や、それだけじゃなくて、何このミニドラマ？　それに、えっと、えーっと、とりあえずハイカラなんて言葉よく知ってたなカカ。あとはどこにツッコもう？

「すまん、俺は行く」

「ああ！　待たんかいね！」

「さらば！！」

なんかバサッと服を翻して去っていこうとする母さん。しかしそのとき！

「行くな！！」

別方向から新たな声が！！

「勝手に行くんじゃねぇ！！」

妙に男らしい声で登場したのは姉！！

それに驚愕した母さんは、吐息と共に彼女の名前を口にした。

「カツ夫……！」

だからカツオって誰だよ。どっかの海鮮類家族の長男じゃないよな？　うちの長女のことだよな。

「俺が……俺が悪かった！！　だから帰ってきてくれ！」

注・うちの姉です。

「もう、無理よ……私たち、終わったの」

注・バージョン変えたうちの母です。

「そんな！　じゃあ、じゃあ！　おまえのお腹の子はどうするんだ！？」

子持ち多いな。少子高齢化もビックリだ。

「私は、この子と二人で生きていくわ……」

涙を浮かべて（女優すげぇ）立ち去ろうとする母さん。そこへ！

「この子ってオラのことか！？　ああ、オラのもとに戻ってきてくれるっぺな！？」

「なんだおまえは！　俺の女に何をする！」

「そではこっつのセリフだべ！　あんたこそオラのだーりんに何しよっと！？」

「やめて！　私のために争うんじゃねぇ！！（母さんキャラ混ざってます）」

展開される三角関係。もはやカオスすぎてツッコみようがなく、
でも僕も意地になってツッコもうとしてアタフタして――

「ほら！　トメ兄も混じって！」

その声に頷いてしまい、

「メイドっぽく言ってみようか」

ちょっとシナをつくって、

「い、行かないでご主人さ――って誰がやるかぁ！！」

危うくヤヴァいノリツッコミをかましそうになるが、ギリギリセーフ！！　きっと！　多分！！

「ちっ！」

「惜しい！」

力いっぱい舌打ちする二人は放っておいて、

「で？　母さん。本当に仕事に戻るのか？」

「うっそーん♪　慌てる皆が見たかっただけ」

「私はトメ兄にそれやらせたかっただけ」

「あたしはノッただけ」

うちの家族は本当にもう……

そんな風に呆れることばっかりの一日でしたとさ。

――その夜。

「うっそーん、が、うっそーん」

そんなことを囁く声が一つ。

「ごめんね、皆。お仕事いってきまーす」

楽しく騒ぎ、寝静まった子供たちの顔を目に焼き付けて。

「ズルいよね、うん。でも、こうでもしないとお仕事に行けないから」

ずっとここにいたい――そんな想いを胸に押し込めて、

「ありがとう、楽しかったよ。元気充填おっけー。でわでわ、いってきまーす」

颯爽と、潔く、笑顔で、彼女は自らの戦場へと戻っていった。

## カカの天下６８１「呆れるばかりの一日か？」（後書き）

微妙に昨日の続き、と……
お母さんのお休み終了です。世の皆様は仕事はじめ、勉強はじめの時期ですね。私はようやく年末年始という激闘が終わって一休みできるころですが……
あえて言います。頑張れみんな！！
応援だけはしてるよ！！
それだけならタダだからね！！

あと、カカの喋りはいろいろ混ざってますがお気になさらず。どこの方言とかそっだらこと言われても子供のしゃべっとーことだっしゃよーわからんがいね。

## カカの天下６８２「不思議な繋がり？」

こんにちは、サエです。

突然ですが、これは夢です。初夢というやつでしょうか。そんなわけで何の説明も理由も道理も前触れもなく、空からお年玉が降ってきました。

『あなたが落とした玉は、この金の玉ですか？　それともこの銀の玉ですか？』

どこからともなく聞こえてくる声が言うには、どうやら落とし玉のようで。目の前には二つのおっきな玉が並びました。

「えっとー」

わたしは何も落としてないんだけど、とりあえず選べばいいのかな？

「どっちにしようかなー」

うろうろと迷っていた、そのとき！

「こっちにしなさい、サエ！！」

いきなり金の玉の上半分が砕け散り、まるで卵から生まれたひよこのごとく現れたのはお養母さん――わかりやすく説明すると、前までお世話になっていた叔母さん。

「いいえ、こっちよー！」

続いて同じように銀の卵から生まれたでっかいひよこは、現在進行形で私と暮らしているお母さん。

二つのお年玉――落とし玉の中身は、お母さんとおばさんだった。がっかり。

あ、いやっ、別に二人が嫌いなわけじゃないですよ？　でもお年玉っていったらもっと……ねぇ？

「あらあらあらー、そこの人はなんで金の玉に入ってるのかしらー？　略してほしい？　略して言ってほしい？」

「あはははうふふ？　何を下品なことを言ってるのかしら銀の人？　英語で言うとシルバーの人？　シルバーつまりは高齢者、あらあらお似合いじゃないですかー。お、ば、あ、ちゃ、ん」

「私より遥かに年上の人に言われたくないわー」

「肌年齢はあなたより下だと思うわよ？　そんなにシワシワじゃないし。のびのびなのは声だけで残念ね」

「ふふふー、あなたの寿命もちゃんとこれ以上のびるといいわねー？　突然終わっちゃったりしなければいいわねー」

寒い……どうしてこの二人が会話するだけでこんなにも寒いのでしょうか。

「それで、サエ？」

「どちらを選ぶのー？　そっちの金玉じゃないよねー」

「あ、言った、言っちゃった！！　サエ？　まさかそっちの下品なシルバァを選んだりしないわよねー？　あら、シルバーとバァが混ざっちゃったー、おっかしー」

「汁バァに言われてしまいましたー。何の汁か？　ふふ、キモチワルイ汁とだけ言っておきまー―」

「えいっ！！」

とりあえず落とし玉、ということなのでー。

二つとも崖に落としました。いきなり崖が現れたのは、夢だからです。なんで落としたかというと……怖かったので、つい。

「――という夢を見たのよっ」

「サユカちゃんが？」

「ええ、なぜかわたしがっ！」

ミステリーだ。あ、ども。バトンタッチしてカカです。いまだ冬休み中、我が家に集まってコタツで歓談しているとこです。今の話題はサユカンの初夢。

ちなみに今の夢話のナレーションは、夢の中でサエちゃんになっ

ていたサユカンでした。微妙な違い、わかった？

「わたし、サエすけのお家事情にそこまで詳しくないはずなのに…
…ここまでシンクロした夢見るなんて、わたしすごくないっ！？」

「あ、でもねー。私も初夢、カカちゃんになりきってる夢だったんだよー」

「なんですと！？」

それは聞き捨てならねぇなぁ！！

「どんなどんな？」

「えっとねー」

『バナナ』

『バナーナ』

『ばにゃにゃ』

『バニャーヌァ！！』

「ひたすらバナナって叫んでたー」

「カカすけっぽい」

そうなのか。

そうなのか？

そうかも。

「んー、この流れだとー」

「カカすけっ！　君はわたしの夢を見たでしょっ！？」

「サバの夢見た」

『なんでさっ！？』

そんなこと言われても。

「この流れなら三人が三人の夢見てー」

「不思議な繋がりを再確認するところでしょうっ」

つくづくそんなこと言われても。

――そして夕飯の時間。

「……こいつか」

「ん、どしたカカ」

テーブルに並んだ今夜のメニューを睨みつける。

サバ。今年の初夢を『交換』した（かもしれない）相手。

じゃあ、このサバはサユカンの夢を見たのか。

「おまえも私たちの仲間だったんだね？」

「なんで焼きサバに話しかけてるんだおまえは」

## カカの天下６８２「不思議な繋がり？」（後書き）

初夢のお話です。
ちょっとおもしろい初夢のリクエストもいただいたんですが、いざ書いたら長くなりそうなんでまたの機会に……

さてさて、そろそろ冬休みも終わる頃。
正月も終わる頃。
やばい……正月っぽいこと初詣しかしてない！！

とりあえず餅を食べようと思います。
あ、カカたちに餅食わせてない！！
サバじゃなくて餅にすればよかった。
餅になった夢……そそられるＺＥ！！

# カカの天下６８３「がんばれ代表、タケダじゃないよ」

おはようございます、カカです。

短かった冬休みも終わり、新学期が始まります。そんなわけで久々に登校してきたわけですが、まずあるのは始業式。体育館に生徒全員が集まり、生徒代表さんが司会進行を務めます。

『起立！』

マイクで増量されたその代表さんの声で、ダラダラと体育座りしていた私たち生徒は一斉に立ち上がります。

『気をつけろ！』

『ろ』はいらない。

『マッチ一本、火事の元』

続けなくていい。

「火のーよーじん！！」

誰だノッた生徒は。うらやましい、私も混ぜろ。

『礼！！』

ペコリ。ちっ、そんな暇ないか。

『ちゃくちぇき！』

あ、かんだ。

色々と「子供のやることですのでお許しください」的な一礼から始まった始業式、お次は？

『教頭先生からのデストロイです』

お話って意味ね。

ステージに上がるデストロイヤー教頭。久々に見るけど、やっぱり渋い。

ナイスミドルな教頭は、ダンディな声で静かにこう言った。

『あけおめ』

まさかこの人が略して言うとは思わなかった。意外と若くてお茶目な一面を見てしまい、そのギャップに私たちは沈黙せざるをえない。

『ことよろ』

ええい、まだ言うか！

『以上！』

えええ！？　もうちょっと何か言おうよ！

誰もが矛盾しつつも私と同じことを思ったに違いない。しかしそんな想いを込めた視線もなんのその、教頭はやりきった顔でステージを下りていく。さすがはデストロイヤー、新年からなんとなく見えない何かを壊していった。そそるぜ。

『生徒代表の言葉』

ん、それいけ代表さん。

……

しーん……

『生徒代表さん？』

……えっと？

『って、あたしか！？』

そうですよん。司会進行に没頭してて忘れてたのか。

『え、えっと……がんばろうぜ！！』

おっけー。あんた粋なヤツだな。応援するよ。

『え、えぇと、次は表彰！』

冬休み中、功績を残した生徒たちを称えます。

略。

『続きまして、校長先生からお言葉をいただきます』

お、今回はいるのね校長先生。

小柄な可愛いおばあさんがゆっくりとステージに上がっていく。

目を皿のようにしてその様子に注目する私たち。

「呼んだ？」

呼んでないよサラさん。だから今のは幻聴です。

こほん、ともかく小柄なおばあさんはマイクを取って、言いました。

『ここはどこかのう？』

『校長じゃないのかよ！？』

なぜか素晴らしいタイミングで体育館に迷い込んだ一般のおばあちゃんは、たまたま手が空いていた事務員のゆーたさんに家まで送ってもらうことになったそうな。

「すまんのぅ……」

「はっはっは！　女性に尽くすことこそ男の悦び！　ささ、手を。足元に気をつけてください」

言い方はともかく、やってることは普通にえらいよねこの人。

さて、本物の校長さんは？

『ええと、てっきりあの方が校長だと思っていたのですが、本物の校長はまた海外に行っていて不在だそうです』

気づこうよ。

『同じおばあちゃんだからてっきり』

外人さんは全部おんなじ顔に見える、みたいな理屈はやめなさい。

えーと、その後は校歌を斉唱しました。『降下、戦死』とか言ってた気もするけど、いい加減にだるくなってきた私たち生徒はスルーしました。

そして、最後。

『きりっ』

キリッとしてどうする。

『気をつけて』

『て』はいらないってば。

『また明日』

だから変な風に続けるなっての。

『失礼』

それ謝ってるの？　『礼』を『失礼』と間違ったの？　どっち。

『ちゃくちぇき！』

や、だから誰も礼してないんだってば。どっちかわからないから。

『ごめんなさい』

え、あ、うん。ええと、頑張ったよね、拍手拍手。

パチパチパチパチ――なぜか予定になかった拍手をもって、式は終了した。

「――こんな始業式だったんだよ、トメ兄」

「おまえらはいつも楽しそうだなぁ」

以上、始業式の模様をトメ兄のツッコミ力も借りてお送りしました。今学期もよろしくお願いします。

## カカの天下６８３「がんばれ代表、タケダじゃないよ」（後書き）

がんばれタケダっぽいサブタイトルですが微塵もヤツは出てきません。

今、彼がどうしてるか？

知りませんよそんな些末事。

# カカの天下６８４「しょっく」

こんにちは、カカです。

今日から普通に授業再開。少し遅れて朝礼を始めたテンカ先生は、静かに口を開きました。

「タケダが死んだ」

は？

「タケダって誰だっけ？」

「ほら、隣のクラスの委員長だよ」

「それってマケダって名前じゃなかったっけ」

「いや、確かヤケダじゃ」

「ヤケだ！！　俺はもうヤケだ！」

「うるさいよ。誰だよおまえ」

「サケダじゃなかったっけ？」

「酒だー！　酒もってこーい！」

「カカすけのお姉さんみたいなこと言わないでよっ」

「いま思いついたんだけどー、チャケダって可愛くないかなー？」

ざわざわきゃいきゃいとはしゃぎ始めるクラスメイト。そんな中で、私は――欠伸をしていた。

「それでそれで、死因は？」

「きっとカカに殺されたんだぜ」

おい。

「でもサエちゃんとも仲良かったよね。闇に売られたんじゃないの？」

「売れなかったよー」

「さも売ろうとしたみたいに言うんじゃないわよサエすけっ」

「売るんなら西だよね」

「どこよ」

「死因は、風邪だ」

あははは、と笑い声がそこかしこから零れる。風邪？　まっさかー。

「風邪から肺炎を起こして、昨夜に亡くなった」

テンカ先生も冗談ばっかり。

「どうせ隣に行けばいるんでしょ？」

「あ、でも、わたくし隣のクラスのお友達とずっと喋ってましたけど……一度も見かけていませんよ」

「もう死体は運ばれたか」

「燃えるゴミなのか萌えないゴミなのかが気になる」

「おお、漢字的にどっちもありえそうだ」

「近々、葬儀についての詳細のプリントが配られるだろう。てめぇら、ちゃんと参加するんだぞ」

またまた……そんな信憑性の高くなりそうなことばっかり言って。

「さて、話はこんくらいだ。もうすぐ授業だから職員室に一旦戻るわ」

え、あの、え？

「テンカ先生」

「んだよ」

委員長としての責任感がそうさせたのか、すっと手を上げたイチョウさん。

「その話、冗談ですよね？」

「冗談でこんなこと言うかよ」

バタン、と妙に大きく響く引き戸の音。

耳障りに思えたのは、誰もが声を出さなくなったからだ。

「……え？　まじ？」

「死んだ？　タケダが？」

静かに再びざわつき始めるクラス。でも今度は――明るい声も、バカにしたような声も、呆れた声も、ない。

あるのは不安な声だけ。

「ねぇ、どう思うカカすけ」

「ねーねーカカちゃん」

「なんで私に言うのさ」

「そんなに落ち着いてるから、事情を知ってるのかとー」

知らないよ、そんなの。

でもどうせ冗談でしょ。

冗談だよね。

まぁ、仮に事実だとしてもタケダがいなくなったくらいで……あれ。

「あう？」

いなく、なった？

もう会えない？　もういない？　もう付きまとってきたりしないし、からかったりも無視したりもしないし、それどころか顔も見ないし喋ることも声を聞くことも何も――ない？

なに、この、嫌な気持ち。

「カカちゃん？　顔がまっさお」

「カカすけ、大丈夫？」

「……や」

大丈夫、じゃ、ない、かも。

なに、なになになに、全然親しくなかったはずなのに。全然なんとも思ってなかったはずなのに。なに、この――

「タケダが、死んだ？」

カラーン！　と。私の声を聞いたのか、それとも誰かの声を聞いたのか。

インドちゃんが、スプーンを落としていた。お弁当箱ごとカレーも落としていた。朝礼の時間にカレーを食べていたのか、とか思う人は誰もいない。なぜなら、インドちゃんならいつカレー食べていてもおかしくないから、ではなく。その表情に釘付けだったからだ。

その、子供な私たちが見たこともないような絶望的な瞳に。

「……やだ」

そうだ。

やだ。

なんかやだ。あいつがいなくなるのは嫌だ。

いてほしいと思ったことはない。どうでもいいと思っていた。でも、でも――

「ああ、あれ嘘だから」

バキン、と音がした。

多分クラスが割れる音。何が割れたかはご想像にお任せする。多分、皆の心とか気持ちとか空間とか世界とかそんなんにヒビを入れたのだ、ひょこっと顔を出したテンカ先生の一言は。

「てん、か、せん、せい？」

誰ともなく問いかける。

「どうだ、思い知ったか。てめぇらは随分と他人を邪険にするケがあるようだからな――いざ人が死んだとなるとどうなるか、考えさせてやりたかったんだよ」

「なんで、そんな」

「忘れたか？　一時間目は道徳だ。オレなりに考えた授業の一環だよ」

「冗談でこんなこと言うか、って！」

「冗談じゃねぇよ。授業っつったろ」

「それにしたってタチ悪すぎでしょ！！」

私は怒鳴った。

さっき自分の胸を抉った気持ちのやり場がなくて。

「あぁん？　じゃあてめぇらが最初に喋ってた内容はタチ悪くねぇってのか」

でもそんな気持ちはどこかへ行ってしまった。

最初、私たちは何を喋っていた？　私は？　どうせ冗談だと決め付けて欠伸をしていたんじゃないのか。

「別にそういうのもいいだろうよ。タケダはいじられ役みたいなもんだしな。ただ、やりすぎるな。あいつも人間で、ガキだ。傷つくときゃ傷つく。あいつだけじゃない、誰でもな。それを忘れるんじ

やねぇぞ」

私たちは、頷くしかなかった。

「あとな、風邪で肺炎を起こして死ぬことはある。うがい、手洗いはしっかりしろよ。あんな想いを他のやつらにさせたくなかったらな」

そして私たちは、言われた通りにうがいと手洗いを習慣づけるようになる。

この破天荒な先生のおかげで。

「……それで、本当のタケダは？」

「風邪で休み」

お見舞いに、いこうかな。

この先生のおかげで、こんなことを思ってしまった。

## カカの天下６８４「しょっく」（後書き）

唐突にガッツーン的な話を書いてしまいまして申し訳ありません。私はいきなりこんなんで読者さんの心を揺さぶるのが大好きなのです。

明日も重い話になるのか？　いいえ全然微塵もそんなことはありませんのでご心配なく。でもなんだかタケダ率が上がりそうな予感です。

これからの予定？　もちろん何も考えてません。

あ、それと。カカたちには注意しましたけど……読者の皆さんはいつもどーりタケダのことを存分にアレコレ言っても構いませんよ？　結局最後はコメディなので笑

## カカの天下６８５「お見舞いだってよ、がんばれタケダ」

やぁ諸君、あけましておめでとう。タケダだ。

クリスマスに風邪をひいて以来、治りかけてはぶり返し、また治りかけてはぶり返しを繰り返し、新学期が始まった今になっても布団から離れられない状況だ。

まったく自分が情けない、しかし馬鹿は風邪をひかないという、さらに夏風邪は馬鹿しかひかないともいう。冬にこんな大風邪をひくとは、やはり俺は天才なのだろう。わっはっは――っくしゅ！

「ぬぅ……そんなことを言いながら風邪で死にでもすれば本末転倒もいいところだ。早く治さねば……」

そう、治さねばカカ君の顔を見ることができない。

好きな女の子に会えない、男子にとってこれほど辛いことはないのだ。

「ああ……カカ君」

「なに」

「うわおえぇあ！？」

風邪のせいで吐いたわけではない、ビックリしたのだ。

なぜなら、なぜならなぜなら！　俺の部屋の入り口に、いつの間

にかカカ君が立っていたのだから！！

「か、カカ君？　なぜ」

「ん。見舞いにきた」

「……なぜ」

俺はもう一度問いかけた。だっておかしい。俺の明晰な頭脳の計算によると、今までの関係上でカカ君がお見舞いに来てくれるほど俺のことを考えている可能性は限りなくゼロに近い。むしろ名前すら覚えているかもあやしい。

それなのに、わざわざ、見舞いに？

「んー、なんとなく？　ほれ、差し入れ」

しかも、リンゴという定番のアイテムまで！？

「剥いたげよっか。台所から適当に皿持ってきたし。あ、ごめんね勝手に」

「い、いや……いいのか？」

「そんくらい別に」

すたすたと物怖じすることなく俺の部屋に入ってきたカカ君は、俺の寝ているベッドの横に座す。膝の上に皿を乗せ、ナイフを取り出してリンゴを剥き始めた。

「おお、うまいものだ……が、そのナイフは？」

「護身用」

「き、君は、なんというか、さすがだ」

そこが好きだ。

「え？」

……え？

「タケダ、いま、なんて言った？」

き、聞こえてたあああああああ！？

いや、待て。それも今更ではあるまいか。俺は幾度と無くアプローチしてきたはずだ、たとえそれが気づかれていなくても――いや、だからこそ！　今ハッキリとするべきではあるまいか！

「カカ君、俺は君が好きだ！！」

言った……

言ってしまった……

「なに、これ。なんかドキドキする……」

カカ君！　俺の想いが伝わって……

俺とカカ君の顔が、少しずつ近づいて……

とかなれば、いいのになぁ……なんて。一人でベッドの中で妄想していたわけなのだが。

「はぁ、暇だ」

なんだ妄想なのかよ!?　そう思ったかね？　言っただろう、好きな女の子に会えない、男子にとってこれほど辛いことはないのだ、と。そして彼女が見舞いに来る可能性なぞほとんどない、ならば妄想するしかないではないか。

「はぁ……カカ君」

「なに」

「そうそう、こんな感じで返事をしてくれ――た？」

ベッドから半身を起こして、ドアの方を見る。

頬をつねる。

痛い。

痛い。

痛いっつの!!

自分で自分にツッコみつつも、俺は呆然としていた。

「え……家の鍵は？」

「開けた」

あっけらかんと答えるカカ君。かかっていた鍵をどうやって、いや、そんなことはどうでもよくて、

「な、なぜ？」

「ん、見舞いにきた」

「……なぜ？」

「んー、なんとなく？　ほれ差し入れ」

これはまさか、先ほどの妄想が現実化したのか！？　きっとそうだ！　その証拠にカカ君は妄想と全く同じことを話しているし、手にはリンゴも持っている！

きっと良い子にしていた俺に神様がプレゼントをくれたのだ！

スパァーン！！

神様、ではなく、カカ君からのプレゼントが俺の頭に炸裂した。

「あの……カカ、君？」

ベッドから落ちてごろりと転がる砕けたリンゴの破片、その欠片の大部分は俺の頭に汁っぽくべったりと付着していた。

「なぜ？」

通算三回目の「なぜ」を言った。

「だって私は風邪ひきたくないもん」

だから部屋に入らないと言うのか。

だから部屋の入り口から「ピッチャー振りかぶって投げました」的な勢いでリンゴを俺に投げつけたのか。頭ど真ん中にストライクだ。キャッチャーアウトだ。

「もいっちょいくよー。せーの」

「待て！！　見舞いに来てくれたのは嬉しいが、ほら、もっと穏便に！　例えば護身用のナイフでリンゴを剥いてくれたり――」

「護身用のナイフ？　これか。せーの」

「だからなんで投げる体勢になってるのだ！？」

「なに、これ。なんかドキドキする……」

カカ君！　俺の想いが伝わって……ない！！　妄想とセリフは同じだが全く伝わってない！　俺に自殺願望なんかないのだあああああ！！

そして。色々投げまくったカカ君は満足そうに帰っていった。俺

はまともに喋れなかった。

でも……へへへ、カカ君が見舞いに来てくれた。

幸せだ。

うむ、一刻も早く風邪を治して礼を言わなければ！　うおおお！
愛の力で風邪の菌など蹴散らしてくれるわぁ！！

次の日。

風邪は悪化した。

## カカの天下６８５「お見舞いだってよ、がんばれタケダ」（後書き）

なんだかんだでカカがお見舞いにきた。
よかったね、タケダ。
でも風邪が悪化した？
よかったね、タケダ。

## カカの天下６８６「またお見舞いか、がんばれタケダ」

「聞きました、かのちゃん？　カカさんのお話」

「私聞いた！　なんかおもしろいことになってきたわよねニッシー」

「アヤ坊、あんまり騒ぐのもどうかと思うよ」

「えー！　だってカカの話って嘘くさいんだもの。普通、お見舞いに行ってリンゴをぶん投げたりする？」

「カカならするだろ」

「カカさん普通じゃありませんし」

「……それもそうね。私が悪かったわ」

「それで、どうします？　かのちゃん」

「……私、いく。いっちゃんたち、一緒にきて」

げほげほ、タケダだ。

昨日カカ君の襲撃――いや、見舞いをくらい、俺の体調は見事に悪化した。なぜだ、幸せ絶頂で気分は高揚し、病は気からというからには治ると思っていたのに。

やはりあれか。カカ君からのプレゼント……と感動して被ったリンゴの汁をしばらくそのまま放置していたからか。身体を濡れたままにしておくと風邪をひく、悪化するというが、リンゴ汁でもなるのだな。気をつけよう。

「はぁ……それにしても暇だ……はぁ」

自室のベッドに寝転がりながら、何度もため息をつく。

また妄想でもするか。いやいや、また昨日のように破滅的に現実化したら……嬉しいな。なにせそれでもカカ君に会えるのだから。よし、妄想してみよう。

カカ君がもう一度お見舞いに――

「タケダ」

「おお、カカ君!!　……カカ君?」

「身舞いにきた」

「……なぜに窓から?」

「舞いやすいでしょ。ほれ」

「う、うわわ、なんだいきなり抱きついて!　いくらなんでも嬉しすぎ――」

「よっこいしょ」

「……え、俺、肩に担がれた？」

「せーの」

「ちょ！　なんで窓の向こうに向かって投げようとしてるのだ！？」

「だから身舞いにきたんだって。身を舞わせなさい、空高く！」

「身舞いするのは俺じゃないかぁ！！」

「ピッチャー振りかぶって、投げました！」

「――ストライク、意識がフェード・アウト。ってなんだこれは」

なぜ妄想の中ですら良い思いをしていないのだ……むう、どうやら昨日の衝撃的お見舞いによって、俺の中のカカ君像が攻撃的に上方修正されたらしい。しかし悲しいかな、こっちのほうがよっぽど彼女らしい。

「むぅ、リアリティを追求するべきか、それとも」

ピンポーン、と。俺の思考を遮るようなチャイムの音が聞こえた。

お客か、まさかカカ君？　とにかく出迎えに、と思ったが身体を起こした途端にクラッと眩暈。どうやら立ち上がるのは無理そうだ。

それを察したのか、性格が勝手なだけなのか。勝手にうちに入ってきたらしい来訪者の足音がドタバタと複数聞こえてきて、やがて俺の部屋の扉を開けた。

「よ、タケダ。元気に風邪ひいてるか？」

「やっほ、見舞いにきたよんカゼダ」

「あらあらタケダさん、おもしろい顔。元からそのようなお造りでしたでしょうか？」

現れたのは比較的親しい同級生の四人。そうか、こいつらなら何度かうちで勉強会とかしていたし、勝手知ったる他人の我が家というやつだ。

「げほ、よく来てくれたな……ニシカワ、風邪の菌は元気だ。アヤ、俺はカゼダじゃなくてタケダ、しかも『ダ』しかあってない。イチョウよ、顔は少々むくれているが」

「あら、元と同じに見えましたが」

「なら言うな……遠まわしに俺の顔が元々おもしろいと言いたいのだろうが」

「いえいえ！　それほどでも！　取るに足りません！」

「君は本当に面の皮が厚くなったな！！」

「ま、またわたくしは失礼なことを言ってしまったのですね！　申し訳ありません……去年の運動会の一件から、色々なことを楽しむ

ためにまずは素直になってみましょうと思いましたが運の尽き、ついつい正直に思ったことを言ってしまうのです……」

イチョウよ、それ微塵も弁解になってないぞよ。

おどおどしつつも心は暗黒だったんだなぁ……

「え、ええと、あ、ほら！　かのちゃん、いつまでも後ろに隠れてないで、そろそろ出てきてください。せっかくお見舞いに来たんですから」

「かのちゃん、とは？」

「カレーの『カ』と、ノゾミの『ノ』をとって、かのちゃんです」

なるほど、ノゾミ君か。道理でイチョウの背後の暗闇でもそもそと動く気配があったと思った。

「あ、あの」

「おお、久しぶりだなノゾミ君」

む、なぜ恐々と顔を出す？　そもそもなぜ隠れていたのだ。

「ほら、言っちゃえインドちゃん」

「言え言え。いぇーい」

「ニシカワさん、家に帰ってほしいほどつまらないです」

「……家ぇーい」

ふむ、何を言うのかな？

「わ、わた、私！」

ふむ？

「カカちゃんには負けない！」

む？

「それは、どういう意味――」

「えーい！！」

勢いよく頭上から降ってくるタッパーＩＮカレー。説明するまでもなくノゾミ君が振りかぶって投げたものだ、なるほど。

「負けないって、そういう意味かぁ」

べちゃり、と俺の身体を襲う半液体。汁気はともかく不快さ、洗濯の面倒さはカカ君の攻撃を遥かに上回る。極めつけはタッパー。それを見事に頭に被ったならば俺の悲惨さは一層二層と増す、いや、増した。これもカカ君のリンゴ攻撃を上回ったと言えるだろう。

「わ、私、勝った！？」

「……ああ」

混乱しつつもなんとなく答えてみる。

「え、えと、私の、プレゼントのほうが、すごい？」

「……ああ」

写真に撮ってどっちがより悲惨か比べたいくらいだ。見るまでもなくどちらも悲惨だが。

「……や、やった」

やられた。

「えへ、カカちゃんに勝った――」

スッパァァァン！！

「聞き捨てならないね！」

ようこそ……カカ君……

「私に勝っただと？」

「あ……う……」

来てくれて嬉しいよ……

「今のはどうよ、私のほうが強いっぽくない？」

「ま、ま、負けないもん！」

でもさ……問答無用でグレープフルーツを投げつけるのはどうかと思うのだよ……しかも頭に直撃して割れるくらいの勢いで……病人の俺に……昨日以上の汁っ気でベタベタなんですが……

「じゃあ、勝負！　もいっちょグレープフルーツ攻撃！」

「よ、予備のカレーこーげきー！！」

「まだまだー！」

「ま、負けないもん負けないもん」

そしてなぜか開始される総攻撃。

うぎゃあ。

そうとしか言えなかった。

「あらあらー、おもしろいことにー。パシャパシャー」

「ねぇサエ、サエ！！　もう、写真撮るのに夢中で聞いてないし…サユカ、これってどういうことよ」

「知らないわよっ。サエすけが三人でお見舞い行こうって誘ってきたから、暇だったしオッケーしたんだけど、アヤたちまでいるなんて知らなかったし」

「なんだか修羅場のような展開となってきてしまいましたね！　これはやはり、勝利した方がタケダさんを手に入れられるというルールなのでしょうか！？」

「……楽しそうね、イチョウさん」

「水を差すようで悪いけど、多分カカすけはノリで競い合ってるだけだと思うわ」

「なぁアヤ坊。僕もあれに混ざりたい。すごくスッキリしそう。石とかないかな」

「ニッシー、あんたって……マイペースよね」

「サユカもどうだ？　おまえいっつもストレス溜まってるっぽいし、案外気持ちいいかもしれないぞ」

「嫌よっ！　あと大きなお世話っ！　ていうかさ、そろそろタケダ助けない？　なんだかカレーと果汁でいい感じに美味しくまずそうに仕上がってきたんだけど」

カレーにフルーツは合うという。だから美味しそう。

しかしタケダ。だからまずそう。

「パシャパシャー、大丈夫だよー。ここまできたらタケダ君も楽しんでるっぽいしー」

――タケダは本当に楽しんでいた。

好きな人にいじめられているから、ではない。ひどい目にあうのが好きだから、でもない。カレーや果汁を浴びるのが趣味だから、だったらおもしろい設定だがそれも違う。

風邪でずっと布団にいて、友達ともほとんど喋ることができなくて、寂しかったから。このように賑やかなのは久々だから。

だからこのくらい。

洗濯すればそれで済むような目にあうくらい、どうってことないのだ。早く治して友達と遊びたい、その想いを、もっと強く、強くして、その翌日。

本当に風邪は治っていた。

カプサイシンとビタミンが効いたのかもしれない。

もしくは、他の何かが。

## カカの天下６８６「またお見舞いか、がんばれタケダ」（後書き）

あんな状態（とにかくベタベタな様）でもこんなことを思えるのは風邪の熱のせいです。きっとそうです。だから彼のことは温くなったカレーのごとく生暖かい目で見守ってやりましょう。

## カカの天下６８７「ご注文はお決まりですか」

こんばんは、トメです。

カカと雑談しながら歩行中。

「でさ、ブートンって名前はつまんないじゃん？」

「サカイさんちの豚か？　そりゃ日本経済だの総理大臣だのに囲まれてりゃ印象薄いけど」

「だから豚野郎に改名したの」

「なんでおまえらのネーミングセンスはそうなんだ？」

「そうなんだと言われてもこうなんだ」

「そうなんだー。あ、見つけたぞ。この店だ」

今日の夕食は、とある居酒屋さんですませることにしました。それというのも、キリヤが臨時バイトとして入っているというので顔を出してみようと思ったからです。

店に入り、案内してくれた子に「今日入ってるはずのキリヤってバイトの知り合いなんですけど」と言っておき、カカと二人でテーブルに座って間もなく。おしぼりを持ったキリヤが目新しい制服姿で登場した。

「いらっしゃいませ。こちら、おしぼりでございます」

「ジュースは？」

「搾ります」

「気にいらないヤツは？」

「絞ります」

「おっぱいは？」

「しぼりたいです」

「でもやがて」

「しぼみます」

「お腹あたりのココが気になる」

「脂肪です」

「トメ兄は」

「死亡です」

店は変わっても相変わらずのやり取りを『しぼ』という言葉縛りで始めるカカキリヤ。ツッコミどころは多いが、僕も一つに『絞って』言わせてもらおう。

「勝手に殺すな」

『しょぼーん』

「仲良いなオイ」

ちょっとヤケるぜ。

「でも自重しろよ。臨時で入ったのにこんな愉快なことしてたら、キリヤの立場が危うくなるかもしれないだろ」

「だってメニューも店の名前もおもしろくないんだもん。私たちがおもしろくなるしかないじゃん」

「カカちゃん、同感です」

「同感なのかよ」

本人がいいならいいけどさ。

「ともかくようこそいらっしゃいました。ご注文がお決まりになりましたら、そちらのボタンでお呼びください。失礼致します」

店員モードになりつつウインクなんかしてくれたキリヤはそそくさと仕事へ戻っていった。

「さて、何を食べようかね」

「飲み物は？」

「僕は生ビール」

「ビールといえばお姉だよね！」

「……まぁ、そうだな」

なんだ急に。

「カカは？」

「私はジンジャエール。あ、神社といえば巫女姿のサラさん可愛かったね」

「少なくともテンの十倍は似合ってたな」

「うんうん、神社はサラさん」

なんか変な言い方だな。

「あと何を食べようか」

「じゃ、これと、これと……わ、居酒屋にホットドッグなんかある」

「ハンバーグも珍しいな。お食事のお客も目当てなのかね。あ。これいいかも」

二人であーだこーだとメニューを指差しながら決めて、ボタンをぷっしゅ。

「はい、お伺い致します」

他の店員が気を使ってくれたのか、ちゃんと来てくれたキリヤ。

「えっとな」

「私！　私が言う！」

「はいはいお好きにどうぞ」

わざわざ言いたがるなんて子供かよ。

……子供だったな、そういえば。

「んとね、んとね」

まずは生ビールと、

「ナマ姉と」

ジンジャエール。

「サラエール」

……ああ、なるほど。なんかしきりに頷いてたのはこの布石だったのか。しかし嫌だなナマ姉。そりゃ姉はいつだってナマモノだけど、なぜか汚いナマ足みたいな印象が浮かんでしまう。あとサラエールって薬みたいだな。もしくは外国人が人さらいの時に「オゥ、コノ子サラエール！　ヒャッフゥ」とか言ってるみたい……これは強引か。

「あとね、日本経済のソテー」

牛肉のソテーね。

「それと、官房長官ハンバーグ」

こねこねハンバーグ……こねこ、子猫ね。

「さらに、あったかいラスカル」

ホットドッグな。

「こんくらいで」

「かしこまりました」

さすがキリヤ、かしこまりやがった。

「オーダー入ります!!　ナマ姉、サラエール、日本経済のソテー、官房長官ハンバーグ、あったかいラスカル、オールワンです!」

しかもそのまま厨房に言いやがった!!

「ナマの、お姉さん?」

「さらえ?　誰を?」

「官房長官どこだ」

「日本経済を……ソテーするのか?　何様?」

「官房長官どこだよ」

「ラスカル……あったかいって、生きたラスカルを出せってこと？　ていうかラスカルって」

「官房長官どこっ！？」

そして困惑する店員さんたちの顔といったら！　僕とカカは口を必死で押さえつつ、静かに大爆笑していた。

「――お待たせしました、ナマ姉とサラエールです。あと、申し訳ありません。官房長官の在庫が無いそうなので、キャンセルという形でお願いしてもよろしいでしょうか」

僕とカカの笑いは止まらなかった。しかしその勢いで僕は一気にビールを飲み干し、気になっていたオリジナルカクテルを注文した。

カクテルの名前は、ネコの踊り。

「総理大臣の踊りを一つお願いしまーす！！」

『無理！！』

奥から聞こえてくる無駄にでかいキリヤの声。仕事中だというのに期待に応えまくってくれるキリヤの姿に、僕とカカはいつまでも笑っているのだった。

おまけ。

サカイ宅にて。

「もしもしー？　あらあらキリヤ君？」

「あ、もしもし。お願いがあるんです。実は食材が不足していまして……官房長官、余ってませんか？」

「あははーくたばれ」

もちろん冗談である。

## カカの天下６８７「ご注文はお決まりですか」（後書き）

成人の日！　というわけで成人された方々おめでとうございます！！

え、話の内容が成人の日とまったく関係ないって？
いーじゃん別に。

ともかくおめでとう！！

# カカの天下６８８「減速注意」

カカです。

昨夜に雨混じりの雪が降りまくり、『ごっつい水たまり』っぽいものが道路のそこかしこにできてしまいました。そう、半分は雪だから流れ切らず、そして半分が水だから簡単に弾け飛ぶ『ごっつい水たまり』が。

「おっと」

いまだ薄らと降り続ける雪を受け止めるために上へ向けていた傘を足元へ、そして間もなく傍を車が通り――バシャアアン！　極太ホースでぶっ放したかと思うほどの水量が襲い掛かってきた。斜め下へ向けていた傘はしっかり私の足をガード。しかし私の近くを歩いていた人たちは、なす術もなく冷水の弾丸に撃ち抜かれていた。

走行中の車のタイヤ。それは『ごっつい水たまり』に突進するたび、歩道にいる罪もない人々に水をぶっかける。とてつもなくハタ迷惑な話だ。

今日は、私の周りの人がそんな迷惑な水たまりにどうやって対処するかを紹介しよう。

サユカンの場合。

「む。あそこ辺りの歩道にある雪、水浸しで柔らかくなってるわね

っ！　つまりは車が通ると水がかかる場所ということ……気をつけないと」

車が通らないときにそこを歩いて見事にスルー。

普通、つまらん。

サエちゃんの場合。

「ふふ……お母さんの手編みのマフラー……ぬくぬくー」

ニコニコ顔で歩いていたサエちゃん。

そこへ車があげた水しぶきが襲い掛かる！！

バシャアアアアアアアアアン！！

ニコニコしていたはずのサエちゃんは、ずぶ濡れになってしまった。

お母さんが縫ってくれたマフラーと一緒に。

「……ふぇ」

立ち尽くす。

涙が出る。

そして再び車が通り――その場から動いていなかったサエちゃんはまたもや水を浴びてしまった。

「……ふえぇ」

冷たい、寒い、でもそんなことより、お母さんのマフラーが濡れてしまったのが悲しくて。

「……ぅう、えぐ」

泣きながら、下が雪なのも構わず座り込んでしまって、

「……ぅぅー……ぅぅー」

泣いて、車が通って、水がかかって、また泣いて、でも車が通って通って次々に水をかけてかけてかけて――

やがて。

「大丈夫!?　ねぇ君!」「ごめんよ!　本当にごめん!」「お願いだから泣き止んでよぅ」「くそぅ、俺の前を走っていたやつはどこいきやがった!?」「ナンバーは覚えてるか!」「おうよ!」「よし、草の根分けても見つけてやる!」「俺も協力するぞ、それがこの子を泣かしてしまった贖罪だ!!」「ていうかホントすいません!!」

その悲惨な姿に心を痛められまくった運転手たちが次々と土下座しにきて列を作る。そして口々に上記のことを叫びながらサエちゃんに謝罪の言葉と金とブツを捧げることになるのだった。

恐るべし腹黒。

「くすん……まふらぁー……」

あ、ごめん。

なんか素だったみたい。

つまりは天然でこれか。魔性の女だ……

ていうかサエちゃんになんてことしやがるコイツら。ブットバス。

お姉の場合。

「かっとばせー、ば、ば、あ！」

妙な鼻唄を響かせながら歩くお姉を襲う、車の水攻撃！

人間離れした運動神経、反射神経を持つお姉だけど、気を抜いているときは案外マヌケだったりする。そんなわけで、

「おわ冷た！」

簡単に水を浴びることになってしまった。

「こんの……待ちやがれ！！」

お姉はさしていた傘を窄めた後、槍投げ選手のごとく勢いでそれ

を遠投した。

槍――いや、矢と化した傘は寸分狂うことなく水をぶっかけた車の後部にブッ刺さる。しかし車は止まらない。気づいていないのかもしれない。でもお姉はそれで満足した。空いた穴の修理はさぞかしお金がかかるだろう。そんな報復ができただけで充分なのだ。

バシャアアアアン！！

偉そうに踏ん反り返っていたお姉を再び襲う水衝撃波。サエちゃんと同じく、そこから動いていなかったせいだ。

「っの！！」

お姉は足元に落ちていた小石を蹴った。その周囲に積もっていた雪が破裂したように吹っ飛ぶ中、どこまでも真っ直ぐ飛び出したのは一つの弾丸と化した石。

それは不届きな車へと突き刺さり、後部のアレやコレやを破壊した。

バッシャ――

「ふん！！」

三度お姉に水をかけようとした車が通る瞬間に放たれたお姉の蹴り。それは槍や矢や弾丸よりも鋭く車の横部に突き刺さり、吹っ飛ばした。

浮き、揺れ、蛇行しながらもなんとかブレーキに成功した車の運

転手は……お姉を見た。

鬼と化したお姉を。

開口一番「あけましておめでとう！！」などと言いながら凄惨な笑みを浮かべているそのバケモノを。

その後、運転手がどうなったかは知らない。

ただ、サエちゃんのことがあったときに誰かが立てた『水たまりがある場合、歩行者に注意しながら減速して走りましょう』という看板に、こっそりと『命が惜しくば』と書かれた、とだけ記しておく。

え、私の対処法？

さっきみたいに傘で防ぐんだよ。

もしくは……

「昨日も冷えたけど、今日も冷える……きっとまたあんな道になってるんだろうな。あーやだやだ」

翌日の朝、コタツで愚痴る私。

もっと簡単な対処法。それは家から出ないこと。

「トメ兄、お茶」

「や、学校行けよ」

## カカの天下６８８「減速注意」（後書き）

昨日、雪が降りまくりました。一日でいい感じに積もってます。
そして今日。水をぶっ掛けられました。
だから書いた。反省も後悔もしていない。

# カカの天下６８９「クララａｎｄタマ」

こんにちは、カカです。

空はすっかり快晴ですがまだまだ雪が残る中、トメ兄に頼まれた買い物へ行くため出歩いている途中で妙なものを見つけました。

それは空の近く、結構な高さにある枯れ木の枝に乗って何やら雪を撒き散らしている……クララちゃん？

「おーい」

「あ、カカ！！　あけましておめでとうございます！」

「あ、うん。おめでとう」

そういえば今年会うのは初めてか。

「久しぶりだね、どこか行ってたのー！？」

いまだに枝の上でなんかしてるクララちゃんを見上げながら、声を張り上げる。

「冬眠してました！」

「……そか」

雪、降ってたしね。木に戻ってたのかな。

「それで、今は何してるの？」

見た感じ……枝に積もった雪を掴んで、木の他部分にぶっかけてるみたいだけど。

「花咲かじいさんです！」

「え！　花って本当にそうやって咲かすの！？」

驚きだ。脳裏に浮かぶのはおとぎ話、おじいさんが色々あった灰を桜の枝にかけると、パーッと花が咲いていくという……まさか、それが本当だったなんて！　実はそれが妖精の仕事で、私たちには見えていなかっただけだったなんて！

「クララ間違えました！」

「え、なに？」

「クララ女の子です！　クララ、花咲かばあさんです！」

「ああ、うん、そだね」

「クララまた間違えました！」

「今度はなに」

「クララまだまだ若いです！　クララ、花咲か女です！」

「急に妖怪っぽい名前になったね。雪女よりも優しそうだけど」

「クララまたまてぃ間違えました」
「噛んだね今。またまた、でしょ」
「こんなんで花が咲くわけないです！　クララはただのクララです！」
「咲かないんかい！！」
「やってみたかっただけです」
私が言うのもなんだけど、この子も結構アレだよね。
「カカはお買い物ですか？」
「うわぉ！？　いつの間に下りてきたの」
「今の間に」
び、ビックリした……消えたり現れたりもできるんだったねクララちゃん。べんりー。いいなー。
「それで、お買い物なんですか？」
「うん。買い物しに歩きながら面白いもの探してる」
「見つかりました？」
「うん」

Ｙｏｕ！！

「よかったです！　あ、ではでは。あそこにいる似たような二人はどうでしょう。面白いですかね？」

「あそこ？」

クララちゃんが指差したのは公園のベンチが並んでいる場所、そのうちの一つに腰を下ろしているのは……タマちゃん、と、タケダ！？

「なに、あの組み合わせ……」

「面白いですか？」

「うん！」

ちょっとコソコソっと近づいてみよう。何話してるのかな。

コソー、コソーっと。

ベンチの真後ろにある木の影へとうまく隠れることに成功。さてさて会話は？

「しかしタマ君」

「あい」

「のんびりとはいいものだな」

「ですね！」

なんだろう、この年寄りくさい若者たちは。

「あおいそら、いいですね」

「うむ、心が洗われるようだな」

タマちゃんもはっきり喋るようになったなぁ。しかも敬語……あ、そういえば最近タマちゃんが敬語にハマってるってお姉が言ってたっけ。

「しろいゆき、いいですね」

「目の保養だな」

どうしたんだろうタマちゃん、こんな大人っぽくなっちゃって。

「にげられません、いいですね？」

「怖いわ！！」

ほっ。タマちゃんはやっぱりタマちゃんだ。

くいくい。

……ん？　何か服が引っ張られて……あ。

目が合う、いつの間にか隣で上着の裾を引っ張っていたタマちゃんと。

逃げられませんって私のことだったのか！？

「おお、カカ君ではないか！」

「……よ」

タケダに気づかれた。ちゃ、と手を上げて軽く応える。

「こんなところで会うとは運命だな！」

「嫌な運命」

あ、凹んだ。

「それにしても珍しい組み合わせだね。どうして？」

「む？　いやな、俺はただ散歩していただけなのだが、この公園で一人で遊ぶタマ君を見つけてな。これも何かの縁と思い、話し相手になっていたのだ」

そっか。何度か一緒にイベントしてたから、いつの間にか喋るようになってたんだね、きっと。

「いや、しかし……はっはっは！　こうしてタマ君を間に挟んで並ぶと、その、夫婦のようだな！」

不愉快だ。

そう言おうとしたんだけど。

「タケダの周りに花が咲いてます！」

どれだけ上機嫌なのか、タケダの周りに少女漫画的な花（イメージ）が開花しまくっていて。

「てい！」

「むごぁ！？」

花咲かクララちゃんはその職務を全うすべく、タケダの顔に雪（ど汚い）をかけまくっていた。文句言おうとしたけど、それでスッキリしたからいいや。

「はなさけー！　はなさけー！」

「ぶふぁぁぁ！　そんなに顔に押し付けるな！　鼻が裂けるわ！！」

「面白くない。てぃ」

「むごぉぉ！？　か、カカ君まで」

うはは。

「ああ！　バックの花（イメージ）が萎んでいくです！」

「これだけ顔に雪を詰められれば幸せ気分も吹っ飛ぶに決まっておるわ！」

「クララしょっくです！！」

バチーン！！

「なんでビンタ！？　ぐ、ぐう、そんなに俺を追い出したいならいいさいいさ、いなくなってやるさ！　でもこれで終わりじゃないからな！」

覚えてろー！　と泣きながら去っていくタケダを笑って見送る私たち。なんだ、あいつ。なかなか面白いやつかも。

「ところでタマちゃんや」

「なんですかぁ？」

いつの間にかクララちゃんに混じって雪を投げてキャッキャ笑っていたタマちゃんは、少し舌ったらずな敬語で返事をしてくれた。

「お姉は一緒じゃないの？」

「とうみんしました！」

「クララと一緒です！」

さすがお姉、クララちゃんという妖精よりも『冬眠』という言葉が似合う人間（かどうかは非常にあやしい）。

「おっと、買い物行かないと」

「では、クララがタマを家に連れて行きましょう！」

「あ、お願い」

時計を見る。やばい、トメ兄が仕事から帰ってくる前に終わらせて戻らないと。夕食が遅くなってしまう！

商店街へと急いで足を向ける私、その後ろで、

「さ、行きますよタマ！　クララがおうちに連れてくです」

「にげられません、いいですか？」

「クララが連れてかれるですか！　どこに！？」

そんな会話が聞こえたけど、その後、彼女たちがどこへ行ったかは……知らない。

# カカの天下６８９「クララａｎｄタマ」（後書き）

新年に入ってからこの子ら書いてないなーと思い、ドーン。
勢いで行動するクララちゃん、いいですね。
敬語な子供なタマちゃん、いいですね。
逃げられません、いいですね？

さて、特に上記のコメントを解説せずに謝罪、というか言い訳をば。

昨日の更新を楽しみにしてくださっていた方々がいましたら申し訳ありません。さー更新しようと思ったらサイトに繋がらず、その時間を逃すと仕事の都合でどうしても昨日中に掲載することができない状況でした。
でも、まぁ。今年はそんなに肩肘張らずにいこうと思っているので、一日くらい、いいかなぁと。そんなわけで一日飛ばしの更新となりました。

読者さんたちのお言葉に甘えて無理せずに行こう、なんて思ってます。去年は後半の休み以外ずっと頑張ったし……いいよね？　これくらい笑

いいと言って！！

## カカの天下６９０「クララａｎｄタマ　２」

こんにちは、クララです！

今日は花咲かクララになって遊んでいたのですが、ひょんなことからタマを家まで送り届けることになりました！

「ひょん！」

「ひょんです！」

「クララ、ひょんです！」

「たまも、ひょんです！」

なんだか知らないけどテンションは最高潮！

この勢いでタマのおうちまでシュバッとひとっ飛び！

「……ひょん？」

の、はずだったのですが。移動をミスって変なところに出ちゃいました。きっと冬眠ボケです！

鼻にツーンとくる独特な匂い、どこかで嗅いだことがあるような……そうそう、消毒液とかいうやつです。学校の保健室に潜り込んだときに覚えました！

「ええと次は――おお、いつの間に次の患者さんが来てたんだ？」

白い、白い部屋。なんだか色んな紙が張り付けまくられた壁、一人用のベッド、よくわからない機械、デスク、それに乗ったパソコン、そして白い服のおっちゃん。

「まったくナースどもめ、ちゃんと呼べよなぁ。まぁいいや」

そう、たしか……お医者さんとかいうやつです！！

「お嬢ちゃん、どこが悪いのかな？」

「おまえが悪いです！！」

「なんですとぉ！？」

はっ！　動揺のあまり反射的に答えてしまいました！！

「くらら！　おいしゃさんってこわいんです！」

「そうなのですか！？」

「はい！　ちゅーしゃとかするんです。あとちゅーしゃとか、えっと、ちゅーとか」

「チュー！？　こんな小さな子に……医者とはなんて恐ろしい人なのでしょう！！」

いけいけな子供、じゃなかった。いやそれも合ってますけど。いたいけな子供をこんなところに連れてきてしまったのはクララの責任です！　一刻も早くタマを逃がさなければ！

「ひょぉぉぉん！！」

「ひょぉぉぉんです！！」

とりあえず威嚇の声をあげるです！

……大人の前で急に消えるわけにはいきません、そういう決まりなのです。ならば普通に歩いて走ってタマの家まで行くしか！

「うーん、面白い子たちだなぁ。パパやママはいないのかな？」

よし、今です！

「タマ、逃げるです」

「あい！」

「わ、こら」

隙をついて医者の脇をすり抜け、扉の向こうへダッシュです！

「――タケダ先生？　どうしました、次の患者さんが入りまきゃあああ！」

「あー、やっぱり患者さんじゃなかったのか」

悲鳴と呑気な声を背にして二人、手を繋いでダッシュダッシュ！

外を目指します！

「お？」

走っていた廊下の角からいきなり現れたのはまたもや白衣！

「うわぁ！　医者ですぅ」

クララ悲鳴をあげつつタマの手を握りなおし、別方向へダッシュダッシュ！

「きゃっ」

するとまたもや立ちふさがった白衣！

「うわぁ！　ナースですぅ！」

クララ悲鳴をあげつつタマの手を握りなおし、別方向へダッシュダッシュ！

そして三度立ちふさがった白衣！

クララが何度も声をあげていたのが羨ましかったのか、今度はタマが叫びました。

「わ！　ブスです！！」

「んだとゴルァァァァァ！！」

きゃあああ！　ブスのお姉さんが襲ってくるですぅ！　なんて不細工で恐ろしい顔でしょう！　きっと喰われます！　喰われて噛まれてクララたちの顔もあんな風にぐちゃぐちゃにされてしまいま

す！

「あ、タマ！　こっちです！」

「はひ！？」

廊下を曲がった直後、タマの身体ごと繋いだ片手で振り回すような勢いでぐりんと方向転換。目に付いた部屋を開けて慌てて飛び込みます！

「ふー……」

「はぁ、はぁ、です、はぁ」

扉を背にして二人して息を整えます……この部屋に入るのは見られなかったはず。なんとか撒いた、ですかね？

「あらまぁ、賑やかなお客さんだこと」

「ほっほっほ……子供は元気があってこそじゃ」

ビクッと顔をあげます。

咄嗟に入りましたけど、ここは、病室？

「あら、それは元気がないワタシへのあてつけかしら？」

「どうかのぅ、ほっほっほ」

白い部屋。さっきよりも何倍も白い部屋。

その中にいたのは、ベッドに座る白髪のおじいさんと、

「ねぇ、可愛いお客さんたち」

ベッドに半身を寝かせた、ウェーブがかった明るいブロンドの髪が似合う、まるで人形みたいに綺麗な女の人でした。

「逃げるなら、すぐそこから逃げられるわよ。でもその前に少しだけ……ワタシとお話してくださらない？」

その後。クララとタマは、そのお姉さんとお爺さんと、少しだけ会話しました。

なんでもないようなことを話しました。お名前は？　何をして遊んでいたの？　とか。

ブスと追いかけっこしてました、と言ったときに「あの人ね」「あのナースじゃのう」と意地悪に笑っていたのが、なんだか印象的でした。

## カカの天下６９０「クララａｎｄタマ　２」（後書き）

まさかの続編！

冬眠ボケ、という言葉を同僚が使ったのをきっかけに思いついたこの話。子供の天敵、病院（本物）！　そこで出会った謎の美少女とは……！！

などと宣伝したものの。

この話のキーワードは「ひょん」と「ブス」だと思います。

## カカの天下691「あたしのご主人様」

こんにちワン！　うふふ、ちょっとお茶目なこと言っちゃったわ。

え、あたしが誰か？　いやぁね、わからないの？

ワンといえばオンリーワンでナンバーワンのワンワン、ラスカルに決まっているでしょう。

懐かしの我が家に戻ってきてから随分と時間が過ぎたわ。仲間もたくさんできたし、あたしは今すごく幸せ……ふふ。

さてさて、もうすぐご飯の時間。あたしのご主人様が一人――いえ、一匹ずつ呼んでくれるわ。

「総理大臣、官房長官。会食の時間ですよー」

む、もうそんな時間か。やむを得ません、今日の仕事はこのくらいにしておきましょう――二匹はそう言って、一日の大半の時間を取られる重要な業務であるお昼寝を中断してご主人様についていく。ネコだからね。一日の半分は寝てるのよ。

「日本経済、成長の時間よ」

本当に成長してほしいものだわー、と愚痴りながらご主人様は牛を連れて行く。

あ、最近ね、人の言葉がハッキリわかるようになってきたの。もちろん喋れないけどね。クララさんのおかげかしら。

「エサの時間だブタ野郎」

でも聞こえたこの言葉はあんまりだと思うわ。ブートン改めブタ野郎も、心なしか肩を落としてるし。あ、本当に落としてるわけじゃないわよ？　いくら肩ロースとか美味しそうだからって……じゅるり。

「こないで財政破綻、経営困難」

ああ、別にご主人様がお祈りしてるわけじゃないのよ？　いるのよ、そういう名前の山羊兄妹が。財政破綻という兄、経営困難という妹が。

プチ動物園としてその筋に知られてしまったこの家に、「ぜひ引き取ってもらいたい」と連れてこられたのがこの二匹。山羊は紙を食べることで知られているけど……なんでもこの二匹は人間の使うお札が大好きで、観光にきた人間の財布をスッて中身を食べることは日常茶飯事、終いには飼育場の事務所のレジを襲ったらしいやんちゃ兄妹よ。まさに名前通りね。

それも今では二匹とも「こないでーこないでー」と言われながらもおとなしくご主人様について行く。もちろんエサは普通の干し草よ。お札を食べることなんてしないわ。

どうやって更生させたかというと……

『この子、お札を食べるんだってー』

『へー。それでお母さん、どうするの？　まさかお札を食べさせて

育てて行くんじゃ……』

『そんなわけないじゃないのー。でもまずは、思うままにお札を食べさせてあげよー』

『どういうこと？』

『さてさて、印刷所に連絡をー』

そしてご主人様が用意したのは、お札とほとんど同じ紙質、ほとんど同じ絵柄の紙束。ニセ札？　いいえ、そんな機能はないわ。ご主人様が『子供銀行が懐かしいわ。玩具のお札なんだけどー』とか言っていたし、玩具と同じよ。

そう、玩具と同じ。だって描かれている写真は福沢諭吉でも野口さんでも樋口さんでもなく――今まで二匹を育ててくれて、すでに亡くなった、飼育係のおっちゃんなのだ。

育ての親の写真を、どうして食い散らかすことができようか。

なのにご主人様は三日間。二匹にその札だけを食べさせ続けた。

そのときの様子は詳しくは書けないわ……だって『ちゃんとよく顔を噛みなさい』とか『眼球食べ残してるわよ』とか『潰して千切って』とか『焼くのと煮るの、どっちがいいかなー』とブタ野郎をチラ見しながら迫ったりとか、とにかくもうグロくて惨い躾だったもの。

でもそのおかげか、財政破綻も経営困難もすっかりお札嫌いになったわ。干し草を泣いて喜んで食べるのよ。

その代わり、心が破綻して、元気になるのが困難になったみたいだけど。お、あたしってばうまいこと言った？

いっそ精神困難と元気破綻に改名したらどうかしら。

「さようならラスカル」

調子に乗ったわごめんなさい！！

え、ああ。なーんだ、ご主人様が呼んでるんじゃないの……まったく、なんだか名セリフらしいけど、呼んでるんだか突き放してるんだかわからないこと言わないでほしいわ……泣くわよ……

「はい、おたべー」

コト、と置いてくれたエサをガツガツガツ！

「相変わらずよく食べるねー」

む、乙女に「よく食べる」とかいう言葉は厳禁よ。今はご飯おいしくてご機嫌だからいいけど。

「そういえば昔から、おまえはよく食べたねー」

まだ言うか。

「懐かしいわ……チョコばっかり食べさせていた、あの時期」

そんなこともあったわね。

「犬にチョコはあまりよくなくて、あなたは中毒で倒れたわね……」

仕方ないじゃない、あなたは知らなかったんだもの。

あたしはちゃんとわかってる。

あなたはあたしに、美味しいものを食べさせてくれようとしてただけなんだよね。

恨んでなんかいないわよ、ご主人様。

「アレわざとー」

えええええええええええ!?

「あはは。色々とストレス溜まってる時期だったからさ、八つ当たりしちゃったー」

しちゃったーって、ええ？　ええ？　あ、あたしの素晴らしい忠誠心とか、その、えええ!?

「でもどうせ犬だしいいよねー。言葉わかんないしいいよねー。あははー」

わかってます、あの頃ならわかんなかったけど今ならわかるんです！　ああ、聞こえないままだったらよかったのに!!

「こんなこと暴露しても何もわかんないんだろうねー。バカだねー動物は」

バカじゃなくてごめんなさい！！　聞こえててごめんなさい！！
チクショウ！！

「でも……その……ごめんね……」

聞こえ、てて……

「あの頃は……全部、ぐちゃぐちゃで……何も、わかんなくなっちゃって……」

聞こえ……

「あなたがこんなに温かいなんて、気づかなかった」

……

「さ、たくさんお食べ。今日は一緒に寝よっか」

聞こえてて、よかったわ。

やっぱり、ご主人様はご主人様だ。

「おかーさーん！！　今日は一緒に寝よー！！」

「サエ！？　いいよー！！　一緒に寝るわよー！！　二人っきりで！　誰も間に入れることなくー！！」

「あれ、ラスカルと約束してた？」

「そんなもん知ったこっちゃないわー」

聞こえなきゃよかったわ！！

やっぱりご主人様はご主人様だわあああああああん！！

## カカの天下６９１「あたしのご主人様」（後書き）

がんばれカカ天アニマルズ。
いつか食われるその日まで（ぇ

# カカの天下692「わーい」

こんばんは、トメです。

今日も今日とて夕飯の時間。せっせと作ってテーブルに並べます。

「ほらカカ、ご飯だぞ」

「わーい、ご飯だご飯だ」

両手をバンザイして喜ぶカカ。うむ、作ったかいがあった。

「ほらカカ、味噌汁だぞ」

「わーい、味噌汁だ味噌汁だ」

「あ、ちょっとトイレ」

「わーい、トイレだトイレだ」

何が始まってるんだか……ふむ。

「カカ。わーいわーい」

「わーい、わーいわーい」

「カカ、青巻紙赤巻紙黄巻紙」

「わーい、赤巻紙青巻紙きまきまき、あかまけまきあみゅっ」

勝った。さーてトイレトイレ……

用を足して戻ってきて、二人そろって「いただきます」だ。

「わーい、とんかつだとんかつだ」

「カカ、それマイブームなのか？」

「わーい、そうだそうだ！」

そうなのか。

「そういえばさ、この間な、姉が」

「わーい、バケモノバケモノ」

「サラさんと」

「わーい、おっぱいおっぱい」

「ボーリングに行ったそうだ」

「わーい、ガーターガーター」

よくガーターばっかりだったってわかったな。ちなみに姉は力の入れすぎ。サラさんは転びすぎだそうだ。

「わーい、おかわりおかわり」

「はいはい」

そんな調子で食事は進み……食べ終わって二人仲良く「ごちそうさま」だ。

「わーい、食器洗い食器洗い」

「おお、やってくれるのか。悪いな」

シーン……

「言ってみただけかよ」

「わーい、だるいだるい」

「まぁいいけど……くそ」

「わーい、クソだクソだ」

「下品な言葉を使うんじゃありません！」

「わーい、大便だ大便だ」

「まったく上品になってません！！」

「わーい、自然の摂理だ不可抗力だ」

「おまえ難しい言葉知ってるね」

仕方ないなぁ……満足して妙なマイブームやめるまで付き合って

やるか。

「はい、質問」

「わーい、質問だ質問だ」

「1＋1は？」

「わーい、2だ2だ」

「356×573は？」

「電卓もってこい」

「急に素になるなよ」

「わーい、次だ次だ」

「まったく……じゃあ問題です」

「わーい、カモンカモン」

「カカの父親は、いまどこにいるでしょう？」

「わーい、死んだ死んだ」

「死んでねぇよ！！」

さすがに哀れすぎるぞ父さん……ちなみにテーブルの下にいたりする。カカの答えを聞いて泣きながらシュバッと消えたけど。

「謝っておけ」

「ごめんなさい」

うむ、さすがにひどいことを言った自覚があるのか、素直で結構。聞こえたかどうかは知らんが。

「ふー疲れた」

「お、満足したのか」

「うん。今度はトメ兄がやってみてよ」

「僕がぁ？　嫌だよ、キャラじゃないし」

「可愛い妹の頼みと思って」

「えー……」

「とーめーにー！　とーめーにー！」

あー、わかったわかった。言うこと聞くから、僕の腹に頭突きしてそのまま頭をぐりぐり押し付けてくんな。攻撃なんだか懐かれてるんだかよくわからんが。

「でも僕、そんな器用になんでも思いつかないぞ？」

「そこを頑張って！」

あーもう！　懐くなってのに！

まったく……本当に仕方ないなぁ。やれやれ！

言っておくけど、妹に甘えられて張り切ってるわけじゃないからな！

ただな、ここで期待に応えてこそ兄だなとか思っただけで！

とにかく頑張ってみるか！

わーいわーいと、元気よく！

すごく恥ずかしいけど頑張っ――

「あ、サエちゃんと電話するんだった。ごめんねトメ兄。私、部屋に戻ってそのまま寝るわ。おやすみ」

――って、みる、つもり、だったのに。たったったーと自室に戻る気まぐれカカ。

「……わーい、一人だ一人だ」

寂しくなんかないんだからな！！

「やーい、一人だ一人だ」

「クソオヤジてめぇ！！　どこだ！？」

「わーい……仲間だ」

「……飲むか？」

「……わーい」

女心と秋の空（冬だけど）に振り回された哀れな親子は、なんとなくしんみりしながら杯を交わすのだった……わーい、酒だ酒だ……

## カカの天下６９２「わーい」（後書き）

わーい、ほのぼのだまったりだ。
そんなの書こうとしたら、なんか残念な結末に。
……わーい、これもカカ天だ私の気まぐれだ。

## カカの天下６９３「きゃんだ」

「と、め、に、い、お、は、よ、う」

「おはようカカ。どした？」

寝起きのトメです。朝食を用意したあたりで現れたカカは、なんだか喋り方が変でした。

「あ、の、ね？」

「その妙に区切る喋り方やめろよ」

「だって……」

なんだ、思いつめた顔して。

「どうしたんだ？」

「……むの」

「なんだって？　声小さくて聞こえないぞ」

「きゃむの！！」

ほわっつ？

「か、む、の！」

ああ、喋ったら噛むのか。

「なんでさ」

「なんきゃ……昨日、舌をきゃんだのがでゃめだったみてゃい」

昨日……？

『――赤巻紙青巻紙きまきまき、あかまけまきあみゅっ』

アレか。

「ベロ出してみ。べーって」

「れろれろれろれろれろれろ」

「ええい、無駄に動かすな」

どれどれ？　ああ、やっぱり腫れあがってる。これのせいでうまく喋れないんだな。

「こういうのは喋って痛めれば痛めるほど治るのが遅くなるんだよなぁ。仕方ない、カカ。今日はあんまり喋るな」

「やらっ」

「やだじゃないの。喋るだけで痛いだろうに。早く治したいだろ？」

「……ひゃい」

「ん、いい返事だ」

ちょっと可愛いしな。

「その代わり、ほれ」

「にゃに」

「メモ帖とペン、持ち歩いてろ。これで書いて言いたいことを知らせるようにしな」

「……にゃ」

受け取ったカカは早速さらさらと書き込んで、それを僕に見せてきた。

『まっちょ』

「何が言いたいのだおまえは」

『ごはん』

「マッチョご飯!?」

すげぇ。どんなご飯なんだ。マッチョを美味しく料理したのか。焼くのか煮るのか刺身なのか。それとも汁物か。マッチョ汁か。なんだその汗をそのまま飲めって感じのエグいもんは。や、でもご飯だよな。じゃあ米粒サイズのマッチョがびっしり茶碗に詰まって……

『ばーか』

なんだとう!?

「ばきゃ！」

「わざわざ言い直しやがって……わかってるよ。マッチョになるくらいの勢いで食べたいから早く朝ご飯をよこせ、って言いたいんだろう」

『そうめん』

「そう、って言いたいのね。わかったわかった」

それじゃま、用意用意っと。

「カカは冷蔵庫からいつもの持ってきてくれ。たまご、まだあったっけ？」

『あるじぇりあ』

「漬物は？」

『ないじぇりあ』

筆談しつつも朝食の準備は整った。

「い、た、だ、き、ましゅ！」

「ぷっ」

妙に溜めたわりに噛んだので、ちょっとウケた。

「……にゃに」

「別にー」

カカはさらさらっと筆談。

『言いたいことがあるなら胃炎』

言えと言われては仕方ない。

「その噛み方はナィジュエリァ！」

「にゃにちょっといいはちゅおんでいってうにょ！」

「何ちょっといい発音で言ってるの、で正解？　合ってるジェリア？　アァルジュェリアァ！？」

「うゆしゃい！」

「うゆ？」

「うゆー！！」

あははは一、と朝っぱらから妙なテンションで楽しみながらもご飯に手をつける、そのとき。

「うゆうううう！」

なんか怒ったカカが僕のおかずに手を――箸を出してきた！

「もぎゅもぎゅも――ぎゅ！？」

「どした？」

「……きゃんだ」

また？　それはちょっとナイジェリア。

「痛い……痛いよぅ……うゆぅぅぅ」

「あー、あの、うん。ごめん」

本当に可哀想になってしまったので、僕は素直に謝り、今日は優しくしてやろうと誓うのだった。

## カカの天下６９３「きゃんだ」（後書き）

舌かんで口内炎……痛いですよね、喋りにくいですよね、うゆー。
別に私がきゃんだわけではありませんのであしからず。

# カカの天下６９４「なめるな　前編」

こんにちは、トメです。

今日はサユカちゃんと喫茶店でお茶してます。『新しいお店見つけたんですっ、和風な感じなんですけど行きませんかっ！　まっちょ』というメールをもらったので一緒した次第です。

最後の『まっちょ』は『かしこ』と同じような意味のようです。話を聞いてみると『それが流行りなんだよー』とサエちゃんに言われたらしい。何を流行らす気だサエちゃん。マッチョご飯か。マジ勘弁してくれ。

「それでですねー、二人はもう未来確定っ！　って感じなんですよぅ」

「へー、ニシカワ君とアヤちゃんねぇ。わかるかも」

直接喋ったことはあまりないけど、顔は浮かぶ。確かに二人並んでいることが多かった気がする。

「ニシカワ君はのほほんとしてて、わかってるんだかわかってないんだかわからないんですけどっ、アヤちゃんがもー、丸わかりでっ！　何かと一緒にいようとしてて、そこまでするならもう告白しちゃえばいいのにって感じなんですけど、でもやっぱり一緒にいるだけで幸せみたいで満足しちゃうんですよ満足しちゃうんですよ満足しちゃうんですよっ！！」

サユカちゃんは頬を赤くしながらバンバンとテーブルをたたいて

「キャー♪」とはしゃいでいる。よっぽどそのときのアヤちゃんの様子がもどかしいのだろう。なにせ三回言うくらいだ。マシンガントークにもキレがある。

「わかるわかる」

「幼馴染って難しいって言いますけど、本当ですよねですよねですよね」

「わかるわかる」

でも三回も言わなくてもいいぞ。

「でもですねっ、気持ちはわからなくもないんですよぅ。わたしも、その、とと、とととトメさんと一緒にいられるだけで、満足、しちゃい、ます、し」

徐々に尻すぼみになっていく言葉……その最後に「告白は、しちゃいましたけど」と小さく聞こえる。

わかるわかる、とは言えなかった。

でも、軽く流すこともできなかった。

「……あれ」

何か、思い出して。

「おかしいな」

誰にも聞こえない声で独りごちる。

サユカちゃんに告白されてから、一緒にいることがたくさんあった。もっと仲良く――ただそれだけを望んでくれた気持ちに応えるように。

ちょっと気恥ずかしいし後ろめたいこともあったけど、自然に。

だからこんな言葉も「照れるな……はは」と、それだけで終わりのはずだった。

「――ねぇ、サユカちゃん」

「はいっ！」

なのに。

弾けるような笑顔の彼女に。

「サユカちゃんは、同級生とかで好きな男子っていないの？」

こんなことを聞いてしまった。

「なんですかそれ」

サユカちゃんの表情は固まっていた。

たった今、返事をした笑顔のままで、小首を傾げる。

「や、その、さ。サユカちゃんには好きって言ってもらったものの

……それは僕が大人だから、“そう”見えた部分も多いと思うんだよね。でもほら、普通だと、そのニシカワ君やアヤちゃんみたいに、近い歳の子を好きになるんじゃないかなぁと」

その顔を見て、なんだか悪いことをしてしまった気がして、慌てて言い繕う。

「これだけ長い間、一緒にいたらさ、よくわかったと思うんだよ。僕は大人ってだけで、そんな誰かに好かれるような立派な人間じゃないしさ。自分でそう思うんだ。だからさ、もしかしたらサユカちゃんも、そろそろ気づいたんじゃないかなって。僕が本当に好きなのかどうか――」

「なんですかそれ」

言葉を止められた、その静かに繰り返された一言で。

「本当に、好きなのか、どうか……？　なんですかそれ、なんですかそれ、なんですかそれっ！」

また、繰り返して――

「わたしがトメさんが好きじゃない？　こんなに……こんなに好きなのに」

「や、だからそれは」

「勘違いだって言いたいんですかっ！？　そんなわけないですっ。だってわたし、本当はカカすけが羨ましいんですよ？　いつもトメさんと一緒にいられていいなぁってずっと思ってて、たまに憎らし

くなるぐらいにっ！！　サエすけみたいに腹黒くなって無理やり一緒になったらとか、いっそ夜這いかけてやろうかなんて思うくらいに、こんなにっ、こんなにっ！」

「……僕は、わからないんだ。だって僕は、そんなに想ってもらうような男じゃない」

「そんなことありませんっ！　トメさんは大人で、優しくて、温かくて」

「大人じゃなかったら？　優しくしなかったら？　そうやって上っ面を繕っているだけで、本当の僕はすごく冷たかったとしたら！」

「それでも好きなんですっ！！　恋をなめないでくださいっ！！」

息まで切らして怒鳴りあった僕たちは、しばらく睨みあって……

「……帰ります。お金、ここに置いておきますっ」

僕が払う、と言う暇もなく。サユカちゃんは帰っていった。

顔を真っ赤にしながら。泣いていた？　それは見えなかったからわからない。というか、僕は何してんだ？　子供相手に。

「はぁ……」

ため息が出る。何してる、大人だろう僕は。なんでこんなガキみたいにムキになってんだ。

「ああ」

そうだ、答えはわかりきってる。記憶の奥底にあった、あの言葉を耳にして、嫌な昔を思い出して、勝手に逆上しただけのこと。

「いつまで引き摺ってんだ……ほんとに」

会計を済ませ、フラフラと外へ出る。サユカちゃんに謝らないと。でも、どう言おう。

「恋をなめるな……か。そこまで一緒のこと言うんだもんな」

凹むわ……と、落としていた肩をポンと叩かれた。

まさかサユカちゃん？　僕は振り向き、予想と違っていてホッとした。まだ謝る言葉を考えてない。

「トーメさん！　どうしたんですか、そんなナメクジみたいな顔して。ナメさんって呼んじゃいますよ？」

日ごろのお返しに！　と明るく笑うのはサラさん。

「うん……僕はどうせナメさんだよ」

「あれま、本当に落ち込んでるんですね。どしたんです？　悩みがあるなら聞きますよ」

人に相談するようなことでもない気がしたけど、このときの僕は弱っていた。くよくよしていた。大人だってそういうときもある。だからフッと聞いてしまった。

「サラさんさ……僕のことデートに誘ってくれてたとき、あったよね？」

「あ、あは、あははー。ありましたね、そんなことも。別に今からでもオッケーですよ？」

「なんで、そう思ったの？」

こんな僕なんかに……そんな意図が伝わったのか、サラさんは少しだけ真面目な顔をして、

「一目惚れ、ですよ。この人、好きだなぁって、想ったんです。それが恋愛なのか、仲良くなれそうな人を見つけただけなのか、今となってはよくわかんないですけど」

「一目惚れ……僕のことを何も知らないのに？」

「はい。カンです」

「カンって、そんな曖昧なもので」

僕の言葉が遺憾だったのか、サラさんはむすっと頬を膨らませた。

「なんですかトメさん。私のカンがどれだけすごいか知らないくせに」

「そうは言ってもさ……」

「トメさんは直感で行動するタイプじゃないですもんね。カカちゃんとは正反対。でもほら、見てください！　トメさんと私はこんな

に仲良くなれた。これこそ私のカンが正しかった証拠！」

「それって結果論だろ」

「いいじゃないですか、結果よければ」

「でも、僕みたいな何もできない、つまんない男をさ」

……なに、サラさん。なんで笑ってるの。

「そうですかぁ、トメさんって自分をそんな風に思ってるんですねぇ」

「悪かったね、期待に沿えなくて」

「いえいえ、“そこ”がいいんですよ」

は？　なにそれ。

「つまり、トメさんのいいところっていうのは――」

「おーいサラちゃん！　これ手伝ってー！」

嫌がらせのようにちょうどいいところで遮ってきた声は姉のもの。

「いけない！　仕事中なんでした、トメさんごめんなさい！」

「あ、ちょっと！」

パン！　と拝むように手を合わせて謝ると、たったかたーと行っ

てしまう！

「せめてその続きだけでも言ってくれよ！」

「私の目に狂いはないってことです！　私をなめるなってことでーす！！」

妙にキラキラした瞳でそう言って、サラさんは花屋の中へと入ってしまった。

「なんだよ、この煮え切らない感じは」

また、なめるなって、言われたし……

「あん？　トメじゃねぇか。どうした、シケた面しやがって」

で、もっと「なめるな」って言葉が似合いそうなヤツが出てくるし……

「ま、いい。暇なら飲もうぜ？　おら、どうした。このテンカ様の誘いを断る気か」

占いは見てないが間違いない、今日は女難の日だ。

# カカの天下６９４「なめるな　前編」（後書き）

昨日の実話。

「ふんふんふーん♪　今日は休みだ！　ちょっと余裕こいてカカ天は後で書こーっと。何しよっかな、何読もっかなー」

こうして色々楽しんでる最中、鳴ったは携帯着信音。

ちなみに曲名はオーエンはなんたら。

「はいもしもし。なんですか？」

「遅刻じゃないか？」

「へ？　今日は休み――」

「休みは明日」

チーン。

というわけで、私の勘違いによって更新する暇どころか書く暇ももちろんなく。一日空けての更新となってしまいました。

それもあって、ちょいと気合入れて踏み込んだ話となっております。コメディ分は小さくなりますが、後編終わったらちゃんと増量するつもりなのでご心配なく。

## カカの天下６９５「なめるな　後編」

……トメです。

サユカちゃんに怒られて、サラさんに元気づけられた（？）後、僕はこうしてテンと一緒に『病院』で飲んでます。

「かっかっか！　まるで女ったらしだな！」

「どこがだよ」

「一日に三人の女と恋について語り合ってんだろ？」

「……そういう言い方すんな」

それでいい思いなんかしてないんだからな……はぁ……

「にしたってわかんねぇんだけどよ。なんでサユカにそんなこと言ったんだよ。あいつがてめぇのこと好きだなんてこたぁ、ずっとわかってたことだろうが」

「それはその……魔が差したというか、なんというか……ニシカワ君とアヤちゃんの話を聞いてさ。あぁ普通の子供は子供同士で好き合ったほうが自然だなぁ、とか思っちゃってさ」

「いまさら、だな。あいつに告白されたときに、んなこたぁいくらでも考えたんだろ」

「そうだけどさ、また改めて考えちゃったんだよ。ましてや僕は、

カカがちゃんと成長するまで誰とも付き合ったりしないって決めてるし、これでいいのかな？　って」

「ふぅん……」

テンは何を思ったか、僕の顔を深く覗き込んでくる。僕の瞳の奥を見透かすかのように。

「なぁ、トメ。てめぇは２５歳だったよな」

「そうだけど」

「オレ、思うんだけどよ。たかだか２５年しか生きてねぇ男が、そんな父親根性丸出しで『恋愛しない』とか言い切るか？　普通」

「……何が、言いたい」

「確かにてめぇは男のくせに女への執着がねぇ。２５歳っつったらまだまだ男盛りだろう。女に盛って金使って痛い目みて、それでも懲りない時期だろが」

言いすぎのような気もするが、否定はしない。

「そんな男が、女を作らない？　妹のために？　そんなにシスコンなのか？　あ、シスコンだったか。あーそうかそうか、立派なシスコンだった。この上もなくシスコンだった」

「……繰り返すな」

「ごめんなシスコン」

「だーかーらー！！」

「まぁ待て。シスコンでも妹に欲情するような危ないものじゃない。あ、一応聞くが、ないよな？」

「断じてない！！」

「だったらよ、不可解なんだよ。なんで女に関心がいかない？　ホモなのか。キリヤと」

「いいかげん、怒るぞ」

ちょうど飲み干したしな、と鈍器にもなりそうなジョッキを握り締める。しかしテンは涼しい顔。

「オレが言いたいのはな、こういうことだ。てめぇさ、カカ以外にあんじゃねぇか？　女を寄せ付けたくない理由が」

「帰る」

立ち上がる。机の端に差してある伝票を持ち、テンの返事も待たずに会計へ。

「やれやれ……ま、今日の酒は軽めにしとくかな。おい、待てよ」

そそくさと入り口へ向かう僕を追いかけてくるテン。

そのまま一人で飲んでればよかったのに。

……飲んでてくれればよかったのに。

「逃げんな」

「……ダメか？」

「ダメだ」

店を出てすぐ。僕の肩はテンに掴まれた。

「……情けない、話なんだよ。男らしくない」

「大丈夫だ。元からおまえはそんなに男らしくねぇ。むしろオレの方が男らしいと常々思っている」

「はは、間違いない」

そこまで言われれば……話しやすい、か。すごく恥ずかしいんだが。

僕は観念して、近くの公園へ入った。テンもついてくる。さすがに夜中、誰もいない。ぽつんと寂しげに立っている街灯の下、テンと並んでベンチに座る。

「ほれ」

「缶コーヒー？　いつのまに」

「院長店長が持ってけってよ」

「……常備してあるのか、ホットの缶コーヒー」

「いざというときのために、だとさ」

すげぇ、さすがは“いざというとき”専門の『病院』という名を使っているだけはある。

「んぐ……うま」

「にげぇ。ブラックかよ」

顔をしかめるテンに、少しだけ笑ってしまう。

「……ここまで逃げ出しておいて、なんだけど。つまらない話だぞ」

「情けなくて男らしくなくてつまらない話か、聞こう」

「なんでもない話なんだ」

「情けなくて男らしくなくてつまらなくてなんでもない話か、聞こう」

「でも誰かにあまり話したくなくて、恥ずかしくて、でも話したかったのかもな」

「情けなくて男らしくなくてつまらなくてなんでもないけど誰かにあまり話したくなくて恥ずかしくてでもやっぱり話したい話か、聞こう」

「あと――」

「いいから話せ！」

ちっ。どこまで続くか見たかったのに。

「単に、前の失恋を引き摺ってるだけだよ」

ただそれだけのこと。

ただ、恋が怖い。それだけのこと。

「随分と前の話でな。忘れてたつもりだった。だけど最近、ちょっとしたきっかけがあって……思い出しちゃったんだよ。そのときのことを」

一度思い出したら止められなかった。ふとしたときに過去の映像がちらついて、それを見てみぬフリをしてきたのが溜まっていたのか――サユカちゃんの言葉を聞いたときに、弾けた。

「そしたらさ、思い出す度にネガティブになっちゃってさ。暗くなっちゃってさ。なんで僕ってこんな情けないんだろって、思っちゃってさ」

恋をなめるな。

そう言った人がいた。

過去にも、現在にも。

「ほんと僕、何様だろう……知らないうちに、いろんなものをなめてかかって……こんな僕なんかに、誰かに好きになってもらう資格なんかないだろう、とか、思って」

酒が入っているせいもあってか根暗な言葉が延々と出てくる。情けない、恥ずかしい、嫌になる、でも吐き出してしまいたい。

――それからも、僕は愚痴り続けた。テンは静かに聞いてくれた。慰めも反論もせず、ただ聞いてくれた。それが何よりの救いになったから、僕は全部吐き出せた。

泣いたかもしれない。

言うべきじゃないことも口にしたかもしれない。

でもテンは、ただ最後にこう言った。

「誰だっていつだって、誰かをなめてるもんさ。そしていつか痛い目にあうんだ。そういう風に、できてるんだ。どれだけ格好つけようが、どれだけ自分は大丈夫と思っていようが……いや、そんなことを思うからこそ自滅する」

自分を他人より上に。

自分を、他人が思う自分より上に。

たかだか25年生きたくらいじゃ、こう“思わない”ことなんて、できない。

だから僕らは、ふとした時に落ち込むんだ。こんなはずじゃなかった。なんでこんなことができない。なんで、なんで、なんで――

「でもな」

そうして落ち込んだ先に、

「痛い目にあったら、ちゃんと学べよ」

救いがあればいいと、心から思う。

「……はは。なんか、先生みたいだぞ、テン」

「先生なんだぞ、知らなかったか？」

「知らなかった……それに年上みたいだ」

「年上だぞ」

「それも知らなかった……なんてな。でもたった一つだろ」

「歳の差ってのは案外でかいもんだ」

「かもな。なのに遥かに年下の子に叱られるなんて……ダメだな、僕は」

「ああ、ダメなやつさ。でもイイやつだ」

「だといいけど」

話は終わりと見たのか、テンはベンチから立ち上がる。

さみーな、そろそろ帰るぞ。そう言って、最後に、

「あと、おまえの場合は――自分をなめるな」

「なんだそりゃ。さっきの話と矛盾してるぞ」

「ああ。だからこれは、落ち込んでるやつ限定のセリフだ」

「つまり？」

「オレだって暇じゃねぇんだ、つまんねぇやつと飲んだりしねぇよ。じゃな」

こんな言葉を、残してくれた。

元気からは程遠い。

多分、僕はひどい顔をしていると思う。

それでも、

「……あ、もしもしサユカちゃん？　今日はごめんな……うん、うん。本当に悪かったと思ってる。サユカちゃんをなめてた。え、いくらでもなめていい？　や、その舐めるじゃなくて……あ、デート一回で許してくれるって？　いいえ、不満なんて、とんでもない……はい、喜んで」

進んでいこう。

痛い目を見て、学ぶものがあるのなら。

念のために説明しておくが、別にサユカちゃんと先へ進もうとか決意しているわけじゃないのであしからず。

誰と先へ進むか？　そんなこと知るか。

さて飲もう。さっさと店を出ちゃったから飲み足りない。

気分はかなり晴れたものの、こんな日は、飲むのだ！

## カカの天下６９５「なめるな　後編」（後書き）

べ、別に私自身が落ち込んでたからこんなの書いたわけじゃないんだからね！！

と、なんとなくツンデレっぽく書いてみた今日このごろ。結構気合入れて書いちゃいました。

テンカ先生、一年ですが年の功。男らしい包容力……しかしてその実態は！？　次回は、この後の話です……そう、ほんのちょこっと続くのです。

## カカの天下６９６「こんな大人たち」

サラです。

「もー、カツコさん！　いきなり呼んだから何かと思えば……これくらいの荷物なら私がいなくても運べるじゃないですか、片手で」

「えー、だってほら。明らかに重そうなダンボールを片手で五個ずつとか持ったらさすがに目立つじゃん？」

「お客さんの注目集めれば、商売繁盛するじゃないですか」

「花屋じゃなくて見世物小屋になっちゃうよ」

「お花はもともと見るためのものです」

「ええい、本当に口が達者になったなおぬし。口達者……たっしゃ……たっちゃんって呼ぶぞ！」

「はいはい、好きに呼んでください……トメさん大丈夫かなぁ」

「弟君、落ち込んでたねぇ」

「あ！　やっぱり私とトメさんが喋ってるの、わかってて呼びましたね！？」

「うぐ、そ、そりは」

「カツコさんのブラコン！！」

「な、な、なにおう！　ラーメン奢るからそれだけは言わないでください！！」

妙な敬語で謝ってくるカツコさんを楽しく眺めながら、私は心の中で呟いた。

ご飯とか、飲み会とか、イベントとか。そんなのに、当然とばかりに誘ってくれるカツコさんや、トメさん、カカちゃん。それがどれだけ嬉しいことなのか、あなたたちにはわかっていないんでしょうね。

裏も表もなく、純粋な好意だけで誘ってくれている――それがこんなにわかりやすい人たちが他にいるでしょうか？

トメさん、私が思うあなたの一番いいところは、そんな“誰かのために何かをする”ということを当然のようにできるところです。

当然すぎて、自分では気づいてないみたいですけどね？

テンだ。

「ただいまー！　いやぁ、いいことしたぜ」

「おかえりなさい。お邪魔してるわテンカさん……また使った食器を洗わないで出かけたでしょう。せめて水に浸してくださいな」

「あー、つっかれた。やっぱオレって教職に就いてるだけあるよな」

「ほらほら、そんな脱ぎ散らかしていかないで」

「オレって格好いい、大人だぜー」

「まったくもう、一人暮らししてからも母親に世話させて……いつまで経っても子供なんだから」

「……来てくれなんて頼んでねぇけど」

「来なかったら部屋がすごいことになるでしょう」

「……すいません」

なぁ、トメよ。一人で家事できたり生活を維持したり、それができるだけでも大したもんなんだぜ？　少なくともオレにとっては。

「もっときちんとしなさい」

「……おう」

「おうじゃなくて、はい、でしょ？」

「……はい」

教職やってるから、人には偉そうに語ったりもできるが……オレ、それ以外ダメなんだよなぁ……はぁ……

カカです。

えっと、ですね？　私は家で留守番してただけですよ？　何もしてないですよ？

ただ、夜遅くにトメ兄が帰ってきて、「おかえりー」と出迎えただけですよ？

なのに、あの。

「笠原トメ！　２５歳、独身です！！」

なんか、さ？

「いま、お水飲んでます！！」

ものすごい状態なんですけど、うちの兄。いかがいたしましょうか。

「笠原トメ！　酔ってます！！」

その通りです。なんかベロンベロンなんです。どうしよコレ。燃えるゴミに持ってっていい？

「趣味は特にありません！　得意なのはツッコミです！　あと家事全般できます！」

なんか自己紹介始めたし。

「まぐろ大好きです！！」

知らないよ。知ってるけど。

「笠原トメ！　２０歳！　初めて飲んだ酒はまずかった！　ていうか苦いよビール！」

なんか時間を逆行してるし。

私、知ってる。ここまで酔っ払ったら、今言ってたことは次の日に覚えてないんだよね、絶対。そして激しい頭痛と共に起きて、首をかしげることになるんだ。何度かお姉が飲みすぎてスイッチ入って潰れたときと同じ感じだもん。

「笠原トメ！　１９歳！　たばこに憧れました！」

いまだに逆行中。

「笠原トメ！　１７歳！！　彼女ができました！」

お、でもこれ昔の話を聞くチャンスかも。

「ねね、彼女ってどんな人だった？」

「隣のクラスの同級生！　地味な黒髪！　地味な三つ編み！　地味なメガネ！　地味な性格！　極めて普通の女の子でした！」

「ほうほう、そうなんだ」

くくく、今のうちにトメ兄の恥ずかしい過去を暴いてやる。

「彼女さんと、どんなことしてたの？」

「カカを子供役にして、ママゴトとかしました！！」

「えええええ！？」

そ、それは初耳なんだけど……ええと、トメ兄が17歳ってことは8年前だから、私が3歳のとき？　そりゃ覚えてないか。

「カカも役になりきって、おっぱいー、おっぱいー飲むー、とにじり寄ってきました！」

「ちょ、待っ！」

「そして僕のを吸ってました！！」

「待てやこらあああああああ！！」

耐え切れなくてドガァンと一発回し蹴り！　見事に後頭部へもらったトメ兄は、そのままコテンとくたばりました。

「はぁ……はぁ……ま、まさか私の恥ずかしい過去が明かされるとは思わなかったわ」

「……それ見て……彼女さんは……大爆笑してて……」

「ええい、まだ言うか！」

「……カカも楽しそうでさ……」

「はいはい、とりあえず自分の部屋で寝ようね。よい、しょっと！
お、トメ兄を背負えるようになった。筋トレの成果出てるなぁ」

「……あのころは……楽しかった……なぁ……」

やれやれ。普段はおとなしいトメ兄がこんなノリになるなんて。
お酒って怖いね。

私は呆れながらトメ兄をベッドまで運んで、布団をかぶせてあげるのだった。おお、私ってば大人っぽい。それに比べてこのでっかい子供は……

でも、トメ兄。

なんで泣いてたんだろ？

## カカの天下６９６「こんな大人たち」（後書き）

トメの過去話はまだか！？　との声が多いようですが……
まぁ待ちねぇ。急がば回れ、焦っても損するだけだぜぃ。

感想の返信はまだか！？　との声は別に多くありませんが……
まぁごめんなさい。貧乏暇なし、時間と身体に余裕がないんだぜい。

とりあえず、過去話は近々明らかにしていくつもりですので一ヶ月ほどお待ちください（なげー

あ、そろそろカカラジですね♪
何かネタ思いついたら遠慮なく送ってくださいね＾＾

# カカの天下697「黒いところと白いところ？」

こんにちは、サエですー。

もうすぐお母さんの手作りな夕飯ができあがる頃。私は自室で机に向かい、一人考えていました。

「むむむー」

一冊のノートを前に、唸ります。ちなみに勉強じゃありません。予習復習含め、すでに終わってます。

「どうしよー……」

悩んでいる議題は、ズバリこれです。

「次の、サユカちゃんの衣装」

ご存知、私とカカちゃんは彼女で遊ぶことが多いです。彼女『と』遊ぶ場合もありますが、彼女『で』のほうが多いです。というわけで、次はどんな着せ替えをして遊ぼうかと思案中なのです。

「次は……メイドさん？　いやいや、それはいつかのトメさんのでお腹いっぱいだしー。巫女さんはサラさんのバインバインなぼんきゅっぼーんの見ちゃったから印象薄いしー。やっぱバニーガールかな」

想像してみる。

『うっふーん、あっはーんっ！』

候補に入れておこう。なに？　描写が少ない？　それくらい根性で妄想してくださいなー。

「あとは……んー？」

てとてと、と可愛い足音がしたので振り返ってみると、そこには足音に見合わないでっかい牛が。

「日本経済、どうしたのー？」

どうした日本経済！！　ってなんだかニュースのタイトルみたいだね。

「あ、ご飯まだなんだね。もう少し待ってね……あ、思いついた」

牛の衣装なんてどうだろう。白黒なまだら模様のオーバーオールに、頭には角のアクセサリー……それだけじゃ面白くない。そうだ、乳搾りできるやつにしよう。そうすればサユカちゃんのおっぱい揉み放題、もとい搾り放題だ。サユカちゃんてば小五にしては胸が結構あるし、いけるよね。

「それをトメさんに揉んでもらったらー……ふふ……ふふふー」

とてつもなく愉快なサユカちゃんが見れそうだー！　想像しただけで笑いがこみ上げてくる。

「よくやったね、日本経済」

なでなでしてあげると、牛さんは眠たげに「モー」と鳴いた。

「あれ、豚野郎もきたの？」

ぽてぽて、と太った感じの足音で部屋に入ってきたのはまん丸な子豚ちゃん。

「豚……豚の、鼻？」

豚の鼻型のアクセサリーを作ったらどうだろう。

それをサユカちゃん――いや、カカちゃんがつけたら！？

「どうしよー……似合いすぎるー！！」

カカちゃんのことだ、きっと顔の真ん中にでっかい豚の鼻を装着しつつも平気で商店街のど真ん中を歩き、なぜか「ホーホケキョ！」とか叫んでくれるに違いない。

「メモメモー……ふふふー……よーし、あとは」

これらをどうやって着せるかだ。

カカちゃんは問題ない。だってこんなの好きだろうし。出来上がった豚の鼻を見せれば喜んでつけてくれるだろう。問題はサユカちゃんだ。どうやってハメるか――じゃなくて、つけてもらうか。

「これは……綿密な計画を練らなければー」

そうとなればきちんとした作戦案を作成しなければならない。だ

とすると、こんなノートじゃ足りない！

そう、今こそ……パコちゃんが本領発揮するときなのだー！

昨今の計画書、企画書といえばパソコンで作成すると決まっている。ならば私も挑戦なのだー！

「はいはい、お肉コンビは出てってー」

ブーとかモーとか言いながらも、二匹はおとなしく部屋から出てってくれた。ごめんね、後でちゃんとご飯持ってくからね。

よーし、いくよパコちゃん！

まずは電源スイッチをポチっと！

……返事ないよ？

「ねーねーパコちゃん、どうしたの？」

慌てない慌てない。何回も連続で電源ボタンを押してはいけないと、前にきちんと学んだのだから。

「いーち、にーい、さーん、しーい、ごーお、ろーく、しーち、はーち、きゅーう、じゅう！」

きちんと十数えてから、もう一回スイッチを押す。今度は長めに。

「……ねーねー」

返事がないー！

「おーかーあーさーん！！」

部屋のドアを開けて、台所にいるだろうお母さんに届くように、廊下の向こうへ精一杯に声を張り上げる。

「なにー！？　お母さん今、レベルの高い玉子焼きで忙しいんだけどー！！」

よし、聞こえた。お母さんの声も聞こえる。

「パコちゃんがー！　グーレーたー！！」

「あらあらサエー？　そのラックの色はグレーじゃなくてシルバーよー！」

「そうじゃなくてー！　動かないのー！」

「コンセントは入れたのー？」

「コンサート？　引退コンサート！？　ありがとうパコちゃん！パコちゃんは永遠に不滅ですーってそんなのやだー！」

「違うわよー！　コンセント！！」

コンセント……あ、抜けてた！　そっか、お肉コンビが足にひっかけちゃったんだ。

「よーし、パコちゃん起きてー」

あ、今度は返事があった！　よかったー！

作業画面が出るまで待機中。まだかなー、まだかなー。

よし、おっけー！

『一個の更新が見つかりました』

え？　え？　なにこれー？

『インストールを開始します』

びっくりしてクリックしちゃったら、なんか出た。え、何このゲージ、なんか、だんだん上がって……違う、下がってるのかな？　え？　えー？

――あとから聞いた話だと、それは自動更新というものらしく、私が見たゲージはインストールの作業状況を表すパーセンテージのバーだったらしい。でもそのときの私は、そんなことを知らなかった。だから、

「これー……横に時間が書いてある……あとこれだけ秒読みってことかな……」

１００％へ向かって上がっていくバー。そして減っていく残り時間。それを見た私はこう結論を下した！

「パコちゃんが爆発するー！！」

もうパニックです！　きっと時限爆弾がセットされたんだー！　時間切れになればパコちゃんは木っ端微塵に！？　どうしよう、パコちゃん機械だから骨を拾えないよー！　それに木じゃなくて鉄でも木っ端って言うのかなー！？　ああそうじゃなくてー！　パコちゃんを見捨てるわけにはいかないよー！

「わかりました、私がパコちゃんを救います！」

こういう爆弾って、そうそう！　たしか、中に二色のコードがあるんだった！　テレビで見たー！

パソコンの本体を開く。わ、コードがいっぱいあるー！　どうしよう、どれだろう、ああ時間がない……こういうときは直感！　そしたら大体は正解なんだよねー！　テレビとか映画じゃそうだもん！　はさみはさみ……えーい！！

コードをパチンッ！！

なんかバチッ！

画面がブツン。

結果、爆発はしなかったー！　やったー！

私、覚えたよー！　ああいうときは、ここを切ればいいんだねー！

……でもその後、お母さんにすっごく怒られました。私がしたのは、とても危険なことだったみたいです。

二度としてはダメ、と言われました。

でも、それでも！　パコちゃんが爆発するのを黙って見ていられません！　いくら危険でも、また同じ状況になったとき、私は同じことをします！

何度でもー！！

## カカの天下６９７「黒いところと白いところ？」（後書き）

書いてから思いました。
前半の黒いところはいいとして……
後半のこれ。白いのか？　白いっていうのか？

どう思います？笑

## カカの天下６９８「ちっちゃいことに気がつくでっかいの」

こんにちは、サエですー。

もうすぐお母さんがおうちに帰ってくる時間。でも少し残業するとのメールがあったので、まだしばらくヒマなのです。

「動物園でも見てこよーっと」

もちろん一般の動物園まで足を伸ばすわけではありません。我が家の一角にある動物小屋を見に行くということです。猫とか犬とか牛とか豚とか山羊とかが住んでまして、たまに私の部屋とかに来るものの、基本はそこにいます。

「やっほー、げんきー？」

キャンキャン鳴くラスカルは元気そう。

ニャンニャン聞こえないからお偉いキャッツは出かけてそう。

ブーブーモーモーは美味しそう。

山羊さんズはここに慣れてきたのか意外と元気そう。

ゆーたは「くくく」と笑ってなんだか楽しそう。

……今、変なもの見たぞう？

「あれ、ゆーたって家畜の仲間だっけー？」

「同じようなものです！　さぁ犬とでも豚とでも蔑んでください！」

「じゃドッグフードか藁食べて」

「それだけはご勘弁を！！　健全に美味しいものを食べるのが人生で二番目の楽しみなのです！！」

だろうねー。だからそんなに身体おっきいんだろうし。

「それは勘弁してあげるけど、どうしてここにいるの？　本当に犬畜生に成り下がったのなら保健所いきなよー」

「さ、サエ様……！　そこは嘘でも『それなら飼ってあげるよ？』とか言ってくださらないものか！？」

「それなら飼ってあげるよ？　嘘だけど」

「うぅ……！　サエ様、たくましくなられて……！　悲しいやら嬉しいやら」

「胸がいっぱい？」

「胸はおっぱいです！　間違えてはなりません！　けっして！！」

「ご、ごめんなさいー……なんでそんな必死なの？」

「おっぱいですから！！」

よくわかんないけど、とってもゆーたっぽい。

「まーいいや。せっかくだし、お話相手になってよ」

「は、喜んで」

「じゃーゆーた。何かおもしろい話して？」

「は、喜んで！」

わ、無茶振りしたつもりだったんだけどな。あっさり頷くってことは期待できるかも？

「えー、言わずとしれた身体の大きいこの私」

うん、体重１３０キロだっけ。筋肉もいっぱいあるんだろうけど、縦も横も奥行きもでっかいことには変わりない。

「実は背中にチャックがついてます！」

「えええー！　開けるとどうなるの？」

「ちっちゃい私がいっぱいいます」

「えええー！　見たいー！」

「どうぞ」

ゆーたが背中を差し出してくる。本当にチャックがついてる！

私は緊張しつつ、ツツツ……とチャックを開けた。

すると中には、本当にちっちゃいゆーたがいっぱい！

そのうちの一人が気軽に「よぅっ」って感じで片手をあげて、こう言った。

「あると思います！！」

「ないよ！！」

うん、ありえないねー。

「でっかいやつには中の人がいるものです……某遊園地やスーパーで何か配ってるイカした怪物たちには中の人などいない、そう思っていた時期が私にもありました」

でも今のはゆーたの作り話だよ。チャックを開ける辺りからね。中にちっちゃいゆーたなんか本当にいるわけないじゃんね。

「なかなかおもしろかった」

「ありがたき幸せ」

「他に何かないー？」

「ふむ、では目を瞑って三十数えてください」

「わ、なになに？　かくれんぼでもするのー？」

「おお！　それは今度いたしましょう。私はこう見えても隠れて人

を脅かすのが得意でしてね」

そりゃゆーたみたいなでっかいのがいきなりヌッと出てきたらい い驚きかたするだろうねー。私は驚かなかったけど。

「いーち、にーい……」

「先ほども隠れていながらつい楽しくなり、笑ってしまいまして」

なるほどねー。でもそれはすぐに見つかっちゃうんじゃないかな。かくれんぼが好きでも、向いてるわけじゃないのかも？　あれ、そういえば隠れて脅かすのが得意って……そもそもかくれんぼと関係ないや。かくれんぼはずっと隠れてるもんだし。

「ろーく、なーな……」

あれ、ゆーたの声が聞こえなくなった。隠れたのかなー。

「……さーんじゅ」

目を開ける。

するとそこには……

「ゆーたの中の人は……お母さんだったのかー！」

衝撃の事実！　腹の中に黒い人、これが本当の腹黒かー！

「ただいまー。サエは何を言ってるのー？」

「あ、やっぱり違ったー？」

だよねー。あれ、じゃあ……

「ゆーた、どこ行ったんだろ。ていうか何しにきたんだろー」

「あら、ゆーたさんに遊んでもらってたのー？」

「うん」

「そっかそっかー。今日のお昼、外に出たときに会って少し話したんだけどー、私が残業するって知って様子を見に来てくれたんだねー」

そうだったんだ。私が一人でいるの嫌いって、知ってたのかな？

ありがと、ゆーた。

「最近は不審者も多いし、ゆーたさんが守ってくれれば安心だねー」

「でも黙って忍び込むゆーたのほうがどう見ても不審者だよ？」

「それ、今度二人で言ってあげましょー」

「うん！」

きっとゆーた、喜ぶぞー。

## カカの天下６９８「ちっちゃいことに気がつくでっかいの」（後書き）

最近サエちゃん目立ってないなーと思ったので、続けてサエちゃん話です。
え、ゆーたの話になってる？
……まぁ、今年初登場だし、いいんじゃないスか？笑

感想返信、もう少々お待ちを。金土日はほんっと余裕ないのです＾＾；

## カカの天下６９９「あの日の次の日」

カカです、今日も元気にサエちゃんサユカンと登校中。

「ねぇねぇカカすけ。トメさん、元気？」

「なんで？」

「昨日、ちょっとあって……夜に電話してきてくれたんだけど」

「やーらーしーいー」

「何よサエすけ。やらしいことなんか一つもないわっ！」

「それはそれで女として、さーびーしーいー」

「うっさいっ！　話を戻すわよ、そのときトメさん、その、元気なかったなぁ、なんて思ってっ」

昨日のトメ兄を思い出す。

『笠原トメ！！　３５歳！　妻も子供もいるといいな！！』

泥酔したトメ兄は、まだ見ぬ未来を叫びながら左手は腰に当て、右手は『僕が一番！』といわんばかりに人差し指を天井向かって突き出して『いぇーい』とポーズを決めていた。

「んと、昨日は変だったけど」

今朝のトメ兄を思い出す。

『おはよ、トメ兄』

『……ぬぁぁ』

朝の挨拶を『ぬぁぁ』で済ませたトメ兄は、ものすんごく顔をしかめて――わかりやすく言えば洒落にならないほど頭が痛そうな表情で朝食を作っていた。そしてこんなことを言っていた。

『なぁ、包丁……なんでおまえ、今日はこんなにうるさいんだ？　なんか怒ってるのか？　キレてるのか？　悩みがあるなら……あれ、包丁が切れるのって普通か？』

こんなことも言っていた。

『フライパン……おまえはどこのパンだ……パンダ？』

とりあえずこの人はもうダメだと思った。

「うん、今朝も変だった」

「変、とか……君は人のこと言えないでしょっ」

や、アレは言えるレベルの変だったと思うんだけど。

「元気かどうかよっ」

そうだねぇ、もう一回寝れば元気になりそうだけど。会社に行くまでずーっと死んだような顔してたからなぁ。今日一日は辛そうだ。

「でもま、元気――」

――だと思うよ、と言おうとしたそのとき、サエちゃんの熱い視線をキャッチした。

サエちゃんの目はこう言っていた。

『愛してるよー』

違う。コレ願望だ。

どれどれ、正しくは……ふむふむ？

「元気っ！？　元気なのねカカすけ！？　そう……元気ならよかったわっ」

「――じゃない。すごく元気じゃない。今にも口からジョーイ＆マイケルを吐き出して死んでしまいそうなくらい元気ない」

「ええっ！！」

これでいいかなサエちゃん？　なんか目が『Ｎｏ！　Ｎｏ！　Ｎｏ！』って言ってるように見えたから、思いつく限り最も『Ｎｏ！』な死因を加えてアレンジしてみたんだけど……あ、サエちゃんがにっこり笑った。

「それは大変だねーサユカちゃん」

「ううん、どうしようっ！　わたしのせいかなぁ、わたしが傷つける

ようなこと言っちゃったから……っ」

「それでトメお兄さんはズダボロになっちゃったんだねー。サユカちゃんのせいで」

「あああっ！　わたしっ、わたしなんてことを！」

「責任取らないとねー」

「どうすればいいの……死ねばいいのかしら……」

「ううん、サユカちゃんは、トメお兄さんが元気になるように頑張るべきだよー」

「そ、そうねっ、そのとおりだわっ！」

「恥も外聞も捨てて、ただトメお兄さんのためだけに、イヤーンなことにもビリビリなことにもネッチョリなことでもビッショリなことでもどんなことでも耐えて、頑張らないといけないんだよー。なぜならサユカちゃんのせいだから」

「わかったわ、わたしのせいだものねっ！　トメさんを元気づけるためなら、どんなことでもっ！！」

サエちゃんはこっそり私にグッ！　と親指を立てた。洗脳成功……なるほどなるほど。

「サユカン、またデートするんだよね？　じゃあ勝負はそんときかな」

「うん、わたし頑張るわっ！」

「私たちも協力するよー」

「ありがとうっ！　やっぱり持つべきものは友達ねっ」

うん、持つべきものは面白い友達だよね。さーて、今回はどんな姿のサユカンが見られるんだろ。ていうか何させよっかな、サエちゃんとよーく相談しないと。たーのしーみー♪

そして、学校が終わって帰宅。

居間でテレビを見ながらゴロゴロしていると、やがてトメ兄が帰ってきた。

「ただいま……」

「おかーり」

むう、暗い表情。二日酔いはまだ治ってない様子。

「カカ……僕、いつの間に会社に行ってたんだろう」

「今朝の分までモノの見事に記憶なくしてるね」

「薬飲んだから頭痛は治まったけど……やばい、思い出せない。昨夜に何をしたのか、おぼろげにしか思い出せない！！　カカ、昨日の僕、変なこと言ってなかったか？」

「んーん、特には」

ここは、昨日の失態は見なかったことにして、教えないであげるのが大人だよね。

そしていざというときのネタとして取っておくのが大人だよね。携帯で撮った動画、ちゃんと保存しておかないと……

「でも、なんだかスッキリした気がする」

そりゃそーだろうさ、あんだけ弾けりゃ。

「……まぁ、何もなかったならいいや。とりあえず夕食を……カカ、今日は雑炊でもいいか？　まだ腹の調子悪くて」

「たまご、たっぷり入れて」

「よしきた。カカはたまご好きだなぁ」

「トメ兄のほうが好きだよ」

「んなこと言っても何も出てこないぞ？」

「冷蔵庫の奥にあるゼリーは？」

「……あれは明日のおやつな」

「トメ兄、大好き」

「だからダメだって」

「トメ兄大好き」

「おのれ卑怯だぞおぬし」

「トメ兄大好き」

「ええい、小癪な」

「トメ兄大好き」

「食後にもってけドロボー！！」

「わーい」

うん。普通のトメ兄に戻ってよかった。

「……もっかい言ってくんない？」

「ヤ」

## カカの天下６９９「あの日の次の日」（後書き）

またもや一日休んじゃいまして、楽しみにされていた方いましたらまたもやすみません。

理由……今回は単純に時間なかっただけです。

明日のカカラジはちゃんと書くつもりですので、投稿ネタありましたらよろしくです！

# カカの天下７００「第二十四回、カカラジ！」

「皆さん、こんカカ！　一応カカラジとしては新年あけましておめでとうなんだけどもうすぐ二月なのに今更？　って感じがすんごく強くてコレ言っていいのか悪いのかワカリマセーンなんでエセ外人風味にワカリマセーンと言ってしまったのかもワカリマセーンなんて今回も冒頭の長文挨拶だけはノリよくいくぜぇイェーイってな感じの香加です！」

「はい、いつもどおり普通に挨拶であけましておめでとう、な留です」

今更そんな挨拶できるかって感じの作者です。

「む、ノリ悪いね。そりゃあんたは一月一日から書いてるから挨拶は済んでるだろうけどさ」

この番組はネット小説『カカの天下』を盛り上げるため、ぶっちゃけトークや作者の本音を交えながら読者さんの投稿で遊ぶラジオ的お話です。ここにいる留と香加はカタカナなやつらの分身であり、本編と直接関係はないのでお気をつけください。

「無視した無視したー！　留兄、どう思う？」

「ん、ああ。今日の冒頭、またもしも話ないけどいいのかな？」

「……留兄まで私の話を聞いてない」

「や、悪い。僕も別人とはいえ本編とシンクロしてるからさ、トメ

が元気ないと僕も元気ないんだよ。一応それなりに回復はしたけど」

今後の展開は、その辺り――トメの過去を中心に展開していくかもしれませんね。

「しれません、という辺りが作者らしいな」

「どうせ気分で変わるから、断言できないんでしょ」

あいあいどうせその通りですよ。それとですね、もしも話のほうですが……前回、まとめて一度にやると書きましたね？　そんなわけで今回のカカラジは『もしも』特集！　一番最後にメインとして、溜まった分をどばーっと書きまくろうと思います。

「あ、今日やっちゃうんだ」

けっして、さっき前回のカカラジを読み返して「あ、ヤベ。やるの忘れてた」とか思って急遽やろうと思ったわけではありません。ええ、そんなことはありません。

「あんたわかりやすいな」

さて、そんなわけで今回は他のコーナーの枠を狭めます。ＣＭは一回、脅迫状も一回、ネタも一回。ふつおたはいくつかやりまーす。

「忙しないなー」

あと重大発表もございますのでお見逃しなく。それではＣＭへ。

最近世間を騒がせているモノ。

人から人へと感染し、瞬く間に広がった恐るべしモノ！！

それは――でゅみゅみゅみゅう！！

発生場所、感染方法、原因の一切が不明。

全てが謎に包まれていると言っても過言ではないこの言葉。

しかし！　その言葉に遂にワクチンが開発された。

それこそ――でゅみゅにゃ！！

カカ天的研医である”霧久さん”が開発したこの言葉。

服用方法（発音）に少々難があるものの、一部の地域では、でゅみゅみゅみゅうに処方される唯一のワクチンとして期待されているような気がする。

そこの君も、今すぐでゅみゅにゃ！

二百円で駄菓子屋で売ってます。

ＣＭがあけて。

「えー、今のは『三日月』さんからいただきました」

そして投稿者の方からメッセージが届いております。

『霧久さん、唐突かつ勝手にお名前及び言葉の使用をしてしまい、申し訳ありません。この言葉を見たときにどうしてもコレを書きたくなってしまいまして。勝手とは思いましたが拝借させていただきました。ご気分を害されたようでしたら、心からお詫びいたします』

だ、そうです。

「どういう意味か、わからない読者さんもいるんじゃないかな？」

「それもそうだな。じゃあ僕が説明を……簡単に言えば、感想欄の常連組のコラボだな、えっと」

そうそう。なんだかよくわからないうちにカカ天の感想欄が読者同士の交流場と化しつつあるんですよね。今回のは本人に許可をとっていないのでどうしようかと思いましたが、これがまた交流に繋がるきっかけになればいいかなーと思って載せちゃいました。霧久様、もし気分を害されましたらすぐにご連絡を。即編集し、三日月さんともども謝罪します。

「説明とられた……元気出さないとな、うん」

「気分を害したら確かに大変だけど、でもその人ってカカ天読んでる人なんだよね？　んじゃこんくらいのこと気にしないんじゃないかな」

「そりゃおまえくらい図太ければ『おもしろけりゃオッケ』で気にならないだろうが……世の中いろいろな人がいるから、一応な」

あい、前に載せた旅行者さんのといい、冒険が好きな作者でごめんなさい。

「さてさて、それじゃふつおたにいこうか」

あい、カカ読んで。

「あいさー。えー、カカラジネーム『サエ＋跳び箱＝萌』さんからいただきました。あんたわかってるね！！　あんたわかってるよ！！　サエちゃん跳べないんだよね、絶対跳び箱の途中でお尻打つよね、それで跳び箱の真ん中辺りに乗っかって『んしょ、んしょ』とか言いながら前にずりずり進んで降りようとするんだよね！　魅惑のブルマと細い腿肉が揺れるよグッジョブ！！」

「はよ読めや」

腿肉てあんたね……

「はいはい慌てないの。えっと、『トメの趣味について話していた話があったのですけど、釣りって趣味じゃないのですか？』　だってさ」

「あー、釣りしたことあったな。かなり最初のころだけど」

どうなの留君や。

「え、だってそんなに行かないし。年に一回行くかどうかわからないものを趣味と呼んでいいものか……」

そうだねぇ。趣味って常日頃から楽しむもんってイメージあるしねぇ。サーフィンとかスノボとか、季節限定とかのもあるけど。

「あれ、でも留兄ってスキーできるんじゃなかったっけ？」

「そこそこは。でもそれもあんまり行かないし」

「むぅ、だよね。だから私もなかなか上達しないんだし」

サユカちゃんはそこそこ得意らしいですけどねーって覚えてるかなー読者さん、昔にこんな会話あったの。

「ともかく、趣味ってほどではない！　以上！　次」

「はいはい、えー『サイボーグ』さんからいただきました。特に指定はありませんが、ふつおたとして読ませていただきます」

どんとこい。

「えー、『うがい&手洗い大事』だそうです」

「普通にも程がある」

だって普通のお便りでふつおただし。

「や、それにしてもさぁ……確かに大事だけどさぁ」

だってメッセージでいただいたんですもん。大事なことですもん。発表せねばなるまい？

「そう、なの、か？　まぁ、いいけどさ」

「じゃ次読むよー。えと、また『三日月』さんからいただきました」

「この人多いなー」

だって投稿数が半端じゃないもん。さぁ読むがいい！

「んとね、『これはタケダですか？』と」

「どれだよ」

「それから『いいえ、マケダです』だって」

「勝手に完結かよ」

質問でもなんでもありませんな。まぁ『普通のおたより』なわけで、特に質問という枠じゃないのは確かなんですが。

「あ、でもこれは質問だよ。カカラジネーム『我こそ糖分王なり』さんからいただきました。糖分……こいつ甘いの？」

「や、この人が糖分大好きなだけだと思う」

多分ね。さ、続きは？

「んー『ルシカさんが、１話から７００話までの間に一番大きく変化したなー、と思うキャラは誰ですか？』だってさ。どうなのよ」

そうですねぇ……

見るからに変化していったのは、やはり姉。

「なるほど……最初からなんでもアリなキャラではあったが……」

「今じゃすっかり、誰がどっからどう見てもバケモノだからね」

次々と正体が明かされていった、という形をとってはいますが、まさか破天荒なだけなおねーさんが、花火に打ち上げられても平気で動物と意思疎通をして電車と並走して壁を走って悪魔人形と激戦を繰り広げるまでになるとは……作者自身も予想していませんでした。

「ノリで書いてたのが丸わかりだな」

それで楽しんでもらえればいいんです！　もしくは私が楽しければいいんです！

「さすがは私の創造主。私っぽい考え方だ」

はいはいどうも。あと……カカサエサユカはもちろん変化しましたね。カカは成長して少しずつ周りが見えるようになってきて、サエちゃんは黒くなってきて、サユカちゃんはエロくなってきました（ここ重要）。

「おお、私だけまともだ！」

あとカカはもっと変になりました。

「ちょっと！　成長したんじゃなかったの！？」

少しばかり周りが見えようが、変なものは変なんです。

「正論だ、諦めろ」

「ううー……」

「で、僕は？」

トメはまったく変わらんね、うん。少しは成長したのかもしれないけど、結局は恋愛の進展は皆無だし、結局はずっとツッコミだし、結局はパッしないし。

「むう……言い返せない」

「はい、留兄もトメ兄もこれから頑張れーってことで最後のおたより。カカラジネーム『（たぶん）林檎なトマトです？』さんからいただきました」

「色々と何がどっちさ」

「わかりません。えーと『お仕事とか大変でしょうが頑張って更新して下さい。さもないとカカちゃんをお持ち帰りして小説書けなくしちゃうぞ（笑）』だそうだよ作者」

お持ち帰られたら困りまくりますな……あい、頑張ります。

「でもこれ脅迫状じゃないのか？」

「どこが」

あい、普通の応援ですな。ありがたく頂戴します！

「そんなわけでふつおたコーナーは終了、脅迫状コーナーに参ります」

「今回選ばれた脅迫状は……これ！！」

『～脅迫状～

この脅迫状はルシカさん宛てにでも、カカ天の誰宛てでもありません！！

ななな、なんと！

カカ天読者の皆様への脅迫状です！！

自称奇人変人の皆様！

貴方達を僕こと『三日月』は脅迫します！！

脅迫内容は……

”カカ天企画に参加し、ルシカさんを忙殺&カカラジを大いに盛り上げろ”

……です！！

もしも、ルシカさんがぴんぴんしてたり。

もしくは盛り上がらなかったら、ルシカさんの身が色々大変なことになるかもですよ！？

……え？　ルシカさんを過労死させる気かって？

ふふふ！　この脅迫の真の内容を御教えしましょう！！

ぶっちゃけ、面白そうだから。

じゃあ、皆さん！

張り切って脅迫されてくださいね～♪』

脅迫が明けて。

「ＣＭが明けて、と違って違和感あるなそれ」

「脅迫でしょ？　明けてっていうより開けてって感じだよね。『開けて！　開けて！　ここから出してよサエすけ！！』みたいな」

なんで例がサエちゃんに閉じ込められるサユカちゃん？

「似合うからだろ」

「そそ。目を瞑るだけで情景が浮かんでくる……檻の中に閉じ込められるサユカン……なぜか裸……サエちゃんの隣にはもちろん私、というかカカが……」

なにされるんだか期待大ですね、今度書きましょう。

「作者ってさぁ……作者ってさぁ……」

なんだね留君、言いたいことがあるなら黙ってなさい。

「じゃ言わせてもら――ダメなの！？」

巻いてるの。ささ、脅迫状も終わったことだし、ＣＭの代わりにネタを一発！

これは去年、クリスマス話までの数日間をお休みしたときに送られてきた、ある読者さんの日記です……本人曰く『冬休みの宿題の日記』であります。前回のカカラジでは紹介する枠がありませんでしたので、少し遅れて今回に載せさせていただきました。

それでは、一読者、『ケイ』さんによる日記に私がコメントを後付けしたものをご紹介いたします。

１２月１７日（水）

間違えてカカ天の更新を待ち続ける。

思い出したときショックをうける。

――作者です。日課を潰して申し訳ありません。

１２月１８日（木）

軽く脱水症状と同じような症状が出る。

カカ天成分不足だと診断。

――作者です。診断した医者連れてこい。

12月19日（金）

今年一年の漢字を知る（遅い）

まさにカカの年だと思い嬉しくなる（悲しい奴）

――作者です。このときの今年、つまりは去年の漢字は『変』ですね……思えばそれをネタに一つくらい話を書けばよかった。

12月20日（土）

禁断症状がでる。

カカ天の読み返しで抑える。

――作者です。もっと読め。

12月21日（日）

夢の中にタケダが出てくる。

なぜカカ天主要メンバーが出てこないのか嘆く。

とりあえずタケダの息の根を止める。

――作者です。そう、その夢を見せたのは私だ、ふはははは。

１２月２２日（月）

夢の中で殺ったはずのタケダが復活して増殖（分身ではない）してワラワラとやってきた。

うなされる。

――作者です。病院行け。

１２月２３日（火）

ケイ（故）

死亡推定時刻　０７：１１

死因　カカ天成分不足により死亡。

――作者です。人殺しです。人をも殺せる私の作品、すごくね？

その後カカ天が更新されるとカカ天レーダーが察知し自己蘇生。

ハイテンションにつき手が付けられない状態になる。

――作者です。ちっ。

こんなところですね。

「作者……あんたひでぇな」

大丈夫、カカ天読者は基本的に心が広いので、これだけ書いても快く許してくれるか、更なるネタで対抗してくれるか、のどっちかです、きっと。

「だったらいいけどな……」

「最後の『ちっ』って何が言いたかったの？」

初めて文章で人を殺せたと思ったのに。

「……」

え、だって、できたらすごくない？　きっと新聞にも載るよ？

「冗談だよね」

当然です。出過ぎたことばかり言って申し訳ありませんでした。心底謝罪いたします。

「よろしい。まったく……カカ天の読者さんは寛容な人ばっかりなせいで、作者も調子に乗ってしまうから困る」

「もっと調子に乗っていいって意見もあるくらいだしね」

色々と考えながらやらせていただきます……さて！！　このあたりでいよいよ本日のメインイベント！　もしも話の大連発に行こうと思います！

「作者、仕事」

はい！　これはもう大仕事で――

「そうじゃなくて。仕事、電話きてるよ？」

……今日は、お昼の営業だけだったはずでは？

「人足りないから出てくれってさ」

……えー、はい。マジ話です……いま呼び出しがありまして、最後まで書けそうにありません……

「ていうか、短くまとめるとか言ってたけどさ」

「気がついたらすでにいつものカカラジ的長さに達してるよな」

むう、なんだかんだでメッセージ溜まってたし、ツッコミどころも色々あったからなぁ……というわけで、カカラジ初、後編に続く、ということで行こうと思います！

もしもシリーズ大連発、さらには重大発表、さらにさらに投票企画も発表しようと思いますので、明日の放送もお楽しみにしててくださいなー！！

「ではでは、ひとまずカカばい！」

「チョップも明日やるからねー！」

それでは、後半へと続く！！

## カカの天下７００「第二十四回、カカラジ！」（後書き）

と、いうわけで。
明日に続きます！
もしもシリーズで埋め尽くすつもりがその前に書きすぎた笑　まぁ、少しでも読者さんの声に応えたってことでよしとしましょう！
して、いいですよね？＾＾；
あと、ラジオに登場した投稿者の皆さん、もし不快に思われることありましたら遠慮なく言ってくださいね＾＾
さてさて、明日はもしも三昧だ！　カオスな内容もあるから覚悟してくださいね！！

## カカの天下７０１「第二十四．五回、カカラジ！」

「皆さん、またもやこんカカ！　二十四．五回のカカラジです小数点です小数点です私は最近習いましたよってわけで後半始まるぜーいぇーいってもしもスペシャルってことはわたくし香加の出番はあまりないのでは？」

「や、もしも話を演じるのは仮想世界の僕らだから出番はあると言ってもいいかと。あ、留です」

昨日に引き続き作者です。さー張り切って参りましょう、もしも祭り。

「最初に説明するぞー。えっと、今まで溜まってたもしもシリーズの投稿を適当な順番にやっていきます。話の繋がりとかまったく考えてないので、いきなり話が変わっても驚かないでな」

「ほら、たまにある詰め合わせの話とおんなじ風にとってもらえばいいんだよ」

そうそう。一気に連続でいきますので覚悟してください。それでは早速いきましょう！

『若木瀬』さんからいただきました。

――サカイさんの娘がもしもサユカンだったら、いちゃつき方はどうなるか？

「サーユーカー♪　お茶しない？」

「なにお母さん。いま忙しいんだけどっ」

「何をしてるのー？」

「トメさんの写真を飾ってるの」

ガシャーン！！　とショッキングな感じの音をたて、カップの乗ったトレイを落とすサカイさん。

「さ、サユカ！　まだおまえ、あの男と……！」

「誰よあんたっ」

「はっ！　私ったらー、思わず昼ドラの『女に弄ばれてる男』みたいになってしまったわー！　こほん……それでサユカ、トメさんとはきちんとしたお付き合いをしてるんでしょうね？」

「きちんとした、って……ま、まだ、付き合って、ないし」

「わたしの娘に不満があるとー！？　何様だー！？」

「そうじゃなくてっ！！」

ピンポーン。

「あ、トメさんが来た！　トーメさーんっ」

「ま、待ってよサユカー！」

舞台はサカイ家の玄関へ。

「や、サユカちゃん。今日は呼んでくれてありがー―」

「トメさん！！」

「――とう、と、言おうとしたんだけど、やぁサカイさん」

「君に話があるー！」

「ちょっとお母さんっ！？」

「な、なんでしょうか」

いきり立つサカイさんに困惑する二人。

「まず自己紹介からだな。私がサユカの父親だ！」

「あんた母親でしょうがっ！」

「そうだったー！　私はお母さんだー！」

「ええと、サカイさん？　おかあさんがどうしたって？」

「君にお養母さんなんて言われる覚えはないのだー！　サユカは嫁にはやらないのー！」

「もうっ、いい加減にしてよ！　お母さんなんて嫌い！」

「ああ、待ってえええー」

空気を読んだトメは帰り……残ったのは自室で不貞腐れるサユカと、オロオロするサカイさん。

「ごめんー、ごめんねサユカー」

「ふんだっ！」

「許してー」

「ふんだっ！」

「犬の」

「フンだっ！」

「それを」

「踏んだ！　って何を言わせるのよっ！？」

「ううー、だってサユカがかまってくれないからついー」

「つい、であんなことを好きな人に言われたらたまらないわよっ！お母さんとはもう口利かない」

「そ、そんなー……」

泣き崩れるサカイさん。

「うう……ひぐ……えぐ……」

「……」

「ごめん、ごめんぇ……ぇぐ……」

「……」

「おがあざんがわるがっだよぉぉ……ひっく……だがらぁ……お話じでよぅ……」

「……あぁもう！　わかったわよっ！　話せばいいんでしょ話せばっ」

「だっこ……」

「はいはいっ！」

「ちゅー……」

「はいはいっ！　ってするかぁっ」

「うぇーん」

「泣くなぁぁぁぁぁっ！」

可愛い一人娘がどこの馬の骨とも知れない男に夢中で気が気でない母親根性により、かなりアブない人となってしまうのでしたとさ。

ＥＮＤ

続きまして。『三日月』さんからいただきました。

――もしも、サエの方がカカに惚れてたら。

「カカちゃん、あの漫画読んだー？」

「読んだけど……なんか、すごい内容だったね。ヒロイン同士が……あんなのもありなんだ……」

作戦その一。特定の漫画を読ませ、女同士の恋愛への抵抗を無くす。

「でも面白かったでしょー？」

「うんうん！　熱い展開だった！」

注意事項、あくまで『内容が面白い』という点を推して、女同士云々は二の次な雰囲気にする。押し付けがましくなっては警戒されるため。

「あれ、サエちゃんのキーホルダー、私のとおそろい……昨日買ったばかりなのに」

「私も昨日買ったのー、偶然だね」

作戦その二。漫画の内容と同じ状況を作る。サエちゃんの予想が

正しければ、『運命!?』という雰囲気に……

「じゃあサエちゃんの、今日の朝ごはんは!?」

「え、な、納豆ご飯だけどー」

「私は卵かけご飯！　こっちは合わなかったか、残念」

作戦その三。相手が気づかなくてもくじけない。

「ドーナツ食べたい」

作戦その四。唐突な言動に翻弄されてもくじけない。

「じゃ、放課後に一緒に食べにいこうかー」

「わ、行こう行こう」

「あ、でも私、お財布持ってきてないやー」

作戦その五。二人でいられる状況を作り、なおかつ自分のお金は使わない。

「じゃトメ兄に作ってもらおう」

邪魔者介入により、作戦失敗。

「どしたのサエちゃん。トメ兄の作るドーナツおいしいよ？　食べない？」

「……たべゆ」

色々と考えすぎるサエちゃんの意図は、全く考えずに行動するカカには全く伝わらないのであった。

しかしまぁ、結局は一緒にいられるので本人は幸せなのだが。

がんばれサエちゃんＥＮＤ

続きまして。『霧久』さんからいただきました。

――もしカカ天のキャラ全員が腹黒かったら。

「からしめんたいこ！！」

今日も今日とてカカは絶好調に皆を笑わせていた。

誰もが天然で面白いと思っていた、そのカカは――実は裏でこんなことを言いながらほくそ笑んでいたのだ。

「ふふ、私は人気者！　見て！　もっと私に注目しなさい！　そして崇めなさい！　わかりやすく言えばお菓子とか貢げ！　誕生日プレゼントとかも奮発しろ！」

そして……チラリと向ける視線はあの人へ。

「誰よりも笑ってほしいサエちゃん。や、いつもニコニコしてるけど、いつかその笑顔を私のものに！　もっと周りを笑わせまくって

アイドルになったあと、サエちゃんに私を独り占めさせて、ファンどもを羨ましくさせまくってやるのだ。そうすれば羨望の視線を浴びつつゴールインすることができる！　なんて気持ちのいい展開だろう……ごめんね皆、あなたたちは私の自己満足のための捨て駒なの。だから今のうちにせいぜい笑いまくって幸せを満喫するがいいさ。特にサユカン、君はサエちゃんと遊びに行くきっかけ、材料でしかないのだし……くくく」

一方、その可哀想なはずのサユカちゃんは。

「ふふ、またカカすけったら目立っちゃって。その調子よ、もっと騒ぎなさいっ！　君が問題起こしたりイベントを企画すれば、必ずトメさんがやってくる……君は、そのための材料でしかないのだから」

腹黒カカと似たようなことを思っていた。さらに、

「サエ……あなたは正直、何の材料にもならないけど、お金をたくさん持ってるからソッチ方面でせいぜい協力してもらうわ……そう、例えばっ！　バレンタインのチョコを一緒に作るとか言って高い材料を持ってこさせ、作った後にこっそりカカすけサエすけ二人のチョコを廃棄……すばらしいチョコはわたしだけっ！　トメさんを感動させるのはわたしだけっ！　みたいな感じで……ふふふっ」

二人とも立派に腹黒くなっている。

さて、元祖腹黒のサエちゃんはというと、

「目立つカカちゃんと、いつも一緒にいるサユカちゃん。これで何をしても二人のせいにできるー」

黒くなりすぎ。

さて、他のメンバーを見てみよう。

姉ことカツコ。

「父よ。あたしの怪物的力を世界にバラせば、それをきっかけとして忍者の存在もバレる……そんな展開にしたくなければ言うことを聞け」

「な、何をしろと言うのだ!?」

「まぐろ買ってこい」

「なぜだ!?」

「食べたいから」

黒くなって世界がどうとか言っても所詮は姉。

インドちゃんは。

「ブラックカレー」

アヤちゃんは。

「ニッシー。あんたの家の西側に、私の家を建てたわ」

「結婚してくれ!」

「ふ、仕方ないわね」

お幸せに。

さて、シューとタマちゃんは？

「シュー、ジュース！」

「はい、ただいま！」

「シュー、お菓子！」

「はい、ただいま！」

「シュー、肩もみ」

「はい、喜んで！」

タマちゃんはほくそ笑む。

「えへへ……シューいいなり」

シューはほくそ笑む。

「えへへ……快感」

あれ、あんま変わってないや。

ではサラさんは？

「ありがとうございましたー！　ふふ、また花の名前を偽って、安いお花を高く売っちゃった♪」

普通に黒いです。

そしてお待ちかね。腹黒くなったトメは？

「またカカたちが来たな。これで女子小学生たちに囲まれてウハウハ……って、待てよ。はて、僕は別にロリコンじゃないから、それが得ってわけでもないんだけど。よし、あれだ。カカたちと仲良くしてれば、美人な先生とお近づきに……や、先生ってテンだろ？わざわざ近づく必要ないし、元から近いし、そもそも色っぽい話にならないし。え、え？　僕はいったいどんな腹黒い理由でカカたちと一緒にいればいいんだ？　あ、近所からの注目を集め……集めて変人扱いされるの嫌だし。静かに暮らしたいし。そうだアレがあった！　可愛い子供なカカを商店街に連れてくと、野菜とか魚とか安く売ってくれるんだよな！　そうだそうだ、それにしよう。僕の腹黒い考えはそれだ！　買い物が安くなる！」

トメ……黒くなってもちっちぇ……根はかなりの善人だしね。

なんだか嫌なやつがいっぱいでカカ天っぽくならなさそうですが、これはこれで面白いかもしれませんね。

ＥＮＤ

続きまして、『ケイ』さんからいただきました。

――もしも旅行者さん（感想常連の読者の方）がカカ天ワールドにいたら。

「あ、カカ」

「何。あんた誰」

「旅行者だ！」

「道中お気をつけて」

「あ……はい」

終了。

続きまして、さらに『ケイ』さんからいただきました。

６５４話を思い出してください。トメとテンカ先生が熱燗を飲みながら話している最中に、テンカ先生が冗談交じりに自分の乳を「揉むか？」と聞いたシーンがありました。ヘタレなトメは「揉むわけあるか！」と返しましたが……

――もしもトメが揉んでたら。

「じゃ遠慮なく」

もみっ。

「人差し指」

ボキ。

「親指」

ボキ。

「中指薬指小指」

ボキポキペキ。

「ぎぃやあああああああああ！！」

「なにマジで触ってんだ、あぁん？　触ったその手、粉々にしてやっから出せやぁ！！」

「もう粉々ですぅぅぅぅぅ！」

「まだ手の甲と手首と腕は残ってんだろうがぁ！！」

「全部折る気ですかぁぁぁぁぁぁ！！」

トメの右手、ＥＮＤ

続きまして、『嘘吐きぬこ』さんからいただきました。

曰く『キリヤを転職させなさい。キリヤなら何をさせても大丈夫！』だそうなので……

――もしも、キリヤがタケダん家の医者だったら。

「風邪ですね、はい薬。次のかた」

「こんにちは、今日は、その」

「風邪ですね、はい薬。次のかた」

「つつつ……あの、今日はお腹が痛くて」

「風邪ですね、はい薬。次のかた」

「腕が死ぬほど痛いんです！」

「風邪ですね、はい薬。次のかた」

「頭が悪いんです！」

「風邪ですね、はい薬。次のかた」

「おまえが悪いです！！」

「風邪ですね、はい薬。次の――」

あの、いい加減マジメにやりません？

「だって医学知りませんし」

そりゃそうだＥＮＤ

――もしも、キリヤがユイナさんのマネージャーだったら。

「どうでしょう、二人で打ち上げへ行きませんか？」

「でも、主人が」

「大丈夫、お仕事の話ということにしておけば……ね？」

「あらあら、悪い子なんだから♪」

この先は自主規制ＥＮＤ

――もしも、キリヤがデンジャーケロリンの中身だったら。

「ゲロゲーロ！！　はっはっは！　ゲロゲーロ！！」

なんかとてつもなく活き活きしてて楽しそうＥＮＤ

――もしも、キリヤがトメの夫だったら。

「トメ君、おかえりなさい。ご飯にしますか？　お風呂にしますか

？　それとも、わ、た、し？」

使い古されたこのセリフが性別違うのに爽やかに似合ってしまうのはこの男だけだと思うＥＮＤ

――もしも、キリヤがミエ様の執事だったら。

「キリヤー、こないだの件は？」

「抜かりありません。これで世界はサカイ様のもの」

「私の計画とあなたの実行力、そして二人の頭脳。これがそろえば敵はないわねー」

「まことにその通り。して、世界を征服した暁には、まずは何を？」

「サエを神にするわー！」

「それはすばらしい！　はっはっは！」

「あっはっはー！」

手がつけられないＥＮＤ

――もしも、キリヤが羊だったら。

「メー」

――もしも、キリヤが犬だったら。

「私はあなた様の犬、どうぞお好きに」

――もしも、キリヤが猫だったら。

「キリヤだにゃん♪」

――もしも、キリヤが牛だったら。

「さぁ、私の乳を搾りなさい！」

こいつ面白いなＥＮＤ

――いかがでしたでしょうか。

「随分と長かったなおい」

はい、せっかくですので今回は『書くとしたらちょっと長めになるかな？』的なもしもを詰め合わせてみました。もちろん数行で終わるようなもしも話もあったのですが、それは次の機会にでも。

「しっかし変なのばっかだったね。さすが私のファンどもだ」

「議題が変じゃなくてもおまえらが変なんだから、全部変になるんだよ」

あんたもね。

「僕はそんなに変じゃないよ……だからパッとしないのさ……」

あ、根に持ってる。そんなこと言ったってどうせ人気投票すればまた上位にいくくせに。

「そういえば投票企画するんだったね。また人気投票？」

いいえ、それは次回のカカラジ辺りにやろうかと。キャラも増えるかもしれませんしね。

「ほうほう、となれば今回のは？」

ちょっと変わった感じで、『カカ天名セリフランキング企画』と題しましょう！　内容はそのまんま、今までのカカ天の中で心に残ったセリフを抜き出してください！

「セリフって言ったって、前後のシーンとかも色々あるよな。どこまで抜き出せばいいんだ？」

何話のこのセリフ、と言っていただければオッケーです。話の内容や前後のやりとりについてはこちらで適当にまとめますので、気に入ったセリフのみを教えてください。

投票方法はいつもの通り。感想欄もしくはメッセージ欄にて、『何話の』『このセリフ』を明記してください。そのシーンに対する感想を添えていただけると嬉しいです。

「また感想の返信とか溜まってるけど、対処できるのか？」

します！　できます！

「ハッキリ言うね。根拠でもあるの？」

時間ができるからです。

「ニートになるのか」

違うわ！　ここで重大発表なのですが……誠に申し上げにくいのですが……

「なにさ」

次回から、カカの天下は毎日更新を止め、基本二日に一度更新にします！

『えええええ』

毎日覗いてくださる方は気づいていらっしゃるでしょうが、最近のカカ天の毎日更新は非常に危うくなっています。０時直前に投稿したり、結局できなかったり、これはいつもですが感想の返信が遅かったり。

他に私個人の理由を挙げるとするならば。一つ、仕事がもっと忙しくなりそう。二つ、公募用に書きたいものもある。三つ、減らした『書く時間』を『読む時間』に向けて勉強したい。と、こんなところです。

元より『書く練習』として始めたカカの天下。丸々一年以上続け、見えてきたものもあります。それらを一層高めるために、時間の余裕を作りたいのです……毎日楽しみにしてくださる方、感想をくださる方には申し訳ありません、しかしその分、二日に一度の更新だけは疎かにしないよう頑張りますので、どうかご了承いただきたい。

「それじゃイベントとか書きにくくない？　四話分とか書いてるうちに時期過ぎちゃうよ」

ご心配なく、私の余裕にもよりますが、『基本は二日に一度』というだけで、イベントのときには一時的に毎日更新に戻るつもりです。

「ほほう、それじゃ誕生日の話とかも」

はい、当日から余りにも離れた日に完結して『おめでとうとか言いにくい』という状況にはしないつもりです。

作者としては読者様方にこれからもカカたちの様子を楽しんでもらえるよう努力するつもりですので、生暖かい目で見ていただけたら幸いです。

「だって。ま、我慢してね？」

「休む分、面白い話を書くってさ」

ぐ……プレッシャーかけやがって。

「はいはい、ヘタレな作者は流してコーナーのおさらい！

普通の質問受け付けます。ふつおたコーナー。

なんでも思いついたらどうぞ、自由枠コーナー。

どんな宣伝でも面白ければＯＫ！　ＣＭコーナー

ファンキーな脅迫状待ってます、脅迫状コーナー。

もしもな寸劇、見てみませんか？　もしもコーナー。

あなたの心に残ったカカ天セリフはなんですか？　なんでもいいので話数とセリフを明記して感想欄もしくはメッセージ欄から投票どうぞ。カカ天名セリフランキングコーナー。

以上です！」

「それではこの時間のお相手は、香加と！」

「留と！」

『毎日読んでくださってた皆さんのチョップをくらう作者でした！！』

なにその予言――え、ちょ！？

『カカばい！！』

ぼぐっ！！

この番組は、新年の皆様と、作者の頭部陥没の音でお送りしました。

……お、ま、け♪

本日のもしも話、さほどカオスじゃなかったような気がしませんか？

そうです、昨日「カオスになる」と言った私が自信を持って紹介するもしも話を、まだ発表していないからです。

そのもしも話は、『ＤＡＮＹ』さんの『もし、カカ天がルシカｓ趣味全開だとしたら』と、さらに！　『龍急』さんや『ＡＢ天』さんにいただいた『もしもカカ天キャラが魔法使いになったら』や『魔法少女になったら』を組み合わせたスペシャル話！　わかる人にしかわからないトンデモ話！　これを最後に発表……しようと、思ったのですが。

なになに？　感想欄に面白いことが書いてあるぞ？

『～脅迫状～

私は、とても悲しい……

僕のリクエスト「ルシカの趣味全開の話を書いてほしい」と書いてもう二ヶ月ぐらい経ったように感じられる……

そしてさらにもう一回お願いをしたのだ。

しかし、そのリクエストが叶えられるときはこのままでは来そうにない！

よって僕は脅迫状を発令する！

ルシカの趣味全開の話を三月いっぱいまでに書くのだ。

さもないと、僕の「二次元（萌え）に関する考察」が一週間に渡って無駄な長文として、感想欄に乗せられ続けるだろう！

ついでに、先ほど封印した僕のオタク史（５０行以上）も解禁される！

この微妙なリアリティーにビビって早く書き出すがよい！！』

あれあれあれー？　なんだか前にもこんなのを旅行な人からもらったような。

それを覚えてる人は、これから私が何を言うか、想像つきますよね♪

実はもう書いちゃったんだけど、カオス話を発表するの、やーめた。

読みたかったらその考察とオタク史、全部書きなさい。書き終わったら丸一話分使って載せてあげよう。

この脅迫返し、旅行な人は乗った。頑張った。

さぁ、君はどうする？

## カカの天下７０１「第二十四．五回、カカラジ！」（後書き）

そんなわけで、次の話は明後日となります。とても心苦しいのですが……またこれからもよろしく読んでいただけると嬉しいです。

さて！　名セリフランキング投票開始です。〆切りは次回のカカ天まで！　二日に一度にするからには感想の返信もきちんとしたいと思います。明日あたりどばっと返すつもりなので、どうぞ遠慮なくお書きください！

ではでは……脅迫返しの反応を期待しつつ、カカばい！

# カカの天下７０２「三百メートル」

こんにちは、カカでーす。

ただいま学校のお昼休み時間。教室での話題はもっぱらコレ。

「ボンッ！　キュッ！　ボン！！」

や、違った。コレ一部の男子だ。

「ねぇ、あんた誰にあげるのよ」

「あたし？　そうね、教頭かな」

「ヤダァ、ライバルじゃん？　負けないわよ」

「あたし、テンカ先生にあげる……手作りで……」

「わ、メッセージとか入れるの？」

「う、うん」

「なんてなんて？」

「えとね、『私は前の席なんですけど先生の声が大きくてうるさいです』って」

「ケンカ売ってんじゃん」

何の話題か、気が付いた？　そう、バレンタインデーの話だよ！　あと二週間もあるのにねぇ。でも恋する乙女にとっては一大イベント、渡す相手のために今から準備するのは当然のこと、なのかなぁ。

「私があげる相手は……サエちゃんでしょ、サユカンでしょ、おまけのトメ兄でしょ。お姉にもあげないとスネるだろうし、お母さんにはいつもどおり郵送するとして」

「カカ君！」

「なにさカゼダ」

「タケダだ！　風邪はおかげ様で治ったのだ！」

そか。あんなんで本当に治るとは思わなかった。今度トメ兄が風邪ひいたときに使おう。

「で、何の用よ」

「む！　そ、それはだな、その……ほら、もうすぐバレンタインじゃないか？」

「違うよ」

「嘘！？」

「嘘」

あ、コケた。こんくらいでガクッとくるとは……何を必死になっ

てるのかねこの子は。

「それで？」

「そ、そのな。バレンタインなんだが、チョコを」

「くれるの？」

「やるわけないだろう！　バレンタインとは本来――」

「なんだ、くれないのか。ちぇ」

「……やる！！」

やた♪

「こほん、その代わりと言ってはなんだが、ホワイトデーは期待してもいいのだろうな？」

「は？　ホワイトデーは男がくれるもんでしょ普通。だからまたちょうだい」

「待て。それを言うならバレンタインデーは女がくれるものだろう」

「そんな決まりはない」

「えええええ！」

傍若無人？　お姉よりマシだよ。どんぐりの背比べ？　うっさい。

「それはあんまりだろう！　それでは単に、俺が君へ貢いでいるだけではないか！」

「嫌なら別にいいよ」

「微塵も嫌ではない！」

そうなのかー。変なやつ。

「しかし！　しかしだな！　こういうイベントというものは古来からの形式に則ってやるべできであって――」

「わかったわかった。じゃ、くれたもんに見合った変なものあげるよ」

「へ、変なもの？」

「うん」

「え、っと……普通はお菓子とかじゃないのか？」

「私を誰だと思っている」

「……そうでした」

普通なんてツマラナーイ。

「ま、まぁいい！　期待しているがいい！　すごいチョコを用意してやるからな！」

「ん、じゃあすごい変なものを期待しててね」

「おう！！」

「三百メートル級のを期待しててね」

「おう！！　……おう？」

んーむ、これはこれで楽しいかも。タケダと話すのもたまにはいいかもね。

――楽しそう（傍から見れば結構）な二人を、じーっと見つめる視線があった。

「どうしてんです、かのちゃん」

「いっちゃん……あれ」

「あら？　あらあら？　カカさんとタケダさんが話しているなんて珍しい。いつもはカカさん、タケダさんのことなんか道に落ちてる小石扱い、いえ『ちょっとでっかい石』扱いして通行の邪魔っぽく見てたはずでしたのに」

「なんかね、その、チョコが、どう、とか言ってた」

「カカさんが、タケダさんにチョコを？」

「それはない」

「同感ですわ。じゃあ、なぜ？」

「多分……あの、サユカちゃん、かも」

「ああ！　そういえば、かのちゃん的に最近怪しいのでしたね」

「うん、その、サユカちゃんも恥ずかしがりやだから」

「さすがは町内一の恥ずかしがりや、お仲間がわかるのですね」

「ご、ご町内で一番……？　じゃ、じゃあ何かちょうだい」

「……なぜ？」

「一番、だし。一等賞……」

変な沈黙。

「ふ、ふふふ、かのちゃんの冗談にはまだまだ付いていけませんね、精進します」

「うぅ……町内ぃ」

「はいはい、別に町内が悪いわけじゃないでしょう。とにかくライバルがいるならこちらも負けていられません。こちらの想いの方が強い！　とハッキリわかるような立派な」

「カレーを作る」

「そうそう、立派なカレーをってカレー！？」

「え、うん。チョコもカレーも同じようなものでしょ？」

「ど、どこがでしょう」

「市販の板チョコと市販のカレールー、そっくり」

「い、言われてみればそうですけどぉ」

「カレーにチョコを入れたらまろやかになるよ。だからチョコもカレーの仲間」

「でもチョコは甘いんですよ？」

「カレーにも甘口あるもん」

「で、でもそこまで見た目がそっくりなわけでは」

「三百メートル先に並べられたカレーとホットチョコレート、どっちがどっちか見分けつく？」

「……つかないと思います」

「だったらチョコはカレーの仲間」

「うぅ、反論したいけどなぜかできないです……かのちゃんたらカレーを語るときだけは口が回りますし……」

「よし、がんばろ」

「そうですね、この際想いが伝わればいいんです、やりましょう！」

――そして、そんな学校から三百メートル離れた病院の、とある病室でも。

「クララ情報です！　もうすぐ街はチョコばっかになるです！」

「チョコ……えへへ、チョコ、チョコです」

「おお、タマもチョコ好きですか！？」

「チョコです！」

「好きなのか嫌いなのかわからない返事です！！」

「チョコです！」

「もういいです、クララもはしゃぐです！　チョコです！」

「チョコです！」

そんなはしゃぐ二人の子供を見つめる、優しい目。

「ああ、そうでしたね……もうバレンタインです、か」

ブロンドの髪をかきあげる彼女はベッドから半身を起こした状態のまま、憂いを帯びた視線で窓の外を見下ろした。

「どうしたんですか！　おねーさん！」

「チョコです！」

「おねーさんもやりましょう！　チョコです！」

「ワタシも？　ふふ……はいはい、チョコです」

「チョコです！」

「チョコです！」

「クララです！」

「タマです！」

「ジジイです！！」

ノリで始まった自己紹介に、いなかったはずの四人目のしゃがれた声が続いた。

「あら、サワサカのおじいさん。いつの間に」

「ジジイも一緒に叫ぶです！」

「叫ぶのです！」

「よしきた」

せーの、

『ジジイです！』

「ねぇ、あなたたち……全員ジジイなの？」

どこもかしこも、バレンタインを楽しみにしています。

そう。どこも、かしこも。

## カカの天下７０２「三百メートル」（後書き）

あと二週間でバレンタインですね。

今年はそこまでドタバタはしない様子……でもちょこちょこと動きがありそうな予感。チョコだけに。

ええすいませんすいません出来心ですオヤジギャグですホントごめんなさい。三百メートル級に反省します。

# カカの天下703「や　お　じ」

こんにちは、トメです。先日はお見苦しいところをお見せして申し訳ありませんでした。

「――てな感じで、皆バレンタインのことばっか話すの」

「へぇ、カカたちもか？」

「私はそうでもないんだけどね、サエちゃんがサユカンをからかって――」

時刻は夕食どき。しかし今日は自宅ではなく、新しく近所にできたというお店に向かってカカと徒歩で移動中。そして雑談中なのです。

「もちろんトメお兄さんにあげるんでしょー？　って聞いたら、サユカンたら、あたぼーよ！　って漢らしく答えてね」

「そういう話を本人の前でするなよなぁ……嬉しいけどさぁ」

「そしたらね、サエちゃんが、今年こそは自分にリボン巻いて『私を食べて♪』って言うんでしょー、って言ってね」

「こそってなんだ、こそって」

「そしたらそしたらサユカンがね、いや食べられたら死ぬじゃないの、なんてツマラナイ反応してね」

「や、あえてもっともなことを言うその返しはなかなか」

「サユカンにも困ったもんだ。別に目玉かじるわけじゃないのにね」

「なんでピンポイントで痛そうなとこ例えに出すかな」

「本当に食べるわけじゃなくて、社会的に食うってことだよね？」

「おまえ実は全然わかってないだろ」

「え、サエちゃんだし、てっきり」

「それはどっちかと言うとサカイさんな感じだな」

将来サエちゃんもそうなる、と考えたら恐ろしいが。

と、そんなことを話しているうちに辿りついた。今週オープンしたばかりの、おじや専門という珍しいお店。チラシで見つけたその店名は、ストレートにそのまま『おじや』だ。ほら、入り口の頭上にでっかい三文字の看板が――

「……ありがちなギャグだけどさ」

「……『おやじ』だね」

そう、チラシには確かに『おじや』と書かれていたのに、そこにあった看板は確かに『おやじ』だった。

ふと下を見ると、貼り紙が見えた。

『店名に疑問を抱かれた皆様へ――書き間違っちゃった、てへ♪
おやじ店長より』

「これ、きっと単に『おやじ』って店の店長って言いたいんだろうけど」

「おやじ店長。ギャグにしか見えないね」

ともかく入ってみよう、とカカを促す。

内装はどこにでもあるファミレス風味。こざっぱりとした店内――しかし、『どうせ誤表記したのなら』と百円均一店でヤケクソまじりに買ったようなオヤジ人形が全テーブル、他各所に置かれているのが異様といえば異様だった。

「いらっしゃ――あ、トメさんじゃないの。やっほ」

「サラさん!?」

「や、待ってトメ兄。このお店の名前をよく考えてみて」

そうか、ここで働いているとなると、

「おやじさん!?」

「あははー想像してましたけどソレダケハヤメテクダサイ!!」

「よし、ではこのカカ様がこう命名してやろう。おやっさん!!」

「ううう、カカちゃん、そういうの慣れてるとはいえ傷つくときは

傷つくんですよ？」

「泣いてないで仕事しなよ店員さん」

「鬼ですか！？」

セリフだけなら本気で鬼だが、カカもサラさんも半分笑いながらやっている。強くなったもんだ。

「それで、なんでここで働いてるのさ。おやっさん」

「だからそれはやめるのじゃ！」

結構ノリノリじゃん。

「実はここの店長と私、知り合いなんですよ。開店したはいいけど経験者が少ないからって、一時的なヘルプで呼ばれたんです。キリヤさんも似たような理由であそこにいますよ」

へぇ、仕事を転々としてたりフリーターだったりすると、そういうのもあるんだねぇ……サラさんが指差す先を見ると、確かにそこにはキリヤが。見るからにもっさりとした付け髭を鼻下に装着していた。こちらの視線に気づき、ニヤリと笑って見せる。なんで自慢げなんだ。

「ささ、こちらの席へどうぞ」

「おやじ、かたじけない」

「カカちゃん！！」

ともあれ案内された席へと座り、メニューを手に取る。

「うわぁ……」

そこには様々なおじやが載っていた。

またしてもヤケクソに誤表記をそのまま使ってやろうとばかりに、全てのおじやが『おやじ』として書かれていた。

「きのこのおやじ……あの、有名な赤い帽子のおっさんが浮かぶんだけど」

「それよりも見ろよコレ。丁寧な説明書きなんだけど……『チーズたっぷり！　クリーミィなおやじです』って食べる気失せるし」

「チーズトマトソースのおやじ、なんて目も当てられないね」

口々にツッコんでいると、隣のテーブルにおじやが運ばれてきたのが目に入った。

それはおじやだった。問答無用で完全無欠に、ただのおじやだった。確かに美味しそうだが、『おやじ』の名が持つインパクトにふさわしいデキではなかった。

それが我慢ならなかったのか、カカは、

「シェフを呼べ！！」

なんか偉そうにこんなことを叫んだ！　僕は慌てて、

「馬鹿！　何を……ああ、ごめんなさい皆さん。今のは聞かなかったことに」

「店長です」

店長湧くのはやっ！！

「店長さん、これどういうこと」

カカは隣のテーブルを指差す。

「どう、とは？」

「おやじじゃないじゃん！！」

そりゃそうだ、というツッコミはしないでおくことにした。なんとなく店長さんがどう返答するか気になったから。

「そりゃそうだ」

うあ普通の返事だし。

「……よぅし、それは私への挑戦だね」

どこをどうしたらそうなるのかさっぱりわからない思考回路、さすがは我が妹君。

「いい！？　本当のきのこおやじっていうのは――そこの人みたいなことを言うんだ！！」

ビシッ！！　とカカが指差した先には（人を無闇に指差しちゃいけませんって後で注意しよう）、なんと！

「おお、カカの嬢ちゃんじゃねぇか」

たまたま店に来ていたらしいセイジのおっさん！？

「この人こそきのこおやじ。なぜなら！」

「俺は死ぬほどきのこが好きだ！」

あんたの好みなぞ知らんて。

「そしてこの人！」

さらに立ち上がったのはまたもやたまたま来ていたトウジのおっさん！

「この人こそ、えっとメニューメニュー……さっきあった、これだ！　お肉モリモリおやじ！」

「ふ、俺こそお肉、ぜい肉、筋肉、尻肉までモリモリな暑苦しいおやじよ」

確かに暑苦しい。

「そして最後！　この『皆大好きたまごおやじ』こそ！」

なんだ、今度は教頭でも出てくるのか。

「私だ！」

「おまえかよ！？　カカのどの辺がたまごおやじなんだよ！　たまごでも産むとか？」

「産むわけないじゃん何言ってんの」

「おまえなら根性で産むかと」

「そうじゃなくて、私は」

皆大好きたまごおやじ＝カカ。その理由とは！

「私は、基本的におやじは皆好きだ！」

「そっちかい！？　ん？」

シュバッ！

「じゃ、じゃあ俺は！」

「誰だお前」

「……」

シュバッ！　ああ、帰っちゃった……せっかく勇気を出して素顔を見せた本物のおやじ（親父とも書く）が！！

「さて、何か変なのもいたけど……」

僕から見れば全部変だ。

「最後に！　店長がおやじじゃないとはどういうことだ！！」

僕も疑問には思ったけどそこは勘弁してやれよ。

「どうだ、まいったか！！」

マイブームなのか、またまたビシッと店長に指を突きつけるカカ。

「まいりました」

「まいるの！？」

そして土下座までして敗北を認める店長なのであった……相変わらずワケのわからん街である。

――後日談。

近くにライバル店ができたやも？　と偵察に来ていたセイジ＆トウジのおやじ二人によってツッコまれた点を直し、カカに教わったおやじの真髄を習得した『おやじ』の店は、いまだに繁盛しているらしい。

曰く、ちゃんと『おやじ』っぽくなっているとか。

例えば店長も付け髭を始めたとか、そんな感じ。

近々、ぜひとも来店しなければなるまい。

それはそうと、気になる点が一つ。

「カカ、おまえ。おやじ好きだったのか」

「見る分には」

ああ……愉快なおやじが多いもんな、この辺り。

## カカの天下７０３「や　お　じ」（後書き）

サブタイトルは、『お』と『や』と『じ』の組み合わせこそこの話のコンセプト、ということを現しております。
なんか満足げなデキ。なぜか？　私がおやじ好きだからです。

さて、二日に一回更新になって少し経ちました。心に余裕ができたおかげか、カカ天もスムーズに書けます。ただ、感想返信のほうはかつてないほど溜まってまして……私事ですが、土日だった&新装開店の準備がありまして時間自体はなかったわけです、ハイ。
でも！　明日は休み！　きちんと全部返信する所存ですので覚悟してください！

というわけで懲りずに遠慮せずに感想ください（これが言いたかっただけ

# カカの天下７０４「有言実行節分」

トメです。

今日は節分の日、そしてサユカちゃんとお出かけの日です。かと言って特別何かをするわけではありません。先日、サユカちゃんを怒らせた埋め合わせとして色々と奢ることになったのですが、指定された日がたまたま節分の日に重なっただけのことです。

そう、特別なことは何もないはず。

なのに……

「こ、こんにちは、トメさんっ！」

「え、っと……」

我が家にいらっしゃったお客様を出迎えたまま、玄関に立ち尽くす。

わからない。なんでそんな格好をしているのかわからない。

節分だから？　いや待て、それなら鬼の格好をするはずだ。黄色と黒の縞々模様を使い、赤鬼やら青鬼やらアレンジした姿になるはずだ。それが……なんで白黒の、牛みたいな格好をしているんだろう。

「……モー」

とりあえず挨拶してみた。

「モーッ！！」

どうしよう、ズバッと元気よく手を上げて応えられてしまった。
ほんとどうしよう。

「トメさん、モーッ！」

「モー？」

「モーモー」

「モー……」

なるほど、カカたちの仕業か。え、いや会話したわけじゃないよ？　こんなことするやつらなんか決まってるし。

「しっかし毎度毎度、そんな服どっから持ってくるんだ？」

サユカちゃんが着ている牛衣装は、着ぐるみというよりは服に近い。オーバーオールの柔らかな白黒の布地はパジャマのようにだぶだぶで、ある一点さえ見なければとても可愛らしい格好だった。いつものポニーテールは頭の両端にお団子になって収まっていて、そこからにょきっと生えている小さな角も、これはこれで愛らしい。

「サカイさんが夜なべして作ってくれましたっ」

「あの人は……仕事しろよな」

「仕事もちゃんとしてるみたいですよ？　だからすんごく寝不足なんだそうです」

「褒めればいいのか貶せばいいのか呆れればいいのかわからん人だな相変わらず」

「さぁ、いきましょうトメさんっ」

「……牧場に？　それとも動物園か」

人気者になること請け合いだが、そこまでの道のりがキツイぞ。主に隣を歩くであろう僕が。

「大体さ、サユカちゃんは恥ずかしくないわけ？　そんな格好、いつもなら……」

顔を真っ赤にして半狂乱に「ぶもぉぉぉぉぉぉっ！！」と叫ぶサユカちゃんが目に浮かぶ。うん、いつもならそんな感じなはず。

「え、だって……トメさん、こういう格好、好きなんですよね？」

「どこの誰だそんな不届きな噂を吹き込んだやつは！！」

「トメさんさえ喜んでくれるなら、わたしはこのくらい、へっちゃらです！」

「へっちゃらないで！　頼むから！」

なんか変な言葉を創ってしまったが、ともかく！　天下の往来を牛少女と歩くわけにはいかない。なぜなら、なんか捕まりそうだか

ら！

「ったく……ほら、そこの二人！！」

「うきゅ？」

「うきゃー」

なぜか猿っぽい声を上げながら、僕が唐突に開いた靴箱の中からころんころんと出てきた二人。説明するまでもなくカカサエだ。

「ぬぅ……なぜ私たちがここに隠れているとバレた」

「絶対どこかで様子を見て楽しんでると思って周囲を探ってたら、物音が聞こえてな」

それにしてもこの狭い靴箱によく二人も納まってたもんだ。さすが女子小学生、コンパクトサイズである。

「バレてしまっては仕方がないー、さぁさぁサユカちゃん。さっき説明した通りにするのだー」

開き直ったサエちゃんは、サユカちゃんに何かを強要。ここにきてようやくサユカちゃんの頬に朱色が刺す。

「ほ、ほんとにやるのっ！？」

「当たり前だよー」

「そうしないと……ね？」

「わ、わかった」

僕を置いて何やら会議する三人娘……お？

「どしたのサユカちゃん」

なんか近づいてきて、身をかがめて、そして――さっき牛パジャマの説明で書いた『ある一点を見なければ』の部分を僕に向かって突き出してきた。

それすなわち、サユカちゃんの胸の位置にある、妙にリアルな牛の乳。

「搾ってくださいっ！　もしくは揉んでくださいっ」

「できるかぁぁぁぁぁ！！」

「し、死ぬほど恥ずかしいですけど、その、こ、こうすればトメさんが元気になるってカカすけが！」

「どこの変態だ僕は！？」

「うちの変態」

「即答せんでくれるかい妹！？」

もーめ、もーめ、しぼれーしぼれーと合唱する赤黒コンビ、うざすぎる。

「いいか？　僕は元気だ。だからそんなことしなくていいだろ？」

「そんなことは関係ないんですよー。これは出発の儀式ですから」

「さっきの『そうすれば元気になる』って説明どこいった！？」

「いいから搾るか揉むかしなよ。いつまで経っても出かけられないよ？」

「あのなぁ……そもそもこの格好のサユカちゃんを連れて出かけられるわけないだろ。他所の子供に恥ずかしい格好させて、それを連れ歩く普通の大人……逮捕されるぞ」

されなくても周りの皆様から犯罪者扱い間違いなしだ。わかってくれ！

「そっか、それもそうだよね」

「わかってくれたか？」

「うん、はいこれ」

「何、これ」

「着てくださいなー」

二分後。

僕も牛の格好をしていた。

「なんでおとなしく着てるんだ僕は！？」

「着たかったんでしょ」

ないないないない！

「これで二人とも牛スタイル。一緒に並んで歩いても違和感ないですねー」

片方が変な目で見られる↓両方変な目で見られる、になっただけじゃないか。

「さぁ二人しておっぱいを搾りあうがいい」

「もしくは揉み合うがいいー！」

「できるか！！」

「トメさん……わ、わたし、トメさんとならっ！」

ああ、純粋っぽい好意が痛い……あと色んな意味で心が痛い……

「仕方ないなー。じゃ、登場だよー！」

サエちゃんの号令を合図に、玄関からぬっと現れたのは！

「牛！　本物の！？」

「いざというときのために日本経済つれてきた」

「『いざ』ってどういう意味だったっけ……や、そんなことはどうでもいい。牛を普通に連れて歩くな！　連れて帰れ！」

「なんだとトメ兄！　牛に人権はないのか！？」

「ねぇよ牛なんだから！」

「日本経済だよ！？」

「名前的に人格すらねぇよ！」

「人でなし！」

「牛だって言ってんだろ！」

ギャーギャー兄妹で騒いでいた、その隙に……当の日本経済は、てとてととサユカちゃんに近づいて、

「え、なにっ！？　うわわわ！」

子牛だったころでも思い出したのか、サユカちゃんの乳（服についてる牛の乳）をくわえ、ぐいん！　と引っ張った。

その勢いでバランスを崩し、「おっとっとっ！」とケンケンするサユカちゃん。そのまま言い合ってる僕とカカの方へ倒れこんできて――

『うあああ！！』

三人そろって仲良く転倒。そして、どぴゅっと撒き散らされる白

い液体。

「うえ、何これ……白い、ぬるぬるしたものが……トメ兄のここからも」

「牛乳？　うあ、なにこの服の乳、搾ったら本当に牛乳出てくる！？」

芸が細かすぎるぞサカイさん……何の嫌がらせだ……そして、

「ふむふむー、おっぱいでイヤーン、牛乳でビッショリ、どことなくネッチョリ……作戦通りだねー。あ、ビリビリ忘れてた」

ビリビリと服を破けばいっかーなどと言いながら、僕らをパシャパシャとデジカメで撮りまくるサエちゃん……おい。

「サエちゃん、あのさ？」

「はいー？　そうですよ、今回の服はですねー、皆さんが白い液体まみれで濃厚に絡み合う姿を撮るためだけにお母さんに作ってもらったのですよー」

聞いてもいないのにベラベラ自供してくれる犯人。

「……なんのために？」

「カカちゃんがこの前言ってたんですよー。『たまには変わった節分がしたいな』って。だから考えてみましたー」

「節分……どこが？　鬼は？」

ちょん、とサエちゃんが指差したのは、僕とサユカちゃんの頭上にある小さな角。これで、鬼、だと？

「……豆は」

「あははー、いやですねー。おっぱいの先にあるじゃないですかー」

よし、サカイさんだな。サカイさんのせいに決まってる。甘やかしてばっかりいないできちんと教育しなさいと、保護者同士でじっくり話し合う必要がありそうだ。

「サエちゃん……私に似てきたよね」

「あははー。ついでに私の写真コレクションも増えて一石二鳥だよー」

「でも、なんで牛乳まみれに？」

「どうせ撮るならそうしなさいってお母さんが」

問題だ。とても問題だ。

こんなのが二人もいてたまるか。今から直談判しに行ってやる！

「あの……デート……」

## カカの天下７０４「有言実行節分」（後書き）

なんかエロい？
いいえ、それはあなたの心が汚れているからそう見えるのです。
澄んだ瞳で見てみなさい。
やっぱエロいわ。

というわけで、相も変わらず年齢に不相応なことをやってのける我らがサユカン、というかサエちゃんですが、今回ばかりは教育的指導が入ったご様子。そのあたりはまた今度。とりあえずサユカちゃんごめんな。

さて、昨日ようやく感想を全部返信しました。とりあえず一言…溜めるのいくない！！

あい、反省してこまめに返すことを心がけようと思います。

# カカの天下７０５「ぼすぼす」

こんにちは、カカです。

キーンコーンカーンコーンというチャイムと共に始まる授業は体育です。すでに体操着に着替えた私たちは、体育館で並んでいます。

「はぁー……」

「ねぇカカすけ。サエすけってば、まだ元気ないわよ」

「アレはダメ、コレはダメって結構しぼられたみたいだからね」

昨日サカイさん宅でこんなやりとりがあったらしい。

『――というわけで、サエちゃんのことをちゃんと教育してください、サカイさん！』

『あらあらー、何を言うんですかトメさん。可愛くてエロい、これはもう最高じゃないですかーうふふふふ』

『本当に最高か？』

『どういう意味ですかー？』

『そりゃサカイさんが近くで見る分には最高かもしれないさ。でも、そう思うのが自分だけだとでも？』

『そりゃーサエのあの可愛さなら、目にした全ての人がメロメロの

エロエロに――はっ！？』

『そう、現代においてそれはとてもアブナイ。ニュースをちゃんと見ていればわかるはず』

『わ、私ですら毎日サエを見るたびに監禁したくなるのに、もしどこぞの阿呆な犯罪者に可愛すぎるサエが見つかったら！　目をつけられる！！』

『そしてサエちゃんが、可愛いだけじゃなくてエロかったら？』

『日本だけじゃなく世界に狙われるー！？　いいえ、宇宙の銀河系犯罪者にまで狙われてしまうレベルにぃー！！　さらには異次元からサエのエロさを見るために魔王とかやってきちゃう！』

『そうなりたくなかったら』

『はい！　教育します！　幸いサエはよくわかってないみたいだからアレとコレとソレとオレのネタを禁止すれば間に合います！！』

『よくわかってない娘にどんだけエロネタ仕込んでたのか、とか『オレのネタ』ってのが気になるけど、まぁ、うん。がんばれ』

『はい！　近年稀に見るスパルタ方式で躾けてみせますー！！』

『お願いしますよ……ふぅ、これでよし。あれだけ必死なら間違いなくちゃんと教育してくれるだろう。いやぁ、キリヤと友達になってから僕の口車レベルも上がったなぁ』

そんなわけで、皆さんご存知サカイさんの膨大な愛は見事に反転、

とってもえぐいスパルタ教育となったらしく、甘え放題で大好きだったお母さんからソレを受けたサエちゃんは心身ともにヘロヘロなのであった。

「でも、何がそんなにエロかったのかしら？」

「よくわかんないけど、乳を揉むとかじゃない？」

「そっかー」

牛乳は……関係ないよね？　身体にいいし。カルシウムあるし。

「おし、てめぇら！　準備運動始めっぞ！」

前に出た学級委員長のイチョウさんの綺麗な動きに合わせて、皆仲良く柔軟運動。

それが終わったらテンカ先生の号令の下、各自でマットを敷く。マットは厚さ五センチの体操マット。運ぶときはちょっと重い、二回くらいでんぐり返りしたらはみ出してしまいそうな白いやつだ。

「おし！　最初は好きに遊んでいいぞ。ただしマットを使うこと！危ないことはすんなよ、怪我したらぶん殴るからな！」

痛い目を見た上、さらに殴られる……そんな理不尽な恐怖に戦き、私たち生徒は怪我をしないよう素直に気をつけるのであった。

「カカすけ、何する？」

「んー、危ないことするなって言われたそばからバク宙するわけに

もいかないしねぇ」

「サエすけは……あ」

意気消沈したサエちゃんは、体育館の隅っこに敷かれたマットで一人でんぐり返りをしていた。

小さく丸めた身体が器用にコロコロ回る。

コロコロ。マットからはみ出た。コロコロ。まだ回る。コロコロコロコロ……ゴン。壁にぶつかった。ポテ。推進力を失った体は横に倒れた。

「さ、サエちゃん？」

ぐでんと寝ていた体勢からむくりと半身を起こすサエちゃん。運動の邪魔にならないように後ろで一括りに縛った長い髪もめちゃくちゃ。蛇のマフラーみたいにサエちゃんの頭に絡みついている。

「……んしょ」

サエちゃんの身体は方向転換。壁と水平に向く。

そして徐に再びでんぐり返り、壁に沿ってコロコロと前へ前へ。

「だ、大丈夫かしらっ！？」

「頭が？」

「うん……うんっ！？　いやそうじゃなくて！」

「壁にぶつけた頭、心配じゃないの？　ゴンっていってたけど」

「あ、あー、そうね。それは心配ね、うん」

「でもなんだか楽しそうだし、大丈夫なんじゃないかな」

「楽しそう……かしら？」

私は見た。むくりと身を起こしたときにサエちゃんがニヤーっと笑ったのを。運動が苦手なサエちゃんも前回りだけは得意らしいし、人間車が気に入ったんだろう。や、人間タイヤか人間ボールかな、どっちかというと。あ、壁際を進んでいたコロコロサエちゃんが体育館の角にぶつかった。またコケた。起き上がった。直角に方向転換してまたコロコロと……やっぱ楽しいんだ。

「ま、元気が出たならいいわっ！　さぁカカすけ、わたしたちは何をするのっ！？」

「どうしよっかな。私はもう大体全部できるし……よし」

ないなら作る。考える。それが私、笠原カカ。

マットの端を両手でむんずと掴む。私の身長だと半分も持ち上がらず、残りは体育館の冷たい床と仲良くしたまま。別にいいやとそのままズリズリ引き摺って移動……そして。

「あん？」

「わっしょーい！！」

「ぐほぁ！！」

気合一発、私が振り回したマットは斧もかくやという重量感と勢いをもってテンカ先生をなぎ払った！

マットが辺りを埋め尽くしていたのが幸いした。吹っ飛ばされたテンカ先生はちょうど柔らかな生地へと着地したのだ。荒々しく、だけど。

「……なにしやがる、カカ！？」

「なにって、“マットを使って”運動しただけですけど」

「ほほぅ……」

断っておくけど、別にテンカ先生に恨みがあるわけじゃない。

子供という生き物は、特に理由もなく暴力的にじゃれたくなることがあるのだ。

「オレを挑発してんのか？　残念だったな、オレはこう見えて大人」

構わずえい――ぼすっ！！

「……ガキのやることにいちいち目くじら立ててたらな」

マットをぶんぶん、ばすん！　ばすん！！

「ぐっ……教師なんざぐお……務まんねぇんぐっ……」

ぼすばすべすばすぼすべぼんはぼんばぼん！！

「てんめぇ本当の意味でマットに沈めてやらぁぁぁぁぁぁ！！」

あははは、怒ったー！

「オラァ！　大人の腕力見せたらぁ！！」

「なにおー！　こっちも日ごろの筋トレ成果を見ろー！！」

テンカ先生も手近なマットを引っつかみ、豪快に振り回す！　それを黙って見ている私じゃない。こちらも得物を握り直し、テンカ先生の攻撃を真正面から受ける！

マット同士が激突。力は拮抗したのか、互いのマットはまるで剣を合わせたかのように跳ね返る。そう、私もテンカ先生もマットを文字通り剣のように使っているのだ。平たい部分ではなく、側面。厚さ五センチの刃で敵を討つ！

「おっらぁぁぁぁ！」

「てぃやあああ！」

武器にしてはマットというものは大きすぎるため、五センチの刃を活かすにはなるべく床と水平に振り回すしかない。よって互いに横の斬撃、両者の武器はすれ違うことなく激突を繰り返す。

とはいえ派手な音は鳴らない、いくら勢いよく振り回しても所詮はマット、聞こえる衝突音は鈍いものだけだ。しかしビリビリ腕に

伝わるこの刺激、この重み――燃える！！

「はぁ、はぁ、はぁ……」

「先生隙ありぃ！！」

「ぬぁ！　はぁ……こんのガキ、なんつう体力してやがる！」

「伊達に鍛えてないんだよーだ！　てい！」

「こ……っのぉ！！」

これで終わりかと思ったのに、私のマットはあっさり弾かれた。
予想外の反撃にマットを手放しそうになって焦る！

「うわぉあ！？　て、テンカ先生だって軽々マット振り回してんじゃん！　鍛えてんの！？」

「んなわけあるか！　オレの場合は単なる気合だ！」

「気合ってすごいね！」

「まぁな！！」

いつの間にかクラスメイトがやんややんやいいぞーやれやれ的な視線で私たちを見ていた。ふふ……ここらで決着をつけるか、もう少し長引かせて皆を楽しませるか……

「君たち、何をしているのかね！」

……第三の選択肢かな、こりゃ。

「きょ、教頭！？」

あちゃー、まずった。そんな顔をするテンカ先生。

「騒がしいから来てみれば……テンカ君、これはどういうことだ？私の記憶が確かなら、体育の授業にこのような種目はなかったはずだが」

「記憶が確かじゃないんじゃねーの？」

「そんなはずはない」

なら言うなよ。

「あーっと、そう！　これはオレが考えた新しい体育の種目なんですよ！」

「ほほう。なんという種目だね？」

「マット相撲だ」

どこに相撲あったっけ？

「ふむ、それによって得られるものは？」

「筋力、体力、破壊力だ！」

「ならよし」

いいの！？

「特に破壊力というのが気に入った」

ああ……デストロイヤー……

「では続けてくれたまえ」

「おう、さんきゅー！！」

遠ざかっていく教頭へフランクに手を振りながら、テンカ先生はこっそり胸を撫でおろした。

「ふぃー、よかった。教頭がバカで」

「そんなこと言っていいの？」

「聞こえてなきゃいいんだよ。さ、続きやるか」

「おうよー。決着つけよ」

私とテンカ先生がまたもやマットを握り直した、そのとき。

「ぶほぉ！？」

「んが！？」

側頭部に重い衝撃。それがブーメランのようにぶん投げられたマットによるものだとわかったのは、倒れてしばらくしてからのこと

だった。

そして間もなく、それを投げた人物も判明する。

「ふむ」

私とテンカ先生を体育館の入り口から見事狙撃したのは、帰ったかと思われたデストロイヤー教頭！

「な、なにを……！」

「私も教師だ。テンカ君の新しい教え方に興味があってね、実践してみたのだが」

テンカ先生の顔が歪む。マット狙撃で顔が潰れたわけじゃない、もっと『あちゃー』と思っているのだ。教頭がそれほど――や、微塵もバカじゃなかったから。全部わかっていたから。

「テンカ君、なにか言いたいことでも？」

「すんませんでした」

「よろしい」

やっぱ教頭強いなぁ。今度ケンカを売ってみよう。もちろんこういう健全な形で。

「まったくもう、何やってるんだか……あ、サエすけ。回り終わっ

たの？」

「う……う……うぇぇぇー」

「ちょっ！　大丈夫！？」

「ぎもぢわるぃぃぃぃー……」

「もー、コロコロコロコロ回りすぎるからよっ！　ほら、保健室いくわよ。肩貸してあげるから……背中さすろうか？」

「うぇぇー、おぇぇー」

「ちょっと！　吐かないでよっ！？」

「はかない？　なにをー？　もしかしてパン――おぇぇぇ」

「はいはいっ！　ボケるのは元気になってからっ！」

「うぅー……やっぱこういうの、もうやめる……ごめんなさいお母さん……おえぇぇ」

## カカの天下７０５「ぼすぼす」（後書き）

突然私的なこと言いますが…

今日から三日間、東京へ旅行に行ってきます。カカ天はちゃんと更新しますが、パソコン触れるか不明なので感想返信がすぐにできないかもしれませんがご了承ください（主にＤさん宛て

# カカの天下７０６「カカ天クエスト　ＥＰ１２」（前書き）

注意：このお話はカカ達がゲームのキャラになりきりながらＲＰＧを進める話です。話の内容はゲームの中ですが、『もしもカカ達が異世界にいたら』みたいな感覚でお楽しみください。

ステータス

カカ　　ボケ勇者　　レベル１　へん

サエ　　悪の魔法使い　　レベル１　はらぐろ

サユカ　　手の平の踊り子　　レベル１　さびしんぼう　エロレベル３

トメ　　ツッコミ　　レベル１　つっこみ　ドリル

ケロリン　　スライム　　レベル２５　おっさんくさい　？？？

# カカの天下706「カカ天クエスト　EP12」

相も変わらずレベル1のまま、無事に『とにかく水』を手に入れた勇者一行。慎重に慎重に魔物から逃げまくりながら、なんとか村まで戻ってきました。

「や、疲れたね」

「うん、疲れたねー。歩くのに」

「ほんと、歩くのに疲れたわっ！」

カカたちのHPは減っていない！

「さて、早速ケロリンを生き返らせに行きましょっ！」

「教会は……」

「カカちゃん、そっちじゃなくて、こっちー」

「ああ、リサイクルショップだったっけ」

少女移動中……

「いらっしゃいませー」

「あ、どうも。持ってきたよ、『多分忘れられてる洗剤』と『水ならなんでもいいんでしょ』ってやつ」

「だんだんアイテム名が投げやりになったきたわね……」

「でも否定できないよー」

「……はい、確かに。ご苦労様です。それでは作業に移らせていただきますので、取りにいきましょう」

「は？　取りに？」

「はい、こちらへどうぞ」

少女移動中……あ、この店員さん少女じゃない。

「誰がおばさんだってぇ！？」

怒れるおばさんのこうげきが異次元を超える！！

ＫＹシステムに３５４３のダメージ。

システムの処置により、『おばさん』のグラフィックが『お姉さん』を通りこして『少女』に変化した。

「ふう、それでは行きましょう」

「おばさん、怖い……」

「しっ！　殺られるわよカカすけ」

今度こそ少女移動中……

「さ、ここです」

「ゴミ捨て場じゃないの！？」

「だって臭いんですもの」

「あなた鼻がないんじゃなかったっけー？」

「だって汚いんですもの」

死んだスライムは腐敗するだけの産業廃棄物に過ぎない。ゴミ捨て場へ置きたくなるのも無理からぬことだろう。

「えっと……あったあった」

キタナイモノの山の一角から店員少女はカンオケをちゃんと掘り当てた。

「こんなところに置いといて大丈夫だったの？」

「はい、この世界には『ゴミ収集車』なんかありませんから。持ってかれる心配なんかありませんよ」

よくよく見れば、ゴミ捨て場は狭くない。ゴミ山と呼んでも過言ではないくらい大量のガラクタが延々と連なっているのだ。ちなみに鉈とかは落ちていない。

「なんだか魔物が出てこないのが不思議なくらい物々しい場所だねー」

KYシステムが作動し、ゴミ山をダンジョン認定に――

「しなくていい！！」

――しなかった。ちなみに今のは店員少女の声である。NPC怖い。

「さ、戻りましょうか……あら、このカンオケ、こんなに重たかったかしら」

少女＋生ゴミ移動中……

「はい、それではこれからスライムのリサイクルを開始します」

店員少女は身も蓋もない呪文を唱えた。

ケロリンが生き返った！

「ケロリン！　久しぶ……り……？」

「無事に生き返ったわね――無事っ！？」

「なんかー……」

三人は唖然としている。

「ふぅ、久々に吸う娑婆の空気はうめぇぜ。おう？　どうしたてめーら。俺様に会えて嬉しくねーのか」

「嬉しい、けどさ」

「ケロリン……なんか」

「黒いよー？」

そう、ケロリンは変色していた。

とあるＲＰＧによくあるスライムの青色とは違い、黒――いや、黒っぽい、けど別の濁った色も所々に混じっているような……言ってみればとてもキタナイ色をしていた。

「これは一体」

カカが疑問を口にしようとした、そのとき！

「大変じゃー！！　魔物が攻めてきたのじゃー！」

「なんですって！？　ここは勇者の出番ね！」「そーだそーだ働け勇者！」「俺たちからぶん取った分だけでも働けぇ！！」「むしろ死んで、お詫びにうちから取ってったもん返せぇ！！」「てか、なんか臭くね？」と、いつかのような展開になってきた。

「なんていいタイミング！　さすがはＲＰＧだね」

お褒めに預かり光栄です。

「ここはやっぱりケロリンの出番でしょー」

「さぁ、久々に復活した君の力を見せてちょうだいっ！」

「ったく、相変わらず他力本願なやつらだぜ……ま、俺様としても病み上がりの準備運動になるからいいけどな！」

一行は外へ出た。

すぐさま走ってたどり着いたのは村の入り口。向かってくるは魔物の群れ。

「よし、行けケロリン！」

「おうよ！！」

ケロリンは激しい炎を吐き出した！！

――いや、違う。

激しいゴミを吐き出した！！

魔物Ａへと金タライが３個ふりそそぐ。１７８のダメージ！　魔物Ａを倒した。

魔物Ｂへと腐った冷蔵庫がふりそそぐ。２２５のダメージ！　魔物Ｂを倒した。

魔物Ｃへと生ゴミがふりそそぐ。精神的に２１０のダメージ！　魔物Ｃを倒した。

魔物Ｄ～Ｚへと『混ぜるな危険』印のゴミが一斉にふりそそいで全部混ざった。なんかもう全部死んだ。

「な、なにこの威力……！」

「そもそもなんなのよこの技っ！」

「あ！　カカちゃん、サユカちゃん、これを見てー！！」

ステータス表。

ケロリン　レベル３０。

「３０!?　なんで、どうして！　ただ死んでただけのはずなのに」

「いつの間にレベルアップをっ！」

「……そうかー、わかったかもしれない」

「どういうこと？　サエちゃん」

「スライムって、産業廃棄物なんだよね？　産業廃棄物って、とどのつまるところゴミだよねー。死んだスライムは特に。そんなゴミと化したケロリンが今まで安置されていた場所は？」

「ご、ゴミ捨て場……」

「そう、ケロリンはゴミ捨て場というキタナイ場所に放置されることによって、様々な汚物を吸収して、よりゴミとして熟成され、成長したんだよー！　ゴミとして！」

「そうか！　だからゴミレベルが上がって、より一層強いゴミになったのか！」

「というか危険なゴミになった感じよねっ！」

「おい、てめーら。そんなに褒めるなよ」

改めて強力な味方を得て、盛り上がる一行！

「さぁ、次の町を目指すわよっ！」

「魔物なんか怖くないね」

「いざ、新しい場所へー！」

意気揚々と出発しようとした、そのとき！

一行の前に新たな敵が立ち塞がる！

「勇者様……」

村長があらわれた！

村長のこうげき！？

妙な臭いが辺りを包み込む……

「くさっ！！　うぇ、何この臭い！」

「村長さんから匂ってくるのっ！？」

「村長……もう歳だし、半分くらい身体が死んで腐ってるんじゃー」

「違うわ！！　あれの臭いじゃ！！」

村長が指差す先、そこには――先ほどケロリンが吐き出した大量のゴミ、汚物の山があった。異臭はそこが発生源だったのだ。

「このままでは、村が異臭で滅びてしまう……なんとかしてください勇者様！」

「え……っと……」

「ところで、この臭いを消すには『消臭剤』というアイテムが必要なのじゃが」

「また探せっての！？」

「いいかげん次の街に行かせてよっ！！」

「ここもう飽きたー」

「ちっ、俺様のせいだってのか……？」

問題解決かと思えば新たなトラブル！？　これもＲＰＧっぽいけど同じ場所にずっといると飽きるから、さっさと次のとこへ行ってほしい……次回、『なんだかんだで新天地！？　サユカちゃんイェイ』をお楽しみに！

## カカの天下７０６「カカ天クエスト　ＥＰ１２」（後書き）

気づいた人はいたでしょうか。ケロリンが死んでから徐々に、前書きに書かれていたレベルが上がっていたことに。私の大好きな小細工です。

さて。今も東京、携帯で更新しています。感想まで携帯で返信するとなると時間が足りないので保留してますが……読みました、ええ。なんかもう「なんだコレ」としか言いようがないカオスっぷり。普通の感想は普通にめっちゃ嬉しいけど、一部！　帰ってからどう返信すればいいのかカナリ悩みどころです。

ま、まぁ帰るのは明日だし……それまでは忘れとこ、うん。

# カカの天下707「だるまなサエちゃん」

こんにちは、カカです。

給食も終わってお昼休み、定番の三人で集まってるんですけど……

「ねね、サエちゃん今度のバレンタインだけどさ」

「んー」

「どんな賑やかなことしよっか！」

「やだー」

「またカカすけは変なこと考えてるんでしょっ！　でも、まぁ……楽しくなるならいいけどねっ」

「よくないー」

「さ、サエちゃん！　とりあえず一緒にチョコ作ろうか？」

「チョコは私と同じで黒いからヤー」

「ほ、ホワイトチョコならいいんじゃないっ！？」

「黒い私に、白いもの作る資格なんてないー」

ええと、見ての通りです。

サカイさんに怒られたのがいまだに効いているらしく、どうにもサエちゃんが元気を出してくれないのです。その証拠に私たちの話を聞きながらちまちまと机の上に広げているビーズは『おとなしくしているのー』という字を描いているのです。目に見えて不貞腐れています。

「ね、ねぇサエすけ。なんでそこまで落ち込んでるの？　サカイさんに言われたことを守りさえすれば、それで終わりな話じゃないの？」

「そーだけどー」

「なら何がダメなの？」

「あのねー、なんかねー、色々よくわかんなかったんだけどー、わかったことがあってねー」

その説明こそよくわかんないけど、私とサユカンは静かに聴く。

「なんかねー……私ってー……すごく黒くてー……すごくエロかったんだなーって思うとー……落ち込んじゃってー……」

な、なるほど。どうやらサカイさんのスパルタ教育は、サエちゃんが自覚していなかったことを見せ付けるものだったらしい。一体ナニをどう喋ったのか想像もつかないけど。

「き、気にすることないわよっ！　ほら、君らもよく言うじゃない、わたしのほうがよっぽどエロいって！」

「うん」

「うん」

「慰めようと思って言ったけど少しは否定してよっ！！」

だって事実だし。そんなことよりサエちゃんだ。

「よし、サユカン。ここはなんとしてでもサエちゃんに元気になってもらわないと」

「あのさ……わたしも今のダブル肯定でちょっと元気なくしてるんだけど……」

「だるまさんが笑った、をしよう」

「ねぇ話聞いてよっ！！」

聞いてもエロいもんはエロい。

「なにそれー？」

「サエちゃんはただ壁に向かって立って、だるまさんが転んだ、の要領で振り向いてくれるだけでいいから。それで、私たちも、だるまさんが転んだ、の要領で動きを止める。ただし口は動かしてもよし」

「まったくもうカカすけってばいっつもいっつも……他にルールは？」

「私たちが動いたら負け。サエちゃんは笑ったら負け。以上！」

「私なんか笑われるのがお似合いだよー……」

「まぁまぁ、そう言わずにやってみよ」

「動いたら負け、笑ったら負け……要は、だるまさんが転んだ、と、にらめっこをプラスしたようなもんねっ」

さすがサユカン。普通に頭いい。

「……わかったー」

動く気力もなくだるそーに壁まで移動するサエちゃん。私とサユカンは二人して適当な距離をとって並ぶ。ん、机が邪魔だな。ほいほい、避けて避けて。

教室のど真ん中で何やらおっぱじめた私たちに注目が集まる。でも知ったこっちゃないね。

サエちゃんはおとなしく壁側を向いて、

「だーるまさんが」

私の言ったとおりに始めた。って前フリなくいきなり!?　私はサユカンに目配せする。その意味はすぐに伝わらなくて、サユカンの顔に焦りが浮かぶ。ええい、仕方ない！

「わーらったー」

サエちゃんが振り向く。

私は両手を腰に当てて胸を張り、大威張りなポーズ！　サユカンも同じポーズ。そして口だけは動かしていいから、

『ふはははははははは！』

とりあえず笑った。

「……だーるま」

サエちゃんは笑わなかった。ええい、サユカンとの打ち合わせができてない。

「さんが」

ええと、とりあえずサユカンに身体を向ける。サユカンも身体を向けてくる。二人向かいあって、とりあえずダンスでもするかのように抱き合うポーズ！

「わーらっ」

ええと、次は！

……どうしよう。

「た」

サエちゃんが振り向く。私とサユカンは抱き合ったまま、近距離で目を合わせたまま、

『ふはは』

とりあえず笑った。何やってんだ私ら。

「……だーるま」

サエちゃんは笑わなかった。ていうかサエちゃんペース速い！

考える時間がないよぅ……！

「さんが」

ああもう、どうしよ――お？　サユカンが黒板に向かっていった。

黒板に指を差して、ああ先生のマネ？　なら、えっと！

「わらった」

サエちゃん振り向いた！

サユカンが言った！

「問題ですっ！　織田信長×武田信玄はっ！？」

「びーえる！！」

「正解っ！」

サユカンないすアドリブッ！　ちなみにびーえる、ＢＬってのは男の子同士が仲良くするものだったはず。サカイさんがよく口にしてた。

「……織田信長と武田信玄ってー、敵同士だったと思うんだけどー」

「じゃあ激しいびーえる！！」

「……だーるま」

あ、壁に向かった。くそぅ、やっぱりこんな適当なネタじゃ笑わないかぁ。でもこうなったら勢いのままに行くしかない！

「さんが、わーらった」

「問題っ！　わたし×トメさんはっ！？」

「ネタ」

「正解ー」

「なんでサエすけが答えるのっ！？」

「だーるまさんが」

「ああもうっ！　今度はカカすけが先生役やりなさいよっ！」

「わかった、交代ね」

とは言っても何も考えてない！

「わーらった」

「先生っ！　今日は何の授業をするんですかっ？」

もう適当に答える！

「調理実習です！」

「何を作るんですかっ！？」

「トマトです！」

「材料はっ！？」

「トマトです！」

「だーるまさんが、わーらった」

「先生！　次の授業はなんですかっ！？」

「トマトです！」

「だーるまさんが、わーらった」

「先生！　患者の容態はっ！？」

「トマトです！」

「キャー！！　赤いっ！！」

「だーるまさんが、わーらった」

「トマト先生っ！！」

「勝手に名づけるな！」

「だーるまさんが、わーらった」

「先生のお名前はっ！？」

「トマトです！」

「わたしがさっき言ったの合ってるじゃんっ！！」

「だーるまさんが、わーらった」

「サユカンのだるまトマトめ！！」

「はぁっ！？　カカすけ先生！　わたしはなんと返せばいいのですかっ！？」

「思いのままに！」

「やっぱ君は変だっ！！」

「……ぷ、く、ふ、ふふふ……」

そんなやりとりを続けているうちに、いつの間にかサエちゃんは笑っていた。何がおもしろかったのかはわからない。ただ必死になっていた私たちを見て、気の毒になって笑ってくれただけかもしれない。

それでもよかった。その笑顔が戻るなら。

「よかった、元気になったみたいだねサエちゃん」

「うん……ちょっと、元気になったかもー。ありがとう、二人とも」

「よしっ！　それじゃ勝負に負けたサエすけにお仕置きねっ！」

「え、そんなのあったっけー？」

あるよ。今決めた。多分サユカンも同じことを思ってるはず。

『もっと元気になれ！　以上！』

ほらね、同じだ。

さぁ、バレンタインに何をするか話し合おう。

笑って元気になっただるま……じゃなくて、サエちゃんさえいれば、きっと面白い計画が浮かぶよね！！

## カカの天下７０７「だるまなサエちゃん」（後書き）

だるまの着ぐるみ姿なサエちゃんを想像した人、申し訳ありません。なんかイメージするとめっちゃ可愛いんですが、そうじゃなくて本当すいません……今度書こかな。

さて、東京から無事に帰ってまいりました。もちっとしたらちゃんと感想返信しますので、少々お待ちを笑

# カカの天下７０８「オリジナリティあふれる元気の素」

こんにちは、クララです！

もうすぐ春がやってきます。その事実にうきうきなのですが、その前に一つ、見逃せないイベントがあります！

それはバレンタインデイ！　別にクララがチョコを誰かにあげるわけではありません。だってお金ないですし。そう、クララの話ではないのです。注目すべきは最近タマと一緒に通っているタケダ医院の病室にいる、あの女の人。バレンタインという単語を聞いて憂鬱な顔をしていたあのおねーさんに、どうか元気を出してもらいたいのです！

もう一人、元気を出してほしいお姉ちゃんもいましたけど、それは他の友達さんたちがうまくやってくれたようですし。クララにはクララにしかできないことをするのです！

「とはいうものの！　一番元気になりそうなことはもうしましたし、何をしてあげれば喜んでくれるでしょうか」

「あのおねーちゃんのことですか？」

「そうです！　タマ、何か名案はないですか？」

「めーあんですか？」

タケダ医院にタマと一緒に向かいながら、クララ相談です！

「そうですね……タマはどんなときに元気になりますか？」

「おべんじょ」

確かにお便所中は元気じゃないと色々困りますけど。

「他にありませんか？」

「おっきいおべんじょ」

「ほ、他には！？」

「すごくおっきいおべんじょ」

「お便所から離れましょう！」

「はなれたおべんじょ」

「そうじゃなくて！！」

まったくもう！　お便所で育ったとしか思えないほどのごり押しです！

「いいですかタマ。あのおねーさんは今、元気がないでしょう？」

「べんきがない？」

「元気です！　元気がなかったでしょう！？」

「うん」

どうしてでしょう。人あらざるものの力のおかげでしょうか。クララにはわかります。

そう、今……クララはツッコミになってます！！

「ええと、言い方を変えるです。タマ、元気がない人は、何が足りないから元気じゃないんだと思いますか？」

そうです、何かをプレゼントすればきっと元気になります！

足りないものをあげれば！

「タマ、元気じゃない人に足りないものは！？」

「げんき」

「そりゃそうです！！　他には？」

「すっごいげんき」

「さっきのお便所と似たような展開です！」

「げんきにおべんじょ！」

「二つを合わせろなんて誰も言ってないです！」

「すっごいげんきにおべんじょ！」

「すっごく気持ちよさそうです！！　ってそうじゃないです！」

「げんきなおべんじょ」

クララの脳裏に浮かびます、用を足された後の白い便器が「うまかったー！　げーっぷ！！」と元気に言う光景が。ちなみに声の出演はカツコです。

「もう、タマ！　お便所以外に元気になるものはないのですか？」

「んー」

タマは考えます。

そして答えました。

「ありません」

「クララしょっくです！！」

元気になるためにはお便所しかないなんて……すごく限定されたお便所人生です！

「じゃあ、お便所で元気になってもらうですか？　ど、どうしたらいいんでしょう。クララには想像もつきません！！」

「おならがでそう」

「会話しましょうよ！？」

なんだかトメが乗り移ったかのようなツッコミっぷりになってる

気がします！

「あれ、タマ。なにやってるですか？」

タマは大きく横に両腕を広げて、思い切り振りかぶって――パン！　と一回拍手しました。

「タマ？　何を」

ぷぅ。

「ごまかせました」

「誤魔化せてないです！！　拍手とおならのタイミングがズレすぎです！　音をちっとも消せてません！」

クララも子供だ子供だと言われてからかわれてきた気がしますが、甘かったです！　本物の子供には敵わないです！！

「そ、それでタマ？　あの女の人を元気にするにはどうしましょう！？」

「おべんじょ」

「だからお便所をどうするのですか！？」

「おべんじょにつきおとします」

「悪魔ですかあなたは！？」

なんということでしょう、便所の子ではなく悪魔の子でしたか！！　もしくは悪魔便所！　ハッ、ということはタマの親代わりであるカツコこそが悪魔便所！！　理解しました、今度カツコと出会ったときの第一声は「この悪魔便所め！」で決まりです。「いつか用を足して流してやります！」とか脅したら効果的かもしれません！

「とにかく却下です！　ほら、もうすぐタケダ医院に着きますよ、歩いて歩いて！」

「しゅばっとはいかないんですか？」

「今はそれはできないのです。ほらほら、歩く歩くです！」

こうなったら直接聞くしかないです！

きっと少しは元気になってくれていると思いますし、話を聞いてくれるはずです！！

でも、その日は会えませんでした。元気かどうかもわかりませんでした。

明後日、二月十四日なら、面会できるそうです。

## カカの天下７０８「オリジナリティあふれる元気の素」（後書き）

ちょっとお下品なお話となりましたが、ほら。子供しか出てませんし？　子供ってそんなもんですし？

純粋なお便所話ならいいですよね。

便所なのに純粋も何もないって？　いやいや便所は清潔で綺麗であるべきです、うん。ならば純粋でもあるのが道理でしょう。

わけわかんないですね。この子らの思考もよくわかんないので作者もたまにわけわかんなくなるのです。うん。

さてさて、お次はバレンタインのお話です。伏線があまりないように見えますねぇ。あっさりいくんですかねぇ。どうでしょうねぇ。ふふ。

# カカの天下709「甘くないチョコ　前編」

――二月十四日、とある病室。

「おねーさん！　こんにちはです、クララです！！」

「タマです！」

勢いよく扉を開ける二人。すると、

「失礼」

ちょうど診察が終わったところなのか、白衣の男が入れ替わりに病室を出る。すれ違いざまにその人がこの病院で最初に会った顔だとクララは気づく。だがさして気にしなかった。

「おお、二人ともよくきたのー」

「サワサキ！　いたのですか！」

「いきてたのですか！」

「ほっほっほ、タマちゃんはキツイのぉ」

和やかに会話する三人とは反対に、無言の女性。

「……」

「……あれ？　おねーさん、どうしたですか？」

「みてみてください」

「そうです、見てください！　今日はバレンタインだから仕方なく普通にチョコ持ってきたんですよ！」

「おべんじょみてください」

「お便所じゃないです！　チョコ見てください！」

「わしも見て！」

「じじぃは黙ってるです！　おねーさん！　……おねーさん？　本当にどうしたんですか」

無言――いや、呆然としている女性は、ベッドの傍で立ち尽くしていた。

「……」

クララとタマがいるときは一度としてベッドから離れなかった彼女は、

「……ワタシ」

まるで信じられない事実を聞かされたかのような顔をしながら、

「……治った、の？」

今、確かに自分の足で立っていた。

――同時刻、別場所。

こんにちは、トメです。

今日はバレンタインデーというやつですね。僕も男、恥ずかしながら「チョコほしいなー」とか思ってるわけでして、妹とはいえ「チョコあげる」と言われれば嬉しいわけでして、その友達からももらえると聞けば相手がお子様でもやっぱり嬉しいわけでして。

「……はい」

「……あ、あげますー」

でも、なんか、神妙な顔して渡されたら戸惑うわけでして。

「あ、ありがと」

カカから。サエちゃんから。それぞれからチョコらしき包みを受け取る。そんな僕らがいるのは公園の片隅。人気のない場所へわざわざ呼び出されてのことだ、しかもなんかそれぞれの包みに手紙らしきものが付いていて……

「あーっと、これ、読んでいい？」

コクリ、とゆっくり頷く二人。だからなんでそんな重い雰囲気なんデスか？

「じゃ、じゃあ読む、ぞ？」

カカにもらった包みのリボンに挟んであった紙を開く。

それにはこう書かれていた。

『トメ兄。受け取ってくれてありがとう』

……だからなんでそんな丁寧なのかとツッコみたい。

『ほんと、いつもいつもありがとう。これはその感謝の気持ちです』

まぁ、悪い気は、しないけどさ。

『それで、ね。わざわざこんなこと書いたのには、理由があって』

わかってるさ。どうボケる気だ？

『兄妹なのに、こんなこと思うのは、間違ってると思うんだけど』

……あん？

『私、トメ兄のことが、好き。大好き』

……あぁん？

『サユカンのことを応援してて、嫌な気持ちになってる自分に気づいたの。本当はサユカンに渡したくなかった。トメ兄には、私だけのトメ兄でいてほしかったの』

……うぉい。

『これが、私の本当の気持ち。チョコと一緒に、受け取ってください』

終わり……だ。オチが、ない。

おそるおそる手紙から顔をあげてカカの顔を見る。

え、あの、なんで恥ずかしそうに俯くんスかカカさん。冗談でしょ？

「と、トメお兄さん。わわ、私のもー」

「あ、はい……」

僕は困惑しながらも、カカと並んで恥ずかしそうなサエちゃんの言う通り、もう一つの包みに付いていた手紙を開いた。

『あなたを奪いたい』

Ｗｈａｔ!?

『いきなりごめんなさい。でも、もう我慢できないんです。カカちゃんから、サユカちゃんからトメお兄さんを奪いたい。もうそれしか考えられないんです』

Ｗｈｙ!?

『トメお兄さんが好きです。私のお兄さんか彼氏かパパかご主人様

か奴隷かもしくは全部になってください。私はあなたに従います。私の全てをあなたに捧げます』

Ｏｈ……！

『カカちゃんと相談して、想いを一緒に伝えることに決めました。これは本心です。嘘偽りありません、ボケもオチもありません。どうか真剣に考えてください』

ＭＡＺＩＤＥ？　って英語じゃないやこれ。マジで？

『そして私のものになってください。もしくはトメお兄さんのものにしてください』

か、過激……先日のサカイさんの教育的指導が入ってなかったらコレがさらにどういう文章になっていたか、想像するだけで恐ろしくて寒気がくるほど過激！！

や、ていうか、さ。

「嘘だろ？」

『本当』

ハモりやがった。

「や、絶対これ冗談だろ、嘘だろ」

『本気』

「あれだろ。前にテンに僕がやったやつだろ」

『今度は本気』

「う、嘘、だろ？」

「トメ兄、知ってるでしょ？　私は大きな嘘はつかないの」

「私も同じですよー」

そこまで言うか……ううううん。

真剣に考えろと？　えええええ……なんで僕って小学生相手にこんなんばっかなの？　子供に好かれるタイプなのか？　や、でも本気じゃ……ないよな？　きっとないよな？　でも本気だったら傷つけるよな……あああああもう！！

無難に答えよう。

「カカ！　えっと、気持ちは嬉しいが、僕らは兄妹。これからもずっと一緒にいるんだから、それで勘弁してくれ。もちろん僕もカカは好きだし、もっと仲良くしていきたいとは思っているが」

次は……

「サエちゃん、君の気持ちも嬉しい。でもサユカちゃんにも言ったけど、今はそういうことを考えられないし、困るから……その、もうしばらくゆっくり考えてほしい。先はまだまだあるんだから」

これで、どうだろう。なんとか答えたと思うんだけど……サユカ

ちゃんの一件があったおかげで耐性がついててよかった。

「一応、真剣に答えたつもりだけど……どうだろう？」

「うん。ま、嘘なわけだけど」

「やっぱりかあああああああああああああああああ！！」

わかってたよ！　わかってたけどね！？　でもあそこまで言われたら誰だって真剣に答えるよね！？　ねぇ！？

「私は嘘とは言いませんよー。本当とも言いませんけどー」

「信じない……もう信じないぞ……」

人間不信なるぞオイ。

「私がトメ兄相手にそんなこと思うわけないじゃん」

「だってさぁ！！　さっき言ってたじゃん！　大きな嘘はつかないって！」

半ば子供のようなわめき様でカカに迫る僕。しかし答えたのはサエちゃんだった。

「あらあらあらー？　トメお兄さんにとってはそんなに大きな嘘だったんですかー？」

「うぐ……」

「トメお兄さんにとって、妹に告白されるのはそんなに大事件なんですかー？　私に告白されるのはそんなに大事件なんですかー？　妹や女子小学生に告白されたら真剣に考えまくるほどの超事件なんですかー？　私はてっきり、大人な男性の方にとっては小さなことばかりー。それを真剣にお付き合いするべきかと思うのは変態とばかり思ってたんですけどー、違いますかー？」

「うぐぐ……！」

間延びした声がざっくんざっくん僕の心を傷つける！　そこまで言われると「今のは重大な嘘だった、僕は傷ついた」なんて言えない……傷？　そうだ！

「ほ、ほら、相手を傷つけないように、とか、色々思うだろ？　大人として、子供の心のことは真剣に考えないと。付き合う付き合わないとか、そういうことじゃなくて」

「お、もっともな意見だ」

「むむー……そう言われたら反論できないです。小さな嘘ってことで通そうと思ってたんですけどー」

危うく滅多打ちにされるところだった。恐ろしきはサエちゃんの黒き言い訳、『僕が真剣に考える＝変態』という公式をそのまま使われていたら二人を許さざるをえなかった。『僕が真剣に考える→子供の心のため』という公式を上書きして免れたけど……って一体なんの勝負をしてるんだ僕らは。

「それにしても悪戯が成功してよかったぁ。私迷ってたんだよね、どれにするか」

カカの手には数枚の手紙が。

「別案があったのか」

「うん、例えばこれ。冒頭の文章がイカすんだよ。『トメ兄が死んで十年が経ちますね』」

なげーよ！　ていうか殺すな！

「私も最後に『通帳の中身も捧げます』って付け加えるかすごい迷ったー」

ええい、書いてくれれば冗談と一発でわかったものを。

「ま、トメ兄の真剣な顔が笑えたし、よしとしよう」

コノヤロウ。べ、別にそこまで真剣じゃなかったんだからな！？

「チョコは普通なので、安心して受け取ってくださいねー」

「……ありがと」

釈然としないが、結局はチョコもらえたし、よしとしよう。イベントのある日に何もないとは思ってなかったし。

「さて！　それじゃメインイベントいこっか」

「トメお兄さんはこちらへー」

「今度はなんだよ」

「バレンタインだよ？　となれば一人、忘れちゃいけない子がいるっしょ」

そりゃ忘れてなかったけどさ。三人娘のもう一人を。

二人に連れられる先には予想通りの人物がいるだろう。

……たぶん。

## カカの天下７０９「甘くないチョコ　前編」（後書き）

なんか書き始めたら意外と長かった……
というわけで、一話でまとまんなかったので続きます。
んでもって、バレンタイン過ぎるとアレなので、明日も更新しちゃいます。なんかほら、読んでもらえたらわかるとおり中途半端でしょ？笑
そんなわけで明日もお楽しみにー！

……バレンタイン？　あげたりもらったりしましたが特筆すべきことはありませんでしたが何か。

# カカの天下７１０「甘くないチョコ　中編」

どうも、引き続きトメです。

なんともタチの悪いチョコをもらったバレンタイン。しかしもらったこと自体は嬉しいから許してやろうと思う辺り、男って損だよなーなんて思いつつ……メインイベントはこっちだと言って歩くカカとサエちゃんについていきます。

やがて見えたのはいつかの桜の木。もちろん花はまだ咲いていないが、その木の下には一輪の花もかくやの乙女が僕を待っていた。

そう、言うまでもなかろう。

その乙女とは！

「タケダだ！！」

殺していいですか？

「待っていたぞ！　俺はこの日を待っていた！」

殴り飛ばせばいいだろうか。

「頑張って頑張って手作りのチョコを作ったんだ！」

蹴り飛ばせばいいだろうか。

「むしろチョコケーキだ！　特大だ！」

投げ飛ばせばいいだろうか。

「これは俺の愛の大きさを語っている！」

とりあえず殺そう。

「カカ、武器ないか？」

「はい木刀」

「ないす。せーの」

「うぉあぉえあぅあ！？」

即座に木刀が出てきたことをさして疑問に思わず振るった僕の一撃をスレスレで避ける不届き者。うん、不届き、たしかに木刀が届かなかった。今度は届けよう。

「せーの」

「ひぃあ！？　な、何をするのだ兄君！　俺はただ、カカ君へ想いと共にチョコを渡そうと！」

「ああ、なるほど」

今のセリフはカカに向けてだったのか。そうかそうか、よかったよかった。

「せーの、せーの」

「ぅお！？　ちょっ！　あぶっ！！　なぜに木刀を振るうのを止めない！？」

だってそれはそれでムカつくし。

「カカ君！　なんとかしてくれ」

「よーし」

「なんで二本目の木刀を取り出すの！？」

「いくよトメ兄」

「よしきた」

二人仲良くせーの、せーの、せーの、せーの、せーの――ゴン。

「さて、サエちゃん。これがメインイベントなのか？　確かに男からチョコを、しかもケーキなんかもらうとなれば大事件なんだが」

「いえいえー、こんなの用意してないですよ」

「嫌がらせにも程があるでしょ。さすがにここまではしないよ」

ボロクソに言われたタケダは地面に転がっていて返事をしない。できないのかもしれない。

「あ、あのぅっ」

「あれ、サユカちゃん。そんなとこにいたのか」

最初に予想していた人物は桜の木の陰に隠れていたようだ。

「ちょっとサユカン、なんでそんなとこにいるの!?」

「だ、だってタケダがっ、俺が先に渡すんだー！　とかいうからっ！」

「トメ兄に!?」

「やっぱりかー」

「やっぱりか!!　恐ろしい!」

殺そう。

「やっぱりって何!?　俺は勘違いしていたのだ！　てっきりサユカ君がカカ君へ渡すのだと思って、それより先に渡したかっただけで!」

「せーの」

「なんで問答無用で木刀振り上げるのだトメさん!?　どう考えても今のセリフにそれ振る理由なかったでしょ!?」

や、なんとなく。

「しかしそういうことならよかった。身の危険を感じたぞ僕は」

「そ、それは俺のセリフなのだが……」

しかしタケダがチョコねぇ。流行の逆チョコというやつか。

「とりあえず受け取っておくよ、タケダのチョコケーキ」

「お、おお！！」

「さぁ皆で食べようか」

「なにぃ！？　カカ君、俺は君のためだけに作ったんだぞ！」

「おまえは私を太らせて食う気か」

たしかに小学生一人にケーキワンホール食えってのはキツイよな。家で食べた後でちゃんと冷蔵しておこう。

「それにしてもサユカちゃん。なんで普通の格好なのー？」

「あ、あれはさすがに恥ずかしくて……っ」

「なんだよ。また何か着せようとしてたのか、おまえら」

「チロルチョコのコスプレ」

見てぇ。普通に見てぇ。

「それはともかくっ！　トメさん、はい！　チョコです！」

「お、おお」

受け取ったのは結構ずっしりとくる包み、そして先の二人と同じように手紙がついている。

「わたしのは二人みたいに冗談じゃなくて、ほほ、本気の手紙ですからっ！！」

……はい、わかっております。誠意をもって読ませていただきます。

えっと。

『好き好き好き

や、だって！　微塵も疑問を感じず堂々と清々しい顔でこんな手紙を渡されたらさすがに引くし！！

「サエちゃん、元気出た？」

「うん、ありがとうカカちゃん。トメお兄さんとサユカちゃんの百面相を見ていたら少しずつ元気になってきたよー」

『オイそこの黒い子』

僕とサユカちゃんのツッコミにも全ての元凶は知らんぷり。しかしなんだ、これは元気のないサエちゃんのための企画だったのか？

「サエちゃん発案のラブレター祭り、成功だね」

「いやいやー、まだまだ続くよ」

「続くのかオイ。まだあるのかオイ」

チョコもらえるのは嬉しいけどなんか疲れるんだが。

「そのチョコ全部まずいよ」

「なんで僕はそこまでコテンパンにされなきゃあかんの！　僕が何かしたか！？」

「息」

「したらダメなのか！？」

「一回三百円」

「生きていくのにはお金がたくさんいりますね！！」

「ささ、いいから次行くよ！　トメ兄こっち」

「ほらほらー、こっちですー」

「おい、押すなって！」

「あぁ、トメさんっ！　もうちょっとわたしと喋りましょうよぅっ！」

「どうしよう……打ち所が悪かったのか、俺、立てない……動けない！　カカくぅぅぅん！」

そんなこんなで大騒ぎしながら。

テンとサラさんが待っているらしい場所へ向かってずんずん進んで。

「びりびりですか？」

「いいえ、リハビリです！」

「ふふ、ちょっと待ってくれないかしら？　病み上がりなんだからそんなに速く歩けないの」

サユカちゃんがタケダと交代したかのように、テンとサラさんではない別の団体と出会った。

クララちゃんとタマちゃんという、僕としては初めて見る組み合わせ。そして……誰だ、あの子。僕の知り合いに金髪の人なんかいないんだけど。

「あら」

「え」

でも、目が合った。

## カカの天下７１０「甘くないチョコ　中編」（後書き）

中編です。まだ続きます。
はてさてはてさて。

# カカの天下７１１「甘くないチョコ　後編」

どうも、トメです……

ええと、あの、ですね。バレンタインです、ええ。やっぱりというか案の定というか、カカたちに振り回されていたのですが、その途中。

こちらに負けないくらいに賑やかに騒ぐクララちゃんとタマちゃんと出会いました。そして、一緒にいた金髪の女性とも。

初対面だと思いました。

でも、あの瞳の大きい穏やかな顔、なんか見覚えが、ある、よう、な、え、あれ、まさか、あれ？

だって額には傷も何も、ないよな？　よく見てみる、見てみる、赤い、うん赤い、視界が赤いもので埋まっていく、どんどん、どんどん――

「ふげら！？」

このすっとぼけた声は僕です。痛い。痛いけど、その痛みは大したことないんだけど、驚きによって僕はよろめいた。

僕の鼻っ柱をぶっ叩いた赤いものを投げつけた金髪女性は、なんと、

「チッ！」

舌打ち!!　え、なんで!?　なんで手に持ってた物を顔に投げられたあげくにそんな小ばかにしたような目で見られるの!?　ていうか今までの穏やかな顔どこいった!?　大きな瞳は切れ長に細まって僕を睨みつけて、

「嫌なやつに会ったわ」

苦々しく吐き捨てる。その声、忘れもしないその声は、やっぱり、

「……ユカ？」

「軽々しく呼ばないでよ、うざったい」

間違いない、あのユカだ。

「な、なんで」

「なによ、ワタシがここにいちゃいけないの？　なんで？　それを言うならあなたこそ、なんでいるの。いないでよ。消えてよ。シュバッと。永遠に」

その声は忘れていない。顔も忘れていない。でもすぐに気づかなかった。

「や、そうじゃなく」

「や？　や？　相変わらずの口癖ね。や、や、や！　ワタシがあなたのことをヤだと思ったときも使っていいのかしら。あーあー、でもそうしたらあなたのマネしてるみたいね。まぁうざい」

あーあー言うそっちの口癖だって相変わらず――じゃない。何もかもがあのときと違う、だからすぐに気づけなかった。

「……今、なにして」

「何してるか？　それはこっちのセリフよ。あなたこそ小さな女の子たち引き連れて何してるの？　幼女誘拐の真っ最中？　ハッ、それはまたお似合いですこと。交番はあっちよ。警察はあっちよ。あの世はあっち。そして地獄はこっち」

大げさに腕を振るユカ。「交番は」で右へ向かって人差し指、「警察は」で背後を指す親指、「あの世は」で立てられる中指、続いて「地獄は」で地面へ向けられる親指。最後の二つ、特に最後の動作に込められているのは、あからさますぎる敵意。

「……ユカさんや」

「さん、とか止めてくれる？　あんたなんか酸で溶ければいいのよ。跡形もなく」

「……ユカ君」

「君、とか止めてくれる？　あんたなんか燻製になって売られればいいのよ。五円とかで」

「……ユカちゃん」

「ちゃん、とか止めてくれる？　あんたなんかちゃんこ鍋で煮込まれればいいのよ。そして誰にも食べられずに捨てられなさい」

「……ユカ」

「呼び捨てとか止めてくれる？　あんたなんか誰にも呼ばれず捨てられればいいのよ」

「……おまえ」

「おまえとか止め――」

「いいかげんにしろやぁ！！　喋らせろ！」

「ヤ」

……何度も言うが、気づかないのも仕方ないと思う。

「あーあ、なんだかんだで、こんなやつのマネしちゃった。ヤだヤだ」

「単刀直入に言おう。なんでそんなに性格悪くなってんだ！？」

そうなのだ。僕の知るユカという女は、金髪でもなければ口が悪くもなければ意地も悪くなかったはずなのだ。おとなしくて地味で純情な子だったはずなのだ。それがどうだろう。

「他人のことを性格悪いなんて、直接言うほうが性格悪いと思うわ」

鼻で笑うこの返答。まるでユカの妹か姉か別人格が出てきたのかと疑うほどの変貌っぷり。

「おまえ、本当にあのユカだよな？」

「そうよ、あなたにフラれたあのユカよ。あなたにフラれてグレた、あのユカよ」

――まじ、か。

「グレ、た？　その金髪も、その言葉遣いも」

「そうよ。あのときあんたにフラれてから染めたの。荒れたの。そりゃ荒れるわよ。ワタシがどれだけ苦しんだと思ってるの？　あーあ！　今となっては馬鹿らしい。わざわざ県外の病院に行ったのは、あんたから離れるためでもあったのよ？　それが仕事の都合で戻ってきてみれば、会うし。あーあー気に食わない。なに？　あんたも気に食わないの？　ワタシの何が悪い？　何か悪いなら、あんたが正しいことを言ってみろ！！」

正しいことなんてわからない。

悪いところなんてわからない。

ただ、僕が悪いということだけはわかったから、

「……ごめん」

何に謝っているのか――きっと全てに謝りたいのだと思う。謝って、そして、

「よかったわね、謝れて」

あのときと同じ言葉を、

「これで満足？」

また、聞いた。

返す言葉が、見つからなかった。

「頭痛いわ。熱っぽいかも……帰るわ」

踵を返し、僕に背を向けて歩くユカの足元はおぼつかない。足……そうだよな。治らないって、言ってたし。そうだよ、だからこんなところで会って心底驚いたんだ。もう立てないって聞いてたから。でも、そうか、あれから年月が随分と経っている。医学も進歩したのだろう。額の傷も見えなくなっていた。よかった……そう、言っていいのか？

「……はっ！？　あ、あまりの光景にクララぼーっとしてました！」

「おねーちゃん、へんしんしたのですか？」

「そ、そうです！　変身でもしたかのような人格変化です！　クララしょっくです！　あ、おねーさん！　待つです！」

固まっていた子供二人が慌ててユカを追う。そして同じく固まっていた僕の周りの女子たちも動き出した。

「なにあれ！？」

「感じわるーい」

「と、トメさんっ！　なんなんですかあの女っ！！」

「そうだそうだ、説明しやがれ」

「あの女の人とトメさんがどういう関係なのかは話を聞いてなんとなくわかったんですけど……過去に何があったのか、気になるところですね」

そしていつの間にか二人ほど増えていた。テンとサラさん。僕らがいつまで経ってもこないから様子を見に来たら僕らのやりとりに遭遇した、というところか。

「トメ兄、あんな風に言わせたままでいいの？」

「いいんだよ。僕が悪い」

なぜか不満そうな瞳が僕を見ている。ばつが悪くなって視線をそらしてみれば、誰を見てもその目に捕まり、どれもこれも「話せ」と言葉にするまでもなく語っていた。

僕は彼女に会って凹んでいたのかもしれない。そのせいか、普段なら「思い出したくない」の一言で逃げるはずが、誰かに聞いてほしいなんて思ってしまった。

「……僕の家に行こうか。お茶くらいだすよ」

幸い、お茶菓子はたくさんある。

「必要なら酒もあんぞ」

「ハハ……気が利くなテン。もらおうか」

酒が入ればもっと簡単に語れるだろう。

「トメさんの恋話かぁ。うーん、不謹慎ながら興味がふつふつと……あれ、トメさんトメさん。この包みって」

「あ」

最初にユカが僕に投げつけて、そのまま地面に転がっていた赤い物体。

何の因果か、それはチョコだった。

バレンタイン。女性が好きな男性にチョコをあげる日。なんという皮肉か。

そのチョコは甘くない。

全然、甘くなかった。

## カカの天下７１１「甘くないチョコ　後編」（後書き）

先に言っておきます。

「あれ？　ここおかしくない？　これ変じゃない？　あれって確か……」

そう思った箇所があったらとりあえず覚えておくと、後々楽しめるかもしれません。

さぁて。過去編の始まり、かも？

# カカの天下７１２「過去、穏やかな時間」

トメです。

思い出すは七年前。

僕がまだ十八歳で、高校に通っていたころの話。

「ふぁ……おはよう」

ある日の早朝。自室で学校へ行く用意をあらかた終わらせた僕は、朝食をとりに居間へと入った。待っていたのは、テーブルに並ぶ母さんの作ったご飯、それを先に食べている姉。「おふぁお」食ってから喋れ。台所からはまだ何か作っているらしい母さんの声。「おふぁお」あんたも何か食ってんのか。そして、

「とめにーちゃん！」

元気すぎる妹。

「カカ、おはよ」

「だっこ！」

「……おはよ」

「だっこ！」

「朝はおはようだろ？」

「だっこ！！」

「……よしこい」

「わーい」

朝っぱらから僕の腹をめがけて全力疾走で突進してくる妹を「ごほっ！」という苦悶の声を押し殺して受け止める。痛い。

「とめにーちゃん、おはよ！」

「あぃ……おはよ」

こうしないと挨拶をしない妹の癖を直すにはどういった教育をすればいいのでしょうか？　誰か教えてくれ。

「あらあら、今日もトメ君とカカ君は仲いいのね」

「母さん、毎朝これやると疲れるんですけど」

「ママ知ーらない。ねーカッ君？」

「あたしらはカカちゃんから、そんなラブラブ光線もらってないもんねー？」

「ねー」

この二人は毎朝お腹にダメージを受ける僕が羨ましいらしい。確かに最初は喜んださ、自分に一番懐いてくれる妹なんかができたら

可愛いに決まってる。でも毎日ボディーにアタックされる僕の身にもなってほしい。最近お腹の調子が悪くて便通が危うい感じになっているのは間違いなくコレのせいだと僕は思っている。

「いただきます」

「妹を？」

「朝食を！！」

タチの悪い冗談を抜かす姉に律儀にツッコんだ後はがつがつがつ！　勢いよく朝ごはんをかきこむ。おお、さすがは卵かけご飯、すんなり口に入っていくぜ。

「こらトメ君。よく噛んで食べないと、よく噛んで食べない子になっちゃうぞ」

「母よ、そのまますぎる」

「えー、この間テレビでこんなの言ったらウケたのに」

「きゃははは！」

「ほら、カカ君にはウケてる！」

「むざいほうめん！」

「何にウケてるのかお姉さんさっぱりわかりませんが」

相変わらず愉快な家族のやりとりを聞き流しながらも引き続きが

つがつがつ！

「それにしても、トメ君は何をそんなに急いでいるの？」

「彼女と待ち合わせなんでしょ、どうせ」

がつがつ……図星を指されて一瞬手を止める、が時間ないのでがつがつ開始。

朝食終了！　自室へダッシュで戻って準備！

「おーおー急いじゃって。構ってもらえなくてお姉さん寂しい……ね、カカちゃん」

「ギャー！」

「なんであたしが話しかけただけで叫ぶ！？」

「ゆうざい！」

「何が！？　会話してよぅ！　一緒に寂しさを分かち合おうよ！だっこしようよ！」

「……またおんぶして空飛んでくれる？」

「二階からならいいよ」

「じゃ、だっこ」

「たはー」

「あ、いいなー。ママも！　ママも！」

馬鹿やってる家族は放っておいて、

「いってきまーす」

そそくさと家を出る。少し予定より遅れ気味だ、寝坊したせいだろう。

高校へ向かう道を、少し遠回りしながら走って進む。

やがて見慣れたT字路が視界に入り、誰もいないことを確認してホッと一息。

「よかった、まだ来てないか」

「あの」

「っとぁ！？」

T字路の中心で「っとぁ」を叫ぶ。

慌てて振り返ると、そこには探していた顔がおずおずといった表情で立っていた。

「いつの間に！？」

「あ、あー、あ、あのね、そこの電柱に、隠れてて」

「なんで」

「驚かそうと……思って」

意地悪な考えとは裏腹に申し訳なさそうに俯くその子。その拍子に三つ編みまで申し訳なさそうに垂れる。もちろん肩も申し訳なさそうに小さくなる。

可愛い。

そう思った。

「うん、驚いた驚いた。成功成功」

「あ、あ、あの」

「大丈夫大丈夫、怒ってない怒ってない」

可愛かった可愛かった、と言えればいいのにと少し思う。でもそんな恥ずかしいことを口にできるほど僕は大人じゃなかった。

「あ、あー、あー……」

自分でやっておいて困りきった顔であーあー言うその子。きっとその子にとっては冒険だったんだろう。もっと親しく、もっと気さくに接するにはどうすればいいのか、必死に考えた結果だったんだろう。でも実行して、それでよかったのか自信がなくて、あたふたしている。

それがわかる。

「はいはい。いいから学校行くよ、ユカ」

「あ、うん。トメ君」

その子は僕の彼女だから。

だからわかる。

「今度は僕がユカを驚かしてあげるよ」

「え……そんなことされたら死んじゃう」

「気弱なユカなら本当にショック死とかありそうだなって思えるからすごいな」

「……えへへ。お墓はトメ君の家に作ってね」

「難しいこと言うね」

「居間がいいなぁ」

「すんごく難しいこと言うね」

わかる――そう。

わかっていたのに。

## カカの天下７１２「過去、穏やかな時間」（後書き）

過去編の始まりです。正確に言えば前回から始まってはいたのですが。

過去に関する話をまとめて過去編として、しばらく展開していきたいと思います。

ではでは、もう少し過去の世界にお付き合いください。

追記。更新時間が不安定なのは私の仕事状況も不安定だからです。お店の新装開店って大変ねぇ。

## カカの天下713「過去、未熟な時間」

僕がユカに告白されたのは、二ヶ月前。

下駄箱の中にラブレター、それに呼び出されて屋上へ……漫画やドラマだけかと思ってたけど、実際にあるんだなぁなんて呆けながら足を運んだそのシチュエーション。

待っていたのは隣のクラスの女の子。面識は少しだけあった。たしか、体育大会で役員を一緒にやっていたんだと思う。そのときに少しだけ会話した。とは言っても「これ、どこ持っていけばいい？」と聞いたくらいの、色気のないやりとりだったはずだ。

「あ……あ、あ」

それくらいしか接点のなかったはずの子が、僕なんかを相手に顔を真っ赤に染めているのを見て、なんとも意外な気持ちになった。

「あ……あ……！」

断っておくが、僕は別に何もしていない。ただお互いに向き合って立ち尽くしているだけだ。僕は彼女の言葉を待ち、彼女は必死に何か言おうとしていて、でも言えなくて。

僕は待っている間、そういえばこの子はすごい内気な印象だったなぁ、なんて思い出していた。いつもおどおどしていて、おとなしくて、体育大会の役員だって押し付けられたんじゃないかと思うほどだった。

「あ……」

その証拠に、ほら。言いたいことを言えない彼女は、

「あ……あぅぅ……」

そのまま泣き出した!?

「おいおいおい！　どうしたの！」

「言えないんですぅ……」

「何を？」

「好きって言えないんですぅ……」

言ってるし。

――というわけで、その不器用すぎる告白を僕は受け入れ、付き合うことになりましたとさ。まだ二ヶ月しか経ってないけど、仲良くできてると思う。現に今日も今日とて早めに朝から待ち合わせして、ゆっくり登校しているんだから。

「――でさ、今朝もお腹が痛いんだ」

「ふふ、カカちゃん可愛いね」

最近は毎朝続いている腹への突進話を聞かせると、ユカは楽しそうにクスクス笑った。

「や、可愛いのは認めるけどさ、こうも毎日続くとさすがにうんざりするよ」

「あー、そんなこといいつつ笑ってるよ？　ふふ」

「や、これは」

ユカと話しているのが楽しいから、とか言えたらとか思うけど言えない。

「結局はカカちゃんが可愛くて仕方ないんだよね、トメ君は」

「そんなことない、とは、言えない、けど」

ユカだってかなり可愛い、なんてことも言えない。

「あ」

「ん、どした？」

あまり感情を激しく表に出さないユカだけど、これだけ付き合っているとさすがに表情が読めるようになってきた。これは何か思いついた顔か、思い出した顔だな。

「……あー、あー」

「何をあたふたしてる」

警戒中の小動物のように挙動不審にきょろきょろと辺りを見渡すユカ。一緒に三つ編みもふるふる揺れる。何を確認してるんだろう。

回り道なせいか周囲には誰もいないし。

「……あの」

違う、周囲に誰もいないか確認したんだ。

「……あの、トメ君」

ユカは、顔を真っ赤にして、俯きながら、でも上目遣いで僕の目を見ながら、小さな小さな声で言った。

「だ、だっこ」

脳が固まった。

言葉を理解した瞬間、石化した意識を粉砕するような勢いで血流が大暴走。身体中の体温が死にそうなくらいに上昇した。インフルエンザ並の熱に達したに違いない、走馬灯っぽいものが見えた、ばーちゃんっぽい顔も見えた、あれ、ばーちゃんって死んでたっけ？　いやいやそんなババァはどうでもいい！！　そんなことよりだっこってなんですかだっこって！　可愛いんですけど可愛いすぎるんですけど！！

「……あ、あの、トメ君？」

声に反応して、思わず弾かれるように後退しまくる。ユカから充分に距離をとり、胸に手を当て、ぜーはーぜーはーと深呼吸。

か、カカから言われ慣れてはいたけど、同年代の女の子に言われるとこれほど破壊力のある言葉とは思わなかった……だっこ、恐る

べし。

「……」

え、なに。なんでユカさん、てってってーとこちらに小走りで向かってくるんスか？　まさかカカみたいに僕の腹へ突進するつもりですか？　ちょっとちょっとそれはいくらなんでも――や、でも待ってくださいよ？　僕らは付き合ってるんだからこれくらい、

「……！」

ユカの顔を見る。

必死。顔真っ赤。ちょっと涙目。

可愛いすぎる。

「だ、だっこ」

「無理無理無理無理無理！！」

恥ずかしさの許容量を超えた僕は、逃げた。

意地になったのか、ユカは追ってきた。

奇妙な鬼ごっこは、学校に到着するまで続いた。

そして、教室へ到着。ユカは不満げだったけど、思春期な男の純

情を説明して何とか隣のクラスへ戻ってくれた。

ホッと一息つきつつ、ちょっと残念だったかなとか思っていた僕を迎えてくれたのは、友人A。

「俺に名前と出番をくれ！！」

「な、なんだいきなり」

「トメ！　おまえは死ね！」

なんて友人だ。

「トメ！　死ね！！」

「二回も言うな！」

今日は放課後にデートなんだから、死ぬわけにはいかないんだ。

「とことん死ね！！」

「三回目！？」

その後、八十七回言われた。

## カカの天下７１３「過去、未熟な時間」（後書き）

カカ天では何気に珍しい、ハッキリと付き合っているカップル。
いやーうざいですねー（爆
いえいえコホン……いやぁ、ほほえましいですねぇ（白々しいですねぇ

ともあれ、まだ過去のお話は続きます。
友人Ａ君が「俺の名前募集！」とか言ってますが気にしないであげてください。

## カカの天下７１４「過去、賑やかな時間」

「俺の名前は友人Ａ！　どうぞよろしく！！」

こ、こんにちは、トメです。

「友人Ａ！　なんだ友人Ａって！　そんな適当な名前にするなら何度も出すなよ！　出るたびに惨めになるだろ！？」

あ、あの。いま授業が終わって、

「あぁそうか、こう考えればオイシイ！　これから皆で俺の名前を募集するんだ、そうしたら俺がどんな名前になるのか皆が気になって、注目が集まりまくりんぐ！」

や、休み時間に入ったんですけど――

「あぁ、もっと俺を見て！！」

「うっさいわ！！」

なんか色々大事なものを無視して叫ぶ友人Ａを一喝する。すると彼は不貞腐れた顔でしゃがみこみ、人差し指で床に『の』の字を描き始めた。

「だってさー、だってさー、こんなことでも言わなきゃやってられねーべさ。俺ってば名前ないし？　授業中寝てたら怒られるし？　腹いせに消しゴム投げたら先生の後頭部に当たっちゃうし？　先生のヅラとれちゃうし？　先生真っ赤になってトンズラするし？　こ

れダジャレだし？　後で俺ってば怒られるし？　それに」

ガラ、と控えめに開けられた教室の扉。

「なんか俺の近くにはラブラブなやつがいるしー……」

そしておずおずと入ってくるユカ。彼女さんは律儀にも、休み時間になるたびに僕の教室まで遊びに来てくれるのだ。

「死んでしまえ」

「……見た目的に今死んでるのはおまえだぞ」

あ、『の』の字を書くスピードがアップした。

「あ、あの、トメ君」

「や、ユカ。えっと……」

とは、言うものの……

人生初めての交際を始めてまだ二ヶ月。少しずつ慣れてはきたもののやはり恥ずかしく、毎回毎回に気の利いた話題を用意できるわけはない。僕とユカは二、三度だけ言葉を交わした後、二人して黙り込んでしまった。

やがてユカが耐えかねたのか、思いついた言葉を口にする。

「だっ――」

「それだけはやめてくれ！！」

朝の恥ずかし暴走大特急を教室のど真ん中でかましてしまったら僕は絶対に死んでしまう。死因？　もちろん悶死だ。悶絶して死ぬと書いて悶死だ。血流の流れが速くなりすぎて心臓が耐え切れず爆発するという恐ろしい死因だ。おお、自分で作っておいてなんだが、なんと恐ろしい死に方だ。

「あー……もう、休み時間、終わっちゃう」

「う、うん。そだね。授業、頑張って」

「あ、トメ君も」

「うん、じゃあ」

「ばいばい」

控えめに手をふりふり振って、恥ずかしそうに去っていくユカ。

可愛い……恥ずかしくて口にはできないけど、心からそう思う。

「あぁ妬ましい妬ましい。妬ましの神よ、ただちに俺に降臨し、こいつを殺しても罪に問われない力をください。本当に『被告A』とかになるのヤなんで」

うざい……口にしてもいいけど、心からそう思う。

「なートメ。休み時間の度に可愛い彼女さんが来てるけどさ、たまにはおまえがユカちゃんのとこ行ってやれよ」

「む」

言われてみればもっともだ。毎回来てくれるユカの好意に甘えていて、僕は応えていない気がする。

「おまえが向こうの教室に行ってる間に机に『死ね』とか書いといてやるから。そりゃもう俺の少ない脳みその引き出しを全開にして思いつく限りの罵詈雑言を」

「……たまには友人らしいこと言うなぁ、なんて思った僕が馬鹿だった」

「バーカ」

「改めて言われると腹立つなこのやろう」

友人Aなんか置いといて。好意に応えるというのは良い思いつきだと思う。僕から教室へ行くのもいいけど……他のことでもいい。何かお返しとか考えておいたほうがいいかも。

「モテるやつは死ねばいい」

さて。それはそれとしてとりあえず、このどこかで聞いたようなセリフを言う友人をなんとかせねば。

「僕は彼女がいるってだけで、別にモテてるわけじゃないだろ」

「相手がいるやつは死ねばいい」

「死ぬやつ多いなー。世界にいっぱいいるぞ、夫婦とか」

「俺は構わん」

「自分の両親も？」

「構わん」

「構えよ」

あ、チャイムだ。ついにこやつを黙らせることができなかった。きっと次の休み時間が始まった途端にいじけ始めるに違いない。はぁ……面倒くさい。

しかし、そんな僕の心配は杞憂となる。

授業が終わり、先生が教室を出て行きドアを閉めた瞬間、

「ハイ皆さんこんにちは！！　笠原トメのおねーさん、とーじょー！！」

響く男らしい女性声。

「とうよぉー！！」

微妙な復唱をする舌っ足らずな幼い声。

「投与！？　そう、授業というクソつまらない時間に毒された教室へ、全世界の元気の源であるおねーさんを投与！　皆！？　オラから元気を持っていってくれ！」

「てってってくえ！！」

ぽかーんとするクラスメイト一同。気持ちはわかります。先生と入れ替わりで私服のおねーさんがワケワカランことを叫びつつ妹を肩車しながら登場すれば、唖然として当然。そう、いくら“慣れているとはいえ”。

「なぁトメ。またおまえのお姉さんか」

「認めたくはないが……ていうか姉！！　なぜ窓から登場する！？しかもここ二階！　どうやって上がってきた！？」

そんな僕の常識的なツッコミをものともせず、

「やーやー皆、弟をよろしくー、弟をよろしくー」

「よぉしくー！」

選挙活動よろしく愛想を振りまく姉。恥ずかしすぎる、しかし悶死はしない。悲しいかな、この人のやる恥ずかしいことには誰よりも僕のほうが慣れている。

「うちの弟いいやつよー！　よろしくー！」

「とめにーちゃんいいおー！　よぉしくー！」

「友人Ａもいいよー！　よろしく！」

とりあえず邪魔な友人を押しのけて。

「こら姉。学校はどうした」

「大学生って暇なんだよ」

「全国の大学生に謝れ！」

「じぇんきょうでぇやいしぇいあぁれ！！」

ちなみに今のはカカです。僕が早口で言ったのを頑張って復唱しています。

「……あ」

そんな大騒ぎの場面に出くわす、律儀にまた訪ねてきてくれた僕の彼女。

姉と目が合う。

「あ、ども、姉です」

「か、彼女です」

「お、おおお、弟、よろしく」

「こ、こここ、こちらこそ」

なんだこの空気は。

悶絶なしに死ねそうなんですけど。

「続く」

「このまま続くの！？　こら勝手なこと言うな友人Ａ！！」

## カカの天下７１４「過去、賑やかな時間」（後書き）

友人Ａ、大活躍の巻。
本当はこんなはずじゃなかったのに、なぜか自己主張の強い友人Ａ。名前もないくせに。おかげで予定より一話延びたじゃないか過去編が。別にいいけど。
さて、そんなわけでまだ続きます。

しかし……毎回言うけど、感想返信をすぐにできなくてごめんなさい。
言い訳させてもらえば、新しい店が昨日開店したのね？　オープンって死ぬほど忙しいのね？　そんだけです、あぃ。
土日終われば落ち着くはずなんで、そしたらまたちゃんと返しまする……申し訳なかとです。

でも本編だけは絶対書く。

## カカの天下７１５「過去、勝負の時間」

と、トメでーす……

「じゃじゃっじゃっじゃじゃん！」

対峙する僕のお姉さんと彼女。

「だだっだっだだん！」

教室のど真ん中で。

「べんべけべんべんべん！」

いきなりですが本音を漏らしていいですか？

「にゃんにゃかにゃんにゃんにゃん！」

勘弁してください！！

「ぺんぺぺけぺんぺけぺんぺけぺんぺけぺんぺけ――」

「そしてうるさいぞカカ！」

「にゃはは」

場の雰囲気を読んでるんだか読んでないんだか、妙なＢＧＭを口ずさむ妹を一喝する。まぁ全く堪えずにゃーにゃー言ってるけど。

や、それはさておき。

「も、もしもーし。姉さん？　ユカさん？」

すっとぼけた挨拶をしてからずーと固まっている二人に、恐る恐る声をかける。

それが合図になったのか、姉が突然声をあげた！

「勝負だ！」

「何をだ！？」

僕は光の速さでツッコんだ。すると姉は「うぐ」と押し黙る。やはり大して考えもせずにノリで口にした言葉らしい。

しかしユカはそう思わなかったのか、固い表情のまま答えた。

「あ、う、受けて立ちます」

ふっかけた姉自身が「え、なにを？」と聞いてしまうくらいの気迫！？

「あ……あの。それで、おねえさん」

「お義姉さんとかいうなよ……ちょ、ちょっといいじゃないか、えへへ」

なんの勝負かさっぱりわからんけど姉はもう負けそうだ。

「勝負って、ええと、どっちがよりトメ君のことが好きか、競うん

ですか？」

「……あぇぃっ！？」

「お姉さんはそんなにトメ君のことが好きなんですか？」

「うぇぃっ！？」

……ユカ、そうくるか。

「どっちが好きかという勝負なら」

「ちょ、ちょ！　ちょちょっちょっちょっ

当事者らしい僕は何一つ言葉を発することができない。だってなんて言ったらいいかわかんないし。ユカが頑張ってくれてるのは嬉しいし姉はわけわかんないしカカは修羅場っぽいＢＧＭを口ずさんでるし、一体どうすればいいのだ！？

「う」

あ、姉が口を開いた。

「うわあああああああああああああああああん！！　ばかあああああああああああ！！」

この雰囲気に耐えかねた姉は吹っ飛ぶような勢いで窓から外へ逃げた！！　だからここ二階――

「おっとカカちゃん忘れてた」

「どうやって戻ってきた！？」

二階という高さを全く無視してひょっこり同じ窓から帰ってきた姉。こいつ、ホントなんでもありだな。

「カカちゃん肩車おっけー！　そいじゃ皆様お騒がせしました、うわあああああああああああああああん！！」

肩車した妹に「おーよちよち」とか慰められながら、嵐は過ぎ去っていった。

「……や、律儀に叫び直さなくても」

そんな僕のツッコミもむなしく、教室には呆気にとられた面々が残った。

いや。

なぜか、瞳の中に黒い炎を灯した熱血な皆さんが、僕を囲んでいらっしゃる。

「……え、なんだおまえら」

「なんだって、友人Aだよ。見せ付けてくれやがって。おまえは死ね」

「友人Bだが。本当に死んだほうがいいと思うよ」

「友人Cだわ。あんたなんか地獄に落ちればいいのよ」

「友人Dだが。そしたら今度は闇魔様とか死神にモテたりするんじゃないか？」

「友人E的には恐竜が住んでる時代あたりにいけばいいと思うよ。人間一人だけで孤独に過ごしたあげくにティラノに食われてしまえ」

「友人FですけどEさんに質問です。もちろんティラノもオスですよね？」

「おぅいえす。トメの周りにはオスしかいない」

「おぅけい」

「友人Gもおぅけい」

待て待て待て待てどんだけ出てくるんですか！？

『モテるやつは死ねばいい！！』

友人H～Zまで満場一致！？

「あ、あはは……さいなら！！」

僕は逃げた。

このまま外へ行こう。授業なんか知らない。日ごろ真面目にしてるから、少しくらいサボったって成績も出席も大丈夫だ。ごめんなユカ、僕は放課後のデートまで身を隠すよ。

はぁ……大変だ大変だ。

大変だけど、やばい、顔がニヤける。

彼女がいるってのは、こんなにもいいもんなのか。可愛い子に想われるのは、こんなにも幸せなもんなのか。

今なら確実に言える、僕はユカが好きだ。

この気持ちをきちんと伝えたい。そうだ。ちょうど日ごろの感謝の印を、と思っていたところだし。今から商店街へ何かプレゼントを探しにいこう。

何が、いいかな？

## カカの天下７１５「過去、勝負の時間」（後書き）

勝負、それは少し重い響き。
とうとうシリアスか？　そう思われた方もいるのではないでしょうか。だがしかーし！　実際はなんか増えまくった友人達とユカさんのアレがアレしてコレがコレな話！

なんだか過去話、結構楽しくてどんどん長くなってる……許してね笑

## カカの天下７１６「過去、想い合う時間」

トメでーす！

ふふ、ふふふ……や、顔がニヤけます。やらしいことを考えてるわけじゃないですよ？　プラトニックな話ですよ、うん。

「どれになさいます？」

「待って」

プレゼント。彼女にプレゼント。あーなんか甘い響きだ！

「どれになさいます？」

「待って」

こういうのって派手なものあげると失敗するんだよな、うん。僕って高校生だし。それなりに地味で、それなりに心にくる、それなりのお値段のものを選ばないと。

「どれになさいます？」

「待って」

アクセサリーがいいよなぁ。ユカって飾りっ気ないし。お、ペアのもあるんだ、ふーん。

「どれになさいます？」

「待ってってば」

それにしてもうるさいなこの店員。僕と同い年くらいか？　妙に格好いい男だな……店員らしく丁寧だけど、しつこい。

「どれになさいます？」

ああもう！　うっとおしい！　怒鳴ってやる！

「うるさ――」

「さっさと選びやがれ！！」

「逆に怒られた！？」

「おまえみたいな若いのがいつまでも店内にいるとな、見栄はった年寄り金持ちがこないんだよ！　儲けが出ないんだよ！　安いもんしか買わない客はさっさと選んで帰れ！」

な、なんて言いにくいことを平然と言うやつなんだ。でも、せっかく買うんだし、ちゃんと選びたいのに……

「客！」

「はい！」

なんで僕のほうが敬語なんだろう。

「何を買いにきた？」

「か、彼女へのプレゼントを……」

「歳は？　派手な彼女か地味な彼女か。普段の服装は？　飾り気は？　付き合って何ヶ月だ？　どこまで進展してる？　何度目のプレゼントだ？　財布の中身はいかほどか？」

矢継ぎ早に聞かれ、僕は圧倒されてしまい、なぜか正直に答えまくっていた。

「よし。じゃあ客、これ買え」

そして進められたのが、一つのペンダント。

薄い鎖の先に、シルバーの小さな六方星。控えめに、しかし確かな存在感を持つその星は、文句なしでユカにぴったりに思えた。

「ペアアクセだ、新米カップルにはこれくらいがいいだろう」

ペア？　六方星は一つしか……や、よく見れば鎖は二つある。

「あ、これ。三角形が二つ、くっついてるんだ」

銀の三角板と、中が空いた逆三角フレーム。その二つがくっついて六方星になっているんだ。二人で片方ずつ持っていてもただの三角、でも二人がそろうと星という形になる――いい、すごく、いいかもしれない。

「これで２９８０円。気にいったか？」

「はい！」

「よし、じゃあ取っといてやるから彼女と二人で買いにこい」

「え？　や、今、僕が買って」

「ばかたれ。こういうのは二人で買うからいいんだよ。店員の言うことは聞いとけ」

「は、はい」

いきなりプレゼントして驚かせたかったけど……でもここに連れてくるのも悪くないな、うん。充分にびっくりしてくれるだろうし。

それで、喜んでくれたら、いいなぁ。

――忘れてる方もいますでしょうけど、実は今の僕はサボり中だったわけで。校門前でひっそりと待ち伏せしてユカと合流したのは、それから少し後のことだった。

「ど、どこいくの？」

「いいからいいから。あ、ユカ。お金持ってる？」

「う、うん」

おどおどしたユカを引っ張りながら「金持ってるか？」なんて確認すると、なんだか自分が恐喝しているような気分になる。いやい

やそれも今だけ、きちんと説明すればいいんだ。

「あ、あ、トメ君、どこ行くのってば」

目的地に着いた！

「ここだ！」

「ラブホテル！？」

「違う！！　隣！」

「人身売買店！？」

「そこはそういう名前のラーメン屋！　その間にあるところだよ！」

「ラブホテルと人身売買の中間……」

「紛らわしい言い方はやめてくれ。僕はどんだけゲス野郎なんだ。そこのアクセ屋だよ」

しかしこんな並びの店ってどうなんだろう。建てた人のチャレンジ精神がよくわからない。

「お、来たか」

店に入ると、なんだかんだで親身にのってくれた男の子がすぐに見つけてくれた。

「ちゃんと取っておいたぞ、ほれ」

あえてラッピングもしないでおいてくれたんだろう。長方形の透明ケースに入った、見た目は一つ、実は二つな星のペンダント。

「ユカ、これを一緒に買おう」

その言葉で、ユカはようやく僕の意図を理解してくれたようだった。

ペンダントを見て、僕を見て、もう一度ペンダントを見る。最初は白黒させていた目は少し熱を帯びて、頬も少し染めて、ユカは答えてくれた。

「……はい」

二人でお金を出しあった。

僕はユカから、三角板のペンダントをもらった。

ユカは僕から、逆三角フレームのペンダントをもらった。

それがお互いの、初めてのプレゼント。たまに一緒にかけあわせて六方星をつくって、二人して恥ずかしそうに微笑みあった。

婚約指輪の交換ほど大げさではなく、バレンタインデーとホワイトデーの交換ほど軽くもない。きっと今の僕らにぴったりな贈り物だったはずだ。

ありがとう店員さん。聞いたところによるとアルバイトみたいだけど。お客に対する口の利き方とかヤバかったけど。でもナイスな

店員さんだったぜ。きっと将来は無敵な店員さんに成長すると思う。

「……先を越された、なぁ」

「え、なにユカ。なんか言った？」

ユカと一緒に幸せ気分な僕は、上機嫌に聞いた。

「あー、うん。ちょっとトメ君に伝えたいことがあって……今度の週末、空いてる？」

「もちろん」

「あ、じゃあそのときに」

「なになに、嬉しい知らせ？　悪い知らせ？」

「変な知らせ」

なんだその、うちの姉や妹で腹いっぱいな知らせは。

## カカの天下７１６「過去、想い合う時間」（後書き）

ちょっとギャグは抑え気味なお話となりました。
なんだか感想を読んでると、皆さんがシリアスを今か今かと身構えているように見えますが……もしかしたらその前兆かも？
焦らすの大好きな私にはハッキリ答えることはできません＾＾

あ、ちなみに。
ペンダントの話、覚えてる人いますかー？

## カカの天下７１７「過去、終わりの時間」

初めてのプレゼントを渡しあってから数日。

僕たちはいつものように一緒に登校して、一緒に休み時間を過ごして、一緒に放課後を満喫して、今までと変わらない日々を送っていた。

それでも、確かに何かが通じ合った気がした。お互い口にはしないし、なんて言い表したらいいのかわからないけど。そうだ、なにより――僕の姉妹によるヘンテコな乱入を笑って受け流せるようになったのが、その証拠だと思う。

え、何の証拠にもなってない？　すごいんだぜ、アレを受け流せるようになるってことは。

ともかく、何もかもうまくいき始めた最初の週末。僕は屋上に呼び出されていた。ペンダント記念日（勝手に名づけたフフフ）にも口にしていたけど、ユカは告白したいことがあるそうだ。

何を告白するんだろう……告白って聞いて真っ先に思い浮かぶのは「好き！」とかいうやつだけど、僕はもう聞いてるし……ま、まさか！

突然のお別れ宣言！？　『ごめんなさいトメ君。私、本当はこの人が好きなの』的な！？　一度不安に駆られると妄想は進んでいく。もしももしも、その相手が――

『私、友人Ａ君のことが好きになっちゃったの！』

『な、なんでそんなやつを!?』

『だって名前が無いなんて可哀想だもの』

うあああああああ！　行かないでくれ!!　よりにもよってそんな理由で！　ユカがそういう女の子じゃないとわかっている、わかっているけど嫌な想像が膨らんでいく。嫌だ、やめろ、なんて顔してるんだ友人A、おまえはケモノかケダモノか！　ユカに手を出すな、出したら今すぐぶっ飛ばしてやるぞ!

「おまたせ」

「ＹＯＵ！　ＪＩＮ！　Ａ!?」

「なに言ってるのトメ君」

ぼ、僕としたことが、取り乱しました……

「もしかしてカカちゃんがうつった?」

「ぐ。ユカも言うようになったねぇ」

「ふふ、だって毎日のように会ってるんだもん」

確かに毎日乱入してくるけどな、あの二人は。しかし可愛い笑顔しちゃってまー。

「……それで、告白したいことって?」

「あー……あ、こほん」

ユカは一つ咳払いして、言った。

「好きな人が、できました」

友人A殺す。とても無残に殺す。

「その人は、特別に目立つわけでもなくて、どっちかというと地味な人。でも間違いなく優しい人」

……ん？　僕の妄想通りの展開じゃないのか。

「何の取り得もない私ですけど、好きになってしまいました」

これって、ええと？

「トメ君、私はあなたが好きです――この贈り物と一緒に、どうか私の気持ちを受け取ってください」

僕は呆けたまま、差し出された包みを受け取っていた。

「……えと？」

「あはは、トメ君おもしろい顔してる」

そりゃするだろう。

「告白のね、やり直しをしたかったの」

――思い出す。ユカの告白を。何か言おうとして、でも言えなくて、結局泣き出してしまったあの時のことを。

「本当はね、このプレゼントと一緒に、こんな告白をしたいなって思ってたの。でもできなくて……」

そう、か。それができるようになったから、やり直してみたかったと。

つまり、内気なユカがそれを言えるようになるくらい、僕らは近づいたってことだ。それを理解すると俄然嬉しくなる。

「そっか。や、照れるけど嬉しいもんだな、あはは……どれどれ、これは何なのかな？」

僕はうきうきしながら包みを開ける。

「……なにこれ」

「ぱ……パンツ」

「な、なんで？」

「あ、あー……あの、去年の、十一月に、寒いなー毛糸のパンツとかほしいなーってトメ君が言ってたのを聞いたから……」

そんなこと言ったっけ？　んー……あーっと、友人Ａとバカ話してるときに言った、かな。あれ冗談のつもりだったんだけどな。

「だから、それが告白のきっかけになると思って！」

……パンツが？

「実はパンツと一緒に告白するつもりだったの！　パンツ告白なの！」

初めて思った。この子おもろい。

「でもね、私、編みものが苦手で……本当はクリスマスに告白するつもりで作ってて、間に合わなくて、バレンタインで告白することにして、でもできなくて、結局いつまでもできなかったから、もういいやって告白しちゃったんだけど」

けっこー思い切りがいいね。

「それから二ヶ月以上頑張って、ようやくできたの！」

どんだけ手の込んだパンツなんだ。

「だから、付き合ってからの最初のプレゼントにしようと、思ったんだけど、先を越されちゃって、がっかりしたんだけど」

最初のプレゼントがパンツって嫌だなぁ。あ、や、でも、それが彼女からなら……そんな嫌でもないかな、うん。そうだ、パンツはいつも身につけるものだし。きっと彼女を思い出すたび、パンツを装着した下半身が温かい気持ちになるに違いない。

「でも、できたから。はいプレゼント！」

「ありがとう！」

僕は喜んでそれを受け取った。

帰りになんとなく友人Aを殴ってから、ユカと一緒に帰った。寄り道して遊んだりもした。家に帰って、今日あったことを振り返って、一人でニヤニヤしていた。

そして翌朝。

ユカが待ち合わせ場所に立っている。

僕の彼女。

僕の自慢の彼女。

守りたいと思った。高校生にできることなんてたかが知れているけれど。

「おはよう、トメ君」

その笑顔に誓う。恥ずかしすぎるセリフだけど、いつか言えたらいいな。

「おはよ、ユカ」

「はいてきた？　じー」

「見せないからな！」

「……端っこだけ」

「見せないってば！」

まったく、男子の純情を考えてほしいものだ。僕はむすっとした顔で先に歩きだした。

「あー、待ってよトメ君」

ドン、と。

軽い衝撃。でも歩こうとしていた方向へまっすぐ背中を押されたから、面白いくらいに浮いた。

地面に向かってごろりと受身。昔から姉の暴力に関わってたおかげでこれ得意なんだよね。体が勝手に動いてくれた。だから余裕があったので、視線を滑らせる。

僕がさっき立っていた場所を車が通り過ぎた。

浮いてる女の子がいる。

その子は僕よりも高く、僕よりも速く、僕よりも強く地面に叩きつけられて――ひしゃげた。

## カカの天下７１７「過去、終わりの時間」（後書き）

いつか書いたと思いますが、トメの過去に特別なことはありません。それはどこにでもある不幸、不運。

もちろん当人にとっては特別なことですが。

過去を振り返るのはそろそろ終わり、過ちを思い出したら現在を動かしましょう。

ところで風邪をひきました。うぎゃあ。喉がやヴぁいので、今日は店の裏でドリンク作りと洗い物に勤しみます。まぁどうせ土曜の忙しいドリンカーをこなせるのは私だけだから適材適所さ！（負け惜しみ

店がオープンしてから働き詰めでようやく休みもらった結果がこれだよ！　気の緩みって怖いですなぁ。皆さんも気をつけましょう。

さて、ニンニクと栄養ドリンクと風邪薬で即治す！！

# カカの天下７１８「過去、別れの時間」

ぼくのすきなこが、ねてる。

あかいえきたいをながして、ねてる。

あたまから、せなかから、ながれて、ながれて。

まもろうとおもったのに。

まもられたのは、ぼく。

気がついたら、病室に立っていた。

そう、立っていたんだ。僕には怪我一つないのだから当然のこと。

目の前にはベッドと、その上で半身を起こした少女。額には包帯、布団の中はどうなっているかはワカラナイ。

少女と目が合う。そしてようやく、脳が目覚めてきた。

「あ……」

通学途中、一台の車が信号無視して歩道に突っ込んできた。聞けば夜勤帰りの居眠り運転だったという。

僕を庇ったユカはその車に衝突。頭と背中を強く打ち、即座に入

院――した、はず。その辺はあまり覚えていない。救急車についていった気もするし、立ち尽くしていただけのような気もする。学校に行った気もするし、休んだような気もするし、事情を聞かれたような気もするけど、自分がどんな言動を取ったのかなんて記憶に残っていない。

「トメく――」

「ごめん！！」

僕の頭の中は、今このとき、面会が許されるこのときまで、ユカのことでいっぱいだったからだ。

「ごめん……ごめん……！」

「そんな、いいんだよトメ君。私が勝手にしたことなんだから」

「いいわけない！」

そうだ、いいわけない。僕は彼氏だったんだ。守るって決めたんだ。誓ったんだ。なのに、なのに、逆に守られて、怪我までさせて、こんな不甲斐ないことなんてない。

「私がいいから、いいんだよ」

優しい言葉が僕の胸に突き刺さる。痛い、その言葉が優しいほど、感じる痛みが増していく。

「……だって、ユカさ、身体、どうなった？」

ユカは細い肩をびくりと震わせる。そして恐る恐る、しかし事実を教えてくれた。

「額と、頭に傷……それから背中に傷で、その」

「それから？」

「下半身が、動かなくなっちゃった」

歩けなくなった――薄らと残っているそのセリフ。多分、医者とユカの家族が話しているのをどこかで聞いたんだと思う。

それを聞いた瞬間、ただでさえ絶望のどん底だった心がさらに叩き落された。歩けなくなった、下半身が動かない。聞いたことがあった。背中を強く打ち、脊髄が傷ついたときに起こる半身不随という症状。未だに治る見込みはないとされる障害。つまり、ユカはこの先、ずっと歩けないままなのだ。

「ごめん……本当に、ごめん……！」

僕は……僕は……僕の、せいで、彼女の人生を、滅茶苦茶にしてしまったんだ……！！

「なんでも、言うこと聞くから……これから何でも言うことを聞くから」

「トメ君！？　そんな、やめてよ！」

「許してくれなんて言わない。僕はずっと君と一緒にいて、罪を償っていく」

「そうじゃない、そんなの望んでない！　私はただ、一緒にいてほしいだけで」

「うん、一緒にいるよ。これからずっと」

「違う……そんなの違う……私はただ、好きな人と」

「うん、僕は君が好きだ。だからずっと傍にいる」

それが、今の僕の精一杯の言葉だった。

「そんな……それじゃ……」

伝わったはずだ。

「そっか……そうなんだ……」

伝わったはず。

「やっぱり……そうなんだ」

伝わっ――

「出てって」

え。

「なん……て？」

「出てって」

伝わって、ない？

なんで？　なんで？　なんで――

「なんで、そんなこと、言うんだよ」

僕たちは、両想いではなかったのか。

僕たちは、ずっと一緒にいたいと願っていたのではなかったのか。

僕のせいでユカが怪我をした。だからより一層、一緒にいようと誓ったんじゃないか。なのに、なんで？

「私は……今まで通りに一緒にいてほしいの」

「それじゃ僕の気がすまな――」

「そんなの嫌！」

「どういうことだよ！？」

「そんな目で見ないで！！」

「……！？」

「そんな、可哀想な人を見るみたいに、私を、見ないで」

え、や、違う、そんなつもりは、ない！　そうだ、違う！！

「違う！　僕はただ、ユカのことが好きだから！！」

「そう、だよね……トメ君は、ただ、私がフラれるのが可哀想だから、受け入れてくれただけなんだよね……」

「ち、違う、違う！　僕は本当に好きだから！」

「それでも私は好きなのに……好きだから一緒にいてほしいのに……」

「なら、なんで僕を拒否するのさ。好きだって言ってるのに！」

なんで？　なんで届かない？

「でも、いいの。私はずっと好きだから。だから、あなたのためになんでもできる」

ユカは今、泣いてるんじゃないのか？　僕では慰めてやれないのか？

「そして今、あなたの心にとって一番優しいのは――私がいなくなること」

後半の声は小さすぎて聞こえなかった。

でも、次の言葉はハッキリと聞こえた。

「恋をなめるな」

それは僕に言ったのか、それとも自分に言い聞かせたのか。

「……わかったわよ」

「なにが――」

「トメ君。いいえ、トメ。あなたが憎い」

僕は息を飲んだ。

ユカが初めて見せる形相で自分を睨みつけていたからだ。それは言葉の通り、穏やかで優しいユカには似合わない、憤怒の表情。

「よくも私を歩けなくしてくれたわね、よくも私の顔に傷をつけてくれたわね。おかげで私の、女のとしての人生が台無しよ！！」

言葉が、出ない。

「どうしてくれるの？　どうしてくれるの？　罪を償う？　できるわけないでしょ。二度と歩けないのよ？　私に足をくれるの？　顔を治してくれるの？　できるもんならやってみてよ」

その罵声を受けながら、僕は驚いていた。

でも、心の片隅で安堵もしていたんだ。ああ、これがユカの本音なんだと。

「できないでしょ。できないよね」

犯した罪を叱られて、罪を償っているつもりになっていた。『こ

れからずっと一緒にいる』という不確かな罰よりも、はっきりと見えるお手ごろな罰をもらって安心したんだ。

「じゃあ、消えてよ」

僕は、謝りたかった。

「謝って、私の前から消えてよ」

犯した罪を償うために、相応の罰を受けて、そして謝りたかった。

「……本当に、すまなかった！」

だから、謝った。

「よかったわね、謝れて」

そしてようやく気づく。

「これで満足？」

自分が何もわかっていないことに。

打ちのめされた僕は、再び記憶が曖昧なまま家に帰ってきていた。

それから時間がどれだけ経ったのかワカラナイ。日を跨いだのかも知覚外。

ユカに何を言われたのか、それだけは思い出せる。それしか思い出せない。ずっと頭の中を回っている。何が間違っていたんだろう。何が食い違っていたんだろう。何もわかってないことはわかった。自分は何かを勘違いしている。もしくは、していた？　わからない、わからないわからない……

全て幻聴だと思いたい。こんなに頭がふわふわしているんだ、きっと夢だ。そうそう、幻聴だ。ユカの悲壮な声も震えながらの罵声も、去り際に聞こえた泣き声も、きっと幻聴。

「とめにーちゃん？」

「……ん」

カカ、か。あれ、ここ、どこだ？　台所、ああ、水を飲みにきたのか。

「とめにーちゃん、大丈夫？」

「あぁ……こんなぼくを、しんぱい、してくれるのか？」

「うん。カカ、とめにーちゃん好きだもん」

「好き……か。はは」

好き。

好きか。

言われると一番、嬉しい言葉だよな——待て。

ぇ。

待て、待てよ。待て待て待て待て待て。

まさか。

『言えたらと思うけど言えない――』

僕は。

『可愛い、なんてことも言えない――』

その言葉を。

『お互い口にしてはいないし、なんて言い表したらいいのかわからないけど――』

一度たりとも口にしていなかったのでは、なかったか？

そう――そう、だ。僕は、恥ずかしいから、わからないから言えないと、そんなくだらない理由で、ユカをどう想っているのかなんて一言も伝えていなかった。彼女の想いに応えようとペンダントを買ったときでさえ口にしなかった。一緒にいるだけで通じ合っていると身勝手な勘違いしていた。真っ直ぐに好意を向けてくれるユカに甘えていた。

だからユカは思ったんだ。

『トメ君は、ただ、私がフラれるのが可哀想だから、受け入れてく

れただけなんだよね』

そして僕が今さら好きと言ったところで届かなかった。ユカの目には『可哀想な自分を励まそうとしてくれる僕』にしか映らなかったから。

だから、謝らせてくれた。そして縁を切ってくれたんだ。

これ以上、僕が罪の意識に囚われないように。

自分という枷から開放するために。

「……よし」

また間違っているかもしれない。

また勝手な思い込みかもしれない。

でもそれなら、またやり直せばいい。

僕はユカが好きだ。この気持ちがあればきっと大丈夫。ユカ、恋をなめるなって言ったよな？

そっちこそなめるな。今度は僕が、どれだけ君を好きか伝えてやる――！

「待った」

あれ、目の前に壁が？

「……あね？」

「どこ行くの」

「……びょういん」

「ダメ」

なんだよ、こんなときまで邪魔するなよ姉。恋が終わるかどうかの一大事なんだ。

「あんた、何日寝てないのさ。ご飯もろくに食べてないでしょ。ようやく部屋から出てきたと思ったら、そんな死にそうな顔して、部屋着のままで、病院まで行くって？　親切心で放って置いてやったけど、もう我慢ならないわ。確かに診察が必要な面だけど、まずは飯食って寝な」

え、何日って？　そんなの知らないしどうでもいい。

「……じかんがない」

「呂律も危うい人間がナマ言ってんじゃないよ。道中で絶対倒れるっつーの。どっちにしろ今は夜、病院は面会も診察もできないよ。救急なら話は別だけど、幸いウチには医学かじってる忍者がいるから」

「やだ……いく」

「ダメ。それ以上無理したらあんた死ぬよ。ほら、まずはもっと水を飲みな」

僕の意気込みとは裏腹に、姉へ抵抗する力は身体に残っていなかった。無理やり気味にお粥やら忍者特性栄養ドリンクやらを飲まされ、無理やり布団に組み伏せられた。

僕の中で一つの答えが出た安心からか、疲労を受け入れた身体はすんなりと睡眠に入ってくれた。その答えが正解なのか、まだわからないというのに。

結果として、その答えが正しいのかどうかはわからなかった。

ユカはとうの昔に別の病院へ移っていたからだ。この街の病院よりも、もっと設備のいい都会へ。

僕はまだ諦めなかった。恋をなめるな、恋をなめるな、そう胸中で呟きながら、タケダ医院の院長先生にユカの連絡先を聞いた。しかし答えはそっけないものだった。

――笠原トメという人にだけは伝えないでほしい、そう言われているんだよ。

病院には守秘義務がある。そういう言い方でもよかったはずだ。しかしそれをわざわざそんな言い方をされた。そこの院長はユカの家とも個人的にも親しかったらしく、知り合いの娘を傷つけられたということで怒りをかっていたのかもしれない。

ともあれ、その一言だけで僕の心は完全に砕け散ってしまった。諦めない？　やり直す？　どうしろというのだ。ガキでは手の届か

ない県外にまで行ってしまった彼女に、行き先すら知れない僕に何ができると？

はっきりとした拒絶の言葉すら、見ず知らずの大人を経由して伝えられた、このちっぽけな僕に何ができると？

数日間も何もせずに、部屋に閉じこもっていただけの僕に何ができると？

結局、僕は恋をなめていた。

そして、高校生にできることなんて、本当にたかが知れていたんだ。

「とめにーちゃん、大丈夫？」

そして、何度かけてもらったかわからない声。

「カカ……」

「心配」

壊れる寸前だった僕を支えてくれたのは、この声かもしれない。

やりきれない僕の想い。心を伝えることができなかった僕の未熟さ。それをこの、素直な妹を育てることによって学ぼう。そう思った。

この先、妹が本当に愛しくて育てることになるのだけど、それを自覚するのは数年後の話。それまでは、そんな自分勝手な馬鹿な理由で妹を可愛がっていた。

僕が、子供だったから。

そして、それは、今も……？

それは、もう一度、面と向かって話してみないとわからない。

再び現れた、彼女と。

## カカの天下７１８「過去、別れの時間」（後書き）

過去編の過去話、終了です。
しかし過去編はもう少し続きます。
過去を踏まえて現在へ。

# カカの天下７１９「れでぃー？」

トメです。

過去の話を一通り語り終えると、一同は誰からともなく「はー…」と息をつきました。

気がつけば皆して猛然と食べ始めていたチョコに誰も手をつけていませんでした。それほど僕の話に聞き入っていたのか……

あ、全部食べ終わっただけか。すんげー量あったんだけど。ていうか僕は数口しか食べてないんだけど。

ともかく。いま我が家の居間にはなんか大人数が集まっています。僕、カカサエサユカ、テンにサラさん、友人Ａ。

……友人Ａ？

ああ、気のせいだ。久々に話題に出したから集まってきたのかな、亡霊が。

「重い、ですね」

恐る恐る口にするサラさん、それに深々と頷くテン。しかし子供たちはどこか納得していないようだった。

「よくわかんないや。ね、サエちゃん」

「うん。二人とも好きだったんならー、うまくいくもんじゃないの

ー？」

そうだったら世の中もっと優しくなるんだろうけどねぇ……

「ガキどもよぅ。これはな、そういう油断してっと痛い目見るぞって話だ。覚えておいて損はねーぞ」

「納得できませんっ！！」

おお、サユカちゃん？

「だってトメさんに好きになってもらっておいて不満を言うなんておかしいですっ！！」

「さ、サユカちゃん？　それあなたの主観ＭＡＸですから……」

「だってトメさんですよ！　このトメさんにですよ！？　いいなぁっ！！」

「……それが本音だろが」

なんともコメントしづらいなぁ。

「それもありますけど、それだけじゃありませんっ！　特に最後、病室のときの話！　事故は確かに残念でしたけど、なんでそんなケンカになっちゃったんですか？　なんで即別れることになっちゃったんですか？　理解できませんっ」

僕も理解できてないと思う。でも、わかってることもある。

「サユカちゃん、恋愛って感情で動くもんでしょ？　感情ってその場その場で生まれたり消えたりするもので、理屈なんか関係ないでしょ？　たとえお互い好きであっても、どんなに相性がよかったとしても、どんなにうまくいっていても……悪いタイミングで悪いことが重なるだけで、壊れてしまうこともあるんだよ。嘘みたいなスピードで良い感情が消えて、どこにあったのかと思うほどの嫌な感情が生まれてきて……」

大勢の人にとって恋愛というモノは、心の中で最も激しく揺れる天秤のようなものだと思う。生きる活力に、死にたくなる絶望に、嬉しい気持ちに、悲しい気持ちに、些細なことであっさりと傾いてしまう。

「むーっ！　でもわたしは、トメさんが相手なら何があっても別れたくありませんっ」

そう言ってくれるのは嬉しいし、否定したくはない、それでも僕は大人になって知ってしまっている……その言葉も絶対じゃないことに。

信じればいい。その人の想いを。

ただそれだけのこと。

でも大人になるほど、その難しさは増していく。

「やっぱわかりまへんな、サエはんや」

「同感ですわーカカはんや」

……まぁ、小学生のうちから恋愛の難しさに理解を得られても、それはそれでムカつくからいいんだけど。

「おし、教師としてわかりやすい例を出してやろう。サユカよ、てめぇ他に思ったことねぇか？　トメの話を聞いて」

「はいっ！　わたしもその思い出話に登場させてほしいですっ！　そしてユカさんより先にわたしが告白して、事故らずに幸せに暮らしたいです！」

んな無茶な。

「さて、もしオレがトメだったとしよう。そして仕事帰りでボロボロに疲れてカルシウムも足りてなくてイライラしてる状態だったとしよう。そしてサユカのそんな戯言を聞いたとしよう。どうなると思う？　オレはキレる」

オイ。

「そして勢い余ってサユカを殺してしまう」

余りすぎ。

「でもテンカ先生ならあり得る！」

カカ……おまえさぁ……たしかに！！

「そういうこともあり得るのが感情ってもんだ。いざというとき感情が爆発したらどうなるかわかんねぇのが人間なんだよ。恋愛ごとしかり、事故しかり」

「なるほどー、恋愛が絡んだサユカちゃんが何を言い出すかわからないのと同じですねー」

「なによっ！　わたしがいつ変なこと言った!?」

『さっき』

こんな例題で何か学んだのだろうか。教職ってレベルたけぇ。

「ま、偉そうに語ってみたものの……正直、トメの恋愛に関してはオレもなんとも言えねーな。愚痴くらいは聞けるがよ、結局恋愛のこじれなんつーもんは、本人同士にしかわかんねぇもんだしな」

「そうですねぇ、本当にトメさんが好きって言わなかったのが悪いのか、それとも他に悪いところがあったのか。そればっかりはユカさんと話してみるしかないんじゃないですか？　ちょうどよく現れたわけですし」

大人な二人の意見――うん、同感だ。

「そう、だよな。僕もあれから色々考えたし。少しは大人になって落ち着いたと思うし」

懐からそれを取り出す。

あのときユカに庇われて突き飛ばされたときに地面にぶつかったのか、角が欠けてしまった銀の三角板のネックレス。部屋にしまってあったのを語り始める前に持ってきておいたのだ。これがあれば、より思い出せると感じて。

「なんだか皆に話してるうちに、僕の中でも整理がついたみたいだし」

「うんうん、そういうことってありますよね」

「おう、相談する時点で自分の答えは決まってるとも言うぜ」

そこまでハッキリしてるわけじゃないんだけどな……

「ただ、いくら事故があったといってもそれは昔のこと。何をどれだけ言うのか、自分の中で決めておいたほうがいいと思いますよ、トメさん？」

昔のこと……過ぎたことで熱くなりすぎるのも栓ないこと、か……うぅむ、さすが現実的な女性陣。

お？

チャイム音？　まさか。

「私見てくるね」

たったったーとカカが玄関へ走る。

「ここで本人が来たらすげぇな」

「それはタイミングいいにも程がありますよテンカさん。そんな空気を読む魔法でも発動してるなら話は別ですが」

玄関のほうからカカの声が聞こえてくる。「お！　久しぶりー。元気してた？　生きてた？　よかった」というやりとりから察するに……誰だ久しぶりって。想像つかないな。

あ、もしかして祖母ちゃんか？　そういやあのババァ、しまっておいたユカからのパンツどこ持っていったんだか――

「まぁ上がって上がって」

そうしてカカに通されたお方は……老人ではあった。でも祖母ちゃんじゃない。しかしどっかで見たような……

「お久しぶりじゃのう。その節は世話になったのぅ」

「……あ！！　たまにコタツ入りにきた、名前も知らないじーさん！」

「そういえば名乗ってなかったの。サワサカっちゅーもんじゃ。苗字は違うがユカの祖父での」

へ？　ユカの？

それって、まさか。じーさんがたまにうちに来てたのって……？

「はいはーい、お邪魔するわよ。うわ、なにこの人間密集率。あー狭い家にこんなにいっぱい女連れ込んで……トメ、あんた幸せそうね？　ワタシと違って」

――そしてご本人の登場となる。

「本当に来るとは思わなかったぜ」

「どうしましょうどうしましょう、修羅場ですよキャーキャー」

「サラさんっ！　またトメさんが苛められるかもしれないってのに何で瞳キラキラさせて嬉しそうなんですかっ！？」

「もちろん理不尽な展開になったら口を挟んで助けますけど、女としてはこういうの傍から見るのもオツなんですよね」

「わかるわかるー」

「……なんでサエちゃんがわかんの」

「まーまー、皆して隅によって見てようよー。あ、おじいちゃんもこっち混ざるー？」

「ほっほっほ、チョコはあるかえ？」

「あーほれ、これ余ってたからやんよ。うめぇぞ」

「ふほほ！　女子にチョコをもらうとは何年ぶりかの！　格好いい女子よ、結婚してくれ！！」

「死ね」

「でもテンカせんせー。その人どうせもうすぐ歳で死ぬから保険金を」

「サエすけ黙ってなさい。始まるわよっ」

「トメ兄ＶＳムカシノ女。ラウンド１！　れでぃー、ふぁいっ」

## カカの天下７１９「れでぃー？」（後書き）

えー本当は次の話で過去編を終えるつもりでしたが、もう一話続くことになりそうです。

理由としましては、そこまで一気に書く体力がないからです。またもや私事ですが、絶賛風邪っぴき中で高熱ぼかーんで座ってるだけできっつい状態です。なので勘弁してください……ちなみに感想返信も、も少し溜めさせてください……もちっと熱ひいたら返しますんで。

しかし１８時間寝てもひかない熱ってナンナンデスカネ。

あ、あと励ましのメッセージくださった方々、ありがとうございます＾＾

これからも頑張っていきますのでよろしくです！！

**カカの天下７２０「ラウンド１、ふぁいっ」**

「ちょっと言い忘れたことがあってね」

トメです。

「あんたの家の場所忘れたから、サワサカのおじいちゃんに案内してもらったのよ」

なんか来襲受けました。

「なにその顔、ワタシが来たから嬉しいでしょう？」

「……涙が出るほど」

しかし好都合といえば好都合。こっちも言われっぱなしでおとなしく引き下がるほど素直な男に育ってきたわけじゃありません。

「言い忘れたこと、ね。それは僕のほうも同じだった」

「へぇ？　なにかしら。聞いてみたいわぁ」

「ユカ、あのときは助けてくれてありがとな」

深々と頭を下げたのでユカの顔は見えない。しかし小さく息を飲んだ音が聞こえた気がする。

「……へぇ、『いまさら』そんなこと言うんだ」

「ああ、『やっと』言えた」

似たような、しかしはっきりと違う意味を込めた言葉をもって頭を上げる。

ユカの瞳をまっすぐ見据えた。

「さっき、昔のことを思い出してたんだけどさ。あの事故があったときの僕は『自分のせいだ』とか『自分が悪い』とかばかり考えて、一番大事なことを忘れていたと思うんだ」

「大事なこと……そうか。友人Ａの名前だね」

「それは全然大事なことじゃない。カカ、ちょっとおとなしくしてな」

「はーい」

おとなしく観客席に戻っていくカカ……は？　観客席？　ま、まぁいいや。なんかいつものことだし。

「ともかくだ、まずはお礼を言うべきだったんだよな。ユカ、僕を守ってくれてありがとう」

本当は僕が守りたかった。そんなことを考えていた僕は、素直にこう考えることができなかった。しかし今は違う。あのときのちっぽけなプライドを置いて、大事なことをきちんと見ることができるはず。

「……言いたいことは、それだけ？」

「や、あともう一つ。足、治ったんだよな。おめでとう」

「……！」

ユカはしっかりと自分の足で歩いて居間へと入ってきた。さっき外で会ったときはおぼつかなかった足元もかなり自然で、今も自身の足で立っている。様子から見て義足ではないだろう。

あれ？　義足、じゃないよな？　なんでそんな複雑な顔してるんだユカ。

「どうした？　もしかしてやっぱり治ってなかったか？　だったら悪いこと言った」

「……治ったわよ。本来なら治らないはずの足が、奇跡的にね」

「そうか、ならよかった」

「……よかった？」

キッと睨んでくる。よぅし、そろそろくると思っていた。

先に言いたいことは粗方言った。さぁこい。

「よかった？　何がよかったってのよ！？　ワタシはこの足が治るまでずっと、どん底の人生だったのよ！！」

「そうなのか？」

「随分と他人事のように言うのね？　こっちはあんたのせいで不幸になったって言ってるのに。あれだけ僕のせいだ僕のせいだーってうざいくらいに連呼しながら謝ってたのが嘘みたい。ちなみにそのときワタシは心の中であなたを『ごめん鳥』と命名していたわ。ごめんごめんごめんーピーチクパーチクとよく鳴いたこと」

「で、その鳥を料理しにやってきたってか？」

「そうよ。から揚げにするか焼き鳥にするか楽しみにしてたのに、もういないんですもの。あー料理したいわぁ。自分の罪を認めて謝り続ける殊勝な鳥は現れないかしら？」

「リクエストにお応えしたいところではあるけど、お礼を言うべき相手にごめんって言い過ぎると卑屈な光景になることに最近気づいてね？　そういうの嫌だろ、ユカは」

「そんなこと言ったかしら？　誰かさんのおかげで人生を狂わされた可哀想なワタシに対して卑屈になるなら大歓迎だけど」

「おかしいな。可哀想な人を見る目はやめろって、誰かさんに言われたことがあるんだけど」

「……よく覚えてるじゃない」

「おかげさまで」

さっきは久々に会って動揺した。

でも落ち着いて、過去を振り返って、改めて会ってみれば……

「なんだか面白くないわ。トメ、なんであんたそんなに普通なの？さっきはあんなに動揺してたくせに！」

「や、ユカが思いのほか元気そうで安心したから」

「んなっ！？」

そうなんだよな。

恋愛絡みで色々あったにせよ、久々に会った知人が元気なのが素直に嬉しかった。歩けなくなって僕の目の前から消えて、どうしているのかずっと気になっていたから。

元気とわかると、過去の一部はどうでもよくなった。

ただ、あのときの感謝を伝えること以外は。

「あ、あんたって人は……ワタシはあのときの別れ話、けっこー悶々考えたりしてたってのに！」

「あぁ、それは僕もだ」

「じゃあそれについて何か言うことないわけ！？」

「そうだな。結局お互いがどう思っていたのか話したいなーとは思う。何が悪かったのか」

「あんたが悪い！」

「うん。そして君も悪い」

「……どっちも、悪いと？　よくもぬけぬけと言えるわね」

僕だけが悪い、なんて格好つけたことは言わない。だって大人だもの。客観的に見てそうだとわかっている。両方が悪いからすれ違いが起きる。そして『こちらが悪い』や『向こうが悪い』と片方に決め付けようとするから軋轢は広がっていくんだ。

お互いの悪いところをきちんと認め合わないと、人と人はうまくいかない。

「ああ。僕らはお互い悪かった。僕は気持ちを伝えなかったのが悪かったし、ユカは……そうだな。何が悪かったと思う？」

「ワタシは何も悪くない！」

「そりゃすげー」

「冗談じゃないわよ？　本気よ！　ワタシは悪くない！　悪く、ないもん……」

「僕はそうは思わないけど」

「あんたが知ってるのは病室での別れ話までしょ！？　それ以降の話は知らないくせに！」

大人として語りかけていたという自信が揺らぐ。

それ、以降？

「何か、あったのか？」

「……あったのよ。色々」

ユカが俯く。表情が金髪に隠れる。違うのは髪の色だけ、いつか見た少女の姿が重なった。

「ワタシがあんたにフラれた後」

「なぁ、そういえばあれって僕がフッたことになるのか？」

「あんたがごめんなさいって言ったんだから、あんたがフッたのよ」

意味が違うと思うけど、まぁ、いいか。

「ワタシは県外の病院へ行くために引越した。それからずっと病室に閉じ込められっぱなし。だって歩けないんですもの」

……なに？

「閉じ込められっぱなし？　この、数年間？」

「そうよ。高校は中退。新しい街に行ったからって病院の中じゃ知り合いなんかできるはずないし、この街にも特別に仲のいい友達は元々いなかったから……転校しても文通、なんて漫画にありそうな展開もなし。病院の人たちは冷たい人ばかりで話すこともない。ワタシにとって会話できるのは両親だけになったわ。そう、仲が悪くて底意地の悪い両親だけ、ね」

はぁ、とため息をついたのはサワサカのじいさん。そういえばこ

の人、家族と折り合いが悪いからってうちに来てたんだっけ。

「ワタシは孤独になった。会話できるのが嫌な性格の両親だけで、元はおどおど怯えて接していたはずのワタシもソレにいつの間にか感染して、気がついたらグレてた」

……そう、だったのか。

「ワタシの下半身は一生動かない。この数年間、何をやってもダメだった。死にたいと思ったわ。『そうだ、クリスマスに死んじゃおう』って、去年に決めた。そう決めて、もっと死んだように過ごして……いざクリスマスになったとき、枕元に見覚えのあるパンツが置いてあったの。そしてあのときのことを思い出して、なんとなく生きる気になったわ。『正義の忍者より』っていうふざけたカードがついてたけど、なんだったのかしらね？」

オヤジ……ババァ……そういうことか。

「ちょっと元気が出て。どうせ治らないならどこの病院にいても一緒だろうって医者に言って、ワタシはここに帰ってきた。知り合いのタケダ医院で、窓からいい景色が見える一室をもらって。するとね、賑やかな景色と、おもしろいおじいちゃんと、ときどき乱入してくる楽しい子供たちのおかげで、灰色だった日々はようやく鮮やかな色を見せてくれるようになってきた。そして、心が元気になったからかな？　奇跡的に足が治って――トメ、あなたと再会した」

重いため息。しかし話はもっと重い。

僕は卑屈にならない。そう決めた。しかしここまではっきりとした闇を見せられると怖くなる。謝りたくなってしまう。僕のせいで

彼女の一生を滅茶苦茶にしてしまった――あのとき感じたその気持ちは、やはり間違いなかったのではないかと。

「じゃあ、ユカ、君は」

「元気そうに見えたからって、元気にやってたわけじゃないのよ。ワタシはずっと生きてなかった……死んでなかっただけ。最近、ちょっと生き返ったけど。あなたに会ってからは特に」

ユカが顔をあげた。

「あなたが憎い。その憎しみが、ワタシの生きる燃料になった」

睨んでくる。

「足が治って、あなたに会って……運命かと思う程のめぐり合わせ」

近づいてくる。

「足あれば、あなたの元へ歩いていける」

近づいてくる。

「あなたが目の前にいれば、触れられる」

手を伸ばしてくる。

「ワタシは不幸だった。あなたのせいで」

両手は僕の首へと。

「だからワタシは、あなたを殺す」
そして締め上げ――
「なんちゃって。ぜーんぶ嘘」
――ることもなく両手を僕の肩へと置いて、ぺろっと舌を出したのだった。
「は？　嘘、嘘って、どっからどこまでっ！？」
「全部と言うとるから全部じゃの」
「だから全部ってどこからどこまでなのー！？」
「いやぁドロドロ楽しい闘いですけど、どうなるんでしょうか！」
「サラさん、あんた泥レスでも見てる気分だろ」
「よーし、トメ兄ＶＳ実は嘘つきおねーさん？　ラウンド2、れでぃー、ふぁいっ！」

## カカの天下７２０「ラウンド１、ふぁいっ」（後書き）

どこからどこまでが嘘か？
や、だから全部ですよ奥さんＨＡＨＡＨＡ！

**カカの天下721「ラウンド2、げーむせっと」**

「う、嘘って……何が！？」

ど、どうも。首に手が伸びてきて色々と覚悟してたのがスッポーンと何処かへ飛んでいってしまった感じのトメです。

しかし当のユカは意地悪そうに笑っていて、

「だーから、全部よ全部」

全部……

全部ってことは、最初から最後までってことだろ？　最初……最初ということは！

「ユカ、まさか君は女じゃなかったのか！？」

「どこまで全部なのよ！！　んなわけないでしょ！」

「じゃあ君は……本当はユカじゃなかったりするのか！？」

「そこは本当よ！」

「じゃあじゃあ！　あのとき付き合ってほしいって言ってきたのが嘘か！？」

「あーあー！　あんたいつからボケ役になったのよ！　あんな恥ずかしいこと言っておいて嘘なわけないでしょ！？　嘘っていうのは、

事故に遭ってから先のことを言ってるの！」

そ、そうなのか。や、だってさ、ここまできて嘘なんて言われたら動揺するじゃん。全部って言われたら全部って思うじゃん。

「あんたさ、ワタシが歩けなくなったって知ってたわよね？」

「あ、ああ。半身不随だろ？」

「半身不随が治るわけないでしょ」

……え？　だって今、ユカ、立ってる、ぞ？

「半身不随ってのはね、脊髄に損傷を負った人がなるもんなの。脊髄の治療法はほとんど見つかってないから、不随って言葉のつく症状は治る見込みがないわ。半身が動かなくなるほど大きな損傷なら、なおさらね。それが奇跡的に歩けるまで治ったら……大騒ぎよ？世界中の医者が放っておかないわ」

開いた口がふさがらない。その奇跡的に治ったはずのユカの周りで大騒ぎなんか起きてないし、それでも普通に歩けてるから、つまり？

「大体ね、もし治ったとして、数年間も使ってなかった筋肉がいきなり動くと思う？　一体どんな魔法なのよそれは」

魔法……そう、だよな。たしかに。

「ていうか車椅子ってもんがあるんだから、たとえ動けなくても病室に閉じこもりっきりになるわけないでしょうに」

でも！

「僕は確かに聞いたぞ！　あのとき病院で、ユカが歩けなくなったって！　医者だって――」

「歩けなくなったのは本当よ？　でも誰が半身不随なんて言ったのかしら」

は？　事故で背中を打って半身が動かなくなったんだから、半身不随じゃないのか。

「ワタシは頭も打ったでしょ？」

「それでそんな性悪に」

「黙れ。あんた意外と余裕あるじゃない」

すみません、ツッコミ染み付いてますんで。

「人はね、脳出血による半身麻痺っていう症状もあるのよ。あのときの事故でワタシが負ったのはそれ。症状とリハビリ次第で、走れるようにはならなくとも普通に歩くくらいは回復する症状よ。実際、ワタシは二ヶ月くらいで回復したしね」

「……じゃあ、それからは」

「普通に生活してたわよ？　向こうの学校いって、普通に友達作って、普通に就職して。あー、でも恋愛ごとで吹っ切れたおかげか、さばさばした性格になっちゃって前より友達できたわね。ノリで髪

も染めちゃったし」

「病院に、ずっといたって」

「最近まではいたわよ？　風邪で」

「かっ！？」

「うん。たまにこの県に遊びに来たらひいちゃってさぁ。こっちの家はなくなってたし、ついでに病室を宿代わりにして滞在してたのよ。タケダ医院とは顔見知りだしね。そしたら途中でインフルエンザなんかもらっちゃって、オチビちゃんたちとは面会謝絶になったりしたけど」

オチビって、クララちゃんとタマちゃんのことだよな。

「そんなわけで、あの事故の後もワタシってば意外と楽しい人生送ってたのよ。走れなくはなったけど、もともと走るの嫌いだから別に構わないし。額の傷も整形いったら治ったし。あんたを恨む理由はほとんどないのよねー実は」

腑に落ちない。

しかし言われれば思い当たる節はある。筋も通っている。しかし理解できない。

「なんで、そんな嘘を」

一生の傷を負わせてしまったと悔やんだ。そりゃ走れなくなったのは同じだけど、あれからもユカは歩くことができていて、きちん

と楽しい人生を歩んでいたと知れたなら、どんなに安心できたことか。

そんな僕の非難の声に、ユカはたった一言であっさりと応えた。

「嫌がらせよ」

意地悪げな笑みを一層、深めて、

「これは単なる嫌がらせ。うまくいかなかった恋愛の八つ当たり」

そして、緩めて、

「ワタシ、馬鹿だったよね――トメ君は私が救ったんだって、いい気になってた。これで感謝してもらえる、ずっと自分のことを想ってもらえる、そんなヒーロー気分でいたの。あ、ヒロインか」

久々に見る、柔らかい笑顔で告白する。

「トメ君は謝ってくれたね。必死で。それを見たら私、自分が情けなくなっちゃって。この人はすごく傷ついたのに、なんで私は気分をよくしてたんだろう。なんで私は、これでトメ君は私のものだ、なんて、もっと思っちゃったんだろう」

でも、どこか泣きそうな声。

「足が動かない、なんて。治るのに、治らないみたいな言い方をわざとして、もっと気を引いて、もっと好きって言ってもらって――そんな自分の汚さに我慢できなくて、結局はあなたと離れた。これはあなたのため、なんて、格好いい言葉を振りかざして」

結局は、綺麗な自分でいようとするための汚い行動だったのだと、ユカは独りで懺悔した。

「そ、っか。やっぱり」

あれからずっと心を学んで、大人になって。

出した結論は正しかった。

「子供だったんだよな、お互い」

「あー……悔しいけど、その通りね」

未熟だらけの恋だった。

その恋は最後まで熟さなかったけど。

「――あーあー、安心した。そっか、元気でやってたんだ、おまえ」

「――あーあー、すっきりした。そうよ、元気元気。あんたの落ち込んだ顔みてさらに元気になったわ」

「なんだそれ」

「嫌がらせ、だーいせーいこー」

こうやって笑いあえるのなら、これはこれで、いい恋だったのではないだろうか。

「ほい」

「おっと？」

ぱし、と反射的に受け取ったのは見慣れた包み。コンビニ辺りで売っていそうな、赤いラップに黄色いリボン。

「さっき出会い頭にあげたチョコさ、クララちゃんが買ってきたやつだったのよ。人からもらったものをあげるのもどうかと思ってね、改めて買ってきた。あげる」

「これ……まさかチョコ？」

「もちろん義理よ！　それともチョコはお腹いっぱいかしら？」

「……や、ちょうど、数口しか食べれなくて物足りないと思ってたところだ」

「ならよし！」

用事は終わりとばかりに踵を返すユカ。多分照れてる、絶対照れてる。彼女の嫌がらせに振り回され、嫌な想いはたくさんしたかもしれない。それでも、こうやってわざわざチョコを買いに足を運んでくれたりする優しさが嬉しい。あのころの恋心はさすがにもうないけど、昔の馴染みというだけで、人はなんでも許せてしまうのかもしれない。

「また来――」

いよ、と言おうとしたとき。

「っ！？」

ガクリ、とユカの膝が曲がった。崩れた体勢、近くにあった壁にしがみついて耐えるその姿は、まるで、脚に力が入っていないように見える――

「お、おいユカ？」

「あー、大丈夫大丈夫。さっきチョコ買いにいくついでに薬も飲んでさ。熱っぽかったから……インフル治っても風邪は治ってないみたいでさ、うん。ちょっと強い薬で、ふらっと」

「……本当か」

「なに」

「まさか、おまえ、今のが嘘で、本当は」

やはり半身が動かなかったのが、奇跡的に治ったんじゃないのか？

そうだ、治らないものが治る奇跡があるんなら、使ってない筋肉がいきなり動く奇跡だっておまけで付いてきてもいいはず。この最後の嘘こそが、僕の心を助けるための大嘘で――

「あー、狼少年の嘘ね。ワタシの言葉はみんな嘘かぁ」

「や、だってさ！　もし嘘なら」

「もし嘘なら、誰か幸せになれるの？」

言葉に詰まる。

そうだ、さっき救われたのは誰だっけ？

「この真実の何が悪い？　何か悪いなら、あんたが正しいことを言ってみろ！」

何も言えない。これ以上にいい真実なんてないんだから。

事実を受け止めるのが大人だ。

しかし、「これが真実だ」と断言する大人を認めることも、また大人なのだ。他人には他人の事情がある。そしてその他人が、大人として、自身を、事情を「真実だ」と象徴するならば、誰にも文句は言えないのだ。

それは、その人が決めた真実なのだから。

「……一人で、帰れるか？」

「帰れるわよ。子供じゃないんだから」

あくまで意地をはるユカに苦笑する。こんな子だとは思わなかった。こんな面をあの頃に知れたら、もっと何か変わっていただろうか？

「また、来いよ」

言えた。

いろんな事を置き去りにして、ただこれだけが言いたかった。

「うん」

そしてユカは頷いてくれて。

僕らはまた会うだろう。そして喧嘩になるだろう。今日のやりとりだけで予想がつく。それはなんだかんだで、きっと楽しい。

それでいい。細かいことは置いておこう。

曖昧でいいのだ。はっきりさせる必要なんてないのだ。

だってお互いが「それでいい」と言っているのだから。

「あの……一人で帰るって……わし、完全に忘れられてるぞぃ」

「仕方ないよおじいちゃん。私ら今回は空気だったし」

「うーん、勉強になりましたー。人の騙しかた」

「いやぁ、いい試合でした！」

「……約二名、マイペースに楽しんでたのがいるわねっ」

「オレあんまし納得いかねぇな……結局はどっちなんだ？　白黒つけてぇ。こればっかりは性格か」

「んだね。とにかく試合終了！　勝者は……誰？」

「……いいんですか？　あれで」

「あら、クララちゃん。いたんだね」

「ええ、こっそり覗いてました」

「気づかなかったわ」

「クララ魔法使いですから」

「あーあー、それっぽいそれっぽい！　クララちゃんって魔法使い似合う！　神出鬼没だし、三角帽子とか似合いそー！」

「それで本当にいいのですか？」

「何がかしら」

「クララの魔法のことです」

「何か、魔法をかけてくれたの？」

「……病室、ずっとベッドから下りませんでしたよね」

「歩くの面倒くさくてね」

「普通に楽しんで生きてる人に、なんでわざわざ思い出のパンツが届けられたのでしょうか？」

「トメが恋愛恐怖症になってるから、それを克服させるために戻ってきてくれーって呼びたかっただけじゃないの？　あれトメの親の仕業だろうし」

「一時期、クララたちと面会謝絶になったのは、手術してたのでは」

「んーん？　インフルエンザが発覚したから、誰にも会わずに菌を殺すため」

「クララたちが病室に入ったとき、すごく驚いた顔で『治った……』って言ってましたよね？」

「思いのほか早く治ったから、びっくりしちゃって」

「……」

「他に何かある？　小さな魔法使いさん」

「……いえ」

「そか、よしよし。ところで魔法使いさん？」

「なんでしょう」

「あなたの魔法はなんなのかな」

「……クララ悩みます」

「ふふ、なんで？」

「言い回しが難しいのです……よし、こうしましょう！」

「おー、ぱちぱちぱち」

「バレンタインに幸せを――これがクララの魔法です」

「うん、いいんじゃないかな。それで」

「トメ兄、大丈夫？」

「うー……疲れた……チョコ食って疲労回復」

「いろいろあったバレンタインだったねー」

「なぜだろう……なんかもう一ヶ月近くバレンタインを続けている気がする」

「そんなに疲れたんだね」

「んむ……回復回復」

「一ヶ月かぁ……じゃあもうすぐホワイトデーだね！」

「はえぇよ。勘弁してくれ」

## カカの天下721「ラウンド2、げーむせっと」（後書き）

何かと白黒はっきりつけたがる人がいます。
細かいことを気にしすぎて、全体を見れない人がいます。
過ぎたことに拘って、進めない人がいます。

全て昔の私です。

何かあったとき、自分にとって大事なことは何なのか、ここをこうすればうまくいくんじゃないか、ここは気にしなくていいのではないか。
考えることの連続です。でも人間は欲張りですので、全て考えたくなってしまいます。でも人間、そんなに器用にはできていません。考えるべきことと、考えなくてもいいこと。それをきちんと自分で選んでいかないと、脳みそがパンクします。それに気づくことができたものの実践できているかは別の話……日々精進ですな。

そんな葛藤を元に今回の話を書きました。何が真実とは書きません。でも、それでいいと思いませんか？　所詮は過ぎたことなのですから。今回のことでトメが気持ちに整理をつけて、恋愛する気になれれば御の字です。

ところで。
過去編なげーよ（自分に文句

気がついたらもうすぐ一ヶ月だぁよ。うわ普通のコメディ話書いてないだぁよ。ホワイトデー間近だぁよ。感想返信しないとだぁよ。
風邪も治ったんで、色々と頑張りますかね笑

ではでは、長々とお付き合いいただきありがとうございます＾＾
明日からはまた普通のカカ天に戻りますねー！

## カカの天下722「最近の日々の詰め合わせ、いち」

サエですー。

なんでしょー。なんだか長い間、出番が極端に少なかった気がします。

「ん？　どうしたのよサエすけ」

私の横には同じく出番も存在感も少なかったサユカちゃん。

「失われた時間を取り戻すにはどうするかー」

「なに言ってるのよサエすけ」

よし、思いつきました。

久々に話の主役を張れるとはいえ、時間は有限。短期間で私たちの印象を強める方法とは！

「とりあえずサユカちゃんがヒーヒー言ってれば問題ないと思うのー」

「なんの話よ！？」

「ヒーヒー言わすぞこらー」

「ぐ、具体的には？」

「ヒィィヒィィィ！　言わすぞこらー」

「何も変わってないでしょがっ。わたしはヒーヒーなんて言わないからね！　ヒヒじゃあるまいし」

ヒヒの鳴き声ってそんなんだっけ。

「違ったわ。ヒヒの鳴き声ってウワーウワーだった」

うわーうわー？　なにそのタケダ君みたいな鳴き声。泣き声？

「とにかくわたしはヒーなんて言わないのっ」

「ここに取り出したるはサユカちゃんの妄想ノート」

「ヒィィッ！？」

「愛の例話その一。『わたしは泳がないタイヤキになりたい。トメさんの手で、ずっと炙られていたい。どこぞのタイヤキ君みたいに逃げ出さないの。毎日毎日、ずっと、ずっとわたしの恋心を炙って！　あぶらかたぶら』って最後の何？　あ、ノートの隅っこにあったー。『かしこ、と同じ意味』だって。すごーい」

「ヒィィィィィッ！」

「おー、サユカちゃんが羞恥で悲鳴をあげてるー。でも実際こんな炙られてる光景を目にしたときの一般人の反応こそが『ヒィィィ！！』だよね」

「返しなさいよ！　っていうかどこから持ってきたのよそれっ！！」

「サユカちゃんの部屋の机の三段目の引き出しの一番奥のアルバムに重ねて隠してある『ＬＯＶＥきゃは』ファイルから」

「事細かに答えてんじゃないわよっ！！」

「愛の例話その百三十五。『わたしは愛のから揚げになりたい。トメさんの手でわたしの恋心を揚げて！　ジュー！　上げ上げヒャッフー！』ひゃっふー？　似合わなー」

「ひぃぃぃぃぃあああああああああ！？」

「この最後のあぶらかたぶらはもちろん揚げ油にかけてるんだよね？　あ、するとさっきのも炙りとかけてたのかー」

「もうやめてぇっ！！」

「ヤ。もっとヒーヒー言わすー」

「いくらでも言うわよっ！　ヒーヒーヒーヒー！！」

「もちっと短い間隔で言ってみようか」

「ヒヒヒ

私はこんな感じで日々を過ごしています。たーのしー。

カツコです。

「ただいまサラちゃん」

帰ってきたのは家ではなくお仕事場所、花屋さんです。

「あ、カツコさん。おかえりなさい、どこ行ってたんですか？」

「営業」

「え」

「何件か契約とれたよ。これで今月も売り上げ更新！」

「オチは？」

「は？」

「オチは！？　あなたはカツコさんでしょう！？　違うんですか！」

「や、そうだけど。あたし普通に仕事したらダメなわけ？」

「ダメです！」

「うわぁお、断言されちゃったよ」

「昔の滅茶苦茶はどこへ行ったんですか!?　聞きましたよ、過去の変態ブラコンぶり！　恥ずかしい！　悩ましい！」

「サラさんさ、あんたも今けっこー滅茶苦茶よ?」

口調とかノリとか。

「私のことはいいんです！　トメさんの元カノが現れたんですよ！？　もっと何かないんですか」

何かって言われてもね。

「あんね、サラさん。あたしもトメも立派な大人なんだよ。面倒見なきゃいけない年齢なんてとっくに過ぎてんの。いちいち構わなくても、向こうは向こうでなんとかするでしょ」

「そりゃ、そうですけど……」

さて、今日はどういう理由でトメんとこ顔出そっかな。

……ん?　面倒見ないんじゃないのかって?　構わないんじゃないのかって?

そんなことは一言も口にしてないが、というわけであたしはトメの家に通って様子見しながら日々を過ごしている。別に寂しいわけじゃないよ?　うん。

タケダです。

覚えていますか？　バレンタインで、なんか玉砕して倒れ、公園に放置されていた俺を。

「あ、流れ星」

俺の願いや、いかに。

そんな感じで日々を過ごし――って家に帰ってないのか俺！？　何日もぶっ倒れていたと！？　殺す気かオイちょっ――

インドです。

あ、別にインドにいるわけじゃありません。インドっていうあだ名のノゾミです。

ええと、ですね。私、一生懸命作ったんです、バレンタインのチョコ。ちゃんとカレールーじゃなくて、チョコを作ったんです。いっちゃんに説得されて、辛いものは一切いれませんでした。

だから堂々とタケダ君に渡せると思っていたんです。

でも……タケダ君……バレンタインの日から姿を消したんです。

一体どうしてるんでしょうか。私はそんな心配に身とカレーを焦がしながら（もったいない）日々を過ごし……ふと小腹が空いたのでチョコを食べてしまいました。

なぜか辛かったです。

イチョウです。

最近、買い物途中に通る公園でボロボロのゴミを目にいたします。どことなく人間っぽい気もするのですが、もしもそうだったら怖すぎるので放置していました。

そしてある日。カラスがソレを突いていました。

ソレがぴくりと動くと、カラスが逃げ出しました。

わたくしも逃げ出しました。

それだけの話ですわ。オチがなくて申し訳ありません。わたくしはコメディチックな日々など送っていないもので……え？　そのゴミがコメディチック？

またまたご冗談を。

## カカの天下７２２「最近の日々の詰め合わせ、いち」（後書き）

ここ数日間、過去編で費やした日々を詰め合わせでーって思ったんですけど。

予想以上に出番少なかったキャラが多くて戸惑ってます。ホワイトデーまでにも一つの詰め合わせで全員分をーと思っていたのですが、ちょっときつそうですね。ホワイトデー挟んだ後に詰め合わせさんを書こうかなー、なんて考えたけどすぐカカラジじゃん!?

どうしよっかなー。次の詰め合わせに詰めまくるかー。

あ、ちょっと感想欄でツッコミきましたが。例によって返信遅れて申し訳ない……過去編全部終わったら一気に返そうかななんて（イイワケ

今晩仕事終わった後に返しまくりますのでご勘弁＾＾；

# カカの天下723「最近の日々の詰め合わせ、に」

やぁやぁ皆の衆。我輩が教頭である。

「むぐむぐ」

「……なぁ教頭」

「なんだ、バレンタインにチョコをくれなかったテンカ君」

「まだ根に持ってんのかよ、っつうかオレがやんなくてもいいだろが。毎日毎日朝昼晩と職員室でチョコ食うほど余ってんだから」

「たわけ。チョコはあればあるほどいいのだ」

「そのうち身体がデストロイすんぞ」

「好きなものを食べていて身体が壊れるはずはない」

「おいそこの間違った教育者」

「たしかに身体の栄養は偏るだろう。しかし心の栄養は完璧だ！病は気から、心から！　心が完璧に満たされているなら身体は勝手についてくる！」

「実は教頭ってバカなんじゃないだろうか」

「なにか言ったかね？」

「いや……そのチョコの山、全部生徒からもらったのか？」

「いいや、半分は自分で買った」

「やっぱバカだこいつ」

「なんだ、バレンタインは安値でいろんなチョコが楽しめるのだぞ？」

「はいはい……」

「はいは一回」

「へぇへぇ」

「へぇならよし」

「いいんだ！？」

私はこのようにチョコにまみれて幸せな日々を送っている。

サカイです。

「三月だというのに最近はまだまだ寒いですねー。でも私には温かい味方がいますー」

ぶもー、ぶひー、めー、にゃーわんという優しい声。そう、私には人肌ならぬ牛肌と豚肌と山羊肌と犬肌と猫肌があるのですよー。

温かいわー。そして牛肌と豚肌ってどことなく美味しそうだわー。

「ただいまー」

あぁ、サエが帰ってきたわ！

やっぱり愛する娘の人肌が一番温かいのよねー！

「サエー！！　おかえーー」

「お母さん、臭い」

※動物と触れ合うときは匂いに気をつけましょう。

「うぅぅー……一番温かいはずの人の言葉が一番冷たいー……」

「お母さん、お風呂入りなさい」

「……一緒に」

「はいはい、一緒に入ってあげるからー」

「やほーい！」

でもやっぱり温かい娘と触れ合いながら、私は日々を過ごしてます。

ゆーたです。

「なんまいだーなんまいだー！」

今日も今日とてチョコを拝みます。そう、ミエ様とサエ様からバレンタインにいただいたチョコです！！

「ありがたやありがたや……」

もちろん仏壇に飾って毎日土下座して、お二人のお気持ちを感謝しながら日々を過ごしています。

父上、母上……ゆーたは幸せモノです。

はて？　どこからか「その父上と母上は不幸だろうな」と聞こえたような。

気のせいだな。俺の仕送りと週一の近況報告電話は完璧だ。両親は幸せに違いない。

テンだ。

「……なぁ、ニシアヤ」

「ちょっとテンカ先生！　さも私とニッシーがセットみたいな言い方やめてくださいよ！」

「いいじゃんアヤ坊。セットのほうが安いんだぞ？」

「誰が何を買うのよ！？」

「今日スーパーでお刺身セットを」

「あんたの夕飯なんか知らないわよ！　……ちなみにいくら？」

「４８０円」

「やすーい！」

……この夫婦も漫才が板についてきたな。

「んでよ、ちょっと聞きたいんだが」

「そのスーパーの場所ですか？　それはいくら先生相手にでも教えられません」

「教えなさいよそのくらい！」

「いや、そんなもんは激しくどうでもいい。おまえらよ、仲いいよな？」

「なにせセットで４８０円ですから」

「それ私たちの話じゃないでしょ！？」

「あーいいからいいから。んでよ、おまえらこれから先も一緒にいると思うか？」

「は？」

訝しい顔をするアヤ。そうだよな……なんかなぁ、最近あったトメのいざこざ見て色々と考えちまったんだよな。いくら仲良くなっても離れるし、また一緒になることもあるし……身近なやつらはどうなのかなーなんて。

「一緒だと思いますよ」

「……西見」

「今日は西狩です」

「ニシカリ、ずいぶんとハッキリ言うじゃねぇか。横でアヤが顔をトマトみたいにしながら喜んでっぞ」

「よ、喜んでなんかないもん！」

「そうです先生。アヤ坊はトマトが嫌いなんです」

「てめぇも相当わけわからんやつだな」

オレの周りにゃマイペースなやつらしかいねぇのか？

「んで話を戻すが。ニシカリはなんでそう思うんだ？」

「根拠なんかありません」

「……ほう？」

「根拠などは後から考えるものだ、と言ってた人がいましたから」

なるほど。要はうだうだ考えてると大事なものを見失うってことかな。いいこと言うじゃねぇか。

「誰の言葉だ？」

「今は亡きタケダの」

「あぁ……タケダか……」

どこ行ったのかなぁ、あいつ。

などと感傷に浸りながら日々を過ごすオレでしたとさ。

ユカです。

「あら？　どうしたのサワサカのおじいちゃん」

「暇での」

「はぁ。ワタシのところなんか来て暇つぶしすることがあるかしら？」

「うむ思ったのだが。ユカの『ワタシ』というイントネーションは独特じゃの」

「そう？　なんだか向こうにいた時に友達のが移ったのよね」

「何度も言ってみぃ」

「ワタシワタシワタシ」

「どう聞いてもタワシにしか聞こえんわぃ」

「出ていけ♪」

こうやってワタシは、まだ病室を宿にして過ごしています。ここにいる理由は特にないんだけど……なんとなく、ね。

「クララです！」

「タマです！」

「クラです！」

「タです！」

「クラです！」

「タす！」

「クラ！」

「タ！」

「ク！」

「！」

クララたちは日々こうやって遊んでいます。

「つ、ついていけない……」

『誰ですおまえは！？』

「シューです！！　ちょっと出てなかったからって忘れないでくださいよ！？」

知らない人には気をつけましょう。

セイジだ。

「よう兄貴。三月の季節限定メニュー、なにかないか？」

「ふむ、最近は春がちけぇってのに寒いしな。いっそ冬の定番を出してみるのはどうだ」

「冬の……そういえば大晦日に寒い中で食った石焼いもがうまかったな」

「馬鹿野郎！　この街でうかつにソレを言うんじゃねぇ！」

「は！？　わ、悪かった兄貴……そう、だよな。この街にゃヤツがいる」

「そうだ、ソレに関するネタがあればどこだろうと現れる、伝説の双子妖怪……」

「お、恐ろしいぜ。特に恐ろしいのは『妖怪』という日本的な種族のくせに外国っぽい名前ってところだ」

「一体どうなってんだかさっぱりわからねぇ。恐ろしすぎて寒気がするぜ……は！？」

そのとき、俺たちが居た部屋の扉が開いた！！

「妖怪か！？」

「野郎、三枚に下ろしてやるぜ！！」

「やめろトウジ！　ヤツらには刃物も銃も効かねぇ！」

「……何を騒いでるんだい、馬鹿ども」

ああ、なんだ姉貴だったか。

「ふう、俺ぁてっきりＨＡＨＡＨＡ！　とか笑う妖怪かと」

「おぅ、妖怪違いだったな」

「違ぇねぇ」

そして俺たちは、完全に妖怪（みたいな顔）と化した姉貴に（主に包丁と鍋で）料理されそうになったところを命からがら逃げ出し、

逃亡生活を送ることになるのだった。

三時間くらい。

ユイナです。

「今日も来たよ、マイハニー！」

「ああ、パパ君！　会いたかった」

「俺もだよ！」

「さぁ今日も食べていって♪」

幸せそうだったパパ君の顔が歪みます。それも仕方ないでしょう、パパ君はバレンタインから毎日毎日ここへチョコを食べに来ているのですから。

「……まだなくならんのか」

「もうちょっとだよ。それにしても逆チョコって嬉しいけど、ちょっと困るね」

そう、私からのチョコじゃないのです。それは小さいのをとっくに渡して食べてもらいました。今パパ君頑張ってもらっているのは……バレンタインに日本全国から私へ届けられた逆チョコの山！

「そんな無理して全部食べなくてもいいのではないか？」

「ダメだよ。せっかく皆が心をこめて送ってくれたんだから。全部自分で食べるの」

「……俺が食べるのはいいのか？」

「パパ君は私の分身みたいなものだから、いいの」

あ、パパ君の顔まで甘くとろけた。ちょっとうざい。正直、甘いものはお腹いっぱいだから。

「さすがに毎日食べてれば減ってきたが……ホワイトデーはどうするつもりだ」

「もちろん全部お返しするよ」

「ほう、偉い！　さすが我が妻！」

「えへへ」

だって優秀なサンタさんが届けてくれるはずだもの。私は用意すればいいだけ。

「よーし、パパ今日はいつもよりいっぱい食べちゃうぞー」

「きゃー、かっこいい！」

でも今は言わないの。甘い時間に水を差すことないものね。

「はぐはぐはぐはぐ！」

こうして私たちは、チョコを消費しながら日々を過ごしています。

## カカの天下７２３「最近の日々の詰め合わせ、に」（後書き）

ほのぼのーっとした感じのをいっぱい詰め込んでみました。トメカカがないのは仕様です。過去編で出番たくさんあったしね。

次はホワイトデーですね。そしてカカラジ……時が経つのは早いもんです。というわけで投稿とか好きなセリフ投票とか、まだ受け付けてますのでよろしくｖｖ

# カカの天下７２４「白い手紙たち」

こんにちは、トメです。

今日はホワイトデーですね。僭越ながらバレンタインにいくつかチョコをもらった身、お返しをしなくてはならない日なのですが…ここでカカから指令を受けました。

『お菓子はいらない。ただし、お返しは全て手紙とせよ。トメ兄にチョコを渡した人には全て了承済み』

つまり、お菓子を持ってって「先月はありがとな」で済ますなということ。感謝の気持ちを文章にして返せということだ。あのときのカカたちみたいに……や、カカたちのはエセラブレターだったけど。

お菓子を選ぶならまだしも言葉を選ぶ羽目になるとは。やれやれ、こいつは難しい。とはいえそれを望まれたならば、お返しする立場としては頑張る他になく……

「おーい、カカ」

居間にいる妹に声をかける。

「はいよっさ！」

「なんだその粋な返事」

「えいやっさ！」

「どこの祭りだよ」

「ほわいとでぃやっさ！」

「なぜホワイトデーに気合を入れてドジョウすくいをしているのか理解に苦しむんですけど」

まぁカカだしな。

「ほれ、約束の手紙だ」

「ほいよっさ！」

僕が放り投げた手紙を、カカは見事にすくってみせた。だからどうした。

「どれどれ、トメ兄はどんなことを書いてくれたのかなっさ？」

「そんな頑張って言葉使い変えなくても」

「恥ずかしい手紙を期待！　えーとなになに？　『いつも元気をくれてありがとう、これからもよろしく。最愛の妹へ』って……」

カカは突然走り出した。居間を飛び出し廊下を走り、トイレの扉をバーンと開けて、力いっぱい叫んだ。

「くせぇ！！」

「そりゃトイレだから臭いだろ」

「違う！　トイレのほうがまだ清純な香りがするほどにこの手紙がくさい！！」

「あぁなるほどそういうことか――ってそこまで言うかオイ」

わざわざトイレ行ってまで表現しなくても。

「くそぅ、トメ兄に恥ずかしい思いをさせるつもりが逆に私が恥ずかしい」

にやり。

「カカ、いつもありがと」

「ぎゃー！！」

「最愛の妹よ！」

「うきゃあああああ！」

おー逃げた逃げた。恥ずかしいんだか嫌なんだか知らないけどたーのしー。

さて、次だ次。

外へ出る。すでにメールで打ち合わせした待ち合わせ場所へ移動中……お。

「姉だ」

「おお弟よ。奇遇じゃの」

そういや姉からもチョコもらってたんだっけ、さりげなく。

あ。

こいつにだけ手紙書くの忘れてた。

「ちょっと待ってろ」

「お、なになに？　ホワイトデーのやつ？」

えーと……

「やー、渡すタイミングなくて描写されなかったんだけど、ちゃんとお返しはくれるんだね！」

なんか言ってはいけないこと言ってる気がするけど、姉だからいいだろう。それよりも……えっと……ポケットに何か……あ、レシートみっけ。これの裏でいいや。常備してるペンでさらさらーっと。

「ほい」

「なに、これ」

レシートの裏に書かれた文字、『ばーか』を見つめて姉は顔をぐじゃっとしかめた。

「ホワイトデーのプレゼント」

「いらねぇぇぇぇ！！」

「はっはっは、ちゃんと白いからいいじゃないか」

「ホワイトデーはそういう日じゃないでしょ普通！」

「あんた普通じゃないからいいじゃん」

「えーんえーん！　お姉ちゃん拗ねてやる」

「おーい歳を考えて喋れー……あ、行っちゃった」

手紙以外にも一応クッキーなんか焼いてみたんだが。身内は後でいっか。

さてさて、待ち合わせ場所にっと。

「あ、トメさんっ！」

「おやおやー、女を待たせる悪者が来ましたよー」

サエちゃんとサユカちゃん発見。商店街を回っていた二人はこの後うちにきてカカと合流するらしいんだけど、僕の予定が詰まってたので先に会うことにしたのだ。

ちなみに二人はカカへのお返しを買うためにうろついていたらしい。カカのやつ、見えないとこでちゃっかりバレンタインのチョコ渡してたんだよな。

「悪い悪い。ほい、ホワイトデーのお返し」

「わ、なんですかこの包みっ」

「クッキーな匂いがしますー。でもトメお兄さん、もちろんアレはー」

「はいはい、書いてきたよ」

時間もないしちゃっちゃと渡してこう、と封筒を二人に渡す。えーと、黒い封筒がサエちゃんで、ピンクのがサユカちゃん。

「……なんかサユカちゃんのはともかく、私のは曰くつきっぽいんですけどー」

イメージカラーだから仕方がない。

「えーとー？　『いつもカカのことを見ててくれてありがとう。サエちゃんがいるから僕も安心できてるよ。これからもどうかよろしく。カカの親友として、僕の友人として』とー、なるほどー」

「……何がなるほどなの」

「直球で相手に文句を言わせない作戦ですねー」

バレたか。

「えへへー」

「な、なに」

「えへへへー」

なんでニヤけながら背中をバンバン叩くのサエちゃん？　えっと、なんだかんだで喜んでくれてるのかな？　だったらよかったけど。

「えへへへへー……あれ、サユカちゃん？」

気がついたら隣にいたはずのサユカちゃんの姿はなかった。

「あ、いましたー」

サエちゃんの指差す先には、全力疾走でここから遠ざかろうとしているサユカちゃんの背中が。遠目からも顔が真っ赤だとわかるとはすごい。驚きの赤さだ。

「トメお兄さん……なに書いたんですかー？」

「バレンタインに渡された文章をそのまま返してみた」

「そのまま、って、あれを？」

「うん、あれを」

「……トメお兄さんって、罪作りですね」

「そう？　僕もサユカちゃん好きだし、別に嘘じゃないよ」

「やっぱ罪作りですー」

仲のいい友達へ『好き』と言って何が悪い。そもそも『そういう意味か』ってのはサユカちゃんが告白してくれた辺りでハッキリしてるんだから、これくらいしても罰は当たらないと思う。

「じゃ、僕は予定あるから」

「そうやって他の女のところに行くんですねー」

「そういうなよ。仕方ないだろホワイトデーのお返しなんだから」

「ふふふー、私へのお返しがこの程度で足りるとお思いでー？」

「……喜んでたじゃん」

「まだ足りません。いずれ徴収しにいきますからー」

「はいはい、わかったよ。今度な」

何されるかわかんないけど、とりあえずご機嫌なサエちゃんに手を振って別れを告げる。

次はっと。商店街に来たついでに花屋へ――あれ。メールだ。

「あれ、サラさん忙しくて今日ダメなのか……あれあれ、続けてテンからもメールだ。こっちもダメ？　なんだよ、せっかく用意したのに」

持ってきたチョコのことごとくを自分達で食っていったにも関わらず用意したというのに……仕方ないか。こういうのは気持ちが大切だし。

気持ちが……大事。

「はぁ、気が進まないんだけどな」

とぼとぼと歩いて、辿りついたのは病院の前。

言わずと知れたタケダ医院だ。おずおずと足を踏み入れる。

「はぁ……ねぇねぇ聞いてよお客さん、またうちの女房ったら家を飛び出して旅行に行っちゃってさぁ……え、ユカちゃんの病室？それなら――ってあああ！　君はもしやあのときの！」

落ち込んでいたり普通に答えたり急に興奮したりする院長はさておいて、僕はその病室にノックして入った。

「ユカ？」

「むー？」

ユカは病室のベッドで横になっていた。やっぱり足がよくないのか――

「むぐっ！？」

と、いうわけではもちろんなく、うつ伏せにゴロゴロしながらポテチ片手に漫画を読んでいたのだ。足は元気に宙でぶらぶら。傍らには牛乳。

「ポテチと牛乳、合うんだよなーわかるわかる」

「むぐんぐんぐ！」

「でもそーだらしない姿を見せられると男としては萎えるよな」

「んぐん！」

あ、ようやく飲み込んだ。

「なによあんた！　乙女の部屋にノックもしないで入ってくるなんて変態じゃないの！？」

「ここは病室だ。あとノックはしたぞ」

「漫画を読んでるワタシにそんなもん聞こえるわけないでしょ！」

カカみたいな言い分だな。それにユカ、そんなに一所懸命にポテチと漫画を隠して佇まいを整えようとしてもすでに遅いぞ。

「それで、何の用よ。バレンタインから連絡もしないでいきなり」

「だって連絡先知らないし」

「こないだ渡したチョコの包みに書いておいたわよ！」

「あれ、そうだったのか。気づかなかった」

「あーあー……相変わらず鈍い男ね！　にぶい！　にぶ！　にぶ？　二部を通り越して三部ね、これは！」

「ますますカカっぽいこと言ってないで、ほれ。受け取れ」

「なによこれ」

「ホワイトデーだから、お返し」

なんだその呆気に取られた顔。ま、まさか……

「ホワイトデーに、手紙……？　ぶ、ぶはははは！　くさっ！　くさすぎて、さむっ！　寒いし臭いしどうにもならないバカ男ねあなたは！　あーあーなるほど、寒い、臭い、バカ、の三部構成というわけね。あーあー愉快愉快、こんなに笑えるなら確かにすばらしいお返しだわ！」

か、カカのやつ……全員に了承を得たって言ってたのに！　こいつには言ってなかったな！？

後にカカは語る――「だって連絡先知らないもん」と。

「手紙……いい歳した大人が手紙……くひひ」

「じ、自分だってラブレターとか出したくせに」

「あら、これはラブレターなのかしら？」

「ぬぐぐぐ！」

どうしよう、急激に恥ずかしくなってきた。

「はーずーかーしー♪」

「わ、渡したからな！　ほらあとこれ！　クッキー！　じゃあな！」

「あ、待って」

「なんだよ！」

「メアドと番号交換しよ」

「へ？　あ、ああ……」

今までのドSモードはどこへやら。一瞬だけ素に戻って、赤外線通信をぴっぽっぱ。

「これでよし、ね？」

「おう、こっちも着た」

「おっけー。じゃ――出てけ変態！！」

「なんなんだよおまえは！？」

蹴ったくられて病室を追い出された。二度と来るなーともまた来いよーとも言われた気がする。やれやれ、数年会わない間にわからなくなったもんだ。

「手紙、どう思うかな」

大したことは書いてないけど、反応は気になる。

「ま、いっか」

……ともかく今日の使命は終わったし。帰ろっかな。

「お……？」

なんかいる。目の前にいる。

「ホワイトデーとは男の日！　つまり男から男へあげるのもアリなのだよトメ君！」

「いっ……！？」

その男は、でかかった。

なぜかというと着ぐるみを着ていたから。

「さぁトメ君！」

そう、人間サイズのチロルチョコのコスプレ（どっかで聞いたような）をしたキリヤは僕に向かって爆走してきて、

「私を食べてえええええ！」

「ぎゃあああああああ！」

なんだか愉快な鬼ごっこをすることになったのでした。

「めでたしめでたしです！」

「ちょっと待てキリヤ、めでたしって言うとなんだか僕がおまえに食べられて終了みたいな感じに」

「いえいえ！　トメ君が私を美味しく食べてめでたしなのですよ！」

「アッ――！　ってやっぱり逆じゃん！！」

ちゃんちゃん。

## カカの天下７２４「白い手紙たち」（後書き）

なーんかいっぱい書いちゃった～（笑）
んーしかし、最近は過去編とか詰め合わせとかばっかですねぇ。
ここらでこの上ないくらいふっつーのお話書きたいとこですが……
カカラジ終わってからね！　次はカカラジですから皆さんよろしく！
ではでは皆様、幸せなホワイトデーを。

**カカの天下７２５「第二十五回、カカラジ！」**

――もしも、インドちゃんがカレー作りに失敗したら。

「世界の終わりだあああああああ！！　私、死ぬ」

――もしも、サエちゃんがバレンタインにカカの分のチョコだけ用意し忘れたら。

「世界の終わりだあああああああ！！　私、死にたくないからトメ兄死ね」

「オイ」

――もしも、シューがいなかったら。

え……別に変わらなくない？

――もしも、タケダがいなかったら。

え……別に変わらなくない？

――もしも、シューがＳでカツコがＭだったら。

え……絶対ありえなくない？

――もしも、インドちゃんの大好物がカレーじゃなくタコスだったら。

「私のあだ名はメキシコ。皆はメキシカンって呼ぶの」

メキシカァン！！

――もしも、トメにもう一人妹がいたら（カカより年下、でもスペックは姉並）。

タマでええやん。

――もしも、カカ天が格闘ゲーム風になったら。

「そのツッコミ、隙だらけだ！」

「ふん、やるではないか。さすがは世界のボケを極めただけはある！」

「くくく、我が渾身の漫才……受けよ！」

「受けて立つ！　うおおおお！　ノ・リ・ツ・ッ・コ・ミ！！」

「つまんね」

ＫＯ！！　Ｙｏｕ，Ｗｉｎ！！

「私よりボケるやつに会いにいく……」

「や、ツッコミ探せよ」

――もしも、キリヤンが女性キャラの誰かを本気で口説いたら。

これ、実は本編で……にやり。

――もしも、総理大臣（猫）が総理大臣（日本のトップ）になったら。

「にゃー！」

「にゃんですとおおおお！」

日本は豊かになりました。猫すげぇ。

――もしもサエちゃんがトメの妹だったら。

あー、これいいっすね。本編でそれっぽいの書こ。

――もしもサユカちゃんがトメの妹だったら（勿論トメのことが好きなまま）。

あー、これもいいっすね。以下同文。

――もしも、ルシカ先生がスランプになったら。

えっと……書けませんって素直に認めて、これ以上書かないけど、それでもいい？

――もしも、カカ天キャラがみんな、虫だったら！

トメとカカ→カブトムシとクワガタ。一本のツノと二本のハサミがボケツッコミのようにきっちりハマる。

サエ→蜘蛛。人知れず張った網は獲物を捕らえ、ゆっくりと優しく咀嚼する。

サユカ→なんか思いつかん。

テンカ先生→カマキリ。つえぇ。

ユイナさん→蝶。似合いすぎ。

サラさん→皿。あコレ虫じゃないや。

姉カツコ→三葉虫。コレも虫じゃない？　虫って書いてあるじゃん。現代にいない？　だからこそ姉じゃん。

タケダ→ダニ。タケダニ。一匹くらいいてもいなくてもどうってことはない。

シュー→ノミ。シュノミ。湯のみに似てる。以下同文。

……微妙なのもあるけど、このメンバーで一つの話を作るのも楽しいかもしれませんねぇ。

「はい、ありったけのもしも話と共に始まってしまいました久々のカカラジですホント久々です毎日更新でなくなってから日々の過ぎる速度が遅いこと遅いこと三月だというのにまだ寒い気がするのもきっとそのせいでしょうねってことで寒さを吹っ飛ばす勢いがほしい香加です！」

「そんだけ勢いよく喋ってれば少なくともおまえだけは寒くないんだろーなーなんて思う留です」

はい、三月なのに寒い元凶にされてしまってなんか私すげぇんじゃね？　なんて思ってる作者です。

「なんかもしも話、たくさん発表したわりには流しまくってたね」

だっていっぱいありますし。こうやって勢いよく書きまくるのも、これはこれでいいかなーと。

「ま、よさそうなのは本編に活かすって言ってるからいいんじゃない？」

「そか……って、虫編はともかくサエちゃんとサユカンが妹に？私はどこにいくのさ」

それは後々考えますよ。

「ならいいけどさ……今回のもしもは、『若木瀬』さん、『嘘吐きぬこ』さん、『ばぁむくぅへん』さん、『てん丸』さん、『睫毛火射夢』さんからいただきました。ありがたう！」

「たう！」

さて、ここで恒例のお断り。

「素人お断り」

「この話数に到達してる時点で素人じゃなかろう」

ですね。でも一応。この番組はネット小説『カカの天下』を盛り

上げるため、ぶっちゃけトークや作者の本音を交えながら読者さんの投稿でヒャッホゥするラジオ的お話です。ここにいる留と香加はカタカナの分身であり、本編と直接関係はないのでお気をつけください。

「それでは第二十五回カカラジ！　スタート！！」

ＤＭへ。

ＣＭじゃないよ、ＤＭだよ。

ｃｍ（センチメートル）でもｄｍ（デシメートル）でもないよ。

ＤＭだよ。

ダイレクトに・揉む、の略じゃないよ。

ダイレクト・メール、の略だよ。

なんのダイレクト・メールか？

知らん。

ＤＭがあけて。

「……ダイレクトメール？」

うん。来たから。

「来たからってなんでも使うのがカカラジだよな、うん」

さすがは大人の留君、わかってらっしゃる。今のはカカラジネーム『豚助』さんからいただきました。

「前によく脅迫状くれてた『鶏助』さんの親戚？　もしくは同一人物とか」

「や、なんか最近は採用されないからって『修行の旅に出る』とか書いてたけど『旅先からの便り』とかたまにきてたし、違う人だと思う」

「にしてもＤＭて。そして最後の……なに」

とてもカカ天っぽい。

「むしろカカっぽい」

「うっさいわ。ふつおたいくお」

いくお、だって。新しい語尾かお？

「なんだかネット上のどこかでありそうな語尾だお」

「うっさいうっさい！　ちょっといい間違えただけだよ！　ほら、ふつおた読むからね！　えー『サイボーグ』さんからいただきました。『歯磨きが大事。さもないとタケダみたいになる。（自分の想

像ではタケダは前歯が欠けていると思う）』だって！」

「普通すぎるお便りきたあああああ！！」

普通すぎて採用！

「タケダって前歯欠けてるの？」

それが普通らしいから採用！

「うーん、僕としてはそんな、タケダにやんちゃっぽいイメージないから、違うような……」

んじゃ読者の反応見て決めましょ。前歯が欠けているか否か。

「すんごいくだらない投票を求めるねあんた」

カカ天っちゃーそういうもんだがや。ほれ次。

「それもそうだ。じゃ僕が読もう、『最近語尾に「ぶっ食べるぞコノヤロウ」をつけるようになった普通の人』さんからいただきました」

「今日の私は鶏のから揚げをぶっ食べるぞコノヤロウ！」

私はドライカレーをぶっ食べるぞコノヤロウ！

「えー『最近、友人にシスコンとかロリコンとか言われるんです。僕はただ、近所に住んでる小６の女の子に「お兄ちゃん」と呼ばれてるだけなのに……というわけで経験者であるルシカ先生にどうし

たら「おはよう普通の人」と呼んでもらえるか教えてほしいです』だってさ、先生」

ほうほう、なるほど。この人はいろいろと間違えているね。まず「おはよう普通の人」なんていうセリフを日常で使うシチュエーションがあると思うかい？　大抵はおはようの後に名前を言うものだ。『フツウノヒト』という名前でもない限り、そんな風には呼ばれないのだよ。ふむ、そういうことではない？　普通の人として見られたいということか。ならば遠くへ行きたまえ。そのようなイメージが一回定着すると払拭するのは難しい。あぁ思い出す……私の高校時代、新任の教師へ生徒を紹介する場面があったのですよ。そしてある生徒が自己紹介しようとしたとき、「～君はロリコンだと思います」「僕も～君はロリコンだと思います」「さらに私も～君はロリコンだと思います」と次々に声があがり、「もうロリコンでいいよ」と諦めた少年がいました……ね？　もう諦めなさいな。って私は「お兄ちゃん」って呼ばれるような経験ないわあああああ！！

「長いわあああああああ！！」

「ノリツッコミにしても語りすぎでしょ。どう見ても経験者だよ」

あっはっは、こういうのはソレっぽく匂わせておいたほうが面白いのだよ。

「実際にそうだったとしても逃げられる言い方でもあるよな」

ハイハイどっちでしょうねー。どうでもいいですねー。はい次。

「なんで作者がそんなに投げやりなのかわからないんだけど」

「留兄、投げやりにしては語りすぎだよ」

いいから次！

「はいはい。次は……前回から募集していた『カカ天名セリフランキング』の結果発表です」

「作者の思いつき企画、そして投稿しにくい企画なために票はバラけるバラける」

むぅ、範囲が広すぎるのは自覚してましたけど、読者さんがどう思ってるのか聞いてみたかったのだよ。

「そんなわけで、票が重なりまくったのは一位ぐらいですけどトップ3を発表していくぞー」

「それだけじゃつまんないし、ちょっと気になったセリフ投稿も紹介していきます。トップ3終わってからね」

うんうん、一票入るだけでも「あーこのセリフ気に入ってくれてるんだなー」とわかって楽しかったですからね。しかしまずは三位、いってみよ。

「名セリフランキング第三位！　セリフ登場話は毎年の十月二十日付近の話。そのセリフは――『私に抱きつけ！』でした！」

「香加、言ってみ」

「私に抱きつけ！」

よっしゃー！

「寄るな！」

どっちだ！？

「や、ほら。なんでもないときに抱きつかれまくってたら尻軽女じゃん」

「おお、そんな言葉を知ってるとは」

「私が目指すのは尻重女だから」

「おお、そんな言葉があるとは」

なんか太ってそうなイメージしか浮かばないんスけど。

「じゃ尻ズッシリ女で」

「何が詰まってんだよ」

ほらほら、脱線しないでセリフに対してのコメントしなさいな。

「はいはい、これはまず２４３話、魔法の誕生日で感極まったカカが言ったセリフだな」

「前にやった好きな話ランキングでも出てたけど、人気高いよねーこの辺りの話」

気合入れて書いた身としては、もーほんと嬉しい限りで。何気な

くカカ天キャラ誕生日の話となると浮かんでくる言葉になってますね。

「うん、分身な私が言うのもなんだけど直球でいいよね。皆で抱きついて、胸はぽかぽか、心は幸せ、お尻はズッシリ」

「尻はいらん」

「え、留兄お尻いらないの!?　……おトイレどうするの」

脱線すんなっつーに。

「うっさい。恥ずかしいんじゃボケ」

ボケ役の香加にボケって言われた……ま、でもそうか。自分のセリフは恥ずかしいか。そうかそうか。

「名セリフランキング第二位!」

「おっと話を逸らす気です香加選手!」

そんなに照れて……留、抱きついてあげなさい。

「ええいやめんか!　えっと、第二位はね!　セリフ登場話はクララちゃんの出る回いくつか。そのセリフは――『クララしょっくです!』でした!」

「あぁ、何気に『～しょっくです!』って使う人増えたんだよな。感想欄とかメッセージとかで」

なんか使いやすいよねぇ。クララを書いたときに「この娘にはなんか口癖ほしいなー」と思って生まれてきたセリフです。かなりキャラにぴったりだったんじゃないかなーと作者ながらに思ってるのですが。

「二位になるくらい投票きたんだし、そうなんだろね」

「でもそこまでしょっちゅう言ってるわけじゃないよな」

そりゃ四六時中しょっく受けてるわけにもいかんでしょう。

「とりあえずこの作品でのクララちゃんの死因は決まったね。しょっく死だ」

勝手に不吉なことを決めないでいただきたい。

「でもこの作者、何書くかわかんないしな」

「そそ、今のうちに伏線を用意してあげようと思ったわけよ。感謝しなよ？」

しません！　クララちゃんは死にません！　キャラ的に！

「や、そこは人間じゃないからーとか言おうよ。そんなぶっちゃけずに」

いいの！　可愛い子は死なないの！　ほら次！

「そういやこれってぶっちゃけラジオだったな……」

「ま、別に死んでほしいわけじゃないし別にいいじゃん。次は一位だよ」

「はい！　では第一位……って、たぶん読んでるかた全員予想はついてると思います。セリフ登場話はいっぱい！　感想欄にもいっぱい！　メッセージでもいっぱい出没！　そのセリフは――やっぱり『でゅみゅみゅみゅう！』です！　票数はもちろん超ダントツ！！」

「でさ、作者。この言葉って結局なんなわけ？」

知らん。

「オイ作者。あんたが考えたんだろが」

そうだけどさー、こんなに色んな世界を汚染する言葉だと思わなかったしー、予想以上に広がってもーほんと何がなんだかわかんないしー。読者さんも発想を自由にしまくって使ってるしー。今さら説明を求められても困るしー。

「とりあえず印象に残ってる言葉ナンバー1、というわけで圧勝でした。投票してくださった方の半分がこの言葉を推しています」

「ほんと皆してでゅみゅみゅみゅうだよね」

これ香加さんや。どういう意味でその言葉を使いおった？

「知らんて」

オイ。

「えー、というわけで好きなセリフランキング第一位は見事、『でゅみゅみゅみゅう』となりました！　記念に『でゅみゅみゅみゅう』に関する話を一つ書いてもらいます！」

……もう今までにいっぱい書いたから、改めて書かなくてもいいんじゃ？

「それもそうだけど、決まりだし」

はーい。んじゃ近々でゅみゅみゅみゅう全開でなんか書きまーす。

「約束な。えーそれでは、投票数は少なかったけど印象に残ったセリフ投稿を紹介していきます」

登場１７話。『嬉しい。それはきっと、楽しいよりも上のこと』

「お、私とサエちゃんの馴れ初めだね」

カカ天初の『コメディ以外の話』でしたので、私としても印象深いものですわ。

「一緒にいると嬉しい、か。今でもそれを忘れてないだろうな？」

「もちろん！」

登場３８４話～３８６話。『寒くなったら――またおいで』

「これは『チェンジ』……サエちゃんと私が入れ替わったときの話だね」

そうそう、まだサカイさんと離れていた時期、寂しさを感じているサエちゃんに気づいたトメが、とっても恥ずかしいセリフで励ましていたときのセリフですな。

「恥ずかしいとか言うな」

「え、だってこのとき外で叫んでたんでしょ。なんか色々と」

イタいよね。

「イタいとか言うな！！　サエちゃんも少し元気づけられた感じがしたし、別にいいだろ！」

結果オーライって便利な言葉ですよね。

「はいはいはい次次次！」

登場５７３話。『当たり前でしょう。親というものはですね、子供がいないと強くなれないのです』

「そしてサカイさん大爆発の回だな」

そう、サエちゃんを取り戻すため、ダメ人間まっしぐらだったサカイさんが頑張りまくる話で口にしたセリフです。

「子供のせいにした単なるイイワケにも聞こえるけどね」

「でも今のサカイさんはちゃんと頑張ってるだろ。子供と引き離されるのはそれほどショックだったってことだよ。とはいえ親になったことのない僕らにわかることじゃないけど」

「留兄は、私と引き離されたら生きる気なくす？」

「……なくすかもな」

「そ、そか」

さて、なんかいい雰囲気の二人は放って置いて。

登場５４４話『人ってね、元気が出たらすぐ頑張ったほうがいいんだよ。元気って賞味期限あるから、それが過ぎるとダメになっちゃうの』

「お母さんの元気論だね」

「確かになぁ。元気出てもダラダラしてたら、いつの間にかやる気なくなっちゃったりするんだよな」

『やるべきこととか、やったほうがいいことがあるなら、それを優先すべきかもしれないけど……そんな難しいことを考えてたら疲れちゃうものだよ。やりたいことをやってみるの。やってみようと思ったことをやってみるの。そうすれば元気は長持ちするし、日々が楽しくなるし、元気をもらえることも増えるはずだよ』とも言ってますね。

「これは香加ならよくわかるんじゃないか？　毎日やりたいようにやってるじゃん――ああ、だから元気なのか」

「んー、でもほら。私は子供だし？　大人の皆さんが持つ責任とかありませんから」

「その言い方は子供らしくないがな」

でもまぁ、ユイナさんも『心に余裕と元気があれば、少しくらい遅れたって大抵のことはなんとかなるものだよ。人って意外と強いんだよ?』とも言ってますし。年齢関係なく、香加みたいな勢いで生きていけば案外うまくいくものなのかもしれませんね。

「……兄としてはこんなのを見習いたくないんだが」

「なにおー」

はいはい、それぞれのやり方で元気よく生きていきましょう!

登場５７０、５７１話。『私を嫌いにならないで』

「これは……言ったのはカカだけど、元は母さんのセリフみたいなもんだな」

そうですね。言ったのはカカですけど、そう思うまでに至ったのはユイナさんの言葉があればこそ。兄妹で喧嘩して、さらに親友とも喧嘩しそうになったとき、ユイナさんの『根っこが大事』という言葉があればこそ思うことができたことです。

「私を嫌いにならないで、か。喧嘩してもいがみ合っても、結局は根っこが好きな相手にそれを伝えられたら仲直りせざるを得ないよな」

もちろん他にも投票はありまして。あわせて過去の話を読み返していると……ユイナさんを始めとした大人たちは心に残る言葉を多

く口にしてくれていました。書いてる私が言うのもなんなんですけど、すでに作品が一人歩きしてる状態なので……改めて、いい大人たちがいてくれるなぁなんて思いました。

「えっと……お世話になってます」

「僕も……お世話になってます」

いえいえどういたしまして。

『おまえには言ってない』

さ、作者なのに……まぁいいや。どれもこれも私の中だけから生まれた言葉ではありませんしね。私も大人な皆さんにお世話になってます！

そんなわけで、たくさんの方々の投稿ありがとうございました。私も作品を振り返り、楽しいひと時を過ごすことができました。

「こうして見ると、変な言葉だけじゃなくて重いことも喋ってるんだね私たち」

「基本ふざけてるけど、やっぱりこれは僕らの生活の話だからな。全部お気楽にはいかないさ」

それでも日々学び、成長し、やっぱり笑って過ごしていければいいなーと思って色々と書いております。こんなカカたちの日常を、また改めてよろしくお読みいただければ幸せでございます。

「私も幸せでっす！」

「ま、僕もだ」

それでは、この辺で名セリフランキングはひと段落させていただきまして……次は脅迫状コーナー！

『カカラジ載せて貰えて幸せの絶頂に居るよろぽならぬ林檎なトマトです。載せてくれたお礼に有難迷惑な脅迫状をおくりまーす。

ルシカさん　あなたは次のカカラジまでに読者に対する面白い脅迫状を考えカカラジで発表しなさい。さもないと意味が分からない文を暇な時送りまくっちゃうぞー　しかも全部カタカナで……じゃあ頑張りたまへ』

というわけでですね、例によって例のごとく。

林檎なトマトさん、その意味わからないカタカナの文を暇なときにどうぞ送りまくってください。私がその文になんとなく満足したならば、自作の脅迫状を次回のカカラジで書きましょう！

「まーた脅迫状返してるよこの人」

だってわざわざ返しやすいの書いてくれるんですもん。それでは林檎なトマトさん、よろしく！

「感想欄のカオス、再びかな？」

「前よりは混沌としないだろ……たぶん」

ではでは、ＣＭいきましょう！

『新ドラマ――名探偵あなた。

言葉の通り探偵役はあなた。そして挑むべき謎は、ユカの語る二つの仮説。

「やはり本当に歩けなかったのでは？」

「いいや、彼女はあのとき『病み上がり』という言葉を使っていた。それは怪我の症状に使う言葉じゃないのでは？」

「使う人もいるはずだ」

「もしかすると松葉杖をついていたかもしれない。『そうでない』とは書かれていないのだから、描写の少ないカカ天ではあり得るはずだ」

「クララが瞬間移動という能力を失うほど『力』を使ったのなら、脊髄を癒すことも不可能ではない？」

「脊髄が治れば確かに大ニュースだが、ユカと懇意のタケダ院長がそれを隠しただけなのでは？」

「行方知れずの友人Ａの正体は、まさかサワサカの爺さんなのでは？」

謎が推理を呼び、しかし実証を掴ませない。果たして真実はどっちだ！？

名探偵あなた。
あなたの挑戦を、待っている』

CMがあけて。

「今のはカカラジネーム『こんなん出ましたけど』さんからいただきました」

「なんか深く読んでるね、この人」

最後の推理なんか秀逸だね。

「あなたの挑戦を待っている――待つの？」

まぁ、推理するなら止めはしませんが。これからもユカは登場しますし。

「なんだよ、作者の大好きな読者参加企画になるぞ？」

いえいえ、もっと大きな参加企画をまず考えているので。

「え、まだなんかやんの？」

はい――お待たせしました！　いや待ってるかどうかはわかりませんが、第三回カカ天キャラ人気投票を行います！！

「おー！　ついに三回目やるんだ？」

「今度はどんなやり方でいくんだ？」

そうですね……投票方法は毎度おなじみ。感想欄またはメッセージ欄からお送りください。『～に投票します』という一言だけでもいいですが、読者さまのコメントなんか入れていただくと私が嬉しかったり次回に紹介したりします。

「確かにおなじみだね。して、投票方法は？」

はい、今回は皆様の好きなキャラの組み合わせも知りたいなーと思いまして……読者さんに好きなキャラトップ3を決めていただきます！　例えば……

『1、カカ。2、サエ。3、テンカ』と書いたとしましょう。この場合、1位のカカに三ポイント。2位のサエに二ポイント。3位のテンカ先生に一ポイント入ります。

「ふむふむ、前回は自由にポイント分けできたけど、今回は固定なわけだね」

はい。毎度「決めにくい！！」という意見をもらいますが、私としては「でもそこが知りたいんじゃ！！」という感じですので。

「じゃ皆、選びにくくても頑張って好きなキャラのトップ3を決めてね！」

きちんと一位～三位まで書いてないと無効票にするかもしれないので、ちゃんと書き方を守ってくださいね。

「結構自由に書いて送ってくる人いるんだよな……や、くれるのは嬉しいんだけどさ」

なお、現在は二日に一回更新なため、発表は次のカカラジとします。途中であとがきにて中間発表はいたしますので、そちらもチェックお願いします。

「ではでは、皆様の投票待ってます！　主に私への投票を！！」

「そだな。僕より香加に入れてほしいかも」

「上位は余裕でいいですなぁ！？」

「や、そういうわけじゃなくて普通に兄妹愛というものでだな！？」

サラリと流してコーナーのおさらい。

普通の質問受け付けます。ふつおたコーナー。

なんでも思いついたらどうぞ、自由枠コーナー。

どんな宣伝でも面白ければＯＫ！　ＣＭコーナー

ファンキーな脅迫状待ってます、脅迫状コーナー。

もしもな寸劇、見てみませんか？　もしもコーナー。

好きなキャラを三人選んで投票しよう！　ただし1位から3位まで順位は決めてね？　第三回カカ天キャラ人気投票コーナー。

以上となります！

「今回はなんか長かったな」

「二日に一回にしてるから、今までの二倍いろいろ溜まっちゃったんだね」

ですねぇ……あ、そうそう。前回のカカラジにて行った脅迫返しですが、『ＤＡＮＹ』さんが見事に感想欄をカオスに陥れ――なんか頑張ってくださったので。約束どおりにカカ天本編の次話にて混沌としたマニアックもしも話を掲載いたします。ネタだらけです。一般の方々にはさっぱりわからない話となりますので、お気をつけください……い、一話だけだから、オカシクなりすぎても見捨てないでね？

「これ読んでる人は心が広いし、大丈夫じゃない？」

「わりとそれいつも言ってるよな」

まー載せると約束したからには載せねば！　『ＤＡＮＹ』さんとマニアックだったりオタクだったりな皆さんはお楽しみ！

「それじゃ最後に留兄へカカラジチョップ！！」

「ぐほぁ！？　……な、なんで？」

「過去編、出すぎ」

「し、仕方ないじゃん……がく」

「そんじゃーカカばい！！」

この番組は、ＤＭとＣＭの提供でお送りしました。

## カカの天下７２５「第二十五回、カカラジ！」（後書き）

間に合わなかった……！

ううう、１６日のうちに更新できませんでした。なんかたくさん書きすぎました。ながーくなってしまいましたがダラダラっとお許しください（どんなだ

しかし人気キャラ投票開催です。

皆さんちゃんと書き方守っていっぱい送ってくださいねー＾＾

お、送ってくれますよ、ね？（結構毎回びくびくしてる

# カカの天下７２６「素人にはオススメできない混沌話」（前書き）

「でっかいカオスです！！」
「恥ずかしいパクり禁止！」
そんなわけで諸注意。
今回のお話は、前々回のカカラジでリクエストされた『もし、カカ天がルシカｓ趣味全開だとしたら』と『もしもカカ天キャラが魔法使いになったら』や『魔法少女になったら』を組み合わせたスペシャル話、わかる人にしかわからないトンデモ話です。
素人の方々にはナンジャコリャ的なお話ですので、ワケワカランと思った方は華麗にスルーしてください。目の毒です。次回からはいつものカカ天ですのでご安心を。

「盛るぜぇー。ネタを超盛るぜぇー」

## カカの天下７２６「素人にはオススメできない混沌話」

「箱根のみなさぁぁぁぁん！！　うたわれるトメですよぉぉぉぉぉ！！」

「オイこらテン。冒頭からツッコミどころだらけの発言すんなや」

「んだよ、別にいいじゃねぇか。この世界じゃどーせツッコミきれねぇんだから、最初からトバしてもよ」

「それもそうか。なら……箱根のみなさぁぁぁぁぁん！！　うたわれるテンですよぉぉぉぉぉ！！」

「逆襲に出やがったなこんにゃろ。箱根にいない人間はどうすりゃいいんだ」

「言い出したおまえが言うな」

「そうか、箱根に行けばいいんだ。なぁなぁトメ、箱根に行こうぜ」

「よしきた」

そんなわけで――これは、最近はめっきり絡みが少なくなったトメとテンカが箱根に行くまでをネタだらけで描いた物語である。

この物語はフィクションです。実在のアレやコレとは似てるかもしれないけど関係ないはずなんで広い心でお楽しみください。

「ところでよ、どうやらオレたちは魔法が使えるらしいぞ」

「とっても唐突かつ強引かつ高速な展開をありがとう、ベルンカステン卿」

「……偉く長い名前になったなオレも」

「魔法使いっていうか魔女っぽい名前らしいけどな。じゃあ僕はどんな名前になるんだろう？」

「トメィトゥ」

「それ魔法使えねーよ」

無事に魔法使いと認識された二人は、箱根へたどり着きました。

「はえぇなオイ！？」

「たどり着いたら物語終わるんじゃねぇのか！！」

しかしそこは廃墟と化していました。

「箱根に謝れ」

いちいちうるさいな、魔法で全部直るし、なかったことになるからいいんです。ともかく箱根の街は三人の妖怪によって滅ぼされかけていたのでした！！

「あら？　あそこに美味しそうな人間がいるぞ！」

「わ、本当だわ」

「美味しそうかしら？　とてもクセがありそうに見えるけど」

その三人の妖怪とは、

「あたしは両方好みだ！　ふはははは！」

ノリノリで高笑いをあげるアネリア・スカーレット。吸血鬼らしいが多分日光とか平気。でも絶対にどこかの月のお姫さんみたいな上等な存在ではない。

「私は男の人のほうが好物……ふふ」

静かに笑うのはサランドール・スカーレット。アネリアの妹らしいが、特徴がないのが特徴という普通きわまりない吸血鬼である。とはいえ、髪の片側だけ結んでいる小六のツッコミでもなければフツーって言うなーとかいう決めセリフがあるわけでもない。

「面倒くさーい。あんた達で勝手にやってよね」

特に興味なさそうにしているのは妖怪、八雲ユカ。境界を操る能力を持っており、真実と嘘の境界をうまく操作するのとか大得意だという。

「テン、じゃなくてベルンカステン卿、どうする！？　魔法を使うのか」

「おぅ！　とりあえずてめぇを吸血鬼に差し出してオレは逃げる！」

「魔法使えよ！？」

「うっせぇ！　それでうまくいくんだからいいんだよ」

「そんなうまくいくわけ――いってる！？　うわああ吸血鬼が僕だけを狙ってくる！！」

理由……吸血鬼といえばトメィトゥジュースだから。

「もう、ゴールして、いいぞ？」

「てめぇテン――うわぁぁぁぁ」

吸血鬼姉妹っぽいやつらのごっすんごっすん攻撃が炸裂しようとした、そのとき！

『ちょっと待ったー！』

ご都合主義に現れる味方キャラ！

「くくく、ご主人。この私が来たからにはもう大丈夫。安心、お手軽、超速のご奉仕によって貴様を守り通してくれるわ。覚悟しておけ！？」

「誰だおまえ」

「カカだよ！」

「問おー、あなたが私の金ヅルかー」

「誰……かは聞くまでもないな」

「サエでーす」

ちょっと変わった登場ですが、おなじみの二人です。

「本来なら！　魔法少女は私たちがなってこそ！」

「年増とトマトは引っ込んでてくださいー」

二人がそろって取り出したのはペンダント。

「いくよ、レイジングマイケル！」

『オナラ、ライト』

「いくよー、バルジョーイ」

『イェス、ブー』

妙にリアルな音で返事をしながら光を放ったそれらは次第に形を変え、いつの間にか杖に変化していた。

「あれ、魔法少女といったらコスチューム変身だけど」

作者が個人的にそういうシーンが寒くて嫌いなのでカット。

「ふん、小娘ごときに負けてちゃカカ天人外の名折れじゃきん！
あたしと書いて、人外と呼ぶきん！」

「言ってて悲しくなりません？　アネリアお姉さま」

「うっさいサランラップ」

「サランドールです！」

「それって第何ドール？」

「薔薇な乙女は関係ありません！」

ともかくここに四人の激闘が始まる！

「おっし！　アネリアごっすんごっすんパンチ！」

「なんの！　必殺『杖で１５００秒間ずっと殴り続ける！』ウッディ！」

「私もひっさつー『もってくセーラー服』」

「きゃあああ！　それは私の過去の！？　どこから持ち出したの！　恥ずかしいからやめてよぉぉ！」

空中でなんか色々やってるやつらを見て、トメィトゥは呟いた。

「誰か魔法使えよ」

ごもっとも。

「じゃてめぇが使えよ」

「トマトに何ができるんだよ」

「召還魔法」

「トマトすげぇ」

トマトじゃなくてトメィトゥですから。

「よし、やってみよう。この場合は……なんかやる気ないのがいるけど二対三だし、味方になる使い魔がほしいな。いでよ、使い魔！！」

適当に使ったトメの召還魔法によって、天から一人の少女が舞い降りました。

「クララしょっくです！　いきなり変な場所に飛ばされました！」

「あぁ、あのさクララちゃん。君は僕が召還――」

「おかしいです。クララは一年中桜が咲いてる島で願いを叶えながら幸せに暮らしていたのに……そしてちょうど金髪ツインテールの子と髪の赤い子がいい感じだったのに！　クララ不満です。帰ります。シュバッ！」

「ああ帰った！？」

「忠誠心の欠片もねぇ使い魔だな」

「今度はベルンカステンがやってみろよ」

「オレがかぁ？　仕方ねぇなぁ……いでよ、エロの使い魔！」

そして現れたのはもちろんこのお方。

「なんでエロでわたしが出てくるのよ！？」

「だってサユカだもんよ」

「さぁ行けサユカちゃん！　あそこで寝転がってポテチを食べてる妖怪を倒すんだ！」

「トメさんの命令なら喜んで！」

「召還したのオレなのに……」

ともかく八雲ユカにも相手ができた！　これで五分五分だ！

カカがいつの間にか取り出した『タケダリボルグ』とかいう金棒を振るう（なんかぴるぴる言ってる）、それを受け止めるはアネリアの刀、和道一文シュー（けしてシュークリームではない）。

サエとサランドールは罵り合っている。戦えよ。

サユカと八雲ユカはいつの間にか一緒にポテチを食べている。だから戦えっての。

「ていうかさ、だから誰か魔法使おうよ」

その声が聞こえたのか、各々がついにやる気になった！

まずはカカＶＳアネリア。

「よっし、私の最強の必殺技で一発で倒してやる！」
「気に入らないねぇ。まずはそのボケをぶち殺す！」
そしてサエＶＳサランドール。
「二重のキワミを見せてあげます」
「サランラップを二重にかけるんですねー、わかります」
「だからラップ違うっての！！」
「はいはいー……おいで、皿女」
最後にサユカＶＳ八雲ユカ。
「ポテチうまー。このうまさはおっくせんまんねっ」
「ウマー」
存在感を放ちまくる阿呆少女たち……じゃなかった魔法少女たち。
その中でも一際目立ったのは、カカの詠唱だった。
――体はボケで出来ている。
廃墟と化した箱根にその声が響く。
――血潮はボケで、心はボケ。

「全部ボケかい」

トメィトゥのツッコミも響き、呪文が完成する。

――それはきっと、無限のボケで出来ていた。

「いくぞ人外王。ネタの貯蔵は充分か」

周囲の世界そのものが塗り替えられ、あらゆるボケを内包した魔法世界へと変化した。ここではカカの思うままにボケを生み出すことができる。果たしてそのボケが戦闘の役に立つだろうか!?

「使えそうなボケは……これだ!!」

カカの足元が大爆発した!!

すさまじい爆発、この威力ならば吸血鬼や妖怪とて、ひとたまりもないだろう。

だから、そんな爆発が足元で炸裂した当のカカ本人は空高く飛んでいった。

「あー……あるよなぁ、爆発オチって」

消える飛行機カカ～♪

僕たちは見送った～♪

空しくて～冷めた～♪

「……帰ろうぜ、トメ」

「……うん」

なんだか色々あったけど、ゆっくり寝れば夢は覚めるさ。きっと明日は天気も晴れ晴れでユカイに違いない。

## カカの天下７２６「素人にはオススメできない混沌話」（後書き）

さて、本当に載せていいのかなーコレと悩みつつ投稿しちゃいましたが……どうなの、コレ笑

どっからどうみてもワケワカラン話ですが、リクエストですので！！　ＤＡＮＹさん、どうですか！？

あ。次からはちゃんと普通のカカ天しますよ、ええ！

# カカの天下727「ねーよ」

こんばんは、カカです。

もうすぐ夕飯の時間、なのにトメ兄は帰ってきません。先ほど届いた携帯メールによると、残業により遅れるそうです。

でも私はそんなにお腹が空いてません。余裕があります。トメ兄を待っていられます。ここは――余裕のあるうちに夕飯の用意をして、トメ兄をびっくりさせてあげるべきでしょう！

そんなわけで、私はまず献立を考えることにしました。

「んー、何が食べたいかなぁ？　ご飯はいっぱいあったよね、たしか。じゃ、ご飯に合うもの……」

鶏の唐揚げ。これしかない！

「よし、メインは決まった。次は材料だね」

鶏の唐揚げに必要なもの……揚げるってことは、あぶらがいるよね。

「アブラカタブラ！」

言ってみただけ。

「こういうのは台所にあると思うから……鶏がいるね」

そんなわけで私は外出することにしました。

玄関を出て、鍵を閉めて、道路へ出て……五分も歩かないうちに目的地に到着します。

ピンポーンと呼び鈴を鳴らしてしばらく。

「あらあらー、カカちゃんじゃないですかー」

でっかい家の主、サカイさんが顔を出しました。

「サエはまだ帰ってないですよー？」

「知ってます」

さっきまで遊んでたからね。

「今頃は埋まってるはずですし」

「埋まってる！？　サエが！！　こうしちゃいられません」

「あ、間違えました。埋めてるとこです」

サユカンを。

「ならいいわー」

いいんだ。

「それで、サエに用事がないなら私に用事かなー？」

「はい。鶏をください」

あれ、なんで黙るのサカイさん。

「……あのー？　カカちゃん、うちに鶏はいませんよー？」

「え、豚も牛も山羊までいるのに、なんで鶏がないの？」

「うちは肉屋じゃないですしー」

「知らなかった」

「知っとけー」

お、サカイさんにツッコまれるとは思わなかった。本人も珍しいことして小気味いいのか「うふふー」と笑ってる。

「ま、無いならいいや。今度は仕入れといてね」

「だからー」

適当に流してサカイさんと別れる。さて、どうしたものか。他にあるかなぁ、食材を調達できるとこ。うちの近くで……あ、セイジ食堂！　きっと材料あまってるよね。

えっと、裏に回って……懐かしいなぁ。この辺りに捨てられた総理大臣のダンボールを置いてたんだよね。そしてこの扉の向こうが食材置き場――そういや私もひどいことしたな。食材置き場のまん前に総理大臣を置いたんだから。どうぞ食べてくださいと言ってい

るとしか思えな――

「……！」

絶句した。

扉を開けて勝手に進入した食材置き場。並ぶ大型冷蔵庫＆冷凍庫の前には、まだ収納していないらしい食材の詰まったダンボール箱が並んでいる。

そのダンボールに囲まれるようにして、猫がびっしりと詰まっていた。本物の猫だ、なんだかお行儀よく座って整列してる！

「ま、まさか……」

これも、食材！？　なんということだろう、この猫たちは揃いも揃って食べられるのを順番待ちしているのだ。なんてこと……こんなに可愛い猫ちゃんたちが食べられるなんて、あってはならない！

ちょっと味見したいけど！

ここは一発、前のように書いておかないと。えっと、ペン、ペン……あ、でっかいホワイトボードがあるからすぐに見つかった。よーし、ちょうど猫ちゃんたちの背後にあるし、このホワイトボードに書いてやれ。

『食べないでください』っと。これでよし。

「わ、誰か来る」

逃げろ逃げろ！

「――というわけで家に逃げ帰ってきたというわけさ」

「ほほう。それで？」

なんだかんだやってるうちに帰ってきてしまったトメ兄に、私は先ほどの出来事を語っていた。

「結果として唐揚げは作れませんでしたとさ」

「……なぁ、なんで商店街に行かなかったんだ？」

「面倒だったから」

「これから夕飯を作るのは？」

「トメ兄」

「……面倒」

「許さん」

「エー」

「さっさと作れ」

「……そもそも唐揚げの材料だって、元々うちの冷蔵庫にあったのに……なぁカカ、おまえうちの食料状況を把握してないな？」

「してるよ」

「ならうちに何の食べ物があるか言ってみろ」

「アブラカタブラ」

「ねーよ」

一方。セイジ食堂のセイジは。

「さーて夜の仕込み前に納品物の整理……うお！？　まーた猫の集会か。最近は総理大臣がいなくなったんだから場所変えりゃいいのに……あぁくそ、またホワイトボードで爪研ぎやがって！　これじゃ書いてあった文字が読めないじゃ――あぁん？」

セイジは眉をひそめた。

ホワイトボードには、まるで猫の大群の総意とばかりに文字が書かれていた。

爪を研がれたために書かれていた文字は濁点に傷がついてしまい、はっきりと読めたのは三文字だけ。

それはまるで漫画の吹き出し。だから猫の大群が声を揃えてこう言っている気がした。

『食べて』

猫の大群が一斉にセイジを見る。

「ねーよ」

猫の大群は一斉に首を傾げた。

## カカの天下727「ねーよ」（後書き）

ふっつーの話を書きたい。
というわけで普通の話を書きました。

多分普通。おそらく普通。結局は猫食べてないし普通に違いない。

しかし気づけばもう三月も終わり……ようやく温かくなってきたところですな。私は花粉症でうぎゃあです。
うぎゃあ。

あーそうそう。どうやら小説家になろうのサイトの作品数が四万を越えたようで。あと色々と決まったようなのでおめでとうございます！
ってここで言っても仕方ないかもしれないけど、他にいう場所もないので……笑
ずっと使わせていただいている身として、心からお祝い申し上げます＾＾

# カカの天下728「がんばれ〇〇」

こんにちは、カカです。

そろそろ春休みに入るので授業も簡単になってきました。次の学級活動の時間なんて楽チンったらありゃしません。最近は卒業式の練習くらいしか行事もなかったし……体育館でドッジボールしたりすることも多いので、むしろ楽しみです。

でも他の教室は少し忙しいような気が。何してんでしょね。

「おぅ、てめぇら」

ともあれ授業開始。教壇に立ったテンカ先生を見つめる私ら生徒。今日は何すんのかな。わくわく、わくわく。

「重大な知らせがある」

「テンカ先生が教頭と結婚!!」

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!』

「カカ、黙れ。殺すぞ」

「ハイすいません」

自重します。こあい。

「あー、知らせだがな――お楽しみ会を忘れていた!!」

しーん……

「……あん？　どうしたてめぇら。お楽しみ会だぞ、年に一度の楽しみだぞ。去年はてめぇらもはしゃぎまくってたじゃねぇか。それを忘れてたってのに、なんでそんなに無反応なんだ？」

「だって私たちは覚えてましたしー」

サエちゃんの言葉にピキリと固まるセンセ。

「ていうか先生、前に言ってたじゃないですかっ！　準備も段取りもぜーんぶ自分がやるから、生徒は何もしなくていいってっ！」

「オレがそんな面倒なことを言うはずがない！！」

や、それが言っちゃったんだなぁ。

「はい、先生。証拠の動画ですよー」

サエちゃんが携帯を先生に見せる。ついでとばかりに私も覗き込む。

そこには過去のテンカ先生が映っていた。

とてつもなく眠そうに机で頬杖を突きながら。

『テンカせんせー』

『……あぁはん？』

外人さんっぽいステキなイントネーションで応えてくれる先生。

『起きてますー？』

『あぁはん？』

『寝てますよねー？』

『……あぁはん？』

『あ、起きてるんですね』

『……あぁはん』

『今回のお楽しみ会なんですけどー、準備はどうするんですか？』

『あぁはん？』

『あ、先生が全部やってくれるんですねー』

『あぁ――』

はん、と続けようとしたところで、誰かから受け取った消しゴム（ケロリンの香り）を先生の口に突っ込むサエちゃん。あぁ、と返事したように聞こえなくもない。

という動画だった。

「ほらー！　ちゃんと言ってるでしょー」

「これっぽちもちゃんとしてねぇ」

「でも証拠があるんですからー、やってくださいねー」

作戦成功とばかりにニヤニヤするサエちゃん。そして共犯（動画撮影係&消しゴム手渡し係）の私とサユカン。

果たしてハメられたテンカ先生は一体どんな反応をしてくれるのか！？　私たちは大いに期待を膨らませた。

「……あのよ」

でも返ってきた反応は、予想外にも呆れた顔。

「ハメるならハメるで、もっと早く言えよ。もう一週間もねぇのにそんなこと言われてもフツーに準備できねぇぞ？　何を発注するにも間に合わねぇし、何の練習もできねぇだろ。時間なくて」

あ……口をあんぐり開ける私たち。

「そ、そういやそうだー！」

「結局わたしたちの首を絞めてるんじゃないのコレッ！　せっかくのお楽しみ会なのにっ！」

「そんな！　サエちゃんが計算ミスするなんて！」

「……ごめんねカカちゃん。計算とかじゃなくて、実は私もさっきまでお楽しみ会のこと忘れてたのー！」

『なにいいいいい！　サエちゃんに任せてれば大丈夫と思って放っておいたのにいいいい！（ｂｙクラスメイト一同）』

あぅー、しっぱいーしっぱいーと頭を抱えているサエちゃんも可愛いけど、事態はそれどころじゃない！

イベント大好きな私たちが、お楽しみ会に何もできないだと！？そんなことがあってはならない！　クラス全員がざわざわと騒ぎ出す。何か……何かをなんとかしないと！

そんな自業自得に焦る私たちに、テンカ先生は「やれやれ」とため息をつきながら口を開いた。

「まぁ落ち着け。オレもさっきお楽しみ会を思い出したときは焦ったがな、他のクラスの出し物を見て参考になったものがある」

「え、他のクラスは何するんですか？」

「タケダのワンマンショー」

騒いでいたクラスはなんか黙り込んだ。

「……なによ、その拷問」

全校生徒もかくやという人数の前、一人でショー。確かに拷問だ。

「いやな？　実はタケダってば最近まで失踪してたんだよ」

『そうなの？　気づかなかった』

誰が言ったかは想像に任せる。

「んで、あいつのクラスメイトが『おいタケダ、休みすぎで単位やべーぞ』『このままだと留年決定だとさ』『なんとかして先生のポイント稼がないと！』ってたきつけたらしくてな」

「あの……ここ、小学校……」

「おう、小学校で留年って素晴らしく格好悪いだろ？」

「あの、そういう問題じゃなくてっ！」

サユカンのツッコミは届かない。

「タケダも『なんと！　日本初の小学校留年児になってしまうというのか！！　ならん、断じてならん！　学歴重視の現在で小卒などではまともな就職ができるはずもないし、何より恥だ！　そのような世界的屈辱に比べれば、生徒の前でショーすることなど……たやすいわ！』って了承したらしい」

「あの……だから、法律……っ」

サユカンもういいよ。

「というわけでコレを参考に考えたんだが、オレたちのクラスの出し物はカカのワンマンショーということでどうだ」

「は？」

反対は出なかった。

むしろ皆、大賛成だった。

……うそん。

## カカの天下７２８「がんばれ〇〇」（後書き）

始まりました、『がんばれカカ』シリーズ。『がんばれタケダ』よりも視聴率を奪えるのか！
まぁシリーズ続きませんけど。

リアルな時期的には卒業式終わってますけど、実はお話的にそれよりちょっと前のお話だったりします。カカラジとかカオスでタイミングがズレました＾＾；
べ、別にテンカ先生みたいに忘れてたわけじゃないんだからね！

とりあえず、去年ほど盛大にではないにしろ、お楽しみ会はやりまーす。

自業な自得なカカさんは、何するんでしょうねぇ。

# カカの天下７２９「来年の練習？」

こんにちは、カカです。

今日は卒業式。ですが去年のように面白おかしいやりとりはありません。普通に『楽しかった、うんどーかい！』とか言ってます。つまらないです。つまらなさすぎて眠くなってきました。

『みんなで行った、遠足！』

普通すぎる。

いかん、これはいかん……なんとかして面白くしなければ。

でも私がいきなり何か叫ぶのもなぁ……卒業式を台無しにしたら六年生の人に悪いし。

仕方ない。頭の中だけで面白くするか。皆の言ってることを改造して……

以下、私の脳内での卒業式ですのであしからず。

まずは……そう、入場から。皆が整列しながら体育館へ行進してきて、ぜんたーい……止まれ！

違うな。

『へんたーい……止まれ！！』

ザ、ザ！　一糸乱れず静止する我が校の生徒たち。なんとも頼もしき変態たちよ。

あ、ちなみにこれを読んでるあなた？　いま動いてる？　もし動きを止めていたらあなたも変態の仲間入りだよフッフッフ！

さて、それはそれとして次は……卒業証書の授与、いこうか。

そつぎょうしょうしょ……

『卒業町長の授与！』

いらねー。

『卒業少女の授与！！』

可愛ければほしいかな。

『卒業でゅみゅみゅみゅうの授与！』

やべー超ほしい。

とか言ってるうちに全部渡し終わってー、つぎは送辞だね。

『掃除！！』

……ごめん。言ってみたかっただけ。定番すぎるよね、うん。私としたことが。ほんっとごめん。

せめて送辞は意表を突いたのを！

『みんなで渡った、赤信号！』

うんうん、こんな感じ。

『一致団結して頑張った――』

えっと、団結して頑張るもの、頑張ったもの……

なんだかんだでこれかな。

『――実生活』

日々みんなで頑張って生きてるよね、うんうん。

『この学校で一番、親しんだ――』

教室？　ううん、違う。

『――お便所』

大人気だよねお便所。たまに行列できるし。

『そこには、思い出が、いっぱいです』

うん、そこでいっぱい喋るから思い出もいっぱいあるよね。間違ってはいない。

『僕が、私が一番になるぞ、とみなぎった――』

んと。

『――お父さん、お母さん』

ウチの子が一番よ！　受験戦争って意外とそんな感じだよね。

んー、でもこれは私的にはいまいち……じゃあこれでどうだ。

『みんなで作った、お母さん！』

こわ。

『みんなで食べた、お父さん』

こわすぎる！！　みんなこわすぎる！！

『とっても、美味しかったです！』

感想いらない！！

『さらに給食の時間は、六年生の皆さんが輝いて見えました！』

どんだけ大食いがいっぱいいるんだ！？

……ふう、ちょっとはしゃぎすぎたかな。落ち着こう。

『時に厳しく、時に優しく、色々なことを教えてくださった――』

先生？　教頭？　ううん、やっぱこの人だ。

『――トメ兄』

これ本当の卒業式に言ってみたいな。もちろん本人を呼んで……うわ、愉快すぎる。来年やろう。私の知り合いの名前をどんどん使ってー……

……来年？

うん、それはいい。それはいいんだけど……来年だけじゃなくて、そこをああして、あこをこうして……あぁ、これいい！　私ってば頭いい！

よぅし、お楽しみ会はこれでいこう！

「……お？」

ふと妄想から意識を戻してみると、卒業式は答辞の途中でした。

『お世話になった、お父さん、お母さん。おじいちゃん、おばあちゃん――』

そんな卒業生の言葉を聞いて、なんとなく思いついた。

『みんなで逝った、おじーちゃん、おばーちゃん』

おじいちゃあああああああああん！　おばあちゃあああああああああん！！

「カカちゃん……泣いてるの？」

「か、悲しくて」

「そっか……私の胸で泣いていいんだよー」

「ううううううう」

「カカすけって意外とセンチねっ。てっきり自分に関係ない卒業式なんかどうでもいいかと思ってたわ」

ごめんサユカンそれ正解。

## カカの天下７２９「来年の練習？」（後書き）

遅くなりましたが、卒業した皆さんにこの話を送ります。
……い、いや、ほんとすみません！　ほら、子供のすることですから！　こんな話イラネーヨとか言わないで！！
こ、こほん。気を取り直しまして。世間ではもう春休みが始まってるっぽいですけどようやく卒業式です。ちゃっちゃと追いついてお楽しみ会始めますが、今回は色んな意味で意外になるかなーと思ってます。

あと、もう一つ。
更新日が一日遅れました。
なぜかといいますと……作者が飲み会で潰れて二日酔いで、仕事始まるまでずっとくたばってたからです！
書く余裕なんかありゃしねぇ！　昨晩の記憶もありゃしねぇ！
ほんっとーに、申し訳ないと思っている！！

**カカの天下７３０「ちぇ、ちぇんじ？」**

こんばんは、トメです。

今日も今日とて夕飯を作ってます。肉カレーです。どれくらい肉いカレーかというと、牛肉、豚肉、鶏肉と全種類入れたカレーです。肉いです。なんか最近のカカは肉を食べたいみたいでしたからね。唐揚げとか。

「よしできた」

味見おっけー。さぁ妹を呼ぼう。

「おーい！　夕飯できたぞー！」

呼びかけるとすぐに妹の声が返ってきた。

「はーい」「はいっ」

なんと二つも。

……二つ？

居間を覗く。するとそこにはテーブルにスタンバイして今か今かと夕飯を待っている――サエちゃんと、サユカちゃんが。

「……あれ、うちの妹は？」

「今日は私たちがトメお兄さんの妹ですよー」

「ふっ！　不束者ですが！　よろしくお願いしますっ！」

なんか、随分と前に似たようなことがあったような……

「じゃカカは、またどっか泊りに行ったのか？」

「さすがトメお兄さん、話が早いー」

「さ、さすがですっ！　お、おお、おおおお、おにーちゃーんっ！！」

そんな頑張って妹やらなくても。

「おにぃぃぃぃぃちゃあああああんっ！！」

頑張りすぎ。

「んで、カカはどこ行ったんだ。サエちゃんち？　あ、今度はサユカちゃんちかな」

「タケダんちー」

ほわっつ？

「……ぇ？　サエちゃん、今、なんと？」

「だからー、カカちゃんはタケダ君の家にお泊りへ行ったんですよー」

「な、なんで？」

「なんか、お楽しみ会について打ち合わせがあるとかでー」

「卒業式しながら何か思いついたみたいですよっ！　お、おお。おにぃっ！」

頭が真っ白になった。

うちの妹が……うちのカカが……あんなカス男のところに……

「コロス」

「トメお兄さん、落ち着いてー」

「落ち着けるか！　うちのカカが！　あぁうちのカカが！　男の家に外泊だなんてお兄さん許しません！！　タケダ医院をデストロイしてやる！！」

「か、カカすけがいなくなった寂しさはわたしが埋めますからっ！」

「そういう問題じゃない！　カカは嫁にはやらん！！」

「まーまー落ち着いてー！！　私もあんなゴミにカカちゃんを譲る気はありませんからー！」

「ほ、本当か？　カカは大丈夫なのか？」

「大丈夫ですよー。変なことしそうになったら、カカちゃんの手でタケダが消滅するだけですからー」

そ、そういえばそうか。そうだよな、タケダごときがカカをどうにかできるわけないよな。

「……しかし気にくわん。まさかカカのやつ、タケダに気があるのか？」

「それはないですってー。私が保証しますよー」

「そうか……」

ん、あれ。なんか、さっきからのサエちゃんの言動って……ま、まぁいいか。

「後で電話しよ……」

「はいはい、心配性なお兄さんですねー」

「で、ですから今はわたしたちで我慢してください！　お、お兄ちゃんっ！！」

「や、別に僕は妹がいないとダメなわけではなくて」

「シスコンが今更なにを言っても無駄ですよー。ご飯ご飯ですよー」

「わたしでは妹として不足ですかっ！？」

だから別に妹になる必要は……って、ツッコんでも無駄か。はぁ。

「じゃ。飯、食べるか。今日はカレーだぞ」

「わーい」「わーいっ」

「お肉たっぷりだぞ」

「お肉！　ウッホー！　ウッホー！」「ウンバババッ！　ウンバババッ！」

「……あーっと、そこの、なんか焚き火を囲む原始人のごとく踊ってる二人は何をしたいんだ？」

「カカちゃんのまねー」「カカすけならこれくらいはするかとっ」

するけどさ。

「別にさ、うちに遊びに来たってことで……無理してカカの代わりしなくてもいいんだぞ？」

「それじゃおもしろくありませんよー」「どうせやるなら楽しくいきましょうっ」

……こういうとこまでカカっぽい、なんて思いつつテーブルにカレーライスを並べていく。

「はい席について。それではいただきます」

いただきます、と手を合わせて行儀よくお辞儀。二人の妹（仮）もそれに倣う。

そして揃ってカレーを口に運んだ。

うん、我ながら美味い。でもカカ仕様で肉っ気多いんだけど……
二人は大丈夫か？

「さすがですお兄ちゃんっ！　すごく美味しいです！」

ほっ、よかった。しかしサユカちゃんにお兄ちゃんとか呼ばれるのはどうにも違和感が……

「サユカちゃん、その美味しさを例えるならー？」

「世界中のお肉がオーケストラを奏でている感じよっ！！」

なんだかとても暑苦しい光景が浮かんだ。

「それにこの甘口ながらも小さな辛み！　これは愛がスパイスになってるんですねっ！」

サユカちゃんも恥ずかしいことを堂々と言うようになったなぁ。

でも、小さな辛み？　おかしいな、けっこー完全に甘口なはずなんだけど……

「きゅう」

ぱたり、と。サユカちゃんが顔を真っ赤にして倒れた。

「え、なに、どした！？」

「ふふふー」

倒れた相棒を楽しそうに見つめるサエちゃん、その手には『後からくるビックリな激辛さ。ふりかけましょう鷹の爪』が握られていた。

「サエちゃん、それ」

「実はいつぞや誕生日にもらったのですよー」

「入れたの？　サユカちゃんのカレーに」

「はい」

「いつの間に？」

「いただきますのお辞儀してる間にー」

「……で、後からきたのか。辛さ」

「ですねー。美味しい美味しいってがっついてましたから、見事な効果です」

「……なんでそんなことを？」

「サユカちゃんも言ってたじゃないですか、『スパイスが愛』だとー。これが私の愛ですよー」

なんか逆だった気がするんだけど。

「さぁトメお兄さん！　今ならサユカちゃんをいじり放題ですよー

！　何します？　何しますー？　イロイロ持ってきたんですよー。
服とか耳とか鼻輪とか」

鼻て。

「とりあえず水を飲ませる」

「鼻からですね」

「ほんとカカっぽくなってますねアナタ！」

やれやれ、先が思いやられるわ……

「むー、つまらないですー……あれ、そういえば」

「どした？」

「いえ、こっちの話なんですけどー。カレー、タケダ、といえば…
…あの娘はどうしてるのかなーなんて思いまして」

「……？」

よくわかんないけど、とりあえずこの話は続くみたいです。

おまけ。

そのころのインドちゃん。

「むむ……！」

きゅぴーん、とその目が妖しく光りました。

「今日のカレーは……四味違う！」

残念ながら特別な力はありませんので、カレーの同士が増えても好きな人の家に女がいても、インドちゃんが気づくことはなかったのでした。

「豚肉、牛肉、鶏肉……山羊肉は？」

た、たぶん。

## カカの天下７３０「ちぇ、ちぇんじ？」（後書き）

ふ、まさかタケダの家とは予想外だったでしょう。その辺りの様子は次回にでも、トメ家の様子と連動でお楽しみください。

ちなみに肉肉カレーは私が実際作ったりしたものだったりします。結構イケますよー。

それにしてもどら焼きは美味しいなぁ（話飛び＆超私事

## カカの天下７３１「練習だってさ、がんばれタケダ」

トメです。

今夜はなにやら妹交代ということで、カカに代わってサエちゃんとサユカちゃんがお泊りにきています。

「お、お兄様！」

「トメにいたまー」

「……なに、それ」

「お兄ちゃん、という呼び方は違和感があるみたいでしたので、呼び方を変えてみましたー」

確かにさっき思ったけど……それ、口に出してないよな？

「心を読むな。兄呼ばわり自体が違和感あるんじゃい！」

「私はいつもトメお兄さんって呼んでますよー？」

「で、でも私としては兄じゃないほうがいいですっ！　そのほうが結婚できますし！」

「おめでとー、サユカお義姉ちゃん」

「あぁ、義妹よっ！！」

「いいから風呂入ってこい！！」

わーわーキャーキャー言いながら散っていく二人。まったく、ある意味カカより騒がしいわ……

「トメさんっ！　覗かないでくださいねっ！」

「絶対に覗いてくださいねー」

「はよ入れ！！」

あー疲れる。

……今頃、カカは何してんのかなぁ。

――そのころのカカとタケダ。

「こ、このたびは俺の家に来てくださりありがとう！！　どうぞ遠慮なく夕飯も食べていってくれ！」

「ん、ありがと。それはいただくけど、今日は私の言うことに全て従うように」

「な、なにをさせられるのだ！？」

「いいからつべこべ言わずに従え。まずは夕飯を出せ」

「か、かしこまりました！！」

「……息子は愉快な友達を連れてきたなぁ」

「父上！　ヘルプ！」

「ヤ」

再びトメです。

お風呂上りの二人に『なんで覗いてくれないんですか！？』とステレオで責められ（サユカちゃんは風呂に入っている間に懐柔されたらしい）、「そんなモン覗いて何になる」と答え、『ネタになる！』と返されて、あぁやっぱりこの二人はカカの親友だなぁなんて再確認しつつ、今度は僕がお風呂に入る番となりました。

「ふぃー……」

湯船でゆったりまったり中。

そこへ、

「ハレンチな妹とうじょー！　さぁ行くんだーサユカちゃん！」

「さ、サエすけ！　本当に行くの？　うぅ……もうヤケよっ！　お兄ちゃん、お背中流しますっ！」

甘い。

「あ、あれ。なんか開かないわよっ」

お風呂場の扉は内側からアレをコレしてどうにかしてロックしてある。

「むむー、こうなったら衣服に悪戯をー、って、あれー？」

さらに甘い。衣服も風呂場に持ち込んである。防水のためスーパーの袋に詰めてな。もちろんタオルもだ。これなら着衣を済ませて風呂場から出れる。

「なんでそこまでするんですかっ！！」

悪戯好きなお子様とは付き合いが長いものでね。はー、いいお湯。

「むー、こうなったらお風呂場の電灯を消してやります」

「おい待てそんな地味な嫌がらせ――」

パチン。

真っ暗。

……地味に迷惑だ、これ。

「サエすけっ！　これは愛のない嫌がらせよっ！」

「そっかー。じゃーちゅけよー」

「……ちゅけよ？」

「……かんだー」

とにかく結局、電灯は点いた。

――そのころのカカとタケダ。

「お風呂……覗かれた……」

「ふっふっふ」

「写真まで……撮られた……」

「ふっふっふっふ」

「もうお嫁にいけない！！」

「うっさい、男のくせにちっさいこと言うな」

もちろん覗かれたのはタケダのほうである。

「さぁ、言うことを聞け！」

三度、トメです。

「お風呂上りのお菓子に、チョコはいかがですかー？」

「お、珍しい形のチョコだな」

「サエすけ、わざわざ持ってきたの？」

小さな箱に入ったチョコを差し出され、とりあえず僕は一つ摘まんで、

「ほれ」

笑顔なサエちゃんの口へ放り込んだ。

サエちゃんは笑顔でペッ！　と吐き出す……かと思いきや、

「ありがほうごわいわふー」

特に動揺した様子もなくそのまま口の中で転がした。なんだ、てっきり風呂場の雪辱戦に何か仕掛けてきたのかと思ったんだけど、普通のか。

「わたしもっ！　わたしもアーン！！」

別にそういうつもりでやったんじゃないけど、まぁいいか。嬉しそうに口を開けるサユカちゃんの姿に苦笑しながらも、僕はそこ目がけてチョコを放り投げるのだった。

――そのころのカカとタケダ。

「さぁ、鳴け！」

「モォォォォォォォ！！」

「叫べ！！」

「なんじゃこりゃあああああああ！！」

「……タケダ！」

「イェス・マム！！」

「おまえはなんだ！？」

「でゅみゅみゅみゅうであります！」

「おまえの人生とは！？」

「でゅみゅみゅみゅうであります！」

「おまえの父親は！？」

「もうすぐでゅみゅみゅみゅうであります！」

「おまえの母親は！？」

「旅行中であります！！」

「おまえが今すべきことはなんだ！？」

「大佐に従うことであります！」

「ＮＯ！　ＮＯ！　違うでしょ違うでしょうそうじゃないでしょソレじゃないでしょ全然これっぽちも正解じゃないでしょう？　練習は中断！　お仕置き！」

「でゅみゅみゅみゅみゅみゅみゅみゅみゅみゅ――」

今ごろカカは何してるんだろう……おそらく変なことになってるんだろうなーなんて確信しながら考えつつ、

「はろほろひれはりぇーあははー」

この子をどうしよっかなーなんて思ってる、四度トメです。

「トメさん……どうしましょうっ」

「うーん」

サユカちゃんと二人して頭を抱える。視線はサエちゃんに。

「とめおにーひゃーん……ひくっ」

そう、なんかベロンベロンのサエちゃんに向けられている。

「多分、僕たちを酔わすつもりだったんだろうな」

先ほど食べたチョコ。それにはブランデーが入っていた。よくあ

る話ではあるけど、そのチョコに含まれていたアルコール度数は予想以上に高いものだったのだ。

そして悲しいかな、皆で仲良く食べているときに真っ先に酔っ払って「ふにゃあああーん」とか叫び出したのは首謀者サエちゃん。この中で一番アルコールに弱かったらしい、なんて子供相手に言うのもどうかと思うが。

「サユカちゃんは平気？」

「何個も食べましたけど、ちょっと体が温かいだけですっ！　もしかしてわたし、トメさんと一緒に飲みにいけるかもっ！？」

それ僕が捕まるから止めて。

「にゃふー、とめおにーひゃん、だっこー」

フラフラと立ち上がったサエちゃんは、そのまま危うい足つきで僕へ向かってダイブ――

「阻止っ！！」

しようとしたところをサユカちゃんが身体でブロックした！

「ふははっ！　わたしの目の前でトメさんとイチャつかせるわけないでしょうっ！」

「にゃー、じゃサユカちゃんだっこー」

バスケのディフェンスよろしく密着していたサエちゃんは、その

ままサユカちゃんにひっついた。

「ちょ、ちょっとサエすけっ！？　ひゃぃっ？　まって、ほっぺた舐めないでっ！」

「ぺーろぺーろちゅっちゅーぺーろちゅっちゅー」

「ひぃやあああああああっ！　トメさん助けてっ！」

た、助けるって言ってもな。引き剥がせばいいのか？

「トメひゃんも、なめゆー？」

悪寒がしたので全力で回れ右。

「さーてと、寝床を用意するかな」

「と、トメさぁぁぁぁぁぁんっ！　ひぅ？　ちょ、そこはくすぐった、あん！　あぁんっ」

「聞こえない聞こえない。カカのベッドそのまま使えばいいよなー。とすると枕をもう一つ用意すればいいわけだ。枕、枕、っと」

あの二人の寝床が一緒なのは言うまでもない。

今夜は楽しんでくださいませ。

――そのころのインドちゃん。

「あ、メルちゃんから返信だ。えっと？　『今夜は練習のおかげで寝られないんだよ。でも私は負けない！　一晩でモノにしてみせる！』って、何をモノにするのかな」

モノにされるのはタケダ……かどうかは定かではない。

「さっき私が送った質問の答えは……あ、最後にあった。なになに？　『今日の夕飯は焼き魚の鯖だった』かぁ。おかしいなぁ。なんとなくメルちゃんちの夕飯はカレーのような気がしたんだけどなぁ」

前話でもいいましたが、インドちゃんに特別な力はありませんのであしからず！！

……たぶん！！

――そして、あわただしい一日が終わる。

## カカの天下７３１「練習だってさ、がんばれタケダ」（後書き）

久々にがんばれタケダ話！
とかいいつつメインはトメ家サイドのダブル妹にゃんにゃんだったりカカの暴走だったり。まぁ細かいこと気にしないのがカカ天ですしタケダの扱いなんて所詮はそんなもんです。
ま、好きな子と一晩過ごしたんだから、その幸せに見合う分だけ不幸になってもイイよね♪

あと、お気づきの方もいるかもですが。
先日、見事トップに輝いた名セリフを最近は特盛りにしています。あくまでトップ記念ですので、期間限定の多用ですのであしからず。
あと、今回の話はいくつかのリクエストが重なってます。細かく紹介はしませんけど、ヤッタね（いろんな意味で）！　また感想いただけると嬉しいです＾＾

ではでは、展開速いですけどそろそろお楽しみ会ですよー。

**カカの天下７３２「夜があけて、目もあけて？」**

ふぁ……おはようございます、トメです。

昨日はイロイロとありましたが、二人をカカの部屋に押し込んでさっさと眠ってしまいました。なのでイロイロ危ぶまれた僕は無事でして、二人がどうなったか気になるところです。

「ふぁ……あ？」

ベッドから半身を起こそうとして、温かい何かに、ふにゅっと手が触れました。

嫌な予感と共に横を見てみます。

――だらだら。

そこには、僕と一緒の布団をかぶったサユカちゃんが！？

――だらだら。

こ、これはまさか、よくあるパターンの『やっちゃった朝』なのか！？

――だらだらだらだら。

などと思うはずもなく。

「おはようサユカちゃん。脂汗すごいよ。無理すんな」

だらんだらんと顔から滝のように流している汗を見る限り、サユカちゃんにとっては大冒険もいいとこの挑戦だったに違いない。ネタに付き合ってあげたいが、倒れそうなほど真っ赤な彼女の顔を見るとさすがに続けるのは気の毒だ。

「おおおはようございます！　ば、ばばばばっバレましたかっ！」

「いいから汗拭きなさい」

「は、はいっ！　では失礼して」

そう言ってサユカちゃんは僕のシャツをまくり上げ――

「僕の汗じゃなくて！　自分の汗を拭けってこと！」

「あああ失礼しましたっ！　てっきり朝だからトメさんが大胆になってしまったのかとっ！」

大胆になってるのはどっちだ、と心でツッコミを入れつつ立ち上がる。寝巻きのまんまだけど……いっか。

「トメさんのパジャマ、可愛いっ！」

「そうか？　普通の青パジャマだけど」

「青パジャマ赤パジャマ黄パジャマですね！」

何か増えてる、じゃなくて、よくスラスラ言えたね早口言葉。

「サユカちゃんのケロリンパジャマも可愛いよ」

「ひくっ！？」

なぜしゃっくりする？

「……まぁいいや。ところでサエちゃんはどうしたの？」

「あっ、忘れてました！　そうです、それなんです。ちょっと来てくださいっ！」

サユカちゃんは僕の腕をぐいぐい引っ張り出した。やっぱ大胆っていうか強引になってきたよなぁなんて思いつつ、ついて行ってみると……サエちゃんとサユカちゃんが昨日泊まったはずのカカの部屋へとたどり着いた。

「サエすけの様子がおかしいんです、ほら見てくださいっ！」

「お邪魔しまーす」

そーっと部屋に入り、ベッドを見てみると……そこには、半身を起こしたサエちゃんがいた。

長すぎる髪はジャングルのツタを無理やりかき集めたかのようにボサボサ。目は薄らと開いているけど焦点は定まっておらず、視力が働いているのか甚だ疑問である。

「え、っと。サエちゃん、おはよう」

「……」

返事がない。まるでしかばねのようだ。

「サユカちゃん、昨夜はサエちゃんに一体何を……」

こんな魂抜かれたみたいになるまで……どきどき。

「何もしてませんっ！　ベッドに入るなりすぐに寝ちゃったんですからっ！」

なーんだ。少し楽しみにしてたのに、あの後の展開。

……変な意味じゃないぞ？　冗談だぞ？

「しかし微動だにしないな。サエちゃんって寝起き悪かったっけ？」

「聞いたところによると、たまに熟睡したときは悪くなるそうですっ！　深すぎる眠りに入るとなかなか帰ってこないとか……いつもわたしやカカすけと一緒に寝るときはそこまで深くならないらしくて見たことないんですけどっ！　やっぱりこれがそうなんでしょうかっ！」

なるほど。昨夜のチョコに含まれた酒のせいでその深すぎる眠りとやらに誘われたというわけか。

「さっきもかなり強く揺すってみたんですけど、全然起きないんですっ！」

「これ、微妙に二日酔い入ってないか……？」

なんだか異様にボーっとしてるような。

「揺すってもダメなら……サユカちゃん、どっかつついてみな」

「つつくって、どこをですか？」

「んー、わき腹とか。指先をぶっさしてみな」

くすぐったがりの人は結構これで起きる。ちなみにうちは父がこういう攻撃に弱かったりして、まだまともに住んでたころに起こしてくれと言われ、よくツッツキ攻撃をしたものだ。そしたら父はとても男らしい声で「オゥ！」「Ｈｏｕ！？」「ぁあん♪」とか叫びながら飛び起きたものだ。とっても気持ち悪い。

「どれどれ……えいっ！」

そんな忌まわしい思い出を振り返りつつ投げ捨てつつ、サユカちゃんのツッツキ攻撃を見守ってみた。

つん。

「……んぅ」

つんつん。

「……やーん」

お、反応あり。

「……んぅぅー。くしゅいー」

くしゅい？　くすぐったいってことかな。

「……んぅ！　くしゅいー、くしゅいー」

眉根をひそめて静かにくねくねするサエちゃん……ヤバイ、なんか可愛いすぎる。サユカちゃんも頬を赤らめてぽーっとしてるし。

ごん。

「あ痛」

くねくねしすぎて壁に頭ぶつけた。

「……うー？」

起きたかな？

「……千円」

なにが！？

「サエすけ。わたしがわかる？」

「三千円でしょ」

だから何が！？

「……あ。おはよーサユカちゃん。トメおにーさん」

「お、おお。起きたのか」

「み、みたいですねっ」

「んー……私、なんか言ってたー？」

僕とサユカちゃんはあえて教えないことにした。しかしとことんカカっぽくなってるなぁサエちゃん。

さっきの「くしゅいー」状態をまだ引き摺ってるのか、サエちゃんはフラフラしながらサユカちゃんに支えられるようにして朝食のテーブルについた。

「トメお兄さん、朝ご飯はなんですかー？」

「カレートースト。ほい」

並べたのは、昨日のカレーにチーズをあわせてトーストと一緒に焼いたもの。お手軽にできるアレンジメニューで、朝食に結構合うんだ。

「では、いただきます」

『いただきます』

行儀よく三人で手を合わせた、そのとき――

「ちょっと待ったぁぁぁぁぁ！！」

懐かしいその声は!?

「カカすけっ！　もう帰ってきたの!?」

「ただいま！　私のご飯は!」

「あ、じゃあ今から作――」

「むしゃむしゃむしゃむしゃ！」

「あ、僕のカレートースト!!」

他人の朝食をものすごい勢いでかき込んだカカは、もぐんもぐんと口を動かし、ごっくんと飲み込んで、

「寝る!!」

そのまま自分の部屋へと直行していった。

「……なんだったんだ、今のは」

「カカちゃん、寝ないで練習するーって言ってたから、徹夜明けなんじゃないですかー?」

はぁ、練習……なんの?

「徹夜かぁ、わたしにはマネできないわね……ところでタケダはどうしたのかしら」

「私の予想だと、向こうも睡眠不足と練習の疲労でくたばってると思うよー」

「そっかぁ、仕方ないわよね。すぐにお楽しみ会なんだし」

あぁ、お楽しみ会の練習してたのか。

……なんの？

――そのころのタケダ。

「息子よ、どうした」

「でゅみゅみゅみゅう」

どうしたのかは推して知るべし。

## カカの天下７３２「夜があけて、目もあけて？」（後書き）

お楽しみ会の準備完了……やっとです。うーん、本当は春休みの前にお楽しみ会だというのに！

やはり二日に一度だと遅れ遅れになりますね……しかし今の予定だと仕方なく……

まぁ、なんとかします。急がず無理せずほのぼのと。

# カカの天下733「2008年度カカ天ダイジェスト」

こんにちは、トメです。

今日はカカの通っている小学校でお楽しみ会があるとのことなので、例年通り見学に来てみました。

「楽しみですね、トメさん！」

「楽しそうでお気楽で化粧濃くていいですねーサラさんはー」

「うるさいですよサカイさん。私だって去年みたいな小芝居することになって疲れてるんですから」

いがみ合うサラさんサカイさん。今年は二人とも保護者としてすんなり入れるはずだったんだけど、受付の子が「あ、去年のおもしろいお兄さんたち」とか覚えてたもんだから、またもや家族ごっこしなきゃならなくなったのだ。

「弟君も大変だねぇ」

「……姉。あんたはどうやって入った」

「天井から忍び込んだ」

さすが人外。忍者の娘。

「はっはっは、それに便乗させてもらいました」

「お、キリヤ……あれ、姉と仲良かったっけ？」

「いやだなぁトメ君。私は笠原ファミリーの誰とでも仲がいいですよ！」

笠原ファミリー……なんか単純に家族って意味じゃなくて、芸人とかでよくある団体的な意味に聞こえるな。例えばここにいる皆とか。

「あ。ほらサエすけ、いたわよっ！」

「トメお兄さーん、お母さーん」

向こうからぶんぶん腕を振りながら寄ってきたのはサエちゃんとサユカちゃんだ。

「サァァァエェェェェェ！！」

「サカイさんうるさいです！　今回はサエちゃんが出るわけじゃないんですから！」

「私は常にサエを応援しているんです！　あなたとは家族への愛情が違うんです！」

「そうですね、私のは真摯な愛情ですが、あなたのは変態的な愛情ですから」

「オラそこ！　周りの迷惑になっからケンカしてんじゃねぇ！」

「あ、テンカ先生っ！　一緒に見ましょうっ！」

「ここ空いてますよー」

「ふ、私の隣でよろしければ」

「よくない。キリヤンどいて、あたしがそこ座るわ。おーいテンちゃんこっちー」

「ったく騒がしいヤツらだ……おぅ！？　シェー、いたのか。気づかず踏んじまったぜ」

「……た、タマ様は大丈夫……よかった……た、タマ様をご無事にお連れするのが僕の役目……ならばこのくらい……」

「シェー、いいからかたぐるましてー」

「鬼子ですか！？　ていうか僕はシェーじゃなくてシューです」

「似てるからいいじゃん」

「クララ楽しみです！！」

うーん、どんどんファミリーが揃ってく感が……ところでクララちゃんはいつの間にいたんだろうか。

「そろそろ五年生の演目ですよー」

サエちゃんの言葉を聞いて、騒いでた笠原ファミリーが演目表に目を向ける。

ええと、なになに？　まず最初が……

『タケダのワンマンショー』

なるほど、これが噂の。

じゃあ、その次が……

『タケダのワンマンショー』

待てい。

「あの……なんか同じ項目が二つあるように見えるんですけど」

「それはですねー、最初がカカちゃんのワンマンショーなんですけどー、そのワンマンショーの名前がー、タケダのワンマンショーなんですよー」

そんなにワンワン言われてもわけわからん。犬じゃないんだから。

「つまりー、タケダのワンマンショーっていう題でカカちゃんがワンマンショーをするんです」

「サエすけ、同じことワンワン言ってるだけよ、それじゃ」

「わんわーん？」

要約すると次がカカのステージってことだし……まぁ、見ればわかるか。

『それでは次に、五年生の演目に移りたいと思います』

アナウンスが流れ、うちのファミリーはステージに注目する。たった今の今まで四年生が何かしてたんだけど、失礼ながら全く見てなかった。ごめんな、名も無き四年生。

『まずは、笠原カカさんでタケダのワンマンショーです』

それにしても並べて『カカのタケダの』とか言ったらすごくわかりにくい演目名だ。ワンマンなんだかそうじゃないんだか。

ツッコミは心の中だけに留めておき、緞帳が上がり始めると同時に皆で拍手。賑やかな声援に迎えられて現れたのは……まず直立不動のタケダ。そしてその後方にカカ。なんだか脚の高い椅子に座って、台本のような冊子とマイクを持っている。

『えー、どうも。私は笠原カカといいます、初めましてこんにちは』

マイクを通してスピーカーから体育館に響く声。大勢の人前だというのに緊張の色はほとんどない。数々の経験から場慣れしてきたのかね。

『今から私のワンマンショーを始めます』

ワンマンのわりにはステージに二人いるんだけど、そこは触れないのだろうか。

『えっとですね、今から私が何をするかと言いますと……今年度、つまり五年生を振り返ってみようと思います』

お？　意外とまともじゃないか。で、どこがワンマンなんだ？

『そして、その思い出を、そこのタケダ君にどうにかして表現してもらおうと思います』

ワンマン……

『タケダ君、挨拶をどうぞ』

「ワンワン！」

マテ。

『景気よく挨拶したところで、早速去年の四月の話からいってみたいと思います。えー、昔々、まだテンカ先生も二十代だったころ』

「今はもう三十代みたいな言い方すんじゃねぇ！！」

『……え！？』

「意外そうな顔もすんじゃねぇ！　オレはまだ二十――」

『なかったことにします。えっと』

客席からの苦情を華麗にスルー。怒りつつもステージを優先してあげたのか、テンは不貞腐れた顔で黙り込んだ。

『えっと、五年生になったばかりの私たち！　桜が咲いて、気持ちのいいスタートを切りました』

うん、ここは普通だ。

『そして、お花見！』

「桜が舞い散る中で、儚さと美しさを知りました！」

なんだか卒業式のやりとりみたいだけど……タケダの家まで行ってたのは、これを練習してたのかな？

『そして最初の事件が起こりました』

ん？

『なんと、クララちゃんという愉快な女の子が現れたのです！』

学校行事とか振り返るかと思いきやプライベートな話かよ！　こいつぁ確かにワンマンだ！　ワンマンプレイだ！　んなこと言われても身内しかわかんないってのに！

「く、くらら登場です！！」

しかもタケダが何か言ったぁ！？　とても気持ち悪い！！

「クララの偽者です！？」

本物キター！

『クララちゃんはいろいろあって、私たちの仲間になりました』

ＲＰＧのあらすじじゃないんだから。皆さんポカーンとしてます

よ？

「く、くららしょっくでぇす！！」

黙れタケダ。おまえのセリフが僕らにとってショックだよ。

「クララしょっくです！」

本人も繰り返さんでいい。

「ふ、ふむ。こうか？　くららしょっくです！」

練習もせんでいい！！

『えー、そしてですね。桜の季節も終わり』

進行はえーなー。

『次に、お母さんが帰還しました』

脈絡ねーなー。

『いつも、知らないうちに帰って、知らないうちに仕事へ出て行くお母さんに、いってらっしゃいを言うことができました』

……あぁ、そんなに心に残ってたんだな、あの日のこと。

今ここで、発表したくなるくらいに。

「いってきます、カカ君！！」

でもタケダがそのセリフを言うのがとてつもなく気に食わない。
そんなん母さんと違う。

『次に誕生日！』

「知り合い二人の誕生日ということで、わたしってばどっきどき♪」

注：これはタケダのセリフです。

『まずトメ兄、っていう私のお兄ちゃんと』

カカの言葉に反応して、タケダが僕の紹介を始めた。

「はぁぁー、ツッコミツッコミ！（とても気合の入った声）」

ぶっ飛ばしていいか？

『私の親友の一人、サユカン』

次はサユカちゃんの紹介。

「とめさんラッブラブ♪（とても気色の悪い声）」

「ぶっ飛ばしていいですかっ？」

僕と同意見が出たが、周りのファミリーに「どうどうどう」と押さえられる。こいつらはどうやらこの続きを見たいらしい……まぁ、ぶっ飛ばすのは後でもできるか。

『この二人が同じ誕生日だったので、デートさせました』

「うふふ、あはは、うふふふあはははは」

つい一瞬前まで感じていた怒りが霧散した。

だってタケダ……笑いながら泣いてるんだぜ……

デートを表現するために、ステージに立って、一人で、道具もなく、なんかできそこないのパントマイムでカップルのマネしようと必死なんだぜ……

想像してみてほしい。百を優に超える人間の前で、一人「いやんばかん！」と叫ばなければならない姿を。

もし自分なら全力でやりたくない。今は春だというのに、心は冬を越える寒さとなるだろう。

「はぁぁぁぁ！　いちゃいちゃいちゃいちゃぁぁぁぁ！」

どう考えても僕らがバカにされてる展開なんだけど、タケダがんばれーと応援したくなってしまった。それはサユカちゃんも同じらしく、同情っぽいものを込めながら、壊れていく彼を見ている。

『そんな梅雨を過ぎると』

どんな梅雨なのか詳しく説明していただきたい。

『今度はあの時期がやってきました』

夏、か。それとも夏休みか？

『お見合いです』

とことん学校関係ない方向へ行くのな！？

「我らがテンカ先生が、お見合いをすることになりました」

卒業式よろしく口上を述べたタケダが、さらに言いました。

「俺たち、私たち、三十二名は！」

はぁ。クラス全員がどうしたって？

「思いました。似合わねー」

「ぶっ殺すぞてめぇ！！」

今度はぶちキレたテンを止めるハメになった僕ら。がんばれタケダ、テンの形相を見ないようにしながら怯えて震えてるけど、逃げるなタケダ！

『そんな似合わないお見合いを、もちろんテンカ先生は完膚なきまでに破壊していきました、物理的に』

「フハハハ！　どかーん、ばこーん！　すぽーん！！」

街を壊す怪獣よろしく暴れる芝居を続けるタケダ。その憐れな姿にさすがのテンも怒りを鎮め――

「壊したのは誰だっつうんだアノヤロウ……だがここで騒ぎ過ぎればオレのことだとバレるし、それが本当だと認めることになっちまう……我慢……我慢……いつでも殺れる、いつでも殺れる、オレならヤツをいつでも殺れる……」

――て、なかった。自分に言い聞かせるようにブツブツ呟いてる。このあとどうなっても知らないぞ、カカ。

『そして夏祭りがやってきました！』

「あーらえっさっさー！」

盆踊りを踊るタケダ！

『繰り広げられる、漫才大会！！』

「いちゃいちゃいちゃいちゃぁぁぁぁ！！」

誰と誰のコンビ漫才のことを言ってるのか知らないけど叫ぶタケダ！

『優勝は、私！』

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ」

『疲れてるんじゃないよ！！』

「はいいいいいい！！」

タケダ、がんばれ。もうそれしか言えん。

『その後、私の親友であるサエちゃんのお母さんが帰ってきました』

「この話は十八禁なので言えぬ！！」

ざわ……ざわ……騒然とする体育館。説明が不足すぎて、またもや身内しかわからないネタなんだけど、それでもざわめく十八禁。みんな注目、十八禁。サカイさんのやったことも、十八禁……というか、単純に禁。

『私たちの、誕生日は！』

「十八禁！！」

ざわざわざわ！！　十八禁が大人気！

でも、なんちゃって結婚式はやりすぎた感があるし、伏せておいて正解かもしれない。

しかし運動会を飛ばしたね。少しは一般の人にわかる話を入れようよ。やなヤツと張り合ったりして色々あったんだしさ、って、ヤナツ君を最近見てないな。生きてるのかな。出番あるのかな。

『クリスマスには、日ごろの感謝の気持ちを大人の皆さんに返しました』

あー、あのお呼ばれした日のことね。ペアに別れてカカサエサユカの部屋に入って遊んだ……タケダはどうやって表現するのかな？

「いやあああああ！　見えちゃう！　見えちゃうううう！」

うげろ。サユカちゃんのイヤンなシーン……あえてそこを選択するか……

ん、なんかキモいタケダがカカのほうをチラチラと見ている。

タケダは目でこう言った。「本当にやるのか？」と。

カカは目でこう言った。「やりやがれ」と。

「み、見えちゃうぅぅぅ」

控えめにもう一度そう言ったタケダは、少しずつ、自分の服を脱ぎ始め……

カカに蹴られた。

『本当に脱ぐやつがあるか！？』

「だ、だってぇ！　脱げっていったではないかぁ！」

『冗談に決まってるでしょ！』

僕は知っている。タケダが脱がなかったらそれはそれで「なんで脱がないの！？」とカカは怒るだろう。あいつはそういうやつだ。人でなし。

『そして迎える新年で、私たちは初詣から元気でした』

「すっぽんぽーん！　すっぽんぽーん！　何が何でもすっぽんぽー

ん！」

『タケダ君はバカですね』

「なにをぅ！？　君らは新年からこればっか叫んでいたんだろうが！」

『んなわけないじゃん』

「んがぁぁぁぁー！　また騙されたぁぁぁ！　でもカカ君だから許す！」

いや、まぁ、実際は叫んでましたけど。

『バレンタインでは、私の兄のイヤンな過去が明かされました』

うをぃ！？　まさか喋る気か！！

「いやん、だめ、あぁん、そこは」

タケダよ……その演技は何が言いたいのだ？　またもやキモすぎて殺したくなってきたんだが。

『これが――その過去に出てきたトメ兄の元彼女、ユカさんの全貌です』

「うっふんあっはん！！」

「ワタシそんなんじゃないわよ！」

ユカいたの！？

『あ、いました。あの人、あの人がトメ兄を捨てたひどい彼女です』

「違うわよ！！」

『じゃあトメ兄に捨てられた可哀想な彼女です』

「それも違うわぁぁ！」

ユカ、落ち着け。注目の的だぞ。僕も注目されたくはないから声はかけんが。

『さて、次です。ホワイトデーにトメ兄は恥ずかしい手紙を配りまくっていました。ここで、そのトメ兄がユカさんに充てた手紙を朗読したいと思います』

『やめろおおおおおおおおお！！』

ハッ！？　思わずユカと同時に叫んでしまった！

『タケダ君、朗読』

「ユッチー、愛してるＺＥ！」

「書いてねえええええええええ！！」

「トミー、ワタシもＹＯ！」

「返事なんて書いてないわよおおおおおおおお！！」

『どうですか？　私はこんなに愉快な人たちと一緒に今年度を過ごしてきました。何が言いたいかわかりますか？』

長々と続けてきた身内ネタしかない小芝居。それを見て何かわかる人間は、笠原ファミリーを含め誰一人としていなかった。

カカは、何を言いたかったのか？

その答えは、すぐにわかり、

『そう、これは単なる自慢です！　どうだ、羨ましいだろー！』

そして脱力。

自慢……そうは言いつつ、何も知らない人にとっては微塵も理解できない展開だった。これを聞いてカカを羨ましがる人はいないだろう。

理解できるのは本人だけ。そしてその一年を実際に経験してきた僕らだけ。

それでもきっと、本人は満足なのだ。あとでみんなで食事会でも開いて、そのときに話の種にさえなれば、それで。

たった一人だけが満足する自慢会。たしかにワンマンショーといえるだろう。でも、まぁ。心底楽しそうに話すカカの表情を見て、心温かになった人もいるかもしれないし、これはこれでよかった……のかな？

『それでは私のワンマンショーは終わりです』

ぺこりとお辞儀して、なにやら真っ白に燃え尽きたっぽいタケダを引き摺ってフェードアウトしていくカカ。緞帳も下りる。

呆気にとられている会場の中で、僕ら身内の拍手だけが響いていた。

『次の演目に移りたいと思います』

さて、見るもん見たし、帰るかな。

『つぎは、タケダのワンマンショーです』

また!?　と体育館中でツッコミが響く。そうだそうだ、これも見ておかないとな。

またもや上がっていく緞帳。そこんは、今度こそタケダが一人で立っていた。真っ白なままで。

「はぁ……はぁ……はぁ……身も……心も……ズタボロだ俺……もう何もできない」

無理くさい。退場か？

誰もがそう思った、そのとき！

意外な救世主が現れた！

カカだ！

「もしもネタがないならーって授けたのがあるじゃないの！」

なんと、カカは自分の演目に付き合わせたせいで失われたタケダの練習時間を気にして、ネタを授けていたのだ！（後で聞いた話）

タケダは目をくわっと見開いた。これしかない、これをするしか生き残る道はないのだと、大きく息を吸って――

「でゅみゅみゅみ

# カカの天下７３３「２００８年度カカ天ダイジェスト」（後書き）

予想以上にまとめるのに時間かかったり長くなったりで更新遅れまくっちゃったＹＯ！

というわけで丸々一日遅れの更新となりましたが、お楽しみ会改め今年度を振り返ってみました笑

多分、予想を裏切った形だと思います。でもまぁ、イベントの後はゆっくりのんびり～が私の基本スタンスですので。大げさに長々とイベントやるより変わったことを一発でやりたかったのです。長かったけど。

で、大きな事件をまとめたものの、深くツッコんで書くよりもタケダの妙ちくりんな動きで表現したほうがカカ天っぽいかなーと思ってこんなんなりました。

そのわりには動きの描写が少ない？　いつものことじゃん。そこはタケダの魂を想像するんだよ。想像力と発展力と愉快力とアハハ力はでゅみゅ力を最大限に発揮するんだよ！

まー色々とありましたが。

カカ、五年生お疲れ様！！

# カカの天下７３４「正しい言葉の伝え方」

こんにちは、サエですー。

もう四月。春休みに入り、桜の開花宣言もされて、来たるべき春に備えてうっきうきですー。

「クララちゃんの桜はどんなもんですかー？」

ぽかぽか陽気の下を散歩中、隣を歩く桜の精さんに声をかけます。

「はい！　蕾をたっぷりつけてるので、満開になったらきっとすごいですよ！」

去年、枯れかけてしまったクララちゃんの桜。密かに回復したものの、その事実はもっとも伝えたい相手には未だ明かしていませんでした。

「校長先生は、まだ気づいてないのー？」

「はい！　なんだかお仕事で県外に行ってるみたいで。でも今日には帰ってくるって教頭が言ってました！」

教頭に聞いたってこと？　以外と学校に馴染んでるねークララちゃん。

「じゃーそろそろ学校に来てるかもね。迎えにいこっかー」

「はい！　それでですね、クララの満開のときに公園に呼ぶのです

！　でも途中で来られたらクララしょっくですので」

「うん、そこはうまく誘導しよー」

適当に用事を作るように根回しできればいいんだけど、うちのお母さんのコネでそんな感じのことできないかなーなんて。

そのときは、思ってたんだけど――

「――あら、おほほ。お久しぶりね、サエさん。クララさん」

「二人のお嬢さんにわざわざ迎えられるとは、校長もやりますな」

タイミングはビンゴ。帰ったばかりの校長先生は、ちょうど職員室でデストロイヤー教頭と先の出張先について談笑中だった。

「こーちょー！！」

そして突進していくクララちゃん。

「おほほ！！」

迎え撃つ校長！　いや、クララちゃんを抱き止めるだけだけどー。

「こーちょー！　こーちょー！　こーちょー！」

「おほほ」

「こちょこちょこちょこちょこちょ！！」

「おほほほほほほほほほほほほほほ！！」

……大丈夫ですかー、お二人とも。

「うむ、楽しそうで何より。まるで本当の親子のようだ！」

「教頭、それ本気で言ってますー？」

「無論だ。親子ならあれくらいするであろう」

そ、そうなの？　じゃあ私もお母さん相手に突進してこちょこちょしないといけないのかな……今度やってみよう。

「お帰りなさいです、校長！」

「お出迎えありがとうね、クララさん。でもわたくし、すぐに発たないといけませんの」

クララちゃんの表情が、固まった。きっと私も同じ顔をしている。

「えい！」

クララちゃんは頑張って校長先生の少し曲がった背中を伸ばそうとしました。なんだか無理やり伸ばされて苦しそうに見えますけど、校長先生は眉一つひそめることなく笑って、

「おほほほ、立つ、ではなくて発つ――また県外に行かなければならないということですよ」

校長先生は、申し訳なさそうに、笑って。

「いつですか！？」

「今晩には出ます……おほほ、そんな顔をしないでクララさん。二週間後には帰ってきますよ」

二週間。

その前に、花見の満開の時期は、もう――

「きゅららしょっくです！」

噛んでしまうほどにショックだったんだろう。

悲しませてしまったお母さんに、満開に咲いた桜の姿で再会しよう……そう思って一年間、クララちゃんは待ち続けてきたというのに。

「……！」

クララちゃんは言えない。満開の時期に、あの桜の木のところへ行ってと言いたいのに。自分が桜だと、普通の人には、何の力も持たない普通の大人には知られてはいけない――精である以上、その自然のルールには逆らえないから口にできない。

「じゃ、じゃあ、せめて」

私はクララちゃんの口を塞いだ。

言おうとしたことはわかってる。「せめて今日だけでも、あの桜の元へ行ってあげて」と。満開の時に会えないのなら、蕾をたくさんつけた姿を。まだまだ自分は生きているのだと証明できる姿を見せようとしたのだろう。

でも、こんなに待ったんだ。せっかくなら満開のときに会わせてあげたい、そのほうが絶対に桜として本懐なはずだ！

クララちゃんが私を見上げてくる。その目を見つめる。それだけでお互いの意図は伝わった。

――どうする？

「ちょっと、待っててください」

訝しむ校長と教頭を置いて、私とクララちゃんは職員室を出た。少し離れた廊下の角を曲がり、そこで携帯を取り出す。

すぐに頼みの綱のお母さんにかけた。なんか裏っぽい取り引きとかしてもらって、校長先生の出張をなくしてしまえば。

それが悪いこととはいえ、ダメ元で相談するつもりだった。

でも本当にダメだった。お母さんは仕事中で出られなかったから。

「サエおねーちゃん……」

どうする、どうする、どうする。時間がない。

嫌がらせして出張できないようにする？　いいや、私みたいな子供にできる悪戯なんてたかが知れてる。いくら裏に手を回しても、子供の力で桜が満開になるまでの数日間を邪魔し続けるなんて不可能だろう。

いつもいつも変なところで頭が回るくせに、こういう肝心なときに限って何も浮かばない。

助けて。誰か助けて。

お母さんがダメなら。

私をいつも助けてくれる人は――

「……あ」

いる。

忘れていたわけじゃない。忘れるはずはない。いつもいつも、どんなときだって私を助けてくれる人。でも自分と同じ子供な彼女に話して、今回の話が解決するのだろうか？

どちらかというと、そのお兄さんの方が知恵を貸してくれるのでは？

そう、思いつつ……私は、やはり最初に親友を頼った。

「もしもし、カカちゃん？　あの」

そして、それは正解だった。

「校長！　お願いがあります！！」

「おほほ、なぁにクララさん。改まって」

カカちゃんに、その作戦を聞いて。

私たちは再び、校長先生と教頭の前に立っていた。

「あの……」

作戦がうまくいくかはわからない。

むしろ、うまくいかない可能性のほうが高いと思う。私が絶対に思いつかない作戦だ。でもカカちゃんは、それしかないと断言した。

「あの……！」

それを、信じた。

「出張に、行かないでください！！」

「……はい？」

直球に。これ以上ないほど素直に。クララちゃんはそのお願いを口にした。

「行かないでほしいんです！！　あと一週間だけ！　あと一週間だ

け、この街に居てくれないでしょうか！！」

あまりにも無理な注文。

「……なぜ？」

困惑しつつも優しく聞いてくれる校長先生、しかしクララちゃんの返答は。

「言えません！！」

またもや正直なものだった。

「でも、お願いします！　あと一週間だけ、ここに居てください！！」

これは、ただの、駄々っ子だ。

理由は言えない、でもこうしてほしい。それを真っ正直に伝えることこそが、駄々をこねることこそが、カカちゃんが発案した作戦だった。

「……クララ君？　悪いけどね、私たちもお仕事なんだ。理由もなしに、これまで計画されてきた行事を放棄することはできないんだよ。わかるね？」

「わかりません！！」

聞き分けのない言葉。

「お願いします！」

身勝手な言葉。

「……ひっく……おね、がい……します……！」

涙も鼻水も隠さない、感情をむき出しにした言葉。

「クララさん」

「ひぐ……うぐ……うぅぅ……」

子供の、言葉。

「わかったわ」

それが、届いた。

「校長！？」

「教頭先生、あなたが代わりに出張に行ってもらえますか？」

「しかし、私では先方が納得しな――」

「させます」

大人の都合をあっさりと一蹴して。

「クララさん、わたくしはここに残って、どうすればいいのかしら」

「くりゃりゃと……い、いっひょに、おはなみ」

涙でぐしゃぐしゃなクララちゃんの顔を胸に抱いて、校長先生は頷いた。

「一緒にお花見に行きたいのね……うん、楽しそうね……わたくしも行きたいわ……よしよし……よしよし」

優しく、穏やかに。幸せそうに。泣きじゃくる子の背中をさすり続ける校長先生は、まるで本当の母親のよう。

私の、クララちゃんの望んだ光景がそこにある。

「カカちゃん……ありがとう」

すごく悩んだ、これでもかと頭を捻って考えた。どうすればうまくいくのかと。

でも、考えないからこそ伝わることがあるのだと、私は改めて知った。

そう、知っていたはずなのだ。だって私の親友は、いつだって何も考えずに周囲に春を撒き散らしてきたのだから。

もうすぐ、春が来る。

だってここはもう、こんなにも温かい――

## カカの天下７３４「正しい言葉の伝え方」（後書き）

色々な言葉の伝え方があります。
でも、率直な言葉が一番大事だと思います。

……まあ、大人の都合ってもんをどうにかするのは大変ですが。
それに見合うものがあれば、頑張るべきだと思います。校長がんばー！

しかし最近咲き始めた桜の花……和む……

# カカの天下７３５「春の日々ならぬ春な日々」

カカです。春休みに入りました。

休みに入る直前、テンカ先生は「春だぞ。ねみぃだろ？　好きなだけ寝て、嫌になるほど寝て、そしておとなしく寝てろ」と言っていました。宿題をやれと言う前に、とにかく私たちにおとなしくしてほしいみたいです。

そうはいくか。

というわけで春休み、一日目。

何かしよう……とは思ったけど、お楽しみ会で疲れたこともあってトメ兄とゆっくりすることにしました。

「はふー」

「んー」

居間で二人、お茶をすすってまったりのんびりテレビ鑑賞。

「……お茶」

「はいよ」

トメ兄はおとなしくしてる私には優しい。特に文句もなくお茶のおかわりを煎れてくれる。

数分後。

「お茶」

「はいよ」

数分後。

「お茶」

「はいよ」

数分後。

「おしっこ」

「はいよ」

「湯のみに入れるの！？」

「ちっ」

「トメ兄……どうするつもりだったの？」

「や、特に何も。反応見たかっただけ。トイレだろ？　行ってこい行ってこい」

トメ兄はたまにお茶目だ。

二日目。もう元気満タンだ。

この日はサエちゃんサユカンと二人で遊び倒してやろうと思ったのに、天気は雨だった。なんだか外に出るのが面倒だ。でも広がってる水弾幕をふっ飛ばしながら突き進むのも悪くないかなぁなんて思ってたら……お姉が遊びにきた。

「やほ、カカちゃん」

「お姉。ちょうど退屈してたんだよ」

「おし、じゃあ久々にやるか？」

「おっけー！」

春休み、つまり連休だからこそできることがある。それはお姉式トレーニング。やり方はこうだ。

一日目。体中のありとあらゆる筋肉をトレーニングでぶっ壊す。例、死ぬほど腕立て伏せをして両肘を付けることができなくなるくらい胸筋を壊す、など。笑いが止まらなくなるくらい腹筋する、など。体の動かなさに泣けてくるまで、など。

二日目。筋肉痛で半分死体。でもできるだけトレーニングする。泣き言は聞かない。

三日目。軽いランニング、軽い運動だけして無理はしない。よくやった。

この三日間、きちんとたんぱく質、余裕があれば適応したアミノ酸を取ること。そうすれば三日だけでかなり筋肉が付く。筋繊維とは一旦壊し、再生することにより強くなるのだから。

ただし注意点。この三日間は激しく行動が制限される。休みでもない限りはするべきではない。二日目に学校や仕事に行こうものなら地獄の一日となるだろう。あなたがドMならば止めはしない。

以上、かつて小学生に入ったお祝いとしてお姉が授けてくれた修行法である。あまりにきついので年に一、二回しかやらないけどね。

よって、春休み二日目〜四日目。体をふらふらにして過ごした。あまりに動けず、外にも出れなくて暇だったので、宿題を全部終わらせてしまった。ちなみにお姉は一日目に私の倍トレーニングしてたくせに、二日目は元気に仕事へ行っていた。バケモノ。

五日目。体が回復した。やっとサエちゃんサユカンと全力で遊べる。

あまりに嬉しかったので、サエちゃんをお姫様だっこして商店街を爆走した。

サユカンは慌ててついてきた。私が見苦しく迷惑かけていることを「ごめんなさいっ！　ごめんなさいっ！」って商店街の皆様に謝ってる。サエちゃんは私の腕の中で寝ている。

商店街を一周したあたりで私は満足した。我が筋力は確実に鍛えられておる。サユカンの喉も確実に鍛えられておる。

「さて、とー」

起きたサエちゃんは徐にサユカンの背中から一枚の紙を剥がした。
貼り紙に書いてある文字は――『笠原トメはわたしのモノでごめんなさい』
『宣伝終了』
サエちゃんとハイタッチ。サユカンは叫ぶ。おお、喉はまだまだいけるみたいだ。
――その夜、トメ兄が。
「なぁ。今日さ、夕飯の買い物に行ったときに変な目で見られたんだけど、僕に何か変なとこあるか？」
「別に」
とりあえずおめでとう。
「そっかー。変といえばキリヤもなんだよ。最近付き合い悪くてさー。奢るって言ってんのにさー」
「あっそー」
とりあえずどうでもいい。
六日目。サエちゃんちで遊んだ。以前に壊れたパコちゃんはすっ

かり元気。ヘンテコＲＰＧでサユカンの絶叫を聞いた後は、サカイ動物園で思いっきりはしゃいだ。一番楽しかったのは鬼ごっこ。動物たちはさすがに速いけど、ルールをわかってないので上手く手懐ければ鬼をあっさり代わってくれる。

そんな動物たちの中でも、一番目立っていたのはゆーた。

「うへへへへへ」とか気持ち悪く笑いながら手をわきわきさせて追いかけてくる姿はヘンタイにしか見えなかった。サエちゃんはそれを真っ正直に言って、ゆーたを泣かしていた。泣くくらいならしなきゃいいのに。でもそれがいいのか。

途中からサカイさんも参加した。誰かと同じように「うへへへー」と追いかけてきて、サエちゃんに「そのネタさっき見たー」と言われて泣かされていた。変態の考えることは皆同じらしい。

七日目。商店街を歩いていたらイチョウさんに会った。

花屋のサラさんに差し入れに行くとのことなので、ついていく。

「お、カカちゃん」

そこではお姉が植木鉢を十二個ほど両手で持って運んでいた。どうやって持っているのか、わけがわからない。

「サラちゃん？　あの子なら奥にいるよ……え、なに！？　お姉さんのことはどうでもいいの！？　一緒に叫びながら腕立て伏せした仲じゃないの！？　汗くさくて水くさくて単純にくさいあたしらの

友情は――」

「いいから仕事しなよ植木のバケモノ」

「んだとう！　肥料くさいとも言う気か！」

「草とも言う気だ」

「おう、一本とられた！！　じゃ、その草の仕事してきまーす」

「いってらー」

イチョウさんは私たちのやりとりを呆然と見つめていた。

「え……っと、仲がいいですね！」

すごく感想を言いづらそうだった。

「ま、姉妹だし」

「わたくしも負けていられません……お姉様！」

花屋さんの中へ入って、すぐにサラさんは見つかった。

「おやおや妹ちゃん、どったの？」

「もうすぐお昼ですので、差し入れをお持ちいたしました」

「わわ！　うっれしぃ！　愛してるよ妹ちゃん！！」

いきなり抱きついて頬ずりされるイチョウさん。メガネがズレる、三つ編みがズレる、「そ、その、あの！？」と焦って表情もズレる。服も微妙にイヤンにズレる。可愛いじゃん。仲いいじゃん。私と姉じゃこういうのはなんないんだよねぇ。

「それで、何を持って来てくれたのかな？」

イチョウさんはバッグからお弁当箱を取り出した。

「お父様のライスと、わたくしのハンバーグ、そしてヤナツのサラダです」

「なんか家族を食ってる気分になるんだけど」

「食べてくれないのですか？」

こんな新しい「私を食べて」初めて見た。

八日目。お馴染みトリオで公園を闊歩してたらニシカワ君とアヤちゃんが歩いているのを発見、即突撃。

「ようよう、お熱いねぇお二人さん！」

「……カカ、あんたのセリフは寒いわよ」

ショック！！

「ねーねーお二人さん、誤魔化さないで教えてよー」

「どうなのっ！　どうなのっ！　ラブラブしてたのっ！？」

瞬時に真っ赤になるアヤちゃん。それに比べてニシカワ君は涼しい顔で、

「うん」

頷いちゃった！？

「え、ちょ、に、ニッシー？」

「どうやってラブラブしてたのー？　詳しくー」

「そこらへんブラブラ」

『そんなボケはいらない！！』

私ら三人の声が重なり、不思議そうに首を傾げるニシカワ君。

「ラブラブってどんなの？　ねぇアヤ坊」

「え……ど、どんなのって、ニッシー？」

「どんなのかなぁ」

「そ、その……」

私ら三人は思った。

そんなのだよ。

九日目。

「もう春休みが終わる！？」

「もうって。さんざん遊んだだろうが」

「花見してない！」

「次の休みにでもすればいいだろ」

「それもそっか」

異常気象かまだまだ寒く、桜の花もこれからが本番だ。

新学期が始まる私らも本番。さぁ、頑張っていこう！

「とりあえずさ、僕ってばこないだ警官に話しかけられたんだけどなんでかな？」

「さーて宿題って終わってたっけなぁ」

## カカの天下７３５「春の日々ならぬ春な日々」（後書き）

春休みの日々をざーっと書いちゃいました。
手抜きになるかなーと心配でしたけど、意外と楽しく書けてよかったです＾＾

さてさて、ようやく普通の時間軸に追いついて……でもちゃんと春の話は今後も書いていきますのでご安心を！

# カカの天下736「どんまいテンカ先生」

よう、テンカだ。

今日は始業式、その後に入学式がある。それが終われば宿題集めたり話をしたりだの、楽な仕事ばっかりの一日だぜ。ま、宿題をチェックするのは面倒くさいんだがな。

まずは始業式。校長の挨拶から校歌斉唱へ。

「テンカ先生」

「あん？　なんスか校長」

「伴奏のピアノをお願いします」

「……は？」

そうだ。そういやいつもは教頭がピアノ弾いてたが、今日はいねぇんだ。珍しく校長が行事を仕切ってるなーと思ってたら……

「や、校長が弾いてくださいよ。ピアノくらいできるっしょ？」

「ねこふんじゃった、しか弾けませんわ」

「……マジか」

この辺りはオレたち全員が教頭頼りだったか。

「というわけでテンカ先生、お願いします」

「似合わねぇっスよ？」

「弾けるなら関係ありません」

無茶を言うなぁこの人……仕方ねぇ。オレは渋々ピアノ前まで移動する。

座る。鍵盤を睨みつける。

さぁ、どうする？

『校歌、斉唱』

ま、普通に弾けるんだが。

何の問題もなく流れるメロディ。そして歌いだす生徒達。悪い、本当に悪い、おもしろくなくて心から謝る。

ミスもボケもなく終わる演奏と斉唱。オレはこきこきと肩を鳴らしながら教師側の席へ戻った。

『続きまして、新年度についてのお話をいただきます。テンカ先生、どうぞ』

……あぁん！？

「ささ、どうぞ。テンカ先生」

にこやかに促してくる校長。

「普通は校長がすんじゃねぇのか？」

「ねこふんじゃった、しか話せませんわ」

「嘘付けや！！」

おっと、思わぬ事態についタメ口になっちまった。

「おほほ、わたくしは入学式のためにチャージしなければいけませんの。それにいつもいないわたくしがやるより、教頭の愛弟子であるあなたがやったほうが生徒の皆さんもしっくりくるでしょう」

そ、そうなのか？　っつうか、いつの間にオレはあのデストロイおやじの弟子になったんだ。おやじくさい自覚はあっけどよ。

「それではお願いします」

オレは再び渋々とステージに上がった。

教壇に置かれたマイクを見下ろし、さらに下の生徒どもを見渡してため息をつく。

ま、できるんだが。

『おし！　じゃあ聞け、そしてオレを見ろガキども』

鋭く視線を走らせる。そして、

『三年、宮崎京伍！！』

唐突な名指し。怒声によって体育館が震える。

『てめぇ、オレの声が聞こえなかったのか？　なに俯いてやがる。耳がわりぃのか頭がわりぃのか、それともてめぇが悪いのか、どっちだ！？』

そして罵声。予想外な展開によって生徒間に緊張が走る。

『……そうだ、てめぇが悪い。そうやって頭を下げるなら許してやる』

生徒どもは不安そうに、恐る恐るチラチラと周囲の様子を伺っている。オレが名指しした生徒がどこにいるか気にしているんだろう。

『聞け！』

そんな挙動不審を一喝した。

『いいか？　今みてぇに名指しされたくなかったら、ちゃんとこっちを見て話を聞きやがれ。オレは生徒の顔と名前を全て覚えている。不真面目なやつがいやがったら即、公開処刑だ！　いいな！？』

『はい！』

威勢良く返事をしたのはオレのクラス、さすがにわかってるな。

しかし、他のやつらがわかってねぇ。

『おいコラ、不真面目なやつがいたら処刑っつったろ？　真面目なやつぁ返事はしっかりするもんじゃねぇのか？』

『はい！』

まだうちのクラスだけだ。わかってねぇ、わかってねぇなぁ？

『何度も言わせんな！！　返事しやがれ！！』

『はい！！』

増える声。ようやく意図が伝わったか。だがまだ足りねぇ。

『真面目なやつの返事っつうのはどんなんだ？　大きな声ではっきりと、だろうが！？』

『はいぃ！！』

『おいおいまだ聞こえてねぇのか？　それとも意味わかってねぇのか？　恥ずかしいのか？　例えばそこの二年、松崎真太！！　口パクしても誤魔化されねぇぞ！』

二人目の犠牲者が出たおかげで緊張感が高まったせいか――

『これから新しい学年だ、いいかてめぇら！？』

『はいぃぃ！！』

生徒の声量は上がるばかり――

『変わるのは肩書きだけじゃねぇ！　授業、環境、教室、何から何まで変わりやがる。それを乗り越えるために何が必要なのか、このオレが教えてやる！！』

『はいいいいい！！』

『それだ！　その声、その意気、その気合だ！！　てめぇらガキどもは元気さえありゃ大抵のもんは乗り越えられる！！』

『はいいいいい！！』

『いいか！　わかったかガキども！』

『はいいい！』

『わかってねぇのか？　返事が小さいと何度言わせる！？』

『はいいいいいい！！』

『それだ！！　その声を忘れるな！　そして一年後にはもっと大きな声を出せるようになっていろ！！』

『はいいいいいいいいいい！！』

『また一年頑張るぞオラァ！！』

『はいいいいいいいいいいいいいいいいい！！』

『長げぇ！！』

『はい！！』

『以上だ！！』

『ありがとうございましたぁぁぁぁぁぁ！！』

『長げぇっつってんだろが！！』

『した！！』

『短けぇ！！　以上！！』

ふぅー……おお、なんか大勢に拍手されてる。

「おほほ、やっちゃいましたねぇ」

教師側の席では校長が小気味よさそうに出迎えてくれた。

「でも名指しは感心しませんね」

「大丈夫だって。言っただろ？　オレは生徒の名前を全て覚えていると」

オレが指した名前を持つ生徒はこの学校に居ない。あれは単なるハッタリだ。

「いいえ、いるのです。　宮崎京伍さんと、松崎真太さんが」

「なに！？　そんなはずはない。オレは生徒の名前を全て――」

「教師の名前は？」

「そっちは覚えてなかったぁ！！」

よくよく見てみればシュンとなってる先生が二人！　さらに聞けばオレが適当に言った学年も当たっていたらしい。ただし担任として。

「そうか。適当に言ったものの、どっかで聞いた名前だと思ったんだよなぁ……」

「お話自体はとてもよかったですよ。お疲れ様。次の入学式はきちんとわたくしがやりますわね、テンカさんは少々勢いが強すぎるので……おほほ」

褒められてるのか微妙なとこだが、なんとなく校長と仲良くなれた気がする。

その後の入学式は、校長によって無難に進められ……滞りなく解散し、生徒たちは各教室で集合して今後の日々に不安と期待を入り混じらせるのだった。

そして新年度早々、全校生徒の前でオレに怒られてしまった先生二人は……とっても過ごしにくいスタートを切ったそうな。

いや、マジですまんかった。めんごめんご。

## カカの天下７３６「どんまいテンカ先生」（後書き）

最近テンカ先生の出番が少ないとの指摘を受けたので、主役にしてみました。
こんな始業式……ないよねぇ。だからこそ書くのだ！

それにしても最近、二日に一度というより四日に二度更新になってきましたねぇ。日々のリズム的にこっちのほうがやりやすいんですよねぇ。
不安定でごめんちゃい笑

## カカの天下737「ごろんごろん」

「ふにゃー……」

こんにちは……カカでふぅ……

あぁー、いま？　いまね、ふにゃふにゃなの。溶けてるの。太陽さんがあんまりにもポカポカだからね、公園の芝生で大の字に寝っ転がって光合成してるの。

「あーったきぃー……」

解説しよう！　あたたかい→あったかい→あったけー→あったきぃー、って感じ。

「あー……ぅうぅー……」

解説しよう！　気持ちよくて、あー、うー♪　な感じ。

程よい雲と、程よい陽気。これだけ春色な気候なら桜もじきに満開だね。あの桜が咲いたらお花見しないとなー。みーんなみんな集めて、騒いで……んあー、それはさておき現在進行形の太陽光が気持ちよすぎるー、草の匂いが心地よすぎるー、花の香りに癒されすぎるー。

たまに体を撫でるそよ風、揺れる草木の静かな囁き、涼やかな鳥の歌、遠くから聞こえてくるのは子供の声……公園って実は、すんごく快適なお昼寝スポットなわけですよ。意外とみんな気づかないわけですよ、気づいても知ってても、忘れてたりするわけですよ。

――なにを？　お昼寝の幸せ具合を、ね。

これこれ、そこの大人さん。そんなに急いでどこに行く？　ちょっとゆっくり休みなさいな。その辺に転がってる幸せも、けっこーいいもんなんだべよ？

「あー……お？」

私が寝っ転がってる芝生越しの道にて、そんな急いでる大人さんの一人が足を止めた感じ。

なにやらこちらを凝視されてる感じ。

かと思ったらズカズカと――や、芝生の上だからざくざくか。とにかく足音たてて近づいてきた感じ。

んで、見下ろされてる感じ。

私は薄らと開いていた目を向けた。太陽を背にして、ぼんやりと浮かび上がるシルエット。

「……おねーちゃん？」

ふと、自然に口が動いた。

「ワタシはあなたの姉なんかじゃないわよ」

あれ、違ったか。

ほんとだ。うちの姉と全く似つかない金髪さんだ。

「ユカさんだっけ」

「そうよ。あなたのお兄さんの天敵よ」

口元がニヤける。天敵だって？　ウケる。

「……なにが可笑しいの」

「んや、日向ぼっこが気持ちよくてさー」

「……そう。じゃ、ワタシはこれ、で？」

目を細めてるからあんま見えないけど、ユカさんが訝しんでるのがわかる。

それもそのはず、私はユカさんの足をがっちり掴んでいるんだから。

「あの、離してほしいんだけど」

ぶんぶん、と首を横に振って拒否。

「なんで」

ばんばん！　と空いてる手で私の隣へカモンと叩く。

「……一緒に寝転がれって？」

コクコク、と頷きまくって肯定。

「はぁ……久々に変なのに捕まったもんだわ」

観念してくれたのか、隣へ動く気配がしたので手を離す。寝転がるまではいかなくても、芝生へ腰を下ろしてくれたのがわかった。

私は満足げに微笑む。

「意外と、のんびりさんなのね」

「んー？　なんで？」

「なんだか、いつも動き回ってるようなイメージがあるから」

「そうでもないよー。まったり大好きよー」

そりゃ面白いこと大好きだから暴れるときが多いけどねぇ。いつも一緒にいるトメ兄がこういう年寄りくさいの好きだから、いつの間にか毒されちゃったんだよね。

「……まぁ、ワタシも最近は空を見上げることもなかったし。いいか」

促されて私も空を見上げる。

「あの雲」

それを見つけて、思わず指を空へ向けた。

「あの雲？　うん、面白い形ね。まるで……」

「まるでトメ兄のツッコミみたい」

「どんな雲!?」

「あの雲は私のボケ」

「だからどんな」

「あれは黒いことしてるサエちゃん。愉快なことになってるサユカン。それを見て笑ってるテンカ先生とお姉、サカイさん」

一つ一つ、指を向けていく。

「料理を運んだりしてみんなのお世話をしてるキリヤン、ちゃっかり美味しいものばかり食べるサラさん、走り回ってるタマちゃんとクララちゃん、追い回されてるシュー。あ、あれは学校のみんなかな。あっちのは、サカイさんの動物団」

もう滅茶苦茶だ。でもしーらない。

「ずいぶんと楽しそうな雲の王国ね」

大事なのは、そこだけだから。

あったかくて、気持ちよくて、楽しければ、ただの雲だって——ラクガキし放題の王国なのだ。

「もちろんユカさんもいるよ」

「……そんな楽しそうな国に、ワタシみたいな恐い顔した女はいられないでしょ」

「そう？　ユカさんっていつも楽しそうだけど」

「はぃ？」

すっとんきょーな声出してまー。

「え、っと……ワタシ、怒った顔しか見せたことないと思うんだけど」

「でも本当に怒ってはいないでしょー」

「……なんで、そう思うの」

「なんとなくー」

隣を見る。そこにはきょとんとした女の人。

実は穏やかな人。

うん、やっぱり。トメ兄を相手にしてるときの刺々しい雰囲気が全くない。あれはトメ兄とだけの“遊び”なんだよね。

「楽しそう、か」

天敵だなんて、そんな遊び相手の呼び方は聞いたことない。だから、面白い。

「そか」

ユカさんも面白かったのかな？

「……あはは」

笑いながら、頭を撫でられた。

すごく、優しく。

「おねーちゃん？」

あれ、頭を撫でられてたら、なんかまた勝手に口が。

「……お義姉ちゃん、か。そう呼ばせて遊んでたこともあったっけ」

「えと？」

「おっきくなったね、カカちゃん」

そう言って、私の頭をポンポン叩きながら、にっこり笑ったユカさんは。

やっぱり私たちの仲間なんだって、思って。

「それじゃ、また――」

「今度、お花見するの」

立ち上がったユカさんを引きとめるように、また口が動いて。

「そうなんだ……ふぅん」

「みんな、集まると思うの」

「雲の王国のみんな？」

「うん。だからユカさんも」

ユカさんは少しだけ考えるそぶり、そして。

「入国審査に受かったら、行くわ」

冗談交じりにそう言って、踵を返した。

来てくれるかな……

来てくれるといいな……

あと……

「入国審査、か」

なんか考えておかないと。

面白いのを。

## カカの天下737「ごろんごろん」（後書き）

最近、日差しが温かくて。
のんびり日向ぼっこしてたら、こんなお話が浮かんできましたとさ。

トメには毒舌満載のユカさんも、子供相手には普通のおねーさんだったりします。

トメ以外の大人へは……はてさて？　入国審査を突破すれば見れるのでしょうか。

それはそうと昼寝したいなーくそー。

あ、次の話のあとがきにでも人気投票の中間発表を載せまーす＾＾

## カカの天下738「みんな楽しみスタンバイ」

カカです。

「カカちゃん、お花見の準備は済んだー？」

「うん、知り合いに全部頼んでおいた」

「……カカすけ、それ何もしてないのと同じでしょ」

「ううん、ちゃんと私が用意したのもあるよ」

「なに？」

「三角定規」

「何に使うのっ！」

「これで人間性を測るんだよ」

「角度しか測れないわよっ！」

「人間性の角度を測るんだねー」

「なんで納得できるのサエすけっ！？」

「私を測ると、直角とかになるのかな」

「やー、でもカカちゃんの角度は分度器でも測れなさそうだよー」

「サエちゃんこそ測った数値が正しいとは限らなさそうだよね」

「なに……なんなの、この会話っ！　花見はどこへ行ったの！？」

「サユカンは３６０度だね」

「間違いないねー」

「どうせわたしは測るまでもなくわかりやすい人間よっ！！」

ともかく明日が楽しみだ。

テンカだ。

明日はお花見だとカカたちが騒いでいた。そしてそれには校長が絶対に出席しなければならないらしい。理由はよーわからんが。

ともかく、校長っつー職は多忙だ。しかもうちのボスは他校に呼ばれまくるほど偉いヤツ。さらには教頭も出張中となれば、仕事はわんさかあるだろう。

校長が花見に行くには、仕事を終わらせなければいけない。それを話すとカカたちは「なんとかしてください」と直球かつ曖昧なお願いをしてきやがった。

ま、仕方ねぇ。面倒くせぇが、可愛い教え子の頼みとあっちゃ断りきれねぇからな。

「校長」

「あら、なんですかテンカ先生」

「仕事、たくさんあるでしょう。手伝いますよ」

「終わってますよ」

オレは一瞬、石化した。

「さ、さっきから熱心に読んでる資料は？」

「恋愛小説の『失恋、始めました』です」

「サボってたんかい！」

「だって、もうやることないんですもの」

「明日の分は？」

「終わってますよ」

「教頭の分は！」

「もちろんそれも。ちなみに明後日の分も終わってます。今は結果待ちだったり微調整の仕事もありますけど、後で二十分もあれば片付くでしょう。おほほ」

オレは実感した。できる人間というのは、仕事をこなす速度まで

ズバ抜けているのだと。

「あらあら、テンカ先生もお仕事終わったのね？　作業が速くなりましたねー、おほほ」

おほほじゃねぇよ。あんたを手伝うために死ぬ気で終わらせたんだよ！

「……明日、お花見いけます？」

「もちろん」

結果オーライ、か。

キリヤです。

「お弁当の件、引き受けていただき、ありがとうございます」

「いいってことよ」

私はカカちゃんに頼まれて、明日のお花見用のお弁当を用意することになりました。なので一番身近な料理人、早い話がうちのトウジ店長にお願いすることにしたのです。

「料理長は行かないんですか？　みんな集まって楽しいですよ、きっと」

「俺にゃぁ花見なんて必要ねぇ。桜で心を満たしたやつらが、今度

は腹を満たしにくる。そいつらに美味い飯を食わすのが俺の役目だ」

「飲食店なのにクサいとはこれいかに」

「うるせぇ！！」

「りょーりちょー？　顔まっかー」

「とっとと行け！！」

「はっはっは！　失礼しまーす！　お仕事がんばってくださーい！」

「待て！　どこへ行く！」

「花見に」

「そりゃ明日だろうが！　今日はまだ働くんだろうがぁ！！」

「キリヤンうっかり」

「いいから仕事場に戻れ！」

はっはっは！

トメです。

「ま、つ、り！　ま、つ、り！」

「まーちゅーりー！　まーちゅーりー！」

僕が幼児退行してこのように騒いでいるわけではもちろんありません。姉がタマちゃんとクララちゃんを連れて遊びに来たので、その相手をしているのです。

とは言っても、庭ではしゃぐお子様二人を姉と一緒に見守っているだけなのですが。

「祭りだ祭りだーです！」

「まっちゅ！　まっちゅ！」

「まっつりーです！　まっつりーです！」

「マッチョ！　マッチョ！」

「違いますよタマ！　祭りです！」

「たまちょっくです！」

お、クララちゃんの真似だ。なかなか可愛らしい。

しかしそこで姉の一言。

「や、祭りじゃなくて花見なんだけど」

『タマクラしょっくです！』

仲いいなぁ

「んじゃあたしも。姉ショーック！！」

なんか姉がやると油ショックの類か必殺技みたいだ。

ともあれ。明日の花見への期待は高まるばかり。

晴れるといいねぇ。

……ユカです。

「明日……か」

行こうか、どうしようか、まだ迷ってるわ。

「ワタシなんか行かなくても、別に……」

「そう言うわりには大量の服を抱えて何を着てこうか迷いまくりじゃ」

「うるさいわよジジイ！！」

ふ、服の整理をしてるだけよ！

「でも……のう？」

「うん……ねぇ？」

それは置いといて。

誰も天気予報を見てないのかしら?

明日は大雨なんだけど。

## カカの天下７３８「みんな楽しみスタンバイ」（後書き）

どうなるお花見、の前に人気投票の中間発表～
実は仕事中に時間もらっての携帯更新なんで、てっとり早く行きまっせ～

１　トメ
２　カカ
３　サエ
４　クララ
５　サユカとユカ
７　テンカ
８　キリヤとタケダ
１０　教頭

こんな感じ！
感想は感想欄にてどうぞ！　応援メッセージは引き続き受け付けてます！
返信もがんばります笑

# カカの天下７３９「満開の桜は何思ふ」

こんにちは、トメです。

今日は楽しいお花見の日！　だったのですが……

「雨……降ってきた」

嫌がらせのような曇天、少しずつ落ちてきた雨は徐々に勢いが強くなり、間もなく豪雨となるらしい。

『えぇー！』

僕の家に集合して準備をしていたカカサエサユカ、クララちゃん、姉の五人が一斉に不満を漏らした。

『困る！！』

そんなこと言われても。

「どうしよー、せっかくのお花見がー」

「よし、みんな！　急いでテルテル坊主を死ぬほど作るんだ！」

「カカすけ、今更そんなことしても無駄よっ！」

「お母さんを迎えに行こうと思ってたのに！」

慌てる一同。

「とりあえず案としては……サカイさんちにでも集まってパーティーでもするか？　せっかく弁当とか用意してもらったんだし」

もちろん僕もお花見はしたい。しかし雨の中で無理やりするわけにもいかないだろう。みんなの予定と準備を無駄にしないための代案を口にしてみたんだけど。

「そんなことしなくてもいいよ」

姉がずっぱり切り捨てて、言った。

「要は、あの雲にどいてもらえばいい話だ」

そんな無茶なことを。

「それで？　どうやってどいてもらうんだよ。雲にお願いでもするのか？」

「そう！」

アホだ。

「せーの――そこの雲！　どけえええええええええええええ！！」

それお願いじゃなくて命令な。

「お姉に続け！　どいてえええええええええええええええ！！」

「雲かーえーれー！　雲かーえーれー！」

「わ、わたしもっ！　ブーブーブーブーッ！」

「サユカン太ったの？」

「ぶたにくー？」

「お腹を摘まないでよっ！　ブーイングのブーブーよっ！」

『知ってる』

「ブーブーブーブーッ！！」

「クララもやるです！　ブヒー！　ブヒー！」

「だから豚じゃないってのっ！！」

や、そもそもさ。そんなことで晴れるわけないでしょ。

「お、雨止んだ」

うそぉ！？

「あの雲も邪魔だね。いくよ妹ちゃんたち！　せーの！」

『あっち行け！！』

本当に雲があっちに行った！？　なんか太陽見えてきた！！　なんだコレ！！

「本当に晴れた！！」

「よーし！　みんな桜の木にいこー！！」

「クララはお母さん呼んできます！！」

「ブーブー言ってるだけでこんなことができるなんて、豚って結構すごいのねっ！」

豚じゃないって言ってなかったっけ。というか、豚じゃなくて姉がすごい……のか？

「なぁ姉。おまえ動物だけじゃなくて天候も操れるのか」

「んなわけないじゃん」

「や、でもあんたが叫んだら実際に天気が」

「あたしゃノリで行動してるだけだ。そしたら空がノッてくれた。それだけのことさね」

どれだけのことなのか微塵もわかりませんが。

「ま、こんだけ力を持ってる人間が願えば雨乞いの逆くらいできるのかもね」

「力？　なんだそれ」

「なんかこう――幸せな力」

とりあえず姉の頭ん中が幸せなのはわかった。

「どうせ似合わないさ！　こういうセリフは！！」

「何も言ってないだろ」

さて、晴れたのには違いないんだし行くとしようか。

クララです！

天気をなんとか快晴にできました！　えっと、こういうのを気合っていうんですよね！

「こーちょー！　はやく来るです！」

「おほほ、そんなに急がないで」

シュバッと移動したクララはお母さんをエスコート中です。繋いだ手を大きくぶんぶん振って、ご機嫌に公園を目指します。

「晴れてよかったですね！」

「ええ、本当に。なんだか雲が怯えたように去っていきましたけど」

「雲が気合負けしたのですね！」

「はい？」

「どちらかと言うと気体負けですね！　雲ですから！」

「はい？」

「クララ気合です！」

「えーと。おほほ、元気ねぇ」

楽しく会話しているうちに、目的地はもう目の前に！

「……」

「あれ？　どうしたのですか校長」

なのにお母さんは足を止めました。

「お花見とは……この先のお花の下でするのかしら？」

「そうです！」

枯れたと勘違いさせてしまってから一年。ようやくクララの復活した姿を見せることができるのです！

なのに、お母さんは、背を向けて――

「校長！？　どどどどーしたのですか！」

「お、おほほ。急に用事が」

「そんな用事どうやって感知したのですか！　携帯も何も見てない

です！」

「こ、校長ともなると、脳に携帯並の受信機能がついてですね？メールも電話もお手のもので」

「嘘です！」

クララに嘘は通用しません。目を見ればわかってしまうのです！え、目を見なくても嘘だとわかる？　あなたすごいですね！！クララそんけーです！！

「とにかく逃がしません！」

クララは校長の腕をがっちり掴み、そのまま桜に向かって引き摺り始めました。こうなったら無理やりです。

「わ、わたくしは、その」

「あの桜を見るのが嫌なのですか！？」

だとしたらクララしょっくです！　お母さんはもう、クララの桜が嫌いになってしまったのでしょうか？

「……恐い、のです」

「えっほ！　えっほ！　なにが！　恐いのですか！」

がんばってずりずり引き摺りながら聞きます。

「わたくしは、本当にあの桜が大切だったのです……本当の子供の

ように」

えっほ！　えっほ！！

「あの木が枯れて――死んでしまって。わたくしは悲しくて……あの子の枯れた姿を見たくなくて」

「校長はその子が好きじゃなかったのですか！？」

「大好きでした。だからこそ――」

ええい、ごちゃごちゃうるさいです！！

「生きていようが死んでいようが、好きな人に会えば嬉しいもんなんです！！」

枯れたがどうしましたか。死んだがどうしましたか。

人はなんでお墓というものを作るのですか？

相手への気持ちが変わらないからでしょう。ずっと好きだからでしょう。

「見てください」

薄らと降った雨は、程よい化粧になったのか。

視界いっぱいに広がる桃色。濡れた花弁を陽光で一層に輝かせな

がら、春を告げる木は堂々とそこに在った。

温かく、美しく、晴れやかに、この世全てを祝福するかのように。

感謝するかのように。

そして何より幸せそうに、花を咲かせていた。

「――ほら、こんなに喜んでいます」

この木はクララ自身です。

花は満開。それは心も満開だから。

お母さんに、「クララは大丈夫だよ」って、伝えることができたから。

そしてまた一緒に、桜と母として会話できることが、何より嬉しいから。

「……あ」

クララに――クララの桜に会えたお母さんは、泣いていました。

「……ああ」

嬉しいんです。喜んでいるんです。クララにはわかります。だってお母さんのことですから。

「……よかった」

本当に、よかったです。晴れてよかった。また会えてよかった。

さぁ、お花見を始めましょう。そろそろみんなが集まってきます。

そして春を祝いましょう！

みんなが集まる直前。

お母さんは小さな声で、納得したように言いました。

「やっぱり最後にあげた肥料――ティラノサウルスの糞が効いたのね」

どっから持ってきたのですか！？

「あ、糞の化石でした」

だからどっから！？

「ありがとう、糞」

クララ台無しです！！

## カカの天下７３９「満開の桜は何思ふ」（後書き）

お花見開始、です！

もちろん今回で終わることなく続きますよん＾＾

楽しい宴になればいいなぁ。

そうそう人気投票ですが。中間発表終わってからもどしどし来たので、またもや番狂わせがありそうです。まだわかんないけどね。

え、感想返信？　あ、明日……笑

## カカの天下７４０「お花見大会（普通）」

「お花見おめでとう！」

どうも。その表現は何か間違ってると思いつつも、野暮なツッコミは入れない空気の読めるトメです。

ちなみにただいま叫んだのは我が妹だったりするのですが、雨が上がって開催が決定した笠原ファミリーお花見大会には次々とメンバーが集まってきました。や、大会といっても何か競い合うわけじゃないんだけどね。

「ゆーた君、あれを運んでください」

「キリヤ、貴様に従う理由は――」

「ゆーたかっこいー」

「ゆーた力もちー」

「ふはははははは！　次はどいつが俺の獲物だ！？　百でも二百でも運んでくれるわ！　み、見てますかーサカイ親子様！！」

『見てなーい』

「ショック！　だがそれがいい！　運ぼ」

最初から素直に運べばいいのに……

「シュー君はこれを並べてください」

「はい！　キリヤ様！」

素直すぎる……キリヤも何かしたのかな。や、しなくてもシュー君なら簡単に様づけしつつ誰にでも従いそうだけど。

「タマちゃんとクララちゃんはそこで応援しててください」

「がんばです！　ですがんば！」

「えいえいおいおいおー！」

和むなぁ。適材適所だキリヤ。

「カカちゃんご一行は何もしないでください」

適材適所すぎる。さすがだ！

「サラさんは私の手伝いを」

「わっかりました！」

「カツコさんはサラさんの監視を」

「ん、慣れてる」

「どういう意味ですか！？　別にお酒をドミノ倒しみたいに倒して全部割ったりとかしませんよ！」

「はいはい、サラちゃん。あたしがいるから二度はないよ」

一度はあったんだ。

「トメ君は」

「おう」

「いつもどおり、ツッコんでてください」

「なんでやねん」

「そんな調子です」

どんな調子なのか甚だ疑問ではあるが、キリヤの指揮で着々と進んでいくお花見準備。要は宴会だ。シートを広げて、弁当や飲み物を所定の位置へと移動させるだけ。

しかしキリヤが大げさなものを東治から持ってきたので少し仕事がある。その大げさなものとは……文字通り大きな、すごく大きなクーラーボックスだ。水と氷をぶっ込んで、そこにペットボトルやビンごと飲み物を入れて冷やすことができる。おかげで外にいても常に冷えた飲み物にありつけるわけだ。ただし水いれ氷いれ、それの移動、最後の水抜きは面倒だったりする。

しかしそれもバカ力のペッ――召使――ていうかゆーたさんのおかげで、なんなく完成、準備完了。各々に飲み物がいきわたり、いよいよ乾杯という段取りとなりました。

「それでは、校長に乾杯の挨拶をしていただきましょう」

仕切りまくってるキリヤがやるのかと思いきや、ここで最年長の参加者様の登場だ。

「おほほ」

はてさて。詳しいことは知らないが校長が今回の主役だと聞く。

いったいどんな素晴らしいお言葉と共に乾杯してくれるのか！？

「かんぱい！」

お言葉ひとつも無いんかい！

『かんぱーい！！』

まぁ、そんな野暮なツッコミを考えるのは僕だけだったらしく。みんなは気にせず乾杯したので、僕も遅れてみんなの紙コップに自分のをぶつける。

そして飲む。よく冷えたビール！　外で飲むビール！　花見酒！　んめー！！

「さて！　お集まりの皆さん！」

お？　みんながシートに座って弁当箱（すごくたくさん）を開ける中、真っ先に飛びつきそうなカカが見向きもせずに立ち上がった。

「なんかメンバーがすっごくいっぱい居ますので、ここで自己紹介なんかしたら、どうでしょうか！」

自己紹介……？

「なぁカカ。今さらじゃないのかそれは」

「や、ほら。なんとなく一緒にいる面子だけどさ、改めてやれば親睦も深まるかなーと」

な、なんだと！　カカがこんなに大人な意見を持ってくるなんて……せ、成長したなぁ。お兄さん涙出ちゃうよ。

「じゃあまずはトメ兄から！」

僕から？　まぁ仕方ないか。今回はカカの大人な提案に乗っかるとしようか。意を決して立ち上がる。

「えーと、まず僕の名前はトメ！」

「なんでやねん！」

「カカ！？　おまえのツッコミになんでやねん！」

「まぁこんなツッコミばっかり言ってる人です」

「おまえが紹介すんのかよ！」

「ていうか今さら言わなくても知ってるよね、みんな」

「おまえは何がしたいんだよ！」

「いただきます」

「聞けよ！！」

「美味しい！」

「よこせよ！」

「あー！　私のハンバーガー！」

ハンバーグじゃなくてハンバーガー！？　お弁当に？　なに考えてんだトウジさん……ってうめぇ！　ハンバーガーうめぇ！！　肉汁とかレタスとか卵とかワンダホーでうめぇ！！

「ま、冗談は置いといて自己紹介を再開しよう」

「むぐむぐむ……？　冗談だったのか」

じゃあ食べるのを止めよう。

「隙あり！」

「僕のハンバーガー！！　返せ！」

「というのも冗談で……むぐむぐ」

「食ってんじゃねぇか！　冗談じゃないじゃん！　返せよ僕の！」

「ほらトメ兄。子供みたいにみっともないこと言ってないで自己紹介やるよ」

「どうせまた僕のお弁当を盗る気だろう？　そうはいくか！　ぼくばくぐもぐもぐもぐむぐんむぐん！！」

盗られる間もないくらいの勢いで食いまくる！　どうだカカ、これで――

「……トメ、あんたって」

これで――

「さぁ、空気の読めないトメ兄は放っておいて、本題のユカさんの自己紹介を始めるよ」

これで――カンペキに僕は見世物なわけだ。来てたのねユカさん。そのための前フリだったのね。そして、僕は見事に乗っかってしまったわけね。見苦しいほどに。

えーん。

「トメって……こんなに意地汚かったんだ」

えええええええええええええん！　なんかユカにしみじみ言われたあああああ！

「さぁユカさん！　雲の王国ファミリーへの入国試験だよ！」

僕の心には雲どころか豪雨が降りまくってるよーうえええええええん！

「これを持って！」

「カカちゃん、これって」

「三角定規」

「これで、どうしろと？」

「なんかおもしろいことして」

僕だってお花見でテンション上がってたんだよーうえええええええ……ん？　なんだか無茶振りが聞こえたような。

「それがうちの入国試験だよ！」

初めて聞きましたが。

「面白いか変か変態じゃないと、うちのファミリーには入れないの！」

そんな特徴も初めて聞きましたが。

「ね、ボス？」

そんな風に呼ばれるとまるで僕がそれらの全てを兼ね備えているみたいに聞こえるんですけど！？

「……」

ま、まぁ、あのユカがそんな恥をかいてまで僕らの仲間に入りた

いなんて、

「がんばる」

思うんだ！？

「えっ……と」

ユカは悩む、悩む悩む。それはそうだ。なにせ三角定規だ。あれでどうボケろというのか。むしろ僕としてはそんな微妙なもんを渡したカカにツッコみたい気分だ。

「よし！」

おお？　もうネタを思いついたのか。意外と才能あるのかもしれない。なんのだ。

「んしょ」

ユカは自分の靴の裏に三角定規を取り付けた。まるでスパイク…いや、ピンヒールか？　ともかくそれを装備したユカは、半ばジャンプするように僕へ近づいてきて――足を振り上げ、踏み下ろしながら言った。

「元彼女様とお呼び！！」

三角定規ヒールは、僕に刺さることはなかった。あくまで踏むマネだったからだ。

ユカはファミリー一同を見る。僕もそっちを見る。

なんか唖然としていた。ネタが突飛すぎたか？

「……！」

あ、ユカの顔がだんだんと赤くなってきて――

「にゃあああああああああああああー！！」

意味不明な奇声をあげて、結局僕を踏み刺した！！

「ぎにゃあああああああああああああああああああ！！」

負けないくらいの声で僕も叫んだ！　だって予想以上に痛かったし！　ぐりぐりされたし！　血が出てるし！　思わず転がるし！！

『合格！！』

なんで満場一致なんだよ！？　唖然としてただろおまえら！　どうして「こういう人材がほしかった」とか「カカちゃん、いい子を拾ってきたわね」とかホクホク顔なんだよ！　僕まだ転がってるんですけど？　あとユカが妙に照れくさそうに笑顔なのも気に食わない！　いや仲よくなるのはいいんだけど加害者だろおまえ！　被害者になんかないのか！！　「みんな、ありがとう」ってありがとうの前にごめんなさいだろ！！

「よし！　仲間も増えたことだし、盛り上がっていくよー！！」

「ぎにゃあああああああああああああ！！」

我が妹の宣言は高らかに。そう、ちょっといつもより高い。僕を踏み台にしたから。僕、何かしましたか……？

ともかくお花見は続きます。あとはダラダラと――

## カカの天下７４０「お花見大会（普通）」（後書き）

むう、思ったより遅れてしまいました。もうお花見の時期は……
ま、まぁちょっと長めにお花見気分を楽しむということで！
次の話は続きますが、ダラダラです。新しい感じの書き方でダラダラさせようと思いますので、お楽しみに。まぁさして特別すごいことするわけじゃないんですけどね笑

しかし感想が返せない。なんか毎回謝ってて申し訳ない。後で寝る前に元気があったら必ず！！

**カカの天下７４１「お花見大会（いつもとちょっと違う）」**

「ささ、ユカさん！　こっちに来たまえ！」

「あ、カカちゃん。そんなに引っ張らないで……」

「ほーほー、これが元彼女さんの顔かー」

「こらサエすけ、そんなにジーッと見ちゃ失礼でしょっ！」

「でもトメお兄さんの元彼女だよー？　つまりこの顔はトメお兄さん好みなわけでー」

「なんですってっ！？　じいいい

ちゃんと座らせてあげないとー。ねぇ、元彼女さん？」

「サカイちゃんの言う通りだよ。元彼女さんにもあたしが調達してきた酒を飲んでもらわねば！」

「なぁなぁ、あんた飲めんのか？　元彼女よぅ。オレの酒が飲めるのか？」

「……あ、あの、ワタシ、だから、名前……」

「ふー……痛かったけど僕復活っと。しかしユカのおとなしい顔は久々に見るなぁ。さっきのが嘘みたいだ。借りてきた猫みたいにおとなしくしちゃって」

「元女はトメ兄の横ね」

「ちょっ！！　なんであなたが隣なのよ！　気分が悪いわ。あーあー気分が悪いわ。どれくらい悪いかというと、朝目が覚めたら自分がゴキブリになっていたーってくらいに気分が悪いわ！」

「なぜ君は僕を目の前にしたときだけベラボウに強気になるのかね！？」

「おお、おもしれぇ。いい酒の肴になりそうじゃねぇか」

「テンちゃん、まま、一杯」

「おう、さんきゅー姐さん。サカイさんは何してんだ？」

「サエの隠し撮りを」

「ああ、いつものこったな。お？　元彼女がまた三角定規をトメに刺し始めたぞ」

「絶景だわ」

「えっほえっほ……うう、飲み物を運んでいるうちにトメさんが元彼女と何やらいい雰囲気に……私ってば最近、空気じゃないかしら」

「殺伐とした雰囲気に見えますがねぇ」

「あ、キリヤさん」

「しかしあれがツンデレというやつでしょう。あそこまでハッキリしたのは初めて見ました」

「なるほど、あれが！　や、やっぱり内心はトメさんのこと好きだったりするんでしょうか！」

「そうだとは思いますけど、そうでもないと思いますよ」

「……キリヤさん、何か知ってます？」

「色々と知ってますよ。例えば美味しいお客の作り方とか」

「おお！　それは興味深々です！　同じフリーター仲間としてぜひ！」

「よろしい、ならば語りましょう。私も一度あなたとバイト談義をしたかったのです」

「わーい！」

「ところでフリーターなあなたに聞きます。今日はフーちゃんとリーちゃんとターちゃん、どれがいいですか？」

「私の名前はサラですってば！」

「おほほ、みんな賑やかでいいですねぇ」

「お母、じゃなくて校長！　校長も楽しむです！」

「楽しんでますよ。私はこうして桜を見ながら、愉快な皆さんと食事して、それだけで充分に満たされています。主にお腹が」

「たしかに校長は玉子焼きを食べすぎです！」

「おほほ、次はたまごサンドにいきましょう」

「たまご好きですね！」

「うー？　よびました？」

「あ、タマ！　タマも大好きですよ！」

「タマタマがすきなのですか？」

「繋げたら危険な単語になってしまいました！　クララしょっくです！」

「タマタマもしょっくです？」

「タマタマにショックを与えるだと！？　な、なんと痛そうな会話をしているのだ君達は！」

「あ、肉ばっかり食べてるゆーたです」

「はっはっは。このパワフルなボディを保つためには酒と肉が不可欠なのだよ」

「でもポヨポヨなとこも多いですよ」

「ふ、そこが俺のチャームポイントだ」

「ゆーたぽよぽよー。ねね、だっこー」

「よしきた！　おりゃ抱っこだー！　タマちゃんの心はこれでゲット！　ふっふっふ、我ながら腹黒い主人に仕えるだけはある。この作戦とは、優しいお兄さんを演出する流れでサエ様をノリで抱っこしてしまおうという計画なのだ。さぁサエ様、感想は！？」

「どう見ても誘拐犯」

「ゆーたしょっくです！！」

「なんかゆーた見てたら肉団子食べたくなってきた。どこだ肉団子！　あ、トメ兄の目の前にある。うおおおお！」

「――あーあーわかったわ！　トメのトは唐変木のトで、メはメイドのメだったのね！」

「唐変木なメイドとか僕はナニモノなんですか――って、カカ？なんでこっちへ飛び掛って」

「その肉団子をよこせー！！」

「わ、わたしもトメさんに抱っこしてもらうっ！」

「サユカちゃんって結構、他人の話を聞いてないよねー。まーいいや、私もー。とーう」

「なんで皆して僕に飛びかかってくるんだ！？」

「どうぞ召し上がれ」

「ユカさんあなた随分とうまいこと言いますね！？　うあああああ」

「あははー、なんだかトメさんを中心にして肉団子ができちゃいましたねー。んぐんぐ、おしゃけおいしー」

「んぐんぐ……かなり見苦しい団子だけどな」

「肉団子だと！？　あたしきゅぴーん！」

「姐さん。随分と瞳を輝かせてるが、食うなよ。食人はさすがにバケモノの域を超えてっから」

「おほほ、この隙にお弁当の肉団子はすべてわたくしが」

「こ、校長はえぇです！？」

「おお、見てくださいフーちゃんリーちゃんターちゃん。あの最小限の動きで素早く動く校長を。あの体捌き、まるで混雑した居酒屋を駆け抜けるスーパーホールバイトのようではないですか！？」

「面倒くさいからって名前を全部混ぜられたのは不満ですけど、確かにあれは理想の動き！　私も精進せねば……いやまぁ最近はあまり飲食店のバイトしてないんですけど」

「もうすぐゴールデンなウィークでかき入れ時ですから、また『病院』に呼ばれますよ」

「そのときはお願いします。あ、校長先生！　そこの肉団子を全部食べて満足げな先生！　その動きはどこで身につけたんですか！？」

「おほほ、サバンナの樹海よ」

『レベル高いし』

「……肉団子は食べれなかったけど、楽しかったからいいや」

「そこな妹、僕の腹の上に仁王立ちするのがそんなに楽しいか」

「トメお兄さんってけっこー腹筋ありますねー。硬い硬い」

「こ、こら触るな。力が抜ける！」

「い、一度やってみたかったんですけど、その……お箸でお料理摘まんで……と、トメさん、食べてください。あーん」

「サユカちゃん!?　ちょっと状況わかってます!?　唐突すぎません!?　僕ってば今仰向けに倒れててカカが乗ってて動けないんですけど!」

「え、ええとっ!　は、はは、恥ずかしいけど、その、あ、あああ、あーんっ!」

「聞いちゃいねぇ!　あああしかもなんでチョイスした料理がおでんなの!?　汁っ気たっぷりの大根なのーって熱っ!!　汁が垂れてきて熱っ!　ってそんな僕の叫びも聞いてないんですよねわかります!　っていうかお弁当におでんってどうなのさトウジてんちょ――」

「あっはっは!　弟君もいい悲鳴をあげるねぇ……む?　そういえばシューはどこいった」

「シュー君でしたら、私が戯れに連れてきた動物軍団に引き摺られてどっかいきましたよー」

「あいつはいっつも喋る機会っつーもんがねぇなぁ」

「ま、あんなのはどうでもいいわさ。ところでそこの元彼女」

「……はぁ。名前に関してはもう諦めました」

「ちょいとこっちに来なさいな。過去の義妹候補ちゃん、少し喋ってみたいのよ」

「え、えと」

「あっはっは！　怯えてんぞ姐さん！　大丈夫だって、別に根性焼きとかしねぇから！」

「根性焼きってどの食べ物ですかー？」

「サカイさんって意外と食い意地張ってんのな」

「お、お邪魔します」

「おーよくきたよくきた。おねーちゃんの横に座りな。よしよし、ほれ一杯」

「ど、どうも」

「ほんと大人しいな、トメ相手だとあんなにパワフルなのによ」

「ふふふー、これがツンデレの『デレ』の部分なのですよー」

「どこら辺がデレてんだ？」

「わかった！　お腹の辺りだ！　えい」

「ちょ！　おねーさん！？　摘まないでください！」

「おー元気になってきた。さすがは姐さん！　遠慮がない！　デリカシーもない！　常識もない！」

「おぅよ！　それがあたしだ文句あっか！？」

『ないでーす』

「てわけでユカちゃんが元気になってきたとこで、もっかいかんぱーい！！」

『かんぱあああああい！！』

「はぁ……はぁ……」

「あ、トメがくたばってます」

「クララちゃんか……楽しんでるか？」

「それはもう！」

「ならよかった……しっかしこれ、お花見って言うのかな？　誰も花を見てないような」

「そんなことありませんよ」

「そうか？　いやまぁ、確かにたまに見上げてるけど」

「それでいいんです。お花と一緒にいるのがお花見ですから」

「そう、なのか？　てっきりお花を見るのがお花見かと」

「いいえ」

「へぇ？」

「お花がみんなを見るのが、お花見かもしれませんよ」

「……それは思いつかなかった」

「ふふ、クララ頭いいです！　あ、またカカたちが何かやってます！　クララ混ざってきます！」

「うん、いっといで」

「いきます！　うりゃー！」

「わ、クララちゃん？」

「クララちゃんも芸やるのー？」

「よ、よかった……クララちゃん、わたしの代わりに芸やってっ！　二人が無理やり何かさせようとしてくるのよっ！」

「わっかりました！　必殺……桜吹雪！」

「うわー！　桜の雨だー！」

「あそこの枝の花だけすごい勢いで散ってるー」

「しまったです！　あそこだけハゲました！」

「……今の、どうやったんだろ。手も触れずに桜の花が……まぁ、いいか。僕らを見てた桜が気をきかせたのかもしれないし」

「クサいですね、トメ君」

「そんな恥ずかしいトメさんもステキだと思います。ぷふー」

「仲いいなぁフリーターコンビこの野郎」

『かんぱーい！』

「なんだ唐突に……まぁいいか、乾杯！　はぁ」

「どうしました、ため息なんかついて」

「いや……こりゃ当分、宴会は終わらないなーと思ってさ」

「当たり前です！　今日は飲みますよ！」

「フーちゃんは皿で日本酒飲むらしいですよ」

「だからサラだって言ってるでしょう！」

「はい、だから皿です」

「そーおーじゃーなーくーてー！」

「やれやれ……桜の木さんや、騒がしくてごめんねぇ。もうちょっとだけ我慢してくれ。それで……まぁ、あんたも楽しんでくれたら幸いだ」

「はい！　わかりました！」

「なんでクララちゃんが返事すんのさ」

「秘密です！！」

「そか」

「おうトメ、オレの酒を飲め！！」

「はいはい……ったく、いつになったら終わるのやら」

## カカの天下７４１「お花見大会（いつもとちょっと違う）」（後書き）

いつもとちょっと違う書き方でお送りしましたお花見、いかがでしたでしょうか。

完全セリフオンリー。これはこれで宴会の雑多な感じが出て、書いてて面白かったです。校長つえぇ。

さて、お花見も終わり、しばらくは普通のお話に戻るかと。まぁカカラジが迫ってるんですが、果たして結果は！？　まだまだ投票待ってます＾＾

## カカの天下７４２「やっぱこれだね！」

トメです。

楽しく騒がしいお花見も終わり、今日からはいつも通りの平穏な日々……だったはずなのですが。

「かんぱーい！」

なぜ僕は飲みに出ているのでしょうか。

「おら、どうしたトメ。乾杯だぞ乾杯」

「あ、ああ」

「それともやっぱり、かんぱいよりおっぱいの方がいいのか？」

「やっぱりってなんだ。そうじゃなくて」

ビールジョッキ片手に首を傾げるテン。お察しの通り、ここは行きつけの居酒屋『病院』で、テンと二人で飲むことになってたりします。

「なぁテン。僕ら昨日、お花見したよな？」

「してない」

「ええ！？」

「うっそーん」

「飲んでないのにもう酔ってんのかおまえ」

「けけけ、くだらねぇこと聞くから思わずふざけちまったんだ」

くだらなくないってばさ。

「僕ら昨日、飲んだよな。たらふく」

「おうよ、おかげで今日は二日酔いだったぜ。学校で吐いたぜ」

「……おいおい」

「心配すんな。ちゃんと出張中の教頭の机に吐いといたから」

「……おいおいおいおい」

「うっせぇな。何が言いたいんだよ」

「こんなに連日飲んでいいのか!?」

「いいじゃん」

「い、いいのか……そうか……」

身体に悪く……ない、か？　そっか、毎日酒浸りってわけじゃないし、僕らぐらいの歳なら二日連続なんか珍しくない、か。

「いいから乾杯すっぞ。オレはいつまで腕を上げてりゃいいんだ？」

「あ、ああ悪い！　乾杯！」

変に律儀なとこあるよなぁなんて思いつつ、キン、とグラスを合わせ、二人揃ってぐいっとビールを喉に流し込む。

「んめぇ！　昼から飲むビールも格別だったが、やっぱこれだよなぁ！」

「確かにな。昨日のビールは美味かった。僕も飲みすぎちゃったし、だからこそ今日は控えたかったんだけど……」

なんとなく話を蒸し返してみると、テンは偉そうに教師ぶって「あー、これこれトメ君？」などと口を開いた。

「いいですか？　私はさっきこう言いましたね」

「久々に見た猫かぶり。それ、お偉いさん相手の教師モードか？」

「うっせぇ黙って聞け。コホン……えー、私はさっきこう言いましたね？　昼に飲むビールは格別と」

「うむ、紛れもなくのんべの言葉だ」

「黙れっつってんだろが。あー、格別って言ったよな？　格別、つまり別、さらにつまり……あれはあれ、これはこれ、なのだ！　ビールうめぇ！」

結局それかい。カカや姉みたいな理論展開だな。

「テン、おまえ二日酔いだったんだろ？　その割には遠慮なく飲むなぁ」

「ああ……朝は辛かった。頭がガンガンして、寒くて、思わず朝のテレビに映ってたアナウンサーに怒鳴り散らしちまったぜ」

「それはうざい」

「そしたら自分の声が頭に響いてもっと痛くなってよ」

「それは阿呆だ」

んぐんぐ。ビールうまー。つまみ何にしよっかな。

「本当に辛かった。泣きそうだった。そんなときに思い出したんだ、おまえのことを」

「あ？」

「この苦しみから助けてほしい……なんて、思ってさ」

テンは恥ずかしそうに笑っている。なに、言ってるんだ、こいつ。

「ずっと……仕事中も、おまえのことをずっと考えていた。頭から離れなかった。今すぐにでも会いたい、でもそういうわけにはいかなかったんだ……大人、だからな」

憂いを秘めた瞳。

「でも、ようやく会えた」

熱い、視線。

「そして今なら言える」

酔いだけではなく頬を染めながら、彼女ははっきりと言った。

「オレはおまえが大好きだ」

僕はこんなテンを初めて見た。

そう。

「ビールに話しかける女なんか初めて見た」

「愛してるぜビールルー！！　おまえ最高！　んぐんぐんぐ！　っぷはぁー！　おっかわりー！」

二日酔いの時点からすでに迎え酒に想いを馳せるとは。のんべだのんべ。わかりやすいのんべだ。こいつをモデルに飲みすぎ防止のポスターでも作ったらどうだろう？　や、待て。そんなの見たら逆に無茶して飲みたくなってしまう。だってやたら楽しそうだし。

「あん？　なんだよ変な顔して。あーはいはい、トメも愛してるよ」

「取ってつけたようなお言葉どうも。それで、つまみは何を頼む」

「でもよー、ユカちゃんはどうなんだろ。まだトメのこと愛してんのかね？」

「それはないだろ。ともかくつまみ」

「何!?　愛してもいない女をつまむのか！　いやらしい！」

「おまえもう酔ってるのか」

「いやぁ、二人だけで飲むのも久々だからよ、なんか楽しくて」

ん、そういえばそうか。なら僕も楽しむことに異論はないんだけど。

「まぁまぁ、初恋の相手が同じモン同士、仲良くしようぜ」

「は?」

「トメの初恋って姐さんだろ?　オレもオレも」

「マジで?　っていうか、どっから聞いたその話!?」

「いやらしい！」

「何を聞いたぁぁぁぁ!?」

そのとき、近くを通りがかった店員さんが足を止めて、こう言ってきた。

「はい！　『いやらしい！』をご注文ですか?」

『あるの!?』

メニューを見る。あった。魚料理の欄に。『いやらしい！』っていう料理が。

さらにたまたま通りがかった院長店長が、

「新メニュー、だ」

なぜかちょっと頬を染めながら言った。なんだこの店。『病院』で『いやらしい』とは、なんとも恥ずかしい組み合わせだが……頼むやつがいるのか？

「おう！　『いやらしい！』をたっぷり頼む！」

「かしこまりました」

「とびっきりいやらしくな！」

「はい、エロエロで」

「そう、エロエロで！！　うひゃひゃひゃ！」

いた、しかも超ノリノリで頼むやつが。

「ファーストオーダー、いやらしいがエロエロで入ります！！」

「今の店員の、聞いたかトメ！？　エロエロで入るんだとよ！　どこに入るんだろうな！？」

「ええい、おまえはオヤジか男子高校生か！？」

こういう客狙いか。なるほど、この料理は売れそうだ。やるな病院、見事な商売戦術だ。

その後、テーブルに置かれた料理だが。

確かにいやらしかった、とだけ言っておく。

酔ったテンは大爆笑してたが。

## カカの天下７４２「やっぱこれだね！」（後書き）

トメテン成分が足りないと抗議があったのと、テンちゃんが酒をよこせーとうるさいのでこんな話となりました。

ああ、それにしても酒が飲みたい……とか私が思ったのが発端ではないですからね！

ほんとですから！

……だって今から飲むし。てへ。

## カカの天下７４３「さーて今年の手芸部は？」

今日も今日とて楽しい学校！　さらに楽しいクラブ活動！　うきうきカカです！

「さぁ、今日の手芸部の議題は！？」

「新入部員についてだよー」

「そっか！　新しく五年生になった子がクラブに入るから、うちにもくるのねっ！」

それは何とも楽しみな話題！

「よう」

あ、顧問のテンカ先生が家庭科室に入ってきた！

「こんにちはー、顧問のわりには年に三回くらいしかクラブ活動の時間に顔を出さないテンカせんせー」

「……随分なご挨拶だな、サエ」

「それで、そんな先生失格の先生（仮）もしくは先生（偽）はたまた先生（詐欺）やっぱり先生（でゅみゅみゅう）が、どうしてここにっ！」

「なんでテメェら今日はそんなに容赦ねぇんだよ」

ほら、久々のクラブ活動でテンション上がってるんだよ。

「……こねーよ」

「テンカ先生の嫁がですかー？」

「あぁ、たしかにこないのもわかるわっ！」

「違う！！」

「え、きたんですかー？　嫁が」

「おめでとうございますっ！　まさかトメさんじゃないでしょうねっ！！」

「あーもーうっせぇ！！」

すごいなぁ二人とも。私が口を挟めない勢いだ。

この私が口を挟めない？　そんなことはあってはならない。私だって二人に負けていられない！　なんとかして口を挟まないと！！

「はさみ！！」

なんかみんな黙った。

「……よぅカカ。はさみがどうした」

「知らん」

「オイ」

だって知らんもんは知らん。ハサミはまぁ家庭科室なんで裁ちバサミがいっぱいあるけど……あ。

「テンカ先生の目つきがハサミみたいだなぁと」

「オレはどんな目をしてんだよ……」

「そうよカカすけっ！　それを言うならカミソリのような目よっ！」

「違うよー。包丁みたいな目だよー」

「いいえっ、むしろ鉈みたいな目ねっ！」

「いやいやー、日本刀のような目だよー。名刀鬼殺し」

「それお酒の名前だよサエちゃん。いっそギロチンのような目にしとこうよ」

「てめぇら……目にモノ見せてくれようか！？」

「わ、どんなモノの目を見せてくれんの？」

「すまん。ワケわかんねぇ」

私もわかんねぇ。

「あーくそ、とにかく！！」

「うわ、関西大震災みたいな目だ！！」

「ほんとワケわかんねぇよ！！　いいから聞けよ！」

ごめんねテンカ先生。なにしろテンション高くて。

「新入部員の話だ！」

おお！　五年生のクラブ希望調査が終わったのかな！　わくわく！

「うちに入りたい人はどれだけいたんですかー？」

「手芸部は地味だから、せいぜい2、3人ってとこじゃないかしらっ！」

「最初に『こねーよ』って言ったろ？　答えは0だ」

あんだってぇ？

「え、なんで0。ありえないでしょ」

「テンカ先生が顧問と聞いて、みんな怯えてるんじゃー」

「きっとそうよっ！　だって絶対いるはずだもの、こう、面倒くさいからあんまり何もしないでよさそうな手芸部に入りたい生徒とかっ！」

私たちの抗議を聞いたテンカ先生は、なんだか哀れそうに深々とため息を吐きながら応えてくれた。

「オレもよ、何人か誘ってみたんだよ。一応は顧問だからさ。そし

たら」

そしたら？

「みんな……先輩についていけない、ってよ」

「それクラブに入ってから言うセリフでしょ！？」

なんで入る前から諦めてるの！

「てめぇらには悪いが自業自得だな。数々の伝説を作り出す手芸部、どうやらその敷居は果てしなく高いようだぞ」

え、私ら何かやったっけ？

「三人とも、わかってねぇようだな。手芸部の伝説その一、運動会を卑猥な言葉で台無しにした」

そ、そこまでやったっけ？　わりとウケたし大成功だったような。

「伝説その二、独創性豊かな芸術を駆使してお見合いを壊した」

ま、間違ってはいないけど、そんなの伝説になるほどじゃ――

「千件以上も」

そんなにしてないよ！？　そんだけやったら確かに伝説だけど！

「伝説その三、漫才大会で優勝」

それ手芸部と関係――なくもない！？　そういや人形とか使ってた！！

「彼らは揃って言った。『とてもマネできない』と」

え。えっとぉ。

「ま、マネできなくてもいいんだけど」

「オレもそれを言った。そしたら彼らは再び揃って言った。『とても信じられない』と」

どうしよう。挙げられた伝説の数々は明らかに手芸部と違う活動のはずなのに……否定できない。だって少し絡んでるし、全部事実だし。

「そしてオレは言った。『それもそっか』と」

「もうちょっと粘ろうよ！？」

「そうは言うがな、一般生徒に『漫才大会で優勝しろ』なんつーのは、いくらなんでも無茶だぞ」

「そもそも手芸部がソレをやるのが無茶なんですけどー」

「だって去年やったじゃん」

何も言い返せねー。

「ま、新入りは諦めるんだな。どうせ手芸部なんざ無くなる予定だ

ったんだし。最後に伝説作ったからもういいじゃねぇか」

それは……そうだけどさぁ……

「あー、そうそう。今年から部員は五人必要になったぞ。本当に最後にしたくないならもう一人頑張れ。じゃないと存続できねぇぞ。んじゃ」

『え!?』

言うだけ言って去っていくテンカ先生……じゃ、じゃあクララちゃんの幽霊部員を足しても一人足りない！　どこかからもう一人引っ張ってこないと、手芸部解散!?

大ぴーんち!!

## カカの天下７４３「さーて今年の手芸部は？」（後書き）

また一日遅れてしまった……最近の私はたるんでいる！（お腹が、じゃないよ

なんか不甲斐なくてムカつくんでちょっと連続投稿してみます。

## カカの天下７４４「サユカの任務、注」

うふふサユカです！！　別にうふふが苗字じゃありません。浮かれてるんですうふふ！

「――というわけで、手芸部の危機だーって三人で騒いでたんですよっ」

「そのわりにはサユカちゃん、危機感なさそうだね」

「さすがトメさん、よくおわかりでっ！　わたしには秘策があるのですっ」

「ほう、どんな？」

「ダメだったら他のクラブへ適当に入ればいいんです」

「……手芸は？」

「あの二人なら例えバスケ部に入っても活動を無視して手芸するでしょ」

「あぁ、なるほど。そんな光景見たことないけど容易に想像できるなぁ」

「それでいつの間にかバスケ部もカカ部になるんですっ！　あ、笠原部のほうがいいですか？」

「うちの家系は一体なんなんだろね」

わかります？　わかっちゃいますっ！？　そうです、今、愛しのトメさんと二人でデート中なのですっ！

事の発端は、わたしがサエすけから奥義を授かったことからです！

『サエすけっ！　トメさんをデートに誘うにはどうすればいいのっ！？』

『素直に言えばいいよー』

というわけで、内気なわたしは見事に『トメさん、デートしてくださいっ！』と言うことができたのですっ！　そして作戦通りに商店街を二人でデート中。さすがはサエすけ、そんなことを素直に言えないわたしの心をちゃんとわかってますっ！

え？　素直に言ってるじゃん、って？

……え？

……あれ、ほんとだっ！！　この上なく直球に誘ってるよわたしっ！　作戦も何もないじゃんっ！

「サユカちゃん、クレープ食べる？」

「はいっ！！」

えへへ……甘い……クレープだけじゃなくていろいろ甘い……まぁ細かいところは現在が幸せだからいいや、結果オーライで……多分わたしがこう思うのも見越してるんでしょうねサエすけ。恐ろし

い子。でも感謝。えへへ。

しかし！

そんな幸せは長く続かなかった！

「おートメちゃん！」

「あ、タイヤキ屋のお姉さん」

な、なによこの女はあああああああああ！

「今日はどうするの？　うちのおいすぃータイヤキ、何匹買ってくの？」

「や、その」

わたしのトメさんに、なに気さくに話しかけちゃってんのよっ！

「タイヤキよ？　買うとメデタイのよ？　しかも食べると死タイが生きタイと思っちゃうくらいに美味しい&タイ力が回復するんだから！」

「そんなことはぜっタイにないだろ」

「あらあらトメちゃんも上手になったみタイね！　でも残念、死タイはそもそも食べることができないから、ぜっタイにないとも言い切れないのよ！」

「ええい、益タイのない話を」

な、なんて楽しそうなのかしらっ！　それにお姉さんの、あの目！

「さぁ、買いタイでしょう？　食べてみタイでしょう！？」

絶対にトメさんを狙っている目だわっ！（注：狙ってるのはトメの財布の中身です）

「あら、そちらのお嬢さんは……噂の妹さん？」

むむむ、さも今気づいたかのような仕草。トメさん以外は目に入っていなかったということかしらっ！（注：商売人な姉さんは財布の中身がある人を優先的に視界へ入れます）

「どんな噂かは知らないけど、この子は妹じゃなくて」

「彼女ですっ！！」

こんな年増に負けるわけにはいかないっ！　そう思ったわたしは思わずこう答えてしまいましたっ！　えっへん！

「えっ……でも、年齢が」

「わたしはトメさんより年上ですっ！」

またまた嘘ついちゃいましたっ！　で、でもでも、わたしはトメさんを盗られたくないんですっ！

「トメちゃん、本当？」

こんなわたしの気持ちをどうかわかって！！　わたしの目を見て！　そう願いながら、わたしはトメさんを見つめます。

その視線を受けたトメさんは、やがて頷いてくれて、

「……まぁ、本当」

きちんとわかってくれました！　さすがトメさん、愛の力ですねっ！（注：実際のトメの心境は『ああ、また変な遊びが始まったんだろうな』と良いお兄さん風味です。あと、『この商売お姉さんうざいし、変態扱いでもなんでも嫌ってくれるならそれはそれで』とも思ってたりします）

「う、嘘よ！　だってそんなに若くて、お肌もとぅるっとぅるで、どう見ても小学生か中学生……絶対にサバ読んでるでしょ！？」

「へいらっしゃい！　鯖を一匹かい！？」

「魚屋さんは呼んでないわよ！（注：ここは商店街です）」

えっと、横から唐突におっちゃん湧いてきてビックリしたけど……

「とにかく、わかったら年増と魚屋さんは引っ込んでなさいっ！」

「と、とと、年増ですって！？　あたしゃこう見えても二十代なのよ！」

「うっそだーっ！　どう見ても三十代よ！　サバ読みすぎっ！」

「へいらっしゃい！！」

「魚屋さんは引っ込んでろって言ってるでしょ！　（注：ここは活きのいい商店街です）とにかく、身分証明にあたしの免許証を見なさい！　ほら、ちゃんと二十代でしょ！！」

「なんて不細工な顔っ！！」

「きゃあああ！　写真は見ないで！　免許証の写真は不細工に映るもんなのよ！」

「あ、生年月日が見えなかったわっ。やっぱりサバ読んでるでしょっ」

「やぁ、我輩の名前はサバだよ」

「魚で腹話術までするんじゃないわよ、しつこいわね魚屋！！　サバを読む、と鯖は違うでしょ！！」

「なにを言う！　同じだ！　サバを読むの語源はな、昔は鯖が途方もなく大漁に獲れて、それを漁師がものすごい速さで数えていって数が合った試しがない、という事からきているんだ！　だからその鯖もこの鯖も一緒だ！」

「そんな豆知識いらないわよ！　なによ！　うちのタイヤキがあんたんとこの鯛より売れてるのを根に持ってるの！？」

「そりゃーてめぇんとこはソレしか売ってねぇんだから当然のことだろが！　売り上げはこっちが上だ！」

「ふん！　最近、のどぐろ（注：高級魚です。めちゃうま）を仕入

れたからって調子に乗ってんじゃないわよ！」

「乗ってるのは調子じゃねぇ！　脂だ！　この魚の美味さはてめぇにゃわかるめぇ！」

「タイヤキと魚を一緒にすんじゃないわよ！」

「その言葉さっきのてめぇにそのまま返すわ！！」

ギャーギャーと商店街戦争を始めたタイヤキ屋さんと魚屋さん。

わたしとトメさんは、そろり、そろーりとその場から逃げ出しました。

「……ふぅ、なんだったんだ結局」

「トメさんっ！」

「は、はい？」

「わたし、トメさんの彼女ですよね！？」

「や、違う」

ガーン！！

う、ううう、さっきは答えてくれたからもしかしてと思ったのにぃ……

「えっ……と、サユカちゃん」

「はいぃぃ……」

「そこでお茶しよっか」

「はいっ！！」

トメさんとお茶っ！　トメさんとお茶っ！

え？　落ち込んでたのはどうしたかって？

だって、一緒にお茶よっ！？

デートよっ！？

今はダメでも、『彼女』と言わせるチャンスはまだまだあるんだから！

「トメさんっ！　これ読んでください」

「かれおんな」

「妖怪！？」

でも道は遠そう……でも負けないわっ！

注：枯れ女。いろいろ人生に疲れて枯れた女が進化した妖怪。友達をどんどん枯らしていくので注意。愛という水をあげれば人間に戻る。

例：サカイさんが一時期それになりかけていた。

## カカの天下７４４「サユカの任務、注」（後書き）

注：のどぐろ、という魚の名前を出したのは、私が昨日食べたからです。塩焼きだった。やばいぐらい美味かった、でもヤバイぐらい高かった。うぎゃあ。

# カカの天下７４５「だって手芸部だし」

「勧誘をしよう！」

現在時刻は昼休み。優秀なるクラブ員の二人を前にして、私は指令を発しました。あ、ども。どっかの艦長っぽく胸を張っていい気になってるカカです。

「わかったー、私は体育館で遊んでる子に声かけるねー」

「わたしはグラウンドにいる子に声をかけるわっ！」

「じゃあ私はヤツらの本拠地である五年生教室前廊下にて作戦を行う！　それぞれ健康を祈る！」

「うん、健康大事だねー」

「……なんだっけ。拳法？」

「あちょー」

「カカすけの方こそ健忘症じゃないの。健闘よ、健闘っ！」

「ん、それを折る」

「折ってどうするのよっ！」

「おっと間違えた。ほら、似てるから」

漢字が。

「ではとにかく祈る！　解散！」

――サユカの勧誘。校庭にて。

「んーっと、運動会のときに見た四年生……今は五年生だけど、大体の顔は覚えてるのよね……あ、いたっ！　三人もいた、けど、話しかけるのは何気に緊張するわね……あーあー、こほん。あ、え、い、う、え、お、あ、お！」

発声練習の後は、腕を大きく広げて！

「トメさんよっ、わたしに力を！」

ちゃらららっちゃらー（何かの音）。

「よし、おっけ。ねぇねぇ、そこの女の子たちっ」

「あ、はい。なんですか？」「……なによ」「ナンパ？　ナンパ？　にひひ」

「君たちはもうクラブって決めてるのっ？」

「はい、私は決めてますよ」「……別に」「やっぱりナンパ？　にひひ」

「じゃあさ、わたしたちのクラブを見学してみない？」

「えぇと、そうですね。見るだけでしたら」「……別に」「ナンパ受諾！」

「ほっ、よかった！　じゃあ早速来てみて？　ちなみに手芸部なんだけど」

「失礼します」「……逃げる」「ぎゃあああああああ！！」

「え……なに、この反応」

――サエの勧誘。体育館にて。

「おーおー、みんな元気に運動してるねー。えっと、私は大きな声出ないから事務所で拡声器を借りて……あ、すいませーん。これ貸してくださーい。あ、どうも宮崎先生。始業式からの生徒の風当たりはどうですかー？　あー、豪風で台風で猛吹雪ですかー、ご愁傷様ですー。えー？　私の力でなんとかー？　無理ですーめんどいですー。ではではー」

こほん、と咳払いして、体育館で遊ぶみんなに拡声器を向ける。

『手芸部ですけどー』

バスケをしていた男子がコケた。転がったボールに躓いて他の男子も次々にコケた。バドミントンをしていた女子のラケットがすっぽ抜け、そのまま相手の額に激突。バレーをしていた全員が滑り込みレシーブ（ボール無し）をキメ、設置されていたバレーネットが

なぜか壊れて床に倒れ、高位置にあるバスケットゴールもなぜかガクッと傾いた。落ちなくてよかった。あ、一個落ちた。

そしてサエ以外に立っている者は居らず、なんか阿鼻叫喚っぽい地獄絵図風味になってしまった。

『……失礼しましたー』

手芸部、と口にしただけなのに。

――カカの勧誘。教室前廊下にて。

「手芸部ー、あー、手芸部はいらんかねー」

最近作ったケロリンの着ぐるみ（キリヤンが持ってたチ○ルチョコの着ぐるみを改造した）を着て手芸部っぷりをアピールしながら勧誘している私。

しかし。

「手芸部だよぉー」

「うぎゃあああああああ！！」

「手芸部なんだけどぉー」

「助けてぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

「手芸――」

「笑わされるうううううううう！！」

なにさ。笑えるならいいじゃんさ。

……なんだかうまくいかない。せっかくフレンドリーになるために廊下の真ん中をケロリンの着ぐるみで闊歩してるのに！　ほら、周りを見てよ。みんな私に注目して――

「……ねぇねぇ、あれ見て」「また手芸部？」「うわ、やっぱ噂どおりだな」「あそこに入るなんて、とてもとても」「お、俺、お笑いに興味はあるんだけど」「やめとけ！　レベルが違う！」「体も心も壊れるよ？　面白い感じに壊れるよ？」「うん……わかった、俺は堅気の道を行くよ」「偉い！」「カタギってなんだ？」「市の町長の名前だよ」「市長じゃないのか」

――注目して、逆効果になってるっぽい。ええい、こうなったら！

「そこの女子！」

「ひっ！！」

「手芸部に入らない！？　今なら洗剤とトメ兄がついてくるよ！」

「無理です！　不可能です！　あたし、お笑いなんてできないもん！」

「お笑いなんて考えなくていいから！」

「絶対に嘘だわ！」

「なんで断言できるの！　手芸部っつったら手芸するだけの活動だよ！？」

「手で芸を作るんでしょ！！　つまりは芸人でしょ！　お笑いでしょ！　無理！！」

「なんでそうなるの！　あ、私らのせいか。ってそれは置いといて、とにかく一度入ってみればわかるって！」

「そんなことになったらアタシの人生はおしまいよ！」

「本気で必死だねチクショウ！！」

うう……ここまで拒否されたからには戻るしかないか……

私はしょぼーんとしながら家庭科室へと帰ってきた。そこには同じく肩を落としたクラブ員の二人が。

「あ、カカちゃんー……」

「ダメだった……みたいだね」

「ええ。カカすけは格好からしてダメね」

なんだとぅ。その通りだ。

「……こうなったら自分たちで作るか、新入部員を」

「人形でも作って『コレが部員です』とでも言うつもり？　また変

な伝説になるわよ、『手芸部の伝説その三十五、人造』とか」

どんだけ伝説あるのさ。

「なんならヤケになってもう一つ伝説を作っちゃおうかー」

「なにする気よ……あ」

ん、どしたのサユカン。私の後ろに何か――あ。

何かじゃない。誰か、がいた。

そして、再びクラブ活動の日。

「……なんで俺がここにいるのだ？」

「それはねー、タケダ君が私たちの奴隷だからー」

「そんなわけあるか！」

「そう思ってるのは君だけよっ」

「マジでか！？」

そんなわけで、仕方なくタケダを新入部員に引き込んでクラブ解散を阻止したのでした。まぁ去年ほどタケダをうざいと思ってないし、いいけどね。

「じゃあ活動を始めよっか」

「待て！　俺はお笑いなんかできないぞ！」

「意外とできると思うけどー」

「い、いや、でも」

「つべこべ言わないのっ！　じゃ、活動開始っ！」

「いやあああああああ！　どんな恐ろしい活動が俺を待っているのだ――！？」

……ちくちく。

……かちゃかちゃ。

「カカちゃん、そっちのビーズとって」

「ん」

……かちゃかちゃ。

「カカすけ、この布どう？」

「いいと思うよ」

……ちくちく。

……ちくちく。

「ん、どしたのタケダ」

「地味だ！！」

「や、だって手芸部だし」

「なぜだ！？」

「や、だって手芸部だし」

「これじゃまるで手芸部ではないか！？」

「や、だって手芸部だし」

めでたし、めでたし。だって手芸部だし。

## カカの天下７４５「だって手芸部だし」（後書き）

というわけで、短期間に三連続くらい投稿してみました。うん、いい気分転換になった。ありがとう手芸部。

仕事あってもこんくらいのペースで書けないことはないんですが、そこはまぁ心の余裕とか色々あるのでご勘弁を笑

さてさて、もうすぐ人気投票〆切りですよー。お忘れの方は早めにね＾＾

## カカの天下７４６「ゆかいなおみせ」

カツコでーす！　姉デース！　バケモノと呼ばれることもありマース。呼んだやつは殺しマース。身内はサービスで見逃しマース。その他は滅殺デース。

「すいませーん。この花くださーい」

「オーゥ、お客さんお目が高いデース！　オメガ高いデース！　値段はそんな高くないデース！　ＨＡＨＡＨＡ！」

「へ、あ、あの、店員さん！？」

そう、あたしは愉快な店員さん。今も楽しくお花屋さんで販売中なのだ。

「あっはっは。気にしないでよ、ちょっとした病気だから。その辺のおなら好きな霊が乗り移ったとでも思って。んで、どれ？」

「はぁ……これです」

「あー、それならいいよ、タダで持ってきな」

「いいんですか！？」

「うん。その花どうせ今日中に腐るし」

「ちょっと！？　元気なやつ選んでくださいよ！」

「いいけど高いよ？　オメガ高いよ？」

「い、いくらくらいですか」

「例えばこの花。２９８円」

「安っ！！」

「何を言う。角のスーパーのコロッケが１５個も買えるんだぞ。オメガ高いじゃないか」

「言われてみれば！　大家族でも満足の数だ！」

毎度ありー、とヒラヒラ手を振りながら見送るあたくし店員さん。あの子は安いが頑張る子だ、きっと社内でも元気に花を咲かせてくれるだろう。

「あ、カツコさん。何か売れました？」

奥にいた仕事仲間のサラちゃん登場。

「うん、これ売れた」

「……また随分と安いお花を」

「だってあの人、会社の使い走りっぽかったからさ。経費もかけられないだろうし、安くてしぶとい花を選んであげたのよ」

ふ、あたしってば意外と考えてるじゃろ？　ってな感じで自慢げに言ったんだけど、サラちゃんは複雑そうな顔。

「カツコさんが普通にいい人だと気持ち悪い」

「んだとう!?」

「っていうのは冗談でして。カツコさんってお店のほとんど任されてるわりには、数字を作ろうって思いませんよね」

ふむ。バイト経験の長いサラちゃんは色んな職場を渡り歩いている。そこで「商売は数字を作ってなんぼ」という考え方も染み付いているみたいだ。

「不況な現在の世の中でずっと黒字でいられるのはすごいと思いますけど……」

そんなサラちゃんの凝り固まった考えを、少しほぐしてやらねば。

「そろそろ何か考えないといけませんよね。カツコさん、何かないですか?」

「ひらめいた!」

「もう!?　っていうか、ひらめいたっていうのがすごく不安なんですけど!」

店の中にある適当な草を、ほいほいっと摘まむ。どりゃどりゃ?　おまえらはやがて花を咲かせる草かいの?　咲かせなくても別にいいけど。これと、これもー。

「あの、カツコさん?　そんなに草を持ってどうするんですか?」

「よし、こんくらいかな。集めたこの草をどうするかというと、サラさんに」

「え、ちょ、え!?　どこ触ってんですか!　あ、やん、そこ……あぁ、んっ、んぅ、やらしぃ、ですぅ」

「うへへへ、ねーちゃんえー乳しとるのぅ。えーケツしとるのぅ」

「ひぁぁん!?　じょ、じょ」

「もみもみもみも――」

「冗談はいい加減にしなさい!!　このハレンチバケモノ!」

わー怒ったー!　でも目的は達成したー!　バケモノって言われたのは身内だからスルー!

たったったーっと店頭へ出て、商店街の往来に向かって全力の大声で叫ぶ!

「いらっしゃい、いらっしゃい!!　今日の特売品はなんと、『おっぱい草』だよ!　その名の通り、サラさんのおっぱいへ直に揉み込んだステキな草!　たった今のことだから香りと温もりがまだ残ってるよ!　さー買った買った!!」

「なっ!?　ちょ、待っ」

『買ったあああああああああああああああ!!』

押し寄せる男性陣！！　おっけーもう一押し！

「この草から花を咲かせた野郎はね、夢の中でサラさんのおっぱいを揉み放題にできるという伝説があるんだよ！！」

『もう一つ買ったあああああああああああああああ！！』

「だから大切に育ててねー」

『はーい！！」

もちろん伝説は今作った。いっぱい売れるし大切に扱ってくれるし一石二鳥。

「ちょ、ちょっと！　買わないで、買わないでくださーい！　うあ何この恥ずかしさ！　やめてお客さん！　おっぱいおっぱい連呼しないで！　頬を赤らめて私を見ないで！！」

サラさんもバカだねぇ。そんな必死に言ってたらおっぱい草の信憑性を高めるだけなのに。

んー……おし、客層が男だけだし、女狙いも言っとくか。

「さらに！！　女性がこの草から花を咲かせてそれを食べると、サラさんと同じくらい胸が大きくなるという伝説が！！」

『買うわあああああああああああああああ！！』

おおお！？　予想以上の反応！　みんなそんなに胸を気にしてんのか。あたしはそんなに気にしてないからピンとこないけど……あ

ともちろんこの伝説も即席適当に作った。ま、育てて「大きくならなかったわよ!?」って責められたら「所詮は伝説だし」とか「所詮おまえはその程度だし」とか答えればいいや。あれ、あたしって結構ひどい？

「うぅ……カツコさんひどい……私、これから商店街の皆さんに変な目で見られちゃいます……」

あー、サラさん泣いてる。でも気にすることないのになぁ。ここの人たちってノリいいだけで、本気か冗談かは大体わかってるのに。世の男がこんな往来で大っぴらに「おっぱいおっぱいフンゴー！」なんて本気で興奮するわけないでしょうに……多分。

ま、おもしろいから放っておこ。

「ううう……しくしく……」

「いらっしゃい！　草を十本？　や、お一人様一本なんですよ、その代わりこの、特に揉み込んだ草を十倍の値段で――」

「しくしく……ごそごそ……しくしく……ごそごそ」

「え、一番揉み込んでないやつを安値でくださいだって？　情けない！　サラちゃんのおっぱいをなめてるね！　舐めてるって意味じゃないよ？　とにかくそんなヤツには売らん！」

「ごそごそ……よいしょっと」

あれサラちゃん、あたしの隣で何やってんの？　なんか涙もいつの間にか消えてるし。

「さぁいらっしゃい！　今日のもう一つの目玉がこれ、カツコこと姐さんパワー花！　不思議なパワーで朝から夜まで元気いっぱい！！」

なにぃ！？　あたしのマネしやがった。しかもその花、あたしと何の関係もない！　おっぱい揉み込んですらいない分、あたしよりハッタリ度が上だ！

「この無駄な元気を少しでも分けてもらえれば！　えーと、腰が痛い人とか肩こりがひどい人とか治ります！」

なんでそんな健康思考なの、あたし花。

『買うのじゃあああああああ』

なんだかご老人に大人気！？　世の中、健康ブームはまだまだ去っていなかったか。いやしかし、いつの世もエロブームに勝るネタはなし！　あたしも負けてらんないわ！

「おっと、草を仕入れなければ！　もみもみもみ！」

「ひぁぁん！！　ん、この――あ、八百円になります！！」

「うお、あたしが仕入れてる（揉んでる）間にも販売するとは、まさに商売人！　負けん、負けんぞあたしは！」

「いらっしゃーい！！　空も飛べるかもしれない花はここデースよー！」

「それ麻薬みたいデースよー！　こっちの夢が叶う草のほうがいいデース！！」

「そっちは悪徳商法みたいデース！！　こっちのほうがー！」

『いいぞー！　もっとやれー！』『金なら少しくらい払うから！』

『はっはっは、やっぱこの店おもしれー』

老若男女問わずノリのいいこの商店街。

なんか黒字なのは人柄のおかげなのかなぁ、なんて思ったり。

……それともあたしとサラちゃんのおかげか。

## カカの天下７４６「ゆかいなおみせ」（後書き）

危ない危ない、三連続投稿後にまた遅れるとこでした。

今日の話を思いついた発端？

べ、別におっぱいは関係ないんだからね！

## カカの天下747「にょー」

トメです。いきなりですが、ちょっと昔のことを思い出しています。

そう、あの頃。カカがまだ小さかった頃……

「トメにー！　これどうやって乗るのー？」

「はいはい、ちゃんと教えてやるから暴れるな」

今よりもちっこくて今よりもうるさくて今よりも元気があって今よりも可愛いチビカカが急かしているのは、同じくミニサイズの自転車の乗り方だった。カカは早く乗れるようになりたくて仕方ないらしく、練習場所の公園に着くまでも自転車を引きながら「ぶーん」とか「ずごごごご」とか「ばっしゅーん」とか「でゅみゅーん」とか、どこにトんで行くのか心配になる擬音を立てながら歩いていた。

そして到着した今、ようやく教えることができる。

「補助輪がついてるからなぁ。まーあんまり何も言わなくても最初は乗れるか」

「そなの？　いいの？　ふとっぱら！」

けっして僕の腹が出ているわけではない。カカが子供すぎて言葉の使い方をわかっていないだけである。

「でぶ！」

僕じゃないからな。デブなのはカカが指差している通りすがりのサラリーマンだ。

「んだとこらぁ！？」

「わ、謝るの忘れてた。ごめんなさい！」

「ごめんちゃい！」

いきなり指さされてデブ呼ばわりされりゃ怒るわな。このショックを機会にあの人やせればいいのに、なんて懲りないことを思いつつカカに向き直る。

「じゃ乗る！　のるのるのるのりゅにょる！」

「落ち着け」

「にょー！」

興奮するカカは早速自転車に跨った。

「このペダルを踏んで……」

「おーじょ様とおよび！」

「いくら激しく踏んでもそのペダルに返事をする機能なんか無いぞ。そもそもどこで覚えた、そんなセリフ」

「はっしーん！」

「聞いてよ」

「にょー！！」

とりあえず発進した。

おーおー、補助輪効果で最初はさすがに横転とかしないなぁ。

あ、横転した。

「うわあああああああああああああああああああん！！」

しかも泣いたぁ！！

「だ、大丈夫か！」

「痛いぃ……ひどいぃ……自転車のバカァ……ぱかぁ……人でなし……」

「人じゃないし」

とか悠長にツッコんでる僕が人でなしか。

「もう自転車要らない」

「ま、まぁ待てって」

「自転車屋さんもなくして」

「それはいきすぎ」

「じゃ自転車だけ全部捨てて」

「何屋かわからなくなるし！」

「米屋になる」

「なんで！？」

――お気づきでしょうか？　僕の家で自転車の登場率が極端に低いことに。実は過去にこんなことがあったせいで、カカが自転車嫌いになったからです。もちろん昔のことですし、カカが今に禍根を残して自転車を憎んでいることはありません。すっかり忘れてます。ただなんとなく乗らないだけでしょう。

さて、時は現代に戻ります。なんでこんなことを思い出したかというと。

場所は商店街の試食コーナー。通りすがりの僕らはチョコレートをいただいたわけです。

そしたらなんと激辛でした。人のいい商店街――人のよすぎる商店街は、たまにこんなお茶目なドッキリを仕掛けてしまうのでした。

その結果、見事に騙されてしまったカカはすっかりむくれてしまって、

「もうチョコ要らない」

こんな、いつか聞いたようなセリフを言い出してしまいまして、

「チョコなくして」

「お、お嬢ちゃん？　ごめんねぇ、おばちゃん謝るからさぁ」

「全部捨てて」

「しょ、商品なんだけど」

試食を管理していたおばちゃんが必死でなだめているんだけど、効果はなし。

どうでもいいけど、あのときみたいに興奮して「にょー」とか言わないかな。言わないだろうな。あれ可愛いかったんだけどなぁ。

「じゃあ燃やして」

「ちょ、チョコを？」

『じゃあ』の意味が今ひとつわからないんだけど。

「チョコ会社を」

『じゃあ』の意味、把握。根本から潰せということか。

「チヨコも燃やして」

「とばっちりにも程があるぞチヨコさん」

「ご、ごめんねぇぇぇぇ！　でもおばちゃん燃えたくないの！　勘弁してぇ！」

……試食のおばちゃん、チヨコさんだったのね。

「燃えたくない？」

「え、ええ。なんとかならないかねぇ？」

しかし子供相手に腰低いおばちゃんだ。

「じゃあ萌えて」

ハイ無茶振り入りましたー。

「べ、べつに脂肪だけ燃やしたいとか思ってないんだからね！」

ハイおばちゃん結構レベル高いでーす。

「許す」

ハイ判断基準さっぱり不明でーす。

――と、まぁ。こんな感じに今日も平和な商店街でしたとさ。

## カカの天下７４７「にょー」（後書き）

意味不明なサブタイトルから始まりました話ですが、実は単なる思い出話だったりします。チビカカを出したかっただけの普通の話です。最近、普通普通と連呼している気がします。お気になさらず。

さてさて、もうすぐ人気投票の〆切りですよー。ＧＷに入る前に発表しちゃうかもしれませんよー。おはやめにー。

# カカの天下７４８「ダメな二人」

「ふぁー」

むくり、とベッドから体を起こします。

「……にゅー」

サエです。

と、思いました？　残念でしたー。その母サカイです。

「……くぁ」

も一度あくび。はい、寝起きです。自室です。目を開けます。すると最初に見えた顔は、愛しの娘サエ……ではなく。

「おはようございます、ご主人様」

野太い声、無駄におっきい体。なぜかスーツを着てるけど、どこからどう見てもゆーたです。

「目を覚まされたところで、本日の予定をお伝えいたします」

ぼけーっと見つめる私の視線にも構わず、ゆーたは胸から出した手帳を読み上げました。

「まず起床後にサエ様との朝食があります。続きまして二度寝。起床後に昼食がありまして、さらに昼寝。１５時からはおやつの時間

となり、またもや惰眠。夕食をサエ様と過ごされた後は、もーそろそろ永眠してしまえ、と以上になっております」

「……永眠？」

「はい」

「……抱き枕は、サエでしょうね？」

「もちろんです」

「ならよし」

サエと一緒に永遠に……ふにゃふにゃむにゅむにゅ……ふへへ……ん？

「……あれー。ゆーた、おはよー」

「おはようございます。ちゃんと起きましたか？」

「はいー。なんだか寝ぼけて変なこと言った気がするんですけど」

「はて？　いつも通りでしたが」

そっかー。

「ところでー、なんで私の部屋にいるの？」

「忍び込みました」

「目的はー？」

「なんとなく執事をしたかったんで」

「かといって、勝手に女性の部屋へ入るのはどうかと思うんですけど」

「ご心配なく。賞味期限切れに用はありません」

「死ね」

「冗談です、お許しください。許せないのなら踏んでください」

「踏むのめんどい」

「おお、踏んでくれないとはなんとひどい仕打ちでしょう！」

むー、目をこすりこすり……まだ眠い。眠いけど、ゆーたに聞いておくことがあったような……あー、そうだー。

「ゆーた、前に私が言ったことは調べてくれたー？」

「はい。報告はまとめてあります」

「それで、どうだった？」

「は、警察はもちろん、機動隊から探偵、裏ルートの情報屋まで使って調べさせましたが……結果は、わからず」

そっかー、そこまでしてもわからないかー。

「一体、どういうことなんでしょうねー」

え、今の会話がどういうことかって？　それはですねー、話はかなーり前まで遡るのですが……

あるとき、トメさんに怒られたことがあるのです。私が趣味と実益を兼ねてサエにえっちなことを吹き込んでいたとき、「それはイロイロ危ないから止めろ」と。サエがこれ以上可愛いくなってしまったら世界に狙われてしまうというその意見に私は賛成し、サエにえっちな情報がいかないように細心の注意を払ってきました。

しかし。だがしかーし！

サエはどこからか新たな情報を得ていたのです！　先日、サユカちゃんの誕生日の衣装を悩んでいたときに「えっちなスクール水着とかどうだろー」とかぼやいていたのを、確かに聞いたのですから！　普通に考えて子供が自分でスクール水着をえっちに見るなんてありえない！　本を読んだか動画を見たか知りませんが、そういった情報をどこからか入手したはずなのです！

だから私はその情報ルートを潰すため、急いでゆーたに調べさせたのですが……

「動物部隊にも手伝っていただきましたが、何も情報はないと……なぁ、総理大臣、官房長官」

いつの間にかゆーたの横に整列していた二匹の猫が「にゃ」と頷きました。

「えーと、ゆーた、この子たちの言葉がわかるの？」
「同じ飯を食った同胞でありますから」
「食ったんだー」
「食わせたのはあなたでしょうに」
「まさか本当に食べるとはー」
「命令されれば従う。それが下僕クオリティ！」
そっかー、下僕をなめてたー。じゃ今度はもっとすごいことさせよ。
「それにしても、本当にどこから情報が漏れてるのかしらー」
「……ご主人様」
「なにゆーた。改まって」
「一つ、わたくしめに推測が」
「なに、情報ルートを掴んだのー！？」
「ご主人様のベッドの下を見たのでは？」
「あうち！」

そこは気づかなかったー！！　そっかー！　私のベッドの下はそんじょそこらの男性に負けないくらいのワンダーランド……私の留守中にサエがこのパンドラの箱を開けてしまっていたとしたら――いやあぁー！！　やめてー！！　この箱の最後に残っているのは希望じゃないのよ、なんだかもっとこう、いやらしい望みなのよー！！

「決まりですね」

「ううー、サエがー、サエが汚れるー」

「心配ありません、おそらく深くまでは見ていないでしょう。本当に深くまで見ていたらサエ様の人格が変わるか、もしくはご主人の人格が疑われます。その場所はそれくらいカオスです。そうなっていないなら、まだ浅いはず」

「そ、そっかぁー」

「というわけで、サエ様が道を踏み外す前に全部捨ててください」

「無理」

「ええ！？　さ、サエ様のためなら捨てるべきではないですか！？」

「か、隠し場所を変えればいいんだもん！」

「それではまた見つかってしまいます！　大事なサエ様のため、ここは思い切って――」

「じゃーあなたは自分のベッドの下にあるものを捨てられるの！？」

「無理」

「でしょー！」

「不覚……思わず即答してしまうほどの問題だったとは！　仕方ありません、どうやっても見つからない場所に隠すしかないようですな！」

あそこだ、ここがいい、それよりもあの場所が――ゆーたと真剣に隠し場所を話しあっていると、総理大臣と官房長官が呆れた感じに「にゃ」と鳴きました。

「ゆーた、二匹はなんて言ってるのー？」

「このダメ人間め、だそうです」

私とゆーたは「あはは」「うふふ」と笑い、同時に言いました。

『そんなに褒めるなよー』

本当にダメだこいつら……猫ちゃんたちがそう思ったのはまず間違いないでしょう。

だって仕方ないでしょー。人間だものー。

## カカの天下７４８「ダメな二人」（後書き）

はい、ダメな二人の話をお送りしました。なんか生々しい話題ですが、カカ天はわりとリアリティを追求していますのでご容赦を。

まぁ、「人気投票までこの二人影薄かったし出番あげよー」と思って書いた結果がこんなんなっちゃったわけですけど＾＾；

……さて、ここでお知らせ。

誠に勝手なのですが、ちょっとＧＷはいっそがしいためカカ天を一回休ませていただきます。

五月五日辺りにカカたちのＧＷの様子を載せれればいいなーって感じです。なのでまだキャラ人気投票していない人はＧＷ中にお願いしますね＾＾

あと！　わざわざ私の誕生日にメッセージをくれた方々、ほんっとーにありがとうございます！　こっちではあんまり言ってなかったのに祝っていただけて、嬉しすぎて半ば感激しています笑

私も２５歳になりました……まだまだイロイロと頑張っていかなきゃなぁ。ではでは、またこれからもよろしくお願いします＾＾

# カカの天下７４９「ＧＷ」

こんにちは、トメです。

今日からゴールデンウィーク！　さして旅行の予定等もないのですが、笠原家ではとっても嬉しいイベントが待っています。なんとなんとなんと！　ユイナ母さんが帰って来るのです！

そんなわけで、僕とカカは母がやってくるであろう時間に駅の前でダラダラと待っていました。

「まだかなぁお母さん」

「まだかねぇ」

「ねぇトメ兄。つかぬことを聞くけど」

「おう、なんだ」

「つかぬこと、って、なにがつくの？」

「つく、っていうか、ついてないんだろう。つかぬ、なんだから」

「ついてないのかぁ、それは残念だね」

「残念だな。ついてないのは」

相も変わらずよーわからん会話していると、ようやく見覚えのあるシルエットがホームに見えた。

「あ、いた！　お母さん！！」

「おー。母さ……ん？」

確かにそれは母さんだった。

でも、なんか、やたらとフラフラしていた。なんだか疲労困憊のように。

「……あ、トメ君、カカ君、久しぶり」

にこやかな優しい笑顔。でもテレビに映っているときのキラキラしたオーラがない。いやまぁ、充分に魅力的ではあるんだけどさ。

「うん、久しぶり。母さん、なんか疲れてる？」

「だいじょぶー？」

「あはは、うん、ママ大丈夫よ。ありがとう」

そう言って母さんは自然な動きでバッグを僕に差し出してきた。はいはい、持ってってことね。いつも働いてくれている母さんが相手だ、荷物持ちならいくらでもしますよ。大して重くもないし。

「それじゃ行きましょうか。あらカカ君、少し背が伸びたかな？」

「ほんとに？　自分じゃわかんないなぁ」

「僕も気づかなかった。いつも一緒にいるからな」

母さんのバッグを手にブラブラさせながら、我が家へ向かって歩きだす。

あれ、なんだ。さっきは足元が危うかったけど、結構しっかりと歩くじゃん。

そしてしばらくして。

「ああ！」

「どったの、お母さん」

「バッグがない！」

全然しっかりしてねぇ。

「あの、母さん？　あなたさっき僕にこれ差し出したよね。持て、と言わんばかりに」

「え、あ、あー、そっかぁ。ごめんなさい、マネージャーさんがいつも持ってくれるから、つい」

「や、こんくらいはいいよ、持ってくよ。しかし本当に大丈夫？」

頭とか。

「ええ、大丈夫！　あぁでもビックリした、電車に置いてきたのかと思った」

「お母さん、疲れてるんだね……」

「あぁ……優しくしてあげような、カカ」

そしてしばらく歩いて。

「ああ！！」

「今度はなんだ」

「バッグがない！！」

「あなた本当に大丈夫ですか！？」

そんなクタクタの母さんを迎えてのゴールデンウィーク。いやはや、ぜひとものんびりと過ごしていつもの母さんに戻ってほしいものである。

――そして、家に着き、夕飯後。

「トメさんや、飯はまだかいな？」

「母さん、さっき食べたでしょ」

「覚えがない！？」

「わざとやってるでしょ？」

「てへ♪」

とりあえず心配はいらなさそうだ。

こんにちは、カツコです。

時はゴールデンウィーク！　なのでちょっと遠出してみることにしたわ！　ついでなのでサカイちゃんを誘って――と思ったら、意外なメンバーがついてきたんだよね。

「サエちゃんサユカちゃん？　カカちゃんと一緒にいなくていいの？」

「いいんですよーだ」

「サエすけったら、カカすけがユイナお母さんにべったりだから拗ねちゃって」

なるほど、そういうことか。ならばこのあたしが、めくるめく大冒険に連れていってやろう！

「サカイちゃん、弁当の用意は充分か！？」

「おっけーですよー。私特製、レベルの高い玉子焼き入りですー」

おお、それは楽しみだわ！

「ねぇ、サエすけ。レベルの高い玉子焼きって」

「あー、お母さんフライパン使うのヘタクソだから、玉子焼きを作

るだけでも難しいの」

「……玉子焼き自体がレベル高いんじゃなくて、玉子焼きを作る行為がサカイさんにとってレベル高いのね」

おお、それは不安だわ！　まぁいいや。

「それじゃ出発！　皆の者、乗れぃ！」

ん、なんでみんなポカンとしてんの？

「あのー、カツコちゃん？　乗れって……？」

「もちろん、こいつらに乗れってことよ」

察しが悪いね、あたしが呼んでおいた乗り物がすぐ傍に整列してるじゃないか。猫や犬に乗るのはさすがに無理だけど、豚、牛、山羊二匹がいる。こいつらで充分じゃん。

「そ、それに乗ってどこに行くのよっ！！」

「山へピクニック」

荒ぶる野生があたしを呼んでるぜ！！

――数十分後。

ドドドドドドドドドドドドドドドド！！

人気の無い山中の獣道を爆走する猫！　犬！　そして背に人を乗

せた草食動物達！！

「いやあああああー！　こわいいいいいー！　カツコちゃん止めてえええー！！」

「ふはは！　何を言うサカイちゃん！　この疾走感がたまらんのではないか！」

「いたいいいいっ！　腰が痛いお尻が痛いいいいっ！　ちょっとサエすけっ、君は大丈夫なのっ！？　運動神経のない君がこんな揺れに耐えられ――」

「ん、慣れたー」

「耐えられてるっ！？　なんでっ！　これ運動神経いるのにっ！」

「んー、動物さんの動きがなんとなーくわかるからー」

「あ、相変わらず変な能力ねっ！」

「もぐもぐー」

「しかも何か食べてるしっ！」

「うん、ブタ野郎の上でとんかつサンド食べてるー」

「なんて残酷なっ！」

「はい、サユカちゃん。日本経済の上で牛焼肉おにぎり食べてー」

「いただくわっ！」

豚と牛の嘆き声を聞きながら爆走する山中……燃える！

「よーし、このまま頂上までいくぞー！！」

「か、カツコちゃん！？　温泉に行くんじゃなかったんですかー！？」

「予約し忘れてて気がついたらどこもいっぱいだったのだ！　はーっはっはっはっは！！」

大丈夫、きっとどっかに秘湯とかあるさ！！

なかったけど。

ゆーただ。

爆走中だ。

「うおおおおお！　サエ様たちを見失うなぁぁぁ！」

「ひえええええ！　ゆーたさん！　こわい、こわいですううう！」

「やかましいわシュー！　貴様、俺に乗っているだけのくせに！」

「だって恐いもんは恐いんですよぉぉぉ！」

肩にヘタレを乗せながら頑張った結果、サエ様たちが山頂で休憩するまでには追いつくことができた。なかなか速いな、あの豚ども。

しかし肩に乗せていたヘタレは途中で振り落とされたようだが、生きているだろうか？　別に興味もないが。

おお、サエ様！　俺にあーんしてくれるのか！？　なんたる幸せ……

あ、ミエ様に奪われた。

ほほえましい光景……眼福じゃぁ、俺はこれで満足じゃぁ……

サラです。

今日からゴールデンウィーク！　私とキリヤさんは同じ居酒屋さんでヘルプとして呼ばれました。なぜ呼ばれたか？　それは……ゴールデンウィークとは飲食店にとって、お盆と並ぶ地獄の忙しさを誇る期間だからです！

その様子を、イメージ的に表現すると……

「最初に、諸君に伝えねばならぬことがある」

「なんですか、店長」

「一人……逃げた」

「！？」

「キリヤ君、サラさん、君たちが今回の、鍵だ」

『さー、いえっさー！！』

「よろしい。開店だ……！」

「三番！　三番テーブル誰かいけるか！？」「こ、こっちは手が」「く、やはり兵力が足りない！！」「泣き言を言うな！　手数を増やせ！　三倍の速度で動くのだ、一人で三人分の働きをするのだ！！」「はい喜んで！！」

「――な、なにぃ！？」

「どうしたキッチン！！」

「こ、このオーダーは……！　無理です、できません！」

「……いいですか、皆さん。お客様はできるかどうかなんて聞いてません。ただ、『やれ』と言っているのです」

「き、キリヤさん！」

「やりましょう！　私たちには全力を尽くすことしかできません！！」

「サラさん……！」「ええ、わかりました、やってみせましょう！！」「おっしゃー！」

「では、そこの君。とりあえずこれだけ全部の食器を三分で洗ってください」

「どえええ！？　さ、サラさん、気合入った直後でなんですけど、これは」

「できるかは聞いてません。やってください」

「さ、サラさんがやったら」

「私がやると皿を割ります。だからここは任せました」

「あなたけっこー勝手ですね！」

「そこ！　口より手を動かしなさい！」

「ああ、すいませんキリヤさん！　でもサラさんだって口ばっかーじゃない！？　めっちゃ手を動かしてた！　もうオシボリ詰め終わったの！？」

「オシボリおっけーです！　前に出ます」

「す、すごい……ヘルプなはずなのに既存スタッフが敵わない……なんだこの戦闘力は！　これが経験の差か……ま、負けるか！」

「一人倒れた！　水を！　水を持ってこい！！」

「お客様が吐きそうだ、こっちにも水を――バカヤロウ、お客様が優先だ！！」

「えーせーへー！！　えーせーへー！！」

「うっさいぞ！　誰だおまえ！　暇なら水持ってこい！！」

サラです。えっと、ゴールデンウィークはこんな感じです。え。誰がどれを喋ったかわからない？　そうですねぇ……私もキリヤさんもかなり喋ってましたよ？　意外なあのセリフからこのセリフまで……想像してみるのも、面白いかもしれませんね。

ともかく私のゴールデンウィークは休みなしの激闘だったのでした……達成感ありますけどね。キリヤさんとお疲れの乾杯したときなんかもう……最高！！　お疲れー！！

ゲンゾウ三姉兄弟だ。

上に同じ。うぎゃあ。お疲れ。

テンカだ。

今日からゴールデンウィーク！　ゴールデン！　つまり金色のビ

ールが最高な週だ！　だからオレはビールを飲むぜ！

いつものことだって？

うるせぇ！！

予定はないのかって？

うるせぇ！！

何かあったのかって？

何もねぇんだよ！！

いいんだいいんだ、オレは一人で思う存分ビールを飲むんだ……

ケッ！！

「んぐ、んぐ、んぐ！」

んめぇ！！

幸せだ。

アヤです。

せっかくのゴールデンウィーク！　うら若き乙女としてはどこかへ出かけたいところなのですが……

「ねぇニッシー！　どっか行くわよ！」

「やだー」

「なんでよ！」

「僕にとってＧＷはゴロゴロウィークなのだー。だからゴロゴロするのだー」

「そんな休日のお父さんみたいなこと言わないの！」

「疲れてるんだよ。放っておいてよお母さん」

「お母さ……！　そ、それってふ、ふ、夫婦みたいな感じ……あなたって呼べばいいのかしら……じゃなくて！！　せめて何かしようよー！　ひまひまひま！」

「じゃあかくれんぼしよう」

「なんでよ！？」

「僕、かくれんぼ好きだから。じゃあ隠れるよ！！」

「なんでいきなりやる気満々なのよ！」

「ほらアヤ坊！　目隠しして！　数えて！」

「わかったわよ、もう！　いーち、にーい、さーん」

「もーいーよ」「はや！！　しかも見つからな！！」

結局、こんな感じに家で過ごす連休でした……

い、いや、まぁ、その、これは、これで。えへへ。

イチョウでございます。

今日からゴールデンウィーク。というわけでして、連休を愛しのあの人と過ごす――いいえ、過ごさせるため、かのちゃんと一緒にタケダ医院へ来たのですが。

「タケダ君、旅行中！？」

「ええ、なんでも旅行好きのお母様にさらわれたそうで……院長として病院を離れられないお父様が泣きながら語ってくださいました」

「せ、せっかく黄金カレーを作ってきたのに」

「金粉まぶしただけですけどねぇ」

「金の粉だよ？　そんなすごいものを振りかけたんだからすごく美味しいよ、いっちゃん！」

えぇと、食用の金粉ならそこまで高くないんですけども、金＝高いという安直なイメージで喜んでいるかのちゃんが可愛いので、あえてツッコまないことにいたします。

「ではかのちゃん。タケダ君がいない間、どういたします？」

「修行する！」

「どこでですか？」

「インド」

「なるほど、故郷に帰るのですね」

「……なんで納得するのぅ？」

「そんな悲しそうな顔をしないでくださいな。今のボケではあまりにもかのちゃんにハマりすぎです。ツッコむ前に納得してしまうのです」

「うぅ……」

「ほらほら、一緒にボケの練習をしましょ？　いつか、カカちゃんに勝てるように」

「……うん。ありがと、いっちゃん」

恋敵であるカカさんに勝つため、ボケを練習中なかのちゃん。

でも多分勝てないと思います。相手は真性のボケですから。

面白いし可愛いから続けますけどね。さぁ連休中ずーっとボケてもらいますよー♪

「ご、ゴールの週で、ゴールデウィーク！」

「何のゴールですか？」

「か、カレーの道」

「ゴールあるんですか」

「ない！」

ダジャレ習得への道もなさそうですね。でもわたくしが楽しめるからそれでよし、です。

ユカです。今日からゴールデンウィーク！　なので……

「――でな！　うちの妻ったら旅行ばっかで全然会ってくれないのだよ！　ラブラブできないのだよぉぉぉ！」

「うざい……」

なぜか院長の愚痴を聞かされてます……いや、泊めてもらってる身だから邪険にはできないんだけど……うざいわ。

「ほっほっほ、この爺がいい案を教えてやろう」

「本当ですか、サワサカさん！」

「そこのユカとラブラブすれば良いのじゃ」

「おお、その手が――」

「ないわ！！」

いい加減に我慢ならなかったので思いっきり蹴り飛ばしてやったわ。ワタシの足は今日も快調ね。

「ワタシはやることあるんだから、そろそろ邪魔はやめてよね！」

仕事仕事、と。あと……プレゼント作らないと。

そんなこんなしてたら、ゴールデンウィークは特に何もなしに終わるわ。ワタシの職業柄、休みってあんまり関係ないんだけど、ね。

こんにちは！　クララです！

「ごーるでんうぃーくです！」

「です！」

ノリよく答えてくれたのはすっかり相棒となったタマです！

「ごーるでんうぃーくといったら何ですか！？」

「しにます！」

「なんでですか！？　そんな不吉なもんじゃありませんよゴールデンウィークは！　黄金の日々なのですよ！　何かないのですか！？」

「きんたま」

「それは確かに金色かもしれませんが違います！　あああもう、それじゃあ……子供の日！　子供の日があるじゃないですか！　何かないのですかタマ！　子供の日といえば！」

「しにます」

「だから死なないんですってば！！」

「じゃーいきかえります」

「子供の日ってすごいですね！？」

「すごいです」

そんなクララたちを見ながら、お母さんは楽しそうに頷いていました。

「子供自身にとっては、いつだって子供の日なのよねぇ……あ、でも。こどもの日の趣旨を考えれば、“親にとっては”になるのかしらね、おほほ」

パパです。

え、誰のパパかって？　そんなのカカのパパに決まっているじゃないか！

ああ、カカ……そして愛すべき妻と、あとおまけどもよ！　楽しそうにゴールデンな休日を過ごして……いいなぁいいなぁいいなぁ！　でもシャイな俺様は何も言い出せず……

いいやもう。寝よう。

ぐー、ぐー、ぐー……

「ぐわあああああああああああ！！」

口元に走る激痛！

「にゃ、にゃんだ！？　くひもほがはらひ！！」

「おはよう、お父さん」

「ひゃ、ひゃひほひは！？（訳、な、なにをした！？）」

「何って、寝てる口元にわさびを塗り込んだ」

「死んだらどうする！？」

「や、死にはせんて」

まったくもう！！　いくらカカとはいえやっていいことと悪いことが……なに！？　カカだと！？

「ん、どしたの？　お父さん」

お父さん……ああ、お父さんだと!?　そう面と向かって呼ばれる日が来るなんて!!

俺様、生きててよかった……

そんな夢ばかり見ていたゴールデンウィークでしたとさ。

タケダだ。

旅行中だ。

「寒い!!」

え、出番これだけ!?　ちょ、待て、ここがどこで、どういう状況かという説明は――ぷつん（出演枠が終了いたしました）。

## カカの天下７４９「ＧＷ」（後書き）

ども、予定よりも大幅に更新が遅れてしまいましたルシカです。ゴールデンウィークが予想以上に忙しくて……ほんと申し訳ない！　遅れた分は長くしたから堪忍しておくれやす。

さて、カカラジ手前のこの話、ちょっと皆さんのアピールタイム的な書き方にしてみました（多分）。

キャラの人気投票〆切りは明後日、五月十日までとします！　まだの方は急いで！！

**カカの天下７５０「第二十六回、カカラジ！」**

「こんカカ、香加です」

「うあ、いまだかつてない短い始まり方だ！　と、留です」

作者です。ま、緊張してるんでしょ。

「これでまた五位とかだったら……しかもそれより低かったら……私は死ぬ」

「さ、さぁ！　なんか不吉な言葉から始まって申し訳ありませんが第二十六回カカラジスタートです！　しかも今日は待ちに待った、キャラ人気投票の結果発表日！！」

「はぁ……」

なんか緊張か諦めか知りませんけど病んでる人がいるのでちゃちゃっと参りましょー。まずは説明。えー、このカカラジは読者様から募ったキャラ人気投票、結果発表の場であり、本編のカカ天世界とは一切関係ありません。別次元です。香加とか留は分身ですのであしからず。

「さて、じゃあ早速発表していこう。まずはランク外の人から」

「なんか可哀想な言い方だね……私もそこにいたらどうしよう……はぁ……」

「こ、こんな陰気な香加も珍しい」

前回、前々回と順位的にパッとしなかったのが心の奥まで効いてるんでしょうねぇ。ともかく行きましょう。今回は『全員がどれだけ投票が集まったのか記載してほしい』とのリクエストに応え、できる限りきちんと何ポイント入っているか明記していきます。ポイントについては前回のカカラジで投票方法を見ればわかるはず。

「さて。まず手始め！　5ポイント以下の人を一気に言います！　高いポイント順で……ユイナ母さん、サラさん、官房長官が5ポイント！　サカイ動物園、インドちゃんが4ポイント！　シュー君、でゅみゅみゅみゅう、アヤちゃん、サワサカ爺さん、メグさん、カカ父が3ポイント！　総理大臣、校長、ゲンゾウ三姉兄弟、ゆーたが2ポイント！　空読の爺さんが1ポイント、以上です！」

「でゅみゅみゅみゅうって……キャラ？」

知りません。でもまーなんか投票した人いたし。キャラなのか違うのかもよくわからん言葉だし。ま、いっかーと載せました。

「そか。しかしお母さんとサラさん、残念だねぇ」

「母さんは『いろんな意味でカカ天最強だと思う』っていう、なんとも頷けるコメントまでもらってるのにな。でも結構キャラ増えてるから……まぁ仕方ない。とりあえずさくさく行こうか、次は１５位！」

１０位からじゃない辺りがキャラが増えたことを物語ってるね。

「１５位の方に投票した方には、こんなメッセージをいただきました。『クララと最近いい感じ？　チビ姉最高！　つえぇ、おもれぇ、

やっぱつえぇ』ってな感じでランクインしたのは――タマちゃん！
7ポイント！」

「最近はクララちゃんとセットで出番が増えたからねぇ。でも7ポイントかぁ」

まだ15位ですからね。どんどん行きましょう！

「はーい、次は私が発表するよん。14位に届いたメッセージはこちら。『西へ行く。ブライアンいいやつ。サブキャラ大好きです！特にちょっとニブめのニッシーが！』などなどいただいた、ニシカワ君が9ポイントでランクインだ！」

「……ブライアンって、誰？」

知らないけど、なんか届いたんで。

「……確かにニシカワ君宛て？」

それは間違いないかと。

「謎だ」

「ま、どうでもいい謎はどうでもいいっしょー。そんなことよりランキングの謎を解き明かすほうが先なのだー！　続けて発表します第13位！　いただいたメッセージは『彼に名前をあげてください。彼に名前はいりません』と両極端な内容！　なんとなくもう想像がつくでしょう？　意外なところにランクイン、友人A、10ポイントでした！」

「……誰だよ」

「留兄。あんたの友達だよ」

「Aなんて名前のやつがいるわけないだろう」

友人A……10ポイントももらってるのに哀れな……

「さて、どこの誰だかわからんやつには触れないで次いくぞ。えー12位！　『あんた頑張ってるよ！　一緒にサエ様をうへへ。俺のオタク仲間。サカイ（さん）とトメとサエ（さん）一緒にいるとき、なんか家族っぽくて面白いから』とのコメントしづらいメッセージを受け取ったサカイさん！　12ポイント！」

トメとサエちゃんとサカイさんで家族……なんだか新しい見方だなぁ。

「私は？　ねぇ私はどこいった!?」

「さーて次行くぞ」

「無視すんなぁ！　サエちゃんは私の嫁だぁ！　ん、ということはトメ兄はトメ義兄に」

「ええい、ややこしいことは置いとけ。11位！　『この変人の右に出る物なし!!　……というのは冗談で、なんかだれかとくっついてほしい　そのバケモノっぷりが好きなんですよねぇ（笑）。清々しいまでに自分に正直に生きる姿も、何だか好きなのです。バケモノ万歳！　カツコのいないカカ天とかけて、クリリンと解く。その心は、華（鼻）がない。カツコのいないカカ天なんて華が……』

などなどユニークなメッセージが多いのはもちろんこの方、我らがバケモノ、姉カツコ！　１４ポイント！」

「みんな怪獣好きだね」

「カカ、その感想はさすがに一言でまとめすぎ……」

「いいじゃん、わかりやすくて。発表もわかりやすくいくよー、ついに第十位！　『くらっしゃー。私の学校にもほしい。くらっしゃあ！　もっと出番を！　くらっしゃあああああ！』と、はい誰だか一瞬でわかりますね。デストロイヤー教頭、１５ポイント！」

意外と高いとこにきてビックリしました。もう少し出番をあげないとなぁ。

「この人は出番少ないからこそ登場時にインパクトあるんだと思うけどな。今のままでよくないか？」

「さてさて、それに比べて出番が増えてきた人が来ましたよ。９位！　『悲惨だから。とりあえず、かわいそうだからー、ただそれだけ……かわいそうだからとかではない。がんばってるタケダはかなり好きだ。アンチダケダファン？　の方にはすんませんけど……いつかこの感想欄でどなたか（誰か忘れた。すいません）が書いてたけどクラスのまとめ役を買ってでてた話で見直した。（というかタケダへの見方が一気にかわった）』なんて生暖かい言葉をもらいまくったタケダ！　１９ポイント」

「タケダ頑張ったな！」

「もう成仏できるね！」

「死んでないって」

「そんなバカな！？」

「そんなバナナ。さて引き続き留さんがお送りしますよー第八位。『その話術、見習いたいものです。キャラが好き。うちの店にこないか？　タケダに負けるな！』　と。うんうんタケダに勝ってよかったなーちょうど一つ上だぞ、キリヤ！　２５ポイント！」

「いつも一生懸命働いてるまじめなこの人が、タケダなんかと比べられるなんて……なんて可哀想」

まぁ主要（？）男性キャラ同士だから仕方ないということで……

「本人は気にせず『ハッハッハ！　私なんぞに投票していただけるだけで光栄です！』とか高らかに笑ってそうだけどな。だから気にせずに七位にいこうか」

「おっしゃー。七位は……ええ！？」

「どした、香加」

「ま、まさか七位がこの人とは……『トメとくっついて欲しいから。姐さんが担任なら、もう一回小学校からやり直してもいいです！　いいかげんくっつけよ。トメテン最高！　トメテン成分をよこせ！！』もうおわかりでしょう……なんと前回の覇者テンカ先生２６ポイント！」

「うあー、下がったなーテン」

出番の無さのせいでしょうか。それともファンが離れていったのか……前回、前々回と大人気だった彼女には申し訳ありませんが、このような結果となりました。

「僕が思うに、本人は『ようやく面倒くさくねぇ順位になったか。あー肩凝った』とかビールを片手にあっさり済ませるかと」

「うんうん、テンカ先生っぽいそれ。だからほっとこ」

そだね。

「では第六位……えええ!?　この子!!」

「香加、そんないちいち驚いてわかりやすいリアクションしなくても」

「だって驚いたんだもん！　第六位！　『なんか不憫なんで（笑）面白オカシイ幸せを手にしてほしいかな（笑）。なんかもう応援せずにはいられない！　なぜかとても親近感が湧いています。幸せを祈ってあげたいランキングならダントツ一位！　これからもいじられてね』という、私と同じ温かい心を持った人たちから送られたメッセージをもらったのは――サユカン！　２８ポイント！」

「おお、三人娘の一人がついに！　しかしテンと2ポイント差か」

この辺は僅差ですね。みんな人気あるようで嬉しいですけど、予想外に早く三人娘が出てまいりました。

「サユカン、元気出してね。あとでたっぷり愛をあげるから」

「訳すと“いじってあげるから”ってことだな」

「そうとも言う。じゃ五位いこか」

「切り替え早いな。まぁ僕が読む。えー五位！　『おまえは何度俺を泣かせれば気が済むんだ！？　なんか目から汁が出てきた、画面が見えないよ。誰よりも妹にほしい。さくらーふぶーきのーはげー。ボクにとりついてほしー。わけわからんかわいさが好き。お花見の話が超楽しみです』カカ天ファンタジー妖精、クララちゃん３１ポイント！」

「さすが春なだけあって桜は強いね」

「なんだかよくわからん理論だが、まぁそういうことなのかもな」

一年越しの桜話はけっこー好評だったので嬉しかったです。それもクララのおかげ。これからは安心してすっとぼけてほしいですね。

「あ、やっぱりずっといるのね。桜とお母さんが再開したら消えるのかなーとかなんとなく思ってたんだけど」

いたほうがおもろいやん。

「……ああ……そう、ですね」

「はい、ツッコみきれないトメ兄は置いて第四位！　……留兄読んで」

「は？　置いとくんじゃなかったのか」

「だ、だってさ。もう5位、言っちゃったじゃん？」

「ああ」

「まだ私、出てないじゃん？」

「そうだな」

「そ、そろそろかな。だっていつもベスト3とか入れないし、そろそろ悔しくて泣くところなのかな！？」

「そんなマイナス思考になるな！　前のカカラジで今回こそはーって意気込んでたのはどうなった！」

「そんなものは最初だけに決まってるよ！」

「開き直りましたね可哀想に！！」

「うー、うー、やだー。留兄読んでー」

「はいはい……じゃあ四位！　うげ」

どうした留、嫌いな食べ物を前にした子供みたいな顔してるよ。

「な、なんともぴったりな表現してくれるな作者……ええい、ままよ！　第四位！　『何か消えそうだから。トメをもっといじめろ。てかギャップが可愛い。決め手は過去編とその後の話でもう…大好きに。私と同じ名前！』とコメントはそんなに多くないんですが……ユカ、３２ポイント」

「おおー！　留兄の元カノすごい！」

「元カノ言うな」

やっぱりみんな、トメが大嫌いなんですね。だからトメをいじめまくるユカさんがこんなに人気を！

「否定したくてもできねぇ……」

「……それはそれとして、え、え？　じゃあ私、ベスト3！？　や、まさか集計違いだったり……ありうる！！　この作者ならやりうる！」

はいはい、観念して次いきなさいな。ここからは留が読んだほうがよさそうね。

「了解。楽しみにしてろよ香加。えー三位！！」

「どきどき……どきどき……」

「メッセージを紹介します。『理由は書くまでもないので以下省略。腹黒がいい。でも、敵に回したくない。可愛いにも程がある。私は白い○○ちゃんが特に好きですね。ええ、○○様ではなく○○ちゃんが。白○○欲しいです！　やっぱかわいいです。今度こそ一番をとって欲しいです。彼女へポイント全部！（無理です）この子のためなら死ねる！（どうぞ）』今回はおとなしくしていただきました、三位はサエちゃん！　３８ポイント！！」

「おおおおお！　私の嫁があああああ！」

「なぁ香加。それ喜んでんのか、悲しんでんのか？」

「６：４」

「どっちがどっちかは聞かないでおこう。ともかく今回も１位にはなれなかったか」

そろそろいくかと思ったんですけどねー。サエちゃんは前回も前々回も２位でしたし。

「そだなぁ。今回は――どした、香加」

「くふふふ……え、なに？」

「そんな通報されそうな笑い方をしといて、なに？　じゃないだろ」

「や、だってさ……残り、１位と２位じゃん？」

「だな」

「もう誰が残ってるか、決まってるじゃん？」

「そだな」

「じゃあ１位は私！」

「じゃないぞ」

「先に言うなあああああああああああああああ！！」

「いやぁ、あんまりにもツッコみたくて、つい」

「うがあああああああああああ！！」

えらいぶっちゃけ発表しちゃいましたが、ここまでくれば皆さん想像はつくでしょう？　一気にいきますよー。

「じゃ僕が2位の紹介をば……メッセージすごいぞ。『仮にも主人公ですからね。こいつみたいなやつがいれば、平和になりそう。カカとかけて、新鮮な魚と解く。その心は、どちらもうまいネタばかり。上位にさせてあげたいから。私はカアカの変な言動が大好きです。是非とも上位に上がって前回の雪辱を晴らすとともに、カカラジ内ではとことん調子に乗って欲しいです。カカすけ無くしてカカ天無し！　破天荒なんて言葉じゃ生温い！　ごく稀に見せる可愛さは反則！　そんな小悪魔な天使（あれ？逆か？）の彼女が大好きです！　なんだかんだ言って、やっぱりコイツがいないと始まりません！　妹に欲しいとは思いませんが（自分にはトメのような突っ込みスキルが無い為）、お隣さん家に1人位欲しいところです。これからも明るく楽しく、周囲をひっかき回して下さい！』と、うちの妹にたくさん応援ありがとう！　第二位はカカで、４５ポイントでしたー！」

「ちくしょーありがとー！　なんかメッセージ読んだらテンション上がってきたー！！　気に入らないけど1位の紹介したるわ！　第1位！　こっちもメッセージ多いぞーくそぅ！　『トメのいないカカ天とかけて、GL（ガールズラブ）と解く。その心は、突っ込みがない。いつかこの世界から消え失せろ。まあ、一番好きなので。キャラがなんか自分に被るんですよね。まーこんなハーレムにはなりませんけど（笑）諸々々…　天へ召されることを祈ってます。トメかカカか迷ったけ

ど自分としてはトメあってのカカ天だと思ってるので……一位奪還&ユカさんともう一度。トメはオマケです。カカチョップでもくらっておけ！　頼れる兄さんでいてほしいから……ではなくて一位になっていろんな人から恨まれて面白いことになってほしいから。ツッコミの星、ツッコミ小市民！　その突っ込みスキルには憧れます。これからも良き兄、良きツッコミでいて下さい』だとさ！　人気あってよろしいですねぇ第1位の留お兄様！　71ポイントってなんですか！？」

こんな結果となりました。

見事に笠原兄妹がワンツーフィニッシュ！　いいですねぇ、こんな展開を望んでたんですよ私は！　もちろんやらせなしで！！

「くそぅ……1位じゃなかった……」

「でも香加、顔がにやけてるぞ」

「うへへへへへ」

たくさんの投票、たくさんのメッセージ。うちの子たちは本当に喜んでいます。

とうとう750話に突入し、まもなくラッキーセブンに到達です。最近は更新も不定期に遅れたりしまして、せっかく続けてきたカカ天の存亡が危ぶまれていますが……大丈夫！　これだけの投票とメッセージをいただいたことで、またどれだけでも頑張れる気がします！

もちろん時間の有無があるので、すぐに復調とはいきませんが…

…なんとかライフスタイルを見直して、いずれは毎日更新復活を目指して書いていこうと思います。

読者の皆様、本当にありがとうございました！！

「……そろそろ喋っていい？」

「まて香加。大人の世界にはな、感情よりも先に建前とかそういうのが必要――」

それでは皆さん、さような――

「待てえええええええ！！　せっかく健闘した私たちにも喋らせろ！」

「そうだそうだ！　勝手に終わらすな！　ランキング発表してハイ終了じゃ読者様も納得しないだろ！」

えー。でも時間が。

「私の調子に乗った姿がみたいというメッセージもあったじゃないか！　それに応えなくてどうする！　めっちゃ調子に乗りたいぞ私は！」

「それに最近ふつおたをやたらと頑張ってる人とかいるんだぞ！　なんかこれでもかと送ってくる人！　それを放っておいていいのか！？」

わかりました。じゃ近々、第二十六・三回カカラジくらいで書きましょう！

「……前から思ってたけど、なんで小数点が出てくんの？」

正規の回じゃないから。あと、私が気に入ってる某ラジオのマネをしてみたかったから。

「わかる人いるのかね、そのラジオ……」

ここの読者さんならいると思いますがね。まーそれはともかく、今回は発表だけで留めておきます。

「んー、仕方ない。近々あるならいっかー」

「あ、それでも一つだけ、メッセージを紹介したいです。投票のときにいただいたものなのですが……」

『いつも見守ってくれる大人がいるからこそ、カカ達が自然体でいられるんだろうな』

「なんだか心がほんわかしました。ええと、それだけです」

カカ天の世界をここまで見守っていただけて、私は本当に幸せモンです。

「私もね！　２位いぇーい！！」

「やっぱ嬉しいんじゃん。僕も嬉しいけど」

ではでは、今回はこの辺りで！　次回の人気投票は……１０００話あたりかな？

「そんな作者にかからじちょーっぷ！」

「もっと執筆更新がんばれやー！！」

ぐぼぁ！？　あ、あぃ……かかばい……

## カカの天下７５０「第二十六回、カカラジ！」（後書き）

えーと、更新が遅れまくって謝るしかない作者です。
心配してくださった方もいまして申し訳ないのですが、単純に書く時間がなかっただけで元気にやってます、はい。仕事場でこれでもかと叫んでます。

しかしここまで不定期なのは困りものですな。去年の頑張りはどこへ行ったのやら……うぅむ、ここまで投票、応援してくださる方々に情けない姿は見せられません。
また頑張っていきますので、よろしければお付き合いお願いします！

そしてカカ！　２位おめでとう！
トメ！　おまえは空気読め！　カカを１位にしろよ！
もしくはサエちゃん（エコヒイキ

……あ、ちなみに私、作者ルシカは今回７ポイントいただいてしまいました。いやはや、『毎日お疲れ様です』とかメッセージもいただきまして、ホント、もっと疲れるくらい精進しないとなぁと思い恐縮の極みでございまする……本当にありがとー！！

## カカの天下751「仲のいいことはいいことです」

こんにちは……トメです。突然ですが皆さんに、重大なお知らせがあります。

「んしょ」

僕、笠原トメは。

「えっほ、えっほ」

なんと、寄生虫にとりつかれてしまったのです！

「よっこいしょ。ふぅー」

ああ、おそろしい……一体どんな目に合わされるのやら！　おにーさん恐い！　それにしても耳がかゆい。

「でさ、カカ。一息ついたところ悪いんだけど、聞いていいか？」

「なんじゃらほい」

「なんで一生懸命よじ登って僕の背中にはりついてるんだ？」

「寄生虫のテレビ番組見たらやってみたくなったの」

そんなこったろうと思ったわぃ。あー耳かゆ。

「ああ！　なんて恐ろしい！　これから僕はどうなってしまうのか

!?」

そんなことを思いつつもノってあげる僕ってば良いお兄さんだなぁ。

「えと」

なんだその間は。どうするか考えてなかったんかい。予定もネタもなく兄によじ登るなんてそうそうできないぞ。さすがカカ、兄として鼻高々の逆だ。

「みーんみーん」

とりあえず鳴いてるし。てかそれセミだし。ていうか耳かゆいし。

「おなかすいた」

「夕飯の料理は終わってるもののすごく準備しづらいんですけど」

「よきにはからえ」

「適当によろしくって意味ですよね、それ?」

聞く耳もたないカカにため息をつきながらも準備開始。作ったおかずを皿によそって、カカをおんぶしたまま居間のテーブルへと運んでいく。

「さて、準備できたぞ寄生虫」

「あーん」

「……食わせろってか」

仕方ない。僕は箸を取っ――

「ばく」

「僕を食うんかい！？」

あ、でも耳を噛まれたおかげでかゆいのが消え――

「痛だだだだだだ！！」

「噛み千切れない。安い肉だね」

「おまえはその安い肉の妹だろうが」

「知らないの？　トメ兄。私はお母さんのいい肉をもらってるんだよ」

「ほう？」

「まず、トメ兄は胸肉だけど」

なるほど。さっき夕飯の買い物で見た一番安い肉だな、鶏の胸肉……うーん、母さんの胸肉と聞いて嫌な気が微塵もしないのは僕が男の子だからでしょうか。

「私なんかお母さんの肝臓をもらってきたんだよ」

「今すぐ返してこい」

確かに肉屋で高かったけどその言い方は恐い。あー、なんか僕も母さんの胸肉を返したほうがいいような気がした。そしたらもっと大きくなるのか、母さんの胸？　いやん。

「トメ兄、あーん」

「ああ、今度こそ飯だな。えーと箸は」

「ばく」

「頭を噛むな！」

「あご痛い」

「知るか！！」

「む、なんだその口の利き方は。私は寄生虫なるぞ！」

「この虫ケラが」

「……えぅ」

おっと、思わず反撃不能なツッコミを入れてしまった。

「あーはいはい！　ごめんごめん！　寄生虫は虫ケラなんかじゃないよな！　もっと、なんだか、すごいよな！　普通の虫とレベルが違うよな！」

そう、普通の虫より遥かに気持ち悪い。

「うん、寄生虫は偉いのだ！」

でもなんか尊厳は取り戻したらしく元気になった。よかったよかった。よくねぇ。

「トメ兄、気をつけ！」

「おまえに気をつけるのか？　言われるまでもない」

「そうじゃなくて！」

「もっと気をつけろと？　カカ……おまえ今度は何やらかす気だよ」

「ちーがーう！　じゃあ前ならえ！」

「前にはテーブルと夕飯しかないが何をならえと」

「にゃー！！」

おーおー、ままならなくて鳴いちゃったよ。久々に聞いたな、この叫び声。

「私はきせーちゅーなのにー！！」

「はぁ。結局、何がしたいんだよカカは」

「規制！！」

わかりづらいダジャレだ。

「……虫はどこいった？」

きせい、はわかる。しかし、ちゅうは？

「ちゅー」

「ちゅーをするな！！」

危ない。僕のほっぺが大ピンチだった。

「くけぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぁ！！

[ 6744 ]

僕のほっぺが三回ちゅーされた。

……これ、勝ちか？　負けか？

## カカの天下７５１「仲のいいことはいいことです」（後書き）

さて、キャラ人気投票でワンツーフィニッシュを決めたお二人。
めずらしくラブラブさせてみました。
ええ、ラブラブです。くっついてますし、何よりちゅー！　ラブラブです。
いつもどおりに見えるのは気のせいです。

兄妹なのにちゅー？　とお思いのそこのあなた。
気にスンナ。

# カカの天下７５２「逆転裁判」

あ、あのぅ、トメです……なんだか突然おどおどした声を出してすいません。しかしそれも仕方のないことなのです。えぇと、僕がいま座っているのは自宅の居間のテーブル前、ただそれだけなのですが……

それだけなのですが……

そのテーブルの上で仁王立ちしているのは――

「我こそは裁判官カツコ！！」

だ、そうです。おっさんくさいジャージ姿のくせに何をほざいているのでしょうかこのバカは。

そうツッコみたいです。いつもならツッコんでます。

「ただいまより裁判を行う！！」

しかし、なぜかツッコめません。それは辺りに漂う、異様な雰囲気のせい。場の厳粛な重圧が僕の心を圧迫し、言葉を発することができないのです。さらにビビった身体は勝手に正座で畏まってます。なんだこれ。ここが裁判所だとでも言う気か？　居間のくせに。姉のくせに。

「罪状！」

んっと、姉が何かに怒ってるのはわかる。

「此処に座る笠原トメには！」

でも、何かしたっけ僕。

「カカちゃんに三回もちゅーされた疑いがかかっている！！」

……はい？

「笠原トメ君」

「なんスか」

「君は先ほど、カカちゃんに三回ちゅーされたと聞くが、それはまことか！？」

「ま、まことです」

「判決、死刑」

「なんでやねん！！」

久々にメジャーなツッコミしちゃったよ。

「じゃあ半ケツを死刑。さぁケツをだせ。削いでやる」

「それ結局死ぬから！！」

ケツから血を吹き出して死ぬなんて勘弁してほしい。

「おいジャージ裁判長！　何を聞いたか知らないけど、僕は妹に襲われただけだぞ！　なんでそれであんたが怒ってんだよ！？」

「あたしだってちゅーされたいんだよ！！」

「八つ当たりかよ！！」

「うっさい！　妹にちゅーされてんじゃねぇよ変態！　あたしも混ぜろ！」

「ならあなたも変態ですよね！？」

「変態上等！！」

そりゃさっきは僕も驚いたけどさ、カカがたまーに甘えてくることはあるし、それは猫みたいな気分的なものであってだな、そんな変態的要素なんて全然ないんだぞ？　や、本当に。

「おぅけぃおうけぃ、ならばここで証人喚問したいと思う」

「……なんの証人だよ」

「見ればわかる。さぁどうぞ！」

呼ばれるまで待機していたのか、廊下から居間へと入ってきたのは。

「サラです」

「証人だからしょーちゃんか」

「サラです！！」

「被告に発言は許していない、黙りなさい！」

姉に怒られた……被告って僕のことだよな。

「ではしょーちゃんに質問します」

「サラですってば！」

「カカちゃんに三回もちゅーされたトメをどう思う！？」

「無視ですかぁ！」

「あたしの質問を無視すんな！」

ケンカすんな。

「はぁ……わかりました、証言しますよ」

何言うんだろサラさん。姉の八つ当たりを鎮めてくれるといいんだけど。

「私なんて弟ちゃんどころか妹ちゃんですらちゅーを断られるのに、どうしてくれるんですか！？」

「それも八つ当たりですよね！？」

僕のツッコミは聞き届けられなかったらしく、サラさんは無視。

姉はサラさんに向かって深々と頷きやがった。

「よろしい。それでは次の証人だ。サカイちゃん」

「はいー。トメさんは私と同じ保護者、つまりは同士。私と同じようにお風呂を一緒に入ってハァハァしてるに違いない！」

「それはない！　ていうかあんたどっから出てきた！」

「よろしい。続いての証人！」

「ゲンゾウ兄弟、セイジだ」

「トウジだぜ」

「何やってんだあんたら！！」

「証人に質問だ。あなたたちは姉にちゅーができますか？」

『気色悪い、勘弁してくれ』

「そりゃそうだろうよあんたらの歳になれば！」

そんな僕の魂の叫びはやっと姉に届いた。

そしたらなんか怒った。

「若ければ許されると！？　若かりし頃の過ちか！！　そんな青春を謳歌しているぞと自慢したいのかチミは！？　なんだチミは！？　なんだチミはってか！？」

最後のは僕のセリフじゃないのか。

「まったくこの男は！！カカちゃんのちゅーがどれだけ大切なものかわかってないね！！　めぐまれない子供がどれだけカカちゃんのちゅーを求めているかわかってない！！」

「めぐまれない子供ってエラい限定的なもん求めますね！？」

「めぐまれない子供に愛のちゅーを！　一万超えるけど」

「ちゅーするの大変すぎますね！？」

「その大変なちゅーをおまえは独り占めしたのだ！」

「会話ができているようでできてない！！」

はぁ、はぁ……息切れするほどの大論争。その最中で僕は思いついた。これは裁判、ならば！

「じゃあここで反証に移らせてもらう」

そう、僕のほうだって無罪を主張するために証人を呼べるのだ。

「カカ！！」

「シュバッ！！」

「うお、カカちゃん！？　いつの間にクソオヤジの移動術を！？」

や、シュバッて口で言いながら普通に入ってきただけですけどね。

「カカ、今回の裁判をどう思う。おまえが僕にちゅーしたのをみんな怒ってるんだけど」

さぁカカの証言は！

「別にええやん」

「負けたぁぁぁぁ！！　あたしたちの負けだぁぁぁ！」

「あんたらここまでやったわりに弱いですね！？」

ま、まぁカカ本人がいいって言ってるんだし、ねぇ。

「誕生日なんだから、そんくらい」

「……へ？」

カカの言葉に、その場にいた全員が呆気にとられた。

「誕生日……？　誰の？」

「トメ兄の」

今日、何日？

あ。あー、あー！！

「僕の誕生日か！！」

忘れてた。すっかり忘れてた。みんなも驚いてる。みんなも忘れてた。なんか寂しいなチクショウ。

「そ。だから三回のちゅーが私のプレゼント。どうだ！」

どうだって言われても喜んでいいんだかどうなんだか……ん。

待て。まてまて。マテマテマテマテ。

「マテマテ？　なにその可愛いっぽい生き物」

カカの声は無視しろ。それより大事なことがある。

僕が、誕生日？

つまり。

サユカちゃんも、誕生日？

皆さんは気づいているだろうか。実はカカの寄生ちゅー騒動があったのは夕飯どき。それから一時間ほど経って姉が現れ、裁判騒動となった。姉がどっから聞きつけてきたのか、証人たちはこんな時間にここまで来て何をしているのか、阿呆なのか、頭と体裁は大丈夫か、色々と疑問は増えるが……

大事なのは、今が夜中だということ。

今日がもうすぐ終わるということ。

サユカちゃんの誕生日を、祝う前に終わってしまうということ。

今日が終わるまで、あと二時間。

――どうする？

## カカの天下７５２「逆転裁判」（後書き）

逆転っていうか別方向な展開になりました裁判。
さーどうするトメ君。時間はないぞ。

……トメとサユカの誕生日、覚えてる人いたかなぁ。いないだろうなぁ。昨日のちゅーはそう思って仕掛けたトラップだったり。

## カカの天下753「思い出に残る誕生日を」

――数日前。

「ねーねーカカちゃん、最近どうー？」

「うーん、やっぱり忘れてるっぽい」

「ふっふっふー、じゃあこうしよう」

そんな会話が、あったらしい。どうも、トメです。

僕の誕生日、そしてサユカちゃんの誕生日である今日が、もう少しで終わる。その事実にようやく気づいた僕は慌てました。あたふたしました。その場で呑気に証言していたゲンゾウ兄弟に「落ち着け若造」と言われさらに腹が立ちました。

そんな僕に道を示したのは、カカ。

「じゃ、行こか」

それが当然と言わんばかりに僕の腕を引いて、そのまま外へ。そこにはサエちゃんまでいて、カカとは反対のほうの腕を掴まれて、まるで犯罪者が連行されているような構図で歩かされて……

気がつけばサユカちゃんの家の前で……

チャイムを鳴らすまでもなくサユカちゃんの両親が迎えてくれて……

どーぞどーぞと僕だけ通されて……

はい、あっという間にサユカちゃんの部屋の前です。

「いいのかオイ。特に両親」

どうぞヤッちゃってください！　と背中を押してくれたサユカちゃんのお母さんに深い意味なんか無いと思いたい。や、そう思うしかない。全部サエちゃんの策略なのだ。サエちゃんすげぇ。サエちゃんこえぇ。

コンコン。

ノックの音にびっくりする。僕じゃない、僕はどうするべきかわからなくて立ち尽くしていたのだ。勝手に扉をノックしたのは、いつの間にか隣に忍び寄っていたサエちゃん！

「はーいっ」

扉の向こうから聞こえた声。サユカちゃんだ、まだ起きてる。

「さ、頑張ってくださいなー」

無責任なサエちゃんを睨みつける。

「……ハメてくれたな」

「あらあらー？　大事な大事な“お友達”の誕生日を忘れていたのは、どこのどなたでしたっけー？」

ぐ、そこを突かれると返す言葉がない。しかしなぜそんなに「お友達」を強調する？

「忘れてた罰です、ちゃんと祝って、プレゼントをあげてくださいなー」

「プレゼントったって、僕は何も」

「見本はカカちゃんが見せたじゃないですかー」

……見本？

まさか、ちゅー？

「何回するんですかねー、楽しみにしてますー」

あれも策略の内か！？　サエちゃんすげぇ！　サエちゃんこえぇ！！

「だれっ？　お母さん？」

「ほらほら、サユカちゃんが待ってますよー。いってらっしゃいトメお兄さん」

「そ、そんなこと言っても」

「どーん」

不意打ち。背中から蹴り飛ばされた感覚、知らぬ間に忍び寄っていたカカだ。

「どーん」

そしてタイミングよく扉を開くサエちゃん。なぜ悪戯するときのガキはこうも素晴らしいコンビネーションを発揮するのだろう畜生。

「え、トメさんっ！？」

「や、やぁ」

何はともあれ、顔を合わせてしまったわけで。

「え、えっ？　どうしてっ」

ケロリンのパジャマ姿でベッドの上に寝転がっていたサユカちゃんは跳ねるように身体を起こして、なぜか正座した。よほど困惑しているのだろう。僕も同じだけど。

「サユカちゃん、誕生日おめでとう！！」

こうなりゃヤケだ。時計を見る。よし！　あと三十分ある！　セーフ！

「と、トメさん……それを言うために、わざわざ？」

「うん、サユカちゃんを驚かせようと思って！」

口からでまかせ、ではない。多分。

「うわぁ、うわぁっ！　わたし、嬉しいですっ！」

ズキ。

「わたしを驚き喜ばせるために、こんなギリギリまで待っててくれたんですねっ！？」

「う、うん」

「きゃぁーっ！！　ほんっとに嬉しいですっ！！　わたし、てっきり祝ってもらえないものかとっ！」

ズキ。ズキ。

「お電話来ないかなぁ、メールだけでもいいのになぁーってずっと携帯握りしめて待ってたのに、まさか会いに来てくれるなんてっ！！」

「あ、あはは」

「眠いのを必死に我慢して起きてたかいがありましたっ！！」

ズキズキズキ。胸が痛いよママン。

「さ、サユカちゃん。実はその、プレゼント、なんだけど」

こんなに喜んでくれてるし、ちゅーとかあげなくても、これだけで別にいい、か、な？

「そんなのいらないですっ！！　わたし、トメさんが会いに来てくれただけで嬉しいですっ！！」

うがあああああぁ実際に言われるとなんかこのまま終わるのは嫌だあああぁ健気すぎるよこの子ぉ！

「あ、でもわたしからは……はいっ」

「これ、は」

「プレゼントですっ」

女の子らしい可愛い包み。驚きで呆然としながら、差し出されて思わず受け取った。

軽い。

軽い？

どこがだ。

「用意して、くれてたんだ」

「はい。トメさんが祝ってくれたら渡そうと思ってたんですけど、その機会もなくて、今日はもう渡せないのかなって思ってたんですけど……こうして来てくれて、祝ってくれて、本当に嬉しいです」

こんなに重いものがどこにある。

大事な友人の誕生日を忘れていた阿呆の手にとって、これほど重いものが、どこに。

軽いのは。

「もうほんと、それだけで嬉しいんですっ！」

薄っぺらいのは。

「だから、その……そんな顔しないでくださいっ」

――僕だ。

「サユカちゃん」

「はいっ？」

「実は」

話してしまった。

それは自己満足でしかなかっただろう。サユカちゃんは喜んでいた、ならばそのまま喜ばせてあげるのが大人だ。嘘を吐き通して、優しい誕生日で終わらせてあげるのが大人だ。

それが上手い大人だ。

それが汚い大人だ。

どちらが正しいかといえば大人のやり方だろう。それで良い方向

へ向かうのだから。でも僕はそんなに器用ではなかった。ここまで純粋な子の前で嘘を吐き続けることなんて、できなかった。

「それで、カカたちはちゅーとかすればって言ってたんだけど、それも、さ……なんだか間違ってる気がして。僕があげたいと思って用意したプレゼントじゃ、ないんだし」

バカな男だ僕は。でも仕方ないと思う。

大人だからって、なんでもかんでも上手くやれるようにはなれない。

「ごめん」

「謝らないでください」

頭を下げた僕にかけられた声は、意外にもハッキリとした声だった。

「わたしは今、すごく燃えているんです」

顔を上げる。サユカちゃんを見る。

「わたしにはですね、目標があるんです」

落ち込むかと思った。がっかりするかと思ってた。

「ずーっと前に言いましたよね？　わたしが大人になったら、もう一度告白するって」

なのにサユカちゃんは確かに笑っていて。

「それからわたしとトメさんは付き合い始めるんです。誕生日を覚えているどころか、ちゅーなんてするのが当然の仲になるんです。そしてゆくゆくは、誕生日プレゼントに婚約指輪をもらうんですっ」

妄想ですよね、なんて、照れながら笑っていて。

「その夢への道は、まだまだ遠いってことですよね」

多分、落ち込んだ。がっかりもしただろう。目尻の涙が語っている。

「わたしは負けません」

でも、それを吹き飛ばすほどの笑顔。

「わたしは、トメさんが、だ、だ……大好きですからっ！」

告白されたときといい、この子には負けてばかりだ。

うん。

負けっぱなしじゃ、いられないよな。

「……誕生日が終わるまで、もう少しあるな」

「え。あ。はい、そうですねっ」

サユカちゃんの大好き発言には応えられない。まだ応えられない。

それは大人になってからだ。でも代わりは用意できる。

「あのさ、サユカちゃん、アレ、ある？」

サユカちゃんは、カカとサエちゃんの親友だ。だからこの部屋にもアレがあるはず。

ああ、やっぱりあった。間もなくしてサユカちゃんが取り出したソレを受け取る。

「机、借りるよ」

「……はい」

僕も妹に付き合っていじったことがある。だからさほど難しくなく……ほら、できた。

「あ――」

「今はまだ、こんなものしかできないし、僕としてはこの先、君の期待に応えられるかはわからないけど」

ビーズで作った、小さな指輪。

「今は、これで」

婚約指輪には子供らしすぎる、大人と子供の中間のような贈りもの。

思いつきにしては僕らにピッタリのプレゼントだと思う。

そしてピッタリ誕生日が終わる直前――

「改めて、誕生日おめでとう」

プレゼントと一緒に、ようやく格好つけて言うことができた。

「来年こそは覚えてるからね」

「は……はいっ！　ありがとうございますっ！　わたしの夢が一つ加わりました。この指輪から、本物の婚約指輪に昇進することです！」

「はは、昇進試験はいつになることやらね」

「頑張って勉強しますっ！」

「……何を？」

「とりあえずサカイさんちで」

「それはヤメロ」

とにかく喜んでくれたようで、よかった。

――その後、覗き見していたらしいカカサエ二人が乱入してきて、夜中のプチ誕生日パーティーに移行した。どうやら二人はこの時を盛り上げるため、サユカちゃんをさらに寂しがらせるように祝うの

を我慢していたらしい。やれやれ、おとなしく誕生日を迎えられない生き物だ。保護者だから付き合うけどね。

そして翌日、サユカちゃんは僕の渡した指輪をはめて登校。「なんだそれは」と注意した宮崎先生に右フックをお見舞いしてまでつけているそうな。いやはや、気恥ずかしい。左の薬指につけているわけではないみたいだし、まだマシか。

あと。またもや姉に「有罪！　死刑！　死刑！　しけー！！」と叫ばれたけど、それはまた別の話。

サユカちゃんからのプレゼント？　ああ、それもまた別の話にしておこう。

## カカの天下７５３「思い出に残る誕生日を」（後書き）

久々に書きましたけど……甘っ！　この二人甘っ！！

でもまぁたまにはこんなのもいいかと。二人とも誕生日おめでとう（実質今日が二人の誕生日）。

カカサエの誕生日は派手なの多い分、こちらは違った風味でお送りさせていただきましたが……いかがだったでしょうか。

トメに死刑判決をプレゼントしたい方は存分にどうぞ。

# カカの天下754「ぺたぺた」

んちゃ、カカだよ!

今日も楽しい学校が終わり、うちに帰ってサエちゃんサユカンと遊んでいました。やがて夕方になるとサユカンが「今日は夕飯の準備をお手伝いするのっ!」と帰ってしまい、サエちゃんと二人だけになりました。

やがてトメ兄が帰ってきたものの、そっちも夕飯の準備。結局二人だけになってしまい、何して遊ぼうか悩み中。

「うちはまだお母さんが帰ってくるまで時間あるから、もう少し遊びたいんだよー」

「うーん、何しよっかなぁ。遊び道具は何がある?」

サエちゃんと二人して、私の部屋の中をキョロキョロ。やがて見つけたのものは、

「紙、ペン、そしてやたらと粘着力のあるテープ」

「それでどうやって遊ぶのー?」

この三つがそろっているなら、やることは一つしかないね。

私はサエちゃんを誘って部屋を出る。足音を忍ばせて台所へ移動。そこには鼻歌を歌いながら包丁を動かすトメ兄の背中が。

「サエちゃん、あれ見てどう思う？」

「主婦」

まったくもって同感。

だから私は紙に『主婦』と、ぶっとーい字で書いて、トメ兄の背中に貼ってあげた。

ぺた。

「……ん、カカ。いつの間に」

「今の間に」

うん、貼り紙は気づかれてない。

「カカ、あのさー」

「どのさー？」

「あの」

「どの？」

「あれ」

「どれ？」

「えぇい、うざい！　最後まで喋らせろ！」

えー。これトメ兄に教わった返し方なのに。

「えーっと、僕さ。ちょっと商店街に買い忘れがあったから買ってくるわ。外に出るときは戸締りよろしくな」

「ん、いってらっしゃい」

「いってらっしゃいトメお兄さん」

そしてトメ兄は背中に『主婦』という文字を背負ったまま、商店街へと出かけてしまった。

「あーあ、いっちゃったねー」

「大丈夫、トメ兄はちゃんと主婦っぽいし」

「それもそだねー」

よし、外へ飛び出そう。

紙とペンとテープを手に！

ちょっと歩いて通行人がちらほらいる道路へ出る。さてさて獲物は？　や、その前に。

「サエちゃん、何か思いつく言葉ない？」

「可哀想」

なんでそんな言葉がスッと出てきたのかは聞かないでおこう。

「よーし、『可哀想』と。これ書いた紙、誰に貼ろうかな」

そう呟いたとき、いいタイミングで一人の男性が通りかかった。

「ふんふんふーん、今日は彼女とデ、イ、ト！　むふふ、むふふふ」

ご機嫌で歌う彼の背中に、私は無言で『可哀想』の紙を貼ってあげた。ペタ。

「浮かれ具合が目ざわりでつい貼っちゃった」

「なんだかあの人、あれ貼られただけで今日フラれそうだよねー」

「めでたしめでたし」

「どうせならあそこの疲れ果てたサラリーマンに貼ればよかったのに」

「それはさすがにアレじゃん」

「アレすぎるかー」

さぁ次いこう。

「サエちゃん、次の言葉は？」

「気持ちイイ」

だからなんでそんな言葉が……ってツッコまないツッコまない。
私はボケだ。

「よし、『気持ちイイ』と。うまく書けた、じゃあこれは誰に……」

サラさんが通りかかった。こっちには気づいてないので、無音で忍び寄ってペタリと背中に貼ってあげた。

「サラさん気持ちイイってさ」

「なんかエロいねー。おっぱいおっきいし」

良いことをした。さ、次！

「サエちゃん？」

「今なら１９８０円」

何がだろう。サエちゃんは謎がいっぱいだ。そこが好き。

「これどこに貼る？」

「人に貼るのはさすがにねー」

「あ。でもあそこにピッタリの人がいるよ」

「ほんとだ。カカちゃんごー！」

なんかボロボロな服を着て道の端で寝ている男の人にペタリと貼ってあげた。今なら１９８０円。

「結構安いけど、売れるかな？」

「私なら買うかなー」

「サエちゃんてばお金持ち！　私はもう少し安くなってから買うなぁ」

まぁ、なんでこんなとこに転がってるか知らないけど頑張れシュー君。

「あ、こんなところに車があるよサエちゃん」

「安全運転」

「お、サエちゃん優しい！」

サラサラーっと書いて、車体にペタリ。

「安金運転って書いちゃった」

「安いお金で運転。タクシーと間違えられるかなー？」

「いいんじゃない？　退屈な人生に刺激を！」

「――勝手に持ち主の人生を退屈にさせるなよ」

後ろから聞きなれたツッコミ。トメ兄だ、商店街から帰ってきたらしい。

「ったく、カカ！　またおまえはこんなことして」

「あ、車行っちゃった」

『あ』

車の中に運転手がいたらしく、『安金運転』と貼られたまま発進してしまった……あ、すごい。ちゃんとタクシーと間違えて手をあげてる人がいる。この街の人って本当にノリいいなぁ。あ、しかも乗せちゃった。ノリよすぎ。

「あ、私そろそろ帰る時間だー」

「ん、サエちゃんまたね」

「カカちゃんまたねー！！」

こうして、私たちは手を振って別れた。

「なぁカカ」

「なんじゃらほい」

「サエちゃんの背中、何か貼ってあったな」

「うん。『今日はあんまり黒くなかった』って書いて貼っておいた」

「感想かよ」

どっちかというと私みたいなこと言ってた気がする。一心同体化

が進んでるね。さすが結婚しただけはある。

「そしてカカ、おまえの背中にも何か貼ってあるぞ」

「なんて書いてある？」

「……『ぬくぬく』」

「……私って、ぬくぬく？」

「……なんか平和で温かそうな緩そうな感じで、似合ってるんじゃないか？」

「ならいいや。帰ろ」

「待て待て、そんな紙を貼り付けたまま外を歩くな！」

トメ兄はわざわざ紙を剥がしてくれた。

「ありがとう」

「どういたしまして。紙なんて貼ってたら格好悪いからな」

そっか、そうだよね。

ところでトメ兄は『主婦』の紙をいつまで背中に貼ってるつもりなんだろう。私の知ったこっちゃないけど。

## カカの天下７５４「ぺたぺた」（後書き）

ほのぼのっぽい普通のお話書いてみました。ええ普通に子供が遊ぶだけの話です。

安金運転。その言葉を思いついたっていうだけの理由でこの話が生まれました。ただそれだけです。

しかし最近黒いサエちゃんあんま書いてないなぁ。何か書きたいなぁ。リクエストありませんかー？

# カカの天下７５５「地味ないいわけ合戦」

こんにちは、サエですー。

最近は寒くなったり暑くなったりの微妙な季節でしたが、ようやくポカポカ温かくなってきました。午後の教室、テンカ先生の声と単調なチョークの音。窓から注ぐ温かい陽光に思わず目を細めてしまいます。

「おいサエ、寝てんじゃねぇ」

「目が細いだけですよー」

「オレだって目が細いぞ」

「テンカ先生のは目つきが鋭いっていうんですよー」

目つきが悪いとも言うけどーなんて思っていると、ちょいちょいっと服が引っ張られた。近くの席のカカちゃんだ。

「で、実際は？」

「ねみゅい」

さっきのは単なるいいわけだったりー。だってこんなにポカポカだものー。

「おいサエ」

あれ、やっぱりバレた？

「笑ってんな」

「……目が細いだけです」

後ろから引っ張られる服。

「実際は？」

「……本当に目が細いだけー」

「サエちゃんってさ、いいわけ上手いよね」

「そうかなー？」

授業も終わって下校時刻。サユカちゃんは用事があるらしいので、今日はカカちゃんと一緒に帰ります。

「さっきの授業中のことだよねー？」

「あれを見て普段のことを思い出したのだよ」

普段からかー、そんなにいいわけしてたっけ？

「サエ君！！」

心の中で首をかしげていると、あまり聞き覚えのない声が。

「えっとー？」

振り向くとそこには、微かに覚えのある男子。たしかこの人は……

「今日は暇かい？　よかったら俺とデートしないか」

そうそう、最近こうやってよくナンパしてくる男子さんだ。そこそこ格好いいから女子には人気らしくて、ご覧の通りいい気になっている。

「今日はカカちゃんとデートだから」

「まったく、君はそればっかりだな。そんな逃げてばかりいないで素直になったらどうだい？」

どうしよう、すごくうざい。

「そうだ、じゃあ携帯の番号を教えてくれるかい？　まずはそこから始めよう」

「遠慮しとくー」

「まぁそう言わずに」

しつこいなー。

「じゃーこっちからかけるから、そっちの番号教えて」

「おお、本当！？　やったねサエ君、俺の番号を知ってる女子なん

てあまりいないんだぜ！」

それって友達少ないだけじゃないかなーなんて思いつつもメモメモ。

「それじゃ後でかけるからー」

「わかった、待ってるからね！！」

さわやか気取りで去っていく男子。名前はまだない。

「あれ、どしたのカカちゃん。そんなに睨んで」

「サエちゃんがどうやって阿呆を撃退するか期待してたのに」

カカちゃんは何か勘違いしてるみたいだ。

「撃退ならしたじゃないのー」

「どうやってさ！？　結局あの男子に番号なんか教えて！」

「教えてないよ、こっちからかけなきゃいいんだから」

「あ」

カカちゃんはあんぐりと口を開けて固まった。こんなの男をあしらう常套手段なのに、直球なカカちゃんは気づかなかったらしい。

「あ、ゆーた。ちょうどいいところに通りかかったねー。この番号あげるー」

「おおサエ様！　ご機嫌うるわしゅう！　なんですかな、この番号は」

「私をナンパしてきた男の番号」

「またですか。わかりました」

あれ、またまたどしたのカカちゃん。そんなに驚いた顔で。

「ゆーた……何するの」

「んっと、電話をかけて私のモノマネをするみたい。それで大体の人はトラウマになって私に近寄らなくなるんだって」

「……サエちゃんって、いいわけっていうか、その、なんか色々上手いよね」

「そうかなー？」

「サエさん！」

そのとき、またもや声をかけられた。

「あのときの約束なんですけどーー」

「ごめん、急いでるの。わけはまた後で話すからー！」

カカちゃんの手を握ってダーッシュ！　廊下の角を曲がったところで足を遅める。

「話さないけどねー。とか、こういうの？」

うんうんうん、と頷くカカちゃん。

「そう言うカカちゃんのいいわけだってすごいじゃないのー」

「私の？　何かいいわけしたっけ」

「ほら、この前に遅刻したとき」

『――カカ、なんで遅刻しやがった』

『それが私の個性だから』

すごい問答無用な理由だと思う。敵わない。

「そういや終いには『んじゃあんたが起こしに来なよ！』って逆ギレしたっけ」

ほんと敵わない。

「それを言ったらこの前のサエちゃんだって」

『――サエ、随分と大事なプリントを忘れてくれやがったな？』

『笑顔は忘れてないよ？　にこ』

『許す！！』

「あのテンカ先生があっさり許すなんて、どれだけ可愛い笑顔見せたのさ」

「さー？　あ、噂をすればテンカ先生だ」

「おぅガキども。さっさと帰れよ」

その前に雑談を。テンカ先生がどんないいわけするかも気になったので。

「いいわけか。よく使うのはな、居酒屋で」

『――こちらのグラスお下げしまーす』

『でよ、そのとき姐さんが空からいっぱい降ってきて――あ、まだ中身が残ってたのに下げられた！　話に夢中で気づかなかったぜ！　オイ店員！！　どうしてくれる！』

「で、うまくすればもう一杯げっとできる」

「……黒いというよりセコいね先生」

「勉強になるねー」

「うっせーうっせー、さっさと帰れ」

いつもどおり穏やかにテンカ先生と別れ、ようやく生徒玄関へ。しかしまだ私を呼び止める声が。

「おおサエ！　すまんがまた整理作業を手伝ってくれないか」

今度は先生だ、松崎先生。始業式で落とした株を持ち上げるため、学校の影の支配者っぽい私と仲良くしようとしている腹黒い大人だ。

「えー。これからお母さんとの用事があるんですけど」

「そこをなんとか！」

「とても大事な用事なので」

「そ、そうか……大事な用事なら仕方ない。呼び止めて悪かった」

「……仕方ないですねー、協力してあげます」

「ほ、ほんとか！？　いや、しかし大事な用なんだろう？」

「学校のお仕事も大事ですからー」

「偉い！　なんて偉い生徒なんだ君は、ではそこの――」

どこの教室に行けばいいかを伝えて、先生は去っていった。

「で、実際は？」

「用事なんて無いよー。これで私の株アップ」

「やっぱ上手いね」

そこ、私のほうが腹黒いなんて思ってないだろうね？　私は黒いんじゃないの、上手いのだよー。

……たぶん。

そして、帰宅して。

「聞いたわよ、サエ」

「え？」

「私との用事を、松崎とかいう先生に潰されたんですってー！？」

しまった、妙に情報通なこっちのフォロー忘れてた。

「お母さん、別に用事なんか無かっ――」

「母と子が出会う、それだけで最重要な用事なのよー！　テレビでもよく壮大な音楽鳴らしてやってるじゃない！」

「それ何年かぶりの再開のときでしょー」

「私はサエと一秒離れるだけで一年経ったように感じるのよー！」

じゃー今日はお母さん的に３６０００年経ったのかー。お疲れ様。

「それをその先公がー！　ひーどーいー！！」

そのとき、家の電話が鳴った。駄々をこねていたお母さんの切り替えも早く、ちゃっちゃとそっちへ向かう。

「はいもしもし。家庭教師のお誘いですかー？　すいません、うちの子、学校辞めたんでー」

そのいいわけ、すごく効きそうだけど、お母さんこそひーどーいー。

でもそれ、私に子供ができたら使おうっと。ん、小学校は辞めれない？　そんなの知ってるけど、言い張れば相手は折れるもんだよ、うん。

黒いって？

黒くないもん！！

## カカの天下７５５「地味ないいわけ合戦」（後書き）

はい、地味に普通にありそうないいわけに関する話をお届けしました。

黒いサエちゃんを書こうとしたんですが、思ったより普通でした。

や、でも小学生的には黒いほうなのでしょうか。皆さんどう思います？

## カカの天下７５６「部員だぞ、がんばれタケダ」

「ただいまより！　タケダ隊員の入部試験を行います！！」

わーぱちぱちぱちー、とささやかな声援を受ける私はカカその人であります。拍手してくれているのはもちろん親友のサエちゃんサユカン。そして私の宣言を聞いて唖然としているのは――タケダ！

「あ、あのう、カカ君？」

「なんだねタケダ隊員！　質問を許可する！」

「入部も何も……俺はすでに、この手芸部へ入っているのではなかったのか？」

そう、ここは手芸部。そして今はクラブ活動時間中なのだ。

「質問に答えよう。確かに先日、部員が足りなくて廃部の危機に立たされた私たちは、仕方なくタケダ隊員に声をかけた。しかし！　それはあくまで数合わせ！　私はまだ、おまえを部員として認めてはいないのだ！！」

「そんな無茶な！！」

ふ、部長のやることは絶対だ。

「あれっ。でもカカすけってば、最近タケダはあんまり嫌じゃないからまぁいいやー、って言ってなかったっけっ」

「野暮だなーサユカちゃん。こんなのただの暇つぶしに決まってるじゃないのー」

「そっか、理由はどうでもいいのねっ」

そうとも言う。だってクラブ活動って言ってもあんまし目標とかないし。

「さぁタケダ隊員、試験だ！！」

「ぬぅ！　これもカカ君に認められるための、男の試練！　やろうではないか！」

威勢はいいね。だが私の試験は甘くないぞ。

「試験内容！　私のボケにツッコみ続けてなさい！」

どよめく部員一同、とはいっても私以外は三人しかいないけど。テンカ顧問は相変わらず来ていない。きっとどこかで酒でも飲んでるんだろう。

「れ、レベルが高いな。しかしふと思ったのだが」

「なんだねタケダ隊員」

「部員ではなくて隊員なのはなんでだ」

「そういう細かいところはツッコまなくてよろしい」

ひそひそと「理不尽ねっ」とか「そこがこの試験の面白いとこな

んだよー、多分」とか聞こえるけど、無視！

「さぁタケダ、行くよ！」

「来い！！」

「とぉ」

とりあえず殴った。タケダは吹っ飛んだ。

「ふぁふぃふぉふふー！？」

「何を言ってるのかわからん。失格！！」

「罰ゲームとして一枚脱げー」

「ちょ、サエすけやめなさいっ！　そんな汚いもの見たくないわっ！」

「やめやめぇい！！　はぁ……はぁ……い、痛すぎて、あと顔が歪みすぎて喋れなかった」

んなおおげさな。

「そ、それでなカカ君。これのどこがボケなのだ？」

「そんなの自分で考えろ」

理不尽だ……理不尽すぎる……そう慄くサエちゃんサユカン。そんな感じでツッコめばいいだけなのにねぇ。

「さぁ、次の問題いくよ！」

「ふ、不安だが……来い！」

もっかい殴った。もっかい吹っ飛んだ。

「ふぁふぁふぁほ！！」

「あーダメダメ。またかよ！？　ってツッコまなきゃ」

「け、けほ、けほ……づ、づっごんだづもりが、けほ！！　言葉にならなかったのだ！」

「じゃあ失格」

鬼と呼びたきゃ呼ぶがいい。なにせバケモノの妹だぞ私は。

「失格だからもう一枚脱がすよー」

「きゃーっ！　ちかーんっ！　あ、これってこうやって脱がすのね」

「しっかり見てるじゃないかサユカ君！！　ええい、も、もう一度だ！」

「よーし」

「腕は振りかぶるな！！」

ちっ。

「じゃあボケるよ。ボケ、それは私にとって息をするより自然なこと」

「え、えっと――」

「私の脳内にはでゅみゅみゅみゅう大魔王が住んでいて常にリンボーダンスをしていてその横にはマイケルとジョーイが常におならをこいている」

「あ、あの？」

「三人は常に仲良しいつもいつも笑っているにゃははははーと可愛く笑っているキモいキモい明らかに異常、だからこそ私の行動も異常となるだからどうした何が悪い」

「え――」

「でゅみゅみゅみゅう！！」

「あ――」

「ボケみゅみゅみゅう！！」

「あぅ……」

タケダは膝をついた。

「わからない……どうツッコめばいいのか全くわからない……なんなのだこの世界は……」

「はい失格。全部脱がそー」

「うあああああぁやめろサエ君！！」

「きゃー！　猥褻物陳列罪よっ！！」

うーん、適当に思いついたことを朗読しただけなんだけどなぁ。

その後。

こんなものにツッコめるはずがないだろう！　と憤慨するタケダを引きつれ、部員みんなで我が家に戻ってきた。

そして……やがてトメ兄が帰ってくる。さぁ、これがお手本だ。

トメ兄にてくてくと近づき。

「おう、カカ、どした」

私は前触れもなくこう言った。

「ボケ、それは私にとって息をするより自然なこと」

「じゃあとりあえず息すんな」

「私の脳内にはでゅみゅみゅみゅう大魔王が住んでいて常にリンボーダンスをしていてその横にはマイケルとジョーイが常におならを

こいている」

「うるさい黙れ」

「三人は常に仲良しいつもいつも笑っているにゃはははーと可愛く笑っているキモいキモい明らかに異常、だからこそ私の行動も異常となるだからどうした何が悪い」

「おまえの頭が悪いんだと思う」

「でゅみゅみゅみゅう！！」

「黙れ」

「ボケみゅみゅみゅう！！」

「はいはい、ツッコみゅみゅう」

どうだ、この見事な切り返し！　ちょっと泣きたくなるくらいに即答だぞ！　しかもツッコみゅみゅうとか予想外なお茶目を返してくれるおまけつきだ！

「ま、負けた……」

「タケダ君がんばー。さぁ今度はどこを脱ごうか」

「トメさんステキ……」

「なぁおまえら。よくわからんが、夕飯一緒に食ってくか？」

わーい、みんなでご飯だ。クラブ活動って楽しいなぁ。

……え、手芸部ですが、なにか？

## カカの天下７５６「部員だぞ、がんばれタケダ」（後書き）

前にいただいたリクエストで、カカにツッコミをする試験はどうだろう、というものがありました。
まぁユカさんの入門試験のときにいただいたのですが、こっちで使わせていただきました＾＾

なんだかんだで手芸部は多芸部ですよね。
あとタケダ、せっかく九位になったのに扱いはそのままでごめんね。形だけ謝っておく。

## カカの天下７５７「突発もしも物語、もしもカカたちが虫だったら」

注：前回の虫キャストとは異なることもあります。どうかご了承ください。

むかしむかし、である必要もないので、いつか適当な日のこと。あるところにクワガタとカブトムシの兄妹が仲良く暮らしていました。兄妹なのに虫の種類が違う？　そんな意見は無視です。

「なんちゃってなんちゃって」

いつもボケ役、クワガタカカ。

「なんでやねんなんでやねん」

いつもツッコミ、カブトムシトメ。

「なんでなんでやねんばっかやねん」

「そっちこそなにがなんちゃってやねん」

「なにがもなにもボケやねん」

「なんでやねんなんでやねん」

こんな感じでハサミと角、ボケとツッコミを突き合わせながら暮らしていました。

「お腹すいたねん」

「ここに蜜があるやねん」

「それだけで腹ふくれるんかいな」

「むしだからそのへんは無視するねん」

「そのボケはくだらなさすぎて無視でけへん」

関西弁風味には意味はありません。単にノリです。

「蜜うまいねん」

「なんでやねん」

「なにがやねん」

「なんでこんなところに蜜があるねん」

名前も知らないなんでもないような木に不自然に塗られた蜜。そう、これは人間が虫を捕まえるための罠だったのです！

「うあー」

「カブトムシトメ兄！！」

クワガタカカの長ったらしい叫び声も空しく、カブトムシトメは人間の手に捕まってしまいました。

「くそー！」

クワガタカカにもその手が伸びます、しかしハサミ攻撃でそれを撃退！　クワガタカカは素早い動きで木の上へと逃げることに成功しました。

「カブトムシトメ兄……絶対に助けるからね！　それにしても言いにくいなこの名前。略してカメ兄でいっか」

こうして、クワガタカカがカメ兄を助け出すための旅が始まりました。

この木なんの木気になる木を降り、進んでいくと……まず最初に、アリの群れに出会いました。わらわらと沢山いる黒アリたち。その群れを率いるのは最も黒い女王アリ、サエちゃんでした。

「ゴッキーじゃなかっただけマシかー」

女王アリサエは唐突によくわからないことを言いました。

「アリサエとアジサイって似てるよね」

クワガタカカの発言も負けてません。

「ねぇねぇアリサエちゃん。ちょっと聞きたいことが二つあるんだけどいいかい？」

「いーよー」

とてもフレンドリーな女王様です。しかし何を企んでいるかはわかりません。なにせ黒いので。

「まず一つ目の質問……このアリの大群、なに？」

女王アリサエを崇めるアリたちは、みんな口々に「サエ様サエ様」とか「踏まれたい踏まれたい」とか「サヤエンドウ」とか言いながら働いています。このアリたちは、一体？

「全部ゆーた」

恐ろしい事実が発覚しました。でもなんかアリって力強いし働き者だし納得です。

「じゃあ二つ目の質問。カメ兄知らない？」

重要なはずの質問なのにとてもフランクな聞き方です。

「あっち」

それに負けないくらいの答えを返す女王アリサエちゃん。

「ありがと」

「いえいえー」

童謡とかにありがちな理由のわからないほのぼの進行で、クワガタカカは先へ進みます。

しばらく歩くと、今度はカマキリテンカに出会いました。

「こんにちは」

「おっす」

なぜこんなに穏やかでのほほんとしているかは虫業界の謎です。

「カマキリテンカ先生はさ」

「なんで先生なんだよ」

「なんとなく。気にすんな」

ハイ気にしません。

「で、カマキリテンカ先生は何してんの」

「あん？　歌って遊んでんだよ」

「お酒しか持ってないように見えるけど」

「っせぇな！　酔ったら歌うんだよ！！」

確かに酔っ払いは歌います、ええ。

「さっきも歌いながら働き者のアリどもをバカにしてきたところだ」

「あの、さっきから思ってたんですけど、それってキリギリスの話じゃないんですか？　あなたカマキリですよね」

「細けぇこたぁ気にすんな。似たようなもんだろ」

昔、作者は区別がつかなかったので似たようなものと分類します。

「バッタみたいなやつとカマキリとは全然違うと思うけど」

「っせぇな、いつもボケたことばっか言ってるくせに、んなとこだけマジメになんな」

「それもそだね。ところで話は変わるけど、カメ兄知らない？」

「あっち」

この世界の虫はとてもモノ知りです。

酒瓶で指された方角へ進んでいくと、今度は二匹のセミに出会いました。

「セミのタケダだ！」

「セミのシューです！」

知っていますか？　セミというのは成虫してから七日間で死んでしまうんです。

「ついに俺たちは地上へと出てきた！」

「さぁ、今から七日間！　短い人生ですが、弾けますよー！！」

しかしこのセミたちはなぜか七秒で死にます。

「え、ちょ、なんで！？」

「待っ――」

ハイ死にました。命、弾けましたかね？　知ったこっちゃありませんが、死んだセミの二匹がダイイングメッセージっぽく進むべき方向を指してくれたので、クワガタカカはちゃんと先へ進むことができました。

次に出会ったのは、かたつむりニシカワ。

「あっち」

「聞く前に答えたよこの人」

マイペースにのろのろ進む彼は、なんか楽しそうです。

ともあれ、特にボケどころもツッコミどころもなかったので先に進んだクワガタカカは……ついに、カメが捕まっている虫カゴへと辿りつきました。こんな案内で本当に辿り着くから物語ってすごいですよね。

「カメ兄！」

すっかりカブトムシのイメージは消えてカメの姿しか浮かばなくなった彼を捕まえていたのは――なんと伝説の虫でした。

そう。恋の虫、サユカン。

「あぁ、トメさん！　その角、ステキです！　その黒い色、ステキです！　その甲羅、ステキです！」

若干おかしな点も混じってますが、とにかく彼女はカメに夢中のようです。

「待っててカメ兄、今助けるからね！！」

クワガタカカは勇ましく恋の虫へと飛び掛りました！

そしたら目測を誤りました！

そのまま虫カゴへ入ってしまいました！

こうして、兄妹は虫カゴの中でサユカンに飼われ、幸せに暮らしましたとさ。めでたし、めでたし……

## カカの天下７５７「突発もしも物語、もしもカカたちが虫だったら」（後書き）

とは書いたものの、実は続きが！？
次回、虫カゴに囚われた彼女たちをアリの大群が救う！
いつ書くかは未定！　本当に書くかも未定！
見たいか？　もし見たいなら感想に要望を書くがいい！

さて、いつぞや書いた虫物語を実際に形にしてみました。いかがだったでしょうかね。個人的にはセミあたりが最高なんですけど。

**カカの天下７５８「第二十六・三回、カカラジ！」**

『六連星』さんからいただきました――もしも、ツッコミ（トメ、サユカ）とボケ（残り全部）が逆だったら。

「トメさん、もっちゃらげっ！」

「サユカちゃん、ぼんぼらげっ！！」

「……なに言ってんのあの二人」

「死ねばいいのにー。ねぇお母さん」

「そういえばー。バカは死んでも治らないと言うけれど、ボケってどうなのかしらー。シュー君、どう思う？」

「わかりませんけど、あの二人みたいにはなりたくないですね」

いくらツッコミ役に回ってもおまえだけには言われたくないと思う。

「まともなあたしとは大違いだな」

あ、姉のこれボケだ。

「一生カレーを食べる資格ないですねぇ」

「ボケっつってもまともなのがまだあんだろ、ってかオレも元ボケか？」

「ああ、我が息子ながら情けない」

「ああ、ママの息子にふさわしい」

あ、これもボケだし。

「俺の義兄になるならもっとしっかりしてほしいものだな！」

こいつタケダのくせに生意気だ。ツッコミにするべきじゃないな。

えーと、この辺にしときましょう。とにかく元ボケが多すぎるのでコテンパンになりすぎて二人が可哀想です。

同じく『六連星』さんからいただきました――もしもアヤの名字に『東』がついてたら。

「ねぇねぇニッシー！」

「誰だおまえは」

「な、なによその言い方！　私たち、幼馴染でしょう！？」

「苗字を変えたら認識してあげる」

可哀想すぎるのにやめておきま――

「そ、それって、その……結婚して私の苗字を変えてくれるってこと？」

「そんなことは言ってないけど」

「や、やっぱり、そう、よね……」

「そうでないとも言ってない」

「え……」

前言撤回。やっぱこいつら変わりゃしねぇ。次！

『嘘吐きぬこ』さんからいただきました――もしも、レギュラーメンバー全員が地方出身者だったら。

「ばんげうこそ」

「おどげでねぇ」

「カカ、ちゃっけー」

「ほーけぇ」

「そぎゃんことなか」

自分で書いといてなんですが、最後のセリフくらいしか意味わからないと思います。却下！

同じく『嘘吐きぬこ』さんからいただきました――もしも、キリヤが木の精だったら。

気のせいです。

同じく『嘘吐きぬこ』さんからいただきました――もしも、祝いの巨乳日本人形がグラビアデビューしたら。

みんなハッピー！！

同じく『嘘吐きぬこ』さんからいただきました――もしも、サカイ動物園にタスマニアンデビルのワシントン条約違反がいたら。

ビリッ！！　くしゃくしゃ、ポイ。

同じく『嘘吐きぬこ』さんからいただきました――カツコがビームを出せたなら。

もともと出せます。

『天上』さんからいただきました――もしも今、流れ星が流れたら何を願う？

カカは？　「うめぼし」

サエちゃんは？　「お金くださいー」

サユカちゃんは？　「愛をくださいっ！！」

カツコは？　「便通がよくなりますように」

テンカは？　「耳かきがほしい」

サカイさんは？　「ふふふふー」

ユカさんは？　「……こんなこと恥ずかしくて言えないわ」

キリヤは？　「使えるバイトを！！」

シューは？　「出番を！」

タケダは？　「出番を！」

ニシカワは？　「流れ星が西へ沈みますように」

サラさんは？　「わ、わ、えっと、えっと、あー迷ってるうちに消えちゃった！」

クララは？　「世界が平和でありますように！」

トメは？　「平穏をください」

その他のキャラは想像に任せます。

『夜野　三日月』さんからいただきました――もしもカカ天メンバーが全員日本人じゃ無かったら。

「ヘィ、聞いてくれよサエチャーン！」

「オゥ、どうしたんだいカーカ？」

マイケルとジョーイのやり取りしか浮かばねぇ。

『なまこ』さんからいただきました――もしも総理大臣がテンカ

先生のペットだったら？

「おう総理大臣。散歩に行くが、一緒に来るか？」

「なぁ総理大臣よぉ、ちょっと聞いてくれよ。教頭がさぁ」

「くっそー！　今日は飲むぜ！　総理大臣、おまえも付き合え！！」

どうしよう、本当は『猫を相棒にしている格好いい女の人』って感じなんだけど、セリフだけ見たらテンカ先生が異様に偉い人みたいに見える。総理大臣という名前のインパクトってすごいんだなぁ。

『アーク』さんと『てん丸』さんからいただきました――　もしもトメがカカ達のクラスの担任だったら？

「ほらほら授業を始めるぞー席につけ。こらサエちゃん、怪しいノート書くのやめな。サユカちゃんの席は僕の隣じゃなくてそっちでしょ。む、タケダ！　おまえここのクラスじゃないだろ。ニシカワも西にばっか座らない！　席替えで決まった席を無視すんなよな…　…そこのカカ、何をしている」

「黒板をしてる」

「ほほう？　じゃあ遠慮なくおまえの顔で授業を始めよう」

「遠慮なく書けば？　トメ兄×サユカン＝って」

「そんな授業はない！！」

「答えはねー、んーと」

「サエちゃんは計算しようとしなくていいの！」

「いえトメさんっ！　わからない公式は実践してこそ身につくのですっ！」

「実践って何する気だサユカちゃんうわやめろズボンを下げるな！！　そこは×（カケル）じゃなくて×（バツ）な場所だ！」

――隣の教室。

「……トメんとこは楽しそうでいいなぁ」

「テンカ先生、こっちの授業に集中してくださいよー」

「なぁ、オレもあっちの生徒になっていいか？」

「んな無茶な！！」

まぁ、楽しい学園コメディになりそうですな。

『鈴宮』さんからいただきました――もしも、ルシカさんがハイパーだったら一日に何話書けるんだろう？

丸一日休みなら……ネタさえ決まってれば一話書くのに最短で１５分くらいだから……３０話くらいいける、かなぁ？　いやまぁ頭の回転やらモチベーションがハイパーだった場合ですが。普通の状態のときにそんなに書いたら余裕なくなってほのぼのできなくなるかも……でも今度やってみようかなぁ。無理だなぁ。

「突発もしも話の後は突発カカラジだーということでやってまいりましたカカラジ２６．３回ですよん小数点ですよん２５話ずつ載せてるこのカカラジ大体２５×０．３したら大体８だから８話後に登場ですよんじゃあ前の２４．５はどうなんだというツッコミはいれないほうがいいよねん香加ですよん！」

「留ですよん」

作者ですよん。

「まぁ前回がキャラ人気投票の結果発表で、普通の企画ができなかったから今回が始まったわけですけど」

「たまにはゲストとか呼んでほしいなぁ、なんて思う今日このごろ」

はいはい、わがまま言わないの。みんな忙しいんだから。

「……自分が忙しいと思ってるのは作者だけだろ」

「しかも自称だし。実は結構余裕あるんじゃないの？」

えーこの番組はネット小説『カカの天下』を盛り上げるため、ぶっちゃけトークや作者の本音と建前を交えながら読者さんの投稿で右往左往するラジオ的お話です。ここにいる留と香加はカタカナじゃなくて漢字な分身であり、本編と直接関係はないのでお気をつけください。

「留兄。無視したよこの人」

「や、さりげなく『建前』とか言ってるあたり無視とも言えないぞ」

はいはい、ちゃっちゃといくよー。まずはＣＭ！

皆さん。カカ天掲示板において大流行の細菌「でゅみゅみゅみゅう菌」。

この細菌に感染した人が何と呼ばれるかご存知だろうか？

ズバリ！『でゅみゅラー』！！

あなたもいつの間にか『でゅみゅラー』になっていませんか？

不安な人は今すぐ霧久に連絡を。

でゅみゅラーからの連絡があった場合、感染源であるル○カさんを撲滅しにいきます。

確信が無くても構いません。不安な方はとりあえずご連絡下さい。

ＣＭがあけて。

「あの感想欄って、掲示板だったんだ……」

「もう似たようなもんだろ。それで、撲滅されるのか？　作者さんよ」

うーん、撲滅しに来る＝読者さんに会える、ですからねぇ。一瞬本当に携帯の番号でも載せてみるか、と冒険しそうになったのも否定できません。

「そこは否定しとけよ。安全を考えて」

まぁ言うまでもないと思いますが『霧久』さんからいただいたCMでした。さて、早速ふつおたコーナーからこなしていきましょう！　まずはこのふつおた！　カカラジネーム『サイボーグ』さんからいただきました！

『後宙と後転、難しい』（３９５話を見て、できると思った。首痛めた）

「さすがだ……相変わらず問答無用で普通だ……」

「それに比べて次の投稿はすごいよ。これもふつおたなんだけど」

『前略　尊敬するルシカ先生さんへ

最近は暑くなってきました。ルシカ先生さんはいかがお過ごしでしょうか。

さて、今回は人気投票の結果発表お疲れ様でした。ルシカ先生さんの頑張りは恐るべき子供たち計画レベルです。尊敬に値します。

１位はやはりトメくんでしたか。流石に強いですね。そして初登場４位のユカさんには驚きです。カカはまぁ一応主人公的立ち位置ですから。今までが不憫だっただけだと思います

〈中略〉

したがって大切なのは年齢制限をせずにどれだけエロを取り入れることができるか。それが作者としての力量の見せどころだと思い

ます。

〈中略２〉

それと便座カバー

〈中略３〉

結論として言いたいのはヤンデレは危険ということです。
ルシカ先生さんもヤンデレな……特に妹的キャラには気をつけてお過ごしください。

早々

普通の人より』

「こんなのを『普通の人』さんからいただきました。どう思う留兄」

「どう見ても普通じゃないぞ」

「うん、サイボーグさんのほうが普通すぎるね」

そんな『サイボーグ』さんから、もう一つおたよりが届いています。

『ニッシーへ

西高校生になりました』

さて、ここで西川君に登場願いたいと思います。西川君、感想は？

「えらい！！」

だそうです。よかったね『サイボーグ』さん。

「なんかえらくサイボーグさんを推すね」

ええ、こんなのももらって嬉しかったので。

『頑張ったで賞（これからも）

あなたは、面白いカカを作ったことにより、この賞を授与します。

平成２０９９年、１２月３１日、未来人代表、サイボーグ

「これからも頑張ってくださいね。」

注：この賞を貰っても、就職活動などには、なんの役にも立ちません』

ほらほら、なんか嬉しいっしょ？

「そりゃあんたは嬉しいだろうさ」

「私……作られたんだ……」

そこの表現はサイボーグだから仕方ない。しかし注意書きのなんと親切なことか。

「はいはい、『サイボーグ』さんがなんか気に入ったのはわかったから、次行くぞ。えーと、今度は普通の質問だな。『トメ死刑』さ

んからいただき……まし……た」

「留兄ったら人気者！」

「……『カカの、トメにキスした感想を聞かせてください』だと」

あー……そりゃ死刑っぽい質問だ。それで香加、感想は？

「は？　兄相手にキスしたくらいで何も思うことなんかないよ」

え、えっと。兄だからこそ……なんかないスか？

「んっと、じゃあ、留兄の不潔！！」

「僕が悪いんか！？」

満場一致で留が悪いと決まったところで次いきましょう。えと、なんだかよくわからない投稿を紹介します。

「今は普通のおたよりコーナーじゃないの？」

普通なのかそうじゃないのかすらよくわからない微妙な投稿なのだよ。

「そ、そっか。とりあえず見てみよう」

『夜野　三日月』さんからいただきました。

『～1～

ミックスサンドドーナッツパフェ・北欧風

～2～

（サ）クラランボ

～3～

歌って踊れる総理大臣！　そして腐って脹れる官房長官！！

～4～

お宅拝見！

むしろお宅（あなた）拝見！！

～5～

いつかの鳥の逆襲

～6～

クララ　ＶＳ　うらら（梅？）

～7～

タマ　　ＶＳ　ポチ（友達？）』

「これで終わり？」

ええ、だからこんなのをどうしろと何度言わせるのでしょうか。

「……見たいんじゃないの？　いつかの鳥とか懐かしいじゃん、あの叩き落されたやつだよね？　あと、うららちゃんとかポチとかの話も」

じゃあ前半のはなんなのさ。

「た、食べたいとか」

知らんて。

「あーほらほら、次は普通の質問だから！　そう素っ気無いことばっかり言うなって」

はいはいわかりましたよ。えーとカカラジネーム『将太』さんからですな。

『ルシカ先生に質問をしようと、ふと思いついたので質問します』

なるほど。テンポよくスラスラ答えてしんぜよう。

『質問１

「何故姉はあんなにバケモノチックなのですか？」

これに答えられなきゃ僕が貴方を一生恨みます』

答え、当初、なんとなくバケモノな姉が書きたかったから。

『質問２

「何故教頭はあんなに甘党チックなのですか？」

これに答えられないのなら僕がでゅみゅみゅ病を貴方に移します』

他人の味覚にケチつけんな。

『質問３

「何故タケダくんとシューくんはあんなに哀れチックなんですか？」

これに答えられないならカカ天を消します』

本人たちの生きる努力が足りないだけです。

『質問４

「何故ゲンゾウ三兄弟はあんなにでゅみゅみゅチックなのですか？」

これに答えられなかったら貴方のネタはもう無くなっている』

でゅみゅみゅチックという言葉の意味がわからない。

『そしてこれすべてに答えられなかったら貴方のパソコンに死ぬほどウイルスを送ります』

普通に困る。

さぁ次行こうか。

「あ、あのぅ……作者さん？　結構、身も蓋もないこと言ってますが……」

「留兄、この人いつもこんなもんだよ？」

さすが香加、わかってるね。さぁ次。

「それほどでもありまくるさー。次は『睫毛火射夢』さんからの質問だね」

『イチョウさんの本名が明かされる日は来るのですか？』

来ない。

「……作者、それはいくらんでもあんまりじゃ」

おや香加さんや、あなたは私のことわかってると思ってたんだけどねぇ。

「……僕の知ってる作者だったら、ここでイチョウさんの名前募集とか言いそうだな」

じゃそれで。

『やっぱりか！？』

はいはい、その辺は最後あたりに告知しますよん。というわけで、ふつおたコーナーはそろそろ――

「あの、作者よぅ」

なんだよぅ留君よぅ。

「あの、さぁ。なぁ香加？」

「うん……いくらなんでも無視はひどいよ」

……なんのことかな。最初あたりにもしもで出したからいいじゃないのさ。

「やっぱわかってるんじゃん！　あの、なんだかよくわからないすごい勢いでふつおたを送りまくってる人のことを！！」

「本人はふつヲタとか言ってるけどな」

「どっちでもいいよ！　でも、でも、少しくらいここで紹介したっていいじゃん！　いつぞやから毎日一つふつおたを送ろうとして必死に色々考えてくれてたんだよ！？」

「毎日でもなかったけどな」

「留兄はいちいちうるさい！　とにかく、そんな風にふつおたを送りまくってくれた『嘘吐きぬこ』さんのふつおたを紹介してあげようよ！」

多すぎて載せれないので、気になる方は感想欄を見てください。

これでいい？

「よくない！！」

「可哀想だ」

な、なんだよぅ。だってさぁ。

「だって、何さ!?」

確かに量は多いけど、面白いやつが少ないんだよぅ……あ、二人とも固まった。

「そ、そそそそんな失礼なこと言っちゃダメでしょ!?」

「そうだぞ！　あんだけ死ぬほど送ってくれたんだから面白いやつが少しくらいあるだろう！」

うん、『実はあまり柔らかくない猫の肉球』ってのはちょっとウケた。

「それだけかよ!?」

あと『マヨネーズはまだか！』とか……

「他は!?」

あ、あと納豆が好きっぽいの、とか……

「もっと色々いっぺんに載せればいいじゃん！」

や、だってあんなに送ってきて「さぁどうだ困っただろふへへ」みたいな言い方されると「じゃあ載せないもん」って反抗したくな

っちゃって……

「……うーん、言われてみれば、私は若干気持ちがわかるかも」

「僕は頑張った人は評価されるべきだと思う。だからぬこさんの努力に見合うだけの量を載せるべきだ！」

とかなんとかいいつつ作者は私なので私の意見が絶対です。というわけで載せません。

「そんなぁ！」

まぁ感想欄を覗けばいつでも見られるんだからいいじゃないですかぁ。きっとぬこさんもこれだけいじられれば満足なはずです。というわけで最後に脅迫状いきましょうか！

「自己完結しやがった……頑張れ『嘘吐きぬこ』さん！　もっと何かを努力すればきっと作者が優遇してくれるさ！　だってあんなに頑張ってるんだもん！」

「たしかに頑張って納豆食べてたね」

「とにかく頑張れ！」

ほれ、次のコーナーが待ってるよ。

「えぇい、仕方ない！　脅迫状を送ってきたのは誰だ！？」

「んっと、『伝馬』さんからだね」

『ルシカさんに脅迫状です。２６１話で、でたマケダの名前ネタをわすれていませんか？　わすれているなら次のカカラジまでに書きなさい。さもなくば感想欄をカオスな状態にします（１ヶ月間）。追伸、脅迫状は本気です』

実は相当前にもらったこの脅迫状。期限はとうに過ぎております。

「だから感想欄はカオスに！？」

「や、この人関係なしにとっくにカオスなんだけどな」

いやまぁ、実はタケダの名前……キンジロウっていうんですけどね？　それはとあるネタのためだけに名づけられた名前なのですよ。しかしそのネタに関する話をまだ書いてないのです。もうしばらくしたらいい加減に書くつもりなのですが。

「キンジロウ……覚えてないな」

なにせ一回しか登場してませんからね。この方もよく覚えてたもんです。

「そのネタってなに？　おもしろい？」

おもしろいと感じるかは人それぞれですが、『あーなるほど』と納得できる名前ではあると思います。さて、その話を書く前に謎を解く人が現れるのでしょうか！？

「今載ってる話だけで謎は解けるの？」

ヒントはありませんが、材料はあります。解こうと思えば解けな

いことはないはずです。しかし解けなくても物語になんら支障はないと思いますので、私が突発的にネタばらしの話を書くまで待っていてもいいと思います。

「突発的に、ねぇ。作者そういうの好きだもんね」

それではコーナーのおさらい！

「ほんと突発好きだな！！」

普通の質問受け付けます。ふつおたコーナー。

なんでも思いついたらどうぞ、自由枠コーナー。

どんな宣伝でも面白ければＯＫ！　ＣＭコーナー

ファンキーな脅迫状待ってます、脅迫状コーナー。

もしもな寸劇、見てみませんか？　もしもコーナー。

こなかったら別に決めなくてもいいや、イチョウさんの名前を決めようコーナー。

君はタケダの名前の謎を解けるか！？　ってこれコーナーじゃないからいいや。思いついた人はメッセージで送ってね、当たってたらあとがきに名前だけ載せますんで。

――こんなところですね。それでは最後にですね、

「ちょっと待て！　進行早いっつうの！」

「そうだよカカラジチョップ！！」

「香加さんあなたも早いですよそしてなぜ標的が僕！？」

「みんな『トメ死刑トメ死刑』っていうから、とりあえず留兄だけでもと思って」

「ちょ――」

それではカカばい！！

この放送は、『モテるやつは死ねばいい委員会』の提供でお送りしました。

## カカの天下７５８「第二十六．三回、カカラジ！」（後書き）

そんなわけで小数点なカカラジでしたとさ。いやー結構長くなった。皆さん投稿がんばりすぎ、嬉しくて泣けますわ笑

採用された方、ネタにされた方いろいろいらっしゃいますが、不快に思われたら遠慮なく言ってくださいね、即行で修正しますんで。実は未だにカカラジ書くたびに失礼ないか恐い＾＾；

……いやまぁ、失礼はしてると思うんですが、許容範囲かどうか、ね。とにかく皆さん笑って許して楽しんでいただけたら幸いです！

# カカの天下759「だぶるで、え!?」

こんにちは、カカです。

お休みの正午。商店街でサエちゃんサユカンと待ち合わせです。でも宿題を終わらせてから行こうとしたら遅れちゃって、サエちゃんたちに『先に遊んでなよバーロー』とイカしたメールを送りました。私ってば格好いい。

そんないい気分で宿題を終えて、悠々と待ち合わせ場所へ向かっている途中……私は、とんでもないものを発見しました。

「うわぁ……さ、サエちゃんに連絡を!」

慌てる心を抑えながら携帯電話を操作、間もなくサエちゃんへと繋がります。

「もしもしサエちゃん!?」

『あ、カカちゃん! 今電話しようと思ってたのー』

「うん、遅れてごめんね。それでね、今ね、そっちに向かう途中の喫茶店を覗いたんだけど」

『私とサユカちゃんも喫茶店にいるんだけどー』

「なんとね、なんとね、トメ兄とユカさんが一緒にお茶してるの!!」

どーん!!（なんか驚きの音）

『本当にー？　こっちはね、キリヤとサラさんがお茶してるのー！！』

どどーん!!（なんか二重の意味で驚きの音）

「え、ほ、本当に!?」

『うん、買い物してたら見かけたんだけどね、私もサユカちゃんもビックリしたよー』

「これがダブルデートってやつか」

さすが大人は違うね。

「よぅし……サエちゃん？　これから何をするべきか、わかってるね？」

『あたぼーよー相棒』

「バレないようにね」

『そっちこそ』

何をするかはもうおわかりでしょう。私たちはひっそりとそれぞれの喫茶店に侵入し、床を這って進み、「お客様？　お客様!?」と慌てる店員たちを「ええい、よいではないか、よいではないか！」と跳ね除けてターゲットへ接近。付近の席へ陣取り、二人の様子を伺うのだ！

わかりやすく言えば野次馬だぜムフフ。

「こちらカカ……じゃ面白くないな。えーと、こちらコードK、ターゲットへの接近に成功した」

『こちらコードS』

「サエちゃんドSだもんね」

『こちらコードドS』

あっさり言い直してくれるノリのいいサエちゃん。だから好き。

『私のほうも接近に成功したよー。サユカちゃんもなんとか』

「そういえば話してないけど、サユカちゃん元気？」

『なんか仏のような笑顔してる』

「……なんで？」

『キリヤとサラさんがくっつけばライバル減るからでしょー』

あ、ああ、なるほど。恋愛が絡むと黒いなサユカンも。

「まぁいいや。えっと、トメ兄とユカさんの様子は……？」

覗きこむ。二人の声が聞こえてくる。

「あーあー本当に煮え切らない男だこと！」

「……遅刻してきたくせに、何を偉そうに」

「身体は遅れて来たけど心は先に来てたのよ。あなたはワタシの身体しか見てくれないの？　心は見てくれないのね！？　そんなことだから今になってもそんなに恋愛がヘタなのよ！」

「そう言うおまえこそ、そんな無茶苦茶だから今になっても友達少ないんだろ」

「へぇ？　ワタシに言えるんだそんなこと。他人のこと言えるんだ？　友達以上恋人未満の女性と小学生くらいしか仲のいい知り合いがいないようなあなたが、ワタシにそんなこと言うんだ。へーへーへー」

「き、キリヤっていう友達がいるぞ！」

「そのキリヤ君だって最近は相手にしてくれないんでしょ？　高校時代の友達にでもすがって仲良くしてもらえばぁ？　でもそれも無理かぁ、あなたのことだから誰の名前も覚えてないでしょうし」

「お、覚えてるやつだっているさ！」

「誰？」

「……友人Ａ」

それ名前じゃないし。

「あーあー可哀想可哀想。その友人A君も可哀想だけど、なによりあなたが可哀想。あ、でもそうでもないのかな？　友達以上恋人未満の子がいっぱい居てハーレム気分？　わぁうざい」

「こ、こんにゃろ……いい加減ムカついてきた」

「あら、やっと？」

「こんの……！」

あー……サエちゃんに報告を、っと。

「もしもしサエちゃん、そっちはどう？」

『んっとねー、キリヤとサラさんはすごく熱心に喋ってて、時々笑ってて、なんというか和やかムードだよー。会話の内容はあまり聞こえないんだけど、恋愛の話をしてるみたい』

「サユカンの顔は？」

『菩薩みたいな笑顔になってる』

「そか……ちなみにこっちは大喧嘩。ユカさんが絶好調で、トメ兄が少しキレ気味だね」

『だってさーサユカちゃん。トメお兄さんとユカさん、うまくいってないみたいだよー』

お、サユカンにも聞こえてたか。

「どんな顔になった？」

『わぁ、まるで天使みたい』

笑ってる理由を考えたら悪魔に近いけどね、なんて思ってたら唐突に耳へ響く声が。

「――もう帰る！！」

お？　我慢強いトメ兄もさすがに限界かぁ。これでめでたく二人は仲違い――

「待って！！」

に、なるかと思いきや？

「わ、悪かったわよ。意地悪なことばっか言って」

「何を今更」

「は、恥ずかしかったのよ。その、これから話す、内容が、その」

「……なんだよ」

「あーあーとにかく！　やっぱりここじゃ話せないわ！　場所を変えるわ！」

「おい、ちょ」

「いいから来なさい！」

乱暴にトメ兄の腕をひっつかんで去っていくユカさん。

なんだかんだで仲良く腕を組んでいるように見えなくも、ない。

「あの、サエちゃんサユカン？　えっとね」

とりあえずその様子を二人に報告してみた。

『おおー、やっぱりユカさんてば、なんだかんだでトメお兄さんのこと……』

「サユカンの顔は？」

『般若』

はんにゃ！？

『あ、ジェイソンになるー』

「武器を持ち出したの！？　ま、待って。いま追いかけるから！」

「お客様、お会計は」

「水すら飲んでません！　さいなら！」

慌てて外へ出たものの、トメ兄の姿を見つけることはできなかった。

「どうなったんだろ……サエちゃん、そっちのキリヤンとサラさん

は？」

『わ、いつの間にか帰ってた。サユカちゃんの面白い顔を撮るのに忙しくて気づかなかったー』

ほんと、どうなってんだろ？　うちの大人たちは。

## カカの天下７５９「だぶるで、え！？」（後書き）

どうなってるんでしょうねぇ、はてさて。

**カカの天下760「ちびっこ探偵社の事件簿？」**

引き続きカカです……いいえ、カカ探偵社です。発足してから三十秒くらいです。本社は私の部屋、つまり現在私たちが集まっているこの場所です。

「それでは会議を始める！」

わー、ぱちぱちぱちー。拍手してくれるのは愛すべきサエちゃんと恐るべきサユカン。何が恐るべきか？　顔だ。

「え、えーと。今回の議題は！　私たちがそれぞれ見かけたダブルデートの――」

「アレはデートじゃないっ！！」

あまりに予想外の重低音な叫びに、私とサエちゃんの身体がビクッと震える。

「で、でも、サユカンは、ほら」

「直接その二人を見たわけじゃないんだからー」

「そんなことは関係ないっ！　二人がデートなんてそんなこと、絶対にないわっ」

「サユカン。絶対なんか絶対にないんだよ」

「どっちよっ！？」

あ、自分で絶対って使ってるや。

「とにかく二人はデートしてないのっ！　よりも戻さないの！　ユカさんは死ぬのっ！！」

「そ、そこまで勝手に話を作るのはいくらなんでもー」

「きしゃあああああああっ！！」

ダメだ、なんか人の声じゃなくなってきた。こないだ誕生日で色々あったせいかトメ兄への想いが今までになくスパークしてるのかもしれない。

とにかくそっちの話はツッコまないほうがよさそうだ、うん！

「じゃあ先にキリヤンとサラさんの関係について――」

「そんなことはどうでもいいのっ！！　トメさんの方が大事よっ」

えええええええ。今そっちツッコまないって決めたばっかなのにぃ……

「仕方ないよーカカちゃん。こっちの話を進めよー」

「うぅ……サユカン恐いよぅ……」

「話っ！！　進めっ！」

あぁもう、わかったよぅ！

「じゃあまとめるよ！　昨日、トメ兄とユカさんは二人で喫茶店でお茶したあと、ケンカっぽくイチャイチャしつつも失踪！　しばらくして帰ってきたトメ兄はなんか嬉しそうだった。『いいことあった？』って聞いたら『まぁな』って言ってた」

見ない。見ない。サユカンの顔は見ない。サユカンの悲痛な叫び声も聞こえない。

「そこで何があったのかは全く教えてくれなかった。それで……サエちゃん？」

「私の奴隷情報ネットワークを使った結果、重要な証人を見つけたよー。ではどうぞ、ユカさんのお祖父ちゃん、だっけ？　サワサカのおじいさん」

待っていたかのように私の部屋に入ってくるおじいさん。本当に待っていたんだろう。部屋の扉の外でずっと。ごめんなさい、お疲れ様。

「ではサワサカさん、証言をお願いしまーす」

「うむ。ユカのことじゃが……」

ごくり、と固唾を飲んで聞き入る私たち。

サワサカさんは三人をゆっくり見渡したあと、重々しく口を開いた。

「ユカはけっこおおおおおおおおおおおお」

ビックリした、結婚かと思った。

結構、なんだ？

「胸がある」

「んなことは聞いてないわぁっ！！」

サユカン爆発。

「おまえさんらは胸がない」

「んなことは聞いてないわぁぁっ！！」

サユカン再爆発。

「可哀想に」

『同情すんなぁぁぁぁぁっ！！』

私ら大爆発。

「……サワサカさん、ボケたー？」

「ほっほっほ、そんなに褒めてもなにもでないぞい」

「褒めてないから何か出せ」

「じゃあわしの自慢の尻を出そうか」

『帰ってください』

私たちの心が重なった。しかしじいさんは「ほっほっほ」と余裕で流す。やはり歳を重ねてるだけ手ごわいのか、と？

「ユカがいつぞや手紙を読んでいたことがあっての」

唐突な話。きょとんとする私たち。

「その少し後かの、なにやら編み始めたのじゃ。何かのプレゼントと言っておったの」

このおじいさんは何を話して――や、待て。

「手紙って……もしかしてホワイトデーの、トメ兄の手紙？」

「あー、そういえばそんなのあったねー」

「プレゼントっていえば、最近トメさんの誕生日があったわよっ」

つまり、トメ兄の手紙でユカさんはよりを戻すつもりになった？そして誕生日プレゼントを渡して仲直り？　トメ兄の機嫌がよかったのは、そのせい？

サエちゃんもサユカンもその推理に至ったらしい。

神妙な顔のサエちゃん。

サユカンは――

「さ、サユカン！？」

「も、モンスター……」

サエちゃんが呆然と呟いた。そんな顔になっているのだ。

なんとかしないと。このままではサユカンがお姉の仲間入りをしてしまう。

「そしてユカはええ身体しとる」

「黙れジジィっ！！」

ユカさんにトメ兄が悩殺される前に、なんとかしないと！！

「しかし女の戦いはエロいほうが勝つのじゃぞ？」

「悪かったわねぇぇぇぇっ！！」

「ま、まぁまぁサユカ――ン？　ってなに、サエちゃん」

ヒートアップするサユカンを抑えようとしたら、サエちゃんに止められた。

「カカちゃん、サユカちゃんはあのままにしておこー」

「なんで！？　サエちゃんだってあの顔を見たでしょ、ヤバイよ！？」

必死に訴えてもサエちゃんは首を横に振った。そして「あれを見て」とサユカンとサワサカじいさんの二人を指した。

「ユカはエロい！　おまえさんらはエロくない！　これは事実じゃ！」

「小学生なんだから仕方ないでしょっ！」

「まぁおぬしの尻はいい線いっとるがな」

「ほ、ほんとっ！？」

サエちゃんは深々と頷いた。

「あのままいけば、またすんなりサユカちゃんにエロい格好させられるよー」

「……サエちゃん。いい趣味してるよね」

「そんなに褒めても何もでないよー」

褒めてないから何か出せ、とは返せなかった。なんとなく。

えーと、とにかく。なんとかしないと。

## カカの天下７６０「ちびっこ探偵社の事件簿？」（後書き）

今回の事件。

それは、サユカちゃんの顔です。

## カカの天下761「怪獣サユカン」

「あんぎゃあああああああ！！」

注意、叫び声はイメージです。どうもカカです。ちなみにこれは私のイメージ映像……違うな。私のイメージ文章です。

「ぎしゃあああああああああああああ！！（イメージです）」

場所は私の部屋。先ほどまでトメ兄とユカさんラブラブ疑惑について会議してたんだけど、やがて限界を超えたらしい彼女が壊れ始めたのです。

なんかイメージ的にも人としてヤヴァイ方向へ向かっているのは——恋の怪獣サユカン。そう、彼女はトメ兄へ想いが強すぎたせいか変貌してしまったのだ。

「どうしよーカカちゃん。サユカちゃんを退治するか封印するかしないと」

「トメ兄が帰って来る前に決着をつけないといけないね。サワサカのおじいさんは？」

「逃げたー」

あのジジイ、煽るだけ煽って自分だけ……オイシイな、参考になる。今度私もやろう。でもこういうことはサエちゃんのほうが先にやりそうな気もする。

「それで、カカちゃん？　どうするー、あれ」

あれ、と言われて再度サユカンのほうを見た。

「ぐぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃがががががががぁっ！！（あくまでイメージです）」

どうしよう。このままだとトメ兄が食べられちゃう。

「なんとかして落ち着かせよう！　サエちゃん、手はある？」

「うん、まかせてー。獣には獣で対抗だよー。いでよ、サカイ動物園！」

けもののむれがあらわれた！

モー！（日本経済）ブー！（豚野郎）ワンワンワン！（ラスカル）メェェェ！（経営破綻＆財政困難）

「さぁ、サユカちゃんを止めるんだよー！」

対峙する獣たち。

威嚇するサカイ動物園！　モー！　ブー！　ワン！！　メェェェ！！（しかし見るからに家畜、もしくは食料）

吼えるサユカン！　きしゃあああああああぎゃるるるるるぉおぉおおおお！！（こっちは明らかに肉食獣）

「あ、サカイ動物園が倒れた」

「……動物のほうが死んだふりしてどうするのー」

「総理大臣と官房長官は？」

「上の人間はいつだって自分の手を汚さないもんなんだよー」

そっかー、そういうもんだよねー。

「さて、どうしようか」

勝利の咆哮をあげた怪獣サユカンはのっしのっしと廊下へ向かい始めた。もしや、もうすぐ帰ってくるであろうトメ兄の元へ？　まずい。

「カカちゃん、阻止！」

「よっしゃ！」

私はサユカンより早く部屋から出た！

台所へ行った！

バケツに水を入れた！

廊下に出たサユカンにぶっかけた！！

「お、サユカンの動きが止まった」

成功か？

「きしゃあああああああああああ！！（だからイメージですってば）」

「攻撃対象がこっちにきた！？」

「当たり前だよー」

「ですよねー！？」

だだだーっと逃げて距離を確保！　さぁ次はどうする。

「ここは私にまかせてー」

サエちゃんが前に出た。そして手に持った携帯をサユカンに向ける。

『サユカちゃん……』

トメ兄の声だ。怪獣サユカンの動きがぴたりと止まった。

「サエちゃん、これは」

「いつか使おうと思って密かに録音しておいた、トメお兄さんの音声だよー」

なるほど、これで愛の言葉の一つでも囁けばサユカンも封印されてくれるだろう！

『おしりがかゆい』

「ろくな言葉じゃないんですけど！？」

「あー、間違えたー！　これ宴会とかで披露しようと思ってたやつだー！！」

「あんぎゃあああああああああああ！！（なんか恥ずかしい）」

サユカンがくるくる回りながら周囲を破壊（するフリを）しつつ迫ってくる。再びだだだーっと逃げて距離をとる私たち。

「も、もう一度だー！」

『サユカちゃん……』

再び流れるトメ兄の声。今度こそいけるか！？

『おなかも、かゆいんだ』

「なんでそんなにかゆいの！？」

「まーたーまーちーがーえーたー！！」

「ふぎゃあああああああああああああ！！（なんかもうムカついてきた）」

廊下を突進してくるサユカン！　危ない！

どーん！

サユカンは見事に私たち――の脇にあった棚に激突した。そしてぶっ倒れる。

「……いちゃい」

「痛いー？　痛いよねー。すごい音したもんねー」

「慣れない暴れ方するから……お」

玄関から音が。トメ兄が帰ってきた！　サユカンがのびてる今のうちに！

「えっほえっほ……トメ兄おかえり！」

「おぅカカ。ただいま」

呑気なトメ兄はいつもどおり。すぐに逃げてもらわないと！

「今ね！　サユカちゃんが来てるんだけど――」

「あ、そなの？　じゃあちょっと部屋に戻るわ」

「え？　え？　なんで？　や、ちょっと、そっちにはサユカンが」

トメ兄はなぜか少し急いで廊下へ向かい、そのまま自分の部屋へと小走りしていった。

サユカンとすれ違うこともなく。

「あれー？　怪獣サユカンどこいった？」

「成仏したのかなー」

「誰が怪獣よっ！」

うわビックリした！？　いつの間にか私たちの背後にサユカンが。

「ど、どこ行ってたの」

「おトイレ」

意外とマイペースだなこの子。

「そんなことより、もしかしてトメさん帰ってきた？」

「うん」

「きしゃあああああああああああ！！」

「また怪物化したあああああ！？」

どうしよう！　おトイレで一緒に邪悪な気も流しちゃったのかと思ったのに！　このままだとトメ兄に向かって「浮気か？　浮気なんかあぁんっ！？」って詰め寄っちゃう。それはそれで面白いけどなんとかしないと。

「お、サユカちゃん。やっほー」

そんな私たちのやきもきも無視してトメ兄登場！　サユカンは詰め寄るべく怪獣の足音をのっしのっしと響かせ、トメ兄へと突進を

始めた！

そして唐突に足を止めた。

「……あ」

「あー、あはは」

呆然とするサユカン。照れ笑いらしきものを浮かべるトメ兄。

やがてサユカンの頬が赤くなってきて……なぜか、そのまま逃げ出した。

「え、え？　怪獣サユカンが……」

「鎮まった……そして逃げ出したー」

わけがわからない。サユカンはやたらとトメ兄を凝視していたけど、何か見たのだろうか。服はちゃんと着ている。社会の窓も開いてない。

「なんでサユカちゃん、おとなしくなったんだろー。今の今まで怪獣化してたのに」

サエちゃんが当然の疑問を口にすると、トメ兄は歯切れ悪く言った。

「んー、あー、このアイテムに封印効果でもあったんじゃないのか？」

アイテム？　どの？　え、え？

結局この日、サユカンの謎はわからないままだった。

後からサユカンに話を聞いたら「トメさんは、ユカさんとはなんでもないわよっ」と断言していた。

……ほんと、わけがわからない。

## カカの天下７６１「怪獣サユカン」（後書き）

随分とまた更新が遅れてしまいました～

季節の変わり目は体調を崩しやすくていけませんねぇ……皆さんも気をつけてくださいね～

ちなみに今日の話は。

昨日、仕事中にお客さんが「きしゃあああ！」と叫んだのを見て思いつきました。

## カカの天下762「チビたちは見た！」

クララです！

大変なものを見てしまいました！　なのでタマと一緒に走ってます！

「てぇへんだー！　てぇへんだー！　です！」

「ていへんでしゅ！　ていへんでしゅ！」

事件があったときは、こう叫びながら走るのが決まりなんです！

テレビでやってました！　クララ物知りです！

「誰が底辺だ！？」

なぜか通りすがりのタケダに怒られました。

カカです。

トメ兄とユカさん。そしてキリヤンとサラさんのラブラブ疑惑。これについてずーっと話し合っているのですが、どうにも解決しません。何をもって解決とするのかも微妙ではあるのですが……サユカンはとにかく「トメさんは無実！」の一点張りで協力してくれないし、サエちゃん情報網も決定的な証拠はつかめないし、お手上げです。

そんなこんなで、最近は登場率の低いこの方に話を伺ってみました。リポーターは私、カカ。そしてサエちゃんです。サユカンは興味ないらしく不参加です。

「あぁん？　トメが元カノと？」

荒っぽい口調が格好いい我らが先生、テンカさんです。

「んなことオレにゃ関係ねぇだろ。トメがどこの誰と付き合おうと」

「……本当に、関係ないんですかー？」

オレは全然気にしてませんとシラを切るテンカ先生。でもね、ネタは上がってるんだよ！

「テンカせんせー、私、知ってるんですよー」

「んだよ」

「先生の手帳。大事に大事な写真が挟まれていて、肌身離さず持ってるんでしょー？」

ぎくり、とテンカ先生の身体が強張る。これはビンゴのようだ。

「どっから聞きやがった……」

「その写真って、誰の写真ですかー？」

質問に答えず、ニヤニヤしながら迫るサエちゃん。

テンカ先生はバツが悪そうにそっぽ向きながら……やがて観念した。

「はぁ。あーわかったわかった、白状するよ」

おおお？

「じゃあテンカ先生。写真に映ってるのって」

「トメ」

「「おおおおおおー！？」」

「の、かーちゃん」

そういやファンだっけこの人。

またクララです！

まだ走ります！

「てぇへんだー！　てぇへんだー！　です！」

「ていへんでしゅ！　ていへんでしゅ！」

「どうせ僕なんか底辺さ……」

すれ違ったシューが勝手に落ち込んでいました。

またカカです。

「わかったろ？　オレは別にトメのことをどうこう想ってるわけじゃ、ねぇんだよ」

テンカ先生は不敵な笑みを浮かべて断言した。でもそれで引き下がる私たちじゃない！

「……テンカ先生の誕生日のとき、トメ兄に迫られてきゅんきゅんしてたくせに」

ほれ、一気に顔が引きつった。

「し、してねぇよ！！」

「したよ、したした。見てたもん」

「してねぇっつうの！　きゅんきゅんってなんだよ！？」

すかさずサエちゃんは携帯を取り出した。

「これがその証拠だよー」

音声が再生される。

『テンカってばきゅんきゅん♪』

「ほらー」

「明らかにてめぇの声マネじゃねぇか！？」

あらら、バレたか。お母さんに伝授されたサエちゃんの声マネ術、結構いい仕事するんだけどな。

「とにかく、オレには関係ねぇんだよ！」

「きゅんきゅん！」

「うっせぇっつうの！！」

またまたクララです！

まだまだ走ります！

「てぇへんだー！　てぇへんだー！　です！」

「ていへんでしゅ！　ていへんでしゅ！」

ゆーたがいました。

「俺はタイヘンではない、ヘンタイだ！！」

そうですね。

またまたカカです。

「きゅんきゅん！！」

「きゅーんきゅーん！！」

「うっせぇよ何の虫だてめぇら！？」

「テンカ先生きゅんきゅん虫」

「オレの名前を勝手に使うんじゃねぇぇぇ！！」

先生で遊んでいた、そのとき。見慣れた二人が唐突に現れた！

「へんたいだー！　へんたいだー！　です！」

「へんたいでしゅ！　へんたいでしゅ！」

なんだって！？

「変態はどこだ！？」

「「……あれ」」

首を傾げるクララちゃんとタマ。その反応をしたいのはこっちなんだけど。

「クララ違いました、大変です！　大変大変大変なのです！」

「ダイヘンタイ？」

「そんな大層な変態じゃないのです！　大変な二人を見てしまいました！」

大変な二人？　このタイミングで……まさか！

「それって、トメ兄とユカさん！？」

「クララ他にも見ました！」

「タマもたまたま見ました！」

「タマタマを見たの！？」

首を傾げるタマちゃん。わかんないならいいや。

「他にも見たって、まさかまさか、キリヤとサラさんもー？」

「そうです！」

「うわぉ、まさに噂のダブルペアだね。それで、大変って？」

「その二人がなんと……ちゅーしてたのです！」

ちゅー！？

「へんたいでしゅ」

その通りじゃないか！？

「い、急いで見にいかないとー」

「だな。走れてめぇら！」

「て、テンカ先生。興味ないんじゃ」

「友人の恋愛に興味ねぇはずねぇだろが！　行くぞ！」

なんだかツッコみたいところがあったけど、それは置いておいた。

急いで見にいかないと！！

ところで、その二人がちゅーって……どっちの二人！？

## カカの天下７６２「チビたちは見た！」（後書き）

前回更新遅れた分、連続更新してみたり。

なんかズルズル続いてるっぽいこの話、そろそろ切り上げに入ります。

きゅんきゅん。

# カカの天下763「ことの真相」

急げ急げと走るカカです！

トメ兄とユカさんが？　それともキリヤンとサラさんが！？　ちゅーしてたって、どっちの二人が！？　クララちゃんとタマの案内で走る私とサエちゃん、そしてテンカ先生！

「クララ見つけました！　あそこの喫茶店！！」

クララちゃんが叫んで指さした！　あそこにトメ兄たちがいるの！？

「美味しそうです！」

「だからどうした！！」

マジメに案内しろや！　とテンカ先生に怒られて、クララちゃんは反省しながら走り出す。ていうかマジメなのねテンカ先生。ふへへへ。

「クララ見つけました！　あそこの二人！」

「いたか！？」

「二人ともブサイクです！」

「失礼だろが！！」

テンカ先生に教育的指導を受けたクララちゃんは再び反省しつつ案内を再会。

やがて。

「クララ見つけました！　あの二人！」

「今度こそいたか！？」

「そろって屁をこきました！」

「耳いいなー、って知らねぇよ！！」

トメ兄の代わりにテンカ先生がツッコんでます。お疲れ様です。

「まってくださいでしゅ！」

タマちゃんが叫んだ！　足を止める私たち！　今度の今度こそ見つけた！？

「つかれたでしゅ」

「うがー！！」

本当にお疲れ様です。

事件を急いで持ってきたわりにはマイペース極まりない子供二人に吼える先生。ていうか先生だよね？　小学校の。こんくらいでイライラしてたら勤まんないよ？

「それだけトメお兄さんのことが気になってるんだよー」

おお、私の心を読んだサエちゃんが応えてくれた。さすがは私の嫁。

「ところでタマちゃん？　その『でしゅ』ってなに」

「萌え狙いー？」

「はいでしゅ」

肯定するんだ。

「あいでんててーがだいじだから、くららとかぶったらだめって、かっちゃんにいわれたんでしゅ」

かっちゃんってお姉のことか。なんか可愛いな。呼び方だけは。

「オラ！　呑気に喋ってねぇでさっさと行くぞ」

「焦ってますねーテンカ先生」

「ふん！　オレは単にさっさと見届けてトイレに行きたいだけだ！」

初めて聞いたよそんないいわけ。

「それで、クララ？　タマ？　てめぇらが目指してる場所ってのはどこなんだ」

「さっき通り過ぎた喫茶店です」

「早く言えやあああああ！」

「ていうかー、なんで通り過ぎたのー？」

「美味しそうって言ったら怒られたからです！」

墓穴を掘ったねテンカ先生。

「とにかく戻れ！！」

はーい、と先生の号令に素直に返事をして引き返す。だっしゅだっしゅ。しばらくして見えてくるさっきの喫茶店。急ぐ足を少しずつ遅めて、そーっと入り口から中を伺う。

「「「……あれ」」」

首を傾げる私、サエちゃん、テンカ先生。

「クララちゃん……トメ兄とユカさんを見たんだよね」

「見ました！」

「タマちゃん。キリヤとサラさんを見たんだよねー？」

「見ましたでしゅ」

「なるほどな……その二人の組み合わせ同士で一緒にいる、とは言ってねぇわな」

「融通利かないねー」

「ま、子供だしね」

テンカ先生の言葉に納得して店内を見る。確かにその四人がいた。ただし組み合わせは――壁側の席にキリヤンとユカさん。そこから隠れるような席でトメ兄とサラさん。

「何してんだろ。特にトメ兄とサラさん」

「なんかコソコソしてるねー」

「見た感じ、オレたちと似たようなことしてるっぽいな。いくぞ」

テンカ先生は何かを察したのか、静かにしつつもトメ兄たちの席へと近づいていった。私たちも慌てて後を追う。

「よ、トメ」

「ん？　テン！　それにおまえら、何を」

「ダメですトメさん！　バレちゃいますから静かに……あなたたちもほら、こっちへ！」

慌てるサラさんに手招きされて、私たちはわけもわからず案内された席へと移動した。ちょうど、キリヤンとユカさんの席から見えない位置だ。

「で、何やってんだてめぇら」

「それは僕のセリフだけど先に答えてやろう。実はな」

「あーそうそう。てめぇらがちゅーしてたって本当か？」

「実はなーって説明する気になってんのに質問かぶせんなよ。ちゅーってこれか？」

トメ兄とサラさんはテーブルにあったデザートを摘まんだ。すっぱー！！　と唇がすぼんだ。ちゅーちゅータコかいなって感じの口だ。

「やっぱそんなオチか……ちっ」

「あ、本当にちゅーしたー」

「サエちゃん、そんな慰めは無用だよ。そんなことあるわけ」

「んーん、キリヤとユカさんがー」

「「「は！？」」」

みんな仲良く首が取れそうなくらいの勢いで二人の方を見る。キリヤンは「はっはっは」と嬉しそうに笑っていて、ユカさんは顔を真っ赤にしてる。え、本当に？

「サエ、マジか？　マジでしたのか！？」

「さーねー。ふふふー」

なんでそこで否定すんの！？　すごく気になるんだけど！

「っつうかよ、トメ。あの二人ってまさか」

「付き合ってるぞ」

「「「えええええええ!?」」」

私たちが唖然とする中。

クララちゃんとタマだけが、「ほーら、クララの言ったとおりです」「でしゅ」と胸を張っていた。

## カカの天下７６３「ことの真相」（後書き）

ま、そんなわけでした。
いつから付き合ってたんでしょうか？　その答えは次の話で＾＾

## カカの天下764「キリヤさん、お願いします」

キリヤです。突然ですが、今回はちょっと過去からのお話になりますよ。聞き苦しい点が多々あるかもしれませんが、どうかご了承ください。

さて、話はホワイトデーまで遡ります。トメ君がとってもクサイ手紙をいろんな人に恥ずかしげもなく配っていたときです。

「ツッコんでいいか？」

「こらトメ兄、黙って話を聞きなさい」

……いいですか？　続けますよ。

ええとですね、覚えているでしょうか？　私がホワイトデーだからとトメ君をからかうため、わざわざチロルチョコの着ぐるみ（結構高価、立ち寄った商店街で売れ残ってるのをたまたま見つけてお金を払って貸してもらった）でボケ倒したことを。

「覚えてるぞ、悪夢として」

そのボケはですね、実は……トメ君がユカさんに手紙を渡した直後のことだったのですよ。

「あー、そういえばそうだったか」

トメ君を散々からかいました。もちろん性的な意味で。

「ツッコんでいいか」

ダメです。一通りいじってアレして「フハハ」と高笑いし、私が満足して帰ろうとした、そのとき……コツン、と頭に何か当たりました。

振り返ってみると、地面には紙飛行機が。どこから飛んできたのかと見回してみると、すぐにタケダ医院が目に入り。見上げてみると、とある病室の窓が開いているではありませんか。そしてそこには、今まさに『バッター振りかぶって投げました』的な格好でいる女性が。

「なんでバッターが投げるんだよ」

「きっとバットを投げたんだよ。それくらい豪快だったんだよ」

カカちゃんの言うとおりです。そしてその女性と私はバッチリ目が合いました。

女性はすぐに病室へ顔を引っ込めようとしたのでしょう。しかし紙飛行機にして飛ばした手紙を放置するわけにもいかず、途方に暮れたようでした――それらの考動がとてもわかりやすい表情で展開されたので、なんだか愉快になった私は、そのまま紙飛行機になった手紙を持ち帰ってみました。

「鬼だ」

「どちらかというとイタズラ小僧だと思いますけどー」

「こらトメサエ、黙って聞けっつの」

否定はしません。ちらりと振り返ったときに見えた彼女の顔色が面白すぎて、してやったりという感じでしたし。それになるほど、まさにそれはイタズラでした。気になる子をからかってしまうような、子供のような反応だったと。今更ながら自分でも恥ずかしく思います。

『おおー！』

はっはっは、続けてよろしいですか？

――いくら私でも全く見ず知らずの方にこんなことはしません。私はチロルチョコどっきりのため、あらかじめカカちゃんから手紙の話を聞いていました。その際にタケダ医院にいる女性のことも聞いたのです。紙飛行機に書かれていた文面がチラリと見えたことから、その娘がトメ君の元彼女だと察しがつきましたし。

そして笠原ファミリーのことですから、どうせこの街にいる限りはいずれまた会えるだろうと踏んでいました。

「何かしらに巻き込まれる形で、ですよね。わかります」

さすがはサラさん、巻き込まれ仲間なだけはあります！

「トメ兄……巻き込むのって、やっぱ私たち？」

「勝手に僕を含むな。主におまえだ」

まぁ、結果としてやはり巻き込まれたわけで。お楽しみ会のことを覚えてますか？

「ああ、そういやいたな。おまえもユカも」

はい。来ているとは知らなかったのですが、カカちゃんの演目内容のおかげでどこにいるかすぐにわかりました。

「恥ずかしい話を餌にしてあぶり出したようなもんだったよねー」

「人聞きの悪いこと言わないでよサエちゃん。やったのは全部タケダなんだから」

「全部タケダのせいになるんだ……まぁ僕的にはどうでもいいけど」

ともかく私としては助かりました。紙飛行機を強奪、というイタズラをしてみたものの、いきなり病室へ行くわけにもいかず困っていたのです。おかげで話をするいい機会に恵まれた、そう思った私はお楽しみ会が終わった後にこっそり抜け出し、彼女に接触してみたのです。

「接触だってさ、やーらし」

「テン、おやじくさいぞ」

「何を今更」

もちろん性的な意味ではありません。トメ君と違って。

「どういう意味だ！？」

あ、いえいえ。トメ君がそういう接触をするという意味でなく、

私がホワイトデーにトメ君へチロルチョコで接触したときの話です。

「ああ……って別にあのときも性的なことなんぞなかったろ!?」

その辺りは子供もいるのでスルーしてさしあげましょう。

「オイ」

ともかく私はユカさんに話しかけました。始めは私が誰なのか気づかなかったようですが『紙飛行機のときはどうも』と声をかけただけですぐに思い出していただけました。彼女としては手紙を持っていかれて気になってはいたものの、私がトメ君の関係者だとは思っていなかったので忘れていたのでしょう。

『よ、読んだ?』

『はっはっは。失礼とは思いましたが、紙飛行機が文面を表にして折られていたので、つい』

『本当に失礼ね!』

『失礼ついでに言わせていただけば、だからこそあなたに声をかけたのですが』

ユカさんの顔は真っ赤になりました。手紙を読んだからこそ――そこで私の言いたいことを悟ったのでしょう。

「私は悟れないんだけど」

「私もですー。トメお兄さん、手紙になんて書いたんですかー?」

「あー、まぁ、平たく言うと。僕は前の恋愛を引き摺るつもりは微塵もないから安心しろーとか、新しい恋でもしろよーとか、余計なお世話かもしれないけど応援してるよーとか、そんなの」

「ほぉほぉ、なるほどな。そんな手紙を読んだからこそ声をかけた、ってーことはだ」

テンカさん、お察しの通りです。私はその『新しい恋』への立候補のつもりで声をかけたのでした。しかし彼女の反応は、顔を赤くしつつも冷たいものでした。

『からかってる？』

『まさか。それこそ失礼というものでしょう』

『だってそうとしか思えないわ。ろくに話もしてないのに』

『綺麗な女性に一目惚れをする……男としては珍しくないことと思いますが？』

『あーあー、おあいにく様。ワタシは女だからわかりません』

『はっはっは、これは一本取られました。しかし一目惚れというだけではありません。私とあなたは、気が合うのではないかと思ったのですよ』

『……どこがよ』

『私はトメ君の親友を自負しています』

『だから何よ』

『トメ君を親友に選んだ私。かつてトメ君に告白したあなた。趣味が合うと思いません？』

『なにそれ、冗談のつもり？　あまり面白くないわね』

『はっはっは！　これは手厳しい』

『手厳しいこと言ってあげてるのに、随分と笑うのね』

『可愛らしい女性と喋ることができる、それだけで楽しいものなのです。男というものは』

『……なんだか聞いててかゆくなってきたわ』

『そう言いつつ少し嬉しそうに』

『なってないわよ。帰るわ。ついてこないでよ！』

『仰せのままに。それでは、また会える日を楽しみに』

『ふん！』

と、このようなラブラブな会話を交わした後ですが。

「……大人の世界じゃこれがラブラブなの？」

「本人がラブラブって言ってるんだから、いいじゃねぇか」

その哀れむような視線はやめてください。私だってわかってますよ、ええ。うまくいかなかったことくらい。

「あ、わかってたんだー」

私が仕事モードで本気を出せば、お嬢ちゃんからお年寄りまでスラスラと口説き落としてさしあげましょう。商売的な意味で。しかし、まぁ、恥ずかしながら……本気の恋となると、不安になって上手く口が回らないものなんですよ、口説くつもりがクドくなってしまい、はっはっはっは！　はぁ……

「オレには充分、回ってるように聞こえたがな」

「僕にはとてもマネできない口上の数々……同感ではあるけど、結局は相手を怒らせたわけだから失敗、ってことじゃないか？」

はい……失敗のままで終わりたくなかった私は、それからしばらくユカさんへのアプローチを考えていたのですが……うまくいかず……

「あー、そういやその辺りでキリヤが付き合い悪くなったんだよなぁ。この僕がラーメンを奢ってやるというのに、反応しなくてなぁ」

「恋の悩み絶頂期だったのですね！　ふふ、それで私にバレることになったと」

「サラさんにバレたって、どういうこと？」

はい、それから少し経った後、お花見があったじゃないですか。

ユカさんも参加して、私はこっそりそちらを気にしていたのですが……

『――あれがツンデレというやつでしょう。あそこまでハッキリしたのは初めて見ました』

『なるほど、あれが！　や、やっぱり内心はトメさんのこと好きだったりするんでしょうか！』

『そうだとは思いますけど、そうでもないと思いますよ』

『……キリヤさん、何か知ってます？』

失言でした。なんとなくムッとなって、つい口にしてしまったのです。

『色々と知ってますよ。例えば美味しいお客の作り方とか』

『おお！　それは興味深々です！　同じフリーター仲間としてぜひ！』

うまく話を逸らしたつもりでした。しかしサラさんも一筋縄ではいかず……

『……で？　ユカさんについて何を知ってるんですか？』

唐突な話の戻し方に面食らいました。私は誤魔化そうとしましたが……女性特有のカン、というやつでしょうか、一向に引き下がってくれず。

「サラさん、意外とつえぇな」

「ふふふ、恋愛事が絡んだ女性は粘っこくなりますからね」

もういっそ相談してしまおうと思い、サラさんには打ち明けたわけです。すると、

『じゃ、とりあえず私と仲良くなって見せ付けてみますか！　自分のことを好きだと思っていた男が、別の女性と仲良くなる……ツンデレっていう人種は人一倍それが我慢ならなくて、気になりまくるらしいですし！』

『情報源はどこですか？』

『サカイさんです。こないだ口喧嘩したときに語ってました』

なぜ口喧嘩している最中にツンデレについて語ることになるのか疑問でなりませんでしたが、正直手詰まりだった私はその案を受け入れました。仲の良さをアピールしようと、サラさんは『めでたいのぅ、めでたいのぅ、カンパーイ！』と半ばオヤジくさく振る舞い、

「む、なんですかその言い方！　せっかく相談してあげたのに！」

そう、あれはまるでテンカさんのようでした。

「んだとぅ？」

ってトメ君が言ってました。

「おまえ本当に親友かよ」

それはともかく、作戦は成功したようですね。ある日、私とサラさんが喫茶店で今後の展開について作戦会議していたとき、ちょうどユカさんからデートのお誘いがきたのです。トメ君経由で。

「おお、あのときのかぁ」

「あのとき？　カカ、何か知ってるのか」

「いーえー！！　何も知らないですよー！！」

「……なんでサエちゃんが答えるの。さてはまたコソコソと」

「そ、それで！？　なんでトメ兄経由で来たの！？」

恥ずかしながら、私が携帯の番号とアドレスをいつまでも渡せないままだったのですよ。つまり向こうからの連絡手段が全くなかったのです。それでユカさんはトメ君を呼び出したわけですね。

「ついでに言うと、ずいぶんとキリヤのことを聞かれたよ。顔を真っ赤にしながらな。ツッコんだら『あーあーうるさいわね！　ワタシとの未練が微塵もないならツベコベ言わずにちゃんと相談に乗りなさい！』とか怒鳴られたぞ。キリヤ、彼女の教育はきちんとしろよ」

善処します。なにせさっき付き合い始めたばかりですので。

「へぇぇぇ！　そうだったんだ！？」

はい。先ほど手編みのマフラーのプレゼントと一緒にお付き合い

を申し込まれました。

「そして僕とサラさんはそれを影から見ていたわけだ」

「二人のキューピッド役としては当然の権利ですよね！」

私は途中から気づきましたけど、ユカさんは気づいていなかったみたいですね。ですからこうして皆さんがぞろぞろ現れた途端に逃げ出したのでしょう。

「……キリヤがあまりにも雄弁かつ事細かに語り始めるから逃げ出しちゃったんじゃないかと思うんですけどー」

そうとも言うかもしれません。

「わりぃ、ちょっといいか？　話を切って悪いが……手編みはいいが、なんで今の時期にマフラーなんだ？　もうすぐ夏だぞ」

そこは考えてなかったみたいです。

「……意外と抜けてるのな」

はっはっは！　可愛いでしょう！

「うあ、ノロケが始まりましたよテンさん」

「それを言うなら今の話が全部ノロケだろ」

おやおや、説明を求められたから答えただけだというのに、酷い言われようですね。

「……んー」

「あれ、どしたのサエちゃん。不満そうな顔で」

「キリヤ、本当に口が回らなかったのー？　最初はからかうみたいな調子で相手を怒らせて、とりあえず自分を強く印象づけてー、それからわざと他の人を巻き込んで上手くやったーって感じに聞こえるんだけど」

はっはっは！　それはサエちゃんが腹黒いからそういう考えになるんですよ。

「……器用な男は、ときに女の腹黒さを超えるってお母さんが言ってたんだけどー」

気のせいですよ、気のせい。所詮は私も一人の人間であり、男。そうそういつも上手くやれません。それでも上手くいったのは……そうですね、あなた達の雰囲気のおかげですよ。

「雰囲気？　なにそれ」

その問答無用で周囲に笑顔を撒き散らす空気のことです。なんか妙にいろいろ上手くいくような気がするんですよね。

「……たまにこんなこと言われるよね、トメ兄」

「だから僕に振るなってのー。言われるのは主におまえだカカ」

ともかく、おかげさまで私とユカさんは付き合うこととなりまし

た。皆さん、よろしくお願いしますね。

「おぅ。なかなか楽しそうだからよろしくしてやっぞ」

「ですよね？　面白そうですよねー？　いやー私ったらこの先が楽しみで！」

「サラさんって本当に恋話好きだよねー。えっと、私としてはサユカちゃんをからかう材料が減って残念だけどー、でも祝福するよー。おめでとー」

「む、ぶっちゃけどうでもいいけどサエちゃんが祝うなら私も祝おう！」

「はいはい、適当によろしくしてやるよ。ところで……なぁカカ」

「なんだねトメ兄」

「おまえら、もう二人くらい連れてなかったか」

「……あれ。クララちゃんとタマ、どこいった？」

ふふふ、さぁて、ね？

## カカの天下７６４「キリヤさん、お願いします」（後書き）

実はこんなわけだったのです。

……本当に？

実のところは？

次回へ続く（ぇ

**カカの天下７６５「ユカさん、お願いします」**

……こんにちは、ユカです。ただいま最悪な気分です。はぁ。

「めっちゃらかったら！」

「らびんびべんぽ！」

それというのも、その、彼氏になってしまったキリヤのことです。彼は、とてもつかみ所がなくて……

「ぽっぴんぱ、てーしゅくてーでんべんたらさ！」

「さちゃい」

さっきもいきなり現れたトメたち相手に驚くどころか『さぁさぁ始まりますよキリヤの恋物語！　聞きたい人はあとで私にラーメン奢ってください！　ＯＫ？　ＯＫ！！　では始めましょう！』とか言い出してノリノリで話し始めるし……

「いんどぺんでんすどぃ！」

「いんでぺんでぃすでででぃ！」

思わず逃げ出しちゃったわよワタシ。はぁ……今頃いろいろと話してるのかしら。あの人のことだから、あることないこと適当にうまく話しそうだけど。あーあーでもわからない、あの人わからない。なんかいつも笑ってるし。なんか不可解なほど口回るし。

「いにゃなやうんついすしとととととととと！」

「とんととととんとんトントントン！」

あーあー、でも。

「クララの勝ちです！」

「タマ負けたでしゅ……」

この子たちのほうがわからないわ。

「クララちゃん、タマちゃん？　さっきから私の後ろで何してるの？」

「もちろんしりとりです」

し、しりとりだったんだ。意味不明な言葉ばっかりで全然気づかなかった。でもなんで？　そんな視線を感じ取ったのか、クララちゃんは答えてくれた。

「実はですね、いきなり気持ちよさそうな顔して逃げ出したユカを追ってきたものの上の空だったので暇つぶしを始めたのです」

「き、気持ちよさそうな顔って何よ！　ワタシは恥ずかしかったの！」

「キリヤがノロケを始めたのが嬉しかったんじゃないのですか？」

「嬉しいわけないでしょが！！」

な、なによこの子……小さいくせに妙に耳年増ね。本当に見た目通りの年齢なのかしら。

「じゃ、そゆことにしておくでしゅ」

タマちゃんも変に聞き分けいいし。なんだこの二人。

「それでユカ、キリヤとはどんな風にラブラブなのですか？」

「なっ！？」

「おー、らぶらぶでしゅか」

「そうですよ、タマ。大人は恋人と二人だけになるとラブラブするのです。他の人に見せられないくらい甘くとろける時間なのです。クララそのときの話が聞きたいです！」

ほんとなんだこの子！？　なんでこうピンポイントで恥ずかしいところを突いてくるのよ！　子供なら子供らしくワタシの怒鳴り声に怯えて引っ込んでなさいよ！　なによその「ハイハイ恥ずかしいんですね」みたいな顔！　いつもは全開でガキなくせに今は子供らしくないったらありゃしない！

「……そんなこと、あなたたちには関係ないわ。ワタシは帰る！」

「わかりました。えっちなことばかりしてるって皆に報告します」

「待てぇぇぇぇぇ！！」

なによその「どうしたんですか？」っていう無垢な顔は！　絶対わかっててやってるくせに！

「大体ね。まだ付き合い始めたばかりなんだから、そんな話はないわよ！」

「じゃあ付き合うまではどうだったんですか？　ラブラブしてませんでしたか？」

「し……してた、けど……」

「クララわくわくです！　どんなことしてたのですか！？」

「べ、別に大したことはしてないわよ……その、彼ったらよく病院の前を通るようになったのね？　仕事へ行く道を変えただけって言ってたけど、あんまりにも通るから、ワタシもなんだか無視するのは悪いなって思って、外に出て、声かけて、一緒に、ご飯食べたりして」

そ、その店がよりによって、カウンターしか空いてなかったりして、すぐ隣同士に座って。そしたらそしたら、彼ったらいきなり「好きです」なんて言ってきて。

それも周りに聞こえないように耳元で囁いてきて、くすぐったくて逃げようとしても手を握られたら逃げられなくて、また「好きです」なんて言われて。

それしか言えないのか、とか。もっと気の利いたこと言いなさいよ、とか。

そんな反論しても「だって大好きですから」なんて言われたら何も喋れなくなって！　あーあー思い出すだけで顔が核爆発するわ！　だいたいなんで「好き」とか言うのよ！　優男なら優男らしく「愛してる」とか言いなさいよ！　それを「好き」とか連発するから逆に可愛いとか思っちゃってわあああ！　さっきだってさっきだって！　誰も見てないのを確認してからいきなりちゅーされて！　絶句したワタシがなんとか抗議しようとしたら「はっはっは、つい♪」なんて言われてまた何も言えなくなって――

「ってワタシはどんだけ暴露してるのよおおお！」

「しりとり」

「り、り……」

「そしてチビすけどもは聞いてないし！　ワタシってばすごく恥ずかしいヤツじゃないの！！」

「それで、どこからどこまでが妄想なのですか？」

「あーあー！　知らない知らない！　どうでしょうねー！　全部妄想かもしれないし全部本当のことかもしれないわねー！」

「とりあえずらぶですね」

「らぶらぶでしゅね」

「知らないもん知らないもん！　ワタシもう知らないもん！　何が本当かはそっちで判断しちゃいなさいよバーカ！！」

「やっぱり気持ちよさそうです」

「どこがよおおおおお！！」

はぁ……いや、ほんと。真実は想像に任せます、ええ。

――オマケ。

「……あの人」

それを遠目に見ていたサユカちゃん。

「ユカさん、よね。なにしてるのかしら、というか」

サユカちゃんは「うーん？」と首を傾げながら、

「ああいう暴走、誰かに似てるような……誰に似てるのかしら」

知らぬは本人ばかりなり。

# カカの天下765「ユカさん、お願いします」（後書き）

果たして真実はいかに。

キリヤの言うように、口下手ながらもなんとか上手くいったのか。

ユカさんの言うように、常にキリヤの口撃がずっきゅんずっきゅんとハートを撃っていたのか。

てか、ちゅーしたのか？

二人がくっついたのだけは確実な事実。それ以外の真実はご想像にお任せします。

……いやまぁ、結局ユカさんから告白したのを考えれば……ねぇ？

最後のおまけは、載せる直前に思いつきました。書き終わってから誰かに似てるなーと。

この二人に妄想合戦させるのも楽しそうだなぁ。

# カカの天下７６６「カカ天クエスト　ＥＰ１３」（前書き）

注意：このお話はカカ達がゲームのキャラになりきりながらＲＰＧを進める話です。話の内容はゲームの中ですが、『もしもカカ達が異世界にいたら』みたいな感覚でお楽しみください。

ステータス

カカ　　ボケ勇者　　レベル１　へん
サエ　　悪の魔法使い　レベル１　はらぐろ
サユカ　手の平の踊り子　レベル１　さびしんぼう　エロレベル３
トメ　　ツッコミ　　レベル１　つっこみ　超ドリル
ケロリン　スライム　　レベル３０　おっさんくさい　超ゴミ

結構間を空けましたので、話を忘れた方は７０６話まで戻ってネ。

# カカの天下７６６「カカ天クエスト　ＥＰ１３」

パワーアップしたケロリンと再会した一行は、汚してしまった街をお掃除してから出発し、新たな街を目指すこととなった。

「なんだかんだあったけど、街の人たちは感謝してくれたねー」

「来たときよりも綺麗にして帰るのが基本だからね」

勇者カカはピクニック気分で旅をしているらしい。

「そう教えてくれたのは、トメさんだったわね……」

どうやらトメもピクニック気分だったらしい。

「トメ、かぁ。さらわれるときに俺様がいれば……今は生きてるやら死んでるやら」

「生きてるわよっ！　トメさんが死ぬなんて、そんな、そんな……！」

「落ち着きなよサユカン。大丈夫、トメ兄はちゃんと生きてる」

「そーそー。あの村娘Ａのオモチャにされつつ、きっと生きてるよー」

「……それならいっそ死んでくれたほうが」

『どっち』

とても勇者らしい会話しながら進む一行。

しかし、そんな彼女たちの前に魔物が立ちはだかる！

田中さんの群れがあらわれた！

「こ、こいつらは！　前にケロリンを倒した『よくある苗字ーズ』の一角！」

「くっくっく、おもしれぇ。あのときの俺様と思うなよ！」

ケロリンはゴミブレスを吐いた！

面倒くさいんで全員ダメージ統一！　田中さんたちは２００のダメージを受けた。

田中さんは絶滅してしまった。

「ぜ、絶滅！？　じゃあ、田中さんは、もう」

「……そう、この世界にはいなくなっちゃったんだよ。田中さんという苗字は」

「た、田中さん……！」

カカは悲しみに崩れ落ちた。

「別にいいじゃないの。ＲＰＧで漢字の苗字の人なんてほとんどいないんだから」

「それもそっか」

カカは立ち直った。

そんなこんなで佐藤さんと鈴木さんも絶滅させながら、一行は新たな街へとたどり着いた。

そして手始めに……いつも入り口に立って場所名を言うのが仕事という、どこにでもいる不幸で不憫な街人に声をかける。

「ここはトラブルの街さ！　今、街はいろんなトラブルに溢れているんだ！」

「明らかに街の名前のせいだと思うのはわたしだけかしら」

「サユカン、そういう文句は街を作った人に言おう」

「製作者、出てこーい！」

「いやサエすけ、確かに作った人はそっちだけどっ」

そこでカカは気づいた。

「あれ、ケロリンは？」

「そういやいないわねっ」

「街のトラブルが増えるから、外で待機してるんじゃないのー？」

「ああ、言われてみれば街中を魔物が歩いてたら問題ねっ」

「んーん、ゴミの不法投棄問題だよー」

「なるほど」

戦闘でお世話になりまくっているわりには酷いモノ言いである。

「それじゃ、まずはどうしよっかー。武器屋さんとか覗く？」

「や、待った。トメ兄のＲＰＧ経験から言うとね」

「トメさんいないじゃないの」

「現実のほうのトメ兄に聞いたの」

本当に身も蓋も無い勇者である。

「とにかく、プレイヤー側のトメ兄の情報によると。こういう問題の多い街ってね、選択肢を選ぶだけで解決できるイベントもあるの。そして解決した後には大抵アイテムがもらえるから、それを取れるだけ取ってから買うものを選んだほうがいいみたいだよ！」

「なるほどー。そういえばお母さんもゲームしてて新しい街に入ったら、必ず最初にタンスとか壺を全部調べてた」

とことん身も蓋も無いゲームキャラである。

「よし、じゃあ最初は街の人に片っ端から声をかけるわよっ！」

街人その一に話しかけた。

「た、助けてくれ！　うちの子供がさらわれたんだ！」

なんと答えますか？

選択肢１：それは大変だ！　まかせろ！

選択肢２：あっそ。

「誘拐でしょ？　警察に届けなさい」

カカは選択肢を無視した！

続いて、街人その二。

「俺の大事なぬいぐるみが盗まれたんだ！　なんとかしてくれ！！」

なんと答えますか？

選択肢１：大事なものなんですね、私が探してきます！

選択肢２：おっさんのくせにぬいぐるみ？　恥を知れ。

選択肢３：キショイ。

「窃盗でしょ？　警察いけ」

カカは選択肢を無視した！

さらに街人その三。

「あぁ、ボウヤ！　あたしの可愛いボウヤはどこにいったの！？」

なんと答えますか？

選択肢１：私に任せろ！

選択肢２：おばさん化粧濃いよ。

選択肢３：かったりぃ。

選択肢４：ていうか、そこにいるし。

「捜索願いは警察で」

カカは選択肢を無視した！

懲りずに街人その四。

「ふがふが、助けておくれ。強盗に襲われておるのじゃ」

なんと答えますか？

選択肢１：こんなおじいさんに、なんて仕打ちを！

選択肢２：年貢の納め時だね。

選択肢３：がんばれ。

選択肢４：えっち！

選択肢５：脈絡もなくじいさんを殴る。

「おまわりさーん！　こっちこっちー！」

カカは選択肢を無視した！

「カカすけ……あんたって……」

「まーまーサユカちゃん。いくら選択肢の４が選びたかったからって」

「そんなこと一瞬も思ってないわよっ！」

「まさか、５！？」

「違うっての！　１の選択肢を無視するカカすけに呆れてんのよ！」

「１ってなんだっけ？」

「たしか……とりあえず揉みしだく、だったようなー」

「サユカンのえっち！！」

「そんな選択肢なかったわよっ！！」

一行は混乱している！

「まーまーサユカちゃん、黙ってもう一度、最初の街人に話しかけ

てみなよー」

サエに言われた通り、一行は最初に選択肢が出た街人に話しかけた。すると？

「ありがとう勇者様！　おかげで問題が解決しました。これ、お礼です！」

アイテムを手に入れた！

「……なんで？　なんで！？　カカすけ何もしてないでしょっ！？　警察を呼んですらいないでしょっ！　お礼を言わなきゃならないのは警察相手にでしょ！！」

「ふしぎだね」

「一言で片付けるな！　それでも勇者かっ」

「まーまーサユカン。選択肢を選んで、それで解決できたなら、結果オーライで街の人は満足するんだよー。そういうプログラムなんだよー」

「プログラムとか言うなっ！」

「裏技みたいなもんだよね」

「裏技とかも言うなぁっ！　ここはゲームの世界なんだからねっ！」

「だからだよ」

「あ。そっか」

サユカは納得せざるを得なかった！

「まーまーまー。とりあえずアイテムもらったんだから確認しようよー」

「……そうね。なんか怒鳴るだけ無駄な気がしてきたわ」

「どれどれ？　お、本だよ。なになに？　この本を使うとせいいかくが変わります、だって」

「おー、ステータスのせいかくが変わるんだね」

「どんだけ影響力強い本なのよっ」

「サユカン、そんなとこにまでツッコんじゃダメ」

今回はぶっちゃけまくりです。ああ、いつもですね。

「それで、なんてアイテムなの？」

「エロ本」

サユカはエロ本を使――

「わないわよっ！　なんで勝手に使おうとしてんのよ！」

「システムが空気を読」

「んでないわよっ！」

「サユカちゃん専用のアイテムって書いて」

「ないっての！　わたしはそんなキャラなんて嫌だって言ってるでしょっ」

「ちなみに言うと、他にもらったのは、すごいエロ本と」

サユカはすごいエロ本を使――

「わないっつうのっ！！」

「あとやばいエロ本と」

サユカはやばいエロ――

「だから使わないってば！」

サユカはやばいエロ。

「なんでそこで止めるのよっ！？　なんで繰り返すのよ！」

「それから、トメのエロ本」

「ほしい！」

サユカは今度こそアイテムを使った！

「うっそーん。普通のエロ本でした」

「にゃあああああああああ！？」

サユカのエロレベルが上がった！

おまけ。

「ちなみにもう一つもらったアイテムは、『エロメイド服』らしいよ」

「トメとサユカしか装備できません、って書いてあったー」

「本とまとめて、全部店に売ったわっ！！」

『えええええ』

どんな店に売ったかは秘密だ！

――その頃、魔王と村娘Ａに捕らえられたトメは。

「ふっふっふ……」

村娘Ａは怪しくほくそ笑んでいる。

「さっき店で購入してきたこの本……」

どんな店で買ったかは秘密だ！

「ちょうど流れてきたところを買ってしまったけど……これを全部、この改造したトメに読ませれば……ふふふ」

トメはドリルなので返事ができない！

「さぁ、もっと恐ろしい魔物に！　あれ、本はどこいったのかしら。魔王様、知りません？」

「あ、ごめん。あたし全部読んじった」

「なんですとー！？　じゃ、じゃあせいかくが」

「あたしの性格がその程度で変わるはずあるまい」

「……そうですね」

「もともとエロいし」

「そうですね」

ドリルになったトメとも何気にうまくやってる魔王城！　とりあえず置いといても大丈夫そうなので次はケロリン特集だ！　次回、『ケロリン大活躍』をお楽しみに！

## カカの天下766「カカ天クエスト　Ep13」（後書き）

ひっさびさのクエストです。でもストーリーがあまり進まないのは仕様です。

そもそもゲーム内に警察があるのか？　という質問は受け付けません。その辺は空気を読んでください。姉の性格についても空気を読んでください。

それにしてもキリヤとユカさんのカップル成立は反響大きいですな。ほとんどの人が祝福していただけているようでよかったです。

いやまぁ祝福できない方のおもしろメッセージとかあればカカラジで公表して笑いますので、何かあるかたはぜひ笑

あと最後に。

田中さんとか、ごめんなさい。

# カカの天下767「前門の妹、後門の姉」

こんにちは、トメです。

春も終わり、もうすぐ夏ですね。というより梅雨かな、そろそろ蒸し暑くなってくる頃です。そんな最中……実は僕、少し太りました。

なんだかね？　暑くも寒くもない気候だったせいか、食欲が旺盛になってね。や、もしかしたら単純に年齢で太りやすくなってきたのかもしれないけど、とにかくちょっとヤバイ。何キロ増えたか？　そんなこと聞くもんじゃないわよ。イヤン。

というわけで。ぽーにょぽーにょぽにょお腹ポニョ♪　になるのを防ぐため、恥を忍んで僕はカカにお願いした。トレーニングに付きあわせてほしい、と。

小学生の妹がやっているトレーニングに付き合う……何も知らない人が聞いたら情けないことこの上ない話だろう。しかしご存知の通り、カカの運動神経は並じゃない。同年代の女子を大幅に上回る身体能力、それが日課のトレーニングのおかげなのだ。いくら成人男性とはいえ、何も日課にしていない僕が運動で敵うはずがない。だからこそ今回は低姿勢でお願いした。

「にゃー」

わかりにくい返事だが、カカは快くオッケーしてくれた。随分とあっさり頷かれて拍子抜けしたけど、とにかくお願いした次の日から運動開始だ。

「んじゃ夕食前に軽く走ろっか」

カカは学校、僕は仕事。運動できるのはそれらが終わってからになるから、ちょうどいい申し出だった。カカはいつも運動時に着る赤ジャージ姿。僕も奥からジャージを引っ張り出してきて、兄妹そろっておそろいです。

「おっしゃー！　走る前に準備運動！　おいっちにー！」

「お、おいっちにー」

なぜかカカはハイテンション。なんだか嬉しそうだけど……なんでだ。

「あたしが思うに、おにーちゃんと遊ぶ時間が増えて嬉しいのだと見るが、どうだろう？」

「……その前に、なんであんたがいるんだろう？」

僕らに合わせたかのようにジャージ姿な姉が、なぜか当然のように隣に立っていた。いやまぁ、この人は普段着でジャージ着ることも多いんだけどさ。

「弟君が珍しく運動するっていうからさ、あたしも手伝おうと思って」

「いらん、消えろ」

「まぁまぁ、カカちゃんを見てみなよ。姉兄妹三人で何かできる、

ってだけで嬉しそうじゃん」

う……たしかにカカはニッコニコでご機嫌だ。仕方ない、か。

「わかった、邪魔すんなよ」

「大丈夫、ちゃんと手伝うから」

ランニングで手伝うも何もないと思うけど。

「さ、行くよトメ兄！　私の後ろについて走ってきてね」

「よしきた」

コースは聞いている。我が家を含めた周囲の住宅街を一周する形で、距離は1キロ程度だ。これくらいなら運動不足の僕でもゆっくりなら走りきれるだろう。優しいコースだ。

「駆け足、すすめー！」

声にあわせて走り出すカカに続く。お、けっこー速……い……え、ちょ、ちょ――

「だあああああああああああっしゅ！！」

ズドドドドドドドドドド！！　ってなにこの全力ダッシュ！？　駆け足っていうのはもっとゆっくりじゃ――痛っ！　首筋になんか刺さった！！

「ほれほれ、おんしの首にはとっても鋭い爪楊枝が迫っておるぞ。

速度を落とせば刺さるぞ。ほれほれ。ほれほれ。はよ行けや！！」

「姉このやろおおおおおお！！」

僕は走った。妹を追いながら。姉に追われながら。秒単位で重くなる身体に鞭打って（というか背後から針を打たれてる）なんとか頑張った。通りすがりの人たちは無駄に全力疾走する僕ら三人を不思議そうに見ていたが、そんなことに構っていられない。こっちは必死なのだ。

「はぁ、はぁ、はぁ……ようやく、ゴール」

フラフラになりながらも、やれる限りの速度で走りきった……

「もう一周！」

「待てやボケ妹！！　お、おま、いつも、こんな、走り方、してんのか！？」

「ゼーハーゼーハーハー！！」

「おまえも必死じゃないかよ！！」

「や、あの、ね？　はぁ、はぁ、いつもは軽いランニング、なんだけど、なんかテンション上がっちゃって、つい、はぁ、はぁ」

結局、姉以外は疲れ果ててしまったのでその日の合同トレーニングはお開きとなった。カカは夕食後には回復して筋トレしてたけど、疲労困憊の僕はとても付き合えなかった。

そして翌日。再挑戦だ。

「うし、やるかぁ！　オレ、あんまりこの辺は詳しくねぇから案内頼むぞ」

なぜかテンが参加していた。最近体重が気になっていたのは僕だけじゃなかったらしい。

「おっけ！　じゃあテンカ先生も私に続いて走ってね」

「カカ。わかってると思うが、くれぐれも昨日みたいなダッシュはするなよ」

「わかってるよん。アレ私も疲れたし」

だよな。

「あたしは疲れないよ？」

「あんたは何しても疲れないだろが」

あとはこのバケモノがまた変なことしないように祈るだけ。

「じゃ、行くよ。駆け足、すすめー」

よし、カカも今度はゆっくり走り出す――

「だあああああああああああああっしゅ！！」

わけがなかったあああああああああああ！！

「ふほほほ！　おんしら二人の首筋には今宵も鋭い爪楊枝が迫っておる、ほれほれ、はよ走れや！！」

「姉このやろおおおおおおおおおおお！　妹このやろおおおおおお！」

「痛っ！　痛ぇって！　な、なんだコレ。おいコラ、うおおおおおおおおおおおお！！」

前方を突っ走るカカを追い、二刀流を器用に使いこなす姉に追われ、テンも一緒に再び全力疾走をすることになりましたとさ。

そしてゴール。死にそうです。

「はぁ……はぁ……おかしいな、日本語通じてなかったのかな、カカ」

「なんにせよテンションが上がっちゃって……ゼーハーゼーハー」

テンは声をかけても返事すらしなかった。

さらに翌日。

すでにテンの姿はなかった。曰く、「てめぇらアホだからもうヤダ」だそうだ。

「カカ……わかってるよな？」

「当たり前だよ。私とトメ兄の仲じゃん？　ツーカーだよ」

すごく嫌な予感がする。

「行くよ。駆け足、はじめだあああああああああああああああっしゅ！！」

「ふほほほほ！　今宵の爪楊枝は一味違うぞえ！　さっき使ったから」

もうツッコむ気も起きない。ヤケになってマジメに走ってやった。

おお、もしかしてスパルタで慣れたのか？　身体が軽い、走れる、僕は走れる！　カカよりも早く、疲れずに、この距離を全力で走りきれるぞ！！

と、思えたのは最初の三十秒だけでした。

「死ぬ……」

「とにかくテンション上がっちゃって。あはは」

「なんでおまえは慣れてきてんだ！？　ゼーハーゼーハー！！」

子供の成長とは恐ろしい。

「なんで疲れてるの？」

「バケモノは口を開くな！！」

もうカカと走るのは止めた。

でも……なんか痩せた。

## カカの天下７６７「前門の妹、後門の姉」（後書き）

べ、別に私が太ったからこんな話書いたんじゃないんだからね！！

まぁ、でも八割実話でできてます。

## カカの天下７６８「結婚宣言」

「そういえばさ、サユカン。なんでトメ兄とユカさんがなんでもないってわかったの？」

「それは話せば長いことながら」

「そこを短くー」

「前にわたしとトメさんの誕生日だったじゃない。そのときに指輪をもらったんだけど」

「はいはい、その自慢はもう百回は聞いた」

「実はね、わたしがトメさんに贈ったのも指輪だったのよっ！　あまりに運命的すぎる偶然よねっ！」

「そこまでうまいこと直感が働くと逆に気持ち悪い」

「なんかストーカーじみているというかー、呪いの類みたいだよねー」

「素直に驚いてよっ！　わたしなんか驚きすぎて幸せすぎて自慢できなかったんだからっ！」

「それで、その呪いの指輪がなに？」

「祝いの指輪よっ！　その、ね？　ユカさんとのデート疑惑が持ち上がってるときに、トメさんが指輪をつけててくれたの。あの生真

面目なトメさんが、前の女と付き合おうっていうときに他の女の子からもらった指輪をつけるわけないでしょ？　特にわたしなんか結婚して生涯を捧げます宣言してるのに」

「恐い」

「恐いって言うなっ！！　とにかくっ、わたしはその指輪を見て確信したわ、ユカさんとは何かの間違いなんだってねっ！　キリヤさんとユカさんがくっついたのは驚きだけど」

「ところでサユカちゃん。それならその指輪、婚約指輪なんだよねー？　じゃあ薬指にはめればいいのに」

「ほんとだ、中指にはめてるや。それもなんか呪いの意味あるの？」

「呪いって言うなっ！　こ、これはその……薬指は、指輪が本物になったときにとっておくのっ！」

どうぞ、カレーです。召し上がれ。

違った。どうも、インドです。

ただいま休み時間。次の授業の準備をしていたのですが、ふと隣からカカちゃんたちが喋っている声が聞こえてきました。そこで気になる単語が。

「サユカちゃんが……婚約指輪……？」

「どうしたのですか、かのちゃん」

「あ、いっちゃん」

同じく準備を終わらせたいっちゃんが寄ってきました。

「なんかね、サユカちゃんが婚約指輪を用意したらしいの」

「あら、随分と大人なんですのね」

「き、きっとタケダ君に用意したんだよ。どうしよう（注意：インドちゃんは周囲との交流が少ないため、『タケダがモテる』と途方も無い勘違いをしています）」

「えぇと、本当にタケダさんごときにあげると仰っていたのですか？」

「言ってない。とーめー人間がノロい、とか言ってた気もするけど」

「……あらあら、本当にどうしましょう（注意：多少カカたちと交流のあるイチョウさんはなんとなく察しつつもあえてツッコまないことにしました）」

「私も負けないようにしなきゃ。そうだ、こんなときはメルちゃんに相談しよう！」

週に数回はメールしてるメルちゃん。とても気さくで面白く、優しい彼女はきっと相談にのってくれるはず。ぽちぽち……どうすればいいの、と。送信！

「おらー、授業はじめっぞー。席につけ」

「席の煮付けってなんですか？」

「カカ、それはあまり面白くない」

「ざんねーん」

あ、返信がくる前に授業が始まっちゃった。とりあえず授業に集中！

……授業が終わって、一分も経たずに返信がきた。まるで授業が終わるのを待っていたような、むしろ同じ授業を受けていたかのようなタイミング。

偶然ってあるんだなぁ。そんなことを思いながらメールを開いた。

『ふんじばって無理やり誓わせればいい』

なるほど！

「かのちゃん、どうするの？」

「ふんじばって無理やり誓わせる」

「ダメですよ！　かのちゃんがどれだけそのメルちゃんを信用してるかは知りませんけど、そんなのはダメですわ。ここはわたくしが尊敬する人に相談してみますから！」

そう言っていっちゃんは自分の携帯を取り出して、ぽちぽちメールを打ち始めた。やがて送信ボタンを押して……すぐに返信がきたみたい。

「なんて書いてあった？」

「よし、わかりましたわ」

「うん」

「ふんじばって無理やり誓わせましょう」

同じ返答だったんだ。

「ちなみにその尊敬してる人って誰なの？」

「ふふ、恥ずかしながらわたくし、とあるファンクラブの副会長をしてまして。サ――そのお方に直接聞いたのですよ。副会長特権ですわね！」

「へー。よくわかんないけど、会長さんは誰なの？」

「うーん、てっきり事務のゆーたさんかと思いましたが、あの方もわたくしと同じ副会長みたいですし……謎ですわ」

そっかー。ほんとよくわかんないけど。

「おらー、授業やっぞー。ちゃくせーき」

「はーい」

「……おいカカ、ボケは？」

「え、毎回やんなきゃならないんですか！？」

先生がきた。とりあえず授業に集中！

「あ、かのちゃん？　プロポーズの言葉、ちゃんと考えておいてね」

え、わ、そっか、どうしよう。授業に集中できない！

「さて、算数の時間だが……まずは！　オレの今日の夕食は何がいいか、決めたいと思う」

集中できなくていいや。だって答えは一瞬で出ます。カレーですよカレー。えっと、プロポーズの言葉……

そして、昼休み。

とりあえずタケダ君をふんじばりました。

「な、何をするのかね！？」

場所は屋上。不意をついて縛り上げたタケダ君は怯えてる。可愛い。

「さぁ、かのちゃん。言ってあげて！」

「うん……」

どきどき。

どきどき。

私の、結婚を誓う言葉を、今こそ！

「あなたのカレーを食べたいです！」

なんで二人とも目が点になってるんだろう。

「……え、あの、それプロポーズの言葉？」

「ま、毎日味噌汁作ってほしい、っていうのを参考にしたんですけど」

「怒涛の勢いでわかりにくいですが……た、タケダさんに伝わりましたかね？」

いっちゃんと二人でタケダ君の様子を見る。

「そうか……」

あ、わかってくれたかな？

「俺をカレーの具にして食べる気だな！（あなたのカレー＝タケダのカレー＝タケダを具にしたカレー、と勘違いしたみたいです）」

い、いくらなんでも、そんな美味しそうなことなんて考えてないのに！　ひどい！

「離せ！　俺は食われるのはごめんだ！」

「ま、まぁまぁ落ち着いて。かのちゃんにそんなつもりはなくてですね」

「やはり元凶はおまえか、イチョウ！　影の黒幕というわけだな！　ああ、前からそんな顔をしていると思っていた」

「わ、わたくしは前からどんな顔をしていたんでしょうか……」

「タケダ君のバカ！」

なんでわかってくれないんだろう。私は悲しくて逃げ出してしまった。

「……え、俺が悪者！？」

「そうですね、悪者です。そしてわたくしはそれを退治しようとする黒幕……ふふふ」

「へ、いや」

「だってそういう顔なんですわよね！？」

「ご、ごめんなさい、つい口が滑ってあああああああ！！」

後ろから声が聞こえるけど、私は悲しくて聞いてなかった。

だって、勇気を出したんだよ？　あなたのカレーを食べたいって……ああ恥ずかしい！　なんて恥ずかしい！

でもわかってくれなかった。くすん。

## カカの天下７６８「結婚宣言」（後書き）

わかってくれなかった。
そりゃそうだ、とお思いのそこのあなた。
デスヨネー。

あと、今日のサブタイトルを見てトメ関連だと思ったそこのあなた。

ざんねーん。

**カカの天下７６９「金は天下の回り物、あくまでテンカのではない」**

よう、テンカだ。金くれ。

突然すまねぇな。金ねぇんだ金。ちょっと知り合いに貸しちまってよ、給料日まで余裕だと思ってたら先週飲みに行っちまってよ。ついつい使いすぎちまってやべぇんだ。どれくらいやべぇかっていうとだな、給料日まであと一週間もあるっつうのに千円もねぇ。やばくね？

「なぁ教頭、金貸してくんねぇか？」

「断る」

「んだよ、やっぱりデストロイヤーだけに財布の中身も壊滅的なのか」

「３００円もない」

ダメだこいつ、金にならねぇ。

「なんでそんなにねぇんだよ」

「彼女に使った」

こいつマジうぜぇ。

「んあー……」

ダメだ、金が無さ過ぎて心が荒む。ちょっと気分転換に学校の中でも散策しよう。

言い忘れてたが今は昼休みだ。ガキどもが騒がしく好き勝手に暴れまわっている。いつもならそれを心地よくも思うんだが、金も心も足りねぇ今のオレには苛立つ対象でしかない。

「せんせー」

「金出せ」

「ひぃ」

「あ、違った」

つい本音が。

「なんか用か？　坊主」

小学二年辺りにいたな、こんなガキ。

「実は今日、お母さんにお使いを頼まれてたんですけど……１０円落としちゃったんです。届いてませんか？」

「うちは交番じゃねぇ。っつうか、１０円くらい失くしたって買い物はできるんじゃねぇのか」

「ぼくのお母さん細かいので、消費税から１円単位まで計算して渡してくれるんです」

そいつぁうぜぇ。

「だから１０円足りないと、他のものが買えなくて……」

「あーわかったわかった。１０円くらいやるよ、ほら」

胸元から財布を取り出す。

「えっと……あんまりないですね」

「財布の中身のことを言ってんだよな。胸じゃねぇよな。あ？」

「も、もちろん財布の中身です！」

よしよし。若いうちは命を大切にするもんだ。ほれ。

「ありがとうございます！！」

感謝して去っていくガキ。いくら金欠とはいえ、１０円くらいなら惜しむもんじゃねぇ。

「テンカ先生！　電話かけたいので１０円貸してください！」

「せんせー！　ともや君が僕のカードやぶったー！　８０円の！」

「そういうおまえだってこないだ僕の８０円切手なくしただろー！」

「ああ、糖分が足りない……あと３０円あれば自販機でジュースが飲めるのに……いま飲まなければ栄養失調で死んでしまうわ！」

「テンカせんせー、２００円落としたよー。一割ちょーだい」

「テンカ先生。ゆーたです。この間ジュース奢りましたよね？　返してください、１２０円」

「テンカ先生、カカです。なんか面白い勢いなんで７７円貸してください」

「カカちゃんったら縁起がいい数字を選ぶねー。じゃあ私は４４円でー」

「わたしは９９円がいいわっ」

な、なんだこれは。オレの財布の中身が地味に減っていく――地味ってレベルじゃねぇぞ！？　こんなチャチな出費のくせにオレの所持金は半分以下だ！　うああこっちも金欠ってレベルじゃねぇ！！

『テンカ先生。ありがとー！！』

そして去っていく生徒とその他。なんだったんだこれは。この学校にゃ、ふざけたやつしかいねぇのか。

「……お、そこの女子生徒！　金持ってねぇか？」

「なに言ってるんですか。学校にお金なんか持ってきちゃいけないでしょう」

うあぁ、マジメなやつもそれはそれでうぜぇ。ガキのくせに。

「それでも教師ですか」

半端なくうぜぇ。

っつうか。なんだか泣きたくなってきた。

「はぁ……」

仕事が終わり、帰宅途中。オレは深々とため息をついた。

冗談抜きで金がない。ガキの使いもできやしない。あーくそ、トメに特売情報とか聞いとけばよかった。あんにゃろたまに「この前、特売のコロッケが一つ18円でさ！」とか自慢してやがるからな、こういうときこそ役に――

「あれ、テン」

「金出せやコラァ！！」

「なんだいきなり、そんな似合いすぎること言って」

偶然にもトメに出会っちまったから、つい。しかし今日はこればっか言ってる気がするぜ。

「実はな……金がねぇんだよ」

「またか？　あのなぁ、金は余裕をもって貯めておけっていつも言ってるだろ」

オレは鼻で笑ってしまった。

「あのな……金ってのはな、寂しがりやなんだよ。たくさんいるほうへ皆逃げてくんだよ。そして集まった金は幸せになるんだよ。それを持ってるやつも幸せ。皆そろって幸せ。わーいわーい幸せ幸せ。オレの幸せはどこだ!?」

「お、落ち着け」

うるせぇうるせぇ。トメもうぜぇ。世界がうぜぇ。オレに金をよこさない世界の全てがうぜぇ！

「しょうがないな……奢ってやるから飲みに行くか？」

「神様かおまえは!!」

ちょっと泣きそうになった。

「あ、ああ。僕はおまえと違って金貯めてるしな。ちょうど飲みに誘おうと思ってたところだし、たまには」

「さっきはトメ超うぜぇとか思ってごめんな！」

「そんなこと思ってたんかい」

おう！　だが今は違うぞ！　なんだかトメがいい男に見えてきた。惚れそうだ！

「ま、いいや。んじゃ行くぞ」

「おー！　今夜は飲むぞ！！」

「おい、少しは加減しろよ」

「飲み放題つけていいか？」

「はいはい」

「あとな、あとな、白子が食べたいぞ！」

「今の時期って旬じゃないから高いんじゃ」

「えー、ケチケチすんなよー」

うしゃしゃ。終わりよければすべてよし、だぜ！

「かんぱーい！！」

持つべきものは友達だな！

## カカの天下７６９「金は天下の回り物、あくまでテンカのではない」（後書き）

べ、別に私が金ないからこれを書いたわけじゃあるんですからね！！

金ないです。マジで。今年の健康保険税とか払えるかヤヴァイです。ここ数年病院に一度も行ってないので無駄金にしか思えません。うがー。

誰かお金くれません？笑

あーあと。とてつもなく久々にあんパン更新しました。誰か覚えてる？＾＾；

まぁ話忘れた方も読み直したりしてやっていただけたら嬉しいです。

## カカの天下770「なんかイロイロ止まらない」

こんばんは、カカです。夕ご飯を食べながらテレビを見てます。

「トメ兄。今日の海老フライなんだけどさ」

「なんだよ」

「ぷりぷりで美味しい」

「そりゃどうも」

「トメ兄を褒めたわけじゃないよ。海老を褒めたんだよ」

「あーそういうことですか」

「トメ兄なんかブリブリだよ」

「あーどういうことですか？」

「トイレで――」

「食事中にやめなさい」

ちぇ。まぁこんな感じでいつもどおりにご飯食べてます。

「あれ」

「どうしたカカ？」

「海老フライだよね、これ」

「他に何に見える」

「ブリブリ」

「眼科いけ」

「肛門科だよ」

あ、お兄ちゃん黙った。

「や、冗談だけど。フライって、飛ぶって意味の英語だよね」

「そういう意味もあるな」

「じゃあ海老フライって、海老が飛んでるの？」

妄想する。

天高く飛び上がる海老。龍のように身体をうねらせながら……ってほど胴体は長くないか。えーと、海老はなんかピクピク痙攣しながら空を飛んでいる。横にはなぜかタケダ。

「あ、死んだ」

タケダも。

「そりゃ水のないとこ行けばな」

「でも私も空飛びたいなぁ。カカフライにならないかな」

「カキフライで我慢しておけ」

うん、わかった。もぐもぐ。テレビを見る。

「あ、お母さん新しいドラマやるんだ」

「本当だな。どんなタイトルだろ」

『枝毛が止まらない』

変な沈黙が私たち兄妹を包んだ。

「お母さん、最近は髪、長いし、ね」

「ぴったり、なのか？　ていうかそもそも、どんな話だ」

「んー……枝毛が伸びすぎて網状になって、それで犯人を捕まえる話とか？」

「恐怖が止まらなくなりそうなんだけど」

もしくは……またもや妄想シーン突入。

シリアス場面。お母さんが怒る。「いいかげんにしなさい！」お母さんの枝毛が伸びる。まだ伸びる。無数に枝分かれしながら伸び続ける。それはやがて世界を覆いつくす。なんとかしなければ世界は暗黒に染まってしまう！　あの毛を焼き払え！　ダメです、燃え

ません！　なんたる剛毛、こうなったらミサイルで……なに、毛が、俺にも毛が……うわああ、俺の身体中の毛が枝分かれしながら伸び続け――ウイルスだ！　新種のウイルスだ！　みんな近寄るな、気持ち悪いぞ！　うわぁこんな場所の毛まで！　ズボンがもっこりだ！！　横にはなぜかタケダ。

「恐すぎる！　っていうかお母さんバケモノじゃん！　悪役じゃん！　ダメだよそんなの！」

「じゃあモデルを姉にしとけ」

「わぁピッタリ」

一件落着。

「僕には話の内容が想像もつかないけど……ほら、髪の毛とは限らないだろ」

妄想シーン突入。

枝毛で伸び続けるのがすね毛だったら。

爆発的に増えるすね毛。

その勢いでロケットのように噴射されるお姉（あまりにピッタリなので女優は修正されました）。

横にはなぜかタケダ。

「アネフライ！！」

「まずそー」

「私もカカフライになるかな！」

「すね毛が止まらないぞ？」

「……そんなのはお姉だけで充分だね」

妄想シーン突入。

枝毛で伸び続けるのがまつ毛だったら。

お姉の目から発射される黒いビーム！！　鉄でも貫通！　今なら１９８０円！

「似合いすぎる」

あ、タケダが買った。

それは置いといて妄想を続ける。

枝毛で伸び続けるのが鼻毛だったら。

お姉の鼻からビームがボーン！！

「こっちのほうが似合うな」

妄想シーン突入。

お姉のひげが伸びたら。

「……なんかお姉にもじゃもじゃのひげがあっても違和感ないなぁ」

「なんか仙人っぽくなるからだろ」

「あー、似合う」

タケダはひげが似合わないからどっか行った。

数分後。

「ねぇトメ兄。お姉のイメージがえらいことになってるんだけど」

「説明してみなさい」

「髪はふえるワカメのように世界を覆い、目からのビームと鼻毛ビームで敵を鬱、じゃなくて撃つ。すね毛ロケット噴射で自在に空を飛びまわり、ひげだけは普通に生えていてダンディ。どんな攻撃も毛がガード、ミサイルも核兵器も効かない。その姿やまさに暗黒の魔王。いったいどんなシャンプーを使ってるのかと話題沸騰中」

「同じシャンプーを使うために？」

「や、絶対使わないために」

「だよねー」

「で、横にはなぜかタケダ」

「なぜ」

「ドラマの主人公がタケダって名前らしいから」

「影薄いなー主人公」

「きっと髪も薄いんだよ」

「そりゃタイトル負けで主人公失格だ」

あっはっは、なんて笑いながらもぐもぐと最後のおかずをいただいて、二人そろって手を合わせて「ご馳走様」とぺこり。

「あ、しまった！　夕飯逃したか、あたしとしたことが！」

そのとき、唐突にお姉が乱入してき――お姉？

「どちら様で？」

「は？　なに言ってんのさ弟よ妹よ！」

「や、私たちのお姉は……トメ兄。ねぇ？」

「カカ。なぁ？」

『もっと剛毛なはず』

「よし歯ぁくいしばれ」

私たちは鼻毛ビームをくらうことになった。

## カカの天下７７０「なんかイロイロ止まらない」（後書き）

ただ夕飯を食べながらダラダラ喋るだけの話です。剛毛。

『枝毛は止まらない』実はちょっと執筆中。公開の予定はありません。

## カカの天下771「自身の振り見て我が不利直せ」

トメです。時刻は夕方すぎ。いつもなら家で夕飯を作っている時間帯ですが、カカがサエちゃんの家で食べるらしいので、今夜は外食することになりました。

「いやぁ、悪いな。また奢ってもらってよ！！」

「……まぁ仕方ない。他に空いてるやついなかったし。おまえ金なさすぎてヤバそうだし」

「おう。給食くらいしかまともに食えねぇ」

はい、そんなわけです。あまりにお金がないらしいテンを誘いました。場所はキリヤが新しく始めたらしいバイト先。今度はお鍋屋さんだそうです。

「いらっしゃいませ、ラブラブカップルのお二人様」

「トメ、鍋の具材はこいつでいいか？」

「食ったら二枚舌になって口が回るようになりそうだな」

またまたご冗談を、と笑う店員はもちろんキリヤ。自分のことを棚にあげてよくも他人のことをラブラブカップルとか言えたもんである。

「さてさて、早速メニューの説明をさせていただきます」

仕事モードに入ったキリヤは本当に懇切丁寧に教えてくれる。要約するとこうだ。このお店のお鍋は二色鍋。お鍋の真ん中に仕切りがあり、一度に二種類のおだしで食べることができる。なので――用意された計八種類のおだし。まずその中から二つ選び、次にお肉と野菜のコースをどうするか決める、という形だ。ドリンクはまた別会計らしい。

「それでは、おだしを決めていただいてもよろしいですか？」

「む、どうするよトメ」

「とりあえずドリンクは決まってるから先に注文しよう。ウーロン茶とコーラな」

「ビール……」

「払うのは僕だぞ。酒は勘弁しろ」

「びぃるぅ……」

「ダメです。我慢なさい」

「びぃーいぃーるぅー！！」

「我慢なさい！！」

「はい、それではウーロンだしとコーラだしでよろしいですね」

「そっちは他人の話を聞きなさい！！」

いつもの調子でツッコミを楽しんでいた、そのとき。少し離れた席で女性の甲高い怒鳴り声が聞こえてきた。

「……クレームか？」

「そのようですね。このお店、まだできたばかりですから多いんですよねぇ」

さすがに慣れているのか、少しも慌てずにキリヤが答える。声の聞こえた方を見てみると、一筋縄ではいかなそうな厳ついおばはんが若いバイト君に説教を垂れていた。バイト君は必死に「すいません！　申し訳ございません！！」と謝り続けている。

「すごい形相だな、あのババァ」

「テン、言いすぎ」

「しかし事実ですね。うーん、テンカさん。手鏡とか持ってます？」

「あるぞ」

「なんでそんな女みたいなものを」

「殺すぞトメ」

「誰がここを支払うと思ってる」

「ごめんなさい」

お金がないと滅法弱いテンを尻目に、手鏡を受け取ったキリヤは

スタスタとクレームおばはんのところへ近づいていった。

「失礼致します、お客様？　いったいどうなされましたか」

明らかに上の立場っぽく登場したキリヤに、おばはんの矛先が変わる。といってもキリヤはバイト、しかも新人なはずなんだけど。

「どうもこうもないわよ！　この店ときたら――」

「あぁ、申し訳ございません。失礼ですが、お先にこちらをご覧ください」

話を遮ったことで更に腹を立てたおばはんだが、さっとキリヤが鏡を正面に見せた途端、鬼のような形相が変わった。

「そのように眉間にしわを寄せられていては、せっかくのお美しい顔が台無しですよ」

嫌味が微塵も感じられない、にこやかな笑顔と穏やかな口調。しかしそれだけが理由とは考えられないほど、バケモノにしか見えなかったおばはんの汚い表情が見る見る穏やかになっていく。

「おー、うまいこと言うもんだ。眉間にしわ、とはねぇ」

「テン。随分と感心してるけど、どういうことなんだ？」

「眉間にしわがあるから見てください、なんてのは口実だよ。キリヤが鏡で見せたかったのは、ばばぁ自身の顔だ。誰だって自分のことは見えねぇ。どれだけ醜い顔で嫌なことを言ってるかわかんねぇんだ。だが鏡を見ればどうだ？　自分の醜さを直視できる。で、自

らのそんな姿が恥ずかしくなって表情を緩めちまうわけだ」

キリヤのほうを見る。「おお、美しい！　失礼ながら、もう少し頬の力を抜かれてはどうでしょうか。きっとステキな笑顔になります。いえいえお世辞などではありませんよ」などと褒めちぎっていた。

「クレームの話はどこにいった？」

「表情が緩めば気も緩む。見てみ」

一通り褒め終わったあと、キリヤは言った。

「長々と失礼いたしました。それでは慎んでご意見を伺います」

「え、ああ、はい。ええと……」

一瞬前まで笑顔になっていた女性は完璧に怒りを忘れてしまったらしい。戸惑いつつも不満な点を述べ、キリヤはあくまで低姿勢のまま、やんわりと弁解、説明していく。それを遠目に見ながら、テンはうんうんと頷いていた。

「いくら向こうがクレームつけてきても、それに謝りっぱなしじゃいけねぇんだよな。いくら客が神様っつったって舐められたら終わりだ。言いなりにはなれねぇんだよなぁ」

「テン、なんだか経験者みたいだな」

「ん、よくいるんだよ。理不尽な親とかが職員室に電話かかってきたりすんだけどさ、こないだなんか『子供を夜２１時まで預かって

ほしい』なんつー無茶なこと言ってきてよ」

「へぇ、なんで？」

「なんでも両親とも仕事で遅くなるんだと。オレのカンだと、ぜってー仕事なんかじゃなくて飲み会かなんかだぜ」

「ほぅほぅ」

「ばばぁも気が強くてよ、『子供を預かるのがあなたたちの仕事でしょ！　一人くらい遅く見るのなんて簡単じゃない！』とか言うんだよ。そりゃ確かにそれが仕事だけどよ、それだけが仕事じゃねぇんだよな。でもそう答えてもわかってくれねぇんだよ。『少しくらい、いいじゃない！？』って聞く耳持たず」

「で、どうしたんだ？」

「どうしたもんかと思ってたら教頭が電話を代わってくれてな――」

『お電話代わりました。ふむ、ふむ、私どもにも他に仕事があるのですが……なるほど。わかりました』

教頭！？　てめぇ了承すんのか！　そう小声で訴えたが、教頭は目で制してきた。まだ続きがあったんだ。

『――それでは今度、うちの子供も預かっていただけますか？』

『はぁ！？』

電話に耳を近づけるまでもなくハッキリと聞こえてきたぜ、おばはんの声が。

『そんなことできるわけないでしょう!?　あたしには仕事があるのよ!』

『いつもそれで子供を育ててるんですから、一人くらい増えても簡単でしょう』

『あなた、本気で言ってるの?』

『少しくらい、いいじゃありませんか』

『無理に決まってるでしょう!　頭おかしいんじゃないの!?』

『はて。その無理に決まっていることを私どもに要請してきたのは奥様かと記憶していましたが?』

テンの話を聞き終わった僕は、失礼ながら笑ってしまった。

「はっはっは!　なにその奥さん、教頭が自分と同じこと言ってたのに気づかなかったのか?」

「おぅ。感情が高ぶってる人間は気づかねぇもんなんだよ、自分がどれだけ無茶を言ってるか、なんてな。そんなのを相手にするにはどうするか?　簡単だ、逆の立場にすればいい。もし自分がそれを言われたらどう思うか?」

「そこで初めて無理難題を口走ってることに気づくわけだな」

「さっきのキリヤだって似たようなことしてたんだ。鏡を見せて、どれだけ嫌な客なのか自覚させたわけだな」

「はぁー……うまいことやるもんだな」

「そう、うまいことババァの無茶をデストロイしたわけだ」

「てっきりババァを破壊するもんかと思ってた」

「それは犯罪だろ」

「正義かもよ」

「――おまたせいたしました！」

おっと、話し込んでいるうちに鍋が到着だ。って、あれ。結局おだしって注文したっけ？

「ウーロンだしとコーラだしです」

「マジか！？」

「冗談です。私のオススメで味噌豆乳だしと鶏塩コラーゲンだしにさせていただきました」

おお、丸いお鍋を二分するＳ字の仕切り、その両側にはなんとも美味しそうな匂いと湯気を上らせるおだしが。

「美味そうじゃねぇか！」

「さて、それではお肉のコース――――の前に。先ほどの話ですが」

「うん？」

「確かに感情が高ぶった人間は自身の痴態に気づかないものです。しかしそれはいつ何時、自分に起こるかわからないことなのですよ」

「確かに、な。オレたちも偉そうに他人のこと言ってるが、人間であることに変わりねぇし」

ま、それは仕方ない。仕方ないけど。

「心配すんな。おまえらは僕が見ててやる。変なこと言ってたらツッコんでやるから」

おばはんの説得は専門外だが、ツッコミならできる。そんな意を込めて言ったのだが。

「聞きましたかテンカさん。トメ君はあなたの全てが見たいそうです」

「キリヤの全裸も見たいらしいぞ」

「いやん」

「言ったそばから変なこと抜かしてんじゃねぇ！！」

僕らが阿呆な話で笑ってた、そのとき。

ひらひらと舞い落ちる、一枚の紙が。

「なんだ、これ。天井から降ってきたのか？」

なんとなくキャッチ。紙面を見る。

『俺様も見て』

「……父さん？　なにしてんだこの人」

「トメ君のお父様といえば、忍者で有名な？」

「大方、父の日に何もしなかったんじゃねぇのか」

あ、それだ。

もう一枚降ってきた。

『俺様も見て！！』

「二回も言うな！」

「あのよ、トメ。たまにはオレがツッコんでいいか？」

「どうぞ」

「見てほしいなら出てこいや！」

シュバッ！

「あ、逃げた」

「そして結局、父ではなくオレに奢るトメでしたとさ」

「ひどい男ですね、トメ君」

「……自覚した。気をつける」

みんなも自分がひどいことを言ってないか、気をつけよう、な？

## カカの天下７７１「自身の振り見て我が不利直せ」（後書き）

サブタイトルは誤字じゃありません、はい。

ちょっと自分の経験とか参考にした話書いてみたら思いのほか長めになりました。

意味不明なことをまくし立てる人はたまにいますが、馬鹿にするだけでなく「ああならないように」と気をつけたいものです。

ちなみに父の日は本当に忘れていました。

## カカの天下772「やきもきサエちゃん」

こんにちは、サエですー。最近は黒いことしてないって評判な私ですー。そうと見せかけて結構してるんですよー？　今からだって自分の部屋で、一人で……ふふー。

さてさてー、紅茶でも飲みながらパコちゃん起動です。いつか壊れかけましたけど、私が泣き出したらお母さんがアレをアアしてアアァー！　って直してくれましたー。そんなわけで、今日もよろしくねパコちゃん。あ紅茶キーボードにこぼした。

「……ぅー」

キーの隙間にまで紅茶がー！　うう、隙間が小さくて直接は拭けないよぅ。

「こういうときは……あー、あったあった」

机から取り出したのは細いはさみ。この前も牛乳こぼしたんだけど、そしたら遊びにきてたサユカちゃんが上手いことキーボードのキーをはずして掃除してくれたんだよねー。こうやって、キー同士の隙間にはさみの先を入れて、はずしたいキーの角に当てて、てこの原理でぐいっとー！　あ腕が紅茶カップにぶつかった。

「またこぼしたー！！」

ますますキーボードが濡れ濡れに。私はちょっと泣きそうになりながらカップを離れた位置へ移動。我慢我慢、これは私が悪い。すぐに対処できなかった私が悪いの。だから我慢なの。

自分にそう言い聞かせながら、私はもう一度キーをはずす作業に戻った。はさみの先を当てて、ぐいっとー、えい！

パチン！　やた、キーの上蓋がはずれたー！　勢いよくはずれて飛んだー！　離れたところに置いた紅茶の中にポチャンと落ちたー！

「にゃうー！！」

あんまりな事態に思わず鳴いた。私なにか神様に怒られるような悪いことしたっけー？　私のためになることばっかりしてるのにー。

「ぅー、キーを上から指でしっかり押さえて、てこの原理で」

紅茶から取り出したキーを念入りに拭いた後、ぶつぶつ言いながらも次のキーを慎重にはずす。パチっとなー。うん、今度はうまくはずせた。この調子で……

「おっと。ふふ、これは失敗しないよー」

私はキーの配列なんてわからないからね、ちゃんと離れたところに、外した順番と同じ形に並べておかないと。今日のパターンだと……全部キーを外して並べ終わった辺りで手が滑ってばら撒いて、どこがどのキーかわからなくなるオチだよね。きっとそうだ。だから気をつけないとー。

「……よし、外し終わったー。あとはティッシュで水気を拭いてー」

ボードを拭くときは手が滑って弾け飛ばないように。キーを拭くときは腕が滑って並べたキーをふっ飛ばさないように気をつけなが

ら拭き拭き。私、そんなに色んなもの飛ばすほどパワフルじゃないはずなんだけどなー。こういうのは不器用、というより、おっちょこちょいなんだよねー。

「よし、拭き終わったー！」

あとは元の位置にキーをはめて戻すだけ！

「待っててねパコちゃん。待ってるんだよ、舞っちゃだめだよー」

さっきのキーみたいに踊りださなくていいからねー？

声をかけながらもそーっと、そーっとキーを戻していく。パチン、パチン、と順調に作業が進み……やがて並べたキーを全部つけ終わった。懸念した失敗はなかったよー。配列に間違いはないはずだし。やったやったー。あれキーが一つ足りない。

「なんでー！？」

嘆いてもないものはない。外して並べて、外して並べて、って繰り返してただけなのに、なんでなくなるんだろー。机の下も周りも、いくら探しても見つからない。

「うー、どこだろー。ぅー。あ、総理大臣と官房長官。ここのキーしらない？」

ニャー、と答える二匹のネコはわかってるんだか、わかってないんだか……あれ。そういえばこの二匹、いつの間に。

「……もしかして、キー食べた？」

ふるふるふる、と首を横に振る二匹。

「そんなに可愛く揃えてもダメ。本当に食べてない？」

またもふるふる首を振る二匹。

「……本当かぁ」

あ総理大臣げっぷした。

「ぼでぃーぶろー！」

「ぐえ！」

大臣のお腹に拳がクリーンヒット。でも吐き出さないかぁ。じゃあ本当に食べてないのかな。そういえばさっきご飯の時間だったし。

「……あ、ごめんね大臣」

大臣はすんごくビックリした顔でこっちを見ている。私が予想外な行動に出たせいだと思う。予想外、だよねー？　うん、私らしくない。カカちゃんの影響を受けてきたかな。気をつけよーっと。

「ところで大臣。今、人間みたいな声出さなかった？　気のせい？」

長官も一緒にうんうん頷いてる。やっぱ気のせいか。

「どうしよー、キーどこー？　キーキーキー」

さっき探したところをもう一度探す。でもない。どれだけ探しても見つからない。

むー、仕方ない。このまま上蓋がないままだったら壊れそうだし、セロハンテープでも貼って塞いでおこっと。まったくもー、本当にどこいったんだろー。私はぼやきながら机の引き出しを開けた。セロハンテープは、っとー。

ねぇキー。なんでそこにいるのん？

「……ミステリィ」

どこをどうして机の中に移動したのかは全くわからないけど、とにかく見つかってよかった。私は安堵しながら最後のキーを空いている位置に戻した。パチン！

「あ上下逆だ」

んっとにもー！！

はい、ただそれだけの話ですー。

## カカの天下772「やきもきサエちゃん」（後書き）

何かこぼして、キーが飛んで、着水したりして、キーがなくなって、机の中で見つかる。

実話です。

私の。

昨日の。

# カカの天下773「甘いもの食べたい」

こんにちは、サエですー。

今日は学校の後、いつもどおりにカカちゃんサユカちゃんと遊びました。ナマコになって、とても楽しかったです。皆がナマコ王になれて満足したから解散となったのですが、ちょっと消しゴムがなくなっているのを思い出したので商店街へと足を延ばしました。

「……甘いもの食べたいなー」

今日はお母さんが遅く帰って来る日。できるだけ一緒にご飯を食べたい私としては待ってあげたい。でもお腹は空く。だからパフェでも食べてお母さんが来るまで辛抱したいところなんだけどー。

「あ、ファミレス東治」

ここもパフェとかおいてるんだよねー。でも……財布の中を見る。222円しかない。お小遣いはもらっているものの、何かあったときのために貯金してるから手持ちは少ないんだよねー。消しゴム買えればいいやーと思ってたし。でも甘いものが食べたい。

「おー」

なんとなしに店内を覗いたそのとき、私はいいものを発見した。

「いらっしゃいませ！」

そして躊躇なく来店する私。

「おやおやサエちゃん、こんにちは」

「こんにちはーキリヤさん」

かけもちバイトを増やしたらしいってトメお兄さんから聞いてたけど、さすがにここのシフトもしっかり入ってるみたいだねー。

「お席は……」

「あそこ」

「ですよね」

キリヤは苦笑しながらも案内してくれた。席の前まで来ると「ではごゆっくり」と残してそそくさと去っていく。

そして、その席には――そんなキリヤの後姿を憮然とした表情で睨んでいるユカさんが。ね？　色んな意味でいい者でしょー。

「ご一緒していいですかー？」

「……へ！？　あ、ああ。君はたしか、カカちゃんのお友達？」

お花見のときくらいしかまともに喋ってなかったけど、覚えていてくれたようでよかったー。

「挨拶が遅れたわね。こんにちは」

「こんにちはー」

意外と礼儀正しい。

「何か飲む？」

「お金ないんですよー」

「子供から取ろうなんて思ってないわよ。好きなの言いなさいな」

……トメお兄さん以外にはホント優しいなーこの人。

「バナナジュースがいいです」

「了解、押すわよ」

ベルのボタンを鳴らすと、すぐに店員さんが来てくれる。

「ご注文は？」

「……バナナジュース一つ」

ただしキリヤじゃなかった。ユカさんは不満そうに唇を尖らせながらも注文してくれる。

店員さんが去ってから、私は思ったことをそのまま口にした。

「なるほどー。勇気を出して彼氏さんが働いている店に来たものの、肝心の彼氏さんが構ってくれないものだから不満が満々でー、でもせっかく来たからには構ってもらわないと気が済まないっていう意地でここにいる感じですかー？」

「なんでわかるのよ！？」

わかりやすい。

「なに。もしかしてあなた、子供ながらに恋愛しまくってるタイプ？」

恋愛に敏感だからわかったのかーと言いたいみたい。でも確かに最近はそういうマセてる子が多いって聞くね。小学生なのに化粧してる子とか。

「そうとまでは言わないけどー、私の主観でよければアドバイスくらいはできると思うよー」

お母さん直伝、相手から話を聞きだすときに常套句。『私の主観でよければ』というのがポイントだ。だって主観なんだから。あくまで思ったことをアドバイスっぽく言えばいい。

「……恋愛、詳しいの？」

私は早くも届いたバナナジュースに口をつけ、とろけそうになるほっぺを支えながら幸せな甘みを堪能して……やがて返事をした。

「運」

「変わった発音をするのね」

うん、とは言ってないよ。肯定する返事なんてしてないよ。だから嘘なんてついてないよ。大丈夫。恋愛話でしょ？　少女漫画いっ

ぱい読んでるから。大丈夫。

「じゃあ相談してみようかしら。あの人……なんでワタシに構ってくれないのかしら」

「それを説明するにはチョコレートパフェが必要ですねー」

そんなわけで注文され、やってきましたチョコレートパフェ。フルーツいっぱいにチョコソースたっぷり、おいしそー！！

「たとえばですねー、こうやって、もぐもぐ」

さっきのバナナジュースもよかったけど、念願のパフェを食べることができて私の幸せパラメータは最高潮に達していた。

「こんな感じで、上からどんどん食べていくでしょー？　これもたしかに美味しいんですけど、ここ！　一番下、チョコソースが溜まりに溜まった底の部分、これが一番美味しいんです」

「つまり？」

「最後に一番美味しい思いをすれば、人は満足できるんですよー。それまで苦労したなら、なおのこと。だからユカさんも、こんな風にもやもやした末にキリヤさんが抱きしめてくれたら、すごく満足できるんじゃないかとー。きっとそういう作戦なんですよ」

「なるほど……そんなようなことも、前に、あったような気が」

あったんだ。やっぱりキリヤ、本気の恋愛となると上手くできないとか嘘でしょー。

「でも、だからって放っておかれるのは納得いかないんだけど」

「それはですねー、ユカさんに足りないものがあるからですよー」

「それは何？」

「それを説明するにはいちごクレープが必要ですー」

そしてまたまたやってきました、クリームといちごソースを惜しげもなく使いまくった甘々しさ絶好調のクレープが！　んー、クリームの甘みといちごの酸味、そしてクレープ生地の触感がたまらないー！

「ユカさんにはですねー、このクレープのような、包み込む優しさが足りないんですよー」

「た、足りないかしら」

「はい。なんだか包むというよりズバッと覆いかぶさるような勢いに見えますー」

「そうなのかしら……」

余裕が大事なんだよねー、余裕が。全部少女漫画の受け売りだけど。それにしてもクレープおいしー。

「それで、ワタシはこれからどうすればいいのかしら!?」

「んー」

「ねぇ、相談に乗ってよ」

もうお腹いっぱいなんだけどなー。

「えーと……じゃあ、あれです」

「あれ？」

「持ち帰り用のサンドイッチです」

後で食べよう。

「はい、買ったわよ。これがどうなの？」

「三度以上アタックすればいいと思いますー」

「……ダジャレ？」

「そこまですればきっと、キリヤもお持ち帰りしてくれますよー」

「……なにを」

「ユカさんを」

あ、顔が沸騰した。

「べ、別にそこまでしてほしいわけじゃないのよ！！　ないんだからね！　だから帰るわ！」

これが証拠と言わんばかりの勢いで逃げ去っていくユカさん。うーん、誰かさんを見てるような気分だ。なんだかいつも一緒にいる誰かさんを。

「やれやれ、帰してしまいましたか」

「あ、キリヤ」

今の今までこっちのテーブルに近づきもしなかったキリヤが、いつの間にか隣に立っていた。

「せっかく焦らしに焦らして最後に抱きしめてあげようと思ってましたのに」

「……本当にそうするつもりだったんだー」

「はっはっは。さてサエちゃん？　これは当店からのサービスです」

「カフェオレ？」

「白と黒が混ざり合って、最後にはやっぱり黒くなる。少し甘いけど、少し苦い。サエちゃんみたいでしょう？」

「……むー」

反論できない。やっぱりできる大人は手ごわいなー。

まぁいいや。美味しい思いできたし。ユカさんの悩みもちゃんと解決したし。

「あ、お会計」

「すごい勢いで逃げながらもユカさんがちゃんと払っていきましたよ」

やっぱり律儀だあの人。

うーん、それにしても。

カフェオレおいし。

あ、消しゴム買わないと。

## カカの天下773「甘いもの食べたい」（後書き）

最近は安定していたのですが、なんか忙しくなってきたので更新遅れてきました。申し訳ない。

そのくせサエちゃん書くと文字量が多めになってしまうから困る。愛だ。

パフェ、クレープ、バナナジュース……ほしい。今すぐ！（いま仕事の休憩中

## カカの天下７７４「蒸し者の詰め合わせ」

朝。起きました。トメです。

さすがは梅雨。湿度が半端ないので、ものっすご暑いです。ベッドから動きたくありません。でも動かないと。朝ご飯の支度をしないと。

「あと十秒だけ、ジッとしたら起きよう……」

説明しよう。これは自分に制限を設けることで、だらけきった心を奮いたたせる画期的な方法なのだ！　１０、９、８、７――

「ぐう」

十秒も耐えられなかった。だって暑いもん。だるいもん。

起きました。カカです。

「……蒸し料理」

なんとなくそんな言葉が出てきた。

「あちー」

ベッドの布団があまりに暑いので、床に落ちてみる。

「あ、ちょっとちべたい」

床のほうがひんやりしてる。でもまだ暑い。

「んぅ、んぅ」

もっと涼しい場所を求めて、ずりずりと身体を這って移動。たまにゴロゴロ転がって移動。

やがて、涼しい場所を見つけた。台所、冷蔵庫だ。

「開けるとひんやりー」

買い物してないのか、中にはほとんど何も入っていなかった。じゃあ私が入ろう。

パタン。

起きました。サユカです。

暑いです。熱いです。たったいままでトメさんとちゅーする夢を見てました。いつも見てます。

「……もっかい寝るわっ」

そしてもう一回、同じ夢をみるのよっ！

こんなときのために、目覚ましは三度に分けて鳴るようにしてあ

るわ。わたしったら策士ねっ！

「うん……た、タケダが……タケダがわんだほー……い、いやぁ……」

次はなぜか悪夢だった。暑苦しいタケダがわんだほー。最悪。呪われてしまえ。

起きました。テンカです。

「さみぃ！！」

開口一番、叫びました。

「寒い寒い寒い寒い！　寒いし！　冷たいし！　凍えるし！　アイス！　ブリザード！　出でよ北極！！」

力いっぱい、叫びました。

「やっぱダメだ」

暑いもんは暑い。誤魔化しきれねぇ。

「ビール！！」

飲みてぇ。

起きました。キリヤです。

カーテンを開けます。

「はっはっは。いい朝ですね」

今日も一日、頑張りましょう。暑さ？　そんなもの、眠る前に水分補給さえ怠らなければどうということはありませんよ。はっはっは。さぁ仕事を頑張りましょう。

起きました。ユカです。

「……すずしー」

病室は冷房がきいてていいわね。

起きました。タケダです。

「うむ、爽快な目覚めだ！」

やはりクーラーで除湿したおかげだな！　そう思った、そのとき。

「ぐあああ！」

なぜかクーラーがはがれて落ちてきた。俺の上に。

「つ、潰される……なぜだ、なぜこんなことに。まるで俺を恨む世界のみんなが仕組んだかのような不幸……」

なぜだろう、その通りのような気がした。

「とにかく誰か助けろ！」

暑いので誰も起きていなかった。

起きました、サエですー。

「……んー」

目をしょぼしょぼ擦りながらベッドの周りを見渡します。なぜか布団は廊下まで飛んでます。枕は机の上です。なんでしょーこれ。暑すぎて投げまくってしまったんでしょうか。

「総理大臣のせいだー。わるいこー」

適当に他人のせいにして納得。

「あちゅいー」

おっけー。もっかい寝ゆー。ぐー。

起きました、サカイですー。

隣にはサエはいません。暑いから一緒に寝るのは嫌、なんだそうです。

そんな私を慰めるかのように総理大臣や官房長官、ラスカルが一緒に寝ようとしてくれましたー。

「暑いから近寄るなー！」

どうせ暑いならサエがいいー！

起きました、ゆーたです。

いまだに鳴っている目覚ましに耳を済ませる。

『今すぐ起きなさーい！　今すぐ立ちなさーい！　そして顔を洗いなさーい！』

サカイミエ様の声です。

『さっさとしないと踏むよー』

サエ様の声です。

「いえ、むしろ踏んでください！！」

感極まって叫びました。おかげで目が覚めました。

「今日も素晴らしい朝だ！」

お二人の声を目覚まし時計に録音させていただいたおかげで、暑さも湿気もまったく気にならん！　こうなれば絶対に俺のほうが暑苦しいからな！　ふはははは！

「よし、顔を洗おう！」

起きました、ニシカワです。

「なんで東から昇る太陽にここまで苦しめられないといけないんだ」

でもいずれ西に沈むから許す。あー暑いな、それにしても。

起きました、アヤです。

普通に愚痴りながら、普通にゆっくり起きて、普通に顔を洗って、普通に朝ごはんを食べて普通に慌てて学校へ向かいます。

普通で何が悪い！？

起きました。校長です、おほほ。

暑い？　ええ、暑いですね。

私が起きて仕事を始めた辺りの時間はまだ涼しかったのですが。外？　もちろん暗かったですよ。おほほ。さて、次のお仕事は……

起きました、サラです。

「暑いからって、あっちゃんじゃないですよ……サラさんですよ……」

「お姉様、何を仰っているのですか？」

「えへへー」

「あ、もう！　せっかく起きたのにベッドに倒れないでください！朝ご飯ができてますよ！」

夏用のお布団きもちいー！　さらりとした感触がー。えへへー。

「ふとん姉様！」

「サラですってば！！」

起きてます、お姉様と違って。イチョウです。

いくら暑くても頑張れば起きられるものなのです。今日はわたく

しが朝食当番でしたし。

そう、十回くらい目覚ましを鳴らせばいくらなんでも起きるのです。

「お姉様！　起きてください！」

「あと五本！」

「何がですか！？」

……お姉様を起こす作業だけでも、重労働で目が覚める気もしますが。

起きました、インドことノゾミです。

「今日のねかせたカレーは……」

てってってーと台所へ向かいます。朝ご飯のカレーが楽しみなので、暑さなんて気になりません。むしろ暑いときのカレーも乙なのです。

「の、ノゾミ？」

「お母さん、おはよう」

「私、もうカレーは飽き――」

「だめ」

「ここまで暑いのにカレーは嫌――」

「だめ」

さ、カレーカレー。

起きました。トメ父です。

「……父の日」

「パパ君、もう過ぎてるよ」

「……くすん」

「はいはい、こっちいらっしゃいな」

いろんな意味で熱いです。

起きました、ユイナです。

いま私の胸には、年がいもなく泣きついているパパ君が。

正直、ものすごく暑苦しい。

でも我慢です。それが愛ですから。

起きました。クララです！！

「学校も仕事もないので、寝ます！！」

だって暑いですから！　地下水吸収、ごっくんごっくん！　っぷはー！

おきました、タマでしゅ。

「しゅー」

「はい、扇いでますよ」

「しゅー」

「はい、もっと扇ぎますよ」

すずしいでしゅ。

起きてます、シューです。

うちわを扇ぐために寝れません。

起きた、カツコだ！

「おし、今日も一日暴れるかー！！」

暑さ？　え。今日って暑いの？

今度こそ本当に起きました。トメです。

「朝ごはん作ろ……」

あーでも買い物してなかったよなぁ。そう思いながら冷蔵庫を開けた。

「……」

なんかいた。

とりあえず閉めた。

「今日はパンでいいや」

暑くて食欲なくても、朝ご飯はしっかり食べましょう。

## カカの天下７７４「蒸し者の詰め合わせ」（後書き）

蒸し蒸し、どうにも寝苦しい日が続いてるのでこんなん書きました。

次はカカラジ。そしてあと二話で７７７話です。ラッキー７です。ぜひともラッキーな話を書こうと思いつつ、実は一番悩んでいるのは７７６話だったりする私です。何書こう。

# カカの天下775「第二十七回、カカラジ！」

『睫毛火射夢』さんからいただきました。

――もしも、ゴッキーが白かったら。

「なんで私を見るのー？」

「もしも黒いのが白かったら。小枝ちゃんにぴったりじゃないか」

「留お兄さんなんか嫌いー」

「ふはははは、サエちゃんに嫌われてやんのざまぁざまぁ！　なんて悪いこと言ってても本当は良い子ですよ私はーえへへ蒸し蒸しジメジメした梅雨をのりきり、カラッと晴れる夏へとレッツゴーと気合も新たにどんどこどんどこ私パワーを発揮しようとしまくっている香加です！！」

「キャラ人気の上位になってからずっとこんな調子だよ……あぁ、留です」

「ゲストの小枝ですー」

それ見たことか！　最近ゲストが来ない来ないとブーブー言うから小枝ちゃんが来ちゃったじゃないか！　嬉しいぞ！　作者です。

「さてさてー。前回の人気投票では見事に笠原兄妹がトップを飾ったわけですがー」

「いやぁ、照れるね！」

「恐縮です」

「ええ、とても喜ばしいことだと思いますー」

「小枝ちゃん、ありがとう！　私はね、やる気満々だよ！　２６．３回は喜び疲れてセーブしてたけど、この私パワーで今回のカカラジは夏真っ盛りに燃え上がるんだよ！」

「まぁ、頑張っていくよ」

留も香加もやる気満々。小枝ちゃんはニコニコと二人を見つめ、

「お二人とも、素晴らしいですー！　ですからもう満足ですよね？」

スイッチを押しました。留と香加の立っていた床がなくなり、二人はどこかへ落ちていきました。

「え、私パワー……」

そんな香加の言葉だけを残して。

「ふふふー、梅雨って暑いんですよー。蒸し蒸しなんですよー。むわむわするんですよー。ただでさえだるいのに夏真っ盛りにされると困るんですよー。というわけで」

「これからはわたしたち、沙由歌と小枝の二人でカカラジを進めていきますっ！」

どこからか登場した沙由歌ちゃん。計画的犯行です。

「えーこの番組はっ、ネット小説『カカの天下』を盛り上げるため、ぶっちゃけトークや作者の本音と建前を交えながら読者さんの投稿をアレコレうふふってするラジオ的お話です。留さんと香加はもう関係ないのでお気をつけくださいっ」

「よく言えましたー」

「……ねぇ小枝すけ。原稿通りに呼んだけど、この、留さんだけでも関係ありに」

「ＣＭですー」

「聞いてよっ！！」

ＣＭへ。

……あれ。ＣＭは？

「ＣＭがあけてー！」

「あけてないわよっ！？」

「まーまー焦らずに。ちゃんと考えてありますからー」

確かに考えてはいるものの、現在小枝ちゃんは作者の思惑を先回りして進んでいます。あーびっくりした。

「作者の手助けをしてこその登場人物ですよー。というわけで、まずはふつおたですー」

「あ、わたし読むわっ！　えっと、『サイボーグ』さんからいただきました」

ふつおたと言えばこの人。さぁ内容は？

『ワタシ、サイボーグハ、アルヒトニ、ショウブヲモウシコミマス。

アルヒトトハ……

ツヅク！』

「続くなよっ！！」

珍しく普通じゃありませんねぇ。そこはかとなく普通ではありますけど。

「その相手が私じゃないことを祈るよー。もちろん『サイボーグ』さんのために。さてさて、次のおたよりは」

小枝ちゃんと沙由歌ちゃんの立っていた床が突然消えました。哀れ、二人は落とし穴の底へ。

「はっはっは、選手交代です！」

「き、桐谷！　いいの？　こんなことして。ワタシ知らないからね」

「結花、大丈夫です。全ては録音スタジオに落とし穴を作った人の責任です」

えぇと、まぁそんなわけで更なるゲストのお二人が登場！　最近の話題沸騰中カップル、桐谷と結花です！

「カップルじゃないわよ、こんなやつ」

「おや、ではバカップルですか？」

「違うわよ！」

「しかし私たちは付き合っているのでは？」

「そ、そ、そう、だけど、そうでも、ないというか」

「恥ずかしいんでしょう？　ほら、手を握ってあげますから」

「……！　あーあーそうよ恥ずかしいのよ！　別に付き合うのはいいわよ！　でもなんでそれを世間一般の皆様に晒さなきゃいけないのよ！　ひっそりでいいじゃないの！　カップル宣言なんて公開処刑と一緒よ！　外で手を握るのなんて、殺人犯の股間を握るのよりも危険な行為だわ！」

「まぁまぁ、結花さん落ち着いて」

「興奮させてるのは誰よ！？」

「確かに殺人犯の股間を握れば興奮もするでしょう」

「話を聞け！！」

「はいはい、結花さん。あとで部屋でいくらでも聞きますから」

「う……」

「あ、と、で」

「……」

「ね？」

「……うん」

さっさと部屋でもどこでも行きやがれ。

「はっはっは！　嫉妬は見苦しいですよ」

うるさい！　私にだって相手くらいいるもんよ！　ってそんなことはいいから続き！

「えーと、カカラジネーム『さようなら、私のキリヤ　さん』からいただきました」

「なんですって！？」

『さようなら私のキリヤ……

私のモノじゃないキリヤなんて、もうキリヤじゃないわ！

あぁ、さようなら私のキリヤ。

仕方ないからどこの馬の骨ともわからない泥棒猫との恋を、陰ながら応援したげるわ！

あぁ、まだ言いたいことはいっぱいあるけど、これ以上一緒にいたら私はきっと自制心がきかなくなってしまう……だからもうお別れするわ。

最後は笑顔でお別れしたいわね？

そういえば一つ言い忘れてたことがあったわね。

ちょうどいいし、言い残して私は消えるわ。

じゃぁ、最後の言葉…ちゃんと覚えといてね？

たとえ「どこの馬の骨ともわからない泥棒猫」の家にチョコにみせかけた時限爆弾（開けたら姉が入ってるのよ……爆発はしないけど、姉が暴れだすわ）が送られてきても、私じゃないわよ。タ・ブ・ン♪（ここで最大限の笑み）

……なんて微妙なふつおたを作ってしまったんだろう。

もし時間があったら改訂版を作ります。

これでカカラジに採用されなかったら結構ショックです……、

恥ずかしいだけですもん！（中身は常識人です、たぶん）

あぁ、カカラジネーム＝ペンネームです。

できればゲストにキリヤが来てくれることを望みます（だって張合いがないですし）。

感想欄などでのＨＮは感想欄に一回出没したので暇だったら探してみてください（ヒント・インパクトを連呼していました）。

ではまた感想欄で会えたら会いたいです。

カカバイ＜終＞』

全部載せちゃいました。てへ。

「桐谷！　どういうこと！！　この女は誰！？」

「はっはっは！　誰と聞かれましても名前を伏せられてますし！」

「この人だったのね、タケダ医院にあの爆弾を送ってきたのは！　大騒ぎになったらしいわよ！　ワタシが留守のときに院長が開いたって聞いたから、あまり知らないけど！」

まぁこの方が気になるなら探してみてください。「こういうのはインパクトが大事、名前が地味な分、コメント内容にインパクトを持たせよう」と、そんな感じに言って頑張ってた誰かさんです。たしか。

「探すわ！　いくわよ桐谷」

「はい？　しかしカカラジが」

「あーあー聞こえない聞こえない！」

あらら、行っちゃいました。読者の皆さんも気が向いたら探してみてください。あ、ご本人さん恥ずかしい？　まぁウチのラジオに投稿した時点で諦めもついてるでしょう。あはは。

さて、パーソナリティがいなくなってしまいましたが。

「仕方ありません。クララ出現です！」

「タマしゅっちゅでしゅ！！」

おっと、ここに来て人気上昇中のコンビが。あれ、漢字表記じゃない？

「本編からタマを連れてきたです！」

あぁ、またこの子は不思議キャラを使って無茶を……

「ところで今回はＣＭ祭りです！」

あ、それまだ内緒だったのに！

「クララしょっくです！」

まぁいいや。じゃあ始めちゃいましょう。そのためにもしも枠を

減らしたんですし。

えー、最近ですね。ひじょーにＣＭ投稿が多いです。それというのも誰かさんが『カカ天ムービーズランキング！』とかいうのを感想欄に載せてから。なんかこーアイデアに覚えのある人が我よ我よと映画ＣＭ載せてくれまして。ここはもーランキングやっちゃうべきだと判断しました。

「おお、また投票するのですか！？」

「しゅるのでしゅか！？」

や、集計が面倒くさいんで私の独断と偏見でランクを決めます。順位が上がるにつれて私のアレンジが入り、ベスト３に入れば実際に話として書きます。

「それでは早速、紹介するです！」

「クララせっかちでしゅ」

ええ本当に。まぁ問題ないんでどぞ。

「それでは１５位から！　『水門』さんからいただいたです！」

ぶっちゃけほとんどこの人が書いたやつばっかなんだけどね、映画のは。

「ひいきでしゅ？」

いえいえ、ちゃんと面白いから採用したまでです。実力です。沢

山送ってくださる方もいますし、一通だけ送ってくださる方もいますが、ユーモアあるなぁと私が思ったものを紹介させていただいてます。ではではカカ天ムービーズランキング１５位！　どうぞ。

そのノートに名前と変な事を書かれた者は必ず変な行動をしてしまう……逆に言えば、書いた内容が変であれば他者の意志を思い通りに出来るノートでもある。

ひょんな事から、貧乏神「シューク」が持ってたノートを強奪した天災少女「カカ」は、早速そのノートを使い腹黒少女「サエ」を嫁にしたが、もとより相思相愛だった為に意味が無かった。

「サエたん、もきゅーん」

「カカたん、もきゅーん」

更に変だったのは言うまでもない。

だがある日、ノートの秘密を知ったエロ少女「サユカ」が己の欲望（皆さんの想像の通りです）を叶えるべく、カカにノート争奪戦を挑む。

「もきゅーん勝負よっ！」

「も、もきゅ……！」

戦う二人はまだ知らない、全てを知り、その上で事を楽しむ黒幕（これも皆さんの予想通りです）がいることを。

『でゅみゅノート』

公開した方がいいですか！？

――カット。

「しなくていいです！」

きっぱり言いましたねクララちゃん。

「だってシューク見たくないでしゅ」

「クララ同意です！」

まー誰も貧乏神なんか見たくありませんね。

「あとなんか、もきゅノートでもいいような気もしたです」

「もきゅもきゅでしゅ」

変なセリフで埋まる前に次の１４位にいきましょう。あ、ちなみにカットっていうのは、映画予告と私たちの雑談が混じりそうだったので適当につけてます。お気になさらず。

ごめんねクララちゃん、次どぞ。

「はい！　『紫神川悠』さんからいただきましたです！」

「女の道場破りが中国全土の道場を荒らし回っている」

田舎町でほそぼそとカンフー道場を営むトメカカ兄妹のもとに不穏な噂が流れ着いた。

こんな貧乏道場に来るわけない、と笑い飛ばすカカ達は知らなかった。道場破りの最終目的がこのカカ天道場であることを……。

なんか色々反則っぽい、母親譲りの暗黒拳『腹黒拳』サエ。

惚れれば惚れるほど強くなる、天性の資質『お色拳』サユカ。

道場破りカツコの襲来を迎え撃つカカと仲間達だったが、カツコの『化姉拳』には歯が立たない。

次々と仲間が倒れていくなか、カカに流れる伝説の拳法の血が目覚める！

「でゅみゅみゅみゅー！」

本格カンフーアクション！　姉だけワイヤー無し！　なんでかフルボイス広東語！『燃えよカカ天！』

近日……後悔？

※作者が広東語を書けないため、アレンジができませんでした。

――カット。

「広東語書けないのですか！　クララ幻滅です」

書ける人いるなら連れて来い。

「次は第１３位でしゅ。『水門』さんからもらったでしゅ」

時は戦国時代……

突如戦場に現れたのは、気合いと気分でタイムスリップして来た化け物『カツコ』だった。

妹に瓜二つな『カカ姫』たっての願いにより、晩御飯にやたらキュウリの漬物を出す、ツッコミハーレム暴君『豊トメ秀吉』をデストロイする為に、（周りにとって）死地に赴く！

果たしてカツコは恋獣『サユカン』が守護するトメを殺れるのか！？

トメはカツコのボケをツッコミ切れるのか！？

そしてカカは人気投票で一位になれるのか！？

サエちゃんはどこかにいないのか！？

いくら恋獣といっても濃い獣のカツコを相手にサユカンが抵抗できるのか！？

その結末は、水門が素ネタの映画をまだ観ていないからわからない……。

「き、貴様……化け物か！？」

「うん！」

「なぜ僕を狙う！？」

「気分」

「豊トメ秀吉様はわたしが守るわっ」

「気合ビーム発射」

「わたし死んだ」

「なんでそんな弱いの！？」

ハイスピードアクション化け物ムービー『ＡＮＥＭＯＮ』

ハイスピードなのは展開か、カツコの動きか。それとも見飽きる速度のことか。

そのうち公開するとかしないとか！！

――カット。

はい、タマさん感想は？

「おかーさんかこいー」

クララさん感想は？

「クララ尊敬です。クララもカツコみたいになりたいです」

こんなんは一匹いれば充分すぎます。さ、次は１２位ですね。

「あい！　『六連星』さんからもらいましたよ！」

な、なんと……

「お前はオレのモノだ」

あの二人が……

「テン……」

ついに……！

「もう誰にも渡さねぇ」

ゴールイン！？

「ビールに向かってなに囁いてんだよ」

「うるせぇ！文句があんならテメェが囁いてみろ！」

「なんで！？」

※コメディではありません。

トメとテンカ、二人の日常ストーリーをなんと映画化！

「あっ……テン！　いきなりどこ触ってんだよ！」

「いいじゃねぇかトメ」

「は、恥ずかしいだろ……」

「オレとトメの仲じゃねぇか」

「う……じゃあ……ちょっとだけだぞ？」

「あぁ」

ツゥ……。

「あっ……」

「トメ、お前……ココ、スゴイことになってるぞ？」

「う、うるさいな」

「お前……最後に掃除したのいつだよ？　ココのホコリすごいぞ？」

「最近忙しくて掃除するヒマなかったんだよ！」

「それにしたって」

「父さんの書斎だから別にいいんだよ。変な本しかないし」

「うお、ホコリよりこの本のほうがすげぇ！」

※コメディじゃありません。

そして、そんな二人を柱のウラからトテツもない形相で睨んでいる影が一つ……

「コノ怨ミ、ハラサデオクベキカ……ニクイ……ニクイ……」

そして影の後ろにはなぜか倒れているカカとサエが……

「肉い」「肉いねー」

倒れていてもなんとなく元気そうな二人。

トメとテンカ、二人どうなってしまうのか！？　そしてカカとサエは無事なのか！？　サユカが両手に持っている凶器っぽいものは

なんなのか！

※アクションでもサスペンスでもありません。

「家政婦なわたしは見たわっ！！」

※なんかそれ系でもありません。

コメディ要素一切無し！

トメとテンカがおりなすハートフルラヴストーリー！

『トメのテンカ』

さぁ、ビールを持って映画館へ急げ！

「あ、ビールないや」

「えー！　びぃ～いぃ～るぅ～！」

提供　トメテン推進派委員会

――カット。ビールを持って映画館へ。最高ですね。

「作者の趣味ですね！」

「おさけは１４さいになってからっておかーさん言ってたでしゅ」

早い早い早い！　それ早いから！

「クララは大人だから飲めますですよ？　なにはともあれ次なのです！　第１１位、またもや『水門』さんからなのです」

『タケダ一少年の事件簿』

キャスト

探偵タケダ一：タケダ

助手トリオ：カカサエサユカ

容疑者Ａ：チェーンソウ持っててホッケーマスク付けてる人

容疑者Ｂ：帽子被ってて手に爪装着してる人

容疑者（本命）：ＡＮＥ

死体：シュー（やっぱりって思った人、手をあげ――あ、全員だこれ）

「さて、皆さんに集まって頂いたのは他でもない、彼を殺した犯人はこの中に」「タケダでいいじゃん」「えぇ！？」

「いやいやそんな」「お前が犯人かー！」「違ぁぁう！」

「そうじゃない！犯人はＡ――」「この人殺しっ！」「何故だあぁぁ！？」

（さぁ！　どれが誰のセリフでしょう！？）

果たしてタケダの運命は！　結局犯人は誰だって？　……タケダでよくね？

それではカカばい！

――カット。タケダでいいと思います。

「タケダでいいです！」

「タケダなんかどうでもいいでしゅ」

はい、満場一致でおめでとう。次いこか。

「第１０位！　やっぱり『水門』さんからでしゅ」

『でゅみゅみゅみゅう』

古来……神話の時代より、その言葉の意味は人類最大の謎とされてきた。

意味を知れば世界を征するとまで言われたその言葉は、片や覇者

の真名、片や混沌の呪文と、様々な憶測が流れたが…知識や技術が著しく発展した現代になっても解明されることはなかった。

だがある日、何の前触れも無く、何処にでもいる訳ねーだろとツッコみたい程に面白く、最強で、そして……変な少女「カカ」がその言葉と意味を何となく思い付く事になる。

それと同時期に、カカの親友「サエ」が率いる腹黒教団が動き出した。

あとなんか姉もぬるぬると動き出した。

だが、世界征服という野望と、親友を利用しているという罪悪感が、サエに重大な決断を迫る事になる。

あと姉はひたすらぬるぬるしていた。

友情をテーマとしたサスペンス・ミステリー。

『でゅみゅンチ・コード』

あと姉。

公開するとかしないとか！

――カット。だそうですが？

「タマ、感想を言うです！」

「でゅみゅみゅみゅうでしゅ」

「それしかないですね！」

あとぬるぬるです。はい、そんなわけでどんどん行きます。次なる第9位は？

「あーい、『雨天決行』さんからいただいたでしゅ」

「僕が君の兄さんだよ」

「チビッコのみんな、元気ぃ？お兄さんだよぉー」

「僕が君のお兄さんだよ……怯えてるんだね……大丈夫、怖くない……怖くない……」

突然現れた、ある少女の兄と名乗る男たち……

「――その口調が恐い」

ズドッ！（ボディーブローが入った音）

「ぐほぇ！　……怖く……ない……がくっ」

「お、俺が死んでも、第二、第三の兄が……」

「一発で三人を殴っただと？　バカな！　これは、飛天……ぐはっ

！」

彼らは、少女の兄なのか？

ありえない！

その少女の兄は……

あの人しかいない！

「トメ、呼んでるぞ？」

「あんな乱暴なやつ妹じゃない」

……たぶん！

カカ天・ザ・ムービー！

「カカの兄はトメしか？」

２０１０年春

ルシカ先生宅のテレビで公開！

……たぶん！

――カット。

今思ったけど、２０１０年って意外ともうすぐですね。

「たぶん！」

「たびゅん！」

たぶんが気に入ったみたいですね。

「とりあえずクララ恐いです」

確かに。いきなり自称お兄さん集団が登場すればそりゃ恐い。ホラー映画ですねコレきっと。

「こわいのヤでしゅ。次いくでしゅ。第８位は、またまた『水門』さんからでしゅ」

地元の海を渡り、自由過ぎる海賊生活を送る少女、『キャプテン・ジャック・カカロウ』

カカの嫁が人には言えない方法で手に入れた船「ブラックサーエ号」に乗り、今日も嫁とツッコミ二人を連れ回し遊びに出掛ける。

その行く手を阻むのは、カカ達の出席日数が足りなくて教頭にメッチャ怒られてる『テンカー・ジョーンズ』

缶ビール一本で買収された化け物を従え、カカ達の前に立ちはだ

かる！

　カカは勉強サボって遊ぶ為、テンカはデストロイを回避してゆっくり酒を飲む為、今！　駄目人間同士のバトルが始まる！

「サエちゃん、今日はなにして遊ぼっか」

「海賊だからー、お金を盗めばいいんじゃないかなー」

「おっけ！！」

「待て！　オレがいる限り、そんなことはさせねぇ！」

「む、テンカー・ジョーンズ！　なぜ私の邪魔をする！」

「教頭に怒られるからだ！　あと犯罪防止だ！　大体な、トメ！てめぇがいるならちゃんと教育せぇや！」

「海賊だし、いいんじゃないか？　まぁ固いこと言わずにテンも飲もうぜ」

「そだな」

「あ、あたしも飲む飲む」

「――と見せかけて確保だ！！」

「ふふー、実はそのビールの中には……」

「睡眠薬か！？」

「サエちゃんさすが！」

「うんにゃー、トメお兄さんのおしっこが」

「うぎゃあああああ！！　死ぬぅぅぅぅぅ！！」

「トメさんといえばわたしの出番ねっ！！」

「サユカちゃん配役あったっけ！？」

『パイレーツ・オブ・カカビアン』（この作品はフィクションです。カカ天メンバーはこんなに駄目ではありません。……多分。）

――カット。

「本編とあまり変わらないです」

いえいえ、ちゃんと非現実な設定もあるじゃないですか。

「おしっこでしゅか？」

……それは現実にありえなくないモンだから恐い。いや、多分やらないと思いますけど……いくらなんでも。

「簡単に言えばダメ人間戦争ですね！　次、第7位にいくです。同じく『水門』さんからです」

笠原家には、女優の母と忍者の父、ツッコミの長男、そして…二人の姉妹が住んでいました。

姉妹は、妹がまだ今よりも小さかった頃は、とても仲が良く、化け物な姉が使う姉拳法を妹に教えたりして楽しく暮らしておりました。

ですが、妹の「カカ」は大きくなるに連れ、喧嘩祭りで流血キャッホーな姉のカツコを避けるようになりました。

化け物な姉がヤバくて変だと思って来たからです。

これは……距離が開いてしまった姉妹の仲を力付くで縮めようとする姉の奮闘記。

「カカちゃーん、山ごもりしよ！」

「ヤ」

「カカちゃん、熊たおそ！」

「ヤ」

「か、カカちゃん。一緒に」

「ヤだってば！！　なんで変なことばっか言うの！」

「い、一緒にご飯食べようって言おうとしただけなのに……」

「……あ。そ、その、ごめ」

「さっき狩ってきた熊。美味しいよ？」

「やっぱヤだ！！」

「あたしの熊が食えんのか！？　それはクマった！！」

『カカのヤバイ姉ちゃん』

同時上映

『おっぱいカレー』

『ヤナツのオニオン』

どうぞお楽しみに。

――カット。

「やっぱ本編と変わらないです！」

そうかも。

「おかーさんかこいー」

怪物ってたまに格好よく見えますよね。はいはい次は6位ですよ。

「もう『水門』さんばっかでしゅ」

（あの某超有名名作ＢＧＭ演奏中）

三人の仲間と共に、世界中の富豪（特にタケダ辺り）を恐怖と笑いのどん底に突き落とす怪盗『カカン三世』

銃より言葉が百発百中一撃必殺なカカの相棒『サエ』

パンチなのに何故か斬れる斬鉄拳の使い手『アネモン』

必ず裏切るセクシー（笑）女泥棒『サユカ』

何やかんやで毎回敵役『トメ』

度々カカ達を追い詰めるＩＬＴＯ（アイラブトメお金）所属の銭無し警部こと『テンカ』

誰かと似ている設定の登場人物が、何と無く金持ち（タケダでいい？）（うん、いいよ）から財宝を盗んだり粛清したり、でゅみゅみゅみゅうしたりと大暴れなこちらの作品。

『カカン三世』

「タケダ、今回は何も盗まないよん」

「ま、待ってくれカカン君！　そしたら俺の出番が！！」

「元からないじゃないのー」

「さ、サエ君……相変わらず急所を撃つ言葉を」

「あたしが……切る！！」

「俺の出番をか！？」

「ちょっ！　わたしにも何か喋らせなさいよっ！」

「僕も――」

こんな感じで果敢に大暴れ！

くっ！　公開ネタが思い付かないっ。

――カット。

「見たいでしゅ！」

さすがお子様、ル○ンに目がありません。

「結局なにを盗むのか気になります！」

あなたの心です。

「なにとち狂ったこと言ってるですか？」

……言ってみたかったんだよぅ。大変なものを盗んでいったんだよぅ。

「第５位です！」

「水さんでしゅ」

「略したです！？」

『タマ』がさらわれた。

犯人は、不幸な出来事により強盗という無実の罪を着せられた二人組『ジョーイ＆マイケル』だ。

逃亡生活が続いたストレスも有り、人質として、道を爆走する一人の子供を誘拐してしまった。

その事件は、一通りしょっくを受け終わった『クララ』により、本物の強盗をデストロイしていたタマの母『カツコ』に伝えられた。

総理大臣と官房長官の情報ネットワークを活用し、タマの元へ急ぐ！

一方タマ達は、ジョーイ＆マイケルの小粋なジョークとタマの最

強のボケにより、今までのストレスを吹き飛ばす程愉快に意気投合していた。しかしツッコミがいない！　逃げる、三人は逃げる。

「ツッコミを手に入れるその日まで、捕ってたまるかデース！」

「たまるかでしゅ。タマだけに」

「ＨＡＨＡＨＡ！　おもしろすぎておならが出るぜ！」

これは、登場人物の意志が奇妙に擦れ違ったハートフル化け物コメディーで、元ネタの超大作映画とは何の関係もございません。

『タマルフィ』

公開したくても…公開出来ない事があるんです！

――カット。

なんかこれは、色々と発想が上手かったのであまりアレンジする気が起きませんでした。普通に上手いと思います。

「水ちゃんすごいでしゅ」

「この人書きすぎです！！」

クララちゃんや、それあまり褒め言葉に聞こえないから気をつけて。

「ウララ了解です！」

名前違う。

「クララうっかりです！　誤魔化すために第４位です！」

『おっぱいカレー』

十八禁！！

なので宣伝不能。

――カットォ！！

「終わりですか！？」

はい。なんせ十八禁ですから。

「これ、おいしいんでしゅか」

たぶん、きっと、おそらく。

「でもこれ、たしか元の宣伝には『いっぱいカレー』って書いてあったような気がするですよ？」

気のせいです。

「おっぱいがすきだからかえたんでしゅか？」

気のせいです！　次は第3位！　書き手はもちろん水ちゃん！

『ヤナツのオニオン』

友達がいないヤナツ君が、玉葱に名前付けてひたすら話し掛ける話。

公開決定！！

カット。はい、というわけで。もう忘れてるかもしれませんが、先に書いたとおりベスト3に入った映画は実際に書きます。もちろん長さはいじらせていただきますが。

「そんなに気に入ったですか？　これ」

はい、そりゃもう。びびびっときました。今度、ふと思いついたかのようにこの話を挟んでやります。

「どれだけヤナツが惨めになるか楽しみです！　では次、2位ですね」

2位と1位はありません。

「クララしょっくです！」

「タマおなかすいたでしゅ！」

一名変なのがいますが、それは置いといて。はい、今回は1位と2位は保留にしておきます。そして募集！　カカ天ムービーズ・ランキング企画！　1位と2位にふさわしい映画を作り、送ってください！　選考基準は面白いかどうか、上手いかどうか、ぶっとんでるかどうか。ともかく私の琴線に触れたら合格です。

投稿方法は感想欄でもメッセージ経由でもオッケーです。見事、1位と2位に輝いた作品は実際に書いちゃいます。どうぞ奮って投稿ください！

「クララも投稿していいですか？」

作品名は？

「タマです！」

……なんとも安直。それ故に見たい気もする。タマはどうですか？

「ねむいでしゅ」

マイペース全開ですね。

「クララ、タマを寝かせてきます！」

え、あ、行っちゃうの！？　おーい……二人そろってマイペースだなぁ。仕方ない、とりあえず進行を……えー、もう一つ企画っぽ

いものがあります。

イチョウの名前はなんにしよー企画！

とりあえず候補は上がったんで、皆さんにどれがいいかコメントしてもらって適当に決めたいと思います。あんまり集計とかする気はないんで、皆さんの感想見てなんとなくこれかなーってのを選びたいと思います。

候補は……『茜』『モミジ』『双葉』『秋葉』『千秋』『杏子』『直々（ママ）』『夜夏（ヤナツ）とあわせて朝夏（アサカ）』となっております。適当にコメントください。

それでは、ひと段落したのでムービー以外のＣＭをも一つ。

『カカ天読者諸君！！

ついに、７７７話まであと少しとなった。

これは、大いに祝わなくてはならない。

そこで、７７７話が掲載されてから２４時間以内に、面白いコメント付きお祝い感想を評価感想欄に書き込み、ルシカ先生とカカ天キャラ一同を祝福しよう！

感想欄常連はもちろん、カカ天中毒の者は皆、是非参加しましょう！！

以上です』

『若木瀬』さんからいただきました。なんだか恐縮です、ありがとうございます。

最近仕事が立て込んでるので、いつ更新する、という約束できませんが……賛同してくださる方がいたら、嬉しいなぁ。できるだけ早く更新するつもりではいるので、もしお暇で時間が合えば……書いてくれたら……私のやる気とか書く気がアップするかも？　や、それだけなんですけどね。

「はぁ……はぁ……やっと出てこられた」

「ひどい目にあったぞ……」

あ、香加と留。落とし穴から上がってきたんですね。

「カカラジは私の城！　こんな罠に負けてられないよ！」

もう終わるよ。

「香加しょっくです！！」

「おい作者、いくらなんでもそれはあんまり――」

はい留。これプレゼント。

「なんだこのはがき」

『単刀直入に言います！　テンカ先生と結婚しちまえ！　夢オチでも何でもいいからくっつけ！　さもないと、商店街で「ひどいわ！　トメ君、私の体だけが目当てだったのね！？」とメイド服着たゆーたに叫んでもらいます。サエちゃんも同じデザインの着てたよーって言ったら気持ち悪い位快く了承してくれました。以上です！』

「なんじゃこりゃあああああああ！！」

メイド服云々がひどすぎますねぇあっはっは！　さて、二人が気持ちよく黙ったところでコーナーのおさらい！

普通の質問受け付けます。ふつおたコーナー。

なんでも思いついたらどうぞ、自由枠コーナー。

どんな宣伝でも面白ければＯＫ！　ＣＭコーナー

ファンキーな脅迫状待ってます、脅迫状コーナー。

もしもな寸劇、見てみませんか？　もしもコーナー。

コメントなくても別にいいや、イチョウさんの名前を決めようコーナー。

１位と２位は誰の手で書かれる！？　カカ天ムービーズ・ランキングコーナー。

「ちょっと！　私にも喋らせなさ――」

映画館にカカラジチョーップ！！

「マジで終わりかー！？」

この番組は、団長及び団員募集中のＫ（カカ天を）Ｏ（大いに盛り上げるための）Ｋ（カカ天中毒者の）団副々々団長若木瀬と、なんかパチンコ店の提供でお送りしました。なんかラッキーセブン近いんで。

# カカの天下７７５「第二十七回、カカラジ！」（後書き）

どぅあー、長かったぁ。

あぃ、更新二日も遅れました。いま１６連勤とかしてて余裕なかったんです、勘弁してください＾＾；

あ、ちゃんと元気ですんで大丈夫ですよ。蒸し蒸ししてるとちょっと疲れてるだけでメッチャ寝すぎちゃうんですよねぇ。それで書く暇なくなったわけです。お恥ずかしい。

さてさて内容ですが。感想欄であれだけ頑張られたら載せないわけにはいかないと書いてみましたが、どうだったでしょうか。アレンジが気に入らなかったら遠慮なく仰ってくださいね、書き直しますんで。

あと感想欄といえば。返信できていないのが原因でもあるのですが……感想欄でケンカしないでくださいね。

どんな意見も、意見は意見。私はちゃんと返信しますし（遅れてますが＾＾；）、私を庇っていただけるのはありがたいのですが、それで感想欄を殺伐とさせたくありません。せっかく面白フシギ空間で愉快になってるんですから笑

万人ウケする書き方でやってませんから、否定的な意見も当然です。もしそれを不当に思ってくださるなら、そっちに噛み付くよりも、愉快な感想書いてる人に突っ込んでください。

そしてもっと愉快にしちゃってくださいな。

私としては、そっちのが嬉しいです＾＾

さて、節目を前にかしこまった話しちゃいましたが。気を取り直して次は７７６話。

７７５話と７７７話の間。狭間。隙間。

つまり隙間の話です。

あ、スキマ妖怪とか関係ないよ?笑

# カカの天下776「スキマ」

――これは、狭間の物語。

えー、はざま。むしろすきま。というわけで、押入れの隙間からお送りする。やぁやぁ我こそは呪いの人形よ。皆の者、我を覚えているか？

ふむ、祝いではないのかだと？　さぁなんのことやら。呪いも祝いも紙一重ではあるが？

まぁいい、それはさておきだ。今回は、我が長年入っていた押入れから見た一コマをお伝えしよう。理由？　もちろん押入れの中にずっと居て暇だったからだ。あぁこれだけは言っておく。これは、君らの考えている時代とは少し違うであろう話だ。

「トメ兄」

「なに」

「ねートメ兄」

「はいはい？　痛い痛い」

「ねーねートメ兄」

「なんだよ、なんだってんだ。なんでつねるんだ」

「ねーねー」

「だから応えてんじゃん。なに、なに!?　なんでつねる!?　痛いんです、痛いんです！　左半身痛いんです!!　やめてください！」

押入れの隙間から外を覗く。元気のいい兄弟の声が聞こえてくる。

「まったく、カカはいくつになっても変わらないな」

「皆が変わりすぎなんだよ――あ」

騒がしい足音が聞こえてきた。どうやらこの家に一人、訪問者が現れたようだ。

「トメさんっ！」

「サユカちゃん……！」

「わたし、16歳になりましたっ！　その……約束どおり、結婚してくれますか？」

ほう、ついにゴールインか。

「ああ。結婚しよう、サユカちゃん！」

付き合ってから二年で、か。うまくいったものよ。おーおー妹がいるのに抱き合ってなどいるわ。

「……テンカ先生に、少し悪いですけど」

「テンはテンで、他にいい相手を見つけるだろ」

「ふふっ、元恋人としては心配じゃないんですか？」

「まぁ、今は犯罪まがいの結婚相手で頭がいっぱいだし」

テンカか。サユカとトメが付き合う前に一年ほど付き合ったらしいな。気持ちのいい別れ方をしたと聞いているが。

「でも……ふふっ、最近の結婚ラッシュに乗ってしまいますねっ」

「サカイさんは再婚したし」

「去年ですけど、キリヤさんとユカさんも結婚しましたし」

「サラさんはゲンゾウさんと結婚したし」

ふむ、幸せなようで何よりだ。呪いの人形としては、いささか物足りなくもあるが。

「……あれ、そういえばカカすけがいないわ」

「いつの間に。空気を読んだか？　あ、テーブルの上に置手紙」

「えっと、『なんか悔しいからサエちゃんとイチャついてくる』ですって！」

「ふふ、あの二人もうまくいくといいですね」

「付き合ってる期間はあっちのほうが上なんだぞ？　大丈夫だろ」

「カカすけもすっかり男らしくなっちゃって」

「あそこまで元気に育ってくれたら、兄として僕も安心だよ。サエちゃんを幸せにできるといいな」

ふむ？　どうした。何を不思議がっておる。我は最初に言っただろう、兄弟の話だと。

ともかく皆、結婚して幸せじゃ。呪いの人形がおとなしくしているから当然よな。

さて、それから時が経った。百年は軽く超えたか、二百に届くか、よくわからぬ。ともかく我は一度自由の身となり、再び捕まった。なにやら聞き覚えのある名の子らがちょろちょろしていたが、あまり人が来ない部屋の押入れに閉じ込められ、またもや月日が過ぎた。

そして、隙間から光が見えた。またもや外へ出られるのだろう。そうすれば我は暴れる、呪いの人形としてな。けっして祝いの人形としてではない。

しかし呪いも祝いも紙一重のモノだ。

この後、我が祝いの人形になる可能性もあるかもな。

む？　なぜ祝いと呪いが紙一重か？

簡単だ。

漢字が似ておろう。書き間違えたらおしまいだ。だから紙一重。

なに、そんな間違いはしない？　ふん、人形はそんなに頭がよくないのだ。漢字などを正確無比に覚えられるはずがない。

さて、動くか。日本はどうなったろう？　おぅおぅ見たことのあるヤツらを感じるわ、おそらくアレらの子孫だろう。果たして外に出るのは何年ぶりやら。くくく。

む？　しかしこの喋り方はいかんな。歳をとりすぎたせいか、若さが足りぬ。もっと若々しく……あたいとか言ってみるか。もっとハイテンションにいくか！

「さぁて、あたいが復活だ」

おお、この調子でいこう。

「存分に祝ってやろう！」

あ、間違えた。

まぁいい、この程度の祝福、世界には影響などない。

あるとすれば、これを読んでいるお主くらいか。運がよかったな？　我の祝福、受け取っておいて損はないぞ。ここは隙間、時間も世界も、話数ですら不確定な場所。この話が本当かどうかさえ曖昧だ。そして曖昧さ故に届く祝福もあろう。

――さて、押入れの隙間が空いていく。今度こそ呪うとしようか。

# カカの天下776「スキマ」（後書き）

世にも珍しい視点で、曖昧なお話をお届けしました。これが本編での話なのか、パラレルワールドの話なのか。それも曖昧です。ただ、そんな結婚ラッシュな世界もあったかも、ということです。

呪いの人形からの祝福で、読者様が幸運になりますように。

……え、祝いと呪いは違いすぎる？

キニシナイ！！

# カカの天下777「縁起イイ！！」

こんばんは、トメです。

今日は七夕ですね。我が家の庭には例年通り笹がぶっ刺さってます。姉が毎年どこから引っこ抜いて持ってくるのかは謎ですが、犯罪の匂いがするので今年も触れないでおきます。

「はいトメ兄、短冊！　ちゃんと書いて吊るしてね」

「ああ、わかった。わかったけど……相変わらずクリスマスツリーみたいな笹だなぁ」

去年と同じくキラキラする飾りをつけまくった笹の木は、相も変わらず無駄にご利益がありそうな気がしないでもない。

「トメ兄、てっぺん見て！」

笹の木のてっぺん？　星の飾りでもあるのか。

「……なにあれ」

てっぺんには確かに飾りがあった。しかしクリスマスツリーによくある星ではなく、立体の『7』が横に三つ並んでいたのだ。

「今日は七月七日でしょ。よく考えればすごくラッキーな日なんだよね」

「……なんで三つ並べた」

「そのほうが縁起いいかと」

パチスロ屋のイベントにしか見えないんだけど。

「……や、短冊にしっかり願い事さえ書かれていれば大丈夫。これは七夕、願いを叶える笹の木だ。大丈夫、大丈夫」

ほら、すでに吊るされているこの短冊なんかどうだろう。さぞかし夢のある願いが書かれているに違いない。どれどれ。

『豚のシャツ』

どんな願いなのか見当もつかねぇ。

全然大丈夫じゃない。なに豚のシャツって。むしろ僕がブーイングでブーブー言いたいくらいだ。

「なぁカカ、この短冊はどういう意味だ？」

「あ、トメ兄は知らないのか。んとね、私たちね、相談したんだよ。短冊に何を書いてお願いすればいいのかなって」

私たちっていうのはカカサエサユカのおなじみトリオのことだろう。

「願い事って、簡単に言うとほしいものでしょ」

「まぁな」

「そんなわけで、今回の七夕はそれぞれが考えたラッキーアイテムを吊るすことになりました」

「なるほど」

……なるほど？

何が「なるほど」なのか微塵もわからない。

「なぁ。今、どうやって話が飛んだ？」

「お姉の背中に乗ってひとっ飛び」

そうか……それなら仕方ないか……

「だからトメ兄も、自分が考えるラッキーアイテムを書いてね」

そんな想定外すぎることを突然言われてもなぁ。ラッキーアイテムって自分で勝手に決めていいのか？　『豚のシャツ』を見る限り、いいんだろうけど。

「こんばんは、トメさん。カカちゃん」

「おやサラさん。こんばんは」

言い忘れていたけど、今年もお月見パーティを開催する。仲のいい人には大体声をかけているから、結構集まるはずだ。うちはそんなに広くないけど、庭に集まって団子を口にしながらダラダラ話すくらいはできる。

「お客では私が一番乗りですかね？　それでは早速、短冊を吊るさせてもらいます」

「サラさんもラッキーアイテムを書いてきたのか？」

「もちろん。事前に聞いてましたから」

「素直に書いてきたんだな。疑問に思わなかった？」

「やですねぇトメさん。カカちゃんの言うことに疑問を持ったって仕方ないでしょう」

さすが付き合いが長いだけある。

「それで、サラさんのラッキーアイテムは？」

「おっぱい？」

「やめてくださいよカカちゃん！」

おもわずそっちの膨らみに目がいってしまった。おのれカカ、ありがとう。

「それで、結局アイテムは」

「皿です」

おお、開き直った。丸くなったなサラさん。

いそいそと吊るされる短冊を見た。おお、本当に書いてある。

『四角い皿』

丸くなったわけではないらしい。

まぁ丸い皿なんてどこにでもあるから、ラッキーアイテムにするには身近すぎるよな。

「お団子の準備は終わってるんですか？」

「うん、大体は。だからのんびり皆が集まるのを待てばいいよ」

「はーい」

「のんびりだから、のんちゃんね」

「サラです！」

「そうだぞカカ、今日は四角いサラさんだ」

「え、丸いよ？　おっぱいとか」

「私自身はただのサラです！」

「無料なんだね。使い捨て？　おっぱいが」

「有料です！　耐用年数は結構長いです！」

何に使うんだろーねーなんて会話してると、徐々に人が集まってきた。

「こんばんはー、トメお兄さん。カカちゃん」

「サエちゃん！　ラッキーアイテム書いてきた？」

「私はラッキー顔にしてみたー」

なんじゃそりゃ。サエちゃんの手元を覗き込む。

『きゃわいい表情』

「みんな、ラッキーになりたかったらきゃわいい表情をするんだよー？　ほら、トメお兄さんも」

ぜってぇしねぇ。男の意地にかけて。

「ふふ、明日のサエちゃんファンクラブはきゃわいい表情でいっぱいになるね」

カカはなんか嬉しそうだけど想像するだけで気色悪いんですけど。古今東西、モデルとかでも無い限りはきゃわいい表情を作ろうとしたって本当にきゃわいくはなれないもんだ。男は特に。ていうかなんだ、きゃわいいって。可愛いじゃいかんのか。

「こんばんは、トメさんっ！」

「……サユカン、他の人にも挨拶しようよ」

おっと、またもや来客が。

「こんばんは。サユカちゃんはどんなラッキーアイテムを書いてきたの？」

「はいっ！　頑張って変わったものを書いてきましたっ」

カカの友達だからってソレ頑張らなくてもいいのに。

「わたしのはラッキー行動ですっ」

ラッキーな行動……カカなら『十人以上の通行人がいる場所で片足立ちでくるくる回りながら全力全開で「でゅみゅみゅみゅう」と三十回叫ぶ（きゃわいい表情できゃわいい発音で）』とか言いそうだけど、サユカちゃんのは？

『肩たたき』

平和だ。この子は平和だ。

「そ、それであの、トメさんっ！」

「はいな？」

「か、肩たたき、しても、いいですかっ！？」

「僕に？　ま、まぁ、いいけど」

「では失礼してっ！」

とりあえず縁側に座る。後ろに回ったサユカちゃんはトントンとリズムよく僕の肩を叩き始めた。別に凝ってはいないんだけど、な

んか楽しそうに叩いてるのでこのままにしておこう。ときどき「えへ、えへへ」とか後ろから聞こえるのはあえてツッコまないほうがいいんだよな？

「皆さん、こんばんは！」

お、キリヤだ。後ろには隠れるようにユカが。おーおーいいねぇ仲良くて。

「よ、キリヤ。短冊は――」

「私はラッキー名前を考えてきました！！」

なぜ僕の周りにはアイデア派しかいないのか。

「えと？　それは何か、おまえの指定する名前ならラッキーになれるのか」

「はい。正確には文字です。この文字が入っている名前ならばラッキーです！」

キリヤが掲げた短冊を見る。

『超』

「日本人にはレベル高い名前だな、おい」

「心配なさらず。自己紹介のときに『私は超キリヤです』とか言えばいいのです」

すごい。何がすごいって、こいつが言うと違和感ないのがすごい。

「ユカは――」

「こ、こんばんは！！」

いきなり何かと思った……ああ、他のみんなに挨拶したのか。口開く機会なかったもんな。まだうちの連中に慣れてなくて緊張してるのか。

仕方ない。幼馴染として、話題提供でもしてフォローしてやるか。

「ユカは短冊に何書いてきたんだ？」

「トメに関係ないでしょ。肩なんか叩かれて、本当にジジィかババァみたいね。名前にぴったり。ちゃんと年金もらえてる？」

幼馴染、玉砕。なんで僕にだけこんな風かね、この人は。

「こらこらユカさん、あまりそういう言い方をするものではないですよ。ここはこの超キリヤに免じて」

「免じれないわよ。大体あんたが変なこと言い出すからワタシまで恥ずかしいんじゃないの！」

「ここにいる人は大抵変ですよ？」

「あーあーだからワタシにも変になれって言いたいわけ！？」

「はっはっは、大丈夫、すでに結構変ですから」

「変態的に爽やかな顔してふざけてんじゃないわよ！」

「なにせ超キリヤですから」

……棘のあるモノ言いはキリヤにも向くようになったか。やっぱコレが素なんだなぁ。でもキリヤは上手いこと流すなぁ。お似合いだなぁ。

ちらりと見えたユカの短冊には『黄色いハンカチ』と書いてあった。普通だ。でもこれから変になってくんだろうなぁ。

「クララ参上です！！」

おっと、どこからともなくクララちゃんが。

「こんばんは、クララちゃん。短冊書いてきた？」

「もちろんです！　七夕のラッキーアイテムといえばこれですよ！」

みんな七夕とか関係なしに書いてるけど、どれどれ？　七夕といえば……

『短冊』

……や、そりゃそうだけどもさ。短冊に『短冊』て書かんでも。

「タマも参上でしゅ！」

どこからともなくパート2。

「タマちゃんの短冊は……」

『シュー』

アイテム扱いですよ、警官のおにーさん。

「おぅ、随分と集まってんなぁ」

テンの短冊は見るまでもない。十中八九、『酒』と書いてあるに違いない。

「どうもどうもー、差し入れを用意してたら遅れましたー」

久々にサカイさん登場。短冊には『4』という数字。ラッキーナンバーにしては不吉だ。あえてサカイさんを信じるか、縁起が悪いとされる常識を信じるか、それは君次第。

「しかしいよいよ賑やかになってきたな」

庭の中心に聳え立つ笹を囲むように、僕たちは思い思いの時を過ごしていた。

早速ケンカしてるサラさんとサカイさん。議題はおっぱいだ。

同じくケンカしてるんだかイチャついてるんだかわからないキリヤとユカ。いいぞ、もっとやれ。

すでに一人だけ缶ビールを空け、目を細めながら笹を見上げているテン。その横にはタマちゃんとクララが同じように笹を見上げて

いた。たまにしている仕草はテンがビールを飲むマネをしているらしい。三人揃ってぐいっと。ちょっと面白い。

「集まりすぎて狭いね」とか言いながらここぞとばかりにサエちゃんにひっついてるカカ。ほどほどにな。

縁側には僕、後ろには未だに肩たたきしてるサユカちゃん。いいかげん肩が痛い。言わないけど。

「あれ、なんか忘れてるような」

僕がそう呟いた瞬間、ソレはやってきた。

「ふはははははは！！」

声高らかに現れたのは――

「短冊よ、我に力を！　豚の血で真っ赤なシャツを着込み！　頭には黄ばんだハンカチをねじりハチマキにして装着！　右手に四角い皿、左手に酒を持つ、きゃわいい４しゃいの超姉、シューに乗ってここに見参！」

紛れも無いバケモノが現れた。

笹を中心とした人の円が崩れた。みんなが一歩、引いたからだ。

「さぁ、この皿に月見だんごを乗せぃ！　そして誰かあたしに肩たたきをするのだ」

普通に叩いてやった。殴ったともいう。

「で、姉の短冊は？　ラッキーアイテムはなんて書いたんだ」

『あたし』

「無茶言うな」

とりあえずもっかい殴っておいた。えぇと、ラッキーアイテム、というかラッキー人物は『姉』ってことでいいかな。お姉さんでも、姐さんっぽい人でもいいから、そんな人と仲良くなればカツコ的祝福が降りるかもしれないとのことだ。

全員のラッキーアイテム……や、『ラッキーなんちゃら』が笹に吊るされた。

さぁみんな、好きな『ラッキーなんちゃら』を選んで、身につけたり近づいたり超自分とか言ったりしてみよう。運勢が少しだけよくなるぞ。しかも一週間は続くらしい。根拠はない。

あ、僕の短冊？

『漬物』だ。みんな、漬物食えよ。そしたら僕の祝福が降りるから。多分。

「さて、団子でも用意するか」

縁起のいい『7』がそろった日。この日もこの先も、みんながラッキーでありますように。

## カカの天下777「縁起イイ！！」（後書き）

サブタイトルはどう見ても直球です。本当にありがとうございました。

えー。あまり肩肘張らず、いつもどおりで、ちょっとラッキー混じりなお話にしてみました。

さぁ皆さん、好きなキャラのラッキーなんちゃらを実行しましょう。一週間はラッキー期間が続きますよ。

サエ様信仰者はちゃんと一週間、きゃわいい表情で過ごしてくださいね。

キリヤ好きはちゃんと自分の名前に超をつけて話してくださいね。面接のときも「斉藤さん……あの、斉藤さん？」「いいえ、私は超斉藤です」とか答えるんですよ。

なにせ今日は7月7日。そして777話。五つも7がそろってるのです。それぐらいのご利益はあるでしょう。

ふふふ……最近の不定期更新を知っている人は、突然の連続更新にて今日777話をやるとは思わなかったはず。今までのはコレをやるための作戦だったのだよ！

嘘です。昨日思いついて、というか気づいて頑張りました。あはは。感想欄でさらに7時7分に投稿を期待されてましたが、さすがにそいつぁ無理でした。今日は半月以上ぶりに久々のお休み、そんな時間に起きれません笑

さてさて、皆さんにラッキーがありますように＾＾

# カカの天下778「みんなの願いは笹の味」

こんにちは、超カカです。

ただいま学校中、そして昼休みになりました。さぁさぁ作戦実行です。

「短冊とペンは……あった。よし、準備おっけ」

実は昨夜の七夕――皆がいい感じにダラダラして、お開きムードとなり。後はお姉に笹を燃やしてもらうだけだったんだけど、トメ兄が言ったのだ。

『いくらなんでもこの笹じゃご利益なさそうだから、クラスの皆にも短冊を書いてもらったらどうだ？　普通にな』

そんなわけで笹を燃やすのは延期になった。そして今、私の使命は、友達に普通の短冊を書いてもらうこと。

「ねぇねぇ、そこのラブラブカップル」

「誰がカップルよ！？」

「ん、どうしたのーカカ」

まず声をかけたのはアヤちゃんとニシカワ君。どう見てもラブラブカップルだ。

「ちょっとニッシー、反論しなさいよ！　私とカップルでいいわけ

！？」

「いいよ別に」

「……ちょ、え、それって」

「どうでも」

「どうでもいいの！？　私のことなんかどうでもいいわけ！！」

「アヤ坊」

「な、なによ」

「うるさいよ？」

「な、な、な！！」

多分ニシカワ君は「声が大きいよ」って言いたいんだろうなー。
でもアヤちゃんの音量はどんどん上がってるなー。

「まぁまぁ、そんな争いこそ私にとってはどうでもいいからさ。短冊書いてよ」

「なによカカ、散々引っ掻き回しといて……」

勝手に回ってたのそっちでしょ。

「短冊って何？」

「あ、実はね」

私は二人に説明した。要はなんか願い書け、と。

「おもしろそうだねー。書くぞ書くぞ」

「わぁ、今年そういうの書いてないのよね！　ねぇねぇニッシー、何書く？」

さっきのケンカはどこへやら。これだからラブラブカップルは。

『書けた！！』

おーおー仲良く一緒に書き終わっちゃって。これだからラブラブカップルは。

「どれどれ？　まずはニシカワ君の短冊から」

『西が平和になりますように』

裏を返すと『Ｙｅｓ　ｗｅ　ｃａｎ！！』と書いてあった。なぜ？

「あ、アヤちゃんは？」

『西以外も平和になりますように』

裏を返せば『Ｙｅｓ　ｗｅ　ｃａｎ！！』と。なぜ？

「「Ｙｅｓ　ｗｅ　ｃａｎ！！」」

よくわかんないけど声を揃えて笑ってる二人。これだからラブラブカップルは。

「……ま、いいや。あんがと」

気を取り直して次いこう。

「ねね、イチョウさん。短冊書いてみない？」

「はい？」

私はかくかくしかじか説明した。

「まぁまぁ、それでは気合を入れて書いてみましょうか」

「うん、お願い」

数分後。

「できましたわ」

「どれどれ」

『あなたが笑うと、私も笑う。

あなたが怒ると、私も怒る。

あなたが悲しいと、私も悲しい。

あなたが死んでも、私は生きる。

だから私が死んでも、どうかあなたは死なないで。

――仲が良いからこそ、想う』

なんだ、この無駄な重さは。

「イチョウサン、ナニコレ？」

「親友にあてた詩を書いてみましたの」

なぜ七夕の短冊にそんなもん書くの。この人、最初はまともだと思ってたのに……最近めっきり変になっちゃって。誰のせいだ？

「あ、かのちゃーん！　かのちゃんも短冊、書きましょう！」

「……ん」

お、かのちゃんことインドちゃんが寄ってきた。昨日メールした身としてはバレたくないから、あまり近づきたくないんだけど。

「――というわけなんですけど、かのちゃんも書いてみませんか？」

「え、えと。うん。書く」

私の顔をちらちら見ながら頷くインドちゃん。やっぱ恐がられてるのか私は。

「できた」

おどおどしてるわりにはあっさり書き終わる。どれ、中身は？

『カレー』

やっぱりか。

「あらあらかのちゃん、短冊には願いを書くんですよ？」

イチョウさんみたいに重たい願い書かれても困るんですけど。

「んーん、いいの。昨日ね、メルちゃんも七夕したらしいのね」

「メルちゃんって、かのちゃんのメル友ですよね」

「うん。そしたらね、そのメルちゃんがね、笹の木にラッキーアイテムを吊るしてたらしいの。だから私もそれにしてみよーと思って。私にとってラッキーアイテムっていえば、カレーだし」

「あらあら！　それは珍しいですわね」

ごめん、うちの笹の木じゃ珍しくない。

「うん、こんな発想する人がいるなんて、世界って広いね」

いえいえ、結構狭いもんですよ世界って。いや本当に。

「と、ともかくありがと！！」

なんかヘタなこと言ってバレる前に逃げた。

――その後もクラスメイトに短冊をお願いしたんだけど。

『お父さんには再就職を。

お母さんには優しさを。

お兄ちゃんには卒業をください。

私のことはどうでもいいからお願いします』

切なすぎる。

『お肉を買えるお金をください』

切なすぎる!!　現実的すぎる!　世の中はそんなに不景気なのか!?

『健康保険税が払えますように』

あんた小学生のくせにそんなの払ってるの!?

『お父さんが』

ああ、お父さんがか……お父さん払えないの!?

むぅ……せっかく愉快な笹の木だったのに、このままじゃ重苦しい笹になっちゃうよ。もっとこう、明るい夢はないの!?　この短冊はどうだ。

『夢をください』

……なんか、泣けてきた。

ともあれ。集めてしまったものは仕方ない。私は家に帰ってからその短冊たちを吊るした。それを見たトメ兄もお姉もすんごく微妙な顔をしてたけど、「あー、ほら、これだけ切実なら織姫さんとか彦星さんも同情して、なんかしてくれるんじゃないか？」というトメ兄のフォローに納得することにした。

「じゃ、とりあえず燃やしてくるわ」

「おう。気をつけてな、姉」

うんしょ、と庭に刺してた笹を引っこ抜き、そのまま担いで、のっしのっしと歩いていくお姉。これから燃やしにいくらしい。

どこでどうやって燃やすんだろう。聞かないほうがよさそうだ。そう、知らないほうが夢があっていいんだ、多分。

そもそもあんな木を担いでる時点で夢みたいなんだけどね。

まさに超姉。

## カカの天下778「みんなの願いは笹の味」（後書き）

みんなの願いは笹の味です。ええ。苦いような、なんというか…
…まぁいいや。

皆さん、ラッキーセブン祝いありがとうございます！　返信が大変そ――じゃなくて、とっても嬉しいです（いやホントよ？笑
メッセージでもいくつかいただき、おかげで私はラッキー気分です。きっとラッキーなことが起きるはずです。皆さんもカカたちのラッキーなんちゃらでしっかりラッキーしてくださいね。

ちなみに私は七夕、お休みでした。というか休みもらいました。で、七夕イベントなんかに行ってきました。

もちろん短冊も吊るしましたよ。

『カカの天下』と書いて。

十枚ほど。

# カカの天下779「継続は力なり」

おはようございます、サラです。

最近は雨が続いていましたが、今日はいいお天気。私は清々しい気分で、家族のために朝食を作っていました。

「んぁ……ねーちゃんおはよ」

「あら弟ちゃん。珍しく早いんだね、おはよう」

いつもならお父さんと寝ぼすけナンバーワンを争っている弟、ヤナツ君がパジャマ姿で台所までやってきた。まぶたが重いらしく、半分目が開いてない。あまり見えていないまま冷蔵庫に向かったせいか、私に真正面からぶつかった。

「……おう」

寝ぼけた顔が私の胸に直撃、ぽよんと跳ね返されるヤナツ君。

「おはようございます」

「えーと、弟ちゃん。どこに挨拶したの？」

「おっぱい」

「お姉ちゃんのおっぱいに別人格はありません！」

「こんなにでけーのに、なんで彼氏いないんだ？」

「大きなお世話です！！」

「大きいのはおっぱいだろ！」

「なんでワケのわからない理由でキレてるの！？」

「朝だからだ！　寝ぼけてるんだ！」

「自分で言ってれば世話ないよ！　さっさと顔洗いなさい！」

まったくもう……あ、妹ちゃんが起きてきた。別名イチョウちゃん、らしい。

「おはよう！　今日は久々に弟ちゃんのほうが起きるの早いよー」

「ふぁ……おぱようございます」

おぱ……？

「だからなんでおっぱいに挨拶するの」

「いえ、噛んだだけです。目線がそっちにいってるのは身長の問題と、寝起きで顔を上げるのが辛いだけですわ」

スラスラとまぁ……最近はこの子も侮れないからなぁ。

「ところでなぜお姉様には彼氏ができないのでしょう」

「……もしかして私たちの会話、聞いてた？」

「はい？　よくわかりませんけど、その豊満な胸を見てなんとなく思いついたのですが」

この兄妹はそろってホントにもー。

「んぅ……おは、よう……ふあぁ」

あら、天気がいいからかしら。いつもは誰かが起こさないと寝たままのお父さんが、自分から起きてくるなんて。

「む」

ふと立ち止まるお父さん。目線は、また私の胸？

「はぁ……死んだ母さんのほうがでかかった」

「大きなお世話すぎるわよ！！」

うちの家族はほんっとにもー！！

――とはいえ。うちでは割と何度もあるやりとりなので気にせずに仕事へ行き、お花屋さんを頑張った。そう、いつものこと。なのに少し気になった。

「彼氏……か」

仕事の合間にふと考える。前にトメさんを追っかけてたときに「

やっぱ彼氏はいいや」って自己完結したんだけど……やっぱり、いて困るもんでもないのよねぇ。きっと。

「やっぱアレが原因かなぁ」

先ほど花屋の前を通った二人。こっちは仕事中だけど、向こうはお互い昼に仕事が無い身なのか、騒ぎながらも楽しそうに歩いていた。

キリヤさんと、ユカさん。

あの二人を見ていると……なんかムカつく。

じゃなくて！

仲のいい彼氏、彼女って、外から見ると……

やっぱりムカつく。

でもなくて！

「ちょっといいなぁ、って思うのよねぇ」

でも私の周りの彼氏候補といえば……うぅん、トメさんくらいだよね。

「でも友達宣言しちゃったしなぁ……いつぞやのホワイトデーにくれた手紙も、思いっきり『これからも友達で』とか書いてあったし……それでもいいんだけどさぁ」

なんにせよ、悩んでも無駄かもしれない。

「慣れてない、からなぁ」

私は同年代の女性に比べて、明らかに恋愛に疎い。かといって仲のいい同年代の女友達には恋愛なんて気にしない人ばっかりだから相談もしにくい。テンカさんとか、サカイさんとか……いやサカイさんに相談はしないと思うけど。ケンカしかしないし。

「サラちゃんサラちゃん、ご苦労様。ちょっと休憩したら？」

「あ、カツコさん。いいんですか？」

「いいよいいよ、そんだけ早く仕事やってくれたんなら少しくらい」

「ど、どうも……」

花屋の先輩、カツコさん。

「いやぁ、それにしても仕事上手くなったねぇ。うっかりミスすることもなくなったし」

「ミスするたびにカツコさんがフォローしてくれたからですよ。私、おっちょこちょいなせいで同じ職場に長くいたことないから……」

「新人育成も仕事のうちよ、気にすんな」

豪快に笑うカツコさん。格好いい。なんでこれで女性なんだろう。

「人ってね、なんでもすぐにできるもんじゃないのよ。よく『向い

てない』とか言って職種をすぐに変えちゃう人いるけどさ、個人が向いてる仕事なんてそうそうないもんよ。つべこべ言わずに自分を向かせるしかないのさ」

「はぁ」

「世の中、うまくやる人間ってやつぁ自分を仕事に向かせた人だ。向いてる仕事を見つけた人じゃないんだよ」

向いてる仕事がある人は確かにいる。でもきっと、見つけられない人のほうが多い――確かにそうだ。私は結局、あれだけ職を転々としても見つけられなかったし。この花屋さんだって最初はミス連発で覚えも悪く、とても向いてるとは思えなかった。

でも、褒めてもらえるようになった。続けてきたおかげで。

「慣れてないのがなんだか知らないけど、同じことだよ?」

カツコさんはにやりと笑った。さっきの独白を聞かれていたらしい。

「慣れてないなら、慣らせばいいんだよ。どうせ時間はあるじゃん？　死ぬまで」

せっかくの人生。挑戦するだけしてみろってことか。

「……ありがとうございます、カツコさん」

「いいってことよ」

「それにしても不思議です。仕事中だとこんなに頼れる先輩なのに、なんでプライベートだと『ああ』なんですか？」

「そりゃあんた、それが社会人だからだよ」

なんだかんだ言ってやっぱりこの人は人生の先輩だ。その笑顔に感謝しつつ、ちょっと決意してみた。

もう一回、少しだけ頑張ってみようかな、と。

友達宣言だって、もしかすると『向いてないから』って逃げたかっただけなのかもしれないし。

というわけで。その日、夕飯の買いものにスーパーへ行くとトメさんを発見。早速突進してみた。試しに、珍しくハイテンションで。

「こんばんは！　超サラです！」

「お、おお。元気だねサラさん、こんばんは」

「いいえ、私は超サラです！　スーパーサラです！」

「スパ皿？　ああスパゲティの皿」

「違います！」

いつものやりとり。でもほんの少しだけ積極的に。

「じゃあどこがスーパーなの？」

「胸です！」

えっへんと開き直ってそこを張ってみた。

「……そ、そう」

ちょっと引かれた。しょぼーん……

で、でも頑張るんだからね！！

「スーパーおっぱい参上！！」

「さ、サラさん何があったの？　僕、相談に乗るよ？」

「じゃあ今度お茶しましょう！」

「うん、うん。だから落ち着いて」

結果オーライ！！

## カカの天下７７９「継続は力なり」（後書き）

向いてる仕事、向いてることって、なかなかないんですよねぇ。私自身が何にも向いてない人間なんで。

今の仕事しかり、前の仕事しかり。覚えが悪かったったらありゃしない。初めて書いた小説しかり。恥ずかしすぎて鼻血がでます。

でも続けているうちに向いてることが見つかったりするもんです。よく『仕事するなら三年は続けろ』とかいいますが、その通りだと思います。続けられないよほどの理由が無い限りは、なんであれ続けてみるべきだと思います。

それで身に付くことがきっとありますから。

……や、最近身近にちゃっちゃと仕事辞めまくってフラフラしてる人間がいたんで。

それに加えてサラさん最近影薄いよーなにやってんのー！　っぽい感想がちらほら見えたのでこんなん書いてみたわけです。

もちっと頑張ってみようかサラさん。

## カカの天下７８０「サユカの任務、負けるな攻めろ編」

こんにちは、カカです。最近暑いっすね。学校が終わって帰り道、サエちゃんサユカンと歩いてるのですが、ここの話題も結構熱いです。

「サラさんがトメ兄とデートするって！？」

「うん、確かな情報だよー」

どっから聞いたのかすごく気になるけど、それは置いといて。

「大変だよサユカン、対抗しないとっ！」

しかし、一番慌てると思われたサユカンは落ち着いていた。

「大丈夫でしょっ。サラさんは恋愛する気なさそうだったし、トメさんはその……わたしと約束、してるし」

指輪を見て「えへ」なんて笑うサユカン。甘い、甘すぎる。

「サユカン――」

「サユカちゃんは甘いよー！」

おお、サエちゃんに先越された。

「女なんてすぐにコロっと変わるし、男なんてすぐにおっぱい大きい人についてくんだよー！　あのサラさん相手にそんな悠長なこと

言ってたらダメだよー」

確かにあのおっぱいは侮れない。

「わ、わたしはトメさんを信じてるもんっ」

「いやいやー、サユカちゃんはおっぱいの攻撃力をわかってないよー」

「サラさんくらいになるとおっぱいビーム出そうだよね」

「きっと出るよー。だってスーパーおっぱいとか言ってたらしいもん。よくわかんないけど」

スーパーおっぱい。なんて強そうなんだろう。

「んじゃおっぱいバズーカか」

「つよそー！　サユカちゃんピンチだよー」

「うう……バズーカなら仕方ないわねっ！　対抗するわ！」

お、納得させた。さすがバズーカ。無闇に攻撃力が高い。

「じゃあどんな衣装を着るー？」

「なんでそうなるのっ」

「胸も背も敵わないんだから肌色で攻めるしかないでしょー」

サエちゃん、最初からそれ言いたいだけでしょ。でも、もっと手っ取り早く……

「もう全裸で風呂場に突っ込めば？」

「ちょっ！！」

「カカちゃん！　それは最後だよー！」

「最後ってなによっ！？」

「ちょっとずつ布を減らして、最後にやるのー」

なるほど！　その通りだ。

「や、うっかりうっかり。めんごめんご」

「ほんとにもー、しっかりしてよー」

気をつけマス。

「そんなわけで、サユカちゃんの大人を演出する衣装を考えよー」

「ちょっと待ってよ！　衣装以外に大人は演出できないわけっ！？」

むぅ、他に大人といえば……あ。

「じゃあ化粧とかは？」

「化粧……確かに大人っぽいねー」

「でもそんなの持ってないわよ？」

「や、持ってそうな人があそこにいたから」

私の視線の先。商店街の本屋さんでイチョウさんがイチョイチョしていた。委員長っぽく本を見ているという意味だ。イチョってるとも言う。

「やっほ、イチョウさん」

「あらカカさん、サエ様、サユカさん。こんにちは」

相変わらずなぜかサエちゃんだけ様づけだ。

「何か御用でしょうか？」

「うん、実はさ。お化粧を貸してほしいんだけど」

「また妙な顔で周囲を驚かして回るんですか？」

またって……確かにいつかの年始めにそんなことしたけどさ、あれはあくまで福笑いだったんだよ。私なりの。

「や、サユカンがね？　ええと――」

事情を説明すると、イチョウさんはイチョっと難しい顔をした。

「わたくしの意見としましては……子供の化粧というのは受け入れられにくいものです。そのトメさんとわたくし自身はあまり交流は

ありませんけど、聞いた話と遠くから見た限りでは生真面目そうな感じでしたし、そのような常識に反することは逆にマイナスイメージではないでしょうか」

なるほど。あるかもしれない。

「トメ兄、考え古いしね」

「おばあちゃんみたいな名前してるだけはあるしねー」

「そこがいいのよっ！」

あんたトメ兄ならなんでもいいんでしょ。

「となると、大人を演出するにはやっぱ服装かねぇ？」

「あら、それでしたらブレザーやセーラー服などの制服がムラムラくると」

「誰が言ってたのー？」

「ヤナツという愚兄が」

やーねー男って。私ら三人は揃ってそんな顔をした。

「でもいいチョイスかもー」

「それなら普通っぽいから着てもいいけど、そんなの持ってないわよっ！」

「お姉さんのお古でも借りてはいかがでしょう」

「お姉がセーラー服？　あんたあの人をどれだけバケモノにする気？　世界制服でもする気じゃないだろうね」

「似合わないのは確かだけど、そこまで言うことないでしょー」

だってあのお姉がセーラー服だよ？　そんなもん着たらおっぱいバズーカの比じゃない破壊力だよ。想像だけでも核兵器だよ。世界がゲロ吐いて滅んじゃうよ。

「ちょっと二人とも、そんな顔したらダメよっ！　いくら現在が『ああ』でも、お義姉さんだってピチピチした若い時代はあったんだから」

「ムキムキした時代しか想像できないんだけど」

「ていうかサユカちゃん、今さりげなく『義』とかいれなかったー？」

ともかく、方針は決まった。まずは我が家だ。

みんな一旦帰ってから集合、家捜し開始となった。元お姉の部屋とか、元開かずの間（お父さんの部屋）とか、いろいろと漁ってみる。

「なに、このお義母さんグッズだらけの部屋」

「前に片付けたはずなんだけどね、いつの間にかお父さんが元に戻したみたい。壁も天井もポスターだらけ、すごいっしょ」

「ねーねーサユカちゃん、いま『義』を……」

ともかく家捜し！

やがて、セーラー服とかは見つからなかったけどトメ兄の学ランが見つかった。予備もあわせて二着も。

「とりあえず着てみたわっ！」

トメ兄のもんだと着るの早いなサユカン。

「わ、サユカン学ラン似合う！」

「私も着てみたー」

「サエちゃんも長髪にすごく合ってる！！　うわぁ、それで運動会の応援団長とかしてほしい！　よし、私も着てみよっかな」

そうして私が狂喜乱舞しながら服を脱ぎ始めたそのとき、玄関から声が！

「ただいまー」

「げ、トメ兄が帰ってきた。こんな面白い姿を見られるわけにはいかないよ、急いで脱いで！」

「ちょっとカカすけ、そんな強引にやると逆に脱ぎにく――きゃっ！」

「わー！！」

どたんこばたんこ。

「カカ、ここにいるのか？」

ドアが開く。

トメ兄は見た。男装してるサエちゃんとサユカンが押し倒され、それを半裸の私が無理やり脱がそうとしている光景を。

「……そっかぁ」

パタンと閉まるドア。

「そっかぁ」

もっかい聞こえた。

「――って、ちょっとトメ兄！？　何を理解した気になってるの！！」

「ほどほどにしとけよー」

「なにが！？」

「大人になったなぁ」

「違う！　そんな意味でそう思ってほしいんじゃなくて！！」

漫画みたいな展開が予想外に恥ずかしくて、思わず大慌てしちゃったけど……トメ兄はわかってからかってるだけだった。なんとなくトメ兄のほうが大人に思えて負けた気分。

悔しい。だから今度は復讐だ、トメ兄をからかってやる。

サユカンで。

## カカの天下７８０「サユカの任務、負けるな攻めろ編」（後書き）

さぁさ、サユカ対サラさん勃発か！

トメくたばれ。

# カカの天下781「デザートみたいに甘くない」

こんにちは、サラです！！

今日はなんと、トメさんとお茶をご一緒する日なのです！　半ば強引に取り付けた約束ですが、デートはデート。久々の恋愛感溢れるイベントに胸の高鳴りが隠せません。

「たしかにねーちゃんの胸は高い。隠せない」

「あら、物理的な高さでしょうか。それともお値段がですか？　確かにお姉様はお高くつきそうな素晴らしい胸をお持ちと思いますが」

「お持ちっていうか、むしろモチじゃね？」

「こら、弟ちゃんも妹ちゃんもそういうこと言わないの！」

「甘いぞ子供たちよ、胸といえばモチモチよりもムチムチだ」

「お父さん！！」

私の家族はいつの間にこんな元気になったんでしょう。確かに元気に笑っていこうって誓いましたけど。こんなカカちゃんたちみたいに……って、そういやあの子らを参考にしろって言ったの私じゃん。がーん。

ま、まぁいいわ。ともかく今日はデートなのよ。

騒がしい家族を捨て置いて出かける私。目指すは待ち合わせ場所、

そしてその後はお気に入りの喫茶店でお茶とおしゃべりが待ってるわ。トメさん好みの和風デザートもあるステキなお店だし、いい雰囲気になってくれればいいけど……

でもなぜか待ち合わせ場所はファミレス東治の前。

それがいけなかった。

「あ、トメさーん……げ」

「や、サラさん」

「よぅ、サラ」

なんと、ファミレス東治へ普通に食事しようとやってきたテンカさんと鉢合わせしてしまったのだ。おのれファミレス東治。

「こないだはトメに奢ってもらったしよ、今度はオレが奢る番だしちょうどいいぜ。サラの分も奢るぞ？　給料入ったからには恐いもん無しだぜ！」

なんというお邪魔虫。

「やったなサラさん！」

そして素直に奢られるのが嬉しいらしいトメさん……ダメよサラ、怒ってはダメ。だって彼は主婦みたいなものだもの、出費が減ると喜ばずにはいられないのよ。私と二人きりよりも奢りが大事なのね、とか思ってはダメ。

「あん？　なんだサラ、随分と不満そうじゃねぇか」

「へ、そ、その」

「まさかデートってわけじゃねぇだろうし、別にいいだろ？」

「……」

「あぁん？　まさかデートなのか。サラってトメのことは友達と思ってんじゃなかったっけ」

トメさんに聞こえないように耳元で言われ、顔が赤くなったのを感じる。それを見てテンカさんは全てを理解した。

「なーなー！　トメ！　サラさんなー、トメのことがなー？」

「ちょちょちょちょっとテンカさん！？　あなたどこの小学生ですか！！」

「貴桜小学校の」

「小学生ではないでしょうが！！」

ものすごくニヤニヤされてるぅぅぅ！　と、身と心の危険を感じていたそのとき。

「おやおや、騒がしいと思ったらあなたたちでしたか」

お邪魔虫二人目、ファミレス東治のバイトリーダーキリヤさん出現。つくづくおのれファミレス東治め。そもそもなんでここが待ち

合わせ場所なんだろう。謎だわ。

「おや、サラさんはどうしたのですか？」

「おう耳貸せや。実は」

テンカさんがキリヤさんの耳にごにょごにょ、って――

「ねーねートメ君、サラさんってばトメ君のことねーえー？」

「キリヤさんまでやるんですかい！？」

「私の小学校はもうちょっと西にあります」

「聞いてないし！」

あぁもう！　滅茶苦茶よぅ。

「なぁ、さっきからなんなんだよ。とりあえず皆でお茶しようってことでいいのか？」

トメさん本人はさっぱりわかってないし！

「……行きますか、テンカさん」

「……ああ。さすがに可哀想に思えてきた」

しかしなんと、トメさんのあまりの鈍っぷりに呆れてくれた二人が気を利かせて解散してくれた！　喜んでいいんだか悪いんだか。

「あれ。なぁなぁ奢りは？」

「トメさん、行きましょう」

「でも、奢り……」

「いいから！！」

相変わらず恋愛へ発想するのが苦手なトメさんだけど、なんとか喫茶店に連れ込むことに成功。お茶もきた、お菓子もきた。これからが本番！

でもこの人を相手に、一体どうやって恋味たっぷりな会話をしてみせよう？　どうすればいい雰囲気になるのかな。んーと、んーと。

「よし、サラさん」

そんな風に悩んでいたんだけど、トメさんから口を開いてくれた。やっぱり男の人はこういうときにリードしてくれるのね！

真剣な表情……な、何を話してくれるんだろう。

「それじゃ相談を受けようか」

「……へ？」

「なんだよ。今回の目的を忘れたのか？」

なんでしたっけ。

「サラさんがなぜ、スーパーおっぱいなんて言い始めたのか。その相談を受けるために僕は来たんだ」

そうだったあああああああああああ！！

「さぁサラさん。一体なにがあったの！？」

「え、えぇ、えぇとぉ」

「よほどのことが無い限り、あのサラさんがスーパーおっぱいなんて発言するわけないよね？」

どうしよう。

なんかピンチだ。

よくわかんないけどピンチだわ！

「さぁ、サラさん！　なんでスーパーおっぱいと！？」

「うー、あー」

後日。こっそりついてきていたテンカさんたちに私とトメさんの会話を聞かれていたことが判明。

すごく真剣な表情でおっぱいについて語っていた（風に聞こえた）

私たちは、おっぱいコンビとして仲間内で有名になってしまった。

「聞いたよ、サラちゃん」

「な、なんですかカツコさん」

「トメと二人で、おっぱいバズーカを発射するために頑張ってるんだって？」

「頑張り方がさっぱりわかりません！」

「あたしも協力するよ！」

「勘弁してください！！」

ほんと勘弁してください……うぅ、やっぱりうまくいかないなぁ……

「まずはトメのおっぱいをサラちゃんサイズに！」

「ちょっと見たいじゃないですか！！」

……これはちょっとうまくいってほしい。

## カカの天下７８１「デザートみたいに甘くない」（後書き）

はいサラさんざんねーん。がんばー。

トメざんねーん。ざまぁー。

姉ないすー、がんばー笑

ああ、それにしても豪華な白玉あんみつが食べたい。

## カカの天下782「カカとドラマ」

こんばんは、トメです。

ただいまカカと一緒に夕飯をもくもく食べながら、テレビドラマを見ています。

「もくもく。ねぇトメ兄、このドラマおもしろくないね」

「うん」

同意も同意。話自体も陳腐だけど、それより主演女優がヘタすぎる。綺麗って理由だけで選ばれたな、この人。

「早くお母さんのドラマが見たいなぁ」

「そういや延期になったんだな、母さんがやる『枝毛が止まらない』ってドラマ」

「なんでも話の内容が恐ろしすぎて、主役のお父さん役とお母さん役と妹役が全部逃げ出したらしいよ」

その話自体が恐いわ。

「だからその役を全部お母さんがやることになって、撮影に時間がかかっているとか」

カカの言ったことを理解するまで一分かかった。

「……は？　一人、三役？」

「や、元々主役だから、四役」

「なにその母さんワールド」

「監督がヤケで発案して、試しにやってみたら思ったより面白そうだったから採用されたらしいよ、お母さん曰く」

「枝毛じゃなくて別のもんが止まらなくなってるじゃん」

「お母さんファンはウハウハだね」

どこまでいくんだろう、母さんと枝毛は。

「それはともかく。このドラマ、ほんっとにつまらないね。私が監督したほうが絶対おもしろいよ」

「ほほう。じゃあカカならどんなドラマを作る？」

「例えば……このサラダ」

カカはテーブルに乗っている、食べかけの明太子と大根のサラダを指差した。じゃなくて箸差した。

「箸を無闇な方向へ向けてはいけません。それで、そのサラダがどうした」

「サラだ！！」

「言うと思った」

「麺、太鼓、サラだ！」

「サラさんに何が起こってる」

確かになんかドラマはできそうだけど。

「ま、今のは言ってみたかっただけ」

今のはも何もおまえ基本的にそれしかないだろ。

「私の題材は、隣のサラダ」

大根サラダの隣、もう一つの明太子サラダに目をやる。そしてカカが口を開いた。

「一緒に住んで、はや一年。彼は今日も帰ってこない。仕事だ仕事だと言いながら、あの女と会っているのはもはや明確。もう我慢ならない、別れなければ！！」

なんだいきなり。

「でもその前に復讐してやるわ。明日の靴には噛みまくったガムをたっぷり詰めてやる、明日のお弁当には今キレた勢いで割っちゃった湯のみを入れてやる、明日の鞄の中に猫の死体を入れてやる、ちゃんと防臭加工して会社に入るまで気づかないようにしてやる、しかも社長の愛猫にしてやる、調理法とか細かく書いて最後に『さぁ美味しく召し上がれ』って書いてやる。賞味期限は明日よ。お早めに！」

あの、いま夕食中なんですけど。

「私の作戦が組みあがっていく。そう、これは制裁よ。あの人が私を裏切った罰を下す！　そしてキッパリと別れてやるわ……この、一年間お世話になった、家を捨てて……」

カカが瞳をきらりと光らせ、ソレを見る。

「ドラマ、『居別！！』」

それキャベツだから。キョベツじゃないから。

「キョャベツ」

「発音しにくいです」

「主役はサラだ！！」

「そっちに繋がるんだ」

なぜだろう、失礼ながらちょっと似合うかもしれない。湯のみとか割る辺りが。

「もちろんハッピーエンド」

「どこをどうしたらそうなるのかすごく見たい」

「そしてカカ監督のドラマ第二弾が始まる」

「かかかんとくって言いづらい」

「聞け！　こほん……あ、そうだ。ねぇトメ兄、聞いていい？」

「聞けばいいのか聞かれればいいのかどっちだ」

「なんでもいいじゃん。それよりさ、確か自分のことを『しょーせい』って呼んだりする人いるよね？」

「小生、な。僕は実際に見たことないけど、いるらしいぞ」

「よし……今度こそコホン！　小生には現在、大問題が起きておる。割れる、割れるのだ。小生の大切な場所が、割れてしまう。誰か助けてくれ！」

今度はシリアスだな。でもカカの視線の先にはソーセージ。

「ドラマ『小生、痔』」

痔ですか。大事な場所ってお尻ですか。何度も言うけど食事中なんだけど。

「もちろんハッピーエンド」

「最終回に痔が治るんだな」

「めでたしめでたし」

「治るまでにはどんなドラマがあるんだ？」

「どんどん割れてくの」

「とことん見たくないな」

「そしてカカ監督ドラマ、第三弾！」

「もうお腹いっぱいなんだけど」

「『キョャベツＶＳしょうせいぢ』」

「戦うんだ」

カカの右手には一本の箸で刺されたキャベツ、そして左手にはもう一本の箸と、それに刺されたソーセージ。

「キョャベツが吼える、なによ、私の方がおもしろいんだから！　あれだけやって裁判沙汰にして更に勝っちゃうんだから！　しょうせいぢが反論する！　いいや、俺のほうがおもしろいね！　なにせもっと割れてやるんだから！　キョャベツ叫ぶ！　血を見るわよ！　しょうせいぢも叫ぶ！　俺なんか最初から見とるわ！　なにせ割れてるからな！　さぁさぁこの勝負どっちが勝つのか！　おっとまずはしょうせいぢが仕掛けた！　切れ痔ビーム！　赤い、このビームは赤いぞー！！」

ハイテンションで両手を動かすカカの頭に拳骨を一発。

「ってぁい！　……うぅ、なにするのよぅ、トメ兄」

「食べ物で遊ぶんじゃありません」

「今のでキョャベツの勝ち」

「なんでだ」

うん、しかし。

確かにあのドラマよりカカのほうがおもしろかった。

## カカの天下７８２「カカとドラマ」（後書き）

久々にトメとカカが喋り続けるだけの話を書きました。ちょっとこんなダラダラを続けよっかなーと思います。

最近ダラダラしてないですからね。あー皆さんも一緒にダラダラしましょー。息抜き息抜き。カカ天は基本的にダラダラ読むもんですから。うん。

カカが熱い？　あんまダラダラしてない？

よしわかった。次はもっとダラダラさせてやる。

それにしてもダラダラ連呼しすぎだ私。

# カカの天下783「まぁいいや」

ども……カカです……暑い……

連休の昼間、私は居間でくたばってます。原因はこの蒸し暑さです。蒸しカカです。居間でお昼ご飯を食べた後、そこから全く動く気力が起きなくて……身体を大の字にして寝転がってます。

「とめにー……ジュース飲みたい……」

返事がない、ただの蒸しトメのようだ。

「とめにー？」

ごろん、と自分の身体を横に転がして、トメ兄が座っていたはずの方を見る。やっぱり蒸しトメだ。私と同じように横になってくたばってた。昼食の片付けをして力尽きたらしい。

「……自分でいくしかないか」

かといって立つ気力はないので、ごろごろと横に転がって台所にある冷蔵庫を目指す。

あ、なんか足にぶつかった。なぜか床に放置されていた瓶が倒れ、その中に入っていたビー玉がこぼれ落ちまくる。誰だこんなものをここに置いたのは。私だ。手芸に使えないかと寝転がりながらダラダラと遊んでいたのだ。まったくもう、どうしてくれよう。

まぁいいや。

爽やかに無視してごろごろ冷蔵庫へ向かう。

台所ゾーンに突入、床が冷たいぞ、もうすぐだ。

そして目標が見えた！

そこで気づく。冷蔵庫の扉、その取っ手が随分と高い位置にあることに。

「……立ち上がるしかないのか」

手を床について、力を入れる。

「ふっ！」

ダメ、だるい、力がでない。立てない。

よぅし、こうなったら。

私は再びゴロゴロ転がって、各所に落ちているものを集めた。

ほうき、孫の手、ガムテープを手に入れた！

なぜこんなものが台所近辺に落ちているのか。その理由は『暑いから』に他ならない。暑くてだるいから適当にその辺へポイポイ置いちゃうんだよね。

さて、と。ほうきと孫の手の柄をガムテープでぐるぐる巻いてくっつけて、即席カカハンド完成！　別名、長い棒！

これで寝ながらでも高い位置へ手が届く。レッツトライ！

「えい、えい！」

……微妙に届かない。よし、こうなったら。

私はまたまたゴロゴロ転がり、居間へと戻る。

そしてトメ兄の死体の横に並び「んしょ、んしょ」と、自分と一緒にそれを転がしていった。死体はピクリとも反応しない。

やがて冷蔵庫にたどり着いた。

「はいトメ兄、これ持って」

おお、ただの死体じゃなかった。トメ兄の手は即席カカハンドをしっかり握ってくれたのだ。寝ててもちゃんと言うことをきいてくれるんだね、さすが妹大好きなだけはある。

「よし、トメ兄の腕の長さをプラスしたカカハンドで、あの冷蔵庫を開けるのだ！」

トメ兄の腕を持って、えいやーそいやーと操作してみると……意外とあっさり扉は開いた。

次はジュースを取るのだ――あ、なんかぶつかった。ボウルに入れて冷やして置いたらしいサラダが落ちる！　受け止めるんだカカハンド！！

そのとき、奇跡が起きた。

カカハンドの、細っこい孫の手の先に、それなりの大きさがあるボウルが乗ったのだ！　こんな色々繋がってる棒の先で静止するなんて、すごいバランス感覚。

ほら、ちょっと左右に揺れるけど倒れ落ちない。重力にしたがってツツツーとこっちに向かってはいるけど……孫の手を超えて……ほうきの柄を越えて……トメ兄の腕を超えて……

そのままトメ兄の顔にサラダが落ちた。

まぁいいや。

とにかくジュースをゲットせねば。うまくパックの口にある隙間にハンドの先を刺して、持ち上げて……そのまま、こっちに持ってきて……やったぁ、げっと！

念願のジュースだ。これを手に入れるまで、どれだけ苦労したことか。頑張って立ちあがったほうが早かったなんて意見は聞こえない。さぁパックの口を開けて直飲みだ！

あ、寝ながら飲んだら手元が狂ってトメ兄にジュースかかった。

まぁいいや。

よし、今度はジュースを戻さないと。

「ほらトメ兄、カカハンド握って。ちゃんと働きなさい！」

よしよし、ジュースのパックを冷蔵庫に戻せた。今度は扉を閉めるよ、これは簡単だ。うんしょ！

カカハンドでぐいっと！

バターン！　と勢いよく冷蔵庫の扉が閉まる！

勢いよすぎてカカハンドの先、孫の手がすっぽ抜けた。

いろんなところに跳ね返った後、寝ているトメ兄のお尻に刺さった。

まぁいいや。

「みっしょんくりあ」

さて、居間の定位置に戻って寝よっと。

「という夢を見たのさ！！」

がばっと起き上がる僕、トメ！　そう、僕はトメだ。カカじゃない。今のは暑い最中で昼寝してしまった僕が見た夢だったのさ！

「……あれ。なんで僕、台所で寝てるんだ？」

嫌な予感がした。頭を触る。ベジタブルな感触。お尻を触る。痛い。なんか刺さってる。まさか、実話だったというのか！？

「おいおい……む？」

立ち上がった際、僕の半ズボンの中からボロボロとビー玉がこぼれ落ちた。

「え、え？　なんでこんなもんがもっさりと股間に入ってんだ！？　まさか最初にビー玉を倒したときに……いや待て、だからってこうはなんないだろ！　おいカカ！　起きろ、一体何がどうなって――」

「えっち」

「なんでやねん！！」

現実は夢より奇なり。

## カカの天下７８３「まぁいいや」（後書き）

ダラダラした話をー、とか言ってたら更新もダラダラしてしまいました。

違うのです、更新したつもりだったのが、できてなかったのです。更新するとき仕事前で時間がなくて確認しなかったのです。そして時間ないので保存するのも省略してたら、見事に書いた分が消えちゃったのです。

ちょうどエラーとか出てる時期だったみたいですね。間が悪かったです。そして書き直す時間もなかなか取れず……こんなに遅れてしまいました。

なんか悔しいのですぐに次書きます。

さっき日食見たので、その話でも……

# カカの天下７８４「それは伝説となる」

こんにちは、トメです。

今日はなんと日食が見られるということで、平日の午前にも関わらずお馴染みメンバー（一部）でサカイさん宅に集まってしまいました。もちろん皆、仕事は休みです。カカたちは学校ですけど、授業で日食を観測するとか言ってました。

「はいはい、それではー」

太陽用の望遠鏡をセットしたところで、サカイさんが集まったメンバーに声をかける。

「本日は皆様、忙しい中でようこそいらっしゃいましたー」

顔ぶれは僕、サカイさん、サラさん、キリヤとユカのカップル、ゆーたさん、シュー（だったよな、名前。たしか）、タマちゃん（寝ている）。以上だ。

「ニャーわんブーもーメェェェ！！」

し、失礼しました！　サカイ動物園も人数に入ります！　そうだよな、ツッコミできるレベルなら人として数えてもいいよな。

「さてさて、早速――カツコちゃんが太陽を食べる様子を観測しましょうの会を始めましょー！」

サカイさんの宣言に、自然と拍手する僕たち。

「いやぁ、うちの姉も出世したもんだよな」

鼻が高すぎてピノキオになりそうだ。

「さすがは私の先輩です！」

サラさんってばテンション高いな。日食なんて滅多に見られるもんじゃないから興奮してるみたいだ。

「今日だけは私のこと、にっしょくん、って呼んでもいいですよ！」

それ男の子じゃないのか。

「はっはっは、しかし人の身で太陽を食せる時代が来るとは。楽しい世になりましたねぇ」

「なに言ってるのよキリヤ。そんな阿呆みたいな話あるわけ――もがもが」

「ユカさん、ロマンとか、ＫＹとか、そんなの覚えたほうがいいですよ。はっはっは」

そうそう、みんなでピノキオになったほうが楽しいんだよ。

「おおー！　いよいよカツコちゃんが太陽にかじりつきましたよー！」

「え、本当ですか！？」

「サラさんには見せません」

「ちょ！　こんなときくらい意地悪しないでくださいよぅ！　それに私はにっしょ君です！」

「はっはっは、よく見えます。綺麗に欠けてきましたねぇ」

「あーあー！　こういうときは最初に彼女に見せるのが普通じゃないの！　こらキリヤ、どきなさいよ！！」

大騒ぎしながら望遠鏡へ群がる女性群＋1を尻目に、僕とゆーたとシュー（だったよな？　しつこいけど）はあらかじめ配られた日食グラスを装着して空を見上げていた。おお、こんなぺらぺらなメガネのくせして意外とくっきり映るじゃないか。

ちょっとずつ欠けていく太陽。

頑張れ、姉。

「くー」

ちなみにタマちゃんは寝ていた。

「にっしょ君は僕にこそふさわしい！！」

「……ニッシー、誰に言ってるの？」

なんか知らないけどニシカワ君が先走りました、でも私はカカで

す、はい。

授業の一環として、皆で日食を見上げています。もちろん配られた日食グラスを装着して。

「いいかー？　日食ってのはな、オレの友達が太陽を食う現象のことを言うんだぞ。わかったか？」

『はーい』

テンカ先生の説明に、素直に頷く私たち。

「せんせー、じゃー太陽はなくなっちゃうんですか？」

「その心配はねぇ。なぜなら――」

テンカ先生の説明に、改めて「なるほどー」と頷く生徒たち。

よかったね、お姉。みんなの人気者だよ。帰ってきたら太陽の味、教えてね。

「私、てっきりカカちゃんが食べるのかと思ったー」

「あまいわねサエすけ、カカすけならあと十年はしないと無理よっ」

うん。悔しいけどその通りだ。それにしてもすんごいなー、本当に欠けてく。

おほほ、校長です。

「皆さん、運がいいですねぇ。このような珍しい現象に遭遇できるとは」

「はい、その感動が教育に結びつけば幸いです」

あらあら、教頭にしては無難なお言葉だこと。

「それにしても、我が校の元生徒が太陽を食べるまで成長するなんて。こちらも感動的なことですわねぇ」

「はい、その妹君にもぜひ頑張っていただきたいところです……おお、ちょうどいい具合に雲ってきましたぞ。これなら肉眼でも欠けているのが確認できます！」

「ところで。なぜそんなに普通なのですか、教頭？」

「一時的に、とはいえ太陽がデストロイしてるのです。私ごときがそれを邪魔するわけにはいきません」

おほほ、変な人。

――誰もが空を見上げている時間。

場所はカカたちが住む街の商店街、とある家族の会話。

「ねーねー、あれってカツコっていう怪獣が食べてるってほんとー

？」

「こらマサオちゃん！　どこでそんな妙な話を――」

「こらこらマサエ、子供の夢を壊すな」

「マサキさん……そ、そうね。こほん！　そうよ。あれはカツコっていう怪獣の仕業なの」

「カツコってこあいー？」

「そうよ、太陽を食べるくらいだもの。おっきいの、恐いのよ。マサオちゃんが嘘をついたりしたら、太陽みたいに食べられるんだから」

「こあい！　ぼく、いい子にする」

「よしよし、いい子ね」

「……あれ？　どんどん欠けてた太陽が戻っていくよ！　太陽はかじられちゃったんじゃないの？」

「きっと吐き戻しているのよ」

「猫舌なんだね」

「そうだ。怪獣カツコは猫舌なんだ。だからマサオも、熱いものはフーフーしてから食べるんだぞ」

「はーい！」

「よしよし、いい子ね」

――そして、日食の間。とある隠れ家にて。

「……ふむ、見事な日食だなぁ。ところでカツコ」

「なにさ、父」

「なぜ俺の隠れ家なんぞにいるのだ？」

「こないださ、酔った勢いで『あの太陽を食うのはあたしだ！』って宣言したら、なんか皆に本気にされちゃって……いつの間にか都市伝説扱いされちゃったのよ。なぜか」

「日ごろの行いだな」

「いっそのこと本当に太陽食ってやろうかと思ったけど、さすがのあたしでも無理だったからさ。とりあえず日食中は身を隠しておこうかと思って」

「うむ、皆の夢を壊さないための配慮ということか」

「まさかここまでノリのいい街だと思わなかったわ」

「そのおかげでおまえは伝説になれたのではないか」

「ナマハゲと同列になったって嬉しくないわよ。あたし、女だよ？」

「そうだっけ？」

「オイこら父親」

「ふふん。カカあたりが伝説を上塗りすることでも期待しながら我慢するんだな。せんべいでも食うか？」

「食う」

「おお、まるで太陽を食ってるようだ」

「しょっぱい太陽だねぇ。バリバリ」

――街に一時の感動を与えたカツコに幸あれ。

## カカの天下７８４「それは伝説となる」（後書き）

というわけで連続更新。

太陽を喰らう伝説の怪獣カツコ、ここに降臨。

さて、皆さんは日食見ました？　私は観測イベントに参加しまして、日食グラスからも望遠鏡からも欠けてる様子を見てきました。作中でもあったように、ちょうどよく雲ってくれたりして肉眼で見ることもできました。結構暗くなったし、ちょっと感動！

その感動を怪獣で台無しにしてごめんなさい。

# カカの天下７８５「楽しかった日々の終わり」

カカです。

「ふぅ……」

かつて自分の席だった場所、その机を撫でながら、私はため息を吐いた。

静かな教室。物音一つしない。聞こえるのは私の呼吸だけ。

誰もいない。私以外には、もう誰も……ここに入ってくる生徒なんて、もういないのだ。

思い出すのは楽しかった日々。サエちゃんがいて、サユカンがいて、その他大勢がいて。テンカ先生がいて。

何気ないようで、退屈なようで、でもとても幸せな時間を過ごしていた。ここで。みんなで。

「懐かしいな……」

目を細める。自然と口元も弛んだ。温かな思い出が際限なく蘇る。

「いろんなことが、あった、な」

ずっとずっと、こんな生活が続いていくんだと……微塵も疑うことなく信じていた。

でもそれは間違いだったのだ。時間は進んでいる。私は成長するし周囲だって刻一刻と変わっていく。学年が上がっていき学期を超えて。やがて卒業し、大人になる――これは避けられない現実なのだ。私は、それを受け入れなければならない。

「でも、もう」

終わっちゃったんだ。あの生活が。

そう思うと、その現実が悲しい。

寂しい。

わがままだとはわかっている。サエちゃんもサユカンも、見知った友達は誰一人としてこの学校にはもういないのだ。でも――だからこそ思わずにはいられなかった。あの日々をもう一度、と。

「無理なんだよね」

そうなんだ。無理なんだ。時間は戻らない。

本来なら私だって、ここにいて良い立場じゃないんだ。気が済んだらすぐに帰らないと。でも、もう少しだけ教室を見ていたかった。自分達の長くを過ごしたこの場所を。

「テンカ先生の授業、おもしろかったな」

話が脱線したのは何度かわからない。すぐに自分のこと話すし、そのくせ面倒くさがりだし。でも大事なことだけは、叱るように教えてくれたっけ。

「休み時間が、毎回楽しみだった」

サエちゃんとサユカンと、飽きることなく毎日三人で。話題は尽きることなく……や、尽きても気にせず一緒にいた。

「給食は賑やかだった」

必ず余るパンや牛乳。それをじゃんけんで奪い合うのが好きだった。

「イベントがあるたびにかき回したっけ」

変な風に盛り上げて騒いでいると、すごく気持ちがよかった。

「手芸部は、あまり大した成果を残せなかったな」

やっぱり手芸だけじゃなくて、もっと色々やればよかった。や、他にもなんかやってたけどさ。もっと大げさにやればよかったんだ。そうしたら活動が終わるまでに、我ら手芸部ここにあり！　みたいな思い出も作れたのに。

「みんなと、さよならした日は……」

実感がまるで湧かなかった。

あんなにあっさりと日々が終わるなんて、考えもしなかったのだ。

楽しみにしていたのに。

新しい季節へと旅立つのを心待ちにしていたというのに。

実際に旅立った後で、こんなに心残りを思いつくなんて。

学校を離れる前にできたことが、もっとたくさんあったかもしれない。

なのに私が勘違いしていたから。やりたいことが、やりたい場所で、いつでもできることなんだって。そんな幸せなことを考えていたから。

だから、こうなってしまったのだ。

「みんなと、やりたかったこと」

もうできない。

だって私は一人でここにいる。

そして『いつもどおり』な日々が終わったことをやっと実感して、今さら後悔なんかしているのだ。

もう遅い。

終わりの日に実感できなかったのも当然のこと。私には心の準備ができていなかったのだから。

明日、この日々が終わっても悔いのないように——それくらいの気構えで生きていけばよかったのだ。

自身の怠慢が、この事態を招いた。

この虚しさが罰に他ならない。

終わりが来ると意識していなかったのが悪い。

日々の変化に鈍感だった自分が悪い。

全部全部、私が悪い。

だから、だから。

だから――

「だから夏休みが始まったのに登校なんかしちゃったんだ」

誰も歩いてないから変だとは思ったんだけど、教室に入るまで気づかないとは不覚だったわぃ。やっちまったぷー。

先生はいるかもしれないし。見つからないうちに、かーえろっと。

# カカの天下７８５「楽しかった日々の終わり」（後書き）

一学期が終わっただけだぷー。

学校が終わったなんて、どこにも書いてないぷー。

ましてや最終回だなんて、そんなことあるわけないぷー。

まーすごく自然に夏休みへ入りたいと思ったらこんな話になったぷー。

書いてて気づいたけどぷーぷー言ってたらちょっとムカつかれるかもっぷー。

ごめんぷー。

# カカの天下７８６「奇跡」

よう、テンカだ。もう夏休みだな。

今回の終業式も味があってよかったぜ。なに、詳細が知りたいだと？　ならその場で三回まわって好きなポーズを決めながら「おトイレ最高！！」と叫べ。どうだ、できねぇだろう。もしできたならちゃんと報告しろよ？　教えてやるから。

「さて、そろそろ出発の時間ですよ。テンカ先生？」

「うげー……マジかよきょーとー……」

ああ、ちなみにここは職員室だ。クーラーがあるくせに省エネとかチャチなこと言って使ってねぇ。だからあちぃ。だから何もしたくねぇ。

「ほら、さっさと行かないか」

「大体よぉ、六年生にもなって家庭訪問はねぇだろ」

「中学生へと上がる大事な時期にこそ、しっかりと生徒の親御さんと話をしなければならない。教育者としては当然のことだ」

「へいへい。しかし夏休みだっつうのにオレらもご苦労なこった。たまにはドバっと連休がほしいぜ」

「たわけ」

「一言で片付けるなよぉ。たまには次の日を気にせずに飲んだくれたりしてぇんだよぉ」

いつも気にしていないんじゃ、と思ったそこのてめぇは何もわかっちゃいねぇな。明日が休みかどうかで、飲むときの爽快さが全然違うんだぜ。

「そこまで言うなら仕方あるまい。連休をやろう」

「マジか！？」

「３６５連休でどうだ」

「ごめんなさい！！」

「謝っても許さん」

「ちょ、ええ！」

いきなり失業はいくらなんでも！

「そこをなんとか」

「なんともならん」

「ならねぇのかよ！　手遅れかよ！　勘弁してくれよ！」

「退職金は出さんぞ」

「出せよ！」

「ああ、出したら辞めるのだな。了解した――もしもし校長？　たわけが一人辞めます」

「ほんとごめんなさい！　働かせてください！」

「よし、いってこい」

「おうよ！！」

オレ、まだまだ弱ぇ……やっぱ権力には敵わねぇぜ。

そんなわけで、家庭訪問に出かけたわけだが。

まずはどいつからだっけな……あ、タケダ医院だ。今日回る家庭訪問リスト見てねぇけど、とりあえず準備運動にここいくか。どうせタケダだ、二十秒くらいで終わるだろ。

「ちーっす……お？」

医院に入ったが受付がいねぇ。なにやってんだ？　奥のほうが騒がしいようだが……

「お、院長。家庭訪問に来た……ぞ、って、何してんだ」

院長はいた。受付の人間もいた。他、患者も多数いた。行列を作って。

「家庭訪問？　それどころじゃない！」

その列の最後尾でもじもじしている院長は苛立たしげに答えた。

んだとコラァ。

「なんなんだよ、この列は」

「トイレの順番待ちだ」

「……は？」

「なぜか院内の全員が一度にトイレに行きたくなってしまったのだ！　それでこの渋滞だ！　だから家庭訪問なんぞしている暇はない！」

微妙なミラクルだなオイ。

「あー……んじゃ奥さんは？　そっちに家庭訪問するわ」

「妻は旅行中だ！」

そういやコイツの奥さんって旅行ばっかしてるとか噂で聞いたな。

亭主元気で留守してろ、ってとこか。

「まぁいいや。どうせ気まぐれで来ただけだし。今日のリストにも載ってねぇし。じゃあな」

んあ？

そういやそもそも、タケダってオレのクラスじゃねぇや。マジで

無駄な時間使っちまった。さっさと行こう。

あーっと、最初は……アヤんちか。ここから近いな。

しばらく歩いて見えてきた普通の家。ああ、普通だ。二階建て、それ以外に特筆することは何もない。面倒だからじゃねぇぞ？

「ごめんくだ――」

インターホンを押そうとしたそのとき、突然玄関の扉が開いた。

「ああ、テンカ先生！」

母親と一緒に飛び出してきたのはアヤだった。

「おぅアヤ。今から家庭訪問――」

「それどころじゃありません！　トイレが壊れたんです！」

「は？」

アヤの言葉できょとんとするオレに、次は母親が必死な形相で訴えてきた。

「だから！　トイレが壊れたんです！　隣のニシカワさんちに借りに行くんです！　失礼します！！　いくわよアヤ」

「うん！」

爆走していく二人……ま、まぁいいか。隣でニシカワとまとめて家庭訪問してしまえば。

そう思って隣にいくと、なぜかどこかで見たような行列がニシカワ家の玄関から伸びていた。おばちゃん、子供、おばあちゃん、仕事着のあんちゃんまでいる。全員もじもじしている。これはまさか。

「あの、奥さんがた。これは何してんスか？」

適当に列の一部に声をかけると、またもや苛立った声が返ってきた。

「トイレ待ちの行列に並んでるのよ！　うちのトイレが壊れたから！」

「あたしんちのトイレも壊れたのよ！」

「間が悪いことに皆さんの家が一斉にね！」

「ニシカワさんちのトイレだけが無事なのよ！」

はぁぁ？　んなバカな話があるかよ。

「っつうか。トイレが壊れたってのは、用が足せないほどにヒドイのか？」

「私の家のトイレは流れないだけなんだけど……お父さんが頑張った後にはできないでしょう？」

「あたしんちのは便器の中心が割れて、なぜか噴水が吹き上げてるわ」

「俺の店のトイレはなぜか便器が砕け散った」

「あたち、トイレに猫しゃんを落としちゃったの。抜けないの。だからおちっこできないの。猫しゃんにかかっちゃうから」

「うちのトイレには便所神が生えてきてねぇ」

「ふん、甘いよ。あたしの家なんか元からトイレが無いのさ」

わけのわからん自慢大会になり、大騒ぎ。結局ここの家庭訪問は諦めた。

そして、日が暮れて。

「おお、テンカ先生。家庭訪問はどうだったかな？」

「行く先々の人間が全員トイレに忙しくて、一つも回れなかった」

「そんなバカな話があるか！」

あったんだもんよ！　仕方ねーだろ！！

あぁくそ、ぜってー誰かが「おトイレ最高！」とか叫んだせいだぜ。ムカつくぜ。終業式のことは話さねぇからな！

## カカの天下７８６「奇跡」（後書き）

奇跡。

それは素晴らしいものとは限らない。

あなたは言いましたか？　言いませんでしたか？

# カカの天下787「テキ」

こんにちは、トメです。もうすっかり夏休みですね。にも関わらず学校へ行ってしまったバカもいますけどぶははははチョーウケる！　コホン。いかんいかん、僕はこんなキャラじゃない。

ともかくウチのカカも夏休みですよ。それが理由かはわかりませんが、最近カカに一つのブームができました。

それはとある口癖です。そう、例えば……

「ねーねートメ兄。はやく夕飯的なもの作ってよ」

「なんだよそれ。夕飯を作ればいいのか？　それとも夕飯っぽい何かを作ればいいのか？」

○○的な。これである。

「じゃ夕飯っぽい何かで」

「マジか」

というわけで、まず夕飯を作る。とんかつとサラダ。それに味噌汁だ。

次に、近くにあったティッシュをいくつかくしゃくしゃに丸めて、茶碗に詰めてみた。白いしふんわりだし。ご飯的なものの完成だ。

さらに千切って細かく丸めたティッシュをサラダに振りかけてみ

る。サラダの一部的な感じになった。

「よし、できたぞカカ。夕飯的なもの」

「おー、どれどれ？」

「食べれそうで食べれなさそうに仕上げました」

「ティッシュを無駄遣いするんじゃありません！」

こいつ殴りたい。

「ちゃんと食べられる程度にボケたんだからな。ティッシュさえ取れば元通りになるんだから。ちゃんと夕飯的な何かだったろ？」

「ビフテキ！」

「今日はとんかつだっつの」

すかさずツッコんだのが気にくわなかったのか、カカは茶碗に詰まっていたティッシュを掴んで僕へと投げつけてきた。

「射的！！」

「テキをつければなんでもいいんか。とにかく、おとなしく席についてなさい！」

僕の厳しい口調がムカついたのか、カカは荒々しくこちらへ向かって指差し、こう宣言した。

「敵だ！」

「じゃあ食うな」

「あ、ごめん！　ほんとごめん！！」

まったく、困ったものだ。

次の日。サエちゃんとサユカちゃんが遊びに来ても、カカはまだ口癖を使っていた。

「ねね、トメ兄。洗濯バサミ的なものってある？」

「洗濯バサミがほしいのか。それとも洗濯バサミのようで実は大いなる何かがほしいのか。どっちだ」

「トメお兄さん、いつもツッコミご苦労様ですー」

「いい加減にトメさんもスルーすればいいのに。カカすけったら先週からずっと言ってるんですよっ」

「や、カカの口癖を直したら僕の勝ち、みたいな競争心がいつの間にか生まれていてだな？」

でもなかなか直らないから腹いせに、ご要望の洗濯バサミでカカの鼻を摘まんでやった。

「ふごぁっ！？」

とても女の子らしくない悲鳴をありがとう。

「ふごぁ！　ふごぁ！」

やっておいてなんだが、もうちょっと可愛く痛がれ。

「あーはいはいっ！　わたしが取ってあげるからジッとしてなさいカカすけ。ほっ」

バチーン！！

「ったぁぁぁぁ！　痛い的っていうか痛い！　もんのすごく！」

「ごご、ごめんなさいっ！　つい手が滑って一番痛い取り方をっ！」

皆さん、わかりますよね？　大体の人が経験したことあるはず。挟んだ力を緩めないまま勢い良く引っ張ったときに感じるあの痛み。見るだけでも痛い。でも僕は特に何をするでもなく、お茶をすすりながら子供たちの見守りモードに入った。

「サユカンこのやろー！」

「わ、わざとじゃないわよっ！」

「じゃあわざと的にやったのか！」

「頷けばいいのか否定すればいいのかどっちなのそれっ！？」

ケンカ勃発かと思われた二人だったが、サエちゃんの一言がそれ

を抑えた。

「まーまーカカちゃん。お鼻が真っ赤になってて可愛いよー？」

「へ、そう？　サエちゃんが言うならそれでいいや」

あんだけ痛そうな音させたわりにはあっさりしているカカである。

「んじゃサエちゃんも鼻を赤くして可愛くなってみようか」

そして予想を上回る返しを即行でやるのもカカらしい。バチーン！！

「……ぃ……！　ぃ……！　ぃー！！」

よほど痛かったのか、サエちゃんはか細すぎる悲鳴をあげながらその場に蹲ってしまった。両手の平で顔を覆って、まさか泣いたか？

「は！　私はなんてことを！」

カカは自分の過ちにようやく気づいた。

「サエちゃん大丈夫？　大丈夫！？　ごめんね、ごめんね、私としたことが嫁に家庭内暴力を振るうなんて……ほら、顔をあげて。大丈夫？　わ、鼻が真っ赤。可愛い、可愛いすぎるよサエちゃん！写メ撮っていい？」

訂正。あんまり過ちに気づいてないっぽい。

「……ぃー……！」

サエちゃんはまだ声を出せないらしい。

「まったくもう、何してるんだか……」

呆れかえったサユカちゃんに、カカの視線がロックオン。

「じゃあ次は順番的にサユカンがバチーンする流れだよね」

「どういう流れよっ！　君がサエすけに謝ってめでたしめでたし、でいいじゃないっ！」

「元はといえばサユカンのせいだ！　痛い的な目にあわせてやる」

洗濯バサミを持ってサユカちゃんに襲い掛かるカカ！

「きゃっ！」

驚きつつもカカの魔の手を受け止め、顔に迫る洗濯バサミをガードするサユカちゃん。

「ぐ……！　い、痛い的な目って、ど、どんな目よっ」

「痛いけど気持ちいいって言うのだ！」

そろそろ教育上よろしくない方向になってきた。止めるかな。

「おい、やめろおまえら」

「と、トメさんにされたら気持ちいいかもっ」

勘弁してください。

「だってさ、トメ兄！　さぁ！」

さぁじゃねぇよ。本当に勘弁しろよ。

――結局、サユカちゃんが逃げ切る形で洗濯バサミ戦争は終わった。サエちゃんは未だに蹲って「いー」って言ってる。もしかしたらイイのか？　まさかな。『痛い』の『い』だ、間違いなく。

「それでカカ、洗濯バサミは何に使うつもりだったんだ？」

「手芸部的なこと」

おお、初めてこいつの口癖が的確な表現をした。こいつらのやることって、いっつも手芸部っぽい何かなんだよなぁ。

「ところでサエちゃんがずっと俯いたままなんだけど、放っておいていいのか？」

「そだね。おーいサエちゃん、そろそろ泣きまね的なことやめなよ」

「バレたかー」

泣きまねだったの！？

「せっかくコレを理由に脅して変なことしてもらおうと思ってたの

にー」

しかも何か黒いこと考えてたらしい。たしかに泣きまねっぽい何かだ。

「あ、姉的な生き物が外を歩いてる」

的確だ！　姉のようでそうじゃない、大いなる変な生物！　これ以上に正しい用法はない。負けだ、僕の負けだ。『的な』という言葉がここまで正しい以上、僕はもうこの口癖を直させようなんて思えない。

そんな激しくどうでもいい一日が、今日も過ぎていく。

なんかバチーンとした音と共に。

「あ、トイレ」

「僕も」

「私もだー」

「わたしもっ！」

あれ。そういや今日って他に何かあったような。なんだっけ。忘れちゃった。

## カカの天下７８７「テキ」（後書き）

この話、最後に何があったのか……ていうか誰が来たのか皆さんならおわかりですねっていうか誰でもわかるか。

いやしかし、またえらく更新遅れたもんで申し訳ないです。

最近一回身体を横にしたら動けなくなっちゃうんですよぉ。休んだら書こうと思ってもつい寝てしまい……

なるべく頑張りますが、お盆を越えるまでは仕事がべらぼうに忙しいので不定期に拍車がかかるかもしれませんが、ご容赦いただけると嬉しいです……的な。

## カカの天下788「やってらんね」

「聞いてくれよトメ！」

ダン、と飲み干したジョッキを叩きつけるようにテーブルへ置いたテンは、唾なんだかビールの泡なんだかよくわからないものを撒き散らしながら叫んだ。どうも、それを撒き散らされたトメです。

ジョッキ、テン、という単語が出てきたらもうわかるでしょう。ここは居酒屋『病院』で、僕らは飲み真っ最中というわけです。

「トイレのせいで家庭訪問ができねぇんだ！」

そして前代未聞の話題が今、始まろうとしています。難易度が高いことこの上ねぇ。

「……家庭訪問に行く先々でトイレ中？　そんなことあるわけないだろ」

「あるんだから仕方ねぇだろって何度も言ってんだろが！」

「何度も言われてはいないぞ」

「教頭に毎日言ってんだよ！　でも信じてくんねぇんだ！」

そりゃそうだろうなぁ。しかも毎日なんだ。

「オレは悪くねぇ！　トイレが悪いんだ。トイレなんか滅んじまえ！　んぐんぐんぐ」

叫んだ勢いに任せてビールを一気飲みするテン。

「小さなお子様からお年寄りまで余すことなく困ることになるぞ、それが滅んだら」

「だってよぉ！　だってだってだってよぉー！　おかわり！」

コイツたまにガキくさくなるよな。

「おかしいのはわかってんだよ。でも『まさかなー』と思いつつ次の家に向かうとやっぱりトイレ中なんだよ！　ぜってーオレ呪われてるって！　トイレの太郎さんとか次郎さんとか憑いてるんだって！」

しかし、そこで通りすがりの霊媒師が口を開いた。

「いんや、おんしには何も憑いておらん。トイレが重なるのはただの運じゃ、偶然じゃ」

なんともありがたいお言葉を残して去っていく霊媒師。なんだアレ。

「くそぃ、偶然じゃ仕方ねぇ」

「くそぃってなんだ」

「くそぅ、って言うのなんか悔しいだろ。トイレに負けたみたいでよ」

くそ、まで言ってる時点で負けのような気がするけど。あ、すいません下品な話を。何せ酔ってるもんで。

「このままじゃいつまでたっても家庭訪問できねぇ」

「そんな毎日トイレとかち合うわけもないだろ」

「てめぇらもさっきはトイレ中だったじゃねぇか！！」

……あ？　もしかして今日、カカの口癖がどうのこうの行った後でトイレに殺到したときに来たのかこいつ。あーそういや今日って家庭訪問だって知らせがあったような。忘れてた。

「ていうかさ、トイレが終わるのを待ってから家庭訪問を始めればええやん」

トイレに一時間もかける人いないだろ。よっぽどお腹の中がステキな状態になってない限りは。そんな僕のごもっとも極まりない意見は、

「トイレした後じゃ気まずくて喋れねぇだろ！」

なんか微妙な意見で一蹴された。

「あー……」

僕は頭をぽりぽり掻きながら、とりあえずビールを飲んだ。んぐんぐ、んまい。心が落ち着いた。さてと。

「スッキリした後で清々しく喋ればいいじゃないか」

「できるかよ。『お日柄もよろしくて』のはずが『便通がよろしくて』から始まるんだぞ。そんな会話できっか！」

「すんなよ」

「家庭訪問に行ってまでトイレの話題で盛り上がってどうするんだよ」

「だから、そんな話しなきゃいいだろ」

「無理だ。トイレの後だぞ？　おまえトイレ舐めんなよ？」

「舐めてたまるか馬鹿者」

「人間がトイレの話題に事欠くわけねーだろうが。人がどれだけの頻度でトイレを愛用してると思ってんだ。各々に独自のやり方が伝統として受け継がれているんだぞ、一子相伝で」

「おまえがトイレについて話したいだけだろ」

「ふざけるなよてめぇ」

「どっちがだ。大体なんで一子相伝なんだよ」

「二人目の子供からトイレを教えるのが面倒になってくるんだよ」

「育てたことあんのかよ」

「ねぇよ。でもトイレのことなら大体わかんだよ」

「おまえいつの間にトイレの先生になってんだよ」

「先週からだよ畜生！　オレだってなりたくてなったんじゃねぇ！！」

ダン！　と再び飲み干したビールジョッキをテーブルにたたきつけるテン。まぁお疲れ様ですねぇ。あ、僕のビールもないや。

「おかわりー」

「トイレのおかわりはもういらねぇ！」

「誰もトイレのことなんて言ってないだろ！？」

とにかく。散々トイレについて談義した結果――仕事なんだから我慢して、トイレの話にならないようにうまく家庭訪問しなさい、ということになった。

別に談義しなくてもそれしかない気はするが。

「トメ！　じゃあ明日はてめぇの家に家庭訪問に行くからな！」

「はいはい」

「トイレすんなよ！」

「無茶言うな！！」

これでまたトイレのタイミングで来たら……まさか、な。

## カカの天下７８８「やってらんね」（後書き）

腹減りすぎて飲食業なんかやってらんね、なんて思いつつ仕事を終えた後にこんなん書きました。

や、もちろんお客様の前では笑顔で仕事しましたよ！　でも裏では空腹でぐったりしながら「お客さんいーなーあんなに食べれて…はぁ」なんて心底思ってたんですよチクショー！

私もたまにはお金出していいモン食べたい……給料日来たら……ふふふ……

さて、相当に私事を書いてしまいましたが。次はテンカ先生の家庭訪問です。もしくはトイレです。多分。

それにしてもすごい勢いで夏休み期間が過ぎそうです（多忙すぎて）なので不定期とか言ってるうちに夏休み終わっちゃうやばいやばい、いっぱい書きたいのに。

これはもうお盆過ぎたら連載頻度アーップってことで頑張るしかないのかもかも。

あとですね、なんとカカ天の二次作っぽいのを書いていただきました笑

感想欄にも書かれているのですが、『拓未』さんが『カカ天劇場』として公開されたり後悔されたりしています。始まったばかりですが、ぜひ検索してみてくださいな＾＾

## カカの天下７８９「我慢とは美徳です」

こんにちは、毎度のトメです。

今日こそはテンが家庭訪問に来ます。なのでカカと二人で居間にて待っているのですが……遅いのです。予定の時間を二十分過ぎてもまだ来ません。

「トメ兄、私トイレいきたい」

「待て、我慢しなさい」

そしてどうだろう。いざテンが来るとなったら僕もカカもトイレに行きたくなるというミステリー。やはり何らかの魔力っぽいものが働いているとしか思えない。いやまぁ、あんだけトイレトイレと聞いてたら逆に気にしすぎてこんな状態になったのかもしれないが。

「……トメ兄、もうやばい」

「僕だってやばい。でも待て、もう少し待つんだ。テンが遅れてるのはきっと、他の家でもトイレに行ってる人がいたからだ。もしかすると全ての家がトイレ中だったかもしれない。そしてうちまでトイレだったらきっと凹む。なぜかわからないまま絶対に凹む。だから、うちくらいは大丈夫だとテンに教えてやるんだ」

「わ、わかった。頑張る」

僕らは頑張った。頑張って我慢した。二人してもじもじしながら座って待った。

しかし十分後、さすがに限界がきた。気を紛らわせるためのもじもじが、どっすんどっすんになってきた。揺らしていた身体がいつの間にか暴れていた。

「と、とめに、も、むり！」

「ぼ、僕もだ。こうなったら僕が先に使う！」

「あ、トメ兄ずっこい！！」

だっしゅだっしゅ！！　急げ急げトイレは僕のもの——と思ったら玄関のチャイムがピンポーンって本当に最悪のタイミングで来やがったぜテンカ先生よぉ！！

「……待て、カカ」

「トメ兄が使わないなら私が先に」

「待て、待つんだカカ。玄関に行くぞ」

「そ、そんな。トイレに行かないで！？　トメ兄、本気なの！」

「ああ」

「でもそんなことしたら、私たちの下半身が……」

「仕方がない。テンが、来たんだ」

「漏れちゃうかもしれないんだよ！？　そうなったら……死ぬんだ

よ？（社会的に）」

「大丈夫。僕は死なない」

「トメ兄……わかった、付き合うよ」

「カカ……」

「死ぬときは、一緒だよ」

「……ありがとう。もし万が一、僕が死んだときのために言っておく。おまえは最高の妹だったぞ」

「トメ兄こそ、最高のお兄ちゃんだったよ」

「……行くか。テンが落ち込む前に」

「うん！」

「おまえらはトイレに行かないでくれたんだな！！」

案の定、テンはよくわからん理由で感動してくれた。笑顔で対応しつつ、僕らは内なる衝動を抑え込むのに必死だった。

「いやぁ、行く先々で父兄どもがトイレ終わるの待ってたらこんな時間になっちまったぜ。時間もおしてるし、ちゃっちゃと終わらせようぜ」

僕らとしてもそれは願ったり叶ったりだ。居間で向かい合って座った僕たちは、形式としてとりあえずお辞儀して「今日はよろしくお願いします」なんて言い合ってみた。

「では早速お聞きしますが」

久々に見るテンの猫かぶりモードだ。

「お兄さんのほうで、カカちゃんへの心配事等はありませんか？」

「頭が変です」

「ほんとにな、心配だ」

「ねぇお二人さん。たまには私だって泣くんだよ？」

だって本当に心配だしなぁ。さて、続きは？

「えーっと」

なんで首を傾げて唸ってんだ先生。続きは？

「あーっと……他に何聞けばいいんだろ」

ダメだこの教師。ここは家庭訪問っぽい話題を提供してあげよう。

「先生。このカカ、学校での様子はどうですか」

「あん？　飲んでるときにさんざん喋ってるから知ってんだろが」

「おまえがそれ言っちゃおしまいだろうが」

僕の機転を無駄にしおって。

「ちっ、どうすっかな。考えてみれば、ここの家のこたぁ笑えるほど知ってんだよなぁ」

「テン、そもそも家庭訪問の目的ってなんなんだよ」

「ガキどもが中学に行っても大丈夫な環境にいるのか見るのが目的だ」

なるほど、そういうことか。

「じゃあ話は簡単だ。カカが中学で無事にやっていけるかってことだろ？　もちろん心配だ」

「だよなぁ」

二人してカカを見る。

「むっ、なにさなにさ。私だってたくましい女なんだよ、中学に行くぐらい大したことないよ！」

「確かにたくましすぎるけどよ。あのなカカ？　世の中にはな、冗談が通じる大人ってヤツは少ねぇんだ。てめぇの妙ちきりんな行動が必ずしも受け入れてもらえるとは限らねぇんだぞ？」

そう、そこが僕も心配なのだ。現在、カカの周りには優しい人間が多い。それはとても喜ばしいことだ。だからこそ、そうでない場

所でやっていけるのかが気がかりになってしまう。

個性の強い人間は、良い意味でも悪い意味でも目立ってしまうのだから。

「じゃあどうしろっていうのさ」

「よし、中学に行くな！」

「待てや、そこの教師」

「だってそれしかねぇだろ。こいつの変なところを直すなんて無理だろうし」

――そこで、脳に火が入った。熱さに任せて口が走る。

「ああ、確かに心配だ。でもなテン、さっきから変だ変だと言ってるが、そこまで悪し様に言われる筋合いはないんだぞ！」

「は？　いや、トメ悪ぃ、そんなつもりじゃ」

「あの阿呆な姉だって社会人になるまで爆走し続けることができたんだ。カカができないわけないだろ！」

「わ、わかったわかった！　別にカカを悪く言うつもりなんてなかったんだよ。いきなりそんな怒るほど気に障ること言ったか、オレ？」

「言ったんだよ。カカは大丈夫だ、僕もフォローする。それでいいだろ」

睨み付けるようにテンをまっすぐ見つめる。視線に覚悟の熱を込めて。

「……ああ、そうだなトメ。おまえがいれば大丈夫だ」

僕の熱意は伝わったようだ。

「話は終わったな。テンはこれから他の生徒の家にも行くんだろ？」

「おう、ちょっと早いが失礼させてもらう……おまえの妹を侮辱した形になって、本当に悪かった」

「悪気がなかったのは知ってる。だから気にせず頑張れよ、仕事」

「ああ。じゃあな」

最後に深々と頭を下げて、テンは帰っていった。

「トメ兄……」

切ない声に振り向くと、カカが涙をためて僕を見つめていた。

「トメ兄が、あんなに怒るなんて……」

「ああ……」

「よっぽどトイレが限界だったんだね」

「ああ！！」

「私が先だよ！！」

「僕が先だ！！」

我よ我よとトイレに殺到する僕ら兄妹。

結局、家庭訪問はトイレに染まったのでした。めでたしめでたし。

## カカの天下７８９「我慢とは美徳です」（後書き）

我慢。素敵です。

トイレ。素敵です。

すっきり感。とても素敵です。

自分で書いててなんですが。

なんだろこのトイレ騒動。

# カカの天下７９０「そこは痛いよ、がんばれタケダ」

やぁこんにちは、俺はタケダだ！

世間は夏休みの真っ只中。俺も休みを満喫すべく、友人連中に声をかけまくってみたのだが……

なんと、どいつもこいつも宿題の最中で遊べないというのだ！

聞けば、かの教師はトイレに呪われているという。それと同じように俺は夏休みの宿題に呪われていたのだ！　ええぃ宿題め、夏休み初日に終わらせてしまったからといってこのような暴挙に出るとは！　なに？　単に友達からハブられているだけじゃないかだと？　黙れ小僧！　おまえに俺が救えるか！？

ともかく、前述したとおり宿題もないので俺は暇なのだ。子供たるもの遊ばなければ。さしあたって公園に来てみたわけだが……

「知り合いが誰もいない」

どいつもこいつも宿題だ。いつからそんなマジメになったのだ貴様ら。

「ぬぅぅ……お？」

懲りずにうろうろしていると、ようやく知っている顔を見つけた。あれは確かタマという頑丈な子供だ。ものすごい勢いでブランコに乗っている。振り子の幅が１８０度を超えている。

おお、そのブランコからタマがすっぽ抜けた。

撃ち出された弾丸のように飛行して、鉄棒に腹から激突した。

タマの身体が『く』の字に折れ曲がる。

やはり頑丈だ。

「っておい！　生きてるのか！？」

ぼと、と落ちたタマに慌てて駆け寄り、ピクリとも動かないその身を抱き起こす。

「タマ！　気は確かか！　頭は大丈夫か！？」

俺の声が届いたのか、タマの目がくわっと開いた。

「しぬほどいたい」

「当たり前だ！」

これで痛くなかったら逆に身体がヤバそうだ。

「でもだいじょぶでしゅ」

服に付いた砂をパンパンと払いながらムクリと起き上がるタマ。

やはりこの子は異様に丈夫である。

「一人で遊んでいたのか？」

「うん」

「そうか……そうだよな、君のような子供なら夏休みの宿題などあるわけないしな」

「あるでしゅよ、しゅくだい」

「む？」

「かつこさんからの」

かつこさん？　ああ、この子のお母さんか。しかし他人行儀な呼び方をさせているな。

「どんな宿題だ？」

「うでたてふせでしゅ」

何の選手に育てるつもりなのだろう。む、待てよ？　そういえばいつぞや、そのカツコさんにやたらと腕立て伏せをさせられた記憶が……

「たけだ、あそぶ？」

「む、ああ。よし、遊ぶか！」

俺は心優しいなぁ、ふっふっふ。これを機にカカ君と更にお近づきに、とかは思っていないぞ。念のために言っておくが。

「じゃーおうまさんやるでしゅ」

「お、おうまさんか。外でやるにはキツイ種目を出してくるな」

なにせ下は地面だ。膝を付くのは少々痛いが……ここは我慢だ。

「よーし、馬になるぞ」

「てい！」

タマは待ちきれないのか、柔道っぽい投げ技で綺麗に俺の身体を横に転ばせた。はっはっは、子供はせっかちだなぁ。しかしこんな技を使う子供は初めて見た。まぁ、アレの子供だしな。

「よし、それではお馬さんになるぞ」

「のるでしゅ！」

……なぜ俺は仰向けなんだろう。なぜその腹にタマが乗っているんだろう。

「おいタマ。上下が逆だぞ、これではお馬さんになれない」

「すわってないで！　たっておうまさん！」

この状態でか！？　ブリッジというやつだな。よぅし、俺も男だ。やってみようではないか。

「てい！」

ぶち。

どこかの筋肉が千切れ、一瞬だけ浮き上がった俺の身体はべちょっと落下した。

「やはり無理だ！」

「しゅーはいつもこれでしゅよ？」

シューさん！！　本当にいつもご苦労様だ！

「こういうときはおしりをたたけばいいんでしゅよね。はいよーしるばー」

もう一度言うが、俺は空を向いた状態でタマに乗られている。

なので、タマがお馬さんをやっているノリでお尻を叩こうとすると？

キン！！　とソコに当たるわけで。

「ぬおおおおお！」

世界の猛毒が骨の髄まで全力疾走！（俺のイメージ）

「あれ、うごかない。もいっかい」

キン！　キン！　金！

「はいよーしるばー」

「そ、そこはどちらかというとごーるど――ひぎぃ！！」

絶望した。生きることに絶望した。そんな痛みが脳内を支配する。

「タケダが使えなくなったでしゅ」

「そ、その言い方だけは……やめて、く、れ」

俺は力つきた。正確には俺のゴールデンが力つきた。

でもちゃんと復活してくれよ？　おまえには夢と希望が詰まっているのだから！

「おうまさんやめたでしゅ！　あ、ふんじゃったでしゅ」

俺の夢と希望がああああああああああ！

「ぶらんこやるでしゅ」

あ、ああ、ああ……

だれ、か、たすけ……

「おおタマ！　あたし仕事終わったよー！」

「かつこさんでしゅ！」

「うおおおおお！　今行くよタマ！　大爆走だあああああタマああああ！　あ、玉踏んだ」

俺は死んだ。

## カカの天下７９０「そこは痛いよ、がんばれタケダ」（後書き）

もう涙で前が見えない。

# カカの天下７９１「まさかの連続、がんばれタケダ」

……

……

……

……

「あ、なんか踏んだー」

……！？

「ぎゃあああああす！！」

あまりの痛みに生き返った！？　どうもタケダです！

「はぁ、はぁ……し、死ぬかと思った。ていうか死んでなかったか俺」

「どしたのー？」

どうやら俺を（踏んで）生き返らせてくれたらしいのは、通りすがりっぽいサエ君だった。周囲を見渡すとカツコさんとタマはいなくなっている。どうやら俺を放置して帰ったようだ。しどい。

「ねーねー、どしたのー？」

「あ、ああ！　聞いてくれサエ君！」

「やっぱいいやー」

「きーいーてーくーれーよー！」

「だってタケダ君、暑苦しいんだもん」

む、そうか。今は夏だからな。暑苦しいのは嫌われる、当然のことだ。今後カカ君と会ったときのことを考えて涼しげなタケダを練習しておかなければ。

涼しげ爽やか、俺は髪をサッとかき上げた。

「ふ、サエ君。実はな」

「なんかムカつく」

「な、なにぃ！　せっかく涼しげにしたというのに」

「涼しげっていうのはこういうのを言うんだよー」

サエ君は髪をかき上げた。しかし俺のように前髪を払っただけではなく、首筋から……腰まで届くほどの黒髪が、指に絡まることなくさらりと流れる。そよ風に乗り、日光を浴びてきらきらと輝くその髪は――

「まさにシャンプーのＣＭ！」

「……もっと他にないの？」

涼しげ、というより冷たげな視線が俺へと突き刺さる。

もちろん俺の豊富な語彙を使えば表現はいくらでもできたろう。しかし真面目にそのようなことを考えると、何を口走ってしまうか不安になったのだ。だって、その、髪をかき上げたときのサエ君の流し目で異様に動悸が激しくなってしまったのだから！　涼しくなるどころか熱くなってしまった！　なんだあの色気は！　君は小学生だろう！　これが噂に聞く魔性の女というやつか！　あなおそろしや！　俺が好きなのはカカ君だぞ！

「まぁいいやー。それで、どうしたの？」

「ああ！　実はな！！」

なんとなく後ろめたいことを考えていたような気がした俺は、逃げるように話題を戻した。先ほど我が身に起こった恐ろしい衝撃（一箇所に集中）を語りまくる。そしてサエ君は優しく微笑んだ。

「大変だったね、タケダちゃん」

「俺はまだ男だ！」

男たる象徴は死んでいない！　きっと！

「ともかくー、タケダ君はいま、暇なんだね」

「そうだが」

「じゃ、デートしよっかー」

「ＨＡ！？」

デート、それは子供なら誰もが憧れるスペシャルなイベント！
俺も幾度と泣く、じゃなくて幾度となくカカ君とのデートを夢見て、そして夢の中にも関わらずフラれてきた。やっぱ泣く。そんな俺が、デートだと？　しかも意中の子の親友と！？

「とりあえずジュースでも飲もっかー」

「お、おう」

「タケダ君、買ってきてー。こういうのは男の子が出すもんだよねー」

「お、おう」

未だ戸惑いの中にいる俺はバカみたいにコクコク頷き、サエ君が好きそうな甘いジュースを買いに公園の自販機へと走る。

数分後、サエ君のもとへ戻った。

ペットボトルのジュースを渡すと、サエ君はこっくんこっくんと遅いペースながらも一気にそれを飲み干した。よほど喉が渇いていたらしい。

「デートおわりー」

「君は喉が渇いていただけか！？」

「当たり前だよー」

「当たり前なのか！？」

ときめいてしまった俺の心はどうなる！

「じゃ、ごちそうさまー。またねー」

「そして爽やかに去っていく気か！？」

「涼しげでしょー」

「確かにな！！」

はぁ、今日はさんざんな一日だった。俺っていったい……

「タケダくーん」

「今度は食事か！？　奢らんぞ」

「あははー、ちゃんと生き返ったねー」

「……はい？」

「元気になってよかったよかったー。じゃ、また頑張って面白いことしてねー」

そう言ってウインクなんかを残して去っていくサエ君を、俺はポケーっと見送ってしまった。

元気づけてくれたのか？　いや、そんなバカな。でも俺、なんだか元気になってしまっているような気がする。

本日の教訓。

可愛い女の子は恐い。そしてズルい。タマ含む。

## カカの天下７９１「まさかの連続、がんばれタケダ」（後書き）

哀れすぎるタケダを少し救済。

さて、これで再び叩き落す準備が整った（外道

でもそこまでタケダを連載するのもアレなので、このくらいで勘弁してあげましょう＾＾

それにしてもお盆ですね。お客さんぱねぇ。

一年の内でもトップクラスな忙しさでハイになった店員のあやしい笑いが止まらない季節です。

行き着く先が灰なのは間違いない。

立てよ飲食業、今こそ我らの稼ぎ時だぁ！！

## カカの天下７９２「お盆ですからこんな話も」

「怪談をしよう！」

こんにちは。最近は本当に夏らしくない天気ですよね、トメです。だからといって僕がこんな、らしくないことを言うはずもなく。

「カカちゃん、怪談は苦手でしょー」

「いつもだったら真っ先に嫌がるくせにっ」

我が家へ遊びに来ていたサエちゃんとサユカちゃんが呆れながら言う。僕も同感だ、しかしカカは雄々しく叫んだ。

「人生は戦いだよ！　苦手なものは克服しなければならない。この夏休み、私は自分の弱点と向き合う決意をしたんだよ！！」

おお、すごい。カカが立派なことを言うなんて！

「本音はー？」

「暑くてだるいからヤケになった」

オイ。

「もうさ、なんかさ、扇風機じゃ足りないしさ、風鈴なんかテルテル坊主と似たようなもんだしさ」

それは形を言っているのか、それとも気休めと言いたいのか。

「もうここは怪談しかないってわけよ！」

そして後悔するオチですね、わかります。

「というわけで、はいサエちゃんからどうぞ！」

いきなり振られたサエちゃんは「あははー」と困った顔になったが。

「ふふふー、じゃーとっておきのお話を。これは昨日あったことなんだけど」

随分と身近なとっておきですね。

「キリヤとユカさんが公園のベンチに並んで座ってたんだけどー……」

『あーあー暑い！　なんでこんなに暑いのかしら。キリヤ、なんとかしなさいよ！』

『わかりました』

……ぎゅ。

『こ、こら！　なおさら暑くなったじゃないの』

『ふふ、ごめんなさい。つい意地悪をしてしまいました』

『暑いってば』

『ではやめますか？』

『ばか！』

『どういう返答でしょう？』

『……わかれ、ばか』

『はい』

ぎゅー。

「熱いよ！！」

「でも聞いてるほうは寒いわっ！」

「っていうかうざい！　その二人うざい！！」

ぎゃーぎゃー騒ぐ僕たちを、サエちゃんは満足そうに見ていた。

どうでもいいけどサエちゃんはずーっと涼しい顔してるのな。

「で、でもこれってホラーなのかしら？」

「ホラーだよ！！」

……そうか？

「よぅし、言い出しっぺは私が次を行くよ！　んとね」

『やぁ、僕トメ！　なんで今さら自己紹介してるんだろうね、あっはっは。あれ、どうしたんだい姉？』

ぎゅ……

『あ、姉？』

『ね。もっと、ぎゅーっとして』

「ホラーだー！！」

「ホラーよっ！！」

紛れもなくホラーだ！！

「カカてめぇ僕を殺す気か！？」

「涼しくなったでしょ？」

「心臓止まって冷たくなるところだったわ！！」

想像するだけでここまで震えがくるホラーが他にあろうか。いや

ない。映画にでもすれば間違いなく世界一恐いホラーとして注目を浴びるに違いない。もしくは誰もが目を背けるに違いない。

「じゃあ次はサユカンね」

「えっ！？　き、急に言われても……」

「サユカちゃんってこういうアドリブきかないもんねー。じゃートメお兄さんどうぞ」

「は？　ぼ、僕だって急に言われても」

「仕方ないなぁ。じゃあ私が二人のホラーを考えてあげるよ」

カカさんや、その発言なんかおかしくないですか。

「んとね……」

『トメさんっ！』

『なんだい、サユカちゃん』

『ちゅーしたいのっ、ちゅーしたいのっ』

『仕方ないなぁ。ちゅっ』

「ホラーだ！」

なんでだ。

「その後の展開が気になるところだねー」

「うーん、サユカンが『嬉しすぎてスッポンポーン！！』とか叫ぶのはどうかな」

「それいーねー」

「よくねぇよ。サユカちゃん、なんとか言ってやれ」

「イイ！！」

いいのかオイ。

「じゃなくて、ななななんて話を作ってるのよっ」

「あれま、気に入らなかったか」

「カカちゃん。じゃー配役を逆にしてみよー？」

『ちゅーしてサユカちゃん。ちゅーして、ちゅー』

『仕方ないわねぇ。ちゅっ』

『えへへ。トメぽん嬉ちい！』

「ホラーだあああ！！」
「トメぽおおおーん！！」
殴りたい。こいつらすっごく殴りたい。
「なぁサユカちゃん？」
「イイ！！」
ダメだこの子。
「あのなぁおまえら」
「なに？　トメぽん」
「どうしましたトメぽんお兄さん。ちゅーしてほちいんでちゅか？」
「わたしはハイ喜んでっ！」
ダメだこいつら。どうしてくれようか……ん。
「あれ、いつの間にやらクララちゃん」
『うお！？』
そう、誰も気づかないうちに僕らの輪へ入って話を聞いていた少

女が一人。

「はい、クララ参上です！　気になる話が聞こえたのでやってきました」

「気になる話ってどれー？」

「トメぽんです」

お、ま、え、も、か。

「というのはくだらない冗談なのですが」

なんでどいつもこいつも殴りたくなるようなこと言うかね。

「かいだん、というのが気になったのです！」

あれ、そういえばこれ怪談だっけ。すっかり忘れてた。

「とりあえずクララ、異様に転びやすい階段なら知ってますけど」

階段の話なのか怪談の話なのかハッキリしろ。

「あのねクララちゃん、怪談っていうのはね」

僕が親切にも教えてあげようとした、そのとき。

クララちゃんの視線が誰もいない方向に留まっていた。

何もない場所を、まるで誰かと目を合わせているかのように見つ

めたまま……

「あ、どもです」

クララちゃんはお辞儀した。

その視線は横へ移動して、そのまま玄関へ。

まるで誰かを見送ったようにもう一度お辞儀してから、クララちゃんはようやく僕らのほうへと視線を戻した。

「それで何の話でしたっけ。あ、クララ思い出しました！　かいだんってなんですか？」

今のそれです。

「綺麗な人でしたねー」

サエちゃんそれ誰のこと？

「「あ」」

カカとサユカちゃんが口を開けてぽかんとしている中、どうやら『見える』らしいサエちゃんとクララちゃんが同時に玄関の方を見た。まさか戻ってきたのか？

その視線はそのまま移動して……

カカが座っている位置で止まった。

「……え？　え？　なんで私を見てるの？」

「入っちゃったー」

「な、なにが」

「幽霊のお姉さんがカカの中にです！」

カカが爆発した（イメージ）。

その勢いで自分の部屋へと飛んでいった。

僕らは慌てて追いかける。そしてカカの部屋を覗くと、そこにはミノムシがいた。

「あ、あの。カカすけっ？」

「ミノムシは喋れません！」

「喋ってんじゃん」

いつだったか、前も見たような光景だ。カカは季節外れの毛布やら厚布団やらで自身を覆いまくり完全ガード。おそらく押入れから出したんだろうけど。

「暑い死ぬ暑い死ぬでも出たら死ぬし出なくても死ぬうおおおお」

無理すんな。

「まったくもー、せっかくカカちゃんが恐がらない程度の怪談にし

てあげてたのにー。どうしてくれるのクララちゃん」

「いや、サエすけだってノってたじゃないの」

「トドメをさしたのはクララちゃんだよー」

「クララしょっくです！　ところでカイダンってなんですか？」

あーもう、この子らは……

「はいはい、こいつは僕がなんとかしとくから。そろそろ皆、帰る時間だろ？」

『はーい』

カカがこういう風になるのも慣れたもので、彼女たちはさして気にすることなく帰っていった。

僕もそんなに気にしなかった。

――しかし、その夜。

「一緒に寝よトメ兄」

「マジかよこんなに暑いのに」

「恐いから一緒に寝よ」

こうなるとは思わなかった。さすがはカカ、いくら慣れても予想を上回る。

「ぎゅー！」

いや暑いんですけどホント。

## カカの天下７９２「お盆ですからこんな話も」（後書き）

お盆ですので怪談の一つでも……と思ったら一つもないこの現実。だってカカ苦手だもん。

でもまぁこんな展開ですので、次の話では兄妹のベッド内の攻防をお届けします。

ああ、でも墓参りもさせないと。

皆さん、墓参りしてますかー？

私はもちろんしてません（ぉぃ

多分、一日くらい寝ないで行くとは思いますが……もし行けなくても頑張ってる姿を見守ってもらうってことでいいですよね。というかよしとしましょう。うん。なるべく行くけど。

# カカの天下７９３「ですよ」

こんばんは、トメです。

今日も今日とて夜なのに暑いです。半そでシャツにブカブカなハーフパンツという楽な格好ですが、それすら脱いでしまいたいところです。しかしちゃんと身体を保温しなければ健康によくないし、何より大人として、だらしないマネはできません。

そんな理知的な僕に無理難題をふっかけくることでお馴染みなのがこいつ、妹のカカ。今回は一緒に寝ようなどと言うのです。

一見、大したことじゃないように思えます。しかし、しかしですね！　重大な問題があるのです。

カカも小学六年生。

すでに身体が大人へと成長し始めている時期。

とかそういう理由はもちろん微塵も関係なく、ただでさえ暑いのに二人でなんて寝られねーよバーローということです。

「……どうしても一緒に寝るのか」

「うん。だって恐いもん」

「何が恐いんだ」

「お姉さん」

その気持ちはよくわかる。お姉さんとは恐いものだ。うちのは特に。

「幽霊のお姉さん」

うん、わかってるよ。あのバケモノな姉のことじゃないのは承知している。でも実際お姉さんって名のつく人たちってどこか恐いんだよね。そう思ってしまうのは男のサガかしら。

「だから一緒に寝ゆ」

「寝ゆ？」

「眠いから」

まともに喋れないくらい眠いらしい。

「はぁ……わかったよ。一緒のベッドで寝てやる。ただし僕に近づくなよ、暑いから」

「わーい」

そんなわけで、一枚のタオルケットをお互いのお腹にかけて寝転がり、電気を消したわけだ。距離は結構空けたから、そんなに暑くはない。

「ぎゅ」

訂正。めっさ暑い。

「カカ、暑いだろ」

「暑い、うざい、ぷしゅー」

「最後のはよくわからんが、僕も同感だ。だから離れろ」

「やだ。暑い。でもぎゅー」

暑さより恐さのほうが勝るか。

「トメ兄だって妹に懐かれて嬉しいでしょ？」

「暑い」

「嬉しいでしょ？」

「暑いという感想しか持てない」

「妹の可愛さに癒されるでしょ」

「暑苦しい」

「可愛いって言え！」

「ええい、その図々しさが暑苦しいとなぜわからん！？」

ひっついてくるカカを蹴るようにひっぺがす。その足を両手で押さえ込み、懲りずにひっついてこようとするカカ。く、この僕に両足を使わせるとは、なかなかやるな！　えい、とお！　などと寝て

いても意外と格闘ってできるんだよなぁなんて童心に返ってみる。

「ゆーれーこわいー！」

「あーつーいー！！」

ていうか丸っきりガキだな僕ら。

「は！？」

攻撃中だったカカは、なぜか急に動きを止めた。

「どうしたカカ」

「お姉さんの霊が私にのりうつった」

「それ絶対うそだろ」

「うらめしやー」

「なにが」

「何がって？」

「何がうらめしいのかってこと」

「うらめしいってどういう意味？」

「帰れおまえ」

自分の部屋に。

「とにかく私は今、お姉さんなの！」

「どのへんが？」

「うやめしイヤン！」

「ほんと帰ってください」

ほんと暑いんですってば。

「むー、じゃあバラすよ。実はね、私はあなたの本当のお母さんなの！」

「その胸で母乳を出したのか。鼻で笑っていいか？」

「ちーがーう！　私はこの子に憑いている霊なのよ。サエという子がたまに見かけていたでしょう？　たまにこの家へ訪れる女の霊、それが私。あなたの本当のお母さん」

「へぇ。お母さん、お名前は？」

「優霊出素夜（ゆうれいですよ）」

「帰れ」

「なによ！　本当なのよ！？　あなたの名前は優霊トメなの」

幽霊と目。

なんか恐い。

「まぁいいや帰れ」

「本当なのよ！」

「嘘つけ」

「うん嘘。ただの通りすがり出素夜」

「寝てもいいですか？」

「だーめー！　もうちょっと遊んでほしいの出素夜」

「いや出素夜」

そんなこんなで夜は更けて。

翌日。

寝る直前にしていた阿呆な会話はかなり忘れていた。それが夢だったのかどうかはわからない。本当に霊が憑いていたのかも不明だ。

そして今日も今日とて我が家に揃う三人娘。その中で最も霊感がある少女、サエちゃんが言うには。

「どちらにせよ、ああいうのはトイレにいけば出ちゃうものだから

ー」

「排泄物っ！？」

除霊って簡単なのな。

「よかった。じゃあ私はもう大丈夫だね。朝からおっきいのしたから」

「そこの女子。お姉さんになりたいならその辺は口にするんじゃありません」

「そりゃ大便なんて口にしないよ」

「そうじゃなくて」

ああ、本当に母さんが来てくれればこの辺も教育してもらえるんだけどなぁ。この際、幽霊でもいいからお願いしたいわ。

# カカの天下７９３「ですよ」（後書き）

お久しぶり出素夜。

いやはや、激動のお盆がようやく終わり、少し余裕が持てそうです。とか言ってたらあと十日で八月が終わり！？

むう、これはちょっと頑張らないといけませんね。

カカたちの夏が全然書けてない。書かなければ。いやまぁ夏らしくなってきたのはめっちゃ最近なんですけどね。やっと梅雨終わったけど暑い暑い。

夏休み終わった直後も相当暑いんじゃないですかね。勉強できるのか学生さんたち笑

なんにせよ、皆様。体調を崩さないよう気をつけましょうね。

# カカの天下７９４「夏の夢」

こんにちは、トメです。

今日はカカと一緒に墓参りに来ました。お盆の定例行事ですね。

「ねぇトメ兄。ちょっと聞いていい？」

「んー？」

僕はお墓の世話をしながら、後ろでボーっと立ってるカカ答えた。

「このお墓ってさ、ご先祖様がいるんだよね」

「そうだぞー」

「お祖父ちゃんとお祖母ちゃんも眠ってるって、言ってたよね」

「ああ、小さい頃にそういう話したな」

「でも、お祖母ちゃん生きてたよね」

ぴたり、と一瞬だけ手が止まる。しかしすぐに作業再開。

「まぁでも、お祖父ちゃんはいるさ」

「お祖父ちゃんって忍者？」

「……うん」

「生きててもおかしくないんじゃない？」

「……そう、かも」

カカの言いたいことはわかってきた。

「ここってさ、お父さんのご先祖様のお墓なんだよね」

「ああ」

「全員忍者だよね」

「おう」

「じゃあここ、誰も入ってないんじゃない？」

やっぱりカカもそう思うか。僕も薄々は思ってたんだが。

「じゃ、無駄なことやめて帰ろう。アイス食べたいんだ私」

「待て待て、もしかしたらお墓に入った人もいるかもしれないだろが」

コンコン。

「もしもーし、入ってますかー？」

「トイレかよ」

これでノックが返ってきたら恐ろしいけどな。

「っていうかさ、カカ。おまえ幽霊が恐いんだろ。そんなことしていいのか」

「いいよ。おりゃ！」

がすっとお墓を蹴り上げるカカ。

「おい、それはいくらなんでも」

「トメ兄がやれって言った！！」

「言ってねぇ！！」

――そのとき。

突然響いたおどろおどろしい声に、僕らの背筋が凍った。

「うーらーめーしーやー……」

どこからともなく聞こえてくる声、しかしその類が一番苦手だったはずのカカは立ち向かった。恐怖を乗り切り、挑戦的に言ったのだ！

「うらめしやってどういう意味！？」

「わからん」

幽霊もバカだった。

「あたしが最初に聞いたときは、裏の飯屋かと思ってワクワクしたもんだ」

バカは姉だった。

「姉、あんたも墓参りか。来るなら最初から言えよ」

「驚かそうと思ってさぁ」

確かに驚いた。うらめしやの意味を知らないこととか。

「そういや姉も、幽霊とか見える人だったよな」

「ん、まぁまぁ見える」

「いまカカがお墓を蹴っちゃったんだけどさ、幽霊が怒ってないか見てくれるか？」

姉は目を凝らした。本当に見えてるかは知らないが、なんとなく安心がほしい。

「どうだ、怒ってないか？」

「気持ちよさそう」

「ドMの家系か」

あの父にしてご先祖あり、だな。

――そのとき。

僕が罰当たりな発言をしたせいか、周囲の温度が急激に下がった。
そして今度は姉ではない、女性の声が……

「うーらーめーしヒク！！」

恐ろしげな声は一転、可愛らしくなってしまった。

「やーんしゃっくりしたぁ。ヒク！」

「母さん……」

「トメ君、ヒク！」

「そんな挨拶初めて聞いた」

「あ、お母さん。ひく！」

「よぅ母。ひっくー」

そしてすぐに浸透する新挨拶。つくづく愉快な家庭だ。

「ねぇお母さん。このお墓、誰も入ってないかもしれないんだよ。帰っていーい？」

「あらあらダメよカカ君。お墓参りっていうのはね？　お墓に誰がいるかよりも、亡くなった方々を想うことが大事なのよ。だからちゃんと、お世話はしなさい」

「「はーい」」

さすが我が家最強の人。カカも姉も素直に頷いて、僕の代わりにお墓の世話を始めたではないか。

「僕の仕事がとられちゃったよ」

「ヒク！」

「ねぇ母さん」

「ヒク？」

「姉じゃないんだから変な生物っぽい返事はやめてください」

「あはは、トメ君は相変わらず手厳しいね」

母さんは相変わらずマイペースですね。

「想うことが大切、ね。母さんの家族の墓は、まだわかんないの？」

困ったように笑う母さん。まだ、か。

ここだけの話、母さんは捨て子のようなものだったらしい。小さい頃に身寄りのなくなった母さんを拾ったのが、現在所属している会社の社長だとか。漫画みたいな話だし、作り話かもしれない。母さんは苦労話のようなことは、ほとんど口にしないから真実はわからない。だけど母さんが『母子家庭から身寄りがなくなった』という身の上だけは聞いている。

「母さんの母さんも、戻ってきてるのかね。お盆だし」

「そうね、多分」

お墓はわからない、行方もわからないらしいけど……母さんは、自分の母が亡くなったことは知っているようだった。理由はわからないけど、ほぼ確実らしい。

「おもしろい人だったのよ」

「カカの血はそれか？」

「ふふ、かもね。でもおっちょこちょいでもあったの。クリスマスの夜、娘にプレゼントを枕元に置こうとして、私の顔面に躓いて転ぶような人だった」

痛い。聞いてるだけで痛い。でも母さんの母、というかカカの祖母ならやりそうだった。

「でね、私は起きちゃうんだけど、お母さんはそんなこともあろうかとってサンタの格好をしててね」

「自分の特性をよくわかってたんだな」

「私が『おかーさん？』って聞いたら、すごく慌てて『違うアルヨ！！』とか言っちゃって。『ワタシおかーさんじゃナイヨー！　サンタヨー！　名前はサンタデスヨだよー。苗字が三田で名前が出素夜ヨー！　字はこう書くヨー』とか言っちゃってね」

「……」

「すごく面白かったから、そのときのことだけはよく覚えてるの」

「……そっか」

「カカちゃんたちと遊んだら、きっと楽しいことになってたんだろうなぁなんて。ときどき思うの」

「今はお盆だから、きっと来てるよ。孫の顔を見に……ついでにカカと夢の中ででも遊んでるさ」

「ふふ、そうかもね」

さて、我が家の謎が一つ解けたところでお墓の様子はどうなった？

……あれ、さっきまで墓の世話をしていたカカと姉の姿がない。

「ねぇ母さん」

そして振り返ると、母さんの姿もなかった。

「あれ？」

誰もいない。周りに、誰も。

「白昼夢、か？」

まさか。

でもそれから——ちょっと遠くで遊んでいたカカに聞いたら、姉

にも母さんにも会ってない、お墓の世話が面倒だからずっとここにいた、というし。

そういえば、あの恐がりなカカが墓を蹴った時点でおかしかったような。

これ、怪談？

まさか、ねぇ。

なんとなく恐くてモヤモヤと過ごした翌日、やっぱり家族らのイタズラだったと判明。あーびっくりした。やっぱり愉快な家庭だよ、なぁ祖母ちゃん？

## カカの天下７９４「夏の夢」（後書き）

皆さん、ひっくー。

お盆は過ぎてるけど、これはお盆の話ヨー。脳内補完よろしくヨー。

お盆の後のお話も頑張って書くヨー。

出素夜ー！

ヒク！

# カカの天下７９５「れれれのひっく」

ひっくー、カカです。今日も暑いねぇ。

「トメ兄、ひく！」

「なんだよ、その挨拶が気に入ったのか？」

そういうわけじゃないんだけどさ。

「いまさ、宿題やってるんだけど、ひく！」

「おー、偉い偉い」

「ここがわかんなくて。ひく！」

「……もしかして、普通にしゃっくり出てるのか」

そうなのさ。

でもそれはそれとして、今は宿題なのさ。

「この問題なんだけど」

「どれどれ」

「７５８たすひく７４かけるひく９ひくわるひくーー」

「わからんわ！！」

「でしょ？　ひく！」

や、本当の問題はこんなじゃなくて、しゃっくりが混ざってるだけなんだけどさ。ひくひく言ってたら頭の中もこんがらがってきちゃって……そう弁明してみると、トメ兄は呆れたようにため息をついた。

「仕方ない。外で遊んでこい。そしてしゃっくりをうつしてこい」

「しゃっくりってうつるの？　ひく！」

「うつそうと思えばうつるだろ」

そうなのか。じゃあトメ兄にうつそう。

「僕にはうつらないぞ」

「なんでさ」

「今日はうつらない日だから」

この人もたまにわけわかんないこと言うよね。

「わかった。じゃあうつしてくる」

「いってらっしゃー」

まずは近場だよね……

「ひく！　ひく！」

しゃっくりしながら外を歩く。

「くひ！　くひひ！」

オリジナリティを追求しながら歩いているうちに目的地へ到着。

「あ、カカちゃん。いらっしゃーい」

「サエちゃん、ひっくー」

よし、うつれうつれうつれうつれうつれうつれうつれうつれれれれれのれー！

「あれー？」

そのとき、サエちゃんに変化が！

「ひくー」

やった、うつった。

「なにこれー。ひくー」

それにしても随分と余裕のあるしゃっくりだ。

「しゃっくりをうつしてみた」

「なにそれー。カカちゃんひどいー。ひくー」

「ごめんねサエちゃん。じゃあ他の人にうつそうか」

そんなわけで二人で移動。目指すはもちろんあの子のおうち。

「あら、カカすけサエすけ。突然どうしたのっ」

「さぁ、サエちゃん。サユカンに」

「うん。れれれのれー」

それでうつるの？

「ひくっっ！！」

うつった。世界って不思議だ。

「な、なによこれ。ひくっっ！！」

「しゃっくりうつしたのー」

「すごく勢いのあるしゃっくりだね」

「なんて迷惑な――ひくっっ！！　こうなったらトメさんに口うつすわ！」

口はどこから出てきたんだろう。

「トメ兄には効かないよ」

「なんでよっ！」

「トメ兄がそう言ってた」

「なるほどっ！　さすがはトメさん！　憧れるわひくっっ！！」

憧れてるのか引いてるのかどっちなんだろう。

「こうなったら商店街に行くわよっ！」

というわけでさらに移動。見慣れた花屋にやってきました。

「あ、お姉だ。働いてる。ほらサユカン」

「れれれのれーって言えばしゃっくりはうつるよー」

「そんなジンクス初めて聞いたけど……覚悟を決めるわっ！　カツコさん！」

「あん？」

「れれれのれっ！」

「バカじゃないのあんた」

あ、サユカンが石化した。そりゃお姉なんかに言われたらねぇ。

「……む！？」

しかしそのとき、お姉に変化が！

「ヒキキ！！」

なんて気持ちの悪いしゃっくりだ。

「なんてことすんのさ！　ヒキキ！」

どうしよう、妖怪にしか見えない。

「こんなもの、あたしだってすぐにうつしてやる。サラちゃん！」

「はい、なんでしょうかカツコさん」

のこのこと店の裏から出てくるサラさん。

「れれれのれ！」

そしてうつされるしゃっくり。どうでもいいけど、れれれのれって呪文すごいね。

「ひっく」

「サラさんのしゃっくりは普通だ」

「名前しか特徴ないもんねー」

「しゃっくりさんかしら。略してクリちゃんでどうっ？」

「好き勝手言ってくれるわね、君たち……ひっく、ひっく」

「おぉ、クリちゃんがひくひくしてる」

「カツコさん！！　なんてこと言うんですかあなたは！！」

「きひひひひ！」

さっきのしゃっくりみたいに気持ち悪く笑うお姉。何がそんなに可笑しいのか私にはよくわからない。

「さぁクリちゃん。次は誰にしゃっくりをうつす？」

「サラです。よくわからないですけど、ちょうどよくキリヤさんがそこから歩いてきますね」

「よし、クリちゃん」

「サラです」

「キリヤンに向かって、『れれれのれー、しゃっくりをあなたにぷれぜんつ、ふぃーばー！　ぷっぷくぷー。私は鳥になりたい』って言うんだよ。そうすればしゃっくりはうつるから」

「わかったわ」

わかったんだ。私はわからないのに。

「キリヤさん！」

「あら、どうしましたサラさん」

「れれれのれー、しゃっくりをあなたにぷれぜんつ、ふぃーばー！
ぷっぷくぷー。私は島になりたい」

大体あってる。ちょっと違う。

しかし、しゃっくりは見事にキリヤンに！

「ヒッキリヤ！」

「嘘でしょ。いろいろと」

私の言葉にキリヤンは高笑いで応えた。

「はっはっは！　しゃっくりとは個性が出るものです。しかし私も仕事がある身、しゃっくりを残したまま店に戻るわけにはいきません。というわけで、れれれのれー！」

もしかして、れれれのれーでしゃっくりがうつるというのは結構メジャーな伝説なのだろうか。

何はともあれ、キリヤンが呪文を唱えた先には――

総理大臣がいた。

「にゃっく」

そして見事にうつった。

世界って本当に不思議だ。

## カカの天下795「れれれのひっく」（後書き）

意味がわからないサブタイトルと共に、よくわからない話をお届けしました。

今回の話はですね。

実はさっき隣の人がしゃっくりして、そのあと近くを猫が通ったんですよ。

だから書きました。

我ながらわけがわかりませんね。でもカカ天はそういう作品です。

どういう作品なのかは想像に任せます笑

# カカの天下７９６「はてなぷーる」

こんにちは、サユカよっ。

ようやく夏らしく暑くなってきたから、学校のプールへ通う率も上がってきたわ。もちろん一緒に行くのはカカすけとサエすけ。去年わたしが泳げるようになってから苛められる機会も減ったし、快適この上ないわっ。

「……ぷはぁっ！　はぁ、はぁ」

「ぷはー。また私の勝ちだねー」

「むぅっ、サエすけ強すぎ」

勝負していたのは潜りっこ。どっちが長く潜っていられるかを競う定番の遊び。わたしは限界まで息を止めてたからすごく苦しいのに、サエすけは何事もなかったかのように笑顔だ。この子ってば本当にいつも涼しい顔してるわよね。

「なんでそんなに息を止めていられるのよっ」

「えとねー、水の中が心地よくて全然苦しくないのー」

「なるほど。確かに水中って気持ちいいわよねっ！　真っ青で、別の世界に来ちゃったみたいで」

「そんな幻想ばっかり見てるからトメお兄さんを奪えないんだよー」

「むっ！　じゃあサエすけは何を見てるのよっ」

「みんなのお尻」

「幻想を見てたほうがマシよっ」

「大丈夫だよー、サユカちゃんのお尻に敵う人はいないから」

「何を比べてんのよっ」

「はみ出てるよ」

「出てないわよっ！」

まったくもうっ。これでカカすけと出会う前はおとなしかったって言うんだから驚きだわ。

「ところでカカちゃんなんだけど」

「なによ、カカすけのお尻がどうしたの」

「またお尻の話？　サユカちゃんのえっち」

「話の流れ的にそっちの話と思うじゃないのっ」

「全然違うよー。そんなに煩悩ばっかりだからトメお兄さんを奪えないんだよー」

「大きなお世話よっ。大体さっきから『奪う』とか言ってるけど、それだとトメさんがもう誰かのモノみたいじゃないのっ」

「私のモノだよー」

「……蹴るわよ？」

「お尻で？」

「わたしってばすごい器用な人ねっ」

「それだけのお尻してれば当然だよ」

「照れるわ」

ふふん、最近、話を流すってことを覚えたわ。泳げるようになったこととといい、わたしって大人になったわよね。

「サユカちゃんのえっちー」

「なんでよっ！？」

でも脈絡のない不意打ちはまだ流せないわ……

「ところで話は戻るけど、カカちゃんって最近おかしいよねー」

「あの子は生まれたときからおかしいわよ」

生まれたときは知らないけど絶対そうに違いない。「おぎゃー」じゃなくて「ゆでたまご！」とか言って生まれてそうよね。

「違うの。おかしくないからおかしいの。見て、今も」

わたしはサエすけの指す方向……カカすけの方を見た。

そこはプールの中心。

「カカちゃんてば、ここに着いてからずーっと泳ぎ続けてるんだよ。２５Ｍを行ったり来たり。面白いことを全くしてないのー」

「ちゃんと他の人とのすれ違いざまに潜って、こっそりとわき腹を突いたりしてるわよ？」

「黙々と泳いでるしー」

「飛び込むときに『えびぴらふ！』って叫んでたわよ」

「最近、ふと真顔になるし」

「ちゃんとさっきビックリ箱から飛び出てきそうな顔してたわよ。なぜかトイレから出てきたときに」

「ふしぎな踊りも踊らないしー」

「ふしぎな呪文なら唱えてるでしょ。ケロリンのポーズと一緒に」

「宿題をちゃんとやってたし」

「あの子、何気にいつも宿題はやるじゃないの」

「私に抱きついてこないしー」

「暑いからでしょ」

「恐い話を自分から振るし」

「それは……変だったわね」

「夏祭りにアレだったし」

「それは……」

何も言えなかった。そこについてだけは、何も。

「やっぱりカカちゃん、何か変だよ」

サエすけがそう言った、そのとき！

「ひゃん！」

「やんっ！」

わきばらに　しょうげきが　はしった！

「んふふ、やーらかい」

なんかＲＰＧ風に言ったけど、ようはカカすけにわき腹を突かれたのだった。今の話、聞かれてないわよね。

「もー、カカちゃん！」

「わ、なにサエちゃん。怒った？」

「サユカちゃんを突くならわきじゃなくてお尻でしょー！？」

「そっか！　ごめん、ほんとごめん！」

「罰としてカカちゃんのお尻たたくよー」

「わーい。やってやって」

この阿呆な会話……カカすけってば全然変わってないように見えるんだけどなぁ。

「ん、どしたのサユカン」

首を傾げる、きょとんとした瞳。

やっぱりいつものカカすけよね。

「サユカンも私のお尻たたく？」

「遠慮しとくわ」

「サユカンのえっち！」

「なんでよっ！」

うん、カカすけだ。

この子が自分から恐い話を振ってきたのは単なる思い付きだったんだろう。いつものように。

でも、今年の夏祭り。

去年は漫才で大いに盛り上がったステージイベントは再び開催され、出店も惜しげなく商売根性を振りかざし、誰もが楽しんでいたその時間――カカすけは何もしなかったのだ。

そう、何も。祭りに参加することすらしなかった。本人とトメさん曰く「体調が悪かった」とのことだけど、あのカカすけが少し体調を崩したくらいでお祭りに行かないとは思えない。

一体何があったんだろう。なんでもないように振舞うカカすけを見ている限りじゃわからない。

## カカの天下７９６「はてなぷーる」（後書き）

お盆終わった～と思って油断したせいで見事に体調崩しました～
あはは。

しかしちゃんと復活しました。カカたちの夏をもっと書かねば。
しかし夏休みはあとわずか。

……やっぱ恒例のあれしかないのか。

あ、夏祭りを楽しみにされていた方いましたらごめんなさい。
書かなかったのにも理由があるので、その辺もふまえて今後を読んでいただけたら嬉しいです。

# カカの天下797「小学校最後の夏詰め合わせ、そのいち」

――サエとサユカのとある夏。

『まんごおおおおおおおおーっ』

マンゴーシロップのカキ氷を一心不乱にかきこむ私たち。

『おうーっ』

同時に頭をキーンとさせる私たち。

『いちごおおおおおおおおおーっ！』

新しくきたカキ氷をまたもやかきこむ私たち。

『とれびあーんっ』

意味がわからないことを言いながらキーンとなる私たち。

『ちょこばななあああああああああーっ』

これもれっきとしたカキ氷です、なんて心で解説しながらかきこむ私たち。

『カキゅみゅみゅみゅう！！』

でゅみゅみゅみゅうのカキ氷版を叫んでしまうくらいに楽しかったこの日。私とサユカちゃんはその店のカキ氷を制覇した！

理由。

なんとなくいっぱい食べたかったから。あるよね、そういうとき。

――カツコとタマのとある夏。

「海だよ、タマちゃん！」

「海でしゅね、カツコしゃん！」

ざざざ、ざっぱぁぁんと波が鳴る崖っぷちにいる親子っぽい二人。

その内、親っぽい人が叫んだ。

「やっほおおおおおおおおおおおおお！！」

子っぽい人が答えた。

「まぁぁぁだだよおおおおおおおおお！！」

ざざざ、ざっぱぁぁぁん、という波の音が「ななな、なんでやねぇぇぇん」に聞こえたのはきっと気のせいだ。

「次へ行こう！」

「はいでしゅ！」

彼女たちが一体何をしたいのか。それは誰にもわからない。

――シューのとある夏。

「暑い……」

交番で。

「ぷしゅー」

溶けました。

――ゆうたのとある夏。

我が名はゆうた。ただいま貴桜小学校のプールの監視員を頼まれし者なり。

「むぅぅぅぅ」

我が目つきは鷹よりも鋭く、けして事故などを見逃しはしない。

全ての水着を視界に入れるこの術、誰にマネできようか。

「ふはは、女子の安全は任せろ」

「あ、あのぅ」

「なんだ名も無き男子生徒よ」

「その、男子の安全は」

「男とは怪我してなんぼだ」

「勉強になります！」

む、変質者？　たわけ。俺は彼女たちを守る。それだけだ。

俺が変質者となるのはサカイ親子に対してだけである！！

――サカイさんのとある夏。

「あつー……」

太陽さんが働いている中、私はお休みですよー。

「ふー……」

クーラーの利いている部屋に戻り、私はごろんと横になりましたー。

「お休みって……らく……」

そのとき、会社から電話が！

面倒くさいけど私は通話ボタンを押した。そしてハッキリと言ったのだ！

「休日出勤は嫌ですよー！！」

『え、あの、今日、出勤日……』

「なちゅやしゅみ！」

『あるわけねぇだろバカタレ！！　今すぐ来い！！』

「えへへ、かんじゃいました」

『患者がいました？　そりゃおまえだ、頭のな！　さっさと来い！』

「ふぁーい」

お母さんてば忙しいよぅ。サエ、構ってあげられなくてごめんねー。よよよ。

「……んしょ」

ごろん。

もちょっと涼んでからいこっと。

「……ぐー」

――サラとキリヤのとある夏。

「疲れましたね、キリヤさん……」

「はい……しばらく仕事したくないです……」

フリーターにとっては激動のお盆を超え、私たち二人は燃え尽きていました。

「でも、キリヤさんはまだまだシフト入ってますよね……」

「ええ、お盆に頑張った人たちがここぞと休みをとるので……」

「キリヤさんは休まないんですか？」

「はっはっは、私まで休んだら誰も店にいなくなるじゃないですか」

「……手伝います」

「サラさんも疲れているでしょう？　花屋の仕事もあるのに」

「女は強いんです。シフト入れておいてください」

「はっは、では男も負けてられませんね」

「ところで彼女さんはいいんですか？　そんなに働いてばかりじゃかまえないんじゃ」

「ええ、ユカさんもお仕事が忙しいようなんで。都合がいいと言えば、あれなんですけど」

「何のお仕事を？」

私はそれを聞いて、かなり驚いた。

「え、え？　ええ！？」

道理であんなに自由なはずだ……

「でも、彼女さんが仕事している中、こうやってお食事してると、なんだか浮気みたいですね」

実際には単なる『お盆お疲れ様会』なんだけど。

「はっはっは、嫉妬してくれたら楽しいですね」

「キリヤさんって逞しいですよね……」

最近は草食男子というものが増えているらしいけど、キリヤさんは当てはまらない……かな？　いや、でも肉食って感じもしないなぁ。

「はっはっは、強さの秘訣は寝る前のお風呂です」

「意外と普通ですね」

でも大事ですよねぇなんて言いつつ、私たちは焼肉を食べるのだった。

――テンカ先生のとある夏。

「……ふう」

寝苦しい夜。暑さにうんざりして寝返りをうつと、棚に足がぶつかった。

「いて」

ひらりと落ちる、一枚の手紙。

眠気がいまいちこないオレはなんとなくそれを手に取った。

それは、トメからの手紙。

ホワイトデイにもらったものだ。今も大事に取ってあるその内容は――トメからの告白だった。

付き合ってほしいと。もちろんオレはＯＫした。そして今も皆に隠れて付き合っている。

関係は良好だ。

なんてな。うっそーん。暑いから変なこと考えただけだよーん。

オレは今度こそ寝た。

――クララのとある夏。

「なぜかみんなしゃっくりしてます。クララ不思議です」

悔しいのでクララもしてみました。

「ひっくらら！！」

予想通りすぎますか？　クララしょっくです！

「しゃっくらら！」

借金したクララみたいです。

「びっくらら！」

あ、これいいです。びっくりしたときに使うです。

「ぽっくらら！」

これはぽっくり逝ったときに使うです。

「いっくらら！」

いくら食べたいです。

そんな風に遊んで過ごしました。

――校長のとある夏。

Ｉｎサバンナ。

遠すぎて実況できません。

略。

――タケダのとある夏。

――ニシカワとアヤのとある夏。

「アヤ坊、旅行に行こう！」

「え、ええ！？　どうしたのよいきなり」

「この間さ、うちに行列できたじゃん」

「あ、ああ。なぜか皆のトイレが壊れて、ニッシーの家だけ無事だったときね」

「あまりにうざいから料金制にしたら、けっこう儲かったんだよね」

「ニッシーって、意外と……」

「さぁ行こう！　せっかくの夏休みだし！」

「どこへ？」

「西へ！」

「そうよね。やっぱそうよね。はいはい付き合ってあげるわよ」

「告白？」

「ちゃう！！」

そして二人の旅が始まった……

つづく。

――インドちゃんとイチョウさんのとある夏。

場所は図書館。

一緒に宿題をしながらカレーを食べました。

「何をやってるんですか、あなたたちは！？」

職員さんに怒られました。

「ええと……何を、しているんですか、あなたたちは」

なぜか二回言われました。

「かのちゃん。怒られてしまいましたね」

「うん……す、すいません。お詫びにこのカレーをどうぞ！」

「おーいすいいいいい！」

てーれってれー！　とカレーのＣＭが出来上がりました。

――トメとカカのとある夏。

……は、また今度。

## カカの天下７９７「小学校最後の夏詰め合わせ、そのいち」（後書き）

というわけで詰め合わせでした。

次も詰め合わせです！

次の次も詰め合わせです！

……だ、だめかな笑

## カカの天下７９８「小学校最後の夏詰め合わせ、そのに」

――サエとサユカのとある夏、続き。

「カカちゃんに元気を出してもらうには、どうすればいいかーの会議だよー」

「確かに今日は元気がなかったわね。昨夜にでも何かあったのかしら？」

「かもねー。昨日の夕方までは元気に私たちと遊んでたし。その辺はトメお兄さんにでも聞くとして、私たちは私たちにできることをしよー」

「何するのよ」

「とりあえずサユカちゃんが変な格好すれば元気になるよ」

「結局それなのっ！」

「今回のテーマは縞パンね」

「見せるの前提っ！？」

「いーじゃん、女の子同士なんだし見られてもー」

「絶対にもれなくトメさんが付いてくるわよっ」

「あれ、嫌なの？　トメお兄さんに見られるの」

「……えへ」

「はい買いにいこー今すぐいこー張り切っていこー」

「ちょ、ちょちょ、あああっ！」

「すいませーん、縞パンくださーい」

「声がでかいいいいいっ！　カカすけが元気ないからって君がカカすけっぽくならなくていいのにぃぃぃっ！」

「いらっしゃいませお客様。あちらが縞パンコーナーです♪」

「そんなコーナー作るなぁぁぁぁぁぁっ！」

――カツコとタマのとある夏、続き。

「タマ、あそこに見えるのが何かわかる？」

「くまでしゅ！」

「あれを倒すよ！」

「はいでしゅ！」

修行の旅は続く。

――ニシカワとアヤのとある夏、続き。

「この電車で、西の地へ！」

「ちょっとニッシー、声でかいわよ！」

そうして始まる二人旅。

電車の中では……

「うおお、なぜ方向を変える！？　そっちは北だ！　北には魔物が住んでいるぞ、だから西へまっすぐ走れえええ！」

「線路通りに走ってるんだから仕方ないでしょ！！」

「おお、僕の声が届いたか。進路を持ち直した！」

「だからそういう風に線路が敷かれてるだけだってば！」

「おねーさーん、アイスください」

「聞けえええ！」

「はい、お一つどうぞ。アヤ坊」

「ありがと」

電車を降りれば……

「よし、西野家で牛丼を食べよう！」

「ちょっとニッシー、せっかく遠くに来たんだからもっと地元の名産とか食べようよ！　そんな全国チェーンで有名っぽいところじゃなくてさぁ！」

「この店は西へ行けば行くほど美味しくなるという伝説が！」

「ないわよ！」

「おお、やっぱりうちの近くより美味い！」

「気のせいよ！」

「気のせいバンザイ！」

「認めるの！？」

目的地まで、あと少し。

――シューのとある夏、続き。

「どろーん」

液体にまで溶けていた。でも誰も気づかない。

――校長のとある夏、続き。

サバンナで行方不明と思われた校長だが、一瞬だけ、その姿を捉えることに成功した。これはその音声である。

「わーにさんこーちら、てーのなーるほーうへ」

何をしているのか、非常に気になるところである。

あと、こんな音声も拾った。

「わににく、げっとだわー。おほほー」

この人がナニモノなのか、今後も調査を続けていきたいと思う。

――タケダのとある夏、続き。

やっぱり略。

――インドさんとイチョウさんのとある夏、続き。

「かのちゃん。今回の自由研究は」

「カレー」

「やっぱりそうなのですね、予想はしていましたが」

「私は今まで自由研究でカレーしか提出したことないよ」

「えぇ！　毎年同じ研究で大丈夫なのですか？　先生に何か言われたりは……」

「研究成果のカレー食べたら、みんな黙るよ？」

「そ、そうですか……わたくしも協力してよろしいでしょうか？」

「うん、一緒に作ろ」

そしてわたくしは、かのちゃんのカレー研究の一端を垣間見ましたわ。

すごくレッドスネークカモンでした。

とてもマネできないと思いました、まる。

――ユイナさんとその他一名のとある夏。

「母さん……俺は母さんの水着姿が見たい！！」

「嫌です。こんな歳になってまで着れません」

「グラビアの仕事とかも来てるじゃないか！」

「お断りしました。もうそんな歳じゃありません」

「俺にとって母さんはずっと16歳ぐらいのままだ！」

「ロリコン」

「うおおお決めセリフをミスったぁ！！」

「仕方ないですねぇ。ちょっとだけですよ？」

「ひゃっほー！！」

「あーあ、どうせ着るならカカ君たちと海へ行きたかったなぁ」

「ふむ、どうやら向こうはそれどころじゃないようだぞ？」

「え、あの子たちに何かあったの？」

「心配はあるまい。大体は誰もが一度、通る道だ」

トメ君がいるから、そこまで心配はしてないけど……会いたいなぁ。早く仕事を終わらせよう。

「というわけでいってきます、パパ君」

「えええええー！　みーずーぎーはー！」

「また今度ね」

「今度って何時何分何秒地球が何回まわったとき！？」

「いってきます♪」

「きーいーてーよー！！　せっかくガキっぽく言ってみたのにぃ」

# カカの天下７９８「小学校最後の夏詰め合わせ、そのに」（後書き）

詰め合わせ、そのに！

次はそのさん！

オチは何も考えてない！

どうしよう！

時期的に夏が終わる！

どうしよう！

とりあえずアイス食べよ。

## カカの天下７９９「小学生最後の夏詰め合わせ、そのさん」

――ニシカワとアヤのとある夏、続きの続き。

「着いたのね、ニッシー」

「ああ、アヤ坊」

「ここは」

「そう、ここは西の果てだ」

時刻は夕方、目の前には海。

燃えるような空の色とは裏腹に、暑かった空気はすっかり冷めていた。心地よい海風が私たちの身体を撫でる。

「西の、果て」

「ああ、僕たちの財力で行ける限りの、な」

「そっか……」

「うん……」

「帰り賃は？」

「ない」

「ばかあああああああああああああああああ！！」

「海のばかやろー！！」

「あんただあああああ！」」

結局、親に電話して迎えにきてもらいました。

すごく無茶な旅だったけど、その……いい思い出だったと、いえなくもないかも。ちょっと楽しかったし……あは。

――カツコとタマのとある夏、続きの続き。

「着いたよ、タマ」

「カツコしゃん、ここは」

「そう、サバンナだ」

生い茂るジャングル。不気味な鳴き声が木霊する、明らかに未開の土地っぽい所にあたしたちは立っていた。

「そ、そこに、なにかいましゅよ！」

そして草むらから、一つの影が！

「あ、校長だ」

「おほほ、奇遇ですねぇ」

「そだね。あたしたちは修行に来たの。そっちは狩り？」

「はい。ワニ美味しいですよ」

「じゃ一緒に行こか」

「ええ、ぜひ」

「わにたべるでしゅ」

あたしたちの熱い夏は、それからもしばらく続いた。

――ジョーイ&マイケルのとある夏。

「ヘイ、聞いてくれよジョーイ」

「オゥ、どうしたんだいマイケル」

「うちのワイフが暑い暑いとうるさいんだよ！」

「うーん、それは夏の風物詩だねぇ」

「ノゥノゥ。それが風鈴のような優しい音ならいいんだけど、まるでブルドーザーのようなダミ声さ！　そこで僕は我慢ならなくて言ってやったんだよ！」

「オゥ、なんて言ったんだい？」

「そんなに暑いのが嫌なら死ねばいい、ってね！」

「ワァオ、なんてストレィトなんだろう！」

「そうしたらワイフがなんて言ったと思う？」

「殺される前に殺してやる、とでも言ったのかい？」

「ＨＡＨＡＨＡ！　それは恐いね！」

「ＨＡＨＡＨＡ！　冗談が過ぎたよ！」

「正解さ！」

「正解なのかい！？」

「おかげで死んでまったよ！　実は僕、幽霊なのサ！」

「そいつはビックリだ！　でも実は僕、死神なのサ！」

「ワァオ、じゃあピッタリのコンビじゃないか！　じゃあ案内してくれるのかい？」

「地獄の底まで付き合うＺＥ！」

「そいつはいい。天国へ向かうと太陽が近くて暑そうだからネ。そっちのほうが涼しそうだＺＥ！」

「イェーイ！」

「イェーイ！」

このお話はフィクションです。

――ユカのとある夏。

「……きゅー」

仕事のし過ぎで伸びているようです。

――シューのとある夏、続きの続き。

「……にゅー」

仕事のしなさすぎで伸びているようです。

しかし、そのとき！

「シュー、事件ですよ！！」

「な、なんだってー！」

がばっと起きるシュー。さすがに事件は見逃せないようです。

「あ、クララちゃん」

「はい、クララ事件見つけました！」

「どこで何が起こったんだい！？」

「ここで職務怠慢してる人がいます！！」

シューは沈黙しました。

そして考えました。大人の必殺技、イイワケを！

「ごめんなさい」

思いつかずに普通に謝りました。やはり素直が一番ですね。

「クララ許さないです！」

「許さないの！？」

しかし世の中、素直なだけじゃ渡れません。

「今度、クララの言うことを一つ聞いてくれるなら見逃してあげます」

「あの、それこそ脅迫っていう罪……」

「職務怠慢罪のほうが大きいです！！　いずれは駄目人間罪に発展するんですよ！」

「ごめんなさい！」

注・この問答はお子様ＶＳ気弱警官のものです。細かいことは気にしないでください。

――サカイ動物団のとある夏。

暑くてバーベキューに。

以上！！

――デストロイヤー教頭のとある夏。

「夏は暑い、という概念を破壊するため、北海道の最北端へ海水浴に来てみた！！」

海パン一丁で。

「ぬおお、寒すぎて身体が破壊されるわ！！」

ざざざ、ざっぱぁぁん！　と波打つ辺り、実はカツコとタマが通った道だったりする。

「うむ、帰って仕事をしよう」

そして北海道限定のメロン系お菓子を買うのは忘れない教頭でし

たとさ。

――タケなんとかのとある夏。

「おい！！　俺の名ま」

暑くて忘れました。暑くて聞こえません。

――トメとカカのとある夏。

「トメ兄、私さ」

「なんだ？　まさか夏休みの宿題を手伝えってんじゃないだろうな。もう明日から始業式だぞ」

「んや……なんでもない」

「どうした。暑さでやられたか？」

「そうかも。でも」

もう夏が終わるのに、なんでまだこんなに暑いんだろう。

うだるような熱気の中でカカは呟く。

らしくない、表情で。

そして、二学期へ……

## カカの天下７９９「小学生最後の夏詰め合わせ、そのさん」（後書き）

詰め合わせ三連続でしたん。

明日から９月！　学生がんば！

ついでに次はカカラジですよ！

**カカの天下８００「第二十八回、カカラジ！」**

鈴宮さんからいただきました――もしも、カカが男だったら。

「サエちゃん、結婚しよう！」

「いやー」

「えー！　しよーよー！！」

「ヤだもーん」

「えええええー！　しーよーぉーよー！！」

「じゃーうん」

「っしゃあ！！　トメ兄、俺たち結婚するぜ！」

「なんだと？　おい、タケダちゃんはどうするんだ」

「あいつとは遊びだったのさ！」

ハッピーエンド。

夜野三日月さんからいただきました――もしもクララが桜じゃ無くて、梅だったら。

「クララじゃなくてウメメです！」

なんだか美味そうですね。

「うめぇ！！」

なにそれ。

「かけ声です。登場シーンに使います」

料理アニメでもなかなか無いですよソレ。

「もしくはメメメです」

目目目ですか

「こわいです！」

霧久さんからいただきました――もしもトメがサカイさん並に強烈なシスコンだったら。

「おねぇちゃーん！！」

「なんだい、我が弟よ！！」

「無理！！」

「えええええ」

嘘吐きぬこさんからいただきました――もしも、ピアノが引けたなら。

……え、自分が？

も、もう一ついただきました――もしも、俺がお前でお前が俺だったら。

……は？

まぁいいや。次。水門さんからいただきました――もしも、サエがきしゃあああああっ！！　になったら。

「きしゃー」

おぉ。

「きしゃーきしゃー」

可愛い。

というわけで次いきましょう――もしも、トメとキリヤであぶない刑事をしたら。

「トメ君……」

「キリヤ……」

「そのデカさはヤバイですよ……アブないですよ……」

「キリヤのだって……」

「あぁ、トメ君！」

「キリヤ！！」

アブないデカさでした。

はい、靄狐さんからいただきました――もしも、トメとテンカ先生が結ばれて、テンカ先生がデレる所を見たサユカンがヤンデレに目覚めたら？

……書いてみました。が、あまりにもサユカちゃんのイメージを損なうために載せるのを止めました。ヤンデレって恐い。

さて次、朝凪彰さんからいただきました――もしもジョーイ＆マイケルがテンカの生徒だったら。

「と、いうわけでだな？　この計算式は――」

「ヘイ、聞いてくれよジョーイ」

「どうしたんだいマイケル。わからないことでもあったのかい？」

「テンカティーチャーがいう『この』が、どこのことなのかわからないのサ。どこに計算式があるんだい？　僕には日本語しか見えないＹＯ！」

「ＨＡＨＡＨＡ！　それはネ、これが小説だから仕方ないんだＹＯ！　そこに『ある』と書いてあれば『ある』のさ！」

「なるほど、こいつぁ一本取られたＺＥ！　つまりそれは、いくら強烈で連続な屁をこいても、そうと書かれなければ気づかれないっ

てことだろう！？」

「オゥイェイ！！」

「イッツ・パラダイス！！」

「パラダイス！　オゥイエィ！！」

「うっせぇぞてめぇら！！　オレの授業で何を学んでやがる！？」

「「誰にもバレない屁のこき方デース！！」」

「そんな授業はしてねぇぇぇぇぇ！！」

めでたしめでたし。

「はい、そんなわけでオナラの音で高らかに始まりました第二十八回カカラジです！」

「どうも、留です。そして僕の相棒さんは――あまりにも普通に喋っていて誰なのかわからないでしょう？　実はこの方、皿さんです」

「字が違います！！　私は沙――」

皿です。

「ちが――」

そんなわけで始まりましたカカラジ。今回は香加が出たくないとのことで急遽、暇人だった皿さんに出演をお願いしました。

「失礼な！　括弧さんだって暇でしたよ！」

あの人をメインにすると収拾がつかなくなるので止めました。

「……納得しました。でも私がメインだと面白くなくなるんじゃないですか？」

「……」

……

「なんで目を逸らすんですか！？」

はい、この番組はネット小説『カカの天下』を盛り上げるため、ぶっちゃけトークや作者の本音と建前を交えながら読者さんの投稿をプギャーするラジオ的お話です。留と皿さんは本編と関係ないのでお気をつけください。

「だから皿じゃないと何度言えば」

ではＣＭ。

寝過ごして学校遅れそうだ！もう渋滞なんて懲りごりだ！なーんてことはありませんか？

そういう時はこれ、“クララちゃん”これさえあれば、行きも帰りも自由自在。タクシーなんて要りません！！

これをなんと、３万９千６百円、３万９千６百円でご提供ー。個数に限りがあるので、ご注意ください。

ＣＭがあけて。カカラジネーム『通りすがりの誘拐犯』さんからいただきました。

「いや、買うでしょうこれなら！」

絶対買うね。

「むしろ安すぎます！」

「……ツッコんだら負けだよな、色々と」

同じくほしい方は感想欄にでも書いてください。売りませんけどニヤニヤしながら眺めてあげます。あ、値切ってもいいですよ？売りませんけど。

「さて、素晴らしいＣＭもいただきましたし」

「皿さん、財布を覗いているのは買う気だからですか？　ていうか誰だよ売ってるの」

多分サエちゃんかサカイさん辺りかと。

「はい次ですよ次！」

皿さん元気ですねぇ。

「あったんだな、財布の中に。買えるだけの額が」

「さて、それでは読者様のご要望にお応えします！」

そのとき、どこからともなく看板が飛んできて留の頭部に激突した。

「ったぁぁぁ！！　な、ん、だ、いきなり！」

バウンドして転がった看板には『トメぽん』と書いてありました。

「だから！　なんなんだそれは！」

「リクエストですよ、『水沢ちぬあ』さんから。この看板をトメさんに投げつけてくれって」

でもトメポーン！　という感じにはならなかったですね。

「そうですね、ポーン！　って勢いよく弾みませんでした。ズゴォッ！　って感じでしたし」

もう一回やりますか。トメポーン。

「それではふつおたです！」

あ、逃げた。

「おなじみ『サイボーグ』さんからいただきました！」

『トメ、モテスギ？
ダレカ、ヒトリニシボレ！
サモナイト……』
「だから続きは！？」
まぁトメさんがタイヘンなことになるんでしょう。
「もしくはヘンタイなことになるんでしょう」
楽しみですね。
「そうですね、そのときはサユカちゃんを呼んでおきましょう。ざまぁみろ♪」
「皿さんキャラ変わってない！？」
「ええ、なんせ皿ですから！！　名前が違えばキャラも違いますよ！」
素晴らしい。
さて、ふつおたはこのくらいにして。
「さっきの看板もふつおたに入るのか……？」
前回、カカ天ムービーランキングをしまして、ベスト3にランク

インした作品は実際に書いてみるという話だったのを覚えていますでしょうか。

「ヤナツのオニオンはまだですか？」

ええい、もうちょっと待たれぃ。ともかく、その後も募集は続きまして……見事に1位、2位に輝いた作品を紹介します！

「わぁ、輝く作品があったんですね。私、てっきり『コレはダメだアレもダメだ』って濁して結局は書かないっていう流れかと思ってました」

……皿さん、なんか、本当に遠慮ないキャラになってるね。

「皿ですから！　血という字と似てますから！　あははは！」

「も、もしかして泣きながら笑ってる？」

見なかったことにして進めましょう。それではまず――1位、2位にはなれなかったけど惜しかった作品から！

「なんだその微妙な位置は」

いやぁ、無視するのも勿体無いなぁって出来だったんで紹介します。『AB天』さんからいただきました、どうぞ！

『笑いのダークサイドに落ちて、つっこまずにボケるようになったダース・トメイダー。彼を救うために立ち上がったサユカ！

「スター・ラヴァーズ」

荒廃した世紀末に笑いをもたらす

「でみゅう！　でみゅう！　でーみゅみゅみゅみゅみゅ！　でーみゅみゅみゅみゅう！」

でみゅみゅ百列笑――お前はもうボケている。

「でみゅみゅの拳」（タケダ主演）』

以上の二本が惜しかった！

「何がどう惜しいのか、僕らにはさっぱり基準がわからないんだけど」

「おそらく、作者の好みに合いそうで合いきれなかった感じではないかと」

そんな感じです。では、しっかり琴線に触れた作品、まずは2位から！

『睫毛火射夢』さんからいただきました、どうぞ！

『カツコと魔法のシャンプー』

シャンプーボトルから“にゅっっ”と出てくる姉。

以上！！

「え、終わり！？」

「どこが映画なの！？」

いただいたメッセージを読んでみます。『以上、映画予告的な駄文でした。元ネタは、私が見た夢です。カツコの代わりにヒヨコでした。しかも、シャンプーボトルに棲んでいるヒヨコが、何故かシャワーの出口から“にゅっっ”と出入りするという設定でした。意味不明でインパクト大な夢でした。ハッピーエンドです』だそうです。

「いや、だから、どこがどういう映画なのかと」

ハッピーエンドな映画でしょ。

「だからそうじゃなくて！」

「そうですよ、問題はそれがネタバレだってことです！」

「そこ！？」

「先を見る楽しみが減るんですよ！？　こんな悲しいことはありません！」

すいません、自重します。でも、それがわかってもきっと面白いよ？

「はい、それなら許します」

「いや、あの、だからさ？」

黙れ。はい、いよいよ1位の発表です！　『七星河　一休』さんからいただきました。本人曰く、『殿堂入り狙い』らしいです。

「どういう意味だよ」

つまり、1位になるとソレを私が書かなければいけないワケじゃないですか？　でもそんな私が書く気すら失くすほどの大作を考えたそうです。つまり、『書けるものなら書いてみろ』という挑戦状！

「おお……粋だ」

さぁ、いよいよ発表です。どうぞ！！

『読者の誰もが期待した、

夢の第１０００話到達までのカウントダウン、

残り　００７話

どことなく（画面の向こう側が）浮足立つ空気に包まれる中、

今日も今日とて愉快な日常を送る笠原ファミリー。

しかし……

「あれ。着替えのパンツどこだ……って前にもあったな、似たようなこと。はぁ、またあの忍者親子の仕業か？　おーい、カカ。部屋にある僕のパンツ無事かー？　ちょっと一つ持ってきてくれー」

風呂上がりのトメに突如降り掛かる、

「さっき姉とばぁばが燃やしてったよ」

「は？　なんだって？」

「だから、姉とばぁばが燃やしてったんだって。トメ兄のパンツ全部」

「ホワッツ！？」

未曾有の緊急事態発生！

「トメ、よく聞け。お前はしばらく……パンツをはいては、いけない！」

「ちょ、は！？　待て父さん！　意味分からん！」

「ふはははは！　ではさらばだ！　シュバッ」

トメのパンツ焼失が、

「なんなら私のパンツはく？」

「はいてたまるかっつーに！」

カカ天史上最大の、

「昨日この界隈の店舗で、何故か成人男性用のパンツが根こそぎ買い尽くされたんですよ」

「まさか、さすがにウチの化け物共でもそんなバカなことは……」

「ねぇトメ兄。パンツどうすんの？」

「……」

とんでもない乱痴気騒ぎを引き起こす！？

「男物の下着がいらない服を着てればいいのではー？　というわけで色々用意してみましたー。ナースさん婦警さん巫女さんにデンジャーケロリン。思い出のメイド服もありますよー」

「丁重にお断りする！」

「……！！　ぶしゅーっ」

「あぁっ！　興奮しすぎてサユカンが鼻血まみれに！　どうすんのさトメ兄！」

「それ僕のせいか!?」

失われたトメのパンツを巡り、

「あら、かのちゃん?」

「じゃあじゃあ!　私がタケダ君のパンツをカレーまみれにする!!」

インドの申し子が。

「パンツを買いに、『東』の隣町へ……?　許せん!!　行くぞ、アヤ坊!」

「え、お出かけ!?　今から!?　それってもしかしてデ、デ、デ――……」

西の戦士が。

「もし私が彼の立場になったら、ユカさんはパンツを貸してくれますか?」

「ぶっ!?」

バカップルが。

「ではタマならどうなるですか?」

「うちゅーがはく一枚のパンツでしゅ」

「なんかよく分からないですけど、とにかくスケールでけぇです！！」

最狂のコンビが。

「お姉さまにパンツを燃やされてタマ様にズボンを下ろされる……」

「サエ様にコスプレを強制させられながらパンツを剥ぎ取られて晒し者……」

「「なんて羨ましい……！！」」

最悪の変態たちが。

「頼めるかな。サカイちゃん」

『任せてー、トメさんの手に渡りそうなパンツは全部、私が消し炭にしとくからー』

裏社会の最強が。

次々と動き出す！！

そして事態は……

「教頭に、校長に……サワサカのじいさん？　何がどうなってんだ？」

「よく聞くんだテンカ君。このままではこの世界はデストロイする」

「おほほ。まぁ、分かりやすく言ってしまえば……」

カオスに突入する！！

「パンツ・パニックじゃあああああああああああああ！！」

タイムリミットは１週間。

たった一度きりの大舞台を、

トメは無事、パンツを履いて迎えられるのか！？

「トメ兄。正直、私……」

「ん？　どうした？」

「パンツって言葉が出るたびに萎える」

「一番萎えたいのは僕だ！」

ルシカ原作・大人気ネット小説「カカの天下」でお馴染みの豪華レギュラー陣オールスターが魅せる、

最高の奇跡と大爆笑！！

カカの天下　ＴＨＥ　ＭＯＶＩＥ

『カウント・パンツ・パニック！！』

きたるべき第１０００話に向けて、堂々制作大決定！！

「で、見えたんでしょー二人とも。どうだったー？」

「いい尻だったぜ……ねーサユカン」

「う、うん。桃みたいだった……ハッ！？　ち、ちが、そうじゃなくてっ」

大人としての体面も男としての誇りも傷付けられた彼は、その時。

「……保護者の義務って、生ゴミであってますか？」

ノーパン男に、幸あれ――』

「……」

「……」

おお、見事に呆気に取られてますな、留さん皿さん。

「……これ、書くの？」

ハイ！！

「ていうか、その辺りの男がはいてるパンツを奪えば解決じゃないですか？」

そんな（いろんな意味で）汚いマネはしません！

「書くんだ……そっかぁ……」

いや、実はね？　書いたことがあるんですよ。トメのパンツが盗まれてノーパンのままスポーツチャンバラする話を。

「なんちゅーもんを書いてんだ！？」

試験的に書いたっていうのと、いつものカカ天と違って中編小説くらいの長さなんで発表はしてないんですけどね……似たようなもんなので、これを改良して出すのもいいかなぁと。

「手抜きだ……」

私だってこんな手抜きできるとは思ってませんでしたよ。どこをどうしたらここまで『トメのノーパン事件』という思考がマッチするのか……カカ天で何か電波的なものでも通じ合ったんですかね？

「その電波ってきっと『でゅみゅみゅみゅう』が関係してると思うよ」

有り得る！！

さぁさぁそんなわけで、このベスト3の映画は近日公開……近日……じゃ、ないかもしれない。少し遅れるかもしれないけど、そのうちきっと書きます！　まずはカカの話とか終わらせないといけませんからね」

「あぁ、カカね。今頃なにしてるやら」

そんな心配もありますが、本編じゃないところで何を言っても始まりません。次のコーナーいきましょう。脅迫状です！

『消臭〇キと長州力で何かやってください、もし出来なかった場合「あれ？普通の下痢のがまだ形あるんじゃね？」と思うくらいの下痢になる呪いをかけます。

きっとやってください、カカラジの時でいいんで』

のりっちさん、ネタ思いつかなくごめんなさい。

「思いつかないんかい！！」

だって仕方ないじゃん！

「いや、本当に思いつかなかったならそうだけどさ……」

呪いは甘んじて受けます！　ではＣＭ！

カカ天をご覧の皆様、こんにちは！

みなさんは、

「告白されてちょっと言葉につまってしまった」

「カオスな話題に困って便通が悪くなってしまった」

なんてことはありませんか？

そんなあなたに手を差し延べるのが、我ら「でゅみゅみゅみゅみゅう帝国」でございます！

あらゆる場面で応用できるこの「でゅみゅみゅみゅみゅう」、一言だけであら不思議！　会話がすばらしくカオスなものに早変わり！

上司に怒られた時、コンビニのお釣りが足りなかった時に！

魔法の言葉「でゅみゅみゅみゅみゅう」があなたを救うでしょう！

さぁ！　あなたも我ら「でゅみゅみゅみゅみゅう帝国」と共に、明るい未来をｍ――

――ザッ――ザザッ――ジジジ――プツン……

『……よし、電波ジャックに成功したぞ。

でゅみゅみゅみゅう崇拝者、そしてでゅみゅみゅみゅみゅう予備軍の諸君！　突然の無礼を許していただきたい。我々は、反でゅみゅみゅみゅう帝国組織、「あでぐ」【ＡＤＥＧ（Ａｎｔｉ・Ｄｙｕｍｙｕｍｙｕｕ・Ｅｎｐｉｒｅ・Ｇｏｖｅｒｎｍｅｎｔ）】である！

今日ここでＣＭを乗っ取ったのは他でもない。でゅみゅみゅみゅうの呪いから皆さんを解き放つためである！

でゅみゅみゅみゅうウィルスに侵された読者の諸君。私は問う。

「でゅみゅみゅみゅう」ってどういう意味だよ！　使うタイミングわかんないよ！　この単語が出る度に混乱しちゃうよ！

……読者の皆さんは、はたして「でゅみゅみゅみゅう」の意味を理解しているのだろうか？　否！　断じて否である！

意味もわからず使いたくなる、さらには使わずにいれば中毒症状を起こすという、麻薬と違わぬこの悪魔の言葉を！

これこそを私は「言葉のウィルス」であると確信するものである！

立てよカカ民よ！　我々の手でこの悪魔の言葉を封印し、「あでぐ」と共に「でゅみゅみゅみゅう帝国」の脅威を退けるのだ！　諸君らの力を我々は欲している！

姉妹団体、「ひでぶ」【ＨＩＤＥＢＵ】（Ｈｅｒｏｅｓ・Ｉｎ・Ｄｙｕｍｙｕｍｙｕｕ・Ｅｎｐｉｒｅ・Ｂｕｓｔｅｒｓ・Ｕｎｉｔｅｄ）のメンバーも募集中だ！

ＣＭがあけて。

はい、これは『ＤＥＧ』さんからいただきました。

「相も変わらずツッコミどころが多すぎてワケがわかりませんねぇ。つまり、どういうことなんでしょう？」

とりあえずいきなり「でゅみゅみゅみゅう」って叫ぼうってことじゃないかな。

「なんともアバウトな受け取り方ですね……」

でも会社で怒られてるときに、

「バカモン！！」

「でゅみゅみゅみゅう！」

なんてやりとりしたらどうなるか、ちょっと見てみたいですよね。上司とかどんな顔するんだろう。

「皆さんもぜひ、やってみてください♪」

ご飯のときの「いただきます」って皆が言うときに一人だけ「でゅみゅみゅみゅう！」って言うのとか、さりげなくてオススメです。

「あの、ところで質問いいですか？」

なんでしょう皿さん。

「留さんは……？」

留はトイレにいきました。下痢で。

「あの呪いは留さんにかかったんですか！？」

だって「私に」って言ってないし。

「そりゃそうですけど……」

あ、皿さんにしたほうがよかった？

「乙女を舐めるな！！」

はい、ごめんなさい。さて、ここでコーナーのおさらい。

普通の質問受け付けます。ふつおたコーナー。

なんでも思いついたらどうぞ、自由枠コーナー。

どんな宣伝でも面白ければＯＫ！　ＣＭコーナー

ファンキーな脅迫状待ってます、脅迫状コーナー。

もしもな寸劇、見てみませんか？　もしもコーナー。

そして前に募集していたイチョウさんの名前募集コーナーですが……ついに発表します！　『夜夏（ヤナツ）とあわせて朝夏（アサカ）』に決定しました。いや、ほんと上手いこと考えたものだと思います。今後の展開で登場……すると、思います、多分。ううん、イチョウさんのこと名前で呼ぶ人いるのか……まぁ深くは考えないでおきましょう。

「弟ちゃんと妹ちゃんの名前が合ってるのはいいんだけど……その、お姉ちゃんの私は……？」

そして、代わりといってはなんですが新企画！

「聞いてくださいよぉ！」

カカ天メンバーの『肩書き』を考えてみようのコーナー！

ほら、よくあるじゃないですか、『疾風のバカ』とか『盗賊殺し』とか『麦わらの』とか『遥かなる蒼』とか『悪魔の妹』とか。そんな肩書きを皆につけてあげてください。誰にどれだけつけるも自由！　その中で私が厳選したものを紹介したり、調子に乗って本編に加えたりできたらいいなぁと思っています。

「わぁ、肩書きですかぁ。私はどんなのになるんでしょう」

割れない皿。

「あなたの頭を割りますよ？」

ともかくそんな感じで、『～のカカ』という書き方でもいいですし、カカは『～』という風な付け方でもいいですし。自由に、思いつくまま送ってみてください。

「今回は投票形式じゃないですし、案外もしもより考えやすいかもしれませんね」

企画参加者が少ないと作者が泣くのでよろしくです。

「わぁうざい」

さ、もうラストですよ。恒例のカカラジチョップですが……ここには皿さんしかいませんねぇ。

「私としては最後まで『皿』で通したあなたにチョップしたいんですけど」

嫌です。

「即答ですか……そもそもなんでラジオの最後にチョップしなきゃいけないんですか？」

……昔、とあるラジオ的なドラマＣＤで、チョップが得意な女の子がいてね……それが好きでねぇ……たぶんネタわかる人はほとんどいないと思うけど、やりたかったのさ！

「わかったような、わからないような」

はい、さておき誰にチョップしますか？

「今もトイレで頑張ってる留さんのお尻に、カカラジチョーップ！！」

ひどっ！！

この番組は、『とっても綺麗なおトイレ委員会』の提供でお送りしました。

# カカの天下８００「第二十八回、カカラジ！」（後書き）

いやぁ、めっさお待たせしました！
更新遅れたのをイイワケしますと、実は作者自身が現実で人生の岐路っぽいとこに立ってしまい、書いてる場合じゃなかったといいますか……いやぁ、人生って重いですねぇ。自分以外の人が関わると……

さぁ愚痴はこのくらいにして！　ようやく二学期を書くことができます。今更でごめんなさい。しかしカカはどうしてしまったのか……映画も描きたいけど、こっちを先になんとかしなければなりません。

そしてこのたび、本作は８００話を迎えられたのですが……
改めて考えると１０００話までマジであと少しなんですね。おそろしい笑

本当に読者の皆様の温かいお言葉のおかげです。これからも不定期状態は続きそうですが、精一杯この子たちを書いていきたいと思いますので、どうか気長にお付き合いいただけたら幸いです。

# カカの天下８０１「二学期が始まった、けど？」

こんにちは、サエですー。

ついに始まりました二学期、終わりました夏休み。悲しいです、寂しいです、でもこれから学校でのカカちゃんワールドを見られると思うとウキウキにもなったりするのですー。

というか、してたのですがー……

「よぅ、てめぇら。夏休みは楽しんだか？」

夏休み中に何度かは会ったけど、テンカ先生が教壇に立つのを見るのも懐かしい感じがするなー。

「例えばニシアキ」

「いくら秋が近いとはいえ、そんな名前はないでしょう」

「じゃあ今はなんて名前だ？」

「ニシンです」

魚類かー。私は秋刀魚のほうが好きだなぁ。

「んで、ニシンの夏休みはどうだった？」

「アヤと旅行に行きました」

「ちょ！！　ニッシー！？　バラさないでよ！」

「今の僕はニシンだ！」

「じゃあニッシン！」

後に『サラダオイル』とか続きそうだけど、ツッコまないほうがいいよねー。

「別にいいじゃん。お金が続く限り西に向かって力尽きて、親に迎えにきてもらったってだけの旅だったんだから」

「そ、そぉだけどぉ、恥ずかしいというか、その……」

「なんでもありませんよね？　テンカ先生」

「バカップルは死ね」

「ド直球っ！？　ちょっとテンカ先生っ、教師がそんなこと言っちゃダメでしょうっ！」

いきり立つ常識人サユカちゃん。でも本来もっと常識人であるはずのテンカ先生は揺るぎもしない。

「っせぇ！　オレの生徒に『死ね』と言われて『ハイ死にます』なんてヤワなやつはいねぇ！　どいつもこいつも『むしろおまえが死ね』と言い返す猛者ばかりだ！」

「一体どういう教育してるんですかっ！？」

「英才教育だ！」

「嘘よっ！」

「鋭砕教育だ！」

「正解よっ！」

鋭く砕く、なんて強そうな教育なんだろー。

「……じゃあテンカ先生、いいですか？」

「おぅ、なんだサユカ」

「むしろおまえが死ねっ！」

あ、ほんとに言った。

「んだとコラァ！！」

先生怒った！　理不尽だー！！

「ったく、教育がなっちゃいねぇ！」

ほんとにねー。

「オイこらイチョウ、てめぇはどう思う！？」

「むしろおまえが死ね♪」

にっこりと笑うイチョウさん、あまりに意外なお言葉に凍りつく教室。

「あ、あらわたくしったら……恥ずかしい」

ポッと頬を赤らめるイチョウさん。傍から見れば『普段マジメな子がちょっと頑張って恥ずかしがっている』風に見えるけど、セリフがセリフなだけに可愛いとは全く思えない、ていうか恐い。

「じゃ、じゃあインド！　てめぇはどう思う！？」

「ぁむ？」

「カレー食ってるし！」

自由だこの子。

「食べますか？」

そしてカレーが絡むと強い。

「あとでな！」

食べるんだ。

「じゃあ――カカはどう思う！？」

ようやくテンカ先生は振った。

いつもなら真っ先に会話に入ってくるのに、今日に限ってずっと

黙り込んでいたカカちゃんに。

「ん」

ずっと窓の外を眺めていたカカちゃんは、ようやくこちらを向いて。

「別に」

そんな素っ気無いことを言った。

「……おいカカ、どうしたんだよ。元気ねぇじゃんかよぉ、てめぇがそんなだと調子狂うぜ」

それはクラス全員の総意だったかもしれない。なんだかんだでカカちゃんは目立つし、カカちゃんの変な雰囲気がこの教室の色と言っても過言ではないくらいだった。

そんなカカちゃんの元気がない。みんな気になりつつも聞くことができず、代表としてテンカ先生が聞いたみたいな形になったんだと思う。

「なに、私って面白いことしか言っちゃいけないの？」

「い、いや。そういうわけじゃねぇけどよ」

「じゃ、ほっといてください」

カカちゃんは再び外に顔を向けた。

今朝からずっとこんな感じ。私やサユカちゃんが何を聞いても「別に」としか答えてくれない。

最近なんだか変だなーとは思ってたけど……一体なにがあったんだろう。

気になる、けど、すぐに聞いちゃいけない。なんでもかんでも突っ込めばいいものじゃないって、私たちは今までで学んできた。

こういうときは、本人が悩みを打ち明けやすい雰囲気を作るのが大事……だと、思う。たぶん。実際はわからない。親友だからこそ、考えすぎて踏み込めない。

だから、いざというときはトメお兄さんに聞こう。きっとそれが一番。

## カカの天下８０１「二学期が始まった、けど？」（後書き）

ども、予想を大幅に上回る勢いでカオスな肩書き投稿が溢れる中、ちょっと元気のないカカのお話をお届けします。

とてつもない肩書きがつきまくってる最中にこんな話もなんなのですが、カカも人の子。悩むこともあるのです。姉とは違うのです。アレが何の子なのかはわかりませんが。

なかなか更新速度が戻りませんが、また頑張りますのでカカを見守っていただければ嬉しいです。

８０１話だし、ヤオイ話にしようとか思ったのはナイショ。

# カカの天下８０２「サエサユカ頑張り物語」

こんにちは、サエですー。

今日も学校が始まりましたが、カカちゃんは相変わらず暗めです。何があったかは知らないけど、とにかく元気になってほしい、カカちゃんの笑顔を見たい！　そんなわけで、私とサユカちゃんは協力してカカちゃんを笑わすことにしましたー。

授業一限目、理科。

サユカちゃんに白衣を着てもらい、授業中を過ごしてもらいましたー。

実験とかではなく、普通に教室で受ける授業です。

……カカちゃん、反応なし。

え、これのどこが笑えるのかってー？

んーと、わかんない。

あ、サユカちゃんが突然、メガネをかけた！

「エロッ！！」

保健室の先生的な格好を見て、誰かが叫んだ！　ざわめく教室。

ざわ……ざわ……

でも叫んだのはカカちゃんじゃない。チラリとこっちを見たけど無反応……次！！

授業二限目、国語。

サユカちゃんに殿様の格好をしてもらい、授業中を過ごしてもらいました。

もちろん普通に教室での授業です。

……カカちゃん、反応なし。

いつだったかカカ殿様について熱く語っていたあの姿はどこに……ええい、最後の手段だー！　サユカちゃんはちょんまげを装着した！

「だっふんだ！」

誰かが叫んだ！

「中の人が同じだが、それはネタが違うぞ！」

「ダメだこりゃ！」

クラスの誰かとテンカ先生のやりとりがあったものの、カカちゃんは反応を示さない……次！

授業三限目、算数。

サユカちゃんの頭の上には立体的な『7』の数字が一つ、でかで

かと輝いていた。手芸部にあった材料で作った『7』型ヘルメット。

モチのロンだけど、普通に教室で座って授業してます。

「サユカちゃん、ななしゃい！！」

クラスの阿呆が叫んだー！　もちろんサユカちゃん本人が言ったわけじゃない！

でもその阿呆は、カカちゃんでもなくて……

「あいつ何言ってんの？」

「バカじゃね？」

「きっと、ななしゃいの子が好きなんでちゅねー」

スベってしまったその子は後ろ指さされ……

「それを言ったらあんなの被ってるサユカちゃんは？」

「あれは可愛いからいいんだよ」

「それもそだね」

サユカちゃんの隠れた人気が明らかになりつつも、肝心のカカちゃんは反応しない……つぎー！！

授業四限目、音楽。

サユカちゃんにはアイドル的なドレス衣装を着てもらいました。

「よし、サユカ。歌え！」

テンカ先生の命令！

「……」

サユカちゃんは音楽準備室に立て篭もった！

「おい、何してる。せっかくの衣装だろ、見せろよ」

ドア越しにテンカ先生が説得します。

「絶対に嫌ですっ！　なんですかこの衣装っ。スカート短いし、っていうか全体的に布が少ないしっ！！」

「久しぶりでしょー？」

「そんな呑気な事態じゃないわよサエすけっ！　嫌ったら嫌だからねわたし、こんなにハレンチな服っ！」

そんなにハレンチかなぁ。ちょっと衣装がピンクで、太ももとおへそと脇と鎖骨とが見えやすいだけじゃないのー。あー、あと肋骨とか。

「わたしの肌を見ていいのはトメさんだけなのっ！」

「お、トメならいいのか」

「見放題ですよっ！！」

「ちっ、しゃあねぇな……あーあー、こほん」

テンカ先生は咳払いした後、こんなことを言った。

「ボクの名前はトメ！」

「似てないっ！！」

「趣味はサユカちゃんさ！」

「え、ほんと――じゃなくてっ！」

「なんでやねん！！」

「トメさんはそんなツッコミなんて滅多にしない！」

「でゅみゅみゅみゅう！！」

「それカカすけのマネでしょ！」

「出てキテクダサーイ」

「誰よっ！？」

「ちっ、妙なコスプレしててもなんか楽しいから見逃してやってればいい気になりやがって」

「じゃあ脱ぎます！」

「どうせ脱ぐなら出てきてからここで脱げ！」

「あんた教師じゃなかったっけっ！？」

「知らん！！」

そんなこんなで、音楽準備室に閉じこもったサユカちゃんを説得するだけで、この時間は終わりました。

カカちゃんはやっぱり反応なし……そして給食の時間。

「……」

カカちゃんは無言でそれに箸を刺しました。

「やぁ、ぼくウィンナーですー。いま刺されていますー」

刺したウィンナーが喋ってる、ように見えます。

「まさに、現在まさに食べられようとしておりますっ。ゆっくりと運ばれるぼく、そして近づいてくる口！　あぁなんという恐怖なのでしょう、背筋が凍ります！　ちなみにぼくは背筋がぴーんと張っているのが自慢です、ウィンナーですからっ！」

「背筋が凍るとは言っても、ちゃんと解凍されたウィンナーですのでご安心をー」

「ああ齧られる、齧られてしまいます！　あああ、ついにっ！」

「パリっと音、ぷりっと肉。笠原ウィンナー、今ならカカちゃんの口の中ー！」

「いらないわねっ！」

「お早めにー」

「手遅れよっ」

私とサユカちゃんの小劇場、しかしカカちゃんは黙々と食べるばかりー……

むー、いつもの調子が出ないなー。やっぱりカカちゃんがいないと……ううん、弱気になっちゃダメ！　カカちゃんに元気になってもらうために、頑張らないとー！

次こそは！

そして――五限目、体育。

体育、つまり体を育てること。

サユカちゃんのおっぱいをありえないくらい大きくしてみようかなーとか思ってたけど、サユカちゃんが手近にあったタケダ君を持って振り回し暴れてきたのでやめました。

なのでサユカちゃんの頭部を五倍くらいに育ててみることにしました。

でーんと巨大な、サユカちゃん（似）の被り物。先程の『7』

型ヘルメットの改良版みたいなものです。こんなのも作れるなんて、手芸部って便利だよねー。

「むご、むごご、むっごごっ！！」

当のサユカちゃんは頭が重すぎて大変みたいだけど、私にできることは何もないしなー。

「いくぞ、それ！」

「よっし、いいボール……カキーン！！　って、やべ！」

あ、どこからともなく飛んできた野球のボールがサユカちゃんの巨大頭部を貫いた！

「サユカちゃんの頭に穴が！！」

あぅー、材料はそんなに頑丈じゃないからー……

「おいサユカ、頭は大丈夫か！？」

「ああ、こんなに即頭部が凹んで……なんて面白い形に……」

「サユカちゃんどうしよー。顔がすごく変だよー」

「むご、むごごごご」

「ああ、なぜかサユカちゃんの頭がふくろうみたいに横回転し始めた！」

「きっとボールの衝撃で、上手い具合に内部が滑ったんだな！」

「サユカ、てめぇおもしれぇぞ！　ふはは！」

「むごごごぉっ！！」

「うあああ巨大化した頭を回転させながらサユカが襲ってきた！」

「なんという恐怖！」

意外なまでの大騒ぎ。

そこでカカちゃんは……あ！

笑っ――

サユカちゃんが転んだ。でっかい頭部が倒れる。カカちゃんが潰された。

ん、んーっと……笑ったように見えたんだけど、大丈夫、かなー？　なんだかカカちゃんの頬を張り倒す勢いでサユカちゃん頭部が激突したように見えたんだけど……

つ、つづくー！！

逃げたんじゃないからねー！

## カカの天下８０２「サエサユカ頑張り物語」（後書き）

むぅん、カカたちの雲行きもあやしいですが更新速度もあやしくなってきましたねぇ。

ようやく週末乗り切って、少しは余裕が出てきたので、更新も感想返信もなるべくできればなぁと思ってます。みんな、沢山の肩書きありがとー！！

さてさてカカが一体どうしたのか……次辺りで大体わかります。

## カカの天下８０３「回想、夏休み後半にて」

カカです。今日は夏休みの宿題をする日、頑張って算数ドリルに向かっていたのですが、どうにも集中できません。

そんなわけで、暇潰しにカカドリルを作ってみました。テンカ先生にやってもらおっと。や、その前にトメ兄かな。

「んっと、『ニシカワ×アヤ＝』っと。答えは『ラブラブバカップル』か『元気な子』か、どれにしよっかなぁ」

着々と問題ができていきます。

「あとは『サユカＶＳテンカＶＳサラ＝』っと。この答えは時期によるね。『サカイ－サエ＝』で答えは『なんかおもろい悲劇』っと。『カツコ＋サカイ＝』は答えが恐い……『シェー＝タケダ』ってこれは問題じゃないや。あれ、あの人の名前ってシェーだっけ、ショーだっけ」

次々とできていく私的ドリル。

「最後の問題は……『トメ＋カカ＝』っと」

トメ兄はなんて答えてくれるだろう？　ちょっとわくわくしてきた。

「よし、完成！」

早速トメ兄に見てもらおう！　私は早足で自分の部屋を後にした。

居間へ行くと、ちょうど仕事から帰ってきたトメ兄が！

「ねぇねぇトメ兄！　ちょっとこれやってみて！」

「あん？」

私的ドリル（ノート）を受け取ったトメ兄は、ぱらぱらとページをめくっていった。

そして最後のページで手が止まる。

「ね、面白いでしょ！　最後の問題の答え、何になるかな」

期待していたトメ兄の返答は！

深いため息だった。

「おまえさ、いつまでこんなことしてるわけ？」

「……え」

予想外の言葉に呆然としてしまう。

「おまえ、もうすぐ中学生になるんだぞ？　いつまでそんな幼稚園児みたいなことして遊んでんだよ」

トメ兄の、冷たい目。

「変だ変だと呼ばれる妹を持つ僕の身にもなってくれよ……恥ずか

しい」

震える。

「おまえはなんで平気なんだよ。変って言われてるんだぞ？　バカにされてるんだぞ？　恥ずかしくないのか」

寒い。

「宿題やるって言ってたよな。じゃあおとなしくやってろよ。余計なことすんな」

胸がイヤナモノでいっぱいになる。

「もう少し普通になれよ」

私はただ……

ただ……なんなんだろう？

私は何をしたかったんだろう。私はいつも何をしてたんだろう。

変っていうのは、ダメなことなの？

私は、ダメなの？

『カカ＋トメ＝』の答えにうきうきした気持ちは冷え切って、凍り、重さを持って私を押し潰す。

重い、痛い、嫌だ。

嫌だ。

そんな、夢を見た。

「……あれ、カカ。寝たんじゃなかったのか？」

「今日も一緒に寝る」

「またか？　おい、夏だってのにここんとこ毎晩くるじゃないか。暑い暑い文句を言ってるのは誰だよ」

「いーじゃん」

「でもなぁ、小さい子じゃあるまいし」

「いーじゃん！！」

私は強情を張る。そうすればこっちのトメ兄は、「やれやれ」とか言いながらも頷いてくれるんだから。私が自由に暴れても、ちゃんとツッコみながら受け入れてくれるんだから。

夢の中のトメ兄は嫌い。

あのとき、テンカ先生の家庭訪問で聞いた言葉。そこからだ、夢を見るようになったのは。

――カカが中学で無事にやっていけるかってことだろ？　もちろ

ん心配だ。

――世の中にはな、冗談が通じる大人ってヤツは少ねぇんだ。てめぇの妙ちきりんな行動が必ずしも受け入れてもらえるとは限らねぇんだぞ？

トメ兄はフォローしてくれると言った。大丈夫だ、とも言ってくれた。

でも、そんなに私は変？

なんでもかんでも楽しければいいと思って、今まで自由にやってきた。思いつきに任せていろんな騒ぎを起こしてきた。すごくすごく楽しくて、幸せだった。

でも、それは私だけだったのかな。

何も知らない他人が見たら、ただの変なヤツにしか見えなかったのかな。

自分がよければいいと思ってた。周りが笑っていればいいとも思ってた。でもそれは、私をバカにする笑いだったんだろうか。そう思うと、すごく、悲しい。

「はぁ……ったく、しょうがないな。いいぞ」

「やた」

わからない。もやもやする。でもバカにされるのは嫌だ。

『この歳で幽霊が恐い』なんていうのも普通じゃないのかと思って、治そうとしたけど無理だったし。

『普通』になるにはどうすればいいんだろう。トメ兄にも誰にも心配されないような『普通』の子に、一体どうすればなれるんだろう。

今までこんな風に思ったこと、なかったのに……中学生になるのが恐いせいだろうか。

「悩みとか、あるなら言えよ？」

「んーん、そんなんじゃないよ。たまにはいいじゃんと思ってさ」

わからないけど。

今はただ、優しいトメ兄に甘えておきたい。

――そんな、夏休みの一コマがあった。そして私はどんどん『面白いこと』が思いつかなくなっていった。でもそれが『普通』ということなんだろうか。

わからない。

## カカの天下８０３「回想、夏休み後半にて」（後書き）

自分が周りからどう見えるのか。

それがむしょーに気になる時期、誰にでもありますよね。カカにもそんな時期がやってきたということです。

変だ変だと言われ続けたカカは、どういう答えを出すのでしょうか。はてさて……

## カカの天下８０４「大人の階段、一段目」

……カカです。なんかクラクラします。

頭がぼんやりしたまま目を覚ますと、真っ白な部屋にいました。

「あ、カカすけ起きたわねっ！」

「ほらー、サユカちゃんが寝込みを襲ってチューなんかしようとするからー」

「しようとしたのはサエすけでしょっ！」

聞きなれた声、よくよく見れば覚えがある場所……あ、保健室か。

「カカすけ、大丈夫？　君ってばねーー」

「サユカちゃんのでかい顔に押しつぶされて気を失ったんだよー」

「もうちょっと言い方があるでしょっ！」

「この上なくわかりやすい表現だと思うけどー」

……あ、そっか。体育の時間に。

「気絶するなんて、打ち所が悪かったんだねー」

「これ以上カカすけの頭が愉快にならないか心配だわっ」

「逆にまともなったりー」

「ないないない、それはないわっ！　なんとなく！」

「あーー」

何か、言わないと。でも何を言う？　お礼？　謝る？　それとも何か面白いことを？

「あ……」

わからない。なんて言えばいいのかわからない。何を言えばいいのかわからない。

「へ、どうしたのよカカすけっ」

「カカちゃんー？」

「あ、ごめ、ごめん」

不意に視界が滲んだ。涙が出る。なんで？　わからない。打った頭が痛いから？　困惑から？　サエちゃんたちに申し訳なくて？　自分が情けなくて？　自分の全部が気持ち悪くて？　わからない、何もわからないけど、今まで心の中に積もり積もった色んなものがぐちゃぐちゃに煮込まれてかき回されてーー

「う……あぅ……く……」

いくら堪えても涙が出てくる。いきなり泣き出して、事情の知らないサエちゃんもサユカンも変な目で見るだろう。恥ずかしい。で

も止められない。止まらない。

「く……うぅ……」

自分が今まで何をどうしてきたのか忘れてしまって、思うように喋れなくなって、楽しいことも思いつかなくなって。サエちゃんやサユカンが励まそうとしてくれたのはわかったけど、やっぱり喋るのが恐くて。体育の大騒ぎ、サユカンの間抜けっぷりに思わず笑ってしまって、一瞬だけいつもの調子で関わろうと思った。でも心の中で聞こえた『また笑われるよ？』っていう声に不安になって、やっぱり止めようとして、そしたらすごく寂しくて。

「……っ」

このまま自分はつまらなくなって、皆に見離されるんじゃないかと思ったら恐くて。そもそも『あいつは変だ』とすでに見離されていたらと思うと、恐くて恐くて仕方なくて。

「う……ううう！」

泣いてしまう。格好悪い。親友の二人なら受け止めてくれるかも、という期待はある。でも恐い、やっぱり恐いんだ、色んなものが。

周りが、こんなに恐いものだらけだとは思わなかった。

大事な人が、楽しいことが増えていって、自分は幸せだと自信満々に思っていた。でも、それが『もしひっくり返ったら』という想像すると――

「うあああああ！」

私はもう、死んでしまいそうになる。

「よしよしー」

震える体が抱きしめられた。

サエちゃんが私を抱きしめてくれた。頭を撫でてくれた。

「落ち着いてー、落ち着いてー」

「サエすけっ！　撫でてるそこ、コブになってるとこよ！」

「いだだだだだ！！」

サエちゃんの温かさに癒された、とか言いたいところだけど実際は痛みのせいで、なんか全部トんだ。

「はぁ……はぁ……なにこれ、めちゃ痛い」

「そりゃ気絶するくらいの勢いで頭をぶつけたのよ？　痛いに決まってるじゃないのっ」

「原因はサユカちゃんの頭突きだけどねー」

「あんなでかい頭を作ったサエすけが悪いんでしょっ！」

「あんな変なもんをかぶるほうが悪いよー」

「き、君ねぇっ！」

……私がこんなに悩んでるのに、なんでこの二人はこんなにいつも通りなんだろう。

なんか、バカらしくなってきた。

「よし、二人とも聞いて！」

「おわっ！　もう泣き止んだのカカすけ？」

「私の悩みを発表するよ！　でもお腹すいた。ここってお菓子とかないかな？」

「とても悩んでる風には見えなくなっちゃったけどー、ここに保健室の先生が隠してるせんべいあるよー」

「なんでそんなこと知ってるのよっ！」

「ばりぼり……うめぇ！」

「カカすけ食ってるしっ！」

……よし、少し調子が戻ってきた気がする。二人のおかげかな。

「んでさ、私の悩みなんだけど――」

二人に打ち明けてみた。自分でも何に悩んでるかわかんなかったんだけど、いざ誰かに話すとなると意外なほどに言葉がスラスラ出てきた。ああ、そっか。私はこういう風に悩んでたんだ、なんて……そんなことを今さら再確認する。

「つまりー、自分がこれでいいのか不安になっちゃったんだねー」

そう、そういうこと。

私が私のままでいいのか。

「わたしは前のまま突っ走り続ければいいと思うわよ。こっちだって見てて楽しいし、付き合ってあげてもいいと思うわっ！」

「地獄まで突っ走ったとしても付き合ってくれる？」

「カカすけが行ったら地獄の住人が愉快になって天国になっちゃうわよ。それを見るのも面白そうだわっ」

「サユカンは私が大好きなんだね」

「うるさいわっ！」

わ、否定しないんだね。今はそれ、素直に嬉しいな。

「私もこのままで全然いいと思うけどー、カカちゃんが不安なのは今後だよねー？　中学生になって、大人になってーっていう時点で、このままでいいのかって」

「……うん」

そうだ。私が恐いのは現在よりも、この先なんだ。もちろん現在も恐い。私は皆と幸せに笑えていたけど、それが『本当』なのか不安になった。

でも一番恐くなったのは、それが『嘘』の幸せだったと思い知らされる未来が訪れることだ。中学生になって、私が笑いかけた相手に、冷たい目で見られるようなことがあったとしたら――

「うん、わかんないねー」

「ちょ、サエすけっ！　あっさり答え出すんじゃないわよっ」

「だってわかるわけないよー。私たち、三人とも子供だもん。大人になったことないもん」

……うん、それもそうだ。

「だからさー、実際に大人になったことある人たちに聞いてみればいいんじゃないかなー」

「聞くって、何を？」

サエちゃんはにっこりと笑った。

「――どうやって大人になったのか」

なる、ほど。

それを聞けば、私でも大人になれるんだろうか。

## カカの天下８０４「大人の階段、一段目」（後書き）

次回は大人の皆さんに、大人な意見を聞いてみます。この階段が何段あるのかはまだわかりません。だって決めてないですもん（ぉぃ

今回はほとんどがぶっつけで書いています（わりかしいつものことですが）。だから誰がどんなことを言うのかまだ不明です。意外な人が意外なことを言うかもしれません。

またコメディ色が薄めになりますけど、お付き合いいただけたら幸いです。

あとそうそう、またもや感想欄の返信する暇がなく申し訳ないと思いつつ……ちょと気になることがあったので少しだけ。

今までもちょくちょく「夢オチ多くないですか？」というご意見をもらっていたのですが、私としてはあまり気にしてません。なぜならこれは日常の物語。日常ってことは毎日寝ます。そしたら毎日夢を見ますよね？　覚えているかは別として。

そして夢っていうのは、いざというときに大事な信号を送ってくれるものだと私は思います。愉快な気分のときには、愉快な映像を。不安に思ったときには、その不安を映し出してくれます。

皆が皆、そうじゃないかもしれません。ですが私は結構、大事な場面で夢を見て、考えさせられたり気づかされたりしたことが何度もあります。

だからこそ、私が日常を書くにあたっては夢をないがしろにはしたくないのです。

まぁ、便利なのは違いないですけどね笑

『夢だったーハイ終わりー』じゃなくて、『こんな夢を見たけど、

これからどうしよう』という場面はやっぱり書いていきたいと思います。

個人的な趣向なので、夢オチ嫌いな人には謝るしかないのですが……どうかご勘弁ください。

## カカの天下８０５「大人の階段、二段目」

カカです。

学校の保健室で悩みを打ち明けた私、そしてそれを解決するため、サエちゃんとサユカンに連れられて大人を訪ねることになりました。

「手近なところだと、職員室だねー」

「テンカ先生、いるかしらっ」

そのとき、予想していなかった人物が現れた！

「おお、カカ君！　大丈夫か！？」

「タケダか」

「タケダねっ」

「ほらほら、大人ぶってるだけのやつに用はないよー、いこー」

「待て待て待て待て！」

爽やかに無視して去ろうとする私たちの前に立ちはだかるタケダ。

「俺を大人ぶってるだけのガキだと思うなよ！？」

「……」

三人の冷たい視線が突き刺さる。

「ああそうさ！　大人ぶってるだけのガキさ！　悪いか！」

「さて、みんないこうかー」

「だから待てと！」

「じゃあ聞くけどー。大人ぶってるって言うけどさ、タケダ君はどうやって大人になったつもりになってるの？」

ふむ、意見を沢山聞くに越したことはないか。

「おう。我思う、故に我あり。そんな言葉があってだな」

「勝手に割れてれば？」

「割れじゃない！！　ええぃ、つまり。自分が望む大人になれるよう常に意識していれば、おのずとそうなれるのだ！」

「その言葉って、そんな意味なのっ？」

「知らん！」

「……タケダ。いつも思うんだけどさ、恥ずかしくない？」

「何がだぁ！　俺は俺の信じる道を行く、疑念などない！」

「そうかーそうかーよかったねー。さぁ行こうかー」

「あああ、なぜそんなにツレないのだぁぁ」

だって結局はまだ大人になってない人の意見だし。それでちゃんと思う通りの大人になれたっていうんなら聞くけど。

でも……自分が望む大人、かぁ。私の場合は、一体どんなだろう？　よくわかんないけど、前まではタケダみたいに、なんの疑念も抱いてなかったような……

ちょっと考えているうちに、辿りつきました職員室。

「テンカ先生っ」

「おお、でかい顔のサユカじゃねぇか」

「もうでかくないです」

「顔がでかかったサユカじゃねぇか」

「うがーっ！」

「声もでかいな。尻もでかいが」

適当にサユカンで遊んだテンカ先生は満足したらしく、きちんと話を聞いてくれた。

「はぁ、どうやって大人になったか、ねぇ」

「はい」

「飯食ってクソして寝てたら、いつのまにかなってたぞ」

「テンカせんせー、仮にも女性がそんなこと言ったらー」

「仮だからいいじゃねぇか」

つくづく男らしい大人だ。

「ま、そうだな……オレだってそれなりに経験してきたぞ？　ガキのころはもっとおとなしかったしな」

「じゃあいつ頃から本性を出したんですか」

「カカ、てめぇ仮にも落ち込んでたんならもっと――」

「仮だからいいじゃないですか」

「ちっ」

や、仮でもないんだけどね。

「ともかく、だ。元々オレは、周りの目ばっか気にしておどおどして、格好の苛められ役だったんだよ」

「嘘だ！」

「嘘じゃねぇよ。そういうときもあったんだ」

信じられない。でも「周りの目ばっか気にして」っていうのは、今の私と同じ？

「だが、オレにゃ憧れの人がいてな。その人のようになりたいってずっと思ってたのが、今みたいな大人になった理由としちゃ一番大きいかな」

誰かのようになりたい、かぁ。さっきタケダが言ってた「なりたい自分」っていうのに近いかも。

「そういう指針で行こう、っていうのはあったけどな。実際はそう簡単にはいかねぇぞ？　人生なんざ予想外の連続だ。いくら『こうだ！』と決めたモンがあっても、ふとした事態で簡単に揺らぎやがる。迷うことなんざしょっちゅうだったな。特におまえらぐらいの時期は」

迷う。そんな言葉もテンカ先生には似合わない気がする。でも『そうなる』までには、やっぱり色んなことがあったんだろうか。

「だからな、カカ？　オレがてめぇを『心配だ』って言ったのが、大人に関して考えるきっかけになったと言ってたがな。そりゃてめぇに問題があるわけじゃない。いや、問題はあるかもしれんが。カカだし」

どっち。

「とにかく、心配して当然ってことだ。オレたち大人は『未来が読めない』ことを身に染みて知ってるからな。姐さんくらいの規格外じゃないかぎり、誰が相手でも『心配する必要がねぇ』なんて思えねぇよ」

「……言われてみれば。サエちゃんは黒いし、サユカンは暴走する

し、心配なのは私だけじゃないかも」

「あれー？　私たちって今回はサポート的なポジションじゃなかったっけー？」

「な、なんかわたしたちも真剣に考えないといけないのかしらっ」

むむむ……心配されるのは当然、かぁ。

「じゃあ、あまり気にしなくていいのかな？」

「いんや、気にしてみろ」

どうすればいいのか、こんがらがってくるんですけど。

「いくら未来が読めねぇって言ってもな、考えてみるに越したこたぁねぇんだ。いい機会だ、じっくり考えてみな。『大人』の定義は知らねぇが、少なくとも何も考えてねぇやつは大人扱いされねぇからな」

考える、考えるかぁ。何を？

えぇと、自分がどういう大人になりたいか、とか。

あれ、それって――『自分がこのままでいいのか』っていう最初の疑問と繋がるかも！

私はこのままでいたいのか。いれるのか。どうなりたいのか。どうなるのか。

「私、もっと色んな人に話を聞いてみます」

「おぉ、そうしな。ちょうどそこに教頭もいるし」

あ、デストロイヤー教頭！　早速聞いてみよう！

「教頭！　大人になるにはどうすればいいと思いますか！？」

「なんとハレンチな質問だ！」

「……オイ」

「テンカ君！？　何を個人授業しとるのだお主は！」

「何を言っとるのだおっさん」

そうか、大人ってハレンチでもあるんだ。勉強になった。私もそうなるのかな？　わからない。

さぁ次は誰に聞こうか。

## カカの天下８０５「大人の階段、二段目」（後書き）

シルバーウィーク、皆さんいかがでしたでしょうか。

早くカカたちも休ませてあげたいものです。なので早く続きを書いてあげなければ！　頑張ります！

# カカの天下８０６「大人の階段、三段目」

こんにちは、引き続きカカです。

今更ですが、学校の授業云々は私が気絶しているうちに終わっていたらしいです。なので私たちは外へ飛び出し、知り合いの大人へ片っ端からインタビューすることにしました。

「うーん、この時間にすぐ話を聞ける人といったらー」

「サラさんとカツコさんはどうかしらっ。まだお花屋さん、営業中だと思うわよ」

「よし、それ行こう」

目的地も決まり、三人でテクテク歩いていると……なんか予想外の人を見つけました。

「ねぇ、サエすけ。あそこの公園でブランコに乗っているのって……」

「サカイさん、だよね？」

「あれー？　お母さん、今は仕事中のはずなのに」

うん、一般の大人さんたちはまだお仕事してる時間のはずだ。でもサカイさんはリストラされたサラリーマンよろしくブランコでゆらゆら遊んでいる。妙に楽しそうなのがシュールだ。

とりあえず声をかけることにした。

「サカイさん、やっほ」

「あららー、愛しの我が娘たちー」

のほほんと返事するサカイさん。焦っている様子がないところを見ると、本当にリストラされたわけじゃなさそうだ。

「お母さん、仕事はどうしたのー？」

「してるよー。いま営業中なのー。外回りなのー」

言いながらブランコを捻った勢いでくるくる回転するサカイさん。確かに外回りしている。

「公園のブランコで何を営業してるんですかっ！」

「目が回るー」

「話を聞いてくださいっ！」

「あははー、ちょっと貸しがある子たちに代理で回ってもらってるんですよー。私は司令塔なんですよー」

司令塔というより灯台に見える。くるくる回ってるから。

「みんなも貸しは作っておくものだよー？　楽して稼げるからー」

とりあえずこの人はダメな大人だ。サエちゃんには悪いけど、き

っとそうだ。でも一応聞いておかないと。

「あの、聞きたいことがあるんですけど、いいですか？　サカイさんはそんな大人ですけど――」

「なんか失礼なこと言われてる気がするー」

「そんな大人に、どうやってなったんですか？」

「なんか随分とアレな大人になっちゃったねーって言われてる気がするー」

「そうじゃなくてですね！　あ、そうですけど！」

「どっちー」

「あの、私、今悩んでて……大人になるっていうことについて……」

私は悩みを打ち明けた。自分がこのまま大人になっていくことについて、不安を抱いているということ。私は今、このままでいいのか疑問に思っているということ。

サカイさんの返答は――

「んー。私はそんな難しいことは考えずに大人になっちゃったなー」

やっぱりなんかダメっぽい返答だった。

「初恋した勢いでそのまま結婚してー、考えなしに子供産んでー……大して頭を使ってなかったよ。流れに逆らうこともなく、起きる

出来事に乗っかってきたの」

ダメっぽい、そう単純に思った自分を少し恥じた。

「だから上手くいかなかったのかもねー」

サカイさんが、真剣な顔をしていたから。

「本当の自分はこうありたい、とか。もっとこうするべきなんだ、とか。誰かにこうしてほしい、とか。立ち止まって考えてみれば、わかることもあっただろうに。もっと早く立ち止まっていればよかったのに。あんな風に大事なものを全部失ってからようやく立ち止まって、動けなくなって、そのまま腐っていくこともなかったのに、とか……考えることがあるんだけどー」

そうだった。ダメだなんて軽々しく言っちゃいけない。この人はこの人で色々とあったんだ。

「でもねー、聞いて聞いてー」

こっちも真剣に聞かないと、と思ったらサカイさんはいきなり相好を崩した。

「こんなに途中で腐っちゃうダメダメな人生を送ってきた私でも、今はすっごく幸せなんだよー」

サエちゃんを見つめながらにこやかに笑う。あ、サエちゃん照れた。

「それでね、思うんだー。いくらダメになっちゃってもね、頑張れ

ば幸せになれるんだって」

サカイさんは私を見た。

「だからね、カカちゃん。サエにサユカちゃんも。この先に何があるかはわからないけど、頑張って。何を頑張れば、とか、そういう答えはあげられないけど、頑張れる大人になれればきっと幸せになれると思うよ」

「……はい」

私は頷いた。サエちゃんもサユカンも頷いた。

頑張る。ありふれた言葉だけど、実は一番難しいことなのかもしれない。サカイさんの話を聞いているとそう思った。

頑張れる大人になれれば……か。覚えておかなくちゃ。

――もうしばらくブランコで営業するというサカイさんと別れ、私たちは当初の目的通り花屋さんを目指した。

と、そのとき。またもや予想外の人物が。

「ねぇ、あそこに人が倒れてないっ！？」

「私、見覚えある気がするー」

「たしかシャーとかいう名前じゃなかったっけ」

「シャア？　そんな有名な名前じゃなかったと思うけどー」

私たちが近づくと、道のど真ん中でうつぶせに倒れていたナントカさんは「いててて」と体を軋ませながら立ち上がった。

「いやぁ、何もないところで転んじゃったよ」

「うわ、バカだ」

「す、ストレートに言わないでくださぁい」

今度こそダメな大人だ。お姉にこき使われる人生、うだつの上がらない仕事っぷり、情けない表情が人生の九割を占めるとの噂のシュー君だ。

「どうやったらそんな大人になれるのっ？」

「もちろんなりたくないから参考に聞くんだけどー」

「いきなりなんですか！　ひどいです！」

「……文句ある？」

「ありません！　ごめんなさい！」

小学生にこれだけなめられて素直に謝る大人も珍しいよね、本当。うーん、よくよく考えたらこんな人の意見も気になってきたぞ。

「それでさぁシュー君」

「あ、はい。なんですかカカちゃん」

今さっきヒドイ事を言われたにも関わらず笑顔で聞き返してくるシュー君。

「……シュー君、大人だよね」

「はい、一応は」

「そんな大人になった自分をどう思う？」

「なんだかとてつもなくヒドイ事を言われてる気がします！」

「や、そうじゃなくて。そうだけど」

「どっちです！？」

「いやいや、実は私、悩んでてさ」

事情をシュー君に話した。しかしこの人はどれだけコケにしてもちゃんと話を聞いてくれる。こんな子供の話を、バカにされながらも。弱気すぎるのかと思ってたけど、もしかしたらすごくマジメで優しいのかも。

「大人になるにはどうすればいいか、ですか」

「うん。シュー君はどうやってそんなにダメな大人になったの？」

「その直球には慣れてきましたが……僕、そんなに自分をダメだと思ってませんよ？」

「ダメよっ！」

「ダメだよー」

「ダメだと思う」

「うわぁぁぁぁぁん！　でも僕はそう思ってるんですよぉ！」

ん、気になる。なんでそう思えるんだろ？

「確かに、世間から見たら僕はダメな大人かもしれませんよ。でも僕は幸せなんですよ」

幸せ……には見えないけど。

そんな私の考えを見透かしたかのように、シュー君はこちらを見て照れたように笑った。

「幸せなんです。うまくいかなくても生活していけるだけの給料をもらえて。お姉様に踏んだり蹴ったりにされながらも、たまには一緒に飲んで。愉快な皆さんと遊んで」

「みんなに苛められていても？」

「それはそれ、これはこれです。自分の中に『これさえよければ後はどうでもいい』って思えるモノがはっきりできれば、自分のプライドとか見栄なんて気にならなくなるものですよ」

言われてみれば、確かにシュー君が幸せなように思えてきた。今までそんなことは考えたこともなかったけど。

やっぱり大人って深い。ややこしい。わからなくなる。

「もちろん見栄やプライドを何より大事にしてる人もいますし、その方々を否定するつもりはありません。これは僕個人の意見ですので、参考までにお聞きください」

「そうだね、所詮はシューの話だし」

「あはは、そうですねぇ」

シュー君はへにゃへにゃ笑う。

「それでは僕は仕事がありますので……カカちゃん、サエちゃん、サユカちゃん。色々と頑張ってください。皆さんが幸せに成長できることを祈ってます」

だけど、初めてこの人が大人に――皆を守る警察官に見えた。

「大人って色々いるんだねー」

「なんだか学校の勉強より難しいわっ」

「うん……もっと話を聞こう！」

## カカの天下８０６「大人の階段、三段目」（後書き）

カカ天内でもダメな大人なお話でした。

しかし人生に悩んだときに必要な意見というのは、そういう人たちのお話なのかもしれません。そして実際に聞いてみると、一概にダメとは言い切れなかったり……

大人になるまでで深い人生を歩んでいない人って、きっといないんですよね。だから他人の話を聞くのはとても大事なこと。

カカたちが色んな話を聞いて、何を思うのか。まだ私にもわかりませんが、きちんと書いてあげたいと思います。

ようやく更新ペースを取り戻せそうですし（少しずつですが＾＾；

近々感動もいっぺんに返しますよー！　もうちょっと待ってくださいねー！！

# カカの天下８０７「大人の階段、四段目」

どうも、まだまだカカが続きます。

サエちゃんサユカンと三人揃って寄り道しつつも、到着しましたお花屋さん。さてさて、お目当ての女性は……いたいた。

「おーい、サラさんやーい」

「あら、カカちゃんトリオじゃないですか。お姉さんに会いに来たんですか？」

エプロン姿のサラさんは、わざわざ仕事の手を止めてこちらまで来てくれた。ええ人や。

「そういうわけじゃないんですけど……お姉は？」

「いまちょっと消えてます」

果たしてどういう意味なんだろう。休憩中なんだろうか、休みなんだろうか、それとも得体の知れない消失でもしたんだろうか。まぁどうでもいいや。

「お姉は置いといて、サラさんに聞きたいことがあるんですけど」

「私に？　はいはいなんでしょ」

「どうしたら大人のボディになれますかー？」

「ちょっとサエすけっ！　質問が変わってるわよっ」

「えー、だって気になるしー」

たしかに。

「質問の内容も似たようなもんでしょー」

たしかに。

「えーと、私はどうすればいいんだろう……」

困惑するサラさんにわかりやすい案を提示しよう。

「とりあえず乳を見せてください」

「カカすけまで何言ってるのっ！　わたしたちはマジメな話をしにきたのよっ」

「おっぱい大きくなればトメお兄さんもメロメロだよー」

「ほらサラさん早くっ！　乳出しなさいっ！」

サユカンてば相変わらずだなぁ。

「残念、お乳は子供ができないと出ないんですよ」

そしてサラさんは前に比べて流すのが上手くなっている。

「聞いたー？　サラさんは子供ができたら自分のおっぱいを一般公

開するらしいよー」

「乞うご期待ねっ」

サエちゃんサユカンの追撃。しかし。

「トメさんの子供かぁ」

「そんなことは誰も期待してないわよっ！！」

「ふふ、期待に胸が膨らむわぁ」

「ほんとに膨らんでるー！！」

……ていうか、ほんとにサラさん流すの上手くなったなぁ。これが大人の余裕なんだろうか。

「ほらサエちゃんサユカン。ふざけた話は置いといて、聞きたいこと聞くよ」

「最初に乳を見たいって言ったのは誰よっ！」

「サユカン」

「サユカちゃん」

「え……あれ？　あれっ！？　そうだったかしら……わたしって……でも、え？」

そういうことにしておこう。

「さてサラさん。直球で聞くけど、どうやったら大人になれると思う？」

目をぱちくりさせるサラさん。

「大人。はぁ、カカちゃんたちがどうやったら大人になれるかですか？」

「うん。サラさんがどうやって大人になったか、とか踏まえて教えてくれると嬉しい」

そこで、なぜかサラさんはキラリと瞳を輝かせた。

「やっぱり恋でしょ！」

なんとなくサユカンを見る。

「恋をすれば誰しも大人になるものです！　だからカカちゃん、恋をしましょう！」

恋……恋かぁ……

「たしかに恋しまくってるサユカンは胸もお尻も成長しているね」

「ほんとだー」

「だぁーっ！　二人して色んなとこ揉むなぁっ！」

いや成長を確かめないと。揉み揉み。うあ良い心地。

「なるほど、参考になったよ。ありがとうサラさん！」

「いえいえ。じゃあねカカちゃん、良い恋を！　青春を！」

ちょっと恥ずかしいセリフを残して、サラさんはお仕事に戻っていった。

「恋かー、カカちゃんからは想像もつかない言葉だねー」

や、一応あなたに恋してるんですけどサエさんや。

「カカすけと合う男子なんて見当たらないわよっ」

やっぱ男子じゃないとダメか。

「とりあえずお姉は居ないみたいだし、次いこうか」

「大人になるには？　あーあー、恋しなさい」

またもや同じ答えを聞かせてくれたのは、かつてトメ兄と恋愛で色々あったであろうユカさんでした。

「ほんと……成長するわよ……世界の真理とかわかるわよ……どれだけ上手くいかないようにできているかとか、どれだけドス黒い感情が溢れてるかとか……ふふ、ふふふ」

ほんっと色々あったみたいです。

「でもま、この上ない幸せも感じられるしね。一回恋愛するだけでも精神的にかなり大人になれると思うわよ」

「ユカさんは今、幸せですかー？」

「……まぁ、そこそこには」

「真っ赤な頬が『そこそこ』どころか『とてつもなく』と物語っているわねっ！」

「そ、そんなことないわよ！　何よあんなやつ、トメのほうが――」

「トメさんのほうが素敵！？」

「違うわよ！」

「じゃあユカさん的にはやっぱりキリヤさんが素敵で素敵でたまらないんですねっ」

「違うってば！」

「じゃあどっちも素敵なんですねっ」

「逆よ！」

「まぁまぁそんなテレないでっ！」

「あーあーあー！　だから違うっての！」

さすがはサユカン。似たもの同士だからユカさんのこと、よくわかるんだね。

「しかし、またしても恋か……」

「カカちゃん、恋できる相手いるー？　同年代の男子とかで」

候補が微塵も見当たらないなぁ。

「うん、やっぱトメ兄しかいないか」

「「「は？」」」

よし、告白してみよう。

# カカの天下８０７「大人の階段、四段目」（後書き）

お久しぶりです。

更新ペースを取り戻せそうとか言いながらここまで更新が遅れたのはわけがあります。

や、なんかサイトがリニューアルしたじゃないですか？　それでなんかデータの巻き戻しあるかもだから更新控えてくださいっ書いてあって、じゃあヘタなことしないほうがいいのかなーまだかなーまだかなーと放置してたのですが……

いつのまにか（しかも意外と早く）更新しても大丈夫って書いてあったし！　気づかなかったし！

というわけで、無闇に遅れた分も取り返す勢いでちゃっちゃと書いていきたいと思います。なので……その……更新遅いからって見捨てないでね！！

# カカの天下８０８「大人の階段、五段目」

どうも、いけいけゴーゴーな感じのカカです。

「ねぇカカすけ、考え直しましょっ！　兄に妹が告白なんて！」

「サユカちゃん、いくらトメお兄さんがオッケーしそうだからってそんな慌てなくてもー」

「慌てるわよっ！　わたしだってトメさんのシスコンっぷりを知ってるものっ。真剣なカカすけの声を受け入れてド変態に成り下がる可能性だってなくはないものっ！」

「うわー、トメお兄さんのこと信用してないんだー」

「信用と妄信は違うのっ」

「……サユカちゃんのは妄信じゃなかったのかー、初めて知ったー」

「また一つ大人になったわねっ、よかったわねサエすけっ！」

「そんなことを堂々と言えるようになった辺りを見ると、サユカちゃんが成長してるのは間違いなさそうだねー」

そんな声を背中に聞きながらも、自宅へ向かってズンズン行進する私。

「ねぇカカすけ。あなただって本気でトメさんが好きってわけじゃないでしょっ！？」

「私が見る限りじゃートメお兄さんもカカちゃんもお互いが大好きだと思うけどなー」

「それは恋愛とは違うでしょっ！」

「友達から恋人へーなんてよくある話だよー」

「妹から恋人はないわよっ！」

「その筋のゲーム界隈じゃー常識のように溢れてるってお母さんが言ってたけどー」

ふと気づき、足を止める。

「あ、カカすけっ。考え直してくれたのっ！？　そうよね、カカすけにはもっとピッタリな相手が見つかるわよっ」

「ある意味、トメお兄さんほどカカちゃんにピッタリな相手もいないと思うけどー」

くるりと振り返って、サエちゃんとサユカンに向き合う。

「私、忘れてたよ」

「え、なに？　よくわかんないけど考え直してくれたのねっ」

「トメ兄まだ仕事だわ。電話する」

「微塵も直ってないねー」

「いやあああっ！！」

ぴ、ぽ、ぱ。コール音が鳴った。出るかな、仕事中だけど。

あ、留守電だ。やっぱ出れないかぁ、仕方ない。メッセージを残しておこう。

「ダメよカカすけっ！　大人はそんなバカなことはしないものよっ！」

トメ兄、私を大人にして――とかそんなようなことを言いかけて止まる。

「大人は……バカな」

ことは、しないの？　じゃあ、私はどうすれば――疑問が巻き戻った。

「バカ……か」

やっぱり私はバカなのかな。

「どうしようもない、バカ……？」

一時消えていた不安感がこみ上がってくる。

自分の全てを否定されているようで悲しくなる。

「か、カカすけ？」

「カカちゃんどしたのー？」

電話を切る。サユカンを見る。

「ねぇ、私、やっぱりバカなのかな」

「え、うん。そうだと思う」

「ちょっとサユカちゃん！　いつもどおり返しちゃダメー！」

「あっ……」

そうだよね……今までは気にしないどころか『バカ上等！』くらいの勢いだったんだけど、やっぱりバカはバカなんだよね。

大人はしないような、ことなんだよね。

「私……バカだから大人になれないのかな」

「そんなことないわよっ！　ほら見て、あそこにいる人をっ」

「あ、なんていいタイミングにー。ほらカカちゃん、あそこに誰よりもバカな大人がいるよー」

「そうよ、キングオブバカよっ！」

二人の視線の先には――

「あ……ほんとだ、バカがいる」

「うぉーい妹ちゃん。いくらなんでもお姉さん相手にそりゃヒドイんでないかい？　いくらあたしでも悲しくなるべ」

だって本当のことだし、なんて言ってしまっても「あっはっは」と笑い飛ばしてしまうお姉。そうだ、この人がいた。私が悩むなら真っ先に話を聞かなきゃいけないだろう、この人が。

「お姉さん、実はカカちゃんが悩んでてー、って、あれー？」

「お連れさんがいるわっ、失礼しましたっ」

そう。たまたま道端で出会ったお姉は、見たことのない女性と一緒だったのだ。お姉のバカオーラが強すぎて見えなかった。

「お姉、この人は誰？」

「ん、タケダのかーちゃん」

わ、この人がそうなんだ！　初めて見た。たしか旅行好きでしょっちゅう家に居ないとかいう話だったような……

いや、あんなやつのことはどうでもいい。今はとにかく、バカについての話を聞かないと。

そう思った矢先に――

「タケダのかーちゃんで、タマのかーちゃんでもある」

「「「は？」」」

この上なくバカな話が舞い降りた。

そのころのトメ。

「あー終わった終わった。ん、着信とメッセージ？　カカからか。なんだろ。再生っと」

『大人は……バカな。バカ……か。どうしようもない、バカ……？』

ケンカ売ってんのかこいつは。

## カカの天下８０８「大人の階段、五段目」（後書き）

台風がきますね（カカ天と関係なし）。

皆様お気をつけて。

いやしかし、カカ天にも話的な意味で台風（嵐？）がくる……のか？

# カカの天下８０９「大人の階段、六段目」

どうも、なんか混乱中のカカです。

目の前には姉と、タケダのかーちゃん兼タマのかーちゃんという、信じ難い設定な女性が。

「えっと、お姉。どゆこと？　タマちゃんってお姉の子供なんじゃないの？」

「違うって最初から言ってたじゃん」

言ってたような言ってなかったような、途中から誰も気にしなくなったというか。

「えっとー、私が聞いたお姉さんの嘘臭い設定はー、武者修行中、雪山で遭難したときに出会った女性と意気投合して、気がついたら子供を押し付けられてたっていうのじゃなかったっけー」

サエちゃんてば驚きの記憶力。たしかそんな感じだった気がする。

「ああ、それは大体合ってる」

もうこの人わけわかんない。

「よし、説明しよう！　この人はね？　あたしが子供の頃から知り合いの、旅行好きなおねーさんなんだよ。もうタケダ医院の院長に嫁いでて子供もいるし、歳的にもおばちゃんって言ったほうが正しいんだけど」

「ちょっとカッちゃん、黙って聞いてれば失礼なこと言ってくれるじゃないか！　あたいはまだまだ若いんだよ！　これだけ日本を飛び回ってんだからね！」

「元気＝若いってんなら、あたしなんか赤ん坊を飛び越えて腹ん中だよ」

「あんたの星じゃそれが普通なんだろうさ」

「あたしゃ地球人だ！」

「嘘つけ！　あたいはカッちゃんみたいな地球人は見たことないわ！」

「ていうか宇宙人を見たことあんのか！」

「あるさ！　あんただ！」

「違うっつうのがわかんないのか！？」

「頭が悪いからわかんないね」

「頭が悪いんなら宇宙人説もきっと間違いなんだろうさ」

「いいや、あたいはカンとお通じだけはいいんだ！　断言する、あんたは地球人じゃない！　もしくは地球生まれのナントカ星人だ！」

「ナントカって何さ！」

「あんたさ！」

「あたしはどんだけアレなんだ！」

……うわぁ、この人、喋り出したらすごい。タケダのお母さんというより、お姉の双子みたいだ。

「まーまー二人ともー、今はそんなことより説明してよー」

「そうよっ！　タケダのママがタマのママでもあるってどういうことよっ」

「あはは、早口言葉みたいだ」

ねぇお姉、笑い事じゃないと思うんだけど。

「はい、改めて自己紹介します！　あたいは……そのタケダのママってのが一番わかりやすいかな！　それで、タマのママでもあります」

いやそれサユカンが言ったのまんま口にしただけだし。

「だからー、その言い方だとタケダ君とタマちゃんが兄妹ってことになっちゃうでしょー」

「そだよ」

「軽く頷いたっ！？　初めて聞いたわよ、そんな話！　じゃあお姉さんの、雪山で意気投合した女性に子供を押し付けられたっていうのは」

「それも大体合ってるのよん。あたしさ、サエちゃんの言った通り武者修行してた時期があったじゃん？　んで、同じく一人旅の途中だったこの人に会ってさぁ。『旅先で子供産んじゃったけどまだ旅を続けたいから』ってことで、その子供、タマをこの街まで送り届けてくれって頼まれたのよ」

「送り届けてってー……タケダさんちには届いてないみたいですけどー」

「お姉のとこで暮らしてるよね。や、正確にはシュー君の家かな？」

「うん、わたしもタマはカツコさんの子供だと思ってたし」

「ええ！？　どういうことよカッちゃん！」

ええええ、お母さんも知らなかったの！？　でもお姉ってば涼しい顔で、

「や、だってさ。あんた言ってたじゃん、『うちのキンジロウは男のくせに弱っちいからこの娘はあんたが鍛えてくれ』って」

「それは酒の勢いよ！」

オイ。

「だから鍛えるためと思って、タマはずっとあたしんとこで預かってたのよ。そういう意味だと思ったんだけど、違った？」

「……ちょっと待って。あたい、嫌な予感がしてきたわ。ねぇカッ

ちゃん。あなた、ちゃんとあたいの夫とキンジロウに子供ができたって報告、した？」

「してないよ」

「なんで！？」

「そういうのはあんた本人がするもんでしょ」

「そりゃそうだ！！」

オイオイ。

「旅に夢中で忘れてたわ……え、じゃあ何。この数年、タマは家族に知られることなく育ってきたってこと！？」

「たまにタケダの坊やと遊んでたから、てっきり知ってるもんかと……でも知らないんだろね、話を聞く限りじゃ」

「うわ、じゃあ今、衝撃の事実を告げたら……」

「家族の、感動の再会！」

「燃える！」

「泣ける！！」

その前に呆れる。何この人たち。

「いやぁ、あたいのテキトーな性格のせいで色々あったみたいだけ

ど、タマは強く育ってるみたいだし、他の家族も元気でやってるっぽいし、結果オーライだね」

「そうそう、あんたは昔からテキトーすぎるんだよ」

「カッちゃんにだけはテキトーって言われたくないね！　あたいよりテキトーなくせに」

「いやいやあんたにゃ負けるってばさ、あっはっは」

「……なんで？」

なおも笑い飛ばす二人に向かって、思わず私は呟いた。

「なんでそんな風に笑ってられるの。二人とも、大人なんだよね？　大人なのに、そんなバカなことをして、恥ずかしくないの？」

私の悩みを吹っ飛ばすような、わけのわからない、突飛すぎるバカ話。それを聞いて私は黙っていられなかった。大人というものに真剣な疑問を持っていた自分は一体なんだったのかと問い詰めたくなる。

「うん、こりゃ恥ずかしいわ！　失敗失敗」

嫌味っぽい私に対して、タケダ母さんから余りに堂々とした返事が。

「でもやっちゃったもんは仕方ないわ！」

ドーンと胸を張りまくった返事が。

「ねぇカッちゃん！？」

「うん、どんまい！！」

明るすぎる励ましが。

なんかもう、開いた口が塞がらない。

「んあ？　カカちんどったの？」

「あ、お姉さんっ！　それはわたしたちが説明するわっ」

「実はカカちゃんねー」

ぽかーんとする私の代わりにサエちゃんとサユカンが説明してくれた。私の、大人に対する疑問等について。

「――それでですねー？　大人になるためにはバカなことをしてはいけないんじゃないかーって思ってるときに、お姉さんが超絶的にバカなことをしたので、カカちゃんとしては不満なわけですよー」

「サエすけ、君ってばバカバカとハッキリ言いすぎ。いくら途方もないバカ相手でも少しは慈悲をかけましょうよっ」

そうだそうだ、もっとバカバカ言っちゃえ。そしてたまにはお姉も凹め。私みたいに。

「大人だろうが子供だろうが、男だろうが女だろうがバカだろうが関係ないわ！　あたしはあたしだ！　あたしの人生は、あたしが楽

しければそれでいいんだ！」

……なんて迷惑な人なんだろう。微塵も凹みやしない。

「人は迷惑かけて当たり前、とか開き直るつもりはないけどね。周りばっか気にして自分を張れないんじゃ、生きてる意味がないんだよ。『大人はこうあるべき』だなんつー誰が決めたか知らない規則より、『自分はこうあるべき』ってぇ心に従うべきだ。じゃないと人生楽しくないよん」

「――――」

一瞬前までただの手前勝手な人に見えていたお姉の言葉が、するりと私の胸に入ってきた。

自分はこうあるべき。そんなこと、私は考えたことあったっけ？

今まではずっと『なんとなく』行動していた。ここ最近になって『大人はこうあるべき』なのか？　と考えるようになった。では今お姉が言ったように『自分はこうあるべき』と考えたことがあるだろうか？

ない。

「カッちゃん。それって結局は自分のやったバカへのイイワケじゃないの？」

「うは、厳しいお言葉。でもこれは本当にあたしの信条だもんね！　っていうか最初にバカやったのはあんただろ！？　旅行先で子供産んで、さらにその子を他人に預けて、家族への報告も忘れて旅行

って……どんだけ旅行好きなんだよ！」

「あたしは旅行してないと死ぬんだ！　泳いでないと死ぬマグロと一緒だ！」

「このマグロおばちゃんめ！」

「そうさマグロバンザイ！　赤身魚ヒャッホウ！　それがあたいの人生さ！　大人である前に母である前に旅人なんだ！」

「子がいる母なんだから少しは自重しろ！」

「すいません！　でもカッちゃんこそ自分を人間と言い張るなら自重しろ！」

「できん！」

なおも二人のバカ大人がグダグダ会話した後、どうやらタケダ家の家族再会シーンが展開される予定らしい。

ちょっと興味はあったけど、私は私で忙しいのでお姉たちと別れた。サエちゃんとサユカンはもちろん私についてきてくれた。

「私はどうあるべきか……か」

大人は、というよりも先に考えるべきことのような気がする。

――そろそろ答えが見えてきたかな。次は誰に話を聞こうか。

## カカの天下８０９「大人の階段、六段目」（後書き）

作中、現実ともに色々あって長引いた階段も、そろそろ終着点です。

タマとタケダの関係については最初から決めていました。なかなか公表するタイミングがつかめず、気がつけばこんなところまできてしまいましたが笑　ほら、タケダとタマが絡む話とかあったでしょ。あれ何気に伏線（誰もきづかないってば

そっちサイドの話はまた改めて書くとして、まずは階段です。そろそろ日常的などうでもいい話が恋しくなってきました、カカは元通り緩いボケをかましてくれるようになるのでしょうか。はてさて。

## カカの天下８１０「大人の階段、まだまだ続く」

大人に向かってまっしぐらのカカです。

いよいよ最後、トメ兄へ意見を聞くときがやってまいりました。

「クララ参上です！！」

その前に何かキター！！

「大人の意見が必要と聞いて、やってまいりましたです！！」

「はいはいー、おうち帰って寝まちょうねー」

「サエお姉ちゃん、クララを子供扱いしないでください！」

「サエすけをお姉ちゃんって呼ぶってことは、サエすけより年下なんでしょっ」

「それは言葉のアヤです！　クララの樹齢を聞いたらビビりますよ！？」

そっか。こんな姿だけどクララちゃんてば校長と同じくらいの歳なんだっけ。

「じゃあクララちゃんに質問。どうしたら大人になれると思う？」

「ふ、簡単な話です！　人は大切な誰かが傍にいれば、勝手に大人になるものなんです！」

うわ、予想外にいいこと言った!?

「いい言葉だけどー、くさいねー」

「恥ずかしげもなく言えるのは子供姿の特権かしらっ」

「いいえ、クララが臭いのは仕方ないのです！　今日の肥料にもらったフンは特別で、かの有名な――」

「わたしたちこれから夕飯だからそれ以上は言わないでっ！！」

大切な誰かが傍にいれば、かぁ。

いすぎなんだけど。

でもそう考えるなら、私って全然心配いらないんじゃ？

「クララちゃん、ありがとう。ちょっと自信ついたよ」

「ほんとですか!?　じゃあクララの今日の肥料の話を」

「夕飯前だからそれは聞かない」

「クララしょっくです！　いいですいいです、ジョーイとマイケルに聞いてもらうです」

誰だそれ。なんか聞いたことあるような名前だ。ともかくクララちゃんはシュバッと消え去った。

「さー早くトメお兄さんに夕飯を作ってもらいに行くよー」

「今日の献立は何かしらっ」

「あれ、そんな目的だったっけ」

首をかしげつつも我が家へ到着。

さてさてトメ兄は……あ、帰ってる。なんだかんだやってたら遅くなっちゃったからなぁ。

「トメ兄ただいま！　あのね――」

「あぁん!?」

うわああなんかめっちゃ怒ってる!?

「と、トメお兄さんこんにちはー」

「ど、どうしたんですかっ。眉間がしわしわですよっ」

「カカ」

「はい！」

「あの留守電は何だ?」

留守電?　さっきのかな。でもなんだかんだで途中で止めたと思うんだけど、何か入ってたのかな。

「あ、れ、は、な、ん、だ！？」

覚えてない。けどトメ兄は聞いてくる！　えっと、えっと、元々言おうとしてたのは。

「カカ、あれはなんだ！？」

「告白です！」

「てめぇ僕のことをそんな風に思ってたのか！」

私マジでなに言ったっけ！？

「あ、あの、その、トメ兄！」

「なんだ！？」

「ほ、ほんとは聞きたいことがあって電話したんだけどね、その、私ってちゃんと大人になれるかなぁって聞きたくて、その、最近悩んでて――」

「そんなもん僕がいるんだからなれるに決まってるだろうが！！」

「ひくっ！？」

ビックリしすぎてしゃっくりでた。

「あんな非常識な留守電をいれるようなやつ、放っておけるか！大人になるまでしっかり監督してやるから、覚悟しておけ！」

――人は大切な誰かが傍にいれば、勝手に大人になるものなんです！

「よ……」

「なんだ、何か文句あるのか！？」

「よ、よろしくお願いします」

「へ？　あ、は、はぁ。こちらこそ」

深々とお辞儀した私に呆気にとられ、どうやら怒気が消えたらしいトメ兄は夕飯調理中。私は居間でサエちゃんとサユカンと喋っていた。

「なんか、わかった気がする」

「ほんとー？」

「その答えはっ」

私はハッキリと言った。

「なんか、なるようになるさってこと」

訂正。ハッキリと曖昧に言った。

「……なにそれー」

「いろんな人の意見を聞いたけど、みんなバラバラなんだもん。答えがどれかなんてわかんないよ」

「まぁ、すぐには見つかる気がしないわねっ」

「うん、でも」

トメ兄がいて、サエちゃんがいて、サユカンがいて、色んな人たちがいて。

私の話を聞いてくれた。ちゃんと答えてくれた。この人たちが味方なら、恐いものは何も無いと思った。

大人という未来も、先が見えない不安も。

私を受け止めてくれる人たちがこんなにいるなら、自分らしい大人になっていけると思う。皆に甘えることになるかもしれないけど、それはそれで。甘えるのは嫌いじゃないし、きっと甘えられるほうも嬉しいでしょ……なんて、大人ぶってズルいことを考えてみたりしたのでした。

「さて、すっきりしたところでリハビリしないとな」

もうすぐ見逃せないイベントがやってくる。それまでに復調しないと！

## カカの天下８１０「大人の階段、まだまだ続く」（後書き）

階段はまだまだ続きますが、このお話はここでひと段落です。

この大人の階段話。特別なことは何もありませんでした（あ、タマのがあったか）。どシリアスでもなければコメディ一直線でもない、微妙なお話だったと思います。

でもカカにとっては得るものがあったと思いたいです。その結果は近々……

さぁ迫る重要なイベントまでにカカは復調できるのか。

作者の私もイベントまでにどれだけ描いてやれるのか笑

大人ということをイイワケにしてないで頑張ろうと思います（いやマジで）。

# カカの天下８１１「カカさんリハビリ中」

こんにちは、トメです。

最近元気がなかったカカが復活した模様です。何があったのか、友人から聞く限り予想はつくのだけど……まぁそこをツッコむのは野暮だよな、うん。

とりあえずどんな風に復活したかというと、例えば朝食風景。

「いただきまーす」

「おー食え食え。今日は目玉焼きが綺麗にできたんだぞ」

「ねぇトメ兄。この目玉って誰の目玉？」

「シュー君」

「食べる気なくしたし！！」

「じゃあサエちゃん」

「ぜっったい食べれないし！！」

「じゃあ」

「もうやめて！　なんか涙出てきた」

「じゃあ聞くな」

例えば学校へ行くとき。

「トメ兄、いってきます」

「いってらっしゃい」

「ヘイらっしゃい！」

「いってきます」

「……あれ。ねぇトメ兄？　ねぇ」

適当に流して僕も会社へ出かけた。

さらに例えば、家に帰ってきたとき。

「トメ兄、おかえりなさい」

「ただいま」

「お持ちいたしました」

「何を」

「おっしゃっているのですか？」

「……はい？」

「いいえ」

なんだか不思議な掛け合いが始まった。

「カカ、どうした」

「こうした」

「どうしてるんだよ」

「こうしてるんだよ」

「……カカ？」

「キキ？」

「……クク」

「ケケ」

「ココ」

なんだこれ。

「とりあえず上がるぞ」

「上へまいりまーす」

「まいらねぇよ家に入るんだよ」

「一万円はいりまーす」

「そんなに持ってない」

「貧乏人はいりまーす」

「ぶっとばすぞコノヤロウ」

例えば、夕飯のとき。

「ねぇトメ兄。『うまい』と『おいしい』ってどっちが上なの？」

「む。なかなか難しい質問だな」

「トメ兄の返答によって、どっちかが上へまいりまーす」

そのフレーズ気に入ったのかな。

「んー、『うまい』ってのは気軽に食べられる料理を口にしたときで、『おいしい』っていうのはかしこまったものを口にしたときに言う感じがするよな。もしくは食べる人の感性か……まぁ別にどっちでもいいと思うぞ」

「そかー」

「ちなみにこの夕食、カカはどう思う？」

「まずい」

「待てやコラ」

「じゃあ微妙」

「え、ほんとに？　ほんとなの？　えぇー……」

料理には結構自信あったのに……なんだかショックだなぁ……

「よし、今度はもっといいモン作って『うまい』も『おいしい』も両方言わせてやる！」

「計画通り」

「あん？　カカ、何か言ったか」

「上へまいりまーす（夕食のレベルが）」

「まだ言ってるのか」

例えば、その後。

「おーいカカ」

「リハビリリハビリ……んーと、ん？」

「今日はデザートいっぱいあるけど、一種類しか食べたらダメだからな？」

「マンマミーヤ！！」

「プリンがいいか？」

「デストロイヤー！」

「ゼリーもあるけど」

「シャカシャカベイベー！」

「あと、どら焼き」

「情熱大陸！！」

「……どれ？」

「チンパンジーは義理堅い！」

そんなこと聞いてねぇ。

「じゃ適当に選ぶぞ。プリンでいいだろ？」

「ソレジャナイ！！」

言いながら頷くカカ。どっちだ。

例えば、寝るときに。

「トメ兄、一緒に寝よう！」

「またか？　何度も言うが、そろそろ子供じゃなくなってきたんだから」

「まだ子供なんだからいいじゃん」

「……なんか開き直ってないか？」

「いやいや、自分に正直になってるだけよん」

や、これはいつもどおりじゃないかな。大人になるにはーとか色々と聞きまわってたみたいだが、どうやら『子供の部分は子供』と割り切ることにしたらしい。

兄と一緒に寝る、なんてのは完璧に子供っぽい事柄だしなぁ。

「てい」

「あ、布団返せ！」

「はい返したぁ！」

「返しすぎ！！　吹っ飛ばされてベッドに落ちるだろうが！」

「下へまいりまーす」

「おまえを下にやってやる！」

「きゃートメ兄におそわれるー！　助けてお姉！！」

や、ほんと、やってることは子供そのものだ。僕も含めてな。

「呼んだ？」

「姉どっから出てきた！？」

子供って滅茶苦茶で疲れるが、楽しいのは事実。大人になってもそれを忘れちゃいかんよな。

「よし、三人で布団の争奪戦すっか！」

「私、お姉と一緒のチームね」

……や、でも睡眠も大事よ？　ねぇ？

## カカの天下８１１「カカさんリハビリ中」（後書き）

カカさんが自分を取り戻そうと頑張っているようです。

でもしばらく更新できてなかった分、色々と書きたいと思うので、カカさんだけじゃなく他の人にもスポットを当てていきたいと思います。

# カカの天下８１２「とあるレストランに関するレポート」

トメです。

皆様は覚えているでしょうか。二年前くらいの話になりますが…
…かつてトイレに割り箸やスプーン、フォークなどを置いていたレストランがあったことを。

もちろん僕はアレ以来行ってないのですが、あの店に入ったことのある友人が何人かいたことが最近判明したのです。

そのときのお話を少し、紹介したいと思います……

ケース１、サラさんの場合。

はい、そうです。そのレストランに間違いありません。お料理は普通だったんですけど、おトイレに入った途端にびっくりしました。

便器の蓋が閉まってたんですけどね？　その蓋の上になんと……皿が置いてあったんですよ！　ええ本当に、よりによって皿ですよ。私をターゲットにしているとしか思えません。しかも『便器じゃなくてこっちに』とばかりに深皿なんです！！

あの店は二度といきませんでしたね。トイレですか？　そこでするのはなんだか嫌だったので、外のコンビニですませましたよ。

ケース2、サエちゃんの場合。

はいー、まだお母さんと一緒に暮らす前に、おばさんと行ったことがありますよー。

やっぱり問題はおトイレですね。補充用のトイレットペーパーが入っているカゴの中に、袋に入った一口チョコが沢山入ってましたー。

食べろということなのでしょうかー？　それとも他の用途があるのでしょうかー？

どちらにせよ私は無視したので、どうでもいいことですけどー。

え、てっきり何か黒いことをするのかと思ったって？　あはは。やだなー、チョコはもともと黒いじゃないですかー。

ケース3、サユカちゃんの場合。

はい、ありますっ！　家族みんなで行きましたっ！　お食事は普通に美味しかったです。特にチョコバナナパフェは最高でしたっ！

それでですね、デザートも食べ終わってルンルンでトイレに行ったら、なんとトイレットペーパーホルダーの横にバナナが刺さっているじゃないですかっ！　驚きましたよっ。食べろというの？　それとも別の用途がっ!?　どちらにせよ嫌っ！　こんな便所味のバナナなんてっ！　まさかさっきのパフェにこのバナナを使ってない

でしょうね。そう考えると気持ち悪くなってきたわ……なんてことがありましたっ！

とても嫌な思い出ですっ。それからは一度も行ってません……原因？　そんなのわかりませんよ。

ケース４、姉。

んあ、行ったことあるよ。けっこー安いし。

トイレね、うん。あたしもバナナが刺さってた。

食べたよ？　うん。デザート代が浮いたーとか喜びながら。

……なに、その目は。

……なに！？

ケース５、キリヤ。

はい、行ったことがあります。働いたことはさすがにありませんが、バイト仲間がいましてね。トイレについては彼も不思議だと言っていました。誰もそんなものを置いた覚えがないのに、いつの間に変なものが……

私がトイレに行ったときはわりと普通でしたよ。単なる相合傘の

ラクガキがあっただけです。傘だけで誰の名前も書いてなかったので、トメ君の名前を書いておきました。無事に結ばれるといいですねぇ。

え、相手の名前ですか？

サルって書いてみました。

はっはっは！　そんな怒らなくても！

――と、このような証言があるわけです。バイト仲間がいたというキリヤの言葉から察するに、一種の心霊現象みたいなものではないか、と僕は見ているのですが……

「トメ兄、なにしてんの」

「おうカカ。いやな？　いつぞやの変なレストランについてのレポートをまとめてるんだよ」

「なんのために？」

「自己満足」

「なるほど。そりゃ大事だ」

そうだろう？

「どれどれ、ふむふむ。相合傘かー。私も最近書いたよ」

「まさかトイレにラクガキしたんじゃないだろうな」

「そんなことしないよ。ちゃんと学校の傘立てにラクガキしたよ」

いくら傘だからってそこに書かんでも。誰にも見つからなさそうだな。

「それで、誰と誰がくっつくように書いたんだ？」

「テナガザルとマントヒヒ」

なぜおまえらはサルを推すんだ？

「世界のどこかにいるテナガザルとマントヒヒが許されない恋愛に苦しんでたらおまえのせいだからな」

「それを乗り越えてマントザルっていう新たな生命が誕生するんだよ」

「なんか空飛びそうなサルだな」

まぁそんなサルはどうでもいいとして。

「しかしこのレストラン……一体なにがあったんだろうか」

「まぁ全部私がやったんだけどね」

「うぉい！　マジか！？」

「さぁネ！！」

「この店潰れたんだぞ！　おまえが潰したのか！？」

「さぁネ！！」

「格好いいポーズで誤魔化すな！」

「さぁネ！！」

はっきりと「そうだ」とは言ってないし、証拠はない。だから真実は闇の中……ということにしておこう。

「そうだと言えばそうなんだけど」

「うっさい！　さぁネって言っとけ！」

「さぁネ！！」

「おっけー」

## カカの天下８１２「とあるレストランに関するレポート」（後書き）

ちょいとリクエストがあったので、私としても「いいなーそれ」と思って乗っかってみました。

真実は闇の中です。ええ。

ええ闇の中ですとも！！

## カカの天下８１３「なんかきたぞ、がんばれタケダ」

やぁ、タケダだ！　今日はちょっと嬉しいニュースを聞いてくれ！　なんと、長年旅に出ていた母上が帰ってきたというのだ。しかも嬉しいニュースと一緒に！　その内容は知らないが、なんともわくわくする話ではないか！

母上……会うのはすごく久しぶりだ。浮かぶのは春のイメージ。子供だった俺を優しく包み込んでくれたあの体温、子守唄のように語り掛けてくれた柔らかな声。見つめられると安心してしまう綺麗な瞳。俺が理想とする女性像！　いや、カカ君とはだいぶ違うが、それはそれ、これはこれというか。

ともかく！　そんな母上と久々の対面。俺も息子として恥ずかしい格好は見せられん。髪をささっと撫でて身だしなみを整え、さらに父上の薄い髪もささっと撫でてやる。うん薄い、母上に釣り合ってないぞ父上。

そんなことを思いながら、父子二人で待ち合わせの場所へと向かう。気分はルンルンだ……なんだ、俺がルンルンとか言ったらキモいか！？　いいじゃないかテンション上がってるんだから！　父上なんか「ルンルン」って口に出してたぞ！　こっちのほうがキモい！

「どっちもキモい」

はっ！？　いま天の声が聞こえたような。誰だ？　誰なんだ！？　気のせいか……まぁいい。いよいよ待ち合わせ場所の公園だ。

いよいよだ、いよいよ……

ああ……

あれが……あの人が母上……

優しく聡明な母上がこちらへ向かって走ってくる……俺も走り始める……感動の再会だ……これは抱擁に違いない、お互いがこんなにも走り寄っているのだから……この歳になると恥ずかしいが、ここは母上に合わせるのが大人の判断だろう。ヘタに意地を張るとKYと呼ばれてしまう、だから俺は仕方なく、その胸に飛び込む！

「母う――」

「おおおおおおおおおおっす息子ぉぉぉぉ！！」

そしてなぜかサッカーボールのように蹴り飛ばされた。

「やっふううううううう夫ぉぉぉぉぉ！！」

そして間髪いれず父上も同じ方向へ蹴り飛ばされた。

宙に浮き、地面に叩きつけられるまでの一瞬で、同じく飛行中の父上と目があった。

そして目で会話する。「父上……母上ってこんなだっけ？」「変わってないなぁ」「マジで！？」絶望したと同時に地面へバタンキュー。

「いっやぁ悪い悪い！　感動して思わず蹴っちまった！」

な、なんだこのカツコさん二号みたいな人は！

「ちょ、ちょっといいか！？」

あまりの衝撃に痛みも忘れてガバッと起き上がる。

「おお息子、意外と丈夫になってるわね」

「ほ、本当にあなたは俺の母上なのか！？」

そのとき、母上（仮）の後から別の声が。

「おいおい、あんたどんだけ家に帰ってないんだよ」

「うあああああ似たようなのが増えたあああああ！」

「なんだ失礼なガキだな」

だだ、だって母上（超仮）とカツコさんが並んだもん！　こあいもん！

「いや、こんなヤツはどうでもいい！」

「ひでぇ」

「俺の母上は、もっとこう、優しくて」

「あたい優しいよ？　ボランティアとか参加するし。参加賞目当てだけど」

「もっと、温かくて」

「むしろ暑苦しいとよく言われる」

「俺を、柔らかく抱きしめてくれるかと……」

「甘えるな！！」

「すいません！！」

ええー。なにこれー。俺ってば母親像を美化しすぎてたのかー？

「な、なぁ父上」

同じく吹っ飛ばされたにも関わらずいつの間にか復活した父へ視線を向けてみる。

「あっはっは、微塵も変わってないなぁ」

「やっぱマジなのか！？」

ううん、俺の母親像が……ていうか何年ぶりなんだっけ……よくよく考えてみれば顔の記憶すら曖昧だった気が……あまりに接点がないから理想で記憶補完していたのか……

「ところでね、二人とも。紹介したい人がいるのよ」

母上（仮じゃないらしい）が促し、現れたのは……タマ？

「その子が、どうかしたのか？」

「この子、あんたらの娘で妹」

は？

何をとち狂ったことを言っとるのだ、この母上（やっぱ怪しい）は。

「それはめでたい！」

「めでたいのはおまえの頭だ父上！！　どんだけ素直に受け止めてるのだ！？　そんなわけなかろう」

「わりーわりー、伝えるの忘れてた」

「無いだろそんなこと、常識的に考えて！」

「あるある」

「父上！？　あんたがそんなに心広いとは知らなかったよ！」

「あるある」

「カツオは黙ってろ！」

「え、あの、あたし……名前違……」

そんなことはどうでもいい！

なんだ、なんなんだこの人は。こんな無茶苦茶ファミリーなんてカカ君の家だけだと思ってたのに、いつの間にか俺も仲間入りか！　これがカカ君と結ばれるための試練だということか！　なんとへンテコな！

「ねーねー、おにーちゃん」

「ぐはぁ！　わけのわからん展開にも関わらず心をくすぐる『おにいちゃん』という言葉、侮れぬ！」

「タマは知ってましたでしゅ。あなたがおにーちゃんだと」

「……なに？　なぜ」

「なんとなくでしゅ。うん――うん？　うん、なんとかを感じたのでしゅ」

運命か……

「そうか、うん○か」

「漏らしたのか」

「待ていそこのバケモノツインズ！　そこは普通運命だろうが！」

「いや、○って言ってるじゃん。ここには何を入れてもいいんだよ？　頭悪いなぁ息子」

「それはそうだが！　そんな表現をしたら誰がどう見てもうん○だろうが！」

「そうでしゅ、うん○でしゅ」

「ああ、タマまで！」

「にじみでていたのでしゅ」

「その表現やめて！」

「立派なうん○だったでしゅ」

「やああめえええてえええええ」

そんな大混乱の再会劇だった。

そして最後に明かされる、衝撃の事実。

「なんか話の内容が下品っぽくなってるから、ついでに言うけどさぁ」

「下品にしたのはあんただろう、母上（仮）」

「うあ、仮ってなに。あはは」

「なぜ笑える！？」

「いやね、あんたの名前はキンジロウじゃん？」

「あまり知られていないが、そうだ」

「頭の二文字をとって、タマちゃんと足すと――」

「黙れ！！」

「いやぁ、我ながら秀逸な名前の付け方だと思うんだよね」

「おかしい！　あんた絶対おかしい！！」

「その血があんたにも流れてんのさ」

「うあああああ！　タマは納得だが俺はいったいどうすればあああ」

「父親目指せばいいんでない？　多分あっちの血が濃いんだろうし」

父を見る。

「よーしお父さん頑張ってチャーハン作っちゃうぞー。あははー。タマちゃんはいっぱい食べるのかなー？」

「食べゆー！」

「可愛いやつめぇ、あっはっは」

……なんか、アレはアレで大人なんだろうかなんて思ってしまった。やたらと幸せそうだし。

「よし、キンちゃんタマちゃん！　食事の用意するよ！」

「そういう呼び方はやめろおおおおおお！」

ともあれ、俺の家庭はこれから大変そうである。

## カカの天下８１３「なんかきたぞ、がんばれタケダ」（後書き）

かつてタケダの名前をキンジロウにしたのはワケがあると書きました。

その理由がついにここで明らかに！！

すげー引っ張ったわりにはとんでもなくしょーもないオチでしたとさ、はい。タケダの家庭もこれから色々あるでしょうが、頑張ってください。

ちなみにカツコさんがああなったのは、小さかったときに若かりしタケダ母さん（そのときはお姉さん）に憧れたからであって、似たようなのが二匹できあがったのは仕方のないことだったりという裏エピソードも。

まぁタケダ母さんいなくてもカツコさんはああなった気もしますけど笑

## カカの天下８１４「ちょっと遅めの運動会」

どうも、カカです。今日はなんと運動会です。ずいぶんと遅めですが、なんだか台風のせいで遅れたそうですよん。台風すごかったらしいね。私がちょうど寝てる時間に過ぎてったからあんまり実感ないけど。

『それでは、入場行進です！』

えっほえっほ、行進行進。それにしてもなんで皆そわそわしてるんだろう。

『それでは、開会式です！』

なんで皆キョロキョロするんだろう。

『それでは、校長先生からのお言葉です』

なんで校長まで注意深く辺りを見回しながら話してるんだろう。なんで他の先生はあんなに厳しい目を光らせているんだろう。

『優勝旗の返還です』

なんで旗まで不安げに揺れているんだろう。

『選手宣誓！』

なんでタケダはあんなに挙動不審なんだろう。っていつもか。

『教頭先生から諸注意です』

なんで教頭はちらちらと私を見てるんだろう。

「――というわけで、怪我にはくれぐれも注意するように。それとカカ君にも注意するように」

『はーい』

え、もしかして皆、私が何かやると思ってソワソワしてたの？

「それでは、私からは以上」

や、教頭。そんな勢いよく後ろを振り返っても何もないってば。

『それではこれで、開会式を終わります』

ざわざわ、ざわざわ。

や、だから皆。今回は私なにもしてないよ？

「どうしたのよカカすけっ」

開会式が終わって早々に、なぜかサユカンが突進してきた。

「何もなかったじゃないっ！」

「何をせなあかんの」

「だってカカちゃん、去年言ってたじゃないのー。次はもっとでかいことしてやるってー」

遅れて登場してきたサエちゃんがそんなことを言ってきた。そっか、あんま覚えてないから当時の勢いで言ったんだろうなぁ、きっと。

「ま、事情が変わったってことで」

忘れてただけだけど、これも嘘じゃない。

「今日は普通に頑張るよ」

「えっ」

「えー」

なんで残念そうなのさ。

『それでは、女子５０Ｍ走です』

走る。もちろん一位。超楽勝。

「カカさん、一位おめでとうございます！」

「へ？　あ、ありがと」

なぜか放送委員の人に声をかけられた。

「勝利の一言をどうぞ！」

マイクを突き出された。

「え、いや別に何もないけど」

「遠慮なさらず！」

そんなに私に何かしてほしいのか、皆の者。ええい仕方あるまい、このカカ様がありがたい言葉をくれてやろう！

『じゃあ、一言だけ』

私の声がグラウンドに響く。全員が静まった。

『あんたら遅い』

ものすごく微妙な雰囲気になった。

『それでは、男子女子混合の騎馬戦です』

私はもちろん乗馬する方。突進突進突進！　ハチマキを取りまくる。

私以外の騎馬は全員潰した。ヤナツがなかなか強かった。

「か、カカさん！　勝利の一言を」

またかぁ。仕方ないなぁ。

『じゃあ一言』

再び静まるグラウンド。

『弱い』

一部でなんか泣きそうな雰囲気になった。主に男子。

そして昼食タイム。

「トメ兄、おべんと！」

「はいはい、好きなもんいっぱい入れてきたぞー」

「からあげは！？」

「もちろん入れた」

「そしてあたしが全部食った！」

「お姉コロス！」

「ふはは！　あたしは日本の騎馬全部よりつえぇぞ！」

「はいはいバカども、座ってさっさと食え。鶏のからあげはまだ全部あるから」

「へ？　じゃーあたしがさっき食ったのは何のからあげ？」

「おまえがこないだ捕ってきたワニ」

「ワニうめえええ！」

お母さんとお父さんは来れないけど、家族三人で和やかに団欒。でもそれで終わらないのが私たちの仲間うち。

「トメさんっ！　聞いてくださいよっ！」

「おやサユカちゃん。どしたの？」

「カカすけが普通なんです！　おかしなことをしないんです！　見たでしょう、今日の競技！」

「や、あんだけ競技荒らしてズバズバ一言で切り捨てるやつは充分に変だと思うが」

そんなに褒めるなよ。

「ほらほら、お母さん。こっちー」

「やーんサエったら、愛の逃避行？　わたしはどこまでも付いていくわよー。おまけつきで」

ぶもーぶもーわんわんにゃんにゃん！！

「サカイさん、おまけつきすぎ。首に紐くらいつけて連れてきなさいその動物団」

「あらあらトメさん。逃げないから平気ですよー」

お、さらにもう一人来た。

「ほんと非常識です。迷惑をかけたお詫びとして、その動物団を今日の昼食にしてくださいよ」

「あらあらサラちゃん。相変わらず残酷で人でなしねぇ」

「サカイさんも周りが見えないくらいに厚化粧するのは変わってないんですねぇ」

この二人のケンカも変わんないねぇ。

「ほらほらアサカ、ヤナツ！　こっちでご飯食べるよ！」

「げ、ちょっと気がすすまねぇな……タケダ、おまえも来い！」

「うわ！　待て、俺はいま新たな家族問題がいろいろとあってだな……」

「おにーちゃん、いくでしゅ！」

「ほら、かのちゃん。タケダ君がいますよ、一緒に行きましょう」

「う、うん……」

なんだろう、得体の知れない勢いで集まってくるこのメンバーは。

普通普通と言われることが多い今日だけど、私をどうこう言う前にあんたらが普通になってみろと言いたい。けどま、楽しいからいいんだけどね。

最後のリレー。

アンカーは私とヤナツの一騎打ちだった。

去年は色々あったけど、今年は正々堂々と勝負して、清々しい終わり方をしたと思う。

もちろん私が全部勝ったしね。

「ぜんっぜん清々しくねぇぇぇぇ！　一回ぐらい勝たせろぉぉぉぉ！」

「か、カカさん。一言……」

『ちょーきもちいー』

「くそぉぉぉぉぉぉ！」

ふ、負け犬の遠吠えが聞こえるぜ。

――そして、閉会式。

去年ほど阿呆みたいに競技に参加しまくってはいないけど、全て一位をとったので大満足だ。特に仕掛けとか小細工しなくても、実は普通に楽しいんだよねぇ運動会って。

「――私、教頭からは以上である。それでは最後に、カカ君に一言いただきたいと思う」

ま、た、か。

「ささ、カカ君」

なんか私、教頭とかと同列扱いになってない？　いいけどさ。

『えーと、じゃ最後に一言』

注目を一身に浴びて、私は言った。

『おつかれ』

『お疲れ様でしたあああああああああああああああああああ！！』

なぜか湧き上がる皆。どうやらツボを当てたらしい。

うん、楽しかったぁ！！

え、なんで特別なことを何もしなかったかって？

ふっふっふ、それはね？

もうすぐわかるよ。

## カカの天下８１４「ちょっと遅めの運動会」（後書き）

時期はずれかなーとも思ったのですが、実際知り合いの子供の学校が台風で三週間、運動会が遅れたらしいし、まぁいっかーと思って運動会書いてしまいました。

去年に比べて随分とあっさりしてますが、前のドロドロ具合を考えるとこれくらいでいっかなーと思います。運動の後は清々しくないとね！

さて、ここにきてようやく溜まっていた感想を返信できました。一ヶ月くらい返信ないままだった方もいらっしゃって、本当に申し訳なく思ってたのですが……書くのにも体力いるもんで、最近プライベートで体力消耗激しかったんで、どうかご勘弁を＾＾；

さて、もっと色々がんばるぞー！　いっそ運動会とかしたいわぁ。

## カカの天下８１５「カカの今年の誕生日、前編」（前書き）

皆さんは覚えていらしたでしょうか？　この子の誕生日を。
忘れていて、かつ２０日以内におめでとうを言えなかった人には罰ゲームが待っています。内容はあとがきで。

# カカの天下８１５「カカの今年の誕生日、前編」

こんにちは、トメです。

今日はカカの誕生日。あいつも１２歳かぁ、などとしみじみ思いつつ、皆と一緒にパーティーの準備です。会場はサカイさんち。毎回アホみたいにはっちゃけるカカの誕生日だけど、カカの希望により普通の路線で行くことになりました。

「ほんとに何の仕掛けもないんだな……」

準備をしながらもついつい確認してしまうのは、あのヘンテコトリオの悪行を知っているからである。いやまぁ、僕の周りって誰が何をしてもおかしくないんだけど。

「ま、もうすぐ大人だとかなんとか言ってたみたいだし。たまにはおとなしくやるのもいいってことか……おーいサカイさん。飾りつけ終わったよー！」

僕はそう一人で納得して、準備作業に戻るのだった。

そしていつものメンバーが集まった。誰が集まったのかは、面倒くさいけど書いてあげよう。

カカサエサユカトメテンカサラカツコサカイキリヤシュータマクララタケダゲンゾウ三兄弟ゆーた動物団だ、わかったかな？

父さんもどっかにいるかもしれない。母さんは仕事、ユカも仕事で来れなかったのだ。とはいえ人数は多め、しかし特別なイベントも何もなく、スムーズに料理が出され、速やかに乾杯のドリンクが行き渡った。

「――それではカカちゃん、お誕生日おめでとー。かんぱーい」

『乾杯！！』

サエちゃんの音頭で始まった誕生パーティー。簡単だけど段取りが決められていて、次はカカから一言、そしてプレゼント贈呈だ。あとは適当に飲んで食べて騒ぐ、という自由かつ適当な展開となっている。仮装もなし、劇もなし、漫才もなし。ここまで普通だと逆に恐くなってくる。

「それではカカちゃんから一言いただきましょー！　はい、カカちゃん」

皆の視線がカカへと集まる。

「えーと、みんな！　今日は私のためにどうもありがとう！　ところで私、皆が変な肩書きを書いた看板を背負って街を爆走する姿が見たいの！！」

「……」

沈黙。

「ところで私、皆が変な肩書きを書いた看板を背負って街を爆走する姿が見たいの！！」

繰り返された。

「え、あの、カカすけ？　今日は何もしないんじゃ」

「さっき思いついたの！！」

こいつとんでもねぇ。

「だから看板も作っておいたよ！」

「おいカカ、いい加減にしろ。てめぇ何様だ？」

「今日の主役様」

「……そうだった」

テン、納得すんな。

「あ、あのー、カカちゃん？　それはいくらなんでも無茶だよー」

「サカイさんと同じ意見を述べるのは胸クソ悪いですけど同感です。そんなの人としてやっちゃいけないことだと思います」

「皿さんならいいんじゃないですか？　人じゃなくて食器だしー」

「フォローしてあげてるのにその言い草はなんですか！　あなたこそナマケモノの一種でしょうに！」

「ねぇ、ところで私、皆が変な肩書きを書いた看板を背負って街を

爆走する姿が見たいの！！」

綺麗に三回目が入りました。

「ど、どうする姉」

「あたしに聞かれてもねぇ。ま、いんじゃない？　たかがそんくらい」

そりゃ生きてるだけで奇異の目で見られてるあんたは平気だろうけどさ。

「キリヤはどう思――あれ、キリヤ？」

「キリヤならゲンゾウさんたちとお料理しに行ったです！！」

くそ、あいつめ逃げたか。

「よくわかんないですけど、カカが喜ぶならクララ頑張ります！」

おお、クララちゃん。君はなんていい子なんだ。将来絶対騙されるから気をつけろ。

「タマもがんばるでしゅ！　ねーおにーちゃん」

「む？　俺は遠慮しておきたいと――」

「ねぇタケダ」

「なな、なんだカカ君！？」

おお、カカが自分からタケダに話しかけるのも珍しい。

「やれ」

「はい」

……あんまり珍しい光景でもなかった。

「シュー君？」

「やります！」

……こっちも珍しくない光景だ。姉相手じゃないんだからもちょっと頑張ろうよシュー君……

「ところで私、皆が変な肩書きを書いた看板を背負って街を爆走する姿が見たいの！！」

ダメ押しの四回目。

「お願いサユカン！」

「おお、ご指名だぞサユカ」

「サユカちゃん格好いいー」

「頑張れサユカ！！　いけいけサユカ！」

「え、ちょっ、皆さっき反対してたくせになんで唐突にノリノリに

なるのよっ！？」

それはね、とりあえず自分以外に矛先が向いたからだよ。

「助けてトメさんっ」

「サユカちゃん、がんば♪」

ごめん。だって僕もやりたくないもん。

「トメさんのばかあああああ！！」

「おおー、いつもならトメお兄さんの言葉なら一も二もなく頷くサユカちゃんが拒むとはー！」

よっぽどやりたくないんだぁ。

「はぁ……仕方ないねぇ」

「姉？」

「あたしが見本を見せてやる！！」

そして姉は、カカお手製の看板を背負った。形はよくある立て看板で、いくつも言葉が書けるくらいに広い。

そして注目の、姉の肩書きとは。

『化け物』

『怪物』

『もののけ王』

『星喰い』

『ポケットに入らないモンスター』

それらがでっかく書かれた看板を背中に刺し、まだまだ夕方で人通りの多い街中を爆走していくカツコさん。

その結果、街の人々の反応は……

「あーまたやってるよ、あの人」

「毎度毎度、変なこと好きだなぁ」

「見て見て、化け物とか書いてあるよ！」

「あー、やっぱりそうなんだ。噂は本当だったのね。納得」

「お、カツコちゃん今度は何したんだ？」

「今日もこの街は平和じゃのう」

戻ってきた姉の一言。

「予想以上に目立たないなコレ。ちょー平気だよ」

や、長年目立ちまくってきたあんたが何やっても大して特別でもないだけだってば。

「じゃ、サユカちゃん！」

「えええええっ！　この後にやるんですかぁっ！？　絶対嫌がらせですよぅ！！　え、本当にやるのっ？　や、いや、いやあああああああっ！」

「……ほら、トメ兄」

サユカちゃんが叫んでる間、実はコソコソと話しかけてきたカカ。えー、マジでやるのかー？　可哀想だよー。でも僕はやりたくないしなぁ。仕方ない。

「サユカちゃん！」

「トメさん、助けてっ」

「僕は、そんなサユカちゃんが見てみたい」

どんなだよって誰かツッコんでもいいぞ。

「わかりましたっ！」

どんだけだよって誰かツッコんでもいいぞ。

というわけで、サユカちゃんが走りました。

気になる背中の看板内容は……

『萌え担当』

『恋する獣（ワンコ）』

『尻で世界を征する者』

『目の保養』

気になる街人の反応は……

「なんだアレ。萌え担当……メイド喫茶か何かの宣伝か？」

「そのわりには普通の格好だぞ」

「萌え萌えな格好が見たければ金を払えということか？　けしからん！　いくらだ！」

「でも恋してるんだよな。好きな相手いるんだろ」

「そうか……頑張ってほしいもんだ。きっとその美しい愛が、汚れた俺たちにとって目の保養になるのサ！！」

「誰だおまえ」

「ひそひそ……ひそひそ……」

戻ってきたサユカちゃんの一言。

「もうお嫁に行けないいいいいいいいっ！！」

どんまいサユカちゃん。ってヘタに言ったら怒られるかな。

「大丈夫だよー、サユカちゃん」

「うぅ……なによぅサエすけ。わたしの人生終わりだわ……街の皆さんに『萌え担当』とか『お尻』とか『ワンコ』とか知れ渡ってしまったわ……最後の『目の保養』の意味がよくわかんないけど、きっと恥ずかしい意味なんだわ……っ」

確かに恥ずかしい。

「ううん、それは看板の表だけのことでしょー？」

「え……っ」

「実は私、こっそり看板の裏に書き加えておいたのー。おっきく、これを」

看板を裏返す。

そこにはこう書いてあった。

『〇〇町〇〇番地　笠原留の嫁です、どうぞよろしく』

「待てえええええええ！！　なんで事細かに住所まで書かれてるんだぁ！？」

「これならお嫁にいけるからいいでしょー、サユカちゃん？」

「うん」

「うんじゃないしっ！！　じゃああれか！？　さっきの街人の反応にあった『ひそひそ……』って僕のこと言ってたのか、もしかして！！」

「トメお兄さん、天罰ですよー」

ぐ、さすがは腹黒に定評のあるサエちゃん。僕の『サユカちゃんを身代わりにしちゃえ』思考を読んでいたか。

「さ、次はねぇ！！」

「か、カカ！　もうやめないか！？」

「ダメ！　もっとやるの！！」

そんなわけで、誕生日＝カカの天下になってしまった本日。まだ受難は続くようです。

うぅ、素直にカカにおめでとうと言いたくなくなってきた。

## カカの天下８１５「カカの今年の誕生日、前編」（後書き）

そんなわけで罰ゲーム！

カカにおめでとうを言えなかった、でも言いたい！　そんな人は感想欄におもしろい祝いの言葉を書きなさい！　そして本編を読んだらわかると思いますが……街を爆走する彼女らが背負う看板の内容を募集！

早い話が先のカカラジ企画の一端です。なにかある人はカカへの誕生日プレゼントと思って投稿してくださると嬉しいです。

もちろん個別にプレゼントだけ渡したい方も書いてくださって結構です＾＾

あえてほとんど伏線を張らなかったけど、誰か「今日ってカカの誕生日ですよね！？」って言ってくれるのを期待してたんだけどなぁ……残念。

# カカの天下816「カカの今年の誕生日、後編」

こんにちは……トメです。今日はカカの誕生日というめでたい日だというのに、なんとも阿呆な展開となっています。あれ、この日って毎年感動するような話になってなかったっけ？　なんで今回こんなにはっちゃけてんだ。

「いっせーのーせ！」

皆一斉に引いた棒くじ。棒先が赤かったら次の犠牲者だ。

「うわ、ぼ、僕ですか……」

そしてソレを引いたのはザ・不幸と名高いシュー君。

「やったねシュー！　いつも日陰者の君に見せ場ができたよ！」

「お姉様……いやあの、これをやったら一層日陰の中に行ってしまいそうな気がするんですが……」

「いいからやれ」

「はい喜んで」

喜んじゃったよ。

シュー君が看板を背負って街中を爆走します。

「ううう……はやく終わってはやく終わってよぉ……うぅ……僕、足遅いよぉ……」

いじめられっ子のごとく走るその背中に輝く文字は――

『足拭きマット』

『ボロ雑巾』

『とってもフルーティ』

酷い。そして意味がわからない。

街人の反応は……

「あらまぁ、今度は何かしら」

「とってもフルーティーな足拭きボロ雑巾ですって」

「あの人がそうなの？」

「なんて可哀想……」

「でも食べたらフルーティーらしいぜ。奥さんお一つどうです？」

「んー、いらない♪」

戻ってきたシュー君の一言。

「……僕……もう外に出れない……」

そして姉の一言。

「シュー、よくやった」

「え、あ、はい！　えへへ」

シュー君は復活した。ある意味、誰よりも逞しい気がするこの人。

「さ、次いくよー」

ちなみにカカは二回目以降、姉の背に乗って爆走する人をこっそり追いかけて見物している。僕らはカカからその様子を聞いているというわけだ。なんて性悪な。これで他人事なら面白いだろうけど、次は自分かと思うとあまり笑えない。

続いて当たり（ハズレ）くじを引いたのは……

「ぬはぁ！！　俺かぁ！？」

おそらくこんなイベントのために呼ばれたであろうタケダだった。さすがはアレなツートップ。こういうイベントは逃さないな。

「皆が走ってる間に大きい看板を作っておいたよ」

カカ……おまえこういうときは本当に働き者だな。

タケダが看板を背負って街中を爆走します。

「カカ君お手製の看板で、カカ君の頼み。男としては好きな女性の願いを叶えてこそ本懐。しかし、しかしこの内容は……」

気になる看板の中身は。

『ザ・残念』

『なんか残念』

『ホント残念』

『とことん残念』

『もうオワタ』

もうとことん残念の上に終わったらしい。可哀想だ。

街人の反応は……

「あらあら……可哀想」

「さっきの人と同じくらい、なんか可哀想」

「よくわからないけどホント可哀想」

「いやもうとことん可哀想」

「人生オワタ」

戻ってきたタケダの一言。

「俺は幸せなんだあああああ！！　好きな女のために死ねて本望なんだあああ！　うおおおおお！！」

タケダの中では既に自分は死んだらしい。

「タケダ君、そう気を落とさないでー」

「さ、サエ君……」

「またもや私、看板の裏に色々と書き込んでたんだけどー」

まさかサエちゃん。あんなに心がボロボロになったタケダにトドメを刺すつもりか！？

「ほら、見てー」

「こ、これは……」

『がんばれ！』

『すごいがんばれ！』

『とにかくがんばれ！』

『がんばれって言ってごめんなさい』

『やっぱオワタ』

「結局終わってるじゃないかあああああああああ！！」

やっぱトドメだ。タケダ死亡（心情的に）。

「さてさて、どんどんいくよー」

そんな些細なことは意にも介さず続けようとする鬼妹。ま、タケダがああなるのはいつものことだし別にいいか。

「あ、ねぇねぇサエ、見てー。ゆーたが引いたわよー」

「すごーい。私たちの底辺が揃って引いたんだねー」

「ほんとねー。身の程を知ってるわねー」

この親子こあい。

「ゆーた、か」

主催者カカはその屈強な男の目を見た。

「ゆーた、やってくれる？」

「別によだれが出るほど楽しんでしまっても構わんのだろう？」

「やっぱいいや」

世間の平和を考えて却下された。彼の大きい背中は少し寂しそうだった。

「はい次のくじ！」

続いて赤いのを引いたのは……

「あ」

「あ」

「おお」

誰もが驚いた。たまたま近くに居て、なんとなく参加した賢い猫……総理大臣が当たりを引いたからだ。

カカは猫の目を見た。

「総理……やってくれるよね？」

言葉が通じない。

「サエちゃん通訳」

「大臣、おねがーい」

「にゃあ！！」

通じた！？

さ、サカイ動物団が看板を背負って街中を爆走します。

「ニャアキシャー！　モーワンブー！　メエエエ！！」

そして気になる看板は！

総理大臣、『弐矢亜』

官房長官、『気射唖』

ラスカル、『腕』

日本経済、『猛』

豚野郎、『武有』

財政破綻と経営困難、『滅衛』

えーと、なんか暴走族みたいですけどニャアとかキシャアとかワンとかモウとかブウとかメエとか読みます。

マントザル、『奇鬼異』

ってマントザルいたの！？　いつの間に！？　キキイって字が恐いし！！　うわーあとでサカイさんを問い詰めよう！

ともかくそんなやつらが爆走して、街人の反応は……

『な、なんだあれは！』

『警察を！　いや保健所を！　いっそ軍隊をよべえええ！』

になるかと思ったら……

「またサカイさんとこの子たちかい」

「アレらの散歩かぁ、いつもより風変わりだなぁ」

「さっきから何かイベントでもしてるのよ、きっと。あそこの人たちは本当にお祭りごとが好きねぇ」

「あはは、なにあのサル。空飛んでるー」

慣れって恐ろしい……や、慣れの一言じゃ済ませられないだろ。どんだけ心広いんだこの街の人々。

ともかくそんな動物団が戻ってきて、サカイさんの一言。

「お座りー」

おお、みんな座った！！

「かえれー」

飼育小屋に帰っていった！！　なに今の！　『おすわり』とか『まて』の定番命令じゃなくて普通に日本語言っただけだよな！？

「さ、次いくよん」

そんな不思議ワールドを当然のごとく受け入れるカカさん。子供

って夢があっていいよな……うん、夢だ。今のは夢だということにしておこう。深くツッコんではいけない。

「次は……サラさんだ」

ここで事件が起こった。

先に言ってしまえば、看板の内容が十八禁だったからだ！

そこには『千変万化の皿』や『楽園の素敵な巫女』など、普通の肩書きもあったが……『乳神様』や『揺れる山脈』などという、なんかヤヴァイ単語もあり、終いには――とても書けない！

とにかくちょっとイヤンな展開だったのでカット。

「私なんか割れてしまえばいいのよぉぉぉぉ！！」

顔を真っ赤にしながら酒に走るサラさんを尻目に、またもや引かれるくじ。

「お、次はキリヤンだ」

「はっはっは！　恥ずかしながらこの私、精一杯走らせていただきます！」

こいつも楽しんでやりそうだなぁ。こういう性格が羨ましい。や、看板背負うのは微塵も羨ましくないが。

キリヤが看板を背負って街中を爆走します。

「はっはっはっは！」

看板の内容は……

『早くユカとイヤンバカンしたい』

それだけだった。街人の反応は……

「やぁねぇバカップルって」

それだけだった。さすがあっさり爽やか味がウリのキリヤ。看板の内容はくどいのになぜか似合い、すっきりとした後味だ。

戻ってきたキリヤは言った。

「さて、ユカさんに電話でもしましょうか」

はいはいラブラブしてろーと色男をどかし、またもやくじ引きだ。いい加減終わりにしてほしい。まさか僕が当たるまでやるんじゃないだろうな。

「あ、テンカ先生が当たったー」

嬉しそうなサエちゃん。カカも若干楽しそうだ。日ごろの恨みでも溜まってるのかもしれない。

「やだ」

しかしテンはきっぱりと言った。

「なにぃ！　言うことを聞けぇ！　今日の私は主役様だぞ！」

いきりたつカカ。しかし。

「オレはオレ様だ！！」

げんこつ一発。

「ご、ごめんなさい……しなくていいです……」

つえぇ。さすが後ろに用意されてた看板に『漢の中の漢』とか書かれるだけはある。

ちなみに、さらにその後ろにはすでに走り終えたサユカちゃんたちが座り、お料理をもぐもぐしながら高みの見物としゃれ込んでいる。くそぅ、僕もあそこにいきたい。

「いっせーのーせ！」

そして飽きることなく引かれたくじ。

「タマがあたったでしゅ！！」

元気よく言ったのはタマちゃん当人！　嬉しそうだけど、今からやること理解してるのかな？

「うーん、この子一人で看板を持つのはきつくないですかー？」

「子供一人に街中を走らせるのも危ないよー」

「サエ、私たちが保護者としてついていきましょー」

「そだねー」

「クララもいくです！」

そんな優しい雰囲気の中、カカが慈悲のない言葉をぶつける。

「じゃあ皆、看板背負ってね」

おまえには血も涙もないのか。

「いいですよー」

「いいよー」

「はい！！」

だが、それを予想していたかのようなサカイさんたちの反応。

四人はプチ家族のように仲良く看板を背負い、和やかな雰囲気のまま街へ繰り出した。

「……ん？」

気づいた。

「……んん？」

なにか、重大なことに気がついたような。

自分の周りを見る。カカしかいない。走り終えた人間はテーブルについてもぐもぐしてるし、サカイさんたちは街へ行っちゃったし。え、これってもしかして――

「じゃ最後はトメ兄決定だね」

「ハメられたあああああああああああああ！！」

あんの腹黒親子！　自分たちが一人で走るのが嫌だからって子供をうまいことダシに使いやがった！　しかも見ろ街人の反応を！

「あらあら、また変なのがきたわよ」

「ああ、子供の遊びに付き合ってあげてるんだろ」

「優しいわねぇ。楽しそうだし」

なんて温かな視線！　そう、一人ではなく複数で、しかも子供と一緒に歩くということでヘンテコな看板の存在を薄れさせたのだ！　なんという策士！

タマちゃんの看板には『ちびっこギャング』『無邪気な痛恨の一撃』クララちゃんの看板には『年齢？　なにそれおいしいの？』『世界一しょっくです！！』とか書いてあるにも関わらず、純粋無垢な子供の笑顔で街人は全部スルー！

サエちゃんの看板には。

『腹黒天使』

『あの笑顔には勝てない』

『笠原香加のお嫁さん』

『ものすっごい可愛いっしょ？』

『えっへん』

『時々白』

『小枝……こ……こわざ？（某ＣＭ）』

とか妙ちくりんなこと書いてあるのに、どっからどうみても子供につきあってあげてるお姉さん役！

サカイさんは保護者！　っていうか看板背負ってすらいないし！　あれいいのか！　詐欺だろ！

「サカイさん、腕力ないから看板持てないんだって」

「そんなもん根性で持てよ！！」

「さ、トメ兄……」

「や、や、やあああああああああああああ！！」

僕が看板を背負い、泣きながら街中を爆走します。

街の人たちの反応は……

「あらまぁ」

あらまぁ、なんだよ!?

「おやまぁ」

おやまぁなんだよ!?

「ぷ」

笑うなあああ!!

「うげろ」

いっそ笑ってくれえええええ!!

看板に並ぶ恥辱の言葉の数々。

『トメぽん』

『閃光のなんでやねん』

『あのカカの兄』

『便利だけど最後はむくわれない』

『妹募集中、小学生以下』

『さっきの子が言ってた留が僕です』

『つまり女子小学生が嫁です』

『てへへ』

『ふへへへへへへへへ』

『耳が好き』

『うふ』

なんで僕だけこんなに多いんだぁぁぁぁぁ！！

「私のためにここまでしてくれる皆に囲まれて、私は本当に幸せだよ！」

「最後だけ良い感じにまとめんじゃねえええええええ！！」

そんなカカの誕生日。

いろんな人がものっそい恥かいたけど、カカが喜んでくれたので「ま、いいか」と思えてしまうのでしたとさ。

めでたしめでたし。

まぁ僕は思えんけどな。

思えるわけねーよ！！

## カカの天下８１６「カカの今年の誕生日、後編」（後書き）

はい、そんなわけで誕生日でした。よかったね、トメ（ぇ
お次はもらったプレゼントの話になると思います。

沢山の肩書きをプレゼントしてくださった方々、本当にありがとうございます＾＾　どの肩書きが誰の案かは載せません、面倒なので（ぉぃ

なので、嬉しかったり喜んじゃったりした人は感想欄ででも自慢してください笑

## カカの天下８１７「あなたを理解したつもり」

どうも、トメです……はぁ……

あの盛り上がりを見せたカカの誕生日会ですが、思い出したくないので回想も後日談もしません。とにかく次の日……え、そのときのことが聞きたい？　うるさい、他の人に聞け。僕は知らん。あの日はきっと僕は寝てたんだ、夢見が悪かったんだ、超悪夢だったんだ、だから何もしてないし何も知らないんだ。むがー！！

さて、むがむがしたところで今日の話だ。カカがもらった誕生日プレゼントを整理していたので、なんとなく僕も手伝ってみることにした。

「……なんだコレ」

いきなり目についたのは、『変』と書かれた兜。

「なんか知らない一般の人からもらった」

「人気者だなおまえ」

「本当は『愛』とか『恋』とか書いてあるらしいんだけど、珍しい誤植を見つけたからってくれたの」

知らない一般の方にしては的を得たプレゼントだ。

「あとこれは……高級石鹸セットだって」

「おお、普通に使おう」

「高級おにぎりセットだって」

「うめぇ」

「うめぇ」

ほんとうめぇ。

「高級原始人セットだって」

「アウストラロピテクス、ネアンデルタール、北京原人、クロマニヨンと各種揃っております、って書いてあるな」

「私、ネアンデルタールね！！」

「いや、おまえは北京原人だろう」

「えー、ネアンデルタールだって！」

「それはどちらかというとサエちゃんだと思うぞ」

「むぅ……とりあえずアウストラロピテクスはお姉だね」

「それは同意」

多分誰もが同意。

「うわ、スポンジのクリームおひたしがある」

「またか、あの子も毎年頑張るなー」

「や、なんか今年は二つあるんだけど」

「……誰からきた」

「なんか知らない人から」

おまえ知らない人に大人気だな。

「あとこれは、サエちゃんから」

「……鯖のブローチ？」

日々スーパーを行き来する僕が見るんだから間違いない。このブローチは木彫りの鯖だった。

「これはサユカンから」

「……鮪のネックレス」

器用にビーズで作られた鮪だった。

「これはサラさんから」

「……秋刀魚」

本物だ、美味そー。いや、すぐに冷蔵庫いれなきゃ！

「これはテンカ先生から」

「鯨のぬいぐるみか」

あいつからのプレゼントとは思えない可愛らしい人形じゃないか。
一応教師らしく子供が好きそうなものをわかってるということか。

「えーと、これはキリヤンから」

「おぉこれは秋鮭のムニエル、ってだからなんですぐ食べるか冷蔵庫いれるかしないんだ！！」

つーか料理を箱に詰めて送るとか何考えてんだあいつは。誕生会中に食わせろよ。

「これはタマちゃんとクララちゃんから」

「……魚拓？」

え……なんで？

どうしよう、ツッコミ方がわからん。

「これはタケダから」

「え、魚拓？　ネタがかぶってるし」

ほんと残念なやつだなタケダ。

「これはシュー君から」

「おお、鰤の刺身！」

シュー君のくせになかなかいいものを……いやだからわざわざプレゼント箱にいれないでもっとわかりやすくしてくれれば最初から冷蔵庫に……

「これはサカイさんとゆーたから」

「さ、鮫革の財布」

また小学生にえらいもんくれたな。しかしこの革の鮫、まさかゆーたさんが捕ってきたとか……ないよな、姉じゃあるまいし。

「で、これはお姉から」

「……鰐」

また捕ってきたのか。前に食ったから揚げ美味かったのかな？

「さてカカ。そろそろ聞いていいか？」

「なんでみんな魚ばっかなんだろう」

あれ先に言われたし。

「鰐は魚じゃないけどな」

「や、漢字に『魚』入ってるじゃん」

おまえよく知ってるな。

「偶然かな？」

「や、おまえのことだ。きっと理由があるはずだ」

「や、でも私のことだからこそ変な偶然が重なっちゃったのかもしれないよ」

この妹、最近はかなり自身の理解度が高まっている。成長したな。

「……あ」

「どうした、心当たりがあったか？」

「確かこのごろ、マイブームになってた言葉があるんだけど」

「ほう」

「誕生日プレゼントについて聞かれたとき……」

『カカちゃん、なにかほしいものあるー？』

『ぎょっ！　何かくれるの？』

『うん』

『うおー！！』

「こんな感じで『ぎょ』と『うお』って会話を繰り返したような」

「……まさか、それで皆が魚がほしいと勘違いしたとか？」

「まさかぁ」

「まさかなぁ」

そんな皆さんに聞いてみました。

『え、カカちゃんのことだからそういう意味かと』

深読みしすぎ。

「私ならありうる！！」

おまえはわかりにくすぎ。

## カカの天下８１７「あなたを理解したつもり」（後書き）

え、こんな誕生日プレゼントでいいのかって？

私は魚が大好きです。私から見ればカカが羨ましくてしょうがない。

だからいいんです。

## カカの天下８１８「うわさのトメさん」

こんにちは、トメです。

最近寒くなってきましたね、そろそろコタツ出さなきゃなぁと思いつつ、まだそこまでじゃないしーなんて面倒臭がっている僕は今、畳の上でゴロゴロしながら雑誌を読んでいます。

「ねートメ兄」

「んー？」

同じく近くでゴロゴロしながら漫画を読んでいるカカが話しかけてきた。

「こないださ」

「おう」

「私が大人がどうとか言ってたときにさ」

「うん」

「トメ兄、私をずーっと監視する、みたいなことを言ってたよね？」

「あー」

そんなことも言ったなぁ。しかしこの雑誌に載ってるパーカーいいなぁ。

「それを学校に言いふらしたら流行った」

「へー」

色も好みだし、値段もお手ごろ。買っちゃおうかなぁこのパーカー……ってぇ。

「カカさん？　いまなんておっしゃいました？　もう一度お願いします」

「それを学校に言いふらしたら流行った」

「綺麗に言い直してくれてありがとう！　なんてことしやがるこのパカ！！」

「ぱか？」

しまった。パーカー見てたからつい。

「や、そんなことはどうでもいい！　ただでさえおまえの誕生日で色々と噂がたってしまった僕になんて追い討ちをかけるんだ！」

「なにさ、流行ってるっていうのはいい意味で言ったんだよ？」

「……例えばどんな風に流行ってるんだよ」

「んとねヤナツがサエちゃんに向かって『俺に君をずっと監視させてくれ！！』って告白したり」

「……サエちゃんの返事は？」

「『しねー』って」

すごい直球だ。剛速球だ。や、監視とか言われたら当然かもしれんが。

「つまりそんな風に流行ってるんだよ」

「ものすごい物騒なモノを流行らせてしまった気がする」

「ほんとだよ。どうしてくれるんだよ」

「流行らせたのおまえだろうが！」

思わず謝りそうになってしまった。

「あと私も言われたよ」

「何を」

「ずっと監視してやるって宣言を」

「誰に！？」

「出素夜さん」

「誰ですよ！？　じゃなくて誰デスカ！」

「ですよですよ」

「そうですかそうですか」

なんでもいいや。

「んで、おまえはなんて答えたんだ？」

「デスヨ！！」

「……返事は？」

「デスヨ！！」

「その人、地球人じゃないのか？」

デスヨとしか喋れないんだろ。

「とりあえず肩を落として帰っていったよ」

「意思疎通できたんだ。やっぱ宇宙人か」

む？　つまりカカも宇宙人ということになってしまうか。まぁ似たようなものだからいいや。

「そしてその流行は街へまで広まった」

「マジか」

「パカみたいだよね」

「蒸し返すな」

ちょっと恥ずかしいだろがパカ。

「とにかく。勇気を出せなかった各地の男子たちが、その言葉を支えに告白してるんだよ」

「絶対にそれ言うほうが勇気いるだろ」

「そして皆、逮捕されていく」

「当然だ」

「なんてことしてくれたんだ！！」

「おまえがな」

「でも成功例もある」

「ほほう」

「あの有名なジョーイがマイケルに告白したんだよ」

なぜか聞いたことはあるが、どんな人だったか思い出せない。もしかして知らないのかも？

「そのときの会話はこうだよ」

『ヘィ、聞いてくれよマイケル！』

『オゥ、どうしたんだいジョーイ？』

『実はね、僕は一生君を監視しようと思うんＤＡ！」

『ホワッツ！？』

『オゥイエ！』

『ホワイ！？　ナッゼー！？　ドシテー！』

『なぜなら君のことが好きだからサ、アイラビュー』

『ＨＡＨＡＨＡ！』

『ＨＡＨＡＨＡ！』

「めでたしめでたし」

「え、ちょっと待て。それって結局どうなったんだ！？」

「とにかくそんな風に流行ってるんだよ。どうしてくれる」

「おまえがどうにかしろよ」

「……じゃあ、私が新たな流行を作るしかないか」

「それだ。何かいい告白言葉を考えろ」

カカはしばらく黙考した後、こう言った。

「パカ！！」

「しつけーよパカ！」

流行って難しいね。

## カカの天下８１８「うわさのトメさん」（後書き）

さぁ皆さんも告白のときには「おまえを一生監視してやる！」と言いましょう。

私は責任を負いません。

パカ！！

## カカの天下819「いったい何だったんだ→答え、誕生日」

こんにちは、カカです。まず、これは相談があってサユカンを呼び出したときの話です。

「何よ、改まって」

「サユカンってエロいよね」

「帰る」

「ちょっと待って！」

サユカンを前にして思わず言っちゃっただけだって！

「まったくもう、何よっ！」

「サユカンも知ってるでしょ？　もうすぐサエちゃんの……」

「誕生日ねっ」

「違うよ、私と二人の結婚記念日だよ」

「帰っていい？」

「なんで帰るの！」

「見たい番組があるのよぅ」

「そんな番組よりも面白い話を私がしてあげるから！」

「へぇ、じゃお願いしようかしら」

「おっけー」

『むかーしむかし、あるところに素っ裸のサユカンとトメが幸せに暮らしておりました』

「終わり」

「ぶっ飛ばすわよっ！？」

「え、面白くなかった？」

「面白いとかいう以前の問題よ！」

「わかったよ。じゃあこんな話で」

『むかーしむかし、あるところに素っ裸の教頭がいました』

「終わり」

「ただの変態じゃないの！！」

「はいはい、わがままだなぁ。じゃこれで」

『むかーしむかし、みんな素っ裸でした』

「終わり」

「ただの事実じゃないのっ！！」

あ、服が無い時代はそれが当然か。

「じゃあお礼として私の話に付き合って」

「聞いてないわね……はいはい、わかったわよ。とにかくサエすけを喜ばせようっていうんでしょ？」

「そそ」

「そういうことなら協力するのもやぶさかではないけど」

「じゃあ最初から協力してよ」

「結婚って聞いて萎えたのよ」

「え……サユカン、もしかして私のこと好きなの？　だから嫉妬して」

「んなわけないでしょ！　バカらしくてよっ！」

「私の結婚履歴をバカにするなぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「ぅえぇ！？　は、はい。すいませんっ」

ふぅ、思わず本気で怒鳴ってしまった。

「とにかく何をしたらいいかな」

「サエすけの喜ぶことでしょ？　何か面白い格好でもすればいいんじゃないかしら。しょっちゅうわたしを着せ替えて遊んでるから、好きなんでしょそういうの」

や、私も好きだし、どちらかというとサユカンで遊ぶこと自体が好きなんだと思うけど。

「よし、私サエちゃんのためなら一肌でも二肌でも脱ぐよ」

「脱ぐんじゃなくて着る話をしてるのよ」

「あ、そっか」

「わたし上手いこと言ったわよねっ」

「え、うん。そうかも」

「よし、これ今度トメさんの前で使おーっと。ウケるかなぁ」

恋する乙女は頑張るねぇ。

「それで、どんな格好すればいいかな」

「もちろんエロい格好よっ」

サユカンが私に今までの復讐をしようとしている気がする。

「でも私、サユカンみたいに胸とかお尻とかボリュームないよ？」

「それがイイっていう人が増えてるらしいわよ、こないだニュースでやってたわ。社会問題なんだって」

そうなのか、それはタイヘンだ。いやヘンタイか。うん、私も上手いこと言った気がする。

「ん、まぁサエちゃんが喜ぶならなんでもやるけど」

「そう、それが一番大事よ！　さぁどんな格好をしましょうか、意外性を突いてメイドとかいいかも。サンタにはまだ早いし……でもわたしが前に着た衣装とかもあるのよね」

やっぱりサユカンは私に復讐しようとしている。

まぁいいや。それでサエちゃんが喜んでくれるなら！

「あ、でもハロウィンとかしてないわよねっ」

「ふむふむ」

「夏祭りがいまいち盛り上がらなかったから、浴衣とか」

「ふむふむ」

「あっ！　あのサカイさんの娘だし、ニーソックスとか好きなんじゃないかしらっ」

「ふむふむ」

「黒かしましまがイイ！　ってこの間サカイさんが語ってたわ」

「ふむふむ」

当日。

「カカすけ……君……っ！」

「とりあえず全部着てみた」

必要な部分だけを切り取って装備したこの衣装。右腕にメイド、左腕に浴衣、右足に黒ニーハイ、左足にしましまニーソ、胴体はサユカンおさがりのエロサンタ服（サイズ調整済み）で、上はハロウィンのかぼちゃをすっぽりと被った。

「衣装を切ったのっ！？　もったいないわよっ！！」

「サエちゃんのためならこれくらい容易い。どう？　かぼちゃ仮面って感じ？」

「妖怪かぼちゃ女って感じよ」

妖怪上等！　クララちゃんの仲間みたいなもんだし、サエちゃんにはウケるはず。

「さて、早速サエちゃんのところへ……」

「大変だ、カカ！！」

「あれ、どしたのトメ兄」

「その格好にツッコむのは置いといて……いまサカイさんから連絡があったんだが」

『さっき、サエから電話があったんです。いいえ、正確には電話させられたんでしょう。サエは言いました、「さらわれる」と！』

――サエちゃんが、さらわれた？

この誕生日というめでたい日に？

「……へぇ」

舞い上がっていた熱が冷めていく。そして代わりに、どす黒い炎が私の中で生まれた。

すぐに動いたのはもちろんサカイさん。独自の情報網を最大限に使い、犯人の居場所特定を急ぐ。

「どう？　ゆーた」

「ひっかかりません！」

「く……こうなったら使うしかないわね、サエちゃんファンクラブ出動よー！　会長たる私の名の元に！！」

極秘に訓練されていた特殊部隊、サエちゃんＦＣは見事な働きを見せ、見事に犯人の根城を割り出した。

待機していた警察が動く。しかしシュー君からの情報によると動きが遅く、即出動というわけにはいかないようだ。

「私、待ってられない」

「お、おいカカ」

「お姉、いる？」

シュバ！

「ここに」

「行くよ」

「承知」

「おい待て！　無茶だ！　あとせめて着替えてから……おい！」

「ま、待ってよ、わたしも行くわっ」

お姉、トメ兄、サユカンを引き連れて犯人へと突撃する。もちろん私は着替えていない。

「おう、待ちな」

「誰の許しがあってここを通る気だ？」

しかし道中で立ちはだかる謎の男たち。なんだかヤクザの下っ端集団のようだ。

「お姉」

「応」

一分もかからずケリはついた。

走る、走る、走る。

進んでしばらく、またもや私たちの行く先を塞ぐ邪魔者たちが現れた。

「誰？　なんか用？」

「……」

問いかけても返事をせず、ただギラギラした目で凶器と狂気を見せびらかす老若男女。

「こりゃさすがにあたしでも手がかかりそうだね」

「おい姉、大丈夫か？」

「ちょっと時間かかりそうだから、先に行って。トメ、カカちゃんとサユカちゃんを守ってあげなよ」

「……さっさと逃げ帰りたいところだが、ここまで来たら仕方ない」

「おし、行きな」

戦が始まった。私たちはその戦場を駆け抜ける。お姉が守ってくれるから左右は気にする必要なし。

やがて背中に戦闘音が聞こえなくなった頃……

「うへへえへ、なんか可愛らしい子がきたぞぉ」

「男はいらねぇが、子供二人は上玉だな」

今度は変態集団が現れた。

「うえへへえへ、ゴーゴーゴー！！」

しかもいきなり襲い掛かってきた！

「く、僕が止める！　おまえらは早く逃げろ！！」

「トメ兄、でも！」

「あいつらにとってはおまえらが大好物だ！　だから居てもらっちゃ困る、早くいけぇぇぇ！」

「く……行くよサユカン！」

「いやぁっ！　トメさんが、トメさんがイケナイ道にいいいいいっ！」

「大丈夫！　敵は多分そういう趣味じゃないから！」

一人、また一人と仲間を失っていきながらも進んでいくその道に――

「ふはははははははははは！！　我こそはかぼちゃ仮面！」

私と同じような格好をした阿呆が現れた！

「仕方ない……サユカン、待ってて。あいつは私が倒す！」

「カカすけっ！」

先手必勝、予備動作なしで駆け出し、速度は一息で最高速へ。銃弾のように突進する。

「ふはは！　かぼちゃパーンチ」

間抜けなネーミングのくせに鋭い拳が私の側頭部を狙ってくる。

だから私はそのまま当てさせた。貫かれ、脳漿が飛び散る――無論、かぼちゃの。

接敵直前でソレを脱いだ私は相手の左方に回りこみ、死角から首筋を狙って飛び回し蹴りを放った。実はあのハロウィンかぼちゃ、被ると視界が極端に狭まる――当たり前？　うるさい。ともかく先にそれを脱いだ時点で私の勝ちは決まっていたのだ。

そう、思っていた。

「止められた！？」

見えていないはずだった、しかし掴まれた私の足、まずい、このまま振り回されると――

「ふっ！」

掴まれた足を軸にして身体を捻り、無理矢理に逆の足で蹴りをもう一度！

「あぅ！」

相手の頭部をかぼちゃごとぶっ飛ばすつもりだった、でも壊れたのは私の脚……この人、かぼちゃに金属を仕込んでいる！　バカだ！！

「うぅ……くそぅ」

身動きが取れなくなった……もう終わり？　そう思った、そのとき！

「えーいっ！！」

なんとサユカンが近くに落ちていたコンクリートの瓦礫をかぼちゃ仮面の股間に投げつけた！！

クリーンヒット！　かぼちゃ仮面は死んでしまった。

「はぁ……はぁ……助かったよサユカン」

「こ、恐かったよぅ……！　も、もうっ！　無茶しちゃダメでしょカカすけ！」

「ごめん……でもこの人、本当に死んじゃったんじゃ」

「カカすけが殺されるよりマシよっ！！」

「サユカン……ありがと……」

「さ、行くわよ。サエすけを助けにっ！」

サユカンは強いな。私も負けてられない！

――そして私たちはたどり着いた。

サエちゃんの前に！

「ううぅー！　やーめーてー！」

「えへへ、えへへ、やわらかーい」

「やーん！　そこはダメー」

「ええのんかー、ここがええのんかー！」

目の前に広がる、衝撃的な光景。

「ああ、カカちゃん！　助けに来てくれたんだねー！」

「なにぃー！？」

状況を簡単に説明しよう。

うん。

サエちゃんが、前に一緒に住んでたおばさんに触られまくっていた。

「助けてー！　さわられるー！！」

さわられる、さらわれる。

よくある間違いでした。

後々、全てを把握したらしいサカイさんに話を聞いてみると。

「……え？　いやあの、サカイさん情報網でも引っかからないほど大事件だったんじゃ？」

「いやー、超個人の犯行でしかも身内のじゃれあいだけだとひっかかりませんよー。サエちゃんファンクラブはご近所さんですから引っかかったみたいですー」

「途中で出てきたチンピラは？」

「たまたまあそこを縄張りにしてたみたいですー」

後から警察さんが一掃したらしい。

「途中で出てきた犯罪者集団は？」

「たまたまあそこを溜まり場にしてたみたいですー」

全部お姉が片付けたらしい。

「途中で出てきた変態は？」

「たまたまあそこでオフ会してたみたいですー」

トメ兄は心に深い傷を負ったらしい。

「途中で出てきたかぼちゃ仮面は？」

「たまたま似たような格好をした子が現れて嬉しくなっちゃったらしいですー」

入院らしい。

「……サエちゃんは？」

「おもしろい話を聞かせてもらったーと喜んでますー」

「なら、まぁ、いっか」

なんとも人騒がせな誕生日事件でしたとさ。

めでたしめでたし。

## カカの天下８１９「いったい何だったんだ→答え、誕生日」（後書き）

……我ながら「いったい何だったんだ」と言いたくなるものを書いてしまった。

たまにはこういう寒気がするほど定番な展開を滅茶苦茶に書くのもいいもんですね、なんて思うのは私だけでしょうか笑　なんか遊んだーって感じがいっぱいです。

誕生日なんだかハロウィンなんだかお祭りなんだか事件なんだかよーわからん日でしたが、サエちゃんは喜んでくれたのでよしとしましょう。

というわけで二人とも、誕生日おめでとう&結婚記念日おめでとう！

# カカの天下８２０「はこ」

こんにちは、トメです。今日も今日とて仕事から帰宅しました。やれやれ疲れました。今日はなにやら仕事の先輩であるおっさんが大変でした。なぜかモヒカンにしてきたのです。白髪のモヒカンなんて初めて見ました。あの歳になって弾けたのでしょうか、フィーバーなのでしょうか、散る直前な一輪の花なのでしょうか。どうでもいいです。

そんなおっさん――じゃなくて、そんな僕ですが（どんなかわかんないけど）ともかく家に帰ってきたのです。

「ただいま」

すると出迎えてくれたのは一つのダンボール箱。玄関から居間への道を塞ぐかのように置いてある。でかい。

「……なんだこれ。おーい、カカー？」

靴はあるのに返事がない。どうしようかね、こやつ。見たところ宅配便でもないみたいだが。とりあえず開けてみるか。封もしてないし。

パカっとな。

「やぁ」

なんとなく予想していたが、その中にはカカが体育座りでコンパクトに収まっていた。

そしてそんなカカは言った。

「人生、いろんなことがある」

ほんとにね。とりあえず閉めた。

さて、どうしたもんか。

もっかい開けてみよう。ぱかっとな。

「うひょー」

カカはそんなことを口にしながら、なぜかひょっとこ顔をしていた。

意味がわからない。とりあえず閉めた。

「うーん、本当にどうしたもんか」

このまま放置しておくというのもボケキラーで楽しいかもしれない。

でもまぁ可哀想なんでもう少し付き合ってみることに。ぱかっとな。

「ぽーん」

「んごぁ!?」

ゴィン！！　と頭が揺れる。このバカいきなり箱から飛び出してきて僕と頭同士をごっつんこしやがった。

「びっくり箱」

「あぁびっくりしたよ！　これで満足か！」

「よきにはからえ」

あぁ、はからってやろうじゃないか。今日の夕飯見てろよ？　揚げ揚げにしてやる。

「ねぇトメ兄、はやく閉めてよ」

「まだやるんかい」

痛い目に遭いつつも付き合ってあげる僕は兄の鑑だと思う。

「もうーいいーかい？」

なんとなく言ってみた。

「まーだだよ」

返ってきた。なんかあの歌を思い出した。

「もうー、いーくつ寝ーるーとー」

「ねーしょーうーがーつー」

また返ってきた。寝正月。間違いない。

「もうーいいーかい？」

「早く開けてよ」

「ノッてやってるんだからそっちもノれよ！」

仕方なしにぱかっと箱を開けた。

するとカカじゃなく、なんとサエちゃんが現れた。

「いまこの箱にはー、あなたが心から好きな人が入っていますー」

本当ならそれほど素晴らしい箱はないな。

「私をあなたに直送便♪」

ちょこんと体育座りしながら、あちらの類な人たちだったらズキューンと撃ち落されそうな笑顔である、が、僕はロリコンではなくシスコンなのであった。というわけで――

「クーリングオフ！」

技名（？）と共に箱を閉めてから思った。やべぇ、シスコンって自分で認めちゃったよ。え、今更？　そうですか。それもそうですね。くすん。

「早く開けてよ」

再び聞こえてくるカカの声。いまサエちゃんと入れ替わったことといい、なんとなく妖怪っぽく思えてきた。でも付き合って開けてやる。

「……」

絶句した。

「私が教頭だ」

そう、教頭のおっさんが体育座りして入っていたのだ。異様に恐い。

「あの」

「私が教頭だ」

「いやその」

「私が教頭だ!!」

「だから」

「私は教頭だろう!?」

「聞かれても知らねぇよ!!」

叩きつけるような勢いで箱を閉めてやった。

「ハヤクアケテヨ」

もうこれ妖怪だろ。

「はぁ……」

深くため息を吐きながらも開けてやる。するとそこには――何も入っていなかった。

「あれ、カカはどこいった」

「私ならここだ！」

どーんと偉そうに腕を組んで居間の影から現れるカカ。そして同じポーズのサエちゃんも。

「説明しよう！　実はこの箱、学校でもらったんだけどね？　トメ兄から見て後ろに穴が空いててね、そこから出たり入ったり――」

「知ってるよ。見えてたし」

目の前にある箱の後でゴソゴソやってりゃ誰でも気づくわ。

「え……」

や、そんな残念そうな顔されても。

「ほら、バレてたでしょー。賭けは私の勝ちだよカカちゃん。約束通り、ファミレス東治の新作プリン・アラモードおごってねー」

そしてちゃっかりしているサエちゃん。

……あれ。

「しかし教頭はどっから引っ張りだしてきたんだ？　姿が見当たらないけど」

「は？　デストロイヤー教頭なんか連れてきてないよ」

「サユカちゃんも用事があって、今回は二人の犯行ですけどー」

え、じゃあ、教頭は？

「なにそれこわい」

僕だってこえぇよ！！

――え、タネ明かし無しで終わるの？　ちょっと待て、めっちゃ気になるんですけど！　オイ！！

## カカの天下８２０「はこ」（後書き）

最近少ない『意味の無い（意味のわからない？）日常話』を書いてみました。しばらくこんな感じで一話完結な話を中心に書いていこうと思います。

え、教頭がどっから湧いてきたか？

まぁ……デストロイヤーですから……

# カカの天下８２１「サユカの任務、久しぶり編」

こんにちは、サユカですっ！

現在トメさんとお茶してます！　今日はちょっと洋風にレモンティーとモンブランケーキなんかをいただいてます。

「ん、美味くて甘くて、そして栗だ。とても栗だ」

「はいっ、とっても栗です！」

でも栗よりも甘いのが――こ、の、じ、か、ん。きゃっ、わたしったらバカみたい。他人から見たら絶対にバカね。でもそれがいいっ！！

「お茶も美味しいし、いい店に入ったな」

「でもトメさんのほうが美味しいですっ」

「……味見したことあんの？」

「きゃーっ！」

「どういう返事？　ねぇそれどういう意味の返事っ！？」

味見……えへ、えへへへ。

「ところでサユカちゃん」

「なんでしゅかぁとめしゃん」

「うおおっ！？　どしたのサユカちゃん、さっきからなんか変だよ！」

だってだってー、こうやって二人でお茶なんて久しぶりなんですもんっ。そりゃ幸せすぎて溶けますよ、ふにゃふにゃにもなりますよ。

「らんれもないれふよー、きにしないでつかぁさい」

「どこの方言だ。酔っ払ってるの？」

「はいっ、トメさんに酔ってますっ！」

「そんな言葉、どっから仕入れてきた」

「タケダです」

「あのマセガキめ」

あの子ってば何故かいろんな言葉よく知ってるのよね。

「あー、もっかい言うけど、ところでサユカちゃん」

仕切り直しですねっ！

「わんっ！」

「なんで返事が犬の鳴き声！？」

だってだってー、こうやって二人でお茶なんて久しぶりなんですもんっ。そりゃ幸せすぎて犬にもなりますよ。ご主人様のためならなんでもしますよ。

「わぅわぅ」

「お手」

「わぅっ」

わーいトメさんの手に触れたっ！　今日はこの手洗わないっ！　お風呂のときも濡れないように頑張るっ！　この手を抱きながら寝るんだっ！　翌朝つぶれて血が止まってそうだけどっ。そして起きたときに止まってた血がじんわり流れてしびしびになって、「これがトメさんの愛のパワーねっ」って実感するの。なんてバカみたいな話っ！　でもやっぱりそれがいいっ！

「よし、お手の次は……おかわり！」

「すいません店員さんっ！　モンブランおかわりっ！」

「おぉ、なかなか良い切り返しだ。その技に免じてもう一個くらい奢ってあげようじゃないか」

「トメさんもおかわりっ！」

「いつの間に召し上がった？」

この間、トメさんがお昼寝してる間に……ペロっと味見……なん

てできればいいなぁなんて妄想っ！！　できればいいなぁっ！　いや今度やっちゃおうかなぁっ！　うわ想像しただけで恥ずかしいっ！　燃えるっ！　萌えるっ！　溶けるっ！　あぁわたしってば今日溶けてる！　最近寒くなってきたっていうのにっ！

「ところでサユカちゃん」

「ふぁいあああああああああああっ！！」

「なんで燃えてんの！？」

だってだってー以下略。そりゃ瞳の奥に炎も宿しますよ。外は寒いですけどわたしは灼熱ですよ。だから寒いときには抱きしめて♪　なんて言えたらいいのにっ！　なんちゃってなんちゃって！　とことんバカなわたしっ！　でもとことんそれがいいっ！！

「おぅ、奇遇だな。てめぇら」

そしてこんなときに必ず現れるテンカ先生っ！　なんでっ、なんでいつも出てくるのっ！　わたしとトメさんに嫉妬してるのっ？　だったら敵ね、恋の炎で燃やしてやるわっ！　なんて言ってるとものっすごいバカみたいよね、わたし。わかってる、わかってるの。だから実際にするときはちゃんとライターを使うわ。

「へっへっへ、お二人さん。どっからどうみてもラブラブカップルじゃねぇか」

「おまえはどっからどう見てもオヤジだぞ、テン」

「そうですよっ！！　もっと言ってくださいっ！」

「サユカちゃん……今日はなんか本当にぶっ飛んでるな」

だってだっ以下略。そりゃ空も飛べますよ。そして天国へ行ってトメさんと結婚するの。でも結婚式はきっと寂しいものになるわ。だってわたしの周りで天国に行けそうな人、他に居ないもの。

「あ、サユカちゃん。ケーキがきたよ」

「ケーキ、入刀っ！！」

「……確かに今日のサユカは変だな。カカみたいだ」

ふ、カカすけとは違うわ。あの子と違ってわたしは恋する乙女、必要以上に妄想しすぎて脳みそが疲労気味なのよ。正直やりすぎたと思ってる、でも後悔はしていないわ。疲労回復のために糖分補給もぐもぐっ。次の妄想のために充電よ、そして実行できそうなものは脳内にストックしておくのっ。

こんなわたしは、大人？　子供？

カカすけに触発されて考えてみたけど、やっぱり答えは出なかった。でも、今は幸せだから、このまま突っ走ることにするわっ！

「ところでサユカちゃん。前にも言ったような気がするけど……君、自分が思ってること口に出してることが結構あるから気をつけたほうがいいよ」

「オレ、燃やされないように気をつけねぇとな。トメも天国連れてかれないように気をつけろよ」

「きゃあああああああ

# カカの天下８２１「サユカの任務、久しぶり編」（後書き）

サブタイトルに「久しぶり編ってなんだよ」とツッコみつつ、どうもこんにちは。いやまぁそのまんま久しぶりにサユカちゃん話なわけです、ええ。

なんか久々すぎてぶっ飛んでます。何をどれだけ口にしてしまったかは皆さんの想像にお任せします。にしても最近寒いのに、確かにこの子は熱い。抱きしめたいと思いませんか？　思う人は正直に言いなさい。

いや、でも。トメが抱きしめるのを見たいと言う人のほうが多いのだろうか。

**カカの天下822「お兄ちゃんだよ、がんばれタケダ」**

俺こそがタケダキンジロウだ。いきなりだが最近の悩みを聞いてくれ。

つい先日、俺の母上がぶっ飛んだ人間だという事実と共に、俺に妹がいることが判明したのだ。その名はタマ。言わずと知れた有名人――あの笠原カツコの愛弟子だ。

それが判明してから、タマはうちで暮らすことになったのだが……

「ねー、たけだー」

俺とタマ、二人で外を散歩中に呼ばれるこの名前。無論、俺のことなのだが……

「あの、タマ？　それは苗字だから、君もタケダなんだぞ？」

「んー？」

「……よくわかってないようだな。じゃあこうしよう、俺のことはお兄ちゃんと呼ぶのだ」

「おにーちゃん」

「……！！」

なんだ、この体中を駆け巡る快感は……おぉ、これが世に言うシスコン電流というものか！　そうかトメさん、あなたはいつもこん

な幸せ電流を浴びていたんだな！　そりゃシスコンにもなろうというもの！

「変態がいる」

「誰がだぁ！！　って、カカ君？」

「よ。タマちゃんの様子見にきた」

なんという幸せ、妹にはこんな特典がついてくるのか！　あぁタマよ、おまえにはいくら礼を言っても足りなさそうだ。

「ま、また何か悶えてるわよっ」

「きっと身も心も変態になっちゃったんだよー」

「失敬な！！」

でもちょっと自分でも「これヤバくね？」と思ってたから我に返ってよかった。いやしかし……カカ君だけではなく、いつもの二人までついてくるとは。ここは兄としてキメどころだな！

「ようこそ三人とも！　どうか妹をよろしく頼む！」

「えい」

「ひぎゃあああああああああああ！！」

なぜかいきなり四方から割り箸を突っ込まれた！　両耳に！　鼻の両穴に刺さった！！

「なにをひゅるのだ！　そしてどこから割り箸を出した！？」

「そこのゴミ捨て場から」

「ひぃやあああああああああああああ！！」

再び叫んだ俺は必死で耳と鼻の汚れを落としにかかった！

「うわ、鼻をほじってる」

「耳もほじってるわよっ」

「ばっちぃー」

「こうさせた当人が何を言うかぁぁぁ！」

「たけだ……」

「おぉタマ。心配してくれるのか？」

「えい」

「二発目ぇ！？」

再び破られる鼻の粘膜。痛い、痛い！　考えてみれば先程は四方から――つまりカカ君たち三人＋タマからの攻撃だったのだ。すなわちタマも敵！

「一体なんなのだ！　なぜ俺がこんな目に！」

カカ君は。

「え、なんかムカついたから」

サユカ君は。

「兄レベルが低いくせに粋がるからよっ」

サエ君は。

「タケダだから」

タマは。

「ざまーみろ」

えぇと、なんか後半ひどくない？　ていうか全部ひどくない！？

「ねぇサユカン、兄レベルってなに？」

「そのままよ。兄としてのレベルっていう意味」

「ちなみにトメお兄さんのレベルはいくつー？」

「レベル２０００よ」

高っ！！

「タケダは？」

「レベル、マイナス５３万よ」

低っ！！　ていうかある意味高っ！　脅威の戦闘力っ！！

「トメお兄さんがすごいんだか、タケダがすごくなさすぎるんだか、わからないねー」

「ある意味どっちもすごいと思うけど……ねぇサユカン。ちなみにあそこで仲良く歩いてる通りすがりの兄妹、レベルいくつ？」

「レベル８ね」

基準が理解不能である。

「とにかく、タケダの分際で粋がるんじゃないよ」

「うわーカカちゃんてば身も蓋もない言い方」

……しかしこの上もなくわかりやすい。

「君たちの言い分はわかった。俺も兄を目指す身ながら、心得がないのは承知している。ではどうすればタマの兄と認めてもらえるのだ？」

「とりあえず刺さってる割り箸抜けば？」

「いつの間に刺した！？」

うおお、気づかないうちにまたもや四本も！　なんだこの技は！

見切れん！

「ねータケダ君、ちゃんと洗浄しないと傷口が腐るから気をつけてねー？」

「ありがとうサエ君！　しかし注意してくれるのはありがたいが刺した当人が言っても優しいんだか優しくないんだかわからんぞ！」

「優しいんだよー」

「いやあの」

「優しいよねー？」

「……はい」

ダメだ。あの笑顔には逆らえん。妙に可愛いし。いや俺はカカ君一筋ではあるのだが。それでも逆らえんくらい可愛いし。

「とりあえずトメさんに話を聞きなさいよっ。きっと色々と教えてもらえるわよっ」

「うむそうか、じゃあそうしよう！」

早くそうしよう！　モタモタしてたら割り箸で刺し殺されてしまう！

「さぁ行こう、タマ！！」

「えい」

「だからなんで刺すの！？」

そして、てんやわんやでトメさんの家に到着。

話を聞いてみると。

「兄として大事なこと？」

「はい！　どうか教えてください」

「耐えることだ」

なんという生々しい、そして痛々しい答えだろうか。しかし先程の経験から察するに、この心得は確かに重要だと確信できる。

「とりあえず割り箸抜けよ」

「だからいつの間に刺しているのだ！？」

あぁ、前途は多難である。頑張れ俺。

……うん、まずは耳と鼻の洗浄を頑張ろう。

## カカの天下822「お兄ちゃんだよ、がんばれタケダ」（後書き）

あい、誕生日が終わってから一人ずつ中心にして日常話を書いてる感じな私です。

しかしタケダの話……なんという書きやすさ。おそらく執筆時間に15分もかかってないんじゃないだろうか。しかも構想も何もなしにぶっつけで書いたし。その分内容が……とか思わず「ま、これでいっか。タケダだし」と思えてしまうのが恐ろしいところ。

ま、いいよね？（おぃ

## カカの天下８２３「キリヤ店員のお話」

こんにちはっはっは、キリヤです。

突然ですが、今日は私の経験談、困ったお客様シリーズをご紹介しましょう。理由ですか？　それはですね……私は現在ファミレス東治でバイト中なのですが、なぜかピーク中にも関わらずド暇なのです。つまりは暇つぶしですハイ。

さて、まずはどんなお客様を紹介しましょうか……よし、まずはよくあるパターンからいきましょう。これはお客様に呼ばれ、私が駆けつけたときのこと……

「はい、お伺いいたします」

「おぅあんちゃん。アレをくれ」

「どれでございましょう」

「アレだよアレ、焼酎！」

「麦でしょうか、芋でしょうか、それとも他の」

「焼酎ならなんでもいいわ！」

困った客シリーズその１、注文がアバウトな人。

「かしこまりました。それでは飲み方だけ、お教えいただけますか？」

「なんでもいいわ！」

「かしこまりました、ではロックでお持ちします」

一番高いヤツを……と心の中で付け加えたのは言うまでもありません。まぁよくあることです。

さて、次も同じく私が呼ばれたときのことです。

「はい、お伺いいたします」

そして中年のお客様は恥も外聞もなく、こう叫びました。

「なまはちゃい！」

地球の言語でお願いします――そう言いかけましたが、なんとか踏みとどまりました。

「申し訳ございません、もう一度お願いします」

「なまはちゃい！」

いえ、その妙に赤ちゃんぽい言葉をリクエストしたわけじゃなくてですね。

生野菜を可愛く言っているのでしょうか？　いやしかし、こんなおっさんが……

「だから、なまはちゃいだよ！」

「申し訳ございません。お手数ですが、メニューを指していただいてもよろしいでしょうか？」

「これだよこれ、なまはちゃい！」

お客様が指したのはドリンクのページ。

「あ、生茶ハイだった」

困った客シリーズその2、品名を間違える人。

「早く持ってこい！」

訂正、注文名を間違えるくせに妙に偉そうな人。照れてるだけかも。

まぁこれもよくあることです。先日に鍋屋で働いたときは『マロニー』を『くずきり』とご注文されたお客様も沢山いらっしゃいましたし、稀に『白滝』と言う方までいました。もちろんわざわざ『それ違います』なんて野暮なこと言わずに流しますけどね。

さてさて、お次はファミリーでご来店されたお客様の話です。

我が物顔で店内を走りまわる子供たち。「こらー」と注意をするものの椅子から立ち上がる様子もなく、放置する両親。困ったことに結構あることなのですよ。そう、困った客シリーズその3、好き勝手ファミリー。

「お客様、他のお客様もいらっしゃいますので……」

「お客様。店内はお料理も運んでいますし、ぶつかったりすると危ないので……」

はい、わかりました。こらー！　と注意はするものの、両親はやはり自分のテーブルからは離れず、しばらくすると再び暴れだす子供たち。そしてもちろん親は放置。何回注意してもこれの繰り返し。

「キリヤさん、あれ危なすぎますよ！」

「うーん、注意しても聞いてくれませんしねぇ」

このままでは子供は怪我をしてしまうかもしれませんし、しかもそうなった場合「自業自得」というわけにはいきません。過失はどちらに、とかいう以前に子供を危ない目に遭わせるわけには……

「こういうときに限って店長は休みですし……どうしましょう」

「仕方ありませんね。ちょっと厨房へお邪魔します」

店長が居ないときは私が一番偉いんで、冷凍庫から勝手にアイスを拝借。

そして走り回っていた子供たちが厨房の近くへ来たとき、

「ほらほらおいで。アイスあげますよー」

「わーい！」

さすがは教育がなってないお子様、警戒心も見せずにあっさりとついてきました。まぁ私の笑顔を警戒する人なんかそうそういませんけどね。トメ君なんかは「完璧すぎて胡散臭い」とか言いますけど。

「美味しいですかー？」

「うん！」

「ほらほら、こぼしてますよ。アイスはこうやって食べるんです」

「こうー？」

「いいえ、こうです」

厨房の中で始まるちょっとした食べ方講座。仕事をサボっているわけではありません、これもお客様に迷惑をかけないための立派なお仕事です。アイス一つ、従業員一人で店内が安全になるなら安いものですから。

――私ども店員は、店内ではとても弱い立場です。いくら店側が迷惑を被っていたとしても、お客様の家庭に強く口出しはできません。しかし他のお客様のことも考えなければなりません。なので色々と柔軟なやり方が必要となってきます。

子供はお菓子で釣っておとなしくさせるのが一番。そして声が聞こえなくなり、姿が見えなくなってさすがに不安に思った親がやっと椅子から立ち上がり、探しにきて……自分たちがどれほど子供を危ない目に遭わせていたかをようやく自覚し、今後はおとなしくさ

せるように教育してくれる。とまぁ、このようなシナリオができ上がるわけです。

もちろん毎回こんなにうまくいくとは限りませんが。迷惑と嫌ってばかりいないで「若いながらの子育てで疲れている」というのを考慮してあげるのも人情というものです。もちろん私のやり方もおせっかい、かつ傍から見れば犯罪間際かもしれませんが……そこは私の裁量でなんとでもできる自信がありますので。素人は真似しないようにお気をつけください。

一番てっとり早いのは店の最高責任者から出入り禁止通告をしてもらうことなんですけどね。そんな経験もう嫌だーと子供を教育してくれるようになるでしょう。多分。

さてさて、最後に私たち、従業員の困った話でもしましょうか。

「オーダー、いただきたきました！！」

「おたませいたしました！！」

困った従業員シリーズその1、よく噛む人。

「オレンジじゅーちゅです！！」

落ち着け。

続いて、お客様がお呼びだと知らせるピンポンが立て続けになったとき。

「五番テーブル様がお呼びです！　あぁ三番テーブル様も、あぁ三

番は料理と一緒に持ってってほしいところに十番テーブル様もお呼び！　しかし俺は一人しかいませんしドリンクも作らねばならないしあぁ一体どうすればいいのでしょうか！？」

「実況してないでとりあえず何かしてください」

困った従業員シリーズその2、とにかく慌てる人。

「うがぁー！！」

「だから叫んでないで動いてくださいってば」

慌てても動きを止めてはいけませんよね、うんうん。

……さて、これだけ紹介して暇つぶしをしたものの、やっぱりお客様があまり来ません。暇です、そろそろピークが過ぎてしまうのですが……そんなに外はガラガラなのでしょうか？　ちょっと外へ出てみますか。

「ふむ、いつもどおりの人通りですね」

やはり原因がわからない、首をかしげながら店へ戻ろうとした、そのとき。

「うあー」

なんということでしょう。店の扉にかかっている札が、『準備中』のままじゃないですか。『営業中』にひっくり返してないじゃない

ですか！　誰ですかオープン作業したのは！

……困った従業員シリーズその３、肝心な作業を忘れる人。

「これは失態。今の責任者は私だから、結局は私の責任に……しかし、まぁ、うん。てい」

シリーズその４、それを誤魔化す人。

まぁ、バレなけりゃいいんですよ。

## カカの天下８２３「キリヤ店員のお話」（後書き）

ま、ぶっちゃけほとんど実話なんですがね笑

しっかし更新がどうにも定まりませんな。忙しかったり火傷したりお腹空いたりしてたらあっというまに時間が……もうすぐカカラジだし、気合を入れねば。しかし油断したら空いた時間に即寝てしまう今日このごろ。

誰かー、オラに元気をわけてくれー。

# カカの天下８２４「カカ天クエスト、ＥＰ１４」（前書き）

注意：このお話はカカ達がゲームのキャラになりきりながらＲＰＧを進める話です。話の内容はゲームの中ですが、『もしもカカ達が異世界にいたら』みたいな感覚でお楽しみください。

ステータス

カカ　ボケ勇者　レベル１　へん
サエ　悪の魔法使い　レベル１　はらぐろ
サユカ　手の平の踊り子　レベル１　さびしんぼう　エロレベル３
トメ　ツッコミ　レベル１　つっこみ　？？？
ケロリン　スライム　レベル３５　おっさんくさい　超ゴミ

かなーり間を空けましたので、７６６話まで軽く戻ることをオススメします。

# カカの天下８２４「カカ天クエスト、ＥＰ１４」

勇者一行が街で何やらやらかしている間、ケロリンは外をうろついていた。

「ふん、この辺りもロクな魔物がいねぇな」

なんとケロリンは今後もしっかりと一行を守るためにと修行していたのだ。魔物のくせに勇者より遥かに努力家である。

「……ん？　なんだありゃ」

そんなケロリンが出くわした場面とは――

「誰か助けて！！」

「ぐへへへへ！！」

魔物に襲われる街人という、ＲＰＧではよくある状況だった。

「誰か！　誰かぁ！！」

「ぐへへへへ！！」

「……」

ケロリンは様子を見ている。

「誰かぁぁぁぁぁ！！」

「ぐーっへへへへへへへ！！」

「……」

ケロリンは様子を見ている。

「きゃあああああああああああああ！！」

「ぐへへへっへへへへへへへへへへぇ！！」

「……」

ケロリンは様子を見ている。

――説明しよう！　こういうＲＰＧではいくら深刻な場面だとしてもプレイヤーが動かない限りは魔物も空気を読んで待ってくれるのだ！　そしてなぜケロリンがじっとしているかというと、きっと襲われている女の子がタイプで「も少し襲われてるところが見たいなー」とかいう変態思考で――

「人聞き悪いこと抜かすな！！　助ければいいんだろが、助ければ！」

さっさと動かないから空気を読んだナレーションを流すことになるんです。うんうん。

「待てや、そこの魔物！」

「あん？　てめぇだって魔物じゃねぇか。邪魔するってのか？」

「ああ、そうだ」

「ふん、おもしれぇ。なら死んじまえ！！」

魔物のこうげき！　ミス！

ケロリンのこうげき！　１０５のダメージ！！

魔物のこうげき！　ミス！

ケロリンの会心の一撃！　２２８のダメージ！！

魔物をたおした！！

ケロリンのこうげき！　３２５のダメージ！！

「え、ちょ」

ケロリンのこうげき！　４４５のダメージ！！

「も、もう死んで」

死体だから防御力も下がり破壊的ダメージが魔物を襲う！　ケロリンのこうげきこうげきこうげき！！

魔物は十三回死んだ！　極悪非道のおかげでケロリンはまたしても魔物的レベルが上がった！

「ふ、これが魔物の鍛え方ってもんだ。悪いことしてなんぼだぜ」

しかし勇者には逆らえないですよね？

「……サエお嬢の笑顔には勝てねぇから仕方ねぇんだよ」

サエちゃん固有スキル『エンジェルデビルスマイル』効果：可愛すぎて大抵の人が逆らえなくなる。嫉妬深い女には逆効果。

「あ、ありがとうございました！！」

「あん？」

「どうかお礼をさせてください！」

「何言ってんだ。見てわかるだろ？　俺様は魔物。悪いやつなんだよ。そんなやつにお礼なんて――」

「いいえ！　あなたは私を助けてくれました！　だから絶対にいい人なんです！」

「そんな簡単に人を信用すんじゃねぇよ」

「いいえ！　絶対にいい人です！」

「人でもねぇし」

「いいゴミです！」

「それはリサイクルできる的な意味で言ってるのか」

「ともかくお礼をさせてください！」

「いらねぇっての」

「空気を読め！！」

「急に偉そうになったなオイ！」

半ば強引な形でケロリンは引き摺られていきました。

「実はですね、いま街にとんでもない人たちがいるんです。どうかそれを退治してください！」

「お礼はどこ行った？」

「その人たちを倒してくれたら、いくらでもいたします！」

「襲われてたわりには随分とあつかましいキャラだなあんた」

「その人たちは勇者と身を偽り、人を助けるフリをして上手いこと色んなものを巻き上げていって……私の家も、ううう」

「何を盗られた？」

「エロ本です」

「オイ、いくらなんでもヒドいだろこのキャラ。なんとかしろよＫＹシステム」

エロを求めぬ人はおらず。これすなわち、空気を読んだ結果なり。

「……スライムの俺にゃ、わからんな」

「おお、娘よ！　無事に帰ったか！」

突然だが街娘の父親が現れた！

「ああ、お父さん！　あの偽勇者たちはどこに！？」

「あっちだ！　ちょうど俺のエロメイド服も盗られたところさ！」

「なんてこと！　お母さんの形見なのに！」

「……オイＫＹシステム。何の空気を読んだ結果で生まれたんだ？　この家族は」

なんでしょう。空気が読みにくい世の中ですから。

「もっともらしいこと言いやがって。まぁいい、愛しの勇者様たちのためにも、街へと貢献しときますかね」

「さぁ本当の勇者様！」

「勇者なんて呼ぶな小娘」

「じゃあ本物のゴミ！」

「てめぇをゴミにしてやろうか！」

「にっくき敵は、あちらです！」

そしてそこには、皆さんの予想通り――ケロリンの飼い主一行がいた。さてどうする、ケロリンは空気を読んで勇者一行に牙を向けるのか！　それともやっぱり服従して街に迷惑をかける方へと回るのか！　次回、勇者ＶＳケロリン！　どうぞお楽しみに！

その頃の魔王城では……

「……」

ぺら。

「……」

ぺら。

「……」

先日、村娘Ａが購入したエロ本（カカたち経由）を、なぜか人間の姿に戻ったトメとカツコも合わせて三人で黙々と読んでいた。

断っておくが、読んでいるだけである。ただ読んでいるだけなのだ。

黙々と……

## カカの天下８２４「カカ天クエスト、ＥＰ１４」（後書き）

超久々のカカ天クエストでーす。といいつつケロリンしか出てませんな笑

果たしてこの後、勇者とケロリンはどうなるのか！？

またお楽しみにー！

## カカの天下８２５「第二十九回、カカラジ！」

水門さんからいただきました――もしも、クララがいつぞやのカカの様に詐欺の電話を受け取ったら。

「はい、もしもし。クララです！」

『あ、もしもし。こちらタケダボンバルディエという有料サイトの者ですが』

「けったいな名前です！」

『先日、当サイトをご利用された分の支払いがされていないようなので、失礼ながらお電話させていただきました』

「……はい？」

『いえ、ですから使用料をお支払いいただきたく』

「しよーりょう？　しようりょう……枝葉霊！？　よくわからないですがクララの敵ですか！？」

『は？　いや、その、当サイトを利用された料金をですね』

「りょうきん……霊菌！？　枝葉霊菌ですか！？」

『は、はい。しようりょうきんです』

「そんな恐ろしいものは必要ないです！」

『そういうわけにはいきません！　使ったならちゃんと払っていただかないと！』

「まだそんな菌に浸かってません！　でもお祓いはしてください！」

『？？？』

「？？？」

わけがわからないまま、電話は切れてしまいましたとさ。

睫毛火射夢さんからいただきました――もしもゴッキーが白かったら。

「きゃー、ゴッキーが現れたわ！」

「白アリみたいでイヤァァァ！」

白かったら嫌われないかなーと思って投稿されたそうです。でもカカ天関係ねぇ。

六連星さんからいただきました――シェー……じゃない、シューがキャリア組のエリート警官だったら（警視以上）。

「警視！　これは――」

「む、ちょっと待て。電話だ。はい、もしもし」

『あ、シュー？』

「はい、お姉様」

『ちょっと来い』

「いえ、いま事件が起きて忙し――」

『いいから来い』

「はい」

「警視、どちらへ！？」

「え、いや、その……ごごご、極秘任務だ！！」

あまり変わりませんね。

アークさんからいただきました――もしもサカイさんがトメ達の母親だったら。

「ねぇお母さん」

「なぁに？　カカちゃん」

「お母さんはどうしてお父さんと結婚したの？」

「ふふふー、それはねー？　私がオタクだからですよー」

「忍者が格好いいと思ったの？」

「いえいえー。オタクってお金かかるんですよー。忍者って危険が多いから給料いいんですよねー」

「金ヅル！？」

なんだかんだ言いつつ幸せに暮らしそう。んでもって自分の子供を放っておいてやっぱりサエちゃんを可愛がりそう。

霧久さんからいただきました――もしもカカがサエ以外の、普通の男子を好きになってしまったら。

「カカ。オレ、もうオマエについていけないよ」

「そんな」

「オレの人生はめちゃくちゃだ」

カカおまえ何した。

「でも面白かったでしょ？」

「笑うしかないくらいにな！？」

……ほんと、何した。

「やっぱ無理だよ。カカにはオレみたいな普通の男は合わないんだよ」

「すでに普通じゃないよ？」

「おまえのせいだあああああああああああああ！！」

やー、ほんと何したんでしょうねぇ。想像が膨らみますねぇ。

「そんなわけでもしも冒頭が終わったので私カカもとい香加が超・降・臨！！　前回いろいろいろいろと大人がどうとか塞ぎこんでガッカリシューンショボーンとなっていた分、今回は弾けさせまくって天まで届け宇宙へ届けその向こうのお姉へと届けーって勢いでラジオを進めていきたいと思いますイェイ！　フェイ！！　シャェエイ！！」

「言語だけなら宇宙の向こうにいる人っぽいよー。あ、どうもー、私は小枝です」

「こ……こわざ？」

「ふふ、香加ちゃんたらー」

「その笑顔が可愛すぎる！！　私ってば超幸せ！」

「あ、断っておきますけどー。別に私が今回目立ちたいからといってアレヤコレヤで留お兄さんをハメてパーソナリティから引き摺り下ろしたわけじゃないですよー？」

……先にそれ言われると、逆に疑ってしまいますな。

「そうそう、小枝ちゃんは何もしてないの！　ただあれだよ、前回の分も張り切っちゃってる私が調子に乗って『小枝ちゃんとヤりたい！』って叫びながら留兄を閉じ込めただけの話だよ」

あらあらグッジョブ。

「まぁほら、こんなのもあるわけだし。『嘘吐きぬこ』さんからもらったんだけどー―」

『我らトメ撲滅委員、所在地違えども兄弟の契りを結びしからは、心同じくして助け合い、困窮するトメを嘲笑ん。

上はトメに報い、下は弱点収集に尽力尽くすことを誓う。

同年、同月、同日にトメ滅することを得ずとも、願わばくば同年、同月、同日トメ撲滅達成出来ることを…。

２００９年５月１５日

トメ撲滅の誓い』

つまり撲滅されたんだ。

「そゆことー」

「しょゆことー」

「あぁん！　小枝ちゃんがそれ言うと可愛いすぎ！！」

なんかテンション上がってサカイさんみたいになってるなぁ……あ、えっと。この番組はネット小説『カカの天下』をアレヤコレヤするため、キャラの本音やボケや欲望を交えながら読者さんの投稿をポエポエするラジオ的お話です。ここの香加と小枝さんは本編と関係ないはずなのでお気をつけください。

「あとね、『もしもカカラジの進行役が変わったら？　いろいろ見てみたいですね。サエとサユカとか、キリヤとテンカとか、サエとキリヤとか』っていうお便りもあった。でも私と小枝ちゃんのコンビが一番だよね？　ね？　ね！？」

あーはいはい、そうですねー。

「うんうん、それじゃＣＭ行こうかー」

「なにその気の無い返事！」

「香加ちゃん大好き♪」

「ならよし！」

はいはいはいはい、そんなわけで２９回カカラジスタートです。
ＣＭＣＭ。

『もっと面白いＣＭをください』

さて、ＣＭがあけて。

「何今の！？」

ＣＭのＣＭです。いやぁなんか今回は「これ！」っていうのが無くてですねぇ。

「だからってこんな直球に書かなくてもー」

「作者が考えればいいじゃん」

それでもいいんですけど、あえて読者さんたちに挑戦的な感じにしてみました。お便り待ってます。

「単にもっとお便りがほしいだけでしょー？」

そんなことアリマセンヨアハハ。

「わかりやすい肯定をもらったところで、さてさてーふつおたに行きましょうかー」

「あぃ、私が元気よく読んでみせます！！　『三雲三龍』さんからいただきました！　『うっかり先生にお母さんと呼びかけてしまったときの誤魔化し方は？』だそうですよ香加さん！！」

香加はおまえだ。

「スパゲッツィ！！」

「なにそれー？」

「驚いたときの掛け声」

絶対１００パー突発的な思いつきだ。そして意図がわかりづらい。

「じゃあとりあえず、もしも話みたいにそのときの光景を演じてみるね！」

「お母さん！」

香加が天下先生に向かってそう言ってしまったとき、教室の空気が止まった。

やがて……再び香加が口を開く。

「が、好きだ！」

唐突な告白。そして天下先生の反応は――

「オレもおまえのお母さんが好きだ！」

「だよね！！」

「おうよ！」

「いぇい！」

「イェーイ！！」

なんだこいつら。

「カンペキやね」

「うん、カンペキだー」

まぁカンペキということにしときましょう。次です。

「えっとー、『サイボーグ』さんからいただきましたー。『……ユウショクニイタダキマストイウトキ、デミュミュミュミュ、トイッタンダ……ツメタイメデミラレタ』だ、そうですー」

「すごい！　私は尊敬する！」

香加はこう言ってるけど、小枝ちゃんはどう思う？

「一回言っただけじゃそんなもんだよー」

え……それは……つまり……

「言い続けましょー。流行るまで♪」

鬼じゃ！！　ここに鬼教官がおる！！

「大丈夫、ちゃんと流行らせたら頭撫でていい子いい子してあげるからー」

「じゃあ私やる！」

おお、これはやり始める人が増えそうですな。でもどうするんです？　もしもこれを読んだ人が皆マジでやって流行っちゃったら……

「全員の頭を撫でてあげるよー。皆の夢の中で」

あー……こりゃ便利な口上を思いついたもんだ。

「私は直接撫でてもらえる！　いいだろー！」

はいはい羨ましい限りですよ香加さん。さて――他にもふつおたはあるのですが、今回はこれくらいにしておきます。前回募集した『肩書き企画』の発表をせねばならないので……

「ん？　あれって誕生日で爆走するときにつけてた看板に書くためだけのもんじゃないの？」

いえ、あれは投稿が多すぎたので「こっちでも消化しちゃえー」ってノリで書いただけです。いい感じの肩書きはかなり向こうで使っちゃいましたが……本番はこれ。ルールを説明します。まずは私が皆さんに投稿していただいた肩書きを読み上げます、するとその当人が登場！　その肩書きにふさわしいセリフを叫んでもらいます。

「で？」

終了！

「それだけー？」

「何を思ってそんな企画立てたの？」

や、なんか思いついたからとりあえずやってみようかと。

「……こういうとき実感する。あんたが私らの生みの親なんだって」

お褒め預かり光栄至極。まずはトメ兄からいきましょかね。

「あれ、留お兄さんじゃなくてトメお兄さんなんですねー？」

はい。いちいち漢字で書くのが面倒なので、こちらももしも話と同じノリで書きたいと思います。

「面倒ってまた正直な」

そっちのほうが肩書き合わせて見栄えよかったりするんです！ともかく行きましょう！

『雷鳴のツッコミ師トメ』

「うやぁいぢゃああしゅしゃあああああ！」

カカに何やらされてエライことになっても必死でツッコむその声はまさに雷鳴。

『婆兄（ばにい）』

「カカさんや、ボケはまだかいね？」

なんだかんだでボケを望んでいるトメは間違いなくMの類だと思います。

『アレの弟』

「いやもうホント大変なんですってばアレの弟って」

『割とオープンシスコン』

「悪いか！？」

開き直りましたね。

『嫉妬されて死ぬ予定』

「え……や、ちょっと。勘弁してよ」

それは私のさじ加減。

続いてカカいきます。

『ボケで世界征服しそう』

「私すげぇ」

確かにすげぇ。

『予測不能』

「カレーパン！！」

……え？

「食べさせたい。トメ兄に」

確かに予測不能。

『駆け抜ける混沌』

「漢字が難しい」

小学生ですもんね。

『アレの妹』

「いやもうほんと楽しいんだってばアレの妹って」

兄妹でハッキリと意見が分かれましたね。

『隠れブラコン』

「ぶれいもの！！」

え、でもお兄ちゃん好きでしょ？

「ん、うん」

大好きでしょ？

「え、あー、うん、まぁ」

じゃあブラコンで。

「違うもん！！」

はいはい、あんまり隠れてませんでしたとさ。

『サエの嫁』

「違う！！」

え、違うんですか。

「サエちゃんが私の嫁！　だから私は婿だ！」

なるほど！！

お次はサエちゃんです。

『びたあちょこ』

「私を甘く見てると苦い思いするよー」

それでもその笑顔を見ていると、結局は甘く感じてしまう。そんなサエちゃんです。お一ついかが。

『時々白』

「パコちゃんが死んじゃったあああああああああああああああー！！」

「サエ、コンセント抜けてるわよー」

機械相手だといつも白。

『腹黒天使』

「んふー」

あらサエちゃん。随分と笑顔ですけど、何かいいことありました？

「悩んでる同級生の話に適当に受け答えしてるだけでケーキ奢ってもらっちゃったー」

……その悩みは解決したんでしょうか？

「したよー」

そうですか……

「ケーキ美味しかったー」

結果オーライ、ですよね。

『何もかも可愛い』

「そ、そんなぁ。照れるよー」

面と向かって言われるとやっぱ照れるらしい。可愛い。

『カカの嫁』

「うん」

認めたよこの子!?

「やっふぅぅぅぅぅ！　サエちゃあああああああああん!!」

こら香加！　今は企画発表中！　いくら嬉しいからって設定を無視して突入してくるんじゃない!!

「なんだとぅ、カレーパン食わすぞこらぁ！」

お腹空いてるので後でぜひお願いします。さぁさぁ引っ込んで、次はサユカちゃんですよ。

『突っ走るモモ缶』

「どういう意味よっ！　モモ缶美味しいけど！　あ、トメさん一緒にモモ缶食べましょおおおっ！！」

名が体を現してます。

『コスプレイヤー』

「好きでやってるんじゃないわよっ！」

でも結局着てしまう、付き合いのいいサユカちゃんだった。

『当たって砕けずやんわりと受けとめられる』

「えっと……どういう意味っ！？」

まぁなんか幸せな状況ってことじゃないですか？

「トメさんに突進しても抱きとめてもらえるということかしらっ！？」

あーそうそう。だから試してみそ？

『カカとサエの親友』

「は、恥ずかしいじゃないの……ばか」

でも嬉しそうなサユカちゃんでした。

『カカとサエの玩具』

「なんですってぇぇぇぇっ！！」

でも嬉しそうなサユ――

「嬉しかないわよっ！」

またまたぁ。

「ほ、ほんとだもんっ！」

またまたぁ。

「もう知らないっ！」

続きまして、サラさんです。

『皿』

「……もうツッコむの疲れました」

お疲れ。

『名前で呼ばれない程度の能力』

「いや、呼んでよ！！」

皿さん。

「違うってば！！」

『今なら１００円！』

「だから私は皿じゃないってば！」

お買い得！　私なら買いますね。

『巨乳』

「え、あの、そこまでストレートに言われると、こっちも返答しようがないと言いますか……」

ボインですね。

「あなたいつの時代の人ですか」

ともかくこれで終わりです。

「え、ちょっと待って！　もっとまともな肩書きないの！？」

じゃ、これで。

『ボイン』

「いやあああああああああああ！！」

残念でした。

次はタケダです。

『焼却炉で燃えてろ』

「うぉい！？

『世界のごみ』

「それはあんまりだ！」

『そんなやついた？』

「あんまりだあああああああ！！」

はい、終わりです。

次はクララちゃん。

『幸咲娘（しあさかむすめ）』

「なんかよさげです！」

うん、普通にいい感じですね。

「クララいい感じです！」

そうですね、よかったですね。

「クララしょっくです！」

なんでさ。

次は皆の姉、カツコさんですよー。

『殺しても死なない』

「あっはっは、いくらあたしでもそんなこたぁないよ」

いやマジで包丁とか刺さらないんですってあの人。

『物語の破壊者』

「む、失礼だなぁ。そんな破天荒なことはしてないはずだよ？」

いやマジで登場されすぎるとストーリー展開が困るんですってあの人。

『だが断る！！』

「どういう意味かわからんが断る！」

いやマジでわかんないんですってこの人。

はい、お次はサカイさん。

『裏社会のドン』

「うふふー」

『真黒幕』

「あはははー」

『子煩悩』

「えへへー」

『過剰なる母』

「あっはははー」

全部正解だそうです。

次、キリヤ！

『完璧超人』

「いえいえ、私などはまだまだです。未だに一人の女性の心を掴むことすらできていないのですから……」

もう色んな人の心を掴んでるように見えますが。

「はっはっは、掴んでいると油断した瞬間に足元をすくわれるものですよ、人間というものは」

なるほど、勉強になります。

『バイト後のビールが美味くなる程度の能力』

「これは我ながら素晴らしい能力かと」

うん、まぁ私も持ってるけど。

「多分テンカさんもトメ君も持ってますね」

皆で一杯やりたいなぁ。

さて、トメ父行きましょう。

『神速の追跡者（チェイサー）』

「どうせ単なるストーカーさ！！」

そうですね。

「否定して！？　ねぇ！！」

次、校長。

『今時珍しい笑い方』

「おほほほほふふほふほほっほほっほほっほっほっほっほっほっほふっふっふっふほほほほ！」

そんなこれ見よがしに笑わんでも。

次、シュー！

『脆弱なる微生物、シュー』

「……」

『風前の灯、シュー』

「……」

えっと、なんか泣いてます。

スルーして次、タマ！

『無邪気な痛恨の一撃』

「しゅーってだれだったかわすれたお」

あ、泣いてたソコの人が倒れた。

次は……え、日本経済？

『食肉問題を考えられる者』

「モォ」

考えてるのかこの牛……いや、きっと考えてるんだ。きっとそうだ。

「モォ」

続いてマイケル＆ジョーイ。

『焼き芋宣伝部長』

「ヘイ、ユーも一緒にブーブー言わそうＺＥ！」

「オゥ、今日はいつもよりブーブーだぜイェイ！」

「ブーブー全開！　ブーブー最高だぜヒャッホゥ！」

「気持ちよすぎるＺＥ！　爽快すぎるＹＯ！！」

焼き芋の宣伝しろよ。

えー次はゲンゾウ三姉兄弟。

『俺たちに若さはない』

「ふ……時代にゃ勝てねぇよ」

渋い……

続いてアヤちゃん。

『実は一番幸せ？』

「な、なに言ってるのよ、もう！」

確かに初っ端からずーっと安定してニシカワ君と上手くいってますもんね。

そしてそんな二人にふさわしい肩書きがありました。

『西の門番アヤ：西に沈む太陽』

「は、恥ずかしいじゃないの！！」

はいはい、そのまま幸せになっちゃってください。

――と、いうわけで肩書き連打してきたカカラジもそろそろ終わりです。

「え、もう？　早くない！？」

「あんまりお便り紹介とかしてないよー」

いやまぁ、今回は脅迫状にも自由枠にも「コレ！」っていうのがあまり無かったので。肩書き発表も思いのほか枠をとっちゃったし、仕方ないかなぁと。

「最近はマジメな話も多かったから、ノリが足りないのかもねー」

「……私のせいか！？」

「大丈夫だよ香加ちゃん、これから本編ではっちゃければいいんだからー」

「よし、頑張る！」

留とかトメが死なない程度にしてくださいね。さて、ここでコーナーのおさらい！

普通の質問受け付けます。ふつおたコーナー。

なんでも思いついたらどうぞ、自由枠コーナー。

どんな宣伝でも面白ければＯＫ！　ＣＭコーナー

ファンキーな脅迫状待ってます、脅迫状コーナー。

もしもな寸劇、見てみませんか？　もしもコーナー。

今回は特別企画はないけど、何か思いついたらよろしくねー。というわけでエンディングです。

「香加ちゃん、冒頭の勢いから考えると今回は暴れ足りないんじゃないかなー？」

「うん、でもこのパワーは本編に回すことにした。小枝ちゃんといられて幸せだったから満足だし」

「あははー、この婿ったらー」

「なんだよぅ、この嫁ったらぁ」

はい、見てるだけで胸焼けしそうなのでチョップで閉めたいと思います。

『カカラジチョーップ！！』

二人の素晴らしいコンビネーションチョップが私の頭に炸裂！！

『もっと頑張って書け！』

ごもっとも……頑張ります……

この番組は、縁の下の力持ちな留さんの提供でお送りしました（実は何かしてたらしい）。

# カカの天下８２５「第二十九回、カカラジ！」（後書き）

……めっちゃお待たせしました。ようやくカカラジアップです。
恥ずかしながら体調を崩し、どうにも書く元気が出ずにここまで遅れることとなってしまいました……カンペキに不定期更新となってますな。自分で自分が残念なり。
私事ですが、来月辺りから引越ししたりもするのでやっぱり更新安定は難しいかもしれません。
でもやっぱりカカたちを書くと元気も出るわけで。
不定期ながらもまだまだ続けていきますので、よろしければまたこやつらにお付き合いいただければ幸いです。

でもしばらくはカカさんのパワーが有り余ってるようなので、話は書き始めれば勝手に進んでいきそうです笑

# カカの天下８２６「そんな日もあるさ」

こんにちは、トメです。

今日はなんでもない日です。普通に起きて、普通に朝食を作り、食べ。普通に仕事を終えて帰ってきて、普通に夕飯の下準備もひと段落してのんびりとテレビを見ています。

もうちょっとのんびりしたらカカを呼んで夕飯を用意します。

そんな普通の一時。それを――

「てい」

ずぽ、という音と共にぶち壊すヤツが一匹、僕の背後に現れました。なんじゃこら。

「……もしもし、カカさんや」

「なにかね、トメさんや」

「おんし、今なにしたんかのぅ？」

「トメ兄の頭にバケツをかぶせた」

「なぜ」

「なぜと言われても困る」

僕のほうが困るんですけど。

「……あ、似合ってるよ？　ピッタリ」

「褒めてほしいわけじゃなくて」

確かにバケツの取っ手が顎下にぴったりハマってすごいフィット感だけど。

「なにさ！　私の誕生日にせっかく高級お掃除セットをもらったのにトメ兄が『高級すぎて勿体無い』とか言って放置してるから使い道を探してあげたんじゃん！」

「逆ギレされても困るんですけど」

とりあえずバケツかぶってるから視界は真っ暗、さっきまで見てたテレビの続きがそろそろ気になってきた。

「外せ」

「あいよ」

意外とあっさり頷いてくれた。本人もちょっとした悪ふざけのつもりだったんだろう。しかし。

「あれ、とれない」

「またまたご冗談を、お嬢さん」

「んー、なんか取っ手の付け根が変な形に曲がってて……てい！

あ、もっと曲がった」

「オイ」

「おりゃ」

ガンガンガン！！　耳近くでカカ〇チョップの振動ががが。

「いたいたいたい！！」

「おお、完全に歪んだ」

「ざけんなよマジで」

「んー！　んー！！　さすがは高級金バケツ。ビクともしない」

「じゃあなんで僕がかぶったときに限って歪んだんだ！？」

自分でも抜こうと手を出してみる。しかし確かに押そうが引こうが顎下の取っ手はビクともしない。やばい、これ本当にやばい！

「えーと、ここをこうして、っと」

「何してる？」

「バケツに顔を書いてみた」

「何してんだコラァ！」

「……ぶっ！　はは！！」

「どんだけウケる顔を描いたんじゃい！？」

「さてどうしよう。とりあえずもっと笑えばいい？」

「だからざけんなマジで！　誰か助けを呼んできてくれ！」

「わかった！！」

走り出す足音。早くしてくれ本当に。

……しばらくして、複数の足音が。

「よかった、連れてきてくれたんだな！」

誰を連れてきてくれたんだろう？

「ぶはははははははははははははははははははは！！　ば、ばけつ！　顔！！　くはははははは！」

巻き起こる大爆笑。誰だか知らんがとりあえずソイツぶっ飛ばす。

「あー、笑った笑った」

「ね？　面白いでしょウチのトメ兄」

カカてめぇコラ。

「うん、いいもん見たわぁ。じゃあな」

「うん、ばいばい」

「待てや！！」

何のために呼んだんだ！？

「うわ、バケツ人間が追ってくる！」

「逃げろぉ！」

「逃げるなぁぁぁ！！」

あ、前見えないのに適当に走ったら壁に激突した。世界が揺れる、バケツのせいでぐわんぐわん揺れる。泣きそう。

「なにやってんのトメ兄」

「脳が揺れてぶっ倒れてる……助けを求めた人はどうなった」

「あ、そっか。助けを求めたんだった」

やっぱ忘れてたか。

「もっかい行くね！」

今度はどうかマトモなのを連れてきてくれ……

何も見えないのでバケツ顔でボーっと待ってるしかない僕。

なんかもっかい泣けてきた。

「連れてきたよ！」

「おお、そうか！！」

……あれ、反応が聞こえないぞ。

「誰を連れてきたんだ？」

「サエちゃん。いきなりお腹抱えて蹲って床をバンバン叩きながら苦しそうに笑い出したけど」

「つ、つぼ……つぼに入っ……ふ、ふふ……」

僕、やっぱ泣きそう。

「はー……はー……あー、笑い疲れたー。で、これ誰？　シューさん？」

あ、涙出てきた。

「何言ってるのよっ！」

「お、サユカン登場」

「その人はどう見てもトメさんでしょうっ！」

「おぉすげぇサユカン……愛だ」

「どこ見て判断したんだろー」

サユカちゃん、僕の味方は君だけだ！

「さぁ助けてくれ」

「小学生にゃ無理だよ」

「ならなんで連れてきた！？」

「友達を呼んで何が悪い！？」

「とりあえず解決してくれよバケツな状況を！！」

泣いてます。僕、泣いてます。大人になってから泣く機会も減りましたが現在かなーり泣いてます。

「むぅ、どうしよう」

「商店街で何とかしてくれそうな店を探せばいいんじゃないかなー？　うまい工具持ってるとこあるでしょー」

「よし、そうと決まれば行きますよトメさんっ！」

「え、え？　このまま外を歩くの！？」

「大丈夫です、わたしが手を繋いで先導してあげますからっ！」

「ちょ、引っ張るな！　イヤだ、僕はイヤだ！　これ以上笑われるなんてイヤなんだ！！」

「大丈夫ですよー、バケツ人間の中身なんて誰もわからないですからー」

む？　そ、それもそうか。

「……じゃあお願いする」

「おっけ、トメ兄レッツゴー」

「さ、トメさんこっちですっ！」

「はい、靴ですよトメお兄さん」

……数十分後。

工具によって外されたバケツ。広がる視界。

久々に見た光景は、僕を囲む商店街の人々だった。

「カカさんや、なんですかこれは」

「バケツ人間が珍しいからって移動中に皆ついてきちった」

「いやあああああああああああああああ！！」

「ドンマイ」

僕おうち帰る。

夕飯なんかもう知らないもん。

## カカの天下８２６「そんな日もあるさ」（後書き）

うん、そんな日もあるさ。

普通はないけど。

# カカの天下８２７「はいはいごちそうさま」

ぷんぷん、アヤよ！　え、誰だか忘れたって？　失礼しちゃうわ！　私よ私、歌が大好きなクラスのアイドルよ！

ちなみにぷんぷんっていうのは挨拶じゃないからね！　単純に怒ってるのよ！　ぷんぷん！

「なによバカ！！」

「そっちがバカだろ！」

「バカじゃないもん！」

「僕だって違うもん！」

むーっ、と睨み合っている相手はおなじみニッシー。場所は教室、時はお昼休み。皆が給食後のダラダラタイムを満喫している中、私たち二人はケンカの真っ最中なの。

「そっちのほうがバカだろ」

「そっちのほうがバカよ！」

「じゃあ勝負だ！」

「望むところよ！　ねぇカカ！」

「……あん？」

なぜか机の上にあぐらをかきながらお馴染みメンバーと雑談していたカカに振ってみる。

「私とニッシー、どっちがバカだと思う!?」

「アヤ坊だよな?」

「ニッシーよね!?」

詰め寄る私たち。

カカの返答はこうだった。

「私が一番バカに決まってるでしょ」

……いや、そういうことを聞きたいんじゃなくてね?

「えー、でもカカちゃんはバカじゃないよー。ボケだよー」

「おやサエちゃん。私としてはどっちも変わらないかと思ったんだけど」

「甘いよカカちゃん。きちんと面白くボケたりバカなことするのって難しいんだよー、実はとっても頭を使ってるんだよー」

「そっか。じゃあ答えはこうだ、アヤちゃん、ニシカワ君! バカなことをするにおいては私が一番だ、あんたらには負けない!」

いや、だからそういうことを聞きたいんじゃなくて。

「……カカはもういいわ。サユカ、あんたはどう思う！？」

「夫婦喧嘩って羨ましい……わたしもトメさんとするのかしら……いいえ、しないわっ！　ケンカなんて一度もしないラブラブカップルとしてご近所でも評判の……えへへ」

聞いちゃいねぇ。ていうか別に夫婦喧嘩じゃないし。

「じゃあ――」

「はいはいー、とりあえずこの勝負、私サエが預かったー」

む、審判代わりでもしてくれるのかしら。ありがたいけど。

「これでとりあえず私に火の粉がかかることはないでしょー」

「サエ、何か言った？」

「んーん、なんにもー。とりあえず状況を整理しなきゃ……ケンカの原因は何なのー？」

原因？　それはね――

「ニッシーが私の趣味をバカにしたのよ」

「そんな大げさなこと言ってないだろ。ただ」

「言ったわよ！　私がどんな思いで！」

「はいはいー、熱くならないのー」

はー、はー……ムカついた心がサエのほややんボイスによって鎮まっていく。

「それで、その趣味ってなんなのー？」

「……作詞作曲よ」

おお！　と盗み聞きしていた周囲のクラスメイトから声が上がる。

「いや、聞こえはいいけど大したモンじゃないよ？」

「なんでニッシーがそういうこと言うのよ！」

そうよ、なんでよりにもよってあんたがそんなこと言うのよ！

これは、この趣味は――あんたがきっかけで始めたことだっていうのに。

小さい頃、記憶があやふやなくらいに昔の話。

ある日、ニッシーが泣いていたことがあった。理由は忘れた。その頃から仲がよかった私は、どうにか元気づけようとして……習ったばかりの歌を聞かせてあげたんだ。

『さんぞー、ごくー、ちょはっかい、さごじょ、みんな、みんなで、にしへいこー♪　きみもいっしょに、にしへいこー』

読んだばかりの絵本を思い出しながら、何かの曲とミックスして精一杯歌った。

『にしへいこー！　にしへいこー！』

しばらくして、ニッシーは笑ってくれた。

『なにそれ、へんなうたー』

『ぼーさんっていうひとがね、にしにたびをして、しあわせになるおはなしのうたなの』

『ぼーさんってなに？』

『んとね、なにかをおしえてくれるひとのこと！』

『そっかぁ。じゃ、あやちゃんもぼーさんだね！』

『え、なんで？』

『にしへいけばしあわせになれるって、おしえてくれたよ。いつかふたりでにしへいこうね！』

『うん！』

それからこいつは私をアヤ坊と呼ぶようになった。そして私ばかりあだ名で呼ばれるのが気に食わなくて、こっちも『ニッシー』なんてありきたりなあだ名をつけて呼ぶようになり、現在にいたる。

――そう、現在に至る。

「私は、あのとき、あんたが喜んでくれたから！」

だから続けている、とまでは恥ずかしくて言えなかった。だって作詞作曲は今じゃ立派な私個人の趣味になっている。きっかけは確かにニッシーだけど、それが全てとは断言できない。でも、でもやっぱり、きっかけなんだから。

「ニッシーにだけはバカにされたくなかったのに！」

「……むぅ。んっと、あー、ごめん」

「なによいきなり謝って！」

「うん、多分、その……僕も、昔のことを思い出して、恥ずかしくなって、なんか意地張って悪く言いたくなったんだと思う。その、僕が西を好きになったきっかけも、あれだし」

あれ、と言われてドキっとした。そっか、こいつも同じ回想をしてたのか。

「わ、わかればいいのよ、わかれば」

あんなにイラついてたのに、今はちょっと嬉しい。なんでだろ。

「のーのーカカさんやー」

「なんだいサエさんや」

「これは、一体なにかのー？」

「そーじゃのぉ。私が察するに、のろけじゃないかのぉ」

「やはりカカさんもそう思うかえー？」

「んむんむ、何やら腹立たしいのぉ」

「ほっほっほ、サユカさんはどう思うかえー？」

「こういうときはこう言えっておばあちゃんが言ってたわっ。『ヒューヒュー！　地獄に落ちろ！！』って」

「すごいおばあちゃんじゃのー」

「えー、かのちゃん特性のカレーはいらんかねー？　甘いものを見たあとに辛いものはいらんかねー？」

「い、いっちゃんてば……」

どうしよう。周りが何やら恥ずかしい展開になってきた。

私は声を大にして言う。違うのよ！　なぜか毎回からかわれるけど、違うの！　ニッシーと私は付き合いが長いだけの、ただの友達なんだから！

ほんとなんだから！

「はい、アヤさんもお一つどうですか？　かのちゃん特性のカレーですよ」

イチョウさんが私の口へ無理矢理スプーンを押し込んだ。ぱっくんちょ。

「辛っ！　うわ……辛っ！」

「先程あれだけの甘い時間を過ごしたのですから、それはそれはさぞ辛いでしょうね」

「違うわよ！　甘くなんかない！　今は死ぬほど辛いし！」

「ヒューヒュー地獄に落ちろ、ですわ♪」

「だから違うんだってばー！！」

本当に違うんだからね！　それにしても辛っ！

## カカの天下８２７「はいはいごちそうさま」（後書き）

カレーごちそうさまです、インドちゃんことかのちゃん。

何気に人気なこの二人。いやぁ、甘い、辛い。小学生時代からいい思いしてますなぁこのカップルは。ひゅーひゅー地獄に落ちｒｙ

……なんか一度、本文を入れ忘れて投稿しちゃったみたいです。お騒がせいたしました笑

# カカの天下８２８「だぁくさいど」

こんにちは、ゆうたです。私が誰だかわかりますかな？　そうです、私が、ヘンタイです。

サカイ家に身も心もいろんなモノも捧げた奴隷でございます。

さて、そんな私ですが。本日はサカイミエ様に付き従い、小学校の屋上なんぞに来ています。なぜこんな場所にいるかと申しますと……ミエ様が率いるサエちゃんファンクラブにおいて、ある項目を解禁したからであります。

それは――『サエ様に告白してはならない、抜けがけ禁止』という鬼の会則！　これを撤回するという！　つまり、現在この小学校の屋上ではサエ様への告白ラッシュが行われているのです！

「あ、またフラれたー。ふふふー」

そして撃沈しまくる男子の様子を影から見つめて喜んでいる、失礼ながら陰気にしか見えない我が主。

会員に伝えられた事項はこうだ。

『もうすぐサエ様が卒業するにあたり、告白解禁。したければするがいい、ただし順番は守ること』

「ところでミエ様。一体どういう風の吹き回しですかな？　サエ様には一生彼氏を作らせないのかと思っていましたが」

「ふふふ、考え直したのよー。たしかに私の可愛い可愛いサエに男ができるなんて不愉快ですよー？　でもそれじゃ女は成長できないの」

おお、確かに恋愛は人として成長するにあたって重要だ。ただの、いや常軌を逸した親バカかと思いきや、ちゃんと考えていたのですね。

「だからぶっちゃけた話、ヤろうとしてもヤれない子供のうちに恋愛経験しといてたほうがいいんじゃないかってー」

「たしかにぶっちゃけすぎですな」

しかし同意。サエ様を汚そうとする輩には漏れなく俺のムチムチプリンを食わせてやる。無理矢理。腹いっぱい。

「それに小学校もすぐ終わりです。付き合ったとしてもすぐ別れるでしょー」

「なんという身も蓋もない言い方」

しかし同意。サエ様と付き合う輩がずっとイチャイチャしようものなら俺のボンバーが炸裂してしまう。無差別に。情熱的に。

「あ、またサエに告白する愚かな男子がきましたよー」

「……自分で焚きつけたわりにはフラれること前提なのですな」

「うちのサエはそこらの男にＯＫするような女じゃないわよー。ほら」

でかい我が身を隠しつつ、屋上の端――サエ様の様子を見る。

「すすすす、好きでぴゃあ！」

緊張のあまり日本語から逸脱している男子。さもありなん、あの女神に告白しようというのだ、人の身には余りすぎる。ご尊顔を拝見できるだけでも有り難く思うがいい。

「ごめんなさいー」

「だ、ダメですか……」

「はいー。顔がタイプじゃないですー」

「がぁぁぁん！！」

うぅむ、しかしサエ様ってばなんて正直な。先程から断り方が直球すぎる。「私太い人は嫌なんですー」とか「お金持ってなさそうなんでヤですー」とか「名前が気に入らないですー」やら「なんかイヤ」とか。まさに微塵も期待を抱かせない、完膚無き拒絶。男子どもよ、心に傷を負い、強くなるがいい。そして再挑戦し、さらに断られ心を砕かれるがいい。ははは、俺様は遠目から見て笑ってやろう。

「ゆーたったら邪悪なこと考えてませんかー？」

「いえいえ、ミエ様ほどでは」

「あはは、分不相応な輩は死ねばいい」

恐ろしい。この方は本当に恐ろしい。そしてそれが……イイ！！

さて、サエ様のほうは……おお、新たな挑戦者だ。

「君だけが好きだ、付き合ってほしい！」

「私だけを見てくれるー？」

「もちろんさ！」

「じゃー付き合いましょうかー」

「本当かい！？　よし、今日からサエは僕の彼女だ！」

……あれ？

何か、上手くいったように見えるのですが。

「ミエさ――」

振り向こうとして、やめた。なんか驚きのあまりモノスゴイ顔になった人がいた。見てはいけない。アレは人が見るべき顔ではない！　それはそうと、サエ様はなぜあのような男を選んだのだ――む？

「ちょっとタナカ君！　どういうことよ！？」

「げ、アケミ。なんでこんなところに！」

「あなたは私と付き合ってるんでしょ！？」

「い、いいや！　俺はサエと付き合うんだ」

「あたしだけを見てくれるって言ったじゃない！」

「そ、それは……」

「うわー、二股かけようとしてたんだー」

「ち、違うんだサエ！」

「やっぱり付き合うのやーめたー」

「えええええ！」

「私もよ！　こんな嘘つき知らないわ！」

「そ、そんなぁぁぁぁ」

二兎追うもの、一兎も得ず。

「さーアケミちゃん。二人でこの男がどれだけ女ったらしか、学校中に言い触らしましょー」

「そうしましょう！　そして登校拒否になって転校でもすればいいんだわ！」

泣きっ面にハチ。

「ぼ、僕が何をした……！」

自業自得。

「なるほど、そういうことだったのねー」

「む、ミエ様？」

「サエは予めあの女子を呼び出しておいたのよー。女ったらしを痛い目にあわせるために」

「なるほど、一度は頷いたのも計画的だったというわけですな」

「あー、びっくりしたー」

「びっくりしすぎです」

主に顔が。

「いやしかしミエ様。サエ様が誰かと付き合うのを念頭に置いていたのではなかったのですか？」

「あははー、それはそうなんだけどね。実際に見るとビックリしちゃって」

確かに漫画みたいなビックリ顔になってました。

「さて、告白ラッシュも終わったようですし、帰りますか」

「そだねー」

生徒に見つからないようにコソコソしながら屋上から降りていく、その途中。

「あ」

「どうされました？」

「サエにタケダ君が近づいていく……」

俺の出番だな。ゆーたさんのでっかい耳、起動！

「――サエ君、実は相談があるのだが」

「なにー、タケダ君も告白？」

「む？　なんのことやらよくわからんが……話はタマのことなんだが」

話しながら去っていく二人。

「あの二人、意外と仲がいいですな」

「んー、タケダ君かぁ。意外といい物件かもね」

「物件という言い方はあんまりでは？」

「なにせ実家が病院だもの」

「ああ、本当に物件の話だったのですか」

しかし最近は病院だからといって儲かっているとは限りませんよ？　などとダークな話をしながら我々は去っていくのだった。

## カカの天下８２８「だぁくさいど」（後書き）

もうすぐクリスマスですね！

聖なる夜ですね♪

だからあえて暗黒話をお届けです＾＾

## カカの天下８２９「今年のカカさんのほしいもの」

こんにちは、トメです。そろそろ雪が降ってくる時期ですね。うちの周りにはそんな雲はまだ来てませんが、ホワイトクリスマスになるかどうか今年も楽しみです。

さて、楽しみといえばクリスマスプレゼント、我らがカカは一体何を望むのでしょうか？

「なぁカカ」

「なにトメ兄」

「今年はサンタさんに何をお願いするんだ？」

「小六に向かってサンタとかバカにしてんの？」

なんだこのクソ生意気なガキは。

「でもあえてお願いするなら」

……あぁ、お願いはするんだ。

「巨大なクリスマスツリーになりたい」

そしてなんなんだこのバカは。

「どしたのトメ兄、ため息なんかついて」

「や、普通クリスマスプレゼントって『なりたい』モンじゃなくて『ほしい』モンを言うだろう」

「クリスマスツリーな自分がほしい」

「なぜに」

「なぜだろう」

聞かれても知らんわ。

「新しい自分を見つけたいんだよ」

「新しすぎる」

「でもきっとサンタさんなら叶えてくれるよ」

「おまえの中のサンタ像を聞かせてもらっていいか？」

「お姉以上の存在」

「それはサンタが可哀想だ」

どんだけバケモノなんだサンタクロース。姉以上となるとブラックホールを食べるくらいのレベルだぞ。

「……あ、巨大クリスマスツリーロボでもいいや。乗れるやつ」

「でもいい、とか言いながら明らかにパワーアップしてるぞ」

「とにかくサンタさんはいい子の願いをなんでも聞いてくれるんだよ」

おまえサンタ信じてないんじゃなかったのかよ。

「じゃ、あれか？　サンタに『彼女ほしい』って言ったら靴下の中に女の子を詰め込んだりしてくれるのか」

「うん」

しねぇよ。

「……神様になりたいとか願ったやつはどうなるんだ」

「そんな愚か者のところにサンタはこない」

おまえ随分サンタに詳しいな。

「いい子にしつつ神様になりたいと思うやつがいたらどうするんだ」

「え、なにそれ。『私、今日もいっぱい良いことしたわ。ゴミも拾ったり、お婆さんの荷物も持ってあげたし、給食で出たプリンを友達にあげたし！　みんな喜んでくれたわ！　ところで神になりたい』とか呟くの？」

「なにもそこまで脈絡のないストーリーにせんでも。あーほら、『この世界にはまだまだ恵まれない人たちがいる、それを私が神になってなんとかしたい！』っていう願いとか」

「人の身でそんなこと考えるなんておこがましい」

だからおまえ何様だよ。

「まぁほら、過ぎた願い事はね、クリスマスの夜に夢で見せてくれるんだよ」

ついにサンタが魔法を使ってきた。

「あ、せっかくだから皆でツリーになろうよ」

「えーと？」

「私がてっぺんの星！　そして皆は飾りなの。素敵」

「エグい」

「は？　トメ兄ってばどんな想像したの」

「知り合いのことごとくが巨大なツリーの枝々で首を吊られてる光景だが。そして天辺にはおまえ」

「それはひどい」

「ま、そんな夢を見ないように気をつけろよ」

「む、何よ。夢じゃなくて現実にできる程度の願いでしょ！　クリスマスツリーになるくらい」

「ちなみにそのツリーの全長は？」

「２０メートルくらいでいいよ。できるでしょ」

その巨大ツリーを用意して天辺にカカをくくりつければ……できないこともない。しかし見ず知らずのサンタがそこまで頑張る義理はないと思う。

「ま、せいぜい夢で楽しむんだな」

「むぅ……最近、夢の中にジョーイ＆マイケルしか出てこないんだよね」

会ったことはないのになぜかわかる、そのジョーイ＆マイケル。

夢――その中で巨大なクリスマスツリーが聳え立ち、幾百ある飾りつけが全てジョーイ＆マイケルの顔で、もしそれが一斉に口を開いたら……

『ＨＡＨＡＨＡ！　顔だけだと屁がこけないＺＥ！』

「……それは、恐ろしいな」

「うん、きっとものすごくやかましいよ」

悪夢でしかない。

「ま、もし夢に見なくてサンタさんにも無理だったら、代わりにトメ兄が叶えてくれるんだよね」

「なんですと？」

「いつだったかトメ兄言ってたよね。『僕、実はサンタの代理人なんだよ』って」

そ、それは！　確かめっちゃ小さい頃に僕がカカへクリスマスプレゼントをあげたときに言った嘘だ。「サンタさんからだよ」って言ったほうが喜ぶと思ったんだけど、まさか今まで覚えていたとは……

「じゃ、よろしくねー」

それが方便だと知ってか知らずか、にこやかに去っていくカカ。

まぁ、いいか。いざとなったら「人って実は就寝中に何回も夢を見てるんだけど、覚えてないだけなんだぞ」と言ってしまえばいい。ジョーイ&マイケルをやたらと覚えてるのはインパクトが強いから、というのもついでに説明して、「せっかく見れたのに、あーあ残念。実はそんなにインパクトなかったんじゃないか？　そのクリスマス吊りー』と、そんな展開でＯＫなはずだ。

もしくはカカが『こんな夢を見たい』と強く念じて寝れば本当に見られるかもしれないし。プレゼントが『夢』なら、これほど扱いやすいものはない。

……でも、まぁ。それじゃつまんないか。

「んむ、できないこともない、か」

あの二人の力でも借りるかね。

## カカの天下８２９「今年のカカさんのほしいもの」（後書き）

うちの近くでは昨日、雪がふりました。最近さみーっすね。

さてさて、もうすぐクリスマスですよん。もうちっと更新頻度を上げたいところ。しかし私事ですが来月に引越しするのでバタバタ中。

でもでも、クリスマスだけはしっかり楽しみたい。リアルもカカ天も！

さてさて二人とは誰のことでしょー。

**カカの天下８３０「よ、ば、い♪」**

ふあぁ……どうも、トメです。

映画なんて見てたらいつの間にやら深夜になってしまいました。いつもならもう寝てる時間、カカもとっくに自室でぐーすかぴーです。そろそろ僕も寝るか……と思ったそのとき。

玄関で音がしました。なんだかドアに何かがぶつかったような。

「……なんだ、酔っ払った父さんがフラフラになりながら土産片手に帰ってきたりでもしたのか？」

どっかの漫画じゃあるまいに、と思いながら玄関へ向かってみる。

そしてドアを開けてみると、そこには――

「うぃー、かえったどー」

「……」

酔っ払ったテンが寝そべっていた。

「惜しい！」

父さんじゃなかったかぁ。まぁ些細な違いだけど無意味に悔しがってみた。

「んあぁ？　なんでオレんちにトメがいるんら？」

「ここは僕の家だ」

「うそつけよぉ。どっからどう見てもオレんちだろが」

「や、そこに『笠原』って表札が」

「ウチの表札は今、壊れててなぁ」

「うお壊れてる！　割れてる！」

「だからここはウチらぁ」

「てめぇ今壊したな！？」

けけけ、と笑うテンは完全に出来上がっている。どこをどうしたのか、ここを自分ちと勘違いしているらしい。

「ともかく、ここは僕のウチなんだ」

「んなわけねぇだろ」

「おまえは酔ってるんだよ！」

「酔ってらいもん！！」

それで酔ってなかったら人としてお前ヤバイぞ。

「ぅぃ……んー」

「あ、こら。こんなとこで寝るな、風邪ひくぞ」

冬の夜は冷えまくる。仕方ない、ウチに入れるか。

「ほら、立て！　あぁいいや、引き摺ってこう」

両脇を抱え、うんしょ、うんしょと中へ引き込む。

「おー……ずるずるだおー……ブルドーザーのようだおー……雪かき機のようだおー……いけー、すすめー、雪をかけー」

どうでもいいけど酔っ払いの言うことって面白いよな。

――脱力した人間を動かすのは骨が折れる。が、なんとかこやつを居間のコタツの中へと突っ込むことに成功。

「おー、あたたかいおー、春がきたおー」

「なんでいちいち比喩表現なんだ」

「ツッコミだおー、細かい男みたいだお」

「悪かったな！」

「くけけけけ」

あー、どうしてくれようこの酔っ払い。

「とめー」

「なんだよ」

「とめとめー」

「なんだよ」

「夜這いみたいだ」

「僕か？　僕のことか！？　ふざけんな！」

どっちかというとテンが夜這いをかけてきた形だろが。

「んじゃオレが夜這いするかぁ」

「……は？」

今まで脱力しきっていたくせに、いきなりコタツから抜け出し、体のばねを使って跳ね上がるテンの身体。

そして僕は何やら柔道っぽい技で投げ飛ばされ――気がつけば押し倒された形になっていた。柔らかい重み、近づいてくるテンの顔。

「ふへへぇ、襲ってやった」

テンの唇が、僕の唇へと迫る。

こいつ……まさか！

まさか！！

まさか僕の口からゲロを流し込む気か！？　あぁわかる、酒に慣れているからわかるんだ。こいつの酔い方は吐く寸前、酔っている当人が気を緩めるだけで瞬時にゲロってしまえる状態なんだ！　しかしそれを僕の口へ――なんと恐ろしい発想なのだろう！　酔っ払い相手に油断すべきではなかったのだ、しかしもう遅い。

僕の唇に、触れる！　触れてしまう！

その寸前――

「おえ」

「顔面に吐く気かぁぁぁぁぁ！　誰か助けてぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

その声を聞いたのか――

「っきゃあああああああああああっ！！」

奇声を発しながら飛び込んできた影が、おもっきしテンの身体を蹴り飛ばした。

「大丈夫ですか、トメさんっ！？」

「さ、サユカちゃん！？　ありがとう、助かったけど、なんでここに、こんな時間に！？」

「えへへ、用事で夜更かししてたんですけど、なんとなく嫌な予感がして来てみたんです」

「さ、サユカちゃん超能力でもあるの？」

「愛の力です」

自分で言ってて恥ずかしかったのか、サユカちゃんの顔が一気に燃え上がった。

「あ、いや、あのっ、そうじゃなくて、あぁっ、そうじゃないわけじゃ、ないんですけど、あの」

「おぇぇぇぇぇぇぇ」

「きぃやあああああああああああ」

サユカちゃんの赤くなっていた顔が一気に青ざめた。背後からゾンビのようなテンが襲いかかってきたからだ。不吉な声と共に。

「な、なにをするんですかぁっ」

「そりゃーこっちのセリフじゃ……人をサッカーボールみたいに蹴り飛ばしやがって……ゴールインしたお祝いだ、飲めや」

「な、なにをっ！？」

「ぅおえぇぇ」

「そんな返事はいやあああああああああああっ！！」

あー……

あーあー……

うん、サユカちゃん。クリスマスプレゼントはなんか奮発してあげよう。だから許せ。

「とめにー？」

「あれ、カカ。起きちゃったか」

「さみゅい」

「じゃあ毛布にくるまってな」

「くしゃい」

「あー、うん。くさいな。今から僕はそのくさいものを片付けるから、おまえはおとなしく寝てな」

「うん」

寝ぼけて下りてきただけなのか、カカは素直に自室へと戻っていった。

さて……片付けるかぁ。

## カカの天下８３０「よ、ば、い♪」（後書き）

最悪の夜這いです。

忘年会シーズンですね、皆さんも気をつけましょう？　もちろんお酒大好きな私もですけど、飲食業としては稼ぎ時であり、自分らの忘年やってる暇がありません。

どちらかというと今回のテンカ先生みたいな人たちの面倒を見るほうですね。まぁ慣れてます。危ない客がいたらポッケに袋を常備し、いざというときサッと出す、我ながらいい店員です。

あと話は変わりますが、話題の映画ワンピース見ました。感動しました。面白すぎです。さすが作者ですわ……いやぁ、見て損はないですよ。皆さんもぜひ＾＾

よかった点は多々あれど、個人的にはブルックの面白さとロビンの色っぽさがポイント高かったり笑

個人的な話、失礼しました。

# カカの天下８３１「さわがしイブ」

どうも、カカです。

先に言っておきますが、ここは夢の中です。なぜか知らないけどわかるんです。そういうときってあるよね？　いつもは記憶とか曖昧なんだけど、今日に限っては珍しく寝る前の記憶がありました。

そう、今日はクリスマスイブ。そして明日はクリスマス。

今夜の夢は、もしかしたらサンタさんが見せてくれるパラダイスかもしれないのです！

私はゆっくりと、その夢の世界を見渡しました。

そして、見つけました。

その大きなツリーを。

『イッツ・パラダイス！！』

ぎっしりと桃のような実が生っている木。

桃？

いいや違う。実は全てジョーイ＆マイケルの顔だ！！　まさにイッツ・ナイトメア！！

『ＨＡＨＡＨＡ！　聞いてくれよジョーイ！』

『どうしたんだいマイケル？』

『俺ってばクリスマスで嬉しすぎて屁をこいちまったぜ！』

『それがどうしたんだい？』

『ＨＡＨＡＨＡ！　屁の勢いが強すぎたせいでこの木の実がことごとく落下していくのさ！』

落ちてくる。ジョーイとマイケルの生首がボトボトと。そして高笑いしながらこちらへ転がってくる。無数に。

「い、いやあああああああああああ！！」

……どうも、トメです。

今夜はクリスマスイブ。なのでサンタ代わりでカカへプレゼントを置きにきました。

「うーん、うーん、なまくびあっちいけ」

「なんちゅー夢を見とるのだこいつは」

今夜の夢を楽しみにしていたはずの妹はどうやら悪夢の真っ最中らしい。哀れな。

「さて、プレゼントを置いて……」

「なまくび……なまくび……」

どうしよう、哀れにも程がある。助けてやりたい。そういえば、寝てる間に聞こえた声で夢が左右されることがある、と何かで読んだことあるぞ。よし！

僕はカカの耳元で囁いた。

「ほっほっほ、サンタじゃぞ。助けに」

「来ないぞ」

「誰だ！？」

余計な言葉を付け加えたのは――

どうも、夢の中のカカです。ただいま無数の生首に追いかけられています。

「助けて、サンタさーん！」

私の声が届いたのか、夢の世界に激震が走りました。

そして生首は、すべてサンタさんの顔になりました。

「ほっほっほ、サンタじゃぞ」

「助けに来ないぞ」

『ほっほっほ』

絶望的な大合唱。泣きそう。

余計な言葉を付け加えたのは――いつの間にか侵入してきていた姉だった。

「なにしにきた」

「サンタをしに」

「サンタを死に？　殺したのか」

前々から人間離れしてると思ったが、ここまできたか。

「そして罪滅ぼしにプレゼントを代わりに配っていると」

「弟君、しばらく見ないうちに想像力豊かになったねぇ」

「夢を忘れたら人間終わりだからね」

「うんうん、そだね。というわけで、そんな夢の真っ最中なカカちゃんに、刺激というプレゼントをあげよう」

姉は再びカカの耳元へ口を寄せ、囁いた。

「ぼきゃーん」

「何の呪文だそれは」

夢の中のカカです。

今、サンタさんの生首に追いかけられていたのですが。

ボキャーン！！　なんか生首が次々と爆発し始めました。

赤いものとか黒い破片が飛んできます。

私、もう泣いています。

「お、おい。なんか泣き始めたぞカカのやつ」

「むう、恐いものが全部ぼきゃーんと吹っ飛んでくれればいいと思ったんだけど」

「カカもろとも吹っ飛ばしてるんじゃないか？」

「かもねぇ」

妹を泣かしたわりにはどうでもよさそうに言って、姉は何やらごそごそと取り出した。

「これがカカちゃんへのプレゼントだよ」

「……なに、それ」

「ブリ。美味しいよ」

姉が取り出したのは1メートルを軽く超える魚。信じられないことに生きている。姉に尾を掴まれながらもビッチビッチと暴れている。

「おまえ、それ枕元に置くつもりだったのか？」

「新鮮第一」

「貰う人のことを第一にしてやれよ」

夢の中のカカです。

爆発したサンタさんは全て、何故か顔だけそのままな人面魚になって復活しました。

そしてビッチビッチ跳ねながら私を追いかけてきます。

神様。私、なにか悪いことしましたか？

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

ついにカカが寝言で謝り始めた。よーわからんけど色々とヤバイのではなかろうか。

「とりあえずブリは絞めて黙らせたよ」

「黙ってれば枕元に置いていいもんでもなかろうが。台所にしまっときなさい」

「えーでも。起きて枕元にあるからビックリするわけで」

そら起きた瞬間に巨大なブリとご対面すれば驚くだろうさ。

「トラウマになるし生臭さが部屋に移るから却下」

「ちぇ」

とりあえず納得してくれたのか、ブリをしまってくれる姉……どこにしまったのかは気にしないでおこう。

「しかし弟君のプレゼントはなかなかに粋だね」

「そだろ」

「なにせわたしたちが夜更かししまくって作ったんですからねっ！」

「頑張ったよねー私たち」

あら、なぜこんなところにサエちゃんとサユカちゃんが。

「どうやってうちに入ったんだ？」

「鍵、あいてましたよー」

「きっとカカすけが空けておいたのよ。サンタさんがきてもいいように」

小六にしては夢見がち過ぎる気もするが、なかなか可愛いことするじゃないか。

「で、何しに来たんだ？」

「ふふふー、このサユカちゃんの格好を見ればわかるでしょー？」

サユカちゃんの格好……

「エロいことしにきたの？」

「お義姉さんは黙っててくださいっ！」

「おりょ？　あたしってば何やら漢字的に不思議な響きで呼ばれたような」

ともかくサユカちゃんはいつかのクリスマスで見たサンタ服を着ていた。なにやら露出が多くなってる気もする。

「つまり、トメさんに頼まれてわたしとサエすけが作ったプレゼントが贈られるのを見届けにきたのですっ！」

「それでわざわざサンタの格好を？」

「はいっ！」

この子、もしかしてコスプレが楽しくなってきてるんじゃないだろうか。

「ほほー。おねーさんもサンタ服着たいけど年齢的にアウトだわ。でもサエちんは普通の格好だね」

「あんな寒い格好できませんよー」

相変わらずだなサエちゃん。

「それにしても、なんでカカちゃんは苦しみながら寝てるんですかー？」

「悪夢を見ているらしい。耳元で何かを囁くたびにおかしな寝言を漏らすんだ」

「それは面白そうですねー」

「わたしもやるわっ！」

なんという友情。

「む、あたしも負けてられないね」

姉が加わる。

「ふふ、俺様も混ざるとしよう」

げ、父さんまで来やがった。

「あらあら、困った君たちだこと」

母さん!?　うあサンタ服似合いすぎ。

――意味のわからない揃い方をした彼女たちは、皆でカカの耳元へ囁くことに。

「一番手、サエ。いきまーす。コホン……」

サエちゃんはいつもの純粋な笑顔で、こう言った。

「汚いお金」

一体どんな狙いがあるのだ君は。

「二番手、サユカいきますっ」

元気いっぱいサユカサンタ。

「愛、覚えていますか？」

なんのタイトルだ。

「三番手、あたしがいくぜぃ」

姉はもうやめたほうが……

「ムキムキふぇすてぃばる」

ほら、ろくなこと言わねぇ。

「四番手、俺様が行く！」

父さんよ、ここらで救いの手を頼むぜ。

「暑苦しい裸の侍が腹筋を三千回した後に『げろげーろ』と叫ぶ」

んなこと言うから嫌われるんだぞアンタ。

「最後はママだね。ふふ」

母さん、あんたくらいはマトモに頼むぞ。

「よいしょっと」

母さんはカカを起こさないようにゆっくりと布団に入り、そのまま添い寝する格好となった。優しく娘を抱きしめて、耳元で囁く。

「よしよし、大丈夫、大丈夫。なんにも恐いことはないのよー」

次第に安らかになっていく寝息。数秒前まではとても絵にできない顔色だったのが嘘のようだ。

「あなたを救ったのはママよー」

「まま……だいすき……」

僕らの母ながら上手いこと囁いたなオイ。

「むぅ、母め。オイシイとこを独り占めしたな!?　あたしだってカカちゃんに大好きとか言われたい！」

無理だろ、ブリ持ってくるような姉じゃ。

「ユイナさんはこのままカカちゃんと一緒に眠って、自分がサンタさんからのプレゼントになるつもりですねー？」

「むっ、なによそれ。そんなことされたら、わたしたちのプレゼントのインパクトが薄れるじゃないのっ！」

「あぁ妻よ！　その勝ち誇った顔も美しいが俺様にもどうか見せ場を！」

なにがなにやらワカラナイ展開になってきた。

そして――

「ほら、弟君も飲みなよ」

「なんで忘年会が始まってんだ」

「いいじゃねぇか。可愛い妹の笑顔を肴に飲むのもオツってもんだろ」

「なんでテンまで来てるんだ」

「そりゃおめぇ、酒がオレを呼んでいたからだよ」

「ふへへ、テンカせんせーもサンタ服着てくらさいよーっ」

「うあサユカ！　てめぇ酔ってるな！？」

「ほらほら、わたひのかしてあげまふからぁっ」

「ここで脱ぐな！」

「……くー」

「ふふ、サエ君もおねんねだね。可愛い寝顔」

「妻よ、好きだ！　一緒に飲もう！」

「はいはい、酔っ払っちゃって。もう」

こんな大騒ぎでも起きないカカ。

さて、どんな夢を見ていることやら……

「はっはっは、忘年会の会場はここですか？」

「キリヤさん、声が大きいですよ！　深夜なんですから」

「お皿の割れるような声よりはマシですよー」

「なんですってサカイさん！？」

「あなたのこととは言ってませんよー。自覚あったんですねー」

「キー！！」

「おさらじゃなくておさるだったんですねー」

「このキリヤ、僭越ながら審判をさせていただきます。レディー、ファイッ」

「おーおー、サラもサカイさんも頑張れぃ、やれやれぃ！　姐さんはどっちに賭ける？」

「やっぱサカイちゃんが勝つっしょ。お？」

「じゃーん！　良い子は寝る時間にも関わらずクララ登場です！」

「クララちゃん、あたしと飲もうぜぃ。桜の酒とかあるよん」

「クララ一気飲みです！」

こんな超騒ぎでも起きないカカ。

……ほんと、どんな夢を見ていることやら。

## カカの天下８３１「さわがしイブ」（後書き）

お話は翌朝のクリスマスへと続きます。

トメが依頼した二人というのはサエちゃんとサユカちゃんでしたとさ。正解者なし！　まぁ普通すぎて誰も予想してませんでしたね笑

プレゼントの内容、そしてカカの夢の結末は明日のお楽しみで。

## カカの天下832「みんなで手作りクリスマス」

「ふあ……」

起きました。カカです。

ぼんやりとする私の記憶が正しければ、今日はクリスマスのはずです。

つまり、私が目を開けて、枕元を見ればプレゼントが――

「くー……」

サエちゃんの寝顔がありました。

サンタ、ぐっじょぶ。

「これが私のものに……うへへ」

「ん、おはよーカカちゃん」

「うおぉ!?　お、おはよサエちゃん!」

「その手はなにー?」

「や、なんでも」

無意味にわきわき動かしてただけですよ。別にどこを揉みしだこうとか考えてはいませんでしたデスよ。

「まぁいいやー。いい夢見れた？」

「夢？」

うん、夢を見た。

「たしか……でっかいツリーからエセ外国人の生首が大量に降ってきてソレがいつの間にかサンタの顔になって爆発したと思ったら人面魚に変身して」

「うんうん」

「その人面魚がいきなりエロいポーズをとりながら汚いお金を請求してきつつ『愛ってなんだろう』って疑問を覚えながら魚体の筋肉が急成長。さらにどこからともなくマッチョの群れが現れてサンタ人面魚をわっしょいわっしょい胴上げしてお祭り騒ぎになったら『うるさい！』とか叫ぶ裸の侍が現れてソレらをばったばったと斬り捨て『ゲロゲーロ』って説教して腹筋三千回の罰を与えたら皆が腹筋しすぎで『ゲロゲーロ』って吐いてたんだけど私もやらされそうになってなぜかお父さんに殺意がわいて」

「なんでだろねー」

「そしたら天空から巨大なお母さんが降ってきて、全てを踏み潰して助けてくれたの」

「母は偉大だねー」

「ホッとしたのも束の間、なぜか見知った人がいっぱい出てきて忘

年会を始めて、そこから先は覚えてない――んだけど」

そこまで説明することで頭がハッキリしてきたのか、私は真っ先に浮かべるはずの疑問をようやく口にできた。

「なんでサエちゃん、ここにいるの？」

まさか本当にサンタさんに拉致されたわけでも……って、あれ。

「なんで私の部屋がスゴイことになってんの」

そう、スゴイことになっていた。この狭い部屋に見知った顔がうじゃうじゃ居て、思い思いの格好で雑魚寝している。周りには酒瓶や空きカンや色々と喰い散らかした跡が。

「えっと、サエちゃん？」

「んとねー、なんだかよくわからないけどココで忘年会が始まったんだよ」

説明が簡単すぎて逆にわかりません。

そんな私の意図が伝わったのか、サエちゃんもっと細かく説明してくれた。

「私も半分寝てたんだけど、大体は薄らと覚えてるよー。たしか……あれが『おさら』と『おさる』がどうとか言い合いの果てにお酒でヒートアップして殴り合いまで発展したけど一発ダブルノックアウトで両方ぶっ倒れたサラさんとうちのお母さん」

なにやってんの二人。

「あれが踊りまくり食べまくり飲みまくり飲ませまくり叫びまくり歌いまくり跳びはねまくりなぜか筋トレしまくり楽しくブリと遊びまくり空中浮遊まで披露してさすがに疲れたのか眠ってしまったカツコさん」

はしゃぎすぎ。

「あれが誰よりも酒を飲んだあげくに『クリスマスイブを素敵に過ごすカップルは皆、爆発すればいい』と叫びつつシャドーボクシングしながらニヤニヤしてたらすっ転んでくたばったテンカ先生」

いろんな意味で哀れ。

「あれが酔いに任せてカカちゃんに顔を見せようと思ってたけどやっぱり恥ずかしくて隠れ身の術を使おうとした際にテーブルに足をぶつけてしまい痛がりつつしっかり隠れたカカちゃんのお父さんの跡」

……結局顔は見れないままかぁ。

「あれが突然始まった忘年会に呆れつつも結局お酒を飲んで潰れたんだけど起こされてまた飲まされてまた潰されてーを八回繰り返したところでよろめき本棚に頭をぶつけて気絶したトメお兄さん」

随分なプレゼントをもらったねトメ兄。

「あれが桜のお酒を一気飲みで十五本空けたくせに平気な顔して眠りについたクララちゃん」

桜の妖精じゃなくてザルの妖精だったのか。

「あれが『今朝の仕込みがあるので』とそそくさと出て行く際にキリヤが少しだけ片付けていった跡」

あ、ほんとだ。よくよく見れば皿とかグラスっていう洗わなきゃいけないものがない。あとみんな捨てるだけでいいんだ、これは楽だ。

「あれがお酒を飲んでしまって着崩れたサンタ服を異様なエロさで着こなしつつ色んな人に絡みまくった末のサユカちゃん。と、それを介抱してるうちに寝ちゃったカカちゃんのお母さん」

二人ともサンタ服、そして二人とも服がはだけている。

「どう見ても事後」

「サエちゃん、それどういう意味？」

さー？　と笑うサエちゃん。教えてくれないらしい。今度トメ兄に聞いてみよう。

「そしてあれが」

最後にサエちゃんが指差したのは。

「サンタさんからのプレゼントだよ」

それは巨大でもなく、生首がなっているわけでもない、普通のク

リスマスツリーだった。鈴や綿、キラキラした飾りが可愛いツリー……ちょっと変わった点は、ツリーの各所で、小さな人形が木のてっぺんを目指してよじ登ろうとしているところだ。

普通に一生懸命登ろうとしているトメ兄人形はなぜか背中にハリセンを背負ってる。

そのトメ兄人形を真下から危ない目線で見つめながら頬を赤らめているのはサユカン人形。

サエちゃん人形は木の下で一休み中。登るつもりもないみたい。

お姉だけはなぜか首だけで吊り下がっている。

そしてそのツリーの頂上には、大きな星。

ピカピカ光る大きな星、それを抱いて満足そうに笑っているのが、多分私の人形。

「すごい……サンタさん、すごい！」

「サンタの手柄になるのかー……」

「ん？　サエちゃん何か言った？」

「喜んでくれたからいっか……んーん、なんにもー。よかったね、カカちゃん」

「うん！」

ここまで私がほしかったイメージにぴったりなモノをくれるなんて！　巨大じゃないのが残念だけど、許す！　嬉しいから許す！

「よし！　皆を起こそう！　裁縫道具出さないと」

「え、何するのー？」

「このツリーにいない人の人形を、皆に自分で作ってもらって飾るの！」

きっと賑やかなツリーになる。

「はいはい、起きて起きて！」

わすれちゃった夢の続きはこの後で。

そう。この後の素敵な時間も、もちろんプレゼントのうちに入るんだよね、サンタさん？

「ほらトメ兄、起きるのだ！」

「二日酔い……おえぇぇぇ」

……サンタの責任者、出てこい。

## カカの天下８３２「みんなで手作りクリスマス」（後書き）

クリスマス、皆さんはどうでしたか？

私は仕事でした。お金のないカップルと彼氏のできない女性客集団に囲まれていて割と地獄でした笑　まぁ職場がクリスマスにカップルがゆっくりする雰囲気の店じゃないので仕方ないのですが、それにしてもちょと辛かった＾＾；

カカたちのクリスマス、そこまで刺激はありませんが（多分）書いててけっこー羨ましかったり。これから皆でダラダラ人形作るんだろなー。

しかし最近、刺激の多い話書いてませんねぇ。まーカカ天は基本的にはのほほん話なので別にいいっちゃいいんですが。

もうすぐ来年。

せめて書き残しがないようにしたいなぁ。

# カカの天下８３３「とある不思議なおねーさんの年末」

よ、カツコだ。

愛すべき家族とクリスマスを過ごし、ご満悦なあたしだが……年末に近づくにつれて、ちょっとしんみりしてきた。

仕事は忙しい。しかし今年のことを振り返るとボーっと……うーん、これが歳をとったということかな。うあー認めたくねー。

うし、ちょっと気合いれるために面白いことしよっかな。

「なにしよっかねぇ」

……うし、決めた。昼間の商店街を目隠しして歩いてみよう。意味？　理由？　そんなものはいらない。

「目隠しはタオルでいいや」

さ、出発だ！

人が大勢行き来しているであろう道をカンだけで歩く。聞こえるのは雑踏と周囲の声だけ。

「ねーねーお母さん、あのおねーちゃん変だよー」

「こら、指さしちゃいけません！」

へー、変なおねえちゃんがいるのか。あたしは残念ながら目隠し

してて見えないなぁ。

お、今度は男子中学生の声かな。

「たった二人で来たのが間違いだったんだ……」

たった二人で来たのが間違いだったらしいですよ。何があったんだ中学生。

今度は女の子、幼稚園くらいの声かな？

「そんな愛はいらない」

どんな愛だクソガキ。

「……でも愛がほしい」

わぁうざい。ぶっ飛ばしてやろうかしら。

「――なーあ？　俺たち親友だよなぁ？」

む？　唐突にあたしの耳がそんなセリフをキャッチ。これは男子高校生くらいかな。

「今月はちょっと金欠でよぉ。貸してくんねぇかなぁ？」

「で、でも先月も、その前も」

「あぁん？」

「い、いえ……その……」

スタスタスタ、と声の聞こえる方向へ。

「四の五の言ってねぇで早く……あん？　なんだてめ――」

気に食わない感じの気配に向かってぱーんち。

「お、おいケンちゃん！？」

「何しやがるこのアマ！　変なタオルなんか巻いて！」

ムカ。適当にキック。

嫌なヤツ的気配を三人倒した。

「あ、ありがとうございます！」

「いいってことよ」

「お、お名前を聞かせてください！」

あたしは思った。こんな目隠しタオルでうろついているのがご町内に広まったら、結構恥ずかしいのではないだろうか。せっかく顔が隠れてるんだし、正体も秘密にしたほうがいいよね。

「正義の味方、タオル仮面！」

「ダサいですね」

おねーちゃんエルボー！！

「ぐほぁ！！」

「助けてやったのに何という口の利き方。身の程を知れ」

ていうかそんなこと言う度胸あるならカツアゲしてくるチンピラくらい跳ね除けろ。

さてさて、またもや周囲の気配だけを探りつつウロウロ開始。

そして聞こえてくるのはやっぱり人の声。

「なにぃ！？」

「なんですと！！」

「な、なんだってー！」

「なんじゃらほいさー！？」

なんだろう、何が起こってるんだろう。

とっちゃおっかな。このタオルとって、見ちゃおっかな。

気になる。すごく気になる。だってなんじゃらほいさーとか言ってるんだよ？

よし、とっちゃおう！

「終わった終わった」

「あぁ、いいもん見た」

終わったの!?　そんな!　ガッカリだ!

「え、なにこの人――」

「てい」

なんかムカつくからその辺にいる気配を全部はっ倒しておいた。

気を取り直してウロウロ開始。

「……あれ、寒い」

なんだか吹雪の中を歩いている気がする。気のせいかな?　どこまで来たんだろ。

「……あれ、暑い」

なんだか急に日差しが強くなったような。しかも足ざわりが砂っぽくなったような。砂漠?　まさかねぇ。

「……あれ、なんかふわふわする」

なんだか異空間にでも迷い込んだような。気のせい、だよね?

む、話し声がする。誰だ?　ここはどこだ……?

「ルッピルルルァぴキュらリアしけこめめソワカ！」

ほんと誰だ。何者だ。

「めっきりりりアミソシュせれメみケろぴくキュりじじゃ亜ｊ費オア．ｊ度派枝ひおｄじゃいおｈどいあふいおじゅれろなぐれ」

お。

「てい」

「ぷりきゅあ！？」

とりあえず『なぐれ』だけは解読できたので殴ってみた。

「オアでゅいあえウイうはおうウイいオアフィはおうフィオアフィおあしゅおｆはういおｓｇふいおあｓｙせんそーみあｓふぃお！」

おお。

「とりゃー！！」

『せんそー』だけは理解できたので、気合を入れて暴れてみた。

向こうは全滅した。

「変な手ごたえだったなぁ。何を相手にしたんだろ」

それは誰にもわからない。

そしてまたもやフラフラ歩き……ここで、気づく。考えてみればタオルを取ればよかったんじゃないか。ヤツらが一体何者なのか。お披露目だ！

「おりゃ！」

タオルを外した！

さて、ここはどこかな？

「む……？　あ、ここってたしか学校の近くだわ」

なんだ、結構歩いたと思ったけどそんなに離れた場所じゃないじゃん。途中で戻ってきちゃったのかね。いくらあたしでも目隠ししながら方向まではわかんないし。

「いないなぁ、あたしがぶちのめしたヤツら」

結構派手に暴れたと思うんだけどなぁ。変な空間にでも迷いこんだのかな？

ま、気にしないでおこう。たまにあることだし。

「あれ、トメのお姉さんじゃないですか」

「ほ？」

あまり聞き覚えのない声に呼ばれて振り向くと、そこにはやっぱり見覚えのないスーツ姿の男が立っていた。

「久しぶりですねぇ」

「あ、うん。そだね」

誰かわからん。でもこういうときはわかるフリをするのが相手のためってもんだ。忘れられると悲しいからね。

「相変わらずお元気そうで」

「あはは、まぁ元気ないあたしなんて便器がない便所みたいなもんだからね」

「それは致命的ですねぇ。でもま、たしかに」

「誰が便所だ！？」

「自分で言ったんでしょう……相変わらずですね、本当に」

んーむ、やっぱりあっちはあたしを知ってるっぽい。

「じゃ、俺は用事があるからこれで。トメに今度会いに行くって伝えておいてください」

「ん、わかったよん」

「それではまた」

去っていく男。

なんとなく、覚えがないわけじゃない、気もするけど思い出せな

い。

「最後の最後に変なハプニングだなぁ」

これだから思いつき行動はやめられない。

「……あ、カレーが食べたい」

今日はトメがカレーを作ってる気がする。根拠はないけどきっとそうだ。よし、乱入決定！

ついでにまたタオルで目隠ししして登場してやろう。

――今年も、多分来年も。こんな風に生きてるあたしです。

おまけ。

「カレーですね、どうぞ」

「誰！？」

「通りすがりのカレー好きです。さぁそこのタオルで目隠しの人、あーんしてください」

「あーん」

「はい、どうぞ」

「うめぇ！！　目隠し外していい？」

外した。

そこには誰もいなかった。

世の中は不思議がいっぱいです。

## カカの天下８３３「とある不思議なおねーさんの年末」（後書き）

不思議な年末の話なのか。

不思議なおねーさんの話なのか。

ええどっちもです。

この話を書いたきっかけは……道を歩いているときに男子中学生っぽい子らが自転車に乗りながら「二人で来たのが間違いだったんだ」と呟いたからです。

話の内容がマジ気になります。

# カカの天下８３４「よいお年を！」

こんにちは、カカです。今年がもうすぐ終わりですね。なんだか実感がわきません。

だから実感をわかせるために、皆に今年を振り返ってもらうことにしました。大晦日の昼下がり、知り合いへの自宅訪問を開始したいと思います。

まずはテンカ先生。

「テンカ先生、こんにちは」

「あたまいたい」

こんな挨拶初めて聞いた。

「あの、今年はどうでしたか？」

「飲みすぎた」

こんな一年の感想も初めて聞いた。

「忘年会に１８回も参加したのはさすがにやりすぎたぜ……」

……うん、そんくらいやったなら一年の感想が「飲みすぎた」でもいいかもしんない。

「じ、じゃお大事に」

「あーくそ、いてぇ年明けだぜ……」

自業自得。

あなたに習った言葉です。

さてさて、次は……お、向こうから歩いてくる二人は。

「キリヤ夫妻だ」

「まだ結婚してないわよ！」

「はっはっは、いつにします？」

「軽く聞くんじゃないわよ！」

仲良さそうで何よりです。

「ねーねーキリヤン、ユカさん。今年はどーだった？」

「はっはっは！　最愛の人と素晴らしい時間を過ごせました！」

「あーあーあー！　だからちっとは恥らえって言ってるでしょう！」

「じゃあこう答えましょう！　今年は天国と地獄だと！」

なんのこっちゃ。

「年末だからと羽目を外しまくるお客との激闘で傷つく私！　そし

てそれを癒してくれる天使！　口が悪い客の攻撃にやられ！　帰ればその客より口が悪い天使が癒してくれる！　次から次へと来るお客に圧倒され！　しかし帰ればなんだかんだで優しい天使！！　地獄の後には天国がある！　去年の天国は酒しかありませんでしたが、今年は愛する人がそこにいる！　私は幸せでした！」

「……キリヤン、酔ってる？」

「あー、年末の飲食店は激しいから疲れすぎておかしくなってるみたいよ」

そういやいつだったかトメ兄から似たような話を聞いた気がする。この時期のキリヤンは壊れると。

「ユカさんはどうだった？　今年」

「うん、ネタに困らなかったわ」

「……なんの？」

「ふふ、さぁね」

うーん、なんのことだろ。ユカさんとはそんなに喋ってないから、まだまだわかんないことがいっぱいだ。来年はもっと仲良くなれるといいな。

「ま、いっか。じゃ私のことは忘れてラブラブしてくださいな」

「はっはっは！　任せてください！」

「……そんなノリのまま年越せるの？」

「越せますよ！　多分店で洗い物をしてるあたりに！」

「はぁ、やっぱりか。せめて初詣は一緒にいこーね。あんたが生きてたら」

「はっはっは！　死んでもいきます！」

「死んだら行かないわよ、埋葬するわよ」

ユカさんてば本当になんだかんだで優しいよね。多分。

「妬ましい」

うわ何この黒いオーラ。振り向くとそこにはサラさんが。

「いいなぁいいなぁ、私も彼氏ほしいなぁ」

「その乳使えばいくらでも寄って来るでしょ」

「そんなんじゃ嫌なの。もっとロマンチックがいいの」

なんて贅沢な。

「そんなサラさんの残念な今年はどうだった？」

「残念って決め付けないでよカカちゃん！　私としては充実した一年だったんだからね？　家族とは仲良く過ごせたし、お仕事もいっぱいしたし」

「じゃあ男関係以外はよかったんだね」

「……来年の目標の方向性が決まったような気がするわ」

とぼとぼと去っていくサラさん。またトメ兄を狙ったりするんだろうか。はてさて。

とりあえず彼女は置いといて、おたく訪問を続けよう。

「誰がオタクよっ！」

そういうわけでやってきました、トメ兄オタクのサユカンち。

「トメさんの……あぁ、うん。それならいいわ」

いいんだ。

「サユカン、今年はどうだった？」

「残念な年だったわ……」

「そうなんだ」

「今年もトメさんと結婚できなかった」

しばらくできないはずだよ。法律的に。

「明日こそは！」

来年じゃなくてまず明日なんだ。すごいなぁサユカン。このパワーは見習いたい。

「んじゃねサユカン」

「え、もう行くの？　あがっていきなさいよっ」

「なんでさ」

「これだけしか喋らないのは寂しいじゃないの」

「……サユカン、この一年で少し素直になったかもね」

まぁ悪い気はしない。ちょっとお邪魔していこう。

――お茶を一緒して、しばらく喋って。適当なところでお暇し、次の目的地へ。

「あれーカカちゃん。大掃除を手伝いにきてくれたのー？」

「そんな面倒くさいことはしない」

ていうか言葉通りに年末大掃除してるんだね。まぁ家主があのサカイさんだからなぁ。

「ねね、サエちゃん。今年はどんな年だった？」

なんとなく予想していたことではあるけど、サエちゃんは満面の笑みで答えてくれた。

「お母さんと一緒に、すごく幸せな年を過ごしたよ」

そうだよね、念願のお母さんと一緒に過ごして、一緒に年を越せるんだもんね。いい一年だったに決まってるよね。

「もちろんカカちゃんとサユカちゃん、トメお兄さんと一緒だったのも大きいよー」

「むしろそれが全てだよね」

「そうかもねー」

快く頷いてくれるサエちゃんが大好きです。

「じゃ、サカイさんによろしくね」

「あいあいー。よいおとしをー」

サエちゃんの笑顔も見納めしたし、さてさて帰宅。

その途中。サエちゃんの笑顔を脳内でリピートする。

幸せな時間だ。

可愛かったなぁサエちゃん。最後の笑顔も最高だったなぁ。

……最後？　サエちゃん最後になんて言ったっけ。

あ。そういえば私、皆に「よいお年を」って言い捨てるの忘れてた。どうしよう。もう一度戻るのは疲れるなぁ。ん？　おお、いい

もん見っけ。

「おーいタケダ」

「うおお、カカ君!?」

冬休み入ってしばらく会わなかったからって、そんなに驚かなくても。

「タケダは今年、どうだった?」

「素晴らしい年だった! なぜなら! こうして声をかけてもらえる程の関係を、カカ君と築くことができたのだから!」

「そっか、よかったね。じゃあ私からお願いとかされたら嬉しい?」

「ああ、嬉しいとも! 頼み、頼まれる関係……それは素晴らしい友人関係ではなかろうか!?」

「うんうん、助け合いは必要だよね」

「そうともさ!」

「じゃあ今から私の代わりに『よいお年を』って言ってきて」

「む? どこへだ?」

「テンカ先生のうちとキリヤンちとユカさん……は病院か。あとサラさんちとサユカンちとサエちゃんち」

「なぜそんなに沢山!?　というか、そもそも根本的になぜそんなことを!?」

「言い忘れたから」

「め、メールで済ませればいいのでは」

「文章は心がこもらないでしょ。直接言わないと」

「俺が言ったらカカ君の心は直接伝わらないのでは」

「じゃあ私になったつもりで感情的に情熱的に心と愛と変を込めて言ってきてよ。あ、ちゃんと『カカから』って言ってよね」

「……えー」

「やれ」

「はい」

よかったよかった。これで問題ない。うちへ帰ろう。

「ただいま」

「おぉカカ。おかえり」

そういやこの人に聞いてないや。

「ねぇトメ兄、今年はどうだった？」

「んー？　おまえはどうだったんだよ。今年、楽しかったか？」

「うん」

「なるほど。じゃあ僕の一年は満足いくものだった、ってことだ」

「トメ兄、それはシスコンにも程があるお？」

「ほっとけ」

「ほっとけないお」

「ほっとけ！！」

皆さん、よいお年を！

# カカの天下８３４「よいお年を！」（後書き）

もう年が明けますね。

この一年。毎日更新は止めましたがなんとか書き続けることができました。最後くらいクリスマスから連続で書いてやろーと意気込んでいたものの、予想以上の忙しさで余裕が微塵もありませんでした。ヘトヘトです。

事情があるから仕方ないものの、飲食業やってて年末に引越しするのは自殺行為だと学びました。ハイ。

まぁ今月だけの話ではないですね。今年は全体的に仕事率が高く、こちらに力を注ぎまくることができませんでした。その分、カカたちに愛は注いだつもりですが笑

まだこれからも更新は不安定なままだと思います。とりあえずカカたちが中学に上がるまではなるべく頑張って書きたいと思っているので、どうか来年もお付き合いいただけたら嬉しいです。

また、この一年こうやって書き続けられたのも、やっぱり応援してくれる方々のおかげです。感想を返信する余裕もないのが心苦しいですが、この場で皆様にお礼を申し上げます。カカたちを見守ってくれて本当にありがとう。

私もキリヤと同じ年越しになりそうですが、皆様はどうかよいお年を！

# カカの天下８３５「今年も二人で」

「あけましておめでとう！」

「誰に言ってんだカカ」

「日本の皆に！」

「喪中の人がいたらどうすんだ」

「喪中って、去年に不幸があった人だっけ」

「そうそう。めでたくないぞ」

「んじゃこう言う」

「ほう」

「あけたから、おめでたいことあるといいね！」

「ん、いい子だ」

さて、こんな冒頭ですが皆様あけましておめでとうございます。
トメです。

「んじゃ初詣いこか」

「ういおー」

変テコな返事をするちっこい妹を連れて、いざ、いつもの神社へ。

「しかし珍しいな、初詣に誰も付き合わないなんて」

「皆、忙しいらしいねぇ」

毎年毎年わりと騒がしい年始を送っている僕らだが、今年は違う。誰にも「行こう」と声がかからないばかりか、こちらから「行こう」と誘ってもただ一人として付き合ってくれなかったのだ。

「……ま、神社に行けば誰かいるだろ」

「さぁねぇ」

「気のない返事だな」

「本当に皆忙しいみたいなんだもん。サエちゃんはまだ大掃除してるらしいし」

いつまでやってんだ。

「サユカンは家族で旅行だし」

おー豪華な。

「トメ兄だけだよ暇なのは」

「人聞き悪いこと言うな。僕は妹の世話で忙しいんだよ」

「じゃー今現在、何か世話してる？」

「とりあえず暴発しないか見張ってる」

「私、暴発するの？」

「するだろ。唐突に」

「暴発したらどうなんの？」

「なぜか笑いが起きる」

「いいじゃん」

まぁな。

「こっちも全滅だよ。テンは引越しするとか言ってるし、キリヤは元旦から仕事で死にかけてたし、姉はどっか飛んでったし」

「ユカさんは？」

「……彼氏が働いてる隙に元彼が初詣に誘うってのはいくらなんでも」

もごもご言いながら歩く。そもそもあいつと喋るのは気がすすまないんだよなぁ。昔のこともあって関係が微妙なままだし。

「ゲンゾウ三兄弟は？」

「あのおっさんたちと初詣したがるおまえをちょっと尊敬するよ」

誘う度胸、僕にはない。

「まぁ、そんなわけで寂しいだろうが堪忍しろ」

「や、別にいいけど」

おろ。

「何、その意外そうな顔は」

「や、毎年激しい正月だったから、てっきり物足りなさそうな顔すると思ってたから」

「トメ兄がいるじゃん」

「僕に激しくなれと？」

それは難しい注文だ。僕には懐からブリを出す能力や獅子舞でかみついて着替えさせる特技なんて無い。

「トメ兄？　おーい、何考えてんの？」

「僕には何ができるんだろう」

「なんで正月早々に重いこと言ってんの」

「や、でもさ。他にも誰か、いたほうが」

「なにさ。トメ兄は私だけじゃ不満だっての？」

「は？　や、全然そんなことはないけど」

「今までだって、ずっと二人でやってきたんじゃないの。今年も一緒にやってくんでしょ？」

「お、おお」

「私ら二人いれば充分でしょ」

「……そだな」

何が充分なのか、いまいちわからないけど素直に頷く。そかそか、そうだよな。なんだかんだで二人で暮らしてきたんだ。今年だって――

「カカ、今年もよろしくな」

「うん」

そして誰にも会うこともなく神社へたどり着き、おみくじを引く。

「お、大吉だ」

「やったねトメ兄」

「よかったですね、トメさん！」

おお、サラさんじゃないか。そっか、この人は毎年巫女やってる

から神社にくれば会えるよな。相変わらず紅白鮮やかでよく似合ってる。

「あけましておめでとうございます、トメさん。カカちゃん」

「おう、あけましておめでとうサラさん」

「おめっとー。ねね、サラさん。ちょっとこっち来て」

「なんですか？」

無防備に近づいてくるサラさん。

カカは突然、彼女の胸倉を掴んで――

「ポロリとな」

その胸元を開いた！！

「……ォウ？」

「……ワォ」

僕とサラさんは妙な音を出した後、顔を爆発させた。

「なななななにをするんですかぁ！！」

「新年だからめでたくいってみた」

「私は全然めでたくないですよ！　と、トメさん、見ました？」

「見ました！　しっかり見ました！」

「そこは見てませんって言うところでしょう！」

「す、すいません、動揺して！　カカ、おまえなんてことを！」

「トメ兄が『今年はよろしく』とか言うから仕方なく」

「ちっがぁう！！　意味ちっがぅ！！」

「ほら、トメ兄のおみくじにも『色恋――ポロリが見れる』って書いてあるよ。さすが大吉」

「んなわけあるかぁ！！」

……そうだよな、忘れてた。

こいつ一人いれば充分すぎるほど激しい展開になるんだった。今年も今年で、どうなることやら。

まぁ、今年もよろしく。

「ん、もっかいやればいい？」

「やらんでいい！」

## カカの天下８３５「今年も二人で」（後書き）

改めまして、皆さんあけましておめでとうございます。

ようやく初カカ天です。いやー、私は一つ学びました。

飲食業をやってる身で年末年始に引越しするのは阿呆なことだったんですね。

いや、薄らとわかってはいたんです。でもいけると思ったんです。

年末年始ぶっとおし営業とか雪がどっさり降ったりとか無ければチョー余裕だったはずなんです。畜生。

……なんのせクタクタであります。しかし、しかし！　今年はカカたちにとって大事な年！　中学に上がる年！　レベルアップする年！　こんくらいでヘバってるわけにはいきません！

景気付けに今から飲んできます！（ぇ

というわけで皆さん今年もよろしくお願いします！　乾杯！！（はや

……でも心残りが。

私自身は初詣にいけなかった……つまり……巫女さんが見れなかった……明日の昼に行くつもりだけど、見れるといいなぁ……

# カカの天下８３６「早く終わって始めてください」

あけましておめでとうございます、サエですー。

そう、新年が始まりました。なのに私は未だに大掃除の真っ最中、まだ初詣にも行けていないのですー。それというのも……

「さぁ、今日は二階を片付けるわよー！」

「どこまでもお供します、ミエ様！」

この二人が去年からずっと頑張っているからなのですー……

「ねー二人とも、もう充分に掃除したじゃないのー」

「いえ、まだよ！　甘いわねサエ」

「そうです！　年末大掃除を完璧に終わらせてこそ、本当の新年が始まるのです」

「よく言ったわゆーた」

困ったことに、こんな風に言い張って聞かないのですー。私の新年が始まらないのですー。

「なんでそんなに頑張るのー……」

「ふ、知れたことを」

うん、知ってる。何度も聞いたー。

「私がたまたまネットでハウスダストに関するホームページを見たときにちょうどサエがくしゃみしたから『もしかしてウチってヤバイ？』と思ったのよー」

そして聞くたびに言いたくなる。それだけ？　って。

「考えてみればウチって、清潔に躾けてあるとはいえ動物が闊歩してるし、やたらと広いから少しくらい散らかってても気にならないし、だから掃除とかしないし、そのわりに私もサエもインドア派だから家に居ること多いしー」

「あぁ、ゾッとします。サエさまがハウスダストのせいで事あるごとに『くちゅん、くちゅん』とくしゃみする光景を想像すると……萌える！」

「じゃーいーじゃん」

「何を言うのです！　萌えにも限度があるのです！　ねぇミエ様！」

「サエが、くちゅん、くちゅん……萌え死ぬ！」

「ええ！　世界中の人間が萌え死ぬことでしょう！」

「これは世界の危機！　いくわよーゆうた！」

「お供します！」

おおげさなことを叫びながら掃除を始める二人。でもこの二人の

掃除はねー……

「さ、ミエ様。ここの棚をどかしますぞ」

「お願いー。やっぱり力持ちがいると便利ねー」

身体のおっきいゆーたが重い家具などをズラして、お母さんが掃除をする。そういう役割分担で、一見は適材適所に見えるんだけど。

「おっと」

バサバサバサ！！　ゆーたの肘が、机の上に積み上げられていた本や書類をなぎ払う。その紙々はまるで吸い込まれるかのように掃除中のお母さんの手元へダイブした。

「あー！　汚くなったー！」

「す、すいません！」

まずゆーたの欠点。身体が大きすぎて不器用だから、物を動かす以外でことごとく邪魔になる。

「もー、仕事を増やしてー！　えっほ、えっほ」

そして、ぶちぶち言いながら拭き掃除をする、お母さんの欠点は……

「ふー……ふー……はぁ、はぁ……ぜー、ぜー。疲れた。やすもー」

体力がとことん無いのです。でも拭き掃除って結構疲れるよねー。

「おっと」

バサバサバサ！　またやった。

「こらゆーた！」

「すいません！」

えっと、ともかく、そんなわけです。ハッキリ言ってものっすごく効率が悪いのです。掃除の才能が皆無なのです。この数日で一階の掃除が終わったのが奇跡です。

「あれー、そういえばお母さん」

「へっきし！！」

「そんな返事やだー」

「ミエ様、もっと可愛く！　ミエ様ならできます！　元が可愛いから！　腹ではどう思おうと上っ面を綺麗に取り繕うのは何より得意なはずです！　サエ様と同じです！　さぁ！」

「ゆーた、ちょっと黙って」

「ハイ喜んで」

「ねーお母さん。最近掃除ばっかりしてるよねー？」

「ええ、命かけてるわ」

体力的にね。

「それでさ、思ったんだけどー。仕事は？」

「あ」

……なに、その「あ」って。

「忘れてたー。てへ」

「本当に命かけてたのー！？」

もちろん生活的な意味で！

「だ、大丈夫よー。お正月休みっていうのがあるしー。いつからいつまでだったか忘れちゃったけどー」

「調べて！　いますぐー！」

「そんなに慌ててもー。もう遅いんだから結果は変わらないよー」

「いいからー！」

ほんっとにもー、お母さんは一つのことに熱中しすぎるんだよねー。まぁ、それが私のため、っていうのはわかってるんだけど。

「……んー、仕方ない。私もお掃除やるかー」

私も体力が無いから、手伝っても邪魔になると思って手を出さな

かったんだけどー。

実は面倒くさかっただけなんだけどー。

このままじゃいつまで経っても終わらないしねー。よいしょっ、バケツに水を入れてっと。

えっほ、えっほー。運び運び。

よし。まずはここからだ。

「さーパコちゃん。綺麗にしましょうねー」

とりあえずバケツいっぱいの水を、パソコンのパコちゃんにぶっかけ――

「サエェェェェェェェェェェ！」

あまりに切迫した声が聞こえたので思わず踏みとどまる。

「何してるの！？」

「え、パコちゃんの掃除だよー」

「ダメよ水なんかをかけたら！」

「そうなのー？」

「ええ、よーく考えてみて！」

よーく考える。

そして気づく。

「そっか」

「わかってくれたのねー」

「お湯じゃないと」

「関係ない！！」

「あ、お風呂場じゃないとー！」

「根本的に違うのー！　なんでサエは機械が関わるとおバカになるのー！」

む。おバカって……そこまで言わなくてもー。

「ミエ様、私は大変なことに気づいてしまいました」

「どうしたの、ゆーた」

「おバカなサエ様……萌えませんか！？」

「ハッ……！　私としたことが！　確かに！　普段とのギャップ萌え！」

ぷー。またバカって言った。

「あぁ見てくださいミエ様！　サエ様が！　サエ様が拗ねてぷーっと頬を膨らませています！」

「きゃー！！　可愛すぎるぅー！」

「ミエ様！　鼻血！　大量の鼻血がショットガンのごとく発射されてます！」

……結局、その日は鼻血の掃除をして力つきましたとさ。

ねー、私の新年いつ始まるのー？

## カカの天下８３６「早く終わって始めてください」（後書き）

私事ですが、ようやく引越しが終わりました。

この年末年始……仕事場では激闘、その後に引越し作業＆掃除、というのを繰り返し、もう疲労困憊でヒーハー！　って感じです。新年始まっても掃除掃除……で、なんかやさぐれたのでサカイ家も同じようにしてやりました（鬼

でもまぁ、飲食店が忙しい時期は過ぎました。引越し先の荷物整理も落ち着いたら、少しは執筆ペースもあげれると思います。

この子たちみたいに新年が始まっていないキャラもいますし、なるべく早く初書きしてあげたいと思ってます。またよろしくです＾＾

とりあえず次は誰の話かこっかなー。

# カカの天下８３７「ここはもうすぐ始まる模様」

皆さんあけましておめでとう！　サユカです！

え、もう「あけましておめでとう」って日でもない？　いえいえっ！　わたしのお正月はまだ始まったばかり！　え、もうお正月っていう時期でもない？　うるさいわっ！

とにかくわたしの新年は初夢を見ないことには始まらないのっ！

もう元旦を越えて数日が経ったわ……なのに全然夢を見ない。でも今日こそはっ！　と部屋のベッドの上で一人、意気込んでいるわけなのよっ！

初夢に縁起がいいっていうのは確か……富士山、鷹、なすびよね。

もし、富士山の夢だったら……

――夢の中（妄想）。

「やぁ、サユカちゃん！」

「その声はトメさんっ！　どこ？　どこにいるの！？」

「ここさ！　僕は富士山になったんだ！」

「わぁ、おっきい！　なんで富士山なんかになったんですかっ？」

「きっと牛乳を飲みすぎたせいだ」

「牛乳は身体を育ててくれますもんねっ！」

「まさか身長が３７７６Ｍまで成長するとは思わなかったけどね！　こんな僕だけど、好きでいてくれるかい？」

「もちろんですっ！　トメさんが富士山なら……わたしは雪になります！　万年雪となってあなたとずっと一緒にいます！」

「寒いからヤダ！」

「じゃあ太陽になります！　あなたをずっと照らし続けます！」

「暑いのもヤダ！」

「きゃーっ！　わがままなトメさんってレア！！　かわいいっ！！」

「……とても幸せな夢だわっ！」

妄想から現実へ戻ってきたわたしはベッドの上で無意味に激しくゴロゴロした。

「じゃあ、鷹だったら？　んーと」

――夢の中（妄想）。

「いやぁ、今日もいい天気だなぁ」

そんなことを呟きながら飛んでいるハトがいました。

「やぁ、僕はハトのトメ。略してハトメさ」

誰にというわけでもなく、なぜか自己紹介するハトメさん。

「でもこれって鷹の夢じゃなかったのかな。なんで僕がハトとして登場しているんだろう」

それはね、わたしが鷹としてあなたを狙っているからですよ。

「いただきまーす」

「ぎゃあああああああ食べられるうううううう！！」

「心配しなくていいですよ、アッチの意味でしか食べませんからっ」

しっぽり♪

「……へへ」

妄想から現実へ戻ってきたわたしはいつの間にか踊っていることに気がついた。喜びの舞だ。

「しゅわっち！」

ポーズのキレも絶好調だ。

「じゃあ、じゃあ、なすびはっ！？」

――夢の中（妄想）。

「さぁできたよ」

麻婆ナスを作ってくれる美味しそうなトメさん。

あれ、なんか文章おかしい？

いやあってる。絶対あってる。

「召し上がれ」

「いただきますっ！」

「え、や、僕じゃなくて――」

モーレツゥ♪

「へへ、へへへ、ふへへへへ」

妄想から現実へ戻れないわたしは自分がどうなってるかわからなかった。

「もう……サユカ！　うるさいわよ何時だと思って――」

お母さんの声が聞こえた気がした。

「またなの？　程々にして早く寝なさいよ」

聞こえたような聞こえてないような……でも結局わたしはそのまま寝てしまった。

そしてその日、ついに初夢を見た。

その結果は！

『ふじたかトメ』という名のおばあちゃんを「おたんこなす！」と罵っている夢だった。

縁起がいいんだか悪いんだかわからない。

誰か教えて？

## カカの天下８３７「ここはもうすぐ始まる模様」（後書き）

初夢、皆さんは見ましたか？

私はゾンビに追いかけられ、殴ったり斬ったりして応戦するという素晴らしい夢を見ました。

こんな初夢を見た私の一年はきっと薔薇色に間違いないですよね？

間違いないですよね？（大事なことなので二回言いました

# カカの天下８３８「そして始まる終わりの学期」

よう、テンカだ。

冬休みも終わり、今日から学校が始まるぜ。あーだりぃ、もっと家でゴロゴロしてぇ。まぁ教職員には大した冬休みは無いんだけどよ、授業が始まるとめんどくせぇんだわ、やっぱ。

本当に、面倒くせぇんだ。

あーだりぃ、帰りてぇ。

「テンカせんせー、思ってることがダダ漏れですよー？」

おっといけねぇ、もう教室に生徒が集まってるんだった。おはようとか言うのも忘れてたぜ。よし！

「おはよう、てめぇら！」

『おはようございます、テンカ先生！』

「あけおめ、てめぇら！」

『あけましておめでとうございます、テンカ先生！』

「うるせぇぞ、てめぇら！」

『すいません、テンカ先生！』

相変わらず何の集会なんだかわかんねぇな。

「あー、めんどくせぇ」

「いきなりそれですかっ」

「いや、授業が始まるのもめんどくせぇんだけどよ、それはいつものことだ」

「他に何かあるんですか」

「わかんねぇか？　この三学期が終わればてめぇら皆、卒業なんだよ。つまりオレとはお別れなわけだ」

「え。テンカ先生、留年したの！？」

「……カカ、人聞きの悪いこと言うな。小学校の先生と中学校の先生ってのは違うんだ」

「つまりテンカ先生の素行が悪くて卒業できないと」

「人の話聞いてんのかてめぇ！」

「確かにテンカ先生の素行は悪いわね」

「アヤ坊、そこは問題じゃないってば。確かに先生の素行は悪いけど」

「あー、好きに言えクソッタレ。ともかくてめぇらがいなくなるのが色々と面倒くせぇんだよ」

なんとなく察したのか、クラスは黙り込んだ。

「てめぇらが卒業したら、オレは新たな生徒たちを受け持つことになる」

「……」

「名前を覚えるのがめんどくせぇ」

『そこ!?』

あまり察せていなかったらしく、クラスは喚いた。

「んだよ、オレがてめぇらの名前を覚えるのにどんだけ苦労したか知らねぇからそんなことが言えるんだ」

「んー、そもそも今ちゃんと覚えてるか疑問ですがー」

「言うじゃねぇかサエ。オレのことバカにしてんだろ?」

「はいー」

「……ほんとに言ってくれるな」

「じゃあこの男子の名前はー?」

サエが問題を出してきた、指されたのは確かに目立たないタイプの男子。しかしオレは担任として、人として、名前を間違うわけにはいかないのだ。

「ふ、オレをなめるな」

「答えは？」

「坂〇」

「なんで伏字なんですかぁ！？」

坂〇が叫ぶ。うるせぇ。

「んー、正解！」

「ちょっとサエちゃん！？　なんで正解なんですか、ボクの名前は――」

「じゃあ次の問題です、この子はー？」

坂〇は無視して、次に指されたのはまたもや地味な男子。

「T尾」

「だからなんで伏字なんですか！」

「何かやっちまっても本名が載らなくて大丈夫だろが」

「何もしませんよ！」

「ま、何もやってないから覚えられてないんだろうね」

一番イロイロとやらかしてるカカが言うと説得力あるな。

「じゃーこの男子の名前はー？」

「岡Ｐ」

「プロデューサーか何かですか、俺は」

「ねぇニッシー、おかピーって意外といい感じじゃない？」

「あだ名の誕生だな」

おお、オレってば生徒の個性を育てちまったらしい。さすがは教師だな。

「ま、アレだ。卒業するまでに本名を覚えてもらえるように頑張れよ」

「……それを先生が言うのはどうかと思うわっ」

「諦めなよサユカン。アレはああいう先生だから」

「そーそー。なんだかんだ言って絶対に卒業式になったら泣くだろうしねー」

カチンときましたねコレわたし。

「サエ、今、なんて言った？」

「なんだかんだ言いました」

「そうじゃなくて！　オレが泣くとか言ってなかったか？」

「泣きますよー」

「このオレが？　ハッ、絶対にないね」

「ほほー。そこまで言うなら……泣いたら私たちのいうことを一つ聞いてもらいますよー？」

「おぅ、望むところだ」

「じゃー卒業式で、テンカ先生が泣いたら」

ここに来てようやくハメられたことに気づいたオレは、頭が悪いのだろうか。

「泣いたら――中学までついてきて、私たちの先生をやってください」

そんな無茶な申し出に、大見栄きってしまったオレは頷くしかなかった。

卒業式は何が何でも泣けねぇ。

もし泣いちまったら、そんときゃ……死ぬ気で頑張るしか、ないのか。

「テンカ先生」

「教頭」

「無理ですからな」

釘を刺された。当然だ、オレが教室でのことを相談したんだから。

……相談してる時点で、バカみたいだが。

「あぁわかってるよ、うっせぇな。いいだろ、相談するくらい。ちっとぐらい夢みたっていいだろが」

「生徒が？　それともあなたが？」

「うるせぇっつーの」

あー、やっぱ泣けねぇなぁ卒業式。

……涙の卒業式ってのは嫌いじゃなかったんだがなぁ。

## カカの天下８３８「そして始まる終わりの学期」（後書き）

久々に連日更新などしてみました。

さーどうするテンカ先生。イロイロと無茶やるカカ天だけど、そーうまくはいかないぞー。

はてさてどうなるやら。

# カカの天下８３９「さんぽ、散歩、惨歩」

ども、カカでーす。

今日は理由もなく早起きしてしまったので、外へ散歩に出てみました。かなりの寒さながらも天気はよく、日光を浴びながら歩くと気持ちがいいです。

そして同意見も人も多いのか、ジョギングや犬の散歩に繰り出す人達がちらほらと見受けられました

「お、あの犬かわいい」

向こうから歩いてくる子犬と目があった。もちろん飼い主に首輪と紐で捕まってるけど『俺は自由だぜ、遊びたいぜ、舐め回したいぜ！』っていう顔をしていた。

「おお、こっちにくる」

飼い主のおばさんをぐいぐいと引っ張り、じーっと私に目を合わせたまま突っ込んでくる。なんだ、やるのか。

「こ、こらこら」

飼い主さんは困ってる模様。

「けって！」

蹴って？　や、いくらなんでも突然そんな。

――戸惑っているうちに子犬は目の前。勢いを殺さずに飛び掛ってくる。

「けって！」

うん、そこまで言われちゃ仕方ない。私は目前に迫る子犬をサッカーボールのように蹴り飛ばした。

きゃいん！？

やはり子犬、勢いは鬼でも鳴き声（泣き声？）はかわゆい。

でも本当のボールのように転がっていくワンちゃんを見て、ちょっと可哀想かなぁと思ったけど……飼い主の許可をもらったんだし、いいよね？　そんなことを思っていたとき。

「何するの！？」

なぜか飼い主のおばはんに怒られた。

「え、だって。蹴って、って言うから」

「ケッテはあたしの犬の名前よ！！」

そんな変な名前つけるな。

そう言いたかったけど我慢した。私はもうすぐ中学生。これ言ったらおばちゃんが怪物化する、そして厄介になる……そんなことくらいはわかるようになったのだ。

「全くもう！　なんで皆あたしの犬を蹴るのかしら！？」

なんで原因がわからないのか問い詰めたかったけど止めておいた。

私は少しだけ大人になったのだ。

おばちゃんと子犬に謝り倒し、再び歩き始める私。

子犬には可哀想なことをしたなぁ。でも最後に『もっと蹴って』って顔してたような……気のせいかなぁ。

と、またもや前方から散歩中の犬が。今度は少し大きい。そしてまた目が合った。

さらに突進を開始する犬。私って今日は犬に好かれる日なんだろうか。それとも嫌われてるから襲われるんだろうか。

「なぐって！」

飼い主が叫んだ。しかし私は大人（になりかけ）。ちゃんと学習するのだ。

「この犬の名前がナグッテなんですか？」

「何言ってるの！？」

ああ、違うのか。じゃそのまんまの意味でとるね。とりゃ。

ぎゅわいん！！

かわゆくない声をあげて吹っ飛んでいく犬。ふ、私の右腕は今日

も絶好調だぜ。

「何するのよ！？」

「えぇ！？　なんで怒るの」

「いきなり他人の犬を殴るなんて！」

「だって殴ってって言ったじゃん！」

「この子はナグッテって名前なのよ！」

「えええ！　最初に確認したのに！」

「そのときは『何言ってるの！？　その通りよ！』って言おうとしたのよ！」

「もうちょっと文法を守ろうよ！」

とにかく謝り倒して、散歩を再開した。

そしてまたもや前方から以下同文。今度はでっかい犬だ。

「ニゲテ！！」

私はもう騙されないぞ。だって今回はわかりやすい。カタカナ表記だよ？　これは名前だとバラしているようなもんだ。だから私は何もしない。

「もきゅ！？」

何もしなかったら顔面にボディープレスをくらい、思っきし押し倒された。

「オゥ、ダカラニゲテトイッタノニ」

飼い主は喋ると全部カタカナ表記な外人だったなんて、誰が想像できただろう。

とにかく私はさんざん舐め回された後、フラフラになりながらも散歩を開始した。

そして前方以下同文。

「だいて！！」

もうわけがわからない。

そんなこんなで波乱万丈な散歩を終えて帰宅すると……トメ兄が待っていた。

「お、カカ。こんな朝早くからどこ行ってたんだ」

「ちょっとね……トメ兄は？」

「ん、軽く散歩でもしようかなぁと。おまえもいくか？」

「トメ兄が私を散歩させるの？」

「……なんだ、その飼い主と犬みたいな言い方は」

や、今朝のことを振り返ると、どうしてもその構図が。

「まぁなんでもいいや。いくぞ」

「けって！　なぐって！　だいて！」

「何をとち狂っとるのだオマエは」

「散歩といえばこうなんだよ。私は今朝、学んだんだよ」

「何を言いたいのかさっぱりわからない。どうしよう」

「なによぅ、じゃあトメ兄にするよ」

「何を」

「蹴る。殴る。血が抱く抱く」

「字が違う」

そんな風に始まる私の一日。

## カカの天下８３９「さんぽ、散歩、惨歩」（後書き）

皆さんも名前をつけるときは気をつけましょう。

## カカの天下８４０「浮気事件発生!?」

「大変ですトメ君!」

「あい?」

どうも、呼ばれたトメ君です。今日も今日とて鼻歌まじりに夕飯の用意をしていたのですが、唐突にキリヤが乱入してきました。

「実は……実は……」

「おう」

「ユカさんが浮気したのです!」

「ざまぁみろ」

「トメ君!?」

おっと、つい本音が。

「や、ほら。独り身としては彼女持ちの不幸は蜜の味なわけで」

「トメ君!　私たちは親友ではなかったのですか!?」

うお、必死だ。ここまで余裕がないキリヤも珍しい。

「はいはい冗談冗談。詳しい話を聞かせてみ?」

「実は！」

「ざまぁみろ」

「トメくぅぅぅぅぅぅん」

本当に余裕ないなコイツ。珍しいからもうちょっと遊びたいな。

「うぅぅぅぅ」

「あー、悪かった悪かった。ちゃんと聞くから話せ」

前言撤回、ここまで落ち込んでるヤツに追い討ちは残酷すぎる。

「実は、先程のことなのですが……散歩していた私は喫茶店でお茶をしているユカさんを発見したのです。私は気さくに声をかけようとしました、しかしできませんでした。なぜなら男性と一緒だったからです！」

「ほうほう」

「私の知らない男性と二人で、楽しそうに笑っていたのです！」

「ほうほう」

「ひどいでしょう！？」

「え、それだけ？」

「はい！」

……こういうのは誤解ってパターンが九割だよな。

「なぁキリヤ。ちゃんとユカと話したりしてないのか？」

「恐くてできません！」

「落ち着け。きっと誤解だ。ユカだって友達くらいいるだろ」

「あんな性格で友達なんかいるはずありません！」

そこまで断言しなくても……あーでもユカに友達いないって話はどっかで聞いたような。

「じゃあ仕事の仲間とか？」

「いや、それはないです」

断言するなぁ。ていうかあいつ、何の仕事してるんだろ？

「まぁいいや。それで？　キリヤは僕にどうしてほしいんだ」

「……どうしましょう」

「何も考えず相談に来たのか」

「とにかく動揺しちゃいまして」

うーん、今までこいつのユカに対する態度は余裕綽々だったけど、じつは熱烈に恋愛してたんだなぁ。

「どれくらい動揺しているかというと、土足でトメ君の家にあがってしまうくらいです」

「とりあえず靴を脱げ」

「はい」

「コラ、脱いだ靴をテーブルに置くな！　汚れるだろが！」

「はい」

「僕に渡されても困る」

「はい」

「調理中の鍋に入れるな！！」

なんだこいつは、カカみたいになってるぞ。

「とにかく動揺してまして。だってユカさんは綺麗です。綺麗な女性は油断なりません」

愛とはここまで人を狂わせるのか……と思いつつ「コイツわざとやってるだろ」と思ってしまう。

「この煮物おいしいですね」

「やっぱりわざとやってるだろ！」

「だって不安で。ユカさんが私以外の男を食ってると思うと」

「だからっておまえがウチの夕飯を食うことなかろうに」

調理中の夕飯を勝手に摘まむキリヤを止めつつ、どうしたもんかと考えてみる。

……結論。僕が下手に口を出すとロクなことにならなさそうだ。

「とにかくだ、ユカと話をしてみな。もし勘違いだったら気を悪くするだろうから、さりげなくな」

「わかりました……あ、もしもしユカさんですか？」

行動力ありすぎだろオマエ。

「ええ、実は聞きたいことがありまして」

「さりげなくだぞ、外堀から少しずつ埋めていく感じで」

「浮気してます？」

「特攻隊かおまえは」

いくらなんでも直球すぎるだろが。

「なるほど、それでは！」

しかも電話終わるの早いし。

「で、どうだったんだ？」

「誤解でした！」

「ほほう。詳細は？」

「わかりません！」

「……は？」

「とにかくあれは浮気じゃないとユカさんが言いました。だから浮気じゃないのです！」

「おまえ、それ言われただけで信じて終わりか」

「もちろんです」

「思ったよりイロイロと簡単な男だな、おまえ」

「好きな女性を信じずして何が男か！」

「つい一分前まで自分がどんなことを口走ってたか一文字違わず言ってみろ」

「私はユカさんを信じています！」

「そんなセリフは一言も口にしてないだろ！」

「お騒がせしましたトメ君！　では」

去っていきやがった……本当にお騒がせだよ、なんだったんだアイツ。

「ま、いっか。夕飯の仕上げを……あれ」

夕飯が、ない。

キリヤ、全部食ったのか？

「あいつ、なんだかんだで夕飯たかりにきただけじゃないのか？」

また作り直しだよ、全く……でも本当になんだったんだろ。

## カカの天下８４０「浮気事件発生!?」（後書き）

キリヤさんもたまには暴走するのです。

愛は人を狂わせるのです。

私も昔は……まぁ深くは語りませんが笑

皆さんもキリヤみたいな恋愛してくださいね！（よくわからない煽り

しかし久々に更新いっぱいした気がする＾＾

もっとやろ！

# カカの天下８４１「カカ天クエスト、ＥＰ１５」（前書き）

注意：このお話はカカ達がゲームのキャラになりきりながらＲＰＧを進める話です。話の内容はゲームの中ですが、『もしもカカ達が異世界にいたら』みたいな感覚でお楽しみください。

ステータス

カカ　　ボケ勇者　　レベル１　へん
サエ　　悪の魔法使い　レベル１　はらぐろ
サユカ　手の平の踊り子　レベル１　さびしんぼう　エロレベル４
トメ　　ツッコミ　　レベル１　つっこみ　？？？
ケロリン　スライム　　レベル４０　おっさんくさい　超ゴミ

またまたかなーり間を空けましたので、７６６話と８２４話を読むことをオススメします。

# カカの天下８４１「カカ天クエスト、ＥＰ１５」

善いことを全くせずに金を巻き上げたりして街を闊歩する勇者カカの一行。そして魔物にも関わらず善行を積み、本物の（ここ重要）勇者として持ち上げられたケロリン。

本物と偽物の勇者が、いま激突する！

「さぁ、勇者ケロリン様！　やつらを倒してくださいまし！」

「お願いします、勇者様！！」

「偽物は出てけー！」

街人の声援が響く中、対峙するカカたち一行とケロリン。

「ケロリン、どういうつもり？」

「私たちに逆らうのー？」

「裏切る気なのねっ」

カカたちはおこっている。

「……いや、俺様もわけがわからんままココに来たんだよ」

ケロリンはとまどっている。

「俺様としては街人なんざどうでもいいから、さっさとそっちの仲

間に加わりたいんだが」

ケロリンは上手いことカカたちだけに聞こえる声で囁いた。

「でもそんなことしたら街人にとっての裏切り者になるよ」

「これだけ期待されてるんだから、それはそれは冷たい目で見られるわねっ」

「仕方ないねー。八百長しますかー」

戦闘が始まった！

「よし、いくぜ！」

ケロリンのこうげき！　わざとミス！！

「じゃ、私がいくよ！」

カカのこうげき！

かいしんのいちげき！！

ケロリンに０のダメージ！

ケロリンは自分で吹っ飛び、身体を地面にたたきつけた！

２２５のダメージ！　ケロリンは気絶してしまった。

カカたちの勝利！！

「あああ、勇者様がやられた！」

「この街は……この街はおしまいだぁ！！」

街人は絶望した！

「……ねぇ、サエちゃんサユカン。私たちってそこまでヒドイことしてたっけ？」

「んー、街中のエロ本を取り上げたのがいけなかったんじゃないかなー」

「どんだけエロが大事なのよ！」

「そのエロ本を全部手にしているサユカンに言われても」

「君たちが持たせたんでしょうがぁっ！　大体いまは持ってないわよ、全部古本屋に売り払ったんだからっ！」

「……ん？」

カカたちはふと黙り込んだ。周囲の様子がおかしい。

「あぁ、勇者様がやられてしまった」

「こうなったら街が生き残る方法はただ一つ」

「あの魔王様たちに絶対服従するしかない」

「魔王様！」

「魔王カカ様バンザイ！！」

街人は盛り上がっている！！

「え、ちょっと？　私たちって、いちおー勇者なんですけど」

「どうすんのよカカすけっ！　君が変な行動ばっかりしてるから勘違いされたじゃないのっ！」

街の人々が仲間になった！

「仲間になりすぎでしょっ！　何人いるのよっ」

街の総人口１２６８人が全て仲間になった！

「多いわっ！　普通の街で考えるとそうでもないけどＲＰＧではありえないくらいに多いわよっ！」

「どうしようサエちゃん！」

カカはサエに応援を求めた！

「んー……」

サエは困ったように笑った！

「おお、なんという可愛らしい笑顔じゃ！！」

「あの魔王様のためなら、この身が萌え尽きても悔いはない！」

街人のテンションが上がった！！

「煽ってどうすんのよっ！」

「えー、ただ笑っただけなのに……」

「魔王サエ様！！」

「なーに？」

サエは小首を傾げて微笑んだ！

街人の攻撃力が１２０倍になった！

「サーエーすーけー！　所構わず誘惑しないのっ！！」

「えー、笑っただけなのにー」

サエ固有スキル『エンジェルデビルスマイル・レベル２』効果：可愛すぎてヤヴァい。

「どうしよう、カカすけ」

「私も魔王カカだ！」

「ノるなぁぁぁっ！！　どういうつもりよ！」

「や、せっかくいっぱい仲間ができたし、このまま魔王城まで突っ

走ればラクかなーと」

「滅茶苦茶じゃないの……ＲＰＧの常識無視にも程があるわよっ」

「早くトメ兄助けないと」

「わたしも魔王よっ！　キリキリついて来なさい愚民どもっ、自爆呪文は全員覚えたんでしょうねっ！！」

サユカは変わり身が早い。

「さぁ皆！　私たちが本物の魔王だよ！　他の魔王を潰しにいくよ！」

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！』

「魔王様！　異変を察知した魔物が街に襲いかかってきました！」

「えー、どうしよー」

サエは困った顔になった。

街人３５３名がいきりたった！（主にロリコン趣味が深い人たち）

魔物が襲い掛かってきた！

街人３５３名のこうげき！！

魔物に４２９０のダメージ！！

魔物は消滅した！

「ちょ、ちょっと？　強すぎない、これっ」

「サエちゃんの笑顔で攻撃力も増してるしね、これなら楽勝でいけるんじゃないかな」

「みんなー、その調子でいくよー」

サエは「えいえいおー」と街人を励ました。

街人はとても絵にかけない様子になってイロイロとステータスが倍化した。

「魔王城目指して、ＧＯ！」

なんか見た目、魑魅魍魎の行進っぽいのが始まった。

とてつもない戦力を確保してしまった勇者魔王カカたち！　果たしてこのまま魔王城へ辿りつけるのか！　というか簡単に辿りついちゃったらどうなってしまうのか！　想像するとなんか恐いのですぐには辿りつかないかも！　あとケロリンいい加減に起きろ。次回、『魔王の行進』をどうぞお楽しみに！

その頃、魔王城では……

「これすげー」

魔王はまだエロ本を読んでいた。

「ぐー、ぐー」

トメと村娘Aは読み飽きて、コタツで寝ていた。

## カカの天下８４１「カカ天クエスト、ＥＰ１５」（後書き）

もう最終回！？　とお思いのソコのあなた！

すぐには終わらないのであしからず。

# カカの天下８４２「だっしゅ」

どどどどどどどど！

こんにちは、カカです！　ただいま街の中を爆走中です。別に車やバイクに乗っているわけではありません。ただ単に走っているんです。

「急がなきゃ、急がなきゃ」

両手をチョップの形にして空気を切り、軽快にだっしゅだーっしゅ。

「あ、カカすけやっほー。どしたのそんなに急いで――」

通りすがりのサユカンに声をかけられたものの、それどころじゃないので素通り。

「えっ、ちょっと!?　そんなに急いでどこ行くのよっ！　ちょっとくらい立ち止まってかまってよ！」

なんかムカついたらしく、サユカンが追いかけてきた。

「あー、カカちゃんにサユカちゃん。なにしてるのー？」

今度は前方にサエちゃん発見。でも止まるわけにはいかないの！

そんな私の様子を察したのか、サエちゃんはポツリとつぶやいた。

「ゆーたー」

「ここに」

どこからともなく、でっかいのが現れた。

「おんぶ」

「喜んで」

本当に至福な顔してる。

「そのままカカちゃん追ってー」

「御意」

なんか天使を背負ったデカブツが追っかけてくる。

そんな二人（あ、三人か）を連れて商店街に突入した。

「あ、ねぇねぇカツコさん！　カカちゃんたちですよ」

「ん、何してんの？」

「なんか……爆走してます」

「よしサラちゃん、おんぶしてやろう」

「きゃ！　なんですか急に」

「カカちゃんたちがいるってことは、きっと何か面白いことがあるのだ！」

「え、でも仕事はどうす――きゃあああぁぁぁはやいいいいいいい！！」

二人の花屋さんも追っかけてきた。

「――というわけで、私が作る今日の夕飯はですね？」

「あーあーキリヤ、すとっぷ。アレなんだろう」

「むぅ？　私とユカさんの素晴らしき献立タイムを邪魔するとはどこのどやつ……はて？　アレはあそこのあちらさん達ではありませんか」

「面白そうね、追っかけましょう」

「はっはっは、野次馬根性は置いといて夕飯について語るべきでは」

「仕事柄ほっとけないの。いくわよ！」

「え、ちょっと！　ユカさんやっぱり最近冷たくないですか！？」

バカップルも追っかけてきた。

「むむ！！　アヤ坊、あれは！」

「どしたのニッシー？　あ、カカたちだ」

「西へ向かって走っている……いかねば！」

「あ、待ってよニッシー！！」

バカップル2も追っかけてきた。

「うし、カレーの材料はこれで全部だな」

「くあー、楽しみだなぁトメカレー」

「テン、食ってくなら少しくらい材料費だせよ――あ？」

「あそこ走ってるのはカカたちだよな。また何かやらかしてんのか」

「あんなに大勢で走って……何やってんだあいつは！」

「おーおー、ただツッコむためだけによく走るねぇ。そんなにツッコむのが好きなのかねぇ。男だねぇ。ナニをドコにツッコむのか知らんが、なかなか楽しそうだ。オレもいこ」

「テン、下品！」

「やっぱツッコむの好きじゃねぇか」

「まぁな！」

バカップル3――って言ったらサユカンに殺されるから、とにかくお馴染みの二人も追っかけてきた。

「いっちゃん、カレーの材料があそこを走ってます！」

「わ、わかるのですか、かのちゃん！」

「きっとあの先に商店街で噂の『トメカレー』が待っているのです！」

「ああ、そんなに走ると転びますよかのちゃん！」

なんかクラスメイトも追っかけてきた。

「むむ、カカ君ではないか！　ゆくぞタマ！」

「ごー！！」

なんだかよくわからないコンビも追っかけてきた。

「校長、あれは」

「いきますよ教頭」

「なぜ？」

「そこに生徒がいるからです」

「なるほど」

ノリだけでなんか追っかけてきた。

「クララ参上です！　なんだか参上しなければならない気がしたので参上です！　そして流されるままに走ってみます！」

ものすごく楽しそうな女の子も追っかけてきた。

「くそぅ、姉貴のやつめ。つまみ食い程度で両手に包丁持って襲いかかってくることはないだろうに！」

「トウジ！　あそこに爆走してる団体がいるぞ！」

「ありがてぇ、アレに紛れれば姉貴を撒ける！」

ドサクサに紛れてどこぞの店長二人も追っかけてきた。

「さんぽーさんぽーさんぽっぽー。あら？　どうしたのおまえたち。え、血が騒ぐ？　え、ちょ、ちょっとそんなに引っ張らないでよきゃあああああー！」

散歩してた動物軍団と共にサカイさんまで追っかけてきた。

――結果、ものすごい人数が商店街を爆走することに。私が右へとカーブすると皆もそれに倣い、まるで大蛇がうねるよう。土煙を上げながら、周囲の人々の視線を集めながらも、誰しも構わず走り続ける。

走る、走る、走る、走る。

見ていた誰かが通報したのか、警察の姿がチラッと見えたけど、それを必死に説得するシュー君らしき姿もチラッと見えた。

それはともかく足を動かす。

ただひたすらに。

速度を緩めることなく。

頭はまっしろ、ただし息は規則正しく、だが速く。限界など知らぬと身をもって証明する。

やがて、辿りつく。

目的の場所に。

そこは馴染みのある場所。

私んち。

「んでさ。私ランニングしてるだけなのに、なんでこんなについてくんの？」

なんか皆、崩れ落ちた。

――はるか遠くの地。

「ということがあったらしい」

トメ父の報告を受けて。

「ママも参加したかった……！」

崩れ落ちる人がここにも。

## カカの天下８４２「だっしゅ」（後書き）

疾走感のある曲を聴いていたら、なぜかこいつらが爆走する映像が浮かんだので書いてみました。

まぁ、なんか楽しかったです笑

## カカの天下８４３「あのてこのて」

ども、カカです。ただいまサエちゃんサユカンと三人で会議中です。

場所は私の部屋。会議の内容は、テンカ先生をいかにして泣かすか、です。

「とりあえず、泣かせればこっちのもんだよねー」

「そうそう。あのテンカ先生のことだもん、意地でも約束を守って中学まで来てくれるわよっ」

「だよね。なんとかしないと」

私たちはまだまだテンカ先生の授業を受けたいんだ！　こんな先生思いの生徒、中々いないよね。

「とりあえず痛い目にあわせるのはどうかなー？」

「ぶ、物騒なこと言うわねサエすけ」

「泣かせればいいんでしょー？」

まぁね。手段の善悪はこの際どうでもいい。

「でもテンカ先生、痛いからって泣く人かな？」

「しゃらくせぇ！　って跳ね除けそうなイメージよねっ」

「むー、それもそうだねー。じゃあ脅すしかないか」

「だからなんでいちいち物騒なのよっ」

「それでいこう」

「なんでカカすけまでノリ気なのよっ！」

だって一番てっとりばやいし。

「サエちゃん、脅す材料ある？」

「3個しかない」

「3個もあるのっ！？」

そりゃあるでしょ。サエちゃんだもの。サカイさんの娘だもの。

「材料そのいちー、寝顔写真だよー」

こんな展開になるのは想定内だったらしく、サエちゃんは鞄から早速その写真を取り出した。

「わ、テンカ先生ってば可愛……いく、ないわっ」

「私、寝顔写真って全部が可愛いもんだと思ってたよ」

「だからこそ効果的なんだよー」

その写真の中には、髪がボサボサでヨダレをたらしベッドの上でおサルみたいなポーズをしながら爆睡するテンカ先生の姿が。

「でもこれ、泣くかな？」

「テンカ先生の場合、激怒して泣くどころじゃなさそうよねっ」

「じゃあ却下かー。じゃあ材料そのに」

そのに、とサエちゃんがピースした。

私もサユカンも合わせてピースしてみた。

意味はない。

「それはね、テンカ先生のパコちゃんをさらうの」

ピースしながら首を傾げる私とサユカン。意味がよくわからない。

「私がパコちゃんをさらわれたら、きっと泣いちゃうもん。だからテンカ先生も」

「……テンカ先生、自宅にパソコン持ってないわよっ」

「そ、そんなー！」

予想外だったらしく、びっくりな顔になるサエちゃん。可愛い。なんでこの子ってば黒いこと考えてるはずなのに所々で可愛らしいんだろう。ズルい。だがそれがいい。

「じゃ、じゃーそのさん！」

名誉挽回とばかりに気合を入れるサエちゃん。

「私ね？　テンカ先生の預金通帳の、暗証番号知ってるのー」

気合が入っていた。

若干、入りすぎな気もする。

や、滅茶苦茶に気合が入った脅迫材料だった。

「テンカ先生の預金を目の前でぜーんぶ燃やせば、いくらなんでも泣くでしょー」

サエちゃん自身はさらに気合が入っていた。

「そ、それはさすがにあんまりじゃ……」

「そもそもサエすけっ！　あんたどこでそんなの知ったのよっ」

「こないだウチに来てお母さんとお酒飲んで酔っ払ったとき、自分で言ってたよ」

うかつすぎるぞ教師。

「ちなみにそのまま酔いつぶれた姿がさっきの写真ねー」

「……さすがに止めたほうがいいわよ、犯罪っぽいし」

「そっかー」

程よい脅迫はできそうにないなぁ。

「あ、トメさんが帰ってきたっ！」

「へ？　サユカンどこ見て言ってんの」

まさか玄関の方向――そう気づいた瞬間、入り口の方から「ただいまー」という声が聞こえてきた。

「サユカちゃん、どうやってトメお兄さんが帰ってきたってわかったのー？」

「カンよ」

この子も人間離れしてきたな。お姉にあてられたかな？

「とめにー！　こっちきてー！！」

大声で言うと、「なんだなんだ？」というボヤキと共に足音が近づいてきた。

そして我らがトメ兄登場。

「おお、今日もおそろいだな。いらっしゃい二人とも」

「どもどもー」

「お邪魔してますっ」

挨拶も済んだところでトメ兄にも意見を聞いてみることに。

「……はぁ、テンを泣かす、ねぇ」

「何かいい方法はありませんかっ」

「や、普通にしんみりした思い出話でもすればいいんじゃないかね」

私たちは思わず笑ってしまった。

「ないない、あのテンカ先生に限ってそれで泣くなんて」

「正攻法は通用しないでしょー。なにせテンカ先生だしー、大人だしー」

「そんなに涙もろい先生だったら苦労しませんよっ」

口々に抗議されたトメ兄は、なぜかニヤリと笑った。

「そうかな。大人ってのは意外と……ま、いっか」

「なにそれ。ねぇトメ兄？　言いかけてやめるのダメだよ。気になっちゃうじゃん」

「や、気にすんなって。それよりテンを泣かすにはどうすればいいか、だろ？」

「そうだけど」

「おまえたちらしく、笑わせて泣かせりゃいいじゃんか」

あ、そっか！　笑いすぎても涙は出るんだ！

「それは確かに私たちらしーねー」

「わたしたちっていうより、カカすけらしいわね」

「よし、それでいこう！！」

「じゃあ早速ネタあわせだねー」

「ネタあわせって芸人みたいに言わないでよっ」

「とりあえず目の前で札束をバラまくのはどうかなー？　みんな笑いが止まらないと思うのー」

「却下っ！！」

「採用！！」

「待ちなさいカカすけっ！！」

あーだこーだと議論する私たちの後ろで。

「大人って意外と泣きやすい生き物なんだがな……ま、子供にゃわからんか」

トメ兄が何か言った気がしたけど、聞こえなくて。私たちは卒業式の改造計画について盛り上がるのだった。

## カカの天下８４３「あのてこのて」（後書き）

あの手この手でテンカ先生を泣かそうとしている子供たち。
こう言っちゃ聞こえは悪いけど、全ては一緒に中学へ行ってほしいがために。

さーどうする？　テンカ先生よ。

## カカの天下８４４「おひさしぶり？」

こんにちは、トメです。

今日の仕事も終わり、「あー疲れた」といつも通りに呟きながら寄った商店街。

夕飯の買い物をしていたときに声をかけられてしまいました。

「よ、トメ！」

こんな感じです。

男です。

「ん、どうしたトメ」

馴れ馴れしいこいつは、いったい誰でしょう？

それが実は……

僕にもわからんのです。

「誰だおまえ」

「はぁ！？　おい、俺がわかんないのかよ！」

「僕の記憶の限り、おまえのようなキャラが登場したことはない」

「登場？　変な言い方するんだな」

そこは気にしたらダメだ。

「ともかく！　おぅトメ、随分と薄情じゃないか。俺とおまえはあんなに仲良くしてたっていうのに」

「誤解を招く表現はやめろ。さてはおまえホモだな？　新手の勧誘だろ」

「……トメ。それ、もし友達に言われたらどうする？」

キリヤに言われたところを想像してみる。

「ぶっころす」

「じゃあ俺の心境も理解してくれるよな？」

「ん？　あぁ、図星だからガッカリしてるのか。残念だったなホモ」

「ぜんっぜん違うわ！！　おまえ話を聞いてないだろ！　まさに現在、友達に言われてるんだよ俺は！」

「お気の毒に」

「他人事じゃなぁい！！」

ふむ、どうやら冗談抜きでこの男は僕の友達（と言い張る）らしい。

「じゃあとりあえず名前を言ってみろ」

さすがにそれ聞けば思い出すだろ。

「よし、言ってやる。俺の名前は○○だ」

「ん？　ごめん、よく聞こえない」

「だから○○だっての」

「なんでそんなに声が小さいんだよ。もう一回！」

「ハッキリ言ってるだろ！　○○だよ！　○○！！」

やっぱり聞こえない。

「……くっそぅ、昔からそうだよオマエらは……人の名前を聞きやしねぇ。あーもうわかった！　こう言えばいいんだろ！？　友人Ａだよ友人Ａ！　小学校から高校から大学までずーっと友人Ａと呼ばれてる男だよ俺は！　たまに先輩Ａとか後輩Ａとか通りすがりＡとかにもなるんだぞ恐れ入ったかバカヤロウ！！」

あああああああ！　思い出した！　そうだ、去年にユカとのゴタゴタで思い出したこともあったっけ。

「てっきり思い出話を補完するために生まれたキャラだと思ってたんだけどな。実在したとは」

「おまえは何を言ってるんだ？」

「や、こっちの話。はー、しかし友人Aかぁ。ほんと久しぶりだな。高校卒業以来か」

「そうだな……はぁ、名前を覚えてもらえないのは慣れてるけど、ほんとーにどいつもこいつも」

仕方ないだろ、なんか覚えにくいし聞こえにくいんだよおまえの名前。容姿もとことん普通だし、なんとかAっていうのが似合いすぎなんだよ。

「でも誓って犯人Aと被告Aにだけはならないからな！」

そんな平凡な彼だが、なにやら野望はあるらしい。

「俺の夢だ」

むしろ夢らしい。なんか哀しい。

「……あ、そっか。いつぞやユカと知らない男が喋ってたとか聞いたけど、もしかしておまえのことか」

「ん、ああ。ユカちゃんね。偶然会っちゃってさ、ついつい声かけちゃったのよ」

「つい、ねぇ」

「だってよぉ、高校のときはあんなにおとなしい黒髪っ子だったのに、バリバリの金髪娘になってんだぜ？　そりゃビックリして声もかけちゃうよ」

よくわからん理由だが、確かにあれは僕もビックリした。

「性格もずいぶんと変わってたろ」

「ああ、すごく大人になってた。おとなしいながらも強くなったとゆーか」

……さてはユカのやつ、猫かぶってやがったな。もしくは僕と同じく友人Aのことを思い出せず、でも言い出せず適当に外行きの顔で通したか。

「あとお姉さんにも会ったぞ。随分とおとなしくなってたな」

それはきっとおまえを覚えてなか――

「みんな大人になったんだなぁ……」

あぁ、哀れだ。このことについて考えるのはやめておいてやろう。

「それでトメ、おまえは彼女いるのか？」

唐突だなオイ。

「いないけど」

友人Aは僕の両肩をがっしり掴み、力強く言った。

「よくやった！！」

「ぶっ殺すぞコノヤロウ」

「いやぁ、よかったよかった。ユカちゃんが彼女だったときには何回殺してやろうと思ったことか」

「思うだけじゃなく言ってただろうに」

「あ、そっか。『死ね』って87回ぐらい言ったときがあったな。あと13回は大人になってからに取って置こうと思ってたんだ」

「……その後もけっこー言われた気がするが」

「あれ？　870回言ったからあと130回言うんだっけ」

おまえはどんだけ僕に死んでほしいんだ。

「ま、おまえに彼女がいないなら残りを言うことはないだろう。ただし」

「ただし？」

「おまえが彼女いないのをいいことに、友達以上恋人未満な女性たちを囲ってたりなんかしたら」

「そんなわけないだろ」

そんなわけないよな？　うん、ないない。

「もしそうだったら、俺は邪神になる！」

「邪神Aか」

「そうだ、邪神となって全力をもっておまえを罵る！！」

邪神のわりにやること小せぇ。

「そうならないことを祈ってるぜ。じゃ、俺は仕事があるから」

「おう……何の仕事だ？」

「ひみちゅ」

「キモい」

「てへ」

「殴られたくなかったらさっさと行け、オカマA」

「へへ、またな！」

相変わらずのふざけっぷりだ。でもまぁ、なんとなくいいヤツっぽいところは変わってないみたいだ。今度うちにでも呼んでみるかな。

「あれ、誰か何か言ったか？」

どこからか『死亡フラグ』という声が聞こえたような気が……空耳か。

「しかし僕の周りには職業を隠したがる人が多いなぁ」

ユカといい友人Aといい……ヤバい仕事やってないだろうな。

## カカの天下８４４「おひさしぶり？」（後書き）

意外と彼を覚えていた人って多いんじゃないかなーなんて思ったりします。

でも名前はあげない。

**カカの天下８４５「ハメをはずしちゃうことってありますよね」**

時は夕方くらい、場所は僕んちの居間。

「怒ってはいけない、２４時！」

どんどんぱふぱふー、と口で言いながら騒ぎ立てるのはカカとサエちゃん、そしてそれをポカーンと見つめているのは僕、トメとサユカちゃん。

「あーっと、何を始めたんだ、おまえら」

「ほら、よくあるでしょ。笑ってはいけないっていう番組。あれのパクリだよ」

「なんでそんなことしなきゃいけないのよっ」

「テンカ先生を笑わせ泣かす練習だよー」

……ああ、本当にやるんだ、ソレ。

「とりあえず思いついたこの企画、実際に面白いのか試してみようと思って」

「なんでやるのが僕らなんだ」

「怒りっぽい人にやらせないと意味ないでしょ」

や、僕らは怒りっぽいわけじゃなくてだな、単に常識人でありツ

ッコミ気質というだけなんだぞ？

「とにかく２４時間……は、長いよね」

「夕食までででいいんじゃないかなー？」

「そだね。よし、夕食までの間、トメ兄とサユカンは怒ってはいけません」

「怒っちゃったらどうなるのよっ」

「テレビと同じく、どこからともなく攻撃が飛んできます」

マジか。一体どうやるんだ、少し見たい。

「んじゃスタート」

「ちょっ！　唐突すぎない！？」

「はいサユカン失格」

「えええええっ！？　お、怒ってないわよ！！」

「怒ってる人は皆そーゆーのー」

あーあ、哀れなサユカちゃん。さて、ここで攻撃とやらを見定めておこう。いざというとき避けたりできるように。

「じゃーお仕置き攻撃どーぞー」

シュバッ！　とどこからともなく姉が現れ、サユカちゃんの頭をフライパンで殴った。

とても響かない鈍い音がした。

「っぃぃぅぅ……！」

あまりの痛さにのた打ち回るサユカちゃん。僕は悟った。アレは避けられない。夕飯まで怒りを溜めて爆発させるしかないだろう。

でもこいつら、一体何をして僕らを怒らせる気なんだろう。

「いったいわねぇっ！？」

「はいサユカちゃんまた失格ねー」

「えぇっ！？　きゃーー」

逃げ出そうとしても無駄なこと、再び炸裂するフライパンアタック。ぶっ倒れるサユカちゃん。

「っぉぉぉぉぉ……」

「どうしようサエちゃん。私たちが何もしてないのにサユカンが」

「これはこれで面白いよー」

たしかに。

「り、理解したわ……とりあえず怒りを溜めて、後で爆発させれば

いいのよね……っ」

フラフラと立ち上がりながらも僕と同じ結論に達するサユカちゃん。もうちょっと早く気づけばよかったな。

「スカートめくりー」

「きゃあああああああああっ！」

赤。

あとパンダ？

「信じらんないわっ！　トメさんの前でなんてことすんのよっ！」

あーあ怒っちゃった。ゴィン！！

「やっぱり子供、理屈ではわかっていても怒っちゃうんだろうなぁ。ま、あんなことされれば仕方ないか」

僕が呟いたと同時、ズリっという音が下半身から。

見ると、カカにズボンが下ろされていた。

「ふ、平常心平常心。僕は大人だ」

冷静にズボンを上げつつ、さらにパンツまで下ろそうとするカカをガードしつつ、僕はあくまで笑みを絶やさなかった。

「パンツ一丁で笑っている青年男性の姿もけっこー笑えますねー」

絶やさなかったけど、心では泣いていた。

「じゃー私はここにある袋詰めのみかんを雪合戦のごとくトメお兄さんに投げてみましょー」

食べ物を粗末にしてはいけません！　という怒声を飲み込む。

みかんが顔に当たった。地味にムカつく。

「よし、パンツは諦めよう」

カカの手が離れた。よし、これで簡単にみかんを避けれる。ひょいひょいっと。

あれ、カカはどこいった？

「バケツボンバー！」

バケツに溜めたであろう水が僕の体を横殴りにした。

ズボンも半分しか上がっていない状態だったために下着までぐっしょり。そして居間の床もその他もぐっしょり。

何から怒ればいいのやら――や、後で全部怒るんだ、我慢我慢。

「カカちゃーん、カップ焼きそばできたよー」

「じゃ、それ床に落として」

「はーい。あ、手が滑ったー」

「きゃあああああっ！」

「おお、サユカンの顔面に落としちゃった形に」

「でも床にも落ちたから結果オーライだよー」

「が、がまん……がまんよわたしっ！」

「ソースで汚れた服を取り替えましょー」

「きゃあああっ！　脱がされるぅぅぅっ！」

「あ、トメ兄の股間にもソースが」

「私が拭いてあげるー」

「拭くのはわたしがやるわっ！」

「今のサユカンがやったらもっとソースまみれになるでしょ！」

「カカちゃん、それもいいんじゃないかなー？」

「それもそだね。おお、半脱ぎのサユカちゃんと半脱ぎのトメ兄が絡む結果に」

「さらにソースまで絡んでとってもおいしそー」

もう怒る点を数え切れなくなった。

だから決めた。僕は怒る。姉の攻撃をくらっても怒る。むしろくらいながら怒ってやる。

だって、そうだろう？　居間は先週に模様替えをしたばかりなのだから。

スタスタとカカに近づく。

「お、トメ兄どしたの？　怒――」

右手でその頭を鷲掴みに。

「え、え、え」

左手は顎に当てる。

「や――」

ぐきっとな。

「……っ！！」

声無き声でのた打ち回るカカ。さて、次はサエちゃんだ。

「ひ、ひどいことしないでー」

怯えたリスのように上目遣いで見上げてくるサエちゃん。

可愛い。僕は思わずその頭を撫でた。

ホッとするサエちゃん。

しかしそうは問屋が卸さない。

頭を撫でる。

撫でる撫でる撫でる撫でる加速加速加速加速！

「にゃーにゅーにょおおおおおおー！！」

むしろ大根を卸すくらいの勢いで撫でまくった結果、サエちゃんは目を回しながら頭を押さえて倒れこむのだった。

惨状を改めて見渡す。

ソースとみかんが散乱し、水浸しになった居間。倒れている二人。

そしてビビりながらこちらを見ているサユカちゃん。

「二人とも」

「はい！」「はいー！」

ガバッと立ち上がるカカとサエちゃん。

「やりすぎ」

「すいませんでした！」「でしたー！」

「片付けて？」

「「はい喜んで！！」」

まったくもう、コイツらは面白いとなったら周りが見えなくなるんだから……思い知ったか。家庭を預かる者にとって家は聖域、汚す輩には容赦しないのだ。

「ひどい目にあったね、サユカちゃん」

「は、はいっ！」

あれ、そんなに恐い形相してたのかな僕。

「そういえば姉は攻撃してこなかったな。さすがにやりすぎと思って見逃してくれたのか」

「い、いえそのっ」

「ん？」

「それは多分、トメさんが怒ってなかったからだと思いますっ」

ああ、なるほど。鏡を見て納得した。

怒りが臨界を越えると笑顔になったりするよね。

## カカの天下８４５「ハメをはずしちゃうことってありますよね」（後書き）

いい感じのリクエストがあったので書いてみましたん。

まぁ、いくらなんでもやりすぎなんで自業自得です。

# カカの天下８４６「深夜の迷惑な忘れ物」

よ、カツコだ。通称姉だよ。

実はね、今日はお休みだったのだよ。だから一日中寝倒してやったわ。なんと２４時間寝たんだぜ。寝る子は育つんだ。どこが育つかって？　もちろん筋肉だ。

「くぁー、もう２３時かぁ」

昨日ベッドに入ったのと同じ時刻。若干損した気分にもなるけど、まぁよしとしよう。

「さて、明日は何日だ？」

日にちの感覚が麻痺しているのでカレンダーを見直す。わが街のマスコット、デンジャーケロリンが『今月も危険だ、気をつケロ！』とか言ってる絵が目に入る。このカレンダーは商店街にいる人は皆持ってたりするのだ。ちなみに来月のページをめくると『避ケロ！！』とでっかく書いてある。避けろ。何を？

ま、いっか。とにかくなんか避けよう。さて明日は……

「あー、二月四日かぁ」

てことは今日は二月三日だったわけだ。節分だったのだ。

……なんだとぅ？

「うあああ！　恵方巻き食べないと！」

豆まきはともかくそれだけは諦められない！

「い、急いで用意しないと。きっとあそこならいっぱい余ってるはず」

幸いジャージで寝てたからこのまま外出可能だ。てことでシュバッ！

場所は変わってセイジ食堂。もちろん営業時間は終わっているし、主人のゲンゾウさんも床についている。でもたたき起こす。

「作れ！　どうせ材料とか余ってるでしょ！」

「ったく、こんな時間に……いいけどよ。明日で客に出すのも気が進まなかったとこだ」

この食堂はいつも作りすぎなのだ。ボリュームあっていいんだけど、経営的にはよろしくないと思う。客としては嬉しいからいいけど。

「早く作って」

「いや、作ってあるのが余ってる。持ってきな」

うし、恵方巻きゲット。聞くところによると今年は西南西に向かって食べるといいらしい。

「しかしいっぱいあるねぇ」

「これでもかなり減ったんだぞ？　昼におもしろいボーズたちが来てな、『うおおお！　西が二つもついているのだ、今日中に限界まで食べるぞ！』『やめてニッシー！　もう十五本目よ！？』とか言って食いまくってくれたんだ」

変な子もいるもんだ。

さて、そんなことは置いとこう。あたしはもっと変な子にこれを食べさせにゃならんのだ。

「そいじゃ、ありがとねぇ！」

「お代は」

「シュバッ！」

「払えよオイ！！」

所変わって元祖我が家。カカちゃんの部屋に忍び込む。

「よい子は寝る時間だぞ！　でも起きろ！」

「……お姉？」

布団を引っぺがし、おねむだったカカちゃんを持ち上げてベッド

の上に無理矢理座らせる。

「さぁ、召し上がれ！」

「おにはー、そとー」

「ひどい！　お姉ちゃんに向かって鬼だなんて」

「気持ちよく寝てるのを叩き起こすほうが鬼だよ……くあぁ」

「てい」

「むが！？」

あ、せっかく口開いたと思って恵方巻き突っ込んだら怒った。

「だからなんだってばさ！」

「今日はこれを食べなきゃいけないんだよ！　西南西を向かって！」

あと何か決まりあったっけ？

あ、そうそう。

「ものすごいスピードで！」

速ければ速いほど縁起がいいんだよね、たしか。

「うえ……寝起きでこんなの食べるの？」

「寝る前にものを食べちゃいけません！　でも食え！」

「ヤ」

「食べないと無理矢理押し込むよ」

「う……お姉ほんとにやるよね。わかったよぅ」

付き合いのいい妹ちゃんを持って、お姉ちゃん嬉しい！

「じゃ競争ね。はい西南西に向けて」

長い恵方巻きを笛のように口の前にスタンバイ。

「せーの」

キュィィィィィン！！

「食べたわ」

「速っ！　え、お姉？　いまの何、食べる音だったの！？　なんかドリルとかミキサーみたいな高速回転するもので何かを削りまくったような音がしたよ！？」

「どちらかというと、大根おろしする機械に似てるかな。ほら、大根の先を押し込んだらそのままキュイーンって削りおろしてってくれるやつ。あんな感じで口を動かしたの」

「どんな感じなのか想像もつかない」

「こんな感じだよ」

おかわりでもう一本食べてみる。

口に恵方巻きの先を押し付けて、ぐいっと。

キュィィィン！

「うあ、手品みたいに消えてった」

「いいから早く食べなよ」

その後、もむもむと頑張って妹が食べ終わるのを見届けて満足するあたしだった。

「さて、次だ。じゃあね妹ちゃん」

「げっぷ」

素敵な挨拶に別れを告げ、今度は弟君の部屋へ。

「さぁ弟よ！　おまえもこれを食べるのだ！」

さすがに夜中まで起きている弟君。いきなり登場するあたしにも慣れたもんで、特に驚きを見せずにしかめっ面を見せてくれた。

「おにはーそとー」

「兄妹そろって言ってくれるねぇ。あたしのどこが鬼だ？」

「腕力と発想」

「それはともかく恵方巻き食べよ」

「鮮やかにスルーしますねお姉様。あーとにかく、それお昼に会社で食べたから遠慮しとく」

「だめ。お姉ちゃんと食べなさい」

「なんで」

「姉弟愛を深めるために」

「それに亀裂を走らせたくなかったらさっさと帰れ」

「はい、向きはこっちね。せーの」

「話を聞け！！」

「ごっくん」

「一口！？」

「さぁ弟君も食べなよ」

「一緒に食べるんじゃなかったのか」

「あたしあと五本食べるもん。君はゆっくりでいいよ」

「はぁ……一本だけだからな」

なんだかんだで付き合ってくれる家族。あたしゃ嬉しいよ。これで今年も縁起よく過ごせそうだ。

翌日。

「太った」

幸先は悪かった。

## カカの天下８４６「深夜の迷惑な忘れ物」（後書き）

はい、その日に恵方巻きを食べたにも関わらず節分忘れてた作者です。

節分の話を書けなかった、というわけで節分を忘れてた話を書きました。しかし恵方巻き、頑張って速く食べましたけど姉のようにはいきません。まぁ正しい食べ方はそこまで詳しくないのですが、なんか一言も喋らず食べるとか速く食べるとか聞いたことあるのでそんな感じに。

とりあえず西南西とくれば彼を書かないと、うんうん。

# カカの天下８４７「楽しみですねバレンタイン」

こんにちは、トメです。

もうすぐバレンタインデーですね。彼女のいない一男としては不安だったり楽しみだったりする日です。

「今年は手作りだよ！　楽しみにしててねトメ兄」

「お、おお……あのカカが手作りだと！？」

「おうよ！」

兄としてこれほど嬉しいことはなかなか無いと思う。ただコイツの場合、『手作り』という言葉を額面どおりに受けていいものか……

「トメお兄さんやー」

「あ、サエちゃん」

「今年は私も手作りですよー」

なんと！　僕はこれ以上ないほどの幸せ者ではないだろうか！

相手は妹だったり小学生だったりして喜ぶのも恥ずかしいんだけど、嬉しいもんは嬉しい！

「トメさんっ！」

「ん、サユカちゃんか」

「わたしも本命手作りチョコです！　頑張りますっ！」

本命と言われるといささか照れるが、かなり嬉しい。しかしチョコをもらえるのが全員小学生というのもロリコン全開に思われそうで嫌だなぁ、普通の人からもらえないかなぁ……などと思ったのが天に通じたのだろうか。

「こんにちは、トメさん！」

「あ、普通のサラさん」

「どうせ普通ですよ！　そんなこと言ってたらチョコあげませんからね！」

「ごめんごめん！　サラさんも手作りでくれるの？」

「いいえ。作れませんもん」

「やっぱ普通だ」

「もう！　そんなこと言ってたら手作りの皿とかあげちゃいますからね！」

「それはなかなか普通じゃないな」

なにも自分からダジャレっぽいネタを振らんでも。

「文字を間違えて『血』を送ってもいいんですよ？」

「ごめんなさい」

とにかく、今年は幸先が良い。こんなにチョコがもらえるなんて……まぁ、中には絶対に例外というか、もらっても首を傾げたくなるようなのが混ざってそうだけど。

「おぅトメ」

「テンじゃないか」

「もうすぐバレンタインデーだな」

「そだな」

「楽しみにしてるぜ、チョコ」

「僕があげんの!?」

でました例外。

「ったりめぇだろうが。百人に聞いたら百人が全員『おまえの方がチョコ作りそう』って言うぜ?」

否定できないのが悲しい。

「それにオレの方が男らしい」

「それだけ断言されると確かになーとか思ってしまう。で、ちゃんとホワイトデーは返してくれるんだろうな」

「は？　何言ってんだ。ホワイトデーは男が女にモノを渡す日だろうが。しかもバレンタインの三倍で。そっちも楽しみにしてるぜ、じゃな」

えぇぇ……言いっぱなしで去ってくの……？　うーん、どうしよう。

「やぁトメ君！」

「え、キリヤ？」

「うふふ！　今年は手作りチョコをあげるから楽しみにしててねキャラーン♪」

可愛らしくポーズをとっている例外その二が現れました。

「うふふふふー」

そして高らかに笑いながら去っていきました。なんだアレ、ただネタを振るためだけに来たのか。

「よぉトメ」

「あれ友人Ａ」

「バレンタインはおまえんち行くからな。彼女いない者同士、一緒にチョコでも食おうぜ。じゃな」

いや待て。だからなんでどいつもこいつもネタを振りっぱなしで去っていく？

「トメ君よ」

「おおお？　ゲンゾウ兄弟のお二人さん」

「バレンタイン、楽しみにしているがいい」

「えええええ！？　あんたらもくれるの！？」

そして言うだけ言ってさっていくゴツいおっさん二人。

「シュバッと！」

「うお！　なんだ父さんか」

「息子よ、バレンタインは楽しみにしているがいい」

「あんたもか！？」

なんだなんだ今年のバレンタインは。一体どうなるんだ、僕にくれるって言う半分が男だぞ。しかも僕も作らなきゃいけないらしいし、一体どうなる！？

「あ、トメさん！　久しぶりです、タケダで――」

「おまえもか！　もういい！！」

これ以上混沌とするのは耐えられなかったので、そいつをおもっきし蹴り飛ばす。即座にぶっ飛ばしたのでそいつが誰かは見ていない。何も聞いてない。

「あ、挨拶しようと思っただけなのに……なんで……」

何も聞いていない。

## カカの天下８４７「楽しみですねバレンタイン」（後書き）

さーてどうなるバレンタイン。

まぁバレンタイン当日に投稿できるかはちょっと怪しいですが、なるべくその辺りに更新します笑

私のバレンタインはもう終わったんですけどねー、一昨日にチョコレートフォンデュ飲み会したので。夜２１時から朝７時まで飲んで寝てすぐ仕事というのはなかなかキツかったですが……まぁたまにはこれくらいしないとね！　書けるもんも書けないということで！

## カカの天下848「バッビーバレンダイン」

どうも、トメです。今日はバレンタイン……べ、別に浮き足立ってなんかいないんだからね！　なんて気持ち悪いことを言いつつ（わかってるんです、自分でも。ええ）居間でのんびりしています。日曜なんでね。

「よぅトメ、チョコ持ってきたぞ」

「友人A！？」

解せぬ。なぜ最初にくるのがおまえなんだ。

「どうせチョコがもらえない者同士、仲良くし――」

「トメ兄、はいチョコ」

「うおおお」

初っ端から飛ばしてくれるじゃありませんかぁカカさん！　おっとぉ、これは意外と綺麗なラッピング！　ピンクの正方形箱に赤いリボン、大きさ的にもヘンナモノが入っているとは考えにくいのがイイ！

「あけるぞ？」

「どぞ」

「おお……これは生チョコ！？」

こんな高度なものをカカが作りあげるとは！　早速食べてみよう。毒とかカエルとか姉とか入ってないよな？　有り得るけど、ここは兄として妹の誠意というものを信じよう。

「むぐ……うまい！」

至高の甘さがとろけて舌を侵食していく。

「信じられん、美味すぎる！」

「ふ、そりゃ美味いさ。手作りだからね。ゲンゾウ兄弟の」

「おまえの手作りじゃないんかい！？」

「私が作るとは言ってないよ」

「嘘つき！」

「嘘じゃないよ。だってそれ手作りじゃん」

それはそうだが！　嘘はついてないけど本当のことを全部言ってない、とか詐欺の論理だぞ。お兄ちゃんの感動とか返してほしい。

「……トメ？」

あ、友人Ａのこと忘れてた。

「ま、まぁそうだよな。家族はくれて当たり前だよな」

うん、と答えようとしたそのとき。

「トメお兄さんやーい、チョコですよー」

「サエちゃん？　あ、ありがとう」

確かこの子も言ってたよな……

「サエちゃん、これって手作り？」

「はいー」

「誰の？」

「うぎゃー」

「何そのリアクション」

「騙せなかったかーと思いまして。お察しの通り、ゆーたに作ってもらいました」

「やっぱりか……」

「脇で」

「脇！？　わき、ワキ！？　なんでそんなとこで作ってもらうの！？」

「斬新かとー」

「程があるよ！？　僕そんな得体の知れないもの食べないからね！」

「えー……私のチョコ……」

「いや君作ってないでしょ」

「頑張って包装したのにー」

「じゃあ包装紙だけもらう」

「ならいいよー」

ふぅ、よかった。考えるまでもなくあのゆーたさんがサエちゃんに「トメお兄さんにあげるから作ってー」と言われて毒物以外のものを作るなんてありえないからな。

「と、とめぃ！？」

「なんだ友人A、いたのか」

「ななななんだ今の美少女は！？」

「なんだと言われても、妹の友達だが」

「そうだよな！？　小学生だよな！　ものっそい可愛いくて小さくて可憐で小悪魔めいててどうみても犯罪だよな！？」

「あぁ、おまえの発言がかなり犯罪だ」

「いいや！　そんな子にチョコをもらうおまえが」

「トメさんっ！　これをどうぞ！」

またもや友人Ａを無視して現れたのはサユカちゃんだった。その手には不器用さ丸出しの包装をされたものが。

「手作りチョコですっ！　頑張りましたっ！」

「これはサユカちゃんが作ったんだよね？」

「当たり前ですっ」

そうだよな、普通はそうだよな……そう思いながら包みを開き、ハート型のチョコにかぶりついてみる。

うん、あまり美味しくない。

でも一番嬉しい。

「ありがとうサユカちゃん」

「は、はいっ！　それ本命チョコですからねっ！　ではっ」

走り去っていくサユカちゃん。そんなに照れなくてもいいのに……ん？

「友人Ａ、どした」

「なんたることか、なんたることか。なんたることか！？」

「ど、どした、本当に」

「我が友人トメはいつの間にやら小学生キラーになっていたというのか！？　しかも揃いに揃って美少女ばかりを狙った犯行……一体どんな手口を使った！？　この世すべてのロリコンは貴様を呪い殺す準備がすでに整っていることは間違いないぞ！　さぁ遺書を残すなら今のうちだ、内容は『ロリ万歳』で本望か！？」

「お、落ち着け！　僕は別にロリコンじゃ――」

「トメさーん」

「あ、サラさん」

「はい、普通のチョコです！　普通でごめんなさいね」

「いや、嬉しいよ」

「えへへ、では」

にこやかに去っていくサラさん……はっ。

「ゆ、友人A」

「そうか……そうだな、普通だった、普通に可愛い子だったな。あぁ認めてやる、おまえはロリコンじゃない、ロリコンでもある、が正解なんだな」

「そうじゃなくて――」

あ、テン。

「トメ、オレのチョコは？」

「……ないけど」

「あぁん！？　仕方ねぇな……ほれ」

「え、くれるの？」

「しゃあなしだ、しゃあなし。来月ちゃんと返せよ。じゃな」

なんか恐いオーラを感じて友人Ａを見る。

「しゅっぽー！！」

なんか頭から汽笛を鳴らしていた。

「我、神に問う！　何故だ、何故このような男に可愛い妹や美人の小学生や活発デレデレ小学生、さらに普通の女性しかも胸でけぇーし更にツンデレまで揃えて『さぁお選びください全てお召し上がりでも構いません』という状況にしているのですか。後にどれだけ軍勢が控えているのか想像するだけでも嫉妬で血涙を尻から流しそうな勢いだ！　何故！　何故それに比べ我はこれほど孤独なのだ！？」

なんか始まった。

「我の年齢とは彼女いない暦と同義！　ときめきを得るためには二次元に逃げるか、もしくは大通りで可愛い子と横に並んで歩いて『俺はこの子とデートしてるんだエヘヘ』などと妄想に浸るしか楽し

みがない！　それをなんなんですかこんちきしょーは。これだけチョコをもらいつつ誰とも付き合わない、友達以上恋人未満のネットワークを広げまくってウハウハですか？　おぉ神よ！」

一体どんな神に向かって訴えているのか気になる。

「こんなにも羨ましいトメ！　こんなにも恵まれた野郎が私の目の前に展開されたこの屈辱的な光景はなんという！　なんという運命の悪戯といいますか、なんというその、ぶっコロスといいますかチートといいますか！　あぁ私は何を申し上げているのでしょう。もしもこんな脚本を描いたやつがいたらマジ殺す！　神だろうと悪魔だろうと作者だろうと！　それが嫌ならばどうか私に慈悲を！　トメには不幸を！　私に出番を！　トメには堕落を！　私には可愛い彼女を！　トメにはブサイクを！　私に幸せを！　トメには借金を！　私にチョコを！　トメには泥水を！　私にほんのささやかな喜びを！　トメに世界最大級の地獄を！！　バレンタイン反対！　モテるヤツ撲滅！　トメ有害！　ラブコメ作者は帰れ！　脇役にも日の目を！　下克上バンザイ！　名無しバンザイ！　俺バンザイ！　バンザイ！　バンッザアアアアアイ！！」

こ、ここまで言われなきゃならんのだろうか。とりあえず身の危険を感じる……逃げておこう。

……ん、携帯にメールがきた。なになに？

『バレンタインだし、チョコあげる』

姉か。

『はい、チョコ』

……はい、って言われても。どこにチョコがあるんだ。

『用意するの面倒だから文字だけでいいよね。んじゃ』

『チョコ』って文字を、くれただけ？

「うわぁ、こんなチョコ初めてもらった」

「まだもらったと申すか？　申すのか！？　もすもすもすもすもす！！」

「ひいいいいいいい！」

今日はバレンタイン。

僕はチョコだけじゃなく、いろんな攻撃をもらいました。

どうも、キリヤです。

「あれ、トメ君がいない」

せっかくオチをあげようと思ったのに、トメ宅にはでっかいボロ雑巾しかありませんでした。とても残念です。

「……仕方ありません、ユカさんにでもあげますか」

きっといい悲鳴をあげてくれることでしょう。

## カカの天下８４８「バッビーバレンダイン」（後書き）

先に言っておきますが、サブタイトルは誤字じゃありません。まぁ濁点つきそうな話だったということで。

これでもトメが幸せそうに見えるから許せん。いい加減にトドメを刺すべきか。

皆さんはどんなバレンタインを過ごしましたか？

私は仕事しただけでした。うがあ。

## カカの天下８４９「いつもどおり」

こんにちは、カカです。今日も今日とて、いつもどおりの授業が終わり、いつもどおりの昼休みとなりました。

「さて諸君、相談だ。テンカ先生を泣かすにはどうしたらいいと思う？」

私とサエちゃんサユカンの三人でプランは決めた、けどやっぱり皆のテンカ先生だし、クラス全員の意見を聞いとかないとね。

「なに。カカともあろうもんが何も思いつかなかったの？」

おやアヤちゃん。随分と挑戦的ですな。

「そんなわけないでしょ。ヤバイくらい沢山思いついたよ」

「じゃあその中の、ボツ案を一つだけ聞いてみようかな」

「あれ、ボツの方でいいの？」

「何をやるか先に知ったらつまんないでしょ」

うんうん、と頷くクラス一同。なんだ、皆で楽しみにしてくれてるのか。

「別に面白いことするわけじゃないんだけどなぁ」

「はいはい、そうかもね。ところでボツ案は？」

「んっとね、卒業証書を渡した途端に教頭の鼻毛が爆発するとか」

「充分に笑えるわよ、それ」

ぱくり。

「や、鼻毛は汚いからきっと笑えない」

「その発想自体が面白いと思うけど……そもそも笑わすんじゃなくて泣かすんでしょ」

おっとぉ、私が間違ってたら世話ないじゃん。

「うーん、教頭と鼻毛まみれになったらテンカ先生も泣くかなぁ？」

「ま、やっぱり放っておいても楽しくなりそうね」

ぱくり、ぱくり。

うんうん、と再び頷くクラス一同。んー、それで納得してるんなら、まぁいいけどさ。

「そういえばニシカワ君は？　いつも一緒なのに」

「いつもってわけじゃないわよ！　えっとね、その、あの、ニッシーは……トイレ」

あれ。

「ニシカワ君、最近トイレ多いね。さっきも授業中に行ってなかったっけ」

「そ、そうね」

なぜかどもるアヤちゃん。

「ふふふー、それはねー？」

そしてどこからニョキっと現れたサエちゃん。

「バレンタインにアヤちゃんのチョコを食べてからニシカワ君のお腹は――」

「キャー！　キャー！　言わないで！！」

一体何があったんだろう。とても気になるけど、アヤちゃんとサエちゃんは楽しそうに追いかけっこして、そのまま何処かへ去っていってしまった。

「相変わらず騒がしいわねっ」

ぱくぱく。

「あぁ、トイレからおかえり。遅かったね、サユカンもお腹がゆるいの？　いっぱい出た？」

「そういう下品なことを言わないのっ！　わたしはただ途中でタケダと会ったから話してただけよ」

「女子トイレで会ったの？　うあタケダきもい。ちゃんとトイレに流した？　タケダを」

「あんな小さなところに流せないわよっ」

「細かくすればなんとか」

「こまか……っ！　うぇぇ、気持ち悪い」

「……ごめん、私もけっこー気持ち悪い」

この表現はやめとこう、うん。

「とにかく途中の廊下で会ったのよ」

「どんな話をしたの？」

「タマちゃんが元気すぎて困るってさ」

「いつもの愚痴かぁ。でもタケダって絶対シスコンになりかけてるよね」

ぱくぱくぱくぱく。

「ところでさ、さっきからこのぱくぱく言ってるのはなんだろう」

や、自分で聞きつつもわかってたんだけどね。見ないフリをしてただけで。

ぱくぱくぱくぱくぱくぱくぱくぱくぱくぱく！

そんな勢いでカレーを食べてるインドちゃんが教室の真ん中にいたのだ。相方のイチョウさんが隣でオロオロするばかり。

「あの、もしもし？　もう給食は終わってるんだけど」

おそるおそる声をかけたら、キッと睨まれてびっくりした。まさかおとなしいインドちゃんに凄まれる日がくるとは。

「私は今、すごく悲しいの」

「とてもそうは見えない」

ものすっごい量のカレー食べてるし。

「なんで……？」

やがてインドちゃんが喉から絞りだしたのは、その一言。

「えっと、なにが？」

ぱくぱくぱくぱくぱくぱくとカレー食べて。

ヤケ食いのように口へと詰め込んでもぐもぐもぐもぐもぐもぐと租借してからインドちゃんはもう一度言った。

「なんで、そんなに楽しそうなの？」

クラスが黙った。

「笑える？　面白くなる？　相変わらず？　いつもの？」

先程の会話を反芻するように言って。

「それがもうすぐ、なくなっちゃうんだよ？」

言って、現実を突きつけた。

小学六年生の二月。

三月は卒業。

もうすぐこの学校に来なくなる。

この学校での時間が、終わる。

そんなことは皆知ってる。来月は卒業式、それが終わったら中学に行くんだ。お別れする人だっていっぱいいる。うん、知ってる。でも誰も実感なんてないんだ。

「大丈夫だよ」

私は言った。根拠はない、でも言い切った。

「テンカ先生を泣かして、中学まで来てもらうんだ。そうすれば中学校でも皆で一緒。なくなったりしない。何も変わらずに、ずっとやっていくんだ」

信じてれば叶うなんて、小学六年生にもなって言うつもりはないけど。でも、信じて頑張ってれば、きっとうまくいくんだ。知って

るの。私の周りには優しい人ばかり。だから頑張れば、絶対に認めてくれるはず。

だから、頑張らないと。

## カカの天下８４９「いつもどおり」（後書き）

さーて、カカたちはどうなりますかね。三月から仕事が本気で忙しくなる予定ですが、小学校編のラストです。しっかり書き上げたいと思ってます。

そして次はカカラジですな。なんかすっごい久々に書く気がする笑

さてさて、ネタはあるかな……？

**カカの天下８５０「第三十回、カカラジ！」**

『嘘吐きぬこ』さんからいただきました。もしも、カカ天女性陣全員が、ムッキムキで暑苦しい漢だったら。

「ぬぉぉぉぉぉぉぉ！　トメにぃぃぃぃぃ！」

「とぅぉめぇさぁぁぁぁぁぁん！　ふんぬぅぅぅぅぅぅ！！！

「待ってよぉぉぉぉーカカちゅわぁぁあぁぁぁぁぁん！！」

『とりゃあああああうるぁぁぁあぁぁあぐぅおおおおおおお！！』

トメさんは死にました。

『夜野　三日月』さんからいただきました。もしもインドちゃんが、出店の手伝いをしたら。

「あの、ここはやきそばの店なんだけど」

「カレーやきそばのほうが美味しいですよ」

「あの、ここはお好み焼きの店なんだけど」

「お好みでカレーを入れます」

「あの、ここは綿アメの店なんだけど」

「カレーをかけたほうが美味しいですよ。甘口と見せかけてあえて

辛口で」

「あの、ここは金魚釣りの店なんだけど」

「金魚さん、カレーを召し上がれ」

「あの、ここは射的の店なんだけど」

「商品は全部カレー」

「あの、ここは」

「全部カレーの店です」

なぜか大好評で大盛況。

同じく『夜野　三日月』さんから。もしもカカ天メンバーが法律を改変したら。

「私、カカはここに宣言する。一日一回、人を笑わせないと死刑！」

一時は平和になるでしょう。しかし絶対に皆さん疲れます。

『水門』さんからいただきました。もしも、シュバッ！　の時に思くそ足を掴んだら。

「シュバッ！！　あっ、とぉ！？」

トメパパさんはそのまますっ飛んでいきました。壁に激突してぶち破ってそのまま外にいた犬に激突して噛まれて子供に激突して泣

かれてなだめようとして警察呼ばれてシュバッと逃げようとしたらまたコケて家に激突してそのお宅を破壊しました。

お疲れ。

同じく『水門』さんから。もしも、タマが饒舌に語りだしたら。

「だるぅー」

「む、タマ？　何をダラけている」

「キンにー」

「そう、俺はキンジロウ！　そして君は俺の妹なのだ！」

「だるぅー」

「それがだるいというのか!?　それを説明してみせよ！」

「うぇー？」

「負けるのが恐いのか？」

「これはこれは異なことを仰る。私が兄貴に負けるのが恐いと？私にとって恐いものはカツコお母様による攻撃的な行動全てくらいである。その他であなたに負けるであろう点は身長、体重、年齢ぐらいであると自負しているが、何か問題でも？　もしあるなら反証を許す。如何なる点が私を上回るのか事細かに箇条書きしてみせるがいい。二分以内の制限とする。書けたか？　書けない？　ならば口頭で一つだけ発言を許そうではないか。さぁ言ってみるがいい」

「誰だおまえは」

「んあ？」

「なんだったんだ今のは！？」

なんだったんでしょうねぇ。

「なんだチミは！？　そういうわけでようやく始まりましたカカラジ第三十回！　記念すべき三十回！　だけど特別なことは何もしないよん。なぜかというともうすぐ卒業式、本編が特別な話になるから逆にこっちはいつも通りでいいよね？　なんていう感じに作品のバランスなどを主張してみる私ですがどう思われますか留兄？」

「大変よろしいのではないでしょうか香加さん。バランスは大事です」

はい、作者です。私もよろしいと思います。

「おっけー！　さらに逆を言えばちゃんと卒業式らしく特別な話を書かないとダメだよ？」

わかっております。最近さらに更新の不安定が増しておりますが、ここだけはちゃんと書かねばカカたちに申し訳が立ちません。

「しっかり頼むぞ。さて、それじゃいつもどおりに」

「最初はＣＭね！」

『ヌンテンドゥーＧＳ』最新作。

ぶっちゃけ別物です。

「今度のカカ天ゲームで重要なのは」

「（タケダの）弱味を握り！」

「（タケダを）とことん追い詰めー」

「（タケダを）×××っ！」

「正解」

「もうお嫁にいけない！」

（タケダの）×××で戦う×××バトル！

『ヌンテンドゥーＧＳカカ天・タケダｖｓ姉』

「ちょっ！　まじ死ぬ！　まじ死――」

発売日？　自分の胸に聞きな！

ＣＭがあけて。

「今のは『雨天決行』さんからいただきました。香加、これやりたいか？」

「けっこー興味あり」

「よかったなタケダ。あの香加が興味を持ってくれるなんて。これで何をされても本望だな」

きっと思う存分『運ぶぅ戦う増えるー、そしてー食べーられるー』って感じになるんだろうな。

「カカ君に食べれるなんて……うおおおおお！！」

あら、なんか暑苦しいタケダが生えてきた。あまりに興奮して本編から飛び出してきたのでしょう。

「じゃ、あたしも登場だ！」

ノリで姉も出てきました。

そして始まる、タケダｖｓ姉！　ゲーム通りな展開に！！

「ちょっ！　まじ死ぬ！　まじ死――」

結果？　発売日に聞きな！

「さて、変なやりとりもあったけど次いこう。ふつおた読むぞ、香加よろしく」

「あいよ。『六連星』さんからいただきました」

『本当のハサミとはピンセットの事である』

え、そうなの！？　確かに挟むっていえば挟むけど……でも私は知らなかったから普通でもないかな。とりあえず私からすれば。

『ルシカさん、クワガタのハサミじゃ紙は切れませんよ？』

そりゃそうですな。うん、普通。

『洗濯バサミ…うん、はさんでるね』

うん。

『クワガタのハサミで紙が切れなくても、クワガタを噛み切ることはできますよ』

何が言いたいんですかあなたは。

「さて次です」

投げっぱなしかい。なんかふつおたってこんなん多いなぁ……

「次はクリスマスにあった投稿だよ！」

「随分とまぁ前の話だな……」

「仕方ないじゃん、誰かさんの更新が遅いんだから」

耳が痛い。痛くて聞こえない。さて内容は？

「『雨天決行』さんからいただきました。ではどうぞ」

『さて、今日はカカ天メンバーのこども達にプレゼントを用意したよー！』

つまりはクリスマスプレゼントですね。本当に各メンバーにこれを渡せればよかったのですが……とりあえずはここにいる留と香加が代表として受け取っておきます。

『まずカカ！　キミにはボンレスハムだ！なんとなく！』

「わーい、肉だ肉だ」

「嬉しそうだな」

『サエちゃんには高級ビーズセットをあげよう！』

「あ、これいい。私からのプレゼントってことにしよっかな」

「こらこら」

『次にサユカちゃん！　コスプレに目覚めたキミにはセーラー服をプレゼントだ！　ちなみに夏服！』

「後々入る中学校によっては、もうすぐコスプレじゃなくなるんじゃないか？　これ」

「ていうか年齢的にもコスプレじゃないよね。これをコスプレって言ったら中学校と高校が全部コスプレ会場になっちゃうよ」

『なぜって？きゃわいいから！　↑結論』

「まぁそれは言える」

「まぁそれは言える」

『さて、長くなりそうなんで一気にいくぜェ！

ニシカワ→タニシ育成セット。

アヤ→最新技術を搭載したマイク。

ヤナツ→ローストオニオンドレッシング。

イチョウ、もといアサカさん→レタス。

クララ→座布団（桜色）。

タマ→赤い長靴にお菓子詰め込んだアレ。

タケダ→カカに叩きのめされ券（一枚につき一回カカに叩きのめしてもらえる）。

さーて、こんなもんか。もし、忘れてる子がいたら、タマにあげたヤツと同じのをあげて下せェ』

「ねぇ作者、どれか一個くらい本編で使ったりするんでしょ？」

うーん、タケダの叩きのめされ券なら使ってもいいかな。

「おぉ、きっと泣いて喜ぶだろうな」

「個人的にはアサカさんのレタスが気に入ってる」

「僕はクララちゃんの座布団だな」

「ところでまだ続きがあるんだけど」

『では最後は歌のじかん！前回の感想で書いた通りクリスマスソングです！

どぞ！

カカ天的クリスマスソング２００９

でゅみゅみゅう～♪×２
でゅみゅみゅみゅう～♪
今日はー楽しいクリスマス♪（ウェイ！）

でゅみゅみゅう～♪×２
でゅみゅみゅみゅう～♪
今日はー楽しいクリスマス！♪（ウェェェイ！）

サユカちゃん♪

トメさんを♪

ミニスカサンタで悩殺かー？♪

でもトメさん♪

正直さぁ♪

ムラムラなんてして
……ないよね？
（ウェイ！）
でゅみゅみゅう～♪×２
でゅみゅみゅみゅう～♪
今日はー楽しいクリスマス♪（ウェイ！）
でゅみゅみゅうー♪×２
でゅみゅみゅみゅうー♪
今日はー楽すぃー♪
ク・リ・ス・マ・ちゅ！（ウェ！？）』

以上、香加さんに高らかに歌っていただきました。

「さて、ツッコんでいいか？」

うむ、どうぞトメさん。

「カカ天的とか言ってるわりにカカに関する描写が一つもないんだが」

ソコをツッコみますか。でも言われてみればそうですねぇ。

「私なくしてカカ天はありえない！　というわけで歌詞の修正を求める」

「でもクリスマス、もう終わってるぞ」

「んじゃ来年のクリスマスまでの宿題ね」

覚えてくれるかねぇ『雨天決行』さん。

「んじゃ忘れられたら作者が改造するってことで」

まぁそれでもいいですけど。例えばどんな風にしたらカカ天らしいかな。

「バックの（ウェイ！）をタケダの悲鳴にしてみるとか」

さっきの叩きのめされ券を使ってるみたいにすればいいんですね。うんカカ天らしい。

「結局カカは出てないぞ？」

「たまに私が（オラァ！）とか言えばいいんでしょ」

そんなん出番でいいのか主役。でもそこはかとなくカカ天ぽい。

「納得されたとこで次いくぞ。えっと、脅迫状コーナーだな。『紫神　川悠』さんからいただきました」

『脅迫状その1。すみません、脅迫します。すみません』

「腰低い脅迫状だね」

「そのくせその1とか言って『沢山脅迫します』と主張している矛盾」

まぁまぁ続きを読みましょう。

『カカさんへの誕生日プレゼント『高級原始人セット』で誰一人選ばなかったクロマニヨンの口の中に、温泉旅行のチケットを入れておきました。仕込んですみません。気付かれなくて、すみません。そういうわけで、この冬は笠原一家で温泉旅行に行って下さい。すみません。なお、チケットは家族なら全員割引対象です　が、自己申請であり証明書等は不要です。すみません。

もし、受け入れられなかったら、トメ君の足がむくみます。すみません』

むくみました、すみません。

「ちょっとぉ！？　受け入れようよ！　温泉旅行とか楽しそうじゃん！」

まだ本編でカカが見つけていません。だからとりあえずむくみました。

「うわ本当にむくんできた！」

はい続き。

『脅迫状その2。すみません。最近チョイ役ばかりで印象薄いテンカ先生にスポットライトをあててあげて下さい。すみません。さもないと、トメ君のお腹がふっくらプニプニもちもちとした感触になります。すみません』

というわけで留君がプニもちなお腹になりました。

「当ててんじゃん！　テンいま卒業式でスポットライト浴びてんじゃん！！」

『脅迫状その3。すみません。最近すっかり化け物扱いが板についてきたカツコさんに、普通にお姉さんをさせてあげて下さい。すみません。

でないと、トメ君がタンスの角に足の小指をガンッてします。すみません』

アレが普通のお姉さん？　ありえない。というわけでガンッ！

「いってぇ！！」

『脅迫状その４。これからも楽しいカカ天を書いて下さい。聞き入れられなければ、ルシカさんが、カカ天メンバー全員ｗｉｔｈ私からカカラジチョップを食らいます』

「今だ、仕返し――」

はい、頑張って書かせていただきます。ということでチョップは無しで。

「更新が遅れまくっているのは書けていると言えるのか！？」

これから卒業式まで頑張るもんよ！！

「さてさて、留兄がいろんな意味で悲惨になったところでＣＭに」

「待てぃ」

「え、なに？　ＣＭの前に皆で大笑いしたほうがいい？　留兄を指差して」

「どんだけ兄不幸な妹なんだおまえは！　もう少し僕のことを哀れんだりとか」

「あーあ可哀想に」

「ムカつくなおまえ！」

「どうしろと」

はいはい、埒が明かないのでＣＭいきますよん。前に「ＣＭください」って書いたおかげで二本も紹介できることとなりました。

「おぉ、やっぱり書いてみるもんだねぇ」

では二連続でどうぞ。

『ついに今春発売決定！『カカの天下』アニメＤＶＤＢＯＸ１～４巻！

テレビ愛知で放送された、アニメ『カカの天下・シーズン１』全１２話を全て収録したＤＶＤＢＯＸが遂に発売されることとなりました！　高画質、高解像度　で、しかも本編では隠されて見れなかった部分や新カットまで収録！　更に予約特典として「サエちゃんフィギュア」と「トメちゃんフィギュア」、そして「タケダのサンドバック」、「姉」が付いてきます！

※一般の店舗では購入出来ません。画面に表示されてある宛先に連絡をとって、その指示に従って下さい』

『ジーク』さんからいただきました。

「なにこれほしい」

うん、むしろ私がほしい。

「誰か作ってくれればいいのに。しかし姉はいらんだろ」

弟の君が言うなよ、可哀想だろ。

「いいんだよ、姉だし。はい次」

『クリスマスまで1ヶ月もない今、皆さんイベントの衣装でお悩みではありませんか？
んな方には是非こちらの商品！「高級サンタセット」をおすすめいたします！！

忍者ご用達！

防弾性、防刃性に優れるのは勿論、注目していただきたいのは衝撃吸収力！

何と！　ＡＮＥに思いっきり殴られても3発までは大丈夫、と言う脅威の性能！！

更に！　今ならこちら、「高級特撮メイクセット」もついてきます！

これで、ちょっと素顔がバレたら困ってしまう、なんて方も安心です！

手軽にできるハリウッド級メイクで、お孫さんですら貴方だと気づきません！

更に更に先着２０名様には、どこぞの小学生探偵の蝶ネクタイ並みの機能を誇る、「付け髭ボイスチェンジャー」まで同封されています！　抽選で１名様には、Ｍ・Ｓさんの鼻血染め（酸化しきって真っ黒け）をお届けいたします！

バリエーションも豊富！

大人用の他に、背が高くてポニーテールで色々成長期（はーと）な小学６年生女子が、一回り以上年上の彼を振り向かせるのにピッタリな、超ミニスカバージョンも！

こちらをお求めの場合は、お電話の際に「桃色」と叫んでください！

さて、気になるお値段ですが――これら全てセットで――

――５００でみゅう、５００でみゅうでご奉仕させていただきます！

本日紹介した「高級サンタセット」、是非こちらの番号にお電話してお求めください！

おっと！　早速お電話いただきました！！

はい！　「高級サンタセット・桃色」をお一つですね、かしこまりました！

では、お支払いの方法ですが……はい！　「きゃわいい声きゃわいいセリフ払い」ですね！　少々お待ちください！　すぐに録音準備いたします！』

ＣＭがあけて。今のは『白金』さんからいただきました。

「えと……クリスマス？　また？」

時間系列が違うのは気にしたら負けです。

「んとね、補足を読むよ。『感想欄で、カカクエの通貨に「でみゅう」を推していた方がいらっしゃった覚えがあったので、つい使ってしまいました。えっ、最後の早すぎる注文がサクラじゃないかって？　いえいえ、サクラではなく、桜な子のお姉ちゃんですよ』だそうです」

買ったのはやっぱあの子なのね。

「しかしきゃわいい声きゃわいいセリフ払いってのはなんだ？」

「きっとそれを録音したテープにすごい価値が付くんだよ。きゃわいすぎて」

そこまでいくとゆくゆくは世界遺産になりそうですねぇ、あの子。

「お母さんの手腕があればできそうなのが恐いな」

「でも何がどうなっても私の嫁であることは変わらないんであしからず」

ハイハイ、わかってますよ。多分読者の方も全員。

――さて、最後にもう一つだけお便りを読みましょう。『三雲』さんからいただきました。

『特別企画大募集！！

こんな企画をしてほしい。

こんな企画を見てみたい。

そんな思いをルシカ先生に伝えてみよう！

面白そうなら採用されるはず！（多分）

感想またはメッセージからどうぞ』

「企画ねぇ。やる余裕あんの？」

という、お便りをいただきまして……

正直、今の形でいくと厳しいかと。

私的なことですが、三月からお仕事の責任がちょいと上がってしまいまして。なおさら気軽に書けない状況となってしまったのです。なので、また形式を変えようかなーなんて考えてます。ハッキリと決めたわけではないのですが、『週一回、この曜日』と更新日を定めて1～3話を一気に更新する形とか、カカラジを10回ごとにして、もう少し短めにしてみるとか。

「前みたいに毎日更新は無理、かぁ」

やりたいのは山々なんですが、これぱっかりやってたら生活できませんので……ちょうど小学生編も一区切りつきますし、中学生編から新体制で、という方向を考えてます。

「じゃあとりあえず、卒業まではなるべく書くんだな」

あい、それは書き上げねばカカたちに合わせる顔がありませんので。

「応援してくれてる皆様、こんな感じになりましたが、どうか温かい目で僕たちを見守ってくれると嬉しいです」

「私の分身も頑張って卒業式を盛り上げると思います！」

そんなわけで、カカラジチョップは――

「作者のケツに、カカラジチョップ！」

「おらぁ、しっかり書けぇ！！」

はいいいいい！

『この番組は、『企画募集委員会』と、『ヌンテンドゥー』と、『でみゅう通販』の提供でお送りしました』

## カカの天下８５０「第三十回、カカラジ！」（後書き）

ほんっと更新遅れすぎてどうしようって感じの一週間でした。うぬぅ、不甲斐ない。

しかししかし、卒業式は今月！　負けぬ、負けてられぬ！　だからカカたちも負けるなー！

## カカの天下８５１「今年の雛祭りはコレだ」

こんにちは、トメです。今日はひなまつり……え？　もう過ぎた？　そんな馬鹿な。だってほら、僕の部屋にあるカレンダーを見ても三月三日ですよ。よし、今日は三月三日だ。

というわけで、イベント好きな僕の周りは今回も大騒ぎすることでしょう。

「トメくぅぅん！　きょーぅおはった、の、し、うぃ雛祭り、フォー！！」

やたら高いテンションで我が家に現れたのは……

「友人Ａか……」

「なんだそのガッカリしましたって顔は！　あぁそうですかそうですかトメハーレムの誰かじゃなくてゴメンなさいねぇ美人女性じゃなくて美形男子ですいませんねぇ！　えぇそうですよ君の周りの女性陣がどうせ集まると思ってつまみ食いに来たんですよあたしゃハイエナですよこうでもしないと彼女ができる可能性とかないんですよ、ケッ！」

友人Ａという地味な名前にしては面白いことを言う。

「あれ、トメ兄どしたの」

と、ここでカカが登場。外行きの服装だ、どこかに行くのか？

「おぉカカちゃん！」

「誰この人！」

「友人Ａだよ！」

「あんたなんかと友人になった覚えはない」

あ、泣いた。

「ところでカカ？　今日は雛祭りだよな、何かやるんだろ？」

「や、何もしないよ。それどころじゃないもん」

あれ。

「いってきまーす」

首を傾げる僕を置いて、さっさと出かけてしまうカカ。

「珍しい……イベント好きなあいつが」

「後をつけよう！」

友人Ａ復活。

「なんでさ」

「雛祭りしないなら俺は暇だ！」

「暇つぶしかよ」

まぁ、今日は僕も予定がないからいいけど。

「でもこれストーカーみたいだぞ」

「そう、これこそが俺たちの雛祭りだ！」

「おまえどこの偏執的な教育で雛祭りを習ったんだよ」

ともかく妹の後をつけることに……

「カカちゃん、気づいてないな」

「あんにゃろ、携帯見ながら歩いてやがる。危ない、許せん」

「おまえって兄というよりママみたいだよな」

「きっとテト〇スの練習だな。おのれ、今度こそ対戦で勝ってやる」

「あ、いまちょっとお兄ちゃんっぽい」

ともかくつける……

やがて辿りついたのは、いつもの公園だった。

しかしそこには、なんとも異様な光景が広がっていた。僕の記憶が正しければ、あれはカカのクラスメイト。あの人数だと、もしかすると全員が集まっているのかもしれない。

――その大人数が、横三列に並んで合唱しているのだ！

『あーかーさーたーなー！！』

綺麗に揃う合唱。

「……なんだ、あれ」

大きな木の陰にこっそり隠れながら、僕は呟く。何かを練習しているのはわかる。しかし、意図は不明。

「なるほど……これがやつらのヒナマツリ……！　それどころじゃないというのは、『そんな普通のひなまつりなんてやってられない』という意味だったのか！」

意図は不明、だが、この阿呆Ａの言っていることは絶対に違うと思う。

「ほら、もっと力入れて！」

カカの声だ。僕は周囲を見渡すと、合唱団から少し離れたところに見つけた。

「どすこーい！」

……なぜか、しこを踏んでいるタケダと一緒に。

「ダメダメ！　そんなヘナチョコじゃ」

「そ、そんなことを言われても……俺はもともと天才的な文系で――」

「じゃあやめるの？」

「やります！　カカ君のためならば！」

「よし、とりあえずもうちょっと太れ」

「おお、カカ君が太った男好きというならば喜んで！」

「デブは嫌い」

「え、じゃあやめ――」

「でも必要だから太れ」

「う、うぉぉぉぉ……これは愛の試練なのか、どすこーい！」

ほんと、なにやってんだあいつら。

「あれ、友人A？　帰るのか」

「おう。なんだか期待してたイベントは起こりそうにないしな」

「とりあえずツッコミどころ満載なイベントは起きてるぞ、そこで」

「いやぁ、俺が期待してたのはもっと大人にデンジャラスな展開なわけよ」

そんな展開を僕の周りで望むほうが間違ってる気がする。

「じゃ、また会おう」

「お、おう」

さて、僕一人になってしまった。どうするか。ツッコみにいくか？　んーでも、何かの練習だとすると……邪魔しないでおくか。

僕はそう結論づけると、そのままこっそり家へと帰るのでありました。

で、帰ったら。

「待ってましたよトメさん！」

「待ってたよ弟！」

「待ってましたよートメさんよー」

なんか、サラさんと姉とサカイさんがいた。

「さぁさ、お雛様の格好しましょうねー」

「え、え、え！　なんで僕がお雛様！？」

「そのほうが面白いからです！」

「本当はうちのサエをお雛様にしたかったんだけどー」

「あたしもカカちゃんをお内裏様にしたかったんだけど」

『忙しいってフラれちゃったから、代わりヨロシク』

友人Ａカモン！　そして身代わりになれ！　おまえの望む『大人にデンジャラスな展開』が相当高いレベルにおいてただいまライブで進行中――うわあああ脱がされるぅぅぅぅ！

――合唱。

『あいうえおいうえあー♪』

違った。合掌。

## カカの天下８５１「今年の雛祭りはコレだ」（後書き）

え、雛祭りは随分と前に過ぎた？

そんなもん知りません。

知りませんとも。

えぇ。

……えーと。

ごめんなさい。

# カカの天下８５２「お酒の味は？」

こんにちは、トメです。

雛祭りではヒドイ目に遭いました。まぁなんとか逃げ切ったのですが、『シュバッ』を使えない身としては厳しい逃亡劇となりました。まぁそれはさておき。

「かんぱーい！」

今は久々にテンと飲んでます。しかしこの乾杯、実は五回目くらいです。

「今日はほんとテンション高いなぁ、雛祭りにでも何かあったか？」

むしろ何かあったのは僕の方だったりもするのだが。

「はっ、この年で雛祭りなんかやらねぇよ」

「だろうな。しかしテンの場合、年齢関係なくやってなさそうだ」

「んだとぉ？　これでも子供の頃はかよわい女の子だったんだぞ。自分のことも『オレ』じゃなくて『私』だったしな」

「ふはははは！」

「なぜウケる！？」

「試しに私って言ってみ」

「何よ、私が私って言うのがそんなにおかしいっていうの！？」

「ぶはははは！　オカマだ」

「そりゃひでぇだろてめぇ！」

だってこんなに男らしいテンが女性言葉とか。ウケるし。

「そういや雛祭りっていえばな？　カカたちが妙なことをしてたぞ」

気のせいか、テンの肩がびくりと揺れたような。

「……妙なことって、どんなことだよ」

「なんか『あーかーさーたーなー♪』って歌ってた」

「冗談抜きで妙だな」

「カカたちが子供じゃなかったら間違いなく通報されてたな」

真っ先に捕まるのはタケダに違いない。

「あー、そのな？　オレがテンション高い理由ってのが……そのカカたちのことなんだよ」

「おまえも変なやつだな。『あーかーさーたーなー♪』で興奮するのか？」

「ちげぇよ！　あーっとな……」

テンは言いにくそうに口をもごもごしながら、

「カカたちが、卒業式で、オレを泣かそうとしてくるんだよ」

泣かそうと？

『あーかーさーたーなー♪』で？

「おまえらアホだろ」

「話は最後まで聞け！」

「『あかさたな』を最後までってことは『わ』で終わりまで聞けばいいのか。それとも『ん』まで続くのか、その日本語講座」

「ちげぇ！　あのな、もうすぐ卒業式だから」

「卒業式にようやく『あかさたな』を習うのか。小学校六年間で一体何を学んでいたのやら」

「は、な、し、を、き、け！！」

おっと、酔いに任せて調子に乗りすぎたか。

「あいつらが勝手に決めやがったんだよ！　オレが卒業式で泣いたら、中学まで担任をやれってな！」

……は？

「なんだそれ、無理だろ」

「ああ、無理なんだよ」

小学校から中学まで『担任が一緒』なんて話は聞いたことがない。ましてやテンは貴桜小学校に勤め始めたばかり。いきなり異動などできないだろう。

「なんでそんな約束したんだ?」

「したくてしたんじゃねぇよ、あいつらが押し切ったんだ」

苦い表情で言葉を漏らすテン。しかしなるほど、言われてみればあっさりと想像できることだった。『テンカ先生と離れたくない』『じゃあついてきてもらおう』『無理矢理にでも』なんてカカたちの考えそうなことじゃないか。

「でも、無理だよなぁ。いくらなんでも」

「ああ、無理だ」

悲しいかな、世の中はそこまで甘くできていない。

「おやじ、ビール!」

だから大人は酒を飲む。

「おやじ、ビールもってこい!」

人に絡む。

「おやじ、ハゲてるぞ！」

ヤケにもなる。

「おやじ、そのハゲを取れ！！」

わけのわからないことも言ってしまう。

「おやじ！　てめぇ店員なら――あ客か」

迷惑もかける。

「って客かよ！？　おまえいくらなんでも」

「トメ、さっさとビールもってこい！　ハゲさすぞ！」

「おまえどうしようもないな！？」

そう、どうしようもなくてやりきれないんだろう。

テンはこの日、いつもよりも多く酒を飲んだ。

「なぁトメ」

「なんだ」

「にげぇ」

「そうか」

苦いのはビールか、世の中か。

とりあえず、この酔っ払いの世話をしなければならない僕の気持ちも苦かった。

## カカの天下８５２「お酒の味は？」（後書き）

ビールは苦いのが旨いのですが。

世の中は……

少しくらい甘くてもいいのにねぇ？

## カカの天下８５３「不安な準備」

「トメ兄、買い物いくよね？」

「ん、ああ」

「じゃあこれ買ってきて」

「え、おい。結構これ高いものも」

「はい、お金あげる」

どうも、トメです。

そんなわけで買い物に言ってきたわけですが、カカに頼まれた妙なものも沢山買ってきました。とりあえず、なんでそんなものを買わなければいけなかったのか問い詰めてみたいと思います。

「よしカカ、質問だ」

「なんぞやもし」

「まずこの、買い物リストの一番上にあった『ぢの薬』はなんだ。おまえ、ぢなのか？」

「乙女にそんなこと聞くやつは死んでしまえばいい」

「じゃあ友達がぢなのか」

「違うよ、いいからちょうだい」

うーん、ぢの薬をぢ以外に使うのか？　思い浮かばん。

「あと、この牛乳。まだうちに一本あるだろ？」

「うん、でも未開封のが必要なんだよ」

「なんで」

「持ち歩けないじゃん」

さっきからどうも会話がかみ合わない。

「……あと、この大量のクッションは？」

「一人１０個がノルマなんだよ」

「この『活きのいい魚、この二種類』はなんなんだ」

「活きがよくなくて腐ったりしたら困るでしょ」

どうしよう、妹が何を言ってるのかさっぱりわからない。

「そもそもこんなに買えるほどの金、どうした？」

「私のお小遣いと皆のカンパ」

……カンパ？

「ていうか自分で買いにいけばよかったんじゃ」

「私は計画書を書くのに忙しい」

「計画書って、何の？」

「卒業式の」

ここでようやく僕は合点がいった。テンを泣かそうと相談していたカカたち。泣いたら中学までついていく、などという約束をしてしまったテン。そしてこの妙なアイテム。こいつらはまた変なことをやらかすつもりなのだ。

「なぁ、カカ。テンを泣かしたら中学までついてきてくれるって、本気で思ってるのか？」

「あれ、トメ兄知ってたんだ。うん、思ってるよ」

「あのな、いくらなんでもそれは無茶だぞ」

「その無茶を可能にしてくれるのがテンカ先生だよ」

どうやら本気で言ってるらしい。

「カカ、できないことはできないんだぞ」

「できないできないって言ってたら、できるもんもできなくなるでしょ。やるだけやってみないと」

「それは、そうだけど」

カカは真剣で、必死だった。

「そんなにテンのことが好きなのか」

「うん」

僕は応援できない、止めることもできない。わかってる、大人だから知っている。無理なものは無理だということを。でも、それがなんだ？　たかがそんなことを知っている程度の僕が、この子たちの純真な想いを妨げていいとでも？　いいわけがない。この子たちが先生に来てほしいと願っているなら、そのための努力をさせてあげるくらい構わないじゃないか。

きっとそれは、誰にも迷惑はかからない――いや、かけてもきっと許されるだろう。

「よし、トメ兄。もうちょっと協力してくれる？」

「なんだ、僕にできることなら」

「かんちょー」

「はぅあぅぅぁあああああああ！？」

とある箇所からほとばしる衝撃！

「ぬぁ、ぬぁにぉしゅりゅ」

「ねね、ぢになった？」

「な、なってないとおもふ」

「じゃ、もっかい」

「はぅぃぅぅぃぃっぃ」

め、迷惑はかかるかも。そしてこれでぢになったら許せないかも！

その頃のタケダ。

「もうすぐ卒業式だな、キンジロウ！」

「……うん」

「どうしたどうした、卒業式が近づいてきたのが悲しいのか？」

「……うん」

「なんでそんなものを握り締めて泣いてるんだ？」

「……うん」

タケダは思う――卒業式なんてこなければいいのに。

その頃のインドちゃん。

「ふ、ふふふ、ふふふ……これで一晩寝かせれば……ふふふ」

インドちゃんは思う――最高のカレーができそうだ。

その頃のサエちゃん。

「……んー」

「どうしたのサエー？」

「もうすぐ卒業式だよねー」

「そうよー。お母さん張り切って撮影するからねー！」

「なんか普通に寂しくなってきた」

「よしよしー、お母さんの胸においでー」

「……ぐず」

サエちゃんは思う――もっと皆といたい。

その頃のサユカちゃん。

「あーあー！　んんっ、あーかーさーたーなー♪」

サユカちゃんは思う――発声練習はこのくらいにしておこう。

その頃のイチョウさん。

「くー」

イチョウさんは夢の中で思う――ちょっと早く寝すぎたかしら？

卒業式まで、あと少し。

## カカの天下８５３「不安な準備」（後書き）

次はいよいよ卒業式。

準備はかなりぼかしましたが、何をどのように使うやら。

そして最後はどうなるか。

まぁ、私の中では決まってるんですけど。皆さんはどうなったらいいと思いますかね？

## カカの天下８５４「卒業式？」

どうも、おなじみのトメです。

いよいよ卒業式当日となりました。僕は父兄として体育館にて開式を待っています。

「胸がドキドキしますねー」

「あらサカイさん？　ドキドキするような胸、あるんですか？」

「あら、そういうサラさんは無駄な脂肪が邪魔して心臓がうまくドキドキできないんじゃないですかー？」

「ほーんと、サカイさんのソレはスリムでいいですねぇ」

……隣の二人は相変わらずだ。誰かなんとかしてほしい。

「はっはっは、いやぁ楽しみですねぇ」

「キリヤ、なんでおまえがここにいる。父兄じゃないだろ」

「ふ、カカちゃんに招待されたのです。面白いことするからどうぞ、と！」

どう考えても卒業式の誘い方じゃねぇ。

「ところであの先生、ゴボウに似てませんか？」

「なんだ急に……うわ、確かに似てる」

「きんぴらゴボウにしてやろうか！？　とかケンカ売ってみたら面白そうですね」

「確かにどういう反応するか見てみたいが、それはさておき……ユカも一緒か？」

なにやらきんぴらゴボウにウケたらしいユカは笑いながら答えた。

「ええ。カカちゃんの卒業式なら見ておかないとね」

「おまえ、結構カカ好きだよな」

「まぁ、それもあるし。仕事もあるし」

だから何の仕事なんだよ。わけわからん。

「うわ懐かしい！　この小学校入るの何年ぶりだろう！」

そして、さらに何の仕事をしているかわからない人間まで現れた。

「友人Ａ？　なんでおまえまでここにいる」

「ふぇ？　なんとなく」

本当に通行人Ａと同じ人種なのね、おまえは。

――こんな騒がしいメンバーで並んで座っているわけだが。さて、注目のテンカ先生様は……あ、いた。ステージ脇で準備してる。

様子は、いたって普通。

はたしてこれから泣くのか、否か。

「お、そろそろか」

父兄も粗方座り終わり、周囲で準備していた先生がたの動きも落ち着いてきた。

そして、始まる。

卒業式が！！

「在校生、入場！」

綺麗に整列して椅子へと向かう一年生から五年生の子供たち。うん、きちんとしてる。

「卒業生、にゅーじょー！」

あれ、なんか言い方が違うような。まぁ変わらないよな。

ほら、入ってくるカカたちにも違う様子は……様子は……なんか変だ。

みんなパックの牛乳持ってる。

「着席！」

あ、座った。

「一気！」

一気に飲んだ！？

「げっぷ！」

や、それは一緒にしなくてもいいだろう。

「卒業生の乳場でした！」

シーン、と静まる体育館。

すっくと立ち上がるカカ。

「乳がなくて悪かったな！！」

なぜか全員がサラさんに注目した。

「え、え、え？　なんで私を見るんですか！？」

「起立！」

「え、あ、はい！」

カカの号令によって無理矢理立たされるサラさん。

「礼！」

「は、はい」

「乳！」

「えええええ！？　どうすればいいんですかそれ！！」

「適当に！」

「え、えっと……じゃ、とりあえず揺らしてみます」

「死んでしまえ！！」

「そんなあああああああ」

「着席！」

「わ、私って一体」

『えー続きまして』

半ば泣きながら座るサラさんに構わず式を進めるデストロイヤー教頭。

『開式のぢ』

……ぢ？

「どうも、開式のジジィです」

誰!?　いまステージに上がってるじーさん誰!?

「えー、本日は開式となるにあたって、ぢの話をしようと思います。このぢというのは肛門部周辺の静脈が圧迫され血液の流れが滞ることによって発生する疾患の総称です。ぢにはいぼ痔、切れ痔、痔ろうの3タイプがあります。その内、約半数程度を占めるのがいぼ痔で、切れ痔、痔ろうは1~2割程度です」

いきなり朗々と語りだしたじーさんは、ゆっくりと懐から円筒状の薬を取り出した。

「そこで皆さんにオススメなのがこの薬、『ヂニナール』」

「なるんかい!!」

思わずツッコんでしまった。注目が集まってしまうかと思いきや、皆「うんうん」と頷いてる。そうだよな、僕は間違ったこと言ってないよな?

「これを塗るとあら不思議」

『以上、開式のぢでした』

「えええええ!　もっと喋らせぃよぅ、きょーとー!」

『つまみ出せ』

「は、離せ!　わしにもっとぢの話をさせろおおおおお!」

教職員に引っ立てられるじーさん……カカよ、あのじーさんどっから連れてきた？

『続いて、校長の話です』

あ、オホホおばさんがステージに上がった。

「おほほ、本日はとてもおめでたい日ですわね」

ぽと、と校長の隣に何かが落ちた。

僕が前に買った鯛だ。

「皆さん、今までの六年間は――」

隣に落ちてる生魚を無視して話を進める校長。

「――そんなおめでたい日のお天気が晴れなのも、きっと天が皆さんをお祝いしているということでしょう」

あ、もう一匹落ちてきた。

「本当に、おめでとう」

あ、落ちてきたかと思ったらいきなり天井から腕が伸びてキャッチ、上に戻った。おめでたいとおめでとうを聞き間違えたな。ていうか、誰が落としてるんだ？

「トメさん、あれー」

「ん」

サカイさんの指差す方向を見てみる。そこの壁には卒業式のスケジュールが達筆で書かれて貼ってあった。こういうのにはお偉いさんの名前も載っているものだが、その中に……

『友情出演、笠原カツコ』

「何の番組だコレは」

ていうか何してるオマエ。

「おほほ、私からのお話は以上です」

そんなこんなで校長の話は終了。

「めでたい」

ぽと。

「いやそれ鯛落としたかっただけでしょ」

僕のツッコミも虚しく、にこやかに去っていく校長。

『続きまして』

そこでいきなり教頭の髪の毛がポーン！　と破裂して宙を舞った。

固まるハゲの教頭。そして今までの異様な雰囲気にお笑い的な意味で呑まれていた人々が一斉に吹き出した。

「許す！」

許すんだ！？

『さて、こうか斉唱である』

そう言いながらハゲカツラを取る教頭。二重にカツラをかぶってたのか、つーか教頭すげー協力的だな。カカのやつ、一体どんな懐柔を……

「いやぁトメ君、こうか斉唱とはなんだろうね。私は楽しみで楽しみで」

「は？　何言ってんだキリヤ。校歌は校歌だろ」

「でもあのスケジュール表を見てください」

僕はさっきの『友情出演、笠原カツコ』という箇所を見ないように、改めてプログラムを見てみた。

『こうか斉唱』

「……なんで校歌がひらがななんだ」

「だから楽しみなんですよ」

確かに何かがありそうな気配。しかし準備はいたって普通、一人の生徒がピアノの前に座り、伴奏を始め――

『こーうーかー♪』

『以上、こうか斉唱でした』

『えええええええええ！』

さすがに驚愕する父兄の皆様。

「終わり！？　終わりなの！？」

思わず立ち上がってステージ脇の教頭へと声をあげてしまった。

『ええ、問題が？』

「そら問題だろ！」

『たしかにこうかを斉唱しましたが』

「いや、うん、したけどさぁ」

『見事なこうかでした』

「たしかに妙に揃ってたけど！　ハモってたけど！」

「教頭ごめんね、うちの兄が」

「僕はここにいる全ての皆さんに同じセリフを返したいところだぞ！　ごめんなさいうちの妹が！！」

さっきから思ってたけど（思ってて口に出さなかったのはカカに慣れすぎたせいかもしれんが）とにかくやりすぎだ！

「校歌くらいちゃんと歌え！」

「むぅ、仕方ない。教頭、やりなおそ？」

おい妹、なんでおまえそんなに偉そうなんだ。

『致し方あるまい。こうか斉唱！』

……ひらがなのままなのが気になる。まさか。

『こーうーかー♪』

変わってないし。

『そーうーかー？』

返事してるし！！

『そーうーだー♪』

「以上、ソーダ斉唱でした」

さすがにツッコミが思いつかなかった。

『閉式のぢ』

「どうも、閉式のジジィです。さて、ぢの素晴らしいところは――」

『以上をもって、卒業式を終了いたします』

「はやいっ、はやいぞ！　いやじゃ、わしはもっとぢの話をするんじゃあああああ」

つまみ出されるじーさん。

えっと……なんだコレ。あのさ、全く関係ない人が見たら面白いかもしれないけどさ。いやそこの関係ないユカさんなんか腹かかえて笑ってるし。うん、でもさ？　当事者としては全然笑えないんじゃないか？

だってほら、ずっと脇に待機してたテンだって絶句して――

「ぶはははっはははははっはっはははははくははははははっはははは！！」

――ない。腹抱えて大爆笑してる。オイ当事者。

「はは、は、は?」

「ん?　どうしたんだあいつ」

テンはギクリと肩を震わせると、慌てたように立ち上がり、そのまま体育館の外へと走っていった。

「追うよ!」

そして同時に立ち上がり、追うように外へとなだれ込む卒業生たち。

なんだ、一体なんなんだ。

しかしとりあえずこれだけは言わせてくれ。

卒業証書、渡してなくね?

## カカの天下８５４「卒業式？」（後書き）

なんかメチャクチャな卒業式ですが。

まだ続きます。

きんぴらゴボウにしてやろうか！

発言に意味はありません。

**カカの天下８５５「卒業式！！」**

テンカだ。

いきなりだがオレは逃げている。体育館を出て、校舎に入り、走って走って、階段の下部分にできる隙間に身を隠した。

急な運動で乱れた息を整えながら、ふと小さい頃を思い出した。周囲にあるものをなんでも遊びに利用していたあの頃、こんな隙間は隠れるのに打ってつけだった。そう、小学校の頃。

「卒業……か」

座り込み、少しぼんやりしてみる。体育座りというやつだ。

「ったくあいつら、笑わせてくれやがって」

冗談抜きで笑えた。笑いすぎた。そして涙を浮かべたところでやつらの作戦に気づき、見られる前に逃げ出した。

「……くく」

思い出すだけで笑えてくる。何を？　さっきの光景だ。もちろんそうさ。

「……はは」

オレがいま思い出してるのは、さっきの光景だけに決まってる。

「ははは」

そうだ、さっきの光景だけを思い出せ。余計なことまで思い出すな。

「せーんせ」

「……！」

あげかけた声を飲み込む。

恐る恐る振り返ると、そこには、カカが。

「見っけ」

「んだよ、足音くらいたてやがれ」

「なんせ忍者の娘なもんで」

「ほんと非常識なヤツだ。これからが心配だな」

「そんなに心配なら中学まで一緒してよ」

「やだね」

「嘘つき」

「なにが」

「さっき笑いすぎて泣いたくせに」

「さて、なんのことやら」

「へぇ、そういうこと言うんだ」

オレは立ち上がった。

「式の途中で悪かったな。さぁ戻ろう」

体育館の方へ足を向けると――それを遮るように、サエとサユカが立っていた。

「あんだよてめぇら」

「せんせー、はい」

サエが何かを手渡してくる。これは……色紙？

「みんなに書いてもらいました」

真ん中にはヘタクソな絵。多分オレの顔。そしてそれを囲むように書かれているのは――

『せんせい、大好きです。今までありがとう』

『先生のおかげで学校が楽しくなりました』

『勉強が嫌じゃなくなりました。テンちゃんのおかげです』

『トメさんは渡さない！　でも先生も好きよっ！』

『もっとカレーを食べましょう』

書かれて、いるのは。

『テンカ先生の男らしさに惚れたぜ！　これからもよろしく！』

『ずっと私たちの先生でいてください』

『他の先生と違って、テンカ先生は友達みたいに接してくれました。嬉しかったです』

『運動会で怪我をしたとき、先生の優しさを実感しました』

『これで終わりなんて嫌です』

『なんだか書いてるうちに泣けてきました』

『もっと一緒に』

やべ。また余計な光景を思い出しちまう。

「さんきゅ、後で見るわ」

「ダメですよー」

「いま見てくださいっ！」

ちっ、めんどくせぇ。

逃げよ。

「あ、先生！」

カカの声を無視して走り出し、階段を駆け上がる。さすがのカカも大人の足にはついてこれまい。これでも結構足は速いほう――あん？　なんだ今の音。笛？　体育のときに使うやつの音か。

『テンカ先生！』

思わず足を止める。なんだ、今のはどっから聞こえてきた？

『私たち、先生に伝えたいことがあるんです』

放送？　放送室からわざわざ流してんのか、こいつら！　しかもこの声、うちのクラス全員の声じゃねぇか。

「っ！？」

階下から足音、あいつらが追ってきたんだ。

足を動かす、階段を上る、声が聞こえる。

『テンカ先生、ありがとう』

二段飛ばしで上がる、上がる。

『すごく楽しい学校生活でした』

声が揃いすぎだ、くそったれが。

『それはテンカ先生がいてくれたからです』

『あかさたな』とか何の練習かと思えばコレのためか。

『こんな時間が、ずっと続いてほしいんです』

はぁ？　何言ってやがる。こんな疲れる時間はまっぴらだ。

『みんな、離れたくないんです』

……あぁ、そうだな。

『だからどうかお願いです』

聞いてやれねぇな。

『この楽しい時間を終わらせないで』

時間は終わってくんだよ。

『もっともっと一緒に過ごしましょう』

色紙といい放送といい同じことばっかり言いやがって。

『みんな、一緒に』

んっとに、どいつもこいつも……

――気がつけば、屋上にいた。

ぼんやりと空を見上げる。

青い、ひたすらに。まさに卒業式日和だ。

どれくらいそうしていただろう。

「先生」

ため息をついて、振り返る。

そこにはオレの生徒が、全員いた。

「あんだよ、てめぇら。神妙な顔して」

代表のようにカカが口を開く。

「先生、泣いて――」

「るせぇ」

「や、だって泣いてるよね？」

「るっせぇっつってんだろが」

「だって泣いてるもん！　賭けは私たちの勝ちだもん！」

「あぁうるせぇうるせぇ」

「テンカ先生は一緒に来てくれるだもん！！」

「うるっせぇぇぇえええええええええ！！」

今までにない程の大声。生徒が数人震える、だがほとんどはオレを見返してきた。睨んでると言ってもいい。

「うるせぇんだよ、てめぇら。何考えてんだ、あぁん？」

「だ、だって約束したじゃん！　卒業式で泣いたら、中学まで一緒に」

「てめぇらが強引に、勝手に決め付けただけじゃねぇか」

「そ、そうだけど。でもみんな、このまま終わっていくのが嫌なんだよ。小学校の生活が終わって、先生との関係が終わって……そんなの嫌なんだよ！　ずっとずっと、楽しい時間を一緒に過ごしたいんだよ……」

「できねぇもんはできねぇんだよ。いつまで甘っちょろいこと言ってんだ？」

「だって！」

「世の中にはな、できることと、できないことがあるんだ。大人になったら腐るほどな」

「……諦めないでよ」

「はぁ？」

カカが言う。

「諦めなかったら、なんでもできるんだって。私、勉強したんだよ？　みんなが教えてくれたんだよ」

こいつらと会ってから、二年ぐらいか。そうだな。色々あった。どう考えてもおかしいだろってツッコみたくなるくらいに色々とあったな。

「だからテンカ先生も諦めないでよ。私たちも諦めないから」

カカは希望を捨てないと、だからオレにも捨てるなと、もっと頑張れと。こう言いたいわけか。

はっ。鼻で笑っちまうぜ。

所詮はガキだ、何もわかってねぇ。

「カカ、もう一度言うぞ。できねぇもんはできねぇ」

「でも！　諦めたら――」

「諦めてんのはどっちだ？」

「え……」

予想外のことを言われて戸惑っていやがる。やっぱ全然わかってねぇ。

「今までの生活が終わる？　関係が終わる？　たかが小学校を卒業するくらいで何を言ってんだ、あぁ？　今までちっとも周りの言うことを聞かなかったてめぇらが、なんでソンナコトだけ大人しく聞いてんだよ」

「そ、そんなこと、って」

そんなこと以外に何がある。

「続けたかったら続けりゃいいだろうが、そんなもん。毎日会えないなら週一で会えばいい。それで一週間分楽しみゃいいだけの話だろうが」

「で、でも」

「いいかガキども、最後の授業だ。オレの言うことをよく聞け」

オレは大きく息を吐いて……一人一人の目を見る。

「変わっていくものは止められねぇ。だから、変わらずにいられるもんだけをなんとかしろ。自分勝手な無茶が通ることもあるがな、そればっかりやってると絶対に上手くいかねぇぞ」

大人になるというのは、そういうことだ。

都合のいいワガママがどんどん押し込められて、窮屈になって、それでも生きていかなければならない。

「変わるべきものと、変わらずにいたくないもの、変わらずにいら

れるものを見定めろ」

「……なんか難しいよ」

「だろうな。んなら例に出してやる」

わかりやすい例がここにある。

「変わるべきものってのは中学生活、変わらずにいたくないものは小学校の生活だろ。じゃあ、変わらずにいられるものはなんだろうな」

「変わらずに、いられるもの」

「答えは自分で考えろ、以上だ」

実はオレも答えなんて知らねぇ。

なんせ適当に言っただけだからな。

「何か質問は？」

ガキどもを見渡すと、そろいもそろってシケた顔してやがる。

そんな中。はい、と一人だけ手をあげたヤツがいた。

サエだ。

「なんだ、サエ」

「……うぅ」

意外だった。

「えぅ……うぅー……せん、せんせーは」

あのサエが泣くなんて。

「せんせーは、本当に中学には来てくれないんですか？　もう、お別れなんですか？」

何を今更、なんて言い方をするつもりはない。オレはただ頷いた。

「えぅぅぅぅぅぅー」

泣かれた。正直、困る。

「わかりましたっ」

オレと同じく困惑していた周囲の雰囲気を吹き飛ばすかのように、勢いの良い声が響いた。サユカだ。

「その、変わらずにいられるものっていうのが何なのか、明日までに考えてきますっ」

あぁ、考えてくれ。

でも、なんで明日なんだ？

「よし、私もわかったよ」

カカが頷いた。

「みんな、考えよう。明日の卒業式までに！」

うんうん。

うんうん……

うん？

「明日の、卒業式？」

「はい！」

「今日のは？」

カカはどこからか一枚のプリントを取り出し、見せてきた。こんなプリント、見た覚えがねぇんが……

「テンカ先生以外の人、みんなに配られたんだよ」

卒業式のお知らせをするプリントに似ている。しかしそのプリントの一番上にはこう書かれていた。

『卒業式　お笑い版』

何の番組だオイ。

ともかくまぁ、そんなわけで。明日も卒業式らしい。

なんじゃそら。

## カカの天下８５５「卒業式！！」（後書き）

なんじゃそら。

というわけで卒業式はもう一話続きます笑

# カカの天下８５６「卒業式」

テンカだ。

卒業式はいたって普通に終わった。ときどき教頭がにやりとして「おお！？」と期待する生徒や父兄がいたが、何もなし。カカたちもその保護者たちもおとなしかった。昨日のインパクトが強かった分、拍子抜けだ。

「ふぅ……」

ため息をつく。

オレは教室で一人、教卓の上であぐらをかいていた。教師にあるまじき姿だが、別に誰も見てねぇし構わねぇだろ。

「んー」

静かな教室を見渡す。

生徒のいない学校というのは信じられないくらい音がしない。シン……という表現がぴったりくる雰囲気がある。

「暇だ」

そう、暇だ。やることがない。

いやまぁオレは教師だし、それが仕事だし。卒業生の次は入学生が来る。もちろん在校生のことも考えなければならない。暇などと

言っている暇はないのだが。

「騒がしいのがいなくなったからなぁ」

今日はともかくとして、昨日まで本当に毎回毎回騒がしかった。

あぁ最後の最後まで……昨日の卒業式なんか傑作だ。ちなみに開式と閉式のじーさんはカカ曰く「タケダ医院のじーさん友達」らしい。何の経由で病院のじーさんに面識があるのか知らんが、まぁ面白かった。あと「鯛は鮮度が命！　だって腐ってるのが降ってきたら笑えないモンね！」とも言っていた。そこで腐っても鯛とかいうネタをうまく仕込めば笑いはとれないだろうか、などと考えてしまうあたり、あいつらに毒された証拠か。

「卒業式、お笑い版は終了。続いて本番も終了いたしました、ってな」

いっちょ最後に、成績表でもつけてやるか。

カカ、あいつは阿呆だ。途方もない阿呆だ。でも誰よりもいいやつだ。テストの成績は悪いが、生徒としては満点だった、個人的評価でな。

サエ、頭がよすぎる。可愛いすぎて腹黒いってのは一番タチが悪い。でもまぁ、雰囲気が悪くならない程度に上手いことやって楽しくしてたよな。

サユカはツンデレだと思っていたが、いつの間にか普通におせっかいな子になってたな。トメに対してデレデレになってたせいでツンをどっかに置き忘れてきたんじゃねぇのか。ま、優しいやつだ。

イチョウ、委員長。あまり目立たないながらも面倒くさがりやなオレに代わってよく働いてくれた。あれでもっと喋れば面白い性格なんだけどな。もっとがっつけ。

インド、カレー屋。

ニシカワ、バカップルは死ね。

アヤ、バカップルはくたばれ。

タケダ……は、オレの教室の生徒じゃねぇや。ああ、そういや昨日の卒業式に向けて『オレが郊外へ逃げようとした場合に「どすこーい！」と身体で止める役』として練習してたらしいけど、結局は無駄な努力に終わったらしい。オレまっすぐ屋上目指したからな。

ちなみにこのために五キロ太ったらしい。どうでもいいが。

あとは……名も無い生徒どもだな。あいつら名前を覚えろ覚えろとうるせぇんだよなぁ。

覚えてほしかったらカカたちに負けないくらいのインパクトを持ってってんだよ。

……まぁ。

覚えてないわけねぇがな。

全員覚えてるさ。

どいつもこいつも大好きだった。

初めての生徒ってのが、こんなにも思い入れが深くなるもんだったとはなぁ。オレは大人になった、二十代も後半、世間に冷めてきている年齢だ。なのにここまで涙が出るとは。オレも所詮は人の子だったか。

「……くく、ははは」

思い出すたびに泣けてくる。この三年近く、あったのは楽しいことばかりなのにな。笑えることばかりなのにな。

なんでこんなに悲しいんだ?

なんでこんなに寂しいんだ?

「ははははは」

笑えてくる。おう、笑ってんだよオレは。

泣いてなんかいねぇ。

「うし!」

パン、と両頬を叩いて気合を入れる。

明日からまた仕事だ。ガキどもがオレを待っている。

「景気づけに飲もう!」

祝い酒しねぇと。普段はぜってー口にしねぇが、今日だけは断言しよう。可愛い教え子に乾杯ってな。

――翌朝。

「うえええええぇぇ」

気持ち悪ぃ……飲みすぎた……

卒業式でしんみりした後にトメを誘うのは気まずくて、一人で飲んだんだが……どうにもペースが速すぎた。どうやって帰ったか記憶にねぇ。

「ほらテンカ先生、さっさと仕事しなさい」

「へーい」

職員室で吐きかけるもんじゃねぇな……教頭のお小言にうんざりしながら教材に向かう。文字を読む。三秒で挫折した。だりぃ。

「あー……受け持ちの生徒がいねぇから楽なはずなんだけどな」

教師は仕事が多い。

本当に。

「楽なはずなんだけどなぁ」

「あれ、それってもしかして当てつけですかー？」

「まさかっ、きっとテレてるだけなのよっ」

聞きなれた声が聞こえる。昨日おさらばしたはずの声だ。

「……なんで、いるんだ？」

ガンガンする頭を押さえて横目で見ると、そこには見慣れた三人が。

「なんでって、宿題の答えを言いにきたんだよ」

「あ？　なんのことだ」

「む、自分で問題出しといて忘れてんの？　これから私たちがどうするか、だよ！」

あー？　そんなことテキトーに言ったような気もするなぁ。

「こほん、えーと。中学生になるにあたり、私たちの変わらないものは……テンカ先生が友達だということです！」

……先生が友達、ねぇ。

「そゆことで、これからもよろしく」

オレとてめぇらが対等ってか？

バカにされたもんだな。

「ふん、悪くねぇな」

でも口元には笑みが浮かぶ。

体裁も年齢も関係ねぇ。こいつらとの繋がりが切れないならそれでいい。まぁ、切れても元気に育ってくれれば、それでよかったんだがな。

んー。

いや、でもやっぱ嬉しいわ。うん。

「よし、友達認定もらったよ」

「じゃ先生って呼ぶのも失礼になるよねー」

「そうよね、なにせ友達だものねっ！」

……んあ？

「じゃあテンカ先生をなんて呼ぼうか会議」

「テンカって呼び捨てで呼んでみたいー」

「さ、サエすけってば大胆ね。わたしは普通にテンちゃんかなぁ」

「私としてはテンテンテンテンテンをおすすめする」

「長いわっ」

むか。

「るっせぇ！　担任じゃなくなったがな、オレが教師であることにゃ変わりねぇんだ！　先生と呼べ！」

「わかったよテンテケテン先生」

「先生をつけりゃいいってもんでもねぇ！」

「じゃーテンテケテン」

「先生をつけなきゃいいってもんでもねぇ！！」

「テケテケは？」

「そりゃ妖怪の名前だ！」

「んじゃ略してケケ先生」

「オレの名前はどこいった？」

ったく。

昨日飲んだくれたオレはなんだったんだかね。

あー。

楽し。

頭は痛いが、今日も頑張りますかね！

「ケケをもっと短くして、毛先生はどうかしらっ！」

「いっそハミ毛先生にしよー」

よし、とりあえず張り切ってこいつらぶっ飛ばそう。

# カカの天下８５６「卒業式」（後書き）

卒業式三連、終わりです。
ここぞとばかりに泣かせてやろうかとも思ったんですが、やはりテンカ先生の性格でしょうかね、思いのほかさっぱりとした仕上がりになりました。
学校から離れても、きっと楽しく一緒に騒いでくれることでしょう。

さて、卒業式も終わったことですし。中学へと向けて、次回はちょっと重大発表が……あるやも。
多分、「えーっ」てなります。

# カカの天下857「カカの天下」

感無量なトメです。

何がかというと、それはもちろん。カカが中学生になるということ！

「みんなおめでとう、乾杯！！」

そんなわけで『小学校卒業おめでとう兼中学校でも頑張れよパーティ』が開催されたのだった。スポンサーはサカイさん。出席者はいつものメンバーだ。

「ふん、さぁ食え。俺が用意した最高の料理どもだ」

「俺の料理のほうがうめぇ」

「なに？　いい度胸だ」

「じゃあどっちの料理が一番多く食われるか勝負だ！」

綺麗に全部食われるに一票。

「サエちゃん。あーん」

「ぱくぱくぱくぱくー」

「サエちゃん！？　無視しないでよ」

「もぐもぐ……ふぉめんカカちゃん。そんなにのんびり食べてられない」

「そんな食い意地の張ったサエちゃんなんて、だいっ好き！！　ぱく……って、やば！　これうま！　やば！！」

主役のうち二人は食うことに一生懸命だ。しかしこの料理の数々、見るからに高そうである。会場はサカイさんの家だし、内装はゆーたさんやらシュー君が頑張ったんだろうけど、この食材に使われた金はどこからきたんだ？

「サカイさん」

「あらトメさん、どうしましたー？」

「さすがにこれだけしてもらって会費が０ってのは……」

「大丈夫ですよー、お金はサエのおじいさんからもらってますから」

「そ、そうなのか」

「えっとですねー、こないだですねー？」

『サエの記念日ですよー？』

『む……まぁ、少しくらいなら援助してやっても』

『ここにサエの卒業式のＤＶＤが』

『ぐ……こ、このくらいなら』

『サエはけっこー食い意地が張ってますから、奮発すればすごく懐いてくれますよー？』

『ぐぐぐ』

『おじいさんっていう存在を印象づける、滅多にないチャンスですよねー？』

『ぐぐぐぐ』

『きっとこう言ってくれますよ？　おじいちゃん、だいちゅきー』

『いくらほしい？』

「こんな感じで巻き上げましたー♪」

えぇと、まぁ、その人が満足ならいいや、うん。

「失礼します！　はいトメさん、フォアグラどうぞ、あーん」

おっとと、横からサラさん登場。

「あらあらー。サラさんは皿でも食べててくださいな。フォアグラより高いですから」

「高ければいいってもんじゃありません。そんなこともわからないんですか？」

「あははー、お客様だからって上から目線の発言ですねー。お高くとまってるのはどっちでしょー」

「もちろんサカイさんです」

「その言い方がお高いって言ってるんです」

「なにせ皿ですから」

「百均の？」

あーもう。この人らは顔をあわせるたびに毎回毎回……もう知らん。

「と、トメさんっ」

「おやサユカちゃん。卒業おめでとう」

「はいっ！　卒業祝いにあーんさせてくださいっ！」

なんか色々と出鱈目な気がするけど、まぁいいや。

「はい、あーんっ！」

「あーん、あむ。もぐもぐ……んまい」

なんだろ、魚だ。めっちゃクリーミィだ。料理名がさっぱりわか

らんけど、すんげー美味い。

「あぁぁぁやったぁやったぁ邪魔が入らずにあーんできたよぅ食べてもらえたよぅきゃーきゃー恋人みたいだよね彼女みたいだよねっ、わたしも中学生になって大人を一歩を踏み出せる勢いなのかしらっ」

邪魔が入らなかったのは、皆が料理に夢中だったからだろうなぁ。

「そうよね、小学生だとさすがにアレだけど中学生ならまだセーフよねっ」

なんの話かわからんけど、カンで発言させてもらえば中学生も充分にアウトだと思う。なんの話かはあくまでわからんけど。

「はい、あーんっ」

「もが!?」

第二撃がくることは予想してなかった。口いっぱいに詰め込まれる魚の何か。

「じゃ、次の料理をとってきますねっ」

「……もがもが」

んまい、んまいけど苦しい。さらに熱い。口の中が天国と地獄。

「んぐんぐんぐ……ごっくんと。ふー食った。ん?」

あそこに見えるのはタケダじゃないか。ちょっと太った?

「食べるべきか……いや、しかし、これ以上体重を増やすわけには……しかしちょっとだけ……いやダメだ！　きっと毒を食らわば皿までの勢いになってしまうに違いない」

本人も気にしているらしく、料理の前で苦悩しまくっている。じゃあ来なけりゃいいのに。

「あれ、サラさんどうしたんですかー？」

「いや、仲間の気配が」

毒を食らわば皿までという言葉に反応したらしい声が後ろで聞こえた気がしたけど、なんとなくスルー。それよりもタケダのほうが気になったからだ。

「や、ヤナツ！　貴様、なぜ食べている！？」

「なぜって……呼ばれたし、料理出たし、食べてもいいんだろ？」

「お、俺の前でそんなに美味しそうに食べやがって！」

「なんだよ、やるのかモヤシっこ」

「どすこーい！」

「うあああ！　意外と重量感たっぷりなタックル！」

「黙れ黙れ！　おまえに俺の愛がわかってたまるかあああ！」

子供特有の変な争い、勃発。

ま、ちゃんと料理が並んでるテーブルから離れた場所で取っ組み合いしてるから別にいいや。気にしないでおこう。

「……ん、あそこって厨房だよな。なんで生徒がいるんだ」

今回の生徒は主役だ、手伝いなんてしなくていいのに。そう思って覗いてみると。

「かのちゃあああああん、わたくしもお料理食べたいですよぅ」

「そこ！　スパイスの量が甘い！　ちゃんと計って！」

「は、はぃぃぃ」

「これでどうだ、インドちゃん！」

「はい、見事なカレーパンです。ニシカワ君合格！」

「よっしゃぁ！」

「ね、ねぇニッシー？　なんでこんなに頑張ってるの、もしかしてインドちゃんのことが好きだったり……」

「インドは西だ！　つまりカレーは西の料理！　それで理由は充分だ」

「カレーパンは日本生まれですわよ」

イチョウさんの言葉に「え」となるニシカワ君。

「いいの！」

いいんだ。

「ほら、きびきび動く！」

「はいぃ、ってかのちゃん、きびきびしすぎだよぉぉぉ」

……楽しんでるようなので放っておこう。で、後でカレー食べにこようっと。

「しっかし騒がしいなぁ。母さんたちが来れなかったのは残念だ」

父親あたりは天井にでもいそうな気もするけど、こんだけ騒がしかったら出てこないだろうな、シャイだから。

「おぅトメ！　飲んでやがるか！？」

「うお、出たな。小学校卒業して寂しくなるとか言ってるわりに毎日カカたちと会ってる飲んだくれ教師め」

言わずと知れたテンである。

「うっせぇなぁ。あっちから会いに来るんだから仕方ねぇだろ。ま、オレが今まで育ててやったんだ、恩を感じるのは当然だがな」

カチーン。

「ちょっと待て。カカを育てたのは、僕だぞ？」

ここだけは譲れない。

「あぁん？　てめぇは『なんでやねん！　なんでやねん！』って隣で言ってただけだろが」

「そういうおまえこそ『うっせぇ！　うっせぇ！』って言ってただけじゃないか」

「……ケンカ売ってんのか？」

「先に売ったのはそっちだろ」

「勝負すっか？」

「望むところだ」

バチバチと僕らの間で火花が散る。

そして！

「カカでぇす！　始まりましたトメＶＳテンカ。その勝敗はどうなるのか！　まずは男らしさ勝負！」

「テンカ先生の勝ちー」

カカサエコンビにより、いきなり勝敗は決まった。

「待てえ！！　僕のどこが男らしくないって！？」

「逆に男らしいところを教えてほしい」

「カカ、おまえお兄ちゃんを持ち上げようと思わないのか？」

「あ、体重は男らしいよね」

「そういう持ち上げるじゃなくて……」

テンはフフンと勝ち誇っている。ムカつく。どこかに味方はいないものか。

「何を言ってるのっ！　トメさんのほうが男らしいに決まってるじゃないのっ！」

いた！　問答無用で味方になってくれる子が！

「ふん、サユカ。トメのどこがオレより男らしいって？」

「戸籍の性別が『男』ですっ！」

……や、そゆことじゃなくてね？

「あと、ここは男ですっ！」

ズビッと指差されたのは、なんと男の証がある場所！

「お、おお……そこはさすがにオレでも勝てねぇ」

「勝つところを逆に見たいような気もするけどー」

「トメ兄、よかったね」

「股間を指差されれてウンウン頷かれてる状況のどこが良いのやらちっともわからんのですけど」

ブッと吹き出す皆の衆。思わず僕も笑う。あぁもうなんでもいいよ。

「しかしテンも吹っ切れたもんだなぁ。カカたちが卒業となって随分と沈んでたのに」

「んなことねーよ」

「え、ほんと？　沈んでたの？」

「ほんとなのー？」

「テンちゃんかわいーっ」

「んなことねーっつってんだろが！」

「ほらせんせ、顔赤いよ」

「カカ？　それはな？　今おまえがオレのほっぺたに苺ジャムを塗ってるからだ！」

「ふふ、舐めてほしいー？」

「わ、サエすけってば色っぽい」

うん、舌なめずりがエロい。

「てめぇらあああああ！」

そして始まる追いかけっこ。教師も生徒も楽しそうで何よりだ。

「あーあ、こんな子供で中学も大丈夫なのかね」

「大丈夫だよ」

あれ、なんだかここにいるのが不思議な人物が。

「友人A、なぜ」

「なぜって、呼ばれたからさ。これからもよろしくということで」

「誰に」

「サカイさんに」

「なぜ」

「俺が中学の担任だから」

……はい？

「言ってなかったけど、俺の職業って中学教師な。もう生徒のクラス分けも決まってる。カカちゃんも俺の担任だし、ちゃんと見ていてやるよ。ほら、大丈夫だろ？」

「ここまで不安な『大丈夫』も珍しい」

「なぜだ！　俺ほど常識のある教師はいないぞ」

「単に特徴のない教師Ａってだけだろ」

「なにぃ！　そんなこと言ってると授業でカカちゃんを苛めるぞ！」

間違いなく苛められるのはおまえのほうだと思う。

「……でもまぁ、カカをよろしく」

「おう」

乾杯、と軽くグラスを合わせる。驚いた、不安もある、でもまぁ、見ず知らずのやつにカカを任せるよりはいいだろう。

さて、ここで姉たちがいるという別室の様子でも見てみるか。あいつら、なんでいちいち違う部屋に……お、ここか。

「おーい、なにやってんだ？」

「おぅ、弟君じゃないか」

そこにいた面子は、意外にもおとなしく飲んでいた。

「おまえらも主役に絡めばいいのに」

「はっはっは、いいんですよ。我々は彼女たちと親しいとはいえ、親や教師ではありません。しばらくここで思い出話に花咲かせ、向こうが落ち着いたあたりで声をかけますよ」

慎み深いやつらだな。まぁ現に子供たちは一番思い入れが強いだろうテンと騒いでるし、大人な選択なのかもしれないけど。

「で、ゆーたさんとシュー君はなんで泣きながら料理を食べてるんだ？」

「サエ様の成長が嬉しすぎて胃袋が止まらぬ」

「うぅ、こんな美味しい料理初めてだよぅ」

「うむ、シューよ。食え、飲め。共にサエ様の中学への門出を祝おう！」

「白いご飯ですら食べるの久々だよぅ」

「おぉ、そんなに嬉しいか！　はっはっは！」

なんだろう。コメントしづらい二人だ。

「しかしカツコさん、ハイボールとは洒落ていますね」

「ふふ、あんたの作るやつが美味いからだよ。おかわり、ちょうだい？」

「かしこまりました」

そしてこの二人はこんなにいい感じでいーんだろうか。

「いいですか、タマ？　おねーちゃんたちは中学に行くのですよ」

「ちゅー？」

「そうです、ちゅーを学びに行くのです」

さらにクララちゃんとタマちゃんがこんなところにいるのも解せない。一緒にカカたちと騒げばいいのに。

「ささ、タマも飲むのです」

「おっとっとー」

「ささ、ぐいっと！」

「んぐ、んぐ！」

「いい飲みっぷり、へいへいへい！　です！」

「ぷはぁー」

「いい感じに酔っ払ったらおねーちゃんたちのところへ行きましょう」

「うぃっきー！」

「お、出来上がってますねぇタマ！　いい返事です！　クララもういっきーです！」

この二人も姉やキリヤと同じ意見とは……いやはや恐れいった。
ちなみに飲んでいるのはオレンジジュースだけど、なぜかしっかり酔っ払ってる風に見えるから子供は不思議だ。

「よーし、あたしもクララちゃんたちに参加しちゃうぞ！　ハイボール飲む？」

「それはやめれ」

姉の脳天にチョップをかましてから、僕はその部屋を後にした。

そして、会場へと戻り。

「楽しんでるわね」

「……ユカ？」

パーティということでおめかしした数少ない人間の一人だ。露出の多い赤のドレスでばっちり決めている。でもこの大騒ぎ会場においては場違いだ。

「キリヤの趣味でコスプレさせられたのか」

「そうよ」

「そうなのか！？」

冗談で言ったのがまさか当たりとは。深いな、このカップル。

「おまえはキリヤのとこにいかなくていいのか」

「いいの、こっちのほうが面白そうだし」

そう言ってメモ帳を見せびらかすユカ。

「たまに持ってるよな、そのメモ帳」

「商売道具だもの」

「いつも思ってたけど、おまえ何の仕事してるんだ？」

ユカは一瞬きょとんとし、あーあー言ってなかったっけなどと口にして。

「小説家」

衝撃の事実を口にした。

「だから君らと一緒にいるとネタになるんだよね」

「じゃ、じゃあ色々とイベント事に顔出すわりに何もしなかったのは、ネタ集めしてたからなのか」

「うん。ちなみにもう君らを題材にして話を書いてたりする」

「なにぃ！？　無断でか！」

「いーじゃない。好評なんだから」

「よくない！　それで、その話のタイトルは！？」

「んー、それがまだ仮でね、決めてる最中なんだけど……いい案ない？」

はぁ……僕はため息を吐いて、問い詰めるのを諦めた。ユカには負い目がある、僕の周りにあるくだらない話をネタにされるくらい我慢しよう。さすがに実名は出してないだろうし。出してないよな？　いくらなんでもそこまでは。

「実名よ」

「なにぃ！」

「ちゃんとカタカナ表記にしてるからバレないわよ」

そ、そうか。ならいい。しかしタイトルか。タイトル……

「主人公は誰だ？」

「カカちゃんとあなた」

主人公の名前をタイトルに入れるのは定番だよな。でも僕の名前を入れるのは恥ずかしいし……

ふと、テンに追いかけられているカカを見た。

逃げ回るカカ、捕まえようとするテンの手がその背中に触れる。

しかしカカは巧みな体捌きでそれを払い、さらにその手を取ってバランスを崩させ、テンを上手いこと転ばせた。

倒れたテンに乗っかり、えっへんと勝ち誇るカカ。

「……カカのテンカ」

「へぇ、それでいいの？」

「ネタにするのは小学生までの話だろ」

「そりゃね」

「じゃ、あいつに花をもたせてもいいかと思ってね」

「あらあら、お優しいこと」

「別に」

テンカの上にカカがいたから、思いついた。そしたら語呂が良かった。それだけだよ。

カカの天下。考えてみれば、あいつと一緒に暮らすようになってからずっとそんな感じだったな。

そしてそれは、悪くない天下だった。

これからも僕らの天下をよろしくな、妹。

「とりあえず、カレーでも食いに行こうぜ」

「あなたと？　やだ」

「むぅ、ネタの提供者に冷たいお言葉」

「わかった、じゃあカカちゃんの話を聞かせてくれるなら付き合ってあげる」

やれやれ、一緒にカレーを食うだけで代償が必要とは。ま、いっか。僕もあいつの思い出話をしたい気分だし。

「じゃ、とりあえず」

どの話がいいだろう。沢山ありすぎて迷うけど――どうせ夜は長い。小学生なカカの天下を存分に語るとしよう。

## カカの天下８５７「カカの天下」（後書き）

はい、とても最終回っぽいタイトル＆中身でしたが。
事実、小学生編は最終回です。そこで一つの区切りとしてこの話を書きました。

次からはもちろん中学生編となりますが……これまで以上にゆるーく書いていこうと思います。
更新日は今から一週間ごと。つまり毎週木曜日に更新することにします。ただ、それが一話なのか詰め合わせなのか三話一度になのかはその週の私の余裕次第（笑
ヘタに三日に一度とか不定期にとかするより、こっちのほうがいいかなーと。
あとまぁ、ゆるーくなるので文字数減ったりするかもしれませんが、カカ天的な雰囲気はそのままにしますのでご容赦くださいな。

さてさて、改めまして皆様。小学生なカカの天下をありがとうございました。毎日更新も途中から挫折し、不定期になり、感想も途中から返す余裕がなくなってしまいましたが、なんとかここまで書き続けられたのは本当に読者様のおかげです。拙い内容ではございますが、これからもカカともどもよろしくお願いいたします。

じゃ、中学校で会いましょう。また来週！

# カカの天下８５８「中学最初のお仕事は」

「ただいまー」

「ねぇトメ兄」

どうも、仕事を終えて会社から帰って来たのに「おかえり」の一つも言ってもらえないトメです。

「ねぇねぇトメ兄。自己紹介」

は？

「……どうも、仕事を終えて会社から帰って来たのに『おかえり』の一つも言ってもらえないトメです」

とりあえず言われるがままに自己紹介してみた。嫌味もこめて。

「ＮＯ！」

まさか英語になって返って来るとは思わなかった。どうしよう、これじゃ嫌味が通じているのかわからない。まぁそれはさておき。

「なんだよ、自己紹介しろって言ったじゃないか」

「ノー！　ノー！」

「なんだよもー！」

「のー！」

「もー！」

「なにぬねのー！」

「まみむめもー！」

なんとなくノッてみたものの、僕ってば何を言ってるんだろうか。

「トメ兄ってば鈍いなぁ。中学校で初めての自己紹介はどんな感じにしたらいいかな？　って言ってるんだよ」

「言ってねぇだろ」

「言ったもん！」

「じゃあそれを言ったときのセリフを一字一句間違えずに繰り返してみろ」

「まみむめもー！」

「言えてないしそれは僕が言ったセリフだ」

いつまで経ってもやはりカカはカカである。

「あー、もういいよ。わかった、とにかく自己紹介の練習がしたいんだな？」

「あいうえおー」

「なんだそれ……ああ、『おー！』っていう返事か」

「さしすせそー」

「そーかそーか」

意外と便利な言い回しだな。

「しかし自己紹介なんかいちいち練習しなくてもいいだろ。普通に名前言うだけでいいじゃん」

「ダメだよ。中学校は生徒が色んな小学校から集まってくるんだよ？　どんな人が来るか油断できない、掴みはしっかりしないと」

とりあえずこの妹は何かにつけ個性を発揮しておかないと気がすまないらしい。

「うーん、普通に名前と、所属してたクラブでも言えばそれでいいと思うんだけど」

「こんにちは、笠原カカです。小学校のころは手芸部でした」

「そうそう」

「……それだけ？」

「む、それじゃ質問。手芸部でどんなものを作ってたんですか？」

「主に漫才です」

「待てぃ」

「あ、一気に言ったほうがいいのか。　こんにちは、笠原カカです。小学校のころは手芸部で漫才を作ってました」

「文章がおかしい」

「こんにちは、笠原カカです。小学校のころは漫才をしながら手芸部をしていました」

「それ単なる不真面目な生徒だろ」

「もう、じゃあどうすればいいのさ」

「だから余計なことは言うなって」

「わかった」

本当にわかったのか？

「ではカカさん、自己紹介をお願いします」

「おまえらが私を知る必要はない」

確かに余計なことは言っていない。要点すらも言ってない。

「名前を言って、それで終わりでいいじゃないか」

「えー。つまんない」

「どうせこれからいくらでも個性を発揮してくんだから、自己紹介くらい普通に済ませろ」

「はぁい」

――そして、中学生としての初日。

「ただいま」

「おかえり」

「よぅカカ、自己紹介は結局どうしたんだ？」

「普通にした」

「そっかそっか」

「そしたら『カカちゃんなのになんで普通なんだろう』って皆に首を傾げられた」

「皆って……生徒全員？」

「先生含めた全員」

なんてことだ。まさか本当に余計な事を言う必要がなかったとは。コイツ色々目立ってたもんなー、他の小学校にまで名前が知れ渡ってたのか。

「とりあえず、まみむめもー！　って言ってやった」

「反応は？」

「拍手された」

とりあえず僕も拍手してあげた。

「……ふふん」

なんか自慢げな妹の中学生活は、こうして始まったのだった。

## カカの天下８５８「中学最初のお仕事は」（後書き）

いよいよ中学編スタート、色々書くぞー！　と思ってたのですが……

先日、事故によって右手の指を三本ざっくり削ってしまい、救急行きになり縫ったりなんだりして……包帯に巻かれて全く使えない状態となってしまいました。とりあえず一ヶ月もすれば治るし、後遺症なども残らない予定なのですが……とにかくキーボードが打ちにいくい。右手は全部、無事な親指で打ってるんですが今にもツりそうです笑　とにかく今回は一話書くので精一杯でした。仕事は休ませてもらってるので時間はあるのに……くそぅ。

なんか開始早々こんなんだと書けないイイワケみたいで嫌なのですが、残念ながら実話です＾＾；

また筆が遅くなってしまうと思いますが、どうかご勘弁お願いします……

あー、うー。

カカたちもごめんよおおお。ちゃっちゃと治して書いてやるからなあああ。

## カカの天下８５９「本日の放送委員会」

こんにちは、サユカですっ。

めでたく中学生になれた……そう、わたしは中学生です。もう大人みたいなものです。なので、ここはどーんとでっかいことに挑戦するべきだと思います。

というわけでトメさんの会社にやって来ました。

「おー、工場見学だー」

サエすけの言うとおり、トメさんが働いているのは印刷会社の工場なのです。今もここで美しい絵柄を印刷しているに違いありません。

「さ、行くわよサエすけっ」

「うん、でも本当に大丈夫なのー？」

「大丈夫よ、わたしたちにやましいことなんて無いんだから」

そう、本当にない。ことの発端はカカすけの電話。「トメ兄が会社に弁当忘れてったんだけど、サユカン届ける？」というものだった。カカすけは「私は眠いから、喜んで行きそうな人に押し付けようと思って」と言っていたけど、わたしにとっては願っても無いシチュエーションだった。だってほら、忘れたお弁当を届ける若奥様……いいじゃない？

「じゃ、ごーごー」

でも一人はやっぱり不安だからサエすけにも来てもらったの。女子中学生が二人もいれば大抵のことは大丈夫よね、きっと！

あ、ちなみに今日は土曜日ね。わたしたちはお休みだけど、トメさんは休日出勤なの。お疲れ様だわ。

「お疲れ様ですっ！」

「あ、ああ。ありがとう」

思わず口に出したら、工場から出てきた社員っぽい人に聞こえてしまったみたいね。なんだか「？」マークをいっぱい浮かべてるけど。

「まさか仕事終わりに女子中学生に労われるとは思ってなかったんだろうねー」

「そっか、じゃあ良いことしたのね」

「うんうん」

気分も晴れやかになったところで乗り込もう！

どう見ても『会社の正面入り口です！』と主張している場所から堂々と入る。

そして受付へ。

「中学生です」

「どうぞ」

うん、やっぱり中学生てすごい。

「……ん？　え、ちょちょちょ！　待ってください！」

やっぱだめか。慌てた受付おねーさんに止められた。

「もー、サユカちゃんたらー。そんなので入れるわけないでしょー」

「入れそうだったじゃないの」

「あまりに堂々としてるからつい……」

冷や汗をぬぐうお姉さん。

「おねーさん、中学生を二枚ねー」

「はーい」

あ、それならいいのね。

「って違うっ！」

やっぱダメなの？

「あのね、お嬢ちゃんたち。ここは映画館でも観光名所でもないのよ？」

「じゃー工場見学ってどう手続きすればいいのー？」

「う……さ、さぁ？」

頼りにならない受付ねっ。

「え、えぇと！　工場見学しに来たの？」

するにはどうすればいいか、はひとまず置いといて用件を聞いてきたわね。

「笠原トメっていう人にお弁当を届けに来たのよっ」

「ああ、そういうこと……だったら工場内のアナウンスで呼び出してあげる。ついてきて」

はーい、と頷いて放送室に案内されるわたしたち。やっぱり工場見学っぽくなってきたわね。

「てき、ぱき、てき、ぱき」

どうも、トメです。ただいまテキパキ仕事中です。

お、アナウンスの音だ。

『――さん、女子中学生がお見えです。受付のほうまでお願いします』

なんだよ、女子中学生がお見えっての は。機械の音がうるさくて名前は聞こえなかったが……僕の聞き間違えかな？

「うーん、来られませんねぇ」

「聞こえなかったのかなー。おねーさん、もっかいお願いー」

「いいわよ。あ、そういえば。あなたたちは笠原さんとはどういう関係？」

「どどっどどどういううって、その」

「好きな人ですー」

「ちょっ、サエすけ！？」

『笠原トメさん、笠原トメさん、あなたが好きな女子中学生がお見えです』

「むしろこの際、恋人ってことにしとけばー？」

「そ、そうねっ」

『笠原トメさん、笠原トメさん、あなたの恋人の女子中学生がお見えです』

「サユカちゃん、そのミニスカ可愛いねー」

『笠原トメさん、笠原トメさん、あなたが好きなミニスカがお見えです』

「はぁ、綺麗な脚……子供ってピチピチでいいですねぇ。私はもう歳のせいでミニスカなんか……」

「お姉さんだって綺麗じゃないですかー」

「そ、そうかな」

「そうですよっ」

『笠原トメさん、笠原トメさん、でも正直ピチピチすぎて羨ましいです』

「ところでトメさんの社内評判はどんな感じなんですかー？」

「そうですねぇ、私はあまり接点はないんですけど、細かい人という印象が」

「というと？」

「この間、休憩室の自販機のボタンを押すときに『ポチ』じゃなくて『ずびし！』とか『あべし！』とか言って押してたら、たまたま居た笠原さんに『それは痛そうだろ』ってツッコまれました」

「それはなんともトメさんらしい」

「あ、マイクのスイッチＯＮになってたー」

サエすけってば絶対わざとねっ。

「こらあああああああああ！！」

あ、やっとトメさんが来たっ！　作業着姿が格好いい！

『というわけで、そんな笠原トメをよろしくお願いしまーす』

「工場全体にそんな宣伝しなくていいいいいいいいいいい！！」

うん、やっぱりカカすけ連れて来ればよかったわ。

## カカの天下８５９「本日の放送委員会」（後書き）

中学生になり、行動範囲が広がりました。おかげでトメさんも楽しくなったことでしょう。

さて怪我ですが、とりあえず今週末に抜糸です。いまだ片手しか使えないし仕事も再開したので書けたのは一話だけですが、治ったらもっと色々書きますんでよろしく！　ではではっ。

**カカの天下８６０「学級崩壊（笑）」**

やぁ、こんにちは。え、誰かって？　俺だよ、――だよ。え、聞こえないって？　わかったよ、じゃあＡとでも呼べよ！

……のっけからすいません。そんなわけでＡです。読んでるあなたの友人ではないので『友人Ａ』とは書きません。しかも現在の俺はどちらかというと教師Ａなので。うん、教師。これから中学校で担任デビューなの。ふはははは！

とうとう僕の教師生活が幕を開けるんだ！

目標は、まず第一に俺のことをちゃんと名前を呼んでもらうこと！

第二に、受け持った生徒全員をまともに育てて卒業させること！

これをトメに言ったら「そこを第二にした時点でおまえの負けは決まっている」とかわけのわからないツッコミをもらったけど、まぁ置いておこう。

教室の前に立つ。中では楽しそうな声が聞こえてくる。

さぁ扉を開けよう。この先には新世界が待っている。俺の顔も名前も知らない子ばかりだ。だから俺はきっと第一の目的を一瞬で達成できるだろう。名前を読んでもらうという、長年の夢を叶えることができるんだ！

うおおお、興奮してきた！　いざ行かん！　初めまして、僕の生徒達！

「あ、A先生がきた」

「A先生、おはようございます」

「教師Aって呼び方のほうがいいと思う」

俺は、唖然とした。

「な、なんで」

「やは、Aさん」

「カカちゃん……まさか」

「馴染みやすいようにと思って皆にあらかじめ教えておきました」

「余計なことを！！」

なぜ僕の文句に「えっへん」と胸を張るのだカカちゃんよ。

「うわぁー」

「む、なんだうわぁーって」

ふと横を見ると、興味深そうに僕の顔を覗き込んでくる初対面の女子が。

「な、なにかな？」

「本当に特徴がありませんね」

「うるさいわ！」

「まさにＡ」

「どういう意味だ！？」

「怒り方も普通」

「特徴のある怒り方ってどんなんだ！？」

はい、とそこで手を上げたのは……サエちゃんだ。何度か話したことはあるけど詳しくは知らないんだよなぁ。

「カカちゃーん、特徴のある怒り方の見本どうぞー？」

「まみむめもー！！」

「それ怒ってるの！？」

カカちゃん。しばらく見ないうちにすっかりお姉さんに似ちゃったなぁ。どうしよう。いや、本当にどうしよう。

「でさ、呼び方は教師Ａでいい？」

「カカちゃん、目上の先生に対してそれはないだろ？」

「いいじゃん、少女Ａっていう有名な曲と似た呼び名なんだから」

「その曲は確かに有名だし好きだけど」

「じゃ、間をとって『少女好きの教師A』ってことで」

「それどう考えてもナニカの犯人の名前（仮）ですよね？」

「略してロリコンですねー」

どうしよう、テンカ先生に「任せてください」と大見得を張ってきたのに初日からズダボロだ。この二人、手ごわすぎる。テンカ先生はどうやって仕切ってたんだろう？　あの人っぽくマネをすれば上手くいくのかな。

いや、待てよ？　この二人ならむしろトメのほうが身近だろう。俺としてもマネやすいし。よし！

「なんでやねん！」

俺は叫んだ。

返ってきたのは数秒の沈黙だった。

やがてカカちゃんが聞いてくる。

「なに。いまの」

「ツッコミ」

「何に対する？」

「……理不尽な世界に対する」

「なるほど」

納得してもらえた！

「あっはっは！　そう、俺はツッコミキャラなんだよ。トメと同じ――」

世界がひっくり返った。

見えるのは天井と、真上から睨みつけてくる、俺を投げ飛ばした張本人。

「トメさんと、同じ？」

あぁ、名前は確かサユカちゃん。トメのことが大好きな子だ。

「片腹痛いわっ」

お父さん、お母さん。お仕事って恐いです。

クラスはまとまらず、コケにされた初日……その翌朝、職員会議。

昨日の大騒ぎに意気消沈しながら臨んだんだけど。

「A先生、生徒からの評判よかっですよ」

「うそぉ！？」

どう見ても学級崩壊中なんですけど！！

「どうやら生徒と同じ目線に立って接しているようですね。他のクラスのどの先生よりも」

まぁ俺ほどいきなり生徒から下に見られている教師もいないだろうけど。

「これからも頑張ってくださいね。Ａ先生」

「は、はい！」

評判がいい、かぁ……そっかぁ。

生徒が生徒だからこういう接し方もアリ、と思ってやっていくしかないか、よし。頑張ろう！

「ところで教頭」

「はい？」

「俺の名前……」

さすがに上司にまでＡとか言われたくないんですけど。

「……ああ！」

やっとわかってくれましたか？

「教師Ａ！」

「それはもういい！！」

前途多難だ。絶対トメに愚痴ってやる。

## カカの天下８６０「学級崩壊（笑）」（後書き）

トメのツッコミ、正解でしたね。おまえはもう負けている。さて、初っ端からかましたカカたちですが、周りのクラスメイトの反応はいかがなものでしょうか。小学校のように仲良くいくのでしょうか。はてさて……

しかしごめんクララちゃん、桜の時期に君の話を書いてあげられなかった！　今回それも書いて載せるつもりだったのに時間が！　せめて次の更新はいっぱい書いてやるからなー！　あーＡなんか先に書くんじゃなかった（可哀想

ではでは。また来週！

# カカの天下８６１「うっかりクララちゃん」

こんにちは、クララです。突然ですがおたよりを紹介します！

これはクララの文通相手からのお手紙なのですが……

『こんな季節に雪が降りやがった！　咲いたばかりな俺のむき出し部分が寒すぎるぜ！　ヒーハー！！』

だ、そうです。相手はもちろんクララと同じ桜の木です。クララもむき出しな部分が寒いです。え、あ、はい。お花のことですよ。まだ蕾ですけど。人間でいうなら……そうですね。綺麗なピンク色の大事な部分を表に。うん。内臓をそのまま外へ公開しているのと同じなのです。だから寒さは堪えるのです。

続いて紹介します。

『私、綺麗に咲きすぎました。だからみんな、私の枝をポキポキ折って持っていくんです』

人間で言うと骨折しまくりですね。しかもその骨を持ち帰るとは、なんたる変態的な所業でしょうか。裁判でこき下ろされるべきです。

『桜の花を潰されました』

内臓破裂です！？

『枝でチャンバラされました』

人の腕でチャンバラしてるようなものです！

『次はおまえだ』

クララしょっくです！！

「ふう」

さて、意外に広いクララの交友関係を暴露したところで本題に入りたいと思います。

聞けばお姉ちゃん達が中学校へ行ったらしいです。ぶっちゃけクララは何のことやらよくわかりません。だからその中学校とやらに侵入してみることにしました。

「あ、不法侵入者」

「クララ逮捕です！？」

いきなり背後から声かけられてビックリですが、振り向いてみればどこかで見たような顔。

「床さんです」

「あーあー、サラさんの気持ちがわかるわ……えぇ、ユカさんよ」

「なんでこんなとこにいるですか？」

「取材よ。クララちゃんこそなんで？　っていうかどうやって入ってきたの？」

それはクララの不思議な力でシュバッと、とか言わないほうがいいような気がします。カンですけど。とりあえず誤魔化さないと。

「愛の力です」

「なるほど」

誤魔化せました。

「おねえちゃんに会いに来たの？」

「はい。あとついでに中学校とやらを探索しようかと思ったです」

「ふーん、面白そうね。私もついていくわ、ネタになりそう」

「寿司ネタですか！？　桜寿司ですか！　あぁなんだか美味しそうです！」

「今度一緒に食べる？」

「共食いです！　クララしょっくです！」

何がしょっくって、頷きそうになったことがです！　だって美味しそうなんですもん！

「むむ、あそこの教室から声がします！」

「子供って話題の切り替え早いわよね」

「さっそく聞き耳を立ててみます！」

クララとユカさんは揃ってその教室の壁に耳をつけました。すると聞こえてきたのは爆笑と、とある男子さんの声。

「それって緑色すぎるだろう！　ふはは！」

意味不明なセリフです。

「それって緑色すぎるだろう！　ふはは！」

また言ってます。

「それって緑色すぎるだろう！　ふはは！　それって緑色すぎるだろう！　ふはは！　それって緑色すぎるだろう！　ふはは！　それって緑色すぎるだろう！　ふはは！」

もしかして壊れたラジカセでも再生してるのでしょうか。そしてそこまで緑色って一体？

「それって緑色すぎるだろう！　ふはは！　それって緑色すぎるだろう！　ふはは！　それって緑色すぎるだろう！　ふはは！　

ンと開けて怒鳴り込んでしまいました！

「……あれ」

「ど、どうしました」

一体どんな緑色が……クララもおそるおそる覗き込みます。

するとそこには――誰もいませんでした。

え、え？　さっきの爆笑は？　緑色は？

「……幽霊？」

「クララしょっくです！！」

「あれ、クララちゃん？　どこ行ったの？　おーい！」

驚いて思わず瞬間移動してしまいました……まぁそれはいいです。

ともかく事件です！　この中学校に眠る謎をクララが解き明かしてみせます！

そんなわけで探索探索！

そして一ヶ月が過ぎました……

「ところでクララちゃん」

「あ、なんですか。カカ」

「今年、お花見できなかったんだけど」

「探索に夢中で花を咲かすの忘れてました！！」

クララ超しょっくです！　むむむ、年に一度の楽しみがぁ。

よし、こうなったら探索が完了したら季節関係なく咲きましょう。
そうしましょう。さぁ探索探索！

「咲くときは言ってね」

「はーい！」

## カカの天下８６１「うっかりクララちゃん」（後書き）

なんかやたらとフリーダムな話になってしまいました。緑色の謎は次回に解ける、はず。ちなみに桜寿司は桜の寿司であって、某店名のことではないのであしからず。

未だに一話ずつしか投稿できてないのが我ながらじれったい……次こそは二話以上更新したいもんです。そして季節外れの花見話を！（べ、別に作者が花見話を書き忘れてたからクララが咲くのを遅れさせたってわけじゃないんだからね！）

## カカの天下862「ノゥノゥぶっちょさん」

ども、カカです。最近中学生始めました。なのにあまり変わったことはありません。一番の変化はテンカ先生の授業がなくなったことですが……

「テンカせんせ、あそぼ」

「あぁん？」

まぁ、こうして何度も小学校に遊びに来てるわけで。

「てめぇよぉ、中学生っつったら勉強難しくなるんだから遊んでばっかいんじゃねぇよ」

「そんなこと言われてもねぇ、まだテストもしてないからわかんない」

「算数が数学になっただけでわかれよ、そんくらい」

「む、言われてみればすごく難しい気がしてきた」

「だろ？」

でも勉強めんどい。

「そんなことよりせんせ、まだ終わんないの？」

「今日はもうすぐ終わるが」

「お、ラッキ。トメ兄が残業しまくるって言ってたから暇だったんだよね」

「へぇ……そういやこないだサエたちから面白い話を聞いたんだが」

「あぁ、うん。私も聞いた」

「行くか？」

「行ってみよう」

「そんなわけで、兄の仕事ぶりを観察しに来ました」

いつぞやサエちゃんサユカンが言っていた会社訪問を決行。

「なんていい妹さんなんでしょう！　工場内は無理ですが、せめて放送室へどうぞ！」

そして噂に違わず受付の人は緩かった。

「さぁ、笠原さんに思いを伝えてください！」

なぜかいきなりマイクの前に立たされる私とテンカ先生。

「どうしよう、先生」

「よし、とりあえずスイッチＯＮだ」

さすが先生、男らしい。

『あーあー、テストテスト、ただいまマイクのテスト中……これ言ってみたかったんだよな』

「で、何を喋るの？」

「考えてなかったぜ」

さすが先生、男らしすぎる。

『よし、とりあえず笠原トメの恥ずかしい性癖シリーズ第一弾。ヤツは酔うと少し脱ぎたがる。これだけ聞くと犯罪者だが、セクシーだから許してしまうんだぜ』

そうなんだぁ。

「私もやる！　マイク貸して貸して」

「む、早く返せよ？　第十二弾まであるんだからな」

「うんうん。よーし！」

『トメ兄の上司の愚痴シリーズ第一弾。あのクソ部長！　グダグダ喋ってる暇があるなら手を動かせ！　口ばっか動かしてんじゃねぇよ、そこにしか筋肉ないのか――』

「会社内でそれはいくらなんでもヤバイだろおおおおお！！」

あ、トメ兄本人だ。

「なんなんだおまえらは！　僕を困らせて楽しいか！？」

「でもトメ兄、遊びってこういうもんでしょ？」

「どういうもんだ！？」

『トメ兄の同僚の愚痴シリーズ第一弾――』

「やめいっつうに！！」

「や、どういうもんかって言うから例を見せようかと」

「こんな放送が部長に聞こえてたら――」

「そもそも社員全員が聞いているがね、笠原君？」

ダンディな声にビクッと肩を震わせたトメ兄は恐る恐る振り返り……いつの間にか立っていた、のっぽな眼鏡のおっさんと顔を合わせた。

「ぶ、部長」

「君が私のことをどう思っていたのか、よくわかった」

む、これは冗談では済まされなさそうな雰囲気。助けねば！

「ぶっちょさん！　ノゥノゥ、ぶっちょさん！」

「なんだそのエセ外国人のホステスみたいな言い方は」

「トメ兄黙れ。えっとね、違うの。あのシリーズ第一弾にはまだ続きがあったの」

「そもそもおまえが黙ってれば――」

「よし聞こう」

「聞くの！？」

トメ兄と違って話がわかるね。

「私はこう続けるつもりだったんだよ。　あのクソ部長！　グダグ

ダ喋ってる暇あるなら手を動かせ！　口ばっか動かしてんじゃねぇよ、そこにしか筋肉ないのか？　でもそこがいい、大好きだ。いつもそう言ってるって」

よし、これでフォローはオッケーだ。ねぇテンカ先生？

「……（バンバン！）」

なんで肩を震わせながら机を叩きつつ腹を押さえて声なく爆笑なんかしてるんだろう。

「そうか、君はそんな風に私のことを思ってくれていたのか」

「ぶっちょさん……」

見つめ合う二人。背景はなぜか薔薇。

「ヒュー、くっついちまうのかコレ」

先生は完全に面白おかしく見学モードだ。

「君は、私のことが好きなのか？」

真面目な顔して阿呆なことを聞くぶっちょさん。

「は、はい」

上司に嫌いと言えるわけもなく、頷いてしまうトメ兄。

「私は嫌いだ」

そしてフラれた。

「口ばかり動かしているのはどっちだ？　黙ってさっさと仕事に戻れ」

そして帰った。

「……あれ、僕って、いったい」

呆然とするトメ兄。テンカ先生はなぜか極限まで大爆笑。

とにかくなんか言わないと。

「トメ兄、ドンマイ！」

「おまえらこそ黙ってさっさと帰れえええええええ！！」

「仕方ない。先生、仕事場に戻ろう」

「よっしゃ」

「なんで工場内へ入っていくんだおまえら！！」

「こちらですよー」

「なんで案内するんだ受付の人！！」

この後もトメ兄と先生と楽しく遊んだ。

ぶっちょさんは現れなかった。残念。もっと遊びたかった。

## カカの天下862「ノゥノゥぶっちょさん」（後書き）

GWが忙しすぎて一話しか載せられなかった……しかもいつの間にか更新日が金曜日になってる件。いやまぁ昨日とか夜中三時にヘトヘトで仕事終わった直後に「GW終わったぁぁぁ！」と一人でカラオケ一時間かましたら本気でくたばってて書けなかったんですほんとごめんなさい。

でも二連続で金曜日に更新しちゃったなぁ。まぁ次は木曜に。多分二話以上載せれます。調子に乗ったら四話とかいきます。それは周りが私のテンションをどれくらい上げてくれるかによります。カモン面白いこと！

んではー！

# カカの天下８６３「楽しい楽しい罠タイム、前」

どうも、引き続き中学生のカカです。

「暇」

「カカちゃん、最近いっつもそれ言ってるよねー」

「でもわかるわっ。授業がつまらないものっ」

ただいま昼休み中。給食も終わってサエちゃんとサユカンとのんびりお喋りしています。

「うんうん、やっぱテンカ先生の授業だよね。あの怒鳴り声がないと」

「そうそう、てめぇーとか、コラーとか、っしゃんなろーとかがないとー」

「A先生ってばほんと、普通に授業するだけだもんねっ」

そんなわけで中学は退屈なのだ。

「なんか面白そうなものないかな」

「じゃー探しにいこうよー」

「あ、それいいわねサエすけ。わたしたち、この学校に来たばかりだもの。どこに何があるのか全然わかってないしっ」

「そいえば、そだね。よし、なんか探しにいこう！」

そうして私たち三人は教室から旅立った。

そして放送室にたどり着き、なんか見つけた。

「録音用のラジカセだねー」

「待った、サエすけは触っちゃダメ」

「なんでー？」

「君、自分の機械オンチを自覚したほうがいいわよ？　いきなりラジカセが核爆発して世界が滅んだらどうするの」

「そしたら反省するー」

「しても遅いわよっ！」

「じゃー反省しないー」

「しなさいよっ！」

「どっちー？」

「……ふむふむ。ほー」

二人がじゃれあってる間に使い方を観察。んっと、ここが、こうで、こうか。

「録音できそうだよ」

「わ、ほんとー？　私が先に声いれたいー」

「はいどうぞ。ポチっとな」

「サユカちゃんのえっち」

「なんちゅー言葉を入れるのよっ！？」

『サユカちゃんのえっちサユカちゃんのえっちサユカちゃんのえっち』

「とめてえええええ！」

あ、奪われた。止められた。

「ふう……」

「サユカちゃんのえっちサユカちゃんのえっちサユカちゃんのえっち」

「えっ、止めたのになんでっ」

「私の肉声」

「かーかーすーけぇー！！」

「きゃー！　えっちサユカちゃんが！」

「変な風にくっつけるなっ！！　こらー！」

わたわたとおっかけっこを始める私たち。でもまぁいつものことなんでサエちゃんは冷静で。

「んー、これ面白そうだけど、ハッキリ録音できすぎて誰が言ったのかモロわかりなのが惜しいねー」

確かにそれは悪戯する側としては致命的だ。

「よし、私に任せろ」

「きゃん！　急に止まんないでよっ」

私を追いかけていたサユカンは止まりきれずマイ背中に激突。そのまま乗り上げてしまったので、半分おんぶする形に。でも私はそのまま移動を始めた。

「あ、あそこによさげな男子が」

「通りすがりのクラスメイトだねー」

私たちは適当に歩いて、適当にカモを見つけた。ちなみにサユカンはまだ私の背中に乗っている。

「名前は忘れたわっ」

「じゃあ男子Ｂと名づけよう」

Ａは先生のものだからとっておこう。

「ねぇね、男子Ｂ」

「え、俺のこと？」

「うん。なんか面白いこと言ってみてよ」

「なんだよいきなり」

「いいからさ。変なこと言ってみて」

「わかった。実はさ、最近妙な三人組にいきなり話しかけられたんだよ。それで変なことを言えって要求してくるんだ。どうすればいい？」

「素直に変なことを言えばいいと思うよ」

「わかった」

うむ、話のわかるやつだ。

「でも変なことって言われてもなぁ」

「サエちゃん、サユカン。見本」

「はーい。やろうサユカちゃん」

「おっけー。カカのマネやりまーす！」

「私、トメお兄さんの役やるねー」

突然始まったカカ天劇場。ちなみにサユカンは私の背中に乗ったまま。

「こほん。カカ？」

「なーにーとめにー」

「テストの成績はどうだった？」

「電柱」

劇場終了。

「うん、こんな感じな言葉をお願い。男子Ｂ」

「どんな感じなのかさっぱりだけど、わかった」

おお、やはり話がわかるやつ。

「じゃあコメントをどうぞ。ポチッと録音開始」

さぁどうぞ。

「それって緑色すぎるだろう！」

録音終了。

「ありがとー」

「お、おう」

サエちゃんに笑顔でお礼を言われた男子Bは途端に顔を真っ赤にして逃げていった。サエちゃん、また一人落としたな。それにしてもサユカンはいつまで私の背中にいるんだろう。

「よし、程よく変な録音もできたところで、どうしよう？」

「再生ボタンを押してリピートにして、その辺に放置しよー」

「それって、どんな意味があるのよっ」

「さぁー？　単なる悪戯。もう休み時間終わるからそれくらいしかできないしー」

「よし、放課後に回収してまた遊ぼう」

運がよければ（悪ければ？）移動教室の人たちが通りすがりで何かリアクションしてくれるかも。そう思って私たちは無意味に罠を仕掛けたのだった。

そして、その間に予想外な誰かさんたちが通過したとは夢にも思わないのでしたとさ。

つづく。

## カカの天下８６３「楽しい楽しい罠タイム、前」（後書き）

むぅ、またもや金曜日に更新となってしまいました。もう一話書きたかったんだけどなぁー。まぁとりあえず三話更新で勘弁してくだせぇ。

# カカの天下８６４「楽しい楽しい罠タイム、後」

どうも、まだまだ中学生かけだしのカカです。

先程イタズラを終えて5限、６限と授業をこなし、楽しい放課後の時間がやってきました。さすがにもう背中にサユカンは乗っていません。

「あのイタズラ、誰か聞いたかな？」

「情報を集めてみたけどー、気づかれてないっぽいよー」

「うーん、イタズラの是非をツッコむべきか、早々にどんな情報網を持ってるのかツッコむべきか、どっちかしら。教えてトメさんっ！　メールメール」

携帯を握り締めるサユカンの首根っこを捕まえて、とりあえずラジカセを回収に向かう。

「あれ、教室の戸が開いてる」

「誰か入ったのかしら」

「その割には情報なかったけどなー。学校関係者以外かなー？」

それを断言できるサエちゃんはすごい。憧れる。大好き。

のろけはさておき、回収回収。おーおー、いまだに緑色がどうとか言ってるよ。ポチッと再生ストップ。

「次はどうしよう?」

「元の場所に戻しておくのが一番だと思うわ」

つまんない。却下。

「とりあえずインパクトが薄かった気がするので、何か恐い感じのセリフを募集しよう」

「さんせー」

「はんたーいっ」

「よし行こう」

「わたしの意見聞いてよっ!?」

「賛成が私とサエちゃんで二人、反対が一人。多数決だよ」

「わたし不利じゃないっ!? それじゃあ大抵の言い分が通っちゃうじゃないっ」

「今までずっとそんなもんだったじゃん」

「それもそうねっ」

サユカンも中学生になってからすっかり物分りがよくなった。私たちのおかげだね。

「お。あそこを歩くのはー、うちのお母さんと教師Ａのはからいで皆同じクラスになったにも関わらずなぜか一人だけ別のクラスになったタケダ君だー」

「ほんとだわっ。ほらカカすけ、いいカモよ！」

「タケダって誰だっけー」

「中学生になったのが嬉しすぎて忘れちゃったのかもだけど、いくらなんでも可哀想だから本人に言っちゃダメだよー」

む、そっか。わかった気をつける。

「おお！　なぜか俺とは別のクラスになったカカ君たちではないか！」

「……タケダ君、気にしてるのー？」

「当たり前だ！」

誰だか忘れたけど正直な人だ。

「ところで何用だ。まさかサエ君の母上の力で俺のクラス替えが決定か？」

「そんな無駄なことはしないよー」

「いいじゃないの、またヤナツ君と同じクラスなんだから。親友なんでしょっ」

「そんなわけないだろう！」

そこで私はポンと手を打った。

「ああ、ヤナツ君の友達か」

「カカちゃん、ヤナツ君は覚えてるのになんでタケダ君は忘れるのー？」

「さぁ」

「……何の話だ？」

ここのやりとりはコッソリしたので当のタケダ君には聞こえていません。いくら私でもそれくらいの配慮はあるよ。えっへん。

「とりあえずタケダ君、だっけ？」

「なぜ自信なさげなのだ、カカ君」

「変な言葉をお願い」

「うむ、その発言がすでに変だぞ」

「つべこべうるさい、言え」

「……カカ君、こんなに冷たかったっけ」

知らない人には厳しいのだ。

「はい、もう録音ボタン押すよ。よくわからなくて意味不明で、それでいいてどことなく恐いセリフをお願い」

「注文が複雑だな！！」

「はい、ごー」

ポチッとな。

「ありえない抜け毛だ！！」

録音終了。

「これはたしかに恐い」

「なかなかやるねー」

「合格っ！　もう行っていいわよ。しっし」

「な、なんだよぅ……俺にも出番よこせよぅ……」

なんか寂しそうに去っていくタケダ君。

「よし、なかなか楽しいセリフをくれたもんだ。ご褒美に思い出してあげよう」

「あ、やっぱり覚えてたのねー」

「まね」

さすがにね。

「録音はこれでおしまいなのー？」

「それじゃつまんないわよねっ……ん、む」

なんだかムズムズしてる様子のサユカン。よし、ポチっとな。

「ごほ」

録音終了。

「……ちょっと待ってカカすけ。いま、何した？」

「録音した」

再生＆リピート。

『ごほごほごほごほごほごほごほごほごほ！』

むせすぎ。

『五歩五歩五歩五歩』

なんとなく皆で五歩、歩いちゃった。

「なかなか面白くなったね」

「それだけでいいのー？」

「充分じゃないの……ん、んん」

サユカンの調子がおかしい。今だ！

「うぇ」

くしゃみが出そうで出なかったらしい。録音終了。

『うぇうぇうぇうぇうぇうぇうぇうぇうぇうぇうぇ』

「なんだか某掲示板とか某動画サイトが頭に浮かんだー」

サエちゃんが何を言ってるのかわからないけど、これで完成だ。

「恥ずかしいから消してっ！」

「ヤ」

さて、どうしてくれようか。

結論。

給食中に放送してみた。

『ありえない抜け毛だ！！』

食事中のクラスメイト全員が吹き出した。そして恐ろしげな表情で給食を見る。まるでその全てが抜け毛で出来ているとでも感じた

かのように。

『ごほごほごほごほ！！』

誰かが言った。「え、この人、まさかその抜け毛を食べたの？そしてむせたの！？」と。

『うぇうぇうぇうぇうぇうぇうぇうぇうぇうぇうぇ』

誰かが言った。「あ、頭がおかしくなったんだ」と。

そしてその後、給食に手をつける人はいなかった。

お残しがいっぱいでた。

そしたら給食のミナミおばちゃんが乗り込んできて説教された。皆、ごめんなさい。やりすぎました。

「さっきの、サユカちゃんの声だよね？」

「きゃあああああああああああああああっ！」

そしてクラスメイトにあれこれ言われることになったサユカン、ごめん。中学生になったからってはしゃぎすぎた。自重しよう。

## カカの天下８６４「楽しい楽しい罠タイム、後」（後書き）

後編です。なんか汚い話になりました。食事中の方は気にしないでください（って言い方も変ですが）

退屈気味なカカたちですが、今度は何をやらかしてくれるのでしょうか。はてさて……

話は変わりますが、実はもう一話書きたかったのは母の日の話です。過ぎましたが。でも今度載せます。しかし他にも重要な話が控えていますね。カカねば。

# カカの天下８６５「カカ天クエスト、ＥＰ１６」（前書き）

注意：このお話はカカ達がゲームのキャラになりきりながらＲＰＧを進める話です。話の内容はゲームの中ですが、『もしもカカ達が異世界にいたら』みたいな感覚でお楽しみください。

ステータス

カカ　ボケ勇者　レベル１　へん
サエ　悪の魔法使い　レベル１　はらぐろ
サユカ　手の平の踊り子　レベル１　さびしんぼう　エロレベル４
トメ　ツッコミ　レベル１　つっこみ　？？？
ケロリン　スライム　レベル５０　おっさんくさい　ゴミ
宇宙

# カカの天下８６５「カカ天クエスト、ＥＰ１６」

あらすじ。

とある街の住人を全て味方につけ、魔王として君臨したカカたち。サエの魅力によって色々とパワーアップした街人たちは若干魔物と化し、元祖のラスボスが住む魔王城へと突進を開始した。

本来ならば様々なイベントを通過しなければ辿り着けない、河の向こうにある魔王城。しかしヤヴァくなった街人たちはつるはしを用意し、地下を掘り進むことで河を下から攻略しようとするのだった。

「んな無茶なっ！」

「いけいけごーごー！」

「ちょっとカカすけっ！　煽ってないで止めなさいよ。そんなことできるわけないじゃないっ」

「え、だってほら」

カカの指差す方向を、サユカは見た。

「みんなー、頑張ってー！」

サエのエンジェルデビルスマイルが発動！

『ひゃっほおおおおおおおおお！！』

街人が無敵化した！

「ほら。なんかいけそうじゃん」

「そ、そうね……」

怒涛の勢いで掘り進む街人たち。そして――なんと、どこかの洞窟を掘り当てた！

「けっこー進んだけど、これ何の洞窟だろうね？」

「位置的には魔王城の真下あたりだと思うんだけどー」

「そ、そんなに進んだのっ！？」

すでに街人たちのステータスは測定不能である。

「におうな」

「あ、ケロリン。なに、ゴミ化した自分が臭うの？」

「ちげぇよ！」

異様にレベルの高いゴミスライムは、無いはずの鼻をくんくんと動かした。

「におう、これは……魔物のにおいだ」

そのとき、暗かった洞窟がライトアップされた。

「電灯のスイッチがあったよ」

「身も蓋もない洞窟だねー」

すると、そこには無数の魔物たちが！！

「……はれ？」

無数。それは紛れもなく無数。数など数えることはできない――説明しよう！　本来ゲームでは敵の類がフィールド上に表示されない。表示されるゲームもあるが、とにかく無尽蔵に湧いてくることに違いは無い。ならばその魔物はどこからくるのか？　そう、この部屋こそが魔物の倉庫。本来ならばゲームバランスを考えて一定時間ごとに排出されるはずの、全ての魔物がここにいたのだ！

「ど、どうしよう」

『まものの群れ』があらわれた。こう表現するしかない状況である。一万や二万じゃ済まない魔物の数なのだ。

「どうしようもないわよっ」

「ちっ、反則技ばっか使うからこんなことになるんだ！」

「なんだよぅ、ケロリンだって反則技でレベルアップしたようなもんじゃないかよぅ」

「た、たすけてー！」

サエちゃんが助けを求めた！

萌えモードの街人たちが反応した！

街人は助けを呼んだ！

「……え、なに。この地響き」

説明しよう！

本来、ゲーム中で表示される村や街の人々の数はあまりに少ない。しかし実際は現実と同じくらいの人口が隠れているはずである。もしもその全てが集まったとしたら？

というわけで、世界の全人口である６５億人が集まった！

「や、いくらなんでもやりすぎでしょ」

勇者カカのツッコミ！

しかし誰も聞いていない。

『全人口』の攻撃が『まものの群れ』を襲う！

『まものの群れ』に５２６４８７９２２１４５のダメージ！

『まものの群れ』のこうげき！

『全人口』に４１５８７９６８８３７０のダメージ！

「もうわけわかんない数字だね」

「ていうか人間強いねー」

「最初からこうやって総力戦してたら勝ったんじゃないの？」

「ともかくこっちは任せて、俺様たちは先へ行こうぜ」

全ての魔物がここにいる、ということは魔王城はがら空き。カカたちは上手いこと戦争をすり抜けて城へと潜入した。

「あ」

「あー」

「あっ」

「ああ」

そしていきなり出くわした。

魔王の間で寝転がって本を読みながらポテチを食べていた、カツコ、村娘Ａ、トメと。

『な、なぜここに！？』

トメまで揃って三人は仲良く飛び上がった！

「魔王、おまえを倒す！」

とりあえず今までの経緯とか色々と置いといて、カカは格好いいセリフを言った！

「フン、あた――」

「私が相手をするまでもないわ！　行け、我が僕であるトメよ！」

「あー！　あたしのセリフ取ったー！　いけずー！」

こっちもとりあえず置いといてそれっぽいセリフを返した！

そして改造されたトメが解き放たれる！

「トメ兄……私たちの敵になったの！？」

村娘Ａが笑った！

「くくく、そうよ。世にも恥ずかしい改造をしてあげたの、倒せるものなら倒してみなさい！」

「や、やめろ！！」

トメの悲痛な叫びも虚しく、改造された身体が真の姿を現す。果たしてカカたちは最愛の兄を倒すことができるのか！　次回、『トメさん（笑）』をお楽しみに！

## カカの天下８６５「カカ天クエスト、ＥＰ１６」（後書き）

果たしてトメの改造された姿とは！？
なんか終わってしまいそうな雰囲気ですが、実はまだまだ続く予定だったりするこのシリーズ。
次回はいつになるんだろう笑

# カカの天下８６６「サユカの任務、必要以上に二人きり編」

こんにちは、サユカですっ！　今日はわたしとトメさんの誕生日！　二人の運命の日っ！

「あ、サユカちゃん。誕生日おめでとう、と、おはよう」

だから今日は、二人でお出かけなのですっ！

きゃーッ！！

きゃぁー！！

っきゃあああああああ！！

はっ！？　テンションが上がり過ぎたわ。

「トメさんっ！　誕生日おはようございます！」

テンション上がり過ぎて混ざったわっ。

「うん、おはよう」

トメさんってばツッコむことなくスルー！？　冷たいっ、でもそれはそれで快感っ。

「じゃ、行こうか」

「はいっ」

今日は二人っきりになれるといいなっ。

――商店街に、着いた。

ひゅーるりー、と寂しい風が吹く。

「誰も、いないぞ」

二人っきりだっ！！

じゃなくてっ。え、なに？　なんでいつも賑わってる商店街に人っ子一人いないの！？

「……人類が滅んだ未来に迷い込んだ、なんてことはないよな」

「それはそれで」

「え、サユカちゃんなんて言った？」

「いいえ、なんでも」

わたしたちがアダムとイブに、なんて思ってませんよ。ええ。

「でも、本当に誰もいませんねぇ」

「とりあえず歩いてみようか」

「はいっ」

トメさんと仲良く探索開始。

「……静かだね」

カサカサ！

「……ですね」

カサカサ！

「……でも、なんか」

カサカサ！

「……人の気配はするような」

カサカサ！

「……なんか、かつて無い勢いで避けられてるような感じじゃないだろうか」

わたしもそんな気がしてきた。街の皆が隠れてる。わたしたちに見つからないように。全員が揃いも揃って。

「よし、店に入ってみよう」

「そうですねっ」

試しに喫茶店に入ってみた。さてさてどうなるのかしら。もし誰もいなかったら勝手にケーキとか食べてやるんだからねっ。

カランカラン、と来店を告げるベルが鳴る。

お客さんはいない。

店員さんは……いない？

「いらっしゃいませ」

いないのに声がしたっ！

「お、お好きなお席へどうぞ」

「そこの店員。なんでカウンターに隠れてるんだ」

トメさんがその姿を目ざとく発見したみたいだっ。カウンターの影かな？　覗きこむと確かにウェイトレスさんが。でも、なぜか縮こまってフルフルと震えている。怯えてるの？　何に？

「お客に対して失礼じゃないか？」

「そ、そのぅ」

そのとき、ハラリと床に落ちた紙。それを見て私たちは全てを理解した。周りの人々が姿を見せない――いや、見せないほどにわたしたちに近づかない、その理由。

トメさんの背中からはがれ落ちた紙には、大きくこう書かれてい

た。『この人、うんこたれ。逃げろ』と。

「ひぃ！　や、やっぱりたれるんですか！？」

「誰がたれるかぁ！！　ていうかやっぱりってなんだ！！」

「きゃあああああ！　たーれーらーれーるー！！」

「人聞きの悪いことを叫ぶなぁ！！　こんな冗談みたいな貼り紙を真に受けてんのか、この商店街の住人は！！　しかも全員！？」

「だってたれるんでしょう！？」

「たれねーよ！！」

いま、街の人々はこんな感じで怯えているのね……ん、ハラリとまた紙が落ちたわ。同じもの、ってわたしにも貼ってあったの！？

「こんなことするのは誰か、なんて考えるまでもないわよね。カカすけっ、サエすけっ！」

案の定、ひょっこりと現れる二人。

「なに、サユカちゃん。やっぱりたれるの？」

「たれないわよっ！」

「だからなんでやっぱりなんだ！？」

「あははー、トメお兄さんさんてば今にもたれそーな顔してるー」

「怒ってんだよ！！」

わたしは怒りをかみ殺しながら、ゆっくりと聞いた。

「なんで、こんなこと、したの？」

カカすけはハッキリと答えた。

「二人きりになりたいと思って」

「ありがとう！！」

「お礼言うの！？」

ごめんなさいトメさん。二人きりになりたいと思ったのはわたしなんです。それを二人は叶えようとしてくれた……だからお礼は言わないと。

「喜んでもらえてよかった。これが今回の二人への誕生日プレゼントだよ」

「存分にたれてねー？」

「たれないって言ってんだろがあああああ！！」

……まぁ、うん。色々と歪曲してる気はするけど、祝ってくれてるのはわかる。かろうじて。だから感謝。

今日でまた一つ、歳が増えました。トメさんに見合う大人へと近

づけたかな？　いや、もっと大人にならないと。このくらいのイタズラはスルーできる大人に！

……と。

「あー、なんだよ。たれないのか」

「おーい皆、たれないんだってさー！！」

なーんだ、と胸を撫で下ろしてわらわらと姿を現す大人たち。

大人たち。

「おまえらバカだろ」

「バカですね」

思わず同意したわ。

すると大人たちは声を揃えた。

『オゥイエ！！』

こんな大人にはなりたくないわ。

## カカの天下８６６「サユカの任務、必要以上に二人きり編」（後書き）

おめでとう二人とも！

そう、何気に二人の誕生日なのです。しかし毎回この日は感動的な展開はありえないですなぁ。まぁこんな感じがサユカにとっては一番幸せでしょう。多分。

多分。

# カカの天下８６７「超ママ」

ふあぁ、おはようございます。カカです。今日もいい天気。

雨ばかり、そして寒い日ばかり続いていたお空はようやく春を思い出したらしく、最近は温かくて安心します。

さて、顔を洗って歯を磨こう。私は部屋を出た。そのまま洗面所へと向かう。

床に『ママ参上』と書かれた紙が落ちていた。きっと目が寝ぼけているんだろう。

さて、洗面所に到着。鏡を見るとぼやーっとした私の顔。

その背後にはママの笑顔。

まだ寝ぼけているらしい。現に、顔を洗ったらその顔は消えた。

歯を磨こう。歯磨き粉を取る。『ママすっきり』と書いてある。

そんな品名だっけ。まぁいいや。

しゅこしゅこ磨いてうがいしてゆすいで……よし、居間へ向かおう。

通りすがりに見えたカレンダーの絵がなぜかママだった。ママのカレンダーなんか買ったっけ。買ったんだろうきっと。

「トメ兄、おはよ」

「おう、おはよう」

いつもの定位置に座りながらテレビを見る。

『おはようございます、ママです』

映ってるのは私のママじゃないけど……なんかセリフおかしいな。耳も寝ぼけてるらしい。

テーブルの上にあった新聞を手に取ってみる。そして読んでみる。

『ママままママままママままママままママままママままママままママままママままママままママままママままママままママままママままママままママままま』

ダメだ。寝ぼけすぎててまともに読めない。

仕方ないからテレビを見ることにする。

『本日、この家で事件が起きました、ママです』

ママが事件を起こしたんだろうか、それともママという事件を起こしたのだろうか。

『そんなわけでママに話を伺ってみようと思います』

犯人か。

『ママさん、そのときの状況は？』

『ま、ママが、ママに、ママしたんだよ！』

ママしかいない。

『そうですかぁ……聞きましたか皆さん、大変ママです。どうしましょう』

ほんとどうしましょう。

「カカ、朝食できたぞ」

「ん、あんがと」

いつの間にか並べられていた皿の数々に目を向ける。

全てのおかずにケチャップやマヨネーズで『ママ』と、味噌汁はネギで『ママ』と書かれていた。

「トメ兄、私まだ寝ぼけてるみたい」

「なんでそう思う？」

「ママがいっぱい見える」

「麻薬にでも手を出したのか」

そうなのかな。いつの間にか一服盛られていたのかな。

「とりあえず食べろよ。まさか皿の上に母さんの生首が見えるわけでもあるまい」

「それはさすがにないけど」

あったら恐すぎるけど。

……んー。

「トメ兄がそんなこと言うから食欲なくなってきたじゃん」

「ごめん。僕もなくなってきた。ほんとごめん」

全くもう……相談の結果、テレビを見て落ち着いてから食べることにした。

チャンネルを変える。お、今日の占いだ。

「今日の一位はママ座、二位はママ座、三位はなんと、ママ座です！」

今日のママは幸運から不幸まで全て味わうのだろうか。

「ということは、最下位は……残念！　パパ座の皆さんです！」

そこはパパ座なんだ。全国のパパ、残念。

「くっそー！　僕は最下位かぁ」

「トメ兄いつの間にパパになったの！？」

「は？　何言ってるんだ。僕はおうし座だろ」

そ、そだよね。やっぱ私の耳が寝ぼけてるのか。や、それにしても寝ぼけすぎじゃない？

『さて、次は街の様子を見てみましょう！』

画面が切り替わる。

とある市場が映された。

全員、私のママだった。

売られている魚もママだった。

「ぎゃあああああああああああああああ！！」

だからこんな叫び方をしても仕方ないと思う。

「どうしたカカ」

「ま、ママが、ママがいっぱい！」

「やっぱ変な薬でもやってるんじゃ」

妹がこんだけ取り乱してんだからもうちょっと慌ててよトメ兄！

「ふっふっふ……それはね」

どこからともなく聞こえてくる声！　これはやっぱり！

「本物のママ！」

「その通り！」

テーブルの下からニョキッと生えてきたのはまさしくママ！

「今年は母の日に何もくれなかったから、ママってば悲しくて悲しくて思わずカカちゃんが寝ている間に『全てがママ関連に感じる』という暗示をかけてしまったのよ！」

ママって変な特技持ってるね。

「さぁカカちゃん。母の日に何も送ってくれなかった理由を言って！　ママ、そう簡単には許さないからね！」

「何も送らなかったら直接来てくれるかと思って。会いたかったから」

「ママったら超許しちゃう！」

めでたし、めでたし。

## カカの天下８６７「超ママ」（後書き）

ママですね。

それしかいえません。

# カカの天下868「おたふくトメさん」

どうも、トメです……はぁ……すいません、思わず初っ端からため息を吐いてしまいました。なぜかというと、鏡を見たからです。

別に僕は顔にコンプレックスを持っているというわけではありません。別に自信があるわけでもありませんが、とりあえず普通の顔だろうなぁと思っているからです。

しかし今はため息です。なぜかというと……顔が縦に伸びたからです。

わかりやすい言い方をしましょう。おたふく風邪になったのです。耳から顎にかけてボンボンに腫れあがっているのです。お相撲さんみたいなのです。この歳にもなって……

説明しよう！　おたふく風邪とは多くが子供の頃にかかる、一度かかった者は二度とかからない（はずの）ウィルス性の病気である！　ひどい風邪と似たような症状に加え、頬から下がその名の通りおたふく状態に腫れあがるのが特徴。稀に大人になってからかかる者もいるが、ぶっちゃけそっちの方が色々と大変だったりする。簡単に言うと子供が作れなくなる可能性とかあるのだが、詳しくは各自で調べてほしい。

「あー……痛い、寒い、だるい」

とりあえず僕はベッドの上。感染する可能性もあるので会社には行けず、高熱のせいで寒く、腫れてるおたふく部分が痛くて眠れず、ずーっと自室でゴロゴロしながら苦しんでるのである。

「トメ兄、水持ってきたよ」

「おー」

ちなみにカカは幼稚園の頃にかかっているので問題なく部屋に入ってこれる。

「おじゃましまー……ぶふっ！！」

そして部屋に入る度に笑われる。

「はい、お水……ぶはは！　お相撲さんがいる！！　ほっぺたがたゆんたゆん！」

「はよ出てけ！」

「あっはっはっは！」

あぁ、僕の顔ってば超ボリュームで面白い。本人的には全然面白くない。

僕は何度目かのため息を吐きながら、ありがたく水を飲む。そう、ありがたいのだ。起き上がるのもキツイ状態のときに面倒を見てくれる妹がいるということに感謝しなければならないのだ。少しくらい笑われたくらいで腹を立ててはいけない。

「トメお兄さん、こんにちはー」

「ん、この声はサエちゃん？」

扉の方に顔を向ける。

にっこり。

そんな笑顔を向けた後、扉はすぐに閉まった。

……もしかして、笑われたのだろうか。ま、まさかな。サエちゃんはいつもニコニコ、あれがいつもどおりだからな、うん。

「トメさん、こんにちはっ」

「あれ、サユカちゃん」

「ぶごっ！」

サユカちゃんはなぜか自分の顔を殴った。

「え、え、どうしたの！？」

「な、なんでもなぶふご！」

わかった。

サユカちゃんは僕の顔を見て吹き出しそうになり、その度に自分を殴っているのだ。

「わ、わたしは笑いません……だ、だぶふごっ！　だからは、はやく良くなってぶふぐっ！」

「ああ、ああ、わかった、わかったから我慢しないで笑っていいんだよ？」

「笑いません！　わたしは笑いません！」

あぁ、愛だ。やばい、ちょっと感動してしまった。

「でもそろそろ限界なんでこれで失礼しますっ！」

そして去っていく足音……僕の顔、そこまで面白いのか？

「トメさん！」

「うあサラさん！？」

いきなり登場したサラさんは僕の顎を凝視して……

「確かに今のトメさんのおたふくはボインボインです……でも、でも！　私のほうがボインなんですから！」

「ちょ、ちょっと！？　変な対抗心燃やしたままどっか行かないでよ、ねぇ！」

行っちゃった……なんなんだ、一体。

「……んん？」

またもや開く部屋の扉。今度はなんだ！？

「姉、テン、サカイさん？　なんなんだ一体」

『ぶはははははははははははははははははは！』

「さて、酒の肴もできたことだし、飲みに行くか」

「なぁ姐さん、いっそここで飲まねぇか？」

「あははー、それはいくらなんでもいくらなんでもですよ、いくらなんでもー」

仲良く笑って去っていく三人。そのまま地獄へ落ちろ。

「クララ参上です！」

「……はいはい。なんでしょうか」

「クララもおたふく風邪になるですか？」

「知るか！」

その後も訪問者は尽きることなく。

そして例外なく皆、笑いやがった。

――翌日。

「ぶふっ！」

「あの、いい加減に笑うためだけに来るの止めていただけませんか！？」

僕は部屋に集まった暇人どもに怒鳴った。

全員おたふく再発してしまえ！　と念をこめて。

そしたら――

僕の容態が悪化した。そして僕以外はいたって健康そうだった。

どちくしょう。

## カカの天下８６８「おたふくトメさん」（後書き）

なんでこんな話を書いたかというと！

私が今おたふくにかかったからです。いやマジで。ほっぺたの下ボインボインです。これ何よりも口開けるだけで痛くて食べれないのが辛いですね。なんか流行ってるみたいなんで、まだなってない人は注意！　４０度いったときは死ぬかと思いました……や、ほんと面白い顔になっちゃってますけど笑っちゃダメですよ。といいつつトメを笑う話書いてるんですけど＾＾；

# カカの天下８６９「教師Ａの奮闘記？」

こんにちは、教師Ａです！

中学の担任として働き始めてからはや二ヶ月。そろそろ中間テストなどもこなしている時期なのですが……

「失礼します」

「やぁ、Ａ君」

「どうも、普通の教頭」

「……なんだ、その普通の教頭というのは」

「私の知りうる限り、教頭には『デストロイヤー』とか『デンジャー』とか『マエストロ』とか肩書きがつくんですけど、うちの教頭にはそんな特徴ないじゃないですか」

「まさか君に『特徴がない』と言われるとは思わなかった」

「よほど特徴がないんですよ」

「口を慎め」

「はい、普通教頭」

「慎んどらん！」

わがままな教頭だなぁ。

「とにかく、なぜ呼び出されたかはわかるかね？」

「特徴がないのをどうすればいいか相談したいんでしょう？　大丈夫、その道にかけては私はプロです」

「君は『普通を脱却するプロ』ではなく『限りなく普通でい続ける』プロだろう」

普通とか特徴ないとかＡとか言われてるけど、俺らって結構イカシタ会話してると思わないかい？　そこのベイビー。

「とにかく！　君を呼んだのは中間テストの件だ」

「ああ、それですか」

ちなみに俺は国語担当だ。

「君自身はどう思ってるのかね？」

「答え合わせが楽でした」

「それは楽だろうさ……平均点９９点のテストならな！」

うん、皆ほとんど◯だったんだよな。

「いやはや、最近の中学生って勤勉ですよね」

「んなわけなかろう！！」

そう一言で切り捨てるのも可哀想だと思うのですが。

「なぜこのような事態になったのだ！　テストは平均点が６０点になるよう作れと言っただろう」

「予想外な事態というのはいつでも起こりうるものです」

「予想外にしては出来すぎだ！」

「奇跡ですね！」

「素直に感動してないで原因を探ってこーい！！」

そんなわけで、俺の作ったテストの何がいけなかったのが聞いて回ることになった。

「サエ君」

「はーい」

「いきなりだけど、俺のテストの悪い点を教えてくれ」

「簡単すぎー」

ショック！

超ショック！！

「も、もっと具体的に」

「出す問題に捻りが無さ過ぎです。授業中に『ここ出るよ』と言ったところを出すのはいいんですけど、そのまま出しても意味がないでしょう。問題文の書き方も変えないとー。あとー」

……その後、真面目に散々ダメだしをされてしまった。俺、情けない。

さらに聞いて回る。

「カカちゃん！」

「あ、Aだ」

呼び名にはツッコまない。慣れたから。

「ちょっと聞きたいんだけどさ」

「どれだけ頑張ってもAはAでしかないよ」

「どんな質問を予想したの！？　違うんだよ、この前の俺のテストでどこが悪かったか教えてほしいんだ」

「ええ」

「うん、助かるよ」

「ええ」

「ん？」

「ええ」

「いや、あの、お願いするよ。教えてよ」

「ええ」

「いくら俺が教師Ａだからって『ええ』しか返事しなくなることないだろ！」

「や、これが私の回答だよ」

「……どういうことだ？」

よくわからない。次いこう。

「サユカちゃん！」

「あ、自分がトメさんに似てるとか不届きなことをほざいたＡ先生。何か用ですかっ」

「ひ、引っ張るねぇ。反省してるから勘弁してよ！」

「仕方ありませんねっ」

とか言いつつまた言われそう。この子、普通にいい子なんだけどトメが絡むと色々……いや愚痴はこの辺にしておこう。

「聞きたいことがあってね。じつはこの前の中間テスト、俺が書いたやつなんだけど」

「あぁ、あのとてつもなく簡単なテストですね」

うぐ……痛い、痛いけど平均点９９点なんだからそりゃ簡単だったんだろうさ。

「そ、それでね？　なんでそんなに簡単になっちゃったのかなぁと思って原因を探ってるんだけど」

「原因なんて簡単じゃないですかっ」

「それも簡単なの！？」

俺のテストって一体どこまで簡単なんだろう。

「自意識過剰ですよ」

「いきなりそんなこと言われる意味がわかんないんですけど！？」

「もう皆がやったテストの答えを見ればわかると思いますよっ」

言われたとおり、職員室に戻ってテストを引っ張りだしてきた。

見直す。うん、やっぱり普通の問題だよな。

……ん、待てよ。サユカちゃんは問題じゃなくて『答えを見ろ』

って言ったよな。答え……答え……あ。

選択肢の答えが全部Ａかａだ。漢字の問題も読み書き全て『え』とか『ええ』だ。カカちゃんが答えてくれた意味がやっとわかった。

「普通の教頭！」

「なんだね普通のＡ」

「原因がわかりました！」

「ほう？」

「俺、なんだかんだ言っても……やっぱりＡが好きみたいです！」

なんだかすんごく怒られた。

なんでだろう。

## カカの天下８６９「教師Ａの奮闘記？」（後書き）

奮闘記と書いたものの、そんなに頑張ってないＡさん。まぁやる気も人並みにしかないんですね。

しかしなんとなく書いたものの『マエストロ教頭』ってなんか良くないですか？　いずれ出そうかなぁ。

**カカの天下８７０「今は夏だが春がきたらしい」**

こんにちは、シューです。み、みんな覚えてくれてるかな？　忘れた？　忘れたよね。えっと、お姉様……カツコ様の友だ――いえ、下僕です。はい。

「こらシュー！　何をボーっとしてる！？」

「あ、先輩」

「おまえはあっちだ。しっかりパトロールしろ！！　絶対に見つけるんだ！」

プンスカ怒りながら指示した先輩は、僕に指示した方向とは逆の道へと走っていった。なんでそんなに張り切ってるんだろう……あ、すいません。説明しますね。

これも覚えてくれている人がいるかは不安なんだけど、僕は一応警察官です。それで、その、何か事件でも起きたのか街中のパトロールに駆り出されたわけです。その事件というのは……本当にごめんなさい。署内の放送で流れたらしいのですが、僕はバナナを食べるのに夢中で聞いてませんでした。

しかしそんなことを正直に言うわけにもいかず、こっそり聞ける仲のいい同僚もいない僕はわけもわからずに来てしまったわけです。

「さて、どうしよう」

パトロールとは言ったものの、何を見つければいいのかわからな

い。

「とりあえず歩いて――あ」

いいことを思いついた。

さっき食べかけのバナナを食べよう。

「誰も見てないし、いいよね」

最後の一口を残したまま、慌ててティッシュに包んでポケットに入れてきたんだよね。そんなことするなら口に放り込めばよかったのにって？　いやいや、やっぱりこういうのはゆっくり食べ終えないと。ま、こんなことしてるから万年ヤクタタズなんだけどね。

「よしよし、無事だった。美味しそう」

ポケットなんかに入れたわりには完璧に無事だ。さて、食べよう。誰にも見られないように、一応しゃがんでっと。

ブォン！！

「……ん？」

頭の上でなんか強い風が通ったような。

「な、なに……」

これは僕の声じゃない。ハテナマークを浮かべながら振り返ると、そこには黒づくめな格好の男（マスクしてて見えないけどたぶん）

が立っていた。

「俺の、背後からの蹴りを、気配だけでかわしただと！？」

「あー」

なんか偶然しゃがんだらそういうことになったみたい。でも、あれ？　それって……僕が襲われたってこと！？

「し、しかも俺をとるに足らない敵と思ってバナナなんか食いやがって」

いや、その、これは今から食べるところなんですけど。ていうか、え、え？　もしかして僕ってば命の危機！？

「ぱく」

「なめやがって畜生！」

うあああ緊張しすぎてなぜかバナナ食べちゃったあああ！

「ぶち殺す！」

そして襲い掛かってきたぁぁぁ！

僕は悲鳴を上げながらしゃがみこんだぁぁぁ！

思わず放り投げたバナナの皮に黒い人が躓いたぁぁぁ！

転んで頭打って気絶したぁぁぁ！

寝転がったその人は通りすがりの自転車に跳ねられたぁぁぁ！

跳ねられた勢いでバウンドしたと思ったらバイクにも跳ねられたぁぁぁ！

さらに車にも跳ねられたぁぁぁ！

そして僕のところに飛んできたぁぁぁ！

なぜか奇跡的にナイスキャッチしたぁぁぁ！

結果。

僕の腕の中にはボロボロな犯人っぽい人が。

「シュー！　何の騒ぎ……は！？　そいつは！」

「え、ええと、こいつは？」

「名前は春日屋芽日呂。二十八歳。血液型はＢ型で趣味はピアノ演奏。好みのタイプは自分よりも強いやつ。最近車を購入し、友達から羨ましがられていたんだ」

「いやそんなよくわからない情報はいらないんですけど」

「ちなみに三日前に隣街で連続殺人事件を素手で行ったという凶悪犯だ」

「それ真っ先に言いましょう！？」

「そんなやつを一人で倒すとは……やはりあのカツコさんの舎弟。普段の情けない姿はカモフラージュで、いざというときだけ眠れる力が呼び起こされるんだな！？」

この黒い人といい、なんでそんな漫画みたいな設定を当てはめたがるんだろう。

「とにかく連行だ！　表彰だ！」

「えええええ」

そんなわけで。

信じられないことに僕は表彰されてしまった。

夢みたいだ。

ま、夢だろうね。うんうん。夢オチに決まってる。

「父の仇を討ってくださり、本当にありがとうございます」

こんな綺麗な被害者さんに声をかけられるのも夢だ。

「よろしければ、お食事でも一緒にいかがでしょう？」

デートできるのもきっと夢だ。

「失礼致します、お客様。こちらは当店からのサービスでございます」

「まぁ……素敵」

ほら、偶然いった高そうなお店にキリヤ君もいる。

「こんな展開、夢以外にないよなぁ」

「はっはっは。お客様、ていうかシュー君。夢と思えば夢。しかし現実であってほしいと真に願うなら、神様は小粋な奇跡を起こしてくれるものなんですよ」

「えー。そりゃこれが現実だったいいけどさぁ」

「まぁ現実なんですけど」

え？

はぁ。

え？

はぁ。

えええええ！？

「マジで！？」

「マジで」

「あの、何の話をされているのでしょう？」

困惑しているこの綺麗な人と食事しているのが、夢じゃないと！？

「い、いやぁなんでもないですよ！」

「そうですか」

ホッとしている女性。違う、まさか、そんな、これが現実なんて。僕がこんな普通の人と！！

「しかし胸がスッとしました。あのクソ女をズダボロに滅ぼしてくださって。今の気分を野菜に例えるとトマトですね。燃えるような赤です」

よかった。ちゃんと変な人だった。少しホッとした。

――驚くべきことに、食事はスムーズに終わり、笑顔でお別れ。携帯の番号とアドレスをゲットしてしまった。

「どうしよう……幸せだ」

「よう」

「え？」

幸福に浸ってボーっと立っていたら声をかけられた。男まさりな

風貌ながらも綺麗な女性だけど……怪我でもしてるのかな。

「突然だが、あたしはあんたに惚れたよ」

「なんですと!?　いや、その、僕ら初対面じゃ」

「何言ってる。先日に熱い勝負したじゃねぇの」

「え、え、ま、さ、か？」

あのとき襲い掛かってきて自滅した犯人!?　ていうか女だったの!?　たしかにマスクしてて性別わかんなかったけど!

「あたしは自分より強いやつが好きなんだ」

「ていうか、え、あの、拘置所にいるはずじゃ」

「あそこにはあたしより弱いやつしかいなかった」

うわぁ。

「というわけで逃げながらの生活になるが、今後ともよろしく。あたしはあんたを落とすぜ。じゃあな」

……えー。

もういい加減に夢って言ってよ誰か。

「こんなことがあったんです」

「へー」

カツコお姉様はスルメをかじりながら生返事。

「ねぇ、お姉様」

「んー」

「これ、なんでしょう」

「モテ期じゃね？」

「こんなモテ期いやだあああああああああ！！」

「わがまま言うなよ」

「うわあああああああん！」

「よしよし、ラーメンでも奢ってやる」

こうして僕のモテ期は始まってしまったのだった。

## カカの天下８７０「今は夏だが春がきたらしい」（後書き）

この続き、一体どうなる！？

まぁ書きませんけどね（ぇ

## カカの天下871「タケダにがんばられた」

ちわ、カカです。何事もなく過ごす中学校生活ですが、やっぱりそこは子供。ちょっとした刺激は必要なのです。今日も今日とて、そんな刺激を探索中。

「カカ君！」

「誰だ！」

「タケダだ！」

「ヤツは死んだはずだ」

「なぜだ！　俺はこうして生きている！」

「私が確かに殺した！」

「なら本望だ！」

「なら殺しなおす」

「待て待て待て！　なぜ殺す！」

「暇だから」

「暇つぶしに殺される程度の存在なのか俺は！」

「じゃあ他の暇つぶしを見つけてよ」

タケダは少し考えてから口を開いた。

「じゃあ」

「時間切れ。しね」

「判定厳しいだろう！　いいからこれを見たまえ！」

いきなり目の前に突きつけられたのは開かれたメモ帖。そこには漢字が書いてあった。

「さぁ読むのだ」

「叩け」

いて。タケダごときにポカリと叩かれた。

「ふ、ひっかかっ」

「なにする」

「ふごぉ！！」

とりあえず鳩尾を蹴り上げてやった。

「な、なにお」

「こっちのセリフだよ」

「いやいや！　自分で言ったのではないか、叩けと！」

読めといわれて読んだだけ……ああ、そういう遊びね。

「じゃあこれ読んで」

私はタケダのメモ帖を勝手に使い、付いていたペンでその文章を書いて渡した。

「む……これを読めと」

「そう」

そこにはこう書いた。『ボディブローをかましてください』と。

「はっはっは、こんなわかりやすい文章を読むわけが」

ボディブローをかました。

「ぐ、ごお……な、なぜ」

「読めなかった罰」

「な、なんと」

「はいもっかい。読んでみ」

「ボディブローをかましてください」

言う通りにしてあげた。

「ひー……はー……」

「イエス、ヒーハー！」

「まるで俺が興奮しているように言うのはやめてくれ！　苦しんでいるのだ！」

「ふざけたことしたお仕置きだよ」

「お仕置きなら最初の蹴りですんだだろう！？」

「あれはあれ」

我ながらよくわからない理屈である。

「あ、あんまりだ……くそぅ、俺も男だ。いつまでも黙っていると思うなよ」

「うん、もう少し黙ってよ」

「うがー！　決めた！　復讐してやる！　覚えてろよカカ君！」

そう言い捨てて、タケダは去っていった。

それにしても、復讐？　タケダが私に？　珍しい。中学生になって少し男らしくもなったのかな。あんまり想像つかないけど……何する気なんだろう。

翌朝。普通に中学校へと登校したんだけど……

「いて」

廊下の曲がり角でタケダとぶつかった。

「おっと、すまんなカカ君。それとおはよう」

「もしかしてこれが復讐？　ちっさいなぁ」

「君はどれだけ俺を過小評価しているのだ！　本番はこれからだ！」

そっかぁ。まー楽しみにしてるよ。

「しかしカカ君は可愛いな」

……。

……は？

「では失礼」

去っていった。何言ってるんだろあいつ。

「おはようカカちゃん」

「あ、うん。おはよう」

通りすがりのクラスメイトさんだ。

「今日のカカちゃんは可愛いね」

「へ？」

「じゃ、またね」

なんなんだ一体。

「あれ、おはようカカちゃん。なんか可愛いね」

「おお、今日の笠原は可愛いな」

「可愛いカカちゃんおっはー」

「可愛い可愛い」

「きゃわゆいきゃきゃちゃんおっひゃー！」

なんだコレ。確かに私は可愛いしサエちゃんにもよく言われるけど、出会う全員が言うなんて異常だ。や、最後に言語が異常な人もいたけど。

「カカちゃんだ、おはよー」

「カカすけ、おはよ」

「あ、サエちゃんサユカン。おはよう。聞いてよあのね」

「カカちゃん、今日は一段と可愛いねー」

「カカすけ、悔しいけどあんた可愛いわっ」

「なにこれー！！」

さすがの私も恥ずかしいんですけど！

「ほらほら、席につけー。出席とるぞー。えーと一番は飛び越して可愛い笠原カカ君！」

「は、はい！？」

思わず立ち上がる私。

なぜか巻き起こる拍手。

顔が熱くなっていく。

「え、えぇと、なんで、みんな、何を企んでるの？」

「可愛いね」

「可愛いなぁ」

「ちょー可愛い」

「う、あ、うう、その、あの、そんなに言われると照れてしまうというか、いたたまれなくなるというか、小さくなってしまうというか、その、とても申し訳ない気持ちになってしまうのですけど、あぅ。なんだろう、私はどうすればよいのですか？」

混乱しながら視線をさまよわせ、しどろもどろに、らしくないことを言いまくる私。

恥ずい。

顔を上げてられなくて、俯いた。

するとそれを見つけた。

『とことん私を可愛いと言いなさい』という紙が私の腹に貼りついているのを。

「あ、やっぱり気づいてなかったんだー」

「え、本当にっ！？　てっきりわざとやってるのかとっ」

ふ、ふふ。

ふふふふふふ。

やってくれたねタケダ。これ以上ないほどの屈辱を与えてくれた。

見てろよ。

「ていうか皆、ノリすぎ」

「一番ノリのいい人が何言うのー」

ともかくリベンジだ！

## カカの天下８７１「タケダにがんばられた」（後書き）

がんばられた話の次はがんばる話です。
どうなるタケダ～

いやしかし照れさせるのは楽しい。もっとやろう。

# カカの天下872「カレーはカレー」

どうも、カカです。

「さ、カカちゃん」

私は今、インドちゃんにカレーの試食をお願いされています。

「これが私の新カレーです！」

カレーに関してだけは自信満々に響き渡る彼女の声。

そして出された、その新カレーとは……

「大根じゃん」

「カレーです」

「や、でも」

「カレーなんです」

インドちゃんは頑なに主張するけど、それはどう見ても大根だった。

「しかも、なんだか物凄い長さだし」

長すぎて端のほうまで見えないくらいだ。

「ちなみにこれは世界一長いです」

「世界一まできたかぁ」

「そう、世界一長いカレーです」

「あくまでカレーなんだ」

「そしてどこを切っても同じ模様」

「真っ白でわかんないだろうに」

「さぁ。このカレーを食べてみてください！」

そう言うとインドちゃんは大根を包丁で切り分け、皿に盛り付けてフォークと一緒に差し出してくれた。

ちなみに中身はやはり大根。カレーが入っているわけでもない。

「……これ、生で食べるの？」

「何言ってるんですか。カレーなんですから、ちゃんと火は通っています」

生の大根にしか見えないんだけど……ま、いっか。

「いただきます」

「めしあがれ！」

ぱくり。

「げ」

「どうですか」

「うんまっ」

やばいくらい美味い。しかもカレーだ。

どうしよう。

「そんな夢を見たんだ」

というわけで、サエちゃんとサユカンに話してみた。

「またよくわかんない夢見るわねっ！」

「サユカちゃんもこないだ、妙なものを食べる夢を見たって言ってたよねー」

「妙とはなによ！　トメさんの形したゼリーを食べる夢なんだからねっ」

誰がどう聞いても妙だ。

「何味だったの」

「ぶどう味」

なんてツッコめばいいんだろう。教えてトメ兄。

「とりあえずカレーが食べたかったんだねー、カカちゃんは」

「そうなのかなぁ」

「あ、噂をすればインドちゃんだよー」

サエちゃんの視線を追ってみれば、確かにインドちゃんがイチョウさんと二人でカレーを食べていた。ちなみにここは中学校で今は休み時間なんだけど……いいんだろうか。太るし。

「今日のカレーはなんですの？」

「これ」

「……え」

絶句するイチョウさん。なんとなく私たちも覗きに行ってみる。

するとあらフシギ。私が夢でみたカレーがあったのだ。かなり短いけど。

「これ、大根ですわよね？」

「大根だねー」

「大根にしか見えないわっ」

常識を語る皆さん。だがしかし。

「ううん、これはカレーだよ」

「そうだよね、インドちゃん。これはカレーだよね」

互いに頷く私たちの心は繋がっていた。

「うーん、カレーってどんな意味だったっけー？」

「奇遇ねサエすけ、わたしもそう思っていたところよ」

「辛いもの＝カレーという認識でいいのではないでしょうか」

この人たちは何を言ってるんだろう。

「カレーはカレーだよ」

「食べればわかる」

私たちの妙な気迫に押され、食べてみることになったサエちゃんサユカンイチョウサン。

ついでに私も一口いただく。

「うん、やっぱりカレーだ」

「うん、うまく出来てる」

頷く私とインドちゃん。

「……カレーの味だー」

「え、え、え!?　カレーよこれっ！　色も形も普通に大根で、カレー要素が一切見えないのにカレー味よこれっ!?」

驚愕する私の親友二人。

「さすがかのちゃん♪」

「ありがとういっちゃん♪」

そしてなぜかラブラブな二人。

というわけで。

世の中にはフシギなカレーがありましたとさ。めでたしめでたし。

「……ねぇ、サエすけ。これって何のお話だったの?」

「さー」

# カカの天下872「カレーはカレー」（後書き）

サブタイトルはダジャレじゃありません。主張しただけです。どんな形をしていようとそれがカレーである限りカレーなのだと。

ええそれだけです。ちなみにこれは友達が見た夢を元に書きました。なんか料理勝負をしていて、相手が出した料理が生の大根だったのですが、それが美味すぎた、という内容だったそうです。

そんな大根食べたい。

あ、そそ。話は変わりますけどサッカー、デンマークに勝っちゃいましたね。正直サッカーは興味なかったのですが、初戦に勝っちゃったので見るようになってしまったという……ああゲンキンなワタシ。

でもあんまりサッカー盛り上がって皆さんテレビにかじりつかれると、飲食業やってる身としてはお客が減って辛いんですが……笑

# カカの天下873「かわいい妹？」

……ふう。

あぁ、いきなりため息ですいません。トメです。いえね？　ちょっと思い出してたんですよ。昔を。

あれは何年前か……八年前くらいかな。あのころのカカは本当にちっちゃくてなぁ。おにーちゃんおにーちゃんと僕にひっついてたもんだ。あ、誤解しないでくださいよ。そんな時代もあったなぁって懐かしんでるだけです。

そうして懐かしんでいるのにもきっかけがあります。そのきっかけというのが……

「おにーちゃーん」

座って本を読んでいた僕の背中におんぶ状態でひっついてるカカ（12歳現在）なのです。

「……頭ん中だけタイムスリップでもしたか」

「どしたの、おにーちゃん」

「そっちこそどうした」

確かに僕ら兄妹は仲がいい。しかしここまでひっつかれる程のスキンシップはなかなか取らない。

「そういう気分のときもあるんだよ」

「どうした、なんか嫌なことでもあったのか」

「何かないとくっついちゃいけないの」

「もういい歳なんだから」

「あ、胸があたってドキっとしたとか？　やーん」

「そんなものはない」

「……ちょっと待てトメ兄。そんなものとは如何なるものを指しての言葉か」

それはドキッとした事実か、胸か、それとも両方か。

胸だな。

「なんだとぅ！？」

「うぇ？　口に出してたか僕」

「雰囲気でわかった」

さすが密着してるだけはあるな。普段より兄妹のシンクロ率が高い。

「ていうかさ、可愛い妹がくっついてるんだから嬉しいとかないわけ？　ていうか嬉しいんでしょ、ねぇ。照れてるだけだよね」

「僕って正直者だし」

「えー」

「乗っかられたとき、背中が結構痛かったし」

「えー」

「ぶっちゃけ重いし」

「えー」

「回されている腕でいつ絞められるか恐いし」

「えー」

「その腕先の服に汚れを見つけて洗濯したくなってきたし」

「えー」

「おまえ歯ちゃんと磨いてるか？　近いからかな、なんか口臭らしき」

「それ以上言うとぶん殴る」

「おまえなぁ、もう少し女らしくしろよ」

「なら女扱いしてよ！　重いだの臭いだの！」

「言ってないだろ！」

「言ってるようなもんじゃん！」

「ほんとだ！」

「とめにーのバカ！　たまにはイチャイチャしたいなぁって思った妹の気持ちがわかんないの！？」

「普通は妹がそんな気持ちになるなぞ思わんわ！」

「じゃあ思ってよ！　イチャイチャしたいの！」

「イチャ！」

「イチャ！」

「はい終わり」

「トメ兄ってそんなにボケ役だったっけ！？」

おお、ほんとだ。僕ってばボケてる。

「……無意識にならたまにボケれるんだよなぁ。意識的にボケるとヒドイ内容になるけど」

「とにかく」

「あーはいはい。よしよし」

手を背後に伸ばす。適当に手探りで……よし、頭めっけ。背中にひっつかれたまま頭を撫でてやる。

カカは不貞腐れた顔をしながらも、ぎゅっとさらにひっついてきた。

「ま、たまにはいっか」

「うん」

「今日は久々に一緒に寝るか？」

「うん」

「……なぁ、本当にどうしたんだ？」

「うん。こんなイチャイチャをサユカンが見たらどう思うかなーと思って」

「思って？」

「やってみたわけで」

ふと後ろを振り返る

なんか般若とか夜叉とかそんな感じの顔の女の子が立っていた。

手にはなぜか包丁。

「……なぁカカ。僕、おまえになんか悪いことしたか？」

「こないだ私のおせんべ食べた。だからひどいめにあえ」

「判定厳しいなオイ！？」

えっと、うん。

ひどいめにあった。

## カカの天下873「かわいい妹？」（後書き）

可愛い妹には裏がある。

んー。

や、裏がないのも書きたいな。

よし書こう。

## カカの天下８７４「世にもフシギな木ですから」

こんにちは、カカです。今日は七月七日、桜の木に短冊を吊るす日です。

え？　なんか違う？　この時期に桜なんか咲くわけがない？　いいえ、それが咲くのです。

「クララ、今年の春に咲き忘れてたので、どうせなら七夕にあわせることにしました！」

そう、桜のうっかり妖精に付き合って私たちも盛り上げてやろう！　というわけです。

そして夜。

「……うわ、本当に咲いてる。なんでだ」

事情を知らないトメ兄は困惑中。まぁ大人は妖精のことなんて知らないからね……適当に誤魔化しておこう。

「フシギだねぇ」

誤魔化し完了。

「それで、何を思ってこれに短冊を吊るそうと？」

「本人の希望」

「はぁ？」

なんでも願いを叶える笹さんたちが羨ましかったらしい。

「トメ兄は短冊ちゃんと書いてきた？」

「あぁ、一応」

「なんて書いたの？」

「物価が上がりませんように」

地味だ。

「もうちょっと夢のあること書こうよ」

「そういうカカはなんて書いたんだ」

「トメ兄がもっと愉快になりますように」

「大きなお世話だ」

「何を言っとるのだおまえは」

「うん、いつもお世話になってるからお返しに」

そんなことを話してるうちに皆が集まってきた。

「カカちゃん、トメお兄さん、こんばんはー」

まずはサカイ親子の登場。サラさんも一緒だ。途中で合流したのかな。

「あらー、本当に咲いてるわー。動画でネット投稿したらウケるかしらー？」

「相変わらずオタクちっくな考え方ですねぇサカイさん」

「あらあら、歳に似合わず乙女ちっくな考え方のお皿さんよりはいいと思いますけど」

「いい歳っていうならあなたに言われたくありませんねぇ」

「ふふん、わたしは早くに相手見つけたものー」

「わ、私だって相手くらい」

「あぁ、あっちの雑貨屋さんに良い皿売ってますよー」

「皿の相手じゃなくて！」

「あ、そっかー。皿に合うのはスプーンとかフォークですよねー」

「人間プリーズ！」

「スプーンって名前の人ならどこかにいますよきっとー」

この二人は相変わらず仲がいいんだか悪いんだか。多分いいんだと思うけど。

「あ、トメさんっ！　こんばんはっ！」

「おやサユカちゃん……なに、それ」

サユカンはものすっごく大きなモノを背負っていた。

「これですか？　短冊ですっ」

「これ……全部？」

「はいっ」

「ね、願いごと多いんだねぇ」

「トメさんのことしか書いてないです……えへ」

可愛い、その照れ笑いは可愛いんだけど行動自体はなんかこあい。

あれ全部叶ったらトメ兄は一体どうなってしまうんだろう。

「サエちゃんは短冊なんて書いたの？」

「ひみつー」

「わたしのはねっ」

「ごめんサユカン、なんか恐いからそれは聞きたくない」

で、さらにわらわらと集まってくる人々。

「キリヤ参上！」

「あーあー、恥ずかしいからやめなさいって」

「恥ずかしいといえばユカさん、短冊にはちゃんと二人の愛が上手くいくように書いてくれたのでしょうね？」

「んや、仕事のこと」

「奇遇ですね、私もです。もっと休みがほしい」

「私はもっと仕事がほしい」

大丈夫かこのカップル。

「あれ、タケダだ。呼んだっけ？」

「それはひどいぞカカ君！」

「サエちゃんが呼んだの？　余計なことを」

「えへー」

「ぬぬぬぬ……いいんだ俺はこの短冊の願いごとに全てを託す！」

「なんて書いたのー？」

「カカ君と」

「やだ」

「返事はやっ」

「いぇーい！　姉、さんっじょう！！　商店街の皆に短冊書いてもらってきたぞぃ！」

「お、お姉様……重いです……」

「情けない。シュー、短冊にはちゃんと腕力アップも書いたんだろうね？」

「はい」

書いたんだ。

「タマね、タマね、タマになるの」

「はっはっは、いい願いごとですな」

「ゆーたはなんて書いたの？」

「私は無論、ロリコン帝国を」

「こらそこ！　なぜ兄をさしおいて大きい人と仲良くなっている！？」

「ふむ？　貴様はタケダとかいったか。ならば一つ教授してやろう。男とは大きくて固いほど良いのだ」

「何の話だ！？」

私、子供だからよくわかんない。

「ほらほらカカっち、手伝っておくれよん」

「お姉」

「皆の願いを桜に吊るすのだ！」

「おっけ」

しばらくして。

そこに短冊だらけの、世にも奇妙な桜の木が完成した。

「はー、へんなのー」

「こらサエすけ、思っててても言っちゃダメッ」

「や、変だろこれ」

「ですよねトメさんっ」

「サユカンって……」

（クララ参上です！）

お？　クララちゃんの声だ。でも、声だけ？

（いまクララの桜はすごいことになってます！　この状態で人化したらすごい格好になってしまいます！　なので声だけで失礼します

！）

あ、そっか。クララちゃんの格好って桜の木がどんな姿で影響されるんだっけ。花が咲いてるときは綺麗なピンクの服だったり、夏は緑色だったり。じゃあ今の短冊だらけだったら……どうなるんだろ。見たい。

（とにかくクララ、ホッとしました。これで今年はちゃんと咲けました！）

うんうん良かったね、と頷く私とサエちゃんサユカン。そしたらトメ兄に変な顔された。私たちとお姉以外の人はクララちゃんの声が聞こえていないみたい。

（よぅし、それじゃ頑張って願いを叶えますよ！）

……へ？

（おりゃー！！）

なんだろう。

桜が一瞬、光ったような。

「あ、そっかぁ」

「どしたのお姉」

「桜の木って笹の木より力が強いんだよねぇ」

「力って、なんの」

「想いを叶えたり、そういう力」

「え、じゃ、願い事叶うの？」

「かも」

マジで！？　じゃ、じゃあ、えっと、とりあえず桜の木にあった願い事は、例えば……

「やぁサユカちゃん！　僕と一緒にお風呂で愉快なことをしないかい？」

「とりあえずトメ兄が変なことになったぁぁぁぁぁ！！」

「喜んでっ！」

「うわー喜ぶんだー」

「感心してる場合じゃないよサエちゃん！」

こ、このままでは。

なんか面白いことになってしまう！！

わくわく。

続く。

## カカの天下８７４「世にもフシギな木ですから」（後書き）

クララちゃんの暴走によって街は大変なことになってしまいました。詳しくはカカラジニュースにてお伝えいたします。

皆さんは短冊書きましたか？

私は書きました。四月に大怪我、五月におたふく風邪。そんな私の願いごとは……『もう何も起こりませんように』ええ本当に書きました。

## カカの天下８７５「第三十一回、カカラジ！」（前書き）

お知らせがあります。なんと……私、８７０話と８７３の更新を失敗してました！　ぶっちゃけ８７５話の更新も先週失敗してました！　原因はＰＣの調子が悪いせいです。全然気づきませんでした……というわけで、今回しっかり抜けてた話を更新したのでちょっと戻って読んでみてくださいね。ではではカカラジどぞ。

# カカの天下８７５「第三十一回、カカラジ！」

「こんにちは、香加です」

「留です」

作者です。

「突然ですがニュースの時間です。ただいま私たちの住むこの街で大変なことが起きています。なんと短冊に書いた願いが無差別に叶えられているというのです」

「とある公園の桜に吊るした願い限定、だけどな」

「はい、そんなわけで今回のもしもコーナーはおやすみです。桜の魔力が暴走しているなか、ヘタにもしも話をしようものなら……」

本当に叶えられてしまうかもしれない、と。

「恐ろしい！　特に僕なんか変なネタが多いからな。休止してくれて助かるよ」

「そんなわけで読みます。『青かご』さんからいただきました。『カカの天下８６２の　ノゥノゥぶっちょさん　で両想いでトメと部長がくっついたら」というもしもを」

「休止じゃないのかよ！」

「や、これだけは読んでおいてもいいかと」

「やめてくれよ頼むから！　しかもよりにもよってそんな内容！」

恋愛小説のような描写か……よし！

「やる気になるな作者！　殺る気になるぞ！」

ちぇ。

「というわけで、七夕騒ぎが終わるまでおあずけです。『青かご』さん、もう少し待っててね」

「一生待っててくださいね」

近々ちゃんと書きますからね。

「……書かれる前に部長を始末するしかないか」

物騒な話はさておき、とりあえず前置きを。この番組はネット小説『カカの天下』をわふーっとするため、最近のニュースと読者さんの投稿を交えながら、わふーするラジオ的お話です。ここの香加と留は本編の影響をあまり受けないはずなのでよろしく。

「影響を受けないなら部長のもしも話やっていいじゃん」

「どっちにしろそんなもんやりたくないわ！」

ちぇ、ＣＭ。

「なんでも願いが叶う桜の木！　これに短冊を吊るせばあらフシギ、本当に願いが叶っちゃうのよ！　『家がほしい』と願った人には頭上から家の材料が次々と降ってくるし、『お金がほしい』と願った人には一円玉が常に降ってきてるみたいです！　私ですか！　ええ、『痩せたい』と書きました。一秒につき1グラムずつ減っていってます。嬉しい、嬉しいんですけど、い、いつ止まるんでしょうねぇ？　最後には、どどどどうなるんでしょうねぇ！　恐い！　恐いよぉ！　というわけで私だけ不安なのは癪だからおまえらも何か書けー！！」

CMがあけて。

「『街のとある女性』から現在進行形のCMとしていただきました」

「……なんか、願いの叶え方がおかしくない？」

まぁほら、クララちゃん不器用だから。

「そーいやそーだね」

「姉が持ってきた短冊の数は百を超えてたしな。そんな大量の願いを相手の都合に合わせて叶えるなんてできないだろうさ」

「確かに。じゃあ他の願いごとをした人はどうなってるんだろう」

ちょっと覗いてみましょうか。現場の小枝さん？　――中継を繋げます。

『はいー、こちら現場の小枝ですー』

「小枝ちゃん！　街の様子はどう？」

『はいー、まず私は現在、商店街にいるのですけどー。大変なことになってますねー』

「例えば？」

『えっとー、まず『空を飛びたい』って書いた子供たちが三十人ほど飛行してますー』

なんでそんなに飛びたい人が多いんだ。

『他にはですねー、『お腹いっぱいになりたい』っていうおじさんが太ってますー』

「そういう意味にとったんだ」

「ていうか短冊に書く願いとしてそれはどうなんだ」

『あとは、『格好よくなりたい』って書いた人が怪獣に変身しましたー』

「あー『人として』とか書かないとこうなるわけだな」

『バカですねー』

容赦ないな小枝ちゃん。

『あとはですねー、『毛が生えてきますように』ってかいたハゲオヤジさんが、とある部分の毛が伸び続けて困ってますー』

とある部分ってどこ。

『そんなわけでー、私はその際限なく伸び続ける毛を切り続けることで商店街が毛に埋もれるのを防いでー、街を救ったってことで謝礼をもらいたいと思いますー。なのでそろそろ中継を終わりますー。失礼しましたー』

あら、勝手に中継切れた。

「本当にすごいことになってるみたいだな」

「皆が変な願いごとばっかり書くからだよ」

「や、わりと普通の願いも多かったような」

恐るべしはクララちゃんの曲解力、というわけですな。

「こんなことで本編の方は大丈夫なのかな」

「大丈夫じゃないだろう。特に僕」

「いろんなこと書かれてたもんねぇ」

ではちょっとその辺の様子も中継で聞いてみましょう。現場の沙由歌ちゃん?

『きゃあああああああああああああっ！』

いきなり響いたのは嬉しそうな悲鳴！　……嬉しそう？

『と、トメさんがとんでもないことにっ』

『きゃあああああああああああああああっ！！』

ちなみに二回目の悲鳴はおそらく本編の『サユカちゃん』の悲鳴だ。しかもやっぱり嬉しそう。

「なんかすごいらしいよ、留兄」

「見たくない」

ではその辺は次の話に持ち越すとして……いま連絡が入りました。突然ですが困ったことに。

「どしたの作者」

とある場所に保管していた『危ないメッセージ』がなくなってまして。

「危ない、ってどんな？」

カカは俺の嫁、サエちゃんは俺の嫁、等というメッセージがわんさか。

「兄としてはムッとせざるをえない内容だが……それが無くなったからどうだってんだ」

どうやらカツコさんが持ってって、あの桜の木に吊るしたみたいです。

「待たんかい！！　カツコって本編のキャラだろ！？　この世界とは違う世界の住人なんだろ！？　なんでそんなことが」

まぁカツコさんですし。

「お姉だしね」

「納得できてしまうから嫌だ……や、この際は姉のことなんざどうでもいい」

まぁカツコさんですし。

「お姉だしね」

「そうだ、そんなことより！　その危ないメッセージはどうなるんだ！？　まさか叶えられるわけじゃないだろうな！？」

「いやん、留兄ったら必死」

「当たり前だ！！」

まぁ落ち着きなさい。同じようなメッセージが多すぎますので、カカやサエちゃんが分裂でもしない限り全部叶うことはありません。叶うとすれば一人ずつだけ。

「誰かは叶ってしまうのか！？」

それなんですけど……現場の括弧さん？

『あい、括弧でーす。や、大変なことになっちった』

「うぉい！　事の元凶が何をいけしゃあしゃあと！！」

『そう言うなよぉ弟君。あれは本編のあたしが異次元を超えて勝手にやっちゃったんだよ』

「だから、なんでそんなことができるんだ！？」

『まぁ、あたしだし』

「くそぅ、どいつもこいつも」

まぁまぁ。とりあえずあっちの状況を説明してもらおうじゃありませんか。

「……ねぇ作者。あっちっていうけど、お姉はどこにいるの？」

ヤホーオークションのサイト管理場所です。

「やほー？」

はい、やほーって挨拶しながら入ることが原則で、あとは自由にオークションをするサイトです。

「ツッコんでいいか？」

ダメです。

「残念だ」

はい、そんなわけでそのオークションで出品されているのはカカ、サエ、サユカ、カツオの名義で書かれた婚姻届――つまり『俺の嫁』と書かれたキャラとの結婚ができる準備が整えられているのです！

「最後の誰だ」

間違えました、カツコです。

「この世界にはすごいモノ好きがいるんだねぇ」

他にも女性メンバーはほぼ全員、婚姻届が出品されています。

「男はいないのか」

や、トメとキリヤも『私の嫁』メッセージがそこそこ沢山ありましたので。

「うわー嬉しくねー」

というわけで読者の皆さんに質問！　カカ天メンバーの中で誰かを嫁にできるとするならば、その婚姻届にいくら出せる！？

「うわぁなんか無茶な企画キター」

んー、婚姻届となると語弊がありますな。よしこうしよう。カカたちを誰か、傍に置けるとしたらいくら出せますか？

「なんだかお金で取引されるって変な気分」

「まぁまぁ、久々の読者参加企画なんだし。相変わらず作者の思いつきだけど、なんだか面白そうじゃないか」

もちろんトメとかもアリです。

「あははー、そうだと思ったー畜生」

はい、読者の皆さんにはカカ天メンバーの中からまず一人、選んでもらいます。そしてその人を自分の傍に置けるならいくら出せるか教えてください。あくまでリアルに自分がいくら出せるかです。借金もアリです。ただし今後の生活もしっかり見据えて！

「なんて生々しい企画だ」

ふ、カカ天はなんでもアリなのです。

そんなわけで皆様、どしどしオークションにご参加ください。いつものように感想欄でもメッセージ欄でもオッケーです。そして必ずその額にした理由を書いてください。面白いものは次回のカカラジで紹介します。

ただ、最近の傾向として皆様わかってると思いますが……ぶっちゃけリアルの仕事がキッツイので感想欄に返信している余裕がありません。質問にはなるべく答えるようにはしたいと思いますが、全ての返信はご勘弁ください。そうですね、本編のあとがきで答えるようにしたいと思います。せっかく書いてくださっていて、前までは全て返信していた手前、申し訳なく思いますが……どうかご理解

お願い致します。

「私個人としては微妙な気分、だけど興味はあるなぁ」

でしょう。ま、次の話を更新するまでにいただいたメッセージ等は本編にも影響させるつもりですのでよろしくお願いします。

「なんか騒動がいきなり企画の話になったが……香加の嫁入りなんか認めないぞ僕は！」

はいＣＭ。

「おい！」

「皆様、お待たせいたしました。本日紹介する商品はこちら、婚姻届！　～は俺の嫁、と気安く口にできるこの世の中、ならば実際いくら出せるのか？　さぁさぁ皆様、自身に問いかけましょう。そして財布と相談しましょう。私たちが求めるのは真実のデータ！　恥ずかしいそこのあなたも、面倒くさがりのそこのあなたも、本気で悩むそこのあなたも！　どうかご協力を。それはきっとあなたのためになる。具体的に？　そうですね……うん、ネットと自分の関係の深さがわかりますよ、きっと。それはあなたの将来性とか色々考える材料になりますよ、きっと。そんなわけでこの企画、投稿よろしくね♪」

ＣＭがあけて。今のはヤホーオークション様からいただきました。

「つまりは企画の宣伝なわけね」

「今回のカカラジは……なんだったんだ」

まぁ突発ニュースということでいつもとは違った感じになりましたね。さてここで今回は全くできませんでしたがコーナーのおさらい！

普通の質問受け付けます。ふつおたコーナー。

なんでも思いついたらどうぞ、自由枠コーナー。

どんな宣伝でも面白ければＯＫ！　ＣＭコーナー

ファンキーな脅迫状待ってます、脅迫状コーナー。

もしもな寸劇、見てみませんか？　もしもコーナー。

カカ天メンバーを誰か一人、傍に置けるならいくら出す？　オークションコーナー。出せる値段をできる限りリアルに考えて、その値にした理由と一緒に送ってください。

「しかし桜の魔力かぁ……カカラジも変わったもんだ」

あい、ファンタジー要素を出した後はしばらく普通の話が続くのでご安心を。

「ああ、僕の分身もえらいことになってるみたいだし、しばらく平穏がほしいよ」

しばらくでいいんだ。

「……長続きしないのは諦めてる」

なるほど。

「さて、チョップの時間だ」

香加、やる気満々だね。

「ま、相手が決まってるしね」

「あぁ、今回は僕も異論はない、というか大歓迎だ」

どう考えてもあの人ですよねぇ。

『というわけで――本編のカツコにカカラジチョーップ！！』

このチョップは……きっと次回に届く。

この番組はヤホーの提供でお送りしました。ヤホー。

## カカの天下８７５「第三十一回、カカラジ！」（後書き）

ただでさえ一週間ずつの連載なのに更新ミスをしてしまい、申し訳ありませんでした。次の話は読者さんの投稿も反映させようと思ってますので、来週載せます。皆さんの愉快な投稿、待ってます！

# カカの天下876「乱れ七夕桜」

こんにちは、カカです。突然ですがあらすじみたいなものをば。

七夕になぜか咲いてしまったクララちゃんの桜。皆はノリでそれに短冊を吊るしまくったんだけどあらフシギ、その願いごとが叶い始めてしまったのでした。しかしそこはやはりクララちゃん、お願い事の意味がよくわかっていないようです。

例えば『もっと寝たい』と願いを書いた人はそのまま路上で気絶。

例えば『幸せになりたい』と願いを書いた人もそのまま路上で気絶。きっと夢の中では幸せ。

例えば『料理が上手くなりたい』と願いを書いた人には『がんばれ』という手紙が届いたり。

例えば『彼女がほしい』と願いを書いた人には『ラブ〇ラス』が届いたり。

例えば『給料をあげて』と願いを書いた人には揚げたての給料袋が食卓に並んだり。

例えば『もきゃー！！』と願いを書いた人は『もきゃー！！』っていう鳴き声っぽい生き物に変身したり。まぁ本当に変身するわけではなく、脱げない着ぐるみをいつの間にか着ていたりするんだけど。

こんな感じに、無差別に思いつくまま叶えようとしまくった、み

たいになっているのです。

さて、身近な人がどうなったかも紹介しましょう。

「さぁタケダ君、たーんと召し上がれ！」

どこからともなく現れたインドちゃんは幸せそうな顔でタケダにカレーを食べさせ続ける。

「もぐ！　んぐ！？　んぐぐ、もぐ、あの、俺の願いは」

それは無視。

「ほらほら、食べて食べて。まだまだあるよ」

「むぐもぐめぐまぐ！？」

早くなんとかしないと腹が破裂して死にます。どうでもいいけど。

続きまして、少し場所を飛ばしてセイジ食堂とファミレス東治。

「なんだこりゃ！？　もう閉店間際だってのに店が繁盛しすぎだ！」

「店長！　もう材料ありません！」

「なんとかして調達してこい！　こんな稼ぎ時は滅多にねぇぜ！」

ここは大変そうだけど幸せそうみたいだね。

次は……学校。え、校長？

「おほほ、邪魔をなさるのね、教頭」

「チェーンソー片手に学校を徘徊する校長を黙ってみていろと？」

「おほほほほ、七夕に『もっと暴れたい』とか書いたからかしら。胸に秘めた熱い思いが止められなくなったのよ！」

「止めなさい、大人なんだから」

「ちなみに教頭はなんて書いたのですか？」

「いえ、特には。ただまぁ、世界が平和であればいいなぁとは思ってますがね」

「おほほ、ならばわたくしを止めるのは道理ですね」

かくして、校長『もっと暴れたい』　ＶＳ　教頭『特になし』が始まる。

こっちも早くしないとどっちか死ぬかな？

……さて、平和な展開になった人もいます。

例えばユカさん、『仕事が増えますように』と書いたんだけど、彼女の仕事は小説家。仕事が増える＝書くネタがなければいけない。そのネタさえ降ってくれれば……ユカさんはそう思ってたみたい。

そんなわけで、ユカさんの上から今ネタが際限なく降ってます。

寿司の。

「うーん、面白いといえば面白い光景だけど、インスピレーションはわかないわね」

そっちのネタはいまいちらしい。

「とりあえず食べよ。はむ……あー美味しい。ご飯はないかな」

まぁ呑気ですな。

あと、タマちゃんは『たまになる』とかいうわけのわからない願いを書いていたのですが、文字通り玉になってしまいました。

「ころころー」

呑気に転がってますが、人間がボールになるのは明らかに異常事態。はやくなんとかしないと。可愛いけど。

サカイさんは急に電話がかかってきて、どっかに行った。どんな欲望が叶えられたのか少し恐いけど気になる。

姉にはなぜか効かない。

「お、俺の願いは」

くどい、タケダの願いもなぜか叶わない。

「え、ちょ、なんですかこれ！？」

そして一番むごいと思われるのがサラさん。

彼女はお花屋さんの看板娘。そのおっぱいに惹かれていたお客さんの数は尋常じゃない。短冊に書かれた『サラさんのおっぱいであれやこれや』と書いた男の多いこと多いこと。

『うおおおおおお！！　おぱーい！』

自身の滾る劣情を抑えきれず叫ぶ男たち。

しかしサラさんの書いた願いは『優しい彼氏ができますように』だ。この阿呆どもの中にそんなものがいるわけない。

そんなわけで、まるで磁石が反発しあうように逃げまくるサラさんと追いかける男ども、という構図が完成し――

「こ、こら変態ども、逮捕だー！」

『たくさんの犯罪者を逮捕できるようになりたい』と『力持ちになりたい』と書いた短冊の裏に書いていたシュー君がさらにそれを追いかけるという、なんとも騒がしい構図も完成してしまったのだった。互いに願いを叶えようとしてるんだから、多分一生続く鬼ごっこだと思う。

「ま、いろいろと大変になったね」

「カカちゃん、どこに向かって喋ってるの？」

「や、ちょっと現実逃避を」

現実逃避したくもなる。目をそむけたくなるってもんですよ。

「トメさんっ！」

「サユカちゃん、抱っこしてほしいのかい！？」

「トメさんっ！」

「サユカちゃん、チューしてあげよっか」

「トメさんっ！？」

「サユカちゃん……おいで」

「はい……きゃあああああああああああっ！　密着ぅっ！！　だ、抱きしめられて、そ、そそそそして、チューを」

「サユカちゃん、手を繋ごうか」

「抱きしめられてから手を繋ぐって順番違うけど幸せぇ！」

「サユカちゃん、釣りに行こう。まずは道具の調達だ！」

「え、ちょ、あぁぁ密着がぁ！　離れてくぅっ」

「サユカちゃん、やっぱりバーベキューしようか」

サユカちゃんが書いた短冊にはトメ兄とあれこれしたいという内容が欲望のままに書かれていた。書かれすぎてトメ兄本人が混乱していて何を喋ってるのかわからなくなっている。

「きゃーっ、トメさんったら腕を組むなんて大胆っ！　でもなんか腕を組みつつ肉を焼く準備をしてるとまるでわたしが焼かれるみたい！　獲物を逃がさないように捕まえてるみたいっ！？　きゃーっ！　嬉しいっ！」

サユカちゃんも程よく混乱している。

「トメおにーさん」

「サエちゃん、ぷっぷくぷー」

ちなみにサエちゃんは『トメお兄さんがおもしろくなりますように』と書いた。だからサエちゃんが声をかけると面白くなる、というか妙な言葉で返す。

「トメおにーさん」

「サエちゃん、ホーホケキョ」

「トメおにーさん」

「サエちゃん、びびでばびでぶーぶーアルファ。俺の鼻は象の鼻」

「あははー、トメお兄さんおもしろーい」

たしかに妙な言葉と共に顔も愉快な形になるから面白いといえば面白い。

……え、私？

んとね。

「トメ兄」

「カカ、怪我はないかい？」

「あるわけないじゃん」

「カカ、心の傷はないかい？」

「いきなり重い」

「カカ、もっとお兄ちゃんの近くにおいで」

「うざい」

とまぁ、『トメ兄がもっと優しくなりますように』って書いたら気持ち悪いほど優しくなったわけで。え、『愉快になりますように』って書いたんじゃなかったかって？　や、それはまぁ……照れ隠しですよ、うん。

「トメ兄」

「トメおにーさん」

「トメさんっ！」

試しに三人いっぺんに呼んでみると。

「僕とエッチなペケポーンで心配はないかい？」

この人ヤヴァイ。

「僕と一緒に裸になってサーロインステーキを食べようよ、大丈夫かい？」

おまえが大丈夫か。

『ああ、大変です！』

「どうしたのクララちゃん。もう充分すぎるほど大変なんだけど」

主にトメ兄が。

『あ、あのですね？　短冊の中に、カカやサユカやおねーちゃんのことが結構書いてあってですね？』

「私たちのことがー？　なんてー？」

『主に一緒にいたい、仲良くなりたいとかいう内容です！　それでですね！　それを叶えようとする人たちが我よ我よとこちらに向かってます！　お金をもって！」

なんでお金？

そう疑問に思った直後、どどどど……と激しい足音が。

「カカちゃんと一緒に過ごす権利は俺のものだぁ！　有り金全部出

してやる！　三百円！」

「いいや、俺のもんだ！　貯金なんざクソくらえ！　五百円！」

「く、じゃあ五百と一円！」

「さ、さ、さ、サエちゃあああああん！　三十二万円出すから僕の元に！」

「俺は五十二万円だ！」

「サユカちゃん、八十八万円あげるから幸せになるために使って！」

どうやら願いを叶える権利をお金で競り合っているらしい。それにしても私だけ額に差がありすぎるような気がするんだけど気のせいだろうか。

「待て待て待てっ！」

そんな団体に立ちはだかるトメ兄。

「エッチな妹達は僕が守る！」

「待て待て待て」

トメ兄おかしくなりすぎ。なんか取り返しのつかないセリフを吐いてる。

「ああ、トメさんっ！」

「もっとやれー」

「サエすけ！？　あんたなんてことを」

「もっとしてもらいたいでしょ？　サユカちゃん。色々と」

「うへへ」

こいつらもダメだ。

「いい加減やばいよねぇ……なんとかしないと」

私もドタバタは好きだけど、こういう節操ない兄を見てるのは正直イライラする。

「あ、お姉！」

「んあ、呼んだ？」

いつのまにいたのやら、呼んだ瞬間に隣へ現れる正体不明の女。

「ねぇ、なんとかしてよ！」

「んー。愉快な展開だったから傍観してたけど、さすがに潮時か。ま、妹ちゃんの頼みだしね、了解」

「え、そんな簡単になんとかできるの？」

お姉はスタスタとクララちゃんの桜の木に歩み寄り。

ドスン、と一発。蹴りをかました。

桜の花が全部散った。

「……あれ、僕は何をしてたんだ」

するとあらフシギ、皆が元に戻ってしまった。

「うあ。本当にあっさりと治っちゃった」

「ま、七夕の夢としてみんな程よく忘れるだろさね」

「クララちゃんは大丈夫なの？」

『あうー、クララ頭がパンパンですー』

よかった、あまりに見事に花が散ったから死んだかと思った。

「無茶するからこういうことになんのさ」

『元はといえばカツコさんが願いごとをかけまくるから！』

「本気で叶えようとするなんて思わなかったのよ。こういうもんはね、叶えてもらうもんじゃないの。叶えたいって気持ちを言葉にするっていうのが大事なの」

「上手くまとめたものの、お姉は面白がってしばらく見物してたんだよね色々と」

「ふはははは！　カカちゃんも酒飲む？」

「飲むわけないでしょ」

あ、トメ兄がぶっ倒れてる。サユカちゃんとサエちゃんが介抱してる。どしたんだろ、トメ兄も願いごとを実行しすぎて頭パンパンになっちゃったのかな。

「そういえばお姉の願い事は？」

「おもろいやつらを肴に美味い酒が飲めますように」

もしかして今回の元凶は、全部コイツじゃなかろうか。

# カカの天下８７６「乱れ七夕桜」（後書き）

空を飛んでいた人は桜が散った瞬間、全員落下したのだろうか…
…いやいや、その辺はうまいことなるよね？笑

どうも、お久しぶりです。前回からめっちゃ間が空いてしまいました。仕事と暑さに加えて異動決定のストレスやらで身体がやられ……書く余裕がなかったというのが正直な理由です。今は身体も回復しましたし、お盆と異動でバタバタするものの、カカたちの夏を書かずに終わるのは作者の名が廃る！　もう結構廃ってきてる気もするけど！

夏休みの宿題を後半に（ヘタすれば最終日に）終わらせる勢いで書いてやるつもりなのでお楽しみに。その名の通り更新日もその辺になるかもだけど。

# カカの天下877「暑さゆえの過ち」

こんにちは、トメです。今年の夏はすごいですね。何がすごいかって？　いやもぅ皆様お分かりの通り。

暑すぎる。

「ぐったりー」

そんなわけで妹は今で寝そべりながら、力が全く入っていない手足を無造作に放り出しています。言葉の通りぐったりポーズなのでした。

「ぐったりー」

かく言う僕も同じポーズなんだけどね。

「とめにぃ、マネしないでよ」

「仕方ないだろ、僕だって暑くて身体が動かないんだから」

「そか、そりゃぐったりの音も出るよね」

なんだ、ぐったりの音って……あぁ、ぐったりーって言ったあれか。

「カラカラカラ」

「喉が渇いた音か？」

「トメさん正解」

「やったね。正解者にご褒美くれよ」

「うむ、冷蔵庫からジュースを取ってくる権利を与えよう」

「いやおまえが取ってこいよ」

「トメ兄にもジュースあげるからさ」

「この家にある飲食類は全て僕のお金で買ったもののはずだ。おまえにそんな偉そうなことを言われる筋合いはない」

「えらえらえら」

「偉い音か」

「うむ、私は偉い」

「うん、今日はえらく暑いな」

「えらいねぇ、あついねぇ」

グダグダだ。所詮ぐったりしているときの会話なんてこんなもんである。

「がんがんがん」

「今度は何の音だ」

「や、なんかガンガンうるさくない？　外で工事でもしてるのかな」

「そういや僕も聞こえる」

でもなんでだろう？　外からっていうよりは……

「ていうか頭痛くない？　トメ兄」

「……痛い」

あれ、もしかしてこの音……頭痛の音？

「なぁなぁカカさんや、もしやこれは」

「うむ、トメさんや。世に言う熱中症というやつではなかろうか」

水分だ、水分を取らなければ！

「……！　げ、やばい」

「何してるのトメ兄、はやく命の水もってきてよ」

「身体が動かん。いやマジで」

「そこをなんとか頑張ってよ！」

「おまえが行けよ！」

「私はさっきから手足に力が入らないんだよ！　だからジュース取

ってきてって言ったんじゃん！」

「その時点で末期だったか！！」

やばい、これはヤバイ。熱中症で死人が出ることもあるご時世でこの状況はやばい。

「で、電話だ。電話で助けを求めよう」

幸い携帯はそばにある！

「わかった、愛しのサエちゃんにかけるね」

「おお、家もそんなに遠くないし、妥当な人選だ」

とりあえず水さえ飲ませてくれるなら誰でもいい！

「……あ、もしもしサエちゃん？」

『カカちゃんだー』

電話越しからサエちゃんの間延びした声が僕の耳にも聞こえてきた。

「あのね、今ちょっと助けてほしいんだけど」

『ちょっと待ってねー。ちゅー』

「サエちゃん！？　もしかしてチューしてる！？」

んなわけなかろう。

『違うよー、美味しいジュースを飲んでるんだよー』

「ふざけるな！！」

カカは携帯をぶん投げた。

「……おい、身体動かないんじゃなかったのか」

「あぅぅ、私はサエちゃんになんてことを。乾きまくった口と身体が嫉妬して勝手に……恐るべき熱中症」

愛しのサエちゃんは何を思っただろうか。

「や、とりあえずそれは置いとこう。僕らの水分問題が何より先決だ」

「そ、そうだね」

カカの携帯は手の届かないところでバラバラになってしまっているが、幸い僕の携帯が手元にある。

「あ、もしもしサユカちゃん？」

とりあえず助けを求めるのがこの子、というのが情けない気はするが、なんかピンチと聞いたらありえない速さ駆けつけてくれそうだからかけてみた。

『ひほへはん！　はふへひょーは！』

「何語だ」

『んっぐん！　ごめんなさいトメさん、アイスがつべたくてっ！』

「くたばれ！！」

叩きつけるように電話を切った。

「……は！？」

「気持ちはわかる、わかるよトメ兄」

あろうことか僕は、サユカちゃんに殺意を……

「恐ろしい、恐ろしいぞ熱中症。こうして人の心も壊していくのか」

「とめにぃ……そろそろヤバイ」

「あぁ、僕も。頭がぐらんぐらんしてきた」

これが最後の電話だ。

「こうなったら姉だ、姉に頼もう」

「なんでもいい……」

姉にコール……繋がった！

『もしも――』

「死んでしまえ！！」

携帯を投げつけた。

「しまったぁ！　なんか声聞いた瞬間ムカついてしまったぁぁ！」

「とめ、にぃの、ば、か……がく」

あぁ、何も、見えなくなって――

「なぁぁぁんだとぉぉぉぉぉ！？」

最後に、なんか聞こえた。

この後、いきなり死んでしまえ呼ばわりされた姉と、突然罵倒されたサエちゃんサユカちゃんが来てくれたおかげで僕らは一命を取り留めた。

事態が事態だったので三人とも許してくれたけど……本当に危なかった。皆も熱中症には気をつけよう。

## カカの天下877「暑さゆえの過ち」（後書き）

お待たせいたしました。
夏休みの宿題を発表します。久々にどれだけ連続更新できるかご覧あれ！

にしてもあっついねー。異動して移動販売車動かすことになったんですがこの暑さで車内で揚げ物とか地獄です。水分補給を怠った瞬間カカたちのようになりそうです。皆さんも気をつけてね！

# カカの天下878「そうです！」

こんにちは、サエですー。

「暑いですね、タマ」

「暑いでしゅね、クララ」

「暑いねー二人とも」

今日はこんな三人で我が家に集まっています。なぜかというとクーラーがあるから。あー、うん、暑いのは外であって、中にいる私たちは暑くなかったりします。今暑いところにいる皆、ごめんねー。

「みんな、ちゃんと水分とるんだよー。じゃないと死んじゃったりするんだからねー」

先日のトメお兄さんとカカちゃんはひどかった。水分補給した後も丸一日動けなくて、私はもう心配で心配でここぞとばかりに恩を売りまくったよー。

「え！　あ、暑いだけで人が死ぬのですか！？」

「そうだよー。植物だって水分がないと枯れるでしょー。この暑さだもん、油断して死んじゃう人だっているよー」

「本当ですか！？　いやクララもちろん知ってましたけど、本当ですか！？」

知らなかったくせにー。強がりクララちゃんだねー。

「わかったでしゅ、人も水分がなくなって枯れてしまうのでしゅ！」

「よく知ってますねタマ！　そうです！」

「水をかければ元通りでしゅ！」

「そうです！」

「違うよー、人体はそんな便利じゃないよー」

それで済む話なら平和なんだけどねー。

「わかったでしゅ！　暑さでいきなり燃え出すんでしゅ！」

「そうです！」

「水をかければ火が消えて元通りでしゅ」

「そうです！」

「違うよー。しかも燃えた部分は帰ってこないよー」

そもそも燃えないけどねー。

「わかったでしゅ、体中の水分がふっとーして死ぬでしゅ！」

「そうです！」

「水をかければ元通りでしゅ」

「そうです！」

「こわいよー、さすがに沸騰するまでは暑くならないよー」

それにしてもタマちゃん、意外と難しい言葉知ってるねー。

「わかったでしゅ！　暑いのにアイスが食べれなくていじけて自殺するでしゅ！」

「そうです！」

そんな理由で死ぬ人がいっぱいいる世界ってすごく嫌だなー。

「水をかければ元通りでしゅ」

それにしてもタマちゃんてば何としても水で元通りにしたいみたいだねー。

「そうです！」

そしてクララちゃんはなんで全部こんなに力強く頷くんだろー？

「いい、二人とも。人間っていうのはねー？」

「ほとんどが水で出来ているんですよね！　クララ知ってます！」

「タマも知ってましたでしゅ。えへん」

「だからと言って水をかければ全部解決っていうわけじゃなくて」
「今のタマは水をくれれば全部解決でしゅ」
あ、タマちゃんお水飲みたかっただけなんだね。
――数時間後。帰り道にて。
「見てくださいタマ！　あんなところにタケダが倒れています！」
「本当でしゅ、タケダでしゅ。ざまーみろでしゅ」
「クララ！　いくらなんでもそれはひどいです！」
「タケダが妙なことになったらとりあえずそう言えってカツコさんが言ってましたでしゅ」
「ならいいです！」
「タケダざまーみろー」
「よくないです！！」
「え？　ダメでしゅか」
「そんな悪口は人としてダメです！　カツコ魔王様の言うことなので即頷いてしまいましたが、ダメなものはダメです！　タケダが可哀想です！　カツコ魔王様には後で注意しにいきます！　魔王は恐

いですけど！」

「クララがそう言うならタマ了解でしゅ」

「よかった、クララ安心です。ところでタケダはタマのお兄さんではありませんでしたか？　お兄ちゃんとか呼ばないのですか」

「タケダのほうが呼びやすいでしゅ」

「そですね」

「う……うぅ……誰か……」

「タケダはぐったりしてますね」

「ねっちゅーしょーというやつでしゅか」

「み、みず……」

「おぉ、水をかければ元通りでしゅね！」

「それは違うんです！」

「そうだったでしゅ！」

「な、なにを……」

「クララ知ってます、それは違うんです！　水をかけても人は元通りにはならないのです！」

「そうでしゅ！　さっき勉強したでしゅ」

「い、いや、みず」

「だからそれは違うんですってば！」

「わからない人でしゅ」

「いきましょう、タマ」

「はいでしゅ」

「あ、あの……ちょ」

完！

「い、いやその、マジで死にそ――」

完！！

「はぁ……はぁ……うぅぅぅ」

タケダの涙が雨となり、彼の命は救われたのでした。

完！！

「なんか良い感じにまとめたけど俺の扱いのひどさは変わってないよな！？　な！？」

「ままー、あの人誰と喋ってるのー？」

「こら、見ちゃいけません！　きっと熱中症のせいで見えない人が見えているのよ」

「そこまでわかってるなら助けてくれよ通りすがりの人！！」

今度こそ完！！

## カカの天下８７８「そうです！」（後書き）

熱中症続出。いやマジで暑いですってこの夏。

何が元通りになるかわかんないけどとりあえず水をかぶりたい！

# カカの天下８７９「酒ＶＳ皿」

「暑いわねー」

「暑いですねぇ」

こんにちは、サラです。

ただいま日中、今日も今日とて太陽さんが頑張っててすごく暑いです。そんな中、買い物しているときにたまたま出会ったサカイさんと二人で喫茶店に涼みに来ています。

「私たちがこんなに気持ちが通じあうなんて、珍しいですよねぇ」

「本当だねー」

コーヒーを飲みながら頷きあう私たち。この暑さなら誰でも意気投合できるだろうけど。

「食欲もなくなるし」

「そうそー。体重も……ねー」

「そうですそうです！」

「本当にどうしたんだろー、こんなに意見が合うなんてねー」

「本当ですね、体重の話なんか特に！」

「そーそーそー！」

私たちがこんなに仲良くできたのは初めてかもしれない。

「なんでこんなに太ったんだろぅ」

「なんでこんなに痩せたんだろー」

一瞬で仲は終わりましたが。

「……痩せた？」

「……なにか？」

開戦！　やせた人　ＶＳ　太った人！

「パンチ！」

「キック！」

「店内で暴れるのはご遠慮ください」

ダブルノックアウト！！

「……なんで痩せたんですか」

「……そっちこそー。食欲なくなったくせに、なんで太ったんですかー」

「いや、その、食欲ない分、小さい間食が増えちゃって」

「なるほどー、バカですねー」

「む！　そっちはどうなんですか！？」

「わたしは飲まず食わずですね」

「健康に悪いですよ！　身体は大丈夫ですか！？」

「あ、そこは心配してくれるんだ」

「当たり前です！」

いくら仲が悪いからと言って、相手がどうでもいいわけじゃありません！

「ていうかー、健康的にはサラちゃんの方こそどうなのよー」

「う……暑くてだるくて食っちゃ寝してるから人のことは言えなかったり」

「ダメだねー。わたしなんか飲まず食わず眠らずでゲームしてるよー」

「ダメ人間にも程があります！！」

「なにをー！」

眠らない女　ＶＳ　寝てばかりの女！

「パンチ！」

「キック！」

「迷惑料いただきますよ」

「ごめんなさい！！」

お店の人には敵わない、ていうかごめんなさい。

「……いいもん、胸も大きくなったし」

「脂肪のプヨプヨバンザイですねー」

「プヨプヨとか言うな！　男の人はそのプヨプヨが大好きなんだから！」

「彼氏がいない人に言われてもー」

「うるさいです、廃人！」

「なんですかオッパイ星人略してパイ人」

はい　ＶＳ　パイ！

「パンツ！」

「ブラジャー！」

「何言ってるんですかお客様」

「ごめんなさい」

「もうしません」

なんか勢いで言ってしまった。すごく恥ずかしい。二人して反省。

「とりあえず、穏便に勝負をつける必要がありますね」

「ですねー。このままじゃ収まりつきません」

「こういうときは都合よく近くにいる人を捕まえるに限りますね」

「そうですねー。というわけでトメさん、よろしくー」

実はさっきから気づいていたり。たまたま別の席に座っていたトメさんに。

「まぁ、あんだけ大声で喋ってたから話の内容はわかるけど」

「サユカちゃんとのデート中にすみませんねー」

「デートじゃない。こないだ失礼なことを言っちゃったからお詫びに奢ってるだけ」

今はお手洗いに行ってるみたいだけど……むぅ、サユカちゃんてば順調にトメさんと仲良くなってるなぁ。羨ましい。しばらく大人しくしてたけど、私も頑張るかなぁ。

「とにかくわたし達の会話を聞いてたなら話は早いですー」

「そうです！　私とサカイさん、どっちの勝ちだと思いますか！？」

「とりあえず二人とも、もっとシャキッとしなよ」

「「ですよねー」」

とりあえず痩せよう、うん。

## カカの天下８７９「酒ＶＳ皿」（後書き）

こんだけ暑いと体重も変動しますよね～
私はもちろん痩せましたが。えっへん。しかし体重と一緒に体力も落ちてそう・・・・・気をつけねば。

# カカの天下８８０「サユカの任務、勝負服編」

「どうしよう」

どうも、困ってるサユカです。

「どうしようカカすけ」

「なにがさ」

そしてわたしの目の前にいるのは、その困った事情を理解してくれない友人です。でもわたしには友人が少ないので、仕方なく問いかけます。

「トメさんにデートに誘われちゃった！」

「そら『くたばれ』とか言っちゃったらお詫びしようって気にもなるさね」

「何を着てこう！？」

「服でしょ」

「どんな！？」

「エロい」

「なんで！？」

「や、むしろなんで私が怒られてるのかわかんない」

だって真面目に相談に乗ってくれないんだものっ。

「とりあえず、うすぎになりたい」

「うなぎになりたい？」

「どんな耳してんのよっ」

「こんな耳だにょろ」

「それ、うなぎになったつもり？」

「そうだにょろ」

「まぁいいにょろ」

話を聞いてくれただけマシだわっ。

「そんなわけで、どんな格好でデートに行けばいいと思う？」

「全裸」

「ふざけんなにょろっ！！」

「にょろとか言ってる人にふざけんなとか言われても」

確かにそうだわっ！

「もういい、カカすけに聞いたわたしがバカだった」

「やーいバーカ。バユカちゃんって呼んでいい？」

「ニョローッ！！」

カカすけにもう相談なんてしないんだからっ。

そんなわけで数少ない友人パート2、サエすけのところにやってきたのだった。

「どんな格好して会えばいいと思う？」

「全裸」

「以心伝心か君らはっ！」

なんで打ち合わせたかのように同じことを言うのかっ。

「確かにわたしは薄着にするつもりだけどっ」

「全裸、薄いじゃーん」

「薄いどころか無いじゃないのっ！！」

「皮膚があるよー」

「もういいっ、他の友達のとこいくもんっ！！」

カカすけとサエすけはダメだった。

他の友達は……

「いないしっ！！」

ガーン。

「あれー。サユカちゃん、他に友達いないのー？」

「自慢じゃないけどいないわっ」

「イチョウさんとかー、アヤちゃんとかー、ニシカワ君とかー」

「腹を割るほどの友達じゃないわ、君らと違って」

「サユカちゃん……そんなに私たちのことを親友と思ってくれてたんだねー」

「まぁ、そうね」

「じゃあ親友の言うとおりに全裸になるしか」

「だからそれだけは嫌だって言ってるでしょっ」

「いずれは全部見せるんでしょー？」

「そうよっ！」

「じ、自信満々に答えられちゃったー」

ふふん、この気持ちには偽りもためらいも無いわ。

「じゃあもう全部見せてもいいんじゃー」

「もっとスタイル良くなってから見せるの」

「勢いよく答えてる割にその辺は冷静だねー」

当たり前よ。本気の恋愛なんだもの、妥協は許されないわっ。

「というわけで、わたしの未発達な身体でも絶妙にトメさんの心をくすぐる衣装がいいのっ。全裸はまだダメッ」

「なんかお母さんと会話してる気がしてきたー」

サカイさん、家で娘とどんな会話してるんだろ。

「うん、お母さんとの会話で思い出した。私たちくらいの歳の子の武器は、鎖骨と肩と太ももだって」

「わかったわっ。服貸してっ！」

「サユカちゃんって意外と図々しいねー」

「親友に遠慮してどうするのっ」

「そ、そう言われると弱いなー。もー」

ふ、伊達に付き合い長くないのよサエすけ。君は友情とかを表に出されるのをかなり恥ずかしがり、かつ嬉しくなって言うこと聞いてくれちゃうのよねっ！

口には出さないけど本当可愛いわこの子。わたしが男子だったらメロメロだわ。

……いや、どうだろう。男子でもトメさんの方に行ってたかな。

「じゃー衣装あわせにいこー」

「おーっ！」

この後、決めた衣装でトメさんとデートしたわっ。

トメさんは悩殺！

……されたかどうかは、本人のみぞ知るわ。

って、え？　もう終わり？　デートの描写は？　え、ちょっとっ！　前回のトイレ行ってる話だけで終わるつもりっ！　まさかそんなちょ――

完！

「にょろーっ！？」

## カカの天下８８０「サユカの任務、勝負服編」（後書き）

この後どうなったかは皆さんの想像にお任せします（ぇ

まぁ書いてほしいっていう声が多かったら書きますが。んー、でもこの子らのデートもしばらく書いてないしなぁ。書いたら書いたでなぁ、どしよっかなぁ。

## カカの天下８８１「夏に売れるよ、がんばれタケダ」

夏に売れるものシリーズ！

売れるものその一、アイスクリーム。定番ですね。

「サエでーす。私はいま、あまーいバニラとストロベリーのアイスパフェを食べてます。幸せですー、つべたー」

「サエ、おかーさんにもちょーだい」

「おかわり」

「ご馳走様って言うかと思えばそれを飛び越えておかわりするのー！？　もー！　サエのいけず！　大好きー！」

売れるものその二、カキ氷。これも夏の定番です。

「カカです。私はいま、メロンのカキ氷を食べてます。私的にはこの味が一番好きです。んー！　ちべたい！」

「なぁカカ、あんまり冷たいものばっかり食べると腹壊すぞ」

「知らぬ」

「壊してもいいんか」

「今が幸せならいい」

「後悔しないか」

「する」

「するんかい」

「人間だもの」

売れるものその三、ゲリ止め。皆、冷たいもんばっか食べるからね。

「ぬぉぉぉぉ……タケダだ……いま、トイレで……ぬぉぉぉぉ……アイスを食べ過ぎた……」

売れるものその四、帽子。

「サラです。私はいま麦わら帽子をかぶって、ひまわり畑を散歩しています」

「イチョウことアサカです。お姉様はまるで良家のお嬢様のようですわ」

「ヤナツだ。ま、絵にはなってるよな。ひまわり畑、麦わら帽子、白いワンピース、白い胸元」

「どこ見てるの！？」

「じゃあ白い皿」

「あんたまで皿とか言うの！？」

「けけけ」

「もう、二人とも！　ひまわり畑に笑われますわよ？」

「……笑われる？」

「……この、四方八方にあるひまわり畑に？」

くけけけ

「それ以上恐くするな！！」

売れるものその五、栄養ドリンク。夏バテにはこれだね。

「はぁ……ハァ……〆切り、シメキリが目の前に……」

「どうもキリヤです。隣で死にそうになっているのは作家のユカさんです」

「こんな安い栄養ドリンクじゃダメ……も、もっと高いのを、もっとキクやつを買ってきて！」

「夏とか関係ありませんねこの人」

「夏コミだから関係あるわよ」

「仕事じゃなかったんですか！？」

「あーあー人生の大仕事よ！　文句あっか！？」

「ありません！」

売れるものその六、さらにゲリ止め。

「またかぁぁぁぁぁ……なにを思って他人のトイレを二度も実況するのかぁ……ふんぬぅぅぅぅぅ……それだけ売れてるのかゲリ止めぇぇぇ……」

売れるものその七、凍らせたスポーツドリンク。運動する人に必

須！

「カツコだ！　んめーなこのでっかいガリガリくん。あん？　かじるもんじゃない？　使用法が違う？　美味けりゃいいんだよ」

売れるものその八、あえて辛いもの。暑いときこそ美味しいですよね。

「ニッシーだぁ！　っくぁー！　カレーうめー！　かれー！！　あっちー！」

「でしょでしょ？　えへへ」

「アヤだけど。ちょっとインドちゃん、ニッシーとくっつきすぎじゃない？」

「わ、カレーよりもこっちのほうがお熱い」

「インドちゃん！？　そんなこと言うキャラだっけ！？」

「うるさいなぁアヤ坊」

「ニシカワ君、それが愛だよ」

「だからインドちゃんキャラおかしいから！」

「そりゃカレーに関わることだからな」

「え！　かなりカレーと離れたこと言ってない！？」

「カレーは愛だよ！！」

「なんかごめんなさい！！」

売れるものその九、やっぱりゲリ止め。

「ぬぅぅぅっ……辛いものも食べすぎたぁぁぁ……インド君めぇぇぇ……美味かったが辛すぎるものを食べた後にコレは地獄だぁぁぁ……」

売れるものその十。

もうゲリ止めしかない。

「ていうか……ゲリ止めのくせに止まってないのはなんでだ……ぐふ」

ご愁傷さま。え、ところで実況してる私は誰かって？　それはね。

「――と、タケダ君は死んでしまいましたとさ。可哀想に」

「ユカさん？　何してるんですか」

「え、休憩のラクガキ」

「〆切り間近で死にそうだったんじゃないんですか！？　なんで余計なもの書いてるんですか！！　休憩なら書くのやめましょうよ！！」

「あーあー、作家の休憩なんてこんなもんよ？」

「そんなだから栄養ドリンクばっか買いにいく羽目になるんですよ！　私が！」

「あ、ゲリ止めも買っといてね。体調ゲキヤバだから」

「彼女にそんなこと言われたくないです！！」

「買ってきてくれないの？」

「今すぐに！！」

「今すぐゲリはしないけど」

「汚い！　そういう言葉使わないでください！　お願い！　夢が壊れる！！」

「夢を壊すのが私たち作家の仕事だ」

「夢を作るんでしょう！」

「作って壊すのよん」

「壊さないで！！」

「わ、わかったわよぅ。そんな泣かなくてもいいじゃないの」

皆もお腹の調子が悪くなったときに失言しないようにね。じゃな

いと彼氏に泣かれちゃうよ。なぜか。

## カカの天下８８１「夏に売れるよ、がんばれタケダ」（後書き）

ちょっと汚い話でごめんなさい。
まぁ、このくらいいいよね（何の基準だ）。
皆さんもお腹の具合にはご注意を。ちなみに私は盛大に壊しました。
死ぬかと思いました、まる。

## カカの天下８８２「あなたも見ましたか？　この夢を」

こんにちは、トメです。今日も今日とてカカとサエちゃんとサユカちゃんは我が家の居間でくつろいでいます。まだ夏休みだもんな。え？　いや、まだ夏休みの時期だよ。うん。

「ところでさ。眉毛がありえないくらい生えて、それを必死に剃り続ける夢を見たんだけど」

カカよ、その話題をいきなり振ってどういう反応を期待してるんだ。

「カカちゃん。私はヒゲだったよ」

「それはひどい！」

うん、この会話はひどい。

「サユカちゃんは何の毛だったー？」

なんで毛の夢が前提なんだ。

「恥ずかしくて言えないわよっ」

見たのか。なんで三人とも欠かさず見てるんだ。

「じゃあトメ兄は何の毛？」

そしてなぜ当然のごとく僕に話が回ってくるんだ。

「毛の夢なんか見てないよ」

ま、当然だな。

「おっくれってるー」

「サエすけ、トメさんの何が遅れてるっていうのっ？」

「発毛」

「待てぃ」

「育毛？」

「待てというに」

「ていうかトメ兄はもうハゲだよね」

「なんで夢見てないだけでハゲ呼ばわりされにゃならんのだ」

「毛が無いから」

「文章足りない！　『毛の夢を見たことが無いから』だろ！」

「ハゲはダメだってさ。じゃあトメ兄はなんて呼ぼう」

「ツルペタはどうかなー」

サエちゃん、なぜそのような単語が出てくる。親か、親の影響な

のか。

「トメ兄はツルペタ」

「なんでその設定で決定みたいな言い方するの！？」

と、そのとき。いきなり玄関のドアが開いた音がした。

「ちっす。なんか愉快な話題が聞こえたから来てみたぜぃ」

「あ、お姉だ」

「なんでこんな話題でわざわざ寄ってくるんだよ」

「毛の話題といえばあたしだ」

「毛深いのか」

「細いんだよ」

知らねぇよ。

「カツコさんはどんな毛の夢を見たんですかっ」

「もちろん胸毛で剛毛よ」

あんた今細いとか言ってなかったか。

「サユカちゃん、君と一緒で胸毛の夢だぜぃ！」

「キャー！　バラさないでくださいっ」

「イケてるねーサユカちゃん」

もうやだこのツッコミどころわかんない人たち。

「これからは二人そろって胸毛ボンバーズだね、おめでとう」

「カカすけ。わたしその名前は全力で嫌」

「あたしは気にいったけど」

姉もう黙れ。

「じゃあトメ兄と二人で胸毛ボンバーズ」

「トメさんとお揃いならいいわっ」

でも胸毛だぞ。

「いっそのことー。胸毛夫婦でいいんじゃないかなー」

「それいきましょうっ」

でも胸毛だぞ。

「結婚式にはブーケの代わりに胸毛を投げるんだね」

「素敵！」

しつこいようだけど胸毛だぞ。なんでその部分だけスルーしてるんだ。相当インパクトあるだろ胸毛。

「あたしの負けだよ……この胸毛も持っていきな！」

「カツコさん、あなたの胸毛はムダにはしない！」

「あげたってことはムダ毛じゃないのかなー」

「これから有効活用するからムダじゃないんじゃない？」

「カカちゃん何に使うのー？」

「私じゃないよ、サユカンとトメ兄が使うんでしょ」

は？　僕と、サユカちゃんで？

「何をどうしろと」

「結婚式に胸毛交換」

どこの民族の儀式だ。

「もちろん三ヶ月分の胸毛なんだよねー」

「ほっほぉう！　汝、笠原トメはぁ、何時如何なる時も、胸毛を愛すると誓いますかぁ？」

「誓いますっ！」

「なんでサユカちゃんが勝手に誓ってるの！？」

「だってトメさんとの結婚ですものっ」

「だからなんで胸毛のフレーズだけ綺麗に抜けてるのさ！？」

その夜。

僕はありえないほど生え続ける胸毛を必死に剃る夢を見た。

なぜかサユカちゃんと二人で協力して。

「二人で初の共同作業です！！」

なんかやかましい姉も登場したので胸毛を投げつけてやった。

## カカの天下８８２「あなたも見ましたか？　この夢を」（後書き）

あなたは何の毛ですか？（なんちゅー質問だ）
ちなみに冒頭のカカの夢は、私が実際に見た夢です。実話です。

しかしくそー、日付が変わるまでに帰ってこれなかった……まだまだ更新は続きますよ！

# カカの天下８８３「デリ！」（前書き）

今回のお話には少し汚い発言がありますのでご了承ください。

## カカの天下８８３「デリ！」

こんにちは、トメです。今日も居間でダラダラと雑誌を読んでます。何の雑誌かって？　料理関係ですが何か。

「クララークララークラクララー♪」

と、そんなところに某有名な音楽と共に登場したのはクララちゃん。

「こんにちはトメ。カカはいないですか？」

「いま便所」

「デリ！！」

おお、トイレまで結構な距離あるのにカカから抗議の声が聞こえてきた。

「なんですか、今のは。大きいのを出そうという気合のかけ声ですか」

「違う違う。デリカシーがない！　って怒ってるんだよ」

「さすがはおにーちゃん、以心伝心ですね」

誰でもわかると思うが。

「そういやクララちゃん」

「はい、クララですが何か」

「ふと思ったんだけど。サエちゃんのことはおねーちゃんって言うのに、カカのことはそう呼ばないんだな？」

「トメ、そんなにクララにおにーちゃんと呼んでほしいのですか？」

……あれ、会話繋がってなくね？

「なんでそうなる？」

「遠まわしにそう言いたいのかなーとよく気がつくクララは思いました」

「全然違うんだが」

「勘違いでしたか！？　あ、違います、気がつくのを間違えんたんですから……気違いです！　クララキチガイです！」

そんなに自分を卑下しなくとも。

「ていうかさ、クララちゃん何しにきたの」

「それはどんな遠まわしですか？」

「かなり直球なんですけど。なにクララちゃん、遠まわしにハマってるの？」

「男は皆テレ屋ですから。遠まわしな感情を女が気づいてあげない

と」

「どっから仕入れたそんな情報」

「あは、このテレ屋さんめー」

「頼むからもう少し会話のキャッチボールをしてくれ」

「む？　どういう意味ですか。クララわかんないです」

「もっとわかりやすく喋ってくれってことだ」

「なるほど、わかりました！」

よし、じゃあ改めて質問しよう。

「クララちゃん、なんでここに来たの」

「クララ暇なんです」

わかりやすい！

「カカ！　はやくうんこしてください！」

「その表現はわかりやすすぎる！」

「デリデリ！！」

お怒りじゃぁ、便所の主がお怒りじゃぁぁ。

「もうクララは待ちくたびれました。カカ、どれだけ出したんですか？　クララが見てあげます」

「こらこらこらこら！　クララちゃん！？」

「なんですか、可能な限りわかりやすいクララですけど」

「わかりやすいっていうのと遠慮がないっていうのは違う」

「クララしょっくです！」

「なんで！？」

「わかりやすいっていうのはカツコ魔王様みたいな感じと思ってました」

「や、あれはある意味わかりにくいっていうか謎っていうか、遠慮がないっていうのは当てはまるけど、とにかくアレを基準にしちゃダメだ。何に関しても」

「クララ、カツコ魔王様みたいになりたいです」

「なんで！？」

「一番幸せそうじゃないですか」

「確かに！！」

は、思わず納得してしまった。

「で、でもダメだ。アレ自身は確かに幸せだが、周りへの被害が尋常じゃないんだ！　僕なんか何度巻き込まれたことか」

「じゃあトメはカツコ魔王様が嫌いなのですか」

「へ、あ、いや」

そら毎回毎回ものごころついたときから色んなことに巻き込まれて尻拭いさせられてきて受けた迷惑を金額に直したら億は確実に超えるだろうなーとか思ってるけど。

「嫌いでは、ない、けど」

「大好きなんですね」

「そこまでじゃない！！」

「でも好きなんでしょう？」

「うぬぅ」

唸るしかない。うぬぅ。

「うんうん、やっぱりクララもトメに好かれるカツコ魔王様みたいになりたいと思います。ところでカカ、うんこまだですか？」

「デェェェリィィィィィ」

この後、トイレの戸を蹴っ飛ばして登場したカカがクララちゃんに襲い掛かり、そのまま追いかけっこが始まるんでしたとさ。めで

たしめでたし。

しかし……うぬぅ。

「僕が、姉を好き？」

うげろ。

## カカの天下８８３「デリ！」（後書き）

うん○とかいうネタはあまり好きではないんですけど、クララが言うとなんか許せちゃうので書いちゃいました。

しかし連続投稿は止まってしまいました。一回週末の忙しい仕事に当たると崩れちゃいますね……悔しい。夏の話全部書くまで毎日投稿やろうと思ったのに。

とりあえず夏いっぱいのネタは書き溜めてあるので、なるべく早めに実際の時期に追いついてやろうと思います。まだ暑いから夏ですよね！

ではでは。

## カカの天下８８４「想像してみよう」

「海に行きたいね」

トメです。勘違いしないでいただきたいが、このセリフは僕のものじゃありません。

「行きたくないよ。遠いし暑いし、プールでいいじゃん」

「何言ってるの！」

まぁご想像の通り、こんなことを言い出してるのはカカなわけですが。

「海は壮大で素晴らしいよ！　ロマンだよ！」

「はいはい」

「むぅ、じゃあ私が今から語る光景を想像してみてよ！」

「ふむ？」

青い海。

白い砂浜。

照りつける太陽。

熱射病。

完。

「壮大で素晴らしいロマンは随分と終わるのが早いな」

「あ、あれ。おかしいな」

いつぞやの熱射病がトラウマになってるんだな、きっと。

「よし、じゃあこれなら！」

「ふむ？」

大人っぽい黒の水着はスラリと伸びた白い手足をより一層際立たせる。

それはまるで天使か悪魔、誰をも魅了する少女の姿。

美しい。

その子の名前はサエ。

熱射病で死亡。

「うぉい」

「ダメだ、熱射病が離れない」

ていうか語り方、上手かったなオイ。愛の力か。

「ダメだ、ダメ……この想像に人が絡んだら絶対死ぬ……」

「壮大だなぁ」

ある意味。

「よ、よし。他の素晴らしいことを考えよう！」

「ふむ？」

色とりどりのカキ氷！

美味しいよ！

イチゴにメロン、ブルーハワイ。

暑くて全部溶けた。

「太陽めぇぇぇぇ！」

「あー、なんにせよ暑さで被害があるのね」

「とにかく涼みたいのに」

「別に無理して海に行かなくても涼めるだろ」

むしろ海に行ったら涼むというより汗だくになって遊ぶだろおまえ。

「仕方ない、家で水着で過ごすしかないね」

「どこをどうやったらその結論に達するんでしょうか」

「だって想像してみてよ」

「ふむ？」

暑い居間。

そこに水着姿で寝そべる兄妹。

横にはポテチ。

「普通にアホだな」

「そだね」

「でもやるんだろうな、カカのことだから」

「もち」

「僕はやらんぞ？」

「うん、なんだかんだ言ってやる展開になるんだよねいつも」

「や、絶対やらんて」

「とりあえずポテチ買ってこよう。お金ちょーだい」

「そのくらい自分で出しなさい」

「ちぇ、ケチ。可愛い女子中学生の水着を拝めるんだよ？」

「はぁ……あのな。想像してみろよ」

「ふむ？」

いつも通る道にある、見慣れた電柱。

それがなぜか水着を着ていた。

「な？　こんなもん拝んでどうするって話だよ。つまりはそういうことだ」

「とりあえずケンカを売られてるのはわかった」

「そんなもん買ってたらポテチを買う金なくなるぞ」

「それは大変だ」

あっさり頷いてポテチを買いにいくカカ。

本当にやるのかね？　暑さで頭がやられたか。や、元からあんなだったか。

想像してみよう。

「……あぁ、うん」

昔からあんなだわ、カカは。

## カカの天下８８４「想像してみよう」（後書き）

想像してみよう。

幸せそうにアイスを食べている教頭の姿を。

……なんでそんなもん想像したんだろう。

# カカの天下８８５「水着は好きですか？」

こんにちは、カカです。そんなわけで、前回の流れで水着になってみました。

家の中で。

三人で。

「涼しいね、サエちゃん」

「涼しいねー」

「確かに涼しいわねっ」

満足そうに頷きあう私たち。

「バカがいる……」

それを冷めた目で見つめるトメ兄。

「いっぱいいる……」

しみじみ言うトメ兄。

「そんなに見つめられたら照れちゃいますよートメお兄さん」

「や、あまりにも異様で思わず」

「エプロンつけて裸エプロン（仮）！　どうだトメ兄！」

「バカか！？　バカなのか！？」

「トメさん嬉しそうだわっ。わたしもやる！」

「んなこたない！！」

や、でも嬉しそうだよやっぱ。

「これはどうかなー。水着の上だから履ける超ミニスカート。フリフリでチラチラだよー」

「バッカァーカ！？」

「やっぱり嬉しそう」

「だから何度も言うが、バカなこと言うな。なんで妹の水着姿云々で喜ばなきゃならんのだ」

「でも可愛い女子中学生だよ」

「確かに」

そこは納得してくれるのね。

「さぁ次は何っ！？」

「サユカン張り切ってるね」

トメ兄の関心を引けたのが嬉しかったらしい。

「じゃあサユカちゃんは全裸でいこー」

「よしきたっ」

わ、サエちゃんってば上手いことノせちゃった！　こないだ奨めたときはなんだかんだでしなかったらしいし、ついに出るのか全裸！

「ていっ」

すぽん！　と脱がされるブラタイプの上の水着。

隠されていた胸が露になる。

私の。

「――っ！？」

声なき声をあげる。慌てて大事な部分を隠し、トンデモナイことをしでかしたサユカンを睨みつける前に――

「トメ兄！　見た！？」

「何を」

「胸！」

「小さくて見えなかった」

「あぁん！？」

「や、そんな凄まれても。何もなかったぞ」

「女子の胸を見といてなんたる言い草でござるか！？」

「おまえの喋り方こそなんでござるか」

「気が動転してるんだよ！」

「んなこと言ってもなぁ、おまえ。妹のそんなもん見たところでなんとも」

「じゃーサエちゃんとかサユカンならいいわけ！？」

「や、相手は子供だしな。別に」

そのとき、ずいっと前に出たのはサエちゃん。

「トメお兄さん、その言い方は失礼です」

「む」

「確かにトメお兄さんはシスコンですけどロリコンじゃありません。多分」

「多分をつけるな」

「だから中学生は興味ないのかもしれません。ですけど、だからと言って成長途中の女の子に対してその発言は許されるものじゃない

と思います」

「むむ」

サエちゃんが、怒ってる。

私のため？　それとも『相手は子供だし』という発言に自分の尊厳を傷つけられたから？　真意はわからない、わからないけど、いつものふんわりとした笑顔は消え、真剣な顔でトメ兄を見つめている。

格好いい。惚れなおした。

「……ごめん、サエちゃんの言うとおりだ。カカ、悪かったな」

「へ、ああ、うん」

ぶっちゃけ格好いいサエちゃんに見とれてたのでトメ兄のことはどうでもよくなってたんだけど。

「はい、サユカちゃんにも謝ってください」

「わかった。サユカちゃんごめん」

「か、顔を上げてくださいトメさんっ！」

「そうですよー。そしてサユカちゃんをしっかり見てください。ね？　子供だなんてバカにしちゃいけない成長をしてるでしょー、胸」

「ほんとだ」

納得しちゃったよ！

「私は全然だけどー……」

さっきの毅然とした態度はどこへやら、シュンとなるサエちゃん。

でも大丈夫。私を含め周りの人は絶対にこう言うよ。

サエちゃんはそれでいい。

「よし、わかった！　おまえらを一丁前の女扱いしてやろう！」

「わーい」

「じゃあとりあえず言わせてもらう。年頃の娘が家の中ではしたない格好するんじゃありません！」

ですよねー。

## カカの天下８８５「水着は好きですか？」（後書き）

なんだかんだでしばらくこのままでいたそうです。

とりあえず言いたいことは一つ。

サエちゃんはそれでいい。

## カカの天下８８６「海も心も綺麗にね」

トメです。最近、カカたちが水着がどーだのうるさいので、姉の車に乗って皆で海に来てしまいました。

快晴が続いたおかげで海は大盛況、かと思いきや。連日の暑さがあまりにひどいせいか、今日はそんなに混んでいませんでした。

メンバーは僕、カカ、サエちゃん、サユカちゃん、姉。場所取りしたり準備したりと動いていると、ふとカカが一人で波打ち際にいることに気づきました。

「何やってんだカカ」

「波と戦ってるの！」

カカは必死っぽく言いながら、波を追いかけたり逃げたり行ったり来たり。なるほど、寄せては返す波にできる限り近づきつつ、でも触れたらアウト、とそういう勝負か。

「わっぷ」

勝敗はあっさりと決した。波は海へ戻ったかと思えばいきなり大きくなってカカへと襲いかかったのだ。勢いよく水を真正面から受けたカカは思わず尻餅をついた。

「どうしてくれんだ海！」

ざっぱーん。

「クリーニング代払え！」

ざっぱーん。

「ざっぱーん以外に何か言え！」

ざざー。

「バカにしてんのか！？」

ざざっぱぁぁん！！

「うわぁぁ」

再び大きな波にやられて尻餅をつくカカ。

「……よぅし、そっちがその気なら、こっちにも考えがある！」

カカはしゃがみ、砂を一生懸命海に向かって投げ始めた。

「何やってんの」

「私を汚した分、海も汚してやる」

投げる投げる、砂を投げる。我が妹は中学生にもなって、これで環境破壊しているつもりらしい。

「なぁカカ」

「なに」

「海の底には何がある？」

「砂」

「おまえが今投げてるのは？」

「砂」

「……や、まぁ。カカが納得してるならいいけど」

「よくわかんないけど海め、汚れてしまえ！」

そのとき！　何処からともなく男たちが三人も現れた！

「そんなことを言ってはダメだ！」

「そーだそーだ、こんにちは！」

「初めまして！」

「なんだあんたら」

男たちは偉そうにふんぞり返りながら言い放つ。

「我らは『綺麗な海を守る会』です！」

「ゴミ掃除係の人だね」

「やってることはそうだけど身も蓋もない言い方はやめて！」

まぁ張りたい見栄ってあるよね。

「とにかくそこのお嬢さん、海を汚してはいけません！」

砂投げてただけだがな。

「海は壮大で綺麗で、様々な生命を育み、人の心と身体を癒してくれる。そんな素晴らしい海を汚すとは何事か」

砂投げてただけだがな。

「愚か者！　発言を取り消せ！」

砂投げてただけでそこまで言わんでも。

「じゃ、あんたら代わりにクリーニング代出してよ」

しかし妹は強かった。

「はい！？　いや、その」

「あんたらは海の代理人みたいなもんなんでしょ。じゃ海の代わりにクリーニング代出してよ」

「べ、別にそんな大層な者じゃ……そ、それに！　水着はもともとそういう汚れ方をするものだろう！　汚れた内に入らない！」

「じゃ海に砂を投げるのも汚れた内に入らないと思うけど」

「うぐ！」

あ、ちゃんとわかっててやってたのね。

「口が上手くなったな、カカ」

「ツッコミばっかしてる人といつも一緒にいるからね」

海を守る会らしい三人は、そのまま潔く「ごめんなさい！」と謝って去っていった。

「さて、海との勝負を再開しよう」

「どうでもいいけど、それどうやったらおまえの勝ちになるの？」

「私が満足したら」

そですか。とりあえずお昼ごはんを買いにいったサエちゃんとサユカちゃんが戻るまで放っておこう。

## カカの天下８８６「海も心も綺麗にね」（後書き）

段々と涼しくなってきましたね。話的にはまだ八月、夏休み中の話となってますのでそろそろ時間軸的に苦しくなってきました。気にしては負け（ぉぃ

しかしなんで皆、海に文句とか言いたくなるんでしょうねぇ……

## カカの天下８８７「酒の肴は水着とな」

こんばんは、トメです。

「かんぱーい」

飽きもせずにテンと病院で飲んでます。

「おうトメ、今年の夏はどうだった」

「死ぬほど暑かった」

「同感だな」

「そしてビールが死ぬほど美味い」

「間違いない！　乾杯だ！」

「おお、乾杯だ！」

毎度のことながら僕らは何回も乾杯をしている。気分的に盛り上がるからな。酔っ払いなんてのはそんなものだ。

「んぐんぐ。ところでトメよ、今年の夏はどうだった」

「暑かったと何度も言ってるだろ」

「そしてビールが美味い」

「乾杯」

同じことを繰り返すのも酔っ払いの特徴である。

「んぐ。そうじゃなくてだな。夏ならではの青春話とかねぇのか」

「その歳で青春とかいうとオヤジくさいぞ」

「やかましい。乾杯」

「乾杯」

ほんと乾杯好きだな僕ら。

「そうだなぁ……カカたちと海に行ったな」

「ほほう。で、水着はどうだった？」

「真っ先に聞くことがそれか。やはりオヤジくさい」

「るせぇ。で、どうだったんだ？　まずカカは」

「明るいオレンジのビキニタイプ、運動で引き締まった肢体を存分に見せつけながら海と戯れていたな。まるで妖精のように」

「は？」

「どした」

「いや……サエは？」

「大人しめな黒のワンピース、可愛いフリルと白い手足が眩しかった。波打ち際を歩く姿は可憐としか言い様がなく、絵にすれば間違いなく男どもは魅了されるだろう」

「ぎゃー」

「だからどした」

「サユカは？」

「大胆」

「一言かよ！！」

「なんだよさっきから変な顔して」

「変なのはおまえだ！　あぁ……トメが変態くさいスケベになった……めでたい！　乾杯！」

「根も葉もないことを！」

「根も葉も種も、数分前からのてめぇのセリフにありまくだが」

「そんなバカな！」

「じゃあ思い返してみ。自分が何を言ったのか」

「ありまくりだ！」

「だろうが！」

「まるで森のようだ！　誰か森林伐採してくれ！」

「もう手遅れだ」

全然気がつかなかった！　恐るべし酒の力！

「待て、違うんだ。これには理由があるんだ」

「酔ったんだろう？　あいつらの可愛さに」

「妙に気取った言い方をするな！　これはだな、ユカのせいだ！」

「なに、ユカの性癖がうつったとな」

「話を聞け！　話を聞かしたんだ！」

「てめぇはさっきから何を言ってんだ」

まてまて、落ち着け僕。

「ユカが僕らをネタにして小説を書いてることは知ってるだろ？
今回行った海の話も使いたいからって説明させられたんだよ。そこで水着の説明もしろと言われたんだ」

「へぇ、そんであんな変態的な説明をしたと」

「や、『可愛かった』とだけ」

「つまらねぇー」

「ユカにもそう言われたんだよ。そしたら、もっと小説っぽい表現で語ってみろと言われて、何度もダメだしをくらったあげくにあんな表現になったわけだ。で、それを覚えてたから口が勝手に動いたというか」

「なるほど、本当に理由があったんだな」

当たり前だ。何が悲しくていい大人が中学生の水着を凝視し、評価せねばならんというのか。

「しかしサユカは一言なんだな」

「ああ、それ以外言うことがない」

「どんな水着を着たんだよ……見てみてぇな」

「二度と着ないって言ってたぞ」

「やべぇ、乾杯！」

「何に乾杯か知らんが、まぁ乾杯」

「トメのキモさに」

「だから僕は悪くない！　ユカの要望に応えただけだ！」

「応えんなよ」

「言い返せねぇ！」

くそー、負けてたまるか。テンの夏の話で逆襲だ！

「今度はテンの番だぞ！　夏は何してた！？」

「仕事」

「……ずっと？」

「教師なめんな？」

「ごめんなさい」

……お疲れ様、かんぱーい。

## カカの天下８８７「酒の肴は水着とな」（後書き）

久方ぶりです。色々とあって書く時間がありませんでしたが、今日は誰かさんの誕生日。なんとしても書かねばと舞い戻ってまいりました。とはいえいきなりその話に行くのもなんなので、夏のひとまとめとしてこんな話を入れてみました。

夏のことを語り合うはずが、なぜか水着にしか触れてません。この人らの飲み会ですから仕方ないですね。

頑張って今日中にまた更新しまっす！

## カカの天下888「誕生日を祝え、そのいち」

こんにちは、カカです。今日はなんと私の誕生日！

でもパーティとかはありません。なぜかというと、皆が空気を読んでくれたからです。代表のトメ兄の言葉を借りると「どうせお祝いは去年サエちゃんとプチ結婚式した日のほうがいいんだろ？」だそうです。まさにその通り。さすがは私が生まれたときから付き合ってるだけはある。

そんなわけで、今日は何にもなし……というのもちょっと寂しいので、「誕生日おめでとう」と言われるためだけに色んなところに行ってみようと思います。

「じゃ、いってきます」

「待てカカ」

「なにトメ兄」

「誕生日おめでとう」

「今朝おはようと一緒に聞いたけど」

「なんとなくもう一度言っておかないと出番がない気がしたんだ」

「トメ兄は何を言ってるの？」

「自分でもよくわからん」

生まれたときから付き合ってるけどトメ兄はたまにわけがわからない。これが大人の謎というものか。

「今日はどこ行くんだ?」

「皆におめでとうって言ってもらいに」

「あつかましいやつだな」

「正直と言ってよ」

「そうとも言う」

「じゃね、トメ兄」

「まてカカ」

「なにさ」

「誕生日おめでとう」

「だからそれは何度も聞いたってば。どしたのトメ兄」

「むぅ……不満なんだよ」

「なにがさ」

「毎年祝ってる日に何もできないのが!」

……あぁ、そだよね。私が生まれたときから毎年欠かさず祝ってくれてたんだもんねぇ。

「じゃ今夜はごちそう作ってよ。それでオッケーじゃん」

「それは結婚記念日（仮）にとっておく」

「今日もその日もご馳走でいいじゃん」

「そしたらありがたみが無くなるだろ」

「融通の利かない男だなぁ。じゃ今夜は魚料理、記念日は肉料理ってことでどうよ」

「それだ！　カカ頭いいな！」

私はたまにトメ兄ほんとは頭悪いんじゃないかと思うときがあるよ。

「じゃ買出し行かないと。いってきまーす！　さぁー祝うぞー」

嬉しいような恥ずかしいような……あれがトメ兄のいいところなんだろうけど。

「さて、気を取り直して行きますか」

まずはサエちゃんちへ。

「こんちは、あれどしたのサエちゃん。なんかくらーい」
「今日カカちゃんのことを祝えないー、ストレスがー」
どんだけ幸せ者なんだ私は。
「私はとりあえずおめでとうとさえ言ってもらえれば」
「おめでとー！」
「ありがとー！」
「あと何万回言えばいい？」
ええい、トメ兄と似たようなことを。
「あー！　せめて誕生日プレゼントを検索……あー！　ぱこちゃんまだ修理中だったー」
「ぱこちゃんどしたの？」
「ういるすとかいうのにやられたのー」
コンピューターウィルスか、噂には聞いたことがある。パソコンの中身を病気にするんだよね。
「くそー、ういるすめー！　ぶち殺すー！」
「サエちゃんがそんな言葉を使ったらダメ！」

「じゃーぷち殺すー？」

「ぷち……も、もうちょっと可愛くいこうか」

「ぷちころーす」

ぷちころされたい！！

「もう一声！」

「ぷちころーしゅ」

可愛すぎる。

「ぷちころしゅんだにゃー」

私はサエちゃんの頭に黒い猫耳を見た。神様、この子をメチャクチャにしたいです。それを誕生日プレゼントということにしてはいけませんか。

「カカちゃんどったのー？」

「い、いや。私、他にも行くとこあるから。それじゃ」

これ以上ここにいたらサエちゃんを抱きしめてその先までいってしまう。

「プレゼントはー？」

「充分すぎるものをもらったよ」

続いてサユカちゃん。

「お、カカすけ。おめー」

「サユカンは軽いねぇ。ま、ありがと」

「なによ、熱烈に祝ってあげたほうがよかった？」

「や、サユカンにはすでに熱烈なプレゼントもらったから、これ以上は悪いよ」

「わたし、何かあげたっけ？」

「海に行ったときの水着は、とてもいい目の保養になりました。あれぞ熱烈」

「ぶっ殺すっ！！」

「ダメ！」

「なにがっ！」

「サユカンもサエちゃんを見習いなさい！　ぶち殺す、なんて言ったらダメ！　もっと可愛く！」

「くたばれっ」

「可愛くないよ!?　もっとこう、好きな言葉をつけ加えるとか」

「トメさんっ！」

「それ好きな人言っただけだよね」

「うんっ」

「いい笑顔しやがって」

「好きな人を想うだけで幸せになれるのっ」

「どうしよう。私がおめでとうと言われるはずなのに、この人の方がめでたいよ」

頭が。

「いいよいいよ。どうせサユカンはトメ兄のことしか頭にないんだ。私の誕生日なんかどうでもいいんだ」

「なによぅ、だから結婚記念日（仮）にしっかり祝ってあげるって言ってんじゃないのっ」

「いいよ、無理しなくても」

「仕方ないなぁ……カカすけ、本音を言ってあげるわ」

「なにさ」

「カカ、愛してるぜっ」

「……！」

「えへ、びっくりした？」

「ししししてないもん！」

「してるじゃないの」

「してないってば！！」

ごめんなさい本当はドキっとしました！！

「この私がサユカンにからかわれることがあるなんて……屈辱！」

「結構長い付き合いなんだからたまにあったでしょうがっ！」

「サユカンは皆に身体を弄ばれてればいいんだよ！」

「あれ、さっき文句言ってたくせに君の方こそわたしのことどうでもいいみたいな発言してないっ！？」

「私はいいの！」

「なんでよっ！」

「誕生日だから！」

「毎日そんな感じじゃないのっ！」

「毎日が誕生日なの！」

「じゃあ君何歳よっ」

「それくらい自分で数えなよ！」

「何なのよこの変なケンカッ！？」

「長い付き合いならこんなこともあるんだよ！」

「そっかぁっ！　じゃあ今後ともよろしくっ」

「こちらこそ！　じゃあばいばい！」

「ばいばいっ」

さて、次に行こう。

## カカの天下８８８「誕生日を祝え、そのいち」（後書き）

作中で話したとおり、お祝い話はまだ先。ですので最近ご無沙汰な雑談をひたすらさせてみようと思います。

あまり山とか谷とかありませんが、これもカカ天と思ってほのぼのしてくださいなー。

## カカの天下８８９「誕生日を祝え、そのに」

どもども、カカです。引き続き「おめでとう」と言ってもらう旅を続けようと思います。

「おう、カカちゃんではないか」

「お姉、おっす」

「誕生日おめっとさん。これでいくつになったんだ？」

「たくさん」

「そりゃめでたい。うんうん」

変な会話。

「んで、あたしに何か用かい？」

「はい、ここでお姉の『今日あった面白い話』のコーナー」

「おっとぅ、初めて聞くコーナーが始まっちまったぃ」

「さ、張り切ってどうぞ」

「これはさっきの話なんだけどね。通りがかりのスーパーで母子がいたの。よくあるじゃん？　子供が『あれ買って！　あれ買って！』って駄々こねて、母さんが『はいはい、行くよ。置いてくよ。ばいばーい。じゃあねー』とか言うと『やぁーだぁー！　やぁーだー！』

と子供は泣きべそをかきながらも追いかけてくっていう」

うん、たまに見るね。

「あたしが見たのは『はいはい、置いてくよー。じゃあねー』の部分だったんだけど」

「ほほぅ、子供は？」

「それがなんて言ったと思う？」

「これで俺は自由だ」

「そんな子供は嫌だわさ」

「んで、なんて言ったの？」

「いや、それはダメだ！　ってめっちゃ男らしく」

「そんな子供も嫌だわさ」

「あたしも思わず吹いたわ。母親のほうが更に『ばいばーい』って言うと子供は『ダメだ！　おい？　ダメだ！！』って繰り返してんの。全く泣きもせずに。妙に偉そうに」

「将来が楽しみだね」

「ほんっと。あいつテンちゃんの生徒にならねーかなぁ。絶対おもしろいと思うんだけどなぁ」

「うん、満足した。じゃね、姉」

「あぁ、遊びに来ただけだったのね。ばいびー」

しかし即興で作ったコーナーにあそこまで応えてくれるとは。さすがは私の姉だ。

「やっほ、サラさん」

「あれ、カカちゃん」

続いてこの人。まぁ職場に遊びに来てるわけだから、お姉がいる近くにこの人もいるわけで。

「カカちゃん……誕生日だったよね……おめでとう」

「なんでそんな、めでたくなさそうな顔で言うの」

「私ね……最近、嫌がらせされたの」

「また皿扱いされたの？」

「うん」

当たった！

「で、でも今更じゃん」

「そうだけどぉ……あまりにもひどいんだもの」

「何されたの」

「こんなの送られたの」

そう言ってサラさんは豊かな胸元から一枚の手紙を取り出した。

受け取って見てみると、そこにはまずこう書いてあった。『お皿の展示会、出展依頼』と。

「ぶはははははは！」

「カツコさんと同じ反応！？」

「出ようよサラさん！　展示されよう？」

「そこまで一緒！？」

「水着と全裸、どっちがいいかな」

「なんでその選択肢しかないの！？　ていうかどんだけ同じこと言うのこの姉妹」

おぉう、まさかそこまでお姉とシンクロしていたとは。

「もうあっちいってください！」

「あ、嫌われちった」

「嫌いになんかなりません！　でもあっちいって！」

律儀に否定してくれるのね。サラさんてばかーわい。

「さて、ではあっちに行ってみよう」

あっちに行ってみました。

そしたら見知った顔がまたいました。

「あれサカイさん」

「あらあらカカちゃん、誕生日おめでとー」

「何してるの？　って聞く前に大体わかった私ってすごい？」

「何がわかったのー？」

「お皿の展示会の主催者あなたでしょ」

「そだよー」

やっぱりか。あんな冗談を送れるのは身内だけだしね。

「どれだけ喜んでくれてるか様子を見に来たんだけどー、大成功ねー」

「若干泣いてたよ」

「泣くほど喜んでくれるなんてー」

本気で嬉しそうだこの人。

「カカちゃんも来る？　展示会」

「参加するのかなぁ。そもそも参加するとしたら……どうなるんだろう」

「ふふふー、カカちゃん？　お皿は動く？」

「動かない」

「服は？」

「着ない」

「そゆことー」

この人すげぇ恐ろしい。

「その展示会の招待状を誕生日プレゼントにしてあげるー」

「超ありがとう」

ぶっちゃけ超見たいし。

「じゃ、私はおめでとうって言ってもらうのに忙しいからこれで」

「またねーカカちゃん」

次はどこ行こうかなぁ……そうだ。学校の方へ行ってみよう。

## カカの天下８８９「誕生日を祝え、そのに」（後書き）

雑談話が続きます。あんまり誕生日が関係ないところがミソです。

しかし最近寒いですねぇ。風邪が二週間くらい続いてます。栄養とって治そうと良いもん食べ続けてたら太りました。おのれ風邪め。

皆さんも気をつけてねー。

## カカの天下８９０「誕生日を祝え、そのさん」

どもどもどーも、引き続きおめでとう作戦を実行します。中学校にて部活中の友達を直撃！

「あん？　どうしたよカカ。わざわざオレに会いに来たのか」

「しまった」

「んだよ、会うなりその言い草は」

足が勝手に小学校のほうへ向かってた。ここに来ても今の学生友達はいないっていうのに……とはいえ、こっちにも知り合いは沢山いるんだけどね。

「何がしまったなんだよ」

「息を口の中にしまった」

「何が言いたい」

「呼吸した」

「『今なにしてる？』と聞かれて『息』と返事する問答と似たようなもんか」

「それそれ」

「いきなりそんなこと言うなんておまえ変なやつだな」

「何を今更」

「ほんとだな。それはさておき元気でやってんのか」

「さみしい」

「微妙に話が繋がってないような気がするが……まぁオレも寂しいかな」

「教師Ａの授業がつまんなくてさ」

「あんにゃろ、卒業式で俺に任せとけみたいなこと言ってたくせに。一体どんな授業してやがんだ」

「すごく面白くない。だって怒声もなければ暴力もないし、暴言すらないんだよ？」

「そりゃつまらねぇな」

「でしょ？　テンカ先生の授業じゃいつもあったのに」

「オレが直接Ａに会って教えてやるしかねぇか。怒声と暴力と暴言とエクスタシーで」

エクスタシーって何。

「うん、お願い。じゃないと授業＝居眠りの時間になっちゃうよ」

「わかった。任せとけ。授業＝戦争にしてやる」

授業は楽しく激しくないと勉強できないからね。眠くて。

「ところで先生、私に何か言うことはないの？」

「あん？　あぁ、誕生日おめでと」

「おお、覚えててくれた」

「ったりめぇだ、生徒全員の生年月日くれぇ覚えるのが教師だ」

「テンカ先生って喋り方そんななのにマジメなとこマジメだよね」

「はん、褒めても何もでねぇぞ」

「誕生日プレゼント出してよ」

「ああ、怒声と暴力と暴言でエクスタシーでいいか？」

エクスタシーって何。

「それ授業中以外でやったら単なる恐い人になっちゃうよ」

「そだな。授業中以外でやっちゃいけないよな。ん、じゃあＡにもやったらいけねぇのか」

「教師についての授業だからいいんじゃない？」

「それもそだな」

「じゃ先生、私は他の人にもおめでとうと言ってもらいに行ってくる」

「おう、教頭は中庭、校長はインドだ」

「わかった、教頭だけ会ってくる」

「おう、またな」

そういやエクスタシーって何だったんだろう。

「それよりもインドだ」

相変わらず校長先生は何をしてるかよくわからない。さてさて中庭……お、いた。

「教頭せんせ」

「む、カカ君か」

「お久しぶりです」

「知っているか？　ここでは本校の生徒じゃない人間は不法侵入扱いされるんだぞ」

久々に顔見せる生徒にそんなこと言わなくても。

「というわけでまたうちの生徒になりなさい。君がいなくて寂しいのだ」

と思ったら不意打ちに嬉しい言葉がきた。やるなデストロイヤー。
何を壊してるのかよくわかんないけど。

「私みたいな愉快な生徒は他にいないんですか？」

「うむ、さすがに教頭にハゲカツラをかぶせるような生徒はいない」

あ、卒業式のアレ根に持ってたのか。

「残念だねぇ。復帰してあげましょっか？」

「やはり遠慮しておく。ハゲカツラは二度とごめんだ」

「この先カツラじゃなくそうなるかもしれませんよ？」

「ならん。私はハゲん」

なぜ断言できるのかフシギだけど、この人が言うと本当にならないような気がする。

「そうそう、話は変わりますけど」

「ふむ？」

「校長、インドにいるんですよね。何をしてるんですか？」

「カリーを食べておる」

インドちゃん羨ましがりそー。

「今朝メールが来たのだが、見るか？」

教頭が差し出した携帯を覗いてみる。

画面にはこう書かれてあった。

『美味しすぎて鼻血が止まらないですわおほほ』

「辛いカリーを食べすぎたらしい」

「あの、前から聞こうと思ってたんですけど」

「なんだ？」

「校長が外国に行くのって、仕事ですよね？」

「無論だ」

無論なんだ。めっちゃ論じたいことといっぱいあるんだけど。

「ところでカカ君は何をしに来たのかな。遊びに来ただけかね？」

「えっと、私ですね。今日誕生日なんですよ」

「誕生日に小学校に来る意味がわからん」

正論ですハイ。

「お、おめでとうって言ってほしいなーなんて」

「おめでとう」

「あ、ありがとうございます」

「ではプレゼントにこの言葉を送ろう。『常識を壊せるのはせいぜい中学生までだ。今を大切に謳歌するように』以上！」

「はい！　ありがとうございます！」

「解散！」

「さようなら！！」

ふー、教頭は相変わらずだなぁ。しかし勉強になった。中学校にいるより勉強になった。小学校って偉大だな。もっと頑張れ中学校。というか教師Ａ。

「さて、次こそ中学校へ向かおう」

結構時間を取られたけど、まだまだ部活してる人が多いはず。れっつらごー。

## カカの天下８９０「誕生日を祝え、そのさん」（後書き）

なんかこのまま全員に行くとなると思ったより時間かかりそうですな。まぁカカの誕生日からサエの誕生日までひっくるめて『誕生日のお話』ってことにしときましょう。相変わらす誕生日関係ない会話してますけど笑

ま、いつもどおりのんびりお付き合いくださいなー。

# カカの天下８９１「誕生日を祝え、そのよん」

おめでとうといわれるだけなのに長い道だぜ。どうもカカです。

「あ、タケダ」

「カカ君ではないか！」

学校のほうへ向かっている途中でこんなのに出会いました。

「帰り遅いね。部活？」

「いや、勉強していた」

「くそマジメだね。吐き気がする」

「そ、そこまで言わなくても良いではないか！」

「そうかもね、ところで今日、私に言うことは？」

「好きだ！」

「……ほかは？」

「結婚してくれ！」

「……ほかは？」

「む、もっと細かく要望を伝えればいいのか？　では初デートの予

定から」

「くたばれ」

「え!?　ちょ、カカ君!!」

「あんた私のこと好きなんじゃないの」

「その通りだ!」

「今日は何の日?」

「平日だ」

「地獄へ落ちろ」

「な、なぜ!?　おいカカ君?」

「追いかけてくんな」

ふん、所詮は口だけの男よ。

「さて、音楽室なわけだが」

「あらカカ」

アヤちゃん発見。

「コーラス部はいる？」

「やーだ」

「にゃにおー。そんなキッパリ断る子には恥ずかしい想いさせてあげるんだから。みんな！」

突然集結したコーラス部の面々＋ニシカワ君！？

『ハッピバースデートゥーユー！！』

全員で誕生日の歌を歌われた。確かに恥ずかしいけどかなり嬉しい。

「ふぅ、どうよ！」

「ありがとう」

「ふ、普通にお礼言わないでよ！　照れるじゃない！」

愛いヤツよ。

「それにしてもニシカワ君、アヤちゃんが呼んだらすぐ来るんだね」

「まぁ西に住んでる幼馴染だから」

「それだけの理由で私と仲良くしてたの！？」

「それもある」

それもあるんだ。

「ま、まぁいいわ。サエとの結婚記念日にはちゃんと結婚ソングを歌ってあげるからね」

「うん。じゃあ君らの結婚式では私が歌ってあげるね」

「ちょ！？」

「カカ」

「何、ニシカワ君」

「楽しみにしてるよ」

「おっけ」

「に、ニッシー。それってどういう意味で言ってるの！？」

「ノリで」

「ノリなのかよ！！」

「アヤ坊が好きだから」

「え……」

「これもノリ」

「ふがー！！」

誕生日に夫婦漫才いただきましたー。

「続きましてイチョウさんの登場です」

「こんにちは、カカさん。お誕生日おめでとうございます」

「ありがとう。それじゃイチョウさん、何か面白い話を」

「特にございません」

「……え、マジで？」

「はい」

「お姉ちゃんのほうはあんなに」

「姉とわたくしは違いますから」

「それはそうだけど」

「それではごきげんよう」

おしとやかに去っていくイチョウさん。くそー、いつかイチョウ並木に招待してやる。

「あ、ヤナツ」

「お、カカか」

「イチョウさんならあっち」

「さんきゅ。あ、カカおめでと」

「ヤナツって、やなやつじゃなくなったよね」

「照れるぜ」

改心したのは私のおかげだよね。プレゼントが楽しみだ。

……くれるよね？

「あれインドちゃん」

「ん」

「え、くれるの」

「ん」

「あ、ありが――いっちゃった」

メルちゃんとしてならともかくカカとしてはそこまで仲良くなってないからなぁ。

でももらったカレーパンに「おめでと」って書いてあった。可愛いしイイやつだ、あの子は。

食べてみた。

うまっ。

「自分までカレーになりそう」

「カレーとカレーパンは違う！！」

「うわびっくりした！！　い、インドちゃんまだいたの」

「違うんだからね！」

「はい！　すいませんでした！」

「よし」

満足そうに頷いて、てってってーと駆けていくインドちゃん。

ほんとギャップの激しい子である。

「むぐむぐ……次どこいこかな」

それにしても美味いなコレ。

## カカの天下８９１「誕生日を祝え、そのよん」（後書き）

ここ数日、仕事する時間と寝る時間しかなかったので更新が滞ってました……サエちゃんの誕生日までには何とかこの辺の話を書くぞ！

と気合を入れつつ書くのはダラダラした話……

和む。

## カカの天下８９２「誕生日を祝え、そのご」

さて、私の旅もそろそろ終着点です。残る知り合いがそろそろ少なくなってきましたので。

「いたいた、カカちゃん！」

「ユカさん」

「誕生日でしょ、面白いネタないの？」

「あなたそればっかだね。結婚記念日待ってなよ」

「あーあー、それがね？　編集のほうから『百合はいい加減ほどほどにしろ』って言われてるの」

「ゆり？」

「うん、百合っていうのはね」

「カカちゃん、おめでとうございます！！」

「お、キリヤだ。ありがと、ところでゆりって」

「カカちゃんはそんな言葉を知らなくていいのです！」

「なんで邪魔すんのよ」

「いいですかユカさん？　説明してしまったら」

「しまったら？」

「吹っ切れてその道に走ってしまうことが決まってしまいます！」

「いいじゃん」

「いいんですけど」

「あ、いいんだ」

「その道に行くかどうか迷うロマンスを見てみたいと思いませんか？」

「あ、それはネタになるかも」

「でしょう、そんなわけで説明しない方向で」

「わかったわ、そんなわけでごめんねカカちゃん」

どんなわけなのか、さっぱりわからなかった……二人は仲良く帰っちゃうし。

「さて、あと残ってるのは……あの二人か。やっぱあそこかな」

私はいつもの公園に向かった。

「あ、誕生日カカです！」

「ほんとでしゅ、略してタンカでしゅ」

いたいた、クララちゃんとタマちゃん。

「もっと略したらタンですね！」

「タンってなんでしゅか」

「ばっちぃやつです！」

「カカばっちぃでしゅ」

「おーい、置いてかないでー」

この私が話についていけないとは。将来有望な二人だ。

「ところで誕生日の人に言うことはないのかな？」

「ばばぁ！」

「としまでしゅ」

「てぃ」

かかきーっく。

ふみふみ。

「ご、ごごめんなさい！」

「謝りましゅからもう踏まないでくだしゃい！」

「かかとでぐりぐり止めてください！」

「ふん。最近はおとなしくしてたけど私ってば、やんちゃさんだったんだからね」

皆様もお忘れでしょう。え、忘れてない？　そっか。

「で、言うことは？」

「ごめんなさい！」

「違う」

「まだ若いです！」

「気にするなでしゅ！」

「慰めてもらう箇所などない！」

「みぎゃあああ」

「にゅうう」

最近の若い子は「おめでとう」と言うことの重要性を理解していないらしい。というわけで中学生のおねーさんが勉強させてあげることにした。

小一時間ほど。

「じゃ、私はいくね」

「勉強させていただきました！」

「ありがとうございましたでしゅ！」

「はーい」

二人とも従順になった。

「む、カカ様」

「あれゆーた」

もっと従順な男が来た。

「奇遇だね」

「はい、タマ様を迎えにきたのです」

「む？　そういやなんで私まで様？」

「それは今日、あなたが主役だからですよ」

「わお」

「誕生日おめでとうございます」

「すごいゆーた。紳士みたい」

「大人へと向かう未熟な年頃……たまりません」

「よかった、ちゃんと変態だ」

「はっはっは、では」

「またねー」

さてさて、お腹減った……お腹減った？　ああ、忘れてたゲンゾウ三兄弟！

「れっつごー！　と、ちょっと待った」

日を変えて一人ずつ行ったほうがいい。きっと美味しいものをご馳走してくれるはず。今日はトメ兄が作ってくれるしね。

「さてさて、帰りますかね」

誰か一人忘れてる気がするけど、まぁいいや。

「トメ兄、ただいまー」

「おかえり。ご飯もう少しだからな」

お鍋がシューシューいってる。

あれ、誰か思い出しかけたような。

気のせいか。

「ところでお母さん、いま電話したら繋がると思う？」

「や、いま父さんにおんぶしてもらって爆走しながらこっちに向かってる最中だからどうだろう」

「何してんの私の親は」

「おまえにおめでとうって言うために来るんだろ。県外から走って」

「はぁ……どうして私ってこんなに幸せなんだろう」

「僕のおかげだな」

「そだね」

「否定しろよ！」

「なんでさ」

「や、照れるじゃないか」

「適当に言った返事でそんな照れられても」

「マジメに答えろよ！」

「そんなさらりと言ったセリフにマジメに答えろって言われても」

「そだな」

「もっと抵抗してよ！」

「なんでさ」

「や、つまんないじゃん」

「冷めたセリフで返してきたくせに面白さを求められても」

「熱くなれよ！」

「こんな寒い日に熱くなれよって言われても」

「そだね」

「納得するの早いんだよ！」

「これいつまで続くの？」

「父さんたちが帰ってくるまで続けてみよっか」

そんな他愛の無い会話を延々としながら。

のんびりと、私の誕生日は過ぎていくのでした。めでたしめでたし。

## カカの天下８９２「誕生日を祝え、そのご」（後書き）

だらだら話もようやく終わり、次は結婚記念日の話です。

サエちゃんの誕生日まであとわずか！　もう細かい日時設定と現実世界の時間がかなり合わなくなってますが、できる限り合わせるけど無理なものは無理だから納得してもらう方向で。

まぁ、現実でその日になったときに「おめでとう」って心からその人のことを想えればそれでいいんですよ、うん。

いいことっぽいことを言って誤魔化そうとしてませんよ、ええ。

**カカの天下８９３「今夜の二人に乾杯」**

「サエちゃん……結婚記念日おめでとう」

「うん、おめでとー。かんぱーい」

カン。

グラスが鳴った。私たちは赤い液体を喉に流し込む。ワインだ。

嘘です、ぶどうジュースです。

「おいしー」

「うん」

私はゆっくりと周囲を眺める。お洒落な椅子とテーブル、可愛い内装の部屋に、窓を覗けば綺麗な夜空。着飾った私たちの手にはワインっぽいもの。

あぁ、なんて結婚記念日っぽいんだろう。二人きりだし。

「ところでかんぱいってなんだろう」

なぜかそんな疑問が浮かぶ私。

「そうだよねー。おっぱいでもいいよねー」

サエちゃんたらそんなこと言って。

「私もそう思う」

「やってみよっかー」

「うん」

「おっぱーい」

ボイン。

そんな音が鳴ったような気がした。

「しまった、私たちの胸じゃ音なんかしない」

あくまで気のせいだったりする。

「せめてサユカンくらいのボリュームがないと」

「今度サラさんあたりも交えてやってもらおー」

「うんうん」

「他に何があるかなー？」

「サエちゃん、なんかない？」

「んーと、例えばー……響きだけで憧れたりするものの実は大したことがない目上の人のこと」

えと、えと。あれだ。

「せんぱーい」

「せいかーい」

カン。

今度は私だ。

「いつものトメ兄に対するサユカン」

「しっぱーい」

「ざんねーん」

カン。

次サエちゃんね。

「世間の私に対する目はー？」

目？

んーと、あれかな？

あれだよね、あれしかないよね。

「はんざーい」

「こわわーい」

そんな目で見られてることを理解しつつ利用するサエちゃんってば痺れるぅ。

「ここらで普通に？」

「かんぱーい」

「かんぱーい」

カン。

「バッター投げましたー」

「ホームラーン」

カン。

「あれ、バッターが投げたの？」

「だから『カン』とかしょぼい音がしたんだよー」

「そっか、なるほど」

何がなるほどかわからない人は修行が足りないと思う。

「みんなで？」

「缶けりー」

カン。

「すごいねサエちゃん、よく言いたいことわかったね」

「奥さんですからー」

「お、おくっ！？　ぐ、げほげほぐごほっ」

「どしたのカカちゃん。そういう設定なんだよねー？」

カン、どころか、ズガン！　と私の心に響いたよ……ふへへへ。

「旦那様♪」

「殺す気ＫＡ！？」

「うぁうー！？　そ、そんな怒らなくてもー」

口調がアメリカンになるくらいびっくりした。萌え死ぬ。やばい。
もっと言ってほしいけど死ぬ。やばい。

「よし、気を取り直して連続でいってみよう！」

「おっけー」

「今日は？」

「便器にー」

「ちゅーいー」

カン？（とまどう感じ）

「今度こそー」

「絶対に」

「カードで支払いー」

カ、カン？（もっと戸惑う感じ）

「てめー」

「こらぁ」

カン！（わからんものはわからんと吹っ切れた感じ）

「かんかん」

「カンカン」

カン。

……？（やっぱりわけがわからない感じ）

「ツーといえば？」

「カー」

「バーといえば？」

「カー」

バカン。

「サエちゃん、好きだよ」

「どれくらい？」

「いっぱーい」

「かんぱーい」

イヤンバカン。

「私たち、一体何してるんだろー」

「わかんない」

とりあえず乾杯の表現の限界に挑戦してみたんだけど。

「ツッコミ役いないとわけわかんないねー」

「そだね。でも私はこういうのも好き」

「うん、何も考えてないからのんびりできるよねー」

「そうそう」

きっとこの会話が理解できない人は頭を使いすぎなんだよ。フィーリングで生きてる人なら理解できるはず。きっと。

「さて、二人の時間を満喫したところですが」

「下はどうなってるだろーねー」

実はこの場所、サエちゃんちの最上階だったりします。下の階ではトメ兄たちが集まって私たちの記念日を祝ってくれるはずでした。しかしあえて私たち二人はそれを抜け出したのです。だってこのほうが二人の記念日っぽくない？

もちろんもう満足したから戻るけど。

「戻ったらなんて言われるかなー」

「焦らしまくった分、すごく盛大に祝ってくれるよきっと」

「そうかなー」

さぁ戻ってみました。

「主役、登場！！」

めっちゃ堂々と胸を張って！

お、トメ兄が近づいてきた！

「ちょっと来なさい」

「え、なに」

「いいから来なさい」

「いたっ、ちょっとそんな強く」

「せっかく集まってくれた人たち放ったらかして何してんだおまえは！」

「あ、その」

「あぁん！？」

「ごめんなさい！！」

サエちゃ、助け――いないし！！　あぁ！　さては逃げた？　そうかなーとか言ってたし！　ずるい！　卑怯者！　でも離婚はしない！！

「はい、そこに座って」

「はい……」

普通に怒られた。

くすん。

ごめんなさいでした。

でも祝って！

お願い！

ていうかサエちゃんどーこー！？

## カカの天下８９３「今夜の二人に乾杯」（後書き）

二人とも、おめでとう。乾杯！

ビールが美味い！！（マジ

## カカの天下８９４「待ちに待ちわびた待ち」

――１０月３１日。

こんにちは、カカです。明日は待ちに待ったサエちゃんの誕生日！　もう前日から張り切って準備しております！

「おいカカ、電話があった」

「なにトメ兄」

「サエちゃんな、急な祖父さんの呼び出しで旅行に行くことになったんだと」

「え、明日!?」

「ああ。だからパーティは延期だって」

「そんなぁ……」

でもまぁ、仕方ないか。なんか強引なジジィだって聞いてるし。偉いらしいし。逆らうと面倒くさいんだろうし。

「じゃ、お祝いメールだけしとこ」

――１１月２日。

サカイさんの家にてパーティの準備を進める私たち。

しかし。

「ごめんねー、みんなー」

間延びした声で主催のサカイさんが言った。

「サエねー、じじーのワガママで海外まで連れまわされてるらしいのー」

「なんですとー！？」

せっかくいつものメンバーは集まってて、料理の準備もゲンゾウ三兄弟にしてもらってたのに！

「ごめんねー、なにせ業突張りの偏屈思いつきジジィだからー」

「や、そこまで言わなくてもいいんじゃ」

「私のサエを奪ってるのよー？　死ねばいいのにー」

「まぁまぁ落ち着いて！　み、みんな？　せっかくだしここは普通に食事会といこうじゃないか」

トメ兄の一言で集まったメンバーはしぶしぶ納得。幸いメインとなる料理の用意はまだこれからだったらしく、次に持ち越すこともできるらしい。

はぁ……サエちゃん、早く祝ってあげたいよ！

――11月4日。

まだか、まだなのか。

「ゲンゾウさん、料理大丈夫？」

「もう食材が限界だ。今日中に使って食っちまおう」

「えー……」

「心配すんじゃねぇ、また新しいの仕入れてきてやるよ。ただ、安く仕入れられるもんはもうねぇから、もっと高級なもんになっちまうがな」

「大丈夫なの？」

「ま、スポンサーが金出してくれるだろ」

スポンサー。あ、サカイさんか。

「とにかく今日も食事会だな。全員呼べ」

――11月7日。

「明日、サエちゃんが帰ってくるそうだ」

「トメ兄ほんと!?」

「おお、サカイさんが謝罪とジジィの悪口を一緒に連絡網まわしてる」

「よし、明日こそは!!」

――そして当日!

ようやく始まったパーティはものすごく豪華になっていた。遅れた一週間の中で装飾は増え続け、料理も都合により高級なケーキと料理の数々が並ぶことに。

そして主役の登場!

「サエちゃん、誕生日おめでとおおおおおおお!!」

湧き上がる大歓声! 皆、溜まりに溜まったお祝いの気持ちを一心に叫ぶ!! やった、ようやく祝うことができる! 私も待ちくたびれて最初に用意したプレゼントから更に色をつけたりしちゃって何個も……

「……なぁ、カカさんや」

「……なんだい、トメさんや」

「いま、僕はすごく失礼なことを考えてる」

「奇遇だね、私もだよ」

「こんなことを考える僕らには愛がないのだろうか？」

「や、ほら。先日、似たようなことやった人だし私。トメ兄はそれを怒った人だし」

「そうか、そうだよなぁ。でも、まさかなぁ」

「見てよ、あのサエちゃんの嬉しそうな顔」

ニコニコだ。ものすんごく。

そんなサエちゃんは私たちの姿に気づくと、小走りでやってきた。

「おめでとう、サエちゃん！」

揃えて言った私とトメ兄、しかしその微妙な顔に気づいたのか首を傾げる。

そして納得したように頷き、

「ね、カカちゃん。焦らすなら、こんな風にしないとー」

「やっぱりか！　やっぱりわざとなのか！？」

「サエちゃんてば！　ほんっとサエちゃんなんだから！」

「そんな褒めなくてもー」

「もう！　私、本当に祝えなくて苦しかったんだからね！」

「今、祝えてどんな心境なのー？」

「最高！」

「じゃーいーじゃーん」

「いいけど！　ほらトメ兄、私にしたみたいにお説教してよ！」

「よしきた！　いいかサエちゃん、周りに迷惑をかけて――」

「皆、すごく楽しそうですよー？」

「それは結果論であって。今までの皆の予定とか」

「きちんと事前に連絡が回るようにしましたよー」

「で、でも実際にはいままで準備した料理とか」

「何度か食事会で消費したから無駄なく楽しめたと思うんですけどー」

「確かに！　や、確かにそうなんだがよく知ってますね！？」

「私は溜め込んだ幸せをもらってー、皆さんは長い準備期間で良いもの食べて、最後に弾けて幸せー。完璧じゃないですかー」

「完璧だ！　ダメだカカ、僕にはこの子を怒れない」

「可愛すぎるからか」

「人の話聞いてました！？」

聞いてたけど細かいことはもういいや。とにかく私も溜めこんできた『祝い』を爆発させなければ！

「サエちゃん、おめでとぉ！！」

「ありがとーカカちゃん！」

あー、もう。

この笑顔があればなんでもいいや。

## カカの天下８９４「待ちに待ちわびた待ち」（後書き）

本作キャラ、そして読者の皆様。大変長らくお待たせいたしました。
しかし読んでいただけるとわかる通り、お待たせしたのはあの子なので。
許してちょ（ぇ

とにかくサエおめでとう！　その腹黒さに乾杯！！

# カカの天下８９５「スーパーは万能です」

こんにちは、トメです。もう薄暗くなる夕時タイム、僕らは買い物にスーパーへ来ていたのですが。

「トメ兄、お腹すいたねぇ」

「すいたなぁ」

僕とカカは今、行列に並んでいます。何のかというと……何のかわかりません。

「もう二十分は並んでるよぉ」

「あれ食べたいって言ったのはカカだろ」

「そうだけどぉ。こんなに時間かかるなんて思わなかったんだもん」

「大体この先には何があるのさ」

「わかんないよ、人が並びすぎててわかんなかったんだから。でも美味しい匂いはした！　食べたい！」

つまりは野次馬根性とノリだけで並び始めたわけです。

「うーん……あの、すいません」

勇気を振り絞って、前に並んでいる女性に声をかけてみた。

「はい？」

「あの、これって何の列なんでしょう」

「わかりません」

わからんのかい。

「匂いに釣られまして……」

皆同じか。

「あなたもお仲間ですかぁ。これで売ってるのが食べ物じゃなかったらどうしましょう」

「匂いの発生源を殴って終わりでしょう」

「ですよねー」

ですよねーでいいんだ。

「ん」

くい、くい、と引っ張られる服のすそ。

「どした、カカ」

「あのね、ナンパはそのくらいにして」

「してねぇよ！」

「いやん」

「照れるなそこの他人！」

「そうだよ他人」

「そ、そこまで言わなくても……」

「面白くない他人は放って置いてさ、もっと面白いものがいっぱいあるんだよ」

「どこにだよ。ここはただのスーパーだぞ？」

「うん、スーパーだと思って侮ってた。結構、面白い人いっぱいいるんだね」

あれ見て、とさすカカの指の先には……

「あーれーたーべーたーいー！」

「ダメ！　帰るの！」

ダダをこねる子供、それを引き摺る親という定番の組み合わせが。

「普通じゃん」

「あーれーたーべーなーいーとーこーろーさーれーるー！」

「誰に」

普通じゃねぇ。

と、そこに通りがかった親子がこんなことを喋っていた。

「あんた好きや思てリンゴ買ったら重いのなんのって……けいちゃんのおでこみたいやわぁ」

けいちゃんのおでこ、どんだけ重いんだ。

更に通りすがりのカップルのうち、男が女に怒鳴っていた。

「だって高いパンツじゃないとまずいだろ！？」

なにが？

「ごめんなさい！」

謝らなくていいよ彼女さん、多分だけど。

「ね？　ここには面白い人だらけだよ」

「本当だ」

「だからこの女の人は面白くないよ」

「本当だ」

「そんな素直に頷かなくても！」

「ここはスーパーだからなんでもあるんだね。きっと面白い人も笑いを売ってるんだよ」

「なるほど」

「つまりこの女の人は笑いを売れないから、きっと売れ残りなんだよ」

「なるほど」

「確かに売れ残って行き遅れてますけど納得されると腹が立ちます」

「ごめんなさい」

「私もごめんなさい」

「そんなに素直に謝られると許すしかないじゃないですか！」

どうしろと。

「ところでおねーさん」

「な、なに？　お嬢ちゃん」

「ここまで仲良くなったんだから自己紹介しようよ」

「は、はぁ。別にいいですけど。私の名前は」

「じゃあだ名をつけてあげるね」

「本名聞く前に！？」

カカはそういうやつだ。

「笑いを売れないんだよね。ノー笑いだよね。一般人だよね。イッパンジン……略してノーパンでいい？」

カカはそういうやつだ。

「絶句です！」

「絶句してないじゃん」

「絶句を通りこして叫ぶほどビックリしたんです！」

「変なノーパン」

「そのあだ名やめてください！　とてつもない文章になってますよ！」

「あ、列が進んだよノーパン」

「まるで私が列の先にパンツを求めてるみたいな言い方やめてください！」

「求めてるのは食べ物だっけ。パンツ食べるの？」

「どっ、はっ、ひゃえ！？」

「おぉ、びっくりしすぎて変な声になってる」

しばらくノーパンさんで遊んでる内に列は進み、僕らは無事に目的地へとたどり着きましたとさ。

あったのは最近よく見る移動販売車ってやつだ。売ってたのは手羽先、買ってその場で食べたけど、たれが濃厚で美味しかった。

「スーパーって色々あるね」

「そだな」

今度からは『笑い』の売り物にも着目してみよう、と思う僕でしたとさ。めでたしめでたし。

ノーパンさんはいつの間にかいなくなってた。きっと下着売り場に行ったんだろう。めでたしめでたし。

## カカの天下８９５「スーパーは万能です」（後書き）

お久しぶりです！　もー毎回毎回更新に間が空いて嫌になるんですけど、どんどん忙しくなってるので勘弁していただきたい。
で、そんな仕事の中で仕入れたネタがこれら。わりと大半実話だったりしたりしなかったり。

もーちょっと仕事に慣れて余裕出てきたら更新も増やしたい……ので体力作り頑張ります。ごっつー寒くなってきてますが、皆さん体調管理に気をつけてくださいのー！

# カカの天下８９６「第?回コタツ記念日」

こんにちは、トメです。最近はめっきり寒くなってきましたね。

「めっきり！」

うちの妹もこう叫んでおります。

さて、皆様はコタツ記念日というのを覚えておいででしょうか？
毎年コタツを出すたびに人が集まってくるという摩訶不思議なイベントです。

「早く出してくださいよっ」

「さむーいー」

「コタツに入りながらビール飲みたいぜ」

「ふふふー、テンちゃん。ちゃんと用意してありますよー」

「おぉ！　あたしのも頼むよサカイちゃん」

「か、カツコさん。私もいいですか？」

「サラさんも飲むんですねぇ。え、わたし？　あーあー、飲めないんでいいです！」

「ユカさんはこのキリヤンの前でしか飲まないのです！　ふはははは！」

「キリヤンの頭がおかしいでしゅ」

「きっと寒いからです！　クララもおかしくなりそうです！」

「む、クララ殿。そんなに薄着では寒くて当然です。目の保養になるので、そのままでいてください」

「ゆ、ゆーたさん。そこは上着とか貸してあげるところでは。あ、僕シュー君です、忘れてる人のために念のため」

「トメ兄、まだ？」

よし、一言いいか？

「こんなに大勢で一つのコタツに入るわけないだろ！？」

「じゃあ交代制でいこうよ」

「おまえらは何がしたいんだ！？」

「コタツに入りたいに決まってるじゃん」

「自分ちで入れ」

「わかってないなぁトメ兄。うちのコタツと他所のコタツを一緒にしないでよ」

「一緒だろうが。主にサイズが」

「いいじゃん、皆が集まれば体温で部屋が温かくなるし」

「じゃコタツいらないだろ」

「それとこれとは話が別だよ」

「いま現在どういう話になっているのかさっぱりわからんのだが」

そんな堂々巡りの会話をカカとしているうちに、集まったバカどもはすでに宴会を始めていた。

「かんぱーい！　いやぁもう今年も終わりかー！」

「カツコさん、結構まだ日はありますよ」

「サラさんは頭がかてぇなぁ」

「皿ですからねー」

「サカイさん、あなたは本当にいつもいつも」

「まーまー、そんなに怒ると割れますよー」

「そうそう、こんだけ寒けりゃもう冬だ、年末みたいなもんだろ」

「そ、それは極論だと思いますテンカさん」

「いちいちツッコミがかてぇんだよ。ほれ飲め、そして柔らかくなれ」

「んぐんぐんぐ……かめさん」

「おぉ、もう酔ったのか。早速わけわかんねぇこと言い出した」

「失礼、私にも一杯もらえますか」

「あーあー、キリヤが飲んだら帰りどうするのよ！」

「泊まっていけばいいじゃないですかー」

「サエすけ、それ君が決めることじゃないわっ」

「お泊り……むふふ」

「ゆーたが怪しげな笑いをしています！」

「ころすでしゅ」

「タマさま！　そんなことを言っては逆に殺されます！　きっとなぜか僕が」

ワイワイがやがやと……

「なぁカカ」

「ん？」

「もうコタツ関係なくね？」

「そだね。何かつまみ作ってよトメ兄」

「結局ただの宴会か……ったくもう！」

「なんでそんなに怒ってるの」

「作るなら作るで材料用意しとかなきゃならないから事前に連絡くれ！」

「あ、作るのは別にいいのね」

「何にすっかなー。茄子あったし、きのこもいくつか……」

「コタツに合った料理にしてね」

「例えば？」

「みかん」

「今から作れと？」

「そうコタツが申しております」

「そんなコタツは片付けてやる」

「や、やめて！　実は私がそう言ったの！　コタツは悪くない！！」

「そうですね」

「そうですね」

「そうですねー」

「そうですねっ」

「おやサエちゃんサユカちゃん。何か食べたいものある？」

「コタツ」

「カカは黙れ」

「私は中学生らしいものが食べたいですー」

「レベル高いこと言うな」

「わたしはチャーハンが食べたいですっ」

「普通のことを言うな」

「「「じゃあ何を言えと」」」

さーて適当に作るかな。

そして皆でコタツを囲んで宴会しましたとさ。

結局、コタツには誰も入らず。だって誰か入ったら他の人も入りたがるだろ？　だから本当に囲んだだけだった。

意味ねー。

## カカの天下８９６「第?回コタツ記念日」（後書き）

ひっさびさの更新です！

いやー正直仕事が忙しすぎて身も心も限界間近です。一月始めさえ過ぎれば暇になるはず……それまで死にかけですが、ちゃんと今年の終わりっぽい話は書きたいと思います。まぁ忘年会ピークは来週までですので少しは身体が空くかと。

いや、ホント限界っぽかったんだけど、ふとカカたちの顔が浮かんで、書いてみたらすごく癒された気がします。やっぱりたまにはこいつらの顔みないとだめだなーと思いました。

毎日更新がいつのまにやら曖昧極まりない更新になっちゃいましたが、またお付き合いくださいな。

しかしウチの今年のコタツ記念日は早かった。寒すぎでしょ最近！

# カカの天下８９７「頑張れクリスマス」

皆様お疲れ様です、トメです。

なぜいきなりお疲れ様などと言ってしまったかというと、僕自身が疲れているからです。

「あぁー」

コタツに入って寝転がり、おっさんくさい呻き声を出す。

「今日は早く帰れてよかったぁぁ」

先月に社員が二人も辞めた上に新任の上司が入ってきたおかげで年末の忙しさは異常だった。残業と休日出勤の繰り返し。仕事して寝て仕事して寝て仕事して、という地獄をくぐり抜けた僕の身体は疲労困憊。立ち上がることすら面倒になるほど気力が尽きていた。

「ご飯、は食べなくていいや」

面倒くさい。

「喉渇いたな」

水を飲みに行くのも面倒くさい。

「寝ようかな」

それが一番ベストな気がした。

「トメ兄！」

そこに、そんな安らぎを邪魔しようとするヤンチャさんが現れる。

「メリークリスマスイヴ！」

ああ、そうか。今日ってそうだっけ。完全に忘れてた。

「今日はサカイさんちでクリスマスパーティーだよ、準備を手伝いにいっこー！」

こいつは元気でいいなぁ。

「あれれ、トメ兄てば最近ノリ悪い。どったの」

疲れた。

なんてことは言いたくない。子供にそんな泣き言をこぼしてたまるか。や、何度かこぼしてしまった記憶もあるが、僕だって意地を張りたいときがある。

「悪い、あんま寝てないんだ。今日のところは勘弁してくれ」

えー、とこいつは不満をこぼすだろう。でも僕には全く元気が残ってない。きっとするであろうプレゼント交換の用意もないし、カカへのプレゼントすら考えてなかった。

わかってくれカカ。今回の僕は無理だ。

「わかった」

「わかったの！？」

「何をそんなに驚いてるの」

「い、いや」

こいつがこんなに物分かりがいいとは思わなかった。

「じゃ、いってきます」

あっさりと僕を置いて、カカは出かけてしまった。

「そうだよな」

カカも中学生だ。いつも僕にべったりだった頃とは違う。

「寂しいけど、ありがたい」

意識が落ちていく。身体を疲労という重みに支配されながら、なんでこんなに疲れなきゃいけないんだろう、なんでこんなに頑張ってるんだろうなんて、そんなことを考えていた。

ふと、目を覚ます。

「２２時」

三時間は寝ただろうか。

「今頃カカは」

「ここに」

「そう、ここでクリスマスパー」

ぽかんと口を開けて固まる。サカイさんちに行ったはずのカカがそこにいた。

「何してる」

「クリスマスパーって何」

「質問に答えろ」

「それよりクリスマスパーが気になる」

「そんなことはいいから」

「よくない。何なのクリスマスパー。じゃんけんのパーと違うの。頭がパーなの。クリスマスはどう関係してくるの」

「何がそこまでおまえの琴線に触れたんだ」

いや本当にどうでもいい。

「おまえ、クリスマスパーティーは」

「蹴った」

「なにぃ！」

あのカカが？

「あ、あぁ。何かを蹴飛ばしたらトンデモナイ事態になって収拾がつかなくなって終了したから早く帰ってきたのか」

「んなわけないでしょ」

「だってカカだし」

「あのねトメ兄、私はもう中学生なんだよ」

「でも所詮はカカだし」

「クリスマスパーティーなんかで浮かれないし」

「嘘だ、カカだもん」

「料理もできるようになった」

「カカなのに？」

「さぁ食え！」

「ぎゃあああ」

「いい加減に怒るよ！？」

だって信じられないのだ、コタツの上におかゆが湯気を昇らせているのが。しかもインスタントではない、不揃いに切られた野菜たっぷり。

「カカ」

「なに」

「クリスマスパーティー、行ってよかったんだぞ？」

パーティーより僕を選んでくれたのは嬉しい、でもこいつがクリスマスを楽しめないのは嫌だった。

「仕方ないじゃん」

しかしカカは恥ずかしそうに、しかしはっきりと言った。

「もうすぐお年玉なんだから」

「それは仕方ありませんなコノヤロウ」

「ま、クリスマスプレゼントってことで」

「……悪いな。お返し用意してなくて」

「その分お年玉に期待してるから大丈夫」

「おまえ、サエちゃんに似てきたな」

「嫁ですから」

「そですね」

笑顔に陰りはない。無理はしていない。長年一緒にいたカンがそう言ってる。

じゃあ、こいつは本当にこれでよかったと思っているということか。

それは正直、嬉しい。僕を気遣ってくれたことも。おかゆなんて慣れないものを作ってくれたことも。

僕が頑張ってきた甲斐があったというものだ。

「お、うまいじゃないか」

「何せ中学生だからね私ゃ」

「そうか、料理できるようになったって言ってたな。他には何ができるんだ？」

「これしかできん」

「それできるって言わない」

「じゃあ今度教えてよトメ兄」

「望むところだ。何が作りたい？」

「雑炊」

「なんでそんなんばっかなの」

「雑炊とおかゆは違う！」

「ごめんなさい」

くだらない会話が続いていく。なんだか久々のような気がした。

自分が何のために頑張っているのか。僕は落ち込んだり疲れ果てたりする度に、こんな時間で再確認している。

そう、僕が頑張っている理由は。

「私のお年玉のため」

「黙らっしゃい」

理由は。

言葉に出来ない、温かいモノのため。

「おかゆまずかった？」

「黙れというに」

「や、だって温かいモノっておかゆのことじゃないの？　言葉に出来ないって、変な味ってことかと」

「……僕、声に出してた？」

「独り言全開」

「メリークリスマス！！」

「や、そんないきなり叫んで誤魔化そうとしても」

「メリークリスマスー！！」

その頃。

パーティをすっぽかされたサエとサユカ。

「クリスマスに結ばれるわたしとトメさんっ」

「どうも。サエですー。ただいまジョッキをあおりながらサユカちゃんの妄想を聞いているところですー」

「そしてカカすけは妹に！　あぁ、あの小生意気な小娘がわたしをお姉様と慕ってくるなんて快感っ」

「ちなみに飲んでいるのはジンジャエールですー。なんとなく名前がお酒っぽいので気分で酔っ払ってます」

「カカすけはわたしのことをどんな風に言うかしらっ。ねぇねぇ、サエすけはどう思う？　カカすけの声真似してみてよっ」

「ねーちゃん、金くれ」

「言いそうっ！　じゃなくて違う！　ねーちゃんじゃなくてっ」

「お姉ちゃん。略して、おちゃん、でいいね。というわけで、おっちゃん金くれ」

「おっちゃんって言ってるしっ！　お姉様とお呼びっ」

「おねえさま。略して、おさ。ねぇねぇおっさん金ちょーだい」

「なんで略して～の呼び名に『っ』とか『ん』とか余計なオプションがつくの！」

「カカちゃんはこう言うよ」

「言いそうだけどっ。あとなんで毎回金をせびるのっ」

「私の婿だもん」

「そうだった！」

「乾杯」

「乾杯！」

メリークリスマス。

## カカの天下８９７「頑張れクリスマス」（後書き）

はい、ド年末にクリスマスの話を無理矢理お届けしました。すいませんこれが精一杯！　そらもー今年は話中のトメと似たような感じで過ごしてたもんで限界でした！

今年はリアルの仕事が波乱万丈でカカ天を全く書くことが出来ませんでした。でも月に何回か書く時間、そして感想をくれる読者様の声を聞くたびに、もっと書きたい。もっと続けようという気持ちが湧いてきます。

私事ですが、来年からは仕事も一新します。落ち着いた時間にまた更新していきますので、どうかお付き合いいただける方はカカたちを見守ってやってください。

それでは皆様、よいお年を！

とりあえず年末年始という形で次は書きます！

# カカの天下８９８「恵みのある一年を願って」

「世も末だね」

「世も末だよー」

「世紀末ねっ！」

年末だと言いたいだけです。あ、どうもトメです。もうすぐ今年が終わる直前、今夜は我が家にカカたち仲良しトリオが集まって、コタツに入りながら紅白を見ています。

「トメ兄」

「なんじゃらほい」

「紅白ってさ、なんで女性は紅なの。白の反対っていったら黒でしょ」

「ばかねぇカカすけ。黒だと『女性』って感じがしないじゃないのっ」

「え、でも」

じー。

「なんで私を見るのー？」

「黒＝サエすけ、ではあるけど。わたしたちにまでそれを当てはめ

ないでほしいわっ」

「確かにサユカンは紅、っていうか真っ赤な感じだよね」

「燃え滾る恋の炎よっ！！」

「暑苦しい」

「なによぉ。ブラックホールみたいな黒よりマシでしょっ」

「だからなんで私を見るのー」

やかましいやつらだ。

「あのなおまえら、昔から紅一点という言葉があってだな」

「紅組は一点しかもらえないのか」

「ひどいわっ！　男尊女卑の世界ねっ」

「サユカちゃん難しい言葉知ってるねー」

「だ、だんそ？」

「あら、カカすけってば知らないの？　この言葉」

「知ってるよ！　昔、よく食べたよ」

どうやって。

「辛口だよね」

ワケがわからないながらも何となく合ってる気がする。

と、まぁくだらないことを喋っているうちに時間は経ち、あと10分で年が明けてしまう。

「小娘どもよ、今年はどんな一年だった？」

なんとなしに聞いてみると、三人は姉妹のように揃って「んー」と遠い目をして考え始める。

「今年の目標を達成できなかったわ、トメさんっ」

なんで僕に言うサユカちゃん。

「来年こそ達成しますからね、トメさんっ」

だからなんで僕に言う。

「ちゅーできなかったねー」

「いいいい言うなサエすけっ、ていうか何で知ってるのっ」

「私はなんでも知っているー」

それもなんでだ。

「最初の目標は結婚だったんだよねー」

ごふ！

「ふん、わたしも中学生になって勉強したわっ。この歳じゃまだ結婚はできないって」

も、もうちょっと早く学ばれてもよろしいんじゃなかろうか？

「だから目標変更を余儀なくされたのよ。来年は必ず達成しますからねっ」

きゅぴーん、と開き直って俺を狙うサユカちゃん。相変わらず反応に困る。とりあえず何を言っても茶化されるのは目に見えているので沈黙する。

「じゃー私の目標はそれの阻止でー」

「なーんーでーっ！？」

「困ってるサユカちゃんが可愛いからー」

「いいもんっ、困ってあげないもんっ」

そうやって不貞腐れてるほうが可愛いぞ、などとは思っても口にしない。周りがうるさいから。え、二人きりなら言うのかって？おまえもうるさい。

「そもそもサエすけの今年の目標はなんだったのよっ！？」

「いくらだっけなー」

「金額なのっ！？」

もう何回も心の中で言ってるけどあえて繰り返そう。なんでだ。

「カカすけもなんとか言いなさいっ」

「なんとか」

「あぁもうわたしの友達ってこんなんばっかりっ！」

何を今更。

「で、随分と考え込んでたけど。どうしたんだカカ」

「や、今年ってあんまりイベントなかったなぁと思って」

「ふむ、確かにな」

むしろ小学校時代に色々とありすぎた感じだけどな。今年はカカは中学に上がり、僕の仕事も忙しいことが多かった。

「なんでだろ」

「それが大人になるってことなのかなー」

「むっ、そういう言い方、なんか嫌ね。どんどんつまらなくなってく気がするわっ」

中学の段階でそんな結論に達するのもどうかと思うが、こいつらを見ていて小学生はいいよなー楽しそうで、とか思っていたのは事

実だ。

「よし、来年の目標を決めたよ」

「トメさんの唇は渡さないわっ」

「あげるよそんなもん」

「私にもくれるー？」

「や、サエちゃんのが私のだからダメ」

「そだねー」

「そうなのっ！？」

おまえらにとって僕は何なんだ。

「とにかく、来年の目標は」

なんとなく想像はつく。

面白いことを探していこうとか、そんな――

「私、もっと面白くなるよ！」

微妙に違った。

……え。

「話題性を増やす」

……もっと？

「新しいボケを探す」

……もっと？

「トメ兄がツッコミに忙しくなるくらい」

も、もっと！？

「変なやつと思われても、泣かない！」

こいつは一体どうなるんだ。

「あ、年あけるよー」

「あと一分ねっ」

一分後、妹は一体どうなってしまうのやら。恐い。ともあれ愉快な一年を願って――

皆さん、あけましておめでとうございます。今年もよろしく！！

# カカの天下８９８「恵みのある一年を願って」（後書き）

あけましておめでとうございます！！（遅

ようやく書けました！

大晦日の話が（超遅

いやね、ちょっと来月からとある居酒屋の店長さんやることになったりと色々と忙しかったんですよ（マジ

しかしカカの言うとおり、去年はイベントが少なかった。リアルの方では怪我するわおたふく風邪なるわ異動の嵐だわで盛り沢山だったんですが、カカ天のほうはいまいち書ききれなかったです。せっかくこいつらが中学生になったのに……成長の過程としてはある意味リアリティがあるかもしれませんね。しかしそれだけでは面白くない（私が

今年も忙しくなること必至です。しかし！

カカ天だけでなく、色々なことを書いていけたら、と思います。公開するかは別として。

ではでは皆様、大幅に遅れまして本当に申し訳ないのですが、カカたちともどもヨロシクお願いいたします！

# カカの天下８９９「あくしゅー」

「や、どうもカカです」

「知ってるけど」

どーもどーも、と気さくに握手を求められた僕はトメ、そして求めているのは名乗った通りカカです。

「どうもどうも」

「はぁ、どうも」

とりあえず握手。にぎにぎ。

「で？」

「失礼しました」

「終わりかい」

行っちゃった。なんだったんだろう。あ、ちなみに現在は何の変哲もない夕方。そろそろ夕飯の準備かなーと思ったところにカカがやってきたわけです。

「じゃじゃん！」

「今度はなんだ」

「カカ、登場！」

「そうですか」

「どうもどうも」

「何がしたいの」

とりあえず握手。にぎにぎ。

「さらば」

あ、また行っちゃった。なんだろう。今までの経験上で言うと、この二回はフェイク。三度目あたりで手に何か仕込んできて僕に握らせる、というイタズラがありうる。

「私がカカだ」

「ほらきた」

「褒美に握手してやろう」

「なんの褒美だ」

「いつもありがとう」

「あ、はい。どうも」

改まって言われると照れるね。そして握手――と、そうはいかな

い。

「てい！」

「あぅ！？」

チョップでカカの手を払ってやった。案の上その手には……あれ、何もない。

「……えぅ」

なんか捨てられた子犬のような表情のカカ。

「ご、ごめん」

「……ん」

「あ、うん。握手な。ほら、あくしゅー」

「……ん」

なんだ、本当の握手してほしいだけか。甘えてきてんのか。なんでだ。

よし、名探偵（カカに関してだけ）トメ、登場。

推理しよう。

カカは握手したいだけ。

握手、つまりは手を握る。手を握りたいだけだとしたら？

理由を予測。一、ただの気分。二、心境が不安定。三、最後に何か企んでいる。

前後の状況を確認。出現が唐突――いつものこと。しかし手を払った後の反応が若干弱気なことから解答『二』が有力候補。まだ手を離さずにしょんぼりしてることからも説は補強される。あとこれ少し可愛い。

精神的に不安定になっている原因を予測。カカの心を揺さぶる点において、最近イベント等が少ないことも考慮し単なる人間関係の悪化が最有力と考える。家族関係の問題に関しては真っ先に僕の耳に入ってくるはず、教師関係についてはおそらく違う。カカは中学ではおとなしくしているし、教師Ａだかの話を聞く限りだと周囲のウケはいいらしい。つまりは友人関係が怪しい。またかよ。

なんだかんだで大人への階段を踏み出しているカカが恥を忍んで僕に甘えてくるということは、よほど落ち込んでいると見ていい。サエちゃんかサユカちゃんの親友連中関係だろう。ではどちらか、と考えると……

「サエちゃんとケンカでもしたか」

「なんでわかったの！？」

当たりだ。サユカちゃんは時折暴走するものの空気を読むのが結構上手い。どちらかというと個性の強いカカとサエちゃんの方がぶつかりやすかったりするのだ。

「トメ兄、すごい」

「はっはっは、これは綿密な推理によって」

「ま、こんなの直感ですぐわかるよね」

「え、あの、僕はちゃんとした推理で」

「サユカンにも『誰でも君の顔見ればわかるわよ』って言われたし」

「えと、その……そだね」

僕の長考はなんだったんだろう。

「ケンカの理由は？」

「ん……大したことじゃないんだけど」

「そっか。じゃ買い物いってくるわ」

「えぇ！　話聞いてくれないの！？」

「大したことじゃないんだろ。だったらちょっと待ってろ。美味いもん作ってやるから、食いながら話せばいい」

とりあえず元気を出すのが重要だろう。

「買い物、一緒に行くか？　手、繋いで」

「そんなキモいことしないよ」

「おまえさっき何してた」

「握手してただけですけど？」

……そうですか。人が気を利かせたのに。

や、考えてみれば恥ずかしいな。やっぱしないでよかった。

「じゃ、いってきます」

「トメ兄」

「なんだ、やっぱ行くか」

「行かぬ」

固い意志が感じられる。

「でも、帰ってきたら、また握手して」

「あいよ」

なんだかね、ここまで可愛い妹って他にいるのかね……オイそこのおまえ、いまシスコンがどうとか思っただろ。違うからな。

「何作るかなー」

辛いもんでも食わせて渇入れてやるかね。

## カカの天下８９９「あくしゅー」（後書き）

握手って便利ですよね（ぉぃ

さて、あざとい発言から始まりました。どうもお久しぶりのルシカです。順番でいくと新年の話を書くところ……ですが、今回は普通の話にしました。なぜなら次はカカラジ、そこで各キャラの新年特集をしようという魂胆だからです。おたよりについては更新停滞のこともあり、紹介できそうな数が限られているので。もちろん掲載までに投稿があれば考えますが。

今回の話の続きは一話飛び越えてまた書きまっせー。少々お待ちを。

## カカの天下９００「第三十二回、カカラジ！」

もしも、未だに毎日カカ天が書かれていたら。

「私、そんなに毎回おもしろいことできるかな」

「大丈夫だ、カカ。おまえは大体毎日おもしろい」

「そう？　例えば今日はどこがおもしろい？」

「まゆげ」

「そんなにほめるなよ」

まゆげについてだけで一話を書く、ありですね。

もしも、カカが中学生になったのを期にマジメになったら。

「サエちゃん」

「カカちゃん、なにー？」

「離婚しよう」

「なんでー？」

「中学生で結婚は、おかしい」

「いまさら何を言ってるの」

「だからお付き合いから始めよう！」

「女同士なのはいいの？」

「うん」

あんま変わんない。

もしも、カカ天がアネ天になったら。

「お姉の天ぷら？」

「まずそー」

「お姉の天下？」

「おう」

「今もそうじゃない？」

「……そだな」

あの人を縛るものは何もない。

もしも、カカ天を読む人がいなくなったら。

「私、泣いちゃう」

「僕も泣いちゃう」

「それはうざい」

うん。

「はい、そんなわけで久々のカカラジが始まったわけですが何だこれはー！　暗い！　そして洒落にならないもしもの嵐！　一体何があったんだ！　誰だこんなの投稿したのは！　これは反乱か、書くなら書くでいい加減にしやがれという読者たちの要望か！　そんな動揺を隠しつつ笑顔を見せる私は香加です」

「まったく隠す気がありませんがぶっちゃけこのもしもは僕も不安です、留です」

や、驚かせちゃってすいません。実際私自身、この連載ペースはヤヴァイなーと思ってこんなこと書いちゃいましたがちゃんと書き続けますよ、何せ記念すべき９００回！

「記念すべき９００回に不安の影を落とすな！」

現実は見つめないとね。

「うわ後ろ向き」

違う、後ろ向いたり横向いたりしながらも歩く方向が前ならそれでいいんだ。

「なんかよさげなこと言ってるけど、ならちゃっちゃと書きなよ」

ごめんなさい。

「話がひと段落ついたところで一応恒例の文章を。えーこのカカラジは本編と別次元のお話です。ナレーションに参加している私たちはあくまで本編に出てる人とは別人ですのでご注意を」

「とはいえ、本編世界に干渉はできなくても覗くことはできる」

「留兄のえっち」

「何を覗くと思ったんだ、香加は」

「お風呂」

「誰の」

「ゲンゾウさんの」

なんてえっちな！

「ほざけ。なぜそこでその人をチョイスする」

「好きでしょ？」

「好きなわけあるか！　どうせ覗くなら――」

「わくわく」

わくわく。

「さて、そんなわけで今回は皆の新年を覗いてみよう」

「留兄の初覗きは誰の裸？」

「いつも誰かの裸を覗いてるような言い方するな」

覗いてるくせに。

「作者が言うと本当っぽいからやめてくれます！？」

さて。そんなわけで今回は皆さんの新年の様子を見てみましょう。

「さりげなくスルーされると僕の言動が目立つんでやめてくれます？」

「でもさー。今さら新年の様子なんて、皆知りたいかなー？」

「無視しないでくれます？」

香加、じゃあ聞いてみるが、いろんなドラマや漫画、小説にはクリスマスのシーンが腐るほどある。しかしそのシーンをクリスマス当日に読む人がどれくらいいるだろう。

「……あんまいないと思うけど」

そうだろう。つまりはそういうことだ。

「でも毎日更新とかしてた作品でやると……って問題だよな、これは」

さてサクッと一人目いってみよう。

「あ、逃げた」

とある神社の一月一日。

「カツコさん！！　カツコさーん！？　もう、どこいっちゃったんでしょう！」

「ほんとにねー。珍しく神社のバイトを手伝うーなんて言ってたのにー」

「……サカイさん」

「なにー？　サラさん」

「なんでいるんですか？」

「元旦に神社にいちゃいけないのー？」

「いや、そうではなく。本来ならいがみ合ってる私に、さっきからずーっとずーっとくっついてきてますよね？」

「うん」

「私のこと嫌いなんじゃないんですか？」

「大好きだよー」

「えええええええ!?　な、なんというショッキングな事実!　で、でもケンカするほど仲がいいとかいうけど、いや、けどそんな直球に言われるなんて思いもしなかったわ。ど、どうしよう。どんな顔すればいいのかしら、ここはやっぱり『私も』とか言って友情を深め合うべきなのか、あえていつもどおりの反応をするべきなのかしらえーっとえーっとえーっと」

「あ、巫女服着てる間だけねー」

「どうせそんなことだろうと思ったわよ!」

「おっぱいおっきい巫女もなかなか」

「オヤジおばさんは放っておいてカツコさーん!　どーこーでーすーかー!?」

「ここ」

「え!　どこですかー!」

「上」

「う、え?　あの、そんな鳥居の上で何やってるんですか」

「人を見下している。ふはは!　こいつらゴミのように見えるぜ!」

「セリフ的にカツコちゃんのほうがゴミだよー、人として」

「きつ!　サカイちゃんキツ!　固いカキ投げるぞ!」

「カツコさんは何がやりたいんですか？　さるかに合戦？　かにが食べたいんですか？　走って北海道にでも行って捕ってきて勝手に食べてくださいよ。そして私にもお裾分けください」

「皆ひどいなぁ。あたしはちゃんと仕事してるっていうのに」

「どこがですか！　ちゃんと巫女の仕事してください」

「そこだよそこ。サラちゃん、巫女の仕事とはなんぞや」

「売り子です」

「バッサリ言いすぎ」

「だってバイトですし」

「本来の巫女の仕事よ！」

「萌えさせることー」

「それもあるけどサカイちゃんは黙って！」

「えっと……神様に奉仕する？」

「そう！」

「それで？」

「あたしに奉仕しろ！」

「……自分が神様だって言いたいんですか？　それがあなたの仕事だと？」

「似たようなもんでしょ」

「バイト代は出さないように言ってきます」

「それは困る！　お、おーい！　ねぇ！　もうちょっと付き合ってよー！！」

「カツコちゃん、今のはあんまり面白くないよー」

「バイト外される上にダメだしくらうあたしって……」

「良い新年が期待できそうだねー」

「そだね」

めでたしめでたし。

「姉……たくましいな」

「頭が筋肉って言いたいの？」

「そうそう」

これだけ全員にひどい扱いされても笑い飛ばせるのはすごいですよね。

「それにしてもサカイさんは、巫女服さえ着てればライバルのサラさん相手でも許すんだな」

「バカだよね」

「それは言いすぎだろ」

「サエちゃんに巫女服着せればそれが一番なのに。何やってんだろサカイさん、母親失格だよ」

「個人的に見たいだけだろそりゃ」

私も見たい！

「や、僕も見たいけどさ」

今度着せよう。

「よろしく作者。さて、その話を楽しみにしつつもとりあえず次のシーンにいってみよう」

とあるレストランの一月一日。

「ええと、お客様？　申し訳ありませんが。そのような品はメニューにはございません」

「一月一日だぞ！　おせち料理を出して当然だろう！」

「あの、そもそもこちらは洋食中心のお店ですので」

「ここは日本だ！　だからどこでもおせちを出すべきだ！」

「あの、お客様。酔っ払ってますよね？」

「俺は酔ってない！　なぜなら教師だからだ！　A判定のな！」

「ああ、お客様が噂の教師A様ですか」

「そうだ！」

「だったら大丈夫ですね」

「何がだー！？　おせちー！！」

「いえいえ、トメ君の関係者なら遠慮しなくても良いということだなぁ、なんて。そんなわけで、迷惑だから出てけ酔っ払い」

「なんだとー！？　おせちを食うまで帰らないぞ俺は！」

「もう食べたじゃないですか」

「なんだと！？」

「食べましたよ。酔っ払って覚えてないんでしょう」

「ほ、ほんとか！？」

「はい、そんなわけでお会計、一万円です」

「高くねぇ！？」

「ないはずのメニューを作らせたんです、これくらいします」

「そ、そうか……その割にはあまり食った気がしないんだが」

「さっきトイレに行ったときに吐いたんでしょう。そのあたりで記憶が戻ってきたんじゃないですかね」

「そ、そうなのか……じゃあ、はい。一万円」

「毎度ありがとうございます」

そんなわけでお年玉をゲットしたキリヤさんでした。

「これがキリヤの本気か」

「確かに全く遠慮なく容赦なくお金を奪い去っていったね」

「これ詐欺じゃないのか？」

この話はフィクションです。

「そこでそれぶっちゃけられても」

良い子はマネしないでね♪

「ほんとだよ」

「でもサエちゃんあたりやりそう」

「あー……やりそう」

さてさて、そんなサエちゃんは？

とある家の一月一日。

ごろごろ。

ごろごろ。

ぱりぱり（おせんべいを食べる音）

ぽりぽり（お尻をかく音）

ぷう（おなら）

「幸せー」

「たけだ、くさい」

「ごめん」

「タケダかよ！！」

「マジでびびったよ！」

いや、チャンネル間違えた。

「よかったーサエちゃんじゃなくて」

「そそ、そうだよ。サエちゃんがあんなことするはずがにゃいよ！バカだなぁ皆！」

「香加さんが一番動揺しております」

想定外のプライベートを映してしまったためにいろんなところでタケダの株は大暴落。

「汚いものはもういいから次いこう」

「綺麗なサエちゃんをプリーズ！」

はいはい、では今度こそ。

とある家の一月一日。

ごろごろ。

ごろごろ。

ぱりぱり（おせんべいを食べる音）

ぽりぽり（お尻をかく音）

ぷう（おなら）

「幸せー」

「たけだ、しね」

「ごめん」

「タケダはもういいよ！」

「さすがにわざとだろこれは！」

あっれー？　おかしいなぁ。んじゃこっちのチャンネルか。

「たこあげしよう」

「しよー」

「でもどこでするのよっ」

「あー……いつもの三人娘集合したかと思えば外に連れ出され、何

かと思えば用件はそんなことかー」

「トメ兄、なんか説明してるみたいだね」

「寝起きだからな、状況確認が必要なんだ。自分に」

「お休みだからって新年からごろごろしてたらダメですよー」

「紅白見た後におまえら連れて初詣に行って、その翌日だってのに寝ちゃいかんのか」

「新年ですからっ！」

「そうだよ」

「そうですよー」

「うぅ……笑顔が眩しい。これが若さか、妬ましい」

「はいはい、とにかくたこ上げるよ」

「だからどこでやるのよっ。ここをどこだと思ってるのっ」

「商店街」

「なるほど、あえてここでやるんだねー」

「なぜに」

「楽しそうだから」

「多分かなり迷惑だぞ」

「ウケがとれれば迷惑のうちに入らない。私を信じろっ！」

「ふーん、カカすけがそこまで言うってことは、そのたこに何か笑えるネタでも書いてあるの？」

「や、ただスピーカーがついてるだけ」

「スピーカーって、そんなもんつけて飛べるのか？」

「お姉のお墨付き。大丈夫」

「何も大丈夫な点が見当たらないけど、スピーカーなら別にいっか」

「よし、それ！！」

「おぉ、あっというまに上がった」

「カカちゃん、たこあげうまーい」

「ほんと、こういうことは上手いわよねっ！　でも広場とはいえ商店街の中でやったら邪魔じゃないかしら」

「ま、ここは人あんまりいないし動かなければいいだろ」

『あーあー、テストテスト』

「うわーおっきい声」

「カカすけ、いつの間にかマイク持ってる」
「たこのスピーカーから聞こえるのか」
『さぁ飛び立ちました、たこ。これからたこの冒険が始まります。題して、たこの天下、です。果たしてこのたこにどんな出会いがあるのでしょうか』
「……トメさん、なにやらあの子、動き回ること前提らしいですよっ」
「……止めるか」
「あー、カカちゃん逃げたー」
『さぁさぁ！　たこ様は突き進んでいきます！　ちょっと通行中の皆様ごめんなさい、たこが通ります。たこにやられたくない方はどいてください』
「たこで何をやるのか知らんが迷惑だからやめろカカ！」
「サエすけ、わたしたちもトメさんと一緒に追うわよっ！」
「だるーい」
「いくわよっ！！」
『おっと、たこが何かに絡まりました！　これは……ブラジャー！　なんとたこ様、ブラジャーを手に入れました！』

「それどっかの二階に干してあったやつだろ！！」

『おぉっと、またもや何か絡まりました！　これは……ふんどし！　なんとたこ様、上にブラジャー、下にふんどしを装備しました！』

「そんなたこ嫌だ」

『ブラジャーとふんどしが絡みあう！　ねっとりとしつこく巻きつくふんどし、それに抗えば抗うほどにふんどしが！　ふんどしがー！！』

「公共の場でなんちゅーこと言っとるのだおまえは！」

『そのとき、ブラジャーとふんどしは一つとなった』

「ブラジャーの持ち主絶対現れないなこれ」

「ふんどしの持ち主も現れないでしょ普通っ」

「いやいやー、男としては嬉しいかもよー。自分のふんどしに女性の」

「サエちゃん。その続き言わないで。なんか言うだけで汚れそう」

「ていうか、なんでふんどし？」

「それは誰もが聞きたいよ」

『楽しー！』

「おまえだけな」

『皆、笑ってるー？』

「おまえしか笑ってねぇよ」

『合体』

「しみじみ言うな」

『そのとき、ふんどしとブラジャーの愛の結晶が生まれた！』

だそうです。

「え、続きは！？」

「愛の結晶ってなんなの！？」

さぁ。だってＶＴＲ終わっちゃったし。

「いやもっかいチャンネル合わせろよ、気になる！」

「そうだよ。ふんどしとブラジャーがラブラブ合体して一体何が生まれるのさ！？」

「香加、改めて言うな。なんかヤダ」

嫌だそうですし、この話はここまでということで。

「うぅ、気になる」

じゃあ募集しますか。ふんどしとブラジャーが合体して、一体何が生まれたと思いますか？

「いくらなんでもその募集はひどい」

そだね。

「なんだか空回りしたね、新年早々」

「張り切りすぎたんだろ。いつもどおりでいりゃいいのに」

「でも楽しそうだよね、あれ」

「やるなよ。さて、じゃあ新年特集はおしまいかな。次のカカラジの募集を」

あ、それですがね。

「なんじゃらほい」

ずっと読んでくださっている読者の方はわかると思いますが、去年から随分と更新が滞ってます。書いていただいた感想どころか投稿してくれたネタにも触れる余裕がない次第、今後こそはと頑張ろうとしているものの余裕の目処は立ちません。

なので、もし投稿してくださる方がいましたらなるべく「そろそ

ろカカラジの話数」というタイミングでお願いします。

「おお、カカラジ終了宣言じゃないのね」

はい、確かに現実が阿呆みたいに忙しいんですが、やはりこの作品だけは続けていきたいと思います。中学編になってから中々盛り上がりを見せていませんが、どうか今後もお付き合い願いたいと思います。誠心誠意、楽しく書かせていただきます。

「そんなわけで」

「今後の作者にカカラジチョップ！」

刺激を糧に頑張ります！！

# カカの天下９００「第三十二回、カカラジ！」（後書き）

ようやくこの子らの新年が明けました。

よき中学生活を！！

書こう！！

# カカの天下９０１「あくしゅの真相」（前書き）

どうもお久しぶりです。
このお話は８９９話の続きです、忘れた方はそちらからどうぞ。

## カカの天下９０１「あくしゅの真相」

こんばんわ、サエです。

『それで、カカすけとのケンカの原因はなんなのよっ』

現在時刻は２２時。ベッドでゴロゴロしながらサユカちゃんと電話してるのですが、さっきからこの質問ばかりです。

「いわなーい」

そしてさっきから私はこの返事ばっかりしています。

『なんで言わないのよっ』

「だってサユカちゃん笑うし」

『いいじゃないのっ』

「よくないよー」

『何を今更』

「これは私のプライドの問題だよー」

『そんなもん捨てなさいよっ』

「サユカちゃんじゃあるまいし」

『わたしがいつプライド捨てたっていうのよっ』

「コスプレのとき」

『えぇ捨てたわよ悪かったわねでも捨てさせたのは君でしょうっ！』

「じゃー今度は私のプライドを捨てさせるために頑張ってみなよー」

『わかったわっ！』

しばらく沈黙された。考えてみると『相手のプライドを捨てさせるにはどうすればいいか』ってすごい難問なんじゃないだろうか。

『よし、とりあえず質問するわっ』

「どうぞー」

『サエすけ』

「はい」

『どうやったらプライド捨ててくれるの？』

「素直に聞いちゃったよーこの人」

気持ちはわかるけど。

「そだねー、プライドなんかどうでもいいやと思わせてくれればいいかなー」

『だからどうしろと』

「そんな小さなことはどうでもいいと思わせるような壮大な話でもしてくれる？」

『なるほど！』

納得しちゃった。

『宇宙！』

「確かに壮大だけど、その単語に何を感じろとー？」

『えぇと、宇宙に比べればわたし達は小さい！』

「そだねー」

『人から見たノミよりも小さい！』

「そだねー」

『そのノミより小さい者の考えなんて、もっともっと小さい！』

「そだねー」

『チビにも程があるっ！　あってないものと同じっ！　誰もが無視するようゴミカスのよう、いいえ違うわ。ゴミカスなら汚いから神経質な人が気にするもの。空気？　いいえ、空気が無ければ人は生きていけない。何の役にも立たず、誰も気にせず、視野にも入れない。存在すら知られない。宇宙から見た人間なんてそんなもんよ』

「……」

『サエすけ、あなたはそんな存在なのよっ』

「……」

『どう？　自分が如何にちっぽけかわかった？　背も低いし胸も小さいし――あれ？　どこからか「だがそれがいい」という声が聞こえたような……まぁいいわ。とにかくそんな君のちんけなプライドなん――』

切ってやった。

数秒後、電話がかかってきた。

「もしもしー」

『なんでいきなり切るのよっ』

「イラッとしたから」

『なんでよっ』

いやーなんでも何も。

「切っていい？」

『よかないわよっ！』

でも切ってやった。

……またかかってきた。

『あのねぇ！』

切った。

かかってきた。

『ちょっと』

切った。

『サエす』

切った。

『あの』

切った。

『み』

切った。

……み？

何を言おうとしたんだろう。

あ、またかかってきた。

『ごめんなさいっ』

やっと謝ったか。

「うん、いいよー。ところでさっき『み』って何を言おうとしたのー？」

『知りたかったらプライドを捨てなさいっ』

おぉ、そこでそう来るか。逞しいなーサユカちゃん。

「そこまで言うなら話してあげるよー」

『やったわっ！　わたしの頭脳プレーの勝利ねっ』

「サユカちゃんで遊んだら、ちょっとスッキリしたし」

『勝利は勝利だわっ』

ほんと逞しくなったなー。

『それでっ、カカすけとケンカした原因はなんだったのっ』

「私、カカちゃんのお尻触っちゃったの」」

『くだらなっ！！』

だから恥ずかしいって言ったじゃーん。

その頃のカカ。

「ほ、は！」

「……はて、握手だよなこれ」

「実は練習」

「何の」

「今度は私が触り返す」

「は？」

「えい、とお！」

「あれ？　いい話になるはずだと思ったんだけどな。なんだろうコレ」

それは本人にしかわからない。

# カカの天下９０１「あくしゅの真相」（後書き）

いやはや本当にお久しぶりです。
色々ありまして更新ストップしてました。震災やら昇進やら結婚やら色々とありましてねぇ。なんとか更新へこぎつけました。感想やメッセージでご心配の声を聞かせてくださった読者様、本当にありがとう。心よりお礼を申し上げます。もらった心の温かさを、カカたちを書くことで返せていけたらいいな、なんて思ってます。

さて。そんなわけで、今後のカカ天ですが……かなり日を空けてしまいましたが、当時からの時間枠で進めていきます。現在7月ですが、ここまでたどり着くのにどれだけかかるかは私次第となりますが笑
こんな私の書く話ですが、改めて１０００話めざしていきますので、お暇があればお付き合いの程、よろしくお願い致します。

# カカの天下902「マジマジバレンタインデー」

こんにちは、トメです。

今日はバレンタインデーです。それが理由でしょうか、こんなところに呼び出されたのは。

「第一回、トメ兄に本気でチョコをあげようのコーナー」

「どんどんぱふぱふー」と口で音を出すのは、なんかいっぱい集まった知り合いたち。

「第一回って、何回ももらってるけど」

「おっと色男発言きました」

「や、僕だって色々と恩売ってるし。義理チョコくらいもらったっていいじゃん」

「本命チョコもらってるくせに」

「それは……まぁ、うん」

恥ずかしながら。

って、さっきからカカとばっか喋ってるな。ちなみにここはサカイ邸。家主のサカイさんはもちろん、姉、カカサエサユカ、サラさんとテンがいる。こんなにいるのに皆どんどんぱふぱふーしか言ってない。変なやつら。

「でも今回は本気だよ。本気と書いてマジコロスだよ」

「逃げていいですか」

「ダメだよ」

「え、だって。僕コロサレルんじゃないの」

「ハートを射止めてノックダウンって意味だよ」

「おまえいつの時代の人間だよ」

「台本はサカイさん」

「それなら納得、歳相応だ」

「女性に歳の話すると本当にコロサレルよ」

「そですね。気をつけます」

「特にあの年頃は。曲がり角だから」

「おまえも気をつけないとコロサレルぞ」

「そですね。気をつけます」

「で？」

「なにが？」

「続きは」

「なんだっけ」

「知らねーよ」

こいつの本気は随分とユルい。

「あーそうそう。今からチョコくれる人の中から彼女選んでね。ホワイトデーに告白する感じで」

「どういう感じかさっぱりわからん」

「え。トメ兄って頭悪い？」

「や、そういう問題でなく」

「じゃあ耳に問題があるのか」

「そじゃなくて。なんで告白とかいう展開になるの」

「いいかげんトメ兄の八方美人っぷりに全世界がイラだってます」

「スケールでけー」

「なのでハッキリしてください」

「そんなこと言われても」

「それでは皆さん、チョコの贈呈と共にアピールたーいむ」

「聞けよ」

しかし聞く耳持たず、なんか恋愛番組で流れそうな音楽がかかり、照明が薄らとピンク色になった。そして僕の前に踏み出したのは……

「一番、サラ、いきます！」

「カラオケでも歌うようなノリですね」

「トメさん！　私のおっぱいに溺れてください！」

「そのとてつもないセリフは誰が考えた！？」

「以上です！　はいチョコ」

「え、終わり！？」

「続きましてー」

「続くのかー」

「サユカちゃん。どうぞ」

「はいっ！　トメさんっ！」

「な、なんでしょうか」

「ち、ちちち、チョコと一緒にわたしも舐めて！」

「おいサカイてめぇどんな台本をどこまで根回ししやがった!?」

「違った！　わたしも食べて！」

今の、天然の間違いか。恐ろしい子。

「え、えぇと。保留で」

「はいっ。ホワイトデーまで身体を洗って待ってます」

どこを舐めろとおっしゃるのですか。あれですよね、首を洗って待ってます、ってのと言い間違えただけだよね。

「続きまして。テンカ先生」

まさかテンまで変なことは言わないだろう。

「トメ」

「おう」

「やる」

「ありがと」

「ん」

……これはこれで寂しい、とか思ってないんだからな。

「続きまして、サエちゃん。え、サエちゃんも！？」

「トメお兄さん、私に告白してくれたらー」

「くれたら？」

「莫大な財産があなたの手に」

「生々しいなぁオイ」

「待ってます」

この子こあい。

「続きまして、大本命！」

え、誰。

「サカイさん」

「人妻は好きですかー。ふふふー」

「論外です」

「このロリコン！」

「極論です」

ここでカカが仕切るようにパンパンと手を叩いた。

「はい、告白タイム終わり！　そしてトメ兄にはこの中の誰かに、ホワイトデーに告白してもらいます！　された人は見事に彼女に！」

え、え、え！？

「ちょっと待て。それ本気だったの！？」

「私が冗談を言うと思う？」

「てっきりいつもの冗談かと」

「本気って言ったじゃん。ホワイトデーのお返しは告白だよ」

しまった。さっきはさらりと言ってたからギャグだと思って流したけど、この目はマジだ。全員マジだ。

「え、と、それじゃ全員に返せないし」

「他の人には『フラれる気持ち』をプレゼント」

なんて嫌なやつなんだ僕は。

「……カカは、僕にチョコくれないの？」

「もぐもぐ」

「なに食べてる！？　それ僕にくれるチョコじゃないの！？」

「私に逃げるな」

バレたか。くそぅ、いつもの兄妹愛オチが使えないだと。これはピンチだ。

「はいはい、トメ兄がとやかく言う前におひらき！　じっくり考えてもらいましょ！」

再び「どんどんぱふぱふー」と口に言いながら去っていく女性陣。

「えー……マジか」

や、えらいことになった。

「どうしよ」

ほんと、どうしよう。

誰かを彼女に、するのか？

「……ねぇ、サカイちゃん」

「どしたのーカツコちゃん」

「あたし、マジでどんどんぱふぱふーしか言ってないうえに誰にも触れられなかったんだけど」

「あ、チョコ用意してたんだ」

「姉弟愛オチとか考えつかないのかな、あいつ」

「考えつかないんじゃない？」

「考えつかないかー」

「日ごろの行いでー」

「そっかー」

「うんー」

「サカイちゃんあげるよ」

「ありがとー」

「……別に寂しくないんだからね！」

「はいはい、よしよし」

## カカの天下９０２「マジマジバレンタインデー」（後書き）

まずは感想欄やメッセージで色々とコメントしてくださった方々に御礼を。こんなに祝ってくれたりなんだりしていただいて恐縮してますでも嬉しいです。いろいろ頑張る気力が湧いてきます。更新ペースは相変わらずですが笑　ありがとおおおおお！

さて本編。時期はズレますが、かねてから考えてた展開となりました。果たしてトメは彼女を作るんでしょうか。それともいつものようにヘタレな展開に逃げるのでしょうか。でもいい加減９００話まで来たんだからそろそろハッキリしても……ねぇ？

# カカの天下９０３「おいもやさん」

こんにちは、カカです。トメ兄が大変なことになっている中、なんなんですけど……ぶっちゃけ私にはそんなに関係ないので先ほど会った面白いおっさんの話をしようと思います。

皆さんはおっさんは好きですか？　私は好きです。

へんなの多いから。

「ぬぅ……」

しかめっ面で道端に佇むおっさん。渋い。

「ぬ」

そのとき。

おっさんの目が、くわっと開いた！

「はぁっ！！」

裂帛の気合と共に！

すさまじい音が！

ぷっひゅうううううううううううう！！

おならだった。

かつてない音だった。

「ふっ」

勝ち誇るおっさん。

「む」

また何かに気づいた！

「てりゃあああああああああああ！！」

ぶっしゅううううううううう！！

とてつもないおならだった。

きっとダイナマイトにも負けない。

「ふはは」

なんか笑ってる。

「ぬ？」

あ。

ずっと見てた私に気づいた。

「ふふん」

なんか勝ち誇られた。

「負けない！」

「ほほう？」

私もおなら出す！

あのおっさんに勝てるくらいの！

「ちょっと待ってて！」

まずはおならの補充だ！　私は焼き芋屋さんを探して走った！

すぐに見つかった！　なんてご都合設定！

「すいません！」

「へいらっしゃい」

寿司屋のようなおっちゃんだ。

「おならを三本ください」

違った焼き芋だ。

ぷっぷっぷー。

かと思ったら、おっちゃんのおならをもらってしまった。

「どうでぃ」

しかも勝ち誇られた。

「三百円」

しかも請求された。でも一芸を見た気分なので払ってあげた。

「え、そう？　俺、すごい？　そっか……へへ、これもってけよ」

芸を褒められたのが嬉しかったらしい。五本もくれた。いいおっちゃんだ。

そして焼き芋入れた袋を片手にダッシュ！　さっきの場所へ！

おならじじい発見！

「待たせたね！」

「お買い上げありがとうございます」

「へ？」

「実はわし、そこの焼き芋屋の兄。ふ、全ては『わしのおならに対抗しようとした人間に焼き芋を買わせる』という作戦だったのだ！　まんまと引っかかったな！？」

「もうちょっとマシな作戦なかったの？」

「言うな！　この一年でひっかかったのはお主だけだ！」

「もっと早くやめればよかったのに」

「言うな！　ここまできたら意地だ！　誰か一人でも引っ掛けなければ負け犬になるじゃないか！」

男の意地って大変だね。

「小娘！」

「なんじゃいジジイ」

「引っかかってくれてありがとう！」

「え、あ、うん。どういたしまして」

「おこづかいをあげよう」

千円もらった。

「あの、これじゃそっち儲かってないんじゃ」

「おぬしはわしらの心を満たしてくれた。それで充分じゃ」

焼き芋もらったうえにお金までもらっちゃった。

だからおっさんって好き。なんか色々くれるもん。

帰った後、そんな話をトメ兄にしてみた。

「援助交際とかお兄さん許しませんからね！！」

なんか錯乱した。説明のしかたが悪かったらしい。

# カカの天下９０３「おいもやさん」（後書き）

このお話は、おならじじいだけノンフィクションです。

え、マジで？

# カカの天下９０４「愚痴を肴に進んだ話」

こんばんは、かんぱーい。

「んぐんぐ、くはぁー！　飲まなきゃやってられないよ」

「……そうか」

「彼女を選べって？　そんなこと急に言われても困るっての。なぁ？」

「……まぁな」

「僕は僕のペースで考えたいんだからさぁ」

「……そう」

「あぁ、ごめんな愚痴ばっかで」

「……うん」

「でもこんなこと愚痴れるのって中々いなくてさ」

「……そうか」

だからって。

「その選択肢のうちの一人に愚痴りまくるのもどうかと思うんだが」

「そか？　いいじゃん。テンだし」

そうです、私がテンなんです。

なんか昔の～なおじさん風に言ってみたが（わかんないか）、見ての通り読んでの通り。なぜかトメの「彼女選び」に対する愚痴を正面から受けているオレ。

『話がある。いつものところで』

そう呼び出されてきたんだが……

「ちょっと驚いたんだがな」

「なんだ、ドキッとしたか？」

「ぎくっとした」

「何わるいことしたおまえ」

「るっせぇな、いろいろだよ」

「したのかよ」

「ったりめぇよ。オレ様だぜ」

「そんな自信満々に何をした。犯罪か」

「なんだと思う？」

「こわい」

「言えよ！！」

「犯罪者！！」

「決め付けるな！」

「じゃあ何したか言えよ！」

「オレがトメに言えっつってんだろ！」

「テンこそ言えよ！」

「なんだよこのケンカ！」

「わかんねーよ！」

「カンパイ！」

「カンパイ！」

なんだかんだで、とりあえず愚痴とは思わなかった。てっきり、いやなんでもねぇ。

「ったく、こんな場面をあいつらが見たら何を言うやら」

「あぁ、今回のイベント関係者か」

上手いこと言うなコイツ。

「見つかったらめんどくせぇぞ」

「いいじゃん、おまえと飲みたかったんだよ。親友だろ？」

「む……そうか」

イベントがイベントだけに複雑な気分がしないでもない。

「あー、しかしなー、どうしよっかなぁ。カカで逃げられないのが痛いよなぁ」

律儀にルール守って悩むあたりクソマジメだよなコイツ。

「好きなやつを彼女にすればいーじゃねーか」

「みんな好きだし」

「ハーレム希望か恐れいったぜ。カンパイ」

「そういう意味じゃないわい！　恋愛とかしばらく考えてなかったし、急に言われても」

「乙女チックなセリフだ、カンパイ」

「うるさいカンパイ」

んぐんぐ、酒は美味い。

「とりあえず無難なヤツを選んで付き合ってみたらどうだ？」

「無難な人間が僕の周りにいるのか」
「んー……サラさんとか」
「確かに一番普通だけど」
「一番エロいし。身体が」
「たしかに」
「なー」
「カンパイ」
「カンパイ」
同士で交わす盃はいいねぇ。
「でもサラさんはなぁ」
「問題でもあんのか」
「なんというか……もし一緒になったとしたら」
「ふむ」
「妹が増えたようにしか思わなさそうなんだよな」
「所詮はシスコンか」

「そうじゃなくてさ、あの人ってドジじゃん」

「確かにいろいろと無能だな」

「だからカカに加えて、世話する人間が増えるだけって感じになりそう」

「なるほど、トメとしては対等な相手が良いってことか」

「んー、そうなのかな」

「役立たずは却下と」

「そこまで言わないけど」

「そうだな。夜はめちゃくちゃ役に立ちそうだし」

「そだね」

「あっさり頷く辺り、酔いが回ってるな」

「テンこそ結構ペース速いじゃん」

「そか？　おーい、おかわり二つ！」

久々の酒だから美味いぜぃ。

ふむ、話を戻すと。じゃあ候補者で一番役に立ちそうなのは……

「サエとか、役に立ちまくりじゃねぇか」

「それはどういう方面で」

「とりあえず金には困らなさそうだぞ。あの手この手で」

「恐いので勘弁。いつか捕まりそう」

「心配すんな。あいつは上手くやる。そして莫大な財産を」

「何の話をしている」

「じゃやっぱサユカでいいじゃねぇか。自分好みに育てろよ」

「うーん、どうしても犯罪に思えて」

確かに。

「んじゃオレと付き合うか」

「そだな」

ん。

あれ？

「あ、メール。カカからか……あー、すぐに戻んなきゃ。悪いなテン、愚痴に付き合わせて。今日は奢る」

「おう、奢りなら文句はねぇ」

「ありがとな。じゃ！」

何を急いでいるのやら。トメは早々に店を出ていった。

やれやれ。

……ん。

あれ？

「なんか暑いな。日本酒の冷でも飲むか」

んー。

さっき、何かハテナマークが飛んだような。

まぁいいや。酔っててわかんねぇし。

## カカの天下９０４「愚痴を肴に進んだ話」（後書き）

しかしまた久々になってしまった更新ですが、読んでの通りお話は進みます。いや、忙しいです。余裕ができたら書くと思いつつ余裕ができやしない。それでも山場（かもしれない）はちゃんと書いてやらないとキャラが可哀想なので（特にサユカとか）頑張りまっせ。

や、今回の話みるとサユカが可哀想な展開になるかも？　だけど。わからんよ！　まだわからんよ！　なにせカカ天だからね！　予想の斜め上とか普通だからね！　でもたまに真っ直ぐいくからね！

さてどうなるやら。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7632b/

カカの天下

2011年10月9日06時26分発行